

Symantec Backup Exec 2010

管理者ガイド



本書で説明するソフトウェアは、使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができます。

Documentation version 12.5

法的通知と登録商標

Copyright © 2009 Symantec Corporation. All rights reserved.

Symantec、Symantec ロゴ、Backup Exec は、Symantec Corporation または同社の米国およびその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

このシマンテック製品には、サードパーティ(「サードパーティプログラム」)の所有物であることを示す必要があるサードパーティソフトウェアが含まれている場合があります。一部のサードパーティプログラムは、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで利用できます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースのフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務は変更されないものとします。サードパーティプログラムの詳細については、このシマンテック製品に含まれるサードパーティの商標登録に関する文書をご参照ください。

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されています。本書のいかなる部分も、Symantec Corporation およびそのライセンサーからの事前の文書による許諾を得ることなく、いかなる方法によっても無断で複写、複製してはならないものとします。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。SYMANTEC CORPORATION およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書の内容は、事前の通知なく、変更される可能性があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212の規定によって商業用コンピュータソフトウェアと見なされ、FAR 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202「Rights in Commercial Computer Software or Commercial Computer Software Documentation」、その他の後継規則の規定により制限権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示、開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

弊社製品に関して、当資料で明示的に禁止、あるいは否定されていない利用形態およびシステム構成などについて、これを包括的かつ暗黙的に保証するものではありません。また、弊社製品が稼動するシステムの整合性や処理性能に関しても、これを暗黙的に保証するものではありません。

これらの保証がない状況で、弊社製品の導入、稼動、展開した結果として直接的、あるいは間接的に発生した損害等についてこれが補償されることはありません。製品の導入、稼動、展開にあたっては、お客様の利用目的に合致することを事前に十分に検証および確認いただく前提で、計画および準備をお願いします。

Made in Singapore.

第 1 章	Backup Exec の概要	59
	Backup Exec について	59
	Backup Exec の動作	64
	Backup Exec の新機能	66
	Backup Exec エージェントとオプションの新機能	70
	Backup Exec エージェントおよびオプション	73
	Backup Exec のメディアサーバーコンポーネントについて	73
	Backup Exec サーバー保護エージェントについて	74
	Backup Exec アプリケーション保護エージェントについて	75
	Backup Exec の仮想マシンエージェントについて	78
	Backup Exec クライアント保護エージェントについて	78
	Backup Exec メディアサーバーストレージオプションについて	79
	管理コンソールについて	83
	[ホーム]ビューについて	86
	[ホーム]ビューの設定	87
	[ホーム]ビューのデフォルト設定のリストア	87
	[ホーム]ビューの項目の編集	88
	ヘルプおよびテクニカルサポート項目	88
	概略の項目	90
	詳細項目	90
第 2 章	Backup Exec のインストール	93
	Backup Exec のインストールについて	94
	インストール前の処理	95
	環境チェックについて	95
	インストール前の環境のチェック	96
	Backup Exec サービスアカウントについて	98
	サービスアカウント情報の変更	99
	Windows のセキュリティの変更について	100
	単一のドメイン内のサーバーのみをバックアップするための Windows のセキュリティの変更	101
	単一のドメイン内のサーバーと指定したワークステーションをバックアッ プするための Windows のセキュリティの変更	101
	複数のドメイン内のサーバーをバックアップするための Windows の セキュリティの変更	102

複数のドメイン内のサーバーとワークステーションをバックアップするための Windows のセキュリティの変更	102
Backup Exec でインストールされる Microsoft SQL Server 2005 Express Edition コンポーネントについて	103
Backup Exec の標準機能 について	104
システムの必要条件	105
ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール	107
ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール	112
リモートコンピュータへの Backup Exec のインストールに関する特別な考慮事項	114
リモートコンピュータへの Backup Exec のプッシュインストール	115
リモートコンピュータへの Backup Exec オプションのインストールについて	120
リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール	123
メディアサーバーからリモートコンピュータへの Desktop Agent および DLO Maintenance Service のプッシュインストール	126
Remote Agent for Windows Systems のインストールについて	129
バックアップ選択リスト内のリモートコンピュータへの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール	130
Active Directory ネットワークでの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール方法	130
コマンドプロンプトを使用したリモートコンピュータへの Remote Agent のインストール	135
コマンドプロンプトを使用したリモートコンピュータからの Remote Agent のアンインストール	137
コマンドスクリプトを使用した Remote Agent および AOFO のインストール	138
コマンドスクリプトを使用した Remote Agent および AOFO のアンインストール	139
Remote Administrator のインストール	140
Remote Administrator の実行	141
コマンドラインを使用した Backup Exec のインストール (サイレントモード)	143
Backup Exec サイレントモードインストール用コマンドラインスイッチ	144
コマンドラインを使用した Remote Administrator のインストール	152
コマンドラインを使用した Backup Exec のアンインストール	154
インストールパラメータファイルの作成	154
インストールパラメータファイルの使用	155
Backup Exec エージェントとオプションの評価版のインストール	156

インストールログについて	156
Backup Exec の修復	157
Backup Exec サービスの起動および停止	158
[Backup Exec Services Manager] オプション	158
Backup Exec のアンインストール	159
ローカルメディアサーバーからの Backup Exec オプションのアンインストール	159
LiveUpdate を使用した Backup Exec の更新について	160
LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定について	161
LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定	162
LiveUpdate の手動実行	163
インストールされている更新の表示	164
ライセンス情報の表示	164
[ライセンス情報] オプション	165
ライセンスの追加	166
環境内にインストールされているライセンスの検出	167
以前のバージョンの Backup Exec のアップグレードについて	168
インストール後のタスク	168
第 3 章 Backup Exec の機能とオプションの設定	171
Backup Exec の設定について	172
ログオンアカウントの設定について	172
Backup Exec のデフォルトログオンアカウントについて	173
Backup Exec の所有者専用ログオンアカウントについて	174
Backup Exec ログオンアカウントの作成	175
Backup Exec システムログオンアカウントについて	177
Backup Exec ログオンアカウントの編集	178
Backup Exec ログオンアカウントパスワードの変更	179
Backup Exec ログオンアカウントの置換	180
Backup Exec ログオンアカウントの削除	180
Backup Exec のデフォルトログオンアカウントの変更	181
Backup Exec システムログオンアカウントの新規作成	181
Backup Exec のデフォルト設定について	182
ジョブの優先度について	183
ジョブ用のデフォルトデバイスとメディアセットの変更	184
[ユーザー設定] のデフォルトの設定	184
デフォルトの [ユーザー設定]	184
別のメディアサーバーへの構成設定のコピー	186
リストのインポートによる複数の宛先メディアサーバーの追加	187
CASO 以外の環境での宛先メディアサーバーの追加	187
CASO 環境での宛先メディアサーバーの追加	188
[設定のコピー] オプション	190

ログオンアカウント情報のコピー	191
[ログオンアカウントのコピー]オプション	191
監査ログについて	192
監査ログの設定	192
監査ログの表示	193
監査ログからのエントリの削除	195
監査ログのファイルへの保存	195
データベースの保守について	195
データベースの保守	196
Backup Exec データベースの場所の表示	198
メディアサーバーの[詳細]プロパティ	198
項目の非表示	199
非表示項目の表示	200
項目の順序の変更	200
項目の情報のソート	200
プロパティの表示	201

第 4 章

メディアの管理	203
Backup Exec のメディアについて	203
メディアの上書き禁止について	206
デフォルトのメディアセットについて	209
メディアセットの作成について	210
メディアセットの削除	212
メディアセットの名前の変更	212
メディアセットへのメディアの関連付け	213
メディアセットの一般プロパティの編集	214
メディアの上書き禁止レベル	216
割り当て済みメディアまたはインポートメディアの上書きについて	216
Backup Exec での上書き可能メディアの検索順序	217
メディア管理用の設定の選択	221
メディア管理用の設定	221
メディア操作のための監査ログのエントリの表示	225
監査ログに表示するための特定のメディア操作の設定	226
メディアラベルの設定	226
メディアラベルの名前の変更	227
インポートメディアのラベル付け	228
バーコードを使用したラベル付け	228
混合メディアライブラリのバーコードルール	229
混合メディアライブラリのバーコードルールの作成	229
バーコードルールの編集	229
バーコードルールの削除	230
バーコードルールオプション	230

バーコードルールオプションの追加	231
WORM メディアについて	232
新しいカタログの作成	232
カタログジョブの[デバイス]オプション	233
メディアまたはデバイスの参照によるリストアジョブの作成	234
メディアの場所およびメディアボルト	235
メディアボルトの作成	236
メディアボルトのプロパティ	236
メディアセットのボルトルールの設定	236
メディアの[ボルトルール]プロパティセット	237
メディアボルトの削除	238
メディアボルトの名前の変更	238
場所またはボルト内のメディアの検索	238
ボルトまたはオフラインメディアの場所へのメディアの移動について	239
バーコードラベルのスキャンを使用したメディアの移動	239
メディアを移動するジョブのスケジュール設定	240
ボルトウィザードを使用したメディアの移動	241
[ボルトへ移動]タスクを使用したメディアの移動	241
[メディアの移動]オプション	242
[メディアをボルトに移動]オプション	242
ドラッグアンドドロップ方式のメディアの移動	242
ドラッグアンドドロップを使用したメディアの移動	243
損傷したメディアの削除について	243
メディアの削除について	244
メディアの削除	244
メディアの[一般]プロパティ	245
メディアの[統計情報]プロパティ	247
メディアローテーション戦略	249
1 世代管理のメディアローテーション戦略	249
2 世代管理のメディアローテーション戦略	250
3 世代管理のメディアローテーション戦略	251
第 5 章 バックアップの準備	253
バックアップを準備する方法	254
バックアップ戦略について	254
バックアップ戦略を選択する方法	254
バックアップスケジュールを判断する方法	255
バックアップするデータの量を判断する方法	255
データストレージのスケジュールを判断する方法	256
バックアップするデバイスを判断する方法	256
ジョブ内でバックアップするリソース数を判断する方法	256
アーカイブビットとバックアップ方式について	257

バックアップ方式について	258
Windows NTFS 変更ジャーナルによるファイル変更の判定につい	
て	265
バックアップするデータの選択について	265
バックアップ選択項目でのコンピュータの完全修飾名の使用について	266
バックアップ選択リストのコンピュータ名のノードについて	267
バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードについて	269
バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードへの Windows シ	
ステムの追加	270
バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードからの Windows シ	
ステムの削除	271
バックアップ選択リストの[ドメイン]ノードについて	272
[Active Directory ドメイン]ノードへの Active Directory ドメインの追	
加	273
[Active Directory ドメイン]ノードからの Active Directory ドメインの削	
除	273
[Active Directory ドメインの管理]オプション	274
バックアップ選択リストの[ユーザー定義選択]ノードについて	274
[ユーザー定義選択]ノードへのユーザー定義選択項目の追加	275
[ユーザー定義選択]ノードからのユーザー定義選択項目の削除	276
[ユーザー定義選択]オプション	277
Backup Exec での Microsoft バーチャルハードディスク (VHD) ファイルの	
管理について	277
ユーザー定義の Microsoft Windows 分散ファイルシステムデータをバック	
アップする方法	278
選択リストについて	279
選択リストの作成	280
選択リストのマージ	284
選択リストの置換	284
選択リストのコピー	285
選択リストのバックアップジョブの保留	287
選択リストの削除	287
選択リストの編集	288
[除外]選択リストの編集	288
選択リストの優先度と有効時間帯について	290
すべての選択リストのデフォルトの優先度と有効時間帯の設定	290
選択リストの優先度と有効時間帯の設定	291
各コンピュータまたはリソースに対する個別の選択リストの作成	292
バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成	293
バックアップ選択リストのフィルタ処理	297
選択リストの検索	298
バックアップ選択リストの履歴の表示	298
選択リストの概略の表示	299

リソース検出について	300
リソース検出による新しいリソースの検索	300
Backup Exec シャドウコピーコンポーネントファイルシステムについて	304
Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方	
法	305
Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイ	
ス	308
Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件につい	
て	309

第 6 章

データのバックアップ	313
データをバックアップする方法	313
バックアップジョブに必要なユーザー権限	315
バックアップウィザードを使用したバックアップジョブの作成	315
[バックアップ]ボタンによるバックアップウィザード起動の回避	316
[バックアップ]ボタンからバックアップウィザードを起動する設定	316
ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成	317
バックアップジョブの[選択リスト]オプション	321
[リソースクレデンシャル]オプション	322
バックアップの[リソースの順序]オプション	323
バックアップジョブおよびテンプレートの[デバイスとメディア]オプシ	
ョン	324
バックアップジョブおよびテンプレートの[一般]オプション	327
バックアップジョブの[詳細]オプション	335
バックアップまたはリストアジョブで使用するプリコマンドとポストコマン	
ド	339
バックアップジョブの概略のプロパティ	342
バックアップファイルを選択または除外する方法	342
ジョブのスケジュールの設定について	343
ジョブのスケジュールの設定	343
スケジュールカレンダーについて	346
特定の日に実行するジョブのスケジュールの設定	346
特定の曜日に定期的に行うジョブのスケジュールの設定	347
毎月特定の日に定期的に行うジョブのスケジュールの設定	348
実行間隔を指定したジョブのスケジュールの設定	349
ジョブスケジュールの有効日の設定	350
開始時間帯について	351
スケジュール済みジョブの開始時間帯の設定	351
時間間隔内でのジョブの再実行	352
スケジュールからの日付の除外	353
デフォルトスケジュールオプションの設定	354
ファイルをバックアップして削除する完全バックアップ方式について	355

ファイルのバックアップおよび削除	356
バックアップしたデータの複製について	356
バックアップしたデータの複製	357
仮想テープライブラリから物理テープデバイスにデータを直接コピー する方法	365
バックアップの検証	367
検証ジョブの[選択リスト]プロパティ	367
検証ジョブのデバイスのプロパティ	368
検証ジョブの[一般]プロパティ	368
テスト実行ジョブについて	369
テスト実行ジョブの作成	370
テスト実行のデフォルトオプションの設定	371

第 7 章

バックアップオプションのカスタマイズ	375
バックアップオプションのデフォルト設定	375
デフォルトのバックアップオプション	376
プリコマンドとポストコマンドについて	383
プリコマンドとポストコマンドのデフォルト設定	384
バックアップネットワークの指定について	386
Backup Exec での IPv4 および IPv6 の使用について	388
デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設 定	388
Symantec Endpoint Protection での Backup Exec の使用について	393
ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について	394
Backup Exec のポート	395
Backup Exec の応答準備ポート	396
Backup Exec Desktop and Laptop Option のポート	397
ファイアウォールを通したシステムの参照	398
ファイアウォールで保護された SQL インスタンスの有効化につい て	398
暗号化について	399
ソフトウェア暗号化について	399
ハードウェア暗号化について	400
暗号化キー	400
所有者専用キーおよび共用キーの暗号化について	401
パスフレーズの暗号化について	401
暗号化キーの管理について	402
暗号化キーの作成	404
暗号化キーの置換	405
暗号化キーの削除について	405
暗号化キーの削除	406
暗号化されたデータのリストアについて	406

	暗号化されたバックアップセットを含むメディアのカタログ登録について	407
	DBA 開始ジョブの設定について	407
	DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成	408
	DBA 開始ジョブの編集	419
	DBA 開始ジョブ用のジョブテンプレートの削除	420
	優先サーバー設定について	420
	優先サーバー設定の作成	421
	優先サーバー設定の削除	422
	優先サーバー設定の編集	423
	デフォルトの優先サーバー設定の指定	423
	優先サーバー設定のデフォルトのステータスの削除	424
第 8 章	デバイスについて	425
	ストレージデバイスについて	425
	デバイス設定アシスタントについて	427
	デバイス設定アシスタントを使用したストレージデバイスの設定	427
	ストレージの共有について	428
	共有ストレージの管理	429
	メディアサーバーの一時停止	430
	メディアサーバーの再開	430
	ストレージデバイスの一時停止	430
	ストレージデバイスの再開	431
	ストレージデバイスの名前の変更	431
	メディアのインベントリの実行について	431
	デバイス内のメディアのインベントリの実行	432
	メディアからのデータの消去	433
第 9 章	テープドライブおよびロボットライブラリの管理	435
	テープドライブおよびロボットライブラリについて	435
	Virtual Tape Library Unlimited Drive Option について	436
	Library Expansion Option について	437
	テープデバイス設定ウィザードを使用したテープデバイスの設定について	437
	ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換について	438
	ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換	438
	Symantec テープデバイスドライバのインストールについて	439
	tapeinst.exe の実行による Symantec テープデバイスドライバのインストール	439

テープデバイス設定ウィザードを使用した Symantec テープデバイス ドライバのインストール	440
デバイスのブロックサイズ、バッファサイズ、バッファ数およびデータ送信開 始バッファ数の変更	441
デバイスのハードウェア圧縮の有効化	441
メディアの種類に基づく読み取りおよび書き込み操作の指定	442
ストレージデバイスのプロパティの表示	442
デバイスの[一般]プロパティ	443
デバイスの[設定]プロパティ	445
デバイスの SCSI 情報	448
デバイスの[統計情報]プロパティ	448
デバイスの[クリーニング]プロパティ	449
デバイスの[メディアの種類]プロパティ	451
Backup Exec のロボットライブラリについて	452
ロボットライブラリのハードウェアを設定するための必要条件	453
ロボットライブラリデバイスの表示のトラブルシューティング	454
Backup Exec サービス起動時のロボットライブラリの初期化	454
ロボットライブラリ用のバーコードルールの有効化	455
クリーニングスロットの定義	455
ロボットライブラリの[設定]プロパティ	456
ロボットライブラリの[統計情報]プロパティ	457
ロボットライブラリスロットのプロパティ	457
ロボットライブラリのパーティションについて	459
デバイスとメディアの管理に役立つユーティリティジョブの作成につい て	464
仮想テープライブラリとシミュレートテープライブラリのユーティリティジョ ブ	466
ユーティリティジョブの[一般]オプション	467
Backup Exec サービス起動時のロボットライブラリのインベントリの実 行	468
ロボットライブラリを初期化するジョブの作成	468
テープのリテンションの実行	469
ドライブ内のメディアのフォーマット	469
メディアのラベル付け	470
ドライブからのメディアの取り出し	471
クリーニングジョブの作成	472
ロボットライブラリへのメディアのインポートについて	473
ロボットライブラリからのメディアのエクスポート	474
ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポートについて	476
ロボットライブラリの前面パネルのロック	477
ロボットライブラリの前面パネルのロックの解除	478

第 10 章	ディスクへのバックアップフォルダの管理	481
	ディスクへのバックアップフォルダについて	482
	ディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件	483
	リムーバブルディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条 件	484
	ディスクへのバックアップウィザードを使用したディスクへのバックアッ プフォルダの作成	485
	プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成	485
	ディスクへのバックアップフォルダの共有について	492
	既存のディスクへのバックアップフォルダの共有	493
	ディスクへのバックアップフォルダのパスの変更	493
	ディスクへのバックアップフォルダの削除	494
	ディスクへのバックアップフォルダとその内容の再利用	495
	デバイスの状態のオンラインへの変更	495
	ディスクへのバックアップファイルの名前の変更	496
	ディスクへのバックアップファイルの削除	496
	削除したディスクへのバックアップファイルの再利用	497
	ディスクへのバックアップファイルからのデータの消去	497
	Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへの バックアップフォルダを使用する場合の推奨事項	498
	Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブ用のディスク領 域を再利用する方法	500
第 11 章	デバイスプールの管理	503
	デバイスプールについて	503
	デバイスプールの作成	504
	[デバイスプール] オプション	505
	デバイスプールへのデバイスの追加	505
	デバイスプール内のデバイスの優先度の設定	506
	デバイスプールからのデバイスの削除	507
	デバイスプールの削除	507
	[ジョブの再設定] オプション	508
	デバイスプールのプロパティ	508
第 12 章	ポリシーおよびテンプレート	509
	ポリシーおよびテンプレートについて	509
	新しいポリシーの作成	511
	ポリシーウィザードを使用した新しいポリシーの作成	511
	ポリシーの編集	513
	ポリシーの削除	514
	ポリシーのサンプルの使用	515

ポリシーのサンプルの再作成	516
ポリシーでのテンプレートの使用について	517
ポリシーへのバックアップテンプレートの追加	518
バックアップセットの検証テンプレートについて	521
ポリシーへのバックアップセットの検証テンプレートの追加	522
メディアのエクスポートテンプレートについて	524
ポリシーへのメディアのエクスポートテンプレートの追加	525
ポリシーへのテンプレートのインポート	526
ポリシーのテンプレートの編集	527
ポリシーからのテンプレートの削除	528
テンプレートルールについて	528
テンプレートルールの設定	530
テンプレートルールの変更	531
テンプレートルールの削除	531
ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について	532
ポリシーのための新しいジョブの作成	533
選択リストからの新しいジョブの作成	533
選択リストをバックアップするために指定されるポリシーの表示	534
ポリシーによってバックアップに指定される選択リストの表示	534
次に実行予定のポリシーベースのジョブの編集	534
ポリシーから作成したジョブの削除	534
ポリシーから作成したジョブの名前の変更	535
バックアップセットの複製テンプレートについて	536
ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加	538

第 13 章

Backup Exec の管理	543
Backup Exec の管理について	543
ジョブ、選択リストまたはポリシーのコピー	544
[メディアサーバーにコピー]オプション	545
「メディアサーバーにコピー」ジョブのジョブログの表示	546
ジョブプロパティの編集	546
[ジョブモニター]オプション	547
実行中のジョブのプロパティの表示	547
ジョブ履歴またはジョブのプロパティでのテキストの検索	551
実行中のジョブのキャンセル	552
実行中のジョブのすべてのスケジュールの保留	552
スケジュール済みジョブの保留の解除	553
実行中のジョブの状態	553
スケジュール済みジョブの状態	555
スケジュール済みジョブの即実行	558
スケジュールジョブを保留に変更	558
スケジュール済みジョブの保留の解除	559

ジョブキューを保留に変更	559
ジョブキューの保留の解除	559
スケジュール済みジョブの優先度の変更	560
スケジュール済みジョブのテスト実行	560
スケジュール済みジョブの削除	561
完了ジョブのプロパティの表示	562
ジョブ、ポリシーまたは選択リストの履歴の表示	565
完了ジョブの削除	566
ジョブログからシマンテック社テクニカルサポート Web サイトへのリン ク	567
完了ジョブの状態	567
ジョブログのデフォルトオプションの設定	569
垂直アプリケーションによるジョブログの使用について	571
ジョブのフィルタ処理	571
カスタムフィルタの管理について	572
ジョブのカスタムフィルタの作成	572
現在のジョブのカスタムフィルタの作成	573
[ジョブ履歴]のジョブのカスタムフィルタの作成	574
カスタムフィルタの削除	576
カスタムフィルタの編集	577
[カレンダー]タブでのメディアサーバーのジョブワークロードの表示	577
カレンダーの特定の日のジョブの表示	578
[カレンダー]タブでのジョブの管理	578
Symantec Endpoint Protection のセキュリティの概略の表示	579
エラー処理方法について	579
カスタマイズしたエラー処理方法の作成	580
カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」	583
クラスタフェールオーバー時の処理方法	584
ジョブの停止、失敗、リカバリにしきい値を使用する方法	584
リカバリされたジョブに対するしきい値の設定	585
[ジョブ状態とリカバリ]のデフォルトオプション	585
第 14 章 データのリストア	587
データのリストアについて	587
リストアジョブとカタログ	588
カタログ登録ジョブのデフォルト設定	589
カタログのレベル	591
リストアウィザードを使用したデータのリストア	592
[リストア]ボタンによるリストアウィザード起動の回避	592
[リストア]ボタンによるリストアウィザード起動の設定	593
ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア	593
リストアジョブの[選択リスト]オプション	598

リストアジョブの[デバイス]オプション	600
リストアジョブの[一般]オプション	600
リストアジョブの[詳細]オプション	602
リストアの[ネットワークとセキュリティ]オプション	606
リストアジョブでのプリコマンドとポストコマンドの実行	607
ファイルの権限設定のリストアについて	608
システム状態について	609
システム状態のリストア	610
シャドウコピーコンポーネントのリストアについて	611
ユーティリティパーティションのリストアについて	612
ユーティリティパーティションのリストア先の変更について	612
別のバックアップソフトウェアで作成したメディアを使用したリストアに ついて	613
ARCserve メディアからのデータのリストアについて	613
ARCserve メディアからのデータのリストア	614
リストアするデータの選択について	615
リストア選択リストの作成	617
リストアジョブのリソースクレデンシャルの変更およびテスト	619
リストアするファイルの検索	620
リストアジョブのリストア先の変更について	623
[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション	623
ネーティブの Microsoft パーチャルハードディスク (VHD) ファイルへのリ ストア先の変更について	625
Windows Server 2003/2008 の Active Directory または Active Directory Application Mode でのリストア先の変更	625
リストアジョブのデフォルト設定	627
デフォルトのリストアオプション	627
リストアジョブのキャンセル	630
第 15 章	
アラートと通知	633
アラートと通知について	634
アラートビューについて	635
[アクティブアラート]ビューと[アラート履歴]ビュー	636
アラートの表示	638
アラートのフィルタ処理	638
アラートのカスタムフィルタの作成	638
アラートのカスタムフィルタの編集	639
アラートのカスタムフィルタの削除	640
アラートのプロパティの表示	640
アラートのジョブログの表示	642
アクティブアラートへの応答	643
アラートカテゴリへの自動応答について	644

アラートカテゴリへの自動応答の設定	644
[アクティブアラート]ペインからの情報アラートのクリア	646
アラートの応答オプション	647
アラートカテゴリのプロパティの設定	648
[アラートカテゴリの設定]のオプション	649
[アクティブアラート]ペインからのアラートの有効と無効の切り替え	650
[アラート履歴]からのアラートの削除	650
アラートの通知の設定	651
SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージ通知の設定	652
MAPI 通知方式の設定	653
VIM 通知方式の設定	654
ページャ通知方式の設定	655
[受信者の設定]のオプション	655
SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージの個人受信者の設定	656
MAPI メールの個人受信者の設定	657
VIM メールの個人受信者の設定	659
ページャの個人受信者の設定	660
Net Send の受信者の設定	662
プリンタ通知受信者の設定	664
グループ受信者の設定	665
受信者への通知スケジュールの設定	665
受信者の通知プロパティの編集	666
受信者への通知方式の編集	667
受信者の削除	667
通知用のアラートカテゴリの指定	668
[アラートカテゴリの指定]のオプション	668
受信者に対するアラート通知の停止	669
ジョブが完了したときの通知の送信	669
選択リストがジョブで使われるときの通知の送信	670
ジョブの通知オプション	670
SNMP 通知について	671
SNMP サービスのインストールおよび設定	674
Windows Management Instrumentation パフォーマンスカウンタプロバイダのインストール	674
Windows Management Instrumentation SNMP プロバイダのインストール	675
Windows Management Instrumentation パフォーマンスカウンタプロバイダのアンインストール	675
Windows Management Instrumentation SNMP プロバイダのアンインストール	676

第 16 章

Backup Exec のレポート	677
Backup Exec のレポートについて	678
レポートのリストの表示	679
レポートの実行	679
標準レポートの追加設定	680
レポートの作成に利用可能なグループ	681
新しいレポートジョブの実行	682
新しいレポートジョブの[一般]オプション	683
レポートの保存	683
新しい場所へのレポートの保存	684
Backup Exec レポートビューアからのレポートの印刷	684
PDF 形式で保存されているレポートの印刷	685
HTML 形式で保存されているレポートの印刷	685
[ジョブ履歴]からのレポートの削除	685
レポートジョブのスケジュール設定および通知受信者の設定について	686
Backup Exec のカスタムレポートについて	686
カスタムレポートの作成	687
カスタムレポートの[名前と説明]オプション	688
カスタムレポートのフィールドオプション	689
カスタムレポートのフィールドのグループ化について	690
カスタムレポートのフィールドのソート	692
カスタムレポートのグラフオプションの設定	694
カスタムレポートのグラフの例	696
カスタムレポートのプレビュー	700
カスタムレポートのフィルタの設定	700
カスタムレポートを定義するためのフィルタ式	703
カスタムレポートのコピー	706
カスタムレポートの編集	706
カスタムレポートの削除	707
レポートのデフォルトオプションの設定	707
レポートのデフォルトオプション	708
レポートのプロパティの表示	709
レポートの[一般]プロパティ	709
利用可能なレポート	710
[アクティブアラート]レポート	718
[アクティブアラート(メディアサーバー別)]レポート	718
[アラート履歴]レポート	719
[アラート履歴(メディアサーバー別)]レポート	719
[アプリケーションイベントログ]レポート	720
[監査ログ]レポート	721
[バックアップジョブの成功率]レポート	721
[バックアップの成功率(リソース別)]レポート	722

[バックアップセットの詳細 (リソース別)]レポート	722
[バックアップセット (メディアセット別)]レポート	723
[バックアップサイズ (リソース別)]レポート	724
[システム構成の設定内容]レポート	725
[現在のジョブ状態]レポート	725
[ネットワークデバイスの使用率 (日別)]レポート	726
重複排除用デバイスの概略	726
重複排除の概略	727
[デバイスの概略]レポート	728
[デバイス使用率 (ポリシー別)]レポート	729
[エラー処理方法]レポート	729
[イベントの受信者]レポート	731
[失敗したバックアップジョブ数]レポート	731
[実行されたジョブ (デバイス別)]レポート	732
[ジョブの概略]レポート	732
[バックアップ済みのマシン]レポート	733
[管理対象メディアサーバー]レポート	734
[メディア監査]レポート	735
[メディアエラー]レポート	736
[リカバリに必要なメディア]レポート	736
[メディアセット]レポート	737
[メディアボルト内のメディア]レポート	738
[有効時間帯を逸したジョブ]レポート	738
[ボルトへのメディアの移動]レポート	739
[ジョブ、メディア、アラートの概要]レポート	740
[ジョブの概略 (前日分)]レポート	742
[ポリシージョブの概略 (リソース別)]レポート	743
[ポリシージョブの概略]レポート	744
[ポリシーのプロパティ]レポート	744
[ポリシー保護リソース]レポート	745
[正常に実行されなかったファイル]レポート	746
[更新されたメディア]レポート	746
[ポリシーによるリソースバックアップの成功率]レポート	747
[リソースのリスク評価]レポート	747
[ポリシーによる保護対象のリソース]レポート	748
[リストアセットの詳細 (リソース別)]レポート	749
[ボルト内の利用可能なメディア]レポート	749
[ロボットライブラリのインベントリ]レポート	750
[サーバーの予想負荷]レポート	751
[スクラッチ メディアの利用可能予定]レポート	752
[選択リスト]レポート	752
[テスト実行の結果]レポート	753
[アーカイブジョブの成功率]レポート	754

[アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択]レポート	754
[Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定]レポート	755
[失敗したアーカイブジョブ]レポート	755
[ファイルシステムのアーカイブ設定]レポート	756
[アーカイブの概略 (前日分)]レポート	757
[ボルトストア使用量の詳細]レポート	757
[ボルトストア使用量の概略]レポート	758

第 17 章 障害対策とディザスタリカバリ (障害回復) 761

障害対策について	761
障害対策 (DPP) の主な要素について	762
前回正常起動時の構成へのリカバリ	763
ハードウェアプロファイルのコピー作成	764
システム修復ディスクの作成について (Windows 2000 コンピュータの み)	765
手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて	765
ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメイン コントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある 復元] を含む) について	766
ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメ インコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) の実行	767
リモート Windows コンピュータのディザスタリカバリ操作について (ドメイン コントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限の ある復元] を含む)	771
リモート Windows コンピュータのディザスタリカバリ操作の実行 (ドメ インコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む)	772

第 18 章 トラブルシューティング 775

ハードウェアに関する問題のトラブルシューティング	775
アラートとエラーメッセージについてより多くの情報を手に入れる方法	780
バックアップ問題のトラブルシューティング	781
NTFS パーティションのクラスタサイズについて	782
リストアの問題のトラブルシューティング	783
Backup Exec のパフォーマンスを向上させる方法	783
シマンテック社のナレッジベースについて	787
シマンテック社のナレッジベースの検索	788
テクニカルサポートに連絡する方法	788
Backup Exec の診断アプリケーションについて	788
トラブルシューティングの診断ファイルの生成	789
Backup Exec Diagnostics	789

トラブルシューティングの診断ファイルを生成するためのコマンドラインの使用	790
診断ファイルのコマンドラインスイッチ	791
リモートメディアサーバーでの診断ファイルの生成	792
トラブルシューティングのために Symantec Gather Utility を使う方法	792
トラブルシューティングのログファイル情報の収集	793
BEGather ユーティリティの実行による Linux サーバーの Backup Exec コンポーネントのトラブルシューティング	794
トラブルシューティングのための Backup Exec の Debug Monitor の使用	794

第 19 章

Symantec Backup Exec のサーバークラスタでの使用	797
Backup Exec とサーバークラスタについて	798
Microsoft Cluster Server での Backup Exec のクラスタ化の必要条件	799
Microsoft Cluster Server 内での Backup Exec の動作	800
Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストールの必要条件	800
Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール	802
Microsoft クラスタ上の Backup Exec のアップグレード	803
Microsoft クラスタへの Backup Exec 追加オプションのインストール	804
Microsoft クラスタからの Backup Exec のアンインストール	804
Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成	805
Microsoft Cluster Server フェールオーバーでの「チェックポイントから再開」機能の使用	806
「チェックポイントから再開」機能の有効化または無効化	808
フェールオーバーノードの変更	808
Microsoft Cluster Server の新しいプライマリ SAN SSO サーバーおよび集中管理サーバーの指定	809
Backup Exec と Microsoft Cluster Server の構成	811
ローカル接続されたストレージデバイスを使用する 2 ノードクラスタ	812
共有 SCSI バス上のテープデバイスを使用する 2 ノードクラスタ	813
テープデバイス用の共有 SCSI バスの構成	814
SAN SSO を使用したファイバーチャネル SAN 上のマルチノードクラスタ	816
Microsoft クラスタおよび SAN SSO との Central Admin Server Option の使用	819
Microsoft Cluster Server のバックアップについて	820

Microsoft クラスタ内のローカルディスクのバックアップ	821
Microsoft クラスタ内の共有ディスクのバックアップ	822
Microsoft クラスタ内のデータベースファイルのバックアップ	823
Windows 2008 R2 のクラスタ共有ボリュームのバックアップ	823
Microsoft クラスタへのデータのリストアについて	825
Microsoft クラスタへの Windows Server 2003/2008 コンピュータの クラスタクォーラムのリストア	825
クラスタクォーラムディスクへの新しいドライブ文字の割り当て	826
Veritas Cluster Server での Backup Exec の使用	827
Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのイ ンストールの必要条件	828
Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのイ ンストール	828
Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec のクラスタ化の必要条 件	829
Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec のクラスタ化	830
Veritas Cluster Server のバックアップについて	831
Veritas クラスタ内の Windows 2000 および Windows Server 2003/2008 機能のバックアップについて	832
Veritas クラスタ内のローカルディスクのバックアップ	833
Veritas クラスタ内の共有ディスクのバックアップ	833
Veritas クラスタ内のデータベースファイルのバックアップ	834
Veritas Cluster Server へのデータのリストアについて	834
Veritas Cluster Server でのバックアップジョブフェールオーバーについ て	835
クラスタのディザスタリカバリ	835
IDR を使用したクラスタのディザスタリカバリ対策の準備	836
IDR を使用したクラスタ上のノードのリカバリ	836
IDR を使用した Microsoft クラスタ上の Backup Exec のリカバリ	838
手動のディザスタリカバリ手順を使用したクラスタ全体のリカバリ	838
Microsoft クラスタデータファイルのリカバリ	839
Microsoft クラスタ内のすべての共有ディスクのリカバリ	840
Veritas クラスタ内のすべての共有ディスクのリカバリ	841
Microsoft クラスタでの Backup Exec のリカバリ	842
クラスタのトラブルシューティング	842
クォーラムディスクの署名の変更	844
手動での 2 つのクラスタディスクグループの結合およびボリュームの再 同期化	845
第 20 章 Backup Exec Retrieve の使用	847
Backup Exec Retrieve について	847
Backup Exec Retrieve の動作	848

エンドユーザーが Backup Exec Retrieve で実行できる内容	850
Backup Exec Retrieve のインストール前の処理	852
Web サーバーに Backup Exec Retrieve をインストールするための要件	852
エンドユーザーのコンピュータで Backup Exec Retrieve を使用する場合の必要条件	853
組織内の Silverlight ランタイムの配備について	854
Backup Exec System Recovery Manager 8.5 で実行される Backup Exec Retrieve からのアップグレード	855
Backup Exec Retrieve のインストール	855
Backup Exec Retrieve の設定について	857
データソースの追加	857
データソースの編集	859
データソースの削除	859
Backup Exec Retrieve のデフォルトオプションの設定	860
Backup Exec Retrieve のデフォルトオプション	860
Backup Exec Retrieve のアンインストール	862
Backup Exec Retrieve のトラブルシューティング	862

付録 A

Symantec Backup Exec Active Directory Recovery Agent	865
Active Directory Recovery Agent について	866
Active Directory Recovery Agent 使用上の必要条件	866
Active Directory Recovery Agent のインストールについて	868
Active Directory Recovery Agent の動作	868
Granular Recovery Technology と Active Directory および ADAM/AD LDS バックアップの連携	869
Active Directory と ADAM/AD LDS のバックアップとリストアジョブのためのデフォルトの編集	870
Microsoft Active Directory のデフォルトオプション	870
Active Directory のバックアップ	871
ADAM/AD LDS のバックアップ	872
Active Directory Recovery Agent のバックアップジョブオプション	873
Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて	874
Active Directory のバックアップからの個別のオブジェクトのリストア	876
ADAM/AD LDS のバックアップからの個別のオブジェクトのリストア	878
Active Directory および ADAM/AD LDS のページ済みオブジェクトの再作成について	878
Active Directory のページ済みオブジェクトの再作成	879

ADAM/AD LDS のページ済みオブジェクトの再作成	880
Active Directory コンピュータオブジェクトとコンピュータオブジェクトの カウントのリセット	881

付録 B

Symantec Backup Exec Advanced Disk-based Backup Option	883
Advanced Disk-based Backup Option について	884
Advanced Disk-based Backup Option のインストールについて	884
合成バックアップ機能について	885
合成バックアップでのバックアップ対象	887
合成バックアップの必要条件	887
合成バックアップに関する推奨事項	888
合成バックアップと True Image Restore の追加情報の収集につい て	889
合成バックアップを作成する方式	890
ポリシーウィザードを使用した合成バックアップの作成	891
サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成につい て	892
ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成	893
合成バックアップのためのジョブテンプレートを実行するテンプレート ルールの作成	896
合成バックアップテンプレートの[一般]オプション	897
合成バックアップテンプレートの[詳細]オプション	897
True Image Restore について	898
True Image Restore の必要条件	901
True Image Restore に関する推奨事項	901
TIR (True Image Restore) に対するバックアップの有効化	902
True Image カタログについて	902
True Image Restore に対して有効なバックアップセットのリストアについ て	903
TIR (True Image Restore) に対して有効なバックアップセットの選択	904
True Image Restore のトラブルシューティングのヒント	904
オフホストバックアップについて	905
オフホストバックアップの必要条件	907
Veritas Storage Foundation for Windows プロバイダを使用する場 合のオフホストバックアップの必要条件	909
オフホストバックアップに関する推奨事項	909
リモートコンピュータにインストールされているスナップショットプロバイ ダの参照	911
バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定	912
ADOB (Advanced Disk-based Backup Option) のためのバックアッ プオプション	913

オフホストバックアップジョブのデフォルトオプションの設定	914
Exchange リソース用の GRT 対応オフホストバックアップの設定	915
オフホストバックアップデータのリストアについて	916
オフホストバックアップのトラブルシューティング	916
プロバイダとして VSWF を使用している場合のオフホストバックアップ の失敗	919
ハードウェアプロバイダを使用している場合のオフホストバックアップの 問題	921

付録 C

Symantec Backup Exec Advanced Open File Option	923
Advanced Open File Option について	923
サポート対象のスナップショットテクノロジーについて	926
Advanced Open File Option 使用上の必要条件	927
AOFO (Advanced Open File Option) をインストールする方法	928
コマンドラインを使用したリモート Windows コンピュータへの Advanced Open File Option のインストール	928
AOFO (Advanced Open File Option) のデフォルトオプションの設定	930
Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートについ て	930
Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートの使 用	931
Symantec Volume Snapshot Provider の使用に関する推奨事 項	932
Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルの場所 について	932
Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルをサイ ズ調整する方法	934
バックアップジョブ用の AOFO (Advanced Open File Option) の設定	934
[Advanced Open File] オプション	935
ジョブログと AOFO (Advanced Open File Option) について	938

付録 D

Symantec Backup Exec Agent for DB2 on Windows Servers	941
Backup Exec DB2 Agent について	941
DB2 Agent 使用上の必要条件	942
Windows コンピュータでの DB2 Agent の設定	943
メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウ ント名の追加	943
Windows コンピュータでの DB2 操作のデータベースアクセスの設 定	947

Remote Agent ユーティリティを実行する Windows コンピュータの DB2 Agent への DB2 インスタンスの追加	951
Remote Agent ユーティリティを使用した DB2 インスタンスの編 集	951
Remote Agent ユーティリティの使用した DB2 インスタンスの削 除	952
DB2 リソースのバックアップ	952
DB2 バックアップオプション	954
DB2 データのリストア	955
DB2 リストアオプション	956
DB2 データのリストア先の変更	958
DB2 を使用した DBA 開始ジョブの実行について	960
DB2 データベースのアーカイブログ方式の使用について	962
db2.conf ファイルについて	963
db2.conf ファイルの編集	963
db2.conf ファイルのサンプル	964
DB2 のトラブルシューティング	966

付録 E

Symantec Backup Exec Agent for Enterprise Vault	969
Enterprise Vault のバックアップ	970
Enterprise Vault Agent の必要条件	970
Enterprise Vault Agent のインストールについて	971
Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について	971
Enterprise Vault バックアップオプション	975
Enterprise Vault バックアップジョブに対するデフォルトのバックアッ プ方式の設定	976
Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベース および Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックにつ いて	977
Enterprise Vault のオープンパーティションのバックアップ	977
Enterprise Vault のクローズパーティションのバックアップ	979
Enterprise Vault 8.x 準備完了パーティションのバックアップ	980
Enterprise Vault のディレクトリデータベースのバックアップ	981
Enterprise Vault の監視データベースのバックアップ	982
Enterprise Vault のボルトストアデータベースのバックアップ	983
Enterprise Vault 8.x の監査データベースのバックアップ	985
Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベースのバックアップ	986
Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースのバックアッ プ	987

Enterprise Vault 8.x の Compliance Accelerator 設定データベースと Compliance Accelerator カスタマーデータベースのバックアップ プ	988
Enterprise Vault 8.x の Discovery Accelerator 設定データベースと Discovery Accelerator カスタマーデータベースのバックアップ	989
Discovery Accelerator カストディアンデータベースのバックアップ	990
Enterprise Vault のボルトストアのバックアップ	991
Enterprise Vault 7.x サーバーと Enterprise 8.x サイトのバックアップに ついて	993
Enterprise Vault 7.x サーバーのバックアップ	993
Enterprise Vault サイトのバックアップ	994
Enterprise Vault のインデックスの場所のバックアップ	995
Enterprise Vault のリストアについて	996
Enterprise Vault サーバーにおける Enterprise Vault コンポーネン トのリストア先の自動変更について	998
Enterprise Vault のディレクトリデータベースのリストア	999
Enterprise Vault の監視データベースのリストア	1000
Enterprise Vault のパーティションのリストア	1001
Enterprise Vault のボルトストアデータベースのリストア	1003
Enterprise Vault 8.x の監査データベースのリストア	1005
Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベースのリストア	1006
Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースのリスト ア	1007
Compliance Accelerator 設定データベースのリストア	1008
Compliance Accelerator カスタマーデータベースのリストア	1009
Discovery Accelerator 設定データベースのリストア	1010
Discovery Accelerator カストディアンデータベースのリストア	1012
Discovery Accelerator カスタマーデータベースのリストア	1013
Enterprise Vault Agent を使用した個々のファイルおよびフォルダの リストアについて	1014
Enterprise Vault Agent を使用したパーティションからの個々のファ イルのリストア	1015
Enterprise Vault インデックスバックアップからの個々のフォルダのリ ストア	1016
Enterprise Vault 7.x サーバーの元の場所へのリストア	1017
Enterprise Vault リストアオプション	1018
Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更	1021
別の Microsoft SQL Server コンピュータへの Enterprise Vault デー タベースのリストア先の変更	1023
Enterprise Vault Agent の推奨事項	1026
Backup Exec Migrator for Enterprise Vault について	1026
Backup Exec Migrator for Enterprise Vault の必要条件	1027
Backup Exec Migrator の動作	1027

Backup Exec Migrator の設定	1033
移行された Enterprise Vault データのリストアビューについて	1041
移行された Enterprise Vault データの取り込みについて	1041
Partition Recovery Utility について	1043
Backup Exec Migrator を使用する場合の推奨事項	1044
Backup Exec Migrator と Partition Recovery Utility の問題のトラ ブルシューティング	1045

付録 F

Symantec Backup Exec Agent for Lotus Domino Server	1047
Agent for Lotus Domino Server について	1048
Lotus Domino Agent 使用上の必要条件	1048
Lotus Domino Agent のメディアサーバーへのインストールについて	1050
Lotus Domino Agent と Domino Attachment and Object Service (DAOS) について	1050
見つからない .nlo ファイルをリストアするための推奨事項	1052
Backup Exec の実行中に作成された Lotus Domino データベースの表 示	1052
ローカルサーバー上の Lotus Domino データベースの表示	1052
リモートコンピュータ上の Lotus Domino データベースの表示	1053
Lotus Domino のデフォルト設定	1053
Lotus Domino のデフォルトオプション	1054
Lotus Domino データベースのバックアップについて	1056
ボリュームレベルのバックアップでの Lotus Domino ファイルの自動 除外について	1058
サポートされている Lotus Domino データベースの構成につい て	1058
Lotus Domino のトランザクションログについて	1059
バックアップする Lotus Domino データベースの選択について	1060
バックアップする Lotus Domino データベースの選択	1060
Lotus Domino データベースのバックアップオプションの選択	1061
Lotus Domino のバックアップジョブのオプション	1062
Lotus Domino データベースのリストア	1063
リストアする Lotus Domino データベースの選択について	1065
Lotus Domino データベースのリストアオプションの選択	1068
Lotus Domino のリストアオプション	1069
Lotus Domino データベースのリストアジョブのリストア先変更	1070
DAOS NLO ファイルのリストア先の変更	1071
Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリを準備する方法	1073
Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリ	1073
アーカイブログを使用した Lotus Domino サーバーのディザスタリカ バリについて	1076

循環ログを使用する Lotus Domino サーバーのリカバリ	1076
アーカイブログが有効な Lotus Domino サーバー、データベース、ト ランザクションログのリカバリ	1077
付録 G	
Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Exchange Server	1079
Backup Exec Exchange Agent について	1080
Exchange Agent 使用上の必要条件	1081
Exchange Agent のインストールについて	1085
Exchange の推奨設定	1086
Exchange メールボックスにアクセスするための必要条件	1087
Exchange 用のバックアップ戦略	1088
ボリュームレベルのバックアップでの Exchange データの自動除 外	1091
Exchange の循環ログ設定について	1092
Granular Recovery Technology による Exchange インフォメーションスト アとの連携	1092
Backup Exec と Microsoft Exchange Web サービスについて	1093
Exchange Agent を使用したスナップショットおよびオフホストバックアッ プ	1094
Exchange Agent のスナップショットジョブおよびオフホストジョブのト ラブルシューティング	1095
Exchange リソース用のスナップショットバックアップの設定	1096
Exchange Agent を使用したオフホストバックアップの設定	1097
Exchange データの継続バックアップについて	1098
CPS Exchange バックアップジョブのコンポーネントをインストールする 場合の必要条件	1099
Exchange データの継続バックアップの設定の必要条件	1101
Exchange の継続バックアップに関する推奨事項	1103
Exchange データに対する CPS Exchange バックアップジョブの管理 について	1104
CPS Exchange バックアップジョブに利用できるディスク容量の確認に ついて	1105
CPS Exchange バックアップジョブの一時停止	1106
Backup Exec からの CPS コンソールの表示	1107
特定の時点に個々の Exchange 項目をリストアするためのリカバリボ イントの使用について	1108
CPS Exchange バックアップジョブのトラブルシューティング	1109
Exchange データのデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設 定	1109
Exchange のバックアップおよびリストアのデフォルトオプション	1110
Exchange 2003/2007 のバックアップについて	1116

Exchange 2010 データベースのバックアップについて	1117
バックアップ選択への Exchange 2010 フォレストの追加	1117
Exchange 2010 フォレストの管理	1118
Exchange のバックアップ	1119
Microsoft Exchange のバックアップオプション	1121
バックアップする個々の Exchange メールボックスの選択につい て	1127
Exchange の個々のメールボックスのバックアップ	1130
Exchange データのリストアについて	1132
Exchange 2000 またはそれ以降をリストアするための必要条件	1133
Exchange でのデータベースの設定	1133
リストアする Exchange データベースのマウント解除	1134
Exchange 2003/2007 のリカバリストレージグループまたは Exchange 2010 のリカバリデータベースを使用したデータのリストアについ て	1134
Exchange 2007 リカバリストレージグループへのデータベースのリ ストア	1136
スナップショットバックアップからの Exchange データのリストアにつ いて	1137
継続バックアップからの Exchange データのリストアについて	1138
メールボックスのバックアップによる Exchange メールボックスおよびパ ブリックフォルダのリストアについて	1140
バックアップセットのディスクへの複製による、テープからの個々の Exchange パブリックフォルダメッセージのリストア	1141
Exchange データのリストア	1142
Exchange データのリストア先の変更について	1147
Exchange のストレージグループおよびデータベースのリストア先の 変更について	1147
Exchange インフォメーションストアとは個別にバックアップされたメー ルボックスまたはパブリックフォルダのリストア先の変更につ いて	1148
Exchange データのリストア先の変更	1150
Exchange Server のディザスタリカバリを準備する方法	1153
Exchange 2000 以降のディザスタリカバリ	1154

付録 H

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Hyper-V	1157
Agent for Microsoft Hyper-V について	1157
Agent for Microsoft Hyper-V のインストールについて	1158
Agent for Microsoft Hyper-V を使用するための要件	1159
Agent for Microsoft Virtual Servers からのアップグレードについて	1161
Microsoft Hyper-V のバックアップ選択について	1161

Backup Exec がバックアップジョブの間に自動的に新しい仮想マシンを保護する方法	1162
Agent for Microsoft Hyper-V を使用したデータのバックアップ	1162
Microsoft Hyper-V バックアップオプション	1163
仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設定	1164
Granular Recovery Technology による Agent for Microsoft Hyper-V との連携	1165
Backup Exec で仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法	1166
仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護するための要件	1167
Microsoft Hyper-V のリストア選択について	1168
Hyper-V ホストへのデータのリストア	1170
Microsoft Hyper-V リストアオプション	1171
別のホストへの仮想マシンのリストア	1172
[Microsoft Hyper-V のリストア先の変更]オプション	1172
Agent for Microsoft Hyper-V のデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定	1173
[Microsoft Hyper-V]のデフォルトオプション	1174
高可用性仮想マシンのバックアップとリストアについて	1175

付録 I

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SharePoint	1177
SharePoint Agent について	1177
SharePoint Agent 使用上の必要条件	1178
SharePoint Agent のインストールについて	1179
バックアップ選択リストへの SharePoint のサーバーファームの追加	1179
サーバーファームの追加オプション	1180
SharePoint サーバーファームの管理オプション	1180
サーバーファームのプロパティ	1181
SharePoint サーバーファームの名前の変更	1181
[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]ノードからのファームの削除	1182
SharePoint Web サーバーと Backup Exec との通信の有効化または無効化	1182
SharePoint Portal Server 2003 および 2007 のデフォルトオプションの設定	1183
Microsoft SharePoint のデフォルトオプション	1183
SharePoint Server 2007 および Windows SharePoint Services 3.0 で SharePoint Agent の使用について	1186

バックアップ選択リストへの SharePoint 2007 サーバーファームの追加について	1187
Microsoft Office SharePoint Server 2007 または Windows SharePoint Services 3.0 ファームのバックアップ	1187
Microsoft SharePoint サーバーファームでの個々の SharePoint 2007 Web アプリケーションのバックアップ	1188
SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて	1190
SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストア	1191
データベースの完全バックアップからの個々の SharePoint 2007 項目のリストア	1192
SharePoint 2007 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) のリストア	1194
ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) バックアップからの旧バージョンの SharePoint 2007 ドキュメントのリストア	1194
Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダのリストア	1195
Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションの元の場所へのリストア	1196
SharePoint 2007 のリストア先の変更	1199
別のドキュメントライブラリへの SharePoint 2007 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) データのリストア先の変更	1201
ファイルパスへの個別の SharePoint 2007 項目のリストア先の変更	1202
Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションのリストア先の変更	1203
SharePoint Portal Server 2003 および Windows SharePoint Services 2.0 での SharePoint Agent の使用について	1206
バックアップする SharePoint Server 2003 リソースの選択について	1207
SharePoint 2003 からのリソースのバックアップ	1207
リストアする SharePoint 2003 リソースの選択について	1208
SharePoint 2003 リソースのリストア	1209
データベースの完全バックアップからの個別の SharePoint 2003 項目 (Microsoft SQL Server ベース) のリストア	1210
SharePoint 2003 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) のリストア	1211
ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) バックアップからの旧バージョンの SharePoint 2003 ドキュメントのリストア	1212
SharePoint 2003 のリストア先の変更	1212
別のドキュメントライブラリへの SharePoint 2003 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) データのリストア先の変更	1214

	ファイルパスへの個別の SharePoint 2003 項目のリストア先の変更	1215
付録 J	Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SQL Server	1217
	Agent for Microsoft SQL Server について	1218
	SQL Agent 使用上の必要条件	1219
	SQL Agent のインストールについて	1220
	SQL Server リソースに Backup Exec ログオンアカウントを使用する方法	1220
	SQL Server のバックアップ戦略について	1222
	SQL Server のバックアップ戦略の推奨事項	1222
	SQL Server の一貫性チェックについて	1224
	SQL Agent とスナップショットテクノロジーの使用法	1225
	SQL Agent と AOFO の使用方法	1226
	SQL Agent と ADBO の使用方法	1227
	SQL Server のバックアップおよびリストアのデフォルト設定	1228
	Microsoft SQL のデフォルトオプション	1229
	SQL Server のバックアップオプションの設定	1236
	SQL のバックアップオプション	1237
	ポリシーレベルのバックアップでの SQL データの自動除外について	1244
	SQL データベースのバックアップについて	1245
	SQL Server ファイルグループのバックアップについて	1246
	バックアップ選択ペインへの SQL ファイルグループの表示	1248
	SQL Server ファイルグループのバックアップ	1248
	SQL Server のトランザクションログをバックアップする方法	1249
	SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットについて	1251
	SQL データベースのスナップショットの作成	1253
	SQL Server のリストアオプションの設定	1253
	SQL のリストアオプション	1254
	SQL データベースとファイルグループのリストアについて	1257
	暗号化された SQL データベースのリストアについて	1258
	SQL Server のデータベースバックアップからのリストア	1259
	SQL Server トランザクションログを指定した時点までリストアする方法	1260
	名前付きトランザクションまでトランザクションログからリストアする方法	1261
	SQL Server のファイルグループバックアップからのリストアについて	1262

SQLデータベース全体、消失したプライマリファイルグループ、削除または変更したテーブルを含んでいるファイルグループをリストアする方法	1263
消失または損傷した SQL 非プライマリファイルグループのリストア	1264
SQL Server master データベースのリストアについて	1265
データベースのコピーを使用した SQL の実行	1266
master データベースのリストア	1268
SQL Server のリストア先の変更について	1269
SQL Server のリストア先の変更	1270
データベースのスナップショットを使用した SQL Server 2005 以上のデータベースの復帰について	1274
SQL Server のディザスタリカバリについて	1275
SQL のディザスタリカバリを準備する方法	1276
SQL のディザスタリカバリの必要条件	1276
SQL Server のディザスタリカバリ	1277

付録 K

Symantec Backup Exec Agent for Oracle on Windows or Linux Servers	1279
Backup Exec Oracle Agent について	1279
Oracle Agent のインストールについて	1280
Backup Exec Oracle Agent のアップグレード	1281
Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定	1282
Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの設定	1283
Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの表示	1285
Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの編集	1286
Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの削除	1287
Windows コンピュータでの Oracle 操作作用のデータベースアクセスの有効化	1287
Linux サーバーでの Oracle インスタンスの設定	1288
Linux サーバーでの Oracle インスタンスの表示	1290
Linux サーバーでの Oracle インスタンスの編集	1290
Linux サーバーでの Oracle インスタンスの削除	1291
Linux サーバーでの Oracle 操作作用のデータベースアクセスの有効化	1291
メディアサーバーの認証クレデンシャルについて	1293
メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシャルの設定	1294
メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシャルの編集	1296
メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストからの Oracle サーバーの削除	1297

Oracle インスタンス情報の変更について	1297
Oracle のアプリケーションのデフォルト設定	1298
Oracle のデフォルトオプション	1298
Oracle リソースのバックアップについて	1299
Oracle RAC リソースのバックアップについて	1300
Oracle リソースのバックアップ	1301
Oracle の DBA 開始バックアップジョブの実行について	1304
Oracle リソースのリストアおよびリカバリについて	1305
Oracle の DBA 開始リストアおよびリカバリについて	1306
Oracle データのリストア	1307
Oracle データのリストア先の変更について	1310
レガシー GRFS Oracle Agent データベースのバックアップのリストア	1312
元の Oracle サーバーを使用した Oracle インスタンスおよびデータベースの完全なリカバリの必要条件	1313
元の Oracle サーバーを使用した Oracle インスタンスおよびデータベースの完全なリカバリ	1314
元の Oracle サーバー以外のコンピュータへの Oracle インスタンスまたはデータベースの完全なリカバリの必要条件	1315
元の Oracle サーバー以外のコンピュータへの Oracle インスタンスまたはデータベースの完全なリカバリ	1316
Oracle Agent のトラブルシューティング	1317
Windows コンピュータ上の Oracle インスタンスの SqlplusTimeout の変更	1320
Linux コンピュータ上の Oracle インスタンスの SqlplusTimeout の変更	1320
Windows コンピュータ上の Oracle インスタンスの自動 RMAN チャンネルに関するタイムアウトの変更	1321
Linux コンピュータ上の Oracle インスタンスの自動 RMAN チャンネルに関するタイムアウトの変更	1321
オンライン REDO ログファイルのパスの更新	1322

付録 L

Symantec Backup Exec Agent for SAP Applications	1323
SAP Agent について	1324
SAP Agent の動作	1324
SAP Agent と RMAN の使用について	1325
SAP Agent 使用上の必要条件	1326
SAP Agent のインストールについて	1327
SAP Agent のセキュリティおよび権限について	1328
SAP データの暗号化について	1328
SAP Agent のアラートの生成について	1328

SAP Agent カタログの整合性維持について	1329
SAP データをバックアップする前に	1329
SAP Agent の biparam.ini の設定	1330
SAP の DBA 開始ジョブの設定	1331
システムレベルの SAP のバックアップジョブについて	1333
SAP Agent を使用したバックアップおよびリストアについて	1333
SAP Agent を使用してリモートコンピュータからジョブをサブミットする ための必要条件	1334
brrestore と SAP Agent を使用したデータのリストア	1334
SAP リストアジョブのリストア先の変更について	1335
RMAN を使用した SAP データのバックアップ	1335
RMAN を使用した SAP データのリストア	1337
_backint.mdb から _backint.xml への SAP Agent カタログの移行	1338
Microsoft Cluster Server 上のクラスタ化された SAP データベースのバック アップについて	1340
SAP Agent を使用した MaxDB データベースのバックアップについて	1340
MaxDB データベースのバックアップの準備	1341
MaxDB データベースのバックアップ	1342
SAP Agent を使用した MaxDB データベースのリストア	1342
SAP Agent を使用したディザスタリカバリの実行について	1343
SAP のディザスタリカバリの必要条件	1343
リモート SAP データベースサーバーのディザスタリカバリ	1344
SAP データベースサーバーとメディアサーバーの組み合わせのリカバ リ	1345

付録 M

Symantec Backup Exec Agent for VMware Virtual Infrastructure	1347
Agent for VMware について	1348
Agent for VMware 使用上の必要条件	1348
Agent for VMware のインストールについて	1349
VMware vCenter Server と ESX Server の追加	1349
VMware vCenter Server と ESX Server の削除	1350
VMware リソースのバックアップについて	1350
Backup Exec がバックアップジョブの間に自動的に新しい仮想マシン を保護する方法	1352
VMware リソースの完全バックアップの作成	1352
VMware バックアップオプション	1353
仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設 定	1356
VMware リソースの増分または差分バックアップの作成	1357
Granular Recovery Technology による Agent for VMware との連 携	1358

Backup Exec で仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法	1359
仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護するための要件	1360
Symantec VSS プロバイダを使用したデータベースおよびアプリケーションの保護について	1360
Symantec VSS Provider のログ切り捨て設定の変更	1361
VMware リソースのリストアについて	1361
リストアのための VMware リソースの選択について	1362
VMware リソースのリストア	1362
VMware の仮想マシンのリストア先の変更	1365
[VMware リストア先の変更] オプション	1365
Agent for VMware のためのデフォルトのバックアップとリストアのオプションの設定	1367
VMware のデフォルトオプション	1367

付録 N

Symantec Backup Exec Archiving Option	1373
Archiving Option について	1374
Archiving Option の必要条件	1375
Archiving Option での Backup Exec サービスアカウントへの Exchange Server に対する権限の付与について	1380
Archiving Option での Enterprise Vault サービスについて	1383
Exchange Mailbox Archiving Option のディスク領域の必要条件を計算する方法	1384
File System Archiving Option のディスク領域の必要条件を計算する方法	1386
Backup Exec Archiving Option のインストール	1389
Archiving Option のアンインストールまたは再インストールについて	1389
Archiving Option がインストールされているメディアサーバーへの Enterprise Vault のインストールについて	1390
Archiving Option の動作	1390
Archiving Option のアーカイブジョブに含まれないデータの種類	1392
監査ログの Archiving Option 操作エントリについて	1392
Archiving Option のエンドユーザーが Backup Exec Retrieve の使用によってアーカイブデータを取得する方法	1393
Archiving Option の推奨事項	1393
Archiving Option のアーカイブジョブの作成について	1395
ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成	1395
Archiving Option でのボルトストアについて	1406

Archiving Option でのボルトストアの作成	1407
[新規ボルトストア]アオプション	1407
ボルトストアのプロパティの編集または表示	1408
ボルトストアのプロパティ	1409
ボルトストアの選択項目	1410
Archiving Option のボルトストアの削除について	1411
Archiving Option でのボルトストアパーティションについて	1412
ボルトストアパーティションの作成	1412
ボルトストアパーティションのプロパティの編集	1413
ボルトストアパーティションのプロパティ	1413
Archiving Option でのアーカイブについて	1414
アーカイブのプロパティの編集	1415
アーカイブのプロパティ	1415
アーカイブの削除	1416
Archiving Option でのアーカイブの設定について	1416
[アーカイブの設定]オプション	1417
アーカイブ項目のための保持カテゴリについて	1418
アーカイブジョブのためのファイルシステムの共有とフォルダの選択項目 目への異なるアーカイブ設定の適用	1420
アーカイブジョブの[インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション ン	1421
アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて	1422
メールボックスグループのオプション	1423
Exchange メールボックスグループの管理	1424
アーカイブ内のデータの検索について	1426
アーカイブ内のデータの検索	1426
[アーカイブの検索]オプション	1426
ファイルシステム選択項目の[アーカイブの検索]オプション	1427
Exchange 選択項目のための[アーカイブの検索]オプション	1428
アーカイブからの項目のリストアについて	1429
アーカイブからの項目のリストア	1429
アーカイブから項目をリストアするための[選択リスト]オプション	1431
アーカイブから項目をリストアするための[一般]オプション	1432
アーカイブから項目をリストアするための[Microsoft Exchange] オプ ション	1433
アーカイブから項目をリストアするための[ファイルのリストア先の変更] オプション	1434
アーカイブから項目をリストアするための [Microsoft Exchange] のリ ストア先の変更]オプション	1435
アーカイブからの項目の削除について	1436
アーカイブからの項目の削除	1436
元の場所からのアーカイブデータの削除について	1438
Archiving Option コンポーネントのバックアップについて	1439

Archiving Option データベースの一貫性チェックについて	1442
Archiving Option コンポーネントのバックアップモードの無効化につ いて	1442
Archiving Option コンポーネントのバックアップ	1442
アーカイブジョブのためのバックアップジョブのプロパティ	1443
Archiving Option コンポーネントのリストアについて	1444
Archiving Option コンポーネントのリストア	1445
リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントのバック アップとリストアについて	1452
リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントの バックアップジョブのデフォルト設定の編集	1453
Archiving Option のバックアップジョブのデフォルト設定	1453
アーカイブからの保持期間が終了したアーカイブ項目の削除の防止	1454
アーカイブの権限と設定の同期について	1454
アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について	1455
アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域の有効化	1455
アーカイブジョブのデフォルト設定の編集	1455
アーカイブジョブのデフォルト設定	1456
新しい場所への Archiving Option コンポーネントの移動について	1459
アーカイブジョブのトラブルシューティング	1460
Archiving Option イベントの Enterprise Vault イベントログの表 示	1461
Archiving Option のレポート	1461

付録 O

Symantec Backup Exec Central Admin Server Option	1463
CASO の動作	1464
CASO と Shared Storage Option の連携方法	1467
CASO のインストールの必要条件	1467
CASO デバイスおよびメディアのデータの場所の選択方法	1468
CASO 集中管理サーバーのインストール	1470
CASO の集中管理サーバーからの管理対象メディアサーバーのインスト ール	1471
ファイアウォールを越える CASO 管理対象メディアサーバーのイン ストールについて	1476
CASO の SQL Express インスタンスの動的ポートの静的ポートへの変 更	1477
SQL Express インスタンスが使われる場合の管理対象メディアサー バーのエリアスの作成	1478
SQL 2005 または 2008 インスタンス用の CASO の SQL ポートの開 放	1479

SQL 2005 または SQL 2008 インスタンスが使われる場合の管理対象 メディアサーバーのエイリアスの作成	1479
既存の CASO のアップグレードについて	1480
既存の CASO 集中管理サーバーのアップグレード	1480
既存の CASO 管理対象メディアサーバーのアップグレード	1482
Backup Exec メディアサーバーから集中管理サーバーへの変更	1483
メディアサーバーから管理対象メディアサーバーへの変更	1485
管理対象メディアサーバーからスタンドアロンメディアサーバーへの変 更	1486
CASO 操作の Backup Exec ユーティリティの実行	1486
CASO の集中管理サーバーからの Backup Exec のアンインストール	1486
管理対象メディアサーバーからの Backup Exec のアンインストール	1487
CASO の設定について	1487
CASO でのネットワークトラフィックの軽減について	1489
管理対象メディアサーバーのデフォルト設定	1489
CASO 用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情 報の設定	1492
CASO 通信のしきい値に到達した場合に発生する事項	1494
ログおよび履歴の集中管理サーバーへのコピー	1495
CASO でのアラートの動作	1496
CASO のアラートと通知について	1498
管理対象メディアサーバーでの利用可能なネットワークインターフェー スカードの使用	1498
CASO カタログの場所について	1499
CASO カタログの場所の変更	1500
CASO でのジョブの委任について	1502
CASO でメディアサーバープールを使う方法	1503
CASO での特定のデバイスへの選択リストのバックアップの限定	1504
CASO でのメディアサーバープールの作成	1504
CASO でのメディアサーバープールへの管理対象メディアサーバーの 追加	1505
CASO でのメディアサーバープールの名前の変更	1505
CASO でのメディアサーバープールの削除	1506
CASO でのメディアサーバープールからの管理対象メディアサーバー の削除	1506
CASO でのメディアサーバープールの一般プロパティの表示	1506
CASO でのメディアサーバープールの実行中のジョブおよびアラート の統計情報の表示	1507
CASO でのプール内のすべての管理対象メディアサーバーへの設定 の適用	1508
CASO でのジョブの委任の代替としてのジョブのコピーについて	1508
CASO のバックアップデータ複製ジョブと合成バックアップジョブの必要条 件	1509

CASO での集中リストアの動作	1510
複数のデバイスに存在するデータを CASO でリストアする方法	1511
CASO での集中リストアに関する推奨事項	1513
CASO の集中管理サーバーからのリストア	1513
CASO の[メディアサーバー]ビュー	1515
CASO でのジョブの管理について	1517
CASO での失敗ジョブのリカバリについて	1518
CASO の管理対象メディアサーバーの一時停止	1519
CASO の一時停止している管理対象メディアサーバーの再開	1520
一時停止されたストレージデバイスが CASO の[デバイス]ビューに かに表示されるか	1520
CASO での通信の無効化	1520
CASO での通信の有効化	1521
CASO のための Backup Exec サービスの停止	1521
CASO のための Backup Exec サービスの起動	1521
リモート管理対象メディアサーバーへの接続	1522
管理対象メディアサーバーのプロパティの表示	1522
CASO のディザスタリカバリ	1523

付録 P

Symantec Backup Exec Deduplication Option	1525
Deduplication Option について	1526
Backup Exec エージェントの重複排除の方式	1528
Deduplication Option の必要条件	1530
Deduplication Option のインストールについて	1531
OpenStorage デバイスについて	1532
OpenStorage デバイスの追加	1532
OpenStorage デバイスのプロパティの表示	1535
重複排除用ストレージフォルダについて	1536
重複排除用ストレージフォルダの追加	1537
重複排除用ストレージフォルダのプロパティの表示	1539
複数のメディアサーバー間における重複排除のデバイスの共有	1541
ダイレクトアクセスについて	1542
ダイレクトアクセスの設定	1543
ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent の設定	1544
ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のプロパティの表示	1546
重複排除バックアップジョブについて	1546
最適化された複製について	1547
最適化された複製の設定	1547
テープへの重複排除データのコピーについて	1548
暗号化を用いる重複排除の使用について	1548
重複排除データのリストアについて	1548
重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリについて	1548

重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリの準備	1549
OpenStorage デバイスのディザスタリカバリについて	1549

付録 Q

Symantec Backup Exec Desktop and Laptop Option	1551
Desktop and Laptop Option について	1553
DLO のコンポーネントについて	1554
DLO のインストールの準備	1555
DLO 管理コンソールのシステムの必要条件	1559
Backup Exec Desktop and Laptop Option のインストールについて	1560
Desktop Agent を配備する方法	1561
Desktop Agent のインストールのカスタマイズ	1562
Desktop Agent の手動プッシュ配備の準備	1564
リカバリパスワードの設定について	1566
データ整合性の確認	1566
[データ整合性スキャナ]オプション	1567
DLO サービスクレデンシアルの変更	1568
[サービスアカウント情報]オプション	1568
DLO の管理者アカウントについて	1568
[管理者アカウントの管理]オプション	1569
管理者アカウントの追加	1570
管理者アカウントの編集	1570
管理者アカウントの削除	1571
DLO の権限管理の自動化について	1571
DLO の制限付きリストアについて	1572
個別アカウントのリストを使用した DLO 権限の管理	1572
ドメイングループを使用した DLO 権限の管理	1573
[アクセス許可]オプション	1574
DLO のデフォルト設定について	1575
DLO のデフォルトプロファイル設定の変更	1575
DLO のデフォルトのバックアップ選択項目設定の変更	1575
デフォルトの DLO グローバル設定の変更	1576
[グローバル設定]オプション	1577
[Desktop Agent の間隔]オプション	1578
[ユーザー操作の設定]オプション	1579
[LiveUpdate]オプション	1580
特定のポートでデータベースにアクセスする場合の DLO の設定	1581
DLO での Backup Exec Retrieve の使用について	1582
DLO の更新について	1582
DLO 管理コンソールの更新	1582
Desktop Agent の更新	1583
Desktop Agent のサイレントアップグレードの実行	1585

Windows Vista への DLO のアップグレードについて	1585
NetBackup Professional から DLO へのアップグレード	1585
Backup Exec からの DLO 管理コンソールの起動	1587
DLO の[概要]ビューについて	1587
別の Backup Exec メディアサーバーでの DLO への接続	1589
DLO の[メディアサーバーに接続]オプション	1589
DLO を設定する方法	1589
設定ウィザードの起動	1590
DLO プロファイルについて	1590
新しい DLO プロファイルの作成	1591
DLO のプロファイルのコピー	1606
DLO のプロファイルの修正	1607
DLO のバックアップ選択項目について	1607
DLO のデフォルトバックアップ選択項目について	1608
プロファイルからのデフォルトの DLO バックアップ選択項目の削 除	1609
プロファイルへの DLO バックアップ選択項目の追加	1610
DLO のバックアップ選択項目の[一般]オプション	1611
DLO バックアップ選択項目内のファイルまたはフォルダのインクルー ドおよびエクスクルード	1612
DLO のリビジョン管理について	1613
DLO のファイルのグルーミングについて	1614
DLO のバックアップ選択項目の[リビジョン管理]オプション	1614
DLO のバックアップ選択のためのオプションの設定	1615
バックアップ選択項目で DLO マクロを使う方法	1617
DLO のバックアップ選択項目の修正	1619
DLO バックアップ選択項目の削除	1620
差分ファイルの転送について	1621
差分ファイルの転送の必要条件	1621
保守サーバーの技術情報およびヒント	1621
バックアップ選択項目の差分ファイルの転送を有効にする方法	1622
新しい保守サーバーの追加	1622
保守サーバーの委任の設定	1623
デスクトップユーザーアカウントで委任が設定されていることの確 認	1623
サーバープロセスアカウントが委任に対して信頼されていることの確 認	1624
デフォルトの保守サーバーの変更	1624
ファイルサーバーの再割り当て	1625
DLO データ格納場所について	1625
データ格納場所の設定のサポート	1626
非表示の共有をデータ格納場所として使う方法	1626
DLO データ格納場所の作成	1628

リモートの Windows 共有または NAS デバイスでの DLO データ格納場所の設定	1630
管理者以外のユーザーを使用したリモートの Windows 共有または NAS デバイスでの DLO データ格納場所の設定	1630
リモートの Windows 共有または NAS デバイスからの DLO データ格納場所の削除	1631
DLO データ格納場所の削除	1632
自動ユーザー割り当てについて	1632
自動ユーザー割り当ての作成	1633
自動ユーザー割り当ての変更	1635
自動ユーザー割り当ての優先度の変更	1635
自動ユーザー割り当てのプロパティの表示	1636
自動ユーザー割り当ての削除	1636
DLO でのグローバルエクスクルードフィルタの設定について	1636
すべての DLO バックアップから除外するファイルおよびフォルダの指定	1637
すべての DLO のバックアップからの電子メールの除外	1639
ファイルとフォルダの圧縮からの除外	1641
ファイルとフォルダの暗号化からの除外	1642
差分ファイルの転送からのファイルとフォルダの除外	1643
常に開いた状態のファイルの除外について	1644
DLO マクロを使用したグローバルエクスクルードの定義について	1645
Desktop Agent ユーザーの管理について	1645
新しいネットワークユーザーデータフォルダの手動による作成	1646
1 人のデスクトップユーザーの DLO への追加	1647
既存のネットワークストレージを持つ複数のデスクトップユーザーのインポート	1648
Desktop Agent ユーザーのプロファイルの変更	1649
Desktop Agent ユーザーの有効化または無効化	1649
DLO データベースからの Desktop Agent ユーザーの削除	1650
新しいネットワークユーザーデータフォルダへの Desktop Agent ユーザーの移動	1651
新しいコンピュータへのデスクトップユーザーの移動	1652
Desktop Agent ユーザーの一覧表示	1653
コンピュータのプロパティの変更	1653
デスクトップコンピュータの有効化または無効化	1654
DLO からのデスクトップコンピュータの削除	1654
DLO 管理コンソールからのデスクトップのバックアップ	1655
ブラックアウトウィンドウの設定	1655
ブラックアウトウィンドウのスケジュールの削除	1656
DLO 管理コンソールからのファイルおよびフォルダのリストア	1657
[リストア]オプション	1658
[リストアの概略]オプション	1660

DLO でリストアするファイルおよびフォルダの検索	1661
[リストア]検索オプション	1661
DLO の緊急リストアおよびリカバリパスワードについて	1662
リカバリパスワードの変更について	1662
DLO 管理コンソールを使用してユーザーを削除した場合	1663
DLO の緊急リストア機能を使用した 1 人のユーザーのデータのリカバリ	1663
DLO の緊急リストア機能を使用しない 1 人のユーザーのデータのリカバリ	1664
システムディスク以外のディスクで障害が発生しているか、ディスクが破損している場合のメディアサーバーまたはファイルサーバーのリカバリ	1664
ハードディスクドライブが失敗した場合またはコンピュータを交換する必要がある場合のメディアサーバーのリカバリ	1665
ハードディスクドライブが失敗した場合またはコンピュータを交換する必要がある場合のファイルサーバーのリカバリ	1665
[履歴]ペインのオプションと[ジョブ履歴]ペインのオプション	1666
履歴ログの表示	1667
ジョブ履歴表示フィルタの設定	1669
履歴ログの検索	1670
DLO 管理コンソールでのアラートの監視について	1671
アラートカテゴリ	1671
DLO の情報アラート	1672
DLO の警告	1673
DLO のアラート	1674
アラートの設定	1675
DLO アラートの管理	1676
DLO アラートのクリア	1677
DLO アラートの通知方式の設定について	1678
DLO アラートの通知方式の設定	1678
DLO における通知受信者の設定について	1679
SMTP メールによる DLO アラート通知を受信する個人の設定	1679
MAPI メールによる DLO アラート通知の個人受信者の有効化	1680
VIM メールによる DLO アラート通知を受信する個人の設定	1680
ページャによる DLO アラート通知の個人受信者の有効化	1680
DLO アラート通知を受信する SNMP トラップの設定	1681
DLO アラート通知を受信するための Net Send の有効化	1681
DLO アラート通知を受信するためのプリンタの有効化	1682
DLO アラート通知を受信するグループの設定	1682
DLO での受信者に対する通知のスケジュール	1683
DLO での受信者についての情報の変更	1683
DLO での受信者の通知方式の変更	1684
DLO アラートの受信者の削除	1684

DLO のレポートについて	1685
DLO レポートの実行	1686
DLO レポートのプロパティの表示	1687
DLO データベースの保守について	1688
Desktop and Laptop Option のクラスタ化について	1688
既存のクラスタへの Backup Exec および Desktop and Laptop Option のインストール	1689
DLO が含まれている既存の Backup Exec 9.x または 10.x クラスタの アップグレード	1689
既存の Backup Exec 9.x または 10.x クラスタのアップグレードとクラ スタへの DLO の追加	1690
DLO のクラスタ構成を解除した後での Desktop Agent のクラスタノー ドへの再接続	1691
DLO のクラスタ構成を解除する前の DLO クラスタ環境内のデータ格 納場所の移動	1691
DLO のコマンド構文について	1692
コマンドライン用のリモートサーバーオプションについて	1692
DLO コマンドの詳細	1693
-AssignSL コマンドについて	1694
-EnableUser コマンドについて	1695
-ChangeServer コマンドについて	1696
-KeyTest コマンドについて	1697
-ListProfile コマンドについて	1698
-ListSL コマンドについて	1699
-ListUser コマンドについて	1699
-LogFile コマンドについて	1700
-Update コマンドについて	1701
-EmergencyRestore コマンドについて	1703
-SetRecoveryPwd コマンドについて	1704
-NotifyClients コマンドについて	1704
-InactiveAccounts コマンドについて	1704
-RenameDomain コマンドについて	1705
-RenameMS コマンドについて	1705
-LimitAdminTo コマンドについて	1706
-IOProfile コマンドについて	1706
Desktop Agent について	1707
Desktop Agent の用語	1708
Desktop Agent の機能とメリット	1708
Desktop Agent のシステムの必要条件	1709
Desktop Agent のインストール	1710
Desktop Agent を設定する方法	1711
Desktop Agent からのメディアサーバーへの接続について	1712
[代替クレデンシヤル]オプション	1712

デスクトップコンピュータ上でのローカルアカウントの使用について	1713
DLO のダイアログボックスとアカウント情報のリセット	1714
接続状態の変更	1714
Desktop Agent の有効化	1715
Desktop Agent の無効化	1715
Desktop Agent コンソールについて	1715
Desktop Agent によるデータのバックアップの作成について	1717
リビジョンについて	1718
Desktop Agent の標準表示でのバックアップ選択項目の修正	1719
Desktop Agent の詳細表示でのバックアップ選択項目の追加	1720
Desktop Agent の詳細表示でのバックアップ選択項目の修正	1721
Desktop Agent の詳細表示でのバックアップ選択項目の削除	1721
DLO を使用した Outlook PST ファイルの増分バックアップについて	1722
Lotus Notes NSF ファイルの増分バックアップについて	1723
Lotus Notes ファイルの増分バックアップを実行するための Desktop Agent の設定	1724
Lotus Notes で現在のユーザーが設定されていない場合の Desktop Agent の使用について	1725
Desktop Agent の設定の変更について	1725
DLO のバックアップジョブのためのスケジュールのオプションの変更	1726
Desktop Agent のカスタムオプションの設定	1727
デスクトップユーザーデータフォルダの移動	1729
接続ポリシーのカスタマイズ	1730
デスクトップのユーザーデータの同期について	1731
同期の動作	1731
複数のデスクトップ間でのフォルダの同期	1732
同期フォルダの変更または表示	1733
同期フォルダの削除	1733
同期ファイルの競合の解決	1734
Desktop Agent の状態について	1734
[状態]ビューからの保留中のジョブの開始	1735
ジョブの一時停止またはキャンセルについて	1735
使用状況の詳細の表示	1736
使用量の詳細	1737
Desktop Agent を使用したファイルのリストア	1738
[リストア]オプション	1739
リストアするデスクトップファイルおよびフォルダの検索	1740
Microsoft Outlook の個人用フォルダファイルのリストアについて	1741
削除した電子メールメッセージのリストアについて	1741

代替ストリームのデータを持つファイルのリストアについて	1742
Backup Exec Retrieve を使用したファイルのリストアについて	1742
Desktop Agent でのジョブ履歴の監視について	1742
ログファイルの表示	1743
ログファイルの検索	1745
ログファイルのグルーミングについて	1747
他の製品での DLO の使用について	1747
DLO 管理コンソールに関するトラブルシューティング	1748
Desktop Agent に関するトラブルシューティング	1753
アクセシビリティおよび DLO	1755

付録 R

Symantec Backup Exec Intelligent Disaster Recovery Option	1759
Intelligent Disaster Recovery Option について	1760
IDR 使用上の必要条件	1761
IDR オプションのインストールについて	1761
IDR オプションの評価版の使用について	1762
IDR のためのコンピュータの準備について	1762
Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードについて	1764
*.dr ファイル用のデフォルトデータパスの手動での編集について	1765
ディザスタリカバリメディアの作成と更新について	1767
Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行するための必要条件について	1769
Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの実行について	1769
障害発生後のディザスタリカバリメディアの作成について	1770
ブート不可能 Intelligent Disaster Recovery CD イメージのみの作成	1776
ディザスタリカバリのファイルのコピー	1778
別のメディアサーバーを使用した IDR メディアの作成	1779
メディアサーバーのログオンクレデンシャルオプション	1780
IDR を使用した障害からのリカバリ準備について	1780
リカバリするコンピュータのハードウェアの変更について	1782
IDR を使用した IBM コンピュータのリカバリについて	1783
Intelligent Disaster Recovery ウィザードについて	1784
暗号化されたバックアップセットおよび Intelligent Disaster Recovery ウィザードについて	1784
Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ	1785
Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した自動リストアの 実行	1785
ローカル接続されているメディアデバイスからのリストア	1788
リモートのディスクへのバックアップフォルダからのリストア	1790

リモートメディアサーバーからのリストア	1791
ネットワークドライバのインストール	1793
ハードディスクドライブのパーティションサイズの変更について	1794
Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した手動リストアの 実行	1794
Microsoft SQL Server のリカバリに関する注意事項	1797
Microsoft Exchange のリカバリに関する注意事項	1798
SharePoint Portal Server のリカバリに関する注意事項	1798
Citrix Metaframe のリカバリに関する注意事項	1798
Central Admin Server Option での IDR の使用について	1798
Veritas Storage Foundation for Windows サーバーでの IDR の使用に ついて	1799
IDR に関する推奨事項	1799

付録 S

Symantec Backup Exec NDMP Option	1801
NDMP Option について	1801
NDMP Option 使用上の必要条件	1802
NDMP Option のインストールについて	1803
Backup Exec への NDMP サーバーの追加	1803
[NDMP サーバーの追加]オプション	1804
複数のメディアサーバー間での NDMP サーバーのデバイスの共有	1804
NDMP リソースのバックアップ	1805
NDMP のバックアップオプション	1806
NDMP のバックアップの選択のためのディレクトリとファイルのインクルード およびエクスクルードについて	1808
NetApp のバックアップ選択項目への特定のディレクトリのインクルード ド	1808
EMC のバックアップ選択項目への特定のディレクトリのインクルード ド	1809
NDMP のバックアップ選択項目からファイルとディレクトリをエクス クルードするためのパターンの使用方法	1810
NetApp バックアップ選択項目からのディレクトリおよびファイルの除 外	1812
EMC のバックアップ選択項目からのディレクトリおよびファイルのエク スクルード	1812
バックアップした NDMP データを複製する方法	1814
NDMP データのリストア	1815
NDMP のリストアオプション	1816
リストアする NDMP データのリストア先の変更について	1818
NDMP のバックアップおよびリストアのデフォルト設定	1818
NDMP のバックアップとリストアのデフォルトオプション	1819
NDMP サーバーのプロパティの表示	1822

付録 T

NDMP サーバープロパティ	1822
Symantec Backup Exec Remote Agent for Linux or UNIX Servers	1823
Remote Agent for Linux or UNIX Servers について	1824
Remote Agent for Linux or UNIX Servers 使用上の必要条件	1824
Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストールについて	1825
Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストール	1826
Remote Agent for Linux or UNIX Servers の設定について	1830
メディアサーバーへの Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの公開に ついて	1831
Remote Agent for Linux or UNIX Servers および Remote Agent for Macintosh Systems が情報を公開できるメディアサーバー の追加	1832
Linux、UNIX と Macintosh コンピュータのバックアップジョブからのファイ ルとディレクトリの除外について	1832
Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションの編集	1833
Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプション	1833
Remote Agent for Linux or UNIX Servers の使用によるデータのバック アップについて	1839
Linux、UNIX、Macintosh コンピュータのバックアップ	1840
Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップジョブオ プション	1867
SUSE Linux Enterprise Server 上の Novell Open Enterprise Server をバックアップする場合の必要条件	1843
バックアップのためにサポートされる Novell Open Enterprise Server コンポーネント	1844
Novell Open Enterprise Server (OES) コンポーネントのバックアッ プ	1845
Linux、UNIX および Macintosh コンピュータへのデータのリストア	1846
Novell OES コンポーネントのリストアについて	1846
Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのリストアジョブオプショ ン	1847
Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップとリストアジョ ブのデフォルトオプションの編集	1848
Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのデフォルトのバック アップとリストアジョブのオプション	1848
Remote Agent for Linux or UNIX Servers のアンインストール	1852
Remote Agent for Linux or UNIX Servers の手動でのアンインス トール	1853
Remote Agent for Linux or UNIX Servers を手動でアンインストー ルする場合に削除するランタイムスクリプト	1854

	Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動	1855
	Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの停止	1856
	Remote Agent for Linux or UNIX Servers のトラブルシューティング	1857
付録 U	Symantec Backup Exec Remote Agent for Macintosh Systems	1859
	Remote Agent for Macintosh Systems について	1859
	Remote Agent for Macintosh Systems 使用上の必要条件	1860
	Macintosh システムの Backup Exec admin グループについて	1860
	Macintosh システムでの Backup Exec admin グループの手動作成	1861
	Remote Agent for Macintosh Systems のインストールについて	1862
	Remote Agent for Macintosh Systems のインストール	1862
	Remote Agent for Macintosh Systems の設定について	1865
	Remote Agent for Macintosh Systems を使用したデータのバックアップについて	1866
	Macintosh システムのバックアップ	1866
	Macintosh のリストアオプション	1867
	Macintosh システムのリストア	1867
	Macintosh システムのバックアップとリストアのデフォルトオプションの編集	1868
	Macintosh システムのバックアップとリストアジョブのデフォルトオプション	1868
	Remote Agent for Macintosh Systems のアンインストール	1872
	Remote Agent for Macintosh Systems の起動	1873
	Remote Agent for Macintosh Systems の停止	1873
	Remote Agent for Macintosh Systems の手動でのアンインストール	1874
	Remote Agent for Macintosh Systems のトラブルシューティング	1875
付録 V	Symantec Backup Exec Remote Agent for NetWare Systems	1877
	Remote Agent for NetWare Systems について	1877
	NetWare サーバーに Remote Agent for NetWare Systems をインストールするための必要条件	1878
	Remote Agent for NetWare Systems のインストールについて	1879
	Remote Agent for NetWare Systems のインストール	1879
	NetWare Agent リストへの NetWare サーバーの公開について	1881
	NetWare サーバー上の AUTOEXEC.NCF ファイルへの BESTART の追加	1882
	Remote Agent for NetWare Systems のアンロード	1882
	NetWare サーバーのバックアップについて	1883

NetWare ディレクトリサービス (NDS) のバックアップについて	1884
NetWare サーバーのバックアップ	1886
NetWare SMS のバックアップオプション	1887
NetWare サーバーのリストアについて	1887
NetWare サーバーのリストア	1888
Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションについ て	1889
Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設 定	1890
メディアサーバーでの TCP 動的ポート範囲の指定	1891
NetWare サーバーの構成情報の保存	1892

付録 W

Symantec Backup Exec Remote Agent for Windows Systems	1895
Remote Agent for Windows Systems について	1895
Remote Agent for Windows Systems 使用上の必要条件	1896
Remote Agent for Windows Systems の停止と起動	1897
Windows システムの Remote Agent ユーティリティについて	1898
Remote Agent ユーティリティの起動	1899
Remote Agent ユーティリティでのリモートコンピュータのアクティビティ の状態の表示	1899
Remote Agent ユーティリティの[状態]オプション	1900
システムトレイからのリモートコンピュータの活動状態の表示	1900
リモートコンピュータでの Remote Agent ユーティリティの自動起 動	1901
リモートコンピュータの更新間隔の設定	1901
メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公 開について	1902
データベースアクセスの設定	1906
Remote Agent ユーティリティの[データベースアクセス]オプショ ン	1907
Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットについて	1909
Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットの使用	1909
Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットのスイッ チ	1910

付録 X

Symantec Backup Exec Remote Media Agent for Linux Servers	1915
Remote Media Agent for Linux Servers について	1916
Remote Media Agent for Linux Servers の動作	1916
Remote Media Agent for Linux Servers の必要条件	1917
Remote Media Agent for Linux Servers のインストールについて	1918

Remote Media Agent for Linux Servers のインストール	1918
Remote Media Agent for Linux Servers の Backup Exec オペレー タグループについて	1921
Remote Media Agent for Linux Servers の Backup Exec オペレー タグループの手動作成	1921
Remote Media Agent としての Linux サーバーの追加	1922
Remote Media Agent のオプションの追加	1923
メディアサーバーと Remote Media Agent 間の通信用ポートの変 更	1924
Remote Media Agent for Linux Servers のプロパティの編集	1925
Remote Media Agent のプロパティ	1926
複数のメディアサーバー間での Remote Media Agent の共有	1927
Remote Media Agent for Linux Servers に接続されたデバイスのための デバイスプールの作成について	1927
メディアサーバーからの Remote Media Agent for Linux Servers の削 除	1928
Remote Media Agent for Linux Servers の使用によるデータのバックアッ プ	1928
Remote Media Agent for Linux Servers の使用によるデータのリスト ア	1928
Tape Library Simulator Utility について	1929
シミュレートテープライブラリの作成	1930
シミュレートテープライブラリのプロパティの表示	1931
シミュレートテープライブラリの削除	1933
コマンドラインからのシミュレートテープライブラリの管理	1934
Remote Media Agent for Linux Servers のアンインストール	1935
シミュレートテープライブラリのファイルの検索	1936
Remote Media Agent for Linux Servers のトラブルシューティング	1937

付録 Y

Symantec Backup Exec SAN Shared Storage Option	1941
SAN Shared Storage Option について	1941
SAN Shared Storage Option 使用上の必要条件	1943
SAN Shared Storage Option のインストールについて	1944
SAN Shared Storage Option のデバイスについて	1945
SAN Shared Storage Option でのメディアローテーションについ て	1947
SAN Shared Storage Option でメディアをカタログ登録する方 法	1947
SAN Shared Storage Option でのメディアの共有について	1947
SAN Shared Storage Option でのスケジュールの設定とジョブの表 示について	1948

Backup Exec for NetWare Servers と Backup Exec 間におけるロ ボットライブラリの共有について	1949
ロボットライブラリ共有の前提条件について	1949
ロボットライブラリ共有用の Windows メディアサーバーのパーティシ ョン設定	1950
ロボットライブラリ共有用の NetWare メディアサーバーのパーティシ ョン設定	1951
SAN Shared Storage Option 環境における「デバイスの管理」の使用 について	1954
SAN Shared Storage Option でのロボットライブラリおよびドライブの 名前の変更について	1954
SAN Shared Storage Option 環境でドライブプールを使用する方 法	1955
SAN Shared Storage Option でのメディアの表示について	1956
SAN Shared Storage Option でデバイスを監視する方法	1956
SAN Shared Storage Option での新しいプライマリデータベースサー バーの指定とサーバーの設定について	1957
SAN Shared Storage Option での Backup Exec データベースサー バーと共有 ADAMM データベースの管理について	1957
SAN Shared Storage Option のスタンバイプライマリデータベース サーバーの作成	1958
SAN Shared Storage Option での複数サーバー上の Backup Exec サービスの起動と停止について	1960
SAN Shared Storage Option 環境の再設定について	1960
SAN Shared Storage Option での障害が発生したコンポーネントのトラブ ルシューティング	1961
SAN Shared Storage Option でのオフラインのデバイスのトラブル シューティング	1961
SAN Shared Storage Option のハードウェアエラーの検出	1963
SAN Shared Storage Option での SAN のリセット	1964
SAN Shared Storage Option での突然のデバイスの取り外しイベン ト後のデバイスのオンライン化	1965
SAN Shared Storage Option に関する推奨事項	1965
付録 Z	
Symantec Backup Exec Storage Provisioning Option	1967
Storage Provisioning Option オプションについて	1968
Storage Provisioning Option の必要条件	1969
CASO 環境での Storage Provisioning Option の必要条件	1969
Storage Provisioning Option のインストールについて	1970
Backup Exec でのストレージアレイのコンポーネントの表示	1970
ストレージアレイ設定ウィザードの使用について	1971

ストレージアレイ設定ウィザードを使用したストレージアレイの設定	1971
ストレージアレイのプロパティの表示	1973
ストレージアレイの物理ディスクのプロパティ	1973
Storage Provisioning Option の[すべての仮想ディスク]デバイスプール について	1976
Storage Provisioning Option の仮想ディスクについて	1977
ストレージアレイの仮想ディスクのデフォルトオプションの編集	1978
ストレージアレイの詳細プロパティ	1978
ストレージアレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプションの編 集	1980
ストレージアレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプション	1980
ストレージアレイでの仮想ディスクの設定	1982
ストレージアレイの未設定の仮想ディスクのプロパティの表示	1983
ストレージアレイの未設定の仮想ディスクのプロパティ	1983
ストレージアレイの仮想ディスクの一般プロパティの編集	1985
ストレージアレイの仮想ディスクの一般プロパティ	1986
Storage Provisioning Option のホットスペアについて	1990
ストレージアレイ設定ウィザードを使用したホットスペアの追加	1990
ストレージアレイ設定ウィザードを使用したホットスペアの変更	1991
新しいストレージアレイの検出	1992
仮想ディスクまたはストレージアレイの名前の変更	1992
仮想ディスクの物理ディスクの識別について	1993
仮想ディスクの物理ディスクの識別	1994
Storage Provisioning Option のディスク使用率の予測について	1994
ストレージアレイのディスク容量不足のアラートの設定	1995
[Storage Provisioning アラート]のデフォルトオプション	1995
Storage Provisioning Option のトラブルシューティング	1996
付録 AA Symantec Online Storage for Backup Exec	1999
Symantec Online Storage for Backup Exec について	1999
Symantec Online Storage for Backup Exec を使用する場合の推奨事 項	2000
Symantec Online Storage for Backup Exec の設定	2001
Symantec Online Storage for Backup Exec のサインアップについ て	2001
Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent の ダウンロードについて	2002
Symantec Online Storage フォルダについて	2002
Symantec Online Storage フォルダの作成	2002
Symantec Online Storage フォルダの一時停止	2004
Symantec Online Storage フォルダの再開	2004
既存の Symantec Online Storage フォルダの共有	2005

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブの作成について	2005
Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブの作成	2006
Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブの管理について	2008
Symantec Online Storage for Backup Exec ファイルの消去	2009
Symantec Online Storage フォルダの削除	2010
Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブのリストアについて	2011

付録 AB

Backup Exec のアクセシビリティ	2013
アクセシビリティと Backup Exec について	2013
Backup Exec のキーボードショートカットについて	2014
Backup Exec 固有のキーボードショートカット	2014
Backup Exec ユーティリティ固有のキーボードショートカット	2016
Backup Exec Desktop and Laptop Option 管理コンソールに固有のキーボードショートカット	2017
Backup Exec Desktop and Laptop Option Desktop Agent に固有のキーボードショートカット	2019
Backup Exec ユーザーインターフェースにおける一般的なキーボードナビゲーション	2020
Backup Exec のダイアログボックス内のキーボードナビゲーション	2021
Backup Exec のリストボックスのナビゲーション	2022
Backup Exec のタブ付きダイアログボックスのナビゲーション	2022
アクセシビリティオプションの設定について	2023

用語集	2025
------------------	-------------

索引	2035
-----------------	-------------

Backup Exec の概要

この章では以下の項目について説明しています。

- Backup Exec について
- Backup Exec の動作
- Backup Exec の新機能
- Backup Exec エージェントとオプションの新機能
- Backup Exec エージェントおよびオプション
- 管理コンソールについて
- [ホーム]ビューについて

Backup Exec について

Symantec Backup Exec 2010 は Windows (R) サーバーネットワーク用の高性能データ管理ソリューションです。クライアント/サーバーモデルを採用し、サーバーおよびワークステーションを、高速かつ安全にバックアップおよびリストアすることができます。

Backup Exec には、多様なプラットフォームで構成されるさまざまな規模のネットワークに対応して、次のような製品が用意されています。

表 1-1 さまざまなプラットフォーム用の Backup Exec 構成

Backup Exec のエディション	説明
Symantec Backup Exec™ 2010	

Backup Exec のエディション	説明
	<p>次のようなほぼすべてのストレージ構成で、多数の種類のテープデバイスとディスクデバイスをサポートします。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ファイバーチャネル■ iSCSI■ NAS■ SAN、LAN および WAN■ ディスクベースの重複排除アプライアンス <p>Backup Exec 2010 は Windows、Linux、Solaris、MAC OS、VMware、NetWare システムなどの物理環境および仮想環境を保護します。リモートシステム、アプリケーションおよびデータベースの保護には、オプションの Backup Exec エージェントを利用できます。個別の Backup Exec オプションを追加して、データの重複排除、アーカイブ、集中管理などの拡張機能を利用できます。</p> <p>Backup Exec 2010 の各ライセンスには次のオプションが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Intelligent Disaster Recovery Option このオプションを使用すると、オペレーティングシステムを再インストールすることなくシステムのディザスタリカバリ機能を使用できます。より高速で高度なシステムリカバリ機能を実現する Backup Exec System Recovery 2010 が個別に販売されています。この機能には、異機種ハードウェアへのリカバリのサポートおよび VMware、Microsoft Hyper-V、Citrix Xen などの仮想環境へのリカバリが含まれます。 次の URL を参照してください。 www.backupexec.com/besr■ Advanced Open File Option このオプションはデフォルトで付属し有効になっており、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットインフラストラクチャを使用してオープンファイルを自動的に保護します。■ Backup Exec Desktop and Laptop Option このオプションを使用すると、ネットワーク上の、Backup Exec 2010 による保護が可能なファイル共有に送信されたユーザーデータファイルが継続バックアップされます。Backup Exec 2010 ライセンスには、デスクトップまたはノートパソコンの 5 台分のライセンスが含まれます。■ スタンドアロンテープドライブとディスクへのバックアップフォルダのためのサポート Backup Exec 2010 では、多数のテープベースおよびディスクベースのバックアップデバイスがサポートされます。 互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

Backup Exec のエディション	説明
	<p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2</p> <ul style="list-style-type: none">■ 物理ロボットライブラリごとに 1 つのドライブのサポートおよびシングルドライブ仮想テープライブラリごとのサポート 物理ロボットライブラリで各追加ドライブをサポートをするには Library Expansion Option を購入します。Virtual Tape Library Unlimited Drive Option を購入して仮想テープライブラリのドライブを無制限にサポートすることもできます。■ Windows XP Professional OS ワークステーション向けの Backup Exec Remote Agent。 <p>p.73 の「Backup Exec エージェントおよびオプション」を参照してください。</p>

Backup Exec のエディション	説明
Small Business Server Edition (SBSE)	<p>サポート対象のバージョンの Microsoft Windows Small Business Server にインストールして保護します。</p> <p>サポートされているオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1</p> <p>Small Business Server Edition の機能は次の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Exchange Agent。■ Small Business Server Premium Edition の Microsoft SQL を保護する SQL Agent。■ Windows SharePoint Services を保護する SharePoint Agent。■ Small Business Server Premium Edition 付きの第 2 サーバーを保護する Remote Agent for Windows Systems。■ サポート対象のバージョンの Windows デスクトップおよびノートパソコンを保護する Desktop and Laptop Option。■ Windows の実行中にシステム全体のディスクベースのスナップショットバックアップを実行する Backup Exec System Recovery 2010 Small Business Server Edition。Small Business Server システム全体を次のいずれかの環境に回復します。<ul style="list-style-type: none">■ 元のハードウェア。■ 異なるハードウェア。■ VMware または Hyper-V 仮想環境。Granular Recovery オプションも含まれます。■ Backup Exec System Recovery 2010 Server Edition (Microsoft SBS Premium Edition で使用される場合のみ)。Microsoft Windows Small Business Server (SBS) Premium Edition に付属する Windows サーバーのシステム全体を回復します。Granular Recovery オプションが含まれます。■ Backup Exec System Recovery 2010 Desktop Edition。個々の Exchange メールメッセージおよび SharePoint ドキュメントのリストアを容易にする Granular Recovery オプションを使用する場合に必要です。 <p>Central Admin Server Option と SAN Shared Storage Option を除いて、SBSE で使用する追加の Backup Exec エージェントおよびオプションを購入できます。</p>

Backup Exec のエディション	説明
QuickStart Edition (QSE) (OEM リリースのみ)	<p>サポート対象のバージョンの Microsoft Windows Server にインストールして保護します。</p> <p>サポートされているオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1</p> <p>QuickStart Edition では次のものがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Backup Exec Desktop and Laptop Option このオプションは、5 台のデスクトップコンピュータおよびラップトップコンピュータに対してユーザーデータファイルの継続的な保護を提供します。 ■ シングルドライブロボットライブラリまたは仮想テープライブラリ 物理ロボットライブラリで各追加ドライブをサポートをするには Library Expansion Option を購入します。 Virtual Tape Library Unlimited Drive Option を購入して仮想テープライブラリのドライブを無制限にサポートすることもできます。 ■ スタンドアロンテープドライブとディスクへのバックアップドライブ <p>追加の Backup Exec エージェントとオプションを使うには、Symantec Backup Exec 2010 または Backup Exec の Small Business Server Edition へのアップグレードを購入する必要があります。QuickStart の OEM 固有のバージョンでは追加のオプションがサポートされることがあります。</p>

p.66 の「Backup Exec の新機能」を参照してください。

p.70 の「Backup Exec エージェントとオプションの新機能」を参照してください。

p.73 の「Backup Exec エージェントおよびオプション」を参照してください。

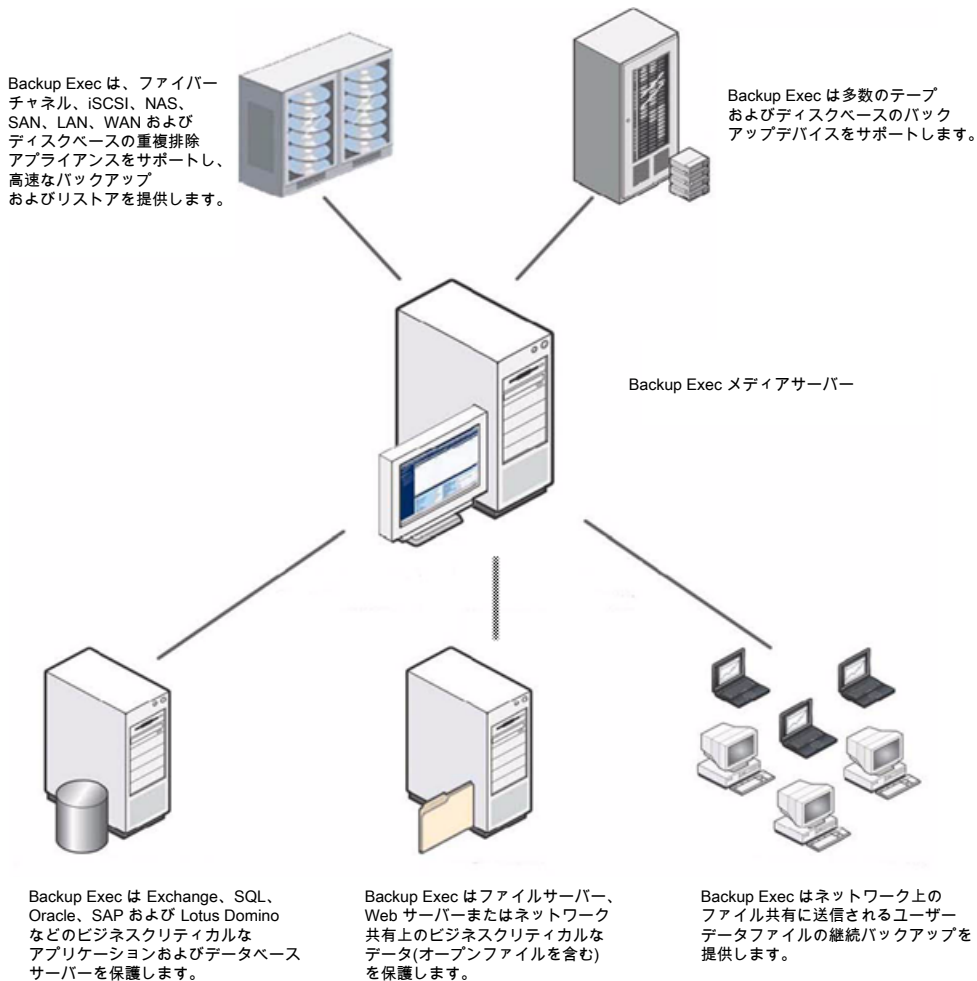
p.64 の「Backup Exec の動作」を参照してください。

Backup Exec の動作

Backup Exec 管理コンソールを使用してバックアップ操作、リストア操作およびキューティリティ操作をサブミットします。管理者は、メディアサーバー (Backup Exec をインストールした Windows サーバー) またはリモートコンピュータから管理コンソールを実行することができます。ジョブの作成後、Backup Exec メディアサーバーでは、ジョブの処理またはジョブを処理するための委任が環境に応じて行われます。

ジョブのサブミット、結果の表示、デバイスおよびメディアの操作など、Backup Exec のほとんどの操作は管理コンソールを使用して実行します。

図 1-1 ネットワーク全体のバックアップとリストアの仕組み



Backup Exec 管理コンソールを使用して、Backup Exec でほとんどのジョブに対して使用するジョブのデフォルト設定を行います。ただし、リソースと呼ばれる選択済みのワークステーションを週次バックアップするような特定のジョブを準備する際には、これらのデフォルトオプションを上書きすることができます。サーバーへのファイルのリストアのような 1 回限りのジョブを作成できます。または、日次バックアップジョブのように繰り返し発生するジョブをスケジュールすることもできます。ポリシーを使用してバックアップ戦略を構成する繰り返しジョブを管理できます。

バックアップまたはリストアジョブの作成、メディアローテーションジョブの設定、メディア上書き禁止など、Backup Exec での操作の多くは、ウィザードを使用して行うことができます。

また、[ジョブモニター]を使用してジョブの進行状況を監視したり、Backup Exec のカレンダーを使用し、その日、その週またはその月に実行が予定されているすべてのジョブをすばやく一覧表示することができます。

メディアサーバーにはメディアおよびデバイスのデータベースが格納され、メディアサーバーにアクセス可能なストレージデバイスの構成および割り当てが行われます。また、これらのデータベースは、誤ってメディアが上書きされないようにします。Backup Exec のデバイス管理機能を使用し、ストレージデバイスを論理的にグループ化してデバイスプールを作成することによってバックアップの負荷を共有できます。メディア管理機能を使用し、ライブラリ内のすべてのメディアの組織化、追跡およびトラブルシューティングを行うことができます。

ジョブが完了すると、ジョブの結果がジョブ履歴データベースに保存されます。バックアップされたデータのレコードは、Backup Exec のカタログに保持されます。ジョブ履歴は、ジョブの処理中に発生した内容 (統計情報やエラーなど) のレポートで、カタログファイルはリストアする内容を選択する際に使用する記録です。

Backup Exec の新機能

このリリースで Backup Exec に追加された新機能は次のとおりです。

表 1-2 Backup Exec の新機能

新機能	説明
Microsoft Windows Server 2008 R2 のサポート	<p>次の操作を行うことができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新しい Express (システム状態) ライターを使用してデータのバックアップおよびリストアを行います ■ 無名パーティションからのオペレーティングシステムのブートファイルのバックアップおよびリストアを行います ■ クラスタ共有ボリューム(CSV)のバックアップおよびリストアを行います ■ ネーティブ VHD ファイルに対してバックアップおよびリストアを行います

新機能	説明
Windows Server 2008 R2 の Server Core インストールオプションのサポート	バックアップとリストア操作のために Server Core で Backup Exec Remote Agent for Windows Systems をインストールできます。Remote Agent は Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットもインストールします。このアプレットによって、リモートコンピュータでの Backup Exec の操作を監視することができます。
Microsoft Windows 7 のサポート	バックアップとリストア操作のために Microsoft Windows 7 コンピュータ用の Backup Exec Remote Agent をインストールできます。Backup Exec Desktop and Laptop Option は Windows 7 コンピュータのファイルを自動的に保護します。Backup Exec は BitLocker ドライブ暗号化もサポートします。
拡張された Backup Exec License Assessment Tool	ネットワーク上の、インストールされているすべての Backup Exec System Recovery と Backup Exec 2010 でライセンスキーのスキャンをサポートします。 License Assessment Tool のレポートは次の新しい情報を提供するようになりました。 <ul style="list-style-type: none">■ 環境をアップグレードすることを計画できるように、インストールされている Backup Exec のバージョン情報を提供します。■ レポートの Web のリンクは現在のリリースの新しい機能について読むことができるようにアップグレードの補足情報を提供します。

新機能	説明
Remote Agent for Linux or UNIX Servers での新しいプラットフォームのサポート	<p>次のプラットフォームをサポートします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Enterprise Linux 5.2 ■ Ubuntu 8.10 ■ XenServer 5 ■ Debian 4.0, 5.0 ■ SUSE Linux Enterprise 11
Remote Media Agent for Linux での新しいプラットフォームのサポート	SUSE Linux Enterprise 11 をサポートします。
Library Expansion Option の拡張	<p>各ロボットライブラリで最初に追加したドライブの後で追加する、各追加ドライブをサポートします。Backup Exec をインストールするとき、すべてのロボットライブラリで最初のドライブのサポートが含まれます。</p> <p>Library Expansion Option はロボットライブラリの各追加ドライブのサポートを有効にします。</p>
Backup Exec 管理コンソールの[ホーム]ビュー	<p>重要な Backup Exec 機能の表示をカスタマイズするために項目を追加または削除できます。1 つのビューで、ジョブ、アラート、デバイスの概略と、高速にアクセスできるテクニカルサポートサイトを表示できます。項目は必要な数のみ追加できます。</p>
インストール DVD	Backup Exec のすべてのインストールファイルを 1 枚の DVD で提供します。

新機能	説明
[アイデアの共有]Webリンク (英語)	<p>Backup Exec 管理コンソールの上部にあるこのリンクをクリックすると、Symantec Backup Exec に関する新しいアイデアを提案できます。提案のサブミット後、コミュニティの他のメンバーはそのアイデアに投票したりコメントしたりすることができます。投票数の最も多いアイデアはリストの最上位に移動します。シマンテックの製品担当者は、今後のリリースでの機能候補を探すためにこれらのアイデアを参照します。</p>
ダイレクトコピー	<p>物理デバイスに仮想デバイスから直接データをコピーできます。Backup Exec メディアサーバーはカタログのデータについての情報を記録します。コピーされたデータについての情報がカタログにあるので、仮想デバイスまたは物理デバイスのいずれかからデータをリストアできます。</p>
バックアップセットの検証テンプレート	<p>バックアップジョブおよびバックアップ複製ジョブとは関係なく検証操作を実行できます。バックアップセットの検証テンプレートを使用すると、バックアップ後の任意の時刻に検証操作を実行するようにスケジュール設定できます。たとえば、ネットワークリソースが不十分な場合、バックアップ時間帯でない時間に検証操作を実行するようにスケジュール設定できます。また、バックアップセットの検証テンプレートを使用するとバックアップセットをローカルに検証できるため、Backup Exec の Deduplication Option のメリットが大幅に拡大されます。</p> <p>Backup Exec には、バックアップセットの検証テンプレートを使用して事前設定されたポリシー例が含まれます。</p>

p.70 の「Backup Exec エージェントとオプションの新機能」を参照してください。

p.73 の「Backup Exec エージェントおよびオプション」を参照してください。

Backup Exec エージェントとオプションの新機能

このリリースの Backup Exec でエージェントとオプションに追加された新機能は次のとおりです。

表 1-3 Backup Exec エージェントとオプションの新機能

エージェントまたはオプション	新機能
Agent for VMware Virtual Infrastructure	<p>次のサポートを含んでいます:</p> <ul style="list-style-type: none">■ ESX/ESXi 4.0、vCenter 4.0、および vStorage APIs for Data Protection を含んでいる VMware vSphere v4.0■ ハードウェアバージョン 7 で設定される仮想マシンの差分および増分バックアップ■ VCB プロキシサーバーなしでパフォーマンスを向上させることができるステージングされないバックアップ■ 仮想マシンの SAN ベースのリストア <p>次の新しい機能も含んでいます:</p> <ul style="list-style-type: none">■ 仮想マシンにインストールされている VSS 対応アプリケーションの 1 回でのバックアップ (個々のアプリケーション項目をリカバリ)■ 前回のバックアップ以降に追加した仮想マシンを自動的に保護する動的インクルード■ オフになる仮想マシンを自動的にジョブから除外する機能■ 異なる仮想マシンのフォルダまたはリソースプールに仮想マシンのリストア先を変更する機能■ 展開された[ジョブ履歴]での各バックアップの仮想マシン合計数のリスト■ バックアップが正常に完了されるようにするための複数の代替バックアップ転送形式
Agent for Microsoft Hyper-V	<p>次のサポートを含んでいます:</p> <ul style="list-style-type: none">■ Hyper-V 2008 R2■ 高可用性仮想マシンの自動検出が付属するクラスタ Hyper-V 仮想マシン■ クラスタ共有ボリューム■ Live Migration■ 仮想マシンにインストールされている VSS 対応アプリケーションの 1 回でのバックアップ (個々のアプリケーション項目をリカバリ) <p>このエージェントは Agent for Microsoft Virtual Servers として以前は知られていました。</p>

エージェントまたはオプション	新機能
Agent for Microsoft Exchange Server	<p>次の新しい機能を含んでいます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Exchange 2010 のサポート ■ Exchange 2010 のデータベース可用性グループのサポート ■ Remote Agent for Windows Systems による Hyper-V と ESX 4.0 の環境での Exchange 2010 のサポート ■ CPS による Exchange 2010 スタンドアロンサーバーのサポート
Agent for Enterprise Vault	<p>次の新しい機能を含んでいます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Enterprise Vault 8.0 のサポート ■ Enterprise Vault の Compliance Accelerator および Discovery Accelerator のサポート ■ Backup Exec Migrator for Enterprise Vault のサポート。 Backup Exec Migrator は Enterprise Vault サーバーから Backup Exec メディアサーバーが管理する三次ストレージシステムへの Enterprise Vault アーカイブデータの移行を有効にします。
Exchange Mailbox Archiving Option	<p>バックアップされた Microsoft Exchange Server の電子メールをアーカイブできます。データはアーカイブされた後、ソースの場所から削除されるため、Exchange Server のデータ量が減ります。</p> <p>Archiving Option ではアーカイブデータをディスクベースのボルトストアに移動するために Enterprise Vault の技術が使用されます。Exchange Server への影響がほとんどないように、すでにバックアップされたデータのみがアーカイブされます。エンドユーザーは Backup Exec Retrieve と呼ばれる Web インターフェースの参照によってファイルの現在のそして以前のバージョンを取得できます。</p> <p>p.1374 の「Archiving Option について」を参照してください。</p>
File System Archiving Option	<p>バックアップされた Windows NTFS データをアーカイブできます。データはアーカイブされた後、ソースの場所から削除されるため、ファイルサーバーのデータ量が減ります。</p> <p>Archiving Option ではアーカイブデータをディスクベースのボルトストアに移動するために Enterprise Vault の技術が使用されます。ファイルシステムサーバーへの影響がほとんどないように、すでにバックアップされたデータのみがアーカイブされます。エンドユーザーは Backup Exec Retrieve と呼ばれる Web インターフェースの参照によってファイルの現在のそして以前のバージョンを取得できます。</p> <p>p.1374 の「Archiving Option について」を参照してください。</p>

エージェントまたはオプション	新機能
Virtual Tape Library Unlimited Drive Option	<p>各仮想テープライブラリ (VTL) で最初の追加ドライブの後のすべての追加ドライブをサポートします。各仮想テープライブラリの追加ドライブすべてをサポートするために Virtual Tape Library Unlimited Drive Option を購入できます。各仮想ドライブに Virtual Tape Library Unlimited Drive Option の個別のインスタンスを購入する必要はありません。</p> <p>追加の VTL の拡張には次が含まれています:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VTL 認識機能 ■ 適切な操作を確認するための VTL デバイス固有のメニュー ■ ADBO (Advanced Disk-based Backup Option) と使われる場合の合成完全バックアップのサポート。
Deduplication Option	<p>次の機能をデータ整理の戦略をサポートするために提供します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 重複のないデータのみを保存することでバックアップに必要なディスクストレージの量を減らします。 ■ 重複のないデータのみをネットワーク経由で送信することでバックアップのネットワーク使用率を減らします。
Active Directory Recovery Agent	<p>Microsoft Windows Server 2008 の Active Directory ドメインサービスオブジェクトをサポートします。</p>
Agent for Lotus Domino Server	<p>Lotus Domino バージョン 8.5 をサポートします。Domino Attachment and Object Service (DAOS) のサポートを含みます。</p>
Symantec Online Storage for Backup Exec	<p>より効率的なオンラインバックアップを提供します。Symantec Online Storage for Backup Exec では、バックアップ選択項目が以前のバックアップ複製ジョブのあらゆる既存のバックアップデータと比較されるようになりました。以前のバックアップ複製ジョブから変更されていないデータはすべてスキップされます。ファイルの部分のみが変わったら、その部分のみがバックアップされます。この拡張によって、繰り返し発生するバックアップジョブの実行に必要な時間と帯域幅を減らすことができます。</p>

エージェントまたはオプション	新機能
Desktop and Laptop Option	<p>次のコンポーネントで Microsoft Windows Server 2008 R2 をサポートします:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DLO 管理コンソール ■ DLO Administration Service ■ Maintenance Service <p>次のコンポーネントで Microsoft Windows 7 をサポートします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Desktop Agent ■ Change Log Service ■ DLO 管理コンソール (リモート管理をサポートするため)

Backup Exec エージェントおよびオプション

ネットワークを保護するためにいくつかの Backup Exec オプションを利用できます。このオプションは次のように分類されます。

- メディアサーバーコンポーネント
p.73 の「[Backup Exec のメディアサーバーコンポーネントについて](#)」を参照してください。
- サーバー保護エージェント
p.74 の「[Backup Exec サーバー保護エージェントについて](#)」を参照してください。
- アプリケーション保護エージェント
p.75 の「[Backup Exec アプリケーション保護エージェントについて](#)」を参照してください。
- 仮想マシンエージェント
p.78 の「[Backup Exec の仮想マシンエージェントについて](#)」を参照してください。
- クライアント保護エージェント
p.78 の「[Backup Exec クライアント保護エージェントについて](#)」を参照してください。
- メディアサーバーストレージオプション
p.79 の「[Backup Exec メディアサーバーストレージオプションについて](#)」を参照してください。

Backup Exec のメディアサーバーコンポーネントについて

次のメディアサーバーコンポーネントはバックアップとディザスタリカバリのより細かい管理を可能にします:

表 1-4 Backup Exec メディアサーバーコンポーネント

項目	説明
Symantec Backup Exec Advanced Open File Option	<p>ファイルが使用中の場合でもネットワーク上のすべてのファイルが保護されます。このオプションは Backup Exec にシームレスに統合されており、単独または特定のオプションと組み合わせて使用されます。ファイルが使用中であるかどうかを事前に調べる必要はなく、通常のバックアップと同様にジョブをスケジュールすることができます。</p> <p>p.923 の「Advanced Open File Option について」を参照してください。</p>
Intelligent Disaster Recovery (IDR)	<p>ローカルとリモートの Windows コンピュータにリカバリソリューションを提供します。このオプションを使用することにより、オペレーティングシステム全体を手動で再インストールする必要なしに、コンピュータ障害をリカバリすることができます。</p> <p>IDR により、フロッピーディスク、CD-R/CD-RW またはブート可能テープを使用して、前回の完全なバックアップセットからリストアし、ただちにシステムをオンラインに回復することができます。</p> <p>p.1764 の「Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードについて」を参照してください。</p>

Backup Exec サーバー保護エージェントについて

次のオプションは、ネットワーク上の Microsoft Windows のリモートサーバー、Novell NetWare サーバー、Linux と UNIX サーバー、Macintosh システムに保護を提供します:

表 1-5 Backup Exec サーバー保護エージェント

項目	説明
Symantec Backup Exec Remote Agent for Windows	<p>リモート Windows コンピュータのバックアップとリストアを提供します。</p> <p>p.1895 の「Remote Agent for Windows Systems について」を参照してください。</p>

項目	説明
Symantec Backup Exec Remote Agent for Linux or UNIX Servers	<p>Windows サーバーネットワークの管理者が、ネットワークに接続されている Linux、UNIX サーバーのバックアップおよびリストアを実行することができます。これらのサーバーのバックアップやリストアを行うには、それらのコンピュータ上でこのエージェントを実行している必要があります。</p> <p>p.1840の「Linux、UNIX、Macintosh コンピュータのバックアップ」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Remote Media Agent for Linux Servers	<p>次のデバイスに対してデータをバックアップし、データをリストアできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Linux サーバーに直接接続するストレージデバイス。 ■ Linuxサーバーのハードディスクのフォルダ。 <p>p.1916の「Remote Media Agent for Linux Servers について」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Remote Agent for Macintosh Systems	<p>Windows サーバーネットワークの管理者が、ネットワークに接続されている Macintosh システムのバックアップおよびリストアを実行することができます。</p> <p>p.1866の「Macintosh システムのバックアップ」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Remote Agent for NetWare Systems	<p>リモート NetWare リソースのバックアップとリストアを提供します。</p> <p>p.1883の「NetWare サーバーのバックアップについて」を参照してください。</p>

Backup Exec アプリケーション保護エージェントについて

次のアプリケーション保護エージェントは、企業の電子メールメッセージ、ナレッジベースとミッションクリティカルなデータベースアプリケーションを継続的に保護します:

表 1-6 Backup Exec アプリケーション保護エージェント

項目	説明
Symantec Backup Exec Active Directory Recovery Agent	<p>権限のある完全リストアまたは権限のない完全リストアを実行せずに、次の Microsoft のアプリケーションからオブジェクトおよび属性をリストアすることができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Active Directory ■ Active Directory Application Mode ■ Active Directory Lightweight Directory Services <p>p.868 の「Active Directory Recovery Agent の動作」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Exchange Server	<p>Exchange Server データのバックアップを行います。Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) オプションが有効なインフォメーションストアのバックアップから、個々のメールボックス、メールメッセージおよびパブリックフォルダをリストアすることができます。Backup Exec Continuous Protection Server (CPS) を使用して、最新の完全なトランザクションログなど、インフォメーションストアの任意の時点への完全なリカバリを実行できます。</p> <p>p.1080 の「Backup Exec Exchange Agent について」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SQL Server	<p>SQL Server のオンラインバックアップを可能にします。データ保護要件をファイルグループレベルまでカスタマイズできます。トランザクションログのバックアップにより特定時点のバックアップを高速に実行することができます。また、リストア先変更機能を使用して、ネットワーク上の他の SQL サーバーに SQL データを簡単にリストアすることができます。</p> <p>p.1222 の「SQL Server のバックアップ戦略について」を参照してください。</p>

項目	説明
Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SharePoint	<p>SharePoint のオンラインバックアップを可能にします。GRT オプションを使用して、ファーム全体から個々のワークスペースおよびドキュメントをリストアすることができます。他のワークスペースに影響を与えずに、元のインフォメーションストアまたは他のインフォメーションストアにデータのリストアを行うことができます。</p> <p>p.1206 の「SharePoint Portal Server 2003 および Windows SharePoint Services 2.0」での SharePoint Agent の使用について」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Agent for Oracle (R) on Windows or Linux Servers	<p>Backup Exec または RMAN コンソールからデータベース管理者 (DBA) としてバックアップ操作およびリストア操作を開始することができます。データベースだけでなく表領域でのバックアップも可能です。また、データベースをオンラインにしたまま、アーカイブの作成されている REDO ファイルと制御ファイルをバックアップすることができます。</p> <p>p.1279 の「Backup Exec Oracle Agent について」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Agent for Lotus Domino Server	<p>Lotus Domino サーバーのオンラインバックアップを可能にします。Lotus Agent では、Lotus Domino API を使用してトランザクションログをサポートし、Lotus Domino サーバー全体を保護します。</p> <p>p.1048 の「Agent for Lotus Domino Server について」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Agent for Enterprise Vault	<p>Enterprise Vault のアーカイブデータに対するディザスタリカバリソリューションを提供します。アーカイブデータのリカバリは、Exchange Server や特定のファイルシステムなどのアーカイブソースに依存しません。</p>
Symantec Backup Exec Agent for DB2 on Windows Servers	<p>Microsoft Windows サーバー上でのバックアップおよびリストアを可能にします。バックアップジョブおよびリストアジョブは、Backup Exec 管理コンソールまたは DB2 コマンドラインプロセッサから開始できます。</p> <p>p.941 の「Backup Exec DB2 Agent について」を参照してください。</p>

項目	説明
Symantec Backup Exec Agent for SAP Applications	<p>アプリケーションが稼動している状態で、重要なデータのオンラインバックアップを可能にします。 SAP Agent は、SAP 社に認定されているとともに、SAP (BC-BRI BACKINT) インターフェースを使用することにより信頼性の高いオンラインバックアップを可能にしています。</p> <p>p.1333の「SAP Agent を使用したバックアップおよびリストアについて」を参照してください。</p>

Backup Exec の仮想マシンエージェントについて

次のエージェントを使用すると仮想マシンの保護とリカバリを実行できます。

表 1-7 Backup Exec の仮想マシンエージェント

エージェント	説明
Symantec Backup Exec Agent for VMware Virtual Infrastructure	<p>VMware ESX Server か vCenter Server (以前の VirtualCenter) を使うオンラインの仮想マシンをバックアップし、リストアすることを許可します。元の場所に仮想マシンをリストアするか、別の仮想サーバーにリストア先を変更できます。</p> <p>p.1348の「Agent for VMware について」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Hyper-V	<p>次の操作を行うことができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想サーバーソフトウェアを実行する物理的なコンピュータである仮想サーバーホストのための設定をバックアップし、リストアします。 ■ 仮想サーバーホストに存在するすべての仮想マシンをバックアップし、リストアします。 ■ 選択されたオンラインおよびオフラインの仮想マシンをバックアップし、リストアします。 ■ 異なる仮想サーバーホストまたは仮想マシンに仮想マシンのリストア先を変更します。 <p>p.1157の「Agent for Microsoft Hyper-V について」を参照してください。</p>

Backup Exec クライアント保護エージェントについて

ネットワーク上の Microsoft Windows のリモートサーバーおよび Macintosh システムを保護するとともに、デスクトップとラップトップシステムを自動的に保護します。

表 1-8 Backup Exec クライアント保護エージェント

項目	説明
Symantec Backup Exec Desktop and Laptop Option	すべてのビジネスデータを保護することができます。ユーザーがオフィスにいるか、外出中であるかに関係なく、継続的なバックアップ保護機能を提供します。また、デスクトップ上とラップトップ上にあるファイルを同期させることも可能です。
Symantec Backup Exec Remote Agent for Windows Systems	リモート Windows システムのバックアップとリストアを提供します。 p.1895 の「 Remote Agent for Windows Systems について 」を参照してください。
Symantec Backup Exec Remote Agent for Macintosh Systems	Windows サーバーネットワークの管理者が、ネットワークに接続されている Macintosh システムのバックアップおよびリストアを実行することができます。 p.1866 の「 Macintosh システムのバックアップ 」を参照してください。

Backup Exec メディアサーバストレージオプションについて

次のオプションを使用すると、SAN 上でより大容量および高効率のメディアストレージデバイスまたは共有ストレージリソースを使用するように Backup Exec の機能を拡張できます。

表 1-9 Backup Exec メディアサーバストレージオプション

項目	説明
Deduplication Option	次の機能をデータ整理の戦略をサポートするために提供します: <ul style="list-style-type: none"> ■ 重複のないデータのみを保存することでバックアップに必要なディスクストレージの量を減らします。 ■ 重複のないデータのみをネットワーク経由で送信することでバックアップのネットワーク使用率を減らします。 <p>p.1526 の「Deduplication Option について」を参照してください。</p>

項目	説明
<p>Microsoft Exchange Mailbox Archiving Option</p>	<p>バックアップされた Microsoft Exchange Server の電子メールをアーカイブできます。データはアーカイブされた後、ソースの場所から削除されるため、Exchange Server のデータ量が減ります。</p> <p>Archiving Option ではアーカイブデータをディスクベースのボルトストアに移動するために Enterprise Vault の技術が使用されます。Exchange Server への影響がほとんどないように、すでにバックアップされたデータのみがアーカイブされます。エンドユーザーは Backup Exec Retrieve と呼ばれる Web インターフェースの参照によってファイルの現在のそして以前のバージョンを取得できます。</p> <p>p.1374 の「Archiving Option について」を参照してください。</p>
<p>File System Archiving Option</p>	<p>バックアップされた Windows NTFS データをアーカイブできます。データはアーカイブされた後、ソースの場所から削除されるため、ファイルサーバーのデータ量が減ります。</p> <p>Archiving Option ではアーカイブデータをディスクベースのボルトストアに移動するために Enterprise Vault の技術が使用されます。ファイルシステムサーバーへの影響がほとんどないように、すでにバックアップされたデータのみがアーカイブされます。エンドユーザーは Backup Exec Retrieve と呼ばれる Web インターフェースの参照によってファイルの現在のそして以前のバージョンを取得できます。</p> <p>p.1374 の「Archiving Option について」を参照してください。</p>
<p>Symantec Backup Exec NDMP Option</p>	<p>Backup Exec で、Network Data Management Protocol (NDMP) を使用して、サポートされているデバイス上でのバックアップおよびリストアを初期化および制御することができます。</p> <p>p.1803 の「NDMP Option のインストールについて」を参照してください。</p>

項目	説明
Symantec Backup Exec Library Expansion Option	<p>ロボットライブラリの各追加ドライブのサポートを有効にします。Backup Exec をインストールするとき、すべてのロボットライブラリで最初のドライブのサポートが含まれます。</p> <p>p.437 の「Library Expansion Option について」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Virtual Tape Library Unlimited Drive Option	<p>各仮想テープライブラリで最初のドライブの後のすべての追加ドライブのサポートを有効にします。Backup Exec をインストールするとき、すべてのシングルドライブ仮想テープライブラリのサポートが含まれています。</p> <p>p.436 の「Virtual Tape Library Unlimited Drive Option について」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec Central Admin Server Option	<p>既存のメディアサーバーまたは新しく構成したメディアサーバーを集中管理してジョブの負荷分散処理を実行できます。これによって、Backup Exec を最大限に活用できます。</p> <p>p.1464 の「CASO の動作」を参照してください。</p>
Symantec Backup Exec SAN Shared Storage Option	<p>ストレージエリアネットワーク (SAN) に接続されたロボットライブラリの使用を可能にし、LAN に依存しない高性能バックアップソリューションを提供します。SAN Shared Storage Option を使用すると、SAN で接続されたロボットライブラリを、複数のメディアサーバーで共有することができます。これにより、ハードウェアの使用効率と耐障害性の向上を図ることができます。SAN 環境でのパフォーマンスが向上するだけでなく、複数の Backup Exec メディアサーバーに分散したバックアップ処理を集中管理することより、ハードウェアの総所有コスト (TCO) を低減することができます。</p> <p>p.1944 の「SAN Shared Storage Option のインストールについて」を参照してください。</p>

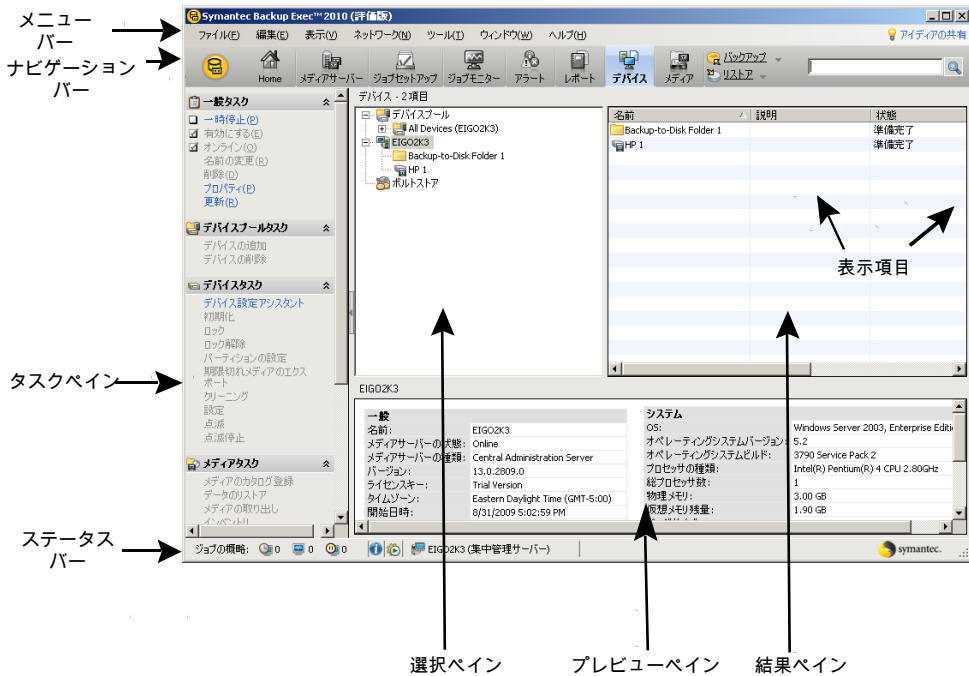
項目	説明
Symantec Backup Exec Advanced Disk-based Backup Option (ADBO)	<p>次の機能が提供されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 合成バックアップでは、実行済みのバックアップ(完全バックアップまたは増分バックアップ)と後続の増分バックアップを組み合わせて、データを作成(合成)します。この機能を使用すると、完全バックアップを実行する必要がなくなります。合成はリモートコンピュータにアクセスせずに Backup Exec メディアサーバー上で実行されます。バックアップウィンドウの総量および必要なネットワーク帯域幅が削減されます。 ■ True Image Restore では、ディレクトリの内容を完全バックアップまたは増分バックアップの実行時の状態にリストアすることができます。 リストアする内容は、バックアップ時点で存在していたディレクトリから選択します。実行前に削除されたファイルはリストアされません。適切な完全バックアップまたは増分バックアップに含まれる正しいバージョンのファイルのみがリストアされます。以前のバージョンはリストアされず、上書きされます。 ■ オフホストバックアップでは、バックアップをリモートコンピュータから、ファイバー接続された SAN 環境内の Backup Exec メディアサーバーへ移動します。バックアップがメディアサーバーに移動した場合、リモートコンピュータでは他の操作を行うことができます。 Granular Recovery Technology (GRT) オプションが有効な Exchange Server バックアップのオフホストバックアップもサポートされます。 <p>p.70 の「Backup Exec エージェントとオプションの新機能」を参照してください。</p> <p>p.885 の「合成バックアップ機能について」を参照してください。</p> <p>p.898 の「True Image Restore について」を参照してください。</p> <p>p.905 の「オフホストバックアップについて」を参照してください。</p>

項目	説明
Symantec Backup Exec Storage Provisioning Option	<p>メディアサーバーに接続するストレージアレイを設定し、管理し、監視することを許可します。ウィザードはストレージアレイの設定について手順をご案内します。ウィザードは Backup Exec がストレージアレイの宛先デバイスとして使う仮想ディスクを作成します。Storage Provisioning Option はディスク容量不足がストレージアレイで起きるときアラートを送信するディスクの使用状況の傾向を監視します。ディスクの使用状況の傾向はまた現在のディスク領域が十分であるかについて、そしてディスク領域を追加するべきであるときについて情報を提供します。</p> <p>p.1968 の「Storage Provisioning Option オプションについて」を参照してください。</p>

管理コンソールについて

管理コンソールから Backup Exec の機能にアクセスできます。

図 1-2 管理コンソール



管理コンソールのウィンドウは次のコンポーネントで構成されています。

表 1-10 管理コンソールコンポーネント

項目	説明
メニューバー	Backup Exec のメニューバーは、画面の最上部に水平に表示されます。メニューを表示するには、メニュー名をクリックするか、またはキーボードショートカットを使用します。Backup Exec の機能は、メニューの該当する項目をクリックして実行することができます。メニュー項目の中には、コンソール画面で何かを選択しないと利用できないものもあります。たとえば、編集メニューの [名前の変更] は、名前を変更する項目を [デバイス] ビューまたは [メディア] ビューで選択しないと使用できません。

項目	説明
ナビゲーションバー	<p>ナビゲーションバーはメニューバーの下に表示されます。ナビゲーションバーを使用すると、Backup Exec のビューを切り替えることができます。</p> <p>ナビゲーションバーを使用して次のビューを表示できます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ [ホーム]。高い頻度で使う Backup Exec の機能にすばやくアクセスするにはこのビューを使用します。項目を追加するか、または削除することによって[ホーム]ビューをカスタマイズできます。■ [メディアサーバー]。このビューは、Central Admin Server Option (CASO)をインストールしている場合にのみ表示されます。CASO 対応の Backup Exec 環境でメディアサーバーを監視および管理するには、このビューを使用します。■ [ジョブセットアップ]。バックアップジョブ、リストアジョブ、メディアローテーションジョブの新規作成およびユーティリティジョブの起動には、このビューを使用します。■ [ジョブモニター]。ジョブおよびジョブ履歴を監視するには、このビューを使用します。このビューで、Outlook スタイルのジョブカレンダーにアクセスすることもできます。■ [アラート]。アラートの表示またはアラートへの応答、アラート履歴の表示、アラートフィルタの適用、アラート発生時の電子メールまたはページャ通知を受信する通知受信者の設定を行うには、このビューを使用します。■ [レポート]。メディアサーバー、メディアサーバーの操作、デバイスおよびメディアの使用についてのレポートの表示、印刷、保存、スケジュールを行うには、このビューを使用します。また、このビューを使用してカスタムレポートを作成できます。Backup Exec のレポートは、PDF 形式または HTML 形式で表示できます。レポートは、PDF 形式、XML 形式、HTML 形式、Microsoft Excel (XLS) 形式およびカンマ区切り (CSV) 形式で保存および印刷することもできます。■ [デバイス]。デバイスを設定し、デバイスの操作を実行し、デバイスのプロパティのページにアクセスするには、このビューを使用します。■ [メディア]。メディアの管理、メディアセットの作成、メディアの場所の作成を行うには、このビューを使用します。■ [バックアップ]。バックアップジョブを作成するには、[バックアップ]または[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。■ [リストア]。リストアジョブを作成するには、[リストア]または[リストア]の横にある矢印をクリックします。
アイデアの共有	<p>[アイデアの共有]リンクは、Symantec Backup Exec に関する新しいアイデアを提案するのに使用できます。提案のサブミット後、コミュニティの他のメンバーはそのアイデアに投票したりコメントしたりすることができます。最も多くの投票を獲得したアイデアはリストの最上位に移動します。シマンテックの製品担当者は、今後のリリースでの機能候補を探すためにこれらのアイデアを参照します。</p>

項目	説明
英語版ナレッジベースの検索	[ナレッジベースの検索]検索ボックスに質問かキーワードを入力し、拡大鏡アイコンをクリックします。ナレッジベースの検索結果がブラウザに表示されます。シマンテック社のナレッジベースにアクセスするにはインターネット接続をアクティブにする必要があります。
タスクペイン	デフォルトでは、タスクペインは管理コンソールの左側の部分に表示されますが、表示メニューから[タスクペイン]を選択して、非表示にすることができます。タスクペインを使用し、新規のバックアップジョブの作成やアラートへの応答などのアクションを開始することができます。タスクペインに表示される内容は、ナビゲーションバーで選択したビューに基づいて動的に変化します。オプションの中には、コンソール画面で何かを選択するか、前提条件を満足するタスクを実行しないと利用できないものがあります。たとえば、[デバイス]タスクペインの[名前の変更]は、ユーザーが作成したドライブプールなど、名前を変更する項目を選択しないと使用できません。
選択ペイン	選択ペインでは、関連する項目を選択します。たとえば、バックアップまたはリストアするファイルを選択することができます。
結果ペイン	結果ペインは、通常、選択ペインで選択中の項目に対応する項目のリストまたはツリービューを含む広い表示領域で、画面の右側に表示されます。たとえば、選択ペインでディスクへのバックアップフォルダを選択すると、そのフォルダに入っているディスクへのバックアップファイルが結果ペインに表示されます。このペインを分割し、プレビューペインを表示することができます。
プレビューペイン	プレビューペインは、管理コンソールの右下に表示されます。ここには、リストまたはツリービューで選択中の項目に関する情報が表示されます。このペインは、[表示]を選択して[プレビューペイン]を選択することにより非表示にすることができます。
ステータスバー	ステータスバーは、管理コンソールの一番下に表示され、メディアサーバー、サーバーで実行中または実行するようにスケジュールされているジョブ、アラートまたは実行中のサービスに関する情報が表示されます。
表示項目	ヘッダーをドラッグアンドドロップすることによって、項目の表示場所を変更できます。また、項目を右クリックして、表示する項目の選択、項目の設定、または項目のソートを行うことができます。さらに、ヘッダーをクリックすることによって、ソート順を変更することができます。たとえば、レポートの名前は、デフォルトではアルファベット順に表示されます。レポート名をアルファベットの逆順に表示するには、[レポート]ビューにある[名前]をクリックします。

[ホーム]ビューについて

Backup Exec 管理コンソールの[ホーム]ビューは、高い頻度で使う Backup Exec の機能にすばやくアクセスできる中央の場所です。項目を追加するか、または削除することによって[ホーム]ビューをカスタマイズできます。[ホーム]ビューの項目は Backup Exec

データと機能へのリンクを含んでいます。[ヘルプおよびテクニカルサポート項目]、[概略]と[詳細]の項目を隠すか、または表示できます。

p.87 の「[\[ホーム\]ビューの設定](#)」を参照してください。

p.87 の「[\[ホーム\]ビューのデフォルト設定のリストア](#)」を参照してください。

p.88 の「[\[ホーム\]ビューの項目の編集](#)」を参照してください。

p.88 の「[ヘルプおよびテクニカルサポート項目](#)」を参照してください。

p.90 の「[概略の項目](#)」を参照してください。

p.90 の「[詳細項目](#)」を参照してください。

[ホーム]ビューの設定

項目を追加するか、または削除することによって[ホーム]ビューをカスタマイズできます。[ホーム]ビューの項目は機能への Backup Exec データとリンクを含んでいます。高い頻度で使う Backup Exec の機能のショートカットを作成するために、項目を隠すか、または表示するように選択できます。

p.86 の「[\[ホーム\]ビューについて](#)」を参照してください。

いつでも[ホーム]ビューをデフォルト設定にすばやくリストアできます。

p.87 の「[\[ホーム\]ビューのデフォルト設定のリストア](#)」を参照してください。

[ホーム]ビューを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ホーム]をクリックします。
- 2 タスクペインの[レイアウト]の下で、[ホーム]ビューで表示したい列の数および種類を選択します。
- 3 タスクペインの[ヘルプおよびテクニカルサポート項目]、[概略項目]、[詳細項目]の下で、[ホーム]ビューで表示したい項目を選択します。
- 4 さらに[ホーム]ビューをカスタマイズするために、表示する列と位置に項目をドラッグします。

[ホーム]ビューのデフォルト設定のリストア

高い頻度で使う Backup Exec の機能のショートカットを作成するために、項目を追加するか、または削除することによって[ホーム]ビューをカスタマイズできます。

p.87 の「[\[ホーム\]ビューの設定](#)」を参照してください。

いつでも[ホーム]ビューをデフォルト設定にすばやくリストアできます。

[ホーム]ビューのデフォルト設定をリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ホーム]をクリックします。
- 2 タスクペインの[レイアウト]の下で、[デフォルトのレイアウトおよび内容]を選択します。

[ホーム]ビューの項目の編集

[詳細]項目を編集して、どのような情報を表示するかを制御できます。編集可能な[ホーム]ビューの項目は、そのタイトルバーに鉛筆のアイコンがあります。

p.86 の「[\[ホーム\]ビューについて](#)」を参照してください。

p.90 の「[詳細項目](#)」を参照してください。

[ホーム]ビューの項目を編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ホーム]をクリックします。
- 2 項目を編集するために鉛筆のアイコンをクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。
- 4 [OK]をクリックします。

ヘルプおよびテクニカルサポート項目

表示する項目を選択することによって Backup Exec の[ホーム]ビューをカスタマイズできます。

p.86 の「[\[ホーム\]ビューについて](#)」を参照してください。

ヘルプおよびテクニカルサポート項目は Backup Exec を設定し、使用法の問題を解決するのを助けます。

表 1-11 ヘルプおよびテクニカルサポート項目

項目	説明
始めましょう	ログオンアカウント、デバイス、メディアセットと Intelligent Disaster Recovery Option を設定するための一連の手順を提供します。ライセンスを有するときのみ Intelligent Disaster Recovery Option を設定する手順が表示されます。

項目	説明
テクニカルサポート	<p>製品の機能と、機能やトラブルシューティングの問題の理解に役立つ次のサポートオプションを提供します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Backup Exec Tech Center■ Backup Exec テクニカルサポート■ MySupport を使用して新規または既存のサポートケースを管理します■ シマンテック社のリモート支援■ 推奨事項■ ソフトウェアアラートを登録する■ ソフトウェアのパッチと更新を取得する
マニュアル	<p>製品の機能と、機能やトラブルシューティングの問題の理解に役立つ次のマニュアルオプションを提供します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Readme を表示■ 管理者ガイド (PDF) を表示する■ 管理者ガイドの補足情報 (PDF) 表示する
インストールタスク	<p>他のサーバーに追加のエージェントとオプションをインストールするために使うことができるインストールウィザードにアクセスできます。</p>
ジョブ作成タスク	<p>ウィザードの使用によってバックアップジョブ、ポリシーとリストアジョブを作成できます。</p>
詳細設定タスク	<p>次の詳細設定のタスクを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ジョブのデフォルト設定とユーザー設定を行う■ アラートと通知を設定する■ Symantec Volume Snapshot Provider を設定する
デバイスおよびメディアのタスク	<p>次のデバイスとメディアのタスクを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ メディアセットを設定する■ デバイスを設定する■ デバイスプールを設定する

概略の項目

表示する項目を選択することによって Backup Exec の [ホーム] ビューをカスタマイズできます。

p.86 の「[\[ホーム\]ビューについて](#)」を参照してください。

[概略]の項目はアラート、ジョブ、デバイスとメディアのステータスに関する簡潔な概要を提供します。

表 1-12 [概略]の項目

項目	説明
アクティブアラートの概略	あらゆるアクティブアラートの概略ビューを提供します。
ジョブ履歴の概略	ジョブ履歴の概略ビューを提供します。完了されたジョブについての情報を表示する時間をカスタマイズできます。ジョブの情報には完了したジョブの数、バックアップされたデータの量、使われたメディアの数が含まれます。ジョブのステータスの詳細も表示されます。
現在のジョブの概略	現在のジョブの概略ビューを提供します。概略はスケジュールされるアクティブな保留ジョブの数を表示します。
デバイスの概略	デバイス情報の概略ビューを提供します。デバイスの情報にはデバイスの数とその現在のステータスが含まれます。
メディアの概略	メディア情報の概略ビューを提供します。メディア情報には、利用できる上書き可能および追記可能メディアの数が表示されます。また、デフォルトのメディアの上書き禁止のレベルを表示または変更することもできます。

詳細項目

表示する項目を選択することによって Backup Exec の [ホーム] ビューをカスタマイズできます。

p.86 の「[\[ホーム\]ビューについて](#)」を参照してください。

さらに、[詳細]の項目に表示する情報を編集できます。

p.88 の「[\[ホーム\]ビューの項目の編集](#)」を参照してください。

[詳細]の項目はアラートおよびジョブのステータスについて簡潔な概要を提供します。

表 1-13 [詳細]の項目

項目	説明
アクティブアラート	すべてのアクティブアラートを表示できます。 次の種類のアラートのいずれかまたはすべてを表示できます: <ul style="list-style-type: none"> ■ 要注意 ■ エラー ■ 警告 ■ 情報
ジョブ履歴	指定の一定期間のジョブ履歴を表示できます。 完了されたジョブを表示したい時間帯を選択できます。
現在のジョブ	すべての現在のジョブを表示できます。 次の種類の現在のジョブのいずれかまたはすべてを表示するように選択できます: <ul style="list-style-type: none"> ■ 実行中のジョブ ■ スケジュール済みジョブ ■ 保留中のジョブ一覧

Backup Exec のインストール

この章では以下の項目について説明しています。

- Backup Exec のインストールについて
- インストール前の処理
- システムの必要条件
- ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール
- ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール
- リモートコンピュータへの Backup Exec のインストールに関する特別な考慮事項
- リモートコンピュータへの Backup Exec のプッシュインストール
- リモートコンピュータへの Backup Exec オプションのインストールについて
- リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール
- メディアサーバーからリモートコンピュータへの Desktop Agent および DLO Maintenance Service のプッシュインストール
- Remote Agent for Windows Systems のインストールについて
- Remote Administrator のインストール
- コマンドラインを使用した Backup Exec のインストール (サイレントモード)
- Backup Exec エージェントとオプションの評価版のインストール
- インストールログについて
- Backup Exec の修復
- Backup Exec サービスの起動および停止

- [Backup Exec のアンインストール](#)
- [ローカルメディアサーバーからの Backup Exec オプションのアンインストール](#)
- [LiveUpdate を使用した Backup Exec の更新について](#)
- [ライセンス情報の表示](#)
- [ライセンスの追加](#)
- [環境内にインストールされているライセンスの検出](#)
- [以前のバージョンの Backup Exec のアップグレードについて](#)
- [インストール後のタスク](#)

Backup Exec のインストールについて

Backup Exec をインストールするには、次のいくつかの方法があります。

次の操作を行うことができます。

- インストールウィザードを使用します。画面の案内に従ってインストール処理を実行できます。
- コマンドラインを使用します (サイレントモードインストールと呼ばれます)。サイレントモードでインストールする場合は、Backup Exec インストールメディア内の `setup.exe` プログラムを使用します。

Backup Exec とそのオプションをローカルコンピュータやリモートコンピュータにインストールできます。また、リモート環境の Windows サーバーまたはワークステーションからメディアサーバーを管理できる **Remote Administrator** をインストールできます。

Backup Exec は追加製品をインストールできます:

- Symantec LiveUpdate
- Microsoft XML Core Services (MSXML) 6.0
- Microsoft Report Viewer Redistributable 2005
- Microsoft .NET Framework 3.5 SP1
- Microsoft Windows Imaging Component
- Microsoft SQL Express 2005 SP3

p.107 の「[ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

p.115の「リモートコンピュータへの Backup Exec のプッシュインストール」を参照してください。

p.123の「リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール」を参照してください。

p.143の「コマンドラインを使用した Backup Exec のインストール (サイレントモード)」を参照してください。

インストール前の処理

Backup Exec をインストールする前に、次のタスクを実行する必要があります。

- Backup Exec をインストールするコンピュータで Backup Exec 環境チェックを実行します。環境チェックでは、インストール処理を完了できるかどうかを確認するためにコンピュータが分析されます。インストール中に Backup Exec によって解決される設定の問題、またはインストールを妨げる要因となる設定の問題が検出された場合は、警告が表示されます。環境チェックはインストール中に自動的に実行されますが、Backup Exec をインストールする前または Backup Exec でデータをバックアップする前に手動で実行することもできます。
p.96の「インストール前の環境のチェック」を参照してください。
- メディアサーバーにストレージデバイスハードウェア (コントローラ、ドライブ、ロボットライブラリ) をインストールします。インストールの方法について詳しくはストレージデバイスハードウェアに付属したマニュアルを参照してください。コントローラおよびストレージデバイスの設定を行うには、該当する Windows のハードウェアセットアップ機能を使用してください。詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。
- Windows のセキュリティ設定をチェックして、その設定が Backup Exec サービスアカウントで適切に動作することを確認します。
p.98の「Backup Exec サービスアカウントについて」を参照してください。
- Backup Exec をインストールするドライブが暗号化または圧縮されている場合にデフォルトの SQL Express データベースを使用するには、暗号化または圧縮されていないドライブに SQL Express をインストールできることを確認します。
- Backup Exec をインストールするコンピュータのコンピュータ名を確認します。標準の ANSI 文字のみが使用されている必要があります。標準でない文字が使用されている名前前のコンピュータに Backup Exec をインストールすると、エラーが発生する可能性があります。
- 他のすべてのプログラムを終了します。

環境チェックについて

Symantec Backup Exec 環境チェックは、インストール中に自動的にコンピュータ上で実行されるユーティリティで、次の事項をレポートします。

- オペレーティングシステム、ディスク、物理メモリ、ログオンアカウントの権限など、コンピュータがインストールの必要条件を満たしているか。
p.105 の「[システムの必要条件](#)」を参照してください。
- Backup Exec を使用する他社ソフトウェアのポートが適切に設定されているか。
- 必要なコンポーネントがインストールされているか、また、そのコンポーネントは Backup Exec と互換性のあるバージョンか。
- 以前のバージョンの Backup Exec または Backup Exec オプションがインストールされていないか。
- ストレージデバイスハードウェアおよびこれに関連するドライバが適切にインストールされ、Windows オペレーティングシステムに認識されているか。
- コンピュータが Desktop and Laptop Option のインストールの必要条件を満たしているか。

各項目のレポートの結果は、次のいずれかです。

表 2-1 環境チェックの結果

結果	説明
合格	Backup Exec のインストールを妨げる要因となる非互換はありません。ハードウェアがこの結果となった場合は、そのハードウェア構成が Backup Exec で認識されていることを示します。
警告	現在の環境と Backup Exec の間に非互換がありますが、インストール時に解決できます。
失敗	現在の環境と Backup Exec の間に、インストール失敗の原因となる非互換があります。正常にインストールするには、Backup Exec をインストールする前に何らかの対処が必要です。

環境チェックはインストール中に自動的に実行されますが、Backup Exec をインストールする前または Backup Exec でデータをバックアップする前に手動で実行することもできます。

p.96 の「[インストール前の環境のチェック](#)」を参照してください。

インストール前の環境のチェック

環境チェックはインストール中に自動的に実行されますが、Backup Exec をインストールする前または Backup Exec でデータをバックアップする前に手動で実行することもできます。

p.95 の「[環境チェックについて](#)」を参照してください。

インストール前に環境をチェックする方法

- 1 インストールメディアのブラウザで、[インストール前]をクリックし、[Backup Exec 環境チェックを開始する]をクリックします。
- 2 [次へ]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。

ローカルコンピュータの設定をチェックする [ローカル環境チェック]にチェックマークを付けます。

リモートコンピュータの設定をチェックする [リモート環境チェック]にチェックマークを付けます。

- 4 [次へ]をクリックします。
- 5 手順3で[リモート環境チェック]にチェックマークを付けた場合は、次のいずれかを実行して、[次へ]をクリックします。

リストからコンピュータ名を選択する

- [リストからのサーバーの追加]をクリックします。
- リストからコンピュータを選択し、[次へ]をクリックします。

コンピュータ名を手動で追加する

- [手動によるサーバーの追加]をクリックします。
- [コンピュータ名]フィールドに、コンピュータの名前を入力します。
- [ドメイン]フィールドに、ドメインの名前を入力します。
- [OK]をクリックします。
- このコンピュータのユーザー名とパスワードを入力します。
- [OK]をクリックします。

環境チェックを実行するコンピュータのリストからコンピュータ名を削除する

- リストからコンピュータを選択します。
- [削除]をクリックします。

- 6 環境チェックの結果を保存する場合は、[結果の保存先]にチェックマークを付けます。

環境チェックの結果の保存先を変更する場合は、[パスの変更]をクリックし、新しい場所を参照して選択します。

- 7 [完了]をクリックします。

Backup Exec サービスアカウントについて

メディアサーバー上のすべての Backup Exec サービスは、Backup Exec システムサービス用として構成されているユーザーアカウントのコンテキスト内で実行されます。このアカウントは Backup Exec のインストール時に作成することができます。また、既存のユーザーアカウントを使用することもできます。インストール時に Backup Exec のサービスアカウントを作成するには、使用する Backup Exec サービスの管理者アカウントの名前およびパスワードを入力します。

メモ: Backup Exec がインストールされるとき、Backup Exec サービスアカウントと Backup Exec システムログオンアカウントは同じユーザー名に設定されます。使われなくなったサービスアカウントのユーザー名を変更する必要がある場合は、新しいクレデンシャルを使うために Backup Exec システムログオンアカウントも変更してください。

p.99 の「サービスアカウント情報の変更」を参照してください。

コンピュータがドメインに属している場合は、ドメインの管理者アカウントまたはドメインの管理者グループ内のアカウントに相当するアカウントを入力します。[ドメイン]リストでドメイン名を選択または入力します。

コンピュータがワークグループに属している場合は、管理者アカウントまたはコンピュータの管理者グループ内のアカウントに相当するアカウントを入力します。[ドメイン]リストでコンピュータ名を選択または入力します。

新しいアカウントを作成する場合でも、既存のユーザーアカウントを使用する場合でも、Backup Exec のサービス用として使用するアカウントには、次の権限が必要です。

- ユーザーとして認証し、ユーザー ID のもとでリソースにアクセスする。
- ローカルリソースへのアクセス時に使用可能なトークンオブジェクトを作成する。
- サービスとしてログオンする。
- 管理権限 (コンピュータに対する完全で制限のない権限)。
- バックアップオペレータ権限 (ファイルとディレクトリをリストアする権限)。
- 監査ログおよびセキュリティログを管理する。

p.315 の「バックアップジョブに必要なユーザー権限」を参照してください。

Microsoft Small Business Server の場合は、実装されているセキュリティの関係により、サービスアカウントとして Administrator を使用する必要があります。

Windows Server 2003/2008、Windows XP コンピュータでは、空のパスワードのアカウントが許可されるように Windows が設定されていない限り、空のパスワードのアカウントを使用して Backup Exec をインストールすることはできません。空のパスワードを指定した場合は、インストール中に次のエラーメッセージが表示されます。

<サーバー>¥<ユーザー名>に与えられたユーザーおよびパスワード情報では認証できませんでした。

ただし、コンピュータに空のパスワードを許可するよう設定することができます。詳しくは Windows のマニュアルを参照してください。

サービスアカウント情報の変更

メディアサーバー上のすべての Backup Exec サービスは、Backup Exec システムサービス用として構成されているユーザーアカウントのコンテキスト内で実行されます。

メモ: Backup Exec がインストールされる時、Backup Exec サービスアカウントと Backup Exec システムログオンアカウントは同じユーザー名に設定されます。使われなくなったサービスアカウントのユーザー名を変更する必要がある場合は、新しいクレデンシャルを使うために Backup Exec システムログオンアカウントも変更してください。

p.98 の「[Backup Exec サービスアカウントについて](#)」を参照してください。

サービスアカウント情報を変更する方法

- 1 ツールメニューの[Backup Exec Services Manager]をクリックします。
- 2 [サービスクレデンシャル]をクリックします。
- 3 [サービスアカウント情報を変更]をクリックします。
- 4 新しいサービスアカウントのためのユーザー名、ドメインとパスワードを入れます。

p.99 の「[\[サービスアカウント情報\]オプション](#)」を参照してください。

[サービスアカウント情報]オプション

メディアサーバー上のすべての Backup Exec サービスは、Backup Exec システムサービス用として構成されているユーザーアカウントのコンテキスト内で実行されます。

p.99 の「[サービスアカウント情報の変更](#)」を参照してください。

表 2-2 [サービスアカウント情報]オプション

項目	説明
サービスアカウント情報を変更	サービスアカウントのためのユーザー名、ドメインとパスワードを変更することを可能にします。
ユーザー名	サービスアカウントのユーザー名を示します。
ドメイン名	サービスアカウントのためのドメインの名前を示します。

項目	説明
新しいパスワード	サービスアカウントのためのパスワードを示します。
パスワードの確認入力	[新しいパスワード]フィールドで入力したパスワードを確認します。
スタートアップオプションを変更	サービスアカウントの起動オプションを変更できます。
自動	システム起動時にサービスアカウントが自動的に起動されることを示します。
手動	システム起動時にサービスアカウントが自動的に起動されないことを示します。手動で起動する必要があります。
無効	システム起動時にサービスアカウントが無効化されることを示します。
サービスアカウントに Backup Exec システムサービスの権限を付与	サービスアカウントにシステムサービスの権限を付与できます。

Windows のセキュリティの変更について

データを保護するために、Backup Exec サービスアカウントを使用して Windows のセキュリティを設定することができます。

次のような Windows のネットワーク構成とバックアップする内容に応じて、Backup Exec サービスアカウントのセキュリティプロパティの設定を変更します。

- 単一のドメイン内のサーバーをバックアップする。
- 単一のドメイン内のサーバーと指定したワークステーションをバックアップする。
- 複数のドメイン内のサーバーをバックアップする。
- 複数のドメイン内のサーバーとワークステーションをバックアップする。

Windows のセキュリティを変更し、必要なドメインおよびワークステーションの管理者権限を Backup Exec サービスアカウントに設定できます。Backup Exec を使用して管理上の共有 (C\$ など) にアクセスし、Windows レジストリのバックアップを行うには、Backup Exec サービスアカウントに管理者権限が設定されている必要があります。

管理ツールグループの [Active Directory ユーザーとコンピュータ] ツールと [Active Directory ドメインと信頼関係] ツールを使用します。

p.101 の「[単一のドメイン内のサーバーのみをバックアップするための Windows のセキュリティの変更](#)」を参照してください。

p.101の「単一のドメイン内のサーバーと指定したワークステーションをバックアップするための Windows のセキュリティの変更」を参照してください。

p.102の「複数のドメイン内のサーバーをバックアップするための Windows のセキュリティの変更」を参照してください。

p.102の「複数のドメイン内のサーバーとワークステーションをバックアップするための Windows のセキュリティの変更」を参照してください。

単一のドメイン内のサーバーのみをバックアップするための Windows のセキュリティの変更

Windows のセキュリティを変更し、必要なドメインおよびワークステーションの管理者権限を Backup Exec サービスアカウントに設定できます。Backup Exec を使用して管理上の共有 (C\$ など) にアクセスし、Windows レジストリのバックアップを行うには、Backup Exec サービスアカウントに管理者権限が設定されている必要があります。

単一のドメイン内のサーバーのみをバックアップするために Windows のセキュリティを変更する方法

- ◆ ユーザー名を入力するメッセージが表示されたら、既存のサービスアカウントまたは新しいサービスアカウント名 (Administrator など) を、そのドメインのローカルアドミニストレータグループのメンバーとして追加します。パスワードを入力することを強くお勧めします。

単一のドメイン内のサーバーと指定したワークステーションをバックアップするための Windows のセキュリティの変更

Windows のセキュリティを変更し、必要なドメインおよびワークステーションの管理者権限を Backup Exec サービスアカウントに設定できます。Backup Exec を使用して管理上の共有 (C\$ など) にアクセスし、Windows レジストリのバックアップを行うには、Backup Exec サービスアカウントに管理者権限が設定されている必要があります。

表 2-3 単一のドメイン内のサーバーと指定したワークステーションをバックアップするための Windows のセキュリティの変更方法

手順	説明
手順 1	既存のサービスアカウントまたは新しいサービスアカウント名 (Administrator など) を、グローバルドメインアドミニストレータグループのメンバーとして追加します。

手順	説明
手順 2	バックアップするドメイン内の各ワークステーションで、グローバル Domain Admins グループがワークステーションのローカル Administrators グループのメンバーであることを確認します。

複数のドメイン内のサーバーをバックアップするための Windows のセキュリティの変更

Windows のセキュリティを変更し、必要なドメインおよびワークステーションの管理者権限を Backup Exec サービスアカウントに設定できます。Backup Exec を使用して管理上の共有 (C\$ など) にアクセスし、Windows レジストリのバックアップを行うには、Backup Exec サービスアカウントに管理者権限が設定されている必要があります。

表 2-4 複数のドメイン内のサーバーをバックアップするための Windows のセキュリティの変更方法

手順	説明
手順 1	<p>ホストドメイン (メディアサーバーが存在しているドメイン) とターゲットドメイン (バックアップするドメイン) 間に、一方向の信頼関係を確立します。</p> <p>次に示す順序で操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホストドメインで、ターゲットドメインがホストドメインを信頼することを許可します。 ■ 各ターゲットドメインで、ホストドメインを信頼します。
手順 2	各ターゲットドメインのローカル Administrators グループに、既存または新しいサービスアカウント (Administrator など) のホストドメイン名を追加します。

複数のドメイン内のサーバーとワークステーションをバックアップするための Windows のセキュリティの変更

Windows のセキュリティを変更し、必要なドメインおよびワークステーションの管理者権限を Backup Exec サービスアカウントに設定できます。Backup Exec を使用して管理上の共有 (C\$ など) にアクセスし、Windows レジストリのバックアップを行うには、Backup Exec サービスアカウントに管理者権限が設定されている必要があります。

表 2-5 複数のドメイン内のサーバーとワークステーションをバックアップするための Windows のセキュリティの変更方法

手順	説明
手順 1	ホストドメイン (メディアサーバーが存在しているドメイン) とターゲットドメイン (バックアップするドメイン) 間に、一方向の信頼関係を確立します。 次に示す順序で操作を実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ ホストドメインで、ターゲットドメインがホストドメインを信頼することを許可します。■ 各ターゲットドメインで、ホストドメインを信頼します。
手順 2	各ターゲットドメインのローカル Administrators グループに、既存または新しいサービスアカウント (Administrator など) のホストドメイン名を追加します。
手順 3	バックアップする各ワークステーションのローカル Administrators グループに、既存または新しいサービスアカウント (Administrator など) のホストドメイン名を追加します。

Backup Exec でインストールされる Microsoft SQL Server 2005 Express Edition コンポーネントについて

Backup Exec のインストールプログラムを実行すると、Backup Exec の実行に必要な Microsoft SQL Server 2005 Express Edition の各コンポーネントがインストールされます。

次のいずれかを実行するようにメッセージが表示されます。

- 必要な Microsoft SQL Express コンポーネントを Backup Exec からインストールし、デフォルト Backup Exec インスタンスを作成する。
- Backup Exec を実行したいネットワークにすでにある Microsoft SQL Server 2005 (SP3) または SQL Server 2008 のインスタンスを選択する。Windows Server 2008 を実行するコンピュータに Backup Exec をインストールするには、SQL Server 2008 インスタンスを選択する必要があります。

Backup Exec のインストール時およびアップグレード時には、Backup Exec によって SQL サービスが何度か停止および起動されます。ユーザーが作成した他のデータベースのうち SQL Server インスタンスを使用するものは、この処理中は利用できません。このような競合を避けるため、Backup Exec は独立した SQL インスタンスにインストールする必要があります。

既存の SQL Server 2005 インスタンスに Backup Exec をインストールする場合には、SQL Server 2005 Service Pack 3 以上がインストールされていることを確認してからインストールを続行してください。

注意: 大文字と小文字を区別して照合を行う既存の SQL インスタンスに Backup Exec をインストールすると、正しく機能しないことがあります。大文字と小文字を区別して照合を行う SQL インスタンスに Backup Exec をインストールしないことをお勧めします。

既存のインスタンスに Backup Exec をインストールした場合には、master データベースの自動リストア機能は使用できません。master データベースのリカバリを行うには、そのデータベースを、master データベースのバックアップ時に Backup Exec が自動的に作成し更新した master データベースコピーに置き換える必要があります。

同一の SQL Server インスタンスに複数の Backup Exec データベースをインストールすることはできません。

メモ: 管理対象メディアサーバーをインストールする場合は、そのメディアサーバー用 Backup Exec データベースのインストール先のローカル Microsoft SQL Server 2005 (Service Pack 3) インスタンスまたはそれ以上を選択することをお勧めします。集中管理サーバーに使用されているものと同じ SQL Server インスタンスを選択しないでください。

Backup Exec の標準機能について

Backup Exec ライセンスキーを入力するとき、インストールが可能な次の追加機能を選択できます。

表 2-6 Backup Exec の標準機能

機能	説明
テープデバイスドライバ	サーバーに接続されているすべてのサポート対象テープデバイスの Symantec テープデバイスドライバをインストールします。メディアサーバーに接続されたテープデバイスがなければ、このオプションのチェックマークをはずしてください。
オンラインマニュアル	PDF ファイル形式の『Symantec Backup Exec 管理者ガイド』がインストールされます。
ロボットライブラリのサポート	テープライブラリまたはオプティカルロボットライブラリの使用が可能になります。Backup Exec では、各ロボットライブラリで 1 つのドライブがサポートされます。ライブラリの追加ドライブそれぞれに Library Expansion Option ライセンスが必要です。

機能	説明
サーバー設定のコピー	メディアサーバー間でジョブ、選択リストとジョブテンプレートをコピーすることを可能にします。このオプションは複数の Backup Exec メディアサーバーを含んでいる環境で推奨されます。このオプションは、 Central Admin Server Option に必要です。
管理対象メディアサーバー	Central Admin Server Option の管理対象メディアサーバーのコンポーネントをインストールします。集中管理サーバーをインストールした後、管理対象メディアサーバーをインストールできます。
Advanced Open File Option	開いていて使用中の場合でも Windows コンピュータのすべてのファイルがバックアップされるようにします。このオプションは Backup Exec 、 Backup Exec Remote Agent for Windows Systems 、 Backup Exec アプリケーションエージェント およびオプションの各ライセンスが付いていて、無償で使用できます。特定のスナップショットの設定を制御するには、 ADBO (Advanced Disk-based Backup Option) と共に AOFO (Advanced Open File Option) をインストールしてください。
Intelligent Disaster Recovery	ローカルとリモートの Windows コンピュータにリカバリソリューションを提供します。
仮想テープライブラリのサポート	あらゆる単一ドライブの仮想テープライブラリ (VTL) のサポートを提供します。各 VTL の追加ドライブをサポートするために Virtual Tape Library Unlimited Drive Option を購入する必要があります。 このオプションを選択すれば、[ロボットライブラリサポート] オプションが自動的に選択されます。[仮想テープライブラリサポート] のチェックマークをはずさなければ、[ロボットライブラリサポート] のチェックマークをはずすことはできません。

その他すべてのオプションおよびエージェントは、追加ライセンスを購入する必要があります。評価版ではすべてのオプションをインストールすることができます。製品版ではこれらのオプションを別途購入することが必要な場合があるので、ご注意ください。

Backup Exec のライセンスを取得している場合、指定された期間中はほとんどのオプションとエージェントの評価版を使用できます。

p.156 の「**Backup Exec エージェントとオプションの評価版のインストール**」を参照してください。

システムの必要条件

このバージョンの Backup Exec の実行に必要なシステムの必要条件を次に示します。

表 2-7 システムの必要条件

項目	必要条件
オペレーティングシステム	<p>互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1</p> <p>Windows Server 2008 の Windows Server Core インストールオプションが実行されているコンピュータに Backup Exec メディアサーバーをインストールすることはできません。Server Core コンピュータには、Backup Exec Remote Agent for Windows Systems のみインストールできます。</p> <p>読み取り専用ドメインコントローラ (RODC) ロールに構成されている Windows Server 2008 コンピュータに、SQL Express または SQL Server 2005 をインストールすることはできません。読み取り専用ドメインコントローラロールでは、SQL Express および SQL Server 2005 で必要なローカルアカウントを使用できません。RODC コンピュータに Backup Exec をインストールする場合は、Backup Exec データベース用のリモート SQL インスタンスを選択する必要があります。</p>
アプリケーションのサポートの追加	Backup Exec は、Microsoft Windows の Microsoft Operations Manager (MOM) 2005 と併用できます。
インターネットブラウザ	Internet Explorer 6.0 以上(SQL Server 2005 Express には Service Pack 1 が必要です)
プロセッサ	Intel Pentium、Xeon、AMD、またはこれらに互換性のある種類
メモリ	<p>必須:512 MB RAM</p> <p>推奨:1 GB RAM 以上 (パフォーマンスの向上にはさらに増やすことをお勧めします)</p> <p>メモ: 必要とされる RAM は、実行する操作、インストールするオプションおよびコンピュータの構成によって異なります。</p> <p>CASO の場合:512 MB RAM (1 GB を推奨します)</p> <p>仮想メモリの推奨値:Windows 推奨の合計ページングファイルサイズ (全ディスクボリュームの合計) に 20 MB を加算した容量。ページングファイルサイズの参照または設定の方法について詳しくは Microsoft Windows のヘルプマニュアルを参照してください。</p>
インストールディスク領域	<p>1.44 GB (通常のインストールの場合)</p> <p>2.32 GB (すべてのオプションを含む場合)</p> <p>メモ: 必要とされるディスク領域は、実行する操作、インストールするオプションおよびシステム構成によって異なります。Backup Exec のデータベースおよびカタログ用に、別途領域が必要となります。さらに 330 MB が SQL Express に要求されます。</p>

項目	必要条件
その他のハードウェア	<p>推奨されるハードウェアは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークインターフェースカードまたは仮想ネットワークアダプタカード ■ CD/DVD ドライブ ■ マウス (推奨) ■ Windows 対応モデム (ページャ通知用オプション) ■ Windows 対応プリンタ (プリンタ通知用オプション)
ストレージ用ハードウェア	<p>ストレージメディアのドライブ、ロボットライブラリ、リムーバブルストレージデバイスと取外し不可能なハードディスクドライブを使うことができます。</p> <p>互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2</p> <p>Backup Exec を購入するとき、各ロボットライブラリの最初のドライブのサポートを利用できます。追加の各ロボットライブラリドライブのサポートを希望される場合は、別売の Backup Exec Library Expansion Option が必要です。</p>

ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール

Backup Exec インストールメディアに格納されているインストールプログラムを使用すると、画面に表示される案内に従ってインストール作業を行うことができます。

インストールプログラムを使って以前のバージョンの Backup Exec からアップグレードすることもできます。

p.168 の「[以前のバージョンの Backup Exec のアップグレードについて](#)」を参照してください。

英語版以外の Windows に Backup Exec をインストールするには、次の両方が当てはまる場合は、Backup Exec をインストールする前に Microsoft Web サイトから SQL Express SP3 セットアップファイルをダウンロードします。

- ローカル Backup Exec SQL Express インスタンスを使用する場合。
- Backup Exec をインストールするコンピュータに英語版以外の SQL Server インスタンスが存在する場合。

英語版以外の Windows を使用している以前のバージョンの Backup Exec からアップグレードする場合は、Microsoft Web サイトからその言語用の SQL Express SP3 セットアップファイルをダウンロードする必要があります。

メモ: ターミナルサービスクライアントを使用し、リモートターミナルサーバー上でインストールプログラムを実行してリモートターミナルサーバーに **Backup Exec** をインストールする場合は、**Backup Exec** のインストールプログラムの保存先をドライブ文字を割り当てたネットワークドライブパスで指定することはできません。UNCパスで指定する必要があります。

Backup Exec のインストール先コンピュータに、インストールログが **Bkupinst.htm** という名前で作成されます。

p.156 の「[インストールログについて](#)」を参照してください。

Backup Exec をインストールした後、インストール後のタスクを実行する必要があります。

p.168 の「[インストール後のタスク](#)」を参照してください。

ローカルコンピュータに **Backup Exec** をインストールする方法

- 1 インストールメディアのブラウザで、[インストール]をクリックし、[**Backup Exec** のインストールを開始する]をクリックします。

Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 がこのコンピュータにまだインストールされていない場合は、**Backup Exec** はそれをインストールします。**Microsoft .NET Framework** のインストールは時間がかかることがあります。

- 2 [よろこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- 3 [使用許諾契約書に同意します]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 4 [ローカルインストール]にチェックマークを付けて、[**Backup Exec** および各オプションのインストール]をクリックします。
- 5 [次へ]をクリックします。

Backup Exec を初めてインストールおよびアップグレードする場合は、[次へ]をクリックした後に、**Backup Exec** 環境チェックが自動的に実行されます。

- 6 環境チェックの結果を確認します。
- 7 次のいずれかを実行します。
 - 環境チェックで **Backup Exec** の正常なインストールを妨げる問題が検出されない場合は、[次へ]をクリックします。
 - 環境チェックで **Backup Exec** の正常なインストールを妨げる問題が検出された場合は、[キャンセル]をクリックしてウィザードを終了します。問題を修正してから再び **Backup Exec** をインストールします。
- 8 次のいずれかを実行します。

Backup Exec とそのオプションのライセンスキーを所有していない場合 次に示す順序で操作を実行します。

- <https://licensing.symantec.com> にアクセスして、製品を登録します。
ライセンスキーは、Backup Exec とそのオプションのインストールに必要です。インターネットに接続できるコンピュータから Web サイトにアクセスできます。
- ライセンスキーを受信したら、手順 9 に進みます。

Backup Exec とそのオプションのライセンスキーを所有している場合 手順 9 に進みます。

9 次のいずれかの方法を選択して、ライセンスキーを入力します。

ライセンスキーを手動で入力する 次に示す順序で操作を実行します。

- [ライセンスキー]フィールドに Backup Exec ライセンスキーを入力します。
- [Add]をクリックします。
- インストールするオプションまたはエージェントごとに、各ライセンスキーについてこの手順を繰り返します。

ライセンスキーをファイルからインポートする 次に示す順序で操作を実行します。

- [ファイルからのインポート]をクリックします。
- besernum.xml ファイルを選択します。

評価版をインストールする [ライセンスキー]フィールドを空白にします。

10 [次へ]をクリックします。

入力したライセンスキーが、%allusersprofile%\Application Data\Symantec\Backup Exec ディレクトリの besernum.xml ファイルに保存されます。

11 インストールしたい追加オプションまたはエージェントを選択します。

p.104 の「Backup Exec の標準機能について」を参照してください。

- 12 [次へ]をクリックします。

File System Archiving Option か Microsoft Exchange Mailbox Archiving Option を選択すると、Archiving Option 環境チェックが実行されます。Archiving Option 環境チェックはコンピュータが Enterprise Vault をインストールして設定するための最小必要条件を満たすことを確認します。コンピュータが最小必要条件を満たさなければ、インストールを続行する前にアーカイブオプションのチェックマークをはずすか、またはエラーを修正する必要があります。

- 13 次のいずれかを実行します。

Backup Exec ファイルのインストール [変更]をクリックして、新しいディレクトリを選択します。
先ディレクトリを変更する

デフォルトのディレクトリを使用する 手順 14 に進みます。
(推奨)

マウントポイントを削除すると Backup Exec がアンインストールされるため、インストール先ディレクトリとしてマウントポイントを選択することはお勧めしません。

- 14 [次へ]をクリックします。

- 15 Backup Exec システムサービスに使用する管理者アカウントのユーザー名、パスワードおよびドメインを入力し、[次へ]をクリックします。

p.98 の「[Backup Exec サービスアカウントについて](#)」を参照してください。

- 16 [SQL Server の選択]パネルで、Backup Exec データベースを保存するための場所を選択するために次のいずれかを実行します。

[SQL Server の選択]パネルはアップグレードでは表示されません。アップグレードの処理中は、データベースの場所を変更できません。アップグレード後にデータベースの場所を変更する場合は、BEUtility を使用します。

ローカル Backup Exec SQL Express インスタンスを作成する

次に示す順序で操作を実行します。

- [ローカルに Backup Exec SQL Express インスタンスを作成してデータベースを格納する。]をクリックします。
- Backup Exec SQL Express インスタンスの場所を変更するには、[参照]をクリックします。
- 場所を選択して、[OK]をクリックします。

既存の SQL Server 2005 または SQL Server 2008 インスタンスを使用する

次に示す順序で操作を実行します。

- [ネットワーク上の SQL Server 2005 (SP3 以降) または SQL Server 2008 の既存のインスタンスを使用してデータベースを格納する。]をクリックします。
- インスタンスを選択します。

既存のインスタンスに Backup Exec をインストールした場合には、master データベースの自動リストア機能は使用できません。master データベースのリカバリを行うには、そのデータベースを、master データベースのバックアップ時に Backup Exec が自動的に作成し更新した master データベースコピーに置き換えます。

注意: Backup Exec のインストール時およびアップグレード時には、Backup Exec によって SQL サービスが何度か停止および起動されます。ユーザーが作成した他のデータベースのうち SQL Server インスタンスを使用するものは、この処理中は利用できません。このような競合を避けるため、Backup Exec は独立した SQL インスタンスにインストールする必要があります。

17 [次へ]をクリックします。

Backup Exec によってインスタンスへの接続が試行されます。

18 [Microsoft SQL Server 2005 Express Edition のセットアップ]画面が表示された場合は、次の手順を実行して、SQL Express SP3 セットアップファイルの場所を識別します。

- [参照]をクリックします。
- SQL Express SP3 セットアップファイルをダウンロードした場所を検索します。
- [OK]をクリックします。
- [次へ]をクリックします。

19 追加の情報を求められた場合、Symantec デバイスドライバインストーラを使用して、サーバーに接続されているテープストレージデバイスにデバイスドライバをインストールするように選択し、[次へ]をクリックします。

[すべてのデバイスに Symantec テープデバイスドライバを使用する(推奨)]を選択することをお勧めします。

20 ダイアログボックスが表示されたら、インストールする追加オプションの設定を入力するか選択し、選択ごとに[次へ]をクリックします。

- 21 Backup Exec のインストールの概略を確認し、[インストール]をクリックします。
インストール処理の完了には数分かかります。インストール処理中、進行バーは数分間動きません。
- 22 インストールが完了すると、[LiveUpdate]の実行、[Readme]の表示、デスクトップへのショートカットの作成を選択するチェックボックスが表示されます。
- 23 [完了]をクリックしてインストールウィザードを終了します。
- 24 [システムの再起動]が表示されたら、変更した内容をシステムに反映するためにコンピュータを再起動します。

ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール

Backup Exec をインストールするときエージェントとオプションをインストールできます。ただし、Backup Exec のインストール後に追加オプションをインストールする場合は、このマニュアルの該当するオプションに関する項を参照し、システムが動作の必要条件をすべて満たしているかどうかを確認する必要があります。追加オプションのインストール中、Backup Exec サービスが停止する場合があります。ジョブが実行している場合は、ジョブを停止するか、ジョブの完了を待機するかを選択を要求されます。

p.107 の「[ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

メモ: ターミナルサービスクライアントを使用し、リモートターミナルサーバー上でインストールプログラムを実行してリモートターミナルサーバーに Backup Exec をインストールする場合は、Backup Exec のインストールプログラムの保存先をドライブ文字を割り当てたネットワークドライブパスで指定することはできません。UNC パスで指定する必要があります。

Backup Exec の評価版または非売品をインストールしている場合は、オプションをインストールするためにシリアルキーを追加する必要はありません。Backup Exec のライセンスを取得している場合、指定された期間中はほとんどのオプションとエージェントの評価版を使用できます。

p.156 の「[Backup Exec エージェントとオプションの評価版のインストール](#)」を参照してください。

メモ: Central Admin Server Option がインストールされ、管理対象メディアサーバーに追加オプションをインストールしたい場合には管理対象メディアサーバーを一時停止できます。管理対象メディアサーバーが一時停止された場合、集中管理サーバーはジョブを委任しません。インストールの完了後、管理対象メディアサーバーの停止を解除し、再開します。

p.1519 の「CASO の管理対象メディアサーバーの一時停止」を参照してください。

ローカルメディアサーバーに Backup Exec 追加オプションをインストールする方法

- 1 ツールメニューの[このメディアサーバーにオプションとライセンスキーをインストール]をクリックします。
- 2 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- 3 [ローカルインストール]と[追加オプション]が選択されていることを確認し、[次へ]をクリックします。
- 4 次のいずれかの方法を選択して、ライセンスキーを入力します。

ライセンスキーを手動で入力する 次に示す順序で操作を実行します。

- [ライセンスキー]フィールドにライセンスキーを入力します。
- [追加]をクリックします。
- インストールするオプションまたはエージェントごとに、各ライセンスキーについてこの手順を繰り返します。

ライセンスキーをファイルからインポートする 次に示す順序で操作を実行します。

- [ファイルからのインポート]をクリックします。
- **besernum.xml** ファイルを選択します。

評価版をインストールする [ライセンスキー]フィールドを空白にします。

- 5 [次へ]をクリックします。
- 6 インストールする追加オプションを選択して、[次へ]をクリックします。
- 7 ダイアログボックスが表示されたら、インストールする追加オプションの設定を入力するか選択します。それぞれのダイアログボックスで必要な情報を入力し、[次へ]をクリックしてください。
- 8 Backup Exec のインストールの概略を確認し、[インストール]をクリックします。

追加オプションのインストール中、Backup Exec サービスは停止します。ジョブが実行している場合は、ジョブを停止するか、ジョブの完了を待機するかの選択を要求されます。

インストールの完了後、サービスが再起動されます。

- 9 [完了]をクリックします。

リモートコンピュータへの Backup Exec のインストールに関する特別な考慮事項

リモートコンピュータに Backup Exec をインストールする前に知っておく必要がある特別な考慮事項があります。

表 2-8 リモートコンピュータへの Backup Exec のインストールに関する特別な考慮事項

項目	考慮事項
Windows XP SP2/Server 2003 SP1	<p>Windows XP Service Pack 2 または Windows Server 2003 が実行されているコンピュータに Backup Exec をブッシュインストールするには、Windows ファイアウォールの例外リストで次の [ファイルとプリンタの共有] のポートを有効にする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 135 (RPC)■ 445 (TCP)■ 103X (通常は 1037)■ 441 (RPC) <p>Windows ファイアウォールの例外リストについて詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。</p> <p>インストール中に、Backup Exec によって、リモートからの起動およびリモートアクセスに関するセキュリティアクセス許可が管理者グループに対して設定されます。</p> <p>ブッシュインストール先のコンピュータの [リモート管理の例外を許可する] グループポリシーを有効にします。</p>
Windows Server 2008	<p>Windows Server 2008 が実行されているコンピュータに Backup Exec をブッシュインストールするには、インストール先のコンピュータの Windows ファイアウォールの例外リストで特定の項目を有効にする必要があります。有効にする必要がある項目は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ファイルとプリンタの共有■ Windows Management Instrumentation (WMI) <p>詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。</p>
Symantec Endpoint Protection (SEP) 11.0 以降	<p>Symantec Endpoint Protection (SEP) のバージョン 11.0 またはそれ以降を実行するコンピュータに Backup Exec をブッシュインストールするには、ファイルとプリンタを共有するように SEP を設定する必要があります。ファイルとプリンタ共有機能はデフォルトではオフになります。</p>

p.115 の「リモートコンピュータへの Backup Exec のブッシュインストール」を参照してください。

リモートコンピュータへの Backup Exec のプッシュインストール

ターミナルサービスクライアントを使用し、リモートターミナルサーバー上でインストールプログラムを実行してリモートターミナルサーバーに **Backup Exec** をインストールする場合は、**Backup Exec** のインストールプログラムの保存先をドライブ文字を割り当てたネットワークドライブパスで指定することはできません。UNC パスで指定する必要があります。

複数のサーバーのインストールを設定できます。**Backup Exec** は最大 5 台のリモートコンピュータのインストールを同時に処理します。

リモートコンピュータに **Backup Exec** をインストールする前に、特別な考慮事項を確認してください。

p.114 の「[リモートコンピュータへの Backup Exec のインストールに関する特別な考慮事項](#)」を参照してください。

メモ: リモートコンピュータに **Backup Exec** をインストールするには、**Microsoft Windows** の [プログラムの追加と削除] を使用することもできます。詳しくは **Microsoft** のマニュアルを参照してください。

Backup Exec のインストール先コンピュータに、インストールログが **Bkupinst.htm** という名前で作成されます。

p.156 の「[インストールログについて](#)」を参照してください。

リモートコンピュータに **Backup Exec** をプッシュインストールする方法

1 次のいずれかを実行します。

インストールメディアから Backup Exec をリモートコンピュータにプッシュインストールする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- インストールメディアのブラウザで、[インストール]をクリックし、[Backup Exec のインストールを開始する]をクリックします。
- [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- [使用許諾契約書に同意します]を選択し、[次へ]をクリックします。
- [ローカルインストール]のチェックマークをはずし、次に[リモートインストール]にチェックマークを付けます。
- [次へ]をクリックします。
- [リモートサーバー]パネルで[追加]をクリックします。
- Backup Exec を1つのリモートコンピュータにインストールするには[単一のサーバーを追加]を選択します。または同じ設定を使用して複数のコンピュータに Backup Exec をインストールするには[同じ設定で複数のサーバーを追加]を選択します。

Backup Exec メディアサーバーから Backup Exec をリモートコンピュータにプッシュインストールする方法

ツールメニューの[他のサーバーにエージェントとメディアサーバーをインストール]をクリックします。

- 2 [Symantec Backup Exec]を選択し、[次へ]をクリックします。
- 3 リモートコンピュータの完全修飾名、IP アドレス、またはコンピュータ名を入力するか、またはリモートコンピュータを探すために[参照]をクリックしてください。
- 4 [リストに追加]をクリックし、次にプログラムをプッシュインストールしたい各リモートコンピュータで手順 3 と 4 を繰り返します。

インストールメディアからプッシュインストールし、手順 1 の[単一のサーバーを追加]を選択した場合は、この手順をスキップできます。

- 5 [リモートコンピュータログオンクレデンシャル]の下で、Backup Exec がリモートサーバーに接続するために使うことができるクレデンシャルを入力します。

管理者のクレデンシャルを使わなければなりません。これらのリモートコンピュータのログオンクレデンシャルは手順 12 の Backup Exec サービスアカウントのクレデンシャルと同じではありません。

- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 次のいずれかの方法を選択して、ライセンスキーを入力します。

ライセンスキーを手動で入力する 次に示す順序で操作を実行します。

- [ライセンスキー]フィールドにライセンスキーを入力します。
- [追加]をクリックします。
- インストールするオプションまたはエージェントごとに、各ライセンスキーについてこの手順を繰り返します。

ライセンスキーをファイルからインポートする 次に示す順序で操作を実行します。

- [ファイルからのインポート]をクリックします。
- **besernum.xml** ファイルを選択します。

評価版をインストールする [ライセンスキー]フィールドを空白にします。

- 8 [次へ]をクリックします。
- 9 インストールするエージェントとオプションを選択して、[次へ]をクリックします。
- 10 [インストール先フォルダ]フィールドで、**Backup Exec** をインストールしたい場所を入力します。
- 11 [次へ]をクリックします。
- 12 次のとおりサービスアカウントのクレデンシャルオプションを完了してください:

ユーザー名	<p>Backup Exec サービスに使用する管理者アカウントのユーザー名を入力します。</p> <p>リモートコンピュータがドメインに属している場合は、ドメインの管理者アカウントまたはドメインの管理者グループ内のアカウントに相当するアカウントを使用します。</p> <p>リモートコンピュータがワークグループに属している場合は、管理者アカウントまたはコンピュータの Administrators グループ内のアカウントに相当するアカウントを使用します。</p>
パスワード	<p>Backup Exec サービスに使用する管理者アカウントのパスワードを入力します。</p>
ドメイン	<p>コンピュータがドメインに属している場合は、コンピュータが属するドメインを選択します。</p> <p>コンピュータがワークグループに属している場合は、コンピュータ名を選択します。</p>

- 13 [次へ]をクリックします。
- 14 次のいずれかを行って **Backup Exec** データベースを保存する場所を選択し、[次へ]をクリックします。

ローカル Backup Exec SQL Express インスタンスを作成する

次に示す順序で操作を実行します。

- [ローカルに Backup Exec SQL Express インスタンスを作成してデータベースを格納する。]をクリックします。
- データベースの場所を変更するには、[インストール先フォルダ]フィールドに新しい場所を入力します。

既存の SQL Server 2005 または SQL Server 2008 インスタンスを使用する

次に示す順序で操作を実行します。

- [ネットワーク上の SQL Server 2005 (SP3 以降) または SQL Server 2008 の既存のインスタンスを使用してデータベースを格納する。]をクリックします。
- インスタンスを選択します。

既存のインスタンスに Backup Exec をインストールした場合には、**master** データベースの自動リストア機能は使用できません。**master** データベースのリカバリを行うには、そのデータベースを、**master** データベースのバックアップ時に Backup Exec が自動的に作成し更新した **master** データベースコピーに置き換える必要があります。

注意: Backup Exec のインストール時およびアップグレード時には、Backup Exec によって SQL サービスが何度か停止および起動されます。ユーザーが作成した他のデータベースのうち SQL Server インスタンスを使用するものは、この処理中は利用できません。このような競合を避けるため、Backup Exec は独立した SQL インスタンスにインストールする必要があります。

Backup Exec によってインスタンスへの接続が試行されます。

この手順はアップグレードではスキップされます。

- 15 [次へ]をクリックします。
- 16 テープデバイスドライバに関する説明を確認して、[次へ]をクリックします。
- 17 [次へ]をクリックします。
- 18 ダイアログボックスが表示されたら、インストールする追加オプションの設定を入力するか選択し、選択ごとに[次へ]または[OK]をクリックします。
- 19 Backup Exec がリモートコンピュータを検証した後、次のいずれかの方法でリストを変更できます:

手動で 1 つのリモートコンピュータを追加する方法

[追加]をクリックし、次に[単一のサーバーを追加]をクリックします。

手動で複数のリモートコンピュータを追加する方法 [追加]をクリックし、次に[同じ設定で複数のサーバーを追加]をクリックします。

コンピュータの既存のリストをインポートして複数のリモートコンピュータを追加する方法 [インポートおよびエクスポート]をクリックして、次のオプションの 1 つを選択します。

- 選択されたリストからリモートコンピュータの名前を **Backup Exec** で追加できるように[ファイルからのインポート]を選択します。
- このメディアサーバーに発行するように設定されているすべてのリモートコンピュータの名前を **Backup Exec** で追加できるように[このメディアサーバーに公開されているサーバーのインポート]を選択します。

リモートコンピュータのリストに対するリモートコンピュータログオンクレデンシャルを入力しなければなりません。

インストールするように選択した製品、またはこのインストールのために選択した他のプロパティを変更する方法 変更するリモートコンピュータを選択して、[編集]をクリックします。

リストからリモートコンピュータを削除する方法 削除するリモートコンピュータを選択して、[削除]をクリックします。

リモートコンピュータと関連付けられているリモートコンピュータのログオンクレデンシャルのリストを保存する方法 [将来のリモートインストールセッションのためにサーバーのリストを保存]にチェックマークが付いていることを確認します。

このオプションは、これらのリモートコンピュータに **Backup Exec** またはオプションを次回インストールするときに、リモートコンピュータすべての名前とクレデンシャルが自動的に追加されるようにします。

リモートコンピュータのリストを XML ファイルに保存する方法 [インポートおよびエクスポート]をクリックし、次に [ファイルにエクスポート]をクリックします。

Push_Export.xml ファイルを保存するための場所を選択できます。このオプションは複数のメディアサーバーに同じリストを使いたい場合に有用です。リストをインポートするとき、リモートコンピュータのログオンクレデンシャルを入力し直さなければなりません。

検証の間に見つかったエラーを修正する方法 コンピュータ名を右クリックし、[エラーの修正]をクリックします。

Backup Exec が無効なリモートコンピュータ コンピュータ名を右クリックし、[環境チェック
を再検証できるようにする方法 の再試行]をクリックします。

20 リストのコンピュータすべてが検証されてリストが完了したら、[次へ]をクリックします。

21 Backup Exec のインストールの概要を確認し、[インストール]をクリックします。

p.156 の「[インストールログについて](#)」を参照してください。

22 [次へ]をクリックし、[完了]をクリックしてウィザードを終了します。

リモートコンピュータを再起動していない場合は、変更した内容をシステムに反映するために、ここで再起動する必要があります。

リモートコンピュータへの Backup Exec オプションのインストールについて

リモートコンピュータには次のオプションをインストールできます。

- Remote Agent for Windows Systems
- Advanced Open File Option (AOFO)
- Desktop and Laptop Option (DLO) Desktop Agent
- Desktop and Laptop Maintenance Service

p.123 の「[リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO \(Advanced Open File Option\) のプッシュインストール](#)」を参照してください。

p.126 の「[メディアサーバーからリモートコンピュータへの Desktop Agent および DLO Maintenance Service のプッシュインストール](#)」を参照してください。

これらのオプションコンポーネントは、メディアサーバーからリモートサーバーにプッシュインストールされます。プッシュインストールを採用し、ターゲットコンピュータへのローカルアクセスを不要にすることで、インストール時間を短縮しています。最大 5 台のリモートコンピュータに Backup Exec を同時にインストールできます。

リモートコンピュータに Backup Exec オプションをインストールする前に知っておく必要がある特別な考慮事項があります。

表 2-9 リモートコンピュータへの Backup Exec オプションのインストールに関する特別な考慮事項

項目	考慮事項
32ビットと64ビットのコンピュータ	32ビットコンピュータから64ビットのコンピュータにオプションをプッシュインストールしようとする、64ビットのインストールメディアの挿入を求められる場合があります。

項目	考慮事項
Remote Agent for Windows Systems	<p>リモートコンピュータに ForceGuest が設定されており、ドメインに属していない場合、Remote Agent for Windows Systems をプッシュインストールすることはできません。オペレーティングシステムで ForceGuest が設定されている場合、サーバーへのアクセスは Guest レベルに制限されます。この場合には、インストールメディアを使用するかネットワークを介して、Windows コンピュータに Remote Agent をインストールします。</p> <p>p.143 の「コマンドラインを使用した Backup Exec のインストール (サイレントモード)」を参照してください。</p> <p>ForceGuest を無効にすることもできます。Windows XP では、ForceGuest は [簡易ファイルの共有を使用する (推奨)] オプションで設定します。Windows Vista では、[ネットワークアクセス: ローカルアカウントの共有とセキュリティモデル] 設定によって設定されます。詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。</p> <p>Backup Exec では、コマンドラインバージョンの Remote Agent を、Windows Server 2008 の Server Core インストールオプションを実行するコンピュータにインストールします。Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットは、Remote Agent とともにインストールされます。このアプレットによって、リモートコンピュータでの Backup Exec の操作を監視することができます。</p> <p>p.1910 の「Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットのスイッチ」を参照してください。</p>
ターミナルサービス	<p>ターミナルサービスクライアントを使用し、リモートターミナルサーバー上でインストールプログラムを実行してリモートターミナルサーバーに Backup Exec をインストールする場合は、Backup Exec のインストールプログラムの保存先をドライブ文字を割り当てたネットワークドライブパスで指定することはできません。UNC パスで指定する必要があります。</p>

項目	考慮事項
<p>Windows XP SP2/Server 2003 SP1</p>	<p>Windows XP Service Pack 2 または Windows Server 2003 SP1 が実行されているコンピュータに Backup Exec オプションをプッシュインストールするには、Windows ファイアウォールの例外リストで次の[ファイルとプリンタの共有]のポートを有効にする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 135 (RPC) ■ 445 (TCP) ■ 103X (通常は 1037) ■ 441 (RPC) <p>Windows ファイアウォールの例外リストについて詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。</p> <p>インストール中に、Backup Exec によって、リモートからの起動およびリモートアクセスに関するセキュリティアクセス許可が管理者グループに対して設定されます。</p> <p>プッシュインストール先のコンピュータの[リモート管理の例外を許可する]グループポリシーを有効にします。</p>
<p>Windows Vista/Server 2008</p>	<p>Windows Vista または Windows Server 2008 が実行されているコンピュータに Backup Exec オプションをプッシュインストールするには、インストール先のコンピュータの Windows ファイアウォールの例外リストで特定の項目を有効にする必要があります。有効にする必要がある項目は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ファイルとプリンタの共有 ■ Windows Management Instrumentation (WMI) <p>詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。</p> <p>Windows Vista が実行されているコンピュータにプッシュインストールするには、インストール先コンピュータがドメインに属している必要があります。</p> <p>詳しくは Microsoft のサポート技術情報を参照してください。</p>
<p>Symantec Endpoint Protection 11.0 以降</p>	<p>Symantec Endpoint Protection (SEP) のバージョン 11.0 またはそれ以降を実行するコンピュータにオプションをプッシュインストールするには、ファイルとプリンタを共有するように SEP を設定する必要があります。ファイルとプリンタ共有はデフォルトではオフになります。</p>

リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール

リモートコンピュータには次のオプションをインストールできます。

- Remote Agent for Windows Systems
- Advanced Open File Option (AOFO)

Backup Exec オプションをリモートコンピュータにインストールする前に、特別な考慮事項を確認してください。

p.120 の「[リモートコンピュータへの Backup Exec オプションのインストールについて](#)」を参照してください。

Backup Exec のインストール先コンピュータに、インストールログが Bkupinst.htm という名前で作成されます。

p.156 の「[インストールログについて](#)」を参照してください。

この方法で Backup Exec Remote Agent をインストールして問題が発生した場合は、Remote Agent の手動インストールを試してください。

p.135 の「[コマンドプロンプトを使用したリモートコンピュータへの Remote Agent のインストール](#)」を参照してください。

Remote Agent と AOFO をリモートコンピュータにプッシュインストールする方法

- 1 次のいずれかを実行します。

インストールメディアから Backup Exec オプションをリモートコンピュータにプッシュインストールする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- インストールメディアのブラウザで、[インストール]をクリックし、[Backup Exec のインストールを開始する]をクリックします。
- [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- [使用許諾契約書に同意します]を選択し、[次へ]をクリックします。
- [ローカルインストール]のチェックマークをはずし、次に[リモートインストール]にチェックマークを付けます。
- [次へ]をクリックします。
- [リモートサーバー]パネルで[追加]をクリックします。
- Backup Exec を1つのリモートコンピュータにインストールするには[単一のサーバーを追加]を選択します。または同じ設定を使用して複数のコンピュータに Backup Exec をインストールするには[同じ設定で複数のサーバーを追加]を選択します。

Backup Exec メディアサーバーから Backup Exec オプションをリモートコンピュータにプッシュインストールする方法

ツールメニューの[他のサーバーにエージェントとメディアサーバーをインストール]をクリックします。

- 2 [Remote Agent for Windows Systems]を選択して、[次へ]をクリックします。
- 3 リモートコンピュータの完全修飾名を入力するか、またはリモートコンピュータを探すために[参照]をクリックします。
- 4 [リストに追加]をクリックし、次にオプションをプッシュインストールしたい各リモートコンピュータで手順3と4を繰り返します。

インストールメディアからプッシュインストールし、手順1の[単一のサーバーを追加]を選択した場合は、この手順をスキップできます。

- 5 [リモートコンピュータログオンクレデンシャル]の下で、Backup Exec がリモートサーバーに接続するために使うことができるクレデンシャルを入力します。
管理者のクレデンシャルを使わなければなりません。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 Remote Agent for Windows Systems とともにインストールしたい場合には AOFO (Advanced Open File Option) を選択します。

- 8 [インストール先フォルダ]フィールドで、ファイルをインストールしたいパスを入力します。
- 9 [次へ]をクリックします。
- 10 リモートエージェントでメディアサーバーに情報を配布できるようにするオプションが選択されていることを確認してください。
- 11 発行先のメディアサーバーがリストにあることを確認してください。メディアサーバーを追加するか、編集するか、または削除できます。
- 12 [次へ]をクリックします。
- 13 Backup Exec がリモートコンピュータを検証した後、次のいずれかの方法でリストを変更できます:

手動で 1 つのリモートコンピュータを追加する方法 [追加]をクリックし、次に[単一のサーバーを追加]をクリックします。

手動で複数のリモートコンピュータを追加する方法 [追加]をクリックし、次に[同じ設定で複数のサーバーを追加]をクリックします。

コンピュータの既存のリストをインポートして複数のリモートコンピュータを追加する方法 [インポートおよびエクスポート]をクリックして、次のオプションの 1 つを選択します。

- 選択されたリストからリモートコンピュータの名前を Backup Exec で追加できるように [ファイルからのインポート]を選択します。
- このメディアサーバーに発行するように設定されているすべてのリモートコンピュータの名前を Backup Exec で追加できるように [このメディアサーバーに公開されているサーバーのインポート]を選択します。

リモートコンピュータのリストに対するリモートコンピュータログオンクレデンシャルを入力しなければなりません。

インストールするように選択した製品、またはこのインストールのために選択した他のプロパティを変更する方法 変更するリモートコンピュータを選択して、[編集]をクリックします。

リストからリモートコンピュータを削除する方法 削除するリモートコンピュータを選択して、[削除]をクリックします。

リモートコンピュータと関連付けられているリモートコンピュータのログオンクレデンシャルのリストを保存する方法

[将来のリモートインストールセッションのためにサーバーのリストを保存]にチェックマークが付いていることを確認します。

このオプションはこれらのリモートコンピュータに Backup Exec またはオプションを次回インストールするときに、リモートコンピュータすべての名前とそのクレデンシャルが自動的に追加されるようにします。

リモートコンピュータのリストを XML ファイルに保存する方法

[インポートおよびエクスポート]をクリックし、次に [ファイルにエクスポート]をクリックします。

XML ファイルを保存するための場所を選択できます。このオプションは複数のメディアサーバーに同じリストを使いたい場合に有用です。リストをインポートするとき、リモートコンピュータのログオンクレデンシャルを入力し直さなければなりません。

検証の間に見つかったエラーを修正する方法

コンピュータ名を右クリックし、[エラーの修正]をクリックします。

Backup Exec が無効なリモートコンピュータを再検証できるようにする方法

コンピュータ名を右クリックし、[環境チェックの再試行]をクリックします。

14 リストのコンピュータすべてが検証されてリストが完了したら、[次へ]をクリックします。

15 Backup Exec のインストールの概要を確認し、[インストール]をクリックします。

p.156 の「インストールログについて」を参照してください。

16 [次へ]をクリックし、[完了]をクリックしてウィザードを終了します。

リモートコンピュータを再起動していない場合は、変更した内容をシステムに反映するために、ここで再起動する必要があります。

メディアサーバーからリモートコンピュータへの Desktop Agent および DLO Maintenance Service のプッシュインストール

リモートコンピュータには次のオプションをインストールできます。

- Desktop Agent
- DLO Maintenance Service

Desktop Agent と DLO Maintenance Service をリモートコンピュータにプッシュインストールする方法

- 1 ツールメニューの[他のサーバーにエージェントとメディアサーバーをインストール]をクリックします。
- 2 [Desktop and Laptop Agent]または[DLO Maintenance Service]を選択して[次へ]をクリックします。
- 3 リモートコンピュータの完全修飾名を入力するか、またはリモートコンピュータを探すために[参照]をクリックします。
- 4 [リストに追加]をクリックし、次にオプションをプッシュインストールしたい各リモートコンピュータで手順 3 と 4 を繰り返します。
- 5 [リモートコンピュータログオンクレデンシャル]の下で、Backup Exec がリモートサーバーに接続するために使うことができるクレデンシャルを入力します。
管理者のクレデンシャルを使わなければなりません。
- 6 [次へ]をクリックします。

7 Backup Exec がリモートコンピュータを検証した後、次のいずれかの方法でリストを変更できます:

手動で 1 つのリモートコンピュータを追加する方法 [追加]をクリックし、次に[単一のサーバーを追加]をクリックします。

手動で複数のリモートコンピュータを追加する方法 [追加]をクリックし、次に[同じ設定で複数のサーバーを追加]をクリックします。

コンピュータの既存のリストをインポートして複数のリモートコンピュータを追加する方法 [インポートおよびエクスポート]をクリックし、選択されたリストからリモートコンピュータの名前を **Backup Exec** で追加できるように [ファイルからのインポート]を選択します。

リモートコンピュータのリストに対するリモートコンピュータログオンクレデンシアルを入力しなければなりません。

インストールするように選択した製品、またはこのインストールのために選択した他のプロパティを変更する方法 変更するリモートコンピュータを選択して、[編集]をクリックします。

リストからリモートコンピュータを削除する方法 削除するリモートコンピュータを選択して、[削除]をクリックします。

リモートコンピュータと関連付けられているリモートコンピュータのログオンクレデンシアルのリストを保存する方法 [将来のリモートインストールセッションのためにサーバーのリストを保存]にチェックマークが付いていることを確認します。

このオプションはこれらのリモートコンピュータに **Backup Exec** またはオプションを次回インストールするときに、リモートコンピュータすべての名前とそのクレデンシアルが自動的に追加されるようにします。

リモートコンピュータのリストを XML ファイルに保存する方法 [インポートおよびエクスポート]をクリックし、次に [ファイルにエクスポート]をクリックします。

XML ファイルを保存するための場所を選択できます。このオプションは複数のメディアサーバーに同じリストを使いたい場合に有用です。リストをインポートするとき、リモートコンピュータのログオンクレデンシアルを入力し直さなければなりません。

検証の間に見つかったエラーを修正する方法 コンピュータ名を右クリックし、[エラーの修正]をクリックします。

Backup Exec が無効なリモートコンピュータ コンピュータ名を右クリックし、[環境チェックを再検証できるようにする方法 の再試行]をクリックします。

- 8 リストのコンピュータすべてが検証されてリストが完了したら、[次へ]をクリックします。
- 9 Backup Exec のインストールの概要を確認し、[インストール]をクリックします。
p.156 の「インストールログについて」を参照してください。
- 10 [次へ]をクリックし、[完了]をクリックしてウィザードを終了します。
リモートコンピュータを再起動していない場合は、変更した内容をシステムに反映するために、ここで再起動する必要があります。

Remote Agent for Windows Systems のインストールについて

Remote Agent for Windows Systems は、使用環境に応じて次の方法でインストールすることができます。

- Backup Exec インストールメディアをコンピュータに挿入し、Backup Exec インストールプログラムを実行して、このメディアから Remote Agent をインストールする
p.112 の「ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール」を参照してください。
- メディアサーバーから 1 台以上のリモートコンピュータに Remote Agent および Advanced Open File Option (AOFO) をプッシュインストールする
p.123 の「リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール」を参照してください。
- バックアップ選択リストに表示されたリモートコンピュータに Remote Agent および AOFO をプッシュインストールする
p.130 の「バックアップ選択リスト内のリモートコンピュータへの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール」を参照してください。
- Microsoft Active Directory ネットワークを使用して、ネットワーク内のコンピュータへの Remote Agent および AOFO のインストールを集中管理する
p.130 の「Active Directory ネットワークでの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール方法」を参照してください。
- コマンドのスクリプトファイルの使用によって Remote Agent と AOFO をインストールする
p.138 の「コマンドスクリプトを使用した Remote Agent および AOFO のインストール」を参照してください。

Remote Agent をインストールするための特別な考慮事項があります。

p.120の「リモートコンピュータへの Backup Exec オプションのインストールについて」を参照してください。

バックアップ選択リスト内のリモートコンピュータへの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール

バックアップの選択時に、バックアップするコンピュータに Remote Agent および Advanced Open File Option (AOFO) をインストールできます。

メモ: AOFO は Windows 2000/XP が実行されている 32 ビットコンピュータにのみインストールできます。

バックアップ選択リスト内のリモートコンピュータに Backup Exec Remote Agent および Advanced Open File Option をインストールする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]タブで、次のいずれかを実行します。

[登録済みリソース]にリモートコンピュータが追加されている場合

次に示す順序で操作を実行します。

- [登録済みリソース]を展開します。
- [Windows システム]を展開します。

[登録済みリソース]にリモートコンピュータが追加されていない場合

次に示す順序で操作を実行します。

- [ドメイン]を展開します。
- [Microsoft Windows Network]を展開します。
- 該当するドメインを展開します。

- 4 Remote Agent および AOFO をインストールするコンピュータを右クリックし、[Remote Agent または Advanced Open File Option のインストール]をクリックします。
- 5 インストールウィザードのインストールを完了します。

p.123の「リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール」を参照してください。

Active Directory ネットワークでの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール方法

Active Directory ネットワーク内のコンピュータへの Backup Exec Remote Agent for Windows Systems および Advanced Open File Option (AOFO) のインストールを集中管理できます。インストールを 1 回設定し、グループポリシーオブジェクト (GPO) を使用

して組織単位内のコンピュータにそのインストール設定を割り当てます。オプションは、組織単位内のコンピュータが起動されるたびに自動的にインストールされます。

メモ: Backup Exec Remote Agent および Advanced Open File Option のロールアウトをクライアントコンピュータに対して実施する前に、組織の配備計画を確認してください。グループポリシーによるデスクトップ管理および Active Directory のマニュアルも参照してください。

メモ: AOFO は Windows 2000/XP が実行されている 32 ビットコンピュータにのみインストールできます。

表 2-10 Active Directory ネットワークでの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール

処理	説明
Remote Agent や AOFO の Transform を作成します。 p.132 の「 Transform の作成 」を参照してください。	Transform には、インストールパス、公開するコンピュータ、AOFO をインストールするかどうかなど、コンピュータの起動時に Remote Agent の Windows Installer パッケージに対して行う変更が含まれます。Transform は、32 ビットコンピュータ用と 64 ビットコンピュータ用を個別に作成する必要があります。 Transform の作成の必要条件を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Transform を作成するコンピュータに、Microsoft Windows 2000 以上がインストールされている必要があります。 ■ Remote Agent をインストールするコンピュータで、MSI 3.1 が実行されている必要があります。 ■ Remote Agent をインストールするコンピュータで、MSXML 6.0 が実行されている必要があります。 ■ コンピュータへの割り当てのみがサポートされています。ユーザーへの割り当てはサポートされていません。
インストールする Remote Agent のソースファイルが含まれる配布ポイント(共有)を作成します。 p.133 の「 ソフトウェアの配布ポイント(共有)の作成 」を参照してください。	作成した Transform と Backup Exec RAW32 または RAW64 ディレクトリを配布ポイントにコピーする必要があります。

処理	説明
配布ポイントの Transform と RAWS32 または RAWSX64 ディレクトリを Active Directory の組織単位内のコンピュータに割り当てるように GPO を設定します。 p.134 の「グループポリシーオブジェクトの設定」を参照してください。	ソフトウェアは、組織単位内のコンピュータが起動されたときに自動的にインストールされます。

Transform の作成

Active Directory ネットワークで Remote Agent と Advanced Open File Option をインストールするには、Transform を作成する必要があります。

p.130 の「Active Directory ネットワークでの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール方法」を参照してください。

Transform を作成する方法

- 次のいずれかを実行します。
 - Backup Exec インストールメディアのブラウザから、[インストール]をクリックし、[Backup Exec Remote Agent のインストールを開始する]をクリックします。
 - Backup Exec がインストールされたメディアサーバーで、¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Agents¥RAWS32 に移動して setup.exe をダブルクリックします。
- [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- [インストールの種類]画面で、[Active Directory を使用して Remote Agent をインストールするために Transform を作成する]をクリックして[次へ]をクリックします。
- [インストールオプション]パネルで、次の手順を実行します。
 - Transform に含めるオプションを選択します。
Transform に指定した設定は、セットアップの実行時に Active Directory ネットワーク内のクライアントコンピュータのデフォルト設定になります。
 - Remote Agent がクライアントコンピュータにインストールされるパスを入力します。
デフォルトパスを変更するには、[変更]をクリックします。
リムーバブルドライブまたはネットワークドライブはパスに指定できません。
- [次へ]をクリックします。
- 次に示す順序で操作を実行します。

- オプション[Remote Agent がリモートコンピュータの IP アドレスと名前、Remote Agent 自身のバージョンをメディアサーバーに公開できるようにします。]が選択されることを確認してください。
 - [追加]をクリックし、Transform が適用された後に Remote Agent によって公開するすべてのメディアサーバーのサーバー名または IP アドレスを入力します。
- 7 [次へ]をクリックします。
- Remote Agent がインストールされたコンピュータは、[登録済みリソース]の下の、メディアサーバーのバックアップ選択ツリーに表示されます。
- 8 Transform のファイル名と保存先のパスを入力し、[次へ]をクリックします。
 デフォルトパスを変更するには、[変更]をクリックします。
- Transform のファイルには意味のある名前を使用します。たとえば、Transform 内のオプションの名前と Transform を適用するプラットフォームを名前に含めます (RemoteAgentDefaultPathNoPublishing など)。
- 9 Transform を作成するには、[インストール]をクリックします。
- 10 Transform を作成したら、ソースファイルの配布ポイントを設定します。
 p.133 の「ソフトウェアの配布ポイント (共有) の作成」を参照してください。

ソフトウェアの配布ポイント (共有) の作成

Active Directory ネットワークで Remote Agent と Advanced Open File Option をインストールするには、Transform の作成後にソフトウェアの配布ポイントを作成する必要があります。

p.132 の「Transform の作成」を参照してください。

p.130 の「Active Directory ネットワークでの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール方法」を参照してください。

表 2-11 ソフトウェアの配布ポイント (共有) を作成する方法

手順	説明
手順 1	共有フォルダを作成し、インストールを実行するクライアントコンピュータからその共有フォルダにアクセスできるように権限を設定します。

手順	説明
手順 2	<p>メディアサーバーから共有フォルダに次のディレクトリをコピーします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ RAWS32 か RAWSX64 ■ MSXML <p>デフォルトでは、これらのフォルダは、¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Agents にあります。</p>
手順 3	<p>Transform が作成されたパスから共有フォルダの RAWS32 または RAWSX64 ディレクトリに Transform をコピーします。</p>
手順 4	<p>ソースファイルを配備するためにグループポリシーオブジェクトを設定します。</p> <p>p.134 の「グループポリシーオブジェクトの設定」を参照してください。</p>

グループポリシーオブジェクトの設定

Active Directory ネットワークで Remote Agent と Advanced Open File Option をインストールするには、ソフトウェアの配布ポイントを作成して Transform を作成した後で、グループポリシーオブジェクトを設定する必要があります。

p.132 の「[Transform の作成](#)」を参照してください。

p.133 の「[ソフトウェアの配布ポイント \(共有\) の作成](#)」を参照してください。

p.130 の「[Active Directory ネットワークでの Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール方法](#)」を参照してください。

ソフトウェアを配備するように GPO を設定する方法

- 1 ユーザーおよびグループを管理する [Active Directory] スナップインで、[プロパティ] をクリックし、新しい GPO を作成するか、既存の GPO を編集します。
GPO の作成について詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。
- 2 [コンピュータの構成] の下の [ソフトウェアの設定] を展開します。
- 3 [ソフトウェア インストール] を右クリックし、[新規作成] をクリックして [パッケージ] をクリックします。
- 4 [ファイルを開く] ダイアログボックスで、Universal Naming Convention (UNC) 名 (¥server name¥share name など) を使用してソフトウェアの配布ポイントを参照し、パッケージファイルを選択して [開く] をクリックします。

- 5 パッケージファイル **Symantec Backup Exec Remote Agent for Windows Systems.msi** を選択して、[開く]をクリックします。
- 6 メッセージが表示されたら、[詳細]を選択します。
- 7 **Active Directory** によって **msi** パッケージがチェックされたら、[一般]タブで、インストールするオプションのバージョンが正しいことを確認します。
- 8 [配備]タブで、環境に合わせて設定を行います。
[WIN64 のコンピュータで、この 32 ビット x86 アプリケーションを利用できるようにする]オプションが選択されていないことを確認してください。
コンピュータが組織単位から削除された場合に **Remote Agent** がアンインストールされるようにするには、[管理の対象でなくなったときは、このアプリケーションをアンインストールする]オプションを選択します。
- 9 [変更]タブで[追加]をクリックし、共有フォルダを参照して、作成した **Transform** を選択します。
- 10 [開く]を選択し、その他の必要な変更を行って[OK]をクリックします。
- 11 すべてのダイアログボックスを閉じます。
指定した組織単位内のコンピュータが起動されると、**Transform** が処理され、指定したオプションがインストールされます。
- 12 インストール先コンピュータで作成されたインストールログを表示して、**Remote Agent** や **AOFO** がインストールされたことを確認します。

コマンドプロンプトを使用したリモートコンピュータへの Remote Agent のインストール

コマンドプロンプトを使用して **Remote Agent** をインストールできます。

インストール処理は **RAWSinst.htm** という名前のインストールログを作成します。

p.156 の「[インストールログについて](#)」を参照してください。

コマンドプロンプトを使用したリモートコンピュータへの Remote Agent のインストール方法

- 1 リモートコンピュータで、Backup Exec のメディアサーバーの Agents ディレクトリにドライブ文字をマップします。デフォルトでは、Agents ディレクトリは次のパスにあります。

¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Agents

また、同じローカルディレクトリに次のフォルダをコピーできます。

32 ビットコンピュータにインストールする場合 RAW32 フォルダと MSXML フォルダ

64 ビットコンピュータにインストールする場合 RAW64 フォルダと MSXML フォルダ

- 2 コマンドプロンプトを開き、手順1でマップしたドライブ文字と次のパスを入力します。

32 ビットコンピュータにインストールする場合 ¥RAW32:

64 ビットコンピュータにインストールする場合 ¥RAW64:

3 次のいずれかを実行します。

公開を有効にせずに Remote Agent を 32 ビットコンピュータにインストールする場合 次のコマンドを実行します。
`setup.exe /RANT32:/S:-boot`

公開を有効にして Remote Agent を 32 ビットコンピュータにインストールする場合 次のコマンドを実行します。
`setup.exe /RANT32:/S:/ADVRT:<media server name 1> <media server name 2>`

公開を有効にせずに Remote Agent を 64 ビットコンピュータにインストールする場合 次のコマンドを実行します。
`setup.exe /RAWSX64:/S:-boot`

公開を有効にして Remote Agent を 64 ビットコンピュータにインストールする場合 次のコマンドを実行します。
`setup.exe /RAWSX64:/S:/ADVRT:<media server name 1> <media server name 2>`

Remote Agent は、リモートコンピュータの次のディレクトリにインストールされます。

Remote Agent を 32 ビットコンピュータにインストールした場合 ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥RAWS

Remote Agent を 64 ビットコンピュータにインストールした場合 ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥RAWS

コマンドプロンプトを使用したリモートコンピュータからの Remote Agent のアンインストール

コマンドプロンプトを使用して Remote Agent をアンインストールできます。

コマンドプロンプトを使用してリモートコンピュータから Remote Agent をアンインストールする方法

- 1 リモートコンピュータで、Backup Exec メディアサーバーの Remote Agent ディレクトリに、次のパスを使用してドライブ文字をマップします。

32 ビットコンピュータから Remote Agent を
アンインストールする場合 ¥Program Files¥Symantec¥Backup
Exec¥Agents¥RAWS32

64 ビットコンピュータから Remote Agent を
アンインストールする場合 ¥Program Files¥Symantec¥Backup
Exec¥Agents¥RAWSX64

- 2 コマンドプロンプトを開き、手順 1 でマップしたドライブ文字を入力します。
- 3 次のコマンドを実行します。

32 ビットコンピュータから Remote Agent を
アンインストールする場合 `setup.exe /RANT32:/S:-u`

/S: パラメータは、ユーザーインターフェース
を使用せずに、サイレントモードでこの操作を
実行するために使用します。-u パラメータは、
アンインストール操作を指定するスイッチで
す。

64 ビットコンピュータから Remote Agent を
アンインストールする場合 `setup.exe /RAWSX64:/S:-u`

コマンドスクリプトを使用した Remote Agent および AOFO のインストール

コマンドスクリプトファイルを使用して、Remote Agent および Advanced Open File Option (AOFO) をインストールできます。コマンドスクリプトファイルは、Remote Agent インストールディレクトリに含まれています。

インストール処理は `RAWSinst.htm` という名前のインストールログを作成します。

p.156 の「[インストールログについて](#)」を参照してください。

コマンドスクリプトを使用した Remote Agent および AOFO のインストール方法

- 1 Backup Exec のメディアサーバーの Agents ディレクトリにドライブ文字をマップします。デフォルトでは、Agents ディレクトリは次のパスにあります。

¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Agents

- 2 次のいずれかを実行します。

32 ビットコンピュータへの Remote Agent のインストール方法 RAWS32 ディレクトリで[setupaa]をダブルクリックします。

32 ビットコンピュータへの Advanced Open File Option のインストール方法 RAWS32 ディレクトリで[setupaof0]をダブルクリックします。

デフォルトで、コマンドスクリプトによって、リモートサーバーの次のディレクトリにオプションが自動的にインストールされます。

¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥RAWS

64 ビットコンピュータへの Remote Agent のインストール方法 RAWSX64 ディレクトリで[setupaax64]をダブルクリックします。

- 3 Advanced Open File Option をインストールした場合は、リモートコンピュータを再起動する必要があります。

コマンドスクリプトを使用した Remote Agent および AOFO のアンインストール

Remote Agent と AOFO をアンインストールするために、1 つのコマンドスクリプトファイルが用意されています。このアンインストールコマンドスクリプトを使用すると、両方のオプションが一緒に削除されます。このコマンドスクリプトを使用して、各オプションを個別に削除することはできません。

コマンドスクリプトを使用した Remote Agent および Advanced Open File Option のインストール方法

- 1 Backup Exec メディアサーバーに次のパスを使用してドライブ文字をマップします。

32 ビットコンピュータ ¥Program Files¥Symantec¥Backup
Exec¥Agents¥RAWS32

64 ビットコンピュータ ¥Program Files¥Symantec¥Backup
Exec¥Agents¥RAWSX64

- 2 次のいずれかを実行します。

32 ビットコンピュータの場合 Removeaafo をダブルクリックします。

64 ビットコンピュータの場合 [Uninstallaaofx64] をダブルクリックします。

メモ: この説明は Remote Agent for Windows Systems 12.5 にのみ適用します。

Remote Agent と Advanced Open File Option の両方がコンピュータから削除されます。

- 3 リモートコンピュータを再起動します。

Remote Administrator のインストール

Remote Administrator を使用し、リモート環境の Windows サーバーまたはワークステーションからメディアサーバーを管理することができます。Remote Administrator をサポートするには、Backup Exec システムサービスを、管理したいメディアサーバーで実行する必要があります。

Remote Administrator をインストールする方法

- 1 インストールメディアのブラウザから、[インストール]をクリックします。
- 2 [Backup Exec のインストールを開始する]をクリックします。
- 3 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- 4 [使用許諾契約書に同意します]を選択し、[次へ]をクリックします。
- 5 Remote Administrator 用に Administration Console をインストールする場合は、[Remote Administrator Console のみのインストール]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 6 ファイルがインストールされる場所を変更するには、インストールの別のディレクトリを選択するために[変更]をクリックします。

- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 インストールの概略を確認し、[インストール]をクリックします。
- 9 [完了]をクリックします。

Remote Administrator の実行

Remote Administrator を使用し、リモート環境の **Windows** サーバーまたはワークステーションからメディアサーバーを管理することができます。**Remote Administrator** をサポートするには、メディアサーバーで **Backup Exec** システムサービスが実行されている必要があります。

共有に対する有効なアカウントを使用して **Remote Administrator** コンピュータにログオンしている場合でも、その共有を参照する際にユーザー名とパスワードの入力を必要とする場合があります。このような場合は、ドメイン修飾のユーザー名 (**domain1¥howard** など) とパスワードを入力します。

ワークグループのアカウントの場合、異なるワークグループ間でログオンする際には、ユーザー ID のみを入力し、ワークグループには何も入力しません。

p.140 の「[Remote Administrator のインストール](#)」を参照してください。

Remote Administrator を実行する方法

- 1 [開始]をクリックします。
- 2 [プログラム]をポイントし、[Symantec Backup Exec]をクリックします。
メディアサーバーからリモート管理コンソールに接続している場合は、[ネットワーク]メニューの[ローカルメディアサーバーに接続]をクリックして接続を切ります。[メディアサーバーに接続]をクリックして、別のメディアサーバーに接続します。

- 3 必要なオプションを選択します。

p.141 の「[\[メディアサーバーに接続\]オプション](#)」を参照してください。

ローカルサービスの状態が、ダイアログボックスの下部に表示されます。サーバーとの接続に失敗した場合は、接続先サーバーのサービスの状態がダイアログボックスに表示されます。

- 4 [OK]をクリックします。

[メディアサーバーに接続]オプション

このダイアログボックスで、リモートの **Windows** サーバーまたはワークステーションからメディアサーバーを管理するために必要なクレデンシャルを入力できます。

p.141 の「[Remote Administrator の実行](#)」を参照してください。

表 2-12 [メディアサーバーに接続]オプション

項目	説明
サーバー	<p>メディアサーバーの名前を示します。メディアサーバーから Remote Administrator を実行している場合、リストから名前を選択するか、またはサーバーの名前を入力できます。</p> <p>ドメイン内の、Backup Exec のインストールされている各サーバーが、自動的にリストボックスに表示されます。</p>
低速回線接続 (RAS)	<p>接続しているメディアサーバーから最初を取得される情報量を最小にします。このオプションを選択した場合は、管理コンソールのロード時に、デバイスビューやメディアビューなどが自動的に展開されることはありません。このオプションによって、リモートメディアサーバーとの接続に要する時間が短縮されます。各ビューの情報は、そのビューを選択したときに更新されます。</p> <p>このオプションは、モデム回線でメディアサーバーに接続する場合に有効です。</p>
ユーザー名	<p>接続するサーバーの管理者のユーザー名を示します。</p> <p>Windows Server 2003/2008 および XP/Vista を実行しているコンピュータでは、空のパスワードが設定されたユーザー名でリモート管理コンソールにログオンすることはできません。空のパスワードを許可するように Windows を設定する必要があります。そのように設定しないと、[ログオン失敗: ユーザーアカウントの制限。]というエラーメッセージが表示されます。詳しくは Windows のマニュアルを参照してください。</p>
パスワード	<p>ユーザーのパスワードを示します。</p>
ドメイン	<p>ユーザーが属するドメインを示します。リストからのドメインを選択するか、またはドメイン名を入力できます。</p>
サービス	<p>Backup Exec Services Manager にアクセスし、サービスを停止したり開始したり、サービスを実行するのに使われるログオンクレデンシヤルを設定することを可能にします。</p>

コマンドラインを使用した Backup Exec のインストール (サイレントモード)

Backup Exec をコマンドラインからインストールする方法は、サイレントモードインストールと呼ばれます。このインストール方法では、Backup Exec インストールメディア内の `setup.exe` プログラムを、一連のスイッチおよび /S: スイッチを指定して実行します。コマンドラインインストールには次のものがが必要です。

- Backup Exec インストールメディア
- Backup Exec をインストール、設定またはアンインストールするコンピュータに対する管理者権限

Backup Exec のインストール先コンピュータに、インストールログが `Bkupinst.htm` という名前で作成されます。

p.156 の「インストールログについて」を参照してください。

コマンドラインを使用して Backup Exec をインストールする方法 (サイレントモード)

- 1 Windows の [コマンドプロンプト] を開きます。
- 2 ドライブを Backup Exec インストールメディアを挿入したドライブに変更します。
- 3 次のいずれかにディレクトリを変更します:

32 ビットコンピュータの場合 `be¥winnt¥install¥be32`

64 ビットコンピュータの場合 `¥be¥winnt¥install¥bex64`

- 4 `setup /TS:` に続けて必要なスイッチを入力します。次に例を示します。

```
setup /TS:/USER:<user> /DOM:domain /PASS:password /SNO:license  
key /S:
```

p.144 の「Backup Exec サイレントモードインストール用コマンドラインスイッチ」を参照してください。

/S: スイッチの指定を省略した場合は、指定したコマンドラインパラメータをデフォルトのインストールオプションとして、Backup Exec インストールプログラムが起動します。たとえば、前述の例で /S: スイッチの指定を省略した場合は、ダイアログボックスに、指定したユーザー名、ドメイン、パスワードおよびライセンスキーが入力された状態で Backup Exec インストールプログラムが起動します。

- 5 Enter キーを押します。

Backup Exec サイレントモードインストール用コマンドラインスイッチ

Backup Exec のサイレントモードインストールで使用するコマンドラインスイッチを次の表に示します。

これらのスイッチを使用する際の一般的なルールは次のとおりです。

- イタリックで示す値は使用環境に合わせて変更します。たとえば、*password* にはパスワードを指定します。
- 値に空白が含まれている場合は、"Operations Weekly Backup" のように値を引用符で囲みます。

表 2-13 Backup Exec サイレントモードインストール用コマンドラインスイッチ

スイッチ	追加スイッチ	説明
/TS:		追加スイッチで指定したオプションを使用して Backup Exec をインストールします。 <i>/USER:"user"</i> <i>/DOM:"dm"</i> <i>/PASS:"pw"</i> は必須です。

スイッチ	追加スイッチ	説明
	/USER:"user" /DOM:"dm" /PASS:"pw"	必須。Backup Exec システムサービスアカウント用の既存のユーザー、ドメインおよびパスワードを指定します。サイレントモードインストールの場合は、ユーザーは作成されません。 メモ: /PASS: を使用するとき、パスワードに引用符 (") が含まれている場合には、 <code>¥</code> と入力します。たとえば、パスワードが <code>pass"word</code> であれば、 <code>/PASS:pass¥"word</code> と入力します。パスワードに <code>¥</code> という文字が含まれている場合は、それぞれの文字の前に <code>¥</code> を付ける必要があります。たとえば、パスワードが <code>pass¥"word</code> であれば、 <code>/PASS:pass¥¥"word</code> と入力します。
	/DEST:"path"	Backup Exec のインストール先のパスを指定します。省略した場合は、デフォルトパスの <code>Program Files¥Symantec¥Backup Exec</code> が使用されます。
	/DOCS:	オンラインマニュアルをインストールします。

スイッチ	追加スイッチ	説明
	/NOINSTALL:	<p>実際に Backup Exec ソフトウェアをインストールすることなく、インストールオプションのすべてを選択することができます。このオプションは、/CPF: スイッチと組み合わせて使用することができます。</p>
	/SNO:license key	<p>Backup Exec および追加オプションをインストールするために使用する 1 つ以上のライセンスキーを指定します。Remote Administrator をインストールする場合は、ライセンスキーは必須ではありません。最大 99 個のライセンスキーを指定することができます。ライセンスキーを省略した場合は、Backup Exec の評価版コピーがインストールされます。</p> <p>/SNO スイッチの使用例を次に示します。</p> <p>/SNO:s1</p> <p>/SNO:s1 s2 s3 s4</p> <p>メモ: オプションまたはエージェントのためのライセンスをインストールする場合、オプションまたはエージェントを指定するスイッチを入力する必要があります。オプションまたはエージェントを指定するスイッチはこの表に含まれています。</p>

スイッチ	追加スイッチ	説明
	/TD:NEW または ALL	<p>/TD:NEW を指定した場合は、ドライブのロードされていないドライブに対してのみテープドライブをインストールします。</p> <p>/TD:ALL を指定した場合は、全ドライブに対してテープドライブをインストールします。</p> <p>メモ: Symantec テープドライブをインストールするには、Windows ドライブ署名ポリシーを Ignore (無視) に設定する必要があります。ドライブ署名ポリシーの変更について詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。</p>
	/CPF:"path%filename.cpf"	指定したインストールパラメータのすべてを格納したファイルを作成します。ファイルは暗号化されないため、パスワードは保護されません。
	/DBSERVER:<server%instance>	指定した SQL Server に Backup Exec データベースをインストールします。
	/DBINSTPATH:<SQL Express destination folder>	指定したフォルダに SQL Express のデフォルトインスタンスをインストールします。
	/NOUPDATE:	Symantec LiveUpdate のインストールを省略します。

スイッチ	追加スイッチ	説明
	/DISADVRT	公開せずに Remote Agent をインストールします。
	/SQLXSETUP:<SQL Express Install Package>	Microsoft SQL Server 2005 Express Edition の各言語固有のインストールパッケージの場所を指定します。
	/LOADER:	Library Expansion Option をインストールします。
	/IDR:	Intelligent Disaster Recovery Option をインストールします。
	/AOFO:	Advanced Open File Option をインストールします。
	/DLO:	Backup Exec Desktop and Laptop Option をインストールします。
	/DLO5:	5 ユーザーバージョンの Backup Exec Desktop and Laptop Option をインストールします。
	/MMS:<CAS server name>	Central Admin Server Option で使用する管理対象メディアサーバーを作成します。

スイッチ	追加スイッチ	説明
	/CASOPVLOCAL:<1 または 0>	<p>/CASOPVLOCAL:<1>を指定すると、デバイスおよびメディアのデータが管理対象メディアサーバーにローカル保存されます。このスイッチは/MMS:とともに使用します。</p> <p>/CASOPVLOCAL:<0>を指定すると、デバイスおよびメディアのデータが集中管理サーバーに保存されます。このスイッチは/MMS:とともに使用します。</p>
	/R3:	Backup Exec Agent for SAP Applications (SAP Agent) をインストールします。
	/SSO:	このサーバーをプライマリサーバーとして、SAN Shared Storage Option をインストールします。
	/SSO:server name	<server name> をプライマリサーバーとし、このサーバーをセカンダリとして、SAN Shared Storage Option をインストールします。
	/SHAREPT:	Agent for Microsoft SharePoint をインストールします。
	/EXCH:	Agent for Microsoft Exchange Server をインストールします。

スイッチ	追加スイッチ	説明
	/LOTUS:	Agent for Lotus Domino をインストールします。
	/ORACLE:	Agent for Oracle on Windows or Linux Servers をインストールします。
	/SQL:	Agent for Microsoft SQL Server をインストールします。
	/EV:	Agent for Enterprise Vault をインストールします。
	/NTA:	Remote Agent for Windows Systems をインストールします。
	/ADBO:	Advanced Disk-based Backup Option をインストールします。
	/CASO:	Central Admin Server Option をインストールします。
	/ADR:	Active Directory Recovery Agent をインストールします。
	/NDMP:	NDMP Option をインストールします。
	/DB2:	Agent for DB2 をインストールします。
	/MAC:	Remote Agent for Macintosh Systems をインストールします。

スイッチ	追加スイッチ	説明
	/RAULUS:	Remote Agent for Linux or UNIX Servers をインストールします。
	/VRTSRV:	Agent for Microsoft Virtual Servers をインストールします。
	/VMWARE:	Agent for VMware Virtual Infrastructure をインストールします。
	/STORPROV:	Storage Provisioning Option をインストールします。
	/DEDUPE:	Deduplication Option をインストールします。
	/EXCHARCH:	Exchange Mailbox Archiving Option をインストールします。
	/NTFS:	File System Archiving Option をインストールします。
	/VTL:	Virtual Tape Library Unlimited Drive Option をインストールします。
	/FIXEDSPO:	Storage Provisioning Option (Basic) をインストールします。
	/RMAL:	Remote Media Agent for Linux Servers をインストールします。
	/COPYCONFIG:	[サーバー設定のコピー]オプションをインストールします。

スイッチ	追加スイッチ	説明
-?		すべてのコマンドライン操作、使用状況および特殊なスイッチについてのヘルプを提供します。

コマンドラインを使用した Remote Administrator のインストール

サイレントモードインストールを使用して、Remote Administrator をインストールすることもできます。Remote Administrator 用のインストールオプションは、コマンドラインスイッチで指定します。

コマンドラインから Remote Administrator をインストールする方法

- 1 Windows の[コマンドプロンプト]を開きます。
- 2 ドライブを Backup Exec インストールメディアを挿入したドライブに変更します。
- 3 次のいずれかにディレクトリを変更します:

32 ビットコンピュータの場合 `¥be¥winnt¥install¥be32`

64 ビットコンピュータの場合 `¥be¥winnt¥install¥be64`

- 4 `setup /RA:` に続けて必要なスイッチを入力します。次に例を示します。

`setup /RA:/S:`

Remote Administrator のサイレントモードインストールで使用するコマンドラインスイッチを次の表に示します。

これらのスイッチを使用する際の一般的なルールは次のとおりです。

- イタリックで示す値は使用環境に合わせて変更します。たとえば、*password* にはパスワードを指定します。
- 値に空白が含まれている場合は、"Program Files¥Symantec¥Backup Exec" のように値を引用符で囲みます。

表 2-14 Remote Administrator サイレントモードインストール用コマンドラインスイッチ

スイッチ	追加スイッチ	説明
/RA:		追加スイッチで指定したオプションを使用して Remote Administrator をインストールします。
	/DEST:" <i>path</i> "	Remote Administrator のインストール先のパスを指定します。省略した場合は、デフォルトパスの Program Files\Symantec\Backup Exec が使用されます。
	/DOCS:	オンラインマニュアルをインストールします。
	/NOINSTALL:	実際に Backup Exec ソフトウェアをインストールすることなく、インストールオプションのすべてを選択することができます。このオプションは、/CPF: スイッチと一緒に使用することができます。
	/CPF:" <i>path</i> \ <i>filename.cpf</i> "	指定したインストールパラメータのすべてを格納したファイルを作成します。このファイルは暗号化されないため、パスワードなどのパラメータは保護されません。
-?		すべてのコマンドライン操作、使用状況および特殊なスイッチについてのヘルプを提供します。

コマンドラインを使用した Backup Exec のアンインストール

Backup Exec がすでにインストールされている場合は、`setup.exe` プログラムを使用して Backup Exec をアンインストールすることができます。

コマンドラインを使用して Backup Exec をアンインストールする方法

- 1 Windows の[コマンドプロンプト]を開きます。
- 2 ドライブを Backup Exec インストールメディアを挿入したドライブに変更します。
- 3 次のいずれかにディレクトリを変更します:

32 ビットコンピュータの場合 `%windir%\winnt\install\32`

64 ビットコンピュータの場合 `%windir%\winnt\install\64`

- 4 Backup Exec プログラムファイルを削除し、Backup Exec データをすべて保持するには、次のように入力します。

```
SETUP /UNINSTALL:
```

Backup Exec プログラムファイルと Backup Exec データを削除するには、次のように入力します。

```
SETUP /REMOVEALL:
```

インストールパラメータファイルの作成

`/S:` スイッチの指定を省略した場合は、指定したコマンドラインパラメータをデフォルトのインストールオプションとして、Backup Exec インストールプログラムが起動します。たとえば、次のように入力したと仮定します。

```
SETUP /TS:/USER:user /DOM:domain /PASS:password /SNO:license  
key
```

Backup Exec インストールプログラムが起動します。ログオンクレデンシャルとライセンスキーを入力する画面が、コマンドラインで指定した情報が入力された状態で表示されます。

また、`/CPF:` コマンドを使用して、指定したコマンドラインオプションのすべてが格納されたパラメータファイルを作成することもできます。Backup Exec や Remote Administrator のインストールオプションの指定に、このパラメータファイルを使用することができます。このファイルは暗号化されないため、パスワードなどのパラメータは保護されません。

Backup Exec エージェントとオプションの評価版のインストール

コア製品のライセンスを取得すると、ほとんどの Backup Exec エージェントおよびオプションの評価版をいつでもインストールできます。各エージェントとオプションには、それぞれ個別の評価期間が設定されています。評価期間の期限切れが近づくと、Backup Exec は警告のアラートを出します。

評価期間で利用可能なエージェントとオプションのリストを表示できます。個々の評価期間の残り時間を表示することもできます。

p.164 の「[ライセンス情報の表示](#)」を参照してください。

Backup Exec エージェントとオプションの評価版をインストールする方法

- 1 ツールメニューの[このメディアサーバーにオプションとライセンスキーをインストール]をクリックします。
- 2 [次へ]をクリックします。
- 3 評価するエージェントまたはオプションを選択します。
- 4 [次へ]をクリックします。
- 5 ダイアログボックスが表示されたら、インストールする追加オプションの設定を入力するか選択します。それぞれのダイアログボックスで必要な情報を入力し、[次へ]をクリックしてください。
- 6 Backup Exec のインストールの概要を確認し、[インストール]をクリックします。
追加オプションのインストール中、Backup Exec サービスは停止します。ジョブが実行中の場合は、ジョブを停止するか、ジョブの完了を待機するかを選択を要求されます。
インストールの完了後、サービスが再起動されます。
- 7 [完了]をクリックします。

インストールログについて

Backup Exec またはパッチをインストールすると、Bkupinst.htm というインストールログファイルが作成されます。このログファイルは、インストールに関する問題のトラブルシューティングに役立ちます。ログファイルには、最も一般的なエラーの TechNote へのリンクが含まれます。また、Remote Agent for Windows Systems をインストールすると、RAWSinst.htm と呼ばれるログファイルも作成されます。

また、ログファイル内の文字列は、警告とエラーを識別できるように、次の色で表示されます。

表 2-15 インストールログの文字の色

色	意味
黒	通常動作
オレンジ	警告メッセージ
赤	エラーメッセージ

ほとんどの Windows バージョンで、Bkupinst.htm は次のディレクトリに保存されています。

```
%allusersprofile%\Application Data\Symantec\Backup Exec\Logs
```

Application Data フォルダは隠しフォルダです。Application Data フォルダが表示されない場合、Microsoft Windows のマニュアルを参照して隠しフォルダを表示してください。

Backup Exec の修復

ローカルメディアサーバー上の Backup Exec ファイルあるいはレジストリキーが消失または破損した場合には、[修復]オプションを実行します。このプログラムは、すべての Backup Exec サービスを一度中止して、破損したファイルとレジストリキーを再インストールし、テープデバイス (スタンドアロンドライブおよびライブラリ) を再インストールして、サービスを再起動します。データベースは再インストールされません。

Backup Exec プログラムファイルとレジストリキーに対する変更は、元の設定にリセットされます。

Backup Exec を修復する方法

- 1 Backup Exec アプリケーションを閉じます。
- 2 Windows の[コントロールパネル]から、[プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。
- 3 [プログラムの追加と削除]ダイアログボックスで[Symantec Backup Exec]を選択し、[変更]をクリックします。
- 4 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- 5 [ローカルインストール]と[修復]を選択して、[次へ]をクリックします。
[リモートインストール]オプションが選択されていないことを確認してください。
- 6 [インストール]をクリックします。

- 7 Backup Exec サービスアカウントのクレデンシヤルを入力するように表示されたら正しいクレデンシヤルを入力してください。
- 8 [完了]をクリックします。

Backup Exec サービスの起動および停止

Backup Exec サービスを起動、停止、再起動できます。

Backup Exec サービスを起動または停止する方法

- 1 ツールメニューの[Backup Exec Services Manager]をクリックします。
- 2 必要なオプションを選択します。

p.158 の「[Backup Exec Services Manager]オプション」を参照してください。

[Backup Exec Services Manager]オプション

Backup Exec サービスを起動、停止、再起動できます。

p.158 の「Backup Exec サービスの起動および停止」を参照してください。

表 2-16 [Backup Exec Services Manager]オプション

項目	説明
サーバー	開始するか、停止するか、またはサービスを再起動するサーバーの名前を示します。サーバーの名前を入力するか、またはサーバーのリストをインポートできます。
追加	開始するか、停止するか、またはサービスを再起動するサーバーの名前を追加できます。
リストをインポート	開始するか、停止するか、またはサービスを再起動するサーバーのリストをインポートできます。
すべてのサービスを起動	選択したサーバーのすべての Backup Exec サービスを開始します。
すべてのサービスを停止	選択したサーバーのすべての Backup Exec サービスを停止します。
すべてのサービスを再起動	選択したサーバーのすべての Backup Exec サービスを停止した後で再起動します。
サービスクレデンシヤル	サービスアカウント情報を変更するか、または起動オプションを変更します。
更新	このダイアログボックスを更新します。
サーバーを削除	選択したサーバーをサーバーリストから削除します。

Backup Exec のアンインストール

コンピュータから Backup Exec を削除するには、Microsoft Windows の [プログラムの追加と削除] オプションを使用します。[プログラムの追加と削除] について詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。

Backup Exec をアンインストールすると、Symantec テープクラスドライバも削除されます。Backup Exec の再インストール後に Symantec テープクラスドライバを使用する場合には、再インストールする必要があります。

メモ: SAN Shared Storage Option を使用する場合は、プライマリサーバーからアンインストールする前に、セカンダリサーバーから Backup Exec をアンインストールする必要があります。

Backup Exec をアンインストールする方法

- 1 Backup Exec を終了します。
- 2 Windows の [コントロール パネル] から、[プログラムの追加と削除] を選択します。
- 3 [プログラムの追加と削除] ダイアログボックスで [Symantec Backup Exec] を選択し、[削除] をクリックします。
- 4 コンピュータからの Backup Exec のアンインストールを確認するメッセージが表示されたら、[はい] をクリックします。
- 5 Backup Exec に関連付けられているすべてのファイルを削除する場合は、[はい、Backup Exec と関連ファイルのすべてをシステムから削除します。] をクリックします。
- 6 [次へ] をクリックします。
アンインストールプログラムの実行に失敗した場合には、[インストールログファイルを表示する] をクリックして詳細情報を表示します。
- 7 メッセージが表示されたら、コンピュータを再起動します。

ローカルメディアサーバーからの Backup Exec オプションのアンインストール

インストールウィザードによって、ローカルメディアサーバーから Backup Exec オプションが削除されます。すべての関連ファイル、レジストリキーおよび設定が削除されます。

ローカルメディアサーバーから Backup Exec オプションをアンインストールする方法

- 1 ツールメニューの [このメディアサーバーにオプションとライセンスキーをインストール] をクリックします。
- 2 [ようこそ] の画面で [次へ] をクリックします。

- 3 [ローカルインストール]の下で、[追加オプション]をクリックします。
- 4 [次へ]をクリックします。
- 5 [ライセンスキー]パネルでアンインストールするオプションのライセンスキーを選択し、[削除]をクリックします。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 [設定オプション]パネルで、削除するオプションにチェックマークが付いていないことを確認し、[次へ]をクリックします。
- 8 インストールの概略を確認してから[インストール]をクリックし、処理を開始します。
- 9 インストールウィザードの完了後、[完了]をクリックします。

LiveUpdate を使用した Backup Exec の更新について

Backup Exec の更新、アップグレードおよび新しいバージョンの提供を行う Symantec LiveUpdate は、Backup Exec のインストール時に自動的にインストールされます。自動更新オプションを有効にすると、指定した間隔でメインの Symantec Web サーバーをチェックするように LiveUpdate を設定できます。自動更新オプションでは、Backup Exec の更新だけが検索されます。LiveUpdate を使用する他の Symantec 製品の更新は表示されません。同様に、他の Symantec 製品を自動的に更新するように LiveUpdate がスケジュールされている場合は、Backup Exec の更新の検索は行われません。

メモ: デフォルトでは、毎週日曜日の午後 10 時に LiveUpdate によって更新がチェックされます。更新があると、LiveUpdate によってアラートが通知されます。

LiveUpdate は、スケジュールを設定するだけでなく、いつでも手動で実行することができます。LiveUpdate は、Backup Exec のいくつかの場所からアクセスできます。ただし、Windows のスタートメニューからアクセスすることはできません。

注意: Backup Exec のインストール時およびアップグレード時に、SQL Server サービスが何度か停止および起動されます。ユーザーが作成した他のデータベースのうち SQL Server インスタンスを使用するものは、インストール時およびアップグレード時には利用できません。このような競合を避けるため、Backup Exec は独立した SQL インスタンスにインストールする必要があります。

Backup Exec をインストールすると、最新バージョンの LiveUpdate がインストールされます。コンピュータで以前のバージョンの LiveUpdate が検出された場合はアップグレードされます。

メディアサーバーにインストールされている Hotfix または Service Pack を表示できます。

p.164 の「インストールされている更新の表示」を参照してください。

LiveUpdate によって、Backup Exec メディアサーバーに更新がインストールされます。その後、それらの更新を Backup Exec Remote Agent にプッシュインストールしたり、手動でコピーすることができます。

LiveUpdate によって何らかのファイルがインストールされた場合、Bkupinst.htm インストールログファイルが、それらのファイルに関する情報で更新されます。

LiveUpdate では LiveUpdate 管理ユーティリティを使用できます。管理者は、LiveUpdate 管理ユーティリティを使用して、ネットワークユーザーがインターネットを介して Symantec LiveUpdate サーバーにアクセスするのではなく、内部サーバーからプログラムおよびウイルス定義の更新をダウンロードできるように LiveUpdate を変更できます。

ftp://ftp.symantec.com/public/english_us_canada/liveupdate/luadmin.pdf に移動します

p.161 の「[LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定について](#)」を参照してください。

p.163 の「[LiveUpdate の手動実行](#)」を参照してください。

p.156 の「[インストールログについて](#)」を参照してください。

LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定について

LiveUpdate が更新をチェックするスケジュールを次のように設定できます。

- 特定の日の特定の時刻に 1 回
- 毎日の特定の時刻
- 毎週特定の曜日の特定の時刻
- 毎月特定の日の特定の時刻

Backup Exec で自動更新のスケジュールを設定した場合、その設定は Backup Exec の更新のみに適用されます。Backup Exec に対する LiveUpdate のスケジュールに行った変更は、LiveUpdate を使用するその他のソフトウェアアプリケーションのスケジュールには影響を与えません。

スケジュールが設定された時刻になると、LiveUpdate は、適切な Web サイトに自動的に接続してファイルの更新が必要かどうかを判断します。選択したオプションに応じて、ファイルをダウンロードして適切な場所にインストールするか、または更新が利用可能であることを通知するアラートを送信します。

送信される LiveUpdate アラートは次のとおりです。

表 2-17 LiveUpdate アラート

アラート	送信されるタイミング
LiveUpdate 情報アラート	更新が正常にインストールされた場合。

アラート	送信されるタイミング
LiveUpdate 警告アラート	更新が正常にインストールされた場合。ただし、コンピュータを再起動する必要があります。
LiveUpdate エラーアラート	更新のインストールが失敗した場合。

p.162 の「[LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定](#)」を参照してください。

LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定

LiveUpdate が Backup Exec の更新をチェックするスケジュールを設定できます。

p.161 の「[LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定について](#)」を参照してください。

LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュールを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[LiveUpdate]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。

p.162 の「[LiveUpdate のためのデフォルトオプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

LiveUpdate のためのデフォルトオプション

LiveUpdate が Backup Exec の更新をチェックするスケジュールを設定できます。

p.162 の「[LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定](#)」を参照してください。

表 2-18 LiveUpdate のためのデフォルトオプション

項目	説明
定時自動更新を有効にする	自動更新をスケジュールし、次に更新の頻度を選ぶことを可能にします。
利用可能なすべての更新を自動的にダウンロードおよびインストールする	利用可能であるすべての更新を、最初にプロンプトを表示しないで Backup Exec がダウンロードし、インストールすることを可能にします。

項目	説明
利用可能な更新を通知するのみで Backup Exec アラートによって通知される (インストールおよびダウンロードは実行しない)	更新が利用可能なとき Backup Exec がアラート通知することを可能にします。更新のダウンロードまたはインストールは実行されません。このオプションはデフォルトです。 このオプションを選択した場合、利用可能な更新をダウンロードおよびインストールするには、LiveUpdate を手動で実行する必要があります。
1 回のみ	[実行日]および[時刻]フィールドで指定した日時にのみ Backup Exec が新しい更新をチェックできるようにします。
毎日	新しい更新があるかどうかを Backup Exec が毎日調べることを可能にします。[時刻]フィールドに、新しい更新をチェックする時刻を入力します。
毎週	新しい更新があるかどうかを Backup Exec が週に 1 回調べることを可能にします。[間隔]フィールドで、更新をチェックする曜日を選択します。[時刻]フィールドに、新しい更新をチェックする時刻を入力します。
毎月	新しい更新があるかどうかを Backup Exec が月に 1 回調べることを可能にします。[間隔]フィールドで、更新をチェックする日付を選択します。[時刻]フィールドに、新しい更新をチェックする時刻を入力します。
間隔	Backup Exec で新しい更新があるかどうかを調べる日時を設定できます。

LiveUpdate の手動実行

LiveUpdate は、更新をチェックするスケジュールを設定するか、またはいつでも手動で実行して更新をチェックできます。LiveUpdate は、対話モードまたは高速モードのいずれかで実行するように設定できます。対話モードでは、インストールする更新を柔軟に選択できます。高速モードでは、Backup Exec の更新すべてが自動的にインストールされます。LiveUpdate のモードの変更について詳しくは LiveUpdate のマニュアルを参照してください。

メモ: デフォルトでは、LiveUpdate は対話モードに設定されます。高速モードに変更した場合は、変更を有効にするために、LiveUpdate セッションをいったん中止して再起動する必要があります。

LiveUpdate を手動で実行する方法

- 1 ツールメニューの[LiveUpdate]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

LiveUpdate が高速モードに設定されている場合 [開始]をクリックします。

LiveUpdate が対話モードに設定されている場合 [次へ]をクリックします。

インストールされている更新の表示

メディアサーバーにインストールされている **Hotfix** および **Service Pack** を表示することができます。管理者権限でログオンしている必要があります。

Hotfix が **Service Pack** より前にインストールされている場合、**Hotfix** は **Service Pack** に含まれているためインストールされているとは表示されません。

Service Pack がリリースされた後に提供された **Hotfix** は、その前の **Service Pack** とともに表示されます。

インストールされている更新を表示する方法

- 1 ヘルプメニューの[バージョン情報]をクリックします。
- 2 [インストール済みの更新]をクリックします。

ライセンス情報の表示

メディアサーバー上の **Backup Exec** オプションについて、ライセンスとインストールの情報を表示できます。評価が可能なエージェントおよびオプションのリストを、それぞれの評価期間の残日数とともに表示することもできます。

p.166 の「[ライセンスの追加](#)」を参照してください。

ライセンス情報を表示する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。

ヘルプメニューからライセンス情報
を表示する

次に示す順序で操作を実行します。

- ヘルプメニューの[バージョン情報]をクリックします。
- [ライセンス情報]をクリックします。

メディアサーバーのプロパティから次に示す順序で操作を実行します。
 ライセンス情報を表示する

- ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- メディアサーバーをツリービューで選択します。
- タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックして、[ライセンス情報]をクリックします。

p.165 の「[\[ライセンス情報\]オプション](#)」を参照してください。

[ライセンス情報]オプション

メディアサーバー上の Backup Exec オプションについて、ライセンスとインストールの情報を表示できます。

p.164 の「[ライセンス情報の表示](#)」を参照してください。

表 2-19 [ライセンス情報]オプション

項目	説明
オプション	利用可能な Backup Exec オプションの名前をリストします。
ライセンス済み	メディアサーバー上でこのオプションのライセンスが設定済みの場合は[はい]が表示されます。ライセンスが設定されていない場合は[いいえ]が表示されます。
インストール済み	メディアサーバー上でこのオプションがインストール済みの場合は[はい]が表示されます。インストールされていない場合は[いいえ]が表示されます。 オプションがインストールされている場合は、追加の設定が必要となる場合があります。
評価	次の状態を表示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 利用可能 ■ 期限切れ ■ N/A オプションが評価期間内であれば、評価期間の残りの日数が表示されます。
保守	オプションの保守契約があるかどうかを示します。

ライセンスの追加

ライセンスを追加することで、追加のエージェントやオプションをいつでも有効化できます。エージェントまたはオプションの評価期間の期限が切れた場合、引き続き使用するにはライセンスキーを入力する必要があります。

ライセンスキーを入手する方法について詳しくは、ご購入先にお問い合わせいただくか、または次の URL に移動します。

<https://licensing.symantec.com>

ライセンスの追加方法

- 1 ツールメニューの[このメディアサーバーにオプションとライセンスキーをインストール]をクリックします。
- 2 [次へ]をクリックします。
- 3 [ローカルインストール]と[追加オプション]が選択されていることを確認し、[次へ]をクリックします。
- 4 次のいずれかの方法を選択して、ライセンスキーを入力します。

ライセンスキーを手動で入力する 次を示す順序で操作を実行します。

- [ライセンスキー]フィールドにライセンスキーを入力します。
- [追加]をクリックします。
- インストールするオプションまたはエージェントごとに、各ライセンスキーについてこの手順を繰り返します。

ライセンスキーをファイルからインポートする 次を示す順序で操作を実行します。

- [ファイルからのインポート]をクリックします。
- `besernum.xml` ファイルを選択します。

- 5 [次へ]をクリックします。
- 6 インストールする追加オプションが選択されていることを確認して、[次へ]をクリックします。
- 7 ダイアログボックスが表示されたら、インストールする追加オプションの設定を入力するか選択します。それぞれのダイアログボックスで必要な情報を入力し、[次へ]をクリックしてください。

- 8 Backup Exec のインストールの概要を確認し、[インストール]をクリックします。

エージェントまたはオプションのインストール中、Backup Exec サービスは停止しません。ジョブが実行中の場合は、ジョブを停止するか、ジョブの完了を待機するかを選択を要求されます。

インストールの完了後、サービスが再起動されます。
- 9 [完了]をクリックします。

環境内にインストールされているライセンスの検出

License Assessment Tool を使用すると、次がインストールされているコンピュータでライセンスキースキャンを実行できます：

- Backup Exec 2010
- Backup Exec System Recovery

これらの製品はいずれも Backup Exec のインストールです。

ライセンスキースキャンを実行する Backup Exec の各インストールで、License Assessment Tool はバックアップされるリソースを確認します。リソースは Windows 共有のようなファイル、または Microsoft SQL Server のようなアプリケーションデータベースです。レポートはインストールされているライセンスキーの数とバックアップされるリソースの数を比較します。

メモ: 期間と日付範囲のスキャンは、Backup Exec Archiving Option に適用されません。期間か日付範囲を選択した場合、Remote Agent によってバックアップされるリソースのみがスキャンされます。

License Assessment Tool のレポートは次の情報を提供します。

- Backup Exec のインストールに推奨される追加のライセンスの数。
- アップグレードを購入することを考慮できるようにインストールされている Backup Exec のバージョン。

License Assessment Tool を実行しても、使用許諾契約に準拠していることは保証されません。ライセンスについて詳しくは、ご購入先にお問い合わせいただくか、または次の URL を参照してください。

<https://licensing.symantec.com>

環境内にインストールされているライセンスの検出方法

- 1 ツールメニューの [Backup Exec License Assessment Tool] をクリックします。
- 2 画面の案内に従って作業を進めます。

以前のバージョンの Backup Exec のアップグレードについて

Backup Exec のバージョン 11d 以降から現在のバージョンにアップグレードするために Backup Exec のインストールメディアを使うことができます。別のアップグレードユーティリティは必要ありません。現在のバージョンの Backup Exec をインストールすると、以前のバージョンと置き換えられます。同一のコンピュータに、異なるバージョンをインストールすることはできません。削除しない場合、Backup Exec の以前のバージョンからのほとんどの設定とすべてのカタログおよびデータディレクトリは保持されます。

Backup Exec の現在のバージョンを実行する Backup Exec Remote Administration Console は、Backup Exec のバージョン 11d 以降がインストールされるメディアサーバーを管理できます。ただし、メディアサーバーで Backup Exec の以前のバージョンを使う場合、現在のバージョンの新しい機能を使うことができません。現在のバージョンの機能を使いたい場合には、Remote Administration Console とメディアサーバーの両方で現在のバージョンを使わなければなりません。Backup Exec の以前のバージョンを使う Remote Administration Console は、現在のバージョンがインストールされるメディアサーバーとともに使うことができません。

Backup Exec をアップグレードする前に、次の事項を実行しておく必要があります。

- アップグレードの時間を短縮するには、不要になったジョブ履歴およびカタログを削除します。
- データベース保守のジョブを実行します。
- SP3 が適用された SQL Server 2005 または SQL Server 2008 に SQL Server 2000 の既存のインスタンスをアップグレードします。

インストール時はメディアサーバーの設定を変更できません。たとえば、集中管理サーバーを管理対象メディアサーバーに変更できません。メディアサーバーの設定を変更したい場合には、現在のバージョンへのアップグレード前またはアップグレード後に行います。アップグレードの処理中は、データベースの場所を変更できません。アップグレード後にデータベースの場所を変更する場合は、BEUtility を使用します。

リモートコンピュータにインストールされているオプションをアップグレードする場合は、再インストールが必要です。プッシュインストールされたオプションは再インストールするまでアップグレードされません。Remote Agent for Windows Systems と AOFO (Advanced Open File Option) はプッシュインストールされます。

インストール後のタスク

最良の結果を得るために、Backup Exec を起動する前にチェックしておく必要のある項目を次に示します。

- ストレージデバイスの接続および設定が正しいことを確認します。

p.425 の「ストレージデバイスについて」を参照してください。

- バックアップ先がテープデバイスかディスクデバイスかを決定します。Backup Exec 環境の準備時に、両方のデバイスを設定できます。

次の点に注意してください。

- テープデバイスにバックアップする場合は、そのデバイスがサポートされているかどうかを確認します。Backup Exec 環境の設定時に、使用するデバイスに対応したドライバをインストールすることができます。

- [ディスクへのバックアップフォルダ]機能を使用してディスクデバイスにバックアップする場合は、バックアップフォルダの作成場所を決定しておきます。[ディスクへのバックアップフォルダ]を作成するデバイスとして、バックアップジョブによるバックアップの対象に含まれていないデバイスで、バックアップジョブの格納に必要な空き領域のあるデバイスを選択します。

p.482 の「ディスクへのバックアップフォルダについて」を参照してください。

- Backup Exec でのメディアの上書き禁止の方法を理解している必要があります。p.206 の「メディアの上書き禁止について」を参照してください。
- デフォルトメディアセットとその無期限の上書き禁止期間を理解している必要があります。p.203 の「Backup Exec のメディアについて」を参照してください。
- 新規メディアセットの作成とその周期(毎週、毎月、毎四半期など)の設定方法を調べておきます。p.209 の「デフォルトのメディアセットについて」を参照してください。
- バックアップ選択項目を参照したり、バックアップ選択項目を選択するときに Backup Exec ログオンアカウントで使用するリソースクレデンシャルを決定します。既存の Backup Exec ログオンアカウントを使用することも新たに作成することもできます。p.175 の「Backup Exec ログオンアカウントの作成」を参照してください。
- すべてのレポートを HTML 形式または Adobe Portable Document Format (PDF) 形式のどちらで表示するかを決定します。デフォルト設定は HTML です。p.707 の「レポートのデフォルトオプションの設定」を参照してください。

Backup Exec の機能とオプションの設定

この章では以下の項目について説明しています。

- Backup Exec の設定について
- ログオンアカウントの設定について
- Backup Exec のデフォルト設定について
- ジョブの優先度について
- ジョブ用のデフォルトデバイスとメディアセットの変更
- [ユーザー設定]のデフォルトの設定
- 別のメディアサーバーへの構成設定のコピー
- ログオンアカウント情報のコピー
- 監査ログについて
- データベースの保守について
- Backup Exec データベースの場所の表示
- 項目の非表示
- 非表示項目の表示
- 項目の順序の変更
- 項目の情報のソート
- プロパティの表示

Backup Exec の設定について

インストール時および初回の使用前に、デフォルトのログオンアカウント、データベース情報、監査ログ設定など、Backup Exec の機能をいくつか設定します。Backup Exec を設定すると、ジョブを作成して実行する前に、Backup Exec を標準化することができます。

次の初期操作を実行することができます。

- ログオンアカウントを設定します。
p.172 の「[ログオンアカウントの設定について](#)」を参照してください。
- Backup Exec のデフォルトログオンアカウントを設定します。
p.173 の「[Backup Exec のデフォルトログオンアカウントについて](#)」を参照してください。
- Backup Exec の新しいシステムログオンアカウントを作成します。
p.177 の「[Backup Exec システムログオンアカウントについて](#)」を参照してください。
- 構成設定とログオン情報を別のメディアサーバーにコピーします。
p.186 の「[別のメディアサーバーへの構成設定のコピー](#)」を参照してください。
- 監査ログを設定します。
p.192 の「[監査ログについて](#)」を参照してください。
- データベースの保守を設定します。
p.196 の「[データベースの保守](#)」を参照してください。
- Backup Exec の項目を設定し、編成します。
p.199 の「[項目の非表示](#)」を参照してください。

ログオンアカウントの設定について

Backup Exec のログオンアカウントは Windows コンピュータなどのリソースにアクセスするために使うユーザーアカウントのクレデンシャルを格納します。Backup Exec ログオンアカウントを使用して、Backup Exec でユーザー名とパスワードを管理し、リソースを参照したりジョブを実行することができます。また、クレデンシャルが変更された場合、そのクレデンシャルを使用しているジョブにその変更を適用することができます。

Backup Exec は、Backup Exec ログオンアカウントを、ローカルやリモートのリソースを参照するために使用します。Backup Exec のログオンクレデンシャルがメディアサーバーとリモートリソース間で受け渡される場合、クレデンシャルは必ず暗号化されます。

Backup Exec ログオンアカウントは、共有、データベースなどのデバイスレベルで関連付けることができます。クレデンシャルを変更する必要がある場合は、Backup Exec ログオンアカウントを変更してください。そうすることにより、その Backup Exec ログオンアカウントを使用するジョブに変更が適用されます。

Backup Exec ログオンアカウントとユーザーアカウントとは同一のものではありません。Backup Exec ログオンアカウントを新規に作成すると、関連付けられた Windows アカウントは Backup Exec のデータベースに入力されますが、Windows 上に新規のユーザーを作成しません。ユーザーアカウントクレデンシャルが変更された場合、その新しい情報で Backup Exec ログオンアカウントを更新する必要があります。Backup Exec は、ユーザーアカウントとの関連を維持しません。

Backup Exec ログオンアカウントの表示、作成、削除、編集および置換を行うことができます。

Backup Exec のログオンアカウントには、次の種類があります。

表 3-1 ログオンアカウントの種類

ログオンアカウントの種類	説明
Backup Exec のデフォルトログオンアカウント	ローカルリソースおよびリモートリソースの参照、バックアップジョブ選択項目の指定、データのリストアに使用します。 p.173 の「 Backup Exec のデフォルトログオンアカウントについて 」を参照してください。
Backup Exec システムログオンアカウント	ほぼすべてのリソースへのアクセスに使用します。Backup Exec サービスクレデンシャルが含まれています。 p.177 の「 Backup Exec システムログオンアカウントについて 」を参照してください。
Backup Exec ログオンアカウント	Backup Exec ユーザー名およびパスワードの管理、ローカルリソースおよびリモートリソースの参照、ジョブの処理、クレデンシャルを使用しているジョブに対するそのクレデンシャルの変更の適用に使用します。 p.175 の「 Backup Exec ログオンアカウントの作成 」を参照してください。

p.175 の「[Backup Exec ログオンアカウントの作成](#)」を参照してください。

Backup Exec のデフォルトログオンアカウントについて

Backup Exec のデフォルトログオンアカウントを使用して、データの参照、選択またはリストアを行うことができます。Backup Exec の最初の起動時に、ログオンアカウントウィザードを使用して、Backup Exec のデフォルトログオンアカウントを指定する必要があります。既存のログオンアカウントを選択することも、新たに作成することもできます。

Backup Exec ログオンアカウントを複数作成することもできますが、Backup Exec の各ユーザーは、Backup Exec のデフォルトログオンアカウントを 1 つだけ使用することができます。

Backup Exec のデフォルトログオンアカウントでは、次の操作を行うことができます。

- リソースの参照:Backup Exec のデフォルトログオンアカウントを使用して、バックアップジョブの作成時にローカルとリモートのリソースを参照することができます。リソースを参照するには、ユーザーアカウントに関連付けられた Backup Exec のデフォルトログオンアカウントが必要です。Backup Exec ログオンアカウントは、Backup Exec へのログオンに使用したユーザー名と同じである必要はありません。

たとえば、ローカル administrator として、メディアサーバー MEDIASERVER にログオンしているとします。Backup Exec の起動時に、このローカル administrator の Backup Exec デフォルトログオンアカウントが存在していないため、このログオンアカウントを作成するように要求するプロンプトが表示されます。ここで、ローカルコンピュータへのクレデンシャルを持つ、ローカル administrator 用の Backup Exec ログオンアカウントを作成することができます。Backup Exec ログオンアカウントのプロパティは、次のように表示されます。

ユーザー名:MEDIASERVER¥Administrator

ログオンアカウント名:MEDIASERVER¥Administrator デフォルトログオンアカウント

所有者:MEDIASERVER¥Administrator

Backup Exec のデフォルトログオンアカウントを変更すると、Backup Exec の新しいデフォルトログオンアカウントを使用して、リソースをすぐに参照することができます。変更内容を有効にするためにシステムを再起動する必要はありません。

- バックアップの選択:バックアップの選択時に、別のログオンアカウントを指定することができます。デフォルトログオンアカウントに権限がない場合、[ログオンアカウントの選択]ダイアログボックスが表示され、ログオンアカウントを新規に作成したり、別のログオンアカウントを指定することができます。また、バックアップの選択時に、コンテキストメニューの[ログオンアカウントの変更]コマンドを使用して、Backup Exec ログオンアカウントを変更することもできます。

p.1220 の「SQL Server リソースに Backup Exec ログオンアカウントを使用する方法」を参照してください。

p.1087 の「Exchange メールボックスにアクセスするための必要条件」を参照してください。

- リストア:リストアジョブの作成時に、Backup Exec ログオンアカウントを指定することができます。リストアジョブの作成時に、[リストアジョブのプロパティ]の[リソースクレデンシャル]で Backup Exec ログオンアカウントを指定しない限り、デフォルトログオンアカウントが使用されます。

p.181 の「Backup Exec のデフォルトログオンアカウントの変更」を参照してください。

p.174 の「Backup Exec の所有者専用ログオンアカウントについて」を参照してください。

Backup Exec の所有者専用ログオンアカウントについて

Backup Exec のログオンアカウントは共用または所有者専用にできます。Backup Exec ログオンアカウントを作成するとき、ログオンアカウントを所有者専用アカウントとして指定できます。所有者専用ログオンアカウントを使うには、ログオンアカウントの所有者であるか、またはログオンアカウントのパスワードを知っている必要があります。ログオンアカウン

トを作成した人が所有者です。少数のユーザーにのみデータのバックアップまたはリストアを行う権限を付与すると、ログオンアカウントを所有者専用ログオンアカウントにすることができます。

ログオンアカウントを制限する主な理由は次の通りです。

- バックアップに利用可能なリソースへのアクセスの制限に役立てるため。
- リストアできるコンピュータの制限に役立てるため。

ジョブのリソースを選択するために所有者専用ログオンアカウントを使うと、ログオンアカウント情報は選択リストとともに保存されます。ジョブを編集することを試みるすべてのユーザーが所有者専用ログオンアカウントにパスワードを入力する必要があります。Backup Exec は所有者専用ログオンアカウントのパスワードが入力されたときのみそのジョブのための選択項目をロードします。

p.175 の「[Backup Exec ログオンアカウントの作成](#)」を参照してください。

p.178 の「[Backup Exec ログオンアカウントの編集](#)」を参照してください。

Backup Exec ログオンアカウントの作成

Backup Exec ログオンアカウントは、作成手順を対話式に進めるログオンアカウントウィザード、または[ログオンアカウントの管理]ダイアログボックスで作成することができます。Backup Exec ログオンアカウントの作成時に、Backup Exec ログオンアカウントのプロパティを入力することができます。ただし、Backup Exec は、Backup Exec ログオンアカウントの所有者を、Backup Exec の管理コンソールを開いているユーザーに割り当てるので、Backup Exec ログオンアカウントの所有者を後から変更することはできません。

p.178 の「[Backup Exec ログオンアカウントの編集](#)」を参照してください。

p.180 の「[Backup Exec ログオンアカウントの置換](#)」を参照してください。

p.181 の「[Backup Exec のデフォルトログオンアカウントの変更](#)」を参照してください。

Backup Exec ログオンアカウントを作成する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。

ログオンアカウントウィザードを使用して新規のログオンアカウントを作成する方法	ツールメニューの[ウィザード]>[ログオンアカウントウィザード]をクリックします。
--	---

ウィザードはセットアップ処理手順をご案内します。

ログオンアカウントを手動で新規作成する方
法

次に示す順序で操作を実行します。

- 1 ネットワークメニューの[ログオンアカウント]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックします。
- 3 必要なオプションを入力します。

p.176の「[\[ログオンクレデンシャルの追加\]オプション](#)」を参照してください。

[ログオンクレデンシャルの追加]オプション

Backup Exec ログオンアカウントを作成するとき Backup Exec ログオンアカウントのプロパティ情報を入力できます。

p.175の「[Backup Exec ログオンアカウントの作成](#)」を参照してください。

表 3-2 新規ログオンアカウントのオプション

項目	説明
ユーザー名	Backup Exec ログオンアカウントに使用する、完全修飾ユーザー名を示します。たとえば、DOMAIN¥Administrator などです。Backup Exec は、このユーザー名を使用してリソースへのアクセスを試みます。ユーザー名の大文字と小文字は区別されません。
パスワード	Windows アカウントのパスワードを示します。入力したパスワードは、セキュリティ保護のために暗号化されます。この Backup Exec ログオンアカウントにパスワードが不要の場合は、このフィールドを空白のままにしておくこともできます。
パスワードの確認入力	パスワードを検証します。[パスワード]フィールドに入力したパスワードと正確に一致する必要があります。
アカウント名	Backup Exec ログオンアカウントを識別するのに使用する、一意の名前を示します。フィールドに情報を入力しない場合は、ユーザー名が自動的に追加されます。
説明	Backup Exec のログオンアカウントがいかに使われるか示します。

項目	説明
所有者専用ログオンアカウント	この Backup Exec ログオンアカウントの使用を、ログオンアカウントの所有者とパスワードを知っているユーザーのみに限定します。このチェックボックスをオフにした場合、このログオンアカウントは共有アカウントになります。共有アカウントは、すべてのユーザーが使用できる共有アカウントです。 p.174の「Backup Exec の所有者専用ログオンアカウントについて」を参照してください。
デフォルトログオンアカウント	このアカウントを、ローカルリソースまたはリモートリソース上のデータの参照、選択またはリストアに使用する Backup Exec のデフォルトログオンアカウントにします。

Backup Exec システムログオンアカウントについて

Backup Exec のインストール時に、Backup Exec システムログオンアカウント (SLA) が作成されます。SLA 作成時のユーザー名とパスワードは、Backup Exec のインストール時に入力したサービスクレデンシャルを使用しています。SLA の所有者は Backup Exec をインストールしたユーザーで、デフォルトでは共有アカウントとして作成されます。共有アカウントは、すべてのユーザーが使用できる共有アカウントです。

SLA には Backup Exec システムログオンアカウントのクレデンシャルが含まれているため、SLA はほぼすべてのリソースにアクセスすることができます。Backup Exec のセキュリティを高めるために、SLA を所有者専用アカウントにすることができます。また、別のログオンアカウントをデフォルトに設定した後に削除することもできます。ただし、SLA を削除すると、SLA を使用するジョブが失敗することがあります。SLA を削除した場合は、[ログオンアカウントの管理]ダイアログボックスから SLA を作成しなおしてください。

SLA は、次のタスクとジョブで使用されます。

- 以前のバージョンの Backup Exec から移行したジョブ
- バックアップ複製ジョブ
- コマンドラインアプレット (bemcmd.exe)
- Backup Exec Agent for SAP Applications

p.181の「Backup Exec システムログオンアカウントの新規作成」を参照してください。

p.175の「Backup Exec ログオンアカウントの作成」を参照してください。

p.178の「Backup Exec ログオンアカウントの編集」を参照してください。

p.180の「Backup Exec ログオンアカウントの置換」を参照してください。

p.180の「Backup Exec ログオンアカウントの削除」を参照してください。

p.181の「Backup Exec のデフォルトログオンアカウントの変更」を参照してください。

p.186 の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

Backup Exec ログオンアカウントの編集

Backup Exec ログオンアカウントを編集すると、変更内容は、その Backup Exec ログオンアカウントを使用するリソースすべてに自動的に適用されます。Backup Exec ログオンアカウントの変更内容はただちに適用されます。変更内容を有効にするためにシステムを再起動する必要はありません。

Backup Exec ログオンアカウントでは、次のプロパティを編集することができます。

- 種類 (所有者専用または共用)
- アカウント名
- パスワード
- ユーザー名
- 説明

p.181 の「Backup Exec のデフォルトログオンアカウントの変更」を参照してください。

ログオンアカウントを編集する方法

- 1 ネットワークメニューの[ログオンアカウント]をクリックします。
- 2 編集する Backup Exec ログオンアカウントを選択し、[編集]をクリックします。

編集する Backup Exec ログオンアカウントが所有者専用で、かつ編集する Backup Exec ログオンアカウントの所有者と異なるユーザーで Backup Exec 管理コンソールを開いている場合は、ログオンアカウントを編集するためにパスワードを入力する必要があります。

- 3 必要に応じて Backup Exec ログオンアカウントのプロパティを変更します。

p.178 の「[ログオンクレデンシャルの編集]オプション」を参照してください。

- 4 [ログオンクレデンシャルの編集]ダイアログボックスで、[OK]をクリックします。

[ログオンクレデンシャルの編集]オプション

既存のログオンアカウントのプロパティを変更できます。

p.178 の「Backup Exec ログオンアカウントの編集」を参照してください。

表 3-3 [ログオンクレデンシャルの編集]オプション

項目	説明
ユーザー名	Backup Exec ログオンアカウントに使用する、完全修飾ユーザー名を示します。たとえば、DOMAIN¥Administrator などです。Backup Exec は、このユーザー名を使用してリソースへのアクセスを試みます。入力したユーザー名の太文字と小文字は区別されません。
パスワード変更	アカウントのためのパスワードを変更することを可能にします。入力したパスワードは、セキュリティ保護のために暗号化されます。
アカウント名	Backup Exec ログオンアカウントを識別するのに使用する、一意の名前を示します。フィールドに情報を入力しない場合は、ユーザー名が自動的に追加されます。
説明	Backup Exec のログオンアカウントがいかに使われるか示します。
所有者専用ログオンアカウント	この Backup Exec ログオンアカウントの使用を、ログオンアカウントの所有者とパスワードを知っているユーザーのみに限定します。このチェックボックスをオフにした場合、このログオンアカウントは共用アカウントになります。共用アカウントは、すべてのユーザーが使用できる共用アカウントです。 p.174 の「 Backup Exec の所有者専用ログオンアカウントについて 」を参照してください。
デフォルトログオンアカウント	このアカウントを、ローカルリソースまたはリモートリソース上のデータの参照、選択またはリストアに使用する Backup Exec のデフォルトログオンアカウントにします。

Backup Exec ログオンアカウントパスワードの変更

次の手順を実行して、Backup Exec ログオンアカウントパスワードを変更することができます。Backup Exec ログオンアカウントパスワードの変更内容はただちに適用されます。

p.172 の「[ログオンアカウントの設定について](#)」を参照してください。

Backup Exec ログオンアカウントパスワードを変更する方法

- 1 ネットワークメニューの[ログオンアカウント]をクリックします。
- 2 編集する Backup Exec ログオンアカウントを選択し、[編集]をクリックします。
編集する Backup Exec ログオンアカウントが所有者専用で、かつ編集する Backup Exec ログオンアカウントの所有者と異なるユーザーで Backup Exec 管理コンソールを開いている場合は、ログオンアカウントを編集するためにパスワードを入力する必要があります。
- 3 [パスワード変更]をクリックします。
- 4 [パスワード]フィールドに新しいパスワードを入力します。
- 5 [パスワードの確認入力]フィールドにパスワードを再入力して、[OK]をクリックします。
- 6 [ログオンクレデンシャルの編集]ダイアログボックスで、[OK]をクリックします。
- 7 [ログオンアカウントの管理]ダイアログボックスで、[OK]をクリックします。

Backup Exec ログオンアカウントの置換

既存のすべてのジョブおよび選択リストに対して、Backup Exec ログオンアカウントを置き換えることができます。Backup Exec ログオンアカウントを使用している既存のリソースと選択リストは、新規の Backup Exec ログオンアカウントを使用するように更新されます。新規の Backup Exec ログオンアカウントが所有者専用の場合、パスワードを指定する必要があります。

p.172 の「[ログオンアカウントの設定について](#)」を参照してください。

Backup Exec ログオンアカウントを置換する方法

- 1 ネットワークメニューの[ログオンアカウント]をクリックします。
- 2 置換する Backup Exec ログオンアカウントを選択し、[置換]をクリックします。
- 3 選択した Backup Exec ログオンアカウントと置換する Backup Exec ログオンアカウントを選択します。
編集する Backup Exec ログオンアカウントが所有者専用で、かつ編集する Backup Exec ログオンアカウントの所有者と異なるユーザーで Backup Exec 管理コンソールを開いている場合は、ログオンアカウントを編集するためにパスワードを入力する必要があります。
- 4 [OK]をクリックします。

Backup Exec ログオンアカウントの削除

次の場合は、Backup Exec ログオンアカウントを削除できません。

- ジョブによって参照されている。
- メディアサーバーにログオンしているユーザーが所有している。
- メディアサーバーにログオンしているユーザーの、Backup Exec のデフォルトログオンアカウントとして設定されている。

所有者およびデフォルトログオンアカウントとして設定しているすべてのユーザーがログオフしている場合は、Backup Exec ログオンアカウントを削除することができます。

p.172 の「[ログオンアカウントの設定について](#)」を参照してください。

Backup Exec ログオンアカウントを削除する方法

- 1 ネットワークメニューの[ログオンアカウント]をクリックします。
- 2 削除する Backup Exec ログオンアカウントを選択し、[削除]をクリックします。
- 3 削除するジョブを確認して[はい]をクリックします。

Backup Exec のデフォルトログオンアカウントの変更

データの参照、選択またはリストアに使用する Backup Exec のデフォルトログオンアカウントを変更することができます。

p.173 の「[Backup Exec のデフォルトログオンアカウントについて](#)」を参照してください。

Backup Exec のデフォルトログオンアカウントを変更する方法

- 1 ネットワークメニューの[ログオンアカウント]をクリックします。
- 2 デフォルトとして使用する Backup Exec ログオンアカウントを選択して、次のいずれかの手順を実行します。
 - [デフォルトに設定]をクリックします。
 - [編集]をクリックし、[デフォルトログオンアカウント]を選択して、[OK]をクリックします。

Backup Exec システムログオンアカウントの新規作成

Backup Exec システムログオンアカウントでは、いくつかの操作が有効になります。また、Backup Exec Agent for SAP Applications やコマンドラインアプレットにも使用されます。Backup Exec システムログオンアカウントを削除した場合は、特定の操作を実行したりエージェントやアプレットを使用するために、新しいシステムログオンアカウントを作成する必要があります。

p.177 の「[Backup Exec システムログオンアカウントについて](#)」を参照してください。

Backup Exec システムログオンアカウントを新規作成する方法

- 1 ネットワークメニューの[ログオンアカウント]をクリックします。
- 2 [システムアカウント]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックして、システムログオンアカウントを作成します。

p.178 の「[\[ログオンクレデンシャルの編集\]オプション](#)」を参照してください。

Backup Exec のデフォルト設定について

Backup Exec の初回の起動時には、デフォルトがすでに設定されています。現在の環境の要件を満たすようにデフォルトを調整することができます。デフォルト設定は、バックアップ、リストア、テスト実行などの各種ジョブで利用できます。カタログ、メディア管理、バーコードルールおよびデータベースの保守に対してデフォルトを設定することもできます。

最も重要なデフォルト設定は、バックアップジョブのデフォルト設定です。メディアローテーション戦略の作成およびメディアセットとドライブプールの作成後には、デフォルト設定の多くを変更できます。ただし、短期的には、インストール時に設定されたデフォルト設定のみでも、Backup Exec でのバックアップジョブおよびリストアジョブを安全に実行することができます。

デフォルトオプションについて詳しくは次のセクションを参照してください。

表 3-4 Backup Exec のデフォルトオプション

項目	説明
ジョブ	p.375 の「 バックアップオプションのデフォルト設定 」を参照してください。 p.627 の「 リストアジョブのデフォルト設定 」を参照してください。 p.371 の「 テスト実行のデフォルトオプションの設定 」を参照してください。 p.589 の「 カタログ登録ジョブのデフォルト設定 」を参照してください。 p.292 の「 各コンピュータまたはリソースに対する個別の選択リストの作成 」を参照してください。 p.291 の「 選択リストの優先度と有効時間帯の設定 」を参照してください。
Backup Exec のカスタマイズ	p.384 の「 プリコマンドとポストコマンドのデフォルト設定 」を参照してください。 p.388 の「 デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定 」を参照してください。
Backup Exec の設定	p.196 の「 データベースの保守 」を参照してください。
レポート	p.707 の「 レポートのデフォルトオプションの設定 」を参照してください。

項目	説明
Backup Exec の管理	<p>p.354 の「デフォルトスケジュールオプションの設定」を参照してください。</p> <p>p.806 の「Microsoft Cluster Server フェールオーバーでの「チェックポイントから再開」機能の使用」を参照してください。</p> <p>p.585 の「リカバリされたジョブに対するしきい値の設定」を参照してください。</p> <p>p.161 の「LiveUpdate を使用した自動更新のスケジュール設定について」を参照してください。</p>
デバイスおよびメディア	<p>p.184 の「[ユーザー設定]のデフォルトの設定」を参照してください。</p> <p>p.235 の「メディアの場所およびメディアポルト」を参照してください。</p> <p>p.229 の「混合メディアライブラリのバーコードルール」を参照してください。</p>
オプション	<p>p.912 の「バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定」を参照してください。</p> <p>p.930 の「AOFO (Advanced Open File Option) のデフォルトオプションの設定」を参照してください。</p> <p>p.1228 の「SQL Server のバックアップおよびリストアのデフォルト設定」を参照してください。</p> <p>p.1153 の「Exchange Server のディザスタリカバリを準備する方法」を参照してください。</p> <p>p.1053 の「Lotus Domino のデフォルト設定」を参照してください。</p> <p>p.1890 の「Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定」を参照してください。</p> <p>p.1183 の「SharePoint Portal Server 2003 および 2007 のデフォルトオプションの設定」を参照してください。</p>

ジョブの優先度について

Backup Exec ジョブのデバイスへのアクセスの優先度を設定できます。

次のレベルの優先度を選ぶことができます:

- 高
- 通常以上
- 通常
- 通常以下
- 低

このオプションは、環境内のデバイスが限られている場合に、特定のジョブがデバイスに優先的にアクセスできるようにするのに最も有用です。優先度が高い実行可能ジョブは、優先度が低い実行可能ジョブよりも前に実行されます。また、優先度が高い実行可能ジョブは、スケジュールされている開始時刻が早い実行可能ジョブよりも前に実行されます。

複数のジョブの実行が準備できていても、デバイスが利用可能になるまで待機する必要がある場合は、Backup Exec は最初に実行するジョブを判断します。この判断を行うために、Backup Exec はジョブの優先順位とスケジュールされた開始時刻を確認します。

ジョブ用のデフォルトデバイスとメディアセットの変更

作成する各ジョブに使うデフォルトデバイスとメディアセットを設定できます。各ジョブのためのデフォルトをそれぞれ変更できます。

ジョブ用のデフォルトデバイスとメディアセットを変更する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [オプション - アプリケーションのデフォルトを設定]ダイアログボックスの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 3 [デバイス]フィールドで、ジョブに関連するデフォルトデバイスとして使用するデバイスを選択します。
- 4 [メディアセット]フィールドで、ジョブに関連するデフォルトメディアセットとして使用するメディアセットを選択します。

[ユーザー設定]のデフォルトの設定

Backup Exec が各種画面、インジケータおよびアラートを表示する際の表示方法に対して、デフォルトを設定することができます。

[ユーザー設定]のオプションのデフォルトを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ユーザー設定]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.184 の「[デフォルトの\[ユーザー設定\]](#)」を参照してください。

デフォルトの[ユーザー設定]

Backup Exec が各種画面、インジケータおよびアラートを表示する際の表示方法に対して、デフォルトを設定することができます。

p.184 の「[\[ユーザー設定\]のデフォルトの設定](#)」を参照してください。

表 3-5 デフォルトの[ユーザー設定]

項目	説明
起動時にスプラッシュスクリーンを表示する	Backup Exec を開始するときスプラッシュスクリーンを表示します。このオプションの選択を解除すると、起動時に Backup Exec 管理コンソールが最初に表示されます。
Backup Exec サービスの起動時にロボットライブラリをインベントリジョブに含める	Backup Exec サービスの起動時に、ロボットライブラリ内のすべてのスロットのインベントリを実行できます。システムに接続されているストレージデバイスの数により、数分かかることがあります。
バックアップジョブ作成前にジョブプロパティの概略を表示する	ジョブをジョブキューにサブミットする前に、選択したジョブオプションの概略を表示できます。
新規ポリシーの作成後にジョブを作成する	ポリシーの作成後に、[ポリシージョブの作成または削除]ダイアログボックスを自動的に表示できます。[ポリシージョブの作成または削除]ダイアログボックスを使用すると、ポリシーと選択リストを関連付けることによってジョブを作成することができます。
バックアップジョブの完了パーセンテージと残り時間を表示する(あらかじめデバイスをスキャンするために余計な時間がかかります)	バックアップジョブの実行中に完了した処理のパーセンテージとインジケータを表示します。これらのインジケータは[ジョブのアクティビティ]タブに表示され、実行中のジョブの進行状況を監視することができます。このオプションを選択した場合は、ターゲットリソースのスキャンを行うため、バックアップに要する時間が長くなります。 ターゲットリソースのスキャンに時間を要するため、リモートリソースをバックアップする場合には、このオプションの選択を避けてください。
パーセンテージバーを有効にする(利用可能な場合)	実行中のジョブの[完了パーセンテージ]列に、グレー表示の完了パーセンテージバーを表示します。完了パーセンテージバーは、完了した処理のパーセンテージとともに表示されます。 コンピュータの色が256色以下に設定されている場合、このオプションは利用不可として表示されることがあります。
画面のヒントを有効にする	管理コンソールで選択中の項目の概要を示す画面のヒントの表示と非表示を切り替えます。画面のヒントを表示するように設定すると、項目にマウスポインタを重ねることによって画面のヒントを表示できます。画面のヒントは選択中の項目に対してのみ表示することができます。
新規アラートを自動表示する	送信されたアラートを自動的にデスクトップに表示します。応答が必要なアラートは、常に Backup Exec のコンソールに表示されます。 このオプションを選択しない場合は、[アラート]ビューを使用してアラートを表示する必要があります。

項目	説明
アラートの受信後に警告音を鳴らす	アラートが発生したときに警告音を発します。アラートについての情報は、[アラート]ビューに表示されます。
Backup Exec ビューの行を交互に網掛けにする	[ジョブモニター]の現在のジョブリストやジョブ履歴リストなど、各種リストで1行ごとに強調表示するかどうかを切り替えます。強調表示すると、長いリストが見やすくなります。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 コンピュータの色が256色以下に設定されている場合、このオプションは利用不可として表示されることがあります。
網掛けのコントラスト設定	[Backup Exec ビューの行を交互に網掛けにする]オプションを選択した場合は、行の網掛けの濃度を設定します。
Backup Exec サポート契約の更新を事前通知する Backup Exec アラートをこの日に送信する	サポート契約の更新の事前通知を受信する日付を選択できます。

別のメディアサーバーへの構成設定のコピー

メディアサーバーの構成設定およびログオン情報を、あるメディアサーバーから別のメディアサーバーにコピーすることができます。このコピー機能を使用して、同じ構成設定またはログオン設定を持つメディアサーバーのグループを簡単に設定することができます。

p.191の「[ログオンアカウント情報のコピー](#)」を参照してください。

構成設定およびログオン情報を他のメディアサーバーにコピーするには、サーバー設定のコピー機能がインストールされている必要があります。

p.123の「[リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO \(Advanced Open File Option\) のプッシュインストール](#)」を参照してください。

別のメディアサーバーへの構成設定をコピーする方法

- 1 ツールメニューの[メディアサーバーへ設定をコピー]をクリックします。
- 2 コピー対象の設定を選択します。
p.190の「[\[設定のコピー\]オプション](#)」を参照してください。
- 3 次のいずれかを実行します。

設定のコピー先メディアサーバーが[宛先メディアサーバーの名前を選択します。メディアサーバー]リストに表示される場合

設定のコピー先メディアサーバーが[宛先メディアサーバー]リストに表示されない場合

次のいずれかを実行します。

- リストにメディアサーバーを追加するために[追加]をクリックします。メディアサーバーを追加した後、宛先としてそれを選択できます。
p.189の「CASO 環境での[サーバーの追加]オプション」を参照してください。
- p.188の「CASO 以外の環境での[サーバーの追加]オプション」を参照してください。
- リストからの複数のメディアサーバーを追加するために[リストをインポート]をクリックします。リストを追加した後、宛先としてリストのメディアサーバーを選択できます。

4 [OK]をクリックします。

リストのインポートによる複数の宛先メディアサーバーの追加

1 つのメディアサーバーからの別のメディアサーバーに一部の設定をコピーできます。[設定のコピー]ダイアログボックスの[宛先メディアサーバー]リストに設定のコピー先メディアサーバーが表示されなければ、リストのインポートによってそれを追加できます。[宛先メディアサーバー]リストにメディアサーバーを追加した後、宛先としてそれを選択できます。

p.186の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

リストのインポートによって複数の宛先メディアサーバーを追加する方法

- 1 ツールメニューの[メディアサーバーへ設定をコピー]をクリックします。
- 2 [設定のコピー]ダイアログボックスで、[リストをインポート]をクリックします。
- 3 リストを参照して選択し、[開く]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

CASO 以外の環境での宛先メディアサーバーの追加

1 つのメディアサーバーからの別のメディアサーバーに一部の設定をコピーできます。[設定のコピー]ダイアログボックスの[宛先メディアサーバー]リストに設定のコピー先メディアサーバーが表示されなければ、それを追加できます。[宛先メディアサーバー]リストにメディアサーバーを追加した後、宛先としてそれを選択できます。

p.186の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

CASO 以外の環境で宛先メディアサーバーを追加する方法

- 1 ツールメニューの[メディアサーバーへ設定をコピー]をクリックします。
- 2 [追加]をクリックします。
- 3 メディアサーバーの名前を入力します。
- 4 必要に応じて、[ログオンアカウントの変更]をクリックし、適切なログオンアカウントを選択または入力します。

p.172 の「ログオンアカウントの設定について」を参照してください。

ログオンアカウントを変更すると、選択された各メディアサーバーのログオンアカウントが一時的に変更されます。

- 5 [OK]をクリックします。

CASO 以外の環境での[サーバーの追加]オプション

設定のコピー先メディアサーバーを追加するのに[サーバーの追加]オプションのダイアログボックスを使うことができます。

p.186 の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

p.188 の「CASO 環境での宛先メディアサーバーの追加」を参照してください。

表 3-6 CASO 以外の環境での[サーバーの追加]オプション

項目	説明
メディアサーバー名	[設定のコピー]ダイアログボックスの[宛先メディアサーバー]リストに追加するメディアサーバーの名前を示します。
メディアサーバーへの接続時に使用するログオンアカウント	選択したメディアサーバーにアクセスするのに使われているログオンアカウントの名前を示します。
ログオンアカウントの変更	選択したメディアサーバーにアクセスするのに Backup Exec が使うログオンアカウントを変更できます。

CASO 環境での宛先メディアサーバーの追加

1 つのメディアサーバーからの別のメディアサーバーに一部の設定をコピーできます。[設定のコピー]ダイアログボックスの[宛先メディアサーバー]リストに設定のコピー先メディアサーバーが表示されなければ、それを追加できます。[宛先メディアサーバー]リストにメディアサーバーを追加した後、宛先としてそれを選択できます。

p.186 の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

CASO 環境で宛先メディアサーバーを追加する方法

- 1 ツールメニューの[メディアサーバーへ設定をコピー]をクリックします。
- 2 [追加]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.189の「CASO 環境での[サーバーの追加]オプション」を参照してください。
- 4 必要に応じて、[ログオンアカウントの変更]をクリックし、コピー操作を完了するために使用する適切なログオンアカウントを選択または入力します。
p.172の「ログオンアカウントの設定について」を参照してください。
コピー操作のためにログオンアカウントクレデンシャルを変更してもログオンアカウントは永続的には変更されません。
- 5 [OK]をクリックします。

CASO 環境での[サーバーの追加]オプション

設定のコピー先メディアサーバーを追加するのに[サーバーの追加]オプションのダイアログボックスを使うことができます。

p.186の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

p.188の「CASO 環境での宛先メディアサーバーの追加」を参照してください。

表 3-7 CASO 環境での[サーバーの追加]オプション

項目	説明
個々のメディアサーバーを追加する	[設定のコピー]ダイアログボックスの[宛先メディアサーバー]リストに追加する単一のメディアサーバーを選択できます。メディアサーバーの名前を追加した後、それに設定をコピーできます。
メディアサーバー名	[設定のコピー]ダイアログボックスの[宛先メディアサーバー]リストに追加するメディアサーバーの名前を示します。
すべての管理対象メディアサーバーを追加する	[設定のコピー]ダイアログボックスの[宛先メディアサーバー]リストに環境の管理対象メディアサーバーすべてを追加できます。このオプションはあらゆる管理対象メディアサーバーに設定をコピーすることを可能にします。
メディアサーバーへの接続時に使用するログオンアカウント	選択したメディアサーバーにアクセスするのに使われているログオンアカウントの名前を示します。

項目	説明
ログオンアカウントの変更	選択したメディアサーバーにアクセスするのに Backup Exec が使うログオンアカウントを変更できます。

[設定のコピー]オプション

[設定のコピー]ダイアログボックスで、別のメディアサーバーにコピーする設定の種類を選択できます。

p.186 の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

表 3-8 [設定のコピー]オプション

項目	説明
デフォルトのジョブオプション	このメディアサーバーからの別のメディアサーバーにデフォルトのジョブオプションをコピーできます。
デフォルトスケジュール	このメディアサーバーからの別のメディアサーバーにデフォルトのスケジュール設定をコピーできます。
エラー処理方法	このメディアサーバーからの別のメディアサーバーにエラー処理方法をコピーできます。
アラートの設定	このメディアサーバーからの別のメディアサーバーにアラートの設定をコピーできます。
追加	[宛先メディアサーバー]リストにメディアサーバーを追加できます。リストにメディアサーバーを追加した後、それに設定をコピーできます。
編集	選択したメディアサーバーに接続するのに使われるログオンアカウントを変更できます。
削除	[宛先メディアサーバー]リストから選択したメディアサーバーを削除できます。
リストをインポート	[宛先メディアサーバー]リストにメディアサーバーのリストをインポートできます。リストにメディアサーバーを追加した後、それらに設定をコピーできます。

ログオンアカウント情報のコピー

異なるメディアサーバーにログオンアカウント情報をコピーできます。

ログオンアカウント情報をコピーする方法

- 1 ネットワークメニューの[ログオンアカウント]をクリックします。
- 2 コピーするログオンアカウント情報を選択し、[サーバーへコピー]をクリックします。
- 3 [サーバー名]フィールドにログオンアカウント情報のコピー先のメディアサーバー名を入力し、[追加]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

[ログオンアカウントのコピー]オプション

異なるメディアサーバーにログオンアカウント情報をコピーできます。

p.191 の「[ログオンアカウント情報のコピー](#)」を参照してください。

表 3-9 [ログオンアカウントのコピー]オプション

項目	説明
サーバー名	ログオンアカウント情報のコピー先のメディアサーバー名を指定し、[追加]をクリックします。
追加	[サーバー名]フィールドからメディアサーバーのリストにメディアサーバーを追加します。
削除	リストからメディアサーバーを削除します。
リストをインポート	リストのメディアサーバーに追加するメディアサーバーのリストをインポートします。リストには、メディアサーバー名のみが、1行に1つずつ含まれている必要があります。
ログオンアカウント	リスト内のメディアサーバーへの接続時に使用するログオンアカウントを指定します。
このアカウントが宛先サーバーにすでに存在する場合は上書きする	同じ名前を持っている既存のジョブのログオンアカウントを上書きします。このオプションが表示されるのは、ジョブを別のメディアサーバーにコピーする場合のみです。

監査ログについて

監査ログを使用すると、Backup Exec の実行済みの操作に関する詳細を確認できます。監査ログには、アクティビティの実行日時、実行したユーザー、アクティビティの内容およびアクティビティの説明が表示されます。

発生した作業について、次のすべてまたはいずれかの情報を表示できます。

- アラート
- 監査ログ
- デバイスとメディア
- 暗号化キー
- エラー処理方法
- ジョブ
- ログオンアカウント
- ポリシーおよびジョブテンプレート
- 選択リスト
- サーバー設定

監査ログは、Backup Exec データベースの保守作業の一環として削除することができ、またファイルに保存することもできます。監査ログに行われた変更（データベースの保守作業の実行時など）も、監査ログに表示することができます。

p.192 の「[監査ログの設定](#)」を参照してください。

p.193 の「[監査ログの表示](#)」を参照してください。

p.195 の「[監査ログからのエントリの削除](#)」を参照してください。

p.195 の「[監査ログのファイルへの保存](#)」を参照してください。

監査ログの設定

監査ログを設定すると、Backup Exec で項目に対して実行された特定の処理についての情報を表示できます。

p.192 の「[監査ログについて](#)」を参照してください。

p.193 の「[監査ログの表示](#)」を参照してください。

監査ログを設定する方法

- 1 ツールメニューの[監査ログ]をクリックします。
- 2 [ログの設定]をクリックします。

- 3 [監査ログの設定]ダイアログボックスで、監査ログに表示するカテゴリのチェックボックスをオンにします。
 カテゴリの左側のプラス記号をクリックしてカテゴリを展開します。カテゴリに対して表示する処理を選択します。
 表示しない項目または処理については、チェックボックスをオフにします。
- 4 [OK]をクリックします。

監査ログの表示

監査ログを表示して、Backup Exec の変更がいつ行われたか、どのユーザーが変更を行ったかを確認することができます。

p.192 の「[監査ログの設定](#)」を参照してください。

監査ログを表示する方法

- 1 ツールメニューの[監査ログ]をクリックします。
- 2 [表示するカテゴリの選択]で、監査情報を表示するカテゴリを選択します。
 p.194 の「[\[監査ログ\]オプション](#)」を参照してください。
- 3 [監査ログ]ウィンドウの最下部にあるスクロールバーを使用してエントリ全体を表示するか、またはエントリをダブルクリックして同じ情報を読みやすい監査ログレコード形式で表示します。

[監査ログの記録]オプション

監査ログを表示して、Backup Exec の変更がいつ行われたか、どのユーザーが変更を行ったかを確認することができます。

p.192 の「[監査ログについて](#)」を参照してください。

表 3-10 [監査ログの記録]オプション

項目	説明
日時	Backup Exec でこの変更が行われた日時を示します。
ユーザー名	変更を行ったユーザーのドメインおよびユーザー名を示します。
カテゴリ	ログが属するカテゴリを示します。
メッセージ	実行した処理について、Backup Exec が記録した処理結果を示します。

[監査ログ]オプション

監査ログを表示して、Backup Exec の変更がいつ行われたか、どのユーザーが変更を行ったかを確認することができます。

p.193 の「[監査ログの表示](#)」を参照してください。

p.195 の「[監査ログからのエントリの削除](#)」を参照してください。

p.195 の「[監査ログのファイルへの保存](#)」を参照してください。

表 3-11 [監査ログ]オプション

項目	説明
表示するカテゴリの選択	監査ログを表示するカテゴリを選択することを可能にします。
日時	Backup Exec でこの変更が行われた日時を示します。列の見出しをクリックすると、情報を日付でソートすることができます。
ユーザー名	変更を行ったユーザーのドメインおよびユーザー名を示します。列の見出しをクリックすると、情報をアルファベット順にソートすることができます。
カテゴリ	ログが属するカテゴリを示します。列の見出しをクリックすると、情報をアルファベット順にソートすることができます。
メッセージ	実行した処理について、Backup Exec が記録した処理結果を示します。列の見出しをクリックすると、情報をアルファベット順にソートすることができます。
更新	新しいエントリで監査ログを更新します。
カテゴリログの消去	監査ログカテゴリからすべてのエントリを削除します。
ログをファイルに保存	監査ログエントリをどこに保存するか示します。テキスト(.txt)ファイルとして監査ログを保存できます。
プロパティ	選択されたエントリについて情報を提供します。
ログの設定	監査ログに含めるカテゴリとオプションを選択できます。

監査ログからのエントリの削除

すべてのカテゴリのエントリまたは選択したカテゴリのエントリを削除できます。

p.192 の「[監査ログについて](#)」を参照してください。

監査ログからエントリを削除する方法

- 1 ツールメニューの[監査ログ]をクリックします。
- 2 [表示するカテゴリの選択]で、監査情報を表示するカテゴリを選択します。
- 3 監査ログカテゴリからすべてのエントリを削除するには、[カテゴリログの消去]をクリックします。

特定のカテゴリを選択して表示した場合、[カテゴリログの消去]をクリックすると、選択したカテゴリで生成されたログのみが消去されます。

監査ログのファイルへの保存

テキスト(.txt) ファイルとして監査ログを保存できます。

p.192 の「[監査ログについて](#)」を参照してください。

監査ログをファイルに保存する方法

- 1 ツールメニューの[監査ログ]をクリックします。
- 2 [ログをファイルに保存]をクリックし、監査ログのエントリを保存するファイル名および場所を指定します。

データベースの保守について

[データベースの保守]オプションを使用して、Backup Exec のデータベースおよび Desktop and Laptop Option (DLO) データベースを管理することができます。データベースの保守は、データベースごとに個別に実行されます。Backup Exec データベースには、テンプレートやカタログなどの設定やファイルに関する記録が保持されています。

[データベースの保守]機能を使用して、次のような作業を行うことができます。

- データベースのサイズを最適化する。
- 不要になったデータを削除する。
- データベースファイルの内容を保存する。
- データベースの一貫性チェックを実行する。

データベースの保守を実行するたびに、開始時点と終了時点に情報アラートが作成されます。アラートには、各データベースで実行された保守の種類、および保守に要した時間に関する詳細情報が記録されます。データベースの保守プロセスが失敗した場合、アラートには失敗した位置とその原因が示されます。

p.196 の「データベースの保守」を参照してください。

データベースの保守

[データベースの保守]オプションを使用して、Backup Exec のデータベースおよび Desktop and Laptop Option (DLO) データベースを管理することができます。データベースの保守は、データベースごとに個別に実行されます。Backup Exec データベースには、テンプレートやカタログなどの設定やファイルに関する記録が保持されています。

オプションをすべて選択する必要はありませんが、いずれもデータベースの保護と管理に必要な作業です。データベースの迅速なリカバリと、最大のパフォーマンスを得るために、すべてのオプションを選択してください。

p.195 の「データベースの保守について」を参照してください。

データベースの保守を設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [設定]の下にある[データベースの保守]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

p.196 の「[データベースの保守]のデフォルトオプション」を参照してください。

[データベースの保守]のデフォルトオプション

Backup Exec データベースおよび Desktop and Laptop Option (DLO) データベースを管理することができます。

p.196 の「データベースの保守」を参照してください。

表 3-12 [データベースの保守]のデフォルトオプション

項目	説明
Backup Exec データベースの保守を実行する	データベースの保守プロセスを有効にします。
前回の保守実行日	前回データベースの保守を実行した日時を示します。
データベース保守実行予定時刻	データベースの保守を実行する時間を示します。すべての保守作業が毎日 1 回、指定時刻に実行されます。
古いデータを削除する	指定日数の経過後に、期限の切れたジョブの概略、ジョブログ、アラート履歴またはレポートを Backup Exec データベースから削除します。 Desktop and Laptop Option (DLO) データベースには、アラート履歴の設定のみが適用されます。DLO にはジョブ履歴、ジョブログ、またはレポートがありません。

項目	説明
上書き禁止期間を経過していないメディアでデータのジョブ履歴を保持する	上書き禁止ポリシーが現在割り当てられているメディアのすべてのジョブ履歴データを保持します。メディアの上書き禁止ポリシーが期限切れになると、メディアのジョブ履歴データを削除することができます。
ジョブ履歴を保持する日数	データベースにジョブ履歴を保持する日数を示します。ジョブ履歴には、ジョブの統計情報の概略と、ジョブに使用したメディア、デバイスおよびバックアップセットの詳細が記録されています。
ジョブログ	データベースにジョブログを保持する日数を示します。ジョブログには、ジョブについての詳細な情報が記録されています。
アラート履歴	データベースにアラート履歴を保持する日数を示します。アラート履歴には、アラートのプロパティと応答情報が記録されています。
レポート	データベースにレポートを保持する日数を示します。レポートデータには、生成したレポートジョブについてのプロパティ情報が含まれています。レポート自体は削除されません。
監査ログ	データベースに監査ログを保持する日数を示します。監査ログは Backup Exec で実行される操作についての情報を含んでいます。 p.192 の「監査ログについて」 を参照してください。
データベースの一貫性チェックを実行する	データベースのデータの論理的または物理的な一貫性を調べます。 デフォルトでは、このオプションにチェックマークは付いていません。 Backup Exec の使用頻度が最も低い時刻に、一貫性チェックを定期的に行うことが推奨されます。
データベースを Backup Exec のデータディレクトリにバックアップする	データベースバックアップファイル (BEDB.bak) をバックアップできるように Backup Exec のデータディレクトリにデータベースに含まれているデータを配置します。バックアップファイルは次のデータベースの保守が実行されるまでデータディレクトリに保存され、保守プロセスごとに上書きされます。障害発生時にデータベースをリカバリするためには、このオプションを選択しておく必要があります。
データベースのサイズを最適化する	断片化したページを構成しなおして、物理データベースの量を実際に使用されているサイズから 10 % 以上減少させます。

Backup Exec データベースの場所の表示

メディアサーバーの詳細プロパティには、Backup Exec のデータベース (Backup Exec データベース、デバイスおよびメディアのデータベース (ADAMM)、カタログデータベースなど) の場所に関する情報が表示されます。

Backup Exec のインストール時に、デフォルトオプションを選択して Backup Exec データベースを格納するローカル Backup Exec SQL Express インスタンスを作成した場合、すべてのデータベースはローカルメディアサーバー上に存在します。Backup Exec データベースの格納にネットワーク上の別のインスタンスを選択した場合、すべてのデータベースはそのインスタンスを含む Microsoft SQL Server に存在します。

SAN SSO 構成の場合、セカンダリサーバーのデータベースの場所は、プライマリサーバー上で表示されるデータベースの場所と同じです。

Central Admin Server Option 構成では、デバイスおよびメディアのデータベースの場所が集中管理サーバー上にある場合、その情報が表示されます。

p.1464 の「CASO の動作」を参照してください。

メモ: 詳細プロパティは、Backup Exec 管理コンソールに接続しているメディアサーバーに対してのみ表示されます。

Backup Exec データベースの場所を表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 メディアサーバーをツリービューで選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]を選択します。
- 4 [詳細]タブで、プロパティを表示します。

p.198 の「メディアサーバーの[詳細]プロパティ」を参照してください。

メディアサーバーの[詳細]プロパティ

メディアサーバーの詳細プロパティには、Backup Exec のデータベース (Backup Exec データベース、デバイスおよびメディアのデータベース (ADAMM)、カタログデータベースなど) の場所に関する情報が表示されます。

p.198 の「Backup Exec データベースの場所の表示」を参照してください。

表 3-13 メディアサーバーの[詳細]プロパティ

項目	説明
サーバー	Backup Exec データベースを含んでいる Microsoft SQL Server の名前を示します。

項目	説明
インスタンス	Backup Exec データベースがインストールされるインスタンスの名前を示します。
名前	Backup Exec データベースの Microsoft SQL Server 名を示します。
パス	Backup Exec データベースのパスを示します。
サーバー	デバイスとメディアの詳細管理 (ADAMM) データベースを含んでいる Microsoft SQL Server の名前を示します。
インスタンス	デバイスとメディアの詳細管理 (ADAMM) データベースがインストールされるインスタンスの名前を示します。
名前	デバイスとメディアの詳細管理 (ADAMM) データベースの Microsoft SQL Server 名を示します。
パス	デバイスとメディアの詳細管理 (ADAMM) データベースのパスを示します。
サーバー	Backup Exec カタログデータベースを含んでいる Microsoft SQL Server の名前を示します。
インスタンス	カタログデータベースを含んでいるデータベースインスタンスを示します。
名前	Backup Exec カタログデータベースの Microsoft SQL Server 名を示します。
パス	Backup Exec カタログデータベースのパスを示します。

項目の非表示

Backup Exec では、情報が構造化および組織化された状態でペインに表示されます。各ペインには、表示される情報の種類を示す項目がいくつかあります。不要な項目は削除することができます。

p.200 の「[非表示項目の表示](#)」を参照してください。

項目を非表示にする方法

- 1 任意の列見出しを右クリックします。
- 2 [表示項目を設定]をクリックします。
- 3 非表示にする列見出しをクリックします。
- 4 [非表示]をクリックします。

非表示項目の表示

項目を非表示にした場合、いつでもそれを再び表示することができます。

p.199 の「[項目の非表示](#)」を参照してください。

非表示項目を表示する方法

- 1 任意の列見出しを右クリックします。
- 2 [表示項目を設定]をクリックします。
- 3 表示する項目を選択します。
- 4 [表示]をクリックします。

項目の順序の変更

要件に適するように項目の位置を変更できます。また、項目の情報のサイズにより適するように項目のサイズを変更することもできます。

項目の順序を変更する方法

- 1 任意の列見出しを右クリックします。
- 2 [表示項目を設定]をクリックします。
- 3 列見出しを選択して、[上に移動]または[下に移動]をクリックします。
[上に移動]オプションを1回クリックするごとに、選択した項目の名前がペインの1つ左の項目に移動します。また、[下に移動]オプションを1回クリックするごとに、選択した項目の名前が1つ右の項目に移動します。
- 4 項目の幅を変更する場合は、次の手順を実行します。
 - 項目を選択します。
 - [選択した項目の幅 (ピクセル単位)]フィールドに、項目の幅を入力します。
- 5 [OK]をクリックします。

項目の情報のソート

Backup Exec が項目の情報をソートする順序を選ぶことができます。

項目の情報をソートする方法

- 1 任意の列見出しを右クリックします。
- 2 [複数列のソート]をクリックします。
- 3 [ソート基準]リストで、情報をソートする列見出しを選択します。

- 4 昇順で情報をソートする場合は[昇順]を、降順で情報をソートする場合は[降順]をクリックします。
- 5 追加の項目でソートするには、[次の基準]リストで、手順3および手順4を繰り返します。
- 6 [OK]をクリックします。

プロパティの表示

プロパティは統計、日付と設定のような詳しい情報を提供します。

プロパティを表示する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。
 - プロパティを表示する項目を右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
 - プロパティを表示する項目を選択し、タスクペインの[一般タスク]の下で[プロパティ]をクリックします。

メディアの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- Backup Exec のメディアについて
- メディアの上書き禁止について
- メディア管理用の設定の選択
- メディア操作のための監査ログのエントリの表示
- 監査ログに表示するための特定のメディア操作の設定
- メディアラベルの設定
- WORM メディアについて
- 新しいカタログの作成
- メディアまたはデバイスの参照によるリストアジョブの作成
- メディアの場所およびメディアボルト
- ボルトまたはオフラインメディアの場所へのメディアの移動について
- 損傷したメディアの削除について
- メディアの[一般]プロパティ
- メディアの[統計情報]プロパティ
- メディアローテーション戦略

Backup Exec のメディアについて

Backup Exec のメディア管理機能を使用すると、次の作業を行うことができます。

- データの誤消去を防止する。
- メディアローテーションを設定する。
- メディアの所在を管理する。
- メディアのラベルを自動的に設定する。
- バーコードを使用してメディアのラベルを読み取り、メディアの所在をトラッキングする。
- メディアの統計情報を表示する。

Backup Exec ではジョブに必要なメディアを選択する必要はありません。必要なメディアは、デバイスとメディアの詳細管理 (ADAMM) コンポーネントによって自動的に選択されます。接続されているストレージデバイスにロードされているすべてのメディアの他、オフラインのメディアやメディアボルトに移動されたメディアも、Backup Exec によって追跡されます。

次の表に、[メディア]ビューに表示されるメディアノードを示します。

表 4-1 [メディア]ビューに表示されるメディアノードの説明

メディアノード	メディアノードの説明
すべてのメディア	Backup Exec で使用されるすべてのメディアが表示されます。スクラッチメディアや再利用可能メディアのように、バックアップ処理で上書きできるメディアは青色で表示されます。 p.214 の「メディアセットの[一般]プロパティ」を参照してください。
メディアセット	デフォルトのシステムメディアセットと、作成したメディアセットが表示されます。メディアセットとは、メディアを管理するルールセットです。このルールには、追記期間、上書き禁止期間およびボルトルールが含まれます。ボルトルールでは、メディアをメディアボルトに移動したりメディアボルトから戻す日時を設定することができます。 メディアセットに関連付けられているメディアを、割り当て済みメディアといいます。このメディアは、追記期間および上書き禁止期間を経過していないメディアです。メディアセットに関連付けられ、上書き禁止期間が終了しているメディアを、再利用可能メディアといいます。 p.210 の「メディアセットの作成について」を参照してください。
クリーニングメディア	すべてのクリーニングメディアが表示されます。 p.455 の「クリーニングスロットの定義」を参照してください。

メディアノード	メディアノードの説明
インポートメディア	<p>他の Backup Exec システムまたはバックアップ製品で作成したメディアが表示されます。デフォルトでは、インポートメディアの上書き禁止期間は[無期限]ですが、[メディアの上書き禁止レベル]が[一部]または[なし]に設定されている場合は上書きすることができます。インポートメディアを上書きするいくつかの方法があります。インポートメディアのデータは、そのメディアへの上書きを実行する前であればリストアに使用することができます。</p> <p>p.221 の「メディア管理用の設定の選択」を参照してください。</p>
Backup Exec および Windows NT Backup メディア	<p>別の Backup Exec で作成されたすべてのメディアが表示されます。</p> <p>p.232 の「新しいカタログの作成」を参照してください。</p>
異種メディア	<p>Backup Exec 以外のソフトウェアで作成したメディアが表示されます。</p> <p>p.232 の「新しいカタログの作成」を参照してください。</p>
破棄メディア	<p>エラーの発生が多いなどの理由で使用を中止したすべてのメディアが表示されます。破棄メディアセットに関連付けられたメディアは、バックアップジョブに使用されることはありません。損傷していない限り、リストア操作には使用することができます。破棄メディアの設定によって、メディアは使用(上書き)されないように保護されます。</p> <p>破棄メディアとして分類されたメディアを Backup Exec データベースから削除することができます。たとえば、再利用する予定のないオフサイトメディアが多数存在する場合や、メディアを廃棄する場合には、メディアの削除を行います。一度削除したメディアを再び Backup Exec で使用する場合は、そのメディアはインポートメディアとして認識され、リストアに使用する場合は事前にカタログを再登録する必要があります。</p> <p>p.243 の「損傷したメディアの削除について」を参照してください。</p>
スクラッチメディア	<p>上書きが可能なすべてのメディアが表示されます。新品のメディア、空のメディアおよび消去済みメディアは、スクラッチメディアセットに自動的に関連付けられます。</p> <p>p.206 の「メディアの上書き禁止について」を参照してください。</p>
データを無期限に保持-上書きを禁止する	<p>バックアップジョブのデフォルトを使用する場合に、バックアップジョブで使用されるすべてのメディアが表示されます。メディアに関連付ける別のメディアセットを作成するまでは、メディアセット[データを無期限に保持-上書きを禁止する]のデフォルトのルールが、作成するすべてのバックアップジョブに適用されます。</p> <p>インストール後はいつでもこのメディアセットの名前を変更することができますため、[データを無期限に保持-上書きを禁止する]と表示されていない場合があります。</p> <p>p.209 の「デフォルトのメディアセットについて」を参照してください。</p>

メディアノード	メディアノードの説明
メディアの場所	メディアの場所が表示されます (オンライン、オフラインまたはユーザー定義メディアボルト)。 p.235 の「 メディアの場所およびメディアボルト 」を参照してください。

p.211 の「[メディアセットウィザードを使用したメディアセットの作成](#)」を参照してください。

p.210 の「[メディアセットの作成について](#)」を参照してください。

p.213 の「[メディアセットへのメディアの関連付け](#)」を参照してください。

メディアの上書き禁止について

各メディアはメディアセットに関連付けられています。メディアセットとは、メディアを管理するルールのセットです。

使用されるルールは次のとおりです。

表 4-2 メディアセットで指定されているルール

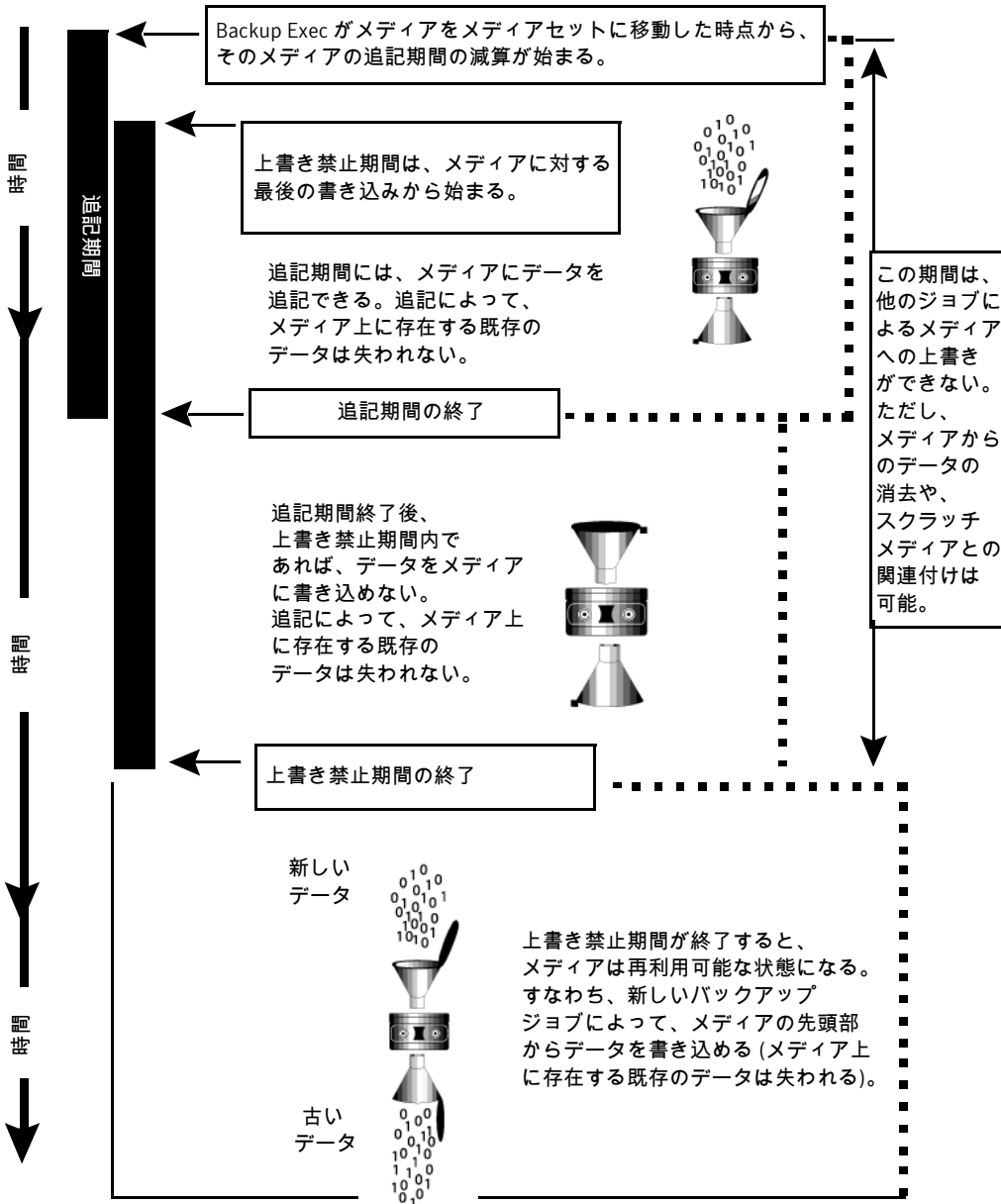
ルール	説明
追記期間	メディアへのデータの追記(追加)が可能な期間。初めてメディアを割り当てた時点から始まります。時間、日数、週数または年数で指定することができます。
上書き禁止期間	メディアが上書きから保護されている期間。メディアに対する最後の書き込み、つまり、前回の追記または上書きジョブが完了した時点から始まります。時間、日数、週数または年数で指定することができます。上書き禁止期間が終了したメディアは、再利用可能メディアとしてデータの上書き保存に使用することができます。 上書き禁止期間は、バックアップジョブが完了した時点から始まります。上書き禁止期間は、追記期間内であれば、追記ジョブが完了するたびに新たに始まります。上書き禁止期間はジョブが完了してから始まるため、ジョブの完了に必要な時間が、メディアへの上書きが可能になる時期に影響を与えます。ジョブの実行に必要な時間を考慮し、上書き禁止期間を調整してください。 たとえば、[上書き禁止期間]を7日間に、[追記期間]を4日間に設定した場合、最低7日間はこのメディアへの上書きが禁止され、4日間はデータをメディアに追記することができます。このメディアに追記したデータは、最低7日間は保持されます。

メディアの使用効率を犠牲にせずにデータの保存期間をできるだけ長くできるように、メディアローテーション戦略を設定する必要があります。Backup Exec では、バックアップデータの保存期間と、そのために必要なメディアコストの関係を調整するため、メディアの

識別ルールをメディアセットで指定し、そのルールにより書き込み可能なメディアと上書き禁止のメディアは、**Backup Exec** によって自動的に識別されます。

次の図は追記期間と上書き禁止期間の関係を示します。

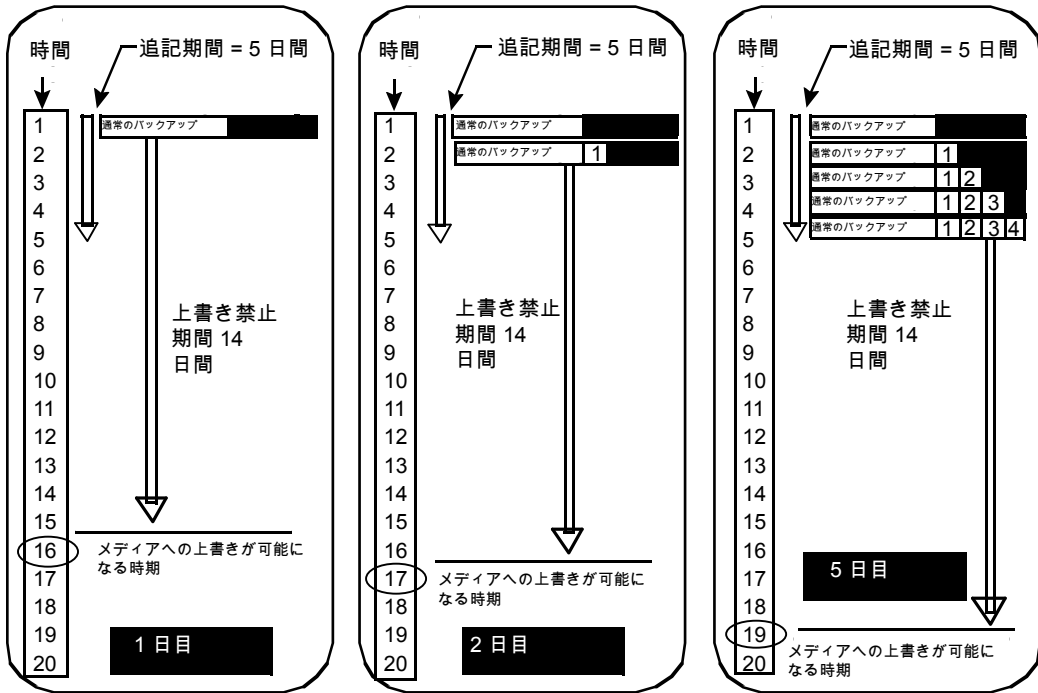
図 4-1 追記期間および上書き禁止期間



指定した追記期間および上書き禁止期間は、メディア上のすべてのデータに適用されます。

メディアへのデータの書き込みのたびに上書き禁止期間がリセットされ、新たに上書き禁止期間が始まります。

図 4-2 上書き禁止期間のリセット



上書き禁止期間はジョブが完了してから始まるため、ジョブの完了に必要な時間が、メディアへの上書きが可能になる時期に影響を与えます。

たとえば、上書き禁止期間 7 日、追記期間 0 日の「週次」という名のメディアセットを作成し、毎週金曜日の午後 8 時に完全バックアップを実行するようにスケジュールを設定したとします。このジョブの完了が午後 9 時 10 分であったとすると、次の週に、このジョブをスケジュールどおりの午後 8 時に実行することはできません。週次メディアセットの上書き禁止期間は 70 分残っています。

一般には、このような事態が発生するのを避けるため、ジョブの実行に必要な時間を考慮し、上書き禁止期間を短縮します。この例で、午後 8 時にジョブを定期的に行うには、上書き禁止期間を 7 日間ではなく 6 日間に設定します。

デフォルトのメディアセットについて

Backup Exec のインストール時に、メディアを上書きから保護するために次の重要なデフォルトが設定されます。

- [データを無期限に保持-上書きを禁止する]というメディアセットが作成されます。
- メディアセット[データを無期限に保持-上書きを禁止する]の追記期間および上書き禁止期間は[無制限]に設定されます。
- 作成するすべてのバックアップジョブは、メディアセット[データを無期限に保持-上書きを禁止する]に関連付けられます。

デフォルト設定を使用すると、すべてのバックアップデータを上書きせずに、保持できます(ただし、メディアの消去、メディアラベルの設定、メディアのフォーマットまたはスクラッチメディアとの関連付けを行った場合を除く)。この設定のもとでは、**Backup Exec**に常にスクラッチメディアを供給しないと、上書き可能メディアが不足します。

メディアローテーション中にメディアの不足を防止するには、次のような方法があります。

- 「週次メディアセット」、「月次メディアセット」などのように、適切な追記期間と上書き禁止期間を設定したメディアセットを新規作成し、バックアップジョブの作成時にそれらのメディアセットを指定します。上書き禁止期間が終了すると、このようなメディアは依然としてメディアセットと関連付けられているように表示されますが、その状態は再利用可能になっています。他のジョブで必要なメディアが不足すると、再利用可能メディアが **Backup Exec** によって自動的に検索されて上書きされます。
- メディアセット[データを無期限に保持-上書きを禁止する]の追記期間と上書き禁止期間を、無期限から適切な期間に変更します。メディアセット[データを無期限に保持-上書きを禁止する]の上書き禁止期間を短期間に変更してこのメディアセットをすべてのジョブで使用し続けた場合、データ保護期間が十分でない危険性があります。

p.210の「[メディアセットの作成について](#)」を参照してください。

p.212の「[メディアセットの削除](#)」を参照してください。

p.212の「[メディアセットの名前の変更](#)」を参照してください。

p.213の「[メディアセットへのメディアの関連付け](#)」を参照してください。

p.214の「[メディアセットの一般プロパティの編集](#)」を参照してください。

メディアセットの作成について

メディアセットは、追記期間、上書き禁止期間およびボルト移動の周期を指定するルールによって構成されています。

新しいメディアセットを作成する場合は、そのセットの追記期間と上書き禁止期間を指定します。そのメディアセットに関連付けられたメディアには、指定した追記期間と上書き禁止期間が適用されます。

また、ボルトルールを指定して、メディアボルトに移動したりメディアボルトから戻すことが可能なメディアについてレポートする日時を設定することができます。ボルトウィザードによってメディアは論理的に移動されてエクスポートされますが、ボルトに移動したりボルトから戻す作業は、ユーザーが物理的に行う必要があります。ボルトウィザードを使用する

と、移動可能なメディアについての詳細が表示されたレポートを印刷または参照して、メディアの場所を更新することができます。

リモートサイトを含む環境では、各リモートサイトに対してそれぞれ別のメディアセットを作成し、ボルトルールが有効な場合そのサイトで移動可能なメディアの詳細のみがレポートに表示されるようにします。

メモ:メディアが上書き禁止期間内にあっても、[メディアの上書き禁止レベル]が[なし]に設定されている場合は、メディアを上書きすることができます。

p.211 の「[メディアセットの作成](#)」を参照してください。

p.216 の「[メディアの上書き禁止レベル](#)」を参照してください。

p.206 の「[メディアの上書き禁止について](#)」を参照してください。

p.212 の「[メディアセットの削除](#)」を参照してください。

p.212 の「[メディアセットの名前の変更](#)」を参照してください。

p.214 の「[メディアセットの一般プロパティの編集](#)」を参照してください。

p.236 の「[メディアセットのボルトルールの設定](#)」を参照してください。

p.241 の「[ボルトウィザードを使用したメディアの移動](#)」を参照してください。

メディアセットの作成

メディアの追記期間、上書き防止期間、ボルト移動の周期を指定するルールを設定するためにメディアセットを作成します。

メディアセットを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 タスクペインの[メディアセットタスク]の下にある[新規メディアセット]をクリックします。
- 3 [一般]タブで必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。
p.214 の「[メディアセットの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 4 [ボルトルール]タブで必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。
p.237 の「[メディアの\[ボルトルール\]プロパティセット](#)」を参照してください。

メディアセットウィザードを使用したメディアセットの作成

このウィザードの画面の案内に従って作業を進めると、**Backup Exec** を初めて使用したり、[メディアセット]という用語の意味や概念を知らなくても新しいメディアセットを作成することができます。ただ、このウィザードを実行する前に、メディアの[上書き禁止期間]と[追記期間]については理解しておく必要があります。

p.206の「[メディアの上書き禁止について](#)」を参照してください。

新しいメディアセットを設定するのにウィザードが不要の場合は、メディアセットを手動で作成することができます。

p.210の「[メディアセットの作成について](#)」を参照してください。

[メディアの上書き禁止レベル]を[すべて]に設定している場合は、バックアップジョブ実行の前に、上書き可能なメディアを用意してオンラインの状態にしておく必要があります。また、インポートメディアを使用する場合は、先にインベントリを実行しておく必要があります。

メディアセットウィザードを使用してメディアセットを作成する方法

- 1 ツールメニューの[ウィザード]をポイントします。
- 2 [メディアセットウィザード]をクリックし、画面の案内に従います。

メディアセットの削除

[メディアセット]カテゴリからメディアセットを削除するには、[削除]を使用します。スケジュール済みジョブが割り当てられているメディアセットを削除すると、そのジョブを別のメディアセットに割り当てるためのダイアログボックスが表示されます。

関連付けられたメディアを含むメディアセットを削除することはできません。事前に内部のメディアを別のメディアセットに関連付けておく必要があります。

注意:メディアとの関連付けを行うメディアセットに、適切な上書き禁止期間と追記期間が設定されていることを確認してください。

メディアセットを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 メディア選択ペインの[メディアセット]の下で、削除するメディアセットを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 4 メディアセットの削除を確認するダイアログボックスで、[OK]をクリックします。
- 5 スケジュール済みジョブが割り当てられているメディアセットを削除すると、そのジョブを別のメディアセットに割り当てるためのダイアログボックスが表示されます。

p.508の「[\[ジョブの再設定\]オプション](#)」を参照してください。

メディアセットの名前の変更

メディアセットの名前を変更すると、そのメディアセットを使用するジョブでは、新しいメディアセットの名前が表示されます。

メディアセットの名前を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 メディア選択ペインの[メディアセット]の下で、名前を変更するメディアセットを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[名前の変更]をクリックします。
- 4 [名前]フィールドに、このメディアセットに割り当てる新しい名前を入力し、[OK]をクリックします。

メディアセットへのメディアの関連付け

メディアをメディアセットに関連付けると、そのメディアは、関連付けられたメディアセットの追記期間および上書き禁止期間のプロパティを使用します。

メモ: スクラッチメディアまたはインポートメディアのメディアセットへの関連付けは、できるだけ避けてください。Backup Exec では、バックアップジョブが必要な場合に、スクラッチメディアまたはインポートメディアがメディアセットに自動的に関連付けられます。

メディアをメディアセットに関連付ける方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 [すべてのメディア]を展開し、メディアを一覧表示します。
- 3 メディアセットに関連付けるメディアを選択します。
- 4 次のいずれかを実行します。
 - メディアをメディアセットにドラッグします。
 - タスクペインの[メディアタスク]の下にある[メディアセットの関連付け]をクリックして、メディアと関連付けるメディアセットを選択し、[はい]または[すべて]をクリックします。

[メディアとメディアセットの関連付け]オプション

上書き禁止期間、追記期間、メディアに対して設定されたボルトルールは、異なるメディアセットと関連付けすると変更される場合があります。

p.213 の「[メディアセットへのメディアの関連付け](#)」を参照してください。

表 4-3 メディアをメディアセットに関連付けるオプション

項目	説明
名前	選択したメディアが現在関連付けされているメディアセットの名前を表示します。

項目	説明
説明	メディアの説明を表示します。
関連付け	選択したメディアを関連付けするメディアセットの名前を表示します。

メディアセットの一般プロパティの編集

メディアセットの一般プロパティでは、次の項目を変更することができます。

- メディアセットの名前
- メディアセットの上書き禁止期間および追記期間
- メディアセットに関連付けられているメディアボルトおよびボルト移動の周期

メディアセットの一般プロパティを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 メディア選択ペインの[メディアセット]の下で、メディアセットを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 メディアセットの名前、上書き禁止期間または追記期間を変更するために、[一般]タブをクリックします。
p.214の「[メディアセットの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 5 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

メディアセットの[一般]プロパティ

メディアセットの一般プロパティはメディアの保持期間と追記期間についての情報を提供します。

p.211の「[メディアセットの作成](#)」を参照してください。

p.201の「[プロパティの表示](#)」を参照してください。

表 4-4 メディアセットの[一般]プロパティ

項目	説明
名前	メディアセットの名前を表示します。
作成日	このメディアセットの作成日時を表示します。この日時は自動的に設定されます。この日時を変更することはできません。

項目	説明
上書き禁止期間	<p>メディアへの上書きを禁止し、このメディア上にデータを保存する期間を、時間、日数、週数、年数で表示します。</p> <p>メモ: 設定される上書き禁止期間に関係なく、メディアの消去、フォーマット、ラベル設定、[スクラッチメディア]への関連付けを行った場合や、[メディアの上書き禁止レベル]を[すべて許可する]に設定した場合は、メディアを上書きできます。</p> <p>入力した時間の単位は、Backup Exec での時間の計算方法に合わせて変換されることがあります。たとえば、[14 日間]と入力しても、次にプロパティを表示すると[2 週間]と表示されます。</p> <p>デフォルトは[無期限 - 常に上書きを禁止する]です。メディアの消去、フォーマット、ラベル付けまたは[スクラッチメディア]への移動を行うか[メディアの上書き禁止レベル]を[すべて許可する]に設定しない限り、メディアへの上書きは 1,000 年間禁止されます。</p> <p>p.206 の「メディアの上書き禁止について」を参照してください。</p>
追記期間	<p>このメディアへのデータの追記が可能な期間を、時間、日数、週数または年数で表示します。入力した時間の単位は、Backup Exec での時間の計算方法に合わせて変換されることがあります。たとえば、[14 日間]と入力しても、次にプロパティを表示すると[2 週間]と表示されます。</p> <p>追記期間は、バックアップジョブによって、このメディアに初めてデータの書き込みが行われた時点から始まります。</p> <p>デフォルトは[無期限 - 常に追記を許可する]で、メディアに空き領域がなくなるまでデータを追記することができます。</p>

p.211 の「[メディアセットの作成](#)」を参照してください。

p.210 の「[メディアセットの作成について](#)」を参照してください。

p.212 の「[メディアセットの削除](#)」を参照してください。

p.212 の「[メディアセットの名前の変更](#)」を参照してください。

p.214 の「[メディアセットの一般プロパティの編集](#)」を参照してください。

p.236 の「[メディアセットのボルトルールの設定](#)」を参照してください。

p.241 の「[ボルトウィザードを使用したメディアの移動](#)」を参照してください。

メディアの上書き禁止レベル

[メディアの上書き禁止レベル]は、メディアセットの上書き禁止期間よりも優先されるグローバル設定です。[メディアの上書き禁止レベル]と[上書き禁止期間]は、名前は似ていますが内容は異なります。[上書き禁止期間]は個別のメディアに対して適用される期間で、メディアごとに異なります。[メディアの上書き禁止レベル]は、[上書き禁止期間]の設定に関係なく、スクラッチメディア、インポートメディアまたは割り当て済みメディアを上書きするかどうかを指定します。

[メディアの上書き禁止レベル]を使用し、上書きバックアップジョブで利用するメディアの種類(スクラッチメディア、インポートメディアなど)を指定します。

[メディアの上書き禁止レベル]には、次のものがあります。

- **すべて:** スクラッチメディア(廃棄するデータを含んだメディア)と再利用可能メディア(メディアセットに関連付けられ、上書き禁止期間が過ぎたメディア)が上書きされます。
- **一部:** インポートメディアが上書きされます。インポートメディアとは、別のシステムの **Backup Exec** または他のバックアップ製品で作成されたメディアのことです。また、スクラッチメディアも上書きされます。
- **なし:** 現在上書き禁止期間中のもの(割り当て済みメディア)を含め、すべてのメディアが上書きされます。

注意: [なし]の選択はできるだけ避けてください。データが上書きから保護されません。

p.221の「[メディア管理用の設定の選択](#)」を参照してください。

p.235の「[メディアの場所およびメディアボルト](#)」を参照してください。

p.206の「[メディアの上書き禁止について](#)」を参照してください。

割り当て済みメディアまたはインポートメディアの上書きについて

割り当て済みメディアおよびインポートメディアは、[メディアの上書き禁止レベル]で[すべて]または[一部]が設定されている場合、**Backup Exec**のメディア管理機能によって上書きが防止されます。ただし、必要に応じ、データ上書き禁止期間が終了する前でも、[メディアの上書き禁止レベル]を[なし]に変更せずに割り当て済みメディアおよびインポートメディアへの上書きを実行することができます。

利用可能な方式は次のとおりです。

- [スクラッチメディア]にメディアを移動する。スクラッチメディアが上書きジョブで選択されると、メディアへの上書きが行われます。
- メディアからデータを消去する。消去したメディアは自動的にスクラッチメディアとして認識されます。

- メディアにラベルを書き込む。[メディアのラベル付け]操作を実行すると、ただちに新規のメディアラベルがメディアに書き込まれ、メディア上のデータが破壊されます。
 - メディアをフォーマットする。メディアをフォーマットすると、メディア上のデータはすべて破壊されます。
 - 該当するメディアセットの上書き禁止期間を変更し、上書き禁止期間を終了させる。
- p.203 の「[Backup Exec のメディアについて](#)」を参照してください。
- p.244 の「[メディアの削除について](#)」を参照してください。
- p.214 の「[メディアセットの一般プロパティの編集](#)」を参照してください。
- p.217 の「[Backup Exec での上書き可能メディアの検索順序](#)」を参照してください。

Backup Exec での上書き可能メディアの検索順序

[メディアの上書き順序]オプションによって、上書き可能なメディアを Backup Exec が検索する順序を設定します。Backup Exec では、バックアップジョブ用の上書き可能なメディアを探すために、スクラッチメディアまたは上書き禁止期間が終了したメディアのいずれかの検索が行われます。

どちらの種類メディアを先に使用するかを選択する必要があります。

- ターゲットメディアセットに含まれる再利用可能メディアへ上書きする前に、スクラッチメディアへ上書きする
再利用可能メディアを使用する前にスクラッチメディアを使用するように選択した場合は、同数のジョブに対する必要なメディアの数は増加しますが、再利用可能メディアをリストア可能な状態で、より長く保持することができます。
- スクラッチメディアへ上書きする前に、ターゲットメディアセットに含まれる再利用可能メディアへ上書きする
スクラッチメディアを使用する前に再利用可能メディアを使用するように選択した場合は、再利用可能メディアより先にスクラッチメディアを使用する場合に比べ、同じメディアを使用する頻度が高くなります。

デバイスプールでは、プール内のすべてのデバイスに存在する再利用可能メディアが、古いものから順に選択されます。

ロボットライブラリでは、ライブラリ内の再利用可能メディアが古いものから順に選択されます。ロボットライブラリにパーティションが設定されている場合は、最も古い再利用可能メディアが、ターゲットのパーティション内のみで検索されます。

注意: 重要なデータを保存したメディアは、誤操作や上書き禁止期間の終了による移動や消去を防ぐために、メディア本体の誤消去防止タブを使用して物理的に上書きを防止することをお勧めします。

上書きジョブで使用するメディアの、Backup Exec での検索順序を次の表に示します。この順序は、[上書き禁止レベル]と[メディアの上書き順序]オプションの組み合わせによって変化します。

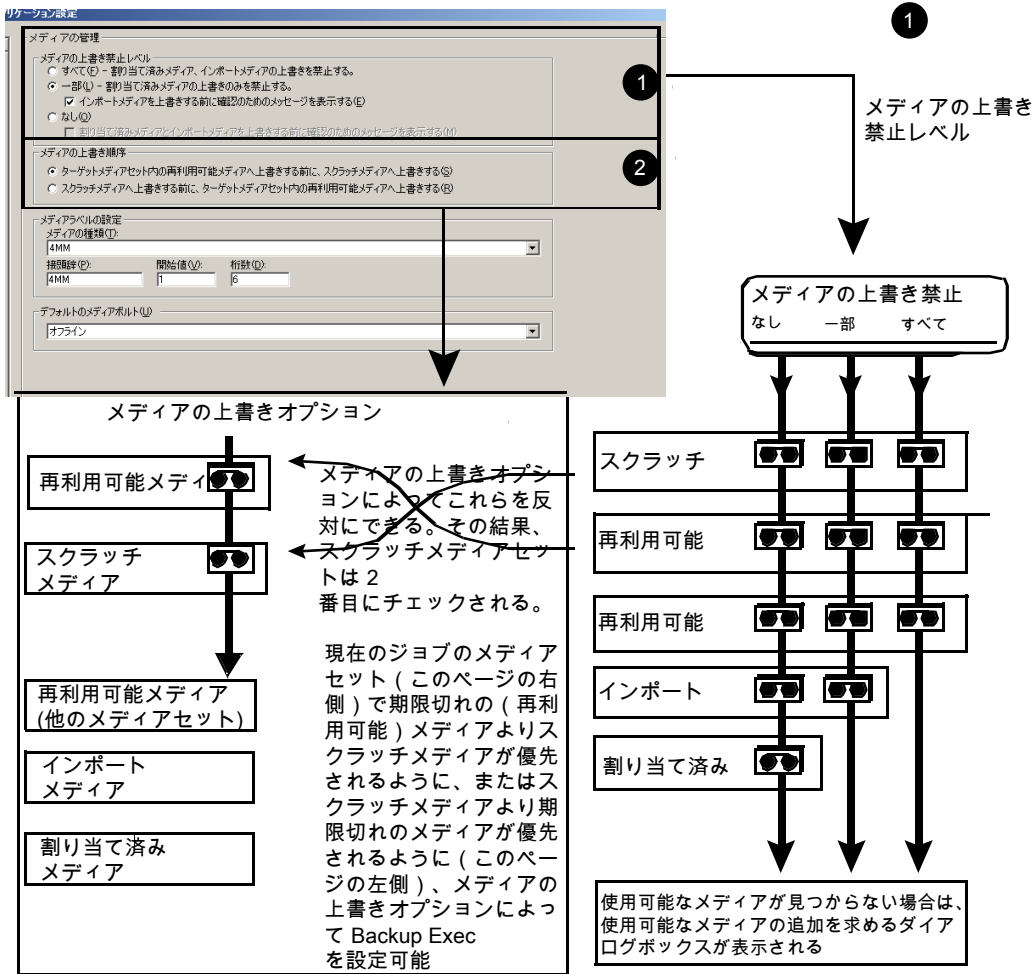
表 4-5 Backup Exec での上書き可能メディアの検索順序

[上書き禁止レベル]と[メディアの上書き順序]オプションの組み合わせ	メディアの上書き順序
<p>すべて + スクラッチメディアを先に上書きする</p> <p>メモ: この組み合わせは、メディアの上書きを最も強力に防止することができます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ スクラッチメディア ■ ターゲットメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ その他のメディアセット内に存在する再利用可能メディア
<p>すべて + 再利用可能メディアを先に上書きする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ ターゲットメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ スクラッチメディア ■ その他のメディアセット内に存在する再利用可能メディア
<p>一部 + スクラッチメディアを先に上書きする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ スクラッチメディア ■ ターゲットメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ その他のメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ インポートメディア
<p>一部 + 再利用可能メディアを先に上書きする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ ターゲットメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ スクラッチメディア ■ その他のメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ インポートメディア
<p>なし + スクラッチメディアを先に上書きする</p> <p>警告: データを上書きから保護することができないため、このオプションの選択はできるだけ避けてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ スクラッチメディア ■ ターゲットメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ その他のメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ インポートメディア ■ その他のメディアセット内に存在する割り当て済みメディア

[上書き禁止レベル]と[メディアの上書き順序]オプションの組み合わせ	メディアの上書き順序
なし + 再利用可能メディアを先に上書きする 警告: データを上書きから保護することができないため、このオプションの選択はできるだけ避けてください。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ターゲットメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ スクラッチメディア ■ その他のメディアセット内に存在する再利用可能メディア ■ インポートメディア ■ その他のメディアセット内に存在する割り当て済みメディア

[上書き禁止レベル]の設定と併せて、**Backup Exec**での上書き可能なメディアの検索順序を決定する[メディアの上書き順序]オプションを選択する必要があります。

図 4-3 メディアの上書き禁止



上書き可能なメディアを必要とするバックアップジョブに最も適しているメディアは、スクラッチメディアと再帰可能メディア (上書き禁止期間が終了しているメディア) です。この2つの種類のメディアは、上書き可能なメディアを必要とするジョブで最初に検索されます。検索順序は、[メディアの上書き禁止レベル]で、[すべて]、[一部]または[なし]のどれを選択したかによって異なります。この図のメディアは、使用できるかどうかのチェックの対象になるメディアの種類を示しています。

p.221の「メディア管理用の設定の選択」を参照してください。

p.235の「メディアの場所およびメディアボルト」を参照してください。

メディア管理用の設定の選択

[メディアの上書き禁止レベル]、[メディアの上書き順序]および[メディアラベルの設定]の設定を選択するには、次の手順を実行します。

メディア管理用の設定を選択する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[メディアの管理]をクリックします。
p.221 の「[メディア管理用の設定](#)」を参照してください。
- 3 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

メディア管理用の設定

メディア管理用の設定は、メディアの上書き禁止レベル、メディアの上書きオプション、メディアのラベル付けを含んでいます。

p.221 の「[メディア管理用の設定の選択](#)」を参照してください。

表 4-6 メディア管理用の設定

項目	説明
すべて -割り当て済みメディア、インポートメディアの上書きを禁止する。	メディアセットのメディアとインポートメディアが上書きされることを防ぎます。 p.216 の「 メディアの上書き禁止レベル 」を参照してください。 割り当て済みメディアとインポートメディアへの上書きが行われるのは、次のいずれかの場合のみです。 <ul style="list-style-type: none">■ このメディアの上書き禁止期間が終了する。■ アクティブなメディアセットに属するメディアを[スクラッチメディア]に移動する。■ メディアの消去、フォーマットまたはラベル設定を行う。■ メディアを、[インポートメディア]から[スクラッチメディア]に移動する。
一部 -割り当て済みメディアの上書きのみを禁止する。	インポートメディアとスクラッチメディアを上書きできます。メディアセット内に存在する上書き禁止期間の終了していないメディア(割り当て済みメディア)への上書きは禁止されます。 旧バージョンの Backup Exec や他のバックアップ製品で作成したメディア(インポートメディア)を使用する場合は、このオプションを選択します。

項目	説明
<p>インポートメディアを上書きする前に確認のためのメッセージを表示する</p>	<p>[一部]が選択されている場合、Backup Execでインポートメディアを上書きする前に確認のためのメッセージを表示します。</p> <p>このジョブは、このダイアログボックスに応答しないと実行されません。</p>
<p>なし</p> <p>データを上書きから保護することができないため、このオプションの選択はできるだけ避けてください。</p>	<p>メディアの上書き禁止機能を無効にします。このオプションを選択した場合は、ストレージデバイス内のメディアを誤って上書きすることのないよう、細心の注意が必要です。</p> <p>たとえば、上書きジョブをデバイスにサブミットして、メディアの上書き禁止レベルを[なし]に設定していると、そのデバイス内部のメディアが上書きされます。</p>
<p>割り当て済みメディアとインポートメディアを上書きする前に確認のためのメッセージを表示する</p>	<p>Backup Execで割り当て済みメディアまたはインポートメディアを上書きする前に確認のためのメッセージを表示します。</p> <p>[なし - すべてのメディアの上書きを許可する。]を選択した場合は、このオプションの選択を強くお勧めします。このオプションを選択しておく、割り当て済みメディアやインポートメディアへの上書きを実行する際に確認のダイアログボックスが表示されます。</p> <p>このジョブは、このダイアログボックスに応答しないと実行されません。</p>

項目	説明
<p>ターゲットメディアセットに含まれる再利用可能メディアへ上書きする前に、スクラッチメディアへ上書きする</p>	<p>上書きジョブが発生した場合に Backup Exec でスクラッチメディアを最初に上書きします。</p> <p>p.217の「Backup Execでの上書き可能メディアの検索順序」を参照してください。</p> <p>どのストレージデバイスにもスクラッチメディアが存在しない場合は、Backup Execは、ターゲットのメディアセット内の再利用可能メディアに上書きします。</p> <p>ターゲットのメディアセット内に再利用可能メディアがなければ、Backup Execはあらゆるメディアセットで再利用可能メディアの有無を検索します。</p> <p>再利用可能メディアが存在しない場合は、Backup Execによって自動的に他の上書き用メディアの検索が行われます。どのメディアが上書きに使用されるかは、設定した[メディアの上書き禁止レベル]([すべて]、[一部]、[なし])によって決まります。このオプションを選択した場合は、再利用可能メディアを先に使用するよう指定した場合に比べ、同数のジョブに必要なメディアの数が増加します。</p> <p>このオプションは、Backup Execでの上書き用メディアの選択順序に影響を与えます。スクラッチメディアから先に上書きに使用するよう選択した場合は、再利用可能メディアをディザスタリカバリ用により長く保持することができます。</p>
<p>スクラッチメディアへ上書きする前に、ターゲットメディアセットに含まれる再利用可能メディアへ上書きする</p>	<p>上書きジョブが発生した場合に Backup Execでターゲットメディアセットの再利用可能メディアを最初に上書きします。</p> <p>どのストレージデバイスにも再利用可能メディアが存在しない場合は、Backup Execはスクラッチメディアに上書きします。</p> <p>再利用可能メディアもスクラッチメディアも存在しない場合は、Backup Execは上書き用メディアを検索します。どのメディアが上書きに使用されるかは、設定した[メディアの上書き禁止レベル]([すべて]、[一部]、[なし])によって決まります。</p> <p>p.217の「Backup Execでの上書き可能メディアの検索順序」を参照してください。</p> <p>再利用可能メディアから先に使用するよう選択した場合は、スクラッチメディアから先に使用する場合に比べ、同じメディアを使用する頻度が高くなります。</p>

項目	説明
メディアの種類	<p>デフォルトラベルを作成できるメディアの種類を表示します。</p> <p>p.228の「インポートメディアのラベル付け」を参照してください。</p> <p>たとえば、[4MM]を選択すると、初めて Backup Exec で使用するすべての 4MM の種類のメディアに、次のフィールドで指定するラベルが割り当てられます。</p>
接頭辞	<p>選択したメディアの種類に対応する現在のデフォルト接頭辞を表示します。この接頭辞を変更するには、最大 8 文字の半角英数字を入力します。</p>
開始値	<p>選択したカートリッジの種類に一致するメディアを Backup Exec で初めて使用するときに、そのメディアに割り当てるラベルに使用される番号が表示されます。選択したカートリッジの種類に一致するメディアを Backup Exec に追加するたびに、この番号には 1 が加算されます。</p> <p>たとえば、[メディアの種類]を[4MM]、[開始値]を[1]に設定した場合は、Backup Exec に最初に導入した 4MM メディアのラベル番号は 1、次に導入した 4MM メディアのラベル番号は 2 になります。</p> <p>新しい値を入力するには、最大 8 文字の半角英数字を入力します。この番号は、[桁数]フィールドで指定する桁数を超えることはできません。</p>
桁数	<p>[開始値]の桁数を表示します。ラベルの番号は指定した桁数になるように 0 を前に付けて表示します。このフィールドでは、ラベル番号の最小の桁数が定義されます。</p> <p>たとえば、[開始値]を 1、[桁数]を 6 に設定した場合は、メディアのラベルの開始値 (番号) は 000001、000002、000003 のようになります。</p> <p>[開始値]が[桁数]フィールドの桁数を超過した場合は、桁が追加されます。上の例で、ラベルの番号が 999999 に達した場合は、[桁数]フィールドの指定が 6 の場合でも、次のラベルには 1000000 と表示されます。</p> <p>ラベルの番号を 000000 や 000001 に戻さずに、桁数を増やして 1000000 や 1000001 にするのは、ラベルの重複を避けるためです。</p> <p>[桁数]フィールドには、3 - 8 の範囲の値を入力します。</p>

項目	説明
デフォルトのメディアボルト	メディアをボルトに移動するジョブまたはメディアをエクスポートするジョブを実行する際にメディアの移動先とするデフォルトボルトを表示します。ここで選択するデフォルトメディアボルトは[ジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[オプション]に表示されます。 p.240の「 メディアを移動するジョブのスケジュール設定 」を参照してください。 p.476の「 ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポート 」を参照してください。

p.217の「[Backup Exec での上書き可能メディアの検索順序](#)」を参照してください。

メディア操作のための監査ログのエントリの表示

監査ログには、メディアが上書きまたは追記されるタイミングなど、メディアの操作に関する情報が記録されます。この情報によって、リストアジョブに必要なすべてのメディアを確認できます。

監査ログでは、メディアの操作について次のオプションがデフォルトで有効になっています。

- メディアの削除
- メディアセットの削除
- メディアの消去 (完全)
- メディアの消去 (クイック)
- メディアのフォーマット
- メディアのフォーマット (WORM)
- メディアのラベル付け
- メディアの移動
- メディアの上書き

メディア操作に対する監査ログのエントリを表示する方法

- 1 ツールメニューの[監査ログ]をクリックします。
- 2 [表示するカテゴリの選択]フィールドで、[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 3 [監査ログ]ウィンドウのエントリを確認します。

監査ログに表示するための特定のメディア操作の設定

メディア操作の一部またはすべてを監査ログに表示できます。

監査ログに表示されるように特定のメディア操作を設定する方法

- 1 ツールメニューの[監査ログ]をクリックします。
- 2 [監査ログ]ダイアログボックスで、[ログの設定]をクリックします。
- 3 [デバイスおよびメディア]カテゴリを展開します。
- 4 ログに記録する操作を選択します。また、ログに記録しない項目または処理については、チェックボックスをオフにします。
- 5 [OK]をクリックします。

メディアラベルの設定

Backup Exec では、メディアラベルを使用してメディアを識別します。未使用のメディアまたはラベルのないメディアをバックアップ操作で使用する際、Backup Exec はそのメディアに自動的にメディアラベルを設定します。このメディアラベルは、メディアの種類を示す接頭辞と通し番号で構成されています。たとえば、メディアが4mm テープの場合、接頭辞は、4M とその直後に 000001 が続きます。次のラベルなし 4mm テープのメディアラベルは、4M000002 になります。

メディアラベルは Backup Exec によって自動的に割り当てられますが、ラベル接頭辞と番号を指定して独自に割り当てることもできます。たとえば、この Backup Exec で初めて使用するすべての 4MM メディアに接頭辞 ACCT と 1000 から始まる通し番号のラベルを付けることを指定できます。また、接頭辞 FIN と 10,000 から始まる番号を使用して別のメディアの種類にラベルを付けることも指定できます。メディアの識別と分類に役立つように、独自のラベル付け規則を作成しておくことが便利です。

Backup Exec では、メディア ID と呼ばれる別のメディアラベルも使用されます。メディア ID は、Backup Exec で使用する個々のメディアに割り当てられた固有のラベルです。メディア ID は、各メディアの統計情報を保持するために、Backup Exec で内部的に使用されます。メディアに書き込まれたメディアラベルやバーコードラベルは変更される可能性があるため、Backup Exec では、ユーザーが変更することも消去することもできないメディア ID を使用し、個別のメディアの統計情報の一貫性を保持しています。メディア ID は、メディアラベルには影響しません。また、ユーザーの行うメディアのラベル付けや変更、メディアからのデータの消去にも影響しません。

メディアラベルが重複した場合は、メディア ID を使用してメディアを識別する必要があります。ラベルの重複は、Backup Exec の再インストールや他のシステムの Backup Exec で作成したメディアを使用する場合に発生することがあります。重複したラベルを識別するには、[メディア ID]を使用します。メディア ID は、そのメディアのプロパティタブで確認することができます。

物理メディアの外部に貼り付けられているラベルに、メディアラベルを記入しておきます。メディアラベルを変更した場合は、物理ラベルも同じように変更しておいてください。

メディアラベルを変更するには、次の方法を利用することができます。

- [メディアのラベル付け]操作:メディアに新しいメディアラベルを書き込みます。この書き込み操作を行うと、メディア上のデータは破壊されます。この操作は[デバイス]ビューで行います。
- [名前の変更]操作:メディアの表示用の名前を変更します。ただし上書き操作を行わない限り、実際にはメディアへのラベルの書き込みは行われません。メディア上のデータは上書きが実行されるまで消去されません。
- メディアのプロパティページを使用したラベルの編集:ラベルを編集するとメディア表示用の名前が変更されます。ただし上書き操作を行わない限り、実際にはメディアへのラベルの書き込みは行われません。メディア上のデータは上書きが実行されるまで消去されません。

p.235 の「[メディアの場所およびメディアボルト](#)」を参照してください。

p.470 の「[メディアのラベル付け](#)」を参照してください。

p.228 の「[バーコードを使用したラベル付け](#)」を参照してください。

p.227 の「[メディアラベルの名前の変更](#)」を参照してください。

p.214 の「[メディアセットの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。

メディアラベルの名前の変更

新しいラベルをメディアに割り当てるには[名前の変更]を使用します。新しいラベルは、上書き操作が発生するまで、実際にはメディアには書き込まれません。したがって、次の上書きジョブが実行されるまで、メディア上のデータは保持されます。ただし、新しいメディアラベルはデータベースに保存され、そのメディアのラベルとして表示に使用されます。ただちに新しいメディアラベルをメディアに書き込むには、[メディアのラベル付け]を使用します。この操作を実行すると、メディア内のデータは消去されます。

名前を変更したメディアを別の **Backup Exec** システムで使用した場合は、インポートメディアとして認識され、元のメディアラベルが表示されます。変更後の新しいラベルは、別の **Backup Exec** システムには転送されません。

メディアラベルを変更する方法

- 1 次のいずれかを実行します。
 - メディアがデバイス内に存在する場合は、ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックし、目的のデバイスをクリックしてメディアを表示します。
 - メディアの所在が不明の場合は、ナビゲーションバーの[メディア]をクリックし、[すべてのメディア]をクリックしてすべてのメディアを表示します。
- 2 メディアラベルを変更するメディアを選択します。

- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[名前の変更]を選択します。
- 4 [名前]に新しいメディアラベルを入力し、[OK]をクリックします。
- 5 物理メディアの外部に貼り付けられているラベルにも、このメディアラベルを記入しておきます。

インポートメディアのラベル付け

Backup Execは、インポートメディアのラベルを自動的に再設定することはありません。インポートしたメディアの既存のラベルが読み取られ、[メディア]ビューの[インポートメディア]に表示されます。また、インポートメディアの元のラベルが、[メディア]ビューの結果ペインの[メディアの説明]に表示されます。メディアのプロパティページを使用し、簡単に内容が識別できるようにメディアの説明を編集することができます。

[メディアの上書き禁止レベル]が[一部]または[なし]に設定されている場合は、インポートメディアがジョブで選択されて上書きされることがあります。ジョブの実行時にインポートメディアへの上書きが行われた場合は、そのメディアには自動的にラベルが設定されません。

他のインポートメディアの[メディアの上書き禁止レベル]を[すべて]に保持したまま、特定のメディアにラベルを設定するには、そのメディアのデータ消去を行ってからラベルを設定します。

p.214の「メディアセットの[一般]プロパティ」を参照してください。

バーコードを使用したラベル付け

カートリッジの外部にバーコードラベルを貼り付けたメディアをバーコードリーダー付きのロボットライブラリで使用すると、そのバーコードラベルが自動的にメディアラベルとして使用されます。

Backup Exec でメディアラベルを変更できますが、読み取りの可能なバーコードラベルがメディアに貼り付けられている限り、メディアラベルよりもバーコードラベルが優先されます。Backup Exec を使用して入力したメディアラベルを使用するには、メディアカートリッジからバーコードラベルを実際に取り除くか、バーコードリーダーの付属していないデバイスでメディアを使用する必要があります。

たとえば、ロボットライブラリ1がバーコードをサポートしているとします。バックアップ処理で、新しいまたは上書き可能なメディアが必要になりました。そこで、バーコードラベル[ABCD]の新品のメディアをロボットライブラリマガジンに挿入すると、バーコードリーダーによってメディアラベルのバーコードIDのスキャンが行われます。このメディアを選択してBackup Execでの操作が継続され、バーコードラベルがメディアに貼り付けられていることが検出されます。Backup Execによって、このバーコードラベルが自動的に使用され、処理が継続されます。

マガジンを変更またはマガジンに新しいメディアを挿入した場合、[スキャン]オプションを使用することで、簡単にスロット情報を更新することができます。

p.226 の「[メディアラベルの設定](#)」を参照してください。

p.229 の「[混合メディアライブラリのバーコードルール](#)」を参照してください。

混合メディアライブラリのバーコードルール

異なるドライブが混在するロボットライブラリでバーコードがサポートされている場合、どのメディアの種類をどのドライブで使用するかを Backup Exec が識別できるように、バーコードルールを作成することができます。Backup Exec によってバーコードルールが読み取られると、接頭辞または接尾辞に対応する種類のメディアが捜されて、そのメディアの種類を扱うことのできるドライブにマウントされます。

ロボットライブラリのためのバーコードルールはユーザーが有効にするまで有効になりません。

p.455 の「[ロボットライブラリ用のバーコードルールの有効化](#)」を参照してください。

p.229 の「[混合メディアライブラリのバーコードルールの作成](#)」を参照してください。

混合メディアライブラリのバーコードルールの作成

ロボットライブラリでバーコードがサポートされている場合は、バーコードルールを作成できます。バーコードルールは Backup Exec がロボットライブラリドライブで使うメディアの種類を指定します。

混合メディアライブラリでバーコードルールを作成する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[バーコードルール]をクリックします。
- 3 [新規]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。
p.231 の「[バーコードルールオプションの追加](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックし、このメディアのバーコードルールを保存します。
- 6 ロボットライブラリでバーコードルールが有効に設定されていることを確認します。バーコードルールを使用するには、ロボットライブラリがバーコードルールを使用するように設定されている必要があります。

p.455 の「[ロボットライブラリ用のバーコードルールの有効化](#)」を参照してください。

バーコードルールの編集

バーコードルールの設定は変更できます。

バーコードルールを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[バーコードルール]をクリックします。
- 3 [編集]をクリックし、必要に応じてオプションを変更します。
p.231の「[バーコードルールオプションの追加](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックして変更した内容を保存し、[OK]をクリックして終了します。

バーコードルールの削除

バーコードルールは削除できます。

バーコードルールを削除する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[バーコードルール]をクリックします。
- 3 削除するバーコードルールを選択し、[削除]をクリックします。
- 4 このルールを削除する旨のメッセージを確認して[はい]をクリックし、次に[OK]をクリックします。

バーコードルールオプション

デフォルトバーコードルールがリストに表示されます。バーコードルールを追加、編集または削除できます。

表 4-7 デフォルトバーコードルール

項目	説明
製造元	このライブラリの製造元の名前を表示します。
接頭辞	バーコードの前に配置される接頭辞を表示します。この接頭辞があるバーコードのメディアのみが指定のドライブで使われます。
接尾辞	バーコードの後に配置される接尾辞を表示します。この接尾辞があるバーコードのメディアのみが指定のドライブで使われます。
メディアの種類	メディアの種類を表示します。
新規	新しいバーコードルールを追加できます。 p.229の「 混合メディアライブラリのバーコードルールの作成 」を参照してください。

項目	説明
編集	バーコードルールを編集できます。 p.229の「 バーコードルールの編集 」を参照してください。
削除	バーコードルールを削除できます。 p.230の「 バーコードルールの削除 」を参照してください。

p.229の「[混合メディアライブラリのバーコードルール](#)」を参照してください。

バーコードルールオプションの追加

バーコードルールは Backup Exec がロボットドライブで使うメディアの種類を指定します。

p.229の「[混合メディアライブラリのバーコードルールの作成](#)」を参照してください。

表 4-8 バーコードルールオプションの追加

項目	説明
メディアの種類	バーコードルールに含めるために選択できるメディアの種類を表示します。
製造元	このライブラリの製造元の名前を表示します。ライブラリの製造元の名前はライブラリのプロパティページで調べることができます。(このフィールドの値は、大文字と小文字が区別されません。) 製造元の名前を入力することで、バーコードルールをその製造元のライブラリに限定できます。さまざまな製造元のライブラリに適用する共通のバーコードルールを作成する場合は、このフィールドを空白にします。
接頭辞	メディアの種類を表すバーコードの前に配置されるコードを表示します。最大16文字の任意の半角英数字の組み合わせを使用することができます。(このフィールドの値は、大文字と小文字が区別されません。)
接尾辞	メディアの種類を表すバーコードの後に配置されるコードを表示します。最大16文字の任意の半角英数字の組み合わせを使用することができます。(このフィールドの値は、大文字と小文字が区別されません。)

p.229の「[混合メディアライブラリのバーコードルール](#)」を参照してください。

WORM メディアについて

Write Once Read Many (WORM) データストレージは、長期のデータ保存期間を必要とするデータのアーカイブに使用されます。WORM メディアにデータを書き込むことができるのは1回のみです。その後は、メディアに追記することはできますが、上書き、消去または再フォーマットすることはできません。

メディアセットでWORMメディアが使用されている場合は、上書き禁止期間ではなく、追記期間が適用されます。

まだ書き込みが行われていないWORMメディアを、新しいWORMメディアといいます。Backup Exec で新しいWORMメディアを使用する場合、[スクラッチメディア]セットに配置されます。

一度書き込みを行ったWORMメディアは、[スクラッチメディア]セットに移動できなくなります。WORMメディアを[破棄メディア]セットに移動してBackup Exec から削除することはできますが、消去または再フォーマットすることはできません。

WORMメディアは、特殊バックアップジョブやポリシーから作成したバックアップジョブで使用することができます。[WORM (Write Once Read Many) メディアを使用する]オプションを選択すると、バックアップ先デバイスがWORMと互換性があるドライブである(またはバックアップ先デバイスにWORMと互換性があるドライブが含まれている)こと、およびそのドライブでWORMメディアが利用可能であることが、Backup Exec によって確認されます。WORMメディアまたはWORMと互換性があるドライブが存在しない場合は、アラートが送信されます。

p.324の「バックアップジョブおよびテンプレートの[デバイスとメディア]オプション」を参照してください。

新しいカタログの作成

次のことを実行するためのメディアのカタログ登録:

- 他の Backup Exec システムまたはバックアップ製品で作成したメディア (インポートメディア) のカタログを登録する
- ローカルハードディスク上にカタログが存在しないメディアのカタログを新規に作成する

データをリストアまたは検証するには、メディアにカタログがなければなりません。このコンピュータで初めて使用するメディアについては、事前にインベントリを実行する必要があります。

p.431の「メディアのインベントリの実行について」を参照してください。

新しいカタログを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]または[デバイス]をクリックします。
- 2 カタログを登録するメディアに関連付けられているメディアセットまたは場所を選択するか、またはカタログを登録するメディアが格納されているデバイスを選択し、次にメディアを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[メディアのカタログ登録]をクリックします。
- 4 パスワード保護されているメディアにデバイスまたはパスワードを指定するには、[プロパティ]ペインの[ターゲット]の下にある[デバイス]をクリックし、必要なオプションを選択します。
p.233の「[カタログジョブの\[デバイス\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 ジョブの名前またはジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックし、必要なオプションを選択します。
p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.669の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 7 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する場合

使用するスケジュー [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリック
ルオプションを設定 します。
する場合

p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

カタログジョブは[ジョブモニター]で監視またはキャンセルすることができます。

- 8 このジョブでメディアをロボットライブラリに挿入する必要がある場合は、[ライブラリのインポート]ジョブの作成を求めるメッセージが表示されます。
p.473の「[ロボットライブラリへのメディアのインポート](#)」を参照してください。
- 9 [ライブラリのインポート]ジョブを作成する場合は、[インポートジョブのプロパティ]の下にある[オプション]をクリックし、[インポート完了後に自動インベントリを実行する]を選択します。

カタログジョブの[デバイス]オプション

[デバイス]オプションは、カタログジョブを実行するデバイスと、必要に応じてパスワードを含んでいます。

p.232 の「[新しいカタログの作成](#)」を参照してください。

表 4-9 カタログジョブの[デバイス]オプション

項目	説明
デバイス	このジョブを実行するデバイスを表示します。
パスワード	パスワード保護されているメディアのカタログを初めてシステムで登録する場合に使用するパスワードを表示します。
パスワードの確認入力	同じパスワードが再入力されていることを確認します。

メディアまたはデバイスの参照によるリストアジョブの作成

Backup Exec で、メディアまたはデバイスを参照してリストアジョブを作成できます。リストアするファイルを選択するには、そのメディアのカタログを登録しておく必要があります。

別のシステムの Backup Exec でバックアップされたメディアのカタログは、メディアサーバーに存在しません。[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスでデータを表示するには、別のシステムの Backup Exec でバックアップされたメディアのカタログを、ローカルメディアサーバー上に登録する必要があります。

メディアまたはデバイスの参照によるリストアジョブの作成

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]または[デバイス]をクリックします。
- 2 リストアするデータに関連付けられているメディアセットまたは場所をダブルクリックします。
- 3 リストアするメディアを選択します。
- 4 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[データのリストア]をクリックします。
- 5 リストアジョブのプロパティを選択します。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

- 6 このジョブでメディアをロボットライブラリに挿入する必要がある場合は、[ライブラリのインポート]ジョブの作成を求めるメッセージが表示されます。

p.473 の「[ロボットライブラリへのメディアのインポート](#)」を参照してください。

- 7 [ライブラリのインポート]ジョブを作成する場合は、[インポートジョブのプロパティ]の下にある[オプション]をクリックし、[インポート完了後に自動インベントリを実行する]を選択します。

メディアの場所およびメディアボルト

Backup Exec のメディアは、次のいずれかの場所に格納されます。

- オンラインメディア:ストレージデバイス、ロボットライブラリのスロットまたはディスクへのバックアップフォルダに存在するメディアが一覧表示されます。オンラインメディアは Backup Exec によって定義されるため、削除したり名前を変更することはできません。また、メディアを追加したり移動することもできません。

メモ: オンラインメディアの場所からメディアを移動する場合は、そのメディアの上書き禁止期間と追記期間が保持されます。

- オフラインメディア:デバイス、スロット、メディアボルトのいずれにも配置されていないサイト内のメディアが表示されます。Backup Exec を使用してデバイスまたはスロットから削除したメディアは、自動的にこの場所に移動されます。他の場所からオフラインの場所にメディアを追加することができます。オフラインメディアをオンラインに戻すには、デバイスまたはスロットのインベントリを実行するか、メディアのカatalog登録を実行します。オフラインの場所は、削除したり名前を変更することはできません。
- ユーザー定義メディアボルト:「メディアボルト」とは、メディアの実際の物理的な場所に対する論理表現です。メディアボルトを作成することにより、特定のメディア保管室、金庫、サイト外などの物理的な場所のどこにメディアを保管しているかを把握することができます。たとえば、サイト外に送られるメディアをまとめたメディアボルトを作成することができます。サイト外に送られる物理的なメディアに添付するため、そのメディアボルト内のメディアリストを[メディアボルト内のメディア]レポートとして印刷することもできます。また、ボルトルールを作成することもでき、メディアをボルトに移動したりボルトから戻す日時を追跡するのに役立ちます。

p.211 の「[メディアセットの作成](#)」を参照してください。

p.238 の「[場所またはボルト内のメディアの検索](#)」を参照してください。

p.236 の「[メディアセットのボルトルールの設定](#)」を参照してください。

p.241 の「[ボルトウィザードを使用したメディアの移動](#)」を参照してください。

p.238 の「[メディアボルトの名前の変更](#)」を参照してください。

p.239 の「[ボルトまたはオフラインメディアの場所へのメディアの移動について](#)」を参照してください。

p.238 の「[メディアボルトの削除](#)」を参照してください。

p.738 の「[\[メディアボルト内のメディア\]レポート](#)」を参照してください。

メディアボルトの作成

オフサイトに保存されているメディアを追跡できるように、メディアボルトを作成します。新規に作成するボルトは[メディア]ビューの[メディアの場所]の下に表示されます。

メディアボルトを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 タスクペインの[メディアの場所に関するタスク]の下にある[新規メディアボルト]を選択します。
- 3 新規に作成するボルトの名前と説明を入力します。
p.236の「[メディアボルトのプロパティ](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

メディアボルトのプロパティ

メディアボルトのプロパティはメディアボルトの名前と説明を含んでいます。

p.236の「[メディアボルトの作成](#)」を参照してください。

表 4-10 メディアボルトのプロパティ

項目	説明
名前	メディアボルトの名前を表示します。
説明	メディアボルトの説明を表示します。

メディアセットのボルトルールの設定

メディアセットのボルトルールのプロパティでは、次の項目を追加または変更することができます。

- このメディアセットと関連付けられているメディアを移動するメディアボルト。
- メディアを割り当ててからボルトに移動するまでに待機する期間。
- メディアに最後に書き込みを行ってからそのメディアをボルトから戻すまでに待機する期間。

Backup Exec では、ボルトは自動的に更新されません。[ボルトの更新(ウィザード使用)]タスクを使用して、ボルトとの間で移動可能なメディアについての詳細が表示されたレポートを印刷または参照し、メディアの場所を更新する必要があります。また、メディアをボルトに移動するジョブにスケジュールを設定してデバイスからメディアをエクスポートしたり、ボルトに移動したメディアの場所を更新することができます。

メディアセットのボルトルールを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 メディア選択ペインの[メディアセット]の下で、メディアセットを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 [ボルトルール]タブをクリックします。
 p.237 の「[メディアの\[ボルトルール\]プロパティセット](#)」を参照してください。
- 5 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

メディアの[ボルトルール]プロパティセット

ボルトルールのプロパティはメディアをメディアボルトに移動する日付またはメディアボルトから戻す日付の情報を提供します。

p.236 の「[メディアセットのボルトルールの設定](#)」を参照してください。

p.211 の「[メディアセットの作成](#)」を参照してください。

表 4-11 メディアセットの[ボルトルール]プロパティ

項目	説明
このメディアセットで使用するメディアボルトを選択	このメディアセットと関連付けられているメディアを保存するメディアボルトを表示します。 メディアの場所を更新するには、移動日時および戻す日時が遅延している場合でも、まず、[ボルトの更新(ウィザード使用)]タスクを実行する必要があります。 p.241 の「 ボルトウィザードを使用したメディアの移動 」を参照してください。 このウィザードを使用すると、ボルトに移動したりボルトから戻すことが可能なメディアについての詳細が表示されたレポートを印刷することができ、メディアを移動するように選択した場合はメディアの場所を更新することができます。ただし、メディアを回収し、ボルトに移動したりボルトから戻す作業は物理的に行う必要があります。
メディアをこのボルトに移動 x 後 (初回書き込みまたは上書きしてから)	その期間を超えると、メディアをボルトに移動可能であるとレポートされる期間を表示します。
メディアをこのボルトから戻す x 後 (最後に書き込みしてから)	その期間を超えると、メディアをボルトに戻すことが可能であるとレポートされる期間を表示します。

p.210 の「[メディアセットの作成について](#)」を参照してください。

メディアボルトの削除

空のメディアボルトは削除することができます。削除するボルト内にメディアが存在する場合は、ボルトを削除する前に移動しておく必要があります。システム定義のオンラインの場所とオフラインの場所は削除できません。

メディアボルトを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 削除するメディアボルトを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 4 メディアボルトを削除するかどうかを確認するためのメッセージが表示されたら、[OK]をクリックします。

メディアボルトの名前の変更

メディアボルトの名前を変更することができます。Backup Exec での[メディアの場所]のデフォルトである[オンラインメディア]と[オフラインメディア]の名前は変更できません。

メディアボルトの名前を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 メディア選択ペインで、名前を変更するメディアボルトをクリックします。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[名前の変更]を選択します。
- 4 新しい名前を入力し、[OK]をクリックします。

場所またはボルト内のメディアの検索

メディアの位置を検索するには、メディアラベル上の名前を検索します。

場所またはボルト内のメディアを検索する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 メディア選択ペインで、[メディアの場所]をクリックします。
- 3 タスクペインの[メディアの場所に関するタスク]の下にある[メディアを検出]をクリックします。
- 4 検索するメディアのメディアラベルの名前を入力し、[OK]をクリックします。

ボルトまたはオフラインメディアの場所へのメディアの移動について

ボルトまたはオフラインメディアの場所にメディアを論理的に移動する場合、いくつかの方法を利用できます。また、移動操作によっては、操作の一部としてメディアをエクスポートするように求められます。これらの操作ではメディアは論理的に移動されますが、ボルト名で示される実際の場所に、メディアを物理的に移動する必要があります。

次のいずれかの方法を使用して、ボルトまたはオフラインメディアの場所にメディアを移動します。

- バーコードラベルをスキャンするか、またはメディアラベルを入力して、ボルトまたはオフラインメディアの場所にメディアを論理的に移動
p.239 の「[バーコードラベルのスキャンを使用したメディアの移動](#)」を参照してください。
- メディアがデバイスから正常にエクスポートされた後でそのメディアをボルトに論理的に移動するようにジョブのスケジュールを設定
p.240 の「[メディアを移動するジョブのスケジュール設定](#)」を参照してください。
- ポリシーで、メディアをエクスポートするジョブテンプレートを作成
p.525 の「[ポリシーへのメディアのエクスポートテンプレートの追加](#)」を参照してください。
- ボルトウィザードを実行して、デバイスからメディアをエクスポートし、メディアをボルトに論理的に移動
p.241 の「[ボルトウィザードを使用したメディアの移動](#)」を参照してください。
- ボルトまたはオフラインメディアの場所にメディアをドラッグアンドドロップしてから、メディアをデバイスからエクスポート
p.242 の「[ドラッグアンドドロップ方式のメディアの移動](#)」を参照してください。
- [ボルトへ移動]オプションを使用して、ボルトまたはオフラインメディアの場所にメディアを論理的に移動
p.241 の「[\[ボルトへ移動\]タスクを使用したメディアの移動](#)」を参照してください。

バーコードラベルのスキャンを使用したメディアの移動

バーコードスキャナを使用している場合、この手順を実行すると、ボルトまたはオフラインメディアの場所にメディアを効率的に移動できます。また、メディアラベルをダイアログボックスに入力することもできます。

バーコードラベルのスキャンを使用してメディアを移動する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 メディア選択ペインで、メディアの移動先のメディアの場所またはボルトを選択します。

- 3 タスクペインの[メディアの場所に関するタスク]の下にある[選択したボルトへのメディアの追加]をクリックします。
p.242の「[メディアをボルトに移動](#)」オプションを参照してください。
- 4 1行に1つずつラベルを入力します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 必要なメディアがすべて追加できるまで、手順4から手順5を繰り返します。
- 7 [OK]をクリックします。

メディアを移動するジョブのスケジュール設定

メディアセットのボルトルールを設定すると、メディアをボルトに移動するジョブのスケジュールを設定できます。このジョブでは、メディアがデバイスからエクスポートされ、指定したボルトにメディアが論理的に移動されます。

メディアセットのボルトルールでメディアセットのボルトを指定するか、またはデフォルトのボルトを指定できます。

[メディア]ビューの[メディアの場所]の下に、既存のユーザー定義メディアボルトが表示されている必要があります。

p.236の「[メディアボルトの作成](#)」を参照してください。

メディアを移動するジョブのスケジュールを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[バックアップ戦略タスク]の下にある[メディアをボルトに移動する新規ジョブ]をクリックします。
- 3 ジョブの名前またはジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックし、必要なオプションを選択します。
p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 エクスポートが正常に実行された後でメディアをメディアボルトに移動するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[オプション]をクリックし、メディアボルトを選択します。
- 5 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.668の「[通知用のアラートカテゴリの指定](#)」を参照してください。
- 6 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。

p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

ボルトウィザードを使用したメディアの移動

ボルトウィザードを使用すると、ボルトとの間で移動可能なメディアについての詳細が表示されたレポートを印刷または参照し、ボルトを更新することができます。

ボルトを更新した後でロボットライブラリが検出された場合は、メディアをエクスポートするかどうかを確認するメッセージが表示されます。メディアをエクスポートするように選択した場合は、[メディアのエクスポート]ジョブが実行されます。

p.476の「[ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポート](#)」を参照してください。

メモ: リモートサイトを含む環境では、各リモートサイトに対してそれぞれ別のメディアセットを作成し、ボルトルールが有効な場合そのサイトで移動可能なメディアの詳細のみがレポートに表示されるようにします。

ボルトウィザードを使用してボルトにメディアを移動する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 更新するボルトを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアの場所に関するタスク]の下にある[ボルトの更新 (ウィザード使用)]を選択します。
ボルトウィザードが表示されます。
- 4 ウィザードの指示に従って作業を進めます。

[ボルトへ移動]タスクを使用したメディアの移動

[メディア]ビューでメディアを選択して、メディアを移動するボルトまたはオフラインメディアの場所を選択できます。Backup Exec データベースのメディアの場所は更新されませんが、メディアの取り出しまたはエクスポートは行われません。

[ボルトへ移動]タスクを使用してメディアを移動する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 [すべてのメディア]を展開してメディアを一覧表示し、メディアボルトに移動するメディアを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[ボルトへ移動]をクリックします。
p.242の「[\[メディアの移動\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 メディアの移動先となるメディアボルトを選択したら、[はい]または[すべて]をクリックします。

[メディアの移動]オプション

ボルトまたはオフラインメディアの場所にメディアを移動できます。

p.241の「[\[ボルトへ移動\]タスクを使用したメディアの移動](#)」を参照してください。

表 4-12 [メディアの移動]オプション

項目	説明
名前	移動するために選択したメディアラベルを表示します。
説明	メディアの説明があれば表示します。
移動先	メディアが移動されるメディアの場所かメディアボルトを表示します。
はい	単一のメディアを新しい場所に移動し、Backup Exec データベースを更新します。
いいえ	メディアを選択解除し、移動しません。
すべてにはい	選択したすべてのメディアを新しい場所に移動し、Backup Exec データベースを更新します。

[メディアをボルトに移動]オプション

このボルトに移動するメディアのメディアラベルを入力するためにバーコードスキャナを使用することができます。また、このボルトに移動するあらゆるメディアのメディアラベルを入力することもできます。

p.239の「[ボルトまたはオフラインメディアの場所へのメディアの移動について](#)」を参照してください。

ドラッグアンドドロップ方式のメディアの移動

ボルトまたはオフラインメディアの場所にメディアを移動するには、別の場所にメディアをドラッグアンドドロップします。また、ドラッグアンドドロップを使用する場合は、デバイスからメディアをエクスポートするように求められます。

メディアのドラッグアンドドロップルールを、次の表に示します。

メモ: オンラインの場所からメディアを移動する場合は、そのメディアの上書き禁止期間と追記期間が保持されます。

表 4-13 メディアのドラッグアンドドロップルール

移動元/移動先	オンラインの場所	オフラインの場所	メディアボルト	メディアプール/メディアセット	すべてのメディア
オンラインの場所	不可	可。ただし、メディアはオンラインの場所から物理的には移動されないとの警告が表示される。	可。ただし、メディアはオンラインの場所から物理的には移動されないとの警告が表示される。	不可	不可
オフラインの場所	不可	不可	可	不可	不可
ユーザー定義ボルト	不可	可	可	不可	不可
メディアプール/メディアセット	不可	可。ただし、警告が表示される。	可。ただし、警告が表示される。	可	不可
すべてのメディア	不可	可。ただし、メディアはオンラインの場所から物理的には移動されないとの警告が表示される。	可。ただし、メディアはオンラインの場所から物理的には移動されないとの警告が表示される。	可	不可

ドラッグアンドドロップを使用したメディアの移動

新しい場所にメディアをドラッグアンドドロップした後、[メディアのエクスポート]ジョブが実行されます。ジョブが実行された後、デバイスからメディアを削除することを求めるメッセージが表示されます。

p.242 の「[ドラッグアンドドロップ方式のメディアの移動](#)」を参照してください。

ドラッグアンドドロップを使用してメディアを移動する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 メディア選択ペインで、メディアが存在するボルトをクリックします。
- 3 結果ペインからメディアを選択し、移動先の場所にドラッグします。
- 4 メディアをエクスポートするかどうかを確認するメッセージが表示されたら、[はい]または[すべて]をクリックします。

損傷したメディアの削除について

メディアの製造元の定める廃棄基準に達したメディアは、[破棄メディア]メディアセットに関連付ける必要があります。ストレージデバイスのファームウェアで発生したソフトウェアエラーの統計値が所定の基準値を超えた場合は、そのメディアが廃棄基準に達したことが Backup Exec に通知されます。

[メディアセット]レポートまたはメディアのプロパティでメディアで発生したエラーの合計を参照し、廃棄するメディアを決定します。

欠陥のあるメディアを重要なデータのバックアップ操作に使用しないように、エラーの発生率が基準値を超えているメディアをすべて[破棄メディア]に関連付けます。[破棄メディア]に移動したメディアは、Backup Execでのバックアップジョブに使用されることはありません。このメディアは、そのデータに損傷がなければリストアに使用することができます。

p.244の「メディアの削除について」を参照してください。

p.247の「メディアの[統計情報]プロパティ」を参照してください。

p.731の「[失敗したバックアップジョブ数]レポート」を参照してください。

メディアの削除について

Backup Execからメディアを削除するとき、メディアのすべての記録はBackup Execデータベースから削除されます。これらの記録はカタログ情報、メディアの統計、メディアと関連付けられているその他の情報を含んでいます。メディアが[破棄メディア]セットに属するときのみメディアを削除できます。

次の場合にはメディアを削除することができます。

- 再利用する予定のないオフサイトメディアが多数存在する。
- 損傷したメディアまたは古いメディアを廃棄する。

Backup Execで削除することのできるメディアは、[破棄メディア]セットに関連付けられているメディアのみです。

一度削除したメディアを再びBackup Execで使用すると、そのメディアは[インポートメディア]として認識されます。このメディアを使用してリストアを行うには、まず、カタログの登録を実行する必要があります。

メモ: Backup Execからメディアを削除する操作は、メディアからデータを消去する操作とは異なります。

p.244の「メディアの削除」を参照してください。

p.247の「メディアの[統計情報]プロパティ」を参照してください。

p.731の「[失敗したバックアップジョブ数]レポート」を参照してください。

メディアの削除

Backup Exec データベースからメディアを削除できます。

メディアを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 次のいずれかの方法を使用して、削除するメディアを[破棄メディア]セットに関連付けます。
 - メディアを[破棄メディア]アイコンにドラッグします。
 - タスクペインの[メディアタスク]の下にある[メディアセットの関連付け]をクリックして、メディアと関連付ける[破棄メディア]セットを選択し、[はい]または[すべて]をクリックします。
- 3 [破棄メディア]アイコンをダブルクリックし、削除するメディアを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。

[削除]が利用できるのは、選択したメディアが[破棄メディア]セットに関連付けられている場合のみです。[削除]を利用するには、まず、削除するメディアを[破棄メディア]に関連付ける必要があります。
- 5 [はい]または[すべて]をクリックして、表示されているメディアを削除します。

メディアの[一般]プロパティ

メディアの[一般]プロパティはメディアの情報を提供します。

p.201 の「[プロパティの表示](#)」を参照してください。

表 4-14 メディアの[一般]プロパティ

項目	説明
メディアラベル	<p>Backup Exec によって自動的に割り当てられたか、管理者によって割り当てまたは変更されたか、あるいは、あらかじめバーコードラベルが割り当てられていたメディアラベルを表示します。</p> <p>メディアラベルは、32 文字 (半角換算) 以内で編集することができます。ラベルを編集するとメディア表示用の名前が変更されます。ただし上書き操作を行わない限り、実際にはメディアへのラベルの書き込みは行われません。このメディアラベルは、メディアを再利用する場合にも使用されるので、簡単に識別できる簡潔なものにします。メディアの外部に貼り付けられたラベルにも、このメディアラベルを記入しておいてください。</p> <p>自動生成されたラベルが重複することがあります。たとえば、Backup Exec を再インストールしたり、別の Backup Exec システムで作成したメディアを使用すると、ラベルが重複することがあります。重複したラベルの使用は許されていますが、できるだけ避けるようにします。</p> <p>バーコードを貼り付けたメディアをバーコード対応デバイスで使用した場合は、自動的にそのバーコードがメディアラベルとして使用されます。</p>
説明	<p>インポートメディアの場合は、元のメディアラベルが表示されます。</p> <p>メディアの説明は、その内容が簡単に識別できるように、128 文字 (半角換算) 以内で編集することができます。</p>
メディアの種類	<p>メディアの種類およびサブタイプを表示します (利用可能な場合)。メディアの種類およびサブタイプを変更するには、このボックスの横のボタンをクリックします。</p>
エクスポートの保留	<p>このメディアをエクスポートするメディアのエクスポートテンプレートが関連付けられたジョブが実行されるときは [はい] が表示されます。</p> <p>p.524 の「メディアのエクスポートテンプレートについて」を参照してください。</p>
メディアセット	<p>このメディアが属するメディアセットの名前を表示します。</p>

項目	説明
メディアの場所	このメディアが存在するデバイスまたはボルトの名前を表示します。
作成日	このメディアを、この Backup Exec システムで初めて使用した日時を表示します。
割り当て日	上書き操作の結果、メディアがメディアセットに割り当てられた日時を表示します。
修正日	このメディアに最後にデータが書き込まれた日時を表示します。
上書き禁止期間	このメディアに対する上書き禁止期間の設定を表示します。
追記期間	このメディアに対する追記期間の設定を表示します。
ハードウェア暗号化のサポート	このメディアでハードウェア暗号化がサポートされている場合は[はい]が表示されます。 p.400 の「ハードウェア暗号化について」を参照してください。

p.226 の「メディアラベルの設定」を参照してください。

p.370 の「テスト実行ジョブの作成」を参照してください。

p.457 の「ロボットライブラリスロットのプロパティ」を参照してください。

p.247 の「メディアの[統計情報]プロパティ」を参照してください。

メディアの[統計情報]プロパティ

メディアの統計情報を表示できます。

p.201 の「プロパティの表示」を参照してください。

表 4-15 メディアの[統計情報]プロパティ

項目	説明
総使用時間	このメディアの総使用時間を表示します。
使用領域	メディア上の生の使用領域を表示します。[使用領域]は、[総容量]から[空き領域]を引いて計算されます。 [使用領域]は、[書き込みバイト数]と等しい場合も等しくない場合もあります。

項目	説明
空き領域	<p>メディア上に残っている未使用の容量を表示します。一部のテープデバイスは、そのデバイスにロードされているメディアの残存容量を読み取る機能を備えています。そのようなデバイスでは、読み取られた残存容量が[空き領域]に表示されます。そうでない場合には、[総容量]から[書き込みバイト数]を引いて[空き領域]が計算されます。</p> <p>[空き領域]は生の未使用領域として報告されるので、特定のジョブの出力を収容するのに必要な容量が存在するかどうかをチェックする場合は、[書き込みバイト数]と[圧縮率]を調べる必要があります。</p>
総容量	<p>メディアの生の総容量を表示します。テープデバイスには、そのデバイスにロードされているメディアの総容量を読み取る機能を備えているものがあります。そのようなデバイスでは、読み取られた総容量が[総容量]に表示されます。そうでない場合は、メディアの過去の使用実績に基づく値が[総容量]に表示されます。</p>
圧縮率	<p>[使用領域]と[書き込みバイト数]の比率を表示します。[圧縮率]は、データ圧縮とメディアの欠陥部が、メディアに格納するデータの量に与える総合的な効率を表します。</p>
書き込みバイト数	<p>メディア上のブロックに、現在までに書き込まれたデータの量を表示します。データの圧縮やメディアの欠陥部により、[書き込みバイト数]と[使用領域]に差が生じる場合があります。データ圧縮を使用した場合は、[使用領域]に比べ[書き込みバイト数]が大きくなる傾向があります。メディアに欠陥部が存在する場合は、[使用領域]に比べ[書き込みバイト数]が小さくなります。</p>
読み取りバイト数	<p>このメディアから読み取られたバイト数を表示します。</p>
マウント数	<p>このメディアをマウントした合計回数を表示します。</p>
シーク数	<p>このメディアによって実行された検索操作の回数を表示します。検索操作は、メディアの特定の情報を見つける場合に実行されます。</p>
シークエラー数	<p>データの検索中に発生したエラー数を表示します。</p>
ソフトエラー数 (書き込み)	<p>リカバリ可能な書き込みエラーの発生回数を表示します。ソフトエラーの発生は、何らかの問題が発生する予兆を示していることがあります。エラーの発生数が多い場合は、メディアの損傷をチェックしてください。</p>

項目	説明
ハードエラー数 (書き込み)	リカバリ不可能な書き込みエラーの発生回数を表示します。エラーの発生数が多い場合は、メディアの損傷をチェックしてください。
ソフトエラー数 (読み取り)	リカバリ可能な読み取りエラーの発生回数を表示します。ソフトエラーの発生は、何らかの問題が発生する予兆を示していることがあります。エラーの発生数が多い場合は、メディアの損傷をチェックしてください。
ハードエラー数 (読み取り)	リカバリ不可能な読み取りエラーの発生回数を表示します。エラーの発生数が多い場合は、メディアの損傷をチェックしてください。

p.214 の「[メディアセットの一般プロパティの編集](#)」を参照してください。

p.210 の「[メディアセットの作成について](#)」を参照してください。

メディアローテーション戦略

データの保護に使用するメディアローテーション戦略にはさまざまなものがあります。主な相違点は、必須のメディア数とメディアの保持期間です。メディア保持期間が過ぎると、同じスケジュールが再びメディアに適用されます。

メディアローテーション戦略として最も一般的なものは、次のとおりです。

- 1 世代管理: 毎回同じメディアを使用して完全バックアップを実行します。
p.249 の「[1 世代管理のメディアローテーション戦略](#)」を参照してください。
- 2 世代管理: 週次の完全バックアップと日次差分バックアップまたは日次増分バックアップを組み合わせた方法です。複数のメディアを 2 週間で循環させます。オフサイトストレージ用のバックアップも生成されます。
p.250 の「[2 世代管理のメディアローテーション戦略](#)」を参照してください。
- 3 世代管理: 週次完全バックアップおよび月次完全バックアップと日次差分バックアップまたは日次増分バックアップを組み合わせた方法です。複数のメディアを使用します。オフサイトストレージ用のバックアップも生成されます。
p.251 の「[3 世代管理のメディアローテーション戦略](#)」を参照してください。

1 世代管理のメディアローテーション戦略

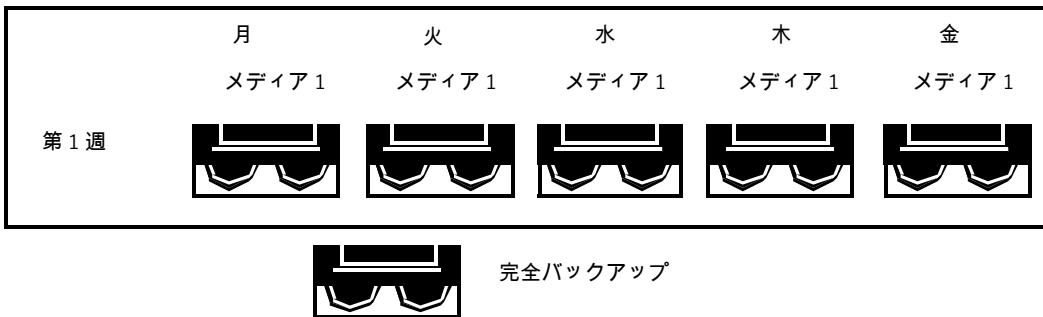
1 世代管理のメディアローテーション戦略では、次のものがが必要です。

表 4-16 1 世代管理のメディアローテーション戦略

項目	説明
必要なメディアの数	1 (最小構成)
上書き禁止期間	直前のバックアップ

1 世代管理方式は、完全バックアップを毎日繰り返す単純な方式です。

図 4-4 1 世代管理のバックアップ戦略



管理が簡単ですが、単一のメディアを使用してバックアップを行うため効果的なバックアップ方法ではありません。これは、磁気メディアは繰り返し使用するうちに次第に劣化するためです。また、リストアできるデータは前回バックアップした時点のものに限られます。

2 世代管理のメディアローテーション戦略

2 世代管理のメディアローテーション戦略では、次のものがが必要です。

表 4-17 2 世代管理のメディアローテーション戦略

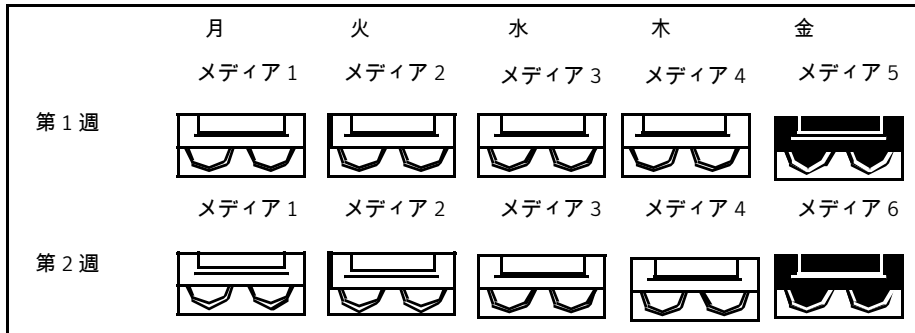
項目	説明
必要なメディアの数	6 (最小構成)
上書き禁止期間	2 週間

この 2 世代管理のメディアローテーション戦略は、2 週間単位のスケジュールを使用して、完全バックアップと差分バックアップまたは増分バックアップを組み合わせたものです。

この方式では、増分バックアップまたは差分バックアップに、月曜日から木曜日用の 4 つのメディアを使用します。残りの 2 つには完全バックアップしたデータを隔週で格納し、毎週金曜日に交代で別の場所に保管します。

この2世代管理方式は、管理しやすく、1世代管理方式よりも長期間データを保存しておくことができますが、通常のネットワーク環境に要求される厳しいデータ保護には十分ではありません。

図 4-5 2 世代管理のバックアップ戦略



完全バックアップ



増分または差分
バックアップ

このバックアップ戦略を使用する場合は、最初に完全バックアップを実行する必要があります。

3 世代管理のメディアローテーション戦略

3 世代管理のメディアローテーション戦略では、次のものがが必要です。

表 4-18 3 世代管理のメディアローテーション戦略

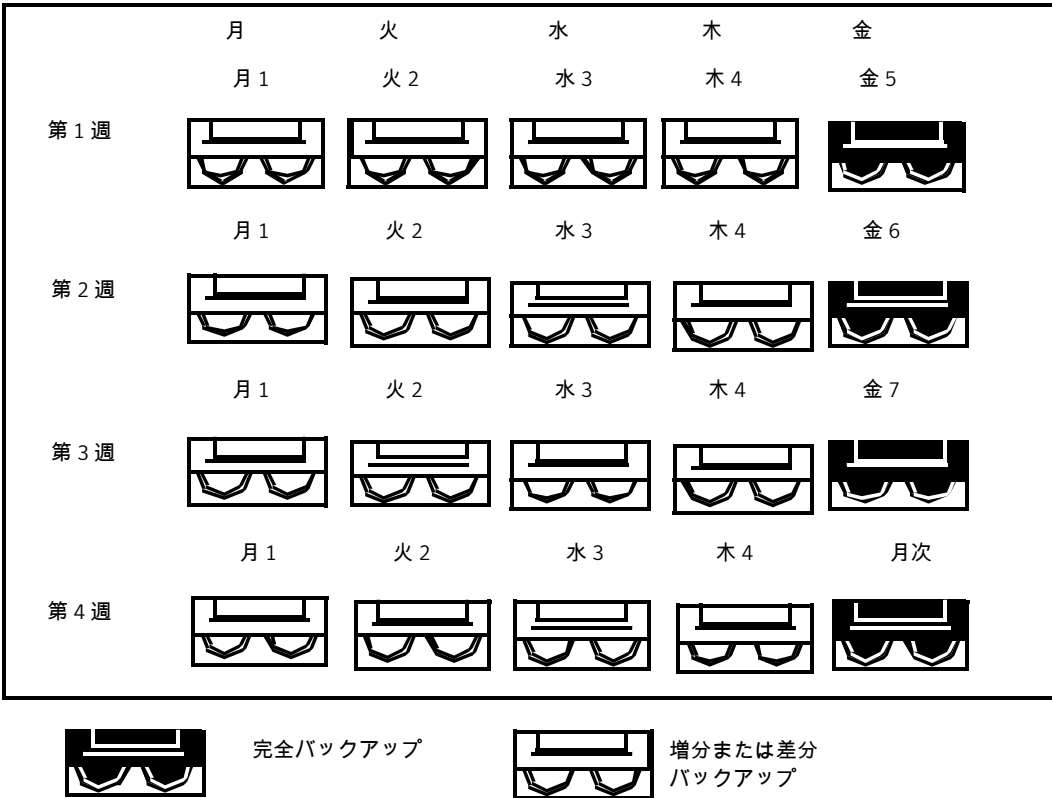
項目	説明
必要なメディアの数	19 (最小構成)
上書き禁止期間	1 年間

この3世代管理が、最も一般的なメディアローテーション戦略です。管理が単純で必要となるときに簡単にファイルを検索してリストアを行うことができます。

この方式では、増分バックアップまたは差分バックアップに、月曜日から木曜日用の4つのメディアを使用します。他に3つのメディアを毎週金曜日の完全バックアップに使用します。

残りの12のメディアは、毎月の完全バックアップに使用し、オフサイトに保管します。

図 4-6 3 世代管理のバックアップ戦略



使用メディアの数と保存期間の比率 (19 メディア/1 年) が適当な、この 3 世代管理戦略の使用をお勧めします。また、使用するメディアの数を増やすことも簡単です。たとえば、毎月最後の土曜日に完全バックアップを実行し、永久保存することもできます。

バックアップの準備

この章では以下の項目について説明しています。

- バックアップを準備する方法
- バックアップ戦略について
- バックアップ戦略を選択する方法
- バックアップするデータの選択について
- バックアップ選択項目でのコンピュータの完全修飾名の使用について
- バックアップ選択リストのコンピュータ名のノードについて
- バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードについて
- バックアップ選択リストの[ドメイン]ノードについて
- [Active Directory ドメイン]ノードへの Active Directory ドメインの追加
- [Active Directory ドメイン]ノードからの Active Directory ドメインの削除
- バックアップ選択リストの[ユーザー定義選択]ノードについて
- [ユーザー定義選択]ノードへのユーザー定義選択項目の追加
- [ユーザー定義選択]ノードからのユーザー定義選択項目の削除
- Backup Exec での Microsoft バーチャルハードディスク (VHD) ファイルの管理について
- ユーザー定義の Microsoft Windows 分散ファイルシステムデータをバックアップする方法
- 選択リストについて
- リソース検出について

- [Backup Exec シャドウコピーコンポーネントファイルシステムについて](#)
- [Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)

バックアップを準備する方法

データをバックアップする前に、次の内容について知っておく必要があります。

- バックアップ戦略の使用
p.254 の「[バックアップ戦略について](#)」を参照してください。
- バックアップデータの選択
p.265 の「[バックアップするデータの選択について](#)」を参照してください。
- ユーザー定義選択リストの作成
p.279 の「[選択リストについて](#)」を参照してください。
- 特定の種類のデータ (Windows サーバーシステム、ユーティリティパーティションなど) の保護
p.265 の「[バックアップするデータの選択について](#)」を参照してください。

バックアップ戦略について

バックアップ戦略とは、使用するバックアップ方式、バックアップを実行するタイミング、定期的なバックアップに使用するメディアのローテーション方法など、ネットワークをバックアップする際の総合的な手順の集まりです。優れたバックアップ戦略を使用すると、障害が発生した場合のシステムのリカバリ時間を短縮することができます。

Backup Exec を使用すると、柔軟性に富んださまざまな方法で、ネットワーク上のデータを保護することができます。メディアローテーション機能を使用して必要な仕様を満たす独自のメディアローテーション戦略 (メディアの再利用手順) の設定と管理を行えば、すべての管理作業を Backup Exec によって自動化することができます。

この戦略を定義したバックアップジョブテンプレートを作成すると、メディアサーバーによって保護されるすべてのリソースに独自の戦略を実装するテンプレートとして使用することができます。

p.249 の「[メディアローテーション戦略](#)」を参照してください。

p.254 の「[バックアップ戦略を選択する方法](#)」を参照してください。

バックアップ戦略を選択する方法

安全で効率のよいデータの管理方法を選定するには、次の事項を考慮しておく必要があります。

- バックアップするデータの重要性
- システムに適したバックアップ頻度
- 必要なストレージメディアの容量
- 特定のストレージメディアの使用時期
- バックアップ情報を追跡する方法

p.254 の「バックアップ戦略について」を参照してください。

バックアップスケジュールを判断する方法

データのバックアップの実行間隔に関する必要条件はありませんが、実行間隔を決定する場合には、最終バックアップ以後に追加または修正したデータを作成しなおす際のコストを考慮してください。

次回にバックアップを実行するまでにファイルサーバーやワークステーションで障害が発生した場合に、どれだけの作業量や、時間、経費および他の関連コストが必要かを計算します(常に最悪の事態を想定することが重要です)。このコストとバックアップに要するコストを比較し、バックアップの間隔を調整します。

たとえば、何人かのデータベースオペレータによって常時更新されている大規模なデータベースの再作成に必要なコストは、かなり大きなものとなります。一方、いくつかのメモを社内で作成する1人のユーザーのデータを再作成するのに必要なコストは前者と比較になりません。この場合、データベースのバックアップは1日に数回実行する必要がありますが、ユーザーのワークステーションのバックアップは1日1回で十分です。

ワークステーションは毎日1回完全バックアップを実行し、サーバーはできるだけ頻繁に完全バックアップを実行すると理想的です。また、常に変更の加えられている重要なファイルやディレクトリも毎日数回バックアップする必要があります。ただし、時間とメディアは無限ではないので、通常、このようなことはできません。完全バックアップは無理でも、計画的に増分または差分バックアップを実行するようにします。また、新たにアプリケーションを追加したり、サーバーの構成を変更する場合は、安全性の観点から、事前に必ず完全バックアップを行うようにします。

バックアップするデータの量を判断する方法

バックアップを必要とするデータの量は、メディアローテーション戦略を決定する際の最も重要な要因です。メディア上に長期にわたって保存しておくべきデータが大量に存在する場合は、それに応じた戦略を選択する必要があります。

データストレージのスケジュールを判断する方法

データを保存しておく必要のある期間は、メディアローテーション方式に直接関係します。たとえば、同一のメディアに毎日バックアップを行うとすると、データが保存されている期間は1日未満になります。

ストレージメディアの価格はデータの価値に比べると安価なので、メディアローテーションに組み込まれていない別のメディアにシステムを定期的にバックアップし、永久保存することをお勧めします。このようなバックアップを、毎週または毎月1回実行するようにします。

ウイルスによる被害も大きな脅威です。ウイルスには、すぐに被害が発生するものや、何日もまたは何週間もたってから被害が発生するものがあります。

いつでもリストアを実行できるように、少なくとも次のバックアップを用意しておく必要があります。

- 3日分の日次バックアップ (月曜日の分、火曜日の分、水曜日の分など)
- 1週間前の完全バックアップ
- 1か月前の完全バックアップ

このようにバックアップを作成しておくことで、万一ウイルスが侵入しても、ウイルスに感染する前の状態にシステムをリストアすることができます。

バックアップするデバイスを判断する方法

Backup Execにより、サーバー、ワークステーションおよびエージェントをバックアップすることができるので、どのリソースをバックアップして保護するかを考慮しておく必要があります。リソースによってバックアップに適した時間を調整する必要もあります。たとえば、ファイルサーバーのバックアップは夜間に、ワークステーションのバックアップは昼休みに実行します。

ジョブ内でバックアップするリソース数を判断する方法

ネットワークのバックアップでは、1つのジョブで複数のリソースのバックアップを実行するのか、単一のリソースのバックアップを実行するのかを決める必要があります。

どちらにも長所と短所があります。

表 5-1 複数のシステムを1つのジョブでバックアップする方式の長所と短所

方式	長所	短所
1つのジョブで1つのデバイスをバックアップする	<ul style="list-style-type: none"> ■ ジョブが異常終了した場合に、どのリソースをバックアップできなかったかがすぐにわかる。 ■ 電源が切断したり移動されたリソースが存在しても、他のリソースのバックアップには影響がない。 ■ ネットワークにリソースを追加した場合、新たにそのリソース用のジョブを作成するだけで済む。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 管理するジョブの数が多くなり煩雑になる(ジョブ履歴のチェックなど)。
1つのジョブで複数のリソースをバックアップする	<ul style="list-style-type: none"> ■ 作成および管理するジョブの数が少なく済む。 ■ データをバックアップする順序が決まっている。 ■ 上書きジョブにすると、メディアとジョブの名前を同一にすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップ中にジョブに含まれるリソースのいずれかで障害が発生した場合、ジョブが異常終了する。

アーカイブビットとバックアップ方式について

ファイルを作成または修正すると、アーカイブビット(または変更ビット)が、オペレーティングシステムによってオンに設定されます。日付と時刻のスタンプに依存するバックアップ方式を選択しなかった場合は、ファイルがバックアップ済みかどうかを判定するためにアーカイブビットが使用されます。ファイルがバックアップ済みかどうかは、バックアップ戦略の重要な要素です。

次のバックアップ方式を選択した場合は、アーカイブビットに影響を与えます。

- 完全 - 選択したファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する(アーカイブビットをリセットする)
- 差分 - 前回の完全バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する(アーカイブビットをリセットしない)
- 増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する(アーカイブビットをリセットする)

[完全 - 選択したファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する(アーカイブビットをリセットする)]または[増分 - 変更されたファイルをバックアップする(アーカイブビットをリセットする)]バックアップ方式を使用してファイルをバックアップすると、バックアップ済みであることを示すために、そのファイルのアーカイブビットがオフに設定されます。このファイルが、次の完全または増分バックアップまでに変更された場合は、アーカイブビットは再びオンに設定され、次の完全または増分バックアップでバックアップされます。

[差分-変更されたファイルをバックアップする]バックアップ方式を使用するバックアップには、前回の完全バックアップ以降に作成または変更されたファイルのみが含まれています。この種類の差分バックアップの実行時には、アーカイブビットの操作は行われません。

バックアップ戦略の例を次に示します。

佐藤氏は、営業所のファイルサーバー用のバックアップ戦略を決めることにしました。彼は、どのようなバックアップ戦略でも、まず、完全バックアップを使用してデバイス全体の完全なバックアップを実行する必要があることを知り、サーバー用の選択リストを作成して、金曜日の営業時間終了後にこのジョブをサブミットすることにしました。

このサーバー上のファイルの大多数は、変更の頻度がきわめて少ない、オペレーティングシステムやアプリケーションなどのファイルです。そこで、増分または差分バックアップを組み合わせてメディアのローテーション方式を作成すると時間とメディアの節約になると考えられます。そこで、彼は増分バックアップを使用することにし、そのスクリプトを月曜日から木曜日の営業時間終了後に実行するスケジュールを設定しました。

金曜日のテープにはファイルサーバーのすべてのデータが格納され、このサーバー上のすべてのファイルの状態は[バックアップ済み]に設定されます。月曜日の業務の終了後に増分バックアップジョブが実行され、その日に作成または変更されたファイル(オペレーティングシステムによってアーカイブビットがオンに設定されたファイル)のみのバックアップが行われます。増分バックアップジョブが終了すると、バックアップしたファイルのアーカイブビットがBackup Execによってオフに設定され、バックアップ済みであることが示されます。火曜日から木曜日と同じです。

このファイルサーバーに木曜日の午前中に障害が発生したとすると、サーバーを再起動し、作成した順序でバックアップをリストアすることになります(金曜日のバックアップ、月曜日のバックアップ、火曜日のバックアップなど)。

ここで、毎日行うバックアップを差分バックアップにしていたとすると、必要なのは金曜日と水曜日のテープのみになります。その理由は、金曜日のテープにはその時点でのすべてのデータが格納され、それ以降に作成または変更されたファイルはすべて水曜日のテープに格納されているからです。

バックアップ方式について

メディアローテーション戦略を考えるには、完全バックアップのみを使用するのか、完全バックアップと変更内容のバックアップ(差分バックアップ、増分バックアップ、またはワーキングセットバックアップ)を組み合わせて使用するのかを決定する必要があります。

メモ: ディザスタリカバリ用の基本データを確保するために、サーバーの完全バックアップを実行しておく必要があります。

Backup Exec で使用するバックアップ方式を次に示します。

- 完全
p.259の「完全バックアップ方式について」を参照してください。
- 差分
p.260の「差分バックアップ方式について」を参照してください。
- 増分
p.260の「増分バックアップ方式について」を参照してください。
- ワーキングセット
p.261の「ワーキングセットバックアップ方式について」を参照してください。

どのバックアップ方式にも長所と短所があります。

p.262の「バックアップ方式の長所と短所について」を参照してください。

完全バックアップ方式について

完全バックアップには、バックアップ対象として選択したすべてのデータが含まれます。完全バックアップを行ったデバイスは、Backup Exec によってバックアップ済みと認識されます。ファイルがバックアップ済みであるかどうかを決定するのに、アーカイブビットを使用するのか、修正日時を使用するのかを選択することができます。

メモ: ディザスタリカバリ用の基本データを確保するために、サーバーの完全バックアップを実行しておく必要があります。

コピーバックアップは、完全バックアップの一種です。コピーバックアップには、選択したすべてのデータが含まれ、アーカイブビットをリセットしないため、メディアローテーション方式にまったく影響を与えません。次のような場合には、コピーバックアップが便利です。

- 別のサイトに送信するなど、特別な目的でデータをバックアップする。
- 特定のデータをバックアップする。
- オフサイトに保管するバックアップを別に作成する。
- ローテーションサイクルに影響を与えずに、メディアローテーションジョブの対象となるデータをバックアップする。

もう1つの完全バックアップオプションは[ファイルのバックアップおよび削除]オプションです。このオプションは正常なコピーバックアップ後にボリュームから選択したファイルとフォルダを削除します。このバックアップオプションは、ディスクからストレージメディアにデータを移動して、サーバーボリューム上で占有していたディスク領域を解放したり、ボリュームを整理することができます。通常のバックアップスケジュールの一部としてこのオプションを使用しないでください。

メモ: データの削除には、ファイルを削除する権限が必要です。必要な権限がない場合は、データはバックアップされますが、元のボリュームからは削除されません。[ファイルのバックアップおよび削除]オプションを選択すると **Backup Exec** は **Remote Agent** がインストールされているリモートコンピュータからはデータを削除しません。

p.258 の「[バックアップ方式について](#)」を参照してください。

差分バックアップ方式について

差分バックアップ方式では、前回の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルすべてをバックアップします。差分バックアップと増分バックアップの違いは、増分バックアップには、前回の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみが含まれていることです。

Backup Exec には、ファイルがバックアップ済みかどうかを決定するのに、アーカイブビットを使用するものと修正日時を使用するものとの、2種類の差分バックアップ方式が用意されています。[完全 - 選択したファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットする)]を選択した場合は、[差分 - 前回の完全バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットしない)]方式の差分バックアップを実行する必要があります。[完全 - 選択したファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする]を選択した場合は、[差分 - 前回の完全バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする]方式の差分バックアップを実行する必要があります。

メモ: ファイルがバックアップされているかどうかを判断するために修正日時を使う場合は、完全バックアップと差分バックアップで同じバックアップ選択リストを使う必要があります。

通常は、増分バックアップ方式よりも差分バックアップ方式をお勧めします。デバイス全体のリストアに必要なバックアップは、差分バックアップ方式では 2 つだけなので、増分バックアップよりも簡単です。また、必要なメディアの数が少ないため、メディアのエラーによって重要なデータがリストアできなくなる危険性も減少します。

差分バックアップと増分バックアップを混在させないでください。

p.258 の「[バックアップ方式について](#)」を参照してください。

増分バックアップ方式について

増分バックアップ方式では、前回の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみをバックアップします。

Backup Exec には、ファイルがバックアップ済みかどうかを決定するのに、アーカイブビットを使用するものと修正日時を使用するものとの、2種類の増分バックアップ方式が用意されています。[完全 - 選択したファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットする)]を選択した場合は、[増分 - 前回の完全または増分バックアップ

クアップ以降に変更されたファイルをバックアップする-アーカイブビットを使用する(アーカイブビットをリセットする)]方式の増分バックアップを実行する必要があります。[完全-選択したファイルをバックアップする-修正日時を使用してバックアップする]を選択した場合は、[増分-前回の完全または増分バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする-修正日時を使用してバックアップする]方式の増分バックアップを実行する必要があります。このセクションで説明する長所と短所は、どちらの種類の差分バックアップにも当てはまります。

メモ:ファイルがバックアップされているかどうかを判断するために修正日時を使う場合は、完全バックアップと増分バックアップで同じバックアップ選択リストを使う必要があります。

p.258 の「[バックアップ方式について](#)」を参照してください。

ワーキングセットバックアップ方式について

ワーキングセットバックアップ方式には、[その日に変更されたファイル]と[過去 x 日間にアクセスされたファイル]の 2 種類のオプションがあります。[その日に変更されたファイル]オプションは、以前のバージョンの **Backup Exec** では[当日バックアップ]と呼ばれていました。選定したメディアローテーション方式とは別に、[その日に変更されたファイル]方式を使用してバックアップを実行できます。[その日に変更されたファイル]方式では、その日に作成または変更された、その日の日付のファイルをすべてバックアップします。アーカイブビットをリセットしないため、ファイルのバックアップ状態には影響を与えません。

[過去 x 日間にアクセスされたファイル]方式を選択した場合、[バックアップジョブ実行日から起算して過去 x 日以内にアクセスのあったファイルをすべてバックアップする]フィールドで、過去何日間にアクセスされたデータをバックアップするのかを指定することができます。

このオプションは、前回のボリュームの完全バックアップ以降に作成または変更されたファイルをバックアップする差分バックアップと似ていますが、指定した日数前から現在までにアクセスしたデータがバックアップに含まれている点が異なります。このオプションでは、障害の発生したサーバーにワーキングセットのみをリストアするだけでシステムをリカバリし、後で必要に応じて、最新の完全バックアップをリストアすることによって、リカバリに要する時間を短縮することができます。

ワーキングセットバックアップのリストアのみでシステムの運用に必要なデータのリストアができるように、[バックアップジョブ実行日から起算して過去 x 日以内にアクセスのあったファイルをすべてバックアップする]フィールドには、少なくとも 30 日間を指定することをお勧めします。ワーキングセットバックアップ方式には、差分または増分バックアップ方式よりも多くのメディアの容量が必要となります。ただし、マシン間でのアクティブデータの移動が多い環境やリストアに要する時間が問題になる場合には、データのリストアに要する時間が短くて済むワーキングセットバックアップ方式は、メディアにかかるコストを補うほどの価値があります。

p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。

バックアップ方式の長所と短所について

どのバックアップ方式にも長所と短所があります。

p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。

表 5-2 バックアップ方式の長所と短所

方式	長所	短所
完全	<ul style="list-style-type: none"> ■ ファイルを簡単に見つけられる: 完全バックアップにはデバイス上のすべてのデータが含まれているため、リストアに必要なファイルを見つけるのに、いくつものメディアを検索する必要はありません。 ■ システム全体の最新のバックアップが、常に単一のメディアまたはメディアセットに格納されている: システム全体のリストアが必要な場合、最新のすべての情報が前回のバックアップに格納されています。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 冗長なバックアップ: ファイルサーバー上のファイルの大多数は変更の頻度がきわめて少ないため、最初の完全バックアップ以降のものは、すでにバックアップされているもののコピーにすぎません。そのために、メディアの使用量に無駄が生じます。 ■ バックアップに要する時間が長い: 完全バックアップの実行には時間がかかります。バックアップするデバイスがネットワーク上にある場合は特に顕著です (エージェントワークステーションやリモートサーバーなどのバックアップ)。

方式	長所	短所
差分	<ul style="list-style-type: none"> ■ ファイルを簡単に見つけられる: 差分バックアップ方式でバックアップしているシステムのリストアに必要なのは、前回の完全バックアップと前回の差分バックアップの2つだけです。前回の完全バックアップと、それ以降のすべての増分バックアップが必要な増分バックアップ方式と比較して、必要なファイルを短時間で探すことができます。 ■ バックアップとリストアに要する時間が短い: 差分バックアップ方式は完全バックアップ方式よりもバックアップに要する時間が短く、増分バックアップ方式よりもリストアに要する時間が短くて済みます。前回の完全バックアップメディアと前回の差分バックアップメディアのみでデバイスのリストアが実行でき、短時間でディザスタリカバリを行うことができます。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 冗長なバックアップ: 前回の差分バックアップ以降修正されていないファイルも今回の差分バックアップに含まれます。
増分	<ul style="list-style-type: none"> ■ メディアを効率的に使用できる: 前回のバックアップ以降に変更されたファイルのみをバックアップするため、メディアの容量が少なくて済みます。 ■ バックアップに要する時間が短い: 完全バックアップおよび差分バックアップ方式よりも短時間でバックアップが完了します。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 複数のメディアにバックアップが分散する: ディザスタリカバリ時に複数のメディアが必要なため、デバイスのリカバリに要する時間が長くなります。また、システムのリカバリにはメディアを正しい順序で使用する必要があります。

方式	長所	短所
ワーキングセット	<ul style="list-style-type: none"> ■ ワーキングセット方式でバックアップされているシステムのリストアに必要なものは、前回のワーキングセットバックアップメディアと前回の完全バックアップメディアのみです。 ■ ワーキングセットのリストアを実行するだけで必要なデータのリストアが行えるため、完全バックアップのリストア後に差分バックアップやすべての増分バックアップのリストアが必要な方式よりも、短時間でシステムをリカバリすることができます。 ■ ワーキングセットバックアップの実行に要する時間は完全バックアップよりも短時間で済みます。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ [過去 x 日間にアクセスされたファイル]方式が利用できるのは、最終アクセス日時をサポートしているプラットフォーム(Windows、NetWare および UNIX)のみです。これ以外のプラットフォームでワーキングセットバックアップを選択した場合は、差分バックアップとして機能します。

修正日時とバックアップ方式について

[完全 - 選択したファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする]、[差分 - 修正日時を使用してバックアップする]、[増分 - 修正日時を使用してバックアップする]を使用するように選択した場合は、ファイルがバックアップ済みかどうかの決定に、アーカイブビットではなく、修正日時が使用されます。

完全または増分バックアップを実行すると、バックアップを開始した日時が **Backup Exec** データベースに記録されます。次回に増分または差分バックアップを開始すると、システムの時刻と **Backup Exec** データベースに記録されているバックアップ時刻が比較されます。ファイルシステムの時刻がデータベースの時刻より新しい場合は、そのファイルはバックアップされます。

メモ: ファイルがコピーされるか、または移動されるとき、ファイルの前回修正した日付とタイムスタンプは変わりません。ファイルの修正日時が以前のバックアップの修正日時より古ければ、そのファイルはバックアップされません。ファイルが確実に保護されるようにするには、ファイルをコピーまたは移動した後に完全バックアップを実行してください。

Advanced Disk-based Option がある場合は、合成バックアップを実行して、コピーまたは移動されたファイルが保護されることを確認できます。

増分バックアップを実行すると、新しい時刻が **Backup Exec** データベースに記録されます。差分バックアップの場合は、データベースの時刻は更新されません。

修正日時を使用すると、UNIX など、アーカイブビットを使用しないファイルシステムで差分バックアップを実行することができます。

ファイルがバックアップ済みかどうかを調べるために修正日時を使用する場合は、完全バックアップと増分バックアップ (または完全バックアップと差分バックアップ) で同じ選択リストを使用する必要があります。

p.279 の「[選択リストについて](#)」を参照してください。

[完全 - 修正日時を使用してバックアップする]バックアップ方式では、完全バックアップジョブが正常に完了した場合のみ、バックアップ時刻が Backup Exec データベースに追加されます。完全バックアップジョブが正常に完了しなかった場合、差分または増分の修正日時バックアップ方式を使用する以降のバックアップジョブで、前回の完全バックアップ以降に変更されたデータだけでなくすべてのデータがバックアップされます。

Windows NTFS 変更ジャーナルによるファイル変更の判定について

Windows 2000 以上のシステムでは、NTFS 変更ジャーナルに記録されている情報を使用するように設定すると、増分および差分バックアップのパフォーマンスを強化することができます。ファイルシステムでの変更内容のすべてが変更ジャーナルに記録されます。変更ジャーナルを使用するように設定し、バックアップ方式として [差分 - 修正日時を使用してバックアップする] または [増分 - 修正日時を使用してバックアップする] を選択した場合は、変更の有無を判定するためにすべてのファイルをスキャンするのではなく、変更ジャーナルをスキャンして変更ファイルのリストを取得するため、増分または差分バックアップに要する時間が短縮されます。

バックアップするデータの選択について

バックアップジョブを設定するときには、バックアップするデータを選択します。[バックアップジョブのプロパティ] ダイアログボックスの選択ペインで、バックアップする項目を選択します。

バックアップ選択ペインに表示されるアイコンのリストは次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-12>

バックアップするデータを選択する方法はいくつかあります。ドライブ全体、フォルダ、ファイル、システム状態、ネットワーク共有、Backup Exec エージェントボリュームまたはユーザー定義選択項目を選択することができます。また、[ファイル選択の詳細設定]機能を使用して、特定のファイルまたは特定のファイルの種類を含めたり除外したりすることもできます。さらに、選択リストを作成して、いくつものバックアップに再利用することができます。

メモ: バックアップするファイルの表示には、ログオンしているアカウントに所定の権限が必要です。

表示されている項目を展開するには、項目の左側のプラス記号 (+) をクリックするか、項目名をダブルクリックします。表示を省略するには、項目の左側のマイナス記号 (-) をクリックするか、項目名をダブルクリックします。

項目の内容を表示するには、その項目のアイコンをダブルクリックします。項目の内容が [バックアップ選択] ビューの右側の表示領域に表示されます。すべての項目 ([システム状態] は除く) について、表示されているフォルダやサブフォルダをクリックすると、どちらのウィンドウからでもファイルの表示階層レベルを変更することができます。

リモート選択項目を表示するときに、リソースおよびデバイスを展開するには、有効なログオンアカウントが必要です。デフォルトのログオンアカウントでリモート選択項目にアクセスできない場合は、既存の別のログオンアカウントを選択するか、目的の選択項目にアクセスできるログオンアカウントを新規に作成するダイアログボックスが表示されます。

データを選択するには、バックアップするドライブやディレクトリの左側のチェックボックスをオンにします。

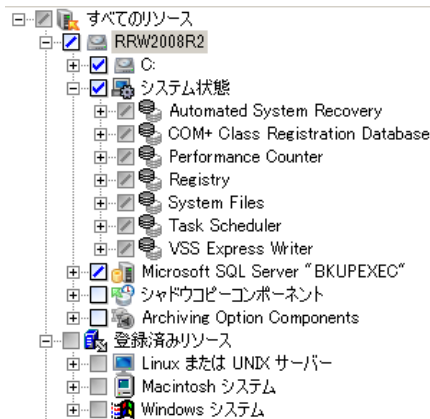
図 5-1 データの選択

グレー表示のチェックボックスに斜線が表示されている場合は、そのチェックボックスの項目自体は選択できませんが、下位の項目に選択されているものがあることを示す

チェックボックス内の斜線は、このディレクトリまたはドライブレベルの下位の項目に選択されているものがあることを示す

チェックボックス内のチェックマークは、このディレクトリまたはドライブレベルの項目またはその下に存在するすべての項目が選択されていることを示す

空白のチェックボックスは、その項目を選択できることを示す



バックアップ選択項目でのコンピュータの完全修飾名の使用について

Backup Exec では、コンピュータ名を入力できる場所にはコンピュータの完全修飾名を入力できます。また、コンピュータ名が一覧表示される場所にコンピュータの完全修飾名を表示できます。

コンピュータの完全修飾名には、次のルールが適用されます。

- 各ラベル (ドット間の文字列) の最大文字数は 63 です。
- 完全修飾名の最大合計文字数は 254 です。この数には、ドットは含まれますが、¥¥ は含まれません。

■ 名前には *|<>? の文字は使用できません。

コンピュータの完全修飾名を確認するには、[コントロールパネル]から[システム]>[コンピュータ名]を選択します。[フル コンピュータ名]フィールドに完全修飾名が表示されます。

選択リストでは、コンピュータの完全修飾名と非修飾名を一緒に使用しないでください。完全修飾名を使用することをお勧めします。

たとえば、**Test_Computer** という名前のコンピュータを使用している場合、選択できるコンピュータ名は 2 つあります。1 つは、**Test_Computer** です。完全修飾では、**Test_Computer.domain.company.com** になります。この場合、両方の名前が同じコンピュータを示していたとしても、**Backup Exec** では、それぞれの名前は別のコンピュータとして扱われます。短いコンピュータ名を使用するバックアップジョブの場合、カタログに短いコンピュータ名が含まれます。完全修飾名を使用するバックアップジョブの場合、カタログに完全修飾名が含まれます。

バックアップ選択リストのコンピュータ名のノードについて

[すべてのリソース]の下の最初のノードには、**Backup Exec** がインストールされているコンピュータの名前が表示されます。

コンピュータ名のノードには次のサブノードが含まれます。

表 5-3 コンピュータ名のノードのサブノード

サブノード名	説明
ローカルドライブ	メディアサーバー上に物理的に存在する CD-ROM やハードディスクが含まれています。
シャドウコピーコンポーネント (Windows Server 2003/2008)	Microsoft のボリュームシャドウコピーサービスを使用して、Windows Server 2003/2008 リソースに存在する、重要なオペレーティングシステムやアプリケーションサービスのデータ、および他社製アプリケーションやユーザーのデータを保護します。

サブノード名	説明
システム状態	<p>コンピュータ名のノードを選択すると必ずバックアップされるシステム固有のデータの集まりです。[システム状態]はバックアップすることをお勧めします。ただし、サーバー上のリソースと同時にバックアップしない場合は、[システム状態]の左側のチェックボックスをオフにします。[システム状態]のリソースを個別に選択したり展開することはできません。これらのリソースは、個別にではなく1つの集まりとしてバックアップされません。</p> <p>[システム状態]に対して実行できるのは、完全バックアップのみです。ただし、同時に選択した他の項目については、他のバックアップ方式を使用することができます。リモートコンピュータに Backup Exec Remote Agent がインストールされている場合は、リモートコンピュータ上の[システム状態]をバックアップすることができます。[システム状態]について詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。</p>
Active Directory Application Mode	<p>Active Directory Application Mode (ADAM) リソースのバックアップが可能な場合にのみ表示されます。ADAM がシャドワコピーコンポーネントである場合でも、[シャドワコピーコンポーネント]ノードの選択時に[Active Directory Application Mode]ノードは自動的に選択されません。ADAM リソースをバックアップする場合は、[Active Directory Application Mode]ノードを選択する必要があります。</p>
Backup Exec データベース	<p>Backup Exec のジョブ、スケジュール、ジョブ履歴、通知、アラート、デバイス、メディア、カタログインデックスデータなどが含まれています。</p>
ユーティリティパーティション	<p>システムにインストールされていてバックアップ可能なユーティリティパーティションが含まれています。個々のユーティリティパーティションオブジェクトには、[ディスク <i>disk_number</i> 上のユーティリティパーティション](例: [ディスク 0 上のユーティリティパーティション]) という名前が付けられ、展開することはできません。ディザスタリカバリの準備など、システム全体のバックアップを実行するときに、ユーティリティパーティションをバックアップすることをお勧めします。ユーティリティパーティションは個々にバックアップすることが可能です。システムにユーティリティパーティションがない場合、このリソースは利用することができません。ユーティリティパーティションを参照したりバックアップするには、管理者権限が必要です。</p>
EFIシステムパーティション	<p>コンピュータ上に Extensible Firmware Interface (EFI) システムパーティションが存在する場合に表示されます。多くの場合、各コンピュータに存在する EFI システムパーティションは 1 つだけです。ただし、コンピュータに複数の EFI システムパーティションが存在する場合、アクティブなパーティションのみが表示されます。</p>

p.868 の「**Active Directory Recovery Agent** の動作」を参照してください。

バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードについて

[登録済みリソース]ノードには、メディアサーバーに情報を公開するように設定されたリモートコンピュータが表示されます。使用するリモートコンピュータの種類によっては、[登録済みリソース]ノードの下に複数のノードが表示される場合があります。

表示されるノードは次のとおりです。

- **Linux** または **UNIX** サーバー
 p.1831 の「[メディアサーバーへの Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの公開について](#)」を参照してください。
- **Macintosh** サーバー
 p.1831 の「[メディアサーバーへの Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの公開について](#)」を参照してください。
- **NetWare Agent**
 p.1881 の「[NetWare Agent リストへの NetWare サーバーの公開について](#)」を参照してください。
- **Windows** システム
 p.1902 の「[メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について](#)」を参照してください。

[**Windows** システム]ノードから、リモート **Windows** コンピュータを追加または削除できます。リモートコンピュータを追加または削除した場合、[**Windows** システム]ノードにその変更が反映されるまでに数分かかる場合があります。

Backup Exec では、次のような場合にリモートコンピュータが[**Windows** システム]ノードから自動的に削除されます。

- リモートコンピュータがネットワークから切断された場合。
- **Remote Agent** がリモートコンピュータからアンインストールされた場合。

メディアサーバーがリモートコンピュータからの公開情報を再び受信すると、[**Windows** システム]ノードにコンピュータ名が再び追加されます。

メディアサーバーが 24 時間以内に公開情報を受信しない場合、リモートコンピュータ名の横にユーザーに注意を促すアイコンが表示されます。このアイコンは、13 日間表示されます。

メディアサーバーが公開情報を受信できない場合、次の原因が考えられます。

- **Remote Agent** 上で公開オプションが無効になっている。
- 公開先リストからメディアサーバーが削除されている。

バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードへの Windows システムの追加

[登録済みリソース]ノードに Windows システムを追加するには、リモートコンピュータの名前または IP アドレスが必要です。

メモ: ノードの下にコンピュータ名が表示されるまで数分かかる場合があります。

バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードに Windows システムを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

ポリシーに関連付けされているバックアップ [バックアップ選択リスト]ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

ポリシーに関連付けされていないバックアップ [ジョブ]ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 バックアップ選択ツリーで、[登録済みリソース]ノードを展開します。
- 5 [Windows システム]を右クリックします。
- 6 [Windows システムの追加]をクリックします。
- 7 [システム名]フィールドに、追加する Windows コンピュータの名前を入力します。
- 8 次のいずれかを実行します。

Remote Agent を Windows コンピュータにインストールして[登録済みリソース]ノードに追加する方法 [Remote Agent をインストールして[登録済みリソース]に追加する]を選択します。

このオプションを選択した場合、ダイアログボックスを完了するとインストールウィザードが表示されます。

p.129 の「[Remote Agent for Windows Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

Remote Agent がすでにインストールされている Windows コンピュータを追加する方法 [Remote Agent がインストールされているシステムを追加する]を選択します。

- 9 [ログオンアカウント]フィールドで、リモートコンピュータで使用するログオンアカウントを選択します。新しいログオンアカウントを代わりに追加するには[新規]をクリックします。
- 10 [OK]をクリックします。

バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードからの Windows システムの削除

Windows システムは、[登録済みリソース]ノードからいつでも削除することができます。

メモ: ノードからコンピュータ名が削除されるまで数分かかる場合があります。

バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードから Windows システムを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

ポリシーに関連付けられているバックアップ [バックアップ選択リスト]ペインで、使用するバックアップジョブを使用する方法 [バックアップ選択リスト]ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

ポリシーに関連付けされていないバックアップ [ジョブ]ペインで、使用するバックアップジョブを使用する方法 [ジョブ]ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 バックアップ選択ツリーで、[登録済みリソース]ノードを展開して、[Windows システム]ノードを展開します。
- 5 削除する Windows システムを右クリックします。
- 6 [[登録済みリソース]から削除]をクリックします。

[Windows システムの追加]オプション

バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードに Windows システムを追加できます。

p.270 の「バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードへの Windows システムの追加」を参照してください。

表 5-4 [Windows システムの追加]オプション

項目	説明
システム名	追加するリモートコンピュータの名前かIPアドレスを指定します。
Remote Agent をインストールして[登録済みリソース]に追加する	リモートコンピュータに Remote Agent をインストールし、[登録済みリソース]にリモートコンピュータを追加します。
Remote Agent がインストールされているシステムを追加する	[登録済みリソース]ノードにリモートコンピュータを追加します。
ログオンアカウント	リモートコンピュータで使うログオンアカウントを指定します。[Remote Agent をインストールして[登録済みリソース]に追加する]を選択した場合、このオプションは利用できません。
新規	リモートコンピュータで使う新しいログオンアカウントを選択できます。[Remote Agent をインストールして[登録済みリソース]に追加する]を選択した場合、このオプションは利用できません。

バックアップ選択リストの[ドメイン]ノードについて

[ドメイン]リソースには、[Active Directory ドメイン]および[Microsoft Windows Network]が含まれます。[Microsoft Windows Network]ノードを使用すると、Microsoft Windows ネットワーク内のリソースを参照できます。

[Active Directory ドメイン]ノードを使用すると、Active Directory ドメインを参照できます。Backup Exec によってメディアサーバーが属する Active Directory ドメインが自動的に検出され、バックアップ選択リストに表示されます。バックアップ選択リストに Active Directory ドメインを手動で追加することもできます。

[Active Directory ドメイン]ノード自体はバックアップ対象として選択できません。Active Directory ドメインを参照するには、ノードを展開する必要があります。

Active Directory ドメインを追加する場合、ドメインの完全修飾名を使用する必要があります。ドメインの完全修飾名は、domain.companyname.com のように指定します。

ドメインの完全修飾名には、次のルールが適用されます。

- 各ラベル (ドット間の文字列) の最大文字数は 63 です。
- ドメインの完全修飾名の最大合計文字数は 254 です。この数には、ドットは含まれますが、¥¥ は含まれません。
- 名前には * | < > ? の文字は使用できません。

[Active Directory ドメイン] ノードへの Active Directory ドメインの追加

Active Directory ドメインの完全修飾名が必要です。

Active Directory ドメインを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの [ジョブセットアップ] をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

ポリシーに関連付けられているバックアップ [バックアップ選択リスト] ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

ポリシーに関連付けされていないバックアップ [ジョブ] ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

- 3 タスクペインの [一般タスク] の下にある [プロパティ] をクリックします。
- 4 バックアップ選択ツリーで、[ドメイン] ノードを展開します。
- 5 [Active Directory ドメイン] を右クリックします。
- 6 [Active Directory ドメインの管理] をクリックします。
- 7 [名前] ボックスに、ドメインの完全修飾名を入力します。
- 8 [追加] をクリックします。
- 9 [閉じる] をクリックします。

[Active Directory ドメイン] ノードからの Active Directory ドメインの削除

必要なくなった Active Directory ドメインは、[Active Directory ドメイン] ノードから削除できます。

Active Directory ドメインを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの [ジョブセットアップ] をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

ポリシーに関連付けられているバックアップ [バックアップ選択リスト] ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

ポリシーに関連付けされていないバックアップ [ジョブ] ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 バックアップ選択ツリーで、[ドメイン]ノードを展開します。
- 5 [Active Directory ドメイン]を右クリックします。
- 6 [Active Directory ドメインの管理]をクリックします。
- 7 [ドメイン]リストで削除するドメインを選択します。
- 8 [削除]をクリックします。
- 9 [閉じる]をクリックします。

[Active Directory ドメインの管理]オプション

バックアップ選択リストの[Active Directory ドメイン]に対して Active Directory ドメインの追加または削除を行うことができます。

p.273の「[Active Directory ドメイン]ノードへの Active Directory ドメインの追加」を参照してください。

p.273の「[Active Directory ドメイン]ノードからの Active Directory ドメインの削除」を参照してください。

表 5-5 [Active Directory ドメインの管理]オプション

項目	説明
名前	バックアップ選択リストの[Active Directory ドメイン]で追加または削除の対象となる Active Directory ドメインの名前を指定します。
ドメイン	バックアップ選択リストの[Active Directory ドメイン]に現在存在するドメインを一覧表示します。
追加	指定した新しいドメインをバックアップ選択リストの[Active Directory ドメイン]に追加します。
削除	[ドメイン]リストで選択したドメインをバックアップ選択リストの[Active Directory ドメイン]から削除します。

バックアップ選択リストの[ユーザー定義選択]ノードについて

共有へのショートカットを作成し、ユーザー定義選択項目として保存することができます。この機能を使用して、バックアップジョブの作成時に、非常に長いパスを指定する必要の

ある共有、またはオフラインの共有に簡単にアクセスすることができます。コンピュータが稼動している場合でも、コンピュータの場所の検索に使用するネットワークリソースがオフラインのために、その共有にアクセスできないことがあります。コンピュータがインターネット上に存在し、社内のプライベートネットワーク内からアクセスできるのに、名前の指定や通常の閲覧方法で場所を確定できない場合などが該当します。

p.275の「[ユーザー定義選択]ノードへのユーザー定義選択項目の追加」を参照してください。

p.276の「[ユーザー定義選択]ノードからのユーザー定義選択項目の削除」を参照してください。

[ユーザー定義選択]ノードへのユーザー定義選択項目の追加

共有への直接アクセスを設定するには、Universal Naming Convention (UNC) パス名またはコンピュータ名、あるいはコンピュータの完全修飾名を入力します。指定した選択項目は、バックアップ処理の対象として、[ユーザー定義選択]ノードで選択することができます。

表 5-6 ユーザー定義選択項目の書式

書式の種類	例
UNC 名	¥¥mycomputer¥shared¥temp
コンピュータの完全修飾名	¥¥mycomputer.domain.companyname.com¥temp

p.266の「バックアップ選択項目でのコンピュータの完全修飾名の使用について」を参照してください。

[ユーザー定義選択]ノードにユーザー定義選択項目を追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

ポリシーに関連付けされているバックアップ [バックアップ選択リスト] ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

ポリシーに関連付けされていないバックアップ [ジョブ] ペインで、使用するバックアップジョブをクリックします。

- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。

- 4 バックアップ選択ツリーで、[ユーザー定義選択]を右クリックし、次に[ユーザー定義の選択項目の管理]をクリックします。
- 5 [名前]フィールドに、サーバー名、ボリューム名、コンピュータ名、コンピュータの完全修飾名のいずれかを入力します。
TCP/IP アドレスをユーザー定義選択項目として入力することができますが、できるだけ避けるようにします。**Backup Exec** では、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) 環境での IP アドレスのユーザー定義選択項目はサポートされていません。
- 6 [追加]をクリックします。
- 7 選択項目の追加が終了したら、[閉じる]をクリックします。

[ユーザー定義選択]ノードからのユーザー定義選択項目の削除

必要なくなったユーザー定義選択項目は、[ユーザー定義選択]ノードから削除できます。

p.274の「[バックアップ選択リストの\[ユーザー定義選択\]ノードについて](#)」を参照してください。

[ユーザー定義選択]ノードからユーザー定義選択項目を削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

ポリシーに関連付けられているバックアップ [バックアップ選択リスト]ペインで、使用するジョブを使用する方法
バックアップジョブをクリックします。

ポリシーに関連付けされていないバックアップ [ジョブ]ペインで、使用するバックアップジョブを使用する方法
ジョブをクリックします。

- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 バックアップ選択ツリーで、[ユーザー定義選択]を右クリックし、次に[ユーザー定義の選択項目の管理]をクリックします。
- 5 [定義した選択]リストで、削除するユーザー定義選択項目を選択します。
- 6 [削除]をクリックします。
- 7 [閉じる]をクリックします。

[ユーザー定義選択]オプション

バックアップ選択リストの[ユーザー定義選択]に対してユーザー定義選択項目の追加または削除を行うことができます。

p.275の「[ユーザー定義選択]ノードへのユーザー定義選択項目の追加」を参照してください。

p.276の「[ユーザー定義選択]ノードからのユーザー定義選択項目の削除」を参照してください。

表 5-7 [ユーザー定義選択]オプション

項目	説明
名前	バックアップ選択リストの[ユーザー定義選択]での追加または削除の対象となるユーザー定義選択項目の名前を指定します。
定義した選択	バックアップ選択リストの[ユーザー定義選択]で現在定義されているユーザー定義選択項目を一覧表示します。
追加	指定した新しいユーザー定義選択項目をバックアップ選択リストの[ユーザー定義選択]に追加します。
削除	[定義した選択]リストで選択したドメインをバックアップ選択リストの[ユーザー定義選択]から削除します。

Backup Exec での Microsoft バーチャルハードディスク (VHD) ファイルの管理について

Microsoft Windows 2008 R2 は、ネイティブバーチャルハードディスク (VHD) ファイルを作成する機能を提供します。VHD ファイルは単一ファイルに含まれているバーチャルハードディスクです。VHD ファイルについて詳しくは、Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。

Backup Exec はネイティブ VHD ファイルをバックアップおよびリストアする機能を提供します。ネイティブ VHD ファイルがマウントされていない場合は、通常の保存先ボリュームをバックアップできます。

ネイティブ VHD ファイルがドライブ文字または空のフォルダパスにマウントされている場合、ファイルはバックアップジョブの間にスキップされます。マウントされた VHD を選択リストの一部として含めることはできません。マウントされた VHD ファイルのデータをバックアップするには、バックアップ選択リストでマウントポイントを選択します。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

通常のリストアのジョブの一部としてネイティブ VHD ファイルをリストアできます。Microsoft Windows 2008 R2 を使う場合は、リストアジョブのリストア先をネイティブ VHD に変更することもできます。リストアジョブのリストア先をネイティブ VHD に変更する場合、Backup Exec はデータの保存につれて動的に拡張される VHD ファイルを作成します。ファイルはネイティブ VHD ファイルの最大サイズである 2040 GB に達するまで拡張されます。リストア先を変更されたすべてのバックアップセットのデータを持つ 1 つの VHD ファイルを作成するか、または各バックアップセットの VHD ファイルを作成できます。

p.625の「[ネイティブの Microsoft バーチャルハードディスク \(VHD\) ファイルへのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

ユーザー定義の Microsoft Windows 分散ファイルシステムデータをバックアップする方法

Microsoft 分散ファイルシステム (DFS) 機能は DFS 名前空間と DFS の複製技術で構成されています。ユーザー定義の DFS の構成設定とファイルシステムのデータをバックアップする場合、シマンテック社は特定のバックアップ選択項目を推奨します。

Backup Exec では次のものがサポートされています。

- Windows Server 2003 以前のバージョン用の DFS
- Windows Server 2003 R2 以上のバージョン用の DFS 名前空間
- Windows Server 2003 R2 以上のバージョン用の DFS 複製
- Windows Server 2003 以前のバージョン用のファイル複製サービス (FRS)

DFS に対しては次のバックアップ選択項目が推奨されています。

表 5-8 DFS の推奨バックアップ選択項目

バックアップする DFS 項目	推奨バックアップ選択項目
スタンドアロン DFS または DFS 名前空間の構成設定	次の選択項目をバックアップしてください。 <ul style="list-style-type: none">■ DFS ルートをホストするサーバーの[システム状態]レジストリ■ ホストのターゲットで共有されるすべてのリモートサーバーの[システム状態]レジストリ

バックアップする DFS 項目	推奨バックアップ選択項目
ドメインベースの DFS または DFS 名前空間の構成設定	<p>次の選択項目をバックアップしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ターゲットサーバーの[システム状態]レジストリ ■ DFS ルートをホストするドメインコントローラの Active Directory ■ ホストのターゲットで共有されるすべてのリモートサーバーの[システム状態]レジストリ <p>メモ: Granular Recovery Technology オプションが有効になっている Active Directory のバックアップからドメイン DFS または DFSN の構成設定はリストアできません。</p>
DFS 名前空間の共有データ (Microsoft の複製技術が使われていない場合)	共有フォルダまたは共有ターゲットをホストするサーバーのシステムボリューム
Windows Server 2003 以前のバージョン用の FRS 構成設定	<p>複製データをホストするドメインコントローラの[システム状態]レジストリと Active Directory</p> <p>メモ: Granular Recovery Technology オプションが有効になっている Active Directory のバックアップから FRS の構成設定はリストアできません。</p>
Windows Server 2003 以前のバージョン用の FRS データ	複製データをホストするサーバーのシステムボリューム

選択リストについて

選択リストを使用すると、頻繁にバックアップするファイルをすばやく簡単に選択することができます。デバイス、ディレクトリ、ファイルを選択して、その選択内容を選択リストとして保存し、定期的なバックアップや 1 回限りのバックアップの実行時に使用することができます。選択リストは、バックアップする内容の定義で、バックアップジョブの作成時に自動的に作成されます。選択リストとポリシーを組み合わせると、簡単にバックアップジョブを作成することができます。

Backup Exec は、選択リストの中にリソースとして存在しない項目がある場合、それを検出し、ユーザーに通知します。この通知は、ローカル選択の選択リストがロードされる時や、ツリー内でリモートサーバーが展開されたときに行われます。

また、特定の選択リストを含むジョブの完了を通知することもできます。この機能を使用すると、特定の選択項目のセットがバックアップされたことを知る必要のあるユーザーに通知することができます。通知には、ジョブの完了状態が含まれます。

選択リストに関連付けられているジョブのジョブ履歴を表示できます。

- p.298 の「バックアップ選択リストの履歴の表示」を参照してください。
- p.280 の「選択リストの作成」を参照してください。
- p.284 の「選択リストのマージ」を参照してください。
- p.284 の「選択リストの置換」を参照してください。
- p.285 の「選択リストのコピー」を参照してください。
- p.287 の「選択リストの削除」を参照してください。
- p.288 の「選択リストの編集」を参照してください。
- p.292 の「各コンピュータまたはリソースに対する個別の選択リストの作成」を参照してください。

選択リストの作成

バックアップ選択リストは、バックアップの対象とするリソースのリストです。作成した選択リストは、任意のバックアップジョブまたはポリシーで使用できます。

新しい選択リストを作成したときの Backup Exec の動作は、選択リストに対する Backup Exec のデフォルトオプションの設定に応じて、次のいずれかになります。

- 選択された各コンピュータに対して、個別の選択リストを作成。
- 選択された各リソースに対して、個別の選択リストを作成。
- 選択されたコンピュータまたはリソースの数に関係なく、1つの選択リストを作成。

p.279 の「選択リストについて」を参照してください。

選択リストを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[選択リストタスク]の下にある[新規バックアップ選択リスト]を選択します。
- 3 選択ペインで、バックアップするリソースを選択します。
- 4 必要なオプションを選択します。

p.281 の「[新規バックアップ選択リスト]オプション」を参照してください。

- 5 (オプション) バックアップする選択リスト内のリソースの順序を変更する場合は、[プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[リソースの順序]をクリックします。

p.323 の「バックアップの[リソースの順序]オプション」を参照してください。

- 6 (オプション) リソースへのアクセスに使用するログオンアカウントを変更またはテストする場合は、[プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[リソースクレデンシャル]をクリックします。

p.322 の「[リソースクレデンシャル]オプション」を参照してください。

- 7 (オプション)選択リストに関連付けられたジョブを処理する際の優先度を設定する場合、またはリスト内のリソースに対してバックアップが可能な時間範囲を設定する場合は、[プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[優先度と有効時間帯]をクリックします。
- p.291の「[\[優先度と有効時間帯\]バックアップオプション](#)」を参照してください。
- 8 (オプション)この選択リストを含むジョブの完了をユーザーに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト別の通知]をクリックします。
- p.670の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。
- 9 (オプション)選択リスト内のリソース用の優先サーバーを選択するには、[プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[優先サーバー]をクリックします。
- p.422の「[バックアップの\[優先サーバー\]オプション](#)」を参照してください。
- 10 CASO環境用の選択リストを作成する場合は、次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイス]をクリックします。
 - [選択リストのバックアップを、プールの次のメディアサーバー上のデバイスに制限する]にチェックマークを付けます。
 - ドロップダウンメニューでメディアサーバーを選択します。
- 11 [OK]をクリックします。

[新規バックアップ選択リスト]オプション

バックアップ選択リストは、バックアップの対象とするリソースのリストです。

p.280の「[選択リストの作成](#)」を参照してください。

[新規バックアップ選択リスト]ダイアログボックスには次のオプションがあります。

表 5-9 [新規バックアップ選択リスト]オプション

項目	説明
選択リスト名	この選択リストの名前を指定します。
既存の選択リストを使用する	既存の選択リストをロードするか、複数の選択リストをマージします。 p.284の「 選択リストのマージ 」を参照してください。
選択リストの説明	この選択リストについての説明です。

項目	説明
インクルード/エクスクルード	[ファイル選択の詳細設定]を使用してバックアップするファイルを選択できます。 p.282の「バックアップの[インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション」を参照してください。
サブディレクトリを含める	選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。
ファイルの詳細を表示する	選択に利用可能なファイルの詳細を表示します。
リソース別の表示	ツリービューにリソースを表示できます。
選択の詳細の表示	選択項目をディレクトリとファイルの一覧形式で表示できます。

バックアップの[インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション

ファイル選択の詳細設定機能を使用してファイルの属性を指定し、バックアップするファイルを簡単に選択または選択を解除することができます。

[インクルードまたはエクスクルードの選択]ダイアログボックスには次のフィールドがあります。

表 5-10 [インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション

オプション名	説明
一般	NDMP 以外の種類のリソースを含めたり、除外することができます。
NDMP	NDMP のリソースを含めるか、または除外できます。
リソース	[バックアップジョブのプロパティ]ダイアログボックスで以前に選択したドライブとは異なるドライブのバックアップにファイルを含めるか、そのバックアップからファイルを除外できます。

オプション名	説明
パス	<p>含めるか除外する特定のファイルを含んでいるフォルダやサブフォルダの名前を指定します。</p> <p>ワイルドカード文字を使用できます。疑問符 (?) を 1 文字の代わりに使用できます。2 つのアスタリスク (**) を任意の個数の文字の代わりに使用することができます。</p> <p>たとえば、Work Files サブフォルダが含まれている「マイドキュメント」フォルダが C: ドライブに存在するとします。Work Files サブフォルダには、さらに、1999、2000、2001 の 3 つのサブフォルダがあるものとします。さらに、これらのサブフォルダには Personnel サブフォルダが存在するとします。</p> <p>今、パスとして ¥My Documents¥¥Personnel と入力したとすると、次のサブフォルダが含まれるかまたは除外されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ C:¥My Documents¥Work Files¥2001¥Personnel ■ C:¥My Documents¥Work Files¥2000¥Personnel ■ C:¥My Documents¥Work Files¥1999¥Personnel <p>また、ワイルドカード ** の下位のすべてのサブフォルダが含まれるかまたは除外されます。ただし、含めたり除外したりされるサブフォルダの、[ファイル] フィールドに入力したファイル名と一致するファイルのみが含まれるかまたは除外されます。したがって、この例では、C:¥My Documents のすべてのサブフォルダがバックアップに含まれまたはバックアップから除外され、[ファイル] フィールドに入力したファイル名と一致するファイルのみが含まれるかまたは除外されます。</p> <p>パスを入力したら、[ファイル] フィールドにファイル名を入力します。</p>
ファイル	<p>バックアップに含めるかバックアップから除外するファイルを指定します。</p> <p>ファイルの指定には、ワイルドカードを使用することができます。疑問符 (?) を 1 文字の代わりに使用することができます。2 つのアスタリスク (**) を任意の個数の文字の代わりに使用することができます。</p> <p>たとえば、拡張子が .exe のファイルをすべて選択するには、**exe と入力します。</p> <p>ファイル名を入力したら、[インクルード]か[エクスクルード]かを指定します。</p>
インクルード	<p>選択したファイルがジョブに含まれるように指定します。このオプションはデフォルトです。</p>
エクスクルード	<p>選択したファイルがジョブから除外されるように指定します。</p>
サブディレクトリを含める	<p>選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。</p>
修正されたファイルのみ	<p>指定したパスの修正されたファイルを含めるか除外します。</p>

オプション名	説明
読み取り専用ファイルのみ	修正できないファイルを含めるか除外します。
ファイルの修正日	特定の期間に作成または修正されたファイルを含めるか除外します。期間の始まりと終わりの日を選択してください。
次の期間内にアクセスのなかったファイル	期間(日数)を指定し、その期間アクセスされていないファイルを含めるか除外します。このオプションは、システムから古いファイルを移動する場合に便利です。

選択リストのマージ

複数の選択リストと新しい選択リストをマージして新しい選択リストを作成することができます。

選択リストをマージまたは置換する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[選択リストタスク]の下にある[新規バックアップ選択リスト]を選択します。
- 3 [新規バックアップ選択リスト]ダイアログボックスで、選択リストに含めるリソースを選択します。
p.281の「[\[新規バックアップ選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [既存の選択リストを使用する]をクリックします。
- 5 以前に選択されたバックアップ選択項目とマージしたい選択リストを選択します。
p.285の「[\[既存の選択リストを使用する\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 [マージ]をクリックします。
- 7 [新規バックアップ選択リスト]ダイアログボックスで、必要なオプションを設定します。
p.280の「[選択リストの作成](#)」を参照してください。
- 8 [OK]をクリックします。

選択リストの置換

選択ツリー内の選択項目を他の選択リストと置換できます。

選択リストを置換する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[選択リストタスク]の下にある[新規バックアップ選択リスト]を選択します。

- 3 [新規バックアップ選択リスト]ダイアログボックスで、選択リストに含めるリソースを選択します。
p.281 の「[\[新規バックアップ選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [既存の選択リストを使用する]をクリックします。
- 5 以前に選択されたバックアップ選択項目を置き換えたい選択リストを選択します。
p.285 の「[\[既存の選択リストを使用する\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 [置換]をクリックします。
- 7 [新規バックアップ選択リスト]ダイアログボックスで、必要なオプションを設定します。
p.280 の「[選択リストの作成](#)」を参照してください。
- 8 [OK]をクリックします。

[既存の選択リストを使用する]オプション

新しい選択リストを作成するために選択リストをマージできます。また、既存の選択リストと選択項目を置換することもできます。

表 5-11 [既存の選択リストを使用する]オプション

項目	説明
名前	既存の選択リストの名前を表示します。
説明	既存の選択リストの説明を表示します。
プロパティ	選択した選択リストのプロパティを表示できます。
置換	[名前]列で選択した選択リストと選択のツリーのアイテムを置換します。
マージ	[名前]列で選択した選択リストと選択のツリーのアイテムをマージします。

選択リストのコピー

新しいメディアサーバー上に選択リストをコピーして再利用することができます。また同じメディアサーバーに選択リストをコピーし、新しい選択リストを作成するために設定を編集することもできます。

p.288 の「[選択リストの編集](#)」を参照してください。

選択リストをコピーする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [バックアップ選択リスト]ペインで、コピーしたい選択リストを右クリックし、[コピー]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。
p.286の「[選択リストのコピー]オプション」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

[選択リストのコピー]オプション

1つ以上のメディアサーバーに選択リストをコピーできます。

p.285の「[選択リストのコピー](#)」を参照してください。

表 5-12 [選択リストのコピー]オプション

項目	説明
このメディアサーバーへコピー	選択リストが現在存在するメディアサーバーに選択リストをコピーします。
その他のメディアサーバーへコピー	他のメディアサーバーに選択リストをコピーします。
名前	選択リストをコピーできる宛先メディアサーバーの名前を示します。
ログオンアカウント	各宛先メディアサーバーのログオンアカウントを示します。
追加	宛先リストに新しいメディアサーバーを追加できます。
編集	選択したメディアサーバーについての情報を編集できます。
削除	選択したメディアサーバーを宛先リストから削除します。
リストをインポート	メディアサーバーのリストをインポートします。
宛先メディアサーバーにすでに存在する同じ名前 前で選択リストを上書きする	コピーする選択リストと同じ名前の場合、宛先メディアサーバーの選択リストを上書きできます。

選択リストのバックアップジョブの保留

選択リストのバックアップを行うすべてのジョブの実行を保留し、ジョブを実行しないようにすることができます。ジョブの保留状態を変更するまで、そのジョブは実行されません。

選択リストのバックアップジョブを保留する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [バックアップ選択リスト]ペインでジョブの実行を保留にする選択リストを右クリックし、[この選択リストをバックアップするすべてのジョブを保留]をクリックします。一度に複数の選択リストを選択するには、**Ctrl**キーまたは**Shift**キーを押しながら他の選択リストをクリックしてください。

この選択リストのバックアップを行うジョブの実行が保留されます。

- 3 ジョブの保留を解除し、スケジュールに従ってジョブを実行するには、[この選択リストをバックアップするすべてのジョブの保留を解除]をクリックします。

選択リストの削除

選択リストを削除することができます。ただし、選択リストがポリシーに関連付けられている場合、選択リストを削除するには、ポリシーと選択リストの関連付けを解除する必要があります。

p.279の「[選択リストについて](#)」を参照してください。

[除外]選択リストは削除できません。

p.288の「[\[除外\]選択リストを編集する方法](#)」を参照してください。

選択リストを削除する方法

- 1 編集メニューで、[選択リストの管理]をクリックします。
- 2 削除する選択リストをクリックします。
- 3 [削除]をクリックします。
- 4 選択リストを削除するには[はい]を、削除をキャンセルするには[いいえ]をクリックします。

ジョブによって使用されている選択リストは削除できません。

- 5 [閉じる]をクリックします。

[選択リストの管理]オプション

既存の選択リストを削除または編集できます。

p.287の「[選択リストの削除](#)」を参照してください。

p.288の「[選択リストの編集](#)」を参照してください。

表 5-13 [選択リストの管理]オプション

項目	説明
名前	選択リストの名前を表示します。
種類	選択リストの種類を表示します。
編集	選択した選択リストを編集できます。
削除	選択した選択リストを削除します。

選択リストの編集

選択リストを編集すると、選択リストを使用しているすべてのジョブに影響を与えます。ただし、実行中のジョブによって使用されている選択リストを編集した場合、この選択リストに行った変更は、実行中のジョブに影響を与えません。特定のジョブの選択項目のみを変更する場合は、選択リストではなくジョブを編集します。

選択リスト上のリソースが存在しなくなった場合にそのリソースを削除するには、[選択の詳細の表示]タブを使用する必要があります。

選択リストを編集する方法

- 1 編集メニューで、[選択リストの管理]をクリックします。
- 2 編集する選択リストを選択します。
- 3 [編集]をクリックします。
- 4 選択リストのプロパティを編集します。
p.281の「[\[新規バックアップ選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

[除外]選択リストの編集

[除外]選択リストはいつでも変更できます。

p.342の「[バックアップファイルを選択または除外する方法](#)」を参照してください。

p.279の「[選択リストについて](#)」を参照してください。

[除外]選択リストを編集する方法

- 1 編集メニューで、[選択リストの管理]をクリックします。
- 2 [選択リストの管理]ダイアログボックスで、[除外]を選択します。
- 3 [編集]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。

[除外]選択リストが以前に編集されている場合 ■ 編集する選択ルールを選択します。
■ [編集]をクリックします。

[除外]選択リストを初めて編集する場合 [挿入]をクリックします。

- 5 選択リストのプロパティを編集します。
p.281の「[\[新規バックアップ選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 いずれかの選択ルールを削除する場合、次の手順を実行します。
 - 削除する選択ルールを選択します。
 - [削除]をクリックします。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 [閉じる]をクリックします。

[除外プロパティ]オプション

新しいファイルまたはフォルダを除外するか含めることができます。

p.288の「[\[除外\]選択リストの編集](#)」を参照してください。

表 5-14 [除外プロパティ]オプション

項目	説明
選択リスト名	選択リストの名前を表示します。[除外プロパティ]を編集すると、[除外]と表示されます。
選択リストの説明	[除外]選択リストについての説明です。[除外]選択リストの内容を覚えておくためにここに説明を入力できます。
選択の詳細の表示	[除外]選択リストの詳細を表示します。
編集	ファイルとフォルダを追加または削除するために[除外]選択リストを編集できます。また、選択基準を編集することもできます。
挿入	[除外]選択リストの基準と設定を作成できます。
削除	[除外]選択リストから基準と設定を削除できます。

選択リストの優先度と有効時間帯について

バックアップ選択リストを作成するとき、その選択リストに関連付けられたジョブを処理する際の優先度を指定できます。また、リスト内のリソースに対してバックアップを実行可能な時間範囲を設定できます。この時間範囲を有効時間帯と呼びます。選択リストに対して、デフォルトの有効時間帯を設定できます。新しい選択リストを作成するとき、デフォルトの有効時間帯が表示されます。ただし、選択リストでデフォルトの有効時間帯を使用するには、[毎日次の有効時間帯にだけ使用できるようにする]オプションを選択する必要があります。

p.291の「[選択リストの優先度と有効時間帯の設定](#)」を参照してください。

1つの選択リストに対して設定可能な有効時間帯は、1つだけです。また、有効時間帯は1週間のすべての曜日で同じになります。複数の選択リストをマージした場合または選択リストを置換した場合、元のリストの有効時間帯が使用されます。

有効時間帯以外の時間帯にジョブを実行するようにスケジュールを設定すると、そのジョブは実行されず、ジョブモニターに[無効なスケジュール]というジョブ状態が表示されます。たとえば、午後11:00から午前6:00までリソースをバックアップに利用できるように有効時間帯を設定すると想定します。この場合、バックアップジョブが午前7:00に実行されるようにスケジュールを設定すると、その時刻にはリソースが利用できないため、ジョブは実行されません。ジョブのスケジュールを設定する際には、リソースの有効時間帯の範囲内であることを確認してください。

すべての選択リストのデフォルトの優先度と有効時間帯の設定

選択リストに対して、デフォルトの有効時間帯を設定できます。新しい選択リストを作成するとき、デフォルトの有効時間帯が表示されます。ただし、選択リストでデフォルトの有効時間帯を使用するには、[毎日次の有効時間帯にだけ使用できるようにする]オプションを選択する必要があります。

p.290の「[選択リストの優先度と有効時間帯について](#)」を参照してください。

また、特定の選択リストの優先度を指定するか、有効時間帯を設定することもできます。

p.291の「[選択リストの優先度と有効時間帯の設定](#)」を参照してください。

すべての選択リストに対してデフォルトの優先度と有効時間帯を設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]を選択します。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[優先度と有効時間帯]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。

p.291の「[\[優先度と有効時間帯\]バックアップオプション](#)」を参照してください。

選択リストの優先度と有効時間帯の設定

バックアップ選択リストを作成するとき、その選択リストに関連付けられたジョブを処理する際の優先度を指定できます。

p.290の「[選択リストの優先度と有効時間帯について](#)」を参照してください。

また、選択リストに対してデフォルトの有効時間帯を設定することもできます。新しい選択リストを作成するとき、デフォルトの有効時間帯が表示されます。ただし、選択リストでデフォルトの有効時間帯を使用するには、[毎日次の有効時間帯にだけ使用できるようにする]オプションを選択する必要があります。

p.290の「[すべての選択リストのデフォルトの優先度と有効時間帯の設定](#)」を参照してください。

選択リストの優先度と有効時間帯を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[選択リストタスク]の下にある[新規バックアップ選択リスト]を選択します。
- 3 バックアップするデータを選択します。
- 4 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[優先度と有効時間帯]をクリックします。
- 5 必要なオプションを設定します。

p.291の「[\[優先度と有効時間帯\]バックアップオプション](#)」を参照してください。

[優先度と有効時間帯]バックアップオプション

バックアップ選択リストを作成するとき、その選択リストに関連付けられたジョブを処理する際の優先度を指定できます。また、リスト内のリソースに対してバックアップを実行可能な時間範囲を設定できます。

p.291の「[選択リストの優先度と有効時間帯の設定](#)」を参照してください。

表 5-15 [優先度と有効時間帯]バックアップオプション

項目	説明
ジョブの優先度	このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。 p.183の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。

項目	説明
このバックアップ選択リストを毎日次の有効時間帯にだけ使用できるようにする	<p>選択リストをバックアップで利用できる毎日の時間帯を指定する有効時間帯を有効にします。このオプションを選択しない場合、選択リストのリソースは常にバックアップで利用できます。</p> <p>Backup Exec は、ジョブを実行するときに、リソースの有効時間帯とジョブの開始時間帯の両方を考慮します。有効時間帯の範囲外で実行されるジョブをスケジュールすると、実行されません。</p> <p>Backup Exec は [ジョブモニター] で [スケジュールが無効] というジョブステータスを表示します。ジョブのスケジュールを設定する際には、ジョブの開始時間帯がリソースの有効時間帯の範囲内であることを確認してください。</p> <p>p.344 の「[スケジュール] オプション」を参照してください。</p>
有効になる日付	選択リストがバックアップのために利用可能となる最初の日付を指定します。選択リストは、この日付以降、毎日利用可能になります。
開始時刻	この選択リストをバックアップで利用できる最も早い時刻を指定します。
終了時刻	この選択リストをバックアップで利用できる最も遅い時刻を指定します。
この選択リストに対する自動キャンセルを有効にする	選択した時間 (時間または分単位) にジョブが完了しなかった場合、この選択リストに関連付けられているジョブをキャンセルします。経過時間は、ジョブの開始時刻ではなく、ジョブがキューに入った時刻から起算されます。
バックアップジョブが完了しない場合に、バックアップジョブをキャンセルする時間: ジョブ開始後	完了していないジョブが自動的にキャンセルされるまでの時間を、時間単位または分単位で指定します。デフォルトでは 3 時間です。

各コンピュータまたはリソースに対する個別の選択リストの作成

Backup Exec では、バックアップジョブの作成時以外に新しいバックアップ選択リストを作成する場合に、選択したリソースまたはコンピュータごとに異なるバックアップ選択リストを作成するためのデフォルトを設定できます。この機能は、バックアップジョブの作成中に選択リストを作成する場合は適用されません。

リソースまたはコンピュータごとに異なる選択リストを作成するように Backup Exec を設定した場合、選択リストの名前は、デフォルト名またはユーザー定義名のいずれかの後にバックアップ対象に選択したコンピュータまたはリソースの名前が付いたものになります。

各コンピュータまたはリソースに対する個別の選択リストを作成する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]を選択します。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[選択リスト]を選択します。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.293の「[選択リスト]のデフォルトオプション」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

[選択リスト]のデフォルトオプション

[選択リスト]のデフォルトオプションを使用すると、ジョブ以外のバックアップ選択リストを作成するときにリソースごとに個別の選択リストを作成できます。

p.292の「各コンピュータまたはリソースに対する個別の選択リストの作成」を参照してください。

表 5-16 [選択リスト]のデフォルトオプション

項目	説明
コンピュータごとに異なるバックアップ選択リスト	バックアップジョブ以外の選択リストを作成するときに選択するコンピュータごとに異なるバックアップ選択リストを作成します。
リソースごとに異なるバックアップ選択リスト	バックアップジョブ以外の選択リストを作成するときに選択するリソースごとに異なるバックアップ選択リストを作成します。
すべてのバックアップ対象に対して1つのバックアップ選択リスト	バックアップ用に選択したリソースの数またはコンピュータの数に関係なく、1つの選択リストを作成します。このオプションはデフォルトオプションです。

バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成

バックアップ選択リストは、次の条件に基づいてフィルタにかけることができます。

- 選択リスト名
- 選択リストの説明
- 選択リストによってバックアップされたコンピュータ
- リソースの種類
- ポリシー
- 保護されていない選択リスト

バックアップ選択リストのカスタムフィルタを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[カスタムフィルタタスク]の下の[カスタムフィルタの管理]をクリックします。
- 3 [新規]をクリックし、[バックアップ選択リストカスタムフィルタ]を選択します。
- 4 フィルタの一意の名前と説明を入力します。

5 必要に応じて次のオプションを設定します。

選択リスト名でフィルタをかける方法	[プロパティ]ペインの[条件]の下にある[選択リスト名]を選択します。 p.296の「 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[選択リスト名]オプション 」を参照してください。
選択リストの説明でフィルタをかける方法	[プロパティ]ペインの[条件]の下にある[説明]を選択します。 p.296の「 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[説明]オプション 」を参照してください。
Backup Execによって保護されるサーバーでフィルタをかける方法	[プロパティ]ペインの[条件]の下にある[保護対象サーバー]を選択します。 p.296の「 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[保護対象サーバー]オプション 」を参照してください。
リソースの種類でフィルタをかける方法	[プロパティ]ペインの[条件]の下にある[リソースの種類]を選択します。 p.296の「 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[リソースの種類]オプション 」を参照してください。
ポリシーでフィルタをかける方法	[プロパティ]ペインの[条件]の下にある[ポリシー]を選択します。 p.297の「 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[ポリシー]オプション 」を参照してください。
現在保護されていない選択リストでフィルタをかける方法	[プロパティ]ペインの[条件]の下にある[未保護の選択リスト]を選択します。 p.297の「 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[未保護の選択リスト]オプション 」を参照してください。

6 [OK]をクリックします。

[バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]オプション

バックアップ選択リストのカスタムフィルタを作成できます。

p.293の「[バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成](#)」を参照してください。

表 5-17 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]オプション

項目	説明
名前	カスタムフィルタの一意の名前を示します。
説明	カスタムフィルタの説明を示します。

[バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[選択リスト名]オプション

[選択リスト名]フィールドはカスタムフィルタを作成したい選択リストの名前を示します。

p.293 の「バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成」を参照してください。

[バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[説明]オプション

[説明]フィールドはカスタムフィルタを作成したい選択リストの説明を示します。

p.293 の「バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成」を参照してください。

[バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[保護対象サーバー]オプション

[保護対象サーバー]フィールドはカスタムフィルタを作成したい保護対象サーバーの名前を示します。

p.293 の「バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成」を参照してください。

[バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[リソースの種類]オプション

[リソースの種類]ダイアログボックスでは、作成するカスタムフィルタに含めるリソースの種類を選択できます。

p.293 の「バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成」を参照してください。

表 5-18 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[リソースの種類]オプション

項目	説明
このフィルタを有効にする	作成するカスタムフィルタのリソースの種類の基準を有効にします。
リソースの種類	選択できるリソースの種類を指定します。選択するリソースはカスタムフィルタに含まれています。

項目	説明
すべてを選択	[リソースの種類]フィールドのすべてのリソースを選択します。
すべてを選択解除	[リソースの種類]フィールドのすべてのリソースを選択解除します。

[バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[ポリシー]オプション

[ポリシー]ダイアログボックスでは、作成するカスタムフィルタに含めるリソースの種類を選択できます。

p.293の「[バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成](#)」を参照してください。

表 5-19 [バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[ポリシー]オプション

項目	説明
このフィルタを有効にする	作成するカスタムフィルタのポリシーの基準を有効にします。
ポリシー	選択できるポリシーを指定します。選択するポリシーはカスタムフィルタに含まれています。

[バックアップ選択リストの新規カスタムフィルタ]の[未保護の選択リスト]オプション

[保護されないバックアップ選択リストをフィルタする]フィールドでは、Backup Execが保護しないバックアップ選択リストを表示するカスタムフィルタを作成できます。

p.293の「[バックアップ選択リストのカスタムフィルタの作成](#)」を参照してください。

バックアップ選択リストのフィルタ処理

特定の条件を満たすバックアップ選択リストを表示するには、フィルタを使用します。

バックアップ選択リストにフィルタをかける方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [バックアップ選択リスト]ペインの[フィルタ]リストで、使用するフィルタをクリックします。

選択リストの検索

Backup Exec には、選択リストを検索する機能があります。この機能を使用すると、特定のコンピュータをバックアップする選択リストを検索できます。この機能は、多数の選択リストが存在する場合に有効です。

検索が完了したら、[選択リストの検索]ダイアログボックスが展開されて結果が表示されます。選択リストを右クリックして、ポリシーを使用した新しいジョブの作成、選択リストのコピーや削除、または選択リストのプロパティの表示を実行できます。

選択リストを検索する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[選択リストタスク]の下にある[バックアップ選択リストの検索]を選択します。
- 3 選択リストを検索するコンピュータ名を指定します。完全な名前または名前の一部を入力します。
- 4 [検索開始]をクリックします。

[バックアップ選択リストの検索]オプション

特定のコンピュータをバックアップする選択リストの有無を検索できます。完全なコンピュータ名またはその一部を入力できます。

p.298 の「[選択リストの検索](#)」を参照してください。

バックアップ選択リストの履歴の表示

特定のバックアップ選択リストを使用するジョブの履歴を表示できます。

次の履歴情報が表示されます。

- ジョブ名
- デバイス名
- ジョブの種類
- ジョブ状態
- 進捗率
- 開始時刻
- 終了時刻
- 経過時間
- バイト数
- スループット

- エラーコード

バックアップ選択リストの履歴を表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 履歴を表示するバックアップ選択リストを右クリックします。
- 3 [履歴の表示]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

選択リストの概略の表示

選択リストについて、次の概略情報を表示できます。

- 選択項目
- リソースの順序
- クレデンシャル
- 優先度と有効時間帯
- 通知

バックアップ選択リストの概略を表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 概略を表示するバックアップ選択リストを右クリックします。
- 3 [概略の表示]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

選択リストの概略

特定の選択リストの情報の概略を表示できます。

p.299 の「[選択リストの概略の表示](#)」を参照してください。

選択リストについて、次の概略情報を表示できます。

- 選択項目
- リソースの順序
- クレデンシャル
- 優先度と有効時間帯
- 通知

リソース検出について

Backup Exec の「リソース検出」機能を使用し、Windows または Active Directory ドメイン内の新しいバックアップリソースを検出することができます。この機能を使用して、新しいサーバーボリュームやデータベースを探すジョブを作成してスケジュールを設定することができます。検索するリソースの種類を指定したり、新しいリソースを検出したときに通知を送信するように設定することができます。

ジョブログに記録された検出リソースを使用し、検出された新しいリソースを保護するバックアップジョブを作成することができます。

リソース検出ジョブを設定するとき、Backup Exec によって検出されたすべての Windows ドメインが一覧表示されます。Active Directory ドメインが存在する場合は、リストに手動で追加する必要があります。ドメインのリストを準備したら、新しいリソースを検索するドメインを選択します。

リモートコンピュータ上のリソースを検出するには Remote Agent が必要です。ただし、メディアサーバーに MAPI クライアントをインストールすることにより、Remote Agent がインストールされていないリモートコンピュータ上でも Exchange リソースを検出することができます。

Windows Server 2003/2008 リソース上で Backup Exec のリソース検出機能を使用して、シャドウコピーコンポーネントを検出することができます。システム状態は検出されません。

p.300 の「[リソース検出による新しいリソースの検索](#)」を参照してください。

リソース検出による新しいリソースの検索

Backup Exec の「リソース検出」機能を使用し、Windows または Active Directory ドメイン内の新しいバックアップリソースを検出することができます。この機能を使用して、新しいサーバーボリュームやデータベースを探すジョブを作成してスケジュールを設定することができます。検索するリソースの種類を指定したり、新しいリソースを検出したときに通知を送信するように設定することができます。

p.300 の「[リソース検出について](#)」を参照してください。

リソース検出を使用して新しいリソースを検索する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[バックアップ戦略タスク]の下にある[新規リソース検出ジョブ]を選択します。
- 3 新しいリソースを検索するドメインのリストに Active Directory ドメインを追加するには、[Active Directory ドメインの追加]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.301 の「[\[Active Directory ドメインの追加\]オプション](#)」を参照してください。

- 4 新しいリソースを検索するドメインを選択します。

- 5 このドメインに対してログオンアカウントを変更する必要がある場合は、[ログオンアカウントの変更]をクリックし、このドメインへのアクセスに必要なログオンクレデンシャルを選択するか入力します。
- 6 検索からコンピュータを除外する場合は、[プロパティ]ペインの[ターゲット]の下にある[除外]をクリックし、除外するコンピュータを選択します。
p.302の「リソース検出ジョブの[除外]オプション」を参照してください。
- 7 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.302の「リソース検出ジョブの[一般]オプション」を参照してください。
- 8 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[リソース]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.303の「リソース検出ジョブの[リソース]オプション」を参照してください。
- 9 このジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
p.670の「ジョブの通知オプション」を参照してください。
- 10 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。
p.344の「[スケジュール]オプション」を参照してください。

[Active Directory ドメインの追加]オプション

Backup Execによってリソース検出ジョブが検索されるドメインのリストにActive Directoryのドメインを追加できます。

p.300の「リソース検出による新しいリソースの検索」を参照してください。

表 5-20 [Active Directory ドメインの追加]オプション

項目	説明
名前	追加するActive Directoryのドメインの完全修飾名を指定します。
ドメイン	新しいリソースを検出するためにBackup Execで使用されるドメインのリストを表示します。
追加	新しいActive Directoryドメインをドメインのリストに追加します。
削除	選択したActive Directoryドメインをドメインのリストから削除します。

リソース検出ジョブの[ドメイン]オプション

新しいリソースを検出するために環境のドメイン内を検索できます。

p.300の「[リソース検出による新しいリソースの検索](#)」を参照してください。

表 5-21 リソース検出ジョブの[ドメイン]オプション

項目	説明
名前	ドメインの名前を表示します。
ログオンアカウント	ドメインにアクセスするために Backup Exec で使用されるログオンアカウントを表示します。
ログオンアカウントの変更	ドメインにアクセスするために Backup Exec で使用されるログオンアカウントを変更できます。
Active Directory ドメインの追加	Active Directory ドメインをドメインのリストに追加できます。

リソース検出ジョブの[除外]オプション

新しいリソースを検出するために環境のドメイン内を検索できます。特定のサーバーまたはドメインをリソース検出ジョブから除外することができます。

p.300の「[リソース検出による新しいリソースの検索](#)」を参照してください。

表 5-22 リソース検出ジョブの[除外]オプション

項目	説明
ドメイン	リソース検出ジョブに含まれているサーバーを表示します。
除外するサーバー	リソース検出ジョブから除外されるサーバーを表示します。
除外する	リソース検出ジョブから除外されるサーバーのリストにサーバーを移動できます。
含める	リソース検出ジョブに含まれるサーバーのリストにサーバーを移動できます。

リソース検出ジョブの[一般]オプション

新しいリソースを検出するために環境のドメイン内を検索できます。

p.300の「[リソース検出による新しいリソースの検索](#)」を参照してください。

表 5-23 リソース検出ジョブの[一般]オプション

項目	説明
ジョブ名	このジョブの名前を表示します。
ジョブの優先度	このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。 p.183の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。

リソース検出ジョブの[リソース]オプション

新しいリソースを検出するために環境のドメイン内を検索できます。

p.300の「[リソース検出による新しいリソースの検索](#)」を参照してください。

表 5-24 リソース検出ジョブの[リソース]オプション

項目	説明
管理共有	新しい管理共有またはボリュームを検索します。
ユーザー共有	新しいユーザー定義共有を検索します。
Microsoft SQL Server データベース	新しいMicrosoft SQL データベースを検索します。
Microsoft Exchange Server データベース	新しいMicrosoft Exchange Serverを検索します。インフォメーションストア、Exchange ディレクトリまたはストレージグループの検索を行います。ストレージグループ下の個別のデータベースは検索されません。
Lotus Domino データベース	新しいLotus Domino データベースを検索します。
システム状態とシャドウコピーコンポーネント	新しい[システム状態]リソースまたはシャドウコピーコンポーネントを検索します。
Oracle データベース	新しいOracle データベースを検索します。
DB2 データベース	新しいDB2 データベースを検索します。
新しいリソースが検出されるたびに通知する	新しいリソースが検出されるたびに通知を送信します。
検出された新しいリソースをすべてまとめて通知する	検出されたすべての新しいリソースに対して1つの通知を送信します。

項目	説明
以前に検出したリソースも通知に含める	リソース検出ジョブで以前に検出されたすべてのリソースを含む通知を送信します。

Backup Exec シャドウコピーコンポーネントファイルシステムについて

Backup Exec のシャドウコピーコンポーネントファイルシステムでは、Microsoft のボリュームシャドウコピーサービスを使用して、Windows Server 2003/2008 リソースに存在する、重要なオペレーティングシステムやアプリケーションサービスのデータ、および他社製アプリケーションやユーザーのデータを保護します。

ボリュームシャドウコピーサービスを使用することによって、アプリケーションおよびサービスを実行したまま、コンピュータでバックアップを実行することができます。これは、バックアップの開始時にボリュームのコピーを用意することによって実現されます。ボリュームを正しくバックアップするためにアプリケーションをシャットダウンする必要はありません。サードパーティベンダーは、ボリュームシャドウコピーサービスを使用して、このシャドウコピーテクノロジーと連携して使用するスナップショットプラグイン、つまりライターを作成することができます。

ライターとは、ボリュームシャドウコピーサービスのフレームワークを利用するアプリケーション内の特定のコードであり、オペレーティングシステムおよびアプリケーションの、特定時点へのリカバリ用として一貫性のとれたデータを提供します。ライターはシャドウコピーコンポーネントとして扱われますが、シャドウコピーコンポーネントは、バックアップ選択リストおよびリストア選択リストにリソースとして表示されます。

Backup Exec シャドウコピーコンポーネントファイルシステムを展開すると、次の種類のライターが表示されます。

- サービス状態: イベントログ、Windows Management Instrumentation (WMI) など、重要なオペレーティングシステムおよびアプリケーションサービスのデータ
- ユーザーデータ: サードパーティアプリケーションのデータ、ユーザーデータなど

ADAM およびシステム状態がシャドウコピーコンポーネントである場合でも、[シャドウコピーコンポーネント]ノードの選択時に[Active Directory Application Mode]ノードおよび[システム状態]ノードは自動的に選択されません。これらのリソースをバックアップする場合は、該当するノードを選択する必要があります。

バックアップ選択リストで選択できるのは、Backup Exec での使用に関するテストが完了しているライターのみです。その他のライターは、選択リストに表示されますが、バックアップ用に選択することはできません。

バックアップ対象としてシャドウコピーデータが含まれるボリュームを選択すると、Backup Exec は、ボリュームレベルのバックアップに含めることができないシャドウコピーファイル

を判断します。これらのファイルは、アクティブファイルの除外と呼ばれる機能によって、自動的にバックアップ対象から除外されます。スナップショット以外のバックアップ中にこのファイルの除外が発生しなかった場合、これらのファイルは使用中と見なされてスキップしたものと扱われます。スナップショットバックアップ中にこのファイルの除外が発生しなかった場合、ファイルは一貫性がとれていない状態でバックアップされ、リストアの問題が発生する可能性があります。

Windows SharePoint Services Feature Pack では、共有情報および連携データのリポジトリとして SHAREPOINT という SQL (MSDE) インスタンスが使用されます。Windows Server 2003/2008 では、Symantec SQL Agent がインストールされていない場合、SQL SHAREPOINT インスタンスはシャドウコピーコンポーネントファイルシステムによって保護されます。SQL Agent がインストールされている場合、SQL SHAREPOINT インスタンスは SQL Agent によって保護されます。

メモ: デフォルトの SHAREPOINT 以外のインスタンス名を使用して Windows SharePoint Services がインストールされている場合は、シャドウコピーコンポーネントファイルシステムでは保護されません。この場合、SQL SHAREPOINT インスタンスを保護するには、Symantec SQL Agent を使用する必要があります。

Windows Small Business Server 2003 Standard Edition および Premium Edition には、サーバー関連のアクティビティデータのリポジトリとして SBSMONITORING という SQL (MSDE) インスタンスが含まれています。Symantec SQL Agent がインストールされていない場合、SQL SBSMONITORING インスタンスはシャドウコピーコンポーネントファイルシステムによって保護されます。SQL Agent がインストールされている場合、SQL SBSMONITORING インスタンスは SQL Agent によって保護されます。

Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法

Granular Recovery Technology (GRT) を使ってバックアップセットから特定の個々の項目をリストアすることができます。たとえば、メールボックス全体をリストアしないでバックアップからの電子メールメッセージをリストアするために Agent for Microsoft Exchange Server を使うことができます。または、サイト全体をリストアしないでリストをリストアするために Agent for Microsoft SharePoint を使うことができます。

個々の項目をリストアするには、バックアップジョブを作成するときに Granular Recovery Technology 機能を有効にする必要があります。

デフォルトでは、GRT は次のエージェントのバックアップ用に有効になります。

- Active Directory Recovery Agent
- Agent for Microsoft Exchange Server
- Agent for Microsoft Hyper-V

- Agent for Microsoft SharePoint
- Agent for VMware Virtual Infrastructure

GRT 対応バックアップからはバックアップセット全体または個々の項目のいずれかをリストアできます。

デフォルトでは、**Agent for Microsoft Hyper-V** と **Agent for VMware Virtual Infrastructure** は Granular Recovery Technology を使って詳細なレベルでファイルとフォルダを保護します。また、仮想マシン上の **Microsoft Exchange**、**SQL**、**Active Directory** アプリケーションデータの個別リカバリを有効にすることもできます。

次の表に、各エージェントに対してリストアできる個々の項目を示します。

表 5-25 各エージェントに対してリカバリできる個々の項目

エージェント	個々の項目
Active Directory Recovery Agent	<p>次の個々の項目をリストアできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Active Directory のオブジェクトおよび属性 ■ Active Directory Application Mode (ADAM) と Active Directory Lightweight Directory Services (AD LDS) のオブジェクトおよび属性
Agent for Microsoft Exchange Server	<p>次の個々の項目をリストアできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メールボックス ■ メールメッセージとその添付ファイル ■ パブリックフォルダ
Agent for Microsoft Hyper-V	<p>Windows オペレーティングシステムを実行する仮想マシンからドライブ、フォルダとファイルをリストアできます。</p> <p>また、仮想マシン上の Microsoft Exchange、SQL、Active Directory アプリケーションデータの個別リカバリを有効にすることもできます。</p> <p>p.1166 の「Backup Exec で仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法」を参照してください。</p>

エージェント	個々の項目
Agent for Microsoft SharePoint	<p>次の個々の項目をリストアできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ポータルサイトとそれに関連するデータベース ■ Windows SharePoint Services サイトとそれに関連するデータベース ■ ドキュメントライブラリストア (Web Storage System ベース) ■ ドキュメントライブラリまたは画像ライブラリに含まれている個別のドキュメント (Web Storage System ベースまたは Microsoft SQL Server ベース) ■ リスト、サイト、サブサイト
Agent for VMware Virtual Infrastructure	<p>Windows オペレーティングシステムを実行する仮想マシンからドライブ、フォルダとファイルをリストアできます。</p> <p>また、仮想マシン上の Microsoft Exchange、SQL、Active Directory アプリケーションデータの個別リカバリを有効にすることもできます。</p> <p>p.1359 の「Backup Exec で仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法」を参照してください。</p>

GRT 対応バックアップジョブを実行すると、Backup Exec は IMG という接頭辞を付けたメディア (IMG00001 など) を作成します。IMG メディアは、Backup Exec が GRT 対応のバックアップ操作専用で作成する特別なメディアタイプです。GRT 対応バックアップジョブを実行すると、IMG メディアにバックアップデータが格納されます。

メモ: ディスクへのバックアップフォルダでは GRT 対応ジョブの暗号化はサポートされていません。

始める前に GRT 対応バックアップに使うデバイスについて検討してください。またバックアップするデータの種類に関する特別な必要条件についても検討してください。

p.308 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス](#)」を参照してください。

p.309 の「[Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について](#)」を参照してください。

p.498 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項](#)」を参照してください。

p.500の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブ用のディスク領域を再利用する方法](#)」を参照してください。

Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス

シマンテック社は **Granular Recovery Technology (GRT)** 対応バックアップの宛先としてファイルサイズの制限がないボリューム上のディスクへのバックアップフォルダを選択することをお勧めします。ファイルサイズの制限がないボリュームの例としては、**NTFS**ドライブがあります。ファイルサイズの制限があるボリュームの例としては、**FAT** ボリューム、**FAT32** ボリュームなどがあります。

ファイルサイズの制限があるボリューム上のディスクへのバックアップフォルダを使う必要がある場合、**Backup Exec** はステージングの場所を必要とします。**Backup Exec** はバックアップジョブの実行中に少しのメタデータをステージングの場所に一時的に格納します。バックアップが終了したら、ステージングの場所からデータを削除します。ただし、ファイルサイズの制限がないボリューム上のディスクへのバックアップフォルダを宛先として使う場合、ステージングの場所は必要ありません。

ステージングの場所のデフォルトのパスは **C:\%temp** です。

バックアップジョブのステージングの場所に使われるボリュームは次の必要条件を満たす必要があります。

- メディアサーバーに対してローカルである
- ファイルサイズの制限がない

また、シマンテック社はディスク領域問題を避けるために次の条件を満たすこともお勧めします。

- システムボリュームではない
- 利用可能な領域が少なくとも **1 GB** ある

他のデフォルトバックアップオプションでデフォルトのステージングの場所を変更できます。

p.375の「[バックアップオプションのデフォルト設定](#)」を参照してください。

Backup Exec はテープまたはファイルサイズの制限があるボリューム上のディスクへのバックアップフォルダから **GRT** 対応データをリストアする場合もステージングの場所を使います。ステージングの場所はファイルサイズの制限がなく、メディアサーバーに対してローカルであるボリュームでなければなりません。**NTFS**などのファイルサイズの制限がないボリューム上のディスクへのバックアップフォルダから **GRT** 対応データをリストアする場合、ステージングの場所は必要ありません。

Backup Exec は次の種類のリストアではステージングエリアを異なる方法で使います。

表 5-26 ステージングの処理

リストア対象のデータがある場所	ステージングの処理
テープ	<p>Backup Exec はバックアップセット全体をステージングエリアにコピーします。ステージングエリアには個々の項目のリストア元のバックアップセット全体に対応する十分なディスク領域が必要です。</p> <p>GRT 対応バックアップにテープデバイスを使う前に、リストアの実行に十分なディスク領域が利用可能であることを確認します。</p> <p>リストアのジョブが完了すると、Backup Exec はステージングエリアからデータを削除します。</p>
ファイルサイズの制限があるボリューム上のディスクへのバックアップフォルダ (FAT、FAT32 など)	<p>Backup Exec は、リストアを完了するためにバックアップセットに関連付けられている少しのメタデータをステージングエリアにコピーする必要があります。</p> <p>リストアのジョブが完了すると、Backup Exec はステージングエリアからデータを削除します。</p>

ステージングの場所のデフォルトのパスは **C:\%temp** です。他のデフォルトリストアオプションでデフォルトのリストア用のステージングの場所を変更できます。

p.627 の「[リストアジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.309 の「[Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について](#)」を参照してください。

Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について

リストにあるエージェントで Granular Recovery Technology (GRT) を使うときは次の必要条件に留意します。

表 5-27 Granular Recovery Technology の必要条件

エージェント	制限事項
Active Directory Recovery Agent	GRT 対応ジョブでは完全バックアップのみを実行できます。

エージェント	制限事項
Agent for Microsoft Exchange Server	<p>Backup Exec は、インフォメーションストアのバックアップおよびリストアを行うために、Exchange 組織内に存在する一意の名前のメールボックスへのアクセスが可能である必要があります。</p> <p>p.1087 の「Exchange メールボックスにアクセスするための必要条件」を参照してください。</p> <p>次の条件の両方がある場合、個々のメールボックスとメッセージはリストアできません：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 増分または差分バックアップ方式が使われた。 ■ 宛先がテープデバイスだった。 <p>完全バックアップ、差分バックアップまたは増分バックアップを作成する場合、GRT 対応ジョブには次の制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全ジョブテンプレート、差分ジョブテンプレートおよび増分ジョブテンプレートはポリシーの一部である必要がある。 ■ 宛先デバイスはディスクへのバックアップフォルダである必要がある。 ■ 完全ジョブ、差分ジョブおよび増分ジョブのバックアップセットは同じボリューム上にある必要がある。
Agent for Microsoft Exchange Server with CPS	<p>GRT 対応ジョブには次の制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップはローカル NTFS ドライブ上のディスクへのバックアップフォルダに送信する必要があります。 <p>メモ: ディスクへのバックアップフォルダは CPS Exchange ジョブ専用として使ってください。GRT 対応バックアップジョブの宛先であるディスクへのバックアップフォルダに、他のリソースのバックアップは作成しないでください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップは特定のディスクへのバックアップフォルダに送信する必要があります。デバイスプールは選択できません。 ■ バックアップは[ディスクへのバックアップファイルに最大サイズを割り当てる]オプションを選択したディスクへのバックアップフォルダには送信できません。

エージェント	制限事項
Agent for Microsoft SharePoint	<p>GRT 対応ジョブには次の制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ GRT 対応ジョブでは完全バックアップのみを実行できます。 ■ SharePoint サーバーに現在のバージョンの Remote Agent for Windows Systems がインストールされている必要があります。
Agent for Microsoft Hyper-V Agent for VMware Virtual Infrastructure	<p>GRT 対応ジョブには次の制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ GRT 対応ジョブでは完全バックアップのみを実行できます。 ■ Windows オペレーティングシステムを実行する仮想マシンには個々の項目のみリカバリできます。 <p>デフォルトでは、Agent for Microsoft Hyper-V と Agent for VMware Virtual Infrastructure は Granular Recovery Technology を使って詳細なレベルでファイルとフォルダを保護します。また、仮想マシン上の Microsoft Exchange、SQL、Active Directory アプリケーションデータの個別リカバリを有効にすることもできます。</p> <p>p.1165 の「Granular Recovery Technology による Agent for Microsoft Hyper-V との連携」を参照してください。</p> <p>p.1358 の「Granular Recovery Technology による Agent for VMware との連携」を参照してください。</p>

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.308 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス](#)」を参照してください。

p.498 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項](#)」を参照してください。

データのバックアップ

この章では以下の項目について説明しています。

- データをバックアップする方法
- バックアップウィザードを使用したバックアップジョブの作成
- ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成
- ジョブのスケジュールの設定について
- ファイルをバックアップして削除する完全バックアップ方式について
- バックアップしたデータの複製について
- バックアップの検証
- テスト実行ジョブについて

データをバックアップする方法

データを保護するにはデータのバックアップが必要不可欠です。**Backup Exec**には、データを保護するためのバックアップジョブを作成する、次のような機能が用意されています。

- バックアップウィザードを使用する:**Backup Exec**を初めて使用する場合または不慣れな場合でも、このウィザードを使用してバックアップジョブをサブミットすることができます。このウィザードの画面の案内に従って作業を進めると、デフォルトのオプションを使用してバックアップジョブを作成することができます。**Backup Exec**での作業に慣れたら、バックアップジョブのプロパティを設定することで、カスタマイズしたバックアップジョブを作成することができます。
- バックアップジョブのプロパティを設定する:**Backup Exec**の使用経験を積むと、保護するリソースを選択し、バックアップオプションを設定してカスタマイズしたバックアップジョブを作成することができます。バックアップジョブのプロパティページを使用する

と、バックアップウィザードではジョブごとに設定することのできない、ジョブの優先度やデータベースオプションなどのオプションを設定することができます。

- 選択リストを作成する:バックアップの必要なデータを選択し、選択した内容を[選択リスト]として保存します。作成した選択リストをバックアップジョブの作成に使用することができます。同じ選択リストを複数のジョブで使用することができます。また、ポリシーと選択リストを組み合わせて、ジョブを作成することができます。

Backup Exec では、バックアップジョブ用のデフォルトオプションを設定できますが、個々のジョブの作成時にデフォルト設定を無効にすることもできます。すべてのバックアップジョブをバックアップデータ専用のローカルエリアネットワークに割り当て、バックアップ処理実行時に、接続されている他のネットワークに影響を与えないようにすることができます。また、ジョブごとに LAN の割り当てを変更することができます。

Backup Exec には、定期的に行うバックアップジョブ(スケジュール済みジョブ)を設定したり、1 回限りのバックアップジョブを設定するオプションもあります。

また、データを保護するためのバックアップジョブだけでなく、次のようなジョブも作成できます。

- スケジュール済みバックアップジョブが正しく動作するかどうかを確認するためのテスト実行ジョブ。
- 前にバックアップしたデータまたはバックアップのスケジュールが設定されているデータのいずれかから、バックアップセットの複製を作成するジョブ。スケジュール済みジョブで作成されたバックアップセットの複製を作成するバックアップセット複製ジョブは、該当するバックアップジョブの完了後に自動的に実行されます。
- メディアの整合性をチェックするための検証ジョブ。
- サーバーのディスク領域を解放する[ファイルのバックアップおよび削除]方式を使用するバックアップジョブ。
- バックアップの必要な新しいリソースを定期的に検出するリソース検出ジョブ。

データのバックアップを開始する前に、バックアップ方式、バックアップの間隔、メディアローテーション方式など、システムの使用環境に適合するバックアップ戦略を決定しておく必要があります。組織内の分野によって戦略が異なる場合があります。また、バックアップジョブを実行する適切なユーザー権限も必要です。

p.315 の「[バックアップジョブに必要なユーザー権限](#)」を参照してください。

バックアップジョブを作成する前に、デバイスとメディアの管理用の設定が必要な場合があります。**Backup Exec** は、特定のストレージデバイスやデバイスプールのようなデバイスの論理グループを使うように設定できます。

また、次のタスクを実行し、ストレージ用のハードウェアとメディアを効率的に管理することができます。

- システム用のドライブプールを複数のストレージデバイスで構成する。
- メディアセットを作成する。

注意: リモートリソースを保護するには、リモートコンピュータに **Backup Exec Remote Agent for Windows Systems** をインストールする必要があります。この **Remote Agent** は **Windows** サーバーおよびワークステーション上で実行されるシステムサービスで、通常のバックアップテクノロジーでは頻りにネットワークとやり取りする必要がある処理をローカル環境で実行し、効率的なバックアップ処理を実行することができます。

p.504 の「[デバイスプールの作成](#)」を参照してください。

p.210 の「[メディアセットの作成について](#)」を参照してください。

p.315 の「[バックアップウィザードを使用したバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

p.254 の「[バックアップ戦略について](#)」を参照してください。

バックアップジョブで必要なユーザー権限

バックアップ操作を実行するには、次の **Windows** ユーザー権限がサービスアカウントと **Backup Exec** のログオンアカウントに必要です:

- オペレーティング システムの一部として機能
- トークン オブジェクトの作成
- ファイルとディレクトリのバックアップ
- ファイルとディレクトリの復元
- 監査とセキュリティログの管理
- バッチ ジョブとしてログオン (**Windows Vista** 以降の場合のみ)。

Windows のオペレーティングシステムのユーザー権限について詳しくは、**Microsoft** 製品のマニュアルを参照してください。

p.98 の「[Backup Exec サービスアカウントについて](#)」を参照してください。

p.172 の「[ログオンアカウントの設定について](#)」を参照してください。

バックアップウィザードを使用したバックアップジョブの作成

初めて **Backup Exec** を使用するなど、**Backup Exec** でのバックアップジョブの作成に不慣れな場合でも、バックアップウィザードを使用して簡単にバックアップジョブを作成することができます。

Backup Exec の使用経験がある場合は、必要なプロパティを設定してバックアップジョブを作成できます。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

バックアップウィザードを使用してバックアップジョブを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ (ウィザード使用)]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。

Backup Exec のデフォルト設定を使用してメディアサーバーをバックアップする方法 [デフォルト設定を使用してこのメディアサーバーを今すぐにバックアップする]をクリックします。

カスタム設定を使用してバックアップジョブを作成する方法 [カスタム設定を使用してバックアップジョブを作成する]をクリックします。

- 4 [次へ]をクリックします。
- 5 画面の案内に従って作業を進めます。

[バックアップ]ボタンによるバックアップウィザード起動の回避

デフォルトでは、ナビゲーションバーの[バックアップ]を選択するとバックアップウィザードが表示されます。バックアップジョブを手動で設定する場合は、バックアップウィザードが表示されないように設定することができます。

[バックアップ]ボタンでバックアップウィザードが起動されないように設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]をクリックします。
- 2 [バックアップウィザードを常に[バックアップ]ボタンで起動する。]のチェックマークを外します。
- 3 [キャンセル]をクリックします。

[バックアップ]ボタンからバックアップウィザードを起動する設定

デフォルトでは、ナビゲーションバーの[バックアップ]を選択するとバックアップウィザードが表示されます。無効にしたバックアップウィザードは、いつでも再び有効にすることができます。

[バックアップ]ボタンでバックアップウィザードが起動されるように設定する方法

- 1 ツールメニューの[ウィザード]>[バックアップウィザード]をクリックします。
- 2 [バックアップウィザードを常に[バックアップ]ボタンで起動する。]にチェックマークを付けます。
- 3 [次へ]をクリックします。

ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成

Backup Exec の使用経験がある場合は、必要なプロパティを設定してバックアップジョブを作成できます。

初めて Backup Exec を使用するなど、Backup Exec でのバックアップジョブの作成に不慣れな場合でも、バックアップウィザードを使用して簡単にバックアップジョブを作成することができます。

p.315 の「[バックアップウィザードを使用したバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

ジョブのプロパティを設定してバックアップジョブを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 選択ペインで、バックアップするデータを選択します。
p.321 の「[バックアップジョブの\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 5 このジョブのデバイスとメディアの情報を選択します。
p.324 の「[バックアップジョブおよびテンプレートの\[デバイスとメディア\]オプション](#)」を参照してください。

6 必要に応じて次のオプションを設定します。

- | | |
|-------------------------------|--|
| リソースが処理される順序を判断する方法 | [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[リソースの順序]をクリックします。
p.323の「バックアップの[リソースの順序]オプション」 を参照してください。 |
| 処理中のリソースのクレデンシヤルを設定またはテストする方法 | [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[リソースクレデンシヤル]をクリックします。
p.322の「[リソースクレデンシヤル]オプション」 を参照してください。 |
| ジョブの優先度と有効時間帯を判断する方法 | [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[優先度と有効時間帯]をクリックします。
p.291の「[優先度と有効時間帯]バックアップオプション」 を参照してください。 |
| 選択リスト別の通知を設定する方法 | [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト別の通知]をクリックします。
p.670の「ジョブの通知オプション」 を参照してください。 |
| 優先サーバーを選択する方法 | [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[優先サーバー]をクリックします。
p.422の「バックアップの[優先サーバー]オプション」 を参照してください。 |
| ジョブの一般の設定を行う方法 | [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。
p.327の「バックアップジョブおよびテンプレートの[一般]オプション」 を参照してください。 |
| ジョブの詳細設定を行う方法 | [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。
p.335の「バックアップジョブの[詳細]オプション」 を参照してください。 |
| ネットワークとセキュリティオプションを設定する方法 | [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。
p.391の「バックアップの[ネットワークとセキュリティ]オプション」 を参照してください。 |

プリコマンドとポストコマンドを作成する方法 [プロパティ]ページの[設定]の下にある[プリ/ポストコマンド]をクリックします。

p.339の「[バックアップまたはリストアジョブで使用するプリコマンドとポストコマンド](#)」を参照してください。

- エージェントのバックアップ設定を行う方法 [プロパティ]ペインの[設定]で、エージェントの名前を選択します。
- p.935の「[\[Advanced Open File\]オプション](#)」を参照してください。
 - p.913の「[ADOB \(Advanced Disk-based Backup Option\) のためのバックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.1237の「[SQLのバックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.1121の「[Microsoft Exchangeのバックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.1189の「[Microsoft SharePointのバックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.873の「[Active Directory Recovery Agentのバックアップジョブオプション](#)」を参照してください。
 - p.1062の「[Lotus Dominoのバックアップジョブのオプション](#)」を参照してください。
 - p.1303の「[Oracleのバックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.954の「[DB2 バックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.1887の「[NetWare SMSのバックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.1867の「[Linux、UNIXおよびMacintoshコンピュータのバックアップジョブオプション](#)」を参照してください。
 - p.1806の「[NDMPのバックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.975の「[Enterprise Vault バックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.1353の「[VMwareバックアップオプション](#)」を参照してください。
 - p.1163の「[Microsoft Hyper-Vバックアップオプション](#)」を参照してください。

Archiving Option コンポーネントのバックアップ設定を設定する方法 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。

p.1443の「[アーカイブジョブのためのバックアップジョブのプロパティ](#)」を参照してください。

特定の選択リストが含まれたバックアップジョブの完了を通知するように **Backup Exec** を設定する方法 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。

p.670の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

7 次のいずれかを実行します。

バックアップジョブを今すぐ実行する方法 [今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するためにバックアップジョブをスケジュールする方法 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。

p.344の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

バックアップジョブの[選択リスト]オプション

[バックアップジョブのプロパティ]ダイアログボックスを開くと、デフォルトでは、[プロパティ]ペインの[選択リスト]が選択されています。[選択リスト]オプションを使用して、このバックアップジョブでバックアップするデータを選択します。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

このダイアログボックスには次のオプションが含まれています。

表 6-1 バックアップジョブの[選択リスト]オプション

項目	説明
選択リスト名	選択リストの名前を指定します。既存の選択リストを使用してジョブを作成する場合は、使用する選択リストを選択できます。そうでない場合は、デフォルトの選択リスト名を使用して、選択リストを新規に作成できます。
既存の選択リストを使用する	既存の選択リストを使用したり、既存の選択リストをマージしたりすることができます。 p.285の「 [既存の選択リストを使用する]オプション 」を参照してください。
選択リストの説明	選択リストを説明します。

項目	説明
インクルード/エクスクルード	[ファイル選択の詳細設定]オプションを使用してバックアップするファイルを選択できます。 p.282の「バックアップの[インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション」を参照してください。
サブディレクトリを含める	選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。
ファイルの詳細を表示する	選択できるファイルの詳細を表示します。
リソース別の表示	選択項目をリソースの一覧形式で表示できます。
選択の詳細の表示	選択項目をディレクトリとファイルの一覧形式で表示できます。

p.265の「バックアップするデータの選択について」を参照してください。

p.279の「選択リストについて」を参照してください。

p.280の「選択リストの作成」を参照してください。

p.275の「[ユーザー定義選択]ノードへのユーザー定義選択項目の追加」を参照してください。

[リソースクレデンシャル]オプション

バックアップジョブまたはリストアジョブのリソースにアクセスするには、そのリソースへのアクセス権限のあるログオンアカウントが必要です。ジョブの実行前にログオンアカウントを変更またはテストできます。

p.172の「ログオンアカウントの設定について」を参照してください。

このダイアログボックスには次のオプションが含まれています。

表 6-2 [リソースクレデンシャル]オプション

項目	説明
リソース	このジョブのリソースを指定します。
ログオンアカウント	Backup Exec がこのバックアップ選択項目またはリストア選択項目に使用するログオンアカウントを指定します。
テスト結果	クレデンシャルのテストの結果を詳しく述べます。
すべてをテスト	リソースにアクセスできることを検証するために、リストにあるすべてのリソースクレデンシャルをテストします。

項目	説明
選択項目をテスト	Backup Exec がリソースにアクセスできることを検証するために、選択したリソースクレデンシアルのみをテストします。
テストのキャンセル	クレデンシアルのテストをキャンセルします。
変更	選択したリソースクレデンシアルを変更できます。 リモート選択の場合、ログオンアカウントを変更しないでください。リモート選択は、選択項目が格納されているサーバーへの接続に使用されるログオンアカウントに依存し、指定するその他のログオンアカウントは無視されます。これに該当するものは、ドライブ、 Lotus 、システム状態、 Exchange の選択項目です (Exchange の選択項目ではメールボックスを除きます)。
クリア	選択したリソースクレデンシアルをダイアログボックスから削除します。

バックアップの [リソースの順序] オプション

バックアップジョブで使用する選択項目の指定後に、選択した項目の処理順序を設定することができます。

バックアップが行われる順序については、次の事項に注意する必要があります。

- 1つのサーバー内でのリソースの処理順序を指定することはできませんが、複数のサーバー間にまたがってリソースの処理順序を指定することはできません。たとえば、サーバー A から C:および D:を選択し、引き続きサーバー B から選択を続行することはできません。ただし、サーバー A から C:を選択し、次にサーバー B から C:を選択し、次に両方のサーバーから D:を選択するようなことはできません。
- どのサーバーの場合でも、システム状態を最後に指定する必要があります。

表 6-3 バックアップの [リソースの順序] オプション

項目	説明
先頭に移動	選択したリソースを、バックアップジョブの実行時に Backup Exec が最初に処理するリソースとして指定します。
上に移動	選択したリソースをリソースの順序の上に移動します。これは、バックアップジョブの実行時に Backup Exec がそのリソースを先に処理することを意味します。

項目	説明
下に移動	選択したリソースをリソースの順序の下に移動します。これは、バックアップジョブの実行時に Backup Exec がそのリソースを後で処理することを意味します。
末尾に移動	選択したリソースを、バックアップジョブの実行時に Backup Exec が最後に処理するリソースとして指定します。

[パスワードの入力]オプション

このダイアログボックスでパスワードを変更できます。

表 6-4 [パスワードの入力]オプション

項目	説明
パスワード	新しいパスワードを指定します。
確認入力	新しいパスワードを確認します。

バックアップジョブおよびテンプレートの[デバイスとメディア]オプション

バックアップジョブを実行するストレージデバイスとメディアセットを選択します。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

このダイアログボックスには次のオプションが含まれています。

表 6-5 バックアップジョブおよびテンプレートの [デバイスとメディア] オプション

項目	説明
デバイス	<p>デバイスプール、ロボットライブラリドライブ、スタンドアロンのドライブ、ディスクへのバックアップフォルダ、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダなど、サポートされているストレージデバイスの種類をバックアップデータの送信先として指定します。</p> <p>p.435 の「テープドライブおよびロボットライブラリについて」を参照してください。</p> <p>p.482 の「ディスクへのバックアップフォルダについて」を参照してください。</p> <p>p.503 の「デバイスプールについて」を参照してください。</p> <p>p.1976 の「Storage Provisioning Option の [すべての仮想ディスク] デバイスプールについて」を参照してください。</p> <p>p.1916 の「Remote Media Agent for Linux Servers について」を参照してください。</p>
このジョブにデバイスへのダイレクトアクセスを許可する	<p>リモートコンピュータで、データを重複排除してから、[デバイス] フィールドで選択される重複排除のストレージデバイスにデータを送信できるようにします。</p> <p>メモ: このオプションは Deduplication Option がインストールされ、[デバイス] フィールドで重複排除のストレージデバイスが選択されているときのみ有効になります。</p> <p>p.1542 の「ダイレクトアクセスについて」を参照してください。</p>
選択リストのバックアップを、プールの次のメディアサーバー上のデバイスに制限する	<p>特定の管理対象メディアサーバー上のデバイスまたは管理対象メディアサーバーのグループ上のデバイスで、ジョブを実行するかどうかを指定します。このチェックボックスは、Central Admin Server Option をインストールしている場合にのみ表示されます。これは特定のジョブの委任先を限定することができます追加のフィルタです。たとえば、Exchange データベースのバックアップを常に Exchange Backups という名前のプール内の管理対象メディアサーバーに接続されているデバイスでのみ実行するには、このオプションを選択してから、Exchange Backups メディアサーバープールを選択します。</p>

項目	説明
メディアセット	<p>バックアップに使用するメディアセットを指定します。[上書き]を選択した場合は、ドライブ内に存在するスクラッチメディアまたは上書き禁止期間が終了しているメディアへの上書きが行われます。設定されているメディアの[メディアの上書き禁止レベル]オプションによっては、ドライブ内に存在する割り当て済みメディアまたはインポートメディアへの上書きが行われる場合があります。</p> <p>追記オプションのいずれかを選択し、追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップデータが追記されます。</p>
メディアに上書きする	<p>バックアップデータを上書き可能なメディアに格納します。このダイアログボックスの[デバイス]フィールドで選択したスタンドアロンドライブまたはドライブプールに、必要なメディアが存在していることを確認してください。</p> <p>ドライブ内に存在するスクラッチメディアまたは上書き禁止期間の終了している再利用可能メディアに上書きが行われます。設定されているメディアの[メディアの上書き禁止レベル]オプションによっては、ドライブ内に存在する割り当て済みメディアまたはインポートメディアへの上書きが行われる場合があります。</p> <p>設定に応じて、スクラッチメディアまたは再利用可能メディアから上書き可能なメディアが選択されます。</p> <p>p.217の「Backup Execでの上書き可能メディアの検索順序」を参照してください。</p> <p>ドライブ内に上書き可能なメディアがない場合は、上書き可能なメディアの追加を求めるアラートが表示されます。</p>
メディアに追記する (追記可能なメディアがない場合は上書きする)	<p>このダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットにこのバックアップを追記します。選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットを追記し、追記可能なメディアが存在しない場合は、上書き可能なメディアが使用され、使用されたメディアがこのメディアセットに追加されます。</p> <p>追記ジョブの途中でメディアの空き領域がなくなった場合は、このジョブは上書き可能な別のメディアを使用して続行されません。</p> <p>ドライブ内に上書き可能なメディアがない場合は、上書き可能なメディアの追加を求めるアラートが表示されます。</p>

項目	説明
メディアに追記する (追記可能なメディアがない場合はジョブを終了する)	このダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットにこのバックアップを追記します。選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットを追記し、追記可能なメディアが存在しない場合はジョブを中止します。
ジョブの完了後にメディアを取り出す	操作の完了時に、ドライブのメディアを取り出します。
バックアップ前にメディアをリテンションする	テープドライブ内のテープを始めから終わりまで早送りして巻き取りなおし、テープがヘッドを滑らかに通過するようにします。リテンション操作は主としてミニカートリッジおよび 1/4 インチカートリッジ用で、これ以外のテープドライブでサポートされることはほとんどありません。
WORM (Write Once Read Many) メディアを使用する	このバックアップジョブに WORM (Write Once Read Many) メディアの使用を指定します。バックアップ先デバイスが WORM と互換性があるドライブである (またはバックアップ先デバイスに WORM と互換性があるドライブが含まれている) こと、およびそのドライブで WORM メディアが利用可能であることが、Backup Exec によって確認されます。WORM メディアまたは WORM と互換性があるドライブが存在しない場合は、アラートが送信されます。 p.232 の「WORM メディアについて」を参照してください。
複数のデータストリームをサポートするリソースで使用する最大デバイス数	このバックアップジョブで使用できるデバイス数を指定します。1 つのストリームに対して 1 つのデバイスだけ使用できます。
最小デバイス数 (利用可能なデバイスがこの数よりも少ない場合はジョブを終了する)	このバックアップジョブで使用できる最小デバイス数を指定します。デバイス数が最小デバイス数に満たない場合、ジョブは完了せずに終了します。

バックアップジョブおよびテンプレートの[一般]オプション

ジョブの名前と使用するバックアップ方式を含む、バックアップジョブの[一般]オプションを設定できます。

p.317 の「ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成」を参照してください。

このダイアログボックスには次のオプションが含まれています。

表 6-6 [一般]オプション

項目	説明
ジョブ名/テンプレート名	このバックアップジョブまたはテンプレートの名前を指定します。表示されるデフォルト名を受け入れるか、または名前を入力することができます。名前は一意であることが必要です。
バックアップセットの説明	今後の参照用にバックアップセットの情報を記述します。

項目	説明
ファイルのバックアップ方式	

項目	説明
	<p>次のバックアップ方式のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <p>■ 完全 - 選択したファイルをバックアップする</p> <ul style="list-style-type: none"> -アーカイブビットを使用する(アーカイブビットをリセットする):選択したすべてのファイルをバックアップし、それらのファイルがバックアップ済みであることを示すために、アーカイブビットをリセットします。 -修正日時を使用してバックアップする:修正日時のタイムスタンプを使用し、増分または差分バックアップにより、選択したすべてのファイルをバックアップします。 -ファイルのコピー:選択したすべてのデータをバックアップします。アーカイブビットはリセットしません。バックアップ戦略またはメディアローテーション方式に影響を与えません。 -ファイルのバックアップおよび削除(選択したファイルおよびフォルダをコピーバックアップ後に削除する):選択したデータをバックアップしてメディアの検証を行った後、バックアップ元のボリュームからバックアップしたデータを削除します。ジョブを実行するのに使うログオンアカウントクレデンシャルにはファイルを削除する権限が必要です。Remote Agent for Linux or Unix Servers または Remote Agent for Macintosh Systems がインストールされるコンピュータのファイルをバックアップし、削除する方式を使うためには、Backup Exec のログオンアカウントにスーパーユーザーの権限がなければなりません。そうでない場合、データはバックアップされますが、削除されません。Backup Exec Archiving Option はデータアーカイブに対してさらに機能を提供します。 <p>p.1374の「Archiving Optionについて」を参照してください。</p> <p>■ 差分- 前回の完全バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする</p> <ul style="list-style-type: none"> -アーカイブビットを使用する(アーカイブビットをリセットしない):前回の完全バックアップ以降に(アーカイブビットに基づいて)変更されたすべてのファイルをバックアップします。この方式ではアーカイブビットをリセットしないため、バックアップ戦略またはメディアローテーション方式に影響を与えません。 -修正日時を使用してバックアップする:前回の完全バックアップ以降に変更されたすべてのファイルを、修正日時のタイムスタンプを使用してバックアップします。この差分バックアップでは、完全バックアップで使用されたものと同じスクリプトや選択リストを使用してください。

項目	説明
	<ul style="list-style-type: none"> ■ ワーキングセット-選択したファイルをバックアップする -その日に変更されたファイル:その日に修正または作成されたすべてのファイルをバックアップします。 - 過去 x 日間にアクセスされたファイル:このバックアップ方式を選択した場合は、[バックアップジョブ実行日から起算して過去 x 日以内にアクセスのあったファイルをすべてバックアップする]フィールドで、過去何日間にアクセスされたデータをバックアップするのかを指定することができます。 <p>p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。</p>
<p>バックアップジョブ実行日から起算して過去 x 日以内にアクセスのあったファイルをすべてバックアップする</p>	<p>[ファイルのバックアップ方式]フィールドで[過去 x 日間にアクセスされたファイル]を選択した場合は、過去 x 日間にアクセスされたファイルをバックアップするように指定します。</p> <p>ワーキングセットからのリストアによってシステムを完全にリカバリするのに必要なデータをバックアップするには、最低 30 日間を指定することをお勧めします。</p>

項目	説明
<p>Microsoft 変更ジャーナルを使用する</p>	<p>前回の完全バックアップ以降に修正されたファイルの追跡に Microsoft 変更ジャーナル を使用します。このオプションは、NTFS ボリュームでのみ使用できます。</p> <p>次のバックアップ方式のいずれかを選択した場合、このオプションは利用可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択したファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする。この方式は、オフホストバックアップの実行では利用できません。 ■ 差分 - 前回の完全バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする ■ 増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする <p>また、このオプションは [合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する] チェックボックスを選択した場合、利用できるようになります。</p> <p>[合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する] オプションで変更ジャーナルを使用する場合、アーカイブビットをリセットするバックアップ方式を選択しても、アーカイブビットはリセットされません。</p> <p>linkd.exe によって作成された接合点を使用してボリュームのバックアップを行う場合は、Microsoft 変更ジャーナル を使用しないでください。この場合、接合点を正しくたどることができません。</p>
<p>バックアップ時と削除時にツリー構造を保持する</p>	<p>完全バックアップジョブで、バックアップするファイルのハードディスク上のディレクトリ構造を保持します。このオプションは、ファイルをバックアップして削除する完全バックアップ方式を選択した場合にのみ使用できます。</p>

項目	説明
合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する	<p>テンプレートの場合にのみ表示されます。このオプションは、合成バックアップジョブと True Image Restore ジョブで使用します。前回のバックアップ以降に移動、名前の変更、または追加の対象となったファイルとディレクトリを検出するのに必要な情報を収集し、それらのファイルとディレクトリをバックアップジョブに含めるように指定します。このオプションを選択しなかった場合、アーカイブビットが変更されていなければ、それらのファイルとディレクトリはスキップされます。このオプションを選択すると、パス名、ファイル名、修正日時および他の属性が、前回の完全バックアップおよび増分バックアップの際のパス名、ファイル名、修正日時および他の属性と比較されます。これらの属性のいずれかが新しいか、または変更されている場合、そのファイルまたはディレクトリはバックアップ対象になります。</p> <p>このオプションを選択してバックアップを行うと、選択しない場合よりも多くのディスク領域と時間が必要です。</p> <p>合成バックアップポリシーに使用するベースラインバックアップテンプレートおよび増分バックアップテンプレートの場合、このオプションを選択する必要があります。</p> <p>p.885の「合成バックアップ機能について」を参照してください。</p>
バックアップ後に検証する	<p>バックアップ完了後に、メディアからデータを読み取り可能かどうかを確認するために、自動的に検証が実行されます。すべてのバックアップで検証を行うことをお勧めします。</p>

項目	説明
圧縮の種類	<p>次の圧縮オプションを提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし: このオプションでは、データを元の形式(圧縮されていない状態)でメディアにコピーします。ただし、データ圧縮を使用した方が、バックアップに必要なストレージメディアの容量を節約することができます。 ハードウェアによるデータ圧縮は、ハードウェア圧縮機能をサポートしているデバイスとハードウェア圧縮機能をサポートしていないデバイスが混在する環境では使用できません。 この場合、ハードウェア圧縮は自動的に無効になります。ハードウェア圧縮をサポートしているドライブの圧縮機能を使用するように手で設定しなおすこともできますが、このような操作は、メディアに格納されるデータの一貫性に問題が発生する原因になります。また、ハードウェア圧縮をサポートしているドライブに障害が発生した場合は、圧縮したメディアを非圧縮ドライブでリストアすることはできません。 ■ ソフトウェア: このオプションでは、STAC ソフトウェアデータ圧縮方式で圧縮したデータをストレージデバイスに格納します。 ■ ハードウェア (無効な場合、なし): このオプションでは、ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮が使用されます。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、データは圧縮されずにバックアップされます。 ■ ハードウェア (無効な場合、ソフトウェア): このオプションでは、ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮が使用されます。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、STAC ソフトウェア圧縮方式が使用されます。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

バックアップジョブの[詳細]オプション

詳細オプションを使用してバックアップジョブをカスタマイズできます。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

このダイアログボックスには次のオプションが含まれています。

表 6-7 バックアップジョブの[詳細]オプション

項目	説明
単一インスタンスストアを使用して NTFS ボリュームをバックアップする	<p>Microsoft Windows の単一インスタンスストア (SIS) 機能を使用している場合にのみ表示されます。単一インスタンスバックアップでは、同一ファイルに対して NTFS ボリュームがチェックされます。ファイルのコピーが複数見つかった場合は、そのファイルを参照している SIS リンクの数に関係なく、そのファイルの 1 つのインスタンスのみが Backup Exec によってバックアップされます。</p> <p>単一インスタンスバックアップを使用すると、バックアップに必要なストレージスペースを大幅に削減できます。多くのアプリケーションで同じ内容のファイルが自動的に生成されます。実際に節約できる容量は、ボリュームの重複ファイルの数によって異なります。</p> <p>警告: バックアップジョブが完了しなかった場合は、バックアップセットにファイルデータが含まれていない可能性があります。バックアップが正しく完了するまでバックアップを再実行してください。増分バックアップ方式を使用している場合は、ジョブを再実行しても同じファイルはバックアップされません。すべてのファイルを完全にバックアップするには、完全バックアップまたはコピーバックアップを実行する必要があります。修正日時を使用する増分バックアップ方式を使用している場合は、同じバックアップジョブを実行することでファイルが正しくバックアップされます。</p>

項目	説明
<p>接合点以下のファイルとディレクトリをバックアップする</p>	<p>接合点の情報とリンク先のファイルおよびディレクトリをバックアップします。このチェックボックスをオフにした場合は、接合点の情報のみがバックアップされ、リンク先のファイルおよびディレクトリはバックアップされません。</p> <p>データが再帰的にバックアップされる可能性があるため、Backup Exec は、Microsoft Windows Vista または Windows Server 2008 によって自動的に作成された接合点をたどりません。</p> <p>詳しくは次のシマンテック社のナレッジベースの記事を参照してください。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-9</p> <p>ドライブ文字の割り当てられていないマウントドライブを選択することはできないため、リンク先のファイルおよびディレクトリは、このオプションの選択に関係なくバックアップされません。</p> <p>接合点のリンク先のファイルおよびディレクトリがバックアップジョブの対象に含まれている場合は、このオプションを選択すると、それらのファイルおよびディレクトリは、ファイルおよびディレクトリの完全バックアップと、接合点のバックアップの合計 2 回重複してバックアップされます。</p> <p>警告: 接合点のリンク先が接合点を含む上位の場所の場合は、再帰 (データのバックアップが再帰的に行われる状況) によるエラーが発生し、バックアップジョブは失敗する可能性があります。たとえば、c:¥junctionpoint のリンク先が c:¥ の場合、c:¥junctionpoint をバックアップしようとするとき再帰によるエラーが発生し、このバックアップジョブは失敗する可能性があります。</p>
<p>シンボリックリンク以下のファイルとディレクトリをバックアップする</p>	<p>シンボリックリンクの情報とリンク先のファイルおよびディレクトリをバックアップします。</p> <p>このオプションを選択しない場合は、シンボリックリンクの情報のみがバックアップされます。リンク先のファイルおよびディレクトリはバックアップされません。</p> <p>シンボリックリンクがリモートコンピュータ上のファイルおよびディレクトリをポイントする場合、リモートコンピュータ上のファイルおよびディレクトリはバックアップされません。</p>

項目	説明
リモート記憶域内のデータをバックアップする	<p>プライマリストレージからセカンダリストレージに移動したデータをバックアップします。データを元の場所に戻さずに、直接バックアップメディアにバックアップします。</p> <p>このオプションを選択してシステム全体のバックアップを実行することは避けてください。セカンダリストレージに移動したデータをロードする必要があり、移動したデータが含まれているデータセットのバックアップに余計な時間がかかります。</p> <p>このチェックボックスをオフにすると、データそのものではなく、セカンダリストレージ上のデータの場所を格納したブレースホルダのみがバックアップされます。</p> <p>ドライブが1つしかないデバイスをセカンダリストレージおよびバックアップ用に使用している場合は、リモート記憶域と Backup Exec でのドライブの使用に競合が発生するため、このオプションを選択しないでください。</p>
Remote Agent の優先度	<p>Remote Agent によるバックアップの実行時に、メディアサーバーでのパフォーマンスの維持に使用する CPU サイクル数を選択することができます。優先度を高くすると、保護対象サーバーの CPU の処理能力のうち、バックアップ処理で使用する割合が増加します。</p> <p>バックアップジョブに対する CPU サイクルの割り当てを少なくすると、バックアップのパフォーマンスが低下します。</p> <p>このフィールドには、次のオプションが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 通常:Remote Agent でのバックアップ時に保護対象サーバーが使用する CPU サイクル数としてデフォルト値を使用する場合は、このオプションを選択します。 ■ 通常以下:バックアップジョブに割り当てる CPU サイクル数を少なくするには、このオプションを選択します。 ■ 低:バックアップジョブに割り当てる CPU サイクル数を最低限度にするには、このオプションを選択します。
バックアップしない	<p>オープンファイルのバックアップをバックアップ処理でスキップします。スキップしたファイルのリストがバックアップジョブのログに表示されます。</p>
ファイルがクローズするのを待つ 待ち時間 x 秒	<p>オープンファイルのバックアップをスキップしてバックアップ処理を続行する前に、そのファイルが閉じるのを指定された時間待ちます。</p> <p>指定した時間内にファイルが閉じない場合は、そのファイルのバックアップはスキップされます。スキップしたファイルのリストがバックアップジョブのログに表示されます。</p> <p>オープンファイルが複数ある場合は、それぞれのファイルに対して指定した時間閉じるのを待ちます。オープンファイルの数によっては、バックアップ時間がかかなり長くなる場合があります。</p>

項目	説明
ファイルロックしてバックアップする	使用中のファイルを開くことを試行します。開くことができたファイルはロックしてバックアップし、他のプロセスからの書き込みを防止します。ただし、オープンファイルのバックアップは、ファイルを開いているアプリケーションを終了してファイルを閉じ、一貫性のとれた状態でバックアップすることに比べ効果的ではありません。
ファイルロックしないでバックアップする	使用中のファイルを開くことを試行します。このオプションを選択した場合は、開くことができたファイルをロックせずにバックアップします。したがって、バックアップ処理中に他のアプリケーションからデータが書き込まれることがあります。 警告: このオプションを選択した場合は、バックアップしたデータの一貫性が損なわれ、データが破損することがあります。

¥Ntmsdata サブディレクトリ内のリムーバブルストレージデータベース、wbem¥Repository サブディレクトリ内の WMI リポジトリ、およびデフォルトの ¥LServer サブディレクトリ内のターミナルサービスデータベースをバックアップするには、<Systemroot>¥System32 ディレクトリを選択します。Systemroot¥System32¥Ntmsdata サブディレクトリ、¥wbem¥Repository サブディレクトリまたはデフォルトの ¥LServer サブディレクトリに個別に格納したファイルは、バックアップすることができない可能性があります。バックアップできるのはシステムファイルのみです。Systemroot¥System32 ディレクトリまたはそのサブディレクトリへの、ユーザーファイルの格納は避けてください。

- p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。
- p.930の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

バックアップまたはリストアジョブで使用するプリコマンドとポストコマンド

プリコマンドとポストコマンドを使用して、ジョブの実行前または実行後にコマンドを実行できます。

- p.383の「[プリコマンドとポストコマンドについて](#)」を参照してください。
- p.384の「[プリコマンドとポストコマンドのデフォルト設定](#)」を参照してください。

このダイアログボックスには次のオプションが含まれています。

表 6-8 [プリ/ポストコマンド]オプション

項目	説明
プリコマンド	<p>バックアップジョブまたはリストアジョブを実行する前に、指定したサーバー上でコマンドを実行します。各サーバー上に存在する正しいローカルパスを使用してください。</p> <p>プロンプトなど、ユーザーの入力が必要なコマンドはサポートされません。</p>
ポストコマンド	<p>バックアップジョブまたはリストアジョブを実行した後で、指定したサーバー上でコマンドを実行します。各サーバー上に存在する正しいローカルパスを使用してください。</p> <p>プロンプトなど、ユーザーの入力が必要なコマンドはサポートされません。</p>
<p>プリコマンドとポストコマンドの実行が戻りコード 0 (ゼロ) で完了した場合にのみ正常終了にする</p>	<p>Backup Exec によってプリコマンドまたはポストコマンドの戻りコードを確認し、コマンドが正しく完了したかどうかを調べることができます。</p> <p>プリコマンドまたはポストコマンドからオペレーティングシステムに終了コードとしてゼロが返された場合、Backup Exec では、そのコマンドが正しく完了したものと処理されません。ゼロでない終了コードが返された場合は、コマンドの実行時にエラーが発生したものと処理されます。</p> <p>Backup Exec によって戻りコードが確認され、指定したプリコマンドとポストコマンドの実行に関する設定に基づいて処理が続行されます。</p> <p>このオプションを選択しなかった場合は、プリコマンドとポストコマンドの実行に成功したかどうかについて、戻りコードに基づく判定は行われません。</p>
<p>プリコマンドが正しく実行された場合にのみジョブを実行する</p>	<p>プリコマンドが正しく実行された場合にのみバックアップジョブまたはリストアジョブを実行します。プリコマンドの実行に失敗した場合は、ジョブは実行されず、失敗したものとして記録されます。</p> <p>プリコマンドの実行に失敗した際にジョブを実行しない場合は、[プリコマンドとポストコマンドの実行が戻りコード 0 (ゼロ) で完了した場合にのみ正常終了にする]を選択する必要があります。戻りコードがゼロでない場合は、プリコマンドの実行に失敗したものと処理されます。ジョブは実行されず、ジョブ状態には[失敗]と表示されます。</p>

項目	説明
プリコマンドが正しく実行された場合にのみポストコマンドを実行する	プリコマンドが正しく実行された場合にのみポストコマンドを実行します。 プリコマンドの実行に失敗した際にポストコマンドを実行しない場合は、[プリコマンドとポストコマンドの実行が戻りコード 0 (ゼロ) で完了した場合にのみ正常終了にする]を選択する必要があります。プリコマンドの戻りコードがゼロでない場合は、コマンドの実行に失敗したものとして処理されます。ポストコマンドは実行されません。 また、[プリコマンドが正しく実行された場合にのみジョブを実行する]を選択し、プリコマンドとジョブの両方が正しく実行されたのにポストコマンドがゼロでないコードを返した場合は、ジョブとポストコマンドの両方の実行に失敗したものとしてジョブログに記録されます。
ジョブが失敗した場合でもポストコマンドを実行する	ジョブの実行に成功したかどうかに関係なくポストコマンドを実行します。 [プリコマンドとポストコマンドの実行が戻りコード 0 (ゼロ) で完了した場合にのみ正常終了にする]を選択し、ポストコマンドがゼロでないコードを返した場合は、そのポストコマンドは実行に失敗したものとしてジョブログに記録されます。
ジョブの検証完了後にポストコマンドを実行する	バックアップの[一般]プロパティダイアログボックスの[バックアップ後に検証する]オプションを選択した場合、検証が完了した後にポストコマンドを実行します。
コマンドが完了しない場合にコマンドをキャンセルする時間: コマンド実行後 x 分	完了しなかったプリコマンドまたはポストコマンドをキャンセルするのに待つ時間を指定します。デフォルトのタイムアウト時間は 30 分です。
このメディアサーバー	プリコマンドとポストコマンドを、このメディアサーバー上でのみ実行します。
バックアップ先の各サーバー	プリコマンドとポストコマンドを、バックアップするサーバーごとに 1 回実行します。 プリコマンドとポストコマンドに関する設定内容は、各サーバーに個別に適用されます。このオプションを選択した場合は、選択した次のサーバーでの処理を開始する前に、各サーバーでプリコマンドとポストコマンドが実行されます。

バックアップジョブの概略のプロパティ

バックアップジョブの作成時に、バックアップジョブの概略が表示されます。ジョブのプロパティが正確であることを確認するために詳細を見直すべきです。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

表 6-9 バックアップジョブの概略のプロパティ

項目	説明
今後、この概略を表示しない	バックアップジョブの作成時に表示されないように、ジョブの概略をオフにします。
OK	バックアップジョブの作成を完了します。ジョブは予定通り実行されます。
キャンセル	サブミットする前にバックアップジョブの設定を変更できるようにバックアップジョブの概略を閉じます。
印刷	ジョブの概略を印刷します。

バックアップファイルを選択または除外する方法

ファイル選択の詳細設定機能を使用してファイルの属性を指定し、バックアップするファイルを簡単に選択または選択を解除することができます。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

p.282の「[バックアップの\[インクルードまたはエクスクルードの選択\]オプション](#)」を参照してください。

この機能を使用して次のことができます。

- ファイル名属性を指定し、その属性のファイルをバックアップの対象に含めたり、バックアップの対象から除外したりすることができます。たとえば、拡張子 `.txt` のファイルのみをバックアップしたり、拡張子 `.exe` のファイルをバックアップから除外することができます。存在しない属性を使用してファイルを除外すると、その種類のすべてのファイルが除外されます。たとえば、SQL データベースの日付に基づいて除外した場合、SQL データベースには日付属性がないため、グローバル SQL エクスクルードが実行されます。
- 日付の範囲を指定し、該当するファイルのみを選択することができます。たとえば、12 月に作成または修正したファイルをバックアップの対象として選択することができます。
- 期間 (日数) を指定し、その期間アクセスされていないファイルをバックアップの対象として選択することができます。たとえば、`My Documents` フォルダ内に存在する過去 30 日間アクセスされなかったファイルを選択できます。その後、ファイルをバックアップして削除する方式を選択した完全バックアップジョブを実行します。

Backup Exec Archiving Option はデータアーカイブに対してさらに機能を提供します。
p.1374 の「[Archiving Option について](#)」を参照してください。

ジョブのスケジュールの設定について

[スケジュール]オプションを使用して、ジョブの開始時刻や実行間隔を設定することができます。バックアップ、リストア、インベントリ、カタログの新規作成などのジョブにスケジュールを設定することができます。ジョブのセットアップ時に、ジョブを今すぐ実行する、指定した日時に 1 回だけ実行する、またはスケジュールに従って実行するように指定することができます。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

バックアップ選択リストを作成する際、選択リスト内のリソースに対してバックアップの実行が可能な時間範囲を設定することができます。この時間範囲を有効時間帯と呼びます。有効時間帯以外の時間帯にジョブを実行するようにスケジュールを設定すると、そのジョブは実行されず、ジョブモニターに[無効なスケジュール]というジョブ状態が表示されます。ジョブのスケジュールを設定する際には、リソースの有効時間帯の範囲内であることを確認してください。

p.291 の「[選択リストの優先度と有効時間帯の設定](#)」を参照してください。

p.354 の「[デフォルトスケジュールオプションの設定](#)」を参照してください。

p.353 の「[スケジュールからの日付の除外](#)」を参照してください。

ジョブのスケジュールの設定

[スケジュール]オプションを使用して、ジョブの開始時刻や実行間隔を設定することができます。バックアップ、リストア、インベントリ、カタログの新規作成などのジョブにスケジュールを設定することができます。ジョブのセットアップ時に、ジョブを今すぐ実行する、指定した日時に 1 回だけ実行する、またはスケジュールに従って実行するように指定することができます。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定について](#)」を参照してください。

ジョブのスケジュールを設定する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。

- 3 必要なオプションを選択します。
p.344 の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [\[今すぐ実行\]](#)をクリックします。

[スケジュール]オプション

次の表に、ジョブをスケジュールするために選択できるオプションを示します。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

表 6-10 [スケジュール]オプション

項目	説明
現在日時	このコンピュータに設定されている現在の日時を表示します。
今すぐ実行する	ジョブを今すぐ実行します。
指定日時に 1 回だけ実行する	ジョブを指定日時に 1 回だけ実行するようにスケジュールを設定できます。
スケジュールに従って実行する	ジョブが定期的に行われるようにスケジュールを設定できます。
スケジュールを設定	ジョブを定期的に行う日を選択できます。
有効日	[スケジュールに従って実行する]が選択されている場合、このスケジュールを開始する日付を表示します。

項目	説明
開始時間帯	<p>[スケジュールに従って実行する]が選択されている場合、スケジュールされた日にジョブを開始することができる時間の範囲を表示します。</p> <p>タスクが実行される期間を設定する場合、前日の午前0時を超過して翌日にわたる期間を開始時間帯に入力することができます。ただし、このような期間を設定すると、タスクの実行日が変更される可能性がある点に注意が必要です。たとえば、毎週金曜日の午後8時から午前4時の間にタスクが実行されるようにスケジュールを設定した場合、タスクは土曜日の午前4時またはそれ以前に実行される可能性があります。土曜日にタスクを実行しない場合、開始時間帯の終了時刻を午前4:00から午後11:59:59に変更する必要があります。これにより、タスクは金曜日に完了することになります。開始時間帯が午前0時をまたぐ場合、開始時刻は終了時刻より遅い時間になります。</p> <p>Backup Exec は、ジョブを実行するときに、ジョブの開始時間帯とリソースの有効時間帯の両方を考慮します。有効時間帯の範囲外で実行されるジョブをスケジュールすると、実行されません。Backup Exec は [ジョブモニター] で [スケジュールが無効] というジョブステータスを表示します。ジョブのスケジュールを設定する際には、ジョブの開始時間帯がリソースの有効時間帯の範囲内であることを確認してください。</p> <p>p.291 の「[優先度と有効時間帯]バックアップオプション」 を参照してください。</p>
保留にする	<p>ジョブを保留状態でサブミットできます。</p> <p>このオプションを選択すると、ジョブはサブミットされますが、保留状態を解除するまで実行されません。</p>
ジョブが正常に完了した場合にジョブを削除する	<p>今すぐまたはスケジュール日時に1回限り実行されたジョブで、かつテンプレートによって作成されていないジョブのうち、正常に完了したジョブを削除します。</p>

項目	説明
ジョブの完了後にジョブを削除する	完了したジョブ(エラーが発生したジョブも含む)、一度だけ実行するように作成されたジョブ、テンプレートから作成されていないジョブは削除されます。一度だけ実行するために作成されたジョブは、すぐに実行された場合でも、後から実行するようにスケジュールされている場合でも削除されます。
ジョブを削除しない	1 回限り実行され、かつテンプレートによって作成されていないジョブを[ジョブセットアップ]ビューに保持します。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

スケジュールカレンダーについて

[スケジュール一覧]タブおよび[除外日の設定]タブでは、どちらも3か月分のカレンダーが表示されます。カレンダーでは、ジョブの実行日を選択する方法およびスケジュールの概略を表示する方法が提供されます。

ジョブの実行日を選択すると、カレンダーに緑色のチェックマークが表示されます。また、ある種類のスケジュールオプションをカレンダーで表示している場合、他の種類のスケジュールオプションが設定されている日には、グレーのチェックマークが表示されます。

p.346の「[特定の日に実行するジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

p.347の「[特定の曜日に定期的に行うジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

p.348の「[毎月特定の日に定期的に行うジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

p.349の「[実行間隔を指定したジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

p.350の「[ジョブスケジュールの有効日の設定](#)」を参照してください。

p.351の「[スケジュール済みジョブの開始時間帯の設定](#)」を参照してください。

p.352の「[時間間隔内でのジョブの再実行](#)」を参照してください。

p.353の「[スケジュールからの日付の除外](#)」を参照してください。

特定の日に実行するジョブのスケジュールの設定

1つの日付または複数の日付にジョブが実行されるようにスケジュールできます。

特定の日に実行するジョブのスケジュールを設定する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。
 たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- 3 [スケジュールに従って実行する]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。

新しいジョブの実行日を選択する方法 手順 5 に進みます。

既存のジョブの実行日を編集する方法 [スケジュールを設定]をクリックします。

- 5 [スケジュール一覧]タブの[カレンダー、スケジュールの編集]の下にある[日付指定]をクリックします。
- 6 次のいずれかを実行します。

- 1つの日付を選択する方法
- [新規]をクリックします。
 - 日付を入力します。
 - [OK]をクリックします。

複数の日付を選択する方法 カレンダーで複数の日付をクリックします。

- 7 [OK]をクリックします。

特定の曜日に定期的に実行するジョブのスケジュールの設定

[週/曜日指定]オプションを使用して、次の種類のスケジュールでジョブを実行します。

表 6-11 定期的に実行するスケジュール例

定期的に実行するジョブオプション	例
毎週同じ曜日	たとえば、毎週水曜日にジョブが実行されます。
毎月特定の週に毎日	たとえば、毎月第2週に毎日ジョブが実行されます。
選択した週の指定した曜日	たとえば、毎月最後の金曜日にジョブが実行されます。

特定の曜日に定期的に行うジョブのスケジュールを設定する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。
たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- 3 [スケジュールに従って実行する]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。

新しいジョブの実行日を選択する方法 手順5に進みます。

既存のジョブの実行日を編集する方法 [スケジュールを設定]をクリックします。

- 5 [スケジュール一覧]タブの[カレンダー、スケジュールの編集]の下にある[週/曜日指定]をクリックします。
- 6 次のいずれかを実行します。

特定の日にジョブを実行する方法 特定の日のチェックボックスをオンにします。

毎週同じ曜日にジョブを実行する方法 マトリックスで曜日の名前を選択します。たとえば、毎週月曜日にジョブを実行するには、[月]をクリックします。

特定の週に毎日ジョブを実行する方法 その週の行番号を選択します。たとえば、毎月第1週にジョブを実行する場合は、[第1週]をクリックします。

月ごとの週の数に関係なく、毎月最後の週にジョブを実行する方法 [最後]をクリックします。

すべての日にジョブを実行する方法 [すべてを選択]をクリックします。

既存のすべての選択項目をクリアする方法 [すべて解除]をクリックします。

- 7 [OK]をクリックします。

毎月特定の日に定期的に行うジョブのスケジュールの設定

毎月、特定の日、最後の日またはすべての日にジョブが実行されるようにスケジュールを設定できます。

毎月特定の日に定期的に実行するジョブのスケジュールを設定する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。

たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。

- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。

- 3 [スケジュールに従って実行する]をクリックします。

- 4 次のいずれかを実行します。

新しいジョブの実行日を選択する方法 手順 5 に進みます。

既存のジョブの実行日を編集する方法 [スケジュールを設定]をクリックします。

- 5 [スケジュール一覧]タブの[カレンダー、スケジュールの編集]の下にある[日付指定]をクリックします。

- 6 次のいずれかを実行します。

毎月特定の日にジョブを実行する方法 各日付のボタンをクリックします。

実際の日付ではなく、毎月月末にジョブを実行する方法 [最終日]にチェックマークを付けます。

すべての日付にジョブを実行する方法 [すべてを選択]をクリックします。

既存のすべての選択項目をクリアする方法 [すべて解除]をクリックします。

- 7 [OK]をクリックします。

実行間隔を指定したジョブのスケジュールの設定

特定の日付から、特定の日数ごとにジョブが実行されるようにスケジュールを設定できます。たとえば、2006年1月1日から3日ごとにジョブを実行するように設定できます。デフォルトでは、現在の日付から、指定した日数ごとにタスクが実行されます。ただし、スケジュールを有効にする日付を設定することができます。バックアップする選択リストに有効時間帯が存在する場合、ここで選択した日付ではなく有効時間帯を使用して開始日が計算されます。

たとえば、6月11日から7日ごとにバックアップジョブが実行されるようにスケジュールを設定するとします。関連する選択リストには6月12日から開始の有効時間帯が存在します。ジョブは6月12日に初めて実行するようにスケジュールを設定されます。ただし、カレンダーには開始日が6月11日として示されます。

繰り返し実行されるタスクは、指定した開始時間帯に実行されます。

実行間隔を指定したジョブのスケジュールを設定する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。

たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。

- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- 3 [スケジュールに従って実行する]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。

新しいジョブの実行日を選択する方法 手順5に進みます。

既存のジョブの実行日を編集する方法 [スケジュールを設定]をクリックします。

- 5 [スケジュール一覧]タブの[カレンダー、スケジュールの編集]の下にある[間隔指定]をクリックします。
- 6 [間隔]にチェックマークを付けます。
- 7 ジョブを繰り返し実行する間隔を日数で入力します。
- 8 [有効開始日]フィールドで、スケジュールを有効にする日付を選択します。
ここで入力した日付によって、[スケジュール一覧]タブの[有効日]オプションを使用して設定した有効日が無効になることはありません。
- 9 [OK]をクリックします。

ジョブスケジュールの有効日の設定

有効日とは、スケジュールが有効になる日です。ジョブは有効日より前に実行できません。デフォルトでは、有効日は現在の日付です。

ジョブスケジュールの有効日を設定する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。

たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。

- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- 3 [スケジュールに従って実行する]をクリックします。

- 4 次のいずれかを実行します。

新しいジョブの実行日を選択する方法 手順 5 に進みます。

既存のジョブの実行日を編集する方法 [スケジュールを設定] をクリックします。

- 5 [スケジュール一覧] タブの [カレンダー、スケジュールの編集] の下にある [有効日] をクリックします。
- 6 [スケジュールを x 日から発効させる] チェックボックスがオンになっていることを確認します。
- 7 スケジュールを有効にする日付を選択します。
- 8 [OK] をクリックします。

開始時間帯について

開始時間帯とは、ジョブを開始することができる時間の範囲です。開始時間帯は 23 時間 59 分 59 秒を超えることはできません。たとえば、午前 3 時に開始し、翌日の午前 5 時に終了する開始時間帯を設定することはできません。

デフォルトの開始時間帯は午後 11 時から午後 10 時 59 分 59 秒です。デフォルトの設定を使用する場合、月曜日に実行するようにスケジュールを設定したジョブは、月曜日の午後 11 時以降であればいつでも開始できます。火曜日の午後 10 時 59 分 59 秒以降は開始できません。

午前 0 時を経過して翌日にわたる期間を開始時間帯に入力することができます。ただし、このような期間を設定すると、ジョブの実行日が変更される可能性があります。たとえば、毎週金曜日の午後 10 時から午前 4 時の間にジョブが実行されるようにスケジュールを設定した場合、ジョブは土曜日の午前 4 時またはそれ以前に実行される場合があります。土曜日にジョブを実行しない場合、ジョブを午後 11 時 59 分 59 秒以前に開始するように開始時間帯を変更する必要があります。

p.351 の「[スケジュール済みジョブの開始時間帯の設定](#)」を参照してください。

スケジュール済みジョブの開始時間帯の設定

ジョブを開始することができる時間の範囲を設定するために開始時間帯を設定できます。

p.351 の「[開始時間帯について](#)」を参照してください。

スケジュール済みジョブの開始時間帯を設定する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。
たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- 3 [スケジュールに従って実行する]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。

新しいジョブの実行日を選択する方法 手順 5 に進みます。

既存のジョブの実行日を編集する方法 [スケジュールを設定]をクリックします。

- 5 [スケジュール一覧]タブの[カレンダー、スケジュールの編集]の下にある[開始時間帯]をクリックします。
- 6 [開始時間帯の始まり]フィールドで、ジョブを開始することができる時刻を選択します。
- 7 [開始時間帯の終わり]フィールドで、ジョブを開始する必要がある最も遅い時刻を選択します。
- 8 [OK]をクリックします。

時間間隔内でのジョブの再実行

スケジュールされた実行日に、指定した時間間隔でジョブが複数回実行されるように設定することができます。開始時間帯にジョブが繰り返される間隔を指定します。たとえば、ジョブの開始時間帯が 12 時間である場合、その開始時間帯に 2 時間ごとにジョブが実行されるように設定できます。開始時間帯の開始時間に基づいて、指定した間隔でジョブが実行されます。間隔は、0 より長く 23 時間 59 分 59 秒より短く設定する必要があります。また、実行間隔は、開始時間帯として設定した間隔よりも短くする必要があります。たとえば、開始時間帯が 2 時間である場合、1 時間 59 分 59 秒より長い実行間隔を指定することはできません。

時間間隔内でジョブを再実行する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。
たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- 3 [スケジュールに従って実行する]をクリックします。

- 4 次のいずれかを実行します。

新しいジョブの実行日を選択する方法 手順5に進みます。

既存のジョブの実行日を編集する方法 [スケジュールを設定]をクリックします。

- 5 [スケジュール一覧]タブの[カレンダー、スケジュールの編集]の下にある[実行間隔]をクリックします。
- 6 [実行日にタスクを繰り返す]にチェックマークを付けます。
- 7 時間間隔を時間、分、秒で選択します。
- 8 [OK]をクリックします。

スケジュールからの日付の除外

スケジュールから、休日や祝日などの特定の日付を除外することができます。日付を選択すると、カレンダーのその日付の記号が、線の入った赤色の丸に変更されます。

スケジュールから日付を除外する方法

- 1 スケジュールを設定するジョブの種類を決定し、ナビゲーションバーの適切なボタンをクリックします。
たとえば、バックアップジョブのスケジュールを設定するには、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- 3 [スケジュールに従って実行する]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。

新しいジョブの実行日を選択する方法 手順5に進みます。

既存のジョブの実行日を編集する方法 [スケジュールを設定]をクリックします。

- 5 [除外日の設定]タブをクリックします。
- 6 次のいずれかを実行します。

1つの日付を除外する方法

- [新規]をクリックします。
- 日付を入力します。
- [OK]をクリックします。

複数の日付を除外する方法 カレンダーで複数の日付をクリックします。

- 除外した日付をスケジュールに再び追加する方法
- [除外日の設定]フィールドで、日付をクリックします。
 - [削除]をクリックします。

7 [OK]をクリックします。

デフォルトスケジュールオプションの設定

新規作成するすべてのジョブに適用される、デフォルトのスケジュールオプションを設定することができます。固定的なスケジュールを設定し、新規に作成するすべてのジョブをそのスケジュールに従って実行する場合は、すべてのジョブ用のデフォルトスケジュールを設定し、ジョブのセットアップ時に[スケジュールに従って実行する]を使用し、必要に応じて修正します。

デフォルトスケジュールオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.354の「[デフォルトスケジュールオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

デフォルトスケジュールオプション

新規作成するすべてのジョブに適用される、デフォルトのスケジュールオプションを設定することができます。

p.354の「[デフォルトスケジュールオプションの設定](#)」を参照してください。

表 6-12 デフォルトスケジュールオプション

項目	説明
スケジュールを設定	既存のデフォルトスケジュールオプションを設定するか、または変更することができます。
ジョブが正常に完了した場合にジョブを削除する	今すぐまたはスケジュール日時に1回限り実行されたジョブで、かつテンプレートによって作成されていないジョブのうち、正常に完了したジョブを削除します。

項目	説明
ジョブの完了後にジョブを削除する	完了したジョブ (エラーが発生したジョブも含む)、一度だけ実行するように作成されたジョブ、テンプレートから作成されていないジョブは削除されます。一度だけ実行するために作成されたジョブは、すぐに実行された場合でも、後から実行するようにスケジュールされている場合でも削除されます。
ジョブを削除しない	1 回限り実行され、かつテンプレートによって作成されていないジョブを [ジョブセットアップ] ビューに保持します。

ファイルをバックアップして削除する完全バックアップ方式について

完全バックアップを実行するとき、ファイルをバックアップして削除する方式を選択できます。このバックアップ方式を使用すると、サーバーからメディアへファイルとフォルダを移動することによってサーバーのボリュームのディスク領域を解放できます。**Backup Exec** では、選択したデータをコピーバックアップとしてバックアップし、メディアの検証を行った後、バックアップ元のボリュームからバックアップしたデータを削除します。

ジョブを実行するのに使う **Backup Exec** ログオンアカウントのクレデンシャルにはファイルを削除する権限が必要です。**Remote Agent for Linux or Unix Servers** または **Remote Agent for Macintosh Systems** がインストールされるコンピュータのファイルをバックアップし、削除する方式を使うためには、**Backup Exec** のログオンアカウントにスーパーユーザーの権限がなければなりません。そうでない場合、データはバックアップされますが、削除されません。

Backup Exec はデータがバックアップされた後検証操作を実行します。検証に失敗した場合は、ジョブは中止され、ユーザーに通知されます。検証のエラーを取得したら、ジョブログを表示してください。問題を訂正することを試み次にジョブを再実行してください。データがバックアップされ、検証された後、**Backup Exec** は選択したデータを削除します。ジョブログには削除したデータのリストが記録されます。

ファイルをバックアップして削除する方式を使用する完全バックアップジョブのための「チェックポイントから再開」オプションを有効にできます。クラスタフェールオーバーが起きてジョブが再開されれば、バックアップが完了した後、ファイルはソースボリュームから削除されません。

Backup Exec Archiving Option はデータアーカイブに対してさらに機能を提供します。

p.1374 の「[Archiving Option について](#)」を参照してください。

p.356 の「[ファイルのバックアップおよび削除](#)」を参照してください。

ファイルのバックアップおよび削除

完全バックアップを実行するとき、ファイルをバックアップして削除する方式を選択できません。Backup Exec では、選択したデータをコピーバックアップとしてバックアップし、メディアの検証を行った後、バックアップ元のボリュームからバックアップしたデータを削除します。

p.355の「[ファイルをバックアップして削除する完全バックアップ方式について](#)」を参照してください。

Backup Exec Archiving Option はデータアーカイブに対してさらに機能を提供します。

p.1374の「[Archiving Option について](#)」を参照してください。

ファイルをバックアップして削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップして削除するデータを選択します。
- 4 [一般]をクリックします。
- 5 [ファイルのバックアップ方式]フィールドで、[ファイルのバックアップおよび削除(選択したファイルおよびフォルダをコピーバックアップ後に削除する)]を選択します。
- 6 バックアップジョブオプションを設定します。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

バックアップしたデータの複製について

バックアップしたデータを複製するジョブを作成することができます。このとき、既存のバックアップセットを複製するのか、スケジュール済みジョブの完了後すぐにバックアップセットを複製するのかを選択します。

仮想デバイスから物理デバイスにデータを直接コピーするバックアップ複製ジョブを使用することができます。仮想デバイスから物理デバイスにデータを直接コピーする場合、バックアップ複製ジョブにはソフトウェア暗号化を適用できません。ダイレクトコピーを無効にするか、またはジョブを暗号化しないようにする必要があります。

p.365の「[仮想テープライブラリから物理テープデバイスにデータを直接コピーする方法](#)」を参照してください。

既存のバックアップセットの複製を作成するように指定した場合は、カタログで選択したバックアップセットがソースメディアから読み出され、ドライブ、ドライブプール、バックアップフォルダなど、指定した宛先に書き込まれます。この種類のジョブは、実行スケジュールを設定することができます。

複数のデータストリームで作成された **Oracle** バックアップセットまたは **DB2** バックアップセットを複製する場合は、次の事項に注意する必要があります。

- 複製ジョブ中に複数のデータストリームは連続したデータストリームに変換されます。
- 複製したコピーのリストアジョブは、元のメディアのリストアジョブよりもパフォーマンスが低下することがあります。

ジョブの完了後に続いてバックアップセットの複製を選択する場合は、ソースとしてスケジュール済みバックアップジョブを選択します。まずバックアップジョブが実行され、作成されたバックアップセットが、複製ジョブ用として指定した宛先にコピーされます。ジョブの実行後にバックアップセットを複製するには、バックアップジョブを、他の複製ジョブと関連付けずに実行するようにスケジュールを設定する必要があります。この種類のジョブはスケジュールを設定できず、関連のバックアップジョブまたはリンク先のバックアップジョブの完了後にのみ実行されます。

p.357 の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

バックアップしたデータの複製

バックアップしたデータを複製するジョブを作成することができます。このとき、既存のバックアップセットを複製するのか、スケジュール済みジョブの完了後すぐにバックアップセットを複製するのかを選択します。

p.356 の「[バックアップしたデータの複製について](#)」を参照してください。

バックアップしたデータを複製する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [バックアップタスク]の下にある[新規バックアップセット複製ジョブ]をクリックします。
- 3 既存のバックアップセットを別のバックアップ先にコピーする場合は、次に示す順序で操作を実行します。
 - [既存のバックアップセットを複製する]を選択して[OK]をクリックします。
 - コピー元のバックアップセットを選択します。複数のデータストリームで作成された **Oracle** ジョブまたは **DB2** ジョブの場合は、インスタンス名の下にあるバックアップセットが作成された日付を選択します。
- 4 スケジュール済みバックアップジョブの実行によって作成されたバックアップセットを複製する場合は、次に示す順序で操作を実行します。
 - [ジョブで作成されたバックアップセットを複製する]を選択して[OK]をクリックします。
 - ソースとして使用するスケジュール済みバックアップジョブを選択します。

- 5 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]を選択します。
p.360の「[バックアップ複製ジョブの\[デバイスとメディア\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.363の「[新規バックアップセット複製ジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細設定]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.364の「[新規バックアップセット複製ジョブの\[詳細\]オプション](#)」を参照してください。
- 8 複製するデータを暗号化する場合は、次に示す順序で操作を実行します。
 - [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。
 - リストから暗号化の種類を選択します。
 - リストから暗号化キーを選択するか、[キーの管理]をクリックして新しいキーを作成します。
- 9 バックアップジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
p.670の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。
- 10 スケジュール済みバックアップジョブで作成されたバックアップセットを複製する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。
複製ジョブは、スケジュール済みバックアップジョブの完了後ただちに実行されます。
- 11 既存のバックアップセットを複製する場合は、[今すぐ実行]をクリックするか、[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、使用するスケジュールオプションを設定します。
p.344の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

【新規バックアップセット複製ジョブ】オプション

バックアップしたデータを複製するジョブを作成するとき、オプションは2つあります。既存のバックアップセットを新しいジョブとして複製するか、または既存のジョブのバックアップセットをジョブの完了時に複製することができます。

p.357の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

表 6-13 [新規バックアップセット複製ジョブ]オプション

項目	説明
既存のバックアップセットを複製する	既存のバックアップセットの複製バックアップを作成します。カタログで選択したバックアップセットがソースメディアから読み出され、指定した宛先に書き込まれます。
ジョブで作成されたバックアップセットを複製する	ジョブの完了時にジョブのバックアップセットの複製バックアップを作成します。選択したバックアップジョブがまず実行され、作成されたバックアップセットが、指定した宛先にコピーされます。

新規バックアップセット複製ジョブの[選択リスト]オプション

既存のバックアップセットを複製するジョブを作成できます。

p.357 の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

表 6-14 新規バックアップセット複製ジョブの[選択リスト]オプション

項目	説明
選択リスト	バックアップセット複製ジョブに使用する選択リストを指定します。
既存の選択リストを使用する	既存の選択リストをマージすることができます。
カタログの検索	複製ジョブの一部としてバックアップするファイルまたは他のアイテムを検索できます。
インクルード/エクスルード	ファイル名属性に基づいてファイルを含めるかまたは除外できます。
サブディレクトリを含める	選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。
ファイルの詳細を表示する	選択するファイルについてのすべての詳細を表示します。
プレビューペイン	ダイアログボックスの下部でプレビューペインを表示します。プレビューペインは選択するアイテムについての追加情報を表示します。
バックアップ開始日	バックアップリソースを表示する最初の日付を指定します。
バックアップ終了日	バックアップリソースを表示する最後の日付を指定します。

項目	説明
リソース別の表示	選択項目をリソースの一覧形式で表示できます。
メディア別の表示	選択項目をメディアの一覧形式で表示できます。
選択の詳細の表示	選択項目をディレクトリとファイルの一覧形式で表示できます。

バックアップ複製ジョブの[デバイスとメディア]オプション

バックアップ複製ジョブを実行するストレージデバイスとメディアセットを選択します。

p.357の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

このダイアログボックスには次のオプションが含まれています。

表 6-15 バックアップ複製ジョブの[デバイスとメディア]オプション

項目	説明
デバイス	<p>デバイスプール、ロボットライブラリドライブ、スタンドアロンのドライブ、ディスクへのバックアップフォルダ、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダなど、サポートされているストレージデバイスの種類をバックアップデータの送信先として指定します。</p> <p>p.435の「テープドライブおよびロボットライブラリについて」を参照してください。</p> <p>p.482の「ディスクへのバックアップフォルダについて」を参照してください。</p> <p>p.503の「デバイスプールについて」を参照してください。</p> <p>p.1976の「Storage Provisioning Option の[すべての仮想ディスク]デバイスプールについて」を参照してください。</p> <p>p.1916の「Remote Media Agent for Linux Servers について」を参照してください。</p> <p>p.2002の「Symantec Online Storage フォルダについて」を参照してください。</p> <p>p.1406の「Archiving Option でのボルトストアについて」を参照してください。</p> <p>p.1532の「OpenStorage デバイスについて」を参照してください。</p> <p>p.1536の「重複排除用ストレージフォルダについて」を参照してください。</p>

項目	説明
メディアまたはリソース	<p>メモ: このオプションは、Central Admin Server Option をインストールしている場合にのみ表示されます。</p> <p>複製ジョブに必要なメディアのリスト、または複製用に選択したリソースの名前が表示されます。</p>
メディアの場所	<p>メモ: このオプションは、Central Admin Server Option をインストールしている場合にのみ表示されます。</p> <p>メディアの場所が表示されます。メディアが[オフライン]または[不明]としてリストにある場合は、[リストア用デバイスまたはメディアサーバー]列でデバイスを選択する必要があります。管理対象メディアサーバーがアクセスできるデバイスのメディアを配置してください。</p> <p>選択したデータがメディアポルトに存在する場合、[オフライン]と表示されます。</p> <p>複製のために選択されるデータが不明のメディアの場所に存在する場合、[不明]と表示されます。ジョブの実行に使用可能な互換性のあるストレージデバイスでメディアを見つけることができません。</p>
デバイス	<p>メモ: このオプションは、Central Admin Server Option をインストールしている場合にのみ表示されます。</p> <p>次の条件と一致するデバイスの名前を表示します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 複製したいメディアと互換性がある。 ■ ジョブの処理に使用可能である。 <p>Backup Exec は各デバイスに個別の選択リストおよび個別の複製ジョブを作成します。</p>
このジョブにデバイスへのダイレクトアクセスを許可する	<p>リモートコンピュータで、データを重複排除してから、[デバイス]フィールドで選択される重複排除のストレージデバイスにデータを送信できるようにします。</p> <p>メモ: このオプションは Deduplication Option がインストールされ、[デバイス]フィールドで重複排除のストレージデバイスが選択されているときのみ有効になります。</p> <p>p.1542 の「ダイレクトアクセスについて」を参照してください。</p>

項目	説明
メディアセット	<p>バックアップの複製に使用するメディアセットを指定します。[上書き]を選択した場合は、ドライブ内に存在するスクラッチメディアまたは上書き禁止期間が終了しているメディアへの上書きが行われず。設定されているメディアの[メディアの上書き禁止レベル]オプションによっては、ドライブ内に存在する割り当て済みメディアまたはインポートメディアへの上書きが行われる場合があります。</p> <p>追記オプションのいずれかを選択し、追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップデータが追記されます。</p>
メディアに上書きする	<p>バックアップの複製データを上書き可能なメディアに格納します。このダイアログボックスの[デバイス]フィールドで選択したスタンダードドライブまたはドライブブールに、必要なメディアが存在していることを確認してください。</p> <p>ドライブ内に存在するスクラッチメディアまたは上書き禁止期間の終了している再利用可能メディアに上書きが行われます。設定されているメディアの[メディアの上書き禁止レベル]オプションによっては、ドライブ内に存在する割り当て済みメディアまたはインポートメディアへの上書きが行われる場合があります。</p> <p>設定に応じて、スクラッチメディアまたは再利用可能メディアから上書き可能なメディアが選択されます。</p> <p>p.217の「Backup Execでの上書き可能メディアの検索順序」を参照してください。</p> <p>ドライブ内に上書き可能なメディアがない場合は、上書き可能なメディアの追加を求めるアラートが表示されます。</p>
メディアに追記する(追記可能なメディアがない場合は上書きする)	<p>このダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットにこのバックアップの複製を追記します。選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットの複製を追記し、追記可能なメディアが存在しない場合は、上書き可能なメディアが使用され、使用されたメディアがこのメディアセットに追加されます。</p> <p>追記ジョブの途中でメディアの空き領域がなくなった場合は、このジョブは上書き可能な別のメディアを使用して続行されます。</p> <p>ドライブ内に上書き可能なメディアがない場合は、上書き可能なメディアの追加を求めるアラートが表示されます。</p>
メディアに追記する(追記可能なメディアがない場合はジョブを終了する)	<p>このダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットにこのバックアップの複製を追記します。選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットの複製を追記し、追記可能なメディアが存在しない場合はジョブを中止します。</p>

項目	説明
ジョブの完了後にメディアを取り出す	操作の完了時に、ドライブのメディアを取り出します。
バックアップ前にメディアをリテンションする	テープドライブ内のテープを始めから終わりまで早送りして巻き取りなおし、テープがヘッドを滑らかに通過するようにします。リテンション操作は主としてミニカートリッジおよび 1/4 インチカートリッジ用で、これ以外のテープドライブでサポートされることはほとんどありません。
WORM (Write Once Read Many) メディアを使用する	このバックアップジョブに WORM (Write Once Read Many) メディアの使用を指定します。バックアップ先デバイスが WORM と互換性があるドライブである (またはバックアップ先デバイスに WORM と互換性があるドライブが含まれている) こと、およびそのドライブで WORM メディアが利用可能であることが、Backup Exec によって確認されます。WORM メディアまたは WORM と互換性があるドライブが存在しない場合は、アラートが送信されます。 p.232 の「WORM メディアについて」を参照してください。
テープへのダイレクトコピーを有効にする	物理デバイスに仮想テープライブラリから直接データをコピーできます。Backup Exec メディアサーバーはカタログのデータについての情報を記録します。コピーされたデータについての情報がカタログにあるので、仮想デバイスまたは物理デバイスのいずれかからデータをリストアできます。

新規バックアップセット複製ジョブの[一般]オプション

バックアップデータを複製するジョブを作成できます。既存のバックアップセットを複製するのか、スケジュール済みジョブの完了後すぐにバックアップセットを複製するのかが選択できます。

p.357 の「バックアップしたデータの複製」を参照してください。

表 6-16 新規バックアップセット複製ジョブの[一般]オプション

項目	説明
ジョブ名	このバックアップジョブの名前を指定します。
ジョブの優先度	このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。 p.183 の「ジョブの優先度について」を参照してください。
バックアップセットの説明	バックアップする情報についての説明を指定します。
ソースデバイス	元のバックアップジョブのバックアップ先デバイスとして使用するデバイスを指定します。

新規バックアップセット複製ジョブの[詳細]オプション

バックアップデータを複製するジョブを作成できます。既存のバックアップセットを複製するのか、スケジュール済みジョブの完了後すぐにバックアップセットを複製するのかを選択できます。

p.357の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

表 6-17 新規バックアップセット複製ジョブの[詳細]オプション

項目	説明
ジョブの完了後に検証する	バックアップ完了後に、メディアからデータを読み取り可能かどうかを確認するために、自動的に検証が実行されます。すべてのバックアップで検証を行うことをお勧めします。
圧縮の種類	<p>次の圧縮の種類から選択することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし: このオプションでは、データを元の形式(圧縮されていない状態)でメディアにコピーします。ただし、データ圧縮を使用した方が、バックアップに必要なストレージメディアの容量を節約することができます。 ハードウェアによるデータ圧縮は、ハードウェア圧縮機能をサポートしているデバイスとハードウェア圧縮機能をサポートしていないデバイスが混在する環境では使用できません。 この場合、ハードウェア圧縮は自動的に無効になります。ハードウェア圧縮をサポートしているドライブの圧縮機能を使用するように手動で設定しなおすこともできますが、このような操作は、メディアに格納されるデータの一貫性に問題が発生する原因になります。また、ハードウェア圧縮をサポートしているドライブに障害が発生した場合は、圧縮したメディアを非圧縮ドライブでリストアすることはできません。 ■ ハードウェア(無効な場合、なし): このオプションでは、ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮が使用されます。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、データは圧縮されずにバックアップされます。

バックアップセットの複製ジョブの[ネットワークとセキュリティ]オプション

バックアップセットの複製ジョブは暗号化することができます。

p.399の「[暗号化について](#)」を参照してください。

表 6-18 バックアップセットの複製ジョブの[ネットワークとセキュリティ]オプション

項目	説明
暗号化の種類	使用する暗号化の種類を指定します(使用する場合)。 ソースバックアップセットがソフトウェアを使用して暗号化される場合、複製バックアップセットも自動的にソフトウェアを使用して暗号化されます。暗号化の種類を選択しなくても複製バックアップセットは暗号化されます。
暗号化キー	使用する暗号化キーを指定します。 ソースバックアップセットが暗号化される場合、複製バックアップセットではソースバックアップセットと同じ暗号化キーが自動的に使用されます。複製バックアップセットに別の暗号化キーを選択しても、複製バックアップセットではソースバックアップセットと同じ暗号化キーが使用されます。
キーの管理	新しい暗号化キーを作成することを許可します。既存のキーを置き換えたり、削除することもできます。

仮想テープライブラリから物理テープデバイスにデータを直接コピーする方法

Backup Exec の[テープへのダイレクトコピー]オプションでは、バックアップ複製ジョブの間に物理テープデバイスに仮想テープライブラリから直接データをコピーできます。Backup Exec メディアサーバーはコピージョブを調整しますが、データをコピーしません。その代わりに、仮想テープライブラリは物理デバイスに仮想テープのイメージを直接コピーします。Backup Exec メディアサーバーはカタログのデータについての情報を記録します。コピーされたデータについての情報がカタログにあるので、仮想テープライブラリまたは物理デバイスのいずれかからデータをリストアできます。バックアップ複製ジョブのジョブログに[テープへのダイレクトコピー]が有効であることが示されます。

p.366の「仮想テープライブラリから物理テープデバイスへのデータのコピー」を参照してください。

ダイレクトコピーを使うためには、ソースデバイスと宛先デバイスの両方が NDMP に対応していなければなりません。デバイスが NDMP に対応していない場合、Backup Exec は通常のバックアップ複製ジョブを実行します。

メモ: [テープへのダイレクトコピー]を有効にして、デスクへのバックアップフォルダを複製ジョブの宛先デバイスとして選択した場合、Backup Execは通常の複製ジョブを実行します。

ハードウェア暗号化とソフトウェア暗号化の両方がダイレクトコピーでサポートされます。ソフトウェア暗号化の場合、ソースバックアップセットと宛先バックアップセットの両方がソフトウェア暗号化を使わなければなりません。

仮想テープライブラリから物理テープデバイスへのデータのコピー

仮想テープライブラリから物理テープデバイスにデータを直接コピーするバックアップ複製ジョブを作成できます。

メモ: ソースデバイスと宛先デバイスの両方がNDMPに対応していなければなりません。デバイスがNDMPに対応していない場合、Backup Execは通常のバックアップ複製ジョブを実行します。

p.365の「仮想テープライブラリから物理テープデバイスにデータを直接コピーする方法」を参照してください。

表 6-19 **ダイレクトコピーを使って仮想テープライブラリから物理デバイスにデータをコピーする方法**

手順	説明	参照先
通常のバックアップのジョブを作成します。	[デバイスおよびメディア]ビューで、宛先として仮想テープライブラリを選択します。	p.317の「 ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成 」を参照してください。 p.324の「 バックアップジョブおよびテンプレートの[デバイスとメディア]オプション 」を参照してください。
バックアップ複製ジョブを作成します。	[デバイスおよびメディア]ビューで次の手順を実行します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 宛先として物理テープデバイスを選択します。 ■ [テープへのダイレクトコピーを有効にする]を選択します。 	p.357の「 バックアップしたデータの複製 」を参照してください。 p.360の「 バックアップ複製ジョブの[デバイスとメディア]オプション 」を参照してください。

バックアップの検証

バックアップジョブの実行時のファイルの検証の他に、メディアの整合性をテストするために検証ジョブをサブミットすることができます。

検証操作でファイルの検証が失敗した場合は、そのメディアは損傷している可能性があります。検証に失敗したファイルについての詳細はジョブログに記録され、[アクティビティモニター]で表示することができます。

p.375 の「[バックアップオプションのデフォルト設定](#)」を参照してください。

p.357 の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

バックアップを検証する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[バックアップタスク]の下にある[新規バックアップデータ検証ジョブ]をクリックします。
- 3 検証するメディアを選択します。
- 4 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイス]をクリックします。
- 5 検証を行うメディアが存在しているデバイスを選択します。
- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。
- 7 必要なオプションを選択します。

p.368 の「[検証ジョブの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。

- 8 バックアップジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。

p.670 の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

- 9 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。

p.344 の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

検証の終了後に、ジョブログで結果をチェックすることができます。

検証ジョブの[選択リスト]プロパティ

バックアップメディアの整合性をテストするために検証ジョブをサブミットすることができます。

p.367 の「[バックアップの検証](#)」を参照してください。

表 6-20 検証ジョブの[選択リスト]プロパティ

項目	説明
選択リスト	検証ジョブに使用する選択リストを指定します。
カタログの検索	検証するファイルまたは他のアイテムを検索できます。
インクルード/エクスルード	ファイル名属性に基づいてファイルを含めるかまたは除外できます。
サブディレクトリを含める	選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。
ファイルの詳細を表示する	選択するファイルについてのすべての詳細を表示します。
プレビューペイン	ダイアログボックスの下部でプレビューペインを表示します。プレビューペインは選択するアイテムについての追加情報を表示します。
バックアップ開始日	バックアップを検索する最初の日付を指定します。
バックアップ終了日	バックアップを検索する最後の日付を指定します。
リソース別の表示	選択項目をリソースの一覧形式で表示できます。
メディア別の表示	選択項目をメディアの一覧形式で表示できます。
選択の詳細の表示	選択項目をディレクトリとファイルの一覧形式で表示できます。

検証ジョブのデバイスのプロパティ

バックアップジョブ実行後のファイルの検証に加えて、検証ジョブはメディアの整合性もテストします。

p.367の「[バックアップの検証](#)」を参照してください。

[デバイス]フィールドは、どのデバイスが検証するメディアを含んでいるかを示します。

検証ジョブの[一般]プロパティ

バックアップジョブ実行後のファイルの検証に加えて、検証ジョブはメディアの整合性もテストします。

p.367の「[バックアップの検証](#)」を参照してください。

表 6-21 検証ジョブの[一般]プロパティ

項目	説明
ジョブ名	検証するデータの内容を簡潔に表す名前を指定します。
ジョブの優先度	このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。 p.183 の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。

テスト実行ジョブについて

Backup Exec には、スケジュール済みバックアップジョブが正しく実行されるかどうかをチェックするテスト実行オプションが備えられています。テストジョブを実行することによって、データのバックアップは行わずに、通常のバックアップジョブの場合と同じようにジョブを監視することができます。テスト実行では、メディアの容量、クレデンシャル、適正なメディアの有無などをチェックすることができます。発生したエラーはジョブログに記録されますが、ジョブの実行は継続されます。指定した受信者に通知を送信することもできます。テスト実行ジョブにより、次のようなエラーの原因をチェックすることができます。

- ログオンクレデンシャルに必要な権限がない。
- メディアの容量が不足している。
- ドライブ内にメディアが存在しない。
- 上書きジョブ用の上書き可能なメディアが存在しない。
- 追記ジョブ用の追記可能なメディアが存在しない。

[すべてのドライブ]を対象とするテスト実行ジョブでは、[すべてのドライブ]で選択されるドライブプールの中のいずれかのデバイスでジョブを実行できないと、このジョブは失敗します。たとえば、デバイスの 1 つにメディアが挿入されていない場合などがそうです。

テスト実行ジョブにより、選択したジョブに必要なメディアの容量がチェックされます。また、複数のジョブの実行に必要なメディアの容量が存在するかどうかを、テスト実行結果レポートでチェックすることができます。

テスト実行ジョブを作成する前に、使用しているデバイスに対してバックアップジョブを実行することをお勧めします。Backup Exec は、バックアップデバイスに対して実際のバックアップジョブが実行されるまでは、バックアップデバイスの容量を認識しません。そのため、いかなるジョブも実行せずにテスト実行ジョブを作成した場合、Backup Exec は、デバイスにバックアップを実行するのに十分な容量があるかどうかを確認できません。デバイスに対してバックアップジョブを少なくとも 1 回実行していれば、容量を確認することができます。

p.370 の「[テスト実行ジョブの作成](#)」を参照してください。

p.753 の「[\[テスト実行の結果\]レポート](#)」を参照してください。

テスト実行ジョブの作成

Backup Exec には、スケジュール済みバックアップジョブが正しく実行されるかどうかをチェックするテスト実行オプションが備えられています。テストジョブを実行することによって、データのバックアップは行わずに、通常のバックアップジョブの場合と同じようにジョブを監視することができます。

p.369 の「[テスト実行ジョブについて](#)」を参照してください。

テスト実行ジョブを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ジョブ]ペインで、テスト実行を行うジョブを選択します。
- 3 [一般タスク]の下の[テスト実行]をクリックします。
- 4 必要な[一般]オプションを選択します。

p.370 の「[テスト実行ジョブの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。

- 5 バックアップジョブの完了を受信者に通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。

p.670 の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

- 6 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

テスト実行ジョブの[一般]プロパティ

Backup Exec には、スケジュール済みバックアップジョブが正しく実行されるかどうかをチェックするテスト実行オプションが備えられています。テストジョブを実行することによって、データのバックアップは行わずに、通常のバックアップジョブの場合と同じようにジョブを監視することができます。

p.369 の「[テスト実行ジョブについて](#)」を参照してください。

p.370 の「[テスト実行ジョブの作成](#)」を参照してください。

表 6-22 テスト実行ジョブの[一般]プロパティ

項目	説明
ジョブ名	テスト実行ジョブの名前を指定します。
クレデンシヤルをチェックする	バックアップ対象のリソースに対して、Backup Exec ログオンアカウントが有効かどうかを検証します。

項目	説明
必要なメディアの空き領域をチェックする	メディア上にジョブの完了に必要な容量があるかどうかをチェックします。 テスト実行では、キュー内に待機しているスケジュール済みジョブの数は確認されません。したがって、テスト実行ジョブを実行したときには利用可能であったメディアが、テスト実行ジョブの実行前に実行を予定されていたジョブによって使用されることがあります。
メディアが利用可能かどうかをチェックする	メディアがオンラインになっていて上書き可能かどうかをチェックします。
ジョブ履歴を使用する	ジョブ履歴を使用し、メディア上にスケジュール済みバックアップジョブの実行に必要な容量があるかどうかを調べます。ジョブ履歴を使用してチェックを行う方が、事前スキャンを実行するよりも高速です。
バックアップ対象をスキャンする	スキャンによってメディア上にスケジュール済みバックアップジョブの実行に必要な容量があるかどうかを調べます。スキャンはメディアの容量を調べる最も正確な方法です。既存のジョブ履歴が存在しない場合は、この方法を使用する必要があります。
エラーが発生した場合は、スケジュール済みジョブを保留にする	テスト実行で障害が発生した場合にスケジュール済みジョブを保留にします。
ジョブの優先度	テストジョブの優先度を指定します。このジョブと同じ時間に実行するようにスケジュールの設定されているジョブが他にもある場合は、優先度によって、どちらを先に実行するかが決定されます。 次の優先度を選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 高 ■ 通常以上 ■ 通常 ■ 通常以下 ■ 低

テスト実行のデフォルトオプションの設定

次の項目をチェックするようにテスト実行ジョブを設定できます。

- クレデンシャルが正しいかどうか
- メディア上に必要な容量があるかどうか
- メディアがオンラインになっていて上書き可能かどうか

テスト実行のデフォルトオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[テスト実行]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.372の「[テスト実行のデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

テスト実行のデフォルトオプション

次の項目をチェックするようにテスト実行ジョブを設定できます。

- クレデンシャルが正しいかどうか
- メディア上に必要な容量があるかどうか
- メディアがオンラインになっていて上書き可能かどうか

p.371の「[テスト実行のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

表 6-23 テスト実行のデフォルトオプション

項目	説明
クレデンシャルをチェックする	バックアップ対象のリソースに対して、Backup Exec ログオンアカウントが有効かどうかを検証します。
必要なメディアの空き領域をチェックする	メディア上にジョブの完了に必要な容量があるかどうかをチェックします。 テスト実行では、キュー内に待機しているスケジュール済みジョブの数は確認されません。したがって、テスト実行ジョブを実行したときには利用可能であったメディアが、テスト実行ジョブの実行前に実行を予定されていたジョブによって使用されることがあります。
メディアが利用可能かどうかをチェックする	メディアがオンラインになっていて上書き可能かどうかをチェックします。
ジョブ履歴を使用する	ジョブ履歴を使用し、メディア上にスケジュール済みバックアップジョブの実行に必要な容量があるかどうかを調べます。ジョブ履歴を使用してチェックを行う方が、事前スキャンを実行するよりも高速です。
バックアップ対象をスキャンする	スキャンによってメディア上にスケジュール済みバックアップジョブの実行に必要な容量があるかどうかを調べます。スキャンはメディアの容量を調べる最も正確な方法です。既存のジョブ履歴が存在しない場合は、この方法を使用する必要があります。

項目	説明
エラーが発生した場合は、スケジュール済みジョブを保留にする	テスト実行で障害が発生した場合にスケジュール済みジョブを保留にします。

バックアップオプションのカスタマイズ

この章では以下の項目について説明しています。

- [バックアップオプションのデフォルト設定](#)
- [プリコマンドとポストコマンドについて](#)
- [バックアップネットワークの指定について](#)
- [Symantec Endpoint Protection での Backup Exec の使用について](#)
- [ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について](#)
- [暗号化について](#)
- [暗号化キー](#)
- [DBA 開始ジョブの設定について](#)
- [DBA 開始ジョブの編集](#)
- [DBA 開始ジョブ用のジョブテンプレートの削除](#)
- [優先サーバー設定について](#)

バックアップオプションのデフォルト設定

バックアップ方式や圧縮の種類など、バックアップ操作に共通して使用する設定を Backup Exec に設定しておくことができます。デフォルト設定が特定のジョブに適さない場合、バックアップジョブの作成時に変更できます。

デフォルトのバックアップオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[バックアップ]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.376の「[デフォルトのバックアップオプション](#)」を参照してください。

デフォルトのバックアップオプション

バックアップ方式や圧縮の種類など、バックアップ操作に共通して使用する設定をBackup Execに設定しておくことができます。デフォルト設定が特定のジョブに適さない場合、バックアップジョブの作成時に変更できます。

p.375の「[バックアップオプションのデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 7-1 デフォルトのバックアップオプション

項目	説明
ファイルのバックアップ方式	デフォルトのバックアップ方式を指定します。[完全 - 選択したファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットする)]が、このフィールドの一般的な設定です。 p.258の「 バックアップ方式について 」を参照してください。
バックアップジョブ実行日から起算して過去 x 日以内にアクセスのあったファイルをすべてバックアップする	ワーキングセットによるバックアップ方式を選択した場合は、過去 x 日以内にアクセスされたファイルをバックアップするように指定します。
Microsoft 変更ジャーナルを使用する	前回の完全バックアップ以降に修正されたファイルの追跡にWindows NTFS 変更ジャーナルを使用できます。このオプションが使用できるのは、NTFS ボリュームのバックアップで、バックアップ方式として、[完全 - 選択したファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする]、[差分 - 修正日時を使用してバックアップする]または[増分 - 修正日時を使用してバックアップする]を選択した場合のみです。

項目	説明
<p>合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する</p>	<p>合成バックアップジョブと True Image Restore ジョブの追加情報を収集します。このオプションは、テンプレートの場合にのみ表示されます。</p> <p>Backup Exec で次の操作を行う場合にこのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 前回のバックアップ以降に移動、名前の変更、または追加の対象となったファイルとディレクトリを検出するのに必要な情報を収集する。 ■ バックアップジョブにこれらのファイルとディレクトリを含める。 <p>このオプションを選択しない場合、アーカイブビットが変更されていないファイルとディレクトリはスキップされます。このオプションを選択する場合は、パス名、ファイル名、修正日時および他の属性が、前回の完全バックアップおよび増分バックアップの際のパス名、ファイル名、修正日時および他の属性と比較されます。これらの属性のいずれかが新しいか、または変更されている場合、そのファイルまたはディレクトリはバックアップ対象になります。</p> <p>このオプションを選択してバックアップジョブを行うと、選択しない場合よりも多くのディスク領域と時間が必要です。</p> <p>合成バックアップポリシーに使用するベースラインバックアップテンプレートおよび増分バックアップテンプレートの場合、このオプションを選択する必要があります。</p> <p>p.885 の「合成バックアップ機能について」を参照してください。</p>

項目	説明
メディアの上書き禁止	<p>次のメディア上書きオプションを提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メディアに上書きする バックアップデータを上書き可能なメディアに格納します。このダイアログボックスの[デバイス]フィールドで選択したスタンドアロンドライブまたはドライブプールに、必要なメディアが存在していることを確認してください。 ドライブ内に存在するスクラッチメディアまたは上書き禁止期間の終了している再利用可能メディアに上書きが行われます。設定されているメディアの[メディアの上書き禁止レベル]オプションによっては、ドライブ内に存在する割り当て済みメディアまたはインポートメディアへの上書きが行われる場合があります。 p.216の「メディアの上書き禁止レベル」を参照してください。 ドライブ内のメディアが上書き不可能な場合は、上書き可能なメディアの挿入を求めるメッセージが表示されます。 ■ メディアに追記する(追記可能なメディアがない場合は上書きする) バックアップデータを、[一般]アプリケーションダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットに追記します。 p.184の「[ユーザー設定]のデフォルトの設定」を参照してください。 選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットを追記し、追記可能なメディアが存在しない場合は、上書き可能なメディアが使用され、使用されたメディアがこのメディアセットに追加されます。 追記ジョブの途中でメディアの空き領域がなくなった場合は、このジョブは上書き可能な別のメディアを使用して続行されます。上書き可能なメディアは、設定に応じてスクラッチメディアまたは再利用可能メディアから選択されます。 p.206の「メディアの上書き禁止について」を参照してください。 ドライブ内のメディアが上書き不可能な場合は、上書き可能なメディアの挿入を求めるメッセージが表示されます。 ■ メディアに追記する(追記可能なメディアがない場合はジョブを終了する) バックアップデータを、[一般]アプリケーションダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットに追記します。 p.184の「[ユーザー設定]のデフォルトの設定」を参照してください。 選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットを追記し、追記可能なメディアが存在しない場合はジョブを中止します。

項目	説明
圧縮の種類	<p>次の圧縮の種類を提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし データを元の形式(圧縮されていない状態)でメディアにコピーします。ただし、データ圧縮を使用した方が、バックアップに必要なストレージメディアの容量を節約することができます。 ■ ソフトウェア STACソフトウェアデータ圧縮方式で圧縮したデータをストレージデバイスに格納します。 ■ ハードウェア (無効な場合、なし) ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮を使用します。ドライブにデータ圧縮機能がない場合は、データは圧縮なしでバックアップされます。 ■ ハードウェア (無効な場合、ソフトウェア) ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮を使用します。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、STACソフトウェア圧縮方式が使用されます。
バックアップ後に検証する	<p>完了後バックアップを検証します。このオプションを選択すると、バックアップ完了後に、メディアが読み取り可能かどうかを確認するために、自動的に検証が行われます。すべてのバックアップで検証を行うことをお勧めします。</p>

項目	説明
<p>接合点以下のファイルとディレクトリをバックアップする</p>	<p>接合点の情報とリンク先のファイルおよびディレクトリをバックアップします。このチェックボックスをオフにした場合は、接合点の情報のみがバックアップされ、リンク先のファイルおよびディレクトリはバックアップされません。</p> <p>データが再帰的にバックアップされる可能性があるため、Backup Exec は、Microsoft Windows Vista または Windows Server 2008 によって自動的に作成された接合点をたどりません。次の URL で接合点に関する情報を参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-9</p> <p>linkd.exe (または同様のツール) によって作成された接合点を使用してボリュームをまたがっている場合、Advanced Open File Option (AOFO) バックアップおよび変更ジャーナル増分バックアップでは、接合点以降を正しくたどることができません。接合点を持つボリュームの AOFO バックアップおよび変更ジャーナル増分バックアップを実行する場合には、このオプションをオフにします。ディスクマネージャまたは mountvol.exe を使用して作成された接合点はサポートされません。</p> <p>ドライブ文字の割り当てられていないマウントドライブを選択することはできないため、リンク先のファイルおよびディレクトリは、このオプションの選択に関係なくバックアップされます。</p> <p>接合点のリンク先のファイルおよびディレクトリがバックアップジョブの対象に含まれている場合は、このオプションを選択すると、それらのファイルおよびディレクトリは、ファイルおよびディレクトリの完全バックアップと、接合点のバックアップの合計 2 回重複してバックアップされます。</p> <p>警告: 接合点のリンク先が接合点を含む上位の場所の場合は、再帰 (データのバックアップが再帰的に行われる状況) によるエラーが発生し、バックアップジョブは失敗する可能性があります。たとえば、c:\junctionpoint のリンク先が c:\\$ の場合、c:\junctionpoint をバックアップしようとする再帰によるエラーが発生し、このバックアップジョブは失敗する可能性があります。</p>
<p>シンボリックリンク以下のファイルとディレクトリをバックアップする</p>	<p>シンボリックリンクの情報とリンク先のファイルおよびディレクトリをバックアップします。</p> <p>このオプションを選択しない場合は、シンボリックリンクの情報のみがバックアップされます。リンク先のファイルおよびディレクトリはバックアップされません。</p> <p>シンボリックリンクがリモートコンピュータ上のファイルおよびディレクトリをポイントする場合、リモートコンピュータ上のファイルおよびディレクトリはバックアップされません。</p>

項目	説明
リモート記憶域内のデータをバックアップする	<p>プライマリストレージからセカンダリストレージに移動したデータをバックアップします。データを元の場所に戻さずに、バックアップメディアに直接バックアップします。</p> <p>このオプションを選択してシステム全体のバックアップを実行することは避けてください。セカンダリストレージに移動したデータをロードする必要があるため、移動したデータが含まれているデータセットのバックアップを行うには余計な時間がかかります。</p> <p>このチェックボックスをオフにすると、データそのものではなく、セカンダリストレージ上のデータの場所を格納したブレースホルダのみがバックアップされます。</p> <p>ドライブが 1 つしかないデバイスをセカンダリストレージおよびバックアップ用に使用している場合は、リモート記憶域と Backup Exec でのドライブの使用に競合が発生するため、このオプションを選択しないでください。</p>
単一インスタンスストアを使用して NTFS ボリュームをバックアップする	<p>単一インスタンスストアを使用して NTFS ボリュームをバックアップします。このオプションが利用できるのは、Microsoft Windows の単一インスタンスストア (SIS) 機能を使用している場合のみです。単一インスタンスバックアップでは、同一ファイルに対して NTFS ボリュームがチェックされます。ファイルのコピーが複数見つかった場合は、そのファイルを参照している SIS リンクの数に関係なく、そのファイルの 1 つのインスタンスのみが Backup Exec によってバックアップされます。</p> <p>単一インスタンスバックアップを使用すると、バックアップに必要なストレージスペースを大幅に削減できます。多くのアプリケーションで同じ内容のファイルが自動的に生成されます。実際に節約できる容量は、ボリュームの重複ファイルの数によって異なります。</p> <p>バックアップジョブが完了しなかった場合は、バックアップセットにファイルデータが含まれていない可能性があります。バックアップが正しく完了するまでバックアップを再実行してください。増分バックアップ方式を使用している場合は、ジョブを再実行しても同じファイルはバックアップされません。すべてのファイルを完全にバックアップするには、完全バックアップまたはコピーバックアップを実行する必要があります。修正日時を使用する増分バックアップ方式を使用している場合は、同じバックアップジョブを実行することでファイルが正しくバックアップされます。</p>
ダイレクトアクセスを有効にする	<p>リモートコンピュータがデータを重複排除し、重複排除のストレージデバイスにデータを送信できるようにします。</p> <p>p.1542 の「ダイレクトアクセスについて」を参照してください。</p>

項目	説明
バックアップしない	<p>オープンファイルのバックアップをバックアップ処理でスキップします。スキップしたファイルのリストがバックアップジョブのログに表示されます。</p>
ファイルがクローズするのを待つ待ち時間 x 秒	<p>オープンファイルのバックアップをスキップしてバックアップ処理を続行する前に、そのファイルが閉じるのを指定された時間待ちます。</p> <p>指定した時間内にファイルが閉じない場合は、そのファイルのバックアップはスキップされます。スキップしたファイルのリストがバックアップジョブのログに表示されます。</p> <p>オープンファイルが複数ある場合は、それぞれのファイルに対して指定した時間閉じるのを待ちます。オープンファイルの数によっては、バックアップ時間がかなり長くなる場合があります。</p>
ファイルをロックしてバックアップする	<p>使用中のファイルを開くことを試行します。開くことができたファイルはロックしてバックアップし、他のプロセスからの書き込みを防止します。ただし、オープンファイルのバックアップは、ファイルを開いているアプリケーションを終了してファイルを閉じ、一貫性のとれた状態でバックアップすることに比べ効果的ではありません。</p>
ファイルをロックしないでバックアップする	<p>使用中のファイルを開くことを試行します。このオプションを選択した場合は、開くことができたファイルをロックせずにバックアップします。したがって、バックアップ処理中に他のアプリケーションからデータが書き込まれることがあります。</p> <p>警告: このオプションを選択した場合は、バックアップしたデータの一貫性が損なわれ、データが破損することがあります。</p> <p>p.923の「Advanced Open File Option について」を参照してください。</p>
バックアップで Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) が有効になっている場合、Backup Exec がデータを一時的にスレージングできるローカルメディアサーバーの NTFS ボリュームのパスを入力する	<p>GRT 対応ジョブの間に Backup Exec が一時的なデータをスレージングできる場所を指定します。デフォルトの場所である C:¥temp が、システムボリュームではなく、NTFS ボリュームであることを確認します。この C:¥temp の必要条件を満たしていない場合は、Backup Exec がデータを一時的にスレージングできるローカルメディアサーバー上の NTFS ボリュームへの別のパスを入力します。</p> <p>バックアップが完了すると、Backup Exec はデータを削除します。</p> <p>1 GB 以上のディスク容量が必要です。</p>

プリコマンドとポストコマンドについて

すべてのバックアップジョブおよびリストアジョブの前後に実行するデフォルトのコマンドを設定することができます。デフォルト設定が指定のジョブに適さない場合、バックアップジョブの作成時に変更できます。

次のような条件を設定することができます。

- プリコマンドが正しく実行された場合にのみバックアップジョブまたはリストアジョブを実行する。
- プリコマンドが正しく実行された場合にのみポストコマンドを実行する。
- バックアップジョブまたはリストアジョブが失敗した場合でもポストコマンドを実行する。
- プリコマンドまたはポストコマンドの戻りコード(または終了コード)を確認し、コマンドが正しく完了したかどうかを調べる。プリコマンドまたはポストコマンドからオペレーティングシステムに終了コードとしてゼロが返された場合、**Backup Exec** では、そのコマンドが正しく完了したのとして処理されます。ゼロでない終了コードが返された場合は、コマンドの実行時にエラーが発生したのとして処理されます。

プリコマンドでエラーが発生した際にジョブを実行しない場合は、**Backup Exec** によってプリコマンドの戻りコードを確認し、そのコマンドの実行時にエラーが発生したかどうかを調べる必要があります。

たとえば、バックアップの前にデータベースをシャットダウンするプリコマンドの実行でエラーが発生した場合は、バックアップを実行するとデータベースが破損する恐れがあります。このような場合は、バックアップジョブを実行しないようにする必要があります。

また、**Backup Exec** によってプリコマンドとポストコマンドの戻りコードを確認するように設定すると、ポストコマンドの戻りコードがゼロでない場合は、ポストコマンドの実行に失敗したことがジョブログに記録されます。プリコマンドの実行に成功した場合にのみジョブを実行するように設定し、プリコマンドとジョブの両方が正しく実行されたのにポストコマンドの実行に失敗した場合は、**Backup Exec** では、そのジョブは実行に失敗したジョブとして記録されます。

たとえば、プリコマンドでのデータベースのシャットダウンが正しく実行され、バックアップジョブも正しく終了したがポストコマンドでのデータベースの再起動に失敗した場合は、このバックアップジョブとポストコマンドは失敗したのとして記録されます。

[バックアップ先の各サーバー]オプションを選択した場合は、選択した次のサーバーでの処理を開始する前に、各サーバーでプリコマンドとポストコマンドが実行されます。

p.384 の「[プリコマンドとポストコマンドのデフォルト設定](#)」を参照してください。

p.339 の「[バックアップまたはリストアジョブで使用するプリコマンドとポストコマンド](#)」を参照してください。

p.607 の「[リストアジョブでのプリコマンドとポストコマンドの実行](#)」を参照してください。

プリコマンドとポストコマンドのデフォルト設定

すべてのバックアップジョブおよびリストアジョブの前後に実行するデフォルトのコマンドを設定することができます。デフォルト設定が指定のジョブに適さない場合、バックアップジョブの作成時に変更できます。

p.383の「[プリコマンドとポストコマンドについて](#)」を参照してください。

p.339の「[バックアップまたはリストアジョブで使用するプリコマンドとポストコマンド](#)」を参照してください。

デフォルトのプリコマンドとポストコマンドを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[プリ/ポストコマンド]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.384の「[デフォルトの\[プリ/ポストコマンド\]オプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

デフォルトの[プリ/ポストコマンド]オプション

すべてのバックアップジョブおよびリストアジョブの前後に実行するデフォルトのコマンドを設定することができます。デフォルト設定が指定のジョブに適さない場合、バックアップジョブの作成時に変更できます。

p.384の「[プリコマンドとポストコマンドのデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 7-2 デフォルトの[プリ/ポストコマンド]オプション

項目	説明
プリコマンドとポストコマンドの実行が戻りコード0(ゼロ)で完了した場合にのみ正常終了にする	<p>Backup Execによってプリコマンドまたはポストコマンドの戻りコードを確認し、コマンドが正しく完了したかどうかを調べることができます。</p> <p>プリコマンドまたはポストコマンドからオペレーティングシステムに終了コードとしてゼロが返された場合、Backup Execでは、そのコマンドが正しく完了したものとして処理されます。ゼロでない終了コードが返された場合は、コマンドの実行時にエラーが発生したものとして処理されます。</p> <p>Backup Execによって戻りコードが確認され、指定したプリコマンドとポストコマンドの実行に関する設定に基づいて処理が続行されます。</p> <p>このオプションを選択しなかった場合は、プリコマンドとポストコマンドの実行に成功したかどうかについて、戻りコードに基づく判定は行われません。</p>

項目	説明
プリコマンドが正しく実行された場合にのみジョブを実行する	<p>プリコマンドが正しく実行された場合にのみバックアップジョブまたはリストアジョブを実行します。プリコマンドの実行に失敗した場合は、ジョブは実行されず、失敗したものとして記録されます。</p> <p>プリコマンドの実行に失敗した際にジョブを実行しない場合は、[プリコマンドとポストコマンドの実行が戻りコード 0 (ゼロ) で完了した場合にのみ正常終了にする]を選択する必要があります。戻りコードがゼロでない場合は、プリコマンドの実行に失敗したものとして処理されます。ジョブは実行されず、ジョブ状態には[失敗]と表示されます。</p>
プリコマンドが正しく実行された場合にのみポストコマンドを実行する	<p>プリコマンドが正しく実行された場合にのみポストコマンドを実行します。</p> <p>プリコマンドの実行に失敗したときはポストコマンドを実行しないようにするには、[プリコマンドとポストコマンドの実行が戻りコード 0 (ゼロ) で完了した場合にのみ正常終了にする]を選択する必要があります。プリコマンドの戻りコードがゼロでない場合は、コマンドの実行に失敗したものとして処理されます。ポストコマンドは実行されません。</p> <p>また、[プリコマンドが正しく実行された場合にのみジョブを実行する]を選択し、プリコマンドとジョブの両方が正しく実行されたのにポストコマンドがゼロでないコードを返した場合は、ジョブとポストコマンドの両方の実行に失敗したものとしてジョブログに記録されます。</p>
ジョブが失敗した場合でもポストコマンドを実行する	<p>ジョブの実行に成功したかどうかに関係なくポストコマンドを実行します。</p> <p>[プリコマンドとポストコマンドの実行が戻りコード 0 (ゼロ) で完了した場合にのみ正常終了にする]を選択し、ポストコマンドがゼロでないコードを返した場合は、そのポストコマンドは実行に失敗したものとしてジョブログに記録されます。</p>
ジョブの検証完了後にポストコマンドを実行する	<p>[バックアップジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[一般]で[バックアップ後に検証する]オプションを選択した場合、検証が完了した後にポストコマンドを実行します。</p>
コマンドが完了しない場合にコマンドをキャンセルする時間: コマンド実行後 x 分	<p>完了しなかったプリコマンドまたはポストコマンドをキャンセルするのに待つ時間を指定します。デフォルトのタイムアウト時間は 30 分です。</p>
このメディアサーバー	<p>プリコマンドとポストコマンドを、このメディアサーバー上でのみ実行します。</p>

項目	説明
バックアップ先の各サーバーまたはリスト先の各サーバー	<p>プリコマンドとポストコマンドを、バックアップするサーバーまたはリスト先のサーバーごとに1回実行します。</p> <p>プリコマンドとポストコマンドに関する設定内容は、各サーバーに個別に適用されます。このオプションを選択した場合は、選択した次のサーバーでの処理を開始する前に、各サーバーでプリコマンドとポストコマンドが実行されます。</p>

バックアップネットワークの指定について

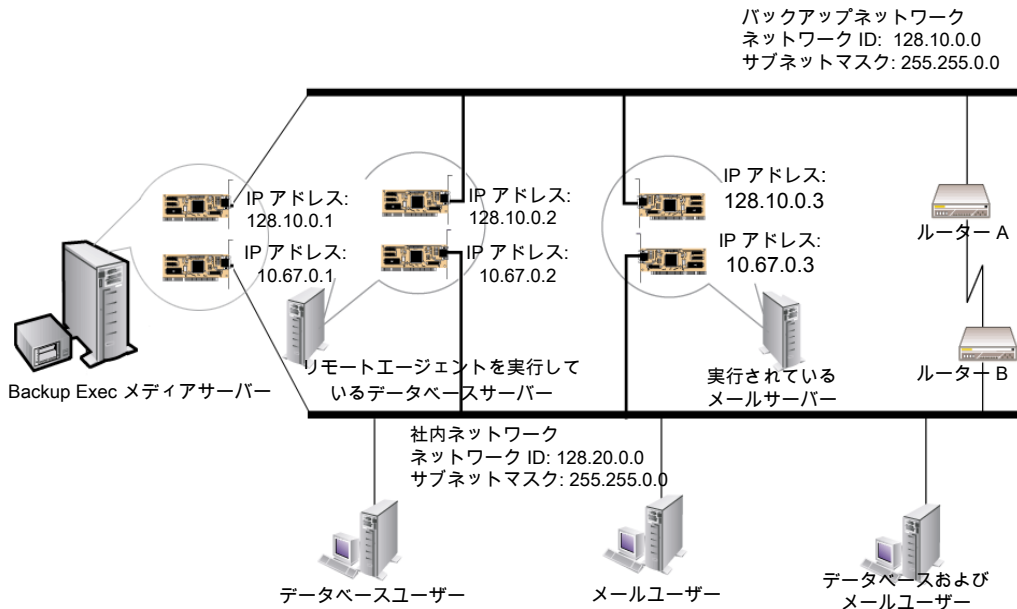
バックアップネットワーク機能を使用し、**Backup Exec** の生成するバックアップトラフィックを、バックアップ専用のローカルネットワークで処理することができます。バックアップジョブは、基幹ネットワークとは異なる専用のローカルネットワークで処理されるため、基幹ネットワークに接続されている他のネットワークへのバックアップトラフィックによる影響を回避することができます。バックアップネットワークは、データのリストアにも使用することができます。この機能をメディアサーバーで有効にすると、指定したローカルネットワーク上に存在するすべてのリモートコンピュータを保護できます。

この機能が有効な場合、バックアップジョブをサブミットすると、メディアサーバーで選択したインターフェースと同じサブネット上にリモートコンピュータが存在するかどうかを確認されます。選択したサブネット上にリモートコンピュータが存在する場合、バックアップ操作は実行されます。

選択したサブネット上にリモートコンピュータが存在しない場合、ジョブは失敗します。ただし、利用可能なネットワークがあれば、そのネットワークを使用し、リモートコンピュータをバックアップするように設定することもできます。

基本的なバックアップネットワークの構成例を次の図に示します。

図 7-1 バックアップネットワークの例



この例では、データベースサーバーとメールサーバーが、バックアップネットワークと社内ネットワークの両方に接続されています。

Backup Exec メディアサーバーでのバックアップ処理には、バックアップネットワークと社内ネットワークのどちらでも使用することができます。社内ネットワークを使用した場合は、バックアップ元とバックアップ先のコンピュータの経路が長くなるためデータベースサーバーやメールサーバーのバックアップに要する時間も長くなります。この方法ではネットワークトラフィックも増大するため、これらのサーバーへのユーザーのアクセスに遅延が発生することがあります。

指定バックアップネットワーク機能を使用した場合は、データベースサーバーやメールサーバーのバックアップは専用のバックアップネットワークで行われるため、これらのサーバーへのユーザーのアクセスに影響はありません。バックアップネットワークにバックアップ対象のリモートコンピュータが接続されていれば、すべてのバックアップ操作は、この専用ネットワークを通じて行われます。

データベースユーザーのコンピュータなど、バックアップネットワークに接続されていないリモートコンピュータのバックアップを実行する必要がある場合は、利用可能なネットワーク経路を使用するように設定します。このようにすると、バックアップネットワークに接続されていないリモートコンピュータでもバックアップを行うことができます。

p.394 の「ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について」を参照してください。

p.398 の「ファイアウォールを通したシステムの参照」を参照してください。

Backup Exec での IPv4 および IPv6 の使用について

Backup Exec では、一般的に IPv4 および IPv6 と呼ばれるインターネットプロトコル (IP) のバージョン 4 およびバージョン 6 がサポートされます。バックアップネットワークおよびリストアネットワークで IPv4 および IPv6 を使用することができます。IPv6 のサポートは、オペレーティングシステムのプロトコルサポートおよびネットワークが適切に設定されているかに依存します。

IPv4 と IPv6 が混在した環境または IPv4 のみの環境で Backup Exec を使用することができます。

次の場合を除き、Backup Exec でコンピュータ名を入力するすべてのコンピュータの IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを入力します。

- ユーザー定義選択。
- クラスタ。Microsoft Windows ではクラスタリソースに IPv6 アドレスはサポートされません。
- [メディアサーバーに接続]ダイアログボックス。

IPv6 をサポートする Remote Agent では、IPv6 準拠のメディアサーバーからのみ IPv6 を使用してバックアップまたはリストアできます。

デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定

すべての Backup Exec ジョブのデフォルトとして使用するネットワークを指定することができます。この機能の設定を行う前に、まずメディアサーバーとリモートコンピュータ間のネットワーク接続をテストしてください。

メモ: バックアップ対象のリモートコンピュータに、Backup Exec Remote Agent の最新のバージョンがインストールされている必要があります。

Backup Exec ジョブのデフォルトのセキュリティオプションを設定することもできます。バックアップジョブに使用するデフォルトの暗号化の種類またはキーを選択できます。Symantec Endpoint Protection 11.0 以上を使用する場合、グローバルな脅威が発生した際に Backup Exec によるデータのバックアップが実行されるように設定できます。

選択したバックアップ設定は、作成するすべての新しいバックアップジョブおよびテンプレートのデフォルトとして設定されます。特定のジョブまたはテンプレートを作成した場合、これらの設定を手動で変更できます。

デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.389の「[デフォルトの\[ネットワークとセキュリティ\]オプション](#)」を参照してください。

デフォルトの[ネットワークとセキュリティ]オプション

作成するすべての新しいバックアップジョブおよびテンプレートのためのネットワークおよびセキュリティのデフォルトオプションを選択できます。特定のジョブまたはテンプレートを作成した場合、これらの設定を手動で変更できます。

p.388の「[デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定](#)」を参照してください。

表 7-3 デフォルトの[ネットワークとセキュリティ]オプション

項目	説明
ユーザー共有からバックアップする	ジョブにユーザー定義共有を含めることができます。このオプションを選択しなければ、ジョブを作成するときユーザー定義共有を選択できません。
Remote Agent との通信に使用する TCP ポートの範囲 (Remote Agent 側)	Remote Agent で通信のためのポートの範囲を使用できるようにします。ポートの範囲を入力します。Backup Exec が最初に使用しようとしたポートが使用できない場合は、範囲内の別のポートを使用して通信が試行されます。範囲内のポートがすべて使用できない場合は、利用可能な動的ポートを探して使用します。デフォルトのポート範囲は 1025 - 65535 です。ファイアウォールと一緒に Backup Exec を使用している場合は、リモートシステムに割り当てられた 25 の範囲のポートを使用することをお勧めします。 p.394の「 ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について 」を参照してください。
インターフェース	バックアップネットワークとして使用するネットワークにメディアサーバーを接続するネットワークインターフェースカードの名前を示します。ドロップダウンメニューには、メディアサーバーで利用可能なネットワークインターフェースカードがすべて表示されます。
インターフェースの詳細	バックアップネットワークとして選択したネットワークインターフェースのメディアアクセス制御 (MAC) アドレス、アダプタの種類、説明、IP アドレスおよびサブネット接頭辞が表示されます。

項目	説明
プロトコル	<p>次のプロトコルオプションから選択することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 利用可能なプロトコルを使用する ■ IPv4 ■ IPv6
サブネット	<p>ネットワークインターフェースカードが所属しているサブネットを識別する32ビットの数値が表示されます。</p>
このネットワークインターフェース、プロトコルまたはサブネットをバインドできないRemote Agentには、利用可能な任意のネットワークインターフェース、プロトコルまたはサブネットを使用する	<p>バックアップカリストアのために選択したリモートシステムが指定のバックアップネットワークの一部でない場合に、リモートシステムからのデータが任意の利用可能なネットワークを介してバックアップされるか、またはリストアされるようにします。</p> <p>このチェックボックスをオフにすると、バックアップ元として選択したリモートシステムが、指定したバックアップネットワークに接続されていない場合は、リモートシステムのデータをバックアップまたはリストアすることができないためジョブは失敗する可能性があります。</p>
カスタムポートを使用してリモートシステムからの操作要求を受信する	<p>DBA開始操作およびメディアサーバー開始操作の両方でこのコンピュータとリモートコンピュータ間の通信に使われるポートを指定します。デフォルトでは、ポート5633が使用されます。</p> <p>リモートWindowsまたはLinuxコンピュータのポート番号を変更する場合は、メディアサーバーのポート番号も変更する必要があります。その後、メディアサーバー上のBackup Exec Job Engineサービスを再起動します。</p> <p>p.1297の「Oracleインスタンス情報の変更について」を参照してください。</p>
FIPS 140-2 準拠のソフトウェア暗号化を使用する	<p>FIPS 140-2標準に準拠するソフトウェア暗号化を有効にします。このオプションを選択する場合は、256ビットAESの暗号化キーを使わなければなりません。このオプションはWindowsコンピュータでのみ利用できます。</p> <p>この変更を有効にするには、Backup Execサービスを停止して再起動する必要があります。</p>
暗号化の種類	<p>使用する暗号化の種類を指定します(使用する場合)。</p> <p>p.399の「暗号化について」を参照してください。</p>
暗号化キー	<p>使用するデフォルトの暗号化キーを指定します。</p>
キーの管理	<p>新しい暗号化キーの作成または既存の暗号化キーの削除を行うことができます。</p>

項目	説明
Symantec ThreatCon が次の値に達したらただちにバックアップを実行する	Symantec ThreatCon が[Symantec ThreatCon レベル]フィールドで指定したレベルに達した場合に自動バックアップを実行します。この機能を使用するには、Backup Exec と同じコンピュータに Symantec Endpoint Protection 11.0 以上がインストールされている必要があります。
Symantec ThreatCon レベル	自動バックアップを実行する ThreatCon レベルを指定します。 次の URL で Symantec ThreatCon レベルに関する詳しい情報を参照できます。 http://www.symantec.com

バックアップの [ネットワークとセキュリティ] オプション

バックアップジョブを新規に作成するときに、そのジョブで使用するバックアップネットワークを変更することができます。ジョブで使用するバックアップネットワークを変更するときに、すべてのバックアップジョブで使用するデフォルトのバックアップネットワークを変更することもできます。

p.386 の「バックアップネットワークの指定について」を参照してください。

バックアップジョブは暗号化することができます。Symantec Endpoint Protection 11.0 以上を使用する場合、グローバルな脅威が発生した際にジョブが自動的に実行されるように設定できます。

p.399 の「暗号化について」を参照してください。

p.393 の「Symantec Endpoint Protection での Backup Exec の使用について」を参照してください。

表 7-4 バックアップの [ネットワークとセキュリティ] オプション

項目	説明
ネットワークインターフェース	このバックアップジョブのバックアップネットワークとして使用するネットワークとメディアサーバーを接続しているネットワークインターフェースカードの名前を指定します。ドロップダウンメニューには、メディアサーバー上に存在する利用可能なネットワークインターフェースカードがすべて表示されます。 Central Admin Server Option (CASO) を使用している場合、管理対象メディアサーバーにデフォルトとして設定されているネットワークインターフェースカードを使用して、CASO の委任バックアップジョブを処理するには、[管理対象メディアサーバーに対してデフォルトのネットワークインターフェースを使用する] オプションを選択します。

項目	説明
プロトコル	このバックアップジョブに使用するプロトコルを指定します。 オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 利用可能なプロトコルを使用する ■ IPv4 ■ IPv6
サブネット	ネットワークインターフェースカードが所属しているサブネットを識別する 32 ビットの数値が表示されます。
このネットワークインターフェース、サブネットまたはプロトコルをバインドできない Remote Agent に利用可能な任意のネットワークインターフェース、サブネットまたはプロトコルを使用する	バックアップカリストアのために選択したリモートシステムが指定のバックアップネットワークの一部でない場合に、リモートシステムからのデータが任意の利用可能なネットワークを介してバックアップされるか、またはリストアされるようにします。 このチェックボックスをオフにすると、バックアップ元として選択したリモートシステムが、指定したバックアップネットワークに接続されていない場合は、リモートシステムのデータをバックアップまたはリストアすることができないためジョブは失敗する可能性があります。
インターフェースの詳細	バックアップネットワークとして選択したネットワークインターフェースのメディアアクセス制御 (MAC) アドレス、アダプタの種類、説明、IP アドレスおよびサブネット接頭辞が表示されます。
暗号化の種類	使用する暗号化の種類を指定します (使用する場合)。 p.399 の「暗号化について」を参照してください。
暗号化キー	使用する暗号化キーを指定します。
キーの管理	新しい暗号化キーの作成または既存の暗号化キーの削除を行うことができます。
Symantec ThreatCon が次の値に達したらただちにバックアップを実行する	Symantec ThreatCon が [Symantec ThreatCon レベル] フィールドで指定したレベルに達した場合にこのバックアップを自動的に実行します。この機能を使用するには、Backup Exec と同じコンピュータに Symantec Endpoint Protection 11.0 以上がインストールされている必要があります。
Symantec ThreatCon レベル	このバックアップを実行する ThreatCon レベルを指定します。 次の URL で Symantec ThreatCon レベルに関する詳しい情報を参照できます。 http://www.symantec.com

Symantec Endpoint Protection での Backup Exec の使用について

ウイルスまたはマルウェアの脅威が大きい場合は、Backup Exec とともに Symantec Endpoint Protection バージョン 11.0 以上を使用してセキュリティ機能を追加することができます。Backup Exec の[セキュリティの概略]から Symantec Endpoint Protection のセキュリティ情報を表示することもできます。[セキュリティの概略]を使用するには、Symantec Endpoint Protection Manager コンポーネントをインストールする必要があります。

Symantec Endpoint Protection では、ThreatCon レベルを使用してグローバルインターネットセキュリティの全体図が表示されます。Symantec ThreatCon レベルは 4 段階評価に基づいており、レベル 4 が最も高い脅威レベルです。

次の URL で Symantec ThreatCon レベルに関する詳しい情報を参照できます。

<http://www.symantec.com>

ThreatCon が指定したレベルに達した場合に Backup Exec によってバックアップジョブが自動的に実行されるように設定することができます。たとえば、最も重要なデータに対して特別なジョブを設定することができます。この戦略によって、グローバルな脅威が検出された場合にただちに重要なデータが安全にバックアップされます。

自動的にトリガされるジョブの種類およびシステムリソースに与える潜在的な影響を考慮する必要があります。ThreatCon レベルは頻繁に更新され、警告なしに高いレベルに変更される可能性があります。大容量のジョブまたはリソースを多く利用するジョブが自動的に起動されるように設定した場合、それらのジョブは通常の業務に影響する可能性があります。

メディアサーバーは ThreatCon レベルを監視するためにインターネットに接続する必要があります。メディアサーバーがインターネットに接続されていない場合は、バックアップジョブは ThreatCon レベルが上がったときトリガされません。

Symantec Endpoint Protection について詳しくは『Symantec Endpoint Protection および Symantec Network Access Control 管理者ガイド』を参照してください。

p.391 の「バックアップの[ネットワークとセキュリティ]オプション」を参照してください。

p.388 の「デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定」を参照してください。

p.579 の「Symantec Endpoint Protection のセキュリティの概略の表示」を参照してください。

ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について

ファイアウォール環境で Backup Exec を使用すると、次のようなメリットがあります。

- バックアップネットワーク接続で使用するポートの数が最小限に抑えられます。
- Backup Exec メディアサーバーとリモートシステムで開いているポートは動的に割り当てられ、参照、バックアップ、リストア操作で柔軟な使い方ができます。
- 特定のファイアウォールのポート範囲を設定し、これらの範囲内のバックアップとリストアのネットワークを指定できます。特定の範囲を使うことで、データトラフィックを分離できるため、高レベルの信頼性が得られます。

メモ: リモートバックアップまたはリストアを実行するには、Remote Agent for Windows Systems が必要です。

ファイアウォールは、ファイアウォール環境の外にあるメディアサーバーとリモートシステム間のシステム通信に影響を及ぼします。Backup Exec を設定するときファイアウォールのための特別なポートの必要条件を考慮する必要があります。

シマンテック社は、ポート 1000 を開き、Backup Exec メディアサーバーとリモートシステムで利用可能にしておくことを推奨します。さらに、メディアサーバーと Remote Agent 間の通信用に Backup Exec で使用する動的ポート範囲を空けておく必要があります。

p.395 の「Backup Exec のポート」を参照してください。

メディアサーバーはリモートシステムに接続するとき、最初にポート 1000 を使います。Remote Agent はこの定義済みポートで接続のリスニングを行います。メディアサーバーは利用可能なポートにバインドされますが、Remote Agent への追加の接続はあらゆる利用可能なポートで開始されます。

データをバックアップするとき、Remote Agent がインストールされるコンピュータに最大 2 つのポートが必要なことがあります。同時ジョブをサポートするには、必要な同時操作の数をサポートするのに十分に大きいポート範囲を許可するようにファイアウォールを設定する必要があります。

競合があれば、`%systemroot%\System32\drivers\etc\services` ファイルを修正することによって、デフォルトポートを代替ポート番号に変更できます。「メモ帳」などのテキストエディタを使用して、NDMP エントリを修正するか、新しいポート番号を使用して NDMP エントリを追加することができます。エントリは次のような形式にする必要があります。

```
ndmp      10000/tcp      #Network Data Management Protocol
```

メモ: デフォルトポートを変更する場合は、ファイアウォールを通してバックアップするすべてのリモートシステムとメディアサーバーで変更する必要があります。

TCP 動的ポート範囲を設定するときは、リモートコンピュータには割り当て済みポートの範囲を 25 にすることをお勧めします。リモートコンピュータに必要なポートの数は、保護するデバイスの数と使用するテープデバイスの数によって決まります。最大レベルのパフォーマンスを維持するには、これらのポート範囲を増やす必要があります。

範囲を指定しないと、Backup Exec は利用可能な全範囲の動的ポートを使用します。ファイアウォールを通してリモートバックアップを実行するときには、[ネットワークおよびファイアウォール] デフォルトダイアログボックスで特定の範囲を選択する必要があります。

p.396 の「Backup Exec の応答準備ポート」を参照してください。

p.397 の「Backup Exec Desktop and Laptop Option のポート」を参照してください。

Backup Exec のポート

ファイアウォールを使用する場合、Backup Exec には特別なポートの必要条件があることがあります。ファイアウォールは、場合によっては、ファイアウォール環境の外にあるメディアサーバーとリモートシステム間のシステム通信に影響を及ぼします。

p.394 の「ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について」を参照してください。

次の表で、Backup Exec およびそのエージェントとオプションによって使用されるポートについて詳しく説明します。

表 7-5 Backup Exec のポート

サービスまたはプロセス	ポート	ポートの種類
Backup Exec Agent Browser (プロセス = benetns.exe)	6101	TCP
Backup Exec Remote Agent for Windows Systems (プロセス = beremote.exe)	10000	TCP
Backup Exec メディアサーバー (プロセス = beserver.exe)	3527, 6106	TCP
MSSQL\$BKUPEXEC (プロセス = sqlservr.exe)	1125 1434 (ms-sql-m)	TCP UDP
Backup Exec Remote Agent for NetWare	10000 (Backup Exec 10.x)、 6102 (Backup Exec 9.x)	TCP
Oracle Agent for Windows and Linux Servers	ランダムポート(他で設定されていない場合)	
DB2 Agent for Windows and Linux Servers	ランダムポート(他で設定されていない場合)	

サービスまたはプロセス	ポート	ポートの種類
Remote Agent for Linux or UNIX Servers (RALUS)	デフォルトで使用される NDMP ポート 10000	TCP
Kerberos	88	UDP
NetBIOS	135	TCP, UDP
NetBIOS ネームサービス	137	UDP
NetBIOS データグラムサービス	138	UDP
NetBIOS セッションサービス	139	TCP
NetBIOS (Windows 2000)	445	TCP
DCOM または RPC	3106	TCP
Backup Exec Remote Agent	6103	TCP
プッシュインストール (beserver.exe の一部である CASO のメッセージキュー内の 競合をチェックする)	103x	TCP
プッシュインストール	441	TCP
SMTP 電子メール通知	25 (メディアサーバーからのア ウトバウンドポート)	TCP
SNMP	162 (メディアサーバーからのア ウトバウンドポート)	TCP

Backup Exec の応答準備ポート

ファイアウォールを使用する場合、Backup Exec には特別なポートの必要条件があることがあります。ファイアウォールは、場合によっては、ファイアウォール環境の外にあるメディアサーバーとリモートシステム間のシステム通信に影響を及ぼします。

p.394の「ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について」を参照してください。

操作が行われていない場合、Backup Exec では、他のサービスおよびエージェントからの着信用のポートで監視が行われます。Backup Exec では、最初に、静的な応答準備ポートを使用して操作が開始され、Remote Agent との通信が行われます。その後、エージェントとメディアサーバーによって動的ポートが使用され、データの受け渡しが行われます。

Backup Exec では次の応答準備ポートが使用されます。

表 7-6 Backup Exec の応答準備ポート

サービス	ポート	ポートの種類
Backup Exec Agent Browser (benetns.exe)	6101	TCP
Backup Exec Remote Agent for Windows Systems (beremote.exe)	10000	TCP
Backup Exec メディアサーバー (beserver.exe)	3527, 6106	TCP
MSSQL\$BKUPEXEC (sqlsevr.exe)	1125 1434	TCP UDP
Backup Exec Remote Agent for NetWare	10000, 6102	TCP
Remote Agent for Linux or UNIX Servers (RALUS)	10000	TCP
Oracle および DB2 の DBA 開 始バックアップ	5633	TCP

Backup Exec Desktop and Laptop Option のポート

ファイアウォールを使用する場合、Backup Exec には特別なポートの必要条件があることがあります。ファイアウォールは、場合によっては、ファイアウォール環境の外にあるメディアサーバーとリモートシステム間のシステム通信に影響を及ぼします。

p.394の「ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について」を参照してください。

Backup Exec Desktop and Laptop Option (DLO) では次のポートが使用されます。

表 7-7 Backup Exec Desktop and Laptop Option のポート

サービスまたはプロセス	ポート	ポートの種類
サーバーメッセージブロッ (SMB) 通信	135-139	TCP または UDP
NetBIOS を使用しないサー バーメッセージブロッ (SMB) 通信	445	TCP または UDP
Microsoft SQL Server	1434	TCP または UDP

サービスまたはプロセス	ポート	ポートの種類
DLOAdminSvcu.exe (DLO Administration Service)	3999 (応答準備モード)	TCP または UDP

ファイアウォールを通したシステムの参照

大部分のファイアウォールでは、Microsoft Windows のネットワークツリーにリモートシステムを表示できないため、Backup Exec 管理コンソールでこれらのリモートシステムを選択するための追加の手順が必要になります。

ファイアウォールを通してシステムを参照する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。
- 3 ポートの動的範囲をメディアサーバーと Remote Agent 用に設定しているか、また、これらのポート範囲および (メディアサーバーから Remote Agent への最初の接続に使用される)ポート 10000 を使用できるようにファイアウォールを構成しているかどうかを確認します。

バックアップ選択ツリーで Windows システムを参照するには、ポート 6101 を使用できる必要があります。

- 4 [OK]をクリックします。

ファイアウォールで保護された SQL インスタンスの有効化について

ファイアウォールで保護された SQL インスタンスに接続する場合は、SQL インスタンスの通信を有効にする必要があります。SQL インスタンスの通信を有効にするには、SQL ポートを静的にして、Windows ファイアウォールを設定する必要があります。

デフォルトでは、Backup Exec SQL インスタンスは、動的ポートを使用するように設定されています。SQL Server を起動するたびに、ポート番号は変わります。

p.1477 の「CASO の SQL Express インスタンスの動的ポートの静的ポートへの変更」を参照してください。

p.1479 の「SQL 2005 または 2008 インスタンス用の CASO の SQL ポートの開放」を参照してください。

SQL インスタンスへの通信を許可するように Windows ファイアウォールを設定する必要があります。システム構成によっては、Windows ファイアウォールの設定方法が複数ある場合があります。sqlsvr.exe および sqlbrowser.exe を Windows ファイアウォールの例外リストに追加したり、Windows ファイアウォールに TCP アクセス用のポートを開いたりすることができます。詳細情報またはネットワークに最適な設定を判別する方法については、Microsoft のサポート技術情報を参照してください。

暗号化について

Backup Exec では、データを暗号化することができます。データを暗号化すると、そのデータは不正なアクセスから保護されます。データのアクセスには暗号化キーが必要です。Backup Exec ではソフトウェア暗号化が提供されますが、T10 標準のハードウェア暗号化機能を提供する一部のデバイスもサポートされます。

Backup Exec では、2 つの暗号化セキュリティレベル (128 ビットと 256 ビットの **Advanced Encryption Standard (AES)**) がサポートされています。128 ビット AES よりも 256 ビット AES の方がキーが長いので、256 ビット AES 暗号化の方が高度なセキュリティを実現できます。ただし、128 ビット AES を使用した暗号化の方がバックアップジョブを速く実行できます。T10 標準を使用するハードウェア暗号化には、256 ビット AES が必要です。

p.399 の「ソフトウェア暗号化について」を参照してください。

p.400 の「ハードウェア暗号化について」を参照してください。

p.400 の「暗号化キー」を参照してください。

ソフトウェア暗号化について

Backup Exec のインストール時に、インストールプログラムによって、必要な暗号化ソフトウェアがメディアサーバーおよび **Remote Agent** を使用するリモートコンピュータにインストールされます。Backup Exec では、**Remote Agent** を使用するコンピュータでデータを暗号化して、暗号化されたデータをメディアサーバーに転送することができます。その後、暗号化されたデータを設定に基づいてテープまたはディスクへのバックアップフォルダに書き込みます。

Backup Exec では、次の種類のデータを暗号化することができます。

- ファイルや **Microsoft Exchange** データベースなどのユーザーデータ
- ファイル名、属性、オペレーティングシステム情報などのメタデータ
- テープ上のカタログファイルおよびディレクトリ情報

Backup Exec のメタデータやディスク上のカタログファイルおよびディレクトリ情報は暗号化されません。

バックアップジョブに対して、暗号化とともにソフトウェア圧縮を使用できます。Backup Exec では、ファイルを圧縮してから暗号化が行われます。ただし、暗号化とソフトウェア圧縮の両方を行う場合は、バックアップジョブにかかる時間が長くなります。

ハードウェア圧縮をソフトウェア暗号化とともに使用することはお勧めしません。ハードウェア圧縮は、暗号化の後に実行されます。暗号化処理中にデータはランダムな状態になります。ランダムな状態のデータで圧縮は効果的に動作しません。

p.399 の「暗号化について」を参照してください。

ハードウェア暗号化について

Backup Exec では、T10 暗号化標準を使用するストレージデバイスのハードウェア暗号化がサポートされます。ハードウェア暗号化を使用すると、データはホストコンピュータからターゲットデバイスに送信され、そのデバイス上で暗号化されます。暗号化されたデータへのアクセスに使用する暗号化キーは、Backup Exec によって管理されます。

Backup Exec では、T10 暗号化に対して認定されたデバイスのみがサポートされます。

次の URL で互換性のあるデバイスのリストを参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/v-269-2>

p.399 の「暗号化について」を参照してください。

暗号化キー

デフォルトの暗号化キーをすべてのバックアップジョブ、テンプレートおよびバックアップセット複製ジョブで使用するよう設定することができます。ただし、特定のジョブのデフォルトキーは変更できます。また、バックアップテンプレートまたはバックアップセットの複製テンプレートの作成時に、ポリシーで暗号化を使用することができます。バックアップセットの複製テンプレートまたはバックアップセット複製ジョブの作成時に、すでに暗号化されたバックアップセットが再度暗号化されることはありません。ただし、暗号化されていないバックアップセットを暗号化することができます。

合成バックアップポリシーで暗号化を使用する場合、ポリシーのすべてのテンプレートで同じ暗号化キーを使用する必要があります。ポリシーの作成後は、暗号化キーを変更しないでください。合成バックアップテンプレートでは、ポリシーの他のテンプレートで選択した暗号化キーが自動的に使用されます。

リストア対象として暗号化されたデータを選択すると、そのデータの暗号化キーがデータベースに存在するかどうかを確認されます。キーが存在しない場合、消失したキーを再作成するようにメッセージが表示されます。ジョブの実行をスケジュール設定した後にキーを削除した場合、ジョブは失敗します。

Backup Exec では、カタログジョブの実行中に暗号化キーが見つからない場合、アラートが送信されます。その後、バスのフェーズを知っている場合は、消失した暗号化キーを再作成することができます。

Intelligent Disaster Recovery Option で暗号化キーを使用している場合は、特別に考慮する必要があります。

p.1784 の「暗号化されたバックアップセットおよび Intelligent Disaster Recovery ウィザードについて」を参照してください。

p.399 の「暗号化について」を参照してください。

p.388 の「デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定」を参照してください。

p.405 の「[暗号化キーの削除について](#)」を参照してください。

p.406 の「[暗号化キーの削除](#)」を参照してください。

所有者専用キーおよび共用キーの暗号化について

Backup Exec には、次の種類の暗号化キーが用意されています。

表 7-8 暗号化キーの種類

キーの種類	説明
共用	どのユーザーも、このキーを使用して、バックアップジョブでのデータの暗号化および暗号化されたデータのリストアを行うことができます。
所有者専用	どのユーザーも、このキーを使用して、バックアップジョブでのデータの暗号化を行うことができます。ただし、所有者専用キーで暗号化されたデータを、キーの所有者以外のユーザーがリストアしようとするとき、キーのパスフレーズの入力を求めるメッセージが表示されます。キーの正しいパスフレーズが入力されなかった場合、データのリストアを行うことはできません。

パスフレーズの暗号化について

暗号化キーにはパスフレーズが必要です。パスフレーズはパスワードと似ています。通常、パスフレーズはパスワードよりも長く、いくつかの文字列またはテキストの集まりで構成されます。パスフレーズは、8 文字から 128 文字までの間で指定することをお勧めします。128 ビット AES 暗号化の最小文字数は 8 文字です。256 ビット AES 暗号化の最小文字数は 16 文字です。最小文字数よりも多い文字数を使用することをお勧めします。

メモ: T10 標準を使用するハードウェア暗号化には、256 ビット AES が必要です。Backup Exec では、ジョブのハードウェア暗号化を有効にするには、16 文字以上のパスフレーズを使用する必要があります。

また、パスフレーズには、大文字や小文字の半角英数字および特殊文字の組み合わせを含めることをお勧めします。パスフレーズに引用符を使用しないでください。

パスフレーズには、印刷可能な ASCII 文字 (コード 32 から 126) のみを含めることができます。ASCII 文字コード 32 は空白文字であり、キーボードのスペースバーを使用して入力します。ASCII 文字コード 33 から 126 を次に示します。

```
!"#$%&'()*+,-./0123456789:;<=>?@
ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ[¥]^_`abcdefghijklmnopqrstuvwxyz{|}~
```

p.404 の「[暗号化キーの作成](#)」を参照してください。

p.388 の「[デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定](#)」を参照してください。

暗号化キーの管理について

作成された暗号化キーは、ログオンしているユーザーのセキュリティ ID に基づいて、識別子によってマークされます。キーを作成したユーザーが、キーの所有者になります。

Backup Exec では、キーは **Backup Exec** データベースに格納されます。ただし、キーのパスワードは格納されません。各キーの所有者は、キーのパスワードを覚えておく必要があります。

キーを保護するには、次の作業を行うことをお勧めします。

- パスワードを紙に記録する。暗号化されたバックアップセットとは物理的に異なる安全な場所に、パスワードを保管します。
- **Backup Exec** データベースをバックアップする。データベースには、キーの記録が保持されています。

注意: **Backup Exec** データベースのバックアップを作成していない場合、およびパスワードを覚えていない場合は、暗号化されたメディアからデータをリストアすることはできません。このような場合は、シマンテック社が暗号化されたデータをリストアすることもできません。

メディアサーバーで作成されたキーは、そのメディアサーバー固有のキーです。メディアサーバー間でキーを移動することはできません。ただし、既存のパスワードを使用して、別のメディアサーバー上で新しいキーを作成することはできます。同じパスワードは、常に同じキーを生成します。また、誤ってキーを削除した場合、パスワードを使用して再作成することができます。

メディアサーバー上の **Backup Exec** データベースが破損し、新しいデータベースと交換した場合、元のデータベースに格納されていたすべての暗号化キーを手動で再作成する必要があります。

データベースを別のメディアサーバーに移動した場合、新しいメディアサーバーが次の条件を満たす限り暗号化キーは有効です。

- 元のメディアサーバーと同じユーザーアカウントが存在する。
- 元のメディアサーバーと同じドメインに属する。

p.400 の「[暗号化キー](#)」を参照してください。

p.401 の「[パスワードの暗号化について](#)」を参照してください。

p.405 の「[暗号化キーの削除について](#)」を参照してください。

p.405 の「[暗号化キーの置換](#)」を参照してください。

p.406 の「[暗号化キーの削除](#)」を参照してください。

[暗号化キー管理]オプション

[暗号化キー管理]ダイアログボックスで、いくつかのキー管理タスクを実行することができます。

p.404 の「[暗号化キーの作成](#)」を参照してください。

p.405 の「[暗号化キーの置換](#)」を参照してください。

p.406 の「[暗号化キーの削除](#)」を参照してください。

表 7-9 [暗号化キー管理]オプション

項目	説明
キー名	暗号化キーの名前を示します。
作成者	だれが暗号化キーを作成したかを示します。作成された暗号化キーは、ログオンしているユーザーのセキュリティIDに基づいて、識別子によってマークされます。キーを作成したユーザーが、キーの所有者になります。
所有者専用	キーが所有者専用キーかどうかを示します。キーが所有者専用である場合、データをバックアップするのにだれでもキーを使うことができます。しかしキーの所有者がパスワードを知っているユーザーのみが、暗号化データをリストアするのに所有者専用キーを使うことができます。
デフォルト	暗号化されるジョブのデフォルトキーとしてキーが設定されているかどうかを示します。
暗号化の種類	暗号化キーと関連付けられる暗号化の種類を示します。
作成日	暗号化キーが作成された日付を示します。
最後のアクセス日	暗号化キーが最後にアクセスされた日付を示します。
新規	新しい暗号化キーを作成することを許可します。
削除	選択した暗号化キーを削除します。
置換	[暗号化キーの置換]ダイアログボックスで選択したキーで、選択された暗号化キーを置き換えます。

暗号化キーの作成

暗号化キーを作成する場合は、使用する暗号化の種類を選択します。

p.402 の「[暗号化キーの管理について](#)」を参照してください。

暗号化キーを作成する方法

- 1 ツールメニューの[暗号化キー]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。
p.404 の「[\[暗号化キーの追加\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

[暗号化キーの追加]オプション

暗号化キーを作成するとき複数のオプションがあります。

p.404 の「[暗号化キーの作成](#)」を参照してください。

表 7-10 [暗号化キーの追加]オプション

項目	説明
キー名	キーの一意の名前を指定します。名前には、最大 256 文字を指定できます。
暗号化の種類	キーに使用する暗号化の種類を指定します。128 ビット AES または 256 ビット AES のいずれかを選択します。デフォルトの種類は 256 ビット AES です。 256 ビット AES 暗号化は、128 ビット AES 暗号化よりも高度なセキュリティを実現します。ただし、256 ビット AES 暗号化の方が 128 ビット AES 暗号化よりもバックアップジョブの処理に時間がかかります。 T10 標準を使用するハードウェア暗号化には、256 ビット AES が必要です。
パスフレーズ	キーのパスフレーズを指定します。128 ビット AES 暗号化の場合は、パスフレーズを 8 文字以上に設定する必要があります。256 ビット AES 暗号化の場合は、パスフレーズを 16 文字以上に設定する必要があります。最小文字数よりも多い文字数を使用することをお勧めします。 印刷可能な ASCII 文字のみを使用できます。 p.401 の「 パスフレーズの暗号化について 」を参照してください。
パスフレーズの確認入力	パスフレーズを確認します。
共用	このキーを共通キーにします。キーが共用である場合、この Backup Exec のどのユーザーも、このキーを使用してデータのバックアップおよびリストアを行うことができます。

項目	説明
所有者専用	このキーを所有者専用キーにします。キーが所有者専用である場合、データをバックアップするのにだれでもキーを使うことができます。しかしキーの所有者かパスフレーズを知っているユーザーのみが、暗号化データをリストアするのに所有者専用キーを使うことができます。

暗号化キーの置換

すべてのバックアップジョブ、テンプレートおよびバックアップセット複製ジョブの暗号化キーを別の暗号化キーに置き換えることができます。

p.402の「[暗号化キーの管理について](#)」を参照してください。

暗号化キーを置換する方法

- 1 ツールメニューの[暗号化キー]をクリックします。
- 2 置換するキーを選択します。
- 3 [置換]をクリックします。
- 4 [<キー名>と置換する暗号化キーを選択してください]ボックスで、次のいずれかを実行します。

既存のキーを使用 リストからキーを選択します。
する場合

新しいキーを作成す 矢印をクリックし、<新しい暗号化キー>をクリックします。
る場合

p.404の「[\[暗号化キーの追加\]オプション](#)」を参照してください。

- 5 [OK]をクリックします。

暗号化キーの削除について

暗号化キーの削除は、十分に注意して行ってください。暗号化キーを削除すると、元のキーと同じ暗号化キーおよびパスフレーズを使用する新しいキーを作成しない限り、そのキーで暗号化されたバックアップセットをリストアすることはできません。

p.406の「[暗号化キーの削除](#)」を参照してください。

次の場合に暗号化キーを削除することができます。

- テープ上の暗号化されたデータが期限切れである場合、またはテープが破棄された場合。
- 暗号化キーがデフォルトキーでない場合。

- 暗号化キーがジョブまたはテンプレートで使用されていない場合。キーが使用されている場合は、ジョブまたはテンプレートの新しいキーを選択する必要があります。
- 暗号化キーがリストアジョブの選択リストおよびバックアップセット複製ジョブの検証の選択リストで使用されていない場合。一覧表示されるジョブの種類のいずれかで使用されているキーを削除すると、選択リストは使用できなくなります。

スケジュール済みリストアジョブで使用されている暗号化キーを削除した場合、キーを置き換えることはできません。そのため、暗号化キーを削除したスケジュール済みリストアジョブは失敗します。

p.402の「[暗号化キーの管理について](#)」を参照してください。

p.405の「[暗号化キーの置換](#)」を参照してください。

暗号化キーの削除

暗号化キーの削除は、十分に注意して行ってください。暗号化キーを削除すると、元のキーと同じ暗号化キーおよびパスフレーズを使用する新しいキーを作成しない限り、そのキーで暗号化されたバックアップセットをリストアすることはできません。

p.405の「[暗号化キーの削除について](#)」を参照してください。

暗号化キーを削除する方法

- 1 ツールメニューの[暗号化キー]をクリックします。
- 2 削除するキーを選択します。
- 3 [削除]をクリックします。
- 4 [はい]をクリックします。
- 5 キーがジョブまたはテンプレートで使用されている場合、次の操作を実行します。
 - [<キー名>置換する暗号化キーを選択してください]ボックスで、ジョブまたはテンプレートの新しいキーを選択します。
 - [OK]をクリックします。

暗号化されたデータのリストアについて

暗号化されたバックアップセットは、リストア選択リストにロック付きのアイコンで示されません。暗号化されたデータを選択してリストアする場合、Backup Exec では、そのデータの暗号化キーの有効性が自動的に確認されます。データのバックアップに使用した暗号化キーが Backup Exec データベースに存在する場合は、その暗号化キーが自動的に選択されます。ただし、暗号化キーが見つからなかった場合は、データのバックアップに使用した暗号化キーのパスフレーズの入力を求めるメッセージが表示されます。正しいパスフレーズを入力すると、キーが再作成されます。

所有者専用暗号化キーをデータのバックアップに使用する場合、キーの所有者以外のユーザーがデータをリストアしたりリストアジョブを編集するには、パスフレーズを入力する必要があります。

p.401 の「[パスフレーズの暗号化について](#)」を参照してください。

p.402 の「[暗号化キーの管理について](#)」を参照してください。

p.405 の「[暗号化キーの置換](#)」を参照してください。

暗号化されたバックアップセットを含むメディアのカタログ登録について

暗号化されたバックアップセットを含むメディアをカタログ登録すると、Backup Exec データベースでバックアップセットの有効な暗号化キーが検索されます。有効なキーが見つからない場合は、キーの作成を指示するアラートが表示されます。有効なキーを作成した後、アラートにตอบสนองし、暗号化されたセットのカタログ登録を再試行することができます。また、暗号化されたセットをスキップしてメディアの残りのカタログ登録を続行したり、カタログジョブをキャンセルすることができます。

p.402 の「[暗号化キーの管理について](#)」を参照してください。

p.404 の「[暗号化キーの作成](#)」を参照してください。

DBA 開始ジョブの設定について

DBA 開始バックアップ操作の作成時に、Backup Exec のデフォルトのジョブテンプレートを指定できます。また、Backup Exec で作成した新しいジョブテンプレートを指定することもできます。ジョブテンプレートには、Backup Exec によって DBA 開始ジョブに適用される設定が含まれています。

使用するジョブテンプレートの名前も Windows コンピュータのインスタンス情報に設定されていることを確認します。

p.1282 の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。

DBA 開始ジョブについては、次の事項に注意する必要があります。

- 関連付けられているジョブテンプレートを削除すると、DBA 開始ジョブは失敗します。DBA 開始ジョブが実行されないようにするには、関連付けられている DBA 開始ジョブテンプレートを削除します。
p.420 の「[DBA 開始ジョブ用のジョブテンプレートの削除](#)」を参照してください。
- すべての DBA 開始バックアップジョブおよびリストアジョブは、完了後に削除されます。
- DBA 開始ジョブにはデバイスの最小必要条件を設定できません。

p.1304 の「[Oracle の DBA 開始バックアップジョブの実行について](#)」を参照してください。

p.408 の「[DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成](#)」を参照してください。

p.419 の「[DBA 開始ジョブの編集](#)」を参照してください。

DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成

Backup Exec によって DBA 開始ジョブに適用される新しいジョブテンプレートを作成できます。

p.407 の「[DBA 開始ジョブの設定について](#)」を参照してください。

p.1317 の「[Oracle Agent のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

p.420 の「[DBA 開始ジョブ用のジョブテンプレートの削除](#)」を参照してください。

DBA 開始ジョブのためのテンプレートを作成する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[DBA 開始ジョブの設定]をクリックします。
- 3 [新規]をクリックします。
- 4 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下で[デバイスおよびメディア]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.409 の「[DBA 開始ジョブの\[デバイスとメディア\]オプション](#)」を参照してください。

- 5 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下にある[一般]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.411 の「[DBA 開始ジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

- 6 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下で[ネットワークとセキュリティ]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.413 の「[DBA 開始ジョブの\[ネットワークとセキュリティ\]オプション](#)」を参照してください。

- 7 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下で[Migrator for Enterprise Vault]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.1037 の「[\[Migrator for Enterprise Vault\]オプション](#)」を参照してください。

- 8 バックアップジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下で[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。

- 9 [プロパティ]ペインの[複製ジョブのテンプレート]の下にある[設定]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.414 の「DBA 開始ジョブの複製ジョブテンプレートの設定」を参照してください。

- 10 [OK]をクリックします。

DBA 開始ジョブの[デバイスとメディア]オプション

DBA 開始ジョブのためのデバイスとメディアの設定を設定できます。

p.407 の「DBA 開始ジョブの設定について」を参照してください。

表 7-11 DBA 開始ジョブの[デバイスとメディア]オプション

項目	説明
デバイス	ジョブに関連するデフォルトデバイスとして使用するデバイスを示します。
このジョブにデバイスへのダイレクトアクセスを許可する	リモートコンピュータで、データを重複排除してから、[デバイス]フィールドで選択される重複排除のストレージデバイスにデータを送信できるようにします。 メモ: このオプションは Deduplication Option がインストールされ、[デバイス]フィールドで重複排除のストレージデバイスが選択されているときのみ有効になります。 p.1542の「ダイレクトアクセスについて」を参照してください。
メディアセット	ジョブに関連するデフォルトメディアとして使用するメディアを示します。

項目	説明
メディアに上書きする	<p>バックアップデータを上書き可能なメディアに格納します。このダイアログボックスの[デバイス]フィールドで選択したスタンドアロンドライブまたはドライブプールに、必要なメディアが存在していることを確認してください。</p> <p>ドライブ内に存在するスクラッチメディアまたは上書き禁止期間の終了している再利用可能メディアに上書きが行われます。設定されているメディアの[メディアの上書き禁止レベル]オプションによっては、ドライブ内に存在する割り当て済みメディアまたはインポートメディアへの上書きが行われる場合があります。</p> <p>設定に応じて、スクラッチメディアまたは再利用可能メディアから上書き可能なメディアが選択されます。</p> <p>p.217の「Backup Execでの上書き可能メディアの検索順序」を参照してください。</p> <p>ドライブ内に上書き可能なメディアがない場合は、上書き可能なメディアの追加を求めるアラートが表示されます。</p>
メディアに追記する(追記可能なメディアがない場合は上書きする)	<p>このダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットにこのバックアップを追記します。バックアップセットは追記可能メディアが選択したメディアセットで利用可能なら追記されます。追記可能メディアが利用可能でなければ、上書き可能メディアがメディアセットに使われ、追加されます。</p> <p>追記ジョブの途中でメディアの空き領域がなくなった場合は、このジョブは上書き可能な別のメディアを使用して続行されます。</p> <p>ドライブ内に上書き可能なメディアがない場合は、上書き可能なメディアの追加を求めるアラートが表示されます。</p>
メディアに追記する(追記可能なメディアがない場合はジョブを終了する)	<p>このダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットにこのバックアップを追記します。選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットを追記し、追記可能なメディアが存在しない場合はジョブを中止します。</p>

項目	説明
ジョブの完了後にメディアを取り出す	操作の完了時に、ドライブのメディアを取り出します。
バックアップ前にメディアをリテンションする	ドライブのテープを最初から最後まで早送りして巻き取りなおします。リテンションすることでテープがヘッドを滑らかに通過するようにします。リテンション操作は主としてミニカートリッジおよび 1/4 インチカートリッジ用で、これ以外のテープドライブでサポートされることはほとんどありません。
WORM (Write Once Read Many) メディアを使用する	このバックアップジョブに WORM (Write Once Read Many) メディアの使用を指定します。バックアップ先デバイスが WORM と互換性があるドライブである (またはバックアップ先デバイスに WORM と互換性があるドライブが含まれている) こと、およびそのドライブで WORM メディアが利用可能であることが、Backup Exec によって確認されます。WORM メディアまたは WORM と互換性があるドライブが存在しない場合は、アラートが送信されます。 p.232 の「WORMメディアについて」を参照してください。

DBA 開始ジョブの[一般]オプション

DBA 開始ジョブのための一般オプションを設定できます。

p.407 の「DBA 開始ジョブの設定について」を参照してください。

表 7-12 DBA 開始ジョブの[一般]オプション

項目	説明
テンプレート名	このバックアップテンプレートの名前を指定します。表示されるデフォルト名を受け入れるか、または名前を入力することができます。名前は一意である必要があります。
バックアップセットの説明	今後の参照用にバックアップセットの情報を記述します。

項目	説明
圧縮の種類	<p>次の圧縮オプションを提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし: このオプションでは、データを元の形式 (圧縮されていない状態) でメディアにコピーします。ただし、データ圧縮を使用した方が、バックアップに必要なストレージメディアの容量を節約することができます。 ハードウェアによるデータ圧縮は、ハードウェア圧縮機能をサポートしているデバイスとハードウェア圧縮機能をサポートしていないデバイスが混在する環境では使用できません。 この場合、ハードウェア圧縮は自動的に無効になります。ハードウェア圧縮をサポートしているドライブの圧縮機能を使用するように手動で設定しなおすこともできますが、このような操作は、メディアに格納されるデータの一貫性に問題が発生する原因になります。また、ハードウェア圧縮をサポートしているドライブに障害が発生した場合は、圧縮したメディアを非圧縮ドライブでリストアすることはできません。 ■ ソフトウェア: このオプションでは、STAC ソフトウェアデータ圧縮方式で圧縮したデータをストレージデバイスに格納します。 ■ ハードウェア (無効な場合、なし): このオプションでは、ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮が使用されます。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、データは圧縮されずにバックアップされます。 ■ ハードウェア (無効な場合、ソフトウェア): このオプションでは、ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮が使用されます。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、STAC ソフトウェア圧縮方式が使用されます。

項目	説明
バックアップ後に検証する	バックアップ完了後に、メディアからデータを読み取り可能かどうかを確認するために、自動的に検証が実行されます。すべてのバックアップで検証を行うことをお勧めします。

DBA 開始ジョブの[ネットワークとセキュリティ]オプション

DBA 開始ジョブのためのネットワークとセキュリティのオプションを設定できます。

p.407 の「[DBA 開始ジョブの設定について](#)」を参照してください。

表 7-13 DBA 開始ジョブの[ネットワークとセキュリティ]オプション

項目	説明
ネットワークインターフェース	このバックアップジョブのバックアップネットワークとして使用するネットワークとメディアサーバーを接続しているネットワークインターフェースカードの名前を指定します。ドロップダウンメニューには、メディアサーバー上に存在する利用可能なネットワークインターフェースカードがすべて表示されます。 Central Admin Server Option (CASO) を使用している場合、管理対象メディアサーバーにデフォルトとして設定されているネットワークインターフェースカードを使用して、CASO の委任バックアップジョブを処理するには、[管理対象メディアサーバーに対してデフォルトのネットワークインターフェースを使用する]オプションを選択します。
プロトコル	このバックアップジョブに使用するプロトコルを指定します。 オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 利用可能なプロトコルを使用する ■ IPv4 ■ IPv6
サブネット	ネットワークインターフェースカードが所属しているサブネットを識別する 32 ビットの数値が表示されます。

項目	説明
このネットワークインターフェース、サブネットまたはプロトコルをバインドできない Remote Agent には利用可能な任意のネットワークインターフェース、サブネットまたはプロトコルを使用する	バックアップカリストアのために選択したリモートシステムが指定のバックアップネットワークの一部でない場合に、リモートシステムからのデータが任意の利用可能なネットワークを介してバックアップされるか、またはリストアされるようにします。 このチェックボックスをオフにすると、バックアップ元として選択したリモートシステムが、指定したバックアップネットワークに接続されていない場合は、リモートシステムのデータをバックアップまたはリストアすることができないためジョブは失敗する可能性があります。
インターフェースの詳細	バックアップネットワークとして選択したネットワークインターフェースのメディアアクセス制御(MAC)アドレス、アダプタの種類、説明、IP アドレスおよびサブネット接頭辞が表示されます。
暗号化の種類	使用する暗号化キーを指定します。
暗号化キー	使用する暗号化キーを指定します。
キーの管理	新しい暗号化キーの作成または既存の暗号化キーの削除を行うことができます。

DBA 開始ジョブの複製ジョブテンプレートの設定

DBA 開始ジョブのための複製ジョブテンプレートの設定を設定できます。

p.407 の「[DBA 開始ジョブの設定について](#)」を参照してください。

表 7-14 DBA 開始ジョブの複製ジョブテンプレートの設定

項目	説明
このジョブのバックアップセットを複製する設定を有効にする	バックアップセットの複製テンプレートの設定を有効にします。
デバイス	ジョブに関連するデフォルトデバイスとして使用するデバイスを示します。
メディアセット	ジョブに関連するデフォルトメディアとして使用するメディアを示します。

項目	説明
メディアに上書きする	<p>バックアップデータを上書き可能なメディアに格納します。このダイアログボックスの[デバイス]フィールドで選択したスタンドアロンドライブまたはドライブプールに、必要なメディアが存在していることを確認してください。</p> <p>ドライブ内に存在するスクラッチメディアまたは上書き禁止期間の終了している再利用可能メディアに上書きが行われます。設定されているメディアの[メディアの上書き禁止レベル]オプションによっては、ドライブ内に存在する割り当て済みメディアまたはインポートメディアへの上書きが行われる場合があります。</p> <p>設定に応じて、スクラッチメディアまたは再利用可能メディアから上書き可能なメディアが選択されます。</p> <p>p.217の「Backup Exec での上書き可能メディアの検索順序」を参照してください。</p> <p>ドライブ内に上書き可能なメディアがない場合は、上書き可能なメディアの追加を求めるアラートが表示されます。</p>
メディアに追記する (追記可能なメディアがない場合は上書きする)	<p>このダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットにこのバックアップを追記します。選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットを追記し、追記可能なメディアが存在しない場合は、上書き可能なメディアが使用され、使用されたメディアがこのメディアセットに追加されます。</p> <p>追記ジョブの途中でメディアの空き領域がなくなった場合は、このジョブは上書き可能な別のメディアを使用して続行されます。</p> <p>ドライブ内に上書き可能なメディアがない場合は、上書き可能なメディアの追加を求めるアラートが表示されます。</p>

項目	説明
メディアに追記する (追記可能なメディアがない場合はジョブを終了する)	このダイアログボックスの[メディアセット]フィールドに表示されているメディアセットにこのバックアップを追記します。選択したメディアセット内に追記可能なメディアが存在する場合は、そのメディアにバックアップセットを追記し、追記可能なメディアが存在しない場合はジョブを中止します。
ジョブの完了後にメディアを取り出す	操作の完了時に、ドライブのメディアを取り出します。
バックアップ前にメディアをリテンションする	テープドライブ内のテープを始めから終わりまで早送りして巻き取りなおし、テープがヘッドを滑らかに通過するようにします。リテンション操作は主としてミニカートリッジおよび 1/4 インチカートリッジ用で、これ以外のテープドライブでサポートされることはほとんどありません。
WORM (Write Once Read Many) メディアを使用する	このバックアップジョブに WORM (Write Once Read Many) メディアの使用を指定します。バックアップ先デバイスが WORM と互換性があるドライブである (またはバックアップ先デバイスに WORM と互換性があるドライブが含まれている) こと、およびそのドライブで WORM メディアが利用可能であることが、 Backup Exec によって確認されます。 WORM メディアまたは WORM と互換性があるドライブが存在しない場合は、アラートが送信されます。 p.232 の「 WORM メディアについて」を参照してください。
テープへのダイレクトコピーを有効にする	Backup Exec で仮想デバイスから物理デバイスへのデータの直接の移動を調整することを可能にします。 Backup Exec メディアサーバーはカタログのデータについての情報を記録します。従って、仮想デバイスまたは物理デバイスのどちらからでもデータをリストアできます。 p.365 の「 仮想テープライブラリから物理テープデバイスにデータを直接コピーする方法 」を参照してください。

項目	説明
暗号化の種類	使用する暗号化の種類を指定します (使用する場合)。 p.399の「暗号化について」を参照してください。
暗号化キー	使用する暗号化キーを指定します。
キーの管理	新しい暗号化キーの作成または既存の暗号化キーの削除を行うことができます。
ソースデバイス	ジョブのデフォルトデバイスに使用するソースデバイスを指定します。

項目	説明
圧縮の種類	<p>次の圧縮オプションを提供します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし: このオプションでは、データを元の形式 (圧縮されていない状態) でメディアにコピーします。ただし、データ圧縮を使用した方が、バックアップに必要なストレージメディアの容量を節約することができます。 ハードウェアによるデータ圧縮は、ハードウェア圧縮機能をサポートしているデバイスとハードウェア圧縮機能をサポートしていないデバイスが混在する環境では使用できません。 この場合、ハードウェア圧縮は自動的に無効になります。ハードウェア圧縮をサポートしているドライブの圧縮機能を使用するように手動で設定しなおすこともできますが、このような操作は、メディアに格納されるデータの一貫性に問題が発生する原因になります。また、ハードウェア圧縮をサポートしているドライブに障害が発生した場合は、圧縮したメディアを非圧縮ドライブでリストアすることはできません。 ■ ソフトウェア: このオプションでは、STAC ソフトウェアデータ圧縮方式で圧縮したデータをストレージデバイスに格納します。 ■ ハードウェア (無効な場合、なし): このオプションでは、ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮が使用されます。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、データは圧縮されずにバックアップされます。 ■ ハードウェア (無効な場合、ソフトウェア): このオプションでは、ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮が使用されます。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、STAC ソフトウェア圧縮方式が使用されます。

項目	説明
バックアップ後に検証する	バックアップ完了後に、メディアからデータを読み取り可能かどうかを確認するために、自動的に検証が実行されます。すべてのバックアップで検証を行うことをお勧めします。

DBA 開始ジョブの編集

Backup Exec によって DBA 開始ジョブに適用されるジョブテンプレートの設定を編集できます。

p.407 の「[DBA 開始ジョブの設定について](#)」を参照してください。

Oracle の DBA 開始ジョブの設定を編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[DBA 開始ジョブの設定]をクリックします。
- 3 編集するジョブテンプレートを選択します。
- 4 [編集]をクリックします。
- 5 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下で[デバイスおよびメディア]をクリックし、必要なオプションを編集します。

p.409 の「[DBA 開始ジョブの\[デバイスとメディア\]オプション](#)」を参照してください。

- 6 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下にある[一般]をクリックし、必要なオプションを編集します。

p.411 の「[DBA 開始ジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

- 7 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下で[ネットワークとセキュリティ]をクリックし、必要なオプションを編集します。

p.413 の「[DBA 開始ジョブの\[ネットワークとセキュリティ\]オプション](#)」を参照してください。

- 8 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下で[Migrator for Enterprise Vault]をクリックし、必要なオプションを編集します。

p.1037 の「[\[Migrator for Enterprise Vault\]オプション](#)」を参照してください。

- 9 [プロパティ]ペインの[バックアップジョブテンプレート]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを編集します。

p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。

- 10 [プロパティ]ペインの[複製ジョブのテンプレート]の下にある[設定]をクリックし、必要なオプションを編集します。
p.414 の「DBA 開始ジョブの複製ジョブテンプレートの設定」を参照してください。
- 11 [OK]をクリックします。

DBA 開始ジョブ用のジョブテンプレートの削除

ジョブテンプレートには、Backup Exec によって DBA 開始ジョブに適用される設定が含まれています。

p.407 の「DBA 開始ジョブの設定について」を参照してください。

Oracle の DBA 開始ジョブ用のジョブテンプレートを削除する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[DBA 開始ジョブの設定]をクリックします。
- 3 削除するジョブテンプレートを選択します。
- 4 [削除]をクリックします。
- 5 [OK]をクリックします。

優先サーバー設定について

優先サーバー設定は優先バックアップソースとして選択する 1 つ以上のサーバーとサイトのコレクションです。優先サーバー設定は、データベースのコピーが複数のサーバーの間でレプリケートされるインスタンスのバックアップソースとして優先されます。Microsoft Exchange データベース可用性グループ (DAG) のための優先サーバー設定を作成できます。

レプリケートされたデータベースのコピーをバックアップするために優先サーバー設定を作成する必要はありません。レプリケートされたデータベースのコピーをバックアップするための最適なサーバーを Backup Exec が選ぶように設定できます。優先サーバー設定を指定すると、バックアップジョブをさらに詳細に管理することができます。たとえば、WAN 上のレプリケートされたデータがバックアップされないように、ローカルの優先サーバー設定を選択できます。

優先サーバー設定の一部として選択したサイトまたは DAG の子は Backup Exec によって自動的に含まれます。したがって、バックアップがローカルに実行されるようにしたい場合には、優先サーバー設定としてローカルサイトを選択できます。Backup Exec は、バックアップジョブで、そのサイトに属するローカルサーバーのいずれかから選択します。特定のサーバーがバックアップに使われるようにするには、そのサーバーのみを優先サーバー設定として選択します。

- p.421の「[優先サーバー設定の作成](#)」を参照してください。
- p.422の「[優先サーバー設定の削除](#)」を参照してください。
- p.423の「[優先サーバー設定の編集](#)」を参照してください。
- p.423の「[デフォルトの優先サーバー設定の指定](#)」を参照してください。

優先サーバー設定の作成

Microsoft Exchange データベース可用性グループのための優先サーバー設定を作成できます。優先サーバー設定では、レプリケートされたデータを Backup Exec がバックアップするときに使用する優先サーバーを指定して、バックアップジョブをさらに詳細に制御できます。

p.420の「[優先サーバー設定について](#)」を参照してください。

優先サーバー設定を作成する方法

- 1 編集メニューで、[優先サーバーの管理]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。
p.422の「[バックアップの\[優先サーバー\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [優先サーバーグループをバックアップ]ダイアログボックスで、[OK]をクリックしてください。
- 5 [優先サーバーの管理]ダイアログボックスで、[OK]をクリックしてください。

[優先サーバーの管理]オプション

優先サーバーの設定を管理できます。

p.420の「[優先サーバー設定について](#)」を参照してください。

表 7-15 [優先サーバーの管理]オプション

項目	説明
名前	優先サーバー設定の名前を示します。
新規	新しい優先サーバー設定を作成できます。 p.421の「 優先サーバー設定の作成 」を参照してください。
削除	選択された優先サーバー設定を削除します。 p.422の「 優先サーバー設定の削除 」を参照してください。

項目	説明
編集	選択された優先サーバー設定を変更できます。 p.423の「優先サーバー設定の編集」 を参照してください。
デフォルトに設定	選択された優先サーバー設定をデフォルトとして設定できます。 p.423の「デフォルトの優先サーバー設定の指定」 を参照してください。
デフォルトを削除	選択された優先サーバー設定のデフォルトのステータスを削除します。 p.424の「優先サーバー設定のデフォルトのステータスの削除」 を参照してください。

バックアップの[優先サーバー]オプション

バックアップジョブの優先サーバー設定を設定できます。

[p.420の「優先サーバー設定について」](#)を参照してください。

表 7-16 バックアップの[優先サーバー]オプション

項目	説明
優先サーバーの設定名	優先サーバー設定の名前を示します。
新規	新しい優先サーバー設定を作成できます。このオプションは、優先サーバーの指定に使用する、利用可能なサーバーと選択されているサーバーのリストを有効にします。 メモ: [新規]オプションは、新しいバックアップジョブか選択リストの作成時に優先サーバー設定を作成した場合にのみ表示されます。
利用可能なサーバーおよびサイト	優先サーバー設定で使うことができる利用可能なサーバーおよびサイトをリストします。
選択したサーバーおよびサイト	優先サーバー設定の一部として使うために選択したサイトとサーバーをリストします。

優先サーバー設定の削除

もはや必要なくなった優先サーバー設定を削除できます。

p.420の「[優先サーバー設定について](#)」を参照してください。

優先サーバー設定を削除する方法

- 1 編集メニューで、[優先サーバーの管理]をクリックします。
- 2 削除する優先サーバー設定を選択します。
- 3 [削除]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

優先サーバー設定の編集

既存の優先サーバー設定を編集できます。

p.420の「[優先サーバー設定について](#)」を参照してください。

優先サーバー設定を編集する方法

- 1 編集メニューで、[優先サーバーの管理]をクリックします。
- 2 編集する優先サーバー設定を選択します。
- 3 [編集]をクリックします。
- 4 必要なオプションを設定します。

p.422の「[バックアップの\[優先サーバー\]オプション](#)」を参照してください。

- 5 [優先サーバーグループをバックアップ]ダイアログボックスで、[OK]をクリックしてください。
- 6 [優先サーバーの管理]ダイアログボックスで、[OK]をクリックしてください。

デフォルトの優先サーバー設定の指定

適切なレプリケーションデータを含んでいるバックアップジョブすべてのデフォルト優先サーバー設定を指定できます。Microsoft Exchange データベース可用性グループからデータをバックアップするとき、Backup Exec がデフォルトの優先サーバー設定を使うように設定できます。バックアップジョブまたは選択リストのプロパティの特定のジョブに対するデフォルト優先サーバー設定を上書きできます。

メモ: デフォルトの優先サーバー設定を指定するとき、既存の選択リストには適用されません。以降に作成する任意の選択リストのデフォルトの優先サーバー設定として扱われます。

p.420の「[優先サーバー設定について](#)」を参照してください。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

優先サーバー設定をデフォルトから解除する場合は、デフォルトのステータスを削除することができます。

p.424 の「[優先サーバー設定のデフォルトのステータスの削除](#)」を参照してください。

デフォルトの優先サーバー設定を指定する方法

- 1 編集メニューで、[優先サーバーの管理]をクリックします。
- 2 デフォルトとして指定したい優先サーバー設定を選択します。
- 3 [デフォルトに設定]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

優先サーバー設定のデフォルトのステータスの削除

適切なレプリケーションデータを含んでいるバックアップジョブすべてのデフォルト優先サーバー設定を指定できます。

p.423 の「[デフォルトの優先サーバー設定の指定](#)」を参照してください。

優先サーバー設定をデフォルトから解除する場合は、デフォルトのステータスを削除することができます。

優先サーバー設定のデフォルトのステータスを削除する方法

- 1 編集メニューで、[優先サーバーの管理]をクリックします。
- 2 デフォルトのステータスを削除する優先サーバー設定を選択してください。
- 3 [デフォルトを削除]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

デバイスについて

この章では以下の項目について説明しています。

- [ストレージデバイスについて](#)
- [デバイス設定アシスタントについて](#)
- [ストレージの共有について](#)
- [メディアサーバーの一時停止](#)
- [メディアサーバーの再開](#)
- [ストレージデバイスの一時停止](#)
- [ストレージデバイスの再開](#)
- [ストレージデバイスの名前の変更](#)
- [メディアのインベントリの実行について](#)
- [デバイス内のメディアのインベントリの実行](#)
- [メディアからのデータの消去](#)

ストレージデバイスについて

Backup Exec のデバイス管理機能を使用することによって、Backup Exec によって認識された、次のようなストレージデバイスの構成と割り当てを簡単に行うことができます。

- メディアサーバーに物理的に接続されているテープドライブまたはロボットライブラリ
- Backup Exec が物理的なロボットライブラリとして扱う仮想テープライブラリ
- ディスクへのバックアップフォルダ (作成するストレージデバイス)
- SAN または CASO 環境で使用する共有デバイス

- Microsoft の「リムーバブル記憶域」機能を使用してアプリケーション間で共有するリムーバブル記憶域デバイス
- Remote Media Agent for Linux Servers のために Symantec Tape Library Simulator Utility で作成するシミュレートテープライブラリ
- Backup Exec Storage Provisioning Option で設定するストレージアレイ

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

Backup Exec のインストール時に構成したストレージデバイスをそのまま使用することができます。デフォルトデバイスプールの[すべてのデバイス]が、バックアップジョブを作成するときのデフォルトのバックアップ先デバイスとして使用されます。デフォルトでは、[すべてのデバイス]デバイスプールの中にローカル接続の全デバイスが含まれます。Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているすべてのコンピュータにあるデバイスとシミュレートテープライブラリが[すべてのデバイス]デバイスプールから除外されます。Storage Provisioning Option とともに Backup Exec を初めてインストールした場合、[すべての仮想ディスク]デバイスプールがデフォルト宛先デバイスプールになります。[すべての仮想ディスク]デバイスプールはすべてのストレージアレイのすべての仮想ディスクを含んでいます。

SAN Shared Storage Option をインストールしている場合には、ローカル接続ストレージデバイスと共有ストレージデバイスの両方が[すべてのデバイス(コンピュータ名)]に表示されます。Backup Exec NDMP Option をインストールしている場合は、NDMP サーバーをストレージデバイスとして追加できます。Backup Exec Storage Provisioning Option をインストールしている場合は、ストレージアレイとそれらのコンポーネントも表示されま

す。

デバイスプールに加えて、Backup Exec は他のデバイス管理機能を提供します。

次の操作を行うことができます。

- すべてのストレージデバイスの現在の状態を識別し、監視する。
- サーバーの再ブートを行わずに物理テープデバイスを交換する。
- デバイスの統計情報を監視し、ハードウェアエラーを追跡する。デバイスの使用年数、使用時間、マウント回数、処理(読み書き)したバイト数、エラー数、前回クリーニングした日時などを追跡することができます。
- メディアサーバーに接続されている物理デバイスの管理や、デバイスおよびデバイスに装着されているメディアに対する操作を実行する。

メモ: Backup Exec のデバイス管理機能を使用することによって得られるメリットは、特に複数のストレージデバイスを使用する場合に実感することができます。また、使用するデバイスが 1 台のみの場合でも、Backup Exec のデバイス監視機能を活用し、デバイスが正しく機能しているかどうかをチェックすることができます。

デバイス設定アシスタントについて

デバイスを設定するために[デバイス設定アシスタント]を使います。

p.427の「[デバイス設定アシスタントを使用したストレージデバイスの設定](#)」を参照してください。

表 8-1 [デバイス設定アシスタント]オプション

デバイス	詳細
デバイスプール	p.503の「 デバイスプールについて 」を参照してください。
テープデバイス	p.435の「 テープドライブおよびロボットライブラリについて 」を参照してください。
ディスクへのバックアップフォルダ	p.482の「 ディスクへのバックアップフォルダについて 」を参照してください。
リムーバブルディスクへのバックアップフォルダ	p.482の「 ディスクへのバックアップフォルダについて 」を参照してください。
重複排除用ストレージフォルダ	p.1536の「 重複排除用ストレージフォルダについて 」を参照してください。
OpenStorage	p.1532の「 OpenStorage デバイスについて 」を参照してください。
Symantec Protection Network	p.1999の「 Symantec Online Storage for Backup Exec について 」を参照してください。
NDMP ストレージ	p.1801の「 NDMP Option について 」を参照してください。
Remote Media Agent ストレージ	p.1916の「 Remote Media Agent for Linux Servers について 」を参照してください。
ストレージアレイ	p.1968の「 Storage Provisioning Option オプションについて 」を参照してください。
ボルトストア	p.1406の「 Archiving Option でのボルトストアについて」を参照してください。

デバイス設定アシスタントを使用したストレージデバイスの設定

デバイス設定アシスタントの使用によってデバイスを設定するために次の手順を使ってください。

p.427の「[デバイス設定アシスタントについて](#)」を参照してください。

デバイス設定アシスタントを使用してストレージデバイスを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 3 設定したいデバイスの種類をクリックします。
- 4 設定するデバイスの各種類に適切なデバイスオプションを設定します。

ストレージの共有について

Backup Exec Central Admin Server Option (CASO) または SAN Shared Storage Option (SSO) を使う環境では、メディアサーバーはストレージを共有できます。SSO 環境か CASO 環境では、Backup Exec は共有デバイスのデータベースを保持します。さもないと、1 つのサーバーがデバイスにサブミットするバックアップデータによって別のサーバーがサブミットするデータが上書きされる可能性があります。CASO 環境では、集中管理サーバー、管理対象メディアサーバー、またはその両方にデバイスを追加できます。CASO 環境にある複数のメディアサーバーはデバイスを共有できます。

メディアサーバーは次の形式のストレージを共有できます：

- NDMP サーバーに接続されているデバイス
- 重複排除用ストレージフォルダ
- OpenStorage デバイス
- Remote Media Agent
- ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent

メモ: また、ディスクへのバックアップデバイスを共有できます。ただし、ディスクへのバックアップフォルダに対する処理は異なります。

p.493 の「[既存のディスクへのバックアップフォルダの共有](#)」を参照してください。

共有をサポートするストレージデバイスを追加するとき、どのメディアサーバーがデバイスにアクセスできるかを選択できます。ストレージデバイスの追加元のメディアサーバーではデバイスを自動的に共有できます。ただし、このメディアサーバーからは共有機能をいつでも削除することができます。たとえば集中管理サーバーにストレージデバイスを追加すれば、そのサーバーはそのデバイスを使うことができます。ただし、集中管理サーバーが管理対象メディアサーバーとして動作するように設定されていない環境では、集中管理サーバーから共有機能を削除できます。

環境内に複数のメディアサーバーとストレージデバイスがある場合は、メディアサーバーを選択し、そのストレージを管理できます。メディアサーバーで使うストレージデバイスを有効、または無効にできます。

p.429 の「[共有ストレージの管理](#)」を参照してください。

p.1804 の「[複数のメディアサーバー間での NDMP サーバーのデバイスの共有](#)」を参照してください。

p.1541 の「[複数のメディアサーバー間における重複排除のデバイスの共有](#)」を参照してください。

p.1927 の「[複数のメディアサーバー間での Remote Media Agent の共有](#)」を参照してください。

共有ストレージの管理

複数のストレージデバイスにアクセスするようにメディアサーバーを設定できます。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

共有ストレージを管理する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 メディアサーバーを右クリックします。
- 3 [共有ストレージの管理]を選択します。
- 4 [メディアサーバー]で、ストレージを共有したいメディアサーバーを選択します。
- 5 選択したメディアサーバーで使いたい各ストレージデバイスを選択します。
- 6 [OK]をクリックします。

[メディアサーバー共有ストレージを管理]オプション

複数のストレージデバイスにアクセスするようにメディアサーバーを設定できます。

p.429 の「[共有ストレージの管理](#)」を参照してください。

表 8-2 [メディアサーバー共有ストレージを管理]オプション

項目	説明
メディアサーバー	ストレージが共有されるメディアサーバーの名前を示します。
ストレージ	ストレージデバイスの名前を示します。
種類	ストレージデバイスの種類を示します。

メディアサーバーの一時停止

保守作業が実行される間、そのデバイス上でスケジュール済みジョブおよび新しいジョブが実行されないように、メディアサーバーを一時停止することができます。実行中のジョブはメディアサーバーが一時停止される前に開始していれば影響されません。

メディアサーバーが一時停止している場合は、[デバイス]ビューのメディアサーバー名の横に[一時停止]の状態が表示されます。

メディアサーバーを一時停止する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 メディアサーバーをクリックします。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[一時停止]チェックボックスを選択します。

メディアサーバーの再開

メディアサーバーを一時停止した場合、それを再開できます。

デバイスが一時停止している場合は、デバイス名の横に[一時停止]の状態が表示されます。

メディアサーバーを再開する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 一時停止しているサーバーのサーバーアイコンをクリックします。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[一時停止]チェックボックスを選択してチェックマークを外します。

ストレージデバイスの一時停止

保守作業が実行される間、そのデバイス上でスケジュール済みジョブおよび新しいジョブが実行されないように、ストレージデバイスを一時停止することができます。実行中のジョブはデバイスが一時停止される前に開始していれば影響されません。

デバイスが一時停止している場合は、[デバイス]ビューのデバイス名の横に[一時停止]の状態が表示されます。

ストレージデバイスを一時停止する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ストレージデバイスアイコンをクリックします。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[一時停止]チェックボックスを選択します。

ストレージデバイスの再開

ストレージデバイスを一時停止した場合、それを再開できます。

デバイスが一時停止している場合は、デバイス名の横に[一時停止]の状態が表示されます。

ストレージデバイスを再開する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 一時停止しているデバイスのストレージデバイスアイコンをクリックします。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[一時停止]チェックボックスを選択してチェックマークを外します。

ストレージデバイスの名前の変更

メディアサーバーのストレージデバイスの名前を変更できます。

ディスクへのバックアップフォルダ名の最大文字数は **128** です。ディスクへのバックアップのパス名の最大文字数は **512** で、ディスクへのバックアップフォルダ名を含みます。**Backup Exec** の[名前の変更]オプションを使用してディスクへのバックアップフォルダの名前を変更すると、**Backup Exec** では名前が変更されますが、ディスク上の名前は変更されません。

Windows エクスプローラに表示されるフォルダ名も変更できます。

p.493 の「[ディスクへのバックアップフォルダのパスの変更](#)」を参照してください。

デフォルトのデバイスプールである[すべてのデバイス]の名前を変更することはできませんが、ユーザーが作成したデバイスプールは、[名前の変更]またはデバイスプールの[プロパティ]ダイアログボックスを使用して名前を変更することができます。

ストレージデバイスの名前を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 名前を変更したいストレージデバイスをクリックします。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[名前の変更]を選択します。
- 4 新しい名前を入力し、[OK]をクリックします。

メディアのインベントリの実行について

新規インストールやアップグレード後に初めて **Backup Exec** を起動したときは、インベントリ操作を実行する必要があります。**Backup Exec** を終了して再起動すると、前回のセッションの終了時に保存された、すべてのメディアの場所と内容に関する情報が取得され

ます(デバイス内のメディアが変更されていない場合)。この情報を使用して、Backup Exec は再起動後ただちに処理を開始することができます。

ロボットライブラリ内のメディアを変更した場合は、ロボットライブラリ内のすべてのスロットまたは選択したスロットのインベントリを実行する必要があります。Backup Exec の指示に基づいてメディアを追加した場合は、スロットのインベントリを実行する必要はありません。

たとえば、リストア操作の実行時に、必要なデータが格納されているメディアがロボットライブラリに存在しない場合は、リストア操作に必要なメディアの挿入を求めるダイアログボックスが表示されます。この場合、リストア用ソースメディアを挿入したスロットのインベントリを実行する必要はありません。

Backup Exec の指示ではなく、独自にメディアをマガジンに追加またはメディアをマガジンから移動した場合は、変更を加えたスロットのインベントリ操作を実行する必要があります。インベントリ操作を実行するとメディアデータベースが更新されるため、ジョブの処理に必要なメディアを探すためにマガジン内のメディアのロードとアンロードを繰り返す必要がなくなります。また、インベントリを実行するスロットを選択することができます。メディアを頻繁に交換する場合は、Backup Exec サービスの起動時に、常にロボットライブラリマガジンのインベントリを実行すると便利です。

デバイス内のメディアのインベントリの実行

インベントリを実行すると、デバイスにメディアがマウントされ、メディアラベルを読み取り、読み取ったラベルが[デバイス]ビューに表示されます。Backup Exec によって初めて検出されたメディアの場合は、[メディア]ビューにもメディアラベルが追加されます。

ロボットライブラリまたはデバイス内のメディアを変更した場合は、インベントリを実行して、デバイス内の現在のメディアが各ビューに表示されるようにします。メディアの変更後にインベントリを実行しなかった場合は、以前と同じメディアが引き続きドライブに存在しているものとして表示されます。

メディアをマウントしてからインベントリを実行するため、多少時間がかかることがあります(ドライブによっては数分かかることがあります)。

ジョブモニターを使用して、インベントリ操作の監視やキャンセルを行うことができます。

デバイス内のメディアのインベントリを実行する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 ドライブまたはスロットのインベントリを実行する場合は、インベントリの実行対象が存在するドライブまたはスロットを選択します。
- 4 ディスクへのバックアップファイルのインベントリを実行する場合は、次に示す順序で操作を実行します。

- ディスクへのバックアップフォルダが存在するコンピュータのアイコンをダブルクリックします。
 - インベントリ対象のファイルが存在するディスクへのバックアップフォルダをクリックします。
 - 結果ペインで、インベントリ対象のファイルをクリックします。
- 5 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[インベントリ]を選択します。
- 6 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
- p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。
- p.670の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。
- 8 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。
- p.344の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

メディアからのデータの消去

メディアのデータを消去するには、[クイック消去]または[完全消去]のいずれかを使用します。ただし完全消去をサポートしていないデバイスもあります。完全消去をサポートしていないデバイスでは、実行できるのはクイック消去のみです。

クイック消去では、メディアに格納されているデータにアクセスできないようにするインジケータがメディアの最初の部分に書き込まれます。通常は、クイック消去の実行で十分です。

完全消去を選択した場合は、メディア全体から物理的にデータが消去されます。重要な情報が格納されているメディアの内容を完全に消去するには、完全消去を実行します。メディアに対する完全消去の実行には、数分から数時間かかることがあります(ドライブとメディアの容量に依存します)。

クイック消去と完全消去のどちらを実行した場合でも、メディアラベルは変更されません。メディアラベルを変更するには、メディアの消去を実行する前に[メディアのラベル付け]または[名前の変更]を使用します。

開始した消去操作をキャンセルすることはできませんが、キューで待機している消去操作は[キャンセル]を使用して取り消すことができます。

メディアからデータを消去する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 データを消去するメディアが存在しているドライブまたはスロットを選択します。
- 4 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[クイック消去]または[完全消去]のいずれかを選択します。

完全消去をサポートしていないドライブの場合は、[完全消去]を利用することはできません。

次の警告メッセージが表示されます。

この処理は、現在有効なドライブまたはスロットにあるメディア上で実行されます。最後のインベントリ処理以後、メディアに変更があった場合には、次に表示されるカードリッジラベルが、選択されているメディアのラベルと一致しないことがあります。

- 5 [はい]をクリックし、操作を続行します。

表示されたメディアは前回のインベントリ操作で読み取られたものです。インベントリ操作を再実行しない限り、表示は変更されません。したがって、スロットまたはドライブ内のメディアを変更しても、インベントリを実行しなかった場合は、表示されるメディアラベルがスロットまたはドライブ内の実際のメディアと異なることがあります。

- 6 ダイアログボックスが表示されたら、[はい]をクリックしてメディアのデータを消去します。
- 7 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。

p.467 の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

- 8 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.670 の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

- 9 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。

p.344 の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

テープドライブおよびロボットライブラリの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- テープドライブおよびロボットライブラリについて
- テープデバイス設定ウィザードを使用したテープデバイスの設定について
- ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換について
- **Symantec** テープデバイスドライバのインストールについて
- デバイスのブロックサイズ、バッファサイズ、バッファ数およびデータ送信開始バッファ数の変更
- デバイスのハードウェア圧縮の有効化
- メディアの種類に基づく読み取りおよび書き込み操作の指定
- ストレージデバイスのプロパティの表示
- **Backup Exec** のロボットライブラリについて
- デバイスとメディアの管理に役立つユーティリティジョブの作成について

テープドライブおよびロボットライブラリについて

Backup Exec をインストールすると、メディアサーバーに接続されているすべてのスタンドアロンテープドライブとロボットライブラリは自動的に認識されます。ロボットライブラリには仮想テープライブラリとシミュレートテープライブラリが含まれます。スタンドアロンドライブとは、ローカル接続された単一のテープドライブのことです。[デバイス]タブのビューには、デバイスプール内のデバイスの論理的な構成と、サーバー上のデバイスの物理的な配置が表示されます。

1 つ以上のロボットライブラリをグループ化してパーティションに分割した場合は、[デバイスプール]アイコンの下の[デバイス]ビューに、パーティションドライブプールが表示されます。

[デバイス設定アシスタント]はストレージデバイス、ストレージフォルダ、オンラインストレージの宛先を設定するのに利用可能です。

テープデバイス設定ウィザードを使用することで、Symantec テープデバイスドライバをインストールし、[デバイス]ビューに誤って[不明なデバイス]と表示されているロボットライブラリドライブを修正できます。

Backup Exec をインストールするとき、以下の項目のサポートが含まれています：

- ロボットライブラリごとの最初のロボットライブラリドライブ。
- すべてのシングルドライブ仮想テープライブラリ。

追加ドライブのサポートは Library Expansion Option と Virtual Tape Library Unlimited Drive Option で利用可能です。

p.427 の「[デバイス設定アシスタントを使用したストレージデバイスの設定](#)」を参照してください。

p.437 の「[Library Expansion Option について](#)」を参照してください。

p.436 の「[Virtual Tape Library Unlimited Drive Option について](#)」を参照してください。

p.1929 の「[Tape Library Simulator Utility について](#)」を参照してください。

p.439 の「[Symantec テープデバイスドライバのインストールについて](#)」を参照してください。

p.452 の「[Backup Exec のロボットライブラリについて](#)」を参照してください。

p.464 の「[デバイスとメディアの管理に役立つユーティリティジョブの作成について](#)」を参照してください。

p.1945 の「[SAN Shared Storage Option のデバイスについて](#)」を参照してください。

Virtual Tape Library Unlimited Drive Option について

Backup Exec をインストールするとき、すべての単一ドライブ仮想テープライブラリのサポートが含まれています。Virtual Tape Library Unlimited Drive Option は、各仮想テープライブラリのすべての追加ドライブのサポートを有効にします。

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/v-269-2>

次の URL で Virtual Tape Library Unlimited Drive Option のライセンス情報を見つけることができます：

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-21>

Virtual Tape Library Unlimited Drive Option をインストールするには、ライセンスキーを追加してください。

p.166 の「[ライセンスの追加](#)」を参照してください。

p.104 の「[Backup Exec の標準機能について](#)」を参照してください。

Library Expansion Option について

Backup Exec をインストールするとき、すべてのロボットライブラリで最初のドライブのサポートが含まれます。Library Expansion Option はロボットライブラリの各追加ドライブのサポートを有効にします。

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/v-269-2>

次の URL で Library Expansion Option のライセンス情報を見つけることができます：

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-21>

Library Expansion Option をインストールするには、ライセンスキーを追加してください。

p.166 の「[ライセンスの追加](#)」を参照してください。

p.104 の「[Backup Exec の標準機能について](#)」を参照してください。

テープデバイス設定ウィザードを使用したテープデバイスの設定について

次を実行するのにテープデバイス設定ウィザードを使います。

- ドライブが[デバイス]ビューに表示される場所を修正するためにロボットライブラリドライブを設定します。
Backup Exec のインストール後に、スタンドアロンドライブが[デバイス]ビューに誤って[不明なデバイス]と表示されることがあります。
- **Symantec** デバイスドライバインストールウィザードを使用して **Symantec** テープデバイスドライバをインストールします。

p.427 の「[デバイス設定アシスタントを使用したストレージデバイスの設定](#)」を参照してください。

p.439 の「[Symantec テープデバイスドライバのインストールについて](#)」を参照してください。

ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換について

ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用すると、サーバーを再ブートすることなく、**Backup Exec** メディアサーバーのホットスワップ対応ストレージデバイスを交換または追加することができます。

ユニバーサルシリアルバス (USB) テープデバイスを取り外して USB ポートに再接続する場合は、ホットスワップ対応デバイスウィザードを実行し、**Backup Exec** でデバイスを再び検出する必要があります。

iSCSI 接続デバイスの場合、iSCSI コントロールパネルアプレットでデバイスを永続的なターゲットとして指定し、次にホットスワップ対応デバイスウィザードを実行する必要があります。デバイスを永続的なターゲットとして指定すると、メディアサーバーが再起動されるたびにデバイスが再検出されます。

ホットスワップ対応デバイスウィザードを起動すると、**Backup Exec** 管理コンソールを閉じるように求められます。ホットスワップ対応デバイスウィザードは、処理中のジョブが完了するまで待機します。そして、メディアサーバーを一時停止し、**Backup Exec** サービスを停止します。ここで、ストレージデバイスの追加や交換を行うことができます。追加または交換したデバイスはウィザードによって検出され、検出したデバイスの情報は **Backup Exec** データベースに追加されます。これでウィザードが終了し、**Backup Exec** 管理コンソールを再び開くことができます。

新しいストレージデバイスは[デバイス]ビューに表示され、このデバイスの使用に関する統計情報の記録が開始されます。デバイスプールに新しいデバイスを追加できます。

交換したストレージデバイスは、[デバイス]ビューに[オフライン]の状態として表示されません。

p.438 の「[ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換](#)」を参照してください。

ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換

ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用すると、**Backup Exec** メディアサーバーのホットスワップ対応ストレージデバイスを追加または置換することができます。メディアサーバーを再起動する必要はありません。

p.438 の「[ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換について](#)」を参照してください。

メモ: ストレージデバイスを追加または交換するには、ホットスワップ対応デバイスウィザードを起動します。

ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換

1 次のいずれかを実行します。

iSCSI 接続デバイスの場合

iSCSI コントロールパネルアプレットで、
[Persistent Targets]リストにデバイスを追
加します。

次の手順に進みます。

他のホットスワップ対応デバイスの場合

次の手順に進みます。

- 2 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 3 タスクペインで、[ウィザード]>[ホットスワップ対応デバイスウィザード]をクリックしま
す。
- 4 画面の案内に従って作業を進めます。

Symantec テープデバイスドライバのインストールにつ いて

Symantec デバイスドライバインストールウィザードを使用すると、Symantec テープデバ
イスドライバをインストールできます。

Symantec テープデバイスドライバをインストールする前に、次を実行します。

- テープデバイスが Backup Exec によってサポートされることを確認します。
互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。
<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>
- Windows のデバイスマネージャを実行して、テープデバイスが表示されることを確認
します。

p.439 の「[tapeinst.exe の実行による Symantec テープデバイスドライバのインストール](#)」
を参照してください。

p.440 の「[テープデバイス設定ウィザードを使用した Symantec テープデバイスドライバ
のインストール](#)」を参照してください。

tapeinst.exe の実行による Symantec テープデバイスドライバのイン ストール

Symantec テープデバイスドライバは、Backup Exec のインストールディレクトリに存在す
る tapeinst.exe を実行してインストールできます。tapeinst.exe の更新は、デバイスドライ
バインストーラパッケージから取得できます。

デバイスドライバインストーラパッケージは、次の URL からダウンロードできます。

<http://go.symantec.com/support/BEWS-downloads-drivers>

メモ: `tapeinst.exe` は、テープデバイスドライバをインストールするメディアサーバーで、ローカルで実行する必要があります。`tapeinst.exe` を使用して、リモートのメディアサーバーにテープデバイスドライバをプッシュインストールすることはできません。

tapeinst.exe を実行して Symantec テープデバイスドライバをインストールする方法

- 1 Backup Exec のインストールディレクトリで、`tapeinst.exe` ファイルをダブルクリックします。

デフォルトのインストールディレクトリは、`C:\Program Files\Symantec\Backup Exec` です。
- 2 **Symantec** デバイスドライバインストールウィザードで、画面の案内に従って作業を進めます。

テープデバイス設定ウィザードを使用した Symantec テープデバイスドライバのインストール

テープデバイス設定ウィザードを使用してデバイスドライバインストールウィザードを実行することによって、Symantec テープデバイスドライバをインストールできます。

テープデバイス設定ウィザードを使用してストレージデバイスを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインで、[ウィザード]>[テープデバイス設定ウィザード]をクリックします。
- 3 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- 4 [バックアップデバイスの確認]画面で[次へ]をクリックします。
- 5 [バックアップデバイスの作成および設定]画面で、[テープデバイスドライバをインストールする]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 6 **Symantec** デバイスドライバインストールウィザードで、画面の案内に従って作業を進めます。

デバイスのブロックサイズ、バッファサイズ、バッファ数およびデータ送信開始バッファ数の変更

注意: デバイスの[ブロックとバッファの設定]設定を使用して、バックアップ処理およびリストア処理のパフォーマンスを調整します。通常は[ブロックとバッファの設定]の設定を変更する必要はありません。この設定を変更すると、バックアップのパフォーマンスやシステムのパフォーマンスが低下する場合があります。この設定を変更した場合は、実際の運用の前に完全なテストを行い、システムのパフォーマンスが低下していないことを確認します。

デバイスのブロックサイズ、バッファサイズ、バッファ数およびデータ送信開始バッファ数を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 プロパティを表示するデバイスをクリックして選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックして、[ドライブのプロパティ]ダイアログボックスで[設定]をクリックします。
- 5 変更する項目のドロップダウンメニューをクリックし、次に新しい設定を選択します。
p.445 の「[デバイスの\[設定\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

デバイスのハードウェア圧縮の有効化

デバイスが圧縮をサポートしている場合、デバイスのハードウェア圧縮の有効と無効を切り替えることができます。

デバイスのハードウェア圧縮を有効にする方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 プロパティを表示するデバイスをクリックして選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックして、[ドライブのプロパティ]ダイアログボックスで[設定]をクリックします。
- 5 変更する項目のドロップダウンメニューをクリックし、次に新しい設定を選択します。
p.445 の「[デバイスの\[設定\]プロパティ](#)」を参照してください。

- 6 [ハードウェア圧縮を有効にする]をクリックします。
- 7 [OK]をクリックします。

メディアの種類に基づく読み取りおよび書き込み操作の指定

デバイスでの読み取りおよび書き込み操作を特定のメディアの種類のみに限定するように指定することができます。この情報はデバイスおよびメディアのデータベースに格納され、メディアへの書き込みが必要なジョブで使用するメディアの検索対象から、このメディアの種類が除外されます。

メディアの種類に基づいて読み取りおよび書き込み操作を指定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 メディアの種類に基づいて読み取りおよび書き込み操作を指定するデバイスを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックして、[ドライブのプロパティ]ダイアログボックスで[メディアの種類]をクリックします。
p.451の「[デバイスの\[メディアの種類\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 5 必要に応じて、[読み取り]チェックボックスと[書き込み]チェックボックスを変更します。
p.229の「[混合メディアライブラリのバーコードルール](#)」を参照してください。

ストレージデバイスのプロパティの表示

プロパティは統計、日付と設定のようなストレージデバイスについての詳しい情報を提供します。

ストレージデバイスのプロパティを表示する方法

- 1 プロパティを表示する項目を選択し、タスクペインの[一般タスク]の下で[プロパティ]をクリックします。
- 2 一般プロパティを表示するには、[一般]をクリックします。
p.443の「[デバイスの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 3 設定プロパティを表示するには、[設定]をクリックします。
p.445の「[デバイスの\[設定\]プロパティ](#)」を参照してください。

- 4 SCSI 情報プロパティを表示するには、[SCSI 情報]をクリックします。
p.448 の「[デバイスの SCSI 情報](#)」を参照してください。
- 5 統計情報プロパティを表示するには、[統計情報]をクリックします。
p.448 の「[デバイスの\[統計情報\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 6 クリーニングプロパティを表示するには、[クリーニング]をクリックします。
p.449 の「[デバイスの\[クリーニング\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 7 メディアの種類のプロパティを表示するには、[メディアの種類]をクリックします。
p.451 の「[デバイスの\[メディアの種類\]プロパティ](#)」を参照してください。

デバイスの[一般]プロパティ

デバイスの一般プロパティはデバイスの状態、種類とベンダーについての情報を含んでいます。

p.442 の「[ストレージデバイスのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 9-1 デバイスの[一般]プロパティ

項目	説明
名前	デバイスの名前を表示します。

項目	説明
状態	<p>次のいずれかの状態を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 一時停止: このデバイスが一時停止しているかどうかを示します。 ■ 有効にする: Backup Exec がこのデバイスを排他的に使用しているかどうかを示します。 このチェックボックスをオフにすると、このデバイスは Backup Exec で使用することができなくなります。デバイスは他のアプリケーションで使用することができます。 ■ オンライン: チェックボックスがオンになっていてグレー表示されている場合は、デバイスがオンラインであることを示します。 デバイスがオフラインなら、チェックマークは表示されません。オンラインに復帰するまで、このデバイスを使用する操作を行うことはできません。 次の場合に、デバイスがオフラインと表示されません。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Backup Exec の起動後に、このデバイスの電源をオフにした。 ■ Backup Exec の起動時に、このデバイスが他のアプリケーション (Windows のバックアップユーティリティなど) で使用されていた。 ■ このデバイスをコンピュータから取り外した。 ■ デバイスが致命的エラーを報告する。 ■ デバイスのファームウェアが更新されたため、Backup Exec は以前のデバイス名または ID が存在しないと判断した。 <p>p.495 の「デバイスの状態のオンラインへの変更」を参照してください。</p>
製造元	ドライブまたはロボットライブラリの製造元の名前を表示します。
製品 ID	SCSI 照会文字列から取得した製品 ID を表示します。
ファームウェアのバージョン	このデバイスで使用されているファームウェアのバージョンを表示します。

項目	説明
ロボットライブラリの種類	ロボットライブラリのデフォルトの最初のスロット番号を表示します。仮想テープライブラリは文字列[VTL]によって識別されます。 Tape Library Simulator Utility が作成するシミュレートテープライブラリは、文字列[TLS]によって識別されます。 p.1929の「 Tape Library Simulator Utility について 」を参照してください。
メディアの種類	このドライブの種類で使用されているメディアの種類を表示します。
使用開始日	この Backup Exec によって、このデバイスが最初に検出された日付を表示します。
シリアル番号	ドライブのシリアル番号を表示します。
暗号化	ハードウェア暗号化をテープデバイスで現在使用できるかどうかを表示します。このフィールドが[はい]でハードウェア暗号化を使用するようにジョブが設定されている場合、 Backup Exec の暗号化キー管理機能を使用してデータを暗号化します。このフィールドが[いいえ]の場合、 Backup Exec はデータを暗号化しません。ただし、他社のハードウェア暗号化を使用するとテープ上のデータを引き続き暗号化できます。暗号化キー管理オプションおよびライセンスについてはハードウェア販売元にお問い合わせください。 p.400の「 ハードウェア暗号化について 」を参照してください。
WORM	テープデバイスでWORM(Write Once Read Many)データストレージを使用できるかどうかを表示します。 Backup Exec はWORMメディアを消去したり再利用したりすることができません。 p.232の「 WORMメディアについて 」を参照してください。

デバイスの[設定]プロパティ

次を実行するのにデバイスの設定プロパティを使います。

- ハードウェア圧縮を使用する、または使用しないように設定する(ドライブに圧縮機能が備えられている場合)。
- ブロックサイズ、バッファサイズ、バッファ数およびデータ送信開始バッファ数を変更する。

注意: [ブロックとバッファの設定]の設定は、バックアップ処理およびリストア処理のパフォーマンスを調整するために使用されます。通常は[ブロックとバッファの設定]の設定を変更する必要はありません。この設定を変更すると、バックアップやシステムのパフォーマンスが低下する場合があります。この設定を変更した場合は、完全なテストを行い、システムのパフォーマンスが低下していないことを確認する必要があります。

p.442 の「[ストレージデバイスのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 9-2 **デバイスの[設定]プロパティ**

項目	説明
ハードウェア圧縮を有効にする	<p>ハードウェア圧縮が有効かどうかを示します。</p> <p>このデバイスにハードウェア圧縮機能が搭載されている場合は、このオプションを使用することができます。</p> <p>ハードウェア圧縮を使用するように設定されているジョブを、ハードウェア圧縮を使用しないように設定したデバイス上で実行した場合は、そのデバイスがハードウェア圧縮をサポートしていても、ハードウェア圧縮は使用されません。</p>
ブロックサイズ	<p>このデバイス内の新しいメディアに書き込まれるデータのブロックサイズが表示されます。デフォルトは適切なブロックサイズです。</p> <p>使用するデバイスによっては、ブロックサイズを大きくするとパフォーマンスが向上することがあります (LTO デバイスなど)。適切なブロックサイズは 512 バイトから 64 KB ですが、さらに大きな値も使用できます。より大きなブロックサイズをサポートするデバイスを使用する場合は、[設定]タブでデバイスのブロックサイズを変更することができます。ただし、ブロックサイズを変更するオプションが利用できない場合は、より大きなサイズを使用するデバイスを設定する必要があります。</p> <p>デバイスの設定については、デバイスの製造元のマニュアルを参照してください。</p> <p>Backup Exec では、指定したブロックサイズが実際にそのデバイスでサポートされているかどうかのチェックは行われません。事前にデバイスの仕様を調べ、サポートされているブロックサイズを確認しておく必要があります。サポートされていないブロックサイズを指定した場合は、デフォルトの標準のブロックサイズが使用されます。</p> <p>ブロックサイズの設定をサポートしていないデバイスの場合は、このオプションは利用できません。</p>

項目	説明
バッファサイズ	<p>読み取りまたは書き込み要求でデバイスに送信されるデータ量を表示します。このバッファサイズはブロックサイズの偶数倍にしてください。</p> <p>システムに搭載されているメモリの量によっては、この値を大きくするとデバイスのパフォーマンスが向上することがあります。スループットを最大限にするバッファサイズはデバイスの種類によって異なります。</p>
バッファ数	<p>このデバイスに割り当てるバッファ数を表示します。</p> <p>システムに搭載されているメモリの量によっては、この値を大きくするとデバイスのパフォーマンスが向上することがあります。スループットを最大限にするバッファ数はデバイスの種類によって異なります。</p> <p>バッファ数を変更すると、データ送信開始バッファ数の変更も必要になる場合があります。</p>
データ送信開始バッファ数	<p>デバイスへのデータの送信開始をトリガしたり、デバイスアンダーランの後に満たす必要のあるバッファ数を表示します。</p> <p>バッファ数より大きなデータ送信開始バッファ数を指定することはできません。0を指定した場合は、データ送信開始バッファ数ロジックは使用されず、各バッファが一杯になるたびにデバイスに送信されます。</p> <p>通常は、デフォルト値で十分なパフォーマンスが得られます。構成によっては、このフィールドのデフォルト値を変更するとパフォーマンスが向上することがあります。バッファ数を変更した場合は、データ送信開始バッファ数も変更する必要があります。デバイスのデータ送信開始バッファ数のデフォルトが 0 の場合は、0 のままにしておきます。</p>
デフォルト設定	<p>すべての構成設定をデフォルトに戻します。</p>
1 ブロックずつデータを読み取る	<p>このデバイスが、バッファブロックのサイズに関係なく、一度に 1 ブロックのデータのみを読み取るかどうかを示します。</p>
1 ブロックずつデータを書き込む	<p>このデバイスで一度に 1 ブロックのデータのみを書き込むかどうかを示します。このオプションを使用すると、データ書き込みエラー処理を細かく制御することができます。</p> <p>シマンテック社では、デバイスが共有ストレージデバイスの場合にこのオプションを推奨しています。</p>

項目	説明
SCSI パススルーモードでデータを読み取る	このデバイスで Microsoft 社のテープデバイス API を使用せずにデータを読み取るかどうかを示します。このオプションを使用すると、データはデバイスを通じて直接渡されるため、デバイスエラーが発生した場合に、より詳細な情報を入手することができます。
SCSI パススルーモードでデータを書き込む	このデバイスで Microsoft 社のテープデバイス API を使用せずにデータを書き込むかどうかを示します。このオプションを使用すると、データはデバイスドライバを通じて直接渡されるため、デバイスエラーが発生した場合に、より詳細な情報を入手することができます。 シマンテック社では、デバイスが共有ストレージデバイスの場合にこのオプションを推奨しています。

デバイスの SCSI 情報

デバイスの SCSI 情報は、Small Computer System Interface (SCSI) のプロパティを提供します。

p.442 の「[ストレージデバイスのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 9-3 デバイスの SCSI 情報

項目	説明
デバイス情報	デバイスのファームウェアから取得したデバイス情報を表示します。
ポート	このデバイスが接続されているサーバーのポート番号を表示します。
バス	このデバイスが接続されているバスの番号を表示します。
ターゲット ID	固有の SCSI ID 番号 (物理ユニット番号) を表示します。
LUN	このデバイスの論理ユニット番号を表示します。

デバイスの [統計情報] プロパティ

統計情報には、デバイスにメディアが最後にマウントされた日時、読み書きしたバイトの総数、デバイスエラーなどの情報が含まれます。エラー率は、メディアや、ヘッドのクリーニングおよびヘッドの磨耗と関連があります。情報は **Backup Exec** が最初にデバイスを検出した後に収集された統計情報のみを含んでいます。

ハードエラーとソフトエラーの許容範囲についてはデバイスに付属のマニュアルを参照してください。マニュアルに記述がない場合は、ドライブの製造元に問い合わせてください。

p.442 の「[ストレージデバイスのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 9-4 デバイスの[統計情報]プロパティ

項目	説明
最新のマウント日	このデバイスにメディアをマウントした最後の日付を表示します。
総書き込みバイト数	このデバイスに書き込まれたバイト数を表示します。
総読み取りバイト数	このデバイスによって読み取られたバイト数を表示します。
総マウント数	このデバイスにメディアをマウントした回数を表示します。
総シーク数	このデバイスで実行された検索操作 (指定した情報が格納されている場合に実行されます) の回数を表示します。
総使用時間	このデバイスを使用 (読み取り、書き込み、マウントおよび検索) した総時間数を表示します。
シークエラー数	データの検索中に発生したエラー数を表示します。
ソフトエラー数 (読み取り)	リカバリ可能な読み取りエラーの発生回数を表示します。ソフトエラーの発生は、何らかの問題が発生する予兆を示していることがあります。このエラーが頻繁に発生する場合は、デバイスのチェックや保守、メディアの損傷チェックを実行してください。
ハードエラー数 (読み取り)	リカバリ不可能な読み取りエラーの発生回数を表示します。ハードエラーが発生した場合は、デバイスのチェックや保守、メディアの損傷チェックを実行してください。
ソフトエラー数 (書き込み)	リカバリ可能な書き込みエラーの発生回数を表示します。ソフトエラーの発生は、何らかの問題が発生する予兆を示していることがあります。このエラーが頻繁に発生する場合は、デバイスのチェックや保守、メディアの損傷チェックを実行してください。
ハードエラー数 (書き込み)	リカバリ不可能な書き込みエラーの発生回数を表示します。ハードエラーが発生した場合は、デバイスのチェックや保守、メディアの損傷チェックを実行してください。

デバイスの[クリーニング]プロパティ

デバイスのクリーニングプロパティは、前回のクリーニング以降の統計情報を提供します。ハードエラーとソフトエラーの許容範囲についてはデバイスに付属のマニュアルを参照してください。マニュアルに記述がない場合は、ドライブの製造元に問い合わせてください。

ロボットライブラリの場合、[クリーニング]タブに表示される統計情報は、クリーニングジョブが正常に完了すると自動的に更新されます。

スタンドアロンドライブの正確なクリーニング情報を表示するには、手動でドライブをクリーニングした後で、クリーニング情報をリセットします。

p.442 の「ストレージデバイスのプロパティの表示」を参照してください。

p.472 の「クリーニングジョブの作成」を参照してください。

表 9-5 デバイスの[クリーニング]プロパティ

項目	説明
最新のクリーニング日	このデバイスを最後にクリーニングした日付を表示します。
前回クリーニング後の経過時間	前回のクリーニング以降の、このデバイスの使用時間を表示します。
クリーニング情報をリセットする	すべてのクリーニング情報が 0 にリセットされず (スタンドアロンドライブのみ)。この操作は元に戻すことができません。
総書き込みバイト数	前回のクリーニング以降に、このデバイスによって書き込まれたバイト数を表示します。
総読み取りバイト数	前回のクリーニング以降に、このデバイスによって読み取られたバイト数を表示します。
総マウント数	前回のクリーニング以降に、このデバイスによってメディアがマウントされた回数を表示します。
総シーク数	前回のクリーニング以降に、このデバイスによって実行された検索操作の回数を表示します。検索操作は、指定した情報を検索するために実行されます。
総使用時間	前回のクリーニング以降の、このデバイスの総使用時間を表示します。
シークエラー数	前回のクリーニング以降の、シークエラーの発生回数を表示します。
ソフトエラー数 (読み取り)	前回のクリーニング以降の、リカバリ可能な読み取りエラーの発生回数を表示します。ソフトエラーの発生は、何らかの問題が発生する予兆を示していることがあります。このエラーが頻繁に発生する場合は、デバイスのチェックや保守、メディアの損傷チェックを実行してください。
ハードエラー数 (読み取り)	前回のクリーニング以降の、リカバリ不可能な読み取りエラーの発生回数を表示します。ハードエラーが発生した場合は、デバイスのチェックや保守、メディアの損傷チェックを実行してください。

項目	説明
ソフトエラー数 (書き込み)	前回のクリーニング以降の、リカバリ可能な書き込みエラーの発生回数を表示します。ソフトエラーの発生は、何らかの問題が発生する予兆を示していることがあります。このエラーが頻繁に発生する場合は、デバイスのチェックや保守、メディアの損傷チェックを実行してください。
ハードエラー数 (書き込み)	前回のクリーニング以降の、リカバリ不可能な書き込みエラーの発生回数を表示します。ハードエラーが発生した場合は、デバイスのチェックや保守、メディアの損傷チェックを実行してください。

デバイスの [メディアの種類] プロパティ

メディアの種類のプロパティは、デバイスに配置できるメディアの種類を表示します。読み取りまたは書き込み操作に使用するメディアの種類を指定できます。デフォルトでは、読み取りと書き込みの両方の操作に使用されるメディアの種類のカテゴリがすべて表示されます。

p.442 の「[ストレージデバイスのプロパティの表示](#)」を参照してください。

Backup Exec のデバイスおよびメディアのデータベースには、4mm などのメディアの種類のリストが保持され、さらにメディアの種類の子カテゴリが定義されています。たとえば、4mm のメディアの種類には、長さ 60m、ストレージ容量 1.3 GB の 4mm DDS-1 が含まれます。また、長さ 90m、ストレージ容量 2 GB の 4mm DDS-1 も 4mm テープです。

異なるドライブが混在するロボットライブラリでバーコードがサポートされている場合、どのメディアの種類をどのドライブで使用するかを Backup Exec が識別できるように、バーコードルールを作成することができます。

p.229 の「[混合メディアライブラリのバーコードルール](#)」を参照してください。

表 9-6 デバイスの [メディアの種類] プロパティ

項目	説明
メディアの種類	メディアの種類 (4mm など) と、そのメディアの種類の子カテゴリ (クリーニングテープの場合の CLN など) が表示されます。カッコで囲まれた数字付きで表示されるメディアの種類 (4mm [6] など) は、特定のバーコードルールの定義に使用することができます。
読み取り	このデバイスで読み取り可能なメディアの種類の場合は [はい] が表示されます。

項目	説明
書き込み	このデバイスで書き込み可能なメディアの種類の場合は[はい]が表示されます。

Backup Exec のロボットライブラリについて

Backup Exec のデバイスとメディアの詳細管理(ADAMM: Advanced Device and Media Manager) 機能を使用すると、ロボットライブラリ用の強力な機能を使用することができます。通常のロボットライブラリモジュールでは、ロボットライブラリ内のスロットを定義済みのグループに分割し、それらのグループをバックアップ先に設定します。この構成は、割り当てられたジョブの処理に必要な容量のメディアがグループ内に存在する限り機能します。データの量がグループ内に存在するメディアの容量を超えた場合には、上書き可能なメディアを物理的に追加し、メディアのインポートジョブを作成してメディアをロボットライブラリに挿入しないと処理を続行することができないために問題が発生します。使用可能なメディアが、ロボットライブラリ内の他のグループに割り当てられているスロットに存在していても、この問題は発生します。

Backup Exec のデバイスとメディアの管理機能を使用することによって、通常のロボットライブラリモジュールに関連したこの問題を解決することができます。メディア数が限定されるスロットにバックアップジョブを割り当てるのではなく、ロボットライブラリ内に存在するすべてのメディアにアクセスし、そのジョブの対象となるメディアセットに所属するメディアにバックアップジョブが割り当てられます。バックアップデータが 1 つのメディアの容量を超える場合は、ロボットライブラリ内に存在するすべてのメディアを検索し、適切なメディアを探して、そのメディアを使用してジョブが続行されます。

たとえば、6 スロットのロボットライブラリを使用しているとします。オペレータは、6 本の生テープを装着し、このロボットライブラリ内のさまざまなメディアセットにバックアップジョブを割り当てます。実行するバックアップジョブが上書きであるか追記であるかに応じ、ロボットライブラリ内の利用可能なテープが Backup Exec によって自動的に割り当てられます。ジョブのデータ量が 1 本のテープの容量を超えても、ロボットライブラリ内に別の上書き可能なテープが存在する場合は、自動的にそのテープを使用してジョブが続行されます。使用可能なテープを使い切った場合は、上書き可能なメディアのインポートを求めるメッセージが表示されます。

ロボットライブラリでは、ライブラリ内の再利用可能メディアが古いものから順に選択されます。これらの必要条件を満たすメディアが複数見つかった場合には、Backup Exec は、一番小さい番号のスロットにあるメディアを選択します。たとえば、スロット 2 と 4 に同じメディアがあった場合、スロット 2 のメディアが選択されます。

p.437 の「[Library Expansion Option について](#)」を参照してください。

p.436 の「[Virtual Tape Library Unlimited Drive Option について](#)」を参照してください。

p.466 の「仮想テープライブラリとシミュレートテープライブラリのユーティリティジョブ」を参照してください。

p.453 の「ロボットライブラリのハードウェアを設定するための必要条件」を参照してください。

p.473 の「ロボットライブラリへのメディアのインポート」を参照してください。

ロボットライブラリのハードウェアを設定するための必要条件

ロボットライブラリのドライブ、ロボットアームおよび Backup Exec を関連付けることによって、ロボットライブラリドライブを Backup Exec で使用できるように設定できます。Backup Exec では連続ドライブがサポートされています。連続ドライブの手動での設定は不要です。

サポートされるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

ロボットライブラリのハードウェアが次のように設定されていることを確認します。

- ロボットアームがランダムモードに設定されている必要があります。詳しくはロボットライブラリのマニュアルを参照してください。
- マルチ LUN ロボットライブラリの場合は、次を確認します。
 - コントローラカードが複数の LUN をサポートするように設定されている (カードがサポートしている場合)。
 - テープドライブのターゲット LUN がチェンジャーのターゲット LUN より小さい番号である。
- ロボットライブラリ内の 1 番目のドライブ (ストレージデバイス 0) を調べ、ドライブ要素アドレスの順序に合わせて SCSI ID を割り当てます。ロボットライブラリのマニュアルを参照し、各ストレージデバイスのドライブ要素アドレスを確認してください。
- ロボットアームの SCSI ID が、ロボットライブラリ内の各ドライブの SCSI ID よりも小さい番号であることを確認します。0 または 1 は使用しないでください。通常、これらの SCSI ID はブートデバイス用に予約されています。

次の例に示すように、2 つのドライブで構成されるロボットライブラリの場合は、ドライブ要素アドレスの数値が小さい方のドライブに小さい番号の SCSI ID を割り当てます。

表 9-7 マルチドライブロボットライブラリの設定例

データ転送要素 (ストレージデバイス)	SCSI ID	ドライブ要素アドレス
ロボットアーム	4	N/A
ストレージデバイス 0	5	00008000

データ転送要素 (ストレージデバイス)	SCSI ID	ドライブ要素 アドレス
ストレージデバイス 1	6	00008001

p.454 の「ロボットライブラリデバイスの表示のトラブルシューティング」を参照してください。

ロボットライブラリデバイスの表示のトラブルシューティング

ロボットライブラリデバイスが[デバイス]ビューに正しく表示されなければ、次の方法を試してみます。

表 9-8 ロボットライブラリデバイスの表示のトラブルシューティング

問題	処理
ロボットライブラリがスタンドアロンドライブとしてバックアップデバイスのリストに表示されている場合	テープデバイス設定ウィザードを実行します。[ライブラリドライブの設定]パネルで、該当するドライブをクリックして適切なロボットライブラリにドラッグし、関連付けを修正します。 p.427の「 デバイス設定アシスタントを使用したストレージデバイスの設定 」を参照してください。
ロボットアームが表示されていない場合	ロボットライブラリのサポートを有効にしたことを確認します。 p.104の「 Backup Exec の標準機能について 」を参照してください。

変更を行ったら、インベントリ操作を実行して Backup Exec のメディアデータベースを更新します。

p.431 の「[メディアのインベントリの実行について](#)」を参照してください。

p.453 の「[ロボットライブラリのハードウェアを設定するための必要条件](#)」を参照してください。

Backup Exec サービス起動時のロボットライブラリの初期化

Backup Exec サービスの起動時に Backup Exec でロボットライブラリを初期化することができます。

起動時にロボットライブラリのストレージデバイス内にメディアが存在する場合は、Backup Exec はそのメディアを元のマガジンスロットに戻そうとします。メディアをスロットに戻せない場合は、ストレージデバイスからのメディアの取り出しを求めるエラーメッセージが表示されます。

ロボットライブラリを初期化するジョブを作成することもできます。

p.468 の「[ロボットライブラリを初期化するジョブの作成](#)」を参照してください。

Backup Exec サービスの起動時にロボットライブラリを初期化する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 ロボットライブラリを選択します。
- 4 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[プロパティ]を選択します。
- 5 [設定]タブで、[Backup Exec サービス起動時に初期化する]をクリックします。
p.456 の「[ロボットライブラリの\[設定\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

ロボットライブラリ用のバーコードルールの有効化

Backup Exec がロボットライブラリドライブで使うメディアの種類を指定するバーコードルールを作成した後で、ライブラリのバーコードルールを有効にする必要があります。

p.228 の「[バーコードを使用したラベル付け](#)」を参照してください。

ロボットライブラリ用のバーコードルールを有効にする方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 ロボットライブラリを選択します。
- 4 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[プロパティ]を選択します。
- 5 [設定]タブで、[バーコードルールを使用する]をクリックします。
- 6 [OK]をクリックします。

クリーニングスロットの定義

クリーニングジョブをサブミットする前に、クリーニングテープが存在しているクリーニングスロットを定義する必要があります。

クリーニングスロットとして定義したスロットにクリーニングテープが存在していることを確認します。クリーニングスロットの定義が終了した後、このロボットライブラリドライブのクリーニングジョブを設定することができます。

p.472 の「[クリーニングジョブの作成](#)」を参照してください。

インベントリジョブの実行時に、定義したクリーニングスロットのインベントリは実行されません。

クリーニングスロットを定義する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 クリーニングを設定するドライブまたはロボットライブラリをクリックします。
- 3 クリーニングテープが存在するスロットを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [クリーニングスロット]にチェックマークを付け、[OK]をクリックします。

ロボットライブラリの[設定]プロパティ

設定プロパティでは、Backup Exec の起動時のロボットライブラリの初期化、バーコードルールの有効化、スロットのベース番号の指定を行うことができます。

p.442 の「[ストレージデバイスのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 9-9 ロボットライブラリの[設定]プロパティ

項目	説明
Backup Exec サービス起動時に初期化する	<p>Backup Exec サービスの起動時にロボットライブラリを Backup Exec で初期化するかどうかを示します。ロボットライブラリの種類によっては、メディアが存在し、メディアのすべてのバーコードラベルの読み取りを行うことができるスロットを初期設定で確認できます。</p> <p>デフォルトの設定は off です。</p> <p>ライブラリの起動時にライブラリ自体の初期化が行われない場合は、このオプションを有効にすることが必要な場合もあります。ただし、ライブラリが複数のサーバーによって共有されている場合は、各サーバーがライブラリを初期化しなければならないのでこのオプションは有効にしないでください。他のサーバーは、すべての初期設定処理が完了するまでライブラリにアクセスできません。</p> <p>起動時にライブラリを初期化しない場合は初期化ジョブをいつでも実行できます。</p> <p>p.468 の「ロボットライブラリを初期化するジョブの作成」を参照してください。</p>
バーコードルールの使用	<p>ロボットライブラリ用のバーコードルールが有効になっているかどうかを示します。Backup Exec がロボットライブラリドライブで使うメディアの種類を指定するバーコードルールを作成する場合は、ルールを使用する前に、そのライブラリのバーコードルールを有効にする必要があります。</p> <p>デフォルトの設定は off です。</p> <p>p.229 の「混合メディアライブラリのバーコードルール」を参照してください。</p>

項目	説明
スロットベース	このロボットライブラリの最初のスロット番号を指定します。Backup Execはこの種類のライブラリのための最初のスロット番号を判断します。ロボットライブラリの最初のスロット番号として 0 を使用するか 1 を使用するかを指定します。最初のスロット番号は、必要に応じて変更できます。 p.461 の「ロボットライブラリのスロットのベース番号の再指定」を参照してください。

ロボットライブラリの [統計情報] プロパティ

ロボットライブラリの統計情報を表示できます。

p.442 の「ストレージデバイスのプロパティの表示」を参照してください。

表 9-10 ロボットライブラリの [統計情報] プロパティ

項目	説明
スロット数	ロボットライブラリのスロット数を表示します。
ドライブエレメント数	ロボットライブラリに含まれるドライブエレメントの数を表示します。
総マウント数	このデバイスにメディアをマウントした回数を表示します。
マウントエラー数	ドライブへのメディアのマウント時に発生したエラーの数を表示します。

ロボットライブラリスロットのプロパティ

ロボットライブラリ内のスロットと、スロット内のすべてのメディアについての情報を表示できます。

p.442 の「ストレージデバイスのプロパティの表示」を参照してください。

表 9-11 ロボットライブラリスロットのプロパティ

項目	説明
スロット番号	スロットの数を表示します。
バーコード	バーコードリーダーで読み取られたラベルを表示します。バーコード情報は、ロボットライブラリにバーコードリーダーが搭載され、メディアにバーコードが貼り付けられている場合にのみ表示されます。

項目	説明
クリーニングスロット	<p>このスロットがクリーニングスロットとして定義されているかどうかを示します。</p> <p>p.455 の「クリーニングスロットの定義」を参照してください。</p>
メディアラベル	<p>次のいずれかとしてメディアラベルを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Backup Exec が自動的に割り当てるラベル。 ■ 管理者が割り当てるラベル。 ■ あらかじめ割り当てられているバーコードラベル。 <p>メディアラベルは、32 文字 (半角換算) 以内で編集することができます。ラベルを編集するとメディア表示用の名前が変更されます。ただし上書き操作を行わない限り、実際にはメディアへのラベルの書き込みは行われません。このメディアラベルは、メディアを再利用する場合にも使用されるので、簡単に識別できる簡潔なものにします。メディアの外部に貼り付けられたラベルにも、このメディアラベルを記入しておいてください。</p> <p>自動生成されたラベルが重複することがあります。たとえば、Backup Exec を再インストールしたり、別の Backup Exec システムで作成したメディアを使用すると、ラベルが重複することがあります。重複したラベルの使用は許されていますが、できるだけ避けるようにします。</p> <p>バーコードを貼り付けたメディアをバーコード対応デバイスで使用した場合は、自動的にそのバーコードがメディアラベルとして使用されます。</p>
説明	<p>インポートメディアの場合は、元のメディアラベルが表示されます。</p> <p>メディアの説明は、その内容が簡単に識別できるように、128 文字 (半角換算) 以内で編集することができます。</p>

項目	説明
メディアの種類	メディアの種類およびサブタイプを表示します(利用可能な場合)。メディアの種類およびサブタイプを変更するには、このボックスの横のボタンをクリックします。
エクスポートの保留	このメディアをエクスポートするメディアのエクスポートテンプレートが関連付けられたジョブが実行されるときは[はい]が表示されます。 p.524の「メディアのエクスポートテンプレートについて」 を参照してください。
メディアセット	このメディアが属するメディアセットの名前を表示します。
メディアの場所	このメディアが存在するデバイスまたはボルトの名前を表示します。
作成日	このメディアを、この Backup Exec システムで初めて使用した日時を表示します。
割り当て日	上書き操作の結果、メディアがメディアセットに割り当てられた日時を表示します。
修正日	このメディアに最後にデータが書き込まれた日時を表示します。
上書き禁止期間	このメディアに対する上書き禁止期間の設定を表示します。
追記期間	このメディアに対する追記期間の設定を表示します。
ハードウェア暗号化のサポート	このメディアでハードウェア暗号化がサポートされている場合は[はい]が表示されます。 p.400の「ハードウェア暗号化について」 を参照してください。

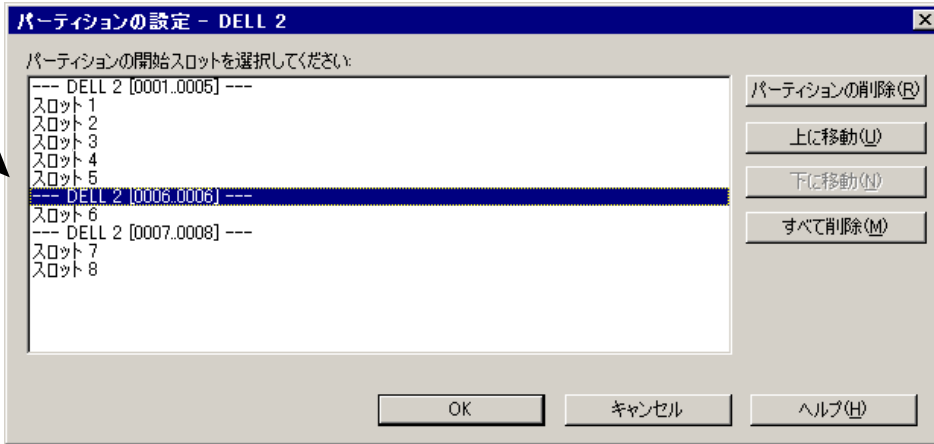
ロボットライブラリのパーティションについて

ロボットライブラリ内のスロットをグループ化してパーティションを作成することができます。ロボットライブラリのスロットでパーティションを作成すると、バックアップジョブでのメディア

の使用方法を細かく制御することができます。ロボットライブラリにパーティションを設定すると、各パーティション用のデバイスプールが作成されます。パーティションデバイスプールに割り当てられたジョブは、そのパーティションの-slot内には存在するメディア上で実行されます。たとえば、slot 1 と slot 2 でパーティションを構成し、これらの slot 内のメディアのみを使用して週 1 回のバックアップを実行する必要がある場合、slot 1 と slot 2 で構成されるパーティションデバイスプールにジョブをサブミットします。パーティション区切り線はパーティションに含まれている slot の範囲を示します。

図 9-1 [パーティションを設定]ダイアログボックス

パーティション
区切り線



10 スロットのロボットライブラリ上に、5 スロットで構成したパーティションを 2 つ作成するには、スロット 1 とスロット 6 をクリックします。この場合、スロット 1 からスロット 5 で第 1 パーティションが、スロット 6 からスロット 10 で第 2 パーティションが作成されます。

任意の数のスロットでパーティションを設定することができますが、複数のパーティションが存在する場合、第 1 パーティションの移動および削除はできません。

ロボットライブラリの設定により、ライブラリの最初のスロット番号は 1 の場合と 0 の場合があります。最初のスロット番号として 0 を使用しているロボットライブラリで、第 1 パーティションの先頭スロットとしてスロット 1 を指定した場合、パーティションユーティリティによって、実際には第 1 パーティションの先頭スロットとしてスロット 0 が使用され、すべてのパーティションの先頭スロットも自動的に調整されます。

パーティションデバイスプールは、[デバイス]ビューの[デバイスプール]アイコンの下に表示されます。ロボットライブラリにパーティションが設定されている場合は、最も古い再利用可能メディアが、ターゲットのパーティション内のみで検索されます。これらの必要条件を満たすメディアが複数見つかった場合には、Backup Exec は、一番小さい番号のスロットにあるメディアを選択します。たとえば、スロット 2 と 4 に同じメディアがあった場合、スロット 2 のメディアが選択されます。

Backup Exec のパーティション管理機能を最大限に活用するために、バックアップの管理方法に応じたパーティションの作成をお勧めします。たとえば、ユーザーとグループに基づいてパーティションへのアクセス権限を設定しネットワークバックアップを管理する方が合理的な場合がありますが、操作の種類に基づいてパーティションを構成する方が合理的な場合もあります。

p.461 の「[ロボットライブラリのパーティションの作成](#)」を参照してください。

p.464 の「[ロボットライブラリのパーティションの削除](#)」を参照してください。

p.462 の「[ロボットライブラリのパーティションの再定義について](#)」を参照してください。

ロボットライブラリのパーティションの作成

バックアップジョブに使われるメディアを制御するためにロボットライブラリスロットのパーティションを作成できます。パーティションの作成が終了した後、定義したパーティションのデバイスプールにジョブをサブミットすることができます。

パーティションデバイスプールは、親の[ロボットライブラリ]の下に表示されます。ロボットライブラリのパーティションデバイスプールのすべてに同じ名前が割り当てられ、パーティションに含まれるスロットの範囲がカッコで囲んで表示されます。

p.459 の「[ロボットライブラリのパーティションについて](#)」を参照してください。

ロボットライブラリのパーティションを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 パーティションを作成するスロットが存在しているロボットライブラリを選択します。
- 4 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[パーティションの設定]を選択します。
- 5 各パーティションを設定するロボットライブラリスロットを選択するには、パーティションの先頭となるスロットをクリックします。
- 6 パーティションを設定した後、[OK]をクリックします。
- 7 [はい]をクリックすると、パーティションが確定されます。

ロボットライブラリのスロットのベース番号の再指定

Backup Exec はロボットライブラリのスロットのベース番号を自動的に割り当てます。必要に応じて、ロボットライブラリスロットの Backup Exec での表示方法を再指定することができます。スロットのベース番号が 0 から始まるロボットライブラリもあれば、1 から始まるロボットライブラリもあります。ロボットライブラリのスロット番号が 0 から始まる場合は、スロットの表示方法を再指定することができます。

ロボットライブラリのスロットのベース番号を再指定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 スロットのベース番号を再指定するロボットライブラリを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [設定]タブの[スロットベース]フィールドに、適切な番号を入力します。
- 6 [OK]をクリックします。

[パーティションを設定]オプション

新しいロボットライブラリのパーティションの設定、パーティションの削除またはパーティションの変更を行うことができます。

p.461 の「[ロボットライブラリのパーティションの作成](#)」を参照してください。

p.464 の「[ロボットライブラリのパーティションの削除](#)」を参照してください。

表 9-12 [パーティションを設定]オプション

項目	説明
パーティションの開始スロットを選択してください	ロボットライブラリのパーティションの最初のスロット番号として指定できる利用可能なスロットを表示します。
パーティションの削除	選択したパーティションを削除します。削除するパーティションを設定しているスロットは、直前のパーティションに追加されます。
上に移動	選択したパーティション区切り線を上に移動し、パーティションを設定するスロットの数を増やします。(直前のパーティションを設定するスロットの数は減少します。)
下に移動	選択したパーティション区切り線を下に移動し、パーティションを設定するスロットの数を減らします。(直前のパーティションを設定するスロットの数は増加します。)
すべてを削除	すべてのパーティション設定を削除します。

ロボットライブラリのパーティションの再定義について

パーティションの先頭スロットを変更し、スロットを別のパーティションに割り当てたり、パーティションの作成やパーティションドライブプールからのスロットの削除を行うことができます。たとえば、6 スロットのロボットライブラリを 2 つのパーティションに分割している場合 (パーティション 1 はスロット 1 からスロット 3、パーティション 2 はスロット 4 からスロット 6)、このロボットライブラリを、スロット 1 とスロット 2 のパーティション 1、スロット 3 からスロット

5 のパーティション 2、スロット 6 のパーティション 3 の 3 つに変更するには、スロット 1、3、6 を選択します。

最初の 2 つのパーティションドライブプールの ID は元の設定と変わらないため、スロットの割り当てを変更しても、これらのパーティションドライブプールにサブミットされたジョブの設定を変更する必要はありません。

ただし、パーティションの数を 3 から 2 に変更した場合、3 番目のパーティションが存在しなくなるため、これにサブミットされていたジョブへのパーティションの割り当てを変更する必要があります。また、元のパーティションの 2 つ以上を含む新しい 1 つのパーティションを作成した場合も、存在しなくなったパーティションにサブミットされていたジョブへのパーティションの割り当てを変更する必要があります。

たとえば、次のパーティションに分割されているロボットライブラリを想定します。

表 9-13 ロボットライブラリのパーティションの例

パーティション	スロット
パーティション 1	スロット 1-2
パーティション 2	スロット 3-4
パーティション 3	スロット 5-10

ライブラリのパーティションを、次のように再定義します。

表 9-14 ロボットライブラリのパーティションの再定義例

パーティション	スロット
パーティション 1	スロット 1-4
パーティション 2	スロット 5-6
パーティション 3	スロット 7-10

この場合、前のパーティション 2 (スロット 3-4) を割り当てていたすべてのジョブの割り当てを変更する必要があります。

メモ: 特定のロボットライブラリドライブ (またはパーティションドライブプールではないデバイスプール) 上で実行するように設定されているジョブは、ロボットライブラリ内の最初のパーティションで実行されます。

p.461 の「ロボットライブラリのパーティションの作成」を参照してください。

p.508 の「[ジョブの再設定] オプション」を参照してください。

ロボットライブラリのパーティションの削除

ロボットライブラリの1つまたはすべてのパーティションを削除できます。

ロボットライブラリのパーティションを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 削除するパーティションを含んでいるロボットライブラリを選択します。
- 4 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[パーティションの設定]を選択します。
- 5 次のいずれかを実行します。

1つのパーティションを削除する方法	削除するパーティションを選択して、[パーティションの削除]をクリックします。
すべてのパーティションを削除する方法	[すべてを削除]をクリックします。

- 6 パーティションを設定した後、[OK]をクリックします。
- 7 [はい]をクリックすると、新しい設定が確定されます。

デバイスとメディアの管理に役立つユーティリティジョブの作成について

Backup Exec には、デバイスとメディアの管理に役立つユーティリティジョブが含まれています。ユーティリティジョブの実行時には、ジョブの優先度および通知の受信者を指定することができます。ユーティリティジョブでは、バックアップジョブやリストアジョブの場合と同じように、実行時にジョブ履歴レコードとXMLのジョブログが生成されます。

次の表に、繰り返しジョブとしてスケジュールを設定できるジョブを示します。

表 9-15 スケジュールを設定できるユーティリティジョブ

スケジュールを設定できるユーティリティジョブ	参照先
ボルトへのメディアの移動ジョブ	p.240の「 メディアを移動するジョブのスケジュール設定 」を参照してください。
メディアのカタログ登録	p.232の「 新しいカタログの作成 」を参照してください。

スケジュールを設定できるユーティリティジョブ	参照先
データのリストア	p.234の「メディアまたはデバイスの参照によるリストアジョブの作成」を参照してください。
ロボットライブラリまたはデバイスのインベントリ	p.431の「メディアのインベントリの実行について」を参照してください。
ロボットライブラリまたはデバイス内のメディアの消去	p.433の「メディアからのデータの消去」を参照してください。
メディアのインポート	p.473の「ロボットライブラリへのメディアのインポート」を参照してください。
メディアのエクスポート	p.474の「ロボットライブラリからのメディアのエクスポート」を参照してください。
期限切れメディアのエクスポート (ロボットライブラリのみ)	p.476の「ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポート」を参照してください。
ロボットライブラリのロック	p.477の「ロボットライブラリの前面パネルのロック」を参照してください。
ロボットライブラリのロックの解除	p.478の「ロボットライブラリの前面パネルのロックの解除」を参照してください。
ドライブのクリーニング	p.455の「クリーニングスロットの定義」を参照してください。

次の表に、ただちに実行または指定した日時に 1 回だけ実行するようにスケジュールを設定したジョブなど、1 回限りのジョブとして作成されるユーティリティジョブを示します。

表 9-16 1 回だけ実行できるユーティリティジョブ

1 回だけ実行できるユーティリティジョブ	参照先
メディアのラベル付け	p.470の「メディアのラベル付け」を参照してください。
メディアのフォーマット (WORM メディアを含む)	p.469の「ドライブ内のメディアのフォーマット」を参照してください。

1回だけ実行できるユーティリティジョブ	参照先
リテンション	p.469の「テープのリテンションの実行」を参照してください。
取り出し	p.471の「ドライブからのメディアの取り出し」を参照してください。
ロボットライブラリの初期化	p.468の「ロボットライブラリを初期化するジョブの作成」を参照してください。

仮想テープライブラリとシミュレートテープライブラリのユーティリティジョブ

Backup Exec は物理ロボットライブラリとして仮想テープライブラリとシミュレートテープライブラリを扱います。ライブラリのプロパティに表示されるラベル VTL によって仮想テープライブラリを識別できます。ラベル TLS (Tape Library Simulator Utility) によってシミュレートテープライブラリを識別できます。

p.443の「デバイスの[一般]プロパティ」を参照してください。

仮想テープライブラリとシミュレートテープライブラリは物理ロボットライブラリで利用可能なユーティリティジョブすべてをサポートするわけではありません。

次の表はこれらのライブラリで利用可能であるタスクを記述したものです。

表 9-17 仮想テープライブラリとシミュレートテープライブラリのユーティリティジョブ

ユーティリティジョブ	仮想テープライブラリで利用可能	シミュレートテープライブラリで利用可能
ロック	不可	不可
ロック解除	不可	不可
エクスポート	可	不可
インポート	可	不可
メディアのラベル付け	可	不可
期限切れメディアのエクスポート	不可	不可
クリーニングスロット	不可	不可
バーコードルール	可	不可

ユーティリティジョブ	仮想テープライブラリで 利用可能	シミュレートテープライブラリで利用 可能
ドライブのクリーニング	不可	不可

ユーティリティジョブの[一般]オプション

ユーティリティジョブの[一般]オプションは、ユーティリティジョブの名前と、ユーティリティジョブのデバイスへのアクセスの優先度を提供します。

表 9-18 ユーティリティジョブの[一般]オプション

項目	説明
ジョブ名	ジョブの名前を表示します。
ジョブの優先度	このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。 p.183の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。

p.464の「[デバイスとメディアの管理に役立つユーティリティジョブの作成について](#)」を参照してください。

p.432の「[デバイス内のメディアのインベントリの実行](#)」を参照してください。

p.232の「[新しいカタログの作成](#)」を参照してください。

p.433の「[メディアからのデータの消去](#)」を参照してください。

p.469の「[テープのリテンションの実行](#)」を参照してください。

p.469の「[ドライブ内のメディアのフォーマット](#)」を参照してください。

p.470の「[メディアのラベル付け](#)」を参照してください。

p.471の「[ドライブからのメディアの取り出し](#)」を参照してください。

p.472の「[クリーニングジョブの作成](#)」を参照してください。

p.477の「[ロボットライブラリの前面パネルのロック](#)」を参照してください。

p.474の「[ロボットライブラリからのメディアのエクスポート](#)」を参照してください。

p.478の「[ロボットライブラリの前面パネルのロックの解除](#)」を参照してください。

p.468の「[ロボットライブラリを初期化するジョブの作成](#)」を参照してください。

p.476の「[ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポート](#)」を参照してください。

Backup Exec サービス起動時のロボットライブラリのインベントリの実行

Backup Exec サービスが開始される時はいつでもすべてのロボットライブラリがインベントリジョブに含まれるようにデフォルトを設定できます。メディアが頻繁にロボットライブラリの間で移動される場合、シマンテック社はこのデフォルトを有効にすることを推奨します。Backup Exec は起動に時間がかかることがあります。

Backup Exec サービス起動時にロボットライブラリのインベントリを実行する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ユーザー設定]をクリックします。
p.184 の「[デフォルトの\[ユーザー設定\]](#)」を参照してください。
- 3 [Backup Exec サービスの起動時にロボットライブラリをインベントリジョブに含める]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

ロボットライブラリを初期化するジョブの作成

ロボットライブラリを初期化するジョブを作成できます。このジョブは[ジョブモニター]で監視することができます。

また、Backup Exec サービスの起動時に初期化を有効にすることもできます。

p.454 の「[Backup Exec サービス起動時のロボットライブラリの初期化](#)」を参照してください。

ロボットライブラリを初期化するジョブを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 目的のロボットライブラリを選択します。
- 3 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[初期化]を選択します。
- 4 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467 の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 ジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 6 [今すぐ実行]をクリックします。

テープのリテンションの実行

テープドライブ内のテープを始めから終わりまで早送りして巻き取りなおし、テープがヘッドを滑らかに通過するようにするには、[リテンション]を使用します。このユーティリティの実行頻度については、使用しているテープドライブに付属のマニュアルを参照してください。

リテンション操作は主としてミニカートリッジおよび 1/4 インチカートリッジ用で、これ以外のテープドライブでサポートされることはほとんどありません。

開始したリテンション操作をキャンセルすることはできませんが、キューで待機しているリテンション操作は[キャンセル]を使用して取り消すことができます。

ジョブは、保留状態でサブミットしない限り、今すぐ実行するジョブとしてサブミットされます。リテンション操作は[ジョブモニター]で監視することができます。

テープのリテンションを実行する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 リテンションの対象となるメディアが存在しているドライブまたはスロットを選択します。
- 4 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[リテンション]を選択します。
- 5 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467 の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 7 [今すぐ実行]をクリックします。

ドライブ内のメディアのフォーマット

ドライブ内に存在するメディアのフォーマットを行うには、[フォーマット]を使用します。ただし、フォーマット操作をサポートしているデバイスはほとんどありません。フォーマット操作がサポートされていない場合は、このオプションを使用することはできません。

DC2000 テープに[フォーマット]を使用すると、フォーマット操作が完了するのに 2 時間以上かかることがあります。

注意: フォーマットを実行すると、メディアからデータが消去されます。メディア上のデータはすべて失われます。

開始したフォーマット操作をキャンセルすることはできませんが、キューで待機しているフォーマット操作は[キャンセル]を使用して取り消すことができます。

ジョブは、保留状態でサブミットしない限り、今すぐ実行するジョブとしてサブミットされます。フォーマット操作は[ジョブモニター]で監視することができます。

ドライブ内のメディアをフォーマットする方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 フォーマットの対象となるメディアが存在しているドライブまたはスロットを選択します。
- 4 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[フォーマット]を選択します。

表示されるメディアラベルは、前回のインベントリ操作で読み取られたものです。このメディアラベルは、新たにインベントリ操作を実行するまで変更されません。したがって、スロットまたはドライブ内のメディアを変更しても、インベントリを実行しなかった場合は、表示されるメディアラベルがスロットまたはドライブ内の実際のメディアと異なることがあります。
- 5 表示されているメディアをフォーマットするには、[はい]をクリックします。
- 6 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。

p.467 の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 8 [今すぐ実行]をクリックします。

メディアのラベル付け

選択したデバイス内に存在しているメディアにただちに新しいラベルを書き込むには、[メディアのラベル付け]を使用します。この操作を実行するとメディア上のデータはすべて破壊されます。上書き操作を行うまでメディア上のデータを保持したままメディアのラベルを変更するには、[名前の変更]を使用します。

メモ: バーコードラベルを使うメディアは名前を変更できません。バーコードラベルを使う一部のメディアに対してメディアのラベル付けジョブを実行すると、正常に完了したジョブがジョブログに記録されます。ただし、メディアのラベルの名前は変わりません。

開始したメディアのラベル付け操作をキャンセルすることはできませんが、キューで待機しているメディアのラベル付け操作は[キャンセル]を使用して取り消すことができます。

メディアのラベル付けを行う方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開します。
- 3 ラベルを付けるメディアが存在しているドライブまたはスロットを選択します。
- 4 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[メディアのラベル付け]を選択します。

次の警告メッセージが表示されます。

この処理は、現在有効なドライブまたはスロットにあるメディア上で実行されます。最後のインベントリ処理以後、メディアに変更があった場合には、次に表示されるカードリッジラベルが、選択されているメディアのラベルと一致しないことがあります。

- 5 [OK]をクリックします。
- 6 このメディアに付けるラベルとして使用する名前を入力します。
- 7 メディア上のすべてのデータを消去してメディアのラベル付けを行うには[OK]をクリックします。
- 8 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 9 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.669の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 10 [今すぐに実行]をクリックします。
- 11 物理メディアの外部にも同じ名前のラベルを貼り付けておきます。

ドライブからのメディアの取り出し

[取り出し]を使用して、スタンドアロンのドライブに現在挿入されているメディアを取り出します。

ソフトウェアによるメディアの取り出しをサポートしていないドライブもあります。このようなドライブでは、メディアがテープの場合は、テープの巻き戻しが完了すると手動でのテープの取り出しを求めるメッセージが表示されます。

ジョブは、保留状態でサブミットしない限り、今すぐ実行するジョブとしてサブミットされません。

ドライブからメディアを取り出す方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 サーバーアイコンを展開し、次にドライブを選択してください。
- 3 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[取り出し]を選択します。
- 4 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.669の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 6 [今すぐ実行]をクリックします。

クリーニングジョブの作成

ロボットライブラリドライブのクリーニングジョブを作成し、スケジュールできます。さらに、ドライブがクリーニングを要求するテープアラートを発行すると、Backup Exec は自動的にロボットライブラリドライブをクリーニングします。

クリーニングジョブをサブミットする前に、クリーニングテープが存在しているクリーニングスロットを定義する必要があります。

p.455の「[クリーニングスロットの定義](#)」を参照してください。

ドライブのクリーニング情報を表示できます。

p.449の「[デバイスの\[クリーニング\]プロパティ](#)」を参照してください。

クリーニングジョブを実行する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ドライブが存在するドライブまたはロボットライブラリをクリックして、ドライブを選択します。
- 3 タスクペインの[ドライブタスク]の下にある[クリーニング]を選択します。
- 4 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

- 5 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。
 p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 6 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。
 p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

ロボットライブラリへのメディアのインポートについて

メディアのインポートジョブでは、ロボットライブラリにメディアが挿入され、Backup Exec データベースが更新されます。

メディアのインポートジョブを作成する前に、次のことに注意してください。

- バーコードが貼り付けられていないメディアのインポートジョブを作成する場合は、[インポート完了後に自動インベントリを実行する]オプションを選択する必要があります。
- ロボットライブラリでメディアマガジンを使用している場合は、実行中のジョブが存在していないことと、すべてのメディアがドライブから取り出されてマガジンに戻っていることを確認してからマガジンを交換します。

任意の数のスロットを選択してインポートすることができます。

Backup Exec のメディアのインポートジョブでは、ポータルを備えたロボットライブラリが完全にサポートされます。このジョブを実行すると、選択したスロットにメディアが存在しているかどうかチェックされます。メディアが存在する場合は、そのメディアはポータルにエクスポートされます。すべてのメディアのエクスポートが終了すると、インポートするメディアのポータルへの挿入を求めるダイアログボックスが表示されます。必要なメディアをすべてロボットライブラリにインポートするまで、この処理が繰り返されます。

p.473 の「[ロボットライブラリへのメディアのインポート](#)」を参照してください。

ロボットライブラリへのメディアのインポート

ロボットライブラリにメディアを挿入するには、メディアのインポートジョブを作成して、Backup Exec データベースを更新する必要があります。

メディアのインポートジョブを作成する前に、次のことに注意してください。

- ロボットライブラリでメディアマガジンを使用している場合は、実行中のジョブが存在していないことと、すべてのメディアがドライブから取り出されてマガジンに戻っていることを確認してからマガジンを交換します。

このジョブは[ジョブモニター]で監視することができます。

ロボットライブラリにメディアをインポートする方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 目的のロボットライブラリを選択します。
- 3 [スロット]をクリックします。
- 4 結果ペインで、メディアのインポート先スロットをクリックします。
- 5 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[インポート]を選択します。
- 6 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 メディアにバーコードが貼り付けられていない場合、またはインポートジョブの完了後に実行するインベントリジョブを **Backup Exec** で自動的に作成する場合は、[設定]の下の[オプション]をクリックします。
p.474の「[インポートジョブのプロパティのオプション](#)」を参照してください。
- 8 ジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
p.651の「[アラートの通知の設定](#)」を参照してください。
- 9 次のいずれかを実行します。
 - このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

インポートジョブのプロパティのオプション

ロボットライブラリにメディアを挿入するメディアのインポートジョブを作成する場合、[インポートの完了後に自動インベントリを実行する]オプションは **Backup Exec** がインベントリジョブを作成することを可能にします。インベントリジョブはインポートジョブの完了後に自動的に実行され、メディアについての情報で **Backup Exec** データベースを更新します。
p.473の「[ロボットライブラリへのメディアのインポート](#)」を参照してください。

ロボットライブラリからのメディアのエクスポート

ロボットライブラリからメディアをエクスポートするときは、**Backup Exec** データベースを更新するジョブを作成する必要があります。

Backup Exec のメディアのエクスポートジョブでは、ポータルを備えたロボットライブラリが完全にサポートされます。ロボットライブラリの1つ以上のスロットに対してこのジョブを実

行すると、エクスポートしたメディアはポータルに配置されます。エクスポートするように選択したメディアの数がポータルの容量よりも多い場合は、まず、ポータルのスロット数と同じ数のメディアがエクスポートされ、ポータルからのメディアの取り出しを求めるメッセージが表示されます。選択したすべてのメディアがロボットライブラリからエクスポートされるまで、この処理が繰り返されます。また、ロボットライブラリから期限切れのメディアをエクスポートできます。

p.476の「[ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポート](#)」を参照してください。

エクスポートジョブが正常に完了した後でエクスポートしたメディアを移動するメディアボルトを選択することができます。

このジョブは[ジョブモニター]で監視することができます。

ロボットライブラリからメディアをエクスポートする方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 目的のロボットライブラリを選択します。
- 3 [スロット]をクリックします。
- 4 結果ペインで、メディアのエクスポート元スロットをクリックします。
- 5 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[エクスポート]を選択します。
- 6 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。

p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

- 7 エクスポートジョブが完了した後でメディアをメディアボルトに移動するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[オプション]をクリックします。

p.475の「[メディアのエクスポートジョブのプロパティのオプション](#)」を参照してください。

- 8 ジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。

p.669の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。

- 9 次のいずれかを実行します。
 - このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。

p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

メディアのエクスポートジョブのプロパティのオプション

[エクスポートに成功した場合は、メディアをこのボルトに移動]オプションを選択すると、メディアのエクスポートジョブはメディアの場所についての情報で Backup Exec データ

ベースを更新します。ボルト名で示される実際の場所に、メディアを物理的に移動する必要があります。

p.474 の「[ロボットライブラリからのメディアのエクスポート](#)」を参照してください。

p.235 の「[メディアの場所およびメディアボルト](#)」を参照してください。

ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポートについて

期限切れメディアのエクスポートジョブを使用すると、ロボットライブラリ内のメディアの処理を自動化できます。このジョブによって書き込みを行うことができないメディアが削除されます。次のバックアップ時間帯に向けた準備のため、ロボットライブラリにスクラッチメディアを追加することができます。

ロボットライブラリから期限切れのメディアをエクスポートすると、期限切れのメディアはオフラインメディアの場所に表示されます。適用可能なボルトメディアルールが設定されたメディアセットに存在するメディアの場合は、ボルトに表示されます。

期限切れメディアのエクスポートジョブでは、クリーニングメディアをエクスポートすることもできます。すべてのクリーニングメディアまたは指定した回数以上使用されたすべてのクリーニングメディアを含めることができます。

期限切れメディアのエクスポートジョブが正常に完了した後、新しいメディアのインポートを求めるメッセージが表示されるように選択することもできます。

p.476 の「[ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポート](#)」を参照してください。

ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポート

期限切れメディアのエクスポートジョブによって、書き込みを行うことができないメディアが削除されます。

期限切れメディアのエクスポートジョブは[ジョブモニター]で監視することができます。

ロボットライブラリから期限切れメディアをエクスポートする方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 目的のロボットライブラリを選択します。
- 3 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[期限切れメディアのエクスポート]をクリックします。
- 4 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。

p.467 の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

- 5 期限切れメディアのエクスポートジョブのオプションを設定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[オプション]をクリックします。

- 6 必要なオプションを選択します。
 p.477 の「[期限切れメディアのエクスポートのオプション](#)」を参照してください。
- 7 ジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
 p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 8 次のいずれかを実行します。
 - このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

期限切れメディアのエクスポートのオプション

期限切れのメディアのエクスポートジョブのオプションを使用すると、Backup Exec が書き込みを行うことができないメディアの削除によって、ロボットライブラリ内のメディアの処理を自動化できます。

p.476 の「[ロボットライブラリからの期限切れメディアのエクスポート](#)」を参照してください。

表 9-19 期限切れメディアのエクスポートのオプション

項目	説明
エクスポートにクリーニングメディアを含める	期限切れメディアのエクスポートにクリーニングメディアを含めるように指定します。
次の使用回数を超えたクリーニングメディアをエクスポート	クリーニングメディアの最大使用回数を表示し、これを超えるとこのジョブによりエクスポートします。
エクスポート後、インポートする新規メディアの確認メッセージを自動的に表示する	期限切れメディアのエクスポート処理の完了後に、新しいメディアをスロットにインポートするためのプロンプトを表示します。
エクスポートに成功した場合は、メディアをこのボルトに移動	エクスポートジョブが正常に完了した後でメディアを論理的に移動するボルトを表示します。 p.236 の「 メディアボルトの作成 」を参照してください。

ロボットライブラリの前面パネルのロック

ロボットライブラリの前面パネルをロックするジョブを作成できます。このジョブは[ジョブモニター]で監視することができます。

ロボットライブラリの前面パネルをロックする方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 目的のロボットライブラリを選択します。
- 3 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[ロック]を選択します。
- 4 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 ジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
p.669の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 6 次のいずれかを実行します。
 - このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

ロボットライブラリの前面パネルのロックの解除

ロボットライブラリの前面パネルのロックを解除するジョブを作成する必要があります。このジョブは[ジョブモニター]で監視することができます。

ロボットライブラリの前面パネルのロックを解除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 目的のロボットライブラリを選択します。
- 3 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[ロック解除]をクリックします。
- 4 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 ジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
p.669の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 6 次のいずれかを実行します。
 - このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

ディスクへのバックアップフォルダの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- ディスクへのバックアップフォルダについて
- ディスクへのバックアップフォルダの共有について
- ディスクへのバックアップフォルダのパスの変更
- ディスクへのバックアップフォルダの削除
- ディスクへのバックアップフォルダとその内容の再利用
- デバイスの状態のオンラインへの変更
- ディスクへのバックアップファイルの名前の変更
- ディスクへのバックアップファイルの削除
- 削除したディスクへのバックアップファイルの再利用
- ディスクへのバックアップファイルからのデータの消去
- **Granular Recovery Technology** を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項
- **Granular Recovery Technology** を使うバックアップジョブ用のディスク領域を再利用する方法

ディスクへのバックアップフォルダについて

ディスクへのバックアップ機能を使用すると、ハードディスク上のフォルダにデータをバックアップすることができます。まずデータをディスクにバックアップしておき、後で時間があるときにテープに転送する、という方法でバックアップを行うことも可能です。

固定ディスクを使用するデバイス上には、ディスクへのバックアップフォルダを作成します。ZIPドライブなどのリムーバブルディスクを使用するデバイス上には、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダを作成します。固定ディスクを使用するデバイス上に作成されたディスクへのバックアップフォルダでは、複数のメディアサーバーからの同時並行ジョブがサポートされます。

新しいディスクへのバックアップフォルダを作成すると、**Backup Exec** によって **Backup-to-Disk Folder x** という名前 (x は新しいディスクへのバックアップフォルダが作成されるたびに 1 が加算される数字) が自動的に割り当てられます。ディスクへのバックアップフォルダの名前は、いつでも変更することができます。ディスクへのバックアップフォルダのデフォルトを設定し、新規に作成するすべてのディスクへのバックアップフォルダに適用することもできます。**Central Admin Server Option (CASO)** または **SAN Shared Storage Option** がインストールされている場合は、コンピュータ間でディスクへのバックアップフォルダを共有することができます。

ディスクへのバックアップ時には、指定したディスクへのバックアップフォルダ内のディスクへのバックアップファイルにデータが格納されます。ディスクへのバックアップファイルとは、バックアップデータを格納する仮想メディアです。ディスクへのバックアップファイルは他の種類のメディアと同じように扱われ、インベントリ、カタログ登録、消去およびリストアを行うことができます。

Backup Exec では、ディスクへのバックアップフォルダはデバイスとして認識されるため、ナビゲーションバーの[デバイス]を選択して表示することができます。ディスクへのバックアップファイルは、[デバイス]ビューと[メディア]ビューの両方に表示されます。

Windows エクスプローラでは、ディスクへのバックアップフォルダは、フォルダの作成時に指定したパスに表示されます。ディスクへのバックアップファイルは、拡張子 **.bkf** のファイルとして表示されます。各ディスクへのバックアップフォルダには、ディスクへのバックアップファイルについての情報を記録した **changer.cfg** ファイルと **folder.cfg** ファイルも格納されます。

メモ: **changer.cfg** や **folder.cfg** ファイルを削除または編集しないように注意してください。

名前に **IMG** という接頭辞が付くサブフォルダが、ディスクへのバックアップフォルダの下に表示される場合があります。

このサブフォルダは、バックアップジョブで次の条件が満たされている場合に、**Backup Exec** によって作成されます。

- **Granular Recovery Technology (GRT)** を有効にするオプションが選択されている。

- ディスクへのバックアップフォルダがバックアップデバイスとして選択されている。

ディスクへのバックアップフォルダからのディザスタリカバリは、ディスクへのバックアップフォルダにアクセス可能なメディアサーバーを使用してリモート **Intelligent Disaster Recovery** によって行われる必要があります。

p.483 の「[ディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件](#)」を参照してください。

p.484 の「[リムーバブルディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件](#)」を参照してください。

p.436 の「[Virtual Tape Library Unlimited Drive Option について](#)」を参照してください。

ディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件

ディスクへのバックアップフォルダは、次のように、ファイルを書き込める場所ならどこにでも作成することができます。

- **NTFS** パーティション (ローカルまたはリモート)

Granular Recovery Technology (GRT) オプションが選択されたバックアップジョブでは、ディスクへのバックアップフォルダは **NTFS** パーティション上に存在する必要があります。このオプションは、**Microsoft Exchange** データベースおよびストレージグループ、**Microsoft Active Directory**、**Microsoft SharePoint** コンテンツデータベースおよびチームデータベースで利用できます。

p.498 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項](#)」を参照してください。

- **DFS** 共有
- **FAT/FAT32** パーティション (ローカルまたはリモート)
- **Veritas™ Volume Manager** パーティション
- 任意の構成の **RAID** ドライブ
- **NFS** ボリューム
- ネットワーク接続ストレージ (**NAS**) デバイス

NAS デバイスが **Windows** オペレーティングシステムのエミュレーションを行っている場合は、**NAS** デバイス上にディスクへのバックアップフォルダを作成する前に、**NAS** の製造元にお問い合わせください。シマンテック社では、**NAS** デバイスを認定していません。実際の **Windows** オペレーティングシステムではなく、独自のオペレーティングシステムを使用している場合、シマンテック社は、デバイスのトラブルシューティングを正しく行うことはできません。

ディスクへのバックアップフォルダは、バックアップ対象のディスクとは別の物理ディスク上に作成してください。たとえば、**Backup Exec** の **Advanced Open File Option (AOFO)**

を使用してバックアップ中にボリュームをスナップする場合、バックアップ先デバイスがディスクへのバックアップフォルダであるときは、そのディスクへのバックアップフォルダは、スナップするボリュームとは別のボリュームに存在する必要があります。

同様に、ディスクへのバックアップフォルダをターゲットとするバックアップジョブでは、そのジョブの選択項目に、ターゲットのディスクへのバックアップフォルダを含めないように注意します。たとえば、新しいディスクへのバックアップフォルダ **C:\Backup Folders** を作成し、バックアップ対象に **C:** ボリューム全体を選択する場合は、バックアップ選択リストから **C:\Backup Folders** を除外する必要があります。

p.484の「[リムーバブルディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件](#)」を参照してください。

p.485の「[ディスクへのバックアップウィザードを使用したディスクへのバックアップフォルダの作成](#)」を参照してください。

p.485の「[プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成](#)」を参照してください。

p.498の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項](#)」を参照してください。

リムーバブルディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件

リムーバブルディスクへのバックアップフォルダには、次の特徴があります。

- 別のメディアへのバックアップセットのスパンがサポートされます。
- 同時並行処理はサポートされません。

複数のメディアサーバー間で、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダを共有しないでください。

デバイスのドライブ名として表示され、ファイルシステムと一緒にフォーマットされていると、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダはリムーバブルディスクを使用するどのデバイス上にも作成することができます。

リムーバブルディスクを使用するデバイスには次のものが含まれます。

- CD-R/RW
- DVD-RW
- ZIP
- REV
- リムーバブルハードディスク

メモ: 新しい CD-R/RW メディアや DVD-RW メディアにディスクへのバックアップフォルダを作成する前に、Microsoft のライブファイルシステムを使用してメディアをフォーマットする必要があります。以前にライブファイルシステムを使用してフォーマットした消去済みの CD-R/RW メディアや DVD-RW メディアを使用することもできます。ライブファイルシステムについて詳しくは、Microsoft のマニュアルを参照してください。

ディスクへのバックアップウィザードを使用したディスクへのバックアップフォルダの作成

初めて Backup Exec を使用するなど、Backup Exec でのディスクへのバックアップフォルダの作成に不慣れな場合でも、ディスクへのバックアップウィザードを使用して簡単にディスクへのバックアップフォルダを作成することができます。このウィザードの画面の案内に従って作業すると、ディスクへのバックアップフォルダの作成や、既存のディスクへのバックアップフォルダの編集を行うことができます。選択が必要なオプションもいくつかありますが、デフォルトの設定が、作成するディスクへのバックアップフォルダの設定として使用されます。

ディスクへのバックアップウィザードを使用してディスクへのバックアップフォルダを作成する方法

- 1 メニューバーで、[ツール]>[ウィザード]>[ディスクへのバックアップウィザード]をクリックします。
- 2 画面の案内に従って作業を進めます。
p.483 の「[ディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件](#)」を参照してください。
p.485 の「[プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成](#)」を参照してください。

プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成

ディスクへのバックアップ機能を使うには少なくとも 1 つのディスクへのバックアップフォルダからリムーバブルディスクへのバックアップフォルダを作成する必要があります。

プロパティの設定によってディスクへのバックアップフォルダを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックします。
- 2 ディスクへのバックアップフォルダを作成するサーバーを右クリックします。

- 3 ショートカットメニューで、次のいずれかをクリックしてください:

ハードディスクドライブまたはネットワークドライブ [新規のディスクへのバックアップフォルダ]を
 イブのディスクへのバックアップフォルダを作 クリックします。
 成する場合

リムーバブルデバイスのディスクへのバックアップ [新規リムーバブルディスクへのバックアップ
 フォルダを作成する場合 フォルダ]をクリックします。

- 4 [一般]タブで、必要な情報を入力します。

p.489の「[ディスクへのバックアップフォルダの\[一般\]プロパティフォルダ](#)」を参照してください。

- 5 [詳細]タブで、必要な情報を入力します。

p.488の「[ディスクへのバックアップフォルダの\[詳細\]プロパティ](#)」を参照してください。

- 6 [OK]をクリックします。

[新規のディスクへのバックアップフォルダ]のデフォルトオプション

デフォルトオプションは、作成した新しいディスクへのバックアップフォルダに適用されま
 ず。

p.492の「[新しいディスクへのバックアップフォルダに適用されるデフォルトオプションの編
 集](#)」を参照してください。

表 10-1 [新規のディスクへのバックアップフォルダ]のデフォルトオプション

項目	説明
ディスクへのバックアップファイルに書き込み可能なバックアップセットの最大数	このフォルダ内の各バックアップファイルに書き込むバックアップセットの最大数を表示します。最大数は 1 - 8192 です。デフォルトは 100 です。 ディスクへのバックアップファイルのバックアップセットが少ない場合は上書き禁止期間がすぐに終了するため、迅速にディスク領域を再利用できます。

項目	説明
ディスクへのバックアップファイルの最大サイズ	<p>このフォルダに格納する各バックアップファイルの最大サイズを表示します。サイズの単位として MB か GB を選択できます。指定可能なファイルサイズは 1 MB から 4096 GB です。デフォルトは 4 GB です。</p> <p>ディスクへのバックアップファイルのサイズが小さい場合でも、たくさんのファイルを作成すると、パフォーマンスが低下することがあります。サイズの大きいディスクへのバックアップファイルを作成すると、特にそのディスクへのバックアップファイルがネットワークを介して格納されている場合、ファイルシステムの制限によりメモリの割り当てまたはネットワークに問題が発生する場合があります。</p> <p>このオプションは、[ディスクへのバックアップファイルに書き込み可能なバックアップセットの最大数]とともに機能します。</p>
ディスクへのバックアップファイルの作成時に最大サイズを割り当てる	<p>ディスクフラグメントを減らすために最大サイズでディスクへのバックアップファイルを作成します。</p> <p>追加期間を長くしたい場合があります。ただし、上書き禁止期間は前回の追記ジョブが終了した時点から始まるため、追記期間が長くなると、上書き禁止期間全体が長くなる可能性があります。このため、このディスクへのバックアップフォルダをターゲットとするバックアップジョブが少なくなる場合があります。この状態を回避するには、ディスクへのバックアップファイルの最大サイズを適切なサイズに設定します。</p> <p>最初にディスクへのバックアップファイルを最大サイズで作成すると、ファイルの作成中にバックアップジョブが遅れる場合があります。ディスクへのバックアップファイルが作成されて、データを書き込むことができるようになるまで、バックアップジョブは実行中の状態に留まります。</p> <p>このオプションを選択すると、Backup Exec は [ディスクへのバックアップファイルに書き込み可能なバックアップセットの最大数] を非表示にします。結果として、ディスクへのバックアップファイルに割り当てられている容量がすべて使用されるようになります。</p> <p>このオプションは、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダには利用できません。</p>
このバックアップフォルダに許可する同時並行ジョブの数 x	<p>このフォルダに許可する同時並行処理の数を表示します。指定可能な数は 1 - 16 です。</p> <p>このオプションは、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダには利用できません。</p>

項目	説明
ディスクの空き領域の低しきい値	<p>ディスクの空き容量が特定のレベルに達したときにディスクへのバックアップフォルダへのバックアップ操作を一時停止するかどうかを示します。</p> <p>ディスクの空き容量がこのしきい値に達すると、Backup Exec はディスク領域を利用できるようになるまで、現在のジョブを保留にします。ディスクの空き領域の低しきい値はディスクに空き領域がなくなるエラーを防ぎ、早期警告を提供します。このしきい値により、ジョブの完了に必要なディスク領域がないディスクへのバックアップフォルダに、ジョブがサブミットされなくなります。この場合、必要なディスク領域があるディスクへのバックアップフォルダにジョブがサブミットされます。ディスクへのバックアップの状態は、[ディスクの空き容量が少ない]と表示されます。ディスク領域を解放して、ジョブのサブミットを再開する必要があります。</p>
ディスクへのバックアップフォルダのデフォルトパス	<p>新規に作成するディスクへのバックアップフォルダ用のデフォルトパスを表示します。</p>

ディスクへのバックアップフォルダの[詳細]プロパティ

ディスクへのバックアップフォルダのための詳細プロパティはディスクの空き領域の管理とデバイスの設定についての情報を提供します。

p.485 の「[プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成](#)」を参照してください。

表 10-2 ディスクへのバックアップフォルダの[詳細]プロパティ

項目	説明
バックアップ操作が中断されるディスクの空き領域の低しきい値	<p>ディスクの空き容量が特定のレベルに達したときにディスクへのバックアップフォルダへのバックアップ操作を一時停止するかどうかを示します。</p> <p>ディスクの空き容量がこのしきい値に達すると、Backup Exec はディスク領域を利用できるようになるまで、現在のジョブを保留にします。ディスクの空き領域の低しきい値はディスクに空き領域がなくなるエラーを防ぎ、早期警告を提供します。このしきい値により、ジョブの完了に必要なディスク領域がないディスクへのバックアップフォルダに、ジョブがサブミットされなくなります。この場合、必要なディスク領域があるディスクへのバックアップフォルダにジョブがサブミットされます。ディスクへのバックアップの状態は、[ディスクの空き容量が少ない]と表示されます。ディスク領域を解放して、ジョブのサブミットを再開する必要があります。</p>

項目	説明
自動検出設定	このデバイスに適した設定を自動的に検出するかどうかを示します。
読み取りバッファを使用	次を示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ このデバイスの設定を自動的に検出しない場合 ■ 大きなデータブロックを読み取るバッファ読み取りをこのデバイスでサポートする場合 バッファ読み取りを有効にすると、パフォーマンスが向上する場合があります。
書き込みバッファを使用	次を示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ このデバイスの設定を自動的に検出しない場合 ■ 大きなデータブロックを書き込むバッファ書き込みをこのデバイスでサポートする場合

p.489 の「ディスクへのバックアップフォルダの[一般]プロパティフォルダ」を参照してください。

ディスクへのバックアップフォルダの[一般]プロパティフォルダ

ディスクへのバックアップフォルダの一般プロパティはフォルダについての情報を提供します。

p.485 の「プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成」を参照してください。

表 10-3 ディスクへのバックアップフォルダの[一般]プロパティ

項目	説明
名前	ディスクへのバックアップフォルダの名前を表示します。ディスクへのバックアップフォルダ名の最大文字数は 128 です。 p.431 の「ストレージデバイスの名前の変更」を参照してください。

項目	説明
パス	<p>ディスクへのバックアップフォルダを作成するパスを表示します。リムーバブルディスクへのバックアップフォルダについては、フォルダが存在するドライブが表示されます。</p> <p>ディスクへのバックアップのパス名の最大文字数は512で、ディスクへのバックアップフォルダ名を含みます。</p> <p>[パス]フィールドの隣の参照ボタンで他のパスを参照できます。</p> <p>p.493の「ディスクへのバックアップフォルダのパスの変更」を参照してください。</p>
一時停止	<p>ディスクへのバックアップフォルダを一時停止するかどうかを示します。</p>
有効にする	<p>Backup Exec がこのディスクへのバックアップフォルダを排他的に使用するかどうかを示します。このチェックボックスをオフにすると、このデバイスは Backup Exec で使用することができなくなります。デバイスは他のアプリケーションで使用することができます。</p>
オンライン	<p>チェックボックスがオンになっていてグレー表示されている場合は、ディスクへのバックアップフォルダがオンラインであることを示します。フォルダがオフラインなら、チェックマークは表示されません。オンラインに復帰するまで、このフォルダを使用する操作を行うことはできません。</p> <p>次の場合に、フォルダがオフラインと表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ディスクへのバックアップフォルダはリモートコンピュータにあり、接続は利用できません。 ■ フォルダまたはリモートコンピュータへのアクセス権は正しくありません。 ■ ディスクへのバックアップフォルダは書き込み禁止です。 <p>p.495の「デバイスの状態のオンラインへの変更」を参照してください。</p>

項目	説明
ディスクへのバックアップファイルの最大サイズ	<p>このフォルダに格納する各バックアップファイルの最大サイズを表示します。指定可能なファイルサイズは 1 MB から 4096 GB です。デフォルトは 4 GB です。</p> <p>以前のバージョンの Backup Exec で作成されたディスクへのバックアップフォルダでは、デフォルトのファイルサイズは引き続き 1 GB になります。</p> <p>ディスクへのバックアップファイルのサイズが小さい場合でも、たくさんのファイルを作成すると、パフォーマンスが低下することがあります。サイズの大きいディスクへのバックアップファイルを作成すると、特にそのディスクへのバックアップファイルがネットワークを介して格納されている場合、ファイルシステムの制限によりメモリの割り当てまたはネットワークに問題が発生する場合があります。</p> <p>このオプションは、[ディスクへのバックアップファイルに書き込み可能なバックアップセットの最大数]とともに機能します。</p>
ディスクへのバックアップファイルに最大サイズを割り当てる	<p>ディスクフラグメントを減らすために最大サイズでディスクへのバックアップファイルを作成します。</p> <p>追加期間を長くしたい場合があります。ただし、上書き禁止期間は前回の追記ジョブが終了した時点から始まるため、追記期間が長くなると、上書き禁止期間全体が長くなる可能性があります。このため、このディスクへのバックアップフォルダをターゲットとするバックアップジョブが少なくなる場合があります。この状態を回避するには、ディスクへのバックアップファイルの最大サイズを適切なサイズに設定します。</p> <p>最初にディスクへのバックアップファイルを最大サイズで作成すると、ファイルの作成中にバックアップジョブが遅れる場合があります。ディスクへのバックアップファイルが作成されて、データを書き込むことができるようになるまで、バックアップジョブは実行中の状態に留まります。</p> <p>このオプションを選択すると、Backup Exec は[ディスクへのバックアップファイルに書き込み可能なバックアップセットの最大数]を非表示にします。結果として、ディスクへのバックアップファイルに割り当てられている容量がすべて使用されるようになります。</p> <p>このオプションは、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダには利用できません。</p>

項目	説明
ディスクへのバックアップファイルに書き込み可能なバックアップセットの最大数	このフォルダ内の各バックアップファイルに書き込むバックアップセットの最大数を表示します。最大数は 1 - 8192 です。デフォルトは 100 です。 ディスクへのバックアップファイルのバックアップセットが少ない場合は上書き禁止期間がすぐに終了するため、迅速にディスク領域を再利用できます。
このバックアップフォルダに許可する同時並行ジョブの数 x	このフォルダに許可する同時並行処理の数を表示します。指定可能な数は 1 - 16 です。 このオプションは、リムーバブルディスクへのバックアップフォルダには利用できません。

p.492 の「新しいディスクへのバックアップフォルダに適用されるデフォルトオプションの編集」を参照してください。

p.486 の「[新規のディスクへのバックアップフォルダ]のデフォルトオプション」を参照してください。

新しいディスクへのバックアップフォルダに適用されるデフォルトオプションの編集

作成する新しいディスクへのバックアップフォルダに適用されるデフォルトオプションを編集できます。

新しいディスクへのバックアップフォルダに適用されるデフォルトオプションを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ディスクへのバックアップ]をクリックします。
- 3 必要に応じてデフォルト設定を編集します。

p.486 の「[新規のディスクへのバックアップフォルダ]のデフォルトオプション」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

ディスクへのバックアップフォルダの共有について

Central Admin Server Option (CASO) または SAN Shared Storage Option がインストールされている場合は、コンピュータ間でディスクへのバックアップフォルダを共有することができます。

メモ: リムーバブル記憶域デバイスは共有できません。

[デバイス]ビューでは、共有されているディスクへのバックアップフォルダが、そのディスクへのバックアップフォルダにアクセスできる各コンピュータの下に表示されます。ディスクへのバックアップフォルダのすべての論理グループが、[デバイスプール]の下にある [デバイス]ビューに表示されます。

ディスクへのバックアップフォルダの共有を停止するには、共有を停止するコンピュータからそのフォルダを削除します。

以前にインストールした **Backup Exec** で作成されたディスクへのバックアップフォルダは共有できず、現在の **Backup Exec** では不明として扱われます。指定のパスに不明なディスクへのバックアップフォルダが検出された場合は、そのパスに新しいディスクへのバックアップフォルダを作成する必要があります。

p.493 の「[既存のディスクへのバックアップフォルダの共有](#)」を参照してください。

既存のディスクへのバックアップフォルダの共有

Central Admin Server Option (CASO) または SAN Shared Storage Option がインストールされている場合は、コンピュータ間でディスクへのバックアップフォルダを共有することができます。

p.492 の「[ディスクへのバックアップフォルダの共有について](#)」を参照してください。

既存のディスクへのバックアップフォルダを共有する方法

- 1 共有するフォルダを追加するコンピュータ上で、ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックします。
- 2 共有するフォルダを追加したいサーバーを右クリックします。
- 3 ショートカットメニューで、[共有ディスクへのバックアップフォルダを追加] をクリックします。
- 4 このコンピュータに追加する共有ディスクへのバックアップフォルダのパスを入力するか、参照して選択します。
- 5 [OK] をクリックします。

ディスクへのバックアップフォルダのパスの変更

ディスクへのバックアップフォルダのパスを変更するには、まず、新たにディスクへのバックアップフォルダを作成し、次に、元のディスクへのバックアップフォルダから新たに作成したディスクへのバックアップフォルダにディスクへのバックアップファイルを移動する必要があります。

ディスクへのバックアップフォルダのパスを変更する方法

- 1 元のディスクへのバックアップフォルダとは異なる名前とパスを使用して、新しいディスクへのバックアップフォルダを作成します。
- 2 Windows エクスプローラの[コピー]と[貼り付け]の機能を使用し、元のディスクへのバックアップフォルダから新たに作成したディスクへのバックアップフォルダに、ディスクへのバックアップファイルをコピーします。
- 3 Backup Exec のナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 4 新しいディスクへのバックアップフォルダを右クリックしてショートカットメニューの[スキャン]をクリックするか、新しいディスクへのバックアップフォルダを選択してF5キーを押します。
- 5 新しいディスクへのバックアップフォルダをクリックし、結果ペインにディスクへのバックアップファイルが表示されることを確認します。
- 6 新しいディスクへのバックアップフォルダに元のディスクへのバックアップフォルダと同じ名前を割り当てるには、元のディスクへのバックアップフォルダを削除します。

p.496 の「[ディスクへのバックアップファイルの削除](#)」を参照してください。

- 7 新しく作成したフォルダの名前を変更します。

p.431 の「[ストレージデバイスの名前の変更](#)」を参照してください。

ディスクへのバックアップフォルダの削除

Backup Exec の[削除]機能を使用してディスクへのバックアップフォルダを削除すると、そのフォルダは Backup Exec からは削除されますが、ディスクへのバックアップフォルダとファイルはディスク上に残されるため、必要に応じて再利用することができます。ディスク上に残っているバックアップフォルダを削除する場合は、Windows の[削除]オプションを使用してください。ただし、この場合は、削除したディスクへのバックアップフォルダとファイルを元に戻すことはできません。

メモ: ディスク上に残っているバックアップフォルダを削除する場合は、Windows エクスプローラを使用して、削除するフォルダを表示し、削除します。フォルダが Windows エクスプローラを使用してディスクから削除されると、Backup Exec のフォルダかファイルを作成し直すことができません。

ディスクへのバックアップフォルダを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ディスクへのバックアップフォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 3 削除するディスクへのバックアップフォルダを選択します。

- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]を選択します。
- 5 [はい]をクリックします。

ディスクへのバックアップフォルダとその内容の再利用

Backup Exec で削除したディスクへのバックアップフォルダは、ディスク上から削除していない限り、そのフォルダとフォルダ内のファイルを再利用することができます。再利用には、元のディスクへのバックアップフォルダの名前とパスが必要です。ディスクへのバックアップフォルダをディスク上から削除した場合は、そのフォルダを再利用することはできません。

ディスクへのバックアップフォルダとその内容を再利用する方法

- 1 削除した名前とパスを使用して、Backup Exec に新しいフォルダを追加します。
- 2 プロンプトが表示されたら、[はい]をクリックして、指定したパスにフォルダを作成し直します。
- 3 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 4 ディスクへのバックアップフォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 5 新しく作成したフォルダを選択します。
- 6 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[インベントリ]を選択し、インベントリジョブを作成して実行します。

p.483 の「[ディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件](#)」を参照してください。

p.431 の「[メディアのインベントリの実行について](#)」を参照してください。

デバイスの状態のオンラインへの変更

デバイスがオフラインになった場合、問題を修正した後で状態をオンラインに変更できません。

デバイスの状態をオンラインに変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 デバイスが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 3 オフラインであるデバイスを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[オンライン]をクリックします。

p.775 の「[ハードウェアに関する問題のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

ディスクへのバックアップファイルの名前の変更

ディスクへのバックアップファイルの名前を変更すると、Backup Exec、ディスク上およびメディアラベルで名前が変わります。

ディスクへのバックアップファイルの名前を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ディスクへのバックアップフォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 3 名前を変更するファイルが存在しているフォルダを選択します。
- 4 結果ペインで、名前を変更するファイルをクリックします。
- 5 タスクペインの[一般タスク]の下にある[名前の変更]を選択します。
- 6 新しいファイル名を入力し、[OK]をクリックします。

ディスクへのバックアップファイルの削除

ディスクへのバックアップファイルを削除するには、事前にこれらのファイルを破棄メディアセットに移動しておく必要があります。Backup Exec の[メディア]タブでディスクへのバックアップファイルを削除すると、Backup Exec からは削除されますが、実際のフォルダとファイルはディスク上に残り、Windows エクスプローラに表示されます。削除したディスクへのバックアップファイルを再利用することができます。

ディスクに残っているファイルを削除する場合は、Windows エクスプローラを使用して、削除するファイルを表示し、削除します。ファイルが Windows エクスプローラを使用してディスクから削除されると、Backup Exec にそれをリストアできません。

ディスクへのバックアップファイルを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[メディア]をクリックします。
- 2 ディスクへのバックアップファイルが格納されているメディアセットをクリックします。
- 3 Windows のドラッグアンドドロップ機能を使用して、ディスクへのバックアップファイルを破棄メディアセットに移動します。
- 4 結果ペインで、削除するディスクへのバックアップファイルをクリックします。
- 5 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]を選択します。
- 6 ディスクへのバックアップファイルの削除を確認するダイアログボックスで、[はい]をクリックします。複数のディスクへのバックアップファイルを選択した場合は、[すべて]をクリックします。

削除したディスクへのバックアップファイルの再利用

Backup Exec で削除したディスクへのバックアップファイルは、Windows エクスプローラを使用してディスク上から削除していない限り、[インベントリ]を実行すると再利用することができます。

ディスクへのバックアップファイルを再利用する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ディスクへのバックアップフォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 3 削除したディスクへのバックアップファイルが格納されていたフォルダを選択します。
- 4 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[インベントリ]を選択し、インベントリジョブを作成して実行します。

p.431 の「[メディアのインベントリの実行について](#)」を参照してください。

ディスクへのバックアップファイルからのデータの消去

ディスクへのバックアップファイルからデータを消去すると、ディスクへのバックアップフォルダとディスクの両方からデータが削除され、カタログからファイル参照が削除されます。ただし、ディスクへのバックアップファイルは以降のバックアップジョブで使用できるように残されます。バックアップファイルからデータを消去した後で、そのデータをリストアに使用することはできません。Backup Exec から削除したデータを後でリストアに使用する場合は、[メディア]ビューでファイルを削除します。

p.496 の「[ディスクへのバックアップファイルの削除](#)」を参照してください。

他の種類のデバイスとは異なり、ディスクへのバックアップフォルダからファイルを消去する場合は、クイック消去と完全消去のどちらを実行するかを選択することはできません。ディスクへのバックアップフォルダ内のディスクへのバックアップファイルに対しては常にクイック消去が実行されます。

注意: 消去したデータをリストアに使用することはできません。ファイルからデータを消去する場合は、必要のないデータであることを十分に確認してください。

ディスクへのバックアップファイルからデータを消去する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ディスクへのバックアップフォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 3 [ディスクへのバックアップフォルダ]の下で、データを消去するディスクへのバックアップファイルが存在するディスクへのバックアップフォルダをクリックします。

- 4 結果ペインで、データを消去するファイルをクリックします。
- 5 タスクペインの[メディアタスク]の下にある[クイック消去]を選択します。
- 6 [OK]をクリックし、操作を続行します。
- 7 [はい]をクリックします。複数のファイルを選択した場合は[すべて]をクリックします。
- 8 ジョブ名かジョブの優先度を指定するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下で、[一般]をクリックします。
p.467 の「[ユーティリティジョブの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 9 ジョブの完了時に個人またはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.651 の「[アラートの通知の設定](#)」を参照してください。
- 10 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項

次の推奨事項は、Granular Recovery Technology (GRT) を使用するバックアップのための容量が不足しないようにするために役立ちます。

表 10-4 GRT 操作でディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項

推奨事項	説明
すべての GRT 対応バックアップジョブに対して、それぞれに専用のディスクへのバックアップフォルダを作成する	GRT 対応ジョブによって作成されるメディアは、他のディスクへのバックアップメディアとは別に管理する必要があります。これは、IMG ファイルに違いがあるためです。最良の結果を得るため、すべての GRT 対応バックアップジョブに対して、それぞれに専用のディスクへのバックアップフォルダを作成する必要があります。
GRT 対応バックアップジョブに使用する特定のディスクへのバックアップフォルダを選択する	GRT 対応ジョブを作成するときに使用する特定のディスクへのバックアップフォルダを選択する必要があります。デフォルトのデバイス設定である[すべてのデバイス]を変更しないと、誤って GRT ジョブをテープに送ってしまうことがあります。

Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項

推奨事項	説明
<p>ディスクへのバックアップファイルに最大サイズを割り当てない</p>	<p>[ディスクへのバックアップファイルの作成時に最大サイズを割り当てる]オプションを選択すると、Backup Exec は指定どおりの大きさのディスクへのバックアップファイルを作成します。GRT 情報は IMG メディアに格納されるため、ディスクへのバックアップファイルにはバックアップデータは保持されません。余分な領域をディスクへのバックアップファイルが占有するためにディスク容量不足が発生し、ジョブの失敗につながることがあります。</p> <p>p.485 の「プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成」を参照してください。</p>
<p>ディスクの空き領域の低しきい値を割り当てる前に、ディスク領域の必要条件を慎重に計算する</p>	<p>ディスクの空き領域の低しきい値は、Backup Exec がディスクへのバックアップフォルダへのバックアップ操作を一時停止するドライブの空き容量です。ディスクへのバックアップフォルダにディスクの空き領域の低しきい値を割り当てると、使用できるディスク領域をすべて使用してしまうことを防止できます。</p> <p>ディスクの空き領域の低しきい値は、慎重に使用してください。ディスクの空き領域の低しきい値として指定した容量を、Backup Exec がディスクへのバックアップフォルダのバックアップに利用することはできません。ディスクの空き領域が小さい場合に高しきい値を設定すると、すぐにディスクの空き領域が不足する可能性があります。バックアップジョブを実行する前にディスクの空き領域の低しきい値に注意してください。</p> <p>バックアップフォルダで使用できる合計容量の計算には、ディスクの空き領域の低しきい値を考慮する必要があります。ボリュームに存在するその他のデータについて考慮することも忘れてください。ボリュームに含まれる他のデータの量が増えると、ディスクへのバックアップフォルダに利用できる容量が減少します。</p> <p>p.488 の「ディスクへのバックアップフォルダの[詳細]プロパティ」を参照してください。</p>
<p>GRT 操作に使用されるディスクへのバックアップフォルダをホストするドライブをいっぱいにならない</p>	<p>ボリュームで使用できる領域の合計容量を計算するときに、ボリューム上に存在するその他のデータのサイズを検討することを忘れてください。この容量には、他のディスクへのバックアップファイルまたは他のアプリケーションからのデータが含まれる場合があります。</p> <p>ドライブがいっぱいになるか、またはディスクの空き領域の低しきい値に達した場合は、バックアップジョブを実行するためにディスク領域を再利用する必要があります。</p>

p.305 の「Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。

p.500の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブ用のディスク領域を再利用する方法](#)」を参照してください。

p.483の「[ディスクへのバックアップフォルダの作成の必要条件](#)」を参照してください。

Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブ用のディスク領域を再利用する方法

Granular Recovery Technology (GRT) を使用するジョブでバックアップセットが作成されるとき、Backup Exec は保護期間の終了した IMG メディアを消去します。Backup Exec は期限切れのメディアを自動的に消去し、バックアップジョブで作成される新しいメディア用にディスク領域を再利用します。Backup Exec は、GRT 対応ジョブのバックアップセットごとに一番古い IMG メディアを消去します。たとえば、GRT 対応バックアップジョブで3つのバックアップセットが作成されると、Backup Exec は上書き保護期間が終了した3つの IMG メディアを消去します。

バックアップセットごとに複数の IMG メディアを消去する必要がある場合は、次のシマンテック社ナレッジベースの記事を参照してください。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-8>

GRT 対応バックアップ中にディスクの空き容量が不足した場合、Backup Exec は期限切れのメディアを削除してジョブを継続します。削除できる期限切れのメディアがない場合、そのジョブはキューに追加されてディスクへのバックアップフォルダは一時停止します。ジョブを再開するには、ディスク領域を再利用するか、またはメディアが期限切れになるのを待たなければなりません。Backup Exec は自動的に利用可能な空き領域の量を定期的に調べます。十分な利用可能な空き領域があるとき、Backup Exec は自動的にジョブを再開します。

ジョブモニターには、ディスクの空き容量不足で実行できない GRT 対応バックアップジョブに関する情報が表示されます。ジョブモニターには、ジョブの状態として[キューに格納]と表示され、ジョブステータスとして[準備完了; 利用可能なアイドルデバイスが存在しません]と表示されます。Backup Exec が利用可能な空き領域があるかどうかを調べる時、ジョブの状態は[メディアをマウント中]に変化します。

次のいずれかの方法で、ディスク領域を再利用できます。

表 10-5 GRT バックアップ操作用にディスク領域を再利用する方法

機能	説明
<p>IMG メディアまたはディスクへのバックアップファイルを消去して、必要なディスク領域を確保する</p>	<p>不要になった IMG メディアまたはディスクへのバックアップファイルを削除します。</p> <p>p.497 の「ディスクへのバックアップファイルからのデータの消去」を参照してください。</p> <p>p.433 の「メディアからのデータの消去」を参照してください。</p>
<p>Windows エクスプローラを使用して、Backup Exec に関する関係のないデータを削除する</p>	<p>ボリュームには、Backup Exec とは関係のないデータが含まれる場合があります。Windows エクスプローラを使用して、このデータを削除できます。Backup Exec データは、Windows エクスプローラを使用して削除しないでください。</p>
<p>IMG メディアまたはディスクへのバックアップファイルがメディアセットのルールに従って期限切れになるのを待つ</p>	<p>メディアセットのルールには、メディアに設定する追記期間と上書き禁止期間が含まれています。これらのルールが期限切れになり、Backup Exec がディスク領域を再利用できるようになるまで待つことができます。</p> <p>p.203 の「Backup Exec のメディアについて」を参照してください。</p>
<p>現在の操作に対してディスクの空き領域の低しきい値設定を解除し、ジョブが完了した後に必要な対処を行う</p>	<p>ディスクへのバックアップフォルダにディスクの空き領域の低しきい値を設定すると、ディスクの空き容量不足によってジョブが完了しなくなる場合があります。ディスクの空き領域の低しきい値を一時的に削除して、Backup Exec が予約済み領域にアクセスできるようにすることができます。ジョブが完了したら、予約済み領域を前より小さく設定して、ディスクの空き領域の低しきい値を復活させることができます。</p> <p>p.488 の「ディスクへのバックアップフォルダの[詳細]プロパティ」を参照してください。</p>

p.430 の「[ストレージデバイスの一時停止](#)」を参照してください。

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.498 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項](#)」を参照してください。

デバイスプールの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [デバイスプールについて](#)
- [デバイスプールの作成](#)
- [\[デバイスプール\]オプション](#)
- [デバイスプールへのデバイスの追加](#)

デバイスプールについて

デバイスプールは、デバイスのグループであり、処理のために同じデバイスプールに送信された **Backup Exec** ジョブの負荷分散を行います。ジョブはプール内のデバイスに分散され、デバイス間で負荷が共有されます。

デバイスプールに対してバックアップジョブをサブミットすると、そのデバイスプール内に存在する最初に利用可能なデバイスに、ジョブが自動的に割り当てられます。新たに作成した別のジョブを、このデバイスプール内の他のデバイス上で同時に実行することができます。**Backup Exec** では、ジョブがサブミットされると動的にデバイスを割り当て、短時間で効率よくジョブを実行することができます。

デバイスは複数のデバイスプールに所属することができます。デバイスプールには、マルチデバイスロボットライブラリ内の特定のデバイスなど、異なる種類のデバイスを含めることができます。

デバイスプール内のデバイスに優先度を割り当て、デバイスの使用順序を指定することができます。複数のデバイスプールに所属しているデバイスについては、あるデバイスプール内での優先度に関係なく他のデバイスプール内での優先度を割り当てることができます。デバイスプール A とデバイスプール B の両方にデバイス 1 が所属している場合、同一のデバイス 1 に、デバイスプール A とデバイスプール B で異なる優先度を割り当てることができます。たとえば、デバイスプール A では高い優先度、デバイスプール B では低い優先度を割り当てることができます。

特定のデバイスにバックアップジョブを送信するか、デバイスプールにジョブを送信することができます。ただし、指定したデバイスが使用中の場合は、そのデバイスが使用できるようになるまでジョブの実行は延期されます。デバイスを指定した場合は、利用可能な次のデバイスにジョブが自動的に割り当てられることはありません。

デバイスプールには、ジョブのスケジュールを自動的に再設定する機能もあります。たとえば、4つのスタンダードドライブで構成されているデバイスプールの最初のデバイスでハードウェアエラーによる障害が発生した場合、障害の発生したデバイスで実行していたジョブは再度サブミットされて実行待ちとなり、他のジョブは同じデバイスプール内の正常なデバイスに対して自動的に割り当てが変更されます。

デバイスプールでは、プール内のすべてのデバイスに存在する再利用可能メディアが、古いものから順に選択されます。必要条件を満たす1つ以上のメディアが見つかった場合には、Backup Exec は、デバイス優先度に基づいてデバイスプール内のデバイスを検索し、最も優先度の高いデバイス内の最も古い再利用可能メディアを使用します。

[すべてのデバイス (Server Name)] はデフォルトのデバイスプールで、Backup Exec のインストール時に作成されます。Backup Exec の起動時に認識されたすべてのデバイスは、[すべてのデバイス (Server Name)] に自動的に割り当てられます。Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているすべてのコンピュータにあるデバイスとシミュレートテープライブラリが [すべてのデバイス (Server Name)] デバイスプールから除外されます。

メモ: Storage Provisioning Option を含んでいる Backup Exec の新規インストールの場合、デフォルトデバイスプールは [すべての仮想ディスク] デバイスプールです。

必要に応じて別のデバイスプールを作成し、デバイスを割り当てたり、割り当てたデバイスを変更することができます。たとえば、高性能デバイスを他のデバイスとは別のデバイスプールにまとめ、優先度の高いジョブをそのデバイスプールの高速ドライブで処理することによって、短時間で処理を完了させることができます。

p.1976 の「[Storage Provisioning Option の \[すべての仮想ディスク\] デバイスプールについて](#)」を参照してください。

p.1927 の「[Remote Media Agent for Linux Servers に接続されたデバイスのためのデバイスプールの作成について](#)」を参照してください。

デバイスプールの作成

デバイスプールは、スタンダードドライブ、シングルドライブロボットライブラリまたはマルチドライブロボットライブラリ内のドライブ、およびディスクへのバックアップフォルダで構成することができます。

デバイスプールを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 [デバイスプール]をクリックします。
- 3 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 4 [デバイスプール]をクリックします。
- 5 必要な情報を入力または選択し、[OK]をクリックします。

p.505 の「[デバイスプール]オプション」を参照してください。

[デバイスプール]オプション

[デバイスプール]オプションは新しいデバイスプールの作成または既存のプールへのデバイスの追加を可能にします。

p.504 の「[デバイスプールの作成](#)」を参照してください。

表 11-1 [デバイスプール]オプション

項目	説明
デバイスプール名	デバイスプールの名前を表示します。
説明	デバイスプールの説明を表示します。
デバイスの種類	新たに作成するデバイスプールで利用可能なデバイスのリストをフィルタにかけるのに使うことができるデバイスの種類のリストを表示します。選択した種類のデバイスのみが選択項目に表示されます。
デバイスの種類 2	利用可能ならデバイスのサブタイプのリストを表示します。デバイスのサブタイプは新しいデバイスプールで利用可能なデバイスのリストに対するフィルタを増加することを可能にします。選択した種類およびサブタイプのデバイスのみが選択項目に表示されます。
このデバイスプールに追加するデバイスを選択	新たに作成するデバイスプールに含めることができるデバイスを表示します。

p.503 の「[デバイスプールについて](#)」を参照してください。

デバイスプールへのデバイスの追加

既存のデバイスプールにデバイスを追加できます。

デバイスプールにデバイスを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 追加するデバイスを選択します。
- 3 タスクペインの[デバイスプールタスク]の下にある[デバイスの追加]を選択します。
- 4 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

p.505 の「[\[デバイスプール\]オプション](#)」を参照してください。

p.1976 の「[Storage Provisioning Option の\[すべての仮想ディスク\]デバイスプールについて](#)」を参照してください。

デバイスプール内のデバイスの優先度の設定

デバイスに優先度を設定し、デバイスプール内での使用順序を指定することができます。デフォルトの優先度は 10 で、最初はすべてのデバイスに同じ優先度が割り当てられています。小さな値を割り当てたデバイスから先に使用されます。たとえば、優先度が 1 のデバイスは、優先度が 5 のデバイスより先に使用されます。1 - 99 の優先度を割り当てることができます。

メモ: メディアの上書き禁止期間および追記期間は、デバイスの優先度よりも重視されません。

[優先度]オプションは、[デバイスプール]アイコンの下でプロパティを表示しているときにのみ表示されます。[スタンドアロンドライブ]アイコンまたは[ロボットライブラリ]アイコンの下に表示されるドライブは、複数のデバイスプールに属してデバイスプール間で異なる優先度が割り当てられている場合があるため、[優先度]オプションは表示されません。

デバイスプール内のデバイスに優先度を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 [デバイスプール]の下で、優先度を設定するデバイスの所属先デバイスプールを選択します。
- 3 目的のデバイスを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]を選択します。
- 5 [一般]をクリックします。
- 6 [優先度]ボックスに 1 - 99 の値を入力します。このデバイスを最初に使用する場合は 1 を指定します。次に、[OK]をクリックします。

p.442 の「[ストレージデバイスのプロパティの表示](#)」を参照してください。

デバイスプールからのデバイスの削除

デバイスプールからデバイスを削除することができます。削除したデバイスも Backup Exec のデバイスデータベースには残されているため、そのデバイスを他のデバイスプールで利用することができます。デバイスプールを削除する場合は、事前にプールからデバイスを削除する必要はありません。プールを削除すると、そのプール内のデバイスも自動的に削除されます。

デバイスプールからデバイスを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 [デバイスプール]の下で、削除するデバイスの所属先デバイスプールを選択します。
- 3 デバイスプールから削除するデバイスを選択します。複数のデバイスを選択して削除することができます。

削除するデバイスとして、[デバイスプール]アイコンの下に表示されているデバイスを選択したこと、サーバーアイコンの下に表示されているデバイスを選択していないことを確認してください。サーバーアイコンの下のデバイスを選択した場合、そのデバイスは、デバイスプールからではなくデータベースから削除されます。

- 4 タスクペインの[デバイスプールタスク]の下にある[デバイスの削除]を選択します。
- 5 メッセージが表示されたら、[はい]をクリックしてデバイスをデバイスプールから削除します。

デバイスプールの削除

デバイスプールを削除する場合は、事前にプールからデバイスを削除する必要はありません。プールを削除すると、そのプール内のデバイスも自動的に削除されます。

[すべてのデバイス]デバイスプールを削除することはできませんが、このデバイスプール内のすべてのデバイスを削除することは可能です。

削除するデバイスプールに割り当てられているスケジュール済みジョブが存在する場合は、それらのジョブの割り当てを別のデバイスプールに変更するよう求められます。

デバイスプールを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 [デバイスプール]の下で、削除するデバイスプールを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]を選択します。

- 4 メッセージが表示されたら、[はい]をクリックしてデバイスプールを削除します。
- 5 削除するデバイスプールにスケジュール済みジョブが割り当てられている場合は、ジョブの割り当て先を別のデバイスプールまたはスタンドアロンドライブに変更するよう求められます。

p.507 の「[デバイスプールからのデバイスの削除](#)」を参照してください。

p.508 の「[\[ジョブの再設定\]オプション](#)」を参照してください。

[ジョブの再設定]オプション

スケジュール済みジョブが割り当てられているデバイスプールまたはメディアセットを削除した場合は、そのジョブの割り当て先を別のデバイス、デバイスプール、または別のメディアセットに変更するよう求められます。[宛先]フィールドはスケジュール済みジョブを再割り当てできる利用可能なメディアセットかデバイスを表示します。

ジョブを再割り当てしないことを選べばジョブは失敗します。別のデバイスにジョブを後で再割り当てするには、ジョブを編集する必要があります。

デバイスプールのプロパティ

デバイスプールのプロパティは、いつデバイスプールが作成されたかと、デバイスプールの名前と説明を提供します。

p.201 の「[プロパティの表示](#)」を参照してください。

表 11-2 デバイスプールのプロパティ

項目	説明
名前	デバイスプールの名前を表示します。 p.431 の「 ストレージデバイスの名前の変更 」を参照してください。
説明	デバイスプールの説明を表示します。
作成日	このデバイスプールを作成した日時を表示します。

p.504 の「[デバイスプールの作成](#)」を参照してください。

p.505 の「[デバイスプールへのデバイスの追加](#)」を参照してください。

ポリシーおよびテンプレート

この章では以下の項目について説明しています。

- [ポリシーおよびテンプレートについて](#)
- [テンプレートルールについて](#)
- [テンプレートルールの設定](#)
- [ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)
- [バックアップセットの複製テンプレートについて](#)

ポリシーおよびテンプレートについて

ポリシーを使用すると、バックアップジョブとバックアップ戦略を管理できます。ポリシーには、ジョブテンプレートが含まれます。ジョブテンプレートとは、いつどのようにジョブを処理するかを定義したジョブ属性です。テンプレートには、デバイス、設定およびジョブのスケジュールを指定できますが、バックアップ対象の選択項目は含まれません。ジョブを作成するには、ポリシーと選択リストを組み合わせます。

ポリシーはさまざまな目的で使用できます。

たとえば、次のようなタスクを実行するためのポリシーを設定することができます。

- **メディアローテーションの設定:**ポリシーウィザードを使用してポリシーを作成する場合、[月次完全バックアップ、週次バックアップおよび日次バックアップ]オプションによって、3世代管理方式のメディアローテーションを作成できます。
- **バックアップセットの複製コピーの作成:**バックアップテンプレートとバックアップセットの複製テンプレートを含むポリシーを設定します。バックアップセットの複製テンプレートを使用すると、バックアップジョブによって作成されたバックアップセットをコピーするジョブが開始されます。
- **バックアップセットの検証:**バックアップテンプレートとバックアップセットの検証テンプレートを含むポリシーを設定します。バックアップセットの検証テンプレートを使用する

と、バックアップ完了後にバックアップデータの整合性が検証されます。バックアップ時間帯内または時間帯外の都合のよいときに実行されるように検証操作をスケジュール設定できます。

- ジョブ間の関係の設定:ポリシーに複数のテンプレートが含まれる場合、テンプレートルールを使用して、テンプレート間の関係を設定できます。たとえば、あるバックアップジョブが完了すると、自動的に別のバックアップジョブが開始されるようにテンプレートルールを設定できます。
- メディアのエクスポート:メディアのエクスポートテンプレートと少なくとも 1 つのバックアップテンプレートを含むポリシーを設定します。次に、バックアップ完了後にメディアのエクスポートジョブを実行するようにテンプレートルールを設定します。ロボットライブラリ内のスロットからのエクスポート後にメディアを移動するボルトを選択することもできます。
- 合成バックアップの作成:Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) を購入してインストールしている場合、合成バックアップの作成に必要なジョブテンプレートを含むポリシーを設定することができます。
- バックアップセットの True Image Restore の有効化:Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) を購入してインストールしている場合、バックアップセットの True Image Restore の有効化に必要なジョブテンプレートを含むポリシーを設定することができます。

選択リストとポリシーを組み合わせると、ポリシーのテンプレートごとにジョブが自動的に作成されます。たとえば、ポリシーに 3 つのテンプレートが含まれる場合、テンプレートごとに 1 つ、合計 3 つのジョブが作成されます。ポリシーは再利用でき、1 つのポリシーを作成して、そのポリシーを複数の異なる選択リストと組み合わせることができます。

p.511 の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

p.511 の「[ポリシーウィザードを使用した新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

p.513 の「[ポリシーの編集](#)」を参照してください。

p.514 の「[ポリシーの削除](#)」を参照してください。

p.885 の「[合成バックアップ機能について](#)」を参照してください。

p.898 の「[True Image Restore について](#)」を参照してください。

p.744 の「[\[ポリシージョブの概略\]レポート](#)」を参照してください。

p.722 の「[\[バックアップセットの詳細 \(リソース別\)\]レポート](#)」を参照してください。

p.745 の「[\[ポリシー保護リソース\]レポート](#)」を参照してください。

p.747 の「[\[ポリシーによるリソースバックアップの成功率\]レポート](#)」を参照してください。

新しいポリシーの作成

新しいポリシーを作成するには、ポリシーの名前と説明を入力し、ポリシーにテンプレートを追加して、必要に応じてテンプレート間の関係を設定します。ポリシーに含めるすべてのテンプレートを設定したら、ポリシーと選択リストを組み合わせることでジョブを作成します。

p.518 の「[ポリシーへのバックアップテンプレートの追加](#)」を参照してください。

p.525 の「[ポリシーへのメディアのエクスポートテンプレートの追加](#)」を参照してください。

p.538 の「[ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加](#)」を参照してください。

p.526 の「[ポリシーへのテンプレートのインポート](#)」を参照してください。

ポリシーの設定は、手動で行うか、またはポリシーウィザードを使用して行います。

p.511 の「[ポリシーウィザードを使用した新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

新しいポリシーを手動で作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ポリシータスク]の下にある[新規ポリシー]をクリックします。
- 3 必要なフィールドを設定します。

p.512 の「[ポリシーのプロパティ](#)」を参照してください。

- 4 次のいずれかを実行します。

新しいテンプレートを作成する方法 ■ [新規テンプレート]をクリックします。
■ 追加するテンプレートの種類を選択します。

既存のテンプレートをインポートする方法 ■ [テンプレートのインポート]をクリックします。
■ インポートするテンプレートを選択します。

- 5 [OK]をクリックして、選択したテンプレートの編集を開始します。

ポリシーウィザードを使用した新しいポリシーの作成

新しいポリシーを作成するには、ポリシーの名前と説明を入力し、ポリシーにテンプレートを追加して、必要に応じてテンプレート間の関係を設定します。ポリシーに含めるすべてのテンプレートを設定したら、ポリシーと選択リストを組み合わせることでジョブを作成します。

ポリシーの設定は、手動で行うか、またはポリシーウィザードを使用して行います。

p.511 の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

ポリシーウィザードを使用してポリシーを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ポリシータスク]の下にある[新規ポリシー (ウィザード使用)]をクリックします。
- 3 ウィザードの指示に従ってポリシーを作成します。

ポリシーのプロパティ

新しいポリシーを作成するとき、目的を思い出すのに役立つ名前と説明を付けるべきです。

p.511 の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

表 12-1 ポリシーのプロパティ

項目	説明
ポリシー名	ポリシーの一意の名前を指定します。バックアップの種類や、このポリシーによって保護されるリソースを表す名前を使用できます ([月次完全バックアップポリシー]、[マイドキュメント日次バックアップ]など)。ここで入力したポリシー名は、[ジョブセットアップ]ビューの[ポリシー]リストに表示されます。
ポリシーの説明	ポリシーの説明を指定します。
新規テンプレート	このポリシーのための新しいテンプレートを作成します。
テンプレートを編集	既存のポリシーテンプレートを編集します。
テンプレートの削除	既存のポリシーテンプレートを削除します。
テンプレートのインポート	このポリシーに既存のテンプレートをインポートします。
新規ルール	新しいテンプレートルールを作成します。
ルールを編集	既存のルールを編集できます。
ルールを削除	既存のルールを削除できます。

[テンプレートの選択]のオプション

新しいポリシーを追加するテンプレートを選ぶことができます。

p.517 の「[ポリシーでのテンプレートの使用について](#)」を参照してください。

表 12-2 [テンプレートの選択]のオプション

項目	説明
バックアップテンプレート	バックアップ方式のジョブテンプレートを追加します。 p.518の「ポリシーへのバックアップテンプレートの追加」 を参照してください。
バックアップセットの複製テンプレート	バックアップセットの複製コピーを作成するためのジョブテンプレートを追加します。 p.538の「ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加」 を参照してください。
バックアップセットの検証テンプレート	バックアップデータの整合性をテストする検証操作のジョブテンプレートを追加します。バックアップジョブ完了後の任意の時間に実行されるように検証操作をスケジュール設定できます。 p.522の「ポリシーへのバックアップセットの検証テンプレートの追加」 を参照してください。
メディアのエクスポートテンプレート	バックアップジョブが完了するときロボットライブラリのスロットからメディアを自動的に削除するためのジョブテンプレートを追加します。 p.525の「ポリシーへのメディアのエクスポートテンプレートの追加」 を参照してください。
合成バックアップテンプレート	ベースラインバックアップジョブと以降の増分バックアップジョブからのデータを組み合わせるためのジョブテンプレートを追加します。 p.885の「合成バックアップ機能について」 を参照してください。

ポリシーの編集

ポリシーの設定は、いつでも変更することができます。

また、ポリシーに属するテンプレートを編集できます。

[p.527の「ポリシーのテンプレートの編集」](#)を参照してください。

ポリシーを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 ポリシーをダブルクリックします。
- 3 必要に応じてポリシーを編集します。

p.512の「[ポリシーのプロパティ](#)」を参照してください。

ポリシーの削除

不要になったポリシーは削除できます。ポリシーを削除する前に、そのポリシーに関連付けられたジョブが不要であることを確認してください。ポリシーを削除するには、選択リストとポリシーの関連付けを解除しておく必要があります。選択リストとポリシーの関連付けを削除すると、ポリシーに関連付けられていた実行中のすべてのジョブは、完了後に削除されます。

ポリシーを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 削除するポリシーを選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。

ポリシーに選択リスト 次を示す順序で操作を実行します。

が関連付けられている場合の方法

- タスクペインの[ポリシータスク]の下にある[ポリシーで作成したジョブの削除]をクリックします。
- 選択リスト名の横にあるチェックボックスをオンにして、このポリシーによって作成されたすべてのジョブを削除します。
- [OK]をクリックします。
- 操作を続行するかどうかを確認するメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。
- 削除するポリシーを再度選択し、タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 続行するかどうかを確認するメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。

ポリシーに選択リスト タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
が関連付けられていない場合の方法

- 4 このポリシーを削除する旨のメッセージを確認して、[はい]をクリックします。

ポリシーのサンプルの使用

Backup Exec は次のポリシーの種類の標準設定を含んでいるポリシーのサンプルを提供します:仮想マシンのメディアローテーション、複製バックアップ、合成バックアップ、検証、および差分バックアップ。これらのサンプルをコピーして、必要に応じてカスタマイズできます。

ポリシーのサンプルを使用する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ポリシー]ペインで、使用するポリシーのサンプルを右クリックし、[コピー]をクリックします。

[合成バックアップ]は、Advanced Disk-based Backup Option を購入してインストールしている場合にのみ表示されます。

p.892 の「[サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成について](#)」を参照してください。

- 3 次のいずれかを実行します。

このメディアサーバーにポリシーのサンプルをコピーする方法
[このメディアサーバーへコピー]をクリックします。

その他のメディアサーバーにポリシーのサンプルをコピーする方法
次に示す順序で操作を実行します。

- [その他のメディアサーバーへコピー]をクリックします。
- コピー先のメディアサーバーを選択します。
- リストにメディアサーバーが表示されない場合は、[追加]をクリックし、メディアサーバー名を入力します。

- 4 既存のポリシーを同じ名前の上書きする場合は、[宛先メディアサーバーにすでに存在する同じ名前ポリシーを上書きする]チェックボックスをオンにします。

p.544 の「[ジョブ、選択リストまたはポリシーのコピー](#)」を参照してください。

[<ポリシーのサンプル>のコピー]という名前の新しいポリシーが作成され、ポリシーをコピーしたメディアサーバーの[ジョブセットアップ]ビューのポリシーのリストに表示されます。

- 5 必要に応じて、ポリシーとテンプレートをカスタマイズします。

たとえば、ポリシーに新しい名前と説明を設定したり、テンプレートの実行スケジュールを変更できます。

p.518 の「[ポリシーへのバックアップテンプレートの追加](#)」を参照してください。

- 6 カスタマイズが終了したら、[OK]をクリックします。
- 7 このポリシーと選択リストを使用して、ジョブを作成します。
 p.532 の「[ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)」を参照してください。

[ポリシーをコピー]オプション

1 つ以上のメディアサーバーにポリシーのサンプルをコピーできます。

p.515 の「[ポリシーのサンプルの使用](#)」を参照してください。

表 12-3 [ポリシーをコピー]オプション

項目	説明
このメディアサーバーへコピー	ポリシーが現在存在するメディアサーバーにポリシーのサンプルをコピーします。
その他のメディアサーバーへコピー	その他のメディアサーバーにポリシーのサンプルをコピーします。
名前	ポリシーのサンプルをコピーできる宛先メディアサーバーの名前を示します。
ログオンアカウント	各宛先メディアサーバーのログオンアカウントを示します。
追加	宛先リストに新しいメディアサーバーを追加できます。
編集	選択したメディアサーバーについての情報を編集できます。
削除	選択したメディアサーバーを宛先リストから削除します。
リストをインポート	メディアサーバーのリストをインポートします。
宛先メディアサーバーにすでに存在する同じ名前 でポリシーを上書きする	宛先メディアサーバーのポリシーの名前が、コピーするポリシーのサンプルの名前と同じである場合に、宛先メディアサーバーのポリシーを上書きしたいかどうかを示します。

ポリシーのサンプルの再作成

ポリシーのサンプルは、再作成することができます。「[ポリシーのサンプルを再作成](#)」オプションを選択したときに、デフォルトの名前が付いたポリシーのサンプルがすでに存在している場合、Backup Exec では、名前に通し番号が付加された別のポリシーのサンプル

が作成されます。たとえば、[メディアローテーション 0002]というポリシーが存在する場合、Backup Exec では、[メディアローテーション 0003]という別のポリシーのサンプルが作成されます。

ポリシーのサンプルを再作成する方法

- ◆ ツールメニューの[ポリシーのサンプルを再作成]をクリックします。

ポリシーでのテンプレートの使用について

テンプレートは、ポリシーの構成要素です。バックアップするリソースを除く、ジョブのすべての設定がテンプレートに含まれています。ポリシーは、少なくとも 1 つのテンプレートを含んでいる必要があります。Backup Exec には、次の種類のテンプレートが用意されています。

表 12-4 テンプレートの種類

テンプレートの種類	説明
バックアップ	完全バックアップ、増分バックアップ、差分バックアップなどのバックアップジョブを作成します。 p.518の「ポリシーへのバックアップテンプレートの追加」 を参照してください。
バックアップセットの複製	ステージング戦略を使用して、バックアップセットの複製コピーを作成できます。ステージング戦略を使用すると、バックアップ時間帯の範囲内または範囲外で、複数のレベルのデータ複製を実行できます。 p.536の「バックアップセットの複製テンプレートについて」 を参照してください。
バックアップセットの検証	バックアップデータの整合性をテストする検証操作を行います。バックアップジョブの完了後の任意の時間に実行されるように検証操作をスケジュール設定できます。 p.521の「バックアップセットの検証テンプレートについて」 を参照してください。

テンプレートの種類	説明
メディアのエキスポート	<p>バックアップジョブまたはバックアップセット複製ジョブの完了後に自動的に実行される、メディアのエキスポートユーティリティジョブを設定します。メディアのエキスポートジョブでは、メディアがロボットライブラリ内のスロットからポータルに移動されるか、またはスロットからのメディアの取り出しを求めるアラートが表示されます。ロボットライブラリ内のスロットからのエキスポート後にメディアを移動するボルトを選択することもできます。</p> <p>p.525の「ポリシーへのメディアのエキスポートテンプレートの追加」を参照してください。</p>
合成バックアップ	<p>Backup Exec Advanced Disk-based Backup Optionをインストールしている場合にのみ利用できます。</p> <p>p.885の「合成バックアップ機能について」を参照してください。</p>

[テンプレートのインポート]オプションを使用すると、バックアップテンプレートを別のポリシーにコピーできます。必要とするすべてまたはほとんどの設定を含むテンプレートをインポートすることによって、時間を節約できます。インポート後、テンプレートに一意の名前を指定したり、設定を変更することができます。

p.476の「[ロボットライブラリからの期限切れメディアのエキスポート](#)」を参照してください。

p.526の「[ポリシーへのテンプレートのインポート](#)」を参照してください。

ポリシーへのバックアップテンプレートの追加

作成した各ポリシーには、少なくとも1つのテンプレートを含める必要があります。テンプレートには、ジョブの実行に必要な情報が含まれています。バックアップテンプレートは、バックアップジョブと同じように作成します。使用するデバイスとメディア、ジョブの設定、およびジョブのスケジュールを選択します。ただし、テンプレートでは、バックアップするリソースは選択しません。ポリシーの作成が完了してから、バックアップするリソースを定義した選択リストにそのポリシーを組み合わせてジョブを作成します。

p.532の「[ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)」を参照してください。

ポリシーにバックアップテンプレートを追加する方法

- 1 新しいポリシーを設定します。

p.511の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

- 2 [新規ポリシー]ダイアログボックスで、[新規テンプレート]をクリックします。

- 3 [テンプレートの選択]ダイアログボックスで、[バックアップテンプレート]を選択して [OK]をクリックします。
- 4 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。 [デバイスおよびメディア]オプションを設定します。

p.324 の「[バックアップジョブおよびテンプレートの\[デバイスとメディア\]オプション](#)」を参照してください。

- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。このテンプレート用の [一般]オプションを設定します。

p.327 の「[バックアップジョブおよびテンプレートの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) をインストールしている場合に、合成バックアップまたは True Image Restore のポリシーを作成するには、[合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する]オプションを選択する必要があります。

p.893 の「[ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成](#)」を参照してください。

- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。このテンプレート用の [詳細]オプションを設定します。

p.335 の「[バックアップジョブの\[詳細\]オプション](#)」を参照してください。

- 7 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[プリ/ポストコマンド]をクリックします。 [プリ/ポストコマンド]オプションを設定します。

p.339 の「[バックアップまたはリストアジョブで使用するプリコマンドとポストコマンド](#)」を参照してください。

- 8 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。

p.391 の「[バックアップの\[ネットワークとセキュリティ\]オプション](#)」を参照してください。

Central Admin Server Option (CASO) をインストールしている場合、管理対象メディアサーバーによる Remote Agent へのアクセスで、すべてのネットワークインターフェースを使用できるようにするオプションが表示されます。

p.1498 の「[管理対象メディアサーバーでの利用可能なネットワークインターフェースカードの使用](#)」を参照してください。

- 9 必要に応じて、[プロパティ]ペインの[設定]の下から、このジョブの詳細オプションを選択します。

■ Advanced Open File Option を使用する場合は、[Advanced Open File]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.935 の「[\[Advanced Open File\]オプション](#)」を参照してください。

- オフホストバックアップを使用する場合は、[Advanced Disk-based Backup]をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.913の「[ADOB \(Advanced Disk-based Backup Option\) のためのバックアップオプション](#)」を参照してください。
- NetWare、Exchange、SQL、SharePointなどの他のプラットフォームの種類またはデータベースエージェントをバックアップする場合は、該当するプラットフォームの種類またはデータベースエージェントを選択します。これらのオプションの設定手順については、その項目に関する章を参照してください。
- バックアップジョブの完了を通知する場合は、[通知]をクリックします。
p.670の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。
- 特定のファイルまたはファイルの種類がバックアップ対象に含まれないようにする場合は、[エクスクルード]を選択します。
p.520の「[\[エクスクルード\]のオプション](#)」を参照してください。

10 テンプレートのスケジュールを設定します。

p.520の「[テンプレートの\[スケジュール\]プロパティ](#)」を参照してください。

11 [OK]をクリックします。

[エクスクルード]のオプション

ポリシーにバックアップテンプレートを追加するとき特定のファイルか特定のファイルの種類を除外できます。

p.518の「[ポリシーへのバックアップテンプレートの追加](#)」を参照してください。

表 12-5 [エクスクルード]のオプション

項目	説明
編集	ファイルとフォルダを追加または削除するために[除外]選択リストを編集できます。また、選択基準を編集することもできます。
挿入	[除外]選択リストの基準と設定を作成できます。
削除	[除外]選択リストから基準と設定を削除できます。

テンプレートの[スケジュール]プロパティ

テンプレートの[スケジュール]プロパティは、テンプレートを使用してジョブが作成される
ときジョブがいつ動作するべきであるかを決定します。

表 12-6 テンプレートの[スケジュール]プロパティ

項目	説明
このテンプレートのルールに従って今すぐ実行する	<p>テンプレートが含まれているポリシーと選択リストを組み合わせると、ジョブがただちに実行されます。テンプレートがテンプレートルールに組み込まれている場合、ジョブはテンプレートルールによっても実行されます。</p> <p>このオプションを選択してポリシーの既存のテンプレートのスケジュールを変更しても、関連付けられた既存のジョブはただちに実行されません。これによって、ポリシーが選択リストと組み合わされたときに作成されたすべてのジョブに対して、[今すぐ実行]操作が誤って実行されることを防ぐことができます。ジョブは、テンプレートのルールのみに従って実行されます。</p>
このテンプレートのルールに従ってスケジュールに基づいて実行する	<p>ジョブが定期的に行われるようにスケジュールを設定します。スケジュールを設定するには[スケジュールを設定]オプションを使います。</p> <p>p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。</p> <p>テンプレートがテンプレートルールに組み込まれている場合、ジョブはテンプレートルールによっても実行されます。</p>
このテンプレートのルールに従って実行する	<p>ジョブがテンプレートルールに基づいて実行されるように設定します。たとえば、[<テンプレート A>の完了後、<テンプレート B>を開始します。]テンプレートルールの場合、<テンプレート A>が完了してから、<テンプレート B>が実行されます。</p>
保留にする	<p>このテンプレートを使用して作成したジョブを保留状態でサブミットします。このオプションを選択すると、ジョブはサブミットされますが、保留状態を解除するまで実行されません。</p>

バックアップセットの検証テンプレートについて

検証操作では、バックアップ後にデータの整合性がテストされます。すべてのバックアップで検証を行うことをお勧めします。デフォルトでは、**Backup Exec** にはバックアップ後すぐに実行される検証操作が用意されています。[バックアップ後に検証する]オプションを使用してデフォルトの検証操作を有効または無効にできます。必要に応じてバックアップ

プセットの検証テンプレートを作成し、ソースのバックアップジョブとは関係なく検証操作をスケジュール設定して実行することができます。

バックアップセットの検証テンプレートを使用し、バックアップ時間帯外に実行されるように検証操作をスケジュール設定できます。ネットワークリソースが不十分な場合は、バックアップ時間帯外に検証操作を実行すると便利です。割り当てられた開始時間帯内にバックアップを完了することが困難な場合は、より都合のよいときに実行されるように検証操作をスケジュール設定できます。

Backup Exec の Deduplication Optionを使用する場合は、バックアップセットの検証テンプレートが特に役立ちます。デフォルトの[バックアップ後に検証する]オプションを使用する場合は、**Backup Exec** によってサーバー側とソース側の両方で検証操作を実行する必要があります。**Backup Exec** ではバックアップセットを検証するためにネットワーク経由でバックアップセットが送信されます。この処理は、検証するデータ量およびネットワーク設定によっては時間がかかる場合があります。バックアップセットの検証テンプレートを使用して操作をスケジュール設定する場合、その操作はローカルで実行され、より効率的です。

p.517 の「[ポリシーでのテンプレートの使用について](#)」を参照してください。

p.522 の「[ポリシーへのバックアップセットの検証テンプレートの追加](#)」を参照してください。

p.1526 の「[Deduplication Option について](#)」を参照してください。

ポリシーへのバックアップセットの検証テンプレートの追加

デフォルトでは、**Backup Exec** にはバックアップ後すぐに実行される検証操作が用意されています。[バックアップ後に検証する]オプションを使用してデフォルトの検証操作を有効または無効にできます。ソースのバックアップジョブとは関係なく検証操作を実行する場合は、必要に応じて、[バックアップ後に検証する]オプションを使うのではなくバックアップセットの検証テンプレートを作成することができます。

p.521 の「[バックアップセットの検証テンプレートについて](#)」を参照してください。

ポリシーにバックアップセットの検証テンプレートを追加する方法

- 1 新しいポリシーを設定します。

p.511 の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

- 2 バックアップテンプレート(検証ジョブのオブジェクトとして使用するメディア生成テンプレート)を設定します。

p.518 の「[ポリシーへのバックアップテンプレートの追加](#)」を参照してください。

- 3 [新規ポリシー]ダイアログボックスで、[新規テンプレート]をクリックします。

- 4 [テンプレートの選択]ダイアログボックスで、[バックアップセットの検証テンプレート]を選択して[OK]をクリックします。
 バックアップセットの検証テンプレートは、ポリシーにバックアップテンプレートが含まれている場合にのみ表示されます。
- 5 検証するバックアップテンプレートを選択します。
 たとえば、月次完全バックアップの完了後にデータを検証する場合は、ソースのテンプレートとして月次完全バックアップ用のテンプレートを選択します。
 p.523 の「バックアップセットの検証テンプレートのプロパティ」を参照してください。
- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。
- 7 必要なオプションを選択します。
 p.523 の「バックアップセットの検証テンプレートの[一般]プロパティ」を参照してください。
- 8 このジョブの通知を設定する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
 p.670 の「ジョブの通知オプション」を参照してください。
- 9 テンプレートのスケジュールを設定します。
 p.520 の「テンプレートの[スケジュール]プロパティ」を参照してください。
- 10 [OK]をクリックします。

バックアップセットの検証テンプレートのプロパティ

バックアップ後に検証操作を実行して、データの整合性をテストすることができます。

p.522 の「ポリシーへのバックアップセットの検証テンプレートの追加」を参照してください。

表 12-7 バックアップセットの検証テンプレートのプロパティ

項目	説明
テンプレート名	検証するメディアのソースであるジョブテンプレートの名前を示します。
ジョブの種類	テンプレートのジョブの種類を示します。

バックアップセットの検証テンプレートの[一般]プロパティ

バックアップ後に検証操作を実行して、データの整合性をテストすることができます。

p.522 の「ポリシーへのバックアップセットの検証テンプレートの追加」を参照してください。

表 12-8 バックアップセットの検証テンプレートの[一般]プロパティ

項目	説明
テンプレート名	作成する検証テンプレートの名前を示します。
このジョブにデバイスへのダイレクトアクセスを許可する	<p>検証操作の実行に使用するネットワークおよびコンピュータリソースを制御します。</p> <p>このフィールドを選択した場合、Remote Agentで検証操作が実行されます。Remote Agentがインストールされているコンピュータに重複排除のデバイスが存在する場合は、このフィールドを選択します。</p> <p>このフィールドを選択しない場合、メディアサーバーで検証操作が実行されます。重複排除のデバイスがメディアサーバーに存在する場合は、メディアサーバーで検証操作を実行する必要があります。</p>

メディアのエクスポートテンプレートについて

メディアのエクスポートテンプレートを使用して、バックアップジョブまたはバックアップセット複製ジョブの完了後に自動的に実行される、メディアのエクスポートユーティリティジョブを設定できます。ターゲットデバイスがポータルを備えたライブラリの場合、メディアのエクスポートジョブでは、メディアがスロットからポータルに移動され、ポータルからのメディアの取り出しを求めるアラートが生成されます。ロボットライブラリ内のスロットからのエクスポート後にメディアを移動するボルトを選択できます。ターゲットデバイスがポータルを備えてないライブラリの場合、メディアのエクスポートジョブでは、表示されるスロットからのメディアの取り出しを求めるアラートが生成されます。

このテンプレートは、マルチテンプレートポリシーで使用する必要があります。メディアを生成し、エクスポートジョブを開始するソーステンプレートが必要です。たとえば、月次完全バックアップの完了後にメディアをエクスポートする場合は、月次完全バックアップジョブ用のバックアップテンプレートを含むポリシーを設定し、月次完全バックアップジョブの完了後にメディアのエクスポートテンプレートが実行されるように設定します。ジョブに複数のメディアが必要な場合、メディアのエクスポートジョブは、個々のメディアの空き領域がなくなるたびに実行されるのではなく、ソースバックアップジョブの完了後に開始されません。

メディアのエクスポートテンプレートを作成すると、[<テンプレートA>の完了後、<テンプレートB>を開始してメディアをエクスポートします。]テンプレートルールがポリシーに自動的に追加されます。<テンプレートA>は、メディアのエクスポートテンプレートのソースとして選択するテンプレート(バックアップテンプレートなど)の名前に置き換えられます。<テンプレートB>は、メディアのエクスポートテンプレートに置き換えられます。

p.525の「ポリシーへのメディアのエクスポートテンプレートの追加」を参照してください。

ポリシーへのメディアのエクスポートテンプレートの追加

メディアのエクスポートテンプレートを使用して、バックアップジョブまたはバックアップセット複製ジョブの完了後に自動的に実行される、メディアのエクスポートユーティリティジョブを設定できます。

p.524 の「[メディアのエクスポートテンプレートについて](#)」を参照してください。

この手順を完了するとき、Backup Exec は[<テンプレート A> の完了後、<テンプレート B>を開始してメディアをエクスポートします。]というテンプレートルールを追加します。別のテンプレートを追加したり、ポリシーと選択リストを組み合わせることができます。

p.532 の「[ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)」を参照してください。

ポリシーにメディアのエクスポートテンプレートを追加する方法

- 1 新しいポリシーを設定します。

p.511 の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

- 2 バックアップテンプレート (エクスポートジョブのソースとして使用するメディア生成テンプレート) を設定します。

- 3 [新規ポリシー]ダイアログボックスで、[新規テンプレート]をクリックします。

- 4 [テンプレートの選択]ダイアログボックスで、[メディアのエクスポートテンプレート]を選択して[OK]をクリックします。

メディアのエクスポートテンプレートは、ポリシーにバックアップテンプレートが含まれている場合に限り表示されます。

- 5 エクスポートジョブのソースとして使用するメディア生成テンプレートを選択します。

たとえば、月次完全バックアップの完了後にメディアをエクスポートする場合は、ソースメディアセットのテンプレートとして月次完全バックアップ用のテンプレートを選択します。

- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。メディアのエクスポートテンプレートの名前を入力します。

- 7 エクスポートが正常に実行された後でメディアをメディアボルトに移動するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[オプション]をクリックし、メディアボルトを選択します。

p.239 の「[バーコードラベルのスキャンを使用したメディアの移動](#)」を参照してください。

- 8 このジョブの通知を設定する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。

p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。

メディアのエクスポートジョブは、テンプレートルールに従って実行されるため、このジョブのスケジュールオプションを設定する必要はありません。

- 9 [OK]をクリックします。

メディアのエクスポートテンプレートのプロパティ

メディアのエクスポートテンプレートを使用して、バックアップジョブまたはバックアップセット複製ジョブの後に自動的に実行される、メディアのエクスポートユーティリティジョブを設定できます。

p.525 の「[ポリシーへのメディアのエクスポートテンプレートの追加](#)」を参照してください。

表 12-9 メディアのエクスポートテンプレートのプロパティ

項目	説明
テンプレート名	エクスポートするメディアのソースであるジョブテンプレートの名前を表示します。
ジョブの種類	テンプレートのジョブの種類を表示します。

ポリシーへのテンプレートのインポート

テンプレートをインポートすると、テンプレートの作成作業が簡単になります。既存のテンプレートに再利用可能な多くの設定が含まれている場合、手動で新しいテンプレートを作成して設定をコピーする代わりに、既存のテンプレートをポリシーにインポートできます。インポートされるテンプレートに関連するテンプレートルールはインポートされません。

ポリシーにテンプレートをインポートした後、必要に応じてテンプレートの設定を変更できます。テンプレートがポリシーにコピーされます。デフォルト名は「<テンプレート名><番号>」になります。<番号> は、このテンプレートの何番目のコピーであるかを示します (2 番目、3 番目など)。

p.527 の「[ポリシーのテンプレートの編集](#)」を参照してください。

ポリシーにテンプレートをインポートする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 既存のポリシーにテンプレートをインポートする場合は、[ポリシー]セクションでポリシーをダブルクリックします。

新しいポリシーを作成して、そのポリシーに既存のテンプレートをインポートする場合は、タスクペインの[ポリシータスク]の下にある[新規ポリシー]をクリックします。ポリシー名と説明を入力します。

- 3 [テンプレートのインポート]をクリックします。
p.527 の「[\[テンプレートのインポート\]のオプション](#)」を参照してください。
- 4 インポートするテンプレートを選択します。
- 5 [OK]をクリックします。

[テンプレートのインポート]のオプション

新しいテンプレートを作成するかわりにテンプレートをポリシーにインポートできます。

p.526 の「[\[ポリシーへのテンプレートのインポート\]](#)」を参照してください。

表 12-10 [テンプレートのインポート]のオプション

項目	説明
ポリシー名	テンプレートが属する既存のポリシーを識別します。
テンプレート名	既存のテンプレートを識別します。
ジョブの種類	テンプレートが適用されるジョブの種類を指定します。

ポリシーのテンプレートの編集

テンプレートは、いつでも編集することができます。

ポリシーのテンプレートを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ポリシー]セクションで、編集するテンプレートを含むポリシーをダブルクリックします。
- 3 [ジョブテンプレート]エリアに表示されたリストから、テンプレートを選択します。
- 4 [テンプレートを編集]をクリックします。
- 5 必要に応じてテンプレートのプロパティを変更します。

ポリシーからのテンプレートの削除

ポリシーからテンプレートを削除すると、そのテンプレートは **Backup Exec** から永久に失われます。また、削除したテンプレートを含むポリシーから作成した、すべてのスケジュール済みジョブも削除されます。ポリシーから作成した実行中のすべてのジョブは、完了後に削除されます。

ポリシーからテンプレートを削除する前に、そのテンプレートに関連するジョブが不要であることを確認してください。ポリシーに含まれるテンプレートが 1 つだけである場合は、テンプレートではなくポリシーを削除します。

p.514 の「[ポリシーの削除](#)」を参照してください。

ポリシーからテンプレートを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ポリシー]セクションでポリシーをダブルクリックします。
- 3 [ジョブテンプレート]エリアに表示されたリストから、テンプレートを選択します。
- 4 [テンプレートの削除]をクリックします。
- 5 このテンプレートを削除する旨のメッセージを確認して、[はい]をクリックします。

テンプレートルールについて

テンプレートルールによって、ポリシー内のテンプレート間の関係を設定できます。たとえば、テンプレートルールを使用すると、開始時刻の競合が発生した場合に先に処理するジョブを決定したり、ジョブが開始、終了または失敗した場合に開始される別のジョブを設定することができます。

テンプレートルールを設定するには、使用するルール、およびそのルールを適用するテンプレートを選択する必要があります。ポリシーに存在するテンプレートの種類によって、表示されるルールは異なります。たとえば、ポリシーにバックアップセットの複製テンプレートが含まれる場合は、バックアップセットの複製ルールが表示されます。**Backup Exec** によってテンプレートに自動的に追加されたテンプレートルールは、削除しないでください。

p.530 の「[テンプレートルールの設定](#)」を参照してください。

利用可能なテンプレートルールは次のとおりです。

表 12-11 テンプレートルール

ルール	説明
開始時刻の競合が発生すると、<テンプレート A> により <テンプレート B> が廃棄されます。	同じポリシー内の 2 つのテンプレートの開始時刻が同じ場合、<テンプレート A> が先に実行されます。<テンプレート B> は、<テンプレート A> のジョブの完了後、<テンプレート B> に対して設定されたスケジュールに従って実行されます。たとえば、毎週土曜日の午後 5:00 に週次バックアップが、毎日午後 5:00 に日次バックアップが実行されるように設定するとします。土曜日の午後 5:00 には、週次バックアップと日次バックアップの両方が実行されるようにスケジュールが設定されていることとなります。この場合、週次バックアップを <テンプレート A>、日次バックアップを <テンプレート B> として設定すると、土曜日の午後 5:00 には、週次バックアップが実行されます。日次バックアップは土曜日には実行されませんが、スケジュールに従って、日曜日の午後 5:00 に実行されます。
開始時刻の競合が発生すると <テンプレート A> が開始され、その完了後に <テンプレート B> が開始されます。	同じポリシー内の 2 つのテンプレートの開始時刻が同じ場合、<テンプレート A> が先に開始されます。<テンプレート A> が完了すると、<テンプレート B> が自動的に開始されます。
<テンプレート A> の開始後、<テンプレート B> を開始します。	2 つのジョブを同時に実行することを許可します。
<テンプレート A> の完了後、<テンプレート B> を開始します。	選択したジョブが完了した後ジョブを自動的に開始します。2 番目のジョブは、最初のジョブが正常に完了したかどうかに関係なく開始されます。たとえば、最初のジョブが失敗しても、2 番目のジョブは実行されます。
<テンプレート A> が正常に完了した場合、<テンプレート B> を開始します。	選択したジョブが正常に完了した後ジョブを自動的に開始します。最初のジョブが失敗した場合、2 番目のジョブは開始されません。
<テンプレート A> が失敗した場合、<テンプレート B> を開始します。	選択したジョブが失敗した場合、新しいジョブを自動的に開始します。

ルール	説明
他のテンプレートを開始する前に、<テンプレート A> を少なくとも 1 回完了させる必要があります。	他の合成バックアップが始まる前にベースラインバックアップジョブが完了することを確認します。このルールは、合成バックアップテンプレートなどでベースラインバックアップが必要な場合に使用します。このルールでベースラインバックアップテンプレートを <テンプレート A> に設定すると、ベースラインバックアップが完了するまで、他の合成バックアップジョブは実行されません。
<テンプレート A> を 1 回だけ実行します。	ベースラインバックアップは、1 回だけ実行されるように設定する必要があります。このルールは、合成バックアップに適用されます。
<テンプレート A> によって作成されたすべてのバックアップセットを、<テンプレート B> を使用してスケジュールに従って複製します。	ポリシーにバックアップセットの複製テンプレートが含まれ、そのテンプレートにスケジュールが関連付けられている場合に限り表示されます。このルールは、バックアップセットの複製テンプレートに適用されます。テンプレートのスケジュールを[このテンプレートのルールに従って今すぐ実行する]または[このテンプレートのルールに従ってスケジュールに基づいて実行する]に設定している場合、このルールがポリシーに自動的に追加されます。このルールを使用すると、複製ジョブがバックアップ時間帯の範囲外に実行されるように設定できます。
<テンプレート A> の完了後、<テンプレート B> を開始してバックアップセットを複製します。	バックアップセットの複製テンプレートに適用されます。ポリシーにバックアップセットの複製テンプレートが含まれている場合に限り表示されます。バックアップセットの複製テンプレートを作成した後、テンプレートのスケジュールを[このテンプレートのルールに従って実行する]に設定すると、このルールがポリシーに自動的に追加されます。<テンプレート A> は、バックアップセットの複製テンプレートのソースとして選択したテンプレートに、<テンプレート B> は、作成した複製テンプレートに置き換えられます。多くの場合、このルールを使用すると、複製ジョブはバックアップ時間帯の範囲内に実行されます。バックアップ時間帯の範囲外に複製を実行する場合は、[<テンプレート A> によって作成されたすべてのバックアップセットを、<テンプレート B> を使用してスケジュールに従って複製します。]ルールを使用します。
<テンプレート A> の完了後、<テンプレート B> を開始してメディアをエクスポートします。	メディアのエクスポートテンプレートに適用されます。ポリシーにメディアのエクスポートテンプレートが含まれている場合に限り表示されます。メディアのエクスポートテンプレートを作成すると、このルールがポリシーに自動的に追加されます。<テンプレート A> は、メディアのエクスポートテンプレートのソースとして選択したテンプレートに、<テンプレート B> は、作成したメディアのエクスポートテンプレートに置き換えられます。

テンプレートルールの設定

ポリシー内のテンプレート間の関係が作成されるようにテンプレートルールを設定できます。

p.528 の「[テンプレートルールについて](#)」を参照してください。

テンプレートルールを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 既存のポリシーに既存のテンプレートのテンプレートルールを設定する場合は、[ポリシー]セクションでポリシーをダブルクリックします。

新しいポリシーを作成する場合は、タスクペインの[ポリシータスク]の下にある[新規ポリシー]をクリックします。ポリシー名と説明を入力します。新しいテンプレートを作成します。
- 3 [ポリシーのプロパティ]画面で、[新規ルール]をクリックします。
- 4 表示される必要なフィールドを設定します。

p.532 の「[テンプレートルールのプロパティ](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

テンプレートルールの変更

テンプレートのルールは、いつでも変更することができます。

テンプレートルールを変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ポリシー]セクションでポリシーをダブルクリックします。
- 3 [ポリシーのプロパティ]画面で、変更するルールを選択し、[ルールを編集]をクリックします。
- 4 必要に応じてテンプレートルールを変更します。

p.532 の「[テンプレートルールのプロパティ](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

テンプレートルールの削除

テンプレートに追加したテンプレートルールを削除することができます。**Backup Exec** によってテンプレートに自動的に追加されたテンプレートルールは、削除しないでください。マルチステージのバックアップテンプレートの場合、少なくとも 1 つのテンプレートルールが必要です。メディアのエクスポートテンプレートのテンプレートルールは、削除しないでください。

テンプレートルールを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ポリシー]セクションでポリシーをダブルクリックします。
- 3 [ポリシーのプロパティ]画面で、削除するルールを選択し、[ルールを削除]をクリックします。

テンプレートルールのプロパティ

ポリシー内のテンプレート間の関係が作成されるようにテンプレートルールを設定できます。

p.530 の「[テンプレートルールの設定](#)」を参照してください。

表 12-12 テンプレートルールのプロパティ

項目	説明
テンプレートルール	適用するテンプレートルールを指定します。
テンプレート A	選択したテンプレートルールの <テンプレート A> の位置に挿入するテンプレートを指定します。テンプレート A は、通常、テンプレート B のトリガーになります。たとえば、[<テンプレート A> の完了後、<テンプレート B> を開始します。]テンプレートルールの場合、テンプレート A が完了してから、テンプレート B が開始されます。
テンプレート B	選択したテンプレートルールの <テンプレート B> の位置に挿入するテンプレートを指定します。複数のテンプレートを設定する必要のないルールもあります。他のテンプレートを設定する必要のないテンプレートルールでは、このオプションからテンプレートを選択することはできません。

ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について

ポリシーを作成し、ポリシー内のテンプレートを設定したら、ポリシーと選択リストを組み合わせることでジョブを作成します。ポリシーと選択リストを組み合わせると、テンプレートの設定に基づいてジョブが作成されます。1 つのポリシーと複数の選択リストを組み合わせることも、複数のポリシーと 1 つの選択リストを組み合わせることもできます。新しいジョブを作成するには、まずポリシーを選択してからそのポリシーと組み合わせる選択リストを選択するか、または選択リストを選択してからそのリストと組み合わせるポリシーを選択します。ジョブは、テンプレートごとおよび選択リストごとに作成されます。たとえば、3 つのテンプレートを含むポリシーを 2 つの選択リストと組み合わせる場合、各選択リストに対して 3 つずつ、合計 6 つのジョブが作成されます。

バックアップ選択リストを作成する際、選択リスト内のリソースに対してバックアップの実行が可能な時間範囲を設定することができます。この時間範囲を有効時間帯と呼びます。選択リストとポリシーを組み合わせる際に、ポリシー内の各テンプレートのスケジュールと、選択リストの有効時間帯が比較されます。テンプレートのスケジュールが有効時間帯の範囲内でない場合、ポリシーのジョブは作成されません。テンプレートのスケジュールを設定する際には、そのテンプレートでバックアップするリソースの有効時間帯の範囲内にスケジュールを設定していることを確認してください。

p.533 の「[ポリシーのための新しいジョブの作成](#)」を参照してください。

p.533 の「[選択リストからの新しいジョブの作成](#)」を参照してください。

ポリシーのための新しいジョブの作成

選択リストとポリシーを組み合わせることによって新しいジョブを作成できます。

p.532 の「[ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)」を参照してください。

ポリシーから新しいジョブを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 ジョブを作成するポリシーを選択します。
- 3 タスクペインの[ポリシータスク]の下にある[新規ジョブ (ポリシー使用)]をクリックします。
- 4 ジョブを作成する選択リストを選択して、[OK]をクリックします。

選択リストからの新しいジョブの作成

選択リストとポリシーを組み合わせることによって新しいジョブを作成できます。

p.532 の「[ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)」を参照してください。

選択リストから新しいジョブを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 ジョブを作成する選択リストを選択します。
- 3 [選択リストタスク]の下にある[新規ジョブ (ポリシー使用)]をクリックします。
- 4 ジョブを作成するポリシーを選択し、[OK]をクリックします。

[新規ジョブ (ポリシー使用)]のオプション

ポリシーと選択リストを組み合わせると、テンプレートの設定に基づいてジョブが作成されます。

p.532 の「[ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)」を参照してください。

表 12-13 [新規ジョブ (ポリシー使用)]のオプション

項目	説明
選択されたポリシー	操作対象に選択したポリシーを表示します。
バックアップ	選択リストと選択したポリシーを使ってバックアップジョブを作成することを示します。
名前	選択したポリシーと組み合わせることができる選択リストの名前を表示します。

選択リストをバックアップするために指定されるポリシーの表示

選択した選択リストのバックアップに指定されているポリシーのリストを表示できます。

選択した選択リストのバックアップに指定されているポリシーのリストを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [バックアップ選択リスト]の下で、ポリシーを表示する選択リストを右クリックします。
- 3 [選択リストをバックアップするポリシーの表示]をクリックします。

ポリシーによってバックアップに指定される選択リストの表示

選択したポリシーによるバックアップに指定されている選択リストのリストを表示できます。

選択したポリシーによるバックアップに指定されている選択リストのリストを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ポリシー]の下で、バックアップに指定されている選択リストを表示するポリシーを右クリックします。
- 3 [ポリシーでバックアップする選択リストの表示]をクリックします。

次に実行予定のポリシーベースのジョブの編集

次に実行予定のポリシーベースのスケジュール済みジョブを編集することができます。編集できるのは、次のスケジュール済みジョブのみです。次のジョブが完了した後は、ポリシーで作成される元の設定でジョブが実行されます。関連付けられているポリシーを編集すると、次に実行予定のジョブに対して行った編集内容が上書きされます。

次に実行予定のポリシーベースのスケジュール済みジョブを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブをクリックします。
- 3 編集するジョブを右クリックし、[次のジョブの編集]をクリックします。

ポリシーから作成したジョブの削除

ポリシーから作成したジョブを削除するには、ポリシーと選択リストの関連付けを削除する必要があります。ポリシーから作成したすべてのスケジュール済みジョブが削除されます。ポリシーから作成した実行中のすべてのジョブは、完了後に削除されます。

ポリシーから作成したジョブを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 ジョブの作成に使用したポリシーまたは選択リストを選択します。

- 3 ポリシーを選択した場合、[ポリシータスク]の下にある[ポリシーで作成したジョブの削除]をクリックします。
 選択リストを選択した場合、[選択リストタスク]の下にある[ポリシーで作成したジョブの削除]をクリックします。
- 4 選択リスト名の横にあるチェックボックスをオンにして、[OK]をクリックします。
- 5 削除を続行するかどうかを確認するダイアログボックスで、[はい]をクリックします。

[ポリシーで作成したジョブの削除]のオプション

ポリシーを使用して作成したジョブを削除するには、選択リストとポリシーの間の関連付けを削除する必要があります。

p.534 の「[ポリシーから作成したジョブの削除](#)」を参照してください。

表 12-14 [ポリシーで作成したジョブの削除]のオプション

項目	説明
選択されたポリシー	選択したポリシーを表示します。
ジョブの削除	削除するジョブの作成元のリストか選択リストを示します。
名前	選択リストの名前を表示します。

ポリシーから作成したジョブの名前の変更

ポリシーからジョブを作成する場合、Backup Exec では、自動的にジョブに名前が付けられます。ジョブ名は、選択リスト名、ポリシー名およびテンプレート名の組み合わせになります。たとえば、ポリシーから作成したジョブは、[バックアップ選択リスト 0001 - ポリシー 001 - バックアップテンプレート 0001]というような名前になります。ポリシーから作成したジョブの名前は、意味のある名前に変更することができます。

ポリシーから作成したジョブの名前を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ジョブ]の下で、名前を変更する、ポリシーから作成したジョブを右クリックします。
- 3 [名前の変更]を選択します。
- 4 新しい名前を[名前]フィールドに入力し、[OK]をクリックします。

バックアップセットの複製テンプレートについて

バックアップセットの複製テンプレートを使用すると、マルチステージのバックアップ戦略を使用してデータをディスクにバックアップした後、そのデータをテープにコピーできます。バックアップセットの複製テンプレートは、従来の[バックアップセットを複製]オプションの代替ではありません。このテンプレートによりバックアップセットを自動的に複製できます。バックアップセットの複製テンプレートを使用すると、バックアップ時間帯の範囲内または範囲外で複数のレベルのデータ複製を実行できます。

複製バックアップは、次のような場合に有効です。

データをステージングする場合

たとえば、データをディスクにバックアップして28日間保存してから(ステージ1)、データを3か月の長期保存用に別のディスクにコピーし(ステージ2)、その後、オフサイトストレージ用にデータをテープに移動する(ステージ3)とします。この場合、ディスクにデータをバックアップして28日間保存するバックアップテンプレート、元のディスクから2番目のディスクにデータをコピーするバックアップセットの複製テンプレート、および2番目のディスクからテープにデータをコピーするもう1つのバックアップセットの複製テンプレートをポリシーに含めます。これらの各ステージには、それぞれ異なるメディアセットとデータ保存期間を定義します。

バックアップ時間帯を短縮する場合

たとえば、バックアップジョブテンプレートを含むポリシーを作成して、そのテンプレートでディスクへのバックアップオプションを使用し、バックアップ時間帯にデータがディスクにバックアップされるように設定します。そして、ディスクにバックアップされたデータをテープにコピーする複製テンプレートを作成し、バックアップ時間帯の範囲外に複製ジョブが実行されるようにスケジュールを設定します。

バックアップテープを複製してオフサイトで保管する場合

たとえば、ディスクまたはテープのいずれかにデータをバックアップするようにバックアップテンプレートを作成します。そして、複製テンプレートを作成して、最初のバックアップジョブの完了後ただちに複製ジョブが実行されるように設定するか、または指定した時間に実行されるようにスケジュールを設定します。

複製バックアップからデータをリストアする必要がある場合、ソースバックアップからも複製バックアップからもリストアを実行できます。

複製バックアップの設定には、次の方法を使用できます。

直接連結

ポリシーに、バックアップテンプレートとバックアップセットの複製テンプレートを1つずつ含める必要があります。<テンプレート A> の完了後、<テンプレート B> を開始してバックアップセットを複製します。]テンプレートルールを指定して、2つのテンプレートを直接連結します。<テンプレート A> はバックアップテンプレート、<テンプレート B> は複製テンプレートです。このテンプレートルールによって、バックアップジョブと複製ジョブが直接連結されます。

この方法で複製バックアップを設定するには、ポリシーの設定後、次の手順を実行します。

- バックアップテンプレートを追加し、定期的に行われるようにスケジュールを設定します。
- 複製テンプレートを追加し、[このテンプレートのルールに従って実行する]スケジュールオプションを設定します。

[<テンプレート A> の完了後、<テンプレート B> を開始してバックアップセットを複製します。]テンプレートルールがポリシーに自動的に追加されます。

増分複製

ポリシーに、バックアップテンプレートとバックアップセットの複製テンプレートをそれぞれ1つ以上含める必要があります。ポリシーに複数のテンプレートを含める場合は、この方法を使用して、1つのバックアップセットの複製テンプレートを複数のバックアップテンプレートまたは複製テンプレート(あるいはその両方)に関連付けることができます。この方法では、[<テンプレートA>]によって作成されたすべてのバックアップセットを、<テンプレートB>を使用してスケジュールに従って複製します。]テンプレートルールを使用します。この方法で複製バックアップを設定するには、ポリシーの設定後、次の手順を実行します。

- バックアップテンプレートを追加し、定期的に行われるようにスケジュールを設定します。
- バックアップセットの複製テンプレートを追加し、定期的に行われるようにスケジュールを設定します。
- [<テンプレートA>]によって作成されたすべてのバックアップセットを、<テンプレートB>を使用してスケジュールに従って複製します。]テンプレートルールを指定します。

p.538の「[ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加](#)」を参照してください。

ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加

マルチステージのバックアップ戦略を使用するには、バックアップセットの複製テンプレートを使用する必要があります。

p.536の「[バックアップセットの複製テンプレートについて](#)」を参照してください。

この手順を完了すると、別のテンプレートをポリシーに追加したり、ポリシーと選択リストを組み合わせることでジョブを作成することができます。

バックアップセットの複製テンプレートを追加する方法

- 1 新しいポリシーを設定します。

p.511の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

- 2 バックアップテンプレートを設定します。

p.518の「[ポリシーへのバックアップテンプレートの追加](#)」を参照してください。

- 3 [新規ポリシー]ダイアログボックスで、[新規テンプレート]をクリックします。

- 4 [テンプレートの選択]ダイアログボックスで、[バックアップセットの複製テンプレート]を選択して[OK]をクリックします。
- 5 ソーステンプレート (コピー元のバックアップデータを作成するテンプレート) を選択します。
- 6 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]を選択します。
p.324 の「バックアップジョブおよびテンプレートの[デバイスとメディア]オプション」を参照してください。
バックアップセットの複製テンプレートでは、元のバックアップセットに指定されているデバイスと同じメディアサーバーによってアクセス可能な宛先デバイスを使用する必要があります。
- 7 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]を選択します。
- 8 必要なオプションを設定します。
p.540 の「新しいバックアップセットの複製テンプレートの[一般]オプション」を参照してください。
- 9 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]を選択します。
- 10 必要なオプションを設定します。
p.540 の「新しいバックアップセットの複製テンプレートの[詳細]オプション」を参照してください。
- 11 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。
p.391 の「バックアップの[ネットワークとセキュリティ]オプション」を参照してください。
- 12 このジョブの通知を設定する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
p.670 の「ジョブの通知オプション」を参照してください。
- 13 バックアップジョブのスケジュールを設定します。
p.520 の「テンプレートの[スケジュール]プロパティ」を参照してください。
[<テンプレート A>]によって作成されたすべてのバックアップセットを、<テンプレート B>を使用してスケジュールに従って複製します。]テンプレートルールを使用する場合は、テンプレートのスケジュールを設定する必要があります。
- 14 [OK]をクリックします。

新しいバックアップセットの複製の[テンプレート]プロパティ

マルチステージのバックアップ戦略を使用するには、バックアップセットの複製テンプレートを使用する必要があります。

p.538 の「[ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加](#)」を参照してください。

表 12-15 新しいバックアップセットの複製の[テンプレート]プロパティ

項目	説明
テンプレート名	複製したいテンプレートを示します。
ジョブの種類	テンプレートが表すジョブの種類を示します。

新しいバックアップセットの複製テンプレートの[一般]オプション

マルチステージのバックアップ戦略を使用するには、バックアップセットの複製テンプレートを使用する必要があります。

p.538 の「[ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加](#)」を参照してください。

表 12-16 新しいバックアップセットの複製ジョブテンプレートの[一般]プロパティ

項目	説明
テンプレート名	このテンプレートの名前を示します。
バックアップセットの説明	バックアップセットのデータの説明を示します。
ソースデバイス	元のバックアップジョブのバックアップ先デバイスとして使用するデバイスを指定します。

新しいバックアップセットの複製テンプレートの[詳細]オプション

マルチステージのバックアップ戦略を使用するには、バックアップセットの複製テンプレートを使用する必要があります。

p.538 の「[ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加](#)」を参照してください。

表 12-17 新しいバックアップセットの複製ジョブテンプレートの [詳細] オプション

項目	説明
ジョブの完了後に検証する	バックアップ完了後に、メディアが読み取り可能であることを確認するために、自動的に検証が行うことができます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。すべてのバックアップで検証を行うことをお勧めします。
圧縮の種類	<p>次の圧縮の種類を適用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし: データを元の形式でメディアにコピーするには、このオプションを選択します。データがソフトウェア圧縮を使用してバックアップされている場合、ソフトウェア圧縮形式でコピーされます。ただし、データ圧縮を使用した方が、バックアップに必要なストレージメディアの容量を節約することができます。 ハードウェアによるデータ圧縮は、ハードウェア圧縮機能をサポートしているデバイスとハードウェア圧縮機能をサポートしていないデバイスが混在する環境では使用できません。また、ハードウェア圧縮をサポートしているドライブに障害が発生した場合は、圧縮したメディアを非圧縮ドライブでリストアすることはできません。 ■ ハードウェア (無効な場合、なし): ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮を使用するには、このオプションを選択します。ドライブがデータ圧縮機能をサポートしていない場合は、データは圧縮されずにバックアップされます。

Backup Exec の管理

この章では以下の項目について説明しています。

- Backup Exec の管理について
- ジョブ、選択リストまたはポリシーのコピー
- ジョブプロパティの編集
- [ジョブモニター]オプション
- ジョブのフィルタ処理
- カスタムフィルタの管理について
- [カレンダー]タブでのメディアサーバーのジョブワークロードの表示
- カレンダーの特定の日ジョブの表示
- [カレンダー]タブでのジョブの管理
- Symantec Endpoint Protection のセキュリティの概略の表示
- エラー処理方法について
- ジョブの停止、失敗、リカバリにしきい値を使用する方法
- リカバリされたジョブに対するしきい値の設定

Backup Exec の管理について

Backup Exec には、Backup Exec および Backup Exec で作成したジョブを管理できる機能が装備されています。

次の操作を実行することができます。

- ジョブ、選択リストおよびポリシーをローカルサーバーまたはリモートサーバーにコピーする。
p.544 の「[ジョブ、選択リストまたはポリシーのコピー](#)」を参照してください。
- ジョブを監視する。
p.547 の「[\[ジョブモニター\]オプション](#)」を参照してください。
- ジョブにフィルタをかける。
p.571 の「[ジョブのフィルタ処理](#)」を参照してください。
- Symantec Endpoint Protection のセキュリティの概略を監視する。
p.579 の「[Symantec Endpoint Protection のセキュリティの概略の表示](#)」を参照してください。
- エラー処理方法を設定する。
p.579 の「[エラー処理方法について](#)」を参照してください。
- ジョブをリカバリするためのしきい値を設定する。
p.585 の「[リカバリされたジョブに対するしきい値の設定](#)」を参照してください。

ジョブ、選択リストまたはポリシーのコピー

Backup Exec を使用して、あるメディアサーバーで作成されたすべてのジョブ (バックアップ、レポート、ユーティリティなどのジョブ)、すべての選択リストおよびすべてのポリシーを、同じメディアサーバーまたは別のメディアサーバーにコピーすることができます。

ジョブ、選択リストまたはポリシーを他のメディアサーバーにコピーするには、サーバー設定のコピー機能がインストールされている必要があります。

p.104 の「[Backup Exec の標準機能について](#)」を参照してください。

項目のコピー先メディアサーバーと、コピーする項目を選択した後操作はキューに格納されます。デフォルトのタイムアウトは 5 分です。転送が 5 分以内に完了しない場合、転送は異常終了し、アラートが生成されます。キューでは、60 秒ごとにコピージョブがチェックされ、キューで待機しているすべてのコピージョブが送信されます。

Backup Exec によって、ジョブの成功または失敗状態の他にログファイルが送信されるため、結果を確認することができます。「メディアサーバーにコピー」ジョブのジョブログは、[ジョブ履歴]に他のジョブログと一緒に表示されません。

ジョブ、選択リストおよびポリシーをコピーする方法

- 1 メディアサーバーのナビゲーションバーで、[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 コピーするジョブ、バックアップ選択リストまたはポリシーを選択します。
- 3 タスクリストの[一般タスク]の下にある[コピー]をクリックします。

- 4 ジョブ、選択リスト、またはポリシーのコピー先メディアサーバーを選択し、次に適用可能な上書きオプションを選択します。
 p.545 の「[\[メディアサーバーにコピー\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

[メディアサーバーにコピー]オプション

Backup Execを使用して、あるメディアサーバーで作成されたすべてのジョブ(バックアップ、レポート、ユーティリティなどのジョブ)、すべての選択リストおよびすべてのポリシーを、同じメディアサーバーまたは別のメディアサーバーにコピーすることができます。

p.544 の「[ジョブ、選択リストまたはポリシーのコピー](#)」を参照してください。

表 13-1 [メディアサーバーにコピー]オプション

項目	説明
このメディアサーバーへコピー	このメディアサーバーにデータをコピーすることを示します。
その他のメディアサーバーへコピー	別のメディアサーバーにデータをコピーすることを示します。[宛先メディアサーバー]フィールドで、コピー先メディアサーバーを選択する必要があります。
宛先メディアサーバー	異なるメディアサーバーにコピーする場合、コピー先のメディアサーバーを示します。メディアサーバーがリストに表示されなければ、それを追加できます。
宛先メディアサーバーにすでに存在する同じ名前でのジョブを上書きする	同じ名前の既存のジョブ、選択リスト、またはポリシーを上書きします。
このジョブで使用される、宛先サーバーにすでに存在するログオンアカウントを上書きする	同じ名前を持っている既存のジョブのログオンアカウントを上書きします。このオプションが表示されるのは、ジョブを別のメディアサーバーにコピーする場合のみです。
追加	[宛先メディアサーバー]リストにメディアサーバーを追加できます。
編集	ログオンアカウントの情報など、選択されたメディアサーバーの情報を編集できます。
削除	[宛先メディアサーバー]リストから、選択されたメディアサーバーを削除します。
リストをインポート	[宛先メディアサーバー]リストにメディアサーバーのリストをインポートできます。リストには、メディアサーバー名のみが、1行に1つずつ含まれている必要があります。

「メディアサーバーにコピー」ジョブのジョブログの表示

「メディアサーバーにコピー」ジョブは、あるメディアサーバーから別のメディアサーバーに、ジョブ、選択リスト、またはポリシーをコピーします。Backup Exec によって、ジョブの成功または失敗状態の他にログファイルが送信されるため、結果を確認することができます。「メディアサーバーにコピー」ジョブのジョブログは、[ジョブ履歴]に他のジョブログと一緒に表示されません。

「メディアサーバーにコピー」ジョブのジョブログを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]タブまたは[アラート履歴]タブをクリックします。
- 3 [ソース]列のヘッダーをクリックします。
- 4 [ソース]が[ジョブ]で、[ジョブ名]が[メディアサーバーにコピー]のアラートを探します。
- 5 そのアラートを右クリックし、[ジョブログを表示]を選択します。
- 6 「メディアサーバーにコピー」のアラートが存在しない場合は、次のいずれかの手順を実行します。

タスクペインからアラートを有効化

- タスクペインの[アラートタスク]の下にある[アラートカテゴリの設定]をクリックします。
- [ジョブ失敗]および[ジョブ成功]アラートカテゴリを有効にします。

ツールメニューからアラートを有効化

- ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ユーザー設定]をクリックします。
- [新規アラートを自動表示する]にチェックマークを付けます。

ジョブプロパティの編集

既存のジョブプロパティを編集できます。

ジョブプロパティを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ジョブ]ペインで、編集するジョブをクリックします。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。

[ジョブモニター]オプション

Backup Exec のジョブモニターでは、サブミットした実行中のジョブ、スケジュール済みジョブおよび完了ジョブについて、ジョブの監視と実行を行うことができます。

ジョブモニターには次のタブが表示されます。

表 13-2 [ジョブモニター]オプション

タブ	説明
ジョブリスト	<p>[現在のジョブ]ペインには、実行中のジョブとスケジュール済みジョブが表示されます。[ジョブ履歴]ペインには成功ジョブ、成功ジョブ (例外処理あり)、失敗ジョブおよびキャンセルジョブが表示されます。</p> <p>p.547 の「実行中のジョブのプロパティの表示」を参照してください。</p> <p>p.562 の「完了ジョブのプロパティの表示」を参照してください。</p>
カレンダー	<p>特定の日付、週または月の表示に、スケジュール済みジョブ、実行中のジョブおよび完了ジョブが表示されます。</p> <p>p.577 の「[カレンダー]タブでのメディアサーバーのジョブワークロードの表示」を参照してください。</p>
セキュリティの概略	<p>見つかったウイルスと、メディアサーバーへの潜在的な脅威およびリスクについての、Symantec Endpoint Protection による概略を表示します。</p> <p>メモ: このタブは Symantec Endpoint Protection Manager コンポーネントがインストールされている場合にのみ表示されます。</p> <p>p.579 の「Symantec Endpoint Protection のセキュリティの概略の表示」を参照してください。</p>

p.572 の「[カスタムフィルタの管理について](#)」を参照してください。

実行中のジョブのプロパティの表示

実行中のジョブのプロパティを[ジョブモニター]に表示します。

実行中のジョブのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
 - 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、表示する実行中のジョブをクリックします。
 - 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- p.548 の「[\[ジョブのアクティビティ\]オプション](#)」を参照してください。

[ジョブのアクティビティ]オプション

実行中のジョブのプロパティを[ジョブモニター]に表示します。

p.547 の「[実行中のジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 13-3 [ジョブのアクティビティ]オプション

項目	説明
ジョブ名	ジョブの設定の間に入力されたジョブ名を表示します。
ジョブの種類	処理のためにサブミットされたジョブの種類を表示します。
ジョブログ	ジョブログのファイル名を表示します。ジョブログは、ジョブが完了するまで表示することはできません。ジョブログは、Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Data に格納されています。
状態	操作の状態を表示します。 p.553 の「 実行中のジョブの状態 」を参照してください。
現在の操作	現在実行中の操作の種類 (バックアップ、カタログ、リストア、検証など) を表示します。
作成元	ジョブを作成したサーバーの種類 (集中管理サーバーまたは管理対象メディアサーバー) を表示します。 この情報は、集中管理サーバーまたは管理対象メディアサーバーが存在する場合にのみ表示されます。
サーバー名	ジョブを処理しているメディアサーバーの名前を表示します。
デバイス名	ジョブを処理しているストレージデバイスの名前を表示します。 マルチストリームジョブの場合は、最初のストリームのデータのみが表示されます。
ソース	処理されているメディアまたは共有の名前を表示します。 フィールド名の左側のアイコンフィールドには、次のいずれかが表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ディスクドライブアイコン: 実行中のジョブがバックアップジョブの場合。 ■ テープドライブアイコン: 実行中のジョブがリストアジョブまたは検証ジョブの場合。 マルチストリームジョブの場合は、最初のストリームのデータのみが表示されます。

項目	説明
宛先	<p>データが書き込まれる場所を表示します。</p> <p>フィールド名の左側のアイコンフィールドには、次のいずれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ テープデバイスアイコン: 実行中のジョブがバックアップジョブの場合。■ ディスクドライブアイコン: 実行中のジョブがリストアジョブの場合。 <p>マルチストリームジョブの場合は、最初のストリームのデータのみが表示されます。</p>
現在処理中のディレクトリ	<p>現在処理中のディレクトリ名を表示します。</p> <p>フィールドの左側のアイコンフィールドには、次のいずれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ フォルダ: 実行中のジョブがバックアップジョブまたはリストアジョブの場合。■ なし: 実行中のジョブがバックアップジョブやリストアジョブでなく、消去ジョブまたはフォーマットジョブの場合。 <p>マルチストリームジョブの場合は、最初のストリームのデータのみが表示されます。</p>
現在処理中のファイル	<p>現在処理中のファイルの名前を表示します。</p> <p>フィールド名の左側のアイコンフィールドには、次のいずれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ページ: 実行中のジョブがバックアップジョブまたはリストアジョブの場合。■ なし: 実行中のジョブがバックアップジョブやリストアジョブでなく、消去ジョブまたはフォーマットジョブの場合。 <p>マルチストリームジョブの場合は、最初のストリームのデータのみが表示されます。</p>
メディアサーバー	<p>このジョブが動作しているメディアサーバーの名前を表示します。</p> <p>Central Admin Server Option がインストールされている場合は、集中管理サーバーがこのジョブを委任した管理対象メディアサーバーが表示されます。</p> <p>p.1517 の「CASO でのジョブの管理について」を参照してください。</p>

項目	説明
委任状態	<p>集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーに委託されているジョブの現在の状態を示します。このオプションは、Central Admin Server Option がインストールされている場合のみ表示されます。</p> <p>次の状態が表示されます。<x> は、管理対象メディアサーバーの名前に置き換えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ジョブを <x> に委任する準備をしています ■ ジョブを <x> に委任しています ■ ジョブが <x> に委任されました ■ ジョブが <x> に受信されました ■ ジョブが <x> でアクティブに実行されています ■ ジョブが <x> で完了しました ■ ジョブの委任エラー...ジョブを <x> に再度サブミットしています <p>p.1517 の「CASO でのジョブの管理について」を参照してください。</p>
ディレクトリ	処理したディレクトリの数を示します。
ファイル	処理したファイルの数を示します。
スキップファイル数	操作の間にスキップされたファイルの数を示します。
破損ファイル数	操作の間に見つけられた破損ファイルの数を示します。
使用中ファイル数	操作時に使用中のファイルの数を示します。
スループット	1 分あたりに処理された MB 数を示します。
バイト数	処理したバイト数を示します。
開始時刻	操作が開始された時間を示します。
経過時間	操作を開始してから経過した時間を示します。
進捗率	<p>ジョブの完了度をパーセント値で表示します。このオプションは[バックアップジョブの完了パーセンテージと残り時間を表示する]が優先設定として選択されるときのみ表示されます。</p> <p>p.184 の「デフォルトの[ユーザー設定]」を参照してください。</p>
総バイト数 (概算)	<p>プリスキャンでバックアップジョブに対して計算された総バイト数を表示します。このオプションは[バックアップジョブの完了パーセンテージと残り時間を表示する]が優先設定として選択されるときのみ表示されます。</p> <p>p.184 の「デフォルトの[ユーザー設定]」を参照してください。</p>

項目	説明
残り時間 (概算)	ジョブが完了するまでの時間 (概算) を表示します。このオプションは [バックアップジョブの完了パーセンテージと残り時間を表示する] が優先設定として選択されるときのみ表示されます。 p.184 の「 デフォルトの [ユーザー設定] 」を参照してください。
注意	ジョブの概算を表示するオプションが選択されていないことを示します。このオプションは [バックアップジョブの完了パーセンテージと残り時間を表示する] が優先設定として選択されるときのみ表示されます。 p.184 の「 デフォルトの [ユーザー設定] 」を参照してください。

ジョブ履歴またはジョブのプロパティでのテキストの検索

ジョブ履歴またはジョブのプロパティのログで特定のテキストを検索できます。

ジョブ履歴またはジョブのプロパティでテキストを検索する方法

- 1 ナビゲーションバーの [ジョブモニター] をクリックします。
- 2 [ジョブリスト] タブの [現在のジョブ] ペインで、表示する実行中のジョブをクリックします。
- 3 タスクペインの [一般タスク] の下にある [プロパティ] をクリックします。
p.548 の「[\[ジョブのアクティビティ\] オプション](#)」を参照してください。
- 4 [検索] をクリックします。
- 5 検索するテキストを入力します。
p.551 の「[\[検索\] オプション](#)」を参照してください。
- 6 次のテキストを検索するには [次へ] をクリックします。

[検索] オプション

ジョブ履歴またはジョブのプロパティのログで特定のテキストを検索できます。

p.551 の「[ジョブ履歴またはジョブのプロパティでのテキストの検索](#)」を参照してください。

表 13-4 [検索] オプション

項目	説明
検索	検索するテキストを示します。

項目	説明
単語単位で検索する	入力した単語全体を検索することを示します。このオプションを選択しなければ、Backup Exec は単語の部分を含んでいるテキストを検索しません。たとえば、単語「file」を検索してこのオプションを選択しなければ、Backup Exec は「file」、「files」、「filed」と、「file」を含んでいる単語のすべてを検索します。このオプションを選択する場合は、Backup Exec は「file」のみ検索します。
大文字と小文字を区別する	入力した単語に対して厳密な大文字の使い分けを使用することを示します。たとえば、単語「File」を検索してこのオプションを選択すれば、Backup Exec は「File」をすべて検索しますが、「file」は検索しません。

実行中のジョブのキャンセル

進行中のジョブをキャンセルできます。スケジュール済みジョブの場合は、スケジュールが設定されている次の時刻に実行されます。

ジョブのキャンセルには数分かかる場合があります。Backup Exec でジョブをキャンセル中の場合は、状態の列に[キャンセルの保留]と表示されます。

実行中のジョブをキャンセルする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、キャンセルする実行中のジョブをクリックします。
- 3 タスクペインの[実行中のジョブタスク]の下にある[キャンセル]をクリックします。
[ジョブモニター]の[ジョブリスト]ビューで複数のジョブを選択するには、ジョブを選択してから <Ctrl> または <Shift> キーを押しながら他のジョブをクリックします。同じ種類のジョブであれば、この方法を使用して一度に複数のジョブに対し、「キャンセル」などのタスクを実行することができます。
- 4 ジョブのキャンセルを確認します。

実行中のジョブのすべてのスケジュールの保留

実行中のジョブの再実行がスケジュールされている場合、スケジュール済みのジョブを保留にすることができます。実行中のジョブのスケジュールを保留にしても、実行中のジョブの現在の処理は継続されます。

p.555 の「[スケジュール済みジョブの状態](#)」を参照してください。

特定の実行中のジョブのスケジュールをすべて保留にする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、スケジュールをすべて保留にする実行中のジョブをクリックします。

[現在のジョブ]ペインで複数のジョブを選択するには、ジョブを選択してから<Ctrl>または<Shift>キーを押しながら他のジョブをクリックします。ジョブの状態が同じであれば、この方法を使用して一度に複数のジョブに対し、「スケジュールを保留」を実行することができます。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[スケジュールを保留]をクリックします。

スケジュール済みジョブの保留の解除

スケジュール済みジョブの保留をいつでも解除できます。

スケジュール済みジョブの保留を解除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、保留から解除するジョブをクリックします。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[スケジュールを保留]をクリックしてチェックマークをはずします。

実行中のジョブの状態

実行中のジョブの状態は、次のいずれかです。

表 13-5 実行中のジョブの状態

項目	説明
実行中	ジョブはすでに開始されています。
キューに格納	ジョブは開始されていますが、適切なドライブやメディアの検索中であることを示しています。
キャンセルの保留	Backup Exec では、キャンセル要求をただちに処理することができません。この状態は、ジョブが実際にキャンセルされるまで表示されます。実際にキャンセルされたジョブのジョブ履歴には、状態として[キャンセル]が表示されます。
メディアをロード中	ターゲットデバイス上へのメディアのロードと所定の位置への配置中であることを示しています。

項目	説明
前処理中	<p>次のいずれかまたはすべての状態であることを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [ユーザー設定]で[バックアップジョブの完了パーセンテージと残り時間を表示する]オプションが選択されている場合、Backup Exec はバックアップするデータ量を計算中です。 p.184の「[ユーザー設定]のデフォルトの設定」を参照してください。 ■ プリコマンドまたはポストコマンドの完了待ちです。 ■ セットマップの取得中で、ジョブを追記するテープの追記ポイントの場所を配置中です。
スナップショット処理	スナップショット操作を処理中です。
デバイス一時停止	<p>ターゲットデバイスが一時停止しています。</p> <p>p.430の「ストレージデバイスの一時停止」を参照してください。</p>
サーバー一時停止	<p>メディアサーバーが停止しています。</p> <p>p.430の「メディアサーバーの一時停止」を参照してください。</p>
通信中断	<p>Backup Exec サービスからの応答がなくなりました。</p> <p>p.585の「リカバリされたジョブに対するしきい値の設定」を参照してください。</p>
メディア要求	ジョブを続行するには、メディアを挿入する必要があります。
通信中断	<p>管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間の通信が、設定された時間のしきい値内に発生しませんでした。</p> <p>p.1492の「CASO用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。</p>
通信途絶	<p>管理対象メディアサーバーからのジョブに関する通信が、集中管理サーバーで受信されていません。設定された時間のしきい値に達しています。</p> <p>p.1492の「CASO用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。</p>
一貫性チェック	バックアップ前にデータベースの一貫性チェックを実行中です。
カタログの更新中	カタログ情報を更新中です。

項目	説明
スケジュール、CPS バックアップジョブが実行中	Exchange ログが Continuous Protection Server (CPS) によって継続的にバックアップされています。この状態は、Exchange バックアップジョブのプロパティで [Backup Exec Continuous Protection Server を使用して継続的にトランザクションログをバックアップする] オプションにチェックマークを付けている場合に表示されます。 p.1098 の「Exchange データの継続バックアップについて」を参照してください。

p.555 の「スケジュール済みジョブの状態」を参照してください。

p.567 の「完了ジョブの状態」を参照してください。

スケジュール済みジョブの状態

スケジュール済みジョブの状態を次の表に示します。

表 13-6 スケジュール済みジョブの状態

スケジュール済みジョブの状態	説明
テンプレートルールで禁止されています	スケジュール済みジョブは、次のテンプレートルールが設定されているジョブテンプレートを含むポリシーによって作成されたため、実行することができません。 他のテンプレートを開始する前に、<テンプレート A> を少なくとも 1 回完了させる必要があります。 このスケジュール済みジョブを実行する前に、ポリシーで <テンプレート A> に指定されているジョブを実行する必要があります。 p.530 の「テンプレートルールの設定」を参照してください。
スケジュールが無効	次のいずれかに該当する場合、スケジュール済みジョブは実行されません。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 関連付けられたレコードがデータベース内に存在しない。 ■ このジョブによってバックアップされる選択リストのスケジュールと有効時間帯が一致していない。 <p>p.291 の「選択リストの優先度と有効時間帯の設定」を参照してください。</p>

スケジュール済みジョブの状態	説明
開始時間帯にない	<p>ジョブを処理するための送信準備は完了していますが、このジョブの開始時間帯が終了しています。これは、ジョブの開始時間帯と選択リストの有効時間帯の共通の時間帯に、適切な宛先デバイスが使用できなかったことが原因と考えられます。</p> <p>p.291 の「選択リストの優先度と有効時間帯の設定」を参照してください。</p>
保留	<p>ジョブは保留されています。</p>
キューに格納	<p>Backup Exec は、ジョブの再試行のためのエラー処理方法を適用しています。これは一時的な状態です。</p> <p>p.583 の「カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」」を参照してください。</p>

スケジュール済みジョブの状態	説明
準備完了	<p>ジョブの実行準備は完了していますが、次のいずれかの理由で実行できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 内部エラー:利用可能なデバイスがありませんが、原因は不明です。 ■ ジョブが無効です:ジョブの種類が不明です。内部エラーが発生しているか、またはデータベースが破損している可能性があります。 ■ ターゲットが無効です:このデバイスの種類は存在しません。 ■ メディアサーバーを利用できません ■ オプション名のライセンスがありません:ライセンスを購入して、ターゲットメディアサーバーにインストールする必要があります。 ■ 利用可能なメディアサーバーが存在しません ■ メディアサーバープール内に利用可能なメディアサーバーが存在しません ■ 指定した宛先デバイスプールは空です ■ 指定した宛先デバイスはメディアサーバープール内に存在しません ■ 指定した宛先デバイスはローカルメディアサーバー上に存在しません ■ ローカルメディアサーバー上の指定した宛先デバイスプールは空です ■ デバイスプールは宛先デバイスとして指定できません ■ メディアサーバーは宛先デバイスとして指定できません ■ システムで別のジョブが実行されているため、このジョブを実行できません。このジョブは、別のジョブの完了後に実行されます。 ■ 入力が無効です ■ 互換性のない再開 ■ サーバーライセンスがありません ■ 複数サーバーのライセンスがありません ■ Windows のライセンスがありません ■ Windows サーバーが存在しません ■ NetWare サーバーが存在しません ■ ローカルメディアサーバーが必要です ■ ローカルサーバーはメディアサーバーではありません ■ 利用可能なアイドルデバイスが存在しません ■ デバイスプール内に利用可能なデバイスが存在しません。 ■ 実行中の、リンクされたバックアップセット複製ジョブにブロックされました

スケジュール済みジョブの状態	説明
スケジュール済み	このジョブの実行はスケジュール済みです。別のジョブにリンクされているスケジュール済みジョブ (バックアップセットの複製ジョブなど) の場合、この状態は表示されません。
サーバー一時停止	ジョブの準備は完了していますが、Backup Exec メディアサーバーが停止しています。メディアサーバーが停止している間、ジョブは送信されません。 p.430の「メディアサーバーの一時停止」 を参照してください。
ジョブ x により廃棄	スケジュール済みジョブは、次のテンプレートルールが設定されているジョブテンプレートを含むポリシーによって作成されたため、実行することができません。 開始時刻の競合が発生すると、<テンプレート A> により <テンプレート B> が廃棄されます。 <テンプレート B> のジョブは、<テンプレート A> のジョブが完了した後、設定されたスケジュールに従って動作します。 p.530の「テンプレートルールの設定」 を参照してください。
スケジュール未設定	スケジュール済みジョブが処理のために送信される間の移行状態です。

[p.553の「実行中のジョブの状態」](#)を参照してください。

[p.567の「完了ジョブの状態」](#)を参照してください。

スケジュール済みジョブの即実行

スケジュール済みジョブをただちに実行できます。このジョブは次の予定日時にも実行されます。

スケジュール済みジョブをただちに実行する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、スケジュール済みジョブを選択します。
- 3 タスクペインの[スケジュール済みジョブタスク]の下にある[今すぐ実行]をクリックします。

スケジュールジョブを保留に変更

スケジュール済みジョブの実行を保留し、ジョブを実行しないようにすることができます。また、ジョブキュー全体を保留にして、環境を変更できます。保留状態を変更するまでジョブは実行されません。

スケジュール済みジョブを保留にする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、スケジュール済みジョブを選択します。
一度に複数のジョブを選択するには、**Ctrl** または **Shift** キーを押しながら選択する他のジョブをクリックしてください。ジョブの状態が同じであれば、この方法を使用して一度に複数のジョブに対し、[スケジュールを保留]を適用することができます。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[スケジュールを保留]にチェックマークを付けます。

スケジュール済みジョブの保留の解除

スケジュール済みジョブの保留を解除すると、ジョブはスケジュールに従って動作します。

スケジュール済みジョブの保留を解除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、スケジュール済みジョブを選択します。
一度に複数のジョブを選択するには、**Ctrl** または **Shift** キーを押しながら選択する他のジョブをクリックしてください。ジョブの状態が同じであれば、一度に複数のジョブの保留を解除することができます。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[スケジュールを保留]チェックボックスをオフにします。

ジョブキューを保留に変更

ジョブキュー全体を保留にして、環境を変更できます。保留状態を変更するまでジョブは実行されません。

p.559 の「[ジョブキューの保留の解除](#)」を参照してください。

ジョブキューを保留にする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブで、タスクペインの[一般タスク]の下にある[ジョブキューの保留]にチェックマークを付けます。
- 3 [はい]をクリックします。

ジョブキューの保留の解除

ジョブキューの保留を解除すると、ジョブはスケジュールに従って動作します。

ジョブキューの保留を解除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブで、タスクペインの[一般タスク]の下にある[ジョブキューの保留]のチェックマークをはずします。

スケジュール済みジョブの優先度の変更

優先度は、ジョブの実行順序を決定するためのプロパティです。2つのジョブが同じ時間に実行されるようにスケジュールされている場合は、優先度によって、どちらを先に実行するかが決定されます。スケジュール済みジョブの場合は、すべての処理について優先度を変更されます。

スケジュール済みジョブの優先度を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーで[ジョブモニター]または[ジョブセットアップ]を選択します。
- 2 次のいずれかを実行します。

たとえば優先度を[低]から[通常以下]に増やすなど、優先度を1レベル増やしたり減らしたりする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- ジョブを選択します。
- タスクペインで[優先度を上げる]または[優先度を下げる]をクリックします。

たとえば優先度を[低]から[高]に増やすなど、優先度を2レベル以上増やしたり減らしたりする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- ジョブを右クリックします。
- [優先度を設定]をクリックします。
- 新しい優先度を選択します。

スケジュール済みジョブのテスト実行

スケジュール済みジョブをテスト実行することにより、スケジュール済みバックアップジョブが正しく実行されるかどうかをチェックすることができます。テスト実行では、メディアの容量、クレデンシャル、適正なメディアの有無などをチェックすることができます。テスト中に問題が発生した場合でも、処理を継続し、問題をジョブログに表示します。

スケジュール済みジョブのテストを実行する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、実行中のジョブを選択します。

- 3 タスクペインの[スケジュール済みジョブタスク]の下にある[テスト実行]をクリックします。
[ジョブモニター]の[ジョブリスト]ビューで複数のジョブを選択するには、ジョブを選択してから <Ctrl> または <Shift> キーを押しながら他のジョブをクリックします。同じ種類のジョブであれば、この方法を使用して一度に複数のジョブに対し、「テスト実行」などのタスクを実行することができます。
- 4 ジョブのテスト実行プロパティを設定します。
p.371 の「[テスト実行のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックして、項目の通知情報を入力します。
p.669 の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 6 このジョブを保留状態でサブミットするには、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、[保留にする]をクリックします。
このオプションを選択すると、保留状態を変更するまでジョブを実行しないようにしてジョブをサブミットすることができます。
- 7 [今すぐに実行]をクリックして、テスト実行ジョブをサブミットします。

スケジュール済みジョブの削除

[ジョブモニター]の[ジョブリスト]タブからスケジュール済みジョブを削除すると、スケジュールされたすべてのジョブの発生が削除されます。特定の日付の定時ジョブの発生のみ削除するには、その日付を削除するようにスケジュールを編集できます。

ジョブがポリシーによって作成されたら、ポリシーと選択リストの間の関連付けを最初に削除する必要があります。

p.534 の「[ポリシーから作成したジョブの削除](#)」を参照してください。

スケジュール済みジョブを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインで、スケジュール済みジョブを右クリックします。
- 3 [削除]をクリックします。
- 4 ジョブと関連付けされるバックアップ選択リストを削除する場合は、[このジョブの選択リストがすでに使用されていない場合、削除します。]をクリックします。
- 5 [はい]をクリックします。

完了ジョブのプロパティの表示

完了した各ジョブについて、プロパティの詳細を表示することができます。いくつかのジョブの場合、ジョブを右クリックしてジョブの再試行を選択したり、またはジョブの失敗の原因となったエラーに対して、カスタマイズしたエラー処理方法を設定するように選択できます。

ジョブログで報告される各エラーには、シマンテック社テクニカルサポートWebサイトにクリックしてアクセスできるハイパーリンクが含まれています。

[ジョブ履歴]ダイアログボックスには、[ジョブ履歴]と[ジョブログ]の2つのタブがあります。[ジョブ履歴]タブには、ジョブの概略が表示されます。[ジョブログ]タブには、ジョブとファイルの統計情報が表示されます。ほとんどのジョブログはHTMLの形式で表示されます。ただし、一部のログはテキストで表示されることがあります。

p.567の「[完了ジョブの状態](#)」を参照してください。

p.569の「[ジョブログのデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

完了ジョブのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[ジョブ履歴]ペインで、表示する完了ジョブを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 [ジョブ履歴]タブまたは[ジョブログ]タブに情報が表示されます。

p.562の「[完了ジョブの\[ジョブ履歴\]のプロパティ](#)」を参照してください。

p.564の「[完了ジョブの\[ジョブログ\]のプロパティ](#)」を参照してください。

完了ジョブの[ジョブ履歴]のプロパティ

[ジョブ履歴]タブには、ジョブの概略が表示されます。

p.562の「[完了ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 13-7 完了ジョブの[ジョブ履歴]のプロパティ

項目	説明
前へ	定期的に行うこのジョブの一部として実行された以前のジョブのジョブ履歴を表示します。
次へ	定期的に行うこのジョブの一部として実行された次のジョブのジョブ履歴を表示します。
ジョブ名	ジョブの設定の間に入力されたジョブ名を表示します。
ジョブの種類	実行した操作の種類 (バックアップ、バックアップおよび削除、カタログ、リストア、検証など) を表示します。

項目	説明
ジョブ状態	操作の状態を表示します。
ジョブログ	ジョブログの保存場所とファイル名を表示します。
サーバー名	ジョブを処理したメディアサーバーの名前を表示します。
選択リスト名	ジョブで処理された選択リストの名前を表示します。
デバイス名	ジョブを処理したデバイスの名前を表示します。
ターゲットデバイス名	ジョブの設定中に選択されたデバイスの名前を表示します。
メディアセット名	ジョブを処理したメディアセットの名前を表示します。
すべての使用メディア	ジョブの処理に使用されたすべてのメディアを一覧表示します。
バイト数	処理したバイト数を表示します。(この項目はカタログジョブの[ジョブ履歴]には表示されません。)
スループット	ジョブ全体で、1分あたりにバックアップされたデータの量を表示します。(この項目はカタログジョブの[ジョブ履歴]には表示されません。)
ファイル	処理したファイル数の合計を表示します。
ディレクトリ	処理したディレクトリ数の合計を表示します。
スキップファイル数	操作の間にスキップされたファイルの数を表示します。
破損ファイル数	操作の間に見つけられた破損ファイルの数を表示します。
使用中ファイル数	操作の間に見つけられたオープンファイルの数を表示します。
キューイング日時	処理のためにジョブがサブミットされた時間を表示します。
開始日時	操作が開始される時間を表示します。
終了日時	操作が終了する時間を表示します。
経過時間	操作にかかった時間を表示します。
ジョブの種類	メディアセットで実行した操作の種類(バックアップ、バックアップおよび削除、カタログ、リストア、検証など)を表示します。
ジョブの状態	操作の状態を表示します。
ジョブ名	ジョブの設定の間に入力されたジョブ名を表示します。

項目	説明
リソース名	ジョブのリソースの名前を表示します。
ログオンアカウント	ジョブで使用したログオンアカウントの名前を表示します。
暗号化キー	ジョブで暗号化キーを使用したかどうかを示します。
エラー	<p>エラーが起きたら、エラーコードを表示します。</p> <p>ジョブログを使用すると、エラーが発生した場所を特定したり、UMI (Unique Message Identifier) からのエラーについての追加情報を入手できます。</p> <p>p.567 の「ジョブログからシマンテック社テクニカルサポート Web サイトへのリンク」を参照してください。</p> <p>また、エラー処理方法を使用すると、このエラーが発生したときに再試行オプションおよびジョブの最終処置がジョブに対して有効になります。</p> <p>p.579 の「エラー処理方法について」を参照してください。</p>
エージェント	処理時に Backup Exec エージェントを使用したかどうかを示します。
Advanced Open File Option	処理時に Advanced Open File Option を使用したかどうかを示します。
開始時刻	操作が開始される時間を表示します。
終了時刻	操作にかかった時間を表示します。

完了ジョブの[ジョブログ]のプロパティ

[ジョブログ]タブには、ジョブとファイルの統計情報が表示されます。ほとんどのジョブログは HTML の形式で表示されます。ただし、一部のログはテキストで表示されることがあります。

p.562 の「[完了ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 13-8 完了ジョブの[ジョブログ]のプロパティ

項目	説明
ジョブの情報	ジョブサーバー、ジョブ名、ジョブの開始日時、ジョブの種類およびジョブログ名が表示されます。
デバイスとメディアの情報	ドライブ名、メディアラベル、上書き禁止期間および追記期間、ジョブが割り当てられていたメディアセットが表示されます。

項目	説明
ユーティリティジョブの情報	スロット、バーコード、メディアラベル、状態およびユーティリティジョブが処理されたデバイスについての情報が表示されます。 p.464 の「デバイスとメディアの管理に役立つユーティリティジョブの作成について」 を参照してください。
ジョブの完了状態	ジョブの終了時刻、完了状態、エラーコード、エラーの説明およびエラーカテゴリが表示されます。ジョブ状態により、ジョブの完了セクションは緑、オレンジまたは赤で表示されます。 p.567 の「完了ジョブの状態」 を参照してください。
エラー	ジョブの処理中に発生したエラーの詳細が表示されます。エラーは、セットごとにグループ分けされ、ラベルが付けられます。ラベルには、該当のセットのジョブ名およびリソース名が含まれます。ジョブログのエラーセクションは赤で表示されます。 [バックアップ - セットの情報 - セットの詳細]でエラーの発生場所を検索するには、エラーテキストをクリックします。エラーの詳細が参照できる場合は、下線付きのエラーコード番号をクリックして、シマンテック社テクニカルサポート Web サイトにアクセスします。
例外	ジョブの処理中に発生した軽度のエラーの詳細が表示されます。ジョブログの例外処理はオレンジで表示されます。
NDMP のログ	操作のために選択された NDMP の環境変数について、および NDMP の重複したセットについての詳細を提供します。

ジョブ、ポリシーまたは選択リストの履歴の表示

実行中のジョブ、スケジュール済みジョブ、ポリシーおよび選択リストのそれぞれの履歴を表示できます。ジョブ履歴については、繰り返し実行されるジョブインスタンスの、それぞれの詳細を表示できます。

たとえば、あるジョブが 20 回実行された場合、そのジョブには 20 のジョブ履歴があります。そのジョブの[履歴の表示]ダイアログボックスには、20 のジョブ履歴がすべて表示されます。

ジョブ、ポリシーまたは選択リストの履歴を表示する方法

- 1 次のいずれかを実行します。

ポリシーまたは選択リストの履歴 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
を表示する方法

実行中のジョブ、スケジュール ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
済みジョブまたはジョブ履歴項
目の履歴を表示する方法

- 2 履歴を表示する項目を右クリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - 現在のジョブを表示する場合は、ショートカットメニューで[履歴の表示]をクリックします。
 - ジョブ履歴を表示する場合は、ショートカットメニューで[繰り返しジョブインスタンスの表示]をクリックします。
- 4 履歴を参照したら、[OK]をクリックします。

完了ジョブの削除

ジョブモニターからジョブを削除したり、Backup Exec で[データベースの保守]を使用してジョブ履歴を自動的に削除することができます。また、ジョブのスケジュールの設定時に、1 回限り実行されるジョブで、かつテンプレートによって作成されないジョブを、自動的に削除するようにデフォルトを設定することもできます。

削除したジョブは、コンピュータから削除され、元に戻すことはできません。

完了ジョブを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[ジョブ履歴]ペインで、削除するジョブを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。

[ジョブモニター]の[ジョブリスト]ビューで複数のジョブを選択するには、ジョブを選択してから <Ctrl> または <Shift> キーを押しながら他のジョブをクリックします。同じ種類のジョブであれば、この方法を使用して一度に複数のジョブに対し、「削除」などのタスクを実行することができます。

最大 2500 個のジョブを[ジョブ履歴]から削除できます。削除しようとしているジョブの数が 2500 個を超えている場合、削除を続行するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

- 4 [はい]をクリックします。

ジョブログからシマンテック社テクニカルサポート Web サイトへのリンク

ジョブログで報告される各エラーには、Unique Message Identifier (UMI) と呼ばれる一意のコードが含まれています。これらのコードには、シマンテック社テクニカルサポート Web サイトをクリックしてアクセスできるハイパーリンクが含まれています。この Web サイトから、特定のメッセージに関連する技術情報やトラブルシューティングのヒントにアクセスできます。Unique Message Identifier (UMI) コードによって、すべてのシマンテック社製品にわたる固有のメッセージコードが体系化されています。

一部のアラートにも UMI が含まれています。たとえば、ジョブが失敗して警告アラートが表示される場合、このアラートに UMI コードが含まれます。

p.643 の「[アクティブアラートへの応答](#)」を参照してください。

エラーに対するエラー処理方法を作成または有効にすることができます。この方法では、エラーが発生した場合にジョブを再試行または停止するためのオプションを設定できます。

p.579 の「[エラー処理方法について](#)」を参照してください。

ジョブログからシマンテック社テクニカルサポート Web サイトへリンクする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[ジョブ履歴]ペインで、表示する完了ジョブを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 トピックのすべての情報を表示するには、[グループを展開する]をクリックします。トピックの情報を非表示にするには、[グループを省略する]をクリックします。
- 5 [ジョブの完了状態]セクションが表示されるまでスクロールします。
- 6 青字のハイパーリンクとして表示されている UMI コードをクリックします。

完了ジョブの状態

処理されたジョブの完了状態は、次のいずれかです。

表 13-9 ジョブの完了状態

状態	説明
成功	エラーが発生することなくジョブが完了しました。
成功 (例外処理あり)	ジョブは完了しましたが、処理中に、次のいずれかの種類のファイルが検出されました。 <ul style="list-style-type: none">■ 使用中■ スキップ■ 破損

状態	説明
フェールオーバー	クラスタ環境でジョブを実行中に、ジョブを実行中のコンピュータがフェールオーバーを行ったため、クラスタ内の別のコンピュータでジョブが再実行されました。ジョブがフェールオーバーされると、ジョブ履歴には2つのセットが記録されます。最初のジョブ履歴にはフェールオーバーの状態、2つ目のジョブ履歴には完了の状態が記録されます。
再開	状態はフェールオーバーの状態と同じですが、[チェックポイントからジョブを再開する]オプションが選択されています。
キャンセル	管理者が、実行中のジョブを停止しました。
タイムアウトのためキャンセル	[実行頻度]の[スケジュール]プロパティの[この選択リストに対する自動キャンセルを有効にする]機能が有効になっており、ジョブは指定された時間内に完了できませんでした。 p.343 の「ジョブのスケジュールの設定」 を参照してください。
失敗	処理は実行されましたが、1つ以上の重大なエラーが発生しました。ジョブログにエラーの原因が記録されているため、ジョブを再実行するかどうかの判断に役立ちます。たとえば、ジョブの実行中に接続が切断されたことが原因でエラーが発生した場合は、接続をリカバリした後でジョブを再度サブミットすることができます。 バックアップ処理中にドライブの電源が切れた場合は、別のテープを使用してバックアップジョブをやりなおす必要があります。電源が切れた時点までにテープに書き込まれたデータをリストアに使用することはできませんが、そのテープを使用してバックアップ処理を続行することはできません。 失敗したジョブは、ジョブログの[エラー]セクションにエラーメッセージが表示されており、そのリンクを使用してシマンテック社テクニカルサポート Web サイトに移動できます。 p.567 の「ジョブログからシマンテック社テクニカルサポート Web サイトへのリンク」 を参照してください。 次の理由でジョブが失敗する場合があります。 <ul style="list-style-type: none">■ ジョブによって指定されたデバイスが、ジョブの実行時に利用できなかった。■ バックアップジョブで使用されたログオンアカウント情報が正しくなかった。バックアップするリソースに対するログオンアカウント情報が有効であることを確認します。■ ジョブの実行時にストレージデバイスで問題が発生した。■ バックアップ対象のコンピュータがバックアップジョブの実行前または実行中にシャットダウンされた。

状態	説明
リカバリ	ジョブの実行中に、管理対象メディアサーバーの状態が通信中断から通信途絶に変更されました。そのジョブには、カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」が適用されました。 p.1492の「CASO用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」 を参照してください。
未処理	スケジュールされた開始時間帯にジョブが実行されませんでした。設定した開始時間帯に基づいてジョブの実行スケジュールが再設定されます。 p.351の「スケジュール済みジョブの開始時間帯の設定」 を参照してください。

ジョブログのデフォルトオプションの設定

ジョブログのデフォルトオプションを設定することにより、ジョブログにどの程度詳しく情報を記録するかを指定することができます。たとえば、多数のファイルが含まれるバックアップなどのように大量のログが生成されるジョブを実行する場合には、ジョブログに記録される詳細情報を少なくすることをお勧めします。ジョブログのファイルサイズは、詳細の程度に比例して増大します。

ジョブログのデフォルトオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[ジョブログ]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

[p.569の「ジョブログのデフォルトオプション」](#)を参照してください。

ジョブログのデフォルトオプション

ジョブログのデフォルトオプションを設定することにより、ジョブログにどの程度詳しく情報を記録するかを指定することができます。

[p.569の「ジョブログのデフォルトオプションの設定」](#)を参照してください。

表 13-10 ジョブログのデフォルトオプション

項目	説明
概略	<p>次の情報がジョブログに含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ジョブ名■ ジョブの種類■ ジョブログ名■ メディアサーバー名■ ストレージデバイス■ 開始日時■ 発生したエラー■ 終了日時■ 完了ジョブの統計情報 <p>スキップファイル名、メディアセット名、バックアップの種類および検証操作の結果 (実行した場合) も含まれます。</p>
概略、ディレクトリ	概略情報、処理されたすべてのサブディレクトリのリストがジョブログに含まれます。
概略、ディレクトリ、ファイル	概略情報、処理されたサブディレクトリ、処理されたすべてのファイルの名前のリストがジョブログに含まれます。
概略、ディレクトリ、ファイル、ファイルの詳細	<p>概略情報、処理されたサブディレクトリ、すべてのファイル名とその属性のリストがジョブログに含まれます。</p> <p>このオプションを選択すると、ジョブログのサイズが大幅に増加します。</p>
ジョブのログファイル名の接頭辞	<p>処理されるジョブログに追加する接頭辞を示します。デフォルトの接頭辞は、BEX です。</p> <p>ジョブログのファイル名は、Prefix_ServerName_Count で構成されます。ここで、Prefix はこのフィールドに入力するラベル、ServerName はジョブを実行したメディアサーバー名、および Count はこのジョブによって生成されたジョブログの数です。</p>
ジョブログをHTMLファイルとして添付	電子メール通知の送信時に、ジョブログを HTML 形式で添付します。
ジョブログをテキストファイルとして添付	電子メール通知の送信時に、ジョブログをテキスト形式で添付します。
ジョブログパス	ジョブログの現在の場所を表示します。パスを変更するには、 BEUtility を使用します。

垂直アプリケーションによるジョブログの使用について

Backup Exec 管理コンソールには、ジョブログを HTML 形式で表示する機能が備えられています。必要に応じて、ジョブログをテキスト形式に変換し、垂直アプリケーションで使用することができます。

ジョブログファイルをテキスト形式に変換するには、デフォルトディレクトリ `C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\Data` または Backup Exec のインストール先ディレクトリからコマンドプロンプトに次の行を入力します。

```
bemcmd -o31 -f"<pathname%job log filename>"
```

たとえば、ジョブログ `C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\Data\bex00001.xml` をテキスト形式でコマンドプロンプトに表示するには次の行を入力します。

```
bemcmd -o31 -f"C:\program files\Symantec\Backup Exec\Data\bex00001.xml"
```

ジョブログの出力先を変更するには、次のいずれかを入力します。

```
bemcmd -o31 -f"C:\program files\Symantec\Backup Exec\Data\bex00001.xml"  
> bex00001.txt
```

または

```
bemcmd -o31 -l"bex00001.txt" -f"C:\program files\Symantec\Backup  
Exec\Data\bex00001.xml"
```

ジョブのフィルタ処理

定義済みフィルタを選択して、[ジョブセットアップ]ビューや[ジョブモニター]ビューに表示されるジョブを制限できます。

ジョブにフィルタをかける方法

- 1 次のいずれかを実行します。

[ジョブセットアップ]ビューでジョブ [ジョブセットアップ]をクリックします。
ジョブにフィルタをかける方法

[ジョブリスト]タブでジョブにフィルタ [ジョブモニター]、[ジョブリスト]の順にクリックします。
ジョブにフィルタをかける方法

[カレンダー]タブでジョブにフィルタ [ジョブモニター]、[カレンダー]の順にクリックします。
ジョブにフィルタをかける方法

- 2 [フィルタ]リストで、使用するフィルタをクリックします。

カスタムフィルタの管理について

ジョブのカスタムフィルタを作成および編集できます。Backup Exec では、カスタムフィルタを作成することができる各ペインに対してXMLファイルが用意されています。作成したカスタムフィルタは、次の場所に格納されます。

```
¥Documents and Settings¥<User name>¥Local Settings  
¥Application Data¥Symantec Corporation  
¥Bkupdexec.exe_StrongName_qlwvfcithy432w2rcmdlndn0kfn1fr5rb  
¥<BE_Version_Number><BE_Build#>¥user.config
```

各カスタムフィルタファイルには、コンピュータへのログオンに使用したログオンアカウント名が追記されます。そのため、カスタムフィルタファイルは Backup Exec ユーザーごとに存在します。各ユーザーは、自分が作成したカスタムフィルタのみを表示できます。

p.572 の「[ジョブのカスタムフィルタの作成](#)」を参照してください。

p.573 の「[現在のジョブのカスタムフィルタの作成](#)」を参照してください。

p.574 の「[\[ジョブ履歴\]のジョブのカスタムフィルタの作成](#)」を参照してください。

p.576 の「[カスタムフィルタの削除](#)」を参照してください。

p.577 の「[カスタムフィルタの編集](#)」を参照してください。

ジョブのカスタムフィルタの作成

カスタムフィルタを作成して、ジョブリストに表示されるジョブを制限できます。

ジョブのカスタムフィルタを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [ジョブ]ペインの[フィルタ]リストで、[<新規カスタムフィルタ>]をクリックします。
- 3 フィルタの一意の名前と説明を入力します。
- 4 [条件]で、ジョブにフィルタをかける情報の種類を選択します。
- 5 [このフィルタを有効にする]にチェックマークを付けます。
- 6 フィルタをかけるデータの種類のチェックボックスをオンにします。フィルタをかけないデータの種類のチェックボックスをオフにします。
- 7 [OK]をクリックします。

[ジョブの新規カスタムフィルタ]オプション

カスタムフィルタを作成して、ジョブリストに表示されるジョブを制限できます。

表 13-11 [ジョブの新規カスタムフィルタ]オプション

項目	説明
名前	カスタムフィルタの一意の名前を示します。
説明	フィルタを記述します。
このフィルタを有効にする	選択の基準がフィルタに含まれていることを示します。フィルタを有効にした後、フィルタ処理する特定の基準を選択できます。

現在のジョブのカスタムフィルタの作成

カスタムフィルタを作成して、ジョブリストに表示される現在のジョブを制限できます。

現在のジョブのカスタムフィルタを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[現在のジョブ]ペインの[フィルタ]リストで、[<新規カスタムフィルタ>]をクリックします。
- 3 フィルタの一意の名前と説明を入力します。
- 4 [条件]で、ジョブにフィルタをかける情報の種類を選択します。
- 5 [このフィルタを有効にする]にチェックマークを付けます。
- 6 フィルタをかけるデータの種類のチェックボックスをオンにします。フィルタをかけないデータの種類のチェックボックスをオフにします。
- 7 [OK]をクリックします。

[現在のジョブの新規カスタムフィルタ]オプション

カスタムフィルタを作成して、ジョブリストに表示される現在のジョブを制限できます。

p.573 の「[現在のジョブのカスタムフィルタの作成](#)」を参照してください。

表 13-12 [現在のジョブの新規カスタムフィルタ]オプション

項目	説明
名前	カスタムフィルタの一意の名前を示します。
説明	フィルタを記述します。この説明は[カスタムフィルタの管理]ダイアログボックスで表示されます。ただし、それは[ジョブモニター]ビューで表示されません。

項目	説明
このフィルタを有効にする	選択の基準がフィルタに含まれていることを示します。フィルタを有効にした後、フィルタ処理する特定の基準を選択できます。
日付の範囲を指定しない	<p>スケジュールされているジョブの実行タイミングに基づいたフィルタ処理を、現在のジョブリストに対してしないことを示します。</p> <p>たとえば、[ジョブの種類]フィルタを有効にし、ジョブの種類として[バックアップ]を選択します。このオプションを選択する場合は、任意の日付に実行をスケジュールされているすべてのバックアップジョブがジョブ履歴のリストに表示されません。</p>
今後	<p>スケジュールされているジョブの実行タイミングに基づいて現在のジョブリストをフィルタ処理することを示します。フィルタ処理する特定の日数または時間数を選択できます。</p> <p>たとえば、[ジョブの種類]フィルタを有効にし、ジョブの種類として[バックアップ]を選択します。このオプションを選択し、範囲として 24 時間を設定する場合、次の 24 時間以内に実行がスケジュールされているバックアップジョブのみがジョブ履歴のリストに表示されます。</p>

[ジョブ履歴]のジョブのカスタムフィルタの作成

カスタムフィルタを作成して、ジョブ履歴に表示されるジョブを制限できます。

[ジョブ履歴]のジョブのカスタムフィルタを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブの[ジョブ履歴]ペインの[フィルタ]リストで、[<新規カスタムフィルタ>]をクリックします。
- 3 フィルタの一意の名前と説明を入力します。
- 4 [条件]で、ジョブにフィルタをかける情報の種類を選択します。
- 5 [このフィルタを有効にする]にチェックマークを付けます。
- 6 フィルタをかけるデータの種類のチェックボックスをオンにします。フィルタをかけないデータの種類のチェックボックスをオフにします。
- 7 [OK]をクリックします。

[ジョブ履歴の新規カスタムフィルタ]オプション

カスタムフィルタを作成して、ジョブ履歴に表示されるジョブを制限できます。

p.574 の「[ジョブ履歴]のジョブのカスタムフィルタの作成」を参照してください。

表 13-13 [ジョブ履歴の新規カスタムフィルタ]オプション

項目	説明
名前	カスタムフィルタの一意の名前を示します。
説明	フィルタを記述します。この説明は[カスタムフィルタの管理]ダイアログボックスで表示されます。ただし、それは[ジョブモニター]ビューで表示されません。
このフィルタを有効にする	選択の基準がフィルタに含まれていることを示します。フィルタを有効にした後、フィルタ処理する特定の基準を選択できます。
日付の範囲を指定しない	ジョブの実行タイミングに基づいたフィルタ処理を、ジョブ履歴のリストに対してしないことを示します。 たとえば、[ジョブの種類]フィルタを有効にし、ジョブの種類として[バックアップ]を選択します。このオプションを選択する場合は、実行されたすべてのバックアップジョブがジョブ履歴のリストに表示されます。
過去	ジョブの実行タイミングに基づいてジョブ履歴のリストをフィルタ処理することを示します。フィルタ処理する特定の日数または時間数を選択できます。 たとえば、[ジョブの種類]フィルタを有効にし、ジョブの種類として[バックアップ]を選択します。このオプションを選択し、範囲として 24 時間を設定する場合、過去 24 時間以内に実行されたバックアップジョブのみがジョブ履歴のリストに表示されます。

項目	説明
次の日付の範囲で表示	<p>特定の日付範囲に基づいてジョブ履歴のリストをフィルタ処理することを示します。日時でフィルタ処理できます。</p> <p>たとえば、[ジョブの種類]フィルタを有効にし、ジョブの種類として[バックアップ]を選択します。このオプションを選択し、日付範囲に12月1日から12月8日を設定する場合、12月1日から12月8日までに実行されたバックアップジョブのみがジョブ履歴のリストに表示されます。</p>
最新の実行済みジョブのみを表示	<p>指定したジョブの種類最新の実行に基づいてジョブ履歴のリストをフィルタ処理することを示します。</p> <p>たとえば、[ジョブの種類]フィルタを有効にし、ジョブの種類として[バックアップ]を選択します。このオプションを選択する場合は、各バックアップジョブの最新の実行のみがジョブ履歴のリストに表示されます。</p>

カスタムフィルタの削除

不要になったカスタムフィルタを削除できます。

カスタムフィルタを削除する方法

1 次のいずれかを実行します。

[ジョブセットアップ]ビューから [ジョブセットアップ]をクリックします。
 カスタムフィルタを削除する方
 法

[ジョブモニター]ビューからカス [ジョブモニター]>[ジョブリスト]をクリックします。
 タムフィルタを削除する方法

2 タスクペインの[カスタムフィルタタスク]の下の[カスタムフィルタの管理]をクリックします。

3 削除するフィルタを選択します。

4 [削除]をクリックします。

5 カスタムフィルタの削除を確認するダイアログボックスで、[はい]をクリックします。

6 [閉じる]をクリックします。

カスタムフィルタの編集

カスタムフィルタのオプションを変更できます。

カスタムフィルタを編集する方法

- 1 次のいずれかを実行します。

[ジョブセットアップ]ビューから [ジョブセットアップ]をクリックします。
カスタムフィルタを編集する方
法

[ジョブモニター]ビューからカス [ジョブモニター]>[ジョブリスト]をクリックします。
タムフィルタを編集する方法

- 2 タスクペインの[カスタムフィルタタスク]の下の[カスタムフィルタの管理]をクリックします。
- 3 編集するフィルタを選択します。
- 4 [編集]をクリックします。
- 5 カスタムフィルタオプションを編集します。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 [閉じる]をクリックします。

[カレンダー]タブでのメディアサーバーのジョブワークロードの表示

月、週、日単位でメディアサーバーのジョブワークロードを表示できます。

月および週のビューには、ジョブの数とジョブインスタンスの数が表示されます。任意の日にスケジュールされたジョブの概要を参照できます。これらのビューにはジョブの詳細は表示されません。

日単位のビューでは、スケジュールされたジョブがわかりやすく表示され、その日のジョブが実行順に一覧表示されます。ジョブに対して実行できるタスクがタスクペインに表示されます。プレビューペインには、ジョブ履歴の最終状態、スループットおよびバイト数など、各ジョブの詳細情報が表示されます。

メモ: [カレンダー]ビューでは、カスタムフィルタは使用できません。

[カレンダー]タブでメディアサーバーのジョブワークロードを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [カレンダー]タブで、次のいずれかを実行します。

日アイコンをクリックします。



週アイコンをクリックします。



月アイコンをクリックします。



カレンダーの特定の日のジョブの表示

タスクペインのカレンダーを使用して、特定の日のジョブの数を表示します。日は、将来または過去の日数、週数、または月数で表示できます。

カレンダーの特定の日のジョブを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 タスクペインの[カレンダー]タブで、矢印キーをクリックして、カレンダーを月単位で前後に変更します。
- 3 現在の日付に進むには、カレンダーの最下部にある[今日]をクリックします。

[カレンダー]タブでのジョブの管理

[カレンダー]タブでは、いくつかの共通タスクを利用できます。ジョブを右クリックして、追加のタスクを含むショートカットメニューにアクセスすることもできます。

[カレンダー]タブでジョブを管理する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 カレンダーのタスクペインの[カレンダー]タブで詳細を表示する日をクリックします。
- 3 日アイコンをクリックします。

- 4 次のいずれかを実行します。

タスクペインで利用できるタスク ジョブの名前を選択します。
を表示する方法

右クリックメニューで利用できる ジョブを右クリックします。
タスクを表示する方法

- 5 実行するタスクをクリックします。

p.547 の「[\[ジョブモニター\]オプション](#)」を参照してください。

Symantec Endpoint Protection のセキュリティの概略の表示

[セキュリティの概略]には、Symantec Endpoint Protection アプリケーションから取得した、メディアサーバーに対するウイルス、脅威およびリスクの詳細が表示されます。

p.393 の「[Symantec Endpoint Protection での Backup Exec の使用について](#)」を参照してください。

メモ: [セキュリティの概略]を有効にするには、メディアサーバーに Symantec Endpoint Protection Manager のコンポーネントをインストールする必要があります。

セキュリティの概略について詳しくは『Symantec Endpoint Protection および Symantec Network Access Control 管理者ガイド』を参照してください。

Symantec ThreatCon レベルが指定したレベルに達すると、バックアップジョブを自動的に開始できるように設定できます。

セキュリティの概略を表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [セキュリティの概略]タブで、Symantec Endpoint Protection の概略情報を表示します。

エラー処理方法について

デフォルトの処理方法を有効にするか、またはカスタマイズした処理方法を作成して、失敗したジョブまたはキャンセルされたジョブに対して再試行オプションやジョブの最終処理を設定することができます。再試行オプションでは、ジョブ失敗時に再試行を行う頻度や間隔を指定できます。ジョブの最終処理では、エラーを修復するまでジョブを保留にす

るか、またはジョブを次回スケジュール時に実行するようにスケジュールを再設定することができます。

デフォルトのエラー処理方法を有効にして、類似したエラーの集まり (エラーカテゴリ) にエラー処理方法を適用することができます。各デフォルトのエラー処理方法は、1 つのエラーカテゴリ (ネットワークエラーやセキュリティエラーなど) に適用されます。デフォルトのエラー処理方法は、デフォルトでは無効になっています。そのため、選択したカテゴリ内のエラーが原因で失敗したジョブに対して再試行オプションおよびジョブの最終処理設定を適用するには、処理方法を編集してデフォルトのエラー処理方法を有効にする必要があります。デフォルトのエラー処理方法を削除したり、カテゴリに特定のエラーコードを追加する、または新しいエラーカテゴリを追加することはできません。エラー処理方法を適用するには、処理方法に関連付けられているエラーカテゴリに最終エラーコードが含まれている必要があります。処理方法が有効になっている必要があります。

エラーカテゴリ内の特定のエラーコードに対してエラー処理方法を適用するには、カスタマイズしたエラー処理方法を作成します。カスタマイズしたエラー処理方法は、最大 28 個のエラーカテゴリ内のエラーコードを選択して適用することができます。また、既存のカスタマイズしたエラー処理方法にエラーコードを追加することもできます。

「リカバリされたジョブ」という名前のカスタマイズしたエラー処理方法が Backup Exec のインストール時に作成され、デフォルトで有効になっています。この処理方法では、再度実行するスケジュールが設定されていない失敗ジョブに対して再試行オプションおよびジョブの最終処理が適用されます。

p.583 の「[カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」](#)」を参照してください。

カスタマイズしたエラー処理方法およびデフォルトのエラー処理方法の両方が失敗ジョブに適用される場合、ジョブにはカスタマイズしたエラー処理方法の設定が適用されません。

メモ: Backup Exec がインストールされているサーバーがクラスタ環境に存在する場合、クラスタフェールオーバー時の処理方法がエラー処理方法のリストに表示されます。この処理方法は、デフォルトで有効になっています。

p.584 の「[クラスタフェールオーバー時の処理方法](#)」を参照してください。

カスタマイズしたエラー処理方法の作成

カスタマイズした処理方法を作成して、失敗したジョブまたはキャンセルされたジョブに対して再試行オプションやジョブの最終処理を設定することができます。

p.579 の「[エラー処理方法について](#)」を参照してください。

カスタマイズしたエラー処理方法を作成する方法

- 1 [ツール]メニューの[エラー処理方法]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックします。
- 3 [エラー処理方法の設定]ダイアログボックスで項目を設定し、[OK]をクリックします。

p.581 の「[\[エラー処理方法の設定\]オプション](#)」を参照してください。

p.583 の「[カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」](#)」を参照してください。

p.584 の「[クラスタフェールオーバー時の処理方法](#)」を参照してください。

[エラー処理方法の設定]オプション

カスタマイズした処理方法を作成して、失敗したジョブまたはキャンセルされたジョブに対して再試行オプションやジョブの最終処理を設定することができます。また既存の方法を編集できます。

p.580 の「[カスタマイズしたエラー処理方法の作成](#)」を参照してください。

表 13-14 [エラー処理方法の設定]オプション

項目	説明
名前	このエラー処理方法の名前を示します。カスタマイズしたエラー処理方法を追加または更新する場合は、処理方法の名前を入力する必要があります。
ジョブの最終状態	この方法を適用するジョブの状態を示します。状態は表示専用で、変更することはできません。 次の状態を設定できます。 <ul style="list-style-type: none">■ エラー■ キャンセル■ 失敗

項目	説明
エラーカテゴリ	<p>この方法が適用されるエラーカテゴリを示します。</p> <p>デフォルトのエラー処理方法またはカスタマイズしたエラー処理方法を編集する場合、エラーカテゴリは表示専用で、変更することはできません。</p> <p>カスタマイズしたエラー処理方法を作成する場合、この処理方法が適用されるエラーを含むエラーカテゴリを選択する必要があります。</p> <p>利用可能なエラーカテゴリは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ その他 ■ ネットワーク ■ サーバー ■ リソース ■ セキュリティ ■ バックアップデバイス ■ バックアップメディア ■ ジョブ ■ システム ■ ディスパッチ
有効	<p>エラー処理方法の有効と無効を切り替えます。再試行オプションおよびジョブの最終処理オプションを設定するには、このチェックボックスをオンにする必要があります。</p>
設定可能なエラー	<p>カスタマイズしたエラー処理方法に関連付けられていないエラーコードを表示します。このフィールドは、デフォルトのエラー処理方法を編集する場合は表示されません。</p> <p>カスタマイズしたエラー処理方法を作成または編集する場合、この処理方法を適用するエラーコードのチェックボックスをオンにする必要があります。最大 28 個のエラーコードを選択できます。</p> <p>設定可能なエラーのリストを変更するには、別のエラーカテゴリを選択します。</p>
ジョブを再試行する	<p>Backup Exec がジョブを再試行することを許可します。</p>
最大再試行回数	<p>ジョブを再試行する回数を示します。最大値は 99 です。</p>
再試行間隔	<p>ジョブを再試行する間隔を分単位で示します。最大値は 1440 分です。</p>
エラー状態が手動で解除されるまでジョブを保留する	<p>エラーを手動で削除するまでジョブを保留にします。エラー状態を解除した後、ジョブを保留状態から解除する必要があります。</p>

項目	説明
ジョブを次回スケジュール時に実行する	スケジュールされた次のタイミングでジョブを実行します。
注意	このエラー処理方法についてのその他の情報を表示します。

カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」

「リカバリされたジョブ」とは、Backup Exec によって特定のエラーが原因で失敗したジョブのリカバリに使用されるカスタマイズしたエラー処理方法のことです。この処理方法は、Backup Exec のインストール時に作成され、デフォルトで有効になっています。

この処理方法の再試行オプションでは、ジョブの再試行回数は 2 回、再試行間隔は 5 分です。ジョブの最終処理では、エラー状態を手動で解除するまでジョブが保留されます。

カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」に対して、デフォルトで選択されているエラーコードを次の表に示します。

表 13-15 カスタマイズしたエラー処理方法「リカバリされたジョブ」のエラーコード

エラーコード	説明
0xE00081D9 E_JOB_ENGINE_DEAD	表示されるエラーメッセージは、次のとおりです。 Backup Exec Job Engine システムサービスが応答しません。 p.585 の「リカバリされたジョブに対するしきい値の設定」を参照してください。
0xE0008820 E_JOB_LOCAL RECOVERNORMAL	表示されるエラーメッセージは、次のとおりです。 ローカルジョブがリカバリしました。ユーザーの操作は不要です。
0xE000881F E_JOB_REMOTE RECOVERNORMAL	表示されるエラーメッセージは、次のとおりです。 リモートジョブがリカバリしました。ユーザーの操作は不要です。
0xE0008821 E_JOB_STARTUP RECOVERY	表示されるエラーメッセージは、次のとおりです。 Backup Exec の RPC サービスが起動したため、ジョブがリカバリしました。ユーザーの操作は不要です。

メモ: **Central Admin Server Option** をインストールしている場合は、さらに多くのエラーコードが選択されています。

p.579 の「[エラー処理方法について](#)」を参照してください。

p.584 の「[クラスタフェールオーバー時の処理方法](#)」を参照してください。

クラスタフェールオーバー時の処理方法

Backup Exec がインストールされているサーバーがクラスタ環境に存在する場合、クラスタフェールオーバー時の処理方法がエラー処理方法のリストに表示されます。この処理方法は、デフォルトで有効になっています。

この処理方法のオプションを設定することはできません。クラスタフェールオーバー時の処理方法は、有効にするか、無効にするかのみを設定することができます。

クラスタフェールオーバー時の処理方法と、[クラスタ]プロパティの[チェックポイントからジョブを再開する]オプションを併用して、フェールオーバーの時点からジョブを再開することができます。[チェックポイントからジョブを再開する]オプションはクラスタフェールオーバー時の処理方法に依存しているため、クラスタフェールオーバー時の処理方法を無効にしている場合は、このオプションも自動的に無効になります。

p.808 の「[「チェックポイントから再開」機能の有効化または無効化](#)」を参照してください。

ジョブの停止、失敗、リカバリにすべき値を使用する方法

Backup Exec サービスの応答がないか、またはジョブが長期間実行されない場合に、Backup Exec が実行中のジョブの状態を停止に変更するべき値を設定できます。また、Backup Exec が停止ジョブを失敗と認識してリカバリするべき値を設定することもできます。

p.585 の「[「リカバリされたジョブに対するべき値の設定](#)」を参照してください。

Backup Exec がジョブの状態を停止に変更するまでのべき値の秒数をより少なく設定すると、ジョブの停止についての通知をより早く受信することができます。また、停止のべき値およびリカバリのべき値の時間の間隔を短くして、より早く Backup Exec が停止ジョブを失敗と認識してリカバリすることができます。ただし、べき値の値を小さくしすぎると、必要のないときにジョブのリカバリが強制的に行われる可能性があります。

Backup Exec は、「リカバリされたジョブ」という名前のカスタマイズしたエラー処理方法を使用してジョブをリカバリします。このカスタマイズしたエラー処理方法は、Backup Exec のインストール時に作成されて、有効になります。また、停止ジョブ、失敗ジョブおよびリカバリされたジョブの再試行が 5 分間隔で 2 回行われるように指定されます。

p.583 の「[カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」](#)」を参照してください。

p.579 の「[エラー処理方法について](#)」を参照してください。

Backup Exec サービスから応答がなくなったために Backup Exec によって停止、失敗およびリカバリされたジョブと、日常のアクティビティでエラーが原因で失敗したジョブでは、Backup Exec での表示方法が異なります。停止ジョブ、失敗ジョブおよびリカバリジョブは、その他の失敗ジョブとは異なり、ジョブ履歴に赤字で表示されません。これらのジョブは、グレーで表示され、ジョブの状態として[リカバリ]が表示されます。

ジョブ履歴では、エラーカテゴリに[ジョブエラー]が示されます。ジョブ履歴には、発生した内部通信エラーの種類およびジョブがリカバリされたことが示されます。発生したエラーの種類に基づいて、リカバリされたジョブに関連付けられたログファイルが存在する場合と存在しない場合があります。

リカバリされたジョブに対するしきい値の設定

Backup Exec サービスの応答がないか、またはジョブが長期間実行されない場合に、Backup Exec が実行中のジョブの状態を停止に変更するしきい値を設定できます。また、Backup Exec が停止ジョブを失敗と認識してリカバリするしきい値を設定することもできます。

p.584 の「[ジョブの停止、失敗、リカバリにしきい値を使用する方法](#)」を参照してください。

ジョブのリカバリのしきい値を設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ジョブ状態とリカバリ]をクリックします。
- 3 適切なフィールドを変更し、[OK]をクリックします。

p.585 の「[\[ジョブ状態とリカバリ\]のデフォルトオプション](#)」を参照してください。

[ジョブ状態とリカバリ]のデフォルトオプション

Backup Exec サービスの応答がないか、またはジョブが長期間実行されない場合に、Backup Exec が実行中のジョブの状態を停止に変更するしきい値を設定できます。また、Backup Exec が停止ジョブを失敗と認識してリカバリするしきい値を設定することもできます。

p.585 の「[リカバリされたジョブに対するしきい値の設定](#)」を参照してください。

表 13-16 [ジョブ状態とリカバリ]のデフォルトオプション

項目	説明
通信中断	Backup Exec Job Engine サービスから応答がない場合、実行中のジョブの状態が停止に変更されるまでの秒数を示します。

項目	説明
リカバリ	ジョブが失敗してから Backup Exec によってリカバリされるまでの秒数を示します。リカバリジョブには、「リカバリされたジョブ」というカスタマイズしたエラー処理方法が適用されます。この処理方法が無効な場合、リカバリジョブには、有効になっているエラー処理方法が適用されます。ジョブに適用されるエラー処理方法が存在しない場合は、そのジョブは失敗します。

データのリストア

この章では以下の項目について説明しています。

- データのリストアについて
- リストアジョブとカタログ
- リストアウィザードを使用したデータのリストア
- [リストア]ボタンによるリストアウィザード起動の回避
- [リストア]ボタンによるリストアウィザード起動の設定
- ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア
- リストアするデータの選択について
- リストアジョブのリストア先の変更について
- ネーティブの Microsoft バーチャルハードディスク (VHD) ファイルへのリストア先の変更について
- Windows Server 2003/2008 の Active Directory または Active Directory Application Mode でのリストア先の変更
- リストアジョブのデフォルト設定
- リストアジョブのキャンセル

データのリストアについて

Backup Exec を使用して、ストレージメディアに格納されているデータを任意のサーバーまたはリモートワークステーションにリストアすることができます。Backup Exec 以外のバックアップ用ソフトウェア製品で作成したメディアも使用することができます。

多くの場合 1 つのファイルのリストアするだけで十分ですが、ディレクトリ、ファイルのグループ、システム全体のリストアが必要な場合もあります。

Backup Exec には、リストアするファイルの検索に使用する、次の機能が用意されています。

表 14-1 リストアするファイルを検索する機能

機能	説明
[リソース]ビュー	バックアップしたデータが、バックアップ元のリソース別に一覧表示されます。この機能は、特定のサーバーやワークステーションに格納されているファイルを検索するのに便利です。
[メディア]ビュー	メディアに格納されているデータが一覧表示されます。この機能は、別のメディアサーバーからバックアップしたメディアの内容を参照するのに便利です。
選択の詳細の表示	ファイルや日付属性を指定して、リストアするデータを検索することができます。
カタログの検索	リストアするファイルまたはその他の項目の検索や、特定のファイルのバックアップが存在するかどうかの確認を行うことができます。また、特定のファイルについて、カタログに登録されているすべてのバックアップバージョンを表示することができるため、必要に応じて古いバージョンをリストアすることもできます。

通常のリストアジョブで共通して使用するデフォルトオプションを設定することができます。デフォルトオプションは、リストアジョブのセットアップ時に変更することができます。

リストアジョブの作成時には、次の操作ができます。

- データをバックアップ元のシステムにリストアすることも、別のシステムにリストア先を変更することもできます。
- ただちにリストアジョブを実行するのか、実行するスケジュールを設定するのかを指定することができます。
- データのリストアに使用するローカルネットワークを指定し、Backup Exec ジョブによる影響を基幹ネットワークに与えないようにすることができます。

p.615 の「[リストアするデータの選択について](#)」を参照してください。

リストアジョブとカタログ

Backup Exec は、リソースからのデータのバックアップ時にバックアップしたファイルのカタログをメディアサーバーおよびメディア上に作成します。このカタログファイルには、すべてのメディアの内容に関する情報が保存され、リストアジョブでの選択項目の指定に使用されます。

別のシステムの Backup Exec で作成したメディアをリストアに使用する場合は、そのメディアのカタログがローカルメディアサーバー上に存在しないため、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスに、メディア内のデータが表示されません。メディア上のデータをリストアに使用するには、[カタログ]ジョブを実行する必要があります。

p.232 の「[新しいカタログの作成](#)」を参照してください。

p.589 の「[カタログ登録ジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。

p.591 の「[カタログのレベル](#)」を参照してください。

カタログ登録ジョブのデフォルト設定

カタログ登録ジョブのデフォルトによって、Backup Exec のカタログの仕様が決定されます。

p.588 の「[リストアジョブとカタログ](#)」を参照してください。

p.591 の「[カタログのレベル](#)」を参照してください。

カタログ登録ジョブのデフォルトを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[カタログ]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.589 の「[カタログのデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

カタログのデフォルトオプション

Backup Exec でのカタログの使用方法のデフォルトオプションを設定できます。

p.589 の「[カタログ登録ジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 14-2 カタログのデフォルトオプション

オプション	説明
すべてのメディアに対してカタログ操作を順番に要求する	<p>テープファミリーで最も小さい既知のテープ番号からメディアのカタログ登録を開始します。たとえば、テープ 1 がない場合は、カタログジョブはテープ 2 から開始されます。このオプションのチェックマークを外すと、カタログジョブは指定したテープから開始されます。</p> <p>[すべてのメディアに対してカタログ操作を順番に要求する]のチェックマークを外した場合は、[ストレージメディア単位のカatalogを使用する]チェックボックスをオンにすることはできません。</p>
ストレージメディア単位のカatalogを使用する	<p>Backup Exec がメディアからカタログ情報を読み取ることを許可します。</p> <p>ストレージメディア単位のカatalogを使用すると、メディアサーバー上のカタログに含まれていないメディア (別のシステムの Backup Exec で作成したメディアなど) のカタログを短時間で登録することができます。この機能を使用すると、従来のファイル単位でのカタログ登録では数時間を要するメディアのカatalog作成を、数分で終了することができます。</p> <p>各ファイルブロックを読み取って新規にカタログを登録する場合は、このチェックボックスをオフにします。ただし、ストレージメディア単位のカatalogを使用した際に問題が発生する場合にのみ、このオプションをオフにすることをお勧めします。</p> <p>[すべてのメディアに対してカタログ操作を順番に要求する]のチェックマークを外した場合は、[ストレージメディア単位のカatalogを使用する]チェックボックスをオンにすることはできません。</p> <p>このオプションを選択した場合は、Granular Recovery Technology を使うことができません。</p> <p>p.305 の「Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。</p>

オプション	説明
カタログを切り捨てる	指定した時間の経過後に、ヘッダー情報のみを残して、ファイルやディレクトリのすべての詳細情報を削除します。このオプションを選択すると、カタログのサイズを大幅に削減することができます。カタログを切り捨てた場合は、カタログを再登録しない限り、そのメディアを使用してファイルやディレクトリをリストアすることはできません。 カタログを切り捨てた場合、最終アクセス日はリセットされません。 切り捨てたカタログからバックアップセットの完全リストアを実行できます。 このオプションは、合成バックアップジョブや True Image Restore ジョブには適用されません。
現在のパス	カタログを格納するパスを指定します。デフォルトのパスは ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Catalogs です。
カタログを保存するドライブ	カタログファイルを格納するボリュームを指定します。メディアサーバーのディスク領域が限られている場合に使用します。
カタログを保存するパス	ボリューム上のカタログファイル格納先のパスを指定します。指定したパスが存在しない場合は、そのパスを作成するかどうかの確認が行われます。

カタログのレベル

メディアのカタログに表示される情報の量は、そのメディアに設定したカタログレベルによって決まります。Backup Exec でバックアップを実行すると完全なカタログが登録されますが、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスには、完全なカタログが登録されていないメディアとして表示されるメディアもあります。

カタログレベルを次の表に示します。

表 14-3 メディアのカタログレベル

項目	説明
完全なカタログの存在するメディア	完全なカタログの存在するメディアに対し、次の操作を実行することができます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 各バックアップセットに格納されている、すべてのディレクトリとファイルに関する情報を表示する。 ■ リストアに必要なファイルを検索する。
カタログが切り捨てられているメディア	カタログが切り捨てられているメディアの場合は、バックアップセットの情報のみが表示されます。ファイルやファイル属性は表示されません。このバージョンの Backup Exec では、完全なカタログのみが登録されます。
カタログが登録されていないメディア	カタログ情報の存在しないメディアです。リストアするファイルを表示して選択するには、そのメディアのカタログを登録する必要があります。

p.589 の「[カタログ登録ジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。

p.588 の「[リストアジョブとカタログ](#)」を参照してください。

リストアウィザードを使用したデータのリストア

リストアウィザードの画面の案内に従って作業すると、リストアジョブが作成されます。リストアウィザードは、ユーザーが初めて Backup Exec を使用する場合に役に立ちます。

リストアウィザードを使用してデータをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ (ウィザード使用)]をクリックします。
- 3 画面の案内に従って作業を進めます。

[リストア]ボタンによるリストアウィザード起動の回避

デフォルトでは、ナビゲーションバーの[リストア]を選択するとリストアウィザードが表示されます。リストアジョブを手動で設定する場合は、リストアウィザードが表示されないように設定することができます。無効にしたリストアウィザードは、いつでも再び有効にすることができます。

[リストア]ボタンでリストアウィザードが起動されないように設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ (ウィザード使用)]をクリックします。

- 3 [リストアウィザードを常に[リストア]ボタンで起動する]のチェックマークを外します。
- 4 [次へ]をクリックします。

[リストア]ボタンによるリストアウィザード起動の設定

デフォルトでは、ナビゲーションバーの[リストア]を選択するとリストアウィザードが表示されます。無効にしたリストアウィザードは、いつでも再び有効にすることができます。

[リストア]ボタンでリストアウィザードが起動されるように設定する方法

- 1 ツールメニューの[ウィザード]>[リストアウィザード]をクリックします。
- 2 [リストアウィザードを常に[リストア]ボタンで起動する]にチェックマークを付けます。
- 3 [次へ]をクリックします。

ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア

Backup Exec に関する知識がある場合は、リストアジョブで使用するオプションを選択して、データをリストアすることができます。

p.615 の「[リストアするデータの選択について](#)」を参照してください。

p.623 の「[リストアジョブのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

p.571 の「[ジョブのフィルタ処理](#)」を参照してください。

p.608 の「[ファイルの権限設定のリストアについて](#)」を参照してください。

リモートリソースを保護するには、リモートコンピュータに **Backup Exec Remote Agent for Windows Systems** をインストールする必要があります。

p.1895 の「[Remote Agent for Windows Systems について](#)」を参照してください。

ファイルシステムの構成環境によっては、リストアしたデータのバイト数が、データのバックアップ時に記録されたバイト数と一致しないことがあります。これは正常であり、リストアされなかったファイルが存在することを示すものではありません。

p.783 の「[リストアの問題のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

システム状態をリストアする場合は、次のデータをリストアする前にシステムを再起動します。

ジョブのプロパティを設定してデータをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアするデータを選択します。

p.598 の「[リストアジョブの\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。

- 4 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[デバイス]をクリックします。
- 5 データのリストア元となるデバイスを選択します。
p.600 の「[リストアジョブの\[デバイス\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 必要に応じて次の手順を実行します。

選択したリソースのログオンクレデンシャルを [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[リソースクレデンシャル]をクリックします。
変更またはテストする場合

p.322 の「[\[リソースクレデンシャル\]オプション](#)」を参照してください。

データのバックアップ元ではない別のシステムにリストア先を変更する場合 [プロパティ]ペインの[宛先]の下で、次のいずれかを実行します。

- ファイルセットのリストア先を変更する場合は、[ファイルのリストア先の変更]をクリックします。

p.623の「[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション」を参照してください。

- 特定のエージェントデータのリストア先を変更するエージェントまたはオプションの名前を選択します。

p.1270の「[Microsoft SQL Server のリストア先の変更]オプション」を参照してください。

p.1151の「[Microsoft Exchange のリストア先の変更]オプション」を参照してください。

p.1204の「[Microsoft SharePoint のリストア先の変更]オプション」を参照してください。

p.1311の「[Oracle のリストア先の変更]オプション」を参照してください。

p.958の「[DB2 のリストア先の変更]オプション」を参照してください。

p.1022の「[Enterprise Vault のリストア先の変更]オプション」を参照してください。

p.1451の「Archiving Option コンポーネントのためのアーカイブのリストア先変更オプション」を参照してください。

p.1365の「[VMware リストア先の変更]オプション」を参照してください。

p.1172の「[Microsoft Hyper-V のリストア先の変更]オプション」を参照してください。

p.623の「リストアジョブのリストア先の変更について」を参照してください。

リストアジョブの一般オプションを設定する場合 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。

p.600の「リストアジョブの[一般]オプション」を参照してください。

リストアジョブの詳細オプションを設定する場合	[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。 p.602 の「 リストアジョブの[詳細]オプション 」を参照してください。
このリストアジョブに使用するローカルネットワークを指定する場合	[プロパティ]ペインの[ネットワークとセキュリティ]をクリックし、ネットワーク情報を入力します。 p.606 の「 リストアの[ネットワークとセキュリティ]オプション 」を参照してください。
ジョブの実行前または実行後にコマンドを実行するように設定する場合	[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[プリ/ポストコマンド]をクリックします。 p.607 の「 リストアジョブでのプリコマンドとポストコマンドの実行 」を参照してください。

- エージェントまたはオプションのリストアオプションを設定する場合
- [プロパティ]ペインの[設定]で、エージェントの名前を選択します。
- p.1254の「[SQLのリストアオプション](#)」を参照してください。
- p.1143の「[Microsoft Exchangeのリストアオプション](#)」を参照してください。
- p.1197の「[Microsoft SharePointのリストアオプション](#)」を参照してください。
- p.1069の「[Lotus Dominoのリストアオプション](#)」を参照してください。
- p.1308の「[Oracleのリストアオプション](#)」を参照してください。
- p.956の「[DB2リストアオプション](#)」を参照してください。
- p.1018の「[Enterprise Vaultリストアオプション](#)」を参照してください。
- p.1445の「[Archiving Option データベースのリストアジョブのプロパティ](#)」を参照してください。
- p.1847の「[Linux、UNIXおよびMacintoshコンピュータのリストアジョブオプション](#)」を参照してください。
- p.1816の「[NDMPのリストアオプション](#)」を参照してください。
- p.1363の「[VMwareリストアオプション](#)」を参照してください。
- p.1171の「[Microsoft Hyper-Vリストアオプション](#)」を参照してください。

リストアジョブが完了する時にユーザーに通知するように **Backup Exec** を設定する場合 [プロパティ] ペインの [設定] の下にある [通知] をクリックします。

p.670 の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

7 次のいずれかを実行します。

バックアップジョブを今すぐ実行する方法 [今すぐ実行] をクリックします。

後で実行するためにバックアップジョブをスケジュールする方法 [プロパティ] ペインの [実行頻度] の下にある [スケジュール] をクリックします。

p.344 の「[\[スケジュール\] オプション](#)」を参照してください。

リストアジョブの [選択リスト] オプション

[リストアジョブのプロパティ] ダイアログボックスを開くと、デフォルトでは、[プロパティ] ペインの [選択リスト] が選択されています。[選択リスト] オプションを使用して、このリストアジョブでリストアするデータを選択します。このダイアログボックスでのデータの表示方法を選択することもできます。

このダイアログボックスには、次のオプションが表示されます。

表 14-4 リストアジョブの [選択リスト] オプション

項目	説明
選択リスト	使いたいリストか選択リストを指定します。また、デフォルトの選択リストを使用して、選択リストを新規に作成することもできます。
既存の選択リストを使用する	以前に作成された選択リストをロードするか、既存の選択リストをマージします。
カタログの検索	リストアするファイルまたは他の項目の有無を検索できます。
インクルード/エクスクルード	リストアジョブに含めるファイル、またはリストアジョブから除外するファイルを選択できます。 p.599 の「 リストアの [インクルードまたはエクスクルードの選択] オプション 」を参照してください。
サブディレクトリを含める	選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。

項目	説明
ファイルの詳細を表示する	メディアラベル、前回のバックアップ日付、バックアップセットの数など、選択できるファイルの詳細を表示します。
プレビューペイン	ダイアログボックスの下部でプレビューペインを表示します。
バックアップ開始日	選択リストに表示する最も古いバックアップセットの日付を指定します。デフォルトでは、過去 30 日以内に作成されたバックアップセットが選択リストに含まれます。 このオプションは、[メディア別の表示]および[リソース別の表示]タブを選択した場合にのみ表示されます。
バックアップ終了日	選択リストに表示する最も新しいバックアップセットの日付を指定します。デフォルトでは、過去 30 日以内に作成されたバックアップセットが選択リストに含まれます。 このオプションは、[メディア別の表示]および[リソース別の表示]タブを選択した場合にのみ表示されます。
リソース別の表示	バックアップしたデータが、バックアップ元のリソース別に表示されます。この機能は、特定のサーバーやワークステーションに格納されているファイルを検索するのに便利です。
メディア別の表示	メディアに格納されているデータが表示されます。この機能は、別のメディアサーバーからバックアップしたメディアの内容を参照するのに便利です。
選択の詳細の表示	[リソース別の表示]タブまたは[メディア別の表示]タブのいずれかで選択したメディアの詳細が表示されます。表示される詳細には、メディアの作成日時、メディアラベルおよびメディアが属するバックアップセットが含まれます。

リストアの[インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション

ジョブをリストアするとき、[インクルード/エクスクルード]では次のオプションを使用できません。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

表 14-5 リストアの[インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション

項目	説明
メディア	リストアするファイルが格納されているメディアを示します。
セット名	属性を指定するバックアップセットを示します。

項目	説明
パス	ディレクトリやサブディレクトリを示します。サブディレクトリへのフルパスを入力します。
ファイル	リストアの対象として含めるまたは除外するファイルの名前を指定します。このフィールドのデフォルトは *.* で、すべての拡張子とすべてのファイル名が選択されます。ファイルの指定にはワイルドカードを使用することができます。ファイル名や拡張子の一部に使用したアスタリスク (*) は、そのファイル名または拡張子の残りのすべての部分を表します。たとえば、拡張子が .exe のファイルをすべて選択するには、*.exe と入力します。 疑問符 (?) は任意の 1 文字を表します。また、2 つのアスタリスク (**) は ¥ 記号を含む任意の個数の文字を表します。
サブディレクトリを含める	入力したパスのすべてのサブディレクトリとその内容がジョブに含められるかまたはジョブから除外されることを示します。[パス]フィールドに入力したディレクトリのみをリストアするには、このチェックボックスをオフにします。
インクルード	ファイルを操作対象に含めます。このオプションはデフォルトです。
エクスクルード	ファイルをジョブから除外します。
ファイルの修正日	指定した期間に作成または修正されたファイルを含めるか除外します。

リストアジョブの[デバイス]オプション

利用可能な[デバイス]オプションは次のとおりです。

表 14-6 リストアジョブの[デバイス]オプション

項目	説明
デバイス	リストアするデータのメディアを含んでいるデバイスを指定します。メディアが別のデバイスにある場合、このオプションは無視されます。
複数のデータストリームをサポートするリソースで使用する最大デバイス数	このリストアジョブで使用できるデバイスの最大数を指定します。1 つのストリームに対して 1 つのデバイスだけ使用できます。このオプションは、Oracle データおよび DB2 データのリストアにのみ適用されます。

リストアジョブの[一般]オプション

[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスを使用して、ジョブ名など、リストアジョブの[一般]オプションを設定することができます。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

このダイアログボックスには、次のオプションが表示されます。

表 14-7 リストアジョブの[一般]オプション

項目	説明
ジョブ名	リストアするデータの内容を簡潔に表す名前を指定します。この名前は、ジョブスケジュールでのジョブの識別に使用されません。
ジョブの優先度	このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。 p.183 の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。
常にディスク上のファイルを上書きする	リストア先リソース上に存在する、リストアされているファイルと同じ名前のファイルを上書きします。リストア先デバイス上に存在するファイルよりも古いバージョンのファイルをリストアするときのみ、このオプションを使用します。
ディスク上のファイルを上書きしない	リストア先のディスク上にリストアジョブに含まれるファイルと同じ名前のファイルが存在する場合、ファイルの上書きを行わずにディスク上のファイルを保持します。
ディスク上のファイルの方が古い場合のみ上書きする	ディスク上にリストアジョブに含まれるファイルと同じ名前のファイルが存在する場合、ディスクに存在するファイルの方が新しいときはファイルの上書きを行わずにそのファイルを保持します。 このオプションは、システムの再構築に便利です。たとえば、リカバリするコンピュータにオペレーティングシステムをインストールした後で、そのシステムファイルを上書きせずに前のシステムの完全バックアップをリストアすることができます。
ファイルとディレクトリのすべての情報をリストアする	セキュリティ情報を含め、ファイルとディレクトリのすべての情報をリストアします。
ファイルとディレクトリのセキュリティ情報のみをリストアする	ファイルとディレクトリのセキュリティ情報のみをリストアします。他の情報はリストアされません。このオプションは、NTFS ボリュームでのみ有効です。このオプションを[ディスク上のファイルを上書きしない]オプションと一緒に選択した場合、情報はリストアされません。[常にディスク上のファイルを上書きする]オプションと[ディスク上のファイルの方が古い場合のみ上書きする]オプションとともにこのオプションを使うことができます。
ファイルとディレクトリのセキュリティ以外の情報をリストアする	セキュリティ情報を除き、ファイルとディレクトリのすべての情報をリストアします。このオプションは、NTFS ボリュームでのみ有効です。

項目	説明
破損ファイルのリストアする	<p>破損ファイルのリストアできます。Backup Exec でのリストア中に破損ファイルを自動的に除外しないようにする場合にのみ、このオプションを選択します。</p> <p>このオプションは、カタログの照会時にテープ上の破損ファイルを特定できなかったことが原因でジョブが失敗した場合に限り選択することをお勧めします。Backup Exec では、通常はリストアジョブの実行時にカタログを照会し、テープ上に破損ファイルが存在するかどうかを調べ、破損ファイルが存在する場合は、そのファイルをリストアジョブから除外します。破損ファイルの識別ができずにリストアジョブが中断した場合は、ジョブは失敗したもとして処理されます。自動的に破損ファイルを除外できない場合は、[リストア選択]ウィンドウで破損ファイルを手動で除外し、[破損ファイルのリストアする]オプションを使用してそのジョブを実行することができます。</p>
ツリー構造を保持する	<p>元のディレクトリ構造のまま、データをリストアします。デフォルトで、このオプションが選択されています。オフにした場合は、サブディレクトリ内のデータを含むすべてのデータが[宛先]オプションで指定したパスにリストアされます。</p> <p>メディア上に存在するサブディレクトリやファイルを個別に選択してリストアする場合には、[ツリー構造を保持する]チェックボックスをオフにします。ただし、ドライブ全体をリストアする場合は、オンにする必要があります。</p>

リストアジョブの[詳細]オプション

リストアジョブの次の[詳細]オプションを設定できます。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

表 14-8 リストアの[詳細]オプション

項目	説明
リムーバブル記憶域データベースをリストアする	<p>リムーバブル記憶域データベースをリストアします。リムーバブル記憶域データベースは、Systemroot\%System32%\Ntmsdata ディレクトリに格納されており、システムディレクトリをバックアップの対象として選択した場合は自動的にバックアップされます。</p> <p>リムーバブル記憶域は、リムーバブルディスクとリムーバブル記憶域デバイスの管理に使用するサービスで、複数のアプリケーションによる同一のメディアリソースへのアクセスおよび共有を可能にします。</p>

項目	説明
ディスククォータ設定をリストアする	<p>ディスククォータ設定をリストアします。ディスククォータ設定は、ボリュームの root ディレクトリをバックアップの対象として選択した場合は、自動的にバックアップされます。</p> <p>ディスククォータは、ユーザー別、ボリューム別にディスク使用率を監視および管理します。各値を、バックアップ前に設定した値にリストアすることができます。</p>
ターミナルサービスデータベースをリストアする	<p>ターミナルサービスデータベースをリストアします。ターミナルサービスデータベースは、デフォルトで Systemroot¥System32¥LServer ディレクトリに格納されており、システムディレクトリをバックアップの対象として選択した場合は自動的にバックアップされます。ターミナルサービスデータベースには、クライアントのライセンスデータが保存されています。</p> <p>ターミナルサービスを使用すると、サーバー上でクライアントアプリケーションを実行し、クライアントコンピュータを、独立したシステムではなく端末として使用することができます。</p>
Windows Management Instrumentation リポジトリをリストアする	<p>WMI (Windows Management Instrumentation) リポジトリをリストアします。WMI リポジトリは、Systemroot¥System32¥wbem¥Repository ディレクトリに格納されており、システムディレクトリをバックアップの対象として選択した場合は自動的にバックアップされます。</p> <p>Windows Management Instrumentation リポジトリを使用すると、システムリソースの監視と管理を行い、管理下の環境を総合的に表示することができます。</p>
クラスタオーラムをリストアする	<p>クラスタ構成をリストアします。</p> <p>p.825 の「Microsoft クラスタへのデータのリストアについて」を参照してください。</p>

項目	説明
他のノードがオンラインの場合および/あるいはディスク署名が一致しない場合でも、クラスタオーラムのリカバリを強制的に実行する	<p>クラスタ内の他のノードをオフラインにできない場合またはクラスタオーラムが存在していたディスクを変更した場合に、クラスタ構成をリストアします。このオプションを利用できるのは、Windows Server 2000/2003/2008 を実行しているコンピュータであり、さらに[クラスタオーラムをリストアする]が選択されている場合です。</p> <p>このオプションを選択すると、オンラインのすべてのノードのクラスタサービスが停止します。また、構成を変更するためにリストアメディア内のディスク署名がクラスタオーラム内のディスク署名と一致しない場合でも、ドライブ文字はクラスタオーラムが存在していたディスクのドライブ文字と同一に保つことができます。</p> <p>最後のバックアップ後に行ったクラスタオーラムへの変更内容はすべて失われます。</p>
ファイル複製サービスによって管理されているフォルダのリストア時またはシステム状態の SYSVOL のリストア時に、このサーバーを複製用のプライマリデータとしてマークする	<p>FRS 管理フォルダまたはシステム状態に含まれる SYSVOL のリストア時に、このサーバーをセット内のすべてのメンバーのプライマリレプリケータに指定します。</p> <p>複製セットのすべてのメンバーをリストアする場合は、複製を停止してすべてのメンバーサーバーをリストアし、最後のメンバーサーバーのリストア時にこのオプションを選択して、そのサーバーをプライマリレプリケータとして指定します。このオプションを選択しないと、複製が行われないことがあります。</p> <p>メモ: このバージョンの Backup Exec では、SYSVOL および FRS 管理フォルダのすべてのリストアは[権限のない復元]です。[権限のある復元]は、リストア先を変更し、ファイルをサーバーにコピーすることによってのみ実行することができます。[権限のある復元]の実行について詳しくは Microsoft のマニュアルを参照してください。</p>
管理対象メディアサーバーによる Remote Agent へのアクセスで、すべてのネットワークインターフェースを使用することを許可する	<p>管理対象メディアサーバーに委任またはコピーされたジョブで、Remote Agent へのアクセス時にすべてのネットワークインターフェースを使用することを許可します。このオプションは、Central Admin Server Option へのみ適用されます。デフォルトでは、集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーに委任またはコピーされたジョブは、管理対象メディアサーバーに設定されているネットワークおよびセキュリティ設定を使用します。このチェックボックスをオンにすると、管理対象メディアサーバーで指定されているネットワークが利用できない場合に、管理対象メディアサーバーは、代替ネットワークを使用して重要なジョブを実行することができます。</p>

項目	説明
既存のハードウェア構成とレジストリ情報をリストアするデータとマージする	既存のハードウェア構成とレジストリ情報を、リストアするデータとマージします。システム状態をリストアする場合にのみ、このオプションを使用してください。
既存のハードウェア構成とレジストリ情報をリストアするデータで上書きする	ハードウェア構成とレジストリ情報を、リストアするデータで上書きします。システム状態をリストアし、かつハードウェアが変更されていない場合にのみ、このオプションを使用してください。
バックアップメディアから、接合点、シンボリックリンク、ファイルおよびディレクトリをリストアする	<p>接合点の情報、シンボリックリンクの情報、およびリンク先のファイルとディレクトリをリストアします。このオプションを選択すると、既存の接合点またはシンボリックリンクは上書きされます。</p> <p>次のオプションのいずれかを選択して、接合点またはシンボリックリンクをバックアップしておく必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 接合点以下のファイルとディレクトリをバックアップする ■ シンボリックリンク以下のファイルとディレクトリをバックアップする <p>どちらのオプションも選択せずにバックアップした場合、元の接合点がドライブ文字の割り当てられていないマウントドライブにリンクしていた場合を除き、これらのファイルおよびディレクトリはリストアされません。</p> <p>p.335 の「バックアップジョブの[詳細]オプション」を参照してください。</p>
既存の接合点とシンボリックリンクを保持し、バックアップメディアからファイルとディレクトリをリストアする	<p>リストア先のコンピュータの現在の接合点およびシンボリックリンクを保持したまま、元の接合点およびシンボリックリンクからバックアップされたファイルとディレクトリをリストアします。このオプションは、現在の接合点およびシンボリックリンクが、バックアップメディアに格納されている接合点およびシンボリックリンクの情報によって上書きされることを回避します。</p> <p>このオプションを選択すると、メディアとリストア先のコンピュータの両方に同一の接合点、シンボリックリンク、またはディレクトリ名が存在する場合は、リストア先コンピュータの該当する接合点、シンボリックリンク、またはディレクトリにファイルとディレクトリがリストアされます。</p> <p>p.335 の「バックアップジョブの[詳細]オプション」を参照してください。</p>

項目	説明
リストアデーター時格納用の、メディアサーバーのローカル NTFS ボリューム上のパス	<p>リストアデータのための一時的なステージングエリアを作成します。</p> <p>このオプションは次の条件の個々の項目をリストアするときのみ適用可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Hyper-V、Microsoft Exchange、SharePoint、Active Directory および VMware Virtual Infrastructure のバックアップが Backup Exec Granular Recover Technology (GRT) に対して有効である。 ■ バックアップがテープにある。 ■ バックアップが NTFS ボリュームにではなく、ディスクへのバックアップフォルダにある。 <p>このメディアサーバー上の NTFS ボリュームのフォルダへのパスを入力します。この場所には、個々の項目がリストアされる際に、このジョブのリストアデータおよびメタデータが一時的に格納されます。ステージングされたデータは、リストアの完了後に自動的に削除されます。</p> <p>システムボリュームを一時ステージング場所として使用することはお勧めしません。</p> <p>必要なすべてのリストアジョブで使用できる場所を指定することもできます。</p> <p>p.627 の「リストアジョブのデフォルト設定」を参照してください。</p> <p>p.305 の「Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。</p>

リストアの [ネットワークとセキュリティ] オプション

ネットワークとセキュリティのオプションの変更によってリストアジョブのデフォルト設定を変更できます。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

表 14-9 リストアの[ネットワークとセキュリティ]オプション

項目	説明
ネットワークインターフェース	<p>リストアネットワークとして使用するネットワークに、メディアサーバーを接続するネットワークインターフェースカードの名前を指定します。ドロップダウンメニューには、メディアサーバーで利用可能なネットワークインターフェースカードがすべて表示されます。</p> <p>Central Admin Server Option (CASO) を使用している場合、管理対象メディアサーバーにデフォルトとして設定されているネットワークインターフェースカードを使用して、CASO の委任リストアジョブを処理するには、[管理対象メディアサーバーに対してデフォルトのネットワークインターフェースを使用する]オプションを選択します。</p>
プロトコル	<p>ネットワークプロトコルを指定します。</p> <p>次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 利用可能なプロトコルを使用する ■ IPv4 ■ IPv6
サブネット	<p>ネットワークインターフェースカードが所属しているサブネットを識別する 32 ビットの数値が表示されます。</p>
このネットワークインターフェース、サブネットまたはプロトコルをバインドできない Remote Agent には利用可能な任意のネットワークインターフェース、サブネットまたはプロトコルを使用する	<p>バックアップがリストアのために選択したリモートシステムが指定のリストアネットワークの一部でない場合に、リモートシステムからのデータが任意の利用可能なネットワークを介してバックアップされるか、またはリストアされるようにします。</p> <p>このチェックボックスをオフにすると、バックアップ元として選択したリモートシステムが、指定したリストアネットワークに接続されていない場合は、リモートシステムのデータをバックアップまたはリストアすることができないためジョブは失敗する可能性があります。</p>
インターフェースの詳細	<p>リストアネットワークとして選択したネットワークインターフェースのメディアアクセス制御 (MAC) アドレス、アダプタの種類、説明、IP アドレスおよびサブネット接頭辞を指定します。</p>

リストアジョブでのプリコマンドとポストコマンドの実行

リストアジョブの実行前または実行後にコマンドを実行したり、コマンドの条件を次のように設定することができます。

- プリコマンドが正しく実行された場合にのみジョブを実行する。
- プリコマンドが正しく実行された場合にのみポストコマンドを実行する。
- ジョブが失敗した場合でもポストコマンドを実行する。

- プリコマンドまたはポストコマンドの戻りコード (または終了コード) を確認し、コマンドが正しく完了したかどうかを調べる。プリコマンドまたはポストコマンドからオペレーティングシステムに終了コードとしてゼロが返された場合、**Backup Exec** では、そのコマンドが正しく完了したものとして処理されます。ゼロでない終了コードが返された場合は、コマンドの実行時にエラーが発生したものとして処理されます。

p.383 の「プリコマンドとポストコマンドについて」を参照してください。

p.384 の「プリコマンドとポストコマンドのデフォルト設定」を参照してください。

p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。

リストアジョブの実行前または実行後にコマンドを実行するように設定する方法

- 1 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[プリ/ポストコマンド]をクリックします。
- 2 必要に応じてオプションを設定します。

p.339 の「バックアップまたはリストアジョブで使用するプリコマンドとポストコマンド」を参照してください。

ファイルの権限設定のリストアについて

ここでは、ファイルのセキュリティに関係のある[セキュリティをリストアする]オプションを使用してデータをリストアする方法について説明します。このセキュリティ機能は、**NTFS** パーティションのみに適用されます。[セキュリティをリストアする]オプションを使用するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。

[セキュリティをリストアする]オプションを使用してデータをリストアするときに、ディスク上に存在するディレクトリのセキュリティ情報のすべてが、リストアするデータに割り当てられているセキュリティ情報で上書きされます。リストア元のディレクトリ構造の **root** ディレクトリから最後のレベルのディレクトリに至るまで、各ディレクトリのセキュリティ情報が更新されます。

次に例を示します。

ストレージメディアのデータ(ディスクのセキュリティを変更する前にバックアップした内容):

¥(root) に設定されているセキュリティ:Users /フルコントロール

¥Users に設定されているセキュリティ:Users /フルコントロール

¥User1 に設定されているセキュリティ:User1 /フルコントロール

DATA.TXT に設定されているセキュリティ:User1 /フルコントロール

ディスク上のデータ(最近変更されたディレクトリとファイルのセキュリティの内容):

¥(root) に設定されているセキュリティ:Users /読み取り

¥Users に設定されているセキュリティ:Users /変更

¥User1 に設定されているセキュリティ:User1 /フルコントロール

DATA.TXT に設定されているセキュリティ:User1 /フルコントロール

[セキュリティをリストアする]オプションを選択してリストアを実行すると、ディスク上のデータのセキュリティレベルは、次のようにバックアップ時の設定にリストアされます。

¥(root) に設定されているセキュリティ:Users /フルコントロール

¥Users に設定されているセキュリティ:Users /フルコントロール

¥User1 に設定されているセキュリティ:User1 /フルコントロール

DATA.TXT に設定されているセキュリティ:User1 /フルコントロール

[セキュリティをリストアする]オプションを選択せずにデータのリストアを実行すると、DATA.TXT のセキュリティは、リストア先ディレクトリの権限設定を継承します。この例では、User1 ディレクトリのフルコントロールのセキュリティレベルが継承されます。

p.600 の「リストアジョブの[一般]オプション」を参照してください。

システム状態について

[システム状態]を構成するシステム固有のデータには、レジストリ、COM+ クラス登録データベース、ブートファイル、システムファイルが含まれます。サーバーを認証サーバーとして使用している場合は、認証サービスデータベースも含まれます。サーバーがドメインコントローラの場合は、データには **Active Directory** サービスデータベースおよび **SYSVOL** ディレクトリも含まれます。[システム状態]のデータは、1 つの集合としてのみバックアップすることができます。ただし、**Active Directory Recovery Agent** を使用すると、個別のオブジェクトをリストアできます。

Active Directory をドメインコントローラであるコンピュータにリストアする場合は、コンピュータをセーフモードで起動し、[ディレクトリサービス復元モード]を使用してリストアを実行する必要があります。ターゲットコンピュータが[ディレクトリサービス復元モード]ではない場合は、[システム状態]をリストアすることはできません。ドメインコントローラではないサーバーに[システム状態]のデータをリストアする場合は、基本リストアを実行します。

ネットワーク内に複数のドメインコントローラが存在し、**Active Directory** を複製する必要がある場合は、**Active Directory** の[権限のある復元]を実行する必要があります。

Active Directory の[権限のある復元]を実行するには、[システム状態]データをリストアし、**Backup Exec** でのリストアジョブが完了した後、そのサーバーを再起動する前に、**Microsoft** の **Ntdsutil** ユーティリティを実行します。[権限のある復元]を実行すると、リストアしたデータがすべてのサーバーに正しく複製されます。[権限のある復元]と **Ntdsutil** ユーティリティについて詳しくは **Microsoft** のマニュアルを参照してください。

メモ: [システム状態]のバックアップは常に完全バックアップです。したがって、リストア時には[システム状態]の最新のバックアップをリストアする必要があります。[システム状態]のリストアジョブを途中でキャンセルしないでください。このジョブを途中でキャンセルすると、システムが使用できなくなることがあります。

p.610 の「[システム状態のリストア](#)」を参照してください。

システム状態のリストア

[システム状態]を構成するシステム固有のデータには、レジストリ、COM+ クラス登録データベース、ブートファイル、システムファイルが含まれます。サーバーを認証サーバーとして使用している場合は、認証サービスデータベースも含まれます。サーバーがドメインコントローラの場合は、データには **Active Directory** サービスデータベースおよび **SYSVOL** ディレクトリも含まれます。[システム状態]のデータは、1つの集合としてのみバックアップすることができます。ただし、**Active Directory Recovery Agent** を使用すると、個別のオブジェクトをリストアできます。

p.609 の「[システム状態について](#)」を参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.602 の [表 14-8](#) を参照してください。

p.874 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて](#)」を参照してください。

Backup Exec サービスを起動してドメインコントローラに[システム状態]データのローカルリストアを実行する方法

- 1 ターゲットサーバーを起動し、起動オプション指定画面で F8 キーを押して[ディレクトリサービス復元モード]オプションを選択します。
- 2 次のいずれかを実行します。

Windows 2000/2003 のサービスを起動する 次に示す順序で操作を実行します。

- [マイ コンピュータ]を右クリックします。
- [管理]をクリックします。
- [サービスとアプリケーション]を展開します。

Windows 2008 のサービスを起動する 次に示す順序で操作を実行します。

- [マイ コンピュータ]を右クリックします。
- [管理]をクリックします。
- [構成]を展開します。

- 3 [サービス]をクリックします。
- 4 表示される各 Backup Exec サービスに対して、次に示す順序で操作を実行します。
 - 右クリックしてショートカットメニューの[プロパティ]をクリックします。
 - [ログオン]タブをクリックし、[アカウント]をクリックしてローカル管理者権限のあるユーザーアカウントを入力して[OK]をクリックします。

- サービスを右クリックし、[開始]をクリックします。
- 5 すべての Backup Exec サービスを起動した後に、Backup Exec を起動し、[システム状態]をリストアします。[詳細]画面で次のオプションを設定します。ファイル複製サービスによって管理されているフォルダのリストア時またはシステム状態の SYSVOL のリストア時に、このサーバーを複製用のプライマリデータとしてマークする
- 6 システム状態をリストアする場合は、次のデータをリストアする前にシステムを再起動します。

シャドウコピーコンポーネントのリストアについて

Backup Exec のシャドウコピーコンポーネントファイルシステムでは、Microsoft のボリュームシャドウコピーサービスを使用して、Windows リソースに存在する、重要なオペレーティングシステムやアプリケーションサービスのデータ、およびサードパーティ製アプリケーションやユーザーのデータを保護します。

ライターとは、ボリュームシャドウコピーサービスのフレームワークを利用するアプリケーション内の特定のコードであり、オペレーティングシステムおよびアプリケーションの、特定時点へのリカバリ用として一貫性のとれたデータを提供します。ライターはシャドウコピーコンポーネントとして扱われますが、シャドウコピーコンポーネントは、バックアップ選択リストおよびリストア選択リストにリソースとして表示されます。Backup Exec シャドウコピーコンポーネントファイルシステムを展開すると、次の選択項目が表示されます。

表 14-10 Backup Exec シャドウコピーコンポーネント

項目	説明
システム状態ライター	システム状態ライターを使用してリストアを行います。 p.610 の「システム状態のリストア」を参照してください。
サービス状態ライター	サービス状態ライターを使用してリストアを行います。 p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。
ユーザーデータライター	ユーザーデータおよび Microsoft Hyper-V をリストアします。 p.1170 の「Hyper-V ホストへのデータのリストア」を参照してください。

Backup Exec のユーザーデータライターは、Active Directory Application Mode ライター (ADAM ライター) です。ADAM ライターを使用してデータをリストアする場合、リストアジョブが開始される前に、リストア対象の ADAM インスタンスのサービスが Backup Exec によって停止されます。ただし、リストアジョブが完了しても、ADAM サービスは再起動されません。これは、Adamutil.exe を使用して [権限のある復元] を実行する場合など、後処理ジョブが必要になる場合があるためです。したがって、手動で ADAM サービスを再起動する必要があります。Backup Exec が ADAM サービスを停止できない場

合、またはすべての ADAM ファイルをリストアできない場合、ADAM リストアは失敗します。

p.874 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて](#)」を参照してください。

p.625 の「[Windows Server 2003/2008 の Active Directory または Active Directory Application Mode でのリストア先の変更](#)」を参照してください。

ユーティリティパーティションのリストアについて

ユーティリティパーティションは、通常、Dell、Hewlett-Packard、IBM などの OEM ベンダーのディスクにインストールされている小さいパーティションであり、リストアの対象として選択することができます。ユーティリティパーティション内にはシステム診断ユーティリティや構成ユーティリティがインストールされており、通常はディザスタリカバリ時にリストアします。

ただし、次の場合は、通常のリストアジョブでもユーティリティパーティションのリストアを選択することができます。

- ユーティリティパーティション (パーティション内のデータを除く) がシステムに存在している。
- ユーティリティパーティションをリストアする権限がある。
- ユーティリティパーティションのデータのリストア先のシステムが、データをバックアップしたシステムと同一である。異なる場合は [リストア先の変更] によるリストアを行う必要があります。
p.612 の「[ユーティリティパーティションのリストア先の変更について](#)」を参照してください。
- リストアするユーティリティパーティションのベンダーが、バックアップしたユーティリティパーティションと同一のベンダーである。たとえば、Dell のユーティリティパーティションを Compaq のシステムにリストアすることはできません。
- データのリストア先のユーティリティパーティションのサイズが、バックアップしたユーティリティパーティションのサイズ以上である。

p.592 の「[リストアウィザードを使用したデータのリストア](#)」を参照してください。

p.615 の「[リストアするデータの選択について](#)」を参照してください。

ユーティリティパーティションのリストア先の変更について

ディザスタリカバリ時にシステム名が変更された場合は、[リストア先の変更] を使用してユーティリティパーティションをリストアする必要があります。また、クラッシュしたシステムを新システムに交換した場合も、[リストア先の変更] を使用してリストアを行う必要があります。この場合、交換後のシステムは、バックアップしたシステムと同一モデルである必要があります。

ユーティリティパーティションを[リストア先の変更]を使用してリストアするには、次の条件が満たされている必要があります。

- ユーティリティパーティション(パーティション内のデータを除く)がシステムに存在している。
- ユーティリティパーティションをリストアする権限がある。
- リストアするユーティリティパーティションのベンダーが、バックアップしたユーティリティパーティションと同一のベンダーである。たとえば、Dell のユーティリティパーティションを Compaq のシステムにリストアすることはできません。
- データのリストア先のユーティリティパーティションのサイズが、バックアップしたユーティリティパーティションのサイズ以上である。
- [リストア先の変更]を使用してリストアを行うシステムが同一製品の同一モデルであり、かつユーティリティパーティションをバックアップしたシステムと、ユーティリティパーティションのサイズが同一である。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.623 の「[\[ファイルのリストア先の変更\]リストアオプション](#)」を参照してください。

p.765 の「[手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。

別のバックアップソフトウェアで作成したメディアを使用したリストアについて

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

Backup Exec では NetWare SMS ボリュームバックアップの非 SMS ボリュームへのリストアがサポートされています。たとえば、Backup Exec for NetWare Servers または Novell の SBackup を使用してバックアップしたデータを、Windows メディアサーバーや別のネットワーク共有にリストアすることができます。

ARCserve メディアからのデータのリストアについて

ARCserve メディアからデータをリストアできます。

p.614 の「[ARCserve メディアからのデータのリストア](#)」を参照してください。

次の種類のデータは、ARCserve テープからリストアすることはできません。

- データベース (Microsoft SQL Server、Exchange Server、NetWare ディレクトリサービスなど)
- Windows レジストリ

- インターリーブファイル
- 圧縮ファイル
- 暗号化ファイル
- OS/2 ファイルのロングファイルネームと拡張属性
- Macintosh ファイルのロングファイルネームとリソースフォーク

ARCserve バックアップを格納しているメディアは上書きすることができます。ただし、バックアップの追記ジョブはサポートされません。Backup Exec のユーティリティジョブは、すべて ARCserve メディア上で実行することができます。

p.431 の「[メディアのインベントリの実行について](#)」を参照してください。

p.232 の「[新しいカタログの作成](#)」を参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.613 の「[別のバックアップソフトウェアで作成したメディアを使用したリストアについて](#)」を参照してください。

メモ: ARCserve バックアップが複数のテープにまたがっている場合は、その ARCserve バックアップに含まれているすべてのテープを用意する必要があります。ARCserve バックアップで作成した最初のテープからカタログ登録ジョブとリストアジョブの両方を開始します。

ARCserve メディアからのデータのリストア

ARCserve メディアからデータをリストアできます。

p.613 の「[ARCserve メディアからのデータのリストアについて](#)」を参照してください。

表 14-11 ARCserve メディアからのデータのリストア

手順	処理
1	ARCserve バックアップに含まれているすべてのテープについて、インベントリを実行します。 p.432 の「デバイス内のメディアのインベントリの実行」 を参照してください。

手順	処理
2	<p>ARCserve バックアップに含まれているすべてのテープのカタログを登録します。</p> <p>p.232 の「新しいカタログの作成」を参照してください。</p> <p>カタログ登録時に、読み取ることできたファイルフォーマットが表示されます。読み取ることでできなかったファイルは、カタログには表示されません。Backup Exec のカタログに表示される [メディアの説明] は、ARCserve によって使用されるセッション記述から取得されます。</p> <p>他社のバックアップ製品で作成したテープの場合は、メディア単位のカテゴリはサポートされません。このため、ARCserve テープのカタログ登録には、Backup Exec で作成したテープのカタログ作成よりも非常に長い時間を要します。</p>
3	<p>リストアするデータを選択して、サーバーまたはワークステーションにリストアします。</p> <p>p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。</p> <p>ARCserve が一部のシステムで使用している命名規則のために、Backup Exec の [ファイルのリストア先の変更] を使用してデータのリストア先を変更する必要がある場合があります。</p>

リストアするデータの選択について

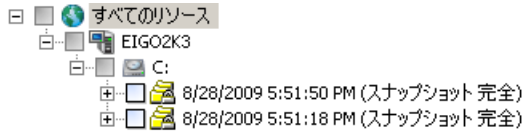
リストアジョブをセットアップするときに最初に行うことは、リストアするデータの選択です。リストアするデータは [リソース別の表示] タブまたは [メディア別の表示] タブから選択できます。

バックアップ選択ペインに表示されるアイコンのリストは次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-12>

[リソース別の表示] タブには、バックアップ元のリソース別にリストア選択項目が表示されます。

図 14-1 リソース別の表示



[メディア別の表示]タブには、バックアップセットが含まれるメディアを表すノードが表示されます。各ノードには、バックアップセットが含まれるメディアのメディアラベルが表示されます。

図 14-2 メディア別の表示



バックアップセットが複数のメディアにまたがっている場合、そのバックアップセットのノードには、すべてのメディアのメディアラベルが表示されます。バックアップセットはそのノードの下に表示されます。

メモ: True Image Restore の選択項目は、[メディア別の表示]タブには表示されません。True Image Restore の選択項目は、[リソース別の表示]タブに表示されます。

リソースまたはメディアの下位項目を表示するには、左端のプラス記号(+)をクリックし、ツリービューを展開します。ツリービューを省略するには、マイナス記号(-)をクリックします。

プラス記号(+)をクリックすると、そのリソースまたはメディアに含まれているバックアップセットが表示されます。バックアップセットのプラス記号(+)をクリックすると、そのバックアップに含まれているデータが表示されます。リソースからバックアップされたデータが、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの右側のペインに表示されます。このビューに表示されるのは、このサーバーにカタログまたはバックアップが存在するメディアのみです。別の Backup Exec システムでバックアップしたデータをリストアする場合は、まずそのメディアのカタログを登録する必要があります。

どちら側のウィンドウからでも、表示されているフォルダまたはサブフォルダをクリックし、表示する階層を変更することができます。

データを選択するには、リストアするドライブ、ディレクトリまたはファイルの左側に表示されているチェックボックスをオンにします。[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで[サブディレクトリを含める]を選択した場合、選択したディレクトリレベルとその下位のすべてのファイルおよびディレクトリがリストアジョブの対象として選択されます。

表示されるチェックボックスとそのマークは、選択した項目の状態によって異なります。

図 14-3 データの選択

グレー表示のチェックボックスに斜線が表示されている場合は、そのチェックボックスの項目自体は選択できないが、下位の項目に選択されているものがあることを示す

チェックボックス内のチェックマークは、このディレクトリまたはドライブレベルの項目またはその下位に存在するすべての項目が選択されていることを示す

チェックボックス内の斜線は、このディレクトリまたはドライブレベルの下位の項目に選択されているものがあることを示す

空白のチェックボックスは、その項目を選択することができていることを示す



p.588 の「[リストアジョブとカタログ](#)」を参照してください。

p.232 の「[新しいカタログの作成](#)」を参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

リストア選択リストの作成

リストア選択リストには、リストアするすべてのリソースが含まれます。

リストア選択リストを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[選択リストタスク]の下にある[新規リストア選択リスト]をクリックします。
- 3 選択リストに含めるリソースを選択します。
 p.617 の「[\[新規リストア選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 必要なオプションを選択します。
 p.617 の「[\[新規リストア選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 (オプション)リソースへのアクセスに使用するログオンアカウントを変更またはテストする場合は、[プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[リソースクレデンシャル]をクリックします。
 p.178 の「[\[ログオンクレデンシャルの編集\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

[新規リストア選択リスト]オプション

リストアするすべてのリソースが含まれているリストア選択リストを作成できます。

p.617 の「[リストア選択リストの作成](#)」を参照してください。

表 14-12 [新規リストア選択リスト]オプション

項目	説明
選択リスト	この選択リストの名前を指定します。Backup Exec が提供する名前を使うことができます。
既存の選択リストを使用する	既存の選択リストをロードします。複数の選択リストをマージする[既存の選択リストを使用する]オプションを使うことができます。 p.284 の「 選択リストのマージ 」を参照してください。
カタログの検索	リストアするファイルまたはその他の項目の検索や、特定のファイルのバックアップが存在するかどうかの確認を行うためにカタログを検索します。また、この機能を使用すると、特定のファイルについて、カタログに登録されたすべてのバージョンのバックアップを表示することができるため、必要に応じて古いバージョンをリストアすることもできます。そのファイルの複数のアーカイブが作成されていることを確認することもできます。その後、ファイルをバックアップして削除する方式を使用する完全バックアップジョブの実行によってファイルを削除できます。
インクルード/エクスルード	この選択リストに含めるファイル、またはこの選択リストから除外するファイルを選択します。
サブディレクトリを含める	選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。
ファイルの詳細を表示する	選択に利用可能なファイルの詳細を表示します。
プレビューペイン	ダイアログボックスの下部でプレビューペインを表示します。プレビューペインを削除するには、このチェックボックスをオフにします。
バックアップ開始日	[メディア別の表示]および[リソース別の表示]タブを選択した場合にのみ表示されます。日付範囲を有効にするには、日付の横のチェックボックスをオンにします。特定の日付範囲内にバックアップされたデータのカタログのみを表示するには、このフィールドに開始日付を入力し、[バックアップ終了日]フィールドに終了日付を入力します。
バックアップ終了日	[メディア別の表示]および[リソース別の表示]タブを選択した場合にのみ表示されます。日付範囲を有効にするには、日付の横のチェックボックスをオンにします。特定の日付範囲内にバックアップされたデータのカタログのみを表示するには、このフィールドに終了日付を入力し、[バックアップ開始日]フィールドに開始日付を入力します。
リソース別の表示	バックアップしたデータが、バックアップ元のリソース別に表示されます。この機能は、特定のサーバーやワークステーションに格納されているファイルを検索するのに便利です。
メディア別の表示	メディアに格納されているデータが表示されます。この機能は、別のメディアサーバーからバックアップしたメディアの内容を参照するのに便利です。

項目	説明
選択の詳細の表示	[リソース別の表示]タブまたは[メディア別の表示]タブのいずれかで選択したメディアの詳細が表示されます。表示される詳細には、メディアの作成日時、メディアラベルおよびメディアが属するバックアップセットが含まれます。

リストアジョブのリソースクレデンシャルの変更およびテスト

データのリストアに必要なログオンアカウントがデフォルトログオンアカウントと異なる場合は、[リソースクレデンシャル]ダイアログボックスを使用して変更することができます。このダイアログボックスは、リストア先変更のためのログオンアカウントの上書きにも使用することができます。また、ログオンアカウントを使用してリソースにアクセスできることを確認することもできます。

新しいリストアジョブを作成するときにデフォルトのリソースクレデンシャルを変更するか、またはテストできます。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

リストアジョブのリソースクレデンシャルを変更およびテストする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

ポリシーに関連付けされているジョブを使用する方法	[バックアップ選択リスト]ペインで、使用するジョブをクリックします。
ポリシーに関連付けされていないジョブを使用する方法	[ジョブ]ペインで、使用するジョブをクリックします。

- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[リソースクレデンシャル]をクリックします。
- 5 ログオンアカウントを変更するリソースを選択します。
- 6 [変更]をクリックします。
- 7 この選択項目へのアクセスに使用するログオンアカウントを選択するか、[新規]をクリックしてログオンアカウントを新規に作成します。

p.620 の「[\[ログオンアカウントの選択\]オプション](#)」を参照してください。

- 8 使用しているログオンアカウントで、リストアに選択したリソースにアクセスできることを確認するには、[すべてをテスト]をクリックします。

Backup Exec がリソースへの接続を試行している間、[テスト結果]列には[テストしています]と表示されます。テストの完了後、[テスト結果]列には[成功]、[未テスト]、エラーメッセージのいずれかが表示されます。[未テスト]は、ログオンアカウントのテストが実行されていないか、またはテストは実行されたが選択項目を含むサーバーにアクセスできなかったことを示します。

テストの完了には時間がかかる場合があります。ログオンアカウントのテストをキャンセルするには、[テストのキャンセル]をクリックします。

- 9 [OK]をクリックします。

[ログオンアカウントの選択]オプション

[ログオンアカウントの選択]ダイアログボックスは、次の理由で表示される場合があります。

- **Backup Exec** ログオンアカウントに、選択したリソースにアクセスするための十分な権限がない場合。
- バックアップジョブのログオンアカウントを変更するオプションを選択した場合。このダイアログボックスから、次のことを行えます。
 - リストされているいずれかの既存のログアカウントの選択。
 - 新しいログアカウントの作成。
 - 既存のログオンアカウントの編集。

リストアするファイルの検索

カタログを検索して、リストアに必要なファイルを簡単に探し出すことができます。特定のファイルのバックアップが存在するかどうかを確認することもできます。また、この機能を使用すると、特定のファイルについて、カタログが登録されたすべてのバージョンのバックアップを表示することができるため、必要に応じて古いバージョンをリストアすることもできます。そのファイルの複数のアーカイブが作成されていることを確認することもできます。その後、ファイルをバックアップして削除する方式を使用する完全バックアップジョブの実行によってファイルを削除できます。

リストアするファイルを検索する方法

- 1 編集メニューの[カタログの検索]をクリックします。
- 2 必要なオプションを設定します。

p.621 の「[\[カタログの検索\]オプション](#)」を参照してください。

- 3 [検索開始]をクリックします。
 検索を中止するには[検索終了]をクリックし、別のファイルを検索するには[新規検索]をクリックします。
 [カタログの検索]の結果ウィンドウが表示されます。[カタログの検索]の結果ウィンドウには、指定したファイルのすべてのバージョンのバックアップが表示されます。ファイルのプロパティを表示するには、そのファイルをダブルクリックします。
 ファイル名、サイズ、種類、修正日によってリストをソートするには、該当する列の見出しをクリックします。
- 4 リストアするファイルのバージョンのチェックボックスをオンにして、[適用]をクリックします。
- 5 通常のリストアジョブと同じ手順でこのジョブをサブミットします。
 必要なメディアがドライブに存在しない場合は、正しいメディアの挿入を要求するダイアログボックスが表示されます。

[カタログの検索]オプション

[カタログの検索]ダイアログボックスは2つのタブを含んでいます。[名前およびリソース]タブではファイルとメディアの情報を使用してデータを検索できます。[修正日]タブでは日付を使用してデータを検索できます。

[名前およびリソース]タブは次のオプションを含んでいます。

表 14-13 [名前およびリソース]オプション

項目	説明
ファイル名または項目名	<p>検索するファイルまたは項目の名前を指定します。検索先を特定のファイルに限定せず、すべてのファイルを検索する場合は、このフィールドを空白にします。</p> <p>ファイルの指定には、ワイルドカードを使用することができます。疑問符(?)を1文字の代わりに使用することができます。1つのアスタリスク(*)を任意の個数の文字の代わりに使用することができます。</p> <p>たとえば、拡張子が.exeのファイルをすべて選択するには、*.exeと入力します。</p>
パス	<p>検索するディレクトリを指定します。検索先を特定のディレクトリに限定せず、すべてのディレクトリを検索する場合は、このフィールドを空白にします。</p> <p>NetWare のカタログを検索する場合は、スラッシュ(/)を使用します。</p>

項目	説明
リソース	検索するサーバーおよび共有を指定します。検索先を特定のリソースに限定せず、すべてのリソースを検索する場合は、このフィールドを空白にします。
メディア	検索対象の、カタログの存在するメディアを指定します。[すべてのカタログされたストレージメディア]を選択してカタログ全体を検索することも、個別のメディアを選択して検索範囲を絞り込むこともできます。
ディレクトリの検索	[パス]または[ファイル名または項目名]のフィールドに表示されているディレクトリを検索します。
サブディレクトリを含める	[パス]フィールドに表示されているディレクトリの下にあるすべてのサブディレクトリを検索します。

[修正日]タブは次のオプションを含んでいます。

表 14-14 [修正日]のオプション

項目	説明
すべてのファイルまたは項目	すべてのファイルか項目を検索します。
次の期間に作成または修正されたすべてのファイルまたは項目の検索	指定した期間に作成または修正されたファイルまたは項目のみを検索します。
期間 x/x/x から x/x/x	検索に月、日、年を使用して特定の日付を指定します。
過去 x か月間	指定した過去の月数に検索を制限します。
過去 x 日間	指定した過去の日数に検索を制限します。

リストアジョブとメディアライブラリについて

Backup Exec のリストアジョブでのソースメディアへのアクセス順序は、マガジン内のメディアの順序とは関係ありません (ソースメディアがマガジンに格納されている場合)。たとえば、リストアジョブで指定したデータがマガジン内の 2 つのメディアにまたがって格納されていても、リストアジョブの実行時にそれらのメディアを連続したスロットにセットする必要はありません。Backup Exec ではメディアにランダムにアクセスすることができるため、メディアサーバーの管理に手間がかかりません。

ロボットライブラリまたはアクセス可能なストレージデバイス内にリストアジョブに必要なメディアが存在しない場合は、ジョブの実行に必要なメディアを要求するアラートが表示されます。

リストアジョブのリストア先の変更について

Backup Exec のデフォルトでは、データのリストア先はバックアップ元のリソースです。[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスを使用して、任意の保護対象サーバーまたは共有にリストア先を変更することができます。

p.623 の「[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション」を参照してください。

ライセンスがある Backup Exec エージェントによって保護される、SQL や Exchange などのデータベースファイルのリストア先を変更するには、タスクペインの[宛先]の下にあるエージェントのリストア先変更オプションを選択します。

p.625 の「Windows Server 2003/2008 の Active Directory または Active Directory Application Mode でのリストア先の変更」を参照してください。

p.625 の「ネイティブの Microsoft バーチャルハードディスク (VHD) ファイルへのリストア先の変更について」を参照してください。

p.1270 の「SQL Server のリストア先の変更」を参照してください。

p.1150 の「Exchange データのリストア先の変更」を参照してください。

p.1212 の「SharePoint 2003 のリストア先の変更」を参照してください。

p.1199 の「SharePoint 2007 のリストア先の変更」を参照してください。

p.1311 の「Oracle データのリストア先の変更」を参照してください。

p.958 の「DB2 データのリストア先の変更」を参照してください。

p.1021 の「Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更」を参照してください。

p.1365 の「VMware の仮想マシンのリストア先の変更」を参照してください。

p.1172 の「別のホストへの仮想マシンのリストア」を参照してください。

[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション

Backup Exec のデフォルトでは、データのリストア先はバックアップ元のリソースです。任意の保護対象サーバーか共有にリストアジョブのリストア先を変更できます。

p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。

表 14-15 [ファイルのリストア先の変更]リストアオプション

項目	説明
ファイルセットのリストア先を変更する	データのバックアップ元とは異なるパスかリソースを指定します。
リストア先ドライブ	データのリストア先を指定します。ローカルドライブとネットワークドライブを表示するには、[...]ボタンをクリックします。

項目	説明
サーバーのログオンアカウント	<p>サーバーが使用している現在のログオンアカウントを表示します。別のログオンアカウントに変更する場合は、[変更]をクリックし、目的のアカウントを選択するか作成します。</p> <p>p.181の「Backup Exec システムログオンアカウントの新規作成」を参照してください。</p> <p>このフィールドをクリアするには、[クリア]をクリックします。</p>
リストア先パス	<p>[リストア先ドライブ]フィールドに表示されているデバイス上のターゲットパスを指定します。元のディレクトリ構造を保持する場合は、[リストアジョブのプロパティ]の[設定]の[一般]ダイアログボックスで、[ツリー構造を保持する]オプションを選択する必要があります。[ツリー構造を保持する]オプションを選択しない場合は、すべてのデータが、このフィールドで指定したパスにリストアされます。</p>
パスのログオンアカウント	<p>ターゲットパスへのアクセスに必要なログオンアカウントを表示します。別のログオンアカウントに変更する場合は、[変更]をクリックし、目的のアカウントを選択するか作成します。このフィールドをクリアするには、[クリア]をクリックします。</p>
リストア先変更ファイル用に Microsoft バーチャルハードディスクを作成する (Windows Server 2008 R2 以降)	<p>リストア先を変更したデータから Microsoft 社の仮想ハードディスクファイルを 1 つ以上作成します。このオプションは Microsoft Windows Server 2008 R2 以上のコンピュータでのみ利用可能です。</p> <p>p.625の「ネイティブの Microsoft バーチャルハードディスク (VHD) ファイルへのリストア先の変更について」を参照してください。</p>
リストアされる各バックアップセット用に異なる Microsoft バーチャルハードディスクを作成する	<p>リストアするバックアップセットごとに Microsoft 社の仮想ハードディスクファイルを 1 つ作成します。</p>
リストア先を変更したすべてのバックアップセットからのマージされたファイルとフォルダを含む単一の Microsoft バーチャルハードディスクファイルを作成する	<p>Backup Exec がバックアップセットに含まれているすべてのファイルとフォルダをマージする Microsoft 社の仮想ハードディスクファイルを 1 つ作成します。</p>
ファイル名	<p>作成する Microsoft 社の仮想ハードディスクファイルの名前を指定します。</p>

ネイティブの Microsoft バーチャルハードディスク (VHD) ファイルへのリストア先の変更について

リストアジョブの宛先としてサポート対象のコンピュータを選択すると、ネイティブバーチャルハードディスク (VHD) にリストア先を変更できます。サポート対象のコンピュータには、Microsoft Windows 2008 R2 が実行されているコンピュータ、RAWS がインストールされている Windows 7 クライアントなどがあります。リストアジョブのリストア先をネイティブ VHD に変更する場合、Backup Exec はデータの保存につれて動的に拡張される VHD ファイルを作成します。ファイルはネイティブ VHD ファイルの最大サイズである 2040 GB に達するまで拡張されます。リストア先を変更したすべてのバックアップセットからのデータをマージする 1 つの VHD ファイルを作成できます。または各バックアップセットの VHD ファイルを作成できます。

p.623 の「[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション」を参照してください。

p.277 の「Backup Exec での Microsoft バーチャルハードディスク (VHD) ファイルの管理について」を参照してください。

Windows Server 2003/2008 の Active Directory または Active Directory Application Mode でのリストア先の変更

既存のドメインに新しい Windows サーバードメインコントローラをインストールするときに、Active Directory と SYSVOL データが、ドメイン内の既存のドメインコントローラから新しいドメインコントローラに複製されます。複製するデータが大量に存在する場合、またはドメインコントローラ間の接続が低速または断続的である場合は、複製に要する時間が長くなります。Active Directory Application Mode での複製に要する時間も、複製するデータの量および接続速度によって変わります。[メディアからのインストール]機能を使用して、Active Directory および Active Directory Application Mode の複製に要する時間を短縮することができます。

Active Directory の場合は、[メディアからのインストール]機能を使用して、新しいドメインコントローラを追加するドメイン内の、既存のドメインコントローラの[システム状態]をバックアップします。それから、バックアップした[システム状態]データのリストア先をターゲットのドメインコントローラに変更してリストアします。

Active Directory Application Mode の場合は、ADAM ライターを使用してデータをバックアップすることができます。それから、バックアップした ADAM データのリストア先をターゲットのシステムに変更してリストアします。

p.431 の「メディアのインベントリの実行について」を参照してください。

p.232 の「新しいカタログの作成」を参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

[メディアからのインストール]機能を使用して Active Directory をインストールする方法

- 1 ターゲットドメイン内のアクティブな Windows サーバードメインコントローラの [システム状態] を、通常の方法でバックアップします。
- 2 ターゲットドメインにインストールするシステムにメディアを移動します。
このメディアは、暗号化や保護が設定されていません。テープを暗号化することをお勧めします。ターゲットドメインへのメディアの移動は、十分に注意して行ってください。
- 3 メディアをロードしたドライブでインベントリを実行します。
- 4 メディアのカタログを登録します。
- 5 ターゲットシステム上のボリュームまたはディレクトリの一時的な場所にリストア先を変更して、[システム状態] のバックアップをリストアします。[プロパティ] ペインの [宛先] の下にある [ファイルのリストア先の変更] をクリックします。次に、リストア先の変更のオプションを選択します。

p.623 の「[\[ファイルのリストア先の変更\] リストアオプション](#)」を参照してください。

リストア先を変更してデータをリストアすると、リストアする [システム状態] の各データ用のサブディレクトリが作成されます。作成されるサブディレクトリは、Active Directory、SYSVOL、Registry、Boot Files、COM+ Class Registration Database、Certificate Server (インストールされている場合) および Cluster Quorum (インストールされている場合) です。Backup Exec は Windows Server 2008 のための自動システム回復も作成します。

- 6 ドメインコントローラのインストールを開始するには、ターゲットシステムの [スタート] をクリックし、[ファイル名を指定して実行] をクリックします。
- 7 `dcpromo /adv` と入力します。
- 8 [OK] をクリックします。
- 9 Active Directory インストールウィザードが表示されたら、[次へ] をクリックします。
- 10 [既存のドメインにドメインコントローラを追加する] を選択します。
- 11 [次へ] をクリックします。
- 12 [次のリストアされたバックアップファイルを使用する] を選択し、手順 5 で [システム状態] データをリストアした一時的な場所を入力します。
- 13 [次へ] をクリックします。
- 14 画面の指示に従って、Active Directory インストールウィザードでの操作を進めます。
- 15 ドメインコントローラのインストールを完了します。

- 16 新しいドメインコントローラをインストールしたシステムを再ブートします。
- 17 [システム状態]データのリストアに使用した一時的な場所を削除します。
詳しくは Microsoft のマニュアルを参照してください。

リストアジョブのデフォルト設定

[オプション-アプリケーションのデフォルトを設定]ダイアログボックスを使用して、すべてのリストアジョブに適用するデフォルトオプションを設定することができます。多くのリストアジョブで共通に使用する設定を指定します。個別のリストアジョブの設定は、このデフォルト設定より優先されます。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

リストアジョブのデフォルトを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]を選択します。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[リストア]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.627 の「[デフォルトのリストアオプション](#)」を参照してください。

デフォルトのリストアオプション

多くのリストアジョブで共通に使用するデフォルトのリストアオプションを指定します。

p.627 の「[リストアジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 14-16 デフォルトのリストアオプション

オプション	説明
常にディスク上のファイルを上書きする	リストア先リソース上に存在する、リストアされているファイルと同じ名前のファイルを上書きします。リストア先デバイス上に存在するファイルよりも古いバージョンのファイルをリストアするときのみ、このオプションを使用します。
ディスク上のファイルを上書きしない	リストア先のディスク上にリストアジョブに含まれるファイルと同じ名前のファイルが存在する場合、ファイルの上書きを行わずにディスク上のファイルを保持します。

オプション	説明
ディスク上のファイルの方が古い場合のみ上書きする	<p>ディスク上にリストアジョブに含まれるファイルと同じ名前のファイルが存在する場合、ディスクに存在するファイルの方が新しいときはファイルの上書きを行わずにそのファイルを保持します。</p> <p>このオプションは、システムの再構築に便利です。たとえば、リカバリするコンピュータにオペレーティングシステムをインストールした後で、そのシステムファイルを上書きせずに前のシステムの完全バックアップをリストアすることができます。</p>
破損ファイルのリストアする	<p>破損ファイルのリストアできます。Backup Exec でのリストア中に破損ファイルを自動的に除外しないようにする場合にのみ、このオプションを選択します。</p> <p>警告: [リストアの選択項目] ウィンドウに赤い X のマークが付いている破損ファイルは、不完全な可能性があります。破損したファイルのリストアすると、データが壊れることがあります。破損ファイルは元の場所にリストアせずに、リストア先を変更してリストアを行うことをお勧めします。</p>
バックアップメディアから、接合点、シンボリックリンク、ファイルおよびディレクトリをリストアする	<p>接合点の情報、シンボリックリンクの情報、およびリンク先のファイルとディレクトリをリストアします。このオプションを選択すると、既存の接合点は上書きされます。</p> <p>[接合点以下のファイルとディレクトリをバックアップする] チェックボックスをオフにして接合点をバックアップした場合は、元の接合点がドライブ文字の割り当てられていないマウントドライブにリンクしていた場合を除き、その接合点のリンク先のファイルおよびディレクトリはリストアされません。</p> <p>p.335の「バックアップジョブの[詳細]オプション」を参照してください。</p>

オプション	説明
既存の接合点とシンボリックリンクを保持し、バックアップメディアからファイルとディレクトリをリストアする	<p>現在のシステムの接合点を保持したまま、元の接合点のリンクおよびシンボリックリンクからバックアップされたファイルとディレクトリをリストアします。このオプションは、現在の接合点が、リストアに使用するバックアップメディアに格納されている接合点情報によって上書きされることを回避します。</p> <p>このオプションを選択すると、メディアとリストア先のシステムの両方に同一の接合点とディレクトリ名が存在する場合は、リストア先システムの該当する接合点またはディレクトリにファイルとディレクトリがリストアされます。</p> <p>リストア先のシステムにリストア元の接合点やディレクトリが同一の場所に存在しない場合または名前が異なる場合は、接合点の情報とリンク先のファイルおよびディレクトリがリストアされます。</p> <p>[接合点以下のファイルとディレクトリをバックアップする]チェックボックスをオフにして接合点をバックアップした場合は、元の接合点がドライブ文字の割り当てられていないマウントドライブにリンクしていた場合を除き、その接合点のリンク先のファイルおよびディレクトリはリストアされません。</p> <p>p.335の「バックアップジョブの[詳細]オプション」を参照してください。</p>

オプション	説明
<p>リストアデータ一時格納用の、メディアサーバーのローカル NTFS ボリューム上のパス</p>	<p>リストアデータのための一時的なステージングエリアを作成します。このオプションは次の条件の個々の項目をリストアするときのみ適用可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Exchange、SharePoint、および Active Directory のバックアップが Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) に対して有効である。 ■ バックアップがテープにある。 ■ バックアップが NTFS ボリュームではなく、ディスクへのバックアップフォルダにある。 <p>メモ: このオプションは Exchange Mailbox Archiving Option のアーカイブジョブにも適用されます。</p> <p>p.1375 の「Archiving Option の必要条件」を参照してください。</p> <p>このメディアサーバー上の NTFS ボリュームのフォルダへのパスを入力します。この場所には、個々の項目がリストアされる際に、リストアデータおよびメタデータが一時的に格納されます。</p> <p>システムボリュームを一時ステージング場所として使用することはお勧めしません。</p> <p>個々のジョブの場所を指定することもできます。</p> <p>p.602 の「リストアジョブの[詳細]オプション」を参照してください。</p> <p>p.305 の「Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。</p>

リストアジョブのキャンセル

リストアジョブを途中で中止した場合は、リストア先に使用できないデータが生成され、ドライブも使用できない状態になることがあります。これを避けるには、予備のターゲットにリストア先を変更し、リストアジョブが正常に完了したら、そのデータを目的のリストア先にコピーします。

[システム状態]のリストアジョブを途中でキャンセルしないでください。このジョブを途中でキャンセルすると、システムが使用できなくなることがあります。

リストアジョブをキャンセルする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブをクリックします。
- 3 [現在のジョブのフィルタ]ボックスで、[実行中のジョブ]をクリックします。
- 4 キャンセルするリストアジョブを選択します。

- 5 タスクペインの[実行中のジョブタスク]の下にある[キャンセル]をクリックします。
- 6 [はい]をクリックします。

アラートと通知

この章では以下の項目について説明しています。

- [アラートと通知について](#)
- [アラートビューについて](#)
- [アラートの表示](#)
- [アクティブアラートへの応答](#)
- [アラートカテゴリのプロパティの設定](#)
- [\[アクティブアラート\]ペインからのアラートの有効と無効の切り替え](#)
- [\[アラート履歴\]からのアラートの削除](#)
- [アラートの通知の設定](#)
- [\[受信者の設定\]のオプション](#)
- [通知用のアラートカテゴリの指定](#)
- [受信者に対するアラート通知の停止](#)
- [ジョブが完了したときの通知の送信](#)
- [選択リストがジョブで使われるときの通知の送信](#)
- [SNMP 通知について](#)
- [SNMP サービスのインストールおよび設定](#)
- [Windows Management Instrumentation パフォーマンスカウンタプロバイダのインストール](#)
- [Windows Management Instrumentation SNMP プロバイダのインストール](#)

- **Windows Management Instrumentation** パフォーマンスカウンタプロバイダのアンインストール
- **Windows Management Instrumentation SNMP** プロバイダのアンインストール

アラートと通知について

アラートとは、ユーザーに通知する必要がある、またはユーザーの応答を必要とする Backup Exec のイベントのことです。

アラートカテゴリとは、アラートの原因となる条件のことです。アラートカテゴリには、システム、ジョブ、メディアまたはデバイスのソースに影響を与える多くの環境または問題が含まれます。どのアラートカテゴリにも、アラートを生成するイベントが 1 つ以上存在します。たとえば、[ジョブ失敗]エラーが発生する原因はさまざまです。

各アラートカテゴリには、次に示すいずれかのアラートの種類があり、アラートの重大度またはユーザーの応答が必要かどうかを識別するのに役立ちます。

表 15-1 アラートの種類

項目	説明
要注意 	ジョブまたは操作の続行前に応答が必要な問題を示します。
エラー 	ジョブの処理またはバックアップの整合性に影響を与える問題を示します。
警告 	ジョブが失敗する原因になる可能性がある条件を示します。その条件を監視して、解決するための処理を行ってください。
情報 	確認が必要な条件に対する状態メッセージを表示します。

多くのアラートは有効になっています。ただし、アラートカテゴリのプロパティを編集して、表示するアラートを選択することができます。

p.648 の「アラートカテゴリのプロパティの設定」を参照してください。

アラートは、応答があるまで[アクティブアラート]ペインに保持されます。アラートには、手動で応答することも、**Backup Exec**を設定して一定期間経過後に自動的に応答することもできます。アラートの種類によっては、応答が必要ない場合もあります(情報アラートなど)。アラートに応答した場合は、**Backup Exec**によってそのアラートはアラート履歴に移動され、指定した期間または削除するまで保持されます。

p.643 の「アクティブアラートへの応答」を参照してください。

通知を設定して、アラートの発生時に受信者に通知することができます。たとえば、致命的アラートが発生した場合、電子メールまたは携帯電話のテキストメッセージを使用してバックアップ管理者に通知することができます。

p.651 の「アラートの通知の設定」を参照してください。

ハードウェアのトラブルシューティングを支援するため、**Backup Exec**では SCSI イベント ID 9(デバイスのタイムアウト)、11(コントローラのエラー)および 15(デバイスの準備未完了)に対するアラートが表示されます。

アラートビューについて

Backup Execには、[アクティブアラート]と[アラート履歴]というアラート用の2つのビューがあります。

[アクティブアラート]ビューには、システム内でアクティブなアラートが表示されます。[アラート履歴]ビューには、応答済みのアラートまたは自動的にシステムから削除されたアラートが表示されます。

Backup Execのデフォルトでは、有効なアラートがすべて表示されます。ただし、アラートビューでフィルタを選択し、ペインに表示するアラートの種類を限定することもできます。

p.638 の「アラートのフィルタ処理」を参照してください。

どちらのビューでも、アラートをダブルクリックすると、より詳細な情報を表示することができます。

p.640 の「アラートのプロパティの表示」を参照してください。

アラートをトラブルシューティングするには、ジョブログの表示が必要になる場合があります。ジョブログは、アクティブアラートまたは以前のアラートから表示することができます。

p.642 の「アラートのジョブログの表示」を参照してください。

画面の下のステータスバーには、アラートアイコンが表示されます。ステータスバーに表示されるアイコンは、最も重大なアクティブアラートの種類を示します。このアラートは、最新のアラートではない場合があります。

[アクティブアラート]ビューと[アラート履歴]ビュー

Backup Exec には、アラートのための 2 つのビューがあります。[アクティブアラート]と[アラート履歴]です。

p.635 の「アラートビューについて」を参照してください。

[アクティブアラート]ビューには次のプロパティが表示されます。

表 15-2 [アクティブアラート]ビューのオプション

項目	説明
種類	アラートの重大度を示します。迅速に応答する必要があるかどうかを判断するのに役立ちます。 次のアラートの種類が表示されることがあります： <ul style="list-style-type: none">■ エラー■ 警告■ 情報■ 要注意
カテゴリ	アラートの原因となった条件を示します。カテゴリには、[データベースの保守]、[一般情報]、[デバイスエラー]、[ジョブが失敗しました]が含まれます。
メッセージ	エラーメッセージのテキストを示します。
アラート受信日時	このアラートを受信した日時を表示します。
ジョブ名	アラートをトリガにしたジョブの名前を示します。この列は、一般情報アラートの場合などのようにアラートがジョブによってトリガされなかった場合は空白になります。
デバイス名	このアラートが発生したデバイスの名前を表示します。
サーバー名	このアラートが発生したサーバーの名前を表示します。
ソース	アラートの原因を示します。 アラートの発生元は、次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none">■ システム■ ジョブ■ メディア■ デバイス

[アラート履歴]ビューには次のプロパティが表示されます。

表 15-3 [アラート履歴]ビューのオプション

項目	説明
種類	アラートの重大度を示します。迅速に応答する必要があるかどうかを判断するのに役立ちます。 次のアラートの種類が表示されることがあります: <ul style="list-style-type: none">■ エラー■ 警告■ 情報■ 要注意
カテゴリ	アラートの原因となった条件を示します。カテゴリには、[データベースの保守]、[一般情報]、[デバイスエラー]、[ジョブが失敗しました]が含まれます。
メッセージ	エラーメッセージのテキストを示します。
アラート受信日時	このアラートを受信した日時を表示します。
ユーザー応答時刻	このアラートにユーザーが応答した日時を表示します。
応答したユーザー	アラートに回答したユーザーのユーザー ID を示します。
応答したコンピュータ	ユーザーがアラートへの応答に使用したコンピュータの名前を表示します。
ジョブ名	アラートをトリガにしたジョブの名前を示します。この列は、一般情報アラートの場合などのようにアラートがジョブによってトリガされなかった場合は空白になります。
デバイス名	このアラートが発生したデバイスの名前を表示します。
サーバー名	このアラートが発生したデバイスの名前を表示します。
ソース	アラートの原因を示します。 アラートの発生元は、次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none">■ システム■ ジョブ■ メディア■ デバイス

アラートの表示

[アクティブアラート]には、システム内でアクティブなアラートが表示されます。[アラート履歴]には、応答済みのアラートまたは自動的にシステムから削除されたアラートが表示されます。

アラートを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]タブまたは[アラート履歴]タブを選択します。

アラートのフィルタ処理

[アクティブアラート]ビューまたは[アラート履歴]ビューに表示されるアラートをフィルタにかけることができます。フィルタは、アラートの数が多く、特定の種類のアラートのみを表示する場合に便利です。また、アラートの種類別に[アラート履歴]をフィルタにかけて、これまでに生成されたアラートを迅速に検索することもできます。

p.638 の「[アラートのカスタムフィルタの作成](#)」を参照してください。

アラートをフィルタにかける方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]タブまたは[アラート履歴]タブをクリックします。
- 3 [フィルタ]フィールドで、表示するアラートの種類を選択します。
- 4 **Central Admin Server Option** がインストールされている場合は、[メディアサーバー]アラートフィルタを選択できます。その後、アラートを表示するメディアサーバーを選択します。

すべてのメディアサーバーのアラートを表示する場合は、[すべてのメディアサーバー]を選択します。

アラートのカスタムフィルタの作成

カスタムフィルタを作成して、さまざまな種類のアラートおよびアラートの原因であるソースを表示することができます。たとえば、デバイスとメディアソースから生成された要注意アラートおよびエラーアラートのみを表示するカスタムフィルタを作成することができます。

アラートのカスタムフィルタを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 次のいずれかのタブを選択します。
 - アクティブアラート
 - アラート履歴

- 3 タスクペインの[カスタムフィルタタスク]の下の[カスタムフィルタの管理]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックします。
- 5 フィルタの一意の名前と説明を入力します。
- 6 [プロパティ]ペインの[条件]の下にある[アラートの種類]をクリックします。
- 7 [このフィルタを有効にする]にチェックマークを付けます。
- 8 表示しないアラートの種類のチェックボックスをオフにします。
- 9 [プロパティ]ペインの[条件]の下にある[ソース]をクリックします。
- 10 [このフィルタを有効にする]にチェックマークを付けます。
- 11 フィルタ処理を行わないソースのチェックボックスをオフにします。
- 12 [プロパティ]ペインの[条件]の下にある[メディアサーバー]をクリックします。
- 13 フィルタをかけるメディアサーバーを選択します。
メディアサーバーがリストになければ、リストにそれを追加できます。
- 14 [プロパティ]ペインの[条件]の下にある[メディアサーバープール]をクリックします。
- 15 フィルタをかけるメディアサーバープールを選択します。
- 16 [OK]をクリックします。

アラートのカスタムフィルタの編集

カスタムフィルタは、いつでも変更することができます。

アラートのカスタムフィルタを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 次のいずれかのタブを選択します。
 - アクティブアラート
 - アラート履歴
- 3 タスクペインの[カスタムフィルタタスク]の下の[カスタムフィルタの管理]をクリックします。
- 4 編集するフィルタを選択します。
- 5 [編集]をクリックします。
- 6 カスタムフィルタオプションを編集します。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 [閉じる]をクリックします。

アラートのカスタムフィルタの削除

不要になったカスタムフィルタを削除できます。

アラートのカスタムフィルタを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 次のいずれかのタブを選択します。
 - アクティブアラート
 - アラート履歴
- 3 タスクペインの[カスタムフィルタタスク]の下の[カスタムフィルタの管理]をクリックします。
- 4 削除するフィルタを選択します。
- 5 [削除]をクリックします。
- 6 カスタムフィルタの削除を確認するダイアログボックスで、[はい]をクリックします。
- 7 [閉じる]をクリックします。

アラートのプロパティの表示

アラートのプロパティには、各アラートについての詳細情報が表示されます。アラートのプロパティに示される情報に加えて、カテゴリのプロパティも表示されます。[アラート履歴]に含まれるアラートの場合は、応答情報も表示されます。

アラートのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]または[アラート履歴]をクリックします。
- 3 [アクティブアラート]ペインまたは[アラート履歴]ペインから、アラートを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。

p.640 の「アラートのプロパティ」を参照してください。
- 5 アラートのプロパティの表示を終了するには、[OK]をクリックします。

アラートのプロパティ

アラートのプロパティには、各アラートについての詳細情報が表示されます。

p.640 の「アラートのプロパティの表示」を参照してください。

[アラートのプロパティ]ダイアログボックスに次の情報が表示されます。

表 15-4 アラートのプロパティ

項目	説明
カテゴリ	アラートのタイトルを表示します。
種類	アラートの重大度を示します。迅速に応答する必要があるかどうかを判断するのに役立ちます。 アラートの種類には、次のものがあります。 <ul style="list-style-type: none">■ エラー■ 警告■ 情報■ 要注意
サーバー	アラートが発生したメディアサーバーの名前を表示します。
デバイス	このアラートが発生したデバイスの名前を表示します。
ジョブ名	このアラートと関連のあるジョブの名前を表示します。
アラート受信日時	このアラートが発生した日時を表示します。
ソース	アラートの原因を示します。 アラートの発生元は、次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none">■ システム■ ジョブ■ メディア■ デバイス
SNMP トラップ ID	状態とエラー条件についての Backup Exec からの SNMP メッセージを一覧表示します。このメッセージを表示するには、SNMP をインストールする必要があります。
有効	このアラートを使用するかどうかを指定します。
通知の送信	このアラートの通知を送信するかどうかを指定します。このオプションを使用するには、受信者を設定する必要があります。
SNMP 通知を送信する	このアラートの SNMP 通知を送信するかどうかを指定します。このオプションを使用するには、SNMP をインストールする必要があります。
イベントログの記録	このアラートを Windows のイベントビューアに表示するかどうかを指定します。このアラートのプロパティ情報がすべて、Windows のイベントログに表示されます。 Windows のイベントログにリンクが表示された場合は、シマンテック社テクニカルサポートの Web サイトからイベント ID の情報を検索することができます。

項目	説明
イベント ID	Windows のイベントビューアで表示されるアラートの ID を表示します。
自動クリア x 日/時間/分後	このアラートをアクティブな状態で保持する時間を表示します。指定された時間が経過すると、このアラートはアラート履歴に移動されます。 要注意アラートについては、デフォルト応答を設定することができます。詳しくは Backup Exec ユーティリティのマニュアルを参照してください。
自動応答の内容	Backup Exec が自動的に送信する応答を一覧表示します。このオプションは、[メディアの上書き]および[メディアの挿入]アラートカテゴリでのみ利用できます。
ジョブログを添付する	通知が設定されている受信者にジョブログを送信します。このオプションが使用できるのは、電子メール通知またはプリンタ通知を設定した受信者に対してのみです。
応答したユーザー	このアラートに回答したユーザーの ID を表示します。
応答したコンピュータ	ユーザーが応答に使用したコンピュータの名前を表示します。
ユーザー応答時刻	このアラートにユーザーが応答した日時を表示します。
ユーザーの応答	アラートに対してユーザーが入力した応答を表示します。

アラートのジョブログの表示

ジョブログには、詳細なジョブ情報、デバイスとメディアの情報、ジョブオプション、ファイルの統計情報および完了ジョブのジョブ完了状態が記録されます。アラートが格納されている場所に応じて、アラートを生成したジョブのジョブログを[アクティブアラート]または[アラート履歴]から表示できます。

アラートからジョブログを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]または[アラート履歴]をクリックします。
- 3 [アクティブアラート]または[アラート履歴]のいずれかのペインから、ジョブログを表示するアラートを選択します。
- 4 次のいずれかの手順を実行します。
 - アラートが[アクティブアラート]にある場合は、タスクペインの[アラートタスク]の下にある[ジョブログを表示]をクリックします。
 - アラートが[アラート履歴]にある場合は、タスクペインの[アラート履歴タスク]の下にある[ジョブログを表示]をクリックします。

- 5 次のいずれかを実行します。
 - 特定の文字列を検索するには、[検索]をクリックします。検索する文字列を入力して、[次を検索]をクリックします。
ジョブログのすべてのセクションを展開していることを確認してください。検索機能では、ジョブログの展開されたセクションのみが検索されます。
 - ジョブログを印刷するには、[印刷]をクリックします。ログを印刷するには、プリンタがシステムに接続され、設定されている必要があります。
 - ジョブログを .html または .txt ファイルとして保存するには、[名前を付けて保存]をクリックして、ファイル名、ファイルの場所およびファイルの種類を指定します。
- 6 ジョブログの表示を終了するには、[OK]をクリックします。

アクティブアラートへの応答

アラートに応答し、アラート条件の内容によってジョブを続行またはキャンセルすることができます。Backup Exec のデフォルトでは、有効なアラートおよび応答が必要なアラートがすべて表示されます。フィルタを設定した場合は、応答が必要なすべてのアラートの他に、指定したアラートのみが表示されます。アラート条件が解決したアラートは、[アラート履歴]に移動されます。

アラートの応答ダイアログボックスで[閉じる]をクリックすると、ダイアログボックスは閉じますが、アラートはアクティブな状態を保持します。アラートをクリアし、そのアラートをアラート履歴に移動するには、[OK]、[はい]、[いいえ]、[キャンセル]などを選択する必要があります。

アラートカテゴリには自動応答を設定できます。

一部のアラートには、**Unique Message Identifier (UMI)** コードが表示されます。このコードは、シマンテック社テクニカルサポート **Web** サイトへのハイパーリンクです。アラートに関連する技術情報にアクセスできます。

p.644 の「[アラートカテゴリへの自動応答の設定](#)」を参照してください。

アクティブアラートへ応答する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。

- 3 応答するアラートを選択し、タスクペインの[アラートタスク]の下にある[応答]を選択します。
複数のアラートを選択した場合は、[すべてに[OK]を応答]をクリックすると、選択したアラートがクリアされ、アラート履歴に送られます。アラートが自動クリアされるには、[OK]の応答が必要です。
- 4 [OK]をクリックし、このアラートへ応答します。
p.647 の「アラートの応答オプション」を参照してください。

アラートカテゴリへの自動応答について

アラート自動応答ウィザードを使用して、次の操作を行うことができます。

- アラートをアクティブな状態で保持する期間の設定
- アラートに送信する応答の指定

次のアラートカテゴリに対して、アラート自動応答ウィザードを使用することができます。

表 15-5 アラート自動応答ウィザードのアラートカテゴリ

アラートカテゴリ	説明
ライブラリの挿入	[ライブラリの挿入]アラートでは、インポートコマンドを使用して、上書き可能なメディアをロボットライブラリに挿入するように要求されます。
メディアの挿入	[メディアの挿入]アラートでは、上書き可能なメディアをテープドライブに挿入するように要求されます。ほとんどのテープドライブでは、メディアの挿入時にその状態が Backup Exec にレポートされ、それによってアラートがクリアされます。一部のテープドライブでは、この状態が生成されないため、応答してアラートをクリアする必要があります。
メディアの上書き	[メディアの上書き]アラートは、メディアを上書きする前に確認を求めるよう [メディアの上書き禁止] が設定されている場合に表示されます。
メディアの削除	[メディアの削除]アラートでは、メディアがテープドライブから取り出されたことに肯定応答するように要求されます。ほとんどのテープドライブでは、メディアの取り出し時にその状態が Backup Exec にレポートされ、それによってアラートがクリアされます。一部のテープドライブでは、この状態が生成されないため、応答してアラートをクリアする必要があります。

p.644 の「アラートカテゴリへの自動応答の設定」を参照してください。

アラートカテゴリへの自動応答の設定

自動応答は、次のカテゴリのアラートが頻繁に発生し、アラートへの応答が常に同じ場合に便利です。

- ライブラリの挿入
- メディアの挿入
- メディアの上書き
- メディアの削除

p.644 の「アラートカテゴリへの自動応答について」を参照してください。

このウィザードを使用して設定した内容は、アラートカテゴリのプロパティを再設定すると上書きされます。

アラートカテゴリに自動応答を設定する方法

- 1 ツールメニューの[ウィザード]>[アラート自動応答ウィザード]をクリックします。
- 2 [アラート自動応答ウィザードによる]パネルで、[次へ]をクリックします。
- 3 [ライブラリの挿入カテゴリの設定]パネルで、必要なオプションを設定します。

自動的にクリアするまでの期間 アラートをクリアしてアラート履歴に移動するまで、そのアラートを表示する時間を選択します。このジョブが再びキューに入ると、アラートは[アクティブアラート]ビューに再び表示され、指定した時間が経過すると自動的にクリアされます。

自動応答の内容 このオプションは、[ライブラリの挿入]アラートカテゴリでは利用できません。

自動応答しない メディアがライブラリに追加されるまでアラートを[アクティブアラート]ビューに保持する場合に選択します。

- 4 [次へ]をクリックします。
- 5 [メディアの挿入カテゴリの設定]パネルで、必要なオプションを設定します。

自動的にクリアするまでの期間 アラートをクリアするまで、そのアラートを表示する時間を選択します。

自動応答の内容 次のいずれかを実行します。

- メディアが挿入されたことに肯定応答するには[はい]を選択します。
- 別のテープドライブでメディアの挿入操作を再試行するには[いいえ]を選択します(ジョブに複数のテープドライブが選択されている場合)。
- ジョブの実行をキャンセルするには[キャンセル]をクリックします。

自動応答しない メディアがテープドライブに追加されるまでアラートを[アクティブアラート]ビューに保持する場合に選択します。

- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 [メディアの上書きカテゴリの設定]パネルで、必要なオプションを設定します。

自動的にクリアする アラートを表示する時間を選択します。
までの期間

自動応答の内容 次のいずれかを実行します。

- メディアを自動的に上書きするには[はい]を選択します。
- 他のメディアで試行するには[いいえ]を選択します。
- このジョブの実行をキャンセルするには[キャンセル]をクリックします。

自動応答しない [OK]をクリックして肯定応答するまでアラートを[アクティブアラート]ビューに保持する場合に選択します。

- 8 [次へ]をクリックします。
- 9 [メディアの削除カテゴリの設定]パネルで、必要なオプションを設定します。

自動的にクリアする アラートをクリアしてアラート履歴に移動するまで、そのアラートを[アクティブアラート]ビューに表示する時間を選択します。
までの期間

自動応答の内容 このオプションは、[メディアの削除]アラートカテゴリでは利用できません。

自動応答しない [OK]をクリックして肯定応答するまでアラートを[アクティブアラート]ビューに保持する場合に選択します。

- 10 [次へ]をクリックします。
- 11 [アラート自動応答の概略]パネルを確認して、[次へ]をクリックします。
- 12 [アラート自動応答ウィザードの完了]パネルで、[完了]をクリックします。

[アクティブアラート]ペインからの情報アラートのクリア

情報アラートは、システム、ジョブ、メディアまたはデバイスで発生します。この種類のアラートは、デフォルトで、24 時間が経過すると[アラート履歴]に移動されますが、頻繁に発生して[アクティブアラート]ペインを埋め尽くしてしまうものもあります。このような情報アラートは、システムによって自動的に移動される前に、手動でクリアして[アラート履歴]ペインに移動することができます。

[アクティブアラート]ペインから情報アラートをクリアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[アラートタスク]の下にある[すべての情報アラートをクリア]を選択します。

アラートの応答オプション

アクティブアラートに応答し、アラート条件の内容によってジョブを続行またはキャンセルすることができます。

p.643 の「[アクティブアラートへの応答](#)」を参照してください。

表 15-6 アラートの応答オプション

項目	説明
カテゴリ名	アラートのタイトルを表示します。
メッセージ	このアラートの原因となったイベントと、このアラートへの応答方法の説明です。
詳しくはここをクリックしてください V-XXX-XXXXX	エラーに関連付けられた TechNote がある場合に表示されます。アルファベットの V で始まる Unique Message Identifier (UMI) をクリックします。これは青字のハイパーリンクとして表示されています。シマンテック社テクニカルサポート Web サイトにアクセスする新しいブラウザウィンドウが開きます。 コンピュータがインターネットにアクセスできない場合、別のコンピュータのブラウザウィンドウに次の URL を入力することができます。 <a href="http://entsupport.symantec.com/umi/<UMIコード>">http://entsupport.symantec.com/umi/<UMIコード>
サーバー名	このアラートが発生したコンピュータの名前を表示します。
デバイス名	このアラートが発生したデバイスの名前を表示します。
ジョブ名	このアラートと関連のあるジョブの名前を表示します。
時間	このアラートが発生した日時を表示します。
新規アラートを自動表示する	送信されたアラートを Backup Exec コンソールに自動的に表示します。このオプションを選択しない場合は、[アクティブアラート]ペインを使用してアラートに応答する必要があります。 メモ: 応答が必要なアラートは、常に Backup Exec のコンソールに表示されます。 p.184 の「 [ユーザー設定]のデフォルトの設定 」を参照してください。

項目	説明
ジョブログを表示	アラートをトリガしたジョブのジョブログを表示することを許可します。
カテゴリのすべてのアラートに自動的に応答してクリアする	このアラートに自動応答を送信することを許可します。応答が送信されるまでの待機時間を選択してから、応答を選択する必要があります。 p.644 の「アラートカテゴリへの自動応答の設定」を参照してください。

アラートカテゴリのプロパティの設定

アラートカテゴリを設定して、アラートの有効と無効を切り替えたり、アラートが発生したときに実行する処理を指定することができます。

また、他のオプションを設定しないですばやく[アクティブアラート]ペインからのアラートを有効または無効にできます。

p.650 の「[アクティブアラート]ペインからのアラートの有効と無効の切り替え」を参照してください。

多くのアラートはデフォルトで有効になっています。ただし、次のアラートカテゴリは最初は無効になっています。

- バックアップジョブにデータが存在しない
- ジョブの開始
- ジョブ成功

アラートの設定を変更すると、変更した内容が監査ログに常に記録されます。いつでも監査ログを表示して、アラートカテゴリの変更内容を確認することができます。

アラートカテゴリのプロパティを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[アラートタスク]の下にある[アラートカテゴリの設定]をクリックします。
- 4 [アラートカテゴリ]で、プロパティを表示または変更するアラートをクリックします。

同時に複数のアラートカテゴリのオプションを変更することができます。連続した複数のカテゴリを選択する場合は、最初のアラートをクリックし、<Shift> キーを押しながら最後のアラートをクリックします。複数のアラートカテゴリを個別に選択する場合は、<Ctrl> キーを押しながら各アラートをクリックします。

- 5 [カテゴリのプロパティ]で、必要なオプションを選択します。

p.649 の「[アラートカテゴリの設定]のオプション」を参照してください。

- 6 このプロパティをアラートに適用し、引き続き別のアラートの設定を行うには、[適用] をクリックします。
- 7 [アラートカテゴリの設定]ダイアログボックスを閉じるには[OK]をクリックします。

[アラートカテゴリの設定]のオプション

アラートカテゴリを設定して、アラートの有効と無効を切り替えたり、アラートが発生したときに実行する処理を指定することができます。

p.648 の「[アラートカテゴリのプロパティの設定](#)」を参照してください。

表 15-7 [アラートカテゴリの設定]のオプション

項目	説明
アラートカテゴリ	利用可能なカテゴリを一覧表示します。
アラート名	アラートのタイトルを表示します。このプロパティは表示されるだけで、編集することはできません。
このカテゴリのアラートを有効にする	アラートを有効または無効にします。エラーおよび要注意アラートを無効にすることはできません。 タスクペインでも、アラートを有効にすることができます。 p.650 の「 [アクティブアラート]ペインからのアラートの有効と無効の切り替え 」を参照してください。
選択した受信者に通知を送信する	アラートが起きたときに通知を送信します。このオプションを使用するには、受信者を設定する必要があります。 通知の受信者を設定するには、[受信者]をクリックする必要があります。 p.655 の「 [受信者の設定]のオプション 」を参照してください。
電子メールまたはプリンタ通知受信者への通知にジョブログを添付する	通知が設定されている受信者にジョブログを送信します。受信者が電子メール通知またはプリンタ通知を受信するように設定されている必要があります。
SNMP 通知を送信する	SNMP 通知を有効にします。このオプションを使用するには、SNMP をインストールする必要があります。 p.671 の「 SNMP 通知について 」を参照してください。
Windows のイベントログにイベントを記録する	Windows のイベントビューアにアラートを表示します。このアラートのプロパティ情報がすべて、Windows のイベントログに表示されます。 Windows のイベントログにリンクが表示された場合は、シマンテック社テクニカルサポートの Web サイトからイベント ID の情報を検索することができます。

項目	説明
自動クリア x 日/時間/分 後	アクティブな状態を保持する時間を指定できます。指定した時間が経過すると、このアラートは[アラート履歴]に移動されます。 要注意アラートについては、自動応答を設定することができます。 p.644 の「アラートカテゴリへの自動応答の設定」を参照してください。
自動応答の内容	このオプションは、[メディアの上書き]および[メディアの挿入]アラートカテゴリでのみ利用できます。自動的に送信する応答を指定します。[キャンセル]、[いいえ]、[はい]または[OK]から選択できます。

[アクティブアラート]ペインからのアラートの有効と無効の切り替え

[アラートカテゴリの設定]ダイアログボックスでアラートを設定する以外に、タスクペインから即座にアラートの有効と無効を切り替えることができます。エラーアラートと要注意アラートは、無効にできません。

p.648 の「アラートカテゴリのプロパティの設定」を参照してください。

[アクティブアラート]ペインでアラートの有効と無効を切り替える方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 [アクティブアラート]ペインで、有効と無効を切り替えるアラートを選択します。
- 4 タスクペインの[アラートタスク]の下にある[アラートカテゴリを有効にする]をクリックします。

[アラート履歴]からのアラートの削除

応答済みのアラートまたは自動的にシステムからクリアされたアラートは、[アラート履歴]に保持されます。表示から除外するようにフィルタが設定されているもの以外の、すべてのアラートが表示されます。アラートは、[データベースの保守]オプションで設定した期間または手動で削除されるまで、[アラート履歴]に保持されます。

[アラート履歴]からアラートを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アラート履歴]をクリックします。

- 3 削除するアラートを選択し、タスクペインの[アラート履歴タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 4 このアラートを削除する旨のメッセージを確認して、[はい]をクリックします。

アラートの通知の設定

アラートの発生時に受信者に通知するように **Backup Exec** を設定することができます。利用可能な通知方式は次のとおりです。

- SMTP 電子メールまたは携帯電話のテキストメッセージ
- MAPI 電子メール
- VIM 電子メール
- ページャ

プリンタおよび **Net Send** 通知方式を使用することもできます。その場合、受信者の作成および割り当て前に設定を行う必要はありません。各受信者に対して、1 つ以上の方式を使用できます。

表 15-8 アラートの通知を設定する方法

手順	処理
手順 1	<p>受信者への通知に使用する方式を設定します。</p> <p>p.652 の「SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージ通知の設定」を参照してください。</p> <p>p.653 の「MAPI 通知方式の設定」を参照してください。</p> <p>p.654 の「VIM 通知方式の設定」を参照してください。</p> <p>p.655 の「ページャ通知方式の設定」を参照してください。</p>
手順 2	<p>受信者を設定します。受信者は、個人、コンピュータ(コンソール)、プリンタまたはグループです。</p> <p>p.656 の「SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージの個人受信者の設定」を参照してください。</p> <p>p.657 の「MAPI メールの個人受信者の設定」を参照してください。</p> <p>p.659 の「VIM メールの個人受信者の設定」を参照してください。</p> <p>p.660 の「ページャの個人受信者の設定」を参照してください。</p> <p>p.662 の「Net Send の受信者の設定」を参照してください。</p> <p>p.664 の「プリンタ通知受信者の設定」を参照してください。</p> <p>p.665 の「グループ受信者の設定」を参照してください。</p>

手順	処理
手順 3	通知するアラートまたはジョブに受信者を割り当てます。 p.668 の「 通知用のアラートカテゴリの指定 」を参照してください。

SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージ通知の設定

SMTP 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、POP3 メールサーバーなどの、SMTP 準拠の電子メールシステムが必要です。

SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージ通知を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[通知システムの設定]をクリックします。
- 4 [SMTP 設定]タブで、[有効にする]をクリックします。
- 5 この通知方式に必要なオプションを選択します。
p.652 の「[\[SMTP 設定\]のオプション](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

[SMTP 設定]のオプション

SMTP 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、POP3 メールサーバーなどの、SMTP 準拠の電子メールシステムが必要です。

p.652 の「[SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージ通知の設定](#)」を参照してください。

表 15-9 [SMTP 設定]のオプション

項目	説明
有効にする	通知方式を有効にします。
SMTP メールサーバー	有効なユーザーアカウントを持つ SMTP メールサーバーの名前を表示します。Backup Exec では、サーバー名や電子メールアドレスの有効性のチェックは行われません。
SMTP ポート	デフォルトの標準 SMTP ポートが表示されます。通常は、このデフォルトポートを変更する必要はありません。
差出人名	送信者の名前を指定します。空白および特殊文字も使用できます。

項目	説明
差出人アドレス	通知メッセージの送信元ユーザーの電子メールアドレスを指定します。電子メールアドレスは、メールサーバーでユーザーを識別する名前、アットマーク(@)、メールサーバーのホスト名およびドメイン名で構成されている必要があります。たとえば、 <code>john.smith@company.com</code> です。 携帯電話の場合、電子メールアドレス形式で携帯電話の番号を入力します。たとえば、 <code>1231231234@mymobile.com</code> です。モバイルサービスプロバイダに、テキストメッセージ用の正しい電子メールアドレスを確認してください。
SMTP 認証の有効化	SMTP 認証を有効にします。SMTP 認証を有効にすると、送信者は SMTP 通知の送信先メールサーバーにログインできます。 SMTP 認証が正しく機能するには、Exchange Server の匿名アクセスおよび TLS 暗号化を無効にする必要があります。
SMTP サーバーログイン	SMTP メールサーバーの送信者のログイン名を指定します。
差出人パスワード	SMTP メールサーバーの送信者のパスワードを指定します。確認用のパスワードも入力する必要があります。Backup Exec では、サーバー名や電子メールアドレスの有効性のチェックは行われません。

MAPI 通知方式の設定

MAPI 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、Microsoft Exchange などの、MAPI 準拠の電子メールシステムが必要です。

Backup Exec をインストールした後に Microsoft Outlook をインストールした場合は、Backup Exec サービスを停止してから再起動する必要があります。これは、MAPI に関する設定を保存し、MAPI 電子メール通知が機能するようにするためです。

MAPI 通知方式を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの [アラート] をクリックします。
- 2 [アクティブアラート] をクリックします。
- 3 タスクペインの [通知タスク] の下にある [通知システムの設定] をクリックします。
- 4 [MAPI 設定] タブをクリックし、必要なオプションを設定します。
p.653 の「[MAPI 設定] のオプション」を参照してください。
- 5 [OK] をクリックします。

[MAPI 設定] のオプション

MAPI 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、Microsoft Exchange などの、MAPI 準拠の電子メールシステムが必要です。

p.653 の「[MAPI 通知方式の設定](#)」を参照してください。

表 15-10 [MAPI 設定]のオプション

項目	説明
有効にする	通知方式を有効にします。
MAPI メールサーバー	Exchange Server の名前を指定します。Backup Exec サービスアカウントがアクセスできる Exchange Server を指定する必要があります。 p.100 の「 Windows のセキュリティの変更について 」を参照してください。
差出人メールボックス名	John Smith など、通知メッセージの送信元メールボックスを示します。この名前は、メッセージの[送信者]フィールドに表示されます。完全なアドレスを入力する必要はありません。 Backup Exec サービスは、MAPI 通知で使われる Exchange メールボックスへの権限を持つドメインのアカウントで実行する必要があります。そうでない場合、MAPI の設定は保存されません。

VIM 通知方式の設定

VIM 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、VIM (Lotus Notes) 準拠の電子メールシステムが必要です。

VIM 通知方式を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[通知システムの設定]をクリックします。
- 4 [VIM 設定]タブをクリックし、必要なオプションを設定します。
p.654 の「[\[VIM 設定\]のオプション](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

[VIM 設定]のオプション

VIM 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、VIM (Lotus Notes) 準拠の電子メールシステムが必要です。

p.654 の「[VIM 通知方式の設定](#)」を参照してください。

表 15-11 [VIM 設定]のオプション

項目	説明
有効にする	通知方式を有効にします。

項目	説明
Notes クライアントディレクトリ	Notes クライアントの存在するディレクトリのパスを指定します。
メールパスワード	Notes クライアントとの接続に必要なパスワードを指定します。
メールパスワードの確認	Notes クライアントとの接続に必要なパスワードを指定します。確認するためにパスワードを再入力する必要があります。

ページャ通知方式の設定

ページャを使用してアラート通知を受信することができます。ページャ通知にはモデムが必要です。モデムがページングサービスと正しく通信できることを確認してください。ページャ通知を設定する前に、モデムとの互換性に関する情報をページングサービスにお問い合わせください。

ページャ通知方式を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[通知システムの設定]をクリックします。
- 4 [ページャ設定]タブをクリックし、[有効にする]を選択してこのアラート通知方式をアクティブにします。
- 5 [ページャ通知の送信に使用するモデムを選択してください]で使用するモデムを選択します。
Windows が認識したモデムのみが、リストボックスに表示されます。
- 6 [OK]をクリックします。

[受信者の設定]のオプション

受信者は、個人、Net Send、プリンタまたはグループです。受信者を設定するには、通知方式を選択し、制限事項を定義します。受信者のエントリを作成し、アラート、ジョブまたは選択リストに割り当てます。

通知先として定義できる受信者の種類は次のとおりです。

表 15-12 [受信者の設定]のオプション

項目	説明
個人	アラートの受信者として個人を設定することを許可します。設定対象ユーザーには、SMTP、MAPI、VIMまたはベージャなどの事前に定義された通知方式が必要です。なお、これらの通知方式を受信者に指定する前に、Backup Exec 側で通知方式を設定しておく必要があります。
Net Send	通知の受信者としてコンピュータを設定することを許可します。
プリンタ	通知の送信先に特定のプリンタを設定することを許可します。
グループ	個人、Net Send、その他のグループなど、複数の受信者をまとめたグループを設定することを許可します。

p.652 の「SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージ通知の設定」を参照してください。

p.668 の「通知用のアラートカテゴリの指定」を参照してください。

p.669 の「ジョブが完了したときの通知の送信」を参照してください。

p.279 の「選択リストについて」を参照してください。

SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージの個人受信者の設定

SMTP 通知方式を設定している場合は、SMTP による電子メールまたは携帯電話のテキストメッセージ通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージの個人受信者を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックし、[受信者の種類]ダイアログボックスが表示されたら、[個人]を選択して[OK]をクリックします。
- 5 [名前]フィールドに、設定する受信者の名前を入力します。
- 6 [SMTP メール]タブをクリックして、必要なオプションを設定します。
p.657 の「[SMTP メール]のオプション」を参照してください。
- 7 [OK]をクリックします。

[SMTP メール]のオプション

SMTP 通知方式を設定している場合は、SMTP による電子メールまたは携帯電話のテキストメッセージ通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

p.656の「SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージの個人受信者の設定」を参照してください。

表 15-13 [SMTP メール]のオプション

項目	説明
有効にする	受信者に対してこの通知方式を有効にします。
アドレス	電子メールの場合、通知メッセージの受信者の電子メールアドレスを指定します。たとえば、 <code>john.smith@company.com</code> です。 携帯電話の場合、電子メールアドレス形式で携帯電話の番号を指定します。たとえば、 <code>1231231234@mymobile.com</code> です。モバイルサービスプロバイダに、テキストメッセージ用の正しい電子メールアドレスを確認してください。
テスト	この受信者の通知の設定をテストすることができます。
有効にする	オプションを有効にします。
最大通知回数 x 回/通知回数をカウントする単位時間 x 分	指定時間(分)内に発生したすべてのアラートについて、受信者に送信する通知の合計数を指定します。指定した数の通知を送信した後は、指定した時間が経過するまで通知の送信は停止されず。指定可能な最大の期間は 1440 分 (1 日) です。
通知制限のリセット	通知制限をリセットするまでの待機時間を分単位で指定します。指定した時間が経過すると、送信した通知の数がゼロにリセットされます。
有効にする	このオプションを有効にすると、受信者が通知を受信する時間帯を設定できます。
スケジュール	受信者に通知を送信する曜日と時間帯を選択することができます。 p.665の「受信者への通知スケジュールの設定」を参照してください。

MAPI メールの個人受信者の設定

MAPI 通知方式を設定している場合は、MAPI 電子メール通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

MAPI メールの個人受信者を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックし、[受信者の種類]ダイアログボックスが表示されたら、[個人]を選択して[OK]をクリックします。
- 5 [名前]フィールドに、設定する受信者の名前を入力します。
- 6 [MAPIメール]タブをクリックして、必要なオプションを設定します。
p.658 の「[MAPIメール]のオプション」を参照してください。
- 7 [OK]をクリックします。

[MAPIメール]のオプション

MAPI 通知方式を設定している場合は、MAPI 電子メール通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

p.657 の「MAPIメールの個人受信者の設定」を参照してください。

表 15-14 [MAPIメール]のオプション

項目	説明
有効にする	受信者に対してこの通知方式を有効にします。
メールボックス	通知メッセージの受信者の電子メールアドレスまたはメールボックス名を指定します。たとえば、john.smith@company.com または John Smith です。
テスト	この受信者の通知の設定をテストすることができます。
有効にする (通知送信数の制限)	受信者に送信する通知の数を指定するオプションを有効にします。
最大通知回数 x 回/ 通知回数をカウントする単位時間 x 分 間	指定時間(分)内に発生したすべてのアラートについて、受信者に送信する通知の合計数を指定します。指定した数の通知を送信した後は、指定した時間が経過するまで通知の送信は停止されます。指定可能な最大の期間は 1440 分 (1 日) です。
通知制限のリセット	通知制限をリセットするまでの待機時間を分単位で入力します。指定した時間が経過すると、送信した通知の数がゼロにリセットされます。
有効にする (通知送信時間帯の制限)	受信者が通知を受信する時間帯を設定します。

項目	説明
スケジュール	受信者に通知を送信する曜日と時間帯を選択することができます。 p.665 の「 受信者への通知スケジュールの設定 」を参照してください。

VIM メールの個人受信者の設定

VIM 通知方式を設定した場合は、VIM 電子メール通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

VIM メールの個人受信者を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックし、[受信者の種類]ダイアログボックスが表示されたら、[個人]を選択して[OK]をクリックします。
- 5 [名前]フィールドに、設定する受信者の名前を入力します。
- 6 [VIM メール]タブをクリックして、必要なオプションを設定します。

p.659 の「[\[VIM メール\]のオプション](#)」を参照してください。

[VIM メール]のオプション

VIM 通知方式を設定した場合は、VIM 電子メール通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

p.659 の「[\[VIM メール\]の個人受信者の設定](#)」を参照してください。

表 15-15 [VIM メール]のオプション

項目	説明
有効にする	受信者に対してこの通知方式を有効にします。
アドレス	通知メッセージの送信先となる受信者の電子メールアドレスを指定します。 たとえば、JohnSmith@company.com です。
テスト	この受信者の通知の設定をテストすることができます。
有効にする (通知送信数の制限)	オプションを有効にします。

項目	説明
最大通知回数 x 回/ 通知回数をカウント する単位時間 x 分 間	指定時間(分)内に発生したすべてのアラートについて、受信者に送信する通知の合計数を指定します。指定した数の通知を送信した後は、指定した時間が経過するまで通知の送信は停止されます。指定可能な最大の期間は 1440 分 (1 日) です。
通知制限のリセット	通知制限をリセットするまでの待機時間を分単位で指定します。指定した時間が経過すると、送信した通知の数がゼロにリセットされます。
有効にする (通知送信 時間帯の制限)	このオプションを有効にすると、受信者が通知を受信する時間帯を設定できます。
スケジュール	受信者に通知を送信する曜日と時間帯を選択することができます。 p.665 の「 受信者への通知スケジュールの設定 」を参照してください。

ページの個人受信者の設定

ページによる通知方式を設定した場合は、ページによる通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

ページの個人受信者を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックし、[受信者の種類]ダイアログボックスが表示されたら、[個人]を選択して[OK]をクリックします。
- 5 [名前]フィールドに、設定する受信者の名前を入力します。
- 6 [ページ]タブをクリックし、必要なオプションを設定します。
p.660 の「[\[ページ\]のオプション](#)」を参照してください。
- 7 [ページの詳細情報]ダイアログボックスでページの詳細設定を行うには、[高度な設定]をクリックします。
p.661 の「[\[ページの詳細情報\]のオプション](#)」を参照してください。
- 8 [OK]をクリックして[詳細なページ情報]ダイアログボックスで設定した内容を保存し、さらに[OK]をクリックしてページの設定を保存します。

[ページ]のオプション

ページによる通知方式を設定した場合は、ページによる通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

p.660 の「[ページの個人受信者の設定](#)」を参照してください。

表 15-16 [ページ]のオプション

項目	説明
有効にする	受信者に対してこの通知方式を有効にします。
事業者電話	ページングサービスプロバイダのモデムにアクセスするための電話番号を指定します。ページングサービスの電話番号は、手でページを入力する番号とは異なる場合があります。
国/地域名およびコード	ページャを使用する国または地域の名前とコードを示します。
ページャ PIN	ページャ ID 番号 (PIN) を示します。PIN はページングサービスプロバイダによって提供されます。TAP サービスを使用する場合は PIN があります。ほとんどの場合、PIN はページャの電話番号の最後の 7 桁です。
高度な設定	ページャについて詳細設定を行うことができます。 p.661 の「 [ページャの詳細情報]のオプション 」を参照してください。
テスト	この受信者の通知の設定をテストすることができます。
有効にする (通知送信数の制限)	オプションを有効にします。
最大通知回数 x 回/ 通知回数をカウントする単位時間 x 分間	指定時間 (分) 内に発生したすべてのアラートについて、受信者に送信する通知の合計数を指定します。指定した数の通知を送信した後は、指定した時間が経過するまで通知の送信は停止されます。指定可能な最大の期間は 1440 分 (1 日) です。
通知制限のリセット	通知制限をリセットするまでの待機時間を分単位で指定します。指定した時間が経過すると、送信した通知の数がゼロにリセットされます。
有効にする (通知送信時間帯の制限)	このオプションを有効にすると、受信者が通知を受信する時間帯を設定できます。
スケジュール	受信者に通知を送信する曜日と時間帯を選択することができます。 p.665 の「 受信者への通知スケジュールの設定 」を参照してください。

[ページャの詳細情報]のオプション

ページャによる通知方式を設定した場合は、ページャによる通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

p.660 の「[ページの個人受信者の設定](#)」を参照してください。

表 15-17 [ページの詳細情報]のオプション

項目	説明
パスワード	必要に応じて、ページのパスワードを指定します。
メッセージの長さ	メッセージに使用する最大の文字数を指定します。ページングサービスプロバイダがこの最大数を決定します。
再試行回数	ページングサービスプロバイダがページの送信を試行する回数を指定します。ページングサービスプロバイダが回数を決定します。
数字	ページは数字のみを識別することを示します。
英数字	ページは英数字を識別することを示します。
モデムのボーレート	モデムの通信速度を指定します。表示される通信速度は、ページャサービスによって設定される制限値です。実際のモデムの速度には関係なく、適切な速度を選択します。
パリティ、データビット、ストップビット	通信プロトコルを指定します。通常は、Windows のデフォルトを使用します。

Net Send の受信者の設定

Net Send を設定して、ターゲットのコンピュータまたはユーザーに通知メッセージを送信することができます。

インターネットのポップアップ広告ブロックソフトウェアがターゲットコンピュータにインストールされている場合、Net Send 通知メッセージは表示されません。

Net Send の受信者を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックし、[受信者の種類]ダイアログボックスが表示されたら、[Net Send]を選択して[OK]をクリックします。

- 5 [Net Send 受信者プロパティ]ダイアログボックスで、必要なオプションを設定します。
p.663 の「[Net Send 受信者プロパティ]のオプション」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

[Net Send 受信者プロパティ]のオプション

Net Sendを設定して、ターゲットのコンピュータまたはユーザーに通知メッセージを送信することができます。

p.662 の「Net Send の受信者の設定」を参照してください。

表 15-18 [Net Send 受信者プロパティ]のオプション

項目	説明
名前	通知を受信する受信者の名前を示します。
ターゲットコンピュータまたはユーザー名	通知の送信先のコンピュータまたはユーザーの名前を示します。ユーザーがログオフすると Net Send メッセージがエラーとなるため、ユーザーよりもコンピュータの名前を入力することをお勧めします。 インターネットのポップアップ広告ブロックソフトウェアがターゲットコンピュータにインストールされている場合、Net Send 通知メッセージは表示されません。
すべてのコンピュータ	ネットワークのすべてのコンピュータに通知を送信します。
テスト	この受信者の通知の設定をテストすることができます。
有効にする (通知送信数の制限)	オプションを有効にします。
最大通知回数 x 回/通知回数をカウントする単位時間 x 分間	指定時間(分)内に発生したすべてのアラートについて、受信者に送信する通知の合計数を指定します。指定した数の通知を送信した後は、指定した時間が経過するまで通知の送信は停止されます。指定可能な最大の期間は 1440 分 (1 日) です。
通知制限のリセット	通知制限をリセットするまでの待機時間を分単位で指定します。指定した時間が経過すると、送信した通知の数がゼロにリセットされます。
有効にする (通知送信時間帯の制限)	このオプションを有効にすると、受信者が通知を受信する時間帯を設定できます。
スケジュール	受信者に通知を送信する曜日と時間帯を選択することができます。 p.665 の「受信者への通知スケジュールの設定」を参照してください。

プリンタ通知受信者の設定

インストールされているプリンタを、通知の受信者として選択することができます。ただし、Backup Exec では、ファックスプリンタデバイスはサポートされません。選択できるのは、Backup Exec サービスアカウントと同じユーザー名とパスワードを使用するように設定されているプリンタのみです。

プリンタ通知受信者を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックし、[受信者の種類]ダイアログボックスが表示されたら、[プリンタ]を選択して[OK]をクリックします。
- 5 [プリンタ受信者プロパティ]ダイアログボックスで、必要なオプションを設定します。
p.664 の「[\[プリンタ受信者プロパティ\]のオプション](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

[プリンタ受信者プロパティ]のオプション

インストールされているプリンタを、通知の受信者として選択することができます。ただし、Backup Exec では、ファックスプリンタデバイスはサポートされません。選択できるのは、Backup Exec サービスアカウントと同じユーザー名とパスワードを使用するように設定されているプリンタのみです。

p.664 の「[プリンタ通知受信者の設定](#)」を参照してください。

表 15-19 [プリンタ受信者プロパティ]のオプション

項目	説明
名前	通知を受信する受信者の名前を示します。通知の受信にファックスプリンタを使用することはできません。
ターゲットプリンタ	通知メッセージを送信するプリンタの名前を示します。
テスト	この受信者の通知の設定をテストすることができます。
有効にする(通知送信数の制限)	オプションを有効にします。
最大通知回数 x 回/ 通知回数をカウントする単位時間 x 分 間	指定時間(分)内に発生したすべてのアラートについて、受信者に送信する通知の合計数を指定します。指定した数の通知を送信した後は、指定した時間が経過するまで通知の送信は停止されます。指定可能な最大の期間は 1440 分(1 日)です。

項目	説明
通知制限のリセット	通知制限をリセットするまでの待機時間を分単位で指定します。指定した時間が経過すると、送信した通知の数がゼロにリセットされます。
有効にする(通知送信時間帯の制限)	このオプションを有効にすると、受信者が通知を受信する時間帯を設定できます。
スケジュール	受信者に通知を送信する曜日と時間帯を選択することができます。 p.665 の「 受信者への通知スケジュールの設定 」を参照してください。

グループ受信者の設定

受信者をグループのメンバーとして追加することによってグループを構成できます。グループには1つ(人)以上の受信者が含まれ、グループ内のすべての受信者に通知メッセージが送信されます。個人受信者、コンピュータ、プリンタおよびその他のグループを任意に組み合わせてグループを構成することができます。また、グループは、他のグループに追加できます。

グループ受信者を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックし、[受信者の種類]ダイアログボックスが表示されたら、[グループ]を選択して[OK]をクリックします。
- 5 [グループ名]フィールドに、通知の受信者グループの名前を入力します。
- 6 グループにメンバーを追加するには、追加する受信者を[すべての受信者]リストから選択し、[追加]をクリックしてその受信者を[グループメンバー]リストに移動します。
- 7 グループからメンバーを削除するには、削除する受信者を[グループメンバー]リストから選択し、[削除]をクリックしてその受信者を[すべての受信者]リストに移動します。
- 8 グループの作成が終了したら、[OK]をクリックします。

受信者への通知スケジュールの設定

受信者の設定中に、[通知送信時間帯の制限]オプションを使用して、通知メッセージを送信する曜日と時間帯を設定することができます。受信者の設定後に、受信者の通知プロパティを編集してこのスケジュールを修正することができます。

受信者の設定時に通知スケジュールを設定する方法

- 1 [受信者プロパティ]ダイアログボックスの[通知送信時間帯の制限]グループボックスの下にある[有効にする]をクリックします。

[受信者プロパティ]ダイアログボックスを表示するには、ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。[新規]をクリックして新しい受信者を作成するか、既存の受信者を選択して[プロパティ]をクリックします。
- 2 [スケジュール]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - 月曜日から金曜日までの午前 8:00 から午後 6:00 を除外するには、[平日の昼を含める]チェックボックスをオフにします。
 - 月曜日から金曜日までの午後 6:00 から午前 8:00 を除外するには、[平日の夜を含める]チェックボックスをオフにします。
 - 土曜日と日曜日の終日を除外するには、[週末を含める]チェックボックスをオフにします。

[平日の昼を含める]、[平日の夜を含める]、[週末を含める]を任意に組み合わせることができます。また、図中の時間をクリックして、その時間を含めるまたは除外することもできます。
- 4 必要な曜日と時間を選択した後、[OK]をクリックします。

受信者の通知プロパティの編集

いつでも受信者の通知プロパティを編集して、電子メールアドレス、電話番号およびスケジュールなどの受信者情報を変更することができます。

受信者の通知プロパティを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 編集する受信者を選択して、[プロパティ]をクリックします。
- 5 選択した受信者のプロパティを編集します。

[名前]フィールドの受信者名を除いて、任意のプロパティを編集することができます。受信者名を変更するには、新しい受信者を作成してから元の受信者を削除します。
- 6 [OK]をクリックします。

受信者への通知方式の編集

受信者の設定後に、新しい通知方式を設定したり、既存の通知方式を変更することができます。

受信者への通知方式を編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[アラートカテゴリの指定]をクリックします。
- 4 [受信者]で[設定]をクリックします。
- 5 通知方式のプロパティを編集します。
 - SMTP の設定:
p.652 の「[SMTP 電子メールまたは携帯電話テキストメッセージ通知の設定](#)」を参照してください。
 - MAPI の設定:
p.653 の「[MAPI 通知方式の設定](#)」を参照してください。
 - VIM の設定:
p.654 の「[VIM 通知方式の設定](#)」を参照してください。
 - ページャの設定:[有効にする]をクリックして、この通知方式を使用するかどうかを指定し、[モデム設定]のリストから使用するモデムを選択します。
- 6 [OK]をクリックします。

受信者の削除

通知メッセージを受信させないように、受信者を削除することができます。ただし、削除すると、その受信者のデータは永久に失われます。受信者のデータは保持しても、受信者に通知を受信させないようにするには、[受信者プロパティ]の[有効にする]のチェックボックスをオフにします。

受信者を削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[受信者の設定]をクリックします。
- 4 削除する受信者を選択して、[削除]をクリックします。

通知用のアラートカテゴリの指定

各アラートカテゴリにアラートの通知先を指定することができます。発生したアラートに応じて指定した通知受信者にアラート通知を送信します。また、アラート通知先の指定だけでなく、指定したアラートの通知先を解除したり、アラートカテゴリのプロパティを編集することができます。

アラートカテゴリを指定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[アラートカテゴリの指定]をクリックします。
- 4 [アラートカテゴリ]で、通知先を指定するアラートカテゴリをクリックします。
- 5 [受信者]で、通知先の受信者のチェックボックスをオンにします。[すべてを選択]ボタンをクリックすると、すべての受信者のチェックボックスを一度にオンにすることができます。
- 6 [OK]をクリックします。

[アラートカテゴリの指定]のオプション

各アラートカテゴリにアラートの通知先を指定することができます。

p.668 の「[通知用のアラートカテゴリの指定](#)」を参照してください。

表 15-20 [アラートカテゴリの指定]のオプション

項目	説明
アラートカテゴリ	受信者を割り当てることができるアラートカテゴリを一覧表示します。
プロパティ	選択したアラートカテゴリのプロパティを表示または変更することを許可します。
受信者	アラート通知の受信を割り当てることができる受信者を一覧表示します。
新規	新しい受信者を作成することを許可します。
削除	アラート通知を受信できる受信者のリストから受信者を削除することを許可します。 受信者を受信者リストから削除しないでアラートカテゴリから分離できます。 p.669 の「 受信者に対するアラート通知の停止 」を参照してください。

項目	説明
プロパティ	選択した受信者のプロパティを表示または変更することを許可します。
すべてを選択	選択したアラートカテゴリに、受信者リストにあるすべての受信者を割り当てることができることを許可します。すべての受信者は、選択したアラートカテゴリの通知を受信します。
設定	通知設定のプロパティを表示または変更することを許可します。

受信者に対するアラート通知の停止

受信者がもはやアラートカテゴリの通知を受信する必要がないときに、通知を停止できます。

受信者に対するアラート通知を停止する方法

- 1 ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックします。
- 3 タスクペインの[通知タスク]の下にある[アラートカテゴリの指定]をクリックします。
- 4 [アラートカテゴリ]で、受信者の通知を停止するアラートカテゴリを選択します。
- 5 [受信者]で、通知を停止する受信者のチェックボックスのチェックマークをはずします。
- 6 [OK]をクリックします。

ジョブが完了したときの通知の送信

ジョブが完了したときに通知される受信者を割り当てることができます。受信者は、通知を設定する前に設定されなければなりません。

ジョブが完了したときに通知を送信する方法

- 1 新しいジョブを作成するか、または既存のジョブを編集します。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
- 3 ジョブが完了したときに通知する受信者を選択します。

- 4 電子メールアドレスかプリンタに通知とともにジョブログを送信するには、[電子メールまたはプリンタ通知受信者への通知にジョブログを添付する]にチェックマークを付けます。
- 5 [プロパティ]ペインで他のオプションを続けて設定することもできます。

選択リストがジョブで使われるときの通知の送信

受信者は、通知を設定する前に設定されなければなりません。

選択リストがジョブで使われるときに通知を送信する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 [バックアップ選択リスト]ペインで、通知を送信する選択リストを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト別の通知]をクリックします。
- 5 選択リストがジョブで使われるときに通知を受信する受信者を選択します。
- 6 [OK]をクリックします。

ジョブの通知オプション

ジョブを設定するか、または編集するとき、そのジョブが完了するときに通知を受信する受信者を選択できます。選択リストを設定するか、または編集するとき、その選択リストがジョブで使われるときに通知を受信する受信者を選択できます。

表 15-21 ジョブの通知オプション

項目	説明
受信者の種類	個人、グループ、プリンタ、Net Send など、利用可能な受信者の種類を一覧表示します。
受信者名	受信者の名前を一覧表示します。
電子メールまたはプリンタ通知受信者への通知にジョブログを添付する	Backup Exec で通知が添付されたジョブログのコピーを含めることを可能にします。このオプションは、電子メール通知を受信するように設定されている個人受信者とプリンタ受信者にのみ適用されます。
プロパティ	選択した受信者のプロパティを表示または変更することを許可します。

SNMP 通知について

SNMP (簡易ネットワーク管理プロトコル) を使用して、ネットワークを中央から監視することができます。SNMP の使用可能なネットワークアプリケーション (Backup Exec など) は、SNMP コンソール (管理用ワークステーション) へのレポートを行います。コンソールは、状態とエラー条件についての SNMP メッセージ (トラップ) を Backup Exec から受信します。MIB は Backup Exec インストールメディアの WINNT¥SNMP¥language ディレクトリに格納されており、SNMP コンソールにロードすることができます。

Symantec のオブジェクト ID の接頭辞を次に示します。

1.3.6.1.4.1.1302

Backup Exec SNMP トラップ (メッセージ) は一意のオブジェクト ID を持ち、最大 4 つの文字列で構成されています。

次のトラップの種類がサポートされています。

表 15-22 SNMP トラップ

トラップの種類	オブジェクト ID	文字列 1	文字列 2	文字列 3	文字列 4
Product Start	1302.3.1.1.9.1	Backup Exec:アプリケーションの初期化	コンピュータ名	製品、バージョン、リビジョン	
Product Stop	1302.3.1.1.9.2	Backup Exec:アプリケーションの強制終了	コンピュータ名	製品、バージョン、リビジョン	
Job Canceled	1302.3.1.2.8.2	Backup Exec:オペレータによりジョブがキャンセルされました	コンピュータ名	ジョブ名	ローカルまたはリモートのオペレータ名
Job Failed	1302.3.1.2.8.1	Backup Exec:ジョブが失敗しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Storage device requires human intervention	1302.3.2.5.3.3	Backup Exec:バックアップデバイスの確認が必要です	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Robotic library requires human intervention	1302.3.2.4.3.3	Backup Exec:ロボットライブラリの確認が必要です。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ

トラップの種類	オブジェクト ID	文字列 1	文字列 2	文字列 3	文字列 4
Intelligent Disaster Recovery Message	1302.3.1.4.2.1.1	ディザスタリカバリディスクにあるディザスタリカバリファイル、(サーバー名).dr を代替パスに手動でコピーしてください	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Intelligent Disaster Recovery Message	1302.3.1.4.2.1.2	ディザスタリカバリ完全バックアップを完了しました。ディザスタリカバリディスクを最新の状態に保つために、今すぐ更新する必要があります	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Backup Exec system error	1302.3.1.1.9.3	アプリケーションにエラーが発生しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Backup Exec general information	1302.3.1.1.9.4	通常のイベント情報	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Job Success	1302.3.1.2.8.3	ジョブが成功しました	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Job Success with exceptions	1302.3.1.2.8.4	ジョブは成功しましたが、問題が発生しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Job Started	1302.3.1.2.8.5	ジョブが開始しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Job Completed with no data	1302.3.1.2.8.6	ジョブは成功しましたが、データが存在しませんでした。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Job Warning	1302.3.1.2.8.7	ジョブに警告が発生しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
PVL Device Error	1302.3.1.5.1.1.1	デバイスでエラーが発生しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
PVL Device Warning	1302.3.1.5.1.1.2	デバイスで警告が発生しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ

トラップの種類	オブジェクト ID	文字列 1	文字列 2	文字列 3	文字列 4
PVL Device Information	1302.3.1.5.1.1.3	通常のデバイス情報	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
PVL Device Intervention	1302.3.1.5.1.1.4	デバイスのチェックが必要です。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
PVL Media Error	1302.3.1.5.2.1.1	メディアにエラーが存在します。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
PVL Media Warning	1302.3.1.5.2.1.2	メディアに問題がある可能性があります。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
PVL Media Information	1302.3.1.5.2.1.3	通常のメディア情報	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
PVL Media Intervention	1302.3.1.5.2.1.4	メディアのチェックが必要です。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Catalog Error	1302.3.1.5.3.1.1	カタログにエラーが存在します。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Tape Alert Error	1302.3.1.5.4.1.1	TapeAlert エラーが存在します。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Tape Alert Warning	1302.3.1.5.4.1.2	TapeAlert 警告が存在します。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Tape Alert Information	1302.3.1.5.4.1.3	通常の TapeAlert 情報	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Database Maintenance Error	1302.3.2.5.5.1.1	データベース保守エラーが存在します。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Database Maintenance Information	1302.3.2.5.5.1.2	通常のデータベース保守情報	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Software Update Error	1302.3.2.5.6.1.1	ソフトウェア更新エラーが発生しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Software Update Warning	1302.3.2.5.6.1.2	ソフトウェア更新警告が発生しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Software Update Information	1302.3.2.5.6.1.3	通常のソフトウェア更新情報	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ

トラップの種類	オブジェクト ID	文字列 1	文字列 2	文字列 3	文字列 4
Install Update Warning	1302.3.2.5.7.1.1	インストール警告が発生しました。	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ
Install Update Information	1302.3.2.5.7.1.2	通常のインストール情報	コンピュータ名	ジョブ名	詳細メッセージ

p.674 の「[SNMP サービスのインストールおよび設定](#)」を参照してください。

SNMP サービスのインストールおよび設定

SNMP クライアントで Backup Exec トラップを受信するには、SNMP サービスのプロパティを使用してトラップ送信先を設定する必要があります。

SNMP は、インストール後に自動的に開始されます。この手順を実行するには、Administrator または Administrators グループのメンバーとしてログオンしている必要があります。コンピュータがネットワークに接続されている場合は、ネットワークポリシーの設定によって、この手順を実行できないことがあります。

Windows 2000 および Windows Server 2003 に SNMP サービスをインストールして設定し、SNMP クライアントにトラップを送信する方法

- 1 [スタート]をクリックし、[設定]をポイントして[コントロール パネル]をクリックし、[プログラムの追加と削除]をダブルクリックします。
- 2 [Windows コンポーネントの追加と削除]を選択します。
- 3 [Windows コンポーネントの追加と削除]から[管理とモニタツール]を選択し、[詳細]をクリックします。

コンポーネントの選択時に、チェックボックスのオンまたはオフ設定を変えないでください。

- 4 [簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP)]を選択して[OK]をクリックします。
- 5 [次へ]をクリックします。

Windows Management Instrumentation パフォーマン スカウンタプロバイダのインストール

Windows Management Instrumentation (WMI) は、システムリソースの監視と制御を行うためのインフラストラクチャです。Backup Exec には、手動でインストールし WMI と併用することのできるパフォーマンスカウンタと SNMP プロバイダが用意されています。

WMI パフォーマンスカウンタプロバイダをインストールする方法

- 1 Backup Exec インストールメディアを挿入します。
- 2 コマンドプロンプトに次の行を入力します。

```
mofcomp <CD Drive Letter>:%winnt%\wmi\backupexecperfmon.mof
```

Windows Management Instrumentation SNMP プロバイダのインストール

Windows Management Instrumentation (WMI) は、システムリソースの監視と制御を行うためのインフラストラクチャです。Backup Exec には、手動でインストールし WMI と併用することのできるパフォーマンスカウンタと SNMP プロバイダが用意されています。

WMI SNMP プロバイダを使用するには、SNMP 通知を設定する必要があります。

WMI SNMP プロバイダをインストールする方法

- 1 Backup Exec に含まれている SNMP プロバイダをインストールする前に、Microsoft SNMP プロバイダをシステムにインストールする必要があります。

詳しくは Microsoft のマニュアルを参照してください。

- 2 Backup Exec インストールメディアを挿入します。
- 3 コマンドプロンプトに次の行を入力します。

```
mofcomp <CD Drive Letter>:%winnt%\wmi\snmp\eng\bkuexecmib.mof
```

Windows Management Instrumentation パフォーマンスカウンタプロバイダのアンインストール

Windows Management Instrumentation (WMI) パフォーマンスカウンタプロバイダおよび WMI SNMP プロバイダを個別にアンインストールする必要があります。

WMI パフォーマンスカウンタプロバイダをアンインストールする方法

- ◆ コマンドラインに次の行を入力します。

```
mofcomp <CD Drive  
Letter>:%winnt%\wmi\deletbackupexecperfmon.mof
```

Windows Management Instrumentation SNMP プロバイダのアンインストール

Windows Management Instrumentation (WMI) パフォーマンスカウンタプロバイダおよび WMI SNMP プロバイダを個別にアンインストールする必要があります。

WMI SNMP プロバイダをアンインストールする方法

- ◆ コマンドラインに次の行を入力します。

```
Smi2smir /d Backup_Exec_MIB
```

Backup Exec のレポート

この章では以下の項目について説明しています。

- Backup Exec のレポートについて
- レポートのリストの表示
- レポートの実行
- 標準レポートの追加設定
- レポートの作成に利用可能なグループ
- 新しいレポートジョブの実行
- レポートの保存
- 新しい場所へのレポートの保存
- Backup Exec レポートビューアからのレポートの印刷
- PDF 形式で保存されているレポートの印刷
- HTML 形式で保存されているレポートの印刷
- [ジョブ履歴]からのレポートの削除
- レポートジョブのスケジュール設定および通知受信者の設定について
- Backup Exec のカスタムレポートについて
- カスタムレポートの作成
- カスタムレポートのフィルタの設定
- カスタムレポートのコピー
- カスタムレポートの編集

- [カスタムレポートの削除](#)
- [レポートのデフォルトオプションの設定](#)
- [レポートのプロパティの表示](#)
- [利用可能なレポート](#)

Backup Exec のレポートについて

Backup Exec には、システムの詳細情報を表示する標準レポートが用意されています。多くのレポートの生成時に、フィルタパラメータや日数、時間などの範囲を設定し、レポートに含めるデータを絞り込むことができます。指定したレポートをただちに実行して表示することも、レポートを[ジョブ履歴]ペインに保存する新規ジョブを作成することもできます。また、各レポートの一般的なプロパティを表示することも可能です。

また、次の機能が提供されています。

- [指定した日時または指定した周期でのレポートの実行](#)
- [Backup Exec の通知を使用したレポートの配信](#)

複数のメディアサーバー間でレポートを実行するには、共有ストレージ環境で使用していない場合でも、**Backup Exec SAN Shared Storage Option** をインストールする必要があります。

レポートは次のファイル形式で表示および印刷できます。

- PDF
- HTML
- XML
- Microsoft Excel (XLS)
- Comma Separated Value (CSV)

Backup Exec に統合されているレポートを正しくフォーマットするには、Windows の[コントロールパネル]の[プリンタ]アイコンを使用し、デフォルトプリンタを設定しておく必要があります。システムにプリンタが接続されていない場合でも、この設定は必要です。

Windows の[コントロールパネル]の[プリンタ]アイコンを使用したプリンタの設定については、Microsoft の Windows のマニュアルを参照してください。

p.679 の「[レポートのリストの表示](#)」を参照してください。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

p.686 の「[レポートジョブのスケジュール設定および通知受信者の設定について](#)」を参照してください。

p.710 の「[利用可能なレポート](#)」を参照してください。

レポートのリストの表示

利用可能なレポートのリストを表示するには、次の手順を実行します。

p.678 の「[Backup Exec のレポートについて](#)」を参照してください。

レポートのリストを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 [レポート]ペインで、[すべてのレポート]をクリックします。
- 3 利用可能なレポートのリストをソートするには、ソートする列の見出しをクリックします。

レポートの実行

レポートの実行時に、条件を指定し、レポートに表示する項目を絞り込むことができます。指定可能な設定 (パラメータ) は、レポートに表示するデータの種類によって決まります。レポートを生成すると、指定した条件に一致する項目のみが表示されます。

p.683 の「[レポートの保存](#)」を参照してください。

p.684 の「[Backup Exec レポートビューアからのレポートの印刷](#)」を参照してください。

p.686 の「[レポートジョブのスケジュール設定および通知受信者の設定について](#)」を参照してください。

p.710 の「[利用可能なレポート](#)」を参照してください。

レポートを実行する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 [レポート]ペインから、実行するレポートを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下から[レポートを作成]を選択します。
- 4 [レポートの作成]が表示されたら、適切な設定またはフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータを絞り込みます。

そのレポートで利用可能なフィルタパラメータのみが表示されます。必要なオプションを選択します。

p.680 の「[標準レポートの追加設定](#)」を参照してください。

- 5 [今すぐ実行]をクリックします。
レポートが表示され、レポート実行時に指定した条件に基づいてデータが表示されます。
- 6 レポートの表示を終了するには、[OK]をクリックします。
Backup Exec はレポートビューアを閉じるときにレポートを自動的に削除します。

標準レポートの追加設定

レポートを実行するか、または新しいレポートを作成するときに追加のレポート設定を設定できます。そのレポートで利用可能な設定のみが表示されます。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

次の表はレポートに設定できる設定を記述したものです。

表 16-1 標準レポートの追加設定

項目	説明
メディアセット	レポートに表示するデータを、メディアセットに基づいて絞り込みます。メディアセットには、ストレージデバイスに挿入されているすべてのメディアが含まれています。
メディアサーバー	レポートに表示するデータを、メディアサーバーに基づいて絞り込みます。メディアサーバーとは Backup Exec がインストールされているサーバーです。この設定は、SAN Shared Storage Option が有効な場合のみ利用できます。
ジョブ状態	レポートに表示するデータを、ジョブの状態に基づいて絞り込みます。
保護対象サーバー	レポートに表示するデータを、保護対象サーバーの名前に基づいて絞り込みます。保護対象サーバーとは、バックアップされているサーバーのことです。
ボルト	レポートに表示するデータを、ボルト名に基づいて絞り込みます。メディアボルトとは、メディアの物理的な所在を仮想的に表現した概念です。 p.235 の「 メディアの場所およびメディアボルト 」を参照してください。

項目	説明
範囲	<p>レポートに表示するデータを、時間範囲に基づいて絞り込みます。利用可能な範囲パラメータが存在しない場合は、このパラメータを選択することができません。</p> <p>選択可能な範囲パラメータまたはオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [日数]。日付フィルタを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> - [レポートを実行するまでの日数]。本日より何日前のデータから、レポートに表示するデータにフィルタを適用するかを日数で指定します。入力可能な日数の範囲は、0 - 32,000 です。 - [レポートを実行してからの日数]。本日より何日後のデータから、レポートに表示するデータにフィルタを適用するかを日数で指定します。入力可能な日数の範囲は、0 - 32,000 です。 ■ [時間]。時間フィルタを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> - この時間内にレポートを実行する: 現時点より何時間前または何時間後から、レポートに表示するデータにフィルタを適用するかを時間数で指定します。指定可能な時間数は、生成するレポートの種類によって決まります。入力可能な時間の範囲は、0 - 32,000 です。 ■ [イベント数]。イベントカウントフィルタを有効にします。 <ul style="list-style-type: none"> - [最大イベント数]。レポートに表示するイベントの数を指定します。アラートを生成するイベントの発生元は、システム、ジョブ、メディアまたはデバイスのいずれかです。入力可能なイベント数の範囲は、0 - 32,000 です。 <p>レポートに含まれるデータの量を無制限にする場合は、範囲パラメータとしてゼロの値を入力します。この場合、レポートが膨大な量になることがあります。</p>

レポートの作成に利用可能なグループ

レポートを作成するグループを選択します。

p.687 の「[カスタムレポートの作成](#)」を参照してください。

表 16-2 レポートを作成するグループの選択

グループ	説明
アラートグループ	アラートのメッセージテキスト、アラートのタイトル、アラートの作成日時、応答者の名前などの情報のフィールドが含まれます。
デバイスグループ	読み書きされたバイト数、デバイスの使用時間、デバイス上のエラー数などの情報のフィールドが含まれます。

グループ	説明
ジョブグループ	ジョブの優先度、ジョブ名、実行日、ポリシー名などの情報のフィールドが含まれます。
ジョブ履歴グループ	バックアップ速度、使用されたデバイス、エラー、メディアなどの情報のフィールドが含まれます。
メディアグループ	バックアップセットの日時、バックアップの種類、割り当て日および修正日、メディアセット名などの情報のフィールドが含まれます。
ポリシーグループ	ジョブの優先度、ポリシーの名前および説明、選択リスト名、実行日などの情報のフィールドが含まれます。

新しいレポートジョブの実行

レポートジョブを作成し、[ジョブ履歴]ペインにレポートデータを保存することができます。フィルタとフィルタの範囲を指定できます。また、通知の受信者も選択できます。ただし、通知にレポートは含まれません。レポートジョブはただちに実行され、スケジュールを設定することができません。

p.683 の「[レポートの保存](#)」を参照してください。

新規レポートジョブを実行する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 [レポート]ペインから、実行するレポートを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[新規レポートジョブ]をクリックします。
- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックし、[ジョブ名]にこのジョブの名前を入力して、[ジョブの優先度]を選択します。

このジョブと同じ時間に実行するようにスケジュールの設定されているジョブが他にもある場合は、優先度によって、どちらを先に実行するかが決定されます。

- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下で、レポートに表示するデータに適用するフィルタパラメータを選択します。

選択可能なパラメータまたは設定がないフィルタはグレー表示されます。

p.680 の「[標準レポートの追加設定](#)」を参照してください。

- 6 レポートジョブの完了を受信者に通知したり、完了したレポートを受信者に送信するには、次の手順を実行します。

- [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。

- レポートジョブの完了時に通知を受信する受信者を選択します。
p.655 の「[\[受信者の設定\]のオプション](#)」を参照してください。
 - 完了したレポートのコピーを通知に含めるには、[\[E-mail またはプリンタ通知受信者への通知にジョブログを添付する\]](#)を選択します。
- 7 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、このジョブを保留状態でサブミットするには[保留にする]をクリックします。
- このオプションを選択すると、保留状態を変更するまでジョブを実行しないようにしてジョブをサブミットすることができます。
- 8 [自動キャンセルを有効にする]をクリックし、[ジョブが完了しない場合に、ジョブをキャンセルする時間]の所定のフィールドに時間単位または分単位で時間を入力します。
- このオプションを使用すると、指定した時間内に完了しない場合はジョブをキャンセルすることができます。経過時間は、実行予定時刻ではなく、実際にジョブを開始した時刻から計測されます。
- 9 このレポートジョブに設定するすべての項目の設定が完了したら、[\[今すぐに実行\]](#)をクリックします。
- 設定したオプションに基づき、レポートがサブミットされます。

新しいレポートジョブの[一般]オプション

新しいレポートジョブを作成するとき、ジョブに重複しない名前を付け、ジョブの優先度を設定できます。

レポートには他のジョブオプションも設定できます。

p.680 の「[標準レポートの追加設定](#)」を参照してください。

表 16-3 新しいレポートジョブの[一般]オプション

項目	説明
ジョブ名	ジョブの名前を指定するか、デフォルトの名前を使用します。
ジョブの優先度	このジョブの優先度を設定します。 p.183の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。

レポートの保存

レポートを保存するには、次の手順を実行します。

p.684 の「[Backup Exec レポートビューアからのレポートの印刷](#)」を参照してください。

レポートを保存する方法

- 1 レポートで、[名前を付けて保存]をクリックします。
- 2 プロンプトが表示されたら、レポートを保存するファイルの名前と場所を入力します。
- 3 [ファイルの種類]フィールドで、レポートを保存する形式を選択します。
HTML 形式でレポートを保存すると、レポートを保存する場所にフォルダが作成されます。このフォルダの名前にはレポートに指定した名前が付けられます。このフォルダは HTML ファイルと .GIF イメージファイルの両方を含んでいます。
- 4 [保存]をクリックします。

新しい場所へのレポートの保存

レポートが保存される場所を指定できます。HTML 形式のレポートの場合は同じ名前のフォルダがレポートの保存場所に作成されます。フォルダにはイメージとレポートページが入り、これにより保存したレポートを表示することができます。

p.684 の「[Backup Exec レポートビューアからのレポートの印刷](#)」を参照してください。

レポートを新しい場所に保存する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブをクリックします。
- 3 [ジョブ履歴]ペインで、保存するレポートを右クリックします。
- 4 [プロパティ]をクリックします。
- 5 PDF レポートの場合は、[名前を付けて保存]アイコンをクリックします。
- 6 保存するレポートのファイル名と場所を入力し、[保存]をクリックします。

Backup Exec レポートビューアからのレポートの印刷

ローカル接続されたプリンタかネットワークプリンタからレポートを印刷できます。レポートを印刷するには、横向き印刷で印刷するようにプリンタを設定しなければなりません。

p.683 の「[レポートの保存](#)」を参照してください。

p.685 の「[PDF 形式で保存されているレポートの印刷](#)」を参照してください。

p.685 の「[HTML 形式で保存されているレポートの印刷](#)」を参照してください。

Backup Exec レポートビューアからレポートを印刷する方法

- 1 [レポートビューア]で、[印刷]をクリックします。
- 2 印刷オプションに関するメッセージを確認し、[OK]をクリックします。

- 3 Windows の [印刷] ダイアログボックスからプリンタを選択します。
- 4 [印刷] をクリックします。

PDF 形式で保存されているレポートの印刷

PDF 形式で保存したレポートを印刷するには、次の手順を実行します。

メモ: PDF 形式で保存したレポートを印刷するコンピュータに Adobe Reader をインストールしておかなければなりません。

PDF 形式で保存されているレポートを印刷する方法

- 1 PDF 形式でレポートを保存したフォルダに移動します。
- 2 レポートの PDF アイコンをダブルクリックすることによってレポートを開きます。
- 3 Adobe Reader のメニューバーから、[ファイル]>[印刷] をクリックします。

HTML 形式で保存されているレポートの印刷

HTML 形式で保存したレポートを印刷するには、次の手順を実行します。

HTML 形式で保存されているレポートを印刷する方法

- 1 HTML でレポートを保存した場所に移動します。
- 2 保存したレポートのフォルダ名をダブルクリックします。
- 3 RPT<number>_.htm という名前の HTML ファイルを右クリックします。
たとえば、RPT3_.htm などです。
- 4 ショートカットメニューの [印刷] をクリックします。
- 5 Windows の [印刷] ダイアログボックスからプリンタを選択します。
- 6 [印刷] をクリックします。

[ジョブ履歴] からのレポートの削除

[レポートを作成] オプションを使用して作成するレポートは、レポートを表示した後、自動的に削除されます。[新規レポートジョブ] を選択するとき作成するレポートは、[ジョブ履歴] からレポートを削除するまで Backup Exec データベースに保存されます。

p.196 の「データベースの保守」を参照してください。

p.562 の「完了ジョブのプロパティの表示」を参照してください。

p.710 の「[利用可能なレポート](#)」を参照してください。

[ジョブ履歴]ペインからレポートを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブリスト]タブをクリックします。
- 3 [ジョブ履歴]ペインから、削除するレポートを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 5 [ジョブ履歴の削除]の表示内容を確認して、[はい]をクリックします。

レポートジョブのスケジュール設定および通知受信者の設定について

レポートジョブを作成して、指定した時間に実行したり定期的に行うようにスケジュールを設定することができます。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

p.655 の「[\[受信者の設定\]のオプション](#)」を参照してください。

また、バックアップやリストアなどの Backup Exec ジョブと同様に、レポートジョブに対しても通知受信者を割り当てることができます。[E-mail またはプリンタ通知受信者への通知にジョブログを添付する]を選択すると、レポートが通知に含まれます。このオプションを選択していないと、レポートが実行されたことを示すメッセージのみが受信者に送信されます。

Backup Exec のカスタムレポートについて

組織の特定の必要条件を満たす情報を含むレポートを作成できます。レポートに含めるデータを選択し、そのデータをフィルタ、ソートおよびグループ化する方法を決定します。また、円グラフおよび棒グラフを設定してレポートデータを図式化することもできます。

次のようにレポートの表示をカスタマイズできます。

- レポートに会社のロゴを追加する
- バナーの色を変更する
- フッターにテキストを追加する

p.687 の「[カスタムレポートの作成](#)」を参照してください。

カスタムレポートの作成

組織の特定の必要条件を満たす情報を含むレポートを作成できます。

カスタムレポートを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 タスクペインで、[新規カスタムレポート]をクリックします。
- 3 [カスタムレポート]ダイアログボックスで、レポートの名前および説明を入力します。
- 4 このレポートにデフォルトのヘッダーおよびフッターの設定を含めない場合は、[[ツール]の[オプション]で指定されたヘッダーおよびフッターの設定を使用する]を選択解除します。
- 5 [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[フィールドの選択]をクリックします。
- 6 [カテゴリ]ボックスで、レポートを作成するグループを選択します。
p.681の「[レポートの作成に利用可能なグループ](#)」を参照してください。
- 7 レポートに含めるフィールドを選択します。
p.689の「[カスタムレポートのフィールドオプション](#)」を参照してください。
- 8 フィールドの列の幅を調整するには、次に示す順序で操作を実行します。
 - [レポート用に選択したフィールド]リストで、フィールド名をクリックします。
 - [列の幅]ボックスに、新しい幅を入力します。
 - [セット]をクリックします。
- 9 次のいずれかを実行します。

レポートのフィルタ条 件を設定する場合 p.700の「[カスタムレポートのフィルタの設定](#)」を参照してください。

レポートのフィールドをグループ化する場合 次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[グループ]をクリックします。
- 必要なグループオプションを設定します。
p.690の「[カスタムレポートのフィールドのグループ化について](#)」を参照してください。

- レポートのフィールドをソートする場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[ソート]をクリックします。
 - 必要なソートオプションを設定します。
p.692の「[カスタムレポートのフィールドのソート](#)」を参照してください。
- レポートのグラフオプションを設定する場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[グラフオプション]をクリックします。
 - 必要なグラフオプションを設定します。
p.694の「[カスタムレポートのグラフオプションの設定](#)」を参照してください。
- レポートをプレビューしてテストする場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[プレビュー]の下にある[プレビュー]をクリックします。
 - レポートをテストするには、[プレビュー]ダイアログボックスで、[レポートのテスト]をクリックします。
- レポートを終了して閉じる場合
- [OK]をクリックします。

カスタムレポートの[名前と説明]オプション

作成するレポートに重複しない名前を指定できます。また、レポートの詳細な説明も入力できます。

p.687の「[カスタムレポートの作成](#)」を参照してください。

表 16-4 カスタムレポートの[名前と説明]オプション

項目	説明
名前	レポートの重複しない名前を示します。 すべてのカスタムレポートに名前を付ける必要があります。
説明	レポートの説明を示します。

項目	説明
[ツール]の[オプション]で指定されたヘッダーおよびフッターの設定を使用する	カスタムレポートにヘッダーおよびフッター情報を表示するにはこのオプションを有効にします。 このオプションでは、[ツール]の[オプション]の下の[レポート]のすべてのレポートに対して、指定したデフォルトのヘッダーおよびフッター設定が使用されます。 p.708の「 レポートのデフォルトオプション 」を参照してください。

カスタムレポートのフィールドオプション

レポートに含めるフィールドを選択します。フィールドは[レポート用に選択したフィールド]フィールドで配置した順序で表示されます。すべてのフィールドは、左から右に水平に配置されます。リスト内の 1 番目のフィールドはレポートの左側に表示されます。

p.687の「[カスタムレポートの作成](#)」を参照してください。

表 16-5 [フィールドの選択]オプション

項目	説明
カテゴリ	Backup Exec の機能に基づくカスタムレポートのフィールドを選択できます。フィールドのカテゴリには次が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ アラートグループ ■ デバイスグループ ■ ジョブグループ ■ ジョブ履歴グループ ■ メディアグループ ■ ポリシーグループ

項目	説明
設定可能なフィールド	<p>各カテゴリで利用可能なフィールドのリストを表示します。</p> <p>Backup Exec のデフォルトでは、各カテゴリの基本フィールドのみが表示されます。基本フィールドには、レポートで使用される可能性が高いフィールドが含まれます。設定可能なフィールドをすべて表示するには、[詳細なフィールドを表示する]にチェックマークを付けます。</p> <p>順番に並んでいる複数のフィールドを選択する場合は、最初のフィールドをクリックし、Shift キーを押しながら最後のフィールドをクリックします。複数のフィールドを個別に選択する場合は、Ctrl キーを押しながら各フィールドをクリックします。</p> <p>選択したフィールドを[レポート用に選択したフィールド]ボックスに移動するには、[>>]をクリックします。</p>
レポート用に選択したフィールド	<p>レポートで表示されるように選択されているフィールドを表示します。</p> <p>フィールドは、[レポート用に選択したフィールド]ボックスに表示される順序でレポートに表示されます。リスト内の 1 番目のフィールドはレポートの左側に表示されます。</p> <p>レポートのフィールドの位置を変えるには、[上に移動]か[下に移動]をクリックします。</p> <p>フィールドを削除するには、アイテムをダブルクリックします。</p>

カスタムレポートのフィールドのグループ化について

カスタムレポートは、レポートで選択した最大 3 つのフィールドごとにグループ化できます。フィールドのグループ化によって、レポートにセクションが作成されます。たとえば、メディアサーバーごとにグループ化した場合、フィルタ条件に一致するメディアサーバーごとにセクションが作成されます。レポートの各メディアサーバーのセクションの下には、レポートで選択した残りのフィールドに対応するデータが表示されます。

レポートには、グループ化されていないフィールドが少なくとも 1 つ含まれている必要があります。たとえば、レポートで 3 つのフィールドを選択した場合、グループ化できるフィールドは 2 つのみです。すべてのフィールドをグループ化すると、すべてのデータがグループセクションのタイトルに表示されるため、レポートに表示されるデータがなくなります。ま

た、3 つのグループフィールドをすべて使用するには、少なくとも 4 つのフィールドがレポートに存在する必要があります。

レポートをグループ化するフィールドを選択した後、そのフィールドのデータを昇順または降順でグループ化できます。昇順では、数値は最小値から最大値の順に、文字はアルファベット順に一覧表示されます。降順では、数値は最大値から最小値の順に、文字はアルファベットの逆順に一覧表示されます。たとえば、日付のフィールドごとに昇順でグループ化した場合、レポートのデータは最も早い日から日付ごとにグループ化されます。

p.691 の「[カスタムレポートのフィールドのグループ化](#)」を参照してください。

カスタムレポートのフィールドのグループ化

カスタムレポートのフィールドをグループ化するには、次の手順を実行します。

p.690 の「[カスタムレポートのフィールドのグループ化について](#)」を参照してください。

カスタムレポートのフィールドをグループ化する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
 - 2 ツリービューで、[カスタムレポート]をクリックします。
 - 3 レポートのリストで、グループ化するフィールドを含むレポートをクリックします。
 - 4 タスクペインで、[編集]をクリックします。
 - 5 [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[グループ]をクリックします。
 - 6 必要なオプションを選択します。
- p.692 の「[カスタムレポートの\[グループ\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 [グループ基準]ボックスで、データをグループ化するフィールドの名前を選択します。
 - 8 昇順で情報をグループ化する場合は[昇順]を、降順で情報をグループ化する場合は[降順]をクリックします。
 - 9 追加のフィールドをグループ化する場合は、[次のグループ基準]ボックスで手順 7 から手順 8 を繰り返します。
 - 10 次のいずれかを実行します。

レポートのフィールド 次に示す順序で操作を実行します。
をソートする場合

- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[ソート]をクリックします。
- 必要なソートオプションを設定します。

p.692 の「[カスタムレポートのフィールドのソート](#)」を参照してください。

- レポートのグラフオプションを設定する場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[グラフオプション]をクリックします。
 - 必要なグラフオプションを設定します。
p.694の「[カスタムレポートのグラフオプションの設定](#)」を参照してください。
- レポートをプレビューしてテストする場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[プレビュー]の下にある[プレビュー]をクリックします。
 - レポートをテストするには、[プレビュー]ダイアログボックスで、[レポートのテスト]をクリックします。
- レポートを終了して閉じる場合
- [OK]をクリックします。

カスタムレポートの[グループ]オプション

レポートに選択したフィールドに基づいて、昇順または降順でレポートの情報をグループ化できます。

p.690の「[カスタムレポートのフィールドのグループ化について](#)」を参照してください。

表 16-6 カスタムレポートの[グループ]オプション

項目	説明
グループ基準	レポートに選択したフィールドに基づいて、レポート情報をグループ化します。
昇順	昇順でレポート情報をグループ化します。昇順では、数値は最小値から最大値の順に、文字はアルファベット順に一覧表示されます。
降順	降順でレポート情報をグループ化します。降順では、数値は最大値から最小値の順に、文字はアルファベットの逆順に一覧表示されます。
次のグループ基準	他のレポートフィールドに基づいてグループ化できます。

カスタムレポートのフィールドのソート

カスタムレポートは、レポートで選択した最大3つのフィールドごとにソートできます。フィールドでソートすると、ソート条件に一致するすべてのデータがレポート内でまとめて配列さ

れます。たとえば、[メディアサーバー]フィールドで昇順でソートした場合、メディアサーバー A のすべてのデータが最初に表示され、その後メディアサーバー B のすべてのデータが表示されます。昇順では、数値は最小値から最大値の順に、文字はアルファベット順に一覧表示されます。降順では、数値は最大値から最小値の順に、文字はアルファベットの逆順に一覧表示されます。

カスタムレポートのフィールドをソートする方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 ツリービューで、[カスタムレポート]をクリックします。
- 3 レポートのリストで、ソートするフィールドを含むレポートをクリックします。
- 4 タスクペインで、[編集]をクリックします。
- 5 [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[ソート]をクリックします。
- 6 必要なソートオプションを選択します。
p.693 の「[カスタムレポートの\[ソート\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 次のいずれかを実行します。

レポートのグラフオプションを設定する場合

- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[グラフオプション]をクリックします。
 - 必要なグラフオプションを設定します。
p.694 の「[カスタムレポートのグラフオプションの設定](#)」を参照してください。

レポートをプレビューしてテストする場合

- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[プレビュー]の下にある[プレビュー]をクリックします。
 - レポートをテストするには、[プレビュー]ダイアログボックスで、[レポートのテスト]をクリックします。

レポートを終了して閉じる場合

- [OK]をクリックします。

カスタムレポートの[ソート]オプション

レポートに選択したフィールドに基づいて、昇順または降順でレポートの情報をソートできます。

p.692 の「[カスタムレポートのフィールドのソート](#)」を参照してください。

表 16-7 カスタムレポートの[ソート]オプション

項目	説明
ソート基準	レポートに選択したフィールドに基づいて、レポート情報をソートします。
昇順	昇順でレポート情報をソートします。昇順では、数値は最小値から最大値の順に、文字はアルファベット順に一覧表示されます。
降順	降順でレポート情報をソートします。降順では、数値は最大値から最小値の順に、文字はアルファベットの逆順に一覧表示されます。
次のソート基準	他のレポートフィールドに基づいてソートできません。

カスタムレポートのグラフオプションの設定

カスタムレポートに円グラフまたは棒グラフを含めることができます。

[フィールドの選択]ダイアログボックスで、円グラフを作成する場合は少なくとも 2 つのフィールドを、棒グラフを作成する場合は少なくとも 3 つのフィールドを選択する必要があります。

カスタムレポートのグラフオプションを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 ツリービューで、[カスタムレポート]をクリックします。
- 3 レポートのリストで、グラフオプションを設定するレポートをクリックします。
- 4 タスクペインで、[編集]をクリックします。
- 5 [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[グラフオプション]をクリックします。
- 6 [グラフの種類]ボックスで、作成するグラフの種類を選択します。[円グラフ]か[棒グラフ]を選択できます。
- 7 [グラフのタイトル]ボックスで、レポートのグラフ上に表示するタイトルを入力します。
- 8 円グラフのオプションを設定します。
p.695 の「[カスタムレポートのグラフオプション](#)」を参照してください。
- 9 棒グラフのオプションを設定します。
p.695 の「[カスタムレポートのグラフオプション](#)」を参照してください。
- 10 次のいずれかを実行します。

レポートをプレビューしてテストする場合 次を示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[プレビュー]の下にある[プレビュー]をクリックします。
- レポートをテストするには、[プレビュー]ダイアログボックスで、[レポートのテスト]をクリックします。

レポートを終了して閉じる場合 [OK]をクリックします。

カスタムレポートのグラフオプション

カスタムレポートに円グラフか棒グラフを含めるように選択できます。グラフの種類を選択した後、そのグラフに対する特定のオプションを選択できます。

p.694 の「[カスタムレポートのグラフオプションの設定](#)」を参照してください。

次の表は利用可能な円グラフオプションを記述したものです。

表 16-8 カスタムレポートの円グラフオプション

項目	説明
[カテゴリ]フィールド (値ごとの総計セクション)	円グラフでセクションを表示するフィールドを指定します。
[データ]フィールド	値を計算するフィールドを指定します。
集計関数	[データ]フィールドで生成された値を計算する方法を選択します。 次の項目を選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [最小値]: 最小値を計算します。これは、数字のフィールドでのみ利用可能です。 ■ [最大値]: 最大値を計算します。これは、数字のフィールドでのみ利用可能です。 ■ [平均]: 平均値を計算します。これは、数字のフィールドでのみ利用可能です。 ■ [個数]: 値の数を計算します。これは、テキストや日付のフィールドなど、数字以外のフィールドで利用可能な唯一のオプションです。ただし、数字のフィールドでも利用可能です。 ■ [合計]: 値の合計を計算します。これは、数字のフィールドでのみ利用可能です。

次の表は利用可能な棒グラフオプションを記述したものです。

表 16-9 カスタムレポートの棒グラフオプション

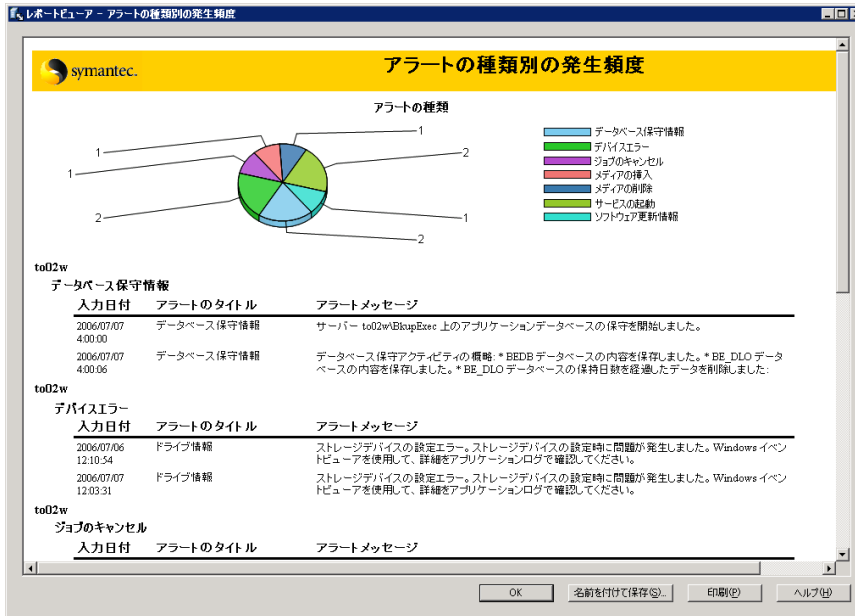
項目	説明
垂直軸のタイトル	グラフの左側に表示するタイトルを指定します。タイトルはレポートで垂直に表示されます。50 文字に制限されています。
[系列]フィールド (値ごとの横棒)	グラフの水平な棒に表示する値を含むフィールドを指定します。値の凡例が作成されます。
[カテゴリ]フィールド (値ごとの系列のセット)	グラフの左側に表示するグループ化に関する情報を含むフィールドを指定します。
[データ]フィールド	値を計算するフィールドを指定します。
水平軸のタイトル	グラフの下に表示するタイトルを指定します。
集計関数	次のいずれかの関数を指定して、[データ]フィールドで生成される値を計算します。 次の項目を選択できます。 <ul style="list-style-type: none">■ [最小値]: 最小値を計算します。■ [最大値]: 最大値を計算します。■ [平均]: 平均値を計算します。■ [個数]: 値の数を計算します。このオプションは、テキストや日付のフィールドなど、数字以外のフィールドでのみ利用可能です。■ [合計]: 値の合計を計算します。

カスタムレポートのグラフの例

ここでは、カスタムレポートで作成できる 3 つのグラフの例について説明します。また、グラフの作成に使用したフィールドについても説明します。

例を参照して、[グラフオプション]ダイアログボックスのフィールドと作成されたグラフがどのように対応しているかを確認してください。

図 16-1 円グラフの例



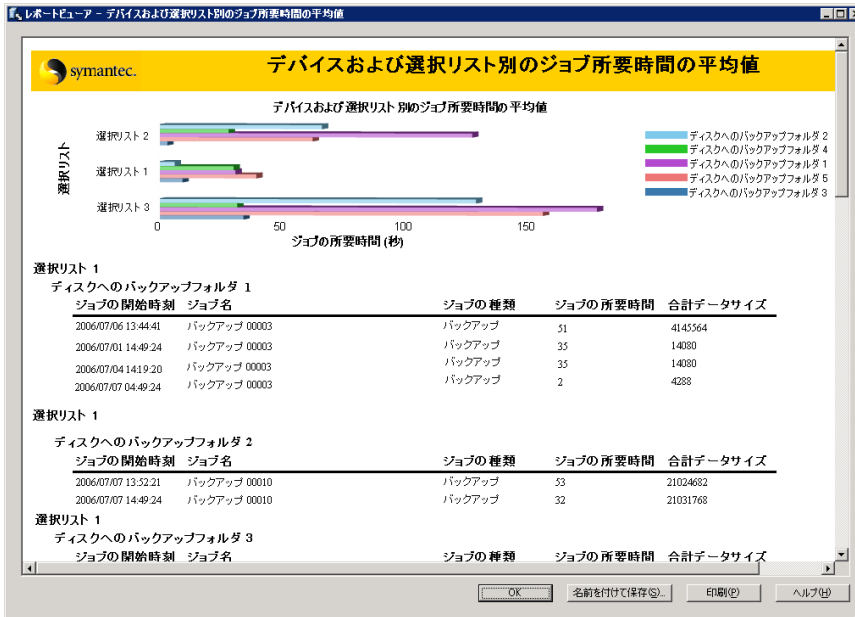
この円グラフの例「アラートの種類別の発生頻度」は、次のオプションを使用して作成されています。

表 16-10 円グラフの例で使用されているオプション

グラフオプション名	選択したフィールド
[グラフの種類]	円グラフ
[グラフのタイトル]	アラートの種類別の発生頻度
[カテゴリ]フィールド	イベント名
[データ]フィールド	イベント名
集計関数	個数

棒グラフを作成できます。

図 16-2 棒グラフの例 1



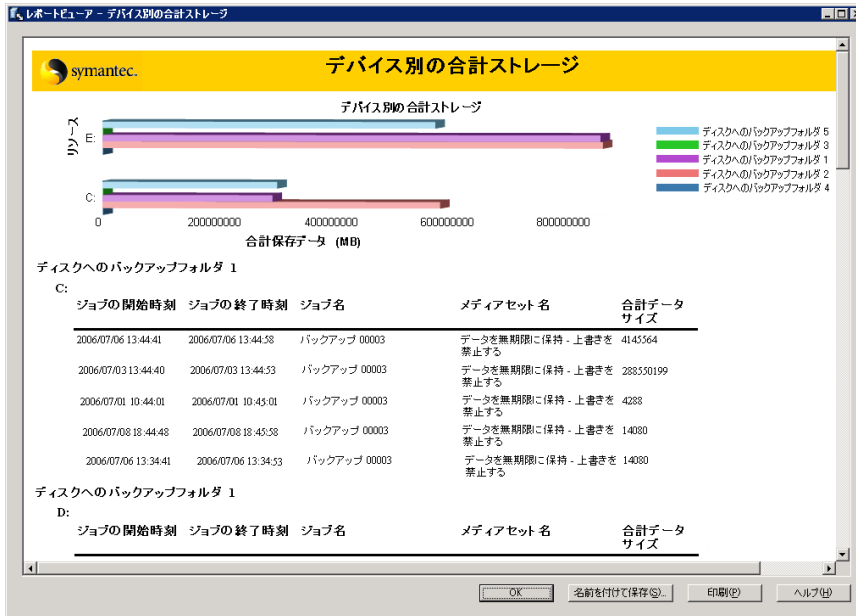
この棒グラフの例「デバイスおよび選択リスト別のジョブ所要時間の平均値」は、次のオプションを使用して作成されています。

表 16-11 棒グラフの例 1 で使用されているオプション

グラフオプション名	選択したフィールド
[グラフの種類]	棒グラフ
[グラフのタイトル]	デバイスおよび選択リスト別のジョブ所要時間の平均値
垂直軸のタイトル	選択リスト
[系列]フィールド	デバイス名
[カテゴリ]フィールド	選択リスト名
[データ]フィールド	ジョブの所要時間
集計関数	平均
水平軸のタイトル	ジョブの平均所要時間 (秒)

棒グラフ 1 と棒グラフ 2 を比較します。

図 16-3 棒グラフの例 2



この棒グラフの例「デバイス別の合計ストレージ」は、次のオプションを使用して作成されています。

表 16-12 棒グラフの例 2 で使用されているオプション

グラフオプション名	選択したフィールド
[グラフの種類]	棒グラフ
[グラフのタイトル]	デバイス別の合計ストレージ
垂直軸のタイトル	リソース
[系列]フィールド	デバイス名
[カテゴリ]フィールド	リソース名
[データ]フィールド	合計データサイズ
集計関数	合計
水平軸のタイトル	格納されているデータの合計 (MB)

カスタムレポートのプレビュー

プレビュー機能を使用して、カスタムレポートが正しく作成されたことを確認します。

カスタムレポートをプレビューする方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 ツリービューで、[カスタムレポート]をクリックします。
- 3 レポートのリストで、プレビューしてテストするレポートをクリックします。
- 4 タスクペインで、[編集]をクリックします。
- 5 [プロパティ]ペインの[プレビュー]の下にある[プレビュー]をクリックします。
- 6 [OK]をクリックします。

カスタムレポートのフィルタの設定

作成するカスタムレポートのフィルタを設定するには次の手順を実行します。

カスタムレポートのフィルタを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 ツリービューで、[カスタムレポート]をクリックします。
- 3 レポートのリストで、フィルタするレポートをクリックします。
- 4 タスクペインで、[編集]をクリックします。
- 5 [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[フィルタ]をクリックします。
- 6 1 つ以上のフィルタ式を定義してフィルタを作成します。
p.703 の「[カスタムレポートを定義するためのフィルタ式](#)」を参照してください。
- 7 [追加]をクリックします。
- 8 さらにフィルタを追加するには、手順 6 および手順 7 を繰り返します。
- 9 フィルタ式を結合するには、次のいずれかを実行します。

両方の式が真である [AND] をクリックします。

たとえば、失敗したすべてのバックアップジョブを検索するには、次の式を追加します。

- 状態 = 失敗
- 種類 = バックアップ

式を設定したら、次の手順を実行します。

- [AND] をクリックして、この 2 つの式を結合します。

結合した式は次のようになります。

状態 = 失敗 AND 種類 = バックアップ

いずれかの式が真 [OR] をクリックします。

たとえば、失敗したか、またはキャンセルされたジョブを検索するには、次の式を追加します。

- 状態 = 失敗
- 状態 = キャンセル

式を設定したら、次の手順を実行します。

- [OR] をクリックして、「状態 = 失敗」と「状態 = キャンセル」を結合します。

結合した式は次のようになります。

状態 = 失敗 OR 状態 = キャンセル

2 つのフィルタ式を [(+)] をクリックします。

たとえば、失敗したバックアップジョブとリストアジョブを検索するには、次の式を追加します。

- 状態 = 失敗
- 種類 = バックアップ
- 種類 = リストア

式を設定したら、次の手順を実行します。

- [OR] を使用して、「種類 = バックアップ」と「種類 = リストア」を結合します。

- Ctrl キーを押しながら「種類 = バックアップ」と「種類 = リストア」をクリックします。

- [(+)] をクリックして、「種類 = バックアップ」と「種類 = リストア」を結合します。

- [AND] を使用して、「状態 = 失敗」と(「種類 = バックアップ」OR「種類 = リストア」) を結合します。

結合した式は次のようになります。

状態 = 失敗 AND (種類 = バックアップ OR 種類 = リストア)

1つの式に結合され [() -]をクリックします。

たフィルタ式を 2 つに分ける場合

たとえば、[() +]を使用して「種類 = バックアップ」と「種類 = リストア」を結合した場合は、[フィルタ]ダイアログボックスに次のように表示されます。

(種類 = バックアップ OR 種類 = リストア)

結合された式を 2 つの個別の式に分けるには、次の手順を実行します。

- Ctrl キーを押しながら「種類 = バックアップ」と「種類 = リストア」の両方をクリックします。
- [() -]をクリックします。

分けられた式は、カッコで囲まれていない状態で表示されます。

10 式を変更するには、次の手順を実行します。

- [フィルタ条件]ボックスで、変更する式を選択します。
- [編集]をクリックします。
- [フィルタ式]エリアで、式の値を編集します。
- [更新]をクリックします。

11 式を削除するには、式を選択して、[削除]をクリックします。

12 次のいずれかを実行します。

レポートのフィールドをグループ化する場合 次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[グループ]をクリックします。
- 必要なグループオプションを設定します。
p.690の「カスタムレポートのフィールドのグループ化について」を参照してください。

レポートのフィールドをソートする場合 次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[ソート]をクリックします。
- 必要なソートオプションを設定します。
p.692の「カスタムレポートのフィールドのソート」を参照してください。

- レポートのグラフオプションを設定する場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[レポートの定義]の下にある[グラフオプション]をクリックします。
 - 必要なグラフオプションを設定します。
- p.694の「[カスタムレポートのグラフオプションの設定](#)」を参照してください。
- レポートをプレビューしてテストする場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[プレビュー]の下にある[プレビュー]をクリックします。
 - レポートをテストするには、[プレビュー]ダイアログボックスで、[レポートのテスト]をクリックします。
- レポートを終了して閉じる場合
- [OK]をクリックします。

カスタムレポートを定義するためのフィルタ式

1 つ以上のフィルタ式を定義してフィルタを作成できます。

p.700 の「[カスタムレポートのフィルタの設定](#)」を参照してください。

表 16-13 カスタムレポートを定義するためのフィルタ式

項目	説明
詳細なフィールドを表示する	フィルタ処理で設定可能なすべてのフィールドを表示するには、[詳細なフィールドを表示する]を選択します。デフォルトでは、最も一般的なフィールドのみが表示されます。
フィールド名	フィルタするフィールドを選択します。

項目	説明
演算子	

項目	説明
	<p>フィルタの適切な演算子を選択します。演算子によって、フィールド名および値のリンク方法が決定されます。Backup Exec では、次の演算子を利用できます。ただし、表示されるリストは、[フィールド名]で選択したフィールドの種類によって異なります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ = (等しい):フィールド名が値と等しい必要があります。■ <> (等しくない):フィールド名が値と等しくない必要があります。■ > (よりも大きい):フィールド名が値よりも大きい必要があります。■ >= (以上):フィールド名が値よりも大きいか、または値と等しい必要があります。■ < (よりも小さい):フィールド名が値よりも小さい必要があります。■ <= (以下):フィールド名が値よりも小さいか、または値と等しい必要があります。■ \$ (含む):[値]フィールドに入力したテキストがフィールド名に含まれます。■ NOT\$ (含まない):[値]フィールドに入力したテキストがフィールド名に含まれません。■ IN LAST:レポートの作成時刻を基準にした時間帯です。この演算子は、レポートの作成時よりも前の日時を定義します。この演算子は、日時のフィールドでのみ利用可能です。[値]フィールドに時間を入力した場合、日を入力した場合よりも詳細な結果を得ることができます。日の値を入力した場合、前の日の午前0時(00:00)からレポートの実行時刻までが計算されます。 たとえば、[値]フィールドに1日と入力した場合、レポートがその日の23:59に実行されると、レポートには過去47時間59分の結果が含まれます。ただし、24時間と入力した場合は、レポートの実行時刻から正確に24時間前までの情報が取得されます。■ IN NEXT:レポートの作成時刻を基準にした時間帯です。この演算子は、レポートの作成時よりも後の日時を定義します。たとえば、3日以内に実行するようにスケジュールされたバックアップジョブを検索するには、この演算子を選択して、[値]フィールドに3日の値を

項目	説明
	入力します。これは、日時のフィールドでのみ利用可能です。
値	フィルタする値を入力または選択します。入力できる値の種類は、選択されたフィールド名の種類によって異なります。たとえば、[フィールド名]で[次の期日]を選択した場合は、日時の値が表示されます。

カスタムレポートのコピー

カスタムレポートのコピーを作成してから、コピーを修正できます。

カスタムレポートをコピーする方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 ツリービューで、[カスタムレポート]をクリックします。
- 3 レポートのリストで、コピーするレポートをクリックします。
- 4 タスクペインで、[コピー]をクリックします。
- 5 [コピーの名前]ボックスで、コピーされたレポートの一意の名前を入力します。
- 6 [OK]をクリックします。

カスタムレポートの編集

編集するレポートが以前のレポートジョブで実行されている場合、変更を加えることによって、ジョブ履歴のレポートの外観が変わることがあります。レポートをコピーして、そのコピーを編集することをお勧めします。

カスタムレポートを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 ツリービューで、[カスタムレポート]をクリックします。
- 3 レポートのリストで、フィルタするレポートをクリックします。
- 4 タスクペインで、[編集]をクリックします。
- 5 必要に応じてレポートの設定を変更します。
- 6 [OK]をクリックします。

カスタムレポートの削除

カスタムレポートを削除するには、関連付けられたジョブ履歴レコードをすべて削除する必要があります。

カスタムレポートに関連付けられたジョブ履歴レコードを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
- 2 [ジョブ履歴]ペインで、削除するカスタムレポートのジョブ履歴を選択します。
レポート名は[デバイス名]列に表示されます。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。

カスタムレポートを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 ツリービューで、[カスタムレポート]をクリックします。
- 3 レポートのリストで、フィルタするレポートをクリックします。
- 4 タスクペインで、[削除]をクリックします。
- 5 [はい]をクリックします。

レポートのデフォルトオプションの設定

すべてのレポートは、HTML 形式または Adobe Portable Document Format (PDF) 形式で表示できます。デフォルト設定は HTML です。選択した形式は、通知機能を使用してユーザーに送信されるレポートの形式に影響しません。

また、すべてのカスタムレポートのヘッダーおよびフッターでデフォルトオプションを設定できます。

次の操作を行うことができます。

- ヘッダーにロゴを含める。
- ヘッダーのバナーの色を選択する。
- フッターにテキストを含める。
- フッターに時刻を含める。

バナーの色を選択するには、色に対応する数値 (RGB 値) を入力するか、または表から色を選択できます。

レポートのデフォルトオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[レポート]をクリックします。

- 3 必要なオプションを設定します。
- 4 [OK]をクリックします。

レポートのデフォルトオプション

Backup Exec のすべてのレポートのデフォルトオプションを変更できます。

p.707 の「[レポートのデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

次の表はレポートのために利用可能なデフォルトオプションを記述したものです。

表 16-14 レポートのデフォルトオプション

項目	説明
HTML	すべてのレポートが HTML 形式で表示されるように指定します。これはデフォルト設定です。
PDF	すべてのレポートが Adobe Portable Document Format (PDF) で表示されるように指定します。
レポートの最大行数	レポートに表示する最大行数を示します。 デフォルトは 10,000 行です。
すべての行を表示	レポートのすべての行を表示します。
重複を排除して行を表示	一意の行のみを表示します。
会社ロゴのイメージファイルを使用する	すべてのカスタムレポートのヘッダーに会社のロゴを使います。
イメージファイルのパス	すべてのカスタムレポートに使用するロゴへのパスを指定します。
赤	赤の値に対応する数値を指定します。
緑	緑の値に対応する数値を指定します。
青	青の値に対応する数値を指定します。
色	カスタムレポートのパナーに使用する基本色を示します。 カスタムレポートのパナーのカスタム色を作成することもできます。
テキスト	カスタムレポートのフッターに表示するテキストを指定します。

項目	説明
時刻を含める	カスタムレポートのフッターにレポートの実行時刻を含めます。

レポートのプロパティの表示

レポートのプロパティには、各レポートについての詳細情報が表示されます。このプロパティは表示されるだけで、編集することはできません。

レポートのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 [レポート]ペインから、プロパティを表示するレポートを選択します。
- 3 タスクペインの[レポートタスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
p.709 の「[レポートの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 4 プロパティの表示を終了するには、[OK]をクリックします。
p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

レポートの[一般]プロパティ

各レポートのプロパティは表示できますが、編集できません。

p.709 の「[レポートのプロパティの表示](#)」を参照してください。

次の表はレポートのプロパティを記述したものです。

表 16-15 レポートの[一般]プロパティ

項目	説明
タイトル	レポートの名前を表示します。
説明	このレポートに含まれているデータの種類の説明です。

項目	説明
カテゴリ	レポートの分類を指定します。 利用可能なカテゴリは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">■ メディア■ メディアボルト■ ジョブ■ デバイス■ 設定■ アラート■ テンプレート
作成者	レポートの作成者を表示します。
件名	レポートの作成対象の製品のバージョンを表示します。
ファイル名	レポートのファイル名を表示します。
ファイルサイズ	レポートのサイズを表示します。
作成日	このレポートがシステムにインストールされた日付を表示します。

利用可能なレポート

ここでは、Backup Exec で利用できる各レポートについて説明します。レポートのファイル名、説明およびレポートに含まれる情報をレポートごとに示します。各レポートに含まれるデータは、そのレポートに対して指定した条件によって異なります。

Backup Exec には、次のレポートが用意されています。

表 16-16 Backup Exec のレポート

レポート名	説明
アクティブアラート	すべてのアクティブなアラートが最新のものから順に一覧表示されます。 p.718の「 [アクティブアラート]レポート 」を参照してください。
アクティブアラート(メディアサーバー別)	メディアサーバー別に、すべてのアクティブアラートが最新のものから順に一覧表示されます。 p.718の「 [アクティブアラート(メディアサーバー別)]レポート 」を参照してください。

レポート名	説明
アラート履歴	アラート履歴内のすべてのアラートが最新のものから順に一覧表示されます。 p.719 の「[アラート履歴]レポート」 を参照してください。
アラート履歴 (メディアサーバー別)	メディアサーバー別に、アラート履歴内のすべてのアクティブアラートが最新のものから順に一覧表示されます。 p.719 の「[アラート履歴 (メディアサーバー別)]レポート」 を参照してください。
アプリケーションイベントログ	Backup Exec アプリケーションのイベントログが一覧表示されます。 p.720 の「[アプリケーションイベントログ]レポート」 を参照してください。
監査ログ	選択したサーバーの指定した期間の監査ログの内容が一覧表示されます。 p.721 の「[監査ログ]レポート」 を参照してください。
バックアップジョブの成功率	バックアップジョブによる、選択したサーバーの保護成功率が一覧表示されます。 p.721 の「[バックアップジョブの成功率]レポート」 を参照してください。
バックアップの成功率 (リソース別)	選択したサーバー上のリソースに対する、指定した期間のバックアップジョブの成功率が一覧表示されます。 p.722 の「[バックアップの成功率 (リソース別)]レポート」 を参照してください。
バックアップセットの詳細 (リソース別)	過去 72 時間以内に実行したすべてのバックアップセットが一覧表示されます。セットはサーバーおよびリソースごとにグループ分けされています。 p.722 の「[バックアップセットの詳細 (リソース別)]レポート」 を参照してください。
バックアップセット (メディアセット別)	すべてのバックアップセットがメディアセット別に一覧表示されます。 p.723 の「[バックアップセット (メディアセット別)]レポート」 を参照してください。

レポート名	説明
バックアップサイズ (リソース別)	過去最大 7 回分のバックアップのリソース別のバックアップサイズおよびその平均値が一覧表示されます。 p.724 の「 [バックアップサイズ (リソース別)]レポート 」を参照してください。
システム構成の設定内容	Backup Exec システム構成パラメータテーブルの内容が一覧表示されます。 p.725 の「 [システム構成の設定内容]レポート 」を参照してください。
現在のジョブ状態	ジョブキューの詳細が状態でソートされて表示されます。 p.725 の「 [現在のジョブ状態]レポート 」を参照してください。
重複排除用デバイスの概略	ローカルおよび共有の重複排除用ストレージフォルダに対する重複排除操作の概略が表示されます。 p.726 の「 [重複排除用デバイスの概略] 」を参照してください。
重複排除の概略	Backup Exec メディアサーバーで実行されるすべての重複排除ジョブの重複排除の概略が表示されます。 p.727 の「 [重複排除の概略] 」を参照してください。
ネットワークデバイスの使用率 (日別)	メディアサーバーで使用されるストレージデバイスの容量がパーセンテージで一覧表示されます。 p.726 の「 [ネットワークデバイスの使用率 (日別)]レポート 」を参照してください。
デバイスの概略	選択したメディアサーバーのデバイスの使用状況とエラーの概略が一覧表示されます。 p.728 の「 [デバイスの概略]レポート 」を参照してください。
デバイス使用率 (ポリシー別)	指定したドライブをターゲットとするすべてのポリシーが一覧表示されます。 p.729 の「 [デバイス使用率 (ポリシー別)]レポート 」を参照してください。
エラー処理方法	すべての定義済みのエラー処理方法が一覧表示されます。 p.729 の「 [エラー処理方法]レポート 」を参照してください。

レポート名	説明
イベントの受信者	<p>各通知受信者によって登録されたすべてのイベントが一覧表示されます。</p> <p>p.731 の「[イベントの受信者]レポート」を参照してください。</p>
失敗したバックアップジョブ数	<p>すべての失敗ジョブが、リソースサーバーおよび時間帯でソートされ一覧表示されます。</p> <p>p.731 の「[失敗したバックアップジョブ数]レポート」を参照してください。</p>
実行されたジョブ (デバイス別)	<p>指定した期間に各システムデバイス上で実行されたすべてのジョブが一覧表示されます。</p> <p>p.732 の「[実行されたジョブ (デバイス別)]レポート」を参照してください。</p>
ジョブの概略	<p>過去 72 時間以内に実行したすべてのジョブが、実行順に一覧表示されます。</p> <p>p.732 の「[ジョブの概略]レポート」を参照してください。</p>
バックアップ済みのマシン	<p>Backup Exec によって保護されているすべてのサーバーが一覧表示されます。</p> <p>p.733 の「[バックアップ済みのマシン]レポート」を参照してください。</p>
管理対象メディアサーバー	<p>Backup Exec によって管理されているすべてのメディアサーバーの状態および設定が一覧表示されます。</p> <p>p.734 の「[管理対象メディアサーバー]レポート」を参照してください。</p>
メディア監査	<p>メディアの設定に加えられた最近の変更が一覧表示されます。</p> <p>p.735 の「[メディア監査]レポート」を参照してください。</p>
メディアエラー	<p>すべてのメディアで発生したエラー数が一覧表示されます。</p> <p>p.736 の「[メディアエラー]レポート」を参照してください。</p>

レポート名	説明
リカバリに必要なメディア	<p>指定した期間に、選択したサーバー上でバックアップした各システムのバックアップセットが格納されているメディアが一覧表示されます。このレポートは、メディアの上書き設定が上書き可能の場合は、正確でないことがあります。</p> <p>p.736の「[リカバリに必要なメディア]レポート」を参照してください。</p>
メディアセット	<p>Backup Exec サーバーで使用しているすべてのメディアセットとメディアが一覧表示されます。各メディアの現在の場所が表示されます。</p> <p>p.737の「[メディアセット]レポート」を参照してください。</p>
メディアボルト内のメディア	<p>各メディアボルト内のメディアが一覧表示されます。</p> <p>p.738の「[メディアボルト内のメディア]レポート」を参照してください。</p>
有効時間帯を逸したジョブ	<p>指定した期間内で、スケジュールが設定されていた有効時間帯に実行されなかったすべてのジョブが一覧表示されます。ジョブは実行順に表示されます。</p> <p>p.738の「[有効時間帯を逸したジョブ]レポート」を参照してください。</p>
ボルトへのメディアの移動	<p>メディアボルトに移動可能なメディアのすべてが一覧表示されます。追記期間が終了している、現在メディアボルトに存在していないメディアが表示されます。</p> <p>p.739の「[ボルトへのメディアの移動]レポート」を参照してください。</p>
[ジョブ、メディア、アラートの概要]レポート	<p>ユーザー定義期間について、過去と将来のジョブのデータが一覧表示されます。</p> <p>p.740の「[ジョブ、メディア、アラートの概要]レポート」を参照してください。</p>
ジョブの概略(前日分)	<p>過去 24 時間の各リソースに対するジョブの結果が一覧表示されます。このレポートには、スケジュールが設定されていたにもかかわらず実行されなかったジョブが表示されます。期限切れとしてマークする前に、ジョブには 24 時間の猶予期間が与えられます。</p> <p>p.742の「[ジョブの概略(前日分)]レポート」を参照してください。</p>

レポート名	説明
ポリシージョブの概略 (リソース別)	<p>選択した期間に作成されたすべてのバックアップセットが一覧表示されます。セットはターゲットサーバーおよびリソースごとにグループ分けされています。</p> <p>p.743の「[ポリシージョブの概略 (リソース別)]レポート」を参照してください。</p>
ポリシージョブの概略	<p>選択したポリシーを使用して作成され、指定した時間内に実行されたすべてのジョブが、実行順に一覧表示されます。</p> <p>p.744の「[ポリシージョブの概略]レポート」を参照してください。</p>
ポリシーのプロパティ	<p>サーバー用に定義されているすべてのポリシーおよびポリシージョブテンプレートが一覧表示されます。</p> <p>p.744の「[ポリシーのプロパティ]レポート」を参照してください。</p>
ポリシー保護リソース	<p>ポリシーから作成され、指定したリソースを保護するように割り当てられている各ジョブの情報が一覧表示されます。</p> <p>p.745の「[ポリシー保護リソース]レポート」を参照してください。</p>
正常に実行されなかったファイル	<p>ジョブの実行中に報告されたすべての問題のあるファイルが一覧表示されます。ファイルは日付およびリソースごとにグループ分けされます。</p> <p>p.746の「[正常に実行されなかったファイル]レポート」を参照してください。</p>
更新されたメディア	<p>過去 24 時間以内に更新されたすべてのメディアが一覧表示されます。</p> <p>p.746の「[更新されたメディア]レポート」を参照してください。</p>
ポリシーによるリソースバックアップの成功率	<p>ポリシーから作成されたバックアップジョブの成功率が一覧表示されます。</p> <p>p.747の「[ポリシーによるリソースバックアップの成功率]レポート」を参照してください。</p>
リソースのリスク評価	<p>前回のバックアップジョブが失敗したリソースのジョブ情報が、リソースサーバー別に一覧表示されます。</p> <p>p.747の「[リソースのリスク評価]レポート」を参照してください。</p>

レポート名	説明
ポリシーによる保護対象のリソース	リソースの保護に使用されているポリシー、テンプレートおよび選択リストが一覧表示されます。 p.748 の「[ポリシーによる保護対象のリソース]レポート」を参照してください。
リストアセットの詳細 (リソース別)	過去 72 時間以内に実行したすべてのリストアセットが一覧表示されます。セットはサーバーおよびリソースごとにグループ分けされています。 p.749 の「[リストアセットの詳細 (リソース別)]レポート」を参照してください。
ボルト内の利用可能なメディア	指定したボルト内の再利用可能なすべてのメディアが一覧表示されます。 p.749 の「[ボルト内の利用可能なメディア]レポート」を参照してください。
ロボットライブラリのインベントリ	メディアサーバーに接続されているロボットライブラリ内のスロットの内容が一覧表示されます。また、各メディアの使用統計情報が表示されます。 p.750 の「[ロボットライブラリのインベントリ]レポート」を参照してください。
サーバーの予想負荷	今後 24 時間のサーバーの予想負荷が、サーバー別に一覧表示されます。 p.751 の「[サーバーの予想負荷]レポート」を参照してください。
スクラッチメディアの利用可能予定	メディアの使用経過時間の分布が表示されます。現在上書き可能なメディアの数およびメディアが上書き可能になる時期が表示されます。 p.752 の「[スクラッチメディアの利用可能予定]レポート」を参照してください。
選択リスト	保護されている選択リストと保護されていない選択リストの説明、ポリシー名およびジョブ名が一覧表示されます。 p.752 の「[選択リスト]レポート」を参照してください。
[テスト実行の結果]レポート	選択した期間および選択したメディアサーバーに対するテスト実行ジョブの結果が表示されます。 p.753 の「[テスト実行の結果]レポート」を参照してください。

レポート名	説明
アーカイブジョブの成功率	正常に実行された保護サーバーのアーカイブジョブの数が表示されます。 p.754の「 [アーカイブジョブの成功率]レポート 」を参照してください。
アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択	各アーカイブ選択項目に適用されるアーカイブルールと保持カテゴリが表示されます。 p.754の「 [アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択]レポート 」を参照してください。
Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定	各ドメインのメールボックスグループに適用されるアーカイブの設定が表示されます。 p.755の「 [Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定]レポート 」を参照してください。
失敗したアーカイブジョブ	最近失敗したアーカイブジョブが表示されます。 p.755の「 [失敗したアーカイブジョブ]レポート 」を参照してください。
ファイルシステムのアーカイブ設定	各サーバーのアーカイブ選択項目に適用されるアーカイブの設定が表示されます。 p.756の「 [ファイルシステムのアーカイブ設定]レポート 」を参照してください。
アーカイブの概略 (前日分)	過去 24 時間に実行したアーカイブジョブの状態が表示されます。 p.757の「 [アーカイブの概略 (前日分)]レポート 」を参照してください。
ボルトストア使用量の詳細	各ストア内のアーカイブと各アーカイブのサイズが表示されます。 p.757の「 [ボルトストア使用量の詳細]レポート 」を参照してください。
ボルトストア使用量の概略	各ボルトストア内のアーカイブ項目とボルトストアの合計サイズが表示されます。 p.758の「 [ボルトストア使用量の概略]レポート 」を参照してください。

p.679の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[アクティブアラート]レポート

[アクティブアラート]レポートには、すべてのアクティブなアラートが最新のものから順に一覧表示されます。[イベント数]に範囲パラメータを入力し、レポートに表示するアラート数を制限することができます。

[アクティブアラート]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-17 [アクティブアラート]レポート

項目	説明
時間	アラートが発生した日時です。
メディアサーバー	アラートが発生したメディアサーバーの名前です。
ジョブ名	このアラートと関連のあるジョブの名前です。
デバイス名	ジョブを実行したデバイスの名前です。
カテゴリ	[サービスの起動]や[ジョブ失敗]など、アラートの名前です。
メッセージ	アラートの原因となったイベントについての説明です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[アクティブアラート (メディアサーバー別)]レポート

[アクティブアラート (メディアサーバー別)]レポートには、メディアサーバー別に、すべてのアクティブアラートが最新のものから順に一覧表示されます。[イベント数]または[メディアサーバー]オプションのフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[アクティブアラート (メディアサーバー別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-18 [アクティブアラート (メディアサーバー別)]レポート

項目	説明
時間	アラートが発生した日時です。
ジョブ名	このアラートと関連のあるジョブの名前です。
デバイス名	ジョブを実行したデバイスの名前です。
カテゴリ	[サービスの起動]や[ジョブ失敗]など、アラートの名前です。

項目	説明
メッセージ	アラートの原因となったイベントについての説明です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[アラート履歴]レポート

[アラート履歴]レポートには、アラート履歴内のすべてのアラートが最新のものから順に一覧表示されます。[日数]または[イベント数]オプションに範囲パラメータを入力し、レポートに表示するアラート数を制限することができます。

[アラート履歴]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-19 [アラート履歴]レポート

項目	説明
時間	アラートが発生した日時です。
受信済み	アラートが発生した時間です。
応答済み	このアラートに応答した時間です。
応答ユーザー	このアラートに応答したユーザーの ID です。
ジョブ名	このアラートと関連のあるジョブの名前です。
メディアサーバー	アラートが発生したメディアサーバーの名前です。
カテゴリ	[サービスの起動]や[ジョブ失敗]など、アラートの名前です。
メッセージ	アラートの原因となったイベントについての説明です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[アラート履歴 (メディアサーバー別)]レポート

[アラート履歴 (メディアサーバー別)]レポートには、アラート履歴内のすべてのアクティブアラートが、メディアサーバー別に、最新のものから順に一覧表示されます。[日数]、[イベント数]または[メディアサーバー]オプションのフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[アラート履歴 (メディアサーバー別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-20 [アラート履歴 (メディアサーバー別)]レポート

項目	説明
メディアサーバー	アラートが発生したメディアサーバーの名前です。
時間	アラートが発生した日時です。
受信済み	アラートが発生した時間です。
応答済み	このアラートに応答した時間です。
応答ユーザー	このアラートに応答したユーザーの ID です。
ジョブ名	このアラートと関連のあるジョブの名前です。
カテゴリ	[サービスの起動]や[ジョブ失敗]など、アラートの名前です。
メッセージ	アラートの原因となったイベントについての説明です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[アプリケーションイベントログ]レポート

[アプリケーションイベントログ]レポートには、Backup Exec アプリケーションのすべてのイベントログが一覧表示されます。

[アプリケーションイベントログ]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-21 [アプリケーションイベントログ]レポート

項目	説明
番号	Windows のイベントログ内のイベントに割り当てられている番号です。
イベント	発生したイベントの種類です。
日時	イベントが発生した日時です。
ソース	このイベントの発生元です。
説明	イベントに対して表示されたメッセージです。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[監査ログ]レポート

[監査ログ]レポートには、選択したサーバーの指定した期間の監査ログの内容が一覧表示されます。[メディアサーバー]または[監査ログカテゴリ]オプションのフィルタパラメータと、[日数]および[イベント数]オプションの範囲パラメータを入力し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[監査ログ]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-22 [監査ログ]レポート

項目	説明
メディアサーバー	監査ログの保存先メディアサーバーの名前です。
カテゴリ	ログオンアカウント、アラートあるいはジョブなどの変更が発生したカテゴリです。
入力日付	変更が発生した日時です。
メッセージ	Backup Exec 内で変更された内容の説明です。
ユーザー名	変更を行ったユーザーです。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[バックアップジョブの成功率]レポート

[バックアップジョブの成功率]レポートには、バックアップジョブによる選択したサーバーの保護成功率が一覧表示されます。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータと[日数]オプションの範囲パラメータを入力し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[バックアップジョブの成功率]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-23 [バックアップジョブの成功率]レポート

項目	説明
サーバー	保護されているサーバーの名前です。
日付	このバックアップジョブを実行した日時です。
総ジョブ数	このメディアサーバーで処理したジョブの総数です。
成功	このメディアサーバーで処理した成功ジョブの総数です。
成功率	このメディアサーバーで処理した成功ジョブのパーセンテージです。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[バックアップの成功率 (リソース別)]レポート

[バックアップの成功率 (リソース別)]レポートには、選択したサーバー上のリソースに対する指定した期間のバックアップジョブの成功率が一覧表示されます。[日数]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[バックアップの成功率 (リソース別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-24 [バックアップの成功率 (リソース別)]レポート

項目	説明
リソース	保護されているシステムの名前です。
日付	このバックアップジョブを実行した日時です。
バックアップセット	このメディアサーバーで処理したバックアップセットの総数です。
成功	このメディアサーバーで処理した成功ジョブの総数です。
成功率	このメディアサーバーで処理した成功ジョブのパーセンテージです。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[バックアップセットの詳細 (リソース別)]レポート

[バックアップセットの詳細 (リソース別)]レポートには、指定した期間内に指定したサーバー上で実行したすべてのジョブが一覧表示されます。ジョブはサーバーおよびリソースごとにグループ分けされています。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータと[時間]オプションの範囲パラメータを入力し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[バックアップセットの詳細 (リソース別)]に表示される情報を次の表に示します。

表 16-25 [バックアップセットの詳細 (リソース別)]レポート

項目	説明
リソース	保護されているシステムの名前です。
開始時刻	ジョブを開始した日時です。
所要時間	ジョブの実行に要した時間です。

項目	説明
サイズ (MB)	処理したバイト数です。
ファイル	処理したファイルの数です。
ディレクトリ	処理したディレクトリの数です。
MB/分	処理したデータの 1 分あたりの MB 数です。
スキップ	ジョブの実行中にスキップしたファイルの数です。
破損ファイル	ジョブの実行中に見つかった破損ファイルの数です。
使用中ファイル	ジョブの実行中に使用中であったファイルの数です。
状態	[完了]など、ジョブの状態です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[バックアップセット (メディアセット別)]レポート

[バックアップセット (メディアセット別)]レポートには、すべてのバックアップセットがメディアセット別に表示されます。[メディアセット]オプションのフィルタパラメータを選択して、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[バックアップセット (メディアセット別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-26 [バックアップセット (メディアセット別)]レポート

項目	説明
メディアセット	ジョブの実行に使用したメディアセットの名前です。
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
セット	メディア上のバックアップセットの通し番号です。
方式	バックアップの種類です。 p.254 の「 バックアップ戦略を選択する方法 」を参照してください。
日時	データをバックアップした日時です。
バックアップセットの説明/ソース	バックアップしたデータとその格納場所についての説明です。

項目	説明
ディレクトリ	バックアップしたディレクトリの数です。
ファイル	バックアップしたファイルの数です。
MB	バックアップしたデータ量 (MB 単位) です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[バックアップサイズ (リソース別)]レポート

[バックアップサイズ (リソース別)]レポートには、過去最大 7 回のポリシーベースの各リソースジョブのバックアップサイズが一覧表示されます。過去最大 7 回のジョブでバックアップされたデータ量の平均値も表示されます。

このレポートには、リソースにポリシーを適用して作成されたジョブのみが表示されます。

p.511 の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

p.532 の「[ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)」を参照してください。

[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[バックアップサイズ (リソース別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-27 [バックアップサイズ (リソース別)]レポート

項目	説明
サーバー	バックアップジョブのデータの格納先メディアサーバーの名前です。
リソース	バックアップしたリソースの名前です。
ジョブ	バックアップジョブの名前です。
ジョブ実行日時	このバックアップジョブを実行した日時です。
バックアップサイズ (MB)	バックアップしたデータ量 (MB 単位) です。
平均 (MB)	過去 7 回の実行でバックアップされたデータ量の平均値です。
差 %	現在のジョブと、それまでのバックアップジョブでバックアップされた量の差異です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「新しいレポートジョブの実行」を参照してください。

[システム構成の設定内容]レポート

[システム構成の設定内容]レポートには、Backup Exec システム構成パラメータテーブルの内容が一覧表示されます。

[システム構成の設定内容]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-28 [システム構成の設定内容]レポート

項目	説明
パラメータ名	Backup Exec 設定パラメータの名前です。
クラス	Backup Exec システム関連のパラメータです。
値	設定パラメータの値です。 メモ: StoreMaintenanceLastrun と StoreMaintenanceRuntime のパラメータは、グリニッジ標準時 (GMT) の日時で表示されます。

p.679 の「レポートの実行」を参照してください。

p.682 の「新しいレポートジョブの実行」を参照してください。

[現在のジョブ状態]レポート

[現在のジョブ状態]レポートには、ジョブキューについての詳細が、状態でソートして一覧表示されます。[ジョブ状態]のフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[現在のジョブ状態]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-29 [現在のジョブ状態]レポート

項目	説明
ジョブ状態	ジョブの状態が表示されます。
ジョブ	ジョブの名前です。
次の期日	このジョブを実行する次の予定日時です。
元の期日	このジョブの実行が予定されていた元の日時です。

項目	説明
優先度	ジョブの実行順序に対するジョブの優先度を決定します。このジョブと同じ時間に実行するようにスケジュールの設定されているジョブが他にもある場合は、優先度によって、どちらを先に実行するかが決定されます。 p.183 の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。
保留	保留中のジョブの場合は X 印、その他の場合はダッシュ (-) が表示されません。
種類	[バックアップ]や[リストア]など、実行したジョブの種類です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ネットワークデバイスの使用率 (日別)]レポート

[ネットワークデバイスの使用率 (日別)]レポートには、メディアサーバーで使用されるストレージデバイスの容量がパーセンテージで一覧表示されます。

[ネットワークデバイスの使用率 (日別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-30 [ネットワークデバイスの使用率 (日別)]レポート

項目	説明
ドライブ名	デバイスが存在するストレージデバイスおよびメディアサーバーの名前です。
日付	このストレージデバイスが使用された日付です。
ジョブ	このメディアサーバーのストレージデバイスで処理したジョブの総数です。
サイズ (MB)	このメディアサーバーのストレージデバイスで処理したバイト数 (MB 単位) です。
使用率 (%)	デバイスの使用率のパーセンテージです。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

重複排除用デバイスの概略

[重複排除用デバイスの概略]レポートには、ローカルおよび共有の重複排除用ストレージフォルダに対する重複排除操作の概略が表示されます。

表 16-31 [重複排除用デバイスの概略]レポート

項目	説明
状態	オンラインや有効など、デバイスの状態です。
作成日	メディアの作成日です。
総容量 (MB)	重複排除用ストレージフォルダの総容量です。
使用容量 (MB)	重複排除用ストレージフォルダで現在使用されている容量です。
空き領域 (MB)	重複排除用ストレージフォルダの残りの容量です。
% 使用済み	重複排除用ストレージフォルダで利用可能なストレージ容量のパーセンテージです。
保護されるバイト数 (MB)	重複排除の実行前にデバイスを使用してすべてのジョブをバックアップするために選択したデータの総量です。
重複排除率	重複排除前のデータ量と重複排除後のデータ量の比率です。

重複排除の概略

[重複排除の概略]レポートには、Backup Exec メディアサーバーで実行されるすべての重複排除ジョブの重複排除の概略が表示されます。

表 16-32 [重複排除の概略]レポート

項目	説明
ジョブ名	ジョブの名前です。
開始時刻	Backup Exec がジョブの開始を試行した時刻です。
所要時間	ジョブの実行に要した時間です。
サイズ (MB)	処理したバイト数です。
MB/分	処理したデータの 1 分あたりの MB 数です。
スキャンされたバイト数 (MB)	重複排除の実行前にバックアップするために選択したデータの総量 (MB 単位) です。

項目	説明
格納されているバイト数 (MB)	重複排除の実行後に格納された重複のないデータの量です。
重複排除率	重複排除前のデータ量と重複排除後のデータ量の比率です。
状態	[完了]など、操作の状態です。

[デバイスの概略]レポート

[デバイスの概略]レポートには、選択したメディアサーバーのすべてのデバイスが一覧表示されます。[メディアサーバー]オプションのフィルタパラメータを選択して、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[デバイスの概略]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-33 [デバイスの概略]レポート

項目	説明
サーバー	このデバイスが存在しているサーバーの名前です。
デバイス名	ロボットライブラリの名前など、デバイスの名前です。スタンドアロンドライブの場合は、このフィールドは空です。
ドライブ名	ロボットライブラリ内に存在するドライブの名前です。
製造元/製品 ID	SCSI照会文字列の、ドライブの製造元の名前、製品 ID およびファームウェアが表示されます。
SCSI ターゲット	SCSI カードのアドレス、SCSI バス、ターゲットデバイス ID および LUN が表示されます。
状態	オンラインなど、デバイスの状態です。
作成日	メディアの作成日です。
クリーニング済み	このドライブ上で前回クリーニングジョブを実行した日です。
時間	前回のクリーニング以降にこのデバイスを使用した時間です。
エラー	前回のクリーニング以降に発生したエラーの数です。
MB	前回のクリーニング以降に読み書きされたデータ量 (MB 単位) です。
マウント数	前回のクリーニング以降にマウントした回数です。
時間	このデバイスの総使用時間です。

項目	説明
エラー	このデバイス上で発生したエラーの合計です。
MB	このデバイスに読み書きされたデータ合計量 (MB 単位) です。
マウント数	このデバイスの総マウント回数です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[デバイス使用率 (ポリシー別)]レポート

[デバイス使用率 (ポリシー別)]レポートには、指定したドライブをターゲットとするすべてのポリシーが一覧表示されます。[ポリシー名]のフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[デバイス使用率 (ポリシー別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-34 [デバイス使用率 (ポリシー別)]レポート

項目	説明
ドライブ名	デバイスが存在するストレージデバイスおよびメディアサーバーの名前です。
方式	バックアップの種類です。 p.258 の「 バックアップ方式について 」を参照してください。
ポリシー名	ポリシーの名前です。
テンプレート名	ジョブテンプレートの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[エラー処理方法]レポート

[エラー処理方法]レポートには、すべてのエラー処理方法が一覧表示され、各処理方法についての詳細が示されます。[メディアサーバー]のフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[エラー処理方法]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-35 [エラー処理方法]レポート

項目	説明
ルール名	エラー処理方法の名前です。
説明	エラー処理方法の作成時に[説明]セクションに入力した情報が表示されます。
ジョブ状態	この処理方法をアクティブにした、ジョブの最終状態です。 表示される状態は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">■ エラー■ キャンセル
エラーカテゴリ	この処理方法が適用されるエラーカテゴリです。 利用可能なエラーカテゴリは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">■ デバイス■ ジョブ■ メディア■ ネットワーク■ その他■ リソース■ セキュリティ■ サーバー■ システム
有効	この処理方法が有効であるか無効であるかが表示されます。
ジョブのキャンセル	エラー処理方法に対してこのオプションを選択した場合は、Xが表示されます。このオプションは、最大試行回数に達した場合、すべてのジョブをキャンセルします。
ジョブの一時停止	エラー処理方法に対してこのオプションを選択した場合は、Xが表示されます。エラー条件を手動でクリアするまでジョブを一時停止する場合は、このオプションを選択します。
ジョブの再試行	エラー処理方法に対してこのオプションを選択した場合は、Xが表示されます。このオプションを選択すると、Backup Exec がジョブを再試行します。
最大再試行数	ジョブを再試行する最大回数です。
再試行間隔 (分)	ジョブを再試行する間隔 (分単位) です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[イベントの受信者]レポート

[イベントの受信者]レポートには、各通知受信者によって登録されたイベントが一覧表示されます。

[イベントの受信者]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-36 [イベントの受信者]レポート

項目	説明
受信者の種類	個人、Net Send、プリンタおよびグループなど、受信者の種類です。
受信者名	受信者の名前です。
イベントの種類	アラートカテゴリまたは特殊ジョブです。
イベント名	アラートカテゴリまたは特殊ジョブの詳細です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[失敗したバックアップジョブ数]レポート

[失敗したバックアップジョブ数]レポートには、ポリシーに関連付けられていて、失敗したすべてのバックアップジョブが一覧表示されます。ジョブは、サーバーおよび指定した時間帯でソートして表示されます。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータと [日数]オプションの範囲パラメータを入力し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[失敗したバックアップジョブ数]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-37 [失敗したバックアップジョブ数]レポート

項目	説明
リソース	保護されているシステムの名前です。
開始時刻	バックアップジョブを開始した日時です。
所要時間	ジョブの実行に要した時間です。
ジョブ名	失敗したジョブの名前です。
カテゴリ	システム、ジョブ、メディアおよびデバイスのエラーによって生成される失敗ジョブのカテゴリです。
エラーコード	失敗に対応するエラーコードが表示されます。

項目	説明
説明	エラーの原因となったイベントについての説明です。
状態	[完了]など、ジョブの状態です。
デバイス名	ジョブを実行したデバイスの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[実行されたジョブ (デバイス別)]レポート

[実行されたジョブ (デバイス別)]レポートには、指定した期間に各システムデバイス上で実行されたすべてのジョブが一覧表示されます。デバイスのジョブ負荷を確認するのに役立ちます。[日数]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[実行されたジョブ (デバイス別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-38 [実行されたジョブ (デバイス別)]レポート

項目	説明
デバイス	ジョブを実行したデバイスの名前です。
ジョブ実行日時	ジョブを実行した日時です。
ジョブ	このデバイス上で実行したジョブの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ジョブの概略]レポート

[ジョブの概略]レポートには、指定した期間内に実行したすべてのジョブが表示されます。ジョブは実行順に表示されます。[時間]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ジョブの概略]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-39 [ジョブの概略]レポート

項目	説明
開始時刻	ジョブを開始した日時です。

項目	説明
ジョブ名	完了ジョブの名前です。
所要時間	ジョブの実行に要した時間です。
サイズ (MB)	処理したバイト数です。
ファイル	処理したファイルの数です。
ディレクトリ	処理したディレクトリの数です。
MB/分	処理したデータの 1 分あたりの MB 数です。
スキップ	ジョブの実行中にスキップしたファイルの数です。
破損ファイル	ジョブの実行中に見つかった破損ファイルの数です。
使用中ファイル	ジョブの実行中に使用中であったファイルの数です。
状態	[完了]など、ジョブの状態です。
種類	バックアップの種類です。 p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。

p.679 の「レポートの実行」を参照してください。

p.682 の「新しいレポートジョブの実行」を参照してください。

[バックアップ済みのマシン]レポート

[バックアップ済みのマシン]レポートには、保護されているすべてのサーバーとバックアップした日時が一覧表示されます。[日数]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[バックアップ済みのマシン]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-40 [バックアップ済みのマシン]レポート

項目	説明
サーバー	バックアップしたサーバーの名前です。
総バックアップ数	バックアップを実行した総回数です。
最終バックアップ	このサーバーの最終バックアップ日時です。

p.679 の「レポートの実行」を参照してください。

p.682 の「新しいレポートジョブの実行」を参照してください。

[管理対象メディアサーバー]レポート

[管理対象メディアサーバー]レポートには、Backup Exec によって管理されているすべてのメディアサーバーの状態および設定情報が一覧表示されます。[メディアサーバー]オプションのフィルタパラメータを選択して、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[管理対象メディアサーバー]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-41 [管理対象メディアサーバー]レポート

項目	説明
管理対象メディアサーバー	管理対象メディアサーバーの名前です。
状態	サーバーの状態です。 状態は、次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ オンライン: 利用可能です。 ■ 通信中断: メッセージに対してすぐに応答しません。 ■ 通信途絶: サーバーとの通信が一定の期間失われました。
通信中断	通信状態に[通信中断]を表示するまでの制限時間です。
通信途絶	通信状態に[通信途絶]を表示するまでの制限時間です。
カタログの場所	サーバー上でカタログ情報が保持される場所です。 場所は、次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ローカル: カタログ情報は、メディアサーバー上で保持されます。 ■ CASO: カタログ情報は、集中管理サーバー上で保持されます。
ログ	ジョブログを、管理対象サーバーからCASOデータベースにアップロードするタイミングです。 アップロードのタイミングは、次のいずれかです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 指定したタイミング (秒単位) ■ スケジュールされた時刻 ■ ジョブの完了時 ■ アップロードしない

項目	説明
履歴	<p>ジョブ履歴を、管理対象サーバーから CASO データベースにアップロードするタイミングです。</p> <p>アップロードのタイミングは、次のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 指定したタイミング (秒単位) ■ スケジュールされた時刻 ■ ジョブの完了時 ■ アップロードしない
状態	<p>状態を、管理対象サーバーから CASO データベースにアップロードするタイミングです。</p> <p>アップロードのタイミングは、次のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 指定したタイミング (秒単位) ■ スケジュールされた時刻 ■ ジョブの完了時 ■ アップロードしない
アラートを表示	<p>サーバー間における時刻の差が、設定されている値(時差の最大許容範囲)を超えた場合にアラートを表示するように設定している場合は、[はい]が表示されます。</p>
秒	<p>サーバーに設定されている時刻の差の最大許容範囲 (秒単位) です。</p>

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[メディア監査]レポート

[メディア監査]レポートには、メディアの設定に加えられた最新の変更が一覧表示されます。[メディアサーバー]オプションのフィルタパラメータを使用して、レポートに表示するデータ量を制限することができます。また、[日数]または[イベント数]オプションに範囲パラメータを入力することもできます。

[メディア監査]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-42 [メディア監査]レポート

項目	説明
入力日付	変更が発生した日時です。
メッセージ	メディアに加えられた変更の説明です。
ユーザー名	変更を行ったユーザーです。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[メディアエラー]レポート

[メディアエラー]レポートには、すべてのメディアで発生したエラー数が一覧表示されます。[メディアセット]オプションのフィルタパラメータを使用して、レポートに表示するデータ量を制限することができます。また、[イベント数]オプションに範囲パラメータを入力することもできます。

[メディアエラー]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-43 [メディアエラー]レポート

項目	説明
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
総マウント数	このメディアをマウントした合計回数です。
総使用時間	このメディアの総使用時間です。
総エラー数	システム、ジョブ、メディアおよびデバイスのエラーアラートの合計数です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[リカバリに必要なメディア]レポート

[リカバリに必要なメディア]レポートには、指定した期間に、選択したメディアサーバー上でバックアップした各システムのバックアップセットが格納されているメディアが一覧表示されます。このレポートは、メディアの上書き設定が上書き可能な場合は、正確でないことがあります。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータと[日数]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[リカバリに必要なメディア]レポート表示される情報を次の表に示します。

表 16-44 [リカバリに必要なメディア]レポート

項目	説明
リソース	バックアップしたシステムの名前です。

項目	説明
種類	バックアップの種類です。 p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。
日付	このバックアップセットが作成された日時です。
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。

p.679 の「レポートの実行」を参照してください。

p.682 の「新しいレポートジョブの実行」を参照してください。

[メディアセット]レポート

[メディアセット]レポートには、Backup Exec サーバーで使用されているすべてのメディアセットとメディアが一覧表示されます。また、各メディアの使用統計情報が表示されます。[メディアセット]オプションのフィルタパラメータを選択して、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[メディアセット]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-45 [メディアセット]レポート

項目	説明
メディアセット	メディアセットの名前です。
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
メディアの種類	メディアカートリッジの種類です (4mm など)。
割り当て	上書き操作の結果、メディアがメディアセットに割り当てられた日付です。
修正日	このメディアに、前回のデータが書き込まれた日付です。
場所	メディアの場所です。
時間	このメディアの総使用時間です。
マウント数	このメディアをマウントした合計回数です。
ソフトエラー	リカバリ可能な読み取りエラーの発生回数です。
ハードエラー	リカバリ不可能な読み取りエラーの発生回数です。

項目	説明
書き込み済み MB	このメディアに書き込まれたデータ量 (MB 単位) です。
現在 MB	このメディア上の現在の推定データ量 (MB 単位) です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[メディアボルト内のメディア]レポート

[メディアボルト内のメディア]レポートには、指定のメディアボルト内に存在するすべてのメディアが一覧表示されます。[ボルト]オプションのフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[メディアボルト内のメディア]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-46 [メディアボルト内のメディア]レポート

項目	説明
ボルト名	メディアの場所です。
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
上書き禁止期間の終了日	メディア上のデータが上書き可能になる日付です。
ボルトメディアルール移動日	メディアがボルトに移動可能になる日付です。
メディアセット	メディアが属するメディアセットの名前です。
ボルトメディアルール名	ボルトメディアルールの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[有効時間帯を逸したジョブ]レポート

[有効時間帯を逸したジョブ]レポートには、指定した期間内で、スケジュールが設定されていた有効時間帯に実行されなかったすべてのジョブが一覧表示されます。ジョブは実

行順に表示されます。[時間]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[有効時間帯を逸したジョブ]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-47 [有効時間帯を逸したジョブ]レポート

項目	説明
日付	ジョブを作成した日時です。
設定された開始時間	Backup Exec がジョブの開始を試行した時間です。
ジョブ名	ジョブの名前です。
選択リスト	ジョブの選択リストの名前です。
開始時刻	有効時間帯の開始日時です。
終了時刻	有効時間帯の終了日時です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ボルトへのメディアの移動]レポート

[ボルトへのメディアの移動]レポートには、メディアボルトに移動可能なすべてのメディアが一覧表示されます。

次のいずれかの条件を満たす、現在メディアボルトに存在していないメディアが表示されます。

- メディアが格納されているデバイスに指定されているボルトへの移動日が到来したか、または経過した。
- 追記期間は終了したが、上書き禁止期間内にある。

[メディアサーバー]のフィルタパラメータと[日数]オプションの範囲パラメータを入力し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ボルトへのメディアの移動]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-48 [ボルトへのメディアの移動]レポート

項目	説明
メディアサーバー	バックアップジョブのデータの格納先メディアサーバーの名前です。
メディアセット	メディアセットの名前です。

項目	説明
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
場所	メディアの場所です。
追記期間の終了日	メディアにデータを追記できる最終の日付です。
上書き禁止期間の終了日	メディア上のデータが上書き可能になる日付です。
ボルトメディアルール移動日	メディアがボルトに移動可能になる日付です。
ボルト名	メディアの移動先ボルトの名前です。
ボルトメディアルール名	ボルトメディアルールの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ジョブ、メディア、アラートの概要]レポート

[ジョブ、メディア、アラートの概要]レポートには、過去と将来の Backup Exec ジョブの詳細が一覧表示されます。[日数]または[イベント数]オプションに範囲パラメータを入力し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ジョブ、メディア、アラートの概要]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-49 [ジョブ、メディア、アラートの概要]レポート

項目	説明
過去に完了したジョブ X 時間	指定期間の、Backup Exec ジョブのアクティビティの詳細です。
エラー	システム、ジョブ、メディアおよびデバイスのエラーアラートの合計数です。
警告	ジョブ、メディアおよびデバイスの警告アラートの合計数です。
情報	システム、ジョブ、メディアおよびデバイスの情報アラートの合計数です。
要注意	ユーザーの応答を要求したアラートの合計数です。
完了 (失敗)	失敗したジョブの合計数です。

項目	説明
完了 (キャンセル)	キャンセルされたジョブの総数です。
完了 (成功)	成功したジョブの合計数です。
例外	ジョブの実行は成功したが、1 つ以上のファイルのスキップ、破損ファイル、ウイルス感染ファイルまたは使用中のファイルを含むジョブの合計数です。
バックアップデータ 合計	バックアップしたデータの合計量 (MB 単位) です。
使用メディア 合計	完了ジョブでのバックアップに使用したメディアの合計です。
未処理	未処理ジョブの総数です。
リカバリ	リカバリされたジョブの総数です。
実行中のジョブ	実行中のジョブの総数です。
スケジュール済み ジョブ	スケジュール済みジョブの総数です。
保留中のジョブ一覧	保留状態のジョブの総数です。
ジョブ状態	ジョブの状態です。
スクラッチメディア	利用可能なスクラッチメディアの総数です。
再利用可能	利用可能な再利用可能メディアの総数です。
インポートメディア	インポートメディア (他の Backup Exec システムまたはバックアップ製品で作成したメディア) の数です。
割り当て	割り当て済みメディア (ユーザーメディアセットに所属しているメディア) の数です。
上書き可能メディア 合計	利用可能な上書き可能メディアの総数です。
追記可能メディア 合計	利用可能な追記可能メディアの総数です。
メディアの上書き禁 止レベル	メディアに割り当てられた上書き保護レベル (すべて、一部、なし) が表示されます。
オンラインのデバ イス	オンラインのデバイスの総数です。
オフラインのデバ イス	オフラインのデバイスの総数です。

項目	説明
無効なデバイス	無効なデバイスの総数です。
一時停止中のデバイス	一時停止中のデバイスの総数です。
無効	無効になるデバイスの名前が一覧表示されます。
一時停止	一時停止中のデバイスの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ジョブの概略 (前日分)]レポート

[ジョブの概略 (前日分)]レポートには、過去 24 時間の各リソースに対するバックアップジョブの結果が一覧表示されます。このレポートには、スケジュールが設定されていたにもかかわらず実行されなかったバックアップジョブも表示されます。期限切れとしてマークする前に、ジョブには 24 時間の猶予期間が与えられます。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ジョブの概略 (前日分)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-50 [ジョブの概略 (前日分)]レポート

項目	説明
リソース	保護されているシステムです。
種類	バックアップの種類です。 p.258 の「 バックアップ方式について 」を参照してください。
開始時刻	ジョブを開始した日時です。
状態	ジョブの状態です。
エラーカテゴリ	システム、ジョブ、メディアおよびデバイスのエラーによって生成されるジョブのカテゴリです。
メディアサーバー	ジョブを実行したメディアサーバーの名前です。
デバイス名	ジョブを実行したデバイスの名前です。
タスク総数	過去 24 時間以内に実行したジョブの総数です。

項目	説明
未解決の例外	失敗した結果、再試行されても成功しなかったジョブの総数です。 過去 24 時間に実行したアーカイブジョブのいくつかで例外が発生しました。例外を解決する必要があります。さもなければ、例外が解決されるまで以降の 24 時間、例外のために失敗するジョブが表示され続けます。
サービスレベル	成功したジョブのパーセンテージです。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ポリシージョブの概略 (リソース別)]レポート

[ポリシージョブの概略 (リソース別)]レポートには、選択した期間に作成されたすべてのバックアップセットが一覧表示されます。ジョブはターゲットサーバーおよびリソースごとにグループ分けされています。[保護対象サーバー]のフィルタパラメータと[時間]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ポリシージョブの概略 (リソース別)]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-51 [ポリシージョブの概略 (リソース別)]レポート

項目	説明
ポリシー	ポリシーの名前です。
開始時刻	ジョブを開始した日時です。
所要時間	ジョブの実行に要した時間です。
サイズ (MB)	処理したバイト数です。
ファイル	処理したファイルの数です。
ディレクトリ	処理したディレクトリの数です。
MB/分	処理したデータの 1 分あたりの MB 数です。
スキップ	ジョブの実行中にスキップしたファイルの数です。
破損ファイル	ジョブの実行中に見つかった破損ファイルの数です。
使用中ファイル	ジョブの実行中に使用中であったファイルの数です。
状態	[完了]など、ジョブの状態です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ポリシージョブの概略]レポート

[ポリシージョブの概略]レポートには、指定した期間内に選択したポリシーから作成されたすべてのジョブが表示されます。ジョブは実行順に表示されます。[ポリシー名]のフィルタパラメータと[時間]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ポリシージョブの概略]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-52 [ポリシージョブの概略]レポート

項目	説明
ポリシー	ポリシーの名前です。
開始時刻	ジョブを開始した日時です。
ジョブ名	完了ジョブの名前です。
所要時間	ジョブの実行に要した時間です。
サイズ (MB)	処理したバイト数です。
ファイル	処理したファイルの数です。
ディレクトリ	処理したディレクトリの数です。
MB/分	処理したデータの 1 分あたりの MB 数です。
スキップ	ジョブの実行中にスキップしたファイルの数です。
破損ファイル	ジョブの実行中に見つかった破損ファイルの数です。
使用中ファイル	ジョブの実行中に使用中であったファイルの数です。
状態	[完了]など、ジョブの状態です。
種類	バックアップの種類です。 p.258 の「 バックアップ方式について 」を参照してください。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ポリシーのプロパティ]レポート

[ポリシーのプロパティ]レポートには、メディアサーバー用に定義されているすべてのポリシーおよびポリシージョブテンプレートが一覧表示されます。

[ポリシーのプロパティ]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-53 [ポリシーのプロパティ]レポート

項目	説明
テンプレート名	ジョブテンプレートの名前です。
セットの説明	バックアップしたデータとその格納場所についての説明です。
方式	バックアップの種類です。 p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。
種類	[バックアップ]や[リストア]など、実行するジョブの種類です。
デバイス	ジョブを実行するデバイスの名前です。
メディアセット	ジョブに使用するメディアセットの名前です。
上書き/追記	バックアップジョブテンプレートプロパティ用のメディアの上書き禁止オプションの設定です。

p.679 の「レポートの実行」を参照してください。

p.682 の「新しいレポートジョブの実行」を参照してください。

[ポリシー保護リソース]レポート

[ポリシー保護リソース]レポートには、ポリシーから作成され、指定したリソースを保護するように割り当てられている各ジョブの情報が一覧表示されます。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ポリシー保護リソース]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-54 [ポリシー保護リソース]レポート

項目	説明
リソース	保護されているシステムです。
ポリシー	ポリシーの名前です。
ジョブ名	ジョブの名前です。
次の期日	このジョブを実行する次の予定日時です。

p.679 の「レポートの実行」を参照してください。

p.682 の「新しいレポートジョブの実行」を参照してください。

[正常に実行されなかったファイル]レポート

[正常に実行されなかったファイル]レポートには、ジョブの実行中に問題が報告されたすべてのファイルが一覧表示されます。ファイルは日付およびリソースごとにグループ分けされます。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータと[日数]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[正常に実行されなかったファイル]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-55 [正常に実行されなかったファイル]レポート

項目	説明
日付	問題のあるファイルが見つかった日付です。
リソース	問題のあるファイルが存在しているシステムの名前です。
時間	問題のあるファイルが見つかった時間です。
原因	ジョブログの概略に記録されたエラーコードです。
ファイル名	問題のあるファイルの名前です。
種類	問題のあるファイルの種類です。
メディアサーバー	問題のあるファイルが存在しているサーバーの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[更新されたメディア]レポート

[更新されたメディア]レポートには、指定した期間内に変更されたすべてのメディアが一覧表示されます。[時間]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[更新されたメディア]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-56 [更新されたメディア]レポート

項目	説明
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
場所	ストレージボルト名やドライブ名など、メディアの存在する場所です。
セット	バックアップセットの名前です。

項目	説明
修正日時	メディアの最終修正日時です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ポリシーによるリソースバックアップの成功率]レポート

[ポリシーによるリソースバックアップの成功率]レポートには、ポリシーバックアップジョブの成功率が一覧表示されます。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータと [日数]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ポリシーによるリソースバックアップの成功率]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-57 [ポリシーによるリソースバックアップの成功率]レポート

項目	説明
ポリシー	ポリシーの名前です。
リソース	保護されているシステムの名前です。
日付	ジョブが完了した日付です。
バックアップセット	このメディアサーバーで処理したバックアップセットの総数です。
成功	このメディアサーバーで処理した成功ジョブの総数です。
成功率	このメディアサーバーで処理した成功ジョブのパーセンテージです。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[リソースのリスク評価]レポート

[リソースのリスク評価]レポートには、前回のバックアップジョブが失敗したリソースのジョブ情報が表示されます。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[リソースのリスク評価]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-58 [リソースのリスク評価]レポート

項目	説明
リソース	ジョブを実行したシステムの名前です。
エラーテキスト	ジョブが失敗する原因となったカテゴリについての説明です。
開始時刻	ジョブの実行を開始した時刻です。
ジョブ	失敗したジョブの名前です。
エラーカテゴリ	システム、ジョブ、メディアおよびデバイスのエラーによって生成される失敗ジョブのカテゴリです。
メディアサーバー	ジョブを実行したメディアサーバーの名前です。
デバイス名	ジョブを実行したデバイスの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ポリシーによる保護対象のリソース]レポート

[ポリシーによる保護対象のリソース]レポートには、リソースの保護に使用されているポリシー、テンプレートおよび選択リストが一覧表示されます。

[ポリシーによる保護対象のリソース]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-59 [ポリシーによる保護対象のリソース]レポート

項目	説明
ポリシー	ポリシーの名前です。
リソース	保護されているリソースです。
テンプレート名	保護対象リソースに適用されるポリシーに含まれるジョブテンプレートの名前です。
選択リスト	保護対象として選択されたリソースのリストです。
ジョブ	ジョブの名前です。
次の期日	このジョブを実行する次回の予定日時です。

[リストアセットの詳細 (リソース別)]レポート

[リストアセットの詳細 (リソース別)]レポートには、指定した期間内に指定したサーバー上で実行したすべてのリストアジョブが一覧表示されます。ジョブはサーバーおよびリソースごとにグループ分けされています。[保護対象サーバー]オプションのフィルタパラメータと[時間]オプションの範囲パラメータを入力し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[リストアセットの詳細 (リソース別)]に表示される情報を次の表に示します。

表 16-60 [リストアセットの詳細 (リソース別)]レポート

項目	説明
リソース	保護されているシステムの名前です。
開始時刻	ジョブを開始した日時です。
所要時間	ジョブの実行に要した時間です。
サイズ (MB)	処理したバイト数です。
ファイル	処理したファイルの数です。
ディレクトリ	処理したディレクトリの数です。
MB/分	処理したデータの 1 分あたりの MB 数です。
スキップ	ジョブの実行中にスキップしたファイルの数です。
破損ファイル	ジョブの実行中に見つかった破損ファイルの数です。
使用中ファイル	ジョブの実行中に使用中であったファイルの数です。
状態	[完了]など、ジョブの状態です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ボルト内の利用可能なメディア]レポート

[ボルト内の利用可能なメディア]レポートには、指定したメディアボルト内に存在するすべての再利用可能メディアが一覧表示されます。[ボルト]オプションのフィルタパラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ボルト内の利用可能なメディア]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-61 [ボルト内の利用可能なメディア]レポート

項目	説明
ボルト名	メディアが存在しているボルトの名前です。
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
上書き禁止期間の終了日	メディア上のデータが上書き可能になる日付です。
移動日	メディアがボルトに移動可能になる日付です。
メディアセット	メディアセットの名前です。
ボルトメディアルール名	ボルトメディアルールの名前です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[ロボットライブラリのインベントリ]レポート

[ロボットライブラリのインベントリ]レポートには、メディアサーバーに接続されているロボットライブラリ内のスロットの内容が一覧表示されます。また、各メディアの使用統計情報が表示されます。[メディアサーバー]オプションのフィルタパラメータを選択して、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[ロボットライブラリのインベントリ]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-62 [ロボットライブラリのインベントリ]レポート

項目	説明
サーバー	ロボットライブラリが接続しているサーバーの名前です。
デバイス名	ロボットライブラリの名前です。
スロット	ロボットライブラリ内での、このスロットの通し番号です。
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
状態	スロット操作の状態です。[一時停止]、[使用不能]、[使用可能]、[オフライン]、[オンライン]のいずれかです。

項目	説明
修正日	スロット内のこのメディアに前回アクセスした日時です。
書き込み済み MB	このメディアに書き込まれたデータ量 (MB 単位) です。
フル	メディア上の空き領域を示します。メディア上の利用可能容量について、[1] は空きがないこと、[0] は空きがあることを示します。
時間	このメディアの総使用時間です。
マウント数	このメディアをマウントした合計回数です。
追加	このメディアの追記期間の残りの時間です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[サーバーの予想負荷]レポート

[サーバーの予想負荷]レポートには、今後 24 時間またはユーザー定義の時間帯のサーバーの予想負荷が表示されます。レポートは少なくとも 1 回実行されている定期実行ジョブのみを表示します。1 回限りのジョブは表示されません。[メディアサーバー]オプションのフィルタパラメータを使用して、レポートに表示するデータ量を制限することができます。また、[時間]オプションに範囲パラメータを入力することもできます。

[サーバーの予想負荷]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-63 [サーバーの予想負荷]レポート

項目	説明
メディアサーバー	このスケジュール済みジョブを実行するメディアサーバーの名前です。
ジョブ	実行スケジュールが設定されているジョブの名前です。
次の期日	このジョブを実行する次回の予定日時です。
バックアップサイズ (MB)	今後 24 時間に処理するデータの、MB 単位の予想量です。
合計サイズ (MB)	サーバー上で今後 24 時間に処理されるデータの総量です。
合計サイズ (MB)	すべてのメディアサーバー上で処理されるデータの総量です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[スクラッチ メディアの利用可能予定]レポート

[スクラッチメディアの利用可能予定]レポートには、メディアの使用経過時間の分布、上書き可能なメディア数、他のメディアが上書き可能になる時期が表示されます。[日数]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[スクラッチメディアの利用可能予定]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-64 [スクラッチ メディアの利用可能予定]レポート

項目	説明
カテゴリ	メディアセットプロパティで設定されているメディアセット期間です。
メディアラベル	メディアラベルには、Backup Exec によって割り当てられたもの、管理者が割り当てたものおよび割り当て済みバーコードラベルに含まれているものがあります。
サイズ (GB)	データの上書きが可能なスクラッチメディアの容量です。
追記に利用可能 (GB)	追記可能なスクラッチメディアの容量です。
グループ合計	システムで利用可能なスクラッチメディアの総数と合計容量です。
メディア合計	利用可能なスクラッチメディアの総数です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[選択リスト]レポート

[選択リスト]レポートには、保護されている選択リストと保護されていない選択リストに関する情報が一覧表示されます。

[ポリシーによる保護対象のリソース]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-65 [選択リスト]レポート

項目	説明
選択リスト名	選択リストの名前です。
選択リストの説明	保護されている選択リストの説明です。
ポリシー名	ポリシーの名前です。保護されていない選択リストには、ジョブは関連付けられていません。

項目	説明
ジョブ名	ジョブの名前です。保護されていない選択リストには、ジョブは関連付けられていません。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[テスト実行の結果]レポート

[テスト実行の結果]レポートには、選択した期間および選択したメディアサーバーについてのテスト実行ジョブの結果が表示されます。[メディアサーバー]のフィルタパラメータと[時間]オプションの範囲パラメータを選択し、レポートに表示するデータ量を制限することができます。

[テスト実行の結果]レポートに表示される情報を次の表に示します。

表 16-66 [テスト実行の結果]レポート

項目	説明
メディアサーバー	ジョブを実行したメディアサーバーの名前です。
ジョブ実行日時	このバックアップジョブを実行した日時です。
ジョブ名	テスト実行ジョブの名前です。
バックアップセット	バックアップセットの名前です。
クレデンシャルチェック	バックアップ対象のリソースに対して、Backup Exec ログオンアカウントが正しく認証されたかどうかを表示します。
バックアップサイズ (MB)	このバックアップのサイズ (MB 単位) です。
メディアの種類	使用したメディアカートリッジの種類です (4mm など)。
デバイス名	ロボットライブラリの名前など、デバイスの名前です。
最大必要容量 (MB)	このジョブの実行に必要なメディアの容量です。
オンライン	デバイス上の、データの追記が可能なメディアの容量です。
メディア合計	システムで利用可能な追記可能メディアの総容量です。
オンライン	デバイス上の、データの上書きが可能なメディアの容量です。
メディア合計	システムで利用可能な上書き可能メディアの総容量です。

p.679 の「[レポートの実行](#)」を参照してください。

p.682 の「[新しいレポートジョブの実行](#)」を参照してください。

[アーカイブジョブの成功率]レポート

[アーカイブジョブの成功率]レポートには、保護対象サーバーのアーカイブジョブが正常に実行された回数が表示されます。

表 16-67 アーカイブジョブの成功率

項目	説明
日付	アーカイブジョブが実行された日付が表示されます。
総ジョブ数	実行したアーカイブジョブの合計数が表示されます。
成功	成功したアーカイブジョブの合計数が表示されます。
成功率	アーカイブジョブの成功率がパーセントで表示されます。

[アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択]レポート

[アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択]レポートは、各アーカイブ選択項目に適用される保持カテゴリとアーカイブルールを表示します。

表 16-68 アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択

項目	説明
アーカイブルール	アーカイブ可能なファイルとメールメッセージを識別するために指定するアーカイブルールを表示します。
アーカイブ選択	アーカイブ選択項目のみを表示します。 NTFS アーカイブの場合には、ネットワークパスが表示されます。 Exchange メールボックスアーカイブの場合には、メールボックスグループがメールボックスグループの選択項目についての情報とともに表示されます。

項目	説明
アーカイブの種類	アーカイブするデータの種類を表示します。 アーカイブの種類は下記のものを含んでいます: <ul style="list-style-type: none"> ■ ファイルシステムのアーカイブ ■ メールボックスのアーカイブ
Windows ドメイン	アーカイブされた選択項目が存在する Windows ドメインを表示します。
保持カテゴリ	アーカイブジョブでファイルシステムの選択項目に適用される保持カテゴリを表示します。保持カテゴリでアーカイブ項目を保持する期間を指定します。

[Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定]レポート

[Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定]レポートは、各ドメインのメールボックスグループに適用されるアーカイブ設定を表示します。

表 16-69 Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定

項目	説明
Windows ドメイン	Exchange Server が属する Windows ドメインの名前を表示します。
メールボックスグループ	アーカイブするメールボックスグループの名前を表示します。
アーカイブルール	メールボックスグループのアーカイブに使われるアーカイブルールを表示します。
保持カテゴリ	アーカイブジョブでメールボックスグループの選択項目に適用される保持カテゴリを表示します。 保持カテゴリでアーカイブ項目を保持する期間を指定します。

[失敗したアーカイブジョブ]レポート

[失敗したアーカイブジョブ]レポートは、最近失敗したアーカイブジョブを表示します。

表 16-70 失敗したアーカイブジョブ

項目	説明
開始時刻	アーカイブジョブが開始された時間を表示します。
所要時間	アーカイブジョブの実行にかかった時間を表示します。
ジョブ名	アーカイブジョブの名前を表示します。
カテゴリ	失敗したアーカイブジョブの状態を表示します。
エラーコード	アーカイブジョブの失敗を引き起こしたエラーのエラーコードを表示します。
説明	アーカイブジョブの失敗を引き起こしたエラーの説明を表示します。
状態	システム、ジョブ、メディア、またはデバイスの問題が原因で生成される場合があるエラーのカテゴリを表示します。
デバイス名	アーカイブジョブを処理したストレージデバイスの名前を表示します。

[ファイルシステムのアーカイブ設定]レポート

[ファイルシステムのアーカイブ設定]レポートは、各サーバーのアーカイブ選択項目に適用されるアーカイブの設定を表示します。

表 16-71 ファイルシステムのアーカイブ設定

項目	説明
サーバー	データのアーカイブ元の Windows サーバーの名前を表示します。
リソース	リソースのパスを表示します。
アーカイブルール	ファイルのアーカイブに使われるアーカイブルールを表示します。
ボルトストア	アーカイブしたファイルが存在するボルトストアの名前を表示します。

項目	説明
保持カテゴリ	アーカイブジョブでファイルの選択項目に適用される保持カテゴリを表示します。 保持カテゴリでアーカイブ項目を保持する期間を指定します。

[アーカイブの概略 (前日分)]レポート

[アーカイブの概略(前日分)]レポートは、過去 24 時間に行われたアーカイブジョブの状態を表示します。

表 16-72 アーカイブの概略 (前日分)

項目	説明
リソース	保護するサーバーの名前を表示します。
種類	過去 24 時間に行われたジョブの種類を表示します。
開始時刻	アーカイブ操作が開始された日時を表示します。
状態	アーカイブ操作の状態を表示します。
エラーカテゴリ	システム、ジョブ、メディア、またはデバイスの問題が原因で生成される場合があるエラーのカテゴリを表示します。
メディアサーバー	ジョブを実行したメディアサーバーの名前を表示します。
デバイス名	ジョブを実行したデバイスの名前を表示します。
タスク総数	先行する 24 時間の間に実行したアーカイブジョブの合計数を表示します。
未解決の例外	エラー状態が解決されなかったために失敗し、再実行で正常に完了しなかったアーカイブジョブの数を表示します。
サービスレベル	成功したジョブのパーセンテージを表示します。

[ボルトストア使用量の詳細]レポート

[ボルトストア使用量の詳細]レポートは、各ストア内のアーカイブと各アーカイブのサイズを表示します。

表 16-73 ボルトストア使用量の詳細

項目	説明
ボルトストア	Backup Exec アーカイブが保存されるボルトストアの名前を表示します。
アーカイブ名	Archiving Option がアーカイブに与える名前を表示します。
アーカイブの種類	アーカイブするデータの種類を表示します。 アーカイブの種類は下記のものを含んでいます: <ul style="list-style-type: none"> ■ ファイルシステムのアーカイブ ■ メールボックスのアーカイブ
アーカイブ項目の数	ボルトストアにあるアーカイブ項目の数を表示します。
合計サイズ (KB)	ボルトストアのアーカイブ項目の合計サイズを表示します。

[ボルトストア使用量の概略]レポート

[ボルトストア使用量の概略]レポートは、各ボルトストア内のアーカイブ項目とボルトストアの合計サイズを表示します。

表 16-74 ボルトストア使用量の概略

項目	説明
ボルトストア	Backup Exec アーカイブが保存されるディスクベースのボルトストアの名前を表示します。
データベース名	設定データとパーティション内の各アーカイブについての情報を含んでいるボルトストアデータベースの名前を表示します。
ボルトストアのオープンパーティション	Backup Exec アーカイブが保存されるボルトストアのオープンパーティションの名前を表示します。
ボルトストアパーティションの空きサイズ (KB)	ボルトストアのオープンパーティションの利用可能な空き領域の量を表示します。
ボルトストアのアーカイブ数	ボルトストアの既存の Backup Exec アーカイブの合計数を表示します。

項目	説明
合計サイズ (KB)	ボルトストアの既存の Backup Exec アーカイブの合計サイズを KB 単位で表示します。

障害対策とディザスタリカバリ (障害回復)

この章では以下の項目について説明しています。

- 障害対策について
- 障害対策 (DPP) の主な要素について
- 前回正常起動時の構成へのリカバリ
- ハードウェアプロファイルのコピー作成
- システム修復ディスクの作成について (Windows 2000 コンピュータのみ)
- 手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて
- ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) について
- リモート Windows コンピュータのディザスタリカバリ操作について (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む)

障害対策について

障害対策とは、データの破壊を伴う障害の発生を想定して、その被害を最小限にする戦略と手順を策定しておくことです。このような障害が発生した場合、その被害を最小限に抑えることはできますが(無停電電源やパスワード保護など)、残念ながらデータを完全に保護する方法はありません。

障害対策 (DPP: Disaster Preparation Plan) の目的は、可能な限り早く業務を再開できるようにすることです。Backup Exec は DPP に不可欠な強力なデータ管理ツールで

す。このセクションでは、Backup Exec を使用して障害対策を策定する方法を説明します。

ディザスタリカバリの手段として、次の基本的な方法があります。

- 手動リカバリ:ローカルとリモートの両方の Windows コンピュータを手動でリカバリできます。
- 自動リカバリ:Backup Exec の Intelligent Disaster Recovery (IDR) Option を使用して、Windows コンピュータのディザスタリカバリプロセスを自動化することができます。

p.1764 の「Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードについて」を参照してください。

p.763 の「前回正常起動時の構成へのリカバリ」を参照してください。

p.765 の「手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて」を参照してください。

障害対策 (DPP) の主要要素について

Backup Exec システムによる障害対策は、ネットワーク環境に合わせて作成する必要があります。

さまざまなネットワーク環境が存在しますが、総合的な障害対策を作成するときには次の要素を検討してください。

表 17-1 DPP の主要要素

要素	説明
ハードウェアの保護	ネットワーク上のハードウェア (CPU、ハードディスク、ビデオカードなど) は、障害に対して脆弱です。現在ではハードウェアの保護に、無停電電源 (UPS)、過電流保護器、セキュリティ監視デバイスが広く使用されています。これらの装置を使用することをお勧めします。この初期投資は、これらの装置によって防止できる障害による損失とは比べものになりません。
障害発生時の業務の継続	ネットワークに障害が発生した場合でも、業務への影響を最小限に減らすための対策を行っておく必要があります。たとえば、サーバーがダウンしているときでも、注文の電話の内容をサーバーがリカバリするまで手作業で記録できるようにしておくことが必要です。各部門で、このような状態への対策を用意しておく必要があります。短時間でサーバーを再構築し、元の業務を続行できるようにするには、そのための対策を講じておくことが重要です。
確実なバックアップ戦略	短時間でファイルサーバーをリストアするには、適切なメディアローテーション方式を含む、優れたバックアップ戦略が重要な役割を果たします。

要素	説明
別の場所へのバックアップの保管	バックアップデータは定期的に別の場所に移して保管しておく必要があります。このようにしておく、サーバーの設置施設に重大な事態が発生しても、すべてのバックアップが破壊されることはありません。データの重要度に応じて、保管施設の数を増やします。テープの引き取りと配達を定期的に行う保管サービス会社を利用する方法もあります。
障害対策の履行管理	最も重要な項目は、策定した障害対策を正しく実行することです。担当者または担当部門を設定し、社内の障害対策が正しく履行されていることを絶えず監視する必要があります。ハードウェア保護装置の設置と保守の責任者を決め、サーバーが一時的にダウンした場合の対策をすべての部門で確認し、定期的にバックアップを作成し別の場所に確実に保管されるようにします。また、障害対策を文書化し、各部門でマニュアルとして使用できるようにしておくことも重要です。

信頼性が高く簡単にファイルのバックアップとリストアを行うことができる **Backup Exec** は、障害対策で重要な役割を果たします。この章では、障害発生時にシステムをできるだけ簡単にリストアするために必要な事前に取りべき手順を示します。

p.265 の「[バックアップするデータの選択について](#)」を参照してください。

前回正常起動時の構成へのリカバリ

システム構成の変更が原因で、システムがブートしなくなることがあります。システムがブートしなくなった原因が構成を変更したためであると考えられる場合は、前回正常起動時の構成に戻すことで問題が解決することがあります。この方法は簡単ですぐに実行することができ、**Windows** コンピュータのブートに関する問題の解決に役立ちます。**Windows** オペレーティングシステムでは、手順がわずかに異なります。ここでは、各種のコンピュータでの手順を説明します。

最後に設定を保存した後でシステムに加えた変更内容は、すべて失われます。

p.764 の「[ハードウェアプロファイルのコピー作成](#)」を参照してください。

p.765 の「[システム修復ディスクの作成について \(Windows 2000 コンピュータのみ\)](#)」を参照してください。

以前の構成にリカバリする方法

- 1 システムを再起動します。
- 2 起動時に **F8** キーを押します。
- 3 次のオプションのいずれかを選択します。

セーフモード

システム起動時の問題を診断して修正することができます。
詳しくは **Microsoft** のマニュアルを参照してください。

前回正常起動時の構成

前回正常に起動したときの構成に戻すことができます。

ハードウェアプロファイルのコピー作成

ハードウェアの構成を大幅に変更する場合は、事前に、現在のハードウェアプロファイルのコピーを作成して新しいハードウェアプロファイルを作成します。新しく作成したプロファイルを使用してコンピュータをブートし、ハードウェアの追加や変更を行います。この方法を使用すると、問題が発生した場合に、簡単に元の構成に戻すことができます。

p.763 の「[前回正常起動時の構成へのリカバリ](#)」を参照してください。

p.765 の「[システム修復ディスクの作成について \(Windows 2000 コンピュータのみ\)](#)」を参照してください。

現在のハードウェアプロファイルのコピーを作成し、そのコピーを使用してコンピュータをブートする方法

- 1 [マイコンピュータ]アイコンを右クリックします。
- 2 [プロパティ]をクリックします。[システムのプロパティ]ダイアログボックスが開きます。
- 3 [ハードウェア]をクリックします。
- 4 [ハードウェアプロファイル]をクリックします。
- 5 現在のハードウェアプロファイルを選択し、[コピー]をクリックします。
- 6 新規に作成するプロファイルの名前を[新しい名前]フィールドに入力し、[OK]をクリックします。
- 7 新規作成したプロファイルを使用してコンピュータをブートするには、そのプロファイルを選択し、リストボックスの右側の上向き矢印をクリックして、使用するプロファイルを選択ボックスの最上部に移動します。
- 8 [ハードウェアプロファイルの選択]ボックスで、**Windows** の起動時に[ハードウェアプロファイル]をユーザーが選択するまで待つ]または[一定の時間後、プロファイルを選択する]のように選択します。
- 9 [OK]をクリックします。

システム修復ディスクの作成について (Windows 2000 コンピュータのみ)

Windows 2000 Server のインストール時に、システム修復ディスク (ERD: Emergency Repair Disk) を作成するかどうかを指定することができます。このディスクには、障害発生時にシステムを起動することのできる情報が格納されています。システムに変更を加えた場合は、必ず、このディスクの内容を更新しておく必要があります。最新の構成が反映されていないディスクは使用できません。

システムを大幅に変更する場合は、その前後に ERD を更新します。大幅な変更には、ハードディスクの追加や取り外し、パーティション、ファイルシステム、構成などの変更も含まれます。ハードディスクの構成を変更する場合は通常、その前後に ERD を更新します。サーバーへの Microsoft Exchange Server や Microsoft SQL Server などの新しいコンポーネントの追加および[コントロールパネル]での変更を行う場合も、その前後に ERD を更新する必要があります。

また、ERD のバックアップを必ず作成しておきます。少なくとも 1 世代前の ERD も保存しておく必要があります。ERD 作成プログラム RDISK.EXE は強制的にフォーマットを実行するため、新しい ERD を作成するときにはフォーマット可能なフロッピーディスクを使用します。

メモ: システム修復ディスクは便利な必須ツールですが、このディスクでシステムをブートすることはできません。ブートファイルと修復ファイルの両方を格納するには、ディスクの容量が足りません。

メモ: 修復プロセスは `systemroot\repair` フォルダに保存されている情報に依存するため、このフォルダを変更したり削除しないでください。

システム修復ディスクを作成する場合は、Microsoft のマニュアルを参照してください。

p.763 の「前回正常起動時の構成へのリカバリ」を参照してください。

p.764 の「ハードウェアプロファイルのコピー作成」を参照してください。

手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて

システムが Backup Exec 2010 Intelligent Disaster Recovery (IDR) によって保護されていない場合は、手動でコンピュータをリカバリできます。

p.772 の「リモート Windows コンピュータのディザスタリカバリ操作の実行 (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む)」を参照してください。

システムが IDR によって保護されている場合は、自動ディザスタリカバリを使用してください。

p.1760 の「Intelligent Disaster Recovery Option について」を参照してください。

手動ディザスタリカバリの手順は、コンピュータのオペレーティングシステムを障害発生前の状態に戻し、Backup Exec の各データベースエージェントによって保護されていないファイルをリストアするためのものです。

手動ディザスタリカバリは、次のような場合に使用してください。

- Windows オペレーティングシステムに障害が発生し、システム修復ディスクを使用してもリストアすることができない場合。
- Windows オペレーティングシステムをインストールしたハードディスクに、再フォーマットを必要とするリカバリ不可能なエラーが発生した場合。
- Windows オペレーティングシステムをインストールしたハードディスクを交換する必要がある場合。

ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) について

この手順は、コンピュータのオペレーティングシステムを障害発生前の状態にリストアします。また Exchange Agent や SQL Agent などの Backup Exec のデータベースエージェントの 1 つによって保護されているデータファイル以外のデータファイルもリストアします。ご使用のデータが Backup Exec エージェントによって保護されている場合、ディザスタリカバリを開始する前に、エージェントによって保護されているデータのリストアに関するセクションを参照してください。

Backup Exec 2010 Intelligent Disaster Recovery (IDR) を使用してシステムの保護を行っている場合、ディザスタリカバリには IDR を使用してください。

p.1760 の「Intelligent Disaster Recovery Option について」を参照してください。

ここでは、IDR を使用していない場合に手動でコンピュータをリカバリする手順を説明します。

リカバリを行うコンピュータに各ハードウェアが正しく接続されていることを確認してください。

また、次のものも用意してください。

ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) について

- リカバリするコンピュータの最新の完全バックアップと、それ以降の増分または差分バックアップ
- Windows インストール用メディア
- Backup Exec インストールメディア

メモ: BitLocker の暗号化が有効になっている Windows コンピュータをリカバリする場合は、リストア後に BitLocker の暗号化を再び有効にする必要があります。

BitLocker ドライブ暗号化について詳しくは Microsoft のマニュアルを参照してください。

p.767 の「ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) の実行」を参照してください。

p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。

p.772 の「リモート Windows コンピュータのディザスタリカバリ操作の実行 (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む)」を参照してください。

p.765 の「手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて」を参照してください。

ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) の実行

ローカル Windows コンピュータの手動によるリカバリ (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) を実行するには、次の手順を実行します。

ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) を実行する方法

1 元の Windows をインストールします。

この Windows の基本インストールは、リストア先のシステムを Backup Exec で認識するために必要です。コンピュータ名、システムディレクトリおよびファイルシステムは、元の Windows のインストールと同じにしてください。この基本インストールは、後でバックアップファイルで上書きされ、システム設定、アプリケーション設定およびセキュリティ設定がリストアされます。

ハードディスクの障害からシステムをリカバリしている場合は、オペレーティングシステムのインストール時に新しいハードディスクにパーティションを作成し、フォーマットを行います。

ハードディスクのパーティションの構成とフォーマットは、次のように元のハードディスクと同じにします。

- システムが特定のドメインまたはワークグループに属していた場合、この時点では、そのドメインまたはワークグループに参加させないでください。
- ドメインコントローラをリカバリする場合、この時点では、ドメインコントローラのインストールを実行しないでください。

- 2 元のディレクトリとは異なるディレクトリに、**Backup Exec** をインストールします (これは一時的なインストールです)。

この手順を実行するには **Administrator** または同等の権限のあるアカウントを使用して **Windows** にログオンしている必要があります。

- 3 デバイス設定ウィザードを使用して、接続されているストレージメディアドライブ用のデバイスドライバをインストールします。
- 4 **Backup Exec** を起動します。
- 5 ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックします。
- 6 リカバリするコンピュータの最新の完全バックアップが格納されているメディアのインベントリを実行します。

p.431 の「[メディアのインベントリの実行について](#)」を参照してください。

- 7 リカバリするコンピュータの最新の完全バックアップが格納されているメディアのカタログを登録します。別のメディアに、この完全バックアップ以降の差分あるいは増分バックアップが格納されている場合は、そのメディアのカタログも登録する必要があります。

p.232 の「[新しいカタログの作成](#)」を参照してください。

- 8 ナビゲーションバーの [リストア] をクリックします。
- 9 ハードディスク上の論理ドライブを含む完全バックアップと増分バックアップから、すべてのセットを選択します。差分バックアップをリストアする場合は、最新の差分バックアップのみを選択します。リストア選択項目に、[システム状態] と [シャドウコピーコンポーネント] が含まれていることを確認します。
- 10 [プロパティ] ペインの [設定] の下にある [一般] をクリックし、必要なオプションを設定します。

- 常にディスク上のファイルを上書きする
- セキュリティ情報をリストアする
- ツリー構造を保持する

ローカル Windows コンピュータの手動によるディザスタリカバリ (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む) について

- 11 [プロパティ] ペインの [設定] の下にある [詳細設定] をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.602 の「リストアジョブの [詳細] オプション」を参照してください。

ドメイン内の唯一のドメインコントローラであるコンピュータをリストアする場合、またはドメイン全体を再作成中で、このコンピュータが最初のドメインコントローラである場合は、[ファイル複製サービスによって管理されているフォルダのリストア時またはシステム状態の **SYSVOL** のリストア時に、このサーバーを複製用のプライマリデータとしてマークする] をクリックします。

- 12 [今すぐ実行] をクリックします。
- 13 ドメイン内で唯一のドメインコントローラであるコンピュータをリストアする場合、またはドメイン全体を再構築中で、このコンピュータが最初のドメインコントローラである場合は、リストアジョブの完了後にコンピュータを再ブートします。

これで、コンピュータは、障害発生前の状態にリストアされました。データファイルは、Backup Exec データベースエージェントによって保護されているものを除き、リストアされています。

- 14 次のいずれかに従います。

[権限のある復元] を実行する 手順 15 に進みます。
場合

[権限のある復元] を実行しない リカバリは完了です。
場合

- 15 次の操作を実行して、Backup Exec サービスがローカルシステムアカウントを使用して実行されるように変更します。

- [マイコンピュータ] を右クリックし、[管理] を選択します。
- [コンピュータの管理] の左ペインで、[サービスとアプリケーション] をダブルクリックします。
- [サービス] をクリックします。
- 右ペインで、Backup Exec の各サービスをクリックし、[ログオン] タブで、[アカウント] を [ローカルシステムアカウント] に変更します。
- [コンピュータの管理] を閉じます。

- 16 コンピュータを再起動します。

- 17 起動時に **F8** キーを押します。

システム起動時の問題を診断して修正するメニューが表示されます。

- 18 [ディレクトリサービス復元モード] を選択します。

- 19 Backup Exec を起動します。
- 20 ナビゲーションバーの [リストア] をクリックします。
- 21 リストア選択項目として、[システム状態] (Windows 2000 以降の場合) または [シャドウコピーコンポーネント] (Windows Server 2003 以降の場合) を選択します。リストアジョブを実行します。
- 22 この時点で、Active Directory 全体をリストアするのか、または Active Directory の特定のオブジェクトをリストアするのかが選択できます。

Active Directory 全体をリストアする場合の手順は次のとおりです。

- コマンドプロンプトを開きます。
- 「NTDSUTIL」と入力して **Enter** キーを押します。
- 「Authoritative Restore」と入力して **Enter** キーを押します。
- 「Restore Database」と入力して **Enter** キーを押し、[OK] をクリックし、[はい] をクリックします。

Windows Server 2008/2008 R2 での NTDSUTIL の実行について詳しくは Microsoft のマニュアルを参照してください。

Active Directory の特定のオブジェクトをリストアする場合の手順は次のとおりです。

- コマンドプロンプトを開きます。
 - 「NTDSUTIL」と入力して **Enter** キーを押します。
 - 「Authoritative Restore」と入力して **Enter** キーを押します。
 - 「Restore Subtree "ou=<OU Name>.dc=<domain name>,dc=<xxx>」(引用符を使用しない) と入力して、**Enter** キーを押します。<OU Name> にはリストア対象の組織ユニットの名前、<domain name> には組織ユニットが属するドメイン名、<xxx> にはドメインコントローラのトップレベルのドメイン名 (com、org、net など) を指定します。リストアの必要があるオブジェクト数と同じ回数これを実行します。
- 23 Active Directory 情報のリストアが終了したら、NTDSUTIL を終了します。
 - 24 コンピュータを再起動します。

リモート Windows コンピュータのディザスタリカバリ操作について (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む)

メディアサーバーとネットワークで接続されているリモートコンピュータのディザスタリカバリを行うことができます。この手順は、コンピュータのオペレーティングシステムを障害発生前の状態にリストアします。また、Backup Exec エージェントで保護されていないデータファイルをリストアします。

Backup Exec エージェントによって保護されているデータがある場合は、ディザスタリカバリを始める前にエージェントの概要を確認します。

p.73 の「[Backup Exec エージェントおよびオプション](#)」を参照してください。

Backup Exec Intelligent Disaster Recovery (IDR) を使用してシステムの保護を行っている場合、ディザスタリカバリには IDR を使用してください。

p.1760 の「[Intelligent Disaster Recovery Option について](#)」を参照してください。

ここでは、IDR を使用していない場合に手動でコンピュータをリカバリする手順を説明します。

次のものを用意してください。

- リカバリするコンピュータの最新の完全バックアップと、それ以降の増分または差分バックアップ
- Windows インストール用メディア

この手順を実行するには Administrator または同等の権限のあるアカウントを使用して Windows にログオンしている必要があります。

メモ: BitLocker の暗号化が有効になっている Windows コンピュータをリカバリする場合は、リストア後に BitLocker の暗号化を再び有効にする必要があります。

BitLocker ドライブ暗号化について詳しくは Microsoft のマニュアルを参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.765 の「[手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。

リモート Windows コンピュータのディザスタリカバリ操作の実行 (ドメインコントローラの Active Directory の [権限のない復元] および [権限のある復元] を含む)

リモート Windows コンピュータでディザスタリカバリ操作を実行するには次の手順を実行します。

リモート Windows コンピュータでディザスタリカバリ操作を実行する方法

1 リモートコンピュータで、元の Windows をインストールします。

この Windows の基本インストールは、リストア先のシステムを Backup Exec で認識するために必要です。コンピュータ名、システムディレクトリおよびファイルシステムは、元の Windows のインストールと同じにしてください。この基本インストールは、後でバックアップファイルで上書きされ、システム設定、アプリケーション設定およびセキュリティ設定がリストアされます。

ハードディスクの障害からシステムをリカバリしている場合は、オペレーティングシステムのインストール時に新しいハードディスクにパーティションを作成し、フォーマットを行います。

ハードディスクのパーティションの構成とフォーマットは、次のように元のハードディスクと同じにします。

- システムが特定のドメインまたはワークグループに属していた場合、この時点では、そのドメインまたはワークグループに参加させないでください。
- ドメインコントローラをリカバリする場合、この時点では、ドメインコントローラのインストールを実行しないでください。

2 メディアサーバーで、Backup Exec Remote Agent をリモートコンピュータにインストールします。

p.129 の「[Remote Agent for Windows Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

3 Backup Exec を起動します。

4 ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックして、リカバリするコンピュータの最新の完全バックアップが格納されているメディアのインベントリを実行します。

p.431 の「[メディアのインベントリの実行について](#)」を参照してください。

5 リカバリするコンピュータの最新の完全バックアップが格納されているメディアのカatalogを登録します。別のメディアに、この完全バックアップ以降の差分あるいは増分バックアップが格納されている場合は、そのメディアのカatalogも登録する必要があります。

p.232 の「[新しいカatalogの作成](#)」を参照してください。

- 6 ナビゲーションバーの [リストア] をクリックして、ハードディスク上の論理ドライブを含む完全バックアップと増分バックアップから、すべてのセットを選択します。差分バックアップをリストアする場合は、最新の差分バックアップのみを選択します。リストア選択項目に、[システム状態] または [シャドウコピーコンポーネント] が含まれていることを確認します。
- 7 [プロパティ] ペインの [設定] の下にある [一般] をクリックし、必要なオプションを設定します。
 - 常にディスク上のファイルを上書きする
 - セキュリティ情報をリストアする
 - ツリー構造を保持する
- 8 [プロパティ] ペインの [設定] の下にある [詳細設定] をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.602 の「[リストアジョブの \[詳細\] オプション](#)」を参照してください。

ドメイン内の唯一のドメインコントローラであるコンピュータをリストアする場合、またはドメイン全体を再作成中で、このコンピュータが最初のドメインコントローラである場合は、[ファイル複製サービスによって管理されているフォルダのリストア時またはシステム状態の SYSVOL のリストア時に、このサーバーを複製用のプライマリデータとしてマークする] をクリックします。

- 9 [今すぐ実行] をクリックします。
- 10 ジョブが完了した後、リモートコンピュータを再起動します。

これで、コンピュータは、障害発生前の状態にリストアされました。データファイルは、Backup Exec データベースエージェントによって保護されているものを除き、リストアされています。
- 11 次のいずれかに従います。

[権限のある復元] を実行する 手順 12 に進みます。
場合

[権限のある復元] を実行しない リカバリは完了です。
場合

- 12 リモートサーバーで、起動時に **F8** キーを押します。

システム起動時の問題を診断して修正するメニューが表示されます。
- 13 [ディレクトリサービス復元モード] を選択します。
- 14 メディアサーバーで、Backup Exec を開きます。
- 15 ナビゲーションバーの [リストア] をクリックします。

- 16 リストア選択項目として、[システム状態](Windows 2000 以降の場合) または [シャドウコピーコンポーネント](Windows 2003 以降の場合) を選択します。
- 17 [プロパティ] ペインの [ソース] の下にある [リソーススクレデンシヤル] を選択します。
- 18 リモートサーバーのリストア選択項目を選択し、[新規] をクリックします
- 19 リストアジョブの新しいログオンアカウントが作成されます。アカウントは、リモートサーバーでの管理者権限を保持しています。
- 20 新しいログオンアカウントを選択し、[OK] をクリックします。
- 21 リストアジョブを実行します。

リモートサーバーで、次の手順を実行します。

- 22 この時点で、Active Directory 全体をリストアするのか、または Active Directory の特定のオブジェクトをリストアするのを選択できます。

Active Directory 全体をリストアする場合の手順は次のとおりです。

- コマンドプロンプトを開きます。
- 「NTDSUTIL」と入力して Enter キーを押します。
- 「Authoritative Restore」と入力して Enter キーを押します。
- 「Restore Database」と入力して Enter キーを押し、[OK] をクリックし、[はい] をクリックします。

Windows Server 2008/2008 R2 での NTDSUTIL の実行について詳しくは Microsoft のマニュアルを参照してください。

Active Directory の特定のオブジェクトをリストアする場合の手順は次のとおりです。

- コマンドプロンプトを開きます。
- 「NTDSUTIL」と入力して Enter キーを押します。
- 「Authoritative Restore」と入力して Enter キーを押します。
- 「Restore Subtree "ou=<OU Name>.dc=<domain name>,dc=<xxx>」(引用符を使用しない) と入力して、Enter キーを押します。<OU Name> にはリストア対象の組織ユニットの名前、<domain name> には組織ユニットが属するドメイン名、<xxx> にはドメインコントローラのトップレベルのドメイン名 (com、org、net など) を指定します。リストアの必要があるオブジェクト数と同じ回数これを実行します。

- 23 Active Directory 情報のリストアが終了したら、NTDSUTIL を終了します。
- 24 コンピュータを再起動します。

トラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

- ハードウェアに関する問題のトラブルシューティング
- アラートとエラーメッセージについてより多くの情報を手に入れる方法
- バックアップ問題のトラブルシューティング
- NTFS パーティションのクラスタサイズについて
- リストアの問題のトラブルシューティング
- Backup Exec のパフォーマンスを向上させる方法
- シマンテック社のナレッジベースについて
- テクニカルサポートに連絡する方法
- Backup Exec の診断アプリケーションについて
- トラブルシューティングのために Symantec Gather Utility を使う方法
- BEGather ユーティリティの実行による Linux サーバーの Backup Exec コンポーネントのトラブルシューティング
- トラブルシューティングのための Backup Exec の Debug Monitor の使用

ハードウェアに関する問題のトラブルシューティング

ハードウェアに問題が発生した場合は、次の質問を確認してください。

表 18-1 ストレージハードウェアに関する質問

質問	回答
<p>使用しているドライブが Backup Exec のデバイスリストに表示されていません。ドライブは接続され、電源も入っており、Windows デバイスマネージャに認識されています。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>まず、ご使用のデバイスが Backup Exec でサポートされているかどうかを確認してください。</p> <p>互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。 http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2</p> <p>ご使用のデバイスがハードウェア互換性リストに表示されている場合は、Backup Exec のデバイス設定ウィザードの実行および Symantec デバイスドライバをインストールしてください。</p> <p>p.437 の「テープデバイス設定ウィザードを使用したテープデバイスの設定について」を参照してください。</p> <p>Symantec デバイスドライバインストーラによって、ご使用のストレージデバイスに最適なドライバが検出され、インストールされます。</p> <p>メモ: ハードウェア互換性リストは、新たにサポートされるデバイスに合わせて頻繁に更新されます。</p>

質問	回答
<p>ストレージデバイスがオフラインと表示されます。これはなぜでしょうか？</p>	<p>デバイスがオフラインの場合は、このメッセージが表示されます。オンラインに復帰するまで、このデバイスを使用する操作を行うことはできません。デバイスがオンラインの場合は、特にメッセージは表示されません。</p> <p>次の場合、ディスクへのバックアップフォルダがオフラインになる可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ディスクへのバックアップフォルダを含むドライブに空きがない。 ■ ディスクへのバックアップフォルダを含むドライブがオフラインである。 ■ ディスクへのバックアップフォルダを含むリモートサーバーがオフラインである。 <p>次の場合、その他のストレージデバイスがオフラインになる可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Backup Exec の起動後に、このデバイスの電源をオフにした。 ■ Backup Exec の起動時に、このデバイスが他のアプリケーション (Windows 2000/XP/Server 2003/2008 のバックアップユーティリティなど) で使用されていた。 ■ このデバイスをコンピュータから取り外した。 ■ テープドライブでエラーが発生した (問題のトラブルシューティングにはイベントログを確認してください)。 ■ ドライブのテープの走行に問題がある。 ■ ドライブのファームウェアが更新されたため、Backup Exec は以前のデバイス名または ID が存在しないと判断した。 <p>デバイスをオンラインにするには、次の方法を試行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デバイスの電源やケーブルが正しく接続されていることを確認します。デバイスの電源をオンにしてサーバーを再起動するか、または Backup Exec サービスを停止して再起動します。 ■ デバイスを使用しているユーティリティを終了してサーバーを再起動するか、または Backup Exec サービスを停止して再起動します。サービスは、[ツール]>[Backup Exec サービス]から再起動できます。 <p>ドライブのファームウェアを更新した場合は、そのドライブを削除して Backup Exec サービスを再起動します。そのドライブが新しいファームウェア ID で表示された後、前のドライブ名に割り当てられていたすべてのジョブの割り当て先を新しいドライブ名に変更します。</p>

質問	回答
<p>ツールメニューの[オプション]からバーコードルールを設定し、次に[バーコードルール]を選択しました。それでもバーコードルールが適用されていません。これはなぜでしょうか？</p>	<p>バーコードルールの設定後、バーコードルールを適用するには、次の 2 つの手順を実行する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [ロボットライブラリ]プロパティの[設定]タブから[バーコードルール]オプションを選択して、ロボットライブラリ用のバーコードルールを有効にする必要があります。 ■ 使用するメディアの各種類に対応するバーコードルールを設定し、さらに、混在メディアライブラリ内の各ドライブについて、使用可能なメディアの種類と、読み取りまたは書き込みに使用できるかどうかを設定する必要があります。 <p>p.229の「混合メディアライブラリのバーコードルール」を参照してください。</p>
<p>ストレージデバイス用に、最新のデバイスドライバを入手する方法を教えてください。</p>	<p>互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2</p>
<p>Backup Exec がロボットライブラリを認識しません。どのようにしたら検出できますか？</p>	<p>Windows オペレーティングシステムがロボットライブラリを正しく認識していることを確認してください。これは、Windows デバイスマネージャで検証できます。</p> <p>p.452の「Backup Exec のロボットライブラリについて」を参照してください。</p>

質問	回答
<p>[バックアップデバイス(device)が、要求(read/write data to/from media)へのエラーを返しました。エラー: Data error (cyclic redundancy check)]というエラーが表示されます。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>巡回冗長検査 (CRC) エラーは、さまざまな原因によって発生します。次に、このエラーの最も一般的な原因とその解決方法を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ テープデバイスの読み取り/書き込みヘッドが汚れている。ハードウェアの製造元に、適切なクリーニング方法をお問い合わせください。 ■ メディアが損傷している。メディアを交換します。ハードウェアの製造元に認定されている新しいテープで試行してください。 ■ テープドライバ。Backup Exec の適切なテープドライバをロードします。 ■ 互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。 http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2 ■ SCSI コントローラのワイド転送 (Wide Negotiation) が適切に設定されていない。Wide (68 ピン) の SCSI デバイスの場合、ワイド転送が使用されます。Narrow (50 ピン) の SCSI デバイスの場合、ワイド転送を無効にしてください。製造元が提供する SCSI セットアッププログラムを使用して、SCSI コントローラカードのワイド転送を無効にします。 ■ SCSI コントローラの転送速度が高すぎる。製造元が提供する SCSI セットアッププログラムを使用して、SCSI 転送速度を低くします。コントローラまたはバックアップデバイスの製造元に、SCSI の転送速度を適切に設定する方法をお問い合わせください。 ■ SCSI コントローラの同期転送 (Sync Negotiation) が有効になっている。製造元が提供する SCSI セットアッププログラムを使用して、SCSI コントローラカードの同期転送を無効にします。コントローラまたはバックアップデバイスの製造元に、SCSI の同期転送を適切に設定する方法をお問い合わせください。 ■ ターミネータが不適切か、またはケーブルに問題がある。SCSI ケーブルに問題がなく、適切な SCSI ターミネータが取り付けられていることを確認します。パッシブターミネータとアクティブターミネータを混在させないでください。 ■ テープドライバが正しく動作することを確認します。テープドライバの製造元に、テープドライバのハードウェアの状態をテストするための診断ソフトウェアについてお問い合わせください。 ■ SCSI の一般的な問題。テープドライバだけを接続したコントローラカードにより他と分離するか、または別の SCSI カードで試します。
<p>DLT テープドライブで、ある種のテープのカatalog登録を実行すると一時停止するのはどうしてですか？</p>	<p>DLT テープドライブは、テープの内部情報をテープディレクトリトラック上で管理しています。ディレクトリトラックは、ドライブからテープが取り出される前に更新されます。テープを取り出さずにドライブの電源をオフにすると、この情報が消失します。</p> <p>テープディレクトリ情報の再作成には数時間かかるため、ドライブがハングしたように見えます。テープディレクトリの作成が終わるまで待つてからテープを取り出してください。ディレクトリトラックの更新が終了すると、正常動作に復帰します。</p>

質問	回答
<p>DLT テープドライブへのバックアップが、99% で止まった状態で完了しました。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>手動でテープを取り出すことが必要な形式のテープドライブに対して、[ジョブの完了後にメディアを取り出す]のオプションが選択されているためバックアップが完了できなかった可能性が高いです。このような形式のドライブとして、DLT (Digital Linear Tape)、LTO (Linear Tape-Open)、Travan、Onstream などがあります。</p> <p>この状況への対策は、[ジョブの完了後にメディアを取り出す]オプションの選択を解除するか、または BEUTILITY を使用して Backup Exec がメディアアラートに自動的に応答するように設定することです。</p> <p>p.437 の「テープデバイス設定ウィザードを使用したテープデバイスの設定について」を参照してください。</p> <p>p.780 の「アラートとエラーメッセージについてより多くの情報を手に入れる方法」を参照してください。</p> <p>p.783 の「Backup Exec のパフォーマンスを向上させる方法」を参照してください。</p>

アラートとエラーメッセージについてより多くの情報を手に入れる方法

Backup Exec は、ユーザーに注意を喚起する場合またはユーザーの応答が必要な場合に、エラーメッセージを生成します。通常、アラートおよびエラーメッセージだけでその内容を判断できますが、状態を解決するためにさらに詳細な情報が必要な場合もあります。

Backup Exec のアラートおよびエラーメッセージの詳細情報は、次の方法で入手できます。

- [アラート]ダイアログボックスで、**Unique Message Identifier (UMI)** コードのリンクをクリックするか、またはジョブログを参照し、**UMI** リンクをクリックします。このコードは、シマンテック社テクニカルサポート Web サイトへのハイパーリンクです。アラートに関連する技術情報にアクセスできます。

p.567 の「[ジョブログからシマンテック社テクニカルサポート Web サイトへのリンク](#)」を参照してください。

- シマンテック社テクニカルサポートのナレッジベースでエラーを検索します。ヘルプメニューで「**Symantec Web** サイト」をクリックし、「ナレッジベースの検索」を選択します。

p.579 の「[エラー処理方法について](#)」を参照してください。

p.775 の「[ハードウェアに関する問題のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

バックアップ問題のトラブルシューティング

データのバックアップで問題が発生した場合は、次の質問を確認してください。

表 18-2 バックアップに関する質問

質問	回答
システム上に存在するファイルで、他のプロセスで使用されているファイルをバックアップすることができません。これはなぜでしょうか？	<p>他のプロセスで使用されているファイルを検出すると、Backup Exec は、[Advanced Open File Option が使用不可能な場合のオープンファイルのバックアップ方式]の設定に従って、そのファイルをスキップするか、ファイルがバックアップできるようになるまで待機します。あるいは、その使用中のファイルをロックしてバックアップするか、ロックしないでバックアップするかを選択することができます。ファイルをロックしてバックアップすることを選択した場合は、Backup Exec がそのファイルを排他ロックするため、バックアップしている間、他のプロセスからのファイルへの書き込みが禁止されます。オープンファイルは、強制的にバックアップする必要がある場合にのみバックアップするようにしてください。通常は、ファイルを開いているアプリケーションを終了してファイルを閉じ、データの一貫性に矛盾が発生しないようにしてバックアップします。</p> <p>Windows コンピュータ上のオープンファイルをバックアップする場合は、Backup Exec Advanced Open File Option を使用すると、ネットワーク環境でデータを連続的に保護することができます。</p>
Backup Exec コンソールを実行していないときでも、ストレージデバイスが Backup Exec に割り当てられたままであるのはなぜでしょうか？	<p>Backup Exec は本格的なクライアント/サーバーアプリケーションであるため、ローカルおよびリモートの両方の管理コンソールでサブミットされるジョブを、いつでも処理できる状態になっている必要があります。</p> <p>デバイスとメディアの詳細管理 (ADAMM) 機能により、メディアサーバーに接続されているすべてのストレージデバイスは、メディアサーバーが稼働している間は常に Backup Exec に割り当てられています。Backup Exec のデバイスとメディアの詳細管理機能による、メディアおよびデバイスの使用に関する統計情報の収集と、メディアの上書き禁止という2つの重要で便利な機能を使用するには、常にストレージデバイスを管理下に置いておく必要があります。</p>

質問	回答
ローカルバックアップを実行した際に、Backup Exec でバックアップしたバイト数の合計が、Windows で表示されているバイト数と一致しません。これはなぜでしょうか？	<p>この問題は、システムのパーティションフォーマットの種類に起因します。</p> <p>NTFS ボリュームで圧縮を有効にしている場合は、Windows のエクスプローラはハードディスクドライブ上のファイルの圧縮後のバイト数を表示しますが、Backup Exec はバックアップするファイルの圧縮前のバイト数を表示します。たとえば、1 GB のデータを持つ NTFS ボリュームが、ファイルシステムにより 500 MB に圧縮された場合を想定します。この場合、エクスプローラでは 500 MB の圧縮データが存在すると表示されますが、Backup Exec でこのボリュームをバックアップした場合、ジョブログにはバイト数が 1 GB と表示されます。</p> <p>FAT ボリュームの場合、Backup Exec は実際にバックアップしたバイト数を報告しますが、エクスプローラではより大きなディスク領域が表示されます。たとえば、2 GB の FAT ボリュームが 32 KB のクラスタサイズでフォーマットされており、エクスプローラではこのディスクの 1.9 GB が使用済みであると表示されていたとします。Backup Exec でこのボリュームをバックアップした場合、ジョブログにはバイト数が 1.4 GB と表示されることがあります。50 MB の pagefile.sys がバックアップから除外されたとしても、バイト数には 450 MB の違いがあります。</p> <p>ボリュームを FAT から NTFS に変換すると、NTFS の方が効率がよく、デフォルトのクラスタサイズが FAT よりも小さいため、ディスクの空き領域が増加します。デフォルト以外の任意のクラスタサイズも設定できますが、システムのパフォーマンスが低下することがあります。詳しくは Windows のマニュアルを参照してください。</p> <p>p.782 の「NTFS パーティションのクラスタサイズについて」を参照してください。</p>

NTFS パーティションのクラスタサイズについて

NTFS パーティションのクラスタサイズを次の表に示します。

表 18-3 NTFS パーティションのクラスタサイズ

パーティションサイズ (MB)	クラスタサイズ
<= 255	512
256 - 511	1024
512 - 1023	2048
1024 - 2047	4096

FAT パーティションのクラスタサイズを次の表に示します。

表 18-4 FAT パーティションのクラスタサイズ

パーティションサイズ (MB)	クラスタサイズ (KB)
<= 127	2
128 - 255	4
256 - 511	8
512 - 1023	16
512 - 1023	32

リストアの問題のトラブルシューティング

リストアするデータのバイト数が、バックアップ時のデータのバイト数と一致しない場合があります。NTFS ボリュームからバックアップしたデータを別の NTFS ボリュームにリストアした場合は、バックアップ時とリストア時のバイト数は一致します。ただし、NTFS ボリュームまたは FAT ボリュームからバックアップしたデータを FAT ボリュームにリストアすると、リストアしたバイト数がバックアップしたバイト数よりも少なくなります。FAT データの場合は、オペレーティングシステムがデフォルトの ACL (アクセス制御リスト) を返すために、バイト数の不一致が発生します。このデータストリームもバックアップされ、そのバイト数がカウントされますが、リストアのときには廃棄され、そのバイト数はカウントされません。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.775 の「[ハードウェアに関する問題のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Backup Exec のパフォーマンスを向上させる方法

スループットパフォーマンスには、次の要因が影響します。

表 18-5 スループットパフォーマンスに影響を与える要因

項目	説明
ハードウェア	<p>ディスクコントローラや、ディスクドライブ、テープドライブ、ディスクコントローラ、SCSI バス、さらに不適切なケーブル接続やターミネータなどに起因するハードウェアエラーがパフォーマンス低下の原因となります。</p> <p>コントローラがテープバックアップハードウェアに適していること、および SCSI BIOS が適切に設定されていることを確認します。新しいモデルの SCSI コントローラは、デフォルトで SCSI ハードディスクドライブと通信するように設定されています。多くのテープドライブでは、ハードウェア圧縮を使用する場合、最大で 3 - 22 MB/秒の同期転送速度 (バス速度) でしか処理できません。この速度を超えると、連続したストリームのテープへのデータの書き込みに影響するだけでなく、テープハードウェアを破損する可能性もあります。</p> <p>また、次の事項を確認する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [Enable Disconnect] および [Enable Sync Negotiation] が [NO] に設定されている (通常はこの状態)。 ■ テープデバイスが 68 ピンの Wide SCSI ケーブルコネクタに接続されている場合、[Initiate Wide Negotiation] が [YES] に設定されている。 ■ テープドライブが SCSI RAID コントローラに接続されていない。
システム	<p>バックアップを実行するメディアサーバーまたはバックアップ対象のリモートシステムの容量および速度は、パフォーマンスに大きな影響を与えます。バックアップ中のシステムアクティビティもパフォーマンスに影響します。</p> <p>断片化したディスクは、バックアップに時間がかかります。断片化が進行したハードディスクの場合、データのテープへの書き込み速度だけでなく、システム全体のパフォーマンスに影響します。断片化したファイルは、各データセグメントがディスク上の異なる場所に存在するためにデータのアクセスに時間がかかり、バックアップにも時間がかかります。定期的にディスクの断片化を解除する必要があります。</p>

項目	説明
メモリ	<p>利用可能なメモリの量は、バックアップ速度に影響します。メモリが不十分な場合、ページファイルの設定が不適切な場合または利用可能なハードディスクの空き領域が不足している場合、ページングが多発し、パフォーマンスが低下します。</p> <p>p.105 の「システムの必要条件」を参照してください。</p>
ファイルの種類	<p>平均的なファイルでは、ハードウェア圧縮を使用した場合 2:1 までの圧縮が可能です。圧縮率は、バックアップ対象のファイルの種類によって異なります。平均的な圧縮ではバックアップ速度が 2 倍になることが期待できますが、圧縮しない場合は公称のテープ速度で実行されます。</p> <p>イメージファイルおよび画像ファイルは、ディスク上で完全に圧縮されます。したがって、バックアップ中にハードウェア圧縮が実行されず、テープドライブはネイティブ (非圧縮) 速度で動作します。ハードウェア圧縮は、バックアップソフトウェアではなくテープデバイスによって実行されます。</p>
圧縮	<p>正常に圧縮されている場合のテープドライブのデータ転送速度は、最大でネイティブ速度の 2 倍です。テープドライブによっては、汎用性および効果性の高い Lempel-Ziv (LZ1) 圧縮アルゴリズムが使用されている場合があります。圧縮は、入力データによって大きく異なります。圧縮アルゴリズムは、圧縮を実行できる再現可能なデータパターンを検出します。</p> <p>Microsoft ペイントなどのグラフィックプログラムのイメージファイルの圧縮率は 4.5:1 以上ですが、バイナリファイルの圧縮率は 1.5:1 程度です。圧縮済みのデータ、または暗号化されたデータや MPEG ファイルなどのランダムデータをさらに圧縮すると、逆にデータ量が 5% ほど増加することがあり、ドライブのスループットを低下させる原因となります。</p>
ファイル	<p>ディスク上のファイルの合計数および各ファイルの相対的なサイズは、バックアップパフォーマンスに影響します。ディスク上にサイズの大きいファイルが少数存在する場合、バックアップは最も高速で実行されます。ディスク上にサイズの小さいファイルが大量に存在する場合、バックアップは最も遅くなります。多数のファイルが同じディレクトリバスに存在する場合は、複数のディレクトリに存在する場合に比べて効率よくバックアップされます。</p>

項目	説明
ブロックサイズ	<p>ブロックサイズを大きくすると圧縮率が向上し、ドライブのスループットが改善され、テープ容量も拡張されます。ブロックサイズおよびバッファサイズが適切に設定されていることを確認してください。スループットは、ドライブの最大スループットに達するまで、圧縮の度合いに比例して増加します。</p> <p>使用するデバイスによっては、ブロックサイズを大きくするとパフォーマンスが向上することがあります (DLT デバイスなど)。適切なブロックサイズは 512 バイトから 64 KB ですが、さらに大きな値も使用できます。より大きなブロックサイズをサポートするデバイスを使用する場合は、[設定] タブでデバイスのブロックサイズを変更することができます。ただし、ブロックサイズを変更するオプションが利用できない場合は、より大きなサイズを使用するデバイスを設定する必要があります。</p> <p>デバイスの設定については、デバイスの製造元のマニュアルを参照してください。</p>
ネットワーク	<p>リモートディスクのバックアップ速度は、物理的な接続の速度によって制限されます。</p> <p>リモートサーバーのハードディスクのバックアップ速度は、次の要因に依存します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークカードの品種やモデル。 ■ ネットワークカードドライバ。 ■ アダプタのモード設定またはフレームの種類の設定。 ■ 接続装置 (ハブ、スイッチ、ルーターなど)。 ■ Windows の設定。 <p>通常、メディアサーバーのローカルディスクドライブは、ネットワークを介してリモートサーバーをバックアップする場合よりも高速でバックアップされます。</p>

項目	説明
ハードウェア	<p>ディスクコントローラや、ディスクドライブ、テープドライブ、ディスクコントローラ、SCSI バス、さらに不適切なケーブル接続やターミネータなどに起因するハードウェアエラーがパフォーマンス低下の原因となります。</p> <p>コントローラがテープバックアップハードウェアに適していること、および SCSI BIOS が適切に設定されていることを確認します。新しいモデルの SCSI コントローラは、デフォルトで SCSI ハードディスクドライブと通信するように設定されています。多くのテープドライブでは、ハードウェア圧縮を使用する場合、最大で 3 - 22 MB/秒の同期転送速度 (バス速度) でしか処理できません。この速度を超えると、連続したストリームのテープへのデータの書き込みに影響するだけでなく、テープハードウェアを破損する可能性もあります。</p> <p>また、次の事項を確認する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [Enable Disconnect] および [Enable Sync Negotiation] が [NO] に設定されている (通常はこの状態)。 ■ テープデバイスが 68 ピンの Wide SCSI ケーブルコネクタに接続されている場合、[Initiate Wide Negotiation] が [YES] に設定されている。 ■ テープドライブが SCSI RAID コントローラに接続されていない。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

シマンテック社のナレッジベースについて

シマンテック社のナレッジベースはシマンテック製品についての詳しい情報を見つけることができる集中管理された場所です。ナレッジベースは製品のインストール、アップグレード、設定、使用についての情報を含んでいます。また、必要条件、ベストプラクティス、問題をトラブルシューティングする方法についての情報を含んでいます。シマンテック社のナレッジベースは Backup Exec 内からアクセスできます。

メモ: シマンテック社のナレッジベースにアクセスするにはインターネット接続をアクティブにする必要があります。

ナレッジベースはキーワードベースの検索技術を使います。検索で重要なキーワードに焦点を合わせ、他の検索句と比較して最良の結果を提供します。検索パラメータを提供

するためにブール検索機能と式の問い合わせを使うことができます。最良の結果を得るには、質問を最もよく表す少数のキーワードに焦点を合わせます。

シマンテック社のナレッジベースの検索

ナレッジベースを検索すると、新しいブラウザウィンドウが起動し、検索結果が表示されません。

シマンテック社のナレッジベースを検索する方法

- 1 Backup Exec の右上の角の[ナレッジベースの検索]検索ボックスに質問かキーワードを入力します。
- 2 拡大鏡アイコンをクリックします。

テクニカルサポートに連絡する方法

可能な限りの対策を試みても問題が解決しない場合は、テクニカルサポートに Symantec MySupport を使ってインターネットを介して連絡するか、または電話で連絡できます。

電話番号のリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/phonesup>

テクニカルサポートでの処理を迅速にするため、以下の準備をお願いします。

- Backup Exec のバージョンおよびリビジョン情報の確認。ローカルコンピュータにインストールされている Backup Exec のバージョンおよびリビジョン (ビルド) を確認する場合は、Backup Exec のヘルプメニューから[バージョン情報]を選択すると、バージョンおよびリビジョン (ビルド) についての情報を表示することができます。
- Backup Exec に付属のいずれかの診断ユーティリティの実行。テクニカルサポートが問題を診断する際に使用する情報が収集されます。
p.788 の「Backup Exec の診断アプリケーションについて」を参照してください。
p.792 の「トラブルシューティングのために Symantec Gather Utility を使う方法」を参照してください。

Backup Exec の診断アプリケーションについて

Backup Exec には、トラブルシューティングに必要な、Windows コンピュータについての情報を収集する診断用アプリケーション (bediag.exe) が付属しています。このアプリケーションは、メディアサーバーまたはリモートコンピュータで実行することができます。また、このアプリケーションは、Backup Exec から実行することも、コマンドラインで実行することもできます。Bediag コマンドラインユーティリティは、ハードディスクドライブ上の Backup Exec デレクトリ (デフォルトでは %Program Files%\Symantec\Backup Exec) に格納されています。

bediag.txt ファイルに保存される情報は次のとおりです。

- アカウントグループ、アカウントの権限および環境設定。
- Backup Exec ソフトウェアのバージョンとレジストリ情報、Backup Exec Agent のリスト、Windows のバージョン情報、SCSI のハードウェア構成、SQL Server 情報、各ドライブのサービス情報、Windows の各サービスの情報。
- サーバー情報、サポートされている共有ディレクトリおよび Windows ソケットの情報。

p.789 の「[トラブルシューティングの診断ファイルの生成](#)」を参照してください。

p.792 の「[リモートメディアサーバーでの診断ファイルの生成](#)」を参照してください。

p.790 の「[トラブルシューティングの診断ファイルを生成するためのコマンドラインの使用](#)」を参照してください。

トラブルシューティングの診断ファイルの生成

トラブルシューティングの情報を集めるために Backup Exec の診断アプリケーションを実行できます。診断情報がテキストファイルとして表示されます。

トラブルシューティングの診断ファイルを生成する方法

- 1 Backup Exec を起動します。
- 2 ツールメニューの [Backup Exec Diagnostics] を選択します。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.789 の「[Backup Exec Diagnostics](#)」を参照してください。
- 4 [診断を実行] をクリックします。
- 5 [閉じる] をクリックします。

Backup Exec Diagnostics

サーバーを選択し、トラブルシューティングの情報を集めるために診断ファイルを生成します。

p.789 の「[トラブルシューティングの診断ファイルの生成](#)」を参照してください。

表 18-6 [Backup Exec Diagnostics] のオプション

項目	説明
サーバー	メディアサーバーの名前を表示します。
ユーザー名	メディアサーバーに対して権限があるアカウントのユーザー名を示します。

項目	説明
パスワード	メディアサーバーに対して権限があるアカウントのパスワードを示します。
ドメイン	メディアサーバーが存在するドメインを示します。
サーバーを選択	診断アプリケーションを実行するために異なるリソースを選択することを許可します。
ファイルを表示	診断情報をテキストファイルに表示します。
診断を実行	トラブルシューティングを目的とする情報を集めるために診断アプリケーションを実行します。

トラブルシューティングの診断ファイルを生成するためのコマンドラインの使用

トラブルシューティングの情報を集めるためにコマンドラインから Backup Exec の診断アプリケーションを実行できます。

トラブルシューティングの診断ファイルを生成するためにコマンドラインを使用する方法

- 1 コマンドプロンプトを起動します。
- 2 次のいずれかを実行します。

メディアサーバーの診断ファイルを生成する場合 ディレクトリ Program
Files¥Symantec¥Backup Exec¥から、
bediag [switches] servername と入力します。

p.791 の「[診断ファイルのコマンドラインスイッチ](#)」を参照してください。

リモートサーバーの診断ファイルを生成する場合 ディレクトリ Program
Files¥Symantec¥Backup Exec¥から、
bediag [switches] workstationname と入力します。

p.791 の「[診断ファイルのコマンドラインスイッチ](#)」を参照してください。

- 3 **Bediag.exe** が含まれるディレクトリ (デフォルトでは、Program Files¥Symantec¥Backup Exec) の「**Bediag.txt**」を開きます。

診断ファイルのコマンドラインスイッチ

トラブルシューティングの診断ファイルを生成するときに追加情報を集めるための次のスイッチを追加できます。

表 18-7 診断ファイルのコマンドラインスイッチ

スイッチ	説明
/a	Agent リストをダンプします。
/b:[server]	サービスアカウント情報のポーリングを行う Backup Exec メディアサーバーを指定します。
/c	レジストリの Backup Exec ソフトウェアの設定情報をダンプします。
/app	アプリケーションのイベントログをダンプします。
/sys	システムのイベントログをダンプします。
/bex	アプリケーションイベントログの中から Backup Exec のエントリのみをダンプします。
/err	すべてのイベントログからエラーイベントのみをダンプします。
/recs:n	指定したイベントログから最新の n 個の記録のみをダンプします。
	*** /bex、/err、/recs の各スイッチは、/app と /sys スイッチのいずれかまたは両方とともに使用する必要があります。
/o:[file]	追記先の出力ジョブログを指定します。
	*** [file] を省略した場合は、画面に出力します。
/h	レジストリの SCSI ハードウェアのサブキーをダンプします。
/l	Lotus Notes の情報をダンプします。
/n	Windows ソケットのネットワークプロトコルをダンプします。
/p	ユーザーの権限情報をダンプします。
	Microsoft SQL Server の情報をダンプします。
/s	サービスについての情報をダンプします。
/u	Microsoft の更新情報をダンプします。
/v	サーバーの情報をダンプします。
/w	Windows のバージョン情報をダンプします。

スイッチ	説明
/x	Microsoft Exchange Server の情報をダンプします。
/?	使用方法を表示します (ヘルプ)。

リモートメディアサーバーでの診断ファイルの生成

次の条件が満たされている場合は、リモートメディアサーバー上で診断ユーティリティを実行することができます。

- メディアサーバー上に Backup Exec がインストールされている。
- Backup Exec サービスが実行中である。

診断情報がテキストファイルとして表示されます。

リモートメディアサーバーで診断ファイルを生成する方法

- 1 ツールメニューの [Backup Exec Diagnostics] をクリックします。
- 2 [サーバーを選択] をクリックして、診断ユーティリティを実行するリモートメディアサーバーを選択します。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.789 の「[Backup Exec Diagnostics](#)」を参照してください。
- 4 [診断を実行] をクリックします。
- 5 [閉じる] をクリックします。

トラブルシューティングのために Symantec Gather Utility を使う方法

Backup Exec に関する問題のトラブルシューティングを行う場合、メディアサーバーの診断ログを確認する必要があります。Symantec Gather Utility により、テクニカルサポートに送るためのさまざまなシステムログファイルを含む圧縮ファイルを作成、集約することができます。処理が簡単になります。Symantec Gather Utility は、ローカルで実行することも、他のコンピュータにコピーすることもできます。

Symantec Gather Utility は収集処理の一部として Bediag と呼ばれる診断アプリケーションを実行します。Bediag は特定のログファイルの情報を取得します。Gather Utility は追加の診断ツールの使用によって他のデータを収集する機能も提供します。

p.793 の「[トラブルシューティングのログファイル情報の収集](#)」を参照してください。

トラブルシューティングのログファイル情報の収集

Backup Exec の問題をトラブルシューティングするのに Symantec Gather Utility を使うことができます。Symantec Gather Utility によってすべてのログファイル情報が収集されたら、ユーティリティによって収集されたすべてのデータを表示するか、電子メールまたは FTP を使用して結果を送信するかを選択できます。収集されたファイルには、インストール、診断およびエラーレポートに関する詳細情報が含まれます。テクニカルサポートに連絡する前にこれらのログを確認すると、問題の原因を明確にすることができます。収集されたログで解決方法が明確でない場合も、テクニカルサポートへの連絡時に備えてこれらのログを保存しておいてください。サポート部門から、ログファイルを添付した電子メールを送ることを依頼する場合があります。

トラブルシューティングのログファイル情報を収集する方法

- 1 ツールメニューで、[サポートユーティリティ]>[Gather Utility を実行して、ログおよびクラッシュダンプを収集します]をクリックします。
- 2 [Data to gather (if available)] フィールドですべてのチェックボックスをオンにします。
- 3 [Output root directory (required)] のデフォルト値を使用するか、代替ディレクトリを指定します。

デフォルトのディレクトリを使用する場合 手順 4 に進みます。

ディレクトリ名がわかっている場合 ディレクトリ名を入力します。

ディレクトリ名が不明な場合 [Browse] をクリックし、適切なディレクトリを参照します。

- 4 ダッシュを使用してケース番号を入力します (例: 123-456-789)。
- 5 圧縮ファイルに追加するファイルが存在する場合は、ここでそのファイルを入力します。

ファイル名がわかっている場合 [Files] テキストボックスにファイル名を入力して、[Add] をクリックします。

ファイル名が不明な場合

- [Browse] をクリックし、適切なファイルを参照します。
- ファイルを選択して、[Open] をクリックします。
- [Add] をクリックします。

- 6 [Gather] をクリックします。

BEGather ユーティリティの実行による Linux サーバーの Backup Exec コンポーネントのトラブルシューティング

BEGather ユーティリティは、Linux サーバーの Backup Exec コンポーネントの問題を診断するのに役立つファイルを収集します。実行すると、BEGather ユーティリティは作成するパケットファイルの名前を表示します。収集されたファイルには、インストール、診断およびエラーレポートに関する詳細情報が含まれます。テクニカルサポートに連絡する前にこれらのファイルを確認すると、問題の原因を明確にすることができます。収集されたファイルで解決方法が明確でない場合も、テクニカルサポートへの連絡時に備えてパケットファイルを保存しておいてください。サポート部門から、パケットファイルを添付した電子メールを送ることを依頼する場合があります。

BEGather ユーティリティを実行して Linux サーバーの Backup Exec コンポーネントをトラブルシューティングする方法

- 1 Backup Exec コンポーネントがインストールされている Linux サーバーに root としてログオンします。
- 2 次のディレクトリに移動します。

```
/opt/VRTSralus/bin
```

次に例を示します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```
- 3 BEGather ユーティリティを起動します。
次に例を示します。

```
./begather
```
- 4 画面に表示されるパケットファイルの場所に注意してください。

トラブルシューティングのための Backup Exec の Debug Monitor の使用

Backup Exec の Debug Monitor または SGMon は、Backup Exec からデバッグの出力を取得し、デバッグログに保存する診断ツールです。SGMon のデバッグログはバックアップ問題のトラブルシューティングに役立てることができます。また、デバッグログはシマンテック社テクニカルサポートが問題を診断し、修復するのに役立てることもできます。

SGMon を開くと、Backup Exec のサービスからデバッグデータが自動的に取得されます。SGMon が閉じられている間にデバッグ情報を収集するには、SGMon の外でデバッグログの作成を有効にし、ログの保存先のディレクトリを指定します。

Debug Monitor を設定する方法とログファイルを確認する方法について詳しくは Debug Monitor 内のヘルプを参照してください。

トラブルシューティングのために Backup Exec の Debug Monitor を使用する方法

- ◆ ツールメニューで、[サポートユーティリティ]>[デバッグを実行するために Debug Monitor を実行します]を選択します。

Symantec Backup Exec の サーバークラスタでの使用

この章では以下の項目について説明しています。

- Backup Exec とサーバークラスタについて
- Microsoft Cluster Server での Backup Exec のクラスタ化の必要条件
- Microsoft Cluster Server 内での Backup Exec の動作
- Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストールの必要条件
- Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール
- Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成
- Microsoft Cluster Server フェールオーバーでの「チェックポイントから再開」機能の使用
- 「チェックポイントから再開」機能の有効化または無効化
- フェールオーバーノードの変更
- Microsoft Cluster Server の新しいプライマリ SAN SSO サーバーおよび集中管理サーバーの指定
- Backup Exec と Microsoft Cluster Server の構成
- Microsoft クラスタおよび SAN SSO との Central Admin Server Option の使用
- Microsoft Cluster Server のバックアップについて
- Microsoft クラスタへのデータのリストアについて
- Veritas Cluster Server での Backup Exec の使用

- [Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのインストールの必要条件](#)
- [Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのインストール](#)
- [Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec のクラスタ化の必要条件](#)
- [Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec のクラスタ化](#)
- [Veritas Cluster Server のバックアップについて](#)
- [Veritas Cluster Server へのデータのリストアについて](#)
- [Veritas Cluster Server でのバックアップジョブフェールオーバーについて](#)
- [クラスタのディザスタリカバリ](#)
- [クラスタのトラブルシューティング](#)

Backup Exec とサーバークラスタについて

サーバークラスタでは、仮想サーバーアプリケーションとして構成された(IPアドレスリソースとネットワーク名のリソースを含み、ネットワーク上では固有のサーバー名(仮想サーバー名)で表示される)Microsoft SQL データベースや Exchange データベースのみでなく、ローカルディスクや共有ディスクのデータも Backup Exec によって保護することができます。サーバークラスタを使用すると、アプリケーションとデータの可用性を高めることができます。サーバークラスタとは、複数のサーバー(ノードと呼ぶ)をネットワークで相互に接続し、クラスタソフトウェアを実行して各ノードから共有ディスクにアクセスすることのできる環境です。使用中のノードが利用不可になった場合は、クラスタリソースは利用可能なノードに移行します(これをフェールオーバーと呼びます)。これにより、共有ディスクおよび仮想サーバーを、そのまま継続して利用することができます。フェールオーバーが発生しても、サービスがごく短時間中断するだけで、ユーザーはそのまま作業を続行することができます。

メモ: Microsoft Cluster Server (MSCS) 環境または Veritas Cluster Server 環境でハードウェアプロバイダを使用してオフホストバックアップを実行する場合、メディアサーバーとリモートコンピュータは異なるクラスタグループに属する必要があります。クラスタアプリケーションでは、署名とパーティションレイアウトが重複したデバイスの論理ユニット番号(LUN)がサポートされないため、LUN を含むスナップショットは、クラスタ外のホストまたはリモートコンピュータに転送する必要があります。

p.802 の「[Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

p.811 の「[Backup Exec と Microsoft Cluster Server の構成](#)」を参照してください。

- p.820 の「[Microsoft Cluster Server のバックアップについて](#)」を参照してください。
- p.825 の「[Microsoft クラスタへのデータのリストアについて](#)」を参照してください。
- p.800 の「[Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストールの必要条件](#)」を参照してください。
- p.835 の「[クラスタのディザスタリカバリ](#)」を参照してください。
- p.828 の「[Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのインストール](#)」を参照してください。
- p.831 の「[Veritas Cluster Server のバックアップについて](#)」を参照してください。
- p.834 の「[Veritas Cluster Server へのデータのリストアについて](#)」を参照してください。

Microsoft Cluster Server での Backup Exec のクラスタ化の必要条件

Backup Exec をクラスタ化する場合は次の条件に従う必要があります。

- Backup Exec をクラスタ化する場合 Backup Exec がインストールするデフォルトデータベースインスタンス (MSDE) を使うことを強くお勧めします。
- またシマンテック社はリモートの SQL Server インスタンスを使って Backup Exec のデータベースをホストする方法をサポートしています。ただし、この方法を使う場合は次のことを見直します。

Backup Exec の 1 つのインストールされたインスタンスのみ、クラスタ化されたノード上のリモートの SQL Server インスタンスにインストールできます。クラスタ内の Backup Exec の他のすべてのインストールされたインスタンスは Backup Exec の MSDE のデフォルトデータベースインスタンスを使う必要があります。

メモ: リモートの SQL Server インスタンスを使うクラスタノードで Backup Exec クラスタウィザードを実行する必要があります。

Windows Server 2008 以上を使用し、Backup Exec データベースをホストするリモートのクラスタ化された SQL Server インスタンスを使用する場合

- Backup Exec メディアサーバーでは、リモートの SQL Server インスタンスをホストするコンピュータにインストールされているのと同じレベルのオペレーティングシステムを使用する必要があります。

Windows Server 2008 以上を使用し、Backup Exec ユーティリティを使用して、クラスタ化された Backup Exec インストールまたはクラスタ化されたリモートの SQL Server インスタンスを再設定する場合

- Backup Exec メディアサーバー、およびリモートの SQL Server インスタンスをホストするコンピュータと同じレベルのオペレーティングシステムを使用するコンピュータで Backup Exec ユーティリティを実行します。

Microsoft Cluster Server 内での Backup Exec の動作

Microsoft Cluster Server (MSCS) に Backup Exec をインストールする場合は、仮想サーバーアプリケーションとしてインストールします。すなわち、Backup Exec に、IP アドレスリソース、ネットワーク名リソース (仮想サーバー名) およびディスクリソースを割り当てます。

フェールオーバーが発生すると、実行中のバックアップジョブは再スケジュールされます。フェールオーバーノードとして指定されているノード上で Backup Exec サービスが再起動され、デフォルトでは、バックアップジョブが再実行されます。Backup Exec には、「チェックポイントから再開」と呼ばれるクラスタフェールオーバー再開のルールが用意されています。「チェックポイントから再開」オプションを使用すると、バックアップジョブを最初からやり直すのではなく、中断したところから再開することができるため、バックアップ時間を短縮し、使用するメディアの容量を削減することができます。クラスタフェールオーバーでのジョブを再実行するルールを有効にした場合は、ジョブの再実行時に「チェックポイントから再開」オプションを指定することができます。クラスタフェールオーバールールに利用できるオプションは、「チェックポイントから再開」のみです。ジョブが再開されないようにデフォルト設定を変更することができます。

障害の発生したサーバーがリカバリされてオンラインになると、MSCS はクラスタ内の負荷を自動的に分散します。これをフェールバックと呼び、クラスタグループはクラスタに復帰したサーバーに戻されます。ただし、Backup Exec は、フェールバックしないように設計されています。バックアップジョブは、指定したフェールオーバーノード上で続行されます。バックアップジョブを、指定したフェールオーバーノード上で続行することにより、故障したサーバーがクラスタに復帰したときにジョブを再開するリスクを回避しています。また、必要に応じて、Backup Exec クラスタグループをホストノードに移動することができます。

クラスタ環境での Backup Exec の動作は、クラスタの構成によって異なります。

p.811 の「[Backup Exec と Microsoft Cluster Server の構成](#)」を参照してください。

p.802 の「[Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストールの必要条件

Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストールの必要条件は、次のとおりです。

- Microsoft Windows 2000 Advanced Server/DataCenter、Windows Server 2003 Enterprise/DataCenter および Windows Server 2008 R2 Enterprise/DataCenter 用の Backup Exec 2010 では、2 ノードクラスタがサポートされています。
- Microsoft Windows 2000 Datacenter、Windows Server 2003 Enterprise/DataCenter および Windows Server 2008 R2 Enterprise/DataCenter 用の Backup Exec 2010 では、4 ノードクラスタがサポートされています。
- Microsoft Windows Server 2003 Datacenter 用の Backup Exec 2010 では、最大で 8 ノードクラスタがサポートされています。
- Backup Exec Cluster は、Windows Server 2003/2008 R2 のマジョリティノードセットのクラスタ構成にインストールすることができます。ただし、Backup Exec によるノード間でのデータベースファイルの共有のために、構成内に共有ディスクが必要です。この種類の構成では、過半数のクラスタに障害が発生した場合は、クラスタ全体が使用不可になります。したがって、この構成は通常 3 つ以上のノードを使用したクラスタ構成で使用されます。
- クラスタ内に Backup Exec をインストールするには、ホストノードと指定したフェールオーバーノードの両方がオンラインになっている必要があります。
- インストール時、Backup Exec 仮想サーバーに固有の IP アドレスと固有のネットワーク名が必要になります。
- Backup Exec Cluster のインストール中は、インストールを実行するノードが共有ディスクの所有者であることが必要です。別のアプリケーションに属する物理ディスクリソースを使用する場合、Backup Exec クラスタ設定ウィザードによって、他のアプリケーションに属するすべてのリソースが Backup Exec グループに移動されます。クラスタクォーラムには Backup Exec をインストールしないことをお勧めします。
- ソフトウェア使用許諾権契約に定義されているように、クラスタ内のアクティブノードごとに、Backup Exec 2010 のライセンスのある個別のコピーと利用可能なエージェントおよびオプションが必要です。Backup Exec の評価版をインストールする場合は、クラスタ環境が自動的に検出され、ライセンスキーを入力する必要はありません。
- SAN SSO 環境に Backup Exec Cluster をインストールする場合は、Backup Exec をインストールするすべてのクラスタでのサーバーの構成を同一にしてください。すべてのノードをデータベースサーバーか、同じプライマリサーバーに接続しているセカンダリメンバーサーバーにしてください。
- Backup Exec は、単一のクラスタグループに属するクラスタにインストールするか、各ノードでローカルにインストールします。クラスタ対応の Backup Exec とクラスタ対応ではないローカルインストール版の Backup Exec の両方をインストールした場合、ローカルにインストールした Backup Exec メディアサーバーにログオンできなくなります。Backup Exec 仮想サーバー名を使用したログオンのみが可能です。ローカルにインストールした Backup Exec メディアサーバーにログオンできるようにするには、クラスタ設定ウィザードを使用して、クラスタ内のすべてのノードからクラスタ対応の Backup Exec をアンインストールする必要があります。

- クラスタ内のすべてのノード上の Backup Exec サービスに同じアカウントを使用します。Backup Exec を使用しているクラスタ内のノードで異なるアカウントを使用している場合、同じアカウントを使用するようにサービスを変更します。

p.802 の「[Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

p.811 の「[Backup Exec と Microsoft Cluster Server の構成](#)」を参照してください。

Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール

クラスタクォーラムがインストールされているディスクへの Backup Exec のインストールはお勧めできません。リカバリプロセスでクォーラムディスクに新しいドライブ文字を指定する必要があった場合は、Backup Exec はその新しいドライブを認識できないため、正しく動作しません。

p.826 の「[クラスタクォーラムディスクへの新しいドライブ文字の割り当て](#)」を参照してください。

メモ: デフォルトでは、クラスタ内のホストノードから指定ノードへのフェールオーバーは、各ノードのマシン名のアルファベット順に行われます。指定ノードへのフェールオーバー順序を変更するには、マシン名を変更します。

クラスタ内のすべてのノードに Remote Agent が自動的にインストールされます。Backup Exec を使用してクラスタ外のリモートサーバーをバックアップする場合は、バックアップするリモートサーバーにも Remote Agent をインストールしてください。

クラスタに Backup Exec をインストールする方法

- 1 クラスタ内の必要なすべてのノードに Backup Exec をインストールします。各ノードには、同じインストールパスを使用します。
- 2 アクティブノードにするノードから、Backup Exec を起動します。
- 3 ツールメニューの[ウィザード]をポイントし、[クラスタ設定ウィザード]をクリックします。
- 4 画面の案内に従って作業を進めます。

[仮想サーバー情報]画面に、仮想サーバー用のデフォルト名[BKUPEXECVRS]が表示されます。このデフォルト名を使用しない場合は、新しいデフォルト名を入力します。

- 5 クラスタ設定ウィザードが終了したら、フェールオーバーの発生時に使用するデバイスプールを、各ノードにローカルに接続されているすべてのストレージデバイスで構成します。これにより、フェールオーバーノードに接続されているストレージデバイス上でジョブを実行することができます。
p.805 の「[Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成](#)」を参照してください。
- 6 すべてのノードで手順 5 を繰り返します。
p.808 の「[「チェックポイントから再開」機能の有効化または無効化](#)」を参照してください。
p.811 の「[Backup Exec と Microsoft Cluster Server の構成](#)」を参照してください。
p.808 の「[フェールオーバーノードの変更](#)」を参照してください。

Microsoft クラスタ上の Backup Exec のアップグレード

クラスタ内のノード上の Backup Exec をアップグレードする場合、そのノードをクラスタから除外する必要はありません。

Desktop and Laptop Option を使用するクラスタ内のノードでは、Backup Exec 12 にアップグレードすることができます。ただし、アップグレードを開始する前に、それぞれのノードがアクティブホストであることを確認する必要があります。

表 19-1 Microsoft クラスタ上の Backup Exec のアップグレード

手順	処理
手順 1	アップグレードするノードを選択し、アクティブな Backup Exec クラスタノードにします。
手順 2	このアクティブノード上で Backup Exec インストールプログラムを実行します。
手順 3	クラスタグループ内で次にアップグレードするノードへと移動し、そのノード上で Backup Exec インストールプログラムを実行します。アップグレードする各ノードに移動する場合は、ディスクを除くすべてのリソースをオフラインにする必要があります。
手順 4	クラスタ内の各ノードで、手順 3 を繰り返します。

p.168 の「[以前のバージョンの Backup Exec のアップグレードについて](#)」を参照してください。

Microsoft クラスタへの Backup Exec 追加オプションのインストール

クラスタの各ノードに、Backup Exec の追加オプションをインストールします。各オプションのインストールについて詳しくは、このマニュアルの該当のセクションまたはオンラインヘルプを参照してください。

メモ: Advanced Open File Option を使用している場合は、仮想サーバーではなく、このオプションをインストールした各物理ノードでデフォルトの設定を行います。静的ボリュームに対するデフォルト設定はノードごとに異なる場合があるため、Advanced Open File Option のデフォルト設定はフェールオーバーされません。

Backup Exec の追加オプションをインストールする方法

- 1 追加オプションをインストールする前に、Backup Exec グループがオンラインであることをホストノードで確認します。
- 2 追加オプションをインストールします。
[p.112 の「ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール」](#)を参照してください。
- 3 ホストノードへのインストールが完了した後、クラスタアドミニストレータを使用して、Backup Exec グループを次にインストールするノードに移動し、手順 2 を繰り返します。
クラスタ内の各ノードには、同じオプションを同じ設定でインストールしてください。
- 4 Backup Exec Agent for Oracle on Windows or Linux Servers と Backup Exec Agent for SAP Applications を別のノードにインストールするには、クラスタ上の Backup Exec がインストールされている共有ディスクにドライブをマップし、SETUP を実行します。

Microsoft クラスタからの Backup Exec のアンインストール

クラスタ設定ウィザードを使用して、Backup Exec を削除します。

クラスタから Backup Exec をアンインストールする方法

- 1 ツールメニューの[ウィザード]をポイントし、[クラスタ設定ウィザード]をクリックします。
- 2 選択したすべてのサーバーからクラスタ対応の Backup Exec を削除するには、このウィザードを使用します。
アクティブノードのクラスタ構成を解除する場合、共有ドライブ上の Backup Exec データを残すかまたは削除するかを選択できます。データを削除する場合、そのデータをアクティブノードで利用可能にできます。
- 3 すべてのノードから Backup Exec をアンインストールします。

- 4 Backup Exec のアンインストール後に、すべてのリソースディスクを Backup Exec のクラスタグループから別のグループに移動し、Backup Exec クラスタグループを削除します。
- 5 Backup Exec のアンインストールを行うノード上で[スタート]をクリックし、[設定]をポイントして[コントロール パネル]をクリックします。
- 6 [プログラムの追加と削除]をダブルクリックし、[現在インストールされているプログラム]リストで[Symantec Backup Exec (TM) 2010]を選択して、[変更と削除]をクリックします。
- 7 すべてのノードで手順 5 を繰り返します。

Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成

Backup Exec をクラスタにインストールすると、クラスタ内の各ノードに[すべてのデバイス(<ノード名>)]という名前のデフォルトのデバイスプールが作成されます。ノードにストレージデバイスが存在する場合は、それらのデバイスは、[すべてのデバイス(<ノード名>)]デバイスプールに自動的に割り当てられます。このデバイスプールは、作成したバックアップジョブまたはリストアジョブの、そのノードでのデフォルトのバックアップ先デバイスとしても使用されます。ただし、フェールオーバーの発生後にフェールオーバーノードに接続されたストレージデバイス上でジョブを実行できるようにするには、すべてのノード上のすべてのストレージデバイスで構成したデバイスプールを作成する必要があります。クラスタの構成に、共有 SCSI バスに接続されたテープデバイスが存在する場合は、各ノードが使用するテープデバイス名をデバイスプールに追加します。また、このデバイスプールを、再開するすべてのジョブのバックアップ先デバイスとして選択する必要があります。

単一のデバイスプールを作成することができます。また、フェールオーバー時に同種のデバイスまたはメディア上でジョブを再開できるように、デバイスまたはメディアの種類別のデバイスプールを作成することもできます。

クラスタ用のデバイスプールを作成する方法

- 1 ホストノードで Backup Exec を開きます。
- 2 新しいデバイスプールを作成します。
p.504 の「[デバイスプールの作成](#)」を参照してください。
- 3 ストレージデバイスを追加し、Backup Exec を終了します。共有 SCSI バス上にテープデバイスが存在するときは、各ノードが使用するテープデバイス名を追加します。
p.505 の「[デバイスプールへのデバイスの追加](#)」を参照してください。
- 4 クラスタアドミニストレータを使用して、Backup Exec リソースグループを次のノードに移動します。

- 5 移動したノードで Backup Exec を開き、このノードのストレージデバイスを、前の手順で作成したデバイスプールに追加し、Backup Exec を終了します。共有 SCSI バス上にテープデバイスが存在するときは、各ノードが使用するテープデバイス名を追加します。
- 6 クラスタ内の各ノードで手順 4 および手順 5 を繰り返します。

Microsoft Cluster Server フェールオーバーでの「チェックポイントから再開」機能の使用

クラスタ上で実行する各バックアップジョブで、「チェックポイントから再開」機能を有効または無効に設定することができます(デフォルトでは「チェックポイントから再開」機能は有効に設定されています)。「チェックポイントから再開」機能を有効に設定すると、フェールオーバーが発生したために中断されたジョブを、最初からやり直すのではなく中断した時点から再開することができます。ジョブの再開時に、すでにバックアップされているファイルはスキップされ、未処理のファイルのみがバックアップされます。このオプションを選択しないと、ジョブは最初から再実行されます。

次の種類のバックアップジョブには、「チェックポイントから再開」機能が適しています。

- NTFS
- Exchange メールボックスおよびパブリックフォルダ
- 複数のストレージグループを持つ Exchange 2003 Information Store
- SQL データベースの非スナップショットバックアップ

次の種類のバックアップジョブには、「チェックポイントから再開」機能は使用できません。

- システム状態
- Lotus Domino
- 1 つのストレージグループを持つ Exchange 2003 Information Store
- NTFS イメージバックアップ
- NTFS ボリュームスナップショット
- SQL データベースのスナップショットバックアップ
- SQL トランザクションログのバックアップ
- NetWare SMS (Remote Agent) を使用して NetWare のバックアップを実行する場合には「チェックポイントから再開」オプションを無効にする必要があります)

「チェックポイントから再開」機能では、次の事項はサポートされません。

- Advanced Open File Option。
- Microsoft Windows Vista/Server 2008。

- **Advanced Disk-based Backup Option** でのオフホストバックアップ機能。
- **Advanced Disk-based Backup Option** で合成バックアップ機能に[合成バックアップの追加情報を収集する]オプションが選択されている場合の「チェックポイントから再開」機能の実行。
- アーカイブビットに基づく増分バックアップ。

フェールオーバーの時点から再開されたジョブは、ジョブモニターの状態欄に[再開]と表示されます。

「チェックポイントから再開」機能を使用する前に、次の項目を確認しておきます。

- クラスタフェールオーバーが発生する前に完全にバックアップが完了しているリソースは、バックアップの種類やファイルの種類が「チェックポイントから再開」機能でサポートされているかどうかに関係なく、「チェックポイントから再開」機能ではスキップされます。これにより、メディアの容量およびバックアップ時間が削減されます。
- リソースのバックアップ中にフェールオーバーが発生した場合、フェールオーバーの発生時に使用中であったメディアはそのままの状態に保持されるため、再開時には新しいメディアが必要です。フェールオーバーの前に使用していたメディアが再開時に上書きされないよう、[メディアの上書き禁止レベル]オプションを適切に選択しておくことをお勧めします。
- 再開時にバックアップされるデータは、フェールオーバーの前にバックアップされたデータとは異なるバックアップセットに格納されます。フェールオーバーの前後にバックアップされたデータでは、異なるカタログバックアップセットエントリが作成されます。また、リソースのバックアップ時に複数のクラスタフェールオーバーが発生した場合は、ジョブの再開ごとに異なるバックアップセットが作成されます。このような場合には、バックアップしたデータが重複している可能性があります。
 バックアップセットは、バックアップされた順序でリストアすることが重要です。また、これらのバックアップセットを使用してリストアジョブを実行する場合は、[常にディスク上のファイルを上書きする]オプションを選択して、バックアップセットに含まれるすべてのデータを完全にリストアする必要があります。
- バックアップ後の検証ジョブ、またはバックアップ前あるいはバックアップ後のデータベース一貫性チェックジョブの実行中にフェールオーバーが発生した場合は、これらのジョブはフェールオーバー後の最初に実行されます。
- クラスタフェールオーバーによって中断され、フェールオーバーの時点から再開されたボリューム全体のバックアップのエントリは、IDR リストアウィザードには表示されません。ただし、IDR リストアウィザードを使用して一次リカバリを行った後で、これらのバックアップセットを手動でリストアすることができます。
- ファイルをバックアップし、削除する完全バックアップジョブのための「チェックポイントから再開」オプションを有効にできます。ただし、クラスタフェールオーバーが起きてジョブが再開されれば、バックアップが完了した後、ファイルはソースボリュームから削除されません。

- クラスタ化した管理対象メディアサーバーでフェールオーバーが発生した場合、リカバリしたジョブがアクティブクラスタノードで再開されます。ジョブは、Backup Exec クラスタ外の他のいずれの管理対象メディアサーバーにもリカバリされません。

「チェックポイントから再開」機能の有効化または無効化

バックアップジョブに「チェックポイントから再開」機能を適用するには、クラスタフェールオーバーのエラー処理方法が有効に設定されていることを確認します。

p.579 の「エラー処理方法について」を参照してください。

「チェックポイントから再開」機能を有効または無効にする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[クラスタ]をクリックします。
- 4 [チェックポイントからジョブを再開する]をオンまたはオフにします。

Backup Exec でのデフォルト設定は、フェールオーバー発生時のホストノードの設定がフェールオーバーノードに引き継がれます。

- 5 [クラスタフェールオーバー]のエラー処理方法を使用可能にします。[ツール]メニューの[エラー処理方法]を選択します。
- 6 [クラスタフェールオーバー]のルールを選択し、[編集]をクリックします。
- 7 [有効]チェックボックスが選択されていることを確認します。

フェールオーバーノードの変更

次の操作を行うことができます。

- ノードのフェールオーバー順序を変更する。
- クラスタにフェールオーバーノードを追加する。
- クラスタからフェールオーバーノードを削除する。

ノードのフェールオーバー順序を変更する方法

- デフォルトでは、MSCS クラスタ内のホストノードから指定ノードへのフェールオーバーは、各ノードのマシン名のアルファベット順に行われます。指定ノードへのフェールオーバー順序を変更するには、希望する順序になるようにマシン名を変更します。
- VCS は、優先度リストをプライマリ方法として使用し、フェールオーバー対象を判断します。VCS で優先度を設定するには、VCS Cluster Explorer の Backup Exec グループを選択して、[ツール]>[システムマネージャ]を選択します。[優先度]フィールドを変更して、目的の順序を反映します。

フェールオーバーノードを追加または削除する方法

Backup Exec クラスタ構成にノードを追加するには、追加するノードに Backup Exec がインストールされている必要があります。クラスタに対するノードの追加または削除を行うには、そのノードのクラスタサービスがオンラインになっている必要があります。

ノードを削除する場合は、削除するノードからクラスタ設定ウィザードを実行しないでください。

- 1 ホストノードのツールメニューの[ウィザード]をポイントします。
- 2 [クラスタ設定ウィザード]をクリックします。
- 3 画面の案内に従って、ノードを追加または削除します。
- 4 フェールオーバーノードを追加する場合は、クラスタデバイスプールに、フェールオーバー発生時に使用する、ローカル接続されているすべてのストレージデバイスも追加します。これにより、フェールオーバーノードに接続されているストレージデバイス上でジョブを実行することができます。

クラスタ内の一部のノードのみ削除して Backup Exec をアンインストールすると、実行中の仮想サーバーおよびサービスのためにパスワードが必要になります。クラスタ上のすべてのノードから Backup Exec を削除する必要があります。

p.804 の「[Microsoft クラスタからの Backup Exec のアンインストール](#)」を参照してください。

p.805 の「[Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成](#)」を参照してください。

p.808 の「[フェールオーバーノードの変更](#)」を参照してください。

p.811 の「[Backup Exec と Microsoft Cluster Server の構成](#)」を参照してください。

Microsoft Cluster Server の新しいプライマリ SAN SSO サーバーおよび集中管理サーバーの指定

クラスタ環境の新しいプライマリ SAN Shared Storage Option サーバーまたは集中管理サーバーを指定するには、BEUtility.exe を使用します。BEUtility.exe を使用すると、Backup Exec 2010 メディアサーバーのさまざまな設定および保守作業を行うことができます。

メモ: クラスタ環境では、BEUtility.exe の[サービスアカウントの変更]を使用しないでください。

Backup Exec Cluster サーバーをデータベースサーバーからメンバーサーバーに変更する方法

- 1 新しいサーバーを、Library Expansion Option および SAN Shared Storage Option のインストールされているセカンダリサーバーとしてインストールします。
Backup Exec Cluster および他のメンバーサーバーに正しく接続されていることを確認します。
- 2 クラスタアドミニストレータを使用して、Backup Exec Cluster サービスをシャットダウンします。
ディスクリソースがオンラインになっていることを確認してください。
- 3 Backup Exec Cluster のインストールパスから、新しいデータベースサーバー上のそれぞれのインストールパスにカタログファイルを移動します。
- 4 BEUtility.exe を使用して、すべての Backup Exec サーバーを新しいデータベースサーバーに接続し、すべての Backup Exec サービスを起動します。
- 5 新しいデータベースサーバー上で、Backup Exec サービスを停止してから再起動します。
- 6 クラスタアドミニストレータを使用して、Backup Exec リソースグループをフェールオーバーノードに移動し、そのノード上でサービスが起動されていることを確認します。
- 7 BEUtility.exe を使用して、SAN のすべてのメンバーサーバー上で Backup Exec サービスを停止して再起動し、これらのサーバーを新しいデータベースサーバーに接続します。

Backup Exec Cluster サーバーを集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーに変更する方法

- 1 新しいサーバーを管理対象メディアサーバーとしてインストールします。
Backup Exec Cluster および他の管理対象メディアサーバーに正しく接続されていることを確認します。
- 2 クラスタアドミニストレータを使用して、Backup Exec Cluster サービスをシャットダウンします。
ディスクリソースがオンラインになっていることを確認してください。
- 3 Backup Exec Cluster のインストールパスから、新しい集中管理サーバー上のそれぞれのインストールパスにカタログファイルを移動します。
- 4 BEUtility.exe を使用して、すべての Backup Exec サーバーを新しい集中管理サーバーに接続し、すべての Backup Exec サービスを起動します。
- 5 集中管理サーバー上で、Backup Exec サービスを停止してから再起動します。

- 6 クラスタアドミニストレータを使用して、Backup Exec リソースグループをフェールオーバーノードに移動し、そのノード上でサービスが起動されていることを確認します。
- 7 BEUtility.exe を使用して、すべての管理対象メディアサーバー上で Backup Exec サービスを停止して再起動し、これらのサーバーを新しい集中管理サーバーに接続します。

p.816 の「SAN SSO を使用したファイバーチャネル SAN 上のマルチノードクラスタ」を参照してください。

Backup Exec と Microsoft Cluster Server の構成

Backup Exec では、ローカル接続されたストレージデバイスまたは共有 SCSI バス上のストレージデバイスを使用して、ファイバーチャネル SAN 上の 2 - 8 ノードのさまざまなクラスタ構成がサポートされます。

メモ: プライベートネットワークにクラスタをインストールした場合は、必要に応じて、クラスタアドミニストレータを使用してパブリックネットワークとの通信を行うことができます。

ファイバーチャネル SAN 上または共有 SCSI バス上のストレージデバイスを使用したクラスタを使用している場合にフェールオーバーが発生すると、SAN コンポーネントの性能によっては、障害の発生したノードが復帰するまで、メディアがテープドライブ内で孤立することがあります。

フェールオーバーが発生する前に、ジョブの終了マーカがメディアに書き込まれていない場合には、次の追記バックアップジョブの実行時に、Backup Exec エンジンによって、メディアが追記不可としてマークされる場合があります。このような場合には、メディアは上書きされる（または削除されるか上書き禁止期間が終了する）まで追記不可となります。

ストレージデバイスがロボットライブラリの場合には、ロボットライブラリのインベントリレポートを表示して、メディアが Backup Exec エンジンによって追記不可に設定されているかどうかを確認することができます。このレポートの[フル]欄に 3 と表示されている場合は、Backup Exec エンジンによってメディアが追記不可としてマークされていることを示します。

クラスタに対してホットスワップ対応デバイスを追加または削除するには、すべての Backup Exec Cluster ノード上でホットスワップ対応デバイスウィザードを実行します。サーバーを更新せず、新しく追加したデバイスが認識されていないと、そのデバイスをターゲットとするジョブはすべて失敗する場合があります。

p.438 の「ホットスワップ対応デバイスウィザードを使用したデバイスの追加または置換について」を参照してください。

各種クラスタ構成の例が利用可能です。

- p.812 の「ローカル接続されたストレージデバイスを使用する 2 ノードクラスタ」を参照してください。
- p.813 の「共有 SCSI バス上のテープデバイスを使用する 2 ノードクラスタ」を参照してください。
- p.816 の「SAN SSO を使用したファイバーチャネル SAN 上のマルチノードクラスタ」を参照してください。

ローカル接続されたストレージデバイスを使用する 2 ノードクラスタ

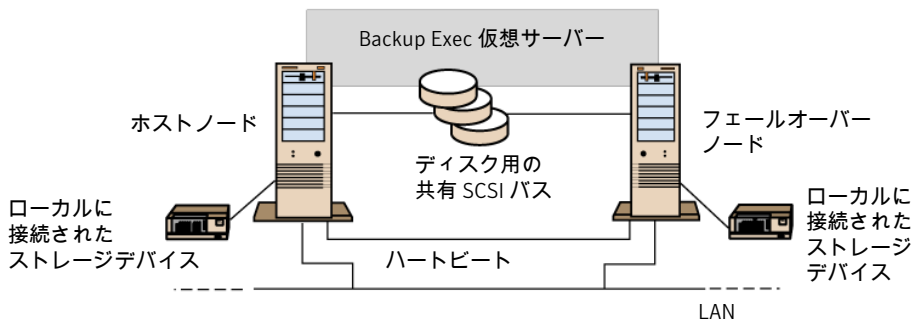
この構成では、クラスタ対応の Backup Exec はホストノード上にインストールされます。フェールオーバーはクラスタ内の指定したノードに発生し、ストレージデバイスは、各ノードにローカルに接続されています。

各ノードにローカル接続されたストレージデバイスは、自動的に[すべてのデバイス(<ノード名>)]デバイスプールに割り当てられます。このデバイスプールは、バックアップジョブまたはリストアジョブを作成するときの、そのノード上のデフォルトの宛先デバイスになります。フェールオーバーの発生後にフェールオーバーノードに接続されたストレージデバイス上でジョブを実行できるようにするには、すべてのノードにローカル接続されたすべてのストレージデバイスで構成したデバイスプールを作成する必要があります。

p.805 の「Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成」を参照してください。

この構成にデータをリストアするには、フェールオーバーノードにローカル接続されているストレージデバイスにメディアを移動します。また、リストアジョブを開始する前にメディアのインベントリを再実行します。

図 19-1 ローカル接続されたストレージデバイスを使用する 2 ノードクラスタ

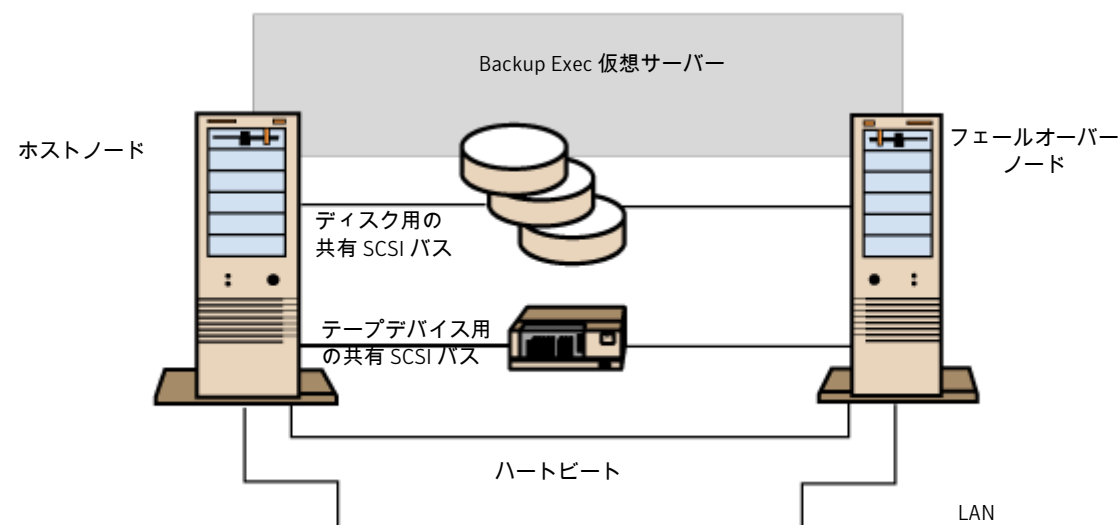


p.816 の「[SANSSO を使用したファイバーチャネル SAN 上のマルチノードクラスタ](#)」を参照してください。

共有 SCSI バス上のテープデバイスを使用する 2 ノードクラスタ

この構成では、クラスタ対応の Backup Exec はホストノード上にインストールされます。フェールオーバーはクラスタ内の指定したノードに発生し、テープデバイスは、ディスク用の共有 SCSI バスとは別の共有 SCSI バスに接続されています。

図 19-2 共有 SCSI バス上のテープデバイスを使用する 2 ノードクラスタ



この構成では、同一のテープデバイスに対して各ノードで一意の名前が作成されるため、ドライブが連続していない場合、フェールオーバー発生時にジョブを実行するには、各ノードで使用するテープデバイス名が含まれたデバイスプールを作成しておく必要があります。

p.805 の「[Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成](#)」を参照してください。

フェールオーバーの発生時には SCSI バスがリセットされます。これにより、テープデバイスと共有ドライブを同一の SCSI バスに接続できないため、それぞれを独立した SCSI バスに接続する必要があります。

p.814 の「[テープデバイス用の共有 SCSI バスの構成](#)」を参照してください。

メモ: 共有 SCSI クラスタ構成で連続テープデバイスを使用している場合、フェールオーバーによってデバイス内で孤立したメディアはテープデバイスから取り出されます。連続していないテープデバイスを使用している場合、デバイスからメディアを手動で取り出すか、またはデバイスを再ブートする必要があります。

p.816 の「[SANSSO を使用したファイバーチャネル SAN 上のマルチノードクラスタ](#)」を参照してください。

テープデバイス用の共有 SCSI バスの構成

テープデバイス用の共有 SCSI バスを設定する前に、次の事項に注意が必要です。

共有 SCSI バス上にテープデバイスを構成するには、ノード間の共有外部バス用として、各クラスタサーバーに SCSI ケーブル、SCSI ターミネータ、および SCSI アダプタが必要です。また、共有バス上に少なくとも 1 つのテープデバイスが必要です。

テープデバイスとそのデバイスを接続する SCSI バスの伝送方式 (シングルエンドまたはディファレンシャル) は同じである必要があります。同一の SCSI バスで複数の伝送方式を使用することはできませんが、デバイス間で伝送方式が異なる場合は、デバイス間に信号変換装置を設置することができます。信号変換装置により、SCSI 信号をシングルエンドからディファレンシャルに変換します。

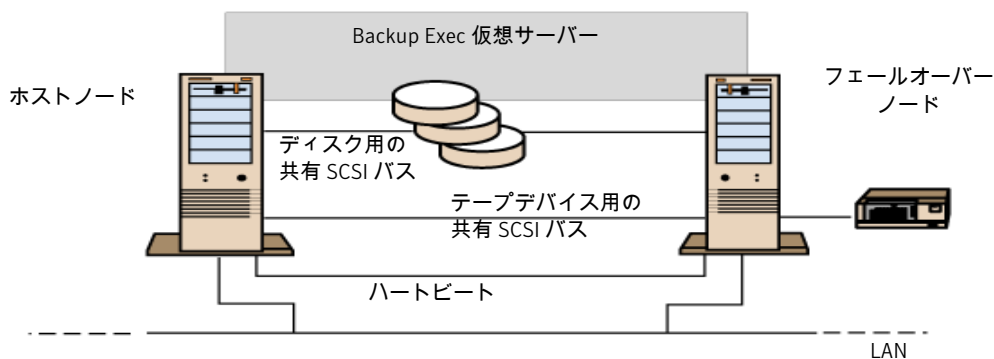
メモ: シングルエンドデバイスとディファレンシャルデバイスを接続する場合は、ハードウェアが故障しないように、必ず信号変換装置を使用してください。

バス上のすべてのデバイス間でコマンドやデータの送受信を正しく行うには、SCSI バスの両端を終端処理する必要があります。SCSI バスには、そのセグメントの両端にターミネータが 1 つずつ必要です。

テープデバイスがバスの中間にある場合には、デバイス内での終端処理を解除します。

終端処理機能を内蔵したテープデバイスをバスの端部に接続した場合は、そのデバイスの終端処理機能を使用することができます。

図 19-3 バス端に接続したテープデバイスを使用するクラスタの例



バスを終端処理する方法を次に示します。

- **SCSI アダプタ:**この方法はお勧めできません。サーバーと共有バスの接続が切断したり、電源に問題が発生すると、バスの終端処理が正しく行われず、バスが正常に動作しないことがあります。
- **パススルー (フィードスルー) SCSI ターミネータ:**この方法は、SCSI アダプタとともに使用することができます。テープデバイスによっては使用できるものもあります。テープデバイスをバス端に接続する場合には、パススルー SCSI ターミネータを接続してバスを終端処理します。その場合はテープデバイスに内蔵の終端処理機能は使用しません。お勧めできる方法です。

メモ: 電源に問題が発生した場合でも確実に終端処理を行うには、ホストアダプタの製造元の推奨する方法に従って、SCSI コントローラ内蔵の終端処理機能を使用しないように設定し、物理的にターミネータを使用してコントローラを終端処理します。

- **Y ケーブル:**テープデバイスによっては、この方法を使用することができます。Y ケーブルを使用してテープデバイスをバス端に接続し、Y ケーブルの他端にターミネータを接続します。テープデバイス内蔵の終端処理機能は使用しないように設定します。お勧めできる方法です。
- **TriLink コネクタ:**テープデバイスによっては、この方法を使用することができます。TriLink コネクタを使用してテープデバイスをバス端に接続し、コネクタの他端にター

ミネータを接続します。テープデバイス内蔵の終端処理機能は使用しないように設定します。お勧めできる方法です。

Y ケーブルや TriLink コネクタを使用する方法は、バスを終端処理するのみではなく、バスの終端に影響を与えずに、共有バスとデバイスの接続を切断することができます。共有 SCSI バスに接続されている他のデバイスに影響を与えずに、デバイスの保守や取り外しを行うことができます。

テープデバイス用の共有 SCSI バスを構成する方法

- 1 共有 SCSI バス用の SCSI コントローラを各ノードにインストールします。
各ノードの SCSI コントローラの SCSI ID が重複しないように注意します。たとえば、ホストノードの SCSI コントローラの SCSI ID を 6 に、フェールオーバーノードの SCSI コントローラの SCSI ID を 7 に設定します。
- 2 共有 SCSI バス用の SCSI コントローラの設定を行います。詳しくは SCSI ホストアダプタに付属のマニュアルを参照してください。
コンピュータの構成時には、同時に両方のノードの電源をオンにしないでください。また、両方のノードの電源がオンになっているときには、共有 SCSI バスを両方のノードに同時に接続しないでください。
- 3 共有 SCSI テープデバイスにケーブルを接続し、ケーブルを両方のノードに接続します。また、前のセクションで説明したいずれかの方法で、バスセグメントの終端処理を行います。
p.813 の「共有 SCSI バス上のテープデバイスを使用する 2 ノードクラスタ」を参照してください。

SAN SSO を使用したファイバーチャネル SAN 上のマルチノードクラスタ

この構成では、1 つまたは複数のクラスタをファイバーチャネルストレージエリアネットワーク (SAN) に接続し、各クラスタのホストノードに、クラスタ対応の Backup Exec と SAN Shared Storage Option (SAN SSO) をインストールします。単一のストレージデバイスを 1 つまたは複数のクラスタで共有することもできますが、共有セカンダリストレージデバイスをファイバーチャネルに接続します。フェールオーバーは、クラスタ内の指定ノードに、マシン名のアルファベット順に発生します。

メモ: SAN SSO 環境で複数のクラスタを使用する場合は、ファイバースイッチを使用してクラスタノードをストレージデバイスに接続することを強くお勧めします。ファイバースイッチではなくハブを使用した場合は、フェールオーバーイベントの発生時にハブにリセットコマンドが送られ、そのハブに接続されているすべてのコンポーネントが切断されます。ファイバーチャネル SAN 上の任意のサーバーを、Shared Storage Option データベースサーバーとして指定することができます。

クラスタ用フェールオーバーデバイスプールを作成する必要があります。

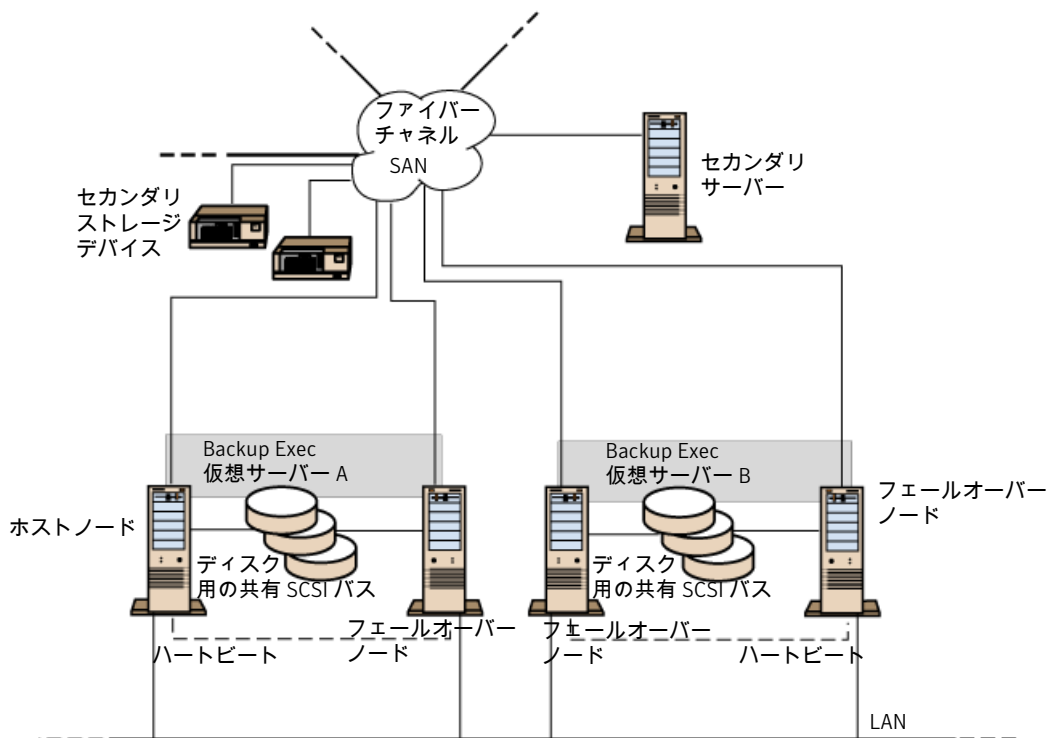
p.805 の「Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成」を参照してください。

この構成では、バックアップはネットワークを経由せずにローカルに実行されるため、パフォーマンスが向上します。集中メディアカタログを利用することもできます。SAN SSO では共有カタログデータベースを使用するため、カタログ作成済みのテープを物理的に他のデバイスに移動することができ、移動してもカタログの再実行は不要です。

メモ: フェールオーバーノードにインストールした SAN SSO の設定は、すべてのノードで、プライマリサーバーと同一である必要があります。すべてのノードをデータベースサーバーか、セカンダリメンバーサーバーにしてください。

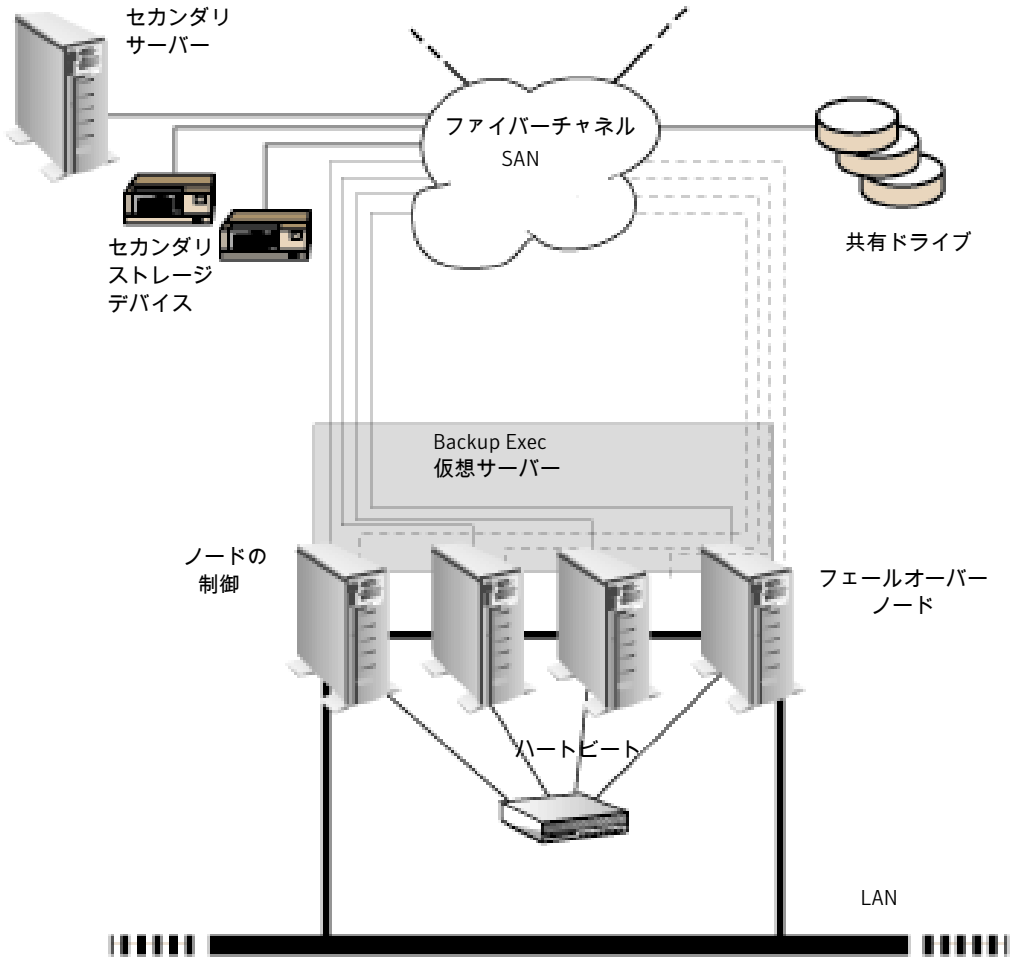
次に、マルチノードクラスタの例を示します。

図 19-4 SAN SSO を使用したファイバーチャネル SAN 上の 2 ノードクラスタ



4ノードクラスタを使用できます。

図 19-5 SAN SSO を使用したファイバーチャネル SAN 上の 4 ノードクラスタ



p.1944の「[SAN Shared Storage Option のインストールについて](#)」を参照してください。
p.809の「[Microsoft Cluster Server の新しいプライマリ SAN SSO サーバーおよび集中管理サーバーの指定](#)」を参照してください。

Microsoft クラスタおよび SAN SSO との Central Admin Server Option の使用

管理対象メディアサーバーはクラスタ化できますが、集中管理サーバーによって分散ジョブ環境内のすべての失敗ジョブがリカバリされるため、クラスタ化はお勧めしません。

Central Admin Server Option (CASO) および SAN SSO とともに Backup Exec Cluster をインストールする場合、次の構成を使用できます。

- CASO と Backup Exec Cluster
- CASO および SAN Shared Storage Option と Backup Exec Cluster
- 管理対象メディアサーバー構成と Backup Exec Cluster
- 管理対象メディアサーバー構成および SAN Shared Storage Option と Backup Exec Cluster

CASO とともに Backup Exec Cluster をインストールする方法

- 1 CASO や他のオプションとともに、Backup Exec を Microsoft クラスタノードにインストールします。
- 2 アクティブノードに指定するノードから、Backup Exec を起動します。
- 3 ツールメニューの[ウィザード]をポイントし、[クラスタ設定ウィザード]をクリックします。
- 4 画面の案内に従って作業を進めます。
- 5 クラスタ設定ウィザードが終了したら、管理対象メディアサーバーをインストールします。集中管理サーバーの名前を入力する画面が表示されたら、仮想 Backup Exec Cluster の名前を使用します。

CASO および SAN Shared Storage Option とともに Backup Exec Cluster をインストールする方法

- 1 CASO や SAN Shared Storage Option などのオプションとともに、Backup Exec を Microsoft クラスタノードにインストールします。
- 2 アクティブノードに指定するノードから、Backup Exec を起動します。
- 3 ツールメニューの[ウィザード]をポイントし、[クラスタ設定ウィザード]をクリックします。
- 4 画面の案内に従って作業を進めます。
- 5 クラスタ設定ウィザードが終了したら、管理対象メディアサーバーをインストールします。集中管理サーバーおよびプライマリ SAN サーバーの名前を入力する画面が表示されたら、仮想 Backup Exec Cluster の名前を使用します。

管理対象メディアサーバー構成とともに Backup Exec Cluster をインストールする方法

- 1 管理対象メディアサーバーオプションや他のオプションとともに、Backup Exec を Microsoft クラスタノードにインストールします。

管理対象メディアサーバークラスタ構成内で Backup Exec を実行するすべてのノードは、同じ集中管理サーバーにアクセスする必要があります。ノードが同じ集中管理サーバーにアクセスしていない場合、フェールオーバーが正常に実行されません。

- 2 アクティブノードに指定するノードから、Backup Exec を起動します。
- 3 ツールメニューの[ウィザード]をポイントし、[クラスタ設定ウィザード]をクリックします。
- 4 画面の案内に従って作業を進めます。

管理対象メディアサーバー構成および SAN Shared Storage Option とともに Backup Exec Cluster をインストールする方法

- 1 管理対象メディアサーバーオプションや SAN Shared Storage Option などのオプションとともに、Backup Exec を Microsoft クラスタノードにインストールします。

管理対象メディアサーバークラスタ構成内で Backup Exec を実行するすべてのノードは、同じ集中管理サーバーにアクセスする必要があります。ノードが同じ集中管理サーバーにアクセスしていない場合、フェールオーバーが正常に実行されません。

- 2 アクティブノードに指定するノードから、Backup Exec を起動します。
- 3 ツールメニューの[ウィザード]をポイントし、[クラスタ設定ウィザード]をクリックします。
- 4 画面の案内に従って作業を進めます。

Microsoft Cluster Server のバックアップについて

共有ファイル、データベース、クラスタクォーラムなど、クラスタ内のすべてのデータを保護するには、次の項目をバックアップします。

- 各ノード上のローカルディスク、シャドウコピーコンポーネントおよび[システム状態]。[システム状態]をバックアップすると、クラスタのリカバリ情報とクラスタ構成の変更情報が格納されているクラスタクォーラムもバックアップされます。

p.821 の「[Microsoft クラスタ内のローカルディスクのバックアップ](#)」を参照してください。

- クォーラムディスク上の Microsoft Cluster Server フォルダ内のデータを含む、すべての共有ディスク。

p.822 の「[Microsoft クラスタ内の共有ディスクのバックアップ](#)」を参照してください。

- データまたは Microsoft SQL Server や Exchange Server などのアプリケーションが格納されている仮想サーバー。データベースをバックアップするには、Backup Exec の各データベース用エージェントを使用します。
p.823 の「[Microsoft クラスタ内のデータベースファイルのバックアップ](#)」を参照してください。

メモ: ハードウェアプロバイダを使用してオフホストバックアップジョブを実行する場合、メディアサーバーとリモートコンピュータは異なるクラスタグループに属する必要があります。クラスタアプリケーションでは、署名とパーティションレイアウトが重複したデバイスの論理ユニット番号 (LUN) がサポートされないため、LUN を含むスナップショットは、クラスタ外のホストまたはリモートコンピュータに転送する必要があります。

Backup Exec をクラスタにインストールした場合は、Backup Exec の他にコマンドラインアプレットを使用することができます。コマンドラインアプレットを使用できないのはバックアップ用デバイスの指定のみです。コマンドラインアプレットを使用してデバイスプールをターゲットにすることはできますが、プール内の特定のデバイスをターゲットにすることはできません。

p.821 の「[Microsoft クラスタ内のローカルディスクのバックアップ](#)」を参照してください。

p.822 の「[Microsoft クラスタ内の共有ディスクのバックアップ](#)」を参照してください。

p.823 の「[Microsoft クラスタ内のデータベースファイルのバックアップ](#)」を参照してください。

p.832 の「[Veritas クラスタ内の Windows 2000 および Windows Server 2003/2008 機能のバックアップについて](#)」を参照してください。

p.315 の「[バックアップウィザードを使用したバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

p.823 の「[Windows 2008 R2 のクラスタ共有ボリュームのバックアップ](#)」を参照してください。

Microsoft クラスタ内のローカルディスクのバックアップ

接続先の物理ノードから、バックアップするローカルディスクを選択します。

Microsoft クラスタ内のローカルディスクをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。

- 3 バックアップ選択ペインで、ノードが含まれているドメインを展開して、各ノード上のローカルディスクを選択します。

Windows 2000 を実行しているノード上のバックアップ対象を選択する場合は、[システム状態] も必ず選択してください。

p.265 の「バックアップするデータの選択について」を参照してください。
- 4 クラスタ用デバイスプールを作成している場合は、フェールオーバーの発生時にフェールオーバーノードでジョブを再実行できるように、そのデバイスプールをデフォルトのバックアップ先デバイスとして選択します。
- 5 バックアップジョブの残りの設定を行います。
- 6 バックアップジョブを今すぐ実行するか、後で実行されるようにスケジュールを設定します。

Microsoft クラスタ内の共有ディスクのバックアップ

Microsoft Cluster Server 仮想サーバーまたは Backup Exec 仮想サーバーから、バックアップする共有ディスクを選択します。

共有ディスクをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択ペインで、ノードが含まれているドメインを展開して、**Microsoft Cluster Server** 仮想サーバーまたは **Backup Exec** 仮想サーバーを選択します。バックアップジョブは、仮想サーバーを使用することにより、ディスクを管理しているノードを通じて共有データにアクセスすることができます。
- 4 共有ディスクに割り当てられているドライブ文字を選択します。
- 5 クラスタ用デバイスプールを作成している場合は、フェールオーバーの発生時にフェールオーバーノードでジョブを再実行できるように、そのデバイスプールをデフォルトのバックアップ先デバイスとして選択します。
- 6 バックアップジョブの残りの設定を行います。
- 7 バックアップジョブを今すぐ実行するか、後で実行されるようにスケジュールを設定します。

[Active Directoryドメイン]でサーバークラスタを参照するには、各仮想クラスタサーバーの **Kerberos** 認証を有効にする必要があります。**Microsoft** のクラスタアドミニストレータから **Kerberos** 認証を有効にすることができます。

Microsoft クラスタ内のデータベースファイルのバックアップ

仮想サーバーのデータベースアイコンを使用して、バックアップするデータベースファイルを選択します。仮想サーバーに Microsoft SQL Server または Exchange Server などのデータベースアプリケーションが含まれている場合は、所定の Backup Exec データベースエージェントを使用してバックアップを実行します。データベースエージェントを使用しなかった場合は、ファイルシステムのみがバックアップされ、データベースファイルはバックアップされません。

クラスタ内のデータベースファイルをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択ペインで、クラスタが含まれているドメインを展開し、データベースファイルが含まれている仮想サーバーを展開します。
- 4 データベースファイルを確認します。
- 5 データベース関連のデフォルトを設定します。データベースのバックアップのデフォルトを設定する方法については、各 Backup Exec データベースエージェントのマニュアルを参照してください。
- 6 クラスタ用デバイスプールを作成している場合は、フェールオーバーの発生時にフェールオーバーノードでジョブを再実行することができるように、そのデバイスプールをデフォルトのバックアップ先デバイスとして選択します。
- 7 バックアップジョブの残りの設定を行います。
- 8 バックアップジョブを今すぐ実行するか、後で実行されるようにスケジュールを設定します。

Windows 2008 R2 のクラスタ共有ボリュームのバックアップ

Backup Exec では、Microsoft Windows 2008 R2 のクラスタ共有ボリュームのバックアップ、リストアがサポートされています。

各クラスタ共有ボリュームを検出した後、Backup Exec は共有ボリュームが存在するクラスタ名の下に各ボリュームを配置します。クラスタ名はバックアップ選択ペインの[Windows システム]の下に表示されます。

メモ: また[ユーザー定義選択]にクラスタ名を追加できます。

p.823 の「[Windows 2008 R2 のクラスタ共有ボリュームのバックアップ](#)」を参照してください。

メモ: Windows XP または Windows Server 2003 を実行するメディアサーバーから Windows Server 2008 R2 クラスタを参照する場合、クラスタ共有ボリュームのプロパティは表示できません。ただし、Windows Server 2008 以上を実行するコンピュータに Backup Exec がインストールされている場合は、クラスタ共有ボリュームのプロパティを表示できます。

Microsoft Windows 2008 R2 Hyper-V ファイルをバックアップするには、Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Hyper-V を使うことを推奨します。

Windows 2008 R2 のクラスタ共有ボリュームをリストアするには、通常のリストア手順を使ってください。

p.825 の「[Microsoft クラスタへのデータのリストアについて](#)」を参照してください。

Windows 2008 R2 のクラスタ共有ボリュームをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択ペインから、[Windows システム]を展開してください。
- 4 クラスタ共有ボリュームが存在するクラスタを選択してください。
- 5 バックアップするクラスタ共有ボリュームを選択します。
- 6 クラスタのためのデバイスプールを作成した場合は、デフォルト宛先デバイスとしてそれを選択してください。

デフォルト宛先デバイスに選択するデバイスプールによって、フェールオーバーの発生時にフェールオーバーノードでジョブを正常に再開することができます。

p.805 の「[Microsoft Cluster Server 用のデバイスプールの作成](#)」を参照してください。

- 7 必要に応じて追加のバックアップジョブのオプションを選択してください。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

- 8 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 - スケジュールのオプションを設定してください。
- p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Microsoft クラスタへのデータのリストアについて

リストア先の変更を含め、すべてのリストアジョブは通常のリストアの手順で実行します。

p.593の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

共有ドライブにファイルをリストアする場合は、ファイルのリストア先として、仮想サーバーまたはリソースのホストノードを指定します。Microsoft SQL Server または Exchange Server などのデータベースファイルを個別にリストアする場合は、ファイルのリストア先として、該当する SQL データベースまたは Exchange データベースの仮想サーバー名を指定します。

p.825の「[Microsoft クラスタへの Windows Server 2003/2008 コンピュータのクラスタクォーラムのリストア](#)」を参照してください。

p.826の「[クラスタクォーラムディスクへの新しいドライブ文字の割り当て](#)」を参照してください。

Microsoft クラスタへの Windows Server 2003/2008 コンピュータのクラスタクォーラムのリストア

クラスタクォーラムはシステム状態の一部としてバックアップされています。

クラスタクォーラムのリストア先として新しいディスクを指定する必要がある場合があります。

p.826の「[クラスタクォーラムディスクへの新しいドライブ文字の割り当て](#)」を参照してください。

クラスタクォーラムをリストアする方法

- 1 クラスタ内の他のノードをオフラインにします。
- 2 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 3 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。
- 5 [クラスタクォーラムをリストアする]を選択します。

- 6 次の場合は、[他のノードがオンラインおよび/あるいはディスク署名が一致しない場合でも、クラスタクォーラムのリカバリを強制的に実行する]オプションを選択します。
 - クラスタ内の他のノードをオフラインにできない場合。このオプションを選択すると、オンラインのすべてのノードのクラスタサービスが停止されます。
 - クラスタクォーラムが存在していたディスクを変更した場合。ディスクを交換したりディスクの構成を変更した場合は、クラスタクォーラムの存在するディスクが別のディスクに変更されています。このオプションを選択した場合は、ディスクの構成を変更したために、リストアメディア内のディスク署名がクラスタクォーラム内のディスク署名と一致しない場合でも、クラスタクォーラムが存在していたディスクのドライブ文字は同一に保たれます。
- 7 必要に応じて、このリストアジョブに対して他のオプションを選択します。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 8 リストアが完了したら、クラスタアドミニストレータを使用して、ノード上の停止中のクラスタサービスを再起動します。

クラスタクォーラムディスクへの新しいドライブ文字の割り当て

コマンドラインユーティリティ `clrest.exe` を使用して、クラスタクォーラムディスクに新しいドライブ文字を割り当てるには、クラスタクォーラムではなく[システム状態]のリストアを行います。[システム状態]のリストア時に、クラスタクォーラムはデフォルトの場所 `%SystemRoot%\¥cluster¥BackupExec` にコピーされます。

次に、`clrest.exe` と `[drive letter]` オプションを使用して、クラスタクォーラムをクラスタクォーラムドライブにリストアし、クラスタクォーラムドライブのドライブ文字を変更します。

Windows 2000 上のクラスタクォーラムディスクに新しいドライブ文字を割り当てる方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リストア選択]ペインで、[システム状態]をクリックします。
- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。
- 5 [クラスタクォーラムをリストアする]オプションの選択を解除します。このオプションは必ずオフに設定してください。
- 6 リストア操作を開始します。

リストアの実行中に、クラスタクォーラムが `%SystemRoot%\¥cluster¥BackupExec` にコピーされます。
- 7 リストアが完了したら、ターゲットノードを再ブートします。

- 8 再ブート後に、コマンドラインで `clrest.exe` を実行し、デフォルトの場所からクォーラムディスクにクラスタクォーラムをリストアします。

```
clrest path [-f] [drive letter]
```

このコマンドの意味は次のとおりです。

`path` はクラスタクォーラムへの完全なパスで、通常は `%SystemRoot%\cluster\BackupExec` です。このパスの指定は必須です。

`[-f]` オプションは、他のノードがオンラインの場合やディスク署名が一致しない場合でも、リストアを強制的に実行するためのものです。このオプションを選択すると、オンラインのすべてのノードのクラスタサービスが停止されます。また、構成を変更したために、リストアメディア内のディスク署名がクラスタクォーラム内のディスク署名と一致しない場合でも、ドライブ文字はクラスタクォーラムが存在していたディスクのドライブ文字と同一に保つことができます。

`[drive letter]` は、クォーラムディスクのドライブ文字を変更するために使用します。このオプションを使用して、クラスタクォーラムの存在するドライブのドライブ文字を変更することができます。このオプションを指定しない限り、ドライブ文字は変更されません。

- 9 クラスタクォーラムのリストアが完了した後、クラスタアドミニストレータを使用して他のノードをオンラインにします。

Veritas Cluster Server での Backup Exec の使用

Veritas Cluster Server (VCS) を使用して Backup Exec と統合する場合、選択可能なオプションが 3 つあります。1 つ目のオプションは、各 VCS ノードにインストールした管理対象メディアサーバーと 1 つの集中管理サーバーによる構成です。集中管理サーバーは、任意のノードまたは VCS ノードでないシステムにインストールできます。ただし、集中管理サーバーは VCS ノードと同じドメインに属する必要があります。

バックアップの選択は集中管理サーバーで行われ、集中管理サーバーは、クラスタリソースのバックアップ選択項目に基づいて、クラスタリソースが現在アクティブである管理対象メディアサーバーにジョブを送信します。集中管理サーバーは、クラスタリソースのバックアップジョブがローカルジョブとして実行されるように、ジョブの負荷を分散しようとします。フェールオーバーが発生した場合、実行中であったバックアップジョブのスケジュールは再設定され、集中管理サーバーによって、失敗したリソースのジョブが新しいアクティブノードで再開されます。

2 つ目のオプションは、Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec アプリケーションのクラスタ化です。これによって、可用性を向上できます。ウィザードを使用して設定することができます。

3 つ目のオプションは、各 VCS ノードへの Backup Exec Remote Agent のインストールです。その後、スタンドアロンメディアサーバーを、任意のノードまたはクラスタ外にインス

トールできます。この環境では、クラスタリソースのバックアップジョブがリモートで完了します。

クラスタ環境での Backup Exec の動作は、クラスタの構成によって異なります。

p.828 の「[Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのインストール](#)」を参照してください。

p.802 の「[Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

p.830 の「[Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec のクラスタ化](#)」を参照してください。

Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのインストールの必要条件

Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO のインストールの必要条件を次に示します。

- Windows Server 2003、Windows Server 2003 Enterprise、Windows Server 2003 Datacenter といったオペレーティングシステムでは、32 ノードクラスタがサポートされています。
- ソフトウェア使用許諾権契約に定義されているように、クラスタ内のアクティブノードごとに、Backup Exec 2010 のライセンスのある個別のコピーと利用可能なエージェントおよびオプションが必要です。クラスタ内の各ノードのライセンスキーを入力する必要があります (クラスタには、少なくとも 2 つのノードが必要です)。
- Storage Foundation for Windows Servers High Availability サーバーコンポーネントを、クラスタノードにインストールしておく必要があります。
- Storage Foundation for Windows Servers High Availability 管理コンソールコンポーネントを、集中管理サーバーにインストールしておく必要があります。

p.802 の「[Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのインストール

クラスタ内のすべてのノードに Remote Agent が自動的にインストールされます。Backup Exec を使用してクラスタ外のリモートサーバーをバックアップする場合は、バックアップするリモートサーバーにも Remote Agent をインストールしてください。

Veritas Cluster Server に Backup Exec および CASO オプションをインストールする方法

- 1 クラスタ内の必要なすべてのノードに Backup Exec を管理対象メディアサーバーとしてインストールします。すべてのインストールはローカルドライブに対して実行する必要があります。各ノードには、同じインストールパスを使用します。
- 2 クラスタノードと同じドメインに含まれるコンピュータに、Backup Exec Central Admin Server Option (CASO) をインストールします。

Central Admin Server Option は、任意のクラスタノードまたはクラスタ外にインストールできます。

- 3 管理対象メディアサーバーにドライブがローカル接続されている場合、フェールオーバーの発生時に使用するドライブプールを、各ノードにローカルに接続されているすべてのストレージデバイスで構成します。これにより、フェールオーバーノードに接続されているストレージデバイス上でジョブを実行することができます。
- 4 Backup Exec Central Admin Server Option がインストールされていない場合、クラスタ内のすべてのノードのローカルドライブに Backup Exec Remote Agent for Windows Systems をインストールします。

p.129 の「[Remote Agent for Windows Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec のクラスタ化の必要条件

Veritas Cluster Server を使用して Backup Exec をクラスタ化する前に、次の事項を確認してください。

- Windows Server 2003、Windows Server 2003 Enterprise、Windows Server 2003 Datacenter といったオペレーティングシステムでは、32 ノードクラスタがサポートされています。
- ソフトウェア使用許諾権契約に定義されているように、クラスタ内のアクティブノードごとに、Backup Exec 2010 のライセンスのある個別のコピーと利用可能なエージェントおよびオプションが必要です。クラスタ内の各ノードのライセンスキーを入力する必要があります (クラスタには、少なくとも 2 つのノードが必要です)。
- Storage Foundation for Windows Servers High Availability サーバーコンポーネントを、クラスタノードにインストールしておく必要があります。
- クラスタ内のすべてのノードは、共有ボリュームにアクセスできる必要があります。
- 共有ボリュームはダイナミッククラスタディスクグループの一部である必要があります。
- Backup Exec Cluster のインストール中は、クラスタウィザードを実行するノードが共有ボリュームを排他的に制御できる必要があります。

- 共有ボリュームは、圧縮が有効になっているディスクには存在できません。
- シマンテック社は Backup Exec をクラスタ化する場合 Backup Exec がインストールするデフォルトデータベースインスタンス (MSDE) を使うことを強くお勧めします。
- またシマンテック社はリモートの SQL Server インスタンスを使って Backup Exec のデータベースをホストする方法をサポートしています。ただし、この方法を使う場合は次のことを見直します。

Backup Exec の 1 つのインストールされたインスタンスのみ、クラスタ化されたノード上のリモートの SQL Server インスタンスにインストールできます。クラスタ内の Backup Exec の他のすべてのインストールされたインスタンスは Backup Exec の MSDE のデフォルトデータベースインスタンスを使う必要があります。

メモ: リモートの SQL Server インスタンスを使うクラスタノードで Backup Exec クラスタウィザードを実行する必要があります。

Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec のクラスタ化

Backup Exec をクラスタ化すると、アクティブパッシブ構成でのアプリケーションの可用性が向上します。Backup Exec サービスを実行できるクラスタノードは一度に 1 つだけです。アクティブノードがオフラインになった場合、サービスおよび実行中のすべてのジョブはクラスタ内の別のノードで再開されます。

Veritas Cluster Server を使用して Backup Exec をクラスタ化する方法

- 1 クラスタ内の各マシンに Veritas Cluster Server をインストールして設定します。Veritas Cluster Server のインストールおよび設定について詳しくは、Storage Foundation for Windows Servers の管理者ガイドを参照してください。
- 2 Backup Exec サービスグループの一部となる各マシンのローカルドライブに Backup Exec をインストールします。
- 3 ダイナミックディスクグループを作成して、共有ディスクリソースとして使用するボリュームにドライブ文字を割り当てます。ダイナミックディスクグループの作成について詳しくは、Storage Foundation for Windows Servers の管理者ガイドを参照してください。
- 4 ボリュームがオンラインであること、および Backup Exec クラスタ設定ウィザードが実行されるノードのボリュームにのみドライブ文字が割り当てられていることを確認します。
- 5 ツールメニューの[ウィザード]>[クラスタ設定ウィザード]をクリックします。
- 6 クラスタ設定ウィザードの[ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。

- 7 Backup Exec クラスタグループの名前を入力するか、デフォルトの名前を使用します。
クラスタグループ名に空白を使用することはできません。
- 8 ウィザードによって、Backup Exec アプリケーションファイルがコピーされる共有の場所が一覧表示されます。別の場所を指定するには、[変更]をクリックします。
- 9 [次へ]をクリックします。
- 10 Backup Exec 仮想サーバーの名前を入力するか、デフォルトの名前を使用します。
- 11 仮想サーバーの IP アドレスおよびサブネットマスクを入力します。
- 12 [次へ]をクリックします。
- 13 ウィザードによって、エントリの有効性が確認されます。
- 14 クラスタに属するノードを選択します。デフォルトでは、クラスタ設定ウィザードが実行されたノードは、クラスタグループに含まれます。
- 15 [次へ]をクリックします。
- 16 [設定]をクリックし、サービスグループを作成して、ファイルを共有ディスクに移動します。

Veritas Cluster Server のバックアップについて

共有ファイルやデータベースなど、クラスタ内のすべてのデータを保護するには、次の項目をバックアップします。

- 各ノード上のローカルディスクおよび[システム状態]。
- すべての共有ディスク。
- データまたは Microsoft SQL Server や Exchange Server などのアプリケーションが格納されている仮想サーバー。データベースをバックアップするには、Backup Exec の各データベース用エージェントを使用します。

p.315 の「バックアップウィザードを使用したバックアップジョブの作成」を参照してください。

メモ: ハードウェアプロバイダを使用してオフホストバックアップジョブを実行する場合、メディアサーバーとリモートコンピュータは異なるクラスタグループに属する必要があります。クラスタアプリケーションでは、署名とパーティションレイアウトが重複したデバイスの論理ユニット番号 (LUN) がサポートされないため、LUN を含むスナップショットは、クラスタ外のホストまたはリモートコンピュータに転送する必要があります。

Backup Exec をクラスタにインストールした場合は、Backup Exec の他にコマンドラインアプレットを使用することができます。コマンドラインアプレットを使用できないのはバック

アップ用デバイスの指定のみです。コマンドラインアプレットを使用してデバイスプールをターゲットにすることはできますが、プール内の特定のデバイスをターゲットにすることはできません。

p.833 の「[Veritas クラスタ内のローカルディスクのバックアップ](#)」を参照してください。

p.833 の「[Veritas クラスタ内の共有ディスクのバックアップ](#)」を参照してください。

p.834 の「[Veritas クラスタ内のデータベースファイルのバックアップ](#)」を参照してください。

p.832 の「[Veritas クラスタ内の Windows 2000 および Windows Server 2003/2008 機能のバックアップについて](#)」を参照してください。

Veritas クラスタ内の Windows 2000 および Windows Server 2003/2008 機能のバックアップについて

Backup Exec Remote Agent for Windows Systems を購入し、バックアップするすべてのリモート Windows 2000 および Windows Server 2003/2008 コンピュータにインストールする必要があります。

次の Windows 2000 の機能は、Remote Agent を使用しなければ、正しくバックアップすることはできません。

- 暗号化ファイル
- SIS ファイル
- ディスククォータ設定
- リムーバブル記憶域データ
- リモート記憶域データ
- マウントポイント
- スパースファイル
- Windows Management Instrumentation
- ターミナルサービス
- [システム状態]の次のデータ
 - COM+ クラス登録データベース
 - ブートファイルおよびシステムファイル
 - レジストリ
 - 認証サービスデータベース (サーバーを認証サーバーとして運用している場合)
 - Active Directory (サーバーがドメインコントローラの場合)
 - SYSVOL (サーバーがドメインコントローラの場合)

メモ: バックアップするためにリモートコンピュータ上の[システム状態]を選択するには、そのリモートコンピュータに **Remote Agent** がインストールされている必要があります。

Veritas クラスタ内のローカルディスクのバックアップ

接続先の物理ノードから、バックアップするローカルディスクを選択します。

メモ: **Central Admin Server Option** および **Veritas Cluster Server** がインストールされた環境内に **Advanced Open File Option** を使用したバックアップの実行対象となるコンピュータが存在する場合、VCS ノードへのフェールオーバーが発生すると、フェールオーバーノードでバックアップを再開する前に、スナップショットを手動でクリーンアップする必要があります。詳しくは **Veritas Storage Foundation for Windows** のマニュアルを参照してください。

Veritas クラスタ内のローカルディスクをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択ペインでノードが含まれているドメインを展開して、各ノード上のローカルディスクを選択します。

p.265 の「[バックアップするデータの選択について](#)」を参照してください。

- 4 クラスタ用デバイスプールを作成している場合は、フェールオーバーの発生時にフェールオーバーノードでジョブを再実行することができるように、そのデバイスプールをデフォルトのバックアップ先デバイスとして選択します。
- 5 バックアップジョブの残りの設定を行います。
- 6 バックアップジョブを今すぐ実行するか、後で実行されるようにスケジュールを設定します。

Veritas クラスタ内の共有ディスクのバックアップ

Veritas Cluster Server 仮想サーバーから、バックアップする共有ディスクを選択します。

共有ディスクをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ペインで、ノードが含まれているドメインを展開して、**Veritas Cluster Server** 仮想サーバーを選択します。バックアップジョブは、仮想サーバーを使用することにより、ディスクを管理しているノードを通じて共有データにアクセスすることができます。

- 4 共有ディスクに割り当てられているドライブ文字を選択します。
- 5 クラスタ用デバイスプールを作成している場合は、フェールオーバーの発生時にフェールオーバーノードでジョブを再実行することができるように、そのデバイスプールをデフォルトのバックアップ先デバイスとして選択します。
- 6 バックアップジョブの残りの設定を行います。
- 7 バックアップジョブを今すぐ実行するか、後で実行されるようにスケジュールを設定します。

Veritas クラスタ内のデータベースファイルのバックアップ

仮想サーバーのデータベースアイコンを使用して、バックアップするデータベースファイルを選択します。仮想サーバーに **Microsoft SQL Server** または **Exchange Server** などのデータベースアプリケーションが含まれている場合は、所定の **Backup Exec** データベースエージェントを使用してバックアップを実行します。データベースエージェントを使用しなかった場合は、ファイルシステムのみがバックアップされ、データベースファイルはバックアップされません。

Veritas クラスタ内のデータベースファイルをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ペインで、クラスタが含まれているドメインを展開し、データベースファイルが含まれている仮想サーバーを展開して、データベースを選択します。
- 4 データベース関連のデフォルトを設定します。データベースのバックアップのデフォルトを設定する方法については、各 **Backup Exec** データベースエージェントのマニュアルを参照してください。
- 5 クラスタ用デバイスプールを作成している場合は、フェールオーバーの発生時にフェールオーバーノードでジョブを再実行することができるように、そのデバイスプールをデフォルトのバックアップ先デバイスとして選択します。
- 6 バックアップジョブの残りの設定を行います。
- 7 バックアップジョブを今すぐ実行するか、後で実行されるようにスケジュールを設定します。

Veritas Cluster Server へのデータのリストアについて

リストア先の変更を含め、すべてのリストアジョブは通常のリストアの手順で実行します。

p.592 の「[リストアウィザードを使用したデータのリストア](#)」を参照してください。

共有ドライブにファイルをリストアする場合は、ファイルのリストア先として、仮想サーバーまたはリソースのホストノードを指定します。**Microsoft SQL Server** または **Exchange**

Server などのデータベースファイルを個別にリストアする場合は、ファイルのリストア先として、該当する SQL データベースまたは Exchange データベースの仮想サーバー名を指定します。

Veritas Cluster Server でのバックアップジョブフェールオーバーについて

Veritas Cluster Server 環境にインストールされた集中管理サーバー構成では、ジョブのフェールオーバーが自動的に有効になります。バックアップするクラスタリソースを選択する場合、バックアップジョブには 1 つのクラスタリソースしか含めることができません。これは、クラスタ上の指定したフェールオーバーノードに、集中管理サーバーがバックアップジョブを再委任するようにするために必要です。

バックアップ中にクラスタリソースのフェールオーバーが発生した場合、管理対象メディアサーバーのジョブが停止し、集中管理サーバーに通知が送信されます。その後、集中管理サーバーは、失敗したクラスタリソースの新しいアクティブノードになった管理対象メディアサーバーにジョブを再委任します。

クラスタのディザスタリカバリ

障害対策を策定してディザスタリカバリの対策を準備しておきます。

p.762 の「[障害対策 \(DPP\) の主な要素について](#)」を参照してください。

クラスタ内の SQL、Exchange、Oracle および Lotus Domino データベースに障害が発生した場合のリストア対策を準備します。該当する章のディザスタリカバリの準備のセクションを参照してください。

Microsoft Cluster Server を正しく保護するには、障害対策のみではなく、実際に障害が発生した場合の対応が必要です。

障害が発生した場合、クラスタをリカバリするには、次の情報が必要です。

- 一般的なクラスタ情報
 - クラスタ名
 - クラスタの IP アドレスとサブネットマスク
 - クラスタのノード名
 - ノードの IP アドレス
 - ローカルドライブ文字と共有ドライブ文字、およびパーティション情報
 - ディスク署名
- クラスタグループ

- グループ名 (Group name):
 - 優先所有者
 - フェールオーバー/フェールバックポリシー
- クラスタリソース
 - リソース名
 - リソースの種類
 - グループメンバーシップ
 - 実行可能な所有者
 - リソースの依存関係
 - 再起動と Looks Alive/Is Alive プロパティ
 - リソース関連パラメータ
 - アプリケーション固有の設定 (SQL データベースキャラクタセットなど)
- Microsoft Cluster Server をリカバリする場合、Microsoft 2000 リソースキットの Dumpcfg.exe または Microsoft 2003 リソースキットの Clusterrecovery.exe を実行して、共有ディスクからディスク署名を取得します。Microsoft 2000 リソースキットを使用してディスク署名を変更することができます。
- Veritas Cluster Server をリカバリする場合、Vmgetdrive.exe を実行して、共有ディスクからディスク署名、ディスクグループおよびボリューム情報を取得します。

IDR を使用したクラスタのディザスタリカバリ対策の準備

Backup Exec には、Intelligent Disaster Recovery (IDR) という名前の、完全に自動化されたディザスタリカバリを行うことのできるオプションが用意されています。IDR を使用すると、障害が発生した場合に、サーバークラスタ内のノードを短時間で効率的にリカバリすることができます。ただし、Oracle サーバーおよび SAP データベースは、IDR を使用してリストアすることはできません。これらのディザスタリカバリについて詳しくは該当する章を参照してください。

p.1762 の「[IDR のためのコンピュータの準備について](#)」を参照してください。

メモ: 設定を変更したり、元の構成とは異なるハードウェアまたはハードウェア構成を使用する場合は、手動でリカバリする必要があります。

IDR を使用したクラスタ上のノードのリカバリ

障害対策に Backup Exec Intelligent Disaster Recovery (IDR) を使用している場合は、IDR を使用してノードを障害発生前の状態にリカバリすることができます。

メモ: Windows 2000 および Windows Server 2003 クラスタノードの場合は、ノードごとにディザスタリカバリメディアを作成する必要があります。作成したディザスタリカバリメディアは、各コンピュータ専用です。クラスタ内のノード間で共用することはできません。

クラスタ内のノードをリカバリするときは、ドライブ文字が元のクラスタの構成と一致していることを確認してください。縮小構成の Windows でリカバリウィザードを実行すると、元のマシンの Windows での構成とは異なる順序でハードドライブが検出されることがあります。

元の構成と異なる場合は、Windows のハードディスクドライブの番号割り当て機能を使用して、ドライブの順序をある程度制御することができます。

IDR ディザスタリカバリウィザードでハードディスクドライブを正しい順序で認識できない場合でも、ディザスタリカバリウィザードのディスクアドミニストレータオプションを使用して、手動でハードディスクドライブのパーティションを設定することができます。手動でパーティションを設定してから、バックアップメディアからの自動リストアを続行することができます。

メモ: Windows のインストール後に、システムドライブのドライブ文字を変更することはできません。バックアップ元のドライブのドライブ文字と同じドライブ文字のドライブに、システムをリストアする必要があります。

IDR を使用してクラスタ上のノードをリカバリする方法

- 1 複数のノードのリカバリを行う場合は、共有ディスクの接続を切断します。単一のノードのみをリカバリする場合は、共有ディスクの切断は不要です。

クラスタ内のすべてのノードが利用できず、すべてをリカバリする必要がある場合は、クラスタのフェールオーバーを実行することはできません。リカバリを開始する前に、共有ディスクの接続を切断します。

- 2 ノードをリストアします。

p.1785 の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

- 3 共有ドライブを再接続し、ノードをオンラインにします。

- 4 所定の Backup Exec エージェントを使用して、共有ドライブにデータベースをリストアします。

p.1277 の「[SQL Server のディザスタリカバリ](#)」を参照してください。

p.1073 の「[Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリ](#)」を参照してください。

p.1305 の「[Oracle リソースのリストアおよびリカバリについて](#)」を参照してください。

IDR を使用した Microsoft クラスタ上の Backup Exec のリカバリ

Backup Exec がインストールされているクラスタを完全にリストアするには、IDR を使用してクラスタノードとすべての共有ディスクをリストアするか、クラスタを再構築します。クラスタをリモートでリストアするには、クラスタノードと共有ディスクのバックアップセットが含まれるメディアのカタログを作成します。

IDR を使用して Microsoft クラスタ上の Backup Exec をリカバリする方法

- 1 必要に応じて、すべての共有ディスクを交換します。
- 2 1 つのノード上で IDR ディザスタリカバリウィザードを実行します。このプロセスで、ディスクマネージャを使用し、すべての共有ディスクを元の構成に戻します。ローカルディスク、システム状態、およびデータファイルを共有ディスクにリストアします。
- 3 サーバーを再ブートします。
クラスタサービスおよび他のすべてのクラスタアプリケーションがオンラインになります。
- 4 他のすべてのノード上で IDR ディザスタリカバリウィザードを実行します。ローカルディスクとシステム状態のみをリストアします。

手動のディザスタリカバリ手順を使用したクラスタ全体のリカバリ

手動のリカバリプロセスの一部として、Windows をインストールします。障害発生前にインストールしていた Service Pack もインストールします。

p.1277 の「[SQL Server のディザスタリカバリ](#)」を参照してください。

p.1073 の「[Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリ](#)」を参照してください。

p.1305 の「[Oracle リソースのリストアおよびリカバリについて](#)」を参照してください。

クラスタ全体を手動でリカバリする方法

- 1 最初にリカバリするノードに、Windows をインストールします。障害発生前にインストールしていた Service Pack もインストールします。
p.765 の「[手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。
- 2 最初にリカバリする他のノードに、Windows をインストールします。障害発生前にインストールしていた Service Pack もインストールします。
- 3 クラスタサービスを再インストールし、クラスタをオンラインにします。
次の手順を実行します。
 - Veritas Cluster Server をリカバリする場合、Volume Manager が含まれる Storage Foundation for Windows Servers High Availability サーバーコンポーネントをインストールし、Volume Manager を使用して、元のクラスタ構成と一致するディスクグループとボリュームを作成します。

- **Microsoft Cluster Server** をリカバリする場合、クラスタ内のノードを起動した後で、ドライブ文字が元のクラスタ構成と一致していることを確認します。元の構成と異なる場合は、ディスクアドミニストレータを使用して、**Windows** によるハードドライブの番号の割り当てをある程度制御することができます。
- 4 次のいずれかを実行します。
 - **Veritas Cluster Server** をリカバリする場合、**Backup Exec** を再インストールします。
p.828 の「**Veritas Cluster Server への Backup Exec および CASO オプションのインストール**」を参照してください。
 - **Microsoft Cluster Server** をリカバリする場合、クラスタウィザードを使用し、クラスタ上に **Backup Exec 2010** を再インストールします。初回インストール時に使用した設定と同じ設定を使用する必要があります。
p.802 の「**Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール**」を参照してください。
 - 5 クラスタ内のメディアのカatalog登録を実行します。
 - 6 アクティブノード上の **Backup Exec** のナビゲーションバーで、[リストア]をクリックします。
 - 7 [リストア選択]ペインで、アクティブノードで作成した最新の完全バックアップセットを選択し、[システム状態]を選択します。
 - 8 次のいずれかを実行します。
 - **Veritas Cluster Server** をリカバリする場合、手順 9 に進みます。
 - **Microsoft Cluster Server** をリカバリする場合、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックし、[クラスタクォーラムをリストアする]オプションを選択します (このオプションは必須です)。
 - 9 リストア操作を開始します。
 - 10 リストアが完了したら、アクティブノードを再ブートします。
 - 11 リカバリする必要があるノードごとに、手順 6 から手順 10 を繰り返します。
 - 12 必要なすべてのノードのリカバリが終了した後、共有ディスクに **Backup Exec** データファイルをリストアします。
 - 13 所定の **Backup Exec** エージェントを使用して、共有ディスクにデータベースをリストアします。

Microsoft クラスタデータファイルのリカバリ

クラスタを完全にリカバリするには、**MSCS** フォルダ内のクラスタファイルのリストアが必要になる場合があります。クォーラムディスクが利用可能で交換を行っていない場合は、このデータファイルのリストアは不要です。クォーラムディスクを交換した場合は、新しい

クォーラムディスクにデータファイルをリストアする必要があります。データファイルのリストアを行う前に、クラスタディスクドライバを使用しないように設定する必要があります。

クラスタデータファイルをリストアする方法

- 1 セカンダリノードをシャットダウンします。
- 2 プライマリノードを起動します。
- 3 [コンピュータの管理]メニューで[システム ツール]を選択します。[デバイス マネージャ]を選択します。
- 4 クラスタディスクドライバを右クリックし、[無効]を選択します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 プライマリノードを再ブートします。
- 7 Backup Exec のナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 8 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 9 [リストア選択]ペインで、MSCS フォルダの最新のバックアップセットを選択します。
クラスタサービスは停止している必要があります。
- 10 MSCS フォルダのリストア先を、指定したクォーラムディスクに変更します。
- 11 クォーラムディスクへのクラスタデータファイルのリストアが終了した後、クラスタディスクドライバを[有効]に設定し、クラスタサービスを起動します。
- 12 クラスタクォーラムのリストアが完了した後、クラスタアドミニストレータを使用して他のノードをオンラインにします。

Microsoft クラスタ内のすべての共有ディスクのリカバリ

共有ディスクをリカバリする場合は、リカバリプロセスの自動化に役立つ Microsoft 2000 リソースキットの Dumpcfg オプションまたは Microsoft 2003 リソースキットの Clusterrecovery のいずれかを使用するか、または手動で実行します。

Dumpcfg を使用してすべての共有ディスクをリカバリする方法

- 1 新しいディスクにアクセスするために、すべてのノードのクラスタディスクドライバを[無効]に設定します。
- 2 [コンピュータの管理]の[システム ツール]を選択します。[デバイス マネージャ]を選択します。
- 3 クラスタディスクドライバを右クリックし、[無効]を選択します。
- 4 共有ディスクを交換し、パーティションを作成します。ディスクマネージャを使用し、すべてのノードが同じ共有ディスクにアクセスしていることを確認します。
- 5 Dumpcfg または Clusterrecovery を実行し、クォーラムディスクのディスク署名を変更します。

- 6 リモート Backup Exec サーバーを使用して、ディスクへのアクセスが可能なノードを通じて、クラスタファイルをクォーラムディスクにリストアします。
- 7 すべてのノードで、クラスタディスクドライバを[有効]に設定します。
- 8 [コンピュータの管理]メニューで[システムツール]を選択します。[デバイスマネージャ]を選択します。
- 9 クラスタディスクドライバを右クリックし、[有効]を選択します。
- 10 すべてのクラスタノードを再ブートします。

Dumpcfg を使用せずにすべての共有ディスクをリカバリする方法

- 1 両方のノードから、すべてのクラスタアプリケーションおよびクラスタソフトウェアをアンインストールします。
- 2 共有ディスクを交換し、ディスクマネージャを使用して、前に保存しておいた構成と同じ構成になるようにパーティションを作成します。
- 3 クラスタソフトウェアを再インストールします。
- 4 クラスタ上に、クラスタ対応の Backup Exec 2010 を再インストールします。
p.107 の「ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール」を参照してください。
- 5 共有ディスク上に、クラスタ対応のソフトウェアアプリケーションを再インストールします。
- 6 Backup Exec を使用して、カタログからデータをリストアします。

Veritas クラスタ内のすべての共有ディスクのリカバリ

Veritas クラスタ内の共有ディスクをリカバリするには、Veritas Volume Manager を使用します。

Volume Manager を使用してすべての共有ディスクをリカバリする方法

- 1 Volume Manger を使用して、すべての共有ボリュームとディスクグループを再作成します。
- 2 コマンドプロンプトで次の行を入力します。Vmgetdisk と入力し、Enter キーまたは Return キーを押します。
ディスクグループおよびボリュームに関する情報を含む VmDriveInfo.txt という名前のファイルが作成されます。
- 3 [メモ帳]などのテキストエディタを使用して、VmDriveInfo.txt ファイルを開きます。
- 4 Veritas Cluster Server がインストールされているディレクトリから、[メモ帳]などのテキストエディタを使用して Main.cf を開きます。

- 5 リカバリするすべてのディスクグループに対して、**Main.cf** の GUID を検索し、**VmDiskInfo.txt** ファイルの GUID に置き換えます。
Lanman および **MountV** リソースが起動していることを確認します。**SQL** または **Exchange** をリカバリする場合、**SQL** または **Exchange** リソースを起動できませんが、**Lanman** および **MountV** リソースを起動してデータをリストアできます。
- 6 仮想サーバーバックアップを使用して、共有情報をリストアします。

Microsoft クラスタでの Backup Exec のリカバリ

IDR オプションを使用して共有ディスク用のディザスタリカバリメディアを準備する場合、手動で共有ディスク上の **Backup Exec** をリカバリする必要があります。

手動で共有ディスク上の Backup Exec をリカバリする方法

- 1 必要に応じて共有ディスクを交換し、ディスクリソースとしてクラスタに追加します。
- 2 クラスタ上に、クラスタ対応の **Backup Exec 2010** を再インストールします。元のインストールに使用した情報と同じ情報を使用する必要があります。
p.107 の「[ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。
- 3 **Backup Exec** を使用して、カタログからデータをリストアします。

クラスタのトラブルシューティング

クラスタ環境で **Backup Exec** を使用する際に問題が発生した場合は、このセクションに記載された質問と回答を確認してください。

表 19-2 クラスタのトラブルシューティングの質問と回答

質問	回答
<p>クラスタとすべての共有ディスクをリカバリしましたが、クラスタサービスが起動されません。どうして起動されないのでしょうか。また、どうすれば起動できますか。</p>	<p>クラスタサービスが起動されないのは、クォーラムディスク上のディスク署名が元の署名と異なっているためと考えられます。Microsoft 2000 リソースキットの <code>Dumpcfg.exe</code> または Microsoft 2003 リソースキットの <code>Clusterrecovery</code> を使用し、ディスク署名を変更することができます。その例を次に示します。</p> <p>dumpcfg.exe /s 12345678 0</p> <p>12345678 を実際のディスク署名に、0 をディスク番号に置換してください。ディスク署名とディスク番号は、イベントログに記録されています。</p> <p>Microsoft 2000 リソースキットを使用できない場合は、-Fixquorum を使用してクォーラムディスクの署名を変更します。</p> <p>p.844 の「クォーラムディスクの署名の変更」を参照してください。</p>
<p>バックアップに「チェックポイントから再開」機能を使用しました。バックアップ中に、Microsoft クラスタフェールオーバーが発生しました。複数のバックアップセットが作成されました。これらのバックアップセットを使用して検証またはリストアを実行しようとする、フェールオーバーの発生する前にバックアップされたデータが格納されているセットで、[予期しないデータの終端]エラーが発生します。これはなぜでしょうか。データは無事でしょうか。</p>	<p>このエラーが発生するのは、リソースのバックアップ中にフェールオーバーが発生したため、このバックアップセットが閉じていないことが原因です。ただ、最初のバックアップセット内に部分的にバックアップされたオブジェクトは、データの整合性を保証するため、再開時に再び最初から完全にバックアップされています。したがって、所定のバックアップセット用のメディア上のすべてのオブジェクトをリストアおよび検証することができます。</p>
<p>プライマリ SAN サーバーをセカンダリ SAN サーバーと一緒にクラスタ化しましたが、セカンダリサーバー上のデバイスとメディアサービスでエラーが発生します。これはなぜでしょうか？</p>	<p>この現象は、セカンダリサーバーがアクティブノードになり、その時点では利用できなくなっているプライマリサーバー上の Backup Exec データベースに接続しようとする場合に発生します。問題を解決するためには、Backup Exec ユーティリティ (BEUTILITY.EXE) を使用するか、セカンダリサーバーを再インストールしてプライマリサーバーにします。</p>

質問	回答
<p>アプリケーション仮想サーバーのフェールオーバーが原因で Advanced Disk-based Backup の実行に失敗しました。Veritas Storage Foundation for Windows クラスタディスクグループとその関連ボリュームをクリーンアップするにはどうすればよいでしょうか？</p>	<p>Veritas Storage Foundation for Windows (SFW) スナップショットプロバイダを使用して Advanced Disk-based Backup を実行するときにアプリケーション仮想サーバーに障害が発生した場合、バックアップジョブが失敗します。スナップショットが作成されたボリュームが属する元のクラスタディスクグループは、プライマリノードからセカンダリノードに移動し、そのボリュームは元のボリュームと再同期化できなくなります。</p> <p>Advanced Disk-based Backup が実行される手順を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ スナップショットが作成されたボリュームが、元のボリュームから分割されます。 ■ 手順 1 で分割されたスナップショット作成済みのボリュームが、新しいクラスタディスクグループに移動します。 ■ 本番仮想サーバーが現在オンラインである物理ノードからこの新しいクラスタディスクグループが削除され、Symantec Backup Exec メディアサーバーに追加されます。 ■ 本番仮想サーバーが現在存在する場所に関係なく、新しいクラスタディスクグループは最終的にメディアサーバーから削除され、以前存在していた物理ノードに戻されます。 ■ 新しいクラスタディスクグループが元のクラスタディスクグループと同じノードに存在する場合、その元のクラスタディスクグループに結合されます。 ■ スナップショットが作成されたボリュームが、元のボリュームと再同期化されます。 <p>このプロセス中に本番仮想サーバーが現在アクティブであるノードからセカンダリノードにフェールオーバーした場合、新しいクラスタディスクグループは元のクラスタディスクグループに再結合されません。</p> <p>p.845 の「手動での 2 つのクラスタディスクグループの結合およびボリュームの再同期化」を参照してください。</p>
<p>Veritas クラスタリソースの手動フェールオーバーを実行した後、バックアップジョブがハングしました。なぜバックアップジョブは終了しないのでしょうか？</p>	<p>Veritas クラスタリソースの手動フェールオーバーが発生しても、Veritas Cluster Server はオープンハンドルが存在している場合には MountV リソースのマウントを解除しません。すべてのバックアップジョブが完了してから手動フェールオーバーを実行することをお勧めします。バックアップジョブがハングしたら、ジョブを手動でキャンセルしてからプロセスの手動クリーンアップを完了する必要があります。</p>

クォーラムディスクの署名の変更

クラスタサービスが起動されないのは、クォーラムディスク上のディスク署名が元の署名と異なっているためと考えられます。ディスク署名は変更できます。

クォーラムディスクの署名を変更する方法

- 1 スタートアップパラメータ内に **-Fixquorum** オプションを使用して、1 つのノード上でクラスタサービスを起動します。
- 2 クラスタアドミニストレータを開き、クラスタを右クリックして、[プロパティ]を選択します。
- 3 [クォーラム]タブを選択します。
- 4 [クォーラムリソース]フィールドで、別のディスクを選択します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 クラスタサービスを停止し、**-Fixquorum** オプションを使用せずに再起動します。
-Fixquorum オプションは、クォーラムディスクの署名の再指定に必要なだけ何度でも実行することができます。
- 7 他のすべてのノードをオンラインにします。

手動での 2 つのクラスタディスクグループの結合およびボリュームの再同期化

アプリケーション仮想サーバーのフェールオーバーが原因で **Advanced Disk-based Backup** の実行に失敗した場合、クラスタディスクグループを再結合が必要となることがあります。

手動で 2 つのクラスタディスクグループを再結合してボリュームを再同期化する方法

- 1 元のクラスタディスクグループが、本番仮想サーバーが現在オンラインであるノードにインポートされていない場合、元のクラスタディスクグループをそのノードにインポートします。
- 2 新しいクラスタディスクグループを元のクラスタディスクグループと再結合します。
- 3 スナップショットが作成されたボリュームと元のボリュームのスナップバックを実行します。元のボリュームを使用する同期化のオプションが選択されていることを確認します。

元のクラスタディスクグループが現在存在するノードに新しいクラスタディスクグループをインポートできない場合、アプリケーション仮想サーバーを元のノードにフェールオーバーしてから、2 つのクラスタディスクグループを再結合してください。SFW 操作の実行方法について詳しくは **Veritas Storage Foundation for Windows** のユーザーマニュアルを参照してください。

Backup Exec Retrieve の使用

この章では以下の項目について説明しています。

- [Backup Exec Retrieve](#) について
- [Backup Exec Retrieve](#) の動作
- エンドユーザーが [Backup Exec Retrieve](#) で実行できる内容
- [Backup Exec Retrieve](#) のインストール前の処理
- Web サーバーに [Backup Exec Retrieve](#) をインストールするための要件
- エンドユーザーのコンピュータで [Backup Exec Retrieve](#) を使用する場合の必要条件
- [Backup Exec System Recovery Manager 8.5](#) で実行される [Backup Exec Retrieve](#) からのアップグレード
- [Backup Exec Retrieve](#) のインストール
- [Backup Exec Retrieve](#) の設定について
- [Backup Exec Retrieve](#) のデフォルトオプションの設定
- [Backup Exec Retrieve](#) のアンインストール
- [Backup Exec Retrieve](#) のトラブルシューティング

Backup Exec Retrieve について

[Backup Exec Retrieve](#) は、エンドユーザーがアーカイブファイルと電子メールの検索、参照、プレビュー、取得を実行できる Web ベースの方式を提供します。ファイルと電子

メールはエンドユーザーに権限がある共有フォルダになければなりません。エンドユーザーが指定する場所に取得したファイルや電子メールが保存されます。Backup Exec Retrieve は、システムデータベースまたは他のシステムレベルのファイルをリストアするように設計されていません。同様に、エンドユーザーは Backup Exec Retrieve を使ってファイルの削除、変更、移動、または名前の変更を実行できません。

エンドユーザーが自分のデータを取得できるように Backup Exec Retrieve を設定できます。Backup Exec Retrieve は、次のデータソースで使用できます。

- Backup Exec Archiving Option
- Backup Exec Continuous Protection Server (CPS)
- Backup Exec Desktop and Laptop Option (DLO)
- Backup Exec System Recovery Manager

Backup Exec Retrieve は Windows のセキュリティ機能とインターネットブラウザのダウンロード機能を使用し、Windows サーバープラットフォームに制限されます。

Backup Exec Retrieve の動作

次の表は Backup Exec Retrieve をインストール、設定、使用するための一般的な使用例のシナリオを記述したものです。管理者とエンドユーザー用の情報を含んでいます。

エンドユーザーはドメインクレデンシャルでログオンします。システムはアクセスを制限して、最初からアクセス権限を所有していたファイルのみを取得できるようにします。たとえば、ファイルサーバーが保護されている場合、ユーザーは通常、共有フォルダ内にあるファイルのみにアクセスできます。Backup Exec Retrieve は Exchange の電子メールの取り込みも許可します。このような場合、メールボックスの権限とメールボックスのフォルダの権限がアクセスを制御します。

表 20-1 Backup Exec Retrieve の動作

処理順序	役割	タスクまたはプロセス
1	管理者	オプション - Backup Exec メディアサーバーに Backup Exec と Backup Exec Archiving Option をインストールします。
2	管理者	Backup Exec Retrieve を Web サーバーまたは Web サーバーにある Backup Exec メディアサーバーにインストールします。

処理順序	役割	タスクまたはプロセス
3	管理者	<p>エンドユーザーによる検索に含めることができる次のいずれかの Indexer の場所で Backup Exec Retrieve を設定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メディアサーバー (Backup Exec Archiving Option がアーカイブするファイルと電子メール用)。 ■ Backup Exec System Recovery Manager サーバー (Backup Exec System Recovery が作成するリカバリポイント内のファイル用)。 ■ Continuous Management Service サーバー (Continuous Protection Server がバックアップするファイル用)。 ■ Desktop and Laptop Option サーバー (Backup Exec Desktop and Laptop Option がバックアップするファイル用)。
4	管理者	<p>自身のファイルと電子メールを検索できるように次の Backup Exec Retrieve Web アドレスをエンドユーザーに通知します。</p> <p>https://<Backup Exec Retrieve Web server name>/BERetrieve</p> <p>エンドユーザーに次の情報を提供する必要もあります:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 標準の Windows セキュリティアラート画面がユーザーに表示されたら、[はい]または[OK]をクリックして続行するようにユーザーに知らせます。 ■ セキュリティ証明書に関する情報がユーザーに表示される場合、そのメッセージは SSL 証明書に関連します。ユーザーに[はい]をクリックして続行するように指示します。

処理順序	役割	タスクまたはプロセス
5	エンドユーザー	<ul style="list-style-type: none"> ■ 管理者が供給する Web アドレスを使用して Backup Exec Retrieve を起動します。 ■ ブラウザは、Backup Exec Retrieve を使用するのに必要なコンポーネントである Microsoft Silverlight のダウンロードとインストールを求めるメッセージをエンドユーザーに表示する場合があります。 組織は Web からのファイルのダウンロードをエンドユーザーに許可しないことがあります。このような場合、エンドユーザーが Backup Exec Retrieve を使用できるように、管理者はエンドユーザーのコンピュータに Silverlight を配備する必要があります。 p.854 の「組織内の Silverlight ランタイムの配備について」を参照してください。 Silverlight がユーザーのコンピュータにすでにインストールされていれば、ブラウザはただちに Backup Exec Retrieve のログオン画面を表示します。 ■ ログオン画面で、エンドユーザーはユーザー名、パスワード、ドメインを入力します。 ユーザーがここに指定するクレデンシャルは、どんなデータを表示して取得する権限があるかを決定します。
6	エンドユーザー	ファイルまたは電子メールの最新のアクティビティを検索、参照、または表示するように選択します。
7	エンドユーザー	照会を提出します。Backup Exec Retrieve は、エンドユーザーが特定のページに移動できる結果を表示します。ユーザーは情報にドリルダウンするために関連のリンクをクリックできます。
8	エンドユーザー	選択したファイルか電子メールを取得し、自分のコンピュータか他の場所にローカルで保存します。

エンドユーザーが Backup Exec Retrieve で実行できる内容

Backup Exec Retrieve を使用すると、エンドユーザーは Web ベースのユーザーインターフェースから自分のファイルと電子メールを検索、参照、取得できます。

次の表に、Backup Exec Retrieve で使用頻度の高いタスクを示します。

表 20-2 Backup Exec Retrieve で実行できる内容

タスク	説明
基本検索	エンドユーザーは次の情報を検索できます: <ul style="list-style-type: none"> ■ ファイル名または内容にテキストが含まれるファイル。ファイルシステムのワイルドカードのサポートも含まれています。 ■ 件名、内容、差出人、宛先フィールドにテキストが含まれる電子メールメッセージ。
高度な検索	エンドユーザーは次を検索できます: <ul style="list-style-type: none"> ■ ファイル名、ファイルの内容、ファイルフォルダ、または指定された日付範囲に基づくファイル。 ■ 次の場所のテキストに基づく電子メールメッセージ: <ul style="list-style-type: none"> ■ 件名フィールド ■ 件名と電子メールの内容 ■ 差出人および宛先フィールド ■ 日付範囲
最近のアクティビティ	エンドユーザーは、最近アーカイブ、削除、または編集したファイルか電子メールメッセージを検索できます。
フォルダの参照	エンドユーザーは権限がある共有フォルダをナビゲートできます。また、バックアップまたはアーカイブされたファイルと電子メールを表示できます。 <p>バックアップされたファイルが見つかると、エンドユーザーはそのファイルのすべての保存されたバージョンを表示できます。バージョン管理はアーカイブファイルまたは電子メールメッセージに適用されません。日付、時刻、ファイルサイズを確認して、取得するファイルのバージョンを決定します。</p>
プレビュー	エンドユーザーは次のことを実行できます: <ul style="list-style-type: none"> ■ 検索結果リスト内の電子メールメッセージまたは一部のファイルの簡易プレビューを開く。 ■ 検索結果のリスト内の電子メールメッセージ全体または一部のファイルをプレビューする。

タスク	説明
バージョンの表示	エンドユーザーはバックアップされたファイルのすべてのバージョンを表示できます。(アーカイブファイルまたは電子メールメッセージに適用されません。)
ファイルと電子メールの取得	エンドユーザーは、Web ブラウザの[名前を付けて保存]ダイアログボックスを使用して、ファイルか電子メールメッセージを取得して保存することができます。電子メールメッセージは、ファイル拡張子 .msg で保存されます。ユーザーはそれから Microsoft Outlook のファイルを開くことができます。

Backup Exec Retrieve のインストール前の処理

インストール手順は作業環境および Backup Exec Retrieve のインストール方法によって異なる場合があります。Web サーバーにソフトウェアをインストールする必要があります。Backup Exec メディアサーバーが Web サーバーでもある場合、そのコンピュータにも Backup Exec Retrieve をインストールできます。

1 つのネットワークドメインに複数の Backup Exec をインストールできます。

インストールの間に Microsoft の .NET Framework の最新版と Microsoft の Internet Information Services を ASP.NET とともにインストールするように求めるメッセージが表示される場合があります。

Backup Exec Retrieve をインストールするには、管理者権限があるか、または管理者権限があるアカウントを使用できる必要があります。

製品のインストールの前に、コンピュータが指定の要件を満たすことを確かめます。

p.852 の「[Web サーバーに Backup Exec Retrieve をインストールするための要件](#)」を参照してください。

p.855 の「[Backup Exec Retrieve のインストール](#)」を参照してください。

p.862 の「[Backup Exec Retrieve のアンインストール](#)」を参照してください。

Web サーバーに Backup Exec Retrieve をインストールするための要件

Backup Exec Retrieve をインストールするには、ソフトウェアをインストールするコンピュータが最小必要条件を満たさなければなりません。

p.852 の「[Backup Exec Retrieve のインストール前の処理](#)」を参照してください。

表 20-3 Web サーバーに Backup Exec Retrieve をインストールするための要件

コンポーネント	必要条件
プロセッサ	Intel Pentium 4 CPU 2.0 GHz 以上
オペレーティングシステム	次のオペレーティングシステムがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows Server 2008 R2 ■ Windows Server 2008 R2 (x64) ■ Windows Server 2008 ■ Windows Server 2008 (x64) ■ Windows Server 2003 R2、SP 2 以降 ■ Windows Server 2003 R2、SP 2 以降 (x64) ■ Windows Server 2003、SP1 ■ Windows Server 2003、SP 1 (x64)
RAM	2 GB
利用可能なディスク領域	45 MB
ソフトウェア	Backup Exec Retrieve をインストールしたいコンピュータに次がインストールされています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft .NET Framework 3.5 SP1 少なくとも、Backup Exec Retrieve を実行するには Microsoft .NET Framework 3.5 SP 1 が必要です。 メモ: .NET Framework の最新版は、まだ存在しないか古いバージョンが存在すると自動的にインストールされます。このメモが当てはまるのは Backup Exec Retrieve を初めてインストールする場合のみです。 ■ Microsoft Internet Information Services (IIS) 6.0 以降 ■ Microsoft ASP.NET

エンドユーザーのコンピュータで Backup Exec Retrieve を使用する場合は必要条件

エンドユーザーが Backup Exec Retrieve を使用するには、クライアントコンピュータが次の必要条件を満たしている必要があります。

表 20-4 エンドユーザーのコンピュータで Backup Exec Retrieve を使用する
 場合の必要条件

コンポーネント	必要条件
オペレーティングシステム	次のオペレーティングシステムがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows XP SP2 以上 ■ Windows Vista
ソフトウェア	次のソフトウェアが必要です。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Internet Explorer 7.0 以上。 他のブラウザでも互換性がありますが、特定の機能およびユーザーインターフェースのレイアウトが異なる場合があります。 ■ Microsoft Silverlight 3.0 以上のプラグイン。 ユーザーが Backup Exec Retrieve Web ページにアクセスしたときに Silverlight が検出されない場合は、ブラウザにインストールを推奨するメッセージが表示されます。 所属する組織によっては、エンドユーザーが Web からファイルをダウンロードすることが許可されない場合があります。このような場合は、エンドユーザーが Backup Exec Retrieve を使用する前に、管理者がエンドユーザーのコンピュータに Silverlight を配備する必要があります。 p.854 の「組織内の Silverlight ランタイムの配備について」を参照してください。
インターネット	インターネットアクセスが必要です。
Web アドレス	エンドユーザーは、次の Web サーバーアドレス、および Backup Exec Retrieve にアクセスするための自分のユーザー名とパスワードを知っている必要があります。 https://<Backup Exec Retrieve Web server name>/BERetrieve Windows の標準の [セキュリティの警告] 画面がユーザーに表示されたら、[はい] または [OK] をクリックして続行するようにユーザーに通知します。 セキュリティ証明書についての情報を含むメッセージがユーザーに表示された場合、SSL 証明書に関係しています。続行するにはユーザーが [はい] をクリックするようにします。

組織内の Silverlight ランタイムの配備について

組織が Web からのファイルのダウンロードをエンドユーザーに許可していない場合は、組織のユーザーのコンピュータに Silverlight を配備する必要がある場合があります。Silverlight は Backup Exec Retrieve を使うための必須コンポーネントです。

管理者として、次の Web サイトから Silverlight の最新版をダウンロードできます:

<http://www.microsoft.com/silverlight/downloads.aspx>

次の方式のいずれかを使って、ネットワークに Silverlight を配備できます:

- Windows のソフトウェア更新サービス
- Microsoft System Center Configuration Manager
- グループポリシー

自分の組織内の Silverlight ランタイムの配備については、次を参照してください:

<http://www.microsoft.com/silverlight/resources/technical-resources/>

Backup Exec System Recovery Manager 8.5 で実行される Backup Exec Retrieve からのアップグレード

このバージョンの Backup Exec Retrieve によって、Backup Exec System Recovery Manager 8.5 で実行される Backup Exec Retrieve のインスタンスが置換されます。現在のバージョンをインストールする前に、Backup Exec Retrieve の既存のバージョンをアンインストールしてください。

古いバージョンの Backup Exec Retrieve をアンインストールするために Microsoft Windows の [プログラムの追加と削除]ユーティリティを使ってください。

Backup Exec Retrieve のインストール

Backup Exec のインストールメディアのブラウザから Backup Exec Retrieve をインストールします。インストールの後で、エンドユーザーがファイルと電子メールを検索できるデータソースを追加して Backup Exec Retrieve を設定する必要があります。

p.857 の「[Backup Exec Retrieve の設定について](#)」を参照してください。

Backup Exec Retrieve をインストールする方法

- 1 Web サーバー (または、Web サーバー機能がある場合は Backup Exec メディアサーバー) にログオンします。
管理者アカウントまたは管理者権限があるアカウントを使わなければなりません。
- 2 コンピュータの適切なドライブに Backup Exec のインストールメディアを挿入します。
- 3 次のいずれかを実行します。

インストールが自動的に開始される場合 次の手順に進みます。

インストールが自動的に開始されない場合 次を示す順序で操作を実行します。

- Windows のデスクトップで、[スタート]> [ファイル名を指定して実行]をクリックします。
- <メディアのドライブ文字>:\\$Setup.exe と入力します。
たとえば、e:\\$setup.exe です。
- 次の手順に進みます。

- 4 [Backup Exec Retrieve 2010]をクリックします。
- 5 [よろこそ]パネルで[次へ]をクリックします。
- 6 [ライセンス]パネルの使用許諾契約を読み、次に[同意する]をクリックしてください。
- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 [環境チェック]パネルで、環境チェックの結果を確認します。各要件に対して、次の結果が表示されます：

チェックマーク	要件と推奨事項が満たされています。
X	要件は満たされていません。要件が満たされるまでインストールを続行できません。 追加情報については関連のリンクをクリックしてください。

- 9 [次へ]をクリックします。
Backup Exec Retrieve プログラムファイルは[オプション]ページに表示されるデフォルトパスにインストールされます。

- 10 [保存先]パネルで、次のいずれかを実行します。

Backup Exec Retrieve ファイルがインストールされるフォルダを変更する場合	[変更]をクリックして、新しいフォルダを選択します。 デフォルトのパスは、C:\\$Program Files\\$Symantec Backup Exec Retrieve¥ です。
--	---

デフォルトを受け入れる場合	次の手順に進みます。
---------------	------------

11 [次へ]をクリックして、インストールを開始します。

Backup Exec Retrieve のインストール時に、Symantec LiveUpdate または Microsoft .NET Framework 3.5 をインストールするように求めるメッセージが表示される場合があります。このような場合、画面の案内に従ってそれらの特定のインストールを完了します。

12 [完了]パネルで[完了]をクリックします。

Backup Exec Retrieve の設定について

エンドユーザーが自身のファイルと電子メールを検索し、取得できるようにするには、最初に Backup Exec Retrieve を設定する必要があります。設定時に、企業で利用可能であるユーザーデータのリポジトリをポイントします。これらのリポジトリはデータソースと呼ばれます。これらのデータソースはファイルのバックアップコピーかファイルと電子メールメッセージのアーカイブを含んでいます。

たとえば、Archiving Option をインストールする Backup Exec メディアサーバー、Continuous Protection Server、または Backup Exec System Recovery Manager サーバーを追加できます。これらのさまざまなデータソースを追加すると、Backup Exec Retrieve によってエンドユーザーに取り込みデータが提供されます。

データソースを削除すると、エンドユーザーは Backup Exec Retrieve を使用して自分のデータのリポジトリを検索できなくなります。

Backup Exec Retrieve コンソールからデータソースを追加、編集、または削除するには、ローカル管理者権限を持たなければなりません。

p.857 の「[データソースの追加](#)」を参照してください。

p.859 の「[データソースの編集](#)」を参照してください。

p.859 の「[データソースの削除](#)」を参照してください。

データソースの追加

エンドユーザーのファイルおよび電子メールを保持する利用可能なデータソースのリストに次の項目を追加できます。

- Archiving Option がインストールされている Backup Exec メディアサーバー
- Continuous Protection Server
- Desktop and Laptop Option サーバー
- Backup Exec System Recovery Manager サーバー

Backup Exec Retrieve からデータソースを追加、編集または削除するローカル管理者権限が必要です。

p.857 の「[Backup Exec Retrieve の設定について](#)」を参照してください。

データソースを追加する方法

- 1 Backup Exec Retrieve Web サーバーにローカル管理者としてログオンします。
- 2 Windows のスタートメニューで、[すべてのプログラム]>[Symantec Backup Exec Retrieve]>[Backup Exec Retrieve Configuration Console]の順にクリックします。
- 3 **[Symantec Backup Exec Retrieve Configuration]** ダイアログボックスで、[追加]をクリックします。
- 4 [データソースの追加]オプションを設定します。
p.858 の「[データソースの追加または編集オプション](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

データソースの追加または編集オプション

データソースを追加するか、または編集するときは、サーバーへの適切な認証のためにアカウントクレデンシャルを指定する必要があります。

p.857 の「[データソースの追加](#)」を参照してください。

p.859 の「[データソースの編集](#)」を参照してください。

表 20-5 データソースの追加または編集オプション

項目	説明
データの種類	Backup Exec Retrieve に接続させるデータソースの種類を識別します。
名前または IP アドレス	Backup Exec Retrieve に接続させるデータソースの名前か IP アドレスを示します。
ユーザー名	このデータソースへのアクセス権限があるアカウントのユーザー名を示します。 このオプションは Archiving Option のデータの種類の適用されません。
パスワード	このアカウントのパスワードを示します。ソフトウェアはパスワードを暗号化しますが、表示しません。 このオプションは Archiving Option のデータの種類の適用されません。

項目	説明
パスワードの確認	このアカウントのパスワードを確認します。 このオプションは Archiving Option のデータの種類に適用されません。
ドメイン	このアカウントのドメイン名を示します (選択したデータソースの種類に適用可能な場合)。 このオプションは、Archiving Option または Backup Exec System Recovery Manager のデータの種類に適用されません。

データソースの編集

Backup Exec Retrieve に追加した各データソースの設定を編集できます。

Backup Exec Retrieve コンソールからデータソースを追加、編集または削除するローカル管理者権限が必要です。

p.857 の「[Backup Exec Retrieve の設定について](#)」を参照してください。

データソースを編集する方法

- 1 Backup Exec Retrieve Web サーバーにローカル管理者としてログオンします。
- 2 Windows のスタートメニューで、[すべてのプログラム]>[Symantec Backup Exec Retrieve]>[Backup Exec Retrieve Configuration Console]の順にクリックします。
- 3 [Symantec Backup Exec Retrieve Configuration]ダイアログボックスで、変更するデータソースを選択します。
- 4 [編集]をクリックします。
- 5 [データソースの編集]オプションを設定します。

p.858 の「[データソースの追加または編集オプション](#)」を参照してください。

- 6 [OK]をクリックします。

データソースの削除

データソースを削除しても、新しいファイルまたは電子メールメッセージのインデックスは引き続き作成されます。ただし、Backup Exec Retrieve ではインデックスが検索されなくなります。その結果、エンドユーザーはこれらの新しいファイルまたは電子メールを検索できません。

Backup Exec Retrieve コンソールからデータソースを追加、編集または削除するローカル管理者権限が必要です。

p.857 の「[Backup Exec Retrieve の設定について](#)」を参照してください。

データソースを削除する方法

- 1 Backup Exec Retrieve Web サーバーにローカル管理者としてログオンします。
- 2 Windows のスタートメニューで、[すべてのプログラム]>[Symantec Backup Exec Retrieve]>[Backup Exec Retrieve Configuration Console]の順にクリックします。
- 3 [Symantec Backup Exec Retrieve Configuration]ダイアログボックスで、テーブル内でデータソース名を選択または入力します。
- 4 [削除]をクリックします。
- 5 データソースの削除を確認して、[はい]をクリックします。

Backup Exec Retrieve のデフォルトオプションの設定

インストール時に Backup Exec によって設定されたデフォルトを、Backup Exec Retrieve で使用することができます。または、独自のデフォルトを選択します。また Backup Exec 内から Backup Exec Retrieve の設定コンソールを起動することもできます。

Backup Exec Retrieve のデフォルトオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Backup Exec Retrieve]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.860 の「[Backup Exec Retrieve のデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

Backup Exec Retrieve のデフォルトオプション

Backup Exec で使用するために Backup Exec Retrieve を設定する前に、Backup Exec Retrieve をインストールし、構成しなければなりません。Archiving Option でバックアップされたデータを取り込むことをエンドユーザーに許可するように Backup Exec Retrieve と Backup Exec を構成できます。Backup Exec Retrieve は次のデータソースで使用できます。

- Backup Exec Archiving Option
- Backup Exec Continuous Protection Server (CPS)
- Backup Exec Desktop and Laptop Option (DLO)
- Backup Exec System Recovery Manager

p.860 の「[Backup Exec Retrieve のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

表 20-6 Backup Exec Retrieve のデフォルトオプション

項目	説明
Backup Exec Retrieve を有効にしてエンドユーザーがデータを取得できるようにする	<p>Backup Exec での Backup Exec Retrieve の使用を有効または無効に切り替えます。</p> <p>Backup Exec Archiving Option の場合は、このチェックボックスにチェックマークを付け、Backup Exec Retrieve がインストールされ、構成されている Web サーバーの名前を指定してください。</p> <p>p.1393 の「Archiving Option のエンドユーザーが Backup Exec Retrieve の使用によってアーカイブデータを取得する方法」を参照してください。</p> <p>このチェックボックスを後でクリアすると、アーカイブフォルダおよびメールボックス内の Backup Exec Retrieve URL のすべての既存リンクが削除されます。</p>
Backup Exec Retrieve Web サーバー	<p>Backup Exec Retrieve がインストールされ、構成されているサーバーの名前を入力します。URL はこのサーバー名から作成され、すべての URL が [ユーザーの取得用の Backup Exec Retrieve URL] に一覧表示されます。エンドユーザーは Web ブラウザで URL にアクセスし、自分のデータを参照して取得するための適切な権限を使用してログオンできます。</p>
データソースの追加	<p>他のデータソースの Backup Exec Retrieve の Web サーバーを構成することを許可します。このオプションは Backup Exec Retrieve の設定コンソールを起動します。たとえば、自身のデータを取り込むことを CPS と DLO のエンドユーザーに許可したい場合には、このコンソールを起動し、データソースとして追加できます。(適切なクレデンシャルが必要です。)</p>
このメディアサーバーを Archiving Option のデータソースとして自動的に追加	<p>Backup Exec Archiving Option のデータソースとしてこの Backup Exec メディアサーバーを追加します。また、手で Backup Exec Archiving Option のデータソースとしてこのメディアサーバーか別のコンピュータを追加するために [データソースの追加] を使うことができます。</p>
ユーザーの取得用の Backup Exec Retrieve URL	<p>現在の Backup Exec Retrieve の Web サーバーの URL を表示します。エンドユーザーにこの URL を提供してください。そうすればエンドユーザーは自分のデータを取り込むことができます。エンドユーザーは Microsoft Outlook からアーカイブされた電子メールメッセージの隣でこの URL を確認できます。</p>
クリップボードへコピー	<p>クリップボードに Backup Exec Retrieve の Web サーバーの URL をコピーします。電子メールメッセージに URL を貼り付けて、Backup Exec Retrieve でデータを取得することについてエンドユーザーに通知できます。</p>

Backup Exec Retrieve のアンインストール

Backup Exec Retrieve をアンインストールするために Microsoft Windows の [プログラムの追加と削除] ユーティリティを使うことができます。

Backup Exec Retrieve をアンインストールする方法

- 1 Backup Exec Retrieve がインストールされている Windows サーバーから [スタート] をクリックして [コントロール パネル] をポイントし、[プログラムの追加と削除] をクリックします。
- 2 [Backup Exec Retrieve] をクリックして、[削除] をクリックします。
- 3 [はい] をクリックしてアンインストールを続行します。

Backup Exec Retrieve のトラブルシューティング

Backup Exec Retrieve で発生する可能性のある問題を解決する場合、次の情報を確認できます。

表 20-7 Backup Exec Retrieve のトラブルシューティング

問題	説明
Backup Exec Retrieve Web サイトに移動するとブラウザに SSL (Secure Sockets Layer) 証明書の警告が表示される。	Backup Exec Retrieve では、クライアントとサーバー間の通信を保護するために SSL 証明書が使用されます。ユーザーはサイトのセキュリティ証明書の問題を Web ブラウザによって警告される場合があります。Web サイトへのアクセスは続行できます。警告の解決について詳しくは、 http://entsupport.symantec.com/umi/V-367-2-1 をクリックしてください。

問題	説明
<p>ファイルを表示するために起動したアプリケーションでファイルを選択するとエラーが発生する</p>	<p>Microsoft Internet Explorer でファイルを選択すると、ファイルはインターネットキャッシュに保存されます。その後、ファイルを開くように要求されたプログラムが起動します。Internet Explorer で [暗号化されたページをディスクに保存しない] オプションが選択されている場合、ファイルはインターネットキャッシュに保存されません。ただし、関連付けされたアプリケーションは起動しますが、そのファイルを開くことはできません。この問題を解決するには、Internet Explorer でこのオプションを選択解除します (このオプションは Windows 2003 ではデフォルトです)。</p> <p>暗号化されたページをディスクに保存するためにオプションを選択解除する方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Internet Explorer で、ツールメニューをクリックし、[インターネット オプション] をクリックします。 ■ [詳細設定] をクリックし、[セキュリティ] セクションが表示されるまでスクロールします。 ■ [暗号化されたページをディスクに保存しない] のチェックマークを外します。 ■ [適用] > [OK] の順にクリックします。
<p>ローカルアカウントでログインできない</p>	<p>Backup Exec Retrieve は、通常、バックアップ元のコンピュータとは別のコンピュータで実行されます。ローカルアカウントおよびパスワードは元のコンピュータに対してのみ権限があるため、Backup Exec Retrieve の使用時に利用できない場合があります。Backup Exec Retrieve を使用してログインし、ファイルを取り込むには、ドメインアカウントを使用する必要があります。Backup Exec Retrieve では、ローカルグループに含まれているドメインユーザーおよびドメイングループを可能な限り取得します。そのため、ドメインアカウントがコンピュータの Local Administrators グループのメンバーであれば、ファイルを取得できます。</p>
<p>すべてのデータを表示できない (インデックス作成に時間がかかりすぎる)</p>	<p>インデックス作成は、リソース集約型の処理です。パフォーマンスは、ハードウェア、ネットワーク設定およびデータ変更率によって大きく異なります。多くのベースリカバリポイントを含む新しいデータ格納場所のインデックスを初めて作成する場合に最も負荷が高く、1 つのイメージにつき数分かかります。後続の増分リカバリポイントの場合は負荷が軽減され、1 つの増分につき数秒しかかかりません。インデックスが作成されていないリカバリポイント、アーカイブおよびファイルは検索結果に表示されません。インデックス作成に時間がかかりすぎる場合は、Indexing Server を追加して負荷を分散する必要がある場合があります。</p>

問題	説明
<p>Internet Explorer で Backup Exec Retrieve のコンピュータ名または IP アドレスを使用するとファイルをダウンロードできない</p>	<p>エンドユーザーが Internet Explorer で Backup Exec Retrieve からファイルをダウンロードできない場合は、ブラウザの自動ダウンロードを有効にします。</p> <p>Internet Explorer で自動ダウンロードを有効にする方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Internet Explorer で、[ツール]>[インターネットオプション]の順にクリックします。 ■ [セキュリティ]タブで、[レベルのカスタマイズ]をクリックします。 ■ [セキュリティ設定 - インターネットゾーン]ページで、[ダウンロード]>[ファイルのダウンロード時に自動的にダイアログを表示]が表示されるまでスクロールします。 ■ [有効にする]をクリックします。 ■ [OK]をクリックし、変更を確認して、[はい]をクリックします。 ■ [OK]をクリックし、Internet Explorer に戻ります。
<p>Internet Explorer で Backup Exec Retrieve をクリックすると、信頼済みサイトの一覧にサイトを追加するように求めるメッセージが表示される。</p>	<p>Windows でセキュリティ強化が有効になっている場合は、Internet Explorer の信頼済みサイトの一覧に Backup Exec Retrieve の URL を追加するように求めるメッセージが表示されます。信頼済みサイトの一覧に URL を追加せずに続行すると、Silverlight がすでにインストールされている場合でもインストールするように求めるメッセージが表示されます。Silverlight を再度インストールしようすると、インストールは失敗します。Internet Explorer の信頼済みサイトの一覧に Backup Exec Retrieve の URL を追加することをお勧めします。</p> <p>Internet Explorer の信頼済みサイトの一覧に Backup Exec Retrieve の URL を追加する方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Internet Explorer で、[ツール]>[インターネットオプション]の順にクリックします。 ■ [セキュリティ]タブで、[信頼済みサイト]をクリックします。 ■ [サイト]をクリックし、[信頼済みサイト]ページで、Backup Exec Retrieve の URL を追加します。 ■ [追加]をクリックし、[閉じる]をクリックします。 ■ [OK]をクリックし、Internet Explorer に戻ります。

Symantec Backup Exec Active Directory Recovery Agent

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Active Directory Recovery Agent](#) について
- [Active Directory Recovery Agent](#) 使用上の必要条件
- [Active Directory Recovery Agent](#) のインストールについて
- [Active Directory Recovery Agent](#) の動作
- [Granular Recovery Technology](#) と [Active Directory](#) および [ADAM/AD LDS](#) バックアップの連携
- [Active Directory](#) と [ADAM/AD LDS](#) のバックアップとリストアジョブのためのデフォルトの編集
- [Active Directory](#) のバックアップ
- [ADAM/AD LDS](#) のバックアップ
- [Active Directory Recovery Agent](#) のバックアップジョブオプション
- [Active Directory](#) および [ADAM/AD LDS](#) の個別のオブジェクトのリストアについて
- [Active Directory](#) および [ADAM/AD LDS](#) のパーズ済みオブジェクトの再作成について
- [Active Directory](#) コンピュータオブジェクトとコンピュータオブジェクトのアカウントのリセット

Active Directory Recovery Agent について

Symantec Backup Exec 2010 Active Directory Recovery Agent (ADRA) は、Backup Exec 2010 の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールします。

ADRA では、権限のある完全リストアまたは権限のない完全リストアを実行しなくても、**Granular Recovery Technology (GRT)** を使用して、**Active Directory** の個別のオブジェクトおよび属性をリストアできます。個別の **Active Directory Application Mode (ADAM)** と **Active Directory Lightweight Directory Services (AD LDS)** のオブジェクトおよび属性をリストアすることもできます。

p.866 の「[Active Directory Recovery Agent 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

p.868 の「[Active Directory Recovery Agent のインストールについて](#)」を参照してください。

p.868 の「[Active Directory Recovery Agent の動作](#)」を参照してください。

p.874 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて](#)」を参照してください。

Active Directory Recovery Agent 使用上の必要条件

Active Directory Recovery Agent を使用して個別のオブジェクトおよび属性をリストアする前に次の必要条件を確認します。

- ADAM/AD LDS または (Active Directory がインストールされた) Windows のシステム状態の完全モードバックアップを作成している必要があります。
- Active Directory が使用されているコンピュータで、次のいずれかの Windows オペレーティングシステムを使用する必要があります。

- Windows XP Professional x64 Edition

- Windows 2000 Server (Service Pack 4)

ADRA では、Windows 2000 ドメインコントローラ上の **Active Directory** の Deleted Objects コンテナからのオブジェクトのリストアがサポートされていません。削除済みオブジェクトの GRT リストアジョブを実行するには、Windows 2003 ドメインコントローラで **Remote Agent** を使用することをお勧めします。[Active Directory の Deleted Objects コンテナからリストアできない削除済みオブジェクトを再作成する]チェックボックスがオンの場合、削除済みオブジェクトは、Windows 2000 ドメインコントローラ上の **Backup Exec Remote Agent** を使用してのみリストアできます。このチェックボックスは、[設定]の下で[Microsoft Active Directory]ノードを選択した後、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスに表示されません。

- Windows Server 2003 (Service Pack 1 以上)

- Windows Server 2003 R2

- Windows Server 2008
- Windows Server 2008 R2
- リストアジョブを実行するメディアサーバーで、ミニフィルタドライバをサポートするバージョンの Windows オペレーティングシステムを使用する必要があります。ミニフィルタドライバは、次の Windows オペレーティングシステムでサポートされています。
 - Windows 2000 (Service Pack 4 および Windows 2000 Rollup Patch 1 をインストール済み)
 - Windows Server 2003 (Service Pack 1 以上)
 - Windows Server 2003 R2
 - Windows Server 2008
 - Windows Server 2008 R2
- Active Directory がインストールされたコンピュータ上で、Backup Exec Remote Agent for Windows Systems を実行する必要があります。
- テープからリストアするときに Backup Exec でリストア対象のオブジェクトおよび属性を一時的に格納できる、メディアサーバーのディスク上の場所を指定する必要があります。
- [Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、Active Directory のバックアップで個々のオブジェクトのリストアを有効にする] オプションを必ず選択します。バックアップ時にこのオプションを選択しない場合、個別の属性とプロパティを Active Directory および ADAM/AD LDS の完全バックアップからリストアできません。

メモ: 読み取り専用ドメインコントローラ (RODC) の場合は、Active Directory のバックアップから個別のオブジェクトおよび属性をリストアすることはできません。GRT バックアップおよび Active Directory のリストアは、書き込み可能な集中管理されたデータセンターのドメインコントローラに対して行う必要があります。

p.868 の「[Active Directory Recovery Agent のインストールについて](#)」を参照してください。

p.868 の「[Active Directory Recovery Agent の動作](#)」を参照してください。

p.874 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて](#)」を参照してください。

Active Directory Recovery Agent のインストールについて

ADRA は、Backup Exec 2010 の独立したアドオンコンポーネントとしてローカルにインストールします。

p.112 の「ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール」を参照してください。

Active Directory Recovery Agent の動作

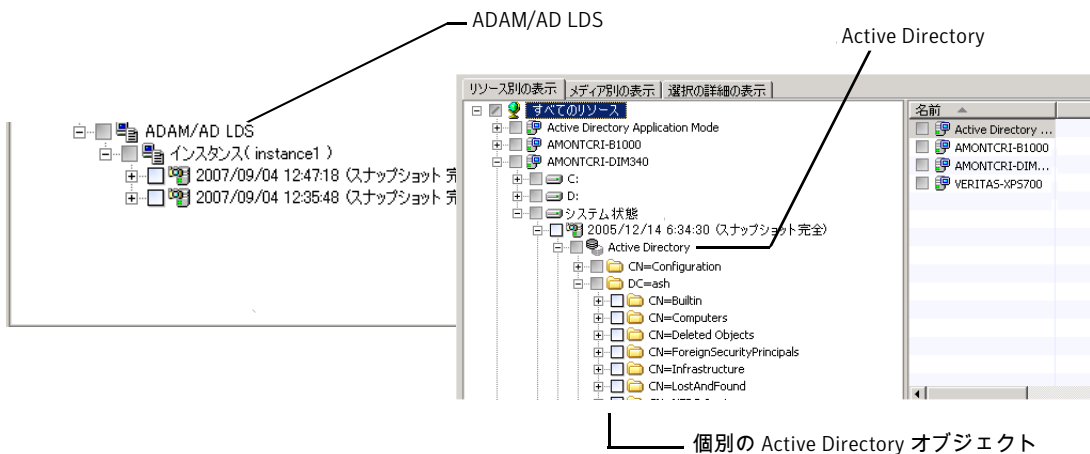
ADRA は、(Active Directory がインストールされた) Windows のシステム状態および ADAM/AD LDS のバックアップで動作します。

Active Directory は Windows のシステム状態のコンポーネントであるため、Windows のシステム状態をバックアップする場合、Active Directory がバックアップジョブに含まれます。

ADRA を使用して ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトおよび属性をリストアすることもできます。複数の ADAM/AD LDS インスタンスがバックアップされている場合、各インスタンスが [Active Directory Application Mode] ノードの下に表示されます。

次の図は、ADAM/AD LDS と Active Directory を示します。

図 A-1 [リソース別の表示]ビュー - [ADAM/AD LDS]および[Active Directory]



ADRA を使用すると、次の場合に Active Directory の Deleted Objects コンテナから廃棄 (Tombstone) オブジェクトをリストアすることもできます。

- 廃棄の有効期間が過ぎていない。
- Deleted Objects コンテナからオブジェクトがパージされていない。
- リストア先が Windows Server 2003、2008、2008 R2、XP Professional x64 Edition である。

Active Directory および ADAM/AD LDS のバックアップは、テープにバックアップする前に、ディスクへのバックアップフォルダにバックアップすることをお勧めします。この戦略によってバックアップ時間帯が短縮されます。また、バックアップしたオブジェクトおよび属性を個別にカタログ登録せずに Active Directory または ADAM/AD LDS を管理できるようにします。

Active Directory または ADAM/AD LDS のアプリケーションデータベースを直接テープにバックアップすると、バックアップ中に追加または削除されたオブジェクトおよび属性と、バックアップセットからのリストアで利用可能な個別のオブジェクトおよび属性が一致しなくなります。データベースのバックアップは Active Directory または ADAM/AD LDS のライブデータベースのスナップショットバックアップで、Active Directory または ADAM/AD LDS のデータベースはスナップショット実行後に個別にカタログ登録されます。カタログ操作では Active Directory または ADAM/AD LDS のライブデータベースからオブジェクトおよび属性がカタログ登録されるため、オブジェクトおよび属性はスナップショット実行後に変更されます。

p.874 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて](#)」を参照してください。

p.878 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS のパージ済みオブジェクトの再作成について](#)」を参照してください。

Granular Recovery Technology と Active Directory および ADAM/AD LDS バックアップの連携

Granular Recovery Technology (GRT) は、権限のある完全リストアまたは権限のない完全リストアを実行しなくても、Active Directory と ADAM/AD LDS のバックアップから個々のオブジェクトと属性をリストアすることを可能にします。個々の項目をリストアするには、バックアップジョブを作成するときに Granular Recovery Technology 機能を有効にする必要があります。GRT 対応のバックアップを設定する前に、必要条件を確認する必要があります。

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.308 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス](#)」を参照してください。

p.309 の「[Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について](#)」を参照してください。

Active Directory と ADAM/AD LDS のバックアップとリストアジョブのためのデフォルトの編集

すべての Active Directory および ADAM/AD LDS のバックアップおよびリストアジョブに対するデフォルト設定を編集できます。Active Directory および ADAM/AD LDS のバックアップおよびリストアジョブを設定するときに、これらのデフォルトを変更することもできます。

p.874 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて](#)」を参照してください。

p.878 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS のパージ済みオブジェクトの再作成について](#)」を参照してください。

Active Directory と ADAM/AD LDS のバックアップとリストアジョブのためのデフォルトを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Microsoft Active Directory]をクリックします。
- 3 Active Directory Recovery Agent のデフォルトのバックアップおよびリストアオプションを選択します。

p.870 の「[Microsoft Active Directory のデフォルトオプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

Microsoft Active Directory のデフォルトオプション

Active Directory および ADAM/AD LDS のバックアップおよびリストアジョブに対するデフォルト設定を編集できます。

p.871 の「[Active Directory のバックアップ](#)」を参照してください。

p.872 の「[ADAM/AD LDS のバックアップ](#)」を参照してください。

p.870 の「[Active Directory と ADAM/AD LDS のバックアップとリストアジョブのためのデフォルトの編集](#)」を参照してください。

表 A-1 Microsoft Active Directory のデフォルトオプション

項目	説明
Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、Active Directory のバックアップで個々のオブジェクトのリストアを有効にする (読み取り専用ドメインコントローラではサポートしない)	<p>Active Directory または ADAM/ AD LDS の完全バックアップから個々の項目をリストアできます。</p> <p>Granular Recovery Technology の必要条件を満たすことを確認します。</p> <p>p.309 の「Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について」を参照してください。</p>
Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットプロバイダを使用する場合は、バックアップ前の一貫性チェックを実行する (Windows Server 2008)	<p>スナップショットにデータ破損がないかを確認します。このオプションは、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) によって実行されるスナップショットに対してのみ適用されます。</p>
一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する	<p>一貫性チェックが失敗してもバックアップジョブの続行を可能にします。現在の状態のデータベースのバックアップでも、バックアップがまったく存在しないよりもよい場合は、ジョブを続行できます。または、データベースが大規模で、問題があったとしても小さい問題だけである場合は、ジョブを続行できます。</p>
Active Directory の Deleted Objects コンテナからリストアできない削除済みオブジェクトを再作成する	<p>次の両方の事項に該当する場合は、削除済みオブジェクトの再作成を試行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オブジェクトの廃棄の有効期間が過ぎている。 ■ Active Directory Deleted Objects コンテナからオブジェクトがパージされている。 <p>このオプションは、Windows 2000 が実行されているコンピュータの削除済みオブジェクトのリストアに使用する必要があります。</p> <p>p.878 の「Active Directory および ADAM/AD LDS のパージ済みオブジェクトの再作成について」を参照してください。</p>

Active Directory のバックアップ

Active Directory をバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているコンピュータに接続するデバイスにデータベースをバックアップできません。

Active Directory をバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある下向き矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]タブの[すべてのリソース]の下で、バックアップする **Active Directory** が含まれているコンピュータの名前を展開します。
- 4 [システム状態]をクリックします。
- 5 タスクペインの[設定]の下にある[Microsoft Active Directory]をクリックします。
- 6 使用するバックアップオプションを選択します。

p.873 の「[Active Directory Recovery Agent のバックアップジョブオプション](#)」を参照してください。

- 7 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する場合

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブのスケジュールを設定する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

ADAM/AD LDS のバックアップ

ADAM/AD LDS をバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているコンピュータに接続するデバイスにデータベースをバックアップできません。

ADAM/AD LDS をバックアップする場合

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある下向き矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]タブで、[登録済みリソース]を展開します。

- 4 [Windows システム]を展開します。
- 5 ADAM/AD LDS がインストールされているコンピュータの名前を展開します。
- 6 使用するバックアップオプションを選択します。
 p.873の「[Active Directory Recovery Agent のバックアップジョブオプション](#)」を参照してください。
- 7 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する場合

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブのスケジュールを設定する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
 p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Active Directory Recovery Agent のバックアップジョブオプション

Active Directory Recovery Agent の適切なバックアップジョブオプションを選択します。

p.871の「[Active Directory のバックアップ](#)」を参照してください。

p.872の「[ADAM/AD LDS のバックアップ](#)」を参照してください。

表 A-2 Active Directory Recovery Agent のバックアップジョブのためのオプション

項目	説明
Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、Active Directory のバックアップで個々のオブジェクトのリストアを有効にする (読み取り専用ドメインコントローラではサポートしない)	<p>Active Directory または ADAM/ AD LDS の完全バックアップから個々の項目をリストアできます。</p> <p>Granular Recovery Technology の必要条件を満たすことを確認します。</p> <p>p.309の「Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について」を参照してください。</p>

項目	説明
Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットプロバイダを使用する場合は、バックアップ前の一貫性チェックを実行する (Windows Server 2008)	スナップショットにデータ破損がないかを確認します。このオプションは、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) によって実行されるスナップショットに対してのみ適用されます。 破損データが見つかった場合にこのオプションが選択されていないと、ジョブは失敗します。
一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する	一貫性チェックでエラーが検出された場合でもバックアップジョブを続行します。現在の状態のデータベースのバックアップでも、バックアップがまったく存在しないよりもよい場合は、ジョブを続行できます。または、データベースが大規模で、問題があったとしても小さい問題だけである場合は、ジョブを続行できます。

Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて

リストアジョブの実行を開始する前に、リストアするデータの検索と表示に関する情報と、リストアジョブのオプションおよびリストアジョブの詳細を確認する必要があります。

p.587 の「データのリストアについて」を参照してください。

テープから Active Directory および ADAM/AD LDS のオブジェクトをリストアする場合、オブジェクトがリストア前に格納されるディスク上のステージング場所を指定する必要があります。ステージング場所は、リストアジョブを実行するメディアサーバーのローカル NTFS ボリューム上のパスである必要があります。Backup Exec サービスアカウントには、このステージング場所へのアクセス権も必要です。

メモ: [ツール]>[オプション]>[リストア]の下にある[リストアデータ一時格納用の、メディアサーバーのローカル NTFS ボリューム上のパス]オプションでデフォルトのステージング場所が定義されている場合、[リストアジョブのプロパティ]-ペインの[設定]の下にある[詳細]ノードにパスを入力して Active Directory および ADAM/AD LDS の各リストアジョブの代替ステージング場所を指定することによって、デフォルトを変更できます。

ステージング場所のパスに指定したディスクには、大きいサイズのファイルが作成される可能性があるため、システムボリュームをステージング場所として使用しないでください。

テープからのオブジェクトのリストアではステージング場所を作成する必要があるため、テープからのリストアはディスクからのリストアより時間がかかります。

削除された **Active Directory** または **ADAM/AD LDS** のオブジェクトの廃棄の有効期間が過ぎていない場合、デフォルトでは、**ADRA** によってこれらのオブジェクトが **Active Directory** の **Deleted Objects** コンテナからリストアされます。

Active Directory のオブジェクトが削除された場合、削除されたオブジェクトは現在の **Active Directory** または **ADAM/AD LDS** のコンテナから削除され、廃棄に変換されて、**Active Directory** の **Deleted Objects** コンテナに格納されます。このコンテナでは、廃棄の有効期間が監視されます。廃棄の有効期間が過ぎると、廃棄は **Active Directory** の **Deleted Objects** コンテナからパージされ、これによって **Active Directory** および **ADAM/AD LDS** のデータベースからオブジェクトが永久に削除されます。

Active Directory または **ADAM/AD LDS** のバックアップで個々の項目のリストアが有効になっている場合のバックアップおよびリストア操作の必要条件を次に示します。

表 A-3 **Active Directory** または **ADAM/AD LDS** のバックアップおよびリストア操作の必要条件

項目	説明
バックアップジョブの宛先デバイスがディスクへのバックアップフォルダの場合	ディスクへのバックアップフォルダは、GRT 対応のバックアップのために最も効率的なストレージの方法を提供します。テープ上の GRT 対応バックアップから個々の項目をリストアするには、ローカル NTFS ボリューム上のハードディスクに一時ステーキング場所を作成する必要があります。データはリストアされる前に、まずテープから一時ステーキング場所にコピーされます。このため、テープからのリストアにはより長い時間がかかります。最良の結果を得るため、GRT 対応バックアップジョブを設定するときには、このジョブ専用のディスクへのバックアップフォルダを選択する必要があります。
完全バックアップを作成する場合	ポリシーに完全ジョブテンプレートが設定されており、このテンプレートに、宛先デバイスとしてディスクへのバックアップフォルダが設定されている必要があります。 Active Directory または ADAM/AD LDS の完全バックアップのみを実行する場合は、ポリシーに完全ジョブテンプレートを設定する必要はありません。 p.511 の「 新しいポリシーの作成 」を参照してください。
ディスクへのバックアップフォルダ以外のデバイスに存在する Active Directory または ADAM/AD LDS のバックアップセットから個々の項目をリストアする場合	Backup Exec は、メディアサーバー上の NTFS ボリュームのパスにデータベース全体を一時的にステーキングして、個々の項目を抽出する必要があります。このパスは指定する必要があります。

Active Directory のユーザーオブジェクトをリストアする場合、オブジェクトのユーザーパスワードを再設定してから、オブジェクトのユーザーアカウントを再び有効にする必要が

あります。ADAM/ADLDS のユーザーオブジェクトの場合は、オブジェクトのユーザーパスワードを再設定してから、オブジェクトのユーザーアカウントを再び有効にする必要があります。Active Directory のユーザーオブジェクトの場合は、Microsoft Windows の [Active Directory ユーザーとコンピュータ] アプリケーションを使用します。ADAM/AD LDS のユーザーオブジェクトの場合は、[ADSI 編集] を使用します。

Active Directory のコンピュータオブジェクトの場合は、オブジェクトのアカウントをリセットする必要があります。

p.881 の「[Active Directory コンピュータオブジェクトとコンピュータオブジェクトのアカウントのリセット](#)」を参照してください。

ADRA では、Windows 2000 ドメインコントローラ上の Active Directory の Deleted Objects コンテナからのオブジェクトのリストアがサポートされていません。Windows Server 2003 ドメインコントローラ上の Backup Exec Remote Agent が同じドメインに存在する場合、これを使用して削除済みオブジェクトの個別リストアを実行することをお勧めします。Windows Server 2003 ドメインコントローラがドメインで使用できない場合で、[Active Directory の Deleted Objects コンテナからリストアできない削除済みオブジェクトを再作成する] チェックボックスがオンの場合、削除済みオブジェクトは、Windows 2000 ドメインコントローラ上の Backup Exec Remote Agent を使用してのみリストアできます。

メモ: [Active Directory Configuration Partition] ノード内のオブジェクトによっては、Active Directory Deleted Objects コンテナからリストアできません。ただし、一部のアプリケーションでは、再作成されたオブジェクトが認識されない場合があります。

詳しくは Microsoft Active Directory のマニュアルを参照してください。

p.431 の「[メディアのインベントリの実行について](#)」を参照してください。

p.232 の「[新しいカタログの作成](#)」を参照してください。

p.876 の「[Active Directory のバックアップからの個別のオブジェクトのリストア](#)」を参照してください。

p.878 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS のパーズ済みオブジェクトの再作成について](#)」を参照してください。

p.878 の「[ADAM/AD LDS のバックアップからの個別のオブジェクトのリストア](#)」を参照してください。

p.881 の「[Active Directory コンピュータオブジェクトとコンピュータオブジェクトのアカウントのリセット](#)」を参照してください。

Active Directory のバックアップからの個別のオブジェクトのリストア

ADRA を使用して、Active Directory から個別のオブジェクトをリストアします。

p.881 の「**Active Directory** コンピュータオブジェクトとコンピュータオブジェクトのアカウントのリセット」を参照してください。

p.878 の「**ADAM/AD LDS** のバックアップからの個別のオブジェクトのリストア」を参照してください。

p.878 の「**Active Directory** および **ADAM/AD LDS** のページ済みオブジェクトの再作成について」を参照してください。

Active Directory のバックアップから個別のオブジェクトをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある下向き矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、システム状態の最新のバックアップが含まれるバックアップセットをダブルクリックします。

以前のバックアップから **Active Directory** オブジェクトをリストアする場合は、目的のバックアップセットを選択します。

- 4 [システム状態]をダブルクリックします。
- 5 システム状態の最新のスナップショットをダブルクリックします。
- 6 [**Active Directory**]をダブルクリックします。
- 7 結果ペインで、目的のオブジェクトを選択します。
- 8 テープからリストアする場合、次の手順を実行します。
 - タスクペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。
 - デフォルトの一時的なステージングの場所を設定していない場合、[リストアデータ一時格納用の、メディアサーバーのローカル **NTFS** ボリューム上のパス]ボックスにパスを入力します。
- 9 [今すぐ実行]をクリックしてリストアジョブを開始するか、タスクペインで他のリストアオプションを選択します。

[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[一般]で[ディスク上のファイルを上書きしない]または[ディスク上のファイルの方が古い場合のみ上書きする]を選択した場合でも、リストア対象に選択した **Active Directory** または **ADAM/AD LDS** のすべてのオブジェクトまたはプロパティによって既存のオブジェクトおよびプロパティが上書きされます。

- 10 削除済みユーザーオブジェクトをリストアした場合、**Microsoft Windows** の[**Active Directory** ユーザーとコンピュータ]アプリケーションを使用して、オブジェクトのユーザーパスワードを再設定し、オブジェクトのユーザーアカウントを再び有効にします。コンピュータオブジェクトをリストアした場合は、そのオブジェクトのアカウントをリセットする必要があります。

ADAM/AD LDS のバックアップからの個別のオブジェクトのリストア

ADRA を使用して、ADAM/AD LDS から個別のオブジェクトをリストアします。

p.876 の「[Active Directory のバックアップからの個別のオブジェクトのリストア](#)」を参照してください。

p.878 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS のパージ済みオブジェクトの再作成について](#)」を参照してください。

ADAM/AD LDS のバックアップから個別のオブジェクトをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの [リストア] の横にある下向き矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ] をクリックします。
- 3 [リソース別の表示] ペインで、[Active Directory Application Mode] をダブルクリックします。
- 4 目的の ADAM/AD LDS インスタンスをダブルクリックします。
- 5 目的のバックアップセットをダブルクリックします。
- 6 結果ペインで、目的のオブジェクトを選択します。
- 7 テープからリストアする場合、次の手順を実行します。
 - タスクペインの [設定] の下にある [詳細] をクリックします。
 - デフォルトの一時的なステージングの場所を設定していない場合、[リストアデータ一時格納用の、メディアサーバーのローカル NTFS ボリューム上のパス] ボックスにパスを入力します。
- 8 [今すぐ実行] をクリックしてリストアジョブを開始するか、[プロパティ] ペインで他のリストアオプションを選択します。

[リストアジョブのプロパティ] ダイアログボックスの [一般] で [ディスク上のファイルを上書きしない] または [ディスク上のファイルの方が古い場合のみ上書きする] を選択した場合でも、リストア対象に選択した **Active Directory** または **ADAM/AD LDS** のすべてのオブジェクトまたはプロパティによって既存のオブジェクトおよびプロパティが上書きされます。
- 9 削除済みユーザーオブジェクトをリストアした場合、[ADSI 編集] アプリケーションを使用して、オブジェクトのユーザーパスワードを再設定し、オブジェクトのユーザーアカウントを再び有効にします。

Active Directory および ADAM/AD LDS のパージ済みオブジェクトの再作成について

廃棄の有効期間が過ぎてオブジェクトが **Active Directory** の Deleted Objects コンテナからパージされた場合、その削除済みオブジェクトの再作成を試行できます。

ただし、次の点に注意する必要があります。

- 再作成されたオブジェクトは元の削除済みオブジェクトと同一ではないため、ほとんどのアプリケーションでは、再作成されたオブジェクトが認識されません。再作成されたオブジェクトでは、新しいグローバルな一意の識別子 (GUID) およびセキュリティ ID (SID) が割り当てられます。これらの ID は、元のオブジェクトを作成したアプリケーションによって識別されません。
- ページ済みオブジェクトを再作成しても、Windows オペレーティングシステムによって作成された属性は再作成されません。そのため、オブジェクトを再作成しても、オペレーティングシステムによって設定された属性に依存するオブジェクトは Windows によって認識されません。

p.879 の「[Active Directory のページ済みオブジェクトの再作成](#)」を参照してください。

p.880 の「[ADAM/AD LDS のページ済みオブジェクトの再作成](#)」を参照してください。

p.874 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて](#)」を参照してください。

Active Directory のページ済みオブジェクトの再作成

Active Directory の削除済みオブジェクトが Active Directory の Deleted Objects コンテナからページされた後に、Active Directory の以前のバックアップからオブジェクトをリストアして、削除済みオブジェクトの再作成を試行できます。

p.880 の「[ADAM/AD LDS のページ済みオブジェクトの再作成](#)」を参照してください。

p.874 の「[Active Directory および ADAM/AD LDS の個別のオブジェクトのリストアについて](#)」を参照してください。

p.881 の「[Active Directory コンピュータオブジェクトとコンピュータオブジェクトのアカウントのリセット](#)」を参照してください。

Active Directory のページ済みオブジェクトを再作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある下向き矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、システム状態の最新のバックアップが含まれるバックアップセットをダブルクリックします。

以前のバックアップから Active Directory オブジェクトをリストアする場合は、目的のバックアップセットを選択します。
- 4 [システム状態]をダブルクリックします。
- 5 システム状態の最新のスナップショットをダブルクリックします。
- 6 [Active Directory]をダブルクリックします。
- 7 結果ペインで、目的のオブジェクトを選択します。

- 8 タスクペインの[設定]の下にある[Microsoft Active Directory]をクリックします。
- 9 [Active Directory の Deleted Objects コンテナからリストアできない削除済みオブジェクトを再作成する]にチェックマークを付けます。
- 10 テープからリストアする場合、次の手順を実行します。
 - タスクペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。
 - デフォルトの一時的なステージングの場所を設定していない場合、[リストアデータ一時格納用の、メディアサーバーのローカル NTFS ボリューム上のパス]ボックスにパスを入力します。
- 11 [今すぐ実行]をクリックしてリストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。

[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[一般]で[ディスク上のファイルを上書きしない]または[ディスク上のファイルの方が古い場合のみ上書きする]を選択した場合でも、リストア対象に選択した Active Directory または ADAM/AD LDS のすべてのオブジェクトまたはプロパティによって既存のオブジェクトおよびプロパティが上書きされます。
- 12 Microsoft Windows の[Active Directory ユーザーとコンピュータ]アプリケーションを使用して、オブジェクトのユーザーパスワードを再設定し、オブジェクトのユーザーアカウントを再び有効にします。

ADAM/AD LDS のパーズ済みオブジェクトの再作成

ADAM/AD LDS の削除済みオブジェクトが Active Directory の Deleted Objects コンテナからパーズされた後に、ADAM/AD LDS の以前のバックアップからオブジェクトをリストアして、削除済みオブジェクトの再作成を試行できます。

p.881 の「[Active Directory コンピュータオブジェクトとコンピュータオブジェクトのアカウントのリセット](#)」を参照してください。

ADAM/AD LDS のパーズ済みオブジェクトを再作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある下向き矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、[Active Directory Application Mode]をダブルクリックします。
- 4 目的の ADAM/AD LDS インスタンスをダブルクリックします。
- 5 目的のバックアップセットをダブルクリックします。
- 6 結果ペインで、目的のオブジェクトを選択します。
- 7 タスクペインの[設定]の下にある[Microsoft Active Directory]をクリックします。

- 8 [Active Directory の Deleted Objects コンテナからリストアできない削除済みオブジェクトを再作成する]にチェックマークを付けます。
- 9 テープからリストアする場合、次の手順を実行します。
 - タスクペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。
 - デフォルトの一時的なステージングの場所を設定していない場合、[リストアデータ一時格納用の、メディアサーバーのローカル NTFS ボリューム上のパス]ボックスにパスを入力します。
- 10 [今すぐ実行]をクリックしてリストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。

 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[一般]で[ディスク上のファイルを上書きしない]または[ディスク上のファイルの方が古い場合のみ上書きする]を選択した場合でも、リストア対象に選択した **Active Directory** または **ADAM/AD LDS** のすべてのオブジェクトまたはプロパティによって既存のオブジェクトおよびプロパティが上書きされます。
- 11 [ADSI 編集]アプリケーションを使用して、オブジェクトのユーザーパスワードを再設定し、オブジェクトのユーザーアカウントを再び有効にします。

Active Directory コンピュータオブジェクトとコンピュータオブジェクトのアカウントのリセット

Active Directory では、コンピュータオブジェクトはユーザーオブジェクトから導出されます。コンピュータオブジェクトと関連付けられている一部の属性は削除されたコンピュータオブジェクトをリストアするときにリストアできません。これらの属性はコンピュータオブジェクトが最初に削除される前にスキーマ変更を通して保存された場合にのみリストアできます。コンピュータオブジェクトのクレデンシャルは 30 日ごとに変更されるため、バックアップからのクレデンシャルと実際のコンピュータに格納されているクレデンシャルが一致しないことがあります。

メモ: コンピュータオブジェクトをリセットするには、**Microsoft Windows** の [Active Directory ユーザーとコンピュータ]アプリケーションを使用する必要があります。

コンピュータオブジェクトのリセットについては、**Microsoft Windows** の [Active Directory ユーザーとコンピュータ]アプリケーションのマニュアルを参照してください。

オブジェクトが削除される前にコンピュータオブジェクトの **userAccountControl** 属性が保持されなかった場合は、オブジェクトをリストアした後オブジェクトのアカウントをリセットする必要があります。

p.880 の「**ADAM/AD LDS のページ済みオブジェクトの再作成**」を参照してください。

Active Directory コンピュータオブジェクトのアカウントをリセットする方法

- 1 ドメインからコンピュータを削除します。
- 2 ドメインにコンピュータを再び追加します。コンピュータの SID は、コンピュータオブジェクトを削除しても保持されます。ただし、オブジェクトの廃棄が期限切れになり、新しいコンピュータオブジェクトが再作成される場合は、SID が変更されます。

Symantec Backup Exec Advanced Disk-based Backup Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Advanced Disk-based Backup Option](#) について
- [Advanced Disk-based Backup Option](#) のインストールについて
- [合成バックアップ機能](#) について
- [合成バックアップでのバックアップ対象](#)
- [合成バックアップの必要条件](#)
- [合成バックアップを作成する方式](#)
- [True Image Restore](#) について
- [TIR \(True Image Restore\)](#) に対するバックアップの有効化
- [True Image](#) カタログについて
- [True Image Restore](#) に対して有効なバックアップセットのリストアについて
- [TIR \(True Image Restore\)](#) に対して有効なバックアップセットの選択
- [True Image Restore](#) のトラブルシューティングのヒント
- [オフホストバックアップ](#) について
- [Exchange](#) リソース用の [GRT](#) 対応オフホストバックアップの設定
- [オフホストバックアップデータのリストア](#) について

- オフホストバックアップのトラブルシューティング

Advanced Disk-based Backup Option について

Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールします。

ADBO は次の機能を備えています。

- 合成バックアップ:ポリシーを使用して、ポリシー内の 1 つのベースラインバックアップと後続の増分バックアップを組み合わせて、完全バックアップを合成することができます。

合成バックアップを使用すると、次のようなメリットが得られます。

- 合成バックアップは、時間が重視されるバックアップ時間帯の範囲外にスケジュールできるため、バックアップ時間帯が短縮されます。
- 合成バックアップではネットワークにアクセスする必要がないため、ネットワークトラフィックが低減されます。

- **True Image Restore:**ディレクトリの内容を完全バックアップまたは増分バックアップの実行時の状態にリストアすることができます。

リストアする内容は、特定のバックアップ時点で存在していたディレクトリから選択されます。バックアップの時点において削除されていたファイルはリストアされません。**True Image Restore** では、適切な完全バックアップまたは増分バックアップに含まれる正しいバージョンのファイルのみがリストアされます。以前のバージョンは不必要にリストアされず、上書きされます。

- オフホストバックアップ:バックアップ処理をリモートコンピュータまたはホストコンピュータに代わって Backup Exec メディアサーバーで行うことができます。バックアップ処理をリモートコンピュータからメディアサーバーへ移動することによって、バックアップのパフォーマンスが向上し、リモートコンピュータの作業負荷が軽減されます。

p.885 の「[合成バックアップ機能について](#)」を参照してください。

p.898 の「[True Image Restore について](#)」を参照してください。

p.905 の「[オフホストバックアップについて](#)」を参照してください。

Advanced Disk-based Backup Option のインストールについて

メディアサーバーで ADBO のライセンスキーを入力すると、ADBO が使用できるようになります。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

合成バックアップ機能について

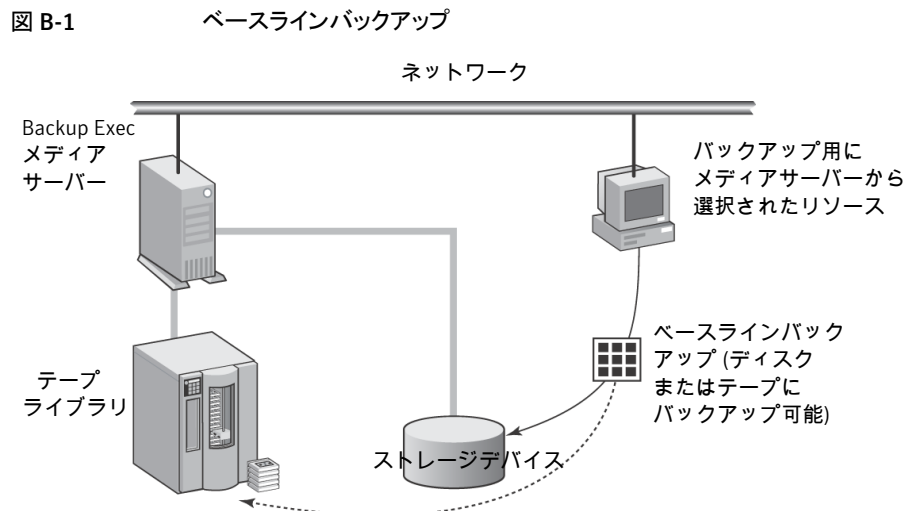
合成バックアップ機能によって、サポートされたリモートリソースの完全バックアップを繰り返し実行する必要がなくなります。合成バックアップ機能用に作成されたポリシーを使用すると、ポリシー内の1つの完全バックアップ(ベースラインと呼ばれる)と後続の増分バックアップを組み合わせて、バックアップを合成することができます。

実行後の合成バックアップが新しいベースラインになるため、次の合成バックアップが作成されるまでは、増分バックアップの実行のみが必要となります。合成バックアップは、それに含まれる最新の増分バックアップと同期しています。

合成バックアップのポリシーは、次のコンポーネントで構成されています。

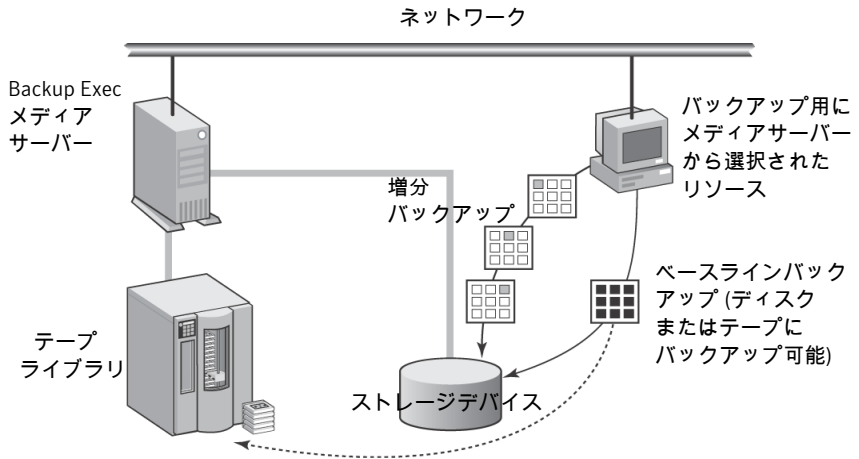
- **ベースラインバックアップ:**合成バックアップに関連付けられた最初に行うバックアップ。ベースラインバックアップは、1回実行するだけで、選択されたリソース上のすべてのファイルがバックアップされます。
- **繰り返し実行される増分バックアップ:**ベースラインバックアップ後に変更されたファイルをバックアップする後続のバックアップ。
- **繰り返し実行される合成バックアップ:**ベースラインバックアップと増分バックアップのデータを組み合わせて、選択されたリソースの合成完全バックアップを作成するプロセス。この合成完全バックアップが新しいベースラインバックアップになります。この新しいベースラインバックアップを後続の増分バックアップセットと組み合わせて、次の合成完全バックアップを作成できます。

合成バックアップポリシーからベースラインバックアップが実行される場合



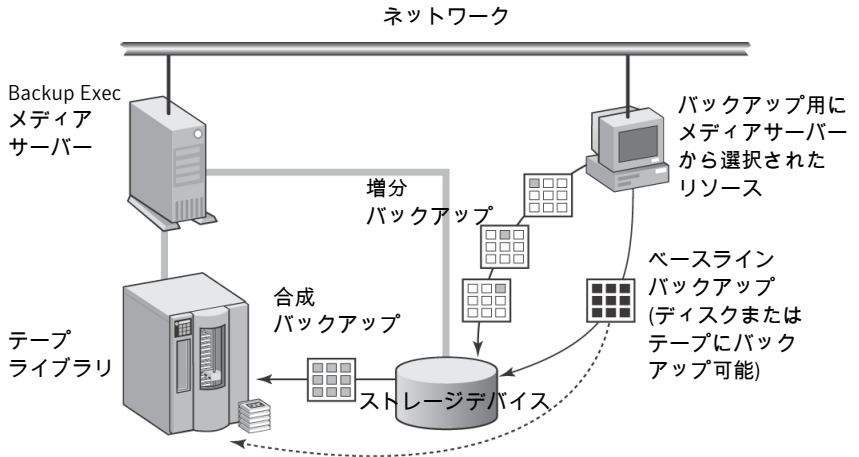
合成バックアップポリシーから増分バックアップが実行される場合

図 B-2 増分バックアップ



ポリシーから合成バックアップが実行され、ベースラインバックアップと増分バックアップが組み合わせられる場合

図 B-3 合成バックアップ



合成バックアップは、ポリシーでのみ作成できます。ポリシーウィザードを使用して、合成バックアップ機能に必要なジョブテンプレートを含むポリシーを作成できます。また、合成バックアップのポリシーのサンプルをコピーして必要に応じて修正したり、ポリシーを手動で作成して必要なジョブテンプレートとして追加することもできます。

ポリシー内の関連付けられたすべてのバックアップテンプレートでバックアップセットの複製テンプレートを使用すると、マルチステージのバックアップ戦略を作成して、データをディスクにバックアップした後、そのデータをテープにコピーできます。

p.536 の「バックアップセットの複製テンプレートについて」を参照してください。

p.888 の「合成バックアップに関する推奨事項」を参照してください。

p.890 の「合成バックアップを作成する方式」を参照してください。

p.889 の「合成バックアップと True Image Restore の追加情報の収集について」を参照してください。

合成バックアップでのバックアップ対象

合成バックアップでは、ファイルシステムリソースのみがサポートされています。

サポートされるリソースには、ボリューム、ドライブ、フォルダなどの一般的なファイルシステムオブジェクトがあります。データベースリソースまたはその他の固有リソースを選択リストに含めないでください。

合成バックアップポリシーに関連付けられた選択リストにサポート外のリソースが含まれる場合は、Backup Exec による合成バックアップジョブの作成は行われません。

p.887 の「合成バックアップの必要条件」を参照してください。

p.890 の「合成バックアップを作成する方式」を参照してください。

合成バックアップの必要条件

合成バックアップを作成する前に、次の情報を確認します。

- 合成バックアップとそれに関連付けられたテンプレートは、ポリシーでのみ作成できます。
- 合成バックアップを含むポリシーでは、暗号化キーが使用される場合、関連付けられたすべてのテンプレートは同じ暗号化キーを使用する必要があります。ポリシーの作成後は、暗号化キーを変更しないでください。関連付けられたテンプレートで選択された暗号化キーは、自動的に合成バックアップテンプレートに適用されます。
- 合成バックアップを含んでいるポリシーでは、増分バックアップは宛先デバイスとしてディスクへのバックアップフォルダか仮想テープライブラリを使わなければなりません。これらのデバイスの 1 つが利用可能でない場合はポリシーを保存できません。
- 合成バックアップのポリシー例を表示するには、次がなければなりません：
 - ディスクへのバックアップフォルダ
 - 仮想テープライブラリ

- **ADOB (Advanced Disk-based Backup Option) のためのライセンスキー**
p.892の「[サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成について](#)」を参照してください。
p.516の「[ポリシーのサンプルの再作成](#)」を参照してください。
- 合成バックアップ用に作成された増分バックアップジョブと完全バックアップジョブのバックアップテンプレートに対して、[合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する]オプションを選択しておく必要があります。このオプションは、[バックアップジョブテンプレート]プロパティの[一般]ページにあります。
p.893の「[ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成](#)」を参照してください。
このオプションを選択すると、バックアップセットに対しても True Image Restore が有効になります。
p.898の「[True Image Restore について](#)」を参照してください。
- ベースラインバックアップジョブがテープに書き込まれており、合成バックアップジョブもテープに書き込む場合、ソースジョブのマウント(ベースラインバックアップ)用に1つとバックアップ先ジョブのマウント(合成バックアップジョブ)用に1つの、合計2つのテープドライブが必要になります。
合成バックアップを実行する際の制限事項を次に示します。
 - 合成バックアップでは、ファイルシステムリソースのみがサポートされています。
p.887の「[合成バックアップでのバックアップ対象](#)」を参照してください。
 - **Central Admin Server Option** をインストールしている場合、合成バックアップジョブテンプレートと、関連付けられたすべての完全および増分バックアップジョブテンプレートは、合成バックアップジョブを実行するメディアサーバーからアクセス可能なバックアップ先デバイスで実行する必要があります。
p.1509の「[CASOのバックアップデータ複製ジョブと合成バックアップジョブの必要条件](#)」を参照してください。
 - [合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する]オプションが選択されている場合、[チェックポイントから再開]オプションはサポートされません。
p.806の「[Microsoft Cluster Server フェールオーバーでの「チェックポイントから再開」機能の使用](#)」を参照してください。
p.889の「[合成バックアップと True Image Restore の追加情報の収集について](#)」を参照してください。
p.892の「[サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成について](#)」を参照してください。
p.893の「[ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成](#)」を参照してください。

合成バックアップに関する推奨事項

次の推奨事項は合成バックアップの機能を使用するためのものです。

- ファイルシステムリソースをバックアップするために合成バックアップを使います。合成バックアップにデータベースバックアップを含めないでください。合成バックアップジョブはサポートされないリソースをバックアップ選択リストが含んでいると作成されません。

メモ: 合成バックアップは、メディアサーバーとは異なるタイムゾーンに存在するリモートリソースに対してはサポートされません。

- ボリュームがハードリンクを含んでいるか、または **Single Instance Storage** を有効にした場合は、オプション[Microsoft 変更ジャーナルを使用する]を選択しないでください。**Backup Exec** はこれらのファイルが変更されたことを検出し、変更ジャーナルを使用しないでバックアップを実行します。この場合、変更ジャーナルオプションが有効になるバックアップにはより多くの時間が必要になることがあります。
- **Backup Exec** が提供する合成バックアップのためのポリシー例をコピーし、カスタマイズします。ポリシー例は合成バックアップのためのデフォルト設定を含んでいます。p.892の「[サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成について](#)」を参照してください。
- テンプレートルールを使って、ベースラインバックアップジョブと繰り返しの増分ジョブが同時に動作しないようにします。次のテンプレートルールを選択して、ベースラインバックアップと繰り返しの増分バックアップが同時に動作しないようにすることができます。
開始時刻の競合が発生すると<テンプレートA>が開始され、その完了後に<テンプレートB>が開始されます。
p.530の「[テンプレートルールの設定](#)」を参照してください。
- バックアップデータを自動的にテープにコピーするには、合成バックアップポリシーにバックアップセットの複製テンプレートを追加します。バックアップセットの複製テンプレートはバックアップセットの自動複製を提供します。
- 合成バックアップポリシーで暗号化キーを使ったら、関連付けされたテンプレートすべてに同じ暗号化キーを使います。ポリシーを作成した後暗号化キーを変更しないでください。
- ベースラインバックアップのための完全バックアップテンプレートを作成します。この設定はベースラインバックアップが異なる宛先デバイスを使うか、または繰り返しの増分バックアップとは異なるスケジュールで動作する場合に役立ちます。
p.885の「[合成バックアップ機能について](#)」を参照してください。

合成バックアップと True Image Restore の追加情報の収集について

合成バックアップおよび True Image Restore 用に作成するすべてのバックアップジョブテンプレートでは、[合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集す

る]オプションが選択されている必要があります。このオプションは、ポリシーの作成時に、バックアップジョブテンプレートプロパティの[一般]ページで選択できます。

このオプションは、前回のバックアップ以降に移動、名前の変更、または追加の対象となったファイルとディレクトリを検出するのに必要な情報を収集し、それらのファイルとディレクトリをバックアップジョブに含めるように指定します。また、このオプションを選択すると、削除されたファイルが追跡され、対応する **True Image Restore** のバックアップセットおよび合成バックアップによって作成されたバックアップセットにこれらのファイルが含まれないようにすることができます。

このオプションを選択しなかった場合、アーカイブビットが変更されていない場合は、それらのファイルとディレクトリはスキップされます。このオプションを選択すると、パス名、ファイル名、修正日時および他の属性が、前回の完全バックアップおよび増分バックアップの際のパス名、ファイル名、修正日時および他の属性と比較されます。これらの属性のいずれかが新しいか、または変更されている場合、そのファイルまたはディレクトリはバックアップ対象になります。

合成バックアップの場合、合成バックアップと関連付けられた最初のバックアップでは、そのバックアップが増分バックアップの場合であっても、すべてのファイルが常にバックアップされます。この最初のバックアップで追加情報の収集が開始されますが、この情報は前のバックアップとは比較されません。

p.885 の「[合成バックアップ機能について](#)」を参照してください。

p.890 の「[合成バックアップを作成する方式](#)」を参照してください。

p.518 の「[ポリシーへのバックアップテンプレートの追加](#)」を参照してください。

p.898 の「[True Image Restore について](#)」を参照してください。

合成バックアップを作成する方式

合成バックアップは、ポリシーでのみ作成できます。

合成バックアップに必要なジョブテンプレートを含むポリシーは、次の方法で作成できます。

- ポリシーウィザードを使用します。
p.891 の「[ポリシーウィザードを使用した合成バックアップの作成](#)」を参照してください。
- 合成バックアップのポリシーのサンプルをコピーし、必要に応じてジョブテンプレートを変更します。
p.892 の「[サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成について](#)」を参照してください。
- ポリシーを手動で作成し、合成バックアップ機能に必要なジョブテンプレートとして追加します。
p.893 の「[ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成](#)」を参照してください。

合成バックアップを作成する前に、合成バックアップの必要条件を確認してください。

p.887 の「[合成バックアップの必要条件](#)」を参照してください。

p.885 の「[合成バックアップ機能について](#)」を参照してください。

p.888 の「[合成バックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。

ポリシーウィザードを使用した合成バックアップの作成

ポリシーウィザードを使用して、合成バックアップに必要なすべてのテンプレートを作成できます。

次のようなポリシーを設定できます。

- 日次増分バックアップを使用した週次合成バックアップ
- 週次バックアップ (合成または増分) および日次増分バックアップを使用した月次合成バックアップ

メモ: 増分バックアップの宛先デバイスとしてディスクへのバックアップフォルダか仮想テープライブラリを選択する必要があります。さもなければ、ポリシーを保存できません。

ポリシーウィザードを使用して合成バックアップを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ポリシータスク]の下にある[新規ポリシー (ウィザード使用)]をクリックします。
- 3 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックして操作を続行し、ウィザードに従ってポリシーを完成させます。

合成バックアップに必要なすべてのジョブテンプレートが新しいポリシー内に作成されます。

p.885 の「[合成バックアップ機能について](#)」を参照してください。

p.887 の「[合成バックアップでのバックアップ対象](#)」を参照してください。

p.887 の「[合成バックアップの必要条件](#)」を参照してください。

p.888 の「[合成バックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。

p.892 の「[サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成について](#)」を参照してください。

p.893 の「[ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成](#)」を参照してください。

サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成について

Backup Exec では、さまざまなタスクで標準的な設定を含むポリシーのサンプルが提供されています。合成バックアップ用のサンプルポリシーには、合成バックアップの実行に必要な標準的な設定およびジョブテンプレートが含まれています。このサンプルポリシーをコピーして名前を変更し、テンプレートが実行するようにスケジュールされている時刻を変更します。

p.515 の「[ポリシーのサンプルの使用](#)」を参照してください。

メモ: 合成バックアップのためのポリシー例はディスクへのバックアップフォルダが仮想テンプレートのライブラリがある時のみ表示されます。ディスクへのバックアップフォルダを作成し、次にポリシー例を作成し直すことができます。

p.516 の「[ポリシーのサンプルの再作成](#)」を参照してください。

合成バックアップのポリシーのサンプルには、次のテンプレートが含まれます。

- **ベースラインバックアップ:** ベースラインバックアップジョブを作成するバックアップテンプレート。このジョブは、1 回だけ実行される必要があります。必要に応じてベースラインバックアップを追加で実行できますが、完全バックアップではなく合成バックアップが実行されるため、バックアップ時間帯は短縮されます。
- **増分バックアップ:** 後続の増分バックアップジョブを作成するバックアップテンプレート。ベースラインバックアップジョブを実行した後に実行されます。
- **合成バックアップ:** 合成バックアップジョブを作成するバックアップテンプレート。

ポリシーのサンプルには、テンプレートの実行順序を設定できるテンプレートルールが表示されます。すべてのテンプレートルールはオプションですが、テンプレートルールを使用すると、テンプレートが適切な順序で実行されることを確認できます。

ポリシー例では、完全バックアップのテンプレートがベースラインとして機能するために含まれています。このテンプレートは最初に動作するテンプレートで、一度だけ動作する必要があります。最初に実行されるテンプレートは、テンプレート A と呼ばれます。

次のルールが追加されています。

- 他のテンプレートを開始する前に、<テンプレート A> を少なくとも 1 回完了させる必要があります。<テンプレート A> として[ベースラインバックアップ]が選択されています。
- 開始時刻の競合が発生すると<テンプレート A> が開始され、その完了後に<テンプレート B> が開始されます。<テンプレート A> として[増分バックアップ]、<テンプレート B> として[合成バックアップ]が選択されています。
- <テンプレート A> を 1 回だけ実行します。<テンプレート A> として[ベースラインバックアップ]が選択されています。

p.887 の「[合成バックアップでのバックアップ対象](#)」を参照してください。

- p.887 の「[合成バックアップの必要条件](#)」を参照してください。
- p.530 の「[テンプレートルールの設定](#)」を参照してください。
- p.885 の「[合成バックアップ機能について](#)」を参照してください。
- p.888 の「[合成バックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。

ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成

合成バックアップ用の新しいポリシーを作成するには、ポリシーの名前と説明を入力し、合成バックアップに必要なジョブテンプレートをポリシーに追加して、テンプレート間の関係を設定します。ポリシーに含める合成バックアップ用のすべてのテンプレートを設定したら、ポリシーと選択リストを組み合わせることでジョブを作成します。

p.532 の「[ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について](#)」を参照してください。

ポリシーにテンプレートを追加して合成バックアップを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ポリシータスク]の下にある[新規ポリシー]をクリックします。
- 3 この合成バックアップポリシーのポリシー名および説明を入力し、[新規テンプレート]をクリックします。
[テンプレートの選択]ダイアログボックスが表示されます。
- 4 [バックアップテンプレート]を選択し、[OK]をクリックします。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックし、ベースラインのバックアップ方式として次のいずれかを指定します。
 - オプションのベースライン完全バックアップテンプレートを追加するには、[完全 - 選択したファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットする)]を選択します。
 - 繰り返し実行される増分バックアップテンプレートを追加するには、[増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットする)]を選択します。
- 6 [合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する]オプションを選択します。
- 7 (必要な場合のみ)[Microsoft 変更ジャーナルを使用する]オプションを選択します。

p.265 の「[Windows NTFS 変更ジャーナルによるファイル変更の判定について](#)」を参照してください。

増分バックアップ方式を選択したら、[宛先]の下で、[デバイスとメディア]をクリックします。

- 宛先デバイスとしてディスクへのバックアップフォルダか仮想テープライブラリを選択します。

- [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。

合成バックアップを含むポリシーでは、暗号化キーが使用される場合、関連付けられたすべてのテンプレートは同じ暗号化キーを使用する必要があります。ポリシーの作成後は、暗号化キーを変更しないでください。関連付けられたテンプレートで選択された暗号化キーは、自動的に合成バックアップテンプレートに適用されます。

p.399の「[暗号化について](#)」を参照してください。

Central Admin Server Option (CASO) をインストールしている場合、管理対象メディアサーバーによる Remote Agent へのアクセスで、すべてのネットワークインターフェースを使用できるようにするオプションが表示されます。

p.1498の「[管理対象メディアサーバーでの利用可能なネットワークインターフェースカードの使用](#)」を参照してください。

- [実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。

p.520の「[テンプレートの\[スケジュール\]プロパティ](#)」を参照してください。

手順5でベースラインバックアップ用にオプションの完全バックアップテンプレートを追加した場合は、そのテンプレートが最初に行われるように設定する必要があります。

ベースラインバックアップは、1回だけ実行される必要があります。必要に応じてベースラインバックアップを追加で実行できますが、完全バックアップではなく合成バックアップが実行されるため、バックアップ時間帯は短縮されます。

増分バックアップテンプレートを追加した場合は、最初のインスタンスがベースラインバックアップとなるように、そのテンプレートを繰り返し実行されるジョブとして設定する必要があります。

- その他の必要なオプションを選択し、[OK]をクリックします。

p.518の「[ポリシーへのバックアップテンプレートの追加](#)」を参照してください。

合成バックアップを含むポリシーでは、増分バックアップジョブを作成するバックアップテンプレートに、バックアップ先デバイスとしてディスクへのバックアップフォルダを使用する必要があります。

- 次のいずれかを実行します。

- 手順5でベースラインバックアップ用にオプションの完全バックアップテンプレートを追加した場合は、次の手順に進み、増分バックアップジョブ用のバックアップテンプレートを作成します。

- 繰り返し実行される増分バックアップテンプレートを追加した場合は、手順18に進み、合成バックアップテンプレートを追加します。

- 13 [新規ポリシー]ダイアログボックスで[新規テンプレート]をクリックし、[テンプレートの選択]ダイアログボックスで[バックアップテンプレート]を再度選択して[OK]をクリックします。
- 14 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックし、バックアップ方式として[増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットする)]を選択します。
- 15 [合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する]オプションを選択します。
- 16 (必要な場合のみ)[Microsoft 変更ジャーナルを使用する]オプションを選択します。
 p.265の「[Windows NTFS 変更ジャーナルによるファイル変更の判定について](#)」を参照してください。
- 17 [実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。
 p.520の「[テンプレートの\[スケジュール\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 18 その他の必要なオプションを選択し、[OK]をクリックします。
 p.518の「[ポリシーへのバックアップテンプレートの追加](#)」を参照してください。
 合成バックアップを含むポリシーでは、増分バックアップジョブを作成するバックアップテンプレートに、バックアップ先デバイスとしてディスクへのバックアップフォルダを使用する必要があります。
- 19 [新規ポリシー]ダイアログボックスで[新規テンプレート]をクリックし、[合成バックアップテンプレート]を選択して[OK]をクリックします。
- 20 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスとメディア]を選択し、必要なオプションを設定します。
 p.324の「[バックアップジョブおよびテンプレートの\[デバイスとメディア\]オプション](#)」を参照してください。
- 21 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックし、必要なオプションを設定します。
 p.897の「[合成バックアップテンプレートの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 22 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックし、必要なオプションを設定します。
 p.897の「[合成バックアップテンプレートの\[詳細\]オプション](#)」を参照してください。
- 23 バックアップジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
 p.669の「[ジョブが完了したときの通知の送信](#)」を参照してください。
- 24 次のいずれかまたは両方を実行します。

- スケジュールオプションを設定する
p.520 の「[テンプレートの\[スケジュール\]プロパティ](#)」を参照してください。
- テンプレートルールを作成する
p.896 の「[合成バックアップのためのジョブテンプレートを実行するテンプレートルール](#)の作成」を参照してください。

合成バックアップのためのジョブテンプレートを実行するテンプレートルールの作成

正しい順序で合成バックアップのためのジョブを実行するテンプレートルールを設定します。

合成バックアップのためのジョブテンプレートを実行するテンプレートルールを作成する方法

- 1 テンプレートルールに関するマニュアルを確認します。
p.530 の「[テンプレートルールの設定](#)」を参照してください。
- 2 [新規ポリシー]ダイアログボックスの[テンプレートルール]の下にある[新規ルール]をクリックします。
- 3 [テンプレートルールのプロパティ]ダイアログボックスで、テンプレートルールのドロップダウンメニューをクリックし、次のいずれかを実行します。
 - ベースラインバックアップとして完全バックアップジョブを使用するバックアップテンプレートを作成した場合は、[<テンプレート A> を 1 回だけ実行します。]を選択します。[テンプレート A]ドロップダウンメニューをクリックし、ベースラインバックアップとして実行するテンプレートの名前を選択してから、[OK]をクリックします。
 - ベースラインバックアップとして繰り返し実行される増分バックアップジョブを使用するバックアップテンプレートを作成した場合は、手順 5 に進みます。
- 4 [新規ルール]を再度クリックし、別のルールを追加します。
- 5 [テンプレートルールのプロパティ]ダイアログボックスで、テンプレートルールのドロップダウンメニューをクリックし、[他のテンプレートを開始する前に、<テンプレート A> を少なくとも 1 回完了させる必要があります。]を選択します。
- 6 [テンプレート A]ドロップダウンメニューをクリックし、ベースラインバックアップのテンプレート名を選択してから、[OK]をクリックします。
- 7 [新規ルール]を再度クリックし、別のルールを追加します。
- 8 [テンプレートルールのプロパティ]ダイアログボックスで、テンプレートルールのドロップダウンメニューをクリックし、[開始時刻の競合が発生すると <テンプレート A> が開始され、その完了後に <テンプレート B> が開始されます。]を選択します。
- 9 [テンプレート A]リストをクリックし、増分バックアップのテンプレート名を選択します。

- 10 [テンプレート B] リストをクリックし、合成バックアップのテンプレート名を選択して、[OK] をクリックします。
- 11 [新規ポリシー] ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。
p.893 の「[ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成](#)」を参照してください。

合成バックアップテンプレートの[一般]オプション

合成バックアップテンプレートの[一般]オプションはジョブテンプレートについての情報を提供します。

p.893 の「[ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成](#)」を参照してください。

表 B-1 合成バックアップテンプレートの[一般]オプション

項目	説明
テンプレート名	このジョブテンプレートの名前が表示されます。
バックアップセットの説明	バックアップする情報についての説明が表示されます。
ソースデバイス	元のバックアップジョブのバックアップ先デバイスとして使用するデバイスが表示されます。

合成バックアップテンプレートの[詳細]オプション

合成バックアップのテンプレートのための[詳細]オプションはジョブの検証操作と圧縮の種類についての情報を提供します。

p.893 の「[ポリシーへのテンプレートの追加による合成バックアップの作成](#)」を参照してください。

表 B-2 合成バックアップテンプレートの[詳細]オプション

項目	説明
ジョブの完了後に検証する	バックアップ完了後に、メディアからデータを読み取り可能かどうかを確認するために、Backup Exec による自動的な検証の実行を可能にします。すべてのバックアップで検証を行うことをお勧めします。

項目	説明
圧縮の種類	<p>次のいずれかが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし このオプションでは、データが元の形式でメディアにコピーされます。データがソフトウェア圧縮を使用してバックアップされている場合、ソフトウェア圧縮形式でコピーされます。ただし、データ圧縮を使用した方が、バックアップに必要なストレージメディアの容量を節約することができます。ハードウェアによるデータ圧縮は、ハードウェア圧縮機能をサポートしているデバイスとハードウェア圧縮機能をサポートしていないデバイスが混在する環境では使用できません。また、ハードウェア圧縮をサポートしているドライブに障害が発生した場合は、圧縮したメディアを非圧縮ドライブでリストアすることはできません。 ■ ハードウェア (無効な場合、なし) このオプションでは、ストレージデバイスがハードウェア圧縮をサポートしている場合にハードウェアによるデータ圧縮が使用されます。ドライブにデータ圧縮機能がない場合は、データは圧縮なしでバックアップされません。

True Image Restore について

True Image Restore では、ディレクトリの内容を完全バックアップまたは増分バックアップの実行時の状態にリストアすることができます。バックアップセットでリストアする内容は、特定のバックアップ時点で存在していたディレクトリから選択されます。バックアップの時点において削除されていたファイルはリストアされません。True Image Restore では、適切な完全バックアップまたは増分バックアップに含まれる正しいバージョンのファイルのみがリストアされます。以前のバージョンは不必要にリストアされず、上書きされます。

True Image Restore に対して有効なバックアップセットからリストアする場合、前の完全バックアップから手動で選択した後に増分バックアップを1つずつ選択するという必要はありません。必要なファイルは、適切なバックアップから自動的に選択されます。

Backup Exec による True Image Restore 情報の収集は、オプションを有効にした後のポリシーを使用して実行される次の完全バックアップまたは増分バックアップから開始されます。True Image Restore 情報は、ファイルが実際に変更されたかどうかに関係なく収集されます。

True Image Restore では、移動、名前変更および tar または zip アーカイブからの新規追加が行われたファイルおよびディレクトリの検出に必要な情報も収集されます。これらのファイルおよびディレクトリは、このポリシーの True Image Restore 増分バックアップに含まれます。ファイルのパッケージ化の方法および追加方法によっては、新しく追加されたファイルの通常の増分バックアップが実行されない場合があります。True Image Restore を有効にすると、パス名が、前回の完全バックアップまたは増分バックアップの

パス名と比較されます。名前が新しいか、または変更されている場合、ファイルまたはディレクトリがバックアップされます。

True Image Restore を使用してファイルをバックアップする例を次に示します。**True Image Restore** を使用しない場合、これらのファイルはバックアップされません。

- **C:\pub\doc** という名前のファイルを、**C:\spec\doc** に移動するか、または追加します。この場合、**C:\pub\doc** およびそのディレクトリ内のサブディレクトリのアーカイブビットは変わりませんが、これは **C:\spec** ディレクトリ内では新しいファイルであるため、バックアップが行われます。
- **C:\security\dev** というディレクトリ名を **C:\security\devices** に変更します。この場合、**C:\security\devices** およびそのディレクトリ内のサブディレクトリのアーカイブビットは変わりませんが、これは新しいディレクトリであるため、バックアップが行われます。

次の表に、2009年12月1日から2009年12月4日に実行された一連のバックアップにおいて、**C:\user\doc** ディレクトリ内でバックアップされたファイルを示します。

表 B-3 True Image Restore が有効になっている場合にバックアップされるファイルの例

日	バックアップの種類	バックアップされる C:\user\doc のファイル	バックアップされる C:\user\doc のファイル	バックアップされる C:\user\doc のファイル	バックアップされる C:\user\doc のファイル	バックアップされる C:\user\doc のファイル	バックアップされる C:\user\doc のファイル
2009年12月1日	完全	file1	file2	dirA\fileA	dirB\fileB	file3	
2009年12月2日	増分	file1	file2	dirA\fileA	-----	-----	
2009年12月3日	増分	file1	file2	dirA\fileA	-----	-----	
2009年12月4日	増分	file1	file2	-----	-----	-----	file4

メモ: 破線 (-----) は、そのファイルがこのバックアップより前に削除されたことを意味します。

C:\user\doc ディレクトリの 2009年12月4日バージョンのリストアを行うと想定します。

完全バックアップの通常のリストアを行ってから後続の増分バックアップセットの通常のリストアを行った場合、リストア後のディレクトリには、2009年12月1日(最後の完全バックアップ)から2009年12月4日の間に **C:\user\doc** 内に存在していたすべてのファイルおよびディレクトリが含まれます。

たとえば、次のファイルとディレクトリが含まれます。

- file1
- file2
- dirA¥fileA
- dirB¥fileB
- file3
- file4

2009年12月4日のバックアップの **True Image Restore** を行った場合、リストア後のディレクトリには、2009年12月4日の増分バックアップ実行時に存在していたファイルおよびディレクトリだけが含まれます。

次のリストに、存在していたファイルとディレクトリを示します。

- file1
- file2
- file4

2009年12月4日の増分バックアップより前に削除されたファイルはいずれもリストアされません。

サブディレクトリ **dirA** は、2009年12月4日にバックアップが行われていますが、リストア後のディレクトリには含まれていません。これらのディレクトリは、**True Image Restore** で参照されている増分バックアップの実行時に存在していないため、リストアされません。

True Image Restore を完了すると、現在はそのディレクトリ内に存在し、バックアップ実行時には存在しなかったファイルは保持されます。2009年12月4日に増分バックアップが実行されてからリストアが行われるまでの間に **file5** というファイルが作成されたと想定します。

この場合、リストア後のディレクトリには次のファイルが含まれます。

- file1
- file2
- file4
- file5

p.889の「[合成バックアップと True Image Restore の追加情報の収集について](#)」を参照してください。

p.901の「[True Image Restore に関する推奨事項](#)」を参照してください。

p.902の「[True Image カタログについて](#)」を参照してください。

p.903の「[True Image Restore に対して有効なバックアップセットのリストアについて](#)」を参照してください。

p.904 の「[True Image Restore のトラブルシューティングのヒント](#)」を参照してください。

True Image Restore の必要条件

以下は TIR (True Image Restore) のための必要条件です。

- Backup Exec は、メディアサーバーにインストールする必要があります。
- Backup Exec Remote Agent for Windows Systems か Remote Agent for Linux or UNIX Servers はバックアップするあらゆるリモートコンピュータにインストールされていなければなりません。
- Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) は、メディアサーバーにインストールする必要があります。
- バックアップセットは、[合成バックアップおよび **True Image Restore** の追加情報を収集する]オプションが選択されている完全ジョブテンプレートおよび増分ジョブテンプレートが含まれるポリシーを使用して作成する必要があります。

次のリソースのみをバックアップするのに TIR (True Image Restore) を使うことができません。

- ファイルシステムのデータ。
- Windows のシステム状態。

p.889 の「[合成バックアップと True Image Restore の追加情報の収集について](#)」を参照してください。

p.902 の「[True Image カタログについて](#)」を参照してください。

p.903 の「[True Image Restore に対して有効なバックアップセットのリストアについて](#)」を参照してください。

p.904 の「[True Image Restore のトラブルシューティングのヒント](#)」を参照してください。

True Image Restore に関する推奨事項

次の推奨事項は TIR (True Image Restore) のためのものです。

- バックアップテンプレートを作成するときはオプション[Microsoft 変更ジャーナルを使用する]を選択せず、ボリュームに次がある場合はオプション[合成バックアップおよび **True Image Restore** の追加情報を収集する]を選択します。
 - 多くのハードリンク。
 - 有効な Single Instance Storage。
 - Linkd.exe を使って作成された接合点。
- 完全バックアップ間に多数の増分バックアップを作成することは避けてください。
- 週次で合成完全バックアップまたは通常の完全バックアップを実行します。

p.898 の「[True Image Restore について](#)」を参照してください。

p.904 の「[True Image Restore のトラブルシューティングのヒント](#)」を参照してください。

TIR (True Image Restore) に対するバックアップの有効化

TIR (True Image Restore) に対してバックアップを有効にできます。

メモ: Central Admin Server Option (CASO) がインストールされている場合は、[合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する]オプションが選択されている完全バックアップおよび増分バックアップが、同じメディアサーバーからアクセスできるデバイスに送信されます。完全バックアップおよび増分バックアップを同じメディアサーバーからアクセスできるデバイスに送信できない場合は、ポリシーを作成できません。ポリシーを変更して再度サブミットする必要があります。また、True Image Restore 操作は、選択したバックアップセットが含まれるデバイスへのアクセス権を持つメディアサーバーに委任されます。

メモ: 少なくとも週次完全バックアップと日次増分バックアップが指定されたポリシーを設定することをお勧めします。必要に応じて、他のテンプレートを追加することもできます。

p.888 の「[合成バックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。

TIR (True Image Restore) に対するバックアップの有効化

- 1 毎週または毎月の完全バックアップと日次増分バックアップのためのテンプレートを含んでいるポリシーを作成します。
p.511 の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。
- 2 各テンプレートのバックアッププロパティで、[設定]の下にある[一般]をクリックします。
- 3 [合成バックアップおよび True Image Restore の追加情報を収集する]を選択します。

True Image カタログについて

カタログには、バックアップジョブでバックアップされ、そのジョブから作成されたバックアップセットに含まれるオブジェクトに関する情報が含まれます。増分バックアップの True Image カタログには、バックアップジョブを実行した時点でボリュームに存在したファイルおよびディレクトリのうち選択したものと、オブジェクトの最新のバックアップに関する追加情報が含まれます。この追加情報によって、増分バックアップジョブによって変更

されたファイルのみがバックアップされた場合でも、バックアップジョブが実行された時点のボリューム全体の True Image が作成されます。また、True Image カタログは削除したファイルを追跡するため、増分バックアップより前に削除されたファイルはリストアされません。

注意: True Image カタログを削除すると、そのカタログに含まれるバックアップセットに対して True Image Restore を実行できなくなります。

p.889の「[合成バックアップと True Image Restore の追加情報の収集について](#)」を参照してください。

p.898の「[True Image Restore について](#)」を参照してください。

p.904の「[True Image Restore のトラブルシューティングのヒント](#)」を参照してください。

True Image Restore に対して有効なバックアップセットのリストアについて

True Image Restore に対してバックアップセットを有効にすると、リストアする内容を、選択したバックアップの時点で存在していたボリュームから選択できます。

また重複したバックアップセットから TIR (True Image Restore) の選択項目を選ぶこともできます。その後、ディスク上のバックアップセットが利用できなくなった場合、テープ上の重複したバックアップセットから True Image Restore 選択項目を選択することができます。Backup Exec は利用可能な複製バックアップセットのうち、最適なバックアップセットを自動的に選択します。

Backup Exec は最適な重複したバックアップセットを選ぶのに次の順序を使います。

- ディスクへのバックアップフォルダにあるバックアップセット。
- ドライブのテープにあるバックアップセット。またはロボットライブラリのスロットにあるバックアップセット。
- その他の既知の複製コピー

メモ: True Image Restore では、Backup Exec バージョン 12.5 以降によって作成されたバックアップセットのみがサポートされます。以前のバージョンの Remote Agent を使用している場合は、リストアするバックアップセットを True Image ビューから選択できますが、リストア操作では従来のバックアップセットのリストアが実行されます。リストア操作は前回の完全バックアップから開始され、続けて選択したバックアップセットの増分バックアップが処理されます。削除されたファイルおよび名前が変更されたファイルもリストアされます。ジョブログ内のメッセージに、True Image Restore は実行されず、すべての適切なバックアップセットが自動的に選択されたことが表示されます。

True Image のバックアップセットは、固有のアイコンで表されます。バックアップの実行時に True Image の各バックアップセットがディスク上に表示され、選択リスト全体が表示されます。アイコンの違いによって、表示されているバックアップジョブでバックアップされたオブジェクトと前回のバックアップでバックアップされたオブジェクトが区別されます。

次の URL に表示される True Image Restore アイコンのリストを確認できます：

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-12>

p.904 の「[TIR \(True Image Restore\) に対して有効なバックアップセットの選択](#)」を参照してください。

p.898 の「[True Image Restore について](#)」を参照してください。

p.901 の「[True Image Restore の必要条件](#)」を参照してください。

p.902 の「[True Image カタログについて](#)」を参照してください。

p.536 の「[バックアップセットの複製テンプレートについて](#)」を参照してください。

TIR (True Image Restore) に対して有効なバックアップセットの選択

TIR (True Image Restore) に対して有効なバックアップセットを表示するか、または選択できます。

TIR (True Image Restore) に対して有効なバックアップセットの選択

- 1 ナビゲーションバーの[リストA]をクリックします。
- 2 [リソース別の表示]をクリックします。
- 3 [True Image]とラベル付けされているバックアップセットを表示するか、または選択します。

[メディア別の表示]タブで true image バックアップセットを選択すると、そのセットが True Image のバックアップセットであっても、True Image の機能を使用せずにリストAされます。

True Image Restore のトラブルシューティングのヒント

通常のリストアジョブで発生する可能性のあるエラーは、True Image Restore ジョブでも発生する可能性があります。True Image のバックアップセットをリストAできない場合は、[メディア別の表示]タブの個々のバックアップセットからリストAを試みてください。

p.904 の「[TIR \(True Image Restore\) に対して有効なバックアップセットの選択](#)」を参照してください。

トラブルシューティングのヒントを次の表に示します。

表 B-4 True Image Restore 操作のトラブルシューティングのヒント

問題	説明
ジョブが失敗して「カタログ情報の取得中にエラーが発生しました。」というエラーが表示される	多くの場合、1 つ以上の前回のカタログが存在しません。 選択したセットのカタログが存在していても、前回のカタログがいくつか存在しない場合は、ジョブログを確認して、この特定のカタログエラーを検索してください。
[リソース別に表示]のリストア選択項目を展開して True Image Restore の選択項目を表示することができない	前回のカタログが消失している場合、リストア画面は展開できません。

p.898 の「[True Image Restore について](#)」を参照してください。

p.901 の「[True Image Restore の必要条件](#)」を参照してください。

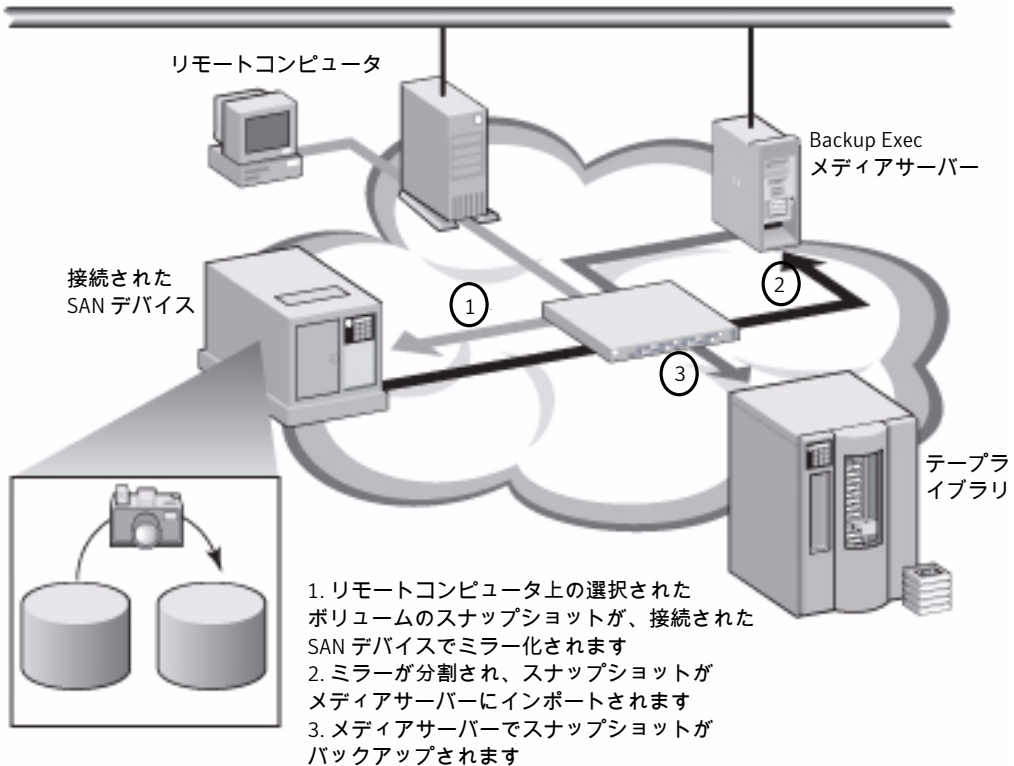
p.902 の「[True Image カタログについて](#)」を参照してください。

オフホストバックアップについて

オフホストバックアップを使用すると、ホストコンピュータ(バックアップ対象として選択されたボリュームが存在するリモートコンピュータ)から Backup Exec メディアサーバーへ、バックアップ処理を移動できます。オフホストバックアップでは、リモートコンピュータ上でバックアップ対象として選択されたボリュームのスナップショットが作成されます。その後、スナップショットがメディアサーバーにインポートされ、メディアサーバーでバックアップされます。

次の図に、オフホストバックアップの基本的な実行方法を示します。

図 B-4 オフホストバックアップ



バックアップ後、スナップショットはメディアサーバーからデポートされ、リモートコンピュータに再度マウントされてソースボリュームと再同期化されます。この処理には、トランスポートプラススナップショット(メディアサーバーに対してインポートおよびデポート可能なスナップショット)をサポートする、ハードウェアまたはソフトウェアの製造元提供のソリューションが必要です。オフホストバックアップの各ボリュームには、選択した **Microsoft** ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) プロバイダが使用されます。オフホストバックアップジョブは、一度に 1 つのリモートコンピュータ上で実行されます。

オフホストバックアップでは、次のものがサポートされています。

- Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS)
- Veritas Storage Foundation for Windows (VSWF)

- 完全、増分および差分バックアップ方式を使用する、NTFS ボリュームのバックアップ
- Microsoft SQL Server 2000 データベースの SQL Agent バックアップ
- Windows Server 2003 上で実行されている Microsoft Exchange Server 2003 (Service Pack 1)/ 2007 インスタンスの Exchange Agent バックアップ。Exchange Agent バックアップ用の Backup Exec Granular Recovery Technology を使用するオプションのサポートが含まれています。

Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) オフホストバックアップでは次がサポートされません。

- [チェックポイントから再開]オプション。
- Windows BitLocker ドライブ暗号化を実行するボリューム。
- 修正日時方式が選択されていない場合に、差分および増分バックアップ用の [Microsoft 変更ジャーナルを使用する]オプション。
- Symantec Continuous Protection Server (CPS) を使用するように設定されている Exchange Agent バックアップジョブ。

p.909 の「[Veritas Storage Foundation for Windows プロバイダを使用する場合のオフホストバックアップの必要条件](#)」を参照してください。

p.912 の「[バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。

p.916 の「[オフホストバックアップのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

p.911 の「[リモートコンピュータにインストールされているスナップショットプロバイダの参照](#)」を参照してください。

p.916 の「[オフホストバックアップデータのリストアについて](#)」を参照してください。

p.1109 の「[Exchange データのデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定](#)」を参照してください。

p.1092 の「[Granular Recovery Technology による Exchange インフォメーションストアとの連携](#)」を参照してください。

p.1227 の「[SQL Agent と ADBO の使用方法](#)」を参照してください。

オフホストバックアップの必要条件

オフホストバックアップの必要条件は次のとおりです。

表 B-5 オフホストバックアップの必要条件

項目	説明
メディアサーバー	<p>次のものをメディアサーバーにインストールする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Backup Exec ■ Advanced Disk-based Backup Option
リモートコンピュータ	<p>Backup Exec Remote Agent for Windows Systems をリモートコンピュータにインストールする必要があります。</p>
メディアサーバーとリモートコンピュータの両方	<p>次のものをメディアサーバーとリモートコンピュータの両方にインストールする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows Server 2003 (Service Pack 2) と最新のボリュームシャドウコピーサービス (VSS) パッチ、または Windows Server 2008 ■ 必要な Microsoft VSS のハードウェアスナップショットプロバイダまたはソフトウェアスナップショットプロバイダ。インストールされていない場合、ボリュームのスナップショットをメディアサーバーにデポートできません。 ■ メディアサーバーとリモートコンピュータ間で共有されるディスクへのアクセス機能
Exchange Server リソースの GRT 対応オフホストバックアップ	<p>次の必要条件を満たす必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows Server 2003 上で動作する Microsoft Exchange Server 2003 (Service Pack 1) または Exchange Server 2007 インスタンスが Exchange Server にインストールされている必要があります。 p.1081 の「Exchange Agent 使用上の必要条件」を参照してください。 ■ GRT 対応ジョブのデバイスの必要条件 p.308 の「Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス」を参照してください。 p.309 の「Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について」を参照してください。

p.806 の「[Microsoft Cluster Server フェールオーバーでの「チェックポイントから再開」機能の使用](#)」を参照してください。

p.905 の「[オフホストバックアップについて](#)」を参照してください。

p.909 の「[オフホストバックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。

p.916 の「[オフホストバックアップのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

p.911 の「[リモートコンピュータにインストールされているスナップショットプロバイダの参照](#)」を参照してください。

Veritas Storage Foundation for Windows プロバイダを使用する場合の オフホストバックアップの必要条件

Veritas Storage Foundation for Windows (VSW) FlashSnap Option プロバイダを使用する場合、オフホストバックアップを実行する前に次の必要条件を確認してください。

- VSW 4.2 以上が、メディアサーバー、およびバックアップするボリュームが存在するコンピュータにインストールされている必要があります。
- VSW FlashSnap Option が、バックアップするボリュームが存在するコンピュータにインストールされている必要があります。
- VSW FlashSnap のスナップスタートコマンドを使用して、リモートコンピュータ上のボリュームをミラー化します。オフホストバックアップオプションでは、ミラー化されたボリュームの作成や、すでに作成されて分割されているボリュームの再同期化は行われません。
p.931 の「[Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートの使用](#)」を参照してください。
- VSW FlashSnap Option で作成したミラー化されたボリュームが、リモートコンピュータ(バックアップ対象のボリュームが存在するコンピュータ)とメディアサーバー間で共有されているディスク上に存在することを確認してください。
- VSW FlashSnap プロバイダを使用してオフホストバックアップを実行するように選択したすべてのボリュームは、同じディスクグループに属する必要があります。1回にスナップ可能な最大ボリューム数は 7 です。
- VSW FlashSnap Option ではベーシックボリュームのスナップショットを実行できないため、同じオフホストバックアップジョブでダイナミックボリュームとベーシックボリュームを選択しないでください。VSW FlashSnap プロバイダが選択されている場合、ベーシックボリュームのバックアップには他のバックアップ方式を使用することをお勧めします。
- Central Admin Server Option および Veritas Cluster Server (VCS) がインストールされた環境にオフホストバックアップの対象となるコンピュータが存在する場合、VCS ノードへのフェールオーバーが発生すると、フェールオーバーノードでオフホストバックアップを再開する前に、スナップショットを手動でクリーンアップする必要がある場合があります。詳しくは Veritas Storage Foundation for Windows のマニュアルを参照してください。

p.916 の「[オフホストバックアップのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

p.911 の「[リモートコンピュータにインストールされているスナップショットプロバイダの参照](#)」を参照してください。

オフホストバックアップに関する推奨事項

次に推奨事項を示します。

- ソースボリュームとスナップ対象のボリュームが同じ物理ディスクを共有しないようにします。これに従わないと、スナップショットボリュームを元のボリュームから分割できません。
- 多くのハードウェアプロバイダおよびソフトウェアプロバイダには、転送可能なボリュームの種類に関する何らかの制限があります。そのため、オフホストバックアップジョブは、すべての依存ボリュームまたはマウントされるボリュームをインポートおよびデポート可能なデータのバックアップにのみ使用することをお勧めします。
- オフホストバックアップを使用して **Veritas Storage Foundation for Windows (VSWF)** ボリュームをバックアップする場合は、共有ストレージ内のスナップショットボリュームをホスト間で転送する必要があります。オフホストバックアップでバックアップされた **VSWF** ボリュームが、「プライベート保護」または「クラスタディスクグループ」ディスクグループプロパティを含む **VSWF** ディスクグループに存在していることを確認してください。ダイナミックディスクボリュームのプライベート保護およびクラスタディスクグループのプロパティ設定では、ハードウェアのロック技術を使用して、共有ストレージに存在するダイナミックディスクグループが、共有ストレージプールに接続された他のホストからアクセスされないようにします。
- バックアップ対象として選択したボリュームのいずれかが **Microsoft** ボリュームシャドウコピーサービス (**VSS**) プロバイダのみによってサポートされており、インポートまたはデポートできない場合、または必要な **VSS** ハードウェアプロバイダがシマンテック社認定の互換性リストに含まれていない場合、オフホストバックアップは失敗する場合があります。オフホストバックアップが失敗した場合でもバックアップを続行するように選択できます。
互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。
<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>
- 日立社の **RAID Manager** ログはスナップ対象のボリューム上に存在できません。日立社の **RAID Manager** は、スナップショットの作成中に **RAID Manager** ログファイルへの I/O を実行します。VSS コーディネータはスナップ対象のドライブへの I/O をブロックします。そのため、スナップ対象のボリューム上に **RAID Manager** のログディレクトリが存在すると、ログ I/O がブロックされ、スナップ処理がデッドロックされます。
- **Central Admin Server Option (CASO)** をインストールしている場合、オフホストバックアップを使用するジョブでは、集中管理サーバーによるジョブの委任を許可せずに、ジョブを実行するバックアップ先デバイスを手動で選択する必要があります。集中管理サーバーによるジョブの委任を許可すると、オフホスト機能がないメディアサーバーにジョブが委任される場合があります。
p.1503 の「**CASO** でメディアサーバープールを使う方法」を参照してください。
- **Microsoft Cluster Server (MSCS)** 環境または **Veritas Cluster Server** 環境で **VSS** ハードウェアプロバイダを使用してオフホストバックアップを実行する場合、メディアサーバーとリモートコンピュータは異なるクラスタグループに属する必要があります。クラスタアプリケーションでは、署名とパーティションレイアウトが重複したデバイスの

論理ユニット番号 (LUN) がサポートされないため、LUN を含むスナップショットは、クラスタ外のホストまたはリモートコンピュータに転送する必要があります。

p.798 の「[Backup Exec とサーバークラスタについて](#)」を参照してください。

p.905 の「[オフホストバックアップについて](#)」を参照してください。

p.907 の「[オフホストバックアップの必要条件](#)」を参照してください。

p.909 の「[Veritas Storage Foundation for Windows プロバイダを使用する場合のオフホストバックアップの必要条件](#)」を参照してください。

p.912 の「[バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。

p.911 の「[リモートコンピュータにインストールされているスナップショットプロバイダの参照](#)」を参照してください。

p.916 の「[オフホストバックアップのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

リモートコンピュータにインストールされているスナップショットプロバイダの参照

選択されたリソースに対してオフホストバックアップを実行する前に、リモートコンピュータにインストールされているスナップショットプロバイダを確認できます。

オフホストバックアップの作成時に選択した Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) のハードウェアプロバイダまたはソフトウェアプロバイダは、バックアップ対象のリモートコンピュータにもインストールされている必要があります。スナップショットプロバイダがリモートコンピュータにインストールされていない場合は、ボリュームのスナップショットをメディアサーバーにインポートできません。

リモートコンピュータにインストールされているスナップショットプロバイダを参照する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 バックアップ選択ペインで、次に示す順序で操作を実行します。
 - バックアップするボリュームを含むリモートコンピュータを右クリックします。

- [スナップショットプロバイダを一覧表示]をクリックします。
- 5 リモートコンピュータ上で利用可能なスナップショットプロバイダのリストが表示され
ます。
 - p.909の「[Veritas Storage Foundation for Windows](#) プロバイダを使用する場合
のオフホストバックアップの必要条件」を参照してください。
 - p.907の「[オフホストバックアップの必要条件](#)」を参照してください。
 - p.909の「[オフホストバックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。
 - p.912の「[バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定](#)」を参照して
ください。

バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定

オフホストバックアップオプションを個々のバックアップジョブに設定できます。

Exchange Server リソースの場合は、GRT 対応オフホストバックアップジョブを作成でき
ます。

p.915の「[Exchange](#)リソース用のGRT対応オフホストバックアップの設定」を参照して
ください。

メモ: Central Admin Server Option (CASO) をインストールしている場合は、集中管理
サーバーによるジョブの委任を許可しないでください。委任を許可すると、オフホスト機能
がないメディアサーバーにジョブが委任される場合があります。オフホストバックアップ方
式を使用するCASOジョブ用のバックアップ先デバイスは、手動で選択する必要があります。

p.1503の「[CASO](#)でメディアサーバープールを使う方法」を参照してください。

バックアップジョブにオフホストバックアップオプションを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Advanced Disk-based Backup]をクリック
します。
- 4 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

p.913の「[ADOB \(Advanced Disk-based Backup Option\)](#)のためのバックアップオ
プション」を参照してください。

ADOB (Advanced Disk-based Backup Option) のためのバックアップオプション

ADOB (Advanced Disk-based Backup Option) のためのバックアップオプションはオフホストバックアップジョブの設定に関する情報を提供します。

p.912の「バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定」を参照してください。

p.914の「オフホストバックアップジョブのデフォルトオプションの設定」を参照してください。

表 B-6 ADOB (Advanced Disk-based Backup Option) のためのバックアップオプション

項目	説明
オフホストバックアップを使用してリモートコンピュータからメディアサーバーへバックアップ処理を移動	<p>オフホストバックアップが有効かどうかを示します。単一のジョブに対して、またはすべてのバックアップジョブのデフォルトとしてこのオプションを有効にすると、すべての必要条件が満たされた場合にすべてのボリュームのオフホストバックアップが実行されます。</p> <p>p.905の「オフホストバックアップについて」を参照してください。</p>
スナップショットプロバイダ	<p>次のオプションが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 自動 - 可能であればハードウェアを使用、無効な場合はソフトウェアを使用 選択したボリュームに最適なプロバイダをVSSで選択できるようにするには、このオプションを選択します。 ■ ソフトウェア - Veritas Storage Foundation for Windowsを使用 ■ ハードウェア - ハードウェアメーカーが提供するテクノロジーを使用 <p>[ソフトウェア]または[ハードウェア]がスナップショットプロバイダである場合、次の情報が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ プロバイダで、転送可能なスナップショットがサポートされている必要があります。 ■ 複数のボリュームを選択する場合、すべてのボリュームのスナップショットが同じ種類のプロバイダで作成できる必要があります。 ■ ソフトウェアプロバイダとハードウェアプロバイダのいずれも、1つのジョブで複数のボリュームのスナップショットを作成するために使用することはできません。別のジョブを作成するか、[オフホストバックアップの論理ボリュームを1つずつ処理する]オプションが選択されていることを確認する必要があります。

項目	説明
バックアップジョブを続行する (オフホストバックアップは使用しない)	選択したいいずれかのボリュームでオフホストバックアップがサポートされていない場合や、スナップショットまたはボリュームのインポートに関連するエラーが発生した場合でも、バックアップジョブを完了することができます。バックアップは、そのジョブに対して設定された他のすべてのオプションに従って実行されます。
バックアップジョブを失敗させる (エラー発生後にバックアップを行わない)	選択したいいずれかのボリュームでオフホストバックアップがサポートされていない場合や、スナップショットまたはボリュームのインポートに関連するエラーが発生した場合に、オフホストバックアップジョブを終了します。
オフホストバックアップの論理ボリュームを1つずつ処理する	<p>1つのジョブで複数のボリュームをバックアップし、一度に1つだけの論理ボリュームのスナップショットを作成する場合に選択します。データベースの整合性を確保する場合、またはボリュームにマウントポイントが含まれる場合は、一度に複数のボリュームのスナップショットを作成する必要がある場合があります。</p> <p>1つの論理ボリュームのスナップショットが作成およびバックアップされ、削除された後で、次の論理ボリュームのスナップショットが作成されます。このオプションを選択すると、スナップショットの作成に必要な最小静止時間をより確実に達成することができます。</p> <p>複数の物理ボリュームを1つの論理ボリュームに構成することができます。1つの論理ボリュームに、データベースが存在するすべてのボリュームを含めることができます。</p>

オフホストバックアップジョブのデフォルトオプションの設定

すべてのバックアップジョブに使用されるデフォルトを設定できます。

メモ: Central Admin Server Option (CASO) をインストールしている場合は、集中管理サーバーによるジョブの委任を許可しないでください。委任を許可すると、オフホスト機能がないメディアサーバーにジョブが委任される場合があります。オフホストバックアップ方式を使用するCASOジョブ用のバックアップ先デバイスは、手動で選択する必要があります。

p.1503 の「CASO でメディアサーバープールを使う方法」を参照してください。

オフホストバックアップジョブのデフォルトオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Advanced Disk-based Backup]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

p.913の「[ADOB \(Advanced Disk-based Backup Option\) のためのバックアップオプション](#)」を参照してください。

Exchange リソース用の GRT 対応オフホストバックアップの設定

Exchange リソースのオフホストバックアップで、Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) オプションを有効にすることができます。バックアップに GRT オプションを選択すると、Backup Exec によってカタログの追加情報が収集されます。この情報によって、インフォメーションストアのバックアップから、個々のメールボックス、メールメッセージおよびパブリックフォルダをリストアすることができます。

オフホストバックアップは、Symantec Continuous Protection Server (CPS) を使用するように設定された Exchange Server バックアップジョブをサポートしていません。

オフホストバックアップを実行する前に、一貫性チェックを実行する必要があります。

Exchange リソース用の GRT 対応オフホストバックアップを設定する方法

- 1 Exchange バックアップジョブを作成します。
p.1116の「[Exchange 2003/2007 のバックアップについて](#)」を参照してください。
- 2 [Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT)] を使用して、インフォメーションストアのバックアップで個々のメールボックス、メールメッセージおよびパブリックフォルダのリストアを有効にする]をオンにします。
- 3 ファイルサイズの制限があるディスクへのバックアップフォルダにジョブを送る場合は、Backup Exec が C:\temp のデフォルトパスに一時メタデータをステー징できることを確認します。
p.375の「[バックアップオプションのデフォルト設定](#)」を参照してください。
- 4 オフホストバックアップオプションを設定します。
p.912の「[バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。

- 5 [自動 - 可能であればハードウェアを使用、無効な場合はソフトウェアを使用]を選択します。
ジョブの最終処置オプションは利用できません。
- 6 オフホストバックアップでサポートされないリソースを含める場合、[オフホストバックアップの論理ボリュームを1つずつ処理する]にチェックマークを付けて、エラーが発生してもジョブが完了するようにします。

オフホストバックアップデータのリストアについて

オフホストバックアップ方式でバックアップされたデータをリストアするには、標準のリストアジョブを使用します。データは、バックアップメディアからリモートコンピュータの元のボリュームに直接リストアされます。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

オフホストバックアップのトラブルシューティング

オフホストバックアップを実行するには、VSS プロバイダおよび転送されるボリュームが正しく設定されている必要があります。Advanced Disk-based Option では、すべてのアレイがサポートされているわけではありません。

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

オフホストバックアップに関する問題のトラブルシューティングを行う場合、VSS プロバイダのツールを使用して、オフホストバックアップ用に必要な設定を確認することをお勧めします。

設定の最小必要条件は次のとおりです。

- バックアップ対象のボリュームがスナップ可能であること
- ボリュームがリモートコンピュータとメディアサーバー間で共有されていること
たとえば、プロバイダとして Veritas Storage Foundation for Windows (VSWF) を使用している場合、Veritas Enterprise Administrator (VEA) を使用して、スナップ対象のボリュームを別のディスクグループ (DG) に分割し、その DG をリモートコンピュータからデポートしてメディアサーバーにインポートして、ボリュームのスナップショットを確認できます。すべてのプロバイダには、ボリュームのスナップショットを作成し、ボリュームをデポートおよびインポートするための、同様の管理コンソールまたはコマンドラインツールが提供されています。
- オフホストバックアップジョブには、バックアップのためにメディアサーバーに転送可能なボリュームのみを含めることができます。

p.907 の「[オフホストバックアップの必要条件](#)」を参照してください。

p.909の「[Veritas Storage Foundation for Windows プロバイダを使用する場合のオフホストバックアップの必要条件](#)」を参照してください。

次の必要条件にも注意してください。

- メディアサーバーとリモートコンピュータの両方に、**Microsoft Windows Server 2003 (Service Pack 1)** または **Windows Server 2008** がインストールされている必要があります。両方のコンピュータには、最新のボリュームシャドウコピーサービス (VSS) パッチが適用されている必要があります。
- **Microsoft XML Core Services (MSXML4)** が、メディアサーバーとリモートコンピュータの両方にインストールされ、実行されている必要があります。

オフホストバックアップの問題のトラブルシューティング方法は、スナップショット用に使用されるVSSプロバイダによって多少異なりますが、オフホストバックアップが失敗するプロバイダには、設定に関する次の共通の問題が存在します。

表 B-7 オフホストバックアップの共通の設定の問題

問題	解決策
ボリュームが共有されていません。	オフホストバックアップを実行するには、すべてのボリュームが、リモートコンピュータと Backup Exec メディアサーバー間で共有されているディスク上に存在する必要があります。バックアップ管理者は、このことを確認する必要があります。ボリュームが共有されていない場合、インポート操作が失敗し、スナップショットのクリーンアップおよびボリュームの再同期化を手動で実行することが必要となる場合があります。
VSS プロバイダがメディアサーバーとリモートコンピュータにインストールされていません。	スナップショット用に使用されるプロバイダは、メディアサーバーとリモートコンピュータの両方にインストールされている必要があります。プロバイダがメディアサーバーにインストールされていない場合、インポート操作が失敗し、スナップショットのクリーンアップおよびボリュームの再同期化を手動で実行することが必要となる場合があります。
転送可能でないボリュームが存在します。	バックアップ対象として選択されたすべてのボリュームは、メディアサーバーに転送可能である必要があります。 Microsoft SQL や Exchange 、または他のデータベースアプリケーションをバックアップ対象として選択した場合は、データベースおよびログファイルが転送可能なボリューム上に存在することを確認してください。

問題	解決策
<p>VSS プロバイダが、選択されたボリュームの一部をスナップできません。</p>	<p>バックアップ対象として選択されたすべてのボリュームは、転送可能であることに加えて、同じプロバイダによってスナップ可能である必要があります。バックアップ管理者は、バックアップジョブのすべてのボリュームが同じ VSS プロバイダによってサポートされていることを確認する必要があります。</p>
<p>ログのパスの場所が不正です。</p>	<p>通常のスナップショット操作時にプロバイダまたはプロバイダがサポートするアプリケーションによって作成されるログファイルは、スナップ対象のボリューム上に存在できません。ログファイルがスナップ対象のボリューム上に存在すると、VSS が書き込みバッファを消去できないため、スナップショットがタイムアウトします。ログのパスを別のボリュームに変更します。</p>
<p>プロバイダサービスまたは VSS サービスが起動されません。</p>	<p>プロバイダサービスが実行していること、および Microsoft Windows のボリュームシャドウコピーサービスが有効になっていることを確認します。</p>
<p>クレデンシャルに必要な権限がありません。</p>	<p>ジョブで使用されるマシンレベルのクレデンシャルが、メディアサーバーとリモートコンピュータの両方で一致していることを確認します。クレデンシャルが正しくない場合、スナップショットまたはバックアップが失敗する場合があります。</p>
<p>VSS プロバイダが Central Admin Server Option (CASO) 環境の一部のメディアサーバーにインストールされていません。</p>	<p>CASO 環境でバックアップジョブを設定している場合、集中管理サーバーによるジョブの委任を許可せずに、選択した VSS プロバイダがインストールされているメディアサーバーにジョブを指定する必要があります。集中管理サーバーによるジョブの委任を許可すると、オフホスト機能がないメディアサーバーにジョブが委任される場合があります。</p> <p>p.1503 の「CASO でメディアサーバープールを使う方法」を参照してください。</p>

問題	解決策
<p>メディアサーバーとリモートコンピュータが同じクラスタグループにあります。</p>	<p>Microsoft Cluster Server (MSCS) 環境または Veritas Cluster Server 環境でオフホストバックアップを実行する場合、メディアサーバーとリモートコンピュータは異なるクラスタグループに属する必要があります。クラスタアプリケーションでは、署名とパーティションレイアウトが重複したデバイスの論理ユニット番号 (LUN) がサポートされないため、LUN を含むスナップショットは、ホストクラスタが存在するクラスタ外のメディアサーバーに転送する必要があります。</p> <p>p.800 の「Microsoft Cluster Server 内での Backup Exec の動作」を参照してください。</p> <p>日立 SANRISE 9970V で、Microsoft Cluster Server (MSCS) のリソースを Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) を使用して保護する場合、次のエラーメッセージが表示される場合があります。</p> <p>ジョブは次のエラーのために失敗しました: ライター状態の照会でエラーが発生しました。</p> <p>この問題を修正するには、RM Shadow Copy Provider for Volume Snapshot Service が存在し、実行されていることを確認してください。サービスが実行されていない場合は、<code>c:\%horcm%tool</code> から <code>RMVSSPRV.exe</code> を実行してください。それでもなお、サービスが実行されない場合は、日立社のサポート窓口に連絡してください。</p>

プロバイダとして VSWF を使用している場合のオフホストバックアップの失敗

Veritas Storage Foundation for Windows (VSWF) ソフトウェアプロバイダを使用している場合、スナップショットおよびオフホストバックアップが失敗する最も一般的な原因は次のとおりです。

表 B-8 スナップショットのエラーとオフホストバックアップのエラーの共通の原因

問題	説明
<p>ボリュームにスナップスタートがありませんでした。</p>	<p>Backup Exec では、オフホストジョブを開始する前に、Veritas Enterprise Administrator 管理コンソールまたはコマンドラインインターフェースを使用して、すべてのボリュームのスナップを開始しておく必要があります。</p> <p>p.931 の「Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートの使用」を参照してください。</p> <p>以前のスナップショット操作でスナップをすでに開始している場合、ボリュームのスナップを別の物理ディスクに対して再度開始するか、または以前のスナップショットボリュームをスナップバックする必要があります。スナップバックの実行方法については、Veritas Storage Foundation for Windows ソフトウェアプロバイダのマニュアルを参照してください。</p>
<p>バックアップのために選択されているボリュームがベーシックボリュームです。</p>	<p>VSWF でスナップ可能なボリュームは、ダイナミックボリュームのみです。</p>
<p>バックアップのために選択されているボリュームが他のボリュームがあるディスクに存在します。</p>	<p>ディスクグループはデポートできません。</p>
<p>スナップショットボリュームとコピー元ボリュームが同じ物理ディスクを共有しています。</p>	<p>スナップショットボリュームとソースボリュームが同じ物理ディスクを共有している場合、スナップショットボリュームをソースボリュームから分割できません。管理者は、ソースボリュームとスナップボリュームが同じ物理ディスクを共有しないようにする必要があります。</p>
<p>VSWF バージョンがサポートされていません。</p>	<p>オフホストバックアップでは、VSWF バージョン 4.1 以上がリモートコンピュータとメディアサーバーの両方にインストールされている必要があります。以前のリリースはサポートされていません。メディアサーバーとリモートコンピュータの両方に、互換性のあるバージョンの VSWF ソフトウェアが存在する必要があります。両方のコンピュータに同じバージョンの VSWF をインストールすることをお勧めします。</p>

問題	説明
<p>同じオフホストバックアップジョブのために複数のディスクグループが選択されています。</p>	<p>バックアップ対象として指定されたすべてのダイナミックボリュームは、同じディスクグループ (DG) に属する必要があります。同じオフホストジョブで複数のディスクグループを使用することはできません。</p>
<p>8 つ以上のボリュームがスナップショット操作のために選択されています。</p>	<p>1 回のスナップショット操作のボリューム数が 7 を超えないようにします。8 以上のボリュームがインストールされている場合、10 秒 (VSS でのスナップショット完了までのタイムアウト期間) 以内にすべてのボリュームをスナップできず、スナップショットが失敗します。</p>
<p>ベーシックボリュームとダイナミックボリュームがオフホストバックアップジョブに対して選択されています。</p>	<p>ベーシックボリュームおよびダイナミックボリュームは、オフホスト機能を使用する 1 つのバックアップジョブ内で混在できません。この問題を回避するには、[オフホストバックアップの論理ボリュームを 1 つずつ処理する] オプションが選択されていることを確認してください。この制限は、ベーシックボリュームのマウントポイントにマウントされたダイナミックボリュームにも適用されます。</p>
<p>ダイナミックブートボリュームとシステムボリュームがオフホストバックアップジョブに対して選択されています。</p>	<p>動的ブートおよびシステムボリュームでは、互換性の問題のため、VSW FlashSnap 機能を使用できません。そのため、オフホストバックアップでは、動的ブートおよびシステムボリュームはサポートされていません。</p>

メモ: 多くの VSS プロバイダには、転送可能なボリュームの種類に関する何らかの制限があります。そのため、システムを完全に保護するためにオフホストバックアップジョブを使用しないことをお勧めします。オフホストバックアップジョブは、データが存在するすべての依存ボリュームが転送可能である場合にデータベースおよびログをバックアップするために使用することをお勧めします。オフホストバックアップでは、データボリュームとマウントポイントがあるボリュームの両方をスナップしてバックアップする必要があるため、データボリュームのマウントポイントをホストするために使用されるボリュームも、転送可能である必要があります。

ハードウェアプロバイダを使用している場合のオフホストバックアップの問題

ハードウェアディスクアレイの製造元は、VSS スナップショット、および SAN 環境でバックアップを行うためのメディアサーバーへのボリュームの転送をサポートしている場合があります。ハードウェアプロバイダを使用するには、SAN のリモートコンピュータとメディアサー

バー間で共有アクセスを行うようにディスクアレイを設定する方法について、よく理解している必要があります。

オフホストバックアップ用にディスクアレイを設定する方法については、ハードウェアディスクアレイのマニュアルを参照してください。特に、ディスクアレイを VSS スナップショットとともに使用する際の制限事項、およびボリュームが転送可能かどうかを確認する方法に注意してください。製造元から提供されているツールを使用して、設定の確認および問題のトラブルシューティングを行うことをお勧めします。

日立社のハードウェアを使用する場合に発生する可能性のあるオフホストバックアップの問題には次のようなものがあります。

表 B-9 **日立社のハードウェアを使用する場合のオフホストバックアップの問題**

問題	説明
日立社は、オフホストバックアップのベーシックディスクのみをサポートしています。	コンピュータでダイナミックディスクとベーシックディスクの組み合わせを使用している場合に日立社のプロバイダを使用すると、オフホストバックアップ機能を使用するシステムバックアップを完全に行うことはできません。
Veritas Cluster Server (VCS) は日立社のプロバイダでサポートされません。	日立社のプロバイダは、オフホストバックアップのダイナミックディスクをサポートしていません。

p.907 の「[オフホストバックアップの必要条件](#)」を参照してください。

p.909 の「[Veritas Storage Foundation for Windows プロバイダを使用する場合のオフホストバックアップの必要条件](#)」を参照してください。

p.888 の「[合成バックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。

Symantec Backup Exec Advanced Open File Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Advanced Open File Option](#) について
- [AOFO \(Advanced Open File Option\)](#) をインストールする方法
- [AOFO \(Advanced Open File Option\)](#) のデフォルトオプションの設定
- [バックアップジョブ用の AOFO \(Advanced Open File Option\)](#) の設定
- [ジョブログと AOFO \(Advanced Open File Option\)](#) について

Advanced Open File Option について

Symantec Backup Exec Advanced Open File Option (AOFO) は、オープンファイルおよびイメージに関する高度なテクノロジーの採用により、バックアップ実行中に開かれているファイルの保護の問題や、バックアップ可能時間帯が短くしか取れないなどのバックアップ時の問題を軽減します。

AOFOを選択してバックアップジョブをサブミットすると、各ボリュームのスナップショットが作成され、その時点でのデータが記録されます。スナップショットの作成時には、スナップショットテクノロジーによってボリュームへの書き込み操作が一時的に中断され、そのボリュームのスナップショットが作成されます。

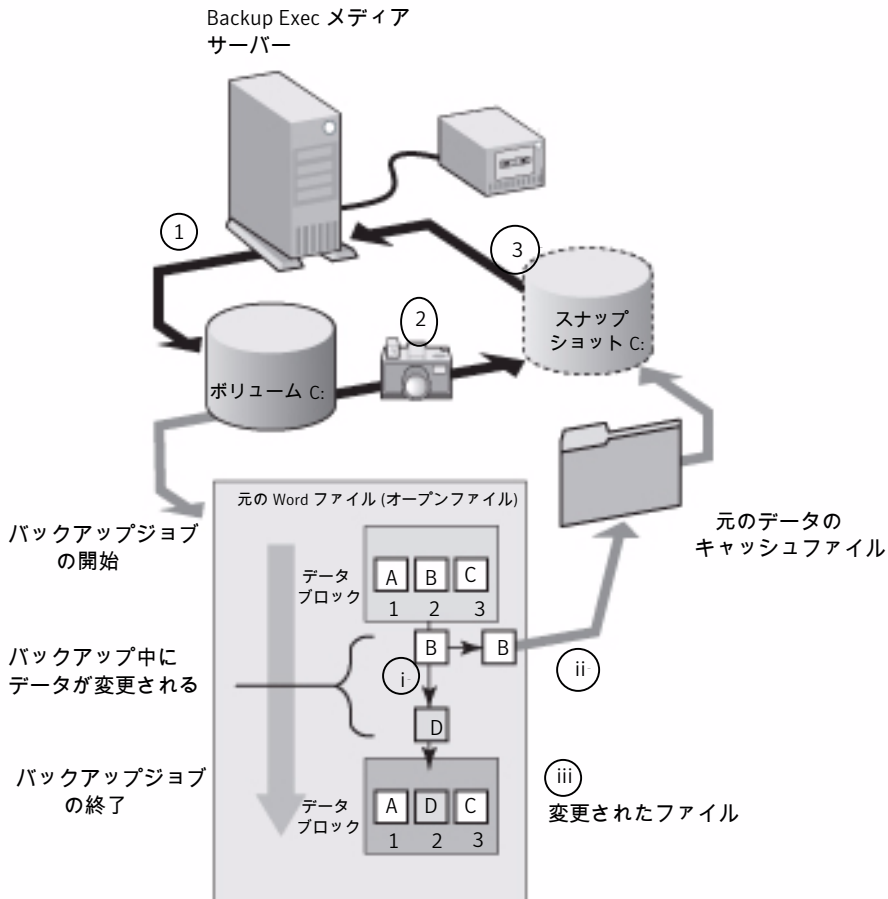
バックアップ対象として選択されたファイルが複数のボリューム上に存在する場合、デフォルトでは、バックアップするデータが格納されたボリュームごとに1つのスナップショットが作成されます。たとえば、バックアップするデータが1つのボリューム上に存在する場合は、スナップショットは1つ作成されます。バックアップするデータが4つのボリューム上に存在する場合は、スナップショットも4つ作成されます。スナップショットが作成されると、そのスナップショットからデータがバックアップされ、その後スナップショットは削除されます。

バックアップ中に、ファイルを開いたりデータを変更することができます。使用しているスナップショットプロバイダに応じて、オープンファイルは異なる方法で処理されます。

p.932の「Symantec Volume Snapshot Providerの使用に関する推奨事項」を参照してください。

次の図は、AOFOの動作を示します。

図 C-1 Advanced Open File Option と Symantec Snapshot Provider



図の説明を次に示します。

1. AOFOを使用して、Windows サーバー上のボリューム C のバックアップが開始されます。
2. ボリューム C のスナップショットが作成され、その時点でのデータが記録されます。
3. スナップショットの作成後、バックアップジョブが開始され、ボリューム C のデータがテープに書き込まれます。

バックアップジョブの実行中に、ファイルを開いたりデータを変更することができます。AOFOを使用すると、キャッシュファイルと呼ばれる元のデータのコピーが作成され、データを変更することができます。キャッシュファイルの図に示すように、スナップショットによってデータの変更の追跡が行われます。

たとえば、Microsoft Word 文書ファイルなどのオープンファイルのデータ A、B および C が、ブロック 1、2 および 3 に格納されているとします。

- i. バックアップジョブの実行中に、ブロック 2 の B が D に変更されました。
- ii. ブロック 2 の元のデータがキャッシュファイルにコピーされます。この場合、B が元のデータです。
- iii. 変更されたファイルが最新のファイルです。

変更されたブロックのスナップショットを作成する際、変更されたブロックは、キャッシュファイルの元のデータに置き換えられます。スナップショットは、その時点でのデータを Backup Exec に送ります。送られたデータがテープまたはディスクに書き込まれます。

バックアップが完了すると、スナップショットは削除されます。

データベースのバックアップには、Backup Exec データベースエージェントを使用することをお勧めします。Backup Exec データベースエージェントを使用すると、データを選択してリストアしたり、データベースアプリケーションとの統合を強化できます。また、不完全なトランザクションのバックアップを防ぐことができます。複数のディスクボリュームにまたがるデータベースをバックアップすることも可能です。

Microsoft SQL Server または Microsoft Exchange Server のボリュームレベルのバックアップに AOFO を選択した場合、データベースエージェントを使用しないと、SQL データベースまたは Exchange データベースはバックアップから除外されます。

Oracle サーバーのバックアップに AOFO を選択した場合は、データベースが自動的にバックアップされます。データベースファイルの複製バックアップを回避するには、バックアップジョブからデータベースファイルを手動で除外します。

AOFO をデータベースと同じボリュームに使用して、他のアプリケーションに対するオープンファイルをサポートすることができます。AOFOを使用すると、Backup Exec エージェントを使用しない場合にフラットファイル全般を保護することができます。また、Microsoft Outlook PST ファイルを保護することができます。

AOFO は、Extensible Firmware Interface (EFI) システムパーティションのバックアップでは使用できません。

p.1080 の「[Backup Exec Exchange Agent について](#)」を参照してください。

p.1236 の「[SQL Server のバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。

p.1279 の「[Backup Exec Oracle Agent について](#)」を参照してください。

p.930 の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.932 の「[Symantec Volume Snapshot Provider の使用に関する推奨事項](#)」を参照してください。

サポート対象のスナップショットテクノロジーについて

Backup Exec でスナップショットテクノロジーを使用するには、Advanced Open File Option (AOFO) をインストールする必要があります。バックアップ選択項目を選択し、AOFO を選択したら、コンピュータにインストールされているスナップショットテクノロジーを使用するように Backup Exec を設定できます。

Backup Exec では、次のスナップショットテクノロジーがサポートされています。

表 C-1 サポートされているスナップショットテクノロジー

オペレーティングシステム	スナップショットテクノロジー
Windows 2000/XP 32ビット	Symantec Volume Snapshot Provider (VSP) Symantec Volume Snapshot Provider (VSP) は、AOFO をインストールするときにインストールされます。
Windows 2000/2003	Veritas Storage Foundation™ by Symantec (以前の Veritas Volume Manager (VM)) および FlashSnap Option
Windows Server 2003 以上	Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) サードパーティソフトウェア販売元からも、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービスと連携して動作するソフトウェアが販売されています。これらは「ライター」と呼ばれ、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービスによってボリュームのスナップショットがバックアップされる前に、コンピュータのメモリ内に存在するアプリケーションデータまたはオープンファイルのデータをフラッシュするために使用されます。VSS ライターについては、その製品に付属のマニュアルを参照してください。 Windows Vista か Server 2008 の場合、デフォルトでは VSS が常に使われます。 メモ: Active Directory を無効にした場合、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) は利用できません。VSS を必要とするジョブは失敗します。

p.930の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.931の「[Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートの使用](#)」を参照してください。

p.932の「[Symantec Volume Snapshot Provider の使用に関する推奨事項](#)」を参照してください。

p.932の「[Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルの場所について](#)」を参照してください。

Advanced Open File Option 使用上の必要条件

Advanced Open File Option (AOFO) を使用するコンピュータの必要条件を次に示します。

- AOFO をインストールする必要があります。
- バックアップジョブの実行時に変更されるデータをキャッシュに保存するのに十分な空きディスク容量が 1 つ以上のボリュームに存在する必要があります。
- ファイルシステムは、NTFS、FAT32 または FAT である必要があります。Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) を使用するには、少なくとも 1 つの NTFS パーティションが必要です。
- リモートコンピュータおよびローカルコンピュータを保護するには、Backup Exec Remote Agent for Windows Systems をインストールする必要があります。Remote Agent は、Backup Exec のインストール時に、デフォルトでメディアサーバーにインストールされます。AOFO をリモートコンピュータにインストールすると、Remote Agent が自動的にインストールされます。

メモ: AOFO は、CD-ROM、フロッピーディスクまたはリムーバブルディスクには使用できません。また、AOFO では、「チェックポイントから再開」機能はサポートされません。

p.808の「[「チェックポイントから再開」機能の有効化または無効化](#)」を参照してください。

Windows 2000 コンピュータで AOFO を使用して暗号化ファイルをバックアップする場合、スナップショットのドライブ文字が Windows エクスプローラおよび Backup Exec 管理コンソールに表示されます。このドライブ文字へのアクセスやバックアップは行わないでください。利用可能なドライブ文字がない場合、暗号化ファイルは元のボリュームからバックアップされ、ジョブは[成功 (例外処理あり)]としてログに記録されます。

p.923の「[Advanced Open File Option について](#)」を参照してください。

p.930の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.931 の「[Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートの使用](#)」を参照してください。

p.932 の「[Symantec Volume Snapshot Provider の使用に関する推奨事項](#)」を参照してください。

p.932 の「[Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルの場所について](#)」を参照してください。

AOFO (Advanced Open File Option) をインストールする方法

インストール時にメディアサーバーで Advanced Open File Option (AOFO) を選択します。Windows 2000/XP 32ビット用の AOFO のインストールが完了したら、インストールしたコンピュータを再ブートする必要があります。

AOFO は次の方法でインストールできます。

- ローカルメディアサーバーに AOFO をインストールする。
p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。
 - リモートメディアサーバーに AOFO をインストールする。
p.123 の「[リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO \(Advanced Open File Option\) のプッシュインストール](#)」を参照してください。
 - コマンドスクリプトを使用して Remote Agent および AOFO をインストールする。
p.138 の「[コマンドスクリプトを使用した Remote Agent および AOFO のインストール](#)」を参照してください。
 - Windows コマンドラインを使用してリモートサーバーで AOFO をインストールおよびアンインストールする。
p.928 の「[コマンドラインを使用したリモート Windows コンピュータへの Advanced Open File Option のインストール](#)」を参照してください。
- p.168 の「[以前のバージョンの Backup Exec のアップグレードについて](#)」を参照してください。

コマンドラインを使用したリモート Windows コンピュータへの Advanced Open File Option のインストール

Windows のコマンドラインを使用して、リモートコンピュータに Advanced Open File Option (AOFO) をサイレントモードでインストールすることができます。サイレントモードでは、ユーザーインターフェースを使用せずにインストール操作が実行されます。

AOFO のファイルは、リモートコンピュータの次のディレクトリにインストールされます。

¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥RAWS

AOFO のインストールログファイルは、次のディレクトリに作成されます。

¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥Symantec¥Backup Exec¥Logs¥rawsinst.htm

Windows 7、Windows Vista、Windows Server 2008 R2、Windows Server 2008 では、AOFO のインストールログファイルは次のディレクトリに作成されます。

¥ProgramData¥Symantec¥Backup Exec¥Logs¥rawsinst.htm

p.265 の「バックアップするデータの選択について」を参照してください。

AOFO をコマンドラインを使用してリモートコンピュータにインストールする方法

- 1 リモートサーバーに移動します。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - Backup Exec メディアサーバーにドライブ文字をマップし、ディレクトリを **Advanced Open File Option** のインストールディレクトリに変更します。デフォルトでは、次のパスにあります。

¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Agents
 - ローカルディレクトリに **RAWS32** と **MSXML** フォルダをコピーします。
- 3 コマンドプロンプトを開き、手順 2 でマップしたドライブ文字と次のパスを入力します。

¥RAWS32
- 4 次のいずれかを実行します。

アドバタイズを有効にせずに AOFO をインストールする方法 コマンドプロンプトに次の行を入力します。
setup.exe /AOFO:-s -boot

アドバタイズを有効にして AOFO をインストールする方法 コマンドプロンプトに次の行を入力します。
setup.exe /AOFO:-s /ADVRT:<media server name 1> <media server name 2>

-s パラメータは、ユーザーインターフェースを使用せずに、サイレントモードでインストールを実行するために使用します。

-boot パラメータは、コンピュータを自動的に再起動するスイッチです。コンピュータを自動的に再起動する場合は -boot パラメータを使用します。このパラメータを省略した場合は、**Advanced Open File Option** を使用するために手動でコンピュータを再起動する必要があります。

- 5 インストールが終了したら、**Advanced Open File Option** を使用するためにコンピュータを再起動します。

AOFO (Advanced Open File Option) のデフォルトオプションの設定

あらゆるバックアップジョブに AOFO (Advanced Open File Option) のデフォルトオプションを設定できます。

ジョブの完了後に、ジョブログ内の [バックアップ - セットの情報 - セットの詳細] というセクションを参照し、バックアップ中に AOFO が使用されたことを確認します。

p.934 の「[バックアップジョブ用の AOFO \(Advanced Open File Option\) の設定](#)」を参照してください。

p.932 の「[Symantec Volume Snapshot Provider の使用に関する推奨事項](#)」を参照してください。

AOFO のデフォルトオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの [オプション] をクリックします。
- 2 [プロパティ] ペインの [ジョブのデフォルト設定] の下にある [Advanced Open File] をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.935 の「[\[Advanced Open File\] オプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK] をクリックします。

Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートについて

Veritas Storage Foundation™ for Windows FlashSnap Option は、以前は Volume Manager (VM) と呼ばれていました。Veritas Storage Foundation for Windows FlashSnap Option を使用してボリュームをバックアップするには、Veritas Enterprise Administrator (VEA) を使用してボリュームのスナップスタートを実行する必要があります。VEA は別途購入する必要があります。

p.931 の「[Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートの使用](#)」を参照してください。

Central Admin Server Option および Veritas Cluster Server がインストールされたコンピュータで、Advanced Open File Option を使用したバックアップを行って、Veritas Cluster Server ノードへのフェールオーバーが発生した場合、フェールオーバーノードでバックアップを再開する前に、スナップショットを手動でクリーンアップする必要があります。詳しくは Veritas Storage Foundation for Windows のマニュアルを参照してください。

Veritas Storage Foundation for Windows FlashSnap Option を AOFO のバックアップに使用する場合、ボリュームのスナップバックは非同期で実行されます。その理由は、スナップバックに時間がかかるためです (所要時間は、スナップ対象のボリュームのサイ

ズおよびバックアップ中に加えられた変更によって異なります)。そうすることで、スナップバック操作が完了するまでジョブの完了を待機しなくても、(他のエラーが発生しなければ)ジョブを正常に完了させることができます。再同期が完了したかどうかは、Veritas Enterprise Administrator を使用して確認できます。

ごくまれに、スナップバックが失敗し、ミラーが破損するという結果になることがあります。この場合、同じボリュームに対して次回サブミットされる FlashSnap ジョブも失敗し、[ボリュームのスナップショットを作成できません]または[ボリュームで Snap Start コマンドが実行されていないか、ボリュームが動的ボリュームではありません]というメッセージが表示されることがあります。ジョブは[成功(例外処理あり)]としてログに記録されます。Veritas Enterprise Administrator を使用して、スナップバックが完了しなかった原因を確認し、エラーを修正してください。

Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートの使用

ボリュームの開始には、スナップスタートを使用できます。ボリュームのスナップスタートが必要なのは 1 回だけです。スナップスタート処理は、ミラーを作成するため、非常に時間がかかる場合があります。

スナップを開始したボリューム上の SQL または Exchange データベースをバックアップする場合は、Backup Exec SQL または Exchange データベースエージェントを使用して選択を行う必要があります。ボリュームレベルでデータベースまたはログを選択しないでください。

Veritas Storage Foundation ボリュームでスナップスタートを使用する方法

- 1 Veritas Enterprise Administrator を開きます。
- 2 左側のペインで、[localhost]オブジェクトを展開します。
- 3 [localhost]オブジェクトの下にある[ボリューム]オブジェクトを展開し、スナップを開始するボリュームを右クリックします。
- 4 ショートカットメニューの[スナップ]を選択し、[スナップスタート]を選択します。
- 5 [スナップスタートボリューム]画面で、[ディスクを自動的に選択する]または[ディスクを手動で選択する]を選択します。

[ディスクを自動的に選択する]を選択した場合は Veritas Storage Foundation によってディスクが選択され、[ディスクを手動で選択する]を選択した場合は手動でディスクを選択します。

- 6 [OK]をクリックして、ボリュームのスナップを開始します。

p.265 の「バックアップするデータの選択について」を参照してください。

p.1222 の「SQL Server のバックアップ戦略について」を参照してください。

p.1080 の「Backup Exec Exchange Agent について」を参照してください。

Symantec Volume Snapshot Provider の使用に関する推奨事項

このセクションでは、AOFO および Symantec Volume Snapshot Provider (VSP) を使用する際の推奨事項を示します。

- AOFO が 1 つのディスクを排他的に使用できることが理想的です。このディスクは、ユーザーデータが存在せず、バックアップの対象とならず、AOFO のキャッシュファイルの場所として指定されている必要があります。
- 変更されるデータをすべて格納できる空き領域がディスク上に存在することを確認します。変更されるデータには、ユーザーファイル、システムファイルおよび NTFS Master File Table (MFT) が含まれます。
- ウイルススキャンソフトウェアのリアルタイムスキャン対象からキャッシュファイルを除外します。AOFO を使用したバックアップ中は、通常のスキャン、またはスキャンディスクやデフラグなどのディスクユーティリティを実行しないでください。
- バックアップ処理中に VSP キャッシュファイルがディスク上で肥大化するのを防ぐため、次の操作は避けてください。
 - ディスクに大量のデータを書き込む。
 - ディスクに大量のデータをコピーする。
- ディスクへのバックアップフォルダは、バックアップ対象のディスクとは別の物理ディスク上に作成してください。たとえば、AOFO を使用してバックアップ中にボリュームをスナップする場合、バックアップ先デバイスがディスクへのバックアップフォルダであるときは、そのディスクへのバックアップフォルダは、スナップするボリュームとは別のボリュームに存在する必要があります。

p.923 の「[Advanced Open File Option について](#)」を参照してください。

p.927 の「[Advanced Open File Option 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

p.930 の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.934 の「[Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルをサイズ調整する方法](#)」を参照してください。

p.938 の「[ジョブログと AOFO \(Advanced Open File Option\) について](#)」を参照してください。

Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルの場所について

Symantec Volume Snapshot Provider (VSP) と AOFO を使用する場合、Backup Exec では、ディスク上にキャッシュファイルが作成され、スナップショット作成中にボリューム上のファイルに加えられた変更がそのキャッシュファイルに保存されます。バックアップに必要なキャッシュファイルのサイズと場所は、Backup Exec によって自動的に計算されます。

キャッシュファイルは、選択されたボリュームのルート内の[Backup Exec AOFO Store]という名前の隠しフォルダ内に作成されます。キャッシュファイルの拡張子は .vsp です。

Backup Exec では、次の要件に基づいて Symantec Volume Snapshot Provider (VSP) のキャッシュファイルが配置されます。

表 C-2 Backup Exec による VSP キャッシュファイルの配置

項目	説明	注意
AOFO ウィザードを使用してキャッシュファイルの場所を指定した場合	指定した場所が書き込み禁止でなく、スナップ対象であるリソースの一部でもない場合は、その場所が使用されます。	複数のソースボリューム (スナップ対象のボリューム) をスナップする場合、指定したボリューム上 (スナップ対象でない場合) に複数のキャッシュファイル (ソースボリュームごとに 1 つ) が作成されます。
キャッシュファイルの場所を指定していない場合	<p>Backup Exec によってソースボリューム以外のボリューム上へのキャッシュファイルの配置が試行されます。</p> <p>ソース以外のボリュームの条件が満たされていない場合、キャッシュファイルはソースボリューム上に作成されます。</p>	<p>これらのボリュームは、次の必要条件を満たしている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ボリュームが固定ドライブである。 ■ ボリュームで、認識可能なファイルシステム (FAT、FAT32 または NTFS) が使用されている。 ■ ボリュームがローカルにマウントされている。 ■ ボリュームが有効なキャッシュファイルの場所である。 <p>有効なキャッシュファイルの場所は、次の必要条件を満たしている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 現在実行中の別のジョブによってスナップショットの対象となっていない ■ 別のアクティブなキャッシュファイルが存在しない ■ 書き込み禁止または無効にされていない

p.923 の「[Advanced Open File Option について](#)」を参照してください。

p.926 の「[サポート対象のスナップショットテクノロジーについて](#)」を参照してください。

p.930 の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.938 の「[ジョブログと AOFO \(Advanced Open File Option\) について](#)」を参照してください。

Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルをサイズ調整する方法

[オープンファイルテクノロジーを自動的に選択する]オプションを指定して **Advanced Open File Option** を使用している場合、**Backup Exec** では、オープンファイルが検出されたときに使用されるテクノロジーとして **Symantec Volume Snapshot Provider** または **Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス** のいずれかが選択されます。どちらのプロバイダでも **Copy-on-Write** テクノロジーを使用してスナップショットを作成します。スナップショット自体は、仮想ボリュームとキャッシュファイルで構成されています。キャッシュファイルには、スナップショット作成後にスナップ対象のボリュームに加えられた変更が記録されます。このテクノロジーを使用すると、データの一貫性を確保しながら特定の時点のデータをバックアップすることができます。

キャッシュファイルの場所は、デフォルトでは、スナップ対象のボリュームの使用ディスク容量と他のボリュームの利用可能な空きディスク容量に基づいて **Backup Exec** によって決定されます。

キャッシュファイルのサイズは、スナップショットがアクティブである時間に基づいて大きくなります。また、スナップショットがアクティブである間にボリュームに対して行われるデータ変更の頻度にも応じて大きくなります。**Backup Exec** のデフォルトでは、キャッシュファイルの規定の最大サイズが設定されていますが、バックアップジョブの実行時にディスクへの書き込み量が多い場合、この最大サイズを上回る可能性があります。そのような場合、バックアップジョブは失敗します。これを回避するために、**Advanced Open File Option** ウィザードを使用して、**Advanced Open File Option** キャッシュファイルの最大サイズを増やすことができます。または、コンピュータの使用率が低い時間帯にバックアップジョブを実行して対処します。極端な場合、キャッシュファイルの最大サイズをスナップ対象のボリュームの使用済み領域と同じサイズにする必要があります。

また、ごくまれに、ウイルススキャンやディスクの断片化解消処理と同時にバックアップを実行すると、キャッシュサイズ不足のためにディスク容量が足りなくなることがあります。

キャッシュファイルのサイズを変更するには、**Advanced Open File Option** ウィザードを使用します。

p.930 の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.932 の「[Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルの場所について](#)」を参照してください。

バックアップジョブ用の AOFO (Advanced Open File Option) の設定

各バックアップジョブに AOFO (Advanced Open File Option) のオプションを設定できません。

AOFO バックアップジョブにオプションを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 バックアップするリソースを選択します。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Advanced Open File]をクリックします。
- 6 必要なオプションを選択します。
 p.935 の「[\[Advanced Open File\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 バックアップジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択します。

[Advanced Open File]オプション

Advanced Open File Option (AOFO) のための次のオプションを設定できます。

p.930 の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.934 の「[バックアップジョブ用の AOFO \(Advanced Open File Option\) の設定](#)」を参照してください。

表 C-3 [Advanced Open File]オプション

項目	説明
Advanced Open File Option を使用する	AOFO がバックアップジョブで有効かどうかを示します。 このオプションを選択しない場合、Advanced Open File Option のインストール前に保存したジョブでは、オープンファイルのバックアップには以前の設定が適用されます。

項目	説明
<p>オープンファイルテクノロジーを自動的に選択する</p>	<p>バックアップするデータの種類の最も適しているスナップショットの作成方法を Backup Exec で自動的に選択します。</p> <p>ただし、選択されたスナップショットの作成方法の必要条件が満たしていない場合、その作成方法が使用されない場合があります。バックアップ対象として選択したボリュームが、AOFO を使用するための必要条件を満たしていない場合、オープンファイルのバックアップオプションが適用されます ([バックアップしない]、[ファイルがクローズするのを待つ 待ち時間 30 秒]、[ファイルをロックしてバックアップする]、[ファイルをロックしないでバックアップする])。</p> <p>p.335 の「バックアップジョブの詳細オプション」を参照してください。</p> <p>AOFO および Microsoft VSS プロバイダを選択すると、Backup Exec では最初に利用可能なハードウェア、ソフトウェアまたはシステムプロバイダを使用して、スナップショットが実行されます。</p>
<p>Symantec Volume Snapshot Provider (Windows 2000 のみ)</p>	<p>Symantec Volume Snapshot Provider (VSP) がスナップショットプロバイダとして有効かどうかを示します。Windows 2000/XP 32 ビットがあるコンピュータでのみ VSP を使うことができます。</p> <p>VSP は、Backup Exec のスナップショット用のシマンテック社のテクノロジーです。VSP の設定に役立つ AOFO のウィザードを使うことができます。</p> <p>p.932 の「Symantec Volume Snapshot Provider の使用に関する推奨事項」を参照してください。</p>
<p>AOFO ウィザード</p>	<p>AOFO での使用のための Symantec Volume Snapshot Provider の設定に役立つウィザードを起動します。</p>
<p>Veritas Storage Foundation™ for Windows FlashSnap Option (Windows 2000/Windows Server 2003 のみ)</p>	<p>Veritas Storage Foundation™ がスナップショットプロバイダとして有効かどうかを示します。Windows 2000/2003 があるコンピュータでのみ Veritas Storage Foundation™ を使うことができます。</p> <p>p.930 の「Veritas Storage Foundation ボリュームでのスナップスタートについて」を参照してください。</p>

項目	説明
<p>Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (Windows Server 2003 以上)</p>	<p>Microsoft 社のテクノロジーを使用するスナップショットアドインを、他社のハードウェアおよびソフトウェア販売元が提供できます。</p> <p>Microsoft 社やサードパーティのソフトウェア販売元から、VSS と連携して動作するソフトウェアが販売されています。これらは「ライター」と呼ばれ、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービスによってボリュームのスナップショットがバックアップされる前に、コンピュータのメモリ内に存在するアプリケーションデータまたはオープンファイルのデータをフラッシュするために使用されます。</p> <p>VSS ライターについては、その製品に付属のマニュアルを参照してください。</p> <p>Active Directory を無効にした場合、Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) は利用できません。VSS を必要とするジョブは失敗します。</p>
<p>スナップショットプロバイダ</p>	<p>ジョブで使用するスナップショットプロバイダを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 自動 - VSS によってスナップショットプロバイダを自動で選択する 選択したボリュームに最適なプロバイダを VSS で選択できるようにするには、このオプションを選択します。スナップショットプロバイダは、ハードウェアプロバイダ、ソフトウェアプロバイダ、システムプロバイダの順に選択されます。 ■ システム - Microsoft Software Shadow Copy Provider を使用 ■ ソフトウェア - Veritas Storage Foundation for Windows を使用 ■ ハードウェア - ハードウェアメーカーが提供するテクノロジーを使用 <p>スナップショットプロバイダに[ソフトウェア]または[ハードウェア]を選択する場合、次の条件が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 複数のボリュームを選択する場合、すべてのボリュームのスナップショットが同じ種類のプロバイダで作成できる必要があります。 ■ ソフトウェアプロバイダとハードウェアプロバイダのいずれも、1 つのジョブで複数のボリュームのスナップショットを作成するために使用することはできません。別のジョブを作成するか、[バックアップの論理ボリュームを 1 つずつ処理する]オプションを選択する必要があります。

項目	説明
バックアップの論理ボリュームを1つずつ処理する	<p>1つのジョブで複数のボリュームをバックアップし、一度に1つだけの論理ボリュームのスナップショットを作成する場合に選択します。データベースの整合性を確保する場合、またはボリュームにマウントポイントが含まれる場合は、一度に複数のボリュームのスナップショットを作成する必要がある場合があります。他のボリュームへのマウントポイントが存在するボリュームは、スナップショットでは、論理ボリュームと見なされます。そのため、ボリュームおよびマウントポイントボリュームは、すべて同時にスナップされます。</p> <p>1つの論理ボリュームのスナップショットが作成およびバックアップされ、削除された後で、次の論理ボリュームのスナップショットが作成されます。このオプションを選択すると、スナップショットの作成に必要な最小静止時間をより確実に達成することができます。</p> <p>複数の物理ボリュームを1つの論理ボリュームに構成することができます。1つの論理ボリュームに、データベースが存在するすべてのボリュームを含めることができます。</p> <p>このオプションを選択しないバックアップジョブでは、すべてのボリュームのスナップショットが同時に作成されます。すべてのボリュームが最小静止時間を達成する必要があります。</p> <p>このオプションは、Symantec Volume Snapshot Provider (VSP) および Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) での論理ボリュームに対するジョブのみで利用可能です。</p> <p>VSSを使用して、シャドウコピーコンポーネントのスナップショットが作成されます。これは、ジョブログおよびジョブ履歴に記録されます。</p>

ジョブログと AOFO (Advanced Open File Option) について

Advanced Open File Option (AOFO) を使用してバックアップが正常に終了した場合は、その情報がジョブログに表示されます。ジョブログ中の[バックアップ - セットの情報 - セットの詳細]というセクションを参照し、バックアップ中にAOFOが使用されたことを確認します。バックアップに複数のボリュームが含まれている場合、この情報は、各ボリュームで繰り返されます。

AOFO の初期化に失敗した場合でもバックアップは続行されますが、ジョブログには[成功 (例外処理あり)]として記録されます。

デバイスのバックアップ時に AOFO の処理に失敗すると、そのバックアップセットは異常終了し、エラーが発生します。

メモ: Symantec Volume Snapshot Provider を使用するジョブが失敗した場合、アクティブなイメージがコンピュータに残ることがあります。アクティブなイメージによって、その後のジョブが不明なエラーで失敗することがあります。そのような場合には、コンピュータを再起動してアクティブなイメージをクリアしてください。

p.930 の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.932 の「[Symantec Volume Snapshot Provider の使用に関する推奨事項](#)」を参照してください。

p.932 の「[Symantec Volume Snapshot Provider のキャッシュファイルの場所について](#)」を参照してください。

Symantec Backup Exec Agent for DB2 on Windows Servers

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Backup Exec DB2 Agent](#) について
- [DB2 Agent](#) 使用上の必要条件
- [Windows コンピュータでの DB2 Agent](#) の設定
- [DB2 リソースのバックアップ](#)
- [DB2 データのリストア](#)
- [DB2 を使用した DBA 開始ジョブの実行について](#)
- [DB2 のトラブルシューティング](#)

Backup Exec DB2 Agent について

Symantec Backup Exec Agent for DB2 on Windows Servers (DB2 Agent) を使用すると、Microsoft Windows コンピュータ上の IBM DB2 データベースを保護することができます。

DB2 Agent では、次の機能を利用できます。

- 次のユーティリティからバックアップおよびリストア操作を開始できます。
 - Backup Exec。
 - IBM DB2 コントロールセンターまたはコマンドラインプロセッサ (データベース管理者 (DBA) として)。DBA によってコントロールセンターまたはコマンドラインプロ

セッサで行われる操作は、DBA 開始操作と呼ばれます。コントロールセンターまたはコマンドラインプロセスについて詳しくは IBM DB2 のマニュアルを参照してください。

- **USEREXIT** および **VENDOR** と呼ばれる DB2 ログアーカイブ方式がサポートされています。
- 複数のデータストリームのサポートにより、バックアップおよびリストア時のパフォーマンスを向上することができます。

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

メモ: Backup Exec では、64 ビットの Windows オペレーティングシステムで 32 ビットの Windows ベースのアプリケーションとして DB2 を実行することはできません。

Backup Exec では、IPv6 プロトコル上で実行される DB2 のバックアップジョブおよびリストアジョブはサポートされません。

p.942 の「[DB2 Agent 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

p.960 の「[DB2 を使用した DBA 開始ジョブの実行について](#)」を参照してください。

DB2 Agent 使用上の必要条件

DB2 Agent は、Backup Exec 2010 の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールします。

ローカルまたはリモートの DB2 インスタンスを保護するには、次の Backup Exec オプションをインストールする必要があります。

- メディアサーバーの Backup Exec DB2 Agent。
p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。
- リモートの Windows コンピュータの Backup Exec Remote Agent for Windows Systems。
p.129 の「[Remote Agent for Windows Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

必要なコンポーネントをインストールしたら、DB2 リソースをバックアップまたはリストアする前に、それらのコンポーネントを DB2 Agent 用に設定する必要があります。

次の手順を実行します。

- DB2 インスタンスがインストールされているコンピュータで DB2 Agent を設定します。
p.943 の「[Windows コンピュータでの DB2 Agent の設定](#)」を参照してください。

- メディアサーバーで DB2 操作用のデータベースアクセスを設定します。
p.943 の「メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウント名の追加」を参照してください。

Windows コンピュータでの DB2 Agent の設定

DB2 データベースをバックアップまたはリストアする前に、DB2 Agent を設定するために Remote Agent ユーティリティを実行する必要があります。

インスタンスについて設定した情報は、そのインスタンスに格納されているすべてのデータベースに適用されます。

DB2 インスタンス情報の変更時には、Remote Agent ユーティリティを更新する必要があります。クレデンシャル情報を更新しない場合または正しくない場合、バックアップジョブの実行時に[リソースに接続できません]というエラーが表示される場合があります。

表 D-1 DB2 Agent の設定の処理

手順	説明
手順 1	メディアサーバーで、DB2 サーバー名とログオンアカウント名を、DB2 サーバーと認証クレデンシャルのリストに追加します。 p.943 の「メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウント名の追加」を参照してください。
手順 2	DB2 操作のためのジョブオプションを設定します。 p.408 の「DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成」を参照してください。
手順 3	Windows コンピュータで DB2 操作用のデータベースアクセスを設定します。 p.947 の「Windows コンピュータでの DB2 操作用のデータベースアクセスの設定」を参照してください。

メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウント名の追加

メディアサーバーで、DB2 サーバー名とログオンアカウント名を、DB2 サーバーと認証クレデンシャルのリストに追加する必要があります。メディアサーバーには、認証リストに含まれる DB2 インスタンスに対する操作のためにデータベースアクセス権限があります。

バックアップまたはリストアを開始する前に、DB2 インスタンスがインストールされているコンピュータ上で、Remote Agent ユーティリティを使用してインスタンス情報とデータベースアクセスを設定します。

ログオンアカウント名には、DB2 サーバーに対する管理者権限が与えられている必要があります。ユーザー名が正しくないか指定されていない場合、または管理者権限が与えられていない場合、そのコンピュータに対してDB2のバックアップまたはリストア操作を実行できません。

p.408 の「DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成」を参照してください。

p.945 の「メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストの DB2 サーバー名またはログオンアカウントの編集」を参照してください。

p.419 の「DBA 開始ジョブの編集」を参照してください。

p.945 の「メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストからの DB2 サーバー名またはログオンアカウントの削除」を参照してください。

メディアサーバーで DB2 操作のデータベースアクセスを設定する方法

- 1 メディアサーバーで、ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[DB2]をクリックします。
- 3 [リストの修正]をクリックします。
- 4 [新規]をクリックします。
- 5 インスタンスがインストールされている DB2 サーバーの名前を入力します。
- 6 ログオンアカウント名を追加するには、次のいずれかを実行します。

矢印をクリックする 追加するログオンアカウント名を選択します。

[新規]をクリックする [ログオンアカウントの選択]ダイアログボックスで、[新規]をクリックします。

p.175 の「Backup Exec ログオンアカウントの作成」を参照してください。

Remote Agent ユーティリティの[データベースアクセス]タブでログオンアカウント名を入力したときに使用した形式と同じ形式のログオンアカウントを使用します。たとえば、Remote Agent ユーティリティで Domainname¥Username の形式で入力した場合、認証クレデンシャルのリストでも同じ形式を使用します。

- 7 [Oracle および DB2 サーバーの認証クレデンシャル]ダイアログボックスで、[OK]をクリックします。

メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストの DB2 サーバー名またはログオンアカウントの編集

DB2 サーバー名または DB2 サーバーのログオンアカウント名を変更した場合は、メディアサーバーで DB2 サーバーと認証クレデンシャルのリストを更新する必要があります。Remote Agent ユーティリティを使用して DB2 サーバー上での変更と同じ変更を行って、インスタンス情報とデータベースアクセスを設定します。

ログオンアカウント名には、DB2 サーバーに対する管理者権限が与えられている必要があります。ユーザー名が正しくないか指定されていない場合、または管理者権限が与えられていない場合、そのコンピュータに対して DB2 のバックアップまたはリストア操作を実行できません。

p.943 の「Windows コンピュータでの DB2 Agent の設定」を参照してください。

p.943 の「メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウント名の追加」を参照してください。

p.945 の「メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストからの DB2 サーバー名またはログオンアカウントの削除」を参照してください。

メディアサーバーで認証クレデンシャルのリストの DB2 サーバー名またはログオンアカウントを編集する方法

- 1 メディアサーバーで、ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[DB2]をクリックします。
- 3 [リストの修正]をクリックします。
- 4 編集するサーバー名またはログオンアカウントを含む項目を選択します。
- 5 [編集]をクリックします。
- 6 サーバー名またはログオンアカウント名を変更します。

p.178 の「Backup Exec ログオンアカウントの編集」を参照してください。

- 7 [OK]をクリックします。

メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストからの DB2 サーバー名またはログオンアカウントの削除

DB2 サーバーのバックアップが不要になった場合は、メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストから DB2 サーバー名またはログオンアカウントを削除します。後からメディアサーバーで DB2 サーバーをバックアップすることになった場合は、再び DB2 サーバーをメディアサーバーの認証クレデンシャルのリストに追加する必要があります。

p.943 の「メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウント名の追加」を参照してください。

メディアサーバーで認証クレデンシャルのリストから DB2 サーバー名およびログオンアカウントを削除する方法

- 1 メディアサーバーで、ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[DB2]をクリックします。
- 3 [リストの修正]をクリックします。
- 4 削除するサーバー名またはログオンアカウントを含む項目を選択します。
- 5 [削除]をクリックします。
p.180 の「[Backup Exec ログオンアカウントの削除](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

DB2 のためのデフォルトオプションの編集

インストール時に Backup Exec によって設定されたデフォルトを、DB2 のすべてのバックアップジョブで使用することができます。また、独自のデフォルトを選択することもできます。

p.952 の「[DB2 リソースのバックアップ](#)」を参照してください。

p.955 の「[DB2 データのリストア](#)」を参照してください。

p.966 の「[DB2 のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

DB2 のためのデフォルトオプションを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[DB2]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。
p.946 の「[DB2 デフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

DB2 デフォルトオプション

インストール時に Backup Exec によって設定された、DB2 のすべてのバックアップジョブに対するデフォルトを編集できます。

p.946 の「[DB2 のためのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

次の表は DB2 デフォルトオプションを記述したものです。

表 D-2 DB2 デフォルトオプション

項目	説明
バックアップ方式	<p>すべてのバックアップジョブのために次のどのバックアップ方式を使用するかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択項目をバックアップ:DB2 選択項目の完全バックアップを実行します。 ■ 差分 - 前回の完全バックアップ以降の変更内容をバックアップ:最後の完全バックアップ以降にデータベースに加えられたすべての変更内容をバックアップします。 ■ 増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降の変更内容をバックアップ:最後の完全バックアップまたは増分バックアップ以降にデータベースに加えられたすべての変更内容をバックアップします。
オフラインバックアップを実行する	バックアップジョブを開始する前にデータベースをオフラインにします。データベースは、バックアップジョブの完了後にオンラインになります。
オフラインバックアップ前にデータベースを停止する	バックアップジョブでデータベースがオフラインになる前にユーザーをデータベースから強制的にログオフします。データベースタスクをアクティブに実行していないユーザーは、データベースから強制的にログオフされます。データベースタスクを実行しているユーザーは、実行中のタスクの完了後、データベースから強制的にログオフされます。
リストの修正	<p>メディアサーバーで、DB2 のコンピュータ名とログオンアカウント名を、DB2 サーバーの認証クレデンシャルのリストに追加できます。</p> <p>p.943 の「メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウント名の追加」を参照してください。</p>

Windows コンピュータでの DB2 操作のデータベースアクセスの設定

Windows コンピュータで DB2 操作のデータベースアクセスを設定するには次の手順を使います。

p.962 の「[DB2 データベースのアーカイブログ方式の使用について](#)」を参照してください。

p.952 の「[DB2 リソースのバックアップ](#)」を参照してください。

p.419 の「[DBA 開始ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.946 の「[DB2 のためのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

Windows コンピュータで DB2 操作のデータベースアクセスを設定する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [DB2]タブで、必要な情報を入力します。

p.948 の「Backup Exec DB2 Agent の設定オプション」を参照してください。

- 3 [データベースアクセス]タブで、必要なオプションを設定します。

p.1907 の「Remote Agent ユーティリティの[データベースアクセス]オプション」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

- 5 メディアサーバーで、メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストに次を追加します。

- DB2 サーバーの名前
- [データベースアクセス]タブで入力したユーザー名

Backup Exec DB2 Agent の設定オプション

Windows コンピュータで DB2 Agent を設定するのに Remote Agent ユーティリティを使う場合は、オプションの設定に次の表を使ってください。

p.943 の「Windows コンピュータでの DB2 Agent の設定」を参照してください。

表 D-3 Backup Exec DB2 Agent の設定オプション

項目	説明
ローカルのインスタンス名	ローカルの DB2 インスタンスの名前を指定します。インスタンスの編集時にインスタンス名を変更することはできません。

項目	説明
ユーザー名	<p>DB2 インスタンスのユーザー名を指定します。</p> <p>ユーザー名には、次の情報が含まれている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 有効な許可 ID、またはこの DB2 インスタンスに存在するすべてのデータベースに接続する権限 ■ 適切な権限レベルおよび権限 <p>適切な権限レベルは SYSADM、SYSCTRL、SYSMAINT、DBADM などです。</p> <p>クレデンシャルが正しくない場合、バックアップジョブの実行時に「リソースに接続できません」というエラーが表示される場合があります。</p> <p>DB2 インスタンスのクレデンシャルを変更した場合は、このフィールドでクレデンシャルを更新する必要があります。</p> <p>このコンピュータ名とログオンアカウントを、DB2 サーバー用の認証クレデンシャルのリストに追加する必要があります。</p> <p>p.943 の「メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウント名の追加」を参照してください。</p>
パスワードの変更	<p>DB2 インスタンスのユーザー名に対するパスワードを変更できる「パスワードの変更」ダイアログボックスを起動します。</p> <p>p.324 の「[パスワードの入力]オプション」を参照してください。</p>
メディアサーバー	<p>操作を処理する Backup Exec メディアサーバーの名前または IP アドレスを指定します。</p> <p>すべての操作で同じ形式の名前解決を使用する必要があります。たとえば、IP アドレスを使用してバックアップを行う場合は、リストアを行う際にも IP アドレスを使用する必要があります。完全修飾名を使用してバックアップを行う場合は、リストアを行う際にも完全修飾名を使用する必要があります。</p>

項目	説明
ジョブテンプレート名	<p>DBA 開始ジョブでバックアップおよびリストア操作に使用する Backup Exec ジョブテンプレートの名前を指定します。Backup Exec メディアサーバーの [DBA 開始ジョブの設定] ダイアログボックスでジョブテンプレートを作成します。ジョブテンプレートの指定を省略した場合は、デフォルトのジョブテンプレートが使用されます。</p> <p>アーカイブログが有効なデータベースの場合は、[アーカイブログテンプレート名] フィールドに個別のアーカイブログテンプレート名を入力します。</p> <p>p.419 の「DBA 開始ジョブの編集」を参照してください。</p>
アーカイブログテンプレート名	<p>USEREXIT 方式または VENDOR 方式を使用する Backup Exec アーカイブログテンプレートの名前を指定します。これらの方式は、DB2 コントロールセンターまたはコマンドラインプロセッサで、データベースに対して指定します。使用しているジョブテンプレート名が正しくない場合、ログファイルのアーカイブを正しく作成できません。</p> <p>データベースに USEREXIT 方式または VENDOR 方式を使用する場合は、アーカイブログの作成専用の Backup Exec ジョブテンプレートを作成する必要があります。このテンプレートには、データベースのバックアップ用のジョブテンプレートに指定されているデバイスとは異なる宛先デバイスを指定する必要があります。</p> <p>両方のジョブに同じデバイスが使用されている場合、アーカイブログのバックアップは、データベースのバックアップが完了するまで待機します。ただし、データベースのバックアップは、アーカイブログのバックアップが完了するまで完了しません。デバイスがディスクへのバックアップフォルダであるときにこの状況が発生する場合は、ディスクへのバックアップフォルダで許可される同時並行処理の数を増やします。</p> <p>p.419 の「DBA 開始ジョブの編集」を参照してください。</p> <p>p.962 の「DB2 データベースのアーカイブログ方式の使用について」を参照してください。</p>

Remote Agent ユーティリティを実行する Windows コンピュータの DB2 Agent への DB2 インスタンスの追加

Remote Agent ユーティリティを実行する Windows コンピュータの DB2 Agent に DB2 インスタンスを追加するには、次の手順を実行します。

p.1898 の「[Windows システムの Remote Agent ユーティリティについて](#)」を参照してください。

p.1910 の「[Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットのスイッチ](#)」を参照してください。

Remote Agent ユーティリティを実行する Windows コンピュータの DB2 Agent に DB2 インスタンスを追加する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [DB2] タブで、[新規] をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。

p.948 の「[Backup Exec DB2 Agent の設定オプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK] をクリックします。

Remote Agent ユーティリティを使用した DB2 インスタンスの編集

Remote Agent ユーティリティを使用して DB2 インスタンスを編集するのに次の手順を使ってください。

Remote Agent ユーティリティを使用して DB2 インスタンスを編集する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

- 2 [DB2] タブで、[編集] をクリックします。
- 3 適切なオプションを編集します。

p.948 の「[Backup Exec DB2 Agent の設定オプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK] をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの使用した DB2 インスタンスの削除

Remote Agent ユーティリティを使用して DB2 インスタンスを削除するのに次の手順を使ってください。

Remote Agent ユーティリティを使用して DB2 インスタンスを削除する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。
- 2 [DB2]タブで、[削除]をクリックします。

DB2 リソースのバックアップ

DB2 リソースのバックアップ前に、次の事項を確認してください。

- バックアップまたはリストアを実行する前に、DB2 サーバー上で Remote Agent ユーティリティを実行して、インスタンスに関する情報を追加する必要があります。DB2 インスタンス情報の変更時には、Remote Agent ユーティリティを更新する必要があります。変更を入力すると、その内容が Backup Exec メディアサーバーによって検出されます。
p.942 の「[DB2 Agent 使用上の必要条件](#)」を参照してください。
- データベースのバックアップとアーカイブログを実行する場合、ジョブで利用可能なストレージデバイスが 2 つ以上必要です。
- バックアップジョブに複数のデータストリームを使用している場合、ジョブで利用可能なバックアップデバイスの数がデータストリームの数以上である必要があります。データベースのアーカイブログが有効になっている場合は、利用可能な追加のバックアップデバイスが必要です。

メモ: Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているコンピュータに接続するデバイスにデータベースをバックアップできません。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

p.419 の「[DBA 開始ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.946 の「[DB2 のためのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

DB2 リソースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択リストで、[登録済みリソース]の下の[Windows システム]を展開します。

- 4 バックアップする DB2 サーバーを展開します。
[登録済みリソース]ノードの下に DB2 サーバーが表示されていない場合は、追加することができます。
p.269 の「バックアップ選択リストの[登録済みリソース]ノードについて」を参照してください。
- 5 バックアップする次のオブジェクトを選択します。

インスタンス	バックアップするデータベースインスタンスを指定します。 インスタンス内のすべてのデータベースをバックアップします。
データベース	バックアップするデータベースを指定します。 データベース内のすべてのパーティションもバックアップされます。 ファイルシステムのバックアップの間に、選択リストに含まれているオンライン DB2 データベースファイルは自動的に除外されません。選択リストから手動でオンライン DB2 データベースのデータファイルを除外する必要があります。
パーティション	バックアップするパーティションを指定します。 パーティションのすべての表スペースとログフォルダがバックアップされます。
表スペース	バックアップするすべての表スペースか個別の表スペースを指定します。
- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[DB2]をクリックします。
- 7 必要なオプションを設定します。
p.954 の「DB2 バックアップオプション」を参照してください。
- 8 バックアップのために複数のデータストリームを設定するには、[宛先]の下にある[デバイスとメディア]をクリックします。
- 9 必要なオプションを設定します。

複数のデータストリームをサポートするリソースで使用する最大デバイス数

バックアップジョブで使用できる最大デバイス数を指定します。

DB2 データベースのバックアップジョブを実行する場合は、ジョブで利用可能なバックアップデバイスの数をストリームの数以上にすることをお勧めします。データベースのアーカイブログが有効になっている場合は、利用可能な追加のバックアップデバイスが必要です。

複数のデバイスを指定する場合は、バックアップジョブのバックアップ先デバイスとして次のいずれかを選択する必要があります。

- デバイスプール
- 2 つ以上の同時並行処理が有効になっているディスクへのバックアップフォルダ

p.485 の「[プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成](#)」を参照してください。

この機能は、DBA 開始ジョブで利用できません。

最小デバイス数 (利用可能なデバイスがこの数よりも少ない場合はジョブを終了する)

ジョブで使用できる最小デバイス数を指定します。

最小数のデバイスを使用できない場合、ジョブは失敗します。

この機能は、DBA 開始ジョブで利用できません。

10 必要に応じて、残りのバックアップジョブのプロパティを設定します。

DB2 バックアップオプション

バックアップジョブを作成するとき DB2 リソースのための特定のバックアップオプションを設定できます。

p.952 の「[DB2 リソースのバックアップ](#)」を参照してください。

次の表は DB2 バックアップオプションを記述したものです。

表 D-4 DB2 バックアップオプション

項目	説明
バックアップ方式	<p>バックアップジョブのために次のどのバックアップ方式を使用するかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択項目をバックアップ:DB2 選択項目の完全バックアップを実行します。 ■ 差分 - 前回の完全バックアップ以降の変更内容をバックアップ:最後の完全バックアップ以降にデータベースに加えられたすべての変更内容をバックアップします。 ■ 増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降の変更内容をバックアップ:最後の完全バックアップまたは増分バックアップ以降にデータベースに加えられたすべての変更内容をバックアップします。
オフラインバックアップを実行する	<p>バックアップジョブを開始する前にデータベースをオフラインにします。データベースは、バックアップジョブの完了後にオンラインになります。</p> <p>データベースの循環ログが有効になっている場合は、このオプションを選択する必要があります。このオプションを選択していない場合、バックアップジョブは失敗します。</p>
オフラインバックアップ前にデータベースを停止する	<p>バックアップジョブでデータベースがオフラインになる前にすべてのユーザーをデータベースから強制的にログオフします。データベースタスクをアクティブに実行していないユーザーは、データベースから強制的にログオフされます。データベースタスクを実行しているユーザーは、実行中のタスクの完了後、データベースから強制的にログオフされます。</p>

DB2 データのリストア

DB2 リソースをリストアする前に、DB2 Agent のインストールおよび設定に関するすべての準備を完了しておきます。

p.942 の「[DB2 Agent 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

メモ: CASO 環境では、DB2 リストアジョブを管理対象メディアサーバーに委任できます。ただし、リストアジョブでリストア元に暗号化された DB2 バックアップセットを使用すると、そのリストアジョブは失敗する場合があります。ジョブの完了に必要な暗号化キーが管理対象メディアサーバーに存在しないことを示すエラーメッセージが表示される場合があります。そのリストアジョブを実行する管理対象メディアサーバーで、暗号化キーを作成する必要があります。

p.404 の「[暗号化キーの作成](#)」を参照してください。

DB2 データをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 [リソース別の表示]タブで、[すべてのリソース]アイコンを展開します。
- 5 リストアするデータベースインスタンスが含まれているシステムリソースを展開します。
- 6 次のいずれかを実行します。

データベース全体を [現在のデータベース]にチェックマークを付けます。

リストアする データベースがオフラインの場合、[現在のデータベース]は空になり、
選択することはできません。

バックアップセットを バックアップセットまたは履歴セットにチェックマークを付けます。
リストアする

表スペースをリストア [現在のデータベース]またはバックアップセットを展開し、リストアする
する 表スペースにチェックマークを付けます。

- 7 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[DB2]をクリックします。
- 8 必要なオプションを設定します。
p.956 の「[DB2 リストアオプション](#)」を参照してください。
- 9 必要に応じて[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択し、リストアジョブを開始します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 10 リストアしたデータベースの完全バックアップを実行します。

DB2 リストアオプション

リストアジョブを作成するのに **Agent for DB2** を使うとき特定のリストアオプションを選択できます。

p.955 の「[DB2 データのリストア](#)」を参照してください。

次の表は DB2 のために利用可能なリストアオプションを記述したものです。

表 D-5 DB2 リストアオプション

項目	説明
完全バックアップか増分バックアップからデータベースをリストアする	リストアオプションを有効にします。
利用可能な最新のバックアップからリストア	利用可能である最新の完全バックアップと増分バックアップから DB2 データベースをリストアします。
指定時刻にリストア	<p>ジョブログに指定した時点までのデータをリストアします。指定した時点まで到達すると、リカバリは完了します。</p> <p>[日付]ボックスで、日付を入力するかまたは矢印をクリックしてカレンダーを表示し、日付を選択します。</p> <p>[時間]ボックスで、時間を入力するかまたは矢印をクリックして時間を選択します。</p>
ログを使用してロールフォワードする	<p>アーカイブログが有効なデータベースのリストアを有効にします。データベースを完全にリストアするには、[完全バックアップや増分バックアップからリストアする]にもチェックマークを付ける必要があります。</p> <p>データベースをリストアした後で、ロールフォワード操作を実行できます。</p> <p>循環ログが有効なデータベースの場合、[ログを使用してロールフォワードする]のチェックマークを外す必要があります。このチェックマークを外さないで、ジョブは失敗します。</p>
利用可能な最新のログからリカバリ	利用可能な最新のログに DB2 データベースをロールフォワードします。
指定時刻にリストア	<p>指定した時点までのログをリストアします。指定した時点まで到達すると、リカバリは完了します。</p> <p>[日付]ボックスで、日付を入力するかまたは矢印をクリックしてカレンダーを表示し、日付を選択します。</p> <p>[時間]ボックスで、時間を入力するかまたは矢印をクリックして時間を選択します。</p>
このジョブでは次のパスを使用して DB2 サーバーのデフォルトログファイルのパスを無効にする	<p>ロールフォワード操作時にアーカイブログファイルを検索するためのログファイルの代替パスを指定します。宛先DB2サーバーのログパスのデータベース設定で指定されている場所以外の場所にアーカイブログファイルを移動した場合、代替の場所を指定する必要があります。アーカイブログの場所のフルパスを入力します。</p> <p>このオプションを選択しても、DB2 サーバーのアーカイブログのパス設定は変更されません。</p>

項目	説明
ロールフォワード終了後にデータベースをオンラインにする	リカバリが終了するとすぐにデータベースがオンラインになります。

DB2 データのリストア先の変更

DB2 データのリストア先のインスタンスが存在している必要があります。Backup Exec は新しいインスタンスを作成しません。

次の場合、DMS コンテナまたは SMS コンテナのリストア先は変更できません。

- データベースのリストア先を別のデータベースに変更する場合。
- 存在しないデータベースを選択する場合。

DB2 データのリストア先を変更する方法

- 1 リストアジョブを作成します。
p.955 の「[DB2 データのリストア](#)」を参照してください。
- 2 DB2 の[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスでオプションを選択し、[プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[DB2 のリストア先の変更]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.958 の「[\[DB2 のリストア先の変更\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 リストア先を変更したリストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
リストアジョブが完了した後、リストアしたデータの完全バックアップを実行しておくことをお勧めします。
p.966 の「[DB2 のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

[DB2 のリストア先の変更]オプション

別のインスタンスがすでに存在する場合、そのインスタンスに DB2 データのリストア先を変更できます。

p.958 の「[DB2 データのリストア先の変更](#)」を参照してください。

次の表は DB2 のために利用可能なリストア先の変更オプションを記述したものです。

表 D-6 [DB2 のリストア先の変更]オプション

項目	説明
DB2 インスタンスのリストア先を次のサーバーに変更する	DB2 インスタンスのリストア先をソースサーバー以外のサーバーに変更します。
サーバー	リストアジョブのリストア先を変更するサーバーの名前を指定します。
サーバーのログオンアカウント	リストアジョブのリストア先を変更するサーバーにデータをリストアする権限のあるログオンアカウントを指定します。
リストア先を新しいインスタンスに変更する	データベースのリストア先を別のインスタンスに変更します。 リストア先のインスタンスが存在している必要があります。このインスタンスが存在しないと、ジョブは失敗します。
インスタンス	データベースのリストア先のインスタンスの名前を指定します。
インスタンスのログオンアカウント	インスタンスのログオンアカウントを指定します。ログオンアカウントを変更する場合に、リストアするデータベースのログオンアカウントを入力します。このログオンアカウントには、バックアップオペレータ権限または管理者権限が与えられている必要があります。
新規データベースにリストアする	データベースのリストア先をソースサーバー以外の新しいデータベースに変更します。
データベース名	リストアジョブのリストア先のデータベースの名前を示します。
リストア先ドライブ	DB2 データベースのリストア先のドライブを示します。
ログのリストア先	新しいデータベースのログファイルを格納する場所のフルパスを指定します。
コンテナのリストア先を変更する	リストアする表スペースまたはデータベースの DMS コンテナや SMS コンテナに別の場所を指定します。

項目	説明
SMS 表スペースコンテナの相対パス	<p>システム管理スペース (SMS) 表スペースコンテナのリストア先のパスを示します。</p> <p>たとえば、次の SMS コンテナおよび DMS コンテナが含まれる表スペース TS1 をリストアするとします。</p> <p>C:\¥TS1Containers¥SMS¥SMSCONT001¥ C:\¥TS1Containers¥SMS¥SMSCONT002¥ C:\¥TS1Containers¥DMS¥DMSCONT001 C:\¥TS1Containers¥DMS¥DMSCONT002</p> <p>SMS コンテナおよび DMS コンテナのリストア先に別の場所を指定するために、SMS コンテナのパスを D:\¥¥と入力します。DMS コンテナのパスを D:\¥TS1DMS¥と入力します。表スペースがリストアされると、コンテナは次のようにリストアされます。</p> <p>SMS コンテナ D:\¥TS1SMS¥SMSCONT001¥ D:\¥TS1SMS¥SMSCONT002¥</p> <p>DMS コンテナ D:\¥TS1DMS¥DMSCONT001 D:\¥TS1DMS¥DMSCONT002</p>
DMS 表スペースコンテナの相対パス	<p>データベース管理スペース (DMS) 表スペースコンテナのリストア先のパスを示します。</p> <p>[SMS 表スペースコンテナの相対パス] フィールドの説明に示す例を参照してください。</p>

DB2 を使用した DBA 開始ジョブの実行について

Backup Exec では、DB2 データベースの DBA 開始バックアップ、リストア、リストア先を変更したリストアおよびリカバリがサポートされています。DB2 の DBA 開始ジョブを実行するとき、Backup Exec ではなく、DB2 を使用してジョブを設定し、開始します。DBA 開始ジョブの開始後、Backup Exec を使用してジョブを監視できます。すべての DBA 開始ジョブは Backup Exec の [ジョブモニター] タブに表示されます。

次の表は DB2 Agent のインストールの間に Backup Exec メディアサーバーにインストールされるファイルを記述したものです:

表 D-7 DB2 Agent でメディアサーバーにインストールされるファイル

ファイル	説明
製造元 DLL ファイル db2sqluv.dll および USEREXIT プログラム db2uext2.exe	Windows システムディレクトリにインストールされます。Windows システムディレクトリのパス名は次のようになります。 C:¥winnt¥system32 または D:¥windows¥system32 DB2コントロールセンターから、ログファイルのアーカイブ方式としてVENDORまたは USEREXIT プログラムを使用できます。ただし、これを行うと、db2sqluv.dll と db2uext2.exe がデフォルトで使われます。 p.962の「DB2 データベースのアーカイブログ方式の使用について」を参照してください。
設定ファイル db2.conf	リストア先を変更したリストアジョブおよびロールフォワード操作に関する指定が含まれています。Backup Exec の製造元 DLL ファイルおよび USEREXIT プログラムでは、このファイルに含まれる情報が使用されます。 db2.conf ファイルは、メディアサーバー上の次の場所にインストールされます。 ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥db2.conf リモート DB2 サーバーでは、次の場所にインストールされます。 ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥RAWS¥db2.conf p.963の「db2.conf ファイルについて」を参照してください。
バックアップおよびリストア用のサンプルスクリプト	DB2 コマンドラインプロセッサで実行可能です。 これらのスクリプトは、次の場所にインストールされます。 ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥scripts¥DB2

DB2 に対して DBA 開始ジョブを実行する前に、次の事項を確認してください。

- DB2 Agent のインストールおよび設定に関するすべての準備を完了しておきます。
 p.942の「DB2 Agent 使用上の必要条件」を参照してください。
- ドメイン管理者のログオンアカウントを使用して DB2 サーバー上の DB2 データベースを参照している場合、Backup Exec でデータベースを展開または選択して操作できない場合があります。そのような場合は、ドメイン管理者アカウントを DB2ADMNS グループに追加します。
- メディアサーバー上では、DB2 リソースのバックアップに使用するログオンアカウントに、バックアップオペレータ権限または管理者権限が与えられている必要があります。
- CASO 環境での DBA 開始ジョブについては、DBA 開始ジョブのテンプレートで選択する宛先デバイスが、集中管理サーバーにローカルに接続されている必要があります。このことは、DBA 開始 DB2 アーカイブログジョブにも当てはまります。

宛先デバイスにデバイスプールが含まれる場合は、そのプール内のすべてのデバイスが集中管理サーバーにローカルに接続されている必要があります。

p.966 の「[DB2 のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

p.962 の「[DB2 データベースのアーカイブログ方式の使用について](#)」を参照してください。

DB2 データベースのアーカイブログ方式の使用について

DB2 では、ログファイルのアーカイブに対して USEREXIT 方式および VENDOR 方式がサポートされています。Backup Exec では、これらの方式をサポートするために、USEREXIT プログラムおよび製造元 DLL ファイルが用意されています。USEREXIT 方式を使用する場合、Backup Exec は、db2uext2.exe という USEREXIT プログラムを使用して、アーカイブログをバックアップします。VENDOR 方式を使用する場合、Backup Exec は、db2sqluv.dll という製造元 DLL ファイルを使用して、アーカイブログをバックアップします。

USEREXIT 方式または VENDOR 方式を使用するには、Remote Agent ユーティリティに、DB2 インスタンスに関する次のような情報を追加しておく必要があります。

- アーカイブログ操作のソースデータベース
- ロールフォワード操作の宛先データベース

また、メディアサーバーで、これらのインスタンスが格納されている DB2 サーバー名を、DB2 サーバーと認証クレデンシャルのリストに追加する必要があります。

DB2 データベースにアーカイブログを使用する場合、アーカイブログジョブによって排他的に使用される、Backup Exec の DBA 開始ジョブの設定テンプレートを作成する必要があります。このジョブテンプレートには、データベースのバックアップに使用されるジョブテンプレートに指定されているデバイスとは異なる宛先ストレージデバイスを指定する必要があります。Remote Agent ユーティリティには、アーカイブログの DBA 開始ジョブの設定テンプレートの名前を追加する必要があります。

次の表に、製造元 DLL ファイル db2sqluv.dll を使用する DBA 開始ジョブに関するエラーを示します。

表 D-8 db2sqluv.dll の使用時に発生するエラー

エラー	説明
514	Backup Exec は、データベースアクセスに必要なログオンアカウント情報を検出できません。メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストで情報が更新されていることを確認してください。
SQL2062N	このエラーについて詳しくは Windows のイベントビューアのアプリケーションログを参照してください。

p.943 の「[Windows コンピュータでの DB2 Agent の設定](#)」を参照してください。

- p.419 の「[DBA 開始ジョブの編集](#)」を参照してください。
- p.966 の「[DB2 のトラブルシューティング](#)」を参照してください。
- p.963 の「[db2.conf ファイルについて](#)」を参照してください。

db2.conf ファイルについて

Backup Exec の db2.conf ファイルには、リストア先を変更した DBA 開始リストアジョブおよびロールフォワードジョブに関する設定が含まれます。リストア先を変更した DBA 開始リストアジョブおよびロールフォワードジョブを実行するには、db2.conf ファイルに必要な設定を指定しておく必要があります。

Backup Exec の DB2 設定ファイル db2.conf は、データベースおよびアーカイブログのバックアップ方法を定義する一連のキーワードおよび値で構成されます。このファイルを使用して、リストア先を変更したリストア操作および宛先を変更したロールフォワード操作のソースデータベースおよびソースインスタンスを定義します。

db2.conf ファイルには説明と設定例が含まれています。

- p.419 の「[DBA 開始ジョブの編集](#)」を参照してください。
- p.960 の「[DB2 を使用した DBA 開始ジョブの実行について](#)」を参照してください。
- p.963 の「[db2.conf ファイルの編集](#)」を参照してください。

db2.conf ファイルの編集

db2.conf ファイルの設定は 2 つのブロックで構成されています。最初のブロックには、リストア先を変更したデータベースのリストアを Backup Exec の製造元 DLL である db2sqluv.dll を使用して実行するために使用する設定が含まれています。2 つ目のブロックには、宛先を変更したデータベースのロールフォワードを Backup Exec の製造元 DLL である db2sqluv.dll または USEREXIT プログラムである db2uext2.exe を使用して実行するために使用する設定が含まれています。

- p.419 の「[DBA 開始ジョブの編集](#)」を参照してください。
- p.960 の「[DB2 を使用した DBA 開始ジョブの実行について](#)」を参照してください。
- p.964 の「[db2.conf ファイルのサンプル](#)」を参照してください。

db2.conf ファイルを編集する方法

- 1 宛先を変更する DB2 インスタンスがインストールされているコンピュータで、編集する db2.conf ファイルを開きます。

メディアサーバーでは、db2.conf ファイルは次のパスに格納されています。

```
¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥db2.conf
```

リモート DB2 サーバーでは、db2.conf ファイルは次のパスに格納されています。

```
¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥RAWS¥db2.conf
```

db2.conf ファイルは、オブジェクト識別子を形成するキーワード行で構成されます。各オブジェクト識別子の行によって、データベースやその他の情報が指定されます。

- 2 行の先頭にあるシャープ記号 (#) を削除し、適切な情報を追加します。
- 3 db2.conf ファイルを保存して閉じます。
- 4 DB2 Agent を使用してバックアップする各 DB2 サーバーに対して手順 1 から手順 3 を繰り返します。

リストア先を変更したリストアジョブまたはロールフォワードジョブが完了したら、そのデータベースに対する指示を削除する必要があります。指示を削除しない場合、以降のすべてのリストア操作に指示が適用されます。

db2.conf ファイルのサンプル

db2.conf ファイルのサンプルを次に示します。

```
#
# The following settings are used by Backup Exec to perform
# an alternate restore or a rollforward of a DB2 database during a
# a DBA-initiated operation using Backup Exec's vendor dll
# db2sqluv.dll or user exit program db2uext2.exe.
# Reminders:
#
# Uncomment the following lines by removing the # preceding every line
# and add appropriate data to perform an alternate restore/rollforward
# operation.
# You can add more blocks for any additional alternate restore/rollforward
operations.

# -----
# Settings for alternate database restore using
# Backup Exec's vendor dll db2sqluv.dll
# -----
```

```
#OBJECTTYPE ALTERNATE      # Specifies an alternate restore
#SRCINST srcinstname       # Names the source instance that was backed up
#SRCALIAS srcaliasname     # Names the source database alias that was backed up
#DESTINST destinstname    # Names the destination instance name
#DESTALIAS destaliasname  # Names the destination database alias name
#ENDOPER                  # Ends the object identifier
```

```
OBJECTTYPE ALTERNATE      # Specifies an alternate restore
SRCINST myinst1          # Names the source instance that was backed up
SRCALIAS mydb1          # Names the source database alias that was backed up
DESTINST myinst2        # Names the destination instance name
DESTALIAS mydb2        # Names the destination database alias name
ENDOPER                  # Ends the object identifier
```

```
OBJECTTYPE ALTERNATE      # Specifies an alternate restore
SRCINST myinst3          # Names the source instance that was backed up
SRCALIAS mydb3          # Names the source database alias that was backed up
DESTINST myinst4        # Names the destination instance name
DESTALIAS mydb4        # Names the destination database alias name
ENDOPER                  # Ends the object identifier
```

```
# -----
# The following are settings for an alternate database rollforward operation
# using Backup Exec's vendor dll db2sqluv.dll or user exit program
# db2uext2.exe. Use this block to indicate the source database
# if the log files were archived from a different source database.
# -----
# If DB2 log file archiving is enabled (DB2 USEREXIT ON), DB2 will invoke
# the Backup Exec user exit program to back up and restore DB2 archive
# log files. If DB2 log file archiving is enabled for vendor dll, DB2 will
# Backup Exec vendor dll db2sqluv.dll to back up and restore DB2 archive log files.
# invoke the DESTALIAS parameter indicates the destination database alias
# for the user exit. DESTINST parameter indicates the destination instance alias
# for the user exit. SRCALIAS parameter indicates the source database alias
# from which log files were archived and should now be used for the
# rollforward operation. SRCINST parameter indicates the source instance from
# which log files were archived and should now be used for the rollforward
# operation.
#
```

```
#OBJECTTYPE ARCHIVE # Specifies that this block is for
#alternate rollforward.
```

```
#ARCFUNC SAVE
#DESTALIAS destaliasname # Names the destination database alias name
for which this setting applies.
#DESTINST destinstname # Names the destination instance name name
for which this setting applies.
#SRCALIAS srcaliasname # Names the source database alias from which
log files were archived.
#SRCINST srcinstname # Names the source instance from which log
files were archived.
#ENDOPER # Ends the object identifier

OBJECTTYPE ARCHIVE # Specifies that this block is for alternate

rollforward.
ARCFUNC SAVE
DESTALIAS mydb1 # Names the destination database alias name for
which this setting applies.
DESTINST myinst1 # Names the destination instance name for
which this setting applies.
SRCALIAS mydb2 # Names the source database alias from which
log files were archived.
SRCINST myinst1 # Names the source instance from which
log files were archived.
ENDOPER # Ends the object identifier
```

DB2 のトラブルシューティング

DB2のリストア先の変更時にロールフォワード操作が失敗します。どのように対処すればよいでしょうか？

アーカイブログを使用しているデータベースの完全なリカバリの場合には、データベースとアーカイブログの両方をリストアする必要があります。この操作は、ロールフォワードと呼ばれます。VENDOR方式を使用している場合、**db2sqluv.dll**がWindowsシステムディレクトリに格納されています。このディレクトリは、次のような異なるパスに存在する場合があります。

C:\winnt\system32 または **D:\windows\system32**

アーカイブ方式および**db2sqluv.dll**の場所に関する情報は、データベースのバックアップを実行するたびにバックアップに書き込まれます。バックアップを別のコンピュータにリストアしても、**db2sqluv.dll**の場所に関する情報では、ソースコンピュータ上のパスと同じパスがポイントされたままです。一方で、リストア先のコンピュータでは、Windowsシステムディレクトリのパスが異なっている場合があります。たとえば、ソースコンピュータでは、

db2sqluv.dll は、次のパスに存在する **Windows** システムディレクトリに格納されているとします。

C:¥winnt¥system32

リストア先のコンピュータでは、**Windows** システムディレクトリに次のような別のパスが使用されている場合があります。

D:¥windows¥system32

リストアしたデータベースに対してロールフォワードを実行すると、**DB2** によって、ソースコンピュータ上の **Windows** システムディレクトリのパスを使用して **db2sqluv.dll** の実行が試行されます。**db2sqluv.dll** はこのパスに格納されていないため、ロールフォワードは失敗します。ロールフォワードを正常に実行するには、ソースコンピュータとリストア先コンピュータで、**db2sqluv.dll** が同じパスに存在している必要があります。

Symantec Backup Exec Agent for Enterprise Vault

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Enterprise Vault のバックアップ](#)
- [Enterprise Vault Agent の必要条件](#)
- [Enterprise Vault Agent のインストールについて](#)
- [Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)
- [Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)
- [Enterprise Vault のオープンパーティションのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault のクローズパーティションのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault 8.x 準備完了パーティションのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault のディレクトリデータベースのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault の監視データベースのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault のボルトストアデータベースのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault 8.x の監査データベースのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベースのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault 8.x の Compliance Accelerator 設定データベースと Compliance Accelerator カスタマーデータベースのバックアップ](#)

- [Enterprise Vault 8.x の Discovery Accelerator 設定データベースと Discovery Accelerator カスタマーデータベースのバックアップ](#)
- [Discovery Accelerator カストディアンデータベースのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault のボルトストアのバックアップ](#)
- [Enterprise Vault 7.x サーバーと Enterprise 8.x サイトのバックアップについて](#)
- [Enterprise Vault のリストアについて](#)
- [Enterprise Vault Agent の推奨事項](#)
- [Backup Exec Migrator for Enterprise Vault について](#)

Enterprise Vault のバックアップ

Backup Exec は Enterprise Vault の環境全体の総合的なバックアップとリストアを提供します。

Enterprise Vault Agent の必要条件

Enterprise Vault Agent を使う前に次の必要条件を確認してください。

- Backup Exec に対して Enterprise Vault サーバーの公開を行うには、Enterprise Vault サーバーに少なくとも 1 つのパーティションを作成しておく必要があります。
- Backup Exec Remote Agent for Windows Systems をインストールし、Enterprise Vault コンポーネントをホストするすべてのコンピュータで Enterprise Vault Agent にライセンスを交付する必要があります。

メモ: Enterprise Vault Agent は、Remote Agent を使用して、Enterprise Vault データが格納されているリモートコンピュータ上のすべての NTFS 共有をバックアップします。もし、Remote Agent がインストールされていない場合は、Microsoft 社の Common Internet File System (CIFS) を使用して、データがバックアップされます。

Remote Agent をサポートしていないデバイスまたはファイラの場合も、CIFS を使用してデータがバックアップされます。Enterprise Vault データの NDMP バックアップを実行する場合は、別のバックアップジョブを作成することをお勧めします。Symantec Backup Exec NDMP Option を使用すると、NDMP バックアップのパフォーマンスが大幅に向上する場合があります。

Enterprise Vault Agent のインストールについて

Enterprise Vault Agent は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてローカルにインストールします。Enterprise Vault のすべてのサーバーをバックアップするには、Enterprise Vault Agent は使用環境内の Enterprise Vault の各サーバーにインストールされなければなりません。また、Enterprise Vault Agent は Enterprise Vault のコンポーネントがインストールされるあらゆるリモートコンピュータにインストールされなければなりません。Compliance Accelerator と Discovery Accelerator がリモートコンピュータにインストールされる場合、Enterprise Vault Agent はそれらのコンピュータにもインストールされなければなりません。

メモ: Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているコンピュータに接続するデバイスに Enterprise Vault データベースをバックアップできません。

Enterprise Vault Agent は次の方法でインストールできます。

- Remote Agent のインストールの一部として、Backup Exec メディアサーバーからローカル Enterprise Vault サーバーに自動的にインストールします。インストールの完了後、選択したメディアサーバーに公開されるように Enterprise Vault Agent を設定する必要がある場合があります。

p.1902 の「[メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について](#)」を参照してください。

- メディアサーバーに必須の Enterprise Vault Agent ライセンスキーをインストールします。

ライセンスキーをインストールした後、Enterprise Vault のすべてのサーバーと Enterprise Vault の他のコンポーネントがインストールされているコンピュータに Backup Exec Remote Agent をプッシュインストールできます。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

p.123 の「[リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO \(Advanced Open File Option\) のプッシュインストール](#)」を参照してください。

Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について

バックアップする Enterprise Vault オブジェクトによって決まるバックアップ方式を選択できます。

次の表は実行できる Enterprise Vault バックアップジョブのタイプを記述したものです。また、この表は各バックアップジョブ形式で利用可能であるバックアップ方式も記述します。

表 E-1 Enterprise Vault バックアップジョブに使用するバックアップ方式

バックアップ対象	選択する方式	説明
ディレクトリデータベースおよび監視データベース 監査データベースとFSAレポートデータベース (Enterprise Vault 8.xのみ)	完全、差分または増分バックアップ方式	ディレクトリデータベース、監視データベース、監査データベースおよび FSA レポートデータベースのバックアップでは、完全バックアップ方式と増分バックアップ方式を使用できます。これらのデータベースは、差分バックアップ方式を使用してバックアップできません。差分バックアップ方式を選択した場合、Backup Exec は代わりに完全バックアップを行います。 メモ: 増分バックアップ方式を選択すると、データベーストランザクションログがバックアップされ、切り捨てられます。
ボルトデータベースとフィンガープリントデータベース	完全、差分または増分バックアップ方式	ボルトデータベースとフィンガープリントデータベースでは、完全、増分および差分の3つのバックアップ方式をすべて使用できます。 メモ: 増分バックアップ方式を選択すると、データベーストランザクションログがバックアップされ、切り捨てられます。
ボルトのパーティションとインデックスの場所	完全、差分または増分バックアップ方式	通常のファイルシステムのバックアップジョブに利用可能なすべてのバックアップ方式を使用できます。

バックアップジョブの Enterprise Vault コンポーネントを結合した場合、各コンポーネントには、ジョブ全体に対して選択したバックアップ方式とは異なるバックアップ方式が使用されることがあります。たとえば、ディレクトリデータベースとパーティションの両方のバックアップに差分バックアップ方式を使用するジョブを作成するとします。ただし、差分バックアップ方式を使用してディレクトリデータベースをバックアップできないため、Backup Exec は完全バックアップ方式を使用してディレクトリデータベースをバックアップします。その結果、高速で簡単なリストアが可能になります。ディレクトリデータベースをバックアップした後、Backup Exec は差分バックアップ方式を使用してパーティションをバックアップします。

次の表を参考にしてください。

表 E-2 Enterprise Vault コンポーネントで実際に使用されるバックアップ方式

Enterprise Vault コンポーネント	完全 (F)	差分 (D)	増分 (I)
ディレクトリデータベースおよび監視データベース	F	F	I 常にトランザクションログを切り捨てる
ボルトストアデータベース	F	D	I 常にトランザクションログを切り捨てる
監査データベース (Enterprise Vault 8.x のみ)	F	F	I 常にトランザクションログを切り捨てる
FSA レポートデータベース (Enterprise Vault 8.x のみ)	F	F	I 常にトランザクションログを切り捨てる
フィンガープリントデータベース (Enterprise Vault 8.x のみ)	F	D	I 常にトランザクションログを切り捨てる
パーティション	F	D	I 常にトランザクションログを切り捨てる
インデックスルートパス	F	D	I 常にトランザクションログを切り捨てる

Enterprise Vault コンポーネント	完全 (F)	差分 (D)	増分 (I)
<p>Compliance Accelerator または Discovery Accelerator 設定データベース (Enterprise Vault 8.x のみ)</p> <p>メモ: Enterprise Vault のランタイムバージョンとともにインストールされる Compliance Accelerator と Discovery Accelerator のデータベースも含んでいます。</p>	F	F	I 常にトランザクションログを切り捨てる
<p>Compliance Accelerator または Discovery Accelerator カスタマーデータベース (Enterprise Vault 8.x のみ)</p> <p>メモ: Enterprise Vault のランタイムバージョンとともにインストールされる Compliance Accelerator と Discovery Accelerator のデータベースも含んでいます。</p>	F	D	I 常にトランザクションログを切り捨てる

Enterprise Vault コンポーネント	完全 (F)	差分 (D)	増分 (I)
Discovery Accelerator カストディアンデータベース (Enterprise Vault 8.x のみ) メモ: Enterprise Vault のランタイムバージョンとともにインストールされる Discovery Accelerator カストディアンデータベースも含まれています。	F	D	I 常にトランザクションログを切り捨てる

p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。

p.977 の「Enterprise Vault のオープンパーティションのバックアップ」を参照してください。

p.979 の「Enterprise Vault のクローズパーティションのバックアップ」を参照してください。

p.981 の「Enterprise Vault のディレクトリデータベースのバックアップ」を参照してください。

p.982 の「Enterprise Vault の監視データベースのバックアップ」を参照してください。

p.983 の「Enterprise Vault のボルトストアデータベースのバックアップ」を参照してください。

p.991 の「Enterprise Vault のボルトストアのバックアップ」を参照してください。

p.993 の「Enterprise Vault 7.x サーバーのバックアップ」を参照してください。

p.994 の「Enterprise Vault サイトのバックアップ」を参照してください。

p.995 の「Enterprise Vault のインデックスの場所のバックアップ」を参照してください。

Enterprise Vault バックアップオプション

バックアップする Enterprise Vault データベースのタイプに基づいてバックアップ方式を選択できます。

p.971 の「Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について」を参照してください。

Enterprise Vault バックアップジョブに対するデフォルトのバックアップ方式の設定

すべての Enterprise Vault バックアップジョブに対して使用できるデフォルトのバックアップ方式を設定できます。

Backup Exec によって、バックアップジョブの実行時にデフォルトのバックアップ方式が変更される場合もあります。

p.971 の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

Enterprise Vault バックアップジョブに対するデフォルトのバックアップ方式を設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 3 必要なバックアップ方式を選択します。完全、増分または差分のいずれかを選択します。

p.976 の「[デフォルトの Enterprise Vault バックアップオプションについて](#)」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

デフォルトの Enterprise Vault バックアップオプションについて

バックアップする Enterprise Vault データベースのタイプに基づいてデフォルトのバックアップ方式を選択できます。

メモ: ディレクトリデータベース、監視データベース、Enterprise Vault 8.x の監査データベースとFSAレポートデータベースでは、完全バックアップの方式は差分バックアップの代わりになります。

Enterprise Vault データベースに増分バックアップ方式を使うと、トランザクションログがバックアップされて切り捨てられます。

p.971 の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて

Backup Exec はバックアップジョブの前およびリストアジョブの後に Enterprise Vault データベースの物理的な一貫性を自動的にチェックします。またバックアップジョブの前およびリストアジョブの後に Compliance データベースと Discovery データベースの一貫性をチェックします。Backup Exec はデータベースの一貫性チェックに Microsoft SQL Server の[物理チェックのみ]ユーティリティを使います。一貫性チェックが失敗したイベントでは、Backup Exec はジョブを続行し、Backup Exec のジョブログに一貫性チェックの失敗をレポートします。

リストア操作中に一貫性チェックが失敗した場合、Backup Exec はジョブを続行し、Backup Exec のジョブログに一貫性チェックの失敗をレポートします。

[物理チェックのみ]ユーティリティについて詳しくは Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

Enterprise Vault のオープンパーティションのバックアップ

オープンパーティションをバックアップすると、同じバックアップジョブで、パーティションに関連するボルトストアデータベースが自動的にバックアップされます。ボルトストアデータベースをバックアップに含めることで、リカバリが必要になった場合に、ボルトストアデータベースとオープンパーティション間の同期が保持されます。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

p.996 の「[Enterprise Vault のリストアについて](#)」を参照してください。

オープンパーティションをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [選択リスト]ペインで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップするパーティションが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- 5 次の手順を実行します。

Enterprise Vault 7.x のパーティションをバックアップする方法 次を示す順序で操作を実行します。

- バックアップ対象のボルトストアパーティションが存在するサーバーが含まれている **Enterprise Vault** サイトを展開します。
- バックアップするオープンパーティションが含まれている **Enterprise Vault** サーバーを展開します。

Enterprise Vault 8.x のパーティションをバックアップする方法 次を示す順序で操作を実行します。

- バックアップ対象のボルトストアパーティションが存在するボルトストアグループが含まれている **Enterprise Vault** サイトを展開します。
- ボルトストアグループを展開します。
- バックアップするオープンパーティションが含まれているボルトストアを展開します。

6 バックアップするパーティションが含まれているボルトストアを展開します。

7 [All Partition]を展開します。

8 [Open Partitions]を選択します。

バックアップ選択ビューで、バックアップするオープンパーティションを選択する必要があります。結果ペインでオープンパーティションを選択することはできません。

バックアップ対象としてオープンパーティションを選択すると、オープンパーティションに関連するボルトストアデータベースが自動的にバックアップジョブに含まれます。

9 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。

10 バックアップ方式を選択します。

p.971の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

11 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。

12 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する

後で実行するジョブ 次に示す順序で操作を実行します。

をスケジュールする

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault のクローズパーティションのバックアップ

ボルトストアのクローズパーティションをバックアップするには、次の手順を実行します。

ボルトストアのクローズパーティションをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ペインで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップするパーティションが存在する[Directory on <Computer name>]を展開します。
- 5 次の手順を実行します。

Enterprise Vault 7.x のクローズパーティションをバックアップする方法 次に示す順序で操作を実行します。

- バックアップ対象のボルトストアパーティションが存在するサーバーが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- バックアップするクローズパーティションが含まれている Enterprise Vault サーバーを展開します。

Enterprise Vault 8.x のクローズパーティションをバックアップする方法 次に示す順序で操作を実行します。

- バックアップ対象のボルトストアパーティションが存在するボルトストアグループが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- ボルトストアグループを展開します。
- バックアップするクローズパーティションが含まれているボルトストアを展開します。

- 6 [All Partition]を展開します。

- 7 [Closed Partitions]をダブルクリックします。
- 8 結果ペインで、バックアップするパーティションを選択します。
- 9 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 10 バックアップ方式を選択します。
p.971の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。
- 11 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 12 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐの実行する [今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする 次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x 準備完了パーティションのバックアップ

Enterprise Vault 8.x 準備完了パーティションをバックアップするには、次の手順を実行します。

Enterprise Vault 8.x 準備完了パーティションをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ペインで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップする準備完了パーティションが存在する[Directory on <Computer name>]を展開します。
- 5 バックアップ対象の準備完了パーティションが存在するボルトストアグループが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- 6 ボルトストアグループを展開します。
- 7 バックアップする準備完了パーティションが含まれているボルトストアを展開します。
- 8 [All Partition]を展開します。

- 9 結果ペインで準備完了パーティションを選択します。
- 10 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 11 バックアップ方式を選択します。
p.971の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。
- 12 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 13 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する場合

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブのスケジュールを設定する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定について](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault のディレクトリデータベースのバックアップ

ディレクトリデータベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的にディレクトリデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

ディレクトリデータベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップするディレクトリデータベースが含まれている[Directory on <Computer name>]を展開します。

- 5 [Directory DB (<SQLServer/instance>/EnterpriseVaultDirectory)]を選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 7 バックアップ方式を選択します。
p.971の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。
- 8 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次を示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault の監視データベースのバックアップ

監視データベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的に監視データベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

監視データベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップする監視データベースが含まれている[Directory on <Computer name>]を展開します。

- 5 [Monitoring DB(<SQLServer/instance>/EnterpriseVaultMonitoring)]を選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 7 バックアップ方式を選択します。
p.971の「Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について」を参照してください。
- 8 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐの実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する

後で実行するジョブ 次に示す順序で操作を実行します。
をスケジュールする

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault のボルトストアデータベースのバックアップ

ボルトストアデータベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的にボルトストアデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977の「Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて」を参照してください。

ボルトストアデータベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 次のいずれかを実行します。

Enterprise Vault 7.x ボルトストアデータベースをバックアップする方法 次を示す順序で操作を実行します。

- バックアップするボルトストアデータベースが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- バックアップするボルトストアデータベースが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- バックアップするボルトストアが含まれている Enterprise Vault サーバーを展開します。
- バックアップしたいボルトストアデータベースを含んでいるボルトストアを展開します。

Enterprise Vault 8.x ボルトストアデータベースをバックアップする方法 次を示す順序で操作を実行します。

- バックアップするボルトストアデータベースが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- バックアップするボルトストアデータベースが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- ボルトストアグループを展開します。
- バックアップしたいボルトストアデータベースを含んでいるボルトストアを展開します。

5 [Vault Store DB (<VaultStore_SQL_Server_name/instance>/<vault_store database_name>)]を選択します。

6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。

7 バックアップ方式を選択します。

p.971の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

8 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。

9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する

後で実行するジョブ 次に示す順序で操作を実行します。

をスケジュールする

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x の監査データベースのバックアップ

監査データベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的に監査データベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 8.x の監査データベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップする監査データベースが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- 5 [Audit DB (<SQLServer/instance>/EnterpriseVaultAudit)]を選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 7 バックアップ方式を選択します。

p.971 の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

- 8 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベースのバックアップ

FSA レポートデータベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的に FSA レポートデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップする FSA レポートデータベースが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- 5 [FSAREporting DB (<SQLServer/instance>/EnterpriseVaultFSAREporting)]を選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 7 バックアップ方式を選択します。
p.971 の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。
- 8 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースのバックアップ

フィンガープリントデータベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的にフィンガープリントデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップするフィンガープリントデータベースが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- 5 ボルトサイトを展開します。
- 6 ボルトスタグループを展開します。
- 7 [**Fingerprint Databases**]を展開します。
- 8 フィンガープリントデータベースを選択します。
たとえば、**[FingerPrint DB (<SQLServer/instance>/EnterpriseVaultFingerprint)]**です。
フィンガープリントデータベースの名前は決定した命名規則に基づきます。
- 9 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。

10 バックアップ方式を選択します。

p.971の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

11 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x の Compliance Accelerator 設定 データベースと Compliance Accelerator カスタマーデー タベースのバックアップ

Compliance Accelerator 設定データベースをバックアップするには、次の手順を実行します。Compliance Accelerator カスタマーデータベースをバックアップする場合もこれらの手順を使うことができます。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的に設定データベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 8.x の Compliance Accelerator 設定データベースをバックアップする 方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 [Accelerators]を展開します。
- 5 [Compliance on <server_name>]を展開します。

- 6 [Configuration DB (<SQLServer/instance>/EVConfiguration)]を選択します。
- 7 必要に応じて、Compliance Accelerator カスタマーデータベースを選択します。
たとえば、[mycompanyABC_cpml Customer DB (<SQLServer/instance>/mycompanyABC_cpml)]です。
- 8 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 9 バックアップ方式を選択します。
p.971の「Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について」を参照してください。
- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x の Discovery Accelerator 設定データベースと Discovery Accelerator カスタマーデータベースのバックアップ

Discovery Accelerator 設定データベースをバックアップするには、次の手順を実行します。Discovery Accelerator カスタマーデータベースをバックアップする場合もこれらの手順を使うことができます。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的に設定データベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977の「Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて」を参照してください。

Enterprise Vault 8.x の Discovery Accelerator 設定データベースと Discovery Accelerator カスタマーデータベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 [Accelerators]を展開します。
- 5 [Discovery <server_name>]を展開します。
- 6 [Discovery DB (<SQLServer/instance>/EVDISCOVERY)]を選択します。
- 7 必要に応じて、Discovery Accelerator カスタマーデータベースを選択します。
- 8 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 9 バックアップ方式を選択します。
p.971の「Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について」を参照してください。
- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Discovery Accelerator カストディアンデータベースのバックアップ

Discovery Accelerator カストディアンデータベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、バックアップの前に自動的にカストディアンデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

p.1237 の「[SQL のバックアップオプション](#)」を参照してください。

Discovery Accelerator カストディアンデータベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 [Accelerators]を展開します。
- 5 [Discovery <server_name>]を展開します。
- 6 [<database_name> Custodian DB (<SQLServer/instance>/<database_name>)]を選択します。
- 7 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 8 バックアップ方式を選択します。

p.971 の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

ジョブを今すぐ実行する場合

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブのスケジュールを設定する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault のボルトストアのバックアップ

ボルトストアをバックアップすると、すべてのクローズパーティション、オープンパーティション、ボルトストアデータベース、準備完了パーティションがバックアップされます。

p.977 の「[Enterprise Vault のオープンパーティションのバックアップ](#)」を参照してください。

p.979 の「[Enterprise Vault のクローズパーティションのバックアップ](#)」を参照してください。

ボルトストアをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 次のいずれかを実行します。

Enterprise Vault 7.x ボルトストアをバックアップする方法 次を示す順序で操作を実行します。

- バックアップするボルトストアが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- バックアップするボルトストアが含まれているEnterprise Vault サイトを展開します。
- バックアップするボルトストアが含まれているEnterprise Vault サーバーを展開します。

Enterprise Vault 8.x ボルトストアをバックアップする方法 次を示す順序で操作を実行します。

- バックアップするボルトストアが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- バックアップするボルトストアが含まれているEnterprise Vault サイトを展開します。
- ボルトストアグループを展開します。

- 5 ボルトストアを選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 7 バックアップ方式を選択します。

p.971 の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

- 8 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次を示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 7.x サーバーと Enterprise 8.x サイトのバックアップについて

Enterprise Vault 7.x サーバーをバックアップすると、次の項目がバックアップされます。

- インデックスの場所
- ボルトストア
- ボルトストアのクローズパーティション (存在する場合)
- ボルトストアのオープンパーティション
- ボルトストアデータベース

Enterprise Vault 8.x のサイトをバックアップするとき、上にリストされている同じ項目がすべて含まれます。また、次の Enterprise Vault 8.x コンポーネントもバックアップされます:

- 監査、フィンガープリントおよび FSA レポートデータベース
- ボルトストアグループ
- ボルトストアの準備完了パーティション (存在する場合)

Backup Exec は Enterprise Vault 7.x サーバーか Enterprise Vault 8.x サイトをバックアップするときディレクトリデータベースの自動バックアップも実行します。

p.993 の「[Enterprise Vault 7.x サーバーのバックアップ](#)」を参照してください。

p.994 の「[Enterprise Vault サイトのバックアップ](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 7.x サーバーのバックアップ

Enterprise Vault 7.x サーバーをバックアップするには、次の手順を実行します。

p.993 の「[Enterprise Vault 7.x サーバーと Enterprise 8.x サイトのバックアップについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 7.x サーバーをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップするサーバーが存在する Enterprise Vault ディレクトリを展開します。
- 5 Enterprise Vault サイトを展開します。
- 6 Enterprise Vault サーバーを選択します。
- 7 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 8 バックアップ方式を選択します。

p.971の「[Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について](#)」を参照してください。

- 9 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
実行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次を示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault サイトのバックアップ

Enterprise Vault サイトをバックアップするとき、Backup Exec はディレクトリデータベースの自動バックアップも実行します。

Enterprise Vault サイトをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップするサイトが含まれている Enterprise Vault ディレクトリを展開します。
- 5 Enterprise Vault サイトを選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。

- 7 バックアップ方式を選択します。
p.971の「Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について」を参照してください。
- 8 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
実行する

後で実行するジョブ 次に示す順序で操作を実行します。
をスケジュールする

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault のインデックスの場所のバックアップ

Enterprise Vault のインデックスの場所をバックアップするには、次の手順を実行します。

インデックスの場所をバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ビューで、[Enterprise Vault]を展開します。
- 4 バックアップするインデックスの場所が含まれている[Directory on <Computer name>]を展開します。
- 5 次の手順を実行します。

Enterprise Vault 7.x のインデックスの場所 次に示す順序で操作を実行します。
をバックアップする方法

- バックアップするインデックスの場所が含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- バックアップするインデックスの場所が含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- バックアップするインデックスの場所が含まれている Enterprise Vault サーバーを展開します。

Enterprise Vault 8.x のインデックスの場所
をバックアップする方法 次を示す順序で操作を実行します。

- バックアップするインデックスの場所が含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- バックアップするインデックスの場所が含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。

6 次のいずれかを実行します。

すべてのインデックスの場所をバックアップする [インデックスの場所]にチェックマークを付けます。

個々のインデックスの場所をバックアップする 次を示す順序で操作を実行します。

- [インデックスの場所]アイコンをクリックします。
- 結果ペインで、バックアップする個々のインデックスの場所を選択します。

7 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。

8 バックアップ方式を選択します。

p.971の「Enterprise Vault バックアップジョブのバックアップ方式について」を参照してください。

9 必要に応じて、タスクペインで他のバックアップオプションを選択します。

10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐに行う [今すぐに行う]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする 次を示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault のリストアについて

Enterprise Vault のリストア操作を開始する前に、次の項目を確認します。

- **Enterprise Vault** インストール済み環境をリストアする場合、ディレクトリデータベースは別のリストアジョブでリストアする必要があります。ディレクトリデータベースが正常にリストアされたら、**Enterprise Vault** のその他のコンポーネントおよびパーティションをリストアできます。

p.999 の「**Enterprise Vault のディレクトリデータベースのリストア**」を参照してください。

- **Enterprise Vault** データベースをリストアするとき、データベースを使用可能な状態または操作対象外の状態にするオプションを選択できます。選択した操作対象外の状態のオプションは、ボルトストアデータベースを除くすべての **Enterprise Vault** データベースに適用されます。**Enterprise Vault 8.x** ボルトストアデータベースをリストアするとき、**Enterprise Vault Agent** はボルトストアデータベースを **Enterprise Vault 8.x** バックアップモードにします。リストアジョブが完了した後でボルトストアデータベースが操作対象外の状態のままの場合、**Enterprise Vault Agent** はバックアップモードからそれを削除できません。

データベースを使用可能な状態にするオプションを選択すると、次が適用されます:

- **Enterprise Vault Agent** はボルトストアデータベースを使用可能で操作可能な状態にリストアします。ボルトストアデータベースの操作可能な状態は、同じボルトストアデータベースのリストアジョブでリストアに追加のバックアップセットを選択したときでさえ維持されます。追加のバックアップセットには完全、差分および増分のバックアップ方式を含めることができます。

データベースを操作対象外の状態にするオプションを選択すると、次が適用されます:

- **Enterprise Vault Agent** はボルトストアデータベースのリストア操作を開始する前に **Enterprise Vault Storage Service** を停止するように求めるメッセージを表示します。**Enterprise Vault Storage Service** が停止した後、ボルトストアのリストア操作を再開できます。

シマンテック社はボルトストアデータベースを使用可能な状態にリストアすることを推奨します。ボルトストアデータベースを操作対象外の状態にリストアすると、リストア操作が終わった後 **Enterprise Vault** はバックアップモードからそれを削除することができません。

p.1018 の「**Enterprise Vault リストアオプション**」を参照してください。

- **Enterprise Vault** のコンポーネントを個別にリストアできます。リストアを始める前に、データベースとその他のコンポーネントがリストア先の **Enterprise Vault** サーバーに存在することも存在しないこともあります。データベースがなければ、**Enterprise Vault Agent** を使用してそれらをリストアできます。リストアジョブが完了した後、リストアされたデータベースを使うために **Enterprise Vault** を設定する必要があります。リストアされたデータベースを使うために **Enterprise Vault** を設定する場合は、**Enterprise Vault** のマニュアルを参照してください。

これらの項目には次のものが含まれます。

- Enterprise Vault 7.x と 8.x のディレクトリ、監視、監査、FSA レポート、フィンガープリントデータベース。
- ボルトストアデータベース、インデックスとパーティション。
- Compliance Accelerator と Discovery Accelerator の設定およびカスタマーデータベース。
- Discovery Accelerator カストディアンデータベース
- デフォルトのログオンアカウントとして、Enterprise Vault サービスアカウントか、リストア選択項目へのアクセス権限を持つアカウントを使用することをお勧めします。これらのアカウントを使用しない場合、リストア対象として選択した各 Enterprise Vault リソースに対し、適切なクレデンシャルの入力が必要となる場合があります。
- Enterprise Vault をリストアした後、Enterprise Vault リカバリツールを実行する必要があることを伝えるメッセージが表示されます。リカバリツールは、リストアの完了後、リストアにより新たに追加されたデータベースと Enterprise Vault を再同期化するために使用されます。
Enterprise Vault リカバリツールを実行する方法について詳しくは、Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。

Enterprise Vault サイトやサーバーなどのコンポーネントをリストアするには、リストア先コンピュータに次の製品をインストールしておく必要があります。

- Enterprise Vault
- Backup Exec Remote Agent for Windows Systems

メモ: Enterprise Vault コンポーネントをリストアするリモート Enterprise Vault コンピュータに、Remote Agent をインストールする必要があります。

- p.999 の「[Enterprise Vault のディレクトリデータベースのリストア](#)」を参照してください。
- p.1001 の「[Enterprise Vault のパーティションのリストア](#)」を参照してください。
- p.1017 の「[Enterprise Vault 7.x サーバーの元の場所へのリストア](#)」を参照してください。
- p.1023 の「[別の Microsoft SQL Server コンピュータへの Enterprise Vault データベースのリストア先の変更](#)」を参照してください。
- p.1021 の「[Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更](#)」を参照してください。

Enterprise Vault サーバーにおける Enterprise Vault コンポーネントのリストア先の自動変更について

ボルトストアデータベース、Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースまたはパーティションの場所をバックアップ元とは異なる場所に変更できます。ボルトストアデータベース、Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースまたはパーティ

ションのリストア時に、**Enterprise Vault Agent** は場所の変更を検出します。これらのコンポーネントのリストア先は、新しい場所に自動的に変更されます。

メモ: ボルトデータベース、パーティション、または **Enterprise Vault 8.x** のフィンガープリントデータベースのリストア先の自動変更は、これらの **Enterprise Vault** コンポーネントの場所のみを変更すると実行されます。パーティション、ボルトストアおよびボルトストアグループの名前はパーティションが最初にバックアップされた時点から変更してはなりません。

p.999 の「[Enterprise Vault のディレクトリデータベースのリストア](#)」を参照してください。

p.1001 の「[Enterprise Vault のパーティションのリストア](#)」を参照してください。

p.1017 の「[Enterprise Vault 7.x サーバーの元の場所へのリストア](#)」を参照してください。

p.1023 の「[別の Microsoft SQL Server コンピュータへの Enterprise Vault データベースのリストア先の変更](#)」を参照してください。

p.1021 の「[Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更](#)」を参照してください。

Enterprise Vault のディレクトリデータベースのリストア

Enterprise Vault ディレクトリデータベースをリストアするには、次の手順を実行します。ディレクトリデータベースのリストア先を、別の Microsoft SQL Server コンピュータに変更することもできます。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的にディレクトリデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault ディレクトリデータベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、リストアするディレクトリデータベースが含まれている Enterprise Vault インストール済み環境を展開します。
たとえば、[Directory on <Computer name>]を展開します。
- 4 [Directory DB(<SQL Server name>/<instance>/EnterpriseVaultDirectory)]を展開します。
- 5 リストア元のバックアップセットを選択します。

- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 7 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]をクリックします。

このオプションを選択しない場合は、ディレクトリデータベースをリストアしたい Enterprise Vault コンピュータの Enterprise Vault Admin Service および Enterprise Vault Directory Service を停止する必要があります。他の Enterprise Vault サーバーがディレクトリデータベースに接続している場合、それらのコンピュータでも管理サービスおよびディレクトリサービスを停止します。

- 8 使用するその他のリストアオプションを選択します。

p.1018 の「Enterprise Vault リストアオプション」を参照してください。

- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する

後で実行するジョブ 次を示す順序で操作を実行します。
をスケジュールする

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

- 10 リストアが正常に完了したら、すべてのディレクトリサービスおよび管理サービスを再起動します。

Enterprise Vault の監視データベースのリストア

監視データベースを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的に監視データベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて」を参照してください。

監視データベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。

- 3 [リソース別の表示] ペインで、[すべてのリソース] を展開します。
- 4 リストアする監視データベースが含まれている **Enterprise Vault** インストール済み環境を展開します。
たとえば、[Directory on <Computer name>] を展開します。
- 5 [**Monitoring DB (<SQL Server name>/<instance>/EnterpriseVaultMonitoring)**] を展開します。
- 6 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 7 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]をクリックします。
- 8 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]をクリックします。
このオプションを選択しない場合は、監視データベースをリストアしたい Enterprise Vault コンピュータの Enterprise Vault Admin Service および Enterprise Vault Directory Service を停止する必要があります。他の Enterprise Vault サーバーが監視データベースに接続している場合、それらのコンピュータでも管理サービスおよびディレクトリサービスを停止します。
- 9 使用するその他のリストアオプションを選択します。
p.1018 の「Enterprise Vault リストアオプション」を参照してください。
- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行] をクリックします。
実行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次を示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット] をクリックします。

- 11 リストアが正常に完了したら、すべてのディレクトリサービスおよび管理サービスを再起動します。

Enterprise Vault のパーティションのリストア

オープンパーティションをリストアすると、同じリストアジョブで、パーティションに関連するボルトストアデータベースが自動的にリストアされます。ボルトストアデータベースをリストアに含めることで、この 2 つのコンポーネント間の同期が保持されます。

メモ: オープンパーティションをリストアすると、リストア対象として選択したパーティションが、リストア先の Enterprise Vault サーバーでオープンした状態になります。

オープンパーティションのリストアジョブ時に、Enterprise Vault Agent はパーティションがバックアップされた時点でバックアップされたボルトデータベースをリストアします。ボルトデータベースバックアップがなければ、ボルトデータベースの既存のバックアップが代わりにリストアされます。Enterprise Vault Agent はパーティションバックアップの時点で最も近い時点でバックアップされたボルトデータベースのバックアップを選択します。

たとえば、10:00 AM にバックアップされたオープンパーティションをリストアする場合、Enterprise Vault Agent はボルトデータベースの 10:00 AM のバックアップをリストアします。ボルトデータベースの 10:00 AM のバックアップはないが、9:45 AM のバックアップがある場合、Enterprise Vault Agent は自動的に 9:45 AM のバックアップをリストアします。

オープンパーティション、クローズパーティションまたは Enterprise Vault 8.x 準備完了パーティションをリストアした後、Enterprise Vault リカバリツールを実行する必要があります。リカバリツールによって、ボルトストアデータベースとそれに関連するパーティション間の同期が保持されます。

Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。

p.1017 の「Enterprise Vault 7.x サーバーの元の場所へのリストア」を参照してください。

p.1023 の「別の Microsoft SQL Server コンピュータへの Enterprise Vault データベースのリストア先の変更」を参照してください。

p.1021 の「Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更」を参照してください。

Enterprise Vault のパーティションをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リストアジョブのプロパティ]ペインで、[すべてのリソース]を展開します。
- 4 リストアするパーティションが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- 5 次の手順を実行します。

Enterprise Vault 7.x のパーティションをリストアする
リストアする方法

- リストア対象のパーティションが存在するサーバーが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- リストアするパーティションが含まれている Enterprise Vault サーバーを展開します。

Enterprise Vault 8.x のパーティションをリストアする方法 次に示す順序で操作を実行します。

- リストアするパーティションが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
 - リストアするパーティションが含まれている ボルトストアグループを展開します。
- 6 [All Partition]を展開します。
 - 7 リストアするパーティションが含まれているパーティションを展開します。
 - 8 リストア元のバックアップセットを選択します。
 - 9 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]を選択します。
 - 10 使用するリストアオプションを選択します。
p.1018 の「Enterprise Vault リストアオプション」を参照してください。
 - 11 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐに行す [今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする 次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
 - [サブミット]をクリックします。
- 12 リストアが正常に完了したら、Enterprise Vault リカバリツールを実行します。

Enterprise Vault のボルトストアデータベースのリストア

ボルトストアデータベースをリストアするには、次の手順を実行します。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的にボルトストアデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて」を参照してください。

ボルトストアデータベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、リストアするボルトストアデータベースが含まれている [Directory on <Computer name>]を展開します。
- 4 次の手順を実行します。

Enterprise Vault 7.x のボルトストアデータベースをリストアする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- リストアするボルトストアデータベースが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- リストアするボルトストアデータベースが含まれている Enterprise Vault サーバーを展開します。

Enterprise Vault 8.x ボルトストアデータベースをバックアップする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- リストアするボルトストアデータベースが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- リストアするボルトストアデータベースが含まれているボルトストアグループを展開します。

- 5 ボルトストアを展開します。
- 6 [Vault Store DB (<SQL_Server_name>/<instance>/EV<vault_store_database_name>)]を展開します。
- 7 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 8 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]を選択します。
- 9 使用するリストアオプションを選択します。
p.1018 の「Enterprise Vault リストアオプション」を参照してください。
- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行う

後で実行するジョブ 次に示す順序で操作を実行します。

をスケジュールする

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x の監査データベースのリストア

監査データベースを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。監査データベースのリストア先を変更することもできます。

p.1021 の「[Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更](#)」を参照してください。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的に監査データベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 8.x の監査データベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、リストアする監査データベースが含まれている Enterprise Vault 8.x の[Directory on <Computer name>]を展開します。
- 4 [Audit DB (<SQL_Server_name>/<instance>/EnterpriseVaultAudit)]を展開します。
監査データベースの名前は決定した命名規則に基づきます。
- 5 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]を選択します。
- 7 使用するリストアオプションを選択します。
- 8 p.1018 の「[Enterprise Vault リストアオプション](#)」を参照してください。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベースのリストア

FSA レポートデータベースを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。FSA レポートデータベースのリストア先を変更することもできます。

p.1021 の「[Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更](#)」を参照してください。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的に FSA レポートデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、リストアする FSA レポートデータベースが含まれている Enterprise Vault 8.x の[Directory on <Computer name>]を展開します。
- 4 [**<FSAReporting_database_name> DB (<SQL_Server_name>/<instance>/EnterpriseVaultFSAReporting)**]を展開します。

FSA レポートデータベースの名前は決定した命名規則に基づきます。

- 5 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]を選択します。
- 7 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ポルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]にチェックマークを付けます。
- 8 使用するその他のリストアオプションを選択します。

- 9 p.1018 の「Enterprise Vault リストアオプション」を参照してください。
- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する	[今すぐ実行]をクリックします。
後で実行するジョブをスケジュールする	次に示す順序で操作を実行します。 <ul style="list-style-type: none">■ タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。■ スケジュールオプションを設定します。 p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。■ [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースのリストア

フィンガープリントデータベースを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。フィンガープリントデータベースのリストア先を変更することもできます。

p.1021 の「Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更」を参照してください。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的にフィンガープリントデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて」を参照してください。

Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、リストアするフィンガープリントデータベースが含まれている Enterprise Vault 8.x の[Directory on <Computer name>]を展開します。
- 4 リストアするフィンガープリントデータベースが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- 5 リストアするフィンガープリントデータベースが含まれているボルトストアグループを展開します。
- 6 [Fingerprint Databases]を展開します。

- 7 [Fingerprint DB
(<SQL_Server_name>/<instance>/<SQL_Server_name/vault_store_group_name>)]
を展開します。
- 8 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 9 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]を選択します。
- 10 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了し
ます。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]にチェック
マークを付けます。
- 11 必要なその他のリストアオプションを選択します。
p.1018 の「Enterprise Vault リストアオプション」を参照してください。
- 12 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[ス
ケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を
参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Compliance Accelerator 設定データベースのリストア

Compliance Accelerator 設定データベースを元の場所にリストアするには、次の手順
を実行します。設定データベースのリストア先を変更することもできます。

p.1021 の「Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更」を参照してください。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的に Compliance
Accelerator 設定データベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよ
び Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて」を参照してくださ
い。

Compliance Accelerator 設定データベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックし、[新規リストアジョブ]を選択します。
- 2 [リソース別の表示]ペインで、[Accelerators]を展開します。
- 3 [Compliance on <computer_name>]を展開します。
- 4 [Configuration DB <SQL_Server_name>/<instance>/EVConfiguration]を展開します。
- 5 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]を選択します。
- 7 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]にチェックマークを付けます。

このオプションを使わない場合は、Compliance Accelerator 設定データベースをリストアするコンピュータの Accelerator Manager service を停止する必要があります。

- 8 使用するその他のリストアオプションを選択します。
p.1018 の「Enterprise Vault リストアオプション」を参照してください。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

- 10 Backup Exec が正常にデータベースをリストアした後、Compliance Accelerator サーバー上で Accelerator Manager service を再起動します。

Compliance Accelerator カスタマーデータベースのリストア

1 つ以上の Compliance Accelerator カスタマーデータベースを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。カスタマーデータベースのリストア先を変更することもできます。

- p.1021 の「Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更」を参照してください。

Compliance Accelerator カスタマーデータベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [リソース別の表示]ペインで、[Accelerators]を展開します。
- 3 [Compliance on <computer_name>]を展開します。
- 4 [<database_name> Customer DB
<SQL_Server_name>/<instance>/CA/<database_name>]を展開します。
- 5 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 6 複数のカスタマーデータベースをリストアするには、手順 6 と 7 を繰り返します。
- 7 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]を選択します。
- 8 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]にチェックマークを付けます。

このオプションを使わない場合は、Compliance Accelerator カスタマーデータベースをリストアするコンピュータの Accelerator Manager service を停止する必要があります。

- 9 使用するその他のリストアオプションを選択します。

p.1018 の「Enterprise Vault リストアオプション」を参照してください。

- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

- 11 Backup Exec が正常に 1 つ以上のデータベースをリストアした後、Compliance Accelerator サーバー上で Accelerator Manager service を再起動します。

Discovery Accelerator 設定データベースのリストア

Discovery Accelerator 設定データベースを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。設定データベースのリストア先を変更することもできます。

p.1021 の「Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更」を参照してください。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的に Discovery Accelerator 設定データベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて」を参照してください。

Discovery Accelerator 設定データベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [リソース別の表示]ペインで、[Accelerators]を展開します。
- 3 [Discovery on <computer_name>]を展開します。
- 4 [Configuration DB <SQL_Server_name>/<instance>/DA]を展開します。
- 5 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[Enterprise Vault]を選択します。
- 7 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]にチェックマークを付けます。

このオプションを使わない場合は、Discovery Accelerator 設定データベースをリストアするコンピュータの Accelerator Manager service を停止する必要があります。

- 8 使用するその他のリストアオプションを選択します。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

- 10 Backup Exec が正常に 1 つ以上のデータベースをリストアした後、Discovery Accelerator サーバー上で Accelerator Manager service を再起動します。

Discovery Accelerator カストディアンデータベースのリストア

Discovery Accelerator カストディアンデータベースを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。カストディアンデータベースのリストア先を変更することもできます。

p.1021 の「[Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更](#)」を参照してください。

メモ: Enterprise Vault Agent は、データベースのリストア後に自動的に Discovery Accelerator カストディアンデータベースの物理的な一貫性チェックを実行します。

p.977 の「[Enterprise Vault データベース、Compliance Accelerator データベースおよび Discovery Accelerator データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Discovery Accelerator カストディアンデータベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [リソース別の表示]ペインで、[Accelerators]を展開します。
- 3 [Discovery on <computer_name>]を展開します。
- 4 [<database_name> Custodian DB <SQL_Server_name>/<instance>/database_name]を展開します。
- 5 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 6 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]にチェックマークを付けます。

このオプションを使わない場合は、Discovery Accelerator カストディアンデータベースをリストアするコンピュータの Accelerator Manager service を停止する必要があります。

- 7 使用するその他のリストアオプションを選択します。

p.1018 の「[Enterprise Vault リストアオプション](#)」を参照してください。

- 8 次の手順を実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

- 9 Backup Exec が正常に 1 つ以上のデータベースをリストアした後、Discovery Accelerator サーバー上で Accelerator Manager service を再起動します。

Discovery Accelerator カスタマーデータベースのリストア

1 つ以上の Discovery Accelerator カスタマーデータベースを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。カスタマーデータベースのリストア先を変更することもできます。

p.1021 の「[Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更](#)」を参照してください。

Discovery Accelerator カスタマーデータベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [リソース別の表示]ペインで、[Accelerators]を展開します。
- 3 [Discovery on <computer_name>]を展開します。
- 4 [<database_name> Customer DB <SQL_Server_name>/<instance>/database_name]を展開します。
- 5 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 6 [選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)]にチェックマークを付けます。

このオプションを使わない場合は、Discovery Accelerator カスタマーデータベースをリストアするコンピュータの Accelerator Manager service を停止する必要があります。

- 7 必要なその他のリストアオプションを選択します。

p.1018 の「[Enterprise Vault リストアオプション](#)」を参照してください。

- 8 次の手順を実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

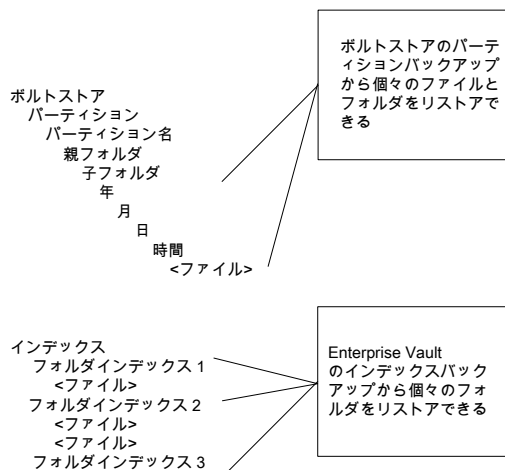
- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

9 Backup Exec が正常に 1 つ以上のデータベースをリストアした後、Discovery Accelerator サーバー上で Accelerator Manager service を再起動します。

Enterprise Vault Agent を使用した個々のファイルおよびフォルダのリストアについて

Enterprise Vault Agent は、ボルトストアパーティションバックアップからの個々のファイルとフォルダのリストアをサポートします。また、Enterprise Vault インデックスバックアップから完全なインデックスの場所または個々のフォルダをリストアすることもできます。

図 E-1 ボルトストアパーティションからの個々のファイルのリストアと Enterprise Vault インデックスからの完全なフォルダのリストア



p.1015の「[Enterprise Vault Agent を使用したパーティションからの個々のファイルのリストア](#)」を参照してください。

p.1016の「[Enterprise Vault インデックスバックアップからの個々のフォルダのリストア](#)」を参照してください。

Enterprise Vault Agent を使用したパーティションからの個々のファイルのリストア

次の手順を使用して、オープンおよびクローズパーティションから個々のファイルのリストアします。

p.1014 の「[Enterprise Vault Agent を使用した個々のファイルおよびフォルダのリストアについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault Agent を使用してパーティションから個々のファイルのリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リストアジョブのプロパティ]ペインで、[すべてのリソース]を展開します。
- 4 リストアするパーティションが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- 5 次の手順を実行します。

Enterprise Vault 7.x のパーティションから個々のファイルのリストアする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- リストア対象のパーティション情報が存在するサーバーが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- リストアするパーティション情報が存在する Enterprise Vault サーバーを展開します。

Enterprise Vault 8.x のパーティションから個々のファイルのリストアする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- リストア対象のパーティション情報が存在するボルトストアが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- リストアするパーティション情報が存在するボルトストアが含まれているボルトストアグループを展開します。

- 6 リストアするパーティションおよびファイルが含まれているボルトストアを展開します。
- 7 [All Partition]を展開します。
- 8 リストアするファイルが含まれているパーティションを展開します。
- 9 リストア元のバックアップセットを選択します。
- 10 結果ペインで、リストアする 1 つ以上のファイルやフォルダを選択します。

- 11 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 12 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

- 13 リストアが正常に完了したら、Enterprise Vault リカバリツールを実行します。詳しくは Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。

Enterprise Vault インデックスバックアップからの個々のフォルダのリストア

次の手順を使用して、Enterprise Vault インデックスから完全なフォルダをリストアします。

p.1014の「[Enterprise Vault Agentを使用した個々のファイルおよびフォルダのリストアについて](#)」を参照してください。

Enterprise Vault インデックスバックアップからフォルダをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、[すべてのリソース]を展開します。
- 4 [Enterprise Vault]を展開します。
- 5 リストアするインデックスの場所が含まれている[Directory on <Computer_Name>]を展開します。
- 6 次の手順を実行します。

インデックスバックアップから Enterprise Vault 7.x フォルダをリストアする方法

次に示す順序で操作を実行します。

- リストアするインデックスフォルダが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- リストアするインデックスフォルダが含まれている Enterprise Vault サーバーを展開します。

インデックスバックアップから Enterprise Vault 8.x フォルダをリストアする方法

次の手順を実行します。

- リストアするインデックスフォルダが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。

- 7 [インデックスの場所]を展開します。
- 8 リストアするフォルダが含まれているパスを展開します。
- 9 リストアするフォルダを含むバックアップセットを展開します。
- 10 リストアするインデックスフォルダを選択します。
- 11 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 12 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

Enterprise Vault 7.x サーバーの元の場所へのリストア

Enterprise Vault サーバーを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。サーバーのリストア先を別のコンピュータに変更することもできます。

p.1021 の「[Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更](#)」を参照してください。

p.1023の「別の Microsoft SQL Server コンピュータへの Enterprise Vault データベースのリストア先の変更」を参照してください。

Enterprise Vault サーバーを元の場所にリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リストアジョブのプロパティ]ペインで、[すべてのリソース]を展開します。
- 4 リストアするサーバーが含まれている[Directory on <Computer_name>]を展開します。
- 5 リストアするサーバーが含まれている Enterprise Vault サイトを展開します。
- 6 Enterprise Vault サーバーを展開します。
- 7 ボルトストアを展開します。
- 8 [All Partition]を展開します。
- 9 各パーティションを展開します。
- 10 各パーティションのバックアップセットを選択します。
- 11 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
実行する

後で実行するジョブ 次に示す順序で操作を実行します。
をスケジュールする

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

- 12 リストアが正常に完了したら、すべてのディレクトリサービスおよび管理サービスを再起動します。

Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。

Enterprise Vault リストアオプション

Enterprise Vault データベースをリストアするときに使用するリストアオプションを選択するのに次の表を使用します。

表 E-3 Enterprise Vault リストアオプション

項目	説明
選択したデータベースをリストアするときにデータベース接続を自動的に終了します。(ボルトストアデータベースのデータベース接続は終了しません。)	

項目	説明
	<p>リストアジョブの実行中に Backup Exec でこれらのデータベースを置換できるように、共有の Enterprise Vault ディレクトリデータベース、監視データベース、監査データベース、FSA レポートデータベース、フィンガープリントデータベースをオフラインにします。</p> <p>メモ: このオプションを使わないと、以前に説明したデータベースをリストアする前にすべての Enterprise Vault サーバーの Directory Service および Admin Service を停止する必要があります。また、すべての Compliance Accelerator サーバーと Discovery サーバーの Accelerator Manager service を停止する必要があります。Accelerator Manager を停止した場合にのみ、カスタマー、設定およびカスタディアンデータベースをリストアできます。</p> <p>このオプションでは、関連するすべての Enterprise Vault サーバー上の Enterprise Vault Admin Service および Enterprise Vault Directory Service で、リストアするディレクトリデータベースへの接続が終端処理されます。</p> <p>また次の接続が終了します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 監視データベース ■ 監査、フィンガープリントおよび FSA レポートデータベース (Enterprise Vault 8.x のみ) ■ 設定、カスタマーおよびカスタディアンデータベース <p>リストアジョブの完了後、Enterprise Vault サーバー上の Enterprise Vault Admin Service および Enterprise Vault Directory Service を手動で再起動する必要があります。サービスを再起動すると、リストアしたデータベースへの再接続が行われ、Enterprise Vault でアーカイブ操作が再開されます。</p> <p>メモ: このオプションでは、すべての Enterprise Vault サーバー上の Enterprise Vault Admin Service および Enterprise Vault Directory Service で、リストアするディレクトリデータベースへの接続が終端処理されます。また Enterprise Vault Accelerator Manager データベースへの接続も終端処理されます。</p>

項目	説明
データベースは使用可能な状態、トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能	最新データベースバックアップ、差分バックアップまたはログバックアップをリストアするときすべての未完了のトランザクションをロールバックします。リカバリ完了時にはデータベースが使用できる状態になっています。このオプションを選択しなかった場合は、データベースは中間状態のまま、使用することができません。 このオプションを選択した場合は、バックアップのリストアは中止され、最初からリストアをやり直す必要があります。
データベースは操作不可能な状態、トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは可能	スタンバイデータベースを作成し、保持します。 このオプションを使用して、操作対象外のデータベースの他のバックアップセットのリストアを続行できます。 スタンバイデータベースについて詳しくは SQL のマニュアルを参照してください。

メモ: シマンテック社はボルトストアデータベースに 1 つのリストアのジョブを実行するときすべての必須のバックアップセットを選択することを推奨します。必要なすべてのバックアップセットに完全、差分および増分のバックアップセットを含めることができます。またボルトストアデータベースはリストアジョブが完了した後に使用可能な状態になるようにしてください。

p.999 の「[Enterprise Vault のディレクトリデータベースのリストア](#)」を参照してください。

p.1000 の「[Enterprise Vault の監視データベースのリストア](#)」を参照してください。

p.1001 の「[Enterprise Vault のパーティションのリストア](#)」を参照してください。

Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更

Enterprise Vault リストアジョブのリストア先を変更するには、次の手順を実行します。

ディレクトリデータベースを別の Microsoft SQL Server コンピュータにリストアすることもできます。

p.1023 の「[別の Microsoft SQL Server コンピュータへの Enterprise Vault データベースのリストア先の変更](#)」を参照してください。

Enterprise Vault リストアジョブのリストア先を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。

- 3 [リストアジョブのプロパティ]ペインで、[すべてのリソース]を展開します。
- 4 リストア時にリストア先を変更する Enterprise Vault コンポーネントを検索して選択します。
- 5 [リストアジョブのプロパティ]ペインの[宛先]の下にある[Enterprise Vault のリストア先の変更]をクリックします。
- 6 リストア先を変更するリストアの種類を選択します。
p.1022 の「[\[Enterprise Vault のリストア先の変更\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 次のいずれかを実行します。
表示されるデフォルトのログオンアカウントを使用します。
[変更]をクリックして、別のアカウントを選択します。
- 8 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
実行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

[Enterprise Vault のリストア先の変更]オプション

Enterprise Vault コンポーネントのリストアジョブのリストア先を変更できます。

p.1021 の「[Enterprise Vault リストアジョブのリストア先の変更](#)」を参照してください。

表 E-4 [Enterprise Vault のリストア先の変更]オプション

項目	説明
Enterprise Vault のリストア先を次のサーバーに変更する (Enterprise Vault 7.x のみ)	Enterprise Vault 7.x のバックアップのリストア先を別のサーバーに変更します。
Enterprise Vault のリストア先を次のサーバーに変更する	Enterprise Vault 7.x のリストアジョブのリストア先を変更する宛先サーバーを示します。

項目	説明
新しい Microsoft SQL サーバーにリストア先を変更する	異なる SQL Server に Enterprise Vault データベースと Accelerator データベースのリストアジョブのリストア先を変更します。 メモ: ボルトストアデータベースは Enterprise Vault 8.0 の場合にのみリストアされます。
サーバー	ボルトストアのリストアジョブの変更先サーバーの名前を表示します。
インスタンス	ボルトストアのリストアジョブの変更先にしたい SQL Server のインスタンスの名前を表示します。
新しい場所にインデックスルートをリストアする	インデックスルートのリストアジョブを新しい場所に変更します。 Enterprise Vault サーバーのリストア先を変更する場合は、宛先サーバー上の代替パスを指定できます。インデックスルートの場所のリストア先を、元のサーバー上の代替パスに変更することもできます。
パス	インデックスルートのリストアジョブの変更先にしたいパス名を表示します。
新しい場所にパーティションをリストアする	ボルトストアパーティションのリストアジョブを新しい場所に変更します。 パーティションは Enterprise Vault 8.0 の場合にのみリストアされます。
パス	ボルトストアパーティションのリストアジョブの変更先にしたいパス名を表示します。
Enterprise Vault のログオンアカウント	使用するログオンアカウントを指定します。

別の Microsoft SQL Server コンピュータへの Enterprise Vault データベースのリストア先の変更

Enterprise Vault データベースのリストア先を、別の Microsoft SQL Server コンピュータに変更するには、次の手順を実行します。

p.996 の「[Enterprise Vault のリストアについて](#)」を参照してください。

ディレクトリデータベースのリストア先を別の Microsoft SQL Server コンピュータに変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする **Enterprise Vault** ディレクトリデータベースを検索して選択します。
- 4 タスクペインの[宛先]の下にある[Enterprise Vault のリストア先の変更]をクリックします。
- 5 [新しい Microsoft SQL サーバーにリストア先を変更する]にチェックマークを付けます。
- 6 サーバーフィールドに、リストア先の **SQL Server** の名前を入力します。
次の書式を使用します。¥¥servername
- 7 リストア先を **SQL** の名前付きインスタンスに変更する場合は、[インスタンス]にチェックマークを付けてインスタンス名を入力します。デフォルトのインスタンスにリストアする場合は、このフィールドには何も入力しないでください。
- 8 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
実行する

後で実行するジョブ 次の示す順序で操作を実行します。
をスケジュールする

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

- 10 リストアジョブの完了後、**SQL** データベースサーバーの新しい名前を使用するように、**Enterprise Vault** を設定します。

p.1025 の「[ディレクトリデータベースを保持する新しい SQL Server の名前を使用するための Enterprise Vault の設定](#)」を参照してください。

ディレクトリデータベースを保持する新しい SQL Server の名前を使用するための Enterprise Vault の設定

ディレクトリデータベースを保持する新しい SQL データベースの名前を使用するために Enterprise Vault を設定するには次の手順を使用します。

p.1023 の「別の Microsoft SQL Server コンピュータへの Enterprise Vault データベースのリストア先の変更」を参照してください。

ディレクトリデータベースを保持する新しい SQL Server の名前を使用するために Enterprise Vault を設定する方法

- 1 各 Enterprise Vault サーバーで、Enterprise Vault を使用して以前の SQL Server コンピュータの名前を変更します。ディレクトリデータベースを現在保持している SQL Server コンピュータの名前に変更する必要があります。

Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。

- 2 ディレクトリデータベースを使用しているすべての Enterprise Vault サーバーで、Enterprise Vault Admin Service を再起動します。

Enterprise Vault サーバー上の Enterprise Vault Admin Service を再起動すると、バックアップ選択ビューに 2 つのディレクトリ名が表示されます。

たとえば、[Directory on <OldSQL_computer_name>]、[Directory on <NewSQL_computer_name>]などです。

- 3 Backup Exec で、ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 4 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 5 [Enterprise Vault]を展開します。
- 6 [Directory on <SQL server computer where you moved the Directory database>]を展開します。
- 7 [Directory on <SQL server computer where you moved the Directory database<]の下のすべての項目を展開します。

ディレクトリデータベース、監視データベース、Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベースと監査データベース、Enterprise Vault サイトが表示されます。さらに、ディレクトリデータベースには、リストアの変更先の新しい SQL Server の名前およびインスタンスが表示されます。

新しいディレクトリデータベースバックアップジョブを設定する際には、現在のディレクトリサーバーからディレクトリデータベースを選択する必要があります。以前のディレクトリサーバー名は、ディレクトリデータベースの移動を完了してから 13 日後に自動的に削除されます。

- 8 手動で以前のサーバー名を削除するには、[**Directory on <OldSQL_computer_name>**]を右クリックします。
- 9 [削除]をクリックします。

Enterprise Vault Agent の推奨事項

シマンテック社は Enterprise Vault Agent を使うとき次の事項を推奨します。

- Enterprise Vault で設定変更を行った後に Enterprise Vault ディレクトリデータベースをバックアップしてください。
- 別の Backup Exec リストアジョブで Enterprise Vault ディレクトリデータベースをリストアしてください。
- 1つのリストアジョブでボルトストアデータベースの完全バックアップセット、差分バックアップセット、増分バックアップセットをすべてリストアしてください。
- バックアップ時間帯とアーカイブ時間帯が重複しないようにしてください。
- バックアップ時間帯と移行時間帯が重複しないようにしてください。
- Enterprise Vault 8.x ディレクトリデータベースをバックアップする前に Enterprise Vault 8.x のコンポーネントがバックアップモードではないことを確かめてください。
- Symantec Backup Exec NDMP Option と Enterprise Vault Agent を両方インストールした場合は、NDMP ファイラに存在する Enterprise Vault パーティションを保護するために 1つの製品のみ選んでください。
- Enterprise Vault によって作成されるデータベースのリカバリモデルを変更しないでください。Enterprise Vault はデータベースの作成時に各データベースを完全なリカバリモードに設定します。

Backup Exec Migrator for Enterprise Vault について

Backup Exec Migrator for Enterprise Vault (Backup Exec Migrator) では、Backup Exec が管理するストレージデバイスに Enterprise Vault のアーカイブデータを自動的に移行できます。Enterprise Vault のアーカイブデータをパーティションから移行することで、追加のハードウェアの費用を支払うことなく Enterprise Vault サーバーのディスク領域を再利用できます。

また、Backup Exec メディアサーバーのストレージデバイスに Enterprise Vault のアーカイブデータを移行することで、オフホスト環境を使用したストレージ冗長性の追加レベルも確保されます。

p.1027 の「[Backup Exec Migrator の動作](#)」を参照してください。

p.1033 の「[Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。

Backup Exec Migrator for Enterprise Vault の必要条件

Backup Exec Migrator を設定する前に、Enterprise Vault サーバーが次の必要条件を満たすことを確認してください:

- Backup Exec Agent for Enterprise Vault が Enterprise Vault サーバーにインストールされている必要があります。
- Enterprise Vault の移行とコレクションは、データの移行元の Enterprise Vault パーティション用に有効にする必要があります。
- Enterprise Vault サーバーには Enterprise Vault 8.0 SP3 以降がインストールされている必要があります。

Backup Exec Migrator の動作

Backup Exec Migrator を設定した後、Enterprise Vault は自動的に Enterprise Vault サーバーからすべてのデータ移行操作を開始します。Enterprise Vault は、Enterprise Vault 管理コンソールで設定したアーカイブポリシーとデータ保持ポリシーに基づいて移行対象を決定します。次に Backup Exec Migrator は、Enterprise Vault がアーカイブ可能なデータをボルトストアパーティションから収集した後、アーカイブデータを Backup Exec メディアサーバーに移行します。パーティションの移行オプションを設定するとき、移行期間を設定できます。すべての移行オプションは Enterprise Vault サーバーで設定されます。

表 E-5 Enterprise Vault のデータ移行の処理

処理	説明
Enterprise Vault はファイルサイズまたはファイル作成日に基づいて、アーカイブ可能なパーティションデータをアーカイブします。	アーカイブ可能なすべてのデータは、データを移行するパーティションで判断されます。 Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。

処理	説明
<p>Enterprise Vault がアーカイブ処理を完了した後、Enterprise Vault の収集処理はアーカイブデータを集めます。</p>	<p>収集処理は Windows の .cab ファイルにアーカイブデータを配置します。 .cab ファイルは移行が行われるパーティションに保存されます。</p> <p>アーカイブ可能なデータには、次の拡張子が付いている Enterprise Vault ファイルを含めることができます：</p> <ul style="list-style-type: none">■ .dvf■ .dvssp■ .dvsc■ .dvs <p>メモ: アーカイブ可能なデータの一部はファイルサイズの制限により .cab ファイルに圧縮できません。ただし、Backup Exec Migrator は移行操作の間にデータを移行します。</p> <p>Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。</p>

処理	説明
<p>Backup Exec Migrator は Backup Exec メディアサーバーへのアーカイブデータファイルの移行を開始します。</p>	<p>移行期間のスケジュールは、パーティションの移行を設定するときとパーティションの収集スケジュールを設定するときに決定されます。</p> <p>p.1034 の「Enterprise Vault のコレクションの設定」を参照してください。</p> <p>p.1038 の「Enterprise Vault と通信するための Backup Exec Migrator の設定」を参照してください。</p> <p>Backup Exec Migrator と Enterprise Vault パーティションのシマンテック社設定推奨事項に従えば、移行期間にパーティションごとに1つの移行ジョブが実行されます。ただし、設定推奨事項に従わない場合、Backup Exec Migrator はパーティションフォルダごとに複数の移行ジョブを作成することがあります。複数のジョブが作成されると、ジョブの実行にオーバーヘッドが要求されて移行および取り込みのパフォーマンスが低下します。</p> <p>メモ: 移行期間にまたがって Enterprise Vault サーバーからのファイル取り込み要求をスケジュール設定すると、設定推奨事項に従っても複数のジョブが作成されます。この場合、Backup Exec Migrator は要求されたファイルの取り込みを促進する複数のジョブを自動的に作成します。移行操作時に、リストアジョブは移行ジョブ間で実行されるようにスケジュールを設定できません。</p> <p>設定推奨事項に従わない場合、ファイル取り込みのパフォーマンスに影響する可能性があります。</p> <p>最も効率の良い移行と取り込みのパフォーマンスを可能にするには、Backup Exec Migrator と Enterprise Vault パーティションを設定するときにシマンテック社推奨事項に従ってください。</p> <p>p.1033 の「Backup Exec Migrator の設定」を参照してください。</p>

処理	説明
<p>Backup Exec は、すべての移行ファイルをストレージデバイスに移動することで、移行処理を完了します。</p>	<p>シマンテック社はステージングされた移行操作に 2 つのストレージデバイスの設定を推奨します。</p> <p>p.1030 の「Backup Exec と Backup Exec Migrator」でのステージングされた移行の使用について」を参照してください。</p> <p>p.1033 の「Backup Exec Migrator の設定」を参照してください。</p>

Backup Exec が .cab ファイルをストレージデバイスに移行した後は、Backup Exec の [ジョブモニター] タブの [ジョブ履歴] ペインで移行の詳細を確認できます。

Backup Exec と Backup Exec Migrator でのステージングされた移行の使用について

Backup Exec Migrator を使用するために Backup Exec を設定するとき、シマンテック社はステージングされた移行操作に 2 つのストレージデバイスを設定することを推奨します。使用するデバイスを考慮するときは、高パフォーマンスのディスクへのバックアップフォルダと、低パフォーマンスのテープデバイスの選択を考慮してください。2 つのデバイスの使用によって、アーカイブデータは 2 つのステージで移行できます。

最初のステージでは、Backup Exec は Backup Exec Migrator から受信したデータを高パフォーマンスのハードディスクドライブのディスクへのバックアップフォルダに移行します。ディスクへのバックアップフォルダの使用によって、最初の移行を実行するためにかかる時間を最小限に抑えることができます。移行の第 2 ステージでは、Backup Exec は複製ジョブを作成して、ディスクへのバックアップフォルダからテープデバイスにアーカイブデータを移行します。メディアサーバーの活動レベルが低いときは、テープデバイスにアーカイブデータを時々移動する複製ジョブのスケジュールを設定できます。

p.1035 の「[Backup Exec メディアサーバーで使用するための Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。

p.1038 の「[Enterprise Vault と通信するための Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。

Backup Exec Migrator のイベントについて

Backup Exec Migrator は実行するタスクの状態を指定するイベントを生成します。このイベントはトラブルシューティングを行うのに有益な情報も提供します。Windows イベントビューアを表示することによって Enterprise Vault Storage Service をインストールしたコンピュータでイベントを表示できます。イベントビューアでは、[Enterprise Vault] の下にイベントを表示できます。また Enterprise Vault Dtrace ユーティリティでイベントを表示することもできます。

Enterprise Vault Dtrace ユーティリティについて詳しくは、Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。

p.1031 の「[Backup Exec Migrator のログについて](#)」を参照してください。

Backup Exec Migrator のログについて

Backup Exec Migrator はすべての移行アクティビティをログに記録するログファイルを作成できます。ログファイルは Enterprise Vault サーバーと Backup Exec メディアサーバー両方に存在します。Backup Exec Migrator のログファイルは移行の問題をトラブルシューティングするうえで役立ちます。

ログファイルを表示する前に Enterprise Vault サーバーと Backup Exec メディアサーバーで Backup Exec Migrator のログを有効にする必要があります。Enterprise Vault サーバーで Backup Exec Migrator のログを有効にするには、Windows レジストリを編集します。

Enterprise Vault サーバーで Backup Exec Migrator のログを有効にする方法について詳しくは次を参照してください:

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-27>

メディアサーバーで Backup Exec Migrator のログを有効にするには「[トラブルシューティングのための Backup Exec の Debug Monitor の使用](#)」を参照してください。

メモ: Partition Recovery Utility のログファイルはデフォルトで有効になります。

Enterprise Vault サーバーと Backup Exec メディアサーバーでログを有効にすると、次の種類のログファイルが作成されます。

- VxBSA のログファイル
たとえば、<computer_name>-vxbsa<00>.log です。
- Partition Recovery Utility のログファイル
たとえば、partitionrecovery<00>.log です。
- Backup Exec メディアサーバーのログファイル
たとえば、<computer_name>-bengine<00>.log です。

Backup Exec Migrator が起動されるたびに、VxBSA の別のログファイルが作成されます。その結果、それぞれの新しいログファイルの通し番号は 1 つずつ増加します。

たとえば、<computer_name> vxbsa00.log、<computer_name> vxbsa01.log です。

同様に、Partition Recovery Utility が起動されるたびに、新しいログファイルが作成されます。その結果、Partition Recovery Utility のそれぞれの新しいログファイルの通し番号は 1 つずつ増加します。

たとえば、partitionrecovery00.log、partitionrecovery01.log です。

Backup Exec メディアサーバーのログファイル番号は複数のログファイルが作成されると同時に 1 つずつ増加します。

たとえば、<computer_name>-bengine00.log、<computer_name>-bengine01.log です。

次の場所でログファイルを見つけることができます。

表 E-6 Backup Exec Migrator と Partition Recovery Utility のログファイルの場所

ログファイル	コンピュータ	ディレクトリの場所
VxBSA のログファイル Partition Recovery Utility の ログファイル	Enterprise Vault サーバー	C:\Program Files\Symantec\BACKUP EXEC\RAWS\logs
Backup Exec メディアサーバー のログファイル	Backup Exec メディアサーバー	C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\Logs

p.1030 の「[Backup Exec Migrator のイベントについて](#)」を参照してください。

Backup Exec Migrator で移行したファイルの削除について

Enterprise Vault はアーカイブ項目の Enterprise Vault の保持期間が終了するとそのアーカイブ項目を自動的に削除します。Enterprise Vault の保持期間は Enterprise Vault がアーカイブ項目を削除するまでアーカイブ項目を保持する期間を示します。

Backup Exec Migrator はアーカイブ項目をテープに移行するときにアーカイブ項目の既存の Enterprise Vault の保持期間を保持します。その結果、項目のデータ保持期間が終了すると、Enterprise Vault は Backup Exec が管理するストレージテープから項目を削除するコマンドを発行します。終了したアーカイブ項目を削除するには、そのアーカイブ項目が存在する .cab ファイルをテープから削除しなければなりません。

メモ: Backup Exec Migrator は Enterprise Vault の既存の保持期間は維持しますが、終了したアーカイブ項目またはアーカイブパーティションのテープからの削除は開始しません。Enterprise Vault のみが終了した項目とパーティションの削除を開始できます。

終了した項目を削除する方法について詳しくは Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。

.cab ファイルに保持期間が異なるアーカイブ項目が含まれていることがあるため、終了した項目は Backup Exec のカタログで削除済みとマーク付けされることがあります。ただし、テープからすぐに削除されないこともあります。.cab ファイルのすべてのアーカイブ項

目は、Enterprise Vault がテープから .cab ファイルを削除するコマンドを発行する前に保持期間が終了していなければなりません。

Enterprise Vault はテープからアーカイブされたボルトストアパーティション全体を削除することもできます。Enterprise Vault 管理コンソールを使用してアクティブな Enterprise Vault ボルトストアパーティションを削除すると、Enterprise Vault は関連付けられたアーカイブパーティションをテープから削除します。

Backup Exec はテープのすべての項目がカタログで削除済みとマーク付けされるとそのテープを自動的に再利用します。Backup Exec は終了した Enterprise Vault Migrator メディアがあるかどうかを 24 時間に 1 回調べます。Backup Exec はそのようなメディアを検出したら、[スラッシュメディア]ノードに論理的にメディアを移動し、次に移動を知らせる情報アラートを生成します。

メモ: 終了した Enterprise Vault Migrator メディアは Backup Exec のカタログで削除済みとマーク付けされている移行された Enterprise Vault データのみを含んでいるメディアと定義されます。

p.203 の「Backup Exec のメディアについて」を参照してください。

メモ: 移行された Enterprise Vault データが、Enterprise Vault データ保持期間が終了するまで移行に使われるテープでアクセス可能なままであることを確認してください。したがって、シマンテック社は移行に使われるすべてのテープに無期限の保持期間を設定することを推奨します。

p.206 の「メディアの上書き禁止について」を参照してください。

Backup Exec Migrator の設定

Backup Exec Migrator の実行に必要なすべてのプログラムファイルは Enterprise Vault サーバーに Enterprise Vault Agent をインストールするときにインストールされます。ただし、Backup Exec Migrator を使うには、宛先の Backup Exec メディアサーバーと Enterprise Vault サーバーの両方で動作するように設定する必要があります。

表 E-7 Enterprise Vault の設定の処理

手順	説明
手順 1	Enterprise Vault のコレクションを設定します。 p.1035 の「ボルトストアパーティションのプロパティ - コレクション」を参照してください。

手順	説明
手順 2	<p>Backup Exec メディアサーバーで使用するために Backup Exec Migrator を設定します。</p> <p>p.1035 の「Backup Exec メディアサーバーで使用するための Backup Exec Migrator の設定」を参照してください。</p>
手順 3	<p>Enterprise Vault で使用するために Backup Exec Migrator を設定します。</p> <p>p.1038 の「Enterprise Vault と通信するための Backup Exec Migrator の設定」を参照してください。</p>

Backup Exec Migrator と Enterprise Vault のパーティションの両方の設定に関する次の推奨事項に従います。

- 移行したデータをローカルに保存するために Enterprise Vault のパーティションを設定してください。
移行操作が終わった直後にファイルを削除するように Enterprise Vault のパーティションを設定しないでください。
移行のパーティション設定について詳しくは、Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。
- ステージングされた移行を実行するために Backup Exec メディアサーバーのテンプレートを設定してください。
p.1030 の「[Backup Exec と Backup Exec Migrator でのステージングされた移行の使用について](#)」を参照してください。

設定の推奨事項に従わないと、移行と取り込みのパフォーマンスが低下します。

Enterprise Vault のコレクションの設定

パーティションから Enterprise Vault のアーカイブデータを移行するために Backup Exec Migrator を使うには、事前に Enterprise Vault でデータを収集する必要があります。

Enterprise Vault のコレクションを設定する方法

- 1 Enterprise Vault コンソールから、データを移行したいボルトストアパーティションに移動します。
- 2 パーティションを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 3 [コレクション]タブで、[コレクションファイルを使用]にチェックマークを付けます。

- 4 必要に応じてコレクションオプションを設定します。
p.1035の「[ボルトストアパーティションのプロパティ-コレクション](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

ボルトストアパーティションのプロパティ - コレクション

パーティションから Enterprise Vault のアーカイブデータを移行するために Backup Exec Migrator を使うには、事前に Enterprise Vault で移行するデータを収集する必要があります。

p.1034 の「[Enterprise Vault のコレクションの設定](#)」を参照してください。

表 E-8 ボルトストアパーティションのプロパティ - コレクションオプション

項目	説明
コレクションファイルを使用	Enterprise Vault をコレクタとして設定できます。
開始時刻	コレクションを開始するローカル時刻を示します。
終了時刻	コレクションを終了するローカル時刻を示します。 Enterprise Vault はこの時点または収集するファイルがなくなったときのうちのいずれか早いほうのタイミングで収集を停止します。
コレクションファイルの最大サイズ: <number> MB	コレクションファイルの最大サイズを示します。 1 MB から 99 MB の範囲のファイルサイズを指定できますが、デフォルトのサイズは 10 MB です。 バックアップメディアの使用を最適化するためにこの値を変更することもできます。
次より古いファイルをコレクション	項目がアーカイブされてから、コレクション対象にされるまでの経過時間を示します。

Backup Exec メディアサーバーで使用するための Backup Exec Migrator の設定

宛先の Backup Exec メディアサーバーで使用するように Backup Exec Migrator を設定するには、次の手順を実行します。

メモ: シマンテック社は Backup Exec を使用するために Backup Exec Migrator を設定するときに 2 つのメディアサーバストレージデバイスを設定することを推奨します。2 つのストレージデバイスを設定すると、Enterprise Vault のアーカイブデータ用のステージングされた移行を作成できます。

p.1030 の「[Backup Exec と Backup Exec Migrator でのステージングされた移行の使用について](#)」を参照してください。

p.1038 の「[Enterprise Vault と通信するための Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。

Backup Exec メディアサーバで使用するために Backup Exec Migrator を設定する方法

- 1 Backup Exec メディアサーバで、Backup Exec を起動します。
- 2 Enterprise Vault サーバのボルトサービスアカウントクレデンシアルを使うログオンアカウントを作成します。

ボルトサービスアカウントクレデンシアルは、Backup Exec と Backup Exec Migrator が移行操作を完了できるように使われます。

p.175 の「[Backup Exec ログオンアカウントの作成](#)」を参照してください。

- 3 ナビゲーションバーで[ツール]をクリックし、次に[オプション]をクリックします。
- 4 [ジョブのデフォルト設定]の下で、[DBA 開始ジョブの設定]をクリックします。
- 5 **DEFAULT**テンプレートを選択し、次に[編集]をクリックします。
また、既存のテンプレートを使うこともできます。または Enterprise Vault の移行専用の新しいテンプレートを作成できます。
- 6 [バックアップジョブテンプレート]の下で、[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 7 ディスクへのバックアップフォルダを、移行データのプライマリストレージの場所として選択し、次にデバイスに使用したいオプションを設定します。
- 8 [**Migrator for Enterprise Vault**]で、[ボルトサービスアカウントクレデンシアル]の横にある下向き矢印をクリックします。
- 9 手順 2 で作成したログオンアカウントを選択します。

p.1037 の「[\[Migrator for Enterprise Vault\]オプション](#)」を参照してください。

- 10 必要に応じて、[バックアップジョブテンプレート]の下で他のオプションを設定します。

p.419 の「[DBA 開始ジョブの編集](#)」を参照してください。

- 11 次のいずれかを実行します。

ステージングされた移行を設定したい場合 次に示す順序で操作を実行します。

p.1030 の「[Backup Exec と Backup Exec Migrator](#)」でのステージングされた移行の使用について」を参照してください。

- [複製ジョブのテンプレート]の下で、[設定]をクリックします。
 - [このジョブのバックアップセットを複製する設定を有効にする]にチェックマークを付けます。
 - [デバイス]リストで、テープデバイスを選択します。
 - 必要に応じて他のオプションを設定します。
- p.414 の「[DBA 開始ジョブの複製ジョブテンプレートの設定](#)」を参照してください。
- [OK]をクリックします。

ステージングされた移行を設定したくない場合 手順 12 に進みます。

12 [OK]をクリックします。

13 Enterprise Vault で使用するために Backup Exec Migrator を設定します。

p.1038 の「[Enterprise Vault と通信するための Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。

[Migrator for Enterprise Vault]オプション

Backup Exec Migrator は Backup Exec メディアサーバーに対する Backup Exec Migrator の認証処理時に Enterprise Vault サーバーのボルトサービスアカウントを使います。

表 E-9 [Migrator for Enterprise Vault]オプション

項目	説明
ボルトサービスアカウントクレデンシヤル	<p>Enterprise Vault サーバーのボルトサービスアカウントクレデンシヤルを使うように指定して、Backup ExecとBackup Exec Migrator が移行操作を完了できるようにします。</p> <p>ボルトサービスアカウントは Backup Exec メディアサーバーの Administrators グループか Backup Operators グループに含まれていなければなりません。</p> <p>メモ: Enterprise Vault サーバーと Backup Exec メディアサーバーが異なるドメインにある場合は、信頼関係をドメイン間で確立しなければなりません。ボルトサービスアカウントのユーザーは、Backup Exec メディアサーバーで信頼できるユーザーでなければなりません。信頼関係は Microsoft のセキュリティサポートプロバイダインターフェイス (SSPI) でボルトサービスアカウントのユーザーを認証できるようにするために必要です。</p> <p>ドメインの信頼関係について詳しくは、Microsoft のマニュアルを参照してください。</p>
新規	<p>新しいログオンアカウントを作成するか、または既存のアカウントを編集できます。</p> <p>p.175 の「Backup Exec ログオンアカウントの作成」を参照してください。</p>

Enterprise Vault と通信するための Backup Exec Migrator の設定

Enterprise Vault と通信するために Backup Exec Migrator を設定するには、次の手順を実行します。

p.1033 の「[Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。

Enterprise Vault と通信するために Backup Exec Migrator を設定する方法

- 1 Enterprise Vault サーバーで、データを移行したいボルトストアパーティションに移動します。
- 2 ボルトストアパーティションを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 3 [移行]タブで、[ファイルを移行]にチェックマークを付けます。

- 4 [以下のコレクションファイルをプライマリストレージから削除]で、このオプションの期間を **0** 日より長い値に設定します。

0 日に設定しないでください。期間を **0** 日に設定すると、Enterprise Vault でパーティションから移行データがただちに削除されます。さらに重要なのは、移行期間中に移行される各パーティションフォルダの複数の移行ジョブが Backup Exec Migrator によって作成されることです。複数のジョブが作成されると、ジョブの実行にオーバーヘッドが要求されて移行および取り込みのパフォーマンスが低下します。

p.1033 の「[Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。
- 5 必要に応じて他の移行オプションを設定します。

p.1040 の「[ボルトストアパーティションのプロパティ-移行オプション](#)」を参照してください。
- 6 [詳細]タブで、[Symantec Backup Exec]が[一覧表示する設定の種類]フィールドに表示されることを確認します。
- 7 [一覧表示する設定の種類]フィールドの下のウィンドウで、[Backup Exec メディアサーバー]を選択します。
- 8 [修正]をクリックします。
- 9 宛先の Backup Exec サーバーの名前か IP アドレスを入力します。
- 10 [OK]をクリックします。
- 11 [Backup Exec DBA 開始ジョブテンプレート]を選択します。
- 12 [修正]をクリックします。
- 13 Enterprise Vault サーバーのボルトサービスアカウントクレデンシャルを使う既存のテンプレートの名前を入力します。

選択するテンプレートは Enterprise Vault サーバーのボルトサービスアカウントを使うように設定されていなければなりません。また、使用するテンプレートは、メディアサーバーで使用するために Backup Exec Migrator を設定したときに使ったテンプレート名と一致している必要があります。

p.1035 の「[Backup Exec メディアサーバーで使用するための Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。
- 14 [OK]をクリックします。
- 15 Enterprise Vault サーバーのボルトサービスアカウントクレデンシャルを含んでいるテンプレートの名前が[設定値]ペインに表示されることを確認してください。

p.1035 の「[Backup Exec メディアサーバーで使用するための Backup Exec Migrator の設定](#)」を参照してください。
- 16 Enterprise Vault サーバーと Backup Exec メディアサーバー間の通信をテストするには、[テスト]をクリックします。

- 17 テストが失敗したら、ボルトサービスアカウントに正しいクレデンシャルが使用されていることを確認し、再度[テスト]をクリックします。
- 18 テストが正常に完了した後[OK]をクリックします。
- 19 [OK]をクリックします。

ボルトストアパーティションのプロパティ - 移行オプション

使いたい Enterprise Vault の移行プロパティのオプションを選択してください。

表 E-10 ボルトストアパーティションのプロパティ - 移行オプション

項目	説明
ファイルを移行	<p>Backup Exec のストレージデバイスに Enterprise Vault のアーカイブデータを移行できます。</p> <p>移行によって、三次ストレージデバイスにコレクションファイルが移動されてストレージコストが削減されます。ただし、取り込み時間が長くなる可能性があります。</p> <p>Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。</p>
移行ソフトウェア	<p>移行アプリケーションの名前を示します。</p> <p>Symantec Backup Exec はこのフィールドに表示されます。</p>
次より古いファイルを移行	<p>ファイルが最後に修正されてから、移行対象にされるまでの経過時間を示します。</p> <p>Enterprise Vault のマニュアルを参照してください。</p>

項目	説明
以下のコレクションファイルをプライマリストレージから削除	<p>移行したコレクションファイルをプライマリストレージの場所から削除するまでの経過時間を示します。</p> <p>Backup Exec ストレージメディアに移行されたファイルは、指定した期間、プライマリ場所に保持されます。</p> <p>メモ: シマンテック社は、このオプションの期間を 0 日より長い値に設定することを推奨します。より長い期間にすると最適です。0 日に設定しないでください。期間を 0 日に設定すると、移行される各パーティションの移行期間内に複数の移行ジョブが Backup Exec Migrator によって作成されます。複数のジョブが作成されると、ジョブの実行にオーバーヘッドが要求されて移行および取り込みのパフォーマンスが低下します。</p> <p>p.1033 の「Backup Exec Migrator の設定」を参照してください。</p>

移行された Enterprise Vault データのリストアビューについて

Backup Exec のリストアビューでは、**Enterprise Vault** のアーカイブデータの移行操作の成功を視覚的に確認できます。移行された .cab ファイルを含んでいるバックアップセットがパーティション名の下に表示され、データの移行元である **Enterprise Vault** パーティションが反映されます。リストアビューにはアーカイブデータが読み取り専用モードで表示されるので、リストア用にデータを選択できません。ただし、データが存在するアプリケーションのデータを取り込むことができます。

メモ: **Partition Recovery Utility** を使用して、リストアビューに表示されるすべてのアーカイブ項目を完全に取り込むことができます。

p.1043 の「[Partition Recovery Utility について](#)」を参照してください。

p.1041 の「[移行された Enterprise Vault データの取り込みについて](#)」を参照してください。

移行された Enterprise Vault データの取り込みについて

すべてのファイル取り込み操作は **Enterprise Vault** サーバーコンソールから開始されます。**Backup Exec** からは **Enterprise Vault** のアーカイブデータをリストアできません。

ファイルがパーティションから移行されると、**Enterprise Vault** は移行ファイルと置換されるパーティションのショートカットを作成します。ショートカットは移行ファイルのデータ格納場所にもリンクします。ファイルを取り込むには、**Enterprise Vault** パーティション自体のショートカットをダブルクリックします。パーティションが移行ファイルのローカルコピーを保持すると、**Enterprise Vault** はローカルコピーからファイルを取り込みます。パーティションのファイル保持期間が過ぎたため **Enterprise Vault** によって移行ファイルが削除された場合は、要求されたファイルを **Backup Exec** のストレージメディアから取り込む必要があります。

表 E-11 移行されたデータの取り込み方法

処理	説明
Enterprise Vault は Backup Exec Migrator と連携して処理を開始します。	Backup Exec Migrator はファイルが保存されている Backup Exec メディアサーバーを識別します。
Backup Exec Migrator はメディアサーバーで Backup Exec のリストアジョブのスケジュールを設定します。	Backup Exec は要求されたファイルをリストアします。
Backup Exec Migrator は Backup Exec メディアサーバーから Enterprise Vault サーバーパーティションにリストアされたファイルを移行します。	Backup Exec Migrator は、Enterprise Vault によって提供された名前を使用して、リストアされたファイルを Enterprise Vault によって指定された場所に移動します。

取り込み処理は **Enterprise Vault** サーバーで操作を開始した後に自動的に実行されます。ストレージメディアを取り外した場合は、おそらくテープデバイスへのテープの配置以外ユーザーが介入する必要はありません。

p.1042 の「[移行された Enterprise Vault データの取り込み](#)」を参照してください。

移行された Enterprise Vault データの取り込み

次の手順を使って、移行された **Enterprise Vault** ファイルをリストアしてください。

メモ: 正しく必要なファイルを取り込むには、**Backup Exec** メディアサーバーでテープドライブへのテープの配置が必要になる場合があります。

移行された Enterprise Vault データを取り込む方法

- 1 **Enterprise Vault** サーバーで、データを取り込みたいパーティションに移動してください。
- 2 取り込みたいファイルをダブルクリックします。

Partition Recovery Utility について

Partition Recovery Utility は、Backup Exec Remote Agent for Windows Systems をインストールするとき自動的にインストールされるコマンドラインのアプリケーションです。このユーティリティでは、1 回の操作で Backup Exec のストレージメディアからパーティションのすべてのアーカイブファイルをリストアできます。また、ディザスタリカバリ状況でそれぞれの Enterprise Vault パーティションのアーカイブされたパーティションデータをリカバリするためにも使うことができます。

Partition Recovery Utility を使うと、Backup Exec の [ジョブ モニター] タブの [ジョブ 履歴] ペインでリストアの詳細を確認できます。

p.1043 の「[Partition Recovery Utility の必要条件](#)」を参照してください。

p.1043 の「[アーカイブ ID の検索](#)」を参照してください。

p.1044 の「[Partition Recovery Utility の起動](#)」を参照してください。

Partition Recovery Utility の必要条件

Partition Recovery Utility を使うときは次を知らなければなりません:

- リカバリしたいデータのボルトストアパーティションの名前。
- リカバリしたいパーティションデータのアーカイブ ID。
- ボルトサービスアカウントの権限がある Enterprise Vault サーバーのユーザーアカウント。

メモ: Windows サーバー 2008/2008 R2 コンピュータで Partition Recovery Utility を実行する場合は、管理者権限が必要です。

また、Partition Recovery Utility はリストアするデータの移行元の Enterprise Vault サーバーで実行する必要があります。

p.1043 の「[アーカイブ ID の検索](#)」を参照してください。

p.1044 の「[Partition Recovery Utility の起動](#)」を参照してください。

アーカイブ ID の検索

Partition Recovery Utility を実行するときはボルトストアパーティション名とともに、リストアしたいデータのアーカイブ ID を使います。アーカイブ ID はかなりの長さの英数字番号です。

たとえば、1D69957C6D917714FB12FEA54C9A8299A1110000ev8archive.EVMBE です。

アーカイブファイルセットのプロパティ間でリストにあるアーカイブ ID を検索できます。

アーカイブ ID を見つける方法

- 1 Enterprise Vault 管理コンソールの左ビューで、[アーカイブ]を展開します。
- 2 フォルダの構造を検索し、リストアしたいデータの種類のフォルダを選択します。
- 3 右ビューでアーカイブを右クリックし、次に[プロパティ]を選択します。
- 4 [詳細]タブで、下部のアーカイブ ID に注意します。

Partition Recovery Utility の起動

Partition Recovery Utility を起動するには、次の手順を実行します。

Partition Recovery Utility を起動する方法

- 1 Enterprise Vault サーバーから、Windows のコマンドプロンプトを開きます。
- 2 Enterprise Vault Agent のインストールディレクトリに移動します。
たとえば、C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\RAWS です。
- 3 次の手順を実行します。

Windows サーバー 2008/2008 R2 コンピュータで Partition Recovery Utility を起動する場合	次のコマンドを入力します。 <pre>runas /user:<domain¥administrator> partitionrecovery.exe -vs <vault_store_name> -ap <archive_ID></pre>
--	--

他のすべてのサポート対象の Windows オペレーティングシステムのバージョンで Partition Recovery Utility を起動する場合	次のコマンドを入力します。 <pre>partitionrecovery.exe -vs <vault_store_name> -ap <archive_ID></pre>
--	---

- 4 **Enter** キーを押します。

Backup Exec Migrator を使用する場合の推奨事項

Backup Exec Migrator を使うときは次の推奨事項を考慮してください：

- シマンテック社は定期的に Backup Exec のカタログをバックアップすることを推奨します。
カタログ破損のイベントでは、バックアップからそのカタログをリストアできます。カタログをリストアした後、Backup Exec Migrator データが保存されるストレージメディアのカタログを再登録する必要があります。ストレージメディアのカタログを再登録すると、最新のカテゴリエントリが確実に利用可能になります。

- 最高のパフォーマンスを実現するために、複製ジョブを使用してディスクへのバックアップフォルダ、テープデバイスの順にデータを移行するように Backup Exec Migrator を設定します。
p.1030 の「Backup Exec と Backup Exec Migrator でのステージングされた移行の使用について」を参照してください。
p.356 の「バックアップしたデータの複製について」を参照してください。
- Enterprise Vault の [移行] オプションタブで、[以下のコレクションファイルをブライマリストレージから削除] の期間を 0 日より長く設定します。
期間を 0 日に設定すると、Enterprise Vault でパーティションから移行データがただちに削除されます。
この期間を 0 日に設定する場合、シマンテック社は次の操作を実行することを推奨します。
 - 移行に使うディスクへのバックアップフォルダに許可される同時並行ジョブの数の追加。
次の式に基づいて同時並行ジョブの数を追加します：
$$\text{<推奨された同時並行ジョブの数>} = \text{<インストールされたテープドライブの数 + 2>}$$

たとえば、インストールされたテープドライブが 2 つある場合は、4 つの同時並行ジョブが許可されるようにディスクへのバックアップフォルダを設定してください。
同時並行ジョブは、ステージングされた移行環境でテープドライブが複製ジョブを処理する間に Backup Exec Migrator でデータをディスクストレージに移行し続けることを可能にします。

メモ: ディスクへのバックアップデバイスの合計同時並行レベルを高めることによって、実行する同時並行ジョブの数を増加できます。

- シマンテック社は最初に 1 回の収集移行操作ですべてのアーカイブファイルを収集してから、次の収集移行操作でそれらを移行することを推奨します。このプロセスでは、Backup Exec Migrator は移行操作ごとに 1 つのジョブを作成します。これによって、移行のパフォーマンスが向上します。

Backup Exec Migrator と Partition Recovery Utility の問題のトラブルシューティング

発生する可能性があるエラーに対して実行可能な解決策については、次のエラーメッセージを確認してください:

- Enterprise Vault サーバー上の Windows Event Viewer および Enterprise Vault Dtrace Utility の移行動作を Backup Exec Migrator が記録します。Backup Exec メディアサーバー上の移行動作も記録されます。

ログファイル内の詳細は **Backup Exec Migrator** で発生する問題のトラブルシューティングに役立ちます。

p.1030 の「[Backup Exec Migrator のイベントについて](#)」を参照してください。

p.1031 の「[Backup Exec Migrator のログについて](#)」を参照してください。

- **Partition Recovery Utility** で呼び戻すファイルを見つけることができませんでした。指定された **Archive ID** を使用してボルトストアデータベースから呼び出すファイルがありません。
- **Partition Recovery Utility** の操作はユーザーの要求により終了されます。**Ctrl + C** または **Ctrl + Break** を押したため、**Partition Recovery Utility** の操作が停止した可能性があります。
- 移行したファイルの名前「<file_name>」(IDは「<migrated_file_id>」)が **Backup Exec** バックアップセットで見つかりませんでした。このファイルに対しては呼び戻しがスキップされます。
Partition Recovery Utility は、ボルトストアデータベースにコレクションファイルが存在する場合はスキップします。ファイルをリストアするには、ボルトストアデータベースからファイルを削除し、**Partition Recovery Utility** を再度実行します。
- **Partition Recovery Utility** でパーティションを見つけることができませんでした。ボルトストアの名前が有効であること、ボルトストアにパーティションがあることを確認してください。
指定されたボルトストア名は無効の可能性があります。

Symantec Backup Exec Agent for Lotus Domino Server

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Agent for Lotus Domino Server](#) について
- [Lotus Domino Agent](#) 使用上の必要条件
- [Lotus Domino Agent](#) のメディアサーバーへのインストールについて
- [Lotus Domino Agent](#) と [Domino Attachment and Object Service \(DAOS\)](#) について
- [Backup Exec](#) の実行中に作成された [Lotus Domino](#) データベースの表示
- ローカルサーバー上の [Lotus Domino](#) データベースの表示
- リモートコンピュータ上の [Lotus Domino](#) データベースの表示
- [Lotus Domino](#) のデフォルト設定
- [Lotus Domino](#) データベースのバックアップについて
- バックアップする [Lotus Domino](#) データベースの選択について
- [Lotus Domino](#) データベースのバックアップオプションの選択
- [Lotus Domino](#) データベースのリストア
- リストアする [Lotus Domino](#) データベースの選択について
- [Lotus Domino](#) データベースのリストアオプションの選択

- **Lotus Domino** データベースのリストアジョブのリストア先変更
- **DAOS NLO** ファイルのリストア先の変更
- **Lotus Domino** サーバーのディザスタリカバリを準備する方法

Agent for Lotus Domino Server について

Symantec Backup Exec Agent for Lotus Domino Server (Lotus Domino Agent) は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールされます。

Lotus Domino Agent を使用すると、ローカルメディアサーバーおよびリモートコンピュータ上の Lotus Domino をバックアップおよびリストアできます。Lotus Domino Agent は Lotus Domino データベース、Domino Attachment and Object Service (DAOS) 関連 NLO ファイルおよびトランザクションログをバックアップします。また、Lotus Domino データベースのバックアップを、個別に管理したり専用のハードウェアを使用しなくても、通常のサーバーのバックアップと統合することができます。

Lotus Domino Agent は、次の機能をサポートしています。

- Lotus Domino API を使用した、Lotus Domino データベース、DAOS 関連 NLO ファイルおよびトランザクションログのオンラインバックアップ (完全、増分および差分)
- Lotus Domino データベース、.nlo ファイルおよびアーカイブトランザクションログのリストア、および指定した時点へのリストア
- バックアップしたアーカイブ Lotus Domino トランザクションログの再利用
- 柔軟なスケジュール設定
- Lotus Domino クラスタサーバーおよびパーティションサーバーのバックアップとリストア
- アクティブ - アクティブ構成とアクティブ - パッシブ構成の両方の Microsoft Cluster Server クラスタ内の Lotus Domino データベース

p.1050 の「[Lotus Domino Agent のメディアサーバーへのインストールについて](#)」を参照してください。

Lotus Domino Agent 使用上の必要条件

Lotus Domino Agent は、Lotus Domino versions 7.x および 8.x のバックアップおよびリストアをサポートしています。

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

メディアサーバーに存在する Lotus Domino データベースファイルのバックアップの必要条件と、リモートの Windows コンピュータおよびワークステーションの必要条件を次に示します。

メモ: Backup Exec は、1 つのコンピュータ上にある 2 つのバージョンの Lotus Domino をサポートしていません。

バックアップする Lotus Domino ファイルがローカルメディアサーバー上に存在する場合は、サーバーには次のものがが必要です。

- Backup Exec
 - Intel x86 ベースのコンピュータ
 - Lotus Domino サーバー上に Lotus Domino データディレクトリが存在していること
- バックアップする Lotus Domino ファイルがリモートコンピュータ上に存在する場合は、そのリモートコンピュータには次のものがが必要です。
- Windows オペレーティングシステム
 - Backup Exec Remote Agent for Windows Systems
 - Intel x86 ベースのコンピュータ
 - Lotus Domino データベースが存在するボリュームに管理共有が設定されていること
 - Lotus Domino サーバー上に Lotus Domino データディレクトリが存在していること
- Lotus Domino のトランザクションログをバックアップするには、次の条件を満たす必要があります。
- アーカイブ形式の[トランザクションログ]を[有効]に設定する。
 - [ログ形式]を[アーカイブ]に設定する。

Lotus Domino DAOS 関連の NLO ファイルをバックアップするには、次の条件を満たす必要があります。

- DAOS の状態が読み取り専用モードまたは有効になっている。
- DAOS のカタログが同期される。

Lotus Domino データベースが Microsoft Cluster Server クラスタ内で実行されている場合は、次の必要条件を満たす必要があります。

- Lotus Domino サーバーが Microsoft Cluster Server クラスタで実行されている。Microsoft Cluster Server クラスタ内の Lotus Domino の設定方法については Lotus Domino のマニュアルを参照してください。
- Backup Exec Lotus Domino Agent が Microsoft Cluster Server クラスタ内のすべてのノードにインストールされている。

p.1052 の「[Backup Exec の実行中に作成された Lotus Domino データベースの表示](#)」を参照してください。

Lotus Domino Agent のメディアサーバーへのインストールについて

Symantec Backup Exec Agent for Lotus Domino は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてローカルにインストールされます。ローカルまたはリモートの Lotus Domino データベースを保護することができます。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

p.123 の「[リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO \(Advanced Open File Option\) のプッシュインストール](#)」を参照してください。

p.135 の「[コマンドプロンプトを使用したリモートコンピュータへの Remote Agent のインストール](#)」を参照してください。

メモ: Backup Exec がすでにインストールされている同一サーバー上に Lotus Domino をインストールする場合、Backup Exec サービスを再起動して Lotus Domino データベースの選択項目を表示する必要があります。

p.158 の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

p.1053 の「[Lotus Domino のデフォルト設定](#)」を参照してください。

p.1056 の「[Lotus Domino データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1063 の「[Lotus Domino データベースのリストア](#)」を参照してください。

Lotus Domino Agent と Domino Attachment and Object Service (DAOS) について

Lotus Domino 8.5 は Domino Attachment and Object Service (DAOS) を組み込みます。DAOS 対応データベース (DAOS データベース) は、サーバーのアプリケーション間でデータを共有することによってハードディスク容量を大幅に節減します。DAOS データベースはあらゆるドキュメントの添付ファイルの個別コピーを保存しません。代わりに、DAOS データベースは内部リポジトリへの添付ファイルの単一コピーを保存します。データベースはその後保存された添付ファイルへの参照ポインタを作成して保存します。

添付ファイルは .nlo の拡張子が付けられて内部リポジトリに保存されます。Lotus Domino サーバー全体の完全バックアップ時に、Backup Exec は Domino の <server>.id ファイルと共にすべての .nlo ファイルをバックアップします。

Backup Exec は、リストア選択ビューの [Lotus Domino データベース] の下で [Domino Attachment and Object Service] という名前のコンテナをパーティションごとに追加します。すべてのバックアップされた DAOS NLO ファイルは [Domino Attachment and Object Service] の下のバックアップセットに存在します。また、すべてのバックアップされた <server>.id ファイルは [Lotus Domino データベース] の下の [データベース] コンテナに存在します。

メモ: Domino は NLO の暗号化のために <server>.id を使います。Domino サーバーで NLO ファイル暗号化を有効にする場合、<server>.id ファイルはバックアップされなければなりません。

個々の DAOS 対応データベースをバックアップに選択すると、各データベースの参照 .nlo ファイルがバックアップジョブに含まれます。ただし、<server>.id ファイルは除外されます。

増分バックアップでは、サーバーの最後の完全バックアップ以降に作成されたデータベースおよび .nlo ファイルのみがバックアップされます。

メモ: 増分バックアップジョブによって完全に DAOS 対応データベースがバックアップされる場合は、各データベースが参照するすべての .nlo ファイルがバックアップされます。このシナリオは DAOS 対応データベースが循環ログ記録を使うか、または DAOS 対応データベースがアーカイブログモードになっていて DBIID が変更されるときに当てはまります。

完全な DAOS 対応 Domino データベースリストア時に、すべてのデータベースデータ、.nlo ファイル、<server>.id ファイルがリストアされます。個々の DAOS 対応データベースをリストアすると、Backup Exec は .nlo ファイルを含むすべてのデータベースデータをリストアします。ただし、Backup Exec は内部リポジトリの .nlo ファイルと一致する .nlo ファイルをリストアしません。DAOS 対応データベースがリストアされた後、Backup Exec は Domino DAOS カタログを再同期化します。

DAOS 対応データベースの特定時点リストアでは、一部の必須 .nlo ファイルがアーカイブのトランザクションログの再生時に生成されないことがあります。このような場合に、Backup Exec は見つからない .nlo ファイルの名前を報告します。見つからない .nlo ファイルを個別にリストアして、Domino サーバーで Domino DAOS カタログの再同期操作を開始できます。

Domino DAOS カタログの再同期操作について詳しくは、Lotus Domino のマニュアルを参照してください。

見つからない .nlo ファイルをリストアするための推奨事項

見つからない .nlo ファイルを個別にリストアする場合、シマンテック社は次の推奨事項をお勧めします。

- 常に .nlo ファイルを現在の DAOS 対応 Domino サーバーの内部リポジトリにリストアします。
- ランダムに .nlo ファイルの選択を行うのではなく、リストアの選択ビューですべての選択項目を選択します。次にリストアオプションである[ディスク上のファイルを上書きしない]を使います。[ディスク上のファイルを上書きしない]オプションの使用によって、Backup Exec は見つからない .nlo ファイルのみをリストアします。
p.1071 の「[DAOS NLO ファイルのリストア先の変更](#)」を参照してください。

Backup Exec の実行中に作成された Lotus Domino データベースの表示

Backup Exec の実行中に作成された Domino データベースを表示するには、次の手順を実行します。

p.1056 の「[Lotus Domino データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1060 の「[バックアップする Lotus Domino データベースの選択](#)」を参照してください。

メモ: Microsoft Cluster Server 環境でジョブを参照またはサブミットするには、Domino サーバーの仮想コンピュータ名または仮想 IP アドレスを使用します。

Backup Exec の実行中に作成されたデータベースを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 選択ペインで、[Lotus Domino データベース]を展開します。
- 4 **F5** キーを押します。

ローカルサーバー上の Lotus Domino データベースの表示

ローカルサーバーにある Domino データベースを表示するには、次の手順を使います。

Lotus Domino のトランザクションログは、[Lotus Domino データベース]の下には表示されませんが、バックアップするデータベースを選択すると、そのトランザクションログも自動的に選択されます。

同じプロセスが DAOS NLO ファイルに適用されます。.nlo ファイルは、[**Lotus Domino** データベース]の下には表示されませんが、バックアップするデータベースを選択すると、その .nlo ファイルも自動的に選択されます。

p.1056 の「[Lotus Domino データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1060 の「[バックアップする Lotus Domino データベースの選択](#)」を参照してください。

Lotus Domino データベースをローカルサーバーで表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 選択ペインで、[Lotus Domino データベース]を展開します。

リモートコンピュータ上の Lotus Domino データベースの表示

リモートコンピュータにある Domino データベースを表示するには、次の手順を使います。

p.1056 の「[Lotus Domino データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1060 の「[バックアップする Lotus Domino データベースの選択](#)」を参照してください。

p.1073 の「[Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリを準備する方法](#)」を参照してください。

リモートコンピュータ上の Lotus Domino データベースを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 [リモート選択]をクリックし、[Microsoft Windows Network]をクリックします。
- 5 必要に応じて、Lotus Domino がインストールされているドメインをクリックし、Lotus Domino データベースが存在するコンピュータをクリックします。

共有ネットワークディレクトリのリストが Lotus Domino データベースアイコンとともに表示されます。

Lotus Domino のデフォルト設定

新規に作成するすべてのジョブに適用する、Lotus Domino データベースのデフォルトオプションを設定することができます。ジョブの作成時には、このデフォルト設定を使用することも、そのジョブの Domino プロパティを編集することもできます。

p.1056 の「[Lotus Domino データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

新規のすべてのジョブに適用する Domino のデフォルトオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[**Lotus Domino**]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.1054 の「[Lotus Domino のデフォルトオプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックして設定したオプションを保存するか、[プロパティ]ペインで他のオプションを選択します。

Lotus Domino のデフォルトオプション

Backup Exec のインストール時に設定されたデフォルトオプションを使うことができます。またはすべての Lotus Domino ジョブのオプションを変更できます。

p.1053 の「[Lotus Domino のデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 F-1 Lotus Domino のデフォルトオプション

項目	説明
バックアップ方式	<p>次のバックアップ方式のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択したデータベースとトランザクションログをバックアップする (アーカイブビットをリセットする): 選択したすべてのデータベースをバックアップするには、このオプションを選択します。Lotus Domino データを正しくバックアップするには、データベースの完全バックアップを定期的に行う必要があります。データベースの DBIID が変更され、以前のトランザクションを新しいデータベースに適用できなくなった場合にも、このバックアップ方式を使用する必要があります。 ■ 差分 - 変更のあったデータベースとトランザクションログをバックアップする: 最後の完全バックアップ以降に修正されたデータベースをバックアップするには、このオプションを選択します。この方法でバックアップされるのは、アーカイブトランザクションログ、トランザクションログのないデータベースおよび DBIID が変更されたトランザクションログのあるデータベースのみのため、完全バックアップよりサイズが小さく、所要時間も少なくて済みます。 メモ: DAOS 対応データベースがアーカイブログモードになっていて DBIID が変更されない場合に、変更される .nlo ファイルのみがバックアップされます。 ■ 増分 - 変更のあったデータベースとトランザクションログをバックアップする (アーカイブビットをリセットする): 最後の完全または増分バックアップ以降に修正されたデータベースをバックアップするには、このオプションを選択します。この方法でバックアップされるのは、アーカイブトランザクションログ、トランザクションログのないデータベースおよび DBIID が変更されたトランザクションログのあるデータベースのみのため、完全バックアップよりサイズが小さく、所要時間も少なくて済みます。 メモ: DAOS 対応データベースがアーカイブログモードになっていて DBIID が変更されない場合に、変更される .nlo ファイルのみがバックアップされます。

項目	説明
トランザクションログに再利用のためのマークを付ける	<p>トランザクションログをバックアップ後に再利用します。</p> <p>Backup Exec では、トランザクションログの削除は行われません。このオプションを選択することは、バックアップが完了したトランザクションログが再利用可能であることを示唆するにすぎません。トランザクションログは Lotus Domino サーバーによって実際に削除されます。</p> <p>完全バックアップ方式を選択した場合、このオプションは自動的に選択されます。完全バックアップ方式を使用している場合は、このオプションをオフにすることはできません。</p> <p>差分または増分バックアップジョブの実行時にこのオプションを選択した場合は、差分バックアップの維持に必要なトランザクションログが再利用されます。新しいトランザクションログのためのスペースを作成するために、このオプションを定期的に変更する必要があります。</p>
データベースがオフラインになるまでの待ち時間 (秒)	<p>リストアするデータベースが使用中の場合に、リストアプロセスが待機する秒数を指定します。リストアする Lotus データベースは、オフラインにする必要があります。これは、リストアジョブの実行時の、リストアするデータベースに対するアクセス、クローズおよび削除を避けるためです。指定した待機時間の後もデータベースが使用中でオフラインにできない場合は、リストアは失敗します。</p>
元のデータベースインスタンス ID を保持する	<p>元のデータベース ID をリストアします。</p>
新規データベースインスタンス ID を割り当てる	<p>データベースに新しい ID を割り当てます。</p>
新規データベースインスタンス ID とレプリカ ID を割り当てる	<p>データベースに新しい ID を割り当てます。レプリカ ID は、Lotus Domino 環境で複製される2つ以上のデータベースを同期化するために使用されます。リストア中にデータベースを複製するときに、リストアされたデータベースファイルで他のデータベースが上書きされないように、新しいレプリカ ID を割り当てることができます。</p>

Lotus Domino データベースのバックアップについて

Lotus Domino バックアップジョブをサブミットすると、**Backup Exec** は、**Lotus Domino** API を使用してデータベースのバックアップを取得します。DAOS 対応 **Domino** データベースをバックアップするとき、**DAOS NLO** ファイルは自動的に含まれます。また、**Lotus Domino** データベースと関連付けされるトランザクションログは、サーバーでアーカイブログが有効な場合にのみバックアップに含まれます。バックアップされる場合、アーカイブログは **Lotus Domino** データベースバックアップセット内で保存される個別バックアップセットに保存されます。

Lotus Domino Agent は、次のファイルのバックアップに使用されます。

- .ntf: Lotus Notes テンプレートファイル
- .nsf: Lotus Notes データベースファイル
- .box: Lotus Mailbox ファイル
- .dsk: キャッシュファイル
- .txn - トランザクションログファイル
- .nlo - DAOS 添付ファイル

メモ: トランザクションログファイルと DAOS 添付ファイルは、Backup Exec のバックアップ選択ビューに表示されませんが、リストアの選択ビューには表示されます。

Lotus Domino データベースを正しくリカバリするには、.nsf、.ntf および .box ファイルをバックアップする必要があります。.njf、.ncf、.id、.dic および notes.ini の各ファイルをバックアップする場合は、Lotus Domino のプログラムディレクトリが存在するボリュームからバックアップするように選択します。

DAOS と非 DAOS Domino サーバーは付加的な Domino 関連データベースとサポートファイルを使用しますが、Backup Exec はそれらをバックアップしません。Domino は自動的に Domino サーバーの再起動後にこれらの項目を作成し直します。

Backup Exec はバックアップジョブから次のサポートファイルを除外します:

- daos.cfg
- daoscat.nsf
- dbdirman.nsf

メモ: Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているコンピュータに接続するデバイスにデータベースをバックアップできません。

p.1059 の「[Lotus Domino のトランザクションログについて](#)」を参照してください。

p.1061 の「[Lotus Domino データベースのバックアップオプションの選択](#)」を参照してください。

p.1068 の「[Lotus Domino データベースのリストアオプションの選択](#)」を参照してください。

ボリュームレベルのバックアップでの Lotus Domino ファイルの自動除外について

バックアップ対象として Lotus Domino データが含まれるボリュームを選択すると、Lotus Domino Agent は、ボリュームレベルのバックアップに含めることができない Domino データを判断します。たとえば、.ntf ファイル、.nsf ファイル、nlo ファイル、<server>.id ファイルおよびすべてのアクティブなログファイルは、Lotus Domino システムによる排他的な使用のためにオープンされるため、バックアップすることはできません。これらのファイルは、アクティブファイルの除外と呼ばれる機能によって、自動的にバックアップ対象から除外されます。スナップショット以外のバックアップ中にこのファイルの除外が発生しなかった場合、これらのファイルは使用中と見なされてスキップしたものと扱われます。スナップショットバックアップ中にこのファイルの除外が発生しなかった場合、ファイルは一貫性がとれていない状態でバックアップされ、リストアの問題が発生する可能性があります。

サポートされている Lotus Domino データベースの構成について

Lotus Domino Agent を使用してバックアップすることのできる Lotus Domino データベースの構成を次に示します。

- **Domino サーバーデータベース:**
Domino サーバーデータベースでは、その DAOS 状態を無効、読み取り専用、または有効にしてトランザクションログのロギング方法を選択することができます。DAOS はトランザクションロギングを使わない Domino データベースで有効にできません。Domino データベースは、Domino データディレクトリ (通常 Lotus¥Domino¥Data) に格納されますが、ディレクトリリンクやデータベースリンクを使用して Domino データディレクトリの外部に保存することもできます。

次の種類の Lotus Domino データベースがサポートされています。

- **トランザクションロギングを有効にした Domino データベース:**
Domino データベースのトランザクションロギングを有効にすると、Lotus データベースのトランザクションログが作成されます。すべてのデータベースのトランザクションは共通のログに記録されます。
- **トランザクションロギングを無効にした Domino データベース:**
Domino データベースのトランザクションロギングを無効にすると、Domino データベースのトランザクションログは作成されません。トランザクションロギングを無効にした Domino データベースは、トランザクションログを使用することができないため、バックアップした時点にしかデータベースをリカバリすることはできません。
- **ローカルデータベース:**
ローカルデータベースは Domino データディレクトリ以外に存在する Lotus データベースで、トランザクションロギングは利用できません。Lotus Domino のいずれかのバックアップ方式を使用する場合は、ローカルデータベース自体のバックアップが必要です。トランザクションログを使用することができないため、バックアップした時点にしかデータベースをリカバリすることはできません。

Lotus Domino のトランザクションログについて

Lotus Domino には、Lotus Domino データベースのトランザクションログを記録する機能があります。Lotus Domino サーバーでトランザクションログを使用するように設定し、Lotus Domino データベースが Domino データディレクトリに存在する場合は、デフォルトでデータベースのログが作成されます。

サーバー上でトランザクションロギングが有効な場合は、Lotus Domino の各データベースには、データベースインスタンス ID (DBIID) が割り当てられます。ログに記録された各トランザクションには DBIID が含まれ、リストア時のトランザクションとデータベースの照合に使用されます。

Lotus Domino の操作を実行すると、新しい DBIID がデータベースに割り当てられる場合があります。新しい DBIID が割り当てられた場合は、以降のトランザクションログでその新しい DBIID が使用されます。ただし、以前のトランザクションログの DBIID は新しい DBIID には変更されません。新しい DBIID が割り当てられると、以前の DBIID を含むトランザクションをリストアすることができなくなるため、完全バックアップを実行してデータの損失を防止する必要があります。完全バックアップには、データベースの現在のトランザクションがすべて含まれているため、新しい DBIID のトランザクションのみでデータベースをリストアすることができます。

トランザクションロギングを有効に設定する場合、選択できるログ形式は 1 つだけです。

Lotus Domino データベースには、次の 2 つのログ形式があります。

■ アーカイブログ:

このログ形式では、使用しているストレージの容量だけに制約されるトランザクションログが生成されます。すべてのトランザクションログのバックアップ、およびログ領域の再利用が可能のため、Lotus Domino Agent で使用するログ形式として、アーカイブログを使用することをお勧めします。Lotus Domino サーバー上のバックアップ済みのトランザクションログはクリアされ、占有していたディスク領域が解放されるため、新しいトランザクションログ作成用に再利用することができます。

■ 循環ログ:

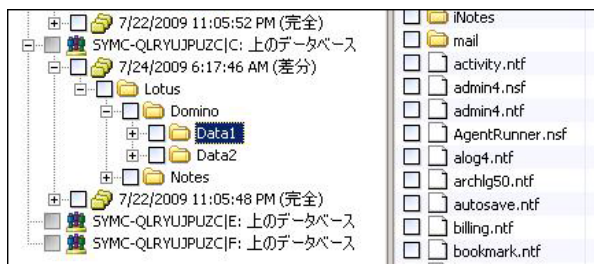
このログ形式では、ログファイルが指定したサイズに達すると、古いログから順に上書きしてログファイルが再利用されます。ログファイルを再利用するとディスク領域を節約することができますが、データベースは、最新の完全バックアップの時点の状態にしかリカバリすることはできません。バックアップジョブで増分バックアップまたは差分バックアップを選択しても、トランザクションログをバックアップすることができないため、データベースの完全バックアップが実行されます。

注意: 循環ログを使用している場合は、循環トランザクションログをバックアップすることができないため、最後のバックアップ以降にデータベースに対して行われた変更は失われます。

バックアップする Lotus Domino データベースの選択について

Lotus Domino Agent をインストールすると、選択ペインで既存の Lotus Domino データベースを選択できます。

図 F-1 Backup Exec の選択ビューに表示される Domino サーバーのファイルの種類



Lotus Domino サーバーのツリーには、次の種類のファイルが表示されます。

- filename.nsf: Lotus Domino データベースファイル
- filename.ntf: Lotus Domino テンプレートファイル
- filename.box: 共有メールデータベース
- filename.dsk: キャッシュファイル

Lotus Domino データベースを正しくリカバリするには、これらのファイルをすべてバックアップする必要があります。

データベースファイルと <server>.id ファイルのみ [Lotus Domino データベース] ビューの下に表示されます。Domino のプログラムファイルおよび .id や notes.ini などのファイルは、Lotus Domino のプログラムディレクトリが存在するボリュームに表示されます。これらのファイルは、ファイルを指定してバックアップする必要があります。

メモ: Domino サーバーの完全バックアップには <server>.id ファイルが含まれます。その結果、アクティブファイルの除外機能は自動的に <server>.id ファイルを除外します。

p.1060 の「バックアップする Lotus Domino データベースの選択」を参照してください。

バックアップする Lotus Domino データベースの選択

Lotus Domino Agent をインストールすると、選択ペインで既存の Lotus Domino データベースを選択できます。

p.1060の「バックアップするLotus Domino データベースの選択について」を参照してください。

Lotus Domino データベースを選択する方法

- ◆ ボリュームの前にあるチェックボックスをオンにすると、そのボリューム内のデータベースがすべて選択されます。また、ボリュームを展開して特定のフォルダやデータベースを選択することもできます。バックアップするデータベースは、Lotus Domino サーバー上に存在している必要があります。

Lotus Domino データベースのバックアップオプションの選択

この項では、Lotus Domino データベースのバックアップジョブのプロパティを選択する方法について説明します。Lotus Domino データベースのバックアップは、事前にLotus Domino およびサードパーティ製の Lotus Domino の各エージェントを停止し、トランザクションのピーク時間帯を避けて実行してください。アーカイブトランザクションログは自動的に含まれます。

p.315の「バックアップウィザードを使用したバックアップジョブの作成」を参照してください。

注意: 単一のボリュームまたは複数のボリューム上に存在するすべての Lotus Domino データベースとトランザクションログを、同一のメディアサーバーでバックアップする必要があります。また、Lotus Domino サーバーを複数のバックアップサーバーから同時にバックアップしないでください。

Lotus Domino データベースのバックアップジョブのプロパティを選択する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Lotus Domino]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。
p.1062の「Lotus Domino のバックアップジョブのオプション」を参照してください。
- 5 バックアップジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択します。

p.317の「ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成」を参照してください。

Lotus Domino のバックアップジョブのオプション

バックアップジョブを作成するとき Lotus Domino 固有のオプションを設定できます。

p.1061の「[Lotus Domino データベースのバックアップオプションの選択](#)」を参照してください。

次の表はバックアップジョブを作成するとき設定できる Lotus Domino のオプションを記述したものです。

表 F-2 Lotus Domino のバックアップジョブのプロパティ

項目	説明
バックアップ方式	<p>次のバックアップ方式のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択したデータベースとトランザクションログをバックアップする (アーカイブビットをリセットする): 選択したすべてのデータベースをバックアップします。Lotus Domino データを正しくバックアップするには、データベースの完全バックアップを定期的に行う必要があります。データベースの DBIID が変更され、以前のトランザクションを新しいデータベースに適用できなくなった場合にも、このバックアップ方式を使用する必要があります。 ■ 差分 - 変更のあったデータベースとトランザクションログをバックアップする: 最後の完全バックアップ以降に修正されたファイルをバックアップします。この方法でバックアップされるのは、アーカイブトランザクションログ、トランザクションログのないデータベースおよび DBIID が変更されたトランザクションログのあるデータベースのみのため、完全バックアップよりサイズが小さく、所要時間も少なくて済みます。 メモ: DAOS 対応データベースがアーカイブログモードになっていて DBIID が変更されない場合に、変更される .nlo ファイルのみがバックアップされます。 ■ 増分 - 変更のあったデータベースとトランザクションログをバックアップする (アーカイブビットをリセットする): 最後の完全または増分バックアップ以降に修正されたファイルをバックアップします。この方法でバックアップされるのは、アーカイブトランザクションログ、トランザクションログのないデータベースおよび DBIID が変更されたトランザクションログのあるデータベースのみのため、完全バックアップよりサイズが小さく、所要時間も少なくて済みます。 メモ: DAOS 対応データベースがアーカイブログモードになっていて DBIID が変更されない場合に、変更される .nlo ファイルのみがバックアップされます。

項目	説明
トランザクションログに再利用のためのマークを付ける	<p>トランザクションログをバックアップ後に再利用します。</p> <p>Backup Exec では、トランザクションログの削除は行われません。このオプションを選択することは、バックアップが完了したトランザクションログが再利用可能であることを示唆するにすぎません。トランザクションログは Lotus Domino サーバーによって実際に削除されます。</p> <p>完全バックアップ方式を選択した場合、このオプションは自動的に選択されます。完全バックアップ方式を使用している場合は、このオプションをオフにすることはできません。</p> <p>差分または増分バックアップジョブの実行時にこのオプションを選択した場合は、差分バックアップの維持に必要なトランザクションログが再利用されます。新しいトランザクションログのためのスペースを作成するために、このオプションを定期的に選択する必要があります。</p>

Lotus Domino データベースのリストア

Lotus Domino データベースをリストアするには 3 段階の処理手順が必要です。

表 F-3 Lotus Domino データベースのリストア

手順	説明
手順 1	<p>データベースファイルを Domino サーバーにリストアします。</p> <p>Lotus Domino データベースのリストア時には、既存のデータベースはオフラインに移行して削除され、データベースがリストアされ、その後、バックアップジョブ内に含まれている変更内容がデータベースに適用されます。</p> <p>メモ: Domino サーバーには、<code>admin4.nsf</code>、<code>names.nsf</code>、<code>busytime.nsf</code> などの名前のデータベースが含まれます。Notes クライアントコンピュータには、<code>bookmark.nsf</code>、<code>cache.dsk</code>、<code>homepage.nsf</code> などの名前のデータベースが含まれます。これらのデータベースは重要なので、Domino サーバーと Notes クライアントが実行されているときはオフラインにできません。また、ディザスタリカバリの状況でのみこれらのデータベースをリストアしてください。</p> <p>トランザクションロギングが無効なデータベースまたはローカルデータベースの場合は、オンラインに復帰します。トランザクションロギングが有効な複数のデータベースをリストアする場合は、データベース名がリカバリ用リストに追加されません。リストアプロセスでは、Backup Exec によってデータベースに一意の名前が割り当てられ、データベースがオンラインに復帰する前に元の名前に戻されます。リストアプロセスで名前を変更しても、リストアされるデータベースには影響しません。</p>
手順 2	<p>見つからない DAOS 対応 NLO ファイルをリストアします。</p>

手順	説明
手順 3	<p>トランザクションログを実行してデータベースを最新の状態にします。</p> <p>内部的な Domino リカバリプロセスは、DAOS NLO ファイルがサーバーにリストアされた後に自動的に開始されます。データベースは、対応するトランザクションログのトランザクションを使用して、指定した時点の状態にリカバリされます。このプロセスには、バックアップおよび再利用されたトランザクションログも含まれています。リカバリプロセスが終了すると、Lotus Domino データベースはオンラインに復帰します。</p> <p>定期的に Lotus Domino データベースのバックアップを実行している場合、Lotus Domino データを格納した最新のバックアップセットをリストアすれば、Lotus Domino データベースの最新のバックアップをリストアできます。</p> <p>メモ: 循環ログが有効な場合にデータベースと Domino のトランザクションログの両方が失われると、データベースは、最後の完全バックアップの時点の状態にしかリカバリすることができません。</p>

Microsoft Cluster Server クラスタ内のサーバーのリストアは、クラスタ以外の環境のサーバーをリストアする場合と同じ手順で行ってください。

Lotus Domino データベースを **MCSC** クラスタにリストアしているときにフェールオーバーが発生すると、実行中のリストアジョブは 15 分間停止し、既存の接続が解決されるまで待機します。フェールオーバーのタイムアウト時間内にリストアジョブが再開されない場合、ジョブは失敗します。この場合、リストアジョブを再度サブミットする必要があります。

p.1065 の「[リストアする Lotus Domino データベースの選択について](#)」を参照してください。

p.1070 の「[Lotus Domino データベースのリストアジョブのリストア先変更](#)」を参照してください。

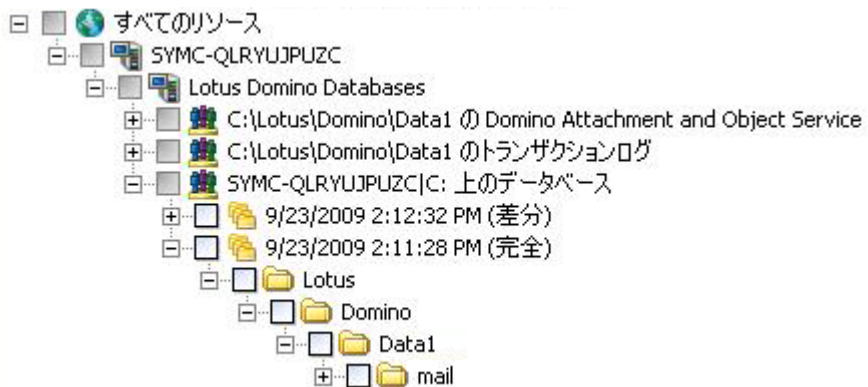
リストアする Lotus Domino データベースの選択について

リストア選択ペインで **Lotus Domino** データベースを表示すると、**Lotus Domino** のバックアップジョブごとに 2 つのバックアップセットが表示されます。最初のバックアップセット

には Lotus Domino データベースが格納され、2 つ目のバックアップセットにはトランザクションログが格納されています。

データをリストアするには、Lotus Domino データベースが格納されているバックアップセットからデータベースを選択します。必要なトランザクションログは、選択したデータベースとともに自動的にリストアされます。

図 F-2 Lotus Domino バックアップジョブからのバックアップセット



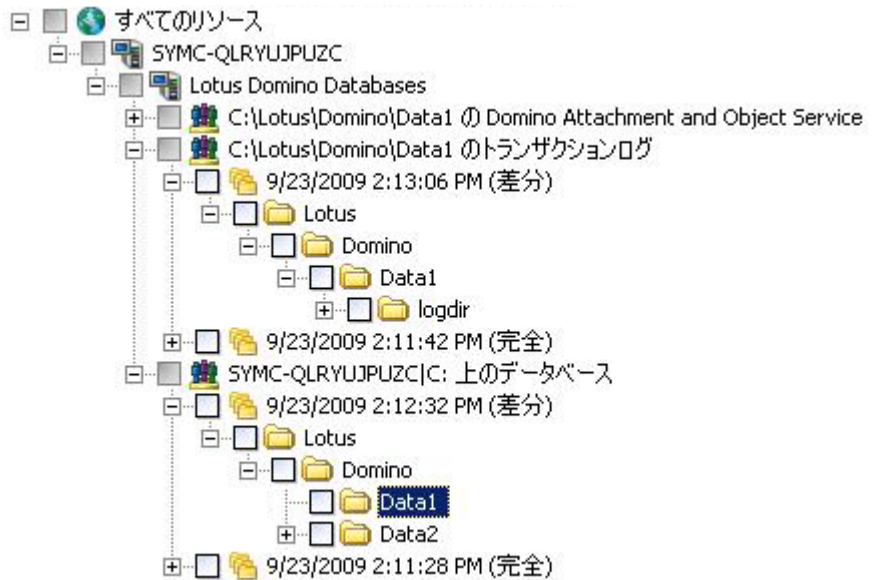
通常、Lotus Domino のデータは最新のバックアップセットに格納されています。ただし、完全バックアップジョブ以降に差分または増分バックアップジョブを実行した場合、トランザクションログのみがバックアップされ、バックアップセットにデータが存在しないことがあります。リストアするデータが最新のバックアップセットに存在しない場合は、データが存在するバックアップセットまでさかのぼって探します。

メモ: 新しい DBIID がデータベースに割り当てられてから差分または増分バックアップを実行した場合は、新しい DBIID のトランザクションが以前の DBIID に一致しないため、データは最新のバックアップセットに格納されています。

たとえば、Domino サーバーには完全バックアップと差分バックアップがあります。差分バックアップからデータをリストアするために Data1 ディレクトリを選択しても、そのディレクトリが空の場合があります。

次の図は空のデータディレクトリを示します。

図 F-3 差分バックアップの空のデータディレクトリ



差分バックアップのバックアップデータは、実際には、トランザクションログのバックアップセットに格納されています。データをリストアするには、以前の完全バックアップから選択する必要があります。

差分バックアップのトランザクションログはデータベースの更新に使われます。

図 F-4 差分バックアップのトランザクションログのバックアップセット



メモ: Lotus Domino データベースを Microsoft Cluster Server クラスタにリストアする場合、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[リソース別の表示]タブで Domino データベース選択項目を参照または選択するときに、Domino サーバーの仮想コンピュータ名または仮想 IP アドレスを使用する必要があります。

p.1070 の「[Lotus Domino データベースのリストアジョブのリストア先変更](#)」を参照してください。

p.1073 の「[Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリ](#)」を参照してください。

Lotus Domino データベースのリストアオプションの選択

この項では、Lotus Domino データベースのリストアジョブのプロパティの選択方法と、Domino 固有のリストアオプションについて説明します。

リストアする Lotus Domino バックアップセットを選択すると、すべてのデータベースファイルと必要なトランザクションログが自動的にリストアされます。また、特定のデータベースファイルを選択してリストアすることもできます。

p.1059 の「[Lotus Domino のトランザクションログについて](#)」を参照してください。

Lotus Domino データベースのリストアジョブのプロパティを選択する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[**Lotus Domino**]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。

p.1069 の「[Lotus Domino のリストアオプション](#)」を参照してください。

Lotus Domino データベースのレプリカが作成されている場合は、データベースのデータベースインスタンス ID およびレプリカ ID は、それぞれのコンピュータで同一にしてください。リストア後にデータベースのレプリカの作成を継続する場合は、[元のデータベースインスタンス ID を保持する]オプションを選択してください。

- 5 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

Lotus Domino のリストアオプション

リストアジョブを作成するとき Lotus Domino 関連の特定のリストアオプションを設定できます。

p.1068 の「[Lotus Domino データベースのリストアオプションの選択](#)」を参照してください。

Lotus Domino のリストアオプションは次の表で記述されています。

表 F-4 Lotus Domino のリストアオプション

項目	説明
データベースがオフラインになるまでの待ち時間 (秒)	リストアするデータベースが使用中の場合に、リストアプロセスが待機する秒数を指定します。リストアする Lotus データベースは、オフラインにする必要があります。これは、リストアジョブの実行時の、リストアするデータベースに対するアクセス、クローズおよび削除を避けるためです。指定した待機時間の後もデータベースが使用中でオフラインにできない場合は、リストアは失敗します。
元のデータベースインスタンス ID を保持する	元のデータベース ID をリストアします。
新規データベースインスタンス ID を割り当てる	データベースに新しい ID を割り当てます。

項目	説明
新規データベースインスタンス ID とレプリカ ID を割り当てる	データベースに新しい ID を割り当てます。レプリカ ID は、 Lotus Domino 環境で複製される 2 つ以上のデータベースを同期化するために使用されます。リストア中にデータベースを複製するときに、リストアされたデータベースファイルで他のデータベースが上書きされないように、新しいレプリカ ID を割り当てることを選択できます。
時刻を指定してリストアする	データベースをリストアする日時を指定します。このオプションは、ロギングが有効なデータベースが、ログ形式としてアーカイブログを選択している場合にのみ利用することができます。 Backup Exec によって、[リストア選択]ダイアログボックスで選択した Lotus Domino データベースがリストアされた後、自動的に、指定した時点でデータベースをリストアするために必要なトランザクションログがリストアされます。 日時指定されていない場合は、データベースは、ログファイルの最新のコミットされたトランザクションまでリストアされます。 アーカイブトランザクションログもリストアされるため、このオプションを選択した場合はさらに時間がかかる場合があります。

Lotus Domino データベースのリストアジョブのリストア先変更

Backup Exec ログオンアカウントには、**Lotus Domino** サーバーのバックアップのリストア先サーバーの管理者クレデンシャルが必要です。**Lotus Domino** データベースのリストア先ディレクトリは、バックアップ元のローカルサーバー上に存在する必要があります。また、そのディレクトリは、**Lotus Domino** データディレクトリ内か、その下位に存在している必要があります。指定した時点でリストアする場合は、リストア先を変更できません。

メモ: DAOS 対応 **Domino** のデータベースのリストア先を変更すると、**nlo** ファイルはリストアされません。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.181 の「[Backup Exec システムログオンアカウントの新規作成](#)」を参照してください。

元の場所とは別の場所に Lotus Domino データベースをリストアする方法

- 1 リストアするデータが格納されているメディアを選択します。
- 2 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 3 [新規リストアジョブ]をクリックします。

- 4 Lotus Domino データベースを選択します。
- 5 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで必要なオプションを選択し、[プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[ファイルのリストア先の変更]をクリックします。
- 6 [ファイルセットのリストア先を変更する]を選択します。
- 7 [リストア先ドライブ]でリストア先のドライブを選択します。ドライブ名を入力することはできません。選択する必要があります。
- 8 [サーバーのログオンアカウント]にサーバーのログオンアカウントを入力します。
- 9 [リストア先パス]にリストア先のパスを入力します。
- 10 [パスのログオンアカウント]にパスのログオンアカウントを入力します。
- 11 リストア先変更ジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。

DAOS NLO ファイルのリストア先の変更

DAOS 対応 Domino データベース全体をリストアしないで DAOS NLO ファイルをリストアできます。DAOS NLO ファイルをリストアするときは、リストア先変更の宛先パスを指定する必要があります。ほとんどの場合、パスは Lotus Domino を構成したときに設定した DAOS 内部リポジトリを指します。

p.1050 の「[Lotus Domino Agent と Domino Attachment and Object Service \(DAOS\) について](#)」を参照してください。

DAOS NLO ファイルのリストア先を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストア選択ビューで、[Lotus Domino データベース]に移動します。
- 4 [Lotus Domino データベース]を展開します。
- 5 [Domino Attachment and Object Service]を展開します。
- 6 リストアしたい nlo ファイルを含んでいるバックアップセットを選択します。
- 7 次のいずれかを実行します。

フォルダの .nlo ファイルをすべてリストアする方法	リストアしたい .nlo ファイルすべてを含んでいるフォルダをチェックします。
-----------------------------	---

見つからない .nlo ファイルのみをリストアする方法 次を示す順序で操作を実行します。

- リストアしたい .nlo ファイルすべてを含んでいるフォルダをチェックします。
- タスクペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。
- [ディスク上のファイルを上書きしない]にチェックマークを付けます。
リストアジョブが実行されると、Backup Exec は見つからない .nlo ファイルのみリストアします。

8 タスクペインの[宛先]の下にある[ファイルのリストア先の変更]をクリックします。

9 [ファイルセットのリストア先を変更する]にチェックマークを付けます。

10 [リストア先ドライブ]フィールドの隣の[...]ボタンをクリックします。

11 Domino を設定したときに指定したパスを使用して DAOS フォルダに移動します。

Domino サーバーをバックアップした後にパスを変更した場合は、新しいパスを代わりに使ってください。

12 [OK]をクリックします。

正しいパスの場所のエントリが[リストア先ドライブ]と[リストア先パス]フィールドに表示されます。

13 必要に応じて他のオプションを選択します。

p.623 の「[ファイルのリストア先の変更](#)リストアオプション」を参照してください。

14 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する

[今すぐ実行]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする

次を示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- [サブミット]をクリックします。

15 リストア先変更ジョブが完了したら、Domino サーバーで Domino DAOS カタログ再同期操作を実行します。

Domino DAOS カタログの再同期について詳しくは、Lotus Domino のマニュアルを参照してください。

Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリを準備する方法

障害対策は、致命的障害の発生時に Lotus Domino データベースを効率的かつ効果的にリストアするために不可欠です。目的は、最短時間でリカバリを行うことです。Windows コンピュータと Lotus Domino データベースの両方のバックアップ戦略を立案しておくことが重要です。

Lotus Domino データベースのバックアップ戦略を立案する場合は、次の推奨事項を考慮してください。

- リンクされたデータベースを1つのボリュームに保持する。Backup Execを使用して、バックアップの実行前にすべてのデータベースを同期させることができます。
- アクティブなデータベースを頻繁にバックアップする。最後にバックアップされた時点へデータベースをリカバリするために必要な手間と時間を少なくすることができます。
- notes.ini、cert.id および <server>.id の各ファイルを確実にバックアップし、障害発生時に利用できるようにしておく。
- Lotus Domino のマニュアルで推奨しているように DAOS の削除期間を設定します。ただし、シマンテック社は 2 つの Domino バックアップ間の時間より短い期間には DAOS の削除期間を設定しないことを推奨します。

p.1073 の「[Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリ](#)」を参照してください。

p.1076 の「[アーカイブログを使用した Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。

p.1076 の「[循環ログを使用する Lotus Domino サーバーのリカバリ](#)」を参照してください。

Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリ

Lotus Domino システムリカバリは、次の方法で実行できます。

- 手動
p.765 の「[手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。
- Backup Exec の Intelligent Disaster Recovery Option の使用
p.1764 の「[Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードについて](#)」を参照してください。

災害から DAOS 対応 Domino サーバーをリカバリするとき、リカバリするそれぞれの Domino データベースが参照するすべての .nlo ファイルが自動的にリストアされます。

メモ: Microsoft Cluster Server クラスタ内の Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリは、クラスタ以外の環境の Domino サーバーをリカバリする場合と同じ手順で行ってください。

Lotus Domino サーバーでディザスタリカバリ操作をするときに、ガイドとして次の手順を使います。

表 F-5 Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリを実行する手順

手順	説明
手順 1	Windows コンピュータをリカバリします。
手順 2	変更ジャーナルの監視を無効にします。 p.1075の「 変更ジャーナルの監視の無効化 」を参照してください。
手順 3	障害の発生前と同じ場所に Lotus Domino をリカバリするか、または再インストールします。 すべての Lotus Domino システムデータはリカバリされなければなりません。システムデータには log.nsf、names.nsf、テンプレートファイル、notes.ini、mail.box と ID ファイルが含まれています。 p.1075の「 Lotus Domino サーバーおよびデータベースのリカバリ 」を参照してください。 メモ: トランザクションログが有効な場合は、Lotus Domino サーバーで選択されるログ形式に基づくディザスタリカバリ操作を実行する必要があります。 p.1075の「 Lotus Domino サーバーおよびデータベースのリカバリ 」を参照してください。 サーバーを再構築した後に、最新のバックアップからデータベースのリストアを行います。
手順 4	変更ジャーナルの監視を再び有効にします。 p.1075の「 変更ジャーナルの監視の再有効化 」を参照してください。

変更ジャーナルの監視の無効化

レジストリで変更ジャーナルの監視を無効にして再び有効にするには、次の手順を使います。すると、Lotus Domino サーバー、データベースとトランザクションログをリカバリできます。

p.1076 の「アーカイブログを使用した Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリについて」を参照してください。

変更ジャーナルの監視を無効にする方法

- 1 レジストリを開き、次のキーを表示します。
`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\SYMANTEC\BACKUP EXEC FOR WINDOWS\BACKUP EXEC\ENGINE\DOMINO`
- 2 Enable Change Journal キーの値を 0 に設定し、変更ジャーナルの監視を無効にします。
- 3 Remote Agent for Lotus Domino を再起動します。

Lotus Domino サーバーおよびデータベースのリカバリ

Lotus Domino サーバーとデータベースをリカバリするには、次の手順を使います。

p.1076 の「循環ログを使用する Lotus Domino サーバーのリカバリ」を参照してください。

p.763 の「前回正常起動時の構成へのリカバリ」を参照してください。

p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。

p.1068 の「Lotus Domino データベースのリストアオプションの選択」を参照してください。

Lotus Domino サーバーおよびデータベースをリカバリする方法

- 1 Lotus Domino サーバー (notes.ini、cert.id および server.id ファイルを除く) を障害発生前と同じ構成でインストールします。
- 2 Lotus Domino サーバーのプログラムディレクトリの最新の完全バックアップから notes.ini、cert.id、<server>.id の各ファイルをリストアします。
- 3 Backup Exec を使って、Domino データディレクトリにデータベースをリストアします。
Backup Exec は DAOS 対応データベースとともにすべての DAOS NLO ファイルを自動的にリストアします。また、Domino は Domino サーバーを再起動するときに daos.cfg ファイルと daoscat.nsf ファイルの両方を自動的に作成し直します。
- 4 Lotus Domino サーバーを起動します。

変更ジャーナルの監視の再有効化

変更ジャーナルの監視を再び有効にするには、次の手順を使います。

p.1076 の「[アーカイブログを使用した Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。

p.1068 の「[Lotus Domino データベースのリストアオプションの選択](#)」を参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

変更ジャーナルの監視を再び有効にする方法

1 レジストリを開き、次のキーを表示します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\SYMANTEC\BACKUP EXEC FOR  
WINDOWS\BACKUP EXEC\ENGINE\DOMINO
```

2 Enable Change Journal キーの値を 1 に設定し、変更ジャーナルの監視を有効にします。

3 Remote Agent for Lotus Domino を再起動します。

アーカイブログを使用した Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリについて

障害によりアクティブなトランザクションログが失われている場合でも、最新のトランザクションログに記録されている時点までデータベースをリカバリすることができます。

ただし、すべてのトランザクションログが失われた場合のデータベースのリカバリには、次のものがが必要です。

- Lotus Domino サーバーに存在する最新の `notes.ini` ファイル
- データベースのバックアップ
- すべてのアーカイブログエクステンツ

また、変更ジャーナルの監視が有効になっている場合は、Lotus Domino サーバーのリカバリを開始する前に、レジストリで変更ジャーナルの監視を無効にしておく必要があります。

p.1075 の「[変更ジャーナルの監視の無効化](#)」を参照してください。

循環ログを使用する Lotus Domino サーバーのリカバリ

循環ログが有効で、かつトランザクションログが失われている場合は、Domino データベースは、完全バックアップの時点の状態にしかりカバリすることはできません。

表 F-6 循環ログを使用する Lotus Domino サーバーをリカバリする手順

手順	説明
手順 1	Lotus Domino サーバー (notes.ini、cert.id および <server>.id ファイルを除く) を障害発生前と同じ構成でインストールします。
手順 2	ログディレクトリ (logdir) が存在し、そのディレクトリにファイルが存在していないことを確認します。 ログディレクトリが存在していない場合は、障害発生前と同じパスにログディレクトリを作成します。 この手順の実行後に、Lotus Domino サーバーを起動しないでください。
手順 3	Lotus Domino サーバーのプログラムディレクトリの最新の完全バックアップから notes.ini、cert.id、<server>.id の各ファイルをリストアします。
手順 4	サーバーの起動時に、Lotus Domino のログディレクトリに循環ログファイルを作成するために、notes.ini ファイルに次のパラメータを設定します。 translog_path=logdir
手順 5	Lotus Domino Agent を使用して、Domino データディレクトリにデータベースをリストアします。 p.593 の「 ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア 」を参照してください。 p.1068 の「 Lotus Domino データベースのリストアオプションの選択 」を参照してください。

アーカイブログが有効な Lotus Domino サーバー、データベース、トランザクションログのリカバリ

Lotus Domino サーバー、データベース、トランザクションログをリカバリするには、次の手順を使います。

[p.1076](#) の「[アーカイブログを使用した Lotus Domino サーバーのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。

アーカイブログが有効な Lotus Domino サーバーをリカバリする方法

- 1 データベース以外の Domino サーバーファイル (*.id および notes.ini) をリストアします。

必要に応じて Domino サーバーを再インストールし、サーバーの設定を行わずにデータベース以外の Domino ファイル (notes.ini ファイル、*.id ファイルなど) をリストアします。元のインストールと同じディレクトリ構造、ディレクトリの場所および logdir パスを使用します。再インストール後にサーバーを起動しないでください。

- 2 [リストアジョブのプロパティ] ダイアログボックスの [設定] の下にある [一般] をクリックします。

- 3 [常にディスク上のファイルを上書きする] にチェックマークを付けます。

- 4 テキストエディタを使用して、Domino サーバーの notes.ini ファイルの TRANSLOG_Status 設定を 0 に変更します。

たとえば、TRANSLOG_Status=0 となります。

- 5 Backup Exec Agent for Lotus Domino を使用して、アクティブなトランザクションログが失われた時点より前にバックアップされた最後のトランザクションログをリストアします。

- 6 トランザクションログのリストアが正常に完了したことを確認します。

- 7 Backup Exec Agent for Lotus Domino をシャットダウンし、再起動します。

- 8 手順 5 でリストアしたトランザクションログ以外のすべてのトランザクションログを、Domino のトランザクションログディレクトリから削除します。

- 9 テキストエディタを使用して、Domino サーバーの notes.ini ファイルを次のように変更します。

```
TRANSLOG_Recreate_Logctrl=1
```

```
TRANSLOG_Status=1
```

- 10 Domino データベースの完全リストアを実行するか、またはアーカイブログエクステンツの指定した時点へのリストアを実行します。

Backup Exec は DAOS 対応データベースとともにすべての DAOS NLO ファイルを自動的にリストアします。また、Domino は Domino サーバーを再起動するときに daos.cfg ファイルと daoscat.nsf ファイルの両方を自動的に作成し直します。

完全リストアが完了したら、notes.ini ファイルの TRANSLOG_Logctrl パラメータを 0 にリセットします。

- 11 Domino サーバーを起動します。これでディザスタリカバリは完了です。

- 12 ディザスタリカバリの開始前に変更ジャーナルの監視を無効にした場合は、再び有効にする必要があります。

p.1075 の「変更ジャーナルの監視の再有効化」を参照してください。

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Exchange Server

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Backup Exec Exchange Agent](#) について
- [Exchange Agent](#) 使用上の必要条件
- [Exchange Agent](#) のインストールについて
- [Exchange](#) の推奨設定
- [Exchange](#) メールボックスにアクセスするための必要条件
- [Exchange](#) 用のバックアップ戦略
- [Granular Recovery Technology](#) による [Exchange](#) インフォメーションストアとの連携
- [Exchange Agent](#) を使用したスナップショットおよびオフホストバックアップ
- [Exchange](#) データの継続バックアップについて
- [Exchange](#) の継続バックアップに関する推奨事項
- [Exchange](#) データのデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定
- [Exchange 2003/2007](#) のバックアップについて
- [Exchange 2010](#) データベースのバックアップについて
- [Exchange](#) のバックアップ
- [Exchange](#) データのリストアについて

- [Exchange データのリストア先の変更について](#)
- [Exchange Server のディザスタリカバリを準備する方法](#)
- [Exchange 2000 以降のディザスタリカバリ](#)

Backup Exec Exchange Agent について

Exchange Agent では、Microsoft Exchange Server データベースのバックアップを、特別な管理や専用ハードウェアを使用せずに、ネットワークバックアップに統合することができます。

Exchange Agent は次の機能を備えています。

- **Granular Recovery Technology (GRT)** を有効にしたバックアップから個々の項目をリストアできます。
- **Backup Exec Continuous Protection Server (CPS)** がインストールされている場合、Exchange Server の継続バックアップを実行できます。CPS Exchange バックアップジョブでは、最新の完全なトランザクションログなど、インフォメーションストアの任意の時点への完全なリカバリを実行できます。次の完全バックアップまでにリカバリポイントが実行されるようにすると、リカバリポイントが作成された時点の個々の項目をリストアできます。リカバリポイントが作成されていない場合でも、完全バックアップから個々の項目をリストアできます。
- ストレージグループまたはストレージグループ内の1つ以上のデータベースを選択して、バックアップジョブおよびリストアジョブを実行することができます。
- Exchange Server 2003 のリカバリストレージグループ機能と Exchange 2010 のリカバリデータベース機能の使用によってスナップショット以外のバックアップから個々のデータベースからストレージグループをリストアすることができます。Exchange Server 2007/2010 では、リカバリストレージグループまたはデータベースにスナップショットバックアップをリストアできます。
- Exchange 2010 データベースコピーのシーディングを行うことができます。シーディングすると、データベース可用性グループの別のメールボックスサーバーの場所にデータベースコピーが追加されます。
- Windows Server 2003 で実行されている Exchange Server 2003 または Exchange Server 2007 のインスタンスに、スナップショットバックアップおよびオフホストバックアップを作成することができます。
- Exchange Server 2003/2007/2010 用の Granular Recovery Technology (GRT) を使用したオフホストバックアップを作成することができます。

p.1085 の「[Exchange Agent のインストールについて](#)」を参照してください。

p.1088 の「[Exchange 用のバックアップ戦略](#)」を参照してください。

p.1086 の「[Exchange の推奨設定](#)」を参照してください。

p.305 の「[Granular Recovery Technology](#) を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。

p.905 の「[オフホストバックアップについて](#)」を参照してください。

p.923 の「[Advanced Open File Option](#) について」を参照してください。

Exchange Agent 使用上の必要条件

メディアサーバーは、次の必要条件を満たしている必要があります。

表 G-1 Backup Exec Exchange Agent のメディアサーバーの必要条件

メディアサーバーの必要条件	説明
Exchange Agent のサポート	<ul style="list-style-type: none"> ■ Symantec Backup Exec Microsoft Exchange Server Agent (Exchange Agent) のライセンスを取得して、インストールする必要があります。 ■ メディアサーバーから Exchange Server にアクセスできる必要があります。 <p>メモ: Exchange 2010 を保護するには、64 ビット版の Microsoft Windows 2008 SP2 のメディアサーバーまたは 64 ビット版の Microsoft Windows 2008 R2 のメディアサーバーに Backup Exec をインストールする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Exchange Server に対するドメインおよびローカルの管理者権限がある Backup Exec サービスアカウントを使用することをお勧めします。

メディアサーバーの必要条件	説明
Exchange Server 2007/2010 のバックアップ	<p>Microsoft Exchange Server 2007/2010 をバックアップするには、Microsoft Exchange Server 2007/2010 用の Exchange 管理ツールをメディアサーバーにインストールする必要があります。メディアサーバーの管理ツールのバージョンは、Exchange Server 2007/2010 の管理ツールのバージョンと同じかそれ以上である必要があります。</p> <p>Microsoft Exchange サーバー 2007/2010 のカスタムインストールを行うとき管理ツールをインストールできます。メディアサーバーで管理ツールと Backup Exec をインストールする場合は、ツールを最初にインストールします。管理ツールをインストールする前に Backup Exec をインストールすると、ツールのインストールが完了したときメディアサーバーを再起動する必要があります。</p>
Windowsドメイン内の新しいバックアップリソースの検出を可能にする Backup Exec のリソース検出機能のサポート	<p>Exchange 2003 の場合、Microsoft Exchange システムマネージャユーティリティをインストールする必要があります。</p> <p>Exchange 2007/2010 の場合、Exchange 管理ツールをインストールする必要があります。メディアサーバーには、Exchange 管理ツールの両方のバージョンをインストールできます。</p>
Veritas Cluster Server の任意のノードからの Exchange データのバックアップ	<p>Microsoft Exchange システムマネージャユーティリティをすべてのノードにインストールする必要があります。</p>

メディアサーバーの必要条件	説明
<p>インフォメーションストアのバックアップから個々の項目をリストアするための Granular Recovery Technology (GRT) のサポート方法</p>	<p>Microsoft Exchange の場合、ミニフィルタドライバをサポートする次のいずれかのバージョンの Microsoft Windows オペレーティングシステムをインストールする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows 2000 Server (Service Pack 4 と Service Pack 4 の Update Rollup 1 をインストール) ■ Microsoft Windows Server 2003 (Service Pack 1 以上をインストール) ■ Microsoft Windows Server 2003 R2 Edition ■ Microsoft Windows Server 2008 SP2 ■ Microsoft Windows Server 2008 R2 Edition <p>メモ: Exchange 2010 の場合は、Microsoft Windows 2008 SP2 または Microsoft Windows Server 2008 R2 のいずれかを使用する必要があります。</p> <p>GRT 対応のバックアップに使用するデバイスには、追加の必要条件がある場合があります。</p> <p>p.308 の「Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス」を参照してください。</p> <p>p.309 の「Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について」を参照してください。</p>
<p>Backup Exec Continuous Protection Server のサポート</p>	<p>CPS コンポーネントをインストールする必要があります。CPS コンポーネントのインストール方法について詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>p.1099 の「CPS Exchange バックアップジョブのコンポーネントをインストールする場合の必要条件」を参照してください。</p>

Backup Exec Exchange Agent を使用する場合の Exchange Server の必要条件を次に示します。

表 G-2 Exchange Server の必要条件

Exchange Server の必要条件	説明
Exchange Server 2007 のサポート	<p>Microsoft Exchange Server MAPI クライアントと Collaboration Data Objects パッケージをダウンロードして、Exchange Server 2007 にインストールします。</p> <p>このパッケージは、次の機能をサポートします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ インフォメーションストアのバックアップからの個々のメールボックス、メールメッセージおよびパブリックフォルダのリストア。 ■ Granular Recovery Technology オプションが有効で、バックアップ先デバイスがテープの場合の、バックアップ用カタログ情報の収集。 <p>このパッケージは、Microsoft 社の Web サイトで入手できます。</p>
すべての Exchange リソースに対する操作	<p>ユーザーアカウントは次のグループのメンバーでなければなりません：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Administrators グループ ■ Domain Admins <p>また、適切な Exchange Server 管理ユーティリティを使ってユーザーアカウントに Exchange Organization Administrators の役割 (2007) または Exchange Organization Management の役割 (2010) を割り当てなければなりません。</p>
Exchange Server 2007 用の Granular Recovery Technology オプションのサポート方法	<p>適切な Exchange Server 管理ユーティリティを使ってユーザーアカウントに Exchange Organization Administrators の役割 (2007) または Exchange Organization Management の役割 (2010) を割り当てなければなりません。</p>
スナップショットバックアップのサポート	<p>Windows Server 2003 以上で動作する Microsoft Exchange Server を使用します。</p> <p>メモ: 増分または差分バックアップ方式を選択する場合は、Exchange Server 2003 Service Pack 1 以上がインストールされている必要があります。</p>

Exchange Server の必要条件	説明
Backup Exec Continuous Protection Server のサポート	<p>CPSコンポーネントをインストールする必要があります。CPSコンポーネントのインストール方法については詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>p.1099の「CPS Exchange バックアップジョブのコンポーネントをインストールする場合の必要条件」を参照してください。</p>
Exchange 2010 のバックアップとリストアの方法	<p>データベース可用性グループ (DAG) 上のデータベースをバックアップするには、DAGのすべてのサーバーに Remote Agent for Windows Systems をインストールする必要があります。</p> <p>Granular Recovery Technology オプションがサポートされるには、サイトのすべてのクライアントアクセスサーバーに Remote Agent for Windows Systems をインストールする必要があります。</p> <p>p.1895の「Remote Agent for Windows Systems について」を参照してください。</p>

Backup Exec は、Outlook が次のいずれかと同じコンピュータにインストールされた場合、Granular Recovery Technology オプションをサポートしません。

- Exchange Server 2003
- 2003 より前の Windows のバージョンでの Exchange Server 2007

同じコンピュータに Outlook と Exchange Server をインストールすることについては、Microsoft のサポート技術情報を参照してください。

p.300 の「[リソース検出による新しいリソースの検索](#)」を参照してください。

p.1127 の「[バックアップする個々の Exchange メールボックスの選択について](#)」を参照してください。

p.1098 の「[Exchange データの継続バックアップについて](#)」を参照してください。

Exchange Agent のインストールについて

Exchange Agent は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてローカルにインストールされ、ローカルまたはリモートの Exchange Server データベースを保護することができます。

Exchange 2010 を保護するには、64ビット版の Microsoft Windows 2008 SP2 のメディアサーバーまたは 64 ビット版の Microsoft Windows 2008 R2 のメディアサーバーに Backup Exec をインストールする必要があります。

メモ: メディアサーバーに Microsoft Exchange Tools 2007/2010 と Backup Exec を一緒にインストールするときは、Exchange Tools 2007/2010 を最初にインストールしなければなりません。Exchange Tools の前に Backup Exec をインストールする場合は、Exchange Tools のインストールを終えた後メディアサーバーを再起動する必要があります。

p.112 の「ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール」を参照してください。

Exchange の推奨設定

Exchange のバックアップを開始する前に、バックアップからのリストアを容易にするため、Exchange の設定に関する次の推奨事項を確認してください。

表 G-3 Exchange の推奨設定

推奨事項	説明
トランザクションログファイルは、データベースとは別の物理的なディスクに配置する。	この構成は、Exchange のパフォーマンスにとって非常に重要です。また、トランザクションログもリカバリ用のリソースとして使用できるため、ディザスタリカバリ対策にもなります。
SCSI コントローラの書き込みキャッシュを利用できないように設定する。	これによって Windows オペレーティングシステムでバッファが使用されないため、Exchange が Windows から書き込み終了通知を受信した時点で、ディスクへの書き込みは完了します。書き込みキャッシュを使用した場合は、キャッシュに書き込んだ時点で、Windows はディスクへの書き込みが終了したものとして、その情報を Exchange (またはその他のアプリケーション) に誤って通知してしまいます。したがって、実際にディスクへの書き込みが終了していない時点でシステムがクラッシュすると、データが破損する可能性があります。

推奨事項	説明
<p>循環ログは、できる限り利用不可にする。</p>	<p>循環ログを使用すると、トランザクションログファイルでディスクが一杯になる危険性を少なくすることができます。しかし、堅実なバックアップ戦略を採用していれば、バックアップ時にトランザクションログファイルのエントリが削除され、循環ログを使用しなくても、ディスク領域が解放されます。循環ログを使用すると、トランザクションログの履歴が上書きされ、ストレージグループおよびデータベースの増分バックアップや差分バックアップが使用できなくなるため、リカバリできるのは最後の完全バックアップまたはコピーバックアップの時点までになってしまいます。</p> <p>メモ: 循環ログを有効にした場合、Backup Exec Continuous Protection Server を使用したインフォメーションストアのトランザクションログの継続バックアップはサポートされません。</p>
<p>Exchange Server をドメインコントローラにしない。</p>	<p>Active Directory を最初にリストアする必要がなくなれば、Exchange のリストアが容易になります。</p>
<p>Exchange は、少なくとも 2 つのドメインコントローラの存在するドメインにインストールする。</p>	<p>ドメイン内にドメインコントローラが 1 つしか存在しない場合は、Active Directory の複製処理ができません。ドメインコントローラに障害が発生して Active Directory が損傷すると、最後のバックアップに含まれていないトランザクションをリストアすることができなくなります。ドメイン内に 2 つ以上のドメインコントローラが存在すると、データベースバックアップのリストア後に、消失したトランザクションが複製を使用してリストアされ、障害からリカバリしたドメインコントローラ上のデータを更新することができます。</p>

p.1092 の「[Exchange の循環ログ設定について](#)」を参照してください。

p.1087 の「[Exchange メールボックスにアクセスするための必要条件](#)」を参照してください。

Exchange メールボックスにアクセスするための必要条件

Backup Exec は、インフォメーションストアの操作を行うために、バックアップジョブおよびリストアジョブの設定に応じて、**Exchange** 組織内に存在する一意の名前のメールボックスへのアクセスが可能である必要があります。

次を実行する場合には、一意の名前のメールボックスへのアクセスが必要になります。

- インフォメーションストアとは別に、個々のメールボックスをバックアップする(メールボックスのレガシーバックアップ方式とも呼ぶ)。
- 次の設定をすべて含むバックアップジョブを設定する。
 - バックアップ先デバイスがディスクへのバックアップフォルダ以外のデバイスである。

- Granular Recovery Technology オプションが有効になっている。
- スナップショット方式以外のバックアップ方式が設定されている。
- メールボックスおよびパブリックフォルダをリストアする。

メールボックスまたはパブリックフォルダをバックアップする場合、Backup Exec ログオンアカウントを使用して Exchange Server に接続する必要があります。Backup Exec は、Backup Exec ログオンアカウントに格納されているユーザー名と同じ名前のメールボックスを検索しようとします。

使用した Backup Exec ログオンアカウントに一意のユーザー名が格納されており、同じ名前のメールボックスが存在する場合は、別のログオンアカウントを入力する画面は表示されません。同じ名前のメールボックスが存在しない場合は、Exchange 組織内に存在する一意の名前のメールボックスと同じ名前を使用した Backup Exec ログオンアカウントに変更するか、そのようなログオンアカウントを作成する必要があります。

一意の名前とは、他のメールボックスの名前の最初の 5 文字を含んでいない名前です。たとえば、EXCH1BACKUP などの名前のメールボックスがすでに存在している場合、メールボックスの名前として EXCH1 を入力しても受け付けられません。別の名前を入力する必要があります。

次のいずれかの必要条件を満たすログオンアカウントを選択または作成できます。

- ユーザー名が一意のメールボックス名と一致するログオンアカウント。
- メールボックスに対して一意のエイリアスを使用するログオンアカウント。Exchange Server に接続するユーザーアカウントには、このメールボックスへのアクセス権も必要です。
- メールボックスの完全なコンピュータ名を使用するログオンアカウント。Exchange Server に接続するユーザーアカウントには、このメールボックスへのアクセス権も必要です。

完全なコンピュータ名の例を次に示します。

/O=Exchange_Organization/OU=Administrative_Group/CN=Recipients/CN=mailbox_name

p.305 の「Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。

p.175 の「Backup Exec ログオンアカウントの作成」を参照してください。

Exchange 用のバックアップ戦略

Backup Exec には、日常のバックアップルーチンの一部として、オンラインの継続的な Exchange データベース保護機能が組み込まれ、日常のアクティビティを妨げることなく、データのリカバリ機会を増やし、データの損失を最小限に抑えます。Backup Exec では、完全、コピー、増分および差分バックアップを使用して、個々のストレージグループ、デー

データベース、メールボックスおよびパブリックフォルダなどの Exchange のデータを保護することができます。

どのバックアップ方式を使用するかを決定するには、次の事項を考慮する必要があります。

- システム内でやり取りされるメッセージの数が比較的少ない小規模の業務環境では、日次完全バックアップを実行することが、データの保護およびリカバリ時間の点で最も有利です。ログファイルの肥大化が問題の場合は、昼休みにオンラインで増分バックアップを実行すると、リカバリポイントが増え、ログファイルの肥大化も自動的に管理できます。
- 大規模な環境では、増分バックアップの使用により、リカバリ可能な時点を増やし、かつ、ログファイルの肥大化を制御することが必要です。完全バックアップを週に 1 回実行し、増分バックアップを毎日実行することで、バックアップに必要な時間を最短化します。代償として、リカバリの必要が発生した場合は、完全バックアップだけでなく各増分バックアップもリストアする必要があります。

どの方式が最も適しているかは、環境の規模、毎日処理されるトランザクションの数およびリカバリが必要になった場合の要件によって決まります。

次のようなバックアップ戦略を検討してください。

- **Backup Exec Continuous Protection Server (CPS)** ジョブを毎週または毎日実行します。完全バックアップおよび複製トランザクションログを使用すると、最新の完全なトランザクションログなど、インフォメーションストアの任意の時点への完全なリカバリを実行できます。CPS バックアップから個々のメッセージまたはフォルダをリストアすることもできます。

次の完全バックアップまでにリカバリポイントが実行されるようにすると、リカバリポイントが作成された時点の個々のメッセージまたはフォルダをリストアできます。リカバリポイントには、リカバリポイントが実行されるたびにトランザクションログが切り捨てられるため、ログの肥大化を制御できるという利点もあります。

メモ: Exchange 2010 のデータベース可用性グループ (DAG) にある Exchange Server では CPS を使用できません。

- 個々の項目のリストアを有効にするオプションを選択して完全バックアップを実行すると、データベース全体をリストアすることなく個々のメールメッセージおよびフォルダをリストアできます。

環境に応じて、次のように完全バックアップを実行します。

- できるだけ頻繁に、毎日 1 回は実行する。
- 毎日 1 回実行し、さらに一定の時間間隔で差分バックアップを実行する。
- 数日おきに (ただし、1 週間を超えずに) 実行し、次の完全バックアップまでに頻繁に増分バックアップを実行する。

- 他のバックアップジョブとは別に Exchange バックアップジョブを実行します。

Exchange ストレージグループまたはデータベースのバックアップだけでなく、定期的に次のデータもバックアップする必要があります。

表 G-4 Exchange 構成データのバックアップ選択項目

推奨する構成データのバックアップ選択項目	説明
ファイルシステム	<p>Windows および Exchange のファイルが格納されているフォルダおよびドライブをバックアップします。通常はルートドライブ C: ですが、環境によって異なる場合があります。</p> <p>メモ: 環境内に Exchange によって作成された仮想ドライブが存在する場合は、C: ドライブのみをバックアップし、仮想ドライブはバックアップしないでください。この仮想ドライブは、エクスプローラから Exchange データにアクセスするためのみ使用するもので、ファイルシステムの機能がすべて複製されているわけではありません。仮想ドライブのバックアップおよびリストアは、推奨およびサポートされていません。</p>
Windows レジストリ	<p>完全バックアップを実行するとレジストリもバックアップされます。</p>
システム状態とシャドウコピーコンポーネント	<p>[システム状態]を選択して完全バックアップを実行し、次の項目をバックアップします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Internet Information Service (IIS) メタベース ■ Windows レジストリ <p>p.265の「バックアップするデータの選択について」を参照してください。</p> <p>サーバー全体のリストアが必要な場合は、Exchange 2000 をリストアする前にシステム状態をリストアする必要があります。また、Exchange Server 2003/2007/2010 をリストアする前に、システム状態とシャドウコピーコンポーネントの両方をリストアする必要があります。</p>

推奨する構成データのバックアップ選択項目	説明
Active Directory	<p>Active Directory をバックアップするには、ドメインコントローラの [システム状態] を選択して完全バックアップを実行します。</p> <p>オブジェクトの追加、変更および削除など、Exchange Server データベースの構成を変更した場合は、ドメインコントローラ上の Active Directory のバックアップを行います。</p> <p>メモ: Active Directory の複製処理を効率化するためおよびドメインコントローラの 1 つに障害が発生した場合でも冗長性を維持するために、各ドメインに複数のドメインコントローラを配置します。</p>

メモ: **Granular Recovery Technology (GRT)** オプションを有効にしたインフォメーションストアバックアップを設定し、個々のメールボックス、メールメッセージおよびパブリックフォルダをリストアします。インフォメーションストアとは別に **Exchange** の個々のメールボックスをバックアップする場合はレガシーバックアップ方式を使用しますが、個々のメールボックスのリカバリにこの方式を使用する必要はありません。

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.1116 の「[Exchange 2003/2007 のバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1117 の「[Exchange 2010 データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1153 の「[Exchange Server のディザスタリカバリを準備する方法](#)」を参照してください。

ボリュームレベルのバックアップでの Exchange データの自動除外

バックアップ対象として **Exchange** データが含まれるボリュームを選択すると、**Exchange Agent** は、アクティブファイルの除外機能を使用して、ボリュームレベルのバックアップに含めることができない **Exchange** データを自動的に除外します。たとえば、**.EDB** ファイル、**.STM** ファイル、およびトランザクションログファイルは、**Exchange** による排他的な使用のためにオープンされるため、ボリュームレベルのバックアップに含めることはできません。

スナップショット以外のバックアップでは、このファイルの除外が発生しなかった場合、これらのファイルは使用中と見なされてスキップしたものと扱われます。スナップショットバックアップでは、これらのファイルは一貫性のない状態でバックアップされ、リストアの問題が発生する可能性があります。

ボリュームレベルのバックアップに Exchange データを含めることはお勧めできませんが、必要な場合には、まずバックアップするストレージグループまたはデータベースのマウントを解除した後で、バックアップジョブを実行する必要があります。

Exchange の循環ログ設定について

循環ログが有効になっている場合は、Exchange データベースおよびストレージグループの差分バックアップおよび増分バックアップ、または継続バックアップが有効になっているバックアップジョブを実行することはできません。このようなバックアップには完全なログの履歴が必要です。

循環ログが有効になっている場合は、データベースへのコミットが済んでいるトランザクションログファイルは上書きされ、不要なログの累積が防止されます。完全バックアップまたは増分バックアップの実行に関係なく、ログファイルが上書きされるため、最後の完全バックアップまたは増分バックアップ以降のログ履歴は保持されません。

循環ログが無効になっている場合は、次に示す操作が実行されるまで、トランザクションログファイルがディスク上に累積されます。

- 完全バックアップまたは増分バックアップ
- Exchange の継続バックアップに含まれるリカバリポイント

これらの操作の後、すべてのトランザクションのデータベースへのコミットが済んだログファイルは削除されます。

p.1088 の「[Exchange 用のバックアップ戦略](#)」を参照してください。

Granular Recovery Technology による Exchange インフォメーションストアとの連携

Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、バックアップ全体をリストアせずにインフォメーションストアのバックアップから個々の項目をリストアできます。GRT 対応のバックアップを設定する前に、必要条件を確認する必要があります。

インフォメーションストアのオフホストバックアップを作成する場合にも、GRT を有効にすることができます。オフホストバックアップを使用すると、バックアップ処理をホストコンピュータから Backup Exec メディアサーバーに移動できます。ホストコンピュータとは、バックアップ対象として選択したボリュームを含むリモートコンピュータです。GRT 対応のオフホストバックアップを実行するには、Backup Exec Advanced Disk-based Option をメディアサーバーにインストールする必要があります。

メモ: 旧バージョンの Backup Exec では、個々のメールボックスをリストアするために、Exchange の個々のメールボックスをインフォメーションストアとは別にバックアップしていました。このようなレガシーバックアップオプションは、旧バージョンの Backup Exec からアップグレードしており、メールボックスバックアップ用のジョブがすでに存在している場合にのみ、デフォルトで有効になっています。

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.308 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス](#)」を参照してください。

p.309 の「[Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について](#)」を参照してください。

p.915 の「[Exchange リソース用の GRT 対応オフホストバックアップの設定](#)」を参照してください。

p.884 の「[Advanced Disk-based Backup Option のインストールについて](#)」を参照してください。

Backup Exec と Microsoft Exchange Web サービスについて

Backup Exec は Granular Recovery Technology オプションをサポートするために Microsoft Exchange Web サービス (EWS) を使います。EWS は Exchange 2010 データベースのバックアップからの個々のメールボックス、メールメッセージ、パブリックフォルダのリストアに対するサポートを提供します。

メモ: EWS を使えば MAPI クライアントと CDO (Collaboration Data Objects) パッケージをインストールする必要はありません。

EWS を使って個々の項目をリストアするために、Backup Exec はリストアジョブに指定するリソースクレデンシャルのクライアントスロットルポリシーを無効にします。クライアントスロットルポリシーはクライアントアクセスサーバーにあり、Exchange Server の接続帯域幅の制限を適用します。

また、Backup Exec は Exchange Impersonation の偽装の役割そして役割の割り当てを作成します。Exchange Impersonation の役割の割り当てはリストアジョブに指定する Backup Exec リソースクレデンシャルと偽装の役割を関連付けます。

Backup Exec は次の役割を作成し、割り当てます:

- SymantecEWSImpersonationRole
- SymantecEWSImpersonationRoleAssignment

Exchange Agent を使用したスナップショットおよびオフホストバックアップ

Exchange Agent で、Microsoft のボリュームシャドウコピーサービス (VSS) がサポートされます。VSS は、Windows Server 2003 以上のみで利用可能なスナップショットプロバイダサービスです。VSS を使用して、Exchange データベースの特定の時点のデータのビュー (スナップショット) が作成され、そのスナップショットのバックアップが行われます。そのため、実際の Exchange データベースは開いたままなので、ユーザーが利用することができます。

オフホストバックアップを使用すると、バックアップ処理を Exchange Server に代わって Backup Exec メディアサーバーで行うことができます。バックアップ処理を Exchange Server からメディアサーバーへ移動することによって、バックアップのパフォーマンスが向上し、リモートコンピュータの作業負荷が軽減されます。

Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) をメディアサーバーにインストールした場合は、インフォメーションストアにオフホストバックアップを作成するときに Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) オプションを使用できます。

p.915 の「[Exchange リソース用の GRT 対応オフホストバックアップの設定](#)」を参照してください。

Exchange Agent のスナップショットは、次のものをサポートしていません。

- NAS 構成
- Exchange 2003 のリカバリストレージグループ機能
- スナップショットバックアップとスナップショット以外のバックアップの混在
Microsoft Exchange の制限により、スナップショット以外のバックアップをデータ保護方式の一環として実行する場合、スナップショットバックアップを実行することはできません。スナップショットバックアップを実行する場合、スナップショット以外のバックアップは実行できません。

Exchange Agent とともに VSS を使用する場合に利用可能なバックアップ方式の種類は、Exchange Server のバージョンによって異なります。次の表に、Exchange Server のバージョンごとに利用可能なバックアップ方式を示します。

表 G-5 Exchange スナップショットのバージョンごとに利用可能なバックアップ方式

Exchange のバージョン	利用可能なバックアップ方式
Exchange Server 2003	利用可能なバックアップ方式は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">■ 完全■ コピー

Exchange のバージョン	利用可能なバックアップ方式
Exchange Server 2003 Service Pack 1 以上 Exchange Server 2007/2010	利用可能なバックアップ方式は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 ■ コピー ■ 差分 ■ ストレージグループレベルの増分スナップショットバックアップ ■ 個々のデータベースのリストア
Exchange Server 2007	LCR または CCR (パッシブコピーまたはアクティブコピーからのバックアップ) メモ: スタンバイ連続レプリケーション (SCR) のパッシブコピーは Exchange Server 2007 ではバックアップできません。バックアップで SCR は選択できません。

Exchange Agent のスナップショットジョブおよびオフホストジョブのトラブルシューティング

次のような場合には、Exchange Agent のスナップショットジョブは失敗します。

- Exchange Agent のスナップショットが失敗した場合。
- Windows 2000 上の Exchange Server 2003 のデータに対して、移行されたスナップショットバックアップまたは新しいスナップショットバックアップを実行する場合。
Exchange のスナップショットバックアップは Exchange Server 2003 以上で Windows Server 2003 またはそれ以降のためにのみサポートされます。Exchange のスナップショットバックアップとスナップショット以外のバックアップは相互操作できないため、ジョブはスナップショット以外のバックアップにフォールバックされません。
スナップショットバックアップはサポートされるリソースに対して続行されるため、ジョブは例外処理ありで正常に完了します。
サポートされるリソースに対するスナップショットの続行を可能にするには、次のいずれかを実行します。
 - Advanced Open File Option の [バックアップジョブのプロパティ] で [バックアップの論理ボリュームを 1 つずつ処理する] にチェックマークを付けます。
 - Advanced Disk-based Backup Option の [バックアップジョブのプロパティ] で [オフホストバックアップの論理ボリュームを 1 つずつ処理する] にチェックマークを付けます。
- 増分または差分バックアップ方式が選択されており、Exchange Server 2003 Service Pack 1 以上がインストールされていない場合。
- 循環ログが有効になっており、増分または差分バックアップ方式が選択されている場合。

- Windows Small Business Server 2003 でスナップショットジョブを実行します。Microsoft Exchange Server 2003 の VSS ライターは Windows Small Business Server 2003 で無効になっているため、Exchange 2003 のスナップショットバックアップが失敗します。
正常に Exchange 2003 のスナップショットバックアップを実行するために、次の Microsoft のサポート技術情報を確認します。
<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;EN-US;Q838183>
Intelligent Disaster Recovery Option の使用によって正常なリストアジョブを実行するためにこの問題を解決する必要があります。

Exchange リソース用のスナップショットバックアップの設定

スナップショットバックアップを実行する前に、一貫性チェックを実行することをお勧めします。

p.1116 の「[Exchange 2003/2007 のバックアップについて](#)」を参照してください。

表 G-6 Exchange リソース用のスナップショットバックアップの設定

手順	処理
手順 1	Exchange バックアップジョブを作成します。 p.1116 の「 Exchange 2003/2007 のバックアップについて 」を参照してください。
手順 2	Advanced Open File Option のデフォルトオプションを設定します。 Exchange Server 2007/2010 リソースの場合、Backup Exec によってスナップショットバックアップが自動的に実行されます。Advanced Open File Option のオプションを選択する必要はありません。 p.930 の「 AOFO (Advanced Open File Option) のデフォルトオプションの設定 」を参照してください。 [Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス] オプションまたは [オープンファイルテクノロジーを自動的に選択する] オプションのいずれかが選択されていることを確認します。 スナップショットバックアップでサポートされないリソースがバックアップ選択リストに含まれている場合、[バックアップの論理ボリュームを 1 つずつ処理する] にチェックマークを付けて、エラーが発生してもジョブが完了するようにします。

手順	処理
手順 3	<p>バックアップジョブをスケジュールまたは開始します。</p> <p>p.317の「ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成」を参照してください。</p> <p>p.1094の「Exchange Agent を使用したスナップショットおよびオフホストバックアップ」を参照してください。</p> <p>p.1095の「Exchange Agent のスナップショットジョブおよびオフホストジョブのトラブルシューティング」を参照してください。</p> <p>p.1137の「スナップショットバックアップからの Exchange データのリストアについて」を参照してください。</p>

Exchange Agent を使用したオフホストバックアップの設定

オフホストバックアップを実行する前に、一貫性チェックを実行することをお勧めします。

p.1116の「[Exchange 2003/2007 のバックアップについて](#)」を参照してください。

Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) をメディアサーバーにインストールした場合は、インフォメーションストアにオフホストバックアップを作成するときに Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) オプションを使用できます。GRT を有効にしたインフォメーションストアのバックアップから個々のメールボックス、メールメッセージおよびパブリックフォルダをリストアできます。

p.915の「[Exchange リソース用の GRT 対応オフホストバックアップの設定](#)」を参照してください。

p.305の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.1094の「[Exchange Agent を使用したスナップショットおよびオフホストバックアップ](#)」を参照してください。

p.1095の「[Exchange Agent のスナップショットジョブおよびオフホストジョブのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Exchange Agent を使用してオフホストバックアップを設定する方法

- 1 Exchange バックアップジョブを作成します。
p.1116 の「[Exchange 2003/2007 のバックアップについて](#)」を参照してください。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Advanced Disk-based Option]をクリックします。
p.912 の「[バックアップジョブのオフホストバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。
- 3 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。
- 4 スナップショットプロバイダに[自動 - 可能であればハードウェアを使用、無効な場合はソフトウェアを使用]が選択されていることを確認します。
- 5 ジョブの最終処置オプションは利用できません。
- 6 オフホストバックアップでサポートされないリソースがバックアップ選択リストに含まれている場合、[オフホストバックアップの論理ボリュームを1つずつ処理する]にチェックマークを付けて、エラーが発生してもジョブが完了するようにします。
- 7 バックアップジョブをスケジュールまたは開始します。

Exchange データの継続バックアップについて

Symantec Backup Exec Continuous Protection Server (CPS) では、レプリケーションテクノロジーを使用したデータ保護とディスクベースのデータ保護が組み合わせられています。メディアサーバーおよび Exchange Server に CPS コンポーネントがインストールされていると、Exchange データを継続的にバックアップできます。

継続バックアップを有効にすると、Backup Exec は CPS Exchange ジョブと呼ばれる繰り返し実行される完全バックアップによって、インフォメーションストアを保護します。CPS Exchange ジョブは、ローカル NTFS ボリューム上のディスクへのバックアップフォルダに送信されます。完全バックアップ間で実行されるリカバリポイントを有効にすることもできます。完全バックアップ後に作成されるトランザクションログは、ディスクへのバックアップフォルダに継続的に複製されます。

完全バックアップおよび複製トランザクションログを使用すると、最新の完全なトランザクションログなど、インフォメーションストアの任意の時点へのリカバリを実行できます。リカバリポイントによって、リカバリポイントが作成された時点の個々のメッセージまたはフォルダをリカバリできます。リカバリポイントが作成されていない場合は、個々のメッセージまたはフォルダを完全バックアップからリストアすることができます。

継続バックアップ機能では、次のものはサポートされていません。

- Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットプロバイダ Advanced Open File Option のバックアップジョブプロパティで選択するスナップショットオプションは、CPS Exchange バックアップジョブでは無視されます。Exchange

Server 2007/2010 の CPS Exchange バックアップジョブは、常にスナップショットバックアップとして実行されます。

メモ: Exchange 2003 の CPS Exchange バックアップジョブは、常に従来のストリームバックアップとして実行されます。

- Exchange Server 2003 リソースに対する、Central Admin Server Option (CASO) 環境の管理対象メディアサーバーへの継続バックアップ関連のジョブの委任。Exchange Server 2007 リソースに対するジョブの委任がサポートされています。
- リカバリポイントを使用している場合の循環ログ。リカバリポイントは、循環ログが有効になると失敗します。
- クラスタ
- データベース可用性グループ。

p.1081 の「[Exchange Agent 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

CPS Exchange バックアップジョブのコンポーネントをインストールする場合の必要条件

Exchange データを継続的に保護するために Backup Exec Continuous Protection Server (CPS) を使用する場合は、CPS コンポーネントをインストールする必要があります。

Continuous Protection Server コンポーネントのインストール方法について詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。

メモ: Exchange 2010 のデータベース可用性グループ (DAG) にある Exchange Server では CPS を使用できません。

次の表に、CPS Exchange バックアップジョブの作成に必要なコンポーネントをインストールする場合の必要条件を示します。

表 G-7 CPS Exchange バックアップジョブのコンポーネントをインストールする場合の必要条件

コンポーネント	必要条件
<p>Backup Exec メディアサーバーをホストしているサーバーに Continuous Management Service (CMS) をインストールする場合</p>	<p>CPS をインストールする場合は、次の手順を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ジャーナルファイルのパスが、CPS Exchange のディスクへのバックアップフォルダとは異なるドライブ上にあることを確認します。ジャーナルファイルにパスを選択するときには、サーバー上の現在利用可能なディスク容量を確認します。ジャーナルファイル用に十分な空き領域があるドライブを選択します。ジャーナルファイルに必要な容量について詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。 <p>メモ: CPS をインストールしたら、サーバーを再起動する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ CPS コンポーネントのプッシュインストールウィザードのパネルで、Exchange Protection Agent が選択されていることを確認します。 <p>CPS コンポーネントのプッシュインストールウィザードのパネルで Exchange Protection Agent が利用できない場合は、DNS エラーがあるかどうかをチェックします。</p> <p>CPS をインストールした後、次の手順を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Symantec LiveUpdate を使用してサーバーを更新します。CPS で LiveUpdate を使用方法について詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。 ■ サービスを表示して、CPS Exchange Agent がインストールされていることを確認します。Backup Exec Continuous Protection Broker Service が表示されていれば、CPS Exchange Agent はインストールされています。 ■ CPS Continuous Protection Agent を Exchange Server にプッシュインストールします。
<p>Exchange Server</p>	<p>Exchange Server の必要条件は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メディアサーバーおよび CMS がインストールされているサーバーとは異なるサーバー上に存在する必要があります。 ■ ドメインが信頼されない場合、メディアサーバーと同じドメインに存在している必要があります。 ■ Backup Exec Remote Agent for Windows Systems がインストールされている必要があります。メディアサーバーまたは CMS がインストールされているサーバーから Remote Agent をインストールできます。

コンポーネント	必要条件
Backup Exec メディアサーバーをホストしていないサーバーに Continuous Management Service (CMS) をインストールする場合	<p>次の手順を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Backup Exec メディアサーバーおよび Exchange Server に CPS Continuous Protection Agent をプッシュインストールする必要があります。 ■ 必要に応じて、メディアサーバーから CPS コンソールを表示するために、Backup Exec メディアサーバーに CPS の管理コンソールをプッシュインストールできます。
Backup Exec メディアサーバー	<p>次の Windows オペレーティングシステムがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows 2000 Server (Service Pack 4 と Service Pack 4 の Update Rollup 1 以上をインストール) ■ Microsoft Windows Server 2003 (Service Pack 1 以上をインストール) ■ Microsoft Windows Server 2003 R2 Edition ■ Microsoft Windows Server 2008 <p>メディアサーバーには、次のものが備わっている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 1 GB 以上の RAM ■ 2 GHz 以上のプロセッサ
Backup Exec サービスアカウント	<p>Continuous Protection Agent および Exchange Protection Agent は、Backup Exec サービスアカウントを使用する必要があります。</p> <p>Backup Exec サービスアカウントに次のものが備わっていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ドメインおよびローカルの管理者権限。 ■ ローカルのアクティブな Exchange Server 上のトランザクションログの場所を問い合わせる機能。

p.1103 の「Exchange の継続バックアップに関する推奨事項」を参照してください。

p.1104 の「Exchange データに対する CPS Exchange バックアップジョブの管理について」を参照してください。

Exchange データの継続バックアップの設定の必要条件

Exchange インフォメーションストアの継続バックアップ設定に必要な条件を次に示します。

表 G-8 Exchange の継続バックアップの設定の必要条件

必要条件	説明
<p>Backup Exec Continuous Protection Server (CPS) コンポーネントのインストール</p>	<p>Continuous Protection Server コンポーネントのインストール方法について詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。</p> <p>p.1099の「CPS Exchange バックアップジョブのコンポーネントをインストールする場合の必要条件」を参照してください。</p>
<p>インフォメーションストアの完全バックアップが CPS ジョブの一部として繰り返し実行されるように指定</p>	<p>リカバリポイントは最新の完全バックアップに依存しています。完全バックアップの頻度が十分でなかったり、あるいは完全バックアップが利用できない場合は、後続のリカバリポイントを使用できません。</p> <p>完全バックアップおよび後続のリカバリポイントを維持するディスク領域が不足している場合は、次のいずれかまたは両方の処理を検討します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全バックアップをより頻繁にスケジュール設定する。 ■ より少ないリカバリポイントをスケジュール設定する。 <p>完全バックアップの頻度とリカバリポイントの頻度とのバランスをとり、利用可能なディスク領域を効率的に使用する必要があります。</p> <p>p.343の「ジョブのスケジュールの設定」を参照してください。</p> <p>p.1108の「特定の時点で個々の Exchange 項目をリストアするためのリカバリポイントの使用について」を参照してください。</p>
<p>インフォメーションストアの完全バックアップジョブがポリシーに存在しないことの確認</p>	<p>必要なプロパティの設定によってバックアップジョブを作成できます。初めて Backup Exec を使用するなど、Backup Exec でのバックアップジョブの作成に不慣れな場合は、バックアップウィザードを使用してバックアップジョブを作成します。</p> <p>p.317の「ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成」を参照してください。</p>
<p>Exchange メールボックスストアがその他のバックアップジョブに含まれていないことの確認</p>	<p>Exchange メールボックスストアが CPS Exchange バックアップジョブによってバックアップされる場合は、他のバックアップの選択リストに含めないでください。</p>

必要条件	説明
<p>CPS Exchange バックアップジョブの宛先デバイスとしてディスクへのバックアップフォルダを選択</p>	<p>ディスクへのバックアップフォルダを次のように設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ それはローカルメディアサーバーの NTFS のボリュームに存在する必要があります。 ■ リムーバブルディスクへのバックアップフォルダは使用できません。 ■ [ディスクへのバックアップファイルに最大サイズを割り当てる]オプションは選択しないでください。 <p>p.486の「[新規のディスクへのバックアップフォルダ]のデフォルトオプション」を参照してください。</p> <p>メモ: 特定のディスクへのバックアップフォルダを選択する必要があります。デバイスプールを選択すると、ディスクへのバックアップフォルダが含まれている場合でも、ジョブが失敗します。</p> <p>p.482の「ディスクへのバックアップフォルダについて」を参照してください。</p> <p>CPS Exchange バックアップジョブではディスクへのバックアップフォルダを排他的に使用します。CPS Exchange バックアップジョブの宛先デバイスであるディスクへのバックアップフォルダに、他のリソースをバックアップしないでください。</p> <p>p.1105の「CPS Exchange バックアップジョブに利用できるディスク容量の確認について」を参照してください。</p>
<p>循環ログの無効化</p>	<p>循環ログが有効になっている場合、繰り返し実行されるインフォメーションストアの完全バックアップはエラーが発生することなく完了しますが、リカバリポイントは失敗します。</p> <p>p.1092の「Exchange の循環ログ設定について」を参照してください。</p>
<p>バックアップ選択リストで Exchange Server 名を選択</p>	<p>メディアサーバーのバックアップ選択リストでは、Exchange Server の IP アドレスを選択できません。</p>

p.1105の「[CPS Exchange バックアップジョブに利用できるディスク容量の確認について](#)」を参照してください。

p.1103の「[Exchange の継続バックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。

Exchange の継続バックアップに関する推奨事項

バックアップ戦略の一環として継続バックアップを使用する場合は、次の推奨事項に注意してください。

- 1 つの継続的なバックアップジョブで 1 つの Exchange Server のバックアップのみを行うことをお勧めします。各 Exchange Server リソースに対して、個別の選択リストを作成します。
- オフサイトストレージ用にバックアップセットをテープにコピーする必要がある場合、バックアップセットを複製するジョブを作成します。完全バックアップジョブが発生するたびにバックアップセットをテープにコピーするジョブを設定できます。必要に応じて、完全バックアップの前に実行するコピージョブを作成できます。このジョブは、すべてのトランザクションログと完全バックアップセットをテープにコピーします。
- インフォメーションストアのバックアップセットをテープに複製し、これをディスクに戻す場合には、完全バックアップと増分バックアップの両方に同じボリュームを指定します。増分バックアップから個々の項目をリストアするには、バックアップセットは同じボリューム上に存在する必要があります。
- カスタムフィルタを作成して、[ジョブ履歴]ビューへのリカバリポイントの表示を制限することができます。
- CPS Exchange バックアップジョブを作成して実行したら、実行先であるディスクへのバックアップフォルダを変更しないでください。ディスクへのバックアップフォルダを変更する必要がある場合は、新しい CPS Exchange バックアップジョブを作成し、新しいディスクへのバックアップフォルダを宛先デバイスとして指定します。以前のジョブを削除します。

p.280 の「[選択リストの作成](#)」を参照してください。

p.538 の「[ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加](#)」を参照してください。

p.572 の「[カスタムフィルタの管理について](#)」を参照してください。

p.1116 の「[Exchange 2003/2007 のバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1105 の「[CPS Exchange バックアップジョブに利用できるディスク容量の確認について](#)」を参照してください。

p.1109 の「[CPS Exchange バックアップジョブのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Exchange データに対する CPS Exchange バックアップジョブの管理について

Exchange Server の継続バックアップに関連するすべてのバックアップ操作は、単一のジョブとして処理されます。このジョブは、[ジョブモニター]の[現在のジョブ]ビューに表示されます。このジョブの状態は、実行中の操作に応じて変化します。

トランザクションログ複製のための継続バックアップジョブまたは関連するエラーを表示するには、CPS の管理コンソールに移動する必要があります。Continuous Protection

Server の管理コンソールコンポーネントがメディアサーバーにインストールされている場合、CPS コンソールを表示できます。

さまざまな操作の状態を次の表に示します。

表 G-9 継続バックアップジョブの状態

継続バックアップの操作	[ジョブモニター]の[現在のジョブ]ビューに表示される状態
繰り返し実行されるインフォメーションストアの完全バックアップの実行	実行中、CPS バックアップジョブが実行中
トランザクションログの複製	スケジュール済み、CPS バックアップジョブが実行中 メモ: このジョブを右クリックしてプロパティを編集することはできません。プロパティを編集するには、[ジョブセットアップ]をクリックした後でジョブを右クリックする必要があります。
リカバリポイントの実行 メモ: ジョブ名に Exchange Recovery Point と追記されて表示されます。	実行中

リカバリポイントが完了すると、そのリカバリポイントは[ジョブ履歴]ビューに表示されます。リカバリポイントは、完全ジョブの名前として表示され、Exchange リカバリポイントの説明が追記されます。エラー処理方法が有効になっている場合、失敗したリカバリポイントに適用されます。

CPS Exchange バックアップジョブを保留にすると、ジョブの保留が解除されるまでトランザクションログの複製は CPS で停止します。

p.1105 の「CPS Exchange バックアップジョブに利用できるディスク容量の確認について」を参照してください。

p.1106 の「CPS Exchange バックアップジョブの一時停止」を参照してください。

p.1107 の「Backup Exec からの CPS コンソールの表示」を参照してください。

p.1109 の「CPS Exchange バックアップジョブのトラブルシューティング」を参照してください。

CPS Exchange バックアップジョブに利用できるディスク容量の確認について

ハードリンクは Microsoft オペレーティングシステムの機能の 1 つで、CPS Exchange バックアップジョブを処理するときに使用されます。CPS Exchange バックアップジョブに

利用できるディスク容量を確認する際、ハードリンクは報告される利用可能なディスク容量に影響を及ぼします。

スケジュールされた CPS Exchange の完全バックアップでは IMG000060 などの名前のメディアが作成されます。リカバリポイントは、IMG メディアの下に vdb_2007_03_08_1735_08 などの名前の VDB サブフォルダを作成します。バックアップ時に、Exchange トランザクションログファイルが IMG メディアに配置されます。VDB サブフォルダのログは、Exchange トランザクションログファイルへのハードリンクです。作成される VDB サブフォルダには、次に完全バックアップが実行されるまで、前回のリカバリポイント以降のハードリンクがすべて含まれます。

次に例を示します。

VDB1 には 1 から 5 までのログファイルへのハードリンクが含まれます。

VDB2 には 1 から 10 までのログファイルへのハードリンクが含まれます。

VDB3 には 1 から 15 までのログファイルへのハードリンクが含まれます。

この例では、1 から 5 までのログファイルは、実際に使用しているディスク領域の 3 倍の容量を使用していると報告されます。

ハードリンクを使用すると、ディスク領域の使用率は実際よりも多く表示されます。たとえば、ドライブ上で 300 MB のディスク領域が使用されている場合に、500 MB のディスク領域が使用されているように表示されることがあります。CPS Exchange バックアップジョブに利用できるディスク容量を確認するときは、この制限事項に注意してください。

p.498 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップジョブでディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の推奨事項](#)」を参照してください。

CPS Exchange バックアップジョブの一時停止

一時的に CPS Exchange バックアップジョブを停止し、メディアサーバーまたは Exchange Server に影響を与える可能性のある保守タスクを実行します。

CPS 手順について詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。

p.1107 の「[Backup Exec からの CPS コンソールの表示](#)」を参照してください。

p.1108 の「[特定の時点で個々の Exchange 項目をリストアするためのリカバリポイントの使用について](#)」を参照してください。

p.1103 の「[Exchange の継続バックアップに関する推奨事項](#)」を参照してください。

p.579 の「[エラー処理方法について](#)」を参照してください。

表 G-10 CPS Exchange バックアップジョブの一時停止

手順	処理
手順 1	メディアサーバー上で、実行中の CPS Exchange バックアップジョブのスケジュールをすべて保留にします。 p.552 の「 実行中のジョブのすべてのスケジュールの保留 」を参照してください。
手順 2	メディアサーバーと Exchange Server で CPS サービスを停止し、[スタートアップの種類]を[手動]に変更します。
手順 3	メディアサーバーで Backup Exec サービスを停止し、[スタートアップの種類]を[手動]に変更します。
手順 4	メディアサーバーまたは Exchange Server で必要な保守を実行します。
手順 5	保守が完了したら、メディアサーバーで Backup Exec サービスを起動し、[スタートアップの種類]を[自動]に変更します。
手順 6	メディアサーバーで CPS サービスを起動し、[スタートアップの種類]を[自動]に変更します。
手順 7	Exchange Server で CPS サービスを起動し、[スタートアップの種類]を[自動]に変更します。
手順 8	実行中の CPS Exchange バックアップジョブのスケジュールの保留を解除します。 p.552 の「 実行中のジョブのすべてのスケジュールの保留 」を参照してください。

Backup Exec からの CPS コンソールの表示

Continuous Protection Server の管理コンソールコンポーネントがメディアサーバーにインストールされている場合、CPS コンソールを表示できます。CPS コンソールでは、継続的なバックアップジョブの名前に「Backup Exec」と追記されて表示されます。バックアップジョブの種類は[Exchange ログ]、状態の種類は[実行中]と表示されます。

Backup Exec から CPS コンソールを表示する方法

- ◆ ツールメニューの[Continuous Protection Server]をクリックします。

特定の時点に個々の Exchange 項目をリストアするためのリカバリポイントの使用について

Exchange の継続バックアップの一環として、Backup Exec を使用して指定した間隔でリカバリポイントを作成することができます。リカバリポイントでは、[リストア]ビューで参照可能なバックアップセットが作成されます。完全バックアップまたはリカバリポイントのいずれかが実行された時点から個々のメッセージまたはフォルダをリカバリできます。また、リカバリポイントが作成されるたびに、トランザクションログが切り捨てられ、ログの肥大化が制御されます。

繰り返し実行される完全バックアップの開始後、指定された間隔でリカバリポイントの実行が開始されます。ただし、完全バックアップがアクティブになっている場合には、リカバリポイントは実行されません。完全バックアップが完了すると、指定された間隔でリカバリポイントの実行が再開されます。トランザクションログの複製は、完全バックアップがアクティブになっている場合でも、継続して行われます。

リカバリポイントは、バックアップ選択リストに含まれる Exchange リソースにのみ影響を与えます。同じバックアップ選択リストに含まれるリソースでも、Exchange に関連しないリソースは、リカバリポイントの影響を受けません。

リカバリポイントの頻度の設定によるインフォメーションストアのトランザクションログに対するパフォーマンス上の影響は、次のとおりです。

表 G-11 リカバリポイントのデフォルトの間隔を変更した場合の結果

リカバリポイントの間隔	結果
リカバリポイントがデフォルトの 8 時間に 1 回より頻繁に発生するように設定した場合	<p>次のような影響が生じる場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [ジョブモニター]ビューとリストア選択リストに多数の項目が表示され、読みにくくなる場合があります。 ■ リカバリポイントがデフォルトの頻度で発生するように設定した場合よりも、Exchange Server のパフォーマンスが低下することがあります。
リカバリポイントがデフォルトの 8 時間に 1 回より少ない頻度で発生するように設定した場合	トランザクションログは頻繁に削除されないため、ディスク領域の消費量が増加します。

リカバリポイントは、継続バックアップ戦略の一環としてのみ作成することができます。リカバリポイントを使用しないように選択した場合、個々のメールメッセージおよびフォルダは、最後の完全バックアップからのみリカバリできます。

注意:リカバリポイントが発生すると、トランザクションログが削除されます。これは、Exchange Server に対するその他の Backup Exec ジョブ、または他社製アプリケーションによって作成されたその他のジョブに影響を与えることがあります。

p.1103 の「Exchange の継続バックアップに関する推奨事項」を参照してください。

p.1116 の「Exchange 2003/2007 のバックアップについて」を参照してください。

p.1098 の「Exchange データの継続バックアップについて」を参照してください。

CPS Exchange バックアップジョブのトラブルシューティング

Exchange Server で Trace_RBS_#####.txt という名前のログファイルを使用すると、トランザクションログがメディアサーバーへ複製されているかどうかを確認できます。このログは、Backup Exec Continuous Protection Broker Service によって生成されます。

次の例に類似のエントリによって、トランザクションログが Exchange Server からメディアサーバーへ正常に複製されたことが示されます。

```
CRepServiceBroker::CheckLogReplica::CheckLocalLogReplica(target:MEDIA  
SERVER, EXCHANGE SERVER, First Storage Group, E00000F4.log, replicated:true)  
... hr(0x0)
```

MEDIA SERVER はメディアサーバーの名前であり、EXCHANGE SERVER は Exchange Server の名前です。文字列「E00000F4.log, replicated:true」は、Exchange トランザクションログ E00000F4.log が複製されたことを意味します。

Exchange データのデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定

インストール時に Backup Exec によって設定されたデフォルトを、Exchange のすべてのバックアップおよびリストアジョブで使用することができます。また、独自のデフォルトを選択することもできます。

p.1088 の「Exchange 用のバックアップ戦略」を参照してください。

p.1094 の「Exchange Agent を使用したスナップショットおよびオフホストバックアップ」を参照してください。

p.1132 の「Exchange データのリストアについて」を参照してください。

Exchange のデフォルトのバックアップおよびリストアオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Microsoft Exchange]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.1110 の「Exchange のバックアップおよびリストアのデフォルトオプション」を参照してください。

Exchange のバックアップおよびリストアのデフォルトオプション

Exchange のすべてのバックアップおよびリストアジョブに次のデフォルトオプションを設定できます。

p.1109 の「[Exchange データのデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定](#)」を参照してください。

表 G-12 Exchange のバックアップおよびリストアのデフォルトオプション

項目	説明
インフォメーションストアのバックアップ方式	<p>次のバックアップ方式のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択したデータベースとトランザクションログをバックアップする (バックアップ後、コミットされたログを消去する): この方式では、データベースおよび関連トランザクションログファイルがバックアップされます。データベースとトランザクションログのバックアップ後に、すべてのトランザクションのデータベースへのコミットが済んだトランザクションログファイルは削除されます。 ■ コピー - 選択したデータベースとトランザクションログをバックアップする: この方式では、データベースおよび関連トランザクションログファイルがバックアップされます。バックアップ後も、トランザクションログは削除されません。 継続されている増分バックアップまたは差分バックアップの状態に影響を与えずに、データベースの完全バックアップを作成するには、この方法を使用します。 ■ 差分 - トランザクションログをバックアップする: この方式では、最後の完全バックアップ以降に作成または変更されたトランザクションログがすべてバックアップされます。バックアップ後も、トランザクションログは削除されません。 差分バックアップを使用してリストアを実行するには、最後の完全バックアップと最後の差分バックアップが必要です。 ■ 増分 - トランザクションログをバックアップする (バックアップ後、コミットされたログを消去する): この方式では、最後の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に作成または変更されたトランザクションログがすべてバックアップされ、データベースへのコミットが済んでいるトランザクションログが削除されます。 増分バックアップを使用してリストアを実行するには、最後の完全バックアップと最後の完全バックアップ以降に実行されたすべての増分バックアップが必要です。 <p>p.1094 の「Exchange Agent を使用したスナップショットおよびオフホストバックアップ」を参照してください。</p> <p>循環ログを使用している場合は、増分バックアップ、差分バックアップおよび継続バックアップを実行することはできません。</p>

項目	説明
<p>Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、インフォメーションストアのバックアップで個々のメールボックス、メールメッセージおよびパブリックフォルダのリストアを有効にする (ポリシーベースのジョブでのみ増分および差分バックアップをサポートする)</p>	<p>インフォメーションストアのバックアップから個々の項目をリストアします。Granular Recovery Technology の必要条件を満たすことを確認します。</p> <p>p.308 の「Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス」を参照してください。</p>
<p>過去のバージョンのメールボックスのサポートを有効にする (Exchange 2003) - 非推奨オプションです。GRT の使用をお勧めします。</p>	<p>個々のメールボックスをインフォメーションストアとともにバックアップするように選択できます。</p> <p>p.1130 の「Exchange の個々のメールボックスのバックアップ」を参照してください。</p> <p>メールボックスのバックアップには個別のジョブは必要ありません。</p> <p>p.305 の「Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。</p> <p>Exchange の [バックアップのプロパティ] ページにメールボックスのバックアップ方式が表示されるようにするには、[過去のバージョンのメールボックスのサポートを有効にする] にチェックマークを付ける必要があります。</p> <p>以前のバージョンの Backup Exec をアップグレードした場合、デフォルトで [過去のバージョンのメールボックスのサポートを有効にする] にチェックマークが付いています。メールボックスのバックアップジョブは、スケジュールに従って続行されます。</p> <p>バックアップ選択ツリーでメールボックスリソースを選択できないようにするには、[過去のバージョンのメールボックスのサポートを有効にする] のチェックマークを外します。</p>

項目	説明
<p>メールボックス、パブリックフォルダのバックアップ方式</p>	<p>利用可能なバックアップ方式は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択したメッセージをバックアップする (アーカイブビットをリセットする): この方式では、選択したメールボックスのすべてのメッセージがバックアップされます。デフォルトで、このオプションが選択されています。 各フォルダの日時タイムスタンプは、メッセージがバックアップされたことを示します。 ■ コピー - 選択したメッセージをバックアップする: この方式では、選択したメールボックスのすべてのメッセージがバックアップされます。日時タイムスタンプは使用されないため、増分バックアップおよび差分バックアップに影響を与えません。 継続中の増分バックアップまたは差分バックアップの状態に影響を与えずにメールボックスの完全バックアップを行うには、この方法を使用します。 ■ 差分 - 変更されたメッセージをバックアップする: 差分 - 変更されたメッセージをバックアップする: 最後の完全バックアップで設定されたフォルダの日時を使用して、最後の完全バックアップ以降に変更されたメッセージが決定されます。この日時は差分バックアップでは更新されません。 ■ 増分 - 変更されたメッセージをバックアップする (アーカイブビットをリセットする): この方式では、選択したメールボックス内の、最後の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたメッセージのみがバックアップされます。 最後の完全または増分バックアップで設定されたフォルダの日時を使用して、最後の完全または増分バックアップ以降に変更されたメッセージが決定されます。この日時は増分バックアップで更新されます。

項目	説明
<p>単一インスタンスストアを使用して添付ファイルをバックアップする</p>	<p>同一のすべてのメッセージ添付ファイルのコピーを1つだけバックアップします。同一の添付ファイルが存在する場合は、その添付ファイルへの参照を保持します。実際の添付ファイルは、バックアップセットの最後にバックアップします。</p> <p>単一インスタンスストアを使用して添付ファイルをバックアップすると、重複する同一の添付ファイルでバックアップされるのは1つだけなので、バックアップのパフォーマンスが向上します。</p> <p>同一のメッセージ添付ファイルをすべてバックアップし、バックアップセットに順番に格納するには、[単一インスタンスストアを使用して添付ファイルをバックアップする]のチェックマークを外します。</p> <p>バックアップジョブが完了しなかった場合は、バックアップセットにメッセージ添付ファイルが含まれていない可能性があります。バックアップが正しく完了するまでバックアップを実行してください。</p> <p>増分バックアップ方式を使用している場合は、ジョブを再実行しても同じメッセージおよび添付ファイルはバックアップされません。すべてのメッセージおよび添付ファイルを完全にバックアップするには、完全バックアップまたはコピーバックアップを実行する必要があります。</p>
<p>ユーザーアカウントとメールボックスを自動的に再作成するために使用する情報をバックアップする</p>	<p>リストアの間ユーザーアカウントとメールボックスを自動的に作成し直すことができます。</p>

項目	説明
<p>ログおよび拡張子が .pat のファイルを一時的に配置する場所</p>	<p>データベースのリストアが終了するまでログおよびパッチファイル (拡張子が .pat のファイル) を一時的に配置する場所を指定します。デフォルトのディレクトリは ¥temp です。ストレージグループをリストアする場合は、各ストレージグループ用のサブディレクトリが ¥temp 内に作成されます。各ストレージグループのログおよび拡張子が .pat のファイルは、対応するサブディレクトリに格納されます。</p> <p>リストアの実行時に[リストア後にコミットする]オプションを選択した場合は、一時格納場所内のログおよび拡張子が .pat のファイルがデータベースに適用され、その後で現在のログファイルが適用されます。リストア後、ログおよび拡張子が .pat のファイルは、自動的に一時格納場所 (サブディレクトリを含む) から削除されます。</p> <p>p.1132の「Exchange データのリストアについて」を参照してください。</p> <p>リストアジョブを開始する前に、ログおよび拡張子が .pat のファイル用の一時格納場所为空であることを確認してください。リストアジョブが失敗した場合は、前のリストアジョブのログおよび拡張子が .pat のファイルが、一時格納場所 (サブディレクトリを含む) から削除されていたかどうかを確認します。</p>
<p>ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成する</p>	<p>ユーザーアカウントとメールボックスが宛先サーバー上に存在しない場合は、それらを再作成します。リストアするメールボックスが宛先サーバー上に存在しないと、リストアジョブは失敗する場合があります。</p> <p>レガシーバックアップ方式でバックアップしたメールボックスをリストアするには、バックアップジョブで[ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成するために使用する情報をバックアップする]オプションが選択されている必要があります。</p> <p>p.1130の「Exchange の個々のメールボックスのバックアップ」を参照してください。</p> <p>[ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成する]にチェックマークを付けた場合、再作成するアカウントのパスワードを入力する必要があります。</p> <p>[ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成する]は、メールボックスを元の場所にリストアする場合にのみ適用されます。メールボックスのリストア先を変更した場合は、リストア先のサーバー上にユーザーアカウントとメールボックスが存在している必要があります。</p>
<p>パスワードの変更</p>	<p>宛先サーバー上でのユーザーアカウントとメールボックスの再作成に使用するパスワードを指定します。</p>

項目	説明
<p>個々のメールメッセージとフォルダを既存のメッセージとフォルダ上に上書きする</p>	<p>既存の項目をメッセージまたはフォルダと置換します。継続バックアップのリカバリポイントのバックアップ、または Granular Recovery Technology (GRT) を使うバックアップからリストアする場合は、このオプションにチェックマークを付けます。メッセージまたはフォルダには、新しいオブジェクトIDは作成されません。内容とプロパティのみが置換されます。</p> <p>このチェックボックスがオフになっているか、元のメッセージまたはフォルダが存在しない場合、新しいメッセージまたはフォルダとして再作成されます。</p> <p>このチェックボックスがオフになっていて、元のメッセージまたはフォルダが存在する場合、メッセージまたはフォルダはスキップされます。</p> <p>p.305の「Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。</p> <p>p.1108の「特定の時点に個々の Exchange 項目をリストアするためのリカバリポイントの使用について」を参照してください。</p>

Exchange 2003/2007 のバックアップについて

Exchange では、次の項目を選択してデータをバックアップすることができます。

- 複数のストレージグループ
- 個々のストレージグループ
- 個々のデータベース(スナップショットテクノロジーを使用している場合はサポートされない)

ストレージグループ内のデータベースを個々に選択するのではなく、個々のストレージグループを選択してバックアップすることをお勧めします。ストレージグループ内のデータベースを個々に選択してバックアップすることもできますが、選択したデータベースごとに、ストレージグループ全体のトランザクションログがバックアップされてしまいます。

たとえば、ストレージグループ内の4つのデータベースを選択してバックアップした場合、そのストレージグループのすべてのトランザクションログも4回バックアップされます。作成されたトランザクションログのバックアップは、このストレージグループ内のすべてのデータベースの完全バックアップを実行するまで削除されません。データベースを個々にバックアップしなくても、ストレージグループのバックアップから個々にリストアすることができます。

メモ: ストレージグループの増分および差分バックアップを実行する場合、または継続バックアップが有効になっているバックアップジョブを実行する場合は、ストレージグループで循環ログが有効になっていないことを確認します。

p.1117 の「[Exchange 2010 データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1119 の「[Exchange のバックアップ](#)」を参照してください。

Exchange 2010 データベースのバックアップについて

バックアップ選択ペインで、フォレストとフォレストに含まれているデータベース可用性グループ (DAG) を表示できます。Backup Exec は Backup Exec メディアサーバーを含んでいるローカルフォレストを [Microsoft Exchange データベース可用性グループ] リソースに自動的に追加します。フォレストに含まれているすべての DAG リソースもリストに追加されます。

メモ: DAG 上のデータベースをバックアップするには、DAG のすべてのサーバーに Backup Exec Remote Agent for Windows Systems をインストールする必要があります。

DAG の個々のサーバーをバックアップする場合は、[登録済みリソース]、[ドメイン]、または [ユーザー定義選択] からバックアップの選択を行うことができます。サーバーを含んでいる DAG がリストになければ、Backup Exec は自動的に DAG を追加します。DAG を検出するために [Microsoft Exchange データベース可用性グループ] リソースを手動で更新することもできます。

バックアップ選択のために使いたいフォレストがリストにない場合は、フォレストを手動で [Microsoft Exchange データベース可用性グループ] リソースに追加できます。

p.1895 の「[Remote Agent for Windows Systems について](#)」を参照してください。

p.166 の「[ライセンスの追加](#)」を参照してください。

p.1117 の「[バックアップ選択への Exchange 2010 フォレストの追加](#)」を参照してください。

p.1119 の「[Exchange のバックアップ](#)」を参照してください。

バックアップ選択への Exchange 2010 フォレストの追加

フォレストを [Microsoft Exchange データベース可用性グループ] リソースに追加して、バックアップの選択を行うことができます。

p.1117 の「[Exchange 2010 データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1119 の「[Exchange のバックアップ](#)」を参照してください。

バックアップ選択に Exchange 2010 フォレストを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 バックアップ選択リストで、[Microsoft Exchange データベース可用性グループ]を右クリックします。
- 5 [フォレストの追加]をクリックします。
- 6 必要なオプションを選択します。
p.1118 の「Exchange 2010 フォレストの追加オプション」を参照してください。
- 7 [OK]をクリックします。

Exchange 2010 フォレストの追加オプション

Exchange 2010 フォレストに次のオプションを設定できます。

p.1117 の「バックアップ選択への Exchange 2010 フォレストの追加」を参照してください。

表 G-13 Exchange 2010 フォレストオプション

項目	説明
ドメインコントローラ名または、データベース可用性グループサーバー名	フォレストを含んでいるドメインコントローラまたは DAG ノードの名前を入力できます。
ログオンアカウント	フォレストに権限があるログオンアカウントの名前を選択します。
新規	リストにログオンアカウントを作成または追加できます。 p.175 の「Backup Exec ログオンアカウントの作成」を参照してください。

Exchange 2010 フォレストの管理

[Microsoft Exchange データベース可用性グループ]リソースにフォレストを追加するか、またはリソースからフォレストを削除できます。

p.1117 の「Exchange 2010 データベースのバックアップについて」を参照してください。

Exchange 2010 フォレストを管理する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。

- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 バックアップ選択ツリーで、[Microsoft Exchange データベース可用性グループ]を右クリックします。
- 5 [フォレストの管理]をクリックします。
- 6 必要なオプションを選択します。
p.1119 の「[Exchange 2010 フォレストの管理オプション](#)」を参照してください。
- 7 [閉じる]をクリックします。

Exchange 2010 フォレストの管理オプション

次のオプションを使って Exchange 2010 フォレストを管理できます。

p.1118 の「[Exchange 2010 フォレストの管理](#)」を参照してください。

表 G-14 Exchange 2010 フォレストの管理オプション

項目	説明
フォレスト	バックアップ選択に利用可能であるフォレストをリストします。
追加	バックアップ選択項目のリストにフォレストを追加することを許可します。
削除	バックアップ選択項目のリストからフォレストを削除することを許可します。

Exchange のバックアップ

この項では、Exchange をバックアップする方法について説明します。

p.1092 の「[Exchange の循環ログ設定について](#)」を参照してください。

p.482 の「[ディスクへのバックアップフォルダについて](#)」を参照してください。

p.1117 の「[Exchange 2010 データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

Exchange をバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行して、バックアップする Exchange データを表示します。

ローカルコンピュータまたはリモートコンピュータ上の Exchange データを表示する方法

次に示す順序で操作を実行します。

- Exchange がインストールされている 1 つまたは複数のドメイン名アイコンをクリックします。
- 実際に Exchange がインストールされている Windows コンピュータを展開します。

サーバークラスタの Exchange データを表示する方法

次に示す順序で操作を実行します。

- 仮想サーバーで、Exchange がインストールされている 1 つまたは複数のドメイン名アイコンをクリックします。
- 実際に Exchange がインストールされている Windows コンピュータを展開します。

Exchange 2010 のデータベース可用性グループ (DAG) を表示する方法

次に示す順序で操作を実行します。

- [Microsoft Exchange データベース可用性グループ] リソースを展開します。
- DAG を含んでいるフォレストを展開します。
- Exchange がインストールされている DAG を展開します。

5 次のいずれかを実行します。

すべての Exchange データベースをバックアップする方法

[Microsoft Information Store] にチェックマークを付けます。

特定の Exchange 2003/2007 Exchange 2010 データベースを選択する方法

[Microsoft Information Store] アイコンを展開して、個々のストレージグループまたはのストレージグループまたはデータベースを選択します。

6 Exchange Server へのアクセスに使用できるログオンアカウントの選択が必要な場合があります。

7 [プロパティ] ペインの [設定] の下にある [Microsoft Exchange] をクリックします。

8 バックアップジョブのオプションを選択します。

p.1121 の「[Microsoft Exchange のバックアップオプション](#)」を参照してください。

9 バックアップジョブを開始するか、または [プロパティ] ペインで他のバックアップオプションを選択してからバックアップジョブを開始します。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

Microsoft Exchange のバックアップオプション

Exchange のバックアップジョブを作成するときに次のオプションを設定できます。
p.1119 の「Exchange のバックアップ」を参照してください。

表 G-15 Exchange のバックアップオプション

項目	説明
<p>インフォメーションストアのバックアップ方式</p>	<p>次のバックアップ方式のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択したデータベースとトランザクションログをバックアップする (バックアップ後、コミットされたログを消去する): この方式では、データベースおよび関連トランザクションログファイルがバックアップされます。データベースとトランザクションログのバックアップ後に、すべてのトランザクションのデータベースへのコミットが済んだトランザクションログファイルは削除されます。 ■ コピー - 選択したデータベースとトランザクションログをバックアップする: この方式では、データベースおよび関連トランザクションログファイルがバックアップされます。バックアップ後も、トランザクションログは削除されません。 継続されている増分バックアップまたは差分バックアップの状態に影響を与えずに、データベースの完全バックアップを作成するには、この方法を使用します。 ■ 差分 - トランザクションログをバックアップする: この方式では、最後の完全バックアップ以降に作成または変更されたトランザクションログがすべてバックアップされます。バックアップ後も、トランザクションログは削除されません。 差分バックアップを使用してリストアを実行するには、最後の完全バックアップと最後の差分バックアップが必要です。 ■ 増分 - トランザクションログをバックアップする (バックアップ後、コミットされたログを消去する): この方式では、最後の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に作成または変更されたトランザクションログがすべてバックアップされ、データベースへのコミットが済んでいるトランザクションログが削除されます。 増分バックアップを使用してリストアを実行するには、最後の完全バックアップと最後の完全バックアップ以降に実行されたすべての増分バックアップが必要です。 p.1094 の「Exchange Agent を使用したスナップショットおよびオフホストバックアップ」を参照してください。 <p>循環ログを使用している場合は、増分バックアップ、差分バックアップおよび継続バックアップを実行することはできません。</p>

項目	説明
<p>Backup Exec Continuous Protection Server を使用して継続的にトランザクションログをバックアップする</p>	<p>次の完全バックアップまで継続的にバックアップされるトランザクションログを含む Exchange データベースの完全リストアを有効にします。</p> <p>このチェックボックスを調べる前に、Exchange サーバーが継続バックアップを設定するための必要条件を満たすことを確認します。</p> <p>p.1101の「Exchange データの継続バックアップの設定の必要条件」を参照してください。</p> <p>p.1103の「Exchange の継続バックアップに関する推奨事項」を参照してください。</p>
<p>表示可能なバックアップセットを作成してログを切り捨てるリカバリポイントを次の間隔で作成する</p>	<p>[リストア]ビューで参照可能なバックアップセットを作成します。最後のリカバリポイントが実行された時点から個々のメッセージまたはフォルダをリカバリできます。また、リカバリポイントが作成されるたびに、トランザクションログが切り捨てられ、ログの肥大化が制御されます。</p> <p>循環ログが有効になっている場合、繰り返し実行されるインフォメーションストアの完全バックアップはエラーが発生することなく完了しますが、リカバリポイントは失敗します。</p> <p>[表示可能なバックアップセットを作成してログを切り捨てるリカバリポイントを次の間隔で作成する]のチェックマークを外した場合、個々のメールメッセージおよびフォルダは CPS バックアップからのみリストアできます。</p> <p>デフォルトの間隔は 8 時間です。設定可能な最小間隔は 15 分です。最大間隔は 1 年です。リカバリポイントの間隔を変更すると、次の完全バックアップまたはリカバリポイントの実行後に新しい間隔が適用されます。</p> <p>デフォルトの間隔を変更する前に、リカバリポイントの間隔の設定に関するパフォーマンス要因を確認します。</p> <p>p.1108の「特定の時点で個々の Exchange 項目をリストアするためのリカバリポイントの使用について」を参照してください。</p>

項目	説明
<p>Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、インフォメーションストアのバックアップで個々のメールボックス、メールメッセージおよびパブリックフォルダのリストアを有効にする (ポリシーベースのジョブでのみ増分および差分バックアップをサポートする)</p>	<p>インフォメーションストアのバックアップから個々の項目をリストアできます。Granular Recovery Technology の必要条件を満たすことを確認します。</p> <p>p.308 の「Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス」を参照してください。</p> <p>p.309 の「Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について」を参照してください。</p> <p>[Backup Exec Continuous Protection Server を使用して継続的にトランザクションログをバックアップする]にチェックマークを付けると、GRT オプションが自動的に有効になります。このオプションの組み合わせで、CPS Exchange バックアップから個々の項目をリストアできます。</p>
<p>設定ガイド</p>	<p>Exchange データのバックアップジョブのプロパティを選択するのに役立つウィザードを起動します。</p>

項目	説明
<p>Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットプロバイダを使用する場合は、バックアップ前の一貫性チェックを実行する</p>	<p>[Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス] オプションが選択されているときに一貫性チェックを実行します。 Advanced Disk-based Backup Option のバックアッププロパティでソフトウェアのバックアップが選択されている場合は、[Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス] オプションが自動的に使用されます。 Advanced Open File Option の [バックアッププロパティ] ページで [Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス] を選択することもできます。</p> <p>一貫性チェックはスナップショットに対して実行され、データが破損している可能性がないかを確認します。</p> <p>このオプションが選択され、これに依存する [一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する] オプションが選択されていない場合は、損傷していると判断された特定の Exchange オブジェクトのデータはバックアップされません。損傷していないその他の Exchange オブジェクトはバックアップされます。</p> <p>たとえば、ストレージグループのトランザクションログファイルが損傷しており、[一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する] オプションが選択されていない場合、そのストレージグループのトランザクションログファイルはバックアップされません。ただし、Backup Exec によって損傷していないと判断された Exchange データベースファイルはバックアップされます。同様に、特定の Exchange データベースファイルが損傷している場合、そのデータベースファイルのバックアップのみがスキップされます。損傷していないその他のデータベースファイルおよびトランザクションログファイルはバックアップされます。</p> <p>[一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する] が有効な場合、損傷したファイルの有無に関係なく、すべての Exchange データがバックアップされます。</p> <p>p.1094 の「Exchange Agent を使用したスナップショットおよびオフホストバックアップ」を参照してください。</p>
<p>一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する</p>	<p>一貫性チェックに失敗した場合でもバックアップジョブを続行します。現在の状態のデータベースのバックアップでもデータベースのバックアップが存在しないよりはよいと考えられる場合、またはバックアップしているデータベースが大規模で問題が小さいと考えられる場合には、バックアップを続行することができます。</p>

項目	説明
<p>高可用性サーバー (Exchange 2007 以降)</p>	<p>Exchange 2007/2010 用の次のいずれかのバックアップソースを指定します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アクティブコピーからのみバックアップする (利用できない場合、ジョブは失敗します) データベースのアクティブコピーをバックアップできます。 Backup Exec がアクティブコピーにアクセスできないとジョブは失敗します。そのため、アクティブコピーまたはパッシブコピーのどちらもバックアップされません。 アクティブコピーにはパッシブコピーよりも新しい情報が含まれます。そのため、アクティブコピーをバックアップする場合は、最新のデータベースのデータのバックアップが存在します。 メモ: スタンバイ連続レプリケーション (SCR) のパッシブコピーは Exchange Server 2007 ではバックアップできません。バックアップで SCR は選択できません。 ■ Backup Exec でバックアップに最適のコピーを自動選択するようにする (推奨) デフォルトでデータベースのパッシブコピーをバックアップできます。Backup Exec は優先サーバー設定での選択に基づいてパッシブコピーを選択します。ただし、パッシブコピーを利用できない場合は、データベースのアクティブコピーを利用できません。バックアップ時に、WAN 経由でデータベースをバックアップしなければならない場合は、データベースのパフォーマンスが低下する場合があります。 ■ 可能な場合、優先サーバーの設定を使用して、パッシブコピーからのみバックアップする (利用できない場合、ジョブは失敗します) データベースのパッシブコピーをバックアップできます。 Backup Exec がパッシブコピーにアクセスできないとジョブは失敗します。この場合、アクティブなデータベースまたはパッシブなデータベースのどちらもバックアップされません。データベースのアクティブコピーのパフォーマンスに影響を与えないようにするには、このオプションを選択します。 Exchange 2010 の場合、Backup Exec は優先サーバー設定での選択に基づいてパッシブコピーを選択します。 メモ: このオプションが使われるように優先サーバー設定を設定しなければなりません。 p.420 の「優先サーバー設定について」を参照してください。

項目	説明
<p>メールボックス、パブリックフォルダのバックアップ方式</p> <p>メモ: [過去のバージョンのメールボックスのサポートを有効にする (Exchange 2003) - 非推奨オプションです。GRT の使用をお勧めします。] オプションを選択すると、このオプションを利用できます。</p>	<p>利用可能なバックアップ方式は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択したメッセージをバックアップする (アーカイブビットをリセットする): この方式では、選択したメールボックスのすべてのメッセージがバックアップされます。デフォルトで、このオプションが選択されています。 各フォルダの日時タイムスタンプは、メッセージがバックアップされたことを示します。 ■ コピー - 選択したメッセージをバックアップする: この方式では、選択したメールボックスのすべてのメッセージがバックアップされます。日時タイムスタンプは使用されないため、増分バックアップおよび差分バックアップに影響を与えません。 継続中の増分バックアップまたは差分バックアップの状態に影響を与えずにメールボックスの完全バックアップを行うには、この方法を使用します。 ■ 差分 - 変更されたメッセージをバックアップする: この方式では、最後の完全バックアップ以降に作成または変更された、選択したメールボックス内のメッセージがすべてバックアップされます。 最後の完全バックアップで設定されたフォルダの日時を使用して、最後の完全バックアップ以降に変更されたメッセージが決定されます。この日時は差分バックアップでは更新されません。 ■ 増分 - 変更されたメッセージをバックアップする (アーカイブビットをリセットする): この方式では、選択したメールボックス内の、最後の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたメッセージのみがバックアップされます。 最後の完全または増分バックアップで設定されたフォルダの日時を使用して、最後の完全または増分バックアップ以降に変更されたメッセージが決定されます。この日時は増分バックアップで更新されます。

項目	説明
<p>単一インスタンスストアを使用して添付ファイルをバックアップする (メールボックスとパブリックフォルダのバックアップのみ)</p> <p>メモ: [過去のバージョンのメールボックスのサポートを有効にする (Exchange 2003) - 非推奨オプションです。GRT の使用をお勧めします。] オプションを選択すると、このオプションを利用できます。</p>	<p>同一のすべてのメッセージ添付ファイルのコピーを 1 つだけバックアップします。同一の添付ファイルが存在する場合は、その添付ファイルへの参照を保持します。実際の添付ファイルは、バックアップセットの最後にバックアップします。</p> <p>単一インスタンスストアを使用して添付ファイルをバックアップすると、重複する同一の添付ファイルでバックアップされるのは 1 つだけなので、バックアップのパフォーマンスが向上します。</p> <p>同一のメッセージ添付ファイルをすべてバックアップし、バックアップセットに順番に格納するには、[単一インスタンスストアを使用して添付ファイルをバックアップする] のチェックマークを外します。</p> <p>バックアップジョブが完了しなかった場合は、バックアップセットにメッセージ添付ファイルが含まれていない可能性があります。バックアップが正しく完了するまでバックアップを実行してください。</p> <p>増分バックアップ方式を使用している場合は、ジョブを再実行しても同じメッセージおよび添付ファイルはバックアップされません。すべてのメッセージおよび添付ファイルを完全にバックアップするには、完全バックアップまたはコピーバックアップを実行する必要があります。</p>
<p>設定ガイド</p>	<p>Exchange メールボックスのバックアップジョブのプロパティを選択するのに役立つウィザードを起動します。</p>

バックアップする個々の Exchange メールボックスの選択について

旧バージョンの Backup Exec では、個々のメールボックスをリストアするため、Exchange の個々のメールボックスをインフォメーションストアとは個別にバックアップしていました。このバージョンの Backup Exec では、インフォメーションストアのバックアップから個々のメールメッセージおよびフォルダをリストアするオプションを使用できるようになりました。

テープ上に存在するインフォメーションストアのバックアップから個々のメールボックスをリストアする場合、メールボックスのレガシーバックアップからメールボックスをリストアするよりもパフォーマンスが低下することがあります。メールボックスの数が少ない場合や、テープへのバックアップのみが可能な場合には、メールボックスのレガシーバックアップ方式を使用することもできます。

メモ: Exchange 2007/2010 では、個々のメールボックスのバックアップはサポートされていません。Exchange 2007/2010 から個々の項目をリストアするために Backup Exec Granular Recovery Technology オプションを使うことができます。

インフォメーションストアとは別に **Exchange** の個々のメールボックスをバックアップする必要がある場合には、次の事項を考慮します。

表 G-16 **メールボックスのレガシーバックアップ方式の推奨事項**

推奨事項	説明
完全バックアップと増分バックアップを使用する	メールボックスまたはパブリックフォルダの完全バックアップを定期的に行うことを考慮してください。バックアップの実行時間を最小化するために、完全バックアップを増分または差分バックアップで補完します。
インフォメーションストアのバックアップを続ける	メールボックスのバックアップをインフォメーションストア全体のバックアップに代用しないでください。メールボックスのバックアップから Exchange Server を完全にリストアすることはできません。 Exchange Server を完全にリストアすることができるのはインフォメーションストアのバックアップからのみです。
削除した項目をリストアするのではなくリカバリする	Exchange システムマネージャユーティリティを使用して各ストアの削除設定を調整することを考慮してください。削除した項目は一定期間保持されるため、リストアではなくリカバリを行うことができます。詳しくは Microsoft Exchange Server のマニュアルを参照してください。
不必要なフォルダをバックアップから除外する	<p>メールボックスまたはパブリックフォルダをバックアップするように選択すると、デフォルトでは、すべてのフォルダおよびサブフォルダが含まれます。特定のフォルダやサブフォルダを除外することができます。</p> <p>p.342の「バックアップファイルを選択または除外する方法」を参照してください。</p> <p>たとえば、[削除済みアイテム]フォルダ内のすべてのメールを除外するには、次の行を入力します。</p> <p>¥**¥削除済みアイテム¥*</p> <p>また、[送信済みアイテム]フォルダ内のすべてのメールを除外するには、次の行を入力します。</p> <p>¥**¥送信済みアイテム¥*</p>

推奨事項	説明
単一インスタンスストアを使用して添付ファイルをバックアップする	<p>メールボックスおよびパブリックフォルダをバックアップするときに、同一のすべてのメッセージ添付ファイルのコピーを 1 つだけバックアップするように指定することができます。同一の添付ファイルが存在する場合は、その添付ファイルへの参照を保持します。実際の添付ファイルは、バックアップセットの最後に 1 回だけバックアップします。</p> <p>単一インスタンスストアを使用して添付ファイルをバックアップすると、重複する同一の添付ファイルでバックアップされるのは 1 つだけなので、バックアップのパフォーマンスが向上します。</p> <p>メモ: バックアップジョブが完了しなかった場合は、バックアップセットにメッセージ添付ファイルが含まれていない可能性があります。バックアップが正しく完了するまでバックアップを再実行してください。増分バックアップ方式を使用している場合は、ジョブを再実行しても同じメッセージおよび添付ファイルはバックアップされません。すべてのメッセージおよび添付ファイルを完全にバックアップするには、完全バックアップまたはコピーバックアップを実行する必要があります。</p>
Exchange によって作成された特殊なシステムメールボックスをバックアップしない	<p>これらの特殊なシステムメールボックスもバックアップできますが、必要性はなく、また有用でもありません。</p> <p>特殊なシステムメールボックスの一般的な例を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ システムアテンダント ■ 名前が SMTP で始まるメールボックスまたはシステムメールボックス <p>Exchange Server の構成や環境によって、これ以外のものも存在する可能性があります。</p> <p>また、メールボックスツリーでオブジェクトを選択すると、すべてのオブジェクトはメッセージとして表示されます。メッセージでないオブジェクトの中には、件名欄で識別できるものもあります。たとえば、Appointment1 という名前のカレンダーイベントを作成した場合は、その名前がオブジェクトの件名欄に表示されます。ただし、フォームや表示などのオブジェクトには、(名前を付けることはできますが)件名欄が存在しないので、簡単に識別できない場合があります。</p>
パブリックフォルダを選択するのは 1 つの Exchange Server のみにする	<p>パブリックフォルダは複製できるため、複数の Exchange Server で同一のパブリックフォルダが表示されることがあります。複数の Exchange Server のパブリックフォルダを選択しても、バックアップに必要な時間とメディアが増えるだけで、セキュリティは強化されません。</p>

メモ: ウイルス検出ソフトウェアによってメールボックスのバックアップのパフォーマンスが低下し、不正なジョブログエラーが発生する可能性があります。添付ファイルを確認するときにジョブログエラーが生成されることがありますが、電子メールおよび添付ファイルは完全にバックアップおよびリストア可能です。

メールボックスは、サーバー別のビューに表示されます。すなわち、バックアップ選択リストに表示されるのは、選択した **Exchange Server** 上のメールボックスのみです。パブリックフォルダは複数のサーバー上に複製できるため、複数のサーバー上に表示されることがあります。

Backup Exec 8.6 よりも前のバージョンでは、選択したサーバー上のメールボックスだけでなく、**Exchange** 組織内のすべてのメールボックスが一覧表示されるサイト単位でもメールボックスを選択することができました。現在のバージョンでは、メールボックスの選択はサーバー単位でしか選択できませんが、サイト単位を使用して作成したメールボックスのバックアップセットのリストアは可能です。

同一のサーバー上で選択したメールボックスは、ストレージメディア上の1つのバックアップセットにすべてまとめて格納されます。複数のサーバーから選択したメールボックスは、サーバー別のバックアップセットに別々に格納されます。

Exchange の個々のメールボックスのバックアップ

メールボックスの数が少ない場合や、テープへのバックアップのみが可能な場合には、メールボックスのレガシーバックアップ方式を使用することもできます。

メモ: Exchange 2007/2010 では、個々のメールボックスのバックアップはサポートされていません。

p.1127の「[バックアップする個々のExchangeメールボックスの選択について](#)」を参照してください。

p.1087の「[Exchangeメールボックスにアクセスするための必要条件](#)」を参照してください。

p.1127の「[バックアップする個々のExchangeメールボックスの選択について](#)」を参照してください。

Exchange の個々のメールボックスをバックアップする方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Microsoft Exchange]をクリックします。
- 3 [過去のバージョンのメールボックスのサポートを有効にする (Exchange 2003) - 推奨オプションです。GRT の使用をお勧めします。]にチェックマークを付けます。
- 4 リストアの実行中にユーザーアカウントとメールボックスを再作成する場合は、[ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成するために使用する情報をバックアップする]にチェックマークを付けます。

デフォルトでは、このオプションにチェックマークは付いていません。

- 5 [OK]をクリックします。

- 6 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 7 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 8 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 9 次のいずれかまたはすべてを実行して、バックアップする Exchange メールボックスまたはパブリックフォルダを表示します。

ローカルコンピュータまたは モートコンピュータから Exchange メールボックスまたは パブリックフォルダを選択する方 法	Exchange メールボックスが存在する 1 つまたは複数のドメ イン名アイコンをクリックします。Exchange メールボックスま たはパブリックフォルダが存在する Microsoft Exchange メールボックスアイコンを展開します。
---	---

クラスタ化された Exchange Server から Exchange メール ボックスまたはパブリックフォル ダを選択する方法	仮想サーバーで、Exchange メールボックスが存在する 1 つまたは複数のドメイン名アイコンをクリックします。 Exchange メールボックスまたはパブリックフォルダが存在 する Microsoft Exchange メールボックスアイコンを展開し ます。
--	---

- 10 バックアップ対象に、メールボックスを選択するか、メッセージ、メールボックスおよびフォルダを個々に選択します。

メールボックスまたはパブリックフォルダを選択すると、デフォルトでは、すべてのフォルダおよびサブフォルダがバックアップに含まれます。バックアップに要する時間を短縮するには、[ファイル選択の詳細設定]を使用して、[削除済みアイテム]や[送信済みアイテム]などのフォルダおよびサブフォルダを、バックアップから除外するようにします。

パブリックフォルダは複数の Exchange Server 上に複製できるため、1 つの Exchange Server のパブリックフォルダのみを選択します。

- 11 Exchange のメールボックスやパブリックフォルダへのアクセスに必要なログオンアカウントの選択が必要な場合があります。

p.1087 の「Exchange メールボックスにアクセスするための必要条件」を参照してください。

- 12 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft Exchange]をクリックします。
- 13 インフォメーションストアのバックアップ方式を選択します。

- 14 バックアップジョブのオプションを選択します。
- p.1121 の「[Microsoft Exchange のバックアップオプション](#)」を参照してください。
- 15 バックアップジョブを開始するか、または[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択してからバックアップジョブを開始します。
- p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

Exchange データのリストアについて

Exchange のすべてのリストアジョブでデフォルト設定を使用することができます。また、独自のデフォルトを選択することもできます。これらのデフォルト設定は、リストアジョブで個別に変更することもできます。

Exchange データをリストアする為の必要条件そして手順は使ったバックアップ戦略によって変わります。Exchange データをリストアする前に、必須の設定とタスクを見直すべきです。

p.1133 の「[Exchange 2000 またはそれ以降をリストアするための必要条件](#)」を参照してください。

Exchange データを次のようにリストアできます。

- リカバリストレージグループまたはリカバリデータベースを使用した、クライアントによる現在のデータへのアクセスが中断されない、ストアの古いバックアップコピーからのデータのリカバリ。
p.1134 の「[Exchange 2003/2007 のリカバリストレージグループまたは Exchange 2010 のリカバリデータベースを使用したデータのリストアについて](#)」を参照してください。
- スナップショットバックアップからの Exchange データのリストア。
p.1137 の「[スナップショットバックアップからの Exchange データのリストアについて](#)」を参照してください。
- 継続バックアップセットからの Exchange データベースのリストアおよび個々のメールメッセージおよびフォルダのリストア。
p.1138 の「[継続バックアップからの Exchange データのリストアについて](#)」を参照してください。
- Granular Recovery Technology (GRT) を使うバックアップからの個々の Exchange 項目のリストア。
p.308 の「[Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス](#)」を参照してください。
- インフォメーションストアのバックアップとは別のバックアップからの Exchange メールボックスおよびフォルダのリストア。
p.1140 の「[メールボックスのバックアップによる Exchange メールボックスおよびパブリックフォルダのリストアについて](#)」を参照してください。

- テープからの個々の Exchange パブリックフォルダメッセージのリストア。
p.1141の「バックアップセットのディスクへの複製による、テープからの個々のExchangeパブリックフォルダメッセージのリストア」を参照してください。
- Exchange データのリストアジョブの設定。
p.1142の「Exchange データのリストア」を参照してください。
- バックアップ元のサーバーとは異なるサーバーへの Exchange データのリストア。
p.1147の「Exchange データのリストア先の変更について」を参照してください。

Exchange 2000 またはそれ以降をリストアするための必要条件

Exchange 2000 またはそれ以降をリストアする前に次を確認してください:

- リストアするストレージグループおよびデータベースがリストア先サーバー上に存在し、その名前が、元のストレージグループおよびデータベースの名前と同じである必要があります。
- ターゲットサーバーとソースサーバーの組織名および管理グループ名が同じである必要があります。

リストアを開始する前に、次の手順を実行します。

- ターゲットデータベースを上書きできるように設定
- リストアするデータベースのマウントを解除

Exchange でのデータベースの設定

Exchange をリストアする前に、ターゲットのデータベースを設定します。

データベースを設定する方法

- 1 次のいずれかを実行します。

Exchange 2000/2003 の場合

Exchange システムマネージャユーティリティを開きます。

Exchange 2007/2010 の場合

Exchange 管理コンソールユーティリティを開きます。

- 2 上書きするデータベースを右クリックします。

- 3 [プロパティ]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。

Exchange 2000/2003/2007 の場合	[データベース]タブで[復元時はこのデータベースを上書きする]を選択します。
Exchange 2010 の場合	[保守]タブで[復元時はこのデータベースを上書きする]を選択します。

リストアする Exchange データベースのマウント解除

Exchange をリストアする前に、リストアされるデータベースをマウント解除します。

リストアするデータベースのマウントの解除方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。
 - Exchange システムマネージャユーティリティまたは Exchange 管理コンソールユーティリティを使ってください。
 - リストアジョブの作成時に、Backup Exec の[リストアジョブのプロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft Exchange]をクリックします。[リストア前にデータベースのマウントを解除する]にチェックマークを付けます。

Exchange 2003/2007 のリカバリストレージグループまたは Exchange 2010 のリカバリデータベースを使用したデータのリストアについて

Exchange Server 2003/2007 のリカバリストレージグループ (RSG) 機能を使用することによって、任意の Exchange Server 上の Exchange メールボックスストアのコピーを元のストアと同じ Exchange 管理グループにマウントすることができます。この間、元のストアはクライアントから要求を継続して実行することができます。これによって、クライアントによる現在のデータへのアクセスが中断されることなく、ストアの古いバックアップコピーからデータをリカバリできます。

Exchange 2010 は RSG の代わりにリカバリデータベースを使います。各サーバーにはリカバリデータベースが備わっています。複数のリカバリデータベースをマウントすることはできません。

RSG とリカバリデータベースについて詳しくは Microsoft Exchange のマニュアルを参照してください。

RSG からリカバリデータベースが作成されたら、それにオンラインバックアップセットをリストアできます。次に、Exchange 2003 の EXMerge ユーティリティまたは Exchange 2007/2010 の Exchange 管理シェルを使用して、ストアのメールボックスデータを .PST ファイルに抽出します。また、抽出したデータをオンラインストアにマージすることもできます。

リストアするデータベースがあるサーバーとは別の **Exchange Server** に **RSG** またはリカバリデータベースがある場合は、**Exchange** ストレージグループまたはリカバリデータベースのリストア先を変更するための必要条件を確認する必要があります。

p.1147の「**Exchange**のストレージグループおよびデータベースのリストア先の変更について」を参照してください。

以下に示すのは、**Exchange 2003/2007** データのリカバリストレージグループ (**RSG**) または**Exchange 2010**のリカバリデータベースを使用してデータをリストアするための要件です:

- **Exchange 2003** の場合、スナップショットバックアップからデータをリストアすることはできません。
- リストア対象として複数のストアが選択されている場合、**RSG** に含めるメールボックスストアは同一のストレージグループに属している必要があります。異なるストレージグループに属するメールボックスストアを同時に **RSG** に追加することはできません。
- パブリックフォルダストアは、**RSG** を使用したリストアではサポートされていません。
- リストアを実行する前に、**RSG** 内のメールボックスストアをマウントしないでください。リストアの前にストアをマウントした場合は、ストアのマウントを解除する必要があります。**Exchange** システムマネージャのデータベースプロパティページで次のオプションを選択します。
[復元時はこのデータベースを上書きする]
それから、リストアする前に、**RSG** のデータパスに作成されたすべてのファイルと追加されたストアを削除します。
リストアの前にストアをマウントした場合は、**RSG** のデータパスに作成されたファイルおよび追加されたストアも削除する必要があります。
- **RSG** をホストするサーバーには、データのリストア先である元のストレージグループと同じ名前のストレージグループが存在する必要があります。そのようなストレージグループがサーバーに存在しない場合は、**RSG** の作成時に **RSG** にその名前を使用できます。
- **Exchange** システムの **Active Directory** のトポロジーは、バックアップの実行時と同じ状態を保っている必要があります。削除され、再作成されたメールボックスストアをリストアすることはできません。また、メールボックスが削除され、システムから取り除かれているか、他のサーバーまたはメールボックスストアに移動されている場合も、ストアからメールボックスをリカバリすることはできません。
- **RSG** にリストアできるのは、**Exchange 2000 Server Service Pack 3** 以上の **Exchange** メールボックスストアのみです。リストアされたメールボックスストアは、**RSG** サーバーで現在実行されているストアのバージョンにアップグレードされます。
- **RSG** がサーバーに存在する場合、デフォルトでは、その **RSG** に含まれているメールボックスストア以外はそのサーバーにリストアすることはできません。**RSG** を使用してデータをリカバリする場合以外は **RSG** を作成せず、またデータのリカバリが完了したらサーバーから **RSG** を削除することをお勧めします。

- 複数のリカバリデータベースを設定できますが、データをリカバリするためには1つのリカバリデータベースのみをマウントできます。
- リストアの前にリカバリデータベースをマウントしないでください。リストアの前にリカバリデータベースをマウントした場合は、データベースのマウントを解除する必要があります。Exchange 管理コンソールユーティリティのデータベースプロパティページで [復元時はこのデータベースを上書きする] オプションを選択してください。

Exchange データのリカバリにおける必要条件および制約については、Microsoft Exchange Server のマニュアルを参照してください。

p.1142 の「Exchange データのリストア」を参照してください。

p.1147 の「Exchange のストレージグループおよびデータベースのリストア先の変更について」を参照してください。

Exchange 2007 リカバリストレージグループへのデータベースのリストア

Exchange 2007 サーバー上の Exchange 2007 リカバリストレージグループにデータベースをリストアするには、次の手順を実行します。データベースをリストアした後、Exchange のリカバリについて詳しくは Microsoft Exchange のマニュアルを参照してください。

p.1142 の「Exchange データのリストア」を参照してください。

p.1147 の「Exchange のストレージグループおよびデータベースのリストア先の変更について」を参照してください。

Exchange 2007 リカバリストレージグループにデータベースをリストアする方法

- 1 リストア先の Exchange 2007 サーバーにリカバリストレージグループが存在すること、リカバリストレージグループ内にリカバリデータベースが存在することを確認します。これらのいずれかが存在しない場合は、続行する前に作成する必要があります。リカバリストレージグループまたはリカバリデータベースを作成する場合は、Microsoft Exchange のマニュアルを参照してください。
- 2 ナビゲーションバーの [リストア] の横にある矢印をクリックします。
- 3 [新規リストアジョブ] をクリックします。
- 4 [リストアジョブのプロパティ] ペインの [ソース] の下にある [選択リスト] をクリックします。
- 5 リストアする Exchange データベースを選択します。
- 6 [リストアジョブのプロパティ] ペインの [宛先] の下にある [Microsoft Exchange のリストア先の変更] をクリックします。
- 7 [Microsoft Exchange Server セットのリストア先を変更する] をクリックします。
- 8 [サーバーまたはデータベース可用性グループにリストアする] フィールドに、リストア先の Exchange サーバーの名前を入力します。

- 9 [ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットプロバイダを使用してリストア先を変更する]をクリックします。
- 10 [リカバリストレージグループ (RSG) にリストア先を変更する (Exchange 2007 のみ)]をクリックします。
- 11 [今すぐ実行]をクリックします。

Backup Exec によって、Exchange 2007 データベースが宛先リカバリストレージグループにリストアされます。リストアジョブが完了した後、Exchange 2007 のリカバリについて詳しくは Microsoft Exchange のマニュアルを参照してください。

スナップショットバックアップからの Exchange データのリストアについて

スナップショットバックアップから Exchange データをリストアする場合は、次のことに注意してください。

- 循環ログが有効になっている場合、特定の時点の状態へのリストアのみ可能です。特定の時点以降の分を含む完全リストアは実行できません。
- Exchange 2003/2007 の場合は、個々のデータベースのリストアは実行できません。ジョブは失敗します。
- 次のオプションは、Exchange 2003 スナップショットバックアップのリストアには使用できません。リストアしたデータベースをマウントする際、Exchange はソフトリカバリプロセスを使用します。
 - すべてのトランザクションログをリストアし、既存のトランザクションログを削除しない (完全リストア)
 - 特定時点までのすべてのトランザクションログをリストアし、それ以降のトランザクションログをスキップする
 - 既存のデータを削除し、バックアップセットからデータベースとトランザクションログのみをリストアする
 - ログおよび拡張子が .pat のファイルを一時的に格納する Exchange Server 上のパス
 - リストア後にコミットする
- Exchange 2003 の場合、スナップショットバックアップからリカバリストレージグループ (RSG) にデータをリストアすることはできません。

p.1134 の「Exchange 2003/2007 のリカバリストレージグループまたは Exchange 2010 のリカバリデータベースを使用したデータのリストアについて」を参照してください。

p.1127 の「バックアップする個々の Exchange メールボックスの選択について」を参照してください。

p.1142 の「Exchange データのリストア」を参照してください。

継続バックアップからの Exchange データのリストアについて

完全バックアップおよび複製トランザクションログを使用すると、最新の完全なトランザクションログなど、インフォメーションストアの任意の時点への完全なリストアを実行できます。

メモ: ストレージグループまたはメールボックスストアを CPS Exchange バックアップからリストアした後、CPS Exchange バックアップジョブを再起動する必要があります。再起動しないと、継続バックアップジョブ、および関連するリカバリポイントが再起動されません。

次の完全バックアップまでにリカバリポイントが実行されるようにすると、リカバリポイントが作成された時点の個々のメッセージまたはフォルダをリストアできます。リカバリポイントが作成されていない場合は、個々のメッセージまたはフォルダを完全バックアップからリストアすることができます。

p.1138の「[継続バックアップからの完全バックアップまたはリカバリポイントの時点へのインフォメーションストア全体のリストア](#)」を参照してください。

p.1139の「[継続バックアップからの最新の完全トランザクションログまでのリストア](#)」を参照してください。

p.1139の「[継続バックアップからの完全バックアップまたはリカバリポイント間の特定の時点までのリストア](#)」を参照してください。

p.1142の「[Exchange データのリストア](#)」を参照してください。

p.1098の「[Exchange データの継続バックアップについて](#)」を参照してください。

p.1147の「[Exchange データのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

継続バックアップからの完全バックアップまたはリカバリポイントの時点へのインフォメーションストア全体のリストア

完全バックアップまたはリカバリポイントの時点にインフォメーションストア全体をリストアするには、次の手順を実行します。

p.1138の「[継続バックアップからの Exchange データのリストアについて](#)」を参照してください。

完全バックアップまたはリカバリポイントの時点にインフォメーションストア全体をリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストアする時点が含まれる完全バックアップまたはリカバリポイントからバックアップセットを選択します。

- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft Exchange]をクリックします。
- 6 [既存のデータを削除し、バックアップセットからデータベースとトランザクションログのみをリストアする]をクリックします。
- 7 [今すぐ実行]をクリックします。

継続バックアップからの最新の完全トランザクションログまでのリストア

最新の完全トランザクションログまでリストアするには、次の手順を実行します。

p.1138の「[継続バックアップからの Exchange データのリストアについて](#)」を参照してください。

最新の完全トランザクションログまでリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 最後の完全バックアップまたはリカバリポイントからバックアップセットを選択します。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]でMicrosoft Exchange をクリックしてから[すべてのトランザクションログをリストアし、既存のトランザクションログを削除しない (完全リストア)]をクリックします。
- 6 [今すぐ実行]をクリックします。

継続バックアップからの完全バックアップまたはリカバリポイント間の特定の時点までのリストア

完全バックアップまたはリカバリポイント間の特定の時点までリストアするには、次の手順を実行します。

p.1138の「[継続バックアップからの Exchange データのリストアについて](#)」を参照してください。

完全バックアップ間の特定の時点またはリカバリポイントにリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 任意の完全バックアップまたはリカバリポイントからバックアップセットを選択し、特定の時点を指定します。

- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[(継続バックアップジョブの場合のみ) 特定時点までのすべてのトランザクションログをリストアし、それ以降のトランザクションログをスキップする]をクリックします。
- 6 特定の時点を指定します。
- 7 [今すぐ実行]をクリックします。

メールボックスのバックアップによる Exchange メールボックスおよびパブリックフォルダのリストアについて

次のレガシー方式によって作成されたバックアップから個々のメールボックス、メッセージおよびパブリックフォルダをリストアできます。

- **Microsoft Exchange** メールボックスを選択して個々のメールボックスをバックアップした場合
- **Microsoft Exchange** パブリックフォルダを選択して個々のパブリックフォルダをバックアップした場合

レガシーバックアップ方式によるメールボックスまたはパブリックフォルダのリストアに関して注意する必要がある事項を次に示します。

- **Backup Exec 8.6** よりも前のバージョンのサイト別表示を使用して作成したメールボックスのバックアップセットのリストアには、複数のリストアジョブの実行が必要になる場合があります。
ターゲットサーバー上に存在していたメールボックスは正常にリストアされます。他のサーバー上に存在していたメールボックスは、そのサーバーにリストア先を変更する必要があります。
- **Backup Exec 8.5** よりも前のバージョンで作成したバックアップからのメールボックスのリストアで、メールボックスの表示名がサーバー上で重複している場合は、リストアするメールボックスを個別に選択し、リストア先を変更します。
p.1148の「[Exchange インフォメーションストアとは個別にバックアップされたメールボックスまたはパブリックフォルダのリストア先の変更について](#)」を参照してください。
- [リストアジョブのプロパティ]-[詳細設定]ダイアログボックスの[常にディスク上のファイルを上書きする]オプションは、メールボックスまたはパブリックフォルダには適用されません。メールボックスまたはパブリックフォルダの他にもリストアする選択項目がある場合、この[常にディスク上のファイルを上書きする]オプションは、その選択項目のみに適用され、既存のオブジェクトがメールボックスまたはパブリックフォルダで上書きされることはありません。
- **Exchange** によって作成された特殊なシステムメールボックスをバックアップしないようにします。

特殊なシステムメールボックスの一般的な例を次に示します。ただし、**Exchange Server** の構成や環境によって、これ以外のものも存在する可能性があります。

- システムアテンダント
- 名前が SMTP で始まるメールボックスまたはシステムメールボックス (Exchange 2000 以上)

p.1133 の「Exchange 2000 またはそれ以降をリストアするための必要条件」を参照してください。

p.1142 の「Exchange データのリストア」を参照してください。

p.1148 の「Exchange インフォメーションストアとは個別にバックアップされたメールボックスまたはパブリックフォルダのリストア先の変更について」を参照してください。

p.280 の「選択リストの作成」を参照してください。

バックアップセットのディスクへの複製による、テープからの個々の Exchange パブリックフォルダメッセージのリストア

個々のパブリックフォルダメッセージをテープからリストアするには、最初にメッセージを含むバックアップセットを、ディスクへのバックアップフォルダに複製する必要があります。その後、複製先のフォルダからデータをリストアできます。

リストア元のバックアップは、完全バックアップまたはコピーバックアップである必要があります。完全バックアップの後に作成された増分または差分バックアップがある場合は、その増分または差分バックアップから個々の項目をリストアできます。完全バックアップ、増分バックアップまたは差分バックアップのバックアップセットは、同じボリューム上になければなりません。

元のバックアップが増分バックアップの場合は、テープから個々のパブリックフォルダメッセージをリストアできません。

ディスクへのバックアップセットの複製を使用してテープから個々の Exchange パブリックフォルダメッセージをリストアする方法

- 1 必要な Exchange バックアップセットを含むテープをテープドライブに挿入します。
- 2 メニューバーで、[ファイル]をクリックし、[新規]をクリックして[バックアップセット複製ジョブ]をクリックします。
- 3 [既存のバックアップセットを複製する]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 複製する Exchange バックアップセットを選択します。
- 6 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 7 [デバイス]リスト、ディスクへのバックアップフォルダを選択します。

- 8 [今すぐ実行]をクリックします。
- 9 ジョブが完了したら、リストアジョブを実行して、ディスクへのバックアップフォルダで複製された Exchange バックアップセットから個々のパブリックフォルダメッセージをリストアします。

p.1142 の「Exchange データのリストア」を参照してください。

Exchange データのリストア

この項では、Exchange のリストアジョブのプロパティの選択方法と、Exchange に固有のリストアオプションについて説明します。

Exchange システムマネージャユーティリティを使用して、リストアするすべてのデータベースを手動でマウント解除するか、またはリストアジョブを作成する際に[リストア前にデータベースのマウントを解除する]にチェックマークを付けます。

p.1140 の「メールボックスのバックアップによる Exchange メールボックスおよびパブリックフォルダのリストアについて」を参照してください。

p.1133 の「Exchange 2000 またはそれ以降をリストアするための必要条件」を参照してください。

メモ: ストレージグループまたはメールボックスストアを CPS Exchange バックアップからリストアした後、CPS Exchange バックアップジョブを再起動する必要があります。再起動しないと、継続バックアップジョブ、および関連するリカバリポイントが再起動されません。

Exchange データをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストア選択リストで、リストアするバックアップセットを選択するか、バックアップセットを展開してリストアする個々の項目を選択します。

p.1132 の「Exchange データのリストアについて」を参照してください。

- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft Exchange]をクリックします。
- 6 必要なオプションを選択します。

p.1143 の「Microsoft Exchange のリストアオプション」を参照してください。

- 7 Granular Recovery Technology を使うバックアップの場合は、デフォルトのステージングの場所が正しく設定されていることを確認します。

p.308 の「Granular Recovery Technology を使うバックアップ用の推奨デバイス」を参照してください。

- 8 必要に応じて[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択し、リストアジョブを開始します。
CPS Exchange バックアップからデータをリストアする場合は、継続バックアップジョブ、および関連するすべてのリカバリポイントを再起動します。
- 9 ジョブ完了後、次に示す順序で操作を実行します。
 - ナビゲーションバーの[ジョブモニター]をクリックします。
 - スケジュールされた **CPS Exchange** バックアップジョブを右クリックします。
 - [今すぐ実行]をクリックします。
- 10 リストアしたデータベースの完全バックアップを実行します。

Microsoft Exchange のリストアオプション

Exchange のリストアジョブを作成するときに次のオプションを設定できます。

p.1142 の「[Exchange データのリストア](#)」を参照してください。

表 G-17 Exchange のリストアオプション

項目	説明
ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成する	<p>ユーザーアカウントとメールボックスがターゲットサーバー上に存在しない場合は、それらを再作成します。リストアするメールボックスが宛先サーバー上に存在しないと、リストアジョブは失敗する場合があります。</p> <p>メモ:レガシーバックアップ方式でバックアップしたメールボックスをリストアするには、バックアップジョブで[ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成するために使用する情報をバックアップする]オプションが選択されている必要があります。</p> <p>p.1130の「Exchange の個々のメールボックスのバックアップ」を参照してください。</p> <p>[ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成する]にチェックマークが付いている場合、[ツール]>[オプション]>[Microsoft Exchange]で入力したパスワードが、再作成するアカウントのパスワードとして使用されます。</p> <p>p.1109の「Exchange データのデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定」を参照してください。</p> <p>[ユーザーアカウントとメールボックスを自動再作成する]は、メールボックスを元の場所にリストアする場合にのみ適用されます。メールボックスのリストア先を変更した場合は、リストア先のサーバー上にユーザーアカウントとメールボックスが存在している必要があります。</p>

項目	説明
<p>個々のメールメッセージとフォルダを既存のメッセージとフォルダ上に上書きする</p>	<p>既存の項目をメッセージまたはフォルダと置換します。メッセージまたはフォルダには、新しいオブジェクト ID は作成されません。内容とプロパティのみが置換されます。</p> <p>このチェックボックスがオフになっているか、元のメッセージまたはフォルダが存在しない場合、新しいメッセージまたはフォルダとして再作成されます。すなわち、Backup Exec によって新しいオブジェクト ID が作成されます。</p> <p>このチェックボックスがオフになっていて、元のメッセージまたはフォルダが存在する場合、メッセージまたはフォルダはスキップされます。</p>
<p>すべてのトランザクションログをリストアし、既存のトランザクションログを削除しない (完全リストア)</p>	<p>Exchange サーバー上の既存のトランザクションログを保持します。ストレージメディア上のトランザクションログは、Exchange Server 上のトランザクションログの既存のセットにリストアされて追加されます。リストア操作が完了すると、既存のトランザクションログおよびリストアにより新たに追加されたトランザクションログ内のコミットしていないトランザクションを使用して、データベースの更新が自動的に実行されます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。</p> <p>メモ: リストアの選択を行うとき、バックアップセットにはトランザクションログ番号の範囲が含まれます。リストアしたいトランザクションログを含んでいるバックアップセットを選択できます。</p> <p>ストレージグループ内にデータベースを個々にリストアする場合は、このオプションを選択する必要があります。このオプションが選択されていないと、ストレージグループ内の他のデータベースのコミット済みトランザクションが失われる場合があります。</p> <p>継続バックアップが有効になっている場合は、最後の完全バックアップまたはリカバリポイントからのバックアップセットを選択し、最新の完全トランザクションログまでリストアします。</p> <p>このオプションは、スナップショットバックアップには使用できません。</p>

項目	説明
<p>(継続バックアップジョブの場合のみ) 特定時点までのすべてのトランザクションログをリストアし、それ以降のトランザクションログをスキップする</p>	<p>メモ: このオプションは継続バックアップからのデータのリストアのみをサポートします。このオプションを選択して他の形式のバックアップデータをリストアすると、このオプションは無視され、不完全リストアジョブが実行されます。</p> <p>トランザクションログ内の時点を指定して、その時点までのトランザクションをトランザクションログからリストアします。指定した時点までのリストアが終了すると、トランザクションログからのリカバリは完了します。</p> <p>完全バックアップまたはリカバリポイントからバックアップセットを選択し、特定の時点を指定します。</p> <p>[日時]ボックスで、変更する日付の部分を選択します。日付を入力するか、または矢印をクリックしてカレンダーを表示し、日付を選択します。</p> <p>次に、変更する時間の部分を選択し、時間を入力します。</p>
<p>既存のデータを削除し、バックアップセットからデータベースとトランザクションログのみをリストアする</p>	<p>既存のトランザクションログを削除します。バックアップセットのデータベースおよびトランザクションログのみがリストアされます。</p> <p>継続バックアップが有効になっている場合は、データベースをリストアする完全バックアップまたはリカバリポイントからのバックアップセットを選択します。</p> <p>Exchange 2007 データベースをリストアし、このオプションを有効にしている場合、Backup Exec によって宛先ストレージグループで検出されたすべての既存の Exchange ログファイルに .DELETE のファイル名拡張子が付けられます。</p> <p>たとえば、e0001.log は e0001.log.delete に変更されます。</p> <p>ストレージグループ内の既存の Exchange ログファイルは、手動で削除されない限り、Backup Exec によって保持されます。</p>

項目	説明
<p>ログおよび拡張子が .pat のファイルを一時的に格納する Exchange Server 上のパス</p>	<p>データベースのリストアが終了するまでログおよびパッチファイル (拡張子が .pat のファイル) を一時的に配置する場所を指定します。デフォルトの場所は %temp で、各ストレージグループ用のサブディレクトリが作成されます。各ストレージグループのログおよび拡張子が .pat のファイルは、対応するサブディレクトリに格納されます。</p> <p>リストアジョブを開始する前に、ログおよび拡張子が .pat のファイル用の一時格納場所为空であることを確認してください。リストアジョブが失敗した場合は、前のリストアジョブのログおよび拡張子が .pat のファイルが、一時格納場所 (サブディレクトリを含む) から削除されていたかどうかを確認します。</p> <p>このオプションは、スナップショットバックアップには使用できません。</p>
<p>リストア前にデータベースのマウントを解除する</p>	<p>リストアジョブを実行する前に、Exchange データベースを自動的にオフラインにします。このオプションを選択しない場合は、リストアジョブを実行する前に、データベースを手動でオフラインにする必要があります。</p> <p>スナップショットバックアップをリストアする場合、またはスナップショットから Exchange データベースを個々にリストアする場合は、ストレージグループ内のすべてのデータベースをオフラインにする必要があります。このオプションを選択すると、ストレージグループ内のすべてのデータベースが自動的にオフラインになります。</p>
<p>リストア後にコミットする</p>	<p>リストアする選択項目に最新のバックアップセットが含まれている場合は、最新のバックアップセットをコミットします。このオプションを選択すると、リストアジョブでログファイルが再生され、未完了のトランザクションがロールバックされます。このオプションを選択しなかった場合は、データベースは中間状態のまま、使用することはできません。</p> <p>中間状態のバックアップの適用時に [リストア後にコミットする] にチェックマークを付けた場合は、バックアップのリストアは中止され、最初からリストアをやり直す必要があります。</p> <p>データベースのリストアが完了すると、一時格納場所内のログおよび拡張子が .pat のファイルがデータベースに適用され、その後で現在のログファイルが適用されます。リストア後、ログおよび拡張子が .pat のファイルは、自動的に一時格納場所 (サブディレクトリを含む) から削除されます。</p> <p>このオプションは、スナップショットバックアップには使用できません。</p>

項目	説明
リストア後にデータベースをマウントする	データベースをマウントして利用できるようにします。このチェックボックスは、[リストア後にコミットする]を選択しないと利用できません。
設定ガイド	ウィザードを使用して、Exchange Server データのリストアジョブのプロパティを選択します。

Exchange データのリストア先の変更について

Backup Exec を使用して、Exchange データをバックアップ元のサーバーにリストアしたり、別の Exchange Server にリストア先を変更することができます。Exchange データのリストア先を変更する場合は、データのリストア先の Exchange Server の Service Pack と元の Exchange Server の Service Pack が同じである必要があります。

データのリストア先を変更する前に、次の必要条件を確認してください。

- パブリックフォルダを含む Exchange 2000 またはそれ以降のストレージグループおよびデータベース
 p.1147の「[Exchange のストレージグループおよびデータベースのリストア先の変更について](#)」を参照してください。
- インフォメーションストアとは個別にバックアップされた Exchange メールボックスまたはパブリックフォルダ
 p.1148の「[Exchange インフォメーションストアとは個別にバックアップされたメールボックスまたはパブリックフォルダのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

リストア先を変更したリストアジョブの実行を開始する前に、リストアするデータの検索と表示、またリストアジョブのオプションおよびリストアジョブのサブミットの詳細を確認してください。

p.587の「[データのリストアについて](#)」を参照してください。

リストアの完了後に、リストアしたデータベースの完全バックアップを実行しておくことをお勧めします。

p.1150の「[Exchange データのリストア先の変更](#)」を参照してください。

Exchange のストレージグループおよびデータベースのリストア先の変更について

Exchange 2000、2003、2007、2010 のストレージグループおよびデータベースのリストア先を変更する場合の必要条件を次に示します。

- リストアするストレージグループおよびデータベースがリストア先サーバー上に存在し、その名前が、元のストレージグループおよびデータベースの名前と同じである必要があります。
- 宛先サーバーとソースサーバーの組織名および管理グループ名が同じである必要があります。
- 宛先データベースを上書きできるように設定する必要があります。
p.1133 の「[Exchange でのデータベースの設定](#)」を参照してください。

次のような場合は、リストア先を変更することはできません。

- **Exchange Server** データベースを別のバージョンのデータベースにリストアする。両方の **Exchange Server** の **Service Pack** が同じである必要があります。
- サイト複製サービス(SRS)およびキーマネジメントサービス(KMS)。これらのサービスは、インストール先コンピュータに依存するため、別のコンピュータへのリストア先の変更はサポートされていません。また、サービス機能が失われる場合があります。

メモ: KMS は Exchange 2003/2007/2010 では利用できません。

p.1147 の「[Exchange データのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

p.1150 の「[Exchange データのリストア先の変更](#)」を参照してください。

Exchange インフォメーションストアとは個別にバックアップされたメールボックスまたはパブリックフォルダのリストア先の変更について

Microsoft Exchange メールボックスの選択から個々のメールボックスまたはパブリックフォルダをバックアップしたときに作成されたバックアップセットから、リストア先を変更して個々のメールボックスまたはパブリックフォルダをリストアすることができます。

メモ: Exchange 2007/2010 では、この機能はサポートされていません。

単一のメールボックスまたはパブリックフォルダ、あるいは単一のメールボックスの 1 つ以上のメッセージを選択した場合は、そのリストア先を同一のまたは異なるサーバー上の既存のメールボックスまたはパブリックフォルダに変更することができます。元のメールボックス内のフォルダがリストア先のメールボックスに存在しない場合は、リストア時に作成されます。

複数のメールボックスまたはパブリックフォルダを選択、または複数のメールボックスから複数のフォルダやメッセージを選択した場合は、変更できるリストア先は別のサーバーのみです。選択したメールボックスおよびパブリックフォルダと同じ名前のメールボックスおよびパブリックフォルダが、リストア先サーバー上に存在している必要があります。

リストア先を変更してメールボックスおよびパブリックフォルダをリストアする場合の必要条件を次に示します。

- リストアするメールボックスまたはパブリックフォルダと同じ名前のメールボックスまたはパブリックフォルダが、リストア先サーバー上に存在しない場合は、リストア先を変更する前に作成しておく必要があります。リストア先を変更した場合は、ターゲットサーバー上でのメールボックスの自動再作成は使用できません。
- 変更したリストア先のサーバーのメールボックスかパブリックフォルダに Backup Exec がアクセスできることを確認します。
p.1148 の「Exchange インフォメーションストアとは個別にバックアップされたメールボックスまたはパブリックフォルダのリストア先の変更について」を参照してください。
p.1087 の「Exchange メールボックスにアクセスするための必要条件」を参照してください。
- 同じ表示名を持つメールボックスが複数存在している場合があります。Backup Exec でメールボックスのリストア先を変更すると、そのメールボックスはリストア先のメールボックスの表示名に変更されます。同一の表示名が存在している場合は、誤ったメールボックスにデータがリストアされる可能性があります。
これを防ぐには、リストア先のメールボックス名として、バックアップ選択リストでメールボックスを参照したときに表示された名前を、メールボックスディレクトリ識別子を囲んでいるカッコを含めて正確に入力する必要があります (メールボックス名 [メールボックス名] など)。

リストア先を変更し、個々のメッセージを別のメールボックスにリストアする場合の必要条件を次に示します。

- メールボックスデータのリストア先を変更する場合は、リストアを開始する前に、リストア先のメールボックスが存在している必要があります。元のメールボックスの内容は、指定したメールボックスに格納されます。
たとえば、Mailbox 1 が Top of Information Store、Inbox、および Folders 1 と Folders 2 で構成され、それぞれにいくつかの電子メールが格納されている場合、Mailbox 1 をバックアップし、この Mailbox 1 を既存の Mailbox 2 にリストアすると、Top of Information Store、Inbox、Folders 1 と Folders 2 およびメッセージを含む Mailbox 1 のすべての内容が Mailbox 2 にリストアされます。Mailbox 2 の下に Mailbox 1 が作成されるわけではありません。
Mailbox 1¥Top of Information Store¥Folder 2 のリストア先を Mailbox 2 に変更した場合は、Mailbox 1¥Top of Information Store¥Folder 2 の、Message 5 および Message 6 の内容が、Mailbox 2 の、Mailbox 1 のときと同じ名前のフォルダに格納されます。

p.1147 の「Exchange データのリストア先の変更について」を参照してください。

p.1140 の「メールボックスのバックアップによる Exchange メールボックスおよびパブリックフォルダのリストアについて」を参照してください。

p.1150 の「Exchange データのリストア先の変更」を参照してください。

過去のバージョンのメールボックスまたはパブリックフォルダへのアクセスの有効化

Backup Exec がメールボックスかパブリックフォルダにアクセスできることを確認するには、次の手順を使います。

p.1148 の「[Exchange インフォメーションストアとは個別にバックアップされたメールボックスまたはパブリックフォルダのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

過去のバージョンのメールボックスまたはパブリックフォルダへのアクセスを有効にする方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Microsoft Exchange]をクリックします。
- 3 [過去のバージョンのメールボックスのサポートを有効にする (Exchange 2003) - 非推奨オプションです。GRT の使用をお勧めします。]にチェックマークを付けます。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 バックアップ選択ツリーでリストア先のサーバーをクリックします。
[Microsoft Exchange メールボックス]オプションを使用すると、メールボックスのリストにリストア先のメールボックスが表示されることを確認できます。
- 6 メッセージが表示された場合は、同じ名前のメールボックスが存在する、一意の名前でユーザーアカウントのクレデンシャルを格納したログオンアカウントを入力します。

Exchange データのリストア先の変更

Exchange データのリストア先を変更するには、次の手順を実行します。

p.1147 の「[Exchange データのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

p.1147 の「[Exchange のストレージグループおよびデータベースのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

p.1148 の「[Exchange インフォメーションストアとは個別にバックアップされたメールボックスまたはパブリックフォルダのリストア先の変更について](#)」を参照してください。

Exchange データのリストア先を変更する方法

- 1 リストアジョブを作成します。
p.1133 の「[Exchange 2000 またはそれ以降をリストアするための必要条件](#)」を参照してください。
- 2 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで必要なオプションを選択し、[プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[Microsoft Exchange のリストア先の変更]をクリックします。

- 3 必要なオプションを選択します。
 p.1151の「[\[Microsoft Exchange のリストア先の変更\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 リストア先を変更したリストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 5 リストアが完了した後、リストアしたデータベースの完全バックアップを実行しておくことをお勧めします。

[Microsoft Exchange のリストア先の変更]オプション

Exchange のリストアジョブのリストア先を変更するときに次のオプションを設定できます。

p.1150 の「[Exchange データのリストア先の変更](#)」を参照してください。

表 G-18 Exchange のリストア先の変更オプション

項目	説明
Microsoft Exchange Server セットのリストア先を変更する	Exchange バックアップセットのリストア先の変更を有効にします。
サーバーまたはデータベース可用性グループにリストアする	リストア先のコンピュータまたはデータベース可用性グループの名前を、「 ¥¥server name 」の形式で指定します。
サーバーのログオンアカウント	Windows ユーザーアカウントのクレデンシャルが格納されている Backup Exec ログオンアカウントを指定します。デフォルトのログオンアカウントが表示されます。別のログオンアカウントを使用するには、[変更]をクリックします。 p.1087の「 Exchange メールボックスにアクセスするための必要条件 」を参照してください。
ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットプロバイダを使用してリストア先を変更する	ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットプロバイダを使用してバックアップセットのリストア先の変更を有効にします。
ストレージグループやデータベースにリストア先を変更する (Exchange 2007 以降のみ)	[リストア先データベース]と[リストア先ストレージグループ]フィールドを有効にします。
ストレージグループにリストアする (Exchange 2007 のみ)	既存のストレージグループの名前を指定します。複数の Exchange 2007 データベースのリストア先を異なるストレージグループに変更するには、このオプションを使用します。

項目	説明
リストア先データベースまたはリカバリデータベース	<p>リストアしたい Exchange 2007 データベース、Exchange 2010 データベースまたは Exchange 2010 リカバリデータベースの名前を指定します。</p> <p>Exchange 2007 では、1 つの Exchange 2007 データベースのリストア先を変更する場合にこのオプションを使用します。</p> <p>データベースのリストア先を変更する場合、指定するストレージグループとデータベースまたはリカバリデータベースの名前は、ターゲットの Exchange Server 上に存在している必要があります。</p>
リカバリストレージグループ (RSG) にリストア先を変更する (Exchange 2007 のみ)	<p>Exchange メールボックスデータベースのリストア先をリカバリストレージグループに変更します。</p> <p>リカバリストレージグループおよび Exchange 2003 または 2007 の Mailbox Merge Wizard を使用して、個々のユーザーのメールボックスデータをリストアすることもできます。</p> <p>このオプションを使用するには、リカバリストレージグループを作成する必要があります。また、リカバリストレージグループ内に、リストアする各データベースに対するデータベースを作成する必要があります。リカバリストレージグループ内に作成する各データベースには、リストアするデータベースと同じ名前を使用する必要があります。リストア先の変更時には、Exchange Agent によってリカバリストレージグループが自動的に検出され、使用されません。</p> <p>リカバリストレージグループについて詳しくは Microsoft Exchange Server 2007 のマニュアルを参照してください。</p>
ドライブとパスにリストア先を変更する (Exchange 2003 および 2007)	[リストア先ドライブ]と[リストア先パス]フィールドを有効にします。
リストア先ドライブ	Exchange データベースをリストアする宛先ドライブを指定します。ローカルドライブとネットワークドライブを表示するには、[...] ボタンをクリックします。
リストア先パス	Exchange データベースをリストアする場所へのパスを指定します。
メールボックスまたはパブリックフォルダのリストア先を変更する	メールボックスのバックアップセットとパブリックフォルダのバックアップセットのリストア先を変更するオプションを有効にします。
メールボックスセットのリストア先を変更する	メールボックスのバックアップセットのリストア先の変更を有効にします。
リストア先メールボックス	リストア先のメールボックスの名前を指定します。そのメールボックスは、リストア先のサーバー上に存在している必要があります。

項目	説明
メールボックスログオンアカウント	リストア先のメールボックスに対する権限のあるログオンアカウントを指定します。別のログオンアカウントを選択するには、[変更]をクリックします。既存のログオンアカウントを選択解除するには、[クリア]をクリックします。
パブリックフォルダセットのリストア先を変更する	パブリックフォルダのバックアップセットのリストア先の変更を有効にします。
リストア先パブリックフォルダ	リストア先のパブリックフォルダの名前を指定します。そのパブリックフォルダは、リストア先のサーバー上に存在する必要があります。
パブリックフォルダのログオンアカウント	リストア先のパブリックフォルダに対する権限があるログオンアカウントを指定します。別のログオンアカウントを選択するには、[変更]をクリックします。既存のログオンアカウントを選択解除するには、[クリア]をクリックします。

Exchange Server のディザスタリカバリを準備する方法

障害対策の策定は、致命的障害の発生時に **Exchange** を効率的かつ効果的にリストアするために不可欠です。**Exchange** では、認証に **Windows** のセキュリティを使用するため、**Exchange** のディザスタリカバリを **Windows** のディザスタリカバリと切り離すことはできません。

事前に計画を立てておけば、リカバリに必要な時間を短縮することができます。

特に、次の項目を含む対策を策定しておくことが重要です。

- オペレーティングシステムの構成記録シート
- ハードドライブのパーティション構成記録シート
- RAID 構成
- ハードウェア構成記録シート
- EISA/MCA 構成ディスク
- Exchange 構成シート
- Windows 緊急修復ディスク

実際のリストアには次の項目が必要です。

- Backup Exec のインストール済みコピー
- リカバリする **Microsoft Exchange** データベースの最新の完全バックアップ、増分バックアップまたは差分バックアップ。CPS バックアップが有効になっている場合は、リカバリポイントを使用して **Exchange** データベースをリカバリできます。

- Microsoft Exchange Server のインストール用 CD
- 元のインストールに適用していた Service Pack

Exchange 2000 以降のディザスタリカバリ

ここでは、Backup Exec を使用して Exchange を完全にリストアする手順を説明します。この時点ですべての準備が適切に完了している必要があります。

p.1153 の「[Exchange Server のディザスタリカバリを準備する方法](#)」を参照してください。

リカバリする Exchange 2000 Server にサイト複製サービス (SRS) やキーマネージメントサービス (KMS) が含まれている場合は、ディザスタリカバリを開始する前に、これらのデータベースのリカバリに関する詳細を、Exchange のマニュアルで参照してください。

この手順の実行には、管理者または同等の権限のあるアカウントを使用して、Windows にログオンする必要があります。また、次の必要条件があります。

- リストアするストレージグループおよびデータベースがリストア先サーバー上に存在し、その名前が、元のストレージグループおよびデータベースの名前と同じである必要があります。
- 宛先サーバーとソースサーバーの組織名および管理グループ名が同じである必要があります。
- 宛先データベースを上書きできるように設定する必要があります。
p.1133 の「[Exchange でのデータベースの設定](#)」を参照してください。

Exchange サーバーをリカバリするために Intelligent Disaster Recovery を使うことができます。

p.1798 の「[Microsoft Exchange のリカバリに関する注意事項](#)」を参照してください。

Exchange 2000 以上の障害対策を実行する方法

- 1 まず、Windows サーバーをリカバリします。

p.763 の「[前回正常起動時の構成へのリカバリ](#)」を参照してください。

ディスクパーティションに存在する Exchange Server 2000 以上のファイルをすべてリストアしてください。

(再ブート後の) Windows 2000 サーバーのディザスタリカバリ手順が完了したら、Exchange Server をリカバリする必要があります。

- 2 [サービス]アイコンを使用して、Microsoft Exchange インフォメーションストアサービスが起動されていることを確認します。
- 3 Backup Exec を起動します。
- 4 リカバリする Exchange 2000 Server 以上のストレージグループの最新のバックアップが格納されているメディアのカatalog登録を実行します。

- 5 ナビゲーションバーの[リストA]の横にある矢印をクリックします。
- 6 [新規リストAジョブ]をクリックします。
- 7 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 8 リストアする各ストレージグループまたはデータベースの最新の完全バックアップを選択します。

継続バックアップが有効になっている場合は、完全バックアップまたはリカバリポイントからのバックアップセットを選択できます。

リカバリする Exchange 2000 Server に、サイト複製サービス (SRS) やキーマネージメントサービス (KMS) がインストールされている場合は、そのデータベースも選択します。

- 9 必要に応じて、それ以降のストレージグループの増分バックアップをすべて選択します。

差分バックアップをリストアするには、ストレージグループの最新の差分バックアップのみを選択します。

- 10 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft Exchange]をクリックします。
- 11 [既存のデータを削除し、バックアップセットからデータベースとトランザクションログのみをリストアする]オプションをクリックします。
- 12 [ログおよび拡張子が .pat のファイルを一時的に格納する Exchange Server 上のパス]フィールドに、データベースのリストアが完了するまでの間、一時的に関連のログおよび拡張子が .pat のファイルを格納しておく場所を入力します。

リストアジョブを開始する前に、ログおよび拡張子が .pat のファイル用の一時格納場所が空であることを確認してください。リストアジョブが失敗した場合は、前のリストアジョブのログおよび拡張子が .pat のファイルが、一時格納場所 (サブディレクトリを含む) から削除されていたかどうかを確認します。

- 13 リストアする選択項目に最新のバックアップセットが含まれている場合は、[リストア後にコミットする]にチェックマークを付けます。

リストアするバックアップセットがまだ残っている場合は、このチェックボックスをオンにしないでください。

中間状態のバックアップの適用時に[リストア後にコミットする]にチェックマークを付けた場合、バックアップのリストアは中止され、最初からリストアをやり直す必要があります。

データベースのリストアが完了すると、一時格納場所内のログおよび拡張子が .pat のファイルがデータベースに適用され、その後で現在のログファイルが適用されます。リストア後、ログおよび拡張子が .pat のファイルは、自動的に一時格納場所 (サブディレクトリを含む) から削除されます。

- 14 リカバリ後ただちにデータベースを利用できるようにするには、[リストア後にデータベースをマウントする]にチェックマークを付けます。
- 15 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 16 リストアの完了後に、リストアしたデータベースの完全バックアップを実行しておくことをお勧めします。

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Hyper-V

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Agent for Microsoft Hyper-V](#) について
- [Agent for Microsoft Hyper-V](#) のインストールについて
- [Agent for Microsoft Hyper-V](#) を使用するための要件
- [Agent for Microsoft Virtual Servers](#) からのアップグレードについて
- [Microsoft Hyper-V](#) のバックアップ選択について
- [Agent for Microsoft Hyper-V](#) を使用したデータのバックアップ
- [Granular Recovery Technology](#) による [Agent for Microsoft Hyper-V](#) との連携
- [Microsoft Hyper-V](#) のリストア選択について
- [Hyper-V](#) ホストへのデータのリストア
- 別のホストへの仮想マシンのリストア
- [Agent for Microsoft Hyper-V](#) のデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定
- 高可用性仮想マシンのバックアップとリストアについて

Agent for Microsoft Hyper-V について

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Hyper-V (Agent for Microsoft Hyper-V) では、次のリソースをバックアップしてリストアできます。

- Microsoft Windows Server 2008/2008 R2 Hyper-V ホスト。

- Hyper-V ホストに存在するすべての仮想マシン。
- クラスタ共有ボリューム (CSV) に存在する仮想マシンなどの Hyper-V ホスト。

Backup Exec は、単一パスバックアップを実行して、ホスト設定データ、すべての仮想マシン、および仮想マシンにインストールされた VSS 対応アプリケーションを保護します。Backup Exec の Granular Recovery Technology (GRT) はバックアップジョブではデフォルトで有効になります。仮想マシン全体をリストアしないで、Windows の仮想マシンから個々のファイルおよびフォルダをリストアするために GRT 対応バックアップを使うことができます。また、仮想マシンに存在する Microsoft Exchange と Active Directory のアプリケーションから個々の項目をリストアできます。個々のデータベースが仮想マシンに存在するときは、Microsoft SQL からリストアすることもできます。

メモ: GRT を実行するには、仮想マシン上で適切な Backup Exec Agent for Microsoft Exchange、SQL、または Active Directory が必要になります。

Backup Exec はオンライン状態、オフライン状態または保存された状態にある仮想マシンをバックアップできます。Microsoft Windows 2003 (Hyper-V Integration Services 付き) 以降を使う仮想マシンをオンライン時にバックアップできます。同じバックアップジョブにオンラインおよびオフラインの仮想マシンを含めることができます。オンライン仮想マシンのバックアップの間に、Backup Exec は Hyper-V ホストのスナップショットバックアップを取ります。次に、ホストはホスト上の仮想マシンのスナップショットを取得します。この処理により、Backup Exec は停止時間を発生させずに仮想サーバーをバックアップできます。オンラインバックアップを実行できない場合は、オフラインバックアップが実行されます。オフラインバックアップの場合、仮想マシンは一時的に保存状態になります。ただし、仮想マシンは、バックアップジョブ全体のために保存状態を保持しません。

保存状態のバックアップジョブのダウンタイムの量は次の条件によって決まります:

- 仮想マシンに割り当てられるメモリの容量。
- ホストのオペレーティングシステムの現在の負荷。

p.1159 の「[Agent for Microsoft Hyper-V を使用するための要件](#)」を参照してください。

p.1162 の「[Agent for Microsoft Hyper-V を使用したデータのバックアップ](#)」を参照してください。

p.1170 の「[Hyper-V ホストへのデータのリストア](#)」を参照してください。

Agent for Microsoft Hyper-V のインストールについて

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft Hyper-V (Agent for Microsoft Hyper-V) は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールされます。Agent for Microsoft Hyper-V は、Microsoft Hyper-V ホストにインストールされます。Backup Exec メディアサーバーが Microsoft Hyper-V ホストでもある場合は、Backup Exec をイ

インストールするときに **Agent for Microsoft Hyper-V** をインストールできます。あるいは **Backup Exec** のインストール後に、インストールできます。

Backup Exec が **Microsoft Hyper-V** ホストにインストールされていない場合は、**Microsoft Hyper-V** ホストに **Remote Agent for Windows Systems** をプッシュインストールする必要があります。仮想マシンに **Agent for Microsoft Hyper-V** をインストールする必要はありません。ただし、ライセンスキーは **Agent for Microsoft Hyper-V** のメディアサーバーで要求されます。**Remote Agent for Windows Systems** は **Agent for Microsoft Hyper-V** とともに含まれます。

p.107 の「ローカルコンピュータへの **Backup Exec** のインストール」を参照してください。

p.112 の「ローカルメディアサーバーへの **Backup Exec** 追加オプションのインストール」を参照してください。

p.115 の「リモートコンピュータへの **Backup Exec** のプッシュインストール」を参照してください。

p.123 の「リモートコンピュータへの **Remote Agent** および **AOFO (Advanced Open File Option)** のプッシュインストール」を参照してください。

Agent for Microsoft Hyper-V を使用するための要件

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

Agent for Microsoft Hyper-V を使用する場合は次の項目が必要になります。

表 H-1 Agent for Microsoft Hyper-V の要件

ソフトウェア	インストール場所
Microsoft Windows Server 2008 Hyper-V	Microsoft Hyper-V ホスト
Backup Exec	Backup Exec メディアサーバー
Agent for Microsoft Hyper-V	Microsoft Hyper-V ホスト

ソフトウェア	インストール場所
VHDMount	メディアサーバー (メディアサーバーが仮想サーバーでない場合) メモ: VHDmount が必要になるのは、メディアサーバーで Hyper-V 役割をインストールせずに、Microsoft Windows 2003 または Windows 2008 を実行する場合のみです。Microsoft Virtual Server 2005 R2 SP1 から VHDmount のコンポーネントをインストールできます。

オンラインバックアップを実行するには、次の要件を満たしている必要があります:

- Microsoft Windows Server 2008、2003 SP2、Vista SP1 または XP SP3 が仮想マシンにインストールされている。
- Hyper-V Integration Services with Backup (Volume Snapshot) がインストールされている。
- 仮想マシンが実行状態である。

これらの条件が満たされないと、仮想マシンは実行時に保存状態になります。[オフになっている仮想マシンをバックアップ]オプションを選択している場合にのみ、仮想マシンがオフになるとその仮想マシンがバックアップされます。

Backup Exec が仮想マシンにある Microsoft Exchange、Active Directory、SQL 用のカタログデータを収集できるようにするには、以下の項目が要求されます:

- アプリケーション (Agent for Microsoft Exchange、Agent for Microsoft SQL または Agent for Microsoft Active Directory) 用のライセンスを受けたバージョンの Backup Exec エージェント。
ライセンスは各仮想マシン上のアプリケーションごとに要求されます。たとえば、5 つの仮想マシンの Microsoft SQL のインストールには 5 つのライセンスが必要です。
- Remote Agent for Windows Systems を仮想マシンにインストールする必要があります。
Agent for Microsoft Hyper-V には、Remote Agent for Windows Systems のライセンスが含まれています。Microsoft Exchange、Active Directory および SQL のエージェントにも、Remote Agent for Windows Systems のライセンスが含まれています。Remote Agent for Windows Systems に個別のライセンスは要求されません。
- 仮想マシンはオンラインでバックアップできる必要があります。
- 仮想マシンにアクセスするために使うクレデンシャルには、アプリケーションへのアクセス権限も含まれている必要があります。

次のことを実行するには、Remote Agent for Windows Systems を仮想マシンにインストールする必要があります。

- 個々のファイルとフォルダをリストアして元の仮想マシンに戻せるようにする。
- 個々の SQL データベースをリストアして元の仮想マシンに戻せるようにする。
- 個々の Exchange 項目をリストアして元の仮想マシンに戻せるようにする。
- 個々の Active Directory オブジェクトをリストアして元の仮想マシンに戻せるようにする。

Agent for Microsoft Virtual Servers からのアップグレードについて

Backup Exec 12 を使用して定期実行ジョブを設定する場合、ジョブを再作成するか、または Microsoft 仮想サーバーを使用するように選択リストを変更する必要があります。

Backup Exec は Microsoft Virtual Server から Microsoft Hyper-V への移行用ツールではありません。移行方法について詳しくは Microsoft の仮想マシンの移行ガイドを参照してください。

[http://technet.microsoft.com/en-us/library/dd296684\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/en-us/library/dd296684(WS.10).aspx)

Microsoft Hyper-V のバックアップ選択について

次のコンテナは Hyper-V 用の管理コンソールの選択ペインに表示されます。

表 H-2 Microsoft Hyper-V バックアップ選択

コンテナ名	コンテナの項目	バックアップジョブに含まれる内容
Microsoft Hyper-V	この項目には[Initial Store]と[仮想マシン]が含まれます。	バックアップ対象として[Microsoft Hyper-V]コンテナを選択した場合、バックアップジョブにはアプリケーションの構成設定とすべての仮想マシンが含まれます。
Initial Store	この項目には、仮想サーバーアプリケーションの構成設定が含まれています。	バックアップ対象として[Initial Store]を選択した場合、バックアップジョブには Hyper-V 認証設定を含む XML ファイルが 1 つ含まれます。

コンテナ名	コンテナの項目	バックアップジョブに含まれる内容
仮想マシン	<p>この項目には、仮想サーバーに存在する各仮想マシンが含まれています。</p> <p>メモ: 個々の仮想マシンを選択した場合、仮想マシン上のファイルは結果ペインに表示されます。ただし、バックアップに含める、または除外する個々のファイルを選択できません。</p>	<p>個々の仮想マシンを選択した場合、バックアップは仮想マシン全体の完全なイメージバックアップになります。これには、次の項目が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ .vhd ファイル ■ .avhd ファイル ■ 差分ディスク ■ Hyper-V 管理対象スナップショット

Backup Exec がバックアップジョブの間に自動的に新しい仮想マシンを保護する方法

Backup Exec の動的インクルード機能は、バックアップジョブが実行されるときに検出される新しい仮想マシンとフォルダを保護します。バックアップジョブの作成時とバックアップジョブの実行時の間に新しい仮想マシンが追加されると、Backup Exec は自動的に新しい仮想マシンをバックアップします。バックアップジョブには新しい仮想マシンが含まれることがあるので、ジョブには予想以上にストレージ容量と時間が必要になる場合があります。ジョブ履歴はバックアップされた仮想マシンの数を示します。

バックアップ選択リストでは、動的インクルードは次の Hyper-V ノードで有効になります:

- Microsoft Hyper-V
- Microsoft Hyper-V 下の仮想マシン
- Hyper-V ホストノード
ホストノードを選択した場合、動的インクルードは Microsoft Hyper-V ノードで自動的に有効になります。
- Microsoft Hyper-V HA 仮想マシン
- クラスタ名のノード
クラスタ名ノードを選択した場合、動的インクルードは Microsoft Hyper-V HA 仮想マシンノードで自動的に有効になります。

Agent for Microsoft Hyper-V を使用したデータのバックアップ

Microsoft Hyper-V 用のバックアップジョブを作成するとき、唯一利用可能なバックアップ方式は完全バックアップです。完全イメージのバックアップが作成されても、Granular

Recovery Technology (GRT) で個々のファイルとフォルダをリストアできます。**GRT** は、仮想マシン上の個々のファイルとフォルダ、および仮想マシンに存在する**VSS** 対応アプリケーションからの個々の項目でデフォルトで有効になります。**VSS** 対応アプリケーションには **Microsoft Exchange**、**SQL**、**Active Directory** が含まれます。デフォルトでは、**Backup Exec** は親の仮想マシンのリソースクレデンシャルを使います。

メモ: 仮想サーバーに存在するファイルのみバックアップされます。リモート.vhdファイルがある仮想マシンは、バックアップジョブから除外されます。**Remote Agent for Windows Systems** と適切な **Backup Exec** エージェントを使って、リモート.vhdファイルがある仮想マシンを保護できます。

Agent for Microsoft Hyper-V を使用したデータのバックアップ方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 バックアップするリソースを選択します。
p.1161の「[Microsoft Hyper-V のバックアップ選択について](#)」を参照してください。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[**Microsoft Hyper-V**]をクリックします。
- 6 このバックアップジョブに必要なオプションを選択します。
p.1163の「[Microsoft Hyper-V バックアップオプション](#)」を参照してください。
- 7 仮想マシンにインストールされる **VSS** 対応アプリケーションの **Granular Recovery** の設定を変更するには、[編集]をクリックします。
p.1164の「[仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設定](#)」を参照してください。
- 8 バックアップジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択します。

Microsoft Hyper-V バックアップオプション

Microsoft Hyper-V 用に作成する各バックアップジョブに次のオプションを設定できます。

p.1162の「[Agent for Microsoft Hyper-V を使用したデータのバックアップ](#)」を参照してください。

表 H-3 Microsoft Hyper-V バックアップオプション

項目	説明
バックアップ方式	完全バックアップの方式を表示します。完全バックアップは唯一利用可能なバックアップ方式です。
バックアップするために保存状態にしておく必要がある仮想マシンを除外する	オンラインバックアップをサポートしない、およびバックアップの開始時に実行状態であるすべてのオフライン仮想マシンをバックアップから除外します。
オフになっている仮想マシンをバックアップ	オフになった仮想マシンを Backup Exec でバックアップできるようにします。
Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、仮想マシンからの個々のファイルとフォルダのリストアを有効にする	完全バックアップから個々のファイルとフォルダをリストアできるようにします。 データをリストアしたい仮想マシンに Remote Agent for Windows Systems をインストールする必要があります。Remote Agent for Windows Systems はデータのバックアップ対象の仮想マシンにはインストールする必要はありません。
編集	Microsoft Active Directory、Exchange および SQL 用に GRT の設定を変更できます。
Microsoft Active Directory	仮想マシン上の Microsoft Active Directory で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
Microsoft Exchange	仮想マシン上の Microsoft Exchange で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
Microsoft SQL	仮想マシン上の Microsoft SQL で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。

仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設定

Microsoft Active Directory、Exchange および SQL からの個々の項目の個別リカバリを有効または無効にするために次のオプションを使ってください。

メモ: 次のいずれかのアプリケーションで Granular Recovery Technology (GRT) を有効または無効にする場合、設定は VMware と Hyper-V 仮想マシンの両方に適用されます。同じ設定を使わない場合は、シマンテック社はそれぞれの種類の仮想マシンに個別のバックアップジョブを設定することを推奨します。

p.1162 の「[Agent for Microsoft Hyper-V を使用したデータのバックアップ](#)」を参照してください。

p.1166 の「[Backup Exec で仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法](#)」を参照してください。

p.1167 の「[仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護するための要件](#)」を参照してください。

表 H-4 仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設定

項目	説明
仮想マシン上の Microsoft Active Directory オブジェクトで GRT を有効にする	Backup Exec で仮想マシン上の個々の Active Directory オブジェクトをリストアするのに必要な情報を収集できるようにします。Backup Exec は Active Directory がインストールされる仮想マシンに使われたログオンクレデンシアルを使いません。
仮想マシン上の Microsoft Exchange データベースおよびメールボックス項目で GRT を有効にする	Backup Exec で仮想マシン上の個々の Exchange データベースおよびメールボックス項目をリストアするのに必要な情報を収集できるようにします。Backup Exec は Exchange がインストールされる仮想マシンに使われたログオンクレデンシアルを使います。
仮想マシン上の Microsoft SQL (データベースレベルのみ) で GRT を有効にする	Backup Exec で仮想マシン上の個々の SQL データベース項目をリストアするのに必要な情報を収集できるようにします。Backup Exec は SQL がインストールされる仮想マシンに使われたログオンクレデンシアルを使います。

Granular Recovery Technology による Agent for Microsoft Hyper-V との連携

Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用すると、仮想マシン全体をリストアせずに、個々のファイルとフォルダをリストアできます。仮想マシンにインストールされる VSS 対応アプリケーションからの個々の項目をリストアすることもできます。

GRT はシステム回復で使われるように意図されていません。ただし、リストアジョブのリストア選択として仮想マシン全体を選択することによって、完全なシステム回復を実行できます。

p.1166 の「[Backup Exec で仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法](#)」を参照してください。

GRT 対応のバックアップを設定する前に、必要条件を確認する必要があります。

p.309の「[Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について](#)」を参照してください。

p.1167の「[仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護するための要件](#)」を参照してください。

GRT を使うには、仮想マシンの NetBIOS 名またはコンピュータ名を展開すると表示されるリストから、リストアする個々のファイルとフォルダを選択する必要があります。[仮想マシン]ノードを展開すると表示される仮想マシンからは、個々のフォルダやファイルを選択できません。

p.305の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.1168の「[Microsoft Hyper-V のリストア選択について](#)」を参照してください。

Backup Exec で仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法

Backup Exec は仮想マシンに存在する次の VSS 対応アプリケーションから個々の項目をリストアできます：

表 H-5 Backup Exec が仮想マシンの VSS 対応アプリケーションのために保護するデータの種類

アプリケーション	Backup Exec が保護するデータの種類
Microsoft Exchange	メールボックス、個々のメッセージ、カレンダー項目、タスク、ジャーナルエントリ、パブリックフォルダデータ (ディスクバックアップのみ)
Microsoft SQL	データベース
Microsoft Active Directory	個々のユーザーアカウント、プリンタオブジェクト、サイト、組織単位

バックアップジョブを作成するとき、Backup Exec は自動的に仮想マシンの VSS 対応アプリケーションを見つけます。バックアップジョブの間に、Backup Exec は Granular Recovery Technology (GRT) を使用して VSS 対応アプリケーションからのデータをバックアップします。デフォルトで、Backup Exec は仮想マシンに接続するために使われた同じクレデンシヤルを使用して GRT を有効にします。VSS 対応アプリケーションのどの種類でも GRT を無効にできます。

メモ: Microsoft Exchange、SQL または Active Directory で GRT を有効または無効にする場合、設定は VMware 仮想マシンと Hyper-V 仮想マシンの両方に適用されます。同じ設定を使わない場合は、シマンテック社はそれぞれの種類の仮想マシンに個別のバックアップジョブを設定することを推奨します。

メモ: Backup Exec は、非クラスタ、非分散型の構成の場合にのみ、個々の Exchange そして SQL 項目の個別リカバリをサポートします。

バックアップジョブの間に、Backup Exec はアプリケーションのメタデータを収集します。Backup Exec でメタデータを収集できない場合は、アプリケーションの個々の項目をリストアできません。ただし、そうでない場合はバックアップジョブは正常に完了することがあります。

Backup Exec は以下の状況ではメタデータを収集できません。

- アプリケーションで GRT が無効になっている。
- Backup Exec が仮想マシンに接続できない。
- 不正なクレデンシャルが仮想マシン用に入力された。

メモ: Backup Exec では仮想マシン上の VSS 対応アプリケーションのバックアップ時に、Microsoft Hyper-V ライターが使われます。Microsoft Hyper-V ライターは、データがストレージデバイスに移動される前にアプリケーションのログを切り捨てます。したがって、仮想マシン上のアプリケーションのアプリケーションログは、Microsoft Hyper-V を使っていると切り捨てられます。

p.1167 の「[仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護するための要件](#)」を参照してください。

仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護するための要件

Backup Exec は仮想マシンにインストールされる VSS 対応アプリケーションから個々の項目をバックアップおよびリストアできます。

以下の項目は仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory のデータを保護するために必要です。

- 仮想マシンはオンになっている必要があります。
- 仮想マシンには適切なクレデンシャルを入力しなければなりません。仮想マシンのクレデンシャルで VSS 対応アプリケーションにアクセスできることを確認してください。

- メディアサーバーはネットワーク名か IP アドレスを使用して仮想マシンに接続できる必要があります。
- Backup Exec Remote Agent for Windows Systems を仮想マシンにインストールする必要があります。
- ライセンスの正しい数を、仮想マシンで保護したいアプリケーションに入力する必要があります。
- 仮想コンピュータのオペレーティングシステムは VSS をサポートする必要があります。

p.1166 の「[Backup Exec で仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法](#)」を参照してください。

Microsoft Hyper-V のリストア選択について

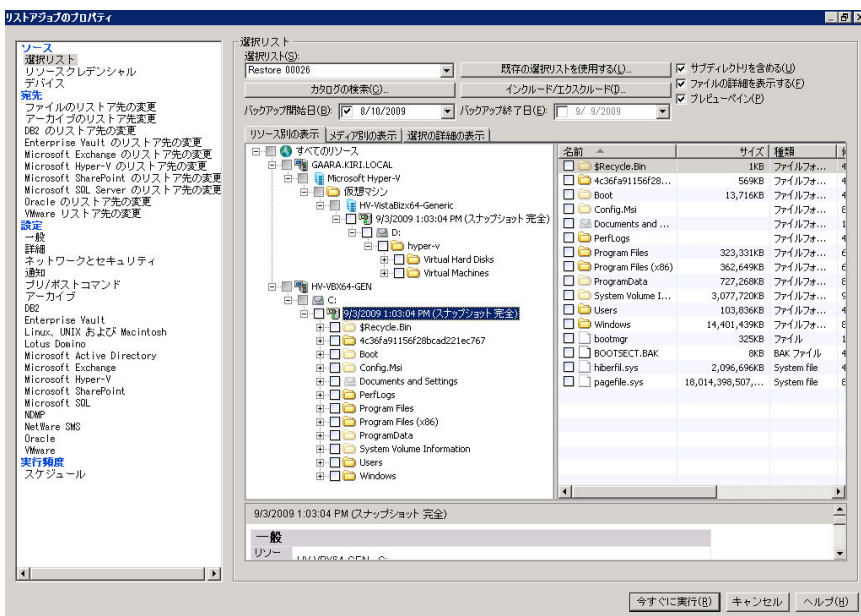
仮想マシンのデータを次のようにリストアできます。

- ディザスタリカバリのために完全な仮想マシンをリストアします。
- バックアップジョブに Granular Recovery Technology オプションを選択した場合、仮想マシンからバックアップされた個々のファイルまたはフォルダをリストアします。

メモ: Linux の仮想マシンは、.vhd レベルで完全にリストアされなければなりません。

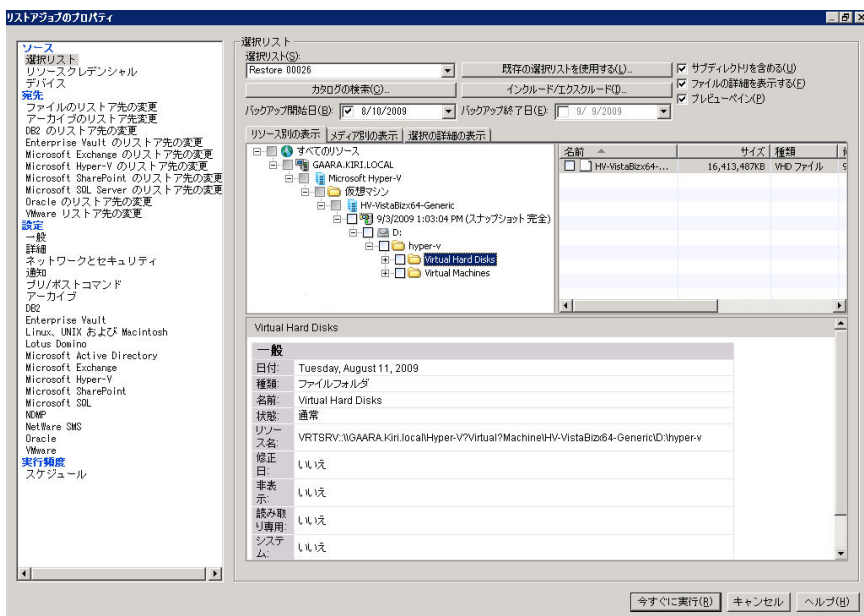
[リストア]ビューでは、GRT を有効にしてバックアップされた仮想マシンがその NetBIOS 名かコンピュータ名の下に表示されます。名前を展開すると、個々のファイルとフォルダが表示されます。

図 H-1 GRT を有効にしたリストア



仮想マシンは[リストア]ビューの[仮想マシン]の下にも表示されます。このビューには、表示名、または仮想マシンの作成時に指定した名前が表示されます。仮想マシンの表示名を展開すると、その内容が表示されます。表示名で仮想マシンを選択すると、仮想マシン全体をリカバリできます。

図 H-2 GRT を無効にしたリストア



Hyper-V ホストへのデータのリストア

Hyper-V ホストに設定情報をリストアするか、仮想マシンを元のホストにリストアするために、これらの手順に従ってください。

異なる Hyper-V ホストに仮想マシンをリストアしたい場合には、リストア先変更機能を使う必要があります。

p.1172 の「別のホストへの仮想マシンのリストア」を参照してください。

Hyper-V ホストにデータをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする項目を選択します。

p.1168 の「Microsoft Hyper-V のリストア選択について」を参照してください。

- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft Hyper-V]をクリックします。

- このリストアジョブに必要なオプションを選択します。
p.1171 の「Microsoft Hyper-V リストアオプション」を参照してください。
- リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。

Microsoft Hyper-V リストアオプション

Microsoft Hyper-V 用に作成する各リストアジョブに次のオプションを設定できます。

p.1170 の「Hyper-V ホストへのデータのリストア」を参照してください。

表 H-6 Microsoft Hyper-V リストアオプション

項目	説明
電源をオンにした仮想マシンを上書きする	電源がオンになっている仮想マシンをリストアします。 デフォルトでは、仮想マシンはリストアジョブの処理の前にオフになり、仮想マシンは上書きされます。電源がオンになっている仮想マシンが上書きされないようにする場合はこのオプションのチェックマークをはずします。このオプションのチェックマークが外され、仮想マシンが実行されている場合、ジョブは失敗します。リストアジョブを再び実行しようとする前に手動で仮想マシンの電源をオフにしなければなりません。
仮想マシンの電源をオンにしない	リストアジョブが完了した後仮想マシンをオフにしたままにします。
仮想マシンの電源をオンにして利用可能な保存状態から再開する	リストアジョブが完了した後仮想マシンを自動的にオンにします。仮想マシンはバックアップ時からの保存状態から操作を再開します。 メモ: このオプションは、保存状態を使用してバックアップされる仮想マシンにのみ適用します。オンラインバックアップされる仮想マシンには保存状態はありません。
仮想マシンの電源をオンにして利用可能な保存状態を破棄する	リストアジョブが完了した後仮想マシンを自動的にオンにします。仮想マシンは利用可能な保存状態を破棄します。 メモ: このオプションは、保存状態を使用してバックアップされる仮想マシンにのみ適用します。オンラインバックアップされる仮想マシンには保存状態はありません。

別のホストへの仮想マシンのリストア

別の Microsoft Hyper-V サーバーに仮想マシンをリストアできます。フラットファイルのリストア先を仮想マシンから Remote Agent for Windows Systems がインストールされているコンピュータに変更できます。

別のホストに仮想マシンをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする仮想マシンを選択します。
p.1168 の「[Microsoft Hyper-V のリストア選択について](#)」を参照してください。
- 4 必要なオプションを選択します。
p.1172 の「[\[Microsoft Hyper-V のリストア先の変更\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 6 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[\[Microsoft Hyper-V のリストア先の変更\]](#)をクリックします。

[Microsoft Hyper-V のリストア先の変更]オプション

異なる Microsoft Hyper-V ホストに仮想マシンをリストアするときに、次のオプションを設定できます。

p.1172 の「[別のホストへの仮想マシンのリストア](#)」を参照してください。

表 H-7 [Microsoft Hyper-V のリストア先の変更]オプション

項目	説明
Hyper-V セットのリストア先を変更する	別の場所に仮想マシンをリストアします。
リストア先サーバー	データをリストアする仮想サーバーの名前を指定します。
サーバーのログオンアカウント	データのリストア先の仮想サーバーのログオンアカウントを指定します。
リストア先ドライブ	データのリストア先を指定します。ローカルドライブとネットワークドライブを参照できます。

項目	説明
リストア先パス	<p>[リストア先ドライブ]フィールドに表示されているデバイス上のターゲットパスを指定します。元のディレクトリ構造を保持する場合は、[リストアジョブのプロパティ]の[設定]の[一般]ダイアログボックスで、[ツリー構造を保持する]オプションを選択する必要があります。</p> <p>p.600 の「リストアジョブの[一般]オプション」を参照してください。</p> <p>[ツリー構造を保持する]オプションを選択しない場合は、すべてのデータが、このフィールドで指定したパスにリストアされます。</p>
リストア先を別の Hyper-V ホストに変更して仮想マシンを登録する	<p>データのリストア先を仮想マシンから別のホストに変更します。仮想マシン全体がリストアされません。</p>
リストア先をフォルダに変更する	<p>ファイルセットのリストア先を変更します。リストアによって各ファイルに関連付けられたフォルダ階層が再作成されます。</p> <p>これらのファイルを次のいずれかの場所にリストアできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 同じ仮想サーバー ■ 別の仮想サーバー ■ 外部ハードディスクドライブ

Agent for Microsoft Hyper-V のデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定

すべての Microsoft Hyper-V のバックアップジョブとリストアジョブに対してインストール時に Backup Exec によって設定されるデフォルトオプションを使うことができます。または、自分自身のデフォルト設定を選択できます。個々のジョブに合わせてこれらのオプションを変更できます。

Agent for Microsoft Hyper-V のデフォルトのバックアップおよびリストアオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft Hyper-V]をクリックします。

- 3 必要なオプションを選択します。
 p.1174 の「[\[Microsoft Hyper-V\]のデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

[Microsoft Hyper-V]のデフォルトオプション

すべての Microsoft Hyper-V のバックアップジョブとリストアジョブに対してインストール時に Backup Exec によって設定されるデフォルトオプションを使用することができます。または、自分自身のデフォルト設定を選択できます。

p.1173 の「[Agent for Microsoft Hyper-V のデフォルトのバックアップおよびリストアオプションの設定](#)」を参照してください。

表 H-8 [Microsoft Hyper-V]のデフォルトオプション

項目	説明
バックアップ時に保存状態にある仮想マシンを除外する	オンラインバックアップをサポートしない、およびバックアップの開始時に実行状態であるすべてのオフライン仮想マシンをバックアップから除外します。
オフになっている仮想マシンをバックアップ	オフになった仮想マシンを Backup Exec でバックアップできるようにします。
Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT)を使用して、仮想マシンからの個々のファイルとフォルダのリストアを有効にする	完全バックアップから個々のファイルとフォルダをリストアできるようにします。 データをリストアしたい仮想マシンに Remote Agent for Windows Systems をインストールする必要があります。 Remote Agent for Windows Systems はデータのバックアップ対象の仮想マシンにはインストールする必要はありません。
編集	Microsoft Active Directory、Exchange および SQL 用に GRT の設定を変更できます。
Microsoft Active Directory	仮想マシン上の Microsoft Active Directory で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
Microsoft Exchange	仮想マシン上の Microsoft Exchange で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
Microsoft SQL	仮想マシン上の Microsoft SQL で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。

項目	説明
電源をオンにした仮想マシンを上書きする	<p>電源がオンになっている仮想マシンをリストアします。</p> <p>デフォルトでは、仮想マシンはリストアジョブの処理の前にオフになり、仮想マシンは上書きされます。電源がオンになっている仮想マシンが上書きされないようにする場合はこのオプションのチェックマークをはずします。このオプションのチェックマークが外され、仮想マシンが実行されている場合、ジョブは失敗します。リストアジョブを再び実行しようとする前に手動で仮想マシンの電源をオフにしなければなりません。</p>
仮想マシンの電源をオンにしない	<p>リストアジョブが完了した後仮想マシンをオフにしたままにします。</p>
仮想マシンの電源をオンにして利用可能な保存状態から再開する	<p>リストアジョブが完了した後仮想マシンを自動的にオンにします。仮想マシンはバックアップ時からの保存状態から操作を再開します。</p> <p>メモ:このオプションは、保存状態を使用してバックアップされる仮想マシンにのみ適用します。オンラインバックアップされる仮想マシンには保存状態はありません。</p>
仮想マシンの電源をオンにして利用可能な保存状態を破棄する	<p>リストアジョブが完了した後仮想マシンを自動的にオンにします。仮想マシンは利用可能な保存状態を破棄します。</p> <p>メモ:このオプションは、保存状態を使用してバックアップされる仮想マシンにのみ適用します。オンラインバックアップされる仮想マシンには保存状態はありません。</p>

高可用性仮想マシンのバックアップとリストアについて

可用性が高まるように仮想マシンを設定する場合、マシンはバックアップ選択リストの新しいノードに移動されます。クラスタ化された仮想マシンは[高可用性仮想マシン]ノードのクラスタ名の下に表示されます。クラスタ化されていない仮想マシンは[Microsoft Hyper-V]ノードに残ります。バックアップ選択を行うとき、Backup Exec は高可用性仮想マシンの存在をチェックします。高可用性仮想マシンが検出されると、Backup Exec はバックアップ用にそれらの仮想マシンを選択することをユーザーに想起させます。

リストア選択リストはバックアップ選択リストに類似しています。クラスタ化された仮想マシンはクラスタ名の下に表示されます。クラスタ化されていない仮想マシンは[Microsoft

Hyper-V]ノードの下に表示されます。高可用性仮想マシンは、他の仮想マシンの場合と同じようにリストアできます。仮想マシンはその高可用性を維持します。ただし別の**Hyper-V**ホストにリストア先を変更すると、仮想マシンはリストアジョブの完了時に高可用性ではなくなります。高可用性にするには、仮想マシンを再設定する必要があります。

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SharePoint

この付録では以下の項目について説明しています。

- [SharePoint Agent](#) について
- [SharePoint Agent](#) 使用上の必要条件
- [SharePoint Agent](#) のインストールについて
- バックアップ選択リストへの [SharePoint](#) のサーバーファームの追加
- [SharePoint](#) サーバーファームの名前の変更
- [\[Microsoft SharePoint のサーバーファーム\]](#)ノードからのファームの削除
- [SharePoint Web](#) サーバーと [Backup Exec](#) との通信の有効化または無効化
- [SharePoint Portal Server 2003](#) および [2007](#) のデフォルトオプションの設定
- [SharePoint Server 2007](#) および [Windows SharePoint Services 3.0](#) での [SharePoint Agent](#) の使用について
- [SharePoint Portal Server 2003](#) および [Windows SharePoint Services 2.0](#) での [SharePoint Agent](#) の使用について

SharePoint Agent について

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SharePoint (SharePoint Agent) はオプション製品で、Backup Exec のアドオンコンポーネントです。SharePoint Agent を使

用すると、ネットワークに接続された **Microsoft SharePoint** のバックアップおよびリストアを行うことができます。個別に管理したり、専用のハードウェアを使用せずに、**SharePoint** のバックアップをネットワークバックアップに統合することができます。

SharePoint Agent では、次の製品のインストールがサポートされます。

- **SharePoint Portal Server 2003**
- **SharePoint Server 2007**
- **Windows SharePoint Services 2.0 および 3.0**

p.1206 の「[SharePoint Portal Server 2003 および Windows SharePoint Services 2.0 での SharePoint Agent の使用について](#)」を参照してください。

p.1186 の「[SharePoint Server 2007 および Windows SharePoint Services 3.0 での SharePoint Agent の使用について](#)」を参照してください。

SharePoint Agent 使用上の必要条件

SharePoint Agent を使用するための必要条件を次に示します。

- **SharePoint Agent** は、メディアサーバーにインストールする必要があります。
- **Backup Exec Remote Agent for Windows Systems (Remote Agent)** は、保護対象の各リモート **SharePoint Portal Server** にインストールする必要があります。また、**SharePoint Server 2003/2007** の場合、**Remote Agent** はサーバーファーム内の各 **SQL** サーバーにインストールする必要があります。
- **SharePoint Portal Server** データのバックアップおよびリストアに使用するログオンアカウントクレデンシャルには、**SharePoint** コンポーネントがインストールされているサーバーのローカル管理者権限が必要です。また、ワークスペース内または下位互換のあるドキュメントライブラリ内の項目を個別にバックアップおよびリストアするには、ワークスペース内またはドキュメントライブラリ内でアクセスするすべてのフォルダに対して、**SharePoint** 内でのコーディネータの役割がアカウントに付与されている必要があります。
ワークスペース内または下位互換のあるドキュメントライブラリ内のフォルダに対する権限の付与について詳しくは **SharePoint Portal Server** のマニュアルを参照してください。
- シングルサインオンデータベースのバックアップおよびリストアに使用するログオンアカウントクレデンシャルは、**SharePoint Portal Server** の[シングルサインオン設定の管理]ページの[シングルサインオン設定]セクションにある[アカウント名]フィールドで指定したアカウント名またはグループのメンバーである必要があります。
- **Internet Information Services (IIS)** の権限が、データベースのバックアップおよびリストアに影響する可能性があります。バックアップおよびリストアに使用するログオンアカウントに、**IIS** サイトへのアクセス権限があることを確認してください。統合 **Windows** セキュリティは、**IIS** 権限の範囲内で使用できます。

次の URL で、互換性のあるオペレーティングシステム、プラットフォームおよびアプリケーションのリストを参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

SharePoint Agent のインストールについて

SharePoint Agent は、メディアサーバーにインストールする必要があります。

p.112 の「ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール」を参照してください。

p.123 の「リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール」を参照してください。

バックアップ選択リストへの SharePoint のサーバーファームの追加

ユーザー定義の選択として SharePoint のサーバーファームにショートカットを作成すると、バックアップ選択リストに表示されます。Backup Exec に公開する SharePoint のサーバーファームもバックアップ選択リストに表示されます。[バックアップジョブのプロパティ] ダイアログボックスの [Microsoft SharePoint のサーバーファーム] ノードの下にバックアップするファームが表示されていない場合は、そのファームを手動でリストに追加できます。

Backup Exec は、新しいサーバーファームを [すべてのリソース] の下にある [Microsoft SharePoint のサーバーファーム] ノードに追加し、指定された Web サーバーに接続して残りのファームトポロジーを取得します。

サーバーファームの SharePoint リソースを保護するためのジョブを作成する場合は、そのサーバーファームノードからバックアップする項目を選択します。また、SharePoint データベースを処理する Microsoft SQL インスタンスごとに、デフォルトの Microsoft SQL データベース (master、model、msdb、pubs) をバックアップします。

サーバーファームを [Microsoft SharePoint のサーバーファーム] に追加すると、Microsoft SQL インスタンスで処理される SharePoint データベースは、Microsoft SQL Server のリソースノードからの直接のバックアップ用に選択することができなくなります。

SharePoint サーバーのファームトポロジーを Microsoft SharePoint サーバーファームに追加した後にこれを変更した場合は、サーバーファームノードを参照して、Backup Exec が変更した内容を認識して保存できるようにする必要があります。

バックアップ選択リストに SharePoint サーバーファームを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの [バックアップ] の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ] をクリックします。

- 3 選択ツリーで[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]を右クリックして、[サーバーファームの追加]をクリックします。
- 4 [Webサーバー名]フィールドに、追加するファームに属する Web サーバーの名前を入力します。
- 5 [サーバーファーム名]フィールドに、ファームの名前を入力するか、デフォルトの名前を使用します。ここで入力した名前が[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]ノードの下に表示されます。選択ツリーには、サーバーファーム名の後に Backup Exec が検出した Web サーバーがカッコで囲んで表示されます。
ファーム名には、「~^*(){}¥;:'", < > / ?」の文字は使用できません。
- 6 [OK]をクリックします。

サーバーファームの追加オプション

バックアップ選択リストに Microsoft SharePoint サーバーファームを手動で追加できます。

p.1179の「バックアップ選択リストへの SharePoint のサーバーファームの追加」を参照してください。

表 I-1 サーバーファームの追加オプション

項目	説明
Web サーバー名	サーバーファームに属する Web サーバー名を指定します。
サーバーファーム名	サーバーファームの名前を指定します。ここで入力した名前がバックアップ選択リストの [Microsoft SharePoint のサーバーファーム] の下に表示されます。

SharePoint サーバーファームの管理オプション

ユーザー定義の選択として SharePoint のサーバーファームにショートカットを作成すると、バックアップ選択リストに表示されます。Backup Exec に公開する SharePoint のサーバーファームもバックアップ選択リストに表示されます。バックアップ選択リストのあらゆるサーバーファームのプロパティを編集できます。また、サーバーファームを使わなくなった場合は、バックアップ選択リストから削除できます。

p.1182の「SharePoint Web サーバーと Backup Exec との通信の有効化または無効化」を参照してください。

p.1181の「SharePoint サーバーファームの名前の変更」を参照してください。

p.1182の「[Microsoft SharePointのサーバーファーム]ノードからのファームの削除」を参照してください。

表 I-2 SharePoint サーバーファームの管理オプション

項目	説明
削除	バックアップ選択リストの[Microsoft SharePointのサーバーファーム]からサーバーファームを削除します。
プロパティ	サーバーファームのプロパティを編集できます。

サーバーファームのプロパティ

Backup Exec がサーバーファームトポロジーの取得を試行するときに、Backup Exec がサーバーファーム内の 1 つ以上の Web サーバーと通信できないようにすることができます。

p.1182の「SharePoint Web サーバーと Backup Exec との通信の有効化または無効化」を参照してください。

表 I-3 [サーバーファームのプロパティ]オプション

項目	説明
サーバーファーム名	Backup Exec との通信を無効にする Web サーバーを含むサーバーファーム名を指定します。
Web サーバー	Backup Exec との通信を無効にする Web サーバーにチェックマークを付けます。通信を有効にするには、チェックマークをはずします。

SharePoint サーバーファームの名前の変更

ファームを追加すると、Backup Exec によってファームにデフォルトの名前が作成されます。このファームのデフォルトの名前は、意味のある名前に変更できます。

ファームの名前を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 選択ツリーで[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]を右クリックして、[サーバーファームの管理]をクリックします。
- 4 名前を変更するファームを選択して、[プロパティ]をクリックします。

- 5 [サーバーファーム名]フィールドに新しいファーム名を入力します。ここで入力した名前が[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]ノードの下に表示されます。選択ツリーには、サーバーファーム名の後に Backup Exec が検出した Web サーバーがカッコで囲んで表示されます。
ファーム名には、「~^*(){}¥;:'", <>/?」の文字は使用できません。
- 6 [OK]をクリックして、[閉じる]をクリックします。

[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]ノードからのファームの削除

使用されていないまたは有効でなくなったサーバーファームは、[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]ノードから削除することができます。

メモ: ファーム内の Web サーバーとして使用されているサーバーに Backup Exec がインストールされている場合、そのファームは削除できません。

[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]ノードからファームを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 選択ツリーで[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]を右クリックして、[サーバーファームの管理]をクリックします。
- 4 削除するファームを選択して、[削除]をクリックします。

SharePoint Web サーバーと Backup Exec との通信の有効化または無効化

Backup Exec は、ファームトポロジーを検出するために SharePoint サーバーファームに属する Web サーバーと通信を行います。Backup Exec が利用不可能な状態の Web サーバーと通信しようとする、この処理に時間がかかる場合があります。ファーム内の特定の Web サーバーが一定期間使用できなくなることがわかっている場合は、その Web サーバーと Backup Exec との通信を無効にすることができます。

Web サーバーと Backup Exec との通信を有効または無効にする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 選択ツリーで[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]を右クリックして、[サーバーファームの管理]をクリックします。

- 4 有効または無効にする Web サーバーを含むファームを選択して、[プロパティ]をクリックします。
- 5 Backup Exec が Web サーバーと通信できないようにするには、その Web サーバー名の横にあるチェックボックスをオフにします。Web サーバーが Backup Exec と通信できるようにする場合は、Web サーバー名の横にあるチェックボックスをオンにします。

Web サーバーとの通信が無効である場合、Backup Exec は [Microsoft SharePoint] のサーバーファームノードの下にあるサーバーファーム名からその Web サーバーの名前を削除します。
- 6 [OK] をクリックして、[閉じる] をクリックします。

SharePoint Portal Server 2003 および 2007 のデフォルトオプションの設定

SharePoint Portal Server 2003 以上のすべてのバックアップおよびリストアジョブにデフォルトのオプションを使用するように設定できます。

SharePoint Portal Server 2003 以上のデフォルトオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの [オプション] をクリックします。
- 2 [プロパティ] ペインの [ジョブのデフォルト設定] の下にある [Microsoft SharePoint] をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.1183 の「[Microsoft SharePoint のデフォルトオプション](#)」を参照してください。

Microsoft SharePoint のデフォルトオプション

SharePoint Portal Server 2003 以上のすべてのバックアップおよびリストアジョブにデフォルトのオプションを使用するように設定できます。

p.1183 の「[SharePoint Portal Server 2003 および 2007 のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

表 I-4 Microsoft SharePoint のデフォルトオプション

項目	説明
バックアップ方式	<p>デフォルトのバックアップ方式として次のいずれかを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - データベース全体をバックアップ データベース全体をバックアップします。 ■ 差分 - データベースの変更のみバックアップ 最後の完全バックアップ以降にデータベースに加えられた変更内容のみをバックアップします。インデックスデータベースまたはドキュメントライブラリをバックアップする場合は、差分バックは使用できません。これらのリソースをバックアップするには、完全バックアップを使用する必要があります。 ■ ログ - トランザクションログをバックアップして切り捨てる トランザクションログに含まれているデータをバックアップします。この方式はデータベースデータをバックアップしません。トランザクションログのバックアップ後に、コミット済みのトランザクションの削除(切り捨て)が行われます。
Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT)を使用して、データベースのバックアップで個々のドキュメントのリストアを有効にする(完全バックアップでのみ利用可能)	<p>データベースのバックアップで個々のドキュメントのリストアを有効にします。このオプションは、完全バックアップを実行する場合のみ使用できます。バックアップ方式として[差分 - データベースの変更のみバックアップ]を選択した場合、このオプションは使用できません。GRT 対応バックアップジョブを実行する場合は、SharePoint サーバーに現在のバージョンの Remote Agent for Windows Systems をインストールする必要があります。</p> <p>p.305 の「Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法」を参照してください。</p>
Microsoft SharePoint で使用される Microsoft SQL データベースをバックアップする前に一貫性チェックを実行する	<p>Microsoft SharePoint で使用する Microsoft SQL データベースをバックアップする前に、インデックスを含む完全な一貫性チェックを実行します。</p>
一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する	<p>一貫性チェックでエラーが検出された場合でもバックアップ処理を続行します。</p>
リストアしたデータベースをオンラインにする	<p>リストア後にデータベースをオンラインにします。</p>
以前のデータベースリンクに再接続する	<p>ポータルサイトまたは Windows SharePoint Services サイトをリストアする場合、リストアされたデータベースと対応するサイトとの接続を再確立します。</p>

項目	説明
既存の Internet Information Services (IIS) Web サイトとアプリケーションプールを保持する (SharePoint 2007 のみ)	リストアする SharePoint Web アプリケーションの Web サイトとアプリケーションプールがすでに IIS に存在している場合、これらが保持されます。このオプションを選択しないと、Web サイトとアプリケーションプールはリストア時に IIS から削除されます。Web サイトとアプリケーションプールは、削除された後で、SharePoint が指定するデフォルトの場所に再作成されます。これは SharePoint 2007 のみのオプションです。
バージョン管理がリストア先で有効な場合	バージョン管理が個々の項目のリストア先で有効になっている場合は、次のオプションから選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 新バージョンとして追加する Backup Exec は既存の項目を新しいバージョンとしてリストアし、既存の項目を最新のバージョンにします。 ■ 項目が存在する場合はスキップする リストア先に同一の項目が存在する場合、Backup Exec は項目をリストアしません。Backup Exec はファイルがスキップされたことをジョブのログに記録します。 ■ 既存の項目をリストアする Backup Exec は既存の項目をリストアした項目に置き換えます。
バージョン管理がリストア先で無効の場合	バージョン管理が個々の項目のリストア先で有効になっていない場合は、次のオプションから選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 項目が存在する場合はスキップする リストア先に同一の項目が存在する場合、Backup Exec は項目をリストアしません。Backup Exec はファイルがスキップされたことをジョブのログに記録します。 ■ 既存の項目をリストアする Backup Exec は既存の項目をリストアした項目に置き換えます。
最新バージョンの項目のみリストアする	最新バージョンの項目のみリストアします。

項目	説明
セキュリティ情報を含む	<p>項目とともに適用可能なセキュリティ情報をリストアします。</p> <p>リストアする SharePoint 項目に基づいて異なるレベルのセキュリティをリストアできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サイト - ユーザー情報、SharePoint グループ情報およびセキュリティ ACL がトップレベルサイトにリストアされます ■ サブサイト - セキュリティ ACL がリストアされます ■ リスト - セキュリティ ACL およびその他のセキュリティ関連情報がリストアされます ■ リスト項目 - 詳細なセキュリティ情報は、Microsoft SharePoint Server 2007 および Windows SharePoint Services 3.0 の個々のリスト項目にのみリストアされます

SharePoint Server 2007 および Windows SharePoint Services 3.0 での SharePoint Agent の使用について

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SharePoint (SharePoint Agent) では、Microsoft Office SharePoint Server 2007 および Windows SharePoint Services 3.0 がサポートされています。

Backup Exec では、[バックアップ選択] ペインに SharePoint リソースの階層ツリービューが表示されます。

[バックアップ選択] ペインの Microsoft SharePoint のサーバーファームには、ネットワーク上の各サーバーファームのトポロジーの論理ビューが表示されます。

図 I-1 Microsoft Office SharePoint Server 2007 の例 ([バックアップ選択] ペイン - [リソース別の表示] タブ)



図 I-2 SharePoint バージョン混在の例 ([バックアップ選択] ペイン - [リソース別の表示] タブ)



バックアップ選択リストへの SharePoint 2007 サーバーファームの追加について

Microsoft Office SharePoint Server 2007 サーバーファームをバックアップする前に、バックアップ選択リストにファームを追加する必要があります。

p.1179の「バックアップ選択リストへの [SharePoint](#) のサーバーファームの追加」を参照してください。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 または Windows SharePoint Services 3.0 ファームのバックアップ

Microsoft Office SharePoint Server 2007 または Windows SharePoint Services 3.0 ファームをバックアップするには、次の手順を実行します。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 または Windows SharePoint Services 3.0 ファームをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択] ペインで、[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]を展開します。
- 4 バックアップする Microsoft Office SharePoint Server 2007 コンポーネントを含むサーバーファームを展開します。
- 5 バックアップする SharePoint リソースを選択します。
p.321の「バックアップジョブの[選択リスト]オプション」を参照してください。
- 6 [バックアップジョブのプロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]をクリックします。

- 7 必要なオプションを選択します。
p.1189 の「[Microsoft SharePoint のバックアップオプション](#)」を参照してください。
- 8 必要に応じて、[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する

後で実行するジョブ 次に示す順序で操作を実行します。
をスケジュールする

- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
- [サブミット]をクリックします。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

Microsoft SharePoint サーバーファームでの個々の SharePoint 2007 Web アプリケーションのバックアップ

個々の Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションをバックアップするには、次の手順を実行します。

Microsoft SharePoint サーバーファームで個々の SharePoint 2007 Web アプリケーションをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [バックアップ選択]ペインで、[Microsoft SharePoint のサーバーファーム]を展開します。
- 4 バックアップする SharePoint Web アプリケーションを含むサーバーファームを展開します。
- 5 バックアップする Web アプリケーションを含む[Windows SharePoint Services Web Application]を展開します。
- 6 バックアップする Web アプリケーションを選択します。
- 7 [バックアップジョブのプロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]をクリックします。
- 8 必要なオプションを選択します。

p.1189 の「[Microsoft SharePoint のバックアップオプション](#)」を参照してください。

- 9 必要に応じて、[バックアップジョブのプロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択します。
- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐに行す [今すぐに行す]をクリックします。

後で実行するジョブをスケジュールする 次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定します。
 - [サブミット]をクリックします。
- p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

Microsoft SharePoint のバックアップオプション

バックアップジョブを実行するとき SharePoint のための特定のオプションを設定できます。

- p.1207 の「[SharePoint 2003 からのリソースのバックアップ](#)」を参照してください。
- p.1187 の「[Microsoft Office SharePoint Server 2007 または Windows SharePoint Services 3.0 ファームのバックアップ](#)」を参照してください。
- p.1188 の「[Microsoft SharePoint サーバーファームでの個々の SharePoint 2007 Web アプリケーションのバックアップ](#)」を参照してください。

表 I-5 Microsoft SharePoint のバックアップオプション

項目	説明
バックアップ方式	<p>次のバックアップ方式から選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - データベース全体をバックアップ データベース全体をバックアップします。 ■ 差分 - データベースの変更のみバックアップ 最後の完全バックアップ以降にデータベースに加えられた変更内容のみをバックアップします。インデックスデータベースまたはドキュメントライブラリをバックアップする場合は、差分バックは使用できません。これらのリソースをバックアップするには、完全バックアップを使用する必要があります。 ■ ログ - トランザクションログをバックアップして切り捨てる トランザクションログに含まれているデータをバックアップします。この方式はデータベースデータをバックアップしません。トランザクションログのバックアップ後に、コミット済みのトランザクションの削除(切り捨て)が行われます。

項目	説明
Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、データベースのバックアップで個々のドキュメントのリストアを有効にする (完全バックアップでのみ利用可能)	データベースバックアップからの個々のドキュメント、イメージ、サイト、副サイト、リスト、リストの項目のリストアを有効にします。このオプションは、完全バックアップを実行する場合のみ使用できます。バックアップ方式として[差分 - データベースの変更のみバックアップ]を選択した場合、このオプションは使用できません。GRT 対応バックアップジョブを実行する場合は、SharePoint サーバーに現在のバージョンの Remote Agent for Windows Systems をインストールする必要があります。 p.305 の「 Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法 」を参照してください。
SharePoint ファームのトポロジーが設定されている場合はロックを解除する (SharePoint 2003 のみ)	バックアップまたはリストア操作を実行する前に SharePoint ファームトポロジーのロックを解除します。別のアプリケーションがトポロジーをロックしている可能性があるため、このオプションを選択する前に SharePoint 管理者に確認してください。
Microsoft SharePoint で使用される Microsoft SQL データベースをバックアップする前に一貫性チェックを実行する	Microsoft SharePoint で使用する Microsoft SQL データベースをバックアップする前に、インデックスを含む完全な一貫性チェックを実行します。
一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する	一貫性チェックに失敗した場合でもバックアップ処理を続行します。

SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて

次の SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースをリストアできます。

- Web アプリケーションとそれに関連するデータベース。トポロジーを保持するためにすべての Web アプリケーションデータベースを一緒にリストアすることをお勧めします。
- ライブラリに含まれている個別のドキュメント。
- サイトおよびサブサイト。
データベースの完全バックアップから個別のオブジェクトとそのバージョンをリストアできます。
- リストおよびリストの項目。

データベースの完全バックアップから個別のオブジェクトとそのバージョンをリストアできます。

リストおよびリストの項目について詳しくは **Microsoft SharePoint** のマニュアルを参照してください。

- 設定データベース。設定データベースには、**SharePoint Server** ファームに関するすべての設定情報が格納されています。このデータベースのリストアは十分に注意して行ってください。バックアップからのリストアの前にファームトポロジーに加えられた変更はすべて失われます。設定データベースは、元の場所にのみリストアできます。
- シングルサインオンデータベース。シングルサインオンデータベースは、元の場所にのみリストアできます。

p.1191 の「[SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストア](#)」を参照してください。

p.1192 の「[データベースの完全バックアップからの個々の SharePoint 2007 項目のリストア](#)」を参照してください。

p.1194 の「[SharePoint 2007 ドキュメントライブラリ \(Web Storage System ベース\) のリストア](#)」を参照してください。

p.1194 の「[ドキュメントライブラリ \(Web Storage System ベース\) バックアップからの旧バージョンの SharePoint 2007 ドキュメントのリストア](#)」を参照してください。

p.1195 の「[Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダのリストア](#)」を参照してください。

p.1196 の「[Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションの元の場所へのリストア](#)」を参照してください。

SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストア

SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースをリストアできます。

p.1190 の「[SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて](#)」を参照してください。

SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする **SharePoint** コンポーネントを含むサーバーファームを展開します。
- 4 リストアする **SharePoint** リソースを展開します。
- 5 リストアする **SharePoint** リソースのバックアップセットを選択します。
- 6 [リストアジョブのプロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]をクリックします。

- 7 必要なオプションを選択します。
p.1197 の「[Microsoft SharePoint のリストアオプション](#)」を参照してください。
- 8 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
実行する

後で実行するジョブ 次に示す順序で操作を実行します。
をスケジュールする

- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定します。
 - [サブミット]をクリックします。
- p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

データベースの完全バックアップからの個々の SharePoint 2007 項目のリストア

バックアップジョブの実行時に次のオプションを選択した場合は、SharePoint データベースの完全バックアップから個別のドキュメント、イメージ、サイト、副サイト、リストおよびリストの項目をリストアできます。

Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT)を使用して、データベースのバックアップで個々のドキュメントのリストアを有効にする (完全バックアップでのみ利用可能)

p.1190 の「[SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて](#)」を参照してください。

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

個々のドキュメントのリストアを有効にするオプションは、差分バックアップジョブでは使用できません。

データベースの完全バックアップから個々のドキュメントをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]タブで、リストアする個々のドキュメントが存在する Web アプリケーションを含むサーバーファームを展開します。
- 4 Windows SharePoint サービスアプリケーションを展開します。

- 5 ドキュメントのリストア元のコンテンツデータベースを含む Web アプリケーションを展開します。
- 6 リストアするドキュメントを含むコンテンツデータベースを展開します。
- 7 リストアするドキュメントを含むバックアップセットを展開します。
- 8 コンテンツデータベースを展開します。
- 9 リストアするドキュメントを含むフォルダを展開します。
- 10 結果ペインで、リストアするドキュメントを選択します。
- 11 [リストアジョブのプロパティ] ペインの [設定] の下にある [Microsoft SharePoint] をクリックします。
- 12 次のいずれかを実行します。

バージョン管理がリストア先で有効な場合

次のオプションのいずれかを選択します。

- 新バージョンとして追加する
Backup Exec は既存の項目を新しいバージョンとしてリストアし、既存の項目を最新のバージョンにします。
- 項目が存在する場合はスキップする
 リストア先に同一の項目が存在する場合、**Backup Exec** は項目をリストアしません。**Backup Exec** はファイルがスキップされたことをジョブのログに記録します。
- 既存の項目をリストアする
Backup Exec は既存の項目をリストアした項目に置き換えます。

バージョン管理がリストア先で無効の場合

次のオプションのいずれかを選択します。

- 項目が存在する場合はスキップする
 リストア先に同一の項目が存在する場合、**Backup Exec** は項目をリストアしません。**Backup Exec** はファイルがスキップされたことをジョブのログに記録します。
- 既存の項目をリストアする
Backup Exec は既存の項目をリストアした項目に置き換えます。

- 13 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ] ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 14 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する場合

後で実行するジョブのスケジュールを設定する場合

- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定します。
 - [サブミット]をクリックします。
- p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

SharePoint 2007 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) のリストア

個別の SharePoint ドキュメントは、常に、リストアに使用するログオンアカウントクレデンシヤルにチェックアウトされた状態で、SharePoint ドキュメントライブラリにリストアされます。このドキュメントは、そのユーザーがチェックインまたは公開すると、他のユーザーが使用できるようになります。

p.1190 の「[SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて](#)」を参照してください。

公開またはチェックインされているドキュメントに上書きリストアしようとする、リストアは失敗します。リストアに使用するログオンアカウントクレデンシヤルと異なるユーザーにチェックアウトされているドキュメントに上書きリストアしようとする、リストアは失敗します。

SharePoint 2007 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) をリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする SharePoint ドキュメントライブラリデータを選択します。
- 4 [プロパティ]ペインで他のリストアオプションを設定するか、リストアジョブを開始します。

ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) バックアップからの旧バージョンの SharePoint 2007 ドキュメントのリストア

ドキュメントライブラリのルートにある SHADOW フォルダには、バックアップの時点でドキュメントライブラリに存在したドキュメントの旧バージョンが格納されています。ドキュメントライブラリバックアップに SHADOW フォルダを含めるように選択すると、ドキュメントの旧バージョンにアクセスできるようになります。ただし、旧バージョンを直接ドキュメントライブ

ラリにリストアすることはできません。旧バージョンのドキュメントは、別の場所にリストアしてから、手動でドキュメントライブラリにコピーする必要があります。

p.1190 の「[SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて](#)」を参照してください。

ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) バックアップから旧バージョンの SharePoint 2007 ドキュメントをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアするドキュメントを含む SharePoint ドキュメントライブラリを検索して選択します。
- 4 バックアップセットの SHADOW フォルダを展開して、リストアするドキュメントを選択します。
- 5 個別のドキュメントのリストア先をファイルパスに変更します。

p.1202 の「[ファイルパスへの個別の SharePoint 2007 項目のリストア先の変更](#)」を参照してください。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダのリストア

Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダをリストアできます。

p.1190 の「[SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて](#)」を参照してください。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダをリストアするには、次の手順を実行します。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする共有サービスプロバイダを含むサーバースタックを展開します。
- 4 リストアする共有サービスプロバイダのノードを展開します。
- 5 リストアする共有サービスプロバイダのすべてのコンポーネントのバックアップセットを選択します。

共有サービスプロバイダのすべてのコンポーネントを一緒にリストアすることをお勧めします。

- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]をクリックします。
- 7 [リストアしたデータベースをオンラインにする]チェックボックスを選択します。

- 8 [以前のデータベースリンクに再接続する] チェックボックスを選択します。
- 9 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ] ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 10 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行] をクリックします。
実行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ] ペインの [実行頻度] の下にある [スケジュール] をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定します。
 - [サブミット] をクリックします。
- p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションの元の場所へのリストア

Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションを元の場所にリストアできます。

p.1190 の「[SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて](#)」を参照してください。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションを元の場所にリストアするには、次の手順を実行します。

メモ: Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションをリストアする場合、Web アプリケーションのコンテンツデータベースに含まれるドキュメントはすべて上書きされます。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションを元の場所にリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの [リストア] の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ] をクリックします。
- 3 リストアする Web アプリケーションを含むサーバーファームを展開します。
- 4 Windows SharePoint サービスアプリケーションを展開します。
- 5 リストアする Web アプリケーションを展開します。

- 6 コンテンツデータベースを展開し、リストアするコンテンツデータベースを含むバックアップセットを選択します。

Web アプリケーションに複数のコンテンツデータベースが含まれる場合は、他のコンテンツデータベースを展開して、それらのデータベースの対応するバックアップセットも同様に選択します。
- 7 [リストアジョブのプロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]をクリックします。
- 8 [リストアしたデータベースをオンラインにする]にチェックマークを付けます。
- 9 [以前のデータベースリンクに再接続する]にチェックマークを付けます。
- 10 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 11 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定します。
 - [サブミット]をクリックします。
- p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

Microsoft SharePoint のリストアオプション

バックアップジョブを実行するとき SharePoint のための特定のオプションを設定できません。

SharePoint データをリストアする為の手順はリストアするデータの種類によって変わります。

- p.1209 の「[SharePoint 2003 リソースのリストア](#)」を参照してください。
- p.1211 の「[SharePoint 2003 ドキュメントライブラリ \(Web Storage System ベース\) のリストア](#)」を参照してください。
- p.1212 の「[ドキュメントライブラリ \(Web Storage System ベース\) バックアップからの旧バージョンの SharePoint 2003 ドキュメントのリストア](#)」を参照してください。
- p.1210 の「[データベースの完全バックアップからの個別の SharePoint 2003 項目 \(Microsoft SQL Server ベース\) のリストア](#)」を参照してください。

- p.1191 の「[SharePoint Server 2007 と SharePoint Services 3.0 リソースのリストア](#)」を参照してください。
- p.1195 の「[Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダのリストア](#)」を参照してください。
- p.1196 の「[Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションの元の場所へのリストア](#)」を参照してください。
- p.1194 の「[SharePoint 2007 ドキュメントライブラリ \(Web Storage System ベース\) のリストア](#)」を参照してください。
- p.1194 の「[ドキュメントライブラリ \(Web Storage System ベース\) バックアップからの旧バージョンの SharePoint 2007 ドキュメントのリストア](#)」を参照してください。
- p.1192 の「[データベースの完全バックアップからの個々の SharePoint 2007 項目のリストア](#)」を参照してください。

表 I-6 Microsoft SharePoint のリストアオプション

項目	説明
リストアしたデータベースをオンラインにする	リストア後にデータベースをオンラインにします。
以前のデータベースリンクに再接続する	ポータルサイトまたは Windows SharePoint Services サイトをリストアする場合、リストアされたデータベースと対応するサイトとの接続を再確立します。
SharePoint ファームのトポロジが設定されている場合はロックを解除する (SharePoint 2003 のみ)	バックアップまたはリストア操作を実行する前に SharePoint ファームトポロジのロックを解除します。別のアプリケーションがトポロジをロックしている可能性があるため、このオプションを選択する前に SharePoint 管理者に確認してください。これは SharePoint 2003 のみのオプションです。
既存の Internet Information Services (IIS) Web サイトとアプリケーションプールを保持する (SharePoint 2007 のみ)	リストアする SharePoint Web アプリケーションの Web サイトとアプリケーションプールがすでに IIS に存在している場合、これらが保持されます。このオプションを選択しないと、Web サイトとアプリケーションプールはリストア時に IIS から削除されます。Web サイトとアプリケーションプールは、削除された後で、SharePoint が指定するデフォルトの場所に再作成されます。これは SharePoint 2007 のみのオプションです。

項目	説明
バージョン管理がリストア先で有効な場合	<p>バージョン管理が個々の項目のリストア先で有効になっている場合は、次のオプションから選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新バージョンとして追加する Backup Exec は既存の項目を新しいバージョンとしてリストアし、既存の項目を最新のバージョンにします。 ■ 項目が存在する場合はスキップする リストア先に同一の項目が存在する場合、Backup Exec は項目をリストアしません。Backup Exec はファイルがスキップされたことをジョブのログに記録します。 ■ 既存の項目をリストアする Backup Exec は既存の項目をリストアした項目に置き換えます。
バージョン管理がリストア先で無効の場合	<p>バージョン管理が個々の項目のリストア先で有効になっていない場合は、次のオプションから選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 項目が存在する場合はスキップする リストア先に同一の項目が存在する場合、Backup Exec は項目をリストアしません。Backup Exec はファイルがスキップされたことをジョブのログに記録します。 ■ 既存の項目をリストアする Backup Exec は既存の項目をリストアした項目に置き換えます。
最新バージョンの項目のみリストアする	<p>最新バージョンの項目のみリストアします。</p>
セキュリティ情報を含む	<p>項目とともに適用可能なセキュリティ情報をリストアします。 リストアする SharePoint 項目に基づいて異なるレベルのセキュリティをリストアできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サイト - ユーザー情報、SharePoint グループ情報およびセキュリティ ACL がトップレベルサイトにリストアされます ■ サブサイト - セキュリティ ACL がリストアされます ■ リスト - セキュリティ ACL およびその他のセキュリティ関連情報がリストアされます

SharePoint 2007 のリストア先の変更

ファーム内の Web サーバーに存在するサイトにリストア先を変更するには、次の手順を実行します。

メモ: 個別のリストアジョブで完全または差分バックアップセットをリストアする場合は、最後のジョブを除くすべてのジョブでこれらのオプションをオフにしてください。正しい順序の最後のリストアジョブでは、これらのオプションを選択してください。すでに使用されているメディアの挿入を求めるメッセージが表示される場合があります。

リストア先を変更したリストアジョブの完了後にデータベースをオンラインにするには、[Microsoft SharePoint] 設定で [リストアしたデータベースをオンラインにする] オプションと [以前のデータベースリンクに再接続する] オプションが選択されていることを確認します。また、ポータルサイトまたは Windows SharePoint Services サイトをリストアする場合は、これらのオプションによって、リストアされたデータベースと対応するサイトとの接続が再確立されます。

SharePoint 2007 のリストア先を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの [リストア] の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ] をクリックします。
- 3 リストアする SharePoint リソースを選択します。
p.598 の [「リストアジョブの \[選択リスト\] オプション」](#) を参照してください。
設定データベースおよびシングルサインオンデータベースは、元の場所にのみリストアできます。
- 4 [プロパティ] ペインの [宛先] の下にある [Microsoft SharePoint のリストア先の変更] を選択します。
- 5 [Microsoft SharePoint セットのリストア先を変更する] にチェックマークを付けます。
- 6 [SharePoint 2003 ポータルサイトまたは SharePoint 2007 Web アプリケーション] をクリックします。
- 7 [URL または Web アプリケーション名] フィールドで、データのリストア先のサイトの URL を入力します。
たとえば、<http://portalsite1> または <https://portalsite1> と入力します。
- 8 [フロントエンド Web サーバー名] フィールドで、サイトが存在する Web サーバーの名前を入力します。
リストアジョブを実行する前に、ソースサイトと同じデータベース構造を持つターゲットの SharePoint Portal Server 2007 ポータルサイトまたは Windows SharePoint Services サイトを、指定された Web サーバーに作成しておく必要があります。
- 9 次のいずれかを実行します。
 - 表示されるデフォルトのログオンアカウントを使用します。

- [変更]をクリックして、別のログオンアカウントを選択します。
- 10 [プロパティ]ペインで他のリストアオプションを設定するか、リストアジョブを開始します。

別のドキュメントライブラリへの SharePoint 2007 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) データのリストア先の変更

リストア先を変更して SharePoint 2007 ドキュメントライブラリデータをリストアするには、リストア先のサーバーに SharePoint Portal Server ソフトウェアがインストールされている必要があります。元のドキュメントライブラリ内のフォルダがリストア先のドキュメントライブラリに存在しない場合は、リストア時に作成されます。

注意: SharePoint ドキュメントライブラリデータをリストアするときに、リストアするドキュメントと同じ名前のドキュメントがリストア先に存在すると、リストアジョブの上書きプロパティの設定によっては、そのドキュメントは上書きされます。

SharePoint 2007 ドキュメントライブラリデータのリストア先を別のドキュメントライブラリに変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする SharePoint ドキュメントライブラリデータを検索して選択します。
- 4 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[Microsoft SharePoint のリストア先の変更]をクリックします。
- 5 [Microsoft SharePoint セットのリストア先を変更する]にチェックマークを付けます。
- 6 [個々の SharePoint サイト、ドキュメント、リストまたは項目]をクリックします。
- 7 [ワークスペースまたはドキュメントライブラリ (Web Storage System ベースのみ) のリストア先を変更する]をクリックします。
- 8 [リストア先サーバー]フィールドに、リストア先の SharePoint Server の名前を入力します。
 「¥¥servername」の書式を使用します。
- 9 [リストアするワークスペースまたはドキュメントライブラリ]フィールドに、リストア先のドキュメントライブラリの名前を入力します。
 まだリストア先のドキュメントライブラリを作成していない場合は、リストアジョブを開始する前に作成する必要があります。
- 10 表示されているデフォルトのログオンアカウントを使用するか、[変更]をクリックして選択します。

- 11 [プロパティ]ペインで、設定の必要なプロパティを選択します。
- 12 リストアジョブを開始します。

ファイルパスへの個別の SharePoint 2007 項目のリストア先の変更

ドキュメントライブラリにアップロードされているか、リストの項目に結び付けられているイメージやドキュメントなどの **SharePoint** のファイルベースのデータのリストア先を変更できます。個々の項目とそのバージョンは、別のコンテンツデータベースではなく、ファイルの場所のみリストア先を変更できます。個々の項目をファイルパスにリストアするには、次の手順を実行します。

メモ: ファイルパスに項目をリストアする場合は、**SharePoint** のセキュリティ情報をリストアできません。

個々の SharePoint 2007 項目のリストア先をファイルパスに変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]タブで、リストアする個々のドキュメントが存在する **Web** アプリケーションを含むサーバーファームを展開します。
- 4 **Windows SharePoint** サービスアプリケーションを展開します。
- 5 ドキュメントのリストア元のコンテンツデータベースを含む **Web** アプリケーションを展開します。
- 6 リストアするドキュメントを含むコンテンツデータベースを展開します。
- 7 リストアするドキュメントを含むバックアップセットを展開します。
- 8 コンテンツデータベースを展開します。
- 9 リストアするドキュメントを含むフォルダを展開します。
- 10 結果ペインで、リストアするドキュメントを選択します。
- 11 [リストアジョブのプロパティ]ペインの[宛先]の下にある[Microsoft SharePoint のリストア先の変更]をクリックします。
- 12 [Microsoft SharePoint セットのリストア先を変更する]にチェックマークを付けます。
- 13 [個々の SharePoint サイト、ドキュメント、リストまたは項目]をクリックします。
- 14 [リストア先パスを変更する]をクリックします。
- 15 [ドライブまたは UNC パスにリストア]フィールドおよび[リストア先パス]フィールドにリストア先のドライブ文字とパスを入力します。

UNC パスには「¥¥servername¥share」の形式を使います。

- 16 表示されているデフォルトのログオンアカウントを使用するか、[変更]をクリックして選択します。
- 17 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 18 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
 行する場合

後で実行するジョブのスケジュールを設定する場合

- 次に示す順序で操作を実行します。
- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定します。
 - [サブミット]をクリックします。
- p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションのリストア先の変更

Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションのリストア先を変更する前に、リストア先のサーバーに SharePoint ソフトウェアをインストールする必要があります。

Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションのリストア先を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする Web アプリケーションを含むサーバーファームを展開します。
- 4 Windows SharePoint サービスアプリケーションを展開します。
- 5 リストアするコンテンツデータベースを含む Web アプリケーションを展開します。
- 6 コンテンツデータベースを展開し、リストアするコンテンツデータベースを含むバックアップセットを選択します。

Web アプリケーションに複数のコンテンツデータベースが含まれる場合は、他のコンテンツデータベースを展開して、それらのデータベースの対応するバックアップセットも同様に選択します。Web アプリケーションのコンテンツデータベースをすべて一緒にリストアする必要があります。

- 7 [リストアジョブのプロパティ]ペインの[宛先]の下にある[Microsoft SharePoint のリストア先の変更]をクリックします。

- 8 [Microsoft SharePoint セットのリストア先を変更する]にチェックマークを付けます。
- 9 [SharePoint 2003 ポータルサイトまたは SharePoint 2007 Web アプリケーション]をクリックします。
- 10 [URL または Web アプリケーション名]フィールドで、リストアする Web アプリケーションの名前を入力します。Web アプリケーションの URL を入力することもできます。
「<Web application name>」または「http://production1」の書式を使用します。
ターゲットの Web アプリケーションが存在し、元の Web アプリケーションと同じ数のコンテンツデータベースで構成されている必要があります。
- 11 [フロントエンド Web サーバー名]フィールドで、Web サーバーをホストする Microsoft IIS サーバーの名前を入力します。Web サーバーの IP アドレスを入力することもできます。
- 12 表示されているデフォルトのログオンアカウントを使用するか、[変更]をクリックして選択します。
- 13 [リストアジョブのプロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]をクリックします。
- 14 [リストアしたデータベースをオンラインにする]チェックボックスを選択します。
- 15 [以前のデータベースリンクに再接続する]チェックボックスを選択します。
- 16 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
- 17 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
実行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
 - スケジュールオプションを設定します。
 - [サブミット]をクリックします。
- p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

[Microsoft SharePoint のリストア先の変更]オプション

SharePoint データのリストア先を変更する手順は、選択するデータの種別および変更後のリストア先によって異なります。

- p.1212 の「[SharePoint 2003 のリストア先の変更](#)」を参照してください。
- p.1199 の「[SharePoint 2007 のリストア先の変更](#)」を参照してください。
- p.1203 の「[Microsoft Office SharePoint Server 2007 Web アプリケーションのリストア先の変更](#)」を参照してください。
- p.1201 の「[別のドキュメントライブラリへの SharePoint 2007ドキュメントライブラリ\(Web Storage System ベース\) データのリストア先の変更](#)」を参照してください。
- p.1202 の「[ファイルパスへの個別の SharePoint 2007 項目のリストア先の変更](#)」を参照してください。

表 I-7 [Microsoft SharePoint のリストア先の変更]オプション

項目	説明
Microsoft SharePoint セットのリストア先を変更する	SharePoint のリストア先を新しい場所に変更します。
SharePoint 2003 ポータルサイトまたは SharePoint 2007 Web アプリケーション	SharePoint 2003 ポータルサイトまたは SharePoint 2007 Web アプリケーションのリストア先の変更を有効にします。
URL または Web アプリケーション名	データのリストア先のサイトの URL または Web アプリケーションを指定します。
フロントエンド Web サーバー名	リストアするサイトが存在する Web サーバーの名前を指定します。
個々の SharePoint サイト、ドキュメント、リストまたは項目	SharePoint サイト、ドキュメント、リストまたは項目のリストア先の変更を有効にします。
リストア先パスを変更する	個々の SharePoint サイト、ドキュメント、リストまたは項目のリストア先をファイルパスに変更します。
ドライブまたは UNC パスにリストア	リストア先の UNC パスかドライブを指定します。UNC パスには「 <code>\\¥¥servername¥share</code> 」の形式を使います。
リストア先パス	リストア先のパスを指定します。
ワークスペースまたはドキュメントライブラリ(Web Storage System ベースのみ) にリストア先を変更する	個々の SharePoint サイト、ドキュメント、リストまたは項目のリストア先をワークスペースまたはドキュメントライブラリに変更します。
リストア先サーバー	リストア先の SharePoint Server を指定します。「 <code>¥¥servername</code> 」の書式を使用します。

項目	説明
リストアするワークスペースまたはドキュメントライブラリ	リストア先のドキュメントライブラリの名前を指定します。まだリストア先のドキュメントライブラリを作成していない場合は、リストアジョブを開始する前に作成する必要があります。
SharePoint ログオンアカウント	SharePoint データにアクセスするのに使うログオンアカウントを指定します。[変更]をクリックして、別のアカウントを選択します。

SharePoint Portal Server 2003 および Windows SharePoint Services 2.0 での SharePoint Agent の使用について

SharePoint Agent を使用して、SharePoint Portal Server 2003 の次のファームコンポーネントをバックアップおよびリストアすることができます。

- 設定データベース
- ポータルサイトとそれに関連する次のようなデータベース:
 - コンテンツデータベース
 - ユーザープロファイルデータベース
 - サービスデータベース
 - インデックスデータベース
 - チームデータベース
- Windows SharePoint Services サイトとそれに関連するデータベース
- シングルサインオンデータベース
- ドキュメントライブラリストア (Web Storage System ベース)
- ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース)

個別のドキュメントとそのバージョンは、Web Storage System ベースのドキュメントライブラリからバックアップし、Web Storage System ベースのドキュメントライブラリにリストアすることができます。また、リストア先のファイルパスを変更することもできます。
- ドキュメントライブラリと画像ライブラリ (Microsoft SQL Server ベース)

データベースの完全バックアップから個別のドキュメントとそのバージョンをリストアできます。
- サイトおよびサブサイト

データベースの完全バックアップから個別のオブジェクトとそのバージョンをリストアできます。

- リストおよびリストの項目

データベースの完全バックアップから個別のオブジェクトをリストアできます。

リストおよびリストの項目について詳しくは **Microsoft SharePoint** のマニュアルを参照してください。

また、次の **Windows SharePoint Services** コンポーネントをバックアップおよびリストアすることができます。

- 設定データベース

- チームサイトとそれに関連するコンテンツデータベース

- ドキュメントライブラリと画像ライブラリ (**Microsoft SQL Server** ベース)

データベースの完全バックアップから個別のドキュメントとそのバージョンをリストアできます。

バックアップする SharePoint Server 2003 リソースの選択について

Backup Exec では、選択ツリー内の次の場所に **SharePoint** リソースの階層ツリービューが表示されます。

- 選択ツリーの [**Microsoft SharePoint** のサーバーファーム] というタイトルのノードには、ネットワーク上の各 **SharePoint** サーバーファームのトポロジーの論理ビューが表示されます。**SharePoint** フロントエンド **Web** サーバーを選択すると、**Backup Exec** は **SharePoint** ファームを自動的に検出し、このノードにそのファームを追加します。また、サーバーファームの追加メニューオプションを使用して、ファームを手動で追加することもできます。

- [**Microsoft SharePoint Resources**] というタイトルのノードには、**SharePoint** リソースがローカルにインストールされているサーバーがすべて表示されます。シングルサーバーの **SharePoint** の場合は、すべての **SharePoint** リソースが一覧表示され、バックアップ用に選択することができます。**SharePoint** サーバーファームの場合は、このサーバー上にローカルに存在する **SharePoint** リソースのみがこのノードに一覧表示され、バックアップ用に選択することができます。フロントエンド **Web** サーバーでは、このノードにはファームトポロジー全体が一覧表示されますが、バックアップ用に選択できるのはローカルに存在するリソースのみです。

SharePoint 2003 からのリソースのバックアップ

各ポータルサイトに最低 3 つのデータベースがあります。コンテンツデータベース、サービスデータベースとユーザープロファイルデータベースです。トポロジーを保持するためにこれらのデータベースを一緒にバックアップすることをお勧めします。

SharePoint リソースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップする SharePoint リソースを選択します。
p.1207の「バックアップする SharePoint Server 2003 リソースの選択について」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]を選択します。
- 5 必要なオプションを選択します。
p.321の「バックアップジョブの[選択リスト]オプション」を参照してください。
- 6 バックアップジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択します。

リストアする SharePoint 2003 リソースの選択について

Backup Exec の[リソースビュー]を使用すると、選択ツリー内に SharePoint リソースの次の階層ツリービューが表示されます。

表 I-8 階層ツリービュー

ノード名	ノードの説明
サーバーファームノード	ファームからバックアップされた SharePoint リソースのトポロジーの論理ビューを表しています。このノードに表示される名前は、[Microsoft SharePoint]のサーバーファームノードの下にある[バックアップ選択]内のサーバーファームに定義した名前と一致します。このビューに表示された各 SharePoint コンポーネントのノードを展開すると、そのコンポーネントのバックアップセットが表示され、リストア用に選択することができます。
個別のサーバーノード	バックアップ時にサーバー上にローカルに存在した SharePoint コンポーネントが表示されます。このビューに表示された各 SharePoint コンポーネントのノードを展開すると、そのコンポーネントのバックアップセットが表示され、リストア用に選択することができます。SharePoint コンポーネントをバックアップした各サーバーには、[Microsoft SharePoint Resources]ノードが含まれています。

次のリソースをリストアできます。

- ポータルサイトとそれに関連するデータベース:各ポータルサイトに最低 3 つのデータベースがあります。コンテンツデータベース、サービスデータベースとユーザープロファイルデータベースです。トポロジーを保持するためにこれらのデータベースを一緒にリストアすることをお勧めします。
- Windows SharePoint Services サイトとそれに関連するデータベース

- ドキュメントライブラリストア (Web Storage System ベース)
- ドキュメントライブラリまたは画像ライブラリに含まれている個別のドキュメント (Web Storage System ベースまたは Microsoft SQL Server ベース)
- サイトおよびサブサイト
データベースの完全バックアップから個別のオブジェクトとそのバージョンをリストアできます。
- リストおよびリストの項目
データベースの完全バックアップから個別のオブジェクトをリストアできます。
リストおよびリストの項目について詳しくは **Microsoft SharePoint** のマニュアルを参照してください。
- 設定データベース:設定データベースには、**SharePoint Server** ファームに関するすべての設定情報が格納されています。このデータベースのリストアは、バックアップの後でファームトポロジーに加えられた変更がすべて失われるため、十分に注意して行ってください。詳しくは **Microsoft SharePoint Portal Server 2003** のマニュアルを参照してください。設定データベースは、元の場所のみにリストアできます。
- シングルサインオンデータベース:シングルサインオンデータベースは、元の場所のみにリストアできます。

SharePoint 2003 リソースのリストア

SharePoint 2003 リソースをリストアできます。

p.1208 の「[リストアする SharePoint 2003 リソースの選択について](#)」を参照してください。

SharePoint リソースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストアする **SharePoint** データに対応する完全および差分バックアップセットを選択します。

1 つのジョブでポータルサイトの **SharePoint** リソースをリストアすると、インデックスデータベースは最後にリストアされます。個別にリストアする場合は、インデックスデータベースを最後にリストアしてください。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]をクリックします。
- 6 必要なオプションを選択します。

p.1197 の「[Microsoft SharePoint のリストアオプション](#)」を参照してください。
- 7 [プロパティ]ペインで他のリストアオプションを設定するか、リストアジョブを開始します。

データベースの完全バックアップからの個別の SharePoint 2003 項目 (Microsoft SQL Server ベース) のリストア

バックアップジョブの実行時に次のオプションを選択した場合は、SharePoint データベースの完全バックアップから個別のドキュメント、イメージ、サイト、副サイト、リストおよびリストの項目をリストアできます。

Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、データベースのバックアップで個々のドキュメントのリストアを有効にする (完全バックアップでのみ利用可能)

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

個々のドキュメントのリストアを有効にするオプションは、差分バックアップジョブでは使用できません。

データベースの完全バックアップから個別のドキュメントをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 該当するコンテンツデータベースのバックアップセットを検索して、リストアするドキュメントまたはイメージを選択します。
p.598 の「[リストアジョブの\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SharePoint]をクリックします。
- 5 次のいずれかを実行します。

バージョン管理が個々のドキュメントのリストア 先のオプションのいずれかを選択します。
先デバイスで有効な場合

- 新バージョンとして追加する
Backup Exec は既存の項目を新しいバージョンとしてリストアし、既存の項目を最新のバージョンにします。
- 項目が存在する場合はスキップする
リストア先に同一の項目が存在する場合、Backup Exec は項目をリストアしません。Backup Exec はファイルがスキップされたことをジョブのログに記録します。
- 既存の項目をリストアする
Backup Exec は既存の項目をリストアした項目に置き換えます。

バージョン管理が個々のドキュメントのリストア先デバイスで無効の場合 次のオプションのいずれかを選択します。

- 項目が存在する場合はスキップする
リストア先に同一の項目が存在する場合、**Backup Exec** は項目をリストアしません。**Backup Exec** はファイルがスキップされたことをジョブのログに記録します。
- 既存の項目をリストアする
Backup Exec は既存の項目をリストアした項目に置き換えます。

- 6 各ドキュメントの最新のバージョンのみをリストアする場合は[最新バージョンの項目のみリストアする]チェックボックスを選択します。
- 7 項目とともに適用可能なセキュリティ情報をリストアする場合は、[セキュリティ情報を含む]オプションを選択します。
リストアする **SharePoint** 項目に基づいて異なるレベルのセキュリティをリストアできます。
 - サイト-ユーザー情報、**SharePoint** グループ情報およびセキュリティ ACL がトップレベルサイトにリストアされます
 - サブサイト-セキュリティ ACL がリストアされます
 - リスト-セキュリティ ACL およびその他のセキュリティ関連情報がリストアされます
- 8 テープからリストアする場合、次の手順を実行します。
 - [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]を選択します。
 - [リストアデータ一時格納用の、メディアサーバーのローカル NTFS ボリューム上のパス]とよばれるオプションで一時的なステー징の場所のパスを指定します。
パスは **Backup Exec** メディアサーバー上に存在する必要があります。システムボリュームを一時ステー징場所として使用することはお勧めしません。
- 9 [プロパティ]ペインで他のリストアオプションを設定するか、リストアジョブを開始します。

SharePoint 2003 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) のリストア

個別の **SharePoint** ドキュメントは、常に、リストアに使用するログオンアカウントクREDENTIALにチェックアウトされた状態で、**SharePoint** ドキュメントライブラリにリストアされます。このドキュメントは、そのユーザーがチェックインまたは公開すると、他のユーザーが使用できるようになります。

公開またはチェックインされているドキュメントに上書きリストアしようとする、リストアは失敗します。リストアに使用するログオンアカウントクレデンシヤルと異なるユーザーにチェックアウトされているドキュメントに上書きリストアしようとする、リストアは失敗します。

SharePoint 2003 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) をリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする SharePoint ドキュメントライブラリデータを選択します。
p.598 の「リストアジョブの[選択リスト]オプション」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインで他のリストアオプションを設定するか、リストアジョブを開始します。

ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) バックアップからの旧バージョンの SharePoint 2003 ドキュメントのリストア

ドキュメントライブラリのルートにある SHADOW フォルダには、バックアップの時点でドキュメントライブラリに存在したドキュメントの旧バージョンが格納されています。ドキュメントライブラリバックアップに SHADOW フォルダを含めるように選択すると、ドキュメントの旧バージョンにアクセスできるようになります。ただし、旧バージョンを直接ドキュメントライブラリにリストアすることはできません。旧バージョンのドキュメントは、別の場所にリストアしてから、手動でドキュメントライブラリにコピーする必要があります。

ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) バックアップから旧バージョンの SharePoint 2003 ドキュメントをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアするドキュメントを含む SharePoint ドキュメントライブラリを検索して選択します。
- 4 バックアップセットの SHADOW フォルダを展開して、リストアするドキュメントを選択します。
- 5 個別のドキュメントのリストア先をファイルパスに変更します。

p.1215 の「ファイルパスへの個別の SharePoint 2003 項目のリストア先の変更」を参照してください。

SharePoint 2003 のリストア先の変更

ファーム内の Web サーバーに存在するサイトにリストア先を変更できます。

メモ: 個別のリストアジョブで完全または差分バックアップセットをリストアする場合は、最後のジョブを除くすべてのジョブでこれらのオプションをオフにしてください。正しい順序の最後のリストアジョブでは、これらのオプションを選択してください。すでに使用されているメディアの挿入を求めるメッセージが表示される場合があります。

リストア先を変更したリストアジョブの完了後にデータベースをオンラインにするには、[Microsoft SharePoint] 設定で [リストアしたデータベースをオンラインにする] オプションと [以前のデータベースリンクに再接続する] オプションが選択されていることを確認します。また、ポータルサイトまたは Windows SharePoint Services サイトをリストアする場合は、これらのオプションによって、リストアされたデータベースと対応するサイトとの接続が再確立されます。

SharePoint 2003 データのリストア先を変更するには、次の手順を実行します。

SharePoint 2003 のリストア先を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの [リストア] の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ] をクリックします。
- 3 リストアする SharePoint リソースを選択します。
p.598 の「リストアジョブの [選択リスト] オプション」を参照してください。
設定データベースおよびシングルサインオンデータベースは、元の場所のみリストアできます。
- 4 [プロパティ] ペインの [宛先] の下にある [Microsoft SharePoint のリストア先の変更] を選択します。
- 5 [Microsoft SharePoint セットのリストア先を変更する] にチェックマークを付けます。
- 6 [SharePoint 2003 ポータルサイトまたは SharePoint 2007 Web アプリケーション] をクリックします。
- 7 [URL または Web アプリケーション名] フィールドで、データのリストア先のサイトの URL を入力します。
たとえば、<http://portalsite1> または <https://portalsite1> と入力します。SharePoint 2003 サイトにリストアする場合、そのサイトはすでに存在する必要があります。
- 8 [フロントエンド Web サーバー名] フィールドで、サイトが存在する Web サーバーの名前を入力します。
リストアジョブを実行する前に、ソースサイトと同じデータベース構造を持つ宛先 SharePoint Portal Server 2003 ポータルサイトまたは Windows SharePoint Services サイトを、指定された Web サーバーに作成しておく必要があります。
- 9 次のいずれかを実行します。

- 表示されるデフォルトのログオンアカウントを使用します。

- [変更]をクリックして、別のログオンアカウントを選択します。

- 10 [プロパティ]ペインで他のリストアオプションを設定するか、リストアジョブを開始します。

別のドキュメントライブラリへの SharePoint 2003 ドキュメントライブラリ (Web Storage System ベース) データのリストア先の変更

リストア先を変更して SharePoint 2003 ドキュメントライブラリデータをリストアするには、リストア先のサーバーに SharePoint Portal Server ソフトウェアがインストールされている必要があります。元のドキュメントライブラリ内のフォルダがリストア先のドキュメントライブラリに存在しない場合は、リストア時に作成されます。

注意: SharePoint Portal ドキュメントライブラリデータをリストアするときに、リストアするドキュメントと同じ名前のドキュメントがリストア先に存在すると、リストアジョブの上書きプロパティの設定によっては、そのドキュメントは上書きされます。

SharePoint 2003 ドキュメントライブラリデータのリストア先を別のドキュメントライブラリに変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアする SharePoint Portal ドキュメントライブラリデータを検索して選択します。
p.598 の「リストアジョブの[選択リスト]オプション」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[Microsoft SharePoint のリストア先の変更]をクリックします。
- 5 [Microsoft SharePoint セットのリストア先を変更する]にチェックマークを付けます。
- 6 [個々の SharePoint サイト、ドキュメント、リストまたは項目]をクリックします。
- 7 [ワークスペースまたはドキュメントライブラリ (Web Storage System ベースのみ) のリストア先を変更する]をクリックします。
- 8 [リストア先サーバー]フィールドに、リストア先の SharePoint Server の名前を入力します。
「¥¥servername」の書式を使用します。
- 9 [リストアするワークスペースまたはドキュメントライブラリ]フィールドに、リストア先のドキュメントライブラリの名前を入力します。

まだリストア先のドキュメントライブラリを作成していない場合は、リストアジョブを開始する前に作成する必要があります。

- 10 表示されているデフォルトのログオンアカウントを使用するか、[変更]をクリックして選択します。
- 11 [プロパティ]ペインで、設定の必要なプロパティを選択します。
- 12 リストアジョブを開始します。

ファイルパスへの個別の SharePoint 2003 項目のリストア先の変更

ドキュメントライブラリにアップロードされているか、リストの項目に結び付けられているイメージやドキュメントなどの **SharePoint** のファイルベースのデータのリストア先を変更できます。個々の項目とそのバージョンは、別のコンテンツデータベースではなく、ファイルの場所のみリストア先を変更できます。個々の項目をファイルパスにリストアするには、次の手順を実行します。

メモ: ファイルパスに項目をリストアする場合は、**SharePoint** のセキュリティ情報をリストアできません。

個々の SharePoint 2003 項目のリストア先をファイルパスに変更する方法

- 1 リストアするデータが格納されているメディアを、バックアップデバイスにセットします。
- 2 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 3 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 4 リストアする **SharePoint** ドキュメントを検索して選択します。
 p.598 の「[リストアジョブの\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[**Microsoft SharePoint** のリストア先の変更]をクリックします。
- 6 [**Microsoft SharePoint** セットのリストア先を変更する]にチェックマークを付けます。
- 7 [個々の **SharePoint** サイト、ドキュメント、リストまたは項目]をクリックします。
- 8 [リストア先パスを変更する]を選択します。
- 9 [ドライブまたは **UNC** パスにリストア]および[リストア先パス]のフィールドにリストア先のドライブ文字とパスを入力するか、[...]ボタンをクリックしてリストア先を選択します。
UNC パスには「`¥¥servername¥share`」の形式を使います。
- 10 表示されているデフォルトのログオンアカウントを使用するか、[変更]をクリックして選択します。
- 11 [プロパティ]ペインで、設定の必要なプロパティを選択します。
- 12 リストアジョブを開始します。

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SQL Server

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Agent for Microsoft SQL Server](#) について
- [SQL Agent](#) 使用上の必要条件
- [SQL Agent](#) のインストールについて
- [SQL Server](#) リソースに [Backup Exec](#) ログオンアカウントを使用する方法
- [SQL Server](#) のバックアップ戦略について
- [SQL Server](#) の一貫性チェックについて
- [SQL Agent](#) とスナップショットテクノロジーの使用方法
- [SQL Server](#) のバックアップおよびリストアのデフォルト設定
- [SQL Server](#) のバックアップオプションの設定
- [SQL Server](#) のリストアオプションの設定
- [SQL](#) データベースとファイルグループのリストアについて
- [SQL Server](#) のディザスタリカバリについて

Agent for Microsoft SQL Server について

Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SQL Server (SQL Agent)を使用すると、ネットワークに接続されたSQL Serverのバックアップおよびリストア操作を実行できます。SQLデータベースのバックアップを、特別な管理を行ったり専用のハードウェアを使用せずに、ネットワークバックアップに統合することができます。

SQL Agent でサポートされる内容を次に示します。

- データベース、トランザクションログ、差分とファイルグループのバックアップおよびデータベースのリカバリと置換
- master データベースの自動リストア
- SQL Server のディザスタリカバリプロセスを自動化する Intelligent Disaster Recovery Option
- 代替の場所への SQL データベースのリストア
- リストア選択項目およびオプションの自動確認。リストアジョブを実行する前に現在のSQL Server のリストア選択項目およびジョブオプションの有効性をテストします。
- バックアップ処理での SQL データベースのホットバックアップコピー。SQL データベースからメディアに送信される実際のデータストリームを、後で使用できるようにローカルディレクトリにコピーできます。
- 複数のインスタンスのバックアップ
- Symantec Backup Exec Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) および Advanced Open File Option (AOFO) との統合。ADBO および AOFO は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントです。ADBO および AOFO を使用すると、リストアに要する時間およびサーバーへのバックアップの影響を軽減できます。
- スタンバイデータベースのサポート。プライマリ SQL サーバーに障害が発生したり、保守のためにシャットダウンした場合は、スタンバイデータベースと呼ばれるデータベースがオンラインになります。スタンバイデータベースにはプライマリサーバーのデータベースのコピーが存在するため、プライマリサーバーが利用できない場合でも、ユーザーはデータベースへのアクセスを続行することができます。プライマリサーバーが再び利用できるようになった場合は、スタンバイデータベースの変更内容をプライマリサーバーにリストアする必要があります。リストアしないと、変更内容が失われます。その後で、再びプライマリサーバーのデータベースをバックアップして、スタンバイデータベースにリストアします。

Backup Exec には、ログファイルバックアップの完了時にデータベースをスタンバイモードにするためのバックアップオプションや、スタンバイデータベースを作成して保持するために、リストア後のデータベースの状態として[データベースは読み取り専用モード]が用意されています。
- 各バックアップジョブおよびリストアジョブの一貫性チェック (DBCC)。データベースの物理的一貫性チェックによる高速データベース一貫性チェックを含みます。

- フル(完全)、一括ログ記録およびシンプル(単純)復旧モデル。シンプル復旧モデルでは、トランザクションのコピーがログファイルに保存されないため、トランザクションログによるバックアップは実行できません。したがって、データベースを最後のバックアップの時点にリカバリすることはできますが、障害の発生した時点または特定の時点の状態にリストアすることはできません。
- ログマークを使用した特定の時点または名前付きトランザクションまでのトランザクションログのリストア

SQL Server 2005 以降の場合の SQL Agent でサポートされる内容を次に示します。

- データベースのスナップショット
- 新しいコピーバックアップジョブ。SQL データベースの完全バックアップジョブを実行せずに SQL Server 2005 以降のデータベースをコピーできます。
- リストア先を変更する場合の複製設定の保持
- 「Verify Only」リストアジョブ。リストアジョブでデータベースが削除または上書きされる前に、メディア上での SQL データの有効性、および宛先の SQL データベースでこのデータの受け入れが可能かどうかを判断できます。
- チェックサム生成を使用したバックアップ。冗長検査として使用します。このオプションを使用するには、「Verify Only」リストアジョブオプションが必要です。
- エラーが検出された場合のリストアジョブの継続。破損したデータベースのバックアップからできるだけ多くのデータをリストアできます。

SQL Server 2008 Enterprise Edition の場合の SQL Agent でサポートされる内容を次に示します。

- SQL Server 2008 Enterprise Edition では、バックアップジョブに対して SQL ソフトウェア圧縮を使うことができます。

p.1220 の「SQL Agent のインストールについて」を参照してください。

SQL Agent 使用上の必要条件

SQL Agent を使用するには、次の必要条件を満たす必要があります。

- Backup Exec に、次の SQL レジストリキーの両方に対する読み取り権限があること。
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Microsoft\Microsoft SQL Server
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\Software\Microsoft\MSSQLServer

Backup Exec にこの権限がない場合、デフォルトディレクトリへのリストアは失敗する可能性があります。また、SQL の[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスに用意されている[**master** データベースのリストアを自動化する]オプションも機能しません。

使用するログオンアカウントに、SQL インスタンスがインストールされている Windows サーバーに対する **Administrator** 権限が設定されているかどうかを調べると、**Backup Exec** にこの権限があるかどうかわかります。

- メディアサーバーから SQL インスタンスにアクセスできること。
- SQL のバックアップおよびリストアに使用する **Backup Exec** ログオンアカウントに格納されているクレデンシャルに、SQL インスタンスでのシステム管理者の役割が許可されていること。

SQL Agent のインストールについて

SQL Agent は、**Backup Exec** の独立したアドオンコンポーネントとしてローカルにインストールされ、ローカルおよびリモートの **SQL Server** データベースを保護することができます。

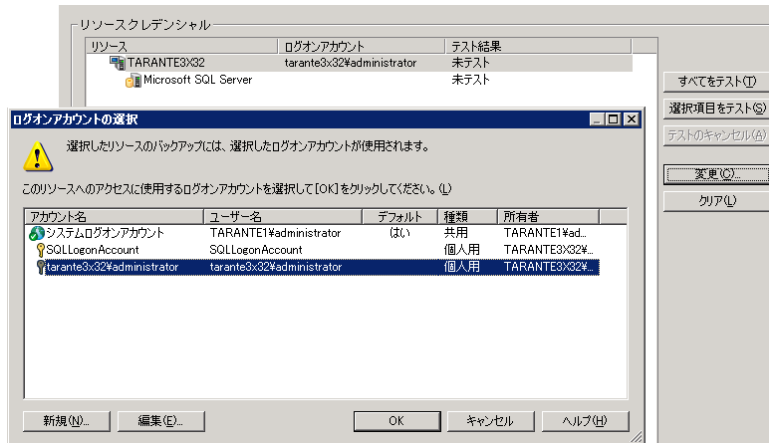
p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

SQL Server リソースに Backup Exec ログオンアカウントを使用する方法

SQL をバックアップするには、Windows ユーザーアカウントのクレデンシャルが格納されている **Backup Exec** ログオンアカウントを使用します。この Windows ユーザーアカウントは、SQL インスタンスのシステム管理者から認可されている必要があります。

バックアップ選択リストまたはリソースクレデンシャルリストで、そのログオンアカウントを、実際の SQL インスタンスではなく、SQL がインストールされている Windows サーバーに適用します。

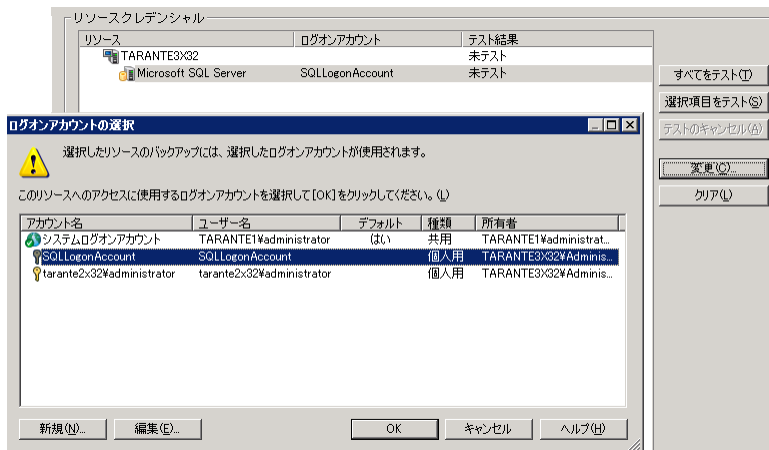
図 J-1 Windows ユーザーアカウントクレデンシャルの適用



SQL Server 認証を使用する場合は、SQL ユーザーアカウントのクレデンシャルを格納した Backup Exec ログオンアカウントを追加します。

バックアップ選択リストで、Windows ユーザーアカウント用の Backup Exec ログオンアカウントを SQL がインストールされている Windows サーバーに適用し、SQL ユーザーアカウント用のログオンアカウントを SQL インスタンスに適用します。

図 J-2 SQL ユーザーアカウントクレデンシャルの適用



使用した Backup Exec ログオンアカウントに適切な権限がない場合は、ユーザー名およびパスワードが無効であるとのエラーメッセージが表示されます。

p.279 の「選択リストについて」を参照してください。

p.181 の「[Backup Exec システムログオンアカウントの新規作成](#)」を参照してください。

SQL Server のバックアップ戦略について

Backup Exec には、日常のバックアップルーチンの一部として、オンラインの継続的な SQL データベース保護機能が組み込まれ、日常のデータベースアクティビティを妨げることなく、データのリカバリ機会を増大し、データの損失を最小化しています。データベースバックアップ、差分バックアップおよびログバックアップを組み合わせると、バックアップ間隔を適正に保ち、データベースをリカバリする必要が生じたときに、リカバリ時間を最小に抑えることができます。

どのバックアップ方式がデータの保護に最も適しているかを決定するには、環境の規模を考慮します。

- 小規模の環境では、データベースの完全バックアップを毎日夕刻に実行し、トランザクションログのバックアップを毎日実行するようにします。
- 中規模の環境では、データベースの完全バックアップを毎週、トランザクションログを毎日、差分バックアップを、完全バックアップを実行した日を除いて毎日実行するようにします。
- 大規模の環境では、データベースの差分バックアップを毎日、データベースの完全バックアップを毎週実行し、必要に応じてトランザクションログのバックアップを実行します。完全バックアップを週に 1 回実行し、差分バックアップを毎日実行することで、バックアップに必要な時間を最小化します。非常に大きな規模の環境では、ファイルグループバックアップを使用して、何日かに分けて完全バックアップを実行することが必要な場合もあります。ファイルグループバックアップを使用してシステムをリカバリするには、ログバックアップが必要です。

完全バックアップの頻度を減らして差分バックアップを増やす方法は、バックアップに要する時間を短縮することができますが、リカバリが必要になったときに、データベースの完全バックアップをリストアした後で、最後のデータベースの差分バックアップをリストアし、最後のデータベースの差分バックアップ以降のログバックアップをすべてリストアする必要があります。

最も適している方法は、環境の規模、毎日処理されるトランザクションの数、リカバリが必要になった場合の必要条件によって決定されます。

SQL Server のバックアップ戦略の推奨事項

SQL のバックアップ戦略を作成するときには、次の事項にも注意してください。

表 J-1 SQL Server のバックアップに関する推奨事項

SQL Server のバックアップ戦略	説明
SQL Server 全体を保護する	<p>SQL を完全に保護するには、定期的に次の項目をバックアップします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SQL の存在するシステムドライブ ■ Windows のレジストリとシステム状態 ■ SQL データベースまたはファイルグループ (両方をバックアップする必要はありません) ■ トランザクションログ
アップグレード時に、データベースの完全バックアップを新規に実行する	<p>SQL をアップグレードする場合に、データベースの完全バックアップを新規に実行します。SQL のバージョンまたは Service Pack のレベルが異なる場合はリストアすることはできません。</p>
バックアップ後に一貫性チェックを実行する	<p>バックアップを実行した後、一貫性チェックを行うことをお勧めします。バックアップ時に、データベース、トランザクションログまたはファイルグループにエラーが含まれていた場合は、そのバックアップをリストアすることができた場合でも、リストアされたデータにはエラーが含まれたままになります。</p> <p>一貫性チェックには、次のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ インデックスを含む完全な一貫性チェック。一貫性チェックは、SQL のパフォーマンスに大きな影響を与えるため、繁忙時を避けて実行するようにします。 ■ インデックスのチェックを除く完全な一貫性チェック。インデックスを含む完全な一貫性チェックほど徹底されてはいませんが、このチェックは高速で、繁忙時に実行してもシステムパフォーマンスへの影響はわずかです。 ■ 物理チェックのみ。この方式もオーバーヘッドの少ないチェックです。ページヘッダーとレコードヘッダーの物理的構造の整合性、ページのオブジェクトIDとインデックスIDおよびその割り当て構造の一貫性のみをチェックします。
master データベース内のデータを変更したときは、master データベースを必ずバックアップする	<p>特に、次のように master データベース内の情報を変更する手順を実行したときは、master データベースを必ずバックアップします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新しいデータベースを作成する。 ■ 既存のデータベースにファイルを追加する。 ■ ユーザー名またはパスワードを追加または変更する。 <p>変更した内容をバックアップせずに master データベースをリストアすると、変更した内容は失われます。</p>
一度に1つのバックアップを実行する	<p>データベースやそのトランザクションログまたはファイルグループに対して、同時に複数のバックアップを実行するスケジュールを設定しないようにします。</p>

SQL Server のバックアップ戦略	説明
<p>システムデータベースとユーザーデータベースの両方およびトランザクションログを定期的にバックアップする</p>	<p>master および model データベースをバックアップすると、常にそのコピーが Backup Exec によって自動的に作成されます。これらのデータベースが損傷または消失したために SQL が動作しなくなった場合は、master および model データベースをコピーと置換して SQL を起動することができます。SQL が再起動した後、Backup Exec の [master データベースのリストアを自動化する] オプションを使用して、master データベースの最新のコピーをリストアし、必要に応じてその他のデータベースをリストアします。</p> <p>Intelligent Disaster Recovery Option (IDR) を使用している場合は、C: ドライブの IDR リカバリプロセスで、損傷したデータベースが master および作成した model データベースのコピーに自動的に置換されます。</p>
<p>ファイルグループを使用している場合は、データベースではなくファイルグループをバックアップする。ファイルグループとデータベースの両方をバックアップしないようにする</p>	<p>一度にバックアップできないほどデータベースのサイズが増大した場合は、代替のバックアップ方式としてファイルグループを使用することができます。異なる時間帯と頻度で、異なるファイルグループをバックアップすることができます。ファイルグループとログのバックアップを組み合わせ、データベースを完全に保護することができます。</p>

SQL Server の一貫性チェックについて

バックアップしたデータベース、トランザクションログまたはファイルグループに存在したエラーは、そのバックアップのリストア後にも残ります。また、これらのエラーのために正常にリストアできないこともあります。**Backup Exec** を使用し、データの論理的または物理的な一貫性をバックアップの前後に検査することができます。一貫性チェックで発見されたエラーは、すべて **Backup Exec** のジョブログに表示されます。バックアップの前または後に、一貫性チェックを実行することを強くお勧めします。

Backup Exec の一貫性チェックでは、次の **SQL** 一貫性チェックユーティリティが使用されます。

- CHECKDB
- CHECKCATALOG
- CHECKFILEGROUP
- PHYSICAL_ONLY

CHECKDB、**CHECKCATALOG** および **PHYSICAL_ONLY** は、データベース関連のジョブで実行されます。

CHECKFILEGROUP はファイルグループ関連のジョブで実行されます。

これらのユーティリティについて詳しくは Microsoft SQL のマニュアルを参照してください。

p.1236 の「[SQL Server のバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。

SQL Agent とスナップショットテクノロジーの使用法

SQL Agent は、Symantec Backup Exec - Advanced Open File Option (AOFO) と Advanced Disk-based Backup Option (ADBO) を使って SQL のスナップショットテクノロジーをサポートします。ADBO は Windows Server 2003、Windows Server 2008 へのみインストールできます。ADBO および AOFO を使用すると、リストアに要する時間およびサーバーへのバックアップの影響を軽減できます。

メモ: SQL Agent は、SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットテクノロジーもサポートします。

p.1251 の「[SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットについて](#)」を参照してください。

SQL Agent でスナップショットテクノロジーを使用する前に、次の情報を確認してください。

- スナップショットテクノロジーによって、SQL データベースの特定の時点のデータのビュー (スナップショット) が作成され、そのスナップショットのバックアップが行われます。そのため、実際の SQL データベースは開いたままなので、ユーザーが利用することができます。
- スナップショットテクノロジーを使用して作成した SQL バックアップのサイズは、通常の SQL バックアップよりも著しく大きくなります。そのため、SQL バックアップジョブは、AOFO または ADBO のバックアップジョブとは別に実行することをお勧めします。
- バックアップを行う前に、一貫性チェックを実行することを強くお勧めします。
p.1224 の「[SQL Server の一貫性チェックについて](#)」を参照してください。
- SQL Agent は、完全スナップショットバックアップのみをサポートします。ファイルグループのスナップショット、ログのスナップショット、および差分スナップショットはサポートしません。
- ファイルグループ、差分またはトランザクションログバックアップ方式を選択した場合、AOFO または ADBO のバックアップジョブのプロパティは無視され、従来の差分またはトランザクションログバックアップが実行されます。
- SQL Agent を使用している場合は、SQL データをリストアする際に、スナップショットバックアップと従来のバックアップの相互操作が可能です。
- SQL のバックアップで使用される Intelligent Disaster Recovery Option では、master および model データベースのコピーが作成されます。コピーは、スナップ

ショットを使用しないで **master** および **model** データベースのバックアップを実行した場合にのみ作成されます。SQL のバックアップに **AOFO** または **ADBO** を使用する場合は、**AOFO** または **ADBO** を使用しない **master** および **model** データベースのバックアップを、最低 1 つは作成しておく必要があります。

- SQL をアップグレードした場合は、スナップショットを使用せずに作成したバックアップを使用してコピーを更新してください。
- SQL Service Pack 2 のインストールされていない環境で、複数のデータベースをバックアップするように選択した場合、**AOFO** または **ADBO** を使用して SQL バックアップを行うことはできません。SQL Server 2000 Service Pack 2 以上がインストールされている場合は、同時に複数のデータベースをバックアップするように選択することができます。
- **master** データベースのスナップショットバックアップのリストア先は変更できません。
- バックアップの前と後にデータベース一貫性チェックを実行すると、バックアップジョブに要する時間に影響してきます。

p.1236 の「[SQL Server のバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。

SQL Agent と AOFO の使用法

SQL Agent を AOFO とともに使用する場合、実行しているオペレーティングシステムに応じて、Veritas Storage Foundation for Windows FlashSnap Option または Microsoft ポリュームシャドウコピーサービスを選択して使用できます。また、[オープンファイルテクノロジーを自動的に選択する]オプションを選択した場合に発生する事項は、使用しているオペレーティングシステムによって異なります。

メモ: SQL Agent とともに使用する場合、AOFO のスナップショットバックアップは、Microsoft SQL Server データベースの完全バックアップに限定されます。

p.1226 の「[Windows 2003 で AOFO を使って SQL を保護する方法](#)」を参照してください。

p.1227 の「[Windows 2000 で AOFO を使って SQL を保護する方法](#)」を参照してください。

Windows 2003 で AOFO を使って SQL を保護する方法

SQL Agent では、Microsoft のボリュームシャドウコピーサービス (VSS) および Veritas Storage Foundation for Windows FlashSnap Option がサポートされます。VSS は、Windows 2003 以上のみで利用可能なスナップショットプロバイダサービスです。

SQL Agent で VSS を使用するには、SQL サーバーに SQL Agent をインストールし、実行しておく必要があります。VSS では、デフォルトプロバイダもしくはシステム、ハードウェアおよびソフトウェアの各種プロバイダが使用されます。

SQL Agent で FlashSnap Option を使用するには、SQL サーバーに SQL Agent、Veritas Storage Foundation for Windows および Advanced Open File Option (AOFO) がインストールされ、実行している必要があります。

p.923 の「[Advanced Open File Option について](#)」を参照してください。

Windows 2000 で AOFO を使って SQL を保護する方法

Windows 2000 を保護する場合、SQL Agent では、Veritas Storage Foundation for Windows FlashSnap Option のみがサポートされます。

FlashSnap Option を使用している SQL Server を保護するには、SQL サーバーに SQL Agent、Veritas Storage Foundation for Windows および Advanced Open File Option (AOFO) がインストールされ、実行している必要があります。

[Advanced Open File] オプションダイアログボックスで、FlashSnap Option を選択できます。Windows 2000 を実行している場合、[Advanced Open File] オプションダイアログボックスで [オープンファイルテクノロジーを自動的に選択する] オプションを選択すると、Backup Exec は FlashSnap Option を使用してバックアップを試行します。FlashSnap Option が利用できない場合、ジョブは失敗します。[Symantec Volume Snapshot Provider] または [Microsoft ポリウムシャドウコピーサービス] オプションを選択すると、スナップショットを使用しないバックアップが実行されます。

また、FlashSnap とともに AOFO を使用する場合は、次のことに注意してください。

- スナップショットを実行するには、ミラー化されたポリウム (プレックス) に SQL Server のユーザーデータおよびログファイルが存在している必要があります。
- システムデータベースを保護するには、ミラー化されたポリウム (プレックス) にシステムデータベースファイルが存在している必要があります。

p.923 の「[Advanced Open File Option について](#)」を参照してください。

p.930 の「[AOFO \(Advanced Open File Option\) のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.1251 の「[SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットについて](#)」を参照してください。

SQL Agent と ADBO の使用法

ADBO を使用している SQL Server を保護するには、SQL Agent と ADBO の両方がインストールされている必要があります。ADBO は、Windows 2003 以降にのみインストールでき、ハードウェアおよびソフトウェアプロバイダを含む複数のスナップショットプロバイダを使うことができます。使用するプロバイダは、バックアップジョブの作成時に、Advanced Disk-based Backup のオプションで選択することができます。

[ソフトウェア - Veritas Storage Foundation for Windows を使用]を使用するには、**Veritas Storage Foundation for Windows (VSWF)** がインストールされている必要があります。

[自動 - 可能であればハードウェアを使用、無効な場合はソフトウェアを使用]を選択すると、最初に利用可能なハードウェアプロバイダが使用されます。ハードウェアプロバイダが利用できない場合は、最初のソフトウェアプロバイダが使用されます。ハードウェアプロバイダもソフトウェアプロバイダも利用できない場合、ジョブ状態は、[Advanced Disk-based Backup]ダイアログボックスで設定した[ジョブの処置]オプションによって異なります。

また、ADBO を使用する場合は、次のことに注意してください。

- スナップショットを実行するには、ミラー化されたボリューム(プレックス)に SQL Server のユーザーデータおよびログファイルが存在している必要があります。
- システムデータベースを保護するには、ミラー化されたボリューム(プレックス)にシステムデータベースファイルが存在している必要があります。

p.265 の「バックアップするデータの選択について」を参照してください。

p.279 の「選択リストについて」を参照してください。

p.1224 の「SQL Server の一貫性チェックについて」を参照してください。

SQL Server のバックアップおよびリストアのデフォルト設定

インストール時に Backup Exec によって設定されたデフォルトを、SQL のすべてのバックアップおよびリストアジョブで使用することができます。また、独自のデフォルトを選択することもできます。これらのデフォルト設定は、バックアップまたはリストアジョブで、個別に変更することもできます。

p.1236 の「SQL Server のバックアップオプションの設定」を参照してください。

p.1257 の「SQL データベースとファイルグループのリストアについて」を参照してください。

SQL Server のバックアップおよびリストアのデフォルト設定を指定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。

p.1229 の「Microsoft SQL のデフォルトオプション」を参照してください。

Microsoft SQL のデフォルトオプション

Microsoft SQL のすべてのバックアップおよびリストアジョブのための次のデフォルトオプションを設定できます。

p.1228 の「[SQL Server のバックアップおよびリストアのデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 J-2 Microsoft SQL のデフォルトオプション

項目	説明
バックアップ方式	

項目	説明
	<p>次のバックアップ方式のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li data-bbox="678 326 1241 529">■ 完全 - 選択したデータベースまたはファイルグループをバックアップする: このオプションでは、データベースまたはファイルグループ全体がバックアップされます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 p.1245の「SQL データベースのバックアップについて」を参照してください。<li data-bbox="678 539 1241 777">■ ログ - トランザクションログをバックアップする: このオプションでは、トランザクションログに含まれているデータのみがバックアップされます。データベースのデータはバックアップされません。トランザクションログのバックアップ後に、コミット済みのトランザクションの削除 (切り捨て) が行われます。 p.1250の「SQL Server のトランザクションログのバックアップ」を参照してください。<li data-bbox="678 788 1241 1258">■ ログ - トランザクションログをバックアップする (ログを切り捨てない): このオプションでは、データベースが損傷しているか、消失したファイルがある場合に、データベースがバックアップされます。この[ログを切り捨てない]方式ではデータベースにアクセスしないため、データベースがこの状態にあってアクセスできないときでも、トランザクションをバックアップすることができます。このトランザクションログのバックアップを、データベースバックアップや以前に実行したトランザクションログのバックアップとともに使用して、障害が発生する直前の時点にデータベースをリストアすることができます。ただし、コミットの済んでいないトランザクションはロールバックされます。 [ログを切り捨てない]方式では、ログのバックアップ後のコミット済みトランザクションの削除は行われません。 p.1250の「SQL Server のトランザクションログのバックアップ」を参照してください。<li data-bbox="678 1269 1241 1558">■ 差分 - データベースまたはファイルグループの変更内容のみをバックアップする: このオプションでは、最後の完全バックアップ以降にデータベースまたはファイルグループに加えられた変更内容のみがバックアップされます。差分バックアップでリストアできるのは差分バックアップを作成した時点までであるため、次の差分バックアップの作成までに、複数のログバックアップを作成しておく必要があります。 p.1245の「SQL データベースのバックアップについて」を参照してください。

項目	説明
バックアップ前の一貫性チェック	<p>バックアップを開始する前に実行する一貫性チェックを、次のいずれかから指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし このオプションはバックアップの前に一貫性チェックを実行しません。バックアップの前または後に、一貫性チェックを実行することを強くお勧めします。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 ■ インデックスを含まない完全チェック このオプションは一貫性チェックからインデックスを除外します。インデックスをチェックしないと、一貫性チェックに要する時間を大幅に短縮できますが、チェックの完全度は低下します。各ユーザーテーブルのデータページとクラスタ化されたインデックスページのみがチェックされます。クラスタ化されていないインデックスページの一貫性はチェックされません。 ■ インデックスを含む完全チェック このオプションは一貫性チェックにインデックスを含めます。発生したエラーはログに記録されます。 ■ 物理チェックのみ このオプションは、オーバーヘッドの少ないデータベースの物理的な一貫性をチェックします。ページヘッダーとレコードヘッダーの物理的構造の整合性、ページのオブジェクト ID とインデックス ID およびその割り当て構造の一貫性のみをチェックします。
一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する	<p>一貫性チェックに失敗した場合でもバックアップ処理を続行します。現在の状態のデータベースのバックアップでもデータベースのバックアップが存在しないよりはよいと考えられる場合、または大規模のデータベースで問題は小さく、テーブルにあると考えられる場合には、一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行することができます。</p>

項目	説明
<p>バックアップ後の一貫性チェック</p>	<p>バックアップ完了後に実行する一貫性チェックを指定します。一貫性チェックの実行中または実行後にデータベースストラクチャが発生することがあるため、バックアップ後に一貫性チェックを実行し、データがバックアップ時に完全であったかどうかを確認することを、バックアップの実行前に考慮しておきます。</p> <p>利用可能なチェックは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし このオプションはバックアップ完了後に一貫性チェックを実行しません。バックアップの前または後に、一貫性チェックを実行することを強くお勧めします。 ■ インデックスを含まない完全チェック このオプションは一貫性チェックからインデックスを除外します。インデックスをチェックしないと、一貫性チェックに要する時間を大幅に短縮できますが、チェックの完全度は低下します。各ユーザーテーブルのデータページとクラスタ化されたインデックスページのみがチェックされます。クラスタ化されていないインデックスページの一貫性はチェックされません。 ■ インデックスを含む完全チェック このオプションは一貫性チェックにインデックスを含めます。発生したエラーはログに記録されます。 ■ 物理チェックのみ このオプションは、オーバーヘッドの少ないデータベースの物理的な一貫性をチェックします。ページヘッダーとレコードヘッダーの物理的構造の整合性、ページのオブジェクト ID とインデックス ID およびその割り当て構造の一貫性のみをチェックします。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
<p>バックアップジョブの作成時にファイルグループを表示する</p>	<p>バックアップに選択するファイルグループを表示します。このチェックボックスをオフにした場合は、ファイルグループはバックアップ選択項目として表示されません。</p>
<p>バックアップでチェックサムを使用する (SQL 2005 以降)</p>	<p>Backup Exec を使用してバックアップされる SQL データベースのデータにチェックサムを追加します。[検証のみ実行し、データをリストアしない] オプションを使用する場合には、バックアップされるデータにチェックサムを追加する必要があります。[検証のみ実行し、データをリストアしない] とともにこのオプションを使用すると、SQL データベースのリストア時に、SQL の検証済みバックアップをリストアに使用できます。</p>

項目	説明
保持するデータベースのスナップショット	<p>(SQL Server 2005 以降) ディスク上に保持するデータベースのスナップショットの数を表示します。しきい値に達すると、古いデータベースのスナップショットが削除され、新しいスナップショットに置き換えられます。データベースのスナップショット数は SQL Server データベースが更新されるたびに増え続けるため、スナップショット数を制限することによって、スナップショットの更新時に必要なディスク領域および SQL Server の処理時間を最小限に抑えることができます。</p> <p>p.1251の「SQL Server 2005以降のデータベースのスナップショットについて」を参照してください。</p>
ディスク上に SQL バックアップのコピーを作成して、データベースが存在する SQL Server に格納する	<p>バックアップする SQL データベースのコピーをディスク上に作成します。このオプションを使用すると、SQL データベースをストレージメディアにバックアップすると同時に[保存先パス]ボックスで指定したディスクパスにデータベースのコピーが書き込まれます。</p> <p>このオプションによって、IT 管理者が SQL データベースをバックアップするときに、データベースのコピーがディスク上に作成され、データベース管理者はこれらのコピーをテストやリストアなどに使用できます。</p> <p>このオプションは、Advanced Open File Option バックアップまたはデータベースのスナップショットと互換性がありません。</p>
保存先パス	<p>ディスク上に SQL バックアップのコピーを保存するためのパスを表示します。</p>

項目	説明
SQL Server 2008 Enterprise Edition のソフトウェア圧縮 (SQL Server 2008 Enterprise Edition のみ)	<p>このバックアップジョブに使用する次の圧縮設定を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ なし: 圧縮をしません。■ 圧縮: SQL Server 2008 の圧縮を使用します。 <p>SQL は、SQL Server 2008 Enterprise Edition がインストールされているコンピュータのデータを圧縮します。したがって、SQL 圧縮を使用すると、より高速な SQL Server 2008 のバックアップが実行されます。</p> <p>リモート SQL Server 2008 コンピュータをバックアップし、SQL Server 2008 のソフトウェア圧縮を使用する場合、最新バージョンの Remote Agent を使用する必要があります。</p> <p>互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1</p> <p>Backup Exec 開始ソフトウェア圧縮を使用するバックアップジョブでは SQL Server 2008 のソフトウェア圧縮を使用しないことをお勧めします。Backup Exec 圧縮を有効にすると、SQL Server 2008 圧縮の最小限の利点が追加されます。実際、両方の圧縮スキームを使用するジョブでは、バックアップ時間が増加する場合があります。</p> <p>SQL Server 2008 のデータを含むバックアップジョブで Advanced Open File Option を使用する場合、SQL Server 2008 のソフトウェア圧縮は使用されません。</p>
データベースは使用可能な状態。トランザクションログのリストアは不可能	<p>最新のデータベースバックアップ、差分バックアップまたはログバックアップのリストア時に、未完了のトランザクションをロールバックできます。リカバリ完了時にはデータベースが使用できる状態になっています。[データベースは使用可能な状態。トランザクションログのリストアは不可能]を選択しないと、データベースは中間状態のまま、使用することができません。</p> <p>中間状態のバックアップの適用時にこのオプションを選択した場合は、バックアップのリストアは中止され、最初からリストアをやり直す必要があります。</p> <p>デフォルトでは、このオプションが選択されています。</p>
データベースは操作不可能な状態、トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは可能	<p>別のリストアジョブでリストアする差分またはトランザクションログのバックアップが他にもあることを示します。</p>

項目	説明
データベースは読み取り専用モード	トランザクションログおよびデータベースのリストア時にスタンバイデータベースを作成して管理します。スタンバイデータベースについて詳しくは SQL のマニュアルを参照してください。
リストア後の一貫性チェック	<p>次の一貫性チェックのいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし このオプションは連続リストア用です。すべての連続リストアが完了するまでは、リストア後の一貫性チェックを実行しないでください。連続リストア中に一貫性チェックを選択した場合は、リストアが完了しても一貫性チェックは実行されません。この情報は、ジョブログで確認できます。 [データベースは使用可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能]オプションを選択した場合は、次の一貫性チェックのいずれかを選択します。 ■ インデックスを含まない完全チェック このオプションは一貫性チェックからインデックスを除外します。インデックスをチェックしないと、一貫性チェックに要する時間を大幅に短縮できますが、チェックの完全度は低下します。各ユーザーテーブルのデータページとクラスタ化されたインデックスページのみがチェックされます。クラスタ化されていないインデックスページの一貫性はチェックされません。 ■ インデックスを含む完全チェック このオプションは一貫性チェックにインデックスを含めます。発生したエラーはログに記録されます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 ■ 物理チェックのみ このオプションは、オーバーヘッドの少ないデータベースの物理的な一貫性をチェックします。ページヘッダーとレコードヘッダーの物理的構造の整合性、ページのオブジェクト ID とインデックス ID およびその割り当て構造の一貫性のみをチェックします。
既存のデータベースを上書きする	サーバー上に存在する同名の別のデータベースやファイルグループを置換します。[既存のデータベースを上書きする]を指定せずにリストアを実行した場合は、既存のデータベースやファイルグループを誤って上書きしないように、SQL による確認が行われます。このオプションを選択しなかった場合の上書き確認について詳しくは SQL のマニュアルを参照してください。

SQL Server のバックアップオプションの設定

この項では、バックアップジョブのプロパティを選択する方法について説明します。

p.265 の「[バックアップするデータの選択について](#)」を参照してください。

p.279 の「[選択リストについて](#)」を参照してください。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

SQL Server のバックアップジョブのオプションを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。

p.1237 の「[SQL のバックアップオプション](#)」を参照してください。

SQL のバックアップオプション

SQL のバックアップジョブを作成するときに次のオプションを設定できます。

p.1236 の「[SQL Server のバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。

p.1247 の「[SQL データベースのバックアップ](#)」を参照してください。

表 J-3 SQL のバックアップオプション

項目	説明
バックアップ方式	

項目	説明
	<p>次のバックアップ方式のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li data-bbox="583 326 1244 499">■ 完全 - 選択したデータベースまたはファイルグループをバックアップする: このオプションでは、データベースまたはファイルグループ全体がバックアップされます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 p.1245の「SQL データベースのバックアップについて」を参照してください。<li data-bbox="583 513 1244 835">■ ログ - トランザクションログをバックアップする: このオプションでは、トランザクションログに含まれているデータのみがバックアップされます。データベースのデータはバックアップされません。トランザクションログのバックアップ後に、コミット済みのトランザクションの削除 (切り捨て) が行われます。 このオプションを選択すると、[トランザクションログバックアップ後のデータベースの状態を設定する]の下にある[NORECOVERY - データベースをローディング状態にする]または[STANDBY - データベースをスタンバイ状態にする]を選択できるようになります。 p.1250の「SQL Server のトランザクションログのバックアップ」を参照してください。<li data-bbox="583 848 1244 1225">■ ログ - トランザクションログをバックアップする (ログを切り捨てない): このオプションでは、データベースが損傷しているか、消失したファイルがある場合に、データベースがバックアップされます。この[ログを切り捨てない]方式ではデータベースにアクセスしないため、データベースがこの状態にあってアクセスできないときでも、トランザクションをバックアップすることができます。このトランザクションログのバックアップを、データベースバックアップや以前に実行したトランザクションログのバックアップとともに使用して、障害が発生する直前の時点にデータベースをリストアすることができます。ただし、コミットの済んでいないトランザクションはロールバックされます。[ログを切り捨てない]方式では、ログのバックアップ後のコミット済みトランザクションの削除は行われません。 p.1250の「SQL Server のトランザクションログのバックアップ」を参照してください。<li data-bbox="583 1239 1244 1442">■ 差分 - データベースまたはファイルグループの変更内容のみをバックアップする: このオプションでは、最後の完全バックアップ以降にデータベースまたはファイルグループに加えられた変更内容のみがバックアップされます。差分バックアップでリストアできるのは差分バックアップを作成した時点までであるため、次の差分バックアップの作成までに、複数のログバックアップを作成しておく必要があります。<li data-bbox="583 1456 1244 1604">■ データベーススナップショット (SQL 2005 Enterprise Edition 以降) - 読み取り専用の、別のデータベースの特定時点のコピー: このオプションは、別のデータベースの読み取り専用のポイントインタイムコピーを作成します。 p.1251の「SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットにつ

項目	説明
	<p>いて」を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全コピーのみ (SQL 2005 以上) - データベースまたはファイルグループ全体をバックアップする: このオプションは今後の差分バックアップまたはログバックアップに影響することなくデータベースまたはファイルグループ全体をバックアップします。 <p>完全バックアップ方式とは異なり、完全コピーのみバックアップ方式では、SQL の差分ベースラインはリセットされません。このベースラインは、前回の完全バックアップ以降に変更されたデータベースブロックを識別するために使われます。</p> <p>完全バックアップの作成後に、完全コピーのみバックアップ方式を使って、今後の差分バックアップの実行に必要なベースラインバックアップセットに影響することなく SQL データベースのコピーを作成できます。</p>
保持するデータベースのスナップショット	<p>(SQL 2005 以降) ディスク上に保持するデータベースのスナップショットの数を表示します。しきい値に達すると、古いデータベースのスナップショットが削除され、新しいスナップショットに置き換えられます。データベースのスナップショット数は SQL データベースが更新されるたびに増え続けるため、スナップショット数を制限することによって、スナップショットの更新時に必要なディスク領域および SQL Server の処理時間を最小限に抑えることができます。</p> <p>p.1251 の「SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットについて」を参照してください。</p>

項目	説明
バックアップ前の一貫性チェック	<p>バックアップを開始する前に実行する一貫性チェックを、次のいずれかから指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし このオプションはバックアップの前に一貫性チェックを実行しません。バックアップの前または後に、一貫性チェックを実行することを強くお勧めします。 ■ インデックスを含まない完全チェック このオプションは一貫性チェックからインデックスを除外します。インデックスをチェックしないと、一貫性チェックに要する時間を大幅に短縮できますが、チェックの完全度は低下します。各ユーザーテーブルのデータページとクラスタ化されたインデックスページのみがチェックされます。クラスタ化されていないインデックスページの一貫性はチェックされません。 ■ インデックスを含む完全チェック このオプションは一貫性チェックにインデックスを含めます。発生したエラーはログに記録されます。 ■ 物理チェックのみ このオプションは、オーバーヘッドの少ないデータベースの物理的な一貫性をチェックします。ページヘッダーとレコードヘッダーの物理的構造の整合性、ページのオブジェクト ID とインデックス ID およびその割り当て構造の一貫性のみをチェックします。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 <p>p.1224 の「SQL Server の一貫性チェックについて」を参照してください。</p>
一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する	<p>一貫性チェックに失敗した場合でもバックアップ処理を続行します。現在の状態のデータベースのバックアップでもデータベースのバックアップが存在しないよりはよいと考えられる場合、または大規模のデータベースで問題は小さく、テーブルにあると考えられる場合には、一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行することができます。</p>

項目	説明
バックアップ後の一貫性チェック	<p>バックアップ完了後に実行する一貫性チェックを指定します。一貫性チェックの実行中または実行後にデータベースストラクチャが発生することがあるため、バックアップ後に一貫性チェックを実行し、データがバックアップ時に完全であったかどうかを確認することを、バックアップの実行前に考慮しておきます。</p> <p>利用可能なオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし このオプションはバックアップ完了後に一貫性チェックを実行しません。バックアップの前または後に、一貫性チェックを実行することを強くお勧めします。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 ■ インデックスを含まない完全チェック このオプションは一貫性チェックからインデックスを除外します。インデックスをチェックしないと、一貫性チェックに要する時間を大幅に短縮できますが、チェックの完全度は低下します。各ユーザーテーブルのデータページとクラスタ化されたインデックスページのみがチェックされます。クラスタ化されていないインデックスページの一貫性はチェックされません。 ■ インデックスを含む完全チェック このオプションは一貫性チェックにインデックスを含めます。発生したエラーはログに記録されます。 ■ 物理チェックのみ このオプションは、オーバーヘッドの少ないデータベースの物理的な一貫性をチェックします。ページヘッダーとレコードヘッダーの物理的構造の整合性、ページのオブジェクト ID とインデックス ID およびその割り当て構造の一貫性のみをチェックします。
トランザクションログバックアップ後のデータベースの状態を設定する	<p>[NORECOVERY - データベースをローディング状態にする]オプションまたは[STANDBY - データベースをスタンバイ状態にする]オプションのいずれかをバックアップに適用することができます。</p> <p>このオプションは、[ログ - トランザクションログをバックアップする]バックアップ方式を選択した場合にのみ使用できます。</p>
NORECOVERY - データベースをローディング状態にする	<p>ログファイルのバックアップ完了時に、データベースをロード状態にします。データベースがロード中の状態の場合は、ユーザーはデータベースに接続したり照会することはできません。</p> <p>このオプションは、[トランザクションログバックアップ後のデータベースの状態を設定する]を選択した場合にのみ使用できます。</p>

項目	説明
<p>STANDBY - データベースをスタンバイ状態にする</p>	<p>ログファイルのバックアップ完了時に、データベースをスタンバイモードにします。データベースがスタンバイモードのときは、ユーザーはデータベースへの接続や照会を実行することはできませんが、データベースを更新することはできません。</p> <p>スタンバイデータベースをライブデータベースに変換するには、最新のトランザクションログをリストアします。必ずリストア後のデータベースの状態として、[データベースは使用可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能]を選択してください。</p> <p>このオプションは、[トランザクションログバックアップ後のデータベースの状態を設定する]を選択した場合にのみ使用できます。</p>
<p>バックアップでチェックサムを使用する (SQL 2005 以降)</p>	<p>Backup Exec を使用してバックアップされる SQL データベースのデータにチェックサムを追加します。[検証のみ実行し、データをリストアしない]オプションを使用する場合には、バックアップされるデータにチェックサムを追加する必要があります。[検証のみ実行し、データをリストアしない]とともにこのオプションを使用すると、SQL データベースのリストア時に、SQL の検証済みバックアップをリストアに使用できます。</p>
<p>ディスク上に SQL バックアップのコピーを作成して、データベースが存在する SQL Server に格納する</p>	<p>バックアップする SQL データベースのコピーをディスク上に作成します。このオプションを使用すると、SQL データベースをストレージメディアにバックアップすると同時に[保存先パス]ボックスで指定したディスクパスにデータベースのコピーが書き込まれます。</p> <p>このオプションによって、IT 管理者が SQL データベースをバックアップするときに、データベースのコピーがディスク上に作成され、データベース管理者はこれらのコピーをテストやリストアなどに使用できます。</p>
<p>保存先パス</p>	<p>ディスク上に SQL バックアップのコピーを保存するためのパスを表示します。</p>

項目	説明
<p>SQL Server 2008 Enterprise Edition のソフトウェア圧縮 (SQL Server 2008 Enterprise Edition のみ)</p>	<p>このバックアップジョブに使用する次の圧縮設定を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし 圧縮をしません。 ■ 圧縮: SQL Server 2008 の圧縮を使用します。 <p>SQL は、SQL Server 2008 Enterprise Edition がインストールされているコンピュータのデータを圧縮します。したがって、SQL 圧縮を使用すると、より高速な SQL Server 2008 のバックアップが実行されます。</p> <p>リモート SQL Server 2008 コンピュータをバックアップし、SQL Server 2008 のソフトウェア圧縮を使用する場合、最新バージョンの Remote Agent を使用する必要があります。</p> <p>互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1</p> <p>Backup Exec 開始ソフトウェア圧縮を使用するバックアップジョブでは SQL Server 2008 のソフトウェア圧縮を使用しないことをお勧めします。Backup Exec 圧縮を有効にすると、SQL Server 2008 圧縮の最小限の利点が追加されます。実際、両方の圧縮スキームを使用するジョブでは、バックアップ時間が増加する場合があります。</p> <p>SQL Server 2008 のデータを含むバックアップジョブで Advanced Open File Option を使用する場合、SQL Server 2008 のソフトウェア圧縮は使用されません。</p>
<p>設定ガイド</p>	<p>ウィザードを使用して、SQL 用バックアップジョブのプロパティを選択します。</p>

ボリュームレベルのバックアップでの SQL データの自動除外について

バックアップ対象として SQL データが含まれるボリュームを選択すると、SQL Agent は、ボリュームレベルのバックアップに含めることができない SQL データを判断します。たとえば、.MDF ファイルおよび .LDF ファイルは、SQL システムによる排他的な使用のためにオープンされるため、バックアップすることはできません。これらのファイルは、アクティブファイルの除外と呼ばれる機能によって、自動的にバックアップ対象から除外されます。スナップショット以外のバックアップ中にこのファイルの除外が発生しなかった場合、これらのファイルは使用中と見なされてスキップしたものと扱われます。スナップショットバックアップ中にこのファイルの除外が発生しなかった場合、ファイルは一貫性がとれていない状態でバックアップされ、リストアの問題が発生する可能性があります。

ボリュームレベルのバックアップに SQL データを含めることはお勧めできませんが、必要な場合には、まずバックアップするストレージグループのマウントを解除する必要があります。その後、バックアップジョブを実行します。

p.1245 の「SQL データベースのバックアップについて」を参照してください。

p.1246 の「SQL Server ファイルグループのバックアップについて」を参照してください。

p.1248 の「バックアップ選択ペインへの SQL ファイルグループの表示」を参照してください。

SQL データベースのバックアップについて

Backup Exec には、データベースのバックアップ方式として、完全、差分、完全コピーのみ (SQL Server 2005 以上) の 3 種類が用意されています。完全バックアップ方式では、すべてのシステムテーブルおよびファイルグループを含む、データベース全体がバックアップされます。差分バックアップ方式では、最後の完全バックアップ以降にデータベースまたはファイルグループに加えられた変更内容のみがバックアップされます。コピー方式は、完全バックアップ方式と同様に実行されますが、今後の差分バックアップまたはログバックアップには影響を与えません。

差分バックアップは完全バックアップよりもサイズが小さく高速なため、完全バックアップよりも頻繁に実行することができます。差分バックアップでリストアできるのは差分バックアップを作成した時点までであるため、次の差分バックアップの作成までに、複数のログバックアップを作成しておく必要があります。トランザクションログのバックアップを使用すると、データベースを障害の発生した時点にリカバリすることができます。

次の完全バックアップまでのデータの変更量が比較的小さい場合または同じデータが繰り返し変更される場合には、差分バックアップを使用することを検討します。シンプル復旧モデルを使用しているため、バックアップを頻繁に実行する必要があるにもかかわらず、完全バックアップを短周期で行う時間がない場合にも差分バックアップを効果的に使用することができます。フルまたは一括ログ記録復旧モデルを使用している場合は、差分バックアップを使用して、データベースのリストア時に、ログバックアップによるロールフォワードに費やされる時間を短縮することができます。

データベースとログのバックアップの組み合わせではなくデータベースバックアップのみを実行する場合は、データベースにシンプル復旧モデルを使用し、データベース内にチェックポイントが発生したときに、トランザクションログを自動的に切り捨てます。これにより、トランザクションログが一杯になるのを防ぐことができます。他の復旧モデルでは、データベースのバックアップ後のログのクリアは行われません。

シンプル復旧モデルでは、トランザクションのコピーがログファイルに保存されないため、トランザクションログによるバックアップは実行できません。

トランザクションログのバックアップを行わない場合は、データベースを最後のバックアップの時点にリカバリすることはできますが、障害の発生した時点または特定の時点にリストアすることはできません。

master データベースは、完全バックアップ方式でのみバックアップすることができます。ログまたは差分バックアップ方式では **master** データベースをバックアップすることはできません。

メモ: Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているコンピュータに接続するデバイスにデータベースをバックアップできません。

SQL Agent はミラー化された SQL データベースの設定をサポートしますが、Microsoft は SQL データベースのミラー化を制限します。

適用される制限は次のとおりです。

- ミラー化された SQL データベースをバックアップしたりリストアしたりすることはできません。ミラー化されたデータベースのバックアップまたはリストアを試行すればバックアップジョブまたはリストアジョブは失敗します。
- ミラー化を設定する間、プライマリ SQL データベースをリストアできません。プライマリ SQL データベースをリストアするには、プライマリデータベースのデータベースミラー化を停止する必要があります。
- バックアップジョブによってデータベースがリカバリ不能な状態にならない場合にのみプライマリ SQL データベースとトランザクションログをバックアップできます。

p.1247 の「[SQL データベースのバックアップ](#)」を参照してください。

SQL Server ファイルグループのバックアップについて

一度にバックアップできないほどデータベースのサイズが増大した場合は、代替のバックアップ方式としてファイルグループを使用することができます。各ファイルグループを異なる時間帯と頻度でバックアップすることができます。変更の多いファイルグループは、変更の少ないファイルグループより頻繁にバックアップすることができます。ファイルグループのバックアップを使用すると、リストアに要する時間を大幅に短縮することができます。たとえば、破壊または損傷したファイルグループが必須のものでない場合は、そのファイルグループのみをリストアするだけで済みます。

Backup Exec には、ファイルグループのバックアップ方式として、完全および差分の 2 種類が用意されています。完全バックアップ方式ではファイルグループ全体がバックアップされます。差分バックアップ方式では、最後の完全バックアップ以降にファイルグループに加えられた変更内容のみがバックアップされます。差分バックアップは完全バックアップよりもサイズが小さく高速なため、完全バックアップよりも頻繁に実行することができます。ファイルグループの次の完全バックアップまでのデータの変更量が比較的少ない場合または同じデータが繰り返し変更される場合には、差分バックアップを使用することを考えます。

差分バックアップでリストアできるのは差分バックアップを作成した時点までであるため、次の差分バックアップの作成までに、複数のログバックアップを作成しておく必要があります。トランザクションログのバックアップを使用すると、ファイルグループを障害の発生した時点でリカバリすることができます。完全および差分ファイルグループバックアップとトランザクションログバックアップを組み合わせることで、データベースを完全に保護することができます。ファイルグループバックアップを使用してシステムをリカバリするには、ログバックアップが必要です。

p.1248 の「バックアップ選択ペインへの SQL ファイルグループの表示」を参照してください。

p.1248 の「SQL Server ファイルグループのバックアップ」を参照してください。

SQL データベースのバックアップ

次の手順は SQL データベースをバックアップする方法の詳細を提供します。

p.1245 の「SQL データベースのバックアップについて」を参照してください。

p.1250 の「SQL Server のトランザクションログのバックアップ」を参照してください。

SQL Server データベースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの [バックアップ] の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ] をクリックします。
- 3 [プロパティ] ペインの [ソース] の下にある [選択リスト] をクリックし、バックアップするデータを選択します。

p.1220 の「SQL Server リソースに Backup Exec ログオンアカウントを使用する方法」を参照してください。

- 4 ローカルまたはリモート選択項目から SQL データを選択するには、ドメイン名アイコンまたは SQL アイコンをクリックし、実際に SQL がインストールされている Windows コンピュータをクリックします。クラスタサーバーを使用している場合は、仮想サーバーからバックアップ選択項目を作成します。

共有ネットワークディレクトリのリストが SQL アイコンとともに表示されます。

SQL 内のデータベースをすべて選択するには、SQL アイコンの前にあるチェックボックスをオンにします。また、SQL アイコンをクリックし、データベースを個別に選択することもできます。

Windows ドメイン、Active Directory、DNS 名または IP アドレスのどれを使用して SQL データベースの選択項目を作成するかにかかわらず、SQL データベースの完全バックアップ、差分バックアップおよび増分バックアップを作成するときには同一の方法を使用する必要があります。たとえば、Windows ドメインを使用して SQL データベースの完全バックアップ選択項目を作成した場合、IP アドレスを使用して増分バックアップまたは差分バックアップの選択項目を作成することはできません。

- 5 SQL バックアップジョブのプロパティを選択するには、[プロパティ] ペインの [設定] の下にある [Microsoft SQL] をクリックします。

- 6 バックアップジョブのオプションを選択します。
p.1237 の「[SQL のバックアップオプション](#)」を参照してください。
- 7 バックアップジョブを開始するか、または[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択してからバックアップジョブを開始します。
p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

バックアップ選択ペインへの SQL ファイルグループの表示

デフォルトでは、バックアップ選択ペインにファイルグループは表示されません。

バックアップ選択ペインにファイルグループを表示する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 3 [バックアップジョブの作成時にファイルグループを表示する]オプションを選択します。
p.1248 の「[SQL Server ファイルグループのバックアップ](#)」を参照してください。
p.1236 の「[SQL Server のバックアップオプションの設定](#)」を参照してください。

SQL Server ファイルグループのバックアップ

特定のファイルグループをバックアップできます。

p.1246 の「[SQL Server ファイルグループのバックアップについて](#)」を参照してください。

SQL Server ファイルグループをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックし、バックアップするデータを選択します。
p.1220 の「[SQL Server リソースに Backup Exec ログオンアカウントを使用する方法](#)」を参照してください。
- 4 SQL データを選択するには、ドメイン名アイコンまたは SQL アイコンをクリックし、実際に SQL がインストールされている Windows コンピュータをクリックします。クラスタサーバーを使用している場合は、仮想サーバーからバックアップ選択項目を作成します。
- 5 SQL コンテナをクリックし、目的のファイルグループを選択します。

- 6 SQL バックアップジョブのプロパティを選択するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 7 バックアップジョブのオプションを選択します。
p.1237 の「[SQL のバックアップオプション](#)」を参照してください。
- 8 バックアップジョブを開始するか、または[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択してからバックアップジョブを開始します。
p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

SQL Server のトランザクションログをバックアップする方法

Backup Exec には、トランザクションログのバックアップ方式として、[ログ - トランザクションログをバックアップする]および[ログを切り捨てない]の 2 種類が用意されています。

ログのバックアップの実行時にログを切り捨てる場合は、Backup Exec を排他的に使用してログを切り捨てることをお勧めします。ログのバックアップ以外の処理によってトランザクションログが切り捨てられた場合は、ログのバックアップを再び実行する前に、完全バックアップまたは差分バックアップを実行する必要があります。

[ログを切り捨てない]方式は、データベースが損傷しているか、消失したファイルがある場合にのみ使用します。この方式では、データベースがこの状態にあってアクセスできないときでも、トランザクションをバックアップすることができます。このトランザクションログのバックアップを、最新のデータベースバックアップや以前に実行したトランザクションログのバックアップとともに使用して、障害が発生する直前の時点でデータベースをリストアすることができます。ただし、コミットの済んでいないトランザクションはロールバックされます。[ログを切り捨てない]方式では、ログのバックアップ後のコミット済みトランザクションの削除は行われません。

[ログを切り捨てない]方式で作成したバックアップを使用してデータベースをリストアするには、[ログを切り捨てない]方式のバックアップ作成以前に作成したデータベースのバックアップが必要です。トランザクションログにはリストアプロセスで使用するログファイルが含まれていないため、データベースを完全にリストアするには、このログファイルだけでは不十分です。データベースを完全にリストアするには、少なくとも 1 つのデータベースバックアップまたはファイルグループバックアップのセットと、データベースのログバックアップが必要です。

注意: SQL データベースでシンプル復旧モデルを使用している場合は、どちらの方式のログバックアップも実行できません。シンプル復旧モデルを使用してデータをリカバリできるのは、最新の完全または差分バックアップの作成時点までです。単純リカバリ完了状態を使用してデータベースのログバックアップを実行した場合、そのバックアップは失敗します。

データベースのプロパティをチェックするには、SQL Server のデータベース管理ツールで、プロパティを表示するデータベースを右クリックし、[プロパティ]をクリックして[オプション]タブをクリックすると、設定情報が表示されます。

p.1250 の「[SQL Server のトランザクションログのバックアップ](#)」を参照してください。

SQL Server のトランザクションログのバックアップ

SQL Server のトランザクションログのバックアップには、Backup Exec を使うことができます。

p.1249 の「[SQL Server のトランザクションログをバックアップする方法](#)」を参照してください。

p.1257 の「[SQL データベースとファイルグループのリストアについて](#)」を参照してください。

p.1260 の「[SQL Server トランザクションログを指定した時点のリストア](#)」を参照してください。

p.1261 の「[名前付きトランザクションまでの SQL トランザクションログからのリストア](#)」を参照してください。

SQL Server のトランザクションログをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックし、バックアップするデータを選択します。

p.1220 の「[SQL Server リソースに Backup Exec ログオンアカウントを使用する方法](#)」を参照してください。

- 4 SQL データを選択するには、ドメイン名アイコンまたは SQL アイコンをクリックし、実際に SQL がインストールされている Windows コンピュータをクリックします。クラスターサーバーを使用している場合は、仮想サーバーからバックアップ選択項目を作成します。

共有ネットワークディレクトリのリストが SQL アイコンとともに表示されます。

- 5 SQL バックアップジョブのプロパティを選択するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。

- 6 バックアップジョブのオプションを選択します。

p.1237 の「[SQL のバックアップオプション](#)」を参照してください。

- 7 バックアップジョブを開始するか、または[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択してからバックアップジョブを開始します。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットについて

SQL データベースのスナップショットはデータベースのスナップショットが作成された時にすばやく以前の状態にデータベースを復帰することを可能にします。データベースのスナップショットを使うとき、データベースを復帰するためにホストデータベースの完全リストアを行う必要はありません。ただし、データベースのスナップショットが作成された時点から復帰が行われた時点までの間にホストに変更が加えられた場合、その変更は失われます。

Backup Exec SQL Agent は、SQL データベースと連携して、データベースのスナップショット (既存のホストデータベースの読み取り専用のポイントインタイムコピー) を作成します。**Backup Exec** でデータベースのスナップショット (SQL 2005 以降) バックアップ方式を使用した SQL のバックアップジョブが実行されると、データベースのスナップショットの作成要求がホストデータベースに送信されます。

メモ: SQL データベースのためのスナップショットバックアップ方式は **SQL Server Enterprise Edition** (バージョン 2005 以降) によってのみサポートされます。

データベースのスナップショットをストレージメディアにバックアップすることはできません。データベースのスナップショットは、ディスク上の SQL スナップショットファイルに書き込まれます。データベースのスナップショットジョブが実行されると、**Backup Exec** によって、ジョブの状態を示す履歴およびジョブログ情報が作成されます。

データベースのスナップショットをバックアップすることはできないため、ホストデータベースがインストールされているディスクに障害が発生すると、すべてのデータベースのスナップショットが失われます。そのため、データベース保護戦略にはデータベースのスナップショット以外の方法を組み込むようにしてください。データベースのスナップショットは、SQL データベースの完全バックアップ、差分バックアップ、トランザクションログのバックアップなど、**Backup Exec** の総合的なデータベース保護戦略と組み合わせて使用する必要があります。

詳しくは **Microsoft SQL Server** のマニュアルを参照してください。

メモ: SQL データベースのスナップショットは、**Microsoft** ボリュームシャドウコピーサービス (**VSS**) のスナップショットとは異なります。**VSS** のスナップショットでは、ディスクボリュームおよび共有のポイントインタイムスナップショットが作成されますが、データベースのスナップショットでは、SQL データベースのポイントインタイムコピーが作成されます。**Backup Exec** の **Advanced Open File Option** で **VSS** オプションを使用して SQL データベースのスナップショットを作成することはできません。

メモ: 削除されたデータベーススナップショットが参照先に設定されている SQL データベーススナップショットのカタログ情報は、カタログから定期的に削除されます。バックアップメディアのカタログが再登録されても、データベースのスナップショットのカタログ情報は定期的に再度削除されます。

p.1252 の「[データベースのスナップショット \(SQL 2005 以上\) バックアップ方式について](#)」を参照してください。

データベースのスナップショット (SQL 2005 以上) バックアップ方式について

データベースのスナップショット (SQL 2005 以上) バックアップ方式を使用すると、次の操作を実行できます。

- SQL データベースのスナップショットを作成する。
- ディスク上に保持する SQL データベースのスナップショット数を設定する。

データベースのスナップショット (SQL 2005 以上) バックアップ方式を選択すると、[保持するデータベースのスナップショット] というオプションが表示されます。このオプションを使用すると、各データベースについてディスク上に保持するデータベースのスナップショット数を設定できます。しきい値に達すると、古いデータベースのスナップショットが削除され、新しいスナップショットに置き換えられます。データベースのスナップショット数は SQL データベースが更新されるたびに増え続けるため、スナップショット数を制限することによって、スナップショットの更新時に必要なディスク領域および SQL Server の処理時間を最小限に抑えることができます。

保持されるデータベースのスナップショット数を制限することによって、ホストデータベースに問題が発生した場合にデータの損失を最小限に抑えるデータベース保護戦略を策定できます。たとえば、不注意によるテーブルの削除から SQL データベースを保護する戦略を作成することができます。この戦略で、24 時間の間、1 時間に 1 回実行するようにスケジュールされた、Backup Exec のデータベースのスナップショットジョブを設定します。また、この戦略の一環として、4 つのデータベースのスナップショットを保持するようにジョブを設定します。ジョブは 1 時間に 1 回実行するようにスケジュールされているため、新しいデータベースのスナップショットは 1 時間に 1 回作成されます。5 時間目以降は、データベースの新しいスナップショットが作成される前に、最も古いスナップショットが自動的に削除されます。24 時間の間、ディスク上に存在するデータベースのスナップショット数が 4 を超えることはありません。ユーザーがデータベーステーブルを削除した場合、まずテーブルが削除された時刻を確認してから、Backup Exec でデータベースのスナップショットのリストアジョブを実行します。このリストアジョブによって、4 時間前までの 4 つの過去の時点のいずれかにホストを戻すことができます。ただし、データベースのスナップショットが作成された時点から復帰が行われた時点までの間にホストに変更が加えられた場合、その変更は失われます。

p.1253 の「[SQL データベースのスナップショットの作成](#)」を参照してください。

p.1274 の「データベースのスナップショットを使用した SQL Server 2005 以上のデータベースの復帰について」を参照してください。

SQL データベースのスナップショットの作成

Backup Exec SQL Agent は、SQL Server 2005 以降のデータベースと連携して、データベースのスナップショット(既存のホストデータベースの読み取り専用のポイントインタイムコピー)を作成します。

p.1251 の「SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットについて」を参照してください。

データベースのスナップショットを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 データベースのスナップショットを作成する SQL データベースを選択します。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 6 [データベースのバックアップ方式]フィールドで、[データベーススナップショット (SQL 2005以降) - 読み取り専用の、別のデータベースの特定時点のコピー]を選択します。
- 7 データベースごとに保持するスナップショットの数を設定するか、デフォルトの 4 を使用します。
- 8 データベースのスナップショットジョブを開始するか、または[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択して、バックアップジョブを開始します。

SQL Server のリストアオプションの設定

この項では、SQL 用リストアジョブのプロパティの選択方法と、SQL 固有のリストアオプションについて説明します。リストアジョブの作成方法およびリストアオプションについて:

p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。

p.1257 の「SQL データベースとファイルグループのリストアについて」を参照してください。

p.1260 の「SQL Server トランザクションログを指定した時点のリストア」を参照してください。

p.1261 の「名前付きトランザクションまでの SQL トランザクションログからのリストア」を参照してください。

p.1262 の「SQL Server のファイルグループバックアップからのリストアについて」を参照してください。

SQL Server のリストアオプションを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。

p.1254 の「[SQL のリストアオプション](#)」を参照してください。

SQL のリストアオプション

SQL のリストアジョブを作成するときに次のオプションを設定できます。

p.1254 の「[SQL のリストアオプション](#)」を参照してください。

p.1259 の「[SQL Server のデータベースバックアップからのリストア](#)」を参照してください。

p.1260 の「[SQL Server トランザクションログを指定した時点のリストア](#)」を参照してください。

表 J-4 SQL のリストアオプション

項目	説明
データベースは使用可能な状態、トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能	最新のデータベースバックアップ、差分バックアップまたはログバックアップのリストア時に、未完了のトランザクションをロールバックできます。リカバリ完了時にはデータベースが使用できる状態になっています。このオプションを選択しなかった場合は、データベースは中間状態のまま、使用することができません。 このオプションを選択した場合は、バックアップのリストアは中止され、最初からリストアをやり直す必要があります。
データベースは操作不可能な状態、トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは可能	別のリストアジョブでリストアする差分またはトランザクションログのバックアップが他にもあることを示します。
データベースは読み取り専用モード	トランザクションログおよびデータベースのリストア時にスタンバイデータベースを作成して管理します。スタンバイデータベースについて詳しくは SQL のマニュアル を参照してください。
既存の保存先データベースをオフラインにする	リストアジョブを実行する前に、 Backup Exec によってデータベースが自動的にオフラインになります。このオプションを選択せずに SQL データベースへの接続を確立した場合、リストアジョブは失敗します。

項目	説明
<p>既存のデータベースを上書きする</p>	<p>サーバー上に存在する同名の別のデータベースやファイルグループを置換します。[既存のデータベースを上書きする]を指定せずにリストアを実行した場合は、既存のデータベースやファイルグループを誤って上書きしないように、SQL による確認が行われます。このオプションを選択しなかった場合の上書き確認について詳しくは SQL のマニュアルを参照してください。</p>
<p>master データベースのリストアを自動化する</p>	<p>master データベースをリストアするために、Backup Exec によって SQL が停止されます。既存のすべてのユーザーはログオフさせられ、SQL Server はシングルユーザーモードになります。</p> <p>このオプションを選択した場合は、リストアできるのは master データベースのみです。他のデータベースのリストアはできません。</p> <p>Backup Exec に、レジストリキー HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Microsoft¥Microsoft SQL Server および HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Microsoft¥MSSQLServer へのアクセス権限がない場合は、デフォルトディレクトリへのリストアを正しく行うことはできません。また、SQL 用リストアジョブプロパティの[master データベースのリストアを自動化する]も使用できません。使用するログオンアカウントに、SQL インスタンスがインストールされている Windows サーバーに対する Administrator 権限が設定されているかどうかを調べると、Backup Exec にこの権限があるかどうかわかります。</p>
<p>リストア中にエラーが発生した場合にリストアを続行する (SQL 2005 以降)</p>	<p>データベースのリストア時に SQL でデータベースの破損エラーが検出された場合にできるだけ多くの SQL データベースをリストアできます。</p>
<p>検証のみ実行し、データをリストアしない</p>	<p>SQL Server で SQL バックアップジョブを検証できます。このオプションは、Backup Exec の SQL データストリーム全体を SQL Server に直接戻して検証を行います。SQL Server によってデータストリームのエラーが処理されても、既存の SQL データベースに影響はありません。すべての検証処理は SQL Server 内で処理され、ディスクには何も書き込まれません。</p> <p>SQL Server によってデータストリームが処理される場合、検証処理が終了するまで、データベース全体のパフォーマンスにわずかな影響があります。</p> <p>このオプションは SQL Server 2000 でもサポートされていますが、Backup Exec SQL バックアップオプションの[バックアップでチェックサムを使用する (SQL 2005 以降)]を使用する場合に最高のパフォーマンスを発揮します。</p> <p>p.1236 の「SQL Server のバックアップオプションの設定」を参照してください。</p>

項目	説明
リストア後の一貫性チェック	<p>次のいずれかのオプションを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ インデックスを含まない完全チェック 一貫性チェックからインデックスを除外します。インデックスをチェックしないと、一貫性チェックに要する時間を大幅に短縮できますが、チェックの完全度は低下します。各ユーザーテーブルのデータページとクラスタ化されたインデックスページのみがチェックされます。クラスタ化されていないインデックスページの一貫性はチェックされません。 ■ インデックスを含む完全チェック 一貫性チェックにインデックスを含めます。発生したエラーはログに記録されます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 ■ 物理チェックのみ オーバーヘッドの少ない SQL Server 2000 データベースの物理的な一貫性をチェックします。ページヘッダーとレコードヘッダーの物理的構造の整合性、ページのオブジェクト ID とインデックス ID およびその割り当て構造の一貫性のみをチェックします。 ■ なし このオプションは連続リストア用です。すべての連続リストアが完了するまでは、リストア後の一貫性チェックを実行しないでください。連続リストア中に一貫性チェックを選択した場合は、リストアが完了しても一貫性チェックは実行されません。この情報は、ジョブログで確認できます。 <p>リストア完了後にデータベースをリカバリする必要がある場合は、前述の一貫性チェックの 1 つを選択します。</p>
ログ全体のリカバリ	<p>リストア用に選択したトランザクションログのトランザクションをすべてリカバリします。</p>
時刻を指定してリストアする	<p>トランザクションログ内の時点を指定して、その時点までのトランザクションをトランザクションログからリストアします。指定した時点までのリストアが終了すると、トランザクションログからのリカバリは完了します。</p> <p>[日付]ボックスで、日付を入力するかまたは矢印をクリックしてカレンダーを表示し、日付を選択します。</p> <p>[時間]ボックスで、時間を入力するかまたは矢印をクリックして時間を選択します。</p>

項目	説明
トランザクションを指定してリストアするトランザクション名	<p>名前付きトランザクション (またはマーク) までのトランザクションをトランザクションログからリストアし、その時点でトランザクションのリストアを終了します。トランザクションの名前には大文字と小文字の区別があります。</p> <p>名前付きトランザクションの日付と時間は、クライアントアプリケーションのイベントログで調べます。</p>
指定したトランザクションをリストアに含める	<p>名前付きトランザクションをリストアに含めます。このオプションを選択しなかった場合は、指定したトランザクションの直前でリストアは終了します。</p> <p>このオプションは、[トランザクションを指定してリストアするトランザクション名] オプションを選択した場合にのみ使用できます。</p>
指定したトランザクションを次の日時以降から検索する	<p>名前付きトランザクションの検索条件として使用する、検索を開始する日付と時刻を指定します。たとえば、2000年6月2日 12:01 p.m. 以降のトランザクション「AfternoonBreak」までを、ログからリストアするように指定した場合は、その時点より前のトランザクション「AfternoonBreak」は検索から除外されます。</p> <p>このオプションは、[トランザクションを指定してリストアするトランザクション名] オプションを選択した場合にのみ使用できます。</p>
選択項目を確認	<p>SQL データベースを正常にリストアするために必要な選択項目を Backup Exec で確認または実行できます。データベースのリストア選択項目を作成したら、この機能を使用して、データベースの選択項目が有効であることを確認します。選択に問題がある場合、Backup Exec はエラーを通知して修正します。</p>
設定ガイド	<p>ウィザードを使用して、SQL 用リストアジョブのプロパティを選択します。</p>

SQL データベースとファイルグループのリストアについて

データベースのリストアは、1 つのジョブまたは複数のジョブを使用してすべてのバックアップセットをリストアすることで実行できます。ジョブの数は、データベースまたはファイルグループを保護するバックアップジョブの種類によって決まります。1 つのジョブを使用してデータベースをリストアする場合は、完全バックアップ、差分バックアップおよびログバックアップなどを含む、適用されるすべてのバックアップセットを選択します。また、[データベースは使用可能な状態。トランザクションログのリストアは不可能] オプションを選択します。シングルジョブリストアおよびマルチジョブリストアは、どちらもリストア先変更リストアジョブで使用できます。

次のような場合には、データのリストアを完了するために、別のリストアジョブを使用する必要があります。

- ファイルグループバックアップを使用してデータベースまたはプライマリファイルグループをリストアする。プライマリファイルグループのリストア、ファイルグループバックアップセットの残りのリストアおよびトランザクションログのリストアには、それぞれ別のリストアジョブを使用する必要があります。
- プライマリでないファイルグループをリストアする。[ログを切り捨てない]バックアップの実行後に、ファイルグループの完全および差分バックアップの消失したファイルグループのリストアおよびトランザクションログのリストアには、別のリストアジョブを使用する必要があります。

複数のジョブを使用してデータベースをリストアする場合は、最後のジョブを除くすべてのジョブに対して、リストア後のデータベースの状態として[データベースは操作不可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは可能]を必ず指定します。最後のジョブでは、リストア後のデータベースの状態として[データベースは使用可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能]を指定する必要があります。このリストア後の状態を使用すると、トランザクションログはリストアできません。

少量のデータがデータベースに追加されるごとにディスクファイルが肥大化することを防ぐため、SQL データベースファイルには未使用の部分が含まれています。未使用の部分はゼロで埋められます。SQL データベースのリストア時には、実際にリストアに使用されるデータの量は予測できないため、SQL はディスク上に必要なデータベースファイルを作成し、ゼロで埋めます。

非常に大規模なデータベースでは、この処理に数時間かかることがあります。このとき Backup Exec は、転送中のデータが存在しないことを報告し、[ジョブモニター]ビューの[バイト数]フィールドも更新されません。SQL によるファイルへのゼロの書き込みが完了した後、リストアジョブが続行されます。この処理はすべてのデータベースリストアジョブで実行されますが、非常に大規模なデータベースでない限り、特に確認できません。

ミラー化された構成では、プライマリ SQL データベースはリストアできません。プライマリ SQL データベースをリストアするには、プライマリデータベースのデータベースミラー化を停止する必要があります。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.1260 の「[SQL Server トランザクションログを指定した時点のリストア](#)」を参照してください。

p.1261 の「[名前付きトランザクションまでの SQL トランザクションログからのリストア](#)」を参照してください。

p.1262 の「[SQL Server のファイルグループバックアップからのリストアについて](#)」を参照してください。

p.1270 の「[SQL Server のリストア先の変更](#)」を参照してください。

暗号化された SQL データベースのリストアについて

SQL 2008 は透過的なデータベース暗号化 (TDE) をサポートします。このため、バックアップセットレベルで SQL 2008 データベースを暗号化できます。

TDE を使用するデータベースをバックアップする場合は、データベースとともに証明書キーと暗号化キーをバックアップすることをお勧めします。証明書キーと暗号化キーを含めないと、選択した SQL インスタンス内ですべてのバックアップ操作とリストア操作を実行する必要があります。

メモ: 証明書キーと暗号化キーが宛先インスタンスに適用されている場合のみ、Backup Exec は TDE を使用したデータベースデータのリストア先を変更できます。証明書キーと暗号化キーが宛先インスタンスに適用されていない場合は、証明書の拇印が見つからないことを示すエラーが表示されます。

Microsoft SQL 2008 のマニュアルを参照してください。

SQL Server のデータベースバックアップからのリストア

データベースでシンプル復旧モデルを使用している場合は、リストアするトランザクションログは存在しません。最新の完全バックアップをリストアし、データベースの差分バックアップが存在する場合は、最新のデータベースの差分バックアップをリストアします。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

メモ: アクティブなデータベースのスナップショットを使用して既存の SQL Server 2005 以上のデータベース上に SQL Server 2005 以上のデータベースの完全バックアップをリストアすると、リストアされる SQL Server 2005 以上のデータベースの既存のスナップショットはすべて消去されます。

p.1274 の「[データベースのスナップショットを使用した SQL Server 2005 以上のデータベースの復帰について](#)」を参照してください。

p.1257 の「[SQL データベースとファイルグループのリストアについて](#)」を参照してください。

p.1251 の「[SQL Server 2005 以降のデータベースのスナップショットについて](#)」を参照してください。

p.1274 の「[データベースのスナップショットを使用した SQL Server 2005 以上のデータベースの復帰について](#)」を参照してください。

SQL Server のデータベースバックアップからリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストア選択リストで、データベースの最新の完全バックアップセットを選択し、存在する場合は、最新のデータベースの差分バックアップセットも選択します。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。

- 6 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、[データベースは使用可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能]をクリックします。
p.1254 の「[SQL のリストアオプション](#)」を参照してください。
- 7 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。

SQL Server トランザクションログを指定した時点までリストアする方法

トランザクションログ内の時点指定して、その時点までのトランザクションをトランザクションログからリストアすることができます。指定した時点までのリストアが終了すると、トランザクションログからのリカバリは完了します。クライアントアプリケーションのイベントログをチェックして、トランザクションの日時を調べることができます。

指定した時点がリストアする最新のトランザクションログより後の場合は、リストアは行われますが、警告が発生し、データベースは中間的な状態に留まります。指定した時点が、リストアする1つまたは複数のトランザクションログに含まれる日時より前の場合は、トランザクションのリストアは行われません。

p.1260 の「[SQL Server トランザクションログを指定した時点のリストア](#)」を参照してください。

SQL Server トランザクションログを指定した時点のリストア

この項では、トランザクションログ内の時点指定して、その時点までのトランザクションをトランザクションログからリストアする方法について説明します。

p.1260 の「[SQL Server トランザクションログを指定した時点までリストアする方法](#)」を参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.1257 の「[SQL データベースとファイルグループのリストアについて](#)」を参照してください。

p.1261 の「[名前付きトランザクションまでの SQL トランザクションログからのリストア](#)」を参照してください。

SQL Server トランザクションログを指定した時点までリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストア選択リストで、データベースの最新の完全バックアップセットを選択します。データベースの差分バックアップセットが存在する場合は最新の差分バックアップも選択し、リストアするすべてのログバックアップセットを選択します。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。

- 6 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、[データベースは使用可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能]をクリックします。
- 7 [時刻を指定してリストアする]を選択し、日時を選択します。
p.1254 の「[SQL のリストアオプション](#)」を参照してください。
- 8 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

名前付きトランザクションまでトランザクションログからリストアする方法

名前 (マーク) 付きトランザクションを指定し、そのトランザクションまでトランザクションログからリストアできます。指定した名前付きトランザクションまでリストアが到達すると、トランザクションログからのリストアは終了します。

指定されたトランザクションの名前は必ずしも一意ではないため、同時に日付と時刻を指定して、その時点以降のトランザクションをリストア操作で検索することができます。たとえば、2000 年 6 月 2 日 12:01 p.m. 以降のトランザクション「AfternoonBreak」までを、ログからリストアするように指定した場合は、その時点より前のトランザクション「AfternoonBreak」は検索から除外されます。クライアントアプリケーションのイベントログをチェックして、名前付きトランザクションの日時を調べることができます。

指定した名前付きトランザクションが存在しなかった場合でもリストアは行われますが、警告が発生し、データベースは中間的な状態に留まります。

トランザクションの名前には大文字と小文字の区別があります。名前付きトランザクションの指定には、大文字と小文字の区別に注意する必要があります。

p.1261 の「[名前付きトランザクションまでトランザクションログからリストアする方法](#)」を参照してください。

名前付きトランザクションまでの SQL トランザクションログからのリストア

この項では、名前 (マーク) 付きトランザクションを指定し、そのトランザクションまでトランザクションログからリストアする方法について説明します。

p.1261 の「[名前付きトランザクションまでトランザクションログからリストアする方法](#)」を参照してください。

p.1257 の「[SQL データベースとファイルグループのリストアについて](#)」を参照してください。

名前付きトランザクションまで SQL トランザクションログをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。

- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストア選択リストで、データベースの最新の完全バックアップセットを選択します。データベースの差分バックアップセットが存在する場合は最新の差分バックアップも選択し、リストアするすべてのログバックアップセットを選択します。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 6 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、[データベースは使用可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能]をクリックします。
- 7 [トランザクションの名前を指定してリストアする]を選択し、トランザクションの名前を入力します。

この名前には大文字と小文字の区別があります。大文字と小文字の区別に注意して名前を入力します。
- 8 指定した名前付きトランザクションをリストアに含めるには、[指定したトランザクションをリストアに含める]を選択します。
- 9 ログ内の特定の名前付きトランザクションを指定するには、[指定したトランザクションを次の日時に降から検索する]を選択して日付と時刻を指定します。

日付と時刻を指定しないと、トランザクションログからのリカバリは指定した名前の最初のトランザクションまでで終了します。

p.1270 の「[SQL Server のリストア先の変更](#)」を参照してください。
- 10 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

SQL Server のファイルグループバックアップからのリストアについて

ファイルグループバックアップを使用して、データベース全体、プライマリファイルグループ、削除または変更されたテーブルを含んでいるファイルグループおよび非プライマリファイルグループをリストアすることができます。

ファイルグループリストアを行うには、次の要件を満たす必要があります。

- ファイルグループをリストアする時点は、すべてのファイルグループで同じにしてください。たとえば、ファイルグループからテーブルを削除した場合、そのファイルグループをテーブルを削除する前の時点にリストアし、その時点に戻すことはできません。既存のすべてのファイルグループは、同じ時点にリストアする必要があります。

ファイルグループを他のファイルグループと同じ時点にリストアすることができるようにするため、次のいずれかのログバックアップを実行します。

- データベースに変更がない場合は[ログ-トランザクションログをバックアップする]方式のバックアップを実行します。

- 消失したファイルまたはファイルグループがある場合は、[ログ-トランザクションログをバックアップする (ログを切り捨てない)] 方式のバックアップを実行します。

メモ: プライマリファイルグループが消失した場合は、ログバックアップ方式は使用できません。データベースがリストアできるのは最後のログバックアップまでです。

- ファイルグループのリストア先を別のサーバーに変更することはできますが、データベースファイルパスは変更できません。たとえば、G:¥SQLDATA からバックアップしたファイルグループは、リストア先のサーバーに関係なく、G:¥SQLDATA にリストアする必要があります。

SQL の [リストアジョブのプロパティ] ダイアログボックスにある [すべてのデータベースファイルをデフォルトドライブにリストアする] および [すべてのデータベースファイルをターゲットインスタンスのデータディレクトリにリストアする] オプションは、ファイルグループのリストアには適用されません。ファイルグループは、バックアップ元のドライブおよびパスにリストアする必要があります。

- ファイルグループバックアップからのリストアでは、複数のリストアジョブが必要です。
- Backup Exec の前のバージョンを使用して、このバージョンの Backup Exec で作成したファイルグループバックアップをリストアすることはできません。

p.1263 の「SQL データベース全体、消失したプライマリファイルグループ、削除または変更したテーブルを含んでいるファイルグループをリストアする方法」を参照してください。

p.1264 の「消失または損傷した SQL 非プライマリファイルグループのリストア」を参照してください。

SQL データベース全体、消失したプライマリファイルグループ、削除または変更したテーブルを含んでいるファイルグループをリストアする方法

データベース全体、消失したプライマリファイルグループ、削除または変更したテーブルを含んでいるファイルグループをリストアするには、次の手順を実行します。

プライマリファイルグループのリストア、ファイルグループバックアップセットの残りのリストアおよびトランザクションログのリストアには、それぞれ別のリストアジョブを使用する必要があります。

p.1264 の「消失または損傷した SQL 非プライマリファイルグループのリストア」を参照してください。

p.1257 の「SQL データベースとファイルグループのリストアについて」を参照してください。

データベース全体、消失したプライマリファイルグループ、削除または変更したテーブルを含んでいるファイルグループをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストア選択リストで、プライマリファイルグループを含んでいるバックアップセットを選択します。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 6 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、[データベースは操作不可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは可能]をクリックします。
p.1270 の「[SQL Server のリストア先の変更](#)」を参照してください。
- 7 リストアジョブを開始します。
- 8 プライマリファイルグループのリストアが終了した後、最新の完全および差分バックアップを含んでいるファイルグループバックアップセットの残りを選択します。
- 9 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、[データベースは操作不可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは可能]をクリックし、リストアジョブを開始します。
- 10 完全および差分バックアップのリストアが終了した後、トランザクションログを含んでいるバックアップセットを選択します。
- 11 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、[データベースは操作不可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは可能]をクリックします。
このオプションを使用すると、すべてのトランザクションログがリストアされます。また、[時刻を指定してリストアする]または[トランザクションの名前を指定してリストアする]を選択することもできます。
- 12 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

消失または損傷した SQL 非プライマリファイルグループのリストア

消失または損傷した非プライマリファイルグループをリストアするには、次の手順を実行します。

p.1263 の「[SQL データベース全体、消失したプライマリファイルグループ、削除または変更したテーブルを含んでいるファイルグループをリストアする方法](#)」を参照してください。

p.1257 の「[SQL データベースとファイルグループのリストアについて](#)」を参照してください。

消失または損傷した非プライマリファイルグループをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 バックアップ選択リストで、目的のデータベースを選択します。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 6 バックアップ方式[ログ - トランザクションログをバックアップする (ログを切り捨てない)]を選択し、一貫性チェックとして[実行しない]を選択して、バックアップジョブを開始します。
- 7 [ログを切り捨てない]方式のバックアップが終了した後、最新の完全および差分バックアップが含まれている最新のファイルグループバックアップおよびトランザクションログバックアップを選択し、消失または損傷したファイルグループをリストアします。
- 8 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、[データベースは使用可能な状態。トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能]をクリックします。
- 9 リストアジョブを開始するか、または[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択してからリストアジョブを開始します。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

SQL Server master データベースのリストアについて

master データベースが損傷した場合は、次のような現象が発生します。

- SQL を起動できない。
- セグメント障害または入力/出力エラーが発生する。
- SQL のデータベース一貫性チェックユーティリティ(DBCC)によってレポートが生成される。

SQL を起動できる場合は、SQL の[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスにある [master データベースのリストアを自動化する] オプションを使用して、master データベースバックアップの最新のコピーをリストアし、必要に応じて、その他のデータベースをリストアすることができます。

master データベースの損傷が大きく SQL を起動できない場合は、master 再構築ユーティリティや SQL を再インストールして SQL を起動するのではなく、データベースのバックアップ時に Backup Exec によって自動的に作成される master および model データベースのコピーを、損傷または消失したデータベースと置換します。SQL が再起動した後、Backup Exec の [master データベースのリストアを自動化する] オプションを使用して、master データベースの最新のコピーをリストアし、必要に応じてその他のデータベースをリストアします。

master および **model** データベースのコピーが作成されていない場合は、Microsoft の **rebuildm.exe** ユーティリティを使用して **master** データベースを再構築し、SQL を起動します。

最終バックアップを作成後に **master** データベースに追加した変更は、バックアップをリストアした時点ですべて失われるため、再適用する必要があります。**master** データベースのバックアップ後に作成したユーザーデータベースが存在する場合、バックアップからリストアするか、再び SQL にアタッチするまで、そのデータベースにアクセスすることはできません。

p.1266 の「データベースのコピーを使用した SQL の実行」を参照してください。

p.1268 の「**master** データベースのリストア」を参照してください。

データベースのコピーを使用した SQL の実行

以前のバックアップのデータベースのコピーを使用して SQL を手動で実行してから、**master** データベースをリストアできます。

p.1268 の「**master** データベースのリストア」を参照してください。

表 J-5 データベースのコピーを使用した SQL の実行

手順	処理
手順 1	SQL サービスが実行されていないことを確認します。 詳しくは SQL Server のマニュアルを参照してください。
手順 2	データベースのコピーが存在することを確認します。 p.1267 の「 SQL データベースのコピーの場所 」を参照してください。 必要に応じ、 master および model データベースが存在していた元のディレクトリに、バックアップセットから master および model データベースをリストアします。

手順	処理
手順 3	<p>Windows エクスプローラを使用して、デフォルトのデータディレクトリを表示し、次のファイルを削除します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ master.mdf ■ mastlog.ldf ■ model.mdf ■ modellog.ldf
手順 4	<p>データベースのコピーの名前を元の名前に変更します。</p> <p>p.1268 の「SQL のデータベース名」を参照してください。</p> <p>読み取り専用ファイルは使用しないでください。読み取り専用ファイルでは SQL サービスは起動しません。</p>
手順 5	<p>サービスコントロールマネージャを使用して SQL Server を起動します。</p>
手順 6	<p>最新の変更内容を master データベースにリストアします。</p> <p>p.1268 の「master データベースのリストア」を参照してください。</p>

SQL データベースのコピーの場所

データベースのコピーの名前は、master\$4idr、mastlog\$4idr、model\$4idr および modellog\$4idr です

p.1266 の「[データベースのコピーを使用した SQL の実行](#)」を参照してください。

表 J-6 SQL データベースのコピーの場所

SQL データベースのコピー	場所
SQL Server 2000 のデフォルトのインストール	C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL\Data*.*
SQL Server 2000 の名前付きインスタンス	C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL\$Instance_Name\Data*.*

SQL データベースのコピー	場所
SQL Server 2005 以降の最初のインストール	C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.1\MSSQL\Data*.*
SQL Server 2005 以降の 2 番目にインストールされたインスタンス	C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.2\MSSQL\Data*.*
SQL Server 2008 のデフォルトのインストール	C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL10.<instance name>\MSSQL\Data

SQL のデータベース名

次の表に、コピーしたデータベースの名前と元のデータベースの名前を示します。

p.1266 の「データベースのコピーを使用した SQL の実行」を参照してください。

表 J-7 SQL のデータベース名

コピーしたデータベースの名前	元のデータベースの名前
master\$4idr	master.mdf
master\$4idr	mastlog.ldf
model\$4idr	model.mdf
modellog\$4idr	modellog.ldf

master データベースのリストア

データベースのコピーを使用して SQL を実行した後で、**master** データベースをリストアできます。

p.1265 の「[SQL Server master データベースのリストアについて](#)」を参照してください。

p.1266 の「データベースのコピーを使用した SQL の実行」を参照してください。

master データベースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストア選択リストで、**master** データベースの最後のバックアップが含まれているバックアップセットを選択します。

- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Microsoft SQL]をクリックします。
- 6 SQL の[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、[**master** データベースのリストアを自動化する]を選択します。

既存のすべてのユーザーはログオフさせられ、SQL Server はシングルユーザーモードになります。

このオプションを選択した場合は、リストアできるのは **master** データベースのみです。他のデータベースのリストアはできません。

Backup Exec に、レジストリキー
HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Microsoft¥Microsoft SQL Server および
HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥Microsoft¥MSSQLServer へのアクセス権限がない場合は、デフォルトディレクトリへのリストアを正しく行うことはできません。また、SQL 用リストアジョブプロパティの[**master** データベースのリストアを自動化する]も使用できません。SQL を実行しているコンピュータの **Administrator** 権限が Backup Exec の使用しているアカウントに設定されているかどうかを確認してください。
- 7 リストア完了後に実行する一貫性チェックを選択します。
- 8 リストアジョブを開始します。

リストアが終了すると、SQL はマルチユーザーモードで起動します。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 9 残りの SQL データベースをリストアします。

SQL Server のリストア先の変更について

次のような場合は、バックアップのリストア先を変更することができます。

- 別のサーバー、データベースまたはインスタンスにデータベースをリストアする。
- データベースのリストア先に差分およびログをリストアする。
- 別のサーバーまたはインスタンスに、バックアップ内のファイルグループをリストアする。ファイルグループのリストア先を別のサーバーに変更することはできますが、データベースファイルパスは変更できません。たとえば、**G:¥SQLDATA** からバックアップしたファイルグループは、リストア先のサーバーを変更した場合でも、**G:¥SQLDATA** にリストアする必要があります。ファイルグループは、バックアップ元のドライブおよびパスにリストアする必要があります。
- 32 ビットまたは 64 ビットのプラットフォームから他のプラットフォームにデータベースをリストアする。

シングルジョブリストアおよびマルチジョブリストアは、どちらもリストア先変更リストアジョブで使用できます。

p.1270 の「[SQL Server のリストア先の変更](#)」を参照してください。

SQL Server のリストア先の変更

次の手順は SQL Server のリストア先を変更する方法の詳細を提供します。

p.1269 の「[SQL Server のリストア先の変更について](#)」を参照してください。

p.1257 の「[SQL データベースとファイルグループのリストアについて](#)」を参照してください。

リストア先を変更する方法

- 1 リストアジョブを開始します。
 - p.1259 の「[SQL Server のデータベースバックアップからのリストア](#)」を参照してください。
 - p.1260 の「[SQL Server トランザクションログを指定した時点のリストア](#)」を参照してください。
 - p.1261 の「[名前付きトランザクションまでの SQL トランザクションログからのリストア](#)」を参照してください。
 - p.1262 の「[SQL Server のファイルグループバックアップからのリストアについて](#)」を参照してください。
- 2 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで必要なオプションを選択し、[プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[Microsoft SQL のリストア先の変更]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
 - p.1270 の「[\[Microsoft SQL Server のリストア先の変更\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 リストア先を変更したリストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
 - p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

[Microsoft SQL Server のリストア先の変更]オプション

異なるサーバーに SQL のバックアップセットをリストアするときに次のオプションを設定できます。

p.1270 の「[SQL Server のリストア先の変更](#)」を参照してください。

表 J-8 [Microsoft SQL Server のリストア先の変更]オプション

項目	説明
Microsoft SQL Server セットの リストア先を変更する	SQL バックアップセットのリストア先の変更を有効にできます。

項目	説明
サーバー	<p>異なるサーバーにリストア先を変更します。チェックボックスをオンにした後、ターゲットサーバーの名前を入力します。</p> <p>データベースの完全バックアップのリストア先を、別のサーバーまたはデータベースに変更することができます。</p> <p>データベースをバックアップした後でドライブの構成を変更した場合は、次のオプションのいずれかを選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ データベースファイルをリストアするデフォルトドライブ ■ すべてのデータベースファイルをターゲットインスタンスのデータディレクトリにリストアする <p>p.1253の「SQL Serverのリストアオプションの設定」を参照してください。</p>
インスタンス	<p>リストア先を名前付きインスタンスに変更します。チェックボックスをオンにした後、インスタンス名を入力します。デフォルトのインスタンスにリストアする場合は、このフィールドには何も入力しないでください。</p>
データベース	<p>リストア先を宛先サーバー上の別のデータベースに変更します。チェックボックスをオンにした後、リストア先データベースの名前を入力します。</p> <p>データベースの完全バックアップのリストア先を、別のサーバーまたはデータベースに変更することができます。</p> <p>データベースをバックアップした後でドライブの構成を変更した場合は、次のオプションのいずれかを選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ データベースファイルをリストアするデフォルトドライブ ■ すべてのデータベースファイルをターゲットインスタンスのデータディレクトリにリストアする <p>差分バックアップまたはログバックアップのリストアで、関連データベースバックアップのリストア先を別のサーバーに変更した場合は、そのデータベース名を指定する必要があります。</p>

項目	説明
変更先ドライブを使用する	<p>SQL データベースファイルのリストアに使用できるデフォルトのドライブを指定します。</p> <p>SQL データベースのバックアップ時に、データベースを構成するファイルの物理ファイル名 (ディレクトリパスを含む) が、SQL によってバックアップセットに格納されます。たとえば、論理ファイル pubs の物理ファイル名として E:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.1\MSSQL\DATA\test.mdf が格納されているとします。このデータベースのリストアが必要になった場合は、リストア先として、これらと同じ物理ファイル名が SQL によって使用されます。リストア時に、必要なサブディレクトリが存在しない場合は Backup Exec によって自動的に作成されます。</p> <p>ただし、1 つ以上のデータベースファイルを格納していた元のドライブが使用できないときは、元のドライブに存在していたファイルは、指定したデフォルトドライブ上の元と同じディレクトリパスにリストアされます。上の例で、デフォルトドライブに C: を指定した場合は、元のディレクトリパス E:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.1\MSSQL\DATA\test.mdf のファイルは C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL.1\MSSQL\DATA\test.mdf としてリストアされます。</p> <p>元のドライブが使用できないときに、デフォルトドライブが指定されていないと、ジョブは失敗します。</p>
元のドライブが存在しない場合のみ指定したリストア先に変更する	<p>データベースのバックアップ元のドライブが存在しない場合に [変更先ドライブを使用する] で選択した代替ドライブを使用できます。</p>
常に指定したリストア先に変更する	<p>元のドライブが存在する場合でも、すべてのデータベースファイルを [変更先ドライブを使用する] で選択した代替ドライブの元と同じディレクトリパスにリストアします。</p> <p>ファイルグループのリストア時には、このオプションを選択しないでください。ファイルグループは、バックアップ元のドライブおよびパスにリストアする必要があります。</p>

項目	説明
変更先インスタンスのデフォルトのデータディレクトリを使用する	<p>変更先インスタンスのデフォルトのデータおよびログディレクトリにファイルをリストアします。たとえば、SQL の別のインスタンスにデータベースをリストアする場合は、このオプションを選択すると、そのインスタンスの正しい場所にデータベースファイルがリストアされます。</p> <p>このオプションを使用しない場合は、ファイルは master データベースの存在するディレクトリにリストアされます。</p> <p>ファイルグループのリストア時には、このオプションを選択しないでください。ファイルグループは、バックアップ元のドライブおよびパスにリストアする必要があります。</p>
このパスを使用する	<p>ディスク上の特定の場所にデータベースをリストアします。このオプションを使用するには、ドライブ文字およびそれに対応するパスを入力します。たとえば、C:\temp のように入力します。[...] ボタンをクリックして、ディスク上の場所を参照することもできます。入力したすべてのパスは、[このパスを使用する] ドロップダウンメニューに保持され、以降のリストア先を変更したリストアジョブで使用できます。</p>
サーバーのログオンアカウント	<p>サーバーをリストアする場合に、Windows ユーザーアカウントのクレデンシャルが格納されている Backup Exec ログオンアカウントを表示します。この Windows ユーザーアカウントは、SQL インスタンスのシステム管理者から認可されている必要があります。デフォルトのログオンアカウントが表示されます。別のログオンアカウントを使用するには、[変更] をクリックします。</p> <p>p.1220 の「SQL Server リソースに Backup Exec ログオンアカウントを使用する方法」 を参照してください。</p>
SQL ログオンアカウント	<p>SQL Server 認証を使用する場合に、SQL ユーザーアカウントのクレデンシャルを格納した Backup Exec ログオンアカウントを表示します。Windows ユーザーアカウント用の Backup Exec ログオンアカウントを SQL がインストールされている Windows サーバーに適用し、SQL ユーザーアカウント用のログオンアカウントを SQL インスタンスに適用します。</p> <p>別のログオンアカウントを使用するには、[変更] をクリックします。フィールドに表示されている SQL ログオンアカウントを削除するには、[クリア] をクリックします。</p> <p>p.1220 の「SQL Server リソースに Backup Exec ログオンアカウントを使用する方法」 を参照してください。</p>

項目	説明
レプリケーション情報を保持する	リストア先を変更したデータベースのリストアジョブでデータベースのデフォルト設定を保持します。デフォルトでは、データベースのリストアジョブでリストア先が変更された場合を除き、データベースのリストアジョブではデフォルトのデータベース設定が保持されます。
選択項目を確認	Backup Exec が SQL データベースのリストア選択項目を検証するようにします。選択に問題がある場合、Backup Exec はエラーを通知して修正します。

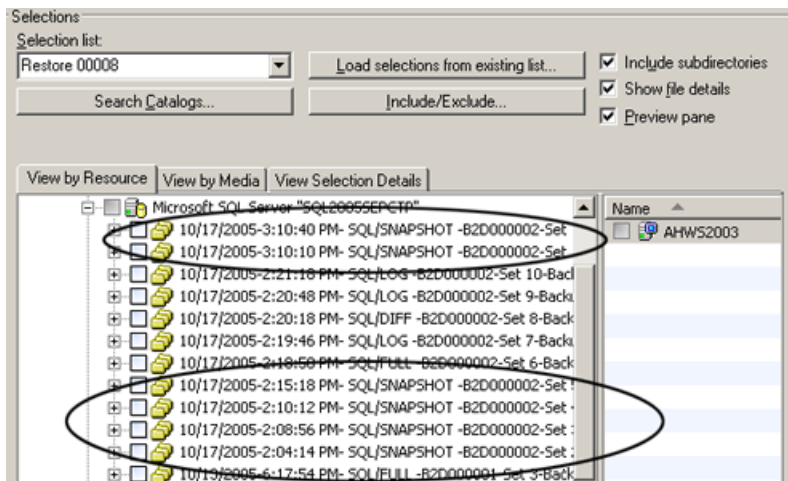
データベースのスナップショットを使用した SQL Server 2005 以上のデータベースの復帰について

Backup Exec で作成された SQL Server 2005 以上のデータベースのスナップショットを使用すると、データベース全体のリストアジョブを実行しなくても、SQL Server 2005 以上のデータベースを過去の特定の時点の状態に戻すことができます。

[リストアジョブのプロパティ] ペインでリソース別の表示を行うと、SQL データベースのスナップショットは、最新のスナップショットから実行順にバックアップセットとして表示されます。

バックアップセットの説明には「スナップショット」と表示されます。

図 J-3 [リストアジョブのプロパティ] ペインでの SQL データベースのスナップショットの表示



データベースを復帰する場合は、次の事項に注意してください。

- 復帰した SQL Server 2005 以降のデータベースを元に戻すことはできません。
- データベースを復帰する前に、復帰に使用されるスナップショットを除き、既存のデータベースのスナップショットがすべて削除されます。SQL Server 2005 以降を使用して作成されたスナップショットも削除されます。削除後にデータベースのスナップショットをリカバリすることはできません。
- データベースのスナップショットのリストアジョブでリストア先を変更することはできません。

データベースのスナップショットを使用した SQL Server 2005 以上のデータベースの復帰

データベース全体のリストアジョブを実行しなくても、データベースのスナップショットを使用して SQL Server 2005 以上のデータベースを復帰できます。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.1257 の「[SQL データベースとファイルグループのリストアについて](#)」を参照してください。

データベースのスナップショットを使用して SQL Server 2005 以上のデータベースを復帰する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 データベースのスナップショットを選択します。

[今すぐ実行]をクリックすると、すべての過去の SQL Server 2005 以上のデータベースのスナップショット (SQL 2005 以降によって作成されたスナップショットを含む) が削除され、データベースが復帰します。復帰が完了すると、SQL データベースを以前の状態に戻すことはできません。

- 5 [今すぐ実行]をクリックします。

SQL Server のディザスタリカバリについて

Backup Exec には、master 再構築ユーティリティを実行したり SQL を再インストールするよりも短時間で SQL をリストアする方法が用意されています。損傷または消失したデータベースを、master および model データベースのバックアップを実行するたびに自動的に作成または更新されるこれらのデータベースのコピーと置換することができます。SQL が再起動した後、Backup Exec の [master データベースのリストアを自動化する] オプションを使用して、master データベースの最新のコピーをリストアし、必要に応じてその他のデータベースをリストアします。

Intelligent Disaster Recovery Option (IDR) を使用している場合は、C: ドライブの IDR リカバリプロセスで、損傷したデータベースが master および model データベースのコ

ピーに自動的に置換されます。SQL を再起動して、最新の **master** データベースのバックアップおよび必要なデータベースをリストアすることができます。

SQL のディザスタリカバ리를準備する方法

SQL を使用している場合、ディザスタリカバ리에備えるために次の作業を実行します。

- システムデータベースとユーザーデータベースの両方およびトランザクションログを定期的にバックアップする

master および **model** データベースをバックアップすると、常にそのコピーが **Backup Exec** によって自動的に作成されます。これらのコピーは、更新に備えて、コピー元のデータベースと同じディレクトリに格納されます。

次の表に、MS SQL データベースの場所に関する情報を示します。

master および **model** データベースのコピーの名前は次のとおりです。

- `master$4idr`
- `mastlog$4idr`
- `model$4idr`
- `modellog$4idr`

- SQL インスタンスが存在するシステムドライブをバックアップします。
SQL インスタンスが存在するシステムドライブをバックアップすると、常に **master** および **model** データベースのコピーがバックアップされます。SQL インスタンスの存在するシステムドライブをバックアップすると、SQL の実行に必要なすべての実行ファイルおよびレジストリ設定もバックアップされます。
- SQL に変更を加えたときは、**master** データベースを必ずバックアップします。
- インストールした **Service Pack** を記録しておきます。
- SQL のみでなくサーバー全体をリカバリすることができるようにします。

p.763 の「[前回正常起動時の構成へのリカバリ](#)」を参照してください。

SQL のディザスタリカバ리의必要条件

リカバリを実行するには、次のものがが必要です。

- SQL ディレクトリ(¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL) および Windows レジストリまたはシステム状態の最新のバックアップ
- データベースまたはファイルグループのバックアップ、差分バックアップおよびログバックアップ

- リカバリ中の Administrator (または同等の) 権限のあるログオンアカウント

SQL Server のディザスタリカバリ

システムの完全バックアップを使用して、SQL データベースを含むサーバー全体をリストアしたり、新規にインストールした SQL サーバーまたは別の SQL サーバーに SQL データベースのみをリストアすることができます。

SQL データベースを含むサーバー全体をリストアすると、障害発生時にサーバーに存在していた他のアプリケーションやデータもリカバリできるメリットがあります。次のいずれかの方法を使用して、サーバー全体のリストアを行うことができます。

- Windows サーバーを手動でリカバリし、次に SQL データベースをリカバリする。この方法には、完全バックアップを使用して手動で Windows サーバーをリストアした後、SQL データベースをリカバリする作業が伴われます。
- Intelligent Disaster Recovery Option を使用する。このオプションを使用すると、システムの完全バックアップから Windows サーバーと SQL データベースを自動的にリストアすることができます。

p.1797 の「[Microsoft SQL Server のリカバリに関する注意事項](#)」を参照してください。

SQL データベースのみをリストアするには、次の事項を確認します。

- 新たにインストールした、または別のサーバーに SQL データベースのみをリストアするには、リストア先のサーバーのハードウェアプラットフォームを同一にしてください(クロスプラットフォームのリストアはサポートされていません)。また、SQL のバージョンおよび Service Pack のレベルも元のサーバーと同一にしてください。
- SQL データベースを、アクティブなデータベースが存在する既存の SQL にリストアする場合は、リストア先を変更する必要があります。

p.1270 の「[SQL Server のリストア先の変更](#)」を参照してください。

p.1277 の「[SQL Server の手動リカバリについて](#)」を参照してください。

SQL Server の手動リカバリについて

SQL を手動でリカバリするとき、最初にシステムの完全バックアップから Windows サーバーをリストアする必要があります。Windows コンピュータのリカバリが完了するか、新規のサーバーが準備できたら、SQL データベースをリカバリできます。

p.765 の「[手動による Windows コンピュータのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。

SQL データベースをリストアするには、SQL が実行されている必要がありますが、SQL を実行するには master および model データベースが必要です。

次の方法のいずれかを使用して、master および model データベースをリストアし、SQL を実行することができます。

- Backup Exec によって作成されたファイルの名前を変更し、**master** および **model** データベースと置換する。SQL 上に **master** および **model** データベースが存在する場合、SQL を実行し、[**master** データベースのリストアを自動化する]オプションを使用して **master** データベースをリストアし、その他の必要なデータベースのすべてをリストアすることができます。
p.1266 の「データベースのコピーを使用した SQL の実行」を参照してください。
- **master** 再構築ユーティリティ (SQL Server 2000 の場合 %Program Files%\Microsoft SQL Server\80\Tools\Binn\rebuilddm.exe) を実行します。

メモ: SQL Server 2005 以降では **master** 再構築ユーティリティはサポートされていません。設定オプションについて詳しくは Microsoft SQL Server 2005 以降のマニュアルを参照してください。

- SQL を再インストールする。

このトピックでは、Backup Exec によって作成された **master** および **model** データベースのコピーを使用して SQL を実行する方法を説明します。**master** 再構築ユーティリティの実行または SQL の再インストールについて詳しくは Microsoft SQL のマニュアルを参照してください。

新たにインストールした SQL にリストアする場合は、**master** データベースのリストアから開始します。

- p.1268 の「**master** データベースをリストアする方法」を参照してください。

Symantec Backup Exec Agent for Oracle on Windows or Linux Servers

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Backup Exec Oracle Agent](#) について
- [Oracle Agent](#) のインストールについて
- [Backup Exec Oracle Agent](#) のアップグレード
- Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの [Oracle Agent](#) の設定
- メディアサーバーの認証クレデンシャルについて
- [Oracle](#) インスタンス情報の変更について
- [Oracle](#) のアプリケーションのデフォルト設定
- [Oracle](#) リソースのバックアップについて
- [Oracle](#) リソースのリストアおよびリカバリについて
- [Oracle Agent](#) のトラブルシューティング

Backup Exec Oracle Agent について

Symantec Backup Exec Agent for Oracle on Windows or Linux Servers (Oracle Agent) を使用すると、Oracle の Recovery Manager (RMAN) を使用して Oracle データベースの保護を行うことができます。RMAN は Oracle データベースのバックアップ、リストア、リカバリを管理するツールです。

Oracle Agent では、次の機能を利用できます。

- Backup Exec または RMAN コンソールからデータベース管理者 (DBA) としてバックアップ操作およびリストア操作を開始できます。
DBA によって RMAN コンソールで行われる操作は、DBA 開始操作と呼ばれます。
RMAN について詳しくは Oracle のマニュアルを参照してください。
- 複数のデータストリームのサポートにより、バックアップおよびリストア時のパフォーマンスを向上することができます。
- RMAN のリカバリカタログのサポートにより、Oracle データベースのバックアップ、リストアおよびリカバリを管理することができます。
- Oracle Real Application Clusters (RAC) がサポートされています。

次のものはサポートされていません。

- Tivoli Storage Manager (TSM) デバイス (Oracle のバックアップジョブに対するストレージデバイスとしてはサポートされません)
- Oracle Management Server
- IPv6 プロトコル上で実行される Oracle のバックアップジョブおよびリストアジョブ

p.1280 の「[Oracle Agent のインストールについて](#)」を参照してください。

p.1281 の「[Backup Exec Oracle Agent のアップグレード](#)」を参照してください。

p.1282 の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。

Oracle Agent のインストールについて

Oracle Agent は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールします。

ローカルまたはリモートの Oracle インスタンスを保護するには、次の Backup Exec オプションをインストールする必要があります。

- リモートの Windows コンピュータの Backup Exec Remote Agent for Windows Systems。

メモ: Oracle サーバー上の旧バージョンの Remote Agent をアップグレードした場合、アップグレード後に Oracle サーバーを再起動する必要があります。Oracle サーバーを再起動するまで、Backup Exec ジョブは正常に完了できません。

p.129 の「[Remote Agent for Windows Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

- リモートの Linux コンピュータの Backup Exec Remote Agent for Linux and Unix Servers。
p.1825 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストール](#)について」を参照してください。
- メディアサーバーの Backup Exec Oracle Agent。
p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

Backup Exec Oracle Agent のアップグレード

レガシー GRFS Oracle Agent は、Backup Exec Oracle RMAN Agent に置き換えられます。既存のすべての Oracle ジョブは、新しいエージェントで使用できるようにアップグレードされます。Backup Exec Oracle RMAN Agent にアップグレードする場合、レガシー Oracle Agent で作成された Oracle インスタンスのバックアップジョブは保留されません。次のタスクを実行する必要があります。

表 K-1 Backup Exec Oracle Agent のアップグレード

手順	処理
手順 1	以前のバージョンの Oracle Agent でバックアップした各リソースのログオンアカウントが新しい Oracle Agent で有効であることを確認する p.619 の「リストアジョブのリソースクレデンシアルの変更およびテスト」 を参照してください。
手順 2	Remote Agent ユーティリティを使用して Oracle Agent で Oracle インスタンスに関する情報を設定したり、Oracle データベースへのメディアサーバーのアクセスを有効にする p.1282 の「Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定」 を参照してください。
手順 3	メディアサーバーで Oracle サーバー名とログオンアカウントを認証クレデンシアルのリストに追加する p.1294 の「メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシアルの設定」 を参照してください。

手順	処理
手順 4	<p>関連するジョブの保留を解除する</p> <p>p.559の「ジョブキューの保留の解除」を参照してください。</p>

アップグレード後は、データベース制御ファイルのリソースが Oracle サーバーノードの下のバックアップ選択ツリーに表示されなくなります。Backup Exec では、Oracle サーバー上の表領域またはその他のリソースがバックアップされたときに、データベース制御ファイルが自動的にバックアップされます。

メモ: バックアップ選択リストにデータベース制御ファイルが単一のリソースとして含まれている場合は、他のリソースを含む選択リストをもう 1 つ作成します。作成すると、選択リストのその他のリソースがバックアップされたときに、データベース制御ファイルが自動的にバックアップされます。これは、レガシー GRFS Oracle Agent で作成された選択リストのみに適用されます。

Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定

Oracle データベースをバックアップまたはリストアする前に、次の操作を実行する必要があります。

表 K-2 Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定

手順	処理
手順 1	<p>Oracle Agent で Oracle インスタンスに関する情報を設定する</p> <p>p.1283の「Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの設定」を参照してください。</p> <p>p.1288の「Linux サーバーでの Oracle インスタンスの設定」を参照してください。</p>

手順	処理
手順 2	<p>メディアサーバーのデータベースアクセスを有効にする</p> <p>Oracle インスタンス情報が変更されるか、または新しい設定が追加される時はいつでも、Remote Agent ユーティリティを更新する必要があります。クレデンシャル情報が更新されていないか正しくない場合、またはサーバーが停止している場合は、バックアップジョブの実行時に[リソースに接続できません]というエラーが表示されることがあります。このメッセージが表示された場合は、サーバーをオンラインにして、情報を設定する必要があります。</p> <p>Oracle RAC の場合、各ノード上で Remote Agent ユーティリティを実行して、インスタンスに関する情報を追加します。Oracle RAC ノードを追加または削除する場合は、インスタンスへの変更に関する情報を Remote Agent ユーティリティに入力する必要があります。</p> <p>メモ: Remote Agent ユーティリティを使用する場合、ログオンに使用するユーザーアカウントは Oracle DBA グループのメンバーである必要があります。</p> <p>Remote Agent ユーティリティを実行するには、管理者権限が必要です。</p> <p>p.1287の「Windows コンピュータでの Oracle 操作のデータベースアクセスの有効化」を参照してください。</p> <p>p.1291の「Linux サーバーでの Oracle 操作のデータベースアクセスの有効化」を参照してください。</p>
手順 3	<p>Oracle のための認証クレデンシャルを設定します。</p> <p>p.1294の「メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシャルの設定」を参照してください。</p>

Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの設定

Remote Agent ユーティリティを使用して Windows コンピュータの Oracle Agent に対する Oracle インスタンス情報を設定できます。

Windows コンピュータで Oracle インスタンスを設定する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [Oracle]タブで、[新規]をクリックします。

現在コンピュータ上に存在するインスタンスがタブに表示されます。

- 3 必要なオプションを設定します。

p.1284 の「Oracle Agent の設定オプション」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

Oracle Agent の設定オプション

次の Oracle Agent の設定オプションを設定できます。

p.1283 の「Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの設定」を参照してください。

p.1286 の「Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの編集」を参照してください。

表 K-3 Oracle Agent の設定オプション

項目	説明
ローカルのインスタンス名	<p>Oracle インスタンスの名前を表示します。インスタンスの編集時にインスタンス名を変更することはできません。</p> <p>Oracle RAC ノードの場合、各物理ノードの名前および仮想ノードの名前を入力します。</p> <p>仮想ノード名は、メディアサーバーのバックアップ選択ツリーの[Oracle Real Application Clusters]の下に表示されます。</p> <p>名前は、RAC-<dbname>-<dbid> の形式で表示されます。ここで、dbname はデータベース名で、dbid はデータベース ID です。</p>
ユーザー名	<p>Oracle インスタンスのユーザー名を表示します。</p> <p>Oracle インスタンスのクレデンシャルを変更した場合は、Oracle インスタンスへの SYSDBA 権限を持つユーザーを入力しなければなりません。</p> <p>Oracle RAC ノードの場合、すべてのノードに同じクレデンシャルを入力します。</p>
パスワード	<p>Oracle インスタンスのユーザー名に対するパスワードを表示します。</p>

項目	説明
パスワードの確認入力	確認のため、パスワードをもう一度表示します。
リカバリカタログを使用する	<p>Oracle リカバリカタログの使用を指定します。</p> <p>Oracle Agent は、Oracle データベースのバックアップ、リストアおよびリカバリ管理での RMAN のリカバリカタログの使用をサポートしています。リカバリカタログを使用しない場合、RMAN は、メタデータの唯一のリポジトリとしてターゲットデータベースの制御ファイルを使用します。</p>
TNS 名	Oracle Net Service 名を表示します。
ユーザー名	Oracle リカバリカタログのユーザー名を表示します。
パスワード	Oracle リカバリカタログのパスワードを表示します。
パスワードの確認入力	確認のため、リカバリカタログのパスワードをもう一度表示します。
メディアサーバー名または IP アドレス	<p>DBA 開始バックアップジョブを送信する Backup Exec メディアサーバーの名前または IP アドレスを表示します。</p> <p>すべての操作で同じ形式の名前解決を使用する必要があります。たとえば、IP アドレスを使用してバックアップを行う場合は、リストアを行う際にも IP アドレスを使用する必要があります。完全修飾名を使用してバックアップを行う場合は、リストアを行う際にも完全修飾名を使用する必要があります。</p>
ジョブテンプレート名	<p>DBA 開始ジョブでバックアップおよびリストア操作に使用する Backup Exec ジョブテンプレートの名前を表示します。Backup Exec メディアサーバーの [DBA 開始ジョブの設定] ダイアログボックスでジョブテンプレートを作成します。ジョブテンプレートの指定を省略した場合は、デフォルトのジョブテンプレートが使用されます。</p> <p>p.408 の「DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成」を参照してください。</p>

Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの表示

Remote Agent ユーティリティを使用して Windows サーバーの Oracle Agent に対する Oracle インスタンス情報を表示できます。

Windows コンピュータで Oracle インスタンスを表示する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。
- 2 [Oracle]タブで、コンピュータに現在存在するインスタンスを表示します。
p.1286の「Remote Agent ユーティリティの[Oracle]オプション」を参照してください。
- 3 [OK]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの[Oracle]オプション

Remote Agent ユーティリティの次の[Oracle]オプションを設定できます。

p.1285の「Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの表示」を参照してください。

表 K-4 Remote Agent ユーティリティの[Oracle]オプション

項目	説明
インスタンス	Oracle インスタンスの名前を表示します。
ユーザー名	Oracle インスタンスのユーザー名を表示します。
リカバリカタログ	リカバリカタログの名前を表示します。
メディアサーバー	DBA 開始バックアップジョブを送信する Backup Exec メディアサーバーの名前または IP アドレスを表示します。
ジョブテンプレート	DBA 開始ジョブのテンプレートの名前を表示します。 p.1304の「Oracle の DBA 開始バックアップジョブの実行について」を参照してください。
新規	Oracle インスタンスを追加できます。
編集	Oracle インスタンスを修正できます。
削除	Oracle インスタンスを削除できます。

Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの編集

Remote Agent ユーティリティを使用して Windows コンピュータの Oracle Agent に対する Oracle インスタンス情報を修正できます。

Windows コンピュータで Oracle インスタンスを編集する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [Oracle]タブで、[編集]をクリックします。

現在コンピュータ上に存在するインスタンスがタブに表示されます。

- 3 適切なオプションを編集します。

p.1284 の「[Oracle Agent の設定オプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

Windows コンピュータでの Oracle インスタンスの削除

Remote Agent ユーティリティを使用して Windows コンピュータの Oracle Agent に対する Oracle インスタンスを削除できます。

Windows コンピュータで Oracle インスタンスを削除する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [Oracle]タブで、[削除]をクリックします。

現在コンピュータ上に存在するインスタンスがタブに表示されます。

- 3 [OK]をクリックします。

Windows コンピュータでの Oracle 操作のデータベースアクセスの有効化

Oracle インスタンスを設定した後、Windows メディアサーバーのためのデータベースアクセスを有効にするには Remote Agent ユーティリティを使います。

p.1299 の「[Oracle リソースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1300 の「[Oracle RAC リソースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.408 の「[DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成](#)」を参照してください。

p.1298 の「[Oracle のアプリケーションのデフォルト設定](#)」を参照してください。

Windows コンピュータで Oracle 操作作用のデータベースアクセスを有効にする方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [データベースアクセス]タブで、必要なオプションを設定します。

p.1907の「[Remote Agent ユーティリティの\[データベースアクセス\]オプション](#)」を参照してください。

- 3 [OK]をクリックします。

- 4 Oracle RAC 環境の場合、公開先のメディアサーバー名または IP アドレスを入力します。

公開先のメディアサーバーでは、バックアップ選択ツリーの[Oracle Real Application Clusters]ノードの下に RAC データベースが表示されます。

公開先のメディアサーバー名または IP アドレスの指定を省略した場合、RAC データベースはメディアサーバーのバックアップ選択ツリーには表示されません。

p.1902の「[メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について](#)」を参照してください。

- 5 メディアサーバーで、データベースアクセスを有効にした Oracle サーバーの名前およびユーザー名を認証クレデンシャルのメディアサーバーのリストに追加します。

p.1293の「[メディアサーバーの認証クレデンシャルについて](#)」を参照してください。

Linux サーバーでの Oracle インスタンスの設定

Remote Agent ユーティリティを使用して Linux サーバーの Oracle Agent に対する Oracle インスタンス情報を設定できます。

Linux サーバーで Oracle インスタンスを設定する方法

- 1 Oracle インスタンスがインストールされている Linux サーバーで、ターミナルウィンドウを開きます。
- 2 次のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```

- 3 Remote Agent ユーティリティを起動します。

```
./AgentConfig
```

- 4 2と入力して[Oracle インスタンスの情報を設定します]を選択し、**Enter**キーを押します。

5 1 と入力して [新しい Oracle インスタンスを追加して保護します] オプションを選択し、**Enter** キーを押します。

6 Oracle インスタンスの名前を大文字で入力します。

たとえば、ORACLENAME と入力します。

7 Oracle インスタンスのユーザー名を入力します。

Oracle インスタンスのクレデンシャルを変更した場合は、このフィールドでクレデンシャルを更新する必要があります。Oracle RAC ノードの場合、すべてのノードに同じクレデンシャルを入力します。

Remote Agent ユーティリティを使用してインスタンスの Oracle クレデンシャルを入力するときに、ログオンに使用しているユーザーアカウントが Oracle DBA グループのメンバーである場合は、クレデンシャルを検証できません。クレデンシャルが正しくない場合、バックアップジョブの実行時に [リソースに接続できません] というエラーが表示される場合があります。

8 [登録済みリソース] の下のメディアサーバーのバックアップ選択リストに Oracle データベースを表示するために、リモートコンピュータの公開先のメディアサーバー名または IP アドレスを入力します。

メディアサーバーの [登録済みリソース] ([Linux または UNIX サーバー] の下の <computer name> <root>) に、Oracle データベースが表示されます。

Oracle RAC データベースは、メディアサーバーのバックアップ選択リストの [Oracle Real Application Clusters] に表示されます。[登録済みリソース] には表示されません。

9 プロンプトが表示されたら、リカバリカタログを使用するかどうかを指定します。

Oracle Agent は、Oracle データベースのバックアップ、リストアおよびリカバリ管理での RMAN のリカバリカタログの使用をサポートしています。リカバリカタログを使用しない場合、RMAN は、メタデータの唯一のリポジトリとしてターゲットデータベースの制御ファイルを使用します。

リカバリカタログを指定する場合は、メディアサーバーからバックアップジョブを実行する前に、バックアップするデータベースをリカバリカタログに登録する必要があります。

10 リカバリカタログを使用するには、リカバリカタログ名とリカバリカタログのユーザー名およびパスワードを入力します。

- 11 カスタマイズした DBA 開始ジョブの設定テンプレートを使用するには、テンプレートの名前を入力します。

p.408 の「DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成」を参照してください。
- 12 次のいずれかを実行します。

設定ファイルに新しい **Y** と入力し、**Enter** キーを押します。
新しいエントリをコミットする

このエントリをキャンセル **N** と入力し、**Enter** キーを押します。
キャンセルする

Linux サーバーでの Oracle インスタンスの表示

Remote Agent ユーティリティを使用して Linux サーバーの Oracle Agent に対する Oracle インスタンス情報を表示できます。

次の情報が表示されます。

- インスタンスの名前
- インスタンスのログオン名
- DBA 開始操作のデフォルトのメディアサーバーの IP アドレス
- DBA 開始ジョブのテンプレートの名前

Linux サーバーで Oracle インスタンスを表示する方法

- 1 Oracle インスタンスがインストールされている Linux サーバーで、ターミナルウィンドウを開きます。
- 2 次のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```
- 3 Remote Agent ユーティリティを起動します。

```
./AgentConfig
```
- 4 **4** と入力します。

Linux サーバーでの Oracle インスタンスの編集

Remote Agent ユーティリティを使用して Linux サーバーの Oracle Agent に対する Oracle インスタンス情報を修正できます。

Linux コンピュータで Oracle インスタンスを編集する方法

- 1 Oracle インスタンスがインストールされている Linux サーバーで、ターミナルウィンドウを開きます。
- 2 次のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```
- 3 Remote Agent ユーティリティを起動します。

```
./AgentConfig
```
- 4 2と入力して[Oracle インスタンスの情報を設定します]を選択し、**Enter**キーを押します。
現在コンピュータ上に存在するインスタンスが検出されます。
- 5 2と入力します。
- 6 プロンプトに従います。

Linux サーバーでの Oracle インスタンスの削除

Remote Agent ユーティリティを使用して Linux サーバーの Oracle Agent に対する Oracle インスタンスを削除できます。

Linux サーバーの Oracle Agent の Oracle インスタンスを削除する方法

- 1 Oracle インスタンスがインストールされている Linux サーバーで、ターミナルウィンドウを開きます。
- 2 次のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```
- 3 Remote Agent ユーティリティを起動します。

```
./AgentConfig
```
- 4 2と入力して[Oracle インスタンスの情報を設定します]を選択し、**Enter**キーを押します。
現在コンピュータ上に存在するインスタンスが検出されます。
- 5 3と入力します。
- 6 プロンプトに従います。

Linux サーバーでの Oracle 操作のデータベースアクセスの有効化

Oracle インスタンスを設定した後、Linux サーバーのためのデータベースアクセスを有効にするには Remote Agent ユーティリティを使います。

p.1294 の「[メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシヤルの設定](#)」を参照してください。

p.1299 の「[Oracle リソースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1300 の「[Oracle RAC リソースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.408 の「[DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成](#)」を参照してください。

p.1298 の「[Oracle のアプリケーションのデフォルト設定](#)」を参照してください。

Linux サーバーで Oracle 操作のデータベースアクセスを有効にする方法

1 Oracle インスタンスがインストールされている Linux サーバーで、ターミナルウィンドウを開きます。

2 次のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```

3 Remote Agent ユーティリティを起動します。

```
./AgentConfig
```

4 1 と入力して[データベースアクセスを設定します]を選択し、**Enter** キーを押します。

5 Linux システムの `beoper` グループに存在するユーザー名を入力します。

p.1828 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers の Backup Exec オペレータグループについて](#)」を参照してください。

Oracle リソースのバックアップ時に認証に失敗すると、バックアップジョブは失敗します。リストアジョブでバックアップセットの参照時に認証に失敗すると、バックアップセットが使用できなくなるため、DBA 開始リストアジョブを実行してデータをリストアする必要があります。

6 このログオンアカウントのパスワードを入力し、確認のためもう一度入力します。

ログオンクレデンシヤルは、このコンピュータに格納されません。

7 このコンピュータの完全修飾名または IP アドレスを入力します。

すべての Oracle 操作で同じ形式の名前解決を使用する必要があります。たとえば、IP アドレスを使用してバックアップを行う場合は、リストアを行う際にも IP アドレスを使用する必要があります。完全修飾名を使用してバックアップを行う場合は、リストアを行う際にも完全修飾名を使用する必要があります。

- 8 プロンプトが表示されたら、**Oracle** 操作時にこのコンピュータとメディアサーバー間の通信を確立するためにカスタムポートを使用するかどうかを指定します。

デフォルトでは、ポート**5633**が使用されます。このコンピュータのポート番号を変更する場合は、メディアサーバーのポート番号も変更する必要があります。その後、メディアサーバー上の**Backup Exec Job Engine**サービスを再起動します。**Windows**のファイアウォールが有効になっている場合は、例外としてこのポートを追加する必要があります。

p.388の「[デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定](#)」を参照してください。

- 9 次のいずれかを実行します。

設定ファイルに **Y**と入力し、**Enter** キーを押します。

Oracle 操作の設定
をコミットする

このエントリをキャン **N**と入力し、**Enter** キーを押します。
セルする

メディアサーバーの認証クレデンシャルについて

メディアサーバーで、**Oracle** サーバー名とログオンアカウント名を **Oracle** サーバーと認証クレデンシャルのリストに追加する必要があります。メディアサーバーには、認証リストに含まれる **Oracle** インスタンスでの操作に対するデータベースアクセス権限があります。バックアップまたはリストアを開始する前に、**Oracle** インスタンスがインストールされているコンピュータ上で、**Remote Agent** ユーティリティを使用してインスタンス情報とデータベースアクセスを設定します。

ログオンアカウント名には、**Oracle** サーバーに対する管理者権限またはバックアップオペレータ権限が与えられている必要があります。ユーザー名が正しくないか指定されていない場合、または適切な権限が与えられていない場合、そのコンピュータに対して **Oracle** のバックアップまたはリストア操作を実行できません。

メモ: **Oracle RAC** ノードの場合、ログオンアカウント名に仮想ノード名とすべての物理ノード名を入力します。仮想ノード名は、バックアップ選択リストで確認できます。名前は、**RAC-<database name>-<database ID>** の形式で表示されます。

p.1294の「[メディアサーバーでの**Oracle** 操作のための認証クレデンシャルの設定](#)」を参照してください。

p.1296の「[メディアサーバーでの**Oracle** 操作のための認証クレデンシャルの編集](#)」を参照してください。

p.1297の「[メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストからの Oracle サーバーの削除](#)」を参照してください。

メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシャルの設定

メディアサーバーに操作作用のデータベースアクセスを設定するには、リストに Oracle サーバーを追加する必要があります。

p.1293の「[メディアサーバーの認証クレデンシャルについて](#)」を参照してください。

p.1295の「[認証クレデンシャルのオプション](#)」を参照してください。

p.1297の「[Oracle インスタンス情報の変更について](#)」を参照してください。

p.1282の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。

p.830の「[Veritas Cluster Server を使用した Backup Exec のクラスタ化](#)」を参照してください。

メディアサーバーで Oracle 操作のための認証クレデンシャルを設定する方法

- 1 メディアサーバーで、ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Oracle]をクリックします。
- 3 [リストの修正]ボタンをクリックします。
[Oracle および DB2 サーバーの認証クレデンシャル]ダイアログボックスで、サーバー名とログオンアカウントを追加、編集または削除できます。
- 4 [新規]をクリックします。
- 5 インスタンスがインストールされている Oracle サーバーの名前を入力します。

Oracle サーバーの名前は Oracle リソースを表示するサーバーの名前と一致します。シマンテック社は完全修飾ドメイン名と NetBIOS 名を両方入力することを推奨します。たとえば、`Servename.domain.com` は完全修飾ドメイン名であり、`Servename` は NetBIOS 名です。Oracle RAC ノードの場合、ログオンアカウント名に仮想ノード名とすべての物理ノード名を入力します。

6 ログオンアカウント名を追加するには、次のいずれかを実行します。

矢印をクリックする 追加するログオンアカウント名を選択します。

[新規]をクリックする [ログオンアカウントの選択]ダイアログボックスで、[新規]をクリックします。

p.175 の「[Backup Exec ログオンアカウントの作成](#)」を参照してください。

Remote Agent ユーティリティの[データベースアクセス]タブでログオンアカウント名を入力したときに使用した形式と同じ形式のログオンアカウントを使用します。たとえば、**Remote Agent** ユーティリティで **Domainname¥Username** の形式で入力した場合、認証クレデンシャルのリストでも同じ形式を使用します。

7 [OK]をクリックします。

8 [Oracle および DB2 サーバーの認証クレデンシャル]ダイアログボックスで、[OK]をクリックします。

認証クレデンシャルのオプション

サーバーの次の認証クレデンシャルを設定できます。

p.1293 の「[メディアサーバーの認証クレデンシャルについて](#)」を参照してください。

表 K-5 Oracle サーバーおよび DB2 サーバーの認証クレデンシャルのオプション

項目	説明
サーバー	Oracle および DB2 メディアサーバーの名前を表示します。
ログオンアカウント	Oracle か DB2 サーバーに対する権限があるログオンアカウントの名前を表示します。
新規	リストにサーバー名とログオンアカウントクレデンシャルを追加できます。
編集	サーバー名とログオンアカウントクレデンシャルを修正できます。
削除	サーバー名とログオンアカウントクレデンシャルを削除できます。

サーバーの追加または編集オプション

次のオプションはコンピュータ名とログオンアカウント名を追加または編集するときに利用可能です。

p.1293 の「[メディアサーバーの認証クレデンシャルについて](#)」を参照してください。

表 K-6 サーバーの追加または編集オプション

項目	説明
Oracle または DB2 サーバー	Oracle または DB2 メディアサーバーの名前を指定します。
ログオンアカウント	Oracle または DB2 サーバーのためのログオンアカウントの名前を指定します。
新規	Oracle か DB2 サーバーに対する権限があるログオンアカウントを追加できます。

メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシャルの編集

Oracle サーバー名または Oracle サーバーのログオンアカウント名を変更した場合は、メディアサーバーで Oracle サーバーと認証クレデンシャルのリストを更新する必要があります。Remote Agent ユーティリティを使用して Oracle サーバー上で同じ変更を行って、インスタンス情報とデータベースアクセスを設定します。

ログオンアカウント名には、Oracle サーバーに対する管理者権限またはバックアップオペレータ権限が与えられている必要があります。ユーザー名が正しくないか指定されていない場合、または適切な権限が与えられていない場合、そのコンピュータに対して Oracle のバックアップまたはリストア操作を実行できません。

p.1293 の「[メディアサーバーの認証クレデンシャルについて](#)」を参照してください。

p.1295 の「[認証クレデンシャルのオプション](#)」を参照してください。

p.1294 の「[メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシャルの設定](#)」を参照してください。

p.1282 の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。

p.1297 の「[メディアサーバーの認証クレデンシャルのリストからの Oracle サーバーの削除](#)」を参照してください。

メディアサーバーで Oracle 操作のための認証クレデンシャルを編集する方法

- 1 メディアサーバーで、ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Oracle]をクリックします。

- 3 [リストの修正]をクリックします。
[Oracle および DB2 サーバーの認証クレデンシヤル]ダイアログボックスで、サーバー名とログオンアカウントを追加、編集または削除できます。
- 4 編集するサーバー名またはログオンアカウントを含む項目を選択します。
- 5 [編集]をクリックします。
- 6 サーバー名またはログオンアカウント名を変更します。
p.178 の「[Backup Exec ログオンアカウントの編集](#)」を参照してください。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 [Oracle および DB2 サーバーの認証クレデンシヤル]ダイアログボックスで、[OK]をクリックします。

メディアサーバーの認証クレデンシヤルのリストからの Oracle サーバーの削除

メディアサーバーで認証クレデンシヤルのリストから Oracle サーバー名またはログオンアカウントを削除できます。

メディアサーバーの認証クレデンシヤルのリストから Oracle サーバーを削除する方法

- 1 メディアサーバーで、ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Oracle]をクリックします。
- 3 [リストの修正]ボタンをクリックします。
[Oracle および DB2 サーバーの認証クレデンシヤル]ダイアログボックスで、サーバー名とログオンアカウントを追加、編集または削除できます。
- 4 削除するサーバー名またはログオンアカウントを含む項目を選択します。
- 5 [削除]をクリックします。
p.180 の「[Backup Exec ログオンアカウントの削除](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

Oracle インスタンス情報の変更について

インスタンスのユーザー名やパスワードなどの Oracle インスタンス情報を変更した場合は、Remote Agent ユーティリティを更新する必要があります。

Oracle RAC ノードを追加または削除する場合は、インスタンスへの変更に関する情報を Remote Agent ユーティリティに入力する必要があります。変更を入力すると、その内容が Backup Exec メディアサーバーによって検出されます。

Remote Agent ユーティリティで変更を更新しない場合、バックアップジョブの実行時に [リソースに接続できません] というエラーが表示される場合があります。

p.1282 の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。

Oracle のアプリケーションのデフォルト設定

インストール時に Backup Exec によって設定されたデフォルトを、Oracle のすべてのバックアップジョブで使用することができます。また、独自のデフォルトを選択することもできます。

p.1297 の「[Oracle インスタンス情報の変更について](#)」を参照してください。

p.1299 の「[Oracle リソースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1317 の「[Oracle Agent のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Oracle のアプリケーションのデフォルトを設定する方法

- 1 ツールメニューの [オプション] をクリックします。
- 2 [プロパティ] ペインの [ジョブのデフォルト設定] の下にある [Oracle] をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。
p.1298 の「[Oracle のデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK] をクリックします。

Oracle のデフォルトオプション

Oracle のバックアップジョブそしてサーバーと認証クレデンシャルのリストを設定できます。

p.1298 の「[Oracle のアプリケーションのデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 K-7 Oracle のデフォルトオプション

項目	説明
バックアップ方式	<p>次のバックアップ方式のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 完全 - 選択項目をバックアップ: Oracle RMAN の増分バックアップ (レベル 0) に相当します。Oracle の選択項目の完全バックアップを実行するには、この方式を選択します。 ■ 差分 - 前回の完全バックアップ以降の変更内容をバックアップ: Oracle RMAN の累積増分バックアップ (レベル 1) に相当します。最後の完全バックアップ以降にデータベースに加えられたすべての変更内容をバックアップするには、この方式を選択します。ログファイルは部分的にバックアップされないため、アーカイブ REDO ログでは完全バックアップが行われます。 ■ 増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降の変更内容をバックアップ: Oracle RMAN の増分バックアップ (レベル 1) に相当します。最後の完全または増分バックアップ以降にデータベースに加えられたすべての変更内容をバックアップするには、この方式を選択します。ログファイルは部分的にバックアップされないため、アーカイブ REDO ログでは完全バックアップが行われます。
バックアップ済みのアーカイブログファイルを削除する	バックアップジョブ後に、 Backup Exec によってアーカイブログファイルが自動的に削除されます。
バックアップ済みのアーカイブログファイルをバックアップしない	以前にバックアップしたアーカイブログファイルを Backup Exec がスキップすることを可能にします。
オフラインバックアップを実行する	バックアップジョブを開始する前にデータベースをオフラインにできます。データベースは、バックアップジョブの完了後にオンラインになります。
リストの修正	<p>メディアサーバーの Oracle サーバー用の認証クレデンシャルのリストで、Oracle のコンピュータ名とログオンアカウント名を追加、編集、または削除できます。</p> <p>p.1294 の「メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシャルの設定」を参照してください。</p>

Oracle リソースのバックアップについて

Oracle リソースのバックアップ前に、次の事項を確認してください。

- バックアップまたはリストアを実行する前に、Oracle サーバー上で **Remote Agent** ユーティリティを実行して、インスタンスに関する情報を追加する必要があります。

Oracle インスタンス情報を変更した場合は、Remote Agent ユーティリティを更新する必要があります。変更を入力すると、その内容が Backup Exec メディアサーバーによって検出されます。

p.1282 の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。

- バックアップ処理では、バックアップされたデータ量がディスク上の Oracle ファイルのサイズと等しくない場合があります。これは正常な状態です。Backup Exec では、選択されたデータファイルとともに制御ファイルのコピーがバックアップされます。
- Central Admin Server Option 環境では、特定の Oracle インスタンスのすべてのバックアップジョブは、同じ管理対象メディアサーバーに委任する必要があります。同じ管理対象メディアサーバーにバックアップジョブを限定しない場合は、データのリストア前に、バックアップセットを含む物理メディアを単一の管理対象メディアサーバーに移動する必要があります。

p.1504 の「[CASO での特定のデバイスへの選択リストのバックアップの限定](#)」を参照してください。

- Oracle データベースが Oracle の自動ストレージ管理 (ASM) を使用して設定されているボリュームに存在する場合、ファイルシステムのバックアップでそのボリュームを選択することはできません。

このようなボリュームを選択しようとすると、次のメッセージが表示されます。

```
<drive> の内容の参照中にエラーが発生しました。
```

```
デバイス特有のエラーが発生しました。
```

- バックアップ選択項目を選択する前に、データベースがマウント状態またはオープン状態になっている必要があります。
- アrchive ログをバックアップ選択リストに表示するには、データベースを ARCHIVELOG モードにしておく必要があります。
- バックアップジョブの完了パーセンテージと残り時間を表示する Backup Exec オプションは、Oracle リソースがバックアップ選択リストに含まれている場合にバックアップジョブで利用できません。

p.1301 の「[Oracle リソースのバックアップ](#)」を参照してください。

p.1304 の「[Oracle の DBA 開始バックアップジョブの実行について](#)」を参照してください。

p.408 の「[DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成](#)」を参照してください。

Oracle RAC リソースのバックアップについて

Oracle Real Application Clusters (RAC) は、共有ストレージを使用したアクティブ - アクティブクラスタです。これにより、複数のインスタンスが単一の物理データベースを共有することができます。クラスタ内のすべてのノードからデータベースにアクセスできるため、任意のノードからバックアップ、リストアまたはリカバリを開始できます。Oracle RAC デー

データベースは、メディアサーバーのバックアップ選択リストの[Oracle Real Application Clusters]ノードに表示されます。

Oracle RAC リソースのバックアップの必要条件を次に示します。

- バックアップまたはリストアを実行する前に、各ノード上で **Remote Agent** ユーティリティを実行して、インスタンスに関する情報を追加する必要があります。
RAC ノードを追加または削除する場合は、影響を受けるインスタンスに関する情報で **Remote Agent** ユーティリティを更新する必要があります。変更を入力すると、その内容が **Backup Exec** メディアサーバーによって検出されます。
p.1282 の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。
- バックアップ項目の選択時に、RAC 仮想ノード名を選択する必要があります。
クラスタ内の各ノードは、同じ仮想ノード名を使用します。仮想ノード名は、メディアサーバーのバックアップ選択リストの[Oracle Real Application Clusters]リソースの下に表示されます。名前は、RAC-<database name>-<database ID> の形式で表示されます。

Oracle RAC のバックアップは、標準の Oracle データベースのバックアップに類似しています。

ただし、次のような相違点があります。

- デフォルトでは、Oracle RAC 内の各ノードは、それぞれのアーカイブログをローカルに保存します。アーカイブログの有効なバックアップを作成するには、各アーカイブログを個別にバックアップします。また、アーカイブログを共有デバイスに移動してバックアップすることもできます。
- クラスタを構成する各ノードには、優先度が割り当てられます。**Backup Exec** は、最も優先度の高いノードに接続してデータベースをバックアップします。ノードへの接続時には、仮想ノード名が使用されます。

p.1304 の「[Oracle の DBA 開始バックアップジョブの実行について](#)」を参照してください。

p.408 の「[DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成](#)」を参照してください。

p.1298 の「[Oracle のアプリケーションのデフォルト設定](#)」を参照してください。

Oracle リソースのバックアップ

Oracle リソースをバックアップする前に、インストールおよび設定のすべての必要条件が満たされていることを確認します。

メモ: Oracle リソースへの接続に使用するクレデンシャルのパスワードに特殊文字を含めることはできません。

p.1280 の「[Oracle Agent のインストールについて](#)」を参照してください。

- p.1299 の「[Oracle リソースのバックアップについて](#)」を参照してください。
- p.1298 の「[Oracle のアプリケーションのデフォルト設定](#)」を参照してください。
- p.1317 の「[Oracle Agent のトラブルシューティング](#)」を参照してください。
- p.408 の「[DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成](#)」を参照してください。

Oracle リソースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択リストで、次のいずれかを実行します。

Oracle RAC の場合 [Oracle Real Application Clusters]ノードの下の RAC 仮想ノード名を展開します。

クラスタ内の各ノードは、同じ仮想ノード名を使用します。名前は、**RAC-<database name>-<database ID>** の形式で表示されます。

Oracle リソースの場合 [登録済みリソース]の下の適切なノードを展開します。
合

データベースの現在の状態が、データベース名の横のカッコ内に表示されます。停止しているデータベースは、バックアップ対象として選択できません。

- 4 バックアップ対象のデータを選択するには、バックアップする項目のチェックボックスをオンにします。

バックアップ対象にコンテナ項目を選択した場合、そのコンテナの個々の項目を除外することはできません。コンテナ項目のチェックボックスをオフにしてから、バックアップの対象として含めるコンテナの個々の項目を選択する必要があります。

- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Oracle]をクリックします。
- 6 必要なオプションを設定します。

p.1303 の「[Oracle のバックアップオプション](#)」を参照してください。

- 7 複数のデータストリームをバックアップするように設定するには、[宛先]の下にある[デバイスとメディア]をクリックします。

- 8 必要なオプションを設定します。

p.1303 の「[Oracle バックアップジョブの\[デバイスおよびメディア\]オプション](#)」を参照してください。

- 9 必要に応じて、残りのバックアップジョブのプロパティを設定します。

p.313 の「[データをバックアップする方法](#)」を参照してください。

Oracle のバックアップオプション

Oracle のバックアップジョブを作成するときに次のオプションを設定できます。

p.1301 の「[Oracle リソースのバックアップ](#)」を参照してください。

表 K-8 Oracle のバックアップオプション

項目	説明
バックアップ方式	次のバックアップ方式のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none">■ 完全 - 選択項目をバックアップ: Oracle RMAN の増分バックアップ (レベル 0) に相当します。Oracle の選択項目の完全バックアップを実行するには、この方式を選択します。■ 差分 - 前回の完全バックアップ以降の変更内容をバックアップ: Oracle RMAN の累積増分バックアップ (レベル 1) に相当します。最後の完全バックアップ以降にデータベースに加えられたすべての変更内容をバックアップするには、この方式を選択します。ログファイルは部分的にバックアップされないため、アーカイブ REDO ログでは完全バックアップが行われます。■ 増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降の変更内容をバックアップ: Oracle RMAN の増分バックアップ (レベル 1) に相当します。最後の完全または増分バックアップ以降にデータベースに加えられたすべての変更内容をバックアップするには、この方式を選択します。ログファイルは部分的にバックアップされないため、アーカイブ REDO ログでは完全バックアップが行われます。
バックアップ済みのアーカイブログファイルを削除する	バックアップ後にアーカイブログファイルを自動的に削除できます。
バックアップ済みのアーカイブログファイルをバックアップしない	以前にバックアップしたアーカイブログファイルを Backup Exec がスキップすることを可能にします。
オフラインバックアップを実行する	バックアップジョブを開始する前に Backup Exec がデータベースをオフラインにすることを可能にします。データベースは、バックアップジョブの完了後にオンラインになります。

Oracle バックアップジョブの [デバイスおよびメディア] オプション

Oracle のバックアップジョブを作成するときに次の [デバイスおよびメディア] オプションを設定できます。

p.1301 の「[Oracle リソースのバックアップ](#)」を参照してください。

表 K-9 Oracle の[デバイスおよびメディア]オプション

項目	説明
複数のデータストリームをサポートするリソースで使用する最大デバイス数	<p>バックアップジョブで使用できる最大デバイス数を指定します。</p> <p>複数のデバイスを指定する場合は、バックアップジョブのバックアップ先デバイスとして次のいずれかを選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デバイスプール ■ 2 つ以上の同時並行処理が有効になっているディスクへのバックアップフォルダ <p>バックアップジョブで使用できるデバイスが1つのみの場合、RMANからのデータストリームは、メディアに逐次バックアップされます。</p> <p>p.485の「プロパティの設定によるディスクへのバックアップフォルダの作成」を参照してください。</p> <p>この機能は、DBA 開始ジョブで利用できません。</p>
最小デバイス数 (利用可能なデバイスがこの数よりも少ない場合はジョブを終了する)	<p>ジョブで使用できる最小デバイス数を指定します。</p> <p>最小数のデバイスを使用できない場合、ジョブは失敗します。</p> <p>この機能は、DBA 開始ジョブで利用できません。</p>

Oracle の DBA 開始バックアップジョブの実行について

データベース管理者 (DBA) は、RMAN コンソールから Oracle のバックアップまたはリストアを開始できます。RMAN コンソールからバックアップおよびリストアを実行するためのサンプルスクリプトは、次の場所にインストールされています。

```
¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥scripts¥Oracle
```

RMAN コンソールを使用する方法について詳しくは Oracle のマニュアルを参照してください。

RMAN コンソールから Oracle のバックアップジョブを開始する前に、次の事項を確認してください。

- Oracle Agent の設定に関するすべての準備を完了しておきます。
p.1282の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。
- RMAN コンソールを終了していない場合、または新しい手動チャンネルがコンソールに割り当てられていない場合、チャンネルは解放されません。
p.1317の「[Oracle Agent のトラブルシューティング](#)」を参照してください。
- RMAN では、SKIP INACCESSIBLE オプションを使用して、破損したデータおよびログファイルをスキップできます。このオプションを指定したジョブは正常に終了します

が、このデータをリストアすると、データベースが使用できない状態になる可能性があります。SKIP INACCESSIBLE オプションは、メディアサーバー操作には使用できません。バックアップジョブの実行中に破損したデータまたはログファイルが見つかった場合、ジョブは失敗します。このオプションを使用しないことをお勧めします。

- CASO 環境では、DBA 開始ジョブのテンプレートで選択する宛先デバイスは、集中管理サーバーにローカルに接続されている必要があります。宛先デバイスにデバイスプールが含まれる場合は、そのプール内のすべてのデバイスが集中管理サーバーにローカルに接続されている必要があります。

p.1297 の「Oracle インスタンス情報の変更について」を参照してください。

p.1299 の「Oracle リソースのバックアップについて」を参照してください。

p.407 の「DBA 開始ジョブの設定について」を参照してください。

Oracle リソースのリストアおよびリカバリについて

Backup Exec で選択したリストア選択項目は、スクリプトに変換されます。RMAN は、そのスクリプトを使用して、Backup Exec メディアからリストアする項目を判別します。データが Oracle サーバーにリストアされると、要求されたリカバリおよびリストアが RMAN によって実行されます。実行されるリカバリおよびリストアは、選択したオプションによって決定されます。

メモ: 今後、Symantec Backup Exec Agent for Oracle Server と、このサーバーによる GRFS テクノロジーの使用はサポートされません。このエージェントを使用してバックアップされるファイルは、ファイルシステムのリストアとしてリストアすることができます。

p.1312 の「レガシー GRFS Oracle Agent データベースのバックアップのリストア」を参照してください。

リカバリ処理によっては、メディアサーバーのメディアが不要な場合があります。たとえば、REDO ログは Oracle サーバーに存在している場合があります。リストア処理では、リストアされたデータ量は、バックアップされたデータ量と等しくない場合があります。また、リストアされたデータ量が 0 バイトを示す場合もあります。Oracle では、ディスク上の最新のデータファイルがスキップされる場合があるため、これは正常な状態です。

データベース全体または表領域やデータファイルで完全なリカバリを実行する場合は、リカバリするデータベースまたはファイルのバックアップをリストアする必要があります。その後、オンライン REDO ログまたはアーカイブ REDO ログ、あるいはその両方を適用する必要があります。メディアサーバーと DBA の両方から開始されたジョブの場合、要求したリストアおよびリカバリの実行に必要な Backup Exec の特定のデータが RMAN で判別されます。

メモ: Backup Exec では、サーバー開始操作による Oracle 表領域の時刻を指定したリストア (TSPITR) はサポートされていません。

Oracle のリストア選択項目は、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[リソース別の表示]タブでのみ指定できます。[メディア別の表示]タブにもバックアップセットが表示されますが、内容を参照または選択することはできません。

[リソース別の表示]タブでは、オンラインデータベースまたは制御ファイルからリストア選択項目を指定できます。

表 K-10 Oracle リソースのリストア選択項目

表示するリストアデータの場所	説明
オンラインのデータベース	ライブデータベースのビューが表示されます(利用可能な場合)。データベース全体または個別の表領域およびデータファイルを選択できます。 メモ: Oracle RAC の場合、その仮想ノード名の下に Oracle データベースが表示されます。名前は、RAC- <i><database name></i> - <i><database ID></i> の形式で表示されます。
制御ファイル	すべての制御ファイルのバックアップが一覧表示されます。各制御ファイルには、バックアップされた日付と制御ファイルのピース ID が表示されます。 個別の表領域またはデータファイルを選択してリストアを行うことはできません。 注意: 制御ファイルを使用して指定した時点までのリカバリを実行する場合は、制御ファイルのバックアップの日付が、指定したリカバリ時点より前であることを確認してください。2 つの時点の間にデータベース構造が変更されていないことも確認してください。また、制御ファイルをリストアすると、データベース全体が、リストアされた制御ファイルのバックアップの時点に戻ります。

p.1307 の「[Oracle データのリストア](#)」を参照してください。

p.1311 の「[Oracle データのリストア先の変更](#)」を参照してください。

Oracle の DBA 開始リストアおよびリカバリについて

DBA は、RMAN コンソールからリストアジョブを直接開始できます。たとえば、リストアするリソースおよびリストアジョブに割り当てるチャンネルの数を指定することができます。RMAN コンソールを使用する方法について詳しくは Oracle のマニュアルを参照してください。

すべての DBA 開始リストアジョブは、完了後に削除されます。

メモ: DBA 開始リストアジョブを使用してオンラインのデータファイル、表領域またはデータベースをリストアしようとする、**RMAN** コンソールにメッセージが表示されます。このメッセージは、**Oracle** ではそれらの項目がオンラインの場合はリストアを実行できないことを通知します。ただし、このメッセージは **Backup Exec** にはレポートされません。そのため、DBA 開始リストアジョブは、**Backup Exec** では正常に完了したものととしてレポートされます。

Oracle データのリストア

Oracle リソースをリストアする前に、設定のすべての必要条件が満たされていることを確認します。

p.1282 の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。

p.1305 の「[Oracle リソースのリストアおよびリカバリについて](#)」を参照してください。

メモ: CASO 環境では、**Oracle** リストアジョブを管理対象メディアサーバーに委任できません。ただし、リストアジョブでリストア元に暗号化された **Oracle** バックアップセットを使用すると、そのリストアジョブは失敗する場合があります。ジョブの完了に必要な暗号化キーが管理対象メディアサーバーに存在しないことを示すエラーメッセージが表示される場合があります。そのリストアジョブを実行する管理対象メディアサーバーで、暗号化キーを作成する必要があります。

p.404 の「[暗号化キーの作成](#)」を参照してください。

p.408 の「[DBA 開始ジョブのためのテンプレートの作成](#)」を参照してください。

p.1306 の「[Oracle の DBA 開始リストアおよびリカバリについて](#)」を参照してください。

p.1317 の「[Oracle Agent のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Oracle データをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 [リソース別の表示]タブをクリックします。
- 5 [すべてのリソース]アイコンを展開します。
- 6 リストアするデータベースインスタンスが含まれているシステムリソースを展開します。

- 7 リストアするデータベースインスタンスを展開します。
データベースの現在の状態が、データベース名の右側に表示されます。データベースは、マウント状態、ノーマウント状態またはオープン状態になっている必要があります。停止状態のデータベースは、リストアジョブ用に選択できません。
- 8 [現在のデータベース]または[制御ファイル]のいずれかのリソースを展開します。
制御ファイルをリストアすると、データベース全体が、選択した制御ファイルのバックアップの時点に戻ります。このオプションを使用して個別の表領域またはデータファイルをリストアすることはできません。
個別の表領域またはデータファイルをリストアするには、[オンラインデータベース]ビューから選択します。
- 9 リストアする必要がある項目を選択します。
- 10 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Oracle]をクリックします。
- 11 必要なオプションを設定します。
p.1308 の「[Oracle のリストアオプション](#)」を参照してください。
- 12 必要に応じて[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択し、リストアジョブを開始します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 13 リストアしたデータベースの完全バックアップを実行します。

Oracle のリストアオプション

Oracle のリストアジョブを作成するときに次のオプションを設定できます。

p.1307 の「[Oracle データのリストア](#)」を参照してください。

表 K-11 Oracle のリストアオプション

項目	説明
完全バックアップや増分バックアップからリストアする	<p>リストア方式を指定します。</p> <p>次のいずれかからデータをリストアするオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 利用可能な最新のバックアップからリストア ■ 指定時刻にリストア ■ 指定した SCN にリストア <p>このリストアジョブに必要なバックアップオブジェクトが RMAN で判別され、Backup Exec でそのオブジェクトのリストアが実行されます。</p> <p>また、リストアの完了後に REDO ログからリカバリを実行する場合は、リカバリオプションも選択する必要があります。</p>

項目	説明
利用可能な最新のバックアップからリストア	利用可能である最新の完全バックアップと増分バックアップから Oracle データベースをリストアします。
指定時刻にリストア	<p>指定した時点までのデータをリストアします。指定した時点まで到達すると、リカバリは完了します。</p> <p>[日付]ボックスで、日付を入力するかまたは矢印をクリックしてカレンダーを表示し、日付を選択します。</p> <p>[時間]ボックスで、時間を入力するかまたは矢印をクリックして時間を選択します。</p>
指定した SCN にリストア	指定したシステム制御番号(SCN)までのリストアを実行します。所定のフィールドに SCN を入力します。
現在のファイルでない場合は、読み取り専用ファイルをリストアする	RMAN がすべての読み取り専用データファイルのヘッダーを確認し、現在のファイルではないファイルをリストアすることを可能にします。
有効性確認のみ実行し、データをリストアしない	<p>必要なすべてのメディアをマウントし、必要に応じて読み取ります。RMAN では、処理に必要なバックアップセットが選択されてそのすべてがスキャンされ、破損しておらず利用可能であるかが確認されます。データベースサーバーへのデータの書き込みまたはリストアは実行されません。制御ファイルの検証はサポートされません。</p> <p>このオプションを選択して、データベースへのリストアを試行する前に、必要なすべてのメディアが利用可能であることを確認することをお勧めします。</p>
有効性確認が正常に完了した場合にデータをリストアまたはリカバリする	<p>有効性確認が正常に完了した場合にすぐにリストアジョブを実行できます。</p> <p>選択したすべてのリストアオプションおよびリカバリオプションが実行されます。</p>
制御ファイルのみリストアする	Oracle データベースの制御ファイルをリカバリしますが、表領域が関連付けされたデータファイルを含みません。
REDO ログを使用してリカバリする	<p>コミット済みトランザクションをオンライン REDO ログおよびアーカイブ REDO ログからリカバリします。利用可能な最新のログからトランザクションをリカバリするか、指定時刻にリカバリするか、指定したシステム制御番号 (SCN) にリカバリするかを選択します。</p> <p>このリストアジョブに必要なバックアップオブジェクトが RMAN で判別され、Backup Exec でそのオブジェクトのリストアが実行されます。</p>
利用可能な最新のバックアップからリストア	オンライン REDO ログおよびアーカイブ REDO ログの利用可能な最新のコミット済みトランザクションまでリカバリします。

項目	説明
指定時刻にリカバリ	<p>オンライン REDO ログおよびアーカイブ REDO ログのコミット済みトランザクションを指定した時点までリカバリします。指定した時点まで到達すると、リカバリは完了します。</p> <p>[日付]ボックスで、日付を入力するかまたは矢印をクリックしてカレンダーを表示し、日付を選択します。</p> <p>[時間]ボックスで、時間を入力するかまたは矢印をクリックして時間を選択します。</p> <p>このオプションが利用できるのは、データベースがARCHIVELOGモードの場合のみです。</p> <p>注意: 制御ファイルを使用して指定した時点までのリカバリを実行する場合は、制御ファイルのバックアップの時刻が、指定したリカバリ時点より前であることを確認してください。2つの時点の間にデータベース構造が変更されていないことも確認してください。</p>
指定したSCNにリカバリ	<p>オンライン REDO ログおよびアーカイブ REDO ログのコミット済みトランザクションを指定したシステム制御番号(SCN)までリカバリします。指定したSCNまでリカバリされると、リカバリは完了します。</p>
リカバリ後、不要になったアーカイブ REDO ログを削除する	<p>古いアーカイブ REDO ログファイルを削除してハードディスクの空き領域を増やします。</p>
リカバリ後にデータベースをオープンする	<p>リカバリ後すぐにデータベースをオープンします。リカバリ後にデータベースをオンラインにする場合も、このオプションにチェックマークを付けます。</p>

Oracle データのリストア先の変更について

Backup Exec では、Oracle インスタンスまたはそのファイルのリストア先を次のように変更できます。

- Oracle インスタンスのリストア先を別の Oracle サーバーに変更する

メモ: インスタンスのリストア先を別の Oracle サーバーに変更する場合は、同じ名前およびデータベース ID (DBID) のインスタンスがそのサーバーで設定されていることを確認します。データベースは、ノーマウント状態である必要があります。同じ名前およびデータベース ID のインスタンスを作成する方法については Oracle のマニュアルを参照してください。

- **Oracle** インスタンスのリストア先を別の **Oracle** サーバーに変更し、**Oracle** ファイルの代替パスを指定する
- 表領域、データファイルおよびアーカイブログのリストア先を、元のサーバーにある代替の場所に変更する

リストア先を変更する際は、一度に 1 つのみのインスタンスを選択することをお勧めします。

Oracle データのリストア先の変更

Oracle インスタンスまたは Oracle ファイルのリストア先を変更するのに Backup Exec を使うことができます。

Oracle データのリストア先を変更する方法

- 1 Oracle データのリストアジョブを作成します。
 p.1307 の「[Oracle データのリストア](#)」を参照してください。
- 2 Oracle の[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで必要なオプションを選択し、[プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[Oracle のリストア先の変更]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
 p.1311 の「[\[Oracle のリストア先の変更\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 リストア先を変更したリストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
 リストアジョブが完了した後、リストアしたデータの完全バックアップを実行しておくことをお勧めします。
 p.1299 の「[Oracle リソースのバックアップについて](#)」を参照してください。

[Oracle のリストア先の変更]オプション

異なるサーバーに Oracle インスタンスをリストアするときに次のオプションを設定できます。

p.1311 の「[Oracle データのリストア先の変更](#)」を参照してください。

表 K-12 [Oracle のリストア先の変更]オプション

項目	説明
Oracle インスタンスを次のサーバーにリストアする	Oracle インスタンスのリストア先をソースサーバー以外のサーバーに変更できます。
サーバー	リストアジョブのリストア先を変更するサーバーの名前を示します。

項目	説明
サーバーのログオンアカウント	リストアジョブのリストア先を変更するサーバーにデータをリストアする権限のあるログオンアカウントを表示します。
インスタンスのログオンアカウント	リストアする Oracle インスタンスのログオンアカウントを表示します。
データファイルを次のパスにリストアする	<p>データファイルのリストア先のパスを指定できます。有効なパスを入力しないと、リストアジョブは失敗します。</p> <p>[Oracle インスタンスを次のサーバーにリストアする]チェックボックスをオンにしている場合、このオプションにチェックマークを付けて、指定したサーバー上のデフォルトとは異なるパスを指定します。</p> <p>インスタンスのリストア先を変更しない場合、このオプションにチェックマークを付けて Oracle サーバーでファイルの代替ローカルパスを指定します。</p>
アーカイブログファイルを次のパスにリストアする	<p>アーカイブログファイルのリストア先のパスを指定できます。有効なパスを入力しないと、リストアジョブは失敗します。</p> <p>[Oracle インスタンスを次のサーバーにリストアする]チェックボックスをオンにしている場合、このオプションにチェックマークを付けて、指定したサーバー上のデフォルトとは異なるパスを指定します。</p> <p>インスタンスのリストア先を変更しない場合、このオプションにチェックマークを付けて Oracle サーバーでファイルの代替ローカルパスを指定します。</p>

レガシー GRFS Oracle Agent データベースのバックアップのリストア

レガシー GRFS Oracle Agent データファイルのバックアップをリストアするには、リストア先を変更したファイルシステムのリストアジョブを使用する必要があります。データファイルをリストアしたら、Oracle のデータベース管理ツールを使用して、データファイルを目的の Oracle インスタンスに追加する必要があります。

詳しくは Oracle のマニュアルを参照してください。

レガシー GRFS Oracle Agent データベースのバックアップをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 [リソース別の表示]タブで、[すべてのリソース]を展開します。
- 5 リストアする GRFS Oracle リソースを参照します。
- 6 結果ペインで、リストアする Oracle データファイルのチェックボックスをオンにします。

- 7 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[ファイルのリストア先の変更]をクリックします。
 [Oracle のリストア先の変更]はクリックしないでください。これは、ファイルシステムのリストアプロセスのみです。
- 8 [ファイルセットのリストア先を変更する]チェックボックスをオンにします。
- 9 [リストア先ドライブ]にドライブ文字を入力します。
- 10 [リストア先パス]にパスを入力します。
- 11 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行 [今すぐ実行]をクリックします。
 行する

後で実行するジョブをスケジュールする 次に示す順序で操作を実行します。

- [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
- スケジュールオプションを設定します。
- [サブミット]をクリックします。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

- 12 リストアされたデータファイルの名前を、元の **Oracle** データファイルの名前に一致するように変更します。
- 13 このデータファイルを目的の **Oracle** インスタンスに追加します。
 詳しくは **Oracle** のマニュアルを参照してください。

元の Oracle サーバーを使用した Oracle インスタンスおよびデータベースの完全なリカバリの必要条件

Oracle インスタンスまたはデータベースを完全に損失、削除または破損した場合、同じ **Oracle** サーバーを使用してリカバリできます。同じサーバー名と SID 名を使う新しい物理サーバーを設定するときにもこれらの手順を使うことができます。

この手順を使用してリカバリを正常に実行するには、次の項目が必要です。

表 K-13 元の Oracle サーバーを使用してリカバリする場合の必要条件

項目	説明
データベース ID	データベース ID が不明な場合は、ログオン後に Backup Exec ジョブログまたは RMAN で確認できます。

項目	説明
制御ファイルのピース ID	[Oracle]ノードの下にある[制御ファイル]サブノードの Backup Exec リストアビューで、制御ファイルのピース ID を確認できます。
Oracle システムの完全バックアップ	Oracle システムの完全バックアップには、次のものを含める必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 制御ファイル ■ データファイル ■ アーカイブログ
元の Oracle サーバー	ディザスタリカバリ手順 1 を使用して Oracle システムを正常にリカバリするには、元の Oracle サーバーにリストアする必要があります。

元の Oracle サーバーを使用した Oracle インスタンスおよびデータベースの完全なリカバリ

Oracle インスタンスまたはデータベースを完全に損失、削除または破損した場合、同じ Oracle サーバーを使用してリカバリできます。

p.1313 の「元の Oracle サーバーを使用した Oracle インスタンスおよびデータベースの完全なリカバリの必要条件」を参照してください。

元の Oracle サーバーを使用して Oracle インスタンスおよびデータベースの完全なリカバリを実行する方法

- 1 損失した元のデータベースで使用していた名前と同じ名前を使用して、Oracle データベースを再作成します。
- 2 `pwd<SID>.ora` ファイルを検索し、名前を変更します。
- 3 新しい `pwd<SID>.ora` ファイルを作成するには、次に示す順序で操作を実行します。
 - コマンドプロンプトを開きます。
 - 次のコマンドを入力します。

```
orapwd file=path%pwdsid.ora password=<password>
```
- 4 次のコマンドを示した順に入力します。
 - `RMAN`
 - `CONNECT TARGET <sys/password@sid>;`
 - `SHUTDOWN ABORT;`
 - `STARTUP NOMOUNT;`
 - `SET DBID<dbid ID>;`

- 5 Backup Exec メディアサーバーに移動します。
- 6 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックし、[新規リストアジョブ]をクリックします。
- 7 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 8 リストアする制御ファイルを選択します。
- 9 [今すぐ実行]をクリックします。
 リカバリ部分のアーカイブログで一貫性がとれていないために、リストアジョブが失敗します。これは、ディザスタリカバリ時の正常な状態です。
- 10 リストアジョブが完了したら、Backup Exec を終了します。
- 11 Oracle サーバーのコマンドプロンプトで次の行を入力します。

Alter database open resetlogs

- 12 コマンドプロンプトを閉じます。

元の Oracle サーバー以外のコンピュータへの Oracle インスタンスまたはデータベースの完全なリカバリの必要条件

Oracle インスタンスまたはデータベースを完全に損失、削除または破損した場合、元の Oracle サーバー以外のコンピュータにインスタンスとデータベースをリストアできます。

p.1316 の「元の Oracle サーバー以外のコンピュータへの Oracle インスタンスまたはデータベースの完全なリカバリ」を参照してください。

この手順を使用してリカバリを正常に実行するには、次の項目が必要です。

表 K-14 新しいまたは別の Oracle サーバーを使用してリカバリする場合の必要条件

項目	説明
データベース ID	データベース ID が不明な場合は、ログオン後に Backup Exec ジョブログまたは RMAN で確認できます。
制御ファイルのピース ID	[Oracle] ノードの下にある[制御ファイル]サブノードの Backup Exec リストアビューで、制御ファイルのピース ID を確認できます。
Oracle システムの完全バックアップ	Oracle システムの完全バックアップには、次のものを含める必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 制御ファイル ■ データファイル ■ アーカイブログ

元の Oracle サーバー以外のコンピュータへの Oracle インスタンスまたはデータベースの完全なリカバリ

元の Oracle サーバー以外のコンピュータに Oracle インスタンスまたはデータベースをリストアできます。

p.1315 の「元の Oracle サーバー以外のコンピュータへの Oracle インスタンスまたはデータベースの完全なリカバリの必要条件」を参照してください。

元の Oracle サーバー以外のコンピュータへの Oracle インスタンスおよびデータベースの完全なリカバリを実行する方法

- 1 損失した元のインスタンスで使用していた名前と同じ名前を使用して、Oracle インスタンスを再作成します。
- 2 `pwd<SID>.ora` ファイルを検索し、名前を変更します。
- 3 新しい `pwd<SID>.ora` ファイルを作成するには、次に示す順序で操作を実行します。
 - コマンドプロンプトを開きます。
 - 次のコマンドを入力します。
`orapwd file=path\%pwdsid.ora password=<password>`
- 4 次のコマンドを示した順に入力します。
 - **`RMAN`**
 - **`CONNECT TARGET <sys/password@sid>;`**
 - **`SHUTDOWN ABORT;`**
 - **`STARTUP NOMOUNT;`**
 - **`SET DBID<dbid ID>;`**
- 5 Backup Exec メディアサーバーに移動します。
- 6 ナビゲーションバーの [リストア] の横にある矢印をクリックし、[新規リストアジョブ] をクリックします。
- 7 [プロパティ] ペインの [ソース] の下にある [選択リスト] をクリックします。
- 8 リストアする制御ファイルを選択します。
- 9 [リストアジョブのプロパティ] ペインの [宛先] の下にある [Oracle のリストア先の変更] をクリックします。
- 10 [Oracle インスタンスを次のサーバーにリストアする] オプションのチェックボックスをオンにします。
- 11 新しいまたは別の Oracle サーバーにアクセスするためのアカウントクレデンシャルを入力します。

- 12 [データファイルを次のパスにリストアする]オプションのチェックボックスをオンにします。
- 13 新しいデータベースへのパスを入力します。
- 14 [アーカイブファイルを次のパスにリストアする]オプションのチェックボックスをオンにします。
- 15 [今すぐに実行]をクリックします。
 リカバリ部分のアーカイブログで一貫性がとれていないために、リストアジョブが失敗します。これは、ディザスタリカバリ時の正常な状態です。
- 16 Oracle サーバーに移動します。
- 17 **Alter database open resetlogs** と入力します。
- 18 次のいずれかを実行します。

データベースを開こうとしたときにエラーが発生した場合 オンライン REDO ログのパスを書き留め、パスを更新します。
 p.1322の「[オンライン REDO ログファイルのパスの更新](#)」を参照してください。

エラーが発生しなかった場合 必要な操作はありません。ディザスタリカバリは完了しました。

Oracle Agent のトラブルシューティング

Oracle Agent に問題がある場合、次の質問と回答が問題を解決するのに役立つことがあります。

表 K-15 Oracle Agent についての質問と回答

質問	回答
<p>Oracle で [Backup Exec によるデータベースの状態の変更でタイムアウトが発生しました] というメッセージが表示されます。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>メディアサーバーの操作時に、Oracle データベースの状態の変更にかかる場合があります (オープン状態からシャットダウン状態への変更や、シャットダウン状態からマウント状態への変更など)。Backup Exec の SQLplus スクリプトでは、データベースの状態の変更に関するデフォルトのタイムアウト時間は 10 分です。Oracle Real Application Clusters (RAC) の場合は、<code>srvctl</code> スクリプトが使用されます。</p> <p>データベースの状態の変更に関するタイムアウト値の名前は <code>SqlplusTimeout</code> です。</p> <p>次のエラーメッセージが表示された場合は、デフォルトのタイムアウト時間を変更する必要がある場合があります。</p> <p>Backup Exec によるデータベースの状態の変更でタイムアウトが発生しました。詳しくはジョブログのデータベーススクリプト出力のセクションを参照してください。データベースの状態を変更する場合は、データベースの管理者に問い合わせてください。</p> <p>データベースのシャットダウンを試行してください。シャットダウンできた場合は、SQLplus のタイムアウト時間が短すぎます。データベースのシャットダウンにかかった時間に基づいて、デフォルトのタイムアウト時間を適切な値に変更します。データベースをシャットダウンできない場合は、DBA に連絡してデータベースのトラブルシューティングを依頼してください。</p> <p>タイムアウト時間が短すぎる場合、リストアジョブおよびオフラインバックアップがタイムアウトエラーで失敗することがあります。タイムアウト時間が長すぎる場合で、データベースが状態の変更要求に応答しないときは、ジョブが失敗するまでの時間が長くなります。</p> <p>p.1320 の「Windows コンピュータ上の Oracle インスタンスの <code>SqlplusTimeout</code> の変更」を参照してください。</p> <p>p.1320 の「Linux コンピュータ上の Oracle インスタンスの <code>SqlplusTimeout</code> の変更」を参照してください。</p>

質問	回答
<p>Oracle RMAN コンソールでジョブの処理が完了していても、メディアサーバー上ではジョブの処理が続行されます。どのように対処すればよいのでしょうか？</p>	<p>自動的に割り当てられたチャンネルでバックアップ処理またはリストア処理を実行する場合、チャンネルが解放されていないと、RMAN コンソールで処理が完了していても、メディアサーバー上ではジョブの処理が続行されます。RMAN コンソールを終了していない場合、または新しい手動チャンネルがコンソールに割り当てられていない場合、チャンネルは解放されません。自動チャンネルが解放されるか、またはそのチャンネルでアクティビティが実行されずにタイムアウトが発生すると、メディアサーバー上のジョブは終了します。タイムアウト時間内に同じ自動チャンネルで新しいバックアップまたはリストアが開始された場合、新しいジョブは作成されません。この場合、既存のジョブによって、そのメディアサーバーでバックアップまたはリストアが実行されます。</p> <p>チャンネルのタイムアウトのデフォルト値は10分です。通常は、この値を使用することをお勧めします。タイムアウト時間が短すぎる場合、1つのチャンネルで、連続した複数の処理に対して複数のジョブが作成されます。タイムアウト時間が長すぎる場合は、処理が終了していても、メディアサーバー上でジョブが長時間にわたり不必要に続行されます。</p> <p>p.1321の「Windows コンピュータ上の Oracle インスタンスの自動 RMAN チャンネルに関するタイムアウトの変更」を参照してください。</p> <p>p.1321の「Linux コンピュータ上の Oracle インスタンスの自動 RMAN チャンネルに関するタイムアウトの変更」を参照してください。</p>
<p>Oracle インスタンス情報を変更すると、[リソースに接続できません]というエラーが表示されます。</p>	<p>Oracle インスタンス情報を変更した場合は、Remote Agent ユーティリティを更新する必要があります。クレデンシャル情報を更新しない場合または正しくない場合、バックアップジョブの実行時に[リソースに接続できません]というエラーが表示される場合があります。このメッセージが表示された場合は、サーバーをオンラインにして、情報を設定する必要があります。</p> <p>p.1282の「Windows コンピュータおよびLinux サーバーでの Oracle Agent の設定」を参照してください。</p>

質問	回答
<p>Oracle がインストールされている Linux コンピュータで [ORA-12546: TNS: アクセス権が拒否されました] というエラーが表示されます。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>Oracle インスタンスがインストールされている Linux コンピュータ上で Backup Exec の処理が失敗し、RMAN 出力のセクションに [ORA-12546: TNS: アクセス権が拒否されました] というエラーが表示された場合、ジョブのマシンレベルのリソースクレデンシアルを変更する必要があります。リソースクレデンシアルは、Linux コンピュータの dba グループおよび beoper グループのメンバーであるアカウントにする必要があります。変更してから、処理を再試行してください。</p> <p>p.1294 の「メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシアルの設定」を参照してください。</p> <p>p.1828 の「Remote Agent for Linux or UNIX Servers の Backup Exec オペレータグループについて」を参照してください。</p>

Windows コンピュータ上の Oracle インスタンスの SqlplusTimeout の変更

Backup Exec が Oracle データベースの状態の変更を処理する期間を変更できます。Backup Exec では、データベースの状態の変更に関するデフォルトのタイムアウト時間は 10 分です。

p.1317 の「Oracle Agent のトラブルシューティング」を参照してください。

Windows コンピュータ上の Oracle インスタンスの SqlplusTimeout を変更する方法

- 1 次の場所に、種類が DWORD のレジストリエントリを作成します。
`Software\Symantec\Backup Exec\Engine\Agents\XBSA\Oracle RMAN Agent`
- 2 エントリに SqlplusTimeout という名前を付けます。
- 3 タイムアウト値を秒単位で設定します。
 たとえば、タイムアウトが 5 分の場合は 300 秒に設定します。

Linux コンピュータ上の Oracle インスタンスの SqlplusTimeout の変更

Backup Exec が Oracle データベースの状態の変更を処理する期間を変更できます。Backup Exec では、データベースの状態の変更に関するデフォルトのタイムアウト時間は 10 分です。

p.1317 の「Oracle Agent のトラブルシューティング」を参照してください。

Linux コンピュータ上の Oracle インスタンスの SqlplusTimeout を変更する方法

- 1 次のように入力して、ファイルを編集します。

```
vi /etc/VRTSralus/ralus.cfg
```

- 2 次のエントリを作成します。

```
Software¥Symantec¥Backup Exec¥Engine¥Agents¥XBSA¥Oracle RMAN  
Agent¥SqlplusTimeout
```

- 3 タイムアウト値を秒単位で設定します。

たとえば、タイムアウトが 5 分の場合は 300 秒に設定します。

Windows コンピュータ上の Oracle インスタンスの自動 RMAN チャネルに関するタイムアウトの変更

自動 RMAN チャネルのデフォルトのタイムアウト (10 分) を変更できます。

p.1317 の「[Oracle Agent のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Windows コンピュータ上の Oracle インスタンスの自動 RMAN チャネルに関するタイムアウトを変更する方法

- 1 次の場所に、種類が DWORD のレジストリエントリを作成します。

```
HKLM¥Software¥Symantec¥Backup Exec¥Engine¥Agents¥XBSA¥Oracle RMAN  
Agent
```

- 2 エントリに ChannelTime という名前を付けます。

- 3 タイムアウト値を分単位で設定します。

Linux コンピュータ上の Oracle インスタンスの自動 RMAN チャネルに関するタイムアウトの変更

自動 RMAN チャネルのデフォルトのタイムアウト (10 分) を変更できます。

p.1317 の「[Oracle Agent のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Linux コンピュータ上の Oracle インスタンスの自動 RMAN チャンネルに関するタイムアウトを変更する方法

- 1 次のように入力して、ファイルを編集します。

```
vi /etc/VRTSralus/ralus.cfg
```

- 2 次のエントリを作成します。

```
HKLM\Software\Symantec\Backup Exec\Engine\Agents\XBSA\Oracle RMAN  
Agent <time-out>
```

- 3 タイムアウト値を分単位で設定します。

オンライン REDO ログファイルのパスの更新

Oracle インスタンスまたはデータベースの完全なリカバリの間にオンライン REDO ログファイルのパスを更新しなければならないことがあります。

p.1316 の「元の Oracle サーバー以外のコンピュータへの Oracle インスタンスまたはデータベースの完全なリカバリ」を参照してください。

オンライン REDO ログファイルのパスを更新する方法

- 1 Oracle サーバーで、コマンドプロンプトを開きます。
- 2 次のコマンドを示した順に入力します。

```
■ SQLPLUS /nolog  
■ connect<sys/password@SID>;
```

- 3 次の SQLPlus コマンドを入力します。

```
SQLPLUS ALTER DATABASE RENAME FILE <REDO ログファイルをバックアップした古いパス> to <REDO ログファイルをリストアする新しいパス>;
```

次に例を示します。

```
ALTER DATABASE RENAME FILE  
'D:\ORACLE\ORADATA\JACOB\REDO01.LOG' to  
'C:\ORACLE\ORADATA\JACOB\REDO01.LOG';
```

- 4 コマンドプロンプトで、**RMAN** と入力します。
- 5 RMAN プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
Alter database open resetlogs
```

- 6 コマンドプロンプトを閉じます。



Symantec Backup Exec Agent for SAP Applications

この付録では以下の項目について説明しています。

- [SAP Agent](#) について
- [SAP Agent](#) 使用上の必要条件
- [SAP Agent](#) のインストールについて
- [SAP Agent](#) のセキュリティおよび権限について
- [SAP](#) データをバックアップする前に
- システムレベルの [SAP](#) のバックアップジョブについて
- [SAP Agent](#) を使用したバックアップおよびリストアについて
- [RMAN](#) を使用した [SAP](#) データのバックアップ
- [RMAN](#) を使用した [SAP](#) データのリストア
- [_backint.mdb](#) から [_backint.xml](#) への [SAP Agent](#) カタログの移行
- [Microsoft Cluster Server](#) 上のクラスタ化された [SAP](#) データベースのバックアップについて
- [SAP Agent](#) を使用した [MaxDB](#) データベースのバックアップについて
- [SAP Agent](#) を使用した [MaxDB](#) データベースのリストア
- [SAP Agent](#) を使用したディザスタリカバリの実行について

SAP Agent について

Backup Exec Agent for SAP Applications (SAP Agent) は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントです。同一のネットワーク上で実行される複数のメディアサーバーをサポートします。SAP Agent を使用すると、オンラインまたはオフラインモードで、個別のファイル、データベース全体または個別の表領域のバックアップおよびリストアを行うことができます。また、オフラインの REDO ログをバックアップし、リストアすることもできます。

SAP Agent では、次のいずれかを使用して、Oracle データベースおよび MaxDB データベースの SAP® のバックアップおよびリストアを行うことができます。

- BACKINT (SAP 社が開発したバックアップおよびリストアインターフェース)
- Oracle の Recovery Manager (RMAN)

RMAN を使用して Oracle データベースの SAP をバックアップするには、SAP Agent と Symantec Backup Exec Agent for Oracle on Windows or Linux Servers (Oracle Agent) の両方が必要です。

SAP で管理していない Oracle データベースをバックアップするには、Oracle Agent を購入する必要があります。Microsoft SQL Server にインストールされている SAP アプリケーションをバックアップするには、Symantec Backup Exec Agent for Microsoft SQL Server を購入する必要があります。

SAP Agent では、次の機能を使用できます。

- ジョブ名の指定
- データの暗号化
- クライアント側でのデータの圧縮
- 受信者への通知
- SAP ジョブ専用のネットワークパス
- バックアップジョブ完了後のデータ整合性の検証
- SAP Agent カタログの保護の強化

p.1331 の「[SAP の DBA 開始ジョブの設定](#)」を参照してください。

p.1328 の「[SAP データの暗号化について](#)」を参照してください。

p.327 の「[バックアップジョブおよびテンプレートの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

p.1329 の「[SAP Agent カタログの整合性維持について](#)」を参照してください。

SAP Agent の動作

SAP Agent は、Backup Exec のクライアントとして動作します。Biparam.ini ファイルを使用すると、SAP インターフェースでサブミットするジョブに適用する Backup Exec パラ

メータを設定できます。たとえば、ジョブ名を設定したり、ジョブに使用するサーバーまたはデバイスを指定したり、バックアップ圧縮モードを指定できます。

SAP Agent は Backup Exec サーバーへ接続します。要求が Backup Exec を使用して処理されます。SAP インターフェースから SAP Agent を通じてサブミットしたジョブは、開始ジョブとして処理されます。すべてのドライブが使用中の場合は、ジョブは Backup Exec のジョブキューに追加されます。キューで待機しているジョブを編集またはキャンセルすることができます。

ジョブが完了すると、サブミットされたすべてのジョブと同じように、標準ジョブログが作成されます。Backup Exec の管理コンソールから、ジョブログを表示することができます。ジョブの結果は、SAP Agent によって SAP ツールに送信されます。SAP インターフェースによってジョブが開始されると、そのジョブログが半角 8 文字のファイル名で作成されます。このジョブログは SAP システムによって、次のディレクトリに格納されます。

```
<x>:¥Oracle¥<SID>¥sapbackup
```

<x> はデータベースのインストールドライブ、<SID> は Oracle インスタンスのシステム ID です。このファイルは、ASCII 形式のプレーンテキストファイルであるため、任意のテキストエディタを使用して表示することができます。

SAP エージェントのコンソールにエラーとそれらの詳細が表示されるため、一部の問題はログファイルを見ないで解決できます。

次のコマンドのどちらかを入力してコマンドラインのヘルプを表示できます。

■ backin/?

■ backint/h

Backup Exec のジョブに関するカタログ情報を格納する `_backint.xml` ファイルは、SAP ユーティリティプログラムの BRTtools が格納されているフォルダに存在します。通常のパスは次のとおりです。

```
Usr¥sap¥<SID>¥sys¥exe¥run
```

障害発生時には、このファイルをリストアして SAP サーバーにデータをリストアします。

p.1333 の「システムレベルの SAP のバックアップジョブについて」を参照してください。

p.1343 の「SAP Agent を使用したディザスタリカバリの実行について」を参照してください。

SAP Agent と RMAN の使用について

Backup Exec では、RMAN と統合してデータファイルをバックアップおよびリストアする場合は Oracle Agent が必要です。

RMAN を使用してデータベースをバックアップすると、次の処理が行われます。

■ Oracle Agent を使用してデータファイルが RMAN によってバックアップされます。

- SAP Agent を使用して制御ファイルおよびログファイルが BACKINT によってバックアップされます。

RMAN を使用してバックアップジョブまたはリストアジョブを実行する前に、Remote Agent ユーティリティを実行して特定の設定を行っておく必要があります。

p.1279 の「Backup Exec Oracle Agent について」を参照してください。

p.1325 の「SAP Agent と RMAN の使用について」を参照してください。

p.1898 の「Windows システムの Remote Agent ユーティリティについて」を参照してください。

SAP Agent 使用上の必要条件

次の URL で、互換性のあるオペレーティングシステム、プラットフォームおよびアプリケーションのリストを参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

その他の必要条件是次のとおりです。

- SAP Agent のライセンスキーをメディアサーバーにインストールする必要があります。
- SAP Agent を SAP サーバーにインストールする必要があります。
- Backup Exec Remote Agent for Windows Systems を SAP サーバーにインストールする必要があります。

メモ: Backup Exec Remote Agent for Windows Systems は、SAP Agent をインストールすると自動的に SAP サーバーにインストールされます。

- バックアップするすべての SAP データベースを ARCHIVE_LOG モードにする必要があります。また、データベース管理ツールを使用して自動アーカイブを有効に設定する必要もあります。
詳しくは SAP のユーザーマニュアルまたは SAP のデータベース管理者ガイドを参照してください。
- バックアップする Oracle データベースはすべて、SAP システムで管理する必要があります。
- Oracle 9i を使用している場合は、バックアップする Oracle サーバーに BRTools 6.40 をインストールする必要があります。Oracle 10g を使用している場合は、バックアップする Oracle サーバーに BRTools 7 または 7.10 をインストールする必要があります。
- SAP Agent を設定する必要があります。
p.1330 の「SAP Agent の biparam.ini の設定」を参照してください。
- バックアップオペレータが ORA_DBA グループのメンバーである必要があります。

- ORA_<SID>_OPER グループを作成してバックアップユーザーを追加する必要があります。
- RMAN のバックアップジョブおよびリストアジョブの場合は、Backup Exec Oracle Agent を SAP サーバーにインストールする必要があります。

SAP Agent は、BC-BRI BACKINT Interface for ORACLE Databases 仕様 3.0 に対応しています。

メモ: SAP Agent では、RAW パーティションタイプに格納されているデータはサポートされません。

p.107 の「ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール」を参照してください。

p.105 の「システムの必要条件」を参照してください。

SAP Agent のインストールについて

SAP Agent をインストールする前に、次の手順を実行します。

- バックアップオペレータが ORA_DBA グループのメンバーであることを確認します(バックアップオペレータが Administrator である場合は、Administrator を ORA_DBA グループに追加します)。
- ORA_<SID>_OPER グループを作成し、このグループに現在のユーザーを追加します。
- SAP システムの環境変数が、バックアップ対象サーバーに適合するように設定されていることを確認します。SAP Agent のデフォルトのディレクトリは、次に示す SAP データベースのホームディレクトリにあります。

```
Ustr¥sap¥<SID>¥sys¥exe¥run
```

Backup Exec をインストールするときに、SAP Agent をメディアサーバーにインストールできます。あるいは、すでに Backup Exec をインストールしている場合は、SAP Agent のみをインストールできます。

p.107 の「ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール」を参照してください。

p.112 の「ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール」を参照してください。

SAP Agent のセキュリティおよび権限について

BACKINT は Backup Exec サーバーのクライアントとして動作するため、Backup Exec 管理コンソールに適用されるすべての Microsoft Windows のセキュリティ制限は BACKINT にも適用されます。

データをバックアップおよびリストアするには、SAP サーバーと Backup Exec メディアサーバーの両方に対する適切な権限が必要です。

Backup Exec サービスアカウントには、次の権限が必要です。

- BACKINT インターフェースを使用してサブミットしたジョブの選択項目へのアクセス権限。
- 選択項目が格納されているボリュームに対するアクセス権限。

p.1328 の「[SAP データの暗号化について](#)」を参照してください。

p.1328 の「[SAP Agent のアラートの生成について](#)」を参照してください。

p.1329 の「[SAP Agent カタログの整合性維持について](#)」を参照してください。

p.1343 の「[SAP Agent を使用したディザスタリカバリの実行について](#)」を参照してください。

p.100 の「[Windows のセキュリティの変更について](#)」を参照してください。

SAP データの暗号化について

SAP Agent では、暗号化キーを使用してデータを暗号化することができます。この機能は、RMAN または BACKINT を使用してバックアップジョブを実行する場合に使用できます。

ジョブテンプレートの作成時または編集時に、[DBA 開始ジョブの設定]を使用して暗号化キーを作成します。Biparam.ini ファイルでジョブテンプレート名を指定する必要があります。

特定の暗号化キーを使用してジョブを実行した後にキーを削除すると、この暗号化キーを使用してバックアップされたデータをリストアできなくなります。

p.1331 の「[SAP の DBA 開始ジョブの設定](#)」を参照してください。

p.400 の「[暗号化キー](#)」を参照してください。

SAP Agent のアラートの生成について

Backup Exec で生成されるアラートは、BACKINT によって次のいずれかのモードで処理されます。

表 L-1 SAP エージェントのアラートモード

項目	説明
無人モード	無人モードでは、応答が必要なアラートが発生すると、ジョブが失敗し、SAP システムコンソールに表示されます。SAP システムコンソールには情報アラートも表示されます。
対話モード	対話モードでは、アラートはすべて SAP システムコンソールに表示されません。ジョブを続行するには、アラートに回答する必要があります。

SAP Agent カタログの整合性維持について

SAP Agent カタログ (`_backint.xml`) の整合性は次の方法で維持できます。

- `_backint.xml` にアクセスできるグループを限定する
- 通常のバックアップデータと一緒にカタログをバックアップする

SAP Agent カタログ (`_backint.xml`) にアクセスできるのは、Administrators グループまたは Backup Operators グループのユーザーのみに設定されています。Administrator は、`_backint.xml` に対するアクセス権限を他のユーザーに付与できます。ただし、Administrators グループおよび Backup Operators グループに対してデフォルトで許可されている権限は禁止しないでください。

通常のバックアップと一緒に `_backint.xml` をバックアップするには、Biparam.ini の Backup Catalog パラメータを on に設定します。カタログのバックアップは、少なくとも毎月行うことをお勧めします。より頻繁にカタログをバックアップすると、カタログが破損した場合に備えて保護を強化できます。

メモ: SAP Agent カタログをリストアするには、Backup Exec メディアサーバーからリストアジョブを作成する必要があります。

p.1330 の「SAP Agent の biparam.ini の設定」を参照してください。

SAP データをバックアップする前に

バックアップ処理をサブミットする前に、次の操作を行う必要があります。

- バックアップするすべての SAP データベースを ARCHIVE_LOG モードにします。
- SAP インターフェースを使用して自動アーカイブを有効に設定します。
自動アーカイブを有効に設定する方法について詳しくは SAP または Oracle のマニュアルを参照してください。

注意: SAP Agent では、同時に複数のバックアップジョブまたはリストアジョブを実行することはできません。同時に複数のメディアサーバーから同じ SAP データベースのバックアップまたはリストアを行おうとすると、そのジョブは失敗します。

RMAN を使用する場合は、次の操作を行う必要があります。

- Backup Exec Remote Agent ユーティリティを使用して SAP Agent を設定します。
p.1898 の「[Windows システムの Remote Agent ユーティリティについて](#)」を参照してください。
- メディアサーバーの[編集]リストに Oracle サーバーを追加します。
p.1294 の「[メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシアルの設定](#)」を参照してください。

特定の設定情報を入力する場合は次のファイルの編集も行います。

- `Usr¥sap¥<SID>¥sys¥exe¥run` ディレクトリにある `biparam.ini` ファイル。
 - `<ORACLE_HOME>¥database` フォルダにある `init<SAP>.sap` ファイル。
- p.1330 の「[SAP Agent の biparam.ini の設定](#)」を参照してください。
- p.1298 の「[Oracle のアプリケーションのデフォルト設定](#)」を参照してください。

SAP Agent の biparam.ini の設定

BACKINT インターフェースを使用すると、SAP インターフェースでサブミットするバックアップジョブに適用する Backup Exec パラメータを指定できます。パラメータは、Biparam.ini というバックアップユーティリティパラメータファイルに格納されます。このファイルのテンプレートは、SAP Agent とともにインストールされます。

SAP では、すべての SAP ツールが共通のフォルダに格納されている必要があります。SAP Agent は、BRTools と同じフォルダにインストールされます。

Biparam.ini ファイルを使用すると、1 か所で指定したジョブのパラメータが RMAN と BACKINT の両方の操作に適用されます。

Biparam.ini を設定する方法

- 1 次のいずれかを実行します。
 - Biparam.ini ファイルが BRTools および SAP Agent と同じ場所に格納されていることを確認します。

- <ORACLE_HOME> database¥init<SID>.sap ファイルの util_par_file パラメータに Biparam.ini ファイルのパスが指定されていることを確認します。
- 2 Biparam.ini ファイル内の任意のオプションを編集し、メディアサーバーの設定を行います。

Server=<サーバー名> このバックアップジョブを処理する Backup Exec サーバーの名前です。

リストアジョブのターゲットは、自動的にバックアップ元の Backup Exec サーバーに設定されます (RMAN を使用したリストアジョブの場合は除く)。

デフォルトはローカルコンピュータです。

Job Name=<ジョブ名> ユーザーが指定するジョブ名です。デフォルトは、メディアサーバーが生成したジョブ名です。

Job Template=<メディアサーバー上の DBA 開始ジョブテンプレート> このジョブに使用されるジョブテンプレートです。ジョブテンプレートには、デバイス、メディア、暗号化キーなどの設定が含まれています。

DBA 開始ジョブテンプレートは、メディアサーバーで作成する必要があります。

p.1331 の「SAP の DBA 開始ジョブの設定」を参照してください。

デフォルト値は DEFAULT ジョブテンプレートです。この場合、すべてのジョブパラメータは DEFAULT ジョブテンプレートから読み取られません。メディアサーバーで DEFAULT ジョブテンプレートを使用できない場合に Biparam.ini でジョブテンプレート名が指定されていないと、ジョブは失敗します。また、指定したジョブテンプレート名が誤っている場合もジョブは失敗します。

Backup Catalog=<On/Off> On: バックアップジョブにクライアント側カタログファイル (_backint.xml) を含めます。

Off: バックアップジョブにクライアント側カタログファイル (_backint.xml) を含めません。

デフォルトは Off です。

- 3 ファイルを保存します。

SAP の DBA 開始ジョブの設定

DBA 開始バックアップ処理の設定時に、Backup Exec のデフォルトのジョブテンプレートを指定するか、または Backup Exec で作成した新しいジョブテンプレートを指定することができます。ジョブテンプレートには、Backup Exec によって DBA 開始ジョブに適用される設定が含まれています。

使用するジョブテンプレートの名前が **Biparam.ini** ファイルに設定されていることを確認してください。

p.1330 の「**SAP Agent の biparam.ini の設定**」を参照してください。

DBA 開始ジョブについては、次の事項に注意する必要があります。

- 関連付けられているジョブテンプレートを削除すると、DBA 開始ジョブは失敗します。DBA 開始ジョブが実行されないようにするには、関連付けられている DBA 開始ジョブテンプレートを削除します。
- すべての DBA 開始バックアップジョブおよびリストアジョブは、完了後に削除されます。
- DBA 開始ジョブにはデバイスの最小必要条件を設定できません。

SAP の DBA 開始ジョブを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [DBA 開始ジョブの設定]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。

新しいジョブテンプレートを作成する 次を示す順序で操作を実行します。

- [新規]をクリックします。
- 手順 4 に進みます。

ジョブテンプレートを編集する 次を示す順序で操作を実行します。

- 編集するジョブテンプレートを選択します。
- [編集]をクリックします。
- 手順 4 に進みます。

ジョブテンプレートを削除する 次を示す順序で操作を実行します。

- 削除するジョブテンプレートを選択します。
- [削除]をクリックします。

- 4 [DBA 開始ジョブの設定]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックし、必要に応じてオプションを完了します。

p.324 の「**バックアップジョブおよびテンプレートの[デバイスとメディア]オプション**」を参照してください。

オプションの中には、DBA 開始ジョブの設定で選択できないものがあります。

- 5 [DBA 開始ジョブの設定] ペインの [設定] の下にある [一般] をクリックし、必要に応じてオプションを完了します。
p.327 の「バックアップジョブおよびテンプレートの [一般] オプション」を参照してください。
オプションの中には、DBA 開始ジョブの設定で選択できないものがあります。
- 6 [プロパティ] ペインの [設定] の下にある [ネットワークとセキュリティ] をクリックし、必要に応じてオプションを完了します。
p.400 の「暗号化キー」を参照してください。
オプションの中には、DBA 開始ジョブの設定で選択できないものがあります。
- 7 バックアップジョブの完了を通知する場合は、[通知] をクリックし、必要なオプションを設定します。
p.669 の「ジョブが完了したときの通知の送信」を参照してください。
- 8 [OK] をクリックします。

システムレベルの SAP のバックアップジョブについて

SAP データベースのバックアップ頻度を高くすると、それだけデータが失われた場合のリカバリ処理に要する時間が少なくて済みます。定例のスケジュール済み SAP Agent バックアップの他にも、データベースの構造を変更した場合は常に、SAP データベースを閉じて、ファイルレベルのバックアップを実行することをお勧めします。

SAP データベースファイルをバックアップする場合は、次の操作も実行する必要があります。

- SAP データベースサーバー上の Windows ディレクトリをバックアップしておきます。Windows レジストリもバックアップします。
- `_backint.xml` ファイルをバックアップします。通常、`_backint.xml` ファイルは次のディレクトリに格納されています。

```
Usr¥sap¥<SID>¥sys¥exe¥run
```

p.1343 の「SAP Agent を使用したディザスタリカバリの実行について」を参照してください。

SAP Agent を使用したバックアップおよびリストアについて

SAP アプリケーションのバックアップジョブを作成するには、次のいずれかの方法を使用します。

- グラフィカルユーザーインターフェースの CCMS コンソールを使用する
- コマンドラインユーティリティの BRTools を使用する

CCMS コンソールからデータベースをバックアップすると、状態メッセージがコンソールに表示されます。このメッセージでは、データベースサーバーの起動時間または停止時間がレポートされます。また、表のバックアップモードの変更時間もレポートされます。詳細なデバッグメッセージおよびログメッセージも表示されます。すべてのファイルのバックアップが行われた後、SAP Agent の BACKINT インターフェースの仕様で規定された形式で完全なファイルリストが表示され、サブミットされたジョブの状態 (成功または失敗) がレポートされます。

BRTools からデータベースをバックアップすると、`init<ORACLE_SID>.sap` パラメータファイルを変更することによってバックアップモードを設定できます。次に例を示します。

`backup_type = online_file`

または、`brbackup` コマンドラインで、`-d` を使用して適切なバックアップの種類を指定できます。たとえば、コマンドラインで次のように入力します。

```
-d util_file_online
```

このコマンドによって、必要な表領域のみがバックアップモードに設定されるため、非常に大きいファイルのオンラインバックアップのパフォーマンスが向上します。Backup Exec で別のファイルを処理する準備が完了すると、`brbackup` に通知されます。

SAP Agent を使用してリモートコンピュータからジョブをサブミットするための必要条件

SAP Agent と Backup Exec メディアサーバーが異なるコンピュータにインストールされている場合、バックアップジョブおよびリストアジョブを正常に実行するには、次の必要条件を満たす必要があります。

- SAP Agent がインストールされているコンピュータとメディアサーバーが同じドメインに属している必要があります。
- システムログオンアカウントが、SAP Agent がインストールされているコンピュータと Backup Exec メディアサーバーの両方に存在する必要があります。
- システムログオンアカウントが、SAP Agent がインストールされているコンピュータと Backup Exec メディアサーバーの両方で、Administrators グループまたは Backup Operators グループのメンバーである必要があります。

brrestore と SAP Agent を使用したデータのリストア

データのリストアを行う BRTools ユーティリティである `brrestore` によって、`BID` およびファイル名のリストが SAP Agent の BACKINT インターフェースに送信されます。BACKINT では、バックアップが実行された日時をチェックし、Backup Exec を使用してファイルのリ

カバリを行います。**BACKINT** は、リストアジョブの進行状況を監視して、その状態を **brrestore** にレポートします。

ジョブが完了すると、**BACKINT** は、**Backup Exec** リストアログのコピーを監査目的で保存します。データベースの場合は再起動する必要があります。

brrestore と **SAP Agent** を使用してデータをリストアする方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。

データをリストアする方法

次のコマンドを入力します。

```
brrestore -d util_file -b last -m full
```

データベースをリストアする方法

次のコマンドを入力します。

```
SQL>startup mount  
SQL>recover database  
SQL>alter database open;
```

SAP リストアジョブのリストア先の変更について

SAP Agent では、リストア先をローカルコンピュータとリモートコンピュータの両方に変更することができます。リストア先をリモートコンピュータに変更する場合は、その場所の有効なフル **UNC** パスを使用する必要があります。

たとえば、**ComputerA** に存在していた表領域を **ComputerB** の **D:¥RestoreDirectory** にリストアする場合は、次の行を入力します。

```
brrestore -d util_file -b <last | logfile name> -m <tablespace to  
restore>=¥¥ComputerB¥D¥¥RestoreDirectory
```

メモ: メディアサーバーのシステムログオンアカウントが、データのリストア先のコンピュータで、**Administrators** グループまたは **Backup Operators** グループのメンバーである必要があります。

RMAN を使用した SAP データのバックアップ

Backup Exec は、次の処理を行う **Oracle** ユーティリティの **RMAN** と統合できます。

- バックアップ処理の管理
- データベースファイルのバックアップ作成

RMAN を使用して **SAP** データをバックアップするには、**Backup Exec Oracle Agent** が必要です。また、最初に **Remote Agent** ユーティリティを実行する必要があります。

p.1898 の「[Windows システムの Remote Agent ユーティリティについて](#)」を参照してください。

Init<SID>.sap ファイルの rman_send パラメータを次のように修正する必要があります。

```
rman_send = ( "channel sbt_1 'NBBSA_SAP_AGENT_CONFIG_PATH=  
<INI file Path>'")
```

ここで、<INI file Path> は Biparam.ini のフルパスです
(C:\oracle\ora92\database\Biparam.ini など)。

p.1330 の「[SAP Agent の biparam.ini の設定](#)」を参照してください。

init<sid>.sap 内の util_par_file パラメータで指定した ini ファイルのパスが、rman_send コマンドで指定したパスと同じであることを確認してください。

RMAN を使用したバックアップジョブおよびリストアジョブの場合、Symantec Backup Exec では、brbackup または brrestore から渡された設定パラメータ (-r オプション) は適用されません。

init<SID>.ora ファイルを次のように更新します。

```
control_file_record_keep_time <n> (たとえば、n = 45)。
```

このパラメータは、再利用可能なレコードが制御ファイルに保持される最小日数を制御します。

オンラインバックアップを実行するには、次のコマンドを実行します。

```
brbackup -d rman_util -t online -m all
```

オフラインバックアップを実行するには、次のコマンドを実行します。

```
brbackup -d rman_util -t offline -m all
```

メモ: リストアを実行する前に、データベースがマウントされていることを確認してください。

オンラインバックアップジョブを実行する前に、次のスクリプトを実行します。

```
$ORACLE_HOME\rdbms\admin\catalog.sql  
$ORACLE_HOME\rdbms\admin\catspace.sql  
$ORACLE_HOME\rdbms\admin\catproc.sql
```

これらのスクリプトを実行すると、データベースがオンラインバックアップ用に設定されます。データベースが適切に設定されていない場合、ジョブが失敗することがあります。

次のエラーが発生する場合があります。

```
RMAN-00571:
```

```
=====
```



```

RMAN-00569:===== ERROR MESSAGE STACK FOLLOWS
=====
RMAN-00571:
=====
ORA-06550:line 1, column 7:

PLS-00201:identifier 'DBMS_BACKUP_RESTORE.SET_CHARSET' must be declared

ORA-06550:line 1, column 7:

PL/SQL:Statement ignored

RMAN-04015:error setting target database character set to
WE8MSWIN1252

```

この場合、次のスクリプトを実行してください。

```

$ORACLE_HOME¥rdbms¥admin¥catalog.sql
$ORACLE_HOME¥rdbms¥admin¥catspace.sql
$ORACLE_HOME¥rdbms¥admin¥catproc.sql

```

スクリプトの実行後、バックアップジョブを再度実行します。

RMAN を使用した SAP データのリストア

Backup Exec は、次の処理を行う Oracle ユーティリティの RMAN と統合できます。

- リカバリ処理の管理
- バックアップからのデータベースのリストアまたはリカバリ

RMAN を使用して SAP データをリストアするには、**Backup Exec Oracle Agent** が必要です。また、最初に **Remote Agent** ユーティリティを実行する必要があります。

p.1898 の「[Windows システムの Remote Agent ユーティリティについて](#)」を参照してください。

`Init<SID>.sap` ファイルの `rman_send` パラメータを次のように修正する必要があります。

```

rman_send = ( "channel sbt_1 'NBBSA_SAP_AGENT_CONFIG_PATH=
<INI file Path>'")

```

ここで、<INI file Path> は `Biparam.ini` のフルパスです
(`C:¥oracle¥ora92¥database¥Biparam.ini` など)。

p.1330 の「[SAP Agent の biparam.ini の設定](#)」を参照してください。

`init<sid>.sap` 内の `util_par_file` パラメータで指定した `ini` ファイルのパスが、`rman_send` コマンドで指定したパスと同じであることを確認してください。

RMAN を使用したリストアの場合、Symantec Backup Exec では、`brbackup` または `brrestore` から渡された設定パラメータ (`-r` オプション) は適用されません。

`init<SID>.ora` ファイルを次のように更新します。

```
control_file_record_keep_time <n> (たとえば、n = 45)。
```

このパラメータは、再利用可能なレコードが制御ファイルに保持される最小日数を制御します。

`brrestore` を使用して RMAN による (完全) リストアを実行する場合、データベースがマウントされている必要があります。

データベースファイルのみをリストアするには、次のコマンドを実行します。

```
brrestore -d rman_util -b last -m full
```

制御ファイルをリストアするには、`-m 0 [,00]` オプションを使用します。

たとえば、`.ctl` ファイルをリストアするには、次のコマンドを実行します。

```
brrestore -d rman_util -b last -m 0
```

`.dbf` ファイルをリストアするには、次のコマンドを実行します。

```
brrestore -d rman_util -b last -m 00
```

RMAN を使用してリストアを行う場合は、`Biparam.ini` ファイルに指定されているメディアサーバーが、バックアップジョブが実行されたメディアサーバーと同じであることを確認してください。

_backint.mdb から _backint.xml への SAP Agent カタログの移行

このリリースの Backup Exec では、SAP Agent カタログは XML ファイルに格納されます。以前のバージョンの Backup Exec からアップグレードする場合、インストール処理で、すべてのバックアップメタデータを `_backint.mdb` から `_backint.xml` に移行するアップグレードオプションを選択します。

インストール時にアップグレードオプションを選択しない場合、このリリースの Backup Exec で以前のバックアップカタログを使用することはできません。

次の場合、手動でデータを移行する必要があります。

- インストール時にアップグレードオプションを選択しなかった場合

- 以前のバージョンの SAP Agent で作成されたカタログを Backup Exec で使用する
場合

データを移行する前に、次のことを確認する必要があります。

- 使用するパスに _backint.xml というファイルが存在しないこと
- BRTools および _backint.exe が格納されている場所と同じ場所に _backint.mdb
が存在すること

手動で backint.mdb から backint.xml に移行する方法

- 1 BRTools および _backint.exe が格納されている場所に _backint.mdb ファイルを
コピーします (存在しない場合)。

移行ユーティリティ (MdbToXML.exe) は、SAP Agent がインストールされているディ
レクトリに格納されています。

- 2 使用する適切なパラメータを指定して、移行ユーティリティ (MdbToXML.exe) を実
行します。

次に例を示します。

```
MdbToXml.exe <Path for the _backint.mdb> <optional Path for Log file >
```

たとえば、_backint.mdb がパス C:\usr\sap\CER\sys\exe\run に格納されてい
る場合、コマンドは次のようになります。

```
MdbToXML.exe C:\usr\sap\CER\sys\exe\run
```

このユーティリティのオンラインヘルプを表示するには、次のコマンドを入力します。

```
MdbToXML.exe /?
```

ログファイルのパスの指定はオプションです。ログファイルのパスの指定を省略した
場合、ログファイルは _backint.xml ファイルに対してローカルの場所に作成されま
す。

_backint.xml ファイルは _backint.mdb ファイルと同じパスに作成されます。

移行が完了すると、_backint.mdb から _backint_migrated.mdb に名前が変更され
ます。

コマンドラインで指定されたパスに MdbToXmlMigrationLog.txt という名前のログ
ファイルが作成されます。パラメータが無視された場合、このファイルは _backint.xml
に対してローカルの場所に作成されます。ログファイルのパスが誤って指定されてい
る場合、ログファイルは作成されません。

ただし、これは移行処理には影響を与えません。

Microsoft Cluster Server 上のクラスタ化された SAP データベースのバックアップについて

Backup Exec for SAP Agent は、Microsoft Cluster Server (MSCS) および Oracle Fail Safe を使用して Oracle のクラスタ環境でのバックアップジョブおよびリストアジョブをサポートします。

SAP Agent をクラスタ環境で使用するには、次の操作を実行します。

- 2 ノードクラスタ環境の両方のノードに、MSCS、Oracle および Oracle Fail Safe をインストールします。
- バックアップするデータベースを共有ディスクにインストールして、他方のノードにデータベースが適切にフェールオーバーされるようにします。
- クラスタに仮想クラスタ名が設定されていることを確認します。
- Oracle データベースのリソースの Is Alive ポーリング間隔が、データベースの完全なバックアップに必要な平均時間より長いことを確認します。

Oracle Fail Safe のインストールおよび設定について詳しくは Oracle Fail Safe のマニュアルを参照してください。

MSCS のインストールおよび設定について詳しくは Microsoft のマニュアルを参照してください。

メモ: クラスタ環境では、BACKINT または RMAN を使用して作成されたジョブの処理中にノードのフェールオーバーが発生した場合、ジョブの処理はノードが停止した時点から再開されません。

SAP Agent を使用した MaxDB データベースのバックアップについて

SAP Agent では、MaxDB (SAPDB) データベースで実行されている SAP アプリケーションのバックアップがサポートされています。

DBM コマンドラインインターフェースまたは MaxDB Database Manager グラフィカルユーザーインターフェースを使用して、バックアップジョブが初期化され、MaxDB の BACKINT インターフェースに送信されます。その後、MaxDB の BACKINT から Symantec SAP Agent BACKINT インターフェースにバックアップジョブが送信され、ジョブが実行されます。SAP Agent では、ローカルとリモートの両方の Backup Exec メディアサーバーに対するバックアップがサポートされています。

SAP Agent では、SAP データベースに対する次のバックアップ機能がサポートされています。

- 完全データのバックアップ
- 増分データのバックアップ
- ログファイルのバックアップ

メモ: SAP Agent は、ディレクトリ階層が 2 以下のディレクトリ構造にインストールする必要があります。このディレクトリ構造を変更する場合は、SAP.PAR ファイルおよび BSI.ENV ファイルを変更してください。

p.1341 の「[MaxDB データベースのバックアップの準備](#)」を参照してください。

p.1342 の「[MaxDB データベースのバックアップ](#)」を参照してください。

MaxDB データベースのバックアップの準備

MaxDB データベースのバックアップを準備するために次の手順を使ってください。

MaxDB データベースのバックアップを準備する方法

- 1 次のファイルが存在することを確認します。
 - SAP.PAR
 - BSI.ENV
- 2 MaxDB のインストール時に次のパラメータが設定されていることを確認します。
 - independent program path = C:¥sapdb¥programs
 - dependant path = C:¥sapdb¥<sid>¥db
 - independent data path = C:¥sapdb¥data
- 3 次のパスが存在することを確認します。
 - C:¥sapdb¥programs
 - C:¥sapdb¥data
 - C:¥sapdb¥<sid>
 - C:¥sapdb¥<sid>¥db
- 4 次の適切なバージョンのアプリケーションがインストールされていることを確認します。
 - SQL Studio
 - DBMGUI

MaxDB データベースのバックアップ

MaxDB データベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

MaxDB データベースをバックアップする方法

- 1 BSI.ENV を C:\sapdb\data\wrk<sid> にコピーします。
- 2 SAP.PAR を C:\sapdb<sid>\db にコピーします。
- 3 MaxDB Database Manager から、バックアップウィザードを選択します。
- 4 バックアップジョブに必要な次の情報を入力します。
 - バックアップの種類
 - 使用するパイプ
 - パイプの名前
- 5 [開始]をクリックします。

SAP Agent を使用した MaxDB データベースのリストア

SAP Agent では、MaxDB (SAPDB) データベースで実行されている SAP アプリケーションのリストアがサポートされています。

DBM コマンドラインインターフェースまたは MaxDB Database Manager グラフィカル ユーザーインターフェースを使用して、リストアジョブが初期化され、MaxDB の BACKINT インターフェースに送信されます。その後、MaxDB の BACKINT から Symantec SAP Agent BACKINT インターフェースにリストアジョブが送信され、ジョブが実行されます。SAP Agent では、ローカルとリモートの両方の Backup Exec メディアサーバーに対するリストアがサポートされています。

SAP Agent では、SAP データベースに対する次のリストア機能がサポートされています。

- 前回のバックアップのリストア
- 指定された過去のバックアップのリストア
- メディアのリストア
- 特定の時点へのデータベースのリストア

データをリストアする方法

- ◆ MaxDB Database Manager からリカバリウィザードを実行し、データベースが Admin モードであることを確認します。

SAP Agent を使用したディザスタリカバリの実行について

深刻な障害が発生した場合に SAP データベースサーバーをリカバリするには、障害が発生する前にバックアップ戦略を実施しておく必要があります。

次のバックアップ戦略を参考にして、ディザスタリカバリ対策を作成しておくことを、強くお勧めします。

- データベースのフラットファイルバックアップを少なくとも1つは用意し、CCMSを使用して定期的にオフラインバックアップを実行します。詳しくは SAP のデータベース管理者ガイドを参照してください。
- SAP データベースサーバー上の Windows ディレクトリをバックアップしておきます。Windows レジストリもバックアップします。
- また、データベースの構造を変更した場合は、そのつど、オフラインデータベースの完全バックアップを作成します。
たとえば、新規の表領域を作成したり、古い表領域を削除した場合は、完全なオフラインのデータベースをバックアップします。
- SAP データベースサーバーの定期的なフラットファイルバックアップには、_backint.xml ファイルを含める必要があります。
通常、_backint.xml ファイルは次のディレクトリに存在します。

```
Usr¥sap¥<SID>¥sys¥exe¥run
```

- SAP データベースサーバーの完全なオンラインのバックアップを定期的に行います。

p.1330 の「SAP Agent の biparam.ini の設定」を参照してください。

SAP のディザスタリカバリの必要条件

障害が発生した SAP データベースサーバーの完全なリカバリの必要条件を次に示します。

- Backup Exec を使用して、SAP データベースサーバーのファイルシステムの完全バックアップを作成しておきます。
このバックアップには、SAP データベースディレクトリおよび Windows システムディレクトリの両方を含めます。ただし、データベースを開いた状態でバックアップを行う必要がある場合は、SAP データベースの表領域データファイルは含めないようにしてください。
- SAP データベースの表領域データファイルが含まれたバックアップを、もう1つ作成します。
詳しくは SAP のデータベース管理者ガイドを参照してください。

これらのバックアップを作成しておくこと、必要に応じて SAP データベースサーバーをリカバリできます。

p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

リモート SAP データベースサーバーのディザスタリカバリ

リモート SAP データベースのリカバリでは、Microsoft Windows オペレーティングシステムの再インストールと最新のバックアップからのファイルのリストアを行います。

リモート SAP データベースサーバーのディザスタリカバリを実行する方法

- 1** SAP データベースサーバーに Microsoft Windows オペレーティングシステムを再インストールします。
この場合は、SAP データベースサーバーのリカバリ後に削除することの可能な一時ディレクトリに Windows をインストールします。
- 2** Backup Exec のメディアサーバーで、SAP データベースサーバーファイルシステムの完全なフラットファイルのバックアップが格納されているストレージメディアを使用して、そのメディアのすべての内容を SAP データベースサーバーにリストアします。
- 3** SAP データベースサーバーを再ブートします。
コンピュータは元の Windows を使用して再ブートします。システムには、元の Windows、SAP Agent、表領域を含まない SAP データベースおよび完全バックアップメディアに含まれる他のすべてのファイルがリストアされています。
- 4** SAP データベースのオフラインの完全バックアップが存在する場合は、最新の SAP オフラインデータベース完全バックアップをリストアし、データベースを起動します。
オフラインの完全バックアップが存在しない場合は、データベースを使用することができません。手順 5 に進みます。
- 5** サーバーの最新の完全バックアップから `_backint.xml` ファイルをリストアします。
`_backint.xml` は、SAP カタログと Backup Exec カタログの関連付けを行うファイルです。
- 6** データベースを最新の状態に更新するには、最新のオンラインまたはオフライン SAP データベースバックアップのリストアを行います。
- 7** メディアサーバーで、次の段階のリストア操作を実行します。ここでは、SAP Agent を使用して、すべての SAP 表領域データファイルが含まれているストレージメディアのリストアを行います。
- 8** リストア処理が完了したら、CCMS コンソールを開き、[Check and Repair Database] をクリックします。
- 9** [Automatic Recovery] をクリックし、画面の指示に従って作業を進めます。

SAP データベースサーバーとメディアサーバーの組み合わせのリカバリ

SAP データベースサーバーとメディアサーバーの組み合わせのリカバリでは、Microsoft Windows オペレーティングシステムの再インストールと最新のバックアップからのファイルのリストアを行います。

SAP データベースサーバーとメディアサーバーの組み合わせをリカバリする方法

- 1 SAP データベースサーバーおよびメディアサーバーに Microsoft Windows オペレーティングシステムを再インストールします。

この場合は、SAP データベースサーバーまたはメディアサーバーの実行後に削除することの可能な一時ディレクトリに Windows をインストールします。

- 2 Backup Exec を再インストールします。
- 3 SAP データベースサーバーファイルシステムのバックアップが格納されているメディアと、SAP データベースの表領域データファイルが格納されているメディアをカタログ登録します。
- 4 SAP データベースサーバーファイルシステムのフラットファイルの完全バックアップが格納されているストレージメディアのすべての内容を、SAP データベースサーバーにリストアします。

これによって、元の Windows システムだけでなく、SAP データベースの実行に必要なすべてのサービスもリストアされます。

- 5 リストアが完了した後、コンピュータを再ブートします。
システムの完全バックアップをリストアしたため、コンピュータは元の Windows を使用してブートします。システムには、元の Windows、SAP Agent、表領域を含まない SAP データベースおよび完全バックアップメディアに含まれる他のすべてのファイルがリストアされています。
- 6 サーバーの最新の完全バックアップから `_backint.xml` ファイルをリストアします。
これは、SAP カタログと Backup Exec カタログの関連付けを行うファイルです。
- 7 メディアサーバーで、次の段階のリストア操作を実行します。
ここでは、SAP Agent を使用して、すべての SAP 表領域データファイルが含まれているメディアのリストアを行います。
- 8 リストア処理が完了したら、CCMS コンソールを開き、[Check and Repair Database] を選択します。
- 9 [Automatic Recovery] を選択し、画面の指示に従って SAP データベースサーバーのディザスタリカバ리를完了します。

Symantec Backup Exec Agent for VMware Virtual Infrastructure

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Agent for VMware](#) について
- [Agent for VMware](#) 使用上の必要条件
- [Agent for VMware](#) のインストールについて
- [VMware vCenter Server](#) と [ESX Server](#) の追加
- [VMware vCenter Server](#) と [ESX Server](#) の削除
- [VMware](#) リソースのバックアップについて
- [VMware](#) リソースの完全バックアップの作成
- [VMware](#) リソースの増分または差分バックアップの作成
- [Granular Recovery Technology](#) による [Agent for VMware](#) との連携
- [Symantec VSS](#) プロバイダを使用したデータベースおよびアプリケーションの保護について
- [VMware](#) リソースのリストアについて
- [VMware](#) の仮想マシンのリストア先の変更
- [Agent for VMware](#) のためのデフォルトのバックアップとリストアのオプションの設定

Agent for VMware について

Symantec Backup Exec Agent for VMware Virtual Infrastructure (Agent for VMware) は、次の VMware 製品を使う仮想マシンをバックアップし、リストアすることを可能にします。

- ESX Server
- vCenter Server (以前の VirtualCenter)
- vSphere 4.0

Backup Exec は、単一パスバックアップを実行して、すべてのゲスト仮想マシン、およびゲスト仮想マシンにインストールされた VSS 対応アプリケーションを保護します。Backup Exec の Granular Recovery Technology (GRT) はバックアップジョブではデフォルトで有効になります。仮想マシン全体をリストアしないで、Windows Guest 仮想マシンから個々のファイルおよびフォルダをリストアするために GRT 対応バックアップを使うことができます。また、ゲスト仮想マシンに存在する Microsoft Exchange、SQL および Active Directory のアプリケーションから個々の項目をリストアできます。

Agent for VMware の追加機能では次のことが可能です：

- ゲスト仮想マシンから代替フォルダ、データストア、ホスト、またはネットワークにデータのリストア先を変更する。
- ディスクデバイスまたはテープデバイスにバックアップする。
- 仮想マシンがハードウェアバージョン 7 で設定されている場合に、ポリシーベースの増分および差分バックアップジョブを実行する。

p.1348 の「[Agent for VMware 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

p.1359 の「[Backup Exec で仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法](#)」を参照してください。

p.1350 の「[VMware リソースのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1361 の「[VMware リソースのリストアについて](#)」を参照してください。

Agent for VMware 使用上の必要条件

Agent for VMware は同じコンピュータまたは別のコンピュータに存在できる次のコンポーネントを使います。

表 M-1 Agent for VMware コンポーネント

項目	説明
Backup Exec メディアサーバー	このコンポーネントはバックアップジョブとリストアジョブを実行します。このコンポーネントに Agent for VMware のライセンスキーを入力する必要があります。
VMware vCenter Server	このコンポーネントは省略可能です。これは ESX Server を管理します。このコンピュータに Remote Agent for Windows Systems (Remote Agent) をインストールする必要はありません。 Remote Agent がインストールされている場合は、Backup Exec メディアサーバーに vCenter Server を公開するためにのみ使用されます。

Agent for VMware とともに Backup Exec の Granular Recovery Technology (GRT) を使うには、Windows を実行するあらゆる仮想マシンに Backup Exec Remote Agent for Windows Systems をインストールしてください。

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

Agent for VMware のインストールについて

Agent for VMware は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてローカルにインストールされます。VMware Agent を ESX ホストにインストールする必要はありません。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

VMware vCenter Server と ESX Server の追加

VMware vCenter Server と ESX Server をバックアップジョブの対象として選択できるように Backup Exec 選択リストに追加できます。

VMware vCenter Server と ESX Server を追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 次のいずれかを右クリックします。
 - すべてのリソース
 - VMware vCenter および ESX Server
- 4 [VMware vCenter および ESX Server の管理]をクリックします。
- 5 [名前]フィールドに、追加するサーバーの名前を入力します。
- 6 [追加]をクリックします。
- 7 [閉じる]をクリックします。

VMware vCenter Server と ESX Server の削除

Backup Exec データベースから VMware vCenter Server および ESX Server を削除できます。サーバーが Backup Exec データベースになければ、バックアップジョブのために選択できません。

VMware vCenter Server と ESX Server を削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 次のいずれかを右クリックします。
 - すべてのリソース
 - VMware vCenter および ESX Server
- 4 [VMware vCenter および ESX Server の管理]をクリックします。
- 5 表示されるサーバーのリストから、削除したいサーバーの名前を右クリックします。
- 6 [削除]をクリックします。
- 7 [閉じる]をクリックします。

VMware リソースのバックアップについて

バックアップジョブを作成するとき、次の VMware リソースを選択できます:

- vCenter Server か ESX Server 全体、データセンターおよびフォルダ
- 個々の仮想マシン

メモ: Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているコンピュータに接続するデバイスにデータベースをバックアップできません。

バックアップリソースとして vCenter Server か ESX Server を選択すると、すべての仮想マシンがバックアップされます。

vCenter Server または ESX Server をバックアップするように選択すると、バックアップジョブには次のものが含まれません。

- vCenter Server または ESX Server のための設定ファイル
- 物理 Raw Disk Mapping (RDM) デバイス
- 独立したディスク

Backup Exec は、バックアップジョブが実行されるときに検出される新しい仮想マシンとフォルダを自動的に保護します。

p.1352の「[Backup Execがバックアップジョブの間に自動的に新しい仮想マシンを保護する方法](#)」を参照してください。

次のバックアップ方式が VMware リソースでサポートされます：

表 M-2 VMware リソースのサポート対象バックアップ方式

バックアップ方式	必要条件
完全	<p>このオプションは VMware vCenter Server と VMware vSphere の両方に利用できます。ポリシーベースのバックアップジョブを使わない場合に VMware リソースに使える唯一のバックアップ方式です。</p> <p>p.1352の「VMware リソースの完全バックアップの作成」を参照してください。</p> <p>Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) では、Windows オペレーティングシステムを使う仮想マシンの個々のファイルをリストアするために完全なイメージバックアップを使うことができます。GRT では、仮想マシンにインストールされる VSS 対応アプリケーションからの個々の項目をリストアすることもできます。</p> <p>p.1358の「Granular Recovery Technology による Agent for VMware との連携」を参照してください。</p>

バックアップ方式	必要条件
増分または差分	<p>このオプションは仮想マシンがハードウェアバージョン7で構成される時のみ利用可能です。増分または差分バックアップ方式を使うバックアップジョブを作成するには、ポリシーを使わなければなりません。</p> <p>p.1357の「VMwareリソースの増分または差分バックアップの作成」を参照してください。</p>

Backup Exec がバックアップジョブの間に自動的に新しい仮想マシンを保護する方法

Backup Exec の動的インクルード機能は、バックアップジョブが実行される時に検出される新しい仮想マシンとフォルダを保護します。バックアップジョブの作成時とバックアップジョブの実行時の間に新しい仮想マシンが追加されると、Backup Exec は自動的に新しい仮想マシンをバックアップします。バックアップジョブには新しい仮想マシンが含まれることがあるので、ジョブには予想以上にストレージ容量と時間が必要になる場合があります。ジョブ履歴はバックアップされた仮想マシンの数を示します。

バックアップ選択リストでは、動的インクルードは次のVMwareリソースで有効になります:

- ESX
- vCenter 4
- フォルダのアイコンがあるすべてのノード

ESX または vCenter 4 を選択すると、その下のフォルダのアイコンがあるすべてのノードで動的インクルードが自動的に有効になります。仮想マシンがバックアップジョブの間に見つからないと、ジョブは失敗します。

VMware リソースの完全バックアップの作成

VMware vCenter Server、ESX Server、または仮想マシンの完全バックアップを作成するためにこれらの手順に従ってください。

仮想マシンがハードウェアバージョン7で設定されていれば、ポリシーの使用によって増分または差分バックアップのジョブを作成できます。

p.1357の「[VMwareリソースの増分または差分バックアップの作成](#)」を参照してください。

VMware リソースの完全バックアップを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。

- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 [VMware vCenter および ESX Server]を展開します。
- 5 次のいずれかを選択します。
 - VMware vCenter Server か ESX Server。
 - VMware vCenter Server か ESX Server の名前の下に表示される 1 つ以上の仮想マシン。
- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[VMware]をクリックします。
- 7 必要なオプションを選択します。
 p.1353 の「[VMware バックアップオプション](#)」を参照してください。
- 8 仮想マシンにインストールされる VSS 対応アプリケーションの Granular Recovery の設定を変更するには、[編集]をクリックします。
 p.1356 の「[仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設定](#)」を参照してください。
- 9 バックアップジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択します。

VMware バックアップオプション

次のオプションは VMware のバックアップジョブに利用可能です。

p.1352 の「[VMware リソースの完全バックアップの作成](#)」を参照してください。

表 M-3 VMware バックアップオプション

項目	説明
バックアップ方式	バックアップジョブに使用するバックアップ方式を示します。仮想マシンがハードウェアバージョン 7 で構成され、ポリシーからバックアップジョブを作成する場合は、増分および差分バックアップ方式を利用できます。VMware vCenter Server を使う場合、完全バックアップ方式は唯一利用可能な方式です。使用する VMware のバージョンに関係なく、ポリシーを使うときのみ増分および差分バックアップ方式を使うことができます。

項目	説明
増分バックアップまたは差分バックアップをサポートしていない仮想マシンの場合は、完全バックアップ方式を使用します	増分バックアップか差分バックアップを実行できない場合に、 Backup Exec が完全バックアップを実行できるようにします。このオプションを選択せず、 Backup Exec が差分バックアップか増分バックアップを実行できなければ、ジョブは失敗します。また、 Backup Exec が設定の変更を検出した場合は、完全バックアップを実行する必要があります。設定変更が検出され、 Backup Exec が完全バックアップを実行できない場合、このオプションが選択されていないとジョブは失敗します。このシナリオは完全バックアップと一部の増分または差分バックアップがすでに実行され、次のスケジュール済みジョブが増分または差分バックアップ用の場合にのみ適用されます。

項目	説明
転送モードの優先度リスト	<p>ESX Server から Virtual Machine Disk Format (VMDK) のファイルを転送するための方式を選択できます。これらのオプションの少なくとも1つを選択する必要があります。複数のオプションを選択した場合、方式は優先度と利用可能であるリソースによって判断されます。優先度を変更するためにリスト内でオプションを上下に移動できます。</p> <p>利用可能な方式は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SAN - 仮想ディスクデータの移動に SAN を使用する。 このオプションを選択する場合、仮想マシンはメディアサーバーがアクセスできる SAN に存在する必要があります。この転送モードによって、ESX Server が影響されないように、データはメディアサーバーにオフロードされます。 ■ NBD - 仮想ディスクデータを暗号化せずにネットワーク経由で転送する セキュリティのために SSL を使わず、次のいずれかの条件がある場合にこのオプションを使います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンは SAN にありません。 ■ メディアサーバーには SAN へのアクセス権がありません。 データは ESX Server に配置されます。それから、データはネットワークを介して移動します。 ■ NBDSSL - 仮想ディスクデータを暗号化してネットワーク経由で転送する セキュリティのために SSL を使い、次のいずれかの条件がある場合にこのオプションを使います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンは SAN にありません。 ■ メディアサーバーには SAN へのアクセス権がありません。 ■ Hotadd - 仮想マシン上の Backup Exec サーバーの仮想ディスクファイルを使用します。 このオプションは、ESX のホットアド機能を使用する場合に使用してください。 ホットアドについて詳しくは VMware のマニュアルを参照してください。 <p>スナップショットは ESX Server に配置されます。それから、データはネットワークを介して移動します。</p> <p>VMDK ファイルは仮想ハードディスクが独立したディスクとして設定されている場合はバックアップされません。</p>
上に移動	<p>選択した転送モードを移動してリストでの優先度を高くできます。</p>

項目	説明
下に移動	選択した転送モードを移動してリストでの優先度を低くできます。
オフになっている仮想マシンをバックアップ	オフになった仮想マシンを Backup Exec でバックアップできるようにします。
Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、仮想マシンからの個々のファイルとフォルダのリストアを有効にする	<p>バックアップから個々のファイルとフォルダをリストアできるようにします。このオプションは Windows オペレーティングシステムのみを使う仮想マシン用です。</p> <p>VMDK ファイルは仮想ハードディスクが独立したディスクとして設定されている場合はバックアップされません。</p> <p>メモ: Windows のコンピュータ上で GRT は、システム回復用ではなく、個々のファイルとフォルダのリストア用として機能します。</p>
編集	<p>Microsoft Active Directory、Exchange および SQL 用に GRT の設定を変更できます。</p> <p>p.1356 の「仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設定」を参照してください。</p>
Microsoft Active Directory	仮想マシン上の Microsoft Active Directory で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
Microsoft Exchange	仮想マシン上の Microsoft Exchange で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
Microsoft SQL	仮想マシン上の Microsoft SQL で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
vSphere ポート番号	Backup Exec が vCenter Server に接続するために使うポートを示します。デフォルトポートは 902 です。

仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設定

Microsoft Active Directory、Exchange および SQL からの個々の項目の個別リカバリを有効または無効にするために次のオプションを使ってください。

p.1352 の「[VMware リソースの完全バックアップの作成](#)」を参照してください。

メモ: 次のいずれかのアプリケーションで Granular Recovery Technology を有効または無効にする場合、設定は VMware 仮想マシンと Hyper-V 仮想マシンの両方に適用されます。同じ設定を使わない場合は、シマンテック社はそれぞれの種類の仮想マシンに個別のバックアップジョブを設定することを推奨します。

表 M-4 仮想マシンのアプリケーションの Granular Recovery Technology 設定

項目	説明
仮想マシン上の Microsoft Active Directory オブジェクトで GRT を有効にする	Backup Exec で仮想マシン上の個々の Active Directory オブジェクトをリストアするのに必要な情報を収集できるようにします。Backup Exec は Microsoft Active Directory がインストールされる仮想マシンに使われたログオンクレデンシアルを使います。
仮想マシン上の Microsoft Exchange データベースおよびメールボックス項目で GRT を有効にする	Backup Exec で仮想マシン上の個々の Exchange データベースおよびメールボックス項目をリストアするのに必要な情報を収集できるようにします。Backup Exec は Microsoft Exchange がインストールされる仮想マシンに使われたログオンクレデンシアルを使います。
仮想マシン上の Microsoft SQL (データベースレベルのみ) で GRT を有効にする	Backup Exec で仮想マシン上の個々の SQL データベース項目をリストアするのに必要な情報を収集できるようにします。Backup Exec は Microsoft SQL がインストールされる仮想マシンに使われたログオンクレデンシアルを使います。

VMware リソースの増分または差分バックアップの作成

仮想マシンがハードウェアバージョン 7 の vSphere 4.0 で構成されている場合は、ポリシーのバックアップジョブを作成することによって VMware リソースの増分または差分バックアップを作成できます。

p.1352 の「[VMware リソースの完全バックアップの作成](#)」を参照してください。

Backup Exec は VMware の増分および差分バックアップのサンプルポリシーを含んでいます。これらのサンプルポリシーは標準設定を含んでいます。これらのサンプルをコピーして、必要に応じてカスタマイズできます。

p.515 の「[ポリシーのサンプルの使用](#)」を参照してください。

表 M-5 VMware リソースの増分または差分バックアップを作成する方法

処理	参照先
ポリシーを作成します。	p.511 の「 新しいポリシーの作成 」を参照してください。

処理	参照先
<p>ポリシーに 2 つのバックアップテンプレートを追加します。</p> <p>1 つのテンプレートでは完全バックアップ方式を使い、もう 1 つのテンプレートでは増分または差分バックアップ方式のいずれかを使う必要があります。VMware 設定でこれらの方式を選択してください。</p>	<p>p.1353 の「VMware バックアップオプション」を参照してください。</p>
<p>新しいテンプレートルールを作成し、ルール[他のテンプレートを開始する前に、<テンプレート A>を少なくとも 1 回完了させる必要があります。]を選択します。</p>	<p>p.518 の「ポリシーへのバックアップテンプレートの追加」を参照してください。</p>
<p>ポリシーを使用して新しいジョブを作成します。</p>	<p>p.533 の「ポリシーのための新しいジョブの作成」を参照してください。</p>

Granular Recovery Technology による Agent for VMware との連携

Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用すると、仮想マシン全体をリストアせずに、個々のドライブ、ファイルおよびフォルダをリストアできます。仮想マシンにインストールされる VSS 対応アプリケーションからの個々の項目をリストアすることもできます。

p.1359 の「[Backup Exec で仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法](#)」を参照してください。

GRT は Windows オペレーティングシステムを使う仮想マシンに対してのみ機能します。GRT にはシステム回復の機能はありません。GRT 対応のバックアップを設定する前に、必要条件を確認する必要があります。

p.309 の「[Granular Recovery Technology を使うジョブの必要条件について](#)」を参照してください。

GRT を使うには、仮想マシンのネットワーク BIOS またはコンピュータの名前を展開すると表示されるリストから、リストアする個々のファイルとフォルダを選択します。[VMware vCenter および ESX Server] を展開すると表示される仮想マシンからは、個々のフォルダおよびファイルを選択できません。

p.1362 の「[リストアのための VMware リソースの選択について](#)」を参照してください。

p.305 の「[Granular Recovery Technology を使って個々の項目をリストアする方法](#)」を参照してください。

p.308の「[Granular Recovery Technology](#)を使うバックアップ用の推奨デバイス」を参照してください。

Backup Exec で仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法

Backup Exec は仮想マシンに存在する次の VSS 対応アプリケーションから個々の項目をリストアできます:

表 M-6 Backup Exec が仮想マシンの VSS 対応アプリケーションのために保護するデータの種類

アプリケーション	Backup Exec が保護するデータの種類
Microsoft Exchange	メールボックス、個々のメッセージ、カレンダー項目、タスク、ジャーナルエントリ、パブリックフォルダデータ (ディスクバックアップのみ)
Microsoft SQL	データベース
Microsoft Active Directory	個々のユーザーアカウント、プリンタオブジェクト、サイト、組織単位

バックアップジョブを作成するとき、Backup Exec は自動的に仮想マシンの VSS 対応アプリケーションを見つけます。バックアップジョブの間に、Backup Exec は Granular Recovery Technology (GRT) を使用して VSS 対応アプリケーションからのデータをバックアップします。デフォルトで、Backup Exec は仮想マシンに接続するために使われた同じクレデンシアルを使用して GRT を有効にします。VSS 対応アプリケーションのどの種類でも GRT を無効にできます。

メモ: Backup Exec は、非クラスタ、非分散型の構成の場合にのみ、個々の Exchange そして SQL 項目の個別リカバリをサポートします。

p.1353 の「[VMware バックアップオプション](#)」を参照してください。

メモ: アプリケーションで GRT を有効または無効にする場合、設定は VMware 仮想マシンと Hyper-V 仮想マシンの両方に適用されます。同じ設定を使わない場合は、シマンテック社はそれぞれの種類の仮想マシンに個別のバックアップジョブを設定することを推奨します。

バックアップジョブの間に、Backup Exec はアプリケーションからメタデータを収集します。Backup Exec でメタデータを収集できない場合は、アプリケーションの個々の項目をリストアできません。ただし、そうでない場合はバックアップジョブは正常に完了することがあります。

p.1360の「[仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護するための要件](#)」を参照してください。

仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護するための要件

Backup Exec は仮想マシンにインストールされる VSS 対応アプリケーションから個々の項目をバックアップおよびリストアできます。

以下の項目は仮想マシンの Microsoft Exchange、SQL および Active Directory のデータを保護するために必要です。

- 仮想マシンはオンになっている必要があります。
- 仮想マシンには適切なクレデンシヤルを入力しなければなりません。仮想マシンのクレデンシヤルで VSS 対応アプリケーションにアクセスできることを確認してください。
- メディアサーバーはネットワーク名か IP アドレスを使用して仮想マシンに接続できる必要があります。
- Backup Exec Remote Agent for Windows Systems を仮想マシンにインストールする必要があります。
- ライセンスの正しい数を、仮想マシンで保護したいアプリケーションに入力する必要があります。
- 仮想コンピュータのオペレーティングシステムは VSS をサポートする必要があります。

Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用する場合は、Backup Exec の Agent for Microsoft Exchange などのアプリケーションエージェントを購入し、仮想マシンにインストールする必要があります。

p.1359の「[Backup Exec で仮想マシンの Exchange、SQL および Active Directory データを保護する方法](#)」を参照してください。

Symantec VSS プロバイダを使用したデータベースおよびアプリケーションの保護について

Symantec VSS Provider は、Backup Exec が Microsoft Exchange、SQL、Active Directory などの VSS 対応アプリケーションを保護できるようにします。Symantec VSS Provider は、バックアップジョブごとに Windows アプリケーションおよびデータベースの自動スナップショットを提供します。

ゲスト仮想マシンには、すでに VMware VSS Provider が存在している場合があります。ただし、ゲスト仮想マシンでは 1 つの VSS Provider のみを使うことができます。そのため、VMware VSS Provider をアンインストールする必要があります。

ゲスト仮想マシンに **Remote Agent for Windows Systems** をインストールすると、**Symantec VSS Provider** は自動的にインストールされます。**Backup Exec** インストールメディアから手動でインストールすることもできます。

p.123 の「リモートコンピュータへの **Remote Agent** および **AOFO (Advanced Open File Option)** のプッシュインストール」を参照してください。

デフォルトでは、**Symantec VSS Provider** は完全バックアップを取り、データベースログファイルを切り捨てます。ただし、スクリプトファイルを修正することによってデフォルト設定を変更できます。

p.1361 の「**Symantec VSS Provider** のログ切り捨て設定の変更」を参照してください。

Symantec VSS Provider のログ切り捨て設定の変更

デフォルトでは、**Symantec VSS Provider** は完全バックアップを取り、データベースログファイルを切り捨てます。設定を変更して、**Symantec VSS Provider** でログの切り捨てなしでコピーバックアップを取るようになります。

メモ: システムルートディレクトリおよび `%Programfiles%\Symantec\Backup Exec\RAWS\VSS Provider` の両方の `Pre-freeze-script.bat` ファイルに `-copy` フラグを追加する必要があります。

Symantec VSS Provider のログ切り捨て設定を変更する方法

- 1 次の両方の場所で `Pre-freeze-script.bat` ファイルを探します。
 - システムルートディレクトリ
 - `%Programfiles%\Symantec\Backup Exec\RAWS\VSS Provider`
- 2 `BeVssRequestor.exe` を含む 3 行のそれぞれの終わりに `-copy` フラグを追加します。
次に例を示します。

```
"%Programfiles%\Symantec\Backup Exec\BE VSS  
Provider\BeVssRequestor.exe" -pre2 -log -logscreen -copy
```

VMware リソースのリストアについて

リストアジョブを設定して、次の処理を行うことができます。

- 元の場所または代替の場所にデータをリストアする。
- リストアジョブが完了した後、仮想マシンの電源をオンにする。
- 既存の仮想マシンを対象にリストアする。

- vCenter Server の新しい仮想マシン名を使用してリストアする。
- リストアジョブが完了した後に使用する仮想マシンのための優先ネットワークを選択する。

単一 Virtual Machine Disk Format (VMDK) ファイルをリストアすることを選択した場合は、リストアが完了した後、データストアに VMDK を移動する必要があります。それから、仮想マシン全体ではなく VMDK ファイルがリストアされます。VMDK ファイルは仮想ハードディスクが独立したディスクとして設定されている場合はバックアップされません。

メモ: Backup Exec 12.5 でバックアップされた仮想マシンをリストアするには、VMware Converter (4.01 以降) を Backup Exec メディアサーバーにインストールする必要があります。

リストアのための VMware リソースの選択について

仮想マシンのデータを次のようにリストアできます。

- ディザスタリカバリのために、仮想マシン全体または Virtual Machine Disk Format (VMDK) のファイルをリストアできます。
- バックアップジョブに Granular Recovery Technology (GRT) オプションを選択した場合、VMDK ファイル内からバックアップされた個々のファイルまたはフォルダをリストアできます。

リストアビューでは、GRT の使用が有効になっている仮想マシンが、物理ネットワークまたは NetBIOS の名前の下に表示されます。ネットワーク名を展開すると、個々のドライブ、ファイルおよびフォルダが表示されます。

また、仮想マシンはリストアビューの [VMware vCenter および ESX Server] の下にも表示されます。[VMware vCenter および ESX Server] の下には、仮想マシンが表示名か、作成中に仮想マシンに指定した名前が表示されます。仮想マシンの表示名を展開すると、その内容が表示されます。表示名で仮想マシンを選択すると、仮想マシン全体とその VMDK ファイルをリカバリできます。

VMware リソースのリストア

デフォルトで、Backup Exec は最初のバックアップ元にデータをリストアします。データが最初に存在した場所以外の仮想マシンにデータをリストアする場合は、リストア先を変更したリストアジョブを作成する必要があります。

p.1365 の「[VMware の仮想マシンのリストア先の変更](#)」を参照してください。

メモ: Backup Exec 12.5 でバックアップされた仮想マシンをリストアするには、VMware Converter (4.01 以降) を Backup Exec メディアサーバーにインストールする必要があります。

メモ: Granular Recovery Technology (GRT) では、個々のデータファイルとフォルダのリストアが可能です。GRT はアクティブなレジストリなど、システム状態ファイルをリストアできません。

VMware リソースをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアするデータを選択します。
 p.1362の「[リストアのための VMware リソースの選択について](#)」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[VMware]をクリックします。
- 5 必要なオプションを選択します。
 p.1363の「[VMware リストアオプション](#)」を参照してください。
- 6 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。

VMware リストアオプション

次のオプションは VMware のリストアジョブで利用可能です。

p.1362の「[VMware リソースのリストア](#)」を参照してください。

表 M-7 VMware リストアジョブオプション

項目	説明
リストア前に既存の仮想マシンを削除する	<p>リストアジョブの間に既存の仮想マシンを削除します。このオプションを選択すると、仮想マシンはリストアジョブが失敗しても削除されます。</p> <p>このオプションを選択しなければ、仮想マシンが仮想サーバーにすでに存在する場合に仮想マシンをリストアできません。</p>
リストア後に仮想マシンの電源をオンにする	<p>リストアジョブが完了した後仮想マシンをオンにします。</p>

項目	説明
転送モードの優先度リスト	<p>ESX Server から Virtual Machine Disk Format (VMDK) のファイルを転送するための方式を選択できます。これらのオプションの少なくとも 1 つを選択する必要があります。複数のオプションを選択した場合、方式は優先度と利用可能であるリソースによって判断されます。優先度を変更するためにリスト内でオプションを上下に移動できます。</p> <p>利用可能なオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SAN - 仮想ディスクデータの移動に SAN を使用する このオプションを選択する場合、仮想マシンはメディアサーバーがアクセスできる SAN に存在する必要があります。この転送モードによって、ESX Server が影響されないように、データはメディアサーバーにオフロードされます。 ■ NBD - 仮想ディスクデータを暗号化せずにネットワーク経由で転送する セキュリティのために SSL を使わず、次のいずれかの条件がある場合にこのオプションを使います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンは SAN にありません。 ■ メディアサーバーには SAN へのアクセス権がありません。 ■ NBDSSL - 仮想ディスクデータを暗号化してネットワーク経由で転送する セキュリティのために SSL を使い、次のいずれかの条件がある場合にこのオプションを使います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンは SAN にありません。 ■ メディアサーバーには SAN へのアクセス権がありません。 ■ Hotadd - 仮想マシン上の Backup Exec サーバーの仮想ディスクファイルを使用します。 このオプションは、ESX のホットアド機能を使用する場合に使用してください。ホットアド機能を使用すると、仮想マシンをブロキシサーバーとして使用できます。 ホットアドについて詳しくは VMware のマニュアルを参照してください。 <p>スナップショットは ESX Server に配置されます。それから、データはネットワークを介して移動します。</p> <p>VMDK ファイルは仮想ハードディスクが独立したディスクとして設定されている場合はバックアップされません。</p>
上に移動	選択した転送モードを移動してリストでの優先度を高くできます。
下に移動	選択した転送モードを移動してリストでの優先度を低くできます。

項目	説明
レガシーバックアップセットのリストアに必要な一時ファイルを格納するためのパスを入力	Backup Exec の以前のバージョンで作成されたバックアップセットからデータをリストアするときに一時ファイルを保存したい場所を示します。
vSphere ポート番号	Backup Exec が vCenter Server に接続するために使うポートを示します。デフォルトポートは 902 です。

VMware の仮想マシンのリストア先の変更

デフォルトで、Backup Exec は最初のバックアップ元にデータをリストアします。データが最初に存在した場所以外の仮想マシンにデータをリストアする場合は、リストア先を変更したリストアジョブを作成する必要があります。

VMware の仮想マシンのリストア先を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアするデータを選択します。
- 4 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[VMware リストア先の変更]をクリックします。
- 5 必要なオプションを選択します。
 p.1365 の「[VMware リストア先の変更]オプション」を参照してください。
- 6 ジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のオプションを選択します。

[VMware リストア先の変更]オプション

次のオプションは VMware のリストア先変更ジョブで利用可能です。

p.1365 の「VMware の仮想マシンのリストア先の変更」を参照してください。

表 M-8 [VMware リストア先の変更]オプション

項目	説明
VMware セットのリストア先の変更	vCenter Server または ESX Server にデータのリストア先を変更するオプションを設定できます。
vCenter および ESX Server	データのリストア先を変更する vCenter Server または ESX Server の名前を入力します。

項目	説明
サーバーのログオンアカウント	表示されるデフォルトログオンアカウントを使います。データのリストア先を変更する vCenter Server か ESX Server のために使う別のログオンアカウントを選択できます。
変更	データのリストア先を変更する vCenter Server か ESX Server のために使う別のログオンアカウントを選択できます。
リストア先を別の vCenter または ESX Server に変更	異なるサーバーに VMware データのリストア先を変更するオプションを設定できます。
リストア先の vCenter および ESX Server を参照	データのリストア先を変更する仮想サーバーを選択できます。サーバーの名前を入力する代わりにこのオプションを使うことができます。
データセンター	データセンターの名前、または ESX Server のグループを表示します。
仮想マシンデータストア	データを格納するために使われる ESX Server の格納場所の名前を表示します。
ホストまたはクラスタ	リストアのジョブが完了した後仮想マシンを実行する ESX Server の名前を表示します。
仮想マシンフォルダ	リストアしたい既存の vSphere フォルダの名前を示します。
リソースプール	リストアしたいリソースプールの名前を示します。
新規仮想マシン名	新しい仮想マシン名を示します。 同じ名前の仮想マシンがサーバーにすでにある場合は、新しい仮想マシン名を指定できます。
選択したホストで利用可能な場合、オリジナルディスクのデータストア選択を使用する	仮想サーバーの元のデータストアの選択項目を使います。元のデータストア選択がない場合は、バックアップデータからのデータストア選択が使われます。
ネットワークを選択	リストアジョブが完了した後に使用する仮想マシンのためのネットワークを示します。
VMware 仮想ハードウェアバージョン 7 をインストールした仮想マシンのリストア	VMware のハードウェアバージョン 7 の仮想マシンをリストアします。 VMware ESX Server バージョン 3.5 にリストアするときにこのオプションを選択すると、ジョブに失敗します。

項目	説明
シンプロビジョニングによってリストア	シンプロビジョニングを用いて仮想マシンをリストアします。シンプロビジョニングは、VMware ESX Server バージョン 4.0 環境のストレージ容量を効率的に使うのに役立ちます。VMware ESX Server バージョン 3.5 にリストアするときこのオプションを選択すると、ジョブに失敗します。
リストア先をフォルダに変更する	ESX Server にリストアしないでフォルダにデータをリストアできます。リストアジョブが完了すると、フォルダには仮想マシンのすべての .vmdk ファイルが含まれています。
リストア先ドライブ	フォルダが存在するドライブを指定します。
リストア先パス	フォルダが存在するパスを指定します。

Agent for VMware のためのデフォルトのバックアップとリストアのオプションの設定

インストール時に Backup Exec によって設定されたデフォルトを、VMware のすべてのバックアップおよびリストアジョブで使用することができます。また、独自のデフォルトを選択することもできます。個々のジョブに対してバックアップオプションまたはリストアオプションを設定することもできます。

Agent for VMware のためのデフォルトのバックアップとリストアのオプションを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[仮想マシン]の下にある[VMware]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.1367 の「[VMware のデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

VMware のデフォルトオプション

すべての VMware バックアップおよびリストアジョブのための次のデフォルトオプションを変更できます。

p.1367 の「[Agent for VMware のためのデフォルトのバックアップとリストアのオプションの設定](#)」を参照してください。

表 M-9 VMware のデフォルトオプション

項目	説明
<p>転送モードの優先度リスト</p>	<p>ESX Server から Virtual Machine Disk Format (VMDK) のファイルを転送するための方式を選択できます。これらのオプションの少なくとも 1 つを選択する必要があります。複数のオプションを選択した場合、方式は優先度と利用可能であるリソースによって判断されます。優先度を変更するためにリスト内でオプションを上下に移動できます。</p> <p>利用可能なオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SAN - 仮想ディスクデータの移動に SAN を使用する このオプションを選択する場合、仮想マシンはメディアサーバーがアクセスできる SAN に存在する必要があります。この転送モードによって、ESX Server が影響されないように、データはメディアサーバーにオフロードされます。 ■ NBD - 仮想ディスクデータを暗号化せずにネットワーク経由で転送する セキュリティのために SSL を使わず、次のいずれかの条件がある場合にこのオプションを使います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンは SAN にありません。 ■ メディアサーバーには SAN へのアクセス権がありません。 データは ESX Server に配置されます。それから、データはネットワークを介して移動します。 ■ NBDSSL - 仮想ディスクデータを暗号化してネットワーク経由で転送する セキュリティのために SSL を使い、次のいずれかの条件がある場合にこのオプションを使います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンは SAN にありません。 ■ メディアサーバーには SAN へのアクセス権がありません。 ■ Hotadd - 仮想マシン上の Backup Exec サーバーの仮想ディスクファイルを使用します。 このオプションは、ESX のホットアド機能を使用する場合に使用してください。ホットアド機能を使用すると、仮想マシンをプロキシサーバーとして使用できます。 ホットアドについて詳しくは VMware のマニュアルを参照してください。 <p>スナップショットは ESX Server に配置されます。それから、データはネットワークを介して移動します。</p> <p>VMDK ファイルは仮想ハードディスクが独立したディスクとして設定されている場合はバックアップされません。</p>

項目	説明
上に移動	選択済み転送モードを優先度リスト内で上に移動できます。
下に移動	選択済み転送モードを優先度リスト内で下に移動できます。
オフになっている仮想マシンをバックアップ	<p>オフになった仮想マシンを Backup Exec でバックアップできるようにします。</p> <p>メモ: 仮想マシンが自動的に検出される場合、オフになっていてもバックアップされません。</p>
Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT) を使用して、仮想マシンからの個々のファイルとフォルダのリストアを有効にする	<p>仮想マシンから個々のファイルとフォルダをリストアできるようにします。このオプションは Windows オペレーティングシステムのみを使う仮想マシン用です。</p> <p>Windows のコンピュータ上で GRT は、システム回復用ではなく、個々のファイルとフォルダのリストア用として機能します。</p>
編集	Microsoft Active Directory 、 Exchange および SQL 用に GRT の設定を変更できます。
Microsoft Active Directory	仮想マシン上の Microsoft Active Directory で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
Microsoft Exchange	仮想マシン上の Microsoft Exchange で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
Microsoft SQL	仮想マシン上の Microsoft SQL で GRT が有効かどうかを示します。デフォルトでは有効です。
vSphere ポート番号	Backup Exec が vCenter Server に接続するために使うポートを示します。デフォルトポートは 902 です。
リストアされた仮想マシンを vCenter または ESX Server イベントリに追加します。	<p>仮想マシン全体をリストアします。デフォルトでは、このオプションが選択されています。このオプションを消去すると、選択した仮想マシンのファイルのみがデータ格納場所にステージングされます。</p> <p>このオプションは、VMware コンバータを使用したインポートが失敗した場合に使います。ゲストオペレーティングシステムの一部である単一 VMDK をリストアする場合もこのオプションを使うことができます。</p>
リストア前に既存の仮想マシンを削除する	<p>リストアジョブの間に仮想マシンを削除します。このオプションを選択すると、仮想マシンはリストアジョブが失敗しても削除されます。</p> <p>仮想マシンは、仮想サーバーにすでにあればリストアできません。</p>

項目	説明
リストア後に仮想マシンの電源をオンにする	リストアジョブが完了した後仮想マシンをオンにします。
転送モードの優先度リスト	<p>ESX Server から Virtual Machine Disk Format (VMDK) のファイルを転送するための方式を選択できます。これらのオプションの少なくとも 1 つを選択する必要があります。複数のオプションを選択した場合、方式は優先度と利用可能であるリソースによって判断されます。優先度を変更するためにリスト内でオプションを上下に移動できます。</p> <p>利用可能なオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SAN - 仮想ディスクデータの移動に SAN を使用する このオプションを選択する場合、仮想マシンはメディアサーバーがアクセスできる SAN に存在する必要があります。この転送モードによって、ESX Server が影響されないように、データはメディアサーバーにオフロードされます。 ■ NBD - 仮想ディスクデータを暗号化せずにネットワーク経由で転送する セキュリティのために SSL を使わず、次のいずれかの条件がある場合にこのオプションを使います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンは SAN にありません。 ■ メディアサーバーには SAN へのアクセス権がありません。 ■ NBDSSL - 仮想ディスクデータを暗号化してネットワーク経由で転送する セキュリティのために SSL を使い、次のいずれかの条件がある場合にこのオプションを使います。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンは SAN にありません。 ■ メディアサーバーには SAN へのアクセス権がありません。 ■ Hotadd - 仮想マシン上の Backup Exec サーバーの仮想ディスクファイルを使用します。 このオプションは、ESX のホットアド機能を使用する場合に使用してください。ホットアド機能を使用すると、仮想マシンをプロキシサーバーとして使用できます。 ホットアドについて詳しくは VMware のマニュアルを参照してください。 <p>スナップショットは ESX Server に配置されます。それから、データはネットワークを介して移動します。</p> <p>VMDK ファイルは仮想ハードディスクが独立したディスクとして設定されている場合はバックアップされません。</p>

項目	説明
vSphere ポート番号	Backup Exec が vCenter Server に接続するために使うポートを示します。デフォルトポートは 902 です。

Symantec Backup Exec Archiving Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Archiving Option](#) について
- [Archiving Option](#) の必要条件
- [Backup Exec Archiving Option](#) のインストール
- [Archiving Option](#) の動作
- [Archiving Option](#) の推奨事項
- [Archiving Option](#) のアーカイブジョブの作成について
- [Archiving Option](#) でのボルトストアについて
- [Archiving Option](#) でのボルトストアパーティションについて
- [Archiving Option](#) でのアーカイブについて
- [Archiving Option](#) でのアーカイブの設定について
- アーカイブジョブでの [Exchange](#) メールボックスグループについて
- アーカイブ内のデータの検索について
- アーカイブからの項目のリストアについて
- アーカイブからの項目の削除について
- [Archiving Option](#) コンポーネントのバックアップについて
- [Archiving Option](#) コンポーネントのリストアについて

- リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントのバックアップとリストアについて
- アーカイブからの保持期間が終了したアーカイブ項目の削除の防止
- アーカイブの権限と設定の同期について
- アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について
- アーカイブジョブのデフォルト設定の編集
- 新しい場所への Archiving Option コンポーネントの移動について
- アーカイブジョブのトラブルシューティング
- Archiving Option のレポート

Archiving Option について

Archiving Option は個別または一緒にインストールできる次の機能を含んでいます:

- アーカイブ可能な Windows のファイルシステムデータをアーカイブする Backup Exec File System Archiving Option。
- アーカイブ可能な Exchange メールメッセージをアーカイブする Backup Exec Exchange Mailbox Archiving Option。

アーカイブ可能なファイルを見つけるために、Backup Exec は選択されたファイルシステムの共有とフォルダおよび Exchange メールボックスにルールを適用します。選択項目内のデータは、バックアップされ、ルールによって指定された基準を満たしている場合にアーカイブできます。アーカイブジョブではその後にディスクベースのボルトストアにこのデータを送信します。このデータはアーカイブされた直後、またはボルトストアのバックアップ直後にリソース内の元の場所から削除されます。

アーカイブにデータを保持する期間を指定する保持カテゴリをアーカイブするデータに適用できます。Backup Exec は保持期間が終了したアーカイブデータを自動的に削除できます。

Backup Exec Retrieve をインストールして設定すると、エンドユーザーは自身のアーカイブファイルとメールメッセージにアクセスできます。エンドユーザーは、Backup Exec がメールメッセージかファイルをアーカイブするときに作成するリンクをクリックします。このリンクは、エンドユーザーが所有するメールメッセージかファイルのみを検索、参照、プレビュー、取得することができる Backup Exec Retrieve を開きます。

バックアップセットからデータをアーカイブすることによって、Backup Exec はリソースのデータを追加でクエリーしたり移動する必要がなくなります。Backup Exec が元の場所からアーカイブデータを削除した後は、ディスク領域がさらに解放され、Backup Exec で将来のバックアップジョブにかかる時間が短縮されます。

Archiving Option では、データをアーカイブするために Symantec Enterprise Vault の技術を使います。Archiving Option をインストールすると、一部の Enterprise Vault サービスもインストールされます。

p.1383 の「[Archiving Option での Enterprise Vault サービスについて](#)」を参照してください。

p.1375 の「[Archiving Option の必要条件](#)」を参照してください。

p.1389 の「[Backup Exec Archiving Option のインストール](#)」を参照してください。

p.1390 の「[Archiving Option の動作](#)」を参照してください。

p.1393 の「[Archiving Option の推奨事項](#)」を参照してください。

Archiving Option の必要条件

Exchange Mailbox Archiving Option と File System Archiving Option の必要条件を次の表に示します:

表 N-1 Archiving Option の必要条件

オプション	必要条件
Archiving Option をインストールしたい Backup Exec メディアサーバー	<p>互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。 http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1</p> <p>メディアサーバーに必要な項目は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メディアサーバーはドメインの一部でなければなりません。ワークグループ内のサーバーには Archiving Option をインストールできません。 ■ メディアサーバーは、アーカイブ可能なデータのアーカイブ元のファイルサーバーおよび Exchange サーバーと同じタイムゾーンになければなりません。 ■ メディアサーバーは Archiving Option のインデックスファイルを保存するための十分な領域を備えている必要があります。Archiving Option をインストールするとき、インデックスファイルが保存されるパスを指定するように求めるメッセージが表示されます。このパスはローカルの NTFS ボリューム上になければなりません。 <p>p.1384 の「Exchange Mailbox Archiving Option のディスク領域の必要条件を計算する方法」を参照してください。</p> <p>p.1386 の「File System Archiving Option のディスク領域の必要条件を計算する方法」を参照してください。</p> <p>メモ: Backup Exec の基本要件以上の RAM が使用可能であることを Symantec では推奨しています。</p>

オプション	必要条件
Exchange Mailbox Archiving Option のみ	

オプション	必要条件
	<p>次の項目は Exchange Mailbox Archiving Option のみに必要です:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Backup Exec Agent for Microsoft Exchange Server は、アーカイブする Exchange Server にインストールされている必要があります。 ■ Archiving Option をインストールする前に Microsoft Outlook がメディアサーバーにインストールされている必要があります。 Outlook をメディアサーバーにインストールする場合は、プロファイルを作成してから Exchange Server メールボックスに接続する必要があります。Outlook は競合するプログラムについてのエラーメッセージを表示することがあります。Outlook が問題を解決することを提供したら、そうすることを選び、次に指定の手順に従ってください。 ■ Exchange サーバーのバックアップでは、Granular Recovery Technology (GRT) オプションが有効になっている必要があります。 Exchange Server のバックアップは次のデバイスの 1 つに存在している必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 固定のディスクへのバックアップフォルダ ■ 重複除外ストレージフォルダ ■ Storage Provisioning Option 環境のストレージレイ ■ アーカイブジョブには、データの一時ストレージ用のメディアサーバーに対してローカルな NTFS ボリュームに設定された有効なパスが必要です。デフォルトパスは C:\temp を使うように設定されます。 p.627 の「リストアジョブのデフォルト設定」を参照してください。 ■ メールボックスは、アーカイブ用のメールボックスを選択したい各 Exchange Server 上で Backup Exec によって排他的に使われるように設定する必要があります。Exchange Mailbox Archiving Option のアーカイブジョブを作成する時はいつでもシステムメールボックスの名前を入力するように求めるメッセージが表示されます。システムメールボックスは Backup Exec による使用のために設定するメールボックスです。それには「システム」メールボックスと名前を付ける必要はありません。 次にこのメールボックスの制限を示します: <ul style="list-style-type: none"> ■ このメールボックスは他のどの目的のためにも使ってはなりません。Exchange Mailbox Archiving Option は排他的なアクセスを要求します。

オプション	必要条件
	<ul style="list-style-type: none">■ このメールボックスはアドレスリストで非表示にしてはなりません。■ このメールボックスのアカウントは無効にしてはなりません。■ メディアサーバーのドメインと Exchange Server のドメインは Backup Exec サービスアカウントが属するドメインを信頼する必要があります。■ メディアサーバーのドメインは、メールボックスが Exchange Server に存在するユーザーのアカウントを含んでいるドメインを信頼する必要があります。■ Backup Exec サービスアカウントに Exchange Server に対する権限を付与する必要があります。 p.1380 の「Archiving Option での Backup Exec サービスアカウントへの Exchange Server に対する権限の付与について」を参照してください。■ Backup Exec サービスアカウントは Active Directory ドメインのメンバーでなければなりません。Exchange Server に対するドメインおよびローカルの管理者権限がある Backup Exec サービスアカウントを使用することをお勧めします。Backup Exec サービスアカウントをドメイン管理者にするべきではありません。

オプション	必要条件
File System Archiving Option のみ	<p>次に File System Archiving Option の必要条件を示します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ メディアサーバーのドメイン、ファイルサーバーのドメイン、Exchange Server のドメインは Backup Exec サービスアカウントが属するドメインを信頼する必要があります。 ■ メディアサーバーのドメインは、ファイルサーバーの共有にアクセスするユーザーのアカウントを含んでいるドメインを信頼する必要があります。 ■ Backup Exec Retrieve がインストールされている場合は、信頼関係がそのドメインのためにも存在している必要があります。 ■ Backup Exec サービスアカウントには、ファイルサーバーのローカル管理者権限が必要です。 ■ Backup Exec サービスアカウントには、アーカイブ用に選択される共有に対するフルコントロールの共有権限が必要です。 <p>Backup Exec サービスアカウントは、アーカイブ用に選択される共有のフォルダに対する次の NTFS 権限を付与される必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 修正 ■ フォルダの内容の一覧表示 ■ 読み取り ■ 書き込み <p>メモ: シマンテック社は MSG ファイルのすべてのインデックス付けを提供するために Microsoft Outlook をメディアサーバーにインストールすることを推奨します。</p>

Archiving Option は次をサポートしません:

- Backup Exec Central Admin Server Option。

メモ: 集中管理サーバーに Archiving Option をインストールできます。ただし、アーカイブジョブのための分散ジョブ管理はサポートされません。

- Backup Exec Remote Media Agent for Linux Servers からのバックアップセットからのアーカイブ。
- クラスタ化されたサーバーへのインストール。また、インストール用に Archiving Option も選択している場合は、クラスタに Backup Exec をインストールできません。
- レガシーメールボックスバックアップセットからのアーカイブ。

- Microsoft Exchange Server がインストールされているコンピュータへの Exchange Mailbox Archiving Option のインストール。

p.1383 の「[Archiving Option での Enterprise Vault サービスについて](#)」を参照してください。

Archiving Option での Backup Exec サービスアカウントへの Exchange Server に対する権限の付与について

Archiving Option の場合、Backup Exec サービスアカウントはアーカイブしたい Exchange Server 上のメールボックスにアクセスする必要があります。このアクセス権を取得するには、Backup Exec サービスアカウントに Exchange Server にアクセスする権限がなければなりません。

Exchange Server のメールボックスにアクセスするために Backup Exec サービスアカウントに必要な権限を付与するために次の方式のどちらかを使うことができます：

- 組織レベルまたは管理グループレベルでの権限の付与。
権限が割り当てられるレベルで追加するすべての新しい Exchange Server に権限が自動的に伝播されます。

メモ: 他のアカウントに権限を付与するには、Exchange の管理権限を持っている必要があります。

- 各 Exchange Server に対する権限の明示的な付与。
権限を明示的に付与してから別の Exchange Server を追加する場合は、追加したサーバーに対する権限も明示的に付与する必要があります。

また、Backup Exec サービスアカウントには、Backup Exec の排他的な使用のために作成するメールボックスに対する送信者権限がなければなりません。システムメールボックスと呼ばれるこのメールボックスは、アーカイブ用に選択するメールボックスが存在する各 Exchange Server に作成されなければなりません。

p.1381 の「[Archiving Option での Exchange Server 2007 に対する権限の組織レベルでの付与](#)」を参照してください。

p.1381 の「[Archiving Option での各 Exchange Server 2007 に対する権限の明示的な付与](#)」を参照してください。

p.1382 の「[Archiving Option での Exchange Server 2003 に対する権限の組織レベルでの付与](#)」を参照してください。

p.1383 の「[Archiving Option での Exchange Server 2003 に対する権限のサーバーレベルでの付与](#)」を参照してください。

Archiving Option での Exchange Server 2007 に対する権限の組織レベルでの付与

組織レベルで Backup Exec サービスアカウントにフルコントロール権限を付与できます。

p.1380の「[Archiving Option での Backup Exec サービスアカウントへの Exchange Server に対する権限の付与について](#)」を参照してください。

メモ: 他のアカウントに権限を付与するには、Exchange の管理権限を持っている必要があります。

Archiving Option で Backup Exec サービスアカウントに権限を組織レベルで付与する方法

- 1 Exchange Server で、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Microsoft Exchange Server 2007]、[Exchange 管理シェル]の順にクリックします。
- 2 次のコマンドを入力します。

```
Get-OrganizationConfig | Add-ADPermission -User '<Domain Name%\Backup Exec service account>' -AccessRights GenericAll -InheritanceType All
```
- 3 次のコマンドを入力します。

```
Add-ADPermission -Identity '<system mailbox name>' -User '<Domain Name%\Backup Exec service account>' -ExtendedRights 'Send-as'
```
- 4 Backup Exec の排他的な使用のために作成したメールボックスに対する送信者権限を付与するには、適切な Exchange Server 上で前の手順を繰り返してください。

Archiving Option での各 Exchange Server 2007 に対する権限の明示的な付与

各 Exchange Server で Backup Exec サービスアカウントにフルコントロール権限を付与できます。アーカイブする各 Exchange Server でこの手順を実行してください。

p.1380の「[Archiving Option での Backup Exec サービスアカウントへの Exchange Server に対する権限の付与について](#)」を参照してください。

メモ: 他のアカウントに権限を付与するには、Exchange の管理権限を持っている必要があります。

Archiving Option で各 Exchange Server 2007 に対する権限を明示的に付与する方法

- 1 Exchange Server で、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Microsoft Exchange Server 2007]、[Exchange 管理シェル]の順にクリックします。

- 2 次のコマンドを入力します。

```
Get-MailboxServer -Identity "<mailbox server name>" > |  
Add-ADPermission -ser "<Domain name¥Backup Exe service account>"  
-AccessRights GenericAll -InheritanceType All
```

- 3 次のコマンドを入力します。

```
Add-ADPermission -Identity '<system mailbox name>' -User '<Domain  
Name¥Backup Exec service account>' -ExtendedRights 'Send-as'
```

Archiving Option での Exchange Server 2003 に対する権限の組織レベルでの付与

組織レベルで Backup Exec サービスアカウントにフルコントロール権限を付与できます。

p.1380 の「[Archiving Option での Backup Exec サービスアカウントへの Exchange Server に対する権限の付与について](#)」を参照してください。

この手順について詳しくは Microsoft 社のナレッジベースを参照してください。

Archiving Option で Exchange Server 2003 に対する権限を組織レベルで付与する方法

- 1 [セキュリティ]ページを表示できるように **ShowSecurityPage** レジストリを設定します。
- 2 Microsoft Exchange System Manager の左ペインで、[Exchange 組織]を右クリックし、次に[プロパティ]をクリックします。
- 3 [セキュリティ]タブで、[追加]をクリックします。
- 4 Backup Exec サービスアカウントを選択してリストに追加します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 [名前]リストで、Backup Exec サービスアカウントを選択します。
- 7 [アクセス許可]リストで、[許可]列のチェックボックスがすべて選択されていることを確認します。
- 8 選択されていないチェックボックスを選択します。
- 9 [OK]をクリックします。

Archiving Option での Exchange Server 2003 に対する権限のサーバーレベルでの付与

Exchange Server 2003 に対する権限を Backup Exec サービスアカウントにサーバーレベルで付与できます。アーカイブする各 Exchange Server でこの手順を実行してください。

p.1380 の「[Archiving Option での Backup Exec サービスアカウントへの Exchange Server に対する権限の付与について](#)」を参照してください。

Archiving Option で Exchange Server 2003 に対する権限をサーバーレベルで付与する方法

- 1 **Microsoft Exchange System Manager** の左ペインで、[サーバー]コンテナを展開します。
- 2 **Exchange Server** を右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 3 [セキュリティ]タブで、[追加]をクリックします。
- 4 Backup Exec サービスアカウントを選択してリストに追加します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 [名前]リストで、Backup Exec サービスアカウントをクリックします。
- 7 [アクセス許可]リストで、[許可]列のチェックボックスがすべて選択されていることを確認します。
- 8 選択されていないチェックボックスを選択します。
- 9 [OK]をクリックします。

Archiving Option での Enterprise Vault サービスについて

Symantec Enterprise Vault テクノロジは Archiving Option の基盤です。Archiving Option をインストールすると、一部の Enterprise Vault サービスもインストールされます。メディアサーバーで動作する Enterprise Vault サービスは Backup Exec サービスアカウントと同じクレデンシアルを使います。

次の Enterprise Vault サービスがメディアサーバーにインストールされます:

- Enterprise Vault Admin Service
- Enterprise Vault Directory Service
- Enterprise Vault Indexing Service
- Enterprise Vault Storage Service
- Enterprise Vault Task Controller Service

Backup Exec クレデンシヤルを更新するには、メディアサーバー上で Backup Exec サービスマネージャを常に使ってください。Backup Exec サービスマネージャは Enterprise Vault サービスのクレデンシヤルを同じクレデンシヤルで自動的に更新します。

メモ: Enterprise Vault サービスまたは Backup Exec サービスのクレデンシヤルの編集に Windows サービスアプレットを使うことはできません。このアプレットを使うと、Archiving Option が Backup Exec サービスアカウントクレデンシヤルと同期されないままになる場合があります。アーカイブ操作中にエラーが発生する場合があります。

p.99 の「サービスアカウント情報の変更」を参照してください。

p.158 の「Backup Exec サービスの起動および停止」を参照してください。

Exchange Mailbox Archiving Option のディスク領域の必要条件を計算する方法

Backup Exec では次の Exchange Mailbox Archiving Option コンポーネント用に永続的なディスク領域が必要です:

- ボルトストアパーティション。
- インデックスの場所。
- ディレクトリ、ボルトストア、フィンガープリントデータベースを含んでいる SQL Server データベース。

表 N-2 は Exchange Mailbox Archiving Option のこれらのコンポーネント用のディスク領域の必要条件を推定するために使うことができる式を記述します。

式には次の値と変数を使用します:

- N は電子メールの数です。
- m はユーザーのメールボックスにある添付ファイルの同一コピーの平均数です。
- 添付ファイルの圧縮率は 60% として推定します。
添付ファイルの多くが Office 2007 ファイルなら、使用する圧縮率は 90% です。
- 添付ファイルがある電子メールの平均数は 20% で推定します。
- 電子メールの添付ファイルの平均サイズは 250 KB で推定します。

表 N-2 Exchange Mailbox Archiving Option のディスク領域の必要条件の計算

コンポーネント	必要条件
ボルトストアパーティション	<p>ボルトストアパーティションのサイズは以下の項目によって決まります:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 電子メールのサイズ。 ■ 添付ファイルの種類。 ■ 添付ファイルの数そしてサイズ。 ■ 添付ファイルがある電子メールの数。 <p>メモ: 単一インスタンス記憶域が有効になっている場合、項目はボルトストア内とボルトストアパーティション内の中で共有されます。20 KB の単一インスタンスのしきい値を超えるメッセージの共有可能な部分は共有されます。これらの共有可能な部分には添付ファイルとメッセージ本文が含まれます。ユーザー情報として単一インスタンスのしきい値未満の共有可能な部分は共有されません。</p> <p>p.1455の「アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について」を参照してください。</p> <p>次のように計算して、ボルトストアパーティションのディスク領域の必要条件を予測できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 単一インスタンス記憶域が有効になっていないボルトストアパーティションの概算サイズ: $(N \times 16) + (N \times 0.2 \times 0.6 \times 250) \text{ KB}$ ■ 単一インスタンス記憶域が有効になっているボルトストアパーティションの概算サイズ: $(N \times 16) + ((1/m) \times (N \times 0.2 \times 0.6 \times 250) \text{ KB}$ <p>たとえば、100,000 通の電子メールのボルトストアパーティションのディスク領域の必要条件を知りたいとします。各電子メールの添付ファイルが平均 3 人で共有されると推定します。</p> <p>アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域が有効になっていない場合、ディスク領域の必要条件の計算は次の通りです:</p> $(100000 \times 16) + (100000 \times 0.2 \times 0.6 \times 250) \text{ KB} = \text{およそ } 4.6 \text{ GB}$ <p>単一インスタンス記憶域が有効になっている場合、ディスク領域の必要条件の計算は次の通りです:</p> $(100000 \times 16) + ((1/3) \times 100000 \times 0.2 \times 0.6 \times 250) \text{ KB} = \text{およそ } 2.6 \text{ GB}$

コンポーネント	必要条件
インデックス	<p>インデックスのサイズはアーカイブする項目の合計サイズのおよそ 8% です。この割合は、インデックス付けする内容が少なれば少なくなる可能性があります。たとえば、MP3 または .jpeg ファイルのような大きい添付ファイルがある場合はインデックス付けする内容が少なくなります。</p> <p>たとえば、100,000 通の電子メールがあり、それぞれに 8 KB の本文サイズがあるとします。電子メールの約 20% に添付ファイルがあり、それぞれの平均合計サイズは 250 KB です。インデックスのサイズはおよそ 450 MB です。</p>
ディレクトリデータベース	<p>ディレクトリデータベースは新しいメールボックスか共有がはじめてアーカイブされる時のみ大きくなります。</p> <p>推奨のディスク領域は 500 MB です。</p>
ボルトストアデータベース	<p>ボルトストアデータベースのサイズはおよそ $N \times 500$ バイトです。ボルトストアデータベースはあらゆるアーカイブ項目とともに大きくなります。バックアップされなかった、またはインデックス付けされなかった項目の情報を保持するために一時領域が使われます。</p>
フィンガープリントデータベース	<p>フィンガープリントデータベースは、アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域を有効にする時のみ作成されます。Backup Exec はフィンガープリントデータベースに最初に 212 MB を割り当てます。フィンガープリントデータベースはあらゆるアーカイブ項目とともに大きくなります。</p> <p>データベースが 212 MB より大きくなったら、必要なディスク領域を推定するために次のように計算してください:</p> <p>$1/m \times N \times 0.2 \times 500$ バイト</p> <p>p.1455 の「アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について」を参照してください。</p>

File System Archiving Option のディスク領域の必要条件を計算する方法

Backup Exec では次の File System Archiving Option コンポーネント用に永続的なディスク領域が必要です:

- ボルトストアパーティション
- インデックス
- SQL Server データベース

表 N-3 は File System Archiving Option のこれらのコンポーネント用のディスク領域の必要条件を推定するために使うことができる式を記述します。

式には次の値と変数を使用します:

- N はファイルの数です。
- m はファイルごとの同一コピーの平均数です。
 m が不明な場合は、概算の 1.2 を使ってください。
- ファイルの圧縮率は 50% として推定します。
 この概算は Office 2003 の文書を多く含む、混在するファイルに適用されます。Office 2007 の文書は圧縮されませんが Office 以外のファイルと混在するとき、圧縮平均は元のサイズの 80% です。純粋なイメージファイルは圧縮されません。

表 N-3 File System Archiving Option コンポーネントのディスク領域の必要条件の計算

コンポーネント	ディスク領域の必要条件
ボルトストアパーティション	<p>次のように計算して、ボルトストアパーティションのディスク領域の必要条件を予測できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域が有効になっていないボルトストアパーティションの概算サイズ: $(N \times 4) + (N \times \text{KB 単位の平均ファイルサイズ} \times 0.5) \text{ KB}$ ■ 単一インスタンス記憶域が有効になっているボルトストアパーティションの概算サイズ: $(N \times 4) + ((1/m) \times N \times \text{平均ファイルサイズ} \times 0.5) \text{ KB}$ <p>たとえば、10,000 ファイルのボルトストアパーティションのディスク領域の必要条件を知りたいとします。各ファイルの平均サイズは 250 KB であり、ファイルごとの同一コピーの平均数は 1.2 です。</p> <p>アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域が有効になっていない場合、ディスク領域の必要条件の計算は次の通りです: $(10000 \times 4) + (100000 \times 250 \times 0.5) \text{ KB} = \text{およそ } 1.3 \text{ GB}$</p> <p>単一インスタンス記憶域が有効になっている場合、ディスク領域の必要条件の計算は次の通りです: $(10000 \times 4) = ((1/1.2) \times 10000 \times 250 \times 0.5) \text{ KB} = \text{およそ } 1.08 \text{ GB}$</p>

コンポーネント	ディスク領域の必要条件
インデックス	<p>インデックスファイルには、アーカイブするファイルの合計サイズのおよそ2%が必要になることを推定できます。この割合は、インデックス付けする内容が少なければ少なくなることがあります。ファイルがすべて圧縮されたイメージファイルの場合、インデックス付けはファイルの多くが小さいテキストメッセージなら少なくなります。多数の小さいテキストメッセージにはExchange Mailbox Archiving Optionのインデックス付け用の場合と同様のディスク領域の必要条件が必要です。</p> <p>たとえば、10 GB のデータをアーカイブする場合、少なくとも200 MB の利用可能なディスク領域がインデックスファイルを保存するために必要です。</p>
ディレクトリデータベース	<p>ディレクトリデータベースは新しいメールボックスか共有がはじめてアーカイブされる時のみ大きくなります。</p> <p>推奨のディスク領域は1 GB です。</p>
ボルトストアデータベース	<p>ボルトストアデータベースはあらゆるアーカイブ項目とともに大きくなります。バックアップされなかった、またはインデックス付けされなかった項目の情報を保持するために一時領域が使われます。</p> <p>ボルトストアデータベースのサイズはおおよそ $N \times 3000$ バイトです。</p>
フィンガープリントデータベース	<p>フィンガープリントデータベースは、アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域を有効にする時のみ作成されます。フィンガープリントデータベースはアーカイブ項目の共有可能な部分を保持します。20 KB の単一インスタンスのしきい値を超える項目の共有可能な部分は共有されます。File System Archiving Option の場合は、すべてのファイルが20 KB のしきい値より大きいと想定されます。</p> <p>Backup Exec はフィンガープリントデータベースに最初に212 MB を割り当てます。フィンガープリントデータベースはあらゆるアーカイブ項目とともに大きくなります。</p> <p>データベースが212 MB より大きくなったら、必要なディスク領域を推定するために次のように計算してください:</p> <p>$1/m \times N \times 500$ バイト</p> <p>p.1455の「アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について」を参照してください。</p>

Backup Exec Archiving Option のインストール

これらのオプションの 1 つまたは両方を Backup Exec の個別のアドオンコンポーネントとしてローカルにインストールできます。

- Exchange Mailbox Archiving Option
- File System Archiving Option

これらのオプションのサイレントモードインストールでは、コマンドラインスイッチも利用可能です。

Archiving Option のインストールを試みる前にすべての必要条件が満たされていることを確認してください。

p.143 の「[コマンドラインを使用した Backup Exec のインストール \(サイレントモード\)](#)」を参照してください。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

p.1375 の「[Archiving Option の必要条件](#)」を参照してください。

p.1383 の「[Archiving Option での Enterprise Vault サービスについて](#)」を参照してください。

p.1390 の「[Archiving Option がインストールされているメディアサーバーへの Enterprise Vault のインストールについて](#)」を参照してください。

Archiving Option のアンインストールまたは再インストールについて

Exchange Mailbox Archiving Option と File System Archiving Option の両方をアンインストールすると、次のようになります。

- Archiving Option に含まれている Enterprise Vault ファイルと Enterprise Vault サービスが削除されます。
- Archiving Option に含まれている Enterprise Vault データベースは残ります。
- ボルトストアパーティションのアーカイブデータは残ります。
- インデックスファイルは残ります。

また、すべてのアーカイブ関連ジョブで[無効]ステータスが表示されます。無効なジョブの実行、編集、保存はできません。無効なジョブは削除できます。

1 つのみのオプションをアンインストールした場合、既存のアーカイブジョブで変更は起こりません。アーカイブジョブをいつものように編集し、実行し続けることができます。

1 つまたは両方のオプションを再インストールする場合は、初期インストールで使った同じ Backup Exec のインストールフォルダのパスを指定します。同じインストールパスを使えば以前にアーカイブされたすべてのデータを利用可能です。Backup Exec データベース

スに変更が行われていなければ無効なジョブを再実行できます。それ以外の場合は、ジョブを再実行しようとするとう失敗します。

p.159の「ローカルメディアサーバーからの Backup Exec オプションのアンインストール」を参照してください。

Archiving Option がインストールされているメディアサーバーへの Enterprise Vault のインストールについて

Archiving Option がインストールされているメディアサーバーに Enterprise Vault をインストールすると、すべてのアーカイブ機能が利用できなくなります。Enterprise Vault のインストール時にアクティブになっているアーカイブジョブは実行が完了しますが、スケジュールされたアーカイブジョブは実行されません。

すべてのアーカイブ関連ジョブで[無効]ステータスが表示されます。無効なジョブの実行、編集、保存はできません。無効なジョブは削除できます。

その後 Enterprise Vault をアンインストールしても、アーカイブ機能は利用できないままになります。

Archiving Option の動作

アーカイブジョブを処理するために、Backup Exec は次の処理を実行します:

- アーカイブの選択元となるファイルシステムと Exchange Server の最新のバックアップを読み取ります。
- アーカイブ可能なファイルとメールメッセージを識別するために指定するアーカイブのルールを適用します。
- アーカイブなファイルがアーカイブにすでに存在するかどうかを確認します。ファイルがアーカイブにすでに存在する場合、そのファイルは再度アーカイブされません。
- アーカイブにデータを追加します。アーカイブされたデータの内容はすべてアーカイブ項目の迅速な検索と取り込みを行えるようにインデックス付けされます。
- アーカイブされたファイルおよびメールメッセージを元の場所から削除します。指定するオプションによっては、アーカイブジョブの完了直後、またはボルトストアのバックアップ直後に削除が実行されます。
- (オプション) エンドユーザーに属するフォルダの Backup Exec Retrieve にリンクを作成します。リンクを作成する前に Backup Exec Retrieve をインストールし、設定する必要があります。

p.1393の「Archiving Option のエンドユーザーが Backup Exec Retrieve の使用によってアーカイブデータを取得する方法」を参照してください。

次の表に、実行できる Archiving Option 操作について示します。

表 N-4 実行できる操作

操作	詳細
ファイルシステムデータと Exchange メールメッセージをボルトストアにアーカイブするアーカイブジョブを作成する。	p.1395の「 Archiving Option のアーカイブジョブの作成について 」を参照してください。
アーカイブデータのストレージデバイスとして使うディスクベースのボルトストアを作成する。	p.1406の「 Archiving Option でのボルトストアについて 」を参照してください。
アーカイブから個々の項目をリストアする。	p.1429の「 アーカイブからの項目のリストアについて 」を参照してください。
アーカイブから個々の項目を削除する。	p.1436の「 アーカイブからの項目の削除について 」を参照してください。
アーカイブから期限切れのアーカイブデータを自動的に削除してディスク領域を解放するか、アーカイブデータがアーカイブから決して削除されないようにする。	p.1454の「 アーカイブからの保持期間が終了したアーカイブ項目の削除の防止 」を参照してください。
Archiving Option コンポーネントをバックアップする。これらのコンポーネントには、ボルトストア、ボルトストアパーティション、アーカイブ、データベース、インデックスの場所が含まれます。	p.1439の「 Archiving Option コンポーネントのバックアップについて 」を参照してください。
Archiving Option コンポーネントをリストアする。これらのコンポーネントには、ボルトストア、ボルトストアパーティション、アーカイブ、データベース、インデックスの場所が含まれます。	p.1445の「 Archiving Option コンポーネントのリストア 」を参照してください。
アーカイブの権限をメールボックスの権限、共有とフォルダの権限に同期させる。	p.1454の「 アーカイブの権限と設定の同期について 」を参照してください。
エンドユーザーがアーカイブファイルを自分でリカバリできるように Backup Exec Retrieve をインストールする。	p.847の「 Backup Exec Retrieve について 」を参照してください。 p.1393の「 Archiving Option のエンドユーザーが Backup Exec Retrieve の使用によってアーカイブデータを取得する方法 」を参照してください。

p.1393の「[Archiving Option の推奨事項](#)」を参照してください。

Archiving Option のアーカイブジョブに含まれないデータの種類

Archiving Option のアーカイブジョブには一部の種類のデータが含まれません。

表 N-5 アーカイブジョブに含まれないデータの種類

Archiving Option	データの種類
File System Archiving Option	次の種類のデータはファイルシステムのアーカイブジョブに含まれません: <ul style="list-style-type: none">■ ハードリンク■ 代替ストリーム付きのファイル■ 再解析ポイント■ スパースファイル■ Microsoft 分散ファイルシステムレプリケーション (DFSR) 共有、システムフォルダ、またはごみ箱のファイル■ 暗号化された属性、非表示の属性またはシステム属性が含まれているファイル■ マウントポイントディレクトリにあるファイル マウントポイントターゲットのルートを共有して、アーカイブ用に選択できます。
Exchange Mailbox Archiving Option	次の種類のデータは Exchange メールボックスのアーカイブジョブに含まれません: <ul style="list-style-type: none">■ 保留中の事前通知があるメールメッセージ。■ アドレス帳のエントリやカレンダー項目などのメールメッセージ以外の Exchange 項目。■ Exchange 管理対象フォルダ、ジャーナルメールボックス、またはパブリックフォルダのメールメッセージ。

監査ログの Archiving Option 操作エントリについて

監査ログは Backup Exec で実行された操作についての情報を提供します。

次に対するアーカイブ操作についての情報を表示できます。

- ボルトストア
- ボルトストアパーティション
- アーカイブの設定
- 保持カテゴリ

p.192 の「[監査ログについて](#)」を参照してください。

Archiving Option のエンドユーザーが Backup Exec Retrieve の使用によってアーカイブデータを取得する方法

エンドユーザーは Backup Exec Retrieve の使用によってアーカイブ項目を取得できません。Backup Exec Retrieve ではオンラインヘルプシステムが提供されています。

エンドユーザーは Backup Exec Retrieve から次を実行できます：

- アーカイブ項目の検索。
- 最近のアーカイブ項目の表示。
- アーカイブ項目の削除。

Backup Exec Retrieve をインストールして設定すると、Backup Exec はアーカイブされたフォルダまたはメールボックスから Backup Exec Retrieve URL へのリンクを作成しません。

Backup Exec Retrieve URL へのリンクは次の表に示されているようにエンドユーザーに表示されます：

表 N-6 Backup Exec Retrieve へのリンクがエンドユーザーに表示される場所

オプション	Backup Exec Retrieve のリンク
Backup Exec File System Archiving Option	Backup Exec Retrieve へのリンクが、ファイルのアーカイブ元のすべてのフォルダに表示されます。
Backup Exec Exchange Mailbox Archiving Option	Backup Exec Retrieve へのリンクが、メールメッセージのアーカイブ元の各メールボックスに表示されます。

Backup Exec Retrieve を無効にすると、アーカイブされたフォルダとメールボックスの既存のリンクがすべて削除されます。

p.860 の「[Backup Exec Retrieve のデフォルトオプション](#)」を参照してください。

エンドユーザーのアクセス制御は次の権限に基づいています：

- ファイルシステムデータの共有権限とファイルシステム権限。
- Exchange メールボックスのメールボックス権限とフォルダ権限。

p.847 の「[Backup Exec Retrieve について](#)」を参照してください。

Archiving Option の推奨事項

次に、Archiving Option を使うときの推奨事項を示します：

- **Backup Exec データベースと Archiving Option データベースをホストする SQL Server** インスタンスのデフォルトのフル (完全) 復旧モデルを使ってください。SQL Server で作成されるすべての Archiving Option データベースはフル (完全) 復旧モデルからも作成されます。
- バックアップされたデータをアーカイブしたい各サーバーに対して 1 つのアーカイブジョブのみを作成します。
- 同じファイルサーバーまたは **Exchange Server** からファイルまたはメールボックスをアーカイブする場合は異なるメディアサーバーを使わないでください。
- 完全バックアップとその関連の増分および差分バックアップで同じ選択リストが使われるようにバックアップジョブを設定します。
- バックアップ時間帯の範囲外でアーカイブジョブを実行します。つまり、バックアップジョブを実行すると同時にアーカイブジョブを実行しないでください。
- メールボックスまたはフォルダなどの少量のデータのアーカイブをまず考慮します。最初のアーカイブジョブを実行するときは、すべてのバックアップデータがアーカイブ可能になる場合があります。一定の期間が経過すると、アーカイブ可能なデータの量は減り、予測可能な量になります。
- 管理共有ではなくエンドユーザーがアクセスできるファイルシステム共有を選択してアーカイブします。その後、エンドユーザーは **Backup Exec Retrieve** の使用によって自身のデータを取り込むことができます。
- 選択項目が 1 つのアーカイブジョブのみに含まれていることを確認します。バックアップジョブとは異なり、アーカイブジョブでは同じ選択項目を共有できません。
- 選択項目のすべてのサブディレクトリが 1 つのアーカイブジョブのみに含まれていることを確認します。
- システムドライブをアーカイブしないでください。Archiving Option は、システムファイルをアーカイブしません。
- ディレクトリデータベースを含む複数の Archiving Option コンポーネントをリストアする場合は、ディレクトリデータベースを最初にリストアする個別のジョブを使ってください。それから、リストアする残りの Archiving Option コンポーネントすべてに対する 1 つのジョブを作成してください。
- データベースをリストアするために複数のバックアップセットをリストアする場合は、単一のリストアジョブを使って、データベースを使用可能な状態にしておいてください。
- ハードウェアエラーのために新しいサーバーに Archiving Option コンポーネントのリストア先を変更する場合は、ディレクトリデータベースのリストア先を最初に変更してください。データベースのリストア先を変更する個別のジョブを作成してください。ディレクトリデータベースのリストア先変更が完了したら、Backup Exec ユーティリティと呼ばれる個別のプログラムで一部の追加タスクを実行する必要があります。Backup Exec ユーティリティのタスクは、コンポーネントの新しい場所でディレクトリデータベースを

更新します。他の Archiving Option コンポーネントのリストア先を変更する前に、Backup Exec ユーティリティタスクを実行する必要があります。

Archiving Option のアーカイブジョブの作成について

アーカイブジョブのプロパティのアーカイブオプションを設定して、カスタマイズされたアーカイブジョブを作成できます。Backup Exec のインストール時に設定されるデフォルト設定を使うこともできます。

特定の種類のデータはアーカイブジョブに含まれません。

p.1392 の「[Archiving Option のアーカイブジョブに含まれないデータの種類](#)」を参照してください。

メモ: データはアーカイブの前にバックアップしなければなりません。

アーカイブジョブを実行する前に次の処理を実行する必要があります:

- ボルトストアを作成します。
ボルトストアは、ジョブを作成するとき、またはアーカイブジョブを実行する前はいつでも作成できます。
p.1407 の「[Archiving Option でのボルトストアの作成](#)」を参照してください。
 - アーカイブしたいファイルシステムサーバーと Exchange Server にアクセスするための適切な権限が Backup Exec サービスアカウントにあることを確認します。
p.98 の「[Backup Exec サービスアカウントについて](#)」を参照してください。
- p.1395 の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。
- p.1455 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。
- p.1393 の「[Archiving Option の推奨事項](#)」を参照してください。
- p.1392 の「[Archiving Option のアーカイブジョブに含まれないデータの種類](#)」を参照してください。

ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成

使いたいプロパティを設定することによってアーカイブジョブを作成します。

p.1395 の「[Archiving Option のアーカイブジョブの作成について](#)」を参照してください。

ジョブのプロパティの設定によって Archiving Option アーカイブジョブを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[アーカイブタスク]の下にある[新規アーカイブジョブ]をクリックします。
- 3 タスクペインの[ソース]で、次のいずれかまたは両方を実行します:

アーカイブするファイルシステムデータを選択する場合 次に示す順序で操作を実行します。

- [ファイルシステム選択]をクリックします。
- [すべての共有とフォルダに同じアーカイブの設定]をクリックします。
- Backup Exec でアーカイブ可能なデータを検索するフォルダを選択します。

異なるアーカイブ設定を適用したい特定の共有とフォルダを選択する場合 次に示す順序で操作を実行します。

- [ファイルシステム選択]をクリックします。
- [特定の共有とフォルダに異なるアーカイブの設定]をクリックします。

p.1420の「アーカイブジョブのためのファイルシステムの共有とフォルダの選択項目への異なるアーカイブ設定の適用」を参照してください。

アーカイブするExchangeメールボックスを選択する場合 [Exchange 選択]をクリックし、次に適切なExchange Serverを選択します。

p.1399の「アーカイブジョブの[Exchange 選択]オプション」を参照してください。

- 4 タスクペインの[宛先]の下にある[ボルトストア]をクリックします。
- 5 必要なオプションを選択します。
p.1400の「アーカイブジョブの[ボルトストア]オプション」を参照してください。
- 6 タスクペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。
- 7 必要なオプションを選択します。
p.1401の「アーカイブジョブの[一般]オプション」を参照してください。

8 次のいずれかを実行します。

ファイルシステムの選択項目をアーカイブする場合	タスクペインの[設定]の下にある[ファイルシステム]をクリックし、必要なオプションを設定します。
-------------------------	--

p.1402の「[アーカイブジョブの\[ファイルシステム\]オプション](#)」を参照してください。

Exchange の選択項目をアーカイブする場合	タスクペインの[設定]の下にある[Exchange]をクリックし、必要なオプションを設定します。
--------------------------	--

p.1404の「[アーカイブジョブの\[Exchange\]オプション](#)」を参照してください。

9 タスクペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。

10 必要なオプションを選択します。

p.670の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

11 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する場合	[今すぐ実行]をクリックします。
---------------	------------------

スケジュールに関するオプションを設定する場合	タスクペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
------------------------	-------------------------------------

p.344の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

アーカイブジョブのファイルシステムの選択項目

Backup Exec でアーカイブするデータを検索したいフォルダまたは共有を選択できます。すべての選択項目に同じアーカイブ設定を適用するか、または異なる選択項目に異なるアーカイブ設定を適用できます。

p.1395の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

表 N-7 アーカイブジョブのファイルシステムの選択項目

項目	説明
同じアーカイブの設定	<p>選択したアーカイブ可能なすべてのファイルとフォルダに同じ保持カテゴリとアーカイブルールを適用できます。</p> <p>このオプションは次の操作を実行します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ アーカイブ可能なすべてのデータを同じ時間にわたって保持します。 ■ アーカイブ可能なすべてのデータをアーカイブジョブに含めるかアーカイブジョブから除外するために同じルールを使います。 <p>Backup Exec でアーカイブするデータを検出したいファイルとフォルダを選択した後で、アーカイブの設定を作成します。</p> <p>p.1416の「Archiving Option でのアーカイブの設定について」を参照してください。</p>
特定のフォルダの異なるアーカイブの設定	<p>選択した共有またはフォルダ内のアーカイブ可能なファイルに、異なる保持カテゴリとルールを適用できます。</p> <p>Backup Exec でアーカイブするデータを検出したい共有とフォルダを選択した後で、アーカイブの設定を作成します。</p> <p>p.1398の「アーカイブジョブの[共有およびフォルダ選択]オプション」を参照してください。</p>
管理共有を表示する	<p>Backup Exec でアーカイブするデータを検出したいファイルとフォルダを選択できる管理共有を表示します。管理共有からファイルとフォルダを選択した場合、エンドユーザーは自身のファイルをリストアするために Backup Exec Retrieve を使うことができません。</p> <p>p.1393の「Archiving Option のエンドユーザーが Backup Exec Retrieve の使用によってアーカイブデータを取得する方法」を参照してください。</p>

アーカイブジョブの[共有およびフォルダ選択]オプション

データをアーカイブしたいファイルシステムの共有またはフォルダを選択できます。選択項目ごとに、異なるアーカイブの設定を適用できます。

p.1420の「[アーカイブジョブのためのファイルシステムの共有とフォルダの選択項目への異なるアーカイブ設定の適用](#)」を参照してください。

表 N-8 [共有およびフォルダ選択]オプション

項目	説明
共有およびフォルダ選択	アーカイブジョブに含めるかアーカイブジョブから除外したい共有の選択項目とフォルダの選択項目を表示します。
種類	次のいずれかの種類を表示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ インクルード Backup Exec はアーカイブジョブに含めるアーカイブ可能なデータの共有の選択項目またはフォルダの選択項目を検索します。 ■ エクスクルード Backup Exec はアーカイブジョブから除外するアーカイブ可能なデータの共有の選択項目またはフォルダの選択項目を検索します。
設定	この共有の選択項目またはフォルダの選択項目に適用したいアーカイブ設定の名前を表示します。 <p>p.1416の「Archiving Option でのアーカイブの設定について」を参照してください。</p>
インクルード/エクスクルード	アーカイブジョブに含めるかアーカイブジョブから除外したい共有またはフォルダを選択できません。
選択を削除	選択リストから共有またはフォルダを削除できます。
設定の指定	特定の共有とフォルダの選択項目に適用する保持カテゴリとアーカイブルールを選択できます。 <p>p.1416の「Archiving Option でのアーカイブの設定について」を参照してください。</p>

アーカイブジョブの[Exchange 選択]オプション

データをアーカイブする Exchange Server を選択できます。

アーカイブしたい Exchange Server がリストに表示されない場合は、次の項目が正しく設定されていることを確認してください:

- Exchange Server 用の Backup Exec Agent for Microsoft Exchange Servers ライセンスキーがメディアサーバーに入力されている。
p.164 の「[ライセンス情報の表示](#)」を参照してください。
 - Exchange Server にインストールされている Remote Agent for Windows Systems がメディアサーバーで公開されている。
p.1902 の「[メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について](#)」を参照してください。
- p.1375 の「[Archiving Option の必要条件](#)」を参照してください。

アーカイブジョブの[システムメールボックスの入力]オプション

Backup Exec が Exchange Server にログオンするときに排他的に使うメールボックスの名前を入力できます。

次の形式を使って名前を入力してください:

SMTP: SystemMailbox@domain.com

p.1375 の「[Archiving Option の必要条件](#)」を参照してください。

アーカイブジョブの[ボルトストア]オプション

新しいアーカイブジョブを作成するとき、Backup Exec がアーカイブデータを保存するボルトストアを割り当てる必要があります。

p.1407 の「[Archiving Option でのボルトストアの作成](#)」を参照してください。

表 N-9 アーカイブジョブの[ボルトストア]オプション

項目	説明
サーバー	ジョブで選択されているサーバーの名前を表示します。
ボルトストア	Backup Exec がアーカイブデータを保存するボルトストアを表示します。 p.1406 の「 Archiving Option でのボルトストアについて 」を参照してください。 ボルトストアが割り当てられていなければボルトストアをサーバーに割り当てる必要があります。

項目	説明
ボルトストアの指定	<p>利用可能なボルトストアを表示するか、または新しいボルトストアを作成できます。</p> <p>p.1410の「ボルトストアの選択項目」を参照してください。</p> <p>割り当て済みのボルトストアを変更すると、その変更はボルトストアを再割り当てした後にアーカイブするメールボックスまたは共有のみに反映されます。</p> <p>以前に割り当て済みのボルトストアにすでにアーカイブがある共有およびメールボックスは、引き続きその同じアーカイブにアーカイブされます。</p>

アーカイブジョブの[一般]オプション

アーカイブジョブの[一般]オプションを選択できます。

p.1395の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

表 N-10 **アーカイブジョブの[一般]オプション**

項目	説明
ジョブ名	アーカイブジョブの名前を表示します。
ジョブの優先度	<p>このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。</p> <p>p.183の「ジョブの優先度について」を参照してください。</p>

項目	説明
暗号化されたバックアップデータからのアーカイブ	<p>Backup Exec は暗号化されたバックアップセットからデータをアーカイブできます。アーカイブデータは解読されたデータとしてボルトストアに保存されます。バックアップセットのデータは暗号化されたままになります。</p> <p>アーカイブジョブの間にバックアップセットを解読するのに共有暗号化キーのみを使うことができます。所有者専用キーが使われると、バックアップセットのアーカイブ可能な項目はアーカイブされません。</p> <p>メモ: このオプションは、File System Archiving Option のみに適用されます。</p> <p>p.401 の「所有者専用キーおよび共有キーの暗号化について」を参照してください。</p>
次の期間に作成されたバックアップデータのアーカイブ	<p>Backup Exec は指定の日数が経過したバックアップセットのみからデータをアーカイブできます。</p> <p>デフォルトの日数は 30 です。</p> <p>このオプションは、Backup Exec をアーカイブ可能なデータを検出する関連のバックアップセットに制限するために使います。</p> <p>メモ: Backup Exec は、指定されたサーバーのバックアップセットで、アーカイブするデータを検索します。バックアップジョブで同じ選択リストを使うと、Backup Exec は最新の完全バックアップおよび後続の増分または差分バックアップからデータをアーカイブします。</p>

アーカイブジョブの [ファイルシステム] オプション

ファイルシステムのアーカイブジョブのオプションを選択できます。

p.1395 の「ジョブのプロパティの設定による **Archiving Option** アーカイブジョブの作成」を参照してください。

表 N-11 アーカイブジョブの[ファイルシステム]オプション

項目	説明
テープデバイス上のバックアップデータからのアーカイブを許可する	<p>Backup Exec はテープにあるバックアップセットからデータをアーカイブできます。</p> <p>アーカイブしたいバックアップデータを含んでいるテープが利用可能でなければなりません。メディアサーバーがテープドライブまたはロボットドライブラリスロットのテープにアクセスできる必要があります。さもなければ、アーカイブジョブは例外処理がある状態で完了します。</p>
保持カテゴリ	<p>アーカイブジョブでファイルシステムの選択項目に適用される保持カテゴリを表示します。保持カテゴリでアーカイブ項目を保持する期間を指定します。</p>
新規	<p>新しい保持カテゴリを作成するための情報を表示します。</p> <p>p.1420の「保持カテゴリのプロパティ」を参照してください。</p>
ルール	<p>指定するルールの名前を表示します。</p>
種類	<p>ルールによって指定データがアーカイブジョブに含まれるか、アーカイブジョブから除外されるかを示します。</p>
新規	<p>ファイルシステムのアーカイブ設定のルールリストに追加する新しいアーカイブルールを作成できます。</p> <p>p.1404の「File System Archiving Option のアーカイブルール」を参照してください。</p>
編集	<p>既存のアーカイブルールを編集できます。</p>
削除	<p>ファイルシステムのアーカイブ設定のルールリストからアーカイブルールを削除します。</p>
上に移動	<p>ルールのリストでルールを上に移動します。項目は、基準を満たす最初のルールに従ってアーカイブされます。リスト内の最上位のルールが最初に適用されるルールです。</p>
下に移動	<p>ルールのリストでルールを下に移動します。</p>

File System Archiving Option のアーカイブルール

アーカイブジョブで含めるまたは除外するデータの性質を指定するルールを設定できません。

表 N-12 File System Archiving Option のルールのオプション

項目	説明
アーカイブに含める	選択した必要条件を満たすファイルがアーカイブジョブに含まれるように指定します。デフォルトで、このオプションが選択されています。
アーカイブから除外する	選択した必要条件を満たすファイルがアーカイブジョブから除外されるように指定します。
次の種類のファイル	アーカイブジョブに含めるか、またはアーカイブジョブから除外するファイルの種類を指定します。自分自身のルールを入力するか、または事前定義済みのルールを使うことができます。
次の期間にアクセスされていないファイル	期間(日数)を指定し、その期間アクセスされていないファイルを含めるか除外します。デフォルトでは 30 日間アクセスされなかったファイルをアーカイブジョブに含めます。
次の期間に修正されていないファイル	期間(日数)を指定し、その期間修正されていないファイルを含めるか除外します。
次の期間に作成されていないファイル	期間(日数)を指定し、その期間に作成されていないファイルを含めるか除外します。
ファイルサイズ	指定のサイズ以上または以下のファイルを含めるか除外します。デフォルトでは 10 MB 以上のファイルをアーカイブジョブに含めます。

アーカイブジョブの [Exchange] オプション

Exchange メールボックスのアーカイブジョブを設定できます。

p.1395 の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

表 N-13 **アーカイブジョブの [Exchange] オプション**

項目	説明
Exchange Server 名	アーカイブしたいメールボックスの選択項目を含んでいる Exchange Server の名前を表示します。
システムメールボックス	<p>Backup Exec がログオンするための Exchange Server 上のシステムメールボックスの名前を表示します。</p> <p>システムメールボックスが割り当て済みでなければ、割り当てる必要があります。</p> <p>アーカイブ用のメールボックスを選択したい各 Exchange Server 上で Backup Exec によって排他的に使われるようにメールボックスを設定する必要があります。</p> <p>p.1380の「Archiving Option での Backup Exec サービスアカウントへの Exchange Server に対する権限の付与について」を参照してください。</p>
システムメールボックスの指定	<p>Exchange Server 上で Backup Exec によって排他的に使われるシステムメールボックスを割り当てることができます。</p> <p>p.1400の「アーカイブジョブの [システムメールボックスの入力] オプション」を参照してください。</p>
ドメインを選択する	選択できるドメインを表示します。
メールボックスグループ	<p>このジョブがアーカイブする選択したドメイン内のメールボックスグループの名前を表示します。</p> <p>p.1422の「アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて」を参照してください。</p> <p>メールボックスグループが表示されなければ、1つを作成する必要があります。</p>
新規	<p>アーカイブジョブに追加するメールボックスグループを作成できます。</p> <p>p.1423の「メールボックスグループのオプション」を参照してください。</p>

項目	説明
編集	<p>選択したメールボックスグループを編集できます。</p> <p>p.1423の「メールボックスグループのオプション」を参照してください。</p>
削除	<p>アーカイブするメールボックスグループのリストから選択したメールボックスグループを削除します。</p>
上に移動	<p>メールボックスグループのリスト内のメールボックスグループを上に移動します。</p> <p>アーカイブの設定は、メールボックスグループがリストされた順序でメールボックスグループに適用されます。複数のグループに属するメールボックスは、属しているグループのうちの最上位のグループのアーカイブ設定に従ってアーカイブされます。</p> <p>p.1422の「アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて」を参照してください。</p>
下に移動	<p>リスト内の選択したメールボックスグループを下に移動します。</p>

Archiving Option でのボルトストアについて

ボルトストアは Backup Exec が 1 つのサーバーからアーカイブするアーカイブデータのためのディスクベースのコンテナです。アーカイブジョブを作成するとき、アーカイブデータの送信先デバイスとしてボルトストアを選択します。ボルトストアはアーカイブ項目が保存される物理的な場所であるボルトストアパーティションを 1 つ以上含んでいます。ディスク領域がさらに必要な場合は、ボルトストアに追加のボルトストアパーティションを作成できます。

関連付けされたデータベースが各ボルトストアにあります。このデータベースはボルトストアのアーカイブについての情報と各アーカイブに保存されているすべての項目を保持します。たとえば、項目がアーカイブされると、ボルトストアのデータベースはこの情報で更新されます。単一インスタンス記憶域関連の情報はすべてのボルトストアのフィンガープリントデータベースに格納されます。

次のボルトストアのプロパティで、アーカイブ項目の削除を管理できます:

- 項目を、アーカイブの直後、またはボルトストアのバックアップ直後にリソース内の元の場所から削除します。
p.1438の「元の場所からのアーカイブデータの削除について」を参照してください。

- ボルトストア内の特定のアーカイブから保持期間が終了したアーカイブ項目を削除します。

p.1454の「[アーカイブからの保持期間が終了したアーカイブ項目の削除の防止](#)」を参照してください。

他の Archiving Option コンポーネントとともにボルトストアとそれに関連するデータベースをバックアップできます。

p.1455の「[アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について](#)」を参照してください。

p.1439の「[Archiving Option コンポーネントのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1407の「[Archiving Option でのボルトストアの作成](#)」を参照してください。

p.1408の「[ボルトストアのプロパティの編集または表示](#)」を参照してください。

p.1412の「[Archiving Option でのボルトストアパーティションについて](#)」を参照してください。

Archiving Option でのボルトストアの作成

Backup Exec がアーカイブジョブからのデータを保存するボルトストアを作成できます。

p.1406の「[Archiving Option でのボルトストアについて](#)」を参照してください。

Archiving Option でボルトストアを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 3 [Archiving Option]の下で、[ボルトストア]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。

p.1407の「[\[新規ボルトストア\]アオプション](#)」を参照してください。

[新規ボルトストア]アオプション

新しいボルトストアを作成できます。

p.1407の「[Archiving Option でのボルトストアの作成](#)」を参照してください。

表 N-14 [新規ボルトストア]オプション

項目	説明
名前	<p>Backup Exec がアーカイブデータを保存するボルトストアの名前を指定できます。</p> <p>メモ: すでに[FingerPrint DB]または[All Partitions]のような Archiving Option コンポーネントで使用されている同じ名前をボルトストアに付けないでください。バックアップ選択項目を作成するときに別の Archiving Option コンポーネントと同じ名前のボルトストアによりエラーが発生する可能性があります。バックアップジョブまたはリストアジョブも失敗する可能性があります。</p>
説明	<p>ボルトストアの説明を指定できます。このフィールドを編集して、説明を変更できます。</p>
パス	<p>Backup Exec が自動的に最初のボルトストアパーティションを作成するパス名を指定できます。</p>
アーカイブ直後	<p>項目がボルトストアにアーカイブされた後に元の場所からアーカイブ項目を削除します。</p> <p>p.1438の「元の場所からのアーカイブデータの削除について」を参照してください。</p>
ボルトストアバックアップ後	<p>ボルトストアがバックアップされ次のアーカイブジョブが実行された後にアーカイブ項目を元の場所から削除します。</p> <p>p.1438の「元の場所からのアーカイブデータの削除について」を参照してください。</p>

ボルトストアのプロパティの編集または表示

ボルトストアのプロパティを編集するか、または表示できます。

p.1406 の「[Archiving Option でのボルトストアについて](#)」を参照してください。

ボルトストアのプロパティを編集または表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 プロパティを編集したいボルトストアを選択します。

- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 必要に応じて情報を編集します。
p.1409 の「[ボルトストアのプロパティ](#)」を参照してください。

ボルトストアのプロパティ

ボルトストアのプロパティを編集できます。

p.1408 の「[ボルトストアのプロパティの編集または表示](#)」を参照してください。

表 N-15 **ボルトストアのプロパティ**

項目	説明
名前	<p>Backup Exec がアーカイブデータを保存するボルトストアの名前を表示します。このフィールドを編集して、名前を変更できます。</p> <p>メモ: すでに[FingerPrint DB]または[All Partitions]のような Archiving Option コンポーネントで使用されている同じ名前をボルトストアに付けないでください。バックアップ選択項目を作成するときに別の Archiving Option コンポーネントと同じ名前のボルトストアによりエラーが発生する可能性があります。バックアップジョブまたはリストアジョブも失敗する可能性があります。</p>
説明	ボルトストアの説明を表示します。このフィールドを編集して、説明を変更できます。
データベース名	このボルトストアと関連付けられているデータベースの名前を表示します。
状態	<p>次の状態を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 利用可能 アーカイブジョブでこのボルトストアにデータを送信できます。 ■ 削除中です ボルトストアは削除中です。アーカイブジョブでこのボルトストアにデータを送信できません。 ■ バックアップモード バックアップまたはリストアジョブがボルトストアに対して実行されています。

項目	説明
項目削除モード	<p>アーカイブ項目をいつ元の場所から削除するかを指定します。</p> <p>アーカイブした直後に項目を削除するか、またはボルトストアがバックアップされた後に元の項目を削除するか選ぶことができます。アーカイブ直後に項目を削除すると、その項目はアーカイブジョブが正常に完了した後に元の場所から削除されます。</p> <p>p.1438の「元の場所からのアーカイブデータの削除について」を参照してください。</p>
アーカイブ数	ボルトストアに含まれているアーカイブの数を表示します。
合計サイズ	ボルトにアーカイブされているすべての項目の合計サイズを表示します。

ボルトストアの選択項目

アーカイブジョブの宛先用にボルトストアを選択できます。

p.1395の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

表 N-16 ボルトストアの選択項目

項目	説明
ボルトストア	<p>サーバーに割り当てることができる利用可能なボルトストアを表示します。Backup Exec は選択したボルトストア内のサーバーからアーカイブされるデータを保存します。</p> <p>割り当て済みのボルトストアを変更すると、その変更はボルトストアを再割り当てした後にアーカイブするメールボックスまたは共有のみに反映されます。</p> <p>以前に割り当て済みのボルトストアにすでにアーカイブがある共有およびメールボックスは、引き続きその同じアーカイブにアーカイブされます。</p>

項目	説明
新規	<p>サーバーに割り当てることができる新しいボルトストアを作成できます。</p> <p>p.1409の「ボルトストアのプロパティ」を参照してください。</p>

Archiving Option のボルトストアの削除について

次のいずれかの条件が当てはまればボルトストアを削除できます:

- アーカイブの選択を行ったサーバーに割り当てられていない。
- 唯一のボルトストアであり、すべてのアーカイブジョブを削除している。

ボルトストアを削除すると、処理を取り消したり元に戻したりすることはできません。

ボルトストアを削除すれば、そのボルトストアのすべてのパーティション、アーカイブ、アーカイブ項目もまた削除されます。削除したいボルトストアに割り当てられていたすべてのサーバーに別のボルトストアを再割り当てする必要があります。

p.1411の「[ボルトストアの削除](#)」を参照してください。

ボルトストアの削除

Backup Exec からボルトストアを削除できます。

p.1411の「[Archiving Option のボルトストアの削除について](#)」を参照してください。

ボルトストアを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 削除するボルトストアを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 4 他のボルトストアが存在しない場合は、次のいずれかを実行する必要があります:
 - このボルトストアを削除する前に既存のすべてのアーカイブジョブを削除します。
 p.561の「[スケジュール済みジョブの削除](#)」を参照してください。
 - 新しいボルトストアを作成し、影響を受けたすべてのアーカイブ済みサーバーに割り当てて、選択したボルトストアを削除します。
 p.1407の「[Archiving Option でのボルトストアの作成](#)」を参照してください。

Archiving Option でのボルトストアパーティションについて

ボルトストアパーティションはアーカイブ項目が保存される物理的な位置を表します。ボルトストアには 1 つ以上のボルトストアパーティションを含めることができます。デフォルトでは、Backup Exec は各ボルトストア内に 1 つのボルトストアパーティションを作成します。

ボルトストアのデータが増えると同時に、追加領域を提供するためにより多くのボルトストアパーティションを作成できます。ボルトストアパーティションの場所としてローカルドライブまたはネットワーク共有を指定できます。別のボルトストアパーティションのパス内のサブディレクトリはパスとして指定できません。

1 つのボルトストアは多くのボルトストアパーティションを含むことができますが一度に 1 つのパーティションのみがオープンになります。データはアーカイブされると同時に、オープンパーティションに保存されます。パーティションのプロパティを編集して、ボルトストアパーティションをオープンまたはクローズとして指定できます。

クローズパーティションからアーカイブ項目をリストアできるだけでなく、クローズパーティションにあるアーカイブ項目を削除できます。

Backup Exec は保持期間が終了したアーカイブ項目を削除するためにボルトストアパーティションを毎日検索します。この日次操作を実行する時間を指定できます。

p.1454 の「[アーカイブからの保持期間が終了したアーカイブ項目の削除の防止](#)」を参照してください。

p.1412 の「[ボルトストアパーティションの作成](#)」を参照してください。

p.1413 の「[ボルトストアパーティションのプロパティの編集](#)」を参照してください。

p.1406 の「[Archiving Option でのボルトストアについて](#)」を参照してください。

p.1414 の「[Archiving Option でのアーカイブについて](#)」を参照してください。

ボルトストアパーティションの作成

新しいボルトストアパーティションを作成できます。

p.1412 の「[Archiving Option でのボルトストアパーティションについて](#)」を参照してください。

ボルトストアパーティションを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ボルトストアを展開します。

- 3 [パーティション]を右クリックし、ショートカットメニューで[新規ボルトストアパーティション]をクリックします。
- 4 必要な情報を入力します。
 p.1413 の「[ボルトストアパーティションのプロパティ](#)」を参照してください。

ボルトストアパーティションのプロパティの編集

ボルトストアパーティションの状態をオープンまたはクローズに変更できます。ボルトストアパーティションの名前と説明を編集することもできます。

p.1412 の「[Archiving Option でのボルトストアパーティションについて](#)」を参照してください。

ボルトストアパーティションのプロパティを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 編集したいボルトストアパーティションを含んでいるボルトストアを展開します。
- 3 右ペインで、編集したいボルトストアパーティションを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 必要な情報を編集します。

p.1413 の「[ボルトストアパーティションのプロパティ](#)」を参照してください。

ボルトストアパーティションのプロパティ

ボルトストアパーティションはアーカイブ項目が保存される物理的な位置を表します。新しいボルトストアパーティションを作成するか、または既存のボルトストアパーティションの状態を変更できます。

p.1412 の「[ボルトストアパーティションの作成](#)」を参照してください。

p.1408 の「[ボルトストアのプロパティの編集または表示](#)」を参照してください。

表 N-17 ボルトストアパーティションのプロパティ

項目	説明
名前	ボルトストアパーティションの名前を表示します。
説明	ボルトストアパーティションの説明を表示します。

項目	説明
場所	<p>ボルトストアパーティションが存在するパス名を表示します。</p> <p>ローカルドライブまたはネットワーク共有のパスを指定できます。別のボルトストアパーティションのパス内のサブディレクトリはパスとして指定できません。</p> <p>たとえば、C:\vault store 1 上にボルトストアパーティションを作成できますが、C:\vault store 1\vault store 2 上に別のボルトストアパーティションを作成することはできません。</p> <p>Backup Exec サービスアカウントにパスに対する完全な権限があることを確認してください。</p> <p>p.98 の「Backup Exec サービスアカウントについて」を参照してください。</p>
状態	<p>次のいずれかの状態を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オープン このボルトストアパーティションに新しいアーカイブデータが保存されます。 ■ クローズ このボルトストアパーティションに新しいアーカイブデータは保存できません。 <p>p.1412 の「Archiving Option でのボルトストアパーティションについて」を参照してください。</p>

Archiving Option でのアーカイブについて

アーカイブはアーカイブ項目の論理グループです。アーカイブ内の項目は、項目のアーカイブ時にオープンになっているパーティションに応じて異なるボルトストアパーティションに保存されます。アーカイブファイルシステム共有にはそれぞれ専用のアーカイブがあり、アーカイブ済み Exchange メールボックスにもそれぞれ専用のアーカイブがあります。Backup Exec はアーカイブジョブを作成するときにアーカイブを作成します。

アーカイブはバックアップできません。ボルトストアパーティションのみをバックアップできます。

p.1415 の「[アーカイブのプロパティの編集](#)」を参照してください。

p.1416 の「[アーカイブの削除](#)」を参照してください。

アーカイブのプロパティの編集

アーカイブのプロパティを編集できます。

p.1414 の「[Archiving Option でのアーカイブについて](#)」を参照してください。

アーカイブのプロパティを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ボルトストアを展開して[アーカイブ]を選択します。
- 3 右ペインで、プロパティを編集するアーカイブを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。

p.1415 の「[アーカイブのプロパティ](#)」を参照してください。

アーカイブのプロパティ

アーカイブのプロパティを表示できます。保持期間が終了したアーカイブ項目を Backup Exec が自動的に削除するように設定を編集することもできます。

p.1415 の「[アーカイブのプロパティの編集](#)」を参照してください。

表 N-18 アーカイブのプロパティ

項目	説明
名前	アーカイブされているファイル共有または Exchange メールボックスの名前を表示します。
種類	次のいずれかの種類のアーカイブを表示します。 <ul style="list-style-type: none">■ ファイル共有■ Exchange メールボックス
状態	状況に応じて次のいずれかの状態を表示します。 <ul style="list-style-type: none">■ 利用可能■ 作成中です■ 削除中です
サーバー	アーカイブが保存されるサーバーの名前を表示します。

項目	説明
保持期間が終了したアーカイブ項目を自動的に削除する	<p>アーカイブの保持期間が終了したアーカイブ項目を Backup Exec で削除できます。</p> <p>Backup Exec がこれらの項目を毎日削除する時間を設定できます。</p> <p>p.1455の「アーカイブジョブのデフォルト設定の編集」を参照してください。</p> <p>アーカイブ項目を自動的にこのアーカイブから削除したくない場合は、このチェックボックスのチェックマークをはずします。</p> <p>デフォルトで、このオプションが選択されています。</p>

アーカイブの削除

アーカイブを削除できます。ただし、**Backup Exec** からアーカイブを削除すると、アーカイブ内のアーカイブデータもすべて削除されます。

p.1414 の「[Archiving Option でのアーカイブについて](#)」を参照してください。

アーカイブを削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ボルトストアを展開して[アーカイブ]を選択します。
- 3 右ペインで、削除したいアーカイブを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 5 アーカイブを削除するかどうかを尋ねるメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。

Archiving Option でのアーカイブの設定について

アーカイブの設定で、ファイルシステムの共有フォルダまたは **Exchange** メールボックスに次の基準を適用できます。

- アーカイブにデータを保つ期間を指定する保持カテゴリ。
- データがアーカイブ可能かどうかを判断するルール。

たとえば、メールボックスの選択で、6 か月より古いメールメッセージのみアーカイブされるように指定できます。

次の選択項目のためのアーカイブの設定を作成できます：

- Exchange メールボックス
- ファイルシステム共有
- 共有内のファイルシステムフォルダ

メモ: 作成するアーカイブの設定の各グループに名前を付けることができます。アーカイブジョブを作成するときにオプション[特定のフォルダの異なるアーカイブの設定]を選択したときのみアーカイブの設定に名前を付けることができます。

p.1395の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

p.1420の「[アーカイブジョブのためのファイルシステムの共有とフォルダの選択項目への異なるアーカイブ設定の適用](#)」を参照してください。

[アーカイブの設定]オプション

Backup Exec でアーカイブ可能なデータを検索するファイルシステムの共有またはフォルダに適用する設定を指定できます。

p.1420の「[アーカイブジョブのためのファイルシステムの共有とフォルダの選択項目への異なるアーカイブ設定の適用](#)」を参照してください。

表 N-19 [アーカイブの設定]オプション

項目	説明
名前	Exchange メールボックスの選択項目かファイルシステムの選択項目に適用するアーカイブの設定の名前を指定します。 他の選択項目にこれらの同じアーカイブの設定を適用できます。
保持カテゴリ	選択項目に適用する保持カテゴリの名前を指定します。
新規	新しい保持カテゴリを作成できます。 p.1420の「 保持カテゴリのプロパティ 」を参照してください。
アーカイブに含める	選択した必要条件を満たすファイルがアーカイブジョブに含まれるように指定します。デフォルトで、このオプションが選択されています。
アーカイブから除外する	選択した必要条件を満たすファイルがアーカイブジョブから除外されるように指定します。

項目	説明
次の種類のファイル	アーカイブジョブに含めるか、またはアーカイブジョブから除外するファイルの種類を指定します。自分自身のルールを入力するか、または事前定義済みのルールを使うことができます。
次の期間にアクセスされていないファイル	期間(日数)を指定し、その期間アクセスされていないファイルを含めるか除外します。デフォルトでは 30 日間アクセスされなかったファイルをアーカイブジョブに含めます。
次の期間に修正されていないファイル	期間(日数)を指定し、その期間修正されていないファイルを含めるか除外します。
次の期間に作成されていないファイル	期間(日数)を指定し、その期間に作成されていないファイルを含めるか除外します。
ファイルサイズ	指定のサイズ以上または以下のファイルを含めるか除外します。デフォルトでは 10 MB 以上のファイルをアーカイブジョブに含めます。
ルールの追加	アーカイブの設定のルールのリストにルールを追加します。このルールはファイルシステムの選択項目のアーカイブジョブを実行するときに適用します。
ルールを削除	アーカイブの設定のルールのリストからルールを削除します。
上に移動	ルールのリストでルールを上に移動します。項目は、基準を満たす最初のルールに従ってアーカイブされます。リスト内の最上位のルールが最初に適用されるルールです。
下に移動	ルールのリストでルールを下に移動します。

アーカイブ項目のための保持カテゴリについて

保持カテゴリを使って、アーカイブに項目を保持する期間を指定します。「業務用」または「個人用」などの意味のある名前を保持カテゴリに指定できます。そのカテゴリ名別に項目の有無を検索できるので、保持カテゴリによって項目の取得がもっと簡単になります。各保持カテゴリには保持期間があります。保持期間はこの保持カテゴリを使用してアーカイブされる項目をどの位保持するかを示します。

たとえば、財政データ保持と名前を付けた保持カテゴリを作成し、7年間アーカイブデータを保持するように設定できます。

保持期間は項目がアーカイブされる日から開始します。**Backup Exec** は保持期間が終了したすべての項目を削除する日次操作を実行します。特定のアーカイブ上でこの操作が実行されないようにできます。

p.1454 の「[アーカイブからの保持期間が終了したアーカイブ項目の削除の防止](#)」を参照してください。

保持カテゴリは削除できません。保持期間を含む保持カテゴリを編集できます。

保持カテゴリに行った変更は次の項目に適用されます:

- 保持カテゴリがすでに適用されているすべての項目。
- 保持カテゴリを適用する新しい項目。
p.1419 の「[保持カテゴリの編集](#)」を参照してください。

アーカイブのジョブを作成するとき必要に応じて保持カテゴリを作成できます。また、すべてのアーカイブジョブのデフォルト設定として使う保持カテゴリを指定することもできます。保持カテゴリを指定しないと、保持期間が無期限のデフォルトの保持カテゴリがアーカイブジョブに適用されます。

p.1395 の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

p.1419 の「[保持カテゴリの編集](#)」を参照してください。

p.1455 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。

保持カテゴリの編集

既存の保持カテゴリを編集できます。変更は既存のアーカイブ項目だけでなく保持カテゴリを適用する新しい項目にも適用されます。

p.1418 の「[アーカイブ項目のための保持カテゴリについて](#)」を参照してください。

保持カテゴリを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。
- 3 [デフォルトの保持カテゴリ]フィールドで、編集したい保持カテゴリを選択します。
- 4 [編集]をクリックします。
- 5 必要な情報を編集します。

p.1420 の「[保持カテゴリのプロパティ](#)」を参照してください。

- 6 [OK]をクリックします。

保持カテゴリのプロパティ

保持カテゴリを作成して、アーカイブに項目を保持する期間を指定します。

p.1418 の「[アーカイブ項目のための保持カテゴリについて](#)」を参照してください。

p.1395 の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

p.1455 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。

表 N-20 保持カテゴリのプロパティ

項目	説明
名前	保持カテゴリの名前を表示します。
説明	保持カテゴリの説明を表示します。
無期限	アーカイブに項目を無期限に保持します。保持期間は項目がアーカイブされる日から開始します。
次の期間	アーカイブに項目を指定の期間保持します。保持期間は項目がアーカイブされる日から開始します。

アーカイブジョブのためのファイルシステムの共有とフォルダの選択項目への異なるアーカイブ設定の適用

特定のファイルシステムの共有とフォルダを選択して、同じアーカイブジョブで異なるアーカイブ設定をそれらに適用できます。

p.1416 の「[Archiving Option でのアーカイブの設定について](#)」を参照してください。

アーカイブジョブのためにファイルシステムの共有とフォルダの選択項目に異なるアーカイブ設定を適用する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[アーカイブタスク]の下にある[新規アーカイブジョブ]をクリックします。
- 3 タスクペインの[ソース]の下にある[ファイルシステム選択]をクリックします。
- 4 [特定の共有とフォルダに異なるアーカイブの設定]をクリックします。
- 5 [インクルード/エクスクルード]をクリックします。

- 6 必要に応じてオプションを設定します。
 p.1421の「[アーカイブジョブの\[インクルードまたはエクスクルードの選択\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 アーカイブの設定を割り当てたい共有選択項目またはフォルダ選択項目をクリックして、[設定の指定]をクリックします。
- 9 必要に応じてオプションを設定します。
 p.1417の「[\[アーカイブの設定\]オプション](#)」を参照してください。
- 10 [OK]をクリックします。
- 11 [インクルード/エクスクルード]を再びクリックし、必要に応じて選択項目を指定します。
- 12 各共有の選択項目かフォルダの選択項目をクリックし、[設定の指定]をクリックし、適用するアーカイブの設定を作成します。
- 13 ジョブのプロパティの設定を続行してアーカイブジョブを完了します。
 p.1395の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

アーカイブジョブの[インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション

アーカイブするデータを Backup Exec で検索できるファイルシステムの共有とフォルダを含めることができます。アーカイブジョブに含めたくないファイルシステムの共有とフォルダを除外することもできます。

p.1420の「[アーカイブジョブのためのファイルシステムの共有とフォルダの選択項目への異なるアーカイブ設定の適用](#)」を参照してください。

表 N-21 [インクルードまたはエクスクルードの選択]オプション

項目	説明
アーカイブに含める	アーカイブ可能な選択項目を含めることができます。
アーカイブから除外する	アーカイブジョブから選択項目を除外できます。
すべてのリソース	アーカイブジョブに含めるかアーカイブジョブから除外するかを選択できるリソースをリストします。

項目	説明
管理共有を表示する	<p>Backup Exec でアーカイブするデータを検出したいファイルとフォルダを選択できる管理共有を表示します。管理共有からファイルとフォルダを選択した場合、エンドユーザーは自身のファイルをリストアするために Backup Exec Retrieve を使うことができません。</p> <p>p.1393の「Archiving Optionのエンドユーザーが Backup Exec Retrieve の使用によってアーカイブデータを取得する方法」を参照してください。</p>

アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて

メールボックスグループにはアーカイブしたい Exchange Server 上の選択項目が含まれています。

メールボックスグループは、同じアーカイブの設定を割り当てたいユーザーのメールボックスで構成されています。たとえば、1つのメールボックスグループに1人のユーザーを追加したり、1つのメールボックスグループに Exchange 組織ユニット全体を追加することができます。

[アーカイブジョブのプロパティ]の[Exchange]設定で、Backup Exec はリスト内の各メールボックスグループにアーカイブ設定を順次適用します。メールボックスが見つかった最初のメールボックスグループのアーカイブ設定がそのメールボックスに適用されます。

メールボックスグループの順序は重要です。リストの先頭にユーザー、グループ、配布リストの特定の選択項目があるメールボックスグループを配置してください。リストの下部には、固有性の低い選択項目を含んでいるメールボックスグループを配置します。たとえば、特定のユーザーを含んでいるメールボックスグループは、ユーザーグループを含んでいるメールボックスのグループの前にリストする必要があります。また、ユーザーグループを含んでいるメールボックスグループは、Exchange 組織ユニット全体が含まれているメールボックスの前にリストする必要があります。たとえば、正しいアーカイブの設定が複数のグループ内のユーザーに適用されるようにしたいとします。

次のメールボックスグループのサンプルをリストされている順序で配置します。

- **Managers** グループには個々のユーザーアカウントが含まれ、すべてのメッセージをアーカイブする必要があります。
- **Some Users** グループには組織ユニット内の一部のユーザーが含まれ、過去 2 か月のメッセージをアーカイブする必要があります。

- All Users グループには Exchange 組織ユニット全体が含まれ、過去 6 か月のメッセージをアーカイブする必要があります。

メールボックスグループにアーカイブする項目には次の項目を選択できます：

- 配布リスト
- ユーザーグループ
- ユーザー

メールボックスグループは、Exchange Server メールボックスのアーカイブジョブを作成するときに作成するか、または[アーカイブジョブのデフォルト設定]ダイアログボックスからいつでも作成できます。

p.1395 の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

p.1424 の「[Exchange メールボックスグループの管理](#)」を参照してください。

メールボックスグループのオプション

アーカイブジョブのために、アーカイブしたい Exchange Server 上の選択項目を含んでいるメールボックスグループを作成します。保持カテゴリを指定して、各グループのアーカイブルールを指定することもできます。

p.1422 の「[アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて](#)」を参照してください。

p.1395 の「[ジョブのプロパティの設定による Archiving Option アーカイブジョブの作成](#)」を参照してください。

表 N-22 メールボックスグループのオプション

項目	説明
メールボックスグループ名	メールボックスグループの名前を指定します。
保持カテゴリ	メールボックスグループの保持カテゴリを指定できます。 デフォルト設定は保持期間が無期限のデフォルトの保持カテゴリです。 p.1418 の「アーカイブ項目のための保持カテゴリについて」 を参照してください。
新規	新しい保持カテゴリを作成できます。 p.1420 の「保持カテゴリのプロパティ」 を参照してください。

項目	説明
経過日数	指定された時点よりも古い項目がアーカイブされることを示します。 デフォルトの設定は 1 年です。
次の値以上および経過日数	指定されたサイズよりも大きく、指定された時点よりも古い項目がアーカイブされることを示します。 他のメッセージよりも大きいメールメッセージをより多くアーカイブしてください。このオプションでは、前の[経過日数]オプションの場合よりも短い時間を指定します。 デフォルトの設定は 1 MB と 1 年です。
添付ファイルがあるメッセージのみをアーカイブする	添付ファイルが付いているメッセージがアーカイブされることを示します。 デフォルトで、このオプションが選択されています。
未読のメッセージをアーカイブする	読まれていないメッセージがアーカイブされることを示します。

Exchange メールボックスグループの管理

Exchange Mailbox Archiving Option のアーカイブジョブ用にメールボックスグループを設定して管理できます。

p.1422 の「[アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて](#)」を参照してください。

Exchange メールボックスグループを管理する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。
- 3 [メールボックスグループの管理]をクリックします。
- 4 状況に応じて必要な情報を入力します。

p.1424 の「[\[メールボックスグループの管理\]オプション](#)」を参照してください。

[メールボックスグループの管理]オプション

アーカイブジョブの選択項目を含んでいるメールボックスグループを設定または編集できます。

p.1424 の「Exchange メールボックスグループの管理」を参照してください。

表 N-23 [メールボックスグループの管理]オプション

項目	説明
ドメインを選択する	選択できるドメインを表示します。
メールボックスグループ	<p>このジョブがアーカイブする選択したドメイン内のメールボックスグループの名前を表示します。</p> <p>p.1422の「アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて」を参照してください。</p> <p>メールボックスグループがない場合は、アーカイブジョブを実行する前に作成する必要があります。</p>
新規	<p>アーカイブジョブに追加するメールボックスグループを作成できます。</p> <p>p.1423の「メールボックスグループのオプション」を参照してください。</p>
編集	<p>選択したメールボックスグループを編集できます。</p> <p>p.1423の「メールボックスグループのオプション」を参照してください。</p>
削除	<p>アーカイブするメールボックスグループのリストから選択したメールボックスグループを削除します。</p>
上に移動	<p>リスト内の選択したメールボックスグループを上に移動します。</p> <p>保持カテゴリとアーカイブルールは、メールボックスグループがリストされた順序でメールボックスグループに適用されます。複数のグループに属するメールボックスは、属しているグループのうちの最上位のグループのアーカイブ設定に従ってアーカイブされます。</p> <p>p.1422の「アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて」を参照してください。</p>
下に移動	<p>リスト内の選択したメールボックスグループを下に移動します。</p>

アーカイブ内のデータの検索について

アーカイブを検索し、そのアーカイブから削除またはリストアしたいデータを検出して選択できます。アーカイブにはアクセス制御制限がありますが、**Backup Exec** 管理コンソールから検索するときこれらの制限は適用されません。この検索ではすべてのアーカイブバージョンのデータが表示されます。

内容、保持カテゴリ、保持期間などの基準を指定できます。1つのアーカイブまたはサーバーと関連付けられているすべてのアーカイブに検索を制限できます。

p.1426 の「[アーカイブ内のデータの検索](#)」を参照してください。

アーカイブ内のデータの検索

アーカイブを検索してデータを検出できます。

p.1426 の「[アーカイブ内のデータの検索について](#)」を参照してください。

アーカイブ内のデータを検索する方法

- 1 編集メニューの[アーカイブの検索]をクリックします。
- 2 検索するアーカイブを選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。

アーカイブ内のファイルシステムデータを検索する場合

[ファイルシステム]タブで、必要な情報を入力します。

p.1427の「[ファイルシステム選択項目の\[アーカイブの検索\]オプション](#)」を参照してください。

アーカイブ内の Exchange メッセージを検索する場合

[Exchange]タブで、必要な情報を入力します。

p.1428の「[Exchange 選択項目のための\[アーカイブの検索\]オプション](#)」を参照してください。

- 4 [検索開始]をクリックします。
- 5 必要に応じて他の処理を選択します。

p.1426 の「[\[アーカイブの検索\]オプション](#)」を参照してください。

[アーカイブの検索]オプション

アーカイブにある特定の項目を検索できます。

p.1426 の「[アーカイブ内のデータの検索](#)」を参照してください。

表 N-24 [アーカイブの検索]オプション

項目	説明
アーカイブの検索	Backup Exec が項目を検索するアーカイブを指定します。
適用	検索結果ウィンドウで選択したファイルのバージョンを[リソース別の表示]タブの選択項目リストに適用します。
検索開始	指定した項目の検索を開始します。
停止	指定した項目の検索をキャンセルします。
新規検索	項目に新しい検索基準を指定できるように既存の基準をクリアします。
閉じる	[アーカイブの検索]ダイアログボックスを終了します。

ファイルシステム選択項目の[アーカイブの検索]オプション

アーカイブにあるファイルシステム項目を検索できます。

p.1426 の「[アーカイブ内のデータの検索](#)」を参照してください。

表 N-25 ファイルシステム選択項目の[アーカイブの検索]オプション

項目	説明
ファイル名	<p>このテキストと一致するファイルを検索します。すべてのファイルを検索するにはこのフィールドを空白のままにします。</p> <p>ファイルの指定には、ワイルドカードを使用することができます。疑問符 (?) を 1 文字の代わりに使用することができます。1 つのアスタリスク (*) を任意の個数の文字の代わりに使用することができます。</p> <p>たとえば、拡張子が .exe のファイルをすべて選択するには、*.exe と入力します。</p>
パス	<p>指定のパスのファイルを検索します。すべてのディレクトリを検索するにはこのフィールドを空白のままにします。</p>
ファイルの内容	<p>このテキストと一致する内容のファイルを検索します。</p>

項目	説明
ファイルサイズ	指定のサイズと一致するファイルを検索します。
修正されたファイル	指定した期間に作成または修正されたファイルを検索します。
アーカイブ済み	日付の範囲と一致するアーカイブファイルを検索します。
保持を超過	日付の範囲と一致する保持期間のファイルを検索します。
保持カテゴリ	指定した保持カテゴリ内のファイルを検索します。

Exchange 選択項目のための[アーカイブの検索]オプション

アーカイブにある Exchange 項目を検索できます。

ファイルの指定には、ワイルドカードを使用することができます。疑問符(?)を1文字の代わりに使用することができます。1つのアスタリスク(*)を任意の個数の文字の代わりに使用することができます。

p.1426の「[アーカイブ内のデータの検索](#)」を参照してください。

表 N-26 Exchange 選択項目のための[アーカイブの検索]オプション

項目	説明
件名	件名のテキストが一致するメールメッセージを検索します。
内容	内容行のテキストが一致するメールメッセージを検索します。
差出人	[差出人]フィールドのテキストが一致するメールメッセージを検索します。
宛先	[宛先]フィールドのテキストが一致するメールメッセージを検索します。
電子メールのサイズ	指定する電子メールのサイズと一致するメールメッセージを検索します。
添付ファイル	添付ファイルがあるメールメッセージを検索します。
受信済み	日付の範囲と一致する受信済みメールメッセージを検索します。

項目	説明
アーカイブ済み	日付の範囲と一致するアーカイブ済みメールメッセージを検索します。
保持を超過	日付の範囲と一致する保持期間のメールメッセージを検索します。
保持カテゴリ	指定した保持カテゴリ内のメールメッセージを検索します。

アーカイブからの項目のリストアについて

アーカイブ項目に次のリストア操作を実行できます：

- ファイルを元の場所または別のファイルサーバーにリストアします。
- メールメッセージを **Exchange** サーバーの元のメールボックスまたは別のメールボックスにリストアします。

メモ: メールボックスはメールメッセージをリストアしたいサーバーにすでに存在している必要があります。

Backup Exec Retrieve を有効にすると、エンドユーザーは **Backup Exec Retrieve** を使って自身のデータを取り込むことができます。

アーカイブは同じ項目の複数のバージョンを含むことができます。特定のバージョンの項目をリストアするには、その項目を個別に選択する必要があります。それ以外の場合、**Backup Exec** は最新バージョンの項目をリストアします。項目の修正日時を調べることによって同じファイルのバージョンを区別できます。

メモ: アーカイブデータのアクセス権限はリストアされません。

p.1429 の「[アーカイブからの項目のリストア](#)」を参照してください。

アーカイブからの項目のリストア

使いたいジョブのプロパティを選択して、アーカイブからデータをリストアできます。

p.1429 の「[アーカイブからの項目のリストアについて](#)」を参照してください。

アーカイブからデータをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[アーカイブタスク]の下にある[アーカイブからリストア]をクリックします。
- 3 アーカイブからリストアするデータを選択します。

p.1431の「[アーカイブから項目をリストアするための\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。

- 4 必要に応じて次のオプションを設定します。

データがアーカイブされたコンピュータ以外
のコンピュータにアーカイブファイルのリストア
先を変更する場合

[プロパティ]ペインの[宛先]の下で、次のい
ずれかを実行します。

- アーカイブファイルセットのリストア先を変更する場合は、[ファイルのリストア先の変更]をクリックします。

p.1434の「[アーカイブから項目をリストアするための\[ファイルのリストア先の変更\]オプション](#)」を参照してください。

- [Microsoft Exchange のリストア先の変更]をクリックします。

p.1435の「[アーカイブから項目をリストアするための \[Microsoft Exchange のリストア先の変更\]オプション](#)」を参照してください。

アーカイブからのリストアジョブの一般オプションを設定する場合

[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。

p.1432の「[アーカイブから項目をリストアするための\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

アーカイブジョブからリストアするための
Exchange データのオプションを設定する場合

[プロパティ]ペインの[設定]の下にある
[Microsoft Exchange]をクリックします。

p.1433の「[アーカイブから項目をリストアするための\[Microsoft Exchange\] オプション](#)」を参照してください。

アーカイブジョブからのリストアに使うネットワー
クインターフェースとプロトコルを設定する場合

[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネット
ワークとセキュリティ]をクリックします。

p.606の「[リストアの\[ネットワークとセキュリティ\]オプション](#)」を参照してください。

- アーカイブジョブからのリストアの実行前または実行後にコマンドを実行するように設定する場合 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[プリ/ポストコマンド]をクリックします。
p.384の「[デフォルトの\[プリ/ポストコマンド\]オプション](#)」を参照してください。
- アーカイブジョブからのリストアが完了したときの通知を設定する場合 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
p.670の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

5 次のいずれかを実行します。

- アーカイブからのリストアジョブを今すぐ実行する場合 [今すぐ実行]をクリックします。
- アーカイブからのリストアジョブを後で実行するためにスケジュールする場合 [プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。
p.344の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

アーカイブから項目をリストアするための[選択リスト]オプション

アーカイブからリストアするデータを選択できます。

p.1429の「[アーカイブからの項目のリストア](#)」を参照してください。

表 N-27 **アーカイブからのリストアジョブの[選択リスト]オプション**

項目	説明
サブディレクトリを含める	選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。
ファイルの詳細を表示する	アーカイブからリストアできるファイルの詳細を表示します。
プレビューペイン	ダイアログボックスの下部でプレビューペインを表示します。
アーカイブの検索	アーカイブからリストアするデータを選択できます。 p.1426 の「 [アーカイブの検索]オプション 」を参照してください。
リソース別の表示	アーカイブ元のリソース別にアーカイブデータを表示します。この機能は特定のコンピュータにあるファイルを検出する場合に有用です。

アーカイブから項目をリストアするための[一般]オプション

ジョブの名前と優先度を指定できます。

p.1429 の「[アーカイブからの項目のリストア](#)」を参照してください。

表 N-28 アーカイブから項目をリストアするための[一般]オプション

項目	説明
ジョブ名	ジョブのスケジュールにこのジョブを識別する名前を表示します。
ジョブの優先度	このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。 p.183の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。
常にディスク上のファイルを上書きする	アーカイブからリストアしたいファイルと同じ名前を持つリストア先ドライブ内のファイルを上書きします。リストア先デバイス上に存在するファイルよりも古いバージョンのファイルをアーカイブからリストアするときのみ、このオプションを使います。
ディスク上のファイルを上書きしない	Backup Exec がリストア先ドライブにあるファイルを、アーカイブ内の同じ名前のファイルで上書きすることを防止します。
ディスク上のファイルの方が古い場合のみ上書きする	リストア先ドライブにあるファイルがアーカイブ内のファイルよりも新しい場合に Backup Exec がそれらのファイルを上書きすることを防ぎます。 デフォルトで、このオプションが選択されています。

項目	説明
ツリー構造を保持する	<p>ファイルを元のディレクトリ構造を変更せずにアーカイブからリストアします。</p> <p>デフォルトで、このオプションが選択されています。</p> <p>このオプションをオフにすると、サブディレクトリ内のデータを含むすべてのデータがアーカイブから[宛先]ダイアログボックスで指定したパスにリストアされます。</p> <p>アーカイブから複数のサブディレクトリまたは個々のファイルをリストアするときは、このオプションをクリアできます。アーカイブから共有全体をリストアする場合は、このオプションをクリアしないでください。</p>

アーカイブから項目をリストアするための [Microsoft Exchange] オプション

アーカイブからメールメッセージをリストアするとき、既存のメッセージとフォルダに対してリストアできます。

メモ: リストア先のメールボックスはすでに存在する必要があります。リストアジョブの一部として作成されません。

p.1429 の「[アーカイブからの項目のリストア](#)」を参照してください。

オプション[個々のメールメッセージを既存のメッセージに上書きする]は、アーカイブからリストアするメッセージと既存のメッセージを置換します。リストアされたメッセージに対して新しいオブジェクト ID は作成されません。メッセージの内容とプロパティのみが置換されます。

デフォルトで、このオプションは選択されません。

このオプションが有効になっていない場合または元のメッセージが存在しない場合、メッセージは新しいメッセージとして再作成されます。Backup Exec は再作成されたメッセージの新しいオブジェクト ID を作成します。

このオプションが有効になっておらず、元のメッセージが存在しない場合、メッセージはアーカイブからリストアされません。

アーカイブから項目をリストアするための[ファイルのリストア先の変更]オプション

ファイルシステムデータをアーカイブからデータの元のバックアップ場所ではない別のドライブまたはパスにリストアできます。

p.1429 の「[アーカイブからの項目のリストア](#)」を参照してください。

表 N-29 **アーカイブから項目をリストアするための[ファイルのリストア先の変更]オプション**

項目	説明
ファイルセットのリストア先を変更する	データをアーカイブからデータの元のバックアップ場所ではないドライブまたはパスにリストアできます。
リストア先ドライブ	アーカイブからデータをリストアしたいリストア先ドライブを指定します。
参照 (...)	ローカルドライブとネットワークドライブを表示できます。
サーバーのログオンアカウント	メディアサーバーが使う現在のログオンアカウントを表示します。
変更	異なるログオンアカウントを使うか、または新しいアカウントを作成できます。 p.172 の「 ログオンアカウントの設定について 」を参照してください。
クリア	このフィールドをクリアできます。
リストア先パス	アーカイブからデータをリストアしたい[リストア先ドライブ]フィールドにリストされているデバイスのリストア先パスを指定します。 元のディレクトリ構造を保持するには、[ツリー構造を保持する]オプションが有効になっていることを確認します。 p.1429 の「 アーカイブからの項目のリストア 」を参照してください。
パスのログオンアカウント	リストア先パスに要求されるログオンアカウントを表示します。

項目	説明
変更	異なるログオンアカウントを使うか、または新しいアカウントを作成できます。 p.172の「ログオンアカウントの設定について」を参照してください。
クリア	このフィールドをクリアできます。

アーカイブから項目をリストアするための [Microsoft Exchange のリストア先の変更] オプション

アーカイブからの Exchange Mailbox Archiving 項目のリストア先を変更できます。

p.1429の「アーカイブからの項目のリストア」を参照してください。

表 N-30 アーカイブから項目をリストアするための [Microsoft Exchange のリストア先の変更] オプション

項目	説明
Microsoft Exchange Server セットのリストア先を変更する	メールメッセージとフォルダをアーカイブからデータの元のバックアップ場所ではないドライブまたはパスにリストアできます。
リストア先サーバー	データのリストア先のコンピュータの名前を指定します。コンピュータの名前には「 ¥¥ サーバー名」の形式を使います。
サーバーのログオンアカウント	メディアサーバーが使う現在のログオンアカウントを表示します。
変更	異なるログオンアカウントを使うか、または新しいログオンアカウントを作成できます。 p.172の「ログオンアカウントの設定について」を参照してください。
クリア	このフィールドをクリアできます。
メールボックスのリストア先を変更する	メールボックスをアーカイブから元のデータバックアップ場所ではないメールボックスにリストアできます。
リストア先メールボックス	リストア先の変更場所となるメールボックスの名前を指定します。メールボックスはアーカイブからデータをリストアしたいサーバーにすでに存在している必要があります。

項目	説明
メールボックスログオンアカウント	リストア先メールボックスに要求されるログオンアカウントを表示します。 このフィールドをクリアするには、[クリア]をクリックします。
変更	異なるログオンアカウントを使うか、または新しいログオンアカウントを作成できます。
クリア	フィールドをクリアできます。

アーカイブからの項目の削除について

アーカイブからアーカイブファイルとメールメッセージを削除できます。ディスク領域の一部を解放する必要がある場合は、保持期間が終了する前にアーカイブから項目を削除できます。

アーカイブは同じ項目の複数のバージョンを含むことができます。特定のバージョンの項目を削除するには、その項目を個別に選択する必要があります。それ以外の場合、Backup Exec は最新バージョンの項目を削除します。項目の修正日時を調べることによって同じファイルのバージョンを区別できます。

アーカイブからファイルとメールメッセージのみを削除できます。アーカイブ全体を削除するには、[デバイス]ビューから削除する必要があります。

さらに、Backup Exec は保持期間が終了したアーカイブ項目を削除するためにボルトストアパーティションを毎日検索します。この日次操作を実行する時間を指定できます。

p.1455 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。

p.1416 の「[アーカイブの削除](#)」を参照してください。

p.1436 の「[アーカイブからの項目の削除](#)」を参照してください。

p.1426 の「[アーカイブ内のデータの検索について](#)」を参照してください。

アーカイブからの項目の削除

アーカイブから特定の項目を削除できます。

p.1436 の「[アーカイブからの項目の削除について](#)」を参照してください。

アーカイブから項目を削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[アーカイブタスク]の下にある[アーカイブから削除する]をクリックします。

- 3 削除するデータを選択します。
 p.1437の「[アーカイブから項目を削除するための\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。
- 5 必要なオプションを選択します。
 p.1438の「[アーカイブから項目を削除するための\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。
- 7 必要なオプションを選択します。
 p.606の「[リストアの\[ネットワークとセキュリティ\]オプション](#)」を参照してください。
- 8 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[プリ/ポストコマンド]をクリックします。
- 9 必要なオプションを選択します。
 p.384の「[デフォルトの\[プリ/ポストコマンド\]オプション](#)」を参照してください。
- 10 ジョブの完了時に通知を送信する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。
 必要なオプションを選択します。
 p.670の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。
- 11 このジョブを今すぐ実行する場合は、[今すぐ実行]をクリックします。後で実行する場合は、[プロパティ]ペインの[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックし、必要なスケジュールオプションを設定します。
 p.344の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

アーカイブから項目を削除するための[選択リスト]オプション

アーカイブから削除したい項目を検索するための基準を指定できます。

p.1436の「[アーカイブからの項目の削除](#)」を参照してください。

表 N-31 アーカイブから項目を削除するための[選択リスト]オプション

項目	説明
サブディレクトリを含める	選択したディレクトリ内のすべてのサブフォルダの内容を含めます。
ファイルの詳細を表示する	アーカイブから削除できるファイルの詳細を表示します。

項目	説明
プレビューペイン	ダイアログボックスの下部でプレビューペインを表示します。
アーカイブの検索	アーカイブから削除したいアーカイブ項目を見つけることを可能にします。
リソース別の表示	アーカイブ元のリソース別にアーカイブデータを表示します。この機能は、特定のサーバーやワークステーションに格納されているファイルを検索するのに便利です。

アーカイブから項目を削除するための[一般]オプション

アーカイブから項目を削除するジョブの名前を入力して、ジョブの優先度を選択できます。

p.1436 の「[アーカイブからの項目の削除](#)」を参照してください。

表 N-32 アーカイブから項目を削除するための[一般]オプション

項目	説明
ジョブ名	ジョブの名前を表示します。
ジョブの優先度	このジョブのデバイスへのアクセスの優先度を表示します。 p.183の「 ジョブの優先度について 」を参照してください。

元の場所からのアーカイブデータの削除について

ボルトストアを作成するときに、アーカイブデータを元の場所からいつ削除するかを指定できます。

Backup Exec で次のいずれかを実行できます。

- アーカイブの直後に項目を元の場所から削除する。
ボルトストアがバックアップされる前にデータが失われた場合、このデータの唯一のバージョンはバックアップセットにあります。
- ボルトストアがバックアップされ次のアーカイブジョブが実行された後にこれを削除してください。

アーカイブ直後に Backup Exec が項目を削除すると、その項目はアーカイブジョブが正常に完了した後に元の場所から削除されます。項目は、アーカイブされてからバックアップされるまでの間に変更された場合、元の場所から削除されません。

p.1408 の「[ボルトストアのプロパティの編集または表示](#)」を参照してください。

p.1407 の「[Archiving Option でのボルトストアの作成](#)」を参照してください。

p.1409 の「[ボルトストアのプロパティ](#)」を参照してください。

Archiving Option コンポーネントのバックアップについて

バックアップ用に Archiving Option コンポーネントの一部またはすべてを選択できます。バックアップのコンポーネントすべてを同じジョブで選択すれば、リカバリ時間は速くなります。ただし、コンポーネントの複数のバックアップジョブを作成すれば、バックアップジョブはより速く実行されます。

次の表に、バックアップ選択項目ビューで選択できる Archiving Option コンポーネントをバックアップの推奨事項とともに示します。

表 N-33 Archiving Option コンポーネントのバックアップ

コンポーネント	説明
Archiving Option コンポーネント	Archiving Option コンポーネントは Archiving Option と関連付けされるコンポーネントすべてを含んでいます。シマンテック社は Archiving Option 環境すべてをバックアップするために Archiving Option コンポーネントを選択することを推奨します。
Backup Exec アーカイブサイト	Backup Exec アーカイブサイトは Archiving Option のインストールの論理表現です。メディアアサンプターは 1 つのアーカイブサイトのみ備えることができます。バックアップにこのコンポーネントを選択すれば、ディレクトリデータベースも自動的にバックアップされます。

コンポーネント	説明
ディレクトリデータベース	<p>ディレクトリデータベースは、アーカイブに関する設定データと情報が格納されている Microsoft SQL Server データベースです。</p> <p>データベースにデータが入力され、時間が経過してもディレクトリデータベースのデータの量はほとんど変わりません。</p> <p>Archiving Option コンポーネントを追加したか、または削除した後ディレクトリデータベースをバックアップする必要があります。コンポーネントの場所を変更してもディレクトリデータベースをバックアップする必要があります。設定変更には、ボルトストアの作成、ボルトストアパーティションの作成、ボルトストアパーティションの状態の変更などが含まれます。</p>
インデックスの場所	<p>インデックスの場所には、アーカイブ項目の迅速な検索と取り込みを行えるようにインデックス付けされているアーカイブデータの内容がすべて格納されます。インデックスデータは Archiving Option のインストール時に指定された場所のインデックスファイルに保存されます。</p> <p>インデックスの場所を定期的にバックアップしてください。</p>
ボルトストアグループ	<p>ボルトストアグループは論理エンティティです。バックアップにそれを選択すれば、ボルトデータベース、ボルトストアパーティション、フィンガープリントデータベースのすべてがバックアップされます。これらのコンポーネントは密接に関連しているため、これらのコンポーネントすべてを一緒にバックアップするためにボルトストアグループを選択することを考慮してください。</p>
フィンガープリントデータベース	<p>フィンガープリントデータベースには、ボルトストアグループ内のすべてのボルトストアの単一インスタンス記憶域関連情報が格納されています。</p> <p>アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域を有効にすれば、フィンガープリントデータベースを定期的にバックアップする必要があります。</p> <p>p.1455の「アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について」を参照してください。</p>

コンポーネント	説明
ボルトストア	ボルトストアは論理エンティティです。バックアップにそれを選択すれば、ボルトデータベース、ボルトストアパーティションのすべてがバックアップされます。
すべてのパーティション	<p>ボルトストアパーティションはアーカイブ項目が保存される物理的な位置を表します。ボルトストアには 1つ以上のボルトストアパーティションを含めることができます。バックアップに[All Partitions]を選択すれば、ボルトストアのボルトストアパーティションすべてがバックアップのために選択されます。</p> <p>メモ: オープンパーティションをバックアップするとき、ボルトストアデータベースは自動的にバックアップされます。</p> <p>ボルトストアパーティションを定期的にバックアップしてください。</p> <p>p.1412 の「Archiving Option でのボルトストアパーティションについて」を参照してください。</p>
ボルトストアデータベース	<p>ボルトストアデータベースは、アーカイブに関する設定データと情報が格納されている Microsoft SQL Server データベースです。関連付けされたデータベースが各ボルトストアにあります。各ボルトストアデータベースには、関連付けされたボルトストアにアーカイブされた各項目のエントリが含まれています。項目がアーカイブから削除されると、その項目への参照がボルトストアデータベースから削除されます。</p> <p>ボルトストアデータベースを定期的にバックアップしてください。</p>

ライセンスキーがインストールされていないリモートメディアサーバーから Archiving Option コンポーネントをバックアップしてリストアすることもできます。

p.1452 の「[リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントのバックアップとリストアについて](#)」を参照してください。

p.1442 の「[Archiving Option コンポーネントのバックアップ](#)」を参照してください。

p.1455 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。

p.1442 の「[Archiving Option データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Archiving Option データベースの一貫性チェックについて

Backup Exec はバックアップジョブとリストアジョブの間に Archiving Option データベースの物理的な一貫性を自動的にチェックします。どのような一貫性チェックエラーでも Backup Exec ジョブログで報告されます。Backup Exec は Archiving Option データベースの一貫性チェックに Microsoft SQL Server の [物理チェックのみ] ユーティリティを使います。

[物理チェックのみ] ユーティリティについて詳しくは Microsoft SQL Server のマニュアルを参照してください。

Archiving Option コンポーネントのバックアップモードの無効化について

ディレクトリデータベースをバックアップするときは、Archiving Option コンポーネントがバックアップモードではないことを確認してください。

p.1408 の「[ボルトストアのプロパティの編集または表示](#)」を参照してください。

コンポーネントがバックアップモードの場合は、Backup Exec ユーティリティの [Archiving Option エンティティでバックアップモードを無効にする] タスクを実行して、バックアップモードを無効にする必要があります。

p.1452 の「[Archiving Option コンポーネントの Backup Exec ユーティリティの実行](#)」を参照してください。

Archiving Option コンポーネントのバックアップ

すべての Archiving Option コンポーネントをバックアップするか、またはバックアップするコンポーネントを個別に選択できます。

p.1439 の「[Archiving Option コンポーネントのバックアップについて](#)」を参照してください。

メモ: Archiving Option コンポーネントのバックアップジョブをアーカイブジョブと同時に実行すると、アーカイブジョブは失敗します。

Archiving Option コンポーネントをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの [バックアップ] の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ] をクリックします。
- 3 Archiving Option がインストールされているメディアサーバーの [バックアップ選択] ペインで、[Archiving Option コンポーネント] を展開します。
- 4 次のいずれかを実行します。

Archiving Option と関連付けられているすべてのコンポーネントをバックアップする場合 次に示す順序で操作を実行します。

- Archiving Option コンポーネントがバックアップモードではないことを確認してください。
p.1442の「[Archiving Option コンポーネントのバックアップモードの無効化について](#)」を参照してください。
- [Archiving Option コンポーネント]を選択します。

Archiving Option と関連付けられている個々のコンポーネントをバックアップする場合 次に示す順序で操作を実行します。

- [Archiving Option コンポーネント]を展開します。
- コンポーネントを展開します。
- バックアップするコンポーネントを選択します。
p.1439の「[Archiving Option コンポーネントのバックアップについて](#)」を参照してください。
- バックアップにディレクトリデータベースを選択する場合は、Archiving Option コンポーネントがバックアップモードではないことを確認してください。
p.1442の「[Archiving Option コンポーネントのバックアップモードの無効化について](#)」を参照してください。

- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。
- 6 バックアップ方式を選択します。
p.1443の「[アーカイブジョブのためのバックアップジョブのプロパティ](#)」を参照してください。
- 7 必要に応じて、[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択します。
p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

アーカイブジョブのためのバックアップジョブのプロパティ

Archiving Option コンポーネントのバックアップ方式を選択できます。

p.1442の「[Archiving Option コンポーネントのバックアップ](#)」を参照してください。

ディレクトリデータベースの場合、差分バックアップ方式を選択しても、Backup Exec によって差分バックアップではなく完全バックアップが実行されます。いずれかのデータベースに増分バックアップ方式を選択すると、トランザクションログがバックアップされて切り捨てられます。

メモ: バックアップに Backup Exec アーカイブサイトを選択すると、ディレクトリデータベースもバックアップされます。

p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。

p.1442 の「Archiving Option データベースの一貫性チェックについて」を参照してください。

Archiving Option コンポーネントのリストアについて

次の Archiving Option コンポーネントをリストアできます：

- ディレクトリデータベース
- ボルトストアデータベース
- フィンガープリントデータベース
- ボルトストアパーティション
- インデックスの場所

Archiving Option コンポーネントをリストアするための最適な手順を見つけるために次の表のシナリオを確認してください。

表 N-34 Archiving Option コンポーネントをリストアするための方式

方式	詳細
データ消失が発生し、同じ場所に Archiving Option コンポーネントをリストアする場合	p.1445 の「Archiving Option コンポーネントのリストア」を参照してください。
ハードウェア障害とデータ消失が発生し、異なる場所に Archiving Option コンポーネントをリストアする場合	p.1446 の「Archiving Option コンポーネントのリストア先変更について」を参照してください。
新しい SQL Server または新しいディスクのような新しいハードウェアにコンポーネントを移動する場合	p.1459 の「新しい場所への Archiving Option コンポーネントの移動について」を参照してください。

p.1442 の「Archiving Option データベースの一貫性チェックについて」を参照してください。

Archiving Option コンポーネントのリストア

データ消失が発生した場合は、最初にあった同じ場所に 1 つ以上の Archiving Option コンポーネントをリストアできます。

ディレクトリデータベースを含む複数のコンポーネントをリストアする場合は、ディレクトリデータベースを最初にリストアする個別のジョブを使用することをお勧めします。それから、リストアする残りの Archiving Option コンポーネントすべてに対する 1 つのジョブを作成してください。

Archiving Option コンポーネントをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]ペインで、リストアしたいデータを含んでいるバックアップセットを選択します。
- 4 (オプション) データベースをリストアしたら、次に示す順序で操作を実行します。
 - [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。
 - 必要に応じてオプションを選択します。
p.1445 の「[Archiving Option データベースのリストアジョブのプロパティ](#)」を参照してください。
- 5 必要に応じて他のプロパティを設定します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 6 [今すぐ実行]をクリックするか、またはリストアジョブを実行する時期をスケジュールします。
p.344 の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

Archiving Option データベースのリストアジョブのプロパティ

最初にあった同じ場所に Archiving Option データベースをリストアするためにオプションを設定できます。

p.1445 の「[Archiving Option コンポーネントのリストア](#)」を参照してください。

メモ: Archiving Option データベースをリストアするときは他のどのアーカイブ関係の操作も実行しないでください。

表 N-35 アーカイブのリストアジョブのプロパティ

項目	説明
データベースは使用可能な状態、トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能	<p>リストア操作で、最新の完全バックアップ、差分バックアップまたはログバックアップのリストア時に、未完了のトランザクションをすべてロールバックできます。リストア操作完了時にはデータベースが使用できる状態になっています。このオプションを選択しなかった場合は、データベースは中間状態のまま、使用することができません。</p> <p>このオプションを選択した場合は、バックアップのリストアは中止され、最初からリストアをやり直す必要があります。</p> <p>p.1257の「SQL データベースとファイルグループのリストアについて」を参照してください。</p>
データベースは操作不可能な状態、トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは可能	<p>別のリストアジョブでリストアする差分またはトランザクションログのバックアップが他にもあることを示します。</p> <p>ボルトストアデータベースをリストアする場合は、リストアジョブを続行する前に Enterprise Vault Storage Service を停止するように求めるメッセージが表示されることがあります。</p> <p>p.1383の「Archiving Option での Enterprise Vault サービスについて」を参照してください。</p>

p.1442の「[Archiving Option データベースの一貫性チェックについて](#)」を参照してください。

Archiving Option コンポーネントのリストア先変更について

異なる場所に1つ以上の Archiving Option コンポーネントをリストアする場合にはリストア先変更ジョブを実行できます。リストア先変更ジョブの手順には、リストアしたコンポーネントの新しい場所を更新する Backup Exec ユーティリティのタスク実行が含まれます。リストア先変更ジョブを作成する前に手順を確認してください。

次の表は Archiving Option コンポーネントの可能なシナリオそして関連付けられたリストア先変更ソリューションをリストしたものです。

表 N-36 Archiving Option コンポーネントのためのリストア先変更ソリューション

シナリオ	解決策
データベースをホストする SQL Server に障害が発生し、データ消失が発生します。	新しい SQL Server に Archiving Option データベースのリストア先を変更します。 p.1447の「 Archiving Option データベースのリストア先変更 」を参照してください。
ボルトストアパーティションをホストするローカルドライブかネットワーク共有に障害が発生し、データ消失が発生します。	ローカルドライブまたはネットワーク共有の異なるパスにボルトストアパーティションのリストア先を変更します。 p.1449の「 Archiving Option ボルトストアパーティションのリストア先変更 」を参照してください。
インデックスファイルを含むディスクに障害が発生し、データ消失が発生します。	インデックスファイルのリストア先を新しい場所に変更します。 p.1450の「 Archiving Option インデックスファイルのリストア先変更 」を参照してください。

p.1444の「[Archiving Option コンポーネントのリストアについて](#)」を参照してください。

Archiving Option データベースのリストア先変更

新しい SQL Server に Archiving Option データベースのリストア先を変更できます。

シマンテック社はディレクトリデータベースのバックアップセットすべてをリストアするために1つのジョブを使うことを推奨します。必要ならば、バックアップセットすべてをリストアする複数のジョブを使うことができます。複数のジョブを使ったら、Backup Exec ユーティリティの[データベースの場所を変更]タスクを実行する前にディレクトリデータベースが使用可能な状態になっていることを確認してください。

メモ: すべての Archiving Option データベースは同じ SQL Server 上でなければなりません。データベースの1つのリストア先を変更する場合は、同じ場所にデータベースすべてをリストアする必要があります。

p.1446の「[Archiving Option コンポーネントのリストア先変更について](#)」を参照してください。

Archiving Option データベースのリストア先を変更する方法

- 1 リストアジョブを作成します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 2 ディレクトリデータベースをリストアする適切な完全バックアップセットと関連の差分および増分バックアップセットを選択します。
p.615 の「[リストアするデータの選択について](#)」を参照してください。
- 3 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスに他の情報を入力します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。
- 5 [データベースは使用可能な状態、トランザクションログまたは差分バックアップのリストアは不可能]を選択します。
- 6 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[アーカイブのリストア先変更]をクリックします。
- 7 [新しい Microsoft SQL サーバーにリストア先を変更する]をクリックします。
- 8 リストア先を変更する SQL Server へのパスを入力します。
- 9 [今すぐ実行]をクリックするか、またはリストア先変更ジョブを実行する時期をスケジュールします。
p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。
- 10 リストア先変更ジョブが完了したら、**Backup Exec** ユーティリティを起動します。
p.1452 の「[Archiving Option コンポーネントの Backup Exec ユーティリティの実行](#)」を参照してください。
- 11 **Backup Exec** ユーティリティのタスクペインの[**Archiving Option** のタスク]の下にある[データベースの場所を変更]をクリックします。
- 12 [変更先の **SQL Server** インスタンス]で、新しい SQL Server の名前を入力します。
- 13 [OK]をクリックします。
- 14 操作が完了したら、**Backup Exec** ユーティリティを終了します。
- 15 リストアジョブを作成します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 16 ボルトストアデータベースとフィンガープリントデータベースをリストアする適切な完全バックアップセットと関連の差分および増分バックアップセットを選択します。

- 17 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]に他の情報を入力します。[アーカイブのリストア先変更]ダイアログボックスの情報を設定しないでください。
- 18 [今すぐ実行]をクリックするか、またはリストア先変更ジョブを実行する時期をスケジュールします。
 p.344 の「[スケジュール]オプション」を参照してください。

Archiving Option ボルトストアパーティションのリストア先変更

ローカルドライブまたはネットワーク共有の異なるパスにボルトストアパーティションのリストア先を変更できます。

[オープン]の状態のボルトストアパーティションをリストアする場合、ボルトストアデータベースは自動的にリストアされます。

p.1446 の「Archiving Option コンポーネントのリストア先変更について」を参照してください。

ボルトストアパーティションがより多くのディスク領域を必要とすれば、新しいパーティションを作成できます。

p.1412 の「ボルトストアパーティションの作成」を参照してください。

Archiving Option ボルトストアパーティションのリストア先を変更する方法

- 1 **Backup Exec** ユーティリティを起動します。
 p.1452 の「Archiving Option コンポーネントの Backup Exec ユーティリティの実行」を参照してください。
- 2 **Backup Exec** ユーティリティのタスクペインの[Archiving Option のタスク]の下にある[ボルトパーティションのパスを変更]をクリックします。
- 3 ボルトストアパーティションの名前を選択します。
- 4 [新規ボルトストアパーティションのパス]で、リストアするボルトストアパーティションへの新しいパスを入力します。
- 5 [ボルトストアパーティションファイルの移動]が選択されていないことを確認してください。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 **Backup Exec** 管理コンソールで、リストアジョブを作成します。
 p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。
- 8 ボルトストアパーティションをリストアする適切な完全バックアップセットと関連の差分および増分バックアップセットを選択します。

- 9 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]で他のリストアオプションを選択します。
[アーカイブのリストア先変更]ダイアログボックスの情報を設定しないでください。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 10 [今すぐ実行]をクリックするか、またはリストア先変更を実行する時期をスケジュールします。
p.344 の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

Archiving Option インデックスファイルのリストア先変更

インデックスファイルのリストア先を新しい場所に変更できます。

メモ: ローカル NTFS ドライブのインデックスファイルを見つけなければなりません。

p.1446 の「[Archiving Option コンポーネントのリストア先変更について](#)」を参照してください。

Archiving Option インデックスファイルのリストア先を変更する方法

- 1 **Backup Exec** ユーティリティを起動します。
p.1452 の「[Archiving Option コンポーネントの Backup Exec ユーティリティの実行](#)」を参照してください。
- 2 **Backup Exec** ユーティリティのタスクペインの[**Archiving Option** のタスク]の下にある[インデックスの場所を変更]をクリックします。
- 3 [新しいインデックスの場所]で、インデックスファイルのリストア先の新しいパスを入力します。
- 4 [インデックスファイルの移動]が選択されていないことを確認してください。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 **Backup Exec** 管理コンソールで、リストアジョブを作成します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 7 インデックスファイルをリストアするために適切なバックアップセットを選択します。
- 8 必要に応じて、[リストアジョブのプロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 9 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[アーカイブのリストア先変更]をクリックします。
- 10 [インデックスファイルを新しい場所にリストアする]をクリックします。

- 11 インデックスファイルをリストアする新しい場所のパスを入力します。
- 12 [今すぐ実行]をクリックするか、またはリストア先変更ジョブを実行する時期をスケジュールします。
 p.344 の「[スケジュール]オプション」を参照してください。

Archiving Option コンポーネントのためのアーカイブのリストア先変更オプション

Archiving Option ディレクトリデータベースのリストア先を変更し、インデックスファイルのリストア先を変更できます。

リストア先変更ジョブの手順には、リストアしたコンポーネントの新しい場所を更新する **Backup Exec** ユーティリティのタスク実行が含まれます。リストア先変更ジョブを作成する前に手順を確認してください。

p.1446 の「[Archiving Option コンポーネントのリストア先変更について](#)」を参照してください。

メモ: Backup Exec ユーティリティのタスクを実行することによってボルトストアパーティションのリストア先を変更できます。

p.1449 の「[Archiving Option ボルトストアパーティションのリストア先変更](#)」を参照してください。

表 N-37 Archiving Option コンポーネントのためのアーカイブのリストア先変更オプション

項目	説明
新しい Microsoft SQL サーバーにリストア先を変更する	異なる SQL Server に Archiving Option ディレクトリデータベースのリストア先を変更します。 ディレクトリデータベースのリストア先を変更したら、 Backup Exec ユーティリティと呼ばれる個別のプログラムにある手順を実行する必要があります。 Backup Exec ユーティリティの手順は、データベースの新しい場所に関する情報でディレクトリデータベースを更新します。ジョブを作成する前にデータベースのリストア先を変更する手順を確認してください。 p.1447 の「 Archiving Option データベースのリストア先変更 」を参照してください。
サーバー	リストアジョブのリストア先の変更場所となるサーバーの名前を指定できます。

項目	説明
インスタンス	リストアジョブのリストア先の変更場所となるSQL Server のインスタンスの名前を指定できます。
インデックスファイルを新しい場所にリストアする	<p>インデックスファイルのリストア先を新しい場所に変更します。</p> <p>別の場所にインデックスファイルのリストア先を変更するには、最初に Backup Exec ユーティリティと呼ばれる個別のプログラムにある手順を実行する必要があります。Backup Exec ユーティリティの手順は、インデックスファイルの新しい場所に関する情報でディレクトリデータベースを更新します。</p> <p>p.1450の「Archiving Option インデックスファイルのリストア先変更」を参照してください。</p>
パス	インデックスファイルのリストアジョブのリストア先の変更場所となるパス名を指定できます。

Archiving Option コンポーネントの Backup Exec ユーティリティの実行

Archiving Option コンポーネントの一部の操作を完了するには、Backup Exec ユーティリティを実行する必要があります。

p.1446の「Archiving Option コンポーネントのリストア先変更について」を参照してください。

Backup Exec ユーティリティを実行する方法

- 1 Backup Exec のインストールディレクトリで、BEUtility.exe をダブルクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[Archiving Option のタスク]で、必要なタスクをクリックします。
- 3 タスクについて詳しくは[ヘルプ]をクリックしてください。

リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントのバックアップとリストアについて

ライセンスキーがインストールされていないリモートメディアサーバーから Archiving Option コンポーネントをバックアップしてリストアできます。Archiving Option コンポーネントのバックアップジョブのデフォルト設定を編集することもできます。

次のオプションの場合、Archiving Option コンポーネントのバックアップに使うリモートメディアサーバーでライセンスキーは要求されません:

- File System Archiving Option
- Exchange Mailbox Archiving Option

Archiving Option がインストールされるメディアサーバーで Backup Exec サービスアカウントのクレデンシヤルを提供する必要があります。

p.1439 の「[Archiving Option コンポーネントのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

p.1453 の「[リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントのバックアップジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。

リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントのバックアップジョブのデフォルト設定の編集

リモートメディアサーバーから Archiving Option コンポーネントのデフォルトのバックアップ方式を編集できます。

p.1452 の「[リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントのバックアップとリストアについて](#)」を参照してください。

Archiving Option のバックアップジョブのデフォルト設定を編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。
- 3 必要な情報を入力します。

p.1453 の「[Archiving Option のバックアップジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。

Archiving Option のバックアップジョブのデフォルト設定

リモートメディアサーバーから Archiving Option コンポーネントのデフォルトのバックアップ方式を選択できます。

p.1453 の「[リモートメディアサーバーからの Archiving Option コンポーネントのバックアップジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。

ディレクトリデータベースの場合、差分バックアップ方式を選択しても、Backup Exec によって差分バックアップではなく完全バックアップが実行されます。

SQL データベースに増分バックアップ方式を選択すると、トランザクションログがバックアップされて切り捨てられます。

アーカイブからの保持期間が終了したアーカイブ項目の削除の防止

Backup Exec は保持期間が終了したアーカイブ項目を特定のアーカイブから削除します。Backup Exec で保持期間が終了したアーカイブ項目を削除しないようにするにはこのオプションをクリアします。

p.1414 の「[Archiving Option でのアーカイブについて](#)」を参照してください。

保持期間が終了したアーカイブ項目をアーカイブから削除しないようにする方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 アーカイブを含んでいるボルトストアを展開します。
- 3 [アーカイブ]をクリックし、右ペインでアーカイブを右クリックします。
- 4 オプション[保持期間が終了したアーカイブ項目を自動的に削除する]のチェックマークをはずします。
- 5 [OK]をクリックします。

アーカイブの権限と設定の同期について

Backup Exec は Exchange Mailbox Archiving Option の日次同期タスクを実行します。同期では、すべてのメールボックスグループ内の各メールボックスに正しいアーカイブ設定が関連付けられます。また、このタスクでは、アーカイブされるメールボックスごとにアーカイブの権限がメールボックスの権限と同期されます。

File System Archiving Option の場合は、アーカイブされるファイルごとにアーカイブの権限が共有およびフォルダの権限と同期されます。

この操作を実行する時刻を指定できます。シマンテック社は同期操作とは異なる時間に実行されるようにアーカイブジョブをスケジュールすることを推奨します。

同期操作が完了するとアラートが管理コンソールに送信されます。アラートは操作の概略統計を表示し、操作のジョブログへのリンクを含んでいます。

メモ: Exchange Server とファイルシステムサーバーはオンライン状態で、同期が発生するメディアサーバーによってアクセス可能でなければなりません。

p.1455 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。

アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について

アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域は Backup Exec が項目の共有可能な部分を識別するようにします。共有可能な部分の例はメッセージの添付ファイルまたは文書の内容です。それから、Backup Exec はそれらの部分を個別に一度のみ保存します。Backup Exec は、ボルトストアにすでに保存されている共有可能な部分を識別するとき、それを再びアーカイブするかわりに保存された共有可能な部分を参照します。

単一インスタンス記憶域が有効になっている場合、項目はボルトストア内とボルトストアパーティションの間で共有されます。ボルトストアパーティションは異なるデバイスの種類上にあることがあります。20 KB の単一インスタンスのしきい値を超えるメッセージの共有可能な部分は共有されます。これらの共有可能な部分には添付ファイルとメッセージ本文が含まれます。ユーザー情報と単一インスタンス記憶域のしきい値未満の共有可能な部分は共有されません。

このオプションを有効にすることによってアーカイブ項目に必要なストレージ容量を大幅に減らすことができます。単一インスタンス記憶域を有効にする場合は、フィンガープリントデータベースをバックアップしてください。単一インスタンス記憶域関連の情報はすべてのボルトストアのフィンガープリントデータベースに格納されます。

p.1455 の「[アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域の有効化](#)」を参照してください。

アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域の有効化

アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域を有効にできます。

p.1455 の「[アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について](#)」を参照してください。

アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域を有効にする方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。
- 3 [アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域を有効にする]が選択されていることを確認してください。

p.1456 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。

アーカイブジョブのデフォルト設定の編集

すべてのアーカイブジョブのデフォルト設定を変更できます。

アーカイブジョブのデフォルト設定を編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[アーカイブ]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.1456 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

アーカイブジョブのデフォルト設定

Archiving Option のインストール時に Backup Exec が設定するデフォルト設定を使うことができます。または、自分自身のデフォルト設定を選択できます。

p.1455 の「[アーカイブジョブのデフォルト設定の編集](#)」を参照してください。

表 N-38 アーカイブジョブのデフォルト設定

項目	説明
バックアップ方式	<p>Archiving Option コンポーネントのバックアップに使うバックアップ方式を表示します。</p> <p>p.258 の「バックアップ方式について」を参照してください。</p> <p>ディレクトリデータベースの場合、差分バックアップ方式を選択しても、Backup Exec によって差分バックアップではなく完全バックアップが実行されます。</p> <p>SQL データベースに増分バックアップ方式を選択すると、トランザクションログがバックアップされて切り捨てられます。</p> <p>p.1439 の「Archiving Option コンポーネントのバックアップについて」を参照してください。</p>
テープデバイス上のバックアップデータからのアーカイブを許可する	<p>Backup Exec はテープにあるバックアップセットからデータをアーカイブできます。</p> <p>アーカイブしたいバックアップデータを含んでいるテープはメディアサーバーで利用可能でなければなりません。メディアサーバーはテープドライブまたはロボットドライブラシスロットにアクセスできる必要があります。さもなければ、アーカイブジョブは例外処理がある状態で完了します。</p>

項目	説明
暗号化されたバックアップデータからのアーカイブ	<p>Backup Exec は暗号化されたバックアップセットからデータをアーカイブできます。アーカイブデータは解読されたデータとしてボルトストアに保存されます。バックアップセットのデータは暗号化されたままになります。</p> <p>デフォルトでは、このオプションにチェックマークは付いていません。</p> <p>アーカイブジョブの間にバックアップセットを解読するのに共有暗号化キーのみを使うことができます。所有者専用キーが使われると、バックアップセットのアーカイブ可能な項目はアーカイブされません。</p>
次の期間に作成されたバックアップデータのアーカイブ	<p>Backup Exec は指定の日数が経過したバックアップセットのみからデータをアーカイブできます。</p> <p>デフォルトの日数は 30 です。</p> <p>このオプションは、Backup Exec をアーカイブ可能なデータを検出する関連のバックアップセットに制限するために使います。</p> <p>メモ: Backup Exec は、指定されたサーバーのバックアップセットで、アーカイブするデータを検索します。バックアップジョブで同じ選択リストを使うと、Backup Exec は最新の完全バックアップおよび後続の増分または差分バックアップからデータをアーカイブします。</p>
デフォルトの保持カテゴリ	<p>デフォルトでは Backup Exec のアーカイブジョブに適用される保持カテゴリを表示します。保持カテゴリは、アーカイブに項目を保持する期間を指定します。</p> <p>保持期間を変更するために保持カテゴリを編集できます。</p> <p>p.1419の「保持カテゴリの編集」を参照してください。</p> <p>デフォルトの保持カテゴリは無期限の保持期間を指定します。</p> <p>p.1418の「アーカイブ項目のための保持カテゴリについて」を参照してください。</p>

項目	説明
新規	<p>Backup Exec のアーカイブジョブに適用できる新しい保持カテゴリを作成できます。</p> <p>p.1420の「保持カテゴリのプロパティ」を参照してください。</p>
保持期間が終了したアーカイブ項目を次の時刻に毎日削除する	<p>保持期間が終了したアーカイブ項目を削除するために Backup Exec がボルトストアパーティションを検索する時刻を示します。</p> <p>デフォルトの時刻は 4:00 AM です。</p> <p>個々のアーカイブでは、保持期間が終了したアーカイブ項目を Backup Exec が自動的に削除しないようにすることができます。</p> <p>p.1454の「アーカイブからの保持期間が終了したアーカイブ項目の削除の防止」を参照してください。</p>
アーカイブ許可とメールボックスグループメンバーを次の時刻に毎日同期する	<p>Backup Exec がすべてのメールボックスグループの各メールボックスと正しいアーカイブ設定およびアーカイブの権限を同期する時刻を示します。</p> <p>デフォルトの時刻は 4:00 AM です。</p> <p>p.1454の「アーカイブの権限と設定の同期について」を参照してください。</p>

項目	説明
<p>アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域を有効にする</p>	<p>メッセージの添付ファイルまたはドキュメントの内容のような項目の共有可能な部分を Backup Exec が識別できるようにします。それから、Backup Exec はそれらの部分を個別に一度のみ保存します。Backup Exec は、ボルトストアにすでに保存されている共有可能な部分を識別するとき、それを再びアーカイブするかわりに保存された共有可能な部分を参照します。</p> <p>このオプションを有効にすることによってアーカイブ項目に必要なストレージ容量を大幅に減らすことができます。</p> <p>p.1455の「アーカイブ項目の単一インスタンス記憶域について」を参照してください。</p> <p>このオプションを有効にする場合は、フィンガープリントデータベースをバックアップしてください。単一インスタンス記憶域関連の情報はすべてのボルトストアのフィンガープリントデータベースに格納されます。</p> <p>p.1439の「Archiving Option コンポーネントのバックアップについて」を参照してください。</p>
<p>メールボックスグループの管理</p>	<p>メールボックスグループを作成するか、または編集できます。</p> <p>p.1422の「アーカイブジョブでの Exchange メールボックスグループについて」を参照してください。</p>

新しい場所への Archiving Option コンポーネントの移動について

新しい場所に Archiving Option コンポーネントを移動するために Backup Exec ユーティリティを使用することができます。コンポーネントを移動するときに他のアーカイブ関連操作が実行されていないことを確認してください。

コンポーネントをホストするハードウェアに障害が発生したためにコンポーネントを移動しなければならない場合は、リストア先変更ジョブを使用する必要があります。

[p.1446の「Archiving Option コンポーネントのリストア先変更について」](#)を参照してください。

表 N-39 新しい場所への Archiving Option コンポーネントの移動

コンポーネント	詳細
インデックスの場所	<p>インデックスファイルが保存されるディスクが領域を使い果たせばインデックスの場所を移動できます。</p> <p>Backup Exec ユーティリティの[インデックスの場所を変更]タスクを使ってください。</p>
データベース	<p>異なる SQL Server にデータベースを移動できます。たとえば、現在の SQL Server が過負荷になれば、データベースを移動できます。</p> <p>Backup Exec ユーティリティの[データベースの場所を変更]タスクを使ってください。</p>
ボルトストアパーティション	<p>パーティションを含んでいる現在のドライブかネットワーク共有を削除しなければならない場合はボルトストアパーティションを移動できます。</p> <p>メモ: ボルトストアパーティションでさらに多くのディスク領域が必要である場合は、新しいパーティションを作成し、オープンに指定できます。</p> <p>p.1412の「ボルトストアパーティションの作成」を参照してください。</p> <p>Backup Exec ユーティリティの[ボルトストアパーティションのパスを変更]タスクを使ってください。</p>

p.1452の「**Archiving Option** コンポーネントの **Backup Exec** ユーティリティの実行」を参照してください。

アーカイブジョブのトラブルシューティング

アーカイブジョブに問題があれば、次のソースで情報を見つけることができます:

- **Backup Exec** のジョブログ。
p.562の「**完了ジョブのプロパティの表示**」を参照してください。
- **Windows** イベントビューアにある **Enterprise Vault** のイベントログ。
p.1461の「**Archiving Option** イベントの **Enterprise Vault** イベントログの表示」を参照してください。
- **Backup Exec** の診断ユーティリティ。
p.788の「**Backup Exec** の診断アプリケーションについて」を参照してください。

Exchange Mailbox Archiving Option ジョブでは、次の理由のためにアーカイブするデータが検出されない場合があります。

- **Granular Recovery Technology** オプションが有効になっており、ディスクへのバックアップフォルダに存在するバックアップセットのみをアーカイブできます。
- 関連付けされた **Exchange** メールストアはバックアップされないことがあります。また、メールボックスかユーザーが過去 14 日間で削除された可能性があります。

バックアップセットがディスクにある場合、または[テープデバイス上のバックアップデータからのアーカイブを許可する]オプションが選択されている場合にのみ、**File System Archiving Option** ジョブでアーカイブするデータを検出できます。

p.1375 の「[Archiving Option の必要条件](#)」を参照してください。

Archiving Option イベントの Enterprise Vault イベントログの表示

Archiving Option イベントの情報について Enterprise Vault のイベントログを確認するのに Windows のイベントビューアを表示することができます。Enterprise Vault は多くのログエントリを生成します。ログファイルが大きくなりすぎないようにするには、何らかの処理を行う必要があります。ログファイルのサイズの制御方法について詳しくは Windows イベントビューアのヘルプを参照してください。

Archiving Option のレポート

次の表のレポートは、Archiving Option の環境を監視するのに役立ちます。

p.678 の「[Backup Exec のレポートについて](#)」を参照してください。

表 N-40 Archiving Option のレポート

レポート	説明
ボルトストア使用量の概略	各ボルトストア内のアーカイブ項目とボルトストアの合計サイズを表示します。
ボルトストア使用量の詳細	各ストア内のアーカイブと各アーカイブのサイズを表示します。
ファイルシステムのアーカイブ設定	各サーバーのアーカイブ選択項目に適用されるアーカイブの設定を表示します。
Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定	各ドメインのメールボックスグループに適用されるアーカイブの設定を表示します。
アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択	各アーカイブ選択項目に適用されるアーカイブルールと保持カテゴリを表示します。

レポート	説明
アーカイブジョブの成功率	正常に実行されたアーカイブジョブの数を表示します。
失敗したアーカイブジョブ	最近失敗したアーカイブジョブのリストを表示します。
アーカイブの概略 (前日分)	過去 24 時間のアーカイブのジョブの概略を表示します。

Symantec Backup Exec Central Admin Server Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- CASO の動作
- CASO と Shared Storage Option の連携方法
- CASO のインストールの必要条件
- CASO デバイスおよびメディアのデータの場所の選択方法
- CASO 集中管理サーバーのインストール
- CASO の集中管理サーバーからの管理対象メディアサーバーのインストール
- 既存の CASO のアップグレードについて
- Backup Exec メディアサーバーから集中管理サーバーへの変更
- メディアサーバーから管理対象メディアサーバーへの変更
- 管理対象メディアサーバーからスタンドアロンメディアサーバーへの変更
- CASO 操作の Backup Exec ユーティリティの実行
- CASO の集中管理サーバーからの Backup Exec のアンインストール
- 管理対象メディアサーバーからの Backup Exec のアンインストール
- CASO の設定について
- CASO でメディアサーバープールを使う方法

- CASO でのジョブの委任の代替としてのジョブのコピーについて
- CASO のバックアップデータ複製ジョブと合成バックアップジョブの必要条件
- CASO での集中リストアの動作
- CASO の[メディアサーバー]ビュー
- CASO の管理対象メディアサーバーの一時停止

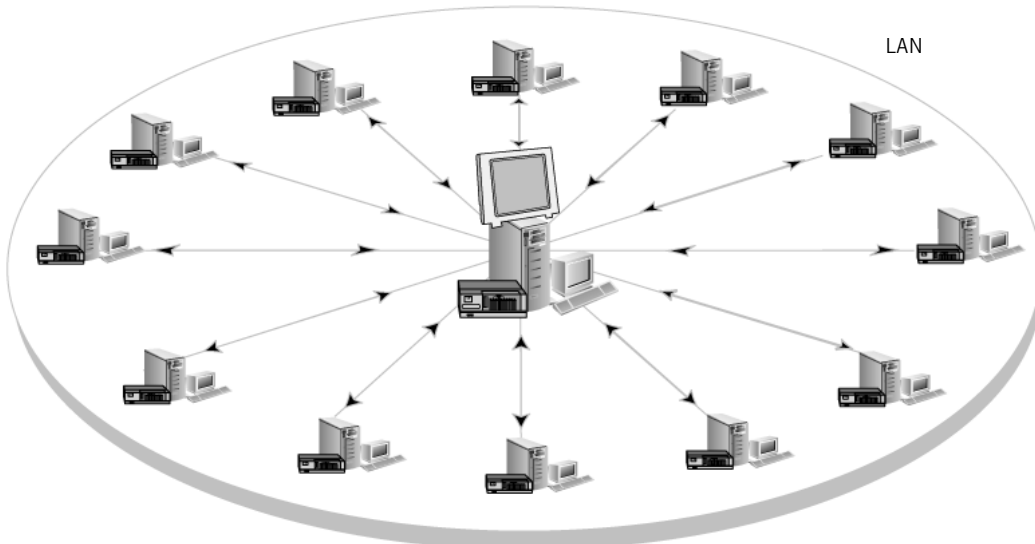
CASO の動作

Symantec Backup Exec 2010 Central Admin Server Option (CASO) は、Backup Exec 2010 の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールします。複数の Backup Exec メディアサーバーを使用している場合、CASO の利用は有益です。

CASO が Backup Exec 環境にインストールされている場合、集中管理サーバーと呼ばれる 1 つのメディアサーバーにより、ネットワークを通じて管理対象メディアサーバーにジョブが委任されます。ジョブの委任とは、CASO 環境内の利用可能な管理対象メディアサーバー間でジョブの負荷を自動的に分散するための機能です。

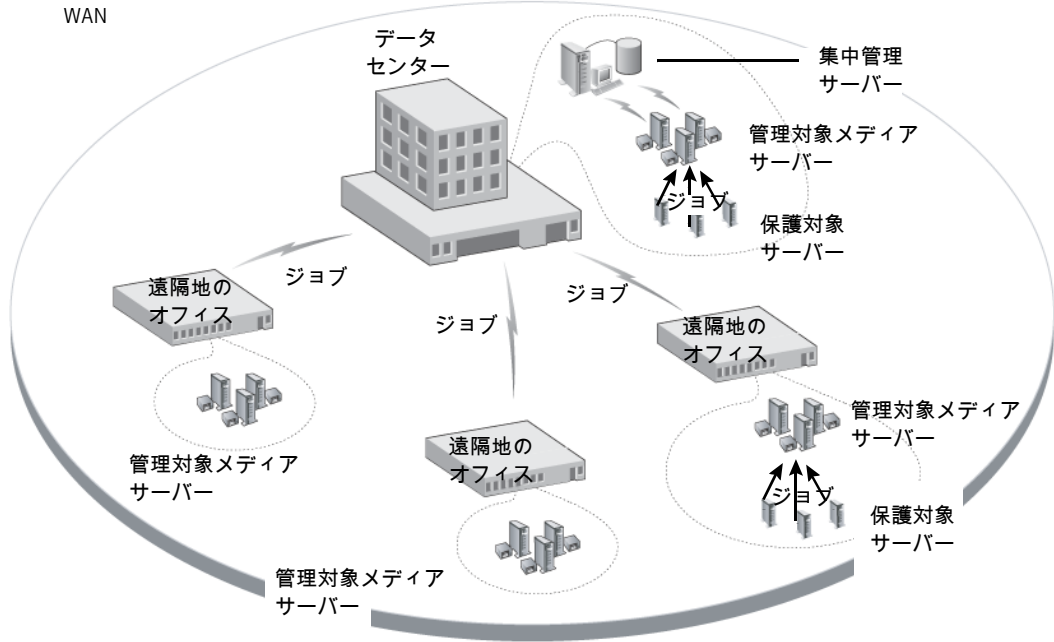
次の図は、1 つの集中管理サーバーと複数の管理対象メディアサーバーを含むローカルエリアネットワーク (LAN) 環境を示します。

図 0-1 CASO 構成の Backup Exec 環境: LAN



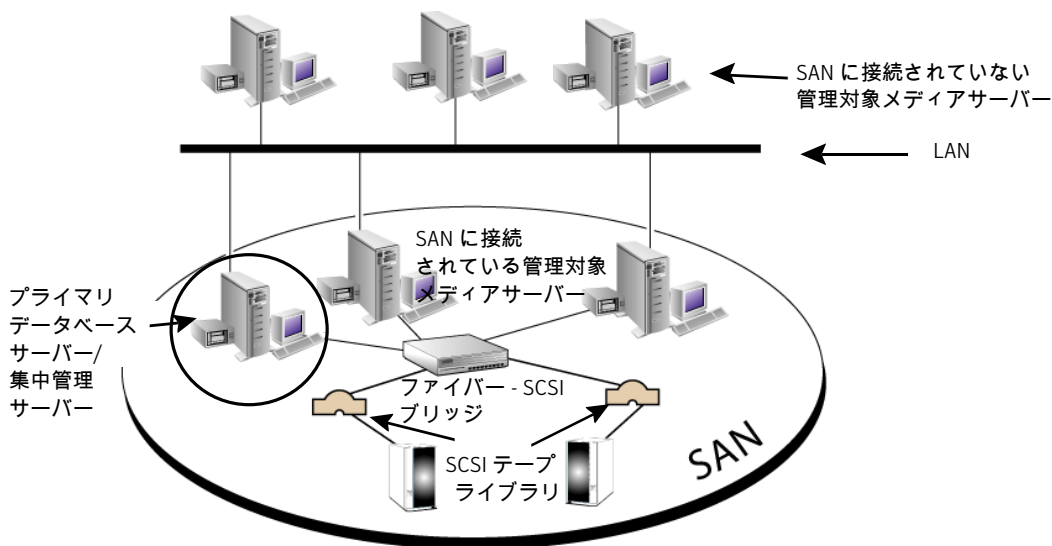
LAN 経由で行われる集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間の通信と同じ通信が、WAN 経由で行われます。

図 0-2 CASO 構成の Backup Exec 環境: WAN



次に、CASO を Backup Exec SAN 共有ストレージネットワーク環境にインストールした図を示します。

図 0-3 CASO 構成の Backup Exec 環境: SAN 共有ストレージネットワーク



CASO 環境のバックアップ情報はすべて、集中管理サーバー上で集中管理できます。この情報をフィルタにかけて、管理対象メディアサーバーごとに表示したり、メディアサーバープール (管理対象メディアサーバーのグループ) ごとに表示することができます。

管理対象メディアサーバーは、集中管理サーバーで管理されます。管理対象メディアサーバーは、バックアップジョブおよびリストアジョブを実際に処理します。まず、ポリシーと選択リストを関連付けることによって、集中管理サーバー上でジョブを作成します。次に、管理対象メディアサーバーまたはメディアサーバープールで、実行するジョブを指定します。ジョブは、管理対象メディアサーバーまたはメディアサーバープールの利用可能なストレージデバイスに委任され、負荷分散されます。共有が有効になっていると、複数のメディアサーバーでデバイスを共有できます。また、集中リストアジョブを管理対象メディアサーバーに委任することもできます。

p.428 の「ストレージの共有について」を参照してください。

集中管理サーバーは、管理対象メディアサーバーとしても動作し、委任されたジョブを処理できます。管理対象メディアサーバーでは、ローカルの管理コンソールでローカルに作成されたジョブを実行することもできます。

CASO のその他の機能は、次のとおりです。

- バックアップジョブとリストアジョブ、ジョブ監視、レポートなどの操作の集中管理。
- デバイスとメディアのデータ、ジョブログ、ジョブ履歴、アラートなどの情報の集中管理。

- ポリシー、選択リストおよびこの 2 つの関連付けの作成の集中管理。また、設定を管理対象メディアサーバーにコピーして、ローカルジョブ操作を行うこともできます。集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間で永続的なネットワーク接続を確立する必要はありません。
 - 一部の管理対象メディアサーバーおよびそれらに接続されたストレージデバイスで操作を実行するためのメディアサーバープール。
 - カタログの場所の設定。集中カタログ、分散カタログまたは複製カタログを使用できます。
- p.1468 の「CASO デバイスおよびメディアのデータの場所の選択方法」を参照してください。
- p.1470 の「CASO 集中管理サーバーのインストール」を参照してください。
- p.1480 の「既存の CASO のアップグレードについて」を参照してください。

CASO と Shared Storage Option の連携方法

Backup Exec Central Admin Server Option (CAS) と Shared Storage Option (SSO) を組み合わせて使用すると、次の機能を提供できます。

- CASO で複数の Backup Exec メディアサーバーを集中的に監視および管理する機能。
- SSO で SAN 上の複数の Backup Exec メディアサーバー間の LAN に依存しないバックアップ用の集中テープライブラリを共有する機能。

個別のライセンスキーを購入して Backup Exec メディアサーバー上にインストールされた CASO と SSO の両方のために入力できます。CASO サーバーと SSO のプライマリサーバーは同じ Backup Exec メディアサーバーにインストールして、集中的にすべての共有デバイスを管理できるようにします。SAN 上の集中デバイスを共有する各 Backup Exec メディアサーバーに追加の SSO ライセンスが必要です。

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

http://entsupport.symantec.com/umi/V-269_2

CASO のインストールの必要条件

CASO を実行するためのシステムの必要条件 (RAM を除く) は、Backup Exec 2010 を実行するための最小必要条件と同じです。ただし、管理する管理対象メディアサーバーの数、バックアップする保護対象サーバーの数、およびカタログの格納に必要な容量によっては、必要なプロセッサ速度、メモリおよび空きディスク領域が増加する場合があります。

集中管理サーバーをインストールするコンピュータには、512 MB の RAM が必要です。1 GB の RAM を推奨します。メディアサーバーの他のアプリケーションが正しく機能するためにも、一定の容量の物理 RAM が必要です。また、RAM の必要条件は集中管理サーバーがより多くのメディアサーバーかテープハードウェアを管理するときに増加することがあります。

次のことを確認します。

- **Central Admin Server Option (CASO)** をインストールするコンピュータの管理者権限が付与されている必要があります。
- **CASO** を複数のドメイン内のメディアサーバーにインストールする場合、**Backup Exec** サービスアカウントが、信頼されるドメインに属しており、集中管理サーバーによって管理されるすべてのメディアサーバーの管理者権限が付与されている必要があります。
集中管理サーバー用の **Backup Exec** データベースが、異なるコンピュータの **SQL Server** インスタンスにインストールされている場合、アカウントは、そのコンピュータのローカル管理者権限が付与されているドメインアカウントでもある必要があります。
- 集中管理サーバーおよび管理対象メディアサーバーは、ドメインに属している必要があります。ワークグループでは、**Central Admin Server Option** はサポートされていません。
- 管理対象メディアサーバーと集中管理サーバーには **NetBIOS** コンピュータ名のみを使用します。サーバー名として完全修飾ドメイン名か IP アドレスは入力できません。

p.105 の「[システムの必要条件](#)」を参照してください。

p.1470 の「[CASO 集中管理サーバーのインストール](#)」を参照してください。

CASO デバイスおよびメディアのデータの場所の選択方法

[管理対象メディアサーバー]機能のインストール中に、管理対象メディアサーバーのデバイスおよびメディアのデータを、集中管理サーバー上または管理対象メディアサーバーのデータベースのいずれかに保存するように求めるメッセージが表示されます。

次の表に、管理対象メディアサーバーのデバイスおよびメディアのデータの場所に応じた CASO タスクの比較を示します。

表 O-1 CASO タスクの比較

タスク	デバイスおよびメディアのデータが集中管理サーバー上にある場合	デバイスおよびメディアのデータが管理対象メディアサーバー上にある場合
集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーにジョブを委任する p.1502の「CASOでのジョブの委任について」を参照してください。	可	不可 代わりに、集中管理サーバー上でジョブを作成して、管理対象メディアサーバーにコピーすることができます。 p.1508の「CASOでのジョブの委任の代替としてのジョブのコピーについて」を参照してください。
集中管理サーバーから管理対象メディアサーバー上のストレージデバイスとメディアを管理する	可	不可
管理対象メディアサーバーでジョブを監視するオプションが有効な場合に、集中管理サーバーからコピーされたジョブを保留、削除、実行およびキャンセルしたり、ジョブの優先度を変更する p.1487の「CASOの設定について」を参照してください。	可	可
管理対象メディアサーバーでジョブを監視するオプションが有効な場合に、ローカルの管理対象メディアサーバーで作成されたジョブを監視する p.1487の「CASOの設定について」を参照してください。	可	可

タスク	デバイスおよびメディアのデータが集中管理サーバー上にある場合	デバイスおよびメディアのデータが管理対象メディアサーバー上にある場合
管理対象メディアサーバーでジョブを監視するオプションが有効な場合に、ジョブの状態の更新情報、ジョブログおよびジョブ履歴を集中管理サーバーに送信する p.1487の「CASOの設定について」を参照してください。	可	可
カタログを集中管理、分散または複製する p.1500の「CASOカタログの場所の変更」を参照してください。	可	不可 分散カタログの場所のみを選択できます。
集中リストアを実行する p.1510の「CASOでの集中リストアの動作」を参照してください。	可	不可 バックアップセットを参照し、集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーのリストア操作を実行できません。

メモ: CASO 環境では、集中管理サーバーまたはデバイスとメディアのデータベースが存在する管理対象メディアサーバーにのみ、NDMP サーバーを追加できます。

p.1480の「既存のCASOのアップグレードについて」を参照してください。

p.1464の「CASOの動作」を参照してください。

p.1486の「CASO操作のBackup Execユーティリティの実行」を参照してください。

CASO 集中管理サーバーのインストール

インストールを開始する前に、デバイスおよびメディアのデータの場所に関する情報を確認してください。

p.1468 の「CASO デバイスおよびメディアのデータの場所の選択方法」を参照してください。

[管理対象メディアサーバー]機能のインストール中に、管理対象メディアサーバーのデバイスおよびメディアのデータを、集中管理サーバー上または管理対象メディアサーバーのデータベースのいずれかに保存するように求めるメッセージが表示されます。その選択は、CASO 環境におけるジョブの管理方法に影響を与えます。

Central Admin Server Option (CASO) をインストールするには、最初に集中管理サーバーをインストールしてから管理対象メディアサーバーをインストールします。

集中管理サーバーをインストールする方法

- 1 集中管理サーバーとして使用するサーバーに、Backup Exec と CASO をインストールします。

p.107 の「ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール」を参照してください。

- 2 メッセージが表示されたら、CASO のライセンスキーを入力します。
- 3 集中管理サーバーに Backup Exec と CASO をインストールしたら、Backup Exec を起動し、ナビゲーションバーに[メディアサーバー]ビューが表示されることを確認します。
- 4 [メディアサーバー]ビューで、CASO をインストールしたメディアサーバーの[メディアサーバーの種類]列に[集中管理サーバー]と表示されていることを確認します。
- 5 タスクペインの[メディアサーバーインストールタスク]の下にある[管理対象メディアサーバーのデフォルトの設定]をクリックします。
- 6 [管理対象メディアサーバーのデフォルト設定]ダイアログボックスで、インストールする新しい管理対象メディアサーバーに適用する設定を選択します。

p.1489 の「管理対象メディアサーバーのデフォルト設定」を参照してください。

- 7 管理対象メディアサーバーをインストールします。

p.1471 の「CASO の集中管理サーバーからの管理対象メディアサーバーのインストール」を参照してください。

CASO の集中管理サーバーからの管理対象メディアサーバーのインストール

集中管理サーバーのインストールが完了したら、[管理対象メディアサーバー]機能をスタンドアロンサーバーにプッシュインストールすることができます。

これらの手順に従った後で管理対象メディアサーバーが[メディアサーバー]ビューに表示されない場合、ネットワークにファイアウォールが設定されている環境では、集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間のいくつかのポートを開く必要があります。

管理対象メディアサーバーをインストールする前に、管理対象メディアサーバーのデバイスとメディアのデータベースの場所を決定してください。管理対象メディアサーバーのインストール中に、管理対象メディアサーバーのデバイスおよびメディアのデータを、集中管理サーバー上または管理対象メディアサーバーのデータベースに保存するように求めるメッセージが表示されます。その選択は、CASO 環境におけるジョブの管理方法に影響を与えます。

p.1468 の「CASO デバイスおよびメディアのデータの場所の選択方法」を参照してください。

集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーをプッシュインストールする方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 タスクペインの[メディアサーバーインストールタスク]の下にある[追加の管理対象メディアサーバーをインストール]をクリックします。
- 3 [リモートサーバー]フィールドで、追加する管理対象メディアサーバーの名前を入力するか、サーバーを探すために[参照]をクリックします。
- 4 [リストに追加]をクリックします。
- 5 [リモートコンピュータログオンクレデンシヤル]の下で、次のフィールドを設定します。

ユーザー名	リモートコンピュータの管理者権限が付与されているアカウントのユーザー名を入力します。
パスワード	リモートコンピュータの管理者権限が付与されているアカウントのパスワードを入力します。
ドメイン	リモートコンピュータが属するドメインを選択します。

- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 次のいずれかを実行します。

- Backup Exec とそのオプションのライセンスキーを所有していない場合 <https://licensing.symantec.com> にアクセスして、製品を登録します。製品を登録すると、シマンテック社からライセンスキーが送信されます。ライセンスキーは、Backup Exec とそのオプションのインストールに必要です。インターネットに接続できるコンピュータから Web サイトにアクセスできます。
- ライセンスキーを受信したら、手順 8 に進みます。

Backup Exec とそのオプションのライセンスキーを所有している場合 手順 8 に進みます。

8 次のいずれかの方法を選択して、ライセンスキーを入力します。

ライセンスキーを手動で入力する 次に示す順序で操作を実行します。

- [ライセンスキー]フィールドにライセンスキーを入力します。
- [追加]をクリックします。
- 追加するオプションまたはエージェントごとに、各ライセンスキーについてこの手順を繰り返します。

ライセンスキーをファイルからインポートする 次に示す順序で操作を実行します。

- [ファイルからのインポート]をクリックします。
- **besernum.xml** ファイルを選択します。

評価版をインストールする 次に示す順序で操作を実行します。

- [ライセンスキー]フィールドを空白にします。
- 手順 **9** に進みます。

9 [次へ]をクリックします。

入力したライセンスキーは **besernum.xml** ファイルに保存されます。

10 Backup Exec の機能リストで、[管理対象メディアサーバー]を選択します。

p.104 の「[Backup Exec の標準機能について](#)」を参照してください。

11 次のいずれかを実行します。

Backup Exec ファイルのインストール先ディレクトリを変更する [インストール先フォルダ]フィールドに、ディレクトリの名前を入力します。

デフォルトのディレクトリを使用する (推奨) 手順 **12** に進みます。

マウントポイントを削除すると **Backup Exec** がアンインストールされるため、インストール先ディレクトリとしてマウントポイントを選択することはお勧めしません。

12 [次へ]をクリックします。

13 Backup Exec システムサービスに使用する管理者アカウントのユーザー名、パスワードおよびドメインを入力し、[次へ]をクリックします。

p.98 の「[Backup Exec サービスアカウントについて](#)」を参照してください。

- 14 ローカル SQL Express インスタンスをインストールするか、SQL Server 2005 (SP3) または SQL Server 2008 の既存のインスタンスを使うかを選択して、[次へ]をクリックします。

p.103 の「[Backup Exec でインストールされる Microsoft SQL Server 2005 Express Edition コンポーネントについて](#)」を参照してください。

- 15 この管理対象メディアサーバーと通信する集中管理サーバーの名前を入力します。
SAN Shared Storage Option でセカンダリサーバーとして管理対象メディアサーバーを設定する場合は、プライマリサーバーを集中管理サーバーに設定してください。プライマリサーバーは、集中管理サーバーと同じサーバーである必要があります。
- 16 この管理対象メディアサーバーのデバイスおよびメディアのデータを保存する場所を選択します。

集中管理サーバー

次の処理を行う場合にこのオプションを使用します。

- この管理対象メディアサーバーにジョブを委任する場合。
- 集中管理サーバーからすべてのストレージデバイスとメディアを管理する場合。

管理対象メディアサーバー

次のような場合にこのオプションを使用します。

- 集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間で永続的なネットワーク接続を利用できない。
- 狭帯域幅のネットワーク接続であるためにネットワークトラフィックを少し軽減する必要がある。

集中管理サーバーからこの管理対象メディアサーバーにジョブを委任することはできませんが、ジョブをこの管理対象メディアサーバーにコピーすることができます。コピーされたジョブは、集中管理サーバーへのネットワーク接続なしで実行することができます。

p.1468 の「[CASO デバイスおよびメディアのデータの場所の選択方法](#)」を参照してください。

インストール時に[SAN SSO]オプションと[管理対象メディアサーバー]オプションを選択すると、Backup Exec カタログおよびデータベース機能はすべて、デフォルトで集中管理されます。

- 17 [次へ]をクリックします。
- 18 デバイスドライバに関する情報を確認して、[次へ]をクリックします。
- 19 Backup Exec がリモートコンピュータを検証した後、次のいずれかの方法でリストを変更できます：

手動で 1 つのリモートコンピュータを追加する方法 [追加]をクリックし、次に[単一のサーバーを追加]をクリックします。

手動で複数のリモートコンピュータを追加する方法 [追加]をクリックし、次に[同じ設定で複数のサーバーを追加]をクリックします。

コンピュータの既存のリストをインポートして複数のリモートコンピュータを追加する方法 [インポートおよびエクスポート]をクリックして、次のオプションの 1 つを選択します。

- 選択されたリストからリモートコンピュータの名前を **Backup Exec** で追加できるように[ファイルからのインポート]を選択します。
- このメディアサーバーに発行するように設定されているすべてのリモートコンピュータの名前を **Backup Exec** で追加できるように[このメディアサーバーに公開されているサーバーのインポート]を選択します。

リモートコンピュータのリストに対するリモートコンピュータログオンクレデンシャルを入力しなければなりません。

インストールするように選択した製品、またはこのインストールのために選択した他のプロパティを変更する方法 変更するリモートコンピュータを選択して、[編集]をクリックします。

リストからリモートコンピュータを削除する方法 削除するリモートコンピュータを選択して、[削除]をクリックします。

リモートコンピュータと関連付けられているリモートコンピュータのログオンクレデンシャルのリストを保存する方法 [将来のリモートインストールセッションのためにサーバーのリストを保存]にチェックマークが付いていることを確認します。

このオプションはこれらのリモートコンピュータに **Backup Exec** またはオプションを次回インストールするときに、リモートコンピュータすべての名前とそのクレデンシャルが自動的に追加されるようにします。

リモートコンピュータのこのリストを XML ファイルに保存する方法 [インポートおよびエクスポート]をクリックし、次に [ファイルにエクスポート]をクリックします。

XML ファイルを保存するための場所を選択できます。このオプションは複数のメディアサーバーに同じリストを使いたい場合に有用です。リストをインポートするとき、リモートコンピュータのログオンクレデンシャルを入力し直さなければなりません。

検証の間に見つかったエラーを修正する方法 コンピュータ名を右クリックし、[エラーの修正]をクリックします。

Backup Exec が無効なリモートコンピュータを再検証できるようにする方法 コンピュータ名を右クリックし、[環境チェックの再試行]をクリックします。

20 すべてのコンピュータが検証されたら、[次へ]をクリックします。

21 Backup Exec のインストールの概要を確認し、[インストール]をクリックします。

22 [次へ]をクリックして、次に[完了]をクリックします。

リモートコンピュータを再起動していない場合は、変更した内容をシステムに反映するために、ここで再起動する必要があります。

23 (必要な場合のみ) サーバーに接続されているテープストレージデバイスのデバイスドライバをインストールします。

p.437 の「[テープデバイス設定ウィザードを使用したテープデバイスの設定について](#)」を参照してください。

管理対象メディアサーバーを再起動すると、Backup Exec 集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間の通信が開始されます。集中管理サーバーで設定した管理対象メディアサーバーのデフォルト設定が適用されます。

24 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。

25 右側のペインに、管理対象メディアサーバーの名前が表示されていることを確認します。

管理対象メディアサーバーが[メディアサーバー]ビューに表示されない場合、ネットワークにファイアウォールが設定されている環境では、集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間のいくつかのポートを開く必要があります。

ファイアウォールを越えるCASO 管理対象メディアサーバーのインストールについて

管理対象メディアサーバーは、集中管理サーバーがインストールされているファイアウォール環境の外側にインストールされる場合、または別のファイアウォール内にインストールされる場合があります。

次のルールはファイアウォールを越えてインストールされる管理対象メディアサーバーに適用されます。

- Backup Exec Server サービスの通信を有効にするには、双方向にポート 3527 を開く必要があります。
- リモート選択項目を表示できるようにするには、Remote Agent for Windows Systems 用にポート 10000 を開く必要があります。

- SQLポートを集中管理サーバーのデータベースに対して双方向に開き、データベース接続を有効にする必要があります。

- 静的ポートを使わなければなりません。

デフォルトでは、Backup Exec SQL インスタンスは、動的ポートを使用するように設定されています。SQL Server を起動するたびに、ポート番号は変わります。動的ポートを静的ポートに変更する必要があります。ポートの設定を動的から静的に変更した後で、その静的ポートを Windows ファイアウォールの例外リストに追加する必要があります。

Windows オペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。

p.1477 の「CASO の SQL Express インスタンスの動的ポートの静的ポートへの変更」を参照してください。

p.1479 の「SQL 2005 または 2008 インスタンス用の CASO の SQL ポートの開放」を参照してください。

CASO の SQL Express インスタンスの動的ポートの静的ポートへの変更

集中管理サーバーの Backup Exec SQL Express インスタンスが実行されているポートを動的ポートから静的ポートに変更する必要があります。その後、管理対象メディアサーバーの別名を作成して、集中管理サーバーの SQL ポートへの接続を許可します。ポートを変更した後、集中管理サーバーの Backup Exec サービスおよび Microsoft SQL サービスを再起動する必要があります。

SQL Express インスタンスの動的ポートを静的ポートに変更する方法

- 1 集中管理サーバーで、[スタート]>[すべてのプログラム]>[Microsoft SQL Server 2005]>[構成ツール]>[SQL Server 構成マネージャ]をクリックします。
- 2 [SQL Server 2005 ネットワークの構成]を展開します。
- 3 [BKUPEXEC のプロトコル]をクリックし、右側のペインで[TCP/IP]をダブルクリックします。
- 4 [TCP/IP のプロパティ]ダイアログボックスで、[IP アドレス]タブをクリックします。
- 5 [IP All]の下にある[TCP 動的ポート]の値を削除して、フィールドを空白にします。
- 6 [IP All]の下にある[TCP ポート]にポート番号を入力します。

ポート番号には、1025 から 65535 の間の値を指定できます。他のアプリケーションで使用されていないポート番号を指定する必要があります。

p.783 の「リストアの問題のトラブルシューティング」を参照してください。

- 7 使用されている特定のネットワークインターフェースカード (IP1、IP2 など) の見出しの[有効]を[いいえ]から[はい]に変更します。
- 8 同じ見出しの[TCP 動的ポート]で 0 (ゼロ) を削除して、[TCP ポート]で入力したポート番号と同じポート番号を入力します。

- 9 [適用]をクリックします。
- 10 Backup Exec サービスおよび SQL サービスを再起動する必要があります。
- 11 管理対象メディアサーバーの別名を作成して、集中管理サーバーの SQL ポートへの接続を許可します。

p.1478の「[SQL Express インスタンスが使われる場合の管理対象メディアサーバーのエイリアスの作成](#)」を参照してください。

SQL Express インスタンスが使われる場合の管理対象メディアサーバーのエイリアスの作成

集中管理サーバーの Backup Exec SQL Express インスタンスが実行されているポートを動的ポートから静的ポートに変更する必要があります。その後、管理対象メディアサーバーの別名を作成して、集中管理サーバーの SQL ポートへの接続を許可します。ポートを変更した後、集中管理サーバーの Backup Exec サービスおよび Microsoft SQL サービスを再起動する必要があります。

SQL Express インスタンスが使用されている場合に別名を作成する方法

- 1 管理対象メディアサーバーで、[スタート]>[SQL Server 構成マネージャ]をクリックします。
- 2 [SQL Native Client の構成]を展開します。
- 3 [別名]をクリックし、集中管理サーバーの名前と Backup Exec SQL インスタンスの名前を含む別名をダブルクリックします。
- 4 別名のプロパティダイアログボックスで、次の表に示す必要な情報を入力します。

別名	集中管理サーバーの名前と Backup Exec SQL インスタンスの名前を、「サーバー名¥インスタンス名」の形式で入力します。
ポート番号	前述の手順で書き留めた、リモート Backup Exec SQL Server インスタンスのポート番号を入力します。
プロトコル	[TCP/IP]を選択します。
サーバー	集中管理サーバーの名前と Backup Exec SQL インスタンスの名前を、「サーバー名¥インスタンス名」の形式で入力します。

- 5 [適用]をクリックし、[OK]をクリックします。
- 6 SQL Server 構成マネージャユーティリティを閉じます。

SQL 2005 または 2008 インスタンス用の CASO の SQL ポートの開放

集中管理サーバーの Backup Exec SQL 2005 または 2008 インスタンスが実行されているポート番号を検索し、管理対象メディアサーバーの別名を作成する必要があります。

SQL 2005 または 2008 インスタンス用の SQL ポートを開く方法

- 1 集中管理サーバーで、¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥80¥Tools¥Binn に移動して、svrnetcn.exe をダブルクリックします。
- 2 [一般]タブで、Backup Exec SQL インスタンスを選択します。
- 3 [有効になっているプロトコル]の下にある[TCP/IP]を選択し、[プロパティ]をクリックします。
- 4 表示されたポート番号を書き留めます。
- 5 管理対象メディアサーバーの別名を作成して、集中管理サーバーの SQL ポートへの接続を許可します。

p.1479 の「[SQL 2005 または SQL 2008 インスタンスが使われる場合の管理対象メディアサーバーのエイリアスの作成](#)」を参照してください。

SQL 2005 または SQL 2008 インスタンスが使われる場合の管理対象メディアサーバーのエイリアスの作成

集中管理サーバーの Backup Exec SQL 2005 または 2008 インスタンスが実行されているポート番号を検索し、管理対象メディアサーバーの別名を作成する必要があります。

SQL 2005 または 2008 インスタンスが使用されている場合に別名を作成する方法

- 1 管理対象メディアサーバーで、管理対象メディアサーバーの別名を作成するために、¥Windows¥System32 に移動し、cliconfg.exe をダブルクリックします。
- 2 [別名]タブで、[追加]をクリックします。
- 3 [サーバー別名]フィールドに、次の情報を入力します。

サーバー名¥インスタンス名

- 4 [ネットワークライブラリ]の下にある[TCP/IP]を選択します。
- 5 [サーバー名]フィールドに、次の情報を入力します。

サーバー名¥インスタンス名

- 6 [ポートを動的に決定する]のチェックマークを外します。
- 7 [ポート番号]フィールドに、リモート Backup Exec SQL Server インスタンスのポート番号を入力します。

既存の CASO のアップグレードについて

既存の CASO 環境で、最初に集中管理サーバーをアップグレードしてから管理対象メディアサーバーをアップグレードします。

必要に応じて、CASO 環境内でローリングアップグレードを実行することができます。つまり、Backup Exec 12.5 から Backup Exec 2010 に集中管理サーバーを最初にアップグレードしてから、一定の期間にわたって Backup Exec 12.5 から Backup Exec 2010 に管理対象メディアサーバーをアップグレードできます。ローリングアップグレードを実行するには Backup Exec の最新の Service Pack を持たなければなりません。

メモ: 上位互換性はローリングアップグレードでサポートされません。したがって、Backup Exec 12.5 が稼動するどのシステムでも Backup Exec 2010 が稼動するシステムを保護できません。

CASO 環境では、異なるバージョンを長期間混在させないことをお勧めします。バージョンが混在した環境では、管理対象メディアサーバーを管理するための重要な機能が失われるため、CASO 環境を適切に管理することが難しくなります。

メモ: 管理対象メディアサーバーに SAN SSO オプションがインストールされていれば、ローリングアップグレードを実行できません。

集中管理サーバーを Backup Exec 2010 にアップグレードすると、Backup Exec 12.5 を実行する管理対象メディアサーバー上で次の操作がサポートされます。

- バックアップ
- リストア
- インベントリ
- カタログ

p.1499 の「CASO カタログの場所について」を参照してください。

p.1500 の「CASO カタログの場所の変更」を参照してください。

p.1480 の「既存の CASO 集中管理サーバーのアップグレード」を参照してください。

p.1482 の「既存の CASO 管理対象メディアサーバーのアップグレード」を参照してください。

既存の CASO 集中管理サーバーのアップグレード

管理対象メディアサーバーをアップグレードする前に、集中管理サーバーをアップグレードする必要があります。

p.1480 の「[既存の CASO のアップグレードについて](#)」を参照してください。

アップグレード時間を短縮するには、**Backup Exec** をアップグレードする前にデータベース保守ジョブを実行して、不要になったジョブ履歴およびカタログを削除します。

p.196 の「[データベースの保守](#)」を参照してください。

メモ: 各管理対象メディアサーバーですべての **Backup Exec** サービスを停止してから、集中管理サーバーをアップグレードすることをお勧めします。

既存の集中管理サーバーをアップグレードする方法

- 1 **Backup Exec** 用の最新の **Service Pack** がインストールされていることを確認します。
- 2 集中管理サーバーおよび管理対象メディアサーバー上のスケジュール済みジョブをすべて保留にします。

p.552 の「[実行中のジョブのすべてのスケジュールの保留](#)」を参照してください。

- 3 実行中のジョブをすべて完了させます。
- 4 インストールメディアブラウザから、**Symantec Backup Exec** をインストールするためのオプションを選択します。
- 5 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
- 6 [使用許諾契約書に同意します]を選択し、[次へ]をクリックします。
- 7 [ローカルインストール]にチェックマークを付けて、[**Backup Exec** および各オプションのインストール]をクリックします。
- 8 [次へ]をクリックします。
- 9 ウィザードに表示されるプロンプトに従います。
- 10 [既存のデータとカタログのバックアップ]ページで、既存のすべてのカタログおよびデータをバックアップするディレクトリを入力するか選択します。デフォルトの場所は次のディレクトリです。

```
C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\Data
```

以前のバージョンのカタログおよびデータが不要な場合は、[以前のデータとカタログをバックアップしない]をクリックします。

- 11 [次へ]をクリックして続行します。

アップグレードの概略が表示されます。アップグレードが完了すると、管理対象メディアサーバーとの通信が自動的に有効になります。

- 12 ジョブの保留状態をすべて解除します。
p.552 の「[実行中のジョブのすべてのスケジュールの保留](#)」を参照してください。
- 13 一部またはすべての管理対象メディアサーバーをアップグレードします。

既存の CASO 管理対象メディアサーバーのアップグレード

管理対象メディアサーバーをアップグレードする前に、集中管理サーバーをアップグレードする必要があります。

p.1480 の「[既存の CASO のアップグレードについて](#)」を参照してください。

Backup Exec をアップグレードする前にデータベース保守ジョブを実行して、不要になったジョブ履歴およびカタログを削除します。そうすることで、アップグレードの時間を短くします。

p.196 の「[データベースの保守](#)」を参照してください。

表 O-2 既存の CASO 管理対象メディアサーバーのアップグレード

手順	説明
手順 1	Backup Exec 12.5 用の最新の Service Pack がインストールされていることを確認します。
手順 2	管理対象メディアサーバーを一時停止して、集中管理サーバーからその管理対象メディアサーバーにジョブが委任されないようにします。実行中のジョブは、アップグレードを開始する前に、終了またはキャンセルしてください。

手順	説明
手順 3	<p>アップグレードする管理対象メディアサーバーで、次のいずれかを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ デバイスおよびメディアのデータを保存する場所を選択する p.1471の「CASOの集中管理サーバーからの管理対象メディアサーバーのインストール」を参照してください。■ 管理対象メディアサーバーのデバイスおよびメディアのデータを集中管理サーバー上で集中管理する。アップグレード後に、デバイスおよびメディアのデータを管理対象メディアサーバーのデータベースに移動するには、Backup Exec ユーティリティを実行する必要があります。Backup Exec ユーティリティでは、ジョブとメディアサーバープールの割り当てを変更し、ローカルの管理対象メディアサーバーでデバイスおよびメディアのデータの新しい場所を使用するように求められます。 p.1485の「メディアサーバーから管理対象メディアサーバーへの変更」を参照してください。
手順 4	<p>管理対象メディアサーバーを再開します。</p> <p>p.1519の「CASOの管理対象メディアサーバーの一時停止」を参照してください。</p> <p>p.1486の「CASO 操作の Backup Exec ユーティリティの実行」を参照してください。</p>

Backup Exec メディアサーバーから集中管理サーバーへの変更

スタンドアロン Backup Exec メディアサーバーを集中管理サーバーに変更することができます。

Backup Exec メディアサーバーを集中管理サーバーに変更する方法

- 1 集中管理サーバーにするメディアサーバー上で、Backup Exec を起動します。
- 2 ツールメニューの[このメディアサーバーにオプションとライセンスキーをインストール]をクリックします。
- 3 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。

- 4 [ローカルインストール]にチェックマークを付け、[次へ]をクリックします。
- 5 次のいずれかを実行します。

Backup Exec とそのオプションのライセンスキーを所有していない場合

- 次に示す順序で操作を実行します。
- <https://licensing.symantec.com> にアクセスして、製品を登録します。
製品を登録すると、シマンテック社からライセンスキーが送信されます。ライセンスキーは、Backup Exec とそのオプションのインストールに必要です。インターネットに接続できるコンピュータから Web サイトにアクセスできます。
 - ライセンスキーを受信したら、手順 6 に進みます。

Backup Exec とそのオプションのライセンスキーを所有している場合

手順 6 に進みます。

- 6 次のいずれかの方法を選択して、ライセンスキーを入力します。

ライセンスキーを手動で入力する

- 次に示す順序で操作を実行します。
- [ライセンスキー]フィールドにライセンスキーを入力します。
 - [追加]をクリックします。
 - 追加するオプションまたはエージェントごとに、各ライセンスキーについてこの手順を繰り返します。

ライセンスキーをファイルからインポートする

- 次に示す順序で操作を実行します。
- [ファイルからのインポート]をクリックします。
 - **besernum.xml** ファイルを選択します。

評価版をインストールする [ライセンスキー]フィールドを空白にします。

評価版をインストールする場合、ライセンスキーの入力は不要です(評価版と製品版の機能は同じです)。

- 7 [次へ]をクリックします。

入力したライセンスキーが、Windows または WINNT ディレクトリの **besernum.xml** ファイルに保存されます。

- 8 Backup Exec の機能リストの [**Backup Exec** オプション]の下で、[Central Admin Server Option]を選択します。

- 9 [次へ]をクリックします。

- 10 Backup Exec サービスが使用するローカル管理者権限があるアカウントのユーザー名、パスワード、ドメインを入力します。
- 11 [次へ]をクリックします。
- 12 Backup Exec のインストールの概要を確認し、[インストール]をクリックします。
- 13 [完了]をクリックします。

メディアサーバーから管理対象メディアサーバーへの変更

スタンドアロン Backup Exec メディアサーバーを管理対象メディアサーバーに変更することができます。

次の例外に注意してください。

- 集中管理サーバーがすでに管理対象メディアサーバーとして設定されている場合は、Backup Exec ユーティリティを使用して、別の集中管理サーバーに変更する必要があります。
- Backup Exec SAN Shared Storage Option がインストールされている場合は、セカンダリサーバーで[集中管理サーバーの設定]オプションを使用できません。

これらの手順に従った後で管理対象メディアサーバーが[メディアサーバー]ビューに表示されない場合、ネットワークにファイアウォールが設定されている環境では、集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間のいくつかのポートを開く必要があります。

メディアサーバーを管理対象メディアサーバーに変更する方法

- 1 集中管理サーバーが実行されていることを確認します。
- 2 スタンドアロンメディアサーバーで Backup Exec を起動します。
- 3 ツールメニューの[集中管理サーバーの設定]をクリックします。
- 4 集中管理サーバーの名前を入力します。
メディアサーバーが指定した集中管理サーバーで管理されることを示す情報アラートが表示されます。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 Backup Exec メディアサーバーを再起動します。
- 7 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。

管理対象メディアサーバーからスタンドアロンメディアサーバーへの変更

管理対象メディアサーバーを[メディアサーバー]ビューから削除して、スタンドアロンメディアサーバーに変更することができます。

管理対象メディアサーバーをスタンドアロンメディアサーバーに変更する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 削除する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。

CASO 操作の Backup Exec ユーティリティの実行

デバイスおよびメディアのデータの場所を移動したり、管理対象メディアサーバーに別の集中管理サーバーを設定するには、Backup Exec ユーティリティという個別のアプリケーションを実行する必要があります。

Backup Exec ユーティリティは、シマンテック社テクニカルサポートの指示に従って使用してください。このユーティリティを適切に使用しない場合、構成が変更され、Backup Exec を実行できなくなる可能性があります。

Backup Exec ユーティリティを実行する方法

- 1 Backup Exec のインストール先ディレクトリ `¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec` で、`BEUtility` をダブルクリックします。
- 2 ヘルプを参照してタスクを実行します。Backup Exec ユーティリティのメニューで[ヘルプ]をクリックします。

CASO の集中管理サーバーからの Backup Exec のアンインストール

集中管理サーバーから Backup Exec をアンインストールする前に、集中管理サーバーの[メディアサーバー]ビューからすべての管理対象メディアサーバーを削除する必要があります。

注意: 次の手順でアンインストールしないと、管理対象メディアサーバーで Backup Exec のアンインストール中に Backup Exec サービスを停止する際に長時間の遅延が発生する場合があります。

集中管理サーバーから Backup Exec をアンインストールする方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 4 [メディアサーバー]ビューに表示されている管理対象メディアサーバーごとに、この手順を繰り返します。
- 5 すべての管理対象メディアサーバーを削除したら、集中管理サーバーの Backup Exec をアンインストールします。

p.159 の「[Backup Exec のアンインストール](#)」を参照してください。

管理対象メディアサーバーからの Backup Exec のアンインストール

Backup Exec をアンインストールする前に、集中管理サーバーの[メディアサーバー]ビューから管理対象メディアサーバーを削除する必要があります。

管理対象メディアサーバーから Backup Exec をアンインストールする方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 削除する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 4 集中管理サーバーの[メディアサーバー]ビューから管理対象メディアサーバーを削除したら、管理対象メディアサーバーから Backup Exec をアンインストールします。

p.159 の「[Backup Exec のアンインストール](#)」を参照してください。

CASO の設定について

CASO のインストール後に、次の操作を行って CASO 環境を設定できます。

表 O-3 CASO 環境の設定

操作	手順
管理対象メディアサーバーのデフォルトを設定する	p.1489の「 管理対象メディアサーバーのデフォルト設定 」を参照してください。
狭帯域幅のネットワーク接続に対応したり、ネットワークトラフィックを軽減する	p.1489の「 CASOでのネットワークトラフィックの軽減について 」を参照してください。

操作	手順
<p>ジョブのリカバリを有効にするために応答のない管理対象メディアサーバーのしきい値をカスタマイズし、管理対象メディアサーバーが実行中のジョブの状態に関する更新情報を送信する間隔をカスタマイズする</p>	<p>p.1492の「CASO用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。</p>
<p>ジョブログの設定およびジョブ履歴情報を、管理対象メディアサーバーに残すようにカスタマイズする。また、この情報を自動的にコピーして集中管理サーバーに移動することもできる</p>	<p>p.1495の「ログおよび履歴の集中管理サーバーへのコピー」を参照してください。</p>
<p>デバイスおよびメディアのデータの場所を変更する</p>	<p>p.1486の「CASO操作のBackup Execユーティリティの実行」を参照してください。</p>
<p>集中管理サーバーから利用可能なデバイスにジョブを委任する</p>	<p>p.504の「デバイスプールの作成」を参照してください。</p>
<p>管理対象メディアサーバーグループで操作を実行する</p>	<p>p.1503の「CASOでメディアサーバープールを使う方法」を参照してください。</p>
<p>管理対象メディアサーバーで発生したアラートを表示する</p>	<p>p.1496の「CASOでのアラートの動作」を参照してください。</p>
<p>アラート発生時の通知を設定する</p>	<p>p.1498の「CASOのアラートと通知について」を参照してください。</p>
<p>失敗ジョブをリカバリするためのデフォルトのエラー処理方法を表示する</p>	<p>p.1518の「CASOでの失敗ジョブのリカバリについて」を参照してください。</p>
<p>選択したネットワークインターフェースを使用できない場合に、委任バックアップジョブですべてのネットワークインターフェースを使用して Remote Agent にアクセスできるように設定する</p>	<p>p.1498の「管理対象メディアサーバーでの利用可能なネットワークインターフェースカードの使用」を参照してください。</p>

CASO でのネットワークトラフィックの軽減について

次の操作を行って、狭帯域幅のネットワーク接続に対応したり、ネットワークトラフィックを軽減することができます。

- ジョブの状態の更新情報が管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに送信される頻度を低減する。
- ローカルの管理対象メディアサーバーで作成されたジョブを集中管理サーバーから監視しないようにする。
- ジョブログおよびジョブ履歴が管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに送信される頻度を低減する。
- メディアサーバーからの応答がなくなった場合に、**Backup Exec** がメディアサーバーの状態を変更するまでに待機する時間を増やす。
- 管理対象メディアサーバーにカタログを保存する (分散)。集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間で永続的なネットワーク接続が確立されている場合は、カタログの場所に関係なく、カタログを参照して両方のサーバーからリストア操作を実行することができます。

p.1489 の「[管理対象メディアサーバーのデフォルト設定](#)」を参照してください。

p.1495 の「[ログおよび履歴の集中管理サーバーへのコピー](#)」を参照してください。

p.1492 の「[CASO 用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定](#)」を参照してください。

p.1500 の「[CASO カatalogの場所の変更](#)」を参照してください。

管理対象メディアサーバーのデフォルト設定

通信のデフォルトは自動的に設定されます。ただし、デフォルト設定は変更することができます。

p.1489 の「[CASO でのネットワークトラフィックの軽減について](#)」を参照してください。

管理対象メディアサーバーのデフォルトを設定する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

インストール時に管理対象メディアサーバーに適用するデフォルトを設定する場合	タスクペインの[メディアサーバーインストールタスク]の下にある[管理対象メディアサーバーのデフォルトの設定]をクリックします。
---------------------------------------	---

既存の管理対象メディアサーバーのデフォルトを設定する場合	設定する管理対象メディアサーバーを右クリックして、[プロパティ]をクリックします。
------------------------------	---

- プール内の管理対象メディアサーバーグループのデフォルトを設定する場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- 新しい設定を適用する管理対象メディアサーバーを含むメディアサーバープールを選択または作成します。
 - メディアサーバープールを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。

- 3 [設定]タブで、必要なオプションを選択します。
p.1490 の「[管理対象メディアサーバーのデフォルト設定](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

管理対象メディアサーバーのデフォルト設定

通信のデフォルトは自動的に設定されます。ただし、デフォルト設定は変更することができます。

p.1489 の「[管理対象メディアサーバーのデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 O-4 管理対象メディアサーバーのデフォルト設定

項目	説明
プールのすべての管理対象メディアサーバーに設定を適用	プール内の管理対象メディアサーバーグループのデフォルトを設定します。このオプションはメディアサーバープールのためだけにのみ表示されます。
高速回線で集中管理サーバーに接続	集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間の通信頻度を高く設定します。この設定を選択した場合、デフォルトでは、ジョブの状態の更新情報が 10 秒ごとに集中管理サーバーに送信されます。ジョブログおよびジョブ履歴は、管理対象メディアサーバーのジョブが完了するたびに送信されます。
低速回線で集中管理サーバーに接続	集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間の通信頻度を低く設定します。この設定を選択した場合、デフォルトでは、ジョブの状態の更新情報が 120 秒ごとに集中管理サーバーに送信されます。ジョブログおよびジョブ履歴は、管理対象メディアサーバーのジョブが失敗した場合にのみ送信されます。

項目	説明
カスタム設定	<p>[カスタム設定の編集]オプションを有効にします。これによって、ジョブのリカバリのしきい値、ジョブの状態の更新情報の送信およびジョブログとジョブ履歴の送信について、個別のデフォルトが設定されます。</p> <p>p.1492の「CASO用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。</p> <p>p.1495の「ログおよび履歴の集中管理サーバーへのコピー」を参照してください。</p>
カスタム設定の編集	<p>ジョブのリカバリのしきい値、ジョブの状態の更新情報の送信およびジョブログとジョブ履歴の送信について、個別のデフォルトを設定します。</p> <p>p.1492の「CASO用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。</p> <p>p.1495の「ログおよび履歴の集中管理サーバーへのコピー」を参照してください。</p>
ローカルの管理対象メディアサーバーで作成されたジョブと、集中管理サーバーから委任されたジョブを監視する	<p>委任されたジョブに加え、ローカル管理対象メディアサーバーで作成されるジョブを表示することを可能にします。</p> <p>また、ローカルの管理対象メディアサーバーで作成されたジョブやローカルの管理対象メディアサーバーにコピーされたジョブを保留、削除、実行およびキャンセルしたり、ジョブの優先度を変更することができます。</p> <p>管理対象メディアサーバーでポリシーから作成されたジョブは、集中管理サーバーから削除できません。</p>
管理対象メディアサーバーと集中管理サーバーの時刻の差が次の秒数より大きくなった場合にアラートを表示する	<p>管理対象メディアサーバーの時計が集中管理サーバーの時計と異なる場合にBackup Execがアラートを作成することを可能にします。示される秒数を超えるとアラートが生成されます。</p> <p>CASOでは、管理対象メディアサーバーと集中管理サーバーの両方で、内部コンピュータクロックが監視されています。集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間で時刻のずれが拡大すると、ジョブが想定外の時刻に実行される可能性があります。この問題を回避するため、管理対象メディアサーバーと集中管理サーバーでクロックの時刻が一致している必要があります。時刻差アラートを受信した場合は、管理対象メディアサーバーのシステムクロックをリセットして、集中管理サーバーのシステムクロックに合わせてください。</p> <p>管理対象メディアサーバーまたは集中管理サーバーのシステムの時刻を変更した場合は、そのシステム上のBackup Execサービスを再起動する必要があります。</p>

CASO 用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定

通信状態によって、応答のない管理対象メディアサーバーに現在委任されているジョブおよび今後委任するジョブの集中管理サーバーでの処理方法が決定されます。

p.1494の「CASO 通信のしきい値に到達した場合に発生する事項」を参照してください。

管理対象メディアサーバーからの応答がなくなった場合に通信状態をトリガするしきい値を変更できます。また、実行中のジョブの状態に関する更新情報を管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに送信する頻度を設定することもできます。この頻度は、ネットワークトラフィックに影響を与えます。

通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の送信頻度を設定する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

インストール時に管理対象メディアサーバーに適用するデフォルトを設定する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- タスクペインの[メディアサーバーインストールタスク]の下にある[管理対象メディアサーバーのデフォルトの設定]をクリックします。

既存の管理対象メディアサーバーのデフォルトを設定する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- 設定する管理対象メディアサーバーを右クリックして、[プロパティ]をクリックします。
- [設定]タブをクリックします。

プール内の管理対象メディアサーバーグループのデフォルトを設定する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- 新しい設定を適用する管理対象メディアサーバーを含むメディアサーバープールを選択または作成します。
- メディアサーバープールを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- [設定]タブをクリックします。
- [プールのすべての管理対象メディアサーバーに設定を適用]にチェックマークを付けます。

- 3 [設定]タブで、[カスタム設定]をクリックし、[カスタム設定の編集]をクリックします。
- 4 [構成]タブで、必要に応じてデフォルトを変更します。

p.1493の「管理対象メディアサーバーのデフォルトオプションの設定」を参照してください。

- 5 [OK]をクリックします。

管理対象メディアサーバーのデフォルトオプションの設定

管理対象メディアサーバーからの応答がなくなった場合に通信状態をトリガするしきい値を変更できます。また、実行中のジョブの状態に関する更新情報を管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに送信する頻度を設定することもできます。この頻度は、ネットワークトラフィックに影響を与えます。

p.1492の「CASO用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。

表 O-5 管理対象メディアサーバーのデフォルトオプションの設定

項目	説明
通信中断(今後ジョブをこの管理対象メディアサーバーのキューに投入しない)	<p>管理対象メディアサーバーから応答がなくなった場合に、その管理対象メディアサーバーの状態を[通信中断]に変更するまでの時間を示します。</p> <p>管理対象メディアサーバーの状態が[通信中断]である場合、集中管理サーバーは、その管理対象メディアサーバーにはジョブを委任しません。しきい値を超える前に管理対象メディアサーバーの状態が[有効]に戻った場合は、ジョブの委任が再開されます。</p> <p>デフォルトのしきい値は 5 分です。</p>
通信途絶(ジョブのリカバリを開始する)	<p>管理対象メディアサーバーの状態を[通信中断]から[通信途絶]に変更するまでの時間を示します。</p> <p>管理対象メディアサーバーの状態が[通信中断]から[通信途絶]に変更された場合、集中管理サーバーは、管理対象メディアサーバーで実行中のジョブの状態を[失敗]とします。カスタマイズしたエラー処理方法[リカバリされたジョブ]は、状態が[通信途絶]に変更された際に実行中であったジョブに適用されます。</p> <p>デフォルトのしきい値は 15 分です。</p>

項目	説明
実行中のジョブの状態の更新情報を集中管理サーバーに送信する間隔 (秒)	<p>集中管理サーバーにジョブの状態に関する更新情報を送ります。管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーにジョブの状態の更新情報を送信する間隔(秒単位)を調節できます。多数のジョブが実行されている場合、ネットワーク帯域幅を確保するには、ジョブの状態の更新情報の送信間隔を長くします。更新情報を頻繁に送信する場合は、間隔を短くします。</p> <p>デフォルトは 10 秒で、ほぼリアルタイムで監視します。ネットワーク接続が高速である場合にのみ、この設定をお勧めします。</p> <p>狭帯域幅のネットワーク接続の場合は、120 秒に設定することをお勧めします。この頻度に設定すると、中規模のジョブの更新を表示でき、さらに、ジョブの状態の更新情報が送信されるために発生するネットワークトラフィックを大幅に軽減できます。</p> <p>このチェックボックスをオフにすると、ジョブの状態の更新情報は送信されません。ジョブの進行状況も集中管理サーバーに表示されません。ジョブが完了したら、集中管理サーバーの[ジョブ履歴]ビューが更新されます。</p>

CASO 通信のしきい値に到達した場合に発生する事項

CASO 環境では、管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間で発生した通信は、ネットワーク通信が正常な場合でも中断することがあります。管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間でジョブ関連の通信が中断した場合、管理対象メディアサーバーの通信状態は[有効]から[通信中断]に変更されます。管理対象メディアサーバーによる処理を待機中のジョブは、通信が再開されるまで管理対象メディアサーバーのジョブキューに保持されます。

管理対象メディアサーバーから応答がなくなった場合に、応答のないメディアサーバーの状態を変更するまでの **Backup Exec** の待機時間を設定できます。構成設定で指定された時間のしきい値を超えると、集中管理サーバーに報告される管理対象メディアサーバーの状態が変更されます。状態には[通信中断]と[通信途絶]があります。管理対象メディアサーバーの状態が[通信中断]または[通信途絶]に変更されると、集中管理サーバーは、停止状態の管理対象メディアサーバーに現在委任されているジョブおよび今後委任するジョブの処理方法を変更します。

たとえば、管理対象メディアサーバーからの通信が設定時間を経過しても集中管理サーバーで受信されなかった場合、集中管理サーバーは、そのメディアサーバーの通信状態を[通信中断]に変更します。それ以降はその管理対象メディアサーバーにジョブを委任せずに、状態が[有効]に戻るのを待機します。ジョブは、宛先のデバイスプールまたはメディアサーバープール内に存在する他の管理対象メディアサーバーに委任されます。

CASO は、管理対象メディアサーバーから通信がない時間を引き続き監視します。状態が[通信中断]に変更されてから設定時間が経過すると、CASO は管理対象メディアサー

バーの状態を[通信途絶]に変更します。CASOはジョブの状態を[失敗]とし、カスタマイズしたエラー処理方法[リカバリされたジョブ]によって、状態が[通信途絶]に変更された際に実行中であったジョブのリカバリを開始します。

p.1492の「CASO用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。

ログおよび履歴の集中管理サーバーへのコピー

ジョブの処理中および処理後、各管理対象メディアサーバーで処理されたジョブごとに、ジョブログおよびジョブ履歴情報が生成されます。デフォルトでは、この情報は、ジョブが処理された管理対象メディアサーバー上にローカルに格納されます。ただし、ジョブログとジョブ履歴情報は両方とも、[ジョブログおよびジョブ履歴]タブで選択したオプションに基づいて、自動的にコピーされて集中管理サーバーに送信されるように設定できます。

ログおよび履歴を集中管理サーバーにコピーする方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。

インストール時に管理対象メディアサーバーに適用するデフォルトを設定する場合

タスクペインの[メディアサーバーインストールタスク]の下にある[管理対象メディアサーバーのデフォルトの設定]をクリックします。

既存の管理対象メディアサーバーのデフォルトを設定する場合

設定する管理対象メディアサーバーを右クリックして、[プロパティ]をクリックします。

プール内の管理対象メディアサーバーグループのデフォルトを設定する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- 新しい設定を適用する管理対象メディアサーバーを含むメディアサーバープールを選択または作成します。
- メディアサーバープールを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- [設定]タブで、[プールのすべての管理対象メディアサーバーに設定を適用]にチェックマークを付けます。

- 3 [設定]タブで、[カスタム設定]をクリックし、[カスタム設定の編集]をクリックします。
- 4 [ジョブログおよびジョブ履歴]タブで、必要なオプションを選択します。
p.1496の「管理対象メディアサーバーの[ジョブログおよびジョブ履歴]」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

管理対象メディアサーバーの[ジョブログおよびジョブ履歴]

デフォルトでは、ジョブログおよびジョブ履歴は、ジョブが処理された管理対象メディアサーバー上にローカルに格納されます。ただし、集中管理サーバーにジョブログとジョブ履歴を送るように Backup Exec を設定できます。

p.1495 の「[ログおよび履歴の集中管理サーバーへのコピー](#)」を参照してください。

表 0-6 管理対象メディアサーバーの[ジョブログおよびジョブ履歴]

項目	説明
送信しない	ジョブログをジョブが動作した管理対象メディアサーバーに保持します。
次の時刻に毎日送信	毎日指定の時刻にジョブログのコピーを集中管理サーバーに送信します。
ジョブの完了時に送信	ジョブの完了時にジョブログのコピーを集中管理サーバーに送信します。
ジョブの失敗時だけ送信	ジョブが失敗したときにのみジョブログのコピーを集中管理サーバーに送信します。
ジョブの種類によって必要な場合だけ送信	ジョブ履歴を集中管理サーバー上に格納する必要がある種類のジョブを管理対象メディアサーバーで処理するたびに、ジョブ履歴のコピーを集中管理サーバーに送信します。 ジョブの種類が[セットコピー]および[合成バックアップ]の場合、ジョブ履歴を集中管理サーバー上に格納する必要があります。
次の時刻に毎日送信	毎日指定の時刻にジョブ履歴のコピーを集中管理サーバーに送信します。
ジョブの完了時に送信	ジョブの完了時にジョブ履歴のコピーを集中管理サーバーに送信します。
ジョブの失敗時だけ送信	ジョブが失敗したときにのみジョブ履歴のコピーを集中管理サーバーに送信します。

CASO でのアラートの動作

Central Admin Server Option (CASO) 環境では、管理対象メディアサーバーで生成されたアラートは、集中管理サーバーに自動的に渡されます。集中管理サーバーでアラートを表示するには、CASO 環境の各管理対象メディアサーバーおよび集中管理サーバーでアラートを有効または無効にするようにアラートカテゴリを設定する必要があります。

p.1497 の「[集中管理サーバーでのアラートの設定](#)」を参照してください。

集中管理サーバーでアクティブアラートに応答してクリアすると、管理対象メディアサーバーでもアラートはクリアされます。

集中管理サーバーのアラート機能を有効にせずに、管理対象メディアサーバーの **Backup Exec** のアラート機能を有効にすると、アラートが生成される管理対象メディアサーバーにのみアラートが表示され、集中管理サーバーには表示されません。

集中管理サーバーでアラートを有効にし、設定してから、管理対象メディアサーバーにアラート設定をコピーします。アラートは、管理対象メディアサーバーで生成されるときに、管理対象メディアサーバーと集中管理サーバーの両方に表示されるようになります。

p.1497 の「[管理対象メディアサーバーへのアラートのコピー](#)」を参照してください。

集中管理サーバーでは、すべての管理対象メディアサーバーのアラートを表示したり、アラートをフィルタにかけて、特定の管理対象メディアサーバーまたはメディアサーバーグループのアラートのみを表示することができます。

集中管理サーバーでのアラートの設定

Central Admin Server Option (CASO) 環境では、管理対象メディアサーバーで生成されたアラートは、集中管理サーバーに自動的に渡されます。集中管理サーバーでアラートを表示するには、CASO 環境の各管理対象メディアサーバーおよび集中管理サーバーでアラートを有効または無効にするようにアラートカテゴリを設定する必要があります。集中管理サーバーのアラート機能を有効にせずに、管理対象メディアサーバーの **Backup Exec** のアラート機能を有効にすると、アラートが生成される管理対象メディアサーバーにのみアラートが表示され、集中管理サーバーには表示されません。

p.1496 の「[CASO でのアラートの動作](#)」を参照してください。

集中管理サーバーで特定のアラートを設定する方法

- 1 集中管理サーバーで **Backup Exec** を起動します。
- 2 ツールメニューの [アラートカテゴリ] をクリックします。
- 3 アラートカテゴリのリストをスクロールして、設定するカテゴリを表示します。
- 4 [カテゴリのプロパティ] の下で、[このカテゴリのアラートを有効にする] にチェックマークを付けます。
- 5 [OK] をクリックします。

管理対象メディアサーバーへのアラートのコピー

集中管理サーバーでアラートを有効にし、設定してから、管理対象メディアサーバーにアラート設定をコピーします。アラートは、管理対象メディアサーバーで生成されるときに、管理対象メディアサーバーと集中管理サーバーの両方に表示されるようになります。

特定のアラートを管理対象メディアサーバーにコピーする方法

- 1 ツールメニューの[メディアサーバーへ設定をコピー]を選択します。
- 2 [コピーする設定の選択]の下にある[アラートの設定]チェックボックスをオンにします。
- 3 [追加]をクリックします。
- 4 設定をコピーする管理対象メディアサーバーの名前を入力します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 [設定のコピー]ダイアログボックスで、[OK]をクリックします。
集中管理サーバーに、コピーに成功した旨のアラートが表示されます。
- 7 [OK]をクリックし、アクティブアラートをクリアします。

CASO のアラートと通知について

Central Admin Server Option (CASO) 環境では、集中管理サーバーまたは管理対象メディアサーバーのどちらでも通知を設定できます。どちらで設定した場合も、委任されたジョブの通知であれば、集中管理サーバーから送信されます。

管理対象メディアサーバーのローカル管理者または集中管理サーバーの管理者、あるいはその両方に通知するように選択できます。

p.634 の「アラートと通知について」を参照してください。

管理対象メディアサーバーでの利用可能なネットワークインターフェースカードの使用

デフォルトでは、集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーに委任またはコピーされたジョブは、管理対象メディアサーバーに設定されているネットワークおよびセキュリティ設定を使用します。

ただし、選択したネットワークインターフェースを使用できない場合は、ジョブでネットワークインターフェースを使用して **Remote Agent** にアクセスするオプションを集中管理サーバーで選択することができます。バックアップジョブ用にこのオプションを有効にすると、管理対象メディアサーバーで代替ネットワークインターフェースが使用され、重要なバックアップジョブが失敗することを回避できます。

利用可能なネットワークインターフェースカードを管理対象メディアサーバーで使用できるように設定する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 タスクペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。

- 4 [管理対象メディアサーバーによる **Remote Agent** へのアクセスで、すべてのネットワークインターフェースを使用することを許可する]にチェックマークを付けます。
- 5 [OK]をクリックします。

CASO カタログの場所について

CASO 環境では、カタログの場所を選択することができます。集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間で永続的なネットワーク接続が確立されている場合は、カタログの場所に関係なく、カタログのバックアップセットを参照して両方のサーバーからリストア操作を実行することができます。

次のカタログの場所は利用可能です。

表 O-7

項目	説明
分散	<p>イメージファイル (バックアップセットの情報を含む小さなファイル) が、すべての管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに配布されます。履歴ファイルは、バックアップセットに関する詳細情報を含み、管理対象メディアサーバー上に残ります。</p> <p>メモ: カタログの場所を分散する場合は、ほとんどのカタログ情報が管理対象メディアサーバーに保存されるため、管理対象メディアサーバーでカタログファイルをバックアップすることが重要です。</p> <p>カタログを分散すると、集中管理サーバーのリストア選択のビューには、ボリュームレベルのバックアップセットのみが表示されます。バックアップセットを作成した管理対象メディアサーバーを利用できない場合、そのバックアップセットの詳細は表示されませんが、集中管理サーバーからボリューム全体をリストアすることができます。</p> <p>分散カタログを使用すると、パフォーマンスが向上し、デフォルトの集中リストア機能が提供され、ネットワークトラフィックが減少します。管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間で永続的な接続が確立されていない場合は、管理対象メディアサーバーから接続するたびに、カタログのイメージファイルが集中管理サーバーに自動的に配布されます。カタログの分散によるネットワークトラフィックの増加は一時的なもので、大きな影響はありません。</p>

項目	説明
集中	管理対象メディアサーバーのすべてのカタログファイルおよび情報が集中管理サーバーに保存されます。
複製	<p>すべてのカタログファイルが管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに複製されます。管理対象メディアサーバーと集中管理サーバーの両方に、管理対象メディアサーバーで生成されたカタログが格納されます。</p> <p>カタログの設定に基づいて Backup Exec がカタログファイルを削除する場合にのみ、カタログファイルの削除が管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間で複製されます。バックアップジョブによって管理対象メディアサーバーのカタログファイルが削除された場合、または手動で削除された場合は、次にカタログを同期するときに削除が複製されます。</p>

カタログの場所を選択する場合は、次の事項を考慮してください。

- 管理対象メディアサーバー上に、分散カタログまたは複製カタログを保存するのに必要なディスク容量があるかどうか。
- 集中カタログまたは複製カタログによって発生したトラフィックを処理するのに必要なネットワーク帯域幅があるかどうか。集中カタログおよび複製カタログの場合は、広帯域幅のネットワーク接続が必要です。
- データをリカバリする際に、カタログ情報を 1 つの場所に保存することが重要かどうか。たとえば、カタログの場所を集中管理または複製する場合は、すべてのカタログ情報が 1 つの場所に保存されるため、バックアップが簡単になります。カタログの場所を分散する場合は、ほとんどのカタログ情報が管理対象メディアサーバーに保存されます。

p.1500 の「[CASO カatalogの場所の変更](#)」を参照してください。

CASO カatalogの場所の変更

CASO 環境では、カタログの場所を変更して、カタログを分散、集中管理または複製することができます。

カタログの場所を変更すると、管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間でカタログファイルがコピーまたは移動され、ネットワークトラフィックが増加する原因になります。また、カタログの場所を変更した管理対象メディアサーバーで、Backup Exec サービスを再起動する必要があります。

p.1499 の「[CASO カatalogの場所について](#)」を参照してください。

p.589 の「[カタログ登録ジョブのデフォルト設定](#)」を参照してください。

p.1510 の「[CASO での集中リストアの動作](#)」を参照してください。

p.1511 の「[複数のデバイスに存在するデータを CASO でリストアする方法](#)」を参照してください。

カタログの場所を変更する方法

- 1 集中管理サーバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 カタログを変更する管理対象メディアサーバーを右クリックして、[プロパティ]をクリックします。
- 3 [メディアサーバーのプロパティ]ダイアログボックスの[詳細設定]タブで、使いたいカタログの場所を選択します。

p.1501 の「[管理対象メディアサーバーの\[詳細\]プロパティ](#)」を参照してください。

管理対象メディアサーバーの[詳細]プロパティ

CASO 環境では、カタログの場所を変更して、カタログを分散、集中管理または複製することができます。

p.1500 の「[CASO カatalogの場所の変更](#)」を参照してください。

表 0-8 管理対象メディアサーバーの[詳細]プロパティ

項目	説明
管理対象メディアサーバー (分散)	<p>集中管理サーバーと管理対象メディアサーバー間でカタログファイルを分散します。</p> <p>集中管理サーバーからは、Backup Exec 9.x またはそれ以前のバージョンで作成されたカタログ内の管理対象メディアサーバーのバックアップセットを参照できません。</p> <p>デバイスおよびメディアのデータが管理対象メディアサーバーのローカルデータベースに保存されている場合、カタログの場所は分散されます。</p> <p>このオプションは、狭帯域幅のネットワーク接続の場合に選択します。</p>
集中管理サーバー (集中)	<p>集中管理サーバーにすべてのカタログファイルを保存します。</p> <p>このオプションを選択する場合は、広帯域幅のネットワーク接続を利用してください。</p>

項目	説明
両方のサーバー (複製)	<p>すべてのカタログファイルを管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに複製します。</p> <p>管理対象メディアサーバーが利用できず、デバイスも共有されていない場合 (SAN Shared Storage Option が管理対象メディアサーバーにインストールされていない場合) でも、集中管理サーバーからカタログを参照することができます。ただし、管理対象メディアサーバーを使用できないため、リストアジョブを実行できません。</p> <p>このオプションを選択する場合は、広帯域幅のネットワーク接続を利用してください。</p>

CASO でのジョブの委任について

ジョブの委任とは、**Backup Exec** 管理対象メディアサーバーに接続されたさまざまなストレージデバイス間でジョブの負荷を自動的に分散するための機能です。ジョブは集中管理サーバーで作成されますが、任意の管理対象メディアサーバーで実行することができます。

ストレージデバイスをデバイスプールに論理的にグループ化しておくこと、利用可能になったストレージデバイスが集中管理サーバーから委任されたジョブを処理します。たとえば、2つのストレージデバイスを含むデバイスプールで、一方のストレージデバイスがジョブを処理中の場合、集中管理サーバーは、自動的に待機状態のストレージデバイスに他のジョブを委任します。

ポリシーが選択リストに適用されると、自動的にジョブが作成され、集中管理サーバーのジョブキューにサブMITされます。キューに追加されたジョブは、優先度順に処理されます。ジョブのパラメータおよびシステムの構成に応じて、集中管理サーバーは、選択されたデバイスプール内の利用可能なストレージデバイスにジョブを委任します。

ポリシー内のテンプレートは、デバイスプール、特定のデバイス、またはメディアサーバープール内のデバイスのいずれかに送信することができます。デバイスプールは、単一の管理対象メディアサーバーに接続されたデバイスで構成するか、または別々の管理対象メディアサーバーに接続されたデバイスで構成することもできます。ジョブの委任機能は、複数の管理対象メディアサーバーにまたがるドライブプールにテンプレートを送信する場合に便利です。集中管理サーバーから複数の管理対象メディアサーバーおよびそのデバイスに対してジョブの委任が可能な場合、特定のデバイスまたは管理対象メディアサーバーが利用可能になるまでジョブの処理を待機させる必要がないため、**Backup Exec** の処理効率は大幅に向上します。

p.1487 の「[CASO の設定について](#)」を参照してください。

p.1503 の「[CASO でメディアサーバープールを使う方法](#)」を参照してください。

CASO でメディアサーバープールを使う方法

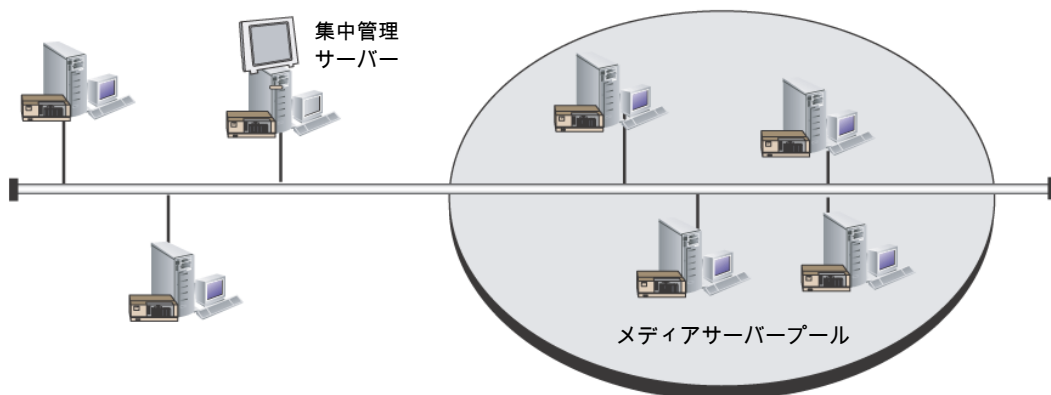
CASO 環境では、複数の管理対象メディアサーバーをメディアサーバープールにグループ化できます。管理対象メディアサーバーのプールを作成しておくことで、その管理対象メディアサーバーのすべてのデバイスプールをジョブの委任に利用できます。メディアサーバープール内の各管理対象メディアサーバーに複数のデバイスを接続している場合は、少数のストレージデバイスで構成された小規模なデバイスプールを複数作成できます。これにより、一部のジョブをメディアサーバープール内の特定のデバイスプールに送信し、他のジョブを同じメディアプール内の別のデバイスプールに送信できます。

メディアサーバープールには、複数の管理対象メディアサーバーを含めたり、1つの管理対象メディアサーバーのみを含めることができます。1つの管理対象メディアサーバーを複数のメディアサーバープールに含めることもできます。また、集中管理サーバーを管理対象メディアサーバーとして使用し、メディアサーバープールに含めることもできます。

プール内の管理対象メディアサーバーまたはメディアサーバーは、バックアップ先デバイスにアクセスできる必要があります。管理対象メディアサーバープールまたはメディアサーバープールとデバイスとの間に接続がない場合は、ジョブは実行されません。[準備完了: メディアサーバープール内に利用可能なメディアサーバーが存在しません]という状態が [ジョブモニター] に表示されます。

次の図は、メディアサーバープールを示します。

図 O-4 社内ネットワークでの CASO 構成のメディアサーバープールの例



メディアサーバープールを使用して、次の操作を行うことができます。

- プールのすべての管理対象メディアサーバーに設定を適用する
p.1508の「CASOでのプール内のすべての管理対象メディアサーバーへの設定の適用」を参照してください。

- バックアップジョブを、一部の管理対象メディアサーバーおよびそれらに接続されたストレージデバイスに限定する
p.1504の「CASOでの特定のデバイスへの選択リストのバックアップの限定」を参照してください。
- プール内のメディアサーバーに表示されるデータ(アラート、統計情報、実行中のジョブなど)を表示したりフィルタにかける
p.1507の「CASOでのメディアサーバープールの実行中のジョブおよびアラートの統計情報の表示」を参照してください。
- メディアサーバーの構成設定およびログオン情報をプール内のすべてのメディアサーバーにコピーする
p.186の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

CASO での特定のデバイスへの選択リストのバックアップの限定

特定の管理対象メディアサーバー上のデバイスまたは管理対象メディアサーバーのグループ内のデバイスで、ジョブを実行することができます。このフィルタ処理により、特定のジョブの委任先を限定することができます。たとえば、Exchange データベースのバックアップを常に Exchange Backups という名前のプール内の管理対象メディアサーバーに接続されているデバイスでのみ実行するには、このオプションを選択してから、Exchange Backups メディアサーバープールを選択します。

特定のデバイスに選択リストのバックアップを限定する方法

- 1 次のいずれかを実行します。
 - ジョブのプロパティを設定し、バックアップジョブを作成します。
p.317の「ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成」を参照してください。
 - バックアップ選択リストを作成します。
p.280の「選択リストの作成」を参照してください。
- 2 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 3 [選択リストのバックアップを、プールの次のメディアサーバー上のデバイスに制限する]にチェックマークを付けます。
- 4 メディアサーバーまたはメディアサーバープールを選択します。
- 5 ジョブのプロパティの設定を続けます。

CASO でのメディアサーバープールの作成

メディアサーバーのグループ化、つまりメディアサーバープールの作成を行うことができます。

p.1503の「CASOでメディアサーバープールを使う方法」を参照してください。

p.1505 の「CASO でのメディアサーバープールへの管理対象メディアサーバーの追加」を参照してください。

メディアサーバープールを作成する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 タスクペインの[メディアサーバープールタスク]の下にある[新規メディアサーバープール]をクリックします。
- 3 メディアサーバープール名と説明を入力します。
- 4 プールに追加するメディアサーバーを選択します。
- 5 [OK]をクリックします。

CASO でのメディアサーバープールへの管理対象メディアサーバーの追加

既存のメディアサーバープールに管理対象メディアサーバーを追加できます。

p.1504 の「CASO でのメディアサーバープールの作成」を参照してください。

メディアサーバープールに管理対象メディアサーバーを追加する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 管理対象メディアサーバーを追加するメディアサーバープールを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアサーバープールタスク]の下にある[メディアサーバーの追加]をクリックします。
- 4 プールに追加するメディアサーバーを選択します。
- 5 [OK]をクリックします。

CASO でのメディアサーバープールの名前の変更

メディアサーバープールの名前は、いつでも変更することができます。

メディアサーバープールの名前を変更する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 名前を変更するメディアサーバープールを右クリックし、[名前の変更]をクリックします。
- 3 プロンプトが表示されたら、メディアサーバープールの新しい名前を入力します。
- 4 [OK]をクリックします。

CASO でのメディアサーバープールの削除

メディアサーバープールは、いつでも削除することができます。

メディアサーバープールを削除する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 削除するメディアサーバープールを右クリックし、[削除]をクリックします。
- 3 削除を確認するダイアログボックスで、[はい]をクリックします。

CASO でのメディアサーバープールからの管理対象メディアサーバーの削除

管理対象メディアサーバーをメディアサーバープールから削除しても、[すべての管理対象メディアサーバー]ノードからは削除されません。

メディアサーバープールから管理対象メディアサーバーを削除する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 管理対象メディアサーバーを削除するメディアサーバープールを選択します。
- 3 右側のペインで、削除する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 4 タスクペインの[メディアサーバープールタスク]の下にある[メディアサーバーの削除]をクリックします。
- 5 [OK]をクリックします。

CASO でのメディアサーバープールの一般プロパティの表示

[メディアサーバープールのプロパティ]の[一般]タブに、メディアサーバープールの名前、説明および作成日が表示されます。

メディアサーバープールの一般プロパティを表示する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 メディアサーバープールを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 3 [一般]タブで、プロパティを表示します。
- 4 [OK]をクリックします。

CASOでのメディアサーバープールの実行中のジョブおよびアラートの統計情報の表示

[メディアサーバープールのプロパティ]の[統計情報]タブに、このメディアサーバープールのデバイス、ジョブおよびアラートの数が表示されます。リンクをクリックして、実行中のジョブおよびアラートをすぐに表示することもできます。

メディアサーバープールの実行中のジョブおよびアラートの統計情報を表示する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 メディアサーバープールを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 3 [統計情報]タブで、プロパティを表示します。

p.1507の「CASOでのメディアサーバープールの[統計情報]プロパティ」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

CASOでのメディアサーバープールの[統計情報]プロパティ

メディアサーバープールのデバイス、ジョブ、アラートの数を表示できます。

p.1507の「CASOでのメディアサーバープールの実行中のジョブおよびアラートの統計情報の表示」を参照してください。

表 O-9 CASOでのメディアサーバープールの[統計情報]プロパティ

項目	説明
デバイス数	このメディアサーバープールに含まれるストレージデバイスの数を示します。マルチドライブロボットライブラリを使用している場合は、ロボットライブラリ内の各ドライブが独立したデバイスとしてカウントされます。
実行中のジョブ数	このメディアサーバープールで現在実行中のジョブの数を示します。
ジョブの表示	このメディアサーバープールの現在のジョブとジョブ履歴をすべて表示します。 ナビゲーションバーの[ジョブモニター]ビューが表示され、現在のジョブとジョブ履歴のフィルタが再設定されてこのメディアサーバーのジョブが表示されます。
エラーアラート数	このメディアサーバーのアクティブなエラーアラートの数を示します。
警告アラート数	このメディアサーバーのアクティブな警告アラートの数を示します。
情報アラート数	このメディアサーバーのアクティブな情報アラートの数を示します。

項目	説明
アラートの表示	このメディアサーバーのすべてのアクティブアラートを示します。ナビゲーションバーの[アラート]ビューが表示され、フィルタが再設定されてこのメディアサーバーのアクティブアラートが表示されます。

CASO でのプール内のすべての管理対象メディアサーバーへの設定の適用

メディアサーバープール内のすべての管理対象メディアサーバーに同じ設定を適用することができます。

プール内のすべての管理対象メディアサーバーに設定を適用する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 設定を適用する管理対象メディアサーバーを含むメディアサーバープールを選択または作成します。
- 3 メディアサーバープールを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 4 [設定]タブで、[プールのすべての管理対象メディアサーバーに設定を適用]にチェックマークを付けます。
- 5 必要に応じてデフォルトを変更します。
p.1464 の「CASO の動作」を参照してください。
p.1492 の「CASO 用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。
p.1495 の「ログおよび履歴の集中管理サーバーへのコピー」を参照してください。
- 6 選択したメディアサーバープールのすべての管理対象メディアサーバーに適用する設定を選択して、[OK]をクリックします。

CASO でのジョブの委任の代替としてのジョブのコピーについて

管理対象メディアサーバーのデバイスおよびメディアのデータが管理対象メディアサーバーのローカルデータベースに保存されている場合、集中管理サーバーは管理対象メディアサーバーにジョブを委任できません。代わりに、集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーにポリシー、選択リストおよび構成設定をコピーすることができます。ジョブが管理対象メディアサーバーでローカルに実行されている場合、集中管理サーバーへの永続的なネットワーク接続を確立する必要はありません。

集中管理サーバー上でポリシーと選択リストを関連付けると、ジョブが集中管理サーバー上に作成されます。その後、作成したジョブを管理対象メディアサーバーにコピーするこ

とができます。管理対象メディアサーバーにポリシーおよび選択リストをコピーしてから、それらに関連付けることもできます。ジョブは管理対象メディアサーバー上に作成されません。

集中管理サーバー上のオブジェクトと、ジョブをコピーするすべての管理対象メディアサーバー上のオブジェクトには、同じ名前を使用します。たとえば、集中管理サーバー上のデバイスプールと管理対象メディアサーバー上のデバイスプールには同じ名前を使用します。これによって、ジョブをコピーする管理対象メディアサーバーに設定や名前をカスタマイズする必要がなくなります。

p.186 の「別のメディアサーバーへの構成設定のコピー」を参照してください。

p.544 の「ジョブ、選択リストまたはポリシーのコピー」を参照してください。

p.1489 の「管理対象メディアサーバーのデフォルト設定」を参照してください。

CASO のバックアップデータ複製ジョブと合成バックアップジョブの必要条件

バックアップセットの複製テンプレートまたは合成バックアップテンプレートを含むポリシーに基づいて繰り返し実行されるジョブは、ジョブが最初に行われた管理対象メディアサーバーで実行する必要があります。これらのテンプレートから生成されるジョブでは、それ以前のジョブから生成されたバックアップセットを含むメディアにアクセス可能である必要があります。

ポリシー内のテンプレートのターゲットデバイスを変更すると、そのテンプレートから生成されるジョブが、別の管理対象メディアサーバーに委任される場合があります。ただし、宛先の管理対象メディアサーバーが引き続き委任の対象である場合は、その管理対象メディアサーバーが使用されます。

テンプレートの宛先デバイスを変更しない場合に、ターゲットの管理対象メディアサーバーが利用できなくなると、ジョブはキューに格納されたまま、ターゲットの管理対象メディアサーバーが利用可能になるのを待機します。ターゲットの管理対象メディアサーバーが管理対象メディアサーバーとして使用できなくなると、ジョブを再委任することができます。

p.532 の「ポリシーと選択リストを使用したジョブの作成について」を参照してください。

p.538 の「ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加」を参照してください。

p.892 の「サンプルポリシーのコピーによる合成バックアップの作成について」を参照してください。

CASO での集中リストアの動作

必要なストレージメディアがストレージデバイスにあるかオフサイトに格納されているかによって、集中管理サーバーからのリストア操作の開始は、ユーザーの介入がほとんど不要な自動的なプロセスとなるかどうかが決まります。

オンラインメディアで集中リストアを使用する場合は、集中管理サーバーで、リストアする項目を選択し、ジョブプロパティを設定します。データの選択プロセスでは、CASO が、リストア処理の実行に必要なメディアを判断し、ジョブに必要なプライマリメディアが存在するストレージデバイスを Backup Exec のデバイスとメディアのデータベースに問い合わせで特定します。必要な選択を行い、リストアジョブのプロパティを設定して、リストアジョブを開始すると、CASO は、選択されたストレージデバイスを制御している集中管理サーバーまたは管理対象メディアサーバーにジョブを委任し、リストア処理を開始します。リストア対象のデータが複数のストレージメディアにまたがっている場合は、リストア操作を正常に完了するために、必要に応じて追加メディアをロードするように要求されます。

オフラインメディアで集中リストアを使用する場合は、集中管理サーバーで、リストアする項目を選択し、ジョブプロパティを設定します。データの選択プロセスでは、CASO が、リストア処理の実行に必要なメディアを判断し、ジョブに必要なプライマリメディアが存在するストレージデバイスを Backup Exec のデバイスとメディアのデータベースに問い合わせで特定します。メディアがストレージデバイス内で見つからない場合、そのメディアはオフラインと見なされます。この場合、CASO は、リストア処理の実行中に使用されるメディアの種類と互換性があるドライブプールおよびストレージデバイスの選択肢を示します。これによって、メディアをロードするストレージデバイスを柔軟に選択できます。

ジョブを実行するように選択したストレージデバイスとその場所を書き留めた後、次の操作を実行します。

- リストアジョブをスケジュール済みジョブとして保留状態でサブミットします。
- メディアを取得してストレージデバイスにセットします。
- 集中管理サーバーでジョブの保留状態を解除します。この時点で、リストアジョブが開始されます。

次に CASO は、選択したストレージデバイスを制御している管理対象メディアサーバーにジョブを委任します。リストア対象のデータが複数のストレージメディアにまたがっている場合は、リストア操作を正常に完了するために、必要に応じて追加メディアをロードするように要求されます。

集中管理サーバーからリストア処理を開始するための必要条件を次に示します。

- 管理対象メディアサーバーの通信状態が[有効]である必要があります。
- 管理対象メディアサーバーがオンラインである(メディアサーバーの状態がすべて[オンライン]と表示されている) 必要があります。

p.203 の「Backup Exec のメディアについて」を参照してください。

複数のデバイスに存在するデータを CASO でリストアする方法

リストア対象として選択したデータが、ある管理対象メディアサーバーに接続された 1 つのデバイス上に存在する場合、1 つのリストアジョブが集中管理サーバーで作成および委任されます。ただし、リストア対象として選択したデータが、CASO 環境内の複数のデバイス上に存在する場合、そのリストアジョブは、使用されるデバイスの数に応じて、別々のリストアジョブに分割されます。

分割されたすべてのリストアジョブは元のジョブと同じ名前を持ち、ジョブ名の末尾に追加された番号によって、区別されると同時に関連付けられます。

たとえば、リストアジョブの作成時にリストア対象として選択したデータが、管理対象メディアサーバー上の 1 つのデバイスに存在する場合、CASO は 1 つのリストアジョブを作成します。一方、リストアジョブの作成時に選択したデータが、管理対象メディアサーバーに接続された複数のデバイスに存在する場合、CASO は複数のリストアジョブを作成します。

次の図は、複数のジョブに分割された 1 つのリストアジョブを示します。

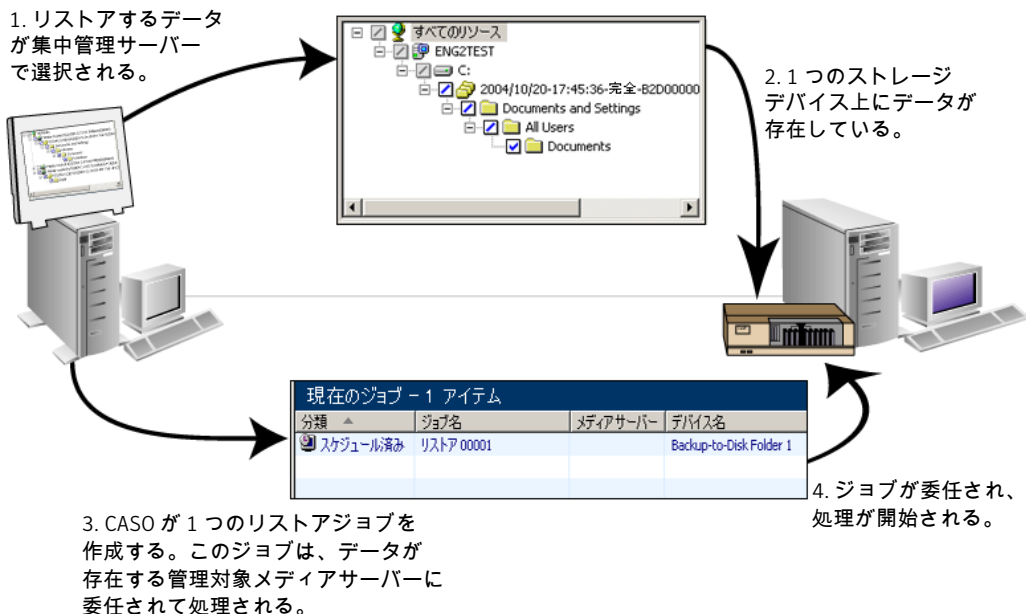
図 0-5 分割されたリストアジョブを関連付ける番号の例

複数のリストアジョブに分割された 1 つのリストアジョブ。元のジョブ名の末尾に番号が追加され、視覚的に関連付けられている。

ジョブ - 2 アイテム							
ジョブ名	ジョブの...	デバイス名	メディアセット名	ジョブの...	上書き	繰り返し	優先度
リストア 00046	ストア	Backup-to-Disk Folder 1				いいえ	通常
リストア 00046(2)	ストア	Backup-to-Disk Folder 2				いいえ	通常

次の図は、1 つのデバイスに格納されているデータを CASO がどのようにリストアするかを示します。

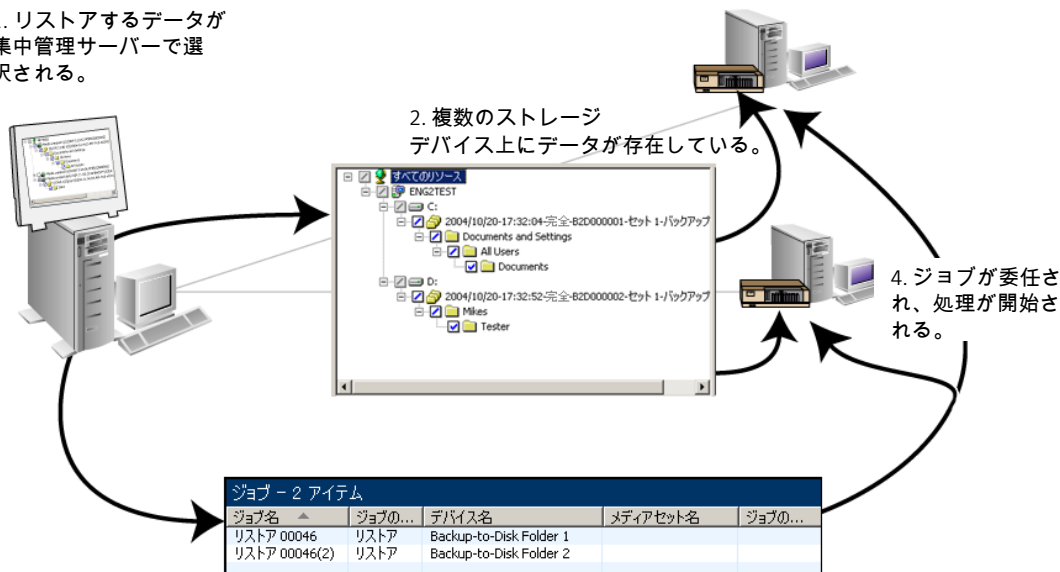
図 0-6 1つのストレージデバイス上に格納されたデータの場合



次の図は、複数のデバイスに格納されているデータを CASO がどのようにリストアするかを示します。

図 0-7 複数のストレージデバイス上に格納されたデータの場合

1. リストアするデータが集中管理サーバーで選択される。



3. CASO が複数のリストアジョブを作成する。これらのジョブは、データが存在する管理対象メディアサーバーに委任されて処理される。

CASO での集中リストアに関する推奨事項

集中リストアを使用する際の推奨事項を次に示します。

- ジョブごとに、リストアするリソースを 1 つ選択します。
- 同じリストアジョブの選択項目には、すべて同じリストア用デバイスまたはメディアサーバーを選択します。
- リストアジョブに必要なすべてのメディアと互換性のあるデバイスを含むメディアサーバーを選択します。

p.1513 の「CASO の集中管理サーバーからのリストア」を参照してください。

CASO の集中管理サーバーからのリストア

リストアジョブを作成する前に、集中リストアに関する推奨事項を確認してください。

p.1513 の「CASO での集中リストアに関する推奨事項」を参照してください。

p.1510 の「CASO での集中リストアの動作」を参照してください。

集中管理サーバーからリストアを行う方法

- 1 リストア選択リストを作成します。
p.617 の「[リストア選択リストの作成](#)」を参照してください。
- 2 [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスで、タスクペインの[ソース]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 3 必要に応じて情報を入力または変更します。
p.1514 の「[CASO リストアジョブの \[デバイスおよびメディア\] プロパティ](#)」を参照してください。
- 4 [プロパティ]ペインから他のリストアジョブのプロパティを設定します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。
- 5 [今すぐ実行]をクリックして、リストア処理を開始します。

CASO リストアジョブの [デバイスおよびメディア] プロパティ

CASO リストアジョブについての次の情報を表示できます:

- 必要なメディアのリスト。
- メディアの場所。
- リストアジョブを処理する候補であるデバイスまたはメディアサーバーの名前。

p.1513 の「[CASO の集中管理サーバーからのリストア](#)」を参照してください。

表 O-10 CASO リストアジョブの [デバイスおよびメディア] プロパティ

項目	説明
メディアまたはリソース	リストアに必要なメディアのリスト、またはリストア用に選択したリソースの名前が表示されます。
メディアの場所	メディアの場所が表示されます。メディアが[オフライン]または[不明]と表示された場合は、メディアを取得して[リストア用デバイス]または[メディアサーバー]列のデバイスを選択し、管理対象メディアサーバーがアクセスできるデバイスにメディアを配置する必要があります。 リストア対象として選択したデータがメディアボルトに存在する場合、[オフライン]と表示されます。 リストア対象として選択したデータが不明なメディア上に存在する場合は、ジョブの実行に使用できる互換性のあるストレージデバイス上にメディアが検出されないため、[不明]と表示されます。

項目	説明
リストア用デバイスまたはメディアサーバー	<p>リストアするメディアと互換性のある、リストアジョブの処理で使用可能なデバイスまたはメディアサーバーの名前が表示されます。</p> <p>デバイスとメディアのデータベースが管理対象メディアサーバー上にあり、集中管理サーバーからのリストアをサポートしている場合は、集中管理サーバーを含むすべてのメディアサーバーがこの列に表示されます。</p> <p>メモ: CASO 環境の Oracle データベースをリストアするとき、元のデータベースバックアップのために使われた管理対象メディアサーバーを使わなければなりません。</p>

CASO の [メディアサーバー] ビュー

CASO をインストールすると、集中管理サーバーの [メディアサーバー] ビューから管理対象メディアサーバー上のタスクを実行できます。管理対象メディアサーバーは、[ジョブモニター] の [現在のジョブ] および [ジョブ履歴] ビューにも表示されます。

次の情報は [メディアサーバー] ビューに表示されます。

表 O-11 [メディアサーバー] ビュー

項目	説明
名前	<p>管理対象メディアサーバーまたは集中管理サーバーの名前です。名前とともに、管理対象メディアサーバーまたは集中管理サーバーを示すアイコンが表示されるため、2 種類のサーバーを簡単に識別できます。</p> <p>p.1515 の「CASO の [メディアサーバー] ビュー」を参照してください。</p>
説明	<p>ユーザーによる管理対象メディアサーバーまたは集中管理サーバーの説明です。</p>

項目	説明
通信状態	<p>管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間の通信状態です。 表示される状態は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 有効: 管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間の、ジョブに関する通信は正常に機能しています。 ■ 通信無効化: ユーザーが管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間の通信を無効にしています。 ■ 通信中断: 管理対象メディアサーバーと集中管理サーバー間の通信が、設定された時間のしきい値内に発生しませんでした。 p.1494の「CASO 通信のしきい値に到達した場合に発生する事項」を参照してください。 ■ 通信途絶: 管理対象メディアサーバーからのジョブに関する通信が、集中管理サーバーで受信されていません。設定された時間のしきい値に達しています。その管理対象メディアサーバーに送信されたジョブはリカバリされます。管理対象メディアサーバーまたは集中管理サーバーのいずれかで、ネットワーク障害やハードウェア障害が発生している可能性があります。 p.1518の「CASOでの失敗ジョブのリカバリについて」を参照してください。 ■ N/A: [名前]列に表示されたコンピュータが集中管理サーバーである場合に表示されます。
メディアサーバーの状態	<p>管理対象メディアサーバーの現在の状態です。 表示される状態は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オンライン: 管理対象メディアサーバー上のすべてのサービスが実行中で、集中管理サーバーとの通信も正常に機能しています。 ■ 一時停止: ユーザーが管理対象メディアサーバーを一時停止しています。一時停止状態では、ジョブは管理対象メディアサーバーに委任されません。 ■ 使用不能: 管理対象メディアサーバーからの通信を集中管理サーバーが受信していません。 ■ オフライン: 管理対象メディアサーバー上のすべてのサービスが停止しています。オフライン状態のメディアサーバーはジョブを実行できません。
メディアサーバーの種類	<p>Backup Exec によるメディアサーバーの説明です。管理対象メディアサーバーまたは集中管理サーバーのいずれかになります。</p>

項目	説明
ローカルで作成されたジョブの監視	<p>[ローカルの管理対象メディアサーバーで作成されたジョブと、集中管理サーバーから委任されたジョブを監視する] オプションが有効な場合は [はい]、無効な場合は [いいえ] です。</p> <p>このオプションが有効な場合、集中管理サーバーからコピーされたジョブを保留、削除、実行およびキャンセルしたり、ジョブの優先度を変更することができます。</p> <p>p.1464 の「CASO の動作」を参照してください。</p>
カタログの場所	<p>カタログの場所です。</p> <p>p.1500 の「CASO カatalogの場所の変更」を参照してください。</p>
バージョン	<p>メディアサーバーにインストールされ、実行されている Backup Exec のバージョンです。</p>
オペレーティングシステム	<p>メディアサーバーにインストールされ、実行されているオペレーティングシステムの種類です。</p>
オペレーティングシステムビルド	<p>メディアサーバーにインストールされているオペレーティングシステムビルドの番号です。</p>

[メディアサーバー] ビューで使用されるアイコンによって、結果ペインに表示される Backup Exec 管理対象メディアサーバーの動作状態を簡単に識別できます。

CASO の [メディアサーバー] ビューに表示されるアイコンのリストは次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-12>

CASO でのジョブの管理について

ジョブが作成されたサーバーを [ジョブセットアップ] ビューか [ジョブモニター] ビューで検索できます。[作成元] とラベル付けされた列は、ジョブが集中管理サーバーで作成されたかまたは管理対象メディアサーバーで作成されたかを示します。

ローカルの管理対象メディアサーバーで作成されたジョブを監視するオプションが有効な場合、集中管理サーバーからコピーされたジョブを保留、削除、実行およびキャンセルしたり、ジョブの優先度を変更することができます。ただし、管理対象メディアサーバー上で選択リストとポリシーを関連付けて作成したジョブは、ポリシーが作成された管理対象メディアサーバーでのみ削除できます。

p.534 の「ポリシーから作成したジョブの削除」を参照してください。

p.1508 の「CASO でのジョブの委任の代替としてのジョブのコピーについて」を参照してください。

p.1489 の「管理対象メディアサーバーのデフォルト設定」を参照してください。

CASO での失敗ジョブのリカバリについて

[リカバリされたジョブ] という Backup Exec のエラー処理方法は、内部ジョブ通信の問題が原因で失敗したジョブをリカバリする際、CASO によって使用されるカスタマイズしたエラー処理方法です。この処理方法は、Backup Exec のインストール時に作成され、デフォルトで有効になっています。

この処理方法の再試行オプションでは、ジョブの再試行回数は 2 回、再試行間隔は 5 分です。最初の再試行では、CASO は利用可能な別の管理対象メディアサーバーにジョブを再委任しようと試みます。

再委任に失敗すると、CASO は、ジョブを処理する利用可能な別の管理対象メディアサーバーを検出しようと試みます。利用可能な管理対象メディアサーバーがない場合、最終処理として、エラー条件が修正されるまでジョブは保留になります。

メモ: ジョブのターゲットとして、複数の管理対象メディアサーバーを含むメディアサーバープールを指定した場合、ジョブが失敗すると、そのメディアサーバープール内の管理対象メディアサーバーのみを使用して、ジョブのリカバリプロセスが実行されます。そのメディアサーバープールに属さない管理対象メディアサーバーは、ジョブのリカバリに使用されません。

失敗し、Backup Exec によってリカバリされた [通信途絶] 状態の CASO ジョブは、Backup Exec の [ジョブ履歴] ビューに灰色の文字で表示され、ジョブの状態には [リカバリ済み] と表示されます。日常のアクティビティのエラーが原因で失敗した CASO ジョブは、その他の失敗ジョブと同様に赤字で表示されます。

リカバリされたジョブのジョブ履歴のエントリを開くと、失敗の原因が [ジョブエラー] と表示され、発生した内部通信エラーの種類の説明が表示されます。ジョブ履歴のエントリには、ジョブがリカバリされたことも示されます。

メモ: リカバリされたジョブのジョブログは作成されません。

次の表に、カスタマイズしたエラー処理方法 [リカバリされたジョブ] にデフォルトで選択されている CASO のエラーコードを示します。

表 0-12 カスタマイズしたエラー処理方法 [リカバリされたジョブ] のエラーコード

エラーコード	説明
0xE000881B JOBDISPATCH	次のメッセージが表示されます。[ディスパッチ中にジョブが失敗しました。ジョブはリカバリされます。]

エラーコード	説明
0xE000881D JOB_CASO_QUEUE FAILURE	次のメッセージが表示されます。[宛先の管理対象メディアサーバーにジョブを委任できませんでした。管理対象メディアサーバーがオンラインになっていないか、通信障害が発生している可能性があります。ジョブはリカバリされます。]
0xE000881E JOB_CASO_REMOTEMMS_STARTFAILURE	次のメッセージが表示されます。[宛先の管理対象メディアサーバーでジョブを開始できませんでした。データベースエラーが発生した可能性があります。ジョブはリカバリされます。]

p.579 の「エラー処理方法について」を参照してください。

p.583 の「カスタマイズしたエラー処理方法の「リカバリされたジョブ」」を参照してください。

p.1492 の「CASO 用の通信のしきい値と実行中のジョブの状態に関する更新情報の設定」を参照してください。

CASO の管理対象メディアサーバーの一時停止

集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーの一時停止と再開を実行できます。

管理対象メディアサーバーを一時停止すると、集中管理サーバーからその管理対象メディアサーバーにジョブが委任されなくなります。一時停止した管理対象メディアサーバーの状態は[オンライン]から[一時停止]に変更され、結果ペインの[メディアサーバーの状態]列にもその変更が反映されます。

注意: Backup Exec のオプション製品を管理対象メディアサーバーにインストールする際は、インストール中に集中管理サーバーからジョブが委任されないように、管理対象メディアサーバーを一時停止する必要があります。実行中のジョブは、インストールを開始する前に、終了またはキャンセルしてください。

管理対象メディアサーバーを一時停止する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 一時停止または再開を実行する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアサーバータスク]の下にある[一時停止]をクリックします。

CASO の一時停止している管理対象メディアサーバーの再開

一時停止された管理対象メディアサーバーを再開するとき、次の変更が起きます:

- 管理対象メディアサーバーの状態は[メディアサーバーの状態]列で[一時停止]から[オンライン]に変わります。
- 管理対象メディアサーバーがオンライン状態であることを示すアイコンが表示されます。

一時停止された管理対象メディアサーバーを再開する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 再開する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアサーバータスク]の下にある[一時停止]をクリックします。

一時停止されたストレージデバイスが CASO の [デバイス] ビューにいかに表示されるか

集中管理サーバーで管理対象メディアサーバーのストレージデバイスを一時停止すると、[デバイス]ビューのストレージデバイスに、一時停止している管理対象メディアサーバーの状態アイコンおよび[一時停止]というテキストが表示されます。

ただし、管理対象メディアサーバーの[デバイス]ビューに表示されるストレージデバイスのリストでは、集中管理サーバーから一時停止したストレージデバイスに[一時停止]と表示されません。

実際の状態を表示するには、F5を使って管理対象メディアサーバーの[デバイス]ビューを更新する必要があります。

p.1515 の「CASO の[メディアサーバー]ビュー」を参照してください。

CASO での通信の無効化

集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーへの通信を無効化および有効化できます。通信を無効にすると、[通信状態]列に表示される管理対象メディアサーバーの通信状態が[有効]から[通信無効化]に変更されます。また、その状態変更は[メディアサーバーの状態]列にも反映され、[オンライン]から[使用不能]に変更されます。管理対象メディアサーバーが無効であることを示すアイコンが表示されます。

通信を無効化および有効化する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 無効または有効にする管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアサーバータスク]の下にある[通信の有効化]をクリックします。

CASO での通信の有効化

集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーへの通信を無効化および有効化できます。通信を有効にすると、[通信状態]列に表示される管理対象メディアサーバーの通信状態が[通信無効化]から[有効]に変更されます。また、その状態変更は[メディアサーバーの状態]列にも反映され、[使用不能]から[オンライン]に変更されます。さらに、管理対象メディアサーバーが正常に動作していることを示すアイコンが表示されます。

通信を有効にする方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 無効または有効にする管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアサーバータスク]の下にある[通信の有効化]をクリックします。

CASO のための Backup Exec サービスの停止

集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーの Backup Exec サービスを停止および起動できます。

集中管理サーバーから Backup Exec サービスを停止する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 サービスを停止または起動する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアサーバータスク]の下にある[Backup Exec サービス]をクリックします。
- 4 [すべてのサービスを停止]をクリックします。

CASO のための Backup Exec サービスの起動

集中管理サーバーから管理対象メディアサーバーの Backup Exec サービスを停止および起動できます。

集中管理サーバーから Backup Exec サービスを起動する方法

- 1 集中管理サーバーのナビゲーションバーで、[メディアサーバー]をクリックします。
- 2 サービスを停止または起動する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 3 タスクペインの[メディアサーバータスク]の下にある[Backup Exec サービス]をクリックします。
- 4 [すべてのサービスを起動]をクリックします。

リモート管理対象メディアサーバーへの接続

集中管理サーバーから管理対象メディアサーバー上の管理タスクを実行するには、Backup Exec の[メディアサーバーに接続]機能を使用して、管理対象メディアサーバーに接続します。

リモート管理対象メディアサーバーに接続する方法

- 1 集中管理サーバーで Backup Exec を起動します。
- 2 ナビゲーションバーの[メディアサーバー]をクリックします。
- 3 接続する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 4 タスクペインの[メディアサーバータスク]の下にある[メディアサーバーに接続]をクリックします。
- 5 目的の管理対象メディアサーバーの名前が表示されない場合は、コンピュータ名を[サーバー]フィールドに入力します。
- 6 管理対象メディアサーバーの管理者または同等の権限のあるログオン情報を入力します。
- 7 [ドメイン]フィールドに、管理対象メディアサーバーのコンピュータ名を入力します。
- 8 [OK]をクリックします。

管理対象メディアサーバーへの接続が行われます。

管理対象メディアサーバーにリモート接続すると、集中管理サーバーのコンソールが終了し、管理対象メディアサーバーのコンソールがアクティブインターフェースになります。

- 9 集中管理サーバーのコンソールに戻るには、管理対象メディアサーバーのコンソールを閉じ、集中管理サーバーで Backup Exec を再起動します。

管理対象メディアサーバーのプロパティの表示

集中管理サーバーの[メディアサーバー]ビューに表示される管理対象メディアサーバーのプロパティを表示できます。

管理対象メディアサーバーのプロパティを表示する方法

- 1 集中管理サーバーで Backup Exec を起動します。
- 2 ナビゲーションバーの[メディアサーバー]をクリックします。
- 3 プロパティを表示する管理対象メディアサーバーを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。

CASO のディザスタリカバリ

Symantec Backup Exec Intelligent Disaster Recovery (IDR) Option を使用すると、CASO 環境で管理対象メディアサーバーと集中管理サーバーの両方を保護できます。

p.1798 の「[Central Admin Server Option での IDR の使用について](#)」を参照してください。

CASO 環境に IDR オプションを実装する前に、次の事項を確認してください。

- CASO 環境では、各管理対象メディアサーバーに対して作成されるすべてのディザスタリカバリ準備ファイル (*.dr ファイル) が、集中管理サーバーに集中格納されます。
- 管理対象メディアサーバーまたは集中管理サーバー用のディザスタリカバリメディアを作成するには、集中管理サーバーで IDR 準備ウィザードを実行する必要があります。リモート管理環境の場合は、集中管理サーバーに接続してください。
- ブート可能テープイメージを使用して管理対象メディアサーバーを保護する場合、ブート可能テープデバイスが接続された管理対象メディアサーバーごとに、IDR 準備ウィザードを実行する必要があります。
- CASO では、管理対象メディアサーバーで IDR 準備ウィザードを実行すると、[ようこそ] の画面に 2 つのオプションが表示されます。
次のいずれかを選択します。
 - [はい、ブート可能テープイメージを今すぐ作成します]
p.1773 の「[ブート可能テープイメージの作成](#)」を参照してください。
 - [いいえ、集中管理サーバーに接続します]: 管理対象メディアサーバー上にブート可能テープドライブが検出されない場合は、このオプションのみが表示されます。
- 集中管理サーバーのバックアップおよびリストアは、ローカルで実行する必要があります。

Symantec Backup Exec Deduplication Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Deduplication Option](#) について
- [Deduplication Option](#) の必要条件
- [Deduplication Option](#) のインストールについて
- [OpenStorage](#) デバイスについて
- [重複排除用ストレージフォルダ](#) について
- 複数のメディアサーバー間における重複排除のデバイスの共有
- [ダイレクトアクセス](#) について
- [重複排除バックアップジョブ](#) について
- [最適化された複製](#) について
- [テープへの重複排除データのコピー](#) について
- [暗号化を用いる重複排除の使用](#) について
- [重複排除データのリストア](#) について
- [重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリ](#) について
- [OpenStorage](#) デバイスのディザスタリカバリについて

Deduplication Option について

Backup Exec Deduplication Option は、ストレージとネットワークの帯域幅を最適化することによってデータ整理の戦略をサポートします。Deduplication Option は、Backup Exec メディアサーバーと、Remote Agent for Windows Systems がインストールされているリモートコンピュータで統合された重複排除をサポートします。また、シマンテック社と他社のインテリジェントディスクデバイスでデータを重複排除し、保存することを可能にします。

表 P-1 重複排除の種類

重複排除の種類	重複排除の実行場所	メリット
サーバー側の重複排除	Backup Exec メディアサーバー。	バックアップのサイズを減らし、ストレージ必要条件を軽減します。
ソース側の重複排除	データが存在するリモートコンピュータ。 メモ: ソース側の重複排除を実行するには、リモートコンピュータに Remote Agent for Windows Systems が必要です。	重複のないデータのみがネットワーク経由で送信されるので、ネットワークトラフィックが軽減されます。また、バックアップ時間帯が短縮されます。
ターゲット側の重複排除	シマンテック社の PureDisk またはサードパーティの製造元のデバイスのようなインテリジェントディスクデバイス。	バックアップのサイズを減らし、ストレージ必要条件を軽減します。また、バックアップ時間帯が短縮されます。

単一の Deduplication Option ライセンスキーでは、2 種類の重複排除のデバイスを使うことができます。

表 P-2 Deduplication Option で使用できる重複排除のデバイスの種類

デバイスの種類	説明
OpenStorage デバイス	<p>Backup Exec はシマンテック社の OpenStorage 技術を使用するため、インテリジェントディスクデバイスと Backup Exec の統合が可能になります。シマンテック社の PureDisk デバイスと他社のストレージデバイスにデータをバックアップできます。</p> <p>互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2p.1532 の「OpenStorage デバイスについて」を参照してください。</p>
重複排除用ストレージフォルダ	<p>重複排除用ストレージフォルダは、Backup Exec メディアサーバーでの統合された重複排除を提供します。重複排除用ストレージフォルダは、Backup Exec メディアサーバーに存在するディスクベースのバックアップフォルダです。それはディスクへのバックアップフォルダに類似しています。</p> <p>p.1536 の「重複排除用ストレージフォルダについて」を参照してください。</p>

ストレージ必要条件とネットワークトラフィックの軽減に加えて、Deduplication Option は次をすることを可能にします:

- 長期またはオフサイトストレージ用に、OpenStorage デバイスまたは重複排除用ストレージフォルダからテープに重複排除されたデータをコピーします。
- 最適化された複製を使用することによって、同じ製造元の OpenStorage デバイス間と、重複排除用ストレージフォルダ間で重複排除されたデータをコピーできます。
- 重複排除のデバイスを使うジョブでシマンテック社の Granular Recovery Technology (GRT) を使用します。
- Central Admin Server Option か SAN Shared Storage Option を使う場合、複数のメディアサーバー間で OpenStorage デバイスそして重複排除のストレージデバイスを共有します。

p.1531 の「Deduplication Option のインストールについて」を参照してください。

p.1530 の「Deduplication Option の必要条件」を参照してください。

p.1541 の「複数のメディアサーバー間における重複排除のデバイスの共有」を参照してください。

p.1547 の「最適化された複製について」を参照してください。

p.1548 の「テープへの重複排除データのコピーについて」を参照してください。

Backup Exec エージェントの重複排除の方式

Backup Exec では次の重複排除の方式がサポートされています。

- インテリジェントディスクデバイス、またはダイレクトアクセスによる重複排除用ストレージフォルダでのソース側の重複排除。
- 重複排除用ストレージフォルダを使用したサーバー側の重複排除。
- OpenStorage デバイスでのターゲット側の重複排除。

次の表は Backup Exec エージェントのために利用可能である重複排除の方式をリストしたものです。

表 P-3 Backup Exec エージェントの重複排除の方式

エージェント	ソース側の重複排除 (ファイルシステム /VSS)	ソース側の重複排除 (Granular Recovery Technology が有効)	サーバー側の重複排除 (ファイルシステム /VSS)	サーバー側の重複排除 (Granular Recovery Technology が有効)	OpenStorage デバイスでのターゲット側の重複排除
Remote Agent for Windows Systems	可	不可	可	不可	可
Agent for VMware	可 メモ: Remote Agent for Windows Systems をゲスト仮想マシンにインストールする必要があります。	可 メモ: Remote Agent for Windows Systems をゲスト仮想マシンにインストールする必要があります。	可	可	可

エージェント	ソース側の 重複排除 (ファイルシス テム /VSS)	ソース側の 重複排除 (Granular Recovery Technology が有効)	サーバー側 の重複排除 (ファイルシス テム /VSS)	サーバー側 の重複排除 (Granular Recovery Technology が有効)	OpenStorage デバイスでの ターゲット側 の重複排除
Agent for Microsoft Hyper-V	可 メモ: Remote Agent for Windows Systems をゲ スト仮想マシン にインストール する必要があります。	可 メモ: Remote Agent for Windows Systems をゲ スト仮想マシン にインストール する必要があります。	可	可	可
Remote Agent for Linux Servers	不可	不可	可	不可	可
Agent for Enterprise Vault	可	不可	可	不可	不可
Exchange Agent	可	可	可	可	可
SQL Agent	可	不可	可	不可	可
SharePoint Agent	可	可	可	可	可
Active Directory Agent	可	可	可	可	可
Oracle Agent for Linux Servers	不可	不可	可	不可	可
Oracle Agent for Windows Servers	可	不可	可	不可	可
SAP Agent	可	不可	可	不可	可

エージェント	ソース側の 重複排除 (ファイルシス テム /VSS)	ソース側の 重複排除 (Granular Recovery Technology が有効)	サーバー側 の重複排除 (ファイルシス テム /VSS)	サーバー側 の重複排除 (Granular Recovery Technology が有効)	OpenStorage デバイスでの ターゲット側 の重複排除
Lotus Domino Agent	可	不可	可	不可	可
DB2 Agent	可	不可	可	不可	可
NetWare Agent	不可	不可	可	不可	可
Remote Agent for Macintosh Systems	不可	不可	可	不可	可
Remote Media Agent for Linux Servers	不可	不可	可	不可	可

Deduplication Option の必要条件

Deduplication Option の必要条件は、重複排除用ストレージフォルダを使うか、OpenStorage デバイスを使うかによって変わります。Deduplication Option のインストールの前に、どのようなストレージデバイスを Deduplication Option で使いたいのか判断してください。それから、使いたいストレージデバイスの必要条件をシステムが満たすことを確認してください。

表 P-4 Deduplication Option の必要条件

ストレージデバイスの種類	必要条件
重複排除用ストレージフォルダ	次の項目が必要です: <ul style="list-style-type: none">■ 64ビットのメディアサーバー。■ 1つのクアドコアプロセッサまたは2つのデュアルコアプロセッサがあるメディアサーバー。■ 重複排除用ストレージフォルダを保存するための場所として使用する専用のボリューム。■ 1TBのストレージごとに1GBのRAM。シマンテック社は8GB以上のRAMを推奨します。
OpenStorage デバイス	OpenStorage デバイスとしてシマンテック社の PureDisk デバイスか別の製造元のストレージデバイスを使うためには、デバイスの製造元からデバイスと適切な OpenStorage コネクタを購入する必要があります。 32ビットのメディアサーバーまたは64ビットのメディアサーバーの OpenStorage デバイスで Deduplication Option を使うことができます。Backup Exec の標準的なシステムの必要条件は、OpenStorage デバイスを使うときに Deduplication Option に適用されます。

p.1531 の「[Deduplication Option のインストールについて](#)」を参照してください。

Deduplication Option のインストールについて

Deduplication Option は Backup Exec のインストールメディアを使用してインストールされます。Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてローカルにインストールします。Deduplication Option のインストールを試みる前に、システムが要件を満たしていることを確認してください。

p.1530 の「[Deduplication Option の必要条件](#)」を参照してください。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

OpenStorage デバイスについて

OpenStorage は Backup Exec と インテリジェントディスクデバイスの統合を実現するシマンテック社の技術です。

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

一部のインテリジェントディスクデバイスには、複数の論理ストレージユニットが含まれます。ただし、それぞれの論理ストレージユニットは OpenStorage の単一のデバイスとして追加されます。OpenStorage デバイスを追加すると、Backup Exec は自動的にそのデバイス上の論理ストレージユニットを検出できます。

p.1532 の「[OpenStorage デバイスの追加](#)」を参照してください。

Backup Exec Central Admin Server Option か SAN Shared Storage Option を使えば、OpenStorage デバイスは複数のメディアサーバー間で共有できます。共有は OpenStorage デバイスを追加するときに有効にできます。OpenStorage デバイスを共有する新しいメディアサーバーの選択、またはメディアサーバーの共有機能の削除はいつでも実行できます。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

OpenStorage デバイスの追加

OpenStorage デバイスとしてインテリジェントディスクデバイスを追加するためにこれらの手順に従ってください。

p.1532 の「[OpenStorage デバイスについて](#)」を参照してください。

OpenStorage デバイスを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 3 [デバイス設定アシスタント]ダイアログボックスの[**Deduplication Option**]の下で、[OpenStorage]をクリックします。
- 4 [**OpenStorage**の設定]ダイアログボックスが表示されたら、[OpenStorage の追加]をクリックします。

この手順はこれが最初の OpenStorage デバイスなら適用されません。[OpenStorage の設定]ダイアログボックスは OpenStorage デバイスがすでにあるときのみ表示されます。

- 5 [一般]タブのオプションを設定します。

p.1533 の「[OpenStorage デバイスの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

- 6 [詳細]タブのオプションを設定します。
p.1533 の「OpenStorage デバイスの[詳細]オプション」を参照してください。
- 7 [共有]タブで、この OpenStorage デバイスで使いたい各メディアサーバーを選択してください。
- 8 [OK]をクリックします。
- 9 手順 7 で選択したメディアサーバーの Backup Exec サービスを再起動してください。
p.158 の「Backup Exec サービスの起動および停止」を参照してください。

OpenStorage デバイスの[一般]オプション

OpenStorage デバイスの次のオプションを設定できます。

p.1532 の「OpenStorage デバイスの追加」を参照してください。

表 P-5 OpenStorage デバイスの[一般]オプション

項目	説明
名前	デバイスの名前を示します。名前を指定しないと、サーバーの種類を選択後に Backup Exec は自動的に名前を作成します。
サーバーの種類	OpenStorage デバイスの種類を示します。
サーバー	デバイスがあるサーバーの完全修飾名を示します。
ログオンアカウント	デバイスにアクセスするために必要なログオンアカウントの名前を示します。
論理ストレージユニット	使いたい論理ストレージユニットを示します。 Backup Exec はデバイスにあるすべての論理ストレージユニットを探してリストに表示します。リストから論理ストレージユニットを選択するか、論理ストレージユニットの名前を入力できます。 メモ: このオプションは、シマンテック社の PureDisk デバイスでは表示されません。
このデバイスに許可する同時並行ジョブ数	このデバイスで同時に実行したいジョブの数を示します。

OpenStorage デバイスの[詳細]オプション

OpenStorage デバイスの次のオプションを設定できます。

p.1532 の「[OpenStorage デバイスの追加](#)」を参照してください。

表 P-6 OpenStorage デバイスの[詳細]オプション

項目	説明
空き領域の低しきい値	領域の低しきい値に達すると Backup Exec がジョブを中断する数値を示します。
Remote Agent にこのデバイスへのダイレクトアクセスを許可する	<p>ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent として設定されているリモートコンピュータが、デバイスに直接データを送信できるようにします。このオプションを使用すると、メディアサーバーはバイパスされ、他の操作を実行するために解放されたままになります。</p> <p>OpenStorage デバイスがソース側の重複排除をサポートすれば、ダイレクトアクセスは Backup Exec がソース側の重複排除を実行することを可能にします。ソース側の重複排除は CPU を集中的に使用することに注意してください。</p> <p>このオプションを有効にする場合は、バックアップジョブで次のことも実行する必要があります：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップ選択項目としてリモートコンピュータ上のリソースを選択します。 ■ バックアップジョブの宛先として OpenStorage デバイスを選択します。 ■ [このジョブにデバイスへのダイレクトアクセスを許可する]オプションを選択します。 <p>このオプションは[バックアップジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[デバイスとメディア]ペインに表示されます。</p> <p>p.1542 の「ダイレクトアクセスについて」を参照してください。</p>
データストリームチャンクサイズ	Backup Exec が行う単一書き込み操作のサイズを示します。デフォルトのサイズは使われるデバイスの種類によって異なります。
ストリームハンドラを有効にする	ストリームハンドラが使われるかどうかを示します。サーバーの種類を選択すると、Backup Exec はこのオプションを自動的に設定します。デバイスの種類によっては、このオプションは全く表示されないことがあります。Backup Exec がこのオプションを設定しなければ、推奨設定についてデバイスの製造元に連絡してください。

OpenStorage デバイスのプロパティの表示

OpenStorage デバイスのすべてのプロパティを表示できます。一部のプロパティは変更できません。

OpenStorage デバイスのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 目的のデバイスを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。

p.1535 の「[OpenStorage デバイスの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.1533 の「[OpenStorage デバイスの\[詳細\]オプション](#)」を参照してください。

OpenStorage デバイスの[一般]プロパティ

OpenStorage デバイスのすべての一般プロパティを表示できます。一部のプロパティは変更できません。

p.1535 の「[OpenStorage デバイスのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 P-7 OpenStorage デバイスの[一般]プロパティ

項目	説明
サーバー	デバイスがあるサーバーの完全修飾名を示します。
説明	デバイスの説明を示します。
サーバーの種類	OpenStorage デバイスの種類を示します。
ログオンアカウント	デバイスにアクセスするために必要なログオンアカウントの名前を示します。
一時停止	デバイスを一時停止したり、または再開したりできます。
有効	デバイスを有効または無効にできます。
オンライン	このデバイスがオンラインかどうかを示します。このプロパティを変更できません。
ディスクの空き容量が少ない	デバイスの空きディスク領域が少ないかどうかを示します。このプロパティを変更できません。
このデバイスに許可する同時並行ジョブ数	このデバイスで同時に実行したいジョブの最大数を示します。

項目	説明
総容量	このデバイスで利用可能な総ストレージ容量を表示します。
使用領域	このデバイスで使用されている総ストレージ容量を表示します。
重複排除率	重複排除前のデータ量と重複排除後のデータ量の比率を示します。

重複排除用ストレージフォルダについて

重複排除用ストレージフォルダは、バックアップジョブの宛先として使うことができるディスクベースのバックアップフォルダです。重複排除用ストレージフォルダを使うと、一意のデータのみが保存されます。

重複排除用ストレージフォルダを作成する前に、要件を確認してください。シマンテック社は、重複排除用ストレージフォルダ用に専用ボリュームと大容量の RAM を推奨します。

p.1530 の「[Deduplication Option の必要条件](#)」を参照してください。

重複排除用ストレージフォルダを作成すると、Backup Exec は重複排除プロセスを管理するデータベースをインストールして構成します。重複排除用ストレージフォルダとデータベースを同じボリュームか、個別のボリュームに保存できます。ただし、重複排除用ストレージフォルダとデータベースを個別のボリュームに保存すると、データベースのパフォーマンスが向上します。

メモ: メディアサーバー上には 1 つの重複排除用ストレージフォルダのみを作成できません。

Backup Exec Central Admin Server Option か SAN Shared Storage Option を使えば、重複排除用ストレージフォルダは複数のメディアサーバー間で共有できます。共有は重複排除用ストレージフォルダを追加するときに有効にできます。重複排除用ストレージフォルダを共有する新しいメディアサーバーの選択、またはメディアサーバーの共有機能の削除はいつでも実行できます。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

重複排除用ストレージフォルダは、作成された後、Backup Exec メディアサーバーの名前の下の[デバイス]ビューに表示されます。ただし、重複排除用ストレージフォルダは[すべてのデバイス]デバイスプールには表示されません。デバイスプールには重複排除用ストレージフォルダを追加できません。

重複排除用ストレージフォルダの一時停止、有効化、無効化、名前の変更、更新、削除を実行できます。重複排除用ストレージフォルダで **Backup Exec** の [削除] オプションを使うと、フォルダは **Backup Exec** データベースから削除されます。ただし、その中のフォルダとファイルはディスクに残ります。

p.1537 の「[重複排除用ストレージフォルダの追加](#)」を参照してください。

重複排除用ストレージフォルダの追加

重複排除用ストレージフォルダは、バックアップジョブの宛先として使うことができるディスクベースのバックアップフォルダです。メディアサーバー上には 1 つの重複排除用ストレージフォルダのみを追加できます。

p.1536 の「[重複排除用ストレージフォルダについて](#)」を参照してください。

重複排除用ストレージフォルダを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックします。
- 2 タスクペインの [デバイスタスク] の下にある [デバイス設定アシスタント] をクリックします。
- 3 [デバイス設定アシスタント] ダイアログボックスの [Deduplication Option] の下で、[重複排除用ストレージフォルダ] をクリックします。
- 4 [重複排除用ストレージフォルダの設定] ダイアログボックスが表示されたら、[重複排除用ストレージフォルダの追加] をクリックしてください。

この手順はこれが最初の重複排除用ストレージフォルダなら適用されません。[重複排除用ストレージフォルダの設定] ダイアログボックスは重複排除用ストレージフォルダが別のメディアサーバーにすでにあるときのみ表示されます。

- 5 [一般] タブのオプションを設定します。
p.1537 の「[重複排除用ストレージフォルダの \[一般\] オプション](#)」を参照してください。
- 6 [詳細] タブのオプションを設定します。
p.1538 の「[重複排除用ストレージフォルダの \[詳細\] オプション](#)」を参照してください。
- 7 [共有] タブで、この重複排除用ストレージフォルダで使いたいメディアサーバーを選択してください。
- 8 [OK] をクリックします。
- 9 手順 7 で選択したメディアサーバーの **Backup Exec** サービスを再起動してください。

p.158 の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

重複排除用ストレージフォルダの [一般] オプション

重複排除用ストレージフォルダには次のオプションを使用できます。

p.1537 の「[重複排除用ストレージフォルダの追加](#)」を参照してください。

表 P-8 重複排除用ストレージフォルダの[一般]オプション

項目	説明
名前	フォルダの一意の名前を示します。
ストレージパス	<p>コンピュータ上のフォルダの場所を示します。シマンテック社は専用のボリュームを使うことを強く推奨します。</p> <p>メモ: ストレージパスを選択した後は、それを変更できません。</p> <p>メモ: ルートディレクトリを使うことができません。パスを使わなければなりません。</p>
データベースパス	<p>重複排除用ストレージフォルダを作成するときにインストールされるデータベースを配置したい場所を示します。データベースパスに個別のボリュームを使うこともできます。このオプションは必須ではありません。ただし、個別のパスを使用すると、データベースのパフォーマンスが改善されることがあります。データベースパスに個別のボリュームを選択しない場合、Backup Exec は [ストレージパス] フィールドに入力されているパスを使います。</p> <p>メモ: データベースパスを設定した後は、それを変更できません。</p>
このデバイスに許可する同時並行ジョブ数	このデバイスで同時に実行したいジョブの最大数を示します。
ログオンアカウント	このデバイスにアクセスするために必要なログオンアカウントの名前を示します。

重複排除用ストレージフォルダの[詳細]オプション

重複排除用ストレージフォルダには次のオプションを使用できます。

p.1537 の「[重複排除用ストレージフォルダの追加](#)」を参照してください。

表 P-9 重複排除用ストレージフォルダの[詳細]オプション

項目	説明
空き領域の低しきい値	このデバイスがデバイスプールにない場合に、 Backup Exec が新しいデバイスにジョブを移動するか、またはジョブを中断するときの数値を示します。
Remote Agent にこのデバイスへのダイレクトアクセスを許可する	<p>ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent として設定されているリモートコンピュータが、重複排除用ストレージフォルダに直接データを送信できるようにします。データが重複排除されると、重複排除用ストレージフォルダに一意のデータのみが直接送られます。このオプションを使用すると、メディアサーバーはバイパスされ、他の操作を実行するために解放されたままになります。</p> <p>このオプションを有効にする場合は、バックアップジョブで次のことも実行する必要があります：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップ選択項目としてリモートコンピュータ上のリソースを選択します。 ■ バックアップジョブの宛先として重複排除用ストレージフォルダを選択します。 ■ [このジョブにデバイスへのダイレクトアクセスを許可する]オプションを選択します。このオプションは[バックアップジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[デバイスとメディア]ペインに表示されます。 <p>p.1542の「ダイレクトアクセスについて」を参照してください。</p>
データストリームチャンクサイズ	Backup Exec が行う単一書き込み操作のサイズを示します。デフォルトのサイズは使われるデバイスの種類によって異なります。
ログレベル	このデバイスの診断ログに含めたい情報の種類を示します。重大なエラーからすべての種類のメッセージまで選択できます。
ログの保持	このデバイスのログを保持する日数を示します。

重複排除用ストレージフォルダのプロパティの表示

重複排除用ストレージフォルダのすべてのプロパティを表示できます。一部のプロパティは変更できます。

重複排除用ストレージフォルダのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 重複排除用ストレージフォルダを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
 p.1540の「重複排除用ストレージフォルダの[一般]プロパティ」を参照してください。
 p.1538の「重複排除用ストレージフォルダの[詳細]オプション」を参照してください。

重複排除用ストレージフォルダの[一般]プロパティ

重複排除用ストレージフォルダのすべての一般プロパティを表示できます。一部のプロパティは変更できます。

表 P-10 重複排除用ストレージフォルダの[一般]プロパティ

項目	説明
名前	重複排除用ストレージフォルダの設定時に入力された名前を示します。ユーザー定義の名前または Backup Exec が入力したデフォルト名を使用できます。名前は、いつでも変更することができます。
サーバー	重複排除用ストレージフォルダが作成されたコンピュータの名前を示します。
ストレージパス	コンピュータ上のフォルダの場所を示します。シマンテック社は専用のボリュームを使うことを強く推奨します。
データベースパス	重複排除用ストレージフォルダを作成したときにインストールされたデータベースの場所を示します。データベースの場所は変更できません。
一時停止	デバイスを一時停止したり、または再開したりできます。
有効	デバイスを有効または無効にできます。
オンライン	デバイスがオンライン状態またはオフライン状態かどうかを表示します。チェックボックスにチェックマークが表示されなければ、デバイスはオフラインです。このプロパティを変更できません。
ディスクの空き容量が少ない	デバイスの空きディスク領域が少ないかどうかを示します。

項目	説明
このデバイスに許可する同時並行ジョブ数	このデバイスで同時に実行したいジョブの最大数を示します。
総容量	このデバイスで利用可能な総ストレージ容量を表示します。
使用領域	このデバイスで使用されている総ストレージ容量を表示します。
重複排除率	重複排除前のデータ量と重複排除後のデータ量の比率を示します。
ログオンアカウント	デバイスにアクセスするために使われているログオンアカウントを示します。ログオンアカウントは、いつでも変更することができます。

複数のメディアサーバー間における重複排除のデバイスの共有

Backup Exec Central Admin Server Option か SAN Shared Storage Option を使えば、どのメディアサーバーが重複排除用ストレージフォルダ、OpenStorage デバイス、またはダイレクトアクセスが有効な Remote Agent を共有できるかを選択できます。重複排除用ストレージフォルダ、OpenStorage デバイス、またはダイレクトアクセスが有効な Remote Agent を追加するとき、デバイスを追加するために使ったメディアサーバーが共有のために自動的に選択されます。

メモ: 重複排除用ストレージフォルダを共有するには、フォルダにアクセスするすべてのメディアサーバーに OpenStorage デバイスとして重複排除用ストレージフォルダを追加する必要があります。ただし、重複排除用ストレージフォルダを作成するために使われたメディアサーバーは除きます。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

複数のメディアサーバー間で重複排除のデバイスを共有する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 [デバイス]ビューでは、メディアサーバーがアクセスする重複排除用ストレージフォルダ、OpenStorage デバイス、またはダイレクトアクセスが有効な Remote Agent を右クリックしてください。
- 3 [共有の管理]を選択してください。
- 4 共有したい重複排除のデバイスを選択してください。

- 5 [メディアサーバー]の下で、重複排除のデバイスで使いたいメディアサーバーを選択してください。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 手順 5 で選択したメディアサーバーの **Backup Exec** サービスを再起動してください。

ダイレクトアクセスについて

ダイレクトアクセスを使用すると、ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** として構成されるリモートコンピュータは、**OpenStorage** デバイスか重複排除用ストレージフォルダにデータを直接送ることができます。ダイレクトアクセスを使用すると、メディアサーバーはバイパスされ、他の操作を実行するために解放されたままになります。重複排除のデバイスでソース側の重複排除がサポートされている場合、ダイレクトアクセスは、リモートコンピュータでデータを重複排除し、重複排除用ストレージフォルダまたは **OpenStorage** デバイスに一意のデータのみを直接送信できるようにします。

メモ: 重複排除のデバイスがソース側の重複排除をサポートすれば、ダイレクトアクセスはリモートコンピュータの **CPU** 使用率を増加させることがあります。

ダイレクトアクセスを使用してバックアップジョブを作成するときは、以下の項目を考慮してください。

- バックアップジョブには 1 つのリモートコンピュータからのみソースを含めることができます。
- **Remote Agent for Windows Systems** がリモートコンピュータにインストールされ、実行されている必要があります。
- リモートコンピュータはダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** として設定されなければなりません。
- リモートコンピュータは **ping** 可能でなければなりません。
- リモートコンピュータには **Backup Exec** メディアサーバーを指定できません。
- 重複排除用ストレージフォルダまたは **OpenStorage** デバイスはバックアップジョブの [デバイスとメディア]ビューで選択する必要があります。
- オプション[このジョブにデバイスへのダイレクトアクセスを許可する]を、バックアップジョブの [デバイスとメディア]ビューで選択する必要があります。バックアップジョブの宛先として重複排除用ストレージフォルダまたは **OpenStorage** デバイスを選択すると、このオプションがデフォルトで選択されます。
- **Backup Exec** サービスアカウントによって、リモートコンピュータは **Symantec PureDisk** デバイスに直接アクセスできます。 **Granular Recovery Technology** が有効なバックアップを実行する場合、**Backup Exec** サービスアカウントは **Symantec PureDisk** デ

パイスに直接アクセスするすべてのリモートコンピュータに対して有効である必要があります。リモートコンピュータが同じドメインに存在すること、またはメディアサーバーが存在するドメインとのドメイン信頼関係がリモートコンピュータにあることを確認する必要があります。

ダイレクトアクセスを使うようにリモートコンピュータを設定していない場合、リモートコンピュータのデータは重複排除するメディアサーバーに送られます。次に、重複排除されたデータは重複排除用ストレージフォルダまたは **OpenStorage** デバイスにバックアップされます。このプロセスはメディアサーバーの CPU 使用率を増加させます。ただし、このプロセスは古いリモートコンピュータをバックアップする場合に有用です。

p.1543 の「[ダイレクトアクセスの設定](#)」を参照してください。

p.1544 の「[ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent の設定](#)」を参照してください。

ダイレクトアクセスの設定

ダイレクトアクセスを使用すると、ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** として構成されるリモートコンピュータは、**OpenStorage** デバイスか重複排除用ストレージフォルダにデータを直接送ることができます。

p.1542 の「[ダイレクトアクセスについて](#)」を参照してください。

表 P-11 **ダイレクトアクセスを設定する方法**

処理	説明	参照先
直接アクセスする OpenStorage デバイスまたは重複排除用ストレージフォルダを設定します。	[詳細]タブで、[Remote Agent (このデバイスへのダイレクトアクセスを許可する)]を選択します。	p.1537の「 重複排除用ストレージフォルダの追加 」を参照してください。 p.1532の「 OpenStorage デバイスの追加 」を参照してください。
ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent を設定します。	バックアップ時に OpenStorage デバイスおよび重複排除用ストレージフォルダに直接アクセスするようにリモートコンピュータを設定します。 メモ: リモートコンピュータには Remote Agent for Windows Systems がインストールされている必要があります。	p.1544の「 ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent の設定 」を参照してください。

処理	説明	参照先
バックアップジョブを作成します。	<p>[選択リスト]ビューでは、ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent として設定されているリモートコンピュータからリソースを選択します。</p> <p>[デバイスおよびメディア]ビューで、宛先デバイスとして OpenStorage デバイスまたは重複排除用ストレージフォルダを選択します。次に[このジョブにデバイスへのダイレクトアクセスを許可する]が選択されていることを確認します。</p>	<p>p.324の「バックアップジョブおよびテンプレートの[デバイスとメディア]オプション」を参照してください。</p>

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent の設定

OpenStorage デバイスまたは重複排除用ストレージフォルダへ直接アクセスするようにリモートコンピュータを設定できます。リモートコンピュータには **Remote Agent for Windows Systems** がインストールされている必要があります。サードパーティ製の OpenStorage デバイスへのダイレクトアクセスのために、デバイスの製造元のプラグインもインストールされなければなりません。シマンテック社の **PureDisk** デバイスの適切なプラグインは **Remote Agent for Windows Systems** に含まれているため、追加のプラグインは必要ありません。

メモ: ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** を設定するオプションが表示されるのは、すでに OpenStorage デバイスまたは重複排除用ストレージフォルダが設定されている場合のみです。

p.1542 の「[ダイレクトアクセスについて](#)」を参照してください。

p.1543 の「[ダイレクトアクセスの設定](#)」を参照してください。

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent を設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 3 [ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent]をクリックします。

- 4 [ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** の設定]ダイアログボックスが表示されたら、[ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** の追加]をクリックしてください。
この手順はこれが最初のダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** なら適用されません。[ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** の設定]ダイアログボックスは、ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** がすでにあるときのみ表示されます。
- 5 **Remote Agent** を設定するためのオプションを設定します。
p.1545の「[ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent の\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 [共有]タブで、**Remote Agent** から直接アクセスしたい各メディアサーバーを選択してください。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 手順 6 で選択したメディアサーバーの **Backup Exec** サービスを再起動してください。
p.158の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent の[一般]オプション

次のオプションはダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** に使用できます。

表 P-12 **ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent の[一般]オプション**

項目	説明
サーバー	ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent として追加したいコンピュータの名前を示します。 メモ: コンピュータ名の入力に使う名前の形式は、バックアップでリモートコンピュータを選択するためにも使われなければなりません。たとえば、ここで IP アドレスを使えば、バックアップ選択項目にも IP アドレスを使わなければなりません。さもなければ、ソース側の重複排除は実行されません。
ポート	メディアサーバーとリモートコンピュータ間の通信のために使用するポートを示します。
説明	選択した説明を表示します。
Backup Exec の ICMP ping 操作を有効にしてサーバーを検出する	メディアサーバーで ICMP ping を使ってリモートコンピュータを検索できます。
ログオンアカウント	リモートコンピュータにアクセスするために必要なログオンアカウントを示します。

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のプロパティの表示

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のすべてのプロパティを表示し、一部のプロパティを変更できます。

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent を選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。

p.1546 の「[ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のプロパティ](#)」を参照してください。

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のプロパティ

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のすべてのプロパティを表示し、一部のプロパティを変更できます。

p.1546 の「[ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 P-13 ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent のプロパティ

項目	説明
サーバー	ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent として追加したいコンピュータの名前を示します。
ポート	メディアサーバーとリモートコンピュータ間の通信のために使用するポートを示します。
説明	Remote Agent のユーザー定義の説明が表示されます。
Backup Exec の ICMP ping 操作を有効にしてサーバーを検出する	メディアサーバーで ICMP ping を使ってリモートコンピュータを検索できます。
ログオンアカウント	リモートコンピュータにアクセスするために必要なログオンアカウントを示します。

重複排除バックアップジョブについて

通常のバックアップジョブの場合と同様に重複排除バックアップジョブを設定します。宛先デバイスとして OpenStorage デバイスまたは重複排除用ストレージフォルダを選択すると、ジョブの実行時に重複排除が行われます。必要に応じて、Remote Agent からデバ

イスに直接アクセスしたい場合は、ダイレクトアクセス用にこのオプションを選択できます。他の追加オプションは重複排除バックアップジョブの作成には必要ありません。

p.1542 の「[ダイレクトアクセスについて](#)」を参照してください。

最適化された複製について

Backup Exec は、重複排除されたデータを同じ製造元の 1 つの OpenStorage デバイスから別の OpenStorage デバイスに直接コピーできる最適化された複製をサポートしています。たとえば、データをシマンテック社の PureDisk デバイスからの別のシマンテック社の PureDisk デバイスにコピーできます。Central Admin Server Option を使えば、管理対象メディアサーバーの重複排除用ストレージフォルダから、別の管理対象メディアサーバーの重複排除用ストレージフォルダにデータをコピーすることもできます。データはネットワーク経由でコピーされるため、Backup Exec メディアサーバーを使う必要がありません。データは重複排除されるので、一意のデータのみがデバイス間でコピーされません。

メモ: 最適化された複製は Granular Recovery Technology が有効なバックアップセットには利用できません。

最適化された複製は、選択した製造元の OpenStorage デバイスで利用可能です。互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

OpenStorage デバイス間でデータをコピーするには、バックアップ複製ジョブを作成する必要があります。複製ジョブの宛先デバイスは、ソースのバックアップジョブで使われたデバイスと同じ製造元の同じ種類のデバイスでなければなりません。どちらのデバイスからでもデータをリストアできます。

p.1547 の「[最適化された複製の設定](#)」を参照してください。

最適化された複製の設定

最適化された複製を使用すると、重複排除されたデータを同じ製造元の 1 つの OpenStorage デバイスから別の OpenStorage デバイスに直接コピーできます。また 1 つの重複排除用ストレージフォルダから別の重複排除用ストレージフォルダにデータをコピーすることもできます。

p.1547 の「[最適化された複製について](#)」を参照してください。

バックアップ複製ジョブを設定し、最適化された複製を実行します。

表 P-14 最適化された複製を設定する方法

手順	参照先
宛先として OpenStorage デバイスか重複排除用ストレージフォルダを使うバックアップジョブを作成します。	p.317の「 ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成 」を参照してください。
バックアップ複製ジョブを作成し、宛先として適切な OpenStorage デバイスまたは重複排除用ストレージフォルダを選択します。 メモ: 複製ジョブの宛先デバイスは、ソースのバックアップジョブで使われたデバイスと同じ製造元の同じ種類のデバイスでなければなりません。	p.357の「 バックアップしたデータの複製 」を参照してください。

テープへの重複排除データのコピーについて

Backup Exec では、長期またはオフサイトストレージ用に、**OpenStorage** デバイスからテープに重複排除されたデータをコピーできます。データはテープにコピーされるときに、元に戻されます。つまり、ファイルは元の形式に再構築されて、重複排除されません。

重複排除データをテープにコピーするには、**OpenStorage** デバイスからテープデバイスにバックアップセットをコピーするバックアップ複製ジョブを作成する必要があります。

p.357の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

暗号化を用いる重複排除の使用について

データを重複排除するバックアップジョブには Backup Exec の暗号化オプションを使わないでください。データは暗号化されると重複排除できません。

重複排除データのリストアについて

通常のリストアジョブの場合と同様にリストアジョブを設定して重複排除データをリストアします。追加設定は必要ありません。

重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリについて

重複排除用ストレージフォルダはBackup Execメディアサーバーに格納されます。メディアサーバーで障害が発生すれば、重複排除用ストレージフォルダのデータは失われます。従って、システム障害からのリカバリの準備のために手順を実行するべきです。障害

に対する準備として、**Backup Exec**は重複排除用ストレージフォルダのスナップショットを作成することを可能にします。スナップショットはフォルダ、フォルダの内容、フォルダの関連付けされたデータベースを含んでいます。スナップショットをテープに保存し、障害の後で重複排除用ストレージフォルダをリカバリするために使うことができます。

スナップショットからデータをリストアするとき、次の処理が実行されます。

- 重複排除サービスが実行中の場合は、**Backup Exec**によって停止されます。重複排除サービスは **Backup Exec** サービスとは別のため、**Backup Exec** サービスは影響されません。
- **Backup Exec** は重複排除用ストレージフォルダおよび関連付けされたデータベースにあるファイルを削除します。
- 重複排除用ストレージフォルダは、フォルダの内容および関連付けされたデータベースと共に元の場所にリストアされます。
- 重複排除サービスが再起動されます。

p.1549の「[重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリの準備](#)」を参照してください。

重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリの準備

障害に対する準備として、**Backup Exec**は重複排除用ストレージフォルダのスナップショットを作成することを可能にします。スナップショットはフォルダ、フォルダの内容、フォルダのデータベースを含んでいます。

p.1548の「[重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリについて](#)」を参照してください。

重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリを準備する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]を選択します。
- 3 バックアップ選択リストの[シャドウコピーコンポーネント]の下にある[Backup Exec Deduplication Writer]を選択します。
- 4 タスクペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 5 [デバイス]フィールドで、テープデバイスを選択します。
- 6 使いたい追加オプションを設定してください。
- 7 ジョブを実行します。

OpenStorage デバイスのディザスタリカバリについて

OpenStorage デバイスでは、次のディザスタリカバリのシナリオが考えられます。

- デバイ스에 장애가 발생합니다.
- デバイスを使うメディアサーバーに 장애가 발생합니다.

デバイスに 장애가 발생した場合、デバイ스의製造元のマニュアルを参照してください。メディアサーバーに 장애가 발생して **Backup Exec** を再インストールする必要がある場合は、デバイスを再設定して、メディアサーバーがリカバリされた後、デバイスからメディアのインベントリそしてカタログ登録を実行する必要があります。

Symantec Backup Exec Desktop and Laptop Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- **Desktop and Laptop Option** について
- **DLO** のコンポーネントについて
- **DLO** のインストールの準備
- **DLO** 管理コンソールのシステムの必要条件
- **Backup Exec Desktop and Laptop Option** のインストールについて
- リカバリパスワードの設定について
- データ整合性の確認
- **DLO** サービスクレデンシャルの変更
- **DLO** の管理者アカウントについて
- **DLO** の権限管理の自動化について
- **DLO** の制限付きリストアについて
- 個別アカウントのリストを使用した **DLO** 権限の管理
- ドメイングループを使用した **DLO** 権限の管理
- **DLO** のデフォルト設定について
- **DLO** のデフォルトプロファイル設定の変更
- **DLO** のデフォルトのバックアップ選択項目設定の変更

- デフォルトの **DLO** グローバル設定の変更
- 特定のポートでデータベースにアクセスする場合の **DLO** の設定
- **DLO** での **Backup Exec Retrieve** の使用について
- **DLO** の更新について
- **Backup Exec** からの **DLO** 管理コンソールの起動
- **DLO** の[概要]ビューについて
- 別の **Backup Exec** メディアサーバーでの **DLO** への接続
- **DLO** を設定する方法
- **DLO** プロファイルについて
- **DLO** のバックアップ選択項目について
- 差分ファイルの転送について
- **DLO** データ格納場所について
- 自動ユーザー割り当てについて
- **DLO** でのグローバルエクスクルードフィルタの設定について
- **Desktop Agent** のユーザーの管理について
- コンピュータのプロパティの変更
- デスクトップコンピュータの有効化または無効化
- **DLO** からのデスクトップコンピュータの削除
- **DLO** 管理コンソールからのデスクトップのバックアップ
- **DLO** 管理コンソールからのファイルおよびフォルダのリストア
- **DLO** でリストアするファイルおよびフォルダの検索
- **DLO** の緊急リストアおよびリカバリパスワードについて
- [履歴]ペインのオプションと[ジョブ履歴]ペインのオプション
- **DLO** 管理コンソールでのアラートの監視について
- **DLO** アラートの通知方式の設定について
- **DLO** における通知受信者の設定について
- **DLO** のレポートについて

- DLO データベースの保守について
- Desktop and Laptop Option のクラスタ化について
- DLO のコマンド構文について
- Desktop Agent について
- Desktop Agent の用語
- Desktop Agent の機能とメリット
- Desktop Agent のシステムの必要条件
- Desktop Agent のインストール
- Desktop Agent を設定する方法
- Desktop Agent コンソールについて
- Desktop Agent によるデータのバックアップの作成について
- Desktop Agent の設定の変更について
- デスクトップのユーザーデータの同期について
- Desktop Agent の状態について
- ジョブの一時停止またはキャンセルについて
- 使用状況の詳細の表示
- Desktop Agent を使用したファイルのリストア
- Backup Exec Retrieve を使用したファイルのリストアについて
- Desktop Agent でのジョブ履歴の監視について
- 他の製品での DLO の使用について
- DLO 管理コンソールに関するトラブルシューティング
- Desktop Agent に関するトラブルシューティング
- アクセシビリティおよび DLO

Desktop and Laptop Option について

Backup Exec Desktop and Laptop Option (DLO) には、デスクトップとラップトップ (この 2 つをまとめてデスクトップと呼びます) のファイルを自動的に保護する機能が搭載されています。ファイルは、コンピュータがネットワークに接続しているか、オフラインになっている

るかにかかわらず保護されます。デスクトップがネットワークに接続されていない場合、ファイルはデスクトップのユーザーデータフォルダにバックアップされます。コンピュータをネットワークに再接続すると、ファイルはローカルのデスクトップユーザーデータフォルダから、指定のネットワークユーザーデータフォルダにバックアップされます。

複数のコンピュータを使用するユーザーは、コンピュータ間でデータを同期化することにより、最新のファイルバージョンをすべてのコンピュータで利用することができます。

メモ: この製品は、デスクトップユーザーデータをファイルレベルで保護するためのものであり、システムの完全バックアップを行うものではありません。

DLO のコンポーネントについて

DLO は次のコンポーネントで構成されています。

表 Q-1 DLO のコンポーネント

コンポーネント	説明
DLO 管理コンソール	<p>DLO 管理コンソールは Backup Exec の一部であり、Backup Exec メディアサーバーで実行されます。DLO 管理コンソールは、Backup Exec からアクセスする個別のウィンドウで実行されます。</p> <p>管理者は、DLO 管理コンソールで次の作業を実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デスクトップユーザーが Desktop Agent と対話するレベルを制御するプロファイルを作成します。さらに、プロファイルを使って、バックアップするファイルの種類を定義し、バックアップスケジュールを設定することができます。 ■ データの格納場所であるネットワークユーザーデータフォルダを作成します。 ■ ユーザーに割り当てられるデータ格納場所とプロファイルを判断する自動ユーザー割り当てを作成します。 ■ DLO にユーザーを手動で追加します。 ■ 履歴ログファイルの表示、アラートの受信およびデスクトップへのファイルのリストアを行います。
DLO データベース	<p>DLO データベースは Backup Exec の一部であり、Backup Exec メディアサーバーで実行されます。</p>
DLO Maintenance Service	<p>保守サーバーは DLO をインストールしたときにデフォルトでインストールされます。</p> <p>必要な保守サーバーは 1 つのみです。ただし、大規模なインストール環境では、各データ格納場所のホスト (ファイルサーバー) に 1 つの保守サーバーをインストールすると効率がよい場合があります。</p>

コンポーネント	説明
Desktop Agent	<p>Desktop Agent は、保護の対象となるデスクトップとラップトップに存在しています。Desktop Agent をバックグラウンドで実行し、自動的にファイルを保護することができます。</p> <p>また、Desktop Agent インターフェースに完全なアクセス権を持っているデスクトップユーザーは、次の作業を行えます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップのスケジュール ■ バックアップするファイルの種類を選択 ■ ファイルのリストア ■ 異なるコンピュータ間でのファイルバージョンの同期 ■ バックアップ状態の表示

p.1589 の「[DLO を設定する方法](#)」を参照してください。

p.1590 の「[DLO プロファイルについて](#)」を参照してください。

p.1607 の「[DLO のバックアップ選択項目について](#)」を参照してください。

p.1625 の「[DLO データ格納場所について](#)」を参照してください。

p.1632 の「[自動ユーザー割り当てについて](#)」を参照してください。

DLO のインストールの準備

DLO をインストールする前に、次のことを考慮する必要があります。

表 Q-2 インストール前の考慮事項

項目	説明
ドメインおよび Active Directory	<p>メディアサーバーおよび DLO データ格納場所は、Windows ドメインまたは Active Directory に属している必要があります。Desktop Agent を実行するコンピュータは Windows ドメインまたは Active Directory の外にある場合もあります。ただし、メディアサーバーまたはデータ格納場所にアクセスするドメインまたはディレクトリの認証が必要です。</p>

項目	説明
サーバーの負荷	<p>DLO は、ネットワークファイルサーバーとして扱うことができます。DLO の理想的なサーバーは、ネットワーク接続が高速で、ディスクの読み書きが高速であることです。DLO ファイルサーバーのこれらの要件に比べれば、CPU の要件はそれほど重要ではありません。</p> <p>1 つの DLO サーバーに正常にバックアップできる Desktop Agent の数は、さまざまな要因によって異なります。ただし、シマンテック社はサーバーが Windows 2000 Advanced Server を実行している場合、サーバーごとのクライアントを 400 台よりも少なくすることをお勧めします。400 台以上のクライアントが接続されていると、ページブールメモリが不足したときに、ファイル操作が失敗する可能性があります。</p>
認証	<p>DLO 管理コンソール</p> <p>DLO 管理コンソールは、DLO がインストールされているメディアサーバーで完全な管理者権限を持っているユーザーであれば、誰でも管理できます。</p> <p>このユーザーのアカウントはドメインアカウントである必要があります。</p> <p>さらに、このアカウントは、データ格納場所に使用されるリモートサーバーまたはネットワークユーザーのデータフォルダで次のことを行う権限が必要です:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワーク共有を作成する ■ ネットワーク共有とディレクトリの権限を管理する <p>ドメイン管理者アカウントを使用するか、または DLO リソースをホストするサーバーのローカル管理者権限を標準ドメインアカウントに付与します。</p> <p>p.1568 の「DLO の管理者アカウントについて」を参照してください。</p> <p>Desktop Agent</p> <p>DLO では、ドメインアカウントが必要です。Desktop Agent の各ユーザーは、ドメインアカウントを使用して DLO にログオンする必要があります。ローカルアカウントを使用してログオンしたユーザーでも DLO を使用できますが、DLO で認証されるためのドメインクレデンシャルが必要となります。</p>

項目	説明
データベースの選択	<p>DLO では、デフォルトで独自の SQL Express 2005 インスタンスがインストールされます。</p> <p>メモ: 既存のデータベースインスタンスを使用する場合は、名前付きパイプを有効にする必要があります。独自の SQL Express 2005 インスタンスが DLO によってインストールされる場合は、名前付きパイプが自動的に有効になります。</p> <p>次の既存のローカルまたはリモートインスタンスを使用するように DLO を手動で設定することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ SQL Express 2005 ■ SQL Server 2005 ■ MSDE 2000 <p>SQL Express 2005 の利点は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 無料です。 ■ 1 つのメディアサーバーで 1000 を超える Desktop Agent をバックアップすることはできませんが、通常は、SQL Express で十分です。 <p>SQL Express 2005 の欠点は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ データベースが 1 つのプロセッサに制限されるため、負荷がかかるとデータベースへの I/O 速度が低下します。 ■ SQL Express のテーブルの最大サイズは 4 GB ですが、DLO でこの制限に達する可能性はほとんどありません。 <p>SQL Server の利点は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 1000 を超える Desktop Agent に対応できる拡張性を備えています。 ■ データベースツールが用意されています。 <p>SQL Server の欠点は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 有料です。ただし、Desktop Agent ごとに SQL Server クライアントライセンスを購入する必要はありません。 <p>MSDE の利点は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 無料です。 ■ 1 つのメディアサーバーで 1000 を超える Desktop Agent をバックアップすることはできませんが、通常は、MSDE で十分です。 <p>MSDE の欠点は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ データベースへの同時並行接続数が制限されるため、負荷がかかるとデータベースへの I/O 速度が低下します。 ■ MSDE のテーブルの最大サイズは 2 GB ですが、DLO でこの制限に達する可能性はほとんどありません。

項目	説明
時間の同期	<p>DLO 管理コンソールまたは Desktop Agent を実行しているすべてのコンピュータで、共通の時間が設定されている必要があります。ネットワークで Windows Time Synchronization サービスを設定できます。</p> <p>詳しくは、Microsoft の Web サイトを参照してください。</p>
ファイアウォール	<p>DLO はファイアウォール環境で動作することができます。DLO がファイアウォール環境で正しく動作するには、VPN などのリモート接続を確立した後に、ネットワーク上のファイル共有が見える必要があります。ファイルを共有できない場合、DLO はネットワークユーザーデータフォルダに対してファイルのやり取りができません。デスクトップコンピュータのファイルは、デスクトップユーザーデータフォルダに保護され、ネットワークユーザーデータフォルダがアクセス可能な場合に転送されます。</p> <p>Windows XP Professional Service Pack 2 を実行するコンピュータにファイアウォールを介して DLO をプッシュインストールできます。プッシュインストールの前に、インストール先のコンピュータで[リモート管理の例外を許可する]グループポリシーを有効にします。詳しくは Windows のマニュアルを参照してください。</p> <p>また Windows Server 2008 のコンピュータにファイアウォールを通して DLO をプッシュインストールできます。プッシュインストールを始める前に、インストール先コンピュータの Winows ファイアウォールの例外リストで、WMI (Windows Management Instrumentation) に加えて、ファイルとプリンタの共有を有効にします。詳しくは Windows のマニュアルを参照してください。</p>
DLO 管理コンソールの MDAC サポート	<p>DLO では、バージョン 2.7 と 2.8 の MDAC がサポートされています。ただし、デフォルトは MDAC 2.8 です。MDAC 2.8 がインストールされていない場合はインストール時にインストールされます。MDAC 2.8 のインストールでは再起動が必要になる場合があるため、コンピュータ管理者がインストール処理を完了する必要があります。MDAC 2.8 のインストール後、管理者以外のユーザーが最初にログオンすると、多数のエラーが発生します。</p> <p>MDAC 2.7 を強制的に使用するには、DLO インストールセット内の setup.ini のファイルに次の CmdLine 値を追加できます。</p> <p>REQUIREDMDACVERSION="2.7"</p> <p>例:</p> <p>CmdLine=REQUIREDMDACVERSION="2.7" /!*v %TEMP%\DLOConsoleInstall.log</p>

項目	説明
Desktop Agent の MDAC サポート	<p>Desktop Agent では、バージョン 2.7 と 2.8 の MDAC がサポートされています。ただし、デフォルトは MDAC 2.8 です。</p> <p>MDAC 2.7 を強制的に使用するには、Desktop Agent インストールセット内の setup.ini のファイルに次の CmdLine 値を追加します。</p> <p>REQUIREDMDACVERSION="2.7"</p> <p>例:</p> <p>CmdLine=/qf DEFAULTMEDIASERVER="SERVERNAME" DLODBINSTANCENAME="BKUPEXEC" LAUNCHCLIENT="1" REQUIREDMDACVERSION="2.7" /!*v "%TEMP%\DLOAgentInstall.log"</p>

DLO 管理コンソールのシステムの必要条件

このバージョンの DLO 管理コンソールの実行に必要なシステムの必要条件を次に示します。

表 Q-3 システムの必要条件

項目	説明
オペレーティングシステム	<p>管理コンソールは次のオペレーティングシステムで動作します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows Server 2003 ファミリー ■ Microsoft Windows Server 2003 x64 Edition ■ Microsoft Windows Server 2003 R2 ■ Microsoft Windows XP Service Pack 2 以上 ■ Microsoft Windows XP Professional x64 Edition ■ Microsoft Windows Vista ■ Microsoft Windows Server 2008 ■ Microsoft Windows Server 2008 R2 ■ Microsoft Windows 7 (リモート管理をサポートするため) <p>Windows Server Core オプションが実行されているコンピュータには DLO をインストールできません。</p>
インターネットブラウザ	Internet Explorer 5.01 以上、ただし、バージョン 5.5 以上を推奨。
プロセッサ	Pentium 互換 CPU
メモリ	<p>必須:256 MB RAM</p> <p>推奨:512 MB RAM 以上 (パフォーマンス向上のため)</p>

項目	説明
ディスクの空き領域	Microsoft Windows をインストール (標準インストール) した状態でハードディスクドライブの空き領域が 150 MB 以上
その他のハードウェア	推奨されるハードウェアは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">■ ネットワークインターフェースカード■ CD-ROMドライブ■ Windows 対応プリンタ (オプション)■ マウス (推奨)

Windows ドメインおよび Active Directory はサポートされています。それ以外の認証方式 (Novell E-Directory、NIS+ など) はサポートされていません。

Backup Exec Desktop and Laptop Option のインストールについて

DLO 管理コンソールは、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールします。Backup Exec メディアサーバーおよびデータ格納場所は、Windows ドメインまたは Active Directory に属している必要があります。Novell E-Directory、NIS+ およびその他の Windows 以外のドメインまたは Active Directory 以外の認証方式はサポートされていません。

管理コンソールをインストールしたら、Desktop Agent をインストールするか、またはデスクトップユーザーにインストール方法を指示できます。Desktop Agent を実行するコンピュータは Windows ドメインまたは Active Directory の外にある場合もあります。ただし、メディアサーバーまたはデータ格納場所にアクセスするドメインまたはディレクトリの認証が必要です。

Backup Exec のインストールメディアから DLO をインストールすると、Desktop Agent のインストールセットが Backup Exec メディアサーバーに作成されます。インストールセットは、UNC パスから利用できる共有ディレクトリに置かれます。

Backup Exec がクラスタ化された後で DLO をインストールした場合は、クラスタ設定ウィザードを再度実行する必要があります。このとき、Backup Exec は DLO があることを確認し、その DLO に対する Backup Exec グループを再設定します。

p.1561 の「[Desktop Agent を配備する方法](#)」を参照してください。

p.1710 の「[Desktop Agent のインストール](#)」を参照してください。

p.1555 の「[DLO のインストールの準備](#)」を参照してください。

p.107 の「[ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

p.143の「コマンドラインを使用したBackup Execのインストール(サイレントモード)」を参照してください。

Desktop Agent を配備する方法

Desktop Agent は、Desktop Agent インストール共有からデスクトップコンピュータに次のように配備できます。

表 Q-4 Desktop Agent の配備方式

配備方式	説明
プッシュインストール	<p>Backup Exec インストーラを使用して、Desktop Agent をプッシュインストールできます。</p> <p>p.123の「リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール」を参照してください。</p> <p>Desktop Agent をプッシュインストールした後、デスクトップコンピュータで Desktop Agent を起動するには、最大で 2 分かかります。</p> <p>Windows ファイアウォールを有効にして Windows XP を実行しているコンピュータに DLO をプッシュインストールするには、そのデスクトップコンピュータでファイルとプリンタの共有を有効にする必要があります。ファイルとプリンタの共有は、[Windows ファイアウォール]の[例外]タブで設定します。</p>
電子メール	<p>インストールファイルへのハイパーテキストリンクを送信するか、インストールファイルを添付ファイルとして配布します。</p>
Web ページ	<p>インストールファイルを会社のイントラネットに配置します。</p>
ログオンスクリプト	<p>Desktop Agent をインストールするためのコマンドを含むファイルを作成します。次に、DLO を使用する必要のある社員のユーザーのプロパティにスクリプトを割り当てます。ユーザーがネットワークにログオンすると、コマンドが自動的に実行されます。ログオンスクリプトについて詳しくは Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。</p>
Microsoft Systems Management Server (SMS)	<p>この自動化されたシステムを使用すると、Desktop Agent インストールセットがデスクトップコンピュータに配信され、デスクトップコンピュータでインストールを開始できるようになります。SMS については Microsoft のマニュアルを参照してください。</p>

配備方式	説明
CD-ROM	Desktop Agent のインストールファイルを CD-ROM で配布するには、 ¥¥media server¥DLO Agent 共有内のデータを CD-ROM に収めます。そうすることによって、ユーザーは CD-ROM から setup.exe を実行できるようになります。インストールされた Desktop Agent は、メディアサーバーに正しく関連付けられます。

Desktop Agent のインストールのカスタマイズ

特定の要件を満たすように、Desktop Agent のインストールをカスタマイズすることができます。たとえば、ユーザーインターフェースを表示せずにサイレントインストールを実行したり、簡易ユーザーインターフェースまたはすべてのユーザーインターフェースのいずれかを表示することができます。インストールをカスタマイズするには、DLO Agent のセットアップディレクトリ内の Setup.ini ファイルを修正します。

たとえば、サイレントインストールを設定するには、Setup.ini ファイルの CmdLine を次のように編集します。

変更前

```
CmdLine=/qf DEFAULTMEDIASERVER="Desktop3" LAUNCHCLIENT="1" /!*v  
"%TEMP%\DLOAgentInstall.log"
```

修正後

```
CmdLine=/qn DEFAULTMEDIASERVER="Desktop3" LAUNCHCLIENT="1" /!*v  
"%TEMP%\DLOAgentInstall.log"
```

インストールのキャンセルオプションがない簡易インターフェースでインストールを行うように設定するには、Setup.ini ファイルの CmdLine を次のように編集します。

変更前

```
CmdLine=/qf DEFAULTMEDIASERVER="Desktop3" LAUNCHCLIENT="1" /!*v  
"%TEMP%\DLOAgentInstall.log"
```

修正後

```
CmdLine=/qb!DEFAULTMEDIASERVER="Desktop3" LAUNCHCLIENT="1" /!*v  
"%TEMP%\DLOAgentInstall.log"
```

Desktop Agent のインストールをカスタマイズする方法

- 1 Desktop Agent のセットアップディレクトリで、Setup.ini ファイルを編集用に開きます。
- 2 CmdLine= /qf で始まる値を修正します。

Desktop Agent のインストールインターフェース	Desktop Agent のインストール時に Desktop Agent ユーザーに対して表示されるインターフェースを変更するには、 /qf という用語を修正します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ /qf フルユーザーインターフェースが表示されます。キャンセルオプションが表示されます。 ■ /qb 簡易的な進行状況を示すダイアログボックスが表示されます。キャンセルオプションが表示されます。 ■ /qb! 簡易ユーザーインターフェースが表示されます。キャンセルオプションは表示されません。 ■ /qn インストールはサイレントモードで実行されます。 完全なサイレントインストールを行うには、 Setup.ini ファイルを修正した後、次のコマンドを実行します。 <pre style="margin-left: 20px;">"setup.exe /s"</pre>
デフォルトのメディアサーバーの設定	DEFAULTMEDIASERVER で、インストール後に Desktop Agent が接続するメディアサーバーを指定します。
Desktop Agent の起動	LAUNCHCLIENT オプションで、インストール後すぐに Desktop Agent を起動するかどうかを指定します。 ただちに起動するには、 LAUNCHCLIENT="1" を設定します。 すぐに起動しない場合は、 LAUNCHCLIENT="0" を設定します。
使用する MDAC パージョンの指定	DLO では、デフォルトで MDAC 2.8 が使用されます。次のオプションを追加すると、MDAC 2.7 が強制的に使用されます。 REQUIREDMDACVERSION=2.7
再ブートの抑止	再起動が必要な場合でも再起動を抑止するには、次のオプションを追加します。 REBOOT=ReallySuppress

ログオプション

I*v 変数を変更すると、ログオプションを修正できます。

I*v "%TEMP%\DLOAgentInstall.log"

詳細ログをオンにして、指定した場所にログファイルを作成します。

Windows インストーラのログオプションについて詳しくは、次の Web サイトを参照してください。

<http://support.microsoft.com/kb/314852/EN-US/>

3 Setup.ini ファイルを保存して閉じます。

Desktop Agent の手動プッシュ配備の準備

Desktop Agent の手動プッシュ配備を試行する前に、次の手順を実行します。この手順は、Backup Exec プッシュインストーラを使用する場合は必要ありません。

表 Q-5 Desktop Agent の手動プッシュ配備を準備する方法

手順	処理	説明
手順 1	次のファイルを探します。 <ul style="list-style-type: none">■ *.mst■ *.cab■ DLOBuildInfo.ini■ *.msi	ファイルは <servername>\DLOAgent ディレクトリに存在します。

手順	処理	説明
手順 2	<p>SETUP.INI の cmdline キーの値を基準として使用し、msiexec コマンドを実行します。</p> <pre>/qf DEFAULTMEDIASERVER="<From setup.INI File>" DLOBINSTANCENAME="<FromSetup.INI File>" LAUNCHCLIENT="1" REQUIREDMDACVERSION="2.8" TRANSFORMS="1033.mst" /!v "%TEMP%\DLOAgentInstall.log"</pre>	<p>サイレントインストールを実行する場合は、/qf を /qn に置き換えます。ユーザーの介入なしにインストールを実行し、インストールの進行状況だけを表示する場合は、/qf を /qb に置き換えます。</p> <p>MDAC 2.7 を使用する場合、REQUIREDMDACVERSION="2.8" を REQUIREDMDACVERSION="2.7" に置き換える必要があります。その他の値は無効です。ターゲットシステムの MDAC バージョンが REQUIREDMDACVERSION の値よりも低い場合、インストールは失敗します。</p> <p>TRANSFORMS プロパティの指定が必要です。プロパティはインストーラのユーザーインターフェースとスタートメニューのショートカットに影響します。DLO Agent のインストールは、選択した Transform に関係なく、8 つの言語すべてでサポートされています。</p> <p>p.1565 の「msiexec コマンドの TRANSFORM プロパティの値」を参照してください。</p> <p>ターゲットシステムには MSI 3.1 が必要です。MSI 3.1 インストーラは次のディレクトリに含まれています:</p> <pre>%%<servername>%DLOAgent% WindowsInstaller-KB893803-v2-x86.exe</pre>

msiexec コマンドの TRANSFORM プロパティの値

デスクトップユーザーが使用する言語に応じて、TRANSFORMS にいずれかの .mst ファイルを設定する必要があります。

p.1564 の「[Desktop Agent の手動プッシュ配備の準備](#)」を参照してください。

表 Q-6 msiexec コマンドの TRANSFORM プロパティの値

値	言語
1031.mst	ドイツ語
1033.mst	英語
1034.mst	スペイン語

値	言語
1036.mst	フランス語
1040.mst	イタリア語
1041.mst	日本語
1042.mst	韓国語
2052.mst	中国語 (PRC) (簡体字)
1028.mst	中国語 (繁体字)

リカバリパスワードの設定について

DLO 管理コンソールの初回の起動時には、リカバリパスワードウィザードが開きます。DLO の動作を可能にするリカバリパスワードを設定する必要があります。DLO の以前のバージョンからアップグレードし、以前にリカバリパスワードを設定している場合、DLO は既存のパスワードを使います。

リカバリパスワードを使用すると、DLO データベースが破損した場合に失われた暗号化されたデータを取得することができます。

このリカバリパスワードを設定した後は、DLO の CLI ツールによってのみ変更できます。

p.1566 の「[データ整合性の確認](#)」を参照してください。

p.1704 の「[-SetRecoveryPwd コマンドについて](#)」を参照してください。

p.1703 の「[-EmergencyRestore コマンドについて](#)」を参照してください。

データ整合性の確認

データ整合性スキャナを使用すると、過去の DLO バックアップのネットワークユーザーデータをスキャンすることによって、リストア不可能なバックアップデータの検出を簡単に行うことができます。また、すべてのデータが最新のユーザーキーを使用して暗号化されているかどうかを検証できます。さらに、すべてのデータが緊急リストア用の正しいリカバリキーを持っているかどうかを確認できます。

Desktop Agent をアップグレードすると、自動的にデータの整合性チェックが実行されます。管理コンソールを開くと、整合性チェックが実行されていない Desktop Agent が識別されます。整合性チェックが実行されていないコンピュータが見つかった場合、それらをスキャンするように求められます。

データ整合性を確認する方法

- 1 ツールメニューの[ウィザード]>[データ整合性スキャナ]をクリックします。
- 2 [次へ]をクリックします。
- 3 データの隔離とコンピュータのスキャンのオプションを設定するには、[詳細]をクリックします。
p.1567 の「[\[データ整合性スキャナ\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [開始]をクリックします。
- 5 スキャン結果を確認します。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 [完了]をクリックします。
- 8 スキャンにより使用期限の切れたキーで暗号化されたデータが検出され、データの隔離を選択していなかった場合は、この手順を繰り返して、使用期限の切れたキーで暗号化されたデータを隔離するオプションを設定します。

[データ整合性スキャナ]オプション

[データ整合性スキャナ]を使用すると、過去の DLO バックアップのネットワークユーザーデータをスキャンすることによって、リストア不可能なバックアップデータの検出を簡単に行うことができます。

p.1566 の「[データ整合性の確認](#)」を参照してください。

表 Q-7 [データ整合性スキャナ]オプション

項目	説明
以前に隔離されたデータを永久に削除	以前に隔離されたすべてのデータを削除します。
使用期限の切れたキーで暗号化されたデータを隔離する	期限の切れたキーが付いているすべてのファイルを隔離します。このオプションを選択していない場合、データはスキャンされますが、隔離は行われません。データが隔離された後で、 Desktop Agent は適切な暗号化キーを持つファイルの新しいバージョンをバックアップします。
すでに有効性を確認済みのコンピュータも含める (すべてのデータを強制的に再スキャンする場合に使用)	以前に有効性が確認されている場合でもすべてのデータを強制的に再スキャンします。
詳細データを出力する	スキャンから詳しい情報を受け取ることができます。

DLO サービスクレデンシャルの変更

DLO のインストール時、DLO Administration Service の実行に使用するアカウントクレデンシャルを指定する必要があります。このアカウントは、データ格納場所とネットワークユーザーデータフォルダを作成するために使われます。このアカウントには、バックアップデータが格納されるすべてのコンピュータに共有を作成する権限が必要です。ドメイン管理者のアカウントを使用することをお勧めします。データ格納場所を別のドメイン内に作成するには、適切な信頼関係が確立されている必要があります。

DLO サービスクレデンシャルを変更する方法

- 1 ツールメニューの[サービスクレデンシャルの管理]をクリックします。
- 2 [DLO サービスアカウント情報の変更]をクリックします。
- 3 アカウントクレデンシャルを入力します。

p.1568 の「[\[サービスアカウント情報\]オプション](#)」を参照してください。

[サービスアカウント情報]オプション

DLO Administration Service を実行するのに使われているアカウントクレデンシャルを変更できます。

p.1568 の「[DLO サービスクレデンシャルの変更](#)」を参照してください。

表 Q-8 [サービスアカウント情報]オプション

項目	説明
DLO サービスアカウント情報の変更	DLO サービスアカウントの情報を変更することができます。
ユーザー名	使用するアカウントのユーザー名を示します。
ドメイン名	このアカウントのドメインを示します。
パスワード	このアカウントのパスワードを示します。
パスワードの確認入力	パスワードを確認します。

DLO の管理者アカウントについて

メディアサーバーで完全な管理者権限があるユーザーは、DLO 管理コンソールを管理できます。このユーザーのアカウントはドメインアカウントである必要があります。

さらに、このアカウントは、データ格納場所に使用されるリモートサーバーまたはネットワークユーザーのデータフォルダで次のことを行う権限が必要です：

- ネットワーク共有を作成する
- ネットワーク共有とディレクトリの権限を管理する

ドメイン管理者のアカウントには通常必要な権限があります。

履歴のログをリストアするか表示するためにファイルを検索するときに、DLO 管理コンソールはリソースにアクセスするために現在のログインユーザーのクレデンシアルを使います。ユーザーにリソースにアクセスする正しい権限がなければ、DLO ではクレデンシアルを入力するプロンプトが表示されます。入力されたクレデンシアルはフォルダへのアクセスに使用されますが、保存されません。

p.1571 の「[DLO の権限管理の自動化について](#)」を参照してください。

p.1572 の「[DLO の制限付きリストアについて](#)」を参照してください。

p.1570 の「[管理者アカウントの追加](#)」を参照してください。

p.1570 の「[管理者アカウントの編集](#)」を参照してください。

p.1571 の「[管理者アカウントの削除](#)」を参照してください。

p.1572 の「[個別アカウントのリストを使用した DLO 権限の管理](#)」を参照してください。

p.1573 の「[ドメイングループを使用した DLO 権限の管理](#)」を参照してください。

[管理者アカウントの管理]オプション

新しい管理者を追加するか、既存の管理者を削除するか、または既存の管理者の設定を変更できます。

表 Q-9 [管理者アカウントの管理]オプション

項目	説明
ユーザー名	管理者権限があるユーザーの名前を示します。
説明	管理者権限があるユーザーの説明を示します。
リストア権限	ユーザーに完全リストア権限があるか制限付きリストア権限があるかを示します。
追加	新しい管理者を追加することができます。
削除	既存の管理者を削除することができます。
編集	既存の管理者の設定を変更することができます。
権限	管理者を管理するのにドメインアカウントを使うことができます。

管理者アカウントの追加

メディアサーバーで完全な管理者権限があるユーザーは、DLO 管理コンソールを管理できます。このユーザーのアカウントはドメインアカウントである必要があります。

管理者アカウントを追加する方法

- 1 ネットワークメニューの[管理者アカウント]をクリックします。
- 2 [追加]をクリックします。
- 3 管理者権限を付与するユーザーのユーザー名を入力します。
- 4 説明と適用される注意を入力します。
- 5 代替の場所にデスクトップユーザーデータをリストアする機能を含む完全リストア権限をこの DLO 管理者に付与する場合は、[管理者に完全リストア権限を付与]にチェックマークを付けます。

[管理者アカウントの追加]オプション

管理者を追加するとき、ユーザー名は必須です。他のフィールドはすべて省略可能です。

p.1570 の「[管理者アカウントの追加](#)」を参照してください。

表 Q-10 [管理者アカウントの追加]オプション

項目	説明
ユーザー名	管理者権限を付与するユーザー名を示します。 DomainName¥UserName の形式を使用します。
説明	この管理者アカウントの説明を示します。
注意	管理者アカウントに関する注意事項を入力します。
管理者に完全リストア権限を付与	代替の場所にデスクトップユーザーデータをリストアする機能を含む完全リストア権限をこの DLO 管理者に付与します。 デスクトップユーザー以外のデータ所有者にファイルの代替の場所へのリストア権限を付与すると、データセキュリティが低下します。

管理者アカウントの編集

説明を変更するか、注意を追加するか、または管理者アカウントのリストア権限を変更できます。

管理者アカウントを編集する方法

- 1 ネットワークメニューの[管理者アカウント]をクリックします。
- 2 編集するアカウントを選択します。
- 3 [編集]をクリックします。
- 4 必要に応じて説明と注意を更新します。
- 5 次のいずれかを実行します。
 - 代替の場所にデスクトップユーザーデータをリストアする機能を含む完全リストア権限をこの DLO 管理者に付与する場合は、[管理者に完全リストア権限を付与]にチェックマークを付けます。
 - 制限付きのリストア権限をこの DLO の管理者に付与する場合は、[管理者に完全リストア権限を付与]のチェックマークをはずします。
制限付きリストア権限には、デスクトップユーザーのファイルを代替の場所にリストアする権限は含まれていません。
- 6 [OK]をクリックします。

管理者アカウントの削除

DLO から管理者アカウントを削除するには、次の手順を実行します。

管理者アカウントを削除する方法

- 1 ネットワークメニューの[管理者アカウント]をクリックします。
- 2 削除するアカウントを選択します。
- 3 [削除]をクリックします。
- 4 管理者を削除する旨のメッセージを確認して、[はい]をクリックします。

DLO の権限管理の自動化について

DLO はネットワークユーザーデータフォルダにアクセスする権限を自動的に管理できます。メディアサーバーの管理者は、ユーザーに対して DLO 管理者アカウントを作成および設定できます。DLO 管理者アカウントを使用して、メディアサーバーの管理者グループにユーザーが追加されないようにすることができます。

DLO 管理者アカウントは次の方法で管理できます。

- 個別ユーザーに対する管理者アクセス権の付与
このオプションは、DLO アカウント管理用のデフォルト設定です。個別ユーザーのリストを使用する場合、完全リストア権限を付与するユーザーと制限付きリストア権限を付与するユーザーを指定できます。
- p.1572 の「[個別アカウントのリストを使用した DLO 権限の管理](#)」を参照してください。

■ ドメイングループを使用した DLO 管理者の管理

ドメイングループを指定する場合、1 つ目のグループに完全リストア権限を付与し、2 つ目のグループに制限付きリストア権限を付与することができます。ドメイングループは、すでに存在しているか、またはドメイン管理者が作成する必要があります。DLO では、**DLOFullAdmin** および **DLOLimitedAdmin** を使用することをお勧めします。完全リストア権限を持つ管理者グループではユーザーデータの読み取り権限が付与されます。制限付きリストア権限を持つ管理者グループではリストへのアクセス権限のみが付与されます。これによって、ユーザーデータが不正なアクセスから保護されます。

ネットワークユーザーデータフォルダにアクセスする場合には、DLO コンソールはフォルダをチェックして、そのフォルダに含まれるファイルおよびデータが読み取り可能かどうかを確認します。DLO コンソールからそのフォルダにアクセスできない場合、DLO は特定のドメイン管理者グループを使用して、アクセスする必要のあるファイルおよびフォルダに権限を設定します。これらのファイルおよびフォルダを特定の DLO 管理者グループに含めることによって、すべての DLO 管理者に自動的に必要なリソースへのアクセス権限が付与されます。

p.1573 の「[ドメイングループを使用した DLO 権限の管理](#)」を参照してください。

DLO の制限付きリストアについて

リストアの制限機能の目的は、権限を所有していないユーザーによる、代替の場所へのデータのリストアを防止することです。デフォルトでは、データセキュリティを強化するため、DLO 管理者はデスクトップユーザーのファイルを代替の場所にリストアすることはできません。DLO 管理者に完全リストア権限が付与されている場合は、データを代替の場所にリストアすることができます。DLO 管理者に制限付きリストア権限が付与されている場合は、一部の管理機能を実行できない場合があります。

個別アカウントのリストを使用した DLO 権限の管理

メディアサーバーの管理者は、個別ユーザーに対して DLO 管理者アカウントを作成および設定できます。アカウントは、個別に設定して完全リストア権限または制限付きリストア権限を指定できます。

p.1568 の「[DLO の管理者アカウントについて](#)」を参照してください。

また、権限の管理にドメイングループを使用するように DLO を設定することもできます。

p.1573 の「[ドメイングループを使用した DLO 権限の管理](#)」を参照してください。

個別アカウントのリストを使用して権限を管理するように DLO を設定する方法

- 1 ネットワークメニューの[管理者アカウント]をクリックします。
- 2 [アクセス許可]をクリックします。

- 3 [ドメイングループを使用してネットワークユーザーデータフォルダへのアクセスを管理する]チェックボックスをオフにします。

このチェックボックスをオンにすると、ドメイングループが[管理者アカウントの管理]ダイアログボックスに一覧表示されます。このチェックボックスをオフにすると、個別ユーザーアカウントが一覧表示されます。アカウント管理の方法を別の種類に変更した場合、後で使用できるように以前の設定が保持されます。たとえば、個別の DLO 管理者のリストがある場合、ドメイングループを使用するように設定を変更すると、個別アカウントのリストが保存されます。チェックボックスをオフにすると、個別アカウントのリストが再度使用されます。

- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [OK]を 2 回クリックします。

ドメイングループを使用した DLO 権限の管理

メディアサーバーの管理者は、DLO の[管理者アカウントの管理]ダイアログボックスで、ユーザーに対して DLO 管理者アカウントを作成および設定できます。DLO の管理者アクセス権を管理するために、ドメイングループを使用して DLO を管理する権限を持つユーザーを指定することができます。この場合、2 つのグループを指定できます。最初のグループには、完全リストア権限が付与されます。2 つ目のグループには、制限付きリストア権限が付与されます。

p.1568 の「[DLO の管理者アカウントについて](#)」を参照してください。

また、権限の管理にアカウントのリストを使用するように DLO を設定することもできます。

p.1572 の「[個別アカウントのリストを使用した DLO 権限の管理](#)」を参照してください。

権限の管理にドメイングループを使用するように DLO を設定する方法

- 1 ネットワークメニューの[管理者アカウント]をクリックします。
- 2 [アクセス許可]をクリックします。
- 3 [ドメイングループを使用してネットワークユーザーデータフォルダへのアクセスを管理する]チェックボックスをオンにします。

このチェックボックスをオンにすると、ドメイングループが[管理者アカウントの管理]ダイアログボックスに一覧表示されます。このチェックボックスをオフにすると、個別ユーザーアカウントが一覧表示されます。アカウント管理の方法を別の種類に変更した場合、後で使用できるように以前の設定が保持されます。たとえば、個別の DLO 管理者のリストがある場合、ドメイングループを使用するように設定を変更すると、個別アカウントのリストが保存されます。チェックボックスをオフにすると、個別アカウントのリストが再度使用されます。

4 必要なオプションを設定します。

完全リストア権限を持つ DLO 管理者用に次のドメイングループを使用する 指定したドメイングループの DLO 管理者に完全リストア権限を付与するには、完全修飾ドメイングループ名を入力するか選択します。

例:Enterprise¥DLOFullAdmins

完全リストア権限には、デスクトップユーザーのファイルを代替の場所にリストアする権限が含まれています。

制限付きリストア権限を持つ DLO 管理者用に次のドメイングループを使用する 指定したドメイングループの DLO 管理者に制限付きリストア権限を付与するには、完全修飾ドメイングループ名を入力するか選択します。

例:Enterprise¥DLOLimitedAdmins

制限付きリストア権限には、デスクトップユーザーのファイルを代替の場所にリストアする権限は含まれていません。

5 [OK]を2回クリックします。

[アクセス許可]オプション

DLO の権限を管理するのにドメイングループを使うことができます。

p.1573 の「[ドメイングループを使用した DLO 権限の管理](#)」を参照してください。

表 Q-11 [アクセス許可]オプション

項目	説明
ドメイングループを使用してネットワークユーザーデータフォルダへのアクセスを管理する	だれが DLO を管理する権限があるかを指定するのにドメイングループを使うことができます。
完全リストア権限を持つ DLO 管理者用に次のドメイングループを使用する	完全リストア権限を使用して DLO 管理者の完全修飾ドメイングループを入力するか、または参照することができます。 例:Enterprise¥DLOFullAdmins 完全リストア権限には、デスクトップユーザーのファイルを代替の場所にリストアする権限が含まれています。
制限付きリストア権限を持つ DLO 管理者用に次のドメイングループを使用する	制限付きリストア権限を使用して DLO 管理者の完全修飾ドメイングループを入力するか、または参照することができます。 例:Enterprise¥DLOLimitedAdmins 制限付きリストア権限には、デスクトップユーザーのファイルを代替の場所にリストアする権限は含まれていません。

DLO のデフォルト設定について

DLO の初回の起動時には、デフォルトがすでに設定されています。現在の環境の要件を満たすようにデフォルトを調整することができます。デフォルト設定は、プロファイル、バックアップ選択項目およびグローバル設定で利用できます。

プロファイル、バックアップ選択項目およびグローバル設定のデフォルト設定は変更できません。

メモ: グローバル設定への変更は、すぐに反映され、すべての **Desktop Agent** にグローバルに適用されます。プロファイルおよびバックアップ選択項目のデフォルト設定への変更は、新しいプロファイルおよびバックアップ選択項目にのみ適用され、既存のものには影響しません。

DLO のデフォルトプロファイル設定の変更

DLO のデフォルトプロファイル設定は修正できます。

デフォルトのプロファイル設定を変更する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ツールタスク]の下にある[オプション]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[新規プロファイルのデフォルト値]の下にある次のいずれかのオプションを選択します。
 - 一般
p.1591 の「[プロファイルの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
 - ユーザー設定
p.1596 の「[プロファイルの\[ユーザー設定\]オプション](#)」を参照してください。
 - スケジュール
p.1601 の「[プロファイルの\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。
 - オプション
p.1603 の「[プロファイルの\[オプション\]](#)」を参照してください。
- 4 必要に応じてオプションを変更します。

DLO のデフォルトのバックアップ選択項目設定の変更

DLO のデフォルトのバックアップ選択項目設定は修正できます。

デフォルトのバックアップ選択項目設定を変更する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ツールタスク]の下にある[オプション]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[新規バックアップ選択項目のデフォルト値]の下にある[リビジョン]をクリックします。
- 4 バックアップ選択項目のリビジョンオプションを設定します。
p.1614の「[DLOのバックアップ選択項目のリビジョン管理](#)オプション」を参照してください。
- 5 [プロパティ]ペインの[新規バックアップ選択項目のデフォルト値]の下にある[オプション]をクリックします。
- 6 バックアップ選択項目のオプションを設定します。
p.1616の「[DLOのバックアップ選択のオプション](#)」を参照してください。

デフォルトの DLO グローバル設定の変更

デフォルトの DLO グローバル設定は変更できます。

メモ: これらの設定は、すべての **Desktop Agent** にすぐに適用されます。

デフォルトのグローバル設定を変更する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ツールタスク]の下にある[オプション]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[グローバル設定]の下にある[オプション]をクリックします。
- 4 グローバルオプションを設定します。
p.1577の「[グローバル設定](#)オプション」を参照してください。
- 5 [プロパティ]ペインの[グローバル設定]の下にある[Desktop Agent の間隔]をクリックします。
- 6 [Desktop Agent の間隔]のデフォルト値を設定します。
p.1578の「[Desktop Agent の間隔](#)オプション」を参照してください。
- 7 [プロパティ]ペインの[グローバル設定]の下にある[ユーザー操作の設定]をクリックします。
- 8 [ユーザー操作の設定]を設定します。
p.1579の「[ユーザー操作の設定](#)オプション」を参照してください。

- 9 [プロパティ]ペインの[グローバル設定]の下にある[LiveUpdate]をクリックします。
- 10 [LiveUpdate]のデフォルト値を設定します。
 p.1580 の「[LiveUpdate]オプション」を参照してください。

[グローバル設定]オプション

バックアップ処理を制限し、レポートの出力方法を指定し、Desktop Agent のしきい値を指定するデフォルトオプションを設定できます。

表 Q-12 [グローバル設定]オプション

項目	説明
すべての Desktop Agent	すべての Desktop Agent でデータをバックアップできなくなります。
Outlook PST ファイルの増分バックアップ	すべてのユーザーが Microsoft Outlook の PST ファイルの増分バックアップを実行できなくなります。 p.1722 の「DLOを使用した Outlook PST ファイルの増分バックアップについて」を参照してください。
Lotus Notes 電子メールファイルの増分バックアップ	すべてのユーザーが Lotus Notes ファイルの増分バックアップを実行できなくなります。 p.1724 の「Lotus Notes ファイルの増分バックアップを実行するための Desktop Agent の設定」を参照してください。
PDF 形式のレポートを生成	Adobe Reader がインストールされている場合は pdf 形式のレポートを作成します。Adobe Acrobat Reader がインストールされていない場合、レポートは HTML 形式で表示されます。
HTML 形式のレポートを生成	HTML 形式のレポートを作成します。
ユーザーがログオンしてから Desktop Agent が起動するまでの遅延時間	ユーザーがログオンした後に Desktop Agent が開始されるまでの遅延秒数を示します。Desktop Agent の開始が遅延されるのは、このオプションが選択されて Desktop Agent が起動メニューから開始される場合のみです。
Desktop Agent の最小エラーしきい値	Desktop Agent がデスクトップユーザーデータフォルダへの書き込みを停止する、利用可能なディスク領域のパーセント値を示します。
Desktop Agent の最小警告しきい値	Desktop Agent がディスク容量不足の警告を発行する、利用可能なディスク領域のパーセント値を示します。

項目	説明
Desktop Agent の最小クォータ警告しきい値	<p>警告が生成される、デスクトップユーザーデータフォルダのストレージ制限のパーセント値を示します。</p> <p>たとえば、デスクトップユーザーデータフォルダが 30 MB に制限され、最小クォータ警告しきい値が 10% に設定されている場合、利用可能なディスク容量が 3 MB を下回ると、警告が生成されません。</p>

[Desktop Agent の間隔] オプション

Desktop Agent が特定の処理を実行するためにかかる時間を指定するデフォルトオプションを設定できます。

表 Q-13 [Desktop Agent の間隔] オプション

項目	説明
以前ビジー状態であったファイルのバックアップを再試行するまでの待機時間	<p>以前ビジー状態であったファイルのバックアップを再試行するまでの DLO の待機時間を、分単位で示します。</p> <p>待機時間を短縮すると、ビジー状態のファイルのバックアップを試行するために、Desktop Agent コンピュータが消費する CPU 時間とディスク I/O が増加します。待機時間を長く設定すると、ファイルのバックアップ頻度は少なくなります。推奨するデフォルト値は 5 分です。</p>
以前失敗したファイルのバックアップを再試行するまでの待機時間	<p>以前失敗したファイルのバックアップを再試行するまでの待機時間を、分単位で示します。</p> <p>待機時間を短縮すると、以前バックアップに失敗したファイルのバックアップを試行するために、コンピュータが消費する CPU 時間とディスク I/O が増加します。待機時間を延長すると、ファイルのバックアップ頻度は少なくなります。推奨するデフォルト値は 60 分です。</p>
バックアップ選択項目から削除されたファイルのバックアップ保持期間	<p>バックアップ選択項目から削除されたファイルのバックアップ保持期間を、日数で示します。</p> <p>保持期間を延長すると、ファイルがサーバー上に保持される期間は長くなります。保持期間を短縮すると、バックアップフォルダの空き領域が増加します。ただし、バックアップ選択項目から削除されたファイルをユーザーがリストアできる期間は短くなります。推奨するデフォルト値は 30 日です。</p>

項目	説明
履歴の最小更新間隔	履歴の更新間隔を分単位で示します。 多数のアクティビティが実行される場合、更新間隔を短縮すると、履歴の更新のためにコンピュータが消費する CPU 時間とディスク I/O が増加します。間隔を長く設定すると、履歴の更新頻度は少なくなります。推奨するデフォルト値は 15 分です。
同じアラートの最小送信間隔	同じアラートの送信間隔を時間数で示します。 繰り返し生成されるアラートは、指定した時間間隔内に 1 回だけ表示されます。間隔を短くしすぎると、同じアラートが何度も送信され、アラートログが一杯になる場合があります。推奨するデフォルト値は 24 時間です。
ジョブログの終了と新規ジョブログの開始の最小間隔	ジョブログの終了と新規ジョブログの開始の間隔を、分単位で示します。 ジョブログの間隔を短縮すると、表示されるジョブログ数が増加します。推奨するデフォルト値は 30 分です。
保守サイクルの最小間隔	保守サイクルの間隔を分単位で示します。 保守サイクルの間隔を短縮すると、保守の実行のために消費される CPU 時間とディスク I/O が増加します。保守サイクルでは、使用されなくなったファイルおよびフォルダが削除されます。推奨するデフォルト値は 1440 分 (24 時間) です。
Lotus Notes 電子メールファイルへの変更の最小チェック間隔	Lotus Notes ファイルへの変更のチェック間隔を、秒単位で示します。 この間隔を短縮すると、Lotus Notes ファイルが変更されたかどうかをチェックするために使用される CPU 時間とディスク I/O が増加します。推奨するデフォルト値は 30 秒です。
再起動の要求に Desktop Agent がランダムに返答する時間	再起動の要求に Desktop Agent がランダムに返答する時間を、分単位で示します。 多数の Desktop Agent が再起動される場合、Desktop Agent は指定した時間内にランダムに再起動されます。この方法により、多数の Desktop Agent を同時に起動することによって DLO のオーバーロードが発生する可能性を回避できます。 推奨するデフォルト値は 30 分です。

[ユーザー操作の設定]オプション

DLO がユーザー操作をいかに処理するかを示すデフォルトオプションを設定できます。

表 Q-14 [ユーザー操作の設定]オプション

項目	説明
ユーザー操作の制限を有効にする	ユーザーがデスクトップコンピュータと通信するとき DLO がタスクをいかに実行するか指定します。ユーザー操作は、キーの入力およびマウスの移動に基づいて行われます。
ネットワーク帯域幅の使用量を次の値に制限する	ユーザーがデスクトップコンピュータと通信しているときに DLO が使用するネットワーク帯域幅の最大値を示します。
次の間ユーザー操作がない場合は制限を解除する	ここで入力した秒数の間ユーザー操作がなかった場合、DLO でジョブが制限されなくなります。
1 秒間にスキャンする最大項目数	<p>ファイルシステムのスキャン時に 1 秒間に処理される項目の最大数を示します。</p> <p>ファイルシステムスキャンは次の場合に実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デスクトップコンピュータの最初のバックアップ時 ■ システムの異常なシャットダウンの後 ■ 変更ジャーナルが切り捨てられる時 <p>この設定によって、デスクトップコンピュータでユーザーが操作を行っている場合のスキャンの影響が低減されます。</p>

[LiveUpdate]オプション

DLO が Symantec LiveUpdate といかに通信するかを示すデフォルトオプションを設定できます。

表 Q-15 [LiveUpdate]オプション

項目	説明
Desktop Agent の定時自動更新を有効にする	定時自動更新をオンにします。
更新をチェックするタイミング	<p>DLO で更新をチェックする方法を示します。</p> <p>利用可能なオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Desktop Agent の利用可能なすべての更新を自動的にダウンロードおよびインストールする ■ Desktop Agent ユーザーに利用可能な更新があることの通知のみ行う (更新はダウンロードおよびインストールされません)

項目	説明
頻度	DLO で更新をチェックする頻度を示します。 利用可能なオプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 1 回のみ ■ 毎日 ■ 毎週 ■ 毎月
間隔	更新をチェックする時間を示します。指定可能なオプションは、選択した頻度によって異なります。

特定のポートでデータベースにアクセスする場合の DLO の設定

特定のポートでデータベースにアクセスするように DLO を設定することが必要となる場合があります。たとえば、固定ポートがすでに SQL Server で使用されている場合、同じポートを使用して DLO データベースにアクセスするように DLO を設定する必要があるかもしれません。

特定のポートを使用して別のデータベースにアクセスするための DLO の設定方法

- 1 DLO データベースに対する一意なポート番号を選択し、svrnetcn.exe を使用して新しいポート番号を設定します。
- 2 ファイアウォールの外側から、DLO 管理コンソールが動作しているコンピュータ上で、次のレジストリキーが存在しない場合はこれを DWORD 値として作成し、DBUseTCP フラグを 1 に設定します。

`HKLM\SOFTWARE\Symantec\DLO\3.0\AdminConsole\DBUseTCP`

- 3 ファイアウォールの外側から、Desktop Agent が動作しているコンピュータ上で、次のレジストリキーが存在しない場合はこれを DWORD 値として作成し、DBUseTCP フラグを 1 に設定します。

`HKCU\Software\Symantec\DLO\3.0\Client\DBUseTCP` または

`HKLM\SOFTWARE\Symantec\DLO\3.0\Client\DBUseTCP`

- 4 手順 2 および手順 3 で修正を行ったコンピュータ上で、DBTcpPort に手順 1 で設定したポート番号を設定します。
- 5 修正を行ったコンピュータを再起動します。

DLO での Backup Exec Retrieve の使用について

DLO は、Symantec Continuous Protection Server (CPS) の機能である Backup Exec Retrieve と統合することができます。Backup Exec Retrieve では、デスクトップユーザーが Web ブラウザを使用し、ファイルを表示および検索してワークステーションに直接リストアすることができます。

Backup Exec Retrieve は、Microsoft Internet Explorer (6.0 以上) 用に最適化されています。その他の Web ブラウザでも動作しますが、画面の構成は異なる場合があります。

Backup Exec Retrieve は、Windows レベルのセキュリティで保護されます。デスクトップユーザーは、Windows ドメインのログオン情報の入力を求められます。この情報は、表示および取得できるファイルを制限するために使用されます。

サーバーを保護する場合、Backup Exec Retrieve のユーザーは、共有フォルダに書き込まれているファイルおよびフォルダにのみアクセスできます。つまり、ファイルサーバーによってフォルダが共有されていない場合は、ファイルを表示または取得できません。

DLO と CPS を統合するには、CPS Continuous Management Service (CMS) を Backup Exec メディアサーバーと同じコンピュータにインストールする必要があります。また、管理者は、Continuous Protection Agent (CPA) を各 DLO ファイルサーバーにインストールする必要があります。CPA のインストールは、各コンピュータでセットアップを手動で実行して行うか、または CPS 管理コンソールでプッシュインストール機能を使用して行うことができます。詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。

デスクトップユーザーは、DLO でバックアップしたファイルを検索およびリストアできます。

p.1742 の「[Backup Exec Retrieve を使用したファイルのリストアについて](#)」を参照してください。

DLO の更新について

シマンテック社は更新を次のように提供します。

- 定期的な製品の更新は Symantec LiveUpdate によって配信されます。Desktop Agent に自動的にインストールされない更新もあります。ただし、SU は Desktop Agent に自動的にインストールされます。
- 重要なアップグレードはシマンテック社の Web サイトまたはインストールメディアで配信されます。

DLO 管理コンソールの更新

Backup Exec の DLO のデフォルトのインストールディレクトリは次のとおりです。

C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\DLO

DLOをアップグレードするとき、以前のバージョンが異なる場所にインストールされていた場合は、インストール先がこの場所に変更されます。

DLO 管理コンソールを更新する方法

- 1 DLO 管理コンソールをインストールします。
p.1560の「[Backup Exec Desktop and Laptop Option のインストールについて](#)」を参照してください。
- 2 DLO 管理コンソールを起動し、次にリカバリパスワードを設定します。
p.1566の「[リカバリパスワードの設定について](#)」を参照してください。
- 3 DLO バージョン 9.1 から更新する場合は、データ整合性スキャナを実行します。
p.1566の「[データ整合性の確認](#)」を参照してください。

Desktop Agent の更新

完全インストール、Hotfix または Service Pack リリースを使用してメディアサーバーを更新した場合は、Desktop Agent を次のいずれかの方法で更新する必要があります。

表 Q-16 Desktop Agent を更新する方法

方式	説明
Desktop Agent から更新する場合	Desktop Agent がインストールされているコンピュータから setup.exe ファイルを実行します。 setup.exe ファイルは次のディレクトリに格納されています。 %%<media server>%DLOAgent%update_13.0%Setup.exe
Backup Exec 管理コンソールから更新する場合	Backup Exec のプッシュインストール機能を使います。
DLO 管理コンソールから更新する場合	DLO コマンドラインインターフェースの公開コマンドを使います。

p.1701の「[-Update コマンドについて](#)」を参照してください。

p.1692の「[DLO のコマンド構文について](#)」を参照してください。

コマンドラインインターフェースを使用して DLO 管理コンソールから Desktop Agent を更新する方法

- 1 更新に関するマニュアルの指示に従って、メディアサーバーを更新します。
- 2 メディアサーバーのコマンドラインから、DLO のインストール先ディレクトリに移動します。

デフォルトのインストール先ディレクトリは次のとおりです。

`C:\Program Files\symantec\Backup Exec\DLO`

- 3 次のように設定ファイルを追加する更新オプションを指定して `DLOCommandu.exe` を実行し、このコマンドの実行によって返される ID 番号を記録しておきます。

```
DLOCommandu -update -add  
-f.\agents\dlo\update_13.0\DLOAgentUpdate_BE.ini
```

設定ファイルが移動されたり名前が変更された場合は、コマンドにフルパスおよびファイル名を指定する必要があります。

出力例:

ID=3

Name= 13.0 Update

Description=Updates Backup Exec DLO Desktop Agent to 13.0

Version=3.1 Build=3.XX.XX

srcPath=\\MediaServerName\DLOAgent\update_13.0

cmdPath=%DOWNLOADDIR%

cmdName=AutomatedAgentUpgrade.exe

cmdArgs=-s

- 4 `DLOCommandu.exe` に公開コマンドを指定して実行し、Desktop Agent ユーザーが更新できるように設定します。

```
DLOCommandu -update -publish -UI y -U UserName  
DLOCommandu -update -publish -UI y -P ProfileName
```

y には、手順 3 で実行した「追加」コマンドによって返された ID 番号を指定します。**UserName** または **ProfileName** の代わりにアスタリスク (*) を使用して、すべてのユーザーに更新を公開します。

このコマンドを実行すると、更新の対象となるすべてのユーザーのリストが返されます。このユーザーは、Desktop Agent アプリケーションの次の起動時に更新されます。

Desktop Agent のサイレントアップグレードの実行

Desktop Agent では、サイレントアップグレードを実行できます。サイレントアップグレードでは、アップグレードをダウンロードおよび開始するためのメッセージは表示されません。ただし、アップグレードを確認するためのメッセージは表示されます。

Desktop Agent のサイレントアップグレードを実行する方法

- 1 Desktop Agent のアップグレードフォルダから、DLOAgnetUpdate_BE.ini ファイルを編集用に開きます。
- 2 PromptUser=0 に設定します。
- 3 ファイルを保存して閉じます。
- 4 アップグレードを実行します。

Windows Vista への DLO のアップグレードについて

DLO には、Windows Vista をサポートするための次の変更が含まれています。

- [ドキュメント]フォルダに、[ミュージック]、[ピクチャ]および[ビデオ]のサブフォルダが含まれなくなりました。したがって、[ドキュメント]フォルダと[サブフォルダを含む]オプションを選択しても、[ミュージック]、[ピクチャ]および[ビデオ]フォルダ内のデータはバックアップされません。バックアップするフォルダを個別に選択する必要があります。
- バックアップされたデータはすべて、AppData フォルダに格納されます。
- ファイルのリビジョンおよび差分ファイルのコピーは新たに開始されます。以前のデータは、削除済みファイルの保持ポリシーの設定に従って、ユーザーデータフォルダに保持されます。
- Windows Vista が実行されている2つのコンピュータ間ではデータを同期できます。Windows Vista が実行されているコンピュータと、Windows XP などの以前のオペレーティングシステムが実行されているコンピュータ間では、データは同期できません。

NetBackup Professional から DLO へのアップグレード

NetBackup Professional (NBUP) から Desktop Agent へのアップグレードは、NBUP バージョン 3.51.20 以上を実行している場合にのみ有効です。3.51.20 を実行していない場合は、Desktop Agent にアップグレードする前に、NBUP サーバーおよびクライアントのアップグレードを検討してください。

この方法では、現在 NBUP クライアントが実行されているデスクトップコンピュータに Desktop Agent がインストールされます。Desktop Agent のインストール時に NBUP クライアントを削除することも、NBUP クライアントを削除せずに両方のアプリケーションを同時に実行することもできます。この2つのオプションは、個別のアップグレードとしてNBUP

コンソールに表示されるため、一部のプロファイルから NBUP を削除して、それ以外のプロファイルでは NBUP の実行を継続することができます。

NBUP から DLO にアップグレードするには、**Desktop Agent** インストールセットに同梱されている、次の追加コンポーネントが必要です。

- **DLO Client (Remove NBUP).VPK** ファイル。システムを DLO にアップグレードし、同時に NBUP を削除するための手順および実行ファイルが含まれます。
- **DLO Client (Leave NBUP).VPK** ファイル。システムを DLO にアップグレードし、NBUP を削除せずに残すための手順および実行ファイルが含まれます。この場合、NBUP がアップグレードされたことがわかるように、バージョン番号が加算されます。

DLO では、バージョン 2.7 および 2.8 の **Microsoft Data Access Components (MDAC)** がサポートされています。ただし、デフォルトは **MDAC 2.8** です。MDAC 2.8 のインストール後、管理者以外のユーザーが最初にログオンすると、多数のエラーが発生します。MDAC 2.7 がすでにインストールされている場合にこのようなエラーを避けるために、MDAC 2.7 を強制的に使用できます。Upgrades フォルダ内の **package.ini** ファイルを修正します。**package.ini** ファイルの **DefaultRuleXML** 行に、**REQUIREDMDACVERSION="2.7"** を追加してください。

例:

```
DefaultRuleXML=<MSIPropertiesAppend>TRANSFORMS="%%%LANG_FILE%%%"  
REBOOT=ReallySuppress LAUNCHCLIENT="0" REQUIREDMDACVERSION="2.7"  
</MSIPropertiesAppend><MSIPropertiesFile>setup.ini</MSIPropertiesFile>
```

NetBackup Professional から DLO にアップグレードする方法

- 1 テクニカルサポートに問い合わせ、NBUP から **Desktop Agent** へのアップグレードに必要なファイル入手します。必須のファイルは **DLOAgent_LeaveNBP.vpk** と **DLOAgent_RemoveNBP.vpk** です。
- 2 NBUP サーバー、または NBUP コンソールがインストールされている任意のコンピュータから、適切なファイル (**DLO Client (leave NBUP).vpk** または **DLO Client (remove NBUP).vpk**) を実行します。このファイルによって、アップグレードパッケージが NBUP サーバーにアップロードされます。さまざまなプロファイルで選択できる NBUP オプションに対して削除する処理と削除しない処理の両方を行う場合は、もう一方の **vpk** ファイルに対してもこの手順を繰り返します。
- 3 **DLOAgent** という名前のフォルダを **C:\Program Files\Veritas NetBackup Professional\Upgrades** に作成します。デフォルト以外の場所に NBUP をインストールしている場合は、適切な場所にこのフォルダを作成します。
- 4 メディアサーバー上の **DLOAgent** 共有の内容全体を、NBUP サーバー上の **DLOAgent** フォルダにコピーします。
- 5 NBUP コンソールを起動します。
- 6 プロファイルのプロパティを開きます。

- 7 [アップグレード]タブで適切なアップグレード (NetBackup Professional を残すか、または削除するか) を選択し、[このアップグレードを有効にする]チェックボックスをオンにして、選択したアップグレードを有効にします。アップグレードに必要な他のオプションを選択します。
- 8 DLO にアップグレードする各 NBUP プロファイルに対して、手順 1 から手順 7 を繰り返します。
- 9 NBUP の通常のアップグレード手順 (コンソールの [今すぐアップグレードを確認] またはクライアントの [更新]) に従います。詳しくは『NetBackup Professional Administrator's Guide』を参照してください。

Desktop Agent が正常にインストールされると、NBUP 管理コンソールの NBUP バージョン番号は次の番号のどちらかに変わります。

 - 9.1.0.0 (NetBackup Professional を削除せずに残しているコンピュータの場合)
 - 0.0.0.1 (NetBackup Professional を削除したコンピュータの場合)

Backup Exec からの DLO 管理コンソールの起動

DLO 管理コンソールは、Backup Exec の [ジョブセットアップ] ビューから起動されます。DLO 管理コンソールから、DLO を設定し、デスクトップでのバックアップ操作およびリストア操作を管理できます。

Backup Exec から DLO 管理コンソールを起動する方法

- 1 ナビゲーションバーの [ジョブセットアップ] をクリックします。
- 2 タスクペインの [バックアップ戦略タスク] の下にある [デスクトップとラップトップのバックアップを設定] をクリックします。

DLO の [概要] ビューについて

DLO の [概要] ビューには、[始めましょう] ビューと [システムの概略] の 2 つのオプションがあります。

[始めましょう] ビューには、DLO の設定および管理に役立つ便利なリンクが表示されます。

このビューから、次のタスクを実行したり、これらのタスクに関連するヘルプにアクセスできます。

- Desktop Agent の配備
- ユーザー設定およびデフォルトの設定
- アラートと通知の管理
- レポートの実行

- プロファイルの作成
- データ格納場所の作成
- 自動ユーザー割り当ての作成
- ユーザーの追加

[システムの概略]概要で確認できる情報は次のとおりです。

表 Q-17 [システムの概略]オプション

項目	説明
最後のバックアップの結果	<p>DLO が保護しているコンピュータで実行された前回のジョブに関する完了状態の概略が表示されます。</p> <p>前回のジョブが完了したコンピュータの数の合計が、次のように分類されて表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ エラー: 前回のジョブは完了しましたが、エラーが発生しました。 ■ 警告: 前回のジョブは完了しましたが、警告が発生しました。 ■ キャンセル: ジョブの実行中に、ユーザーによってキャンセルされたか、または更新されました。 ■ 成功: 警告やエラーが発生することなく正常に完了し、またジョブの実行中にユーザーによってキャンセルまたは更新が行われませんでした。 <p>エラーは警告よりも優先されます。エラーと警告の両方が発生した場合、最後のバックアップの結果は[エラー]と表示されます。</p>
保留中のジョブ	DLO 管理者が要求したリストアジョブで、未実行のジョブを一覧表示します。
アクティブアラート	DLO 管理者がまだクリアしておらず、アラートグルーミングプロセスによってまだ削除されていないアラートを一覧表示します。アラートのグルーミングは、Backup Exec 管理コンソールで管理します。
サーバー状態	<p>各 DLO サーバーの状態を一覧表示します。</p> <p>サーバーの状態は次の状態のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 実行中 ■ 停止
サーバーの稼動状況	DLO が保護しているデスクトップの数と、インストールされている Desktop Agent ユーザーの合計数を一覧表示します。複数のユーザーが DLO を使用して複数のコンピュータを保護している場合は、これらの数が一致しない場合があります。ユーザーの合計数には、オンラインとオフラインの両方のユーザーが含まれます。

別の Backup Exec メディアサーバーでの DLO への接続

別の Backup Exec メディアサーバーで DLO に接続するには、ユーザーアカウントがメディアサーバーに対して完全な管理者権限を持っているドメインアカウントである必要があります。

p.1568 の「[DLO の管理者アカウントについて](#)」を参照してください。

Backup Exec メディアサーバーで DLO に接続する方法

- 1 DLO のネットワークメニューで[メディアサーバーに接続]をクリックします。
- 2 必要なオプションを選択します。
p.1589 の「[DLO の\[メディアサーバーに接続\]オプション](#)」を参照してください。
- 3 [OK]をクリックします。

DLO の[メディアサーバーに接続]オプション

[メディアサーバーに接続]ダイアログボックスで、異なる Backup Exec メディアサーバーの DLO に接続するために必要なクレデンシャルを入力します。

p.1589 の「[別の Backup Exec メディアサーバーでの DLO への接続](#)」を参照してください。

表 Q-18 DLO の[メディアサーバーに接続]オプション

項目	説明
サーバー	接続するメディアサーバーの名前を指定するか、またはドロップダウンメニューからメディアサーバーを選択します。
ユーザー名	メディアサーバーへの管理者アクセス権のあるアカウントのユーザー名を示します。
パスワード	このアカウントのパスワードを示します。
ドメイン	このアカウントのドメインを示します。

DLO を設定する方法

デスクトップユーザーがデータをバックアップできるようにするには、次の順序でオプションを設定する必要があります。

- プロファイルを作成します。このプロファイルを使用して、バックアップするファイル、ファイルのバックアップ時期およびデスクトップユーザーが **Desktop Agent** と対話するレベルを決定します。

p.1590 の「[DLO プロファイルについて](#)」を参照してください。

- ユーザーデータをネットワーク上のどこに保存するかを決定します。DLO では、デスクトップユーザーごとに個別のユーザーデータフォルダをネットワークに確保する必要があります。
p.1625 の「[DLO データ格納場所について](#)」を参照してください。
p.1645 の「[Desktop Agent のユーザーの管理について](#)」を参照してください。
- 自動ユーザー割り当てを作成してデータ格納場所とプロファイルを新しいユーザーに自動的に割り当てるか、新しいユーザーを手動で設定します。
p.1632 の「[自動ユーザー割り当てについて](#)」を参照してください。

DLO を設定するには、**Desktop and Laptop 設定ウィザード (DLO 設定ウィザード)** を使用するか、オプションを手動で設定します。DLO 設定ウィザードは、DLO を正しい順序で設定するための一連のウィザードです。

設定ウィザードの起動

DLO 設定ウィザードは、DLO を正しい順序で設定するための一連のウィザードです。

設定ウィザードを起動する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[始めましょう]の下にある[DLO の設定 (ウィザード使用)]をクリックします。
- 3 DLO 管理コンソールを起動するたびに設定ウィザードを表示させるには、[起動時に常にこのウィザードを表示する]をクリックします。

DLO プロファイルについて

プロファイルを使用して、特定の類似したユーザーグループの設定をカスタマイズします。たとえば、非常に専門的なユーザーのグループはバックアップ選択項目とスケジュールを修正する機能を必要とすることがあります。経験が少ないユーザーは完全自動化されたバックアップサービスを必要とすることがあります。

プロファイルでは、次の項目を設定できます。

- バックアップファイルおよびフォルダの選択項目。
- デスクトップおよびネットワークのユーザーデータフォルダの格納制限。
- バックアップスケジュール。
- デスクトップユーザーが **Desktop Agent** と対話するレベル。
- ログオプション。
- ネットワーク帯域幅の使用率。

各ユーザーがプロファイルに割り当てられている唯一のユーザーでない限り、DLO 管理コンソールで個別の Desktop Agent ユーザーの設定を修正することはできません。ただし、Desktop Agent ユーザーに各自の設定を修正できる権限を付与することはできます。

新しい DLO プロファイルの作成

デスクトップユーザーの特定の要件を満たしたり、既存の IT 環境をサポートするために、新しいプロファイルを作成することができます。

新しい DLO プロファイルを作成する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 [設定]ペインで、[プロファイル]をクリックします。
- 3 タスクペインの[タスクの設定]の下にある[新規プロファイル]をクリックします。
- 4 [一般]タブで、プロファイルの名前を入力し、帯域幅設定、格納制限、デスクトップのユーザーデータフォルダのパスを設定します。
p.1591 の「[プロファイルの\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 [バックアップ選択項目]タブで、このプロファイルのユーザーに適用するバックアップ選択項目を選択します。
- 6 [ユーザー設定]タブで、デスクトップユーザーが Desktop Agent と対話できるレベルを設定します。
個々のユーザーがユーザー設定を変更すると、変更はそのユーザーにのみ適用されます。
p.1596 の「[プロファイルの\[ユーザー設定\]オプション](#)」を参照してください。
- 7 [スケジュール]タブで、データをバックアップする頻度を選択します。
p.1601 の「[プロファイルの\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。
- 8 [オプション]タブで、ログオプションとメールオプションを選択します。
p.1603 の「[プロファイルの\[オプション\]](#)」を参照してください。
- 9 [接続ポリシー]タブで、新しい接続ポリシーを追加するために[追加]をクリックします
p.1605 の「[\[\[接続ポリシー\]の追加と削除\]オプション](#)」を参照してください。
- 10 [OK]をクリックします。

プロファイルの[一般]オプション

[一般]タブでは、プロファイルの名前を入力し、帯域幅設定、格納制限、デスクトップのユーザーデータフォルダのパスを設定できます。

p.1591 の「[新しい DLO プロファイルの作成](#)」を参照してください。

表 Q-19 プロファイルの[一般]オプション

項目	説明
プロファイル名	新たに作成するプロファイルの名前を示します。プロファイル名には ¥"@#\$\$%^&*()=+ /{}[]' の文字は使用できません。
説明	プロファイルの説明を示します。
このプロファイルを有効にする	プロファイルの有効と無効を切り替えます。デフォルトでは、プロファイルは有効になっています。
帯域幅を制限する (KB/秒)	<p>データがネットワークユーザーデータフォルダに送られる速度を制御します。</p> <p>帯域幅を制限して、バックアップ速度と、ローカルコンピュータ、ネットワークおよびサーバーに対するバックアップの影響を管理できます。デフォルトの制限は、バックアップの影響を最小限に抑えるように控えめに設定されています。</p> <p>ただし、次のような多くの要因が設定に影響します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークの速度 ■ 接続の種類 ■ バックアップしたデータ量 ■ DLO にバックアップするコンピュータの合計台数 <p>コンピュータパフォーマンスに対して影響がないのに DLO によるデータ転送速度が遅い場合は、より大きい帯域幅を設定するとパフォーマンスが向上します。コンピュータパフォーマンスがバックアップ中に著しく低下する場合は、より小さい値を設定すればコンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響が減少します。ただし、バックアップにかかる時間が増加します。</p> <p>データの転送速度を制限できるのは、データがネットワークユーザーデータフォルダに書き込まれるときのみです。データがデスクトップユーザーデータフォルダに書き込まれるときはデータの転送速度は制限されません。データの転送速度は、Outlook PST ファイルまたは Lotus Notes NSF ファイルの増分バックアップの実行中には制限されません。</p>

項目	説明
<p>他のプログラムに帯域幅を優先させる</p>	<p>デスクトップコンピュータ上の他のアプリケーションがデータを転送する際に、ネットワーク上での DLO によるデータ転送を少なくすることができます。他のアプリケーションがこのリソースを使用しなくなると、DLO によるデータ転送率は自動的に通常に戻ります。</p> <p>[他のプログラムに帯域幅を優先させる]オプションでは、デスクトップコンピュータのネットワークトラフィックが監視されます。DLO トラフィックが現在の合計トラフィック量の 90 % を超える場合、DLO は抑制されません。</p> <p>次の条件が満たされると、DLO は接続の未使用部分のみを使用するように抑制されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DLO トラフィックがデスクトップの合計ネットワークトラフィックの 90% を下回るとき ■ 合計トラフィック量が接続の最大トラフィック量の 60% を超えるとき <p>たとえば、合計使用率が 70 % である場合、DLO は最大の 30 % に抑制されます。</p> <p>ネットワークを多く利用する他のアプリケーションを同時に実行する場合、このオプションを選択すると、システムのパフォーマンスが向上します。データの転送速度を制限できるのは、データがネットワークユーザーデータフォルダに書き込まれるときのみです。データがデスクトップユーザーデータフォルダに書き込まれるときはデータの転送速度は制限されません。</p>
<p>ネットワークユーザーデータフォルダを制限 (MB)</p>	<p>DLO バックアップファイルが使用するネットワーク上のディスク容量を制限します。使用するディスク容量を入力します。</p>

項目	説明
<p>デスクトップユーザーデータフォルダを有効にする</p>	<p>デスクトップユーザーデータフォルダの使用を有効にします。[デスクトップユーザーデータフォルダを有効にする]が選択されていると、次の処理が行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 最初にファイルがデスクトップユーザーデータのフォルダにコピーされる。 ■ 次にデスクトップユーザーデータフォルダからネットワークユーザーデータフォルダにファイルがコピーされる。 <p>これらの処理は、DLO がデスクトップユーザーデータフォルダで 1 つもリビジョンを保持しないように設定されている場合でも行われます。</p> <p>[デスクトップユーザーデータフォルダを有効にする]を選択していない場合、ファイルは元の場所からネットワークユーザーデータフォルダに直接コピーされます。</p> <p>デスクトップユーザーデータフォルダを有効にした場合の利点は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リビジョンがネットワークだけでなくローカルコンピュータでも保存されるため、オフラインで保護されます。 ■ ローカルコンピュータではネットワークよりも高速にファイルが保存されるため、ファイルをバックアップのために開いている時間が短縮されます。 <p>デスクトップユーザーデータフォルダを無効にした場合の利点は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ローカルにリビジョンを保存する必要がない場合、このオプションによって、バックアップファイルがデスクトップユーザーデータフォルダに保存されないようにできます。バックアップ選択項目で、特定の数のリビジョンがローカルに保存されるように指定している場合でも、リビジョンはデスクトップユーザーデータフォルダに保存されません。 ■ ディスク容量が制限されているデスクトップユーザーでも、パフォーマンスが低下しません。 ■ デスクトップユーザーデータフォルダが無効であるか、またはリビジョンの数が 0 (ゼロ) に設定されている場合でも、デスクトップユーザーデータフォルダには空のプレースホルダが作成されます。このプレースホルダは、デスクトップユーザーデータフォルダに表示されますが、データは格納されません。このプレースホルダは、バックアップされネットワークユーザーデータフォルダに保存されたファイルおよびフォルダを指します。

項目	説明
<p>デスクトップユーザーデータフォルダを制限</p>	<p>DLO のバックアップファイルを保存するのに利用可能なディスク領域を制限します。</p> <p>利用可能なオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 全ディスク容量に対する割合 (%) デスクトップユーザーデータフォルダに DLO のバックアップファイルを格納するために割り当てたいディスク容量の合計のパーセンテージを示します。 ■ サイズ (MB) デスクトップユーザーデータフォルダに DLO のバックアップファイルを格納するために割り当てたい最大ディスク容量(MB 単位)を示します。 <p>デスクトップユーザーデータフォルダが利用可能なディスク容量を制限することによって、デスクトップのハードディスクドライブのオーバーロードを防ぐことができます。ただし、デスクトップユーザーデータフォルダの容量制限の設定が低すぎると、バックアップが失敗することがあります。</p>
<p>デフォルトのデスクトップユーザーデータフォルダのパスを上書きする</p>	<p>デスクトップユーザーデータフォルダがデフォルトの場所に存在しないようにします。このプロファイルに割り当てられたすべての新規 Desktop Agent ユーザーが使用するフォルダのパスを入力できます。</p> <p>このフォルダは、このプロファイルに割り当てられた新規ユーザーが初めてログオンする前に、デスクトップ上に作成されている必要があります。Desktop Agent では、このフォルダは作成されません。最初のログオンを行う前にフォルダが作成されていない場合は、DLO によって、デフォルトのフォルダがバックアップに使用されます。</p> <p>Windows XP およびそれ以前のオペレーティングシステムを実行しているコンピュータ上では、デフォルトのフォルダは次のパスに存在します。</p> <p>¥¥Documents and Settings¥<user_name>¥Local Settings¥Application Data¥Symantec</p> <p>Windows Vista を実行しているコンピュータ上では、デフォルトのフォルダは次のパスに存在します。</p> <p>¥¥Users¥<user_name>¥AppData¥Symantec</p>

プロファイルの [バックアップ選択項目] オプション

プロファイルのバックアップ選択項目は、このダイアログボックスから追加、修正および削除できます。新しいバックアップ選択項目を作成すると、そのバックアップ選択項目はすべてのプロファイルで選択できるようになります。1 つのプロファイルでバックアップ選択

項目を変更すると、そのバックアップ選択項目を使用しているその他すべてのプロファイルでも変更されます。同様に、バックアップ選択項目を削除すると、そのバックアップ選択項目を使用しているすべてのプロファイルでも削除されます。

p.1591 の「[新しい DLO プロファイルの作成](#)」を参照してください。

プロファイルの[ユーザー設定]オプション

[ユーザー設定]タブでは、デスクトップユーザーが **Desktop Agent** と対話できるレベルを設定できます。

p.1591 の「[新しい DLO プロファイルの作成](#)」を参照してください。

表 Q-20 プロファイルの[ユーザー設定]オプション

項目	説明
<p>Desktop Agent の表示設定</p>	<p>デスクトップユーザーが Desktop Agent と通信するレベルを指定します。</p> <p>利用可能なオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのインターフェースを表示 デスクトップユーザーが Desktop Agent オプションのすべてにアクセスできます。 ■ 状態のみ表示 デスクトップユーザーがバックアップジョブの状態を表示することを可能にします。このオプションを選択しても、デスクトップユーザーは Desktop Agent の設定を変更したり、状態以外のオプションにアクセスすることはできません。 デスクトップユーザーは、システムトレイアイコンを右クリックすると、状態の表示またはプログラムの終了を選択できます。 ■ システムトレイアイコンのみ表示 画面右下のシステムトレイに Desktop Agent のアイコンを表示します。 デスクトップユーザーは、システムトレイアイコンを右クリックしてプログラムを終了できます。 ■ 何も表示しない バックグラウンドで Desktop Agent を実行します。デスクトップユーザーが Desktop Agent を表示することはできません。
<p>データのリストア</p>	<p>このプロファイルのユーザーは、バックアップファイルをリストアすることができます。</p> <p>p.1738の「Desktop Agentを使用したファイルのリストア」を参照してください。</p>

項目	説明
ユーザー定義のバックアップ選択項目の追加	<p>このプロファイルのユーザーが、バックアップ選択項目を作成および修正できるようにします。このオプションを選択しても、ユーザーは、DLO 管理者がプロファイルで作成したバックアップ選択項目を修正することはできません。</p> <p>ユーザーは、プロファイルバックアップ選択項目から除外されたフォルダをバックアップするバックアップ選択項目を追加できます。プロファイルのユーザーが特定のフォルダをバックアップできないように設定するには、このオプションのチェックマークを外します。</p> <p>p.1607の「DLOのバックアップ選択項目について」を参照してください。</p> <p>p.1719の「Desktop Agentの標準表示でのバックアップ選択項目の修正」を参照してください。</p> <p>p.1721の「Desktop Agentの詳細表示でのバックアップ選択項目の修正」を参照してください。</p>
プロファイルバックアップ選択項目の修正	<p>このプロファイルのユーザーが、DLO 管理者がプロファイルで作成したバックアップ選択項目を修正できるようにします。</p> <p>p.1607の「DLOのバックアップ選択項目について」を参照してください。</p> <p>p.1721の「Desktop Agentの詳細表示でのバックアップ選択項目の修正」を参照してください。</p>
バックアップ選択項目のリビジョンポリシーの設定をカスタマイズ	<p>このプロファイルのユーザーが、リビジョンポリシーの設定を修正できるようにします。このオプションにチェックマークが付いていない場合、ユーザーは設定を変更できません。</p>

項目	説明
バックアップ選択項目の暗号化設定の変更	このプロファイルのユーザーがバックアップファイルの暗号化の有効と無効を切り替えることができます。
バックアップ選択項目の圧縮設定の変更	このプロファイルのユーザーがバックアップファイルの圧縮の有効と無効を切り替えることができます。
プロファイルのログ設定をカスタマイズ	このプロファイルのユーザーが、プロファイルのログ設定をカスタマイズできるようにします。 p.1727の「Desktop Agentのカスタムオプションの設定」 を参照してください。
プロファイルの電子メール設定をカスタマイズ	このプロファイルのユーザーが、プロファイルのメール設定をカスタマイズできるようにします。 p.1727の「Desktop Agentのカスタムオプションの設定」 を参照してください。
ローカルユーザーデータフォルダを移動	このプロファイルのユーザーが、ローカルユーザーデータフォルダを新しい場所に移動できるようにします。 p.1729の「デスクトップユーザーデータフォルダの移動」 を参照してください。
グルーミングポリシーの設定の変更	このプロファイルのユーザーが、グルーミング設定をカスタマイズできるようにします。 p.1727の「Desktop Agentのカスタムオプションの設定」 を参照してください。
ファイルの同期	このプロファイルのユーザーが、 Desktop Agent を実行しているすべてのコンピュータのデータを同期させることができるようにします。 p.1731の「デスクトップのユーザーデータの同期について」 を参照してください。

項目	説明
ローカルディスククォータのカスタマイズ	<p>このプロファイルのユーザーが、バックアップファイルをデスクトップユーザーデータフォルダに保存するために使用できるディスク容量を制限できるようにします。</p> <p>p.1727の「Desktop Agent のカスタムオプションの設定」を参照してください。</p>
バックアップスケジュールの修正	<p>このプロファイルのユーザーが、ファイルをバックアップするタイミングを修正できるようにします。</p> <p>p.1726の「DLOのバックアップジョブのためのスケジュールのオプションの変更」を参照してください。</p>
接続ポリシーのカスタマイズ	<p>このプロファイルのユーザーが、接続ベースのポリシーをカスタマイズできるようにします。</p> <p>p.1730の「接続ポリシーのカスタマイズ」を参照してください。</p>
スケジュール済み/手動のジョブのキャンセル	<p>このプロファイルのユーザーが、スケジュール済みのジョブと手動で開始したジョブの両方をキャンセルできるようにします。スケジュール済みジョブは、次のスケジュールの時刻に実行されます。手動のジョブは、手動で再実行する必要があります。</p> <p>p.1735の「ジョブの一時停止またはキャンセルについて」を参照してください。</p>
ジョブの一時停止	<p>このプロファイルのユーザーが、指定した時間の間、ジョブを一時停止できるようにします。</p> <p>p.1735の「ジョブの一時停止またはキャンセルについて」を参照してください。</p>

項目	説明
Desktop Agent を無効にする	このプロファイルのユーザーが、トレーアイコンから Desktop Agent を無効にすることができるようにします。ユーザーは Desktop Agent を有効にすることもできます。
オフラインで作業	このプロファイルのユーザーが、 Desktop Agent をオフラインモードに設定できるようにします。 p.1714の「 接続状態の変更 」を参照してください。
DLO が使用する暗号化パスワードの保存	認証に失敗した場合にユーザーがメディアサーバーまたはデータ格納場所に自動的に認証されるようにします。認証の失敗は、デスクトップユーザーがローカルアカウントまたはクロスドメインアカウントを使用してログオンした場合などに発生することがあります。このオプションを選択しない場合、DLO は認証が失敗するとパスワードを要求するプロンプトを表示します。
エラーおよび警告を表示しない	ユーザーが Desktop Agent と通信していない場合にエラーおよび警告のメッセージボックスが表示されないようにします。
ユーザーがオフラインになった場合、次の時間後に自動的にオンラインに戻る	Desktop Agent によってユーザーがオフラインになった後、再びオンラインになるまでの時間を示します。
ユーザーがジョブを一時停止した場合、または Agent を無効にした場合、次の時間後に自動的にジョブを再開する、または Agent を有効にする	ユーザーがジョブを中断したか、または Desktop Agent を無効にした後、ジョブを再開する、または Desktop Agent を有効にするまでの時間を示します。

プロファイルの [スケジュール] オプション

[スケジュール] タブで、このプロファイルでユーザーのジョブを実行するタイミングを指定します。

p.1591 の「[新しい DLO プロファイルの作成](#)」を参照してください。

表 Q-21 プロファイルの[スケジュール]オプション

項目	説明
ファイルの変更時	<p>変更するたびにファイルをバックアップします。</p> <p>NTFSドライブの場合は、ファイルを変更するたびに自動的にバックアップが実行されます。FATドライブの場合は、[変更ファイルのバックアップ間隔]フィールドでバックアップ間隔を入力する必要があります。</p>
スケジュール	<p>カスタマイズされたスケジュールに従ってファイルをバックアップします。</p>
スケジュールを編集	<p>バックアップスケジュールを設定することができます。</p> <p>p.1603の「[バックアップスケジュール]オプション」を参照してください。</p>
手動	<p>デスクトップユーザーがファイルをバックアップするタイミングを指定することを可能にします。</p>
ジョブを実行しない	<p>バックアップが必要なファイルがある時でもユーザーがログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行することを許可します。</p> <p>ジョブがすでに実行中の場合、ジョブの完了時にログアウト、再起動またはシャットダウンを行うかどうかの確認が表示されます。</p>
ジョブの実行をユーザーに確認	<p>ユーザーがログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行する前にバックアップジョブを実行することを求めるプロンプトを表示します。</p> <p>ジョブがすでに実行中の場合、ログアウト、再起動またはシャットダウンを続行するためにジョブをキャンセルするかどうかの確認が表示されます。</p>
今すぐジョブを実行	<p>ログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行する前にプロンプトを表示しないで待機中のファイルをバックアップします。</p> <p>ジョブがすでに実行中の場合、ログアウト、再起動またはシャットダウンを続行するためにジョブをキャンセルするかどうかの確認が表示されます。</p>
スケジュールに従ってジョブを実行	<p>ログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行し、スケジュールに従ってファイルをバックアップします。</p> <p>ジョブがすでに実行中の場合、ログアウト、再起動またはシャットダウンを続行するためにジョブをキャンセルするかどうかの確認が表示されます。</p>

項目	説明
次のログオン時にジョブを実行	<p>プロンプトを表示しないでログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行し、ジョブを次のログオンで実行します。</p> <p>ジョブがすでに実行中の場合、ログアウト、再起動またはシャットダウンを続行するためにジョブをキャンセルするかどうかの確認が表示されます。</p>

[バックアップスケジュール]オプション

バックアップジョブを実行する日時を設定できます。

表 Q-22 [バックアップスケジュール]オプション

項目	説明
実行する曜日	ファイルをバックアップする曜日を示します。
次の時間に 1 度実行	選択した日の指定した時間に単一のバックアップを実行します。
次の間隔ごとに実行	選択した日に指定した時間間隔でバックアップジョブを実行します。
開始	[次の間隔ごとに実行]を選択した場合は、バックアップを開始する時間間隔の開始時刻を示します。
終了	<p>[次の間隔ごとに実行]を選択した場合は、バックアップを開始する時間間隔の終了時刻を示します。このフィールドはバックアップを開始できる時間間隔の終了時刻を指定します。</p> <p>その時点でバックアップが進行中の場合は、完了するまで実行されます。</p>
次の期間にわたってバックアップジョブを開始	バックアップジョブを段階的に開始します。すべてのバックアップジョブを指定の時刻に一度に開始するのではなく、指定の期間内で段階的に開始するため、サーバーとネットワークに対する負荷がうまく分散されます。

プロファイルの [オプション]

[オプション]タブでは、ログオプションとメールオプションを選択できます。

p.1591 の「[新しい DLO プロファイルの作成](#)」を参照してください。

表 Q-23 プロファイルの [オプション]

項目	説明
最低でも次の日数ログファイルを保持	<p>ログファイルを保持する最小日数を示します。ログファイルは、少なくとも指定した日数が経過するまでは削除されません。</p> <p>合計サイズがすべてのログファイルの合計サイズの設定を超えるまで、ログファイルは削除されません。</p>
最低保持期間の経過後、全体のサイズが次のサイズ (MB) を超えた場合ログファイルを古い順に削除	<p>保持するすべてのログファイルの最大の合計サイズを示します。この値を超えると最も古いログファイルが削除されます。</p> <p>[最低でも次の日数ログファイルを保持] 設定に指定した日数が経過したログファイルが存在しない場合、この項目で指定する MB 数を超えるログファイルが保存される可能性もあります。</p>
グルーミングメッセージを記録	グルーミング操作のログを作成します。
バックアップの情報メッセージを記録	すべてのバックアップ操作のログを作成します。
警告メッセージを記録	警告を生成するすべての操作のログを作成します。
Outlook PST ファイルのメッセージレベルの増分バックアップを有効にする	<p>Microsoft Outlook の個人用フォルダ (PST) ファイルの増分バックアップを有効にします。PST ファイルを開いた状態でバックアップを行うには、増分バックアップが有効になっている必要があります。</p> <p>このオプションにチェックマークを付けなかった場合、Outlook で設定された PST のファイルは、PST ファイルが保存されるたびに完全にバックアップされます。一般に、PST ファイルは Outlook が閉じられるとき保存されます。</p> <p>Outlook PST ファイルの増分バックアップを行う場合、保持されるリビジョンは、バックアップ選択項目内で設定されているリビジョンの数に関係なく 1 つだけです。</p> <p>DLO で PST ファイルの増分バックアップを実行するには、通常使用するメールアプリケーションに Microsoft Outlook が設定されている必要があります。</p> <p>同期ファイルの増分バックアップを行うことはできません。</p> <p>p.1722 の「DLOを使用した Outlook PST ファイルの増分バックアップについて」を参照してください。</p>
Outlook で設定されていない PST ファイルを無視する	Desktop Agent コンピュータの Microsoft Outlook クライアントに登録されていない PST ファイルを除外します。

項目	説明
Lotus Notes 電子メールファイルのメッセージレベルの増分バックアップを有効にする	<p>Lotus Notes 電子メールファイルの増分バックアップを有効にします。追加の設定が必要となる場合があります。</p> <p>p.1724の「Lotus Notes ファイルの増分バックアップを実行するための Desktop Agent の設定」を参照してください。</p> <p>Lotus Notes NSF ファイルの増分バックアップを行う場合、保持されるリビジョンは、バックアップ選択項目内で設定されているリビジョンの数に関係なく 1 つだけです。</p>

[[接続ポリシー]の追加と削除]オプション

接続の種類に基づいてバックアップを制限するか、または無効にできます。

表 Q-24 [[接続ポリシー]の追加と削除]オプション

項目	説明
接続の種類	<p>バックアップを制限するか、または無効にしたい接続の種類を示します。</p> <p>次の接続の種類の 1 つを選ぶことができます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ダイヤルアップ接続 ダイヤルアップ接続を使用するとき、バックアップを制限するか、または無効にします。 ■ IP アドレス範囲 特定の IP アドレスの範囲のバックアップを制限するか、または無効にします。 指定した IP アドレス範囲内にあるコンピュータと範囲外にあるコンピュータのどちらに接続ポリシーを適用するかを指定します。 IPv6 または IPv4 を選択して、接続ポリシーの IP アドレス範囲を入力します。 IPv6 アドレスは Windows XP またはそれ以降のオペレーティングシステムのみでサポートされます。IPv6 アドレスは Windows 2000 で動作している Desktop Agent では実行されません。IPv4 アドレスを使用した接続ポリシーを Windows 2000 コンピュータの Desktop Agent に追加することをお勧めします。 ■ Active Directory Active Directory を使用したバックアップを制限するか、または無効にします。[設定]を選択して、Active Directory の設定を構成します。 p.1730の「接続ポリシーのカスタマイズ」を参照してください。

項目	説明
ネットワークバックアップを無効にする	ユーザーはネットワークユーザーデータフォルダにバックアップできなくなります。バックアップはデスクトップユーザーデータフォルダで行われます。
次のサイズを超えるファイルのネットワークバックアップを無効にする	ユーザーは、接続の種類に基づいて指定のサイズより大きいファイルをバックアップできなくなります。ファイルサイズをKB単位で入力します。
ネットワーク帯域幅の使用量を次の値に制限する	指定した値にネットワーク帯域幅の使用量を制限します。値はKB/秒の形式で入力する必要があります。
スケジュールされた時間帯に従ってポリシーを実施する	接続ポリシーが指定の一定期間の間のみ適用されます。
スケジュール	ポリシーを有効にする期間を設定できます。スケジュールは、毎週または特定の日付範囲で実行するように設定できます。

プロファイルの接続ポリシーの[スケジュール]オプション

接続ポリシーを有効にする時間を設定できます。

表 Q-25 プロファイルの接続ポリシーの[スケジュール]オプション

項目	説明
スケジュール	スケジュールの頻度を示します。
開始時間/開始日	スケジュールが始まる時間と日を示します。
終了時間/終了日	スケジュールが終わる時間と日を示します。

DLO のプロファイルのコピー

既存のプロファイルを基に新しいプロファイルを作成できます。たとえば、新しいプロファイルで使う設定と同じ設定が既存のプロファイルに多数含まれている場合などです。コピーしたプロファイルは、新しいデスクトップユーザーグループの要求に応じて修正することができます。

プロファイルをコピーする方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 [設定]ペインで、[プロファイル]をクリックします。
- 3 コピーするプロファイルを右クリックします。
- 4 [コピー]をクリックします。

- 5 新しいプロファイルの名前を入力します。
- 6 新しいプロファイルの説明を入力します。
- 7 [OK]をクリックします。

DLO のプロファイルの修正

プロファイルは、ユーザーグループの変更の要求に応じて変更することができます。

メモ: プロファイルを修正する場合、そのプロファイルのユーザーは、ジョブをキャンセルして設定をロードし、バックアップエンジンを再起動してバックアップ選択項目ツリーをスキャンしなければならないことがあります。

プロファイルを修正する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 [設定]ペインで、[プロファイル]をクリックします。
- 3 結果ペインで、修正するプロファイルを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 必要に応じてプロパティを修正します。
- 6 [OK]をクリックします。

DLO のバックアップ選択項目について

バックアップ選択項目を使用して、デスクトップでバックアップするファイルとフォルダを指定します。管理者はプロファイル内のすべてのユーザーに適用されるバックアップ選択項目を作成できます。この場合、バックアップ選択項目はプロファイルバックアップ選択項目と呼ばれます。さらに、十分な権限があるデスクトップユーザーはバックアップ選択項目を作成し、修正できます。

それぞれのバックアップ選択項目では、次のことができます。

- バックアップ対象のパスを指定する
- サブフォルダ、ファイルの種類または特定のフォルダのインクルードまたはエクスルードを選択する
- バックアップ選択項目の各ファイルについて保持されるリビジョン数を設定する
- リビジョンが保存される頻度を設定する
- バックアップファイルを保持する期間を設定する
- ファイルの変更部分のみを転送するようにバックアップ選択項目を設定する

- 送信および格納時にファイルを圧縮または暗号化する
- ソースファイルが削除された後のバックアップファイルの保持期間を指定する

注意: デスクトップコンピュータおよびラップトップコンピュータのバックアップ選択項目を選択する際には、ディスク容量を考慮してください。ローカルコピーが多数あると、**Desktop Agent** ユーザーのコンピュータの空きディスク容量が不足する可能性があります。たとえば、ドライブ全部をバックアップまたは同期するようなことは避けてください。

- p.1608 の「[DLO のデフォルトバックアップ選択項目について](#)」を参照してください。
- p.1609 の「[プロフィールからのデフォルトの DLO バックアップ選択項目の削除](#)」を参照してください。
- p.1610 の「[プロフィールへの DLO バックアップ選択項目の追加](#)」を参照してください。
- p.1611 の「[DLO のバックアップ選択項目の\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
- p.1612 の「[DLO バックアップ選択項目内のファイルまたはフォルダのインクルードおよびエクスクルード](#)」を参照してください。
- p.1613 の「[DLO のリビジョン管理について](#)」を参照してください。
- p.1615 の「[DLO のバックアップ選択のためのオプションの設定](#)」を参照してください。
- p.1617 の「[バックアップ選択項目で DLO マクロを使う方法](#)」を参照してください。
- p.1619 の「[DLO のバックアップ選択項目の修正](#)」を参照してください。
- p.1620 の「[DLO バックアップ選択項目の削除](#)」を参照してください。

DLO のデフォルトバックアップ選択項目について

DLO は、デフォルトで一般的に使用されるファイルおよびフォルダをバックアップするように設定されています。バックアップ選択項目を追加したり、デフォルトのバックアップ選択項目が使用されないように設定できます。

デフォルトのバックアップ選択項目は次のとおりです。

表 Q-26 デフォルトのバックアップ選択項目

バックアップ選択項目	説明
マイドキュメント	[マイドキュメント](Windows Vista では[ドキュメント]) 内のすべてのファイル
お気に入り	Internet Explorer の[お気に入り]
Outlook PST ファイル	デフォルトの場所の PST ファイル
デスクトップ	デスクトップ上のすべてのファイル

バックアップ選択項目	説明
Notes ファイル (マルチユーザー)	マルチユーザーインストールの Lotus Notes データ
Notes アーカイブ (マルチユーザー)	マルチユーザーインストールの Lotus Notes アーカイブ
Notes ファイル (シングルユーザー)	シングルユーザーインストールの Lotus Notes データ
Notes アーカイブ (シングルユーザー)	シングルユーザーインストールの Lotus Notes アーカイブ
マイミュージック	[マイミュージック](Windows Vista では[ミュージック]) 内のすべてのファイル
マイピクチャ	[マイピクチャ](Windows Vista では[ピクチャ]) 内のすべてのファイル
マイビデオ	[マイビデオ](Windows Vista では[ビデオ]) 内のすべてのファイル

デフォルトのバックアップ選択項目は、アプリケーションでデフォルトのパスが使用されていることを前提としています。インストール時にカスタムパスを使用した場合、またはインストール後にパスを修正した場合は、バックアップ選択項目が正しく動作するようにカスタマイズする必要があります。

p.1619 の「[DLO のバックアップ選択項目の修正](#)」を参照してください。

プロファイルからのデフォルトの DLO バックアップ選択項目の削除

デフォルトのプロファイルバックアップ選択項目は、多くの DLO 環境で有効です。ただし、デフォルトのバックアップ選択項目の削除または置換が必要となる場合もあります。

プロファイルからデフォルトのバックアップ選択項目を削除する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 [設定]ペインで、[プロファイル]をクリックします。
- 3 結果ペインで、修正するプロファイルを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [バックアップ選択項目]タブで、使用しないバックアップ選択項目のチェックマークを外します。
- 6 [OK]をクリックします。

プロファイルへの DLO バックアップ選択項目の追加

プロファイルに新しいバックアップ選択項目を作成すると、そのプロファイルバックアップ選択項目はその他すべてのプロファイルで選択できるようになります。

プロファイルにバックアップ選択項目を追加する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 [設定]ペインで、[プロファイル]をクリックします。
- 3 結果ペインで、バックアップ選択項目を追加するプロファイルを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [バックアップ選択項目]タブで、[追加]をクリックします。

バックアップ対象のファイルまたはフォルダに対する NTFS 権限、または圧縮や暗号化などのディレクトリ属性をカスタマイズする場合、それらの設定はバックアップされません。そのため、これらのカスタマイズ内容は、ファイルのリストア後に設定しなおす必要があります。Microsoft Outlook の PST ファイルに対してパスワードを使用する場合は、PST ファイルのリストア後にパスワードを設定しなおす必要があります。

- 6 表示されるメッセージを確認し、[OK]をクリックします。
- 7 次のいずれかを実行して、バックアップ選択項目のプロパティをカスタマイズします。
 - [一般]タブで、名前、説明、バックアップフォルダなどのバックアップ選択項目の一般的なプロパティを設定します。
p.1611の「[DLOのバックアップ選択項目の\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
 - [インクルード/エクスクルード]タブで、このバックアップ選択項目内の特定のファイルを含めるか、除外します。
p.1612の「[DLOバックアップ選択項目内のファイルまたはフォルダのインクルードおよびエクスクルード](#)」を参照してください。
 - [リビジョン管理]タブで、このバックアップ選択項目のリビジョン管理を設定します。
p.1614の「[DLOのバックアップ選択項目の\[リビジョン管理\]オプション](#)」を参照してください。
 - [オプション]タブで、このバックアップ選択項目の差分ファイルの転送、暗号化および圧縮オプションを設定します。
p.1616の「[DLOのバックアップ選択の\[オプション\]](#)」を参照してください。
- 8 [OK]を2回クリックします。

DLO のバックアップ選択項目の[一般]オプション

バックアップ選択項目の作成時に、名前、説明およびバックアップ対象のパスを[バックアップ選択項目]ダイアログボックスの[一般]タブで指定します。名前、説明およびバックアップパスは、バックアップ選択項目の作成時に必要に応じて修正できます。

p.1610 の「[プロファイルへの DLO バックアップ選択項目の追加](#)」を参照してください。

表 Q-27 DLO のバックアップ選択項目の[一般]オプション

項目	説明
名前	バックアップ選択項目を説明するような名前が表示されます。
説明	バックアップ選択項目の説明が表示されます。たとえば、バックアップ対象とするフォルダ、作成したバックアップ選択項目の使用対象となるユーザーグループ、バックアップ選択項目の作成目的などを入力します。
フォルダ名の入力	バックアップ選択項目に特定のフォルダを追加できます。フォルダ名を含めてフォルダのパスを入力します。たとえば、ドライブ C に My Data という名前のフォルダを追加するには、C:¥My Data と入力します。 バックアップするフォルダは、マクロを使用して定義することができます。 p.1617 の「バックアップ選択項目で DLO マクロを使う方法」 を参照してください。
定義済みのフォルダを選択	表示されたリストから定義済みのフォルダを選択できます。 事前定義済みのフォルダをマクロを使用して入力することができます。 p.1617 の「バックアップ選択項目で DLO マクロを使う方法」 を参照してください。
サブフォルダを含む	指定したディレクトリ内のすべてのサブフォルダをバックアップできます。デフォルトでは、このオプションが選択されています。 Microsoft Windows Vista を実行しているコンピュータの場合、このオプションではバックアップ選択項目に[ミュージック]、[ピクチャ]または[ビデオ]フォルダが含まれません。 それ以前のバージョンの Microsoft Windows を実行しているコンピュータの場合は、このオプションによってバックアップ選択項目に[マイミュージック]、[マイピクチャ]および[マイビデオ]フォルダが含まれます。

DLO バックアップ選択項目内のファイルまたはフォルダのインクルードおよびエクスクルード

各バックアップ選択項目は、すべてのファイルおよびフォルダをインクルードするか、または特定のファイルおよびフォルダをインクルードまたはエクスクルードするように設定できます。また、ワイルドカードを使用して、特定のファイルの種類またはフォルダをインクルードまたはエクスクルードするように指定できます。

グローバルエクスクルードフィルタを使用して、すべてのユーザーに対するすべてのバックアップからファイルおよびフォルダをエクスクルードすることもできます。デフォルトでエクスクルードされるファイルの種類もあります。このグローバルエクスクルードは、[グローバルエクスクルード]ダイアログボックスで表示または修正できます。

p.1636の「DLOでのグローバルエクスクルードフィルタの設定について」を参照してください。

バックアップ選択項目内のファイルまたはフォルダをインクルードまたはエクスクルードする方法

- 1 [バックアップ選択項目]ダイアログボックスを開きます。
p.1610の「プロファイルへのDLOバックアップ選択項目の追加」を参照してください。
- 2 [インクルード/エクスクルード]タブで、次のいずれかのオプションを選択します。

すべてのファイルの種類をインクルード	このバックアップ選択項目にすべてのファイルの種類をインクルードするには、このオプションを選択します。
--------------------	--

以下のリストの項目のみをインクルードまたはエクスクルード	特定のファイルまたは特定のファイルの種類のみをバックアップ対象としてインクルードまたはエクスクルードするには、このオプションを選択します。このオプションを選択すると、ワイルドカードによるインクルードが追加され、エクスクルードに設定されていないすべてのファイルがバックアップされます。
------------------------------	---

- 3 [インクルード/エクスクルード]リストにフィルタを追加するには、[以下のリストの項目のみをインクルードまたはエクスクルード]が選択されていることを確認して、[インクルードを追加]または[エクスクルードを追加]をクリックします。
- 4 [エクスクルードを追加]を選択した場合、過去にバックアップされたファイルのうち、この除外条件に一致するファイルがバックアップ選択項目から削除されることが通知されます。ファイルを削除するには[はい]を、削除をキャンセルするには[いいえ]をクリックします。

- 5 必要なオプションを選択します。
 p.1639の「[\[グローバルエクスクルードフィルタを追加\]オプション](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。

DLO のバックアップ選択項目の[インクルード/エクスクルード]オプション

各バックアップ選択項目は、すべてのファイルおよびフォルダをインクルードするか、または特定のファイルおよびフォルダをインクルードまたはエクスクルードするように設定できます。

p.1612の「[DLO バックアップ選択項目内のファイルまたはフォルダのインクルードおよびエクスクルード](#)」を参照してください。

表 Q-28 DLO のバックアップ選択項目の[インクルード/エクスクルード]オプション

項目	説明
すべてのファイルの種類をインクルード	このバックアップ選択にすべてのファイルの種類を含めます。
以下のリストの項目のみをインクルードまたはエクスクルード	特定のファイルかファイルの種類のみを含むか、または除外することができます。このオプションを選択すると、ワイルドカードによるインクルードが追加され、エクスクルードに設定されていないすべてのファイルがバックアップされます。

DLO のリビジョン管理について

リビジョンは、特定の時点でのファイルのバージョンです。バックアップ選択項目の作成時に、リビジョンの設定を行います。ファイルが変更され、バックアップされると、DLO によって新しいリビジョンが保存されます。DLO では、バックアップ選択項目に含まれるすべてのファイルに対し、特定の数のリビジョンが保存および管理されます。バックアップ選択項目は個別に設定されるため、各バックアップ選択項目に保持されるリビジョンの数は異なる場合があります。リビジョンの数が上限を超えると、DLO は最も古いリビジョンを削除します。

一定期間内に保持されるリビジョン数は、制限できます。作業中のドキュメントのバックアップを頻繁に行うと、すべてのリビジョンが数分おきに保持される可能性があります。そのような場合、24 時間ごとに 120 分以上間隔が空いているリビジョンを 2 つまで保持するように指定することにより、古いリビジョンを長い期間保持することができます。中間のバージョンは保持されませんが、古いリビジョンに戻る必要があるような状況には対処できません。

保持するリビジョン数を決定する際は、データの保存に必要なストレージスペースの容量も考慮する必要があります。バックアップに必要な容量は、保持するリビジョンの数と保護されているデータ量を掛け合わせることで見積もることができます。

たとえば各ファイルについて 3 つのリビジョンを保持し、バックアップするデータ量が 10 MB の場合、ファイルのサイズがどのリビジョンでも変わらないとすると、約 30 MB のディスク容量が必要になります。

容量の使用率は圧縮によって改善できますが、効果はファイルの種類やその他の要因によって大きく異なります。一般的な圧縮率は、約 2:1 であるため、例では、最大ディスク使用量を約 15 MB に削減できます。

DLO のファイルのグルーミングについて

Desktop Agent では、バックアップ選択項目の設定に基づいてリビジョンがグルーミングされます。リビジョンは、新しいリビジョンが作成されるとグルーミングされます。新しいリビジョンが作成され、それによって制限に達した場合、一番古いリビジョンが削除されます。

保守グルーミングとは、削除したファイルのバックアップを削除する処理のことです。保守グルーミングは、最大で 24 時間に 1 回行われます。保守グルーミングは、最後の保守グルーミングから 24 時間が経過した後、最初に実行されるバックアップ処理中に行われます。

DLO のバックアップ選択項目の [リビジョン管理] オプション

それぞれのバックアップ選択項目では、次の設定を指定できます。

- デスクトップユーザーデータフォルダおよびネットワークユーザーデータフォルダに保持するリビジョンの数
- リビジョン間の期間

p.1610 の「[プロフィールへの DLO バックアップ選択項目の追加](#)」を参照してください。

表 Q-29 DLO のバックアップ選択項目の [リビジョン管理] オプション

項目	説明
保持数 x リビジョン (デスクトップユーザーデータフォルダ)	バックアップ選択項目内の各ファイルについて、デスクトップユーザーデータフォルダに保持するリビジョンの数が示されます。 Outlook PST ファイルまたは Lotus Notes NSF ファイルの増分バックアップを行う場合、保持されるリビジョンは、バックアップ選択項目内で設定されているリビジョンの数に関係なく 1 つだけです。

項目	説明
保持数	<p>特定の期間に保持するリビジョン数を制限します。</p> <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 保持するバージョン数。 ■ バージョンを保持する期間。 ■ このバックアップ選択項目のバックアップ間で経過する必要がある最小間隔。 <p>新しいリビジョンが作成され、それによって前述のいずれかの制限に達した場合、一番古いリビジョンが削除されます。</p>
保持数 x リビジョン (ネットワークユーザーデータフォルダ)	<p>バックアップ選択項目内の各ファイルについて、ネットワークユーザーデータフォルダに保持するリビジョンの数が示されます。</p>
保持数	<p>特定の期間に保持するリビジョン数を制限します。</p> <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 保持するバージョン数。 ■ バージョンを保持する期間。 ■ このバックアップ選択項目のバックアップ間で経過する必要がある最小間隔。 <p>新しいリビジョンが作成され、それによって前述のいずれかの制限に達した場合、一番古いリビジョンが削除されます。</p>
デスクトップユーザーデータフォルダ内にある、次の日数より古いすべてのリビジョンを破棄	<p>日数が示されます。デスクトップユーザーデータフォルダ内のこの日数を経過したすべてのリビジョンが削除されます。</p> <p>最新のリビジョンは破棄されません。</p>
ネットワークユーザーデータフォルダ内にある、次の日数より古いすべてのリビジョンを破棄	<p>日数が示されます。ネットワークユーザーデータフォルダ内のこの日数を経過したすべてのリビジョンが削除されます。</p> <p>最新のリビジョンは破棄されません。</p>

DLO のバックアップ選択のためのオプションの設定

DLO バックアップ選択項目は、差分ファイルの転送、圧縮および暗号化を設定することによってさらにカスタマイズできます。また、ソースファイルが削除された後のバックアップファイルの保持期間を指定できます。

DLO のバックアップ選択項目のオプションを設定する方法

- 1 [バックアップ選択項目]ダイアログボックスを開きます。
p.1610の「[プロファイルへのDLOバックアップ選択項目の追加](#)」を参照してください。
- 2 [オプション]タブで、必要なオプションを選択します。
p.1616の「[DLOのバックアップ選択の\[オプション\]](#)」を参照してください。
- 3 [OK]をクリックし、バックアップ選択項目を保存します。

DLO のバックアップ選択の[オプション]

DLO バックアップ選択項目は、差分ファイルの転送、圧縮および暗号化を設定することによってさらにカスタマイズできます。また、ソースファイルが削除された後のバックアップファイルの保持期間を指定できます。

p.1615の「[DLOのバックアップ選択のためのオプションの設定](#)」を参照してください。

表 Q-30 DLO のバックアップ選択の[オプション]

項目	説明
差分ファイルの転送	ファイルのバックアップが実行されるたびに、ファイルの変更部分のみが転送され、ネットワークユーザーデータフォルダに格納されることを示します。また、差分ファイルの転送では圧縮が使用されます。このオプションを有効にするには、保守サーバーをインストールおよび設定する必要があります。 p.1622の「 新しい保守サーバーの追加 」を参照してください。
圧縮	ネットワーク上のデータ転送とデスクトップおよびネットワークユーザーデータフォルダのストレージのために、このバックアップ選択項目のファイルを圧縮できるようにします。 この設定は、この機能を有効にした後で作成されたファイルに適用されます。以前から格納されていたファイルは圧縮されません。 また、差分ファイルの転送でも圧縮が使用されません。

項目	説明
暗号化	<p>送信時にファイルを暗号化したり、このバックアップ選択項目のファイルを暗号化された形式でネットワークユーザーデータフォルダに格納します。</p> <p>この設定は、この機能を有効にした後で送信および格納されたファイルに適用されます。以前から格納されていたファイルは暗号化されません。</p> <p>Advanced Encryption Standard (AES) および 128 ビットの鍵長 が使用されます。デスクトップユーザーのデータフォルダでは、バージョンは暗号化されずに格納されます。ネットワークユーザーのデータフォルダでは、バージョンが暗号化されて格納されます。ネットワーク上での転送時は暗号化されます。</p>
デスクトップユーザーデータフォルダの場合、次の日数が経過したら削除	<p>ソースファイルがデスクトップから削除されてから、そのファイルのすべてのバージョンがデスクトップユーザーのデータフォルダから削除されるまでに DLO が待機する日数を示します。</p>
ネットワークユーザーデータフォルダの場合、次の日数が経過したら削除	<p>ソースファイルがデスクトップから削除されてから、そのファイルのすべてのバージョンがネットワークユーザーのデータフォルダから削除されるまでに DLO が待機する日数を示します。</p>

バックアップ選択項目で DLO マクロを使う方法

[バックアップ選択項目]ダイアログボックスの[フォルダ名の入力]フィールドにマクロを入力して、特定のフォルダを自動的にバックアップできます。

p.1611 の「[DLO のバックアップ選択項目の\[一般\]オプション](#)」を参照してください。

次のマクロがサポートされています。

表 Q-31 バックアップ選択項目で使用するフォルダのマクロ

バックアップ選択項目のマクロ	バックアップされるフォルダ
%LOCALFIXEDDRIVES%	<p>ローカルのすべての固定ドライブ。</p> <p>メモ: DLO ではリムーバブルディスクをバックアップできません。フロッピーディスクや CD-ROM をバックアップしようとする、エラーが発生します。</p>

バックアップ選択項目のマクロ	バックアップされるフォルダ
%MACHINENAME%	デスクトップユーザーのコンピュータ名を表します。 例:C:\documents¥%machine name% は C:\documents¥ユーザーのマシン名を表します。
%CURRENTUSERNAME%	現在ログオンしているユーザーのユーザー名を表します。 例:ローカルの Administrator がコンピュータにログオンしている場合、C:\documents¥%current username% は C:\documents¥Administrator を表します。
%CURRENTUSERPROFILE%	C:\Documents and Settings¥現在のユーザープロファイルディレクトリ (Windows XP の場合) または C:\Users¥現在のユーザープロファイルディレクトリ (Windows Vista の場合) 内のすべてのファイルおよびフォルダ。
%CURRENTUSERMYDOCS%	現在ログオンしているユーザーの[マイドキュメント]。
%CURRENTUSERFAVORITES%	現在ログオンしているユーザーの[お気に入り]。
%CURRENTUSERPRINTHOOD%	現在ログオンしているユーザーの[プリンタ]。
%CURRENTUSERNETHOOD%	現在ログオンしているユーザーの[マイ ネットワーク]。
%CURRENTUSERDESKTOP%	現在ログオンしているユーザーの[デスクトップ]。
%CURRENTUSERRECENT%	現在ログオンしているユーザーの[最近使用したファイル]。
%PROGRAMFILES%	Windows プログラムファイルディレクトリ。例: %PROGRAMFILES%¥lotus¥notes¥data¥archives
%LOCALAPPDATA%	Windows ローカルアプリケーションデータディレクトリ。 ■ Windows XP の場合: Documents and Settings¥<ユーザー名>¥Local Settings¥Application Data ■ Windows Vista の場合: Users¥<ユーザー名>¥AppData¥Local

次の定義済みのフォルダのマクロを[バックアップ選択項目]ダイアログボックスで選択できます。

表 Q-32 [バックアップ選択項目]ダイアログボックスの定義済みのフォルダのマクロ

フォルダ名	定義済みのフォルダのマクロ	バックアップされるフォルダ
マイドキュメント	%CURRENTUSERMYDOCS%	現在ログオンしているユーザーの[マイドキュメント]。
マイミュージック	%CURRENTUSERMYMUSIC%	現在ログオンしているユーザーの[マイミュージック]。
マイピクチャ	%CURRENTUSERMYPICTURES%	現在ログオンしているユーザーの[マイピクチャ]。
マイビデオ	%CURRENTUSERMYVIDEO%	現在ログオンしているユーザーの[マイビデオ]。
デスクトップ	%CURRENTUSERDESKTOP%	現在ログオンしているユーザーの[デスクトップ]。
お気に入り	%CURRENTUSERFAVORITES%	現在ログオンしているユーザーの[お気に入り]。
プリンタ	%CURRENTUSERPRINTHOOD%	現在ログオンしているユーザーの[プリンタ]。
マイネットワーク	%CURRENTUSERNETHOOD%	現在ログオンしているユーザーの[マイ ネットワーク]。
最近使用したファイル	%CURRENTUSERRECENT%	現在ログオンしているユーザーの[最近使用したファイル]。
ローカルのすべての固定ドライブ	%LOCALFIXEDDRIVES%	ローカルのすべての固定ドライブ。

マクロを使用したパスを入力した場合、マクロの後ろに自動的に円記号が追加されます。たとえば、%LOCALFIXEDDRIVES%¥Documents と入力すると、円記号がもう 1 つ追加されるため、Desktop Agent のバックアップ選択項目の詳細表示には x:¥¥Documents と表示されます。Desktop Agent のバックアップ選択項目の標準表示には、何も表示されません。このマクロの正しい入力方法は、%LOCALFIXEDDRIVES%Documents です。このマクロでは、x:¥Documents と適切に変換されます。

DLO のバックアップ選択項目の修正

プロファイルバックアップ選択項目は、DLO 管理コンソールから修正することができます。

バックアップ選択項目を修正する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 [設定]ペインで、[プロファイル]をクリックします。
- 3 結果ペインで、修正するプロファイルを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [バックアップ選択項目]タブで、修正するバックアップ選択項目を選択して、[修正]をクリックします。
- 6 このバックアップ選択項目の修正によって、その選択項目を使用しているすべてのプロファイルが変更されることを示すメッセージを確認し、[OK]をクリックします。
- 7 必要に応じてバックアップ選択項目を変更します。
 - p.1611の「[DLOのバックアップ選択項目の\[一般\]オプション](#)」を参照してください。
 - p.1612の「[DLOバックアップ選択項目内のファイルまたはフォルダのインクルードおよびエクスクルード](#)」を参照してください。
 - p.1614の「[DLOのバックアップ選択項目の\[リビジョン管理\]オプション](#)」を参照してください。
 - p.1615の「[DLOのバックアップ選択のためのオプションの設定](#)」を参照してください。
- 8 [OK]を2回クリックします。

DLO バックアップ選択項目の削除

バックアップ選択項目を削除する場合は、そのバックアップ選択項目がどのプロファイルでも使用されていないことを確認する必要があります。バックアップ選択項目は1つのプロファイルから削除すると、すべてのプロファイルから削除されます。

バックアップ選択項目を削除すると、ソースファイルを削除する場合と同じように、バックアップのバージョンが削除されます。バックアップのバージョンは、バックアップ選択項目で指定されている日数が経過するとグルーミングされます。

バックアップ選択項目を削除する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 [設定]ペインで、[プロファイル]をクリックします。
- 3 結果ペインで、削除するバックアップ選択項目を含むプロファイルを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [バックアップ選択項目]タブで、削除するバックアップ選択項目を選択します。
- 6 [削除]をクリックします。
- 7 [はい]をクリックします。

差分ファイルの転送について

差分ファイルの転送機能を使用して、増分バックアップデータを転送および格納できます。このオプションを有効にした場合は、最初のバックアップでファイル全体を転送する必要があります。後続のバックアップでは、ファイルの変更された部分のみが転送されるため、必要な帯域幅を削減し、バックアップを高速化できます。

差分ファイルの転送は、特定のプログラムやファイルの種類に制限されません。ただし、特定のファイルの種類を除外することはできます。このテクノロジーを使用してもメリットのないファイルの種類は、差分ファイルの転送からデフォルトで除外されています。これらの種類のファイルはすでに高度に圧縮されています。

p.1636の「DLOでのグローバルエクスクルードフィルタの設定について」を参照してください。

差分ファイルの転送は、ネットワークユーザーデータフォルダにバックアップファイルを転送および格納する場合にのみ使用されます。デスクトップユーザーデータフォルダに格納されるバックアップファイルでは、差分ファイルは使用されません。Desktop Agent ユーザーがオフラインで作業している場合は、ローカルのリビジョンの全体がデスクトップユーザーデータフォルダ内に格納されます。ユーザーがオンライン状態に戻ると、差分ファイルの転送によって、データがネットワークユーザーデータフォルダに転送されます。

差分ファイルの転送の必要条件

差分ファイルの転送には、DLO 保守サーバーを使用する必要があります。保守サーバーによって、データ格納場所からの以前のリビジョンの差分ファイルの削除が管理されます。保守サーバーは、差分ファイルの転送オプションが有効になっている場合にのみ必要ですが、DLO のインストール時にデフォルトでインストールされます。メディアサーバーがデータ格納場所のホストでもある場合、保守サーバーを設定するための追加の手順は必要ありません。

必要な保守サーバーは1つのみです。ただし、大規模なインストール環境では、各データ格納場所のホスト (ファイルサーバー) に1つの保守サーバーをインストールすると効率がよい場合があります。

保守サーバーの技術情報およびヒント

Desktop Agent では、保守サーバーとの通信に、名前付きパイプを経由した Windows RPC が使用されます。保守サーバーが正しく動作するためには、DLO クライアントと保守サーバー間で、名前付きパイプのトラフィックがブロックされないようにする必要があります。

差分ファイルのリビジョンの削除処理には、非常に大きい帯域幅が必要な場合があります。このため、保守サーバーは、データ格納場所のホストコンピュータにインストールする必要があります。

ただし、データ格納場所のサーバーと同じコンピュータに保守サーバーをインストールできない場合もあります。たとえば、保守サーバーは、NAS デバイスにはインストールできません。この場合は、保守サーバーを、十分な帯域幅でデータ格納場所に接続しているコンピュータにインストールする必要があります。

保守サーバーでは、1 つ以上のデータ格納場所を管理できます。保守サーバーでは、同じコンピュータ上のデータ格納場所が常に管理されます。DLO 管理コンソールから、保守サーバーで追加のデータ格納場所のホストが管理されるように設定できます。保守サーバーでは、データ格納場所へのリモートアクセスに委任機能が使用されます。

p.1623 の「[保守サーバーの委任の設定](#)」を参照してください。

バックアップ選択項目の差分ファイルの転送を有効にする方法

差分ファイルの転送は、デフォルトではオフになっています。ただし、指定のバックアップ選択項目については転送を有効化できます。

p.1621 の「[差分ファイルの転送について](#)」を参照してください。

また、他のターゲット上のファイルサーバーを保守サーバーで管理する場合は、保守サーバーで委任の設定を行う必要があります。

p.1623 の「[保守サーバーの委任の設定](#)」を参照してください。

デフォルトの圧縮の種類として差分ファイルの転送を選択することもできます。デフォルトの圧縮設定を[差分]に変更した場合、すべての新しいバックアップ選択項目に対して、差分圧縮がデフォルトで使用されます。

p.1575 の「[DLO のデフォルト設定について](#)」を参照してください。

新しい保守サーバーの追加

デフォルトの保守サーバーは DLO とともにインストールされます。インストーラから、スタンドアロンの保守サーバーをインストールすることもできます。

新しい保守サーバーをインストールしたら、その保守サーバーを DLO に追加する必要があります。保守サーバーを DLO に追加すると、その保守サーバーで管理するファイルサーバーを指定できるようになります。

p.1625 の「[ファイルサーバーの再割り当て](#)」を参照してください。

新しい保守サーバーを追加する方法

- 1 新しい保守サーバーをインストール済みであることを確認します。
- 2 DLO 管理コンソールの DLO ナビゲーションバーで、[セットアップ]をクリックします。
- 3 タスクペインの[タスクの管理]の下の[保守サーバー]をクリックします。
- 4 [追加]をクリックします。

- 5 保守サーバーがインストールされているコンピュータを検索して、そのコンピュータを選択します。
- 6 [OK]をクリックします。

保守サーバーの委任の設定

保守サーバーを設定して、異なるコンピュータによってホストされるデータ格納場所を管理することができます。次に、**Desktop Agent** を実行するデスクトップユーザーに代わってこれらの場所にアクセスするために、保守サーバーを設定する必要があります。この設定は、**Active Directory** を使用して管理します。

Active Directory 管理の委任について詳しくは次の Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

<http://www.microsoft.com/technet/prodtechnol/windowsserver2003/technologies/directory/activedirectory/actdid1.mspx>

表 Q-33 保守サーバーの委任の設定

手順	説明
手順 1	<p>次の条件が満たされていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ドメインが Windows 2000 以上である(NT 4ドメインはサポートされていない) ■ Desktop Agent ユーザーアカウントと Maintenance Service のアカウントの両方が同じフォレストに存在する ■ Desktop Agent ユーザーアカウントおよびコンピュータアカウントが相互信頼関係にあるドメインに存在する ■ デスクトップおよびサーバーのオペレーティングシステムが Windows 2000 以上である
手順 2	<p>デスクトップユーザーアカウントで委任が設定されていることを確認します。</p> <p>p.1623の「デスクトップユーザーアカウントで委任が設定されていることの確認」を参照してください。</p>
手順 3	<p>サーバープロセスアカウントが委任に対して信頼されていることを確認します。</p> <p>p.1624の「サーバープロセスアカウントが委任に対して信頼されていることの確認」を参照してください。</p>

デスクトップユーザーアカウントで委任が設定されていることの確認

次の手順は、委任のための保守サーバーを設定する処理の 1 つです。

p.1623 の「[保守サーバーの委任の設定](#)」を参照してください。

デスクトップユーザーアカウントで委任が設定されていることを確認する方法

- 1 ドメイン管理者アカウントを使用してドメインコントローラにログオンします。
- 2 タスクバーで、[スタート]>[プログラム]>[管理ツール]>[Active Directory ユーザーとコンピュータ]の順にクリックします。
- 3 使用するドメインの[Users]フォルダをクリックします。
- 4 委任対象のユーザーアカウントを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 5 [アカウント]タブの[アカウントオプション]リストで、次のオプションが選択されていないことを確認します。
アカウントは重要なので委任できない
- 6 [OK]をクリックします。

サーバープロセスアカウントが委任に対して信頼されていることの確認

次の手順は、委任のための保守サーバーを設定する処理の 1 つです。

p.1623 の「[保守サーバーの委任の設定](#)」を参照してください。

サーバープロセスアカウントが委任に対して信頼されていることを確認する方法

- 1 ドメイン管理者アカウントを使用してドメインコントローラにログオンします。
- 2 タスクバーで、[スタート]>[プログラム]>[管理ツール]>[Active Directory ユーザーとコンピュータ]の順にクリックします。
- 3 [Computers]フォルダを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 4 保守サーバーを実行するコンピュータを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 5 [一般]ページの[コンピュータを委任に対して信頼する]をクリックします。
- 6 [OK]をクリックします。

デフォルトの保守サーバーの変更

DLOをインストールすると、保守サーバーがインストールされ、デフォルトの保守サーバーとして設定されます。新しいデータ格納場所を作成すると、その格納場所はデフォルトの保守サーバーに自動的に割り当てられます。新しいデータ格納場所をデフォルトで別の保守サーバーに割り当てる場合は、この設定を変更する必要があります。

デフォルトの保守サーバーを変更する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[タスクの管理]の下の[保守サーバー]をクリックします。

- 3 [保守サーバー]リストで、デフォルトに設定する保守サーバーを選択します。
- 4 [OK]をクリックします。

ファイルサーバーの再割り当て

ファイルサーバーを、DLO が認識している別の保守サーバーに再割り当てすることができます。たとえば、新しいデータ格納場所を作成すると、その格納場所はデフォルトの保守サーバーに自動的に割り当てられます。このデータ格納場所を別の保守サーバーに再割り当てすることができます。

ファイルサーバーを再割り当てする方法

- 1 新しい保守サーバーをインストールして設定済みであることを確認します。
- 2 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 3 タスクペインの[タスクの管理]の下の[保守サーバー]をクリックします。
- 4 ファイルサーバーを現在管理している保守サーバーを選択します。
- 5 [編集]をクリックします。
- 6 再割り当てするファイルサーバーを選択します。
- 7 [再割り当て]をクリックします。
- 8 ドロップダウンメニューから新しい保守サーバーを選択します。
- 9 [OK]を3回クリックします。

DLO データ格納場所について

データ格納場所は、ネットワークユーザーデータフォルダが自動的に作成される、ネットワークコンピュータ上の場所です。

Desktop and Laptop Option では、各ユーザーのデータが次の場所に保存されます。

表 Q-34 ユーザーデータの保存場所

場所	説明
ユーザーのコンピュータのデスクトップユーザーデータフォルダ	コンピュータがネットワークから切断されている場合でも、データの保護およびリストアの機能が提供されます。
ネットワーク上のネットワークユーザーデータフォルダ	保護レベルが強化されており、サーバーのバックアップ時にファイルをセカンダリメディアにバックアップできるようになっています。

自動ユーザー割り当てを使用してユーザーを自動的にDLOに追加する場合、ネットワークユーザーデータフォルダは、自動ユーザー割り当てで指定したデータ格納場所に作成

されます。デスクトップユーザー用のネットワーク共有がすでに存在する場合は、ユーザーを手動で DLO に追加する際に、既存のネットワーク共有をネットワークユーザーデータフォルダとして指定できます。既存のネットワーク共有をネットワークユーザーデータフォルダとして使用する場合、データ格納場所は使用されません。

DLO では、NTFS ボリューム上のデータ格納場所または FAT32 ボリュームのネットワークユーザーデータフォルダとして、非表示の共有 (たとえば「Share\$」) を使用できます。ただしそれらを DLO 管理コンソールで作成することはできません。非表示の共有は手動で作成および設定する必要があります。

p.1626 の「非表示の共有をデータ格納場所として使う方法」を参照してください。

データ格納場所の設定のサポート

次の表に、DLO データ格納場所の各設定がサポートされているかどうかを示します。

表 Q-35 データ格納場所の設定のサポート

説明	サポート	非サポート
すべてのメディアサーバープラットフォーム	X	
Windows 2000 の NAS デバイスまたは SAK NAS デバイス	X	
ストレージデバイスに直接接続しているローカルメディアサーバー	X	
SAN	X	
Windows でネットワークアクセスが可能な NAS デバイス (Quantum、Network Appliance など)	X	
データ格納場所として FAT、FAT32 および NTFS パーティションがサポートされていますが、FAT および FAT32 は推奨されていません。NTFS は、データ格納場所のファイルシステムに適しています。	X	
NetWare 3.1x、4.x または E-Directory データ格納場所		X
UNIX ファイルシステムまたは UNIX システム上の SAMBA 共有		X

非表示の共有をデータ格納場所として使う方法

DLO では、NTFS ボリューム上のデータ格納場所または FAT32 ボリュームのネットワークユーザーデータフォルダとして、非表示の共有 (たとえば「Share\$」) を使用できます。

ただし、それらを手動で作成して設定する必要があります。非表示の共有は、DLO 管理コンソールから作成することはできません。また、FAT ベースのデータ格納場所を使用することはできません。

次の権限を使用する必要があります。

表 Q-36 非表示の共有に対する権限の設定

ドライブの種類	ユーザーまたはグループ	権限
NTFS ボリュームに対する共有権限	Administrator	フルコントロール、変更、読み取りを許可
	Everyone	フルコントロール、変更、読み取りを許可
NTFS ボリュームに対するセキュリティ権限	Administrator	フルコントロール
	Everyone	読み取りおよび実行を許可 フォルダの内容の一覧表示を許可 読み取りを許可
	特別なセキュリティ権限または詳細設定	フォルダの変更/ファイルの実行を許可 フォルダの一覧表示/データの読み取りを許可 読み取り属性を許可 読み取り拡張属性を許可 読み取り権限
NTFS ボリュームに対する高度なセキュリティ権限	Administrator	フルコントロールを許可
	Everyone	フォルダの変更/ファイルの実行を許可 フォルダの一覧表示/データの読み取りを許可 読み取り属性を許可 読み取り拡張属性を許可 読み取り権限
FAT ボリュームに対する共有権限	Administrator	フルコントロール、変更、読み取りを許可

ドライブの種類	ユーザーまたはグループ	権限
	Owner	フルコントロール、変更、読み取りを許可
	すべての管理者グループ	フルコントロール、変更、読み取りを許可
	一部の管理者グループ	読み取りを許可

DLO データ格納場所の作成

1 つのデータ格納場所を 1 台のメディアサーバーのみが使用するようにします。複数のメディアサーバーが同じデータ格納場所を使うとき、データ格納場所が 1 つのメディアサーバーから削除されれば、他のメディアサーバーはそれにアクセスできなくなります。

データ格納場所は、Windowsドメインまたは Active Directory に属している必要があります。Desktop Agent を実行するコンピュータは、Windows ドメインまたは Active Directory の外部に存在していてもかまいません。ただし、コンピュータがメディアサーバーまたはデータ格納場所にアクセスするには、ドメインまたはディレクトリの認証が必要となります。Desktop Agent を起動する際にドメインクレデンシャルの入力を求められます。

元のファイルが NTFS ボリュームに存在する場合、デスクトップユーザーデータフォルダおよびネットワークユーザーデータフォルダも NTFS に存在する必要があります。元のファイルが NTFS に存在し、デスクトップユーザーデータフォルダまたはネットワークユーザーデータフォルダのいずれかが FAT または FAT32 ボリュームに存在する場合、[リストア] および [リストアするファイルの検索] 画面でエントリが重複して表示されることがあります。そのような場合、リストア対象としてどちらのファイルを選択してもかまいません。

データ格納場所を作成した後は、それを変更できません。ただしユーザーや自動ユーザー割り当てがそれらに割り当てられていなければ、データ格納場所を削除できます。ユーザーは新しいデータ格納場所に移動できます。

p.1651 の「[新しいネットワークユーザーデータフォルダへの Desktop Agent ユーザーの移動](#)」を参照してください。

データ格納場所の作成時にエラーが発生した場合には、データ格納場所のディレクトリを作成および変更するための十分な権限が、MSSQL\$BKUPEXCDLO サービスのログオン情報に割り当てられていることを確認してください。MSSQL\$BKUPEXCDLO インスタンスのログオン情報を変更するには、Windows の [サービス] コントロールパネルを使用します。Backup Exec のインストール時にドメインアカウントを指定すると、このような問題が発生するのを防ぐことができます。

DLO データ格納場所を作成する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[タスクの設定]の下にある[新規データ格納場所]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.1629 の「[新規データ格納場所]オプション」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

[新規データ格納場所]オプション

新しいデータ格納場所を作成するとき、次の情報を入力しなければなりません。

p.1628 の「DLO データ格納場所の作成」を参照してください。

表 Q-37 [新規データ格納場所]オプション

項目	説明
コンピュータ名	データ格納場所を作成したいコンピュータの名前を示します。
パス	データ格納場所を作成したいコンピュータの場所を示します。 データ格納場所は、メディアサーバーと同じドメイン内またはメディアサーバーのドメインと信頼関係にあるドメイン内に存在する必要があります。
データ格納場所の名前	新しいデータ格納場所の名前を示します。名前には次の文字は使用できません: ¥"@#%&*()=+ /{}[]'
概略	このデータ格納場所に割り当てられる新しいユーザーのために作成されるネットワークユーザーデータフォルダの場所と形式を表示します。ネットワークユーザーデータフォルダは、データ格納場所に自動的に作成されます。 DLO は %USERDOMAIN% および %USERNAME% 変数を使用して、データ格納場所に割り当てられている各ユーザーの実際のフォルダパスを判別します。DLO はユーザーのドメインとユーザー名を使用して、そのユーザーに固有のネットワークユーザーデータフォルダ名を作成します。データ格納場所へのアクセスを許可されていないクレデンシャルでログオンした場合、ユーザーは別のドメインクレデンシャルの入力を求められます。 ネットワーク管理者は、このフォルダにアクセスすることはできませんが、変数を設定することはできません。

リモートの Windows 共有または NAS デバイスでの DLO データ格納場所の設定

DLO データ格納場所を、リモートの Windows 共有またはネットワーク接続ストレージデバイス上に作成できます。

さらに、DLO Administration Service が管理者レベルのユーザーとして実行されていない場合に、DLO 管理グループに既存の共有に対する適切な権限が割り当てられるように、データ格納場所を設定できます。

p.1630 の「管理者以外のユーザーを使用したリモートの Windows 共有または NAS デバイスでの DLO データ格納場所の設定」を参照してください。

表 Q-38 リモートの Windows 共有または NAS デバイスでの DLO データ格納場所の設定

手順	説明
手順 1	DLO 5.1 MP1 以上がインストールされていることを確認します。
手順 2	DLO サービスに使用されるアカウントクレデンシャルに、リモートのデータ格納場所または NAS デバイスに対する完全な管理者権限があることを確認します。
手順 3	リモートのデータ格納場所または NAS デバイス上で、DLO に使用するボリュームにドライブ文字が割り当てられていることを確認します。 共有の作成および名前について詳しくはハードウェアの製造元のマニュアルを参照してください。
手順 4	新しいデータ格納場所を作成します。 参照機能を使用して、データ格納場所を作成するコンピュータ上の場所を指定します。この手順によって、パスおよび DLO サービスアカウントが有効になります。

管理者以外のユーザーを使用したリモートの Windows 共有または NAS デバイスでの DLO データ格納場所の設定

DLO データ格納場所を、リモートの Windows 共有またはネットワーク接続ストレージデバイス上に作成できます。

さらに、**DLO Administration Service** が管理者レベルのユーザーとして実行されていない場合に、**DLO 管理グループ**に既存の共有に対する適切な権限が割り当てられるように、データ格納場所を設定できます。

管理者以外のユーザーを使用してデータ格納場所を設定する方法

- 1 既存のドメイングループを使用してネットワークユーザーデータフォルダへのアクセスを自動的に管理するように **DLO** を設定します。

[ドメイングループを使用してネットワークユーザーデータフォルダへのアクセスを管理する]チェックボックスをオンにして、必要なドメイングループを指定します。2つのグループ(完全な **DLO** 管理者のグループおよび制限付きの **DLO** 管理者のグループ)を指定してください。

p.1568 の「[DLO の管理者アカウントについて](#)」を参照してください。

- 2 [管理者アカウントの管理]ダイアログボックスで、アカウントマネージャに適切なドメインユーザーアカウントを追加します。ユーザーが完全な管理者権限を持っている場合、[管理者アカウントの追加]ダイアログボックスの[管理者に完全リストア権限を付与]チェックボックスをオンにします。他のユーザーに加えて、**DLO Administration Service** に完全リストア権限を付与します。
- 3 管理者または同等の権限のあるユーザーを使用して、リモートのデータ格納場所にフォルダを作成します。
- 4 新しいフォルダを共有します。「**Everyone**」が共有に対して完全なアクセス権を持っていることを確認します。
- 5 フォルダのセキュリティ権限を修正して、完全な **DLO** 管理者グループにはフォルダに対するフルコントロールを許可し、制限付きの **DLO** 管理者グループには変更権を許可します。
- 6 **DLO** コンソールを使用して、新しいデータ格納場所を作成します。作成したフォルダのコンピュータ名、ドライブとパス、および共有名を指定します。
データ格納場所の作成中は、参照ボタンを使用しないでください。参照ボタンを使用すると処理が失敗します。
- 7 必要なフィールドを入力したら、[OK]をクリックします。

リモートの Windows 共有または NAS デバイスからの DLO データ格納場所の削除

データ格納場所が手動で作成されており、**DLO Administration Service** が、DLO データ格納場所をホストするサーバーに対して完全な管理者権限を持っていない場合、データ格納場所は削除できません。

表 Q-39 リモートの Windows 共有または NAS デバイスからの DLO データ格納場所の削除

手順	説明
手順 1	データ格納場所のすべてのユーザーを移動または削除します。
手順 2	データ格納場所の共有およびフォルダをサーバーから手動で削除します。
手順 3	DLO 管理コンソールからデータ格納場所を削除します。

DLO データ格納場所の削除

DLO データ格納場所を削除するには、そのデータ格納場所を使用するユーザーと自動ユーザー割り当てを削除するか、再割り当てする必要があります。ユーザーまたは自動ユーザー割り当てに関連付けられているデータ格納場所は、[セットアップ]ビューで[ユーザー]または[自動ユーザー割り当て]を選択すると一覧表示されます。

p.1635 の「[自動ユーザー割り当ての変更](#)」を参照してください。

p.1636 の「[自動ユーザー割り当ての削除](#)」を参照してください。

データ格納場所をリモートコンピュータの既存の共有を使用して作成しており、DLO でコンピュータのフル権限を所有していない場合、管理コンソールからこのデータ格納場所を削除することはできません。データ格納場所を削除するには、まずデータ格納場所の共有を削除し、それから管理コンソールでこのデータ格納場所を削除します。

データ格納場所を削除する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで、[ファイルサーバー]の横の[+]印をクリックしてファイルサーバーリストを展開します。
- 3 選択ペインで、データ格納場所が存在するファイルサーバーをクリックします。
- 4 結果ペインで、削除するデータ格納場所をクリックします。
- 5 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 6 [はい]をクリックします。

自動ユーザー割り当てについて

自動ユーザー割り当ては、**Desktop Agent** がデスクトップで最初に実行されたときに適用される命令です。自動ユーザー割り当てを使用して、DLO が自動的に設定する各ユーザー

ザーに対し、プロファイルとネットワークユーザーデータフォルダを割り当てます。これらの設定は、必要に応じて後で **DLO 管理** コンソールで変更できます。

DLO にユーザーを手動で追加する場合は、**DLO 管理者** がデータ格納場所とプロファイルを選択します。自動ユーザー割り当てでは使用されません。

p.1645 の「**Desktop Agent のユーザーの管理について**」を参照してください。

自動ユーザー割り当ては、ドメインおよびグループに基づいて、または **Active Directory** の設定を使用してデスクトップユーザーに割り当てられます。ユーザーが複数の自動ユーザー割り当ての条件に一致する場合があるため、自動ユーザー割り当ての優先度を設定します。**Desktop Agent** の初回起動時に、ユーザーのドメインとグループクレデンシヤルが自動ユーザー割り当てと照合されます。**Desktop Agent** は最も優先度が高い割り当てからクレデンシヤルをチェックします。一致する自動ユーザー割り当てが見つかると、その自動ユーザー割り当てで指定されている共有とプロファイルが新しいユーザーに割り当てられます。

自動ユーザー割り当てを修正した場合、すでに設定されているユーザーは影響されません。変更後の自動ユーザー割り当てを使用して設定される新しいユーザーのみが、新しい設定を使用します。

p.1635 の「**自動ユーザー割り当ての優先度の変更**」を参照してください。

自動ユーザー割り当ての作成

自動ユーザー割り当ては、ドメインおよびグループの設定または **Active Directory** の設定に基づいて **Desktop Agent** ユーザーに割り当てられます。自動ユーザー割り当てを使用して、ユーザーに割り当てるデータ格納場所とプロファイルを決定します。

新しい自動ユーザー割り当てを作成する方法

- 1 **DLO** ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[自動ユーザー割り当て]をクリックします。
- 3 タスクペインの[タスクの設定]の下にある[新規ユーザー割り当て]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。

p.1633 の「**[新規自動ユーザー割り当て]オプション**」を参照してください。

- 5 手順 4 で、**Active Directory** を使用してユーザー割り当てを設定するように選択した場合は、**Active Directory** を設定し、[OK]をクリックします。

p.1634 の「**[Active Directory オブジェクト]オプション**」を参照してください。

- 6 [OK]をクリックします。

[新規自動ユーザー割り当て]オプション

新しい自動ユーザー割り当てを作成するとき、次のオプションを設定する必要があります。

p.1633 の「[自動ユーザー割り当ての作成](#)」を参照してください。

表 Q-40 [新規自動ユーザー割り当て]オプション

項目	説明
ユーザー割り当ての名前	自動ユーザー割り当ての名前を示します。ユーザー割り当ての名前には、¥"@#\$\$%^&*()=+ /{}[]' の文字は使用できません。
ドメインおよびグループを使用し て割り当てる	ドメインおよびグループに基づいて Desktop Agent ユーザーに自動ユーザー割り当てを適用します。
ドメイン	この自動ユーザー割り当てが適用されるドメインを示します。
グループ	この自動ユーザー割り当てが適用されるグループを示します。
Active Directory を使用し て割り当てる	Active Directory の設定に基づいて Desktop Agent ユーザーに自動ユーザー割り当てを適用します。
設定	Active Directory を使用してユーザーの割り当てを設定します。
データ格納場所	選択したドメインおよびグループ内のユーザーに割り当てるデータ格納場所を示します。
プロファイル	選択したドメインおよびグループ内のユーザーに割り当てるプロファイルを示します。

[Active Directory オブジェクト]オプション

自動ユーザー割り当てを設定するのに **Active Directory** を使うように選んだら、次のオプションを完了する必要があります。

p.1633 の「[自動ユーザー割り当ての作成](#)」を参照してください。

表 Q-41 [Active Directory オブジェクト]オプション

項目	説明
オブジェクト	自動ユーザー割り当ての場合、利用可能なオプションは[ユーザー]のみです。
場所 (LDAP ディレクトリ)	LDAP ディレクトリを示します。 Active Directory のユーザーアカウントを選択する場合、そのユーザーアカウントを保持する特定のディレクトリを選択する必要があります。ユーザーグループのディレクトリを選択しないでください。作成中のこのルールを適用する特定のユーザーアカウントディレクトリを参照して選択するか、そのディレクトリのパスを正確に入力します。

項目	説明
このディレクトリのすべてのオブジェクト	指定されたディレクトリのすべてのオブジェクトに接続ポリシーを適用します。
このディレクトリの次の条件に一致するオブジェクトのみ	入力した条件に一致するオブジェクトにのみ接続ポリシーを適用します。
属性	接続ポリシーを適用したい属性を示します。
条件	属性と値と一致させるために使用する条件を示します。選択可能なオプションは、=、<、<>、および > です。
値	一致を判断するのに使われるユーザー定義の基準を示します。指定する値にワイルドカードを使用できます。

自動ユーザー割り当ての変更

自動ユーザー割り当てを変更した場合、変更後に割り当てに追加されたユーザーのみが影響を受けます。既存の **Desktop Agent** ユーザーは影響を受けません。

既存の **Desktop Agent** ユーザーの設定を変更するには、DLO 管理コンソールの [セットアップ] ビューを使用します。

p.1649 の「[Desktop Agent ユーザーのプロファイルの変更](#)」を参照してください。

自動ユーザー割り当てを変更する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの [セットアップ] をクリックします。
- 2 選択ペインで [自動ユーザー割り当て] をクリックします。
- 3 結果ペインで、変更する自動ユーザー割り当てを選択します。
- 4 タスクペインの [一般タスク] の下にある [プロパティ] を選択します。
- 5 自動ユーザー割り当てのプロパティを変更します。

自動ユーザー割り当ての優先度の変更

自動ユーザー割り当てを作成するとき、DLO はそれに優先度を割り当てます。優先度は、ユーザーが複数のドメインおよびグループのメンバーのときに、どの自動ユーザー割り当てが使われるかを決定します。最新の自動ユーザー割り当てには一番低い優先度が割り当てられます。自動ユーザー割り当ての優先度は変更できます。

自動ユーザー割り当ての優先度を変更する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの [セットアップ] をクリックします。
- 2 選択ペインで [自動ユーザー割り当て] をクリックします。

- 3 結果ペインで、優先度を変更する自動ユーザー割り当てを選択します。
- 4 タスクペインの[タスクの設定]の下にある[優先度を上げる]または[優先度を下げる]を選択します。

自動ユーザー割り当てのプロパティの表示

自動ユーザー割り当てのプロパティを表示できます。

自動ユーザー割り当てを表示する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[自動ユーザー割り当て]をクリックします。
- 3 結果ペインで、自動ユーザー割り当てを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]を選択します。

自動ユーザー割り当ての削除

自動ユーザー割り当ては、不要になった場合に削除できます。

自動ユーザー割り当てを削除する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[自動ユーザー割り当て]をクリックします。
- 3 削除する自動ユーザー割り当てをクリックします。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 5 [はい]をクリックします。

DLO でのグローバルエクスクルードフィルタの設定について

DLO のグローバルエクスクルードオプションは次の操作を可能にします。

- すべてのバックアップから除外するファイルの属性を指定します。
- 差分ファイルの転送で圧縮、暗号化、またはバックアップを行わないファイルを指定します。
- バックアップから電子メールへの添付ファイルか特定の電子メールのフォルダを除外します。

グローバルエクスクルードは、グローバルエクスクルードが設定されているメディアサーバーに対してバックアップを行うすべての **Desktop Agent** ユーザーの、プロファイルバックアップ選択項目とユーザーが作成したバックアップ選択項目の両方に適用されます。

除外されるファイルは次の場所に表示されます。

表 Q-42 除外されるファイルの場所

コンポーネント	除外されるファイルの場所
Desktop Agent	詳細表示の[インクルード/エクスクルード]タブ。
DLO 管理コンソール	プロファイルバックアップ選択項目の[インクルード/エクスクルード]タブ。

グローバルエクスクルードリストに設定された項目は、選択リストで選択できません。

グローバルエクスクルードを追加すると、過去に行われたバックアップのうち、この除外条件に一致するファイルが保存期間の終了時にすべて削除されます。保存期間は、バックアップ選択項目の設定時に設定します。

p.1720の「[Desktop Agentの詳細表示でのバックアップ選択項目の追加](#)」を参照してください。

次の場合、次回の保守サイクル時に、バックアップがただちに削除されます。

- 保存期間が1日に設定されている場合。
- 保守サイクルの間隔にデフォルト値が使用されている場合。デフォルト値は24時間です。この値を変更すると、すべてのファイルの保存期間に影響します。
p.1576の「[デフォルトのDLOグローバル設定の変更](#)」を参照してください。

グローバルエクスクルードの設定方法についての情報が利用可能です。

p.1637の「[すべてのDLOバックアップから除外するファイルおよびフォルダの指定](#)」を参照してください。

p.1639の「[すべてのDLOのバックアップからの電子メールの除外](#)」を参照してください。

p.1641の「[ファイルとフォルダの圧縮からの除外](#)」を参照してください。

p.1642の「[ファイルとフォルダの暗号化からの除外](#)」を参照してください。

p.1643の「[差分ファイルの転送からのファイルとフォルダの除外](#)」を参照してください。

p.1645の「[DLOマクロを使用したグローバルエクスクルードの定義について](#)」を参照してください。

すべてのDLOバックアップから除外するファイルおよびフォルダの指定

ファイルおよびフォルダのグローバルエクスクルードは、すべてのユーザーに対するすべてのバックアップから除外するファイルとフォルダ(またはファイルとフォルダの種類)を指定します。

すべてのバックアップから除外するファイルおよびフォルダを指定する方法

- 1 ツールメニューの[グローバルエクスクルード]をクリックします。
- 2 [ファイルとフォルダ]タブで、次のいずれかを行います。

指定したサイズを超えるすべてのファイル
を除外する方法 [次のサイズを超えるすべてのファイルをエクスクルード]
チェックボックスをオンにして、サイズをKB単位で入力しま
す。

指定した日付より前に修正され
たすべてのファイルを除外する
方法 [次の日付より前に変更されたすべてのファイルをエクス
クルード]チェックボックスをオンにして、日付を入力します。

新しいファイルとフォルダのグ
ローバルエクスクルードを追加
する方法 [追加]をクリックし、除外するファイルまたはフォルダの名前
を入力します。

p.1639の「[\[グローバルエクスクルードフィルタを追加\]オプション](#)」を参照してくださ
い。

- 3 [OK]をクリックします。

[グローバルエクスクルード]オプション

グローバルエクスクルードは、すべてのユーザーに対してすべてのバックアップから除外
される項目を指定します。

表 Q-43 [グローバルエクスクルード]オプション

項目	説明
フィルタ	既存のフィルタをリストします。
説明	既存のフィルタの説明をリストします。
適用対象	既存のフィルタがファイルまたはフォルダに適用されるかどうかを示します。
次のサイズを超えるすべての ファイルをエクスクルード	選択したサイズより大きいすべてのファイルを除外できます。
次の日付より前に変更されたす べてのファイルをエクスクルード	選択した日付の前に変更されたすべてのファイルを除外できま す。
追加	除外したいファイルまたはフォルダの名前を入力できます。
編集	グローバルエクスクルードのプロパティを変更できます。
削除	グローバルエクスクルードを削除できます。

[グローバルエクスクルードフィルタを追加]オプション

特定のファイル、フォルダ、ファイルとフォルダの種類を除外できます。

p.1637の「すべてのDLOバックアップから除外するファイルおよびフォルダの指定」を参照してください。

表 Q-44 [グローバルエクスクルードフィルタを追加]オプション

項目	説明
フィルタ	除外されるファイルまたはフォルダを指定します。除外するファイルの名前、ワイルドカードまたはマクロを使用できます。 例: ワイルドカード:*.tmp ファイル名:pagefile.sys マクロ:%WINDIR% ワイルドカードを使用する場合は、アスタリスク (*) を使用してください。たとえば、*.tmp を指定すると .tmp という拡張子を持つファイルがすべて表示されますが、.tmp を指定すると .tmp という名前のファイルのみが表示されます。
拡張子	含めるファイルの種類または除外するファイルの種類を選択できます。
説明	グローバルエクスクルードの説明を示します。
適用対象	グローバルエクスクルードの適用対象を、[ファイル]、[フォルダ]、[ファイルおよびフォルダ]のうち、いずれにするかを示します。

すべての DLO のバックアップからの電子メールの除外

電子メールの添付ファイルとメッセージを、すべてのユーザーのすべてのバックアップジョブから除外することができます。

メモ: Lotus Notes 電子メールは、添付ファイルのサイズまたは種類でフィルタにかけることはできません。

すべてのバックアップから電子メールを除外する方法

- 1 ツールメニューの [グローバルエクスクルード] をクリックします。
- 2 [電子メール] タブで、次のいずれかを実行します。

指定したサイズより大きい電子メールの添付ファイルを除外する方法

次に示す順序で操作を実行します。

- [次のサイズを超えるすべての添付ファイルをエクスクルード]チェックボックスをオンにします。
- サイズをKB単位で入力します。

この機能はLotus Notes 電子メールには適用されません。

指定した日付より前に受信された電子メールメッセージを除外する方法

次に示す順序で操作を実行します。

- [次の日付より前に受信したすべてのメッセージをエクスクルード]チェックボックスをオンにします。
- 日付を入力します。

特定の種類の電子メール添付ファイルまたは特定の電子メールフォルダを除外する方法

次に示す順序で操作を実行します。

- [追加]をクリックします。
- 除外する添付ファイルの種類または除外するフォルダの名前を入力します。
p.1641の「[\[グローバルEmailエクスクルードフィルタを追加\]オプション](#)」を参照してください。
- [OK]をクリックします。

3 [OK]をクリックします。

電子メールの[グローバルエクスクルード]オプション

電子メールの添付ファイルとメッセージを、すべてのユーザーのすべてのバックアップジョブから除外することができます。

p.1639の「[すべてのDLOのバックアップからの電子メールの除外](#)」を参照してください。

表 Q-45 電子メールの[グローバルエクスクルード]オプション

項目	説明
フィルタ	バックアップから除外される項目の名前を示します。
説明	バックアップから除外される項目のユーザーによる説明を示します。
適用対象	除外される項目が電子メールの添付ファイルまたは特定のフォルダに適用されるかどうかを示します。
次のサイズを超えるすべての添付ファイルをエクスクルード	指定したサイズより大きい電子メールの添付ファイルを除外できます。

項目	説明
次の日付より前に受信したすべてのメッセージをエクスクルード	指定した日付より前に受信された電子メールメッセージを除外できます。

[グローバル Email エクスクルードフィルタを追加]オプション

電子メールの添付ファイルとメッセージを、すべてのユーザーのすべてのバックアップジョブから除外することができます。

p.1639の「すべてのDLOのバックアップからの電子メールの除外」を参照してください。

表 Q-46 [グローバル Email エクスクルードフィルタを追加]オプション

項目	説明
添付ファイルの種類	<p>グローバルエクスクルードによってバックアップから除外される添付ファイルの種類を判別します。</p> <p>Lotus Notes 電子メールは、添付ファイルの種類でフィルタにかけることはできません。</p> <p>フィルタには、ファイル名またはワイルドカードを設定できます。</p> <p>例:</p> <p>ワイルドカード:*.tmp</p> <p>ファイル名:pagefile.sys</p> <p>ワイルドカードを使用する場合は、アスタリスク (*) を使用してください。たとえば、*.tmpを指定すると .tmp という拡張子を持つファイルがすべて表示されますが、.tmp を指定すると .tmp という名前のファイルのみが表示されます。</p>
メールフォルダ名	バックアップの対象から除外するメールフォルダの名前を示します。
説明	グローバルエクスクルードの説明を示します。

ファイルとフォルダの圧縮からの除外

グローバルエクスクルードを使用することで、特定のファイルやフォルダが圧縮されないようにすることができます。グローバルエクスクルードを使用すると、選択したファイルまたはフォルダの種類がすべてのユーザーについて圧縮されずに保持されます。

ファイルとフォルダを圧縮から除外する方法

- 1 ツールメニューの[グローバルエクスクルード]をクリックします。
- 2 [圧縮ファイル]タブで、次のいずれかを行います。

- 指定したサイズを超えるすべてのファイルを圧縮から除外するには、[次のサイズを超えるすべてのファイルをエクスクルード]チェックボックスをオンにして、サイズを KB 単位で入力します。
- 新しい圧縮ファイルのグローバルエクスクルードを追加するには、[追加]をクリックし、除外するファイルまたはフォルダを入力します。

p.1642 の「圧縮の[グローバルエクスクルード]オプション」を参照してください。

3 [OK]をクリックします。

圧縮の[グローバルエクスクルード]オプション

グローバルエクスクルードを使用することで、特定のファイルやフォルダが圧縮されないようにすることができます。グローバルエクスクルードを使用すると、選択したファイルまたはフォルダの種類がすべてのユーザーについて圧縮されずに保持されます。

p.1641 の「ファイルとフォルダの圧縮からの除外」を参照してください。

表 Q-47 圧縮の[グローバルエクスクルード]オプション

項目	説明
フィルタ	圧縮から除外される項目の名前を示します。
説明	圧縮から除外される項目のユーザーによる説明を示します。
適用対象	除外される項目の適用対象を、[ファイル]、[フォルダ]、[ファイルおよびフォルダ]のうち、いずれにするかを示します。
次のサイズを超えるすべてのファイルをエクスクルード	指定したサイズより大きいファイルを除外できます。

ファイルとフォルダの暗号化からの除外

特定のファイルまたはフォルダ、あるいは特定の種類のファイルやフォルダが暗号化されないようにすることができます。

ファイルとフォルダを暗号化から除外する方法

- 1 ツールメニューの[グローバルエクスクルード]をクリックします。
- 2 [暗号化ファイル]タブで、次のいずれかを行います。
 - 指定したサイズを超えるファイルを除外するには、[次のサイズを超えるすべてのファイルをエクスクルード]チェックボックスをオンにして、サイズを KB 単位で入力します。

- 新しい暗号化ファイルのグローバルエクスクルードを追加するには、[追加]をクリックし、除外するファイルまたはフォルダを入力します。
p.1643の「暗号化の[グローバルエクスクルード]オプション」を参照してください。

3 [OK]をクリックします。

暗号化の[グローバルエクスクルード]オプション

特定のファイルまたはフォルダ、あるいは特定の種類のファイルやフォルダが暗号化されないようにすることができます。

p.1642の「ファイルとフォルダの暗号化からの除外」を参照してください。

表 Q-48 暗号化の[グローバルエクスクルード]オプション

項目	説明
フィルタ	暗号化から除外される項目の名前を示します。
説明	暗号化から除外される項目のユーザーによる説明を示します。
適用対象	除外される項目の適用対象を、[ファイル]、[フォルダ]、[ファイルおよびフォルダ]のうち、いずれにするかを示します。
次のサイズを超えるすべてのファイルをエクスクルード	指定したサイズより大きいファイルを除外できます。

差分ファイルの転送からのファイルとフォルダの除外

ファイルとフォルダが差分ファイルの転送に含まれないようにすることができます。一部の種類のファイルは、差分ファイルの転送によるメリットがないため、デフォルトで除外されています。

差分ファイルの転送から除外されたファイルとフォルダは、標準圧縮を使用して圧縮されます。ただし、圧縮のグローバルエクスクルードを設定することで、ファイルとフォルダが圧縮されないようにすることができます。

p.1641の「ファイルとフォルダの圧縮からの除外」を参照してください。

差分ファイルの転送からファイルとフォルダを除外する方法

- 1 ツールメニューの[グローバルエクスクルード]をクリックします。
- 2 [差分ファイルの転送]タブで、次のいずれかを行います。
 - 指定したサイズを超えるすべてのファイルを差分ファイルの転送から除外するには、[次のサイズを超えるすべてのファイルをエクスクルード]チェックボックスをオンにして、サイズをKB単位で入力します。

- 指定したサイズより小さいすべてのファイルを差分ファイルの転送から除外するには、[次のサイズに満たないすべてのファイルをエクスクルード]チェックボックスをオンにして、サイズを KB 単位で入力します。
- 新しい差分ファイルの転送のグローバルエクスクルードを追加するには、[追加]をクリックし、除外するファイルまたはフォルダを入力します。
p.1644 の「差分ファイルの転送の[グローバルエクスクルード]オプション」を参照してください。

3 [OK]をクリックします。

p.1621 の「差分ファイルの転送について」を参照してください。

差分ファイルの転送の[グローバルエクスクルード]オプション

ファイルとフォルダが差分ファイルの転送に含まれないようにすることができます。

p.1643 の「差分ファイルの転送からのファイルとフォルダの除外」を参照してください。

表 Q-49 差分ファイルの転送の[グローバルエクスクルード]オプション

項目	説明
フィルタ	差分ファイルの転送から除外される項目の名前を示します。
説明	差分ファイルの転送から除外される項目のユーザーによる説明を示します。
適用対象	除外される項目の適用対象を、[ファイル]、[フォルダ]、[ファイルおよびフォルダ]のうち、いずれにするかを示します。
次のサイズを超えるすべてのファイルをエクスクルード	指定したサイズより大きいファイルを除外できます。
次以下のすべてのファイルをエクスクルード	指定したサイズより小さいファイルを除外できます。

常に開いた状態のファイルの除外について

Windows XP/2000 を実行しているデスクトップコンピュータでは、次のフォルダおよびファイルの種類は通常開いた状態であり、DLO でバックアップすることができません。

- C:¥Windows¥System32¥Config
- レジストリハイブおよびログ(たとえば、*.DAT.LOG、*.LOG およびそのファイルシステム、SECURITY、DEFAULT、SAM、SOFTWARE など)
- C:¥Windows¥System32¥wbem

- *.EVT
- *.LOG (STI_Trace.log、WIADEBUG.LOG、WIASERVC.LOG など)
- *.DAT (NTUSER.DAT、USRCLASS.DAT など)

これらのファイルが **Desktop Agent** の保留中のファイルリストに常に含まれないようにするには、それらのファイルをグローバルエクスクルードリストまたはバックアップ選択項目のエクスクルードリストに追加します。

p.1607 の「[DLO のバックアップ選択項目について](#)」を参照してください。

p.1636 の「[DLOでのグローバルエクスクルードフィルタの設定について](#)」を参照してください。

DLO マクロを使用したグローバルエクスクルードの定義について

次のマクロは、一般的に、グローバルエクスクルードオプションを使用したファイルを除外する際に使用されますが、バックアップ選択項目に使用することもできます。

表 Q-50 グローバルエクスクルードのマクロ

マクロ	フォルダ
%TEMP%	現在ログオンしているユーザーの Temp ディレクトリ
%WINDIR%	Windows ディレクトリ 例:C:¥Windows または C:¥Winnt
%WEBTEMP%	現在ログオンしているユーザーの Web キャッシュ
%RECYCLED%	ごみ箱
%SYSTEM%	Windows システムディレクトリ 例:C:¥Windows¥system または C:¥Winnt¥system

Desktop Agent のユーザーの管理について

DLO 管理者は、DLO 管理コンソールで **Desktop Agent** ユーザーを管理します。

このインターフェースから、ユーザーまたはユーザーのグループに対して次のタスクを実行できます。

- DLO に手動で追加する
- 有効または無効にする
- 新しいネットワーク共有に移動する
- 別のプロファイルに割り当てる

Desktop Agent ユーザーは、自動ユーザー割り当てを使用して自動的に DLO に追加することも、DLO 管理コンソールから手動で追加することもできます。

p.1632 の「[自動ユーザー割り当てについて](#)」を参照してください。

p.1647 の「[1 人のデスクトップユーザーの DLO への追加](#)」を参照してください。

p.1648 の「[既存のネットワークストレージを持つ複数のデスクトップユーザーのインポート](#)」を参照してください。

p.1653 の「[Desktop Agent ユーザーの一覧表示](#)」を参照してください。

p.1649 の「[Desktop Agent ユーザーのプロファイルの変更](#)」を参照してください。

p.1649 の「[Desktop Agent ユーザーの有効化または無効化](#)」を参照してください。

p.1650 の「[DLO データベースからの Desktop Agent ユーザーの削除](#)」を参照してください。

p.1651 の「[新しいネットワークユーザーデータフォルダへの Desktop Agent ユーザーの移動](#)」を参照してください。

新しいネットワークユーザーデータフォルダの手動による作成

ネットワーク共有をネットワークユーザーのデータのフォルダとして使うには、フォルダに適切なセキュリティ属性がなければなりません。

ネットワークユーザーデータフォルダを手動で作成し、セキュリティ属性を設定する方法

- 1 バックアップファイルを格納するコンピュータにネットワーク共有を作成または配置します。
- 2 ネットワーク共有を右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 3 [共有]タブで、[このフォルダを共有する]が選択されていることを確認します。
- 4 [アクセス許可]をクリックします。
- 5 ユーザー「Everyone」に対して、フルコントロール、変更、読み取りのうち、いずれかのアクセス許可を選択します。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 [セキュリティ]タブで、[詳細設定]をクリックします。
- 8 [子オブジェクトに適用するアクセス許可エントリを親から継承し、それらをここで明示的に定義されているものに含める]チェックボックスがオフになっていることを確認します。
- 9 「Administrator」と「Everyone」を追加し、これらのユーザーにフルコントロールのアクセス許可を割り当てます。
- 10 共有フォルダで、データ格納場所を使用するユーザーごとにデータフォルダを作成するか、またはデータフォルダがすでに存在することを確認します。

- 11 ユーザーのデータフォルダを右クリックします。
- 12 [プロパティ]をクリックします。
- 13 [セキュリティ]をクリックします。
- 14 [子オブジェクトに適用するアクセス許可エントリを親から継承し、それらをここで明示的に定義されているものに含める]チェックボックスがオフになっていることを確認します。
- 15 「Administrator」と、ユーザーデータフォルダに割り当てるユーザーを共有アクセス許可のリストに追加します。
- 16 「Administrator」とユーザーにフルコントロールのアクセス許可を割り当てます。

1 人のデスクトップユーザーの DLO への追加

Desktop Agent ユーザーは、自動ユーザー割り当てを使用せずに手動で設定することもできます。既存のネットワークフォルダを、特定のユーザーのバックアップデータを保存するための専用フォルダとして使用できます。このようなネットワークフォルダは、DLO ネットワークユーザーデータフォルダになります。

1 人のデスクトップユーザーを DLO に追加する場合は、ユーザーデータフォルダを指定します。ただし、データ格納場所を使用することもできます。

デスクトップユーザーを手動で追加した後に割り当てた設定は、デスクトップユーザーが Desktop Agent を初めて実行したときに適用されます。

1 人のデスクトップユーザーを DLO に追加する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[ユーザー]をクリックします。
- 3 タスクペインの[ユーザータスク]の下にある[新規ユーザー]をクリックします。
- 4 必要なオプションを設定します。

p.1647 の「[新規ユーザー]オプション」を参照してください。

[新規ユーザー]オプション

新しいユーザーを追加するには次のオプションを完了する必要があります。

p.1647 の「1 人のデスクトップユーザーの DLO への追加」を参照してください。

表 Q-51 [新規ユーザー]オプション

項目	説明
このユーザーを有効にする	このユーザーが Desktop Agent を使うことを可能にします。ユーザーが Desktop Agent を使用できないようにするには、このチェックボックスをオフにしてください。
ユーザー	ユーザー名を示します。
プロファイル	このユーザーに割り当てるプロファイルを示します。
ネットワークユーザーデータフォルダ	このデスクトップユーザーのバックアップファイルがどこに保存されるかを示します。既存のフォルダを使用する必要があります。さらに、組織のニーズに応じて、フォルダにセキュリティ属性を設定する必要があります。たとえば、どのユーザーがフォルダにアクセスできるようにするかを指定します。 既存のネットワーク共有をネットワークユーザーデータフォルダとして使用する場合、データ格納場所は必要ありません。
データ格納場所	このユーザーのために使用するデータ格納場所を示します。新しいユーザーのネットワークユーザーデータフォルダがこのデータ格納場所に配置されます。

既存のネットワークストレージを持つ複数のデスクトップユーザーのインポート

既存のネットワーク上のデータ格納場所をすでに持つ新しいユーザーのリストをインポートするには、カンマ区切りファイルを使うことができます。この機能は、既存の **Desktop Agent** ユーザーのネットワークユーザーデータフォルダをインポートする場合には使用できません。

ファイルは次の形式で、ユーザーごとに次の情報を含む必要があります。

ユーザー名,ドメイン,プロファイル,ユーザーデータフォルダ

たとえば、JSmith,enterprise,Default,¥¥Server1¥¥Userdata¥¥smith などです。

複数のデスクトップユーザーをファイルからインポートする方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[ユーザー]をクリックします。
- 3 タスクペインの[ユーザータスク]の下にある[ユーザーのインポート(ウィザード使用)]をクリックします。
- 4 ウィザードのプロンプトに従います。

Desktop Agent ユーザーのプロファイルの変更

Desktop Agent のユーザーのプロパティを変更できます。

Desktop Agent ユーザーのプロファイルの変更

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[ユーザー]をクリックします。
ユーザーが結果ペインに一覧表示されます。
- 3 変更するユーザーを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]を選択します。
- 5 このユーザーのための新しいプロファイルを選択します。

[ユーザーのプロパティ]オプション

Desktop Agent のユーザーのプロパティを変更できます。

p.1649 の「[Desktop Agent ユーザーのプロファイルの変更](#)」を参照してください。

表 Q-52 [ユーザーのプロパティ]オプション

項目	説明
このユーザーを有効にする	このユーザーが Desktop Agent を使用できるようにします。使用できないようにするには、このオプションを選択解除します。
ユーザー	ユーザーの名前を表示します。このフィールドは編集できません。
プロファイル	このユーザーに適用するプロファイルを示します。
ネットワークユーザーデータフォルダ	ユーザーのバックアップファイルを保存する場所を表示します。この場所は変更できません。 新しい場所にユーザーを移動できます。 p.1651 の「 新しいネットワークユーザーデータフォルダへの Desktop Agent ユーザーの移動 」を参照してください。

Desktop Agent ユーザーの有効化または無効化

このオプションを使用すると、ユーザーによる Desktop Agent の使用を許可または禁止することができます。

Desktop Agent ユーザーを有効または無効にする方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[ユーザー]をクリックします。
ユーザーが結果ペインに一覧表示されます。
- 3 変更するユーザーを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]を選択します。
- 5 次のいずれかを実行します。
 - Desktop Agent ユーザーがデータをバックアップできないようにするには、[このユーザーを有効にする]チェックボックスをオフにします。
 - Desktop Agent ユーザーがデータをバックアップできるようにするには、[このユーザーを有効にする]チェックボックスをオンにします。

DLO データベースからの Desktop Agent ユーザーの削除

ユーザーを DLO データベースから永久に削除する場合は、ユーザーのエントリを DLO から削除します。ユーザーを DLO 管理コンソールデータベースから削除する前に、ユーザーのデスクトップから Desktop Agent をアンインストールしてください。アンインストールしないと、ユーザーが Desktop Agent を実行して、一致するユーザー割り当てが DLO に存在した場合に、ユーザーが再び自動的に追加されてしまいます。Desktop Agent をユーザーのコンピュータからアンインストールできない場合は、ユーザーを無効にしてください。

p.1649 の「[Desktop Agent ユーザーの有効化または無効化](#)」を参照してください。

DLO データベースからユーザーを削除する方法

- 1 Desktop Agent をユーザーのコンピュータからアンインストールします。
- 2 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 3 選択ペインで[ユーザー]をクリックします。
- 4 削除するユーザーをクリックします。
- 5 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。

- 6 ユーザーデータフォルダに格納されているデータを削除するには、[ユーザーデータフォルダに格納されたデータを削除]をオンにします。
[ユーザーデータフォルダに格納されたデータを削除]オプションがオンになっている場合、バックアップデータはネットワークユーザーデータフォルダから削除されますが、デスクトップユーザーデータフォルダからは削除されません。Desktop Agent をデスクトップコンピュータからアンインストールする場合は、デスクトップユーザーデータフォルダを削除するオプションが表示されます。
- 7 ユーザーを削除するには、[はい]または[すべてにはい]をクリックします。
ユーザーのデスクトップから最初に Desktop Agent をアンインストールしないでユーザーを削除すれば、そのユーザーのデスクトップの Desktop Agent は自動的に閉じます。

新しいネットワークユーザーデータフォルダへの Desktop Agent ユーザーの移動

Desktop Agent ユーザーを新しいネットワークユーザーデータフォルダに移動すると、各ネットワークユーザーデータフォルダの内容が新しいディレクトリに移動されます。新しいディレクトリには、既存のデータ格納場所またはネットワーク上の他のディレクトリを使用できます。

ネットワークユーザーのデータフォルダを UNC の場所に移動する場合、新しい場所の権限を修正する必要がある場合もあります。ローカルの管理者グループおよびファイルの所有者は、ネットワークユーザーのデータフォルダに対する読み取りおよび変更の権限を持っている必要があります。また、Everyone グループを削除する必要があります。

p.1646 の「新しいネットワークユーザーデータフォルダの手動による作成」を参照してください。

転送が完了した後、影響を受けた各 Desktop Agent は終了し、30 分以内に自動的に再起動します。

データの移動が正常に完了すると、古いネットワークユーザーデータフォルダのデータは削除されます。移動後に行うバックアップは、各ユーザーの新しい場所に保存されます。

1 つ以上の Desktop Agent ユーザーを新しいネットワークユーザーデータフォルダに移動する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[ユーザー]をクリックします。
- 3 移動するユーザーを 1 つ以上選択します。
- 4 タスクペインの[ユーザータスク]の下にある[ネットワークユーザーデータフォルダの移動]をクリックします。

- 5 新しいネットワークユーザーデータフォルダのための場所を選択します。
- 6 [開始]をクリックして、データの転送を開始します。

[ユーザーデータフォルダの移動]オプション

新しいネットワークユーザーデータフォルダに Desktop Agent ユーザーを移動できます。

p.1651 の「[新しいネットワークユーザーデータフォルダへの Desktop Agent ユーザーの移動](#)」を参照してください。

表 Q-53 [ユーザーデータフォルダの移動]オプション

項目	説明
ユーザー	選択したユーザーのドメインおよびユーザー名を指定します。
開始	現在のネットワークユーザーデータフォルダの場所を指定します。
ユーザーデータフォルダを既存のデータ格納場所に移動	ドロップダウンリストから既存のデータ格納場所を選ぶことができます。新しいネットワークユーザーデータフォルダは、移動する各ユーザーの新しいデータ格納場所に作成されます。
ユーザーデータフォルダの内容を代替の場所に移動	新しいデータ格納場所を指定できます。ボックス内にパスを入力するか、または[参照]をクリックして新しい場所を探して選択します。新しいネットワークユーザーデータフォルダは、移動する各ユーザーの新しいデータ格納場所に作成されます。

新しいコンピュータへのデスクトップユーザーの移動

デスクトップユーザーが新しいコンピュータを入手した場合、DLO を使用して、ユーザーデータを新しいコンピュータに移動することができます。この作業では、リストアッププロセスを使用して、ユーザーのバックアップデータが新しいコンピュータに移動されます。ユーザーがログオンすると、データは、元のコンピュータで配置されていた場所と同じ場所にリストアップされます。ユーザーがログオンし、メディアサーバーに接続する必要がない場合に、データの最終的なリストアップが自動的に実行されます。

新しいコンピュータにデスクトップユーザーを移動する方法

- 1 ユーザーデータをリストアップします。
 p.1657 の「[DLO 管理コンソールからのファイルおよびフォルダのリストアップ](#)」を参照してください。
- 2 [このユーザーデータを、新規 DLO インストール用の代替コンピュータに移動]オプションを選択します。

Desktop Agent ユーザーの一覧表示

Desktop Agent を使うように設定されているユーザーのリストを表示できます。

Desktop Agent ユーザーを一覧表示する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[ユーザー]をクリックすると、結果ペインにユーザーが一覧表示されます。

コンピュータのプロパティの変更

コンピュータのプロパティは、DLO 管理コンソールから表示および変更することができます。コンピュータのプロパティは、デスクトップコンピュータの所有者が割り当てられているプロファイルに基づきます。デスクトップユーザーは、プロファイルで十分な権限があればコンピュータのプロパティを変更できます。

コンピュータのプロパティを表示および変更する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[コンピュータ]をクリックします。
- 3 プロパティを変更するコンピュータを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。
 - [スケジュール]タブで、必要に応じてスケジュールを調整します。
p.1726 の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。
 - [オプション]タブで、ログとディスク領域使用状況のオプションを変更します。
p.1728 の「[Desktop Agent の\[オプション\]](#)」を参照してください。
 - [バックアップフォルダ]タブで、コンピュータのバックアップフォルダを表示します。
 - [バックアップ選択項目]タブで、コンピュータのバックアップ選択項目を変更します。
p.1610 の「[プロファイルへのDLOバックアップ選択項目の追加](#)」を参照してください。
プロファイルのバックアップ選択項目は表示されません。プロファイルでのみ直接修正することができます。
p.1619 の「[DLOのバックアップ選択項目の修正](#)」を参照してください。
 - [同期選択項目]タブで、コンピュータの同期選択項目を表示します。
同期選択項目は、管理コンソールからのみ表示できます。それらは **Desktop Agent** で設定されます。
p.1731 の「[デスクトップのユーザーデータの同期について](#)」を参照してください。

- [接続ポリシー]タブで、接続ポリシーを表示して修正します。
接続ポリシーが定義されているプロファイルは、プロファイルでのみ修正できません。
- p.1730 の「[接続ポリシーのカスタマイズ](#)」を参照してください。

デスクトップコンピュータの有効化または無効化

デスクトップコンピュータを無効にした場合でも、そのコンピュータにはまだ **Desktop Agent** がインストールされています。**Desktop Agent** は、ファイルのリストアおよび履歴の表示を行うために使用されますが、バックアップを実行したり、ユーザーが **Desktop Agent** の設定を変更することはできません。

デスクトップコンピュータを有効または無効にする方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[コンピュータ]をクリックします。
- 3 結果ペインで、有効または無効にするコンピュータを 1 台以上選択します。
- 4 選択したコンピュータを右クリックし、次のいずれかを実行します。
 - 選択したコンピュータ上で **Desktop Agent** を実行する場合は[有効にする]をクリックします。
 - 選択したコンピュータ上で **Desktop Agent** を実行しない場合は[無効にする]をクリックします。

DLO からのデスクトップコンピュータの削除

デスクトップコンピュータを DLO から削除すると、そのコンピュータは DLO データベースから削除され、バックアップファイルも削除されます。この機能は、ほとんどの場合、使用しなくなったデスクトップコンピュータに対して実行します。コンピュータを削除しても、**Desktop Agent** ソフトウェアが無効になるわけではありません。**Desktop Agent** によって次のバックアップが実行されると、コンピュータは DLO に再び追加されます。コンピュータをバックアップ対象から除外するには、コンピュータを削除するのではなく、無効にしてください。

デスクトップコンピュータを DLO から削除する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[コンピュータ]をクリックします。
- 3 結果ペインで、削除するコンピュータを 1 台以上選択します。

- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 5 選択したコンピュータおよびすべてのバックアップファイルを削除するかどうかを確認するメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。

DLO 管理コンソールからのデスクトップのバックアップ

DLO 管理コンソールを使用すると、1 台以上のデスクトップコンピュータ上で即時バックアップを実行することができます。そうすることで、管理者は、手動モードまたはスケジュールモードで稼動しているコンピュータのバックアップを強制的に行うことができます。

デスクトップコンピュータ上で即時バックアップを実行する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 選択ペインで[コンピュータ]をクリックします。
- 3 結果ペインで、即時バックアップを実行するコンピュータを 1 台以上選択します。
- 4 タスクペインの[コンピュータタスク]の下にある[今すぐバックアップを実行]をクリックします。

ブラックアウトウィンドウの設定

DLO では、選択したファイルサーバー、または特定の保守サーバーによって管理されるファイルサーバーに対するバックアップを一定期間停止するように設定することができます。この機能はブラックアウトウィンドウと呼ばれます。選択したリソースでブラックアウトウィンドウを設定すると、指定した期間内のネットワークユーザーデータフォルダへのバックアップが一時停止します。

ブラックアウトウィンドウは、作成時に指定したリソース固有です。2 つの異なるリソースに同じスケジュールを使用するには、リソースごとに設定する必要があります。

ネットワークリソースでブラックアウトウィンドウを設定する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ツールタスク]の下にある[ブラックアウトウィンドウ]をクリックします。
- 3 [ファイルサーバー]リストから、ブラックアウトウィンドウを設定するネットワークリソースを選択します。
- 4 次のいずれかを実行します。
 - 既存のスケジュールを編集する場合は、ドロップダウンメニューからそのスケジュールを選択します。
 - 新しいスケジュールを作成する場合は、[新規]をクリックします。
- 5 [スケジュール]で、ブラックアウトウィンドウを毎週または特定の日付に発生させるかどうかを指定します。

- 6 開始日時と終了日時を入力します。
- 7 [OK]をクリックします。

[ブラックアウトウィンドウ]オプション

DLO では、選択したファイルサーバー、または特定の保守サーバーによって管理されるファイルサーバーに対するバックアップを一定期間停止するように設定することができます。

p.1655 の「[ブラックアウトウィンドウの設定](#)」を参照してください。

表 Q-54 [ブラックアウトウィンドウ]オプション

項目	説明
ファイルサーバー	ブラックアウトウィンドウを適用できるファイルサーバーをリストします。
スケジュール	既存のブラックアウトウィンドウをリストします。
新規	新しいブラックアウトウィンドウを作成できます。
削除	[スケジュール]に表示されるブラックアウトウィンドウを削除できます。
スケジュールを有効にする	[スケジュール]に表示されるスケジュールを有効にします。
スケジュール	ブラックアウトを毎週または特定の日に実行するかどうかを示します。
開始時間	ブラックアウトの開始時間を示します。 ブラックアウトを特定の日付に実行する場合、ブラックアウトを開始する日付を入力します。 ブラックアウトを毎週実行する場合、ブラックアウトを開始する曜日を選択します。
終了時間	ブラックアウトの終了時間を示します。 ブラックアウトを特定の日付に実行する場合、ブラックアウトを終了する日付を入力します。 ブラックアウトを毎週実行する場合、ブラックアウトを終了する曜日を選択します。

ブラックアウトウィンドウのスケジュールの削除

ブラックアウトウィンドウのスケジュールは削除できます。

ブラックアウトウィンドウのスケジュールを削除する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[セットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[ツールタスク]の下にある[ブラックアウトウィンドウ]をクリックします。
- 3 [スケジュール]の下で、削除するスケジュールを選択します。
- 4 [削除]をクリックします。
- 5 [OK]をクリックします。

DLO 管理コンソールからのファイルおよびフォルダのリストア

管理者は、ファイルおよびフォルダを DLO 管理コンソールからデスクトップコンピュータにリストアできます。

DLO では、ファイルが別のアプリケーションで使用されていると、そのファイルは元の場所にリストアされません。

使用中のファイルが DLO で検出された場合は、次のいずれかのタスクを実行してファイルをリストアできます。

- ファイルをリストアする時間をスケジュールする。ファイルはコンピュータの再起動後にリストアされます。ファイルがリストアされる際に通知は行われません。
- 管理者アカウントを使用してデスクトップコンピュータにログオンする。管理者アカウントでログオンした後、リストアジョブを実行してロックされたファイルを上書きし、リストアします。
- 別のアプリケーションでファイルを閉じる。
- ファイルを代替の場所にリストアする。

DLO 管理コンソールからファイルおよびフォルダをリストアする方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[リストア]をクリックします。
- 2 [コンピュータ]ペインで、リストアするデータが格納されているデスクトップをクリックします。
- 3 [バックアップフォルダ]ペインのツリービューで、リストアするファイルが格納されているフォルダを選択します。
- 4 フォルダ全体をリストアするには、[バックアップフォルダ]ペインでフォルダをチェックします。
- 5 特定のファイルをリストアするには、[ファイルのバージョン]ペインでファイルをチェックします。

- 6 ファイルに複数のバージョンが存在する場合は、リストアするファイルのバージョンを選択します。

デスクトップのユーザーが元のファイルを削除しても、バックアップファイルは、ファイルのグルーミングプロセスによって削除されるまで保持されます。元のファイルが削除されてもバックアップファイルが利用可能である場合は、ファイルのアイコンに赤色の小さな x マークが付きます。

p.1614 の「[DLO のファイルのグルーミングについて](#)」を参照してください。

- 7 タスクペインの[リストアタスク]の下にある[ファイルのリストア]をクリックして、[リストア]ダイアログボックスを開きます。

- 8 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

p.1658 の「[\[リストア\]オプション](#)」を参照してください。

- 9 [OK]をクリックします。

ファイルまたはフォルダに対する NTFS 権限、または圧縮や暗号化などのディレクトリ属性をカスタマイズする場合は、リストア後にこれらのカスタマイズ内容を設定しなおす必要があります。PST ファイルに対してパスワードを使用する場合は、PST ファイルのリストア後にパスワードを設定しなおす必要があります。

- 10 [リストアの概略]ダイアログボックスで、選択したリストア設定を見なおし、次のいずれかを実行します。

- [印刷]をクリックしてリストアの概略を印刷します。
- [リストア]をクリックしてリストアを続行します。

- 11 リストアジョブが完了したら、[OK]をクリックします。

[リストア]オプション

管理者は、ファイルおよびフォルダを DLO 管理コンソールからデスクトップコンピュータにリストアできます。

p.1657 の「[DLO 管理コンソールからのファイルおよびフォルダのリストア](#)」を参照してください。

表 Q-55 [リストア]オプション

項目	説明
元のコンピュータにリストア	<p>選択したファイルまたはフォルダをバックアップ元のコンピュータにリストアします。</p> <p>ファイルまたはフォルダを元のデスクトップコンピュータにリストアする場合、ジョブは Desktop Agent にサブミットされます。ジョブは Desktop Agent がメディアサーバーに接続すると動作します。ジョブはデスクトップコンピュータがネットワークにあればただちに動作することがあります。デスクトップコンピュータがネットワークに接続されていない場合は、しばらくの間保留されます。</p>
元のフォルダにリストア	<p>元の場所にファイルまたはフォルダをリストアします。</p>
リストア先を代替フォルダに変更	<p>元のデスクトップの異なる場所にファイルまたはフォルダリストアします。</p> <p>ファイルをリストアしたいフォルダを参照できます。</p> <p>Windows ファイアウォールが無効になっている場合にのみ参照できます。</p>
代替コンピュータにリストア	<p>バックアップ元のコンピュータ以外のコンピュータにデータをリストアします。</p> <p>データが代替のコンピュータのフォルダにリストアされる時、DLO はネットワークユーザーのデータフォルダからリストアジョブをただちに処理します。このジョブは、Desktop Agent のキューには追加されません。</p>
リストア先を代替コンピュータのフォルダに変更	<p>代替コンピュータの選択したフォルダにデータをリストアします。</p>
このユーザーデータを、新規 DLO インストール用の代替コンピュータに移動	<p>新しいコンピュータにユーザーデータを移動します。</p> <p>p.1652の「新しいコンピュータへのデスクトップユーザーの移動」を参照してください。</p>
フォルダ構造を保持	<p>元のディレクトリ構造のまま、データをリストアします。このオプションをオフにした場合は、サブディレクトリ内のデータを含むすべてのデータが、指定したパスの 1 つのフォルダにリストアされます。</p>

項目	説明
すでに存在するファイルのリストア方法	<p>リストア用に選択されているファイルがリストア先フォルダにすでに存在する場合の処理を指定します。</p> <p>利用可能なオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 上書きしない リストア先フォルダにすでにあるファイルのリストアをキャンセルします。 ■ 確認 リストア先フォルダにファイルがすでにある場合、ファイルを上書きする前にユーザーにプロンプトを表示します。 ■ 上書き リストア先フォルダにファイルがすでにある場合、プロンプトを表示しないでファイルを上書きします。
削除したファイルのリストア	元のファイルが削除されている場合でもファイルのリストアします。
リストアしたファイルのセキュリティ属性を保持	<p>リストアされたファイルのセキュリティ情報を保持します。</p> <p>ソースファイルのセキュリティと宛先のセキュリティが競合する場合、ファイルを正常にリストアするには、このチェックボックスをオフにする必要がある場合があります。このオプションのチェックマークを外すと、リストアされるファイルからセキュリティ情報が削除されます。</p>

[リストアの概略]オプション

[リストアの概略]ダイアログボックスはリストア用に選択されているファイルのリストアします。

表 Q-56 [リストアの概略]オプション

項目	説明
設定	このリストアのジョブのために選択されている設定をリストします。
選択項目	リストア用に選択されているファイルのリストアします。
リストア	リストアジョブを開始します。
キャンセル	リストア処理をキャンセルします。ファイルはリストアされません。
印刷	選択されているプリンタで概略情報を印刷します。

DLO でリストアするファイルおよびフォルダの検索

検索機能を使って、リストアするデータを見つけることができます。

リストアするデスクトップファイルおよびフォルダを検索する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[リストア]をクリックします。
- 2 [コンピュータ]ペインで、検索の対象となるリストアファイルを含むデスクトップをクリックします。
- 3 タスクペインの[リストアタスク]の下にある[リストアするファイルを検索]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。
p.1661 の「[\[リストア\]検索オプション](#)」を参照してください。
- 5 [検索]をクリックします。
- 6 結果ペインで、リストアする項目にチェックマークを付けます。
[リストアするファイルの検索]ビューに同じファイルのエントリが重複して表示されることがあります。リストア対象としてどちらのファイルを選択しても結果は同じになります。
- 7 [リストア]をクリックします。
- 8 必要なオプションを選択します。
p.1657 の「[DLO 管理コンソールからのファイルおよびフォルダのリストア](#)」を参照してください。
- 9 [OK]をクリックします。

[リストア]検索オプション

検索機能を使って、リストアするデータを見つけることができます。

p.1661 の「[DLO でリストアするファイルおよびフォルダの検索](#)」を参照してください。

表 Q-57 [リストア]検索オプション

項目	説明
ファイル名に次の文字列が含まれるファイルを検索	検索するファイルまたはフォルダの名前を指定します。*proj.doc のように、ワイルドカードを使用することができます。
修正日	特定の期間に変更されたファイルを検索できます。
今日	今日修正されたファイルを検索できます。
過去 1 週間以内	過去 1 週間に修正されたファイルを検索できます。

項目	説明
次の期間内	範囲内の日に修正されたファイルを検索できます。
種類	リストにあるファイルの種類を検索できます。
サイズ	このチェックボックスをオンにして、次の情報を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 最初のドロップダウンメニューから、[一致]、[最小]または[最大]を選択します。 ■ ファイルサイズを入力します。 ■ [KB]、[MB]または[GB]を選択します。

DLO の緊急リストアおよびリカバリパスワードについて

DLO の緊急リストア機能を使用すると、設定データベースが失われた場合に、ファイルサーバーから **Desktop Agent** ユーザーデータをリカバリできます。また、**DLO 管理コンソール**を使用して削除したユーザーのデータを簡単にリストアすることができます。緊急リストア機能を使用するには、データベースの消失またはユーザーの削除前に、リカバリパスワードを設定しておく必要があります。ユーザーデータを別のメディアからリストアする場合、データをリカバリするには、ユーザーデータのバックアップ時に有効であったリカバリパスワードを使用する必要があります。

リカバリパスワードは、**DLO 管理コンソール**の初回の起動時に設定します。以前のバージョンの **DLO** では、リカバリパスワードは、**DLO コマンドラインインターフェース**を使用して手動で設定する必要がありました。各ユーザーの暗号化キーをファイルサーバーに安全に格納できるように、リカバリパスワードを使用してキーが暗号化されます。**DLO**では、ランダムに生成されるユーザー固有の暗号化キーを使用してユーザーデータが暗号化されます。暗号化キーは、メディアサーバー上の **DLO** の設定データベースに格納されません。暗号化キーは、暗号化された形式でファイルサーバーにも格納されます。

緊急リストア機能の使用時に、管理者はリカバリパスワードの入力を求められます。このパスワードを使用して、ユーザーの暗号化キーが解読されます。次に、その暗号化キーを使用してユーザーデータが解読されます。リカバリパスワードが設定されていない場合は、緊急リストア機能を使用して暗号化されたユーザーデータをリストアすることはできません。

リカバリパスワードの変更について

リカバリパスワードを変更する必要がある場合、管理者は、古いリカバリパスワードがファイルサーバーの古いバックアップに対して有効なままになることに注意する必要があります。

リカバリパスワードは、パスワードが漏えいした場合など、セキュリティ上の理由で変更する必要がある場合にのみ変更してください。できるだけ、リカバリパスワードは変更しな

いでください。リカバリパスワードを変更または設定しても、既存のユーザーデータのリストアには使用できません。実際には、リカバリパスワードを変更すると、同時に複数のリカバリパスワードが使用されることになる可能性があるため、リストアがより困難になる場合があります。

たとえば、DLO のインストール時にリカバリパスワード「pwd1」が設定されているとします。そのリカバリパスワードを使用して各ユーザーの暗号化キーが暗号化され、ファイルサーバーに格納されます。ファイルサーバーのバックアップ時に、すべてのバックアップコピーでリカバリパスワード「pwd1」が使用されます。その後、リカバリパスワードを「pwd2」に変更すると、ファイルサーバー上に存在するユーザーの暗号化キーが、新しいリカバリパスワードを使用して暗号化されるようになります。以降のファイルサーバーのバックアップでは、リカバリパスワード「pwd2」が使用されます。この結果、リカバリパスワードとして「pwd1」と「pwd2」の両方がファイルサーバーのバックアップに使用されていることとなります。緊急リストア機能の使用時には、管理者は、ファイルサーバーのバックアップ時に有効であったリカバリパスワードを使用する必要があります。

DLO 管理コンソールを使用してユーザーを削除した場合

DLO 管理コンソールを使用してユーザーを削除すると、そのユーザーに関連付けられているすべてのデータが削除されます。メディアサーバーに格納されている構成データとファイルサーバーに格納されているユーザーデータも同様に削除されます。削除されたユーザーのデータをリストアする方法は、リカバリパスワードが設定されているかどうかによって異なります。

DLO の緊急リストア機能を使用した 1 人のユーザーのデータのリカバリ

次の条件が満たされている場合、緊急リストア機能を使用して、削除されたユーザーのデータをリストアすることができます。

- ファイルサーバーのバックアップからユーザーデータをリストアできる。
- バックアップの作成前にリカバリパスワードを設定している。

p.1662 の「[DLO の緊急リストアおよびリカバリパスワードについて](#)」を参照してください。

DLO の緊急リストア機能を使用して 1 人のユーザーのデータをリカバリする方法

- 1 ユーザーデータをファイルサーバーの元の場所か、または他の一時格納場所にリストアします。
- 2 DLO コマンドラインインターフェースを使用して、データを DLO にリストアします。

```
dlocommandu -emergencyrestore <usersharepath> -w <RecoveryPassword> -ap <destination-path>
```

DLO の緊急リストア機能を使用しない 1 人のユーザーのデータのリカバリ

リカバリパスワードが設定されていないか、または失われた場合、ユーザーを削除する前の特定の時点にメディアサーバーとファイルサーバーをリストアする必要があります。その後、削除されたユーザーのデータをリストアできます。

DLO の緊急リストア機能を使用せずに 1 人のユーザーのデータをリカバリする方法

- 1 ファイルサーバーとメディアサーバーの両方をオフラインにします。
- 2 ファイルサーバーとメディアサーバーの両方をバックアップします。

バックアップに DLO の設定データベースおよびすべてのユーザーデータが含まれていることを確認してください。データのリカバリ後に、このバックアップを使用して DLO を現在の状態にリストアします。DLO データをバックアップしていない場合は、DLO を現在の状態に戻すことができなくなる可能性があります。
- 3 ユーザーデータをファイルサーバーにリストアします。

可能な場合は、リストア対象のユーザーのデータのみをリストアします。可能かどうか不明な場合は、ファイルサーバー上のボリューム全体をリストアできます。ただし、手順 2 でボリューム全体がバックアップされている場合に限りです。
- 4 メディアサーバーに設定データベースをリストアします。

デフォルトのデータベースパスは、**C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\Data** です。
- 5 メディアサーバーを再起動します。
- 6 DLO 管理コンソールを使用してユーザーデータをリストアします。[代替コンピュータにリストア]を選択して、データを一時格納場所にリストアします。
- 7 ファイルサーバーとメディアサーバーの両方を最新の状態にリストアします。

システムディスク以外のディスクで障害が発生しているか、ディスクが破損している場合のメディアサーバーまたはファイルサーバーのリカバリ

破損したメディアサーバーまたはファイルサーバーはリカバリできます。メディアサーバーは設定データベースを格納します。ファイルサーバーはユーザーデータを格納します。

表 Q-58 メディアサーバーまたはファイルサーバーをリカバリする方法

手順	説明
手順 1	障害が発生したディスクを修復または交換します。

手順	説明
手順 2	バックアップコピーからディスク全体をリストアします。
手順 3	コンピュータを再起動します。

ハードディスクドライブが失敗した場合またはコンピュータを交換する必要がある場合のメディアサーバーのリカバリ

破損したメディアサーバーはリカバリできます。メディアサーバーは設定データベースを格納します。

ハードディスクドライブで障害が発生しているか、またはメディアサーバーコンピュータを新しいコンピュータに交換する必要がある場合にメディアサーバーをリカバリする方法

- 1 オペレーティングシステムソフトウェアを使用してコンピュータをセットアップします。障害が発生したメディアサーバーと同じコンピュータ名を使用してください。
- 2 新しいメディアサーバーに DLO をインストールします。障害が発生したメディアサーバーにインストールされていた DLO と同じバージョンの DLO を使用してください。
- 3 DLO データベースファイルをリストアし、DLO のインストール時に作成されたデータベースファイルを上書きします。デフォルトのデータベースパスは、**C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\Data** です。
- 4 コンピュータを再起動します。

ハードディスクドライブが失敗した場合またはコンピュータを交換する必要がある場合のファイルサーバーのリカバリ

破損したファイルサーバーはリカバリできます。ファイルサーバーはユーザーデータを格納します。

ハードディスクドライブで障害が発生しているか、またはファイルサーバーコンピュータを新しいコンピュータに交換する必要がある場合にファイルサーバーをリカバリする方法

- 1 オペレーティングシステムソフトウェアを使用してコンピュータをセットアップします。障害が発生したファイルサーバーと同じコンピュータ名を使用してください。
- 2 ファイルサーバーに DLO 保守サーバーがインストールされていた場合は、コンピュータに DLO 保守サーバーをインストールします。障害が発生したファイルサーバーにインストールされていた DLO と同じバージョンの DLO を使用してください。
- 3 DLO ファイルデータをリストアします。

[履歴]ペインのオプションと[ジョブ履歴]ペインのオプション

DLO 管理コンソールの[履歴]ビューを使用して、Desktop Agent ジョブの状態に関する情報を表示します。履歴ログは Desktop Agent を実行する各デスクトップによって生成されます。[履歴]ビューには、デスクトップごとにコンピュータ履歴とジョブ履歴が表示されます。

DLO 管理コンソールか Desktop Agent コンソールのいずれかで履歴ログを表示できます。履歴ログをフィルタにかけて古いログやあまり重要でないログを表示しないようにしたり、バックアップジョブまたはリストアジョブのログのみを表示することができます。

デフォルトでは、履歴ログは、ジョブが実行されたとき、および最後の更新から 1 時間が経過した後に更新されます。ただし、ジョブの状態が変更された場合は、履歴ログがただちに更新され、新しい状態が反映されます。

[履歴]ビューには、次のような概略情報が提供されます。

表 Q-59 [履歴]ペイン

項目	説明
ユーザー	メッセージを生成したデスクトップにログオンしているユーザーのユーザー名。
コンピュータ	このメッセージを生成したデスクトップの名前。
最後のバックアップの結果	完了したバックアップの結果。成功、警告、失敗、キャンセルなど。
プロファイル	デスクトップにログオンしているデスクトップユーザーが属しているプロファイルの名前。 p.1590 の「DLO プロファイルについて」を参照してください。
バックアップモード	プロファイルで指定されているバックアップモード。 バックアップモードには次の項目が含まれています。 <ul style="list-style-type: none"> ■ ファイルの変更時:バックアップはファイルが変更されるたびに行われます。 ■ スケジュール:バックアップはスケジュールに従って行われます。 ■ 手動:バックアップはデスクトップユーザーによって行われます。
デスクトップデータフォルダのサイズ	デスクトップユーザーデータフォルダの現在のサイズ。
ネットワークデータフォルダのサイズ	ネットワークユーザーデータフォルダの現在のサイズ。

項目	説明
ネットワークデータフォルダのパス	ネットワークユーザーデータフォルダの場所。

[ジョブ履歴]ペインには次の情報が表示されます。

表 Q-60 [ジョブ履歴]ペイン

項目	説明
開始時刻	ジョブが開始された日時。
終了時刻	ジョブが終了した日時。
操作	バックアップやリストアなど、このジョブで実行された操作。
状態	実行中、完了、エラーで完了、警告で完了、キャンセル、失敗など、ジョブの現在の状態。
保護されたファイル(デスクトップ)	ジョブの実行中にデスクトップユーザーデータフォルダにコピーされたファイルの数。
保護されたサイズ(デスクトップ)	ジョブの実行中にデスクトップユーザーデータフォルダにコピーされたデータの総バイト数。
保護されたファイル(ネットワーク)	ジョブの実行中にネットワークユーザーデータフォルダにコピーされたファイルの数。
保護されたサイズ(ネットワーク)	ジョブの実行中にネットワークユーザーデータフォルダにコピーされたデータの総バイト数。
エラー	ジョブの実行中に生成されたエラー数(発生した場合)。

履歴ログの表示

デスクトップコンピュータの各ジョブに対して履歴ログが一覧表示されます。

DLO 管理コンソールで履歴ログを表示する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[履歴]をクリックします。
- 2 [履歴]ペインで、履歴ログを表示するコンピュータを選択します。
- 3 [ジョブ履歴]ペインで、表示するログをクリックします。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[履歴ログファイルを表示]をクリックして、ログファイルビューアにこのジョブのすべてのログメッセージを表示します。

- 5 結果をフィルタにかける場合は、必要なオプションを選択します。
 p.1668 の「[ログファイルビューア]オプション」を参照してください。
- 6 [検索]をクリックします。
- 7 詳細な情報を表示するには、ログエントリをダブルクリックします。
- 8 [閉じる]をクリックします。

[ログファイルビューア]オプション

コンピュータで動作する各ジョブのログファイルを表示できます。

p.1667 の「履歴ログの表示」を参照してください。

表 Q-61 [ログファイルビューア]オプション

項目	説明
すべてのログファイル	ログファイルビューアにすべてのログエントリを示します。
現在のログファイル	現在のログファイルにあるログエントリのみを検索します。
タイムスタンプ	指定の期間以内のログエントリのみを検索します。 利用可能なオプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 今日: 今日作成されたログファイルのみを表示します。 ■ 先週: 先週作成されたすべてのログファイルを表示します。 ■ 日付: 指定した期間に作成されたすべてのログファイルを表示します。
種類	示された種類のログのみを表示します。 利用可能な選択項目はログファイルによって異なりますが、次のような選択項目を利用できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップ ■ リストア ■ ユーザーの移動 ■ 保守
ファイル名に含まれる文字列	ファイル名かファイル名の種類によってファイルを検索します。ワイルドカードを使用することができます。 例:*gold.doc ワイルドカードを使用する場合は、[*]を使用してください。たとえば、*.tmpを指定すると.tmpという拡張子を持つファイルがすべて表示されますが、.tmpを指定すると.tmpという名前のファイルのみが表示されます。

項目	説明
検索範囲	<p>表示されるログファイルを次のいずれかの種類のログエントリに制限します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 情報エントリのみ ■ エラーエントリと警告エントリのみ ■ エラーエントリのみ ■ 警告が発生したエントリのみ ■ ローカルデータフォルダのエントリのみ ■ ローカルデータフォルダのエラーエントリのみ ■ ネットワークデータフォルダのエントリのみ ■ ネットワークデータフォルダのエラーエントリのみ

ジョブ履歴表示フィルタの設定

ジョブの[履歴]ビューでは、フィルタをかけて、参照したい種類のジョブだけを表示することができます。ジョブの種類、ジョブの実行中に受信したアラート、ジョブが実行された時間帯によってフィルタを設定することができます。

ジョブ履歴表示フィルタを設定する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[履歴]をクリックします。
- 2 履歴を表示するデスクトップをクリックします。
- 3 タスクペインの[ジョブ履歴の表示フィルタ]の下にある次のいずれかをクリックします。

すべてのジョブを表示	選択したデスクトップで実行されたジョブすべての履歴ログを一覧表示します。これらのジョブには、バックアップ、同期、リストアまたはユーザーの移動が含まれます。
バックアップジョブを表示	選択したデスクトップで実行されたバックアップジョブのみの履歴ログを一覧表示します。
リストアジョブを表示	選択したデスクトップで実行されたリストアジョブのみの履歴ログを一覧表示します。

- 4 次のオプションを1つ以上選択し、受信したアラートに基づいてジョブ履歴のログをフィルタにかけます。

成功ジョブを表示 選択したデスクトップで成功したジョブすべての履歴ログを一覧表示します。

警告が発生したジョブを表示 選択したデスクトップで警告が発生したジョブすべての履歴ログを一覧表示します。

エラーが発生したジョブを表示 選択したデスクトップでエラーが発生したジョブすべての履歴ログを一覧表示します。

キャンセルされたジョブを表示 選択したデスクトップでキャンセルされたジョブすべての履歴ログを一覧表示します。

- 5 次のいずれかを選択して、フィルタ対象となる表示期間を選択します。

過去 24 時間を表示 過去 24 時間以内に生成された履歴ログで、その他すべてのフィルタ条件を満たすものを一覧表示します。

過去 7 日間を表示 過去 7 日間以内に生成された履歴ログで、その他すべてのフィルタ条件を満たすものを一覧表示します。

すべて表示 その他すべてのフィルタ条件も満たす履歴ログをすべて一覧表示します。

履歴ログの検索

ログファイルビューアを使用すると、ジョブのリストを絞り込んで必要なジョブのみを表示することができます。

ログファイルを検索する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[履歴]をクリックします。
- 2 タスクペインの[一般タスク]の下にある[ログファイルを検索]をクリックして、ログファイルビューアを表示します。
- 3 フィルタオプションを設定します。
p.1668 の「[ログファイルビューア]オプション」を参照してください。
- 4 [検索]をクリックします。
- 5 詳細な情報を表示するには、ログエントリをダブルクリックします。
- 6 [閉じる]をクリックします。

DLO 管理コンソールでのアラートの監視について

管理者の介入が必要な場合は、DLO にアラートが表示されます。アラートには、ジョブに関する情報が表示されるため、DLO 管理者は、アラートを見れば DLO ジョブの現在の状態を把握することができます。

アラートは、一般的な情報を提供するために生成される場合や、問題に回答して生成される場合があります。問題が原因でアラートが生成された場合、そのアラートには問題についての情報が含まれます。また、問題を修正する推奨方法が含まれることもあります。

DLO 管理者は、すべてのアラートを表示するか、または表示するアラートの種類を制限するかを選択できます。

[アクティブアラート]には、システム内でアクティブで、オペレータの回答が必要なアラートが表示されます。[アラート履歴]には、応答済みのアラートまたは自動的にシステムから削除されたアラートが表示されます。

また、画面の下のステータスバーには、アラートアイコンが表示されます。ステータスバーに表示されるアイコンは、[アクティブアラート]リストで最も重大なアラートの種類を示します。したがって、現在のアラートまたは最新のアラートが最も重大なアラートでない場合、ステータスバーに表示されるアイコンは、アラートリストの最新のアラートを示すアイコンと一致しません。

Desktop Agent では、DLO での負荷を最小化するためにアラートをフィルタにかけます。デフォルトでは、各種類のアラートの表示が 24 時間に 1 回に限定されています。たとえば、[デスクトップユーザーデータフォルダのディスクの空き容量がありません]というアラートは、Desktop Agent を実行しているデスクトップから、24 時間ごとに 1 回表示されます。

メモ: [バックアップの完了]アラートや[リストアの完了]アラートをフィルタにかけるとはできません。これらのアラートを有効にした場合は、バックアップまたはリストアジョブが完了するたびにアラートが生成されます。

指定の日数を経過したアクティブアラートは、クリアされ、アラート履歴に移動されます。クリアされてから指定の日数が経過した履歴内のアラートは削除されます。履歴内のアラートがクリアされてから指定の日数(デフォルトでは 7 日)が経過すると、ファイルのバックアップと削除を行う Backup Exec 完全バックアップジョブによってそれらのアラートは削除されます。

アラートを手動でクリアした場合は、クリアしたアラートをアラート履歴に移動します。アラートを手動で削除すると、削除したアラートは永久に取り除かれます。

アラートの発生時に受信者に通知するように DLO をセットアップすることができます。

アラートカテゴリ

次の表は DLO アラートカテゴリをリストしたものです。

表 Q-62 アラートカテゴリ

アラートの種類	説明
情報	バックアップまたはリストアジョブの成功など、予定どおりの操作が発生したことを通知します。
警告	潜在的な問題を通知します。たとえば、一定の期間内にデスクトップでバックアップが完了していない場合や、ディスククォータ制限に近づいている場合にアラートが生成されます。
エラー	アプリケーションやそのデータが現在危険にさらされているか、差し迫った危険があることを通知します。たとえば、エラーは、バックアップの完了に失敗した場合、デスクトップのディスククォータ制限を超過した場合などに生成されます。

DLO の情報アラート

次の表は DLO の情報アラートの種類をリストしたものです。

表 Q-63 DLO の情報アラートの種類

アラート	説明
バックアップジョブが完了しました。	バックアップジョブが正常に完了しました。
リストアジョブがキューに追加されました。	リストアジョブがメディアサーバーで開始されました。
リストアジョブが完了しました。	リストアジョブが正常に完了しました。
PST ファイルは Outlook で設定されていないためスキップされました。	デスクトップコンピュータの PST ファイルは、Microsoft Outlook で設定されていないため、バックアップされませんでした。
ユーザーが設定されました。	新しいユーザーが接続され、正常に設定されました。
バックアップジョブが完了しました。	バックアップジョブが正常に完了しました。
リストアジョブがキューに追加されました。	リストアジョブがメディアサーバーで開始されました。
リストアジョブが完了しました。	リストアジョブが正常に完了しました。

アラート	説明
PSTファイルはOutlookで設定されていないためスキップされました。	デスクトップコンピュータのPSTファイルは、Microsoft Outlookで設定されていないため、バックアップされませんでした。

DLO の警告

次の表は DLO の警告の種類をリストしたものです。

表 Q-64 DLO の警告

アラート	説明
バックアップジョブが完了しました (警告の発生あり)。	バックアップジョブは完了しましたが、警告が発生しました。
リストアジョブが完了しました (警告の発生あり)。	リストアジョブは完了しましたが、警告が発生しました。
過去 1 時間にリストアジョブが行われていません。	リストアジョブがサブミットされましたが、1 時間が経過してもリストアジョブは完了していません。
過去 12 時間にリストアジョブが行われていません。	リストアジョブがサブミットされましたが、12 時間が経過してもリストアジョブは完了していません。
過去 24 時間にリストアジョブが行われていません。	リストアジョブがサブミットされましたが、24 時間が経過してもリストアジョブは完了していません。
デスクトップユーザーデータフォルダが格納制限に近づいています。	ユーザーのデスクトップユーザーデータフォルダ内に格納されているバックアップデータの量が、指定したサイズ制限に近づいています。
デスクトップユーザーデータフォルダのディスクの空き領域が少なくなっています	デスクトップユーザーデータフォルダを含むボリュームの空き領域が少なくなっています。
評価期間を毎日通知	この事前通知は、Symantec Desktop and Laptop Option の評価期間の残りの日数を示します。
評価期間が終了しました	DLO の評価期間が終了しました。DLO を引き続き使用するにはライセンスが必要です。
ネットワークユーザーデータフォルダが格納制限に近づいています。	ユーザーのネットワークユーザーデータフォルダ内に格納されているバックアップデータの量が、指定したサイズ制限に近づいています。

アラート	説明
ネットワークユーザーデータフォルダのディスクの空き領域が少なくなっています	ユーザーのネットワークユーザーデータフォルダの空き領域がほとんどありません。
過去 14 日間にバックアップが行われていません	ユーザーのデータが過去 14 日間バックアップされていません。ユーザーが複数のマシンを使用している場合、この警告はユーザーがアクセスする各マシンで表示されます。
過去 28 日間にバックアップが行われていません	ユーザーのデータが過去 28 日間バックアップされていません。ユーザーが複数のマシンを使用している場合、この警告はユーザーがアクセスする各マシンで表示されます。
過去 7 日間にバックアップが行われていません	ユーザーのデータが過去 7 日間バックアップされていません。ユーザーが複数のマシンを使用している場合、この警告はユーザーがアクセスする各マシンで表示されます。
対応する自動ユーザー割り当てがありません	このユーザーの条件に合う自動ユーザー割り当てが存在しません。新しい自動ユーザー割り当てを作成するか、既存のものを編集してこのユーザーの条件に追加します。

DLO のアラート

次の表は DLO のアラートの種類をリストしたものです。

表 Q-65 DLO のアラート

アラート	説明
バックアップジョブが完了しました (エラーの発生あり)。	バックアップジョブは完了しましたが、エラーが発生しました。
リストアジョブが完了しました (エラーの発生あり)。	リストアジョブは完了しましたが、エラーが発生しました。
デスクトップユーザーデータフォルダのディスクの空き領域がありません。	デスクトップユーザーデータフォルダを含むボリュームの空き領域がありません。現在のファイルをバックアップするための空きディスク容量が不足しています。ファイルは、ネットワークユーザーデータフォルダに直接コピーされます。
デスクトップユーザーデータフォルダの格納制限に到達しました。	新しいリビジョンをデスクトップユーザーデータフォルダに追加したことにより、指定したディスクストレージの制限に到達しました。

アラート	説明
ファイル名、ディレクトリ名またはボリュームラベルの構文が正しくありません。	ストレージシステムで注意を要する問題が発生しているか、SRMソフトウェアがファイル名を拒否したことを示します。後者の場合、拒否されたファイルを DLO のグローバルエクスクルードリストに追加する必要があります。 p.1636の「 DLOでのグローバルエクスクルードフィルタの設定について 」を参照してください。
ネットワークユーザーデータフォルダのディスクの空き領域がありません	ネットワークユーザーデータフォルダを含むボリュームの空き領域がありません。現在のファイルをバックアップするための空きディスク容量が不足しています。
ネットワークユーザーデータフォルダの格納制限に到達しました。	新しいリビジョンをネットワークユーザーデータフォルダに追加したことにより、指定したディスクストレージの制限に到達しました。
Desktop Agent を設定できません。	新しいユーザーの接続時に、不明な理由で正しい設定ができません。

アラートの設定

受信するアラートの種類を選択できます。さらに、アラートの受信者を有効にできます。

アラートを設定する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 タスクペインの[アラートタスク]の下にある[アラートの設定]をクリックします。
- 3 受信するアラートを選択します。受信しないアラートのチェックボックスはオフにします。
- 4 選択したアラートが生成された場合に受信者に通知を送信するには、次の手順を実行します。
 - リストからアラートを 1 つ以上選択します。複数のアラートを選択するには、項目を 1 つクリックし、<Ctrl> または <Shift> キーを押しながら他の項目をクリックします。
 - [選択したアラートの通知を受信者に送信する]チェックボックスをオンにします。
 - アラートの通知を受信する受信者を選択します。

受信者を選択する前に、アラートの通知を設定する必要があります。

p.1679の「[DLOにおける通知受信者の設定について](#)」を参照してください。

- 5 [OK]をクリックします。

[アラートの設定]オプション

受信するアラートの種類を選択できます。さらに、アラートの受信者を有効にできます。
p.1675 の「[アラートの設定](#)」を参照してください。

表 Q-66 [アラートの設定]オプション

項目	説明
アラートカテゴリ	受信するように選ぶことができるアラートすべてをリストします。
受信者	アラートを受信するように選ぶことができる受信者すべてをリストします。
選択したアラートの通知を受信者に送信する	選択した受信者に選択したアラートをDLOで送信できます。
新規	新しい受信者を設定することを許可します。
削除	リストから選択した受信者を削除できます。
プロパティ	選択した受信者のプロパティを表示または変更することを許可します。

DLO アラートの管理

DLO 管理コンソールの[アラート]ビューでは、アラートのサブセットの表示、アラートのクリアおよび履歴ログへのアラートの移動ができます。

DLO アラートを表示する方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アクティブアラート]をクリックしてアクティブアラートを表示するか、[アラート履歴]をクリックして、クリアされているアラートを表示します。
指定の日数を経過したアラートは、クリアされ、アラート履歴に移動されます。日数の指定は Backup Exec 管理コンソールで行います。
- 3 アラートを種類別にフィルタ処理するには、アクティブアラートまたはアラート履歴の[表示フィルタ]で 1 つ以上のオプションを選択します。

エラーを表示	選択した表示のエラーアラートを一覧表示します。
警告を表示	選択した表示の警告アラートを一覧表示します。
情報を表示	選択した表示について情報アラートを一覧表示します。

- 4 アラートのプロパティを表示するには、[アクティブアラート]または[アラート履歴]リストのアラートを右クリックして、プロパティを選択します。
- 5 ログファイルがアラートに関連付けられている場合は、ログファイルへのリンクが表示されます。このリンクをクリックして、ログファイルを表示します。
- 6 [アラート情報]ダイアログボックスを閉じるには、[閉じる]をクリックします。

DLO アラートのクリア

アラートは、指定した期間が経過するとデフォルトで[アラート履歴]に移動します。ただし、一部のアラートが頻繁に表示されて、[アクティブアラート]ペインに空きがなくなることがあります。このようなアラートは、自動的に移動される前に、手動でクリアして[アラート履歴]ペインに移動することができます。

DLO アラートをクリアする方法

- 1 DLO ナビゲーションバーの[アラート]をクリックします。
- 2 [アラート]ビューをフィルタにかけます。
p.1676 の「[DLO アラートの管理](#)」を参照してください。
- 3 アラートリストから、クリアするアラートを 1 つ以上選択します。
- 4 タスクペインの[アラートタスク]で、次のいずれかを実行します。
 - [応答]を選択して、選択したアラートのみをクリアします。
 - [すべてに OK を応答]を選択して、すべてのアラートの状態をクリア済みにします。

[アラート情報]オプション

アラートについての情報を表示し、それらに応答できます。

表 Q-67 [アラート情報]オプション

項目	説明
操作	アラートが適用される操作の種類をリストします。
応答	アラートをクリアできます。
コンピュータ	アラートが適用されるコンピュータの名前をリストします。
ユーザー	アラートの発生時にログオンしていたユーザーのユーザー名をリストします。
時間	アラートが起きた時間をリストします。

DLO アラートの通知方式の設定について

DLO には、アラートを通知する方式がいくつか用意されています。

次のいずれかの方法を選ぶことができます:

- **SMTP**
SMTP 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、POP3 メールサーバーなどの、SMTP 準拠の電子メールシステムが必要です。
- **MAPI**
MAPI 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、Microsoft Exchange などの、MAPI 準拠の電子メールシステムが必要です。
- **Lotus Notes (VIM) 電子メール**
VIM 通知方式を使用してアラート通知メッセージを受信するには、VIM (Lotus Notes) 準拠の電子メールシステムが必要です。
- **ページャ**
ページャ通知方式を使用するには、システムにモデムが接続され正しく設定されている必要があります。ページャ通知が正常に機能するように、モデムがページングサービスと正しく通信できることを確認してください。ページャ通知を設定する前に、推奨されるモデムの製品に関する情報をページングサービスにお問い合わせください。
- **プリンタ**
- **Net Send**

通知を使用するには、次の手順に従います。

- 受信者への通知に使用する方式を設定します。プリンタ、Net Send による通知は、事前の設定は不要です。
- 受信者を設定します。受信者は、個人、コンピュータ (コンソール)、プリンタまたはグループです。それらは 1 つ以上の通知方式を使うように設定できます。
- 通知するアラートまたはジョブに受信者を割り当てます。

p.1678 の「[DLO アラートの通知方式の設定](#)」を参照してください。

DLO アラートの通知方式の設定

DLO アラートの通知方式を設定する方法

- 1 ツールメニューの[電子メールおよびページャによる通知]をクリックします。
- 2 設定する通知方式のタブを選択し、その方式のオプションを設定します。
利用可能な方式は次のとおりです。
 - SMTP
 - MAPI

DLO をインストールした後 Outlook をインストールした場合は、DLO Administration Service を停止し、再起動する必要があります。

- Lotus Notes (VIM) 電子メール
- ページャ
- プリンタ
- Net Send

3 [OK]をクリックします。

DLO における通知受信者の設定について

受信者は、個人、Net Send、プリンタまたはグループです。受信者を設定するには、通知方式を選択し、制限事項を定義します。受信者のエントリを作成し、アラートまたはジョブに割り当てます。

通知先として定義できる受信者の種類は次のとおりです。

表 Q-68 受信者の種類

種類	説明
個人	SMTP、MAPI、VIM またはページャなどの通知方式を受信者に設定する場合に選択します。なお、これらの通知方式を受信者に指定する前に、Backup Exec 側で通知方式を設定しておく必要があります。
SNMPトラップ	通知先として設定されているコンピュータに送信されます。
Net Send	通知の受信者となるコンピュータです。
プリンタ	通知出力用のプリンタです。
グループ	複数の受信者をまとめたグループです。

SMTP メールによる DLO アラート通知を受信する個人の設定

SMTP 通知方式を設定している場合は、SMTP 電子メール通知メッセージを受信する個人を設定することができます。

SMTP メールによるアラート通知を受信する個人を設定する方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックします。
- 3 [個人]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

- 5 [名前]フィールドに、設定する受信者の名前を入力します。
- 6 [SMTP メール]タブで、必要なオプションを選択します。
- 7 [OK]をクリックします。

MAPI メールによる DLO アラート通知の個人受信者の有効化

MAPI 通知方式を設定している場合は、MAPI 電子メール通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

MAPI メールによる DLO アラート通知の個人受信者を有効にする方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックします。
- 3 [個人]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [名前]フィールドに、設定する受信者の名前を入力します。
- 6 [MAPI メール]タブで、必要なオプションを設定します。
- 7 [OK]をクリックします。

VIM メールによる DLO アラート通知を受信する個人の設定

VIM 通知方式を設定した場合は、VIM 電子メール通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

VIM メールによるアラート通知を受信する個人を設定する方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックします。
- 3 [個人]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [名前]フィールドに、設定する受信者の名前を入力します。
- 6 [VIM メール]タブで、必要なオプションを選択します。

ページャによる DLO アラート通知の個人受信者の有効化

ページャによる通知方式を設定した場合は、ページャによる通知メッセージを受信する個人受信者を設定することができます。

ページャによる DLO アラート通知の個人受信者を有効にする方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックし、[個人]をクリックします。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 [名前]フィールドに、設定する受信者の名前を入力します。
- 5 [ページャ]タブで、必要なオプションを設定します。
- 6 ページャの詳細設定を行うには、[高度な設定]をクリックして、必要なオプションを設定します。
- 7 [OK]をクリックして[詳細なページャ情報]ダイアログボックスで設定した内容を保存し、さらに[OK]をクリックしてページャの設定を保存します。

DLO アラート通知を受信する SNMP トラップの設定

通知メッセージを受信するように SNMP トラップを設定することができます。

アラート通知を受信する SNMP トラップを設定する方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックします。
- 3 [SNMP トラップ]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 必要なオプションを選択します。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 [閉じる]をクリックします。

DLO アラート通知を受信するための Net Send の有効化

Net Send を設定して、ターゲットのコンピュータまたはユーザーに通知メッセージを送信することができます。

メモ: インターネットのポップアップ広告ブロックソフトウェアがターゲットコンピュータにインストールされている場合、Net Send 通知メッセージは表示されません。

アラート通知を受信するために Net Send を有効にする方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックし、[NetSend]をクリックします。
- 3 [OK]をクリックします。

- 4 必要なオプションを選択します。
- 5 [OK]をクリックします。

DLO アラート通知を受信するためのプリンタの有効化

インストールされているプリンタを、通知の受信者として選択することができます。ただし、DLO では、ファックスプリンタデバイスはサポートされません。選択できるのは、DLO サービスアカウントと同じユーザー名とパスワードを使用するように設定されているプリンタのみです。

アラート通知を受信するためにプリンタを有効にする方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックし、[プリンタ]をクリックします。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 必要なオプションを選択します。

DLO アラート通知を受信するグループの設定

受信者をグループのメンバーとして追加することによってグループを構成できます。グループには1つ(人)以上の受信者が含まれ、グループ内のすべての受信者に通知メッセージが送信されます。個人受信者、コンピュータ、プリンタおよびその他のグループを任意に組み合わせてグループを構成することができます。

アラート通知を受信するグループを設定する方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 [新規]をクリックし、[グループ]をクリックします。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 [グループ名]フィールドに、通知の送信先グループの名前を入力します。
- 5 次のいずれかを実行します。

グループにメンバーを追加する方法	受信者を[すべての受信者]リストから選択し、[追加]をクリックしてその受信者を[グループメンバー]リストに移動します。
------------------	---

グループからメンバーを削除する方法	受信者を[グループメンバー]リストから選択し、[削除]をクリックしてその受信者を[すべての受信者]リストに移動します。
-------------------	---

- 6 [OK]をクリックします。

DLO での受信者に対する通知のスケジュール

受信者が通知メッセージを受信できる時間帯と曜日を選択できます。受信者の設定後に、受信者の通知プロパティを編集してこのスケジュールを修正することができます。

p.1679 の「[DLO における通知受信者の設定について](#)」を参照してください。

受信者への通知をスケジュール設定する方法

- 1 [受信者プロパティ]ダイアログボックスの[通知送信時間帯の制限]グループボックスの下にある[有効にする]をクリックします。

[受信者プロパティ]ダイアログボックスを表示するには、ツールメニューの[受信者]をクリックします。

- 2 [スケジュール]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。

平日の昼を含める 月曜日から金曜日までの午前 8:00 から午後 6:00 を除外するには、[平日の昼を含める]チェックボックスをオフにします。

平日の夜を含める 月曜日から金曜日までの午後 6:00 から午前 8:00 を除外するには、[平日の夜を含める]チェックボックスをオフにします。

週末を含める 土曜日と日曜日の終日を除外するには、[週末を含める]チェックボックスをオフにします。

[平日の昼を含める]、[平日の夜を含める]、[週末を含める]を任意に組み合わせることができます。また、図中の時間をクリックして、その時間を含めるまたは除外することもできます。

- 4 [OK]をクリックします。

DLO での受信者についての情報の変更

いつでも受信者の通知プロパティを編集して、電子メールアドレス、電話番号およびスケジュールなどの受信者情報を変更することができます。

[名前]フィールドの受信者名を除いて、任意のプロパティを編集することができます。受信者名を変更するには、新しい受信者を作成してから元の受信者を削除します。

受信者についての情報を変更する方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 編集する受信者を選択します。
- 3 [プロパティ]をクリックします。
- 4 選択した受信者のプロパティを編集します。
- 5 [OK]をクリックします。

DLO での受信者の通知方式の変更

受信者の設定後に、新しい通知方式を設定したり、既存の通知方式を変更することができます。

受信者の通知方式を変更する方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 編集する受信者を選択して、[プロパティ]をクリックします。
- 3 通知方式のプロパティを編集します。
 - SMTP の設定:
p.1681の「[DLO アラート通知を受信するSNMPトラップの設定](#)」を参照してください。
 - MAPI の設定:
p.1680の「[MAPIメールによるDLOアラート通知の個人受信者の有効化](#)」を参照してください。
 - VIM の設定:
p.1680の「[VIMメールによるDLOアラート通知を受信する個人の設定](#)」を参照してください。
 - ページャの設定:[有効にする]をクリックして、この通知方式を使用するかどうかを指定し、[モデム設定]のリストから使用するモデムを選択します。
- 4 [OK]をクリックします。

DLO アラートの受信者の削除

通知メッセージを受信させないように、受信者を削除することができます。ただし、削除すると、その受信者のデータは永久に失われます。受信者のデータは保持しても、受信者に通知を受信させないようにするには、[受信者プロパティ]の[有効にする]のチェックボックスをオフにします。

受信者を削除する方法

- 1 ツールメニューの[受信者]をクリックします。
- 2 削除する受信者を選択して、[削除]をクリックします。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 新しい受信者の設定が終了した後、ジョブを開始することができます。また、[プロパティ]ペインで受信者のプロパティを編集したり、他のオプションを設定することもできます。

DLO のレポートについて

DLOには、DLO操作の詳細情報を表示する多くのレポートが用意されています。レポートの生成時に、フィルタとそのパラメータや日数、時間などの範囲を指定し、レポートに含めるデータを絞り込むことができます。Adobe Acrobat が検出された場合は、レポートは Adobe Portable Document Format (PDF) で表示されます。Adobe Acrobat が検出されない場合は、レポートは HTML 形式で表示されます。PDF と HTML のどちらの形式のレポートでも、保存および印刷ができます。

[レポート]ビューでは、次のレポートを利用できます。

表 Q-69 DLO のレポート

レポート名	説明
アクティブアラート	現在アクティブなすべてのアラートが一覧表示されます。アラートは発生順に表示されます。
コンピュータごとのアクティブアラート	現在アクティブなすべてのアラートが一覧表示されます。アラートはコンピュータ名でソートされて表示されます。
ユーザーごとのアクティブアラート	すべてのコンピュータに対する現在アクティブなすべてのアラートが一覧表示されます。アラートは Desktop Agent ユーザー名でソートされてアルファベット順に一覧表示されます。
アラート履歴	これまでにすべてのコンピュータによって送信されたアラートが、発生順に一覧表示されます。
アラート履歴 (コンピュータ別)	これまでにすべてのコンピュータによって送信されたアラートが一覧表示されます。アラートはコンピュータ名でソートされて表示されます。
アラート履歴 (ユーザー別)	これまでにすべてのコンピュータによって送信されたアラートが一覧表示されます。アラートは Desktop Agent ユーザー名でソートされて一覧表示されます。
失敗したバックアップ	最後のバックアップが失敗したコンピュータが、失敗した状態の発生順に一覧表示されます。
失敗したバックアップ (コンピュータ別)	最後のバックアップが失敗したコンピュータが一覧表示されます。アラートはコンピュータ名でソートされて表示されます。 最後のバックアップ結果のみが DLO データベースに格納されます。そのため、各デスクトップコンピュータの最後のバックアップ結果のみレポートすることはできますが、失敗ジョブの完全な履歴をレポートすることはできません。

レポート名	説明
失敗したバックアップ(ユーザー別)	最後のバックアップが失敗したコンピュータが一覧表示されます。アラートは Desktop Agent ユーザー名でソートされて表示されます。最後のバックアップ結果のみが DLO データベースに格納されます。そのため、各デスクトップコンピュータの最後のバックアップ結果のみレポートすることはできますが、失敗ジョブの完全な履歴をレポートすることはできません。
最後のバックアップ状態	すべての Desktop Agent コンピュータの最後のバックアップ状態が、発生順に一覧表示されます。
最後のバックアップ状態(コンピュータ別)	すべての Desktop Agent コンピュータの最後のバックアップ状態が一覧表示されます。アラートはコンピュータ名でソートされて表示されます。
最後のバックアップ状態(ユーザー別)	すべての Desktop Agent コンピュータの最後のバックアップ状態が一覧表示されます。アラートは Desktop Agent ユーザー名でソートされて一覧表示されます。

p.1687 の「[DLO レポートのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.1686 の「[DLO レポートの実行](#)」を参照してください。

DLO レポートの実行

レポートの実行時に、フィルタ条件を指定し、レポートに表示する項目を絞り込むことができます。レポートを生成すると、指定した条件に一致する項目のみが表示されます。条件を指定しない場合、利用可能なすべてのエントリがレポートに表示されます。

レポートを実行する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 [レポート]ペインから、実行するレポートを選択します。
- 3 タスクペインの[レポートタスク]の下にある[今すぐレポートを実行]をクリックします。
- 4 レポートに表示するデータに適したパラメータを選択します。
p.1686 の「[レポートの作成](#)」オプションを参照してください。
- 5 [OK]をクリックして、レポートを実行します。レポートを閉じる前に、印刷または保存することができます。
- 6 [OK]をクリックして、レポートを閉じます。

[レポートの作成]オプション

レポートの実行時に、フィルタ条件を指定し、レポートに表示する項目を絞り込むことができます。

p.1686 の「[DLO レポートの実行](#)」を参照してください。

表 Q-70 [レポートの作成]オプション

項目	説明
コンピュータ	特定のコンピュータのレポートを作成します。デスクトップのコンピュータ名を入力しなければなりません。
ユーザー	特定のデスクトップユーザーのレポートを作成します。ユーザーの名前を入力しなければなりません。
日	特定の日数のレポートを作成します。日数を入力しなければなりません。

DLO レポートのプロパティの表示

レポートのプロパティには、各レポートについての概略が表示されます。このプロパティは表示されるだけで、編集することはできません。

p.1687 の「[\[レポート\]オプション](#)」を参照してください。

レポートのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[レポート]をクリックします。
- 2 [レポート]ペインから、プロパティを表示するレポートを選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 4 プロパティを確認した後で、[OK]をクリックします。

[レポート]オプション

レポートのプロパティには、各レポートについての概略が表示されます。このプロパティは表示されるだけで、編集することはできません。

p.1687 の「[DLO レポートのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 Q-71 [レポート]オプション

項目	説明
タイトル	レポートの名前を表示します。
説明	このレポートに含まれているデータの種類の説明を表示します。

項目	説明
カテゴリ	レポートの分類を表示します。 利用可能なレポートのカテゴリは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ アラート ■ 最後のバックアップ状態 ■ 失敗ジョブ
作成者	レポートの作成者を表示します。
件名	レポートの作成対象の製品のバージョンを表示します。
キーワード	レポートの分類に使用するキーワードを表示します。
ファイル名	このレポートテンプレートのファイル名を表示します。
ファイルサイズ	このレポートテンプレートのサイズを表示します。
作成日	このレポートがシステムにインストールされた日付を表示します。

DLO データベースの保守について

Desktop and Laptop Option は、それ自体の Microsoft SQL Express 2005 データベースまたは SQL Server データベースを Backup Exec データベースと同じ場所にインストールします。これらのデータベースは相互依存せずに動作します。Backup Exec データベースを後日移動した場合でも、DLO データベースは元の場所に残ります。

Backup Exec データベースと DLO データベースは、Backup Exec データベースの保守オプションを使用して保守できます。データベースの操作を BKUPEXCDLO で実行するには、BEUtility を使用します。DLO データベースは、Backup Exec データベースがバックアップまたはリストアされるたびに、自動的にバックアップまたはリストアされます。

BEUtility を使用して DLO データベースを修復またはリカバリする場合には、すべての DLO 管理コンソールを閉じる必要があります。閉じていない場合、操作は失敗に終わります。

Desktop and Laptop Option のクラスタ化について

Backup Exec クラスタ構成で DLO をクラスタ化するには、各クラスタノードに DLO をインストールする必要があります。

DLO を既存の Backup Exec クラスタに追加することはできません。クラスタの構成時に DLO を追加するか、既存のクラスタ構成を解除してから DLO を追加してクラスタを再構成してください。

Desktop Agent が非アクティブなクラスタノードからインストールされた場合は、クラスタ構成を解除する次の手順ではクラスタに再接続できません。

p.1560 の「Backup Exec Desktop and Laptop Option のインストールについて」を参照してください。

p.827 の「Veritas Cluster Server での Backup Exec の使用」を参照してください。

p.804 の「Microsoft クラスタからの Backup Exec のアンインストール」を参照してください。

p.802 の「Microsoft Cluster Server への Backup Exec のインストール」を参照してください。

既存のクラスタへの Backup Exec および Desktop and Laptop Option のインストール

既存のクラスタに Backup Exec および Desktop and Laptop Option をインストールするには、次の手順を実行します。

既存のクラスタに Backup Exec および Desktop and Laptop Option をインストールする方法

- 1 Backup Exec をアクティブなクラスタノードにインストールします。Backup Exec のインストール時に Desktop and Laptop Option が含まれていることを確認してください。
- 2 各フェールオーバーノードに Backup Exec をインストールします。Backup Exec のインストール時に Desktop and Laptop Option が含まれていることを確認してください。
共有クラスタディスク下のアクセス権があるノードに Backup Exec をインストールします。
- 3 手順 1 のサーバーで、Backup Exec コンソールからクラスタ設定ウィザードを実行し、クラスタ対応の Backup Exec メディアサーバーを設定します。DLO がインストールされたクラスタノードがすべて含まれていることを確認してください。

DLO が含まれている既存の Backup Exec 9.x または 10.x クラスタのアップグレード

DLO が含まれている既存の Backup Exec 9.x または 10.x クラスタをアップグレードするには、次の手順を実行します。

DLO が含まれている既存の Backup Exec 9.x または 10.x クラスタをアップグレードする方法

- 1 Backup Exec をアクティブな Backup Exec クラスタノードにインストールします。Backup Exec のインストール時に Desktop and Laptop Option が含まれていることを確認してください。
- 2 各フェールオーバーノードに Backup Exec をインストールします。Backup Exec のインストール時に Desktop and Laptop Option が含まれていることを確認してください。

Backup Exec 共有クラスタディスク下のアクセス権があるノードに Backup Exec をインストールします。
- 3 手順 1 のサーバーでクラスタ設定ウィザードを実行し、以前と同じ仮想サーバー名を使用して、クラスタ対応の Backup Exec を再構成します。アップグレードされたクラスタノードをすべて追加します。

既存の Backup Exec 9.x または 10.x クラスタのアップグレードとクラスタへの DLO の追加

既存の Backup Exec 9.x または 10.x クラスタをアップグレードしてクラスタに DLO を追加するには、次の手順を実行します。

既存の Backup Exec 9.x または 10.x クラスタをアップグレードしてクラスタに DLO を追加する方法

- 1 Backup Exec をアクティブな Backup Exec クラスタノードにインストールします。DLO オプションは選択しないでください。
- 2 各フェールオーバーノードに Backup Exec をインストールします。DLO オプションは選択しないでください。

Backup Exec 共有クラスタディスク下のアクセス権があるノードに Backup Exec をインストールします。
- 3 アクティブな Backup Exec クラスタノードでクラスタ設定ウィザードを使用して、すべてのノードのクラスタ構成を解除します。共有ドライブのデータを削除するかどうかを確認するメッセージが表示されたら、[いいえ]をクリックします。データをローカルノードで利用可能にするかを確認するメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。
- 4 すべてのクラスタノードに DLO をインストールします。ノードを再クラスタ化するには、すべてのノードに DLO が存在する必要があります。

- 手順 3 のサーバーでクラスタ設定ウィザードを実行し、以前と同じ仮想サーバー名を使用して、クラスタ対応の Backup Exec を再構成します。
- アップグレードされたクラスタノードをすべて追加します。
DLO サービスがクラスタアドミニストレータに追加されます。

DLO のクラスタ構成を解除した後での Desktop Agent のクラスタノードへの再接続

DLO のクラスタ構成を解除した後に、クラスタノードに Desktop Agent を再接続するには、次の手順を実行します。

DLO のクラスタ構成を解除した後に Desktop Agent をクラスタノードに再接続する方法

- デスクトップユーザーのデータ格納場所の `.dlo¥.notify` ディレクトリ内に、`NewMediaServerDesktopMachineName` という名前のテキストファイルを作成します。たとえば、デスクトップコンピュータの名前が `Admin123` である場合、ファイル名は `NewMediaServerAdmin123` になります。
- テキストファイル内の最初の行に新しい DLO サーバーの名前を入力し、ファイルを保存します。
- 新しい DLO サーバーを使用するすべてのデスクトップコンピュータについて、手順 1 および手順 2 を繰り返します。

デスクトップコンピュータが実行中であれば、そのデスクトップコンピュータは新しいサーバーに接続します。デスクトップコンピュータが実行中でない場合には、次回の実行時に新しいサーバーに接続します。

DLO のクラスタ構成を解除する前の DLO クラスタ環境内のデータ格納場所の移動

DLO のクラスタ構成を解除する前に DLO クラスタ環境内のデータ格納場所を移動するには、次の手順を実行します。

DLO のクラスタ構成を解除する前に DLO クラスタ環境内のデータ格納場所を移動する方法

- 1 データ格納場所が共有ドライブ上または仮想サーバー上にある場合には、そのデータ格納場所を使用するすべてのユーザーのデータを移動する必要があります。ユーザーデータをローカルノード上のデータ格納場所に移動します。
- 2 共有ドライブ上または仮想サーバー上のデータ格納場所を使用するように設定されているすべての自動ユーザー割り当てを、ローカルノード上のデータ格納場所を使用するように変更します。
- 3 共有ドライブ上または仮想サーバー上のデータ格納場所のユーザーデータの移動がすべて完了したことを確認してから、ユーザーデータを共有ドライブまたは仮想サーバーから削除します。

DLO のコマンド構文について

DLO コマンドラインインターフェースコマンドは、インストール先ディレクトリから `DLOCommandu` コマンドを使用して実行します。

Backup Exec の DLO のデフォルトのインストールディレクトリは次のとおりです。

`C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\DLO`

Backup Exec DLO をアップグレードするとき、以前のバージョンが異なる場所にインストールされていた場合は、インストール先がこの場所に変更されます。

`DLOCommandu` は次のように実行します。

```
DLOCommandu [remote-server-options] command  
[command-options-and-arguments] [log-file-option]
```

コマンドライン用のリモートサーバーオプションについて

リモートサーバーオプションを使用すると、コマンドを実行するリモートサーバー名を指定することができます。また、必要に応じて、ユーザー名とパスワードを入力することができます。

リモートサーバーオプションは次のとおりです。

表 Q-72 リモートサーバーオプション

オプション	説明
<code>-C <computer></code>	リモートコンピュータ名。デフォルトは、ローカルコンピュータです。
<code>-N <user></code>	完全修飾されたユーザー名 (例: Enterprise\GFord)。デフォルトは、現在のユーザーです。

オプション	説明
-W <password>	-N を指定した場合のユーザーパスワードです。

DLO コマンドの詳細

利用可能なコマンドは次のとおりです。

表 Q-73 コマンドの種類

コマンド	参照先
-AssignSL	p.1694 の「 -AssignSL コマンドについて 」を参照してください。
-EnableUser	p.1695 の「 -EnableUser コマンドについて 」を参照してください。
-ChangeServer	p.1696 の「 -ChangeServer コマンドについて 」を参照してください。
-KeyTest	p.1697 の「 -KeyTest コマンドについて 」を参照してください。
-ListProfile	p.1698 の「 -ListProfile コマンドについて 」を参照してください。
-ListSL	p.1699 の「 -ListSL コマンドについて 」を参照してください。
-ListUser	p.1699 の「 -ListUser コマンドについて 」を参照してください。
-LogFile	p.1700 の「 -LogFile コマンドについて 」を参照してください。
-Update	p.1701 の「 -Update コマンドについて 」を参照してください。
-EmergencyRestore	p.1703 の「 -EmergencyRestore コマンドについて 」を参照してください。
-SetRecoveryPwd	p.1704 の「 -SetRecoveryPwd コマンドについて 」を参照してください。
-NotifyClients	p.1704 の「 -NotifyClients コマンドについて 」を参照してください。
-InactiveAccounts	p.1704 の「 -InactiveAccounts コマンドについて 」を参照してください。
-RenameDomain	p.1705 の「 -RenameDomain コマンドについて 」を参照してください。
-RenameMS	p.1705 の「 -RenameMS コマンドについて 」を参照してください。
-LimitAdminTo	p.1706 の「 -LimitAdminTo コマンドについて 」を参照してください。
-IOProfile	p.1706 の「 -IOProfile コマンドについて 」を参照してください。

-AssignSL コマンドについて

-AssignSL コマンドを実行すると、既存のデータ格納場所を利用できなくなった場合に、既存のユーザーに新しいデータ格納場所を割り当てることができます。新しいデータ格納場所は、同じメディアサーバーで管理する必要があります。

注意: 既存のデータ格納場所へアクセス可能な場合、ユーザーを新しいデータ格納場所へ移動するには、**Move User** コマンドを使用する必要があります。

p.1651 の「[新しいネットワークユーザーデータフォルダへの Desktop Agent ユーザーの移動](#)」を参照してください。

Desktop Agent ユーザーは、ユーザーアカウント名、プロフィール名、プロフィール ID、データ格納場所、データ格納場所 ID およびファイルサーバーに基づいて新しいデータ格納場所に割り当てられます。

移動された **Desktop Agent** は、移動の完了がメディアサーバーに通知されるまでは無効です。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -assignsl -NI [-A | -F | -P | -PI | -S | -SI | -U ]
```

メモ: プロファイル名、データ格納場所名およびユーザー名には、ワイルドカード (*) を使用できます。名前に空白またはコロンが含まれている場合は、名前を引用符で囲む必要があります。

次のコマンドオプションを使います。

表 Q-74 -AssignSL のオプション

オプション	説明
-NI <newSLID>	新しいデータ格納場所の名前を指定するには、-NI オプションを使用します。
-A	新しいデータ格納場所をすべてのユーザーに割り当てます。
-F <file server>	新しいデータ格納場所を、指定されたファイルサーバー上のデータ格納場所を持つユーザーに割り当てます。
-P <profile name>	新しいデータ格納場所を、指定されたプロフィールを持つユーザーに割り当てます。
-PI <profile id>	新しいデータ格納場所を、指定されたプロフィール ID を持つユーザーに割り当てます。

オプション	説明
-S <SL name>	新しいデータ格納場所を、指定されたデータ格納場所を持つユーザーに割り当てます。
-SI <SL id>	新しいデータ格納場所を、指定されたデータ格納場所 ID を持つユーザーに割り当てます。
-U <user>	新しいデータ格納場所を、指定されたユーザーアカウントのみに割り当てます。

次の例はコマンドオプションを使う方法を示しています。

DLOCommandu -assignsl -NI DLO_SL02 -A

DLOCommandu -assignsl -NI DLO_SL03 -U mmouse

-EnableUser コマンドについて

-EnableUser コマンドを実行すると、ユーザーを有効または無効にすることができます。ユーザーをすべて有効または無効にしたり、ファイルサーバー (すべてのデータ格納場所)、プロファイル名、プロファイル ID、データ格納場所名、データ格納場所 ID またはユーザー名に基づいて有効または無効にすることもできます。

デスクトップコンピュータをメディアサーバーから強制的に更新する場合に、このコマンドを実行してください。

次の構文を使います。

DLOCommandu -enableuser [-E | -D] [-A | -F | -P | -PI | -S | -SI | -U]

メモ: プロファイル名、データ格納場所名およびユーザー名には、ワイルドカード (*) を使用できます。名前に空白またはコロンが含まれている場合は、名前を引用符で囲む必要があります。

次のコマンドオプションを使います。

表 Q-75 -EnableUser オプション

オプション	説明
-A	メディアサーバー上のすべてのユーザーを有効または無効にします。
-E -D	ユーザーアカウントを有効または無効にします。デフォルトでは、ユーザーを有効にします (-E)。
-F <file server>	指定されたファイルサーバー上のデータ格納場所を持つユーザーを有効または無効にします。

オプション	説明
-P <profile name>	指定されたプロファイル名を持つユーザーを有効または無効にします。
-PI <profile id>	指定されたプロファイルを割り当てられたユーザーを有効または無効にします。
-S <SL name>	指定されたデータ格納場所を割り当てられたユーザーを有効または無効にします。

次の例にコマンドオプションの使用方法を示します。

DLOCommandu -enableuser -E -A

DLOCommandu -enableuser -D -U mmouse

-ChangeServer コマンドについて

-ChangeServer コマンドを実行すると、ユーザーを別のメディアサーバーに再割り当てすることができます。

各デスクトップユーザーは、各自が割り当てられたメディアサーバーが管理するネットワークユーザーデータフォルダにバックアップする必要があります。新しいメディアサーバーで対応する自動ユーザー割り当てが利用可能な場合は、プロファイルとデータ格納場所がユーザーに自動的に割り当てられます。対応する自動ユーザー割り当てが利用できない場合は、ユーザーを手動で設定できます。

Desktop Agent ユーザーを別のメディアサーバーに再割り当てした場合、ユーザーの現在のプロファイル設定と既存のバックアップファイルは移動されず、元のファイルサーバーに保持されます。

次の構文を使います。

DLOCommandu -ChangeServer -M <media server> [-A | -F <file server> | -P <profile name> | -PI <profile id> | -S <SL name> | -SI <SL id> | -SP <SL path> | -U <user>]

メモ: プロファイル名、データ格納場所名およびユーザー名には、ワイルドカード (*) を使用できます。名前に空白またはコロンが含まれている場合は、名前を引用符で囲む必要があります。

次のコマンドオプションを使います。

表 Q-76 -ChangeServer のオプション

オプション	説明
-A	すべてのユーザーを切り替えます (デフォルト)。

オプション	説明
-F <file server>	指定されたファイルサーバー上のデータ格納場所を持つユーザーを切り替えます。
-M <media server>	新しいメディアサーバーの名前です。
-P <profile name>	プロファイル名に基づいてユーザーを切り替えます。
-PI <profile id>	プロファイル ID に基づいてユーザーを切り替えます。
-S <SL name>	データ格納場所名に基づいてユーザーを切り替えます。
-SI <SL id>	データ格納場所 ID に基づいてユーザーを切り替えます。
-SP <SL path>	データ格納場所のパスに基づいてユーザーを切り替えます。
-U <user>	ユーザー名に基づいてユーザーを切り替えます。

次の例はコマンドオプションを使う方法を示しています。

DLOCommandu -ChangeServer -M sunshine -P Desktop*

DLOCommandu -ChangeServer -M sunshine -SP ¥¥moonlight¥EngDept

DLOCommandu -ChangeServer -M sunshine -SP
¥¥moonlight¥EngDept¥Enterprise-MNoel

-KeyTest コマンドについて

-KeyTest コマンドを実行すると、ネットワークユーザーデータをスキャンして、現在の暗号化キーでリストアできない暗号化されたデータを識別することができます。

次の構文を使います。

DLOCommandu -KeyTest

次のコマンドオプションを単独でまたは組み合わせて使います。

表 Q-77 -KeyTest のオプション

オプション	説明
-f	データの有効性をすでに確認済みの場合でも、すべてのユーザーに対して完全スキャンを強制的に実行します。
-quar	リストアできないデータが検出された場合にこれを隔離します。現在の暗号化キーでリストアできないデータは、ユーザーのネットワークユーザーデータフォルダ内の .dloquarantine フォルダに隔離されます。このオプションを指定しない場合、データはスキャンされてレポートされますが、隔離されません。

オプション	説明
-purge	以前に隔離されたデータを削除します。

次の例はコマンドオプションを使う方法を示しています。

表 Q-78 コマンドオプションの例

項目	コマンド
まだ有効性が確認されていないか、または以前のバージョンの Desktop Agent でバックアップされた、リストアできないデータを確認する。	DLOCommandu -keytest
有効性確認済みのデータを含むすべてのデータをスキャンし、リストアできないデータを識別する。リストアできないデータは隔離する。	DLOCommandu -keytest -f -quar

-ListProfile コマンドについて

-ListProfile コマンドを実行すると、**Desktop Agent** ユーザーのプロファイルを一覧表示することができます。

次の構文を使います。

DLOCommandu -listprofile [-A | -P]

メモ: プロファイル名、データ格納場所名およびユーザー名には、ワイルドカード (*) を使用できます。名前に空白またはコロンが含まれている場合は、名前を引用符で囲む必要があります。

次のコマンドオプションを使います。

表 Q-79 -ListProfile のオプション

オプション	説明
-A	すべてのプロファイルの設定を一覧表示します (デフォルト)。
-P <profile name>	指定されたプロファイルのみの設定を一覧表示します。

次の例はコマンドオプションを使う方法を示しています。

DLOCommandu -listprofile -A

DLOCommandu -listprofile -P yourprofile

-ListSL コマンドについて

-ListSL コマンドを実行すると、DLO のデータ格納場所を一覧表示することができます。
次の構文を使います。

```
DLOCommandu -listsl [ -A | -F | -S ]
```

メモ: プロファイル名、データ格納場所名およびユーザー名には、ワイルドカード (*) を使用できます。名前に空白またはコロンが含まれている場合は、名前を引用符で囲む必要があります。

次のコマンドオプションを使います。

表 Q-80 -ListSL のオプション

オプション	説明
-A	すべてのデータ格納場所を一覧表示します (デフォルト)。
-F <file server>	指定されたサーバーのデータ格納場所を一覧表示します。
-S <SL name>	指定されたデータ格納場所のみを一覧表示します。

次の例はコマンドオプションを使う方法を示しています。

```
DLOCommandu -listsl -A
```

```
DLOCommandu -listsl -F yourserver
```

```
DLOCommandu -listsl -S yourSL
```

-ListUser コマンドについて

-ListUser コマンドを実行すると、ユーザーをすべて一覧表示したり、ファイルサーバー、プロファイル名、プロファイル ID、データ格納場所名、データ格納場所 ID またはユーザー名に基づいて一覧表示することもできます。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -listuser [ -A | -F | -P | -PI | -S | -SI | -U ]
```

メモ: プロファイル名、データ格納場所名およびユーザー名には、ワイルドカード (*) を使用できます。名前に空白またはコロンが含まれている場合は、名前を引用符で囲む必要があります。

次のコマンドオプションを使います。

表 Q-81 -ListUser のオプション

オプション	説明
-A	すべてのユーザーの設定を一覧表示します (デフォルト)。
-F <file server>	指定されたファイルサーバー上のデータ格納場所を持つユーザーの設定を一覧表示します。
-P <profile name>	プロファイル名に基づいてユーザーの設定を一覧表示します。
-PI <profile id>	プロファイル ID に基づいてユーザーの設定を一覧表示します。
-S <SL name>	データ格納場所名に基づいてユーザーの設定を一覧表示します。
-SI <SL id>	データ格納場所 ID に基づいてユーザーの設定を一覧表示します。
-U <user>	ユーザー名に基づいてユーザーの設定を一覧表示します。

次の例はコマンドオプションを使う方法を示しています。

DLOCommandu -listuser -A

DLOCommandu -listuser -P yourprofile

DLOCommandu -listuser -U mmouse

DLOCommandu -listuser -U m*

-LogFile コマンドについて

-LogFile コマンドを実行すると、管理者は、LogFile のパスまたは名前を変更することができます。コマンドが発行されるたびに LogFile は上書きされるため、以前の LogFile を保持し、すべてのイベント (ログ) を追跡するためには、次の LogFile のパスや名前を変更する必要があります。

デフォルトのパスは、インストールパスの下の "%LogFiles" フォルダです。

C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\DLO\LogFiles

DLO が以前のバージョンからアップグレードされた場合は、元のディレクトリ構造が使用されます。

以前のバージョンの "%LogFiles" フォルダのデフォルトのパスは次のとおりです。

C:\Program Files\VERITAS\Backup Exec\DLO\LogFiles

次の構文を使います。

-LogFile <path\file>

メモ: プロファイル名、データ格納場所名およびユーザー名には、ワイルドカード (*) を使用できます。名前に空白またはコロンが含まれている場合は、名前を引用符で囲む必要があります。

次のコマンドオプションを使います。

表 Q-82 -LogFile のオプション

オプション	説明
<path>	新しい LogFile のパスを指定します。
<file>	新しい LogFile のファイル名を指定します。

次の例はコマンドオプションを使う方法を示しています。

```
DLOCommandu -logfile test.log
```

```
DLOCommandu -logfile "c:\test.log"
```

-Update コマンドについて

-Update コマンドを実行すると、Desktop Agent の更新内容を一覧表示、追加、削除および公開することができます。

p.1582 の「[DLO の更新について](#)」を参照してください。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -update [ -list | -add | -remove | -publish ]
```

次のサブコマンドを使用すると、更新内容を一覧表示、追加、削除または公開することができます。

表 Q-83 -Update のサブコマンド

サブコマンド	説明
-List [-A -UI <update id>]	以前に使用された更新の設定を一覧表示します。
-Add -F <file name>	更新定義ファイルを更新リストに追加して、一意の更新 ID 番号を割り当てます。更新 ID 番号は、-publish コマンドで更新を公開する場合に使用します。
-Remove [-UI <update id> -A]	ファイルを更新リストから削除します。

サブコマンド	説明
-Publish [-R] -UI <update id> [-P <profile name>]-PI <profile id> -U <user>]	指定した更新をユーザーが利用できるようにします。次のオプションを使用して、ユーザーを識別できます。 -P: プロファイル名 -PI: プロファイルレコード ID。プロファイルレコード ID を取得するには、-listprofile コマンドを実行します。 -U: ユーザー名

次のコマンドオプションを使います。

表 Q-84 -Update コマンドおよびサブコマンドのオプション

オプション	説明
-A	すべてを更新します。
-F <file name>	更新レコードを含むテキストファイルを指定します。
-U <user name>	完全修飾されたユーザー名を指定します (例:Enterprise¥JFord)。
-P <profile name>	プロファイル名を指定します。
-PI <profile id>	プロファイルレコード ID を指定します。
-R	公開しないことを指定します。
-UI <update id>	更新レコード ID を指定します。

メモ: プロファイル名、データ格納場所名およびユーザー名には、ワイルドカード (*) を使用できます。名前に空白またはコロンが含まれている場合は、名前を引用符で囲む必要があります。

次の例はコマンドオプションを使う方法を示しています。

表 Q-85 コマンドオプションの例

実行する処理	説明	コマンド
公開された更新の一覧表示	公開されたすべての更新の設定を一覧表示します。	DLOCommandu -update -list -A
特定の更新の詳細の一覧表示		DLOCommandu -update -list -UI <updateID>

実行する処理	説明	コマンド
更新リストへのファイルの追加およびID番号の割り当て	公開する更新ファイルを準備して、一意のレコード ID 番号を割り当てます。レコード ID 番号は、次のコマンドを実行すると返されます。	DLOCommandu -update -add -f cntlfile.txt
Desktop Agent で利用するための更新の公開	更新をユーザーが利用できるようにします。すべてのユーザー、特定のユーザー、またはプロファイル内のユーザーに対して更新を利用可能にするように指定できます。また、ワイルドカードを使用してプロファイル名およびユーザー名を指定できます。	<p>プロファイルに対して更新を公開する方法</p> <pre>DLOCommandu -update -publish -UI <updateID> -P <profile name></pre> <p>DLOCommandu -update -publish -UI 63 -P yourprofile</p> <p>特定のユーザーに対して更新を公開する方法</p> <pre>DLOCommandu -update -list -UI <updateID> -U <username></pre> <p>すべてのユーザーに対して更新を公開する方法</p> <pre>DLOCommandu -update -list -UI <updateID> -U *</pre>
更新リストからのファイルの削除	更新リストからファイルを削除します。公開済みのファイルを削除するには、非公開にしておく必要があります。	<p>非公開にする方法</p> <pre>DLOCommandu -update -publish -R -UI 33</pre> <p>削除する方法</p> <pre>DLOCommandu -update -remove -UI 3</pre>

-EmergencyRestore コマンドについて

-EmergencyRestore コマンドを実行すると、DLO 管理者のリカバリパスワードを使用して、DLO データベースが破損した場合に利用できないユーザーデータをリストアすることができます。このコマンドを実行するには、リカバリパスワードが必要です。データは、元のデータ構造の指定した場所にリストアされますが、暗号化されなくなります。

p.1566 の「リカバリパスワードの設定について」を参照してください。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -EmergencyRestore <usersharepath> -W <recovery password>  
-AP <destination path>
```

次のコマンドオプションを使うことができます。

表 Q-86 -EmergencyRestore のオプション

オプション	説明
<usersharepath>	ユーザー共有ディレクトリへのフルパスを指定します。
-W <recovery password>	リカバリパスワードを指定します。
-AP <destination path>	リストア対象のデータへのパスを指定します。

-SetRecoveryPwd コマンドについて

-SetRecoveryPwd コマンドを実行すると、リカバリパスワードを変更することができます。リカバリパスワードを使用すると、DLO データベースが破損した場合に失われた暗号化されたデータを取得することができます。-SetRecoveryPwd コマンドでは、新しいユーザーに加えて既存のユーザーのパスワードを更新できます。

リカバリパスワードを変更する場合は、DLO コマンドラインインターフェースツールを使用する必要があります。

p.1566 の「[リカバリパスワードの設定について](#)」を参照してください。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -SetRecoveryPwd <password>
```

-NotifyClients コマンドについて

-NotifyClients コマンドは、Desktop Agents によりプロファイル設定を強制的に即時に更新したり、または Desktop Agent がオフラインである場合は次回再接続時にプロファイル設定を更新したりします。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -notifyclients
```

-InactiveAccounts コマンドについて

-InactiveAccounts コマンドを実行すると、指定した日数の間に使用されなかったアカウントを一覧表示し、削除することができます。

無効なアカウントを一覧表示するには、次のコマンドを使用します。

dlocommandu -inactiveaccounts -list -days <#days>

このコマンドは、無効なアカウントのリストを返します。

リストには、指定したアカウントの削除に使用される次の情報が含まれます。

- コンピュータ名
- コンピュータ ID
- ドメイン¥ユーザー名
- ユーザー ID

特定の無効なアカウントを削除するには、次のコマンドを使用します。

```
dlocommandu -inactiveaccounts -delete -U <domain¥user name> -M <computer name> -days <#days>
```

```
dlocommandu -inactiveaccounts -delete -UI <userID> -MI <computer ID> -days <#days>
```

-U および -M が名前によりユーザーおよびコンピュータを削除するのに対し、-UI および -MI は ID によりユーザーおよびコンピュータを削除します。

指定した日数の間無効なすべてのアカウントを削除するには、次のコマンドを使用します。

```
dlocommandu -inactiveaccounts -delete -a <#days>
```

-RenameDomain コマンドについて

-RenameDomain コマンドは、Windows ドメインの名前が変更された場合に使用します。-RenameDomain コマンドを実行すると、各 Desktop Agent ユーザーのレコードが変更されて新しいドメイン名が反映され、ネットワークユーザーデータフォルダのパスが変更されます。また、各 Desktop Agent に変更が通知されます。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -RenameDomain <OldDomainName> <NewDomainName>
```

-RenameMS コマンドについて

-RenameMS コマンドは、メディアサーバーの名前が変更された場合に使用します。-RenameMS コマンドを実行すると、インストール共有、データ格納場所のパス、およびネットワークユーザーデータフォルダのパスが更新されます。また、各 Desktop Agent に変更が通知されます。

-RenameMS コマンドを使用する前に、次に示す順序で操作を実行する必要があります。

- Windows のコントロールパネルを使用して、メディアサーバーの名前を変更します。Microsoft Windows のマニュアルを参照してください。

- **Backup Exec** ユーティリティを使用して、新しいメディアサーバー名の設定を更新します。

Backup Exec ユーティリティのオンラインヘルプを参照してください。

メディアサーバーの名前を変更し、**Backup Exec** ユーティリティを使用して設定を更新したら、**-RenameMS** コマンドを使用できます。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -RenameMS <OldServerName> <NewServerName>
```

-LimitAdminTo コマンドについて

-LimitAdminTo コマンドを実行すると、DLO の管理を、指定したグループまたはユーザーに制限することができます。

次の構文を使います。

```
DLOCommandu -LimitAdminTo -NAU <domain¥NewAdminName>
```

```
DLOCommandu -LimitAdminTo -NAU <domain¥NewAdminGroup>
```

次のコマンドオプションを使うことができます。

表 Q-87 -LimitAdminTo のオプション

オプション	説明
-NAU	新しいDLO管理者を追加します。または、DLO管理者のグループとして使用可能なグループを追加します。
-DAU	DLO管理者またはDLO管理グループを削除します。
-L	現在のDLO管理者およびDLO管理グループをすべて一覧表示します。

-IOProfile コマンドについて

-IOProfile コマンドを実行すると、あるメディアサーバーからプロフィールをエクスポートして、別のメディアサーバーにインポートすることができます。また、グローバル設定をインポートするオプションも使用できます。

メモ: プロファイルをインポートした場合、インポートしたプロフィールには最初はユーザーが割り当てられないため、すぐに影響することはありません。グローバル設定をインポートした場合、インポートしたグローバル設定は、サーバーに割り当てられているすべての **Desktop Agent** ユーザーにすぐに適用されます。

プロフィールをエクスポートするには、次のコマンドを使用します。

```
DLOCommandu -C <master server name> -IOProfile -DBF <export file name> -E <profile name>
```

このコマンドを実行すると、要求した名前のプロファイル (-E) が、指定したサーバー (-C) から指定したファイル (-DBF) へエクスポートされます。コマンドを実行するサーバー上にプロファイルが存在する場合、-C オプションでマスターサーバー名を指定する必要はありません。

プロファイルをインポートするには、次のコマンドを使用します。

```
DLOCommandu -C < server name> -IOProfile -DBF <export file name>
```

このコマンドを実行すると、指定したファイル(-DBF)内のプロファイルが指定したサーバー(-C)にインポートされます。

プロファイルに加えて DLO 管理者アカウント管理のコンソール設定をインポートするには、次のコマンドを使用します。

```
DLOCommandu -C < server name> -IOProfile -DBF <export file name> -IPRGCS
```

プロファイルに加えてグローバル設定をインポートするには、次のコマンドを使用します。

```
DLOCommandu -C < server name> -IOProfile -DBF <export file name> -IPRGS
```

Desktop Agent について

Desktop Agent は、Backup Exec Desktop and Laptop Option のコンポーネントであり、デスクトップコンピュータおよびラップトップコンピュータ(これら 2 つをまとめてデスクトップと呼びます)のファイルを保護します。それはデスクトップのローカルドライブとネットワークのデータ格納場所にデータをバックアップします。

最初に DLO 管理者が Desktop Agent を設定します。プロファイルを使用して、ユーザーが Desktop Agent と対話するレベルを決定します。管理者が、実行する Desktop Agent の設定にユーザーインターフェースを使用しない場合もありますが、全機能装備のユーザーインターフェースを使用する場合、またはその中間の方法を使用する場合もあります。

DLO の管理者が、Desktop Agent 全体を表示して設定を変更できるようにユーザープロファイルを設定している場合には、次のことができます。

- ファイルのリストア
- 複数デスクトップ間のファイルの同期
- バックアップ選択項目の設定
- スケジュールの設定

■ 履歴の表示

p.1708 の「[Desktop Agent の用語](#)」を参照してください。

Desktop Agent の用語

DLO のマニュアルでは、以下の用語が使用されています。

表 Q-88 DLO の用語

オプション	説明
デスクトップ	Desktop Agent を実行するデスクトップコンピュータまたはラップトップコンピュータ。
Desktop Agent	デスクトップコンピュータやラップトップコンピュータ上で実行される DLO プログラムおよびそのユーザーインターフェース。
デスクトップユーザーデータフォルダ	バックアップファイルを格納するデスクトップ上のフォルダ。ここに格納されたファイルはオフライン時に使用できます。
ネットワークユーザーデータフォルダ	バックアップデータの格納先となるネットワークファイルサーバー上のフォルダ。
プロファイル	Desktop Agent の操作に関する詳細な設定オプションを指定します。プロファイルは、類似したデスクトップユーザーのグループに割り当てられます。
同期	複数のデスクトップ上に存在する、ある特定のファイルの現在のリビジョンを管理するためのプロセス。
自動ユーザー割り当て	Desktop Agent がデスクトップに初めてインストールされたときに、プロファイルとデータ格納場所をデスクトップユーザーに割り当てます。

DLO の用語の完全な用語集が利用可能です。

Desktop Agent の機能とメリット

Desktop Agent は次の機能を備えています。

表 Q-89 Desktop Agent の機能

項目	説明
データの保護	<p>選択されたファイルはデスクトップのローカルドライブのユーザーデータフォルダとネットワークのユーザーデータフォルダに自動的にコピーされます。</p> <p>Desktop Agent は、ユーザーが介入することなく実行されるように設定することができます。ファイルは、デスクトップがオンラインまたはオフラインになると自動的に保護されます。Backup Exec では、DLO ファイルサーバー上のネットワークユーザーデータフォルダをバックアップすることにより、データの保護を強化しています。</p>
データの可用性	<p>各デスクトップで同じログオンクレデンシアルを使用することによって、ユーザーは、さまざまな場所にある各種デスクトップからデータにアクセスすることができます。デスクトップのユーザーデータフォルダの少なくとも1つのファイルのリビジョンを保存すれば以前のファイルのリビジョンもリストアできます。</p>
同期	<p>同じログオンクレデンシアルを使用して複数のコンピュータにアクセスするユーザーは、各コンピュータでフォルダを同期させるように設定することができます。</p> <p>あるコンピュータ上で同期ファイルに変更を加えると、更新されたファイルは、同期するように設定されている他のすべてのコンピュータの次の場所にコピーされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークユーザーデータフォルダ ■ デスクトップユーザーデータフォルダ

Desktop Agent のシステムの必要条件

このバージョンの Desktop Agent の実行に必要なシステムの必要条件を次に示します。

表 Q-90 Desktop Agent のシステムの必要条件

項目	説明
オペレーティングシステム	<p>次のオペレーティングシステムがサポートされています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Windows 2000 ■ Microsoft Windows XP Service Pack 2 以上 ■ Microsoft Windows XP Professional x64 Edition ■ Microsoft Windows Vista ■ Microsoft Windows 7 <p>Desktop Agent は、Windows Server 2003、Windows Storage Server 2003、Windows 2000 Server を含む、いずれのサーバーオペレーティングシステムでもサポートされていません。</p>

項目	説明
プロセッサ	Pentium 互換 CPU
メモリ	必須:256 MB RAM 推奨:512 MB RAM 以上 (パフォーマンスの向上にはさらに増やすことをお勧めします)
インターネットブラウザ	Internet Explorer 5.01 以上、ただし、バージョン 5.5 以上を推奨。
ディスクの空き領域	Microsoft Windows をインストール (標準インストール)した状態でハードディスクドライブの空き領域が 25 MB 以上が必要です。デスクトップユーザーデータフォルダを有効にした場合、さらに多くの領域が必要になる場合があります。
その他のハードウェア	ネットワークインターフェースカードまたは仮想ネットワークアダプタカード

Desktop Agent のインストール

DLO 管理者は、管理者とデスクトップユーザーのどちらが Desktop Agent をインストールするかを指定することができます。ユーザーは、管理者またはデスクトップユーザーのいずれかです。Desktop Agent をインストールするには、管理者権限が必要です。インストール中にデスクトップを再起動する必要がある場合は、同じ管理者ログオンアカウントを再度使用して、インストールが正常に完了することを確認する必要があります。

Desktop Agent をデスクトップにインストールすると、そのデスクトップにログオンするすべてのユーザーが Desktop Agent を使用できるようになります。ログオンしているユーザーは、ログオンアカウントに関連付けられている DLO バックアップファイルにのみアクセスできます。

DLO 管理コンソールまたは Desktop Agent を実行しているすべてのコンピュータで、共通の時間が設定されている必要があります。これは、ネットワークで Windows Time Synchronization サービスを設定することで実現できます。詳しくは Microsoft の Web サイトを参照してください。

Desktop Agent をインストールする方法

- 1 Desktop Agent をインストールするデスクトップで、Desktop Agent のインストールファイルを格納するネットワークサーバーを参照して選択します。

デフォルトの場所は、¥¥<Backup Exec media server name>¥DLOAgent です。場所が不明な場合は、管理者に問い合わせてください。

- 2 setup.exe をダブルクリックします。
- 3 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。

- 4 使用許諾書に目を通し、[使用許諾契約の条項に同意します]をクリックします。
- 5 [次へ]をクリックします。
- 6 次のいずれかを実行します。

Desktop Agent をデフォルトの場所にインストールする方法 手順 7 に進みます。

デフォルトのインストール場所は、**C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\DLO** です。

Desktop Agent を選択した場所にインストールする方法 次に示す順序で操作を実行します。

- [変更]をクリックします。
- **Desktop Agent** をインストールする場所のパスを入力します。
- [OK]をクリックします。

- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 [インストール]をクリックします。
- 9 [完了]をクリックして、**Desktop Agent** をインストールします。

Desktop Agent を設定する方法

Desktop Agent は次の方法で設定できます。

- メディアサーバーに接続します。
 p.1712の「[Desktop Agentからのメディアサーバーへの接続について](#)」を参照してください。
- デスクトップのローカルアカウントを使用します。
 p.1713の「[デスクトップコンピュータ上でのローカルアカウントの使用について](#)」を参照してください。
- 代替クレデンシャルを使用します。
 p.1712の「[\[代替クレデンシャル\]オプション](#)」を参照してください。
- ダイアログボックスとアカウント情報をリセットします。
 p.1714の「[DLOのダイアログボックスとアカウント情報のリセット](#)」を参照してください。
- 接続の状態を変更します。
 p.1714の「[接続状態の変更](#)」を参照してください。
- **Desktop Agent** の有効と無効を切り替えます。
 p.1715の「[Desktop Agentの有効化](#)」を参照してください。
 p.1715の「[Desktop Agentの無効化](#)」を参照してください。

Desktop Agent からのメディアサーバーへの接続について

通常の操作では、Desktop Agent はメディアサーバー上の DLO データベースおよびサービスと通信します。Desktop Agent を使用する場合は、ドメインアカウントを使用してメディアサーバーに接続する必要があります。

メモ: あるクレデンシアルを使用してメディアサーバーに接続している場合に、別のクレデンシアルでサーバーに接続しようとする、認証に失敗する可能性があります。再接続するにはコンピュータを再起動してください。

Desktop Agent で新しい情報が利用可能になった場合、Desktop Agent はその新しい情報の通知を受信して、情報を取り込みます。たとえば、設定または同期ファイルが変更された場合やソフトウェアの更新が利用可能な場合です。Desktop Agent とメディアサーバーは、相互に直接通信しません。

注意: ローカルシステムのコードページに存在しない文字を含む共有名が付けられているサーバーに接続しようすると、接続は失敗します。コードページによって、文字コードが対応する文字にマップされます。一般的に、コードページは言語または言語グループに固有です。

[代替クレデンシアル]オプション

Desktop Agent はデフォルトでログオンアカウントを使います。ただし、代替のアカウントが指定されると、他のドメインに接続する場合などに使われることがあります。

Desktop Agent によって認識されないクレデンシアルを使用してログオンする場合は、Desktop Agent の操作に必要な代替クレデンシアルを指定し、以降のセッション用にそのアカウント情報を保存します。また、必要に応じて、Desktop Agent の操作に必要なアカウントを無効にすると、現在使用しているアカウントでログオンしたときに Desktop Agent が実行されないようにできます。今後の接続のためにこのアカウント情報を保存できます。

メモ: 事前にメディアサーバーへのネットワーク接続が確立されており、それが Desktop Agent で使用するアカウントと一致しない場合、Desktop Agent は Desktop Agent ユーザーアカウントを使用して再接続しようとします。再接続に失敗すると、「複数のユーザー名を使用した同じユーザーが、サーバーまたは共有リソースに複数の接続を持っていますが、これは許可されていません。サーバーまたは共有リソースへの前の接続をすべて切断し、もう一度実行してください。」という内容のエラーが表示されます。Desktop Agent で使用されるアカウントはデフォルトのログオンアカウントですが、たとえば、他のドメインに接続できるようにするため、別のアカウントを指定することもできます。

信頼関係が設定されていないクロスドメインの設定では、複数のユーザーが同一の Desktop Agent を実行する場合、それぞれのユーザーがメディアサーバードメイン内で

固有のユーザー名とパスワードを使用する必要があります。別々のユーザーが同じクレデンシアルを使用すると、ユーザーはすでにメディアサーバーに接続しているというエラーメッセージが表示されます。

表 Q-91 [代替クレデンシアル]オプション

項目	説明
このアカウントを使用する	現在のログオンアカウントを使用したときに Desktop Agent を実行できます。
ユーザー名	Desktop Agent を操作する権限が割り当てられているアカウントのユーザー名が示されます。
パスワード	Desktop Agent の操作に使用するアカウントのパスワードが示されません。
ドメイン	Desktop Agent の操作に使用するアカウントのドメインが示されます。
パスワードを保存	DLOでこのパスワードを保存して将来使うことができます。これによって認証のエラーの場合にユーザーは自動的にメディアサーバーかデータ格納場所に認証されることが可能です。 このオプションは、DLO 管理者が有効にした場合にのみ表示されます。新しく配備された Desktop Agent では、Desktop Agent が 2 度目にメディアサーバーに接続されるまでこのオプションは表示されません。
このアカウントを無効にする	現在のログオンアカウントを使用したときに Desktop Agent が実行されないようにします。

デスクトップコンピュータ上でのローカルアカウントの使用について

ローカルアカウントを使用してデスクトップにログオンする場合は、Desktop Agent によってドメインアカウントのユーザー名とパスワードの入力を求められます。

Desktop Agent を実行するデスクトップのローカルアカウントを使うとき次の情報を考慮します。

- 1 つのローカルアカウントには、1 つのドメインクレデンシアルを使用できます。デスクトップコンピュータまたはラップトップコンピュータ上で複数のローカルアカウントを使用する場合は、別のアカウントの DLO を無効にするか、または各アカウントに一意のドメインクレデンシアルを作成する必要があります。

p.1712 の「[代替クレデンシアル]オプション」を参照してください。

たとえば、通常、デスクトップコンピュータに[myusername]としてログオンする場合、このアカウントで DLO を使用するにはドメインアカウントを持っている必要があります。また、「administrator」としてログオンする場合、このアカウントにログオンすると DLO が無効になる場合があります。あるいは、[administrator]としてログオンする場合は、DLO で使用する一意のドメインクレデンシアルを使用することができます。

- 同じデスクトップコンピュータの複数のユーザーはすべてDLOを使用できます。ただし、デスクトップコンピュータに重複のないクレデンシャルを、Desktop Agent との接続に重複のないドメインクレデンシャルを入力する必要があります。
- DLO では、Windows XP のユーザーの簡易切り替え機能はサポートされていません。

DLO のダイアログボックスとアカウント情報のリセット

[今後、このメッセージを表示しない]チェックボックスにチェックマークを付けることによって、ある特定のダイアログボックスが表示されることを防ぐことができます。ただし、無効なダイアログボックスをリセットできます。パスワードおよびアカウントの情報がクリアされると、リソースへのアクセスにこの情報が必要な場合に情報の入力が必要になります。

ダイアログボックスおよびアカウント情報をリセットする方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [ユーザー設定]タブで、次のいずれかを実行します。

無効になったダイアログボックス 次を示す順序で操作を実行します。
をリセットする方法

- [ダイアログをリセット]をクリックします。
- プロンプトで、[はい]をクリックします。

パスワードとアカウント情報を消 次を示す順序で操作を実行します。
去する方法

- [アカウントをリセット]をクリックします。
- プロンプトで、[はい]をクリックします。

- 3 [OK]をクリックします。

接続状態の変更

Desktop Agent を使用している場合、Desktop Agent コンソールの右下の角に、接続状態が表示されます。

Desktop Agent がオフラインモードの場合は、オンラインに復帰するまで、次のような状態になります。

- ファイルがネットワークユーザーデータフォルダに転送されません。保留中のファイルが、保留中のファイルリストで[保留中 (ネットワーク)]の状態として保持されます。
- ジョブのログがネットワークユーザーデータフォルダにコピーされません。
- アラートがメディアサーバーに送信されません。

DLO 管理者は、ネットワーク接続が利用可能な場合に、Desktop Agent が自動的にオンラインモードに戻されるまでの最長時間を設定します。

接続状態を変更する方法

- 1 Desktop Agent の右下の角の接続状態をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - [オフラインで作業]をクリックして、Desktop Agent をオフラインモードにします。
 - [オンラインで作業]をクリックして、Desktop Agent をオンラインモードにします。

Desktop Agent の有効化

プロファイルで許可されている場合、無効になっている Desktop Agent を再び有効にすることができます。

この処理を実行する権限を所有していない場合、[有効にする]オプションは利用できません。

Desktop Agent を有効にする方法

- 1 Windows のシステムトレイで、Desktop Agent のアイコンを右クリックします。
- 2 [有効にする]をクリックします。

Desktop Agent の無効化

プロファイルで許可されている場合、Desktop Agent を無効にすることができます。

この処理を実行する権限を所有していない場合、[無効にする]オプションは利用できません。

Desktop Agent を無効にする方法

- 1 Windows のシステムトレイで、Desktop Agent のアイコンを右クリックします。
- 2 [無効にする]をクリックします。

Desktop Agent コンソールについて

Desktop Agent コンソールは、Desktop Agent 用のユーザーインターフェースです。DLO 管理者は Desktop Agent コンソールへのアクセスを制御します。

メモ: Desktop Agent の使用中に最新の状態と設定を確認するには、[最新の情報に更新]機能を使用します。

DLO 管理者は、制御方法を次の中から選択することができます。

表 Q-92 Desktop Agent のためのユーザーインターフェースのオプション

項目	説明
すべてのインターフェースを表示	デスクトップユーザーが Desktop Agent オプションのすべてにアクセスできます
状態のみ表示	デスクトップユーザーは、バックアップジョブの状態を表示することはできませんが、 Desktop Agent の設定を変更したり、状態以外のオプションにアクセスすることはできません。デスクトップユーザーは、システムトレイアイコンを右クリックすると、状態の表示またはプログラムの終了を選択できます。
システムトレイアイコンのみ表示	デスクトップユーザーは、画面右下のシステムトレイの Desktop Agent のアイコンのみを参照できます。デスクトップユーザーは、システムトレイアイコンを右クリックしてプログラムを終了できます。
何も表示しない	Desktop Agent は、バックグラウンドで実行されます。デスクトップユーザーが Desktop Agent を表示することはできません。

Desktop Agent コンソールは次のコンポーネントから構成されています。

表 Q-93 Desktop Agent コンソールの機能

項目	説明
メニューバー	メニューバーは、画面の最上部に水平に表示されます。メニューを表示するには、メニュー名をクリックします。メニュー項目の中には、コンソール画面で何かを選択しないと利用できないものもあります。
タスクバー	タスクバーは、 Desktop Agent コンソールの左側に表示されます。タスクバーを非表示にするには、[表示]メニューから[タスクバー]をクリックします。操作はタスクバーから実行します。実行できる操作は選択したビューによって異なります。

項目	説明
表示メニュー	<p>表示メニューはタスクバーに表示されます。表示メニューを使用して、次のビューへ移動します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 状態 p.1734の「Desktop Agent の状態について」を参照してください。■ バックアップ選択項目 p.1717の「Desktop Agent によるデータのバックアップの作成について」を参照してください。■ 同期 p.1731の「デスクトップのユーザーデータの同期について」を参照してください。■ リストア p.1738の「Desktop Agent を使用したファイルのリストア」を参照してください。■ 履歴
タスクメニュー	<p>操作はタスクペインから開始します。実行できる操作は、選択した表示によって異なります。</p>
ツールメニュー	<p>次を可能にするオプションを含んでいます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ [今後、このメッセージを表示しない]チェックボックスをオンにして非表示にされていたダイアログボックスを、リセットできます。■ Desktop Agent に保存されていたパスワードおよびアカウントの情報を、クリアできます。 p.1714の「DLOのダイアログボックスとアカウント情報のリセット」を参照してください。

Desktop Agent によるデータのバックアップの作成について

Desktop Agent によってバックアップされたデータは、デスクトップのローカルドライブのユーザーデータフォルダに送信されます。次に、そのデータは DLO 管理者が割り当てたネットワークユーザーデータフォルダへ送信されます。通常、ネットワークユーザーデータフォルダも Backup Exec によってバックアップされるため、保護が強化されます。

注意: ローカルシステムのコードページに存在しない文字を含む共有名が付けられているサーバーに接続しようとする、接続は失敗します。コードページによって、文字コードが対応する文字にマップされます。一般的に、コードページは言語または言語グループに固有です。

p.1722の「[DLOを使用したOutlook PSTファイルの増分バックアップについて](#)」を参照してください。

p.1741の「[Microsoft Outlookの個人用フォルダファイルのリストアについて](#)」を参照してください。

保護するファイルを[バックアップ選択項目]ビューで選択します。DLO 管理者は最初のバックアップ選択項目を割り当てます。ただし、DLO 管理者が、Desktop Agent 全体を表示して設定を変更できるようにユーザープロファイルを設定している場合には、ユーザーがバックアップ選択項目を選択することができます。

オフライン作業中に、Desktop Agent の設定およびバックアップ選択項目を変更することができます。設定は、オンラインになるまで保存され、オンラインになった時点で自動的に転送されます。また、管理者によって行われた変更が、Desktop Agent で行われた変更と競合する場合は、管理者によって行われた変更が使用されます。

また、標準表示および詳細表示を使用して、バックアップ選択項目を表示したり変更することができます。標準表示には、ローカルドライブの内容が一覧表示され、バックアップするファイルやフォルダを選択または選択解除できます。デフォルトのバックアップ選択を使用して、新しいバックアップ選択項目を追加することもできます。詳細表示では、バックアップ選択の詳細設定オプションを設定できます。

バックアップ選択は以下の項目から成っています。

- 1つのフォルダまたは複数のフォルダのリスト
- バックアップ対象としてファイルをインクルードまたはエクスクルードするための基準
- 保持するファイルのリビジョン数の上限値
- 圧縮、バックアップファイルの削除および暗号化に関する設定

リビジョンについて

リビジョンは、特定の時点でのファイルのバージョンです。ファイルが変更され、バックアップされると、DLO によって新しいリビジョンが保存されます。DLO では、バックアップ選択項目に含まれるすべてのファイルに対し、特定の数のリビジョンが保存および管理されます。各バックアップ選択項目は個別に設定されるため、保持されるリビジョンの数はバックアップ選択項目ごとに異なる場合があります。

リビジョンの数が上限を超えると、DLO は最も古いリビジョンを削除します。デスクトップとネットワークのユーザーデータフォルダの、指定された数のリビジョンのみ保持します。

DLO で一定期間保持されるリビジョン数は、制限できます。文書を高い頻度でバックアップしたら、すべてのリビジョンがわずかに数分おきに保持されることとなります。そのような場合、24 時間ごとに 120 分以上間隔が空いているリビジョンを 2 つまで保持するように指定することにより、古いリビジョンを長い期間保持することができます。中間のバージョンは保持されませんが、古いリビジョンに戻る必要があるような状況には対処できます。

保持するリビジョン数を決定する際は、データの保存に必要なストレージスペースの容量も考慮する必要があります。バックアップに必要な容量は、保持するリビジョンの数と保護されているデータ量を掛け合わせることで見積もることができます。

たとえば、各ファイルについて3つのリビジョンを保持し、バックアップするデータ量が10 MB の場合、約 30 MB のディスク容量が必要になります。

容量の使用率は圧縮によって改善できますが、効果はファイルの種類やその他の要因によって大きく異なります。

DLO では、セキュリティストリームを含む、ファイルのすべての代替ストリームが保護されます。新しいバージョンのファイルに代替ストリームのデータに対する修正のみが含まれる場合、リビジョン数は変更されずに、古いバージョンは新しいバージョンに置き換えられます。

p.1719の「[Desktop Agent の標準表示でのバックアップ選択項目の修正](#)」を参照してください。

p.1720の「[Desktop Agent の詳細表示でのバックアップ選択項目の追加](#)」を参照してください。

p.1722の「[DLOを使用したOutlook PSTファイルの増分バックアップについて](#)」を参照してください。

p.1741の「[Microsoft Outlookの個人用フォルダファイルのリストアについて](#)」を参照してください。

p.1742の「[代替ストリームのデータを持つファイルのリストアについて](#)」を参照してください。

Desktop Agent の標準表示でのバックアップ選択項目の修正

バックアップ選択項目の標準表示には、バックアップ対象として選択できるドライブ、フォルダおよびファイルのリストが表示されます。

標準表示で新しいバックアップ選択項目を作成するときは、デフォルトのバックアップ選択項目の設定が使用されます。標準表示で新しいサブフォルダやファイルをバックアップ選択項目に追加すると、追加した新しいバックアップ選択項目には元の選択項目と同じ設定が使用されます。

標準表示では、バックアップ対象としてファイルおよびフォルダを選択または選択解除できるツリービューに、ファイルおよびフォルダが表示されます。ファイルまたはフォルダの横のチェックボックスがグレー表示されている場合、その選択項目は管理者によって定義されており、プロファイル定義で管理者によってこの権限が付与されている場合にのみ詳細表示で変更することができます。

p.1721の「[Desktop Agent の詳細表示でのバックアップ選択項目の修正](#)」を参照してください。

ファイルまたはフォルダの横のチェックボックスに赤色の **x** マークが表示されている場合、この項目は、管理者によってすべてのバックアップからグローバルにエクスクルードされているため、選択できません。

[変更を保存] をクリックすると、選択が解除された古いバックアップ選択項目は、削除されたバックアップ選択項目として処理され、バックアップされなくなります。このバックアップ選択項目のバックアップファイルは、バックアップ選択項目の設定で指定された日数が経過すると削除されます。削除されたバックアップ選択項目のソースファイルが **Desktop Agent** によって削除されることはありません。

以前は選択しなかったフォルダを選択すると、デスクトップのバックアップ選択項目に追加されます。

標準表示でバックアップ選択項目を修正する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある [バックアップ選択項目] をクリックします。
- 2 [標準表示] をクリックします。
- 3 バックアップするファイルとフォルダを調べ、もはやバックアップしたくないフォルダとファイルのチェックマークをはずします。
プラス記号 (+) をクリックすると選択項目を展開することができ、マイナス記号 (-) をクリックすると選択項目を省略することができます。
- 4 新しい設定を保存する場合は [変更を保存] を、前回保存した設定に戻す場合は [変更を元に戻す] をクリックします。

Desktop Agent の詳細表示でのバックアップ選択項目の追加

詳細表示は標準表示より多くの設定オプションを提供します。

詳細表示でバックアップ選択項目を追加する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある [バックアップ選択項目] をクリックします。
- 2 [詳細表示] をクリックします。
- 3 [追加] をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行して、バックアップ選択項目のプロパティをカスタマイズします。
 - [一般] タブで、名前、説明、バックアップフォルダなどのバックアップ選択項目の一般的なプロパティを設定します。
p.1611 の「[DLO のバックアップ選択項目の \[一般\] オプション](#)」を参照してください。
 - [インクルード/エクスクルード] タブで、このバックアップ選択項目内の特定のファイルを含めるか、除外します。
p.1613 の「[DLO のバックアップ選択項目の \[インクルード/エクスクルード\] オプション](#)」を参照してください。

- [リビジョン管理]タブで、このバックアップ選択項目のリビジョン管理を設定します。
p.1614の「DLOのバックアップ選択項目の[リビジョン管理]オプション」を参照してください。
 - [オプション]タブで、このバックアップ選択項目の差分ファイルの転送、暗号化および圧縮オプションを設定します。
p.1616の「DLOのバックアップ選択の[オプション]」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックし、変更した内容を保存します。

Desktop Agent の詳細表示でのバックアップ選択項目の修正

詳細表示では、プロファイルで Desktop Agent ユーザーに対して必要な権限が付与されている場合、Desktop Agent で作成したバックアップ選択項目および DLO 管理者によってプロファイルに作成されたバックアップ選択項目を修正することができます。

詳細表示でバックアップ選択項目を修正する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[バックアップ選択項目]をクリックします。
- 2 [詳細表示]をクリックします。
- 3 変更するバックアップ選択項目を選択して、[修正]をクリックします。

プロファイルバックアップ選択項目とは、DLO 管理者によって設定されたバックアップ選択項目のことです。プロファイルバックアップ選択項目は、ユーザーに対して必要な権限が付与されている場合は、ドロップダウンメニューで[カスタムの選択を使用]を選択して修正することができます。バックアップ選択項目に対してこのオプションを選択すると、管理者がプロファイルバックアップ選択項目を更新した場合でも更新されなくなります。

プロファイルバックアップ選択項目の設定は、ドロップダウンメニューで[プロファイルの選択を使用]を選択して、いつでも元に戻すことができます。このオプションを選択すると、DLO 管理者がプロファイルバックアップ選択項目を修正した場合にプロファイルが更新されるようになります。

- 4 必要に応じてバックアップ選択項目を修正します。
- 5 [OK]をクリックします。

Desktop Agent の詳細表示でのバックアップ選択項目の削除

バックアップ選択項目を削除した場合、バックアップファイルは、そのバックアップ選択項目に対して指定されている日数が経過すると、Backup Exec のグルーミングプロセスによって削除されます。

バックアップ選択項目を削除する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[バックアップ選択項目]をクリックします。
- 2 [詳細表示]をクリックします。
- 3 削除するバックアップ選択項目を選択します。
プロファイルのバックアップ選択項目は削除できません。
- 4 [削除]をクリックします。
- 5 このバックアップ選択項目を削除する場合は[はい]をクリックし、削除をキャンセルする場合は[いいえ]をクリックします。

DLO を使用した Outlook PST ファイルの増分バックアップについて

DLO は、デフォルトで、PST ファイルの増分バックアップを実行するように設定されています。PST ファイルの増分バックアップは、管理者によってプロファイルで制御されるか、デスクトップユーザーに対して必要な権限が付与されている場合は、デスクトップユーザーによって[オプション]ダイアログボックスで制御されます。

メモ: Outlook PST ファイルの増分バックアップを実行するには、通常使用するメールアプリケーションに Outlook が設定されている必要があります。

PST ファイルの増分バックアップを実行する場合、次のことを考慮する必要があります。

- Outlook PST ファイルの増分バックアップを行う場合、保持されるリビジョンは、バックアップ選択項目内で設定されているリビジョンの数に関係なく 1 つだけです。
- Microsoft Outlook の PST ファイルをリストアすると、リストアした PST ファイルは元のファイルとは異なるファイルになります。
p.1741 の「[Microsoft Outlook の個人用フォルダファイルのリストアについて](#)」を参照してください。
- 同期ファイルの増分バックアップを行うことはできません。
- DLO プロファイルで、ネットワークユーザーデータフォルダへのデータ転送時に帯域幅の使用率を制限するように設定している場合、増分 PST ファイルの転送時に帯域幅は制限されません。

デフォルトのメールアプリケーションとして Outlook を使わない場合、増分バックアップについての警告メッセージを無効にできます。

p.1727 の「[Desktop Agent のカスタムオプションの設定](#)」を参照してください。

Outlook PST ファイルが DLO バックアップ選択項目にインクルードされている場合、PST ファイルが閉じられると、ファイルは Desktop Agent の保留中のキューに表示されます。PST は共有リソースであるため、PST ファイルの開閉は MAPI というプロセスによって制

御されています。DLO および Outlook は、どちらも MAPI プロセスを介して PST にアクセスします。アプリケーションから要求があった場合、MAPI によって PST が開かれます。次の場合、使用している MAPI のバージョンによっては、MAPI が応答して PST が閉じられる場合と閉じられない場合があります。

- DLO や Microsoft Outlook などのアプリケーションが PST への接続を切断した場合 (Outlook が閉じられた場合など)
- DLO が起動された場合
- PST で 30 分の静止時間が経過した場合

PST が閉じられた場合、DLO では次のいずれかが行われます。MAPI を介して PST の増分バックアップを行っている場合 (PST の増分バックアップについてのセクションを参照)、DLO では PST 全体がバックアップされたかどうかを確認されます。バックアップが完了している場合は、DLO では PST が同期されていると認識され、エントリが Desktop Agent の保留中のキューから削除されます。PST の増分バックアップを行っていない場合、このタイミングで PST 全体のバックアップが行われます。

p.1741 の「[Microsoft Outlook の個人用フォルダファイルのリストアについて](#)」を参照してください。

Lotus Notes NSF ファイルの増分バックアップについて

次の種類の Lotus Notes NSF ファイルは増分バックアップできます:

表 Q-94 増分バックアップできる NSF ファイル

ファイル名	場所	説明
BOOKMARK.NSF	Notes¥Data ディレクトリ	保存されたブックマークと[ようこそ]ページの情報を含みます。
NAMES.NSF	Notes¥Data ディレクトリ	このファイルは連絡先、接続、場所、個人アドレス帳の情報を含んでいます。
A_<name>.NSF		これは電子メールのアーカイブファイルです。電子メールは、DLO によって増分バックアップされるにはアーカイブされなければなりません。電子メールのアーカイブに関するその他の情報については Lotus Notes のマニュアルを参照してください。

ファイルが増分バックアップされる時、Desktop Agent の[状態]ビューには進行状況インジケータは表示されません。1 つのリビジョンのみが保持されます。

メモ: DLO プロファイルで、ネットワークユーザーデータフォルダへのデータ転送時に帯域幅の使用率を制限するように設定している場合、増分 Lotus Notes NSF ファイルの転送時に帯域幅は制限されません。

Lotus Notes は Desktop Agent がインストールされる前にすでにインストールされていなければなりません。Lotus Notes が Desktop Agent の後でインストールされた場合、インストールを修復するために Desktop Agent インストーラを再び実行する必要があります。さらに Lotus Notes が Desktop Agent のインストール時に動作している場合、Lotus Notes は再起動されなければなりません。

Lotus Notes の電子メールファイルは、アーカイブされた場合にのみ DLO で増分バックアップできます。電子メールがアーカイブされると、作成されたアーカイブファイルを増分バックアップできます。電子メールのアーカイブに関する情報については Lotus Notes のマニュアルを参照してください。

削除された Lotus Notes の電子メールファイルはバックアップされません。

p.1724 の「[Lotus Notes ファイルの増分バックアップを実行するための Desktop Agent の設定](#)」を参照してください。

Lotus Notes ファイルの増分バックアップを実行するための Desktop Agent の設定

Lotus Notes がインストールされている場合は、電子メールファイルの増分バックアップを実行できます。

p.1723 の「[Lotus Notes NSF ファイルの増分バックアップについて](#)」を参照してください。

Lotus Notes ファイルの増分バックアップを実行するように Desktop Agent を設定する方法

- 1 Desktop Agent をインストールする前に、Lotus Notes がインストールされていることを確認します。または、Lotus Notes をインストールした後に Desktop Agent インストーラが再度実行され、インストールを修復していることを確認します。
- 2 バックアップする電子メールが、Lotus Notes でアーカイブされていることを確認します。
- 3 バックアップする Lotus Notes NSF ファイルが、適切なバックアップ選択項目で選択されていることを確認します。

p.1717 の「[Desktop Agent によるデータのバックアップの作成について](#)」を参照してください。

- 4 タスクバーのツールメニューの下にある[オプション]をクリックします。

- 5 [オプション]タブで[**Lotus Notes** 電子メールファイルのメッセージレベルの増分バックアップを有効にする]を選択します。
- 6 [OK]をクリックします。

Lotus Notes で現在のユーザーが設定されていない場合の Desktop Agent の使用について

ユーザーのログオン先コンピュータに DLO と Lotus Notes の両方がインストールされているが、Lotus Notes でそのユーザーがまだ設定されていない場合、デバッグ DOS ウィンドウが表示され、次のエラーが表示される場合があります。

```
<time_date_stamp> Created new log files as C:\Documents and Settings\%<user_name>%\Local Settings\Application Data\Lotus\Notes\Data\log.nsf.
```

```
<time_date_stamp> A previous process with the process ID <####> failed to terminate properly.
```

この DOS ウィンドウを閉じるには、DLO プロセスを手動で終了する必要があります。このエラーに対処するには、Lotus Notes で現在のユーザーを設定します。ユーザーを設定すると、そのユーザーのログオン時にこのエラーが生成されなくなります。

Desktop Agent の設定の変更について

DLO 管理者が、Desktop Agent 全体を表示して設定を変更できるようにユーザープロファイルを設定している場合には、[設定]ビューで次の設定を変更することができます。

- バックアップジョブスケジュールのオプション
- デスクトップユーザーデータフォルダの場所
- デスクトップユーザーデータフォルダのディスク容量の制限
- ログファイルのディスク容量の制限
- ログのレベル
- 帯域幅の使用率

Desktop Agent は、カスタムスケジュールまたはオプションの使用が選択されない限り、プロファイルで指定された設定を使い続けます。

p.1726 の「[DLOのバックアップジョブのためのスケジュールのオプションの変更](#)」を参照してください。

p.1727 の「[Desktop Agent のカスタムオプションの設定](#)」を参照してください。

オフライン作業中に、Desktop Agent の設定およびバックアップ選択項目を変更することができます。設定は、オンラインになるまで保存され、オンラインになった時点で自動的

に転送されます。また、管理者によって行われた変更が、**Desktop Agent** で行われた変更と競合する場合は、管理者によって行われた変更が使用されます。

メモ: 1 つの **Desktop Agent** で設定を変更すると、同じ認証を使う他の **Desktop Agent** で設定がロードされます。実行中のジョブはキャンセルされ、次に再起動されます。

DLO のバックアップジョブのためのスケジュールのオプションの変更

DLO 管理者が、**Desktop Agent** 全体を表示して設定を変更できるようにユーザープロファイルを設定している場合には、バックアップジョブのスケジュールを変更することができます。

バックアップジョブのためのスケジュールのオプションを変更する方法

- 1 タスクバーのツールメニューの下にある[オプション]をクリックします。
- 2 [スケジュール]タブで必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

p.1726 の「[\[スケジュール\]オプション](#)」を参照してください。

[スケジュール]オプション

プロファイルで許可されていれば、プロファイルと関連付けられているスケジュールを使用したり、カスタマイズされたスケジュールを設定したりできます。

p.1726 の「[DLO のバックアップジョブのためのスケジュールのオプションの変更](#)」を参照してください。

表 Q-95 [スケジュール]オプション

項目	説明
プロファイルのスケジュールを使用	プロファイルで指定されているバックアップのタイミングを使用するには、ドロップダウンメニューで[プロファイルのスケジュールを使用]を選択します。 このオプションを選択すると、[スケジュール]タブの詳細設定を変更することができなくなります。
カスタムスケジュールを使用	プロファイルのスケジュールと異なるカスタマイズされたスケジュールを指定できます。
ファイルの変更時	変更するたびにファイルを自動的にバックアップします。 この機能は NTFS ファイルシステムの場合にのみ利用可能です。FAT ファイルシステムの場合は、[変更ファイルのバックアップ間隔]フィールドでバックアップ間の時間を分単位または時間単位で入力します。

項目	説明
スケジュール	<p>スケジュールに従ってファイルをバックアップします。デフォルトでは月曜日、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日の午後 11 時にバックアップが実行されます。</p> <p>このデフォルトを変更するには、[編集]をクリックします。</p>
手動	<p>ユーザーが開始したときのみバックアップを実行します。</p>
ログアウト、再起動、シャットダウン	<p>次のオプションから選択することができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ジョブを実行しない ファイルのバックアップが必要な時でも、ログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行します。 ジョブがすでに実行されている場合、ジョブが完了したときにログアウト、再起動、またはシャットダウンするかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。 ■ ジョブの実行をユーザーに確認 ユーザーがログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行する前にバックアップジョブを実行することを求めるプロンプトを表示します。 ジョブがすでに実行されている場合、ジョブをキャンセルしてログアウト、再起動、またはシャットダウンするかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。 ■ 今すぐジョブを実行 ログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行する前にプロンプトを表示しないで待機中のファイルをバックアップします。 ジョブがすでに実行されている場合、ジョブをキャンセルしてログアウト、再起動、またはシャットダウンするかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。 ■ スケジュールに従ってジョブを実行 ログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行し、スケジュールに従ってファイルをバックアップします。 ジョブがすでに実行されている場合、ジョブをキャンセルしてログアウト、再起動、またはシャットダウンするかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。 ■ 次のログオン時にジョブを実行 プロンプトを表示しないでログアウト、再起動、またはシャットダウンを続行し、ジョブを次のログインで実行します。

Desktop Agent のカスタムオプションの設定

プロファイルで許可されている場合、Desktop Agent の追加の設定を変更できます。

オプションを変更する方法

- 1 タスクバーのツールメニューの下にある[オプション]をクリックします。
- 2 [オプション]タブで、ドロップダウンメニューから[カスタムオプションを使用]を選択します。
- 3 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

p.1728 の「[Desktop Agent の\[オプション\]](#)」を参照してください。

Desktop Agent の[オプション]

プロファイルで設定を修正できる場合は、コンピュータのログオプションとディスク領域の使用量を変更できます。

p.1727 の「[Desktop Agent のカスタムオプションの設定](#)」を参照してください。

表 Q-96 Desktop Agent の[オプション]

項目	説明
プロファイルのオプションを使用	<p>Desktop Agent がプロファイルで指定されているスケジュールオプションを使うことを示します。</p> <p>このオプションを選択すると、[スケジュール]タブの詳細設定を変更することができなくなります。</p>
カスタムオプションを使用	<p>プロファイルのスケジュールと異なるカスタマイズされたスケジュールを設定できます。</p> <p>[オプション]タブの詳細設定へのアクセスを可能にするには、このオプションを選択する必要があります。</p>
コンピュータのディスクの使用量を次の値に制限	<p>バックアップファイルの保存に使われるコンピュータの容量を制限します。</p> <p>バックアップファイルを保存するのに使うことができるハードディスク容量をパーセントで入力するには[%]を選択します。</p> <p>バックアップファイルを保存するのに使うことができる最大ディスク容量を MB 単位で入力するには[MB]を選択します。</p>
最低でも次の日数ログファイルを保持	<p>ログファイルを保持する最小日数を示します。ログファイルは、少なくとも指定した日数が経過するまでは削除されません。</p> <p>ログのグルーミングはログが作成されるたびに行われます。ログファイルは、最小日数が経過し、すべてのログファイルの合計サイズが設定値に達するまで削除されません。</p>

項目	説明
最低保持期間の経過後、全体のサイズが次のサイズ (MB) を超えた場合ログファイルを古い順に削除	保持するすべてのログファイルの最大の合計サイズを示します。この値を超えると最も古いログファイルが削除されます。 [最低でも次の日数ログファイルを保持]設定に指定した日数が経過したログファイルが存在しない場合、この項目で指定するMB数を超えるログファイルが保存される可能性もあります。
グルーミングメッセージを記録	グルーミング操作のログを作成します。
バックアップの情報メッセージを記録	すべてのバックアップ操作のログを作成します。
警告メッセージを記録	警告を生成するすべての操作のログを作成します。
Outlook PST ファイルのメッセージレベルの増分バックアップを有効にする	Microsoft Outlook の個人用フォルダ (PST) ファイルの増分バックアップを有効にします。PST ファイルを開いた状態でバックアップを行うには、増分バックアップが有効になっている必要があります。 このオプションにチェックマークを付けなかった場合、Outlook で設定された PST のファイルは、PST ファイルが保存されるたびに完全にバックアップされます。一般に、PST ファイルは Outlook が閉じられるとき保存されます。 p.1722 の「DLOを使用した Outlook PST ファイルの増分バックアップについて」 を参照してください。
Lotus Notes 電子メールファイルのメッセージレベルの増分バックアップを有効にする	ある特定の Lotus Notes NSF ファイルの増分バックアップのための DLO の設定を有効にします。これらのファイルを確実にバックアップするには、追加の手順が必要になる場合があります。 p.1724 の「Lotus Notes ファイルの増分バックアップを実行するための Desktop Agent の設定」 を参照してください。 このチェックボックスをオフにすると、Lotus Notes ファイルの増分バックアップが無効になります。

デスクトップユーザーデータフォルダの移動

プロファイルで許可されている場合、デスクトップユーザーデータフォルダの場所を変更できます。

デスクトップユーザーデータフォルダを移動する方法

- 1 タスクバーのツールメニューの下にある[オプション]をクリックします。
- 2 [バックアップフォルダ]タブで[移動]をクリックします。
- 3 [フォルダの参照]ダイアログボックスで、デスクトップユーザーデータフォルダの移動先となる場所を選択します。

- 4 [OK]をクリックします。
- 5 続行するかどうかを確認するメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。
- 6 [OK]をクリックします。

接続ポリシーのカスタマイズ

Desktop Agent は、特定の接続の種類バックアップを無効にしたり制限するように設定できます。たとえば、DLO の管理者が十分な権限を認可したら、ダイヤルアップ接続によって接続するときバックアップを無効にすることを選択できます。それから、より高い速度の接続に接続するとき、バックアップを続行できます。

バックアップが接続ポリシーによって制限されている場合、ファイルはデスクトップユーザーデータフォルダにバックアップされます。バックアップが接続ポリシーによって制限されなくなったときに、ファイルはネットワークユーザーデータフォルダに転送されます。デスクトップユーザーデータフォルダが無効になっている場合は、オフラインでは保護されません。

Active Directory の設定を使用して接続ポリシーを作成した場合や、複数のポリシーが特定のユーザーまたはコンピュータと一致している場合は、最も制限の厳しいポリシーが使用されます。

例:

1 つ目の接続ポリシーは、特定のユーザーまたはコンピュータに一致し、500 KB 以上のすべてのファイルのネットワークユーザーデータフォルダへのバックアップを無効にします。2 つ目の接続ポリシーは、ユーザーまたはコンピュータに一致し、ネットワークユーザーデータフォルダへのすべてのバックアップを無効にします。この場合、大きなファイルのバックアップを無効にするより、すべてのバックアップを無効にする方がより制限的なため、2 つ目の接続ポリシーが使用されます。

接続ポリシーをカスタマイズする方法

- 1 タスクバーのツールメニューの下にある[オプション]をクリックします。
- 2 [接続ポリシー]タブで必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。
p.1605 の「[[接続ポリシー]の追加と削除]オプション」を参照してください。
- 3 手順 2 で Active Directory を選択した場合、Active Directory を設定し、それから[OK]をクリックします。
p.1634 の「[Active Directory オブジェクト]オプション」を参照してください。
- 4 [OK]を 2 回クリックします。

デスクトップのユーザーデータの同期について

バックアップデータは、各デスクトップのローカルドライブのデスクトップユーザーデータフォルダと、ネットワークユーザーデータフォルダに格納されます。複数のデスクトップを使用している場合、ネットワークユーザーデータフォルダには、各デスクトップのバックアップファイルのコピーが格納されます。フォルダを同期させると、フォルダおよびフォルダに含まれているサブフォルダやファイルのコピーが1つだけネットワークユーザーデータフォルダに格納されます。デスクトップ上でファイルを変更すると、ファイルは、そのコンピュータのデスクトップユーザーデータフォルダに格納され、次のDLOジョブの実行時にネットワークユーザーデータフォルダに格納されます。このファイルは、同期済みの別のデスクトップコンピュータが次のジョブを実行するときに、そのコンピュータにダウンロードできるようにします。

フォルダを同期させると、デスクトップをネットワークに接続するたび、およびデスクトップでジョブを実行するたびに、**Desktop Agent** によってネットワークユーザーデータフォルダがチェックされるようになります。同期フォルダのいずれかに新しいファイルバージョンが存在する場合は、その新しいバージョンがデスクトップ上のユーザーデータフォルダにダウンロードされます。ファイルを同期させずに、現在ログオンしているデスクトップ上のファイルを変更し、さらにバックアップ対象の他のコンピュータ上で同じファイルを変更すると、競合が発生し、使用するファイルのリビジョンの選択を求めるメッセージが表示されます。

バックアップ対象のデータを同期させることにより、作業中のファイルが最新のバージョンであることを確認しながら、任意のデスクトップ上でファイルを編集することができます。

[同期選択項目]ビューには、同期可能な他のデスクトップにバックアップされているフォルダが表示されます。表示されたフォルダから、現在ログオンしているデスクトップコンピュータ上のフォルダと同期させるフォルダを任意の数だけ選択します。

メモ: NTFS 権限、または圧縮や暗号化などのディレクトリ属性をカスタマイズする場合は、リストアまたは同期後にこれらのカスタマイズ内容を設定しなおす必要があります。

p.1731 の「[同期の動作](#)」を参照してください。

同期の動作

DLOジョブが実行されると、DLOは次のようにしてファイルをバックアップし、同期します。

- デスクトップで変更されたファイルをバックアップします。
- 同期対象のファイルを、デスクトップと同期される他のコンピュータでも利用できるようにします。
- 前回の DLO ジョブが実行されてから別のコンピュータで変更され、アップロードされた同期ファイルをダウンロードします。

- 競合しているバージョンのファイルをすべて保持します。その中から、使用するバージョンを選択できるようになります。

ファイルをバックアップするときは、さまざまなフィルタを設定できます。たとえば、バックアップ対象にインクルードまたはエクスクルードするファイルの種類、あるいは圧縮や暗号化を行うファイルの種類についてフィルタを設定できます。コンピュータ間でファイルを同期するときには、フィルタがすべて組み合わせられます。たとえば、同期されるファイルの1つが圧縮および暗号化されている場合、同期されるすべてのファイルが自動的に圧縮され、暗号化されます。元のバックアップ選択項目で .jpg ファイルのみがバックアップされていた場合、同期ファイルセットには .jpg ファイルのみがインクルードされます。

フォルダを同期した後に同期フォルダの設定を変更し、後でそのフォルダの同期を解除した場合、フォルダは元のバックアップ選択項目の設定に戻されます。たとえば、元のバックアップ選択項目で .jpg ファイルのみバックアップを作成する場合にそのフォルダが後で同期されると、すべてのファイルのバックアップを作成するように設定されます。それからフォルダの同期が解除されると、再び .jpg ファイルのみのバックアップを作成します。

各コンピュータでバックアップされたファイルの数が異なる場合には、最大数のファイルが同期されます。たとえば、コンピュータ A で 3 つのファイルをバックアップし、コンピュータ B で 5 つのファイルをバックアップした場合は、5 つのファイルが同期されます。

同期選択項目は、バックアップ選択項目と同様に、グローバルエクスクルードによる制限が適用されます。

p.1636 の「[DLOでのグローバルエクスクルードフィルタの設定について](#)」を参照してください。

次のオプションを使用して、同期を管理します。

- 新しい同期セットを作成することを可能にする標準表示。
- 同期セットごとの設定を変更することができる詳細表示。

同期機能を使用するには、すべての同期コンピュータで同じバージョンの **Desktop Agent** が実行され、すべてのコンピュータのシステムクロックを同期させる必要があります。また、**Desktop Agent** が実行されるコンピュータでは、同じバージョンの **Windows オペレーティングシステム** を使用する必要があります。たとえば、**Microsoft Windows Vista** が実行されている 2 つのコンピュータ間ではデータを同期できます。**Windows Vista** が実行されているコンピュータと、**Windows XP** が実行されているコンピュータ間では、データは同期できません。

複数のデスクトップ間でのフォルダの同期

バックアップ対象のデータを同期させることにより、作業中のファイルが最新のバージョンであることを確認しながら、任意のデスクトップ上でファイルを編集することができます。

p.1731 の「[同期の動作](#)」を参照してください。

複数のデスクトップ間でフォルダを同期させる方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[同期選択項目]をクリックします。
- 2 [標準表示]をクリックします。
同期が可能なデスクトップが[リモートコンピュータ]ペインに表示されます。
[同期選択項目]ビューには、所有者が同じであり、**Desktop Agent** によってバックアップされるデスクトップが表示されます。同期が可能なのはバックアップ対象のフォルダのみです。
- 3 同期させるフォルダを選択します。
- 4 [ローカルフォルダの選択]ダイアログボックスが表示されたら、同期ファイルを格納する場所を入力するか、または参照して選択します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 [変更を保存]をクリックします。

同期フォルダの変更または表示

同期フォルダの設定を変更するか、または表示できます。

p.1731 の「[同期の動作](#)」を参照してください。

同期フォルダを変更または表示する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[同期選択項目]をクリックします。
- 2 [詳細表示]をクリックします。
- 3 変更または表示するフォルダを選択します。
- 4 [修正]をクリックします。
- 5 同期のフォルダのオプションを設定します。
- 6 [OK]をクリックします。

同期フォルダの削除

同期選択項目を削除すると、ソースファイルを削除したときと同じように、バックアップファイルが削除されます。バックアップファイルは、バックアップ選択項目で指定されている日数が経過するとグルーミングされます。

p.1731 の「[同期の動作](#)」を参照してください。

同期フォルダを削除する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[同期選択項目]をクリックします。
- 2 [詳細表示]をクリックします。

- 3 削除する同期選択項目をクリックします。
- 4 [削除]をクリックします。
- 5 プロンプトで、[はい]をクリックします。

同期ファイルの競合の解決

Desktop Agent を使用せずに同期ファイルを複数のコンピュータ上で修正すると、競合が発生し、保持するファイルバージョンの決定を求めるメッセージが表示されます。たとえば、デスクトップコンピュータとラップトップの両方で同じファイルに修正を加え、かつそのラップトップがネットワークに接続していない場合などに競合が発生します。ラップトップをネットワークに接続すると、競合が検出されます。

p.1731 の「同期の動作」を参照してください。

同期ファイルの競合を解決する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[状態]をクリックします。
競合が検出されると、[状態]ビュー内に[競合の解決]オプションが表示されます。
- 2 [X 個の競合が見つかりました。]というリンクをクリックすると、競合の解決ウィザードが起動します。
- 3 同期における競合についての情報を確認して、[次へ]をクリックします。
- 4 競合を含むファイルを選択します。
- 5 [フォルダを開く]をクリックします。
- 6 必要に応じてリビジョンを管理します。
たとえば、古いリビジョンを保持する場合は、新しいリビジョンを削除し、競合が発生しているリビジョンを元の名前に戻します。
- 7 [完了]をクリックします。

Desktop Agent の状態について

Desktop Agent の[状態]ビューには、次に示す Desktop Agent 操作の概略が表示されます。

表 Q-97 Desktop Agent 操作

項目	説明
状態	Desktop Agent のジョブの現在の状態、バックアップが実行される日時および最後のバックアップ結果の概略が表示されます。

項目	説明
詳細	このリンクは、FATドライブに対するバックアップ選択項目を選択する場合に、状態の概略のすぐ下に表示されます。クリックすると、現在の Desktop Agent の設定に基づいたバックアップのタイミングについての詳細が表示されます。
保留中のファイルを表示/非表示	保留中のファイルを表示または非表示にします。このリンクをクリックすると、[保留中のファイルを非表示]および[保留中のファイルを表示]を切り替えることができます。
ネットワーク	このコンピュータのネットワークユーザーデータフォルダに格納されているデータの合計量が表示されます。
ローカル	このコンピュータのデスクトップユーザーデータフォルダに格納されているデータの合計量が表示されます。
詳細	このリンクは、状態の概略のすぐ下に表示されます。クリックすると、ユーザーデータのフォルダの使用状況に関する詳細情報が表示されます。p.1736 の「 使用状況の詳細の表示 」を参照してください。

[状態]ビューからの保留中のジョブの開始

[状態]ビューから、バックアップ、同期、またはリストアのようなすべての種類の保留ジョブを実行できます。

[状態]ビューから保留中のジョブを開始する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[状態]をクリックします。
- 2 タスクバーのタスクメニューの下にある[ジョブを実行]をクリックします。

ジョブの一時停止またはキャンセルについて

プロファイルで許可されている場合、ジョブを一時停止するか、またはキャンセルできます。

メモ: DLO 管理者は、一時停止されているジョブが再開するまでの最長時間を設定します。

利用可能なオプションは、一時停止されているジョブの種類によって異なります。

表 Q-98 ジョブの一時停止オプション

実行中のジョブの種類	オプション
ファイルの変更時	指定した分数に達するまでジョブを一時停止して、再開します。
手動	利用可能なオプションは次のとおりです。 ■ 指定した分数に達するまでジョブを一時停止して、再開します。 ■ ジョブが手動で再開されるまで、ジョブをキャンセルします。
スケジュール済み	利用可能なオプションは次のとおりです。 ■ 指定した分数に達するまでジョブを一時停止して、再開します。 ■ 次に実行するようにスケジュールされるまで、ジョブをキャンセルします。

使用状況の詳細の表示

Desktop Agent の[状態]ビューには、データの格納に必要なローカルおよびネットワークの両方のディスク容量に関する情報の概略が表示されます。

次のより詳細な使用状況およびグルーミング機能については、[使用量の詳細]ダイアログボックスで参照できます。

- 現在バックアップデータの格納に使用されているネットワークおよびデスクトップコンピュータのディスク容量の合計。
- クォータ、またはネットワークおよびデスクトップコンピュータでデータの格納に使用できる最大のストレージスペース。
- データの格納に利用できるネットワークおよびデスクトップコンピュータのディスク容量。
- 古いリビジョンおよび削除したファイルをただちに削除するオプション。
- 追加情報およびヘルプへのリンク。

メモ: 使用状況の詳細へのリンクは、Desktop Agent がアイドル状態のときのみ利用できます。ジョブが実行中の場合は表示されません。

使用状況の詳細およびファイルのグルーミングを表示する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[状態]をクリックします。
- 2 [状態]ペインの[使用量の概略]の下にある[詳細]をクリックします。
- 3 使用状況に関する情報を参照して、必要に応じて適切な処理を行います。

p.1737 の「[使用量の詳細](#)」を参照してください。

使用量の詳細

[使用量の詳細]ダイアログボックスには、次の情報が表示されます。

p.1736 の「[使用状況の詳細の表示](#)」を参照してください。

表 Q-99 使用量の詳細

項目	説明
ローカル	<p>データの格納に使用するデスクトップコンピュータのディスクの使用状況についての概略が表示されます。次の情報が表示されます。</p> <p>使用中 - バックアップデータを格納するためにデスクトップコンピュータで現在使用されているディスク容量の合計。</p> <p>クォータ - デスクトップコンピュータでバックアップデータの格納に利用可能な最大ディスク容量。管理者がプロファイルのクォータの制限を設定します。ただし、プロファイルで許可されている場合はユーザーが変更できます。</p> <p>p.1725 の「Desktop Agent の設定の変更について」を参照してください。</p> <p>利用可能な空き領域 - デスクトップコンピュータでクォータを超過せずにデータを格納できる利用可能な空き領域の合計。クォータが設定されていない場合、バックアップデータによってドライブの空き領域が完全になくならないように、Desktop Agent によって少量のディスク領域が予約されます。</p>
ネットワーク	<p>データの格納に使用するネットワークのディスクの使用状況についての概略が表示されます。次の情報が表示されます。</p> <p>使用中 - バックアップデータを格納するためにネットワークで現在使用されているディスク容量の合計。</p> <p>クォータ - ネットワークでバックアップデータの格納に利用可能な最大ディスク容量。</p> <p>利用可能な空き領域 - ネットワークでクォータを超過せずにバックアップデータを格納できる利用可能な空き領域の合計。</p>
同期ファイル	<p>同期データの格納に使用するディスクの使用状況についての概略が表示されます。次の情報が表示されます。</p> <p>使用中 - 同期データを格納するためにネットワークで現在使用されているディスク容量の合計。</p>

項目	説明
削除済みファイルを完全に削除	<p>ネットワークとデスクトップユーザーデータフォルダで削除済みとマーク付けされているすべてのファイルを削除します。これらのファイルは割り当てられたプロファイルで指定されている時間を経過した後、定期保守サイクルによって削除されます。</p> <p>[削除済みファイルを完全に削除]ダイアログボックスの次のオプションから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ バックアップ選択項目の選択ファイル条件を満たす削除済みファイルのみを削除 ■ すべての削除済みファイルを削除 <p>ネットワークユーザーデータフォルダから削除されたファイルのグルーミングも行う場合は、[ファイルをネットワークユーザーデータフォルダから削除]チェックボックスをオンにします。</p>
ここをクリックすると最新のジョブログが表示されます	<p>[ログファイルビューア]を開きます。</p> <p>p.1742の「Desktop Agentでのジョブ履歴の監視について」を参照してください。</p>

Desktop Agent を使用したファイルのリストア

プロファイルで許可されている場合、元のディレクトリか代替のディレクトリにファイルをリストアするために **Desktop Agent** を使うことができます。**Desktop Agent** のユーザーに DLOを実行中の複数のデスクトップコンピュータがあれば、ファイルはユーザーの各デスクトップのすべての利用可能なバックアップから選択できます。ただし、それらのファイルは現在のデスクトップコンピュータにのみリストアできます。

p.1722の「[DLOを使用したOutlook PSTファイルの増分バックアップについて](#)」を参照してください。

p.1741の「[Microsoft Outlookの個人用フォルダファイルのリストアについて](#)」を参照してください。

ファイルまたはフォルダに対する NTFS 権限、または圧縮や暗号化などのディレクトリ属性をカスタマイズする場合は、リストア後にこれらのカスタマイズ内容を設定しなおす必要があります。

Desktop Agent の実行中にネットワークの接続を切断すると、[リストア]ビューを参照する際の応答時間が長くなる可能性があります。この問題を解決するには、タスクメニューで[最新の情報に更新]を選択します。

DLO では、ファイルが別のアプリケーションで使用されていると、そのファイルは元の場所にリストアされません。

使用中のファイルが DLO で検出された場合は、次のいずれかのタスクを実行してファイルをリストアできます。

- ファイルをリストアする時間をスケジュールする。ファイルはコンピュータの再起動後にリストアされます。ファイルがリストアされる際に通知は行われません。
- 管理者アカウントを使用してデスクトップコンピュータにログオンする。その後、リストアジョブを実行してロックされたファイルを上書きし、リストアします。
- 別のアプリケーションでファイルを閉じる。
- ファイルを代替の場所にリストアする。

ファイルをリストアする方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[リストア]をクリックします。
- 2 [表示]で、次に示すリビジョン表示オプションのいずれかを選択します。

すべてのリビジョン すべてのファイルのリビジョンが表示され、リストア対象として選択できます。

最新のリビジョン 最新のファイルのリビジョンのみが表示され、リストア対象として選択できます。

指定した日時またはそれ
以降に修正されたリビジョ
ン このオプションを選択した場合は、いつ以降のリビジョンを表示およびリストア対象として選択できるようにするかを指定する日時を入力し、[OK]をクリックします。

- 3 リストアする項目を選択します。

[リストアするファイルの検索]ビューに同じファイルのエントリが重複して表示されることがあります。そのような場合、リストア対象としてどちらのファイルを選択しても結果は同じになります。

ファイルを削除するとき、バックアップファイルはファイルグルーミングプロセスによって削除されるまで保持されます。[リストア]ビューでは、元のファイルが削除されてもバックアップファイルが利用可能なファイルに、赤色の x マークが付きます。このマークは元のファイルが削除されたことを示します。

p.1614 の「[DLO のファイルのグルーミングについて](#)」を参照してください。

- 4 [リストア]をクリックします。
- 5 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。

p.1739 の「[\[リストア\]オプション](#)」を参照してください。

[リストア]オプション

[リストア]ダイアログボックスでは、リストアされたファイルを処理する方法を指定できます。

p.1738 の「[Desktop Agent を使用したファイルのリストア](#)」を参照してください。

表 Q-100 [リストア]オプション

項目	説明
このコンピュータの元のフォルダにリストア	元の場所にファイルとフォルダをリストアします。
リストア先をこのコンピュータの代替フォルダに変更	同じコンピュータの代替フォルダにファイルとフォルダをリストアします。
フォルダ構造を保持	元のディレクトリ構造でデータをリストアします。このオプションをオフにした場合は、サブディレクトリ内のデータを含むすべてのデータが、指定したパスにリストアされます。
すでに存在するファイルのリストア方法	リストアしたいファイルがすでに存在する場合の処理を指定します。 次のいずれかを選択できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 上書きしない ■ 確認 ■ 上書き
削除したファイルをリストア	ソースファイルが削除された場合でもファイルをリストアすることができます。
リストアしたファイルのセキュリティ属性を保持	リストアされたファイルのセキュリティ情報を保持します。 ソースファイルのセキュリティと宛先のセキュリティが競合する場合、ファイルを正常にリストアするには、このチェックボックスをオフにする必要がある場合があります。このオプションのチェックマークを外すと、リストアされるファイルからセキュリティ情報が削除されます。

リストアするデスクトップファイルおよびフォルダの検索

リストアするフォルダとファイルを見つけるために検索機能を使います。

リストアするデスクトップファイルおよびフォルダを検索する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[リストア]をクリックします。
- 2 タスクバーのタスクメニューの下にある[リストアするファイルを検索]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定し、[OK]をクリックします。
 p.1740 の「[\[検索\]オプション](#)」を参照してください。

[検索]オプション

リストアするファイルを見つけるには、[検索]ダイアログボックスを使います。

p.1740の「[リストアするデスクトップファイルおよびフォルダの検索](#)」を参照してください。

表 Q-101 [検索]オプション

項目	説明
ファイル名に次の文字列が含まれるファイルを検索	ファイル名かフォルダで検索できます。
修正日	特定の期間に変更されたファイルを検索できます。時間帯を指定してください。
今日	今日修正されたファイルを検索できます。
過去 1 週間以内	過去 1 週間に修正されたファイルを検索できます。
次の期間内	日付を指定した期間で検索できます。
種類	特定の種類のファイルを検索できます。提供されるリストからファイルの種類を選択してください。
サイズ	指定したサイズと同じファイル、指定したサイズ以上のファイル、または指定したサイズ以下のファイルを検索できます。

Microsoft Outlook の個人用フォルダファイルのリストアについて

Microsoft Outlook の個人用フォルダ (PST) ファイルをリストアすると、リストアした PST と元の PST との間に次の相違点が生じます。

- ファイルサイズが一致しません。
- PSTファイル内のフォルダをポイントするルールが正常に機能しなくなります。正しいフォルダをポイントするようにルールを編集する必要があります。
- 元のファイルに[受信トレイ]、[送信トレイ]および[送信済みアイテム]フォルダが含まれていない場合でも、リストアした PST ファイルにはそれらのフォルダが含まれています。
- PSTファイルに対してパスワードを使用する場合は、PSTファイルのリストア後にパスワードを設定しなおす必要があります。

p.1722の「[DLOを使用した Outlook PST ファイルの増分バックアップについて](#)」を参照してください。

削除した電子メールメッセージのリストアについて

電子メールのアーカイブからメッセージを削除した場合のデフォルトの動作は、電子メールアプリケーションによって異なります。Lotus Notes の場合、[ごみ箱]という特定のフォルダに一定期間 (デフォルトでは 48 時間) メッセージを保存する[一時的削除]という機

能があります。一定期間が経過したら、メッセージは完全に削除されます。**Outlook** にも同様の機能があります。削除したメッセージは、[削除済みアイテム]フォルダに移動されますが、この処理に関連付けられた時間制限はありません。**Outlook** では、ユーザーが [削除済みアイテム]フォルダを空にしない限り、メッセージは完全に削除されません。

どちらの場合にも、**Desktop Agent** では、次のバックアップ操作時に、削除がレプリケートされます。ユーザーがメールのアーカイブから誤ってメッセージを削除すれば、メッセージをリカバリする必要があります。電子メールのアーカイブで保持されるバージョンがない場合は、時間制限を超えた後またはユーザーが手動でフォルダを空にした後に、完全に削除されたメッセージが利用できなくなります。

代替ストリームのデータを持つファイルのリストアについて

DLO では、セキュリティストリームを含む、ファイルのすべての代替ストリームが保護されます。新しいバージョンのファイルに代替ストリームのデータに対する修正のみが含まれる場合、リビジョン数は変更されずに、古いバージョンは新しいファイルに置き換えられます。実際にデータが変更されたリビジョンのみが、新しいリビジョンとして扱われます。

FAT パーティションでは代替データストリームは使用されません。NTFS パーティションから FAT パーティションにファイルのリストアした場合、リストアされたファイルには代替ストリームのデータは含まれません。

ファイルのリストアする場合、リストアされるファイルのセキュリティ属性を保持するオプションを選択できます。このオプションのチェックマークを外すと、リストアされるファイルからセキュリティ属性が削除されます。このオプションは、[リストア]ダイアログボックスで設定します。

Backup Exec Retrieve を使用したファイルのリストアについて

DLO で Backup Exec Retrieve を使用できるように設定している場合、Web ブラウザを使用し、DLO ファイルを検索してコンピュータにリストアすることができます。検索結果には、ネットワークユーザーデータフォルダ内で検索基準に一致する、バックアップされたすべてのバージョンの DLO ファイルが含まれます。また、最新のアクティビティに基づいて検索することもできます。DLO ファイルは、固有のアイコンで識別されます。Backup Exec Retrieve を使用したファイルのリストアについて詳しくは『Symantec Backup Exec Continuous Protection Server 管理者ガイド』を参照してください。

Desktop Agent でのジョブ履歴の監視について

バックアップ、リストアまたは同期が実行されると、そのジョブの詳細がログファイルに保存されます。ログファイルは、表示および検索することができます。また、テキストファイルに

保存することもできます。[履歴]ビューには、次の情報の概略が表示され、すべてのログにアクセスすることができます。

[履歴]ウィンドウの下で対応するタブを選択すると、バックアップ履歴またはリストア履歴を表示することができます。

表 Q-102 ジョブ履歴の表示情報

項目	説明
開始	ジョブが開始された日時。
終了	ジョブが終了した日時。
状態	[実行中]、[完了]、[キャンセル]、[失敗]など、ジョブの状態。
転送されたファイル数 (ローカル)	表示されているジョブの実行中にデスクトップユーザーデータフォルダに転送されたファイルの合計数。
転送されたサイズ (ローカル)	表示されているジョブの実行中にデスクトップユーザーデータフォルダに転送されたデータの合計バイト数。
転送されたファイル数 (ネットワーク)	表示されているジョブの実行中にネットワークユーザーデータフォルダに転送されたファイルの合計数。 この情報は、バックアップ履歴のみで利用できます。リストア履歴では利用できません。
転送されたサイズ (ネットワーク)	表示されているジョブの実行中にネットワークユーザーデータフォルダに転送されたデータの合計バイト数。 この情報は、バックアップ履歴のみで利用できます。リストア履歴では利用できません。
エラー	コピーに失敗し、エラーが生じたファイルの数。

p.1743 の「[ログファイルの表示](#)」を参照してください。

p.1745 の「[ログファイルの検索](#)」を参照してください。

ログファイルの表示

ログファイルはコンピュータで動作したジョブについての情報を含んでいます。

p.1742 の「[Desktop Agent でのジョブ履歴の監視について](#)」を参照してください。

ログファイルを表示する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[履歴]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - バックアップログを表示するには、[バックアップ]をクリックします。

- リストアログを表示するには、[リストア]をクリックします。

3 [表示]で、以下の項目の 1 つを選択します。

すべてのログ	すべての履歴ログが表示されます。
エラーがあるすべてのログ	エラーが発生したすべてのジョブの履歴ログが表示されます。
日付によってフィルタされたログ	指定の日時以降に生成されたすべてのログが表示されます。 [日付によるフィルタ]ダイアログボックスに表示するログの日時を入力し、[OK]をクリックします。

- 4** 履歴ログを表示するジョブをクリックします。
- 5** [ログを表示]をクリックして、ログファイルビューアを開きます。
 p.1744 の「[ログファイルビューア]オプション」を参照してください。
- 6** 必要に応じて、[名前を付けて保存]をクリックしてログファイルをテキストファイルに保存します。
- 7** [閉じる]をクリックします。

[ログファイルビューア]オプション

ログエントリについての詳細を表示し、表示したい特定のログエントリを検索できます。

p.1743 の「[ログファイルの表示](#)」を参照してください。

表 Q-103 [ログファイルビューア]オプション

項目	説明
すべてのログファイル	すべてのログファイルのログエントリを検索できます。
現在のログファイル	選択したログファイルのログエントリを検索できます。
タイムスタンプ	特定のタイムスタンプを持つログエントリを検索できます。
今日	今日生成されたログエントリを検索できます。
先週	過去 1 週間に生成されたログエントリを検索できます。
[日付]と[日付]の間	指定した 2 つの日付の間に生成されたログエントリを検索できます。

項目	説明
種類	バックアップまたはリストアなどの特定の種類のログエントリを検索できます。
ファイル名に含まれる文字列	特定のファイル名を含んでいるログエントリを検索できます。
検索範囲	情報エントリまたはエラーエントリなどの特定の種類のログエントリのみを検索できます。
検索	選択した条件に一致するログエントリを検索できます。
名前を付けて保存	テキストファイルとしてログファイルを保存できます。
ログファイルを開く	以前保存したログファイルを開くことができます。

ログファイルの検索

ログファイルビューアの強力な検索機能を使用すると、表示対象のログファイルの場所を特定することができます。

p.1742 の「[Desktop Agent でのジョブ履歴の監視について](#)」を参照してください。

ログファイルを検索する方法

- 1 タスクバーの表示メニューの下にある[履歴]をクリックします。
- 2 [履歴]ペインで、[検索]のリンクをクリックします。
- 3 フィルタパラメータを入力します。

すべてのログファイル	ログファイルビューアにログエントリをすべて表示するには、このオプションを選択します。
現在のログファイル	現在のログファイルのログエントリのみを検索するには、このオプションを選択します。

タイムスタンプ	<p>指定期間のログエントリのみを検索するには、[タイムスタンプ]チェックボックスをオンにします。次のオプションがあります。</p> <p>今日: 今日作成されたログファイルのみを表示します。</p> <p>先週: 先週作成されたすべてのログファイルを表示します。</p> <p>日付: 指定した期間に作成されたすべてのログファイルを表示します。</p>
種類	<p>指定した種類のログのみを表示するには、[形式]チェックボックスをオンにします。次のいずれかの種類を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ バックアップ■ リストア■ ユーザーの移動■ 保守■ エラー■ 警告
ファイル名に含まれる文字列	<p>ファイル名またはファイル名の種類によってログを表示するには、[ファイル名]チェックボックスをオンにし、ファイル名またはファイル名の種類を入力します。ワイルドカードを使用することができます。</p> <p>例: *gold.doc</p> <p>ワイルドカードを使用する場合は、[*]を使用してください。たとえば、*.tmp を指定すると .tmp という拡張子を持つファイルがすべて表示されますが、.tmp を指定すると .tmp という名前のファイルのみが表示されます。</p>
情報エントリのみ	<p>情報エントリのみを表示するには、[情報エントリのみ]を選択します。</p>
エラーエントリと警告エントリのみ	<p>エラーエントリと警告エントリの両方を表示するには、[エラーエントリと警告エントリのみ]を選択します。</p>
エラーエントリのみ	<p>エラーエントリのみを表示するには、[エラーエントリのみ]を選択します。</p>
警告が発生したエントリのみ	<p>警告が発生したエントリのみを表示するには、[警告が発生したエントリのみ]を選択します。</p>

4 [検索]をクリックします。

- 5 必要に応じて、[名前を付けて保存]をクリックしてログファイルをテキストファイルに保存します。
- 6 [閉じる]をクリックします。

ログファイルのグルーミングについて

ログのグルーミングはログが作成されるたびに行われます。ログファイルは、最小日数の設定値を経過して、かつすべてのログファイルを合計したサイズが、設定されている最大値に達するまで削除されません。必要な権限が管理者によってプロファイルに付与されている場合、Desktop Agent の[設定]の[オプション]タブでこれらの設定を変更することができます。

p.1727 の「[Desktop Agent のカスタムオプションの設定](#)」を参照してください。

他の製品での DLO の使用について

次に、互換性に関する既知の問題について説明します。

表 Q-104 互換性の問題

製品	説明
Symantec Storage Exec	<p>Symantec Storage Exec は、Microsoft Windows 環境でファイルおよびアプリケーションのディスク使用率を管理するポリシーベースのストレージリソースマネージャです。DLO と Storage Exec は互換性がありますが、DLO のバックアップ選択項目と Storage Exec のポリシー間で競合が発生しないように注意する必要があります。DLO で特定のファイルの種類をバックアップするように設定され、Storage Exec でこのファイルの種類がサーバーにコピーされないように設定されている場合、競合が発生します。DLO はファイルのバックアップを試行しますが、操作は失敗します。DLO の履歴ログには、ファイルがネットワークユーザーデータフォルダへのコピーに失敗したことが示されます。</p> <p>この競合を避けるには、DLO のバックアップ選択項目と Storage Exec のポリシーが競合する可能性について確認する必要があります。競合が検出された場合は、ポリシーを手動で変更して競合を排除する必要があります。</p>
WinCVS	<p>DLO を WinCVS と同時に実行している場合、ソースのチェック時に、権限がないというエラーが生成される場合があります。グローバルエクスクルードまたはバックアップ選択項目のエクスクルードを使用して、cvs という名前のディレクトリを除外すると、この問題を回避できます。</p>
Windows XP Service Pack 2	<p>Windows XP Service Pack 2 を使用している場合、DLO 管理コンソールの [リストア]ビューの [参照] ボタンを使用するには、ファイル共有を有効にする必要があります。</p>

製品	説明
PGP Desktop 8.1	PGP Personal Desktop 8.1 を使用して DLO を実行している場合、DLO のバックアップ選択項目でマウントドライブを作成したり、ドライブをマウント解除するには、DLO を無効にする必要があります。

DLO 管理コンソールに関するトラブルシューティング

DLO 管理コンソールについて質問がある場合は、次の回答を参照してください。

表 Q-105 DLO 管理コンソールの質問と回答

質問	回答
<p>自動ユーザー割り当てに変更を加えましたが、変更内容が既存の Desktop Agent ユーザーに反映されません。</p>	<p>自動ユーザー割り当てでは、新規の Desktop Agent ユーザーにプロファイルおよびデータ格納場所を割り当てるために 1 回だけ使用されます。プロファイルおよびデータ格納場所の設定を変更するために自動ユーザー割り当てを変更することはできますが、変更内容は新規ユーザーにのみ適用されます。自動ユーザー割り当てに追加の変更を加えても、すでに設定が完了しているユーザーに影響を与えることはありません。</p> <p>これは、別のデスクトップ上に Desktop Agent をインストールする既存のユーザーについても同様です。新規インストールでは、既存のユーザー設定が使用され、ユーザーのユーザーデータフォルダにデータが格納されます。新しいコンピュータに Desktop Agent をインストールする場合でも、自動ユーザー割り当てに対する変更内容が既存のユーザーに影響することはありません。</p> <p>既存のデスクトップユーザーの設定を変更するには、ユーザーが割り当てられているプロファイルを修正するか、新しいプロファイルまたはデータ格納場所にユーザーを再割り当てします。</p> <p>p.1649の「Desktop Agent ユーザーのプロファイルの変更」を参照してください。</p> <p>p.1645の「Desktop Agent のユーザーの管理について」を参照してください。</p> <p>p.1632の「自動ユーザー割り当てについて」を参照してください。</p> <p>p.1590の「DLO プロファイルについて」を参照してください。</p> <p>p.1651の「新しいネットワークユーザーデータフォルダへの Desktop Agent ユーザーの移動」を参照してください。</p>

質問	回答
<p>デスクトップユーザーが Desktop Agent を実行すると、[Desktop Agent を設定することができません。現在のユーザーのため設定が見つからないか、自動ユーザー割り当てが一致しません。]というメッセージが表示されます。これはなぜでしょうか？</p>	<p>このメッセージは、ユーザー、またはユーザーのドメインおよびグループに対応する自動ユーザー割り当てを DLO が検出できなかったことを意味しています。</p> <p>ユーザーを DLO に追加するには、次の方法を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザーのドメインおよびグループに対応する自動ユーザー割り当てによって、プロファイルおよびデータ格納場所を Desktop Agent に割り当て、ユーザーを DLO に追加します。Desktop Agent を実行するユーザーが属しているドメインおよびグループに対応する自動ユーザー割り当ての作成が完了していることを確認します。 <p>また、すべてのドメインおよびすべてのグループを対象とする自動ユーザー割り当てを作成し、ドメインやグループよりも詳細なレベルの自動ユーザー割り当てに該当しないユーザーにも、自動ユーザー割り当てが適用されるようにすることもできます。通常、そのような「包括的な」種類の自動ユーザー割り当てには、最も低い優先度を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DLO にユーザーを手動で追加します。この処理では、プロファイルとデータ格納場所またはユーザーデータフォルダのどちらかを新規ユーザーに割り当てる必要があります。 <p>ユーザーが Desktop Agent を実行する前に、ユーザーに対応する自動ユーザー割り当てが存在すること、またはユーザーが手動で追加されていることを確認してください。</p>

質問	回答
<p>ネットワークユーザーデータフォルダおよびデータ格納場所が必要になるのはどのような場合でしょうか？</p>	<p>すべての Desktop Agent ユーザーにはネットワークユーザーデータフォルダが割り当てられ、そこにバックアップデータが格納されます。データ格納場所は、ネットワークユーザーデータフォルダの作成および保守が自動的に行われるネットワーク上の場所です。既存のネットワーク共有を使用してユーザーデータを格納する場合には必要ありません。</p> <p>DLO によってネットワークユーザーデータフォルダが自動的に作成されるようにするには、データ格納場所を使用します。データ格納場所に新規ユーザーを追加すると、新規ユーザー用のネットワークユーザーデータフォルダがデータ格納場所内に自動的に作成されます。</p> <p>一方、既存のネットワーク共有フォルダをネットワークユーザーデータフォルダとして使用する場合や、ネットワークユーザーデータフォルダを手動で作成する場合には、データ格納場所を使用しません。</p> <p>p.1589の「DLOを設定する方法」を参照してください。</p>
<p>データ格納場所をリモートファイルサーバー上に作成しようとする、Desktop and Laptop Option 用の MSDE データベースインスタンスにリモートファイルサーバーへのアクセス権が必要であるというメッセージが表示されます。どのように対処すればよいのでしょうか？</p>	<p>リモートファイルサーバー上にデータ格納場所を作成するには、そのリモートファイルサーバーに対する管理者権限が与えられているアカウントを使用する必要があります。</p> <p>データ格納場所を作成するために使われたアカウントのクレデンシアルを変更できます。</p> <p>p.1568の「DLO サービスクレデンシアルの変更」を参照してください。</p>
<p>新規ユーザーを手動で追加し、そのユーザーに既存のデータ格納場所を割り当てました。データ格納場所内に新規ユーザーの新しいユーザーデータフォルダが見当たりません。ユーザーデータフォルダは作成されていないのでしょうか？</p>	<p>ユーザーデータフォルダは、Desktop Agent がデスクトップにインストールされ、新規ユーザーによって実行されたときに初めて作成されます。</p>
<p>ユーザーがデータをバックアップできないようにするにはどのようにすればよいのでしょうか？</p>	<p>ユーザーを無効にできます。</p>

質問	回答
<p>バックアップ選択項目でユーザーデータの暗号化または圧縮を選択しました。しかし、バックアップ済みのデータが暗号化または圧縮されません。これはなぜでしょうか？</p>	<p>DLO では、バックアップ済みのユーザーデータに対して、暗号化および圧縮設定への変更がさかのぼって適用されることはありません。これらの設定が変更されてからバックアップされたデータについては、新しい設定が使用されます。</p>
<p>特定の種類のファイルがバックアップされないようにしたいと考えています。*.mp3 や *.gho などのファイルが常にバックアップから除外されるようにするには、どのように DLO を設定すればよいでしょうか？</p>	<p>ツールメニューの[グローバルエクスクルード]をクリックします。表示されたダイアログボックスで、すべてのプロファイルのバックアップ選択項目から除外するファイルの種類を個別に選択することができます。</p>
<p>すべてのユーザーに対してバックアップが実行されていないようです。または、特定のファイルがバックアップされません。</p>	<p>あるグループのユーザーに対してバックアップジョブが実行されていない場合には、それらのユーザーのプロファイルを調べ、バックアップがスケジュールされていることを確認します。</p> <p>特定のファイルがバックアップされていない場合には、そのファイルがバックアップ対象としてプロファイルのバックアップ選択項目で選択されていることを確認します。</p>
<p>ファイルをリストアしようとしたのですが、リストア選択項目として表示されません。</p>	<p>既存のファイルを元の場所へリストアする場合には、ファイルが置き換えられるように、[リストア]ダイアログボックスで[確認]または[上書き]が選択されていることを確認してください。[上書きしない]が選択されている場合、ファイルはリストアされません。</p>
<p>プロファイルで、ファイルが暗号化されるようにバックアップ選択項目を設定しました。ユーザーのファイルをリカバリする必要があるのですが、データをリストアするためには暗号化キーが必要ですか？</p>	<p>DLO 管理コンソールを実行する管理者であれば、暗号化されたユーザーデータのリストア先を代替コンピュータまたは代替の場所に変更することができます。そうすれば、リストア時にデータが解読されます。</p>
<p>データをユーザーのコンピュータにリストアしたいのですが、ユーザーが外出中です。ユーザーが戻ってくるまで待たなければならぬのでしょうか？</p>	<p>DLO では、デスクトップへのリストアジョブをキューに入れることができます。ユーザーが現時点でオフラインである場合には、DLO 管理コンソールの[リストア]ビューで、リストアジョブをキューに入れることができます。</p> <p>もう1つの方法としては、管理用のコンピュータやネットワークドライブなどの代替の場所にデータをリストアする方法があります。</p>

質問	回答
<p>オープンファイルを保護するにはどのようにすればよいのでしょうか？</p>	<p>DLOでは、開いた状態のファイルは保護されません。開かれていないファイルまたは保存されているファイルに対してバックアップが行われます。ファイルが開いた状態であるためにバックアップできない場合(たとえば、編集中の Word 文書など)、そのファイルは、Desktop Agent の保留リストに残ります。Desktop Agent は次回のバックアップ時にそのファイルのバックアップを行います。これは、オペレーティングシステムによって開かれている特定のファイルのバックアップは作成されないことも意味します。それらは、オペレーティングシステムが動作している間は閉じられません。</p> <p>ただし、開いた状態の PST ファイルは例外です。Desktop Agent は、開いた状態の PST ファイルがプロファイルまたはユーザーのバックアップ選択項目で選択されている場合には、それらを保護するように設計されています。</p> <p>開いた状態の PST ファイルのバックアップを実行するには、増分バックアップを有効にしておく必要があります。</p>
<p>DLO 管理コンソールの[履歴]ビューに、すべてのユーザーの最新のバックアップが表示されません。</p>	<p>DLO 管理コンソールはジョブが実行されると自動的に最新の状態に更新されますが、その回数は 1 時間に 1 回に制限されています。</p>

Desktop Agent に関するトラブルシューティング

Desktop Agent についての質問がある場合、答えを見つけるために次の情報を見直します。

表 Q-106 Desktop Agent の Q&A 集

質問	回答
<p>保護するすべてのデスクトップに Backup Exec をインストールする必要がありますか？</p>	<p>いいえ。保護するすべてのデスクトップにインストールする必要のあるのは Desktop Agent です。Backup Exec をインストールする必要はありません。</p>

質問	回答
<p>Desktop and Laptop Option をインストールしましたが、ユーザーのコンピュータに Desktop Agent をインストールする方法がわかりません。</p>	<p>Desktop Agent は DLO がインストールされる共有からのインストールプログラムの実行によってインストールできます。または、Backup Exec のインストーラを使用してプッシュインストールできます。</p> <p>Desktop Agent のインストールプログラムは、DLO をインストールした共有フォルダにあります。共有フォルダには、次の形式で名前が付けられます。</p> <p>¥¥<Server>¥DLOAgent</p> <p>Desktop Agent によって保護するデスクトップから Windows エクスプローラを使用して、共有フォルダの内容を表示します。この共有フォルダから Setup.exe を実行します。Desktop Agent ソフトウェアをインストールするには、対象のデスクトップに対する管理者権限が与えられている必要があります。</p> <p>Desktop Agent に慣れるためにも、DLO 管理者が設定ウィザードを実行することをお勧めしています。</p>
<p>Windows サーバーまたはメディアサーバーに Desktop Agent をインストールすることはできますか？</p>	<p>Desktop Agent は、重要なサーバーデータの保護ではなくユーザーデータの保護を目的としているため、Windows サーバーまたはメディアサーバーにインストールすることはできません。</p>
<p>Desktop Agent を介したメディアサーバー DLO 管理サーバー認証時に [データベースの初期化に失敗しました。0x800A0E7D] というエラーメッセージが表示されます。</p>	<p>メディアサーバーと同じドメインまたは信頼されるドメインに属さないアカウントを使用してメディアサーバーに接続しようとしたものと思われます。DLO が正しく動作するためには、メディアサーバーが Windows ドメインに属している必要があります。</p>
<p>Desktop Agent を使用してデスクトップコンピュータおよびラップトップコンピュータを保護していますが、ラップトップコンピュータを新しいデータ格納場所に移動できません。なぜでしょうか？</p>	<p>Desktop Agent を実行する複数のコンピュータをユーザーが使用している場合、すべてのバックアップデータは同一のネットワークユーザーデータフォルダ内に格納されます。データを新しいデータ格納場所に移動する場合には、すべてのコンピュータのネットワークユーザーデータフォルダ全体を新しい場所に移動する必要があります。</p>

質問	回答
<p>使用しているデスクトップコンピュータとラップトップコンピュータ間でファイルを同期させようとしたのですが、Desktop Agent の[同期選択項目]ビューに他のコンピュータが表示されません。</p>	<p>2 台のコンピュータ間でデータを同期させるには、各コンピュータ上で Desktop Agent を実行するときに同一のユーザーアカウントを使用する必要があります。たとえば、Domain¥MyUser というユーザーがコンピュータ A とコンピュータ B という 2 台のコンピュータ間で同期を実行するためには、それぞれのコンピュータ上に Domain¥MyUser のバックアップデータが保存されている必要があります。</p> <p>両方のコンピュータで同一のユーザーアカウントを使用して Desktop Agent を実行しており、それぞれにバックアップデータが存在していることが確認できている場合には、Desktop Agent の[同期選択項目]ビューで[最新の情報に更新]をクリックすると、同期選択項目が表示されるようになります。問題が解決しない場合には、ファイルメニューの[終了]を選択してから、Desktop Agent を再起動します。</p>
<p>コンピュータ間で同期させることができるのは、どのようなファイルやフォルダですか？</p>	<p>バックアップ選択項目に基づいてバックアップされた任意のデータを同期させることができます。このバックアップ選択項目は、DLO 管理者が、Desktop Agent を使用して作成したプロファイルまたはバックアップ選択項目に定義されています。</p>
<p>同期データを同僚と共有したいのですが、どのようにすればよいのでしょうか？</p>	<p>Desktop and Laptop Option は、ユーザー間でファイルを共有するための機能を備えていません。DLO における同期化は、シングルユーザーのコンピュータ間でファイルを共有するためのものです。</p>

アクセシビリティおよび DLO

次の表に、タブ付きダイアログボックス内のキーボードナビゲーションを示します。

表 Q-107 タブ付きダイアログボックス内のキーボードナビゲーション

キーボード入力	結果
Ctrl+Page Down または Ctrl+Tab	次のタブに移動し、そのページを表示します。
Ctrl+Page Up	前のタブに移動し、そのページを表示します。
← または →	フォーカスがタブにある場合、次または前のタブに移動してそのページを表示することができます。

次の表に、管理コンソールのキーボードショートカットを示します。

表 Q-108 Backup Exec Desktop and Laptop Option 管理コンソールに固有のキーボードショートカット

アクセラレータ	ニーモニック	結果
Alt	F	ファイルメニューを表示します。ファイルメニューでは、新しいプロファイルやデータ格納場所の作成、ユーザーの追加を行うことができます。
Alt	E	編集メニューを表示します。編集メニューでは、ファイルのリストア、リストアするファイルの検索、アラートの管理、および項目の削除を行うことができます。
Alt	V	表示メニューを表示します。表示メニューは、画面に表示される情報を変更する際に使用します。
Alt	N	ネットワークメニューを表示します。ネットワークメニューを使用して、管理者アカウントに関する操作、ネットワーク上の DLO 管理サーバーへの接続またはローカルの DLO 管理サーバーへの再接続を行います。
Alt	T	ツールメニューを表示します。ツールメニューでは、グローバルエクスクルドの設定、すべての DLO ウィザードへのアクセス、およびサービスクレデンシャルの管理を行います。
Alt	W	ウィンドウメニューを表示します。ウィンドウメニューを使用して、新しいウィンドウまたはビューに移動します。
Alt	H	ヘルプメニューを表示します。ヘルプメニューを使用して、マニュアルやさまざまなシマンテック社の Web サイトにアクセスします。

次の表に、Desktop Agent のキーボードショートカットを示します。

表 Q-109 Desktop and Laptop Option Desktop Agent に固有のキーボードショートカット

アクセラレータ	ニーモニック	結果
Alt	F	ファイルメニューを表示します。ファイルメニューでは、Desktop Agent の最小化または終了を行うことができます。
Alt	V	表示メニューを表示します。表示メニューは、画面に表示される情報を変更する際に使用します。

アクセラレータ	キーモニック	結果
Alt	K	タスクメニューを表示します。タスクメニューは、ジョブの実行または表示の更新に使用します。
Alt	O	ツールメニューを表示します。ツールメニューでは、ダイアログボックスやアカウントの再設定を行います。
Alt	H	ヘルプメニューを表示します。ヘルプメニューは、 Desktop Agent のオンラインヘルプにアクセスするために使用します。

Symantec Backup Exec Intelligent Disaster Recovery Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- **Intelligent Disaster Recovery Option** について
- **IDR** 使用上の必要条件
- **IDR** オプションのインストールについて
- **IDR** のためのコンピュータの準備について
- **Intelligent Disaster Recovery** 設定ウィザードについて
- ディザスタリカバリメディアの作成と更新について
- ディザスタリカバリのファイルのコピー
- 別のメディアサーバーを使用した **IDR** メディアの作成
- **IDR** を使用した障害からのリカバリ準備について
- **Intelligent Disaster Recovery** ウィザードについて
- **Central Admin Server Option** での **IDR** の使用について
- **Veritas Storage Foundation for Windows** サーバーでの **IDR** の使用について
- **IDR** に関する推奨事項

Intelligent Disaster Recovery Option について

Symantec Backup Exec 2010 Intelligent Disaster Recovery Option (IDR) を使用すると、ハードディスクに障害が発生した場合の Windows コンピュータのリカバリを短時間で効率よく行うことができます。IDR ウィザードの画面の案内に従って作業を進めれば、ディザスタリカバリの準備に必要な作業や、ローカルまたはリモートコンピュータの障害発生前の状態へのリカバリを行うことができます。

コンピュータをリカバリする前に、示されている順序で次の作業を実行し、ディザスタリカバリのための準備を行う必要があります。

- メディアサーバー上で、**Intelligent Disaster Recovery** 設定ウィザードを使用して、コンピュータ固有のディザスタリカバリファイル (ファイルの名前は *.dr で、アスタリスクは保護するコンピュータの名前) のコピーを保管する場所を指定します。

Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードの画面の案内に従って作業すると、*.dr ファイル用の代替データパスを設定できます。*.dr ファイルのデフォルトパスは、メディアサーバーのハードディスク上に存在しますが、メディアサーバーのハードディスクが損傷した場合に備えて、*.dr ファイルのコピーを保管する代替パスを指定しておくことをお勧めします。

- 保護するコンピュータのハードディスクの完全バックアップを実行します。Windows 2000 および Windows XP コンピュータのシステム状態と、Windows Server 2003、Windows Vista、Windows Server 2008、Windows Server 2008 R2、Windows 7 コンピュータのシャドウコピーコンポーネントを含めるようにしてください。完全バックアップからファイルを除外しないでください。ファイルを除外すると *.dr ファイルが作成されません。

*.dr ファイルは、Backup Exec での完全バックアップ時に作成され、デフォルトおよび代替の場所に保存されます。それ以降のバックアップによるカタログエントリが、バックアップの完了後に *.dr ファイルに追記されます。

- **Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードを使用して、各コンピュータのブート可能メディアを作成します。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの画面の案内に従って作業すると、保護するコンピュータのリカバリに使用するブート可能メディアを作成することができます。**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードでは、任意の場所に *.dr ファイルをコピーすることもできます。

保護するコンピュータごとにこれらの手順を実行しておくこと、次のいずれかのリカバリ方式を使用してコンピュータをリカバリできるようになります。

- ローカル接続されているストレージデバイスを使用して、メディアサーバー (Backup Exec サーバー) をリストアする。
- リモートのディスクへのバックアップフォルダを使用して、メディアサーバー (Backup Exec サーバー) をリストアする。
- リストアする Windows コンピュータにメディアとストレージデバイスを移動し、ローカル接続したストレージデバイスを使用して、そのコンピュータをリストアする。

- メディアサーバーへのネットワーク接続を使用して、リモート Windows コンピュータをリストアする。
- p.1764 の「[Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードについて](#)」を参照してください。
- p.1767 の「[ディザスタリカバリメディアの作成と更新について](#)」を参照してください。

IDR 使用上の必要条件

IDR を使用するには、次の必要条件を満たす必要があります。

- Symantec Backup Exec 2010。
- IDR を使用してリモートコンピュータを保護するには、そのコンピュータに Symantec Backup Exec Remote Agent for Windows and NetWare Systems (Remote Agent) または Backup Exec がインストールされている必要があります。
- Windows 環境全体の格納に必要なハードディスクの空き領域 (600 MB - 2 GB)。

メモ: メディアサーバーは、リモートのディスクへのバックアップフォルダを使用してリカバリできます。混合メディアローダーは、ローカルの IDR ではサポートされていません。

- Windows BitLocker ドライブ暗号化を使用して暗号化されたすべてのハードディスクドライブの暗号化キーファイル (Windows Vista、Windows Server 2008、Windows Server 2008 R2、Windows 7 のみ)。
- IDR で作成されたブート可能 CD イメージを CD に書き込むための、サードパーティ製の ISO 9660 互換 CD ライティングアプリケーション。
- 書き込み可能または上書き可能な CD デバイス。

p.1769 の「[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行するための必要条件について](#)」を参照してください。

p.1762 の「[IDR オプションの評価版の使用について](#)」を参照してください。

IDR オプションのインストールについて

IDR は、Backup Exec 2010 のインストール時にオプションとしてインストールすることができます。また、後でこのオプションをインストールすることもできます。

IDR オプションとは別に Remote Agent を購入し、IDR を使用して保護するリモートコンピュータにインストールする必要があります。Remote Agent はリモートサーバー上で実行されるシステムサービスで、バックアップおよびリストアの機能を拡張するものです。IDR の機能を使用するには、Remote Agent が必要です。

p.112 の「ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール」を参照してください。

p.123 の「リモートコンピュータへの Remote Agent および AOFO (Advanced Open File Option) のプッシュインストール」を参照してください。

p.129 の「Remote Agent for Windows Systems のインストールについて」を参照してください。

p.1764 の「Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードについて」を参照してください。

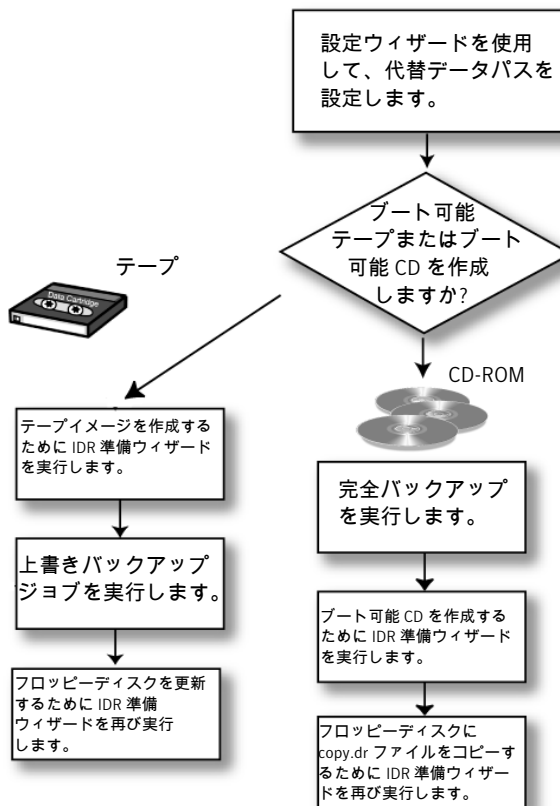
IDR オプションの評価版の使用について

IDR オプションをインストールし、最大 60 日間または Backup Exec のライセンスを取得するまで評価できます。ただし、システム状態とシャドウコピーコンポーネントと共に重要なボリュームの完全バックアップジョブを実行する必要があります。IDR オプションがインストールされた後に IDR のディザスタリカバリメディアを再作成する必要もあります。

IDR のためのコンピュータの準備について

障害発生後にコンピュータを正常にリカバリするには、ディザスタリカバリのために慎重かつ適切にコンピュータを準備する必要があります。

図 R-1 IDR のためにコンピュータを準備する方法



IDR のためのコンピュータの準備では、次の作業を実行します。

- Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードを使用して、*.dr ファイルのコピーを保存する代替の場所を決定する。
- 保護するコンピュータで完全バックアップジョブを実行する。
- Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを使用して、ブート可能ディザスタリカバリメディアを作成する。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを使用して、次の種類のブート可能メディアを作成することができます。

- CD-R または CD-RW
- ブート可能テープ (テープデバイスがブート機能を備えている必要があります)

保護する Windows コンピュータの種類、利用可能なハードウェア、システム BIOS の機能などを考慮して、作成するブート可能メディアの種類を決定します。また、メディアを組み合わせて使用すると、*.dr ファイルの更新が簡単になります。ブート可能 CD-R、CD-RW またはテープを使用する場合でも、Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを使用して *.dr ファイルを任意の場所にバックアップしておけば、必要に応じて簡単に更新することができます。

次の表を使用して、どのメディアを使用するかを決定します。

表 R-1 ブート可能メディア比較表

メディアの種類	長所	短所
CD-R、CD-RW	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワーク上のリモート Windows コンピュータの保護にも使用できる。 ■ リモートコンピュータ用のブート可能 CD イメージを作成できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ CD からブートすることのできる BIOS を備えている必要がある。 ■ CD 作成装置が必要。
ブート可能テープ	<ul style="list-style-type: none"> ■ CD 作成装置が不要。 	<ul style="list-style-type: none"> ■ SCSI CD からブートすることのできる BIOS と、SCSI CD ドライブのエミュレーションを行うブート可能テープデバイスが必要。 ■ リモートコンピュータ用のブート可能テープイメージを作成することができない。

Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードについて

Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードは、Backup Exec の[始めましょう]ページに表示されます。このウィザードを使用して、コンピュータ固有のディザスタリカバリファイルの *.dr ファイルを保管する代替データパスを設定します。

アスタリスク (*) は、実際には、ファイルを作成したコンピュータの名前になります。この *.dr ファイルには、保護するコンピュータに固有の、次の情報が格納されています。

- ハードディスクのパーティション情報、大容量ストレージコントローラおよびネットワークインターフェースカードなどの、各コンピュータのハードウェアに関する情報。
- コンピュータのリカバリに使用するバックアップメディアを識別するためのカタログエントリのリスト。
- Microsoft Vista、Windows Server 2008、Windows Server 2008 R2、Windows 7 の場合、Windows 自動システム回復 (ASR) 構成情報ファイル (asr.xml)。リカバリ

プロセスでの Windows Vista、Windows Server 2008、Windows Server 2008 R2 コンピュータのパーティションの再作成には、この ASR ファイルが必要です。

- Windows XP および Windows Server 2003 コンピュータの場合、Windows の自動システム回復 (ASR) 構成情報ファイル (asr.sif および asrnpn.sif)。リカバリプロセスでの Windows XP および Windows Server 2003 コンピュータのパーティションの再作成には、この ASR ファイルが必要です。

p.1770 の「[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの実行](#)」を参照してください。

p.1785 の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.1767 の「[ディザスタリカバリメディアの作成と更新について](#)」を参照してください。

p.1773 の「[ブート可能テープイメージの作成](#)」を参照してください。

p.313 の「[データをバックアップする方法](#)」を参照してください。

*.dr ファイル用のデフォルトデータパスの手動での編集について

*.dr ファイルの代替データパスの設定に Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードを使用しなかった場合、手動で設定することができます。

p.1765 の「[*.dr ファイルのデフォルトデータパスの手動での編集](#)」を参照してください。

IDR で保護されているコンピュータのリカバリを自動化するには、保護するコンピュータの固有の情報を格納した *.dr ファイルのコピーが必要です。

Backup Exec でのバックアップ時に *.dr ファイルが自動的に作成され、メディアサーバーのハードディスクドライブ上のデフォルトの場所である、次のディザスタリカバリデータパスに保存されます。

```
C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\IDR\Data\<computer name>.dr
```

デフォルトを変更しないことをお勧めします。

メディアサーバーが損傷した場合でも *.dr ファイルを使用することができるように、*.dr ファイルのコピーを保管する代替データパスを指定することができます。この代替データパスは、別のコンピュータまたはデフォルトの場所とは別の物理ドライブ (マップされたネットワークドライブ) 上に作成することをお勧めします。

p.1766 の「[Intelligent Disaster Recovery のデータパス](#)」を参照してください。

*.dr ファイルのデフォルトデータパスの手動での編集

*.dr ファイルのデフォルトデータパスを編集するには次の手順を使用します。

p.1765 の「[*.dr ファイル用のデフォルトデータパスの手動での編集について](#)」を参照してください。

*.dr ファイルのデフォルトデータパスを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [設定]の下にある[Intelligent Disaster Recovery]をクリックします。
- 3 *.dr ファイルを保存するパスを入力します。

Intelligent Disaster Recovery のデータパス

Intelligent Disaster Recovery *.dr ファイルを保存するデフォルトデータパスと代替データパスを編集できます。

このデフォルトのデータパスは変更しないでください。

p.1765の「[*.dr ファイル用のデフォルトデータパスの手動での編集について](#)」を参照してください。

表 R-2 *.dr ファイルのデータ格納場所のデータパス

項目	説明
データパス	保護するコンピュータの *.dr ファイルのコピーを保存するディレクトリパスを入力します。Backup Exec でのバックアップ時に *.dr ファイルが自動的に作成され、メディアサーバーのハードディスク上のデフォルトの場所である、次のデータパスに保存されます。 C:\Program Files\Symantec\Backup Exec\IDR\Data\<computer name>.dr

項目	説明
代替パス	<p>保護するコンピュータの *.dr ファイルのコピーを保存する代替ディレクトリパスを入力します。 Backup Exec でのバックアップ時に自動的に *.dr ファイルが作成または更新され、指定した場所に保存されます。</p> <p>この代替データパスは、メディアサーバーとは別のコンピュータ、またはデフォルトの場所とは別の物理ドライブ上に作成することをお勧めします。これにより、リカバリ時にメディアサーバーのハードディスクが利用できない場合でも、この代替パスに保存されている *.dr ファイルを任意の場所にコピーすることで、目的のコンピュータのリカバリを行うことができます。</p> <p>リモートコンピュータのハードディスクを代替データパスとして使用するには、リモートコンピュータへの有効な接続を確立します。代替パスとして UNC パスを指定し、ディレクトリに *.dr ファイルが正しくコピーされていることを確認します。</p> <p>d:\drfiles</p> <p>Backup Exec の Remote Administrator を使用した場合、代替データパスとしてフロッピーディスクドライブ (A:, B:) は指定しないでください。</p>

ディザスタリカバリメディアの作成と更新について

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行してディザスタリカバリメディアを作成または更新する前に、ハードディスクの完全バックアップを実行します (ブート可能テープメディアを作成する場合を除く)。

p.1773 の「[ブート可能テープイメージの作成](#)」を参照してください。

*.dr ファイルは、ハードディスクの完全バックアップを実行すると作成されます。

メモ: バックアップからファイルを除外すると、*.dr file が作成されません。

作成された *.dr ファイルは、以降のバックアップ (コピーバックアップを除く) のたびに自動的に更新されます。更新は、コンピュータ上のデフォルトの場所および指定した代替の場所の両方で行われます。[ツール]>[オプション]>[**Intelligent Disaster Recovery**] からデフォルトの場所を表示できます。

実行されるバックアップセットごとに、アラートが表示され、**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードを使用して任意の場所に ***.dr** ファイルをバックアップするように通知されます。フロッピーディスクを使う場合は、それにラベル付けをしてから、他のディザスタリカバリメディアとともに格納します。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行する前に完全バックアップを実行してなくても、リカバリ用のすべてのメディアを作成することができますが、コンピュータ固有の ***.dr** ファイルにバックアップセット用のカタログエントリが含まれていないため、リカバリプロセスで、コンピュータのリカバリに必要なバックアップセットを手動で検索してリストアップする必要があります。

メモ: ローカルメディアサーバーの場合は、完全バックアップが完了するたびに、またはオペレーティングシステムソフトウェアでパッチを適用したりアップグレードしたりするたびにブート可能メディアを更新します。ストレージドライバ、ネットワークドライバを再構成または更新した場合にもブート可能メディアを更新することをお勧めします。リモートコンピュータの場合は、リモートコンピュータの ***.dr** ファイルがメディアサーバー上で利用できる場合に限り、障害が発生するまでブート可能メディアを作成または更新する必要はありません。

ブート可能メディアには、障害発生後に操作不能となった **Windows** コンピュータを操作可能にするために必要なシステムファイルが格納されています。保護するコンピュータ上のハードウェア、**SCSI** ドライバまたはストレージデバイスドライバを変更した場合は、常に新しいブート可能イメージを作成する必要があります。

ブート可能メディアを作成したら、メディアが正しく作成されているかどうかを事前にテストしておきます。

p.1785 の「**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ」を参照してください。

ブート可能メディアには、<コンピュータ名>-**diskconf.txt** という名前のテキストファイルも存在します。このファイルには、コンピュータのハードディスクレイアウトに関する情報が含まれています。

p.1771 の「ブート可能 **CD** イメージの作成」を参照してください。

p.1773 の「ブート可能テープイメージの作成」を参照してください。

p.1776 の「ブート不可能 **Intelligent Disaster Recovery CD** イメージのみの作成」を参照してください。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行するための必要条件について

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行するには、ブートメディアおよびディザスタリカバリメディアを作成する前に、ハードディスクドライブの完全バックアップを実行します (ブート可能テープイメージを作成する場合を除く)。

IDR の準備のために実行する完全バックアップでは、次の項目に従ってください。

- ボリューム (C、D など) がバックアップされていることを確認します。個別のディレクトリをバックアップする場合は、*.dr ファイルは作成または更新されません。
- Windows 2000 または XP の場合は、システム状態をバックアップします。
- Windows Server 2003、Vista、Server 2008 の場合は、シャドウコピーコンポーネントをバックアップします。
- コンピュータ上にユーティリティパーティションが存在する場合は、そのパーティションをバックアップするように指定します。
p.267の「バックアップ選択リストのコンピュータ名のノードについて」を参照してください。
- ファイル選択の詳細設定機能を使用して、バックアップにファイルを含めたり、バックアップからファイルを除外したりしないでください。
- リモートコンピュータの場合は、互換性のある Remote Agent がインストールされているかどうかを確認します。リモートコンピュータ上に Remote Agent がインストールされているかどうかを確認するには、Windows エクスプローラを使用して、そのリモートコンピュータを右クリックし、ショートカットメニューの[プロパティ]を選択します。Remote Agent がインストールされている場合、その状態が表示されます。
- 既存の SQL インスタンスに Backup Exec をインストールする場合は、オプションの SQL Agent を使用して SQL システムデータベースを定期的にバックアップすることをお勧めします。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの実行について

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの画面の案内に従って作業すると、保護するコンピュータのリカバリに使用するブート可能メディアを作成することができます。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを使用して、任意の場所にディザスタリカバリファイル (*.dr ファイル) をコピーできます。たとえば、ローカルドライブ、ネットワークドライブ、USB フラッシュドライブなどを使うことができます。また、ブート不可能ディザスタリカバリ CD イメージを作成することもできます。保護するコンピュータで製造元のブート可能 CD を使用してコンピュータを起動する必要がある場合、ブート不可能ディザスタリカバリ CD を使用して Intelligent Disaster Recovery ウィザードを実行することができます。

たとえば、Dell や HP など、他の種類のコンピュータ上で RAID システムを実行している場合、必要な RAID ドライバをインストールするには、製造元のブート可能 CD を使用してコンピュータを起動することが必要になる場合があります。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行すると、デフォルトでは、IDR オプションがインストールされているローカルコンピュータを使用してディザスタリカバリメディアが作成または更新されます。ローカルコンピュータに IDR オプションがインストールされていない場合は、[IDR オプションがインストールされているメディアサーバーを選択] を選択して IDR オプションがインストールされている別のメディアサーバーを選択し、メディアを作成または更新します。

p.1770 の「[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの実行](#)」を参照してください。

p.1767 の「[ディザスタリカバリメディアの作成と更新について](#)」を参照してください。

p.1769 の「[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行するための必要条件について](#)」を参照してください。

p.1779 の「[別のメディアサーバーを使用した IDR メディアの作成](#)」を参照してください。

p.1771 の「[ブート可能 CD イメージの作成](#)」を参照してください。

p.1773 の「[ブート可能テープイメージの作成](#)」を参照してください。

p.1776 の「[ブート不可能 Intelligent Disaster Recovery CD イメージのみの作成](#)」を参照してください。

p.1778 の「[ディザスタリカバリのファイルのコピー](#)」を参照してください。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの実行

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行するには次の手順を使います。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行する方法

- ◆ ツールメニューの[ウィザード]>[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード]をクリックします。

障害発生後のディザスタリカバリメディアの作成について

ディザスタリカバリメディアを作成していないコンピュータで障害が発生しても、障害発生前にコンピュータの完全バックアップを作成した場合は、ディザスタリカバリメディアを作成できます。

メモ: リモートコンピュータの場合は、バージョン 10.0 以上の Remote Agent がリモートコンピュータにインストールされている場合に限り、この機能を使用できます。

コンピュータの完全バックアップを作成すると、IDRはシステムおよびカタログの情報を含む*.drファイルを作成します。IDRは*.drファイルを使用して、コンピュータのリカバリに必要なディザスタリカバリメディアを作成します。

ローカルメディアサーバーで障害が発生しても、別のメディアサーバーと、ローカルメディアサーバーの*.drファイルのコピーが代替の場所に存在している場合は、障害発生後にディザスタリカバリメディアを作成できます。また、Remote Administratorを使用してローカルメディアサーバーをリカバリすることもできます。

p.1771の「[ブート可能 CD イメージの作成](#)」を参照してください。

p.1773の「[ブート可能テープイメージの作成](#)」を参照してください。

p.1776の「[ブート不可能 Intelligent Disaster Recovery CD イメージのみの作成](#)」を参照してください。

ブート可能 CD イメージの作成について

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを使用して、定期的に任意の場所に*.drファイルのコピーしたり、保護するコンピュータ上のハードウェア、SCSIドライブまたはテープドライブの変更時にブート可能 CD イメージの再作成を行うこともできます。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行するための必要条件に加えて、次の点に注目します。

- Backup Exec には、サポートしている CD-R および CD-RW ドライブにディザスタリカバリ用の CD イメージを書き込む機能は用意されていません。CD イメージを CD に書き込むには、サードパーティ製の ISO 9660 互換アプリケーションを使用してください。サードパーティ製の CD ライティングソフトウェアでイメージを作成した場合は、それを使用してディザスタリカバリを行う必要が生じる前に、そのイメージの検証を行ってください。
- ブート可能 CD イメージの作成には CD-R の使用をお勧めします。CD-RW メディアを使用する場合は、CD ドライブが MultiRead 機能を備えている必要があります。この機能がない場合は、IDR を正しく実行できないことがあります。ディザスタリカバリに使用する前に、CD ドライブでメディアが正しく処理できることを確認しておく必要があります。
- また、ブート可能 CD を使用して、正しくコンピュータをブートできることをテストしておく必要があります。

p.1771の「[ブート可能 CD イメージの作成](#)」を参照してください。

ブート可能 CD イメージの作成

ブート可能 CD イメージを作成するには、Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを使用します。

p.1771の「[ブート可能 CD イメージの作成について](#)」を参照してください。

ブート可能 CD イメージを作成する方法

- 1 保護するコンピュータの完全バックアップが実行されていることを確認します。
- 2 [ツール]メニューの[ウィザード]>**[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード]**をクリックします。

デフォルトでは、**Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード**は、このコンピュータを使用してブート可能 CD イメージを作成します。このコンピュータに **IDR オプション**がインストールされていない場合は、**IDR オプション**がインストールされている別のメディアサーバーを選択し、ブート可能 CD イメージを作成してください。

- 3 次のいずれかを実行します。

このコンピュータを使用 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
用してブート可能
CD イメージを作成
する場合

別のコンピュータを使用 [IDR オプションがインストールされているメディアサーバーを選択]
用してブート可能 クリックします。
CD イメージを作成
する場合 [p.1779の「別のメディアサーバーを使用したIDRメディアの作成」](#)を参照してください。

- 4 [**IDR**ブートメディアの作成]画面で、[作成]の下にある[**CDライター (ISO 9660)**で使用するブート可能 CD イメージ]を選択し、[次へ]をクリックします。
- 5 [**CD**イメージの作成開始]画面で[次へ]をクリックします。
- 6 [利用可能なコンピュータ]ペインで、ブート可能メディアを作成するコンピュータを選択し、[→]をクリックしてコンピュータを[選択されたコンピュータ]ペインに移動します。
- 7 保護するコンピュータが[利用可能なコンピュータ]ペインに表示されない場合は、[参照]をクリックしてコンピュータを検索します。[追加]ボタンの横にあるフィールドにコンピュータの名前を入力し、[追加]をクリックすることもできます。
- 8 [次へ]をクリックします。
- 9 [**CD**イメージの保存場所の選択]画面で、**CD**に書き込むまでブート可能 CD イメージを格納するパスを入力するか、[参照]をクリックして格納場所を選択します。
- 10 [次へ]をクリックします。

- 11 [Windowsオペレーティングシステムのインストールファイルのパスを選択]画面で、オペレーティングシステムセットアップファイルのコピーが存在する場所へのパスを入力します。[参照]をクリックして、その場所へのパスを指定することもできます。

インストールパスで指定する Windows オペレーティングシステムは、保護するコンピュータと Windows のバージョンおよび言語が一致する必要があります。

次のいずれかを入力できます。

ファイルが CD に存在する場合
CDドライブ文字を入力します。

ファイルがネットワークドライブにある場合
ファイルへのパスを入力します。
またはローカルコンピュータのハードディスクに保存されている場合

オペレーティングシステムの CD の .iso イメージへのパスを指定します。
イメージが利用可能な場合

- 12 [次へ]をクリックします。
ウィザードによって、ブート可能イメージの作成が開始されます。
- 13 ブート可能 CD イメージの作成が完了したら、[次へ]をクリックします。
- 14 [完了]をクリックします。
- 15 ブート可能 CD イメージを CD に書き込む場合は、サードパーティ製の CD ライティングソフトウェアツールを使用して、CD ディスクイメージとして書き込みます。CD イメージをファイルとして書き込まないでください。

ブート可能 CD イメージの更新について

ブート可能 CD イメージを作成済みで、メディアサーバーのハードウェア構成を変更する場合は、新しいブート可能 CD イメージを作成する必要があります。保護するコンピュータの完全バックアップを改めて実行します。メディアサーバーのバックアップ後に、**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードを再度実行し、新しいブート可能 CD イメージを作成します。

p.1771 の「[ブート可能 CD イメージの作成](#)」を参照してください。

ブート可能テープイメージの作成

このオプションは、互換性のあるブート可能テープデバイスが存在するローカルメディアサーバーでのみ利用できます。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを使用してブート可能テープイメージを作成し、上書きバックアップジョブを実行して、作成したイメージをテープに書き込みます。

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを使用して、定期的に *.dr ファイルを更新したり、保護するコンピュータ上のハードウェア、SCSI ドライブまたはテープドライブの変更時にブート可能テープイメージの再作成を行うこともできます。ブート可能テープを使用して、正しくコンピュータを起動できることをテストしておく必要があります。テープドライブのブート機能のテストについて詳しくはテープドライブのマニュアルを参照してください。

この手順を開始する前に、**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードを実行するための必要条件を見直します。

p.1769 の「**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードを実行するための必要条件について」を参照してください。

p.1785 の「**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ」を参照してください。

p.1775 の「**ブート可能テープイメージの更新**」を参照してください。

ブート可能テープイメージを作成する方法

ブート可能テープドライブおよびそのドライブが検出されなかった場合、ブート可能テープイメージ作成用のオプションは、**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードに表示されません。

- 1 ツールメニューの[ウィザード]>[**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザード]をクリックします。

デフォルトでは、**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードは、このコンピュータを使用してブート可能テープイメージを作成します。このコンピュータに **IDR** オプションがインストールされていない場合は、**IDR** オプションがインストールされている別のメディアサーバーを選択し、ブートイメージを作成します。

- 2 次のいずれかを実行します。

このコンピュータを使用してブート可能テープイメージを作成する場合

別のコンピュータを使用してブート可能テープイメージを作成する場合

[**IDR** オプションがインストールされているメディアサーバーを選択]をクリックします。
p.1779 の「別のメディアサーバーを使用した **IDR** メディアの作成」を参照してください。

- 3 [作成]の下にある[ブート可能テープデバイスで使用するブート可能テープイメージ]を選択し、[次へ]をクリックします。
- 4 [テープイメージの作成開始]画面を確認し、[次へ]をクリックします。
- 5 完全バックアップを実行するまでブート可能イメージを格納するパスを入力するか、[参照]をクリックして格納場所を選択します。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 Windowsオペレーティングシステムファイルの場所へのパスを入力するか、[参照]をクリックしてその場所を選択します。
- 8 [次へ]をクリックします。
- 9 ブート可能テープイメージの作成が完了したら、[次へ]をクリックします。
- 10 コンピュータのハードディスク構成を表示する場合は、[ディスク設定の表示]をクリックします。
- 11 [完了]をクリックします。
- 12 上書きバックアップジョブを実行し、ブート可能イメージをテープに書き込みます。

ブート可能テープイメージの更新

ブート可能テープイメージを更新するには、次の手順を実行します。

メモ: ブート可能テープドライブおよびそのドライブが検出されなかった場合、ブート可能テープイメージ作成用のオプションは、**Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード**に表示されません。

ブート可能テープイメージを更新する方法

- 1 [ツール]メニューの[ウィザード]>[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード]をクリックします。

デフォルトでは、**Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード**は、このコンピュータを使用してブート可能テープイメージを更新します。このコンピュータに **IDR オプション**がインストールされていない場合は、**IDR オプション**がインストールされている別のメディアサーバーを選択し、ブートイメージを更新します。

- 2 次のいずれかを実行します。

このコンピュータを使 [よろこ]の画面で[次へ]をクリックします。
用してブート可能
テープイメージを更
新する場合

別のコンピュータを [IDR オプションがインストールされているメディアサーバーを選択]を
使用してブート可能 クリックします。
テープイメージを更
新する場合 [p.1779の「別のメディアサーバーを使用したIDRメディアの作成」](#)を参
照してください。

[**IDR** ブートメディアの作成]画面が表示されます。

- 3 [作成]の下にある[ブート可能テープデバイスで使用するブート可能テープイメージ]をクリックし、[次へ]をクリックします。

[テープイメージの作成開始]画面が表示されます。

既存のブート可能テープイメージが存在する場合は、[ディザスタリカバリイメージが検出されました]画面が表示されます。

- 4 最初の上書きバックアップジョブの実行時に、新しいブート可能イメージをブート可能テープに書き込むため、[既存のイメージを削除する]をクリックします。
- 5 画面の案内に従って作業し、ウィザードを完了します。
- 6 ブート可能イメージの作成が完了したら、上書きバックアップジョブを実行し、作成したブート可能イメージをテープに書き込みます。

[p.313の「データをバックアップする方法」](#)を参照してください。

ブート不可能 Intelligent Disaster Recovery CD イメージのみの作成

保護するコンピュータにブート可能テープイメージまたはブート可能 CD イメージが存在している場合、またはブート可能イメージが更新されている場合は、ディザスタリカバリメディアセットを構成するブート不可能ディザスタリカバリCDイメージを作成することができます。**nonbootable_idrcd.iso**という名前のブート不可能CDイメージには、必要なドライ

バ、**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードおよびコンピュータ固有の *.dr ファイルが格納されます。

メモ: ブート不可能 CD イメージは、サードパーティ製のソフトウェアを使用して、ディスクイメージとして CD に書き込む必要があります。CD イメージをファイルとして書き込まないでください。

p.313 の「[データをバックアップする方法](#)」を参照してください。

ブート不可能 Intelligent Disaster Recovery CD イメージのみを作成する方法

- 1 [ツール]メニューの[ウィザード]>[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード]をクリックします。

デフォルトでは、**Intelligent Disaster Recovery** 準備ウィザードは、このコンピュータを使用してブート不可能 CD イメージを作成します。このコンピュータに IDR オプションがインストールされていない場合は、IDR オプションがインストールされている別のメディアサーバーを選択し、ブート不可能 CD イメージを作成します。

- 2 次のいずれかを実行します。

このコンピュータを使用 [ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。
してブート不可能
CD イメージを作成
する場合

別のコンピュータを [IDR オプションがインストールされているメディアサーバーを選択]
使用してブート不可 クリックします。
能 Intelligent p.1779の「[別のメディアサーバーを使用したIDRメディアの作成](#)」を参
Disaster Recovery 照してください。
CD イメージを作成
する場合

- 3 [作成]の下にある[ブート不可能ディザスタリカバリCDイメージ]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 4 [ブート不可能 CD イメージの作成開始]画面で[次へ]をクリックします。
- 5 ブート不可能 CD イメージの格納場所へのパスを入力するか、[参照]をクリックして格納場所を選択します。
- 6 [次へ]をクリックします。
ウィザードによって、ブート不可能イメージの作成が開始されます。
- 7 ブート不可能 CD イメージの作成が完了したら、[次へ]をクリックします。
- 8 [完了]をクリックします。

- 9 ブート不可能CDイメージをCDに書き込む場合は、サードパーティ製のCDライティングソフトウェアツールを使用して、CD ディスクイメージとして書き込みます。CD イメージをファイルとして書き込まないでください。
- 10 ブート不可能ディザスタリカバリCDイメージに適切なラベルを貼り、ブート可能IDR CDとともに保管します。

ディザスタリカバリのファイルのコピー

シマンテック社は、バックアップ処理の間に作成したディザスタリカバリの情報 *.dr ファイルを代替の安全な場所にコピーすることを推奨します。

*.dr ファイルは、IDR がインストールされているメディアサーバー上の ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥IDR¥Data ディレクトリに存在します。

ディザスタリカバリのファイルをコピーする方法

- 1 ターゲットコンピュータの完全バックアップを実行します。
IDR の準備のために実行する完全バックアップでは、次の項目に従ってください。
 - 各ハードディスクボリューム (C: や D: など) の完全バックアップが作成されていることを確認します。個別のディレクトリのみをバックアップする場合は、*.dr ファイルは作成または更新されません。
また、次のタスクを実行します。
 - Windows 2000 または XP の場合は、システム状態をバックアップします。
 - Windows Server 2003、Vista、Windows Server 2008、Windows Server 2008 R2、Windows 7 の場合は、シャドウコピーコンポーネントおよびシステム状態コンポーネントをバックアップします。
 - コンピュータ上にユーティリティパーティションが存在する場合は、そのパーティションをバックアップするように指定します。
p.267 の「バックアップ選択リストのコンピュータ名のノードについて」を参照してください。
 - ファイル選択の詳細設定機能を使用して、バックアップにファイルを含めたり、バックアップからファイルを除外したりしないでください。
- 2 ツールメニューの[ウィザード]>[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード]をクリックします。

デフォルトでは、Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードは、このコンピュータを使用してディザスタリカバリ情報を代替の場所にコピーします。このコンピュータに IDR オプションがインストールされていない場合は、IDR オプションがインストールされている別のメディアサーバーを選択し、ディザスタリカバリファイルをコピーします。

3 次のいずれかを実行します。

このコンピュータを使用してディザスタリカバリ情報ファイルをコピーする場合

[ようこそ]の画面で[次へ]をクリックします。

別のコンピュータを使用してディザスタリカバリ情報ファイルをコピーする場合

[ようこそ]画面で、[IDR オプションがインストールされているメディアサーバーを選択]をクリックします。

p.1779の「別のメディアサーバーを使用したIDRメディアの作成」を参照してください。

4 [コピー]の下にある[ディザスタリカバリ情報ファイル (.dr)]をクリックし、[次へ]をクリックします。

5 ディザスタリカバリの情報ファイルをコピーするコンピュータを選択します。

6 [コピー先]のフィールドのコピー先フォルダの名前を入力するか、またはコピー先フォルダにナビゲートするために[参照]をクリックし、そして次に[次へ]をクリックします。

コピー先フォルダはローカルドライブ、ネットワークドライブと USB フラッシュドライブである場合もあります。

7 [ディザスタリカバリ情報ファイルのコピー]画面で、[次へ]をクリックします。

8 ディザスタリカバリ情報ファイルがコピーされると、[終了]画面が表示されます。

p.1779の「別のメディアサーバーを使用したIDRメディアの作成」を参照してください。

別のメディアサーバーを使用した IDR メディアの作成

Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行すると、デフォルトでは、IDR オプションがインストールされているローカルコンピュータを使用してディザスタリカバリメディアが作成または更新されます。このコンピュータに IDR オプションがインストールされていない場合は、IDR オプションがインストールされている別のメディアサーバーを選択し、ディスクを作成または更新することができます。

別のメディアサーバーで、ディザスタリカバリメディアを作成する方法

- 1 ツールメニューの[ウィザード]>[Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザード]をクリックします。
- 2 Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの[ようこそ]画面で、[IDR オプションがインストールされているメディアサーバーを選択]をクリックし、[次へ]をクリックします。

- 3 [参照]をクリックしてネットワークを参照し、IDR オプションがインストールされているメディアサーバーを選択します。
- 4 メディアサーバーへのアクセスに必要なクレデンシャルを入力します。
p.1780の「[メディアサーバーのログオンクレデンシャルオプション](#)」を参照してください。
- 5 [次へ]をクリックして、ディザスタリカバリメディアの作成を続行します。
ここで選択したメディアサーバーが、実際にメディアを作成するコンピュータになります。
p.1785の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。
p.1785の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した自動リストアの実行](#)」を参照してください。
p.1794の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した手動リストアの実行](#)」を参照してください。

メディアサーバーのログオンクレデンシャルオプション

メディアサーバーへのアクセスに必要なクレデンシャルを入力します。

p.1779の「[別のメディアサーバーを使用した IDR メディアの作成](#)」を参照してください。

表 R-3 メディアサーバーのログオンクレデンシャルオプション

項目	説明
メディアサーバー名	リストアジョブを実行するように選択したリモートメディアサーバーの名前を示します。
ユーザー名	リモートメディアサーバーに対する管理者権限を持つユーザー名を示します。
パスワード	アクセスに必要なパスワードを示します。
ドメイン	リモートメディアサーバーが属するドメインを示します。メディアサーバーがワークグループに属している場合は、このフィールドを空白にします。

IDR を使用した障害からのリカバリ準備について

障害が発生した場合は、IDR を使用してコンピュータを障害発生前の状態に戻すことができます。コンピュータのリカバリは、手動および自動による複数の手順を必要とする処理です。コンピュータをリカバリするには、次の順序で手順を実行する必要があります。

注意: リカバリするコンピュータに接続されているストレージエリアネットワーク (SAN) またはクラスタを切断します。接続されたままの場合、コンピュータ上のハードディスクでも再パーティションおよび再フォーマットが実行されます。

表 R-4 IDRを使用した障害からのリカバリ準備

手順	説明
手順 1	リカバリするコンピュータに必要なハードウェアの変更を行います。 p.1782の「リカバリするコンピュータのハードウェアの変更について」 を参照してください。
手順 2	IBM コンピュータをリカバリする場合は、IBM コンピュータの必要条件も確認します。 p.1783の「IDRを使用したIBMコンピュータのリカバリについて」 を参照してください。
手順 3	Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードで作成したブート可能メディアを使用してコンピュータを起動し、リカバリプロセスを開始します。
手順 4	Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用して、コンピュータを障害発生前の状態にリストアし、データファイルをリストアします。 p.1785の「Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ」 を参照してください。

メモ: IDRを使用して、System Commander や OS/2 Boot Manager などのブートマネージャをリストアすることはできません。ブートマネージャは、通常は非常に低レベルにインストールされるため、Backup Exec では保護することができません。たとえば、OS/2 Boot Manager は独自のパーティションにインストールされるため、Backup Exec からアクセスすることができません。ブートマネージャを使用している場合は、IDR によってオペレーティングシステムをリストアしても、コンピュータを再起動できないことがあります。このような場合には、通常、ブートマネージャを再インストールすると問題を解決することができます。

コンピュータのリカバリを行う前に、次の事項に注意する必要があります。

- 重要なシステムディスクのすべてをリストアするのに必要なディスク領域が存在している必要があります。重要なシステムディスクとは、コンピュータの起動に必要なディスクのことです。

- 重要な各ディスクのストレージ容量は、対応する元のディスクの容量以上である必要があります。ディスクのジオメトリ(ディスクパラメータとも呼ぶ)は、互換性がある必要があります。
- フロッピーおよびCDデバイスとして、外付けのPCカードドライブは使用できません。外付けのPCカードドライブは、GUIモードのWindowsセットアップ段階ではサポートされず、データにアクセスすることができないため、リカバリを完了することができません。
- リストアするコンピュータ用の*.drファイルが利用できない場合でもIDRを使用してコンピュータをリカバリすることができますが、最初に、ユーティリティパーティションなどの重要ではないパーティション情報を手動でリストアする必要があります。
- IDRでは、ソフトウェアによってミラー化されたボリューム、または自動パーティション設定機能を持つ各種のソフトウェアRAIDはリカバリされません。ディスクマネージャを使用して手動でミラーを適用する必要があります。また、ハードウェアRAIDコンポーネントは、ディザスタリカバリを実行する前に設定する必要があります。

p.1782の「リカバリするコンピュータのハードウェアの変更について」を参照してください。

p.1785の「Intelligent Disaster Recoveryウィザードを使用したコンピュータのリカバリ」を参照してください。

リカバリするコンピュータのハードウェアの変更について

*.drファイルの作成中に、IDRを実行しているメディアサーバー上にデバイスドライバデータベースが作成されます。このデータベースには、各コンピュータに搭載されたさまざまなハードディスクドライブおよびネットワークインターフェースカードに必要なドライバが含まれています。特定のコンピュータのハードディスクドライブまたはネットワークインターフェースカードに障害が発生し、障害が発生したコンポーネントを他のコンピュータに存在する同じ種類のコンポーネントと交換した場合、リカバリ時に正しいデバイスドライバがIDRによって自動的にインストールされます。

また、IDRを使用して、機能していないコンピュータをリカバリすることもできます。たとえば、コンピュータのメインシステムボードに障害が発生した場合、新しいシステムボードが異なるモデルであったり、複数のプロセッサを搭載していても、システムボードの交換後にコンピュータのデータをリストアすることができます。

リカバリするコンピュータのハードウェアを変更する場合は、次の項目に注意する必要があります。

- ハードディスクドライブ:交換するハードディスクドライブには元のドライブ以上の容量が必要です。また、その数は元のコンピュータ構成でのハードディスクドライブの数以上である必要があります。これらの条件を満たしていない場合は、パーティションの作成に問題が発生することがあります。
- システムボード:障害が発生したシステムボードを交換し、IDRを使用してコンピュータをリカバリしたら、システムボードの製造元が提供するドライバCDを使用して、オン

ボードサウンドやオンボードビデオなどの追加機能を再インストールする必要があります。

- ネットワークインターフェースカード:リカバリするコンピュータのネットワークインターフェースカードを変更する場合は、必要なネットワークドライバをインストールする必要があります。ネットワークドライバがインストールされていない場合、リモートメディアサーバーまたはリモートのディスクへのバックアップフォルダを使用してコンピュータをリカバリする際に、ネットワークにアクセスできません。リカバリの完了後、コンピュータに搭載されているネットワークカードに適合する新しいネットワークインターフェースカードドライバをインストールする必要があります。コンピュータのリカバリに使用するバックアップセットには、障害が発生し交換したネットワークインターフェースカード用の元のネットワークインターフェースカードドライバが含まれます。

p.1785 の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.1784 の「[暗号化されたバックアップセットおよび Intelligent Disaster Recovery ウィザードについて](#)」を参照してください。

p.1794 の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した手動リストアの実行](#)」を参照してください。

IDR を使用した IBM コンピュータのリカバリについて

IBM ServeRAID カードを搭載した IBM コンピュータをリカバリするには、IDR プロセスを開始する前に、次の作業が必要です。

- IBM ServeRAID コントローラカードおよび ServeRAID ソフトウェアをインストールし、Windows オペレーティングシステムからブートパーティションが見えるように構成します。
- IDR ブート可能メディアを使用する前に、CD-ROM ドライブに IBM サーバーの ServeRAID Configuration and Management CD をセットし、この CD を使用してサーバーを起動します。これにより IBM ServeRAID ユーティリティの構成およびインストールプロセスが開始され、現在の BIOS およびファームウェアレベルの表示および更新が行われます。

ServeRAID コントローラを搭載した IBM サーバーに Windows をインストールする方法について詳しくは IBM ServeRAID のマニュアルを参照してください。ServeRAID ディスクを作成して初期化し、Windows オペレーティングシステムからパーティションが見えるようにします。

p.1785 の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードについて

Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用してリカバリを実行する場合、3つのソースからリストアに必要なメディアデバイスにアクセスできます。次の操作を行うことができます。

- リカバリするコンピュータでローカル接続されているメディアデバイスを使用する。
- リモートコンピュータ上に存在するリモートのディスクへのバックアップフォルダを使用する。
- リモートメディアサーバーからリストアジョブを実行する。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用してデータのリストアを行うには、次の必要条件を満たす必要があります。

- リストアするターゲットコンピュータの完全バックアップを格納したメディアセットが必要です。
- ローカルコンピュータをリカバリする場合は、リカバリするコンピュータにストレージデバイスが接続されている必要があります。
- ブート可能 CD を使用する場合は、ターゲットコンピュータにバックアップセットをリストアするメディアサーバーがネットワークに接続されている必要があります。

p.1785の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した自動リストアの実行](#)」を参照してください。

p.1794の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した手動リストアの実行](#)」を参照してください。

暗号化されたバックアップセットおよび Intelligent Disaster Recovery ウィザードについて

Intelligent Disaster Recovery ウィザードでは、以前に暗号化されたバックアップセットを使用したコンピュータのリカバリがサポートされています。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードの自動リカバリオプションを使用してローカルメディアサーバーをリカバリすると、リストアジョブの実行に必要な暗号化された各バックアップセットのパスフレーズを入力するように求められます。

リモートメディアサーバーで、暗号化されたバックアップセットを使用してコンピュータをリカバリすると、次のいずれかが実行されます。

表 R-5 暗号化キー、パスフレーズ、Intelligent Disaster Recovery ウィザード

項目	説明
バックアップセットをリモートメディアサーバーに作成した場合	Intelligent Disaster Recovery ウィザードで暗号化キーが自動的に取得されます。

項目	説明
バックアップセットをリモートメディアサーバー以外に作成した場合	Intelligent Disaster Recovery ウィザードでパスフレーズの入力が求められます。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードの手動リカバリオプションを使用すると、リカバリの実行に必要な暗号化された各バックアップセットのパスフレーズを入力するように求められます。

p.400 の「暗号化キー」を参照してください。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ

Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用してコンピュータをリカバリするには、次の手順を実行する必要があります。

メモ: リカバリをすべて自動化するには、リストアするコンピュータ用の最新の *.dr ファイルが必要です。*.dr ファイルが利用できないか、または最新のものではない場合でも、IDR を使用してコンピュータを手動でリカバリできます。

表 R-6 Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用したコンピュータのリカバリ手順

手順	操作
手順 1	Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードで作成したブート可能テープまたは CD を使用してコンピュータを起動する。
手順 2	Windows セットアップを使用して、リカバリ用のコンピュータを準備する。
手順 3	Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用して、コンピュータを使用できる状態にリストアし、コンピュータのデータを最新のバックアップセットからリストアする。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した自動リストアの実行

Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用して自動リストアを実行するには、次の手順を実行します。

p.1788 の「ローカル接続されているメディアデバイスからのリストア」を参照してください。

p.1790 の「リモートのディスクへのバックアップフォルダからのリストア」を参照してください。

p.1791 の「リモートメディアサーバーからのリストア」を参照してください。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用して自動リストアを実行する方法

- 1 リカバリするコンピュータの CD ドライブにブート可能 IDR CD を挿入して、コンピュータを起動します。
- 2 [IDR のブート] 画面を確認し、**Enter** キーを押します。
- 3 最初の [Symantec Intelligent Disaster Recovery] パネルで、[自動リカバリ] をクリックし、[次へ] をクリックします。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードの実行に失敗し、最初の IDR リカバリ画面に戻った場合は、[開始]>[ログファイルを表示] をクリックします。このログファイルは、シマンテック社テクニカルサポートに連絡する場合に使用します。

SCSI または RAID コントローラドライバが必要な場合、Intelligent Disaster Recovery ウィザードによってドライバデータベースからそのドライバが検出されると、自動的にインストールされます。SCSI または RAID ドライバが検出されなかった場合は、[ディスク使用] ボタンをクリックして必要なドライバをインストールし、[OK] をクリックします。

- 4 リカバリするコンピュータ用の *.dr ファイルを選択し、[次へ] をクリックします。
*.dr ファイルの名前には作成元のコンピュータの名前が使用されています。また、作成日時も表示されます。正しい *.dr ファイルを選択していることを確認してください。
- 5 *.dr ファイルが表示されなければ、[参照] をクリックし、*.dr ファイルのバックアップコピーを格納した宛先フォルダにナビゲートします。
- 6 *.dr のファイルがネットワークドライブに存在する場合は、[ネットワークのインストール] をクリックしてネットワークを有効にします。
- 7 ネットワークドライブのインストール後、[参照] をクリックして *.dr ファイルを検索します。

p.1793 の「ネットワークドライブのインストール」を参照してください。

- 8 [ディスク構成] パネルで、次のいずれかを実行します。

この手順は Windows 2000/Vista、Windows Server 2008 にのみ当てはまります。

現在のハードディスク [現在のレイアウトを保持する] をクリックし、[次へ] をクリックします。
クレイアウトを使用する場合

元のハードディスク [元のレイアウトをリストアする] をクリックし、[次へ] をクリックします。
レイアウトをリストアする場合

- 9 次のいずれかを実行します。

リカバリする既存のハードディスクドライブで BitLocker ドライブ暗号化が有効になっている場合

次に示す順序で操作を実行します。

- [ロック解除]をクリックします。
- [BitLocker ドライブのリカバリ]パネルで、暗号化キーを含むファイルを選択するか、またはリカバリパスワードを入力します。
- [次へ]をクリックします。

BitLocker ドライブ暗号化が有効になっていない場合

手順 11 に進みます。

- 10** [ディスクレイアウトをリストア]パネルで、[次へ]をクリックします。
- 11** [ハードディスクレイアウトを修正]パネルで、次のいずれかを実行します。

*.dr ファイルから元の構成を使用する場合

[次へ]をクリックします。

パーティション情報を変更する場合

次に示す順序で操作を実行します。

- [ディスク管理を起動]をクリックします。
- ディスクレイアウトを修正します。
- [次へ]をクリックします。

Windows の[ディスクの管理]および耐障害性構成について詳しくは Windows のマニュアルを参照してください。

p.1794の「ハードディスクドライブのパーティションサイズの変更について」を参照してください。

- リカバリするコンピュータ用の *.dr ファイルが存在しない場合
- 次に示す順序で操作を実行します。
- [ディスク管理を起動]をクリックします。
 - パーティションレイアウトを修正します。
 - [次へ]をクリックします。

12 次のいずれかの方法を選択して、ストレージデバイスにアクセスします。

ローカルメディア
サーバーに接続した
メディアデバイスを使用

テープドライブ、オートローダ、ディスクへのバックアップフォルダなどのローカル接続されているバックアップメディアを使用する場合は、このオプションを選択します。ブート可能テープを使用する場合は、このオプションを使用する必要があります。

p.1788の「[ローカル接続されているメディアデバイスからのリストア](#)」を参照してください。

ネットワークをインストールしてリモート
ディスクへのバック
アップフォルダから
リストア

ディスクへのバックアップフォルダがリモートコンピュータ上に存在する場合は、このオプションを選択します。

p.1790の「[リモートのディスクへのバックアップフォルダからのリストア](#)」を参照してください。

ネットワークをインストールしてリモート
メディアサーバーから
リストア

リストアジョブをリモートメディアサーバーからサブミットする場合は、このオプションを選択します。

p.1791の「[リモートメディアサーバーからのリストア](#)」を参照してください。

ローカル接続されているメディアデバイスからのリストア

ローカル接続されているメディアデバイスからリストアするには、次の手順を実行します。
p.1782の「[リカバリするコンピュータのハードウェアの変更について](#)」を参照してください。

ローカル接続されているメディアデバイスからリストアする方法

1 [リストア方法の選択]画面で[ローカルメディアサーバーに接続したメディアデバイスを使用]を選択し、[次へ]をクリックします。

2 メディアデバイスが検出されたら、[次へ]をクリックします。

選択した支援レベルに応じて、すべてのバックアップセットが自動的にリストアされるか、リストアするバックアップセットを個別に選択することができます。

リストアの完了後に、リストアするメディアを追加することができます。

*.dr ファイルが存在しない、または *.dr ファイルにカタログエントリが存在しない場合は、手動リストアを実行して[テープからリストアする]を選択してから、**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードを使用して手動リストアを実行します。

p.1794の「**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードを使用した手動リストアの実行」を参照してください。

3 次のいずれかを実行します。

- スタンドアロンテープドライブからリストアする場合は、正しいメディアを挿入して [次へ]をクリックします。

- ディスクへのバックアップフォルダからリストアする場合は、[次へ]をクリックします。

コンピュータのリカバリにロボットライブラリを使用する場合は、そのロボットライブラリの最初のドライブがリストアに使用されます。

4 [次へ]をクリックします。

[データのリストア]画面では、コンピュータの完全リストアに必要なすべてのバックアップセットに、デフォルトでチェックマークが付いています。

5 [次へ]をクリックします。

6 [デバイスにメディアを挿入]画面で、リストアするメディアが含まれているディスクへのバックアップフォルダまたはドライブを選択します。

7 [次へ]をクリックします。

8 自動リストアプロセスが終了したら、適切な応答をクリックします。

はい **Intelligent Disaster Recovery** ウィザードでリストアプロセスを続行する別のメディアセットを選択するように求められます。

いいえ **Intelligent Disaster Recovery** ウィザードによってハードディスクドライブが更新され、リカバリプロセスが終了します。

9 [Intelligent Disaster Recovery ウィザードが終了しました。]画面で、次の作業を実行できます。

CMD.EXE を実行	Intelligent Disaster Recovery ウィザードからコマンドウィンドウを開いてコンピュータに修正を加えることができます。
BOOT.INI を編集	Intelligent Disaster Recovery ウィザードから Windows の [メモ帳] アプリケーションを使用して、システムパーティションのルートに存在する boot.ini ファイルを編集できます。(Windows 2000/XP/Server 2003 のみ)
メッセージ	リカバリプロセスで Intelligent Disaster Recovery ウィザードによって生成されたメッセージを確認するには、[メッセージ] ボタンをクリックします。

10 [完了]をクリックします。コンピュータの再起動後、起動処理によって起動 CD ドライブが検出される前に CD を取り出します。

コンピュータを再起動すると、Intelligent Disaster Recovery ウィザードによってリカバリの最終的な修正が行われる少しの間、[Symantec]画面が表示されます。修正が終了するとコンピュータが再起動され、リカバリプロセスが完了します。

リモートのディスクへのバックアップフォルダからのリストア

リモートのディスクへのバックアップフォルダからリストアするには、次の手順を実行します。

リモートのディスクへのバックアップフォルダからリストアする方法

- 1 [リストア方法の選択]画面で[ネットワークをインストールしてリモートディスクへのバックアップフォルダからリストア]をクリックします。

- 2 [次へ]をクリックします。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードによって、正しいネットワークドライバの検出およびインストールが試行されます。

- 3 ネットワークのインストール後、[次へ]をクリックします。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードによって、リモートディスクへのバックアップフォルダの検出が試行されます。検出後、[<computer_name>への接続]画面が表示され、ディスクへのバックアップフォルダが存在するリモートコンピュータへのアクセスクREDENTIALを入力するように求められます。

- 4 リモートコンピュータへのアクセスに必要なクREDENTIALを入力します。

- 5 [次へ]をクリックします。

[メディアデバイスを検出中]画面が開き、ディスクへのバックアップフォルダが表示されます。

- 6 [次へ]をクリックします。
[データのリストア]画面では、コンピュータ全体のリストアに必要なすべてのバックアップセットに、デフォルトでチェックマークが付いています。
- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 [デバイスにメディアを挿入]画面で、リストアするメディアが含まれているディスクへのバックアップフォルダを選択します。
- 9 [次へ]をクリックします。
- 10 自動リストアプロセスが終了したら、適切な応答をクリックします。

はい Intelligent Disaster Recovery ウィザードでリストアプロセスを続行する別のメディアセットを選択するように求められます。

いいえ Intelligent Disaster Recovery ウィザードによってハードディスクドライブが更新され、リカバリプロセスが終了します。

- 11 [Intelligent Disaster Recovery ウィザードが終了しました。]画面で、次の作業を実行できます。

CMD.EXE を実行 Intelligent Disaster Recovery ウィザードからコマンドウィンドウを開いてコンピュータに修正を加えることができます。

BOOT.INI を編集 Intelligent Disaster Recovery ウィザードから Windows の [メモ帳] アプリケーションを使用して、システムパーティションのルートに存在する boot.ini ファイルを編集できます。

メッセージ リストアプロセスで Intelligent Disaster Recovery ウィザードによって生成されたメッセージを確認するには、[メッセージ] ボタンをクリックします。

- 12 [完了]をクリックします。コンピュータの再起動後、起動処理によって起動 CD ドライブが検出される前に CD を取り出します。

コンピュータを再起動すると、Intelligent Disaster Recovery ウィザードによってリカバリの最終的な修正が行われる少しの間、[Symantec] 画面が表示されます。修正が終了するとコンピュータが再起動され、リカバリプロセスが完了します。

リモートメディアサーバーからのリストア

リモートメディアサーバーからリストアするには、次の手順を実行します。

リモートメディアサーバーからリストアする方法

- 1 [リストア方法の選択]画面で[ネットワークをインストールしてリモートメディアサーバーからリストア]をクリックします。
- 2 [次へ]をクリックします。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードによって、正しいネットワークドライバの検出およびインストールが試行されます。

- 3 ネットワークのインストール後、[次へ]をクリックします。
- 4 [メディアサーバーに接続]画面で、メディアサーバーへのアクセスに必要なクレデンシャルを入力します。

サーバー名	リストアジョブを実行するように選択したリモートメディアサーバーの名前です。
ドメイン	リモートメディアサーバーが属するドメインです。
ユーザー名	リモートメディアサーバーに対する管理者権限を持つユーザー名です。
パスワード	アクセスに必要なパスワードです。

- 5 [次へ]をクリックします。
[データのリストア]画面では、コンピュータ全体のリストアに必要なすべてのバックアップセットに、デフォルトでチェックマークが付いています。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 自動リストアプロセスが終了したら、適切な応答をクリックします。

はい **Intelligent Disaster Recovery** ウィザードでリストアプロセスを続行する別のメディアセットを選択するように求められます。

いいえ **Intelligent Disaster Recovery** ウィザードによってハードディスクドライバが更新され、リカバリプロセスが終了します。

8 [Intelligent Disaster Recovery ウィザードが終了しました。]画面で、次の作業を実行できます。

CMD.EXE を実行	Intelligent Disaster Recovery ウィザードからコマンドウィンドウを開いてコンピュータに修正を加えることができます。
BOOT.INI を編集	Intelligent Disaster Recovery ウィザードから Windows の [メモ帳] アプリケーションを使用して、システムパーティションのルートに存在する boot.ini ファイルを編集できます。(Windows 2000/XP/Server 2003 のみ)
メッセージ	リストアプロセスで Intelligent Disaster Recovery ウィザードによって生成されたメッセージを確認するには、[メッセージ] ボタンをクリックします。

9 [完了]をクリックします。コンピュータの再起動後、起動処理によって起動 CD ドライブが検出される前に CD を取り出します。

コンピュータを再起動すると、Intelligent Disaster Recovery ウィザードによってリカバリの最終的な修正が行われる少しの間、[Symantec]画面が表示されます。修正が終了するとコンピュータが再起動され、リカバリプロセスが完了します。

ネットワークドライバのインストール

Intelligent Disaster Recovery ウィザードで、[ネットワークのインストール] ボタンまたは [ネットワークの設定] ボタンが表示されている任意の画面からネットワークドライバをインストールできます。

p.1785 の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した自動リストアの実行](#)」を参照してください。

p.1794 の「[Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した手動リストアの実行](#)」を参照してください。

ネットワークドライバをインストールする方法

- 1 [ネットワークのインストール]をクリックします。
- 2 Intelligent Disaster Recovery ウィザードによってネットワークアダプタが検出され、検出された各アダプタがバインドされたら、[ネットワークの設定]画面で[次へ]をクリックします。

デフォルトでは、IP アドレスがデフォルトの DHCP サーバーから各ネットワークアダプタに割り当てられます。検出された各ネットワークアダプタに静的な IP アドレスを割り当てるには、ネットワークアダプタを選択して[設定]をクリックします。

ハードディスクドライブのパーティションサイズの変更について

IDR での Windows 2000 コンピュータのリカバリでは、ハードディスクドライブに、障害発生前と同じサイズのパーティションがリストアされます。したがって、新しく交換したハードディスクの容量が以前のものより大きい場合は、未使用の領域が発生します。このような場合には、**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードで **Windows** の [ディスクの管理] を実行し、パーティションのサイズを変更します。

Windows 2000 コンピュータのリカバリ時に、[リストア中にブートおよびシステムドライブのパーティションを IDR で自動的に作成する] を選択しなかった場合は、セットアップ時にハードディスクドライブのパーティション情報を指定する必要があります。

ハードディスクドライブのサイズを変更する必要がある理由を、次の例に示します。

障害発生前のコンピュータが、4 GB の容量のハードディスクを 2 つの 2 GB のパーティションに分割していたとします。これを 9 GB の容量のものと交換した場合、*.dr ファイルの情報に基づいて元の 4 GB ドライブのパーティションテーブルが IDR によって復元されます。その結果、この 9 GB のドライブでは、2 GB のパーティション 2 つで構成された 4 GB の領域のみが使用され、5 GB が未使用のまま残ってしまいます。

新しいハードディスクドライブの容量を有効に使用するには、[ディスクの管理] を使用してパーティションのサイズを変更します。

p.1782 の「[リカバリするコンピュータのハードウェアの変更について](#)」を参照してください。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードを使用した手動リストアの実行

*.dr ファイルが存在しない場合でも、**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードを使用して手動リストアを開始することにより、コンピュータをリカバリできます。**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードでは、バックアップメディアを読むことで個別のバックアップセットが識別されるため、リストアするバックアップセットを選択することができます。

注意: リストアするメディアに、完全バックアップセットと増分または差分バックアップセットの両方が格納されている場合は、完全バックアップセットのリストアを先に実行してください。

p.1782 の「[リカバリするコンピュータのハードウェアの変更について](#)」を参照してください。

手動リストアを実行する方法

ユーティリティパーティションのある Windows 2000 コンピュータをリストアする場合は、まずコンピュータの製造元から提供されたメディアを使用してユーティリティパーティションを再作成します。

- 1 リカバリするコンピュータの CD ドライブにブート可能 IDR CD を挿入して、コンピュータを起動します。
- 2 [IDR のブート] 画面を確認し、**Enter** キーを押します。

- 3** 最初の[Symantec Intelligent Disaster Recovery]パネルで、[手動リカバリ]をクリックし、[次へ]をクリックします。

Intelligent Disaster Recovery ウィザードの実行に失敗し、最初の IDR リカバリパネルに戻った場合は、[開始]>[ログファイルを表示]をクリックします。このログファイルは、シマンテック社テクニカルサポートに連絡する場合に使用します。

SCSI または RAID コントローラドライバが必要な場合、**Intelligent Disaster Recovery** ウィザードによってドライバデータベースからそのドライバが検出されると、自動的にインストールされます。SCSI ドライバまたは RAID ドライバが検出されなかった場合は、[ディスク使用]アイコンをクリックして必要なドライバをインストールし、[OK]をクリックします。

- 4** 次のいずれかを実行します。

リカバリする既存の 次に示す順序で操作を実行します。

- | | |
|---|---|
| ハードディスクドライブで BitLocker ドライブ暗号化が有効になっている場合 | <ul style="list-style-type: none"> ■ [ロック解除]をクリックします。 ■ [BitLocker ドライブのリカバリ]パネルで、暗号化キーを含むファイルを選択するか、またはリカバリパスワードを入力します。 ■ [次へ]をクリックします。 |
|---|---|

BitLocker ドライブ 手順 5 に進みます。
暗号化が有効になっていない場合

- 5** [ハードディスクレイアウトを修正]画面で[ディスク管理を起動]をクリックします。
- 6** コンピュータの元のパーティションレイアウトと一致するようにハードディスクのパーティションレイアウトを再作成します。
- 7** ハードディスクのパーティションレイアウトを作成したら、[次へ]をクリックします。

8 次のいずれかの方法を選択して、ストレージデバイスにアクセスします。

ローカルメディア テープドライブ、オートローダ、ディスクへのバックアップフォルダなど
サーバーに接続した のローカル接続されているバックアップメディアを使用する場合は、こ
メディアデバイスを使 のオプションを選択します。ブート可能テープを使用する場合は、この
用 オプションを使用する必要があります。

p.1788の「ローカル接続されているメディアデバイスからのリストア」を参
照してください。

ネットワークをインス ディスクへのバックアップフォルダがリモートコンピュータ上に存在する
トールしてリモート 場合は、このオプションを選択します。

ディスクへのバック p.1790の「リモートのディスクへのバックアップフォルダからのリストア」
アップフォルダからリ を参照してください。
ストア

ネットワークをインス リストアジョブをリモートメディアサーバーからサブミットする場合は、こ
トールしてリモートメ のオプションを選択します。

ディアサーバーから p.1791の「リモートメディアサーバーからのリストア」を参照してください。
リストア

9 リストア用のメディアが存在するテープドライブを選択します。

[バックアップセットの検出]ダイアログボックスが開き、メディア上で検出された最初
のバックアップセットが表示されます。

10 表示されている場所とは異なる場所にリストアする場合は、[変更]をクリックし、デー
タのリストア先の場所を選択します。代替の場所にドライブ **C** を使用しないでくださ
い。

11 次のいずれかをクリックします。

- | | |
|-----------|--|
| セットをリストア | [メディア情報]および[セット情報]に表示されているバックアップセットをリストアする場合にクリックします。選択したパーティションにデータがリストアされます。リストアが完了すると、[バックアップセットの検出]ダイアログボックスが再び表示され、このメディア上で検出された次のバックアップセットが表示されます。バックアップセットのリストアがすべて終了すると、[テープドライブの選択]画面が表示されます。

別のバックアップセットをリストアする場合は、もう一度[セットをリストア]をクリックし、次のバックアップセットをリストアします。このメディア上で検出されたすべてのバックアップセットに対して、この手順を繰り返します。 |
| セットをスキップ | このバックアップセットのリストアをスキップし、リストアに使用する次のバックアップセットを検索する場合にクリックします。 |
| メディアをスキップ | 使用中のメディアを取り出し、別のメディアと交換する場合にクリックします。 |

12 最後のバックアップセットのリストアが終了した後、[完了]をクリックしてリカバリプロセスを終了し、Intelligent Disaster Recovery ウィザードを終了します。

Microsoft SQL Server のリカバリに関する注意事項

SQL Server データベースを完全にリカバリするには、メディアサーバーに Backup Exec Agent for Microsoft SQL Server オプションがインストールされている必要があります。

Intelligent Disaster Recovery を使用して Windows サーバーをリカバリすると、損傷した master および model データベースが、そのコピーと自動的に置換されます。SQL が再起動し、最新の master データベースおよびその他のシステムデータベースがリストアされて、IDR のリカバリが完了した後に、すべてのユーザーデータベースを手動でリストアする必要があります。

注意: SQL Server 2000 で使用される Intelligent Disaster Recovery Option では、master および model データベースのコピーが作成されます。コピーは、AOFO (Advanced Open File Option) を使用しないで master および model データベースのバックアップを実行した場合にのみ作成されます。SQL のバックアップに AOFO を使用する場合は、AOFO を使用しない master および model データベースのバックアップを、少なくとも 1 つ作成しておく必要があります。SQL Server 2000 をアップグレードした場合は、AOFO を使用せずに master および model データベースのバックアップを改めて実行してください。

p.1225 の「[SQL Agent とスナップショットテクノロジーの使用方法](#)」を参照してください。

p.884 の「[Advanced Disk-based Backup Option](#) について」を参照してください。

Microsoft Exchange のリカバリに関する注意事項

Exchange Server データベースを完全にリカバリするには、メディアサーバーに Backup Exec Agent for Microsoft Exchange Server オプションがインストールされている必要があります。

Intelligent Disaster Recovery を使用して Windows サーバーをリカバリした後、Backup Exec を使用して、最新の Exchange Server データベースのバックアップから Exchange Server データベースをリストアします。

SharePoint Portal Server のリカバリに関する注意事項

Intelligent Disaster Recovery を使用して SharePoint Portal Server 2001 がインストールされている Windows サーバーを (システムの再起動後に) リカバリしても、SharePoint Portal Server ソフトウェアはインストールされますが正しく動作しません。SharePoint データをリストアする前に、SharePoint Portal Server 2001 をいったん削除して再インストールする必要があります。

Citrix Metaframe のリカバリに関する注意事項

Backup Exec では、Citrix Metaframe 1.8、XPa、XPe および XP コンピュータの IDR がサポートされます。ただし、次の例外があります。

- Citrix をインストールしたメディアサーバーのドライブ C が再マップされている場合、リモートコンピュータの IDR はサポートされません。
- Citrix コンピュータの他のドライブが IDR よりも前に再マップされている場合は、ファイルがリストアされる前に、IDR プロセス時にそのドライブを再マップする必要があります。
- IDR プロセスで自動リカバリを選択し、*.dr ファイルを選択した場合は、Backup Exec は自動的にドライブを再マップします。
- IDR プロセスで自動リカバリまたは手動リカバリを選択し、*.dr ファイルを選択しなかった場合は、手動でドライブを再マップする必要があります。

Central Admin Server Option での IDR の使用について

Central Admin Server Option (CASO) を購入してインストールすると、CASO 環境で管理対象メディアサーバーの IDR を実行できます。管理対象メディアサーバー用のディザスタリカバリメディアを準備するには、集中管理サーバーで Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行する必要があります。*.dr ファイルは、集中管理サーバーに格納さ

れます。IDR による管理対象メディアサーバーのリカバリでは、すべてのリストアジョブは集中管理サーバーからサブミットされます。集中管理サーバーは、該当する管理対象メディアサーバーにリストアジョブを送信します。

メモ: CAS 環境で管理対象メディアサーバーノードがアクティブな場合は、そのノードを IDR の準備のための有効なメディアサーバーとして選択できません。IDR ブートメディアを作成するには、管理対象メディアサーバーが接続されている CAS サーバーを選択する必要があります。

Veritas Storage Foundation for Windows サーバーでの IDR の使用について

Windows Server 2003 で Veritas Storage Foundation for Windows を使用した場合、IDR はダイナミックボリュームをリストアできます。バックアップ時、IDR はダイナミックボリュームのリストアに必要なアプリケーションおよびコンポーネントを収集し、ディザスタリカバリメディアに追加します。リカバリ時には、収集されたアプリケーションは、ダイナミックボリュームをリカバリするために、Windows 自動システム回復 (ASR) プロセスの一部として実行されます。ダイナミックボリュームのリカバリ後、ボリュームのデータリカバリは通常どおりに続行されます。

IDR に関する推奨事項

次の表に IDR 使用時の推奨事項を示します。

表 R-7

IDR に関する推奨事項

項目	説明
リモート IDR	リモートコンピュータのディザスタリカバリを実行する場合は、Remote Agent を別途購入して、リモートコンピュータで実行する必要があります。

項目	説明
ブート可能メディアの作成	<p>ブート可能メディアを作成する前に、次の推奨事項を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ *.dr ファイルが、選択した代替データベースに作成されていることを必ず確認してください。 ■ ブート可能テープを作成する場合は、完全バックアップを実行する前に、Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードを実行してブート可能イメージを作成してください。 ■ ブート可能 CD を作成する場合は、ブート可能メディアを作成する前に完全バックアップを実行してください。 ■ バックアップメディアが別の Backup Exec メディアサーバーに存在する場合は、Intelligent Disaster Recovery 準備ウィザードの最初の画面で [IDR オプションがインストールされているメディアサーバーを選択] を選択します。 ■ ローカル IDR の場合、リカバリ時にアクセスできるドライブ上に、ディスクへのバックアップフォルダが存在している必要があります。
ディザスタリカバリ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 新しいパーティションレイアウトは、元のドライブ以上の領域が必要です。 ■ ディスクには、最新の RAID、SCSI または NIC (リモートの場合) ドライブが必要です。

Symantec Backup Exec NDMP Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NDMP Option](#) について
- [NDMP Option](#) 使用上の必要条件
- [NDMP Option](#) のインストールについて
- [Backup Exec](#) への [NDMP](#) サーバーの追加
- 複数のメディアサーバー間での [NDMP](#) サーバーのデバイスの共有
- [NDMP](#) リソースのバックアップ
- [NDMP](#) のバックアップの選択のためのディレクトリとファイルのインクルードおよびエクスルードについて
- バックアップした [NDMP](#) データを複製する方法
- [NDMP](#) データのリストア
- リストアする [NDMP](#) データのリストア先の変更について
- [NDMP](#) のバックアップおよびリストアのデフォルト設定
- [NDMP](#) サーバーのプロパティの表示

NDMP Option について

Symantec Backup Exec NDMP Option を使用すると、Network Data Management Protocol (NDMP) を使用して、ネットワーク接続ストレージ (NAS) デバイスをバックアップおよびリストアできます。

NAS デバイスからの次の場所にデータをバックアップできます。

- NDMP 対応の NAS デバイスに直接接続されたストレージデバイス (直接接続)
- 別の NDMP 対応の NAS デバイスに接続されたストレージデバイス(ファイラ - ファイラ接続)
- Backup Exec メディアサーバー上のディスクへのバックアップデバイス (リモート)
- Backup Exec メディアサーバーに接続されたテープデバイス (リモート)

メモ: NDMP データは、シミュレートテープライブラリ、または Backup Exec Remote Media Agent for Linux Servers に接続されたテープデバイスにバックアップできません。

Backup Exec メディアサーバー上のストレージデバイスから NAS デバイスにデータをリストアできます。ただし、NDMP データのリストア先は Windows または Linux のオペレーティングシステムを実行するコンピュータには変更できません。

Backup Exec SAN Shared Storage Option を使用して、単一または複数の Backup Exec メディアサーバーと NAS デバイス間でテープデバイスを共有できます。また、同じバックアップジョブに NDMP のデータと NDMP 以外のデータを混在させることができます。

p.1941 の「[SAN Shared Storage Option について](#)」を参照してください。

p.1802 の「[NDMP Option 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

p.1803 の「[NDMP Option のインストールについて](#)」を参照してください。

NDMP Option 使用上の必要条件

NDMP Option を使用するには、Backup Exec メディアサーバーに次のものがインストールされている必要があります。

- Windows XP または Windows Server 2003/2008/2008 R2
- Backup Exec
 - p.107 の「[ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

また、バージョン 4 の Network Data Management Protocol が有効になっている NDMP サーバーを用意する必要があります。

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

NDMP Option のインストールについて

NDMP Option は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてメディアサーバーにローカルでインストールされます。ファイルは NDMP サーバーにはコピーされません。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

Backup Exec への NDMP サーバーの追加

NDMP オプションが使われるように Backup Exec を設定するには Backup Exec に NDMP サーバーを追加する必要があります。NDMP サーバーにストレージデバイスが接続されている場合、Backup Exec はサービスの再起動後にそれらを自動的に検出してデバイスのリストに追加します。

CASO 環境では、NDMP サーバーは次のサーバーにのみ追加できます。

- 集中管理サーバー
- デバイスとメディアのデータベースが格納されている管理対象メディアサーバー

NDMP サーバーを追加するとき、NDMP サーバーに接続されているデバイスにアクセスできるメディアサーバーを選択できます。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

Backup Exec に NDMP サーバーを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 3 [デバイス設定アシスタント]ダイアログボックスの[**NDMP Option**]の下で、[NDMP ストレージ]をクリックします。
- 4 [**NDMP**サーバーの設定]ダイアログボックスが表示されたら、[NDMP サーバーの追加]をクリックします。

この手順はこれが最初の NDMP サーバーなら適用されません。[**NDMP**サーバーの設定]ダイアログボックスは NDMP サーバーがすでにあるときのみ表示されます。

- 5 [一般]タブで、必要な情報を入力します。

p.1804 の「[\[NDMP サーバーの追加\]オプション](#)」を参照してください。

- 6 [共有]タブで、この NDMP サーバーに接続されているデバイスを使う各メディアサーバーを選択してください。

- 7 [OK]をクリックして、NDMP サーバーを追加します。
- 8 Backup Exec サービスを再起動します。
p.158 の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

[NDMP サーバーの追加]オプション

Backup Exec に NDMP サーバーを追加するとき、次のオプションが必要です。
p.1803 の「[Backup Exec への NDMP サーバーの追加](#)」を参照してください。

表 S-1 [NDMP サーバーの追加]オプション

項目	説明
サーバー	NDMP サーバーの名前を示します。
ポート	Backup Exec メディアサーバーと NDMP サーバー間の通信に使用するポートが一覧表示されます。
説明	サーバーのユーザー定義の説明を表示します。
Backup Exec の ICMP ping 操作を有効にして NDMP サーバーを検出する	Backup Exec で NDMP サーバーを特定するために ping を使えるようにします。
ログオンアカウント	NDMP サーバーのログオンアカウントの名前を示します。

複数のメディアサーバー間での NDMP サーバーのデバイスの共有

Backup Exec Central Admin Server Option か SAN Shared Storage Option を使えば、どのメディアサーバーが NDMP サーバーに接続されているデバイスを共有できるかを選択できます。NDMP サーバーを追加するとき、サーバーを追加するために使ったメディアサーバーは共有のために自動的に選択されます。

メモ: Backup Exec の以前のバージョンからアップグレードした場合、既存の構成は保持されます。従って既存の構成のために共有を設定する必要がありません。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

複数のメディアサーバー間で NDMP サーバーのデバイスを共有する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 [デバイス]ビューでは、メディアサーバーがアクセスするデバイスがある NDMP サーバーを右クリックしてください。
- 3 [共有の管理]を選択してください。
- 4 共有したいデバイスがある NDMP サーバーを選択してください。
- 5 [メディアサーバー]の下で、選択した NDMP サーバーに接続されているデバイスで使うメディアサーバーを選択してください。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 手順 5 で選択したメディアサーバーのサービスを再起動してください。

NDMP リソースのバックアップ

NDMP リソースのバックアップ前に、次の制限事項を確認してください。

- **NDMP Option** では、親フォルダがバックアップされているフォルダは、バックアップジョブから除外されません。この場合、バックアップから除外するように指定している項目も含め、親フォルダ内のすべての項目がバックアップされます。
- **Backup Exec** では、NDMP バックアップのファイルおよびディレクトリ情報を十分に収集できません。そのため、ジョブ履歴の[ジョブの概略]セクションと[セットの詳細]セクションには、正確な情報が表示されません。従って、ファイル数、ディレクトリ数、スキップしたファイル数、破損ファイル数および使用中のファイル数は常に 0 と表示されます。

NDMP リソースをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 バックアップ選択ツリーで、[NDMP サーバー]または[ユーザー定義選択]を展開します。

NDMP サーバーが **Backup Exec** によって自動的にバックアップ選択リストに追加された場合、NDMP サーバーは[**NDMP サーバー**]の下に表示されます。NDMP サーバーをバックアップ選択リストに手動で追加した場合、NDMP サーバーは[ユーザー定義選択]の下に表示されます。

- 5 バックアップする NDMP リソースを選択します。
このリソースのログオンアカウントの選択または作成を求めるメッセージが表示される場合があります。
NDMP リソース全体をバックアップしない場合は、バックアップジョブに含めるか、またはバックアップジョブから除外する特定のファイルかディレクトリを選択してください。
p.1808 の「[NDMP のバックアップの選択のためのディレクトリとファイルのインクルードおよびエクスクルードについて](#)」を参照してください。
- 6 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 7 [デバイス]リストで、ストレージデバイスを選択します。
- 8 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[NDMP]をクリックします。
- 9 このジョブのために使用するバックアップ方式と他のバックアップオプションを選択します。
p.1806 の「[NDMP のバックアップオプション](#)」を参照してください。
- 10 次のいずれかを実行します。
 - バックアップジョブを開始する。
 - [プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択し、バックアップジョブを開始する。

NDMP のバックアップオプション

NDMP のバックアップジョブを作成するとき、ジョブのために適切である次のオプションを設定できます。

p.1805 の「[NDMP リソースのバックアップ](#)」を参照してください。

表 S-2 NDMP のバックアップオプション

項目	説明
バックアップ方式 (NetApp/IBM)	バックアップレベルを指定します。レベル 0 は完全バックアップを表します。レベル 1 からレベル 9 は、さまざまなレベルの増分バックアップを表します。レベル 1 のバックアップ方式では、レベル 0 のバックアップ以降の新しいファイルまたは修正されたファイルがバックアップされます。レベル 2 のバックアップ方式では、レベル 1 のバックアップ以降の新しいファイルまたは修正されたファイルがバックアップされます (レベル 3 以降も同様です)。

項目	説明
アクセス制御リストをバックアップする	(NetApp Filer のみ) NetApp アクセス制御リストをバックアップします。
ファイル履歴を有効にする(NetApp/IBM)	ファイル履歴データの生成を有効にします。ファイルの履歴は、バックアップイメージから選択したデータのサブセットのリカバリを最適化するために使用されます。ファイルの履歴を生成して処理すると、バックアップ時間が増加します。このオプションを無効にするとバックアップ時間を改善します。ファイルの履歴を無効にした後でデータをリストアする場合は、バックアップイメージ全体をリストアします。
バックアップ方式 (EMC)	バックアップレベルを指定します。レベル 0 は完全バックアップを表します。レベル 1 からレベル 9 は、さまざまなレベルの増分バックアップを表します。レベル 1 のバックアップ方式では、レベル 0 のバックアップ以降の新しいファイルまたは修正されたファイルがバックアップされます。レベル 2 のバックアップ方式では、レベル 1 のバックアップ以降の新しいファイルまたは修正されたファイルがバックアップされます (レベル 3 以降も同様です)。
バックアップの種類	このバックアップジョブのためのバックアップの種類を判断します。 次のバックアップの種類のいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ VBB (EMC のみ) ■ ダンプ
統合チェックポイントを使用してバックアップする (SnapSure)	Backup Exec で EMC SnapSure 機能を使用するバックアップセットを作成できます。この機能は EMC のみに適用されます。 SnapSure については詳しくは EMC のマニュアルを参照してください。
ファイル履歴を有効にする (EMC)	バックアップ履歴からの選択したデータのサブセットのリカバリを可能にします。[ファイル履歴を有効にする] のチェックマークを外したら、ファイル履歴データは生成されませんが、バックアップは短縮される場合があります。デフォルトでは、このオプションが選択されています。

項目	説明
Tape Silvering を有効にする	Backup Exec で、Tape Silvering を使用してデータのレプリケートに使用できるバックアップセットを作成できます。このオプションは EMC のみに適用されます。 Tape Silvering について詳しくは EMC のマニュアルを参照してください。

NDMP のバックアップの選択のためのディレクトリとファイルのインクルードおよびエクスクルードについて

バックアップジョブの作成時に、次のタスクを実行できます。

- バックアップジョブにインクルードする特定のディレクトリを選択します。
- バックアップジョブからエクスクルードする特定のディレクトリとファイルを選択します。

次の表に、NetApp と EMC のバックアップの選択のためにインクルードおよびエクスクルードできる項目を示します。

表 S-3

NDMP のバックアップ選択項目の種類	インクルード	エクスクルード
NetApp	1 つまたは複数のディレクトリ	ディレクトリとファイル
EMC	1 つのディレクトリ	(バックアップの種類としてダンプを選択するときのみ) ディレクトリとファイル

p.1808 の「[NetApp のバックアップ選択項目への特定のディレクトリのインクルード](#)」を参照してください。

p.1809 の「[EMC のバックアップ選択項目への特定のディレクトリのインクルード](#)」を参照してください。

p.1810 の「[NDMP のバックアップ選択項目からファイルとディレクトリをエクスクルードするためのパターンの使用方法](#)」を参照してください。

p.1812 の「[NetApp バックアップ選択項目からのディレクトリおよびファイルの除外](#)」を参照してください。

NetApp のバックアップ選択項目への特定のディレクトリのインクルード

NetApp 装置用にバックアップジョブを作成するとき、バックアップジョブにインクルードする特定のディレクトリを選択できます。1 つのディレクトリまたは複数のディレクトリをインク

ロードできます。NetApp のファイルの選択に特定のファイルをインクルードすることはできません。

NetApp のバックアップ選択項目に特定のディレクトリをインクルードする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択項目にインクルードするファイルを含んでいるリソースを選択します。
- 4 [インクルード/エクスクルード]をクリックします。
- 5 [リソースの種類]で、[NDMP]をクリックします。
- 6 [NDMP の種類]で、[NetApp/IBM]を選択します。
- 7 [種類]で、[インクルード]をクリックします。
- 8 次のいずれかを実行します。
 - [リソース]ペインで、インクルードするディレクトリを参照します。
複数のディレクトリを選択する場合は、ディレクトリの名前を入力するのではなく、[リソース]ペインから選択することをお勧めします。
 - [パス]で、インクルードするディレクトリを入力します。
- 9 次のいずれかを実行します。

追加のディレクトリをバックアップの選択にインクルードする [適用] をクリックし、手順 5 と 6 を繰り返します。

この手順を完了する [OK] をクリックします。

EMC のバックアップ選択項目への特定のディレクトリのインクルード

EMC Celerra Server のためのバックアップジョブを作成するとき、特定のディレクトリをインクルードできます。ファイルシステム内の 1 つのディレクトリのみインクルードできます。EMC のバックアップ選択項目に特定のファイルをインクルードすることはできません。

EMC のバックアップ選択項目に特定のディレクトリをインクルードする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択項目にインクルードするファイルを含んでいるリソースを選択します。
- 4 [インクルード/エクスクルード]をクリックします。
- 5 [リソースの種類]で、[NDMP]をクリックします。

- 6 [NDMP の種類]で、[EMC]を選択します。
- 7 [種類]で、[インクルード]をクリックします。
- 8 [パス]で、インクルードするディレクトリを入力します。
- 9 [OK]をクリックします。

NDMP のバックアップ選択項目からファイルとディレクトリをエクスクルードするためのパターンの使用方法

EMC Celerra Server または NetApp/IBM の装置のためのバックアップ選択項目からファイルとディレクトリをエクスクルードする場合は、パターンを使う必要があります。慎重にパターンを入力して、正しいファイルとディレクトリを確実にエクスクルードします。Backup Exec はエクスクルードパターンの有効性を確認しません。無効なパターンを入力すると、パターンは無視されるため、ファイルまたはディレクトリはエクスクルードされません。

パターンの使用方法について詳しくは NDMP ベンダーのマニュアルを参照してください。

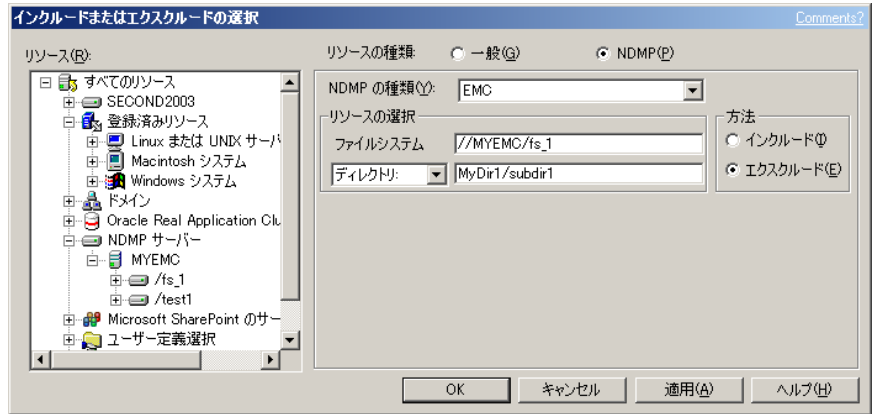
次の例は NetApp 装置のためのバックアップ選択項目からファイルとディレクトリをエクスクルードするパターンを示しています。

表 S-4 NetApp 装置のためのパターン例

パターン	例
tmp	「tmp」という名前を持つファイルとディレクトリをすべてエクスクルードします。
*.core	「.core」で終了するファイルとディレクトリをすべてエクスクルードします。

EMC Celerra Server のためのディレクトリをエクスクルードするには、パターンに EMC Celerra Server の名前またはファイルシステムの名前を含めないでください。NDMP サーバーとファイルシステムの名前は、[ファイルシステム]テキストボックスにすでにインクルードされています。ディレクトリパターンで NDMP サーバーおよびファイルシステムの名前を繰り返すと、EMC Celerra Server はエクスクルードを無視します。ルートディレクトリからエクスクルードするディレクトリまでのパスを入力します。最初のスラッシュ (/) はインクルードしないでください。

図 S-1 EMC ディレクトリのエクスクルード



次の例は EMC Celerra Server のためのバックアップ選択項目からディレクトリをエクスクルードするパターンを示しています。

表 S-5 EMC Celerra Server のためのディレクトリをエクスクルードするパターン例

パターン	説明
test_exclusion/subdir1	[ファイルシステム]テキストボックスに表示されているファイルシステム上の「subdir1」ディレクトリのみをエクスクルードします。
d*	[ファイルシステム]テキストボックスに表示されているファイルシステム上の文字「d」から始まるすべてのディレクトリをエクスクルードします。

次の例は EMC Celerra Server のためのバックアップ選択項目からファイルをエクスクルードするパターンを示しています。

表 S-6 EMC Celerra Server のためのファイルをエクスクルードするパターン例

パターン	説明
*.mp3	「.mp3」で終わるすべてのファイルをエクスクルードします。
temp	「temp」という名前を持つファイルをすべてエクスクルードします。

p.1812の「[NetAppバックアップ選択項目からのディレクトリおよびファイルの除外](#)」を参照してください。

p.1812の「[EMCのバックアップ選択項目からのディレクトリおよびファイルのエクスクルード](#)」を参照してください。

NetApp バックアップ選択項目からのディレクトリおよびファイルの除外

バックアップジョブを作成する場合、バックアップジョブに含めない特定のファイルとディレクトリを選択できます。

NetApp バックアップ選択リストからディレクトリおよびファイルを除外する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択項目から除外するファイルが格納されているリソースを選択します。
- 4 [インクルード/エクスクルード]をクリックします。
- 5 [リソースの種類]で、[NDMP]をクリックします。
- 6 [NDMPの種類]で、[NetApp/IBM]を選択します。
- 7 [方法]で、[エクスクルード]をクリックします。
- 8 次のいずれかの方法を使用して、除外するファイルまたはディレクトリが存在するボリュームを選択します。
 - [リソース]で、ボリュームに移動します。
 - [リソースの選択]の[ボリューム]へ、ボリュームへのパスを入力します。
- 9 [パターン]で、ファイルまたはディレクトリを除外するパターンを入力します。

p.1810の「[NDMPのバックアップ選択項目からファイルとディレクトリをエクスクルードするためのパターンの使用方法](#)」を参照してください。
- 10 次のいずれかを実行します。

バックアップ選択リストから、さらにディレクトリ [適用]をクリックし、手順 6 から 9 を繰り返す
またはファイルを除外する ます。

この手順を完了する

[OK]をクリックします。

EMC のバックアップ選択項目からのディレクトリおよびファイルのエクスクルード

「ダンプ」のバックアップの種類を選択する場合、バックアップジョブに含めない特定のファイルとディレクトリを選択できます。

メモ: バックアップ方式として VBB を選択すると、エクスクルードは無視されます。

EMC のバックアップ選択項目からディレクトリおよびファイルをエクスクルードする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップの選択項目からエクスクルードするファイルを含んでいるリソースを選択します。
- 4 [インクルード/エクスクルード]をクリックします。
- 5 [リソースの種類]で、[NDMP]をクリックします。
- 6 [NDMP の種類]で、[EMC]を選択します。
- 7 [方法]で、[エクスクルード]をクリックします。
- 8 次のいずれかの方法を使用して、エクスクルードするファイルまたはディレクトリが存在するファイルシステムを選択します。
 - [リソース]の下で、ファイルシステムを参照する。
Backup Exec は、[ファイルシステム]テキストボックスに EMC Celerra Server の名前と、選択済みのファイルシステムの名前を自動的に入力します。
 - [リソースの選択]の下の[ファイルシステム]で、入力がまだ行われていなければファイルシステムのパスを入力する。
次の書式を使用します。
`//EMC_Celerra_Server_name/file_system_name`
たとえば、「emcnas_ndmp」という EMC Celerra Server を示す
「//emcnas_ndmp/fs_1」と、「fs_1」というファイルシステムを入力します。

9 次のいずれかを実行します。

ファイルをエクスクルードする

[リソースの選択]のドロップダウンリストで、
[ファイルパターン]をクリックし、次にテキスト
ボックスにパターンを入力します。

ディレクトリをエクスクルードする

[リソースの選択]のドロップダウンリストで、
[ディレクトリ]をクリックし、次にテキストボック
スにパターンを入力します。

パターンには、EMC Celerra Server の名前
またはファイルシステムの名前を含めないで
ください。NDMP サーバーとファイルシステム
の名前は、[ファイルシステム]テキストボック
スにすでにインクルードされています。ルート
ディレクトリからエクスクルードするディレクトリ
までのパスを入力します。最初のスラッシュ(/)
はインクルードしないでください。

次の例は、「/test_exclusion/subdir1」ディ
レクトリをエクスクルードするパターンを入力す
る方法を示しています。

test_exclusion/subdir1

p.1810の「[NDMPのバックアップ選択項目からファイルとディレクトリをエクスクルードするためのパターンの使用方法](#)」を参照してください。

10 次のいずれかを実行します。

バックアップ選択項目から追加のディレクトリ
またはファイルをエクスクルードする

[適用]をクリックし、手順 6 から 9 を繰り返
します。

この手順を完了する

[OK]をクリックします。

バックアップした NDMP データを複製する方法

バックアップデータを複製するジョブを作成できます。重複したジョブを作成するとき、Backup Exec メディアサーバーまたは NAS サーバーに接続されているデバイスを選択できます。テープデバイス、ディスクへのバックアップデバイス、または仮想テープライブラリを使用することができます。

Backup Exec では次の設定がサポートされています。

- Backup Exec のメディアサーバーにローカルに接続されている 2 つのテープデバイス。
- NAS サーバーにローカルに接続されている 2 つのテープデバイス。

- NAS サーバーにローカルに接続されている 1 つのテープデバイスと別の NAS サーバーにローカルに接続されている 1 つのテープデバイス。
- Backup Exec メディアサーバーにローカルに接続されている 1 つのテープデバイスと NAS サーバーにローカルに接続されている 1 つのテープデバイス。

NDMP データを複製する手順は他のすべての種類のデータを複製する手順と同じです。ただし、ソースの NDMP サーバーのログオンクレデンシャルを選択する必要があります。

p.357 の「バックアップしたデータの複製」を参照してください。

メモ: 複製するデータがハードウェア暗号化されている場合は、ハードウェア暗号化を実行可能な宛先デバイスを選択してください。そうしないと、複製ジョブは失敗します。

NDMP データのリストア

リストアでは、バックアップジョブでファイルの履歴が有効な場合に、リストア対象として個々のファイルを選択できます。

Backup Exec では、NDMP リストアジョブのファイルおよびディレクトリ情報を十分に収集できません。そのため、ジョブ履歴の [ジョブの概略] セクションと [セットの詳細] セクションには、正確な情報が表示されません。従って、ファイル数、ディレクトリ数、スキップしたファイル数、破損ファイル数および使用中のファイル数は常に 0 と表示されます。

次のオプションがカタログのデフォルトとして選択されていないかぎり、NDMP バックアップセットをカタログ登録できません。

ストレージメディア単位のカタログを使用する

p.589 の「カタログ登録ジョブのデフォルト設定」を参照してください。

メモ: NDMP サーバーのリストアジョブからファイルとディレクトリを除外できません。除外されたディレクトリとファイルはリストアされます。

NDMP データをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの [リストア] の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ] をクリックします。
- 3 リストアするデータを選択します。
- 4 ログオンクレデンシャルを変更またはテストするには、[プロパティ] ペインの [ソース] の下にある [リソースクレデンシャル] をクリックします。

p.322 の「[リソースクレデンシャル] オプション」を参照してください。

- 5 [プロパティ] ペインの [ソース] の下にある [デバイスおよびメディア] をクリックします。

- 6 必要なオプションを選択します。
p.600 の「リストアジョブの[デバイス]オプション」を参照してください。
- 7 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[NDMP]をクリックします。
- 8 必要なオプションを選択します。
p.1816 の「NDMP のリストアオプション」を参照してください。
- 9 次のいずれかを実行します。
 - リストアジョブを開始する。
 - [プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択し、リストアジョブを開始する。

NDMP のリストアオプション

NDMP のためのリストアジョブを作成するとき、次のオプションを選択できます。

p.1815 の「NDMP データのリストア」を参照してください。

表 S-7 NDMP のリストアオプション

項目	説明
アクセス制御リストをリストアする	NetApp アクセス制御リストをリストアします。
ダイレクトアクセスリカバリを有効にする (NetApp/IBM)	Backup Exec で、リストアジョブの実行時にダイレクトアクセスリカバリ (DAR) を使用できます。ダイレクトアクセスリカバリを有効にしたリカバリでは、Backup Exec は、バックアップデータストリーム内のファイルの正確な場所を特定できます。これによって、NDMP サーバーは、リストアしている単一のファイルに該当するデータを読み取ることができます。そうすることで、処理する情報量が削減され、リカバリに要する時間を大幅に短縮できます。DAR を使用できない場合、リストアに要する時間が大幅に長くなる場合があります。
データをディスクに書き込まずにリストアする (リストアを実行せずにデータを検証する)	リストアジョブに選択したデータの有効性をテストします。Backup Exec はデータをリストアしません。NetApp/IBM ファイラの場合、Backup Exec のバックアップジョブ検証オプションではなく、このオプションを使用してデータを検証する必要があります。

項目	説明
ツリー構造を保持する(NetApp/IBM)	<p>元のディレクトリ構造のまま、データをリストアします。デフォルトで、このオプションが選択されています。オフにした場合は、ディレクトリおよびサブディレクトリ内のすべてのデータが[ファイルのリストア先の変更]ダイアログボックスで指定したパスにリストアされます。</p> <p>p.623の「[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション」を参照してください。</p> <p>メモ: このオプションは NetApp/IBM のデータの場合にのみリストアジョブに影響します。EMC のデータについては、EMC グループボックスの [ツリー構造を保持する] オプションを使います。NDMP 以外のデータについては、[リストアジョブのプロパティ] ダイアログボックスの [ツリー構造を保持する] オプションを使います。</p> <p>p.600の「リストアジョブの[一般]オプション」を参照してください。</p>
ダイレクトアクセスリカバリを有効にする(EMC)	<p>Backup Exec で、リストアジョブの実行時にダイレクトアクセスリカバリ(DAR)を使用できます。ダイレクトアクセスリカバリを有効にしたリカバリでは、Backup Exec は、バックアップデータストリーム内のファイルの正確な場所を特定できます。これによって、NDMP サーバーは、リストアしている単一のファイルに該当するデータを読み取ることができます。そうすることで、処理する情報量が削減され、リカバリに要する時間を大幅に短縮できます。DAR を使用できない場合、リストアに要する時間が大幅に長くなる場合があります。</p>

項目	説明
ツリー構造を保持する(EMC)	<p>元のディレクトリ構造のまま、データをリストアします。デフォルトで、このオプションが選択されています。オフにした場合は、ディレクトリおよびサブディレクトリ内のすべてのデータが[ファイルのリストア先の変更]ダイアログボックスで指定したパスにリストアされます。</p> <p>p.623の「[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション」を参照してください。</p> <p>メモ: このオプションは EMC のデータのみのレストランに影響します。NetApp/IBM データについては、NetApp/IBM グループボックスの[ツリー構造を保持する]オプションを使います。NDMP 以外のデータについては、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[ツリー構造を保持する]オプションを使います。</p> <p>p.600の「リストアジョブの[一般]オプション」を参照してください。</p>

リストアする NDMP データのリストア先の変更について

1 つの NDMP サーバーからの別の NDMP サーバーに NDMP データのリストア先を変更できます。

NDMP データのリストア先を変更するとき、次の制限事項に注意してください。

- NDMP データのリストア先は Windows または Linux のオペレーティングシステムを実行するコンピュータには変更できません。
- NTFS データや SQL のデータなどの NDMP 以外のデータのリストア先は NDMP サーバーには変更できません。

p.623の「リストアジョブのリストア先の変更について」を参照してください。

NDMP のバックアップおよびリストアのデフォルト設定

インストール時に Backup Exec によって設定されたデフォルトを、NDMP のすべてのバックアップおよびリストアジョブで使用することができます。また、独自のデフォルトを選択することもできます。これらのデフォルト設定は、バックアップまたはリストアジョブで、個別に変更することもできます。

NDMP のバックアップおよびリストアのデフォルトを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[NDMP]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
 p.1819の「[NDMP のバックアップとリストアのデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

NDMP のバックアップとリストアのデフォルトオプション

すべてのバックアップおよびリストアジョブのためのデフォルトオプションを設定できます。

p.1818の「[NDMP のバックアップおよびリストアのデフォルト設定](#)」を参照してください。

表 S-8 NDMP のバックアップおよびリストアのデフォルトオプション

項目	説明
バックアップ方式 (NetApp/IBM)	バックアップレベルを指定します。レベル 0 は完全バックアップを表します。レベル 1 からレベル 9 は、さまざまなレベルの増分バックアップを表します。レベル 1 のバックアップ方式では、レベル 0 のバックアップ以降の新しいファイルまたは修正されたファイルがバックアップされます。レベル 2 のバックアップ方式では、レベル 1 のバックアップ以降の新しいファイルまたは修正されたファイルがバックアップされます (レベル 3 以降も同様です)。
アクセス制御リストをバックアップする	NetApp アクセス制御リストをバックアップします。
ファイル履歴を有効にする (NetApp/IBM)	バックアップ履歴からの選択したデータのサブセットのリカバリを可能にします。[ファイル履歴を有効にする]のチェックマークを外したら、ファイル履歴データは生成されませんが、バックアップは短縮される場合があります。デフォルトでは、このオプションが選択されています。
バックアップ方式 (EMC)	バックアップレベルを指定します。レベル 0 は完全バックアップを表します。レベル 1 からレベル 9 は、さまざまなレベルの増分バックアップを表します。レベル 1 のバックアップ方式では、レベル 0 のバックアップ以降の新しいファイルまたは修正されたファイルがバックアップされます。レベル 2 のバックアップ方式では、レベル 1 のバックアップ以降の新しいファイルまたは修正されたファイルがバックアップされます (レベル 3 以降も同様です)。

項目	説明
バックアップの種類	<p>バックアップジョブのためのバックアップの種類を判断します。</p> <p>次のバックアップの種類のをいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VBB (EMC のみ) ■ ダンプ
統合チェックポイントを使用してバックアップする (SnapSure)	<p>Backup Exec で EMC SnapSure 機能を使用するバックアップセットを作成できます。この機能は EMC のみに適用されます。</p> <p>SnapSure について詳しくは EMC のマニュアルを参照してください。</p>
ファイル履歴を有効にする (EMC)	<p>バックアップ履歴からの選択したデータのサブセットのリカバリを可能にします。[ファイル履歴を有効にする]のチェックマークを外したら、ファイル履歴データは生成されませんが、バックアップは短縮される場合があります。デフォルトでは、このオプションが選択されています。</p>
Tape Silvering を有効にする	<p>Backup Exec で、Tape Silvering を使用してデータのレプリケートに使用できるバックアップセットを作成できます。このオプションは EMC のみに適用されます。</p>
アクセス制御リストをリストアする	<p>NetApp アクセス制御リストをリストアします。</p>
ダイレクトアクセスリカバリを有効にする (NetApp/IBM)	<p>Backup Exec で、リストアジョブの実行時にダイレクトアクセスリカバリ (DAR) を使用できます。ダイレクトアクセスリカバリを有効にしたリカバリでは、Backup Exec は、バックアップデータストリーム内のファイルの正確な場所を特定できます。これによって、NDMP サーバーは、リストアしている単一のファイルに該当するデータを読み取ることができます。そうすることで、処理する情報量が削減され、リカバリに要する時間を大幅に短縮できます。DAR を使用できない場合、リストアに要する時間が大幅に長くなる場合があります。</p>
データをディスクに書き込まずにリストアする (リストアを実行せずにデータを検証する)	<p>リストアジョブに選択したデータの有効性をテストします。</p> <p>Backup Exec はデータをリストアしません。NetApp/IBM ファイラの場合、Backup Exec のバックアップジョブ検証オプションではなく、このオプションを使用してデータを検証する必要があります。</p>

項目	説明
ツリー構造を保持する(NetApp/IBM)	<p>元のディレクトリ構造のまま、データをリストアします。デフォルトで、このオプションが選択されています。オフにした場合は、ディレクトリおよびサブディレクトリ内のすべてのデータが[ファイルのリストア先の変更]ダイアログボックスで指定したパスにリストアされます。</p> <p>p.623の「[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション」を参照してください。</p> <p>メモ: このオプションは NetApp/IBM のデータの場合にのみリストアジョブに影響します。EMCのデータについては、EMC グループボックスの[ツリー構造を保持する]オプションを使います。NDMP 以外のデータについては、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[ツリー構造を保持する]オプションを使います。</p> <p>p.600の「リストアジョブの[一般]オプション」を参照してください。</p>
ダイレクトアクセスリカバリを有効にする(EMC)	<p>Backup Exec で、リストアジョブの実行時にダイレクトアクセスリカバリ (DAR) を使用できます。ダイレクトアクセスリカバリを有効にしたリカバリでは、Backup Exec は、バックアップデータストリーム内のファイルの正確な場所を特定できます。これによって、NDMP サーバーは、リストアしている単一のファイルに該当するデータを読み取ることができます。そうすることで、処理する情報量が削減され、リカバリに要する時間を大幅に短縮できます。DAR を使用できない場合、リストアに要する時間が大幅に長くなることがあります。</p>
ツリー構造を保持する(EMC)	<p>元のディレクトリ構造のまま、データをリストアします。デフォルトで、このオプションが選択されています。オフにした場合は、ディレクトリおよびサブディレクトリ内のすべてのデータが[ファイルのリストア先の変更]ダイアログボックスで指定したパスにリストアされます。</p> <p>p.623の「[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション」を参照してください。</p> <p>メモ: このオプションは EMC のデータのみのリストアに影響します。NetApp/IBM データについては、NetApp/IBM グループボックスの[ツリー構造を保持する]オプションを使います。NDMP 以外のデータについては、[リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックスの[ツリー構造を保持する]オプションを使います。</p> <p>p.600の「リストアジョブの[一般]オプション」を参照してください。</p>

NDMP サーバーのプロパティの表示

[リソース別の表示]タブに表示されるすべての NDMP サーバーについて、詳細を表示することができます。

p.1348 の「[Agent for VMware について](#)」を参照してください。

NDMP サーバーのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]タブで、[NDMP サーバー]を展開します。
- 4 NDMP サーバーの名前を右クリックします。
- 5 [プロパティ]をクリックします。

p.1822 の「[NDMP サーバープロパティ](#)」を参照してください。

NDMP サーバープロパティ

NDMP サーバーの次のプロパティを表示できます。

p.1822 の「[NDMP サーバーのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 S-9 NDMP サーバープロパティ

項目	説明
名前	NDMP サーバーに割り当てられている名前または IP アドレスが表示されます。
メディアサーバーの状態	Backup Exec メディアサーバーとして使用されている NDMP サーバーの状態が表示されます。メディアサーバーの状態には、[オンライン]、[一時停止]、[使用不能]および[オフライン]があります。
説明	NDMP サーバーの説明が表示されます。この説明は、ユーザーが定義できます。
ping 可能	Backup Exec が NDMP サーバーと通信できるようにします。ping 要求がブロックされる環境では、このオプションを無効にすることができます。
ホスト ID	NDMP サーバーによって生成される識別番号が表示されます。
システムのバージョン	NDMP サーバーで実行されているオペレーティングシステムのバージョンが表示されます。

Symantec Backup Exec Remote Agent for Linux or UNIX Servers

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) について
- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) 使用上の必要条件
- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) のインストールについて
- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) の設定について
- メディアサーバーへの Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの公開について
- Linux、UNIX と Macintosh コンピュータのバックアップジョブからのファイルとディレクトリの除外について
- Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションの編集
- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) の使用によるデータのバックアップについて
- Linux、UNIX および Macintosh コンピュータへのデータのリストア
- Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップとリストアジョブのデフォルトオプションの編集
- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) のアンインストール
- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) デーモンの起動
- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) デーモンの停止

- [Remote Agent for Linux or UNIX Servers のトラブルシューティング](#)

Remote Agent for Linux or UNIX Servers について

Backup Exec Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) は別のアドオンコンポーネントとしてインストールされます。Remote Agent を使用すると、ネットワークに接続される Linux または UNIX サーバーでネットワーク管理者がバックアップとリストア操作を実行できます。バックアップとリストア操作を実行するには、Linux か UNIX サーバーに Remote Agent がインストールされていなければなりません。

p.1825 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストールについて](#)」を参照してください。

p.1824 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers 使用上の必要条件

Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) のインストールには次の項目が必要です。

- メディアサーバーに TCP/IP がインストールされていなければなりません。
- Linux または UNIX サーバーの root ログオンアカウントを持たなければなりません。
- Backup Exec のインストールメディアを持たなければなりません。
- メディアサーバーの Remote Agent のライセンスキーを入力しなければなりません。

メモ: Linux のバージョンによっては、libstdc++.so.5 パッケージのインストールが必要となる場合があります。

p.1857 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

シマンテック社はリモートサーバーに Remote Agent をプッシュインストールするときセキュアシェル (SSH) プロトコルを使うことを推奨します。Remote Agent をプッシュインストールする前に SSH を有効にする必要があります。

Backup Exec は Linux サーバーに Remote Agent for Linux or UNIX Servers をインストールするときに、Remote Media Agent for Linux Servers を自動的にインストールします。ただし Remote Media Agent for Linux Servers を使用できるようにするには、Remote Media Agent for Linux Servers 用の別のライセンスキーを入力しなければなりません。

p.1916 の「[Remote Media Agent for Linux Servers について](#)」を参照してください。

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

p.1825 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストールについて](#)」を参照してください。

p.1843 の「[SUSE Linux Enterprise Server 上の Novell Open Enterprise Server をバックアップする場合の必要条件](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストールについて

次をするのに Backup Exec のインストールメディアを使います。

- Linux のローカルサーバーに Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) をインストールします。

- 1 つ以上の Linux のリモートサーバーに Remote Agent をプッシュインストールします。

Remote Agent をプッシュインストールする場合は、RSH (リモートシェル) がデフォルトで使われます。RSH の代わりに SSH (セキュアシェル) を使用することをお勧めします。SSH を使うには、Remote Agent をインストールする前に有効にする必要があります。SSH について詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。

Backup Exec は Remote Agent をインストールするとき beoper グループを作成し、メンバーとして root を追加します。beoper グループは Linux か UNIX サーバーをバックアップし、リストアする権限があるユーザーの名前を含んでいます。ただし、Backup Exec が Remote Agent のインストールの間に NIS サーバーを検出すれば、beoper グループは作成されません。Remote Agent をインストールする Linux または UNIX サーバーで beoper グループを手動で作成する必要があります。

インストールが完了したとき、Backup Exec は Remote Agent がインストールされているサーバーの次の場所にインストールログファイルを保存します。

```
/var/tmp/vxif/installralus<summary file number>/installralus.log
```

p.1826 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストール](#)」を参照してください。

p.1875 の「[Remote Agent for Macintosh Systems のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストール

Linux または UNIX のローカルサーバーに Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) をインストールできます。また、1 つ以上の Linux か UNIX のリモートサーバーにプッシュインストールすることもできます。

メモ: Linux または UNIX サーバー上で `RALUS_RAMR_RMAL_<version number>.gz` ファイルを圧縮解除する必要があります。Windows オペレーティングシステムを実行するコンピュータで圧縮解除するとインストールは実行されません。

p.1825 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers のインストールについて](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers をインストールする方法

- 1 Linux か UNIX サーバーで、適切なドライブに Backup Exec のインストールメディアを配置します。
- 2 Remote Agent をインストールするサーバーに root としてログオンします。
- 3 インストールメディアの次のディレクトリに移動します。

<LinuxUnixMac>

- 4 ローカルコンピュータ上のディレクトリにこのディレクトリ内の **RALUS_RAMR_RMAL_<version number>.gz** ファイルをコピーします。
- 5 ファイルを圧縮解除します。

次に例を示します。

```
gunzip RALUS_RAMR_RMAL_<version number>.gz
```

- 6 ファイルを展開します。

次に例を示します。

```
tar xfp RALUS_RAMR_RMAL_<version number>.tar
```

- 7 **installralus** スクリプトを開始してください。

次に例を示します。

```
./installralus
```

8 次のいずれかを実行します。

ローカルサーバーに **Remote Agent** をインストールする方法 **Enter** キーを押します。

1 つのリモートサーバーに **Remote Agent** をインストールする方法 **Linux** または **UNIX** サーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力してください。

複数のリモートサーバーに **Remote Agent** をインストールする方法 **Linux** または **UNIX** サーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力してください。各識別子の間にスペースを入れてください。

9 システムの初期確認で、有効な **Linux** または **UNIX** オペレーティングシステムが確認されたら、**Enter** キーを押します。

10 パッケージのインストールの内容を確認し、次に **Enter** キーを押します。

11 システムによるインストールの必要条件の確認が完了したら、**Enter** キーを押します。

12 **Enter** キーを押すことによって前提条件の確認を始めます。

13 **Remote Agent** をバックアップするメディアサーバー (ディレクトリのホスト) の名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

14 この **Remote Agent** をバックアップするメディアサーバーの追加の名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

15 次のいずれかを実行します。

名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名が正しい場合 **Enter** キーを押してインストールを続行します。

名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を変更する場合 **N** と入力し、**Enter** キーを押し、情報を変更します。

16 **Enter** キーを押すことによって **NIS** サーバーのスキャンを開始します。

17 **NIS** サーバースキャンの結果を確認し、次のいずれかを実行します。

NIS サーバーが検出された場合 **Remote Agent** インストーラは **beoper** グループを作成できません。**Remote Agent** のインストールが完了した後、それを手動で作成する必要があります。

次の手順に進みます。

NIS サーバーが検出されない場合

beoper グループを作成するのにインストーラを使います。

次に示す順序で操作を実行します。

- インストーラで **beoper** グループを作成できるようにするには **y** を入力します。
- 利用可能な次のグループ ID を選択するには **n** を入力します。
- **beoper** グループに **root** ユーザーアカウントを追加するには **y** を入力します。
- 次の手順に進みます。

18 Enter キーを押すことによってインストールを開始します。

19 インストールが完了した後、設定の処理を開始するために **Enter** キーを押します。

20 設定の処理が完了した後、次のファイルにインストールログを保存するために **Enter** キーを押します。

`/var/tmp/vxif/installralussummary file number/installralus.log`

21 Remote Agent インストーラが **beoper** グループを作成しなければ、それを作成する必要があります。

p.1829 の「[Backup Exec オペレータグループの手動作成](#)」を参照してください。

22 Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを起動します。

p.1855 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動](#)」を参照してください。

23 必要に応じて **Remote Agent for Linux or UNIX Servers** を設定します。

p.1830 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers の設定について](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers の Backup Exec オペレータグループについて

Backup Exec オペレータ (**beoper**) グループは Linux か UNIX サーバーをバックアップし、リストアする権限があるユーザーの名前を含んでいます。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) をインストールするとき、Backup Exec は **beoper** グループを作成し、メンバーとして **root** を追加します。**beoper** グループに追加する Linux か UNIX ユーザーは、サーバーをバックアップし、リストアするのに必要な権限を取得します。

ただし、NIS サーバーが Remote Agent のインストール中に検出されたら、Backup Exec は **beoper** グループを作成できません。Remote Agent をインストールする Linux また

は UNIX サーバーで **beoper** グループを手動で作成する必要があります。バックアップとリストア操作を開始する前に **beoper** グループを作成する必要があります。さもなければ、Linux または UNIX サーバーとメディアサーバー間の接続は失敗します。

beoper グループのメンバーがバックアップまたはリストア操作を実行するには、Backup Exec ログオンアカウントを持たなければなりません。

p.1829 の「[Backup Exec オペレータグループの手動作成](#)」を参照してください。

p.175 の「[Backup Exec ログオンアカウントの作成](#)」を参照してください。

Backup Exec オペレータグループの手動作成

Remote Agent for Linux or UNIX Servers をインストールする各サーバーで **beoper** グループを作成する必要があります。

p.1828 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers の Backup Exec オペレータグループについて](#)」を参照してください。

メモ: **beoper** グループにグループ ID を割り当てる前に Linux または UNIX サーバーでグループのセキュリティを設定する方法を理解していることを確認します。

表 T-1 手動で **beoper** グループを作成する方法

手順	処理	詳細
手順 1	Remote Agent をインストールする Linux または UNIX サーバーを検索します。 Linux か UNIX サーバーが NISドメインにある場合は、NISドメインのグループファイルを検索します。	NISドメインのグループファイルにグループを追加する方法については NIS のマニュアルを参照してください。
手順 2	大文字と小文字の区別がある次の名前のグループを作成します。 beoper	グループを作成する方法について詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。
手順 3	beoper グループで、Linux か UNIX サーバーのバックアップとリストアを行う権限を付与するユーザーを追加します。	グループにユーザーを追加する方法について詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。

手順	処理	詳細
手順 4	beoperグループに追加する各ユーザーのための Backup Exec ログオンアカウントを作成します。	p.175の「Backup Exec ログオンアカウントの作成」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers の設定について

Backup Exec は Remote Agent がインストールされている各 Linux または UNIX サーバーで、`ralus.cfg` という名前のファイルを作成します。このファイルで文字列、識別子、変数を編集して、Remote Agent のためのオプションを追加または編集できます。

`ralus.cfg` ファイルで編集できるオプションは次を含んでいます。

- Remote Agent が公開メッセージを送信しなければならないポート。
- Backup Exec Remote Agent ユーティリティを使う Oracle と DB2 データベース操作と NDMP 情報のためのログ記録レベル。
- Remote Agent を 1 つ以上のメディアサーバーに公開できる設定。
- Linux と UNIX サーバーの、バックアップから除外するファイルとディレクトリ。
- Novell OES のターゲットサービスエージェントファイルシステムのバックアップのための設定。

`ralus.cfg` の書式は、3 つの要素で構成されます。次の例で、1 つ目の要素 (A) は必須文字列です。

2 つ目の要素 (B) は一意の識別子で、その識別子の後に等号 (=) を入力します。一意の識別子には、通し番号、文字、英数字などを使用できます。たとえば、1、2、3 や A、B、C などを使うことができます。AA、BB、CC や A1、A2、B1、B2 などでも使うことができます。

`ralus.cfg` 形式の第 3 コンポーネントはメディアサーバーの NetBIOS 名、完全修飾ドメイン名、または IP アドレスです。

図 T-1 ralus.cfg ファイルの例

A	B	C
Software\Symantec\Backup Exec For Windows\Backup Exec\Engine\Agents\Agent Directory List 1=	srv.mycompany.com	
Software\Symantec\Backup Exec For Windows\Backup Exec\Engine\Agents\Agent Directory List 2=	datasrv	
Software\Symantec\Backup Exec For Windows\Backup Exec\Engine\Agents\Agent Directory List 3=	66.35.250.151	

A = 必須の文字列

B = 必須の一意の識別子 (順序や使用する文字には特に意味はない)

C = 除外するファイルまたはディレクトリ

p.1833 の「Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションの編集」を参照してください。

p.1833 の「Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプション」を参照してください。

メディアサーバーへの Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの公開について

Remote Agent for Linux or UNIX Servers と Remote Agent for Macintosh Systems は、バックアップされるためにメディアサーバーに公開する必要があります。(これら両方を Remote Agent と呼びます。)インストールの間に、Remote Agent を公開したいメディアサーバーを識別します。Backup Exec は `ralus.cfg` ファイルにこの情報を追加します。Remote Agent はそのメディアサーバーに情報を公開します。メディアサーバーが公開された情報を受け取ると、Linux、UNIX と Macintosh のリモートコンピュータがメディアサーバーのバックアップ選択項目に表示されます。[登録済みリソース]の下に表示されます。

Remote Agent は `ralus.cfg` ファイルに記載されているすべてのメディアサーバーに公開します。Remote Agent の各公開先メディアサーバーに対して、操作のためにローカルバックアップネットワークを指定できます。このバックアップネットワークはメディアサーバーと Linux、UNIX、Macintosh コンピュータの間にあります。ジョブは社内ネットワークではなくローカルネットワークで処理されるため、バックアップデータトラフィックを分離することができます。そのため、メディアサーバーと Linux、UNIX、Macintosh コンピュータ間で操作が実行されるとき、接続されている他のネットワークは影響されません。

メモ: Central Admin Server Option をインストールしている場合は、管理対象メディアサーバーに Remote Agent ジョブを委任できます。そうするには、管理対象メディアサーバーに Remote Agent を公開する必要があります。

Remote Agent はメディアサーバーに次の情報を公開します。

- Remote Agent のバージョン。
- Linux、UNIX、Macintosh コンピュータの IP アドレスと名前。
- 設定情報。

公開のための次の設定を行うために `ralus.cfg` ファイルを編集できます。

- Remote Agent の公開先メディアサーバーの追加、編集、削除。
- 新しい公開サイクルの開始。
- Remote Agent による公開の停止。
- 公開間隔の編集。

- p.1832 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers](#) および [Remote Agent for Macintosh Systems](#) が情報を公開できるメディアサーバーの追加」を参照してください。
- p.269 の「[バックアップ選択リストの\[登録済みリソース\]ノードについて](#)」を参照してください。
- p.386 の「[バックアップネットワークの指定について](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers および Remote Agent for Macintosh Systems が情報を公開できるメディアサーバーの追加

Remote Agent for Linux or UNIX Servers か Remote Agent for Macintosh Systems が情報を公開できるメディアサーバーを指定できます。(両方とも Remote Agent と呼ばれます。)

p.1831 の「[メディアサーバーへの Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの公開について](#)」を参照してください。

Remote Agent が情報を公開する各メディアサーバーのバックアップ選択項目にリモートコンピュータが表示されます。

p.269 の「[バックアップ選択リストの\[登録済みリソース\]ノードについて](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers および Remote Agent for Macintosh Systems が情報を公開できるメディアサーバーを追加する方法

- 1 次のファイルを開くのにテキストエディタを使います。

```
/opt/VRTSralus/ralus.cfg
```

- 2 次の文字列を追加します。

```
Software¥Symantec¥Backup Exec For Windows¥Backup  
Exec¥Engine¥Agents¥Agent Directory List unique identifier number = IP  
address or DNS name of media server
```

- 3 ファイルを保存して閉じます。

Linux、UNIX と Macintosh コンピュータのバックアップジョブからのファイルとディレクトリの除外について

すべてのバックアップジョブから Linux、UNIX、Macintosh コンピュータの特定のファイルとディレクトリを除外できます。除外するファイルを指定するために `ralus.cfg` ファイルを編集してください。

次に、すべてのバックアップジョブからファイルとディレクトリを除外する `ralus.cfg` ファイルの文字列の例を示します。

図 T-2 ralus.cfg の書式で記載されているファイルとディレクトリの除外の例

A	B	C
Software\Symantec\Backup Exec For Windows\Backup Exec\Engine\RALUS\SystemExclude1=	/dev/*.*	
Software\Symantec\Backup Exec For Windows\Backup Exec\Engine\RALUS\SystemExclude2=	/proc/*.*	
Software\Symantec\Backup Exec For Windows\Backup Exec\Engine\RALUS\SystemExclude3=	/mnt/nfs/pools/	
Software\Symantec\Backup Exec For Windows\Backup Exec\Engine\RALUS\SystemExclude4=	/mnt/nfs/.pools/	

A = 必須の文字列
B = 必須の一意の識別子 (順序や使用する文字には特に意味はない)
C = 除外するファイルまたはディレクトリ

特定のバックアップジョブのファイルとディレクトリを除外するには、そのバックアップジョブのプロパティで除外を指定します。

p.289 の「[\[除外プロパティ\]オプション](#)」を参照してください。

p.1833 の「[Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションの編集](#)」を参照してください。

Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションの編集

Remote Agent for Linux or UNIX Servers または Remote Agent for Macintosh Systems の設定オプションを編集できます。

Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションを編集する方法

- 1 次のファイルを開くのにテキストエディタを使います。

```
/opt/VRTSralus/ralus.cfg
```

- 2 ファイルの適切な文字列を変更します。

p.1833 の「[Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプション](#)」を参照してください。

Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプション

Remote Agent for Linux or UNIX Servers または Remote Agent for Macintosh Systems を設定するオプションを編集できます。(両方とも Remote Agent と呼ばれます。)

p.1833 の「[Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションの編集](#)」を参照してください。

表 T-2 Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプション

文字列とデフォルト値	説明
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Agent Browser¥TcpIp¥AdvertisementPort=6101	Remote Agent が公開メッセージとページメッセージを送信しなければならないポートを一覧表示します。
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Debug¥AgentConfig=0	<p>Oracle 操作が使う Remote Agent ユーティリティのためのログ記録を有効にします。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 ログ記録は有効になりません。 ■ 1 ログ記録が有効になります。Backup Exec は自動的にログファイルを生成します。 <p>このオプションは Remote Agent for Macintosh Systems に適用されません。</p>
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Debug¥VXBSAlevel=0	<p>Oracle 操作用に Remote Agent のログ記録を有効にします。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 ログ記録は有効になりません。 ■ 5 通常のログ記録が有効になります。 ■ 6 詳細なログ記録が有効になります。大きいログファイルが作成されることがあります。 <p>このオプションは Remote Agent for Macintosh Systems に適用されません。</p>

文字列とデフォルト値	説明
<p>Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥Agents¥Advertise All=1</p>	<p>文字列 ¥Agents¥Agent Directory List に記載されているすべてのメディアサーバーに Remote Agent が情報を公開できるようにします。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 1 Remote Agent は Agent Directory List のすべてのメディアサーバーに情報を公開します。 ■ 0 Remote Agent は Agent Directory List の最初のメディアサーバーに情報を公開します。これが正常に行われたら、Remote Agent は他のどのメディアサーバーにも情報を公開しません。これが正常に行われなかったら、Remote Agent はリストの次のメディアサーバーへの情報の公開を試行します。試行は Remote Agent がリストの終わりに達するまで続行されます。
<p>Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Agents¥Advertise Now=0</p>	<p>ralus.cfg ファイルの設定を追加または編集した後に Remote Agent が新しい公開サイクルを開始できるようにします。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 Remote Agent は、文字列 ¥Agents¥Advertising Interval Minutes で設定されている通常のサイクルに従って情報を公開します。新しい公開サイクルの開始時に、ralus.cfg ファイルに対するすべての変更が反映されます。 ■ 1 Remote Agent は新しい公開サイクルを開始します。ralus.cfg ファイルに対するすべての変更がただちに反映されます。 メディアサーバーが公開情報を受信しない場合、Remote Agent は最大 10 回再試行します。メディアサーバーへの情報の公開を試行する間隔は 1 分です。情報が 10 回目の試行後も送信されない場合、Remote Agent は次の公開サイクルまでそのメディアサーバーをスキップします。公開サイクルは、文字列 ¥Agents¥Advertising Interval Minutes に設定された時間 (分) です。

文字列とデフォルト値	説明
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Agents¥Advertisement Purge=0	<p>Remote Agent で文字列 ¥Agents¥Advertisement Purge のすべてのメディアサーバーにページメッセージを送信できます。メディアサーバーは、ページメッセージを受信すると、[登録済みリソース]リストから Remote Agent を削除します。Remote Agent は継続して機能します。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 文字列 ¥Agents¥Advertisement Purge に記載されているメディアサーバーから Remote Agent をページしません。 ■ 1 ¥Agents¥Advertisement Purge の文字列の 1つ以上のメディアサーバーから Remote Agent をページします。
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Agents¥Advertising Disabled=0	<p>Remote Agent でメディアサーバーに公開できます。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 文字列 ¥Agents¥Agent Directory List に記載されているメディアサーバーに Remote Agent が情報の公開を試行します。 ■ 1 Remote Agent はメディアサーバーに情報を公開しません。
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Agents¥Advertising Interval Minutes=240	<p>Remote Agent が公開サイクル間で待たなければならない時間(分)を設定します。デフォルトは 240 分です。範囲は 1 分から 720 分です。</p>
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Agents¥Agent Directory List 1=<media server name>	<p>Remote Agent が情報を公開する NetBIOS 名、完全修飾ドメイン名、IP アドレスのいずれかのリストを表示します。</p> <p>Remote Agent のプッシュインストール元のメディアサーバーは Agent Directory List にデフォルトで追加されます。</p>

文字列とデフォルト値	説明
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Agents¥Auto Discovery Enabled=1	<p>Remote Agent が関連付けされているバックアップジョブをメディアサーバーが実行する場合、そのメディアサーバーを文字列 ¥Agents¥Agent Directory List に追加します。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 1 バックアップジョブを実行するメディアサーバーを Agent Directory List に追加します。Remote Agent はこのメディアサーバーに情報を公開できます。 ■ 0 バックアップジョブを実行するメディアサーバーは Agent Directory List に追加されません。
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥Logging¥RANT NDMP Debug Level=0	<p>Remote Agent の NDMP ログ情報の冗長性のレベルを表示します。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 NDMP エラーのみをログに記録します。 ■ 1 NDMP エラーと警告をログに記録します。 ■ 2 NDMP エラー、警告、リモートコンピュータとメディアサーバー間で送信されるメッセージ情報をログに記録します。
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥RALUS¥Encoder=	<p>デフォルトエンコーダーによってユーザーインターフェースに文字が誤って表示される場合に追加できるエンコーダーを表示します。</p>

文字列とデフォルト値	説明
<p>Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥RALUS¥ShowTSAFS=</p>	<p>Novell Open Enterprise Server のアプリケーションに対するターゲットサービスエージェントファイルシステム (TSAFS) のバックアップを実行することを可能にします。デフォルトでは、このオプションは有効になりません。</p> <p>Remote Agent は[ルート]オブジェクトを使用してすべてのファイルシステムをバックアップします。ShowTSAFS が有効になれば、Novell Open Enterprise Server のリソースはバックアップ選択リストに表示されます。バックアップのためにコンピュータ全体を選択する場合は、余分なバックアップが実行されます。このオプションを有効にしないことをお勧めします。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 空白か 0 ファイルシステム TSA はバックアップ選択用に表示されません。 ■ 1 ファイルシステム TSA リソースはバックアップ選択用に表示されます。 <p>このオプションは Remote Agent for Macintosh Systems に適用されません。</p>
<p>Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥RALUS¥SystemExclude1=</p>	<p>Remote Agent のすべてのバックアップジョブから除外するファイルを一覧表示します。</p> <p>p.1832 の「Linux、UNIX と Macintosh コンピュータのバックアップジョブからのファイルとディレクトリの除外について」を参照してください。</p>
<p>Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥RALUS¥SystemFSTypeExclude1</p>	<p>Remote Agent のバックアップから除外するファイルシステムの種類を一覧表示します。</p>
<p>Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥RALUS¥vfmPath=/opt/VRTSralus/VRTSvxms</p>	<p>Remote Agent が使う Veritas Mapping Service ライブラリのパスを表示します。</p>

文字列とデフォルト値	説明
Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥RMAL¥DisableRMAL=0	<p>Remote Media Agent for Linux Servers を使って、インストール先の Linux サーバーをバックアップできます。デフォルトでは、このオプションは無効になりません。</p> <p>サポートされていないバージョンの Linux に Remote Media Agent をインストールすると、Remote Media Agent は使用できません。Linux サーバーに接続されたデバイスで実行するジョブは作成できません。ただし、Remote Agent for Linux or Unix Servers コンポーネントを使用して Linux サーバーをバックアップできます。このコンポーネントは Remote Media Agent とともにインストールされます。Remote Agent for Linux or Unix Servers コンポーネントを使うには、この文字列の値を 1 に変更する必要があります。</p> <p>指定可能な値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 0 Linux サーバーのストレージデバイスで実行されるメディアサーバーにバックアップ、リストアおよびユーティリティジョブを作成できます。 ■ 1 インストール先の Linux サーバーをバックアップする場合にだけ Remote Agent for Linux or Unix Servers コンポーネントを使うことができます。 <p>p.1937 の「Remote Media Agent for Linux Servers のトラブルシューティング」を参照してください。</p>

Remote Agent for Linux or UNIX Servers の使用によるデータのバックアップについて

次のバックアップ方式は、データをバックアップするのに Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) を使うときサポートされます:

- 完全 - 修正日時を使用してバックアップする
- 差分 - 修正日時を使用してバックアップする
- 増分 - 修正日時を使用してバックアップする
- ワーキングセット

Remote Agent for Linux or UNIX Servers にバックアップジョブの設定を指定するのにバックアップウィザードを使う場合は、完全バックアップのみがサポートされます。バックアップウィザードで他のいずれかのバックアップ方式を選択しても、代わりに完全バックアップが実行されます。

p.1840 の「[Linux、UNIX、Macintosh コンピュータのバックアップ](#)」を参照してください。

p.1867 の「[Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップジョブオプション](#)」を参照してください。

p.1845 の「[Novell Open Enterprise Server \(OES\) コンポーネントのバックアップ](#)」を参照してください。

Linux、UNIX、Macintosh コンピュータのバックアップ

Linux、UNIX、Macintosh コンピュータをバックアップするためのジョブプロパティを編集できます。

メモ: Linux と UNIX サーバーでは、修正日時のタイムスタンプを使うバックアップ方式のみがサポートされます。

Linux、UNIX、Macintosh コンピュータをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択リストで、[登録済みリソース]の下の[Linux または UNIX サーバー]を展開します。
- 4 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 5 バックアップするデータを選択します。

p.280 の「[選択リストの作成](#)」を参照してください。

- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Linux、UNIX および Macintosh]をクリックします。
- 7 必要なオプションを設定します。

p.1867 の「[Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップジョブオプション](#)」を参照してください。

- 8 必要に応じて、残りのバックアップジョブのプロパティを設定します。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップジョブオプション

Linux、UNIX と Macintosh コンピュータのためのバックアップジョブオプションを設定できます。

p.1840 の「Linux、UNIX、Macintosh コンピュータのバックアップ」を参照してください。

表 T-3 Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップジョブオプション

項目	説明
変更時刻を保持する	<p>バックアップの発生時に Remote Agent でオブジェクトの属性が変更されないようにします。オブジェクトはファイルまたはディレクトリです。</p> <p>デフォルトでは、このオプションは選択されていません。</p> <p>バックアップ時には、Backup Exec が最終アクセスタイムスタンプをバックアップ前の値にリセットして、オブジェクトの最終アクセスタイムスタンプを保持します。Backup Exec がオブジェクトの最終アクセスタイムスタンプを変更すると、オペレーティングシステムによって内部的にそのオブジェクトの ctime が更新されます。</p> <p>オブジェクトの ctime とは、アクセス権限、タイムスタンプなどのオブジェクトの属性が変更された時刻です。バックアップの後に Remote Agent によって属性が変更されない場合、オブジェクトの ctime は変更されません。</p> <p>このオプションは、リストア時に設定されるオブジェクト属性には影響を与えません。</p>
ローカルマウントポイントをたどる	<p>データのバックアップ時に Backup Exec でローカルマウントポイントをたどることができます。</p> <p>デフォルトで、このオプションが選択されています。</p> <p>ローカルマウントポイントについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>

項目	説明
リモートマウントポイントをたどる	<p>データのバックアップ時に Backup Exec でリモートマウントポイントをたどることができます。</p> <p>デフォルトでは、このオプションは選択されていません。</p> <p>このオプションを使用する場合、次の制限事項が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ マウントされるデータは Backup Exec でサポートされている種類のコンピュータに存在している必要があります。 サポートされているオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。 http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1■ マウントポイントをたどった先が Backup Exec でサポートされていないオペレーティングシステムである場合は、そのオペレーティングシステムの製造元に連絡して問題を解決する必要があります。 <p>リモートマウントポイントについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>

項目	説明
ソフトリンクされたディレクトリの内容をバックアップする	<p>ソフトリンクを使用してリンクされたディレクトリの内容をバックアップします。</p> <p>ソフトリンクを含むディレクトリを選択する必要があります。ソフトリンクのみを選択すると、そのリンクのみがバックアップされます。そのリンクがポイントするデータはバックアップされません。バックアップするデータへのソフトリンクを含む単一のディレクトリを作成できます。それから、このオプションを選択して、その単一のディレクトリをバックアップします。</p> <p>注意: Linux、UNIX および Macintosh コンピュータでは、多くのソフトリンクが使用されていて、その一部は親ディレクトリをポイントしている場合があります。このような場合、このオプションを使用すると、データが 2 回バックアップされたり、バックアップジョブが無期限に続行される可能性があります。</p> <p>ソフトリンクされたディレクトリについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>
リモートファイルをロックする	<p>ネットワークファイルシステム (NFS) を介して接続されたリモートサーバーのファイルに Remote Agent で排他的にアクセスできます。リモートファイルをロックすると、バックアップ時に他のアプリケーションによってデータが変更されなくなります。</p>
eDirectory のバックアップ方式	<p>SUSE Linux Enterprise Server 上の Novell OES の eDirectory データをバックアップするためのバックアップ方式が表示されます。</p> <p>p.1845 の「Novell Open Enterprise Server (OES) コンポーネントのバックアップ」を参照してください。</p> <p>メモ: Macintosh コンピュータでは、このオプションは利用できません。</p>

SUSE Linux Enterprise Server 上の Novell Open Enterprise Server をバックアップする場合の必要条件

Backup Exec で Novell OES をバックアップするには、次の条件が満たされている必要があります。

- Novell OES に Service Pack 1 がインストールされている必要があります。
- Novell OES 2 に Target Service Agent for NDS (TSANDS) がロードされている必要があります。
TSANDS によって Novell Open Enterprise Server 2 の eDirectory が保護されます。デフォルトでは、TSANDS は Novell Open Enterprise Server 2 にロードされません。バックアップに利用可能なリソースとして eDirectory を表示するには、手動で TSANDS をロードする必要があります。TSANDS をロードする方法について詳しくは Novell のマニュアルを参照してください。
- ターゲットサービスエージェントが次のコンポーネントに対して有効になっている必要があります。
 - Novell eDirectory
 - Novell iFolder
 - Novell GroupWise
- 管理レベルの eDirectory ユーザーに相当する UNIX ローカルユーザー名が beoper グループに存在します。Backup Exec では eDirectory ユーザーはサポートされていません。
p.1828 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers の Backup Exec オペレータグループについて](#)」を参照してください。
- eDirectory に対してバックアップジョブを実行するには、同等の管理レベルの eDirectory クレデンシャルを含んでいる Backup Exec ログオンアカウントが存在している必要があります。
p.1845 の「[Novell Open Enterprise Server \(OES\) コンポーネントのバックアップ](#)」を参照してください。
p.1840 の「[Linux、UNIX、Macintosh コンピュータのバックアップ](#)」を参照してください。

バックアップのためにサポートされる Novell Open Enterprise Server コンポーネント

Backup Exec では次の Novell Open Enterprise Server (OES) コンポーネントがサポートされています。

- Novell iFolder
- Novell eDirectory
- Novell GroupWise
- Novell Storage Services (NSS)

p.1843 の「[SUSE Linux Enterprise Server 上の Novell Open Enterprise Server をバックアップする場合の必要条件](#)」を参照してください。

p.1845 の「[Novell Open Enterprise Server \(OES\) コンポーネントのバックアップ](#)」を参照してください。

Novell Open Enterprise Server (OES) コンポーネントのバックアップ

Remote Agent for Linux or UNIX Servers は Novell OES コンポーネントが存在するサーバーにインストールされなければなりません。

p.1843 の「[SUSE Linux Enterprise Server 上の Novell Open Enterprise Server をバックアップする場合の必要条件](#)」を参照してください。

Novell OES コンポーネントをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択リストで、[登録済みリソース]の下の[LinuxまたはUNIXサーバー]を展開します。
- 4 バックアップする Linux サーバーまたは UNIX サーバーをダブルクリックします。
- 5 必要に応じて、Linux または UNIX サーバーにアクセスするために Backup Exec ログオンアカウントを選択し、[OK]をクリックします。
- 6 バックアップするデータを選択します。

p.1844 の「[バックアップのためにサポートされる Novell Open Enterprise Server コンポーネント](#)」を参照してください。

- 7 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Linux、UNIX および Macintosh]をクリックします。
- 8 必要なバックアップオプションを選択します。

p.1840 の「[Linux、UNIX、Macintosh コンピュータのバックアップ](#)」を参照してください。

- 9 eDirectory データベースをバックアップするには、[eDirectory のバックアップ方式]のリストでバックアップ方式を選択します。

p.258 の「[バックアップ方式について](#)」を参照してください。

- 10 必要に応じて、残りのバックアップジョブのプロパティを設定します。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

Linux、UNIX および Macintosh コンピュータへのデータのリストア

リストアジョブオプションを指定して Linux、UNIX と Macintosh コンピュータをリストアできます。

メモ: 圧縮か暗号化が有効な HP-UX ファイルシステムのバックアップのクロスプラットフォームのリストアは実行できません。それぞれのプラットフォームにこれらのバックアップをリストアする必要があります。

Linux、UNIX および Macintosh コンピュータをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストア選択リストで、リストアするデータを選択します。
p.598 の「[リストアジョブの\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Linux、UNIX および Macintosh]をクリックします。
- 6 必要なリストアオプションを選択します。
p.1847 の「[Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのリストアジョブオプション](#)」を参照してください。
- 7 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

Novell OES コンポーネントのリストアについて

Backup Exec は、Novell OES コンポーネントをリストアするとき、Novell NDS データベース全体をディスク上の DIB ファイルのセットにリストアします。その後、NDS データベースはオフラインになります。DIB ファイルの名前は NDS に変更され、オフラインの NDS データベースを上書きします。

p.1846 の「[Linux、UNIX および Macintosh コンピュータへのデータのリストア](#)」を参照してください。

Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのリストアジョブオプション

次に、Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのリストアジョブオプションを示します。

p.1846の「Linux、UNIX および Macintosh コンピュータへのデータのリストア」を参照してください。

表 T-4 Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのリストアジョブオプション

項目	説明
リモートファイルをロックする	ネットワークファイルシステム (NFS) を介して接続されたリモートコンピュータのファイルに Backup Exec で排他的にアクセスできます。 デフォルトで、このオプションが選択されています。
DIB セットをリストアする	ディレクトリ情報ベース (DIB) をリストアします。DIB は Novell Directory Services (NDS) データベースとも呼ばれます。
検証後に DIB をアクティブにする	確認処理が正常に完了したら Backup Exec でデータベース名を .RST から .NDS に変更できます。検証操作が失敗すれば、.RST ファイルは削除され、元の .NDS ファイルはそのまま保たれます。 このオプションを選択しなければ、データベースがリストアされた後、.RST ファイルは手動でのアクティブ化か手動ディザスタリカバリの実行に利用可能です。
終了時にデータベースをオープンする	リストアが完了した後に Backup Exec でデータベースをオープンできます。 データベースが開く前に保守タスクを実行する場合は、このオプションを選択しないでください。
リストア後にデータベースを検証する	リストアが完了した後に Backup Exec でデータベースを検証できます。
ロールフォワードに使用するログディレクトリ	ロールフォワードに使用するログディレクトリの場所が表示されます。

項目	説明
バックアップファイルをディスク上に残す	ハードディスクドライブに Novell DIB ファイルセットを保持します。 p.1846 の「Novell OES コンポーネントのリストアについて」を参照してください。

Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップとリストアジョブのデフォルトオプションの編集

Linux、UNIX と Macintosh システムのすべてのバックアップとリストアジョブのための既存のデフォルトオプションを編集できます。

Linux、UNIX および Macintosh システムのデフォルトのバックアップとリストアジョブのオプションを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Linux、UNIX および Macintosh]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。

p.1848 の「Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのデフォルトのバックアップとリストアジョブのオプション」を参照してください。

Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのデフォルトのバックアップとリストアジョブのオプション

Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのすべてのジョブにデフォルトのバックアップとリストアジョブのプロパティを設定できます。

p.1848 の「Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップとリストアジョブのデフォルトオプションの編集」を参照してください。

サポートされているオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

表 T-5 Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのデフォルトのバックアップとリストアジョブのオプション

項目	説明
変更時刻を保持する	<p>バックアップの発生時に Remote Agent でオブジェクトの属性が変更されないようにします。オブジェクトはファイルまたはディレクトリです。</p> <p>デフォルトでは、このオプションは選択されていません。</p> <p>バックアップ時には、Backup Exec が最終アクセスタイムスタンプをバックアップ前の値にリセットして、オブジェクトの最終アクセスタイムスタンプを保持します。Backup Exec がオブジェクトの最終アクセスタイムスタンプを変更すると、オペレーティングシステムによって内部的にそのオブジェクトの ctime が更新されます。</p> <p>オブジェクトの ctime とは、アクセス権限、タイムスタンプなどのオブジェクトの属性が変更された時刻です。バックアップの後に Remote Agent によって属性が変更されない場合、オブジェクトの ctime は変更されません。</p> <p>このオプションは、リストア時に設定されるオブジェクト属性には影響を与えません。</p>
ローカルマウントポイントをたどる	<p>データのバックアップ時に Backup Exec でローカルマウントポイントをたどることができます。</p> <p>デフォルトで、このオプションが選択されています。</p> <p>ローカルマウントポイントについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>

項目	説明
リモートマウントポイントをたどる	<p>データのバックアップ時に Backup Exec でリモートマウントポイントをたどることができます。</p> <p>デフォルトでは、このオプションは選択されていません。</p> <p>このオプションを使用する場合、次の制限事項が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ マウントされるデータは Backup Exec でサポートされているオペレーティングシステムに存在している必要があります。■ マウントポイントをたどった先が Backup Exec でサポートされていないオペレーティングシステムである場合は、そのオペレーティングシステムの製造元に連絡して問題を解決する必要があります。 <p>リモートマウントポイントについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>

項目	説明
<p>ソフトリンクされたディレクトリの内容をバックアップする</p>	<p>ソフトリンクを使用してリンクされたディレクトリの内容をバックアップします。</p> <p>ソフトリンクを含むディレクトリを選択する必要があります。ソフトリンクのみを選択すると、そのリンクのみがバックアップされます。そのリンクがポイントするデータはバックアップされません。バックアップするデータへのソフトリンクを含む単一のディレクトリを作成できます。それから、このオプションを選択して、その単一のディレクトリをバックアップします。</p> <p>注意: Linux、UNIX および Macintosh コンピュータでは、多くのソフトリンクが使用されていて、その一部は親ディレクトリをポイントしている場合があります。このような場合、このオプションを使用すると、データが 2 回バックアップされたり、バックアップジョブが無期限に続行される可能性があります。</p> <p>ソフトリンクされたディレクトリについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>
<p>eDirectory のバックアップ方式</p>	<p>SUSE Linux Enterprise Server 上の Novell OES の eDirectory データをバックアップするためのバックアップ方式が表示されます。</p> <p>メモ: Macintosh コンピュータでは、このオプションはサポートされていません。</p> <p>p.1845 の「Novell Open Enterprise Server (OES) コンポーネントのバックアップ」を参照してください。</p>

項目	説明
リモートファイルをロックする	ネットワークファイルシステム(NFS)を介して接続されたリモートサーバーのファイルに Remote Agent で排他的にアクセスできます。リモートファイルをロックすると、バックアップジョブ時またはリストアジョブ時に他のアプリケーションによってデータが変更されなくなります。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers のアンインストール

Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) の自動アンインストール処理は Backup Exec のインストールメディアで実行できます。

`/opt/VRTS/install/logs/uninstallralus<summary file number>.summary`

Remote Agent for Linux or UNIX Servers をアンインストールする方法

- 1 Linux か UNIX サーバーで、適切なデバイスに Backup Exec のインストールメディアを配置します。
- 2 Remote Agent をアンインストールするサーバーに root としてログオンします。
- 3 Backup Exec のインストールメディアの次のディレクトリに移動します。

<LinuxUnixMac>

- 4 **uninstallralus** スクリプトを開始してください。

次に例を示します。

```
./uninstallralus
```

- 5 次のいずれかを実行します。

1つのサーバーから Remote Agent をアンインストールする方法

Linux または UNIX サーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力してください。

複数のサーバーから Remote Agent をアンインストールする方法

Linux または UNIX サーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力してください。各識別子の間にスペースを入れてください。

- 6 **Enter** キーを押します。

- 7 Remote Agent パッケージの確認が正常に完了したら、**Enter** キーを押します。
- 8 RALUS パッケージのアンインストールを求められたら、**Enter** キーを押します。
- 9 Linux または UNIX サーバーの次の場所にアンインストールの概略を保存するには、**Enter** キーを押してください:
`/opt/VRTS/install/logs/uninstallralus<summary file number>.summary`

Remote Agent for Linux or UNIX Servers の手動でのアンインストール

Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) は手動でアンインストールできます。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers を手動でアンインストールする方法

- 1 ターミナルセッションを使って root ユーザーとして Linux か UNIX サーバーに接続します。

- 2 次のディレクトリに移動します。

```
/opt/VRTSralus/bin
```

次に例を示します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```

- 3 次の行が `/etc/inittab` ファイルにある場合は削除します。

```
/opt/VRTSralus/bin/VRTSralus.init
```

次に例を示します。

```
rm -r /opt/VRTSralus/bin/VRTSralus.init
```

- 4 Remote Agent デーモンを停止します。

p.1856 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの停止](#)」を参照してください。

- 5 Linux か UNIX サーバーから Remote Agent のパッケージを削除します。

次に例を示します。

```
Debian GNU/Linux、Ubuntu      dpkg -r VRTSralus
```

```
Linux                          rpm -e VRTSralus
```

```
Sun Solaris                    pkgrm VRTSralus
```

- 6 ルートディレクトリに戻ります。

次に例を示します。

```
cd /
```

- 7 次のファイルを削除します。

```
/etc/VRTSralus
```

```
/opt/VRTSralus
```

```
/var/VRTSralus
```

次に例を示します。

```
rm -r /etc/VRTSralus /opt/VRTSralus /var/VRTSralus
```

- 8 サブディレクトリを削除するか確認するメッセージが表示されたら、**y** と入力します。
- 9 ディレクトリを削除するか確認するメッセージが表示されたら、**y** と入力します。
- 10 ランタイムスクリプトが存在する場合は削除します。

p.1854 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers を手動でアンインストールする場合に削除するランタイムスクリプト](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers を手動でアンインストールする場合に削除するランタイムスクリプト

Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) を手動でアンインストールするときに次のランタイムスクリプトが存在する場合は削除します。

表 T-6 Remote Agent を手動でアンインストールする場合に削除するランタイムスクリプト

オペレーティングシステム	削除するランタイムスクリプト
Debian, Ubuntu	<pre>/etc/rc5.d/S95VRTSralus.init</pre> <pre>/etc/rc3.d/S95VRTSralus.init</pre> <pre>/etc/rc2.d/S95VRTSralus.init</pre> <pre>/etc/init.d/VRTSralus.init</pre> <p>次に例を示します。</p> <pre>rm /etc/rc5.d/S95VRTSralus.init</pre>

オペレーティングシステム	削除するランタイムスクリプト
Red Hat Linux、Asianux	<p>/etc/rc.d/rc5.d/S95VRTSralus.init /etc/rc.d/rc3.d/S95VRTSralus.init /etc/rc.d/rc2.d/S95VRTSralus.init /etc/rc.d/init.d/VRTSralus.init</p> <p>次に例を示します。</p> <pre>rm /etc/rc.d/rc5.d/S95VRTSralus.init</pre>
Novell Open Enterprise Server 1.0/SUSE Linux Enterprise Server 9 (32 ビットのみ)	<p>/etc/init.d/rc5.d/SxxVRTSralus.init /etc/init.d/rc3.d/SxxVRTSralus.init /etc/init.d/rc2.d/SxxVRTSralus.init /etc/init.d/VRTSralus.init</p> <p>次に例を示します。</p> <pre>rm /etc/init.d/rc5.d/SxxVRTSralus.init</pre>
Novell Open Enterprise Server 2.0/SUSE Linux Enterprise Server 10 (32 ビットおよび 64 ビット)	<p>/etc/init.d/VRTSralus.init,start=2,3,5 /etc/init.d/VRTSralus.init</p> <p>次に例を示します。</p> <pre>rm /etc/init.d/VRTSralus.init</pre>
Solaris	<p>/etc/rc2.d/S95VRTSralus.init /etc/rc2.d/S91VRTSralus.init /etc/init.d/VRTSralus.init</p> <p>次に例を示します。</p> <pre>rm /etc/rc2.d/S95VRTSralus.init</pre>

Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動

必要に応じて、オペレーティングシステムを起動した後に Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) デーモンを起動できます。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを起動する方法

- 1 ターミナルセッションを使って root ユーザーとして Linux か UNIX サーバーに接続します。

- 2 次のディレクトリに移動します。

```
/etc/init.d/
```

次に例を示します。

```
cd /etc/init.d/
```

- 3 Remote Agent デーモンを起動します。

次に例を示します。

```
/etc/init.d/VRTSralus.init start
```

Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの停止

Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) デーモンを停止できます。

p.1855 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動](#)」を参照してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを停止する方法

- 1 ターミナルセッションを使って root ユーザーとして Linux か UNIX サーバーに接続します。

- 2 次のディレクトリに移動します。

```
/etc/init.d/
```

次に例を示します。

```
cd /etc/init.d/
```

- 3 Remote Agent デーモンを停止します。

次に例を示します。

```
/etc/init.d/VRTSralus.init stop
```

- 4 必要な場合デーモンを再起動してください。

Remote Agent for Linux or UNIX Servers のトラブルシューティング

Remote Agent for Linux or UNIX Servers (Remote Agent) で問題が発生した場合は、次の質問と回答を確認してください。

表 T-7 Remote Agent のトラブルシューティング

質問	回答
<p>一部の文字はインストールの間にターミナルセッションで正しく表示されません。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>このエラーは、Remote Agent をインストールするコンピュータで、システムの場所が英語以外の言語の文字セットを使うと起きます。同じ言語の別の場所の設定に切り替えて、この問題を解決することを試みることができます。</p>
<p>Remote Agent インストーラは Remote Agent をインストールできません。次のエラーは installralus ログファイルで報告されます: VxIF::Error:: Unable to compress files. Hash(0x8711e8)->{{GUNZIP}}not found on <hostname></p>	<p>Remote Agent のプラットフォーム別パッケージの圧縮解除をサポートするには、GNU のデータ圧縮ユーティリティをインストールできます。Remote Agent をインストールしたいコンピュータにこのユーティリティをインストールしてください。 ユーティリティは次の URL で入手できます: http://www.gzip.org</p>
<p>Remote Agent for Linux or UNIX Servers が NIS ドメインの UNIX か Linux サーバーにインストールされています。Backup Exec でこのサーバーのリソースを参照できません。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>nsswitch.conf ファイルの group 行と passwd 行が compat モードに設定されているかどうかを確認します。設定されている場合は、/etc/passwd ファイルと /etc/group ファイルを設定する必要があります。compatibility モードが使用されるように nsswitch.conf を設定する方法について詳しくは nsswitch.conf のマニュアルページを参照してください。 また、password 行および group 行を NIS files に変更して、Linux サーバーまたは UNIX サーバーで NIS を介してユーザーの有効性を確認することもできます。NIS サーバーを利用できない場合、またはユーザーが検出されない場合は、有効性の確認にローカルファイルが使用されます。</p>

質問	回答
<p>Remote Agent をロードできません。/beremote --log-console と入力してコンソールモードで Remote Agent をロードしようとすると、次のメッセージが表示されます。</p> <p>ACE_SV_Semaphore_Complex: no space left on device.</p> <p>どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>この問題は、コンピュータが、セマフォの最大制限値に達した場合に発生します。Remote Agent が予期せず強制終了された後に発生することもあります。Remote Agent が予期せず強制終了された場合、使用していたセマフォリソースの一部をクリーンアップできません。他のプロセスでセマフォの使用が制限値に達している場合があります。この状況から安全にリカバリするには、コンピュータを再起動する必要があります。</p> <p>他のプロセスが実行中の場合、コンピュータを再起動できない場合があります。この場合、オペレーティングシステムで使用中のすべてのセマフォを指定して削除できるコマンドを使用することができます。削除するセマフォを選択するときは注意してください。Remote Agent で使用中のセマフォは識別できません。使用中の他のプログラムのセマフォを削除すると、それらのプログラムが不安定になることがあります。</p> <p>セマフォを一覧表示するには、次のコマンドを入力します。</p> <pre>ipcs -a</pre> <p>一覧表示されている各識別子のセマフォを削除するには、次のコマンドを入力します。</p> <pre>ipcrm -s <id></pre>
<p>Remote Agent をロードできません。/beremote --log-console と入力してコンソールモードで Remote Agent をロードしようとすると、次のメッセージが表示されます。</p> <p>Error while loading shared libraries: libstdc++.so.5: cannot open shared object file: No such file or directory.</p> <p>どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>このエラーは、libstdc++.so.5 ライブラリが /usr/lib ディレクトリに存在しないことを示します。このライブラリは、Remote Agent を起動して機能させるために必要です。この問題を解決するには、libstdc++5 パッケージをインストールします。</p> <p>このパッケージは、Linux が提供されたメディアからインストールできます。または、インターネットに接続できるコンピュータで次のコマンドを実行できます。</p> <pre>apt-get install libstdc++5</pre> <p>SUSE Linux Enterprise Server 11 の場合は、次のコマンドを実行します。</p> <pre>zypper install libstdc++5</pre>



Symantec Backup Exec Remote Agent for Macintosh Systems

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Remote Agent for Macintosh Systems](#) について
- [Remote Agent for Macintosh Systems](#) 使用上の必要条件
- [Macintosh システムの Backup Exec admin グループ](#) について
- [Remote Agent for Macintosh Systems](#) のインストールについて
- [Remote Agent for Macintosh Systems](#) の設定について
- [Remote Agent for Macintosh Systems](#) を使用したデータのバックアップについて
- [Macintosh](#) のリストアオプション
- [Macintosh システムのバックアップとリストアのデフォルトオプションの編集](#)
- [Remote Agent for Macintosh Systems](#) のアンインストール
- [Remote Agent for Macintosh Systems](#) のトラブルシューティング

Remote Agent for Macintosh Systems について

Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) は個別のアドオンコンポーネントとしてインストールされます。Remote Agent を使用すると、ネットワークに接続される Macintosh システムのネットワーク管理者がバックアップとリストア操作を実行できます。

バックアップとリストア操作を実行するには、Macintosh システムに Remote Agent がインストールされていなければなりません。

p.1860 の「[Remote Agent for Macintosh Systems 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

p.1862 の「[Remote Agent for Macintosh Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

Remote Agent for Macintosh Systems 使用上の必要条件

Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) のインストールには次のものがが必要です。

- メディアサーバーに TCP/IP がインストールされていなければなりません。
- Remote Agent をインストールする Macintosh システムの admin グループのメンバーでなければなりません。
- Backup Exec のインストールメディアを持たなければなりません。
- メディアサーバーの Remote Agent のライセンスキーを入力しなければなりません。

シマンテック社はリモートの Macintosh システムに Remote Agent をプッシュインストールするときセキュアシェル (SSH) プロトコルを使うことを推奨します。Remote Agent をインストールする前に SSH を有効にする必要があります。

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

p.1862 の「[Remote Agent for Macintosh Systems のインストール](#)」を参照してください。

p.1860 の「[Macintosh システムの Backup Exec admin グループについて](#)」を参照してください。

Macintosh システムの Backup Exec admin グループについて

Backup Exec の admin グループは Macintosh システムをバックアップし、リストアする権限があるユーザーの名前を含んでいます。

Backup Exec は Remote Agent for Macintosh Systems をインストールするとき admin グループを作成し、メンバーとして root を追加します。admin グループに追加するの

Macintosh ユーザーも Macintosh システムをバックアップし、リストアするのに必要な権限を取得します。

ただし、NIS サーバーが Remote Agent のインストール中に検出されたら、Backup Exec は admin グループを作成できません。インストール後に、Macintosh システムに admin グループを手動で作成する必要があります。admin グループは、バックアップとリストア操作を開始する前に作成する必要があります。そうしないと、Macintosh システムとメディアサーバーの間の接続は失敗します。

admin グループのメンバーがバックアップまたはリストア操作を実行するには、Backup Exec ログオンアカウントを持たなければなりません。

p.1861 の「[Macintosh システムでの Backup Exec admin グループの手動作成](#)」を参照してください。

p.175 の「[Backup Exec ログオンアカウントの作成](#)」を参照してください。

Macintosh システムでの Backup Exec admin グループの手動作成

Remote Agent をインストールする各 Macintosh システムに admin グループを作成する必要があります。

p.1860 の「[Macintosh システムの Backup Exec admin グループについて](#)」を参照してください。

メモ: admin グループにグループ ID を割り当てる前に Macintosh システムでグループのセキュリティを設定する方法を理解していることを確認します。

表 U-1 手動で admin グループを作成する方法

手順	処理	詳細
手順 1	Remote Agent をインストールする Macintosh システムに移動します。 Macintosh システムが NIS ドメインにある場合は、NIS ドメインのグループファイルに移動します。	NIS ドメインのグループファイルにグループを追加する方法については NIS のマニュアルを参照してください。
手順 2	大文字と小文字の区別がある次の名前のグループを作成します。 admin	グループを作成する方法について詳しくは Macintosh のマニュアルを参照してください。

手順	処理	詳細
手順 3	admin グループに、Macintosh システムのバックアップとリストアを行う権限を持つユーザーを追加します。	グループにユーザーを追加する方法については Macintosh のマニュアルを参照してください。
手順 4	admin グループに追加する各ユーザーのための Backup Exec ログオンアカウントを作成します。	p.175 の「Backup Exec ログオンアカウントの作成」を参照してください。

Remote Agent for Macintosh Systems のインストールについて

次をするのに Backup Exec のインストールメディアを使います。

- ローカル Macintosh システムに Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) をインストールします。
- 1 つ以上のリモート Macintosh システムに Remote Agent をプッシュインストールします。Remote Agent をプッシュインストールする場合は、RSH (リモートシェル) がデフォルトで使われます。RSH の代わりに SSH (セキュアシェル) を使用することをお勧めします。SSH を使うには、Remote Agent をインストールする前に有効にする必要があります。SSH について詳しくは Macintosh のマニュアルを参照してください。

インストールが完了したとき、Backup Exec は Remote Agent がインストールされるシステムの次の場所にインストールログファイルを保存します。

`/var/tmp/vxif/installrams <unique identifier number> for installs`

メモ: 一部の文字はインストールの間にターミナルセッションで正しく表示されない場合があります。このエラーは、Remote Agent をインストールするコンピュータで、システムの場所が英語以外の言語の文字セットを使うと起きます。同じ言語の別の場所の設定に切り替えて、この問題を解決することを試みることができます。

p.1862 の「Remote Agent for Macintosh Systems のインストール」を参照してください。

Remote Agent for Macintosh Systems のインストール

ローカル Macintosh システムに Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) をインストールできます。1 つ以上のリモート Macintosh システムに Remote Agent をプッシュインストールすることもできます。

p.1862 の「[Remote Agent for Macintosh Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

メモ: Linux、UNIX または Macintosh コンピュータ上で RALUS_RAMs_RMAL_<version number>.gz ファイルを圧縮解除する必要があります。Windows オペレーティングシステムを実行するコンピュータで圧縮解除するとインストールは実行されません。

Remote Agent for Macintosh Systems をインストールする方法

1 Macintosh システムで、適切なドライブに Backup Exec のインストールメディアを配置します。

2 インストールメディアの次のディレクトリに移動します。

<LinuxUnixMac>

3 ローカルシステム上のディレクトリにこのディレクトリ内の RALUS_RAMs_RMAL_<version number>.gz ファイルをコピーします。

4 ファイルを圧縮解除します。

次に例を示します。

```
gunzip RALUS_RAMs_RMAL_<version number>.gz
```

5 ファイルを展開します。

次に例を示します。

```
tar xfp RALUS_RAMs_RMAL_<version number>.tar
```

6 ファインダーを開いて、[アプリケーション]>[ユーティリティ]を参照します。

7 [ターミナル]を開きます。

8 **installrams** スクリプトを開始します。

次に例を示します。

```
sudo ./installrams
```

9 現在ログオンしているユーザー名のパスワードを入力します。

10 次のいずれかを実行します。

ローカルシステムに Remote Agent をインストールする方法 **Enter** キーを押します。

1 つのリモートシステムに Remote Agent をインストールする方法 **Macintosh** システムの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

複数のリモートシステムに Remote Agent をインストールする方法 **Macintosh** システムの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。各識別子の間にスペースを入れてください。

11 **Enter** キーを押します。

12 システムの初期確認で、有効な **Macintosh** システムのオペレーティングシステムが確認されたら、**Enter** キーを押します。

13 パッケージのインストールの内容を確認し、次に **Enter** キーを押します。

14 システムによるインストールの必要条件の確認が完了したら、**Enter** キーを押します。

15 **Enter** キーを押すことによって前提条件の確認を始めます。

16 **Remote Agent** をバックアップするメディアサーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

17 **Enter** キーを押します。

18 この **Remote Agent** をバックアップするメディアサーバーの追加の名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

19 次のいずれかを実行します。

名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名が正しい場合 **Enter** キーを押してインストールを続行します。

名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を変更する場合 **N** と入力し、**Enter** キーを押し、情報を変更します。

20 **Enter** キーを押すことによって NIS サーバーのスキャンを開始します。

21 NIS サーバースキャンの結果を確認し、次のいずれかを実行します。

NIS サーバーが検出された場合

Remote Agent インストーラでは Backup Exec オペレータ用の **admin** グループは作成できません。Remote Agent のインストールが完了した後、それを手動で作成する必要があります。

次の手順に進みます。

NIS サーバーが検出されない場合

admin グループを作成するのにインストーラを使います。

次に示す順序で操作を実行します。

- インストーラで **admin** グループを作成できるようにするには **y** を入力します。
- 利用可能な次のグループ ID を選択するには **n** を入力します。
- **admin** グループに **root** ユーザーアカウントを追加するには **y** を入力します。
- 次の手順に進みます。

22 **Enter** キーを押してインストールを開始します。

23 インストールが正常に完了したことを示すメッセージが表示されたら、**Enter** キーを押します。

24 Remote Agent を起動します。

p.1873 の「[Remote Agent for Macintosh Systems の起動](#)」を参照してください。

25 インストールで **admin** グループが自動的に作成されなければ作成します。

p.1861 の「[Macintosh システムでの Backup Exec admin グループの手動作成](#)」を参照してください。

26 必要に応じて追加の設定を実行します。

p.1865 の「[Remote Agent for Macintosh Systems の設定について](#)」を参照してください。

Remote Agent for Macintosh Systems の設定について

Backup Exec は Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) がインストールされる各 Macintosh システムで、**ralus.cfg** という名前のファイルを作成します。

ralus.cfg ファイルで Remote Agent の次の文字列、識別子、変数を編集できます:

- Remote Agent が公開メッセージを送信しなければならないポート。

- Remote Agent を 1 つ以上のメディアサーバーに公開できる設定。
- バックアップから除外する Macintosh システムのファイルとディレクトリ

p.1833 の「[Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションの編集](#)」を参照してください。

p.1831 の「[メディアサーバーへの Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの公開について](#)」を参照してください。

p.1832 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers および Remote Agent for Macintosh Systems が情報を公開できるメディアサーバーの追加](#)」を参照してください。

p.1832 の「[Linux、UNIX と Macintosh コンピュータのバックアップジョブからのファイルとディレクトリの除外について](#)」を参照してください。

Remote Agent for Macintosh Systems を使用したデータのバックアップについて

データのバックアップに Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) を使用する場合、Macintosh システムでは次のバックアップ方式のみがサポートされます。

- 完全 - 修正日時を使用してバックアップする
- 差分 - 修正日時を使用してバックアップする
- 増分 - 修正日時を使用してバックアップする
- ワーキングセット

Remote Agent にバックアップジョブの設定を指定するのにバックアップウィザードを使用する場合は、完全バックアップのみがサポートされます。バックアップウィザードで他のいずれかのバックアップ方式を選択しても、完全バックアップが実行されます。

p.1866 の「[Macintosh システムのバックアップ](#)」を参照してください。

Macintosh システムのバックアップ

Macintosh システムのバックアップのデフォルトオプションを編集できます。

メモ: Macintosh システムでは、修正日時のタイムスタンプを使うバックアップ方式のみがサポートされます。

Macintosh システムをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。

- 3 バックアップ選択リストで、[登録済みリソース]の下の[**Macintosh**システム]を展開します。
- 4 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 5 バックアップするデータを選択します。
p.280 の「[選択リストの作成](#)」を参照してください。
- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Linux、UNIX および Macintosh]をクリックします。
- 7 必要なオプションを設定します。
p.1867 の「[Linux、UNIX および Macintosh コンピュータのバックアップジョブオプション](#)」を参照してください。
- 8 必要に応じて、残りのバックアップジョブのプロパティを設定します。
p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

Macintosh のリストアオプション

Macintosh システムをリストアするとき、[リモートファイルをロックする]オプションを有効にできます。このオプションを選択すると、ネットワークファイルシステム(NFS)を介して接続されたリモートシステムのファイルに排他的にアクセスできます。デフォルトで、このオプションが選択されています。

p.1867 の「[Macintosh システムのリストア](#)」を参照してください。

Macintosh システムのリストア

Macintosh システムをリストアするためにリストアジョブのプロパティを指定できます。

Macintosh システムをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 リストア選択リストで、リストアするデータを選択します。
p.598 の「[リストアジョブの\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 5 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[Linux、UNIX および Macintosh]をクリックします。

- 6 NFS を介して接続されたリモートシステムのファイルへの排他的なアクセス権を Remote Agent に付与するには、[リモートファイルをロックする]を選択します。
- 7 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

Macintosh システムのバックアップとリストアのデフォルトオプションの編集

Macintosh システムのすべてのバックアップとリストアジョブの既存のデフォルトを使うか、デフォルトを編集できます。

Macintosh コンピュータのバックアップとリストアのデフォルトオプションを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[Linux、UNIX および Macintosh]をクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。

p.1868 の「[Macintosh システムのバックアップとリストアジョブのデフォルトオプション](#)」を参照してください。

Macintosh システムのバックアップとリストアジョブのデフォルトオプション

Macintosh システムのすべてのジョブにデフォルトのバックアップとリストアジョブのオプションを設定できます。

p.1868 の「[Macintosh システムのバックアップとリストアのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

表 U-2 Macintosh システムのバックアップとリストアジョブのデフォルトオプション

項目	説明
変更時刻を保持する	<p>バックアップの発生時に Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) でオブジェクトの属性が変更されないようにします。オブジェクトはファイルまたはディレクトリです。</p> <p>デフォルトでは、このオプションは選択されていません。</p> <p>バックアップ時には、Backup Exec が最終アクセスタイムスタンプをバックアップ前の値にリセットして、オブジェクトの最終アクセスタイムスタンプを保持します。Backup Exec がオブジェクトの最終アクセスタイムスタンプを変更すると、オペレーティングシステムによって内部的にそのオブジェクトの ctime が更新されます。</p> <p>オブジェクトの ctime とは、アクセス権限、タイムスタンプなどのオブジェクトの属性が変更された時刻です。バックアップの後に Remote Agent によって属性が変更されない場合、オブジェクトの ctime は変更されません。</p> <p>このオプションは、リストア時に設定されるオブジェクトの属性には影響を与えません。</p>
ローカルマウントポイントをたどる	<p>データをバックアップするために Backup Exec でローカルマウントポイントをたどることができます。</p> <p>デフォルトで、このオプションが選択されています。</p> <p>ローカルマウントポイントについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>

項目	説明
リモートマウントポイントをたどる	<p>データをバックアップするために Backup Exec でリモートマウントポイントをたどることができます。</p> <p>デフォルトでは、このオプションは選択されていません。</p> <p>このオプションを使用する場合、次の制限事項が適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ マウントされるデータは Backup Exec でサポートされているシステムに存在している必要があります。サポートされているオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。 http://entsupport.symantec.com/umi/v-269-1■ マウントポイントをたどった先が Backup Exec でサポートされていないオペレーティングシステムである場合は、そのオペレーティングシステムの製造元に連絡して問題を解決する必要があります。 <p>リモートマウントポイントについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>

項目	説明
<p>ソフトリンクされたディレクトリの内容をバックアップする</p>	<p>ソフトリンクを使用してリンクされたディレクトリの内容をバックアップします。</p> <p>ソフトリンクを含むディレクトリを選択する必要があります。ソフトリンクのみを選択すると、そのリンクのみがバックアップされます。そのリンクがポイントするデータはバックアップされません。バックアップするデータへのソフトリンクを含む単一のディレクトリを作成できます。それから、このオプションを選択して、その単一のディレクトリをバックアップします。</p> <p>注意: Linux、UNIX および Macintosh コンピュータでは、多くのソフトリンクが使用されていて、その一部は親ディレクトリをポイントしている場合があります。このような場合、このオプションを使用すると、データが 2 回バックアップされたり、バックアップジョブが無期限に続行される可能性があります。</p> <p>ソフトリンクされたディレクトリについて詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。</p>
<p>eDirectory のバックアップ方式</p>	<p>SUSE Linux Enterprise Server 上の Novell OES の eDirectory データをバックアップするためのバックアップ方式が表示されます。</p> <p>メモ: Macintosh システムでは、このオプションはサポートされていません。</p> <p>p.1844の「バックアップのためにサポートされる Novell Open Enterprise Server コンポーネント」を参照してください。</p>

項目	説明
リモートファイルをロックする	ネットワークファイルシステム(NFS)を介して接続されたリモートサーバーのファイルに Remote Agent で排他的にアクセスできます。リモートファイルをロックすると、バックアップジョブ時またはリストアジョブ時に他のアプリケーションによってデータが変更されなくなります。

Remote Agent for Macintosh Systems のアンインストール

Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) の自動アンインストール処理は Backup Exec のインストールメディアで実行できます。

また Remote Agent は手動でアンインストールすることもできます。

p.1874 の「[Remote Agent for Macintosh Systems の手動でのアンインストール](#)」を参照してください。

アンインストールの概略は Macintosh システムの次の場所に保存されます。

`/var/tmp/vxif/uninstallrams<unique identifier number>.summary`

アンインストールのログファイルは Macintosh システムの次の場所に保存されます。

`/opt/VRTS/install/logs/uninstallrams<summary file number>.log`

ログファイルが保存されたら、アンインストールは完了です。

Remote Agent for Macintosh Systems をアンインストールする方法

- 1 Macintosh システムで、適切なドライブに Backup Exec のインストールメディアを配置します。
- 2 Remote Agent をアンインストールする Macintosh システムに管理者権限を使用してログオンします。
- 3 Backup Exec のインストールメディアの次のディレクトリに移動します。
<LinuxUnixMac>
- 4 **uninstallrams** スクリプトを開始します。

次に例を示します。

```
./uninstallrams
```


5 次のいずれかを実行します。

1 つのシステムから Remote Agent をアンインストールする方法 Macintosh システムの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

複数のシステムから Remote Agent をアンインストールする方法 Macintosh システムの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。各識別子の間にスペースを入れてください。

6 Enter キーを押します。

7 Remote Agent パッケージの確認が正常に完了したら、Enter キーを押します。

8 RALUS パッケージのアンインストールを求められたら、Enter キーを押します。

9 アンインストール処理が完了したら、Enter キーを押します。

Remote Agent for Macintosh Systems の起動

Remote Agent for Macintosh Systems を手動で起動できます。

p.1873 の「[Remote Agent for Macintosh Systems の停止](#)」を参照してください。

Remote Agent for Macintosh Systems を手動で起動する方法

1 ターミナルセッションを使用して root ユーザーとしてターゲット Macintosh システムに接続します。

2 root プロンプトから、VRTSrams サービスを起動します。

次に例を示します。

```
SystemStarter start VRTSrams
```

Remote Agent for Macintosh Systems の停止

Remote Agent for Macintosh Systems を手動で停止できます。

p.1873 の「[Remote Agent for Macintosh Systems の起動](#)」を参照してください。

Remote Agent for Macintosh Systems を手動で停止する方法

1 ターミナルセッションを使用して root ユーザーとしてターゲット Macintosh システムに接続します。

2 root プロンプトから、VRTSrams サービスを停止します。

次に例を示します。

```
SystemStarter stop VRTSrams
```

Remote Agent for Macintosh Systems の手動でのアンインストール

Macintosh システムから Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) を手動でアンインストールできます。

また、Remote Agent をアンインストールするのに Backup Exec のインストールメディアを使うこともできます。

p.1872 の「[Remote Agent for Macintosh Systems のアンインストール](#)」を参照してください。

Remote Agent for Macintosh Systems を手動でアンインストールする方法

- 1 Macintosh システムに接続するには、ターミナルセッションにログオンする管理者権限を持つログオンアカウントを使います。

- 2 次のディレクトリに移動します。

```
/opt/VRTSralus/bin
```

次に例を示します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```

- 3 次の行が `/etc/inittab` ファイルにある場合は削除します。

```
/opt/VRTSralus/bin/VRTSralus.init
```

次に例を示します。

```
rm -r /opt/VRTSralus/bin/VRTSralus.init
```

- 4 Remote Agent デーモンを停止します。

p.1873 の「[Remote Agent for Macintosh Systems の停止](#)」を参照してください。

- 5 Linux か UNIX サーバーから Remote Agent のパッケージを削除します。

- 6 ルートディレクトリに戻ります。

次に例を示します。

```
cd /
```

- 7 次のファイルを削除します。

```
/etc/VRTSralus
```

```
/opt/VRTSralus
```

```
/var/VRTSralus
```

次に例を示します。

```
rm -r /etc/VRTSralus /opt/VRTSralus /var/VRTSralus
```

- 8 サブディレクトリを削除するか確認するメッセージが表示されたら、**y** と入力します。

9 ディレクトリを削除するか確認するメッセージが表示されたら、**y** と入力します。

10 /Library/StartupItems/VRTSrams フォルダを削除します。

次に例を示します。

```
rm -r /Library/StartupItems/VRTSrams
```

11 ディレクトリを削除するか確認するメッセージが表示されたら、**y** と入力します。

Remote Agent for Macintosh Systems のトラブルシューティング

Remote Agent for Macintosh Systems (Remote Agent) で問題が発生した場合は、次の質問と回答を参照してください。

表 U-3 Remote Agent のトラブルシューティング

質問	回答
Remote Agent を NIS ドメインの Macintosh システムにインストールしましたが、Backup Exec でそのシステム上のリソースを参照できません。どのように対処すればよいのでしょうか？	<p>nsswitch.conf ファイルの group 行と password 行が compatibility モードに設定されている場合は追加の設定が必要です。compatibility モードを使用する場合の nsswitch.conf の設定について詳しくは nsswitch.conf のマニュアルページを参照してください。</p> <p>また、password 行および group 行を NIS files に変更して、Macintosh システムで NIS を介してユーザーの有効性を確認することもできます。NIS サーバーを利用できない場合、またはユーザーが検出されない場合は、有効性の確認にローカルファイルが使用されます。</p>

質問	回答
<p>Remote Agent をロードできません。./beremote --log-console と入力してコンソールモードで Remote Agent をロードしようとすると、次のメッセージが表示されます。</p> <p>ACE_SV_Semaphore_Complex: no space left on device.</p> <p>どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>この問題は、コンピュータが、セマフォの最大制限値に達した場合に発生します。Remote Agent が予期せず強制終了された後に発生することもあります。Remote Agent が予期せず強制終了された場合、使用していたセマフォリソースの一部をクリーンアップできません。他のプロセスでセマフォの使用が制限値に達している場合があります。この状況から安全にリカバリするには、コンピュータを再起動する必要があります。</p> <p>他のプロセスが実行中の場合、コンピュータを再起動できない場合があります。この場合、オペレーティングシステムで使用中のすべてのセマフォを指定して削除できるコマンドを使うことができます。削除するセマフォを選択するときは注意してください。Remote Agent で使用中のセマフォは識別できません。使用中の他のプログラムのセマフォを削除すると、それらのプログラムが不安定になることがあります。</p>



Symantec Backup Exec Remote Agent for NetWare Systems

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Remote Agent for NetWare Systems](#) について
- [NetWare](#) サーバーに [Remote Agent for NetWare Systems](#) をインストールするための必要条件
- [Remote Agent for NetWare Systems](#) のインストールについて
- [NetWare](#) サーバーのバックアップについて
- [NetWare](#) サーバーのリストアについて
- [Remote Agent for NetWare Systems](#) のデフォルトオプションについて
- [NetWare](#) サーバーの構成情報の保存

Remote Agent for NetWare Systems について

Backup Exec Remote Agent for NetWare Systems (Remote Agent) は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてインストールします。リモート [NetWare](#) リソースのバックアップおよびリストアを行う場合、必ず使用する必要があります。

[Remote Agent](#) を使用すると、[Windows](#) ネットワークの管理者が、ネットワークに接続されている [NetWare](#) サーバーのバックアップおよびリストアジョブを実行することができます。

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

Remote Agent は Client Access License (CAL) でもあり、NetWare データを完全に保護し、バックアップに要する時間を短縮することができます。リモート NetWare サーバーのリソース上のデータおよび特殊ファイルをバックアップ対象として選択するには、Remote Agent のインストールが必要です。

Remote Agent は NetWare Loadable Module (NLM) として、NetWare サーバーにインストールされます。Remote Agent を使用することにより、頻りにネットワークとやり取りする必要があるタスクをローカルに実行することができ、高速なバックアップを行うことができます。Remote Agent は、Novell の Storage Management Services (SMS) を使う連続的なストリームにバックアップデータを変換します。その後、メディアサーバーは単一のタスクとしてバックアップデータを処理します。Remote Agent は、Novell SMS に完全に対応しています。

p.1878 の「[NetWare サーバーに Remote Agent for NetWare Systems をインストールするための必要条件](#)」を参照してください。

p.1879 の「[Remote Agent for NetWare Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

p.1883 の「[NetWare サーバーのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1890 の「[Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.1884 の「[NetWare ディレクトリサービス \(NDS\) のバックアップについて](#)」を参照してください。

NetWare サーバーに Remote Agent for NetWare Systems をインストールするための必要条件

NetWare サーバーに Remote Agent をインストールするための必要条件を次に示します。

- Backup Exec メディアサーバーには、リモート NetWare サーバーへの、TCP/IP プロトコルによるネットワークアクセス権限が必要です。
- インストールプログラムを実行するコンピュータは、NetWare サーバーにアクセスできる必要があります。
- エージェントをインストールする NetWare サーバーでの管理者権限が必要です。

p.1879 の「[Remote Agent for NetWare Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

Remote Agent for NetWare Systems のインストールについて

NetWare サーバーへの Remote Agent のインストールでは、次の操作を実行する必要があります。

- **SYS:** ボリュームに BKUPEXEC という名前のディレクトリを作成します。その後、Backup Exec が NetWare 固有の要求を処理するために必要な NLM の最新のテスト済みバージョンを Bkupexec/Nlms ディレクトリにコピーできます。
- **Bestart.ncf** および **Bestop.ncf** ファイルを作成して SYS:SYSTEM ディレクトリに配置します。これらのファイルには、NetWare サーバーのバックアップに必要な NLM をロードするコマンドが格納されています。

メモ: Remote Agent がインストールされている NetWare サーバーに Remote Agent を再インストールするには、各 NetWare サーバーのコンソールで Bestop を実行する必要があります。

Backup Exec のインストール時には、デフォルトでは、使用するプロトコルとして TCP/IP が選択されています。ただし、このデフォルトの設定は、[ツール]>[オプション]>[ネットワークとセキュリティ]ダイアログボックスで変更することができます。

p.1890 の「[Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.1882 の「[NetWare サーバー上の AUTOEXEC.NCF ファイルへの BESTART の追加](#)」を参照してください。

Remote Agent for NetWare Systems のインストール

ローカルの NetWare サーバーに Remote Agent for NetWare Systems (Remote Agent) をインストールできます。

Remote Agent for NetWare Systems をインストールする方法

- 1 NetWare サーバーにアクセスできる Backup Exec メディアサーバーまたはワークステーションで、適切なドライブに Backup Exec のインストールメディアを挿入します。
- 2 Remote Agent をインストールする NetWare サーバーにログオンします。
- 3 **SYS:** ボリュームに BKUPEXEC という名前のディレクトリを作成します。
- 4 インストールメディアの次のディレクトリに移動します。
`BE¥Winnt¥Install¥Netware¥Nwagtacc`
- 5 ディレクトリの内容を NetWare サーバーの SYS:BKUPEXEC ディレクトリにコピーします。

- 6 インストールメディアの次のディレクトリに移動します。
BE¥Winnt¥Install¥Netware¥Netware¥Nksfiles¥en
- 7 Novell.nks ファイルを NetWare サーバーの SYS:BKUPEXEC ディレクトリにコピーします。
- 8 NetWare サーバーの SYS:SYSTEM ディレクトリに移動します。
- 9 テキストエディタで Bestart.ncf という名前のファイルを作成し、次の情報を追加します。

```
SEARCH ADD SYS:/BKUPEXEC/NLMS
```

```
Load SYS:/BKUPEXEC/NLMS/BKUPEXEC.NLM -!x -tr -to %1 %2
```

メモ: AOFO (Advanced Open File Option) のライセンスがない場合は、**-to** スイッチを削除できます。

- 10 Bestart.ncf ファイルを保存します。
- 11 テキストエディタで Bestop.ncf という名前のファイルを作成し、次の情報を追加します。
Load SYS:/BKUPEXEC/NLMS/BESTOP.NLM %1 %2
- 12 Bestop.ncf ファイルを保存します。
- 13 次のいずれかを実行します。

AOFO (Advanced Open File Option) のライ 次に示す順序で操作を実行します。
センスがある場合

- NetWare サーバーの SYS:BKUPEXEC ディレクトリに移動します。
- テキストエディタで、**License.oyo** という名前のファイルを作成します。
- ハイフンまたはスペースなしで **AOFO (Advanced Open File Option)** のライセンスキーを入力します。
- **License.oyo** ファイルを保存します。

AOFO (Advanced Open File Option) のライ 手順 14 に進みます。
センスがない場合

- 14 Advrtms.dat ファイルを作成します。

p.1881 の「[Advrtms.dat ファイルの作成](#)」を参照してください。

NetWare Agent リストへの NetWare サーバーの公開について

Backup Exec で NetWare Agent リストに NetWare サーバーを表示するには、エージェントが自己の存在を公開する必要があります。または Remote Agent を実行しているサーバーを手動で追加する必要があります。

Remote Agent をインストールした場合、SYS:BKUPEXEC の Advrtms.dat ファイルは含まれません。Remote Agent は、メディアサーバーに情報を公開できません。NetWare サーバーの SYS:BKUPEXEC ディレクトリに Advrtms.dat ファイルを作成する必要があります。このファイルには、NetWare サーバーをバックアップする Backup Exec メディアサーバーのすべての名前または IP アドレスが含まれるようにします。

NetWare サーバーで BESTART を実行すると、自動的に Novell の SMDR.NLM コンポーネントがロードされます。このコンポーネントは、TCP/IP プロトコルを使用して、バックアップを行うサーバーの可用性を公開します。このプロトコルは、サーバーが NetWare Agent リストに自動的に追加されるように、ネットワーク上および Backup Exec の [ネットワークとセキュリティ] ダイアログボックスで有効にしておく必要があります。

p.388 の「[デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定](#)」を参照してください。

ネットワークでこのプロトコルを実行できない場合は、NetWare サーバー名を手動で Backup Exec のサーバーリストに追加する必要があります。

p.1890 の「[Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

NetWare サーバーを Backup Exec の [ユーザー定義選択] ノードに手動で追加する場合は、次の操作を実行する必要があります。

- ネットワークで名前解決を設定する。
- Remote Agent がインストールされている NetWare サーバーをメディアサーバーに対して公開する。公開を設定するには、保護する各 NetWare サーバー上の ADVRTMS.DAT ファイルを編集する必要があります。

p.274 の「[バックアップ選択リストの \[ユーザー定義選択\] ノードについて](#)」を参照してください。

p.1881 の「[Advrtms.dat ファイルの作成](#)」を参照してください。

p.1882 の「[NetWare サーバー上の AUTOEXEC.NCF ファイルへの BESTART の追加](#)」を参照してください。

Advrtms.dat ファイルの作成

公開を設定するには、Advrtms.dat ファイルを作成する必要があります。このファイルには、NetWare サーバーをバックアップする Backup Exec メディアサーバーのすべての名前または IP アドレスが含まれるようにします。

p.1881の「[NetWare AgentリストへのNetWare サーバーの公開について](#)」を参照してください。

Advrtms.dat ファイルを作成する方法

- 1 NetWare サーバーの SYS:BKUPEXEC ディレクトリに移動します。
- 2 テキストエディタで、Advrtms.dat という名前のファイルを作成します。
- 3 NetWare サーバーの名前か IP アドレスを追加します。
- 4 ADVRTMS.DAT ファイルを保存します。

NetWare サーバー上の AUTOEXEC.NCF ファイルへの BESTART の追加

NetWare サーバーに Remote Agent をインストールした後で、最新のパッチをロードする必要があります。また、サーバーの起動時に Remote Agent をロードするために、AUTOEXEC.NCF ファイルに BESTART コマンドを追加する必要があります。

p.1881の「[NetWare AgentリストへのNetWare サーバーの公開について](#)」を参照してください。

NetWare サーバー上の AUTOEXEC.NCF ファイルに BESTART を追加する方法

- 1 NetWare サーバーの起動時に、自動的に Remote Agent を起動するように、AUTOEXEC.NCF ファイルの最後の行に BESTART コマンドを追加します。
- 2 編集した AUTOEXEC.NCF ファイルを保存し、変更した内容を反映するために、NetWare サーバーを再起動します。

p.1882の「[Remote Agent for NetWare Systems のアンロード](#)」を参照してください。

Remote Agent for NetWare Systems のアンロード

NetWare サーバーの AUTOEXEC.NCF ファイルの最後の行に BESTART を追加した場合は、NetWare サーバーで AUTOEXEC.NCF ファイルが実行されるたびに、Remote Agent が自動的にロードされます。Remote Agent は、コマンドを使用してアンロードすることができます。

p.1881の「[NetWare AgentリストへのNetWare サーバーの公開について](#)」を参照してください。

Remote Agent for NetWare Systems をアンロードする方法

- 1 NetWare システムコンソールのプロンプトで、次の行を入力します。

```
bestop
```

- 2 Enter キーを押します。

このエージェントに関連したすべての NLM がアンロードされます。

NetWare サーバーのバックアップについて

バックアップのために初めて NetWare サーバーにアクセスする場合、ユーザー名とパスワードを入力する必要があります。リモートサーバーまたはワークステーションに初めてアクセスしたときに入力したユーザー名とパスワードはパスワードデータベースに保存されるため、アクセスのたびに再入力する必要はありません。このデータベースを使用すると、リモートデバイスにアクセスするたびにユーザー名とパスワードを入力する必要がなくなります。また、Backup Exec での無人ジョブの実行時に、サーバーにログオンしてエージェントワークステーションに接続することができます。

NetWare のファイルシステムのバックアップおよびリストアを行うには、次の権限のあるアカウントが、その NetWare サーバー上に必要です。

表 V-1 NFS のバックアップとリストアに必要な権限

実行する処理	必要な権限
バックアップ	ファイルの読み取り ファイルのスキャン ファイル属性の変更 アクセス制御 ファイルの消去 ([ファイルのバックアップおよび削除] の完全バックアップ方式を選択した場合にのみ必要)
リストア	ファイルの書き込み ファイルの作成 ファイルのスキャン ファイル属性の変更 アクセス制御

NDS ツリーをバックアップまたは必要に応じてリストアするには、NDS ツリーの [Root] オブジェクトに対する次の権限のあるユーザーアカウントが NetWare サーバー上に存在している必要があります。

表 V-2 NDS のバックアップとリストアに必要な権限

実行する処理	必要な権限
バックアップ	オブジェクト権限 Supervisor (スーパーバイザ) Browse (参照) Create (作成) 削除 名前の変更 Inheritable (継承可能)
リストア	プロパティ権限、すべてのプロパティ Supervisor (スーパーバイザ) Compare (比較) 読み取り 書き込み Add Self (自己の追加) Inheritable (継承可能)

メモ: [Trustees of [Root]] ダイアログボックスの、これらの権限の前の白色のチェックボックスに黒色のチェックマークが表示されます。デフォルトの権限のみの場合は、これらのチェックボックスは灰色で、灰色のチェックマークが表示されます。

p.1890 の「[Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

NetWare ディレクトリサービス (NDS) のバックアップについて

Novell は、マルチサーバー環境における NDS の第一段階の保護機能として、レプリケーションを使用することを推奨しています。また、誤って削除されたオブジェクトを置き換える必要が生じたときのために、NDS データベースを定期的にバックアップします。

NDS ツリーに複数のサーバーが存在する場合は、どのサーバーからでも NDS の全体をバックアップすることができます。NDS TSA のすべてから NDS のすべてをバックアップする必要はありません。ただし、冗長性を持たせる場合は除きます。

シングルサーバー、マルチサーバー、シングルアドミニストレータまたはマルチアドミニストレータなどの使用環境に応じて、パーティションのレプリケーションや、NDS を保護するためのバックアップを実行する必要があります。

次に、いくつかの場合に分けて、そのバックアップ戦略の例を示します。

- シングルサーバーのバックアップ戦略:単一のネットワークサーバーで構成した NDS 環境ではレプリケーション機能を使用できないため、ディレクトリデータベースの保護は Backup Exec で行います。

バックアップを実行する場合は、それが完全バックアップか変更部分のみのバックアップかに関係なく、NDS データベース全体のバックアップが必要です。NDS データベースの変更がほとんどない場合、すなわちデータベースに格納されているオブジェクトとそれらのプロパティや値を変更することがまれな場合は、頻繁にバックアップを実行する必要はありません。

ファイルシステムのバックアップの場合と同様に、次の完全バックアップを実行する直前に障害が発生した場合に、どの程度の被害が発生するかを検討します。障害が発生した場合に、ディレクトリの変更内容を手作業で再構築するために必要な時間を考慮します。

- シングルアドミニストレータおよびマルチサーバーの場合のバックアップ戦略:単一のネットワークアドミニストレータ(ディレクトリデータベース全体に対するスーパーバイザ権限を持った単一のオブジェクト)と複数のサーバーで構成される NDS 環境の耐障害性は、NDS に内蔵のレプリケーション機能にほぼ全面的に依存します。あるサーバーで障害が発生しても、別のサーバーに保存されている NDS の複製から、NDS を完全に復元することができます。障害が発生したサーバーを修復する場合は、Novell の NetWare 5.x 以降の NWCONFIG.NLM を使って NDS を再インストールします。その後で、必要に応じて、サーバー上にレプリカを戻します。また、誤って削除したオブジェクトを復元する必要が生じたときのために、NDS データベースを定期的にバックアップすることも必要です。

- マルチアドミニストレータの場合のバックアップ戦略:複数のネットワークアドミニストレータが存在する NDS 環境では、各アドミニストレータがディレクトリツリーのアクセスを分担しているため、バックアップ戦略を作成する際に考慮する必要のある事項が多くなります。このような環境では、ディレクトリツリー全体に対する完全な権限のあるオブジェクトが存在しないのが普通で、中小規模のネットワークの多くがこれに該当します。

このような場合には、ツリーを論理的により小さなコンポーネントに分割します。各コンポーネントの管理を担当するアドミニストレータを割り当てたパーティションがその例です。この種類の構成では、高度のネットワークセキュリティを備えることができますが、ディザスタリカバリが非常に複雑になります。

耐障害性を確保する最適な方法は、パーティションを複製することです。コンテナレベルで Inherited Rights Filter (IRF) が適用されるため、ディレクトリを正しく複製することによって、障害発生時に短時間でリストアすることができます。可能な場合は、NDS ツリーのルートと信頼関係を結んだ完全な権限のあるオブジェクトを作成し、部分的なバックアップではなく、NDS ツリーの完全なバックアップを実行します。これによって、障害発生時の NDS の再構築を簡単に行うことができます。

NDS の複製とパーティションの構成および管理について詳しくは Novell のマニュアルを参照してください。

p.1883 の「[NetWare サーバーのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.1890 の「[Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

NetWare サーバーのバックアップ

次の手順は NetWare サーバーをバックアップする方法の詳細を提供します。修正日時を使用して指定する完全、差分および増分バックアップジョブは、ジョブに含まれる NetWare サーバーのアーカイブビットを使用して元に戻されます。

メモ: ダブルバイトのコードページをロードしている NetWare サーバーでダブルバイトのキャラクタセットをバックアップすることは、Backup Exec ではサポートされていません。ソフトウェア暗号化もサポートされていません。

p.1883 の「[NetWare サーバーのバックアップについて](#)」を参照してください。

p.274 の「[バックアップ選択リストの\[ユーザー定義選択\]ノードについて](#)」を参照してください。

p.399 の「[暗号化について](#)」を参照してください。

p.1887 の「[NetWare サーバーのリストアについて](#)」を参照してください。

NetWare サーバーをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 [プロパティ]ペインの[ソース]の下にある[選択リスト]をクリックします。
- 4 バックアップ選択ツリーで、[ユーザー定義選択]を展開します。

NetWare サーバーへのログオン時に、`.admin.novell`などの、完全修飾のタイプレスの名前が必要な場合があります。

完全修飾の、すなわち完全な名前とは、共通名 (CN)、組織ユニット (OU) オブジェクトおよび組織 (O) オブジェクトなど、さまざまなオブジェクトの種類で構成される名前です。オブジェクトの完全な名前にこれらのオブジェクトの省略形が含まれていない場合、その名前をタイプレスの名前と呼びます。完全な名前、部分的な名前、タイプフルの名前およびタイプレスの名前について詳しくは **Novell NetWare** のマニュアルを参照してください。

- 5 バックアップする NetWare リソースを選択します。

[NetWare File System]と[NetWare Directory Services (Novell Directory)]が別に表示されます。バックアップするディレクトリを個別に選択する必要があります。

- 6 ハードウェア暗号化を使う場合は、次の順序で手順を実行します。

- [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。
 - 暗号化の種類として[ハードウェア]を選択します。
 - 暗号化キーを選択するか、または作成します。
- 7 バックアップのデフォルト設定を変更するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[NetWare SMS]をクリックします。
- 8 [圧縮ファイルを非圧縮形式でバックアップする]をオンまたはオフにします。
- このチェックボックスをオンにした場合は、バックアップ時に圧縮されているファイルを非圧縮、すなわち解凍します。このオプションを選択すると、サーバーのメモリまたはディスク領域が不足することがあります。また、ファイルを解凍する時間が必要なため、バックアップジョブの実行時間が長くなります。
- 9 ジョブオプションを選択した後、バックアップジョブを開始するか、または[プロパティ]ペインで他のバックアップオプションを選択してからバックアップジョブを開始します。
- p.317の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

NetWare SMS のバックアップオプション

[圧縮ファイルを非圧縮形式でバックアップする]オプションを使用すると、圧縮ファイルがバックアップされるときにそれらを圧縮解除、または展開できます。このオプションを選択すると、サーバーのメモリまたはディスク領域が不足することがあります。また、ファイルを解凍する時間が必要なため、バックアップジョブの実行時間が長くなります。

NetWare サーバーのリストアについて

NetWare サーバーのリストアを実行する前に、一般的なリストアジョブについての説明をお読みください。

p.593の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

NDS ツリーに複数のサーバーが存在している場合は、別のサーバーに NDS の複製が保存されているため、NDS をリストアする必要はありません。NDS のリストアが必要になるのは、誤って削除したオブジェクトを復元する場合のみです。

パーティションおよび複製に関する情報は、NDS のバックアップ時からリストア時までに変更されることがあるため、この情報は、NDS のバックアップ時には SMS によって保存されません。そのため NDS をバックアップすると、すべてのオブジェクトが単一のパーティションに保存されているように見えます。

ただし、リストア時にパーティションに関する情報が使用できる場合は、その情報を使用して各オブジェクトがパーティションにリストアされます。

p.1888 の「[NetWare サーバーのリストア](#)」を参照してください。

NetWare サーバーのリストア

データのバックアップ元の NetWare サーバーまたは別のサーバーにデータをリストアできます。

リストア先を変更する場合は、次の点に注意してください。

- リストア先を変更できるのはデータのみです。NDS オブジェクトのリストア先は変更できません。
- Windows ボリュームには、Novell サーバーからバックアップしたデータはリストアできますが、NDS オブジェクトはリストアできません。

p.1887 の「[NetWare サーバーのリストアについて](#)」を参照してください。

NetWare サーバーをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 リストアするデータを選択します。

p.615 の「[リストアするデータの選択について](#)」を参照してください。

- 4 リストアオプションのデフォルト設定を変更するには、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[NetWare SMS]をクリックします。
- 5 [ボリュームの制限をリストアする]をオンまたはオフにします。

このチェックボックスをオンにした場合は、NetWare のボリューム制限がリストアされます。ディザスタリカバリを行う場合を除き、ボリューム制限のリストアは避けてください。

- 6 (オプション) リストア先として別のサーバーまたはデータベースを指定する場合は、[宛先]の下にある[ファイルのリストア先の変更]をクリックし、必要なオプションを設定します。

p.623 の「[ファイルのリストア先の変更]リストアオプション」を参照してください。

NetWare データを Windows ボリュームにリストアする場合、ファイルに関連付けられた信頼関係のあるデータはリストアされません。ファイルが NetWare によって圧縮され、圧縮状態でバックアップされた場合は、Windows ボリュームにリストアすることができません。

- 7 リストアジョブを開始するか、[プロパティ]ペインで他のリストアオプションを選択します。

[リストアジョブのプロパティ]の[一般]オプションで[ツリー構造を保持する]オプションがオフにされていて、ターゲットディレクトリがボリュームのルートである場合でも、Backup Exec は[ツリー構造を保持する]オプションを使用し、データは元のディレクトリ構造を保持してリストアされます。

p.593 の「ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア」を参照してください。

Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションについて

デフォルトでは、Backup Exec は、TCP/IP プロトコルを使用して、公開している NetWare サーバーを検出します。これらのプロトコルを使用できない場合、NetWare Remote Agent は検出されません。また、NetWare Agent ノードはバックアップ選択ツリーの[登録済みリソース]の下に表示されません。

メモ: システムにインストールされていないプロトコルは、このダイアログボックスで使用できません。たとえば、TCP/IP プロトコルがメディアサーバーにインストールされていない場合、TCP/IP プロトコルのチェックボックスはグレー表示され、使用できません。

また、Backup Exec によって実行される NetWare サーバーのすべてのバックアップとリストアに適用されるネットワークのデフォルト設定を変更することもできます。たとえば、Remote Agent によって使用される動的ポート範囲を指定できます。ただし、この設定よりも、個別のバックアップジョブまたはリストアジョブの作成時の設定が優先されます。

p.1890 の「Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定」を参照してください。

p.1891 の「メディアサーバーでの TCP 動的ポート範囲の指定」を参照してください。

Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定

次の手順は NetWare のバックアップオプションとリストアオプションを設定する方法の詳細を提供します。

p.1889 の「[Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションについて](#)」を参照してください。

p.1892 の「[NetWare サーバーの構成情報の保存](#)」を参照してください。

NetWare サーバーのバックアップとリストアのデフォルト設定を変更する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[NetWare SMS]をクリックします。
- 3 必要なオプションを選択します。
p.1890 の「[NetWare SMS のデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

NetWare SMS のデフォルトオプション

NetWare Agent を使うすべてのバックアップとリストアジョブのためのデフォルトオプションを設定できます。

p.1890 の「[Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

次の表は NetWare SMS のデフォルトオプションを記述したものです:

表 V-3 NetWare SMS のデフォルトオプション

項目	説明
NetWare サーバー	Backup Exec が表示するサーバーを選択できます。Backup Exec は、レジストリを確認して、NetWare サーバーのリストを探します。リストが存在しない場合、Backup Exec はデフォルトのワイルドカード(*)を使用してリストを作成します。ワイルドカードは Service Location Protocol (TCP/IP プロトコル) を使用して公開されているすべてのサーバーを表示できます。これらのサーバーが、このフィールドに表示されます。

項目	説明
追加	<p>サーバーリストにメディアサーバーを追加できません。</p> <p>このリストに追加するサーバー名は、TCP/IP アドレスに解決できる必要があります。Backup Exec が TCP/IP アドレスに名前を解決できない場合、そのサーバー名はサーバーリストに表示されません。ただし、Backup Exec はそのサーバーに接続できません。NetWare サーバー名および IP アドレスがネットワークの DNS データベースに存在している場合、その名前は解決できます。これらの名前と IP アドレスが DNS にない場合は、メディアサーバーの Hosts ファイルに手動で名前と IP アドレスを追加する必要があります。このファイルは、通常 <code>¥WINDOWS¥SYSTEM32¥Drivers¥ETC</code> ディレクトリにあります。</p> <p>変更した内容を反映するには、Backup Exec 管理コンソールを再起動する必要があります。</p>
削除	<p>サーバーリストからメディアサーバーを削除できます。</p>
圧縮ファイルを非圧縮形式でバックアップする	<p>圧縮ファイルがバックアップされるときにそれらを圧縮解除、または展開します。このオプションを選択すると、サーバーのメモリまたはディスク領域が不足することがあります。また、ファイルを解凍する時間が必要なため、バックアップジョブの実行時間が長くなります。</p> <p>通常は、このオプションを選択する必要はありません。</p>
ボリュームの制限をリストアする	<p>NetWare のボリューム制限をリストアします。ディザスタリカバリジョブを実行する場合を除き、ボリューム制限のリストアは避けてください。</p>

メディアサーバーでの TCP 動的ポート範囲の指定

次の手順はメディアサーバーで TCP 動的ポート範囲を指定する方法の詳細を提供します。

p.1889 の「Remote Agent for NetWare Systems のデフォルトオプションについて」を参照してください。

メディアサーバーで TCP 動的ポート範囲を指定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[ジョブのデフォルト設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。
- 3 [Remote Agent との通信に使用する TCP ポートの範囲 (Remote Agent 側)]をクリックして TCP 動的ポート範囲を指定し、ポート範囲を入力します。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 Backup Exec を再起動します。

NetWare サーバーの構成情報の保存

BEDIAG.NLMユーティリティを使用して、サーバーの構成情報が格納されたBEDIAG.FAXという名前のASCIIファイルを作成します。

このファイルには、次の情報が格納されています。

- CONFIG.SYS および AUTOEXEC.BAT ファイルの内容
- STARTUP.NCF ファイルの内容
- メモリの空き領域
- AUTOEXEC.NCF ファイルの内容
- 現在サーバーにロードされているNLMのリスト(バージョン番号とタイムスタンプ付き)
- サーバーの構成 (ボリュームと個別の名前空間のサポートを含む)

また、テクニカルサポートへの連絡用に、手元にも BEDIAG.FAX のコピーを保管しておきます。

NetWare サーバーの設定情報を保存する方法

- 1 NetWare システムコンソールのプロンプトで、次の行を入力します。

```
load SYS:BKUPEXEC/NLMS/BEDIAG
```

BEDIAG.FAX ファイルが作成されます。

BEDIAG.NLM をロードするときに、次のオプションを使用できます。(例: load bediag /c)

/c: ファイルを画面に出力する

/s: SCSI デバイスの情報のみを収集する

/n: SCSI デバイスの情報を除外する

- 2 テキストエディタまたはワードプロセッサを使用して BEDIAG.FAX ファイルを開きます。
- 3 BEDIAG.FAX を印刷し、スーパーバイザユーザーとパスワードを記入しておきます。印刷した情報は、鍵のかかる安全な場所に保管しておいてください。

Symantec Backup Exec Remote Agent for Windows Systems

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Remote Agent for Windows Systems](#) について
- [Remote Agent for Windows Systems](#) 使用上の必要条件
- [Remote Agent for Windows Systems](#) の停止と起動
- [Windows システムの Remote Agent ユーティリティ](#) について
- [データベースアクセスの設定](#)
- [Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレット](#) について

Remote Agent for Windows Systems について

Backup Exec Remote Agent for Windows Systems (Remote Agent) は個別のアドオンコンポーネントとしてインストールされます。Remote Agent を使用すると、ネットワークに接続される Windows リソースのネットワーク管理者がバックアップとリストア操作を実行できます。

Remote Agent は、リモート Windows サーバーまたはワークステーション上で実行されるシステムサービスです。通常のバックアップ技術では頻繁にネットワークとやり取りする必要のある処理が、Remote Agent ではローカルに実行されるため、バックアップに要する時間が大幅に短縮されます。バックアップするデータは連続したデータストリームに変換され、メディアサーバーで単一のタスクとして処理されます。したがって、メディアサー

バーとリモートサーバー間で頻繁に要求と応答を繰り返す必要がある従来の手法に比べ、データの転送率を大きく向上させることができます。

Remote Agent を使用して、次のことを実行できます。

- ファイアウォール環境でバックアップおよびリストアを行うことができる。
- メディアサーバーおよびリモートコンピュータが同じサブネット上にある場合、指定したローカルネットワークを使用してバックアップおよびリストアを行うことができる。
- メディアサーバーの[登録済みリソース]ノードにリモートコンピュータを表示することができる。
- 修正されたファイルのバックアップ (差分バックアップや増分バックアップなど) のパフォーマンスを大幅に向上させることができる。これは、従来のネットワークバックアップアプリケーションではネットワークを通じて行っているバックアップ対象ファイルの選択を、Backup Exec では Remote Agent を使用してローカルに行っているためです。

メモ: ネットワークハードウェアは、パフォーマンスに大きな影響を与えます。メディアサーバーとリモートデバイスのネットワークハードウェアの性能は、パフォーマンスに直接影響します。また、ネットワークの帯域幅が大きければ大きいほど、バックアップのパフォーマンスも向上します。

p.1896の「[Remote Agent for Windows Systems 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

p.129の「[Remote Agent for Windows Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

p.388の「[デフォルトのバックアップネットワークとセキュリティオプションの設定](#)」を参照してください。

p.394の「[ファイアウォール環境での Backup Exec の使用について](#)」を参照してください。

p.304の「[Backup Exec シャドウコピーコンポーネントファイルシステムについて](#)」を参照してください。

p.1898の「[Windows システムの Remote Agent ユーティリティについて](#)」を参照してください。

Remote Agent for Windows Systems 使用上の必要条件

Remote Agent も Client Access License (CAL) の 1 つであるため、バックアップするすべてのリモート Windows コンピュータに Remote Agent をインストールする必要があります。Remote Agent がインストールされていないと、リモートサーバー上のリソースを完全に保護することはできません。

Backup Exec メディアサーバーで、保護対象のリモート Windows コンピュータごとに Remote Agent のライセンスキーを入力する必要があります。複数のメディアサーバーで 1 台のリモート Windows コンピュータをバックアップする場合は、各メディアサーバーで同一の Remote Agent のライセンスキーを入力します。

また、Backup Exec のデータベースエージェントには、1 台のリモート Windows コンピュータを保護できる Remote Agent が含まれています。Remote Agent のライセンスはメディアサーバーにデータベースエージェントをインストールすると有効になります。

サポートされる Windows プラットフォームのワークステーションバージョンを保護する場合も、各プラットフォームに Remote Agent をインストールする必要があります。

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

メモ: 以前のバージョンの Remote Agent がインストールされている場合は、新しい Remote Agent のインストールを開始すると自動的にアップグレードされます。新しい Remote Agent のインストール時に、リモートコンピュータ上に存在する前のバージョンのエージェントが自動的に検出され、新しいバージョンに置き換えられます。アップグレード完了後に、システムサービス名が変更されている場合があります。

Remote Agent for Windows Systems は、使用環境に応じてさまざまな方法でインストールすることができます。

p.129 の「[Remote Agent for Windows Systems のインストールについて](#)」を参照してください。

Remote Agent for Windows Systems の停止と起動

リモートコンピュータ上で Windows を起動すると、Remote Agent はサービスとして自動的に起動されます。

Remote Agent for Windows Systems を停止または起動する方法

- 1 次のいずれかを実行します。

Windows 7/Vista/Server 2008 R2/Server [コンピュータ]を右クリックします。
2008 コンピュータの場合

Windows Server 2003 のコンピュータの場合 [マイ コンピュータ]を右クリックします。
合

- 2 [管理]をクリックします。

3 次のいずれかを実行します。

Windows Server 2008 R2/Server 2008 コ
ンピュータの場合 [サーバーマネージャ]で、[構成]を展開しま
す。

Windows 7/Vista/Server 2003 コンピュ
ータの場合 [コンピュータの管理]ダイアログボックスで、
[サービスとアプリケーション]をダブルクリック
します。

4 [サービス]をクリックします。

5 結果ペインで、[Backup Exec Remote Agent for Windows Systems]を右クリック
します。

6 次のいずれかを実行します。

Remote Agent を停止する方法 Remote Agent を停止するには[停止]をク
リックします。

Remote Agent を起動する方法 Remote Agent を起動するには[開始]をク
リックします。

Windows システムの Remote Agent ユーティリティにつ いて

Remote Agent をリモート Windows コンピュータにインストールすると、Remote Agent
ユーティリティもインストールされます。

Remote Agent ユーティリティを使用すると、次のタスクを実行できます。

- ログオン時に毎回 Remote Agent ユーティリティを起動する。
p.1899 の「[Remote Agent ユーティリティの起動](#)」を参照してください。
- リモート Windows コンピュータ上の現在のアクティビティを表示する。
p.1899 の「[Remote Agent ユーティリティでのリモートコンピュータのアクティビティの状
態の表示](#)」を参照してください。
- バージョンや IP アドレスなどの Remote Agent に関する情報をメディアサーバーに
送信するように Remote Agent を設定する。
p.1902 の「[メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開につ
いて](#)」を参照してください。
- Oracle インスタンスのバックアップおよびリストア用に Remote Agent ユーティリティ
を設定する。

p.1282 の「[Windows コンピュータおよび Linux サーバーでの Oracle Agent の設定](#)」を参照してください。

- DB2 インスタンスのバックアップおよびリストア用に Remote Agent ユーティリティを設定する。
p.943 の「[Windows コンピュータでの DB2 Agent の設定](#)」を参照してください。
- Oracle 操作および DB2 操作でメディアサーバーがデータベースにアクセスできるように Remote Agent ユーティリティを設定する。
p.1906 の「[データベースアクセスの設定](#)」を参照してください。

Remote Agent ユーティリティの起動

Remote Agent ユーティリティには、Windows タスクバーからアクセスします。

p.1899 の「[Remote Agent ユーティリティでのリモートコンピュータのアクティビティの状態の表示](#)」を参照してください。

p.1902 の「[メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について](#)」を参照してください。

Remote Agent ユーティリティを起動する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 リモート Windows コンピュータの [レジストリエディタ]、[サービス] ウィンドウおよび [イベントビューア] を開くには、システムトレイの Remote Agent ユーティリティのアイコンを右クリックし、[ツール] をクリックします。

Remote Agent ユーティリティでのリモートコンピュータのアクティビティの状態の表示

リモート Windows コンピュータのアクティビティの状態を表示するために Remote Agent ユーティリティを使うことができます。

Remote Agent ユーティリティでリモートコンピュータのアクティビティの状態を表示する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティがすでに実行されている場合は、システムトレイに格納されているアイコンをダブルクリックできます。

- 2 [状態]タブをクリックします。
p.1900の「[Remote Agent ユーティリティの\[状態\]オプション](#)」を参照してください。
- 3 [OK]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの[状態]オプション

Remote Agent ユーティリティの次の[状態]オプションを設定できます。

p.1899の「[Remote Agent ユーティリティでのリモートコンピュータのアクティビティの状態の表示](#)」を参照してください。

表 W-1 Remote Agent ユーティリティの[状態]オプション

項目	説明
ログオン時に毎回 Remote Agent ユーティリティを起動する	このコンピュータにログオンするとき Remote Agent ユーティリティを表示するかどうかを示します。
更新間隔	Remote Agent ユーティリティがコンピュータの状態を更新する間隔を秒単位で表示します。デフォルトでは、5 秒に設定されています。
メディアサーバー	ジョブを実行中のメディアサーバー名を表示します。
ソース	ジョブの実行元のメディアまたは共有を表示します。
現在処理中のフォルダ	エージェントに応じて、現在処理中のディレクトリ、フォルダまたはデータベースの名前を表示します。
現在処理中のファイル	現在処理中のファイル名を表示します。

システムトレイからのリモートコンピュータの活動状態の表示

リモートコンピュータのアクティビティの状態を表示できます。

表示される状態は次のとおりです。

- バックアップジョブが実行中です

- リストアジョブが実行中です
- バックアップジョブとリストアジョブが実行中です
- スナップショットを作成中です
- Backup Exec クライアントサービス Beremote.exe がコンピュータ上で実行されていません
- アイドル

リモートコンピュータのアクティビティの状態を表示する方法

- ◆ システムトレイの Remote Agent アイコン上にカーソルを置きます。

リモートコンピュータでの Remote Agent ユーティリティの自動起動

デフォルトでは、リモートコンピュータにログオンするたびに Remote Agent ユーティリティを自動的に起動できます。

p.1900 の「[Remote Agent ユーティリティの\[状態\]オプション](#)」を参照してください。

リモートコンピュータ上の Remote Agent ユーティリティを自動的に起動する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティがすでに実行されている場合は、システムトレイに格納されているアイコンをダブルクリックできます。

- 2 [状態]タブをクリックします。
- 3 [ログオン時に毎回 Remote Agent ユーティリティを起動する]チェックボックスにチェックマークを付けます。
- 4 [OK]をクリックします。

リモートコンピュータの更新間隔の設定

Remote Agent ユーティリティがコンピュータの状態を更新する間隔を秒単位で表示できます。

p.1900 の「[Remote Agent ユーティリティの\[状態\]オプション](#)」を参照してください。

リモートコンピュータの更新間隔を設定する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティがすでに実行されている場合は、システムトレイに格納されているアイコンをダブルクリックできます。

- 2 [状態]タブをクリックします。
- 3 [更新間隔]フィールドに、状態を更新するための秒数を入力します。
- 4 [OK]をクリックします。

メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について

Remote Agent ユーティリティを使用して、このリモート Windows コンピュータを公開するメディアサーバー名または IP アドレスを追加、変更または削除します。[公開]タブのリストに追加した各メディアサーバーでは、バックアップ選択ツリーの[登録済みリソース]の下に、このリモートコンピュータが表示されます。

Remote Agent が公開する情報には、Remote Agent のバージョンおよびリモートコンピュータの IP アドレスが含まれます。リモートコンピュータの IP アドレスがメディアサーバーに公開されるため、メディアサーバーは、リモートコンピュータが不明なドメインに属している場合でも、接続および表示することができます。

公開先の各メディアサーバーに対して、メディアサーバーとリモートコンピュータ間の操作にローカルのバックアップネットワークを指定できます。メディアサーバーとリモートコンピュータ間の操作は、社内ネットワークではなく、指定したローカルネットワークで処理されるため、社内ネットワークに接続されている他のネットワークへのバックアップデータトラフィックによる影響を回避することができます。

p.386 の「[バックアップネットワークの指定について](#)」を参照してください。

p.1903 の「[Remote Agent for Windows Systems の公開先メディアサーバーの追加](#)」を参照してください。

p.1905 の「[Remote Agent for Windows Systems の公開先メディアサーバーの情報の編集](#)」を参照してください。

p.1906 の「[Remote Agent for Windows Systems の公開先メディアサーバーの削除](#)」を参照してください。

Remote Agent for Windows Systems の公開先メディアサーバーの追加

Remote Agent が情報を公開できるメディアサーバーを追加するのに Remote Agent ユーティリティを使うことができます。

p.1902 の「[メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について](#)」を参照してください。

p.269 の「[バックアップ選択リストの\[登録済みリソース\]ノードについて](#)」を参照してください。

p.270 の「[バックアップ選択リストの\[登録済みリソース\]ノードへの Windows システムの追加](#)」を参照してください。

p.271 の「[バックアップ選択リストの\[登録済みリソース\]ノードからの Windows システムの削除](#)」を参照してください。

p.1899 の「[Remote Agent ユーティリティでのリモートコンピュータのアクティビティの状態の表示](#)」を参照してください。

Remote Agent の公開先メディアサーバーを追加する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [公開]タブをクリックします。
- 3 必要なオプションを設定します。
p.1903 の「[Remote Agent ユーティリティーの\[公開\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティーの[公開]オプション

Remote Agent ユーティリティの次の[公開]オプションを設定できます。

p.1903 の「[Remote Agent for Windows Systems の公開先メディアサーバーの追加](#)」を参照してください。

表 W-2 Remote Agent ユーティリティの [公開] オプション

項目	説明
Remote Agent でリスト内のメディアサーバーへの情報の公開を有効にする	<p>バージョンや IP アドレスなどの Remote Agent に関する情報をリストのすべてのメディアサーバーに Remote Agent が送信するかどうかを示します。Remote Agent は、メディアサーバーのバックアップ選択ツリーの [登録済みリソース] および [ドメイン] の下に表示されます。</p> <p>デフォルトでは、この Remote Agent のプッシュインストールを行ったメディアサーバーの名前がこのリストに表示されます。Remote Agent がメディアサーバーでもある場合は、名前は 127.0.0.1 と表示されます。</p> <p>情報がすべてのメディアサーバーに送信されないようにするには、[Remote Agent でリスト内のメディアサーバーへの情報の公開を有効にする] のチェックマークを外します。メディアサーバーのリストは保持されますが、Remote Agent からメディアサーバーに情報が送信されなくなります。</p>
公開の間隔	<p>リストに表示されているメディアサーバーに対して Remote Agent の状態に関する情報を送信する間隔を分単位で表示します。デフォルトの間隔は 240 分です。これは、システムの応答とネットワークトラフィックのバランスを適正に保つための推奨値です。指定できる最長の間隔は 720 分です。</p>
設定を変更	<p>メディアサーバーリストでメディアサーバーの追加、編集、または削除を実行できる設定を有効にします。</p> <p>このオプションは Remote Agent ユーティリティを最初に起動する時に表示されます。</p>
追加	<p>メディアサーバーリストにメディアサーバー名か IP アドレスを追加することを許可します。</p>
編集	<p>メディアサーバーリストの名前かアドレスを編集することを許可します。</p>
削除	<p>メディアサーバーリストからメディアサーバー名か IP アドレスを削除することを許可します。Remote Agent は、メディアサーバーに情報を公開しなくなります。メディアサーバーの [登録済みリソース] ノードからリモートコンピュータをバックアップ対象として選択できなくなります。</p>

項目	説明
このエージェントの公開名	<p>このリモートコンピュータが公開されるとき使われる名前を示します。この名前はメディアサーバーの[登録済みリソース]の下に表示されます。</p> <p>表示される名前は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ドメインの完全修飾名。 ■ コンピュータ名。 ■ NetBIOS コンピュータ名。 ■ 仮想サービス名。リモートコンピュータがホストであるクラスターリソースに割り当てられる名前です。 ■ Oracle RMAN の Real Application Clusters (RAC) 名。RAC 内のコンピュータで Oracle アプリケーションのホストコンピュータに対して使用される仮想名です。この名前は、Oracle RAC ノードにあるメディアサーバーのバックアップ選択リストに表示されます。

Remote Agent for Windows Systems の公開先メディアサーバーの情報の編集

Remote Agent が情報を公開できるメディアサーバーの名前または IP アドレスを編集するのに Remote Agent ユーティリティを使うことができます。

p.1902 の「[メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について](#)」を参照してください。

メディアサーバーの情報を編集する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されません。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [公開]タブをクリックします。
- 3 編集するメディアサーバーをリストから選択します。
- 4 [編集]をクリックします。
- 5 メディアサーバーの名前か IP アドレスを編集します。
- 6 [OK]をクリックします。

Remote Agent for Windows Systems の公開先メディアサーバーの削除

Remote Agent がもはやメディアサーバーに情報を公開しないようにメディアサーバーを削除するのに Remote Agent ユーティリティを使うことができます。

p.1902 の「メディアサーバーへの Remote Agent for Windows Systems の公開について」を参照してください。

Remote Agent の公開先メディアサーバーを削除する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。

Remote Agent ユーティリティの実行中は、アイコンがシステムトレイに表示されます。このアイコンをダブルクリックすると、ユーティリティを表示できます。

- 2 [公開]タブをクリックします。
- 3 削除するメディアサーバーをリストから選択します。
- 4 [削除]をクリックします。
- 5 [OK]をクリックします。

データベースアクセスの設定

メディアサーバーで Oracle 操作および DB2 操作を認証できるようにデータベースアクセスを設定できます。

p.1294 の「メディアサーバーでの Oracle 操作のための認証クレデンシャルの設定」を参照してください。

p.943 の「メディアサーバーの認証リストへの DB2 サーバー名とログオンアカウント名の追加」を参照してください。

データベースアクセスを設定する方法

- 1 Remote Agent がインストールされているコンピュータのタスクバーで、[スタート]> [すべてのプログラム]> [Symantec Backup Exec]> [Backup Exec 2010 Remote Agent Utility]をクリックします。
- 2 [データベースアクセス]タブをクリックします。
- 3 変更を行うには、[設定を変更]をクリックします。
- 4 必要なオプションを設定します。

p.1907 の「Remote Agent ユーティリティの [データベースアクセス] オプション」を参照してください。

- 5 [OK]をクリックします。
- 6 メディアサーバーで、Oracle サーバーまたは DB2 サーバーの名前と[データベースアクセス]タブで入力したユーザー名を、認証クレデンシャルのリストに追加します。

Remote Agent ユーティリティの[データベースアクセス]オプション

Remote Agent ユーティリティの次の[データベースアクセス]オプションを設定できます。
p.1906 の「データベースアクセスの設定」を参照してください。

表 W-3 Remote Agent ユーティリティの[データベースアクセス]オプション

項目	説明
Oracle および DB2 操作のメディアサーバーの認証を有効にする	<p>DBA 開始操作などの Oracle と DB2 サーバーでのすべての操作でメディアサーバーが使うクレデンシャルを指定します。メディアサーバーは、Oracle サーバーおよび DB2 サーバーの認証にも、これらのクレデンシャルを使用します。</p> <p>メディアサーバーとこのコンピュータ間で DB2 操作および Oracle 操作を有効にするには、このオプションにチェックマークを付ける必要があります。</p>
ユーザー名	<p>このコンピュータに対する管理者権限が与えられているユーザー名を指定します。これは、メディアサーバーがこのコンピュータに接続する際に使用するログオンアカウントです。</p> <p>ユーザー名の一部として IP アドレスまたは完全修飾コンピュータ名を指定した場合は、Remote Agent ユーティリティでユーザーアカウントを検証できない場合があります。入力したクレデンシャルが正しくない場合、バックアップまたはリストアジョブの実行時に[リソースに接続できません]というエラーが表示される場合があります。</p> <p>メディアサーバーで、このコンピュータ名とログオンアカウントを、Oracle サーバーおよび DB2 サーバー用の認証クレデンシャルのリストに追加する必要があります。Oracle リソースのバックアップ時に認証に失敗すると、バックアップジョブは失敗します。リストアジョブでバックアップセットの参照時に認証に失敗すると、バックアップセットが使用できなくなるため、DBA 開始リストアジョブを実行してデータをリストアする必要があります。</p>

項目	説明
パスワード	<p>このログオンアカウントのパスワードを指定します。</p> <p>メモ: セキュリティ上の理由で、ログオンクレデンシャルは、リモートコンピュータに格納されません。</p>
パスワードの確認入力	<p>確認のため、パスワードをもう一度指定します。</p>
<p>Oracle および DB2 操作でコンピュータの完全修飾名または IP アドレスを使用する</p>	<p>リモートコンピュータとメディアサーバー間での Oracle と DB2 操作のための完全なコンピュータ名か IP アドレスを指定します。すべての DB2 操作で同じ形式の名前解決を使用する必要があります。</p> <p>たとえば、IP アドレスを使用してバックアップを行う場合は、リストアを行う際にも IP アドレスを使用する必要があります。完全修飾名を使用してバックアップを行う場合は、リストアを行う際にも完全修飾名を使用する必要があります。</p>
名前または IP アドレス	<p>このコンピュータの完全修飾名または IP アドレスを指定します。</p> <p>コンピュータの完全修飾名には、次のルールが適用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 各ラベル (ドット間の文字列) の最大文字数は 63 です。 ■ 最大合計文字数は 254 です。この数に、ドットは含まれますが、¥¥ は含まれません。 ■ 名前には次の文字は使用できません: * < > ? .
<p>Oracle および DB2 操作中にメディアサーバーに接続するためにカスタムポートを使用する</p>	<p>Oracle または DB2 操作の実行中にこのコンピュータとメディアサーバー間の通信に使われるポートを指定します。デフォルトでは、ポート 5633 が使用されます。</p> <p>このコンピュータのポート番号を変更する場合は、メディアサーバーのポート番号も変更する必要があります。その後、メディアサーバー上の Backup Exec Job Engine サービスを再起動します。</p>
ポート番号	<p>メディアサーバーに操作要求を送信するために使用するポート番号を指定します。</p>

Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットについて

Windows オペレーティングシステムのコマンドプロンプトで Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットを使用して、Remote Agent ユーティリティにアクセスできます。Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットは、Remote Agent のインストール時にインストールされます。Windows 7/Vista/Server 2008 R2/Server 2008 コンピュータでコマンドラインユーティリティを実行する場合は、昇格したコマンドプロンプトを使用する必要があります。

メモ: Microsoft Windows Server 2008 R2 または Server 2008 コンピュータで Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットを実行するには、Server Core を使わなければなりません。

Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットを使用して、次の Remote Agent ユーティリティ機能を実行できます。

- 公開間隔を分単位で設定する。
- エージェントの公開名を一覧表示する。
- そのエージェントの公開先になるメディアサーバー名を一覧表示する。
- 公開リストにメディアサーバーを追加する。
- 公開リストからメディアサーバーを削除する。
- 次の状態情報を表示する。
 - アクティビティの状態
 - 現在処理中のソース
 - 現在処理中のフォルダ
 - 現在処理中のファイル
 - 現在接続されているメディアサーバー

p.1909 の「[Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットの使用](#)」を参照してください。

Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットの使用

Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットを使用するには、次の手順を実行します。

p.1909 の「[Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットについて](#)」を参照してください。

Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットを使用する方法

- 1 コマンドプロンプトを開きます。
- 2 Backup Exec のインストールディレクトリから、ramcmd.exe に続けて一連のコマンドスイッチを入力します。

デフォルトのインストール場所は、c:\Program Files\Symantec\Backup Exec\RAWS です。

p.1910の「[Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットのスイッチ](#)」を参照してください。

Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットのスイッチ

次の表は、Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットで使用できるスイッチを示しています。

p.1909の「[Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットについて](#)」を参照してください。

表 W-4 Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットのスイッチ

スイッチ	説明
status:[n]	状態の出力が、1 から 86400 の範囲で <n> 秒ごとに繰り返されます。出力の実行を停止するには、Q キーを押します。 ramcmd /status:[n] 時刻の値を指定しないで /status スイッチを使用すると、コマンドウィンドウに Remote Agent の状態が表示され、アプレットが終了します。

スイッチ	説明
<p><code>/publish:[on off add remove interval][/ms:<media server>] [/t:<x>]</code></p>	<p><code>/publish</code> スイッチで、次のパラメータを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ パラメータの指定なし - 公開状態が表示されてから終了します。 ■ <code>[on]</code> - 公開が有効になります。バージョンや IP アドレスなど、Remote Agent に関する情報が送信されます。 ■ <code>[off]</code> - 公開が無効になります。 ■ <code>[add]</code>、<code>[remove]</code> - <code>/ms</code> と組み合わせて使用します。このパラメータを使用して、Remote Agent の公開リストでメディアサーバーを追加または削除できます。 ■ <code>[interval]</code> - <code>/t</code> と組み合わせて使用します。Remote Agent がクライアントの情報をメディアサーバーに送信する時間間隔を指定します。 時間間隔は、<code>/t:[<x>]</code> パラメータを使用して分単位で設定できます。 <p>メモ: <code>[interval]</code> スイッチは、<code>/t:</code> スイッチと組み合わせて使用する必要があります。コマンドラインで <code>[interval]</code> を単独で使用することはできません。</p> <pre>ramcmd /publish:[on off add remove interval] [/ms<media server>] [/t:<x>]</pre>

スイッチ	説明
<p>/oracle:[new edit delete]</p> <p>/in:[<instance name>]</p> <p>/ms:[<media server address>]</p> <p>/jt:[<job template>]</p> <p>/user:[<username>]</p> <p>/password:[<password> *]</p> <p>/rc:[yes no]</p> <p>/tns:[<TNS name>]</p>	<p>/oracle スイッチで、次のパラメータを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ パラメータの指定なし - 既存の Oracle インスタンスが表示されてから終了します。 ■ [new]、[edit]、[delete] - /in スイッチと組み合わせて使用します。 ■ /in:[<instance name>] - Oracle インスタンスリストで Oracle インスタンス名を追加、編集および削除するために使用します。 ■ /ms:[<media server address>] - メディアサーバー名または IP アドレスを設定します。 ■ /jt:[<job template>] - Backup Exec ジョブテンプレートを設定します。 ■ /user:[<username>] - ユーザー名を設定します。 ■ /password:[<password> *] - /user:[<username>] と組み合わせて使用するパスワードを設定します。パスワードを省略した場合、またはアスタリスク[*]を使用した場合は、コマンドラインにパスワードを入力する必要はありません。コマンドを実行すると、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。 ■ /rc:[yes no] - [Use recover catalog] の設定を有効または無効にします。パラメータを指定しないで /rc を表示した場合は、そのインスタンスの現在の状態が表示されます。 ■ /tns:[TNS name] - Oracle TNSNAMES ファイルに存在する、利用可能な Oracle データベースおよびサーバーの TNS の別名を設定します。 <pre>ramcmd.exe /oracle:edit /in:<instance name> /rc:[yes no] [/tns:<TNS name>] [/user:<username>] [/password:password *]</pre>

スイッチ	説明
<p>/db2:[new edit delete] /in:[<instance name>] /ms:[<media server address>] /jt:[<job template>]/user:[<username>] /password:[<password> *] /al:<archive log template> /tns:[<TNS name>]</p>	<p>/db2 スイッチで、次のパラメータを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ パラメータの指定なし - 既存の DB2 インスタンスが表示されてから終了します。 ■ [new]、[edit]、[delete] - /in スイッチと組み合わせて使用します。 ■ /in:[<instance name>] - DB2 インスタンスリストで DB2 インスタンス名を追加、編集および削除するために使用します。 ■ /ms:[<media server address>] - メディアサーバー名または IP アドレスを設定します。 ■ /jt:[<job template>] - Backup Exec ジョブテンプレートを設定します。 ■ /user:[<username>] - ユーザー名を設定します。 ■ /password:[<password> *] - /user:[<username>] と組み合わせて使用するパスワードを設定します。パスワードを省略した場合、またはアスタリスク[*]を使用した場合は、コマンドラインにパスワードを入力する必要はありません。コマンドを実行すると、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。 ■ /al:<archive log template>- アーカイブログテンプレート名を <archive log template> に設定します。 ■ /tns:[<TNS name>] - Oracle TNSNAMES ファイルに存在する、利用可能な Oracle データベースおよびサーバーの TNS の別名を設定します。 <pre>ramcmd .exe /db2:new /in:<instance name> /ms:<media server address> [/jt:<job template>] [/al:<archive log template>] /user:<username> [/password:<password> *]</pre>
<p>/auth:[on off] [/user:<username>] [/password:<password> *]</p>	<p>Oracle および DB2 操作のメディアサーバーの認証を有効または無効にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /auth:on - 状態が有効になります。/user パラメータが必要です。 ■ /auth:off - 状態が無効になります。/user パラメータが必要です。 ■ /user:<username> - ユーザー名を設定します。 ■ /password:<password> - /user:<username> と組み合わせて使用するパスワードを設定します。パスワードにアスタリスクを使用した場合、またはパスワードを省略した場合は、パスワードを入力するように求められます。

スイッチ	説明
<p>/full:[on off] [/ms:<name address>]</p>	<p>リモートコンピュータとメディアサーバー間の操作に対するコンピュータの完全修飾名または IP アドレスの使用を有効または無効にします。(Oracle および DB2 の操作のみ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /full - 現在の設定が表示されます。 ■ /full:on - 状態が有効になります。/ms:<name address> パラメータが必要です。 ■ /full:off - 状態が無効になります。/ms:<name address> パラメータが必要です。 ■ /ms:<name address> - メディアサーバー名または IP アドレスを <name> または <address> に設定します。
<p>/port:<port>]</p>	<p>Oracle および DB2 の操作中にメディアサーバーに接続するために使用するカスタムポートを表示または設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /port - 現在のポート番号が表示されます。ポートがデフォルトポートの場合は、「(default)」と表示されます。 ■ /port:<port> - ポート番号を <port> に設定します。ポートをデフォルトのポート番号を変更するには、[/port:0]と入力します。
<p>/log_path:<log path>]</p>	<p>デバッグログのカスタムパスを表示または設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /log_path - ログディレクトリのパスが表示されてから終了します。 ■ /log_path:<"logs path"> - <"logs path"> ディレクトリが作成されます。パス名に空白が含まれる場合は、パスを引用符で囲みます。たとえば "C:¥Program files¥LogsFolder" のように指定します。

p.1909 の「[Remote Agent ユーティリティのコマンドラインアプレットの使用](#)」を参照してください。



Symantec Backup Exec Remote Media Agent for Linux Servers

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) について
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) の動作
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) の必要条件
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) のインストールについて
- [Remote Media Agent](#) としての Linux サーバーの追加
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) のプロパティの編集
- 複数のメディアサーバー間での [Remote Media Agent](#) の共有
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) に接続されたデバイスのためのデバイスプールの作成について
- メディアサーバーからの [Remote Media Agent for Linux Servers](#) の削除
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) の使用によるデータのバックアップ
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) の使用によるデータのリストア
- [Tape Library Simulator Utility](#) について
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) のアンインストール
- [Remote Media Agent for Linux Servers](#) のトラブルシューティング

Remote Media Agent for Linux Servers について

Remote Media Agent for Linux Servers はリモートコンピュータから次のデバイスにデータをバックアップすることを許可します。

- Linux サーバーに直接接続するストレージデバイス。
- Linux サーバーのシミュレートテープライブラリ。

Remote Media Agent としてメディアサーバーに Linux サーバーを追加できます。それから、Linux サーバーに接続されているデバイスに Linux サーバーまたはサポート対象のリモートコンピュータからデータをバックアップできます。また Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているサーバーに仮想デバイスを作成することもできます。この仮想デバイスは SCSI テープライブラリをエミュレートします。

Remote Media Agent は次の Remote Agent のための操作をサポートします:

- Remote Agent for Windows Systems
- Remote Agent for NetWare Systems
- Remote Agent for Macintosh Systems
- Remote Agent for Oracle on Linux or Windows Systems
- Agent for DB2 on Windows Servers
- Agent for SAP Applications

p.1916 の「[Remote Media Agent for Linux Servers の動作](#)」を参照してください。

p.1917 の「[Remote Media Agent for Linux Servers の必要条件](#)」を参照してください。

p.1929 の「[Tape Library Simulator Utility について](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers の動作

Backup Exec メディアサーバーから、Remote Media Agent として Linux サーバーを追加できます。Remote Media Agent はサポート対象の Remote Agent がインストールされているリモートコンピュータへのデータ接続を確立します。それから、Linux サーバーのストレージデバイスで実行されるメディアサーバーにバックアップ、リストアおよびユーティリティジョブを作成できます。

Backup Exec Central Admin Server Option か SAN Shared Storage Option を使えば、複数のメディアサーバー間で Remote Media Agent を共有できます。共有は Remote Media Agent を追加するときに有効にできます。Remote Media Agent を共有する新しいメディアサーバーの選択、またはメディアサーバーからの共有機能の削除はいつでも実行できます。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

データがリモートコンピュータから Linux サーバーに接続されているデバイスに移動するのでジョブのパフォーマンスが向上します。この向上はメディアサーバーが Remote Media Agent とリモートコンピュータとは異なるサイトにある場合に特に明白です。

Remote Media Agent にユーザーインターフェースはありません。Remote Media Agent でジョブとデバイスを管理するにはメディアサーバーの管理コンソールを使います。Backup Exec メディアサーバーはジョブログ、カタログ、ジョブ履歴、アラートおよび通知を保持します。

p.1917 の「[Remote Media Agent for Linux Servers の必要条件](#)」を参照してください。

p.1918 の「[Remote Media Agent for Linux Servers のインストールについて](#)」を参照してください。

p.1922 の「[Remote Media Agent としての Linux サーバーの追加](#)」を参照してください。

p.1929 の「[Tape Library Simulator Utility について](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers の必要条件

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>

Remote Media Agent for Linux Servers をインストールするには、Linux サーバーのスーパーユーザー権限が必要です。

メモ: Remote Media Agent は Backup Exec File System Archiving Option または Exchange Mailbox Archiving Option をサポートしません。

シマンテック社はリモートサーバーに Remote Media Agent をプッシュインストールするときセキュアシェル (SSH) プロトコルを使用することを推奨します。Remote Media Agent をインストールする前に SSH を有効にする必要があります。

メモ: Linux のバージョンによっては、libstdc++.so.5 パッケージのインストールが必要となる場合があります。

p.1937 の「[Remote Media Agent for Linux Servers のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

p.1918 の「[Remote Media Agent for Linux Servers のインストールについて](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers のインストールについて

次をするのに Backup Exec のインストールメディアを使います。

- ローカル Linux サーバーに Remote Media Agent for Linux Servers をインストールします。
- 1 つ以上の Linux のリモートサーバーに Remote Media Agent for Linux Servers をプッシュインストールします。

Remote Media Agent for Linux Servers をプッシュインストールする場合は、RSH (リモートシェル) がデフォルトで使用されます。RSH の代わりに SSH (セキュアシェル) を使用することをお勧めします。SSH を使用するには、Remote Media Agent for Linux Servers をインストールする前に有効にする必要があります。SSH について詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。

Backup Exec は Remote Media Agent for Linux Servers をインストールするとき beoper グループを作成し、メンバーとして root を追加します。beoper グループに追加するどの Linux ユーザーも Linux サーバーをバックアップし、リストアするのに必要な権限を取得します。

ただし、Backup Exec が Remote Media Agent for Linux Servers のインストールの間に NIS サーバーを検出すれば、beoper グループは作成されません。Linux サーバーに beoper グループを手動で作成する必要があります。

インストールが完了した後、メディアサーバーに Remote Media Agent として Linux サーバーを追加する必要があります。その後、Linux サーバーに接続されているデバイスにジョブを送信することができます。

p.1922 の「[Remote Media Agent としての Linux サーバーの追加](#)」を参照してください。

p.1918 の「[Remote Media Agent for Linux Servers のインストール](#)」を参照してください。

p.1921 の「[Remote Media Agent for Linux Servers の Backup Exec オペレータグループについて](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers のインストール

Remote Media Agent はローカル Linux サーバーにインストールするか、または 1 つ以上のリモート Linux サーバーにプッシュインストールできます。

p.1918 の「[Remote Media Agent for Linux Servers のインストールについて](#)」を参照してください。

メモ: Linux または UNIX サーバー上で RALUS_RAMs_RMAL_<version number>.gz ファイルを圧縮解除する必要があります。Windows オペレーティングシステムを実行するコンピュータで圧縮解除するとインストールは実行されません。

Remote Media Agent for Linux Servers をインストールする方法

- 1 Linux サーバーで、適切なドライブに Backup Exec のインストールメディアを配置します。
- 2 Remote Media Agent for Linux Servers をインストールしたいサーバーに root としてログオンします。
- 3 インストールメディアの次のパスに移動します。

<LinuxUnixMac>

- 4 ローカルサーバー上のディレクトリにこのディレクトリ内の RALUS_RAMs_RMAL_<version number>.gz ファイルをコピーします。
- 5 ファイルを圧縮解除します。

次に例を示します。

```
gunzip RALUS_RAMs_RMAL_<version number>.gz
```

- 6 ファイルを展開します。

次に例を示します。

```
tar RALUS_RAMs_RMAL_<version number>.tar
```

- 7 **installrmal** スクリプトを開始します。

次に例を示します。

```
./installrmal
```

- 8 次のいずれかを実行します。

ローカルサーバーにインストールする方法 **Enter** キーを押します。

1つのリモートサーバーにインストールする方法 Linux サーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

複数のリモートサーバーにインストールする方法 Linux サーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。各識別子の間にスペースを入れてください。

- 9 システムの初期確認で、有効な Linux オペレーティングシステムが確認されたら、**Enter** キーを押します。
- 10 パッケージのインストールの内容を確認し、次に **Enter** キーを押します。

- 11 システムによるインストールの必要条件の確認が完了したら、**Enter** キーを押します。
- 12 **Enter** キーを押すことによって前提条件の確認を始めます。
- 13 この **Remote Media Agent** を使用するメディアサーバー (ディレクトリのホスト) の名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。
- 14 この **Remote Media Agent** を使用するメディアサーバーの追加の名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。
- 15 次のいずれかを実行します。

サーバー名、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名が正しい場合 **Enter** キーを押してインストールを続行します。

サーバー名、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を変更する場合 **N** と入力し、**Enter** キーを押し、情報を変更します。

- 16 **Enter** キーを押すことによって NIS サーバーのスキャンを開始します。
- 17 NIS サーバースキャンの結果を確認し、次のいずれかを実行します。

NIS サーバーが検出された場合 **Remote Media Agent** インストーラは **beoper** グループを作成できません。**Remote Media Agent** のインストールが完了した後、それを手動で作成する必要があります。
次の手順に進みます。

NIS サーバーが検出されない場合 **beoper** グループを作成するのにインストーラを使います。
次に示す順序で操作を実行します。

- インストーラで **beoper** グループを作成できるようにするには **y** を入力します。
- 利用可能な次のグループ ID を選択するには **n** を入力します。
- **beoper** グループに **root** ユーザーアカウントを追加するには **y** を入力します。
- 次の手順に進みます。

- 18 **Enter** キーを押すことによってインストールを開始します。
- 19 インストールが完了した後、設定の処理を開始するために **Enter** キーを押します。
- 20 設定の処理が完了した後、次のファイルにインストールログを保存するために **Enter** キーを押します。

`/var/tmp/vxif/installrmasummaryfile number/installrma.log`

- 21 Remote Media Agent インストーラが **beoper** グループを作成しなければ、それを作成する必要があります。
p.1829 の「[Backup Exec オペレータグループの手動作成](#)」を参照してください。
- 22 Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを起動します。
p.1855 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動](#)」を参照してください。
- 23 Remote Media Agent として Linux サーバーを追加します。
p.1922 の「[Remote Media Agent としての Linux サーバーの追加](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers の Backup Exec オペレータグループについて

Backup Exec オペレータ (**beoper**) グループは Linux サーバーをバックアップし、リストアする権限があるユーザーの名前を含んでいます。

Backup Exec は Remote Media Agent for Linux Servers をインストールするとき **beoper** グループを作成し、メンバーとして **root** を追加します。 **beoper** グループに追加するどの Linux ユーザーも Linux サーバーをバックアップし、リストアするのに必要な権限を取得します。

ただし、NIS サーバーが Remote Media Agent のインストール中に検出されたら、Backup Exec は **beoper** グループを作成できません。 Remote Media Agent をインストールする Linux サーバーに **beoper** グループを手動で作成する必要があります。バックアップとリストア操作を開始する前に **beoper** グループを作成する必要があります。そうしないと、Linux サーバーとメディアサーバーの間の接続は失敗します。

beoper グループのメンバーがバックアップまたはリストア操作を実行するには、Backup Exec ログオンアカウントを持たなければなりません。

p.1921 の「[Remote Media Agent for Linux Servers の Backup Exec オペレータグループの手動作成](#)」を参照してください。

p.175 の「[Backup Exec ログオンアカウントの作成](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers の Backup Exec オペレータグループの手動作成

Remote Media Agent for Linux Servers をインストールする各 Linux サーバーで **beoper** グループを作成する必要があります。

p.1921 の「[Remote Media Agent for Linux Servers の Backup Exec オペレータグループについて](#)」を参照してください。

メモ: beoper グループにグループ ID を割り当てる前に Linux サーバーでグループのセキュリティを設定する方法を理解していることを確認します。

表 X-1 手動で beoper グループを作成する方法

手順	処理	詳細
手順 1	Remote Media Agent をインストールする Linux サーバーを検索します。 Linux サーバーが NIS ドメインにある場合は、NIS ドメインのグループファイルに移動します。	NIS ドメインのグループファイルにグループを追加する方法については NIS のマニュアルを参照してください。
手順 2	大文字と小文字の区別がある次の名前のグループを作成します。 beoper	グループを作成する方法について詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。
手順 3	beoper グループで、Linux サーバーのバックアップとリストアを行う権限を付与するユーザーを追加します。	グループにユーザーを追加する方法について詳しくはオペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。
手順 4	beoper グループに追加する各ユーザーのための Backup Exec ログオンアカウントを作成します。	p.175 の「 Backup Exec ログオンアカウントの作成 」を参照してください。

Remote Media Agent としての Linux サーバーの追加

Remote Media Agent として Linux サーバーを追加するとき、Linux サーバーに接続されているデバイスにアクセスできるメディアサーバーを選択できます。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

Remote Media Agent として Linux サーバーを追加する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 3 [デバイス設定アシスタント]ダイアログボックスの[**Remote Media Agent Option**]で、[Remote Media Agent Storage]をクリックします。

- 4 [一般]タブのオプションを設定します。
 p.1923 の「[Remote Media Agent のオプションの追加](#)」を参照してください。
- 5 [共有]タブで、この Remote Media Agent で使いたいメディアサーバーを選択してください。
- 6 [OK]をクリックして、Remote Media Agent を追加します。
- 7 メディアサーバーで、Remote Media Agent に直接接続されているストレージデバイスと Remote Media Agent が[デバイス]ビューに表示されるように Backup Exec サービスを再起動します。
 p.158 の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

Remote Media Agent のオプションの追加

メディアサーバーに Remote Media Agent として Linux サーバーを追加するとき情報を提供する必要があります。

p.1922 の「[Remote Media Agent としての Linux サーバーの追加](#)」を参照してください。

表 X-2 Remote Media Agent のオプションの追加

項目	説明
サーバー	<p>Remote Media Agent として追加する Linux サーバーの名前を指定します。</p> <p>Backup Exec SAN Shared Storage Option が環境にインストールされている場合は、Linux サーバーのホスト名か完全修飾ドメイン名を 사용합니다。つまり、バックアップ選択項目を参照するときに表示される Linux コンピュータの名前を使ってください。IP アドレスを使用すると、Backup Exec はジョブに使用するデバイスパスを区別できなくなります。</p>

項目	説明
ポート	<p>メディアサーバーと Remote Media Agent 間の通信のために使用するポートを一覧表示します。ポート番号を変更したら、Linux サーバーの /etc ディレクトリの services ファイルを編集し、NDMP エントリを更新する必要があります。</p> <p>p.1924 の「メディアサーバーと Remote Media Agent 間の通信用ポートの変更」を参照してください。</p> <p>このポートが Remote Media Agent とメディアサーバーの間のすべてのファイアウォールで開いていることを確認してください。別のアプリケーションまたはサービスで使用されていないポート番号を使用します。</p> <p>デフォルトポートは 10000 です。</p>
説明	選択した説明を表示します。
ログオンアカウント	<p>Remote Media Agent のためのログオンアカウントを示します。</p> <p>デフォルトログオンアカウントはメディアサーバーのシステムログオンアカウントです。</p>
Backup Exec の ICMP ping 操作を有効にしてサーバーを検出する	<p>メディアサーバーで ICMP ping 操作を使って Linux サーバーを検索できます。ping 要求がブロックされる環境では、このオプションを無効にすることができます。</p> <p>デフォルトで、このオプションが選択されています。</p>
Backup Exec ログオンアカウント	<p>このサーバーにログオンするために使いたい Backup Exec のログオンアカウントを示します。</p> <p>p.172 の「ログオンアカウントの設定について」を参照してください。</p>

[p.1927 の「Remote Media Agent for Linux Servers に接続されたデバイスのためのデバイスプールの作成について」](#)を参照してください。

[p.1928 の「Remote Media Agent for Linux Servers の使用によるデータのバックアップ」](#)を参照してください。

メディアサーバーと Remote Media Agent 間の通信用ポートの変更

Backup Exec が Remote Media Agent との通信に使用するポートを変更できます。

メディアサーバーと Remote Media Agent 間の通信用ポートを変更する方法

- 1 Remote Media Agent がインストールされているコンピュータで、テキストエディタを使用して /etc ディレクトリの services ファイルを開きます。

次に例を示します。

```
vi /etc/services
```

- 2 ファイルで、次のようなエントリを検索します。

ndmp 1000/tcp

- 3 次のいずれかを実行します。

このエントリが存在する場合

ポート番号を、使用するポート番号に変更します。

このエントリが存在しない場合

次に示す順序で操作を実行します。

- ファイルの最後に ndmp と入力し、Tab キーを押します。
- NDMP で使用するポート番号を入力し、次に /tcp と入力します。
- Enter キーを押します。

- 4 ファイルを保存して、エディタを終了します。

- 5 Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを再起動します。

p.1855 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers のプロパティの編集

Remote Media Agent for Linux Servers のプロパティを編集できます。

Remote Media Agent for Linux Servers のプロパティを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックします。
- 2 Remote Media Agent を選択します。
- 3 タスクペインの [一般タスク] の下にある [プロパティ] をクリックします。
p.1926 の「[Remote Media Agent のプロパティ](#)」を参照してください。
- 4 [OK] をクリックします。

Remote Media Agent のプロパティ

Remote Media Agent for Linux Servers のプロパティを表示できます。

p.1925 の「[Remote Media Agent for Linux Servers のプロパティの編集](#)」を参照してください。

次の表に、Remote Media Agent のプロパティを示します。

表 X-3 Remote Media Agent のプロパティ

項目	説明
名前	Remote Media Agent の名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名が表示されます。
ポート	メディアサーバーと Remote Media Agent 間の通信のために使用するポートを表示します。
メディアサーバーの状態	メディアサーバーの状態が表示されます。メディアサーバーの状態には、[オンライン]、[一時停止]、[使用不能]および[オフライン]があります。
説明	Remote Media Agent の説明が表示されます。この説明は編集できます。
Backup Exec の ICMP ping 操作を有効にして Remote Media Agent を検出する	Backup Exec が Remote Media Agent と通信できるようにします。ping 要求がブロックされる環境では、このオプションを無効にすることができます。 デフォルトで、このオプションが選択されています。
ホスト ID	Remote Media Agent によって生成される識別番号が表示されます。
システムのバージョン	Remote Media Agent で実行されているオペレーティングシステムのバージョンが表示されます。
ログオンアカウント	Remote Media Agent のためのログオンアカウントを示します。[変更]をクリックして、別のログオンアカウントを選択するか作成します。

複数のメディアサーバー間での Remote Media Agent の共有

Central Admin Server Option か SAN Shared Storage Option がインストールされていれば、Remote Media Agent を共有するメディアサーバーを選択できます。Remote Media Agent を追加するとき、デバイスを追加するために使ったメディアサーバーは共有のために自動的に選択されます。

p.428 の「[ストレージの共有について](#)」を参照してください。

複数のメディアサーバー間で Remote Media Agent を共有する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 [デバイス]ビューで、メディアサーバーがアクセスする Remote Media Agent を右クリックしてください。
- 3 [共有の管理]を選択してください。
- 4 共有する Remote Media Agent を選択します。
- 5 [メディアサーバー]の下で、Remote Media Agent で使いたいメディアサーバーを選択してください。
- 6 [OK]をクリックします。
- 7 手順 5 で選択したメディアサーバーの Backup Exec サービスを再起動してください。

Remote Media Agent for Linux Servers に接続されたデバイスのためのデバイスプールの作成について

Backup Exec は [すべてのデバイス] デバイスプールの Remote Media Agent に接続されたデバイスを含んでいません。[すべてのデバイス] デバイスプールにこれらのデバイスは追加できません。

Remote Media Agent は異なる物理的な場所に存在することがあります。ネットワークトラフィックを減らし、ジョブのパフォーマンスを向上させるには、異なるサイトにある Remote Media Agent ごとに別のデバイスプールを作成します。

p.504 の「[デバイスプールの作成](#)」を参照してください。

p.1929 の「[Tape Library Simulator Utility について](#)」を参照してください。

メディアサーバーからの Remote Media Agent for Linux Servers の削除

メディアサーバーから Remote Media Agent を削除できます。

メディアサーバーから Remote Media Agent for Linux Servers を削除する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 削除する Remote Media Agent を選択します。
- 3 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 4 都合のよいときに Backup Exec サービスを再起動します。

p.158 の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers の使用によるデータのバックアップ

メディアサーバーから、Remote Media Agent のためのバックアップジョブを作成します。

Remote Media Agent for Linux Servers を使ってデータをバックアップする方法

- 1 ナビゲーションバーの[バックアップ]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規バックアップジョブ]をクリックします。
- 3 バックアップ選択リストで、バックアップするデータを選択します。

p.280 の「[選択リストの作成](#)」を参照してください。

- 4 タスクペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 5 バックアップの送信先にする Remote Media Agent を選択します。
- 6 必要に応じて、残りのバックアップジョブのプロパティを設定します。

p.317 の「[ジョブのプロパティの設定によるバックアップジョブの作成](#)」を参照してください。

Remote Media Agent for Linux Servers の使用によるデータのリストア

Backup Exec メディアサーバーから、Remote Media Agent のためのリストアジョブを作成します。

メモ: 他のアプリケーションが作成したテープからデータをリストアするには、Backup Exec メディアサーバーに接続するデバイスを使用します。Remote Media Agent は Microsoft Tape Format (MTF) メディアのみサポートします。

Remote Media Agent for Linux Servers を使ってデータをリストアする方法

- 1 ナビゲーションバーの[リストア]の横にある矢印をクリックします。
- 2 [新規リストアジョブ]をクリックします。
- 3 [リソース別の表示]タブのリストア選択リストで、リストアするデータを選択します。
p.598 の「[リストアジョブの\[選択リスト\]オプション](#)」を参照してください。
- 4 タスクペインの[ソース]の下にある[デバイス]をクリックします。
- 5 Remote Media Agent デバイスを含んでいるデバイスプールを選択します。
- 6 必要に応じて他のリストアジョブのプロパティを設定します。
p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

Tape Library Simulator Utility について

Tape Library Simulator Utility ではハードディスクまたは Linux サーバーのマウントされたボリュームに仮想デバイスを作成できます。この仮想デバイスは SCSI テープライブラリをエミュレートします。Remote Media Agent for Linux Servers はサーバーにインストールされなければなりません。

Tape Library Simulator Utility を実行すると、次の情報の入力を求めるメッセージが表示されます:

- このライブラリに割り当てるスロットの数。
- ライブラリの場所かパス。

その後、Tape Library Simulator Utility はシミュレートテープライブラリのためのメディアを作成します。各メディアが一意的な名前を持つように、Tape Library Simulator Utility は各メディアにバーコードラベルを作成します。これらのバーコードラベルの名前は変更できません。ただし、メディアの一意的説明を追加できます。

p.245 の「[メディアの\[一般\]プロパティ](#)」を参照してください。

シミュレートテープライブラリは Advanced Intelligent Tape (AIT) メディア形式をエミュレートします。このメディア形式はほとんど使われません。したがって物理ロボットライブラリとシミュレートテープライブラリを区別するのに役立ちます。シミュレートメディアにも AIT メディア形式のラベルがあります。

シミュレートテープライブラリに書き込まれるファイルの形式はディスクへのバックアップファイルのファイル形式に類似しています。ただし、シミュレートテープライブラリとディスクへのバックアップフォルダの間でファイルをコピーまたは移動することはできません。

Backup Exec は [すべてのデバイス] デバイスプールにシミュレートテープライブラリを含めません。[すべてのデバイス] デバイスプールにシミュレートテープライブラリは追加できません。別のデバイスプールにはシミュレートテープライブラリを追加できます。

Tape Library Simulator Utility を使うには、Linux サーバーに利用可能な領域が最低 500MB なければなりません。利用可能な領域はハードディスク容量、フラッシュドライブ、USB ドライブを含んでいます。十分な領域がなければ、ジョブはメディアエラーを返して失敗します。利用可能なディスク領域を作成するか、別のボリュームにジョブを割り当てて、ジョブを再開する必要があります。

シミュレートテープライブラリは物理ロボットライブラリで利用可能なタスクをすべてサポートするわけではありません。

p.466 の「[仮想テープライブラリとシミュレートテープライブラリのユーティリティジョブ](#)」を参照してください。

p.1930 の「[シミュレートテープライブラリの作成](#)」を参照してください。

シミュレートテープライブラリの作成

Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているサーバーにシミュレートテープライブラリを作成します。ハードディスクまたはマウントされたボリュームにシミュレートテープライブラリを作成する必要があります。

p.1929 の「[Tape Library Simulator Utility について](#)」を参照してください。

シミュレートテープライブラリの作成方法

- 1 Remote Media Agent で、Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを停止します。

p.1856 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの停止](#)」を参照してください。

- 2 Tape Library Simulator Utility を含んでいる次のパスに移動します:

```
</opt/VRTSralus/bin>
```

次に例を示します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```

- 3 **mktls** ユーティリティを起動します。

次に例を示します。

```
./mktls
```

- 4 [Create a new simulated tape library.]を選択し、次に Enter キーを押します。

- 5 必要な情報を入力します。

p.1931 の「[シミュレートテープライブラリのオプション](#)」を参照してください。

- 6 ユーティリティを終了します。
- 7 Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを再起動します。
p.1855 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動](#)」を参照してください。
- 8 メディアサーバーで、Backup Exec サービスを再起動します。
p.158 の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

シミュレートテープライブラリのオプション

シミュレートテープライブラリを作成するとき、ライブラリにディレクトリパスとスロット数を指定する必要があります。

p.1930 の「[シミュレートテープライブラリの作成](#)」を参照してください。

表 X-4 シミュレートテープライブラリのオプション

項目	説明
Directory path	シミュレートテープライブラリのディレクトリのパスを入力します。512 文字まで入力できます。パスがない場合は、Tape Library Simulator Utility が作成します。
Number of slots	このシミュレートテープライブラリのスロットの番号を選択します。スロット数は 1 から 50 の範囲で指定できます。デフォルトのスロット数は 20 です。

p.1931 の「[シミュレートテープライブラリのプロパティの表示](#)」を参照してください。

シミュレートテープライブラリのプロパティの表示

Symantec Tape Library Simulator Utility を使うと、シミュレートテープライブラリとコンテナツについての情報を表示できます。

シミュレートテープライブラリのプロパティを表示する方法

- 1 Remote Media Agent で、Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを停止します。

p.1856 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの停止](#)」を参照してください。

- 2 Tape Library Simulator Utility を含んでいる次のディレクトリに移動します:

```
/opt/VRTSralus/bin
```

次に例を示します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```

- 3 **mktls** ユーティリティを起動します。

次に例を示します。

```
./mktls
```

- 4 [View an existing simulated tape library.]を選択します。
 - 5 表示するシミュレートテープライブラリにカーソルを移動し、Enter キーを押します。
 - 6 シミュレートテープライブラリのプロパティを表示するには Enter キーを再び押します。
- p.1932 の「[シミュレートテープライブラリのプロパティ](#)」を参照してください。
- 7 ユーティリティを終了するには Q と入力します。
 - 8 Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを再起動します。

p.1855 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動](#)」を参照してください。

シミュレートテープライブラリのプロパティ

シミュレートテープライブラリのプロパティを表示できます。

p.1931 の「[シミュレートテープライブラリのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 X-5 シミュレートテープライブラリのプロパティ

項目	説明
Number of drives	このシミュレートテープライブラリのドライブ数が表示されます。 シミュレートテープライブラリにはドライブのみを使用できます。このドライブは設定できません。

項目	説明
Number of slots	このシミュレートテープライブラリのスロット数が表示されます。スロット数は 1 から 50 の範囲で指定できます。デフォルトのスロット数は 20 です。
Tape capacity	テープ容量が表示されます。デフォルト容量は 100 GB です。
Directory path	シミュレートテープライブラリが存在するディレクトリパスが表示されます。

シミュレートテープライブラリの削除

Tape Library Simulator Utility を使うと、シミュレートテープライブラリを削除できます。手動でシミュレートテープライブラリのファイルの内容を削除した後、これらのファイルを含むディレクトリを削除する必要があります。

シミュレートテープライブラリの削除方法

- 1 Remote Media Agent で、Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを停止します。
p.1856 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの停止](#)」を参照してください。
- 2 Tape Library Simulator を含んでいる次のディレクトリに移動します：
`/opt/VRTSralus/bin/`
次に例を示します。
`cd /opt/VRTSralus/bin/`
- 3 `mktls` ユーティリティを起動します。
次に例を示します。
`./mktls`
- 4 [View an existing simulated tape library.]を選択します。
- 5 削除するシミュレートテープライブラリを選択します。
- 6 プロンプトが表示されたら、シミュレートテープライブラリを削除します。
- 7 ユーティリティを終了します。
- 8 Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを再起動します。
p.1855 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動](#)」を参照してください。

- 9 シミュレートテープライブラリのファイルを検索して、手動で削除します。
p.1929 の「[Tape Library Simulator Utility について](#)」を参照してください。
- 10 メディアサーバーで、都合のよいときに Backup Exec サービスを再起動します。
p.158 の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

コマンドラインからのシミュレートテープライブラリの管理

シミュレートテープライブラリを作成するのにコマンドラインを使うことができます。シミュレートテープライブラリは、ハードディスク、または **Remote Media Agent** のマウントされたボリュームで作成します。コマンドラインから、シミュレートテープライブラリを表示または削除することもできます。

コマンドラインからのシミュレートテープライブラリの管理方法

- 1 Remote Media Agent サーバーで、Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを停止します。
p.1856 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの停止](#)」を参照してください。
- 2 Tape Library Simulator Utility を含んでいる次のディレクトリに移動します:
`/opt/VRTSralus/bin`
次に例を示します。

```
cd /opt/VRTSralus/bin
```
- 3 適切なパラメータスイッチを指定して **mktls** ユーティリティを起動します。
p.1934 の「[Tape Library Simulator Utility 用のコマンドラインスイッチ](#)」を参照してください。
- 4 Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンを起動します。
p.1855 の「[Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動](#)」を参照してください。

Tape Library Simulator Utility 用のコマンドラインスイッチ

シミュレートテープライブラリを管理するのにコマンドラインスイッチを使うことができます。たとえば、次のコマンドラインは /TLS2/Testing に格納される 10 スロットのシミュレートテープライブラリを作成します。

```
./mktls -s10 -p/TLS2/Testing
```

- p.1934 の「[コマンドラインからのシミュレートテープライブラリの管理](#)」を参照してください。

表 X-6 Tape Library Simulator Utility 用のコマンドラインスイッチ

スイッチ	説明
-p<path>	シミュレートテープライブラリのディレクトリのパスを指定します。パスがない場合は、ユーティリティが作成します。パスの最大サイズは 512 文字です。
-s<number of slots>	このシミュレートテープライブラリのスロット数を指定します。スロット数は 1 から 50 の範囲で指定できます。デフォルトの数は 20 です。
-r	情報が表示されないようにします。
-l	Remote Media Agent 用に存在するシミュレートテープライブラリを一覧表示します。
-d -p<path>	削除するシミュレートテープライブラリのパスを指定します。
-h	オンラインヘルプを表示します。

Remote Media Agent for Linux Servers のアンインストール

Remote Media Agent for Linux Servers をアンインストールする前に、シミュレートテープライブラリのファイルの場所を書き留めてください。その後、アンインストール操作が完了したら、シミュレートテープライブラリのすべてのファイルを削除できます。これらのファイルを削除するとき、Linux サーバーに保存したバックアップデータを削除します。

p.1936 の「[シミュレートテープライブラリのファイルの検索](#)」を参照してください。

メモ: **Remote Media Agent for Linux Servers** をアンインストールするには Backup Exec のインストールメディアが必要です。

Remote Media Agent for Linux Servers をアンインストールする方法

- 1 Linux サーバーで、適切なデバイスに Backup Exec のインストールメディアを配置します。
- 2 **Remote Media Agent for Linux Servers** をアンインストールしたいサーバーに root としてログオンします。
- 3 インストールメディアの次のパスに移動します。

<LinuxUnixMac>

- 4 **uninstallrmal** スクリプトを開始します。

次に例を示します。

```
./uninstallrmal
```

- 5 次のいずれかを実行します。

1 つのサーバーから Remote Media Agent をアンインストールする方法 Linux サーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。

複数のサーバーから Remote Media Agent をアンインストールする方法 Linux サーバーの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名を入力します。各識別子の間にスペースを入れてください。

- 6 **Enter** キーを押します。

- 7 Remote Media Agent パッケージの確認が正常に完了したら、**Enter** キーを押します。

- 8 Remote Media Agent パッケージをアンインストールするか確認するメッセージが表示されたら、アンインストールの概略を保存し、次の場所にログ記録するために **Enter** キーを押します:

```
/var/tmp/vxif/uninstallrmalsummary file number.log
```

- 9 手動でシミュレートテープライブラリのファイルを削除します。

シミュレートテープライブラリのファイルの検索

Remote Media Agent for Linux Servers をアンインストールする前に、シミュレートテープライブラリのファイルの場所を書き留めてください。その後、**Remote Agent** をアンインストールしたら、シミュレートテープライブラリのすべてのファイルを削除できます。これらのファイルを削除するとき、Linux サーバーに保存したバックアップデータを削除します。

p.1935 の「[Remote Media Agent for Linux Servers のアンインストール](#)」を参照してください。

p.1929 の「[Tape Library Simulator Utility について](#)」を参照してください。

シミュレートテープライブラリのファイルを検索する方法

- 1 シミュレートテープライブラリのファイルを検索するサーバーに **root** としてログオンします。
- 2 **Tape Library Simulator** を含んでいる次のディレクトリに移動します:

```
/opt/VRTSralus/bin
```

次に例を示します。

```
cd /opt/VRTSRALus/bin
```


- 3 シミュレートテープライブラリのファイルとフォルダを一覧表示するために **mktls** ユーティリティを起動します。

次に例を示します。

```
/opt/VRTSralus/bin/mktls -l
```

- 4 シミュレートテープライブラリのファイルのディレクトリの場所を書き留めます。

Remote Media Agent for Linux Servers のトラブルシューティング

Remote Media Agent に問題があったら、次の質問と回答を参照してください。

表 X-7 Remote Media Agent for Linux Servers のトラブルシューティング

質問	回答
Remote Media Agent で接続デバイスが検出されません。どのように対処すればよいでしょうか？	<p>最初に、Backup Exec と Remote Media Agent for Linux Servers がデバイスをサポートすることを確認してください。</p> <p>互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。 http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2</p> <p>デバイスがハードウェア互換性リストに表示されていたら、次のことを確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オペレーティングシステムがデバイスを検出する ■ デバイスが <code>/proc/scsi/scsi</code> に表示されている <p>オペレーティングシステムでデバイスを検出できる場合は、デバイスが <code>/etc/VRTSralus/TILDBG.TXT</code> にリストされていることを確認してください。</p>

質問	回答
<p>Backup Exec メディアサーバーで Remote Media Agent に接続するデバイスが表示されません。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>次の手順を試みてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンが実行されていることを確認してください。実行されていない場合は、デーモンを起動し、サーバーの電源が入っていること、すべてのケーブルが正しく接続されていることを確認します。 ■ Remote Media Agent のプロパティが正しいポートに設定されていること、ICMP ping 操作が有効であることを確認してください。 ■ Remote Media Agent がメディアサーバーに追加された後 Backup Exec サービスが再起動されることを確認してください。利用可能なデバイスは Remote Media Agent ノードの下に表示されます。 <p>p.1925 の「Remote Media Agent for Linux Servers のプロパティの編集」を参照してください。</p> <p>p.1855 の「Remote Agent for Linux or UNIX Servers デーモンの起動」を参照してください。</p>
<p>どうして[すべてのデバイス]デバイスプールにリモートデバイスが表示されないのでしょうか？</p>	<p>デフォルトで、Backup Exec は[すべてのデバイス]デバイスプールにリモートデバイスを含めません。Remote Media Agent に接続するデバイスごとに別のデバイスプールを作成することをお勧めします。</p> <p>p.1927 の「Remote Media Agent for Linux Servers に接続されたデバイスのためのデバイスプールの作成について」を参照してください。</p>

質問	回答
<p>Remote Media Agent がリモートコンピュータで実行されません。どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>Remote Media Agent がサポート対象のバージョンの Linux にインストールされていることを確認してください。</p> <p>互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1</p> <p>サポートされていないバージョンの Linux に Remote Media Agent をインストールすると、Remote Media Agent は使用できません。Linux サーバーに接続されたデバイスで実行するジョブは作成できません。ただし、Remote Agent for Linux or Unix Servers コンポーネントを使用して Linux サーバーをバックアップできます。このコンポーネントは Remote Media Agent とともにインストールされます。</p> <p>Remote Agent for Linux or Unix Servers のコンポーネントを使って Linux サーバーをバックアップするには、次の手順を実行してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ralus.cfg ファイルを編集します。 ■ 文字列 Software¥Symantec¥Backup Exec for Windows¥Backup Exec¥Engine¥RMAL¥DisableRMAL=0 で 0 を 1 に変更します。 <p>p.1833 の「Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの設定オプションの編集」を参照してください。</p> <p>p.794 の「BEGather ユーティリティの実行による Linux サーバーの Backup Exec コンポーネントのトラブルシューティング」を参照してください。</p>
<p>Remote Media Agent をロードできません。/beremote --log-console と入力してコンソールモードで Remote Media Agent をロードしようとすると、次のメッセージが表示されます。</p> <p>Error while loading shared libraries: libstdc++.so.5: cannot open shared object file: No such file or directory.</p> <p>どのように対処すればよいでしょうか？</p>	<p>このエラーは、libstdc++.so.5 ライブラリが /usr/lib ディレクトリに存在しないことを示します。このライブラリは、Remote Media Agent を起動して機能させるために必要です。この問題を解決するには、libstdc++.so.5 パッケージをインストールします。このパッケージは、Linux が提供されたメディアからインストールできます。または、インターネットに接続できるコンピュータで次のコマンドを実行できます。</p> <pre>apt-get install libstdc++5</pre> <p>SUSE Linux Enterprise Server 11 の場合は、次のコマンドを実行します。</p> <pre>zypper install libstdc++5</pre>

Symantec Backup Exec SAN Shared Storage Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- [SAN Shared Storage Option](#) について
- [SAN Shared Storage Option](#) 使用上の必要条件
- [SAN Shared Storage Option](#) のインストールについて
- [SAN Shared Storage Option](#) のデバイスについて
- [SAN Shared Storage Option](#) での新しいプライマリデータベースサーバーの指定とサーバーの設定について
- [SAN Shared Storage Option](#) での障害が発生したコンポーネントのトラブルシューティング
- [SAN Shared Storage Option](#) に関する推奨事項

SAN Shared Storage Option について

Symantec Backup Exec SAN Shared Storage Option (SSO) を使うと、複数のメディアサーバーで、ロボットライブラリなどのセカンダリストレージデバイスを SAN 内で共有することができます。セカンダリストレージデバイスは、SCSI によって単一のサーバーに直接接続されるのではなく、ファイバーチャネル交換装置 (FC-SW) または iSCSI に接続されます。

複数のメディアサーバー間で、ストレージデバイスとメディアを共有するために、共有の「デバイスとメディアの詳細管理 (ADAMM)」データベースが、「プライマリデータベースサーバー」または「プライマリサーバー」と呼ばれるメディアサーバー上に作成されます。このデータベースには SAN 上のすべてのメディアサーバーが接続され、すべての共有デバイスとメディアを 1 つの統合体と見なすことができるようになります。この共有データ

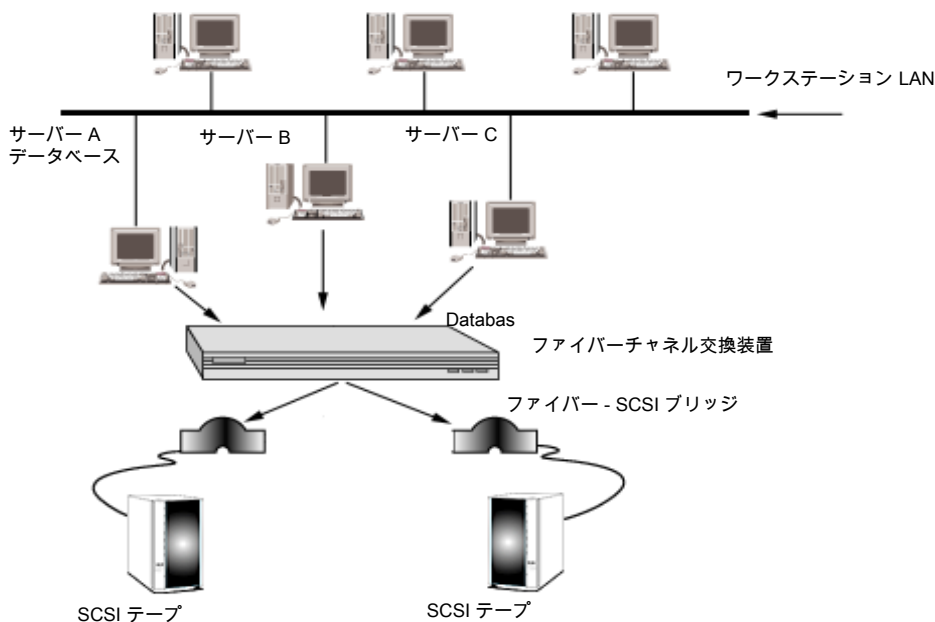
ベースを使用し、デバイスとメディアへのすべての要求の調停を行い、一貫した上書き禁止ポリシーを使用してメディアの上書きを防止します。デバイスで共有が有効になっていると、複数のメディアサーバーでデバイスを共有できます。複数のメディアサーバー間でのアクセスの競合を解決するために、操作の実行時には、ロボットアームとテープデバイスが予約されます。

p.428 の「ストレージの共有について」を参照してください。

メディアサーバー間でメディアのカatalogが共有されているため、Catalogを共有している任意のメディアサーバーを使用してリストアジョブを実行することができます。また、メディアを SAN 上の別のデバイスに移動する必要がある場合でも、Catalog処理を再実行する必要はありません。共有ストレージ環境で、セカンダリストレージデバイスを任意のメディアサーバーの SCSI、SATA、SAS、USB または ATAPI バスにローカル接続することもできます。ただし、これらのローカルデバイス、つまりサーバーに直接接続されているディスクまたはテープドライブは、接続されているサーバーでしか利用できません。SAN Shared Storage Option で使用するストレージデバイスには、製造元が割り当てたシリアル番号が必要です。

共有ストレージ環境で、プライマリデータベースサーバーとメディアサーバーが、FC-SW をまたいでファイバーを通じて SCSI ブリッジ (ルーター) に至り、そこからセカンダリストレージデバイス (SCSI ロボットライブラリ) にデータを転送する例を次に示します。

図 Y-1 SAN Shared Storage Option での FC-SW の使用例



任意のメディアサーバーを使用して、ロボットライブラリおよびドライブの名前をユーザーの操作に対応した名前に変更することができます。

複数の SAN が存在する場合は、ループごとに共有 ADAMM データベースおよび共有カタログを格納する専用の Backup Exec データベースサーバーを使用し、各 SAN を個別に扱うことをお勧めします。複数の SAN に対して 1 つの Backup Exec データベースサーバーを使用した場合、ある 1 か所の障害がシステム全体に影響を与える可能性が増大します。

ジョブについての統計情報やエラーは、ジョブを実行したサーバーに接続されているいずれの管理コンソールでも表示することができます。

p.1947 の「[SAN Shared Storage Option でのメディアの共有について](#)」を参照してください。

p.1948 の「[SAN Shared Storage Option でのスケジュールの設定とジョブの表示について](#)」を参照してください。

p.1943 の「[SAN Shared Storage Option 使用上の必要条件](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option 使用上の必要条件

このバージョンの SAN Shared Storage Option を実行するシステムの最小必要条件を次に示します。

- Windows Server 2003/2008 がインストールされている必要があります。Windows Server 2008 の Windows Server Core インストールオプションとともに SAN SSO を使用することはできません。
- Windows のタスクマネージャに表示される利用可能な物理メモリと、ファイルキャッシュの合計が、256 MB 以上必要です。
- SAN Shared Storage Option は、セカンダリストレージデバイスを共有する各サーバー上に、ローカルにインストールする必要があります。
- SAN 内で使用されているデバイスが、サポート対象デバイスリストに掲載されている必要があります。
互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。
<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-2>
- すべてのハードウェアドライブが最新バージョンで、動作している必要があります。
次の URL で互換性のあるドライブのリストを参照できます。
<http://entsupport.symantec.com/rd/bews-drivers.htm>
- プライマリサーバーに、SAN 内のすべてのサーバーのカタログ用に必要な空き領域が存在している必要があります。

ファイバーチャネル接続の場合は、次の事項も必要です。

- ファイバーチャネルのホストアダプタと、そのデバイスドライバをインストールし、SAN に接続します。
- SAN 上のすべてのファイバー - SCSI ブリッジまたはファイバーライブラリを、ハブまたはスイッチに接続します。
- すべてのロボットライブラリを SCSI ブリッジ、ファイバースイッチまたはファイバーハブに接続します。
- ハブまたはスイッチの電源をオンにしてから、ブリッジまたはファイバーチャネルライブラリの電源をオンにします。
- すべてのロボットライブラリの電源をオンにしてから、ブリッジの電源をオンにします。
- Windows がファイバーチャネルのドライバをロードする前に (通常はブート時)、ブリッジの電源をオンにします。

メモ: SAN Shared Storage Option がメディアサーバーにインストールされている場合、Backup Exec によって、ファイバーチャネルに接続されているすべてのデバイスが、リムーバブル記憶域で無効に設定されます。SAN Shared Storage Option および Symantec デバイスドライバをアンインストールしない限り、ファイバーチャネル接続デバイスをリムーバブル記憶域で使用することはできません。

p.1944 の「[SAN Shared Storage Option のインストールについて](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option のインストールについて

プライマリサーバーとして指定するサーバーに Backup Exec SAN Shared Storage Option をインストールする必要があります。その後に Backup Exec Shared Storage Option を他のサーバーにインストールできます。共有 ADAMM データベースの存在するサーバーが動作していない場合、他のメディアサーバーに正しくインストールすることはできません。

最高のパフォーマンスを得るには、Backup Exec 以外のタスクの負荷が少ない SAN 上の最も高速のサーバーに、共有 ADAMM データベースおよびカタログデータベースをインストールします。

Backup Exec のインストール時に SAN Shared Storage Option をインストールすることができます。

p.107 の「[ローカルコンピュータへの Backup Exec のインストール](#)」を参照してください。

すでに Backup Exec がインストールされている場合は、追加オプションをインストールできます。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

SAN 内の最初のサーバーをインストールする場合は、**Shared Storage Option** の種類としてプライマリを選択します。**Backup Exec** のデバイスドライバは **Backup Exec** と同時にインストールできます。

SAN Shared Storage Option がプライマリサーバーにすでにインストールされていて、セカンダリサーバーにインストールする場合は、[セカンダリ]を選択し、**Backup Exec** データベースサーバーの名前を入力します。

プライマリデータベースサーバーに **Backup Exec** をインストールしたら、データベースサーバーを再起動します。**Backup Exec** を他のサーバーにロードする前に **Backup Exec** がすべてのデバイスを検出することを確認する必要があります。共有 **ADAMM** データベースの存在するサーバーが動作していない場合、他のメディアサーバーに正しくインストールすることはできません。

Backup Exec を初めて実行するときは、[ホーム]ビューの[始めましょう]項目を使って環境設定を構成します。[始めましょう]項目は、ログオンアカウント、デバイス、メディアセットを設定するときに使うことができる一連の手順を提供します。画面の案内に従って必要な情報を入力し、**Backup Exec** を使用する準備を行ってください。メディアは **SAN** 全体で共有されるため、[上書き禁止レベル]オプションを設定することが重要です。

メモ: **Backup Exec** をアンインストールする場合は、セカンダリサーバーからアンインストールした後で、プライマリサーバーからアンインストールする必要があります。

p.159 の「[Backup Exec のアンインストール](#)」を参照してください。

p.1948 の「[SAN Shared Storage Option でのスケジュールの設定とジョブの表示について](#)」を参照してください。

p.1965 の「[SAN Shared Storage Option に関する推奨事項](#)」を参照してください。

p.398 の「[ファイアウォールで保護された SQL インスタンスの有効化について](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option のデバイスについて

Backup Exec サービスを起動すると、すべてのローカルストレージデバイスおよび **SAN** 上のストレージデバイスが認識されます。ナビゲーションバーの[デバイス]を選択しても、接続されているストレージデバイスまたは共有ストレージデバイスが表示されない場合は、テープデバイス設定ウィザードを使用します。ウィザードの画面の案内に従って作業することで、システムに接続されているストレージハードウェアに適したドライバをインストールすることができます。

p.437 の「[テープデバイス設定ウィザードを使用したテープデバイスの設定について](#)」を参照してください。

Backup Exec が ADAMM.log ファイルで認識するデバイスのリストを表示することもできます。ADAMM.log ファイルのデフォルトパスは、¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Logs です。

メモ:ファイバーチャネル交換装置(FC-SW)に接続されているすべてのデバイスを Backup Exec で認識するには、SAN Shared Storage Option がインストールされている必要があります。FC-SW とは、ファイバーチャネルスイッチを使用してネットワーク内でデバイスが接続されているファイバーチャネル構成です。

ストレージデバイスは、ロボットライブラリまたはスタンドアロンドライブのいずれかに分類されます。複数のテープドライブを持つロボットライブラリをサポートするには Library Expansion Option が必要です。

p.437 の「[Library Expansion Option について](#)」を参照してください。

p.164 の「[ライセンス情報の表示](#)」を参照してください。

Backup Exec のインストール後に新しいデバイスを SAN に追加する必要がある場合は、ストレージネットワークの製造元の指示に従ってください。新しいデバイスの追加後に、ADAMM データベースが存在するプライマリサーバーを再ブートし、新しいデバイスが認識されていることを確認します。新しいデバイスはデバイス検出処理が完了するまで [デバイス] ビューでオフラインになっているように表示される場合があります。ストレージネットワークベンダーの手順に従って他のメディアサーバーを再ブートする必要があります。ベンダーによっては、複数のサーバーの同時ブートまたはアクティブなジョブを実行中のサーバーのブートをサポートしていません。

Backup Exec のデバイス管理機能には、SAN 上のセカンダリストレージユニット用の次の機能が含まれています。

- デバイスの割り当て:共有セカンダリバックアップデバイスをジョブで使用するには、まずそのデバイスを予約する必要があります。ジョブで予約したドライブは、そのジョブが完了するまで予約が解除されません。ジョブが完了すると、ドライブの予約は解除され、他のジョブで予約することができます。
- ドライブプール:ドライブプールはバックアップの宛先として 1 つ以上のドライブをまとめたもので、これに対してドライブを割り当てることができます。特定のドライブプールにサブミットされたジョブは、そのプール内で利用できる最初のドライブ上でサブミットされます。ドライブプール内の特定のドライブにジョブをサブミットすることもできます。

p.1955 の「[SAN Shared Storage Option 環境でドライブプールを使用する方法](#)」を参照してください。

p.1954 の「[SAN Shared Storage Option 環境における「デバイスの管理」の使用について](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option でのメディアローテーションについて

メディアのローテーションジョブは、バックアップジョブと同様に処理されます。メディアのローテーションジョブにスケジュールを設定し、ローカルデバイスや共有ストレージデバイスなどのアクセス可能な任意のデバイス上で実行することができます。別のサーバーのローカル SCSI バスに接続されているテープドライブなど、アクセスできないデバイス上でメディアのローテーションジョブを実行するようにスケジュールを設定することはできません。

メディアのローテーションジョブのスケジュール設定時刻にすべての利用可能デバイスが使用中の場合、ジョブはキューに追加されます。

共有ストレージ環境でメディアセットウィザードを使用するには、次のいずれかの戦略を使用する必要があります。

- メディアセットウィザードの使用を単一のメディアサーバーに制限する。
- 共有ストレージ環境のメディアサーバー上でメディアセットウィザードを使用するときは、すべてのサーバーで常に同一の上書き禁止期間と完全バックアップの日付を使用する。
- ジョブを編集して、メディアセットウィザードを使用して作成したメディアセットの名前を変更し、ジョブとメディアセットがサーバー単位になるようにする。

p.1948 の「[SAN Shared Storage Option でのスケジュールの設定とジョブの表示について](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option でメディアをカタログ登録する方法

SAN Shared Storage Option では、共有カタログデータベースが使用されます。カタログ登録済みのテープを別のデバイスに物理的に移動しても、カタログの再登録は不要です。

セカンダリサーバーがカタログ情報を生成したときにネットワーク上でプライマリサーバーが利用できなかった場合、その情報は、自動カタログ同期が発生するまで一時的にセカンダリサーバーに保存されます。

カタログが共有されているため、テープが存在するデバイスにアクセスできる任意のサーバーを使用して情報をリストアすることができます。テープが共有デバイスまたはリストアを実行するサーバー上のローカルデバイスに存在する場合は、そのままリストアジョブを開始してください。その他の場合は、アクセス可能なドライブにテープを移動する必要があります。

p.232 の「[新しいカタログの作成](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option でのメディアの共有について

Backup Exec メディアサーバーは、共有ストレージデバイス内のメディアを共有することができますが、他のサーバーと同時に使用することはできません。たとえば、メディアサー

サーバー A はあるメディアにバックアップを書き込むことができ、そのジョブが完了すると、メディアサーバー B が別のバックアップを同じメディアに追記することができます。また、上書きが可能な場合には、メディアサーバー B がそのメディアに上書きすることができます。

メディアセットはサーバー単位ではありません。共有デバイス環境では、すべてのユーザーがすべてのメディアおよびメディアセットを表示することができます。各メディアセットには、共有デバイス内のメディアおよび各サーバーに接続されているローカルデバイス内のメディアを含めることができます。

メモ: メディアの上書き禁止のデフォルト設定は、サーバー単位で設定されるわけではありません。このオプションは共有 ADAMM データベース内に設定されるため、ローカル接続されているデバイス内のメディアを含め、すべてのメディアに適用されます。たとえば、あるサーバーで[メディアの上書き禁止]オプションを[なし]に設定した場合、他のサーバーにローカル接続されているデバイスを含め、共有ストレージ環境内のすべてのメディアも同時に上書き可能になります。

ローカル接続されたセカンダリストレージデバイス内のメディアには、他のメディアサーバーからアクセスすることはできません。

SAN Shared Storage Option でのスケジュールの設定とジョブの表示について

SAN Shared Storage Option を使用してバックアップジョブおよびリストアジョブを作成する方法は、非共有環境でジョブを作成する方法と同様です。テスト実行ジョブ、リソース検出ジョブおよびバックアップデータ複製ジョブも作成できます。

SAN Shared Storage Option では、SAN 上のサーバーにあるスケジュールの設定されているジョブを集中的に表示することはできませんが、ジョブをサブミットしたメディアサーバー上のスケジュール済みジョブ、実行中のジョブおよび完了ジョブは、ナビゲーションバーの[ジョブモニター]を選択して、いつでも表示することができます。

メモ: ストレージデバイスを待機しているジョブの場合、ジョブモニターの[デバイス名]には何も表示されません。また、ジョブの状態が[キューに格納]と表示されている場合、そのジョブは、ストレージデバイスが利用できるようになるのを待機しています。

SAN Shared Storage Option を使用している場合は、すべてのメディアサーバーが、共有 ADAMM データベースを通じてストレージデバイスへのアクセスを共有します。先にストレージデバイスを予約したサーバーが先にジョブを実行します。したがって、すべてのストレージデバイスが他のサーバーによって使用されているときは、スケジュールの設定されているジョブがスケジュールどおりに実行されない場合があります。

サーバーがデバイスの制御を解放して次のジョブを検索するまでに、短い遅延が発生します。他のメディアサーバーはこの遅延時間を利用して、解放された共有ストレージデバイスを予約します。

1 回だけ実行されるジョブの実行中にデバイスに障害が発生した場合は、そのジョブは失敗し保留されます。繰り返し実行されるジョブの実行中にデバイスに障害が発生しても、ジョブのスケジュールは変更されません。デバイスは解放され、次に実行が予定されているジョブに割り当てられます。ただし、デバイスに障害の発生した理由によっては、次のジョブはトラップされることがあります。トラップが発生すると、後続のジョブは、そのデバイスの認識、正常な処理の完了および失敗後のスケジュールの保留などを行うことができません。デバイスが正しく動作してないと判断される場合は、ジョブを別のドライブに割り当てるか、障害の発生したドライブを速やかに交換し、保留されているジョブを再開してください。

p.562 の「[完了ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

Backup Exec for NetWare Servers と Backup Exec 間におけるロボットライブラリの共有について

同一のファイバー環境内の Backup Exec for NetWare Servers と Backup Exec SAN Shared Storage Option でロボットライブラリを共有し、ハードウェアコストを削減することができます。ロボットライブラリを共有するには、まず、Backup Exec でロボットライブラリのパーティションを作成します。次に、同じロボットライブラリに、Backup Exec for NetWare Servers で使用するパーティションを追加で作成します。

NetWare サーバーは NetWare コンソールで、Windows サーバーは Windows コンソールでそれぞれ表示します。Backup Exec for NetWare Servers のジョブのターゲットを Backup Exec のジョブ用のドライブに指定しても、そのドライブは予約済みとして表示されます。

p.1949 の「[ロボットライブラリ共有の前提条件について](#)」を参照してください。

p.1950 の「[ロボットライブラリ共有用の Windows メディアサーバーのパーティション設定](#)」を参照してください。

ロボットライブラリ共有の前提条件について

ライブラリを共有するための前提条件を次に示します。

- Windows メディアサーバーに Backup Exec がインストールされていること。
- NetWare メディアサーバーに、Backup Exec for NetWare Servers バージョン 9.0 以上がインストールされていること。
- 共有環境で使用する各 Windows メディアサーバーに、Backup Exec SAN Shared Storage Option がインストールされていること。

- 共有環境で使用する各 NetWare メディアサーバーに、Backup Exec for NetWare Servers SAN Shared Storage Option がインストールされていること。
- Backup Exec Library Expansion Option または Backup Exec for NetWare Servers Library Expansion Option がインストールされていること。

メモ: この実装では、ロボットライブラリ用のドライブライセンスは特定のプラットフォームに制限されません。たとえば、10 台のドライブを備えたロボットライブラリを共有する場合は、Backup Exec または Backup Exec for NetWare Servers 用のドライブライセンスが 9 つ必要です (ロボットライブラリの 1 番目のドライブには、Library Expansion Option ライセンスは必要ありません)。

ロボットライブラリを正しく共有するには、Backup Exec と Backup Exec for NetWare Servers の両方についての実務的な知識が必要です。また、必要なハードウェアに完全にアクセスでき、メディアサーバーを再起動できる必要があります。

実際にロボットライブラリの共有設定を実行する前に、共有環境でのロボットライブラリの使用方法を検討しておきます。たとえば、ロボットライブラリに 100 のスロットが存在する場合は、Backup Exec と Backup Exec for NetWare Servers で 50 スロットずつ使用するように、ロボットライブラリのパーティションを作成することができます。各オペレーティングシステムで使用するスロット数の決定には、メディアローテーション方式、保護対象のサーバー数および各サーバーに格納されているデータの種類などの要因を考慮します。

オペレーティングシステムまたは Backup Exec の種類に対応したラベルをメディアに貼り付けます。Backup Exec と Backup Exec for NetWare Servers のどちらで使用しているテープかを識別できるように、色別のラベルまたは一意のバーコードを貼り付けることをお勧めします。このようにしておけば、データをリストアしたり、メディアをメディアのローテーションスケジュールに戻す必要があるときに、簡単にメディアを識別することができます。

ロボットライブラリ共有用の Windows メディアサーバーのパーティション設定

ロボットライブラリ共有用に Windows メディアサーバーを設定する前に、現在バックアップ処理が行われていないことを確認する必要があります。

ロボットライブラリ共有用にすべてのメディアサーバーが設定されるまで、ファイバー処理またはバックアップジョブは実行しないようにします。

ロボットライブラリ共有用に Windows メディアサーバーのパーティションを設定する方法

- 1 SAN Shared Storage Option がインストールされている Windows サーバーで、Backup Exec 管理コンソールを開きます。
- 2 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
ツリーペインに、ファイバー接続またはローカル接続されているすべてのデバイスが一覧表示されます。
- 3 共有するロボットライブラリを選択します。
- 4 タスクペインの[ロボットライブラリタスク]の下にある[パーティションの設定]を選択します。
p.462 の「[パーティションを設定]オプション」を参照してください。
- 5 パーティションを作成します。
p.459 の「ロボットライブラリのパーティションについて」を参照してください。
- 6 [デバイス]ツリーペインで、このパーティション内のドライブのうち Backup Exec メディアサーバーで使用しないドライブを選択します。
- 7 使用しないパーティションでジョブが実行されないように、使用しないドライブを削除します。
- 8 使用しないパーティション内のすべてのドライブに対して、手順 6 から手順 7 を繰り返します。
- 9 他の Windows サーバーをすべて再起動し、各サーバーで共有ロボットライブラリを参照できることを確かめます。

ロボットライブラリ共有用の NetWare メディアサーバーのパーティション設定

ロボットライブラリ共有用に NetWare メディアサーバーを設定する前に、現在バックアップ処理が行われていないことを確認する必要があります。Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールまたは NetWare の管理コンソールを使って、ロボットライブラリのパーティションを設定できます。

表 Y-1 ロボットライブラリ共有用の NetWare メディアサーバーのパーティション設定

手順	処理
手順 1	<p>サーバーに接続されていること、およびパーティション管理機能が有効になっていることを確認してください。</p> <p>詳しくは『Symantec Backup Exec for NetWare Servers』の SAN Shared Storage Option の使用に関する記載を参照してください。</p>
手順 2	<p>既存のパーティションを削除します。</p> <p>次のいずれかを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ p.1952 の「Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールからのロボットライブラリのパーティションの削除」を参照してください。 ■ p.1953 の「NetWare の管理コンソールからのロボットライブラリのパーティションの削除」を参照してください。
手順 3	<p>パーティションを作成します。</p> <p>次のいずれかを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ p.1953 の「Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールによるロボットライブラリのパーティションの作成」を参照してください。 ■ p.1954 の「NetWare の管理コンソールによるロボットライブラリのパーティションの作成」を参照してください。
手順 5	<p>グループのサーバー上の Backup Exec for NetWare Servers を再起動し、各サーバーで共有ライブラリが認識されていることを確認します。</p>

Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールからのロボットライブラリのパーティションの削除

Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールを使って、ロボットライブラリのパーティションを削除できます。

Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールからのパーティションの削除

- 1 [ドライブ]をクリックします。
- 2 [パーティション]をクリックします。
- 3 削除するパーティションを右クリックし、[削除]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

NetWare の管理コンソールからのロボットライブラリのパーティションの削除

NetWare の管理コンソールを使って、ロボットライブラリのパーティションを削除できます。

NetWare の管理コンソールからのパーティションの削除

- 1 [Drives]を選択します。
- 2 [Partitions]を選択します。
- 3 削除するパーティションを選択して Delete キーを押します。
- 4 Y キーを押します。

Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールによるロボットライブラリのパーティションの作成

Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールを使って、共有ライブラリにロボットライブラリパーティションを作成できます。

Backup Exec for NetWare Servers 管理コンソールによるロボットライブラリのパーティションの作成

- 1 管理コンソールの[ドライブ]をクリックします。
- 2 [パーティション]を右クリックします。
- 3 [パーティションの作成]をクリックします。
- 4 [パーティションの作成]ダイアログボックスにオプションを入力します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 [パーティションの作成]ダイアログボックスの[一般]タブのオプションを設定します。
- 7 [パーティションの作成]ダイアログボックスの[設定]タブのオプションを設定します。
- 8 [OK]をクリックします。

NetWare の管理コンソールによるロボットライブラリのパーティションの作成

NetWare の管理コンソールを使って、共有ライブラリにロボットライブラリパーティションを作成できます。

NetWare の管理コンソールによるロボットライブラリのパーティションの作成

- 1 NetWare 用管理コンソールで、[Drives]を選択します。
- 2 [Partitions]を選択します。
- 3 [Insert]を押します。
- 4 このパーティションに追加するドライブを選択します。
- 5 [Configuration]を選択して Enter キーを押し、[Configuration]ダイアログボックスのオプションを表示または編集します。
- 6 [General]ダイアログボックスに戻るには、F2 キーを押します。
- 7 F2 キーを押します。

SAN Shared Storage Option 環境における「デバイスの管理」の使用について

「デバイスの管理」を使用して、メディアサーバーに接続されている物理ドライブを管理し、ドライブ内のメディアに対していくつかの操作を実行することができます。ドライブの削除、ドライブの停止と停止の解除、ドライブのインベントリの実行、メディアのカatalog登録、メディアのラベル付けおよびメディアの消去などの手順は、共有デバイス環境でも変わりません。

p.1948 の「[SAN Shared Storage Option でのスケジュールの設定とジョブの表示について](#)」を参照してください。

p.1945 の「[SAN Shared Storage Option のデバイスについて](#)」を参照してください。

p.1947 の「[SAN Shared Storage Option でのメディアの共有について](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option でのロボットライブラリおよびドライブの名前の変更について

サーバーの名前は変更できませんが、ロボットライブラリとドライブの名前は簡単に識別できる名前に変更することができます。ジョブの内容を表す名前を使用したり、DATA_CENTER_ROBOTICLIBRARY のような、ユーザーや場所によってデバイスを識別する名前を使用することができます。

ナビゲーションバーで[デバイス]を選択すると、SAN に接続されているすべてのデバイスの名前が表示されます。手動で画面の表示を更新するには、F5 キーを押します。

ロボットライブラリとドライブの名前は、ADAMM データベースを共有している任意のサーバーを使用して変更することができます。新しい名前は、SAN 上のすべてのサーバーに表示されます。

メモ: Backup Exec 管理コンソールの [デバイスの管理] ウィンドウに名前が表示されていない場合は、手動で表示を更新してください。

p.430 の「[ストレージデバイスの一時停止](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option 環境でドライブプールを使用する方法

Backup Exec をインストールすると、「すべてのデバイス (<サーバー名>)」がデフォルトで作成されます。非共有ストレージ環境では、このデフォルトのドライブプールには、サーバーにローカル接続されているドライブが含まれます。共有環境では、このデフォルトのドライブプールは、SAN Shared Storage Option を使用しているサーバーごとに作成され、ローカル接続されたデバイスと共有デバイスの両方が含まれます。

共有デバイスのみを含む共有ストレージドライブプールを作成することをお勧めします。

p.504 の「[デバイスプールの作成](#)」を参照してください。

必要に応じて、他のドライブプールを作成することができます。たとえば、ドライブの性能によってドライブプールを分けると便利な場合があります。優先度の高いジョブを高性能ドライブ用のドライブプールで処理すると、より短時間でジョブを完了することができます。

同一のドライブを複数のドライブプールに所属させたり、異なる種類のドライブでドライブプールを構成することもできます。共有デバイス環境では、ローカルドライブと共有ドライブの両方をドライブプール内に収容できますが、ジョブは、サーバーからアクセスできるプール内のドライブでのみ実行されます。

たとえば、メディアサーバー A とメディアサーバー B の両方のローカルドライブでドライブプールを構成したとします。このドライブプールにメディアサーバー B でジョブをサブミットした場合、そのジョブは、サーバー B に接続されている利用可能なドライブでのみ実行されます。サーバー B に接続されているすべてのドライブが使用中の場合、ジョブは、サーバー B のいずれかのドライブが利用できるようになるまで待機する必要があります。サーバー B で、そのローカルデバイスと共有デバイスの両方で構成したドライブプールにジョブをサブミットした場合は、ジョブは最初に利用可能なドライブ上で実行されます。

ドライブプールの作成と削除、ドライブプールに対するドライブの追加または削除、ドライブプール内のドライブの優先度の設定などの手順は、共有デバイス環境でも変わりません。

SAN Shared Storage Option でのメディアの表示について

[デバイス]ビューでドライブを選択するか、[スロット]を選択すると、選択したドライブまたはスロットに装着されているメディアについての情報が、右側のペインに表示されます。この情報は、[メディア]ビューで[すべてのメディア]を選択したときにも表示されます。

p.245 の「メディアの[一般]プロパティ」を参照してください。

p.1955 の「SAN Shared Storage Option 環境でドライブプールを使用する方法」を参照してください。

p.1954 の「SAN Shared Storage Option 環境における「デバイスの管理」の使用について」を参照してください。

p.1948 の「SAN Shared Storage Option でのスケジュールの設定とジョブの表示について」を参照してください。

SAN Shared Storage Option でデバイスを監視する方法

ナビゲーションバーの[デバイス]を選択すると、そのサーバーに接続されているすべての物理ドライブと、それらが関連付けられている論理グループを表示することができます。[ドライブプール]の下に、物理ドライブの論理グループのすべてと、SAN 上のすべてのサーバーに SCSI、SATA、SAS、USB または ATAPI でローカル接続されているデバイスおよび SAN を通じてアクセスされるセカンダリストレージユニットも表示されます。

[すべてのデバイス]を展開すると、SAN 上のすべてのストレージデバイスを表示することができます。ロボットライブラリは、直接接続されていない場合でも、そのロボットライブラリへのアクセス権限のある各サーバーの下に一覧表示されます。

[デバイスの概略]レポートを実行し、SAN Shared Storage Option のドライブを表示することもできます。

共有デバイスのドライブのプロパティを表示することができます。

p.442 の「ストレージデバイスのプロパティの表示」を参照してください。

共有デバイスの場合、デフォルトで、[1 ブロックずつデータを書き込む]および[SCSI パススルーモードでデータを書き込む]オプションが選択されています。これらのオプションを選択すると、データの重要なブロックが欠落する可能性が減少し、書き込みエラーが発生した場合も詳細な情報を取得することができます。FC 接続のテープドライブの場合、これらのオプションは必須です。

p.744 の「[ポリシージョブの概略]レポート」を参照してください。

SAN Shared Storage Option での新しいプライマリデータベースサーバーの指定とサーバーの設定について

Backup Exec ユーティリティ (Beutility.exe) を使用して SAN Shared Storage Option の設定を変更することができます。このユーティリティでは新しいプライマリデータベースサーバーを指定できます。

次の理由で、プライマリデータベースサーバーの交換が必要な場合があります。

- 新しい高速のサーバーが利用できるようになった。
- データベースサーバーが故障した。

現在のサーバーが稼動している場合は、新しいシステムに SAN Shared Storage Option をインストールするときに、現在のプライマリサーバーを指定することをお勧めします。これによって、新しいデータベースサーバーとして指定する前にファイバー接続をテストすることができます。現在のデータベースサーバーが動作していない場合は、新しいシステムをプライマリデータベースサーバーとしてインストールすることをお勧めします。

詳しくは『Backup Exec ユーティリティ』を参照してください。

SAN Shared Storage Option での Backup Exec データベースサーバーと共有 ADAMM データベースの管理について

ADAMM データベースと Backup Exec データベースサーバーは、SAN Shared Storage Option の重要なコンポーネントです。ADAMM データベースとカタログデータベースを保護するために、プライマリサーバー上の Backup Exec ディレクトリツリー全体をバックアップするジョブを頻繁に実行する必要があります。

メモ: また、各セカンダリサーバーには、他のサーバーから独立した独自のローカル Backup Exec データベースインスタンスがあります。サーバーについてのデータが含まれているので、セカンダリサーバーの Backup Exec データベースインスタンスを必ずバックアップしてください。

データベースサーバーの Backup Exec ディレクトリのバックアップの頻度は、バックアップセットを作成する頻度と、SAN 上のすべてのメディアサーバーの影響を受けるテープの数を基準にして設定します。データベースサーバー上の情報がすべて失われた場合は、共有データベースまたはカタログサーバーの最後のバックアップ以降に変更されたすべてのバックアップセットおよびテープのカタログを再登録する必要があります。

プライマリサーバー上の Backup Exec ディレクトリツリーおよび Windows オペレーティングシステムのバックアップ専用の特別なメディアセットを作成します。これによって、ADAMM データベースおよびカタログのリストアに必要なファイルを検索するために、カタログを登録する必要のあるテープの数を減らすことができます。

注意: これらのファイルを大容量のメディアセットにバックアップした場合、ADAMM データベースおよびカタログのリストアに必要な最新のバックアップファイルを検索するために、その大容量メディアセット内のすべてのテープのカタログを登録することが必要になる場合があります。

プライマリサーバーに障害が発生すると、SAN 上のすべてのサーバーの Backup Exec が使用できなくなります。それぞれの Backup Exec データベースサーバーを保護するために、Intelligent Disaster Recovery Option の使用を強くお勧めします。IDR オプションを使用すると、システム全体が消失した場合でも短時間にシステムをリカバリすることができます。

Backup Exec の可用性を高めるには、ストレージネットワーク上のメディアサーバーの 1 つをスタンバイプライマリサーバーとして設定することをお勧めします。

SAN Shared Storage Option のスタンバイプライマリデータベースサーバーの作成

プライマリサーバーに障害が発生した場合に備えて、スタンバイサーバーを構成し、利用可能にしておく必要があります。プライマリデータベースサーバーに障害が発生した場合にデータが失われないようにするために、スケジュールされている毎日のデータベース保守作業後に、bedb.bak ファイルとカタログディレクトリを別のサーバーに保存することをお勧めします。

次の手順の実行について詳しくは『Backup Exec ユーティリティ』を参照してください。

表 Y-2 SAN Shared Storage Option のスタンバイプライマリデータベースサーバーの作成

手順	処理
手順 1	BEUtility を使用して、新しいプライマリ SAN SSO サーバーを使用するすべての SAN サーバーを追加します。
手順 2	BEUtility を使用して、手順 1 で追加したすべてのサーバーを含むメディアサーバーグループを作成します。 メモ: [グループの作成元]で[SAN SSO の設定]オプションを選択しないでください。
手順 3	BEUtility を使用して、作成したメディアグループで、新しい SAN SSO サーバーをプライマリに指定します。

手順	処理
手順 4	<p>BEUtility を使用して、メディアサーバーグループ内のすべてのメディアサーバーで Backup Exec サービスを停止します。</p>
手順 5	<p>プライマリに指定したメディアサーバーで、 ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Data ディレクトリを参照し、bedb.bak ファイルの名前を、元のファイルであることを示す名前に変更します。</p> <p>たとえば、originalbedb.bak または bedborg.bak とします。</p>
手順 6	<p>元のプライマリサーバーで、¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec¥Data ディレクトリを参照します。bedb.bak ファイルを新しいプライマリサーバー上の同じディレクトリにコピーします。</p> <p>元のプライマリサーバーが利用できない場合は、bedb.bak ファイルの最新のコピーを探し、新しいプライマリサーバーにコピーします。</p>
手順 7	<p>プライマリに指定したメディアサーバーで、 ¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec を参照します。カタログディレクトリの名前を、元のディレクトリであることを示す名前に変更します。</p>
手順 8	<p>元のプライマリサーバーで、¥Program Files¥Symantec¥Backup Exec を参照します。カタログディレクトリを新しいプライマリサーバー上の同じディレクトリにコピーします。</p> <p>元のプライマリサーバーが利用できない場合は、カタログディレクトリの最新のコピーを探し、新しいプライマリサーバーにコピーします。</p>
手順 9	<p>BEUtility を使用して、手順 6 でコピーしたデータベースをリストアします。[既存のデータベースをドロップし、バックアップを再ロードする]オプションを必ず選択してください。</p>
手順 10	<p>BEUtility を使用して、メディアサーバーグループ内のすべてのメディアサーバーで Backup Exec サービスを起動します。</p>

p.1764 の「[Intelligent Disaster Recovery 設定ウィザードについて](#)」を参照してください。

p.593 の「[ジョブのプロパティの設定によるデータのリストア](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option での複数サーバー上の Backup Exec サービスの起動と停止について

システムの保守は、Backup Exec サービスを停止することから始まります。システムの保守が済んだら、再びサービスを起動します。サービスの起動と停止を同時に行うことができます。これを「バウンディング」と呼び、データベースの更新、接続の再確立およびシステムの強制同期を行うことができます。すべてのサーバーの再ブートと同じような効果があります。

p.158 の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option 環境の再設定について

セカンダリサーバーを割り当てるプライマリサーバーを変更することができます。最初に、セカンダリサーバーをスタンドアロンサーバーにする必要があります。スタンドアロンサーバーにしないと、すべての SAN SSO デバイス構成のデータがプライマリサーバーデータベースに移行されます。

ADAMM サービスの再起動時に、標準のデバイス検出処理によって、サーバーに接続された物理デバイスが再検出されます。

SAN SSO セカンダリサーバーとしてスタンドアロンサーバーを設定すると、標準のデバイス検出処理はサーバーに接続された物理デバイスを再検出します。元のディスクへのバックアップを指定してリカバリすることはできません。ディスクへのバックアップフォルダを再作成し、フォルダが存在する元のパスを入力する必要があります。その後、インベントリジョブを実行し、ディスクへのバックアップメディアを検出する必要があります。データのリストアを行う前に、メディアのカタログ登録を行います。

セカンダリサーバーの管理の再設定

セカンダリサーバーの管理を再設定するのに次の処理を使います。

次の手順の実行について詳しくは『Backup Exec ユーティリティ』を参照してください。

表 Y-3 セカンダリサーバーの管理の再設定

手順	処理
手順 1	BEUtility を使用して、セカンダリサーバーをスタンドアロンサーバーに変換します。
手順 2	BEUtility を使用して、プライマリ SAN SSO サーバーを設定します。

SAN Shared Storage Option での障害が発生したコンポーネントのトラブルシューティング

SAN 内のいかなる場所でも、問題が発生する可能性があります。Backup Exec が正しく動作するためには、デバイスが 3 か所で認識されている必要があります。ブリッジまたはルーターでは SCSI デバイスとして、オペレーティングシステムではデバイスとして、また Backup Exec ではサポート対象デバイスとして認識されていることが必要です。ハードウェア販売元の技術的なサポートを必要とする問題がハードウェアに発生している場合もあります。

ブリッジやハブなどの SAN のコンポーネントも交換が必要な場合があります。ハードウェアの交換手順については、ハードウェア販売元の説明書を参照してください。

p.1961 の「[SAN Shared Storage Option でのオフラインのデバイスのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

SAN Shared Storage Option でのオフラインのデバイスのトラブルシューティング

SAN 内のデバイスがオフラインになった場合は、次の手順によって問題の原因を切り分けてください。

トラブルシューティングを実行する前に、使用しているデバイスが Backup Exec のサポート対象デバイスリストに表示されていることを確認します。

互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-1>

また、すべてのハードウェアドライバが最新バージョンで、動作していることを確認します。ハードウェアに関連するエラーが発生した場合は、ハードウェア販売元にお問い合わせください。

表 Y-4 SAN Shared Storage Option でのオフラインのデバイスのトラブルシューティング

手順	処理
手順 1	<p>Windows のデバイスマネージャを使用して、デバイスがオペレーティングシステムで認識されていることを確認します。</p> <p>デバイスが認識されていない場合は、デバイスのトラブルシューティングが必要となることがあります。</p> <p>p.1963 の「SAN Shared Storage Option のハードウェアエラーの検出」を参照してください。</p>
手順 2	<p>ロボットライブラリの場合は、ロボットライブラリサポートがインストールされていることを確認します。</p>
手順 3	<p>システムイベントログで、SAN の通信エラーを示す SCSI エラー 9、11 および 15、またはストレージに関連するタイムアウトエラーを確認します。アプリケーションイベントログで、複数イベント 33152 を確認します。これらのイベントは SAN の通信エラーを示します。</p> <p>p.1963 の「SAN Shared Storage Option のハードウェアエラーの検出」を参照してください。</p> <p>ハードウェア販売元への連絡が必要となる場合もあります。</p>
手順 4	<p>ライブラリがオンラインで、一部またはすべてのドライブがオフラインの場合は、Backup Exec を使用してライブラリを初期化します。</p> <p>ライブラリを初期化するには、次に示す順序で操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックします。 ■ ライブラリを選択し、[デバイスタスク] の下の [初期化] をクリックします。
手順 5	<p>ライブラリを初期化してもデバイスがオンラインにならない場合、前面パネルにエラーが表示されていないか、機械的な問題がないか、またはテープがドライブに適切に挿入されているかを確認します。エラーが発生している場合は修正します。</p>

手順	処理
手順 6	ライブラリでエラーが発生していない場合、またはエラーを修正してもデバイスがオフラインのままである場合は、SAN 内のすべての Backup Exec ジョブが停止しているときに、Backup Exec サービスを停止しその後サービスを再起動します。
手順 7	サービスを再起動してもデバイスがオンラインにならない場合、オペレーティングシステムを再起動します。再起動時には、Backup Exec ジョブが実行されていないことを確認してください。
手順 8	オペレーティングシステムを再起動してもデバイスがオンラインにならない場合、SAN をリセットして問題のあるテープデバイスを検出します。また、SAN をリセットするとファイバーの問題が解決する場合があります。 p.1964 の「SAN Shared Storage Option での SAN のリセット」 を参照してください。

SAN Shared Storage Option のハードウェアエラーの検出

SAN 環境で起きる共通ハードウェアエラーを見つけるのに次の手順を使います。ハードウェアに関連するエラーが発生した場合は、ハードウェア販売元にお問い合わせください。

表 Y-5 SAN Shared Storage Option のハードウェアエラーの検出

手順	処理
手順 1	適切なデバイスドライバがインストールされていることを確認します。
手順 2	ファイバーケーブルが HBA およびスイッチに正しく接続されていることを確認します。
手順 3	SCSIブリッジがライブラリおよびスイッチに正しく接続されていることを確認します。ファイバー - SCSIブリッジに通常の SCSIトラブルシューティング技法を適用します。ブリッジの管理ツールを使用して、ブリッジですべてのデバイスが認識されていることを確認します。また、ブリッジのファームウェアが最新であることを確認します。

手順	処理
手順 4	サーバーとスイッチ間に障害が発生したハードウェアがあるかどうかを確認します。テープデバイスがSAN内の一部のサーバーで認識されて、他のサーバーでは認識されない場合があります。SAN内のすべてのサーバーでテープデバイスが認識されない場合は、スイッチとテープデバイス間に障害が発生したハードウェアがあるかどうかを確認します。
手順 5	SANをリセットします。これによって、障害が発生したハードウェアが検出され、ファイバーの問題が解決する場合があります。

SAN Shared Storage Option での SAN のリセット

SANをリセットするには、SANのコンポーネントの電源をオフにし、特定の順序でコンポーネントの電源をオンにする必要があります。

表 Y-6 SAN Shared Storage Option での SAN のリセット

手順	処理
手順 1	SAN内のすべてのサーバー、ロボットライブラリおよびファイバー - SCSIブリッジの電源をオフにします。 スイッチの電源もオフにする必要がある場合があります。その場合は、他のコンポーネントより先に電源をオンにし、すべてのチェックが完了してから他のコンポーネントの電源をオンにします。
手順 2	ロボットライブラリをオンにします。 p.468の「ロボットライブラリを初期化するジョブの作成」 を参照してください。
手順 3	ブリッジをオンにします。
手順 4	スイッチでライブラリが認識されていることを確認します。
手順 5	プライマリ SAN SSO サーバーをオンにします。
手順 6	オペレーティングシステムでロボットライブラリおよびドライブが認識されていることを確認します。

手順	処理
手順 7	いずれかのセカンダリサーバーの電源をオンにします。そのセカンダリサーバーがブートしてから、他のセカンダリサーバーの電源をオンにします。

SAN Shared Storage Option での突然のデバイスの取り外しイベント後のデバイスのオンライン化

突然のデバイスの取り外しイベント時にデバイスが使用されていた場合、デバイスは Backup Exec でオフラインになります。

表 Y-7 突然のデバイスの取り外しイベント後にデバイスをオンラインにする方法

手順	処理
手順 1	SAN 内で Backup Exec ジョブが実行されていないことを確認します。
手順 2	ライブラリがオンラインでドライブがオフラインの場合は、Backup Exec を使用してライブラリを初期化します。 p.468 の「ロボットライブラリを初期化するジョブの作成」 を参照してください。
手順 3	ライブラリがオフラインの場合、または初期化後もドライブがオフラインの場合は、すべての Backup Exec サービスをいったん停止してから再起動します。 p.158 の「Backup Exec サービスの起動および停止」 を参照してください。 デバイスがオンラインになっていない場合は、デバイスのトラブルシューティングが必要となる場合があります。 p.1963 の「SAN Shared Storage Option のハードウェアエラーの検出」 を参照してください。

SAN Shared Storage Option に関する推奨事項

SAN SSO に関する次の推奨事項を確認してください。

- **Backup Exec** をインストールする前に、**SAN** 内のすべてのハードウェアの動作および設定が正しいことを確認します。
- プライマリサーバーとして、余計な負荷の少ない最速のサーバーを選択します。
- **SAN** ごとに個別のプライマリサーバーを使用します。
- **HBA** ドライバ、ファイバー - **SCSI** ブリッジおよびライブラリファームウェアを最新のリリースに更新します。
- **SAN** 上のすべての **HBA** カードで、最新かつ同レベルのファームウェアおよびドライバを使用します。
- **SAN** 内のサーバーでは同じ **Microsoft** 管理ドメインを使用します。クロスドメイン環境では、インストール時に認証問題が発生し、バックアップ時にリソースへのアクセスが失敗する場合があります。
- ライブラリおよびドライブの表示名を、それらを使用するサーバーまたはジョブに関連した名前に変更します。
- **SAN** の各 **Backup Exec** データベースサーバーの **Backup Exec** ディレクトリツリー全体の頻繁なバックアップを実行します。
- プライマリデータベースサーバー上の **Backup Exec** ディレクトリツリーおよび **Windows** オペレーティングシステムのバックアップ専用の特別なメディアセットを作成します。これによって、**ADAMM** データベースおよびカタログのリストアに必要なファイルを検索するために、カタログを登録する必要のあるテープの数を減らすことができます。
- スイッチの管理ツールを使用して、各サーバーでテープデバイスを使用したゾーン設定が行われていることを確認します。
- メンバーサーバーによってデータベースが更新された場合、**SAN SSO** 設定の **Backup Exec** 管理コンソールを手動で更新する必要があります。ユーザーインターフェースを手動で更新するには、適切なコンポーネントを右クリックし、**F5** キーを押します。

Symantec Backup Exec Storage Provisioning Option

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Storage Provisioning Option オプション](#)について
- [Storage Provisioning Option](#) の必要条件
- CASO 環境での [Storage Provisioning Option](#) の必要条件
- [Storage Provisioning Option](#) のインストールについて
- [Backup Exec](#) でのストレージレイのコンポーネントの表示
- ストレージレイ設定ウィザードの使用について
- ストレージレイ設定ウィザードを使用したストレージレイの設定
- ストレージレイのプロパティの表示
- ストレージレイの物理ディスクのプロパティ
- [Storage Provisioning Option](#) の[すべての仮想ディスク]デバイスプールについて
- [Storage Provisioning Option](#) の仮想ディスクについて
- [Storage Provisioning Option](#) のホットスペアについて
- 新しいストレージレイの検出
- 仮想ディスクまたはストレージレイの名前の変更
- 仮想ディスクの物理ディスクの識別について
- [Storage Provisioning Option](#) のディスク使用率の予測について

- ストレージアレイのディスク容量不足のアラートの設定
- [Storage Provisioning アラート]のデフォルトオプション
- Storage Provisioning Option のトラブルシューティング

Storage Provisioning Option オプションについて

Storage Provisioning Option は、メディアサーバーに接続するストレージアレイを設定、管理および監視することを可能にします。

メモ: Dell PowerVault DL Backup to Disk アプライアンスを使う場合は、この付録を使わないでください。Dell 社がアプライアンスとともに提供するマニュアル『Dell™ PowerVault™ DL Backup to Disk Appliance and the Symantec Backup Exec Storage Provisioning Option』を参照してください。

表 Z-1 Storage Provisioning Option の機能

機能	説明
新しいストレージアレイ、物理ディスク、仮想ディスクの検出	Backup Exec は新しいストレージアレイ、物理ディスク、ストレージアレイに追加する仮想ディスクを検出できます。ストレージアレイのベンダーツールか SAN 用記憶域マネージャ ユーティリティを使って仮想ディスクを作成した場合、Backup Exec はそれらの仮想ディスクも検出します。
Backup Exec で使うことができるようにストレージアレイを設定するのに役立つウィザード	Backup Exec はストレージアレイで仮想ディスクを設定するのに役立つストレージアレイ設定ウィザードを提供します。仮想ディスクは[すべての仮想ディスク]デバイスプールに追加されます。その後、Backup Exec はジョブのための宛先デバイスとしてデバイスプールの仮想ディスクを使います。
ディスクの使用量の傾向分析	Backup Exec はストレージアレイで必要になるディスク容量を予測するために統計情報を収集します。利用可能なディスク領域が、必要とされるディスク領域の予測量を満たさない場合は、アラートが送信されます。
ディスク容量不足のためのアラート	Backup Exec は利用可能なディスク領域が仮想ディスクに対して設定した3つのしきい値のそれぞれに達するとアラートを送信します。

p.1969 の「[Storage Provisioning Option の必要条件](#)」を参照してください。

p.1971 の「[ストレージレイ設定ウィザードを使用したストレージレイの設定](#)」を参照してください。

p.1976 の「[Storage Provisioning Option の\[すべての仮想ディスク\]デバイスプールについて](#)」を参照してください。

Storage Provisioning Option の必要条件

Backup Exec Storage Provisioning Option をインストールする前に次の操作を実行します。

- Virtual Disk Service (VDS) 1.1 がメディアサーバーにインストールされていることを確認します。

VDS 1.1 は Windows Server 2003 Service Pack 2 と Windows Server 2008 とともにインストールされます。Windows Server 2003 R2 に VDS 1.1 をインストールするには、Service Pack 2 か SAN 用記憶域マネージャ MMC スナップインをインストールします。

- メディアサーバーにストレージレイを接続します。

- メディアサーバーにストレージレイベンダーの VDS ハードウェアプロバイダをインストールします。

p.1468 の「[CASO デバイスおよびメディアのデータの場所の選択方法](#)」を参照してください。

p.1969 の「[CASO 環境での Storage Provisioning Option の必要条件](#)」を参照してください。

p.1970 の「[Storage Provisioning Option のインストールについて](#)」を参照してください。

p.1971 の「[ストレージレイ設定ウィザードの使用について](#)」を参照してください。

CASO 環境での Storage Provisioning Option の必要条件

Central Admin Server Option (CASO) 環境で Storage Provisioning Option を実行するには次の操作を実行する必要があります。

- ストレージレイが接続されているメディアサーバーに Storage Provisioning Option をインストールする必要があります。

ストレージレイが管理対象メディアサーバーに接続されている場合は、その管理対象メディアサーバーに Storage Provisioning Option をインストールします。ストレージレイが集中管理サーバーに接続されていない場合は、集中管理サーバーに Storage Provisioning Option をインストールする必要はありません。

- **Central Admin Server Option** は集中型のデータベースを使わなければなりません。
p.1499 の「[CASO カタログの場所について](#)」を参照してください。
- p.1971 の「[ストレージレイ設定ウィザードの使用について](#)」を参照してください。
- p.1970 の「[Storage Provisioning Option のインストールについて](#)」を参照してください。

Storage Provisioning Option のインストールについて

Storage Provisioning Option は、Backup Exec の独立したアドオンコンポーネントとしてローカルメディアサーバーにインストールします。

以前のバージョンの Backup Exec からアップグレードするときに Storage Provisioning Option をインストールできます。ただし、以前のバージョンからのデフォルトデバイスプールは保持されます。[すべての仮想ディスク]デバイスプールはデフォルトデバイスプールとして設定されません。

p.112 の「[ローカルメディアサーバーへの Backup Exec 追加オプションのインストール](#)」を参照してください。

p.1976 の「[Storage Provisioning Option の\[すべての仮想ディスク\]デバイスプールについて](#)」を参照してください。

p.1969 の「[CASO 環境での Storage Provisioning Option の必要条件](#)」を参照してください。

Backup Exec でのストレージレイのコンポーネントの表示

Storage Provisioning Option をインストールした後、ストレージレイが[デバイス]ビューに表示されます。ストレージレイ設定ウィザードを使用してストレージレイを設定した後、属しているストレージレイの下に仮想ディスクが表示されます。

物理ディスクは[デバイス]ビューのストレージレイの下には表示されません。物理ディスクはストレージレイのプロパティと、ストレージレイを選択するときには[デバイス]ビューの右ペインに表示されます。

Backup Exec でストレージレイのコンポーネントを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 接続されたストレージレイがあるメディアサーバーを展開します。

- 3 プロパティを表示するストレージレイを展開します。
- 4 ストレージレイのコンポーネントを表示します。

p.1971 の「[ストレージレイ設定ウィザードの使用について](#)」を参照してください。

p.1971 の「[ストレージレイ設定ウィザードを使用したストレージレイの設定](#)」を参照してください。

p.1973 の「[ストレージレイの物理ディスクのプロパティ](#)」を参照してください。

ストレージレイ設定ウィザードの使用について

Storage Provisioning Option はストレージレイで仮想ディスクを設定するのに役立つストレージレイ設定ウィザードを提供します。

このウィザードは次の項目を設定するのに役立ちます。

- 仮想ディスクを作成するために使う 3 つ以上の未設定の物理ディスク。
このグループの物理ディスクはディスクグループと呼ばれます。**Storage Provisioning Option** は少なくとも 3 つの物理ディスクを必要とする RAID 5 ディスクグループを使います。
- 仮想ディスクの冗長性が失敗した場合にホットスペアとして使う少なくとも 1 つの未設定の物理ディスク。
- 選択した物理ディスクに作成する少なくとも 1 つの仮想ディスク。
利用可能であるディスク領域の量は指定する仮想ディスクの数で均等に分けられます。メディアサーバーが使うファイルシステムでは、最小数の仮想ディスクを作成する必要があります。

ウィザードが完了すると、ストレージレイの設定と呼ばれるユーティリティジョブが実行されます。このユーティリティジョブは指定した仮想ディスクを作成します。その後、**Backup Exec** は[すべての仮想ディスク]という名前のデバイスプールに仮想ディスクを追加します。[すべての仮想ディスク]デバイスプール、ストレージレイ、または特定の仮想ディスクにジョブをサブミットできます。

また、すでに設定されているディスクグループのホットスペアを追加するか、または変更するためにこのウィザードを使うこともできます。

p.1971 の「[ストレージレイ設定ウィザードを使用したストレージレイの設定](#)」を参照してください。

ストレージレイ設定ウィザードを使用したストレージレイの設定

Backup Exec Storage Provisioning Option で使うストレージレイを設定するためにストレージレイ設定ウィザードを使います。

Backup Exec は [ストレージアレイを設定] ジョブをサブミットして、仮想ディスクを作成します。

メモ: Central Admin Server Option (CASO) 環境で、集中管理サーバーからストレージアレイ設定ウィザードを実行します。Storage Provisioning Option がインストールされている管理対象メディアサーバーに対してストレージアレイ設定ウィザードを実行できます。管理対象メディアサーバーは単一のストレージアレイは共有できますが、ストレージアレイの仮想ディスクは共有できません。

ストレージアレイ設定ウィザードを使ってストレージアレイを設定する方法

- 1 ツールメニューの [デバイスを設定] をクリックします。
- 2 [ストレージアレイの設定] をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。

CASO 以外の環境の場合

[ようこそ] 画面で、設定したいストレージアレイを選択して [次へ] をクリックします。

CASO 環境の場合

次に示す順序で操作を実行します。

- [ようこそ] パネルで、仮想ディスクにアクセスする管理対象メディアサーバーを選択します。
- 設定するストレージアレイを選択します。
- [次へ] をクリックします。

- 4 [利用可能な物理ディスク] リストで、少なくとも 3 つの物理ディスクを選択し、左上の矢印をクリックして [選択された物理ディスク] リストにディスクを移動します。
- 5 [利用可能な物理ディスク] リストで、ホットスペアとして使う 1 つ以上の物理ディスクを選択します。
- 6 左下の矢印をクリックして [ホットスペア] リストにディスクを移動し、[次へ] をクリックします。
- 7 [仮想ディスクの作成] 画面で、このディスクグループのために作成する仮想ディスクの数を指定し、[次へ] をクリックします。

- 8 [概略]画面で、概略情報が正しいことを確認し、[次へ]をクリックします。
- 9 次のいずれかを実行します。

別の物理ディスクグループを設定する場合 [[完了]をクリックしてから別の物理ディスクグループを設定する。]にチェックマークを付けます。

[ストレージアレイを設定]ジョブをサブミットする場合 [完了]をクリックします。

p.1971 の「[ストレージアレイ設定ウィザードの使用について](#)」を参照してください。

p.1970 の「[Backup Exec でのストレージアレイのコンポーネントの表示](#)」を参照してください。

p.1994 の「[Storage Provisioning Option のディスク使用率の予測について](#)」を参照してください。

p.1995 の「[ストレージアレイのディスク容量不足のアラートの設定](#)」を参照してください。

ストレージアレイのプロパティの表示

プロパティは統計や設定のような詳しい情報を提供します。

ストレージアレイのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
 - 2 次のいずれかを実行します。
 - 接続されたストレージアレイがあるメディアサーバーを展開します。
 - プロパティを表示するストレージアレイを右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
 - プロパティを表示する項目を選択し、タスクペインの[一般タスク]の下で[プロパティ]をクリックします。
- p.1986 の「[ストレージアレイの仮想ディスクの一般プロパティ](#)」を参照してください。

ストレージアレイの物理ディスクのプロパティ

ストレージアレイの物理ディスクのプロパティを表示できます。

p.1973 の「[ストレージアレイのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 Z-2 ストレージアレイの物理ディスクのプロパティ

項目	説明
エンクロージャ	物理ディスクが存在するエンクロージャを識別します。
スロット	物理ディスクが占有しているスロットを識別します。
容量	このスロットの物理ディスクの利用可能なディスク領域の総計を表示します。
状態	<p>物理ディスクの状態を表示します。 状態は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホットスペア 物理ディスクはホットスペアとして設定されています。 ■ 設定済み 物理ディスクは使用できるように設定されています。 ■ 設定可能 物理ディスクは Backup Exec で使用するよう設定できます。 ■ 設定不可能 物理ディスクは不良な状態にあるか、または失敗したため設定できません。 ■ 割り当て 物理ディスクは設定過程にあります。

項目	説明
状態	<p>ハードウェアの状態を表示します。</p> <p>ハードウェアの状態を示す値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OK 物理ディスクはオンラインです。 ■ オフライン 物理ディスクはオフラインです。この物理ディスクを使う仮想ディスクもオフラインであることがあります。Backup Exec はアクセスできません。 ■ 失敗 物理ディスクに障害が発生しています。この物理ディスクを使う仮想ディスクにも障害が発生していることがあります。Backup Exec は仮想ディスクにアクセスできません。 ホットスペアが設定されている場合、仮想ディスクは自動的に再構築されます。ストレージアレイが自動再構築の機能をサポートしていない場合は、仮想ディスクの手動による再構築を実行するためにベンダーのツールを使うなければなりません。詳しくはストレージアレイのベンダーのマニュアルを参照してください。 <p>問題のトラブルシューティングについては、ストレージアレイとともに提供されたベンダーのマニュアルと管理ソフトウェアを参照してください。</p>

項目	説明
健全性	<p>ハードウェア健全性を表示します。</p> <p>ハードウェア健全性を示す値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ OK 物理ディスクはオンラインです。■ 警告 物理ディスクに障害が発生したか、エラーが生成されていますが、現在操作は可能です。■ 重要 物理ディスクに障害が発生している可能性があります。物理ディスクを交換する必要があります。 <p>問題のトラブルシューティングについては、ストレージアレイとともに提供されたベンダーのマニュアルと管理ソフトウェアを参照してください。</p>

Storage Provisioning Option の[すべての仮想ディスク]デバイスプールについて

Storage Provisioning Option をインストールした後、Backup Exec はデバイスプールのリストに[すべての仮想ディスク]デバイスプールを追加します。[すべての仮想ディスク]デバイスプールには、Backup Exec 環境のすべてのコンピュータ上にあるすべてのストレージアレイからのすべての仮想ディスクが含まれています。

メモ: 個々の仮想ディスクは、[すべてのデバイス <computer_name>]デバイスプールに表示されません。ただし、ジョブのための宛先デバイスとして特定の仮想ディスクを選択できます。

[すべての仮想ディスク]デバイスプールに仮想ディスク以外のデバイスは追加できません。

p.1971 の「[ストレージアレイ設定ウィザードの使用について](#)」を参照してください。

p.1977 の「[Storage Provisioning Option の仮想ディスクについて](#)」を参照してください。

p.503 の「[デバイスプールについて](#)」を参照してください。

Storage Provisioning Option の仮想ディスクについて

仮想ディスクはメディアサーバーに仮想ストレージを提供するためにストレージアレイに作成する論理ディスクです。

仮想ディスクを作成するために次のいずれかを使うことができます。

- ストレージアレイ設定ウィザード
- ストレージアレイのベンダーが提供する管理ツール
- SAN 用記憶域マネージャ MMC スナップイン

ストレージアレイ設定ウィザード以外のツールを使って仮想ディスクを作成する場合は、Backup Exec で使用するために仮想ディスクを設定する必要があります。仮想ディスクを設定した後、Backup Exec はジョブのための宛先デバイスとして仮想ディスクを使います。Backup Exec は設定された仮想ディスクを[すべての仮想ディスク]デバイスプールに自動的に追加します。

p.1982 の「[ストレージアレイでの仮想ディスクの設定](#)」を参照してください。

ストレージアレイ設定ウィザードで、ストレージアレイにある物理ディスクから作成する仮想ディスクの数を指定します。メディアサーバーは物理ディスクにアクセスできません。メディアサーバーは作成した仮想ディスクのみにアクセスできます。

Backup Exec はディスクへのバックアップフォルダを使う場合と同様に設定された仮想ディスクを使います。

p.482 の「[ディスクへのバックアップフォルダについて](#)」を参照してください。

Backup Exec は仮想ディスクにドライブ文字を割り当てません。仮想ディスクを参照したり、コマンドプロンプトから仮想ディスクにアクセスすることはできません。仮想ディスクを参照できないので Backup Exec で仮想ディスクをバックアップすることはできません。仮想ディスクから別のデバイスにデータを移動するためのバックアップデータの複製ジョブを作成することをお勧めします。たとえば、テープまたは別のストレージアレイの別の仮想ディスクにデータを移動できます。

仮想ディスクに対して 3 つのディスクの空き領域の低しきい値を設定できます。利用可能なディスク領域が各しきい値に達すると、Backup Exec はアラートを送信します。仮想ディスクの利用可能なディスク領域が 3 番目のしきい値に達すると、アラートはディスク領域をすぐに増やすように警告します。

すべての新しい仮想ディスクに適用されるデフォルト、または特定の仮想ディスクに適用されるデフォルトとしてこれらのしきい値を設定できます。

p.1978 の「[ストレージアレイの仮想ディスクのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

メモ: 2 つのコンピュータ間で仮想ディスクは共有できません。

p.1970の「[Backup Exec でのストレージレイのコンポーネントの表示](#)」を参照してください。

p.1994の「[Storage Provisioning Option のディスク使用率の予測について](#)」を参照してください。

p.1980の「[ストレージレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

p.1983の「[ストレージレイの未設定の仮想ディスクのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.1976の「[Storage Provisioning Option の\[すべての仮想ディスク\]デバイスプールについて](#)」を参照してください。

ストレージレイの仮想ディスクのデフォルトオプションの編集

個々の仮想ディスクに適用するデフォルトのオプションを設定できます。

p.1976の「[Storage Provisioning Option の\[すべての仮想ディスク\]デバイスプールについて](#)」を参照してください。

p.1985の「[ストレージレイの仮想ディスクの一般プロパティの編集](#)」を参照してください。

ストレージレイの仮想ディスクのデフォルトオプションを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 接続されたストレージレイがあるメディアサーバーを展開します。
- 3 ストレージレイを展開し、表示する仮想ディスクを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [一般]タブで、必要に応じて情報を変更します。

p.1986の「[ストレージレイの仮想ディスクの一般プロパティ](#)」を参照してください。

- 6 [詳細]タブで、必要に応じて情報を変更します。
- 7 [OK]をクリックします。

ストレージレイの詳細プロパティ

ストレージレイの詳細プロパティは、ディスクの空き領域の低い値、読み取りバッファ、書き込みバッファについての情報を提供します。

p.1978の「[ストレージレイの仮想ディスクのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

表 Z-3 **ストレージアレイの詳細プロパティ**

項目	説明
1 番目のしきい値	<p>Backup Exec がアラートを送信する 1 つ目のディスクの空き領域の低しきい値を表示します。しきい値は変更できます。また、ディスク領域の量の単位を MB か GB に変更できます。</p> <p>使用済みのディスク領域の量がこのしきい値に達すると、Backup Exec はアラートを送信します。デフォルトのしきい値は 75% です。これは、この仮想ディスクの利用可能なディスク領域全体の割合です。</p>
2 番目のしきい値	<p>Backup Exec がアラートを送信する 2 つ目のディスクの空き領域の低しきい値を表示します。しきい値は変更できます。また、ディスク領域の量の単位を MB か GB に変更できます。</p> <p>使用済みのディスク領域の量がこのしきい値に達すると、Backup Exec はアラートを送信します。デフォルトのしきい値は 85% です。これは、この仮想ディスクの利用可能なディスク領域全体の割合です。</p>
3 番目のしきい値	<p>Backup Exec がアラートを送信する 3 つ目のディスクの空き領域の低しきい値を表示します。しきい値は変更できます。また、ディスク領域の量の単位を MB か GB に変更できます。</p> <p>使用済みのディスク領域の量がこのしきい値に達すると、Backup Exec はアラートを送信します。デフォルトのしきい値は 95% です。これは、この仮想ディスクの利用可能なディスク領域全体の割合です。</p>
自動検出設定	<p>このデバイスに適した設定を自動的に検出するかどうかを示します。</p> <p>読み込みバッファまたは書き込みバッファを設定する場合は、[自動検出設定]のチェックマークを外します。</p> <p>デフォルトの設定は On です。</p>

項目	説明
読み取りバッファを使用	次を示します。 <ul style="list-style-type: none">■ このデバイスの設定を自動的に検出しない場合■ 大きなデータブロックを読み取るバッファ読み取りをこのデバイスでサポートする場合 [読み取りバッファを使用]を有効にすると、パフォーマンスが向上することがあります。 デフォルトの設定は Off です。
書き込みバッファを使用	次を示します。 <ul style="list-style-type: none">■ このデバイスの設定を自動的に検出しない場合■ 大きなデータブロックを書き込むバッファ書き込みをこのデバイスでサポートする場合 デフォルトの設定は On です。

ストレージレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプションの編集

ストレージレイのすべての新しい仮想ディスクに適用されるデフォルトを設定できます。

ストレージレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプションを編集する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[仮想ディスク]をクリックします。
- 3 必要なデフォルトを設定します。
- 4 [OK]をクリックします。

p.1980の「[ストレージレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプション](#)」を参照してください。

ストレージレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプション

デフォルトオプションはストレージレイのすべての仮想ディスクについての情報を提供します。

表 Z-4 ストレージアレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプション

項目	説明
1 ファイルごとのバックアップセットの最大数	<p>仮想ディスクのファイルに書き込むバックアップセットの最大数を表示します。最大数は 1 から 8192 まで設定できます。デフォルトは 100 です。</p> <p>ファイル内で少ない数のバックアップセットを指定すると、多くのバックアップセットを指定した場合よりも、Backup Exec はディスク領域をより速く再利用できることがあります。たとえば、ファイルごとに 100 のバックアップセットを指定します。Backup Exec は、すべてのバックアップセットの上書き禁止期間が期限切れになるまで、ディスク領域を再利用できません。ファイルごとに 1 つのバックアップセットを指定すると、Backup Exec はそのセットの上書き禁止期間が期限切れになるとすぐディスク領域を再利用できます。</p>
ファイルの最大サイズ	<p>この仮想ディスクに含まれる各ファイルの最大サイズを表示します。サイズの単位として [MB] か [GB] を選択します。指定可能なファイルサイズは 1 MB から 4096 GB です。デフォルトサイズは 4 GB です。</p> <p>小さいファイルを多数作成した場合は、コンピュータが各ファイルを処理しなければならないので、パフォーマンスが低下することがあります。ただし、大容量ファイルを作成した場合は、ファイルシステムの制限によりメモリ割り当ての問題やネットワーク上の問題を引き起こすことがあります。これらの問題は、ネットワークをまたいでファイルを格納する場合の問題になる可能性があります。</p>
許可する同時並行ジョブの数 x	<p>この仮想ディスクに許可する同時並行処理の数を表示します。指定可能な数は 1 から 16 です。</p>
1 番目のしきい値	<p>Backup Exec が 3 つのアラートのうちの 1 つ目のアラートを送信するディスクの空き領域の低しきい値を表示します。デフォルトのしきい値は 75% です。これは、この仮想ディスクの利用可能なディスク領域全体の割合です。デフォルトは変更できます。また、領域の量の単位をパーセントから MB か GB に変更できます。</p>

項目	説明
2 番目のしきい値	Backup Exec が 3 つのアラートのうちの 2 つ目のアラートを送信するディスクの空き領域の低しきい値を表示します。デフォルトのしきい値は 85% です。これは、この仮想ディスクの利用可能なディスク領域全体の割合です。デフォルトは変更できます。また、領域の量の単位をパーセントから MB か GB に変更できます。
3 番目のしきい値	Backup Exec が 3 つのアラートのうちの最後のアラートを送信するディスクの空き領域の低しきい値を表示します。デフォルトのしきい値は 95% です。これは、この仮想ディスクの利用可能なディスク領域全体の割合です。デフォルトは変更できます。また、領域の量の単位をパーセントから MB か GB に変更できます。

ストレージレイでの仮想ディスクの設定

Backup Exec 以外のツールを使って仮想ディスクを作成する場合は、Backup Exec で使うようにその仮想ディスクを設定する必要があります。Backup Exec はジョブのための宛先デバイスとして設定された仮想ディスクのみを使うことができます。仮想ディスクを設定すると、Backup Exec は[仮想ディスクの設定]というジョブをサブミットします。ジョブが正常に完了すると、仮想ディスクが設定され、[すべての仮想ディスク]デバイスプールに追加されます。

メモ: 未設定の仮想ディスクを選択するときは注意してください。未設定の仮想ディスクは Microsoft SQL Server データベース、Exchange データベースまたはブートディスクとして使用中である場合があります。

ストレージレイで仮想ディスクを設定する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 接続されたストレージレイがあるメディアサーバーを展開します。
- 3 ストレージレイを展開し、未設定の仮想ディスクを選択します。
- 4 タスクペインの[デバイス]の下にある[設定]をクリックします。
- 5 プロンプトが表示されたら、[OK]をクリックして仮想ディスクを設定します。

p.1980 の「[ストレージレイのすべての仮想ディスクのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

ストレージレイの未設定の仮想ディスクのプロパティの表示

ストレージレイの未設定の仮想ディスクのプロパティを表示できます。

メモ: Backup Exec でジョブのための宛先デバイスとして仮想ディスクを使う前に仮想ディスクを設定する必要があります。

p.1982 の「[ストレージレイでの仮想ディスクの設定](#)」を参照してください。

ストレージレイの未設定の仮想ディスクのプロパティを表示する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 接続されたストレージレイがあるメディアサーバーを展開します。
- 3 ストレージレイを展開し、未設定の仮想ディスクを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [仮想ディスク(未設定)のプロパティ]ダイアログボックスで、プロパティ情報を表示します。

ストレージレイの未設定の仮想ディスクのプロパティ

未設定の仮想ディスクのプロパティはディスクの名前、状態、健全性についての情報を提供します。

p.1983 の「[ストレージレイの未設定の仮想ディスクのプロパティの表示](#)」を参照してください。

表 Z-5 ストレージレイの未設定の仮想ディスクのプロパティ

項目	説明
名前	未設定の仮想ディスクの名前を表示します。 デフォルトの名前は VIRTDISK X です。x は仮想ディスクを作成するたびに増分する番号です。 p.1992の「仮想ディスクまたはストレージレイの名前の変更」 を参照してください。
ハードウェア名	仮想ディスクを作成するためにベンダー固有のツールを使っている場合、仮想ディスクに割り当てられている名前を表示します。

項目	説明
ハードウェアの状態	<p>ハードウェアの状態を表示します。</p> <p>ハードウェアの状態を示す値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ OK 未設定の仮想ディスクはオンラインです。■ オフライン 未設定の仮想ディスクはオフラインです。■ 失敗 未設定の仮想ディスクに障害が発生しています。
ハードウェア健全性	<p>ハードウェア健全性を表示します。</p> <p>ハードウェア健全性を示す値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ OK 未設定の仮想ディスクはオンラインです。■ 警告 未設定の仮想ディスクに障害が発生したか、エラーが生成されていますが、現在操作は可能です。■ 重要 未設定の仮想ディスクに障害が発生しています。■ 指定なし 未設定の仮想ディスクは設定過程にあります。

項目	説明
ディスクの分類	<p>未設定の仮想ディスクがあるディスクグループの種類を表示します。</p> <p>ディスクの分類は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ シンプル (RAID 0) 単一の物理ディスク、ストライプ化またはパリティなし。冗長性なし。 ■ スパン 一緒に連結される複数の物理ディスクのセット。ストライプ化またはパリティなし。冗長性なし。 ■ ストライプ 物理ディスクにまたがってストライプ化されるデータを含む複数の物理ディスクエクステンツのセット。冗長性なし。 ■ ミラー (RAID 1) ペアの各物理ディスクに同じデータが書き込まれる物理ディスクのペアまたは複数のペア。データ冗長を提供します。 ■ パリティ付きストライプ (RAID 5 または RAID 6) パリティに使われる 1 ディスク分の領域を持ち、物理ディスクにまたがってストライプ化されたデータのある 3 つ以上の物理ディスク。データ冗長を提供します。 ■ 不明 <p>Backup Exec は、パリティ (RAID 5) のストライプにディスク分類される物理ディスクのグループのみを作成します。別のディスク分類が表示される場合、そのディスクグループは Storage Provisioning Option 以外のツールによって作成されています。</p>

ストレージレイの仮想ディスクの一般プロパティの編集

ストレージレイの仮想ディスクの一般プロパティを編集できます。

ストレージレイの仮想ディスクの一般プロパティを編集する方法

- 1 ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックします。
- 2 接続されたストレージレイがあるメディアサーバーを展開します。
- 3 ストレージレイを展開し、表示する仮想ディスクを選択します。

- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[プロパティ]をクリックします。
- 5 [一般]タブで、必要に応じてプロパティを編集します。
p.1983の「[ストレージアレイの未設定の仮想ディスクのプロパティの表示](#)」を参照してください。
- 6 [OK]をクリックします。
p.1978の「[ストレージアレイの仮想ディスクのデフォルトオプションの編集](#)」を参照してください。

ストレージアレイの仮想ディスクの一般プロパティ

一般プロパティはストレージアレイの仮想ディスクについての情報を提供します。
p.1985の「[ストレージアレイの仮想ディスクの一般プロパティの編集](#)」を参照してください。

表 Z-6 ストレージアレイの仮想ディスクの一般プロパティ

項目	説明
名前	ストレージアレイ設定ウィザードを使うときに Backup Exec が仮想ディスクに割り当てる名前を表示します。名前は VIRTDISKx です。x はストレージアレイを追加するたびに増分する番号です。 p.1992の「 仮想ディスクまたはストレージアレイの名前の変更 」を参照してください。

項目	説明
状態	<p>仮想ディスクの現在の状態を表示します。 仮想ディスクの状態は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 一時停止 仮想ディスクは一時的に停止しています。 p.430 の「ストレージデバイスの一時停止」を参照してください。 ■ 有効にする 仮想ディスクは Backup Exec で使用できません。仮想ディスクが無効になっている場合は、他のアプリケーションで使用できます。Backup Exec は無効になっている仮想ディスクに対して、ディスクの空き領域の低い値を監視しません。 ■ オンライン 仮想ディスクは使用できます。 ■ オフライン Backup Exec は仮想ディスクにアクセスできません。[オフライン]にチェックマークを付けて、ストレージアレイをオンラインにすることができます。
使用領域	<p>ストレージアレイの使用済み物理ディスクすべての RAW 容量の量を表示します。Backup Exec は総容量から利用可能な容量を引くことによって使用済み容量を計算します。</p>
ハードウェア名	<p>ストレージアレイのハードウェアプロバイダがベンダーのハードウェアプロバイダが割り当てる名前を表示します。</p>

項目	説明
ハードウェアの状態	<p>ハードウェアの状態を表示します。</p> <p>ハードウェアの状態を示す値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OK 仮想ディスクはオンラインです。 ■ オフライン 仮想ディスクはオフラインです。Backup Exec はアクセスできません。仮想ディスクをオンラインにする方法については、ストレージアレイとともに提供されたベンダーのマニュアルと管理ソフトウェアを参照してください。 ■ 失敗 仮想ディスクに障害が発生しています。Backup Exec はアクセスできません。問題のトラブルシューティングについては、ストレージアレイとともに提供されたベンダーのマニュアルと管理ソフトウェアを参照してください。問題が解決された後、仮想ディスクは自動的にオンラインになります。
ハードウェア健全性	<p>ハードウェア健全性を表示します。</p> <p>ハードウェア健全性を示す値は、次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OK 仮想ディスクはオンラインです。 ■ 警告 仮想ディスクに障害が発生したか、エラーが生成されていますが、現在操作は可能です。 ■ 重要 仮想ディスクに障害が発生しています。Backup Exec はアクセスできません。問題のトラブルシューティングについては、ストレージアレイとともに提供されたベンダーのマニュアルと管理ソフトウェアを参照してください。 ■ 指定なし 仮想ディスクは設定過程にあります。

項目	説明
ディスクの分類	<p>仮想ディスクがあるディスクグループの種類を表示します。</p> <p>Backup Exec は、パリティ (RAID 5) のストライプにディスク分類される物理ディスクのグループのみを作成します。別のディスク分類が表示される場合、そのディスクグループは Storage Provisioning Option 以外のツールによって作成されています。</p>
最大ファイルサイズ	<p>この仮想ディスクに含まれている各ファイルの最大サイズを表示します。MB か GB を選択します。指定可能なファイルサイズは 1 MB から 4096 GB です。デフォルトサイズは 4 GB です。</p> <p>小さいファイルを多数作成した場合は、コンピュータが各ファイルを処理しなければならないので、パフォーマンスが低下することがあります。ただし、大容量ファイルを作成した場合は、ファイルシステムの制限によりメモリ割り当ての問題やネットワーク上の問題を引き起こすことがあります。これらの問題は、ネットワークをまたいでファイルを格納される場合の問題になる可能性があります。</p>
1 ファイルごとのバックアップセットの最大数	<p>各仮想ディスクファイルに書き込むバックアップセットの最大数を表示します。最大数は 1 から 8192 までの範囲で設定できます。デフォルトは 100 です。</p> <p>ファイル内で少ない数のバックアップセットを指定すると、多くのバックアップセットを指定した場合よりも、Backup Exec はディスク領域をより速く再利用できることがあります。たとえば、ファイルごとに 100 のバックアップセットを指定します。Backup Exec は、すべてのバックアップセットの上書き禁止期間が期限切れになるまで、ディスク領域を再利用できません。ファイルごとに 1 つのバックアップセットを指定すると、Backup Exec はそのセットの上書き禁止期間が期限切れになるとすぐディスク領域を再利用できます。</p>
許可する同時並行ジョブの数 x	<p>この仮想ディスクに許可する同時並行処理の数を表示します。この数は 1 から 16 の範囲で指定できます。デフォルトの数は 1 です。</p>

Storage Provisioning Option のホットスペアについて

自動再構築の機能があるストレージアレイが仮想ディスクの冗長性を失った場合、冗長性を取り戻すためにホットスペアとして物理ディスクを使います。ストレージアレイが自動再構築の機能をサポートしていない場合は、仮想ディスクを手動で再構築するためにベンダーのツールを使わなければなりません。詳しくはストレージベンダーのマニュアルを参照してください。

ホットスペアとして使いたい物理ディスクを指定するためにストレージアレイ設定ウィザードを使います。

ホットスペアを指定する前に、次の推奨事項を参照してください。

- 各エンクロージャに少なくとも 1 つのホットスペアを指定します。すべてのエンクロージャに対して 1 つのホットスペアのみを指定できますが、複数の物理ディスクに障害が発生した場合の危険性を考慮します。
- エンクロージャのスロット 0 にある物理ディスクをホットスペアとして指定します。これによって、ホットスペアはどのディスクであるかをすばやく識別できます。
- ホットスペアに置換される物理ディスクと少なくとも同じサイズであるホットスペアを指定します。ホットスペアが物理ディスクより小さい場合、ストレージアレイは仮想ディスクを再構築できません。

推奨事項について詳しくはストレージアレイベンダーのマニュアルを参照してください。

p.1991 の「[ストレージアレイ設定ウィザードを使用したホットスペアの変更](#)」を参照してください。

p.1971 の「[ストレージアレイ設定ウィザードの使用について](#)」を参照してください。

p.1971 の「[ストレージアレイ設定ウィザードを使用したストレージアレイの設定](#)」を参照してください。

ストレージアレイ設定ウィザードを使用したホットスペアの追加

ストレージアレイのホットスペアを追加するためにストレージアレイ設定ウィザードを使うことができます。このウィザードを完了すると、[ストレージアレイの設定]と呼ばれるユーティリティジョブがサブミットされます。ジョブが正常に完了した場合は、ホットスペアが追加されています。

ストレージアレイ設定ウィザードを使ってホットスペアを追加する方法

- 1 ツールメニューで、[ウィザード]>[ストレージアレイ設定ウィザード]をクリックします。
- 2 [よろこそ]画面で、追加したいホットスペアが含まれているストレージアレイを選択して[次へ]をクリックします。
- 3 [利用可能な物理ディスク]リストで、ホットスペアとして使う物理ディスクを選択します。

- 4 左下の矢印をクリックして[ホットスペア]リストに選択した物理ディスクを移動します。
- 5 [次へ]をクリックします。
- 6 [概略]画面で、[ホットスペアの数]が正しいことを確認し、[完了]をクリックします。
 p.1990の「[Storage Provisioning Option のホットスペアについて](#)」を参照してください。

ストレージレイ設定ウィザードを使用したホットスペアの変更

別の物理ディスクを選択してストレージレイのホットスペアとして使うためにストレージレイ設定ウィザードを使うことができます。このウィザードを完了すると、[ストレージレイの設定]と呼ばれるユーティリティジョブがサブミットされます。ジョブが正常に完了した場合は、ホットスペアが変更されています。

ストレージレイ設定ウィザードを使ってホットスペアを変更する方法

- 1 ツールメニューで、[ウィザード]>[ストレージレイ設定ウィザード]をクリックします。
- 2 [ようこそ]画面で、変更するホットスペアが含まれているストレージレイを選択して[次へ]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。

ホットスペアを利用可能な物理ディスクとして 次に示す順序で操作を実行します。
 指定する場合

- [ホットスペア]リストで、[利用可能な物理ディスク]リストに戻すホットスペアを選択します。
- 右下の矢印をクリックして[利用可能な物理ディスク]リストに選択したホットスペアを移動します。

利用可能な物理ディスクをホットスペアとして 次に示す順序で操作を実行します。
 指定する場合

- [利用可能な物理ディスク]リストで、ホットスペアとして使う1つ以上の物理ディスクを選択します。
- 左下の矢印アイコンをクリックして[ホットスペア]リストに選択した物理ディスクを移動します。

- 4 [次へ]をクリックします。
- 5 [概略]画面で、[ホットスペアの数]が正しいことを確認し、[完了]をクリックします。
p.1990の「[Storage Provisioning Option のホットスペアについて](#)」を参照してください。
p.1970の「[Backup Exec でのストレージレイのコンポーネントの表示](#)」を参照してください。

新しいストレージレイの検出

Backup Execは定期的に新しいストレージレイまたは物理ディスクを検索します。追加した新しいストレージレイまたは物理ディスクをBackup Execが検出しない場合は、更新操作を実行してください。更新操作を実行しても新しいデバイスが検出されない場合は、Backup Exec サービスを再起動します。

サービスを再起動すると、[デバイス]ビューに新しいストレージレイが表示されます。

Backup Exec で新しいストレージレイを検出するには、Storage Provisioning Option をインストールしておく必要があります。

新しいストレージレイを検出する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 新しいストレージレイか物理ディスクを追加したメディアサーバーを展開します。
- 3 メニューバーで[表示]、[最新の情報に更新]の順にクリックします。
新しいストレージレイが[デバイス]ビューに表示されます。
- 4 更新を実行してもストレージレイが検出されない場合は、Backup Exec サービスを再起動します。

p.158の「[Backup Exec サービスの起動および停止](#)」を参照してください。

p.1996の「[Storage Provisioning Option のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

仮想ディスクまたはストレージレイの名前の変更

仮想ディスクまたはストレージレイの名前を変更できます。名前は128文字を超過できません。ハードウェアの名前は変更できません。

ストレージレイを設定するためにベンダーのツールを使っている場合、アレイに割り当てるハードウェア名はベンダーのツールに表示されます。ストレージレイの名前を変更するには、ベンダー提供のツールを使用する必要があります。

仮想ディスクまたはストレージレイの名前を変更する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 接続されたストレージレイがあるメディアサーバーを展開し、次に名前を変更するデバイスを選択します。
- 3 ストレージレイを展開し、次に名前を変更するデバイスを選択します。
- 4 次のいずれかを実行します。
 - 名前を変更するデバイスを右クリックし、[プロパティ]をクリックしてから[一般]タブで、[名前]フィールドを選択します。
 - タスクペインの[一般タスク]の下にある[名前の変更]をクリックします。
- 5 デバイスの新しい名前を入力します。
- 6 [OK]をクリックします。

仮想ディスクの物理ディスクの識別について

多くのストレージレイのエンクロージャには、物理ディスクの操作状態を示す小さい状態ライトを使う物理ディスクが組み込まれています。**Storage Provisioning Option**は[点滅]機能が付いているこれらのライトを使用し、仮想ディスクを構成する物理ディスクを簡単に識別するのに役立ちます。仮想ディスクの[点滅]機能を選択すると、物理ディスクの状態ライトは点滅します。

メモ: 点滅機能に対するストレージレイのサポートは、この機能に対するストレージレイハードウェアのサポートによって決まります。すべてのストレージレイハードウェアが点滅をサポートするわけではありません。詳しくはストレージレイハードウェアのマニュアルを参照してください。

点滅機能を異なる方法で使うことができます。次の場合に役に立つように使うことができます:

- 1つのストレージレイからの別のストレージレイへの仮想ディスクの移動。
1つのエンクロージャから別のエンクロージャに仮想ディスクを移動する場合に点滅機能を使うことができます。多くのエンクロージャがある場合、仮想ディスクを構成する物理ディスクを識別するのに点滅機能を使うことができます。これがないと、仮想ディスクを構成する物理ディスクの判断が困難になる場合もあります。
- 問題となる物理ディスクの識別。
Storage Provisioning Optionが物理ディスクの問題のためのアラートを生成するとき、問題となる物理ディスクを見つけるのに役立つ点滅機能を使うことができます。

点滅機能を使うと、次が適用されます:

- 点滅機能は一度に1つの仮想ディスクで動作します。

複数の仮想ディスクの物理ディスクを同時に識別するのにこれを使うことはできません。

p.1994 の「[仮想ディスクの物理ディスクの識別](#)」を参照してください。

仮想ディスクの物理ディスクの識別

仮想ディスクの物理ディスクを識別するには、次の手順を実行します。

p.1993 の「[仮想ディスクの物理ディスクの識別について](#)」を参照してください。

仮想ディスクの物理ディスクを識別する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 接続されたストレージアレイがあるメディアサーバーを展開します。
- 3 ストレージアレイを展開します。
- 4 仮想ディスクを選択します。
- 5 タスクペインの[デバイス]の下にある[点滅]をクリックします。
- 6 点滅機能をオフにするには、タスクペインの[デバイス]の下にある[点滅停止]をクリックします。

Storage Provisioning Option のディスク使用率の予測について

Storage Provisioning Option をインストールした後、Backup Exec はストレージアレイのディスク領域の使用率を予測できます。すべてのストレージアレイで利用可能なディスク領域の量が低くなると予測された場合にアラートを送信するよう Backup Exec を設定できます。アラートは現在のディスク領域リソースが十分かどうかの情報を提供し、ディスク領域をいつ拡大するか計画する場合に役立ちます。

Backup Exec は統計分析用のサンプルデータを集めます。たとえば、デフォルト設定を使用すると、1 週間にわたり 24 時間ごとの日々のデータを Backup Exec に収集させることができます。統計的な正確さを確保するために、デフォルトで Backup Exec は 35 個のデータサンプルグループを保持します。Backup Exec はサンプルグループごとにジョブ履歴データを調べ、新しいデータを使ってディスクの使用率の傾向を再計算します。

Backup Exec はサンプルデータを使って、今後のジョブによるディスクアレイの領域の使用率を推定します。Backup Exec は過去の使用率について統計的の平均を計算し、上昇傾向か下落傾向かを判断します。また、Backup Exec は過去のバックアップセットの上書き禁止期間が期限切れになると同時に利用可能になる使用済みのディスク領域の量を計算します。

Backup Exec はストレージレイで利用可能なディスク領域の量とこれらの予測値を組み合わせます。その後、Backup Exec はすべてのストレージレイのディスク領域が消費されるまでの残り時間を予測できます。

次の場合に予測の正確さが低下します。

- 統計的に有効な推定値のための履歴データの量が不十分な場合
- 履歴データが大きく変動していて、反復性に欠ける場合

Backup Exec はこのような場合にアラートを送信して通知します。

p.1995 の「[ストレージレイのディスク容量不足のアラートの設定](#)」を参照してください。

p.1995 の「[\[Storage Provisioning アラート\]のデフォルトオプション](#)」を参照してください。

ストレージレイのディスク容量不足のアラートの設定

Backup Exec は接続されているすべてのストレージレイについて、ディスクの使用率の情報を集めます。統計分析によって、Backup Exec はすべてのストレージレイのディスク領域が消費されるまでの時間を予測します。ディスク容量不足が起きる何日前に Backup Exec にアラートを送信させるかを指定することもできます。

p.1994 の「[Storage Provisioning Option のディスク使用率の予測について](#)」を参照してください。

ストレージレイのディスク容量不足のアラートを設定する方法

- 1 ツールメニューの[オプション]をクリックします。
- 2 タスクペインの[設定]の下にある[Storage Provisioning アラート]をクリックします。
- 3 必要に応じてデフォルトを変更します。
p.1995 の「[\[Storage Provisioning アラート\]のデフォルトオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

[Storage Provisioning アラート]のデフォルトオプション

デフォルトオプションは Backup Exec がディスクの使用状況の情報を集める方法についての情報を提供します。

p.1995 の「[ストレージレイのディスク容量不足のアラートの設定](#)」を参照してください。

表 Z-7 [Storage Provisioning アラート]のデフォルトオプション

項目	説明
すべてのストレージアレイのディスク容量低下が予測される x 日前にアラートを送信する	ディスク容量不足が起きる前に Backup Exec がアラートを送信するタイミングを表示します。 デフォルトは 30 日です。
サンプルグループ	有効な分析を行うために Backup Exec が平均を取る対象とするサンプルグループの数を表示します。 デフォルトは 35 個のサンプルグループです。
1 グループ当たりのサンプル	グループ 1 つあたりのサンプル数を表示します。各サンプルは Backup Exec がデータを収集する期間を示します。たとえば、グループ 1 つあたりにデフォルトである 7 つのサンプルを指定すると、 Backup Exec は 7 つの期間についてデータを収集します。期間には、指定されているサンプル間隔が適用されます。 Backup Exec は統計分析のためにグループのサンプルを平均します。 デフォルトはグループ 1 つあたり 7 個のサンプルグループです。
サンプル間隔	Backup Exec がサンプルのデータを収集するための時間数を表示します。たとえば、24 時間というデフォルトのサンプル間隔を指定すると、 Backup Exec は 24 時間分のデータを収集します。 デフォルトのサンプル間隔は 24 時間です。
ハードウェア関連情報の警告を表示しない(Dell ディスクへのバックアップデバイス)	

Storage Provisioning Option のトラブルシューティング

Storage Provisioning Option またはストレージアレイのハードウェアで問題が起きたら、次の項目を確認します。

- オペレーティングシステムがサポートされている。メディアサーバーが **Windows Server 2003 R2** を実行している場合、**Service Pack 2** か **SAN 用記憶域マネージャ MMC** スナップインがインストールされていることを確認します。
- ベンダーのストレージアレイとベンダーのハードウェアプロバイダがサポートされている。

互換性があるデバイスのリストは、次の URL で参照できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/v-269-2>

- ストレージアレイに電源があり投入されている。
- ストレージアレイのすべてのライトとインジケータの表示が正常である。
- ストレージアレイが適切にゾーニングされている (SAN にある場合)。
- ケーブルが正しいポートに差し込まれている。
- Microsoft DiskRAID コマンドラインツールか SAN 用記憶域マネージャ MMC スナップインがストレージアレイのハードウェアを検出および動作できる。
- ディスクマネージャはマスクされていない仮想ディスクを検出できる。
- 新しい仮想ディスクを検出するために更新操作が実行されている。

Storage Provisioning Option を評価版のライセンスでインストールした場合は、ライセンスが評価期間内であることを確認します。評価期間が期限切れになると、オプションは非常に限られたモードで機能します。

Symantec Online Storage for Backup Exec

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Symantec Online Storage for Backup Exec について](#)
- [Symantec Online Storage for Backup Exec を使用する場合の推奨事項](#)
- [Symantec Online Storage for Backup Exec の設定](#)
- [Symantec Online Storage フォルダについて](#)
- [Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブの作成について](#)
- [Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブの管理について](#)
- [Symantec Online Storage for Backup Exec ファイルの消去](#)
- [Symantec Online Storage フォルダの削除](#)
- [Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブのリストアについて](#)

Symantec Online Storage for Backup Exec について

Symantec Online Storage for Backup Exec は Symantec Protection Network の一部としてオンラインのバックアップとリストアのサービスを提供します。Symantec Protection Network はオンラインサービスとしてシマンテック社のテクノロジーを提供します。Backup Exec との統合は、オンラインバックアップのセキュリティを利用するために新しいアプリケーションについて学習する必要がないことを意味します。

Symantec Online Storage for Backup Exec により Backup Exec の最も重要なデータをバックアップし、バックアップの複製コピーをオフサイトに送信できます。データは、ハー

ドウェア障害、マルウェアおよび自然災害の危険がないシマンテックのサーバーに格納されます。Symantec Online Storage for Backup Exec の使用は、バックアップ戦略の重要な部分になります。

Backup Exec メディアサーバー全体を失っても、Backup Exec カタログを Symantec Protection Network にバックアップすることでデータを保護できます。サポートされているすべてのコンピュータに Backup Exec と Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をインストールして、オンラインカタログからデータをリストアできます。

Symantec Online Storage for Backup Exec を使用する 場合の推奨事項

Symantec Online Storage for Backup Exec を使用して、通常 Backup Exec によってバックアップするすべてのデータをバックアップできます。ただし、最も重要なデータを含む小規模なジョブに Symantec Online Storage for Backup Exec を使用することをお勧めします。Symantec Online Storage for Backup Exec はローカルバックアップ処理を置換するためのものではありません。ただし、ビジネスの最も重要なデータに、自然災害とハードウェア障害からのセキュリティを提供するのに役立ちます。

帯域幅によっては大規模な Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブのバックアップが制限される場合があります。同じジョブをローカルで実行するよりもインターネットで実行するほうが時間がかかります。また、使用するストレージスペースの料金を支払う必要があるため、このサービスの最も費用効率が低い使用法は、重要なジョブのみをバックアップすることです。

Symantec Online Storage を使う最も効率のよい方法は、同じ重複したバックアップジョブを定期的に行うことです。ポリシーを作成し、スケジュールに従ってジョブを実行できます。初めてジョブを実行した後は、以降にそのジョブを実行したときに Symantec Online Storage for Backup Exec はバックアップデータを確認します。前回から変更されていないデータはスキップされます。後続のバックアップには、最後の実行以降に変更されたファイルのみが含まれます。この処理によって、繰り返し発生するバックアップジョブの実行に必要な時間と帯域幅が減ります。

Symantec Online Storage for Backup Exec を使用して次の種類の重要な情報をバックアップしたい場合があります。

- Backup Exec カタログ
- 顧客関係管理 (CRM) データベース
- 従業員情報または給与情報

Symantec Online Storage for Backup Exec の設定

複製オンラインバックアップジョブを実行する前に、Symantec Online Storage for Backup Exec を設定する必要があります。サービスにサインアップし、Symantec Protection Network の Web サイトから Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をダウンロードします。これらの手順を完了したら、Symantec Online Storage フォルダを作成し、オンラインバックアップ複製を実行できます。

Symantec Online Storage フォルダを作成する前に Symantec Online Storage にサインアップして、Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をダウンロードする必要があります。

表 AA-1 Symantec Online Storage for Backup Exec の設定

手順	説明
手順 1	Symantec Protection Network の Web サイトで Symantec Online Storage for Backup Exec にサインアップします。 p.2001 の「 Symantec Online Storage for Backup Exec のサインアップについて 」を参照してください。
手順 2	Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をダウンロードします。 p.2002 の「 Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent のダウンロードについて 」を参照してください。
手順 3	Symantec Online Storage フォルダを作成します。 p.2002 の「 Symantec Online Storage フォルダの作成 」を参照してください。

Symantec Online Storage for Backup Exec のサインアップについて

Symantec Protection Network の Web サイトで Symantec Online Storage for Backup Exec にサインアップします。要件に合ったサービスプランを選択する必要があります。

Symantec Online Storage for Backup Exec にサインアップするには、次の Web サイトに移動してください:

<https://signup.spn.com>

詳しくは、Symantec Protection Network の Web サイトのオンラインヘルプを参照してください。

p.2001 の「[Symantec Online Storage for Backup Exec の設定](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent のダウンロードについて

Symantec Online Storage for Backup Exec を使う前に Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をダウンロードする必要があります。Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent では、Symantec Online Storage フォルダを作成して設定できます。Symantec Online Storage フォルダは、Backup Exec の他のすべてのデバイスと同様にバックアップ先として使用できるオンラインストレージデバイスです。

Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をダウンロードするには、次の Web サイトに移動してください：

<http://www.spn.com>

アカウントにログオンし、Symantec Online Storage for Backup Exec 用に表示される手順に従ってください。詳しくは、Symantec Protection Network の Web サイトのオンラインヘルプを参照してください。

p.2001 の「[Symantec Online Storage for Backup Exec の設定](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage フォルダについて

Symantec Online Storage フォルダは、オンラインバックアップ複製ジョブのバックアップ先です。異なるオンラインバックアップ複製ジョブに複数の Symantec Online Storage フォルダを作成および設定できます。ただし、一度に 1 つの Symantec Online Storage ジョブしか実行できません。Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をダウンロードして、Symantec Online Storage フォルダを作成した後は、デバイスとして使うことができます。[デバイス]タブに Symantec Online Storage フォルダを表示できます。

p.2001 の「[Symantec Online Storage for Backup Exec の設定](#)」を参照してください。

p.2002 の「[Symantec Online Storage フォルダの作成](#)」を参照してください。

p.2004 の「[Symantec Online Storage フォルダの一時停止](#)」を参照してください。

p.2004 の「[Symantec Online Storage フォルダの再開](#)」を参照してください。

p.2005 の「[既存の Symantec Online Storage フォルダの共有](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage フォルダの作成

Symantec Online Storage フォルダは、オンラインバックアップ複製ジョブのバックアップ先です。

p.2002 の「[Symantec Online Storage フォルダについて](#)」を参照してください。

メモ: Symantec Online Storage にサインアップし、Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をダウンロードするまでは、Symantec Online Storage フォルダを作成できません。

p.2001 の「[Symantec Online Storage for Backup Exec の設定](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage フォルダは[すべてのデバイス]プールも含め、デバイスプールには含まれません。バックアップ複製ジョブのターゲットとする個々の Symantec Online Storage フォルダを常に指定する必要があります。この機能は、バックアップジョブを Symantec Online Storage フォルダに誤って送信しないようにするのに役立ちます。

Symantec Online Storage フォルダを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 3 [Symantec Online Storage]をクリックします。
Symantec Online Storage for Backup Exec を設定していない場合は、[デバイス設定アシスタント]に[**Symantec Online Storage**]ではなく[**Symantec Protection Network**]が表示されます。サービスにサインアップして Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent をダウンロードする必要があります。
- 4 新しいフォルダの名前を入力します。
- 5 フォルダをオンラインバックアップ複製ジョブで使用できるようにするために[有効にする]が選択されていることを確認します。
- 6 [OK]をクリックします。

Symantec Online Storage フォルダのプロパティ

異なるオンラインバックアップ複製ジョブに複数の Symantec Online Storage フォルダを作成および設定できます。

p.2002 の「[Symantec Online Storage フォルダの作成](#)」を参照してください。

表 AA-2 Symantec Online Storage フォルダオプション

項目	説明
名前	Symantec Online Storage フォルダの名前を指定します。Symantec Online Storage フォルダの名前を選択すると、変更することはできません。 Symantec Online Storage フォルダの名前は、128 文字以内にする必要があります。
一時停止	フォルダを一時停止または再開します。
有効にする	Backup Exec で使用するフォルダを有効にします。フォルダを無効にするには、このチェックボックスをオフにします。

Symantec Online Storage フォルダの一時停止

Symantec Online Storage フォルダを一時停止できます。Symantec Online Storage フォルダを一時停止すると、そのフォルダに対するバックアップ複製ジョブは実行されません。一時停止するときにバックアップ複製ジョブが Symantec Online Storage フォルダですでに実行されている場合、ジョブは完了します。フォルダが再開されるまで、それ以降のバックアップ複製ジョブは実行されません。

p.2004 の「[Symantec Online Storage フォルダの再開](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage フォルダを一時停止する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 Symantec Online Storage フォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 3 一時停止する Symantec Online Storage フォルダを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[一時停止]を選択します。

Symantec Online Storage フォルダの再開

Symantec Online Storage フォルダを一時停止できます。Symantec Online Storage フォルダを一時停止すると、そのフォルダに対するバックアップ複製ジョブは実行されません。Symantec Online Storage フォルダに対するバックアップ複製ジョブを実行するには、このフォルダを再開する必要があります。

p.2004 の「[Symantec Online Storage フォルダの一時停止](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage フォルダを再開する方法

- 1 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 Symantec Online Storage フォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 3 停止している Symantec Online Storage フォルダから再開するフォルダを選択します。
- 4 タスクペインの[一般タスク]の下にある[一時停止]を選択します。

既存の Symantec Online Storage フォルダの共有

Central Admin Server Option (CASO) または SAN Shared Storage Option がインストールされている場合は、コンピュータ間で Symantec Online Storage フォルダを共有することができます。共有 Symantec Online Storage フォルダにアクセスできる各コンピュータの下の[デバイス]ビューに共有 Symantec Online Storage フォルダが表示されます。Symantec Online Storage フォルダの名前は一意です。1 つのアカウントで同じ名前の複数のフォルダを所有することはできません。

既存の Symantec Online Storage フォルダを共有する方法

- 1 共有するフォルダを追加するコンピュータ上で、ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 2 タスクペインの[デバイスタスク]の下にある[デバイス設定アシスタント]をクリックします。
- 3 [Symantec Online Storage]をクリックします。
- 4 [Add shared Symantec Online Storage]をクリックします。
- 5 このコンピュータに追加する共有 Symantec Online Storage フォルダの名前を入力します。
- 6 [OK]をクリックします。

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブの作成について

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップジョブは複製ジョブとして作成されなければなりません。既存のバックアップセットを複製するか、またはバックアップセットが作成されるスケジュール済みジョブのすぐ後にバックアップセットを複製することができます。

p.357 の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

p.2006 の「[Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブの作成](#)」を参照してください。

また、テンプレートの一部として Symantec Online Storage for Backup Exec のための複製バックアップセットを作成することもできます。

p.536 の「[バックアップセットの複製テンプレートについて](#)」を参照してください。

p.538 の「[ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加](#)」を参照してください。

初めてバックアップ複製ジョブを実行した後は、以降にそのジョブを実行したときに Symantec Online Storage for Backup Exec はバックアップデータを検査します。前回から変更されていないデータはスキップされます。後続のバックアップには、最後の実行以降に変更されたファイルのみが含まれます。この処理によって、繰り返し発生するバックアップジョブの実行に必要な時間と帯域幅が減ります。

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブを作成する場合は推奨事項を考慮してください。

p.2000 の「[Symantec Online Storage for Backup Exec を使用する場合の推奨事項](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブの作成

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップジョブは複製ジョブとして作成されなければなりません。既存のバックアップセットを複製するか、またはバックアップセットが作成されるスケジュール済みジョブのすぐ後にバックアップセットを複製することができます。

p.357 の「[バックアップしたデータの複製](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブを作成する方法

- 1 ナビゲーションバーの[ジョブセットアップ]をクリックします。
- 2 タスクペインの[バックアップタスク]の下にある[新規バックアップセット複製ジョブ]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。

既存のバックアップセットを別の宛先にコピーする方法
 次に示す順序で操作を実行します。

- [既存のバックアップセットを複製する]をクリックして[OK]をクリックします。
- コピー元のバックアップセットを選択します。複数のデータストリームで作成されたOracle ジョブまたはDB2 ジョブの場合は、インスタンス名の下にあるバックアップセットが作成された日付を選択します。

スケジュール済みバックアップジョブを実行した場合に作成されるバックアップセットを複製する方法
 次に示す順序で操作を実行します。

- [ジョブで作成されたバックアップセットを複製する]をクリックして[OK]をクリックします。
- ソースとして使用するスケジュール済みバックアップジョブを選択します。

- 4 [プロパティ]ペインの[宛先]の下にある[デバイスおよびメディア]をクリックします。
- 5 必要なオプションを設定します。

デバイス

バックアップ複製ジョブのコピー先の **Symantec Online Storage** フォルダを選択します。

メディアに上書きする

このオプションを選択します。既存のバックアップセットに **Symantec Online Storage for Backup Exec** のバックアップジョブは追記できません。

必要に応じて他のオプションを設定します。

p.324 の「バックアップジョブおよびテンプレートの[デバイスとメディア]オプション」を参照してください。

- 6 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[一般]をクリックします。
 p.363 の「新規バックアップセット複製ジョブの[一般]オプション」を参照してください。
- 7 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[詳細]をクリックします。

- 8 [圧縮の種類]で、[なし]をクリックします。

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブはハードウェア圧縮をサポートしません。元のバックアップジョブでソフトウェア圧縮を使った場合、Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブも圧縮されます。

必要に応じて他のオプションを設定します。

p.364 の「[新規バックアップセット複製ジョブの\[詳細\]オプション](#)」を参照してください。

- 9 [プロパティ]ペインの[設定]の下にある[ネットワークとセキュリティ]をクリックします。

- 10 [暗号化の種類]で、[ソフトウェア]をクリックします。

Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップ複製ジョブは暗号化されなければなりません。Symantec Online Storage はハードウェアの暗号化をサポートしません。

元のバックアップジョブを暗号化した場合、元のジョブの暗号化キーは Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブに適用されます。

必要に応じて他のオプションを設定します。

p.391 の「[バックアップの\[ネットワークとセキュリティ\]オプション](#)」を参照してください。

- 11 バックアップジョブの完了を通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]の下にある[通知]をクリックします。

p.670 の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

- 12 次のいずれかを実行します。

スケジュール済みバックアップジョブからデータを複製する場合 [今すぐ実行]をクリックします。

既存のバックアップセットからデータを複製する場合 [今すぐ実行]をクリックするか、または[実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。

Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブの管理について

既存のバックアップセットに Symantec Online Storage for Backup Exec のバックアップジョブは追記できません。すべての Symantec Online Storage for Backup Exec バックアップ複製ジョブは新しいジョブであるか、または上書き禁止期間が過ぎた既存のジョブを上書きします。

p.206 の「[メディアの上書き禁止について](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage for Backup Exec アカウント情報を表示するには、Symantec Protection Network の Web サイトにログオンします。特に、使用したデータの量を表示できます。バックアップジョブを確認するように Backup Exec を設定した場合は、Web サイトで結果を表示することもできます。

次の URL で Symantec Protection Network の Web サイトにアクセスできます：

<https://www.spn.com>

Symantec Online Storage for Backup Exec ファイルの消去

Symantec Online Storage for Backup Exec ファイルは、不要になった場合に消去できます。Symantec Online Storage for Backup Exec ファイルを消去すると、Backup Exec は Symantec Online Storage フォルダとディスクの両方からデータを削除します。また、カタログからもファイル参照を削除します。ただし、ファイルは今後のバックアップジョブで使用するため残されます。

注意: 消去したデータをリストアに使用することはできません。ファイルからデータを消去する場合は、必要のないデータであることを十分に確認してください。

Symantec Online Storage for Backup Exec ファイルを消去する方法

- 1 ナビゲーションバーの [デバイス] をクリックします。
- 2 Symantec Online Storage フォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 3 消去するファイルを含んでいる Symantec Online Storage フォルダを選択します。
- 4 結果ペインで、消去するファイルを選択します。
- 5 タスクペインの [メディアタスク] の下にある [クイック消去] を選択します。
- 6 [はい] をクリックします。複数のファイルを選択した場合は [すべて] をクリックします。
- 7 必要なオプションを設定します。

p.467 の「ユーティリティジョブの [一般] オプション」を参照してください。

- 8 ジョブの完了時にユーザーまたはグループに通知する場合は、[プロパティ]ペインの[設定]で、[通知]をクリックします。

p.670 の「[ジョブの通知オプション](#)」を参照してください。

- 9 次のいずれかを実行します。

ジョブを今すぐ実行する場合 [今すぐ実行]をクリックします。

スケジュールに関するオプションを設定する場合 [実行頻度]の下にある[スケジュール]をクリックします。

p.343 の「[ジョブのスケジュールの設定](#)」を参照してください。

Symantec Online Storage フォルダの削除

Symantec Protection Network 上の Symantec Online Storage フォルダまたはそのフォルダ内のデータを保存しておく必要がなくなった場合は、Symantec Online Storage フォルダを削除できます。

Symantec Online Storage フォルダを削除する前に、フォルダ内に含まれるすべてのバックアップファイルを消去する必要があります。バックアップファイルを消去せずにフォルダを削除すると、ファイルは Symantec Protection Network に保存されたままになります。ただし、このファイルは Backup Exec 内で表示できません。

p.2009 の「[Symantec Online Storage for Backup Exec ファイルの消去](#)」を参照してください。

メモ: 最初に Symantec Online Storage フォルダ内のファイルを消去せずにフォルダを削除した場合は、フォルダの元の名前を使用してフォルダを再作成できます。次に、フォルダでインベントリジョブを実行します。Symantec Online Storage フォルダ内のバックアップファイルは、インベントリ操作の完了後に表示できます。必要に応じて、次の手順に従ってファイルの消去およびフォルダの削除を行うことができます。

Symantec Online Storage フォルダを削除する方法

- 1 削除するフォルダ内に存在するすべての Symantec Online Storage バックアップファイルを消去します。
- 2 ナビゲーションバーの[デバイス]をクリックします。
- 3 Symantec Online Storage フォルダが存在しているコンピュータのアイコンを展開します。
- 4 削除する Symantec Online Storage フォルダを選択します。

- 5 タスクペインの[一般タスク]の下にある[削除]をクリックします。
- 6 [はい]をクリックします。

Symantec Online Storage for Backup Exec ジョブのリストアについて

ジョブをローカルにリストアするよりも Symantec Online Storage for Backup Exec を使用してインターネット経由でリストアするほうが時間がかかります。データをリストアする必要がある場合、Symantec Online Storage for Backup Exec を使用する前に、まず複製バックアップのソースからリストアすることをお勧めします。

p.602 の「[リストアジョブの\[詳細\]オプション](#)」を参照してください。

Backup Exec のアクセシビリティ

この付録では以下の項目について説明しています。

- [アクセシビリティと Backup Exec について](#)
- [Backup Exec のキーボードショートカットについて](#)
- [Backup Exec のリストボックスのナビゲーション](#)
- [Backup Exec のタブ付きダイアログボックスのナビゲーション](#)
- [アクセシビリティオプションの設定について](#)

アクセシビリティと Backup Exec について

シマンテック製品は、アメリカ合衆国の Rehabilitation Act 第 508 条で規定されている連邦政府のアクセシビリティの必要条件に準拠しています。Rehabilitation Act 第 508 条については、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.access-board.gov/508.htm>

シマンテック製品は、オペレーティングシステムのアクセシビリティ設定および各種の操作補助テクノロジーと互換性があります。また、すべてのマニュアルは、多くの標準的なシステムでアクセス可能な PDF ファイルで提供されています。オンラインヘルプは HTML ファイルで提供されており、HTML に準拠したビューアを使用して表示することができます。

すべてのグラフィカルユーザーインターフェース操作およびメニュー項目は、キーボードショートカットを利用してアクセスすることができます。Backup Exec では、オペレーティングシステムで標準的なナビゲーションキーおよびキーボードショートカットを使用しています。独自の機能については、固有のキーボードショートカットを使用しています。固有のキーボードショートカットについては、マニュアルで説明されています。

p.2014 の「[Backup Exec のキーボードショートカットについて](#)」を参照してください。

キーボードショートカットを使用できないタスクペイン項目には、オペレーティングシステムのマウスキー機能を使用してアクセスできます。マウスキー機能を使用すると、キーボードのテンキーを使用して、マウスの操作を行うことができます。

Microsoft の標準のナビゲーションキーおよびキーボードショートカットを確認するには、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.microsoft.com/enable/products/keyboard.aspx>

Backup Exec のキーボードショートカットについて

すべてのメニュー項目は、アクセラレータまたはニーモニックによるキーボードショートカットを使用して選択することができます。アクセラレータとは、ユーザーインターフェース機能にすばやくアクセスするためのキーの組み合わせです。ニーモニック(「ホットキー」とも呼ばれます)とは、メニュー項目などのユーザーインターフェースコンポーネントに対応する文字で、**Alt** キーとこの文字のキーを組み合わせることで使用することによって、対応する項目を選択することができます。ユーザーインターフェースでは、ニーモニックの文字は下線付きで表示されます。

メインメニュー内の項目を選択するには、メインメニューを開き、**↑** キーや **↓** キーを使用して対象の項目を強調表示します。**→** キーを押すとサブメニューが表示され、**Enter** キーを押すと選択した項目が実行されます。

キーボードショートカットでは、大文字と小文字は区別されません。ニーモニックは、**Alt** キーの後に押しても、**Alt** キーと同時に押しても選択できます。すべてのメニュー項目にはニーモニックが割り当てられていますが、アクセラレータは必ずしも割り当てられているわけではありません。

ファイルを開く、保存する、印刷するなどの頻繁に使用される機能は、Microsoft の標準的なキーボードショートカットを使用して実行することができます。その他のメニュー項目については、Backup Exec 固有のキーボードショートカットを使用します。

p.2014 の「[Backup Exec 固有のキーボードショートカット](#)」を参照してください。

p.2014 の「[Backup Exec 固有のキーボードショートカット](#)」を参照してください。

p.2017 の「[Backup Exec Desktop and Laptop Option 管理コンソールに固有のキーボードショートカット](#)」を参照してください。

p.2019 の「[Backup Exec Desktop and Laptop Option Desktop Agent に固有のキーボードショートカット](#)」を参照してください。

Backup Exec 固有のキーボードショートカット

次の表は、Backup Exec 固有のキーボードショートカットのリストです。

p.2014 の「[Backup Exec のキーボードショートカットについて](#)」を参照してください。

表 AB-1 Backup Exec 固有のキーボードショートカット

Backup Exec でのアクセラレータ	Backup Exec でのニーモニック	結果
Alt	F	ファイルメニューを表示します。ファイルメニューを使用して、ジョブ、デバイスおよびメディアの新規作成、選択中の項目の印刷、プロパティの表示または Backup Exec の終了を実行することができます。
Alt	E	編集メニューを表示します。編集メニューでは、項目の名前変更、削除、コピーおよび選択を行うことができます。さらに、選択リストの編集やカタログの検索を行うことができます。
Alt	V	表示メニューを表示します。表示メニューは、画面に表示される情報を変更する際に使用します。表示メニューのオプションは、ナビゲーションバーで選択中の項目に応じて異なります。
Alt	N	ネットワークメニューを表示します。ネットワークメニューを使用して、 Backup Exec のログオンアカウントに関する操作を行ったり、ネットワーク上のメディアサーバーに接続したり、ローカルのメディアサーバーに再接続します。

Backup Exec でのアクセラレータ	Backup Exec でのニーモニック	結果
Alt	T	ツールメニューを表示します。ツールメニューには、サービスの起動と終了、デバイスおよびメディア操作の使用、ウィザードの使用、デフォルトオプションの設定など、Backup Exec に関する作業のための重要なオプションがあります。
Alt	W	ウィンドウメニューを表示します。ウィンドウメニューを使用して、新しいウィンドウまたはビューに移動します。
Alt	H	ヘルプメニューを表示します。ヘルプメニューを使用して、Backup Exec のマニュアルやさまざまなシマンテック社の Web サイトにアクセスします。

Backup Exec ユーティリティ固有のキーボードショートカット

次の表は、Backup Exec ユーティリティのショートカットキーのリストです。

p.2014 の「[Backup Exec のキーボードショートカットについて](#)」を参照してください。

表 AB-2 Backup Exec ユーティリティ固有のキーボードショートカット

Backup Exec でのアクセラレータ	Backup Exec でのニーモニック	結果
Alt	F	ファイルメニューを表示します。ファイルメニューでは、メディアサーバーおよびメディアサーバーグループの新規作成、プロパティの表示、 Backup Exec ユーティリティの終了を行うことができます。
Alt	E	編集メニューを表示します。編集メニューでは、項目の名前変更、削除および選択を行うことができます。
Alt	V	表示メニューを表示します。表示メニューは、画面に表示される情報を変更する際に使用します。
Alt	H	ヘルプメニューを表示します。ヘルプメニューを使用して、 Backup Exec のマニュアルやさまざまなシマンテック社の Web サイトにアクセスします。

Backup Exec Desktop and Laptop Option 管理コンソールに固有のキーボードショートカット

次の表は、Backup Exec Desktop and Laptop Option 管理コンソールのショートカットキーのリストです。

p.2014 の「[Backup Exec のキーボードショートカットについて](#)」を参照してください。

表 AB-3 Backup Exec Desktop and Laptop Option 管理コンソールに固有の
キーボードショートカット

Backup Exec でのアクセラレータ	Backup Exec でのニーモニック	結果
Alt	F	ファイルメニューを表示します。ファイルメニューでは、新しいプロファイルやデータ格納場所の作成、ユーザーの追加を行うことができます。
Alt	E	編集メニューを表示します。編集メニューでは、ファイルのリストア、リストアするファイルの検索、アラートの管理、および項目の削除を行うことができます。
Alt	V	表示メニューを表示します。表示メニューは、画面に表示される情報を変更する際に使用します。
Alt	N	ネットワークメニューを表示します。ネットワークメニューを使用して、管理者アカウントに関する操作、ネットワーク上のメディアサーバーへの接続またはローカルのメディアサーバーへの再接続を行います。

Backup Exec でのアクセラレータ	Backup Exec でのニーモニック	結果
Alt	T	ツールメニューを表示します。ツールメニューでは、グローバルエクスクルードの設定、すべての DLO ウィザードへのアクセス、およびサービスクレデンシャルの管理を行います。
Alt	W	ウィンドウメニューを表示します。ウィンドウメニューを使用して、新しいウィンドウまたはビューに移動します。
Alt	H	ヘルプメニューを表示します。ヘルプメニューを使用して、Backup Exec のマニュアルやさまざまなシマンテック社の Web サイトにアクセスします。

Backup Exec Desktop and Laptop Option Desktop Agent に固有のキーボードショートカット

次の表は、Backup Exec Desktop and Laptop Option Desktop Agent のショートカットキーのリストです。

p.2014 の「[Backup Exec のキーボードショートカットについて](#)」を参照してください。

表 AB-4 Backup Exec Desktop and Laptop Option Desktop Agent に固有のキーボードショートカット

Backup Exec でのアクセラレータ	Backup Exec でのニーモニック	結果
Alt	F	ファイルメニューを表示します。ファイルメニューでは、 Desktop Agent の最小化または終了を行うことができます。
Alt	V	表示メニューを表示します。表示メニューは、画面に表示される情報を変更する際に使用します。
Alt	K	タスクメニューを表示します。タスクメニューは、ジョブの実行または表示の更新に使用します。
Alt	T	ツールメニューを表示します。ツールメニューでは、ダイアログボックスやアカウントの再設定を行います。
Alt	H	ヘルプメニューを表示します。ヘルプメニューは、 Desktop Agent のオンラインヘルプにアクセスするために使用します。

Backup Exec ユーザーインターフェースにおける一般的なキーボードナビゲーション

Backup Exec は、キーボード操作のみで使用することができます。ユーザーインターフェースでは、アクティブなツリーやテーブルは濃い青色で強調表示されます。アクティブなタブ、ラジオボタン、チェックボックスは、点線の長方形で囲まれて表示されます。この状態を「フォーカス」が当たっていると言います。コマンドは、フォーカスが当たっている領域に対して実行されます。

シマンテック製品のすべてのユーザーインターフェースでは、次のキーボードナビゲーションルールが適用されています。

- **Tab** キーを押すと、設定されている順序に基づいて、フォーカスが次のアクティブエリア、フィールドまたはコントロールに移動します。**Shift+Tab** を押すと、この逆の順序でフォーカスが移動します。
- **Ctrl+Tab** を押すと、コンソールの画面を切り替えることができます。画面内部は **Tab** キーを押して移動します。
- **↑** キーおよび **↓** キーは、リスト内の項目を上下に移動する際に使用します。
- **Alt** キーを押しながら、フィールドやコマンドボタンにある下線付きのニーモニック文字のキーを押すことによって、そのフィールドやボタンにフォーカスを移動することができます。
- **Enter** キーまたは **Space** キーを押すと、選択されている項目をクリックしたことになります。たとえば、ウィザード画面で **Tab** キーを押して[次へ]ボタンを選択し、**Space** キーを押すと、次の画面が表示されます。
- **Shift+F10** を押すと、コンテキストメニューにアクセスできます。

Backup Exec のダイアログボックス内のキーボードナビゲーション

ダイアログボックスには、プログラムのオプションの選択や各種設定を行うために必要な一連のコントロールが含まれています。

ダイアログボックスに関する一般的なナビゲーションルールは次のとおりです。

- **Tab** キーを押すと、設定されている順序に基づいて、ダイアログボックス内のコントロール間でフォーカスが移動します。
- ニーモニック (下線付きの文字) が表示されているコントロールは、フォーカスの有無に関係なく、**Alt** キーを押しながら下線付きの文字のキーを押すことによって選択することができます。
- 太い枠で囲まれているボタンは、それがデフォルトボタンであることを示します。この太枠のボタンは、**Enter** キーを押すことによっていつでも選択することができます。
- [キャンセル]ボタンがある場合は、**Esc** キーを押すことによって選択することができます。
- **Tab** キーを使用して移動したコントロールは、**Space** キーを押すことによって選択することができます。
- **Space** キーを押すことによって、フォーカスが当たっているチェックボックスの状態を変更することができます。チェックボックスにニーモニックが付いている場合、その文字のキーを入力することによって、フォーカスをそのチェックボックスに移動し、状態を変更することができます。

- ラジオボタン、リストボックス、スライダー、オプションコントロールのグループ、ページタブのグループ内では、矢印キーを押すことによってフォーカスを移動することができます。
- 変更できない項目には、**Tab** キーを押してもフォーカスは移動しません。利用できないオプションはグレー表示され、選択することも、フォーカスを移動させることもできません。

ここで説明されている操作は、主にダイアログボックスに関することですが、ダイアログボックス以外でも当てはまる場合があります。その場合には、同様のナビゲーションルールが適用されます。

Backup Exec のリストボックスのナビゲーション

リストボックスには、選択可能な項目が表示されます。

リストボックスにはいくつかの種類があり、それぞれに次のような特有の操作方法があります。

- ドロップダウンリストボックスには、デフォルトで選択されている項目のみが表示されます。コントロールの右側の小さなボタンには下向きの矢印が表示されています。その矢印をクリックすると、リストボックス内の他の項目が表示されます。リストボックスとして設定されている領域にすべての項目を表示できない場合には、リストボックスの横にスライダーが表示されます。**Alt+ ↑**、**Alt+ ↓** または **F4** キーのいずれかのキーを押すことによって、リストの表示と非表示を切り替えることができます。**Tab** キーを使用して、項目を選択することができます。
- 拡張選択リストボックスでは、1つの項目の選択および連続する複数の項目の選択が可能で、それらを組み合わせて選択することもできます。ある項目を選択した後に、**Ctrl** キーを押しながら項目を選択することによって、選択項目を追加したり、連続する一連の項目を選択することができます。また、同様にして選択解除することもできます。

Backup Exec のタブ付きダイアログボックスのナビゲーション

ダイアログボックスの中には、多数のオプションを分類するためのタブページを使用しているものがあります。それぞれのタブページには、各種のコントロールが含まれています。**Tab** キーを使用すると、ダイアログボックス内のタブ付きページ間でフォーカスを移動させることができます。また、タブのニーモニックを入力して、指定したタブのページにフォーカスを移動し、そのページ内のコントロールを表示することもできます。

次の表は、タブ付きダイアログボックスのキーボードナビゲーションルールを示しています。

表 AB-5 タブ付きダイアログボックス内のキーボードナビゲーション

キーボード入力	結果
Ctrl+Page Down または Ctrl+Tab	次のタブに移動し、そのページを表示します。
Ctrl+Page Up	前のタブに移動し、そのページを表示します。
← または →	フォーカスがタブにある場合、次または前のタブに移動してそのページを表示することができます。

アクセシビリティオプションの設定について

シマンテック社のソフトウェアは、オペレーティングシステムのアクセシビリティ設定に従って動作します。

シマンテック製品は、Microsoft のアクセシビリティ関連のユーティリティに対応しています。Windows オペレーティングシステムでは、キーボードの機能設定、画面の表示設定、警告音、マウスの動作など、アクセシビリティに関するオプションは、[コントロールパネル]を使用して設定します。

アクセシビリティ機能は主に英語版を対象としています。本製品の日本語版は、アクセラレータキーおよびニーモニックキーを使用する、キーボードによる (マウスを使用しない) ナビゲーションをサポートします。

アクセシビリティオプションの設定について詳しくは、Microsoft 製品のマニュアルを参照してください。

ADAMM (デバイスとメディアの詳細管理)(ADAMM (Advanced Device and Media Management))	Backup Exec データベースの 1 つ。メディアとストレージデバイスを追跡し、適切なメディアにバックアップを格納するために使用されます。
管理コンソール (Administration console)	Backup Exec のジョブを実行するために使用するユーザーインターフェース。メディアサーバーまたはリモートコンピュータで管理コンソールを実行することができます。
エージェント (Agent)	ワークステーションや Microsoft SQL Server などのコンピュータと、Backup Exec メディアサーバーの連携に使用するコンポーネント。
アラートカテゴリ (Alert category)	Backup Exec で発生し、アラートを生成する 1 つ以上のイベントのグループ。アラートカテゴリには、[ジョブ成功]、[インストール警告]および[データベース保守失敗]などがあります。
アラートソース (Alert source)	アラートの生成元。アラートソースには、ジョブ、メディア、デバイスおよびシステムの 4 つがあります。
アラートの種類 (Alert type)	アラートの重大度を判別するためのアラートの分類。アラートの種類には、[エラー]、[警告]、[情報]および[要注意]があります。
アラート (Alert)	何らかの形でユーザーの介入や確認を必要とするイベント。
割り当て済みメディア (Allocated media)	メディアセットに関連付けられた、追記期間および上書き禁止期間を経過していないメディア。
追記期間 (Append period)	メディアにデータを追記できる期間。追記期間は、バックアップジョブによって、そのメディアに初めてデータの書き込みが行われた時点から始まります。
アーカイブ (archive)	Backup Exec Archiving Option が作成するアーカイブ項目の論理グループ。アーカイブはボルトストアパーティションに含まれます。アーカイブファイルファイルシステム共有にはそれぞれ専用のアーカイブがあります。アーカイブ済み Exchange メールボックスにもそれぞれ専用のアーカイブがあります。
監査ログ (Audit log)	Backup Exec で行われたすべての操作の履歴。ログのエントリは、監査ログに表示するように設定した操作が行われるたびに作成されます。
Backup Exec サービスアカウント (Backup Exec service account)	Backup Exec システムサービス用のユーザーアカウント。ユーザー名とパスワードで構成され、サービスとしてログオンする権限と Backup Exec 管理者としての権限が設定されています。

バックアップ方式 (Backup method)	バックアップジョブの実行時に、各ファイルのバックアップ状態を設定する方法を指定するために選択するオプション。たとえば、ファイルをバックアップするかどうかを決定するのに、アーカイブビットをリセットするのか、修正日時を使用するのかを選択することができます。
バックアップセット (Backup set)	Microsoft Exchange データセットなどの単一のリソースから選択されたデータ。バックアップジョブを実行すると、メディア上にまとめて格納されます。複数のリソースからファイルを選択した場合は、複数のバックアップセットが作成されます。
バックアップ戦略 (Backup strategy)	ネットワークのバックアップに使用する手順。優れたバックアップ戦略を使用すると、障害が発生した場合のコンピュータのリカバリ時間を短縮することができます。
ディスクへのバックアップフォルダ (Backup-to-disk folder)	ハードディスク上のフォルダへのデータのバックアップが可能な、ユーザーが作成するストレージデバイス。
ベースライン (Baseline)	合成バックアップポリシーで最初に実行されるバックアップジョブ。ベースラインバックアップは、一度実行するだけで、選択されたリソース上のすべてのファイルがバックアップされます。ポリシー内の 1 つのベースラインバックアップと後続の増分バックアップを組み合わせると、完全バックアップが合成されます。
カタログ (Catalog)	メディア上に存在する、バックアップジョブまたはアーカイブジョブで作成された内容を追跡するデータベース。完全にカタログ登録されているメディアからのみリストアを行うことができます。
集中管理サーバー (Central administration server)	Central Admin Server Option (CASO) がインストールされている Backup Exec メディアサーバー。CASO 環境では、集中管理サーバーにより、ストレージ環境内の Backup Exec メディアサーバーを集中管理して委任されたジョブを処理し、負荷分散を実現することができます。
集中カタログ (Centralized catalog)	Central Admin Server Option でのカタログの場所。カタログ内のすべてのファイルが集中管理サーバーに保存されます。
集中リストア (Centralized restore)	すべてのリストア操作を集中管理サーバーで実行および管理できる処理。集中リストアは、Central Admin Server Option をインストールしている場合にのみ利用できます。
共用暗号化キー (Common encryption key)	暗号化キーの一種。すべてのユーザーが、このキーを使用して、暗号化を使用したデータのバックアップおよび暗号化されたデータのリストアを行うことができます。
カスタマイズしたエラー処理方法 (Custom error-handling rule)	エラーカテゴリに含まれる特定のエラーコードに対して定義可能なエラー処理方法。ジョブが失敗して、カスタマイズしたエラー処理方法に関連付けられているエラーコードが表示された場合は、再試行オプションとジョブの最終処置が適用されます。
カスタムフィルタ (Custom filter)	ジョブモニターで指定する情報のみを表示するように定義できるフィルタ。
デバイスプール (Device pool)	Backup Exec の操作で使用可能なデバイスをグループ化したもの。デバイスプールに割り当てられたジョブは、最初に利用可能なデバイスで実行されます。

デバイス (Device)	(Backup Exec の場合) ロボットライブラリのドライブ、スタンドアロンドライブ、ディスクへのバックアップフォルダ、ディスクへのバックアップデバイスまたはカスケードドライブプール。
差分- 前回の完全バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする (Differential - Backup changed files since last full)	前回の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたすべてのファイルを (アーカイブビットに基づいて) バックアップするバックアップ方式。この方式ではアーカイブビットをリセットしないため、メディアローテーション方式に影響を与えません。
差分- 修正日時を使用してバックアップする (Differential - Using modified time)	前回の完全バックアップ以降に変更されたすべてのファイルを、修正日時のタイムスタンプを使用してバックアップするバックアップ方式。
分散カタログ (Distributed catalog)	Central Admin Server Option でのカタログの場所。カタログ内のイメージファイルは、すべての管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに分散されます。分散されたファイルはカタログ全体を含まないため、サイズが小さくなります。分散されたファイルは、バックアップセットに関する情報のみを含みます。履歴ファイルは、バックアップセットに関する詳細情報を含み、管理対象メディアサーバー上に残ります。
バックアップセットの複製テンプレート (Duplicate Backup Sets template)	マルチステージのバックアップ戦略を使用して、データをディスクにバックアップした後、そのデータをテープにコピーできるテンプレート。
エラー処理方法 (Error-handling rule)	失敗したジョブまたはキャンセルされたジョブに対して再試行オプションやジョブの最終処置を設定する、デフォルトまたはカスタマイズした方法。再試行オプションでは、ジョブ失敗時に再試行を行う頻度や間隔を指定できます。ジョブの最終処置では、エラーを修復するまでジョブを保留にすることができます。
イベント (Event)	Backup Exec の操作で発生する動作。ジョブのキャンセルなど。
完全- 選択したファイルをバックアップする - ファイルのアーカイブ (ファイルをコピー後に削除する)(Full - Back Up Files - Archive the files (delete files after successful copy))	選択したデータをバックアップしてメディアの検証を行った後、バックアップしたデータがボリュームから削除されるバックアップ方式。データの削除には、ファイルを削除する権限が必要です。必要な権限がない場合は、データはバックアップされますが、元のボリュームからは削除されません。
完全- 選択したファイルをバックアップする - ファイルのコピー (Full - Back Up Files - Copy the files)	選択したすべてのデータをバックアップするバックアップ方式。この方式ではアーカイブビットをリセットしないため、メディアローテーション方式に影響を与えません。

完全 - 選択したファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットする)(Full - Back Up Files - Using archive bit (reset archive bit))	選択したすべてのファイルをバックアップし、それらのファイルがバックアップ済みであることを示すために、アーカイブビットをリセットするバックアップ方式。
完全 - 選択したファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする (Full - Back Up Files - Using modified time)	選択したすべてのファイルをバックアップし、修正日時のタイムスタンプを使用した増分または差分バックアップを実行できるバックアップ方式。
個別リストア (granular restore)	Granular Recovery Technology オプションが有効になっているバックアップからの個々の項目のリストア。
GRT (Granular Recovery Technology)	Backup Exec Agent とともに利用可能なバックアップオプション。Granular Recovery Technology を使用すると、データベースのバックアップから個別の項目をリストアできます。1 つの項目をリカバリする場合、個別の項目の個別のバックアップは不要です。
[ホーム]ビュー (Home view)	頻繁に使用する機能にアクセスできる Backup Exec の中央の場所。Backup Exec データと機能へのリンクを含む項目を追加するか、または削除することによって[ホーム]ビューをカスタマイズできます。
インポートメディア (Import media)	他の Backup Exec システムまたはバックアップ製品で作成されたが、Backup Exec 環境のストレージデバイス内に存在するメディア。
増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - アーカイブビットを使用する (アーカイブビットをリセットする)(Incremental - Backup changed files since last full or incremental - Using archive bit (reset archive bit))	前回の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみを (アーカイブビットに基づいて) バックアップするバックアップ方式。ファイルがバックアップ済みであることを示すために、アーカイブビットをリセットします。
増分 - 前回の完全または増分バックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする - 修正日時を使用してバックアップする (Incremental - Back	前回の完全バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたすべてのファイルを、ファイルの最終修正日時のタイムスタンプを使用してバックアップするバックアップ方式。

up changed files since
last full or incremental
- Using modified time)

ジョブの委任 (Job delegation) 集中管理サーバーが、管理対象メディアサーバー上の利用可能なストレージデバイスにジョブの処理を分散する処理。ジョブの委任は、**Central Admin Server Option** をインストールしている場合にのみ利用できます。

ジョブ履歴 (Job history) ジョブの処理で発生した事項のレポート (統計情報、エラーなど)。

ジョブログ (Job log) ジョブの結果が含まれるログ。ジョブの実行時に作成されます。ジョブのエラーや詳細を表示することができます。

ジョブ (Job) メディアサーバーによる処理スケジュールが設定されている一連の操作の集まり。たとえば、バックアップする対象を選択してバックアップのサブミットを行うと、バックアップジョブが作成されます。ジョブには、ソースまたは宛先情報、各種の設定、スケジュールが含まれています。ジョブの種類には、「バックアップ」、「リストア」、「メディアローテーション」、「リソース検出」、「レポート」、「テスト実行」および「ユーティリティ」があります。

負荷分散 (Load-balancing) **Backup Exec** の機能。利用可能なストレージデバイス間でジョブを自動的に分散します。また、集中管理サーバーから複数の管理対象メディアサーバーへジョブを自動的に分散してさまざまなストレージデバイスでジョブを処理する、**Backup Exec** の **Central Admin Server Option** の機能も表します。

ログオンアカウント (Logon account) **Windows** ユーザーアカウントのクレデンシャル格納されているアカウント。ログオンアカウントを使用して、**Backup Exec** でユーザー名とパスワードを管理したり、リソースの参照およびジョブの処理を実行できます。

メールボックスグループ (mailbox group) **Backup Exec Archiving Option** で同じアーカイブルール、保持カテゴリ、ボルトストアを割り当てるユーザーメールボックスのグループ。**Enterprise Vault** では、プロビジョニンググループと呼ばれます。

管理対象メディアサーバー (Managed media server) 集中管理サーバーによって管理されているメディアサーバー。管理対象メディアサーバーは、**Central Admin Server Option** 環境でバックアップジョブおよびリストアジョブを実際に処理します。管理対象メディアサーバーは、**Backup Exec** の **Central Admin Server Option** をインストールしている場合にのみ利用できます。

メディア ID (Media ID) **Backup Exec** で使用されている各メディアに割り当てられる固有のラベル。メディア ID は、各メディアの統計情報の収集に使用されます。メディア ID は消去または変更できません。

メディアラベル (Media label) メディアの識別に使われるラベル。ラベルは、**Backup Exec** で自動的に割り当てるか、メディアの種類に応じてラベル接頭辞と番号を指定して割り当てることもできます。最初にバーコードリーダー付きのライブラリで使用したメディアには、バーコードラベルが使用されます。

メディアの上書き禁止レベル (Media overwrite protection level) **Backup Exec** のグローバル設定。メディアの上書き禁止期間に関係なく、スクラッチメディア、インポートメディアまたは割り当て済みメディアを上書きするかどうかを指定できます。

メディアローテーション (Media rotation)	メディアを再利用する時期、すなわち使用ローテーションに戻す時期を決定する戦略。メディアローテーション戦略の一般的な例は、1世代、2世代および3世代管理方式です。
メディアサーバープール (Media server pool)	Backup Exec の Central Admin Server Option の機能。管理対象メディアサーバーをプールにグループ化して、バックアップジョブを行うメディアサーバーを限定できます。
メディアサーバー (Media server)	Backup Exec がインストールされ、Backup Exec サービスを実行しているコンピュータ。
メディアセット (Media set)	メディアセットに関連付けられたメディアに適用されるルールのセット。このルールでは、追記期間、上書き禁止期間およびボルト移動の周期を指定します。
メディアボルト (Media vault)	特定のメディア保管室、金庫、サイト外などの、メディアの実際の物理的な場所に対するユーザー定義の論理表現。
オフホストバックアップ (Offhost backup)	Backup Exec の Advanced Disk-based Backup Option の機能。バックアップ処理をリモートコンピュータまたはホストコンピュータに代わって Backup Exec メディアサーバーで行うことができます。バックアップ処理をリモートコンピュータからメディアサーバーへ移動することによって、バックアップのパフォーマンスが向上し、リモートコンピュータの作業負荷が軽減されます。
オフラインメディアの場所 (Offline media location)	ドライブ、スロット、メディアボルトのいずれにも配置されていないサイト内のメディアが一覧表示される[メディア]ビューのノード。Backup Exec を使用してデバイスまたはスロットから削除したメディアは、自動的にオフラインメディアの場所に移動されます。
オンラインメディアの場所 (Online media location)	ストレージデバイス、ロボットライブラリのスロットまたはディスクへのバックアップフォルダに存在するメディアが一覧表示される[メディア]ビューのノード。
上書き禁止期間 (Overwrite protection period)	メディアへの上書きを禁止し、このメディア上にデータを保持する期間(ただし、メディアの消去、メディアのフォーマット、スクラッチメディアへの移動を行った場合や、メディアの上書き禁止レベルを「なし」に設定した場合を除く)。上書き禁止期間は、メディアに最後にデータが追記または上書きされた時点から始まります。
ポリシー (Policy)	バックアップジョブとバックアップ戦略を管理する方法。ポリシーには、ジョブを設定するテンプレートが格納されています。
優先サーバー設定 (preferred server configuration)	優先バックアップソースとして選択する1つ以上のサーバーとサイトのコレクション。優先サーバー設定は、データが複数のサーバーの間でレプリケートされるインスタンスのバックアップソースとして優先されます。
プライマリデータベース サーバー (Primary database server)	Backup Exec SAN Shared Storage Option がインストールされている場合に、共有 ADAMM (デバイスとメディアの詳細管理) データベースと共有カタログデータベースが格納されている Backup Exec サーバー。
再利用可能メディア (Recyclable media)	メディアセットに割り当てられている、上書き禁止期間が終了しているメディアのこと。
Remote Administrator	リモートコンピュータ上で実行される Backup Exec ユーザーインターフェース (管理コンソール)。

Remote Agent	Microsoft Windows コンピュータまたは NetWare のリモートサーバーまたはワークステーション上で実行される Backup Exec システムサービス。これらのシステムのリモートバックアップおよびリストアを可能にし、バックアップのスループットを向上することができます。
複製カタログ (Replicated catalog)	Central Admin Server Option でのカタログの場所。カタログ内のすべてのカタログファイルが管理対象メディアサーバーから集中管理サーバーに複製されます。
リソース検出 (Resource discovery)	Windows ドメイン内の新しいバックアップリソースを検出する Backup Exec の機能。
リソース (Resource)	Windows 共有や Microsoft SQL データベースなど、バックアップするように選択することのできるデータファイルやデータベースのこと。
所有者専用暗号化キー (Restricted encryption key)	暗号化キーの一種。すべてのユーザーが、このキーを使用して、暗号化を使用したデータのバックアップを行うことができます。キーの所有者またはパスワードを知っているユーザーのみが、所有者専用暗号化キーで暗号化されたデータをリストアできます。
保持カテゴリ (retention category)	アーカイブに項目を保持する期間を指定するための Backup Exec Archiving Option の設定。アーカイブ項目の検索と取得をより簡単にするために保持カテゴリに名前を付けることができます。
破棄メディア (Retired media)	エラーの発生が多いため使用を中止したメディア。破棄したメディアは、リストアジョブに利用することは可能ですが、バックアップジョブには使用できません。メディアを削除するには、まず破棄する必要があります。削除したメディアを使用すると、Backup Exec ではインポートメディアとして認識されます。このメディアを使用してリストアを行うには、まずカタログ登録を実行する必要があります。
スクラッチメディア (Scratch media)	メディアセットに関連付けられていない、上書き可能なメディア。新品または空のメディア、消去済みメディアまたは別のグループからスクラッチメディアセットに移動されたメディアが含まれます。
選択リスト (Selection list)	バックアップまたはリストアの対象として選択したデータ。選択リストは保存しておいて、別のジョブで使用することができます。
シミュレートテープライブラリ (Simulated tape library)	Advanced Intelligent Tape (AIT) メディア形式をエミュレートし、AIT メディア形式のラベルが付いているテープライブラリ。シミュレートテープライブラリは Tape Library Simulator によって作成されます。
Symantec Online Storage フォルダ (Symantec Online Storage folder)	Symantec Protection Network にデータをバックアップするために作成するストレージデバイス。
Symantec Online Storage for Backup Exec	Symantec Protection Network の一部としてオンラインバックアップとリストアのサービスを提供するオプションの Backup Exec のコンポーネント。
Symantec Protection Network	シマンテック社の SaaS (Software as a Service) プロバイダ。Symantec Protection Network はオンラインサービスとしてシマンテック社のテクノロジーを提供します。

合成バックアップ (Synthetic backup)	Advanced Disk-based Backup Option の機能。1 つのベースラインジョブのバックアップと後続の増分バックアップを組み合わせて、完全バックアップを合成することができます。
テープライブラリシミュ レータ	ハードディスクまたは Backup Exec Remote Media Agent for Linux Servers がインストールされているコンピュータのマウント済みボリュームに仮想デバイスを作成できるユーティリティ。作成される仮想デバイスはシミュレートテープライブラリと呼ばれます。
テンプレートルール (Template rule)	ポリシー内のテンプレート間の関係を設定する方法。
テンプレート (Template)	Backup Exec がいつものようにジョブを処理するかを定義するポリシーの必須要素。テンプレートでは、ジョブで使用するデバイス、設定およびスケジュールオプションを指定します。ポリシーは、少なくとも 1 つのテンプレートを含んでいる必要があります。
True Image Restore	Advanced Disk-based Backup Option の機能。ディレクトリの内容を完全バックアップまたは増分バックアップの実行時の状態にリストアすることができます。リストアする内容は、特定のバックアップ時点で存在していたディレクトリから選択されます。バックアップの時点において削除されていたファイルはリストアされません。True Image Restore では、適切な完全バックアップまたは増分バックアップに含まれる正しいバージョンのファイルのみがリストアされます。以前のバージョンは不必要にリストアされず、上書きされます。
UMI (一意のメッセージ ID)(UMI (Unique Message Identifier))	ジョブログまたはいくつかのアラートで報告されるエラーに関連付けられた一意のコード。これらのコードには、シマンテック社テクニカルサポート Web サイトをクリックしてアクセスできるハイパーリンクが含まれています。特定のエラーに関連する技術情報およびトラブルシューティングのヒントにアクセスできます。
ボルトストアパーティショ ン (vault store partition)	Backup Exec Archiving Option が作成したアーカイブ項目が保存されるディスク上の物理的な場所。デフォルトでは、Backup Exec は各ボルトストア内に 1 つのボルトストアパーティションを作成します。ボルトストアのデータが増えると同時に、追加領域を提供するためにより多くのボルトストアパーティションを作成できます。
ボルトストア (vault store)	Backup Exec Archiving Option が 1 つのサーバーからアーカイブするアーカイブデータのディスクベースのコンテナ。
仮想ディスク (virtual disk)	メディアサーバーにストレージを提供するためにストレージアレイに設定する論理ディスク。
ワーキングセット-選択し たファイルをバックアップ する- その日に変更され たファイル (Working Set - Back up files - Changed today)	その日に修正または作成されたすべてのファイルをバックアップするバックアップ方式。
ワーキングセット-選択し たファイルをバックアップ する- 過去 (x) 日間にア	指定した期間 (日数) にアクセスされたデータをバックアップするバックアップ方式。このバックアップ方式を選択した場合は、[バックアップジョブ実行日から起算して過去 x 日以内にアクセスのあったファイルをすべてバックアップする]フィールドで日数を指定することができます。

クセスされたファイル
(Working Set - Back up
files - Last accessed in
(x) days)

記号

- 1 世代管理のメディアローテーション戦略 249
- 2 世代管理のメディアローテーション戦略 250
- 3 世代管理のメディアローテーション戦略 251

A

Active Directory

- DLO の自動ユーザー割り当て 1633
- Exchange でのバックアップ 1091
- 接続ポリシー 1730

Active Directory Recovery Agent

- [Backup Exec Granular Recovery Technology (GRT)を使用して、Active Directory のバックアップで個々のオブジェクトのリストアを有効にする] オプション 871、873

Granular Recovery Technology (GRT)

- 概要 869
- インストール 868
- 概要 868
- 個別のオブジェクトのリストアについて 874
- 廃棄 875
- バージョン済みオブジェクトの再作成 878
- パスワード 876
- 必要条件 866

Active Directory ドメイン

- ドメインの削除 273
- ドメインの追加 273

Advanced Disk-based Backup Option

- VSW FlashSnap Option
- オフホストバックアップとの併用 909

Advanced Disk-based Backup Option

- Granular Recovery Technology による Exchange Server のオフホストバックアップ 915

True Image Restore

- 概要 898
- 使用 902
- 必要条件 901
- 有効にするオプション 890
- オフホストバックアップ 914
- [スナップショットプロバイダを一覧表示] オプション 912

- オフホストバックアップに関する推奨事項 910
- オフホストバックアップの概要 905
- オフホストバックアップのスナップショットプロバイダ 選択 913
- オフホストバックアップの必要条件 907
- 合成バックアップ
 - 作成 892
 - テンプレートの必要条件 887
 - ポリシー。「例」を参照
 - 有効にするオプション 890
- 合成バックアップテンプレートルール 896
 - 例 892
- トランスポートスナップショット
 - 定義 906
- ベースライン
 - 設定 885
- ホストコンピュータ
 - 定義 905
- Advanced Open File Option
 - Active Directory ネットワークでのインストール 130
 - Symantec Volume Snapshot Provider 936
 - Symantec VSP のキャッシュファイルのサイズ 934
 - Symantec VSP のデフォルト設定の変更 932
 - VSW ポリユームのスナップスタート 931
 - 暗号化ファイル
 - バックアップ 927
 - インストール 928
 - 概要 923
 - キャッシュファイルの場所 933
 - コマンドスクリプトを使用したアンインストール 139
 - コマンドスクリプトを使用したインストール 138
 - コマンドラインを使用したインストール 929
 - ジョブログ 938
 - スナップショットプロバイダ 926
 - スナップスタート
 - 概要 930
 - データベース
 - バックアップ 925
 - デフォルトオプション 935
 - 設定 930
 - バックアップジョブ 934

- バックアップ選択リスト内のリモートコンピュータへのインストール 130
- 必要条件 927
- リモートコンピュータへのインストール 120、123
- Agent for Microsoft Hyper-V**
 - Granular Recovery Technology (GRT) の有効化** 1163
 - インストールの概要 1158
 - 概要 1157
 - 仮想サーバーへのデータのリストア 1170
 - 高可用性仮想マシン 1175
 - デフォルトオプション 1174
 - バックアップ 1162
 - バックアップオプション 1163
 - バックアップ選択項目 1161
 - 必要条件 1159
 - 別のホストへの仮想マシンのリストア 1172
 - リストアのためのリソースの選択 1168
- Agent for Microsoft SharePoint**
 - Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダのリストア** 1195
 - Microsoft Office SharePoint Server 2007 のバックアップ** 1187
 - SharePoint 2003 ドキュメントライブラリデータのリストア先の変更** 1214
 - SharePoint 2003 ドキュメントライブラリのリストア** 1211
 - SharePoint 2003 リソースのリストア** 1209
 - SharePoint 2003 リソースのリストアについて** 1208
 - SharePoint 2007 Web アプリケーションのリストア先の変更** 1203
 - SharePoint 2007 ドキュメントライブラリデータのリストア先の変更** 1201
 - SharePoint 2007 ドキュメントライブラリのリストア** 1194
 - SharePoint 2007 リソースのリストア** 1191
 - SharePoint 2007 リソースのリストアについて** 1190
 - SharePoint Portal Server 2003 および 2007 のデフォルトオプションの設定** 1183
 - SharePoint Portal Server 2003 および Windows SharePoint Services 2.0 について** 1206
 - SharePoint Portal Server 2003 のリストア先の変更** 1212
 - SharePoint Portal Server 2003 リソースのバックアップ** 1207
 - SharePoint Portal Server 2007 のリストア先の変更** 1199
 - SharePoint Server 2007 Web アプリケーションのリストア** 1196
 - SharePoint Server 2007 と Windows SharePoint Services 3.0 での使用** 1186
 - SharePoint Services 3.0 リソースのリストア** 1191
 - SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて** 1190
 - Web サーバーと Backup Exec との通信の有効化または無効化** 1182
 - Windows SharePoint Services 3.0 ファームのバックアップ** 1187
 - インストール 1179
 - 概要 1177～1178
 - 個々の **SharePoint 2007 Web アプリケーションのバックアップ** 1188
 - 個々の **SharePoint 2007** 項目のリストア 1192
 - 個別の **SharePoint 2003** 項目のリストア 1210
 - サーバーファームの追加 1179、1187
 - システムの必要条件 1178
 - デフォルトオプション 1183
 - ドキュメントライブラリバックアップからの SharePoint 2003 ドキュメントのリストア** 1212
 - ドキュメントライブラリバックアップからの SharePoint 2007 ドキュメントのリストア** 1194
 - バックアップオプション 1189
 - バックアップする **SharePoint Portal Server 2003** リソースの選択 1207
 - 必要条件 1178
 - ファイルパスへの個々の **SharePoint 2003** 項目のリストア先の変更 1215
 - ファイルパスへの個々の **SharePoint 2007** 項目のリストア先の変更 1202
 - ファームの削除 1182
 - ファームのデフォルトの名前の変更 1181
 - リストアオプション 1197
 - リストア先の変更オプション 1204
- Agent for VMware**
 - Granular Recovery Technology (GRT)**
 - 概要 1358
 - 必要条件 1348
 - Granular Recovery Technology (GRT)、バックアップの設定** 1356
 - VMDK ファイルの転送方式の選択** 1355、1367
 - VMware vCenter Server と ESX Server の削除** 1350
 - VMware vCenter Server と ESX Server の追加** 1349
 - VSS プロバイダ** 1360
 - インストール 1349
 - 概要 1348
 - 完全なシステム回復 1362

- 既存の仮想マシンの削除 1363
- コンポーネント 1348
- 転送モードの優先度 1364
- バックアップのデフォルト設定 1367
- バックアップ方式 1350
- 必要条件 1348
- 変更されたリストアの格納場所の選択 1366
- リストア後に仮想マシンの電源をオンにする 1363
- リストア先の変更 1365
- リストア先変更のためのネットワークの選択 1366
- リストアの概要 1361
- リストアのための個々のファイルとフォルダの選択 1362
- リストアのデフォルト設定 1367
- リソースのバックアップ 1352
- リソースのリストア 1362
- Archiving Option**
 - Backup Exec Retrieve の使用 1393
 - Backup Exec ユーティリティによるリストア先変更 1446~1447
 - Backup Exec ユーティリティの実行 1452
 - Enterprise Vault サービスの実行 1383
 - Enterprise Vault のイベントログの表示 1461
 - Enterprise Vault のインストール 1390
 - Exchange Server に対する権限の付与 1380
 - Exchange 項目のリストア先変更 1435
 - Exchange メールボックスのオプションの設定 1404
 - SQL Server 名の更新 1446
 - アーカイブ、概要 1414
 - アーカイブからの Exchange データのリストア 1433
 - アーカイブからの項目の削除 1436
 - アーカイブからの項目のリストア 1429
 - アーカイブからのファイルシステムデータのリストア 1434
 - アーカイブからリストアする項目の選択 1431
 - アーカイブ後の項目の削除 1407
 - アーカイブ後のデータの削除 1438
 - アーカイブされないデータ 1392
 - アーカイブする最新データの検出 1401
 - アーカイブ内のデータの検索 1426
 - アーカイブ内のリストアするデータの検索 1431
 - アーカイブの削除 1416
 - アーカイブの設定の概要 1416
 - アーカイブの設定の指定 1417
 - アーカイブのプロパティの編集 1415
 - アンインストール 1389
 - 暗号化データからのアーカイブ 1401、1456
 - インストール 1389
 - エンドユーザーへの Backup Exec Retrieve リンクの表示 1393
 - 概要 1374
 - 監査ログのエントリ 1392
 - 管理共有の選択 1397
 - 権限と設定の同期 1454、1456
 - 項目削除モード 1409
 - コンポーネントの概要 1439
 - コンポーネントのバックアップ 1439、1442
 - コンポーネントのリストア 1445
 - コンポーネントのリストア先変更 1451
 - 再インストール 1389
 - 最新のバックアップからのアーカイブ 1456
 - サポートされない項目 1375
 - システムメールボックスの割り当て 1404
 - ジョブの作成 1395
 - ジョブのデフォルト設定 1456
 - 推奨事項 1393
 - すべてのコンポーネントのリストア先変更 1446
 - 選択ファイルシステムの共有とフォルダ 1397
 - 単一インスタンス記憶域の有効化 1456
 - ディレクトリデータベースのリストア先変更 1447
 - データベースの一貫性チェックの実行 1442
 - データベースのリストアオプションの設定 1445
 - デフォルトの保持カテゴリの編集 1456
 - テープからのアーカイブの許可 1402
 - テープデバイスからのアーカイブ 1456
 - 動作 1390
 - トラブルシューティング 1460
 - バックアップジョブのデフォルト設定 1453
 - バックアップモードの無効化 1442
 - 必要条件 1375
 - ファイルシステムの選択項目のインクルードおよびエクスクルード 1421
 - ファイルシステムの選択項目のためのアーカイブルールの設定 1404
 - ファイルシステムの選択項目のためのアーカイブルールの適用 1402
 - ファイルシステムの選択項目への設定の割り当て 1398
 - プロビジョニング用のメールボックスグループの配置 1424
 - 保持カテゴリの概要 1418
 - 保持カテゴリの編集 1419
 - 保持期間が終了した項目の削除 1415、1454、1456
 - 保持期間の指定 1420
 - ボルトストア、概要 1406
 - ボルトストアの削除 1411
 - ボルトストアの作成 1407

- ボルトストアの状態の表示 1409
 - ボルトストアのプロパティの編集 1408
 - ボルトストアの割り当て 1400
 - ボルトストアバックアップ後の項目の削除 1407
 - ボルトストアパーティション、概要 1412
 - ボルトストアパーティションの作成 1412
 - ボルトストアパーティションの状態の表示 1413
 - ボルトストアパーティションのプロパティの編集 1413
 - 無効なジョブのステータス 1390
 - メールボックスグループのアーカイブ規則の設定 1423
 - メールボックスグループの概要 1422
 - メールボックスグループの管理 1424、1456
 - メールボックスグループの配置 1404
 - リストア時の項目のスキップと上書き 1432
 - リストア時のディレクトリ構造の保持 1432
 - リモートメディアサーバーからのバックアップ 1452
 - リモートメディアサーバーからのリストア 1452
 - レポート 1461
 - Archiving Option でのバックアップモードの無効化 1442
 - ARCserve メディア
 - データのリストア 614
 - データのリストアについて 613
 - AUTOEXEC.NCF ファイル
 - Remote Agent for NetWare Systems 1882
- B**
- BACKINT
 - CCMS コンソールとの使用 1334
 - アラートの処理 1328
 - 概要 1328
 - Backup Exec Retrieve
 - インストール要件 852
 - エンドユーザー、使用する場合の必要条件 853
 - トラブルシューティング 862
 - Backup Exec Retrieve で実行可能なタスク 850
 - Backup Exec Retrieve のインストール 855
 - Backup Exec Retrieve の設定 857
 - Backup Exec
 - Desktop and Laptop Option のポート 397
 - Symantec Endpoint Protection での使用 393
 - アクセシビリティ 2013
 - キーボードショートカット 2014
 - ダイアログボックス 2021
 - アップグレード
 - 概要 168
 - アプリケーション保護エージェント 75
 - インストール
 - アップグレード 168
 - アンインストール 159
 - コマンドラインからのインストール 143
 - サイレントモードインストール 143
 - [修復]オプションの使用 157
 - 応答準備ポート 396
 - オプション 73
 - 概要
 - 新しいエージェントとオプションの機能 70
 - 新機能 66
 - 動作 64
 - 仮想マシンエージェント 78
 - クライアント保護エージェント 78
 - サーバー保護エージェント 74
 - システムの必要条件 105
 - 修復 157
 - ポート 395
 - メディアサーバーコンポーネント 73
 - メディアサーバーストレージオプション 79
 - Backup Exec 2010
 - 説明 60
 - Backup Exec for Windows Small Business Server
 - 説明 63
 - Backup Exec License Assessment Tool 167
 - Backup Exec Migrator
 - Backup Exec のリストアビューについて 1041
 - Backup Exec メディアサーバー
 - 使用 1035
 - Enterprise Vault データの取り込み 1042
 - Enterprise Vault データの取り込みについて 1041
 - Enterprise Vault との通信 1038
 - Enterprise Vault の保持期間 1032
 - [Migrator for Enterprise Vault]オプション 1037
 - 移行したファイル
 - 削除について 1032
 - イベント
 - 概要 1030
 - 概要 1026
 - 推奨事項 1044
 - ステージングされた移行について 1030
 - 設定 1033
 - データ移行プロセス 1027
 - 動作 1027
 - トラブルシューティング 1045
 - 必要条件 1027
 - ログ
 - 概要 1031
 - ログファイルの場所 1032
 - Backup Exec QuickStart Edition
 - 説明 64

Backup Exec Retrieve

- Archiving Option での使用 1393
- DLO での使用 1582
- エンドユーザーへのリンクの表示 1393
- 説明 1582
- デフォルト 860
- ファイルの取得 1742

Backup Exec アーカイブサイト

- バックアップ 1439

Backup Exec 環境チェック 95**Backup Exec サービス**

- [Backup Exec Services Manager]ダイアログボックス 158
- 停止および起動 158

Backup Exec で使用されるポート

- Desktop and Laptop Option 397
- 応答準備 396
- デフォルト 395

Backup Exec のエディション

- リストと説明 59

Backup Exec の診断アプリケーション

- オプション 789
- 概要 788
- 診断ファイル
 - コマンドラインを使用した生成 790
 - 生成 789

Backup Exec ユーティリティ

- Archiving Option ディレクトリデータベースのリストア先変更 1447
- Archiving Option のための実行 1452
- Archiving Option のリストア先変更 1446

BEDIAG.FAX ファイル 1893**bediag.nlm ユーティリティ**

- 設定情報の保存 1892

beoper グループ

- Remote Agent for Linux or UNIX Servers、概要 1828
- 作成 1829

besernum.xml ファイル

- ライセンスキーのインポート 109、113

BESTART コマンド

- Remote Agent for NetWare Servers の起動 1882

BESTOP コマンド

- Remote Agent for NetWare Servers の停止 1882

Biparam.ini

- Backup Exec パラメータの指定 1330
- オプション 1331
- 概要 1325

BKUPEXECDLOMSDE データベースインスタンス 1688**brrestore**

- データのリストア 1334

BRTtools

- SAP Agent との使用 1334

C**CASO**

- Backup Exec サービスの停止と起動 1521

Backup Exec ユーティリティ

- 実行 1486

SQL Express の別名 1478**SQL インスタンス用のポート番号 1479****アップグレード 1480****アラート**

- 設定 1496

概要 1464**カタログの場所**

- 概要 1499

- 表示 1517

- 変更 1500

管理対象メディアサーバー

- SAN Shared Storage Option のインストール 1474

- 一時停止 1519

- インストール 1471

- 状態メッセージ 1516

- ジョブ履歴オプション 1495

- ジョブログオプション 1495

- デバイスとメディアのデータ。「場所の選択」を参照

- プロパティの表示 1522

- 通信中断 1494

- 管理対象メディアサーバーからの Backup Exec のアンインストール 1487

- 管理対象メディアサーバーのデフォルト設定 1489

- 管理対象メディアサーバーの別名 1479

- 機能 1466

- 合成バックアップジョブの必要条件 1509

- サーバー間の時刻の差 1491

- 失敗ジョブのリカバリ 1496、1518

集中カタログ

- 概要 1500

集中管理サーバー 1479

- インストール 1470

- 管理対象メディアサーバーの設定 1485

- ストレージデバイスの一時停止 1520

- 集中管理サーバーからの Backup Exec のアンインストール 1486

集中リストア

概要 1510

複数のストレージデバイス 1510

ジョブの委任 1464、1502

ジョブ履歴オプション

設定 1495

設定について 1487

選択リスト

バックアップの限定 1504

通信

無効化 1520

通信状態

途絶 1494

通知

設定 1498

デバイスとメディアのデータ 1468

ネットワークインターフェースカード

使用 1498

ネットワークトラフィック

軽減 1489

バックアップデータ複製ジョブの必要条件 1509

必要条件 1467

ファイアウォールを越えるインストール 1476

複製カタログ

概要 1500

分散カタログ

概要 1499

メディアサーバー

管理対象メディアサーバーへの変更 1485

メディアサーバープール

概要 1503

管理対象メディアサーバーの削除 1506

削除 1506

長所 1503

データのフィルタリング 1503

名前の変更 1505

プール内のすべてのサーバーへの設定の適用 1508

リカバリされたジョブ 1493、1495

ローカルの管理対象メディアサーバーのジョブの監視 1491

CCMS コンソール

SAP Agent との使用 1334

CHECKCATALOG ユーティリティ 1224

CHECKDB ユーティリティ 1224

CHECKFILEGROUP ユーティリティ 1224

D

DAOS

.nlo ファイル 1050

DAOS 対応データベース 1050

Lotus Domino Agent と DAOS について 1050

DB2 Agent

db2.conf 設定ファイル 961

db2.conf ファイル

概要 963

作成 963

DBA 開始ジョブ

概要 960

ジョブのテンプレート名 950

USEREXIT db2uext2.exe

インストール 961

USEREXIT 方式

設定 943

アーカイブログテンプレート名

DB2 インスタンスの設定 950

アーカイブログ方式、Backup Exec での使用 962

インストールおよび設定 942

概要 941

機能 941

クレデンシヤル

インスタンスの更新 949

サンプルスクリプト

コマンドラインプロセッサ用 961

データベースアクセス

メディアサーバーでの設定 944～945

トラブルシューティング 966

認証

DB2 インスタンスの設定 948

バックアップ 952

バックアップおよびリストアのデフォルト 946

複数のデータストリーム

指定 954

ベンダーライブラリ db2sqluv.dll

インストール 961

リストア先の変更 958

DBA 開始ジョブ

テンプレートの削除 420

テンプレートの作成 408

編集 419

DBA 開始ジョブの設定

SAP 1331

SAP Agent 1332

設定について 407

Debug Monitor 794

Deduplication Option

- OpenStorage** デバイス間または重複排除用ストレージフォルダ間のデータのコピー 1547
- OpenStorage** デバイスの概要 1532
- OpenStorage** デバイスの追加 1532
- OpenStorage** デバイスのディザスタリカバリ 1549
- OpenStorage** デバイスのプロパティ 1535
- 暗号化の使用 1548
- インストール 1531
- エージェントの重複排除の方式 1528
- 概要 1526
- 最適化された複製の設定 1547
- 重複排除用ストレージフォルダの概要 1536
- 重複排除用ストレージフォルダの追加 1537
- 重複排除用ストレージフォルダのディザスタリカバリ 1548
- 重複排除用ストレージフォルダのプロパティ 1539
- ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** の追加 1544
- ダイレクトアクセスが有効な **Remote Agent** のプロパティ 1546
- ダイレクトアクセスの概要 1542
- ダイレクトアクセスの設定 1543
- ディザスタリカバリの準備 1549
- デバイスの共有 1541
- テープへの重複排除データのコピーについて 1548
- バックアップについて 1546
- 必要条件 1530
- リストアについて 1548
- Desktop Agent**
 - 「**Desktop and Laptop Option (DLO)**」も参照 1560
 - 定義 1708
- Desktop Agent (DLO)**
 - [状態]ビュー 1734
 - [アカウントのリセット]オプション 1714
 - インストール 1560
 - インストールセットのデフォルトの場所 1710
 - インストールのカスタマイズ 1562
 - 概要 1707
 - コンソール 1715
 - 詳細表示オプション 1720
 - [ダイアログのリセット]オプション 1714
 - タスクバー
 - 説明 1716
 - デスクトップユーザーデータフォルダ
 - 移動 1729
 - データのバックアップ 1717
 - 同期
 - [同期選択項目]ビュー 1731

- 同期フォルダの削除 1733
- 新規セットの作成 1731
- バックアップジョブのスケジュール 1726
- バックアップ選択項目
 - 修正 1719
 - 概要 1717
- 表示メニュー
 - 説明 1716
- 標準表示オプション 1719
- ファイルのリストア 1738
- フィルタオプション
 - [履歴]ビュー 1743
- メニューバー
 - 説明 1716
- [リストア]ダイアログボックス 1739
- [履歴]ビュー 1742
- ログファイル
 - 概要 1742
- Desktop Agent** のユーザー
 - 管理 1645
- Desktop and Laptop Option (DLO)** 1554
 - BEUtility.exe** ユーティリティ
 - 使用 1688
 - CSV** ファイルを使用した複数のユーザーのインポート 1648
 - DLO** データベースからのエントリの削除 1654
 - MSDE** データベースインスタンス
 - 保守 1688
 - 「**Desktop Agent**」も参照 1560
 - [優先度を上げる]オプション 1635
 - [優先度を下げる]オプション 1635
 - アクセス
 - 無効化と有効化 1649
 - アラート
 - [アラートの設定]ダイアログボックス 1675
 - カテゴリ 1672
 - 監視 1671
 - 表示 1675
 - 削除 1677
 - 管理 1676
 - アラート通知
 - プリンタ 1682
 - アラート履歴 1675
 - 暗号化
 - バックアップ選択項目の設定 1615
 - インクルード/エクスクルード 1612
 - インストール 1560
 - 概要 1554
 - 管理コンソール 1587

管理者

作成 1568
 管理者アカウント 1568
 クラスタ化 1688
 コマンドラインインターフェース
 -assignSL 1694
 -changeserver 1696
 -emergencyrestore 1703
 -enableuser 1695
 -keytest 1697
 -listprofile 1698
 -listsl 1699
 -listuser 1699
 -logfile 1700
 -setrecoverypwd 1704
 -update 1701
 リモートサーバーオプション 1692
 構文 1692
 自動ユーザー割り当て
 作成 1633
 定義 1554
 変更 1635
 プロパティ 1636
 優先度 1635
 削除 1636
 定義 1708
 [ジョブ履歴]ペイン 1667
 設定 1589
 設定ウィザード 1590
 ダイアログとアカウントのリセット 1714
 デスクトップ
 定義 1708
 デスクトップユーザーデータフォルダ
 定義 1708
 データ格納場所
 削除 1632
 定義 1554
 ユーザーの移動 1651
 同期
 定義 1708
 ネットワークユーザーデータフォルダ
 定義 1708
 バックアップ選択項目
 修正 1619
 追加 1607
 削除 1620
 フィルタオプション
 [履歴]ビュー 1669

プロパティ

ユーザーの変更 1649
 プロファイル
 作成 1590
 定義 1708
 ユーザー帯域幅設定 1592
 ユーザーデータの格納制限 1593
 ユーザーデータフォルダ 1625
 ユーザーの削除 1650
 ユーザーの追加 1647
 ユーザーの表示 1653
 [ユーザーのプロパティ]ダイアログボックス 1649
 リストア 1657
 レビジョン
 DLO で保持する数の設定 1614
 自動的に削除 1617
 定義 1613
 [履歴]ビュー 1666
 [履歴]ペイン 1666
 履歴ログファイルの検索オプション 1670
 [履歴ログファイルを表示]オプション 1667
 DLO 内の優先度の移動オプション 1635
 DLO 管理コンソール
 リストア 1657
 DLO 管理サーバー
 接続 1589
 DLO でのアラート通知
 プリンタ 1682
 DLO でのユーザーの追加
 CSV ファイル 1648
 DLO でユーザーを追加するためのファイル
 CSV 1648
 DLO のコンポーネント 1554
 DLO のサイレントインストール 1562
 DLO のサービスクレデンシャル
 管理 1568
 DLO の自動ユーザー割り当て 1633
 Active Directory の使用 1633
 DLO のユーザーデータフォルダ 1625
 DLO の[ユーザーの移動]ダイアログボックス 1651
 DLO の[ユーザーのプロパティ]ダイアログボックス 1649
 DLO 用のウィザード
 設定 1589
 DLO 用の設定ウィザード 1590
 DLT テープ
 カタログ登録時のドライブのハング 779

E**Enterprise Vault**

- イベントログの表示 1461
- サービスの実行 1383
- バックアップ 970

Enterprise Vault Agent**Backup Exec Migrator**

- Backup Exec のリストアビューについて 1041
- Backup Exec メディアサーバーでの使用 1035
- Enterprise Vault データの取り込み 1042
- Enterprise Vault データの取り込みについて 1041
- Enterprise Vault との通信 1038
- Enterprise Vault の保持期間 1032
- [Migrator for Enterprise Vault] オプション 1037

VxBSA のログ 1031

- 移行したファイルの削除について 1032
- イベントについて 1030
- 概要 1026
- 推奨事項 1044
- ステージングされた移行について 1030
- 設定 1033
- データ移行プロセス 1027
- 動作 1027
- トラブルシューティング 1045
- 必要条件 1027
- ログについて 1031
- ログファイルの場所 1032

Backup Exec メディアサーバー

- ログ 1031
- ログファイルの場所 1032

Compliance Accelerator カスタマーデータベース

- バックアップ 988
- リストア 1009

Compliance Accelerator 設定データベース

- バックアップ 988
- リストア 1008

Discovery Accelerator カスタマーデータベース

- バックアップ 989
- リストア 1013

Discovery Accelerator カストディアンデータベース

- バックアップ 990
- リストア 1012

Discovery Accelerator 設定データベース

- バックアップ 989
- リストア 1010

Enterprise Vault 7.x サーバー

- バックアップ 993

リストア 1017**Enterprise Vault 8.x サイト**

- バックアップについて 993

Enterprise Vault 8.x の FSA レポートデータベース

- バックアップ 986

Enterprise Vault 8.x の 監査データベース

- バックアップ 985

Enterprise Vault 8.x のフィンガープリントデータベース

- バックアップ 987

Enterprise Vault インデックスからのフォルダのリストア 1016**Enterprise Vault コンポーネントのリストア先の自動変更 998****Enterprise Vault サイト**

- バックアップ 994

Enterprise Vault サーバー

- バックアップについて 993

FSA レポートデータベース

- リストア 1006

Partition Recovery Utility

- アーカイブ ID の検索 1043
- 概要 1043
- 実行 1044
- トラブルシューティング 1045
- 必要条件 1043
- ログ 1031
- ログファイルの場所 1032

移行

- ボルトストアパーティションのプロパティ 1040

インストール 971**インデックスの場所**

- バックアップ 995

オープンパーティション

- 個々のファイルのリストア 1015
- バックアップ 977

オープンパーティションからの個々のファイルのリストア 1015**オープンパーティションのリストア 1001****監査データベース**

- リストア 1005

監視データベース

- バックアップ 982
- リストア 1000

クローズパーティション

- バックアップ 979

クローズパーティションのリストア 1001**個々のファイルおよびフォルダのリストアについて 1014**

- コレクション
 - 設定 1034
 - ボルトストアパーティションのプロパティ 1035
- 準備完了パーティション
 - バックアップ 980
- 準備完了パーティションのリストア 1001
- 使用可能な状態 996
- 推奨事項 1026
- 操作対象外の状態 996
- ディレクトリデータベース
 - バックアップ 981
 - 別の SQL Server へのリストア 1023
 - リストア 999
- デフォルトのバックアップ方式の設定 976
- バックアップ方式の選択 971
- パーティション
 - リストア 1001
- 必要条件 970
- フィンガープリントデータベース
 - リストア 1007
- ボルトストア
 - バックアップ 991
- ボルトストアデータベース
 - バックアップ 983
 - リストア 1003
- リストアオプション 1018
- リストア先の変更オプション 1022
- リストアジョブのリストア先の変更 1021
- リストアについて 996
- 利用可能なバックアップ方式 972
- ESX Server、削除 1350
- ESX Server、追加 1349
- Exchange Agent
 - Active Directory
 - バックアップ 1091
 - Exchange 2003と VSS
 - バックアップ 1094
 - Exchange 2007 のスナップショットバックアップ方式 1095
 - Exchange 2010 フォレスト
 - オプション 1118
 - 管理オプション 1119
 - Exchange Web サービス
 - 概要 1093
 - Exchange の高可用性サーバーオプション 1125
 - Granular Recovery Technology (GRT)
 - 概要 1092
 - 必要条件 1083
 - Granular Recovery Technology (GRT) オプション
 - バックアップの設定 1123
 - Internet Information Service (IIS) メタベース
 - バックアップ 1090
 - VSSを使用した Exchange の保護 1094
 - インストール 1085
 - オフホストバックアップ
 - Granular Recovery Technology (GRT) による 915、1092
 - 設定 1097
 - 概要 1080
 - 過去のバージョンのメールボックスまたはパブリックフォルダ
 - アクセスの有効化 1150
 - 継続バックアップ
 - インフォメーションストアのリストア 1138
 - 概要 1098
 - コンソールの表示 1107
 - 最新の完全トランザクションのリストア 1139
 - 指定した時点へのリストア 1139
 - 推奨事項 1104
 - 設定 1102
 - ディスク容量の確認 1106
 - トラブルシューティング 1109
 - バックアップジョブの停止 1106
 - 必要条件 1099
 - 継続バックアップオプション 1122
 - 継続バックアップからのリストア 1138
 - 個々の項目のリストア
 - 必要条件 1083
 - 個々の項目を既存のメッセージとフォルダ上に上書きする 1144
 - サーバーへのデータのリストア 1132
 - サービスアカウント
 - 概要 1081
 - システム状態
 - バックアップ 1090
 - 循環ログ
 - 確認 1092
 - 推奨事項 1086
 - ストレージグループ
 - バックアップ 1116
 - ストレージグループおよびデータベースのリストア先の変更 1147
 - スナップショットジョブおよびオフホストジョブのトラブルシューティング 1095
 - スナップショットテクノロジー
 - および 1094

- スナップショットバックアップ
 - 設定 1096
- スナップショットバックアップからのデータのリストア 1137
- ディザスタリカバリ 1154
- データのリストア先の変更 1147
- データベース
 - 設定 1133
 - リストアするためのマウント解除 1134
- デフォルト設定 1109
- テープからの個々のパブリックフォルダメッセージのリストア 1141
- 特定のフォルダの除外 1128
- バックアップ
 - Exchange 2003/2007 の概要 1116
 - Exchange 2010 の概要 1117
 - 個々のメールボックス 1130
 - 推奨する選択項目 1091
- バックアップオプション 1121
- バックアップジョブの作成 1119
- バックアップ選択項目
 - フォレストの管理 1118
 - フォレストの追加 1117
- バックアップとリストアのデフォルトオプション 1110
- バックアップのウィザードを使用 1123
- バックアップの戦略 1089
- バックアップ方式 1111、1121
- 必要条件 1081
- ボリュームレベルのバックアップ
 - ファイルの自動除外 1091
- ボリュームレベルのバックアップでのファイルの自動除外 1091
- ボリュームレベルのバックアップでのファイルの除外 1091
- メールボックスおよびパブリックフォルダのリストア
 - 概要 1140
- メールボックスとユーザーアカウントのリストア 1143
- メールボックスの再作成時のパスワードの変更 1115
- メールボックスのリストア先の変更 1148
- メールボックスのレガシーバックアップオプション 1112、1127
- メールボックスへのアクセスの必要条件 1087
- ユーザーアカウントとメールボックスの再作成 1143
- リカバリストレージグループへの Exchange 2007
 - データベースのリストア 1136
- リカバリストレージグループを使用した Exchange 2003 および 2007 のリストア 1134
- リカバリポイント 1108
- リカバリポイントオプション 1122
- リストア
 - Exchange データ 1142
 - [リストア後にコミットする]オプション 1146
 - リストア後の DS/IS 一貫性調整機能 1150
 - ログおよび拡張子が .pat のファイル用の一時格納場所 1146
 - リストアオプション 1143
 - [リストア後にデータベースをマウントする]オプション 1147
 - リストア先の変更オプション 1151
 - [リストア先の変更]ダイアログボックス 1150
 - [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックス 1142
 - リストアの必要条件 1133
 - リソース検出機能
 - 併用 1082
 - Exchange Mailbox Archiving Option
 - 概要 1374
 - Exchange Server Agent
 - ボリュームレベルのバックアップでのファイルの除外 1058
 - Exchange Web サービス
 - Exchange Agent との使用 1093
 - Exchange データの継続バックアップオプション 1122
 - Exchange のリストア先の変更のページ 1150
 - Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定 755
 - Exchange メールボックスへのアクセスの必要条件 1087
- F**
- FAT
 - クラスタサイズ 782
 - パーティション 782
- File System Archiving Option
 - 概要 1374
- G**
- Gather Utility 792
 - ログファイルの収集 793
- Granular Recovery Technology (GRT)
 - Agent for Microsoft Servers 1165
 - Agent for Microsoft SharePoint 1183、1188、1192、1210
 - Exchange Web サービスの使用 1093
 - Exchange データ 1092
 - オフホストバックアップ 1092
 - Microsoft Hyper-V 用に有効化 1163
 - VMware リソース 1356
 - 一時ステー징の場所
 - ジョブ用の設定 606

デフォルトとして設定 630
 個々の項目のリストアについて 305
 推奨デバイス 308
 ディスクへのバックアップフォルダを使用する場合の
 推奨事項 498
 ディスク領域の再利用 500
 必要条件 309

I

IBM コンピュータ
 IDR でリカバリ 1783
 IDR 設定ウィザード 1764
 IDR でのリカバリの必要条件 1781
 IDR の ASR ファイル 1765
 IDR のディザスタリカバリファイル (*.dr ファイル)
 定義 1764
 場所の設定 1765
IDR 用ブート可能メディア
 CD イメージ
 作成 1771
 種類の比較 1764
 テーブイメージ
 作成 1773
 メディアの種類 1763
IMG サブフォルダ
 説明 482
Intelligent Disaster Recovery (IDR)
 ASR ファイル 1765
 IBM コンピュータ 1783
 Microsoft Exchange Server
 リカバリ 1798
 Microsoft SQL Server
 リカバリ 1797
 OS/2 Boot Manager
 リストア 1781
 SharePoint Portal Server
 リカバリ 1798
 System Commander ブートマネージャ
 リストア 1781
 Windows 自動システム回復 (ASR) ファイル 1765
 暗号化されたバックアップセット 1784
 インストール 1761
 [オプション]-[アプリケーションのデフォルトを設定]
 ダイアログボックス 1766
 概要 1760
 カタログエントリ
 *.dr ファイルへの追加 1760

クラスタ

Microsoft クラスタ上での Backup Exec のリカ
 バリ 838
 ノードのリカバリ 836
 自動リストア 1785
 ディザスタリカバリファイル (*.dr ファイル)
 定義 1764
 ディスクへのバックアップフォルダ
 使用 483
 ハードディスクドライブのパーティション
 IDR を使用してサイズを変更 1794
 必要条件 1761
 ブートマネージャ 1781
 ユーティリティパーティション
 バックアップ 1769
 リカバリウィザード
 実行 1785
 リモートのディスクへのバックアップフォルダからのリ
 ストア 1790
 リモートメディアサーバーからのリストア 1791
 ローカル接続されているメディアデバイスからのリス
 トア 1788
Internet Information Services (IIS) メタベース
 バックアップ 1090
IPv4 388
IPv6 388
iSCSI 接続デバイス
 追加 438

L

Library Expansion Option
 概要 437
 ハードウェアの SCSI ID 453
 ハードウェアの設定 453
LiveUpdate
 概要 160
 自動更新のスケジュール設定 162
 自動更新のスケジュール設定について 161
 手動実行 163
Lotus Domino Agent
 API 1056
 Microsoft Cluster Server 1049
 リストア 1065
 アーカイブログ 1059
 概要 1048
 サポートされている構成 1058
 循環ログ 1059
 ディザスタリカバリ
 アーカイブログ 1076

- サーバー 1073
 - 循環ログ 1076
 - ディザスタリカバリの準備 1073
 - データベースのバックアップの必要条件 1049
 - データベースの表示 1052
 - データベースバックアップの概要 1056
 - デフォルトオプションの設定 1053
 - バックアップオプション 1061
 - 必要条件 1048
 - リストアオプションの選択 1068
 - リストア先の変更 1070
 - リストアの概要 1063
 - リストアのための選択 1065
- Lotus Notes
 - DLO を使用した nsf ファイルのバックアップ 1723
- M**
- MAPI
 - DLO での電子メール通知方式 1678
 - 受信者の設定 658、1680
 - 通知方式 653
- master データベース (SQL)
 - バックアップ 1223
 - リストア 1255
- MaxDB データベース
 - SAP Agent を使用した保護
 - 概要 1324
 - バックアップ 1340
 - リストア 1342
- Microsoft Cluster Server
 - Backup Exec で使用 800
- Microsoft SQL Server 2005 Desktop Engine (MSDE)
 - インストール 103
- Microsoft Terminal Service
 - Backup Exec のインストール 108
- Microsoft クラスタ
 - データベースファイル 823
- Microsoft クラスタフェールオーバーでの「チェックポイントから再開」機能
 - 概要 806
 - 有効化または無効化 808
- Microsoft バーチャルハードディスクファイル
 - VHD ファイルへのリストア先の変更について 625
 - 管理について 277
- Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS)
 - AOFO 937
- MSCS
 - Backup Exec で使用 800

- MSDE 1557
 - 2005 コンポーネント
 - Backup Exec によるインストール 103
 - データベースインスタンス
 - BKUPEXEC DLO 1688
 - DLO 1688
- N**
- NDMP Option
 - EMC ディレクトリとファイルのエクスクルード 1812
 - NDMP のサーバーの追加 1803
 - NetApp ディレクトリおよびファイルの除外 1812
 - インストール 1803
 - 概要 1801
 - サーバーのプロパティの表示 1822
 - データのリストア 1815
 - 特定の EMC ディレクトリのインクルード 1809
 - 特定の NetApp ディレクトリのインクルード 1808
 - パターンの使用方法 1810
 - バックアップしたデータの複製 1814
 - 必要条件 1802
 - リストアするデータのリストア先の変更 1818
 - リソースのバックアップ 1805
- NDMP のエクスクルードでのパターン 1810
- Net Send
 - 受信者の設定 662、1681
- Novell OES
 - コンポーネントのバックアップ 1845
 - サポート対象のコンポーネント 1844
 - バックアップの必要条件 1843
 - リストアについて 1846
- nsf ファイル
 - DLO を使用したバックアップ 1723
- NTFS
 - クラスタサイズ 782
 - パーティション 782
- NTFS に対する単一インスタンスバックアップ 336
- O**
- OpenStorage デバイス
 - 概要 1532
 - 追加 1532
 - ディザスタリカバリ 1549
 - 必要条件 1530
 - プロパティの表示 1535
- OpenStorage デバイス間または重複排除用ストレージ
 - フォルダ間の複製 1547

Oracle Agent

- DBA 開始ジョブ
 - ジョブテンプレート名 1290
- DBA 開始ジョブの設定
 - テンプレートの作成 407
- DBA 開始バックアップ 1304
- DBA 開始リストア 1306
- Linux サーバー
 - Oracle インスタンスの削除 1291
 - Oracle インスタンスの設定 1288
 - Oracle インスタンスの表示 1290
 - Oracle インスタンスの編集 1290
 - データベースアクセスの有効化 1291
- Linux での Oracle データベースの公開 1289
- Oracle Net Service 名 1285
- Oracle 操作の認証 1293
- Real Application Clusters (RAC) 1288~1289、1301
- Remote Agent ユーティリティのオプション 1286
- Windows コンピュータ
 - Oracle インスタンスの削除 1287
 - Oracle インスタンスの設定 1283
 - Oracle インスタンスの表示 1285
 - Oracle インスタンスの編集 1286
 - データベースアクセスの有効化 1287
- アップグレード 1281
- インスタンスのクレデンシャルの更新 1284、1289、1297
- インストール 1280
- 機能 1279
- 設定 1280、1282
- チャンネルのタイムアウト
 - デフォルトの変更 1319
- データのリストア 1307
- データベースのタイムアウト
 - デフォルトの変更 1318
- [デバイスおよびメディア]オプション 1303
- デフォルトオプション 1284、1298
- トラブルシューティング 1318
- 認証クレデンシャル 1293
 - 削除 1297
 - 設定 1294
 - 編集 1296
- 認証クレデンシャルのオプション 1295
- バックアップ 1299
- バックアップオプション 1303
- バックアップおよびリストアのデフォルト 1298
- 複数のデータストリーム
 - 指定 1304

ポート

- DB2 および Oracle 操作の設定 1293
 - リカバリカタログ 1285、1289
 - リストア 1305
 - リストアオプション 1308
 - リストア先の変更 1310
 - リストア先の変更オプション 1311
 - リソースのバックアップ 1301
 - レガシー GRFS Oracle Agent データベースのバックアップ
 - リストア 1312
- Outlook PST ファイル
- DLO を使用したバックアップ 1722

P

- Partition Recovery Utility
- アーカイブ ID の検索 1043
 - 概要 1043
 - 実行 1044
 - トラブルシューティング 1045
 - 必要条件 1043
 - ログ
 - 概要 1031
 - ログファイルの場所 1032
- PHYSICAL_ONLY ユーティリティ 1224
- PST ファイル
- DLO を使用したバックアップ 1722

R

- ralus.cfg
- Remote Agent for Macintosh Systems 1865
 - 概要、Remote Agent for Linux or UNIX Servers
 - 用 1830
 - 設定オプション 1833
 - 設定オプションの編集 1833
- Rehabilitation Act 第 508 条
- 準拠 2013
- Remote Administrator
- コマンドラインを使用したインストール 152
 - 実行 141
- Remote Agent for Linux or UNIX Servers
- beoper グループ、定義 1828
 - beoper グループの作成 1829
 - Novell OES コンポーネントのバックアップ 1845
 - Novell OES、バックアップの必要条件 1843
 - ralus.cfg ファイルの設定 1830
 - ralus.cfg ファイルの設定オプション 1833
 - ralus.cfg ファイルの設定オプションの編集 1833

- Remote Agent デーモンの起動 1855
- Remote Agent デーモンの停止 1856
- アンインストール 1852
- インストール 1826
- インストールログの保存 1826
- 手動でのアンインストール 1853
- 手動でのインストールおよびアンインストール 1874
- デフォルトオプション 1848
- デフォルトオプションの編集 1848
- トラブルシューティング 1857
- バックアップからの除外について 1832
- バックアップジョブオプション 1841
- バックアップジョブのプロパティの設定 1840
- バックアップについて 1839
- 必要条件 1824
- プッシュインストール 1825
- プッシュインストール時の SSH の使用 1825
- メディアサーバーへの公開 1832
- メディアサーバーへの公開について 1831
- ランタイムスクリプト 1854
- リストア 1846
- リストアジョブオプション 1847
- Remote Agent for Macintosh
 - メディアサーバーへの公開について 1831
- Remote Agent for Macintosh Systems
 - ralus.cfg ファイルについて 1865
 - ralus.cfg ファイルの設定オプション 1833
 - ralus.cfg ファイルの設定オプションの編集 1833
 - アンインストール 1872
 - インストール 1862
 - サポートされているバックアップ方式 1866
 - 手動での起動 1873
 - 手動での停止 1873
 - デフォルトオプション 1848、1868
 - デフォルトオプションの編集 1848、1868
 - トラブルシューティング 1875
 - バックアップジョブオプション 1841
 - バックアップジョブオプションの編集 1866
 - バックアップジョブのプロパティの設定 1840
 - 必要条件 1860
 - メディアサーバーへの公開 1832
 - リストア 1846、1867
 - リストアオプション 1867
 - リストアジョブオプション 1847
- Remote Agent for NetWare Systems
 - Advrtms.dat ファイルの作成 1881
 - AUTOEXEC.NCF ファイル 1882
 - NetWare サーバーの公開 1881
 - NetWare サーバーのバックアップ 1886
- TCP 動的ポート範囲
 - 指定 1891
 - インストール 1879
 - 概要 1877
 - システムの必要条件 1878～1879
 - デフォルトオプション 1889～1890
 - 設定 1890
 - バックアップ
 - BEDIAG.FAX の作成 1893
 - BEDIAG.NLM ユーティリティ 1892
 - シングルアドミニストレータの場合 1885
 - シングルサーバーの場合のバックアップ戦略 1885
 - パスワードデータベース 1883
 - バックアップに必要な権限 1883～1884
 - 非圧縮ファイル 1891
 - マルチアドミニストレータの場合のバックアップ戦略 1885
 - バックアップオプション 1887
 - リストア 1888
 - 概要 1887
- Remote Agent for Windows Systems
 - Active Directory ネットワークでのインストール 130
 - Microsoft クラスタでのインストール 802
 - Remote Agent ユーティリティ 1898
 - Veritas Cluster Server へのインストール 828
 - インストール 129
 - コマンドスクリプトを使用したアンインストール 139
 - コマンドスクリプトを使用したインストール 138
 - コマンドラインを使用したアンインストール 138
 - コマンドラインを使用したインストール 136
 - 停止および起動 1897
 - バックアップ選択リスト内のリモートコンピュータへのインストール 130
 - ハードウェア必要条件 1896
 - メディアサーバーへの公開 1902
 - ライセンスキー 1897
- Remote Agent の優先度 338
- Remote Agent ユーティリティ
 - DB2 DBA 開始ジョブテンプレート名
 - 追加 950
 - DB2 アーカイブログのジョブテンプレート名
 - 追加 950
 - DB2 インスタンス
 - データベースアクセスの設定 948、1288
 - DBA 開始ジョブのジョブテンプレート名 1289
 - Linux
 - Oracle インスタンスの設定 1292
 - Linux インスタンスのクレデンシャルの更新 1289

- Real Application Clusters (RAC)
 - メディアサーバーへの公開 1288
 - Windows
 - Oracle インスタンスの設定 1288
 - アクティビティの状態
 - 表示 1900
 - イベントビューア
 - 開く 1898
 - 起動 1899
 - 公開
 - メディアサーバー情報の編集 1905
 - メディアサーバーの削除 1906
 - メディアサーバーの追加 1903
 - [公開]オプション 1903
 - 更新間隔 1900
 - 設定 1901
 - コマンドラインアプレット 1909
 - 使用 1909
 - スイッチ 1910
 - サービス
 - 開く 1898
 - 自動起動 1901
 - [状態]オプション 1900
 - 状態の表示 1899
 - データベースアクセス
 - オプション 1907
 - 設定 1906
 - デフォルトの公開間隔 1904
 - ポート
 - DB2 および Oracle 操作の設定 1293
 - メディアサーバーへの公開 1902、1904
 - レジストリエディタ
 - 開く 1898
 - ログオン時のユーティリティの起動 1900
 - Remote Media Agent for Linux Servers
 - Backup Exec データベースへの追加 1922
 - beoper グループ 1918
 - ICMP ping 1923
 - SAN Shared Storage Option で使用 1923
 - Tape Library Simulator Utility 1929
 - アンインストール 1935
 - インストール 1918
 - 概要 1916
 - コマンドラインからのシミュレートテープライブラリの管理 1934
 - サーバーの状態の判断 1926
 - シミュレートテープライブラリの削除 1933
 - シミュレートテープライブラリの作成 1930
 - シミュレートテープライブラリのプロパティの表示 1931
 - データのバックアップ 1928
 - データのリストア 1928
 - 動作 1916
 - トラブルシューティング 1937
 - 必要条件 1917
 - プロパティの表示 1925
 - ポート番号の変更 1923
 - Remote Media Agent の追加 1922
 - Remote Media Agent への制御接続 1916
 - RMAN
 - Oracle データベースの SAP を保護するために使用 1324
 - SAP Agent の使用 1325
 - SAP Agent を使用したバックアップ 1335
 - SAP Agent を使用したリストア 1337
 - RMAN を使用した Oracle データベースの SAP の保護 1324
- ## S
- SAN Shared Storage Option
 - Remote Media Agent for Linux Servers の使用 1923
 - SAN Shared Storage Option (SSO)
 - NetWare メディアサーバー
 - ロボットライブラリの共有に必要な設定 1951
 - SAN のリセット 1964
 - Windows メディアサーバー
 - ロボットライブラリの共有に必要な設定 1950
 - インストール 1944
 - 概要 1941
 - 環境の再設定 1960
 - サービス
 - 複数のサーバー上での起動および停止 1960
 - ジョブのスケジュールの設定 1948
 - 推奨事項 1965
 - スタンバイライブラリデータベースサーバー
 - 作成 1958
 - 設定の変更 1957
 - デバイスの監視 1956
 - デバイスの管理 1954
 - デバイスの割り当て 1946
 - ドライブプール
 - SSO での使用方法 1955
 - トラブルシューティング 1961
 - オフラインのデバイス 1961
 - 名前の変更
 - 共有環境でのライブラリおよびドライブ 1954

- ハードウェアエラー 1963
- 必要条件 1943
- メディアのカタログ登録 1947
- メディアの共有 1947
- メディアの表示 1956
- メディアローテーション 1947
- ロボットライブラリの共有 1949
 - 前提条件 1949
- SAN 内の Backup Exec メディアサーバー 1942
- SAP Agent
 - RMAN を使用したバックアップ 1335
 - RMAN を使用したリストア 1337
 - インストール 1327
 - 概要 1324
 - 機能 1324
 - 権限 1328
 - セキュリティ 1328
 - ディザスタリカバリ 1343
 - ディザスタリカバリの必要条件 1343
 - データベース
 - システムレベルのバックアップジョブ 1333
 - データベースサーバー
 - リモートサーバーのリストア 1344
 - 動作 1324
 - バックアップおよびリストアに使用 1333
 - バックアップ前 1329
 - 必要条件 1326
 - リモートコンピュータからのジョブのサブミット 1334
- SAP Agent カタログ
 - _backint.mdb から _backint.xml への移行 1338
 - 手動による移行 1338
 - 整合性維持 1329
 - リストア 1329
- SAP データベースサーバーまたはメディアサーバーの組み合わせのリカバリ 1345
- SCSI
 - デバイスのアドレス 453
 - デバイスの情報 448
 - ロボットライブラリドライブのアドレスの設定 453
- SCSI バス
 - Microsoft クラスタでのテープデバイス用の設定 814
- SCSI パススルーモード
 - デバイスの設定 448
- SGMon 794
- SharePoint Agent
 - Microsoft Office SharePoint Server 2007 共有サービスプロバイダのリストア 1195
 - Microsoft Office SharePoint Server 2007 のバックアップ 1187
- SharePoint 2003 ドキュメントライブラリデータのリストア先の変更 1214
- SharePoint 2003 ドキュメントライブラリのリストア 1211
- SharePoint 2003 リソースのリストア 1209
- SharePoint 2003 リソースのリストアについて 1208
- SharePoint 2007 Web アプリケーションのリストア先の変更 1203
- SharePoint 2007 ドキュメントライブラリデータのリストア先の変更 1201
- SharePoint 2007 ドキュメントライブラリのリストア 1194
- SharePoint Portal Server 2003 および 2007 のデフォルトオプションの設定 1183
- SharePoint Portal Server 2003 および Windows SharePoint Services 2.0 での使用 1206
- SharePoint Portal Server 2003 のリストア先の変更 1212
- SharePoint Portal Server 2003 リソースのバックアップ 1207
- SharePoint Portal Server 2007 のリストア先の変更 1199
- SharePoint Server 2007 Web アプリケーションのリストア 1196
- SharePoint Server 2007 と Windows SharePoint Services 3.0 での使用 1186
- SharePoint Server 2007 リソースのリストア 1191
- SharePoint Server 2007 リソースのリストアについて 1190
- SharePoint Services 3.0 リソースのリストア 1191
- SharePoint Services 3.0 リソースのリストアについて 1190
- Web サーバーと Backup Exec との通信の有効化または無効化 1182
- Windows SharePoint Services 3.0 ファームのバックアップ 1187
- インストール 1179
- 概要 1177~1178
- 個々の SharePoint 2007 Web アプリケーションのバックアップ 1188
- 個々の SharePoint 2007 項目のリストア 1192
- 個別の SharePoint 2003 項目のリストア 1210
- サーバーファームの追加 1179、1187
- システムの必要条件 1178
- デフォルトオプション 1183
- ドキュメントライブラリバックアップからの SharePoint 2003 ドキュメントのリストア 1212
- ドキュメントライブラリバックアップからの SharePoint 2007 ドキュメントのリストア 1194

- バックアップオプション 1189
- バックアップする SharePoint Portal Server 2003
 - リソースの選択 1207
- 必要条件 1178
- ファイルパスへの個々の SharePoint 2003 項目の
 - リストア先の変更 1215
- ファイルパスへの個々の SharePoint 2007 項目の
 - リストア先の変更 1202
- ファームの削除 1182
- ファームのデフォルトの名前の変更 1181
- リストアオプション 1197
- リストア先の変更オプション 1204
- Silverlight**
 - 組織内の配備 854
- SMTP**
 - DLO での電子メール通知方式 1678
 - 通知方式 652
 - 電子メール受信者の設定 656
- SNMP**
 - Windows 2000 用のシステムサービスの設定 674
 - WMI 674
 - WMI プロバイダのインストール 675
 - オブジェクト ID の接頭辞 671
 - 通知の設定 671
 - トラップ
 - 定義 671
- SNMP トラップ**
 - 受信者の設定 1681
 - 通知 1681
 - 電子メール受信者の設定 1679
- SQL Agent**
 - ADBO 1227
 - AOFO 1226
 - SQL Server ファイルグループのバックアップ
 - 概要 1246
 - SQL データベースのバックアップ 1247
 - 一貫性チェック 1224
 - 推奨事項 1223
 - インストール 868、1220
 - 概要 1218
 - 機能 1218
 - スナップショットテクノロジー
 - 使用 1225
 - 戦略の推奨事項 1222
 - [チェックポイントでのログの切り捨て]オプション 1249
 - ディザスタリカバリ 1277
 - 概要 1275
 - 手動 1277
 - 準備する方法 1276
 - 必要条件 1276
- データベース一貫性チェック (DBCC)
 - 推奨事項 1223
- データベースのスナップショット
 - 概要 1251
 - 作成 1253
 - バックアップ方式 (Backup method) 1252
- デフォルトオプション 1228~1229、1237
 - 設定 1236
- トランザクションログ 1249
- バックアップ
 - Windows レジストリ 1223
 - 一貫性チェックの推奨事項 1223
 - 戦略 1222
 - データベース 1245
 - トランザクションログ 1250
 - バックアップ後の一貫性チェック 1242
 - バックアップ方式 1238
 - ファイルグループ 1248
- [バックアップジョブのプロパティ]ダイアログボックス 1237
- 必要条件 1219
- ファイルグループの表示 1248
- リストア
 - master データベース 1265
 - master データベースのリストアの自動化 1255
 - ウィザードを使用 1257
 - [時刻を指定してリストアする]オプション 1260
 - スタンバイデータベースの作成 1254
 - ターゲットインスタンスへのデータベースファイルのリストア 1273
 - 名前付きトランザクションの日付および時刻の指定 1257
 - 非常に大規模なデータベース 1258
 - ファイルグループ 1262
 - リストア先の変更 1269
 - [リストア先の変更]ダイアログボックス 1270
 - [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックス 1254
 - リストアオプション 1254
 - 設定 1253
 - リストア先の変更オプション 1270
 - ログオンアカウント 1220
- SQL Server 1557**
- SQL Server 2000**
 - ウィザードを使用 1244
 - シンプル復旧モデル 1219
 - スタンバイデータベース 1218

- スタンバイモード 1242
 - 名前付きトランザクション 1261
 - 含める 1257
 - リストア先 1257
 - バックアップ後の物理チェック 1223
 - ファイルグループ 1262
 - プライマリおよび非プライマリファイルグループ 1258
 - リストア
 - 名前付きインスタンス 1271
 - ロード中の状態 1242
 - SQL データベースのバックアップ
 - リストア 1259
 - TDE で暗号化されたデータベースバックアップ 1258
 - SSH (セキュアシェル) を使用した Remote Agent for Linux or UNIX Servers のプッシュインストール 1825
 - Storage Provisioning Option
 - CASO での設定 1969
 - アップグレード 1970
 - インストール 1970
 - ストレージアレイの検出 1992
 - 説明 1968
 - ディスク領域の使用率のアラートの設定 1995
 - ディスク領域の使用率の予測 1994
 - 必要条件 1969
 - Storage Provisioning Option におけるディスク領域の使用率の傾向
 - 設定 1995
 - 説明 1994
 - Storage Provisioning アラート
 - 設定 1995
 - 説明 1994
 - Symantec Backup Exec 2010
 - 説明 60
 - Symantec Endpoint Protection
 - Backup Exec で使用 393
 - 概略の表示 579
 - Symantec Online Storage for Backup Exec
 - Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent のダウンロード 2002
 - Symantec Online Storage フォルダオプション 2003
 - Symantec Online Storage フォルダについて 2002
 - Symantec Online Storage フォルダの一時停止 2004
 - Symantec Online Storage フォルダの再開 2004
 - Symantec Online Storage フォルダの削除 2010
 - Symantec Online Storage フォルダの作成 2002
 - 既存の Symantec Online Storage フォルダの共有 2005
 - サインアップ 2001
 - 詳細 1999
 - ジョブの管理について 2008
 - ジョブのリストアについて 2011
 - 推奨事項 2000
 - 設定 2001
 - バックアップ複製ジョブの作成 2006
 - バックアップ複製ジョブの作成について 2005
 - ファイルの消去 2009
 - Symantec Online Storage for Backup Exec Protection Agent 2002
 - Symantec Online Storage フォルダ
 - 一時停止 2004
 - 共有 2005
 - 再開 2004
 - 削除 2010
 - 作成 2002
 - 詳細 2002
 - プロパティ 2003
 - Symantec Volume Snapshot Provider
 - AOFO 936
 - デフォルトの変更 932
 - Symantec デバイスドライバインストールウィザード 439
- ## T
- tapeinst.exe
 - Symantec デバイスドライバインストールウィザード 439
 - Tape Library Simulator Utility
 - 概要 1929
 - コマンドラインからの実行 1934
 - シミュレートテープライブラリの作成 1930
 - プロパティの表示 1931
 - ライブラリの削除 1933
 - TCP/IP
 - RAMS エージェントの必要条件 1860
 - ユーザー定義選択項目の追加 276
 - TDE
 - 透過的なデータベース暗号化 1258
 - ThreatCon レベル 393
 - True Image Restore
 - CASO 902
 - True Image カタログ 902
 - アイコン 904
 - 概要 898
 - トラブルシューティング 904
 - 必要条件 901
 - ポリシーの作成 902

- U**
- Unique Message Identifier (UMI) エラーコード表示 567、647
 - USB テープデバイス
 - 再接続 438
- V**
- Veritas クラスタ
 - Windows 2003/2008 832
 - VHD ファイル
 - VHD ファイルへのリストア先の変更について 625
 - 管理について 277
 - VIM
 - 受信者の設定 659、1680
 - 通知方式 654、1678
 - Virtual Disk Service
 - Storage Provisioning Option のためのインストール 1969
 - VMware vCenter Server、削除 1350
 - VMware vCenter Server、追加 1349
 - VSS
 - Active Directory バックアップ前の一貫性チェックの実行 874
 - Exchange データの保護 1094
 - Exchange バックアップ前の一貫性チェックの実行 1124
 - VSS プロバイダ
 - データベースとアプリケーションの保護 1360
- W**
- Windows Management Instrumentation (WMI)
 - WMI の機能の追加 674
 - Windows Server 2003
 - バックアップ 304
 - Windows Server 2008
 - Server Core 106
 - バックアップ 304
 - 読み取り専用ドメインコントローラ 106
 - Windows 自動システム回復 (ASR) ファイル
 - IDR
 - 定義 1765
 - Windows 変更ジャーナル
 - バックアップ状態の判定に使用 265
 - バックアップジョブに使用するオプション 333
 - Windows レジストリ
 - SQL Agent を使用したバックアップ 1223
 - WMI
 - SNMP プロバイダのアンインストール 676
 - SNMP プロバイダのインストール 675
 - パフォーマンスカウンタ 674
 - パフォーマンスカウンタプロバイダのインストール 675
- あ**
- アイディアの共有、説明 83
 - アーカイブ
 - 概要 1414
 - 削除 1416
 - プロパティの編集 1415
 - 保持期間が終了した項目の削除 1415
 - アーカイブ項目の保持期間 1418
 - アーカイブジョブの成功率 754
 - アーカイブの概略 (前日分) 757
 - アーカイブの権限と設定の同期 1454
 - アーカイブの設定
 - 概要 1416
 - アーカイブビット
 - 定義 257
 - アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択 754
 - アーカイブログ
 - Lotus Domino 1059
 - Lotus Domino サーバーのリカバリ 1076
 - [アカウントのリセット]オプション
 - Desktop Agent (DLO) 1714
 - アクセスビリティ
 - 概要 2013
 - キーボードショートカット 2014
 - キーボードナビゲーション 2020
 - 設定 2023
 - ダイアログボックス 2021
 - アクセラレータ
 - 定義 2014
 - アクティブアラート
 - 応答 643
 - 定義 635
 - 表示 635
 - アクティブアラートへの応答 643
 - [アクティブアラート (メディアサーバー別)]レポート 718
 - [アクティブアラート]レポート 718
 - アクティブファイルの除外 1091
 - Exchange データ 1058
 - 圧縮
 - DLO での差分ファイルの転送 1621
 - DLO バックアップ選択項目
 - 設定 1615
 - 暗号化の使用 399
 - 差分ファイルの転送 1615

- バックアップ用のデフォルト設定 379
- ハードウェア 445
- ハードウェア圧縮オプションを使用 445
- 宛先メディアサーバー
 - CASO 以外の環境での追加 187
 - CASO 環境での追加 188
 - 複数の追加 187
- [アプリケーションイベントログ]レポート 720
- アプリケーションのデフォルトを設定
 - ユーザー設定 184
- アラート
 - DLO での監視 1671
 - DLO での管理 1676
 - DLO でのグルーミング 1671
 - DLO での削除 1677
 - DLO での定義 1672
 - DLO での表示 1675
 - SAP Agent を使用した処理 1328
- アラートの種類 634
- 応答 643
- 受信者の削除 669
- 受信者の割り当て 668
- ジョブログの表示 642
- 定義 634
- ビュー 635
- 表示 638
- フィルタ 635、638
- プロパティ 640
- アラート通知
 - プリンタ 664～665
- [アラートの設定]ダイアログボックス (DLO) 1675
- アラート履歴
 - 定義 635
 - 表示 635
- [アラート履歴]レポート 719
- アンインストール 862
 - Backup Exec 159
 - Microsoft クラスタからの Backup Exec のアンインストール 804
 - Windows Management Instrumentation SNMP プロバイダ 676
 - コマンドラインの使用 154
- 暗号化
 - DLO バックアップ選択項目 1615
 - SAP データ 1328
 - 暗号化された SQL データベースのリストア 1258
 - 重複排除の使用 1548
 - 種類 399
 - 詳細 399
 - ソフトウェア 399
 - ハードウェア 400
- 暗号化キー
 - 128 ビット AES 399
 - 256 ビット AES 399
 - 圧縮の使用 399
 - 暗号化されたデータのリストア 406
 - 暗号化の種類 399
 - 概要 400
 - 管理 402
 - 共用 401
 - 削除 406
 - 削除について 405
 - 作成 404
 - 所有者専用 401
 - 置換 405
 - デフォルト設定 388
 - パスフレーズ 401
- 暗号化された SQL データベースのリストア 1258
- 暗号化ファイル
 - AOFO を使用したバックアップ 927
 - メディアのカタログ登録について 407
- 安全なファイルアクセス 848
- 以前のバージョンの Backup Exec Retrieve からのアップグレード 855
- 一部 (上書き禁止レベル) 221
- 一貫性チェックオプション
 - Exchange Agent 1124
 - SQL Agent 1223
- 一貫性チェックでエラーが検出された場合の Active Directory バックアップの続行 871、874
- 一貫性チェックでエラーが検出された場合の Exchange バックアップの続行 1124
- [一般]のデフォルト
 - 設定 184
- [イベントの受信者]レポート 731
- インクルード/エクスクルード
 - DLO バックアップ選択項目 1612
 - バックアップファイル 342
- インスタンス
 - BKUPEXCDLO MSDE データベース 1688
- インストール
 - Backup Exec 108
 - besernum.xml ファイル
 - ライセンスキーのインポート 109
 - Desktop Agent 1560
 - Desktop Agent オプション 1562
 - Desktop and Laptop Option 1560
 - DLO のサイレントインストール 1562

- Microsoft SQL Server 2005 Desktop Engine (MSDE 2005) 103
- Microsoft クラスタでの Backup Exec 802
- Microsoft クラスタへの Backup Exec 追加オプションのインストール 804
- NDMP Option 1803
- Remote Administrator 140
- Remote Media Agent for Linux Servers 1918
- SharePoint Agent 1179
- Veritas クラスタでの Backup Exec 828
- Windows Management Instrumentation SNMP プロバイダ 675
- Windows Management Instrumentation パフォーマンスカウンタ 675
- インストールメディアのインストールプログラムを使用 107
- 環境チェック
 - インストール前に実行 95~96
- 既存の Microsoft SQL Server 2005 インスタンス 104
- [修復]オプションの使用 157
- ターミナルサービスの使用 108
- 評価版 109
 - 方法 94
 - メディアからのドメインコントローラのインストール 625
 - ライセンスキーのインポート 109
 - ローカル環境
 - 別売オプション 112
- インストールされている更新
 - 表示 164
- インストールの概要 1158
- インストールパラメータファイル
 - 作成 155
 - 使用 155
 - 定義 154
- インストール要件
 - Backup Exec Retrieve 852
- インストールログ 156
 - Remote Agent for Linux or UNIX Servers 1826
- インデックスの場所
 - Archiving Option でのバックアップ 1439
- インベントリ
 - Backup Exec の起動時のすべてのドライブ 185
 - Backup Exec の起動時のロボットライブラリ 468
- インポートジョブ完了後のメディアの自動インベントリ 474
- インポートメディア
 - Backup Exec によるラベル付け 228
 - 上書き 216
- ウイルス
 - データストレージ必要条件への影響 256
- ウィンドウメニュー 2016
- 上書き禁止
 - 無効化 222
- 上書き禁止期間
 - 定義 206、215
 - メディアセットの設定 215
- 上書き禁止レベル
 - 一部 221
 - すべて 221
- 上書きする前の警告メッセージ 222
- エージェント
 - Backup Exec
 - エージェントリスト 73
 - 評価版 156
 - リモートコンピュータでのアップグレード 168
- エラーコード
 - 一意のメッセージ ID
 - 表示 567、647
- エラー処理方法
 - 概要 580
 - カスタマイズした方法
 - 定義 580
 - クラスタフェールオーバー時の処理方法 580、584
 - 設定 580
 - デフォルトの方法
 - 定義 580
 - リカバリされたジョブ(カスタマイズした処理方法) 580
- エンドユーザーの必要条件
 - Backup Exec Retrieve 853
- オプション
 - Backup Exec 別売オプションの説明 73
 - アプリケーションのデフォルトを設定
 - ユーザー設定 184
 - ジョブログのデフォルト設定 569
- オフホストバックアップ
- Exchange Server 用
 - Granular Recovery Technology (GRT) による 915
- VSWF FlashSnap Option
 - 併用 909
 - 概要 905
 - 推奨事項 910
 - スナップショットプロバイダ
 - 選択 913
 - [スナップショットプロバイダを一覧表示]オプション 912
 - 単一のボリュームのスナップショット 914

- トランスポートブルスナップショット
 - 定義 906
 - 必要条件 907
 - ホストコンピュータ
 - 定義 905
 - オフライン
 - ディスクへのバックアップフォルダの表示 490
 - デバイスの表示 444
 - オフラインメディアの場所
 - 定義 235
 - メディアの追加 239
 - オープンファイル
 - AOFOを使用したバックアップ 924
 - バックアップできない 781
 - オンライン
 - デバイスの変更 495
 - オンラインメディアの場所 235
- か**
- 開始時間帯
 - 概要 351
 - 設定 351
 - カスタムレポート
 - 概要 686
 - グラフオプション 694
 - コピー 706
 - 削除 707
 - 作成 687
 - フィールドのグループ化 690
 - フィールドのソート 692
 - プレビュー 700
 - 編集 706
 - 仮想サーバー
 - Microsoft クラスタ内のバックアップ 823
 - Veritas クラスタ内のバックアップ 834
 - 仮想ディスク 1983
 - 「未設定の仮想ディスク」も参照
 - 一般プロパティの編集 1985
 - グローバルなデフォルトの編集 1980
 - 作成 1971
 - 状態 1986
 - 設定 1982
 - 説明 1977
 - ディスクの空き領域の低しきい値の編集 1978、1980
 - デフォルトオプションの編集 1978
 - 点減 1993
 - 同時並行ジョブ 1986
 - 名前の変更 1992
 - ハードウェア健全性 1986
 - ハードウェアの状態 1986
 - ファイル数 1986
 - 物理ディスクの識別 1994
 - 容量 1986
 - 仮想テープライブラリ
 - 物理デバイスへのダイレクトコピー 365～366
 - 仮想マシン
 - Agent for VMware を使用したバックアップ 1352
 - Hyper-V の場合の自動保護 1162
 - カタログ
 - 暗号化されたバックアップセットを含むメディア 407
 - 検索 620
 - デフォルトオプション 589
 - デフォルト設定 589
 - ドライブ内のメディア 232
 - リストアジョブ 588
 - レベル 589、591
 - カタログ操作エラー
 - DLT テープドライブのハング 779
 - カタログデータベース
 - SAN Shared Storage Option 1947
 - カレンダー
 - ジョブワークロードの表示 577
 - 環境チェック
 - Backup Exec 用に実行 95～96
 - 監査ログ
 - Archiving Option エントリ 1392
 - エントリの削除 195
 - 概要 192
 - 設定 192
 - 表示 193
 - ファイルへの保存 195
 - メディア操作 225
 - [監査ログ]レポート 721
 - 完全バックアップ
 - 長所と短所 262
 - 定義 259
 - 管理コンソール
 - Desktop Agent コンソール 1715
 - Desktop and Laptop Option (DLO) 1587
 - 概要 83
 - バックアップ処理での役割 64
 - 管理対象メディアサーバー
 - アップグレード 1480
 - インストール 1471
 - 集中管理サーバーへのネットワーク接続速度 1490
 - ジョブのコピー 1508
 - デフォルト
 - 設定 1489

- ネットワークインターフェースカード
 - 使用 1498
 - プール 1503
- [管理対象メディアサーバー]レポート 734
- 完了ジョブ
 - ジョブログの概要 567
- 起動
 - Desktop and Laptop Option (DLO) 1587
- キーボードショートカット 2014
- キーボードナビゲーション
 - ショートカット 2013
 - ダイアログボックス 2021
 - ルール 2021
- キャッシュファイルの場所
 - AOFO 933
- 共有カタログ
 - 使用 1942
- 共用暗号化キー 401
- クラスタ
 - Backup Exec で使用 798
 - Desktop and Laptop Option 1688
 - FAT パーティションのサイズ 782
 - Microsoft 809、823
 - Backup Exec のアンインストール 804
 - BEUtility 809
 - IDR を使用したクラスタ上の Backup Exec の
 - ディザスタリカバリ 838
 - インストール 802、804
 - 概要 820
 - 構成 811～814、816
 - すべてのデバイスプール 805
 - ディザスタリカバリ 839～840、842
 - デバイスプールの作成 805
 - ノードのフェールオーバー順序の変更 808
 - フェールオーバーノードの追加または削除 809
 - リストア 825
 - ローカルディスク 821
 - フェールオーバー再開 800
 - 共有ディスクのバックアップ 822
 - SAP Agent 1340
 - SAP データベースのバックアップ 1340
 - Veritas
 - ディザスタリカバリ 835
 - バックアップ 832～834
 - ディザスタリカバリ 841
 - 概要 831
 - Veritas Cluster Server への Backup Exec のイン
 - ストール 828
 - クラスタ共有ボリューム 823
- ディザスタリカバリ
 - IDR を使用した準備 836
 - IDR を使用したノードのリカバリ 836
 - クラスタ全体の手動でのリカバリ 838
- トラブルシューティング 842
- リストア
 - Microsoft クラスタォーラムディスクへの新しいドライブ文字の割り当て 826
- クラスタ共有ボリューム 823
 - ォーラムの名前 823
- クラスタ内のマジョリティノード 801
- クラスタフェールオーバー時のエラー処理方法 580、584
- クリーニング情報をリセットする 449
- クリーニングスロット
 - 定義 457
 - ロボットライブラリでの定義 455
- グループ
 - 受信者の設定 665、1682
- グルーミング
 - DLO のファイル 1614
- グローバルエクスクルード
 - 暗号化 1642
 - 削除 1636～1637
 - 追加 1636～1637、1641
 - 電子メール 1639
 - マクロ 1645
- 継続バックアップ
 - Exchange データ
 - 概要 1098
 - 推奨事項 1103
 - 設定 1101
 - 停止 1106
 - トラブルシューティング 1109
 - Exchange のジョブ状態 1104
 - Exchange の必要条件 1099
 - コンソールの表示 1107
 - ディスク容量の確認 1106
- 携帯電話
 - 通知 652
- 携帯電話による通知 652
- 現在のジョブ
 - カスタムフィルタ 573
- 検索
 - カタログ 620
 - ログファイルの履歴 1670
- 検証
 - バックアップ完了後 334
 - 複製完了後 364、897

検証ジョブ

- 作成 367
- 定義 367

公開

- デフォルトの間隔 1904
- メディアサーバー

Remote Agent for Windows Systems の使用 1902

- リモートコンピュータでの無効化 1904

高可用性仮想マシン

- バックアップとリストアについて 1175

更新

- DLO 1582

[更新されたメディア]レポート 746

合成バックアップ

暗号化

- 必要条件 887
- 作成 890、892
- テンプレートルール 896
- 例 892
- 必要条件 887
- ベースライン 885

コピージョブ

選択リスト

- ポリシー 544

コマンドの実行

- バックアップ後 340
- バックアップ前 340
- リストア後 340
- リストア前 340

コマンドラインからの Backup Exec のインストール 143

混合メディアライブラリのバーコードラベル 229

コンピュータの完全修飾名 275

さ

サイズ

- クラスタ 782

最適化された複製 1547

- 設定 1547

サイレントモードインストール 94、143

削除

- DLO からのユーザーエントリ 1650
- DLO デスクトップコンピュータ 1654
- DLO 内のリビジョン 1617
- DLO の自動ユーザー割り当て 1636
- DLO のデータ格納場所 1632
- デバイス(デバイスプールから) 507
- デバイスプール 507
- ボルト 238

メディア 244

サーバーのプロパティ

Remote Media Agent の表示 1925
表示 198

[サーバーの予想負荷]レポート 751

サーバーリスト

NetWare での手動による更新 1891

サーバーの追加と削除 158

サーバーリストの手動による更新

NetWare 1891

サービス

起動および停止 158

サービスアカウント

- 概要 98
- 変更 99、158

サービス状態 304

差分バックアップ

長所と短所 263

定義 260

差分ファイルの転送 1615、1621

[時刻を指定してリストアする]オプション

SQL Agent 1256、1260

システム構成の設定内容

別のサーバーへのコピー 186

[システム構成の設定内容]レポート 725

システム修復ディスク

作成 765

システム状態

- 概要 609
- リストア 610

システムの必要条件

Backup Exec 105

システムログオンアカウント 177

作成 181

[実行されたジョブ(デバイス別)]レポート 732

実行中のジョブ

- キャンセル 552
- スケジュール済みのジョブの保留 553
- プロパティの表示 547、551
- 保留の削除 553

失敗したアーカイブジョブ 755

[失敗したバックアップジョブ数]レポート 731

指定バックアップネットワーク機能

- 設定 388
- 説明 386

自動更新

スケジュール設定について 161

スケジュールの設定 162

自動ユーザー割り当て

- 削除 1636
- 作成 1632
- 定義 1554、1708
- プロパティ
 - 表示 1636
- 変更 1635
- 優先度
 - 変更 1635

シマンテック社のナレッジベース 787

- 検索 788

シミュレートテンプライブラリ

- 削除 1933
- 作成 1930
- プロパティの表示 1931

シャドウコピーコンポーネント

- ファイルシステム 304
- リストアについて 611

[修正日]タブ 621

集中カタログ

- CASO 内 1500

集中リストア

- 推奨事項 1513

重複排除用ストレージフォルダ

- 概要 1536
- 追加 1537
- ディザスタリカバリ 1548
- ディザスタリカバリの準備 1549
- 必要条件 1530
- プロパティの表示 1539

[重複排除用デバイスの概略]レポート 726

受信者

- MAPI 電子メールの設定 658
- Net Send の設定 662
- SMTP の設定 656
- VIM 電子メールの設定 659
- アラートカテゴリの割り当て 668～669
- グループの設定 665
- 定義 655
- ページの設定 660、664、1682

受信者 (DLO)

- MAPI 電子メールの設定 1680
- Net Send の設定 1681
- SMTP の設定 1679
- SNMPトラップの設定 1681
- VIM 電子メールの設定 1680
- グループの設定 1682
- 定義 1679
- ページの設定 1681

循環ログ

Exchange Agent

- 確認 1092

Lotus Domino 1059

Lotus Domino サーバーのリカバリ 1076

使用

Backup Exec オプションでのデバイス 444

Backup Exec オプションのディスクへのバックアップ
フォルダ 490

障害対策

概要 761

システム修復ディスク 765

障害対策 (DPP) 762

ハードウェアの保護 762

別の場所へのバックアップの保管 763

使用例 848

ジョブ

Lotus Domino のデフォルト設定 1053

Lotus Domino のバックアッププロパティ 1061

Symantec Online Storage for Backup Exec から
のリストアについて 2011

[一般]のデフォルトの設定 184

エラー処理方法の設定 580

カスタムフィルタの管理 572

カレンダー

ジョブの管理 578

完了したときの通知の送信 669

完了ジョブの表示 562

休日のスケジュール 353

キューの保留 559

時間間隔内での再実行 352

スケジュール 343

スケジュール済みジョブに対するテストの実行 560

スケジュール済みジョブの削除 561

スケジュール済みジョブの実行 558

スケジュール設定について 343

スケジュールの設定 343

スケジュールの優先度の変更 560

選択リストからの作成 533

次に実行予定のポリシーベースのジョブの編集 534

デフォルトスケジュールの設定 354

表示とスケジュール設定 1948

フィルタ 571

フィルタ処理 572

負荷のカレンダー表示 577

ポリシーから作成したジョブの削除 534

ポリシーから作成したジョブの名前の変更 535

ポリシーを使用した作成について 532

ポリシーを使用して作成 533

- 保留の削除
 - 実行中のジョブ 553
 - スケジュール済みジョブ 559
- レポートの実行 682
- ジョブキュー
 - 保留 559
- ジョブ状態
 - しきい値の設定 584
- ジョブの委任
 - CASO 内 1464
- [ジョブの概略]レポート 732
- ジョブの進行状況インジケータ
 - 表示 185
- ジョブの保留 558
- ジョブの優先度、概要 183
- ジョブのリカバリ
 - しきい値 584
- [ジョブ、メディア、アラートの概要]レポート 740
- ジョブモニター
 - ビュー 547
- ジョブ履歴 1666
 - DLO での履歴表示フィルタ
 - DLO での設定 1669
 - カスタムフィルタ 574
 - 表示 562
 - レポートの削除 685
 - レポートの保存 684
- ジョブ履歴 (DLO)
 - Desktop Agent での表示 1742
- ジョブログ
 - CASO の設定オプション 1495
 - 状態の概要 567
 - デフォルトオプションの設定 569
- 所有者専用暗号化キー
 - 定義 401
- 所有者専用ログオンアカウント 174
- シングルブロックモード
 - デバイスの設定 447
- 診断ファイル
 - コマンドラインスイッチ 791
 - リモートメディアサーバー 792
- シンプル復旧モデル
 - SQL Server 2000 1219
- スキャン
 - ストレージアレイの検出 1992
- スクラッチメディア
 - 作成 216
 - 定義 205
- [スクラッチメディアの利用可能予定]レポート 752
- スケジュール
 - Desktop Agent でのバックアップジョブ 1726
 - カレンダー 346
 - 日付の除外 353
 - 有効日の設定 350
 - スケジュール済みジョブ
 - 開始時間帯について 351
 - 開始時間帯の設定 351
 - 概要 343
 - 削除 561
 - 実行間隔を指定 349
 - 状態のリスト 555
 - 設定 343
 - 即実行 558
 - テストの実行 560
 - デフォルトオプションの設定 354
 - 特定の日に実行 346
 - 特定の曜日に定期的に行う 347
 - 保留 558
 - 保留の削除 559
 - 毎月特定の日に定期的に行う 348
 - 優先度の変更 560
 - スケジュール済みジョブの割り当て先の変更 508
 - スケジュールの設定
 - 通知受信者 665
 - テンプレート用の設定 520
 - レポートジョブ 686
 - スタンバイデータベース
 - SQL Server 2000 1218
 - 作成
 - SQL Agent 1254
 - ストレージ
 - 共有 428
 - ストレージアレイ
 - 仮想ディスクの設定 1982
 - 検出 1992
 - コンポーネントの表示 1970
 - 設定 1971
 - 点滅 1993
 - 名前の変更 1992
 - 物理ディスクの識別 1994
 - 物理ディスクの識別について 1993
 - 物理ディスクのプロパティの表示 1973
 - プロパティの表示 1973
 - ストレージアレイ設定ウィザード
 - ストレージアレイの設定 1971
 - 説明 1971
 - ホットスペアの変更または追加 1991

- ストレージデバイス
 - 一時停止 430
 - インストール 95
 - 再開 431
 - 詳細 425
 - 名前の変更 431
 - メディアサーバーの一時停止 430
 - メディアサーバーの再開 430
 - スナップショットテクノロジー
 - Advanced Open File Option で使用 923
 - Exchange Agent との使用 1094
 - スナップスタート
 - VSWF ボリューム 931
 - スプラッシュスクリーン
 - 起動時に表示 185
 - [すべての仮想ディスク]デバイスプール
 - 説明 1976
 - すべてのメディア
 - 定義 204
 - スロット表示方法の再指定 457
 - スロットベースの設定 457
 - [正常に実行されなかったファイル]レポート 746
 - セキュリティ
 - Windows システム用の変更 100
 - リストア 601
 - セキュリティオプション
 - 設定 391
 - デフォルト設定 388
 - 接合点
 - バックアップ 337
 - 接続ベースのポリシー
 - Active Directory の使用 1730
 - DLO での設定 1730
 - 設定
 - 休日 353
 - デバイス 445
 - [設定]タブ
 - ロボットライブラリ 456
 - 設定、デスクトップとラップトップのバックアップオプション 1587
 - 接頭辞
 - メディアラベルの作成 224
 - 前回正常起動時の構成 763
 - 前回正常起動時の構成へのリカバリ 763
 - 選択項目
 - Desktop Agent
 - バックアップ 1717
 - DLO
 - バックアップ 1607
 - バックアップジョブのオプション 321
 - ユーザー定義
 - TCP/IP アドレスの使用 276
 - 削除 276
 - 追加 275
 - 選択リスト
 - 概略の表示 299
 - 各コンピュータまたはリソースに対する個別作成 292
 - カスタムフィルタの作成 293
 - 検索 298
 - コピー 285
 - 削除 287
 - 作成 280
 - 除外 288
 - ジョブで使われるときの通知の送信 670
 - ジョブの作成 533
 - ジョブの作成について 532
 - 置換 284
 - 通知 279
 - 通知の設定 281
 - 定義 279
 - デフォルトの優先度と有効時間帯の設定 290
 - バックアップジョブの保留 287
 - 表示 534
 - フィルタ処理 297
 - 別のサーバーへのコピー 544
 - 編集 288
 - マージ 284
 - 優先度と有効時間帯について 290
 - 優先度と有効時間帯の設定 291
 - 履歴の表示 298
 - 選択リストのバックアップジョブの保留 287
 - 増分バックアップ
 - 長所と短所 263
 - 定義 260
 - 組織内の Silverlight の配備 854
 - ソフトウェア使用許諾契約 140
 - 損傷したメディア
 - 廃棄 243
- ## た
- [ダイアログのリセット]オプション
 - Desktop Agent (DLO) 1714
 - ダイアログボックス (DLO)
 - ユーザーの移動 1651
 - 帯域幅設定
 - DLO
 - ユーザー用 1592

ダイレクトアクセス

概要 1542

設定する方法 1543

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent の追加 1544

ダイレクトアクセスが有効な Remote Agent 1544

プロパティの表示 1546

ダイレクトアクセスリカバリ 1815、1818

ターゲットドメイン

定義 102

タスクペイン

概要 86

タブ付きダイアログボックス

ナビゲーション 2022

[チェックポイントでのログの切り捨て]オプション

SQL Agent 1249

追記期間

定義 206、215

メディアセットの設定 215

通知

DLO での設定 1678

MAPI 電子メールの設定 653

SMTP 電子メールの設定 652

SNMP の設定 671

VIM 電子メールの設定 654

アラートへの受信者の割り当て 668

完了したジョブのための送信 669

受信者 1679

受信者のスケジュール設定 665

受信者のプロパティの変更 666

選択リストがジョブで使われるときの送信 670

定義 635

ページの設定 655

通知 (DLO)

受信者のプロパティの変更 1683

[ツリー構造を保持する]オプション

バックアップジョブ用 333

リストア用 602

ディザスタリカバリ

Backup Exec エージェントによるデータの保護 765

Exchange Server 1154

Lotus Domino Agent 1073

Microsoft クラスタ

Backup Exec 842

共有ディスク 840

データファイル 839

OpenStorage デバイス 1549

SAP Agent を使用した実行 1343

Veritas クラスタ

概要 835

共有ディスク 841

Windows システムの手動によるリカバリ 765

概要 765

クラスタ

IDR を使用した Microsoft クラスタ上の Backup Exec のリカバリ 838

IDR を使用した準備 836

IDR を使用したノードのリカバリ 836

クラスタ全体の手動でのリカバリ 838

異なる種類のコンピュータ

概要 765

重複排除用ストレージフォルダ 1549

リモート Windows 2000 コンピュータ (権限のない復元) 771~772

ローカル Windows 2000 コンピュータ (権限のない復元) 766

ディザスタリカバリウィザード

実行 1785

必要条件 1784

ディザスタリカバリの準備

Exchange Server 1153

Lotus Domino Agent 1073

ディザスタリカバリ用代替データパス

IDR 1767

ディザスタリカバリ用データベース

IDR 1766

停止ジョブの状態

しきい値 584~585

ディスクの空き領域の低いしきい値

仮想ディスクのグローバルなデフォルトの編集 1980

仮想ディスクの編集 1978

ディスクへのバックアップフォルダのオプション 488

ディスクへのバックアップファイル

削除 496

削除したファイルの再利用 497

消去 497

定義 482

名前の変更 496

ディスクへのバックアップフォルダ

Granular Recovery Technology とともに使用する
場合の推奨事項 498

IDR で使用 483

概要 482

共有 493

最大サイズ 491

割り当て 491

再利用 495

- 削除 494
- 作成 485
- 自動検出設定 489
- 詳細プロパティ 488
- 定義 482
- ディスクの空き領域の低しきい値 488
- ディスクへのバックアップウィザード 485
- デフォルト設定の編集 486、492
- 同時並行ジョブ 482、492
- パスの変更 493
- バックアップセットの最大数 492
- 必要条件 483
- 読み取りバッファを使用 489
- ディスクへのバックアップフォルダの共有 493
- ディスクへのバックアップフォルダを Backup Exec で無効にする 490
- ディレクトリ
 - EMC のバックアップへのインクルード 1809
 - EMC バックアップからのエクスクルード 1812
 - NDMP のためのインクルードおよびエクスクルード 1808
 - NetApp のバックアップへのインクルード 1808
 - NetApp バックアップからの除外 1812
- ディレクトリデータベース
 - Archiving Option でのバックアップ 1439
- テクニカルサポート
 - 連絡 788
- デスクトップ
 - DLO での定義 1708
- デスクトップとラップトップのバックアップオプション
 - 設定 1587
- デスクトップのデータ
 - DLO を使用したバックアップ 1717
- デスクトップユーザーデータフォルダ
 - 定義 1708
- テスト実行ジョブ
 - 一般 370
 - 概要 369
 - 作成 370
 - スケジュール済みジョブに対する実行 560
 - 定義 370
 - デフォルト設定 371
- テスト実行に失敗した場合はスケジュール済みジョブを保留にする 373
- [テスト実行の結果]レポート 753
- データ格納場所 (DLO) 1625
 - 削除 1632
 - 定義 1554
- データ送信開始バッファ数
 - デバイスの設定 447
- データソース
 - オプション 858
 - 削除 859
 - 追加 857
 - 編集 859
- データのステージング 536
- データベース 1557
 - データベースインスタンス
 - BKUPEXEC DLO MSDE 1688
 - データベースサーバー
 - Microsoft クラスタ内 809
 - 定義 1942
 - データベースのスナップショット
 - Microsoft SQL Server 1238
 - データベースの保守
 - 概要 195
 - 設定 196
 - データベースファイル
 - Microsoft クラスタ内のバックアップ 823
 - Veritas クラスタ内のバックアップ 834
- デバイス
 - iSCSI 接続
 - 追加 438
 - OpenStorage デバイスの追加 1532
 - OpenStorage の概要 1532
 - SCSI 情報 448
 - Symantec デバイスドライバインストールウィザード 439
 - USB テープデバイス
 - 再接続 438
 - 一時停止 430
 - 共有ストレージ環境での割り当て 1946
 - 再開 431
 - 重複排除のデバイスの共有 1541
 - 重複排除用ストレージフォルダの追加 1537
 - 詳細 425
 - ジョブのデフォルト設定 184
 - 設定 445
 - データ送信開始バッファ数 447
 - デフォルト設定 447
 - 統計情報 (クリーニング) 449
 - 統計情報 (使用状況) 448
 - 名前の変更 431
 - バックアップジョブ用の選択 325
 - バックアップ複製ジョブ用の選択 360
 - バッファ数 447
 - バッファサイズ 447

- ブロックサイズ 445
- ホットスワップ対応デバイスウィザード 438
- メディアサーバーの一時停止 430
- メディアサーバーの再開 430
- メディアの種類の指定 442
- デバイス管理 425
- [デバイス使用率(ポリシー別)]レポート 729
- デバイス設定アシスタント
 - 詳細 427
 - ストレージデバイスの設定 427
- デバイスとメディアの詳細管理 (ADAMM)
 - データベースの概要 1942
 - デバイス管理について 425
- デバイスとメディアのデータ
 - CASO での場所 1468
- デバイスに適したデフォルト構成設定 447
- [デバイスの概略]レポート 728、1956
- デバイスの管理
 - SAN Shared Storage Option で使用 1954
 - Virtual Tape Library Unlimited Drive Option 436
 - テープのリテンション 469
 - [ハードウェア圧縮を使用する]オプション 445
 - メディアのカタログ登録 232
 - メディアの取り出し 471
 - メディアのフォーマット 469
 - メディアのラベル付け 470
 - ユーティリティジョブの概要 464
 - ロボットライブラリ 437
- デバイスのプロパティ
 - [SCSI 情報]タブ 448
 - [一般]タブ 443
 - [設定]タブ 445
 - メディアの種類 451
- デバイスのプロパティの[クリーニング]タブ 449
- デバイスプール
 - Microsoft クラスタ内での作成 805
 - 概要 503
 - 削除 507
 - 作成 504
 - すべての仮想ディスク 1976
 - デバイスの削除 507
 - デバイスの追加 505
 - デバイスの優先度 506
 - デフォルトデバイスプールの使用 504
 - プロパティ 508
- デバイスを Backup Exec で使用しない 444
- テープ
 - DLT テープドライブ 779
- デフォルト
 - デバイスとメディアのジョブ 184
- デフォルトオプション
 - Agent for Microsoft Hyper-V の場合のバックアップとリストア 1174
 - Agent for VMware のためのバックアップとリストア 1367
 - Backup Exec Retrieve 860
 - Exchange Agent のバックアップおよびリストア 1109~1110
 - IDR
 - 設定 1766
 - NDMP のバックアップおよびリストア 1818
 - SQL Agent
 - バックアップおよびリストア 1228
 - 概要 65
 - カタログ 589
 - 設定 182
 - ネットワークおよびセキュリティ 389
 - バックアップ 376
 - バックアップジョブ用の設定 375
 - プリ/ポストコマンド 384
 - リストア 627
- デフォルト設定
 - DLO での変更 1575
- デフォルトメディアラベルの上書き 224
- テープデバイス、設定 437
- テープデバイス設定ウィザード 437
- テープのリテンション 469
- テープへのダイレクトコピー
 - 概要 365
 - データのコピー 366
- 電子メール
 - DLO での通知の設定 1678
 - MAPI 通知の設定 653
 - SMTP 通知の設定 652
 - VIM 通知の設定 654
- テンプレート
 - 概要 509
 - スケジュールの設定 520
 - テンプレートルールについて 528
 - テンプレートルールの削除 531
 - テンプレートルールの設定 530
 - テンプレートルールの変更 531
 - バックアップセットの検証テンプレートについて 521
 - バックアップセットの複製テンプレートの概要 536
 - バックアップテンプレートのファイルの除外 520
 - ポリシーからの削除 528
 - ポリシーでの使用 517

ポリシーでの編集 527
 ポリシーへのインポート 526
 ポリシーへのバックアップセットの検証テンプレートの追加 522
 ポリシーへのバックアップセットの複製テンプレートの追加 538
 ポリシーへのバックアップテンプレートの追加 518
 ポリシーへのメディアのエクスポートテンプレートの追加 525
 メディアのエクスポートテンプレートについて 524
 テンプレートのインポート 526
 点滅機能
 詳細 1993
 物理ディスクを識別する方法 1994
 透過的なデータベース暗号化
 TDE 1258
 同期
 DLO での定義 1708
 同期 (DLO)
 概要 1731
 新規セットの作成 1731
 同期フォルダの削除 1733
 [同期選択項目]ビュー
 Desktop Agent (DLO) 1731
 統計情報
 デバイス
 クリーニング 449
 デバイス使用状況 448
 動的インクルード
 Hyper-V 1162
 登録済みリソース
 Windows システムの削除 271
 Windows システムの追加 270
 概要 269
 ドメイン
 ホストとターゲット
 定義 102
 ドメインコントローラ
 メディアからインストールするためのリストア先の変更 625
 ドライブ
 最新のダウンロード 778
 ドライブプール
 SAN Shared Storage Option 1946
 トラブルシューティング
 Backup Exec のパフォーマンス
 向上 783
 Remote Media Agent for Linux Servers 1937
 エラーメッセージ 780

クラスタ 842
 バックアップの問題 781
 ハードウェアに関する問題 775
 リストアの問題 783
 トランザクションログ
 Lotus Domino DBIID 1059
 Lotus Domino の表示 1052
 概要
 Lotus Domino 1059
 再利用
 Lotus Domino 1056、1063
 バックアップ
 SQL Agent 1250

な

ナビゲーション
 タブ付きページ 2022
 リストボックス 2022
 ナビゲーションバー
 概要 85
 [名前およびリソース]タブ 621
 名前付きトランザクション
 リストア
 SQL Server 2000 1257、1261
 リストアに含める
 SQL Server 2000 1257
 名前付きトランザクションのリストアの日付および時刻の指定 1257
 名前の変更
 ボルト 238
 メディアラベル 227
 ナレッジベースの検索 83
 日次バックアップ
 定義 261
 ニーモニック
 定義 2014
 ネットワーク
 バックアップジョブ用 391
 バックアップネットワークの概要 386
 バックアップネットワークの設定 388
 ネットワーク接続ストレージ (NAS)
 保護 1801
 [ネットワークデバイスの使用率 (日別)]レポート 726
 ネットワークトラフィック
 CASO での軽減 1489
 ネットワークユーザーデータフォルダ
 作成 1646
 定義 1708

ノード

- IDR を使用したディザスタリカバリ 836
- Microsoft
 - ノードのフェールオーバー順序の変更 808
 - フェールオーバーノードの追加または削除 809
- Microsoft クラスタ内での構成 811
- 定義 798

は

バイト数

- 不一致 782

破棄メディア

- 損傷したメディアの移動 243
- 定義 205

バーコードラベル

- 概要 228
- 混合メディアライブラリ 229
- デフォルト 228
- メディア ID との関係 226
- ロボットライブラリのサポート 228

バーコードルール

- 削除 230
- 使用 456
- 設定 229
- 編集 230

場所

- Backup Exec のメディア 235
- 場所またはボルト内のメディアの検索 238

パスフレーズ 401

パスワード

- ログオンアカウントのための変更 179

パスワードデータベース

- Remote Agent for NetWare Systems 1883

バックアップ

Microsoft クラスタ

- ローカルディスク 821
- 共有ディスク 822

Remote Media Agent の使用 1928

Veritas クラスタ

- 共有ディスク 833
- データベースファイル 834
- ローカルディスク 833

概要 313

準備する方法 254

バックアップウィザード

- 起動 315
- [バックアップ]ボタンからの起動の回避 316
- [バックアップ]ボタンによる起動の設定 316

バックアップオプション

- デスクトップとラップトップの設定 1587

[バックアップサイズ (リソース別)]レポート 724

バックアップしたデータの複製

概要 356

- バックアップ複製ジョブの作成 357

バックアップジョブ

Agent for Microsoft Hyper-V 1162

Symantec Online Storage for Backup Exec 2006

- ウィザードを使用して作成 315

作成用オプション 313

重複排除 1546

手動で作成 317

[詳細]オプション 335

スケジュール 343

[選択リスト]オプション 321

デバイスとデータの選択 265

[デバイスとメディア]オプション 324

バックアップ前に実行するタスク 314

必要なユーザー権限 315

プリ/ポストコマンド 339、383

別のサーバーへのコピー 544

バックアップジョブの成功率 721

バックアップジョブの[デバイスとメディア]オプション 324

[バックアップジョブのプロパティ]ダイアログボックス

SQL Agent 1237

[バックアップ済みのマシン]レポート 733

バックアップするためにオープンファイルをロック 339、382

バックアップするデバイスとデータの選択 265

バックアップセットの検証テンプレート

概要 521

ポリシーへの追加 522

[バックアップセットの詳細 (リソース別)]レポート 722

バックアップセットの複製テンプレート

概要 536

ポリシーへの追加 538

[バックアップセット (メディアセット別)]レポート 723

バックアップ選択項目

DLO での追加 1610

DLO のマクロ 1617

コンピュータの完全修飾名の使用 266

順序の変更 323

バックアップ選択リスト

コンピュータ名 267

登録済みリソース 269

ドメイン 272

ユーザー定義選択 274

バックアップ戦略

1つのジョブで1つのリソースをバックアップ 257

1つのジョブで複数のリソースをバックアップ 257

Remote Agent によるスループットの向上 1896

ウイルス感染からの保護 256

選ぶ方法 254

定義 254

データの保存期間 256

バックアップされるデータの量 255

バックアップする頻度 255

バックアップするリソースの選択 256

バックアップネットワーク

概要 386

設定 388

バックアップジョブ用 391

バックアップの種類

概要 258

完全 259

コピー 259

差分 260

増分 260

当日 261

ファイルのバックアップおよび削除 259

ワーキングセット 261

バックアップの[詳細]オプション 335

バックアップ方式

VMware リソース 1350

修正日時を使用 264

選択 329

デフォルト設定 375

バックファ数

デバイスの設定 447

バックファサイズ

デバイスの設定 447

パーティション

FAT 782

NTFS 782

ロボットライブラリでの再定義 462

ロボットライブラリに作成 459

ハードウェア

障害発生時の保護 762

トラブルシューティング 775

ハードウェア圧縮オプションを使用 445

プロファイルのコピーの作成 764

ハードウェア圧縮

使用 441

パフォーマンス

リモート Windows コンピュータのバックアップでの向上 1896

必要条件

Agent for Microsoft Hyper-V 1159

Backup Exec 105

Exchange Agent 1081

Lotus Domino Agent 1048

NDMP Option 1802

Remote Media Agent for Linux Servers 1917

SAN Shared Storage Option 1943

Symantec Backup Exec - Central Admin Server Option 1467

評価版

Backup Exec のインストール 109

エージェントおよびオプション 156

表示

DLO の自動ユーザー割り当てのプロパティ 1636

DLO のユーザー 1653

Lotus Domino データベース 1052

アラートのジョブログ 642

アラートのプロパティ 640

カレンダーでのジョブ負荷 577

ジョブモニター 547

表示、Lotus Domino 1052

ファイアウォール

Backup Exec の使用 394

SQL インスタンスの有効化 398

システムの参照 398

ファイル

EMC バックアップからのエクスクルード 1812

NDMP のためのインクルードおよびエクスクルード 1808

NetApp バックアップからの除外 1812

Symantec Online Storage for Backup Exec からの消去 2009

ファイルアクセス

Backup Exec Retrieve での保護 848

ファイルグループ

リストア

SQL Agent 1262

非プライマリ SQL Server 2000 1258

プライマリ SQL Server 2000 1258

ファイル権限

リストア 608

ファイルシステムのアーカイブ設定 756

[ファイル選択の詳細設定]オプション 282

ファイルのバックアップおよび削除方式

ディスク領域の解放 355

バックアップ用の使用 356

ファイルの履歴

NDMP のための有効化 1818

- ファイル複製サービス (FRS)、バックアップ 278
- ファーム
 - 削除 1182
 - 追加 1179, 1187
 - ファームのデフォルトの名前の変更 1181
- フィルタ
 - アラート用 635、638
 - カスタム
 - 現在のジョブ 573
 - ジョブ 572
 - ジョブ履歴 574
 - ジョブ用 571
 - 履歴表示フィルタ
 - Desktop Agent での設定 1743
 - DLO での設定 1669
- フィンガープリントデータベース
 - Archiving Option でのバックアップ 1439
 - ボルトストア 1406
- フェールオーバー
 - 再開 800
 - 定義 798
 - ノードのフェールオーバー順序の変更 808
 - フェールオーバーノードの追加または削除 809
- フェールバック
 - 定義 800
- 複製カタログ
 - CASO 内 1500
- 物理チェック
 - SQL Server 2000 1223、1242
- 物理ディスク
 - ハードウェア健全性 1973
 - ハードウェアの状態 1973
 - 物理ディスクグループの作成 1971
 - プロパティの表示 1973
 - 容量 1973
- ブートマネージャ
 - IDR でリストア 1781
- プライマリサーバーの定義 1942
- ブラックアウトウィンドウ
 - DLO での設定 1655
- ブリコマンド
 - デフォルト設定 384
 - バックアップジョブ 383
 - バックアップジョブ用の設定 340
 - リストアジョブ 383
 - リストアジョブ用の設定 607
- プリンタ
 - 受信者の設定 664、1682
- ブロックサイズ
 - デバイスの設定 445
- プロパティ
 - Lotus Domino 1061
 - NDMP サーバーのための表示 1822
 - アラート 640
 - 実行中のジョブ 547、551
 - ジョブの編集 546
 - メディア
 - [一般]プロパティ 245
 - 統計情報 247
 - ユーザー
 - DLO の変更 1649
 - レポート 709
- プロファイル
 - 定義 1708
- プロファイル (DLO)
 - コピー 1606
 - 作成 1590
 - 定義 1554
- 分散カタログ
 - CASO 内 1499
- 分散ファイルシステム (DFS)、バックアップ 278
- ページャ
 - 受信者の設定 660、1681
 - 通知方式 655、1678
- ベースライン
 - 合成バックアップの設定 885
- 別の場所へのバックアップの保管 763
- 保持カテゴリ
 - 概要 1418
 - デフォルトの保持カテゴリの編集 1456
 - プロパティの指定 1420
 - 編集 1419
- 保守サーバー (DLO)
 - 委任
 - 保守サーバー (DLO) 1623
- ポストコマンド
 - デフォルト設定 384
 - バックアップジョブ 383
 - バックアップジョブ用の設定 340
 - リストアジョブ 383
 - リストアジョブ用の設定 607
- ホストメイン
 - 定義 102
- ポータルサポート 475
- ホットキー
 - 定義 2014

ホットスぺア

- 指定 1971
- 推奨事項 1990
- 説明 1990
- 変更または追加 1991

ポート番号、Remote Media Agent for Linux Servers
のための変更 1923

[ホーム]ビュー

- 概要 86
- [概略]の項目 90
- 項目の編集 88
- [詳細]の項目 90
- 設定 87
- デフォルト設定のリストア 87
- ヘルプおよびテクニカルサポート項目 88

ポリシー

True Image Restore の有効化 902

- 概要 509
- 削除 514
- 手動で作成 511
- ジョブの作成 533
- ジョブの作成について 532
- テンプレートのインポート 526
- テンプレートの削除 528
- テンプレートの使用 517
- テンプレートのスケジュールの設定 520
- テンプレートの編集 527
- テンプレートルール 530
- テンプレートルールの削除 531
- テンプレートルールの変更 531
- バックアップセットの複製テンプレートの概要 536
- バックアップセットの複製テンプレートの追加 538
- バックアップテンプレートの追加 518
- 表示 534
- 別のサーバーへのコピー 544
- 編集 513
- ポリシーウィザードを使用して合成バックアップ用を
作成 891
- ポリシーウィザードを使用して作成 512
- ポリシーから作成したジョブの削除 534
- ポリシーから作成したジョブの名前の変更 535
- ポリシーのサンプルの再作成 516
- ポリシーのサンプルの使用 515
- メディアのエクスポートテンプレートの追加 525

[ポリシージョブの概略(リソース別)]レポート 743

[ポリシージョブの概略]レポート 744

[ポリシーによるリソースバックアップの成功率]レポー
ト 747

ポリシーのサンプル

- 再作成 516
- 使用 515

[ポリシーのプロパティ]レポート 744

[ポリシー保護リソース]レポート 745

ボリュームの制限

Remote Agent for NetWare Systems 1891

ボリュームレベルのバックアップ

SQL データの自動除外 1244

ボリュームレベルのバックアップでの SQL データの自動
除外 1244ボリュームレベルのバックアップでのファイルの自動除
外 1058

ボルト

ドラッグアンドドロップ

メディアの移動 242

バーコードラベルのスキャンを使用したメディアの移
動 239

メディアの移動 239、241

メディアの検索 238

メディアを移動するジョブのスケジュール設定 240

ボルトウィザード 241

ボルトストア

Archiving Option でのバックアップ 1439

アーカイブ後の項目の削除 1407

概要 1406

項目削除モードの変更 1409

削除 1411

作成 1407

状態の表示 1409

フィンガープリントデータベース 1406

プロパティの編集 1408

ボルトストアバックアップ後の項目の削除 1407

割り当て 1400

ボルトストアグループ

Archiving Option でのバックアップ 1439

[ボルトストア使用量の概略]レポート 758

ボルトストア使用量の詳細 757

ボルトストアパーティション

Archiving Option でのバックアップ 1439

オープンおよびクローズ 1412

オープンおよびクローズ状態の表示 1413

概要 1412

作成 1412

プロパティの編集 1413

[ボルト内の利用可能なメディア]レポート 749

[ボルトの更新(ウィザード使用)] 241

[ボルトへのメディアの移動]レポート 739

ま

- マウント済みのローカルドライブ
 - バックアップ 337
 - バックアップ対象ファイルとディレクトリ 337
- マクロ
 - グローバルエクスクルーード 1645
- マルチステージのバックアップ戦略 536
- 未設定の仮想ディスク
 - 設定 1982
 - ハードウェア健全性 1983
 - ハードウェアの状態 1983
 - プロパティの表示 1983
- 無効なジョブのステータス 1390
- メッセージ
 - エラー 780
- メディア
 - 一般 245
 - インベントリ処理について 431
 - 上書きオプション 217
 - エラー多発メディア 243
 - オフラインの場所またはユーザー定義メディアボルトへの追加 239
 - カテゴリ 203
 - 削除 244
 - 消去 433
 - ジョブのデフォルト設定 184
 - スクラッチ
 - 定義 205
 - すべてのメディア
 - 定義 204
 - 整合性のテスト 367
 - 損傷 243
 - デバイスでのインベントリ処理 432
 - デフォルトオプションの設定 221
 - デフォルトラベルの作成 224
 - 統計情報プロパティ 247
 - ドラッグアンドドロップ
 - メディアの移動 242
 - 破棄
 - 定義 205
 - バーコードラベルのスキャン 239
 - 場所またはボルト内のメディアの検索 238
 - 場所またはボルトへの移動 239
 - バックアップでの上書き 326
 - バックアップの複製に対する上書き 362
 - プロパティ 245
 - ボルトウィザード 241
 - ボルトの削除 238
 - メディア ID の表示 245
 - メディアセットまたはボルトへの関連付け 213
 - メディアに追記する 326
 - メディアを移動するジョブのスケジュール設定 240
 - 割り当て済みまたはインポートメディアへの上書き 216
 - メディア ID (Media ID)
 - 定義 226
 - メディア上書きオプション
 - バックアップジョブに対する指定 326
 - バックアップ複製ジョブに対する指定 362
 - [メディアエラー]レポート 736
 - メディアカタログ 1942
 - メディアからのインストール 626
 - [メディア監査]レポート 735
 - メディアサーバー
 - DLO への接続 1589
 - メディアサーバーへの Linux、UNIX と Macintosh コンピュータの公開
 - 概要 1831
 - 方法 1832
 - メディアセット
 - ウィザードを使用した作成 211
 - 上書きおよび追記についてのプロパティ 214
 - 概要 210
 - 共有ストレージ環境 1948
 - 削除 212
 - 作成 211
 - 定義 204
 - デフォルト 209
 - 名前の変更 213
 - バックアップジョブ用の選択 326
 - バックアップ複製ジョブ用の選択 362
 - ボルトルールのプロパティ 236
 - メディアセットウィザード 211
 - メディアセットのボルトルール 236
 - [メディアセット]レポート 737
 - メディアの移動
 - ドラッグアンドドロップの使用 243
 - メディアのインポート 473
 - メディアの上書き禁止
 - 概要 210
 - メディアの上書き禁止レベル
 - 定義 216
 - メディアのエクスポート 474
 - メディアのエクスポートテンプレート
 - 詳細 524
 - ポリシーへの追加 525
 - メディアの共有 1942

メディアの種類

- デバイスでの指定 442

メディアの操作

- 監査ログ 225

- メディアセットへのメディアの関連付け 213

- メディアの削除 244

メディアの[統計情報]プロパティ 247

メディアの取り出し

- ジョブの完了後 327、363

- ドライブ 471

メディアの場所

- 更新 241

メディアのフォーマット 469

メディアの容量

- バックアップの実行前にテスト 372

メディアのラベル付け

- インポートメディアのラベル 228

- デフォルトラベルの作成 224

- ドライブ内 470

- 名前の変更 227

- バーコードラベルの使用 228

[メディア]ビュー 588

メディアへの追記オプション 326、362

メディアボルト

- 削除 238

- 定義 235

- 名前の変更 238

- ボルト内のメディアの検索 238

- メディアの移動 239

- ユーザー定義 235~236

[メディアボルト内のメディア]レポート 738

メディアラベル

- インポート 228

- 概要 226

- 名前の変更 227

- バーコード 228

- バーコードルール

- 混合メディアライブラリ 229

- バーコードルールの削除 230

- バーコードルールの編集 230

メディアローテーション 509

戦略

- 1 世代 249

- 2 世代 250

- 3 世代 251

メニュー

説明

- ウィンドウ 2016

- ヘルプ 2020

メニューバー

- 概要 84

メールボックス

- 特定のフォルダの除外 1128

- リストア先の変更 1148

- リストアの概要 1140

メールボックスグループ

- アーカイブジョブのための作成 1404

- アーカイブルールの設定 1423

- 概要 1422

- 管理 1424、1456

- 順序の設定 1404

- プロビジョニング用の配置 1424

メールボックスのレガシーバックアップ方式

- Exchange 1127

や

有効時間帯

- 概要 290

- 設定 291

- デフォルト設定 290

[有効時間帯を逸したジョブ]レポート 738

優先サーバー設定

- 概要 420

- 削除 422

- 作成 421

- 設定の編集 423

- デフォルトの削除 424

- デフォルトの指定 423

優先度

DLO のオプション

- 移動 1635

- 自動ユーザー割り当て

- DLO の変更 1635

- スケジュール済みジョブの変更 560

- 選択リスト 290~291

- 選択リストのデフォルト 290

- プール内のデバイスの設定 506

- リストアジョブ用の設定 601

ユーザー

- DLO Desktop Agent での管理 1645

- DLO からの削除 1650

- DLO で CSV ファイルのインポート 1648

- DLO での追加 1647

- DLO での表示 1653

- アクセス

- DLO での無効化と有効化 1649

- プロパティ

- DLO の変更 1649

- プロファイル
 - 定義 1708
 - プロファイルを使用した Desktop Agent へのアクセス 1707
 - ユーザー定義選択項目
 - 概要 274
 - 削除 276
 - 追加 275
 - ユーザー定義メディアボルト 235
 - 作成 236
 - メディアの追加 239
 - ユーザーデータの格納制限
 - DLO 1593
 - ユーザーデータフォルダ
 - 定義 1708
 - ユーティリティジョブ
 - 概要 464
 - ユーティリティパーティション
 - IDR でのバックアップ 1769
 - バックアップのための選択 268
 - リストア 612
 - リストア先の変更の実行について 612
- ら**
- ライセンスキー 113
 - Backup Exec
 - 追加 166
 - 追加と削除 109、113
 - 表示 164
 - Remote Agent for Windows Systems 1897
 - 環境内で検出 167
 - ライセンス情報
 - 環境内で検出 167
 - ランタイムスクリプト、Remote Agent for Linux or UNIX Servers 用 1854
 - リカバリされたジョブ (カスタマイズしたエラー処理方法) 580
 - リカバリストレージグループ 1134
 - [リカバリに必要なメディア]レポート 736
 - リカバリパスワード
 - DLO での設定 1566
 - リカバリポイント
 - Exchange
 - 概要 1108
 - Exchange での設定 1122
 - Exchange でのデフォルトの間隔 1108
 - リストア
 - ARCserve テープ 614
 - Backup Exec Retrieve の使用 1742
 - Exchange データ 1132
 - Lotus Domino Agent 1065
 - Microsoft クラスタ
 - Windows 2000 および Windows Server 2003 のクラスタクォーラム 825
 - Remote Agent for NetWare Systems のボリュームの制限 1891
 - SQL master データベース 1265
 - 暗号化されたデータ 406
 - 選択リストのオプション 617
 - 他のバックアップソフトウェアで作成したメディア 613
 - データの選択 615
 - データのリストアについて 587
 - バイト数が一致しない 783
 - ファイル
 - Desktop Agent (DLO) の使用 1738
 - DLO 管理コンソールの使用 1657
 - ファイルの検索 620
 - [メディア]ビュー 588
 - [メディア]ビューの使用方法 616
 - リストア選択リストの作成 617
 - [リソース]ビュー 588
 - [リソース]ビューの使用方法 615
 - リストアウィザード
 - 起動 592
 - [リストア]ボタンによる起動の回避 592
 - [リストア]ボタンによる起動の設定 593
 - リストア先の名前付きインスタンス 1271
 - リストア先の変更
 - Exchange データ 1147
 - Microsoft バーチャルハードディスクファイル 625
 - Microsoft バーチャルマシン 1172
 - SAP データ 1335
 - VMware の仮想マシン 1365
 - メディアからのドメインコントローラのインストールに使用 625
 - リストアジョブ
 - Hyper-V ホスト 1170
 - Lotus Domino オプション 1068
 - Lotus Domino のリストア先の変更 1070
 - Remote Media Agent for Linux Servers 用に作成 1928
 - SAP データのリストア先の変更 1335
 - [一般]オプション 600
 - ウィザードを使用して作成 592
 - 既存ファイルに上書き 601
 - キャンセル 630
 - [詳細]オプション 602
 - セキュリティ 601

- [選択リスト]オプション 598
- ダイアログボックスを使用して作成 593
- [ツリー構造を保持する]オプション 602
- デフォルト設定 627
- ファイル権限 608
- ファイル選択の詳細設定 599
- [ファイルのリストア先の変更]オプション 623
- プリ/ポストコマンド 339、383、607
- 別のサーバーへのコピー 544
- リストア先の変更 623
- リストアジョブの[一般]オプション 600
- [リストアジョブのプロパティ]ダイアログボックス
 - SQL Agent 1254
- [リストアセットの詳細 (リソース別)]レポート 749
- [リストア]ダイアログボックス
 - Desktop Agent (DLO) 1739
- リストボックス
 - ナビゲーション 2022
- リソース
 - クレデンシャル
 - リストアジョブの変更 619
 - 順序 323
- リソース検出
 - Exchange Agent との使用 1082
 - 概要 300
 - ジョブの作成 300
- [リソースのリスク評価]レポート 747
- リビジョン
 - DLO で自動的に削除 1617
 - 保持する数
 - DLO での設定 1614
 - [リビジョン管理]タブ
 - DLO 1614
- リビジョン (DLO) 1613
- リムーバブルディスクへのバックアップフォルダ
 - 必要条件 484
- リモート記憶域
 - バックアップ 338
- リモートコンピュータへのデータ接続 1916
- リモートバックアップの最適化 338
- 履歴の表示 298
- レポート
 - Backup Exec で利用可能 710
 - Exchange メールボックスグループのアーカイブ設定 755
 - アーカイブジョブの成功率 754
 - アーカイブの概略 (前日分) 757
 - アーカイブルールと保持カテゴリによるアーカイブ選択 754
 - アクティブアラート 718
 - アクティブアラート (メディアサーバー別) 718
 - アプリケーションイベントログ 720
 - アラート履歴 719
 - イベントの受信者 731
 - 概要 678
 - 監査ログ 721
 - 管理対象メディアサーバー 734
 - 更新されたメディア 746
 - サーバーの予想負荷 751
 - システム構成の設定内容 725
 - 実行 679
 - 実行されたジョブ (デバイス別) 732
 - 失敗したアーカイブジョブ 755
 - 失敗したバックアップジョブ数 731
 - 重複排除 726
 - ジョブの概略 732
 - ジョブの実行 682
 - ジョブ、メディア、アラートの概要 740
 - [ジョブ履歴]ペインでの削除 685
 - スクラッチメディアの利用可能予定 752
 - 正常に実行されなかったファイル 746
 - 通知受信者の設定 686
 - テスト実行の結果 753
 - デバイス使用率 (ポリシー別) 729
 - デバイスの概略 728
 - ネットワークデバイスの使用率 (日別) 726
 - バックアップサイズ (リソース別) 724
 - [バックアップジョブの成功率]レポート 721
 - バックアップ済みのマシン 733
 - バックアップセットの詳細 (リソース別) 722
 - バックアップセット (メディアセット別) 723
 - 表示 679
 - [ファイルシステムのアーカイブ設定]レポート 756
 - プロパティの表示 709
 - 保存 684
 - ポリシージョブの概略 744
 - ポリシージョブの概略 (リソース別) 743
 - ポリシーによるリソースバックアップの成功率 747
 - ポリシーのプロパティ 744
 - ポリシー保護リソース 745
 - ボルトストア使用量の概略 758
 - ボルトストア使用量の詳細 757
 - ボルト内の利用可能なメディア 749
 - ボルトへのメディアの移動 739
 - メディアエラー 736
 - メディア監査 735
 - メディアセット 737
 - メディアボルト内のメディア 738

- 有効時間帯を逸したジョブ 738
- リカバリに必要なメディア 736
- リストアセットの詳細 (リソース別) 749
- リソースのリスク評価 747
- レポートジョブのスケジュール設定 686
- レポート (DLO) 1685
 - 実行 1686
 - 表示 1685
- レポートの通知受信者の設定 686
- 連番
 - メディアラベル用に指定 224
- ローカルコンピュータ 107
- ローカルの管理対象メディアサーバーのジョブの監視 1491
- ローカルメディアサーバー
 - 切断 141
- ログオンアカウント
 - SQL Server リソース 1220
 - 概要 172
 - 削除 181
 - 作成 175
 - システムログオンアカウント 177
 - 所有者専用 174
 - 置換 180
 - テスト 322
 - デフォルト
 - 定義 173
 - デフォルトの変更 181
 - パスワードの変更 179
 - バックアップするリソース関連の変更 322
 - 編集 178
 - リストアするリソース関連の変更 322
- ログオンアカウントのテスト 322
- ログオン情報
 - 別のサーバーへのコピー 191
- ロックの解除
 - ロボットライブラリパネル 478
- ロボットライブラリ
 - Backup Exec で使用 452
 - 起動時の初期化 456
 - クリーニングスロット 455
 - 構成例 453
 - 前面パネルのロック 477
 - 前面パネルのロックの解除 478
 - パーティションの構成 460
 - パーティションの再定義 462
 - パーティションの作成 459
 - ハードウェアの設定 453
 - 表示できない問題 778

- ポータルサポート 475
- メディアのインポート 473
- ロボットライブラリパネルのロック 477
- ロボットライブラリプロパティ
 - [設定]タブ 456
- ロボットライブラリを初期化するジョブ 468

わ

- ワーキングセット
 - 長所と短所 264
 - バックアップ
 - 定義 261
 - 割り当て済みメディア
 - 上書き 216